

暗部の一夏君

猫林13世

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

白騎士事件翌日、織斑一夏は攫われた。彼の姉であり事件の当事者織斑千冬は、クラスメイトであり暗部に所属している女子に弟の捜索を頼み、そして彼女からの電話の内容は千冬には受け入れがたい事だった。

目次

事の始まり	1
更識家の面々	7
きっかけは	13
残念な姉	20
二人のブラコン	27
ませた子供	33
当主VSブラコン	40
楯無の計画	46
女子高生の会話	52
動き始める世界	58
一夏の特異能力	64
一夏の周りの危険性	70

新たな脅威	76
代表選考会	82
更識・IS開発部	88
専用機との会話	94
木霊の力	100
試運転	107
少女たちの心配	114
開発戦争	120
開幕直前	127
モンド・グロツソ開幕	133
スパイの影	140
大会終了	146
中国からの転校生	153

候補生、決定	240
美紀の努力	233
本音の名言	227
息抜き?	220
合宿の合間	214
簪の秘密	207
感じる距離	200
更識一夏の誕生	193
姉弟の再会	187
養子に	181
乙女の気持ち	174
大人びる一夏	167
鈴との付き合い方	160

二人の専用機	246
急展開	253
一夏の提案	260
対 I S 用護衛	267
号泣	274
逃げ出すように	281
次の代表	287
一夏の進路	294
代表選考	300
当主としての一夏	306
代表決定	312
新たなる悪友	319
一夏の境遇	326

代表のトレーニング	333
更なる危険	339
卒業式前日	346
小学校卒業	354
お姉さんたちの心配事	361
中学入学	367
天才の悩み	374
新しいシステム	380
第二回モンド・グロツソ開幕	386
一夏の黒い考え	393
実戦のプレッシャー	400
第二回モンド・グロツソ終結	406
必須成分	413

一夏の計画	420
マスコミの対応	426
織斑姉妹の指導	432
差出人不明メール	440
タイムリミット	447
一夏の決意	454
三人の専用機	461
専用機の説明	467
発表の準備	474
全世界同時ハッキング	481
翌日の騒動	488
デート？	495
休日の計画	501

朝早くから	508
更識家内の順位	514
戒め	521
受験の準備	529
実技試験	536
合格祝い	542
新たな恐怖	549
謎の少女	555
織斑マドカ	562
鈴の転校	568
刀奈の受験	574
禁断症状	581
家族の再会	588

新たな少女	594
最強世代の受験	601
中学卒業	608
IS学園入学	615
多い理由は	622
他国の候補生	629
代表選出	635
過去との遭遇	642
更識関係者の感情	649
ISの授業	655
昼食時に	662
VT Sのシステム変更	669
一夏VSセシリア	675

クラス代表決定	682
代表就任パーティ	688
転校生は悪友	694
新たな友人	701
悪友との昼食	708
生徒会での初仕事	714
籌対策	720
気になる書類	726
クラス対抗戦、前日	733
新たな候補生	740
乱入のIS	747
姉妹機的能力	754
大怪我	761

篠ノ之姉妹への制裁	768
一歩間違えば…	775
早朝の対面	782
解析依頼	789
コアの調査	796
一夏のいない教室	802
エイミイとの約束	809
新たな問題	815
一夏と交渉	822
もう一人の転校生	828
解任と就任	835
新たなマスコット	841
事情説明	848

ラウラのお願い	853
ラウラとの模擬戦	860
ドイツの問題	866
一夏の苛立ち	872
ラウラの幼児退行	878
学年別トーナメントのルール	884
お兄ちゃんの心配事	891
衝撃の展開	898
籌救出	905
訓練機の解析	912
更識会議	918
処分は……	924
専用機の設計図	930

部屋での会話	936
一緒のベッドで……	942
本音の特技	950
エイミイのデータ	956
本音と美紀	962
バカ二人	969
週末の予定	975
エイミイの専用機	981
勘違いの女性	987
合流	994
織斑姉妹とのデート？	1000
いざ海へ	1006
織斑姉妹の懸念	1013

生徒会の動き	1102
様々な問題	1094
ナターシャの情報	1088
闇落ちの筈	1081
誘拐	1075
新たな病気	1068
銀の福音の意志	1061
作戦内容	1055
紫陽花の疑問	1048
残された二人	1041
部屋割りの理由	1034
夕食	1026
ビーチバレー	1020

1102109410881081107510681061105510481041103410261020

スコールと一夏	1190
テスト飛行	1182
静寐の専用機	1176
簪の不満	1169
静寐の適正值	1162
ちよつとした変化	1155
夏休みの予定	1148
マドカと静寐	1142
契約書	1136
勝者は：	1129
隣の彼女の特殊能力	1122
コードネーム	1115
解析結果	1108

1190118211761169116211551148114211361129112211151108

デユノア社の現状	1197
シャルの疑問	1204
最強の監視者	1211
天罰とご褒美	1218
本音V S 静寢	1226
二つの気配	1232
パンデミック	1239
休日の予定	1244
目立つメンツ	1251
プールでの会話	1258
篠ノ之姉妹の現状	1264
帰路	1271
一夏の基準	1277

1277 1271 1264 1258 1251 1244 1239 1232 1226 1218 1211 1204 1197

亡国機業の人々	1285
聞きたくない情報	1292
強奪後	1299
亡国機業に備えて	1306
一般高校生の夏休み	1313
墮ちる企業	1320
寝ぼけの一夏	1327
不穏な影	1335
疑わしい先輩	1342
バッドタイミング	1348
ゲームの魔力	1356
マッド一夏	1364
一夏の逆鱗	1371

1371 1364 1356 1348 1342 1335 1327 1320 1313 1306 1299 1292 1285

一夏・碧ペアVS織斑姉妹	—
武装の説明	—
籌の成長	—
新武装開発の追い込み	—
専用機製造の為に	—
産業スパイ？	—
更識の見解	—
クーちゃん初めてのおつかい	—
一夏と簪	—
専用機の名前	—
久延毘古、完成	—
お披露目の模擬戦	—
美紀の本気	—

1458145114451438143214241418141114041397139113841377

織斑姉妹の怒り	—
突然の来訪者	—
二学期始業式	—
文化祭の出し物	—
文化祭に向けて	—
疑う碧	—
新カリキュラム	—
生徒会の出し物	—
着々と	—
初めてのIS学園	—
一夏のコスプレ	—
学園祭の裏で	—
微かな気配で：	—

1546153915331526151915121505149814911484147814711465

いちか君の扱い方	—
幼児退行の原因	—
アリーナでのお茶会	—
女子トーク	—
模擬戦直前の更衣室	—
実力者同士の模擬戦	—
試合前の思考	—
客席での一幕	—
試合中の交代	—
ちよつとした油断	—
刀奈の嘘	—
碧の怒り	—
襲われた原因	—

1633162616181612160616001592158515791572156615591552

虚の脅し	—
隙を生んだ原因	—
賞品変更	—
就寝前	—
専用機との会話	—
それぞれの代償	—
二人の誤解	—
更識姉妹の考え	—
一夏の観察眼	—
一夏の不安	—
別の問題	—
誕生日の話題	—
誕生日の為の話し合い	—

1714170717001694168816811675166916631657165116451639

マドカの情報	—
更識家からの報告	—
織斑姉妹の復帰	—
織斑姉妹の処分	—
束の反省	—
職員室での会話	—
誕生日前日	—
外出先で	—
兄妹の時間	—
女性恐怖症の原因	—
盛り上がる誕生会	—
狂気の箒	—
箒VS一夏	—

1800179317861780177217641757175117451739173317261720

考え方の相違	—
スクールVS箒	—
闇落ち箒の対策	—
来るべき時に備え	—
一夏の指導	—
夜半のメンテナンス	—
仮想世界の箒	—
銀の福音の今後	—
束に出来る事	—
箒VSオータム	—
知力と武力	—
一夏の忙しさ	—
襲撃予定日	—

1877187118641859185418481842183618301824181818121806

ダリルVS虚	襲撃直前	本音のツツコミ	最強の三人	愛か平和か	新たな候補生を探して	一夏の説得	サラの悩み	決定的証拠	揺れる思い	サラからの質問	姉の信頼	マドカVSラウラ

1958 1952 1946 1940 1934 1928 1922 1917 1910 1904 1897 1889 1883

仕事の速さ	色々な問題	一夏の愚痴	一夏にインタビュー	続くインタビュー	写真撮影	自分たちの苗字	成長する美紀	処刑方法	姉妹の時間	スコールの悩み	織斑姉弟の関係	新兵器開発

2037 2031 2024 2018 2012 2005 1999 1993 1988 1982 1976 1970 1963

オータムの苦勞
恋バナ
サラの専用機の名前
美紀の意思
海外組の期待
更識所属のレベル
クラスメイト達の納得
常識外れの速度
セイレーンの性格
初陣は…
セイレーンの特徴
侵入者の末路
織斑姉妹との確執

2120211221052098209120852079207320672061205520492044

認識不足
一夏との時間
刀奈の考え
一夏の憂鬱
一夏の訊問方法
身内の評価
束からの情報
独立派の不安
裏取引
本音の癖
情報の共有
それぞれの打ち合わせ
天才二人の密会

2204219721902183217721702164215821522146214121342127

真夜中の勘違い
過激派の影
爆音の原因
マナカの目的
最凶タッグ
独立派の処分
無人機の解析
独立派の処遇
織斑姉妹の部屋
召喚方法
旅行再開
四人の今後
学園へ

2289228322762270226322562249224322372231222322162209

無人機の使い道
隠し撮り写真
簪の悩み
織斑夫妻の情報
ダリル、フォルテへの罰
ゴミの出所
スクールとオータムの使い道
ストレス発散
追加の対戦相手
究極の解決法
一夏の狙い
一夏のカミナリ
狂気のマナカ

2373236623592353234723402333232723202314230723012295

変態の実力	—————
箒の考え方	—————
束のモチベーション	—————
清掃完了	—————
アメリカの不正記録	—————
好奇の目	—————
不意な来訪者	—————
兄妹の会話内容	—————
訓練後	—————
緊張感の無さ	—————
改善点	—————
等価交換	—————
姉の奇行	—————

2457245124452439243224262419241224062399239323872380

急展開	—————
衝突	—————
重症の兄妹	—————
箒の企み	—————
結局は	—————
マナカも同類	—————
現時点での最強	—————
箒の思い付き	—————
凡人と人外	—————
織斑姉妹の逆鱗	—————
箒捕獲に向け	—————
箒覚醒	—————
監視	—————

2541253525292522251625102504249824912484247724712465

最強の師匠	—
最強のお出迎え	—
親子の対面	—
平和な日常？	—
朝の風景	—
マナカの罰	—
心を砕く	—
優秀な生徒会役員	—
知らず内に	—
審判の割り当て理由	—
大魔王	—
織斑四姉妹の共通点	—
オカン一夏	—

2624261826112605259925922586257925732567256025542548

風邪ひき簪	—
姉の心配	—
紫陽花の行動力	—
悩みの種	—
不敵な笑み	—
一夏の中の順位	—
四人への罰	—
姉の乱入	—
父の後悔	—
束の介入	—
目覚め	—
刀奈の覚悟	—
姉妹の語らい	—

2711270526992692268526782672266526592652264526382631

真夜中の妄想

束来訪

仕掛けられていた罫

箒の教育

ISの精神世界

見えないもの

代表に向けて

更識からのお願い

箒との対面

ISと箒の関係

戸惑う一夏

体調不良の原因

二人の関係

2793278727802774276827612755274827422736273027242718

甘えっ子

早朝のVTSルーム

未来予想

大会直前

事前説明

盛り上がる大会

第二グループの戦力

本音の今後

本音への信頼

土竜の心配

本音VS四人

簪の地雷

料理の腕前

2875286828612855284828422835282928232818281328062799

試験に向けて	美紀の弱点	背負い背負われ抱き抱かれ…	打ち上げ 大人の部	打ち上げ 学生の部	移籍問題	決着 非専用機持ちの部	決着 専用機持ちの部	妹空間	美紀VS本音	ティナの思惑	同い年	モブの嫉妬
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

2955294929422936293029242918291229062899289328872881

旅行の計画	冬休みの予定	衝撃の目覚め	大人と子供	一日遅れのお祝い	本音の立場	本音と箒	嚴重な見張り	普通の感性	一夏と本音	出迎えば生徒会	箒の復帰	箒の心中
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

3033302730203013300630002994298829822977297229672961

海外組の予定	一夏との関係	仕事納め	更識内の序列	二学期の総括	仲良くお風呂	お風呂で的一幕	逆上せた一夏	新生徒会の考案	簪の嫉妬	碧の決意	監視の目	謎の気配
_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____

3115310931023096309030843077307130653059305330463040

病気の検証法	寝不足の一夏	お疲れの一夏	一夏の連絡先	箒の憧れ	簪の得意分野	苦労の総括	煽てられた鈴	刀奈の後任	大晦日の朝	珍しい事	スコールのアドバイス	鈴の特性
_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____

3193318731813175316931643158315231453138313231263121

世間からの評価
年越しの瞬間
一夏と碧
早朝のお喋り
新年の挨拶
兄力
箒の為の訓練
一夏と鈴の関係
有効的な脅し
織斑姉妹と束
静寐の脅し
虚のカミナリ
鈴の行動力

3277327032633257325132453239323332273220321432073200

落ち着かない一夏
一夏の風呂事情
無理をさせない程度で
小さな賭け事
普通の親への気持ち
評価の原因
出発前に
更識勢の料理の腕
訓練の相談
鈴からの報告
I Sとの対話
見学者多数
更識勢の実力差

3359335333473341333533293322331633093303329732903284

初実機訓練
訓練相手の実力
護衛としての自覚
努力の質
二人の覚悟
美紀への訊問
強行軍
最後の敵
安心出来る空気
久しぶりの実習
心の奥で
織斑四姉妹の会話
模擬戦後の整備

3443343734303423341834123405339933933386337933723366

他国の整備士
織斑姉妹に対するご褒美
使えるもの
二人の成長
織斑姉妹の威圧感
不審な動き
クラスメイトの反応
浮かれるセシリア
ちよつとした贅沢
整備の結果
久しぶりの外出
母の抱擁
男としての魅力

3532352535183511350534983491348434783471346434573450

束からの預かりもの
クロエのルームメイト
箒とクロエ
忙しい理由
不安な成績
お疲れの美紀
駄姉と駄ウサギ
成長した候補生たち
慣れない態度
苦手な気配
束の努力
美紀の勇氣
箒の受難

3617361036043598359235863580357335663559355335463539

更識の基準
訓練中の事故
今回の罰
怪しい動き
更識勢の作戦会議
海外組の考え
元亡国機業の使い方
恐ろしい病
一夏の周りの人の心配事
別の侵入者
戦争の火ぶた
一方的な殲滅
あつという間の終戦

3696368936833678367336673661365536493643363636293623

敗軍の将
黒い影
一夏の金銭感覚
箒の相談
最大の問題児
卒業イベント
ダリルと虚
疲労困憊の一夏
参加報酬
真耶の成長
織斑姉妹の反省
掃除出来ない姉たち
最後の試合

3779377237653758375337463740373437273722371637093702

盛り上がる観客
最大のライバル
ハイレベルな闘い
虚の秘策
今後の話
女子高生のお喋り
虚の代わり
卒業式前日
卒業式
永遠に…

3846383938323825381938123805379937923785

事の始まり

白騎士事件。それは世界を造り変えたある物のお披露目会的な事だった。造った本人は楽しければ良いという、何とも無責任な理由で造り、それに協力した友人も、まさかこれほど大々的に女尊男卑の世界に創り変えられるとは思っていなかった。

だがその友人は、その翌日に大切な家族を一人失った。その家族の名は織斑一夏。織斑家の長男であり、彼女——織斑千冬の愛してやまない弟だった。そしてもう一人の姉も、彼の事を溺愛していた。

「千冬！ 千冬が無責任に束の計画を手伝ったから、一夏が攫われちゃったんじゃない
！」

「すまない、千夏。だがお前が断ったから私に持ちかけてきたんだぞ」

「だって危ない計画だったし、束の計画に付き合つてろくな事無かつたじゃないの」

織斑家に響き渡る二人の女性の声。いや、まだ高校生の少女に『女性』は当てはまらないかもしれない。だが見た目も声も十分に大人びている少女二人。織斑千冬と織斑千夏。名前からも分かるように、彼女たちは双子だ。

この二人と一緒に過ごしてきた大切な弟、一夏は何者かに攫われ、未だに消息が分からずにいる。諸悪の根源である篠ノ之束は現在行方不明。つまり千夏は彼女を問い詰める事が出来ないのだ。

「とにかく一夏を探さないと。あの子は優しいし可愛いから殺されたりはしらないと思うけど……」

「それもそうだな。だが一夏の心配と同時に、私たちの生活の心配も並行してしておかないとマズイかもしれないぞ」

「……千冬もわたしも家事一切が出来ないものね」

幼い弟に家事を任せる事に始めは抵抗があつた二人だったが、一卵性双生児であるが故に、似て欲しくないところまで似てしまっているのだ。そう、家事が苦手だということころが……

「とりあえず、日本のとある暗部組織に搜索を依頼してある」

「どうやってそんな連中とコンタクトを取ったのよ」

「お前も知ってるだろ。同級生の小鳥遊だ。アイツはとある暗部組織の一員で、一夏とも面識があつたからな」

「なるほど。でも、見つけ出せたとして、報酬は？ わたしも千冬もそんなにお金持つて

なっし」

「…………それは考えてなかった!？」

「ほんと、肝心なところが抜けてるんだから……」

普通に搜索願を出せば良かっただけなのに、千冬はその事に気がつけなかった。千夏は盛大にため息を吐いて、小鳥遊に電話をする為に携帯を取り出す。

「それで、その小鳥遊さんの番号は？」

「知らん。こちらのを教えただけで、向こうのは聞いてないからな」

「…………我が姉ながら、何でそんな事も出来ないのか不思議よ」

「姉と言っても、たかだか数十分だけの差だ。千夏と私にそれほどの差は無いだろ」

「それでも、貴女は織斑家の長女で、わたしは次女なの。それくらい知ってるでしょ!」

言い争う中、千冬の携帯に着信を告げるメロディーが流れる。表示された番号は諸悪の根源の物だった。

『やつほーちーちゃん、なっちゃん! 東さんは今最高に気分が良いよー』

「東! 貴女の所為で一夏が攫われちゃったじゃないのよ!」

『何それ!? 東さんはそんな事知らないだけど?』

「ISを欲した何処かの阿呆が、我らの天使、一夏を攫ったんだ！」

『いっくんが攫われた……？ 東さんはいっくんに酷い事をしたかった訳じゃ無いのに……』

「だからわたしは反対したのよ！ ろくな結果にならないからって！」

『とにかく、東さんもいっくんの行方を探してみるよ！ こんなことなら、いっくんにGPSでも付けておけば良かったよ……』

「このストーカーめ！」

『可愛い弟を心配するのは、姉として当然だよ』

「東は一夏の姉じゃない！」

千冬と千夏の声が揃ったタイミングで、千冬の携帯にキヤッチが入った。番号は知らない物だった。

「スマン、東。お前と阿呆なやり取りをしている場合じゃないんだ。一夏の事、頼んだぞ」

『はいはい！ 東さんの力、思い知らせてあげるよ』

東との通信を切ったあと、千冬は掛って来た電話に出る。

「誰だ？」

『あつ、織斑さん？ 私、小鳥遊ですけど』

「見つかったのか!？」

『え、ええまあ……一応は織斑一夏君を保護する事に成功しました』

「そうか……良かった……ん？ おい、お前今、『一応』と言ったか？」

安堵したのも束の間、小鳥遊の言葉に引っかけかりを覚えた千冬は、声のトーンを落として問いかける。

『一夏君を攫ったのはとある犯罪組織でして、貴女たちの事を聞き出そうとしてかなり酷い拷問を行ったようなのよ。もちろん肅清は出来るように捕えてあるから、貴女と千夏さんで好きにして構わないわ』

「感謝する。それで、一夏の容体は？」

『……残念だけど、記憶の殆どを失ってしまっていて、今はお嬢様たちと一緒に遊んでい
るわ』

「記憶を……何処まで覚えてる！ 私たちの事は覚えているのか!？」

携帯に怒鳴りつける千冬。その姿を見て、千夏は顔を蒼白にしている。

『……一夏君が覚えていたのは、自分の名前だけ。あとは何も覚えてなかったわ』

「それじゃあ、一夏は私や千夏の事も……」

『残念だけど……それから、一夏君の事は暫く私たちが——更識が護ります。だから少し時間が経ってから一夏君に会いに来てあげて。今は彼、精神的に凄く不安定だから』

「そうか……手間を掛けたな」

『ううん、クラスメイトでしょ。それに、私も一夏君の事は知ってたし』

そう言つて依頼した相手——小鳥遊碧は電話を切つた。切られた千冬は、暫く呆然とした後、妹の千夏に今聞いた事を伝えたのだつた……

更識家の面々

暗部更識家。織斑一夏が保護されているこの屋敷には、二人の娘とその二人のメイドである二組の姉妹と、遠縁に当たる少女の五人が一夏の相手を任されていた。

まず更識家の長女、更識刀奈。次期当主候補筆頭である彼女だが、暗部の娘とは思えないほど明るく、妹を溺愛している。

次に更識家次女、更識簪。姉の刀奈と比べられる事を気にしているが、それ以外では姉との仲は良好。若干少女趣味で、ヒーローに憧れている。

更識刀奈のメイドで、更識家に仕えている布仏家長女、布仏虚。まだ若いながらもしっかり者で、五人の中で最年長。みんなのお姉さんの存在だが、意外と打たれ弱いメンタルの持ち主。

更識簪のメイドで、布仏家次女、布仏本音。刀奈より明るい性格で、何となくボンヤリしている雰囲気纏っている。姉の虚とは違い、簪の事を主ではなく友達だと思っている節が見られる。

更識の遠縁で刀奈と並び次期当主候補、四月一日家の一人娘、四月一日美紀。自分に自信が持てない性格だが、更識・布仏姉妹は彼女の事を認めており、この四人と一緒に

いる時だけは本当の自分でいられると思つてゐる。

そんな五人に一夏の事を知らせたのは、織斑千冬に依頼を受け、捜索隊の一人であつた小鳥遊碧であつた。

「碧さん、その男の子つて簪ちゃんたちと同じ年なのよね？」

「そうですね。まだ六歳か七歳ですかね」

「そんな男の子が誘拐されたんですか？ お金持ちの子とか？」

真つ当な疑問を抱いた簪は、事情を知つてゐるだろう碧に尋ねる。だが碧の首は縦ではなく横に振られた。

「彼の名前は織斑一夏。先日起こつた白騎士事件の首謀者とされている篠ノ之束の友人で、白騎士の操縦者ではないかと噂されている織斑千冬の弟です。ちなみに私とは面識があつたのですが、残念ながら彼は私の事を覚えてはいませんでした」

「覚えてない……ですか？ それは彼が幼かつたからですか？」

「いえ……」

虚の疑問に対する答えは、少し間を置かれてから返つて来た。

「攫われてから数時間で一夏君の事は発見出来たのですが、既に拷問を受けた後でした。

そのショックからなのか、何かの薬の副作用なのかは分かりませんが、一夏君は自分の名前以外の記憶を失ってしまっていました」

「えっ……それって……」

最年長の虚で九歳、刀奈が八歳で、残りの三人が七歳か六歳。子供には刺激が強過ぎる内容だが、暗部で育てている彼女たちは普通の女の子とは精神的に強さが違った。

「それで、その一夏君って子は今どこに？」

「その事で私がここに来ました。本日より、織斑一夏君は我々更識家で護る事になり、当面の間はお嬢様たち五人で相手をしてもらいたいです」

「ほえ？ そのおりむくって男の子だって言ったよね？ 私たちと遊んでも問題ない

の……」

「本音……聞いていなかったのですか？ 一夏さんは記憶喪失で、おそらくは大人に対して恐怖を抱いているでしょう。だから私たちのような年の近い相手が必要なんですよ」

「さすが虚ちゃんですね、まさにその通りです。これはご当主様からのご命令ですので」「お父さんの？」

更識家当主更識楯無。この名前は代々世襲されるものではあるが、今の当主は直系であり、娘二人を溺愛している子煩悩な父親だ。更識家内にもみ適応される重婚もせず、一人の女性を愛し続けている真面目な男でもある。

その父親から「命令」という形を取られた事の無かった刀奈と簪は、少し驚いたような反応を見せた。

「ご命令と言っていますが、ようは遊び相手になつて上げて欲しいとのことですよ。一夏君は今心を閉ざしていますし、我々年長者では怯えてしまいますし」

「そうなんだ……お姉ちゃん、とりあえず会ってみようよ」

「そうね。碧さん、案内お願い出来る？」

「畏まりました」

年下の主に恭しく一礼をして、碧は五人を先導するべく一夏が保護されている部屋を指す……だが、彼女は致命的なほどに方向音痴であり、一夏が保護されている部屋にたどり着いたのは、それから数分後だった。

「碧さん……この部屋ってさつきまで私たちがいた部屋からそう遠くないわよ？」

「碧さんの方向音痴は相変わらずなのですね」

「いめんさい……」

刀奈と虚にそう言われ身体を縮込ませる碧。年は彼女の方が大分上なのだが、立場的には圧倒的に下なので、二人には強く出れない。むしろ残りの三人にも強くは出れない立場なのだ。

「どんな男の子なんだろう。仲良く出来れば良いな」

「本音ちゃんはホント能天気だよ。男の子って何となく粗野で乱暴なイメージがあるから、私は出来れば関わりたくないよ」

「美紀は気にし過ぎだと思っけど、私も出来れば積極的には関わりたくないかな」

同い年三人の中で、本音だけが積極的な姿勢を見せたが、残り二人はかなり消極的。考えれば当たり前だが、いきなり連れてこられた男の子と仲良くしろと言われ、はいわかりましたと受け容れられる方がおかしいのだ。

会う事には納得はしているけど、仲良くするかどうかはまだ分からない。それが簪と美紀の偽らぎぬ本音だったのだ。

「大丈夫ですよ。一夏君は元々優しい子ですし、記憶を失ってる今はかなり大人しい子になってしまってます。簪お嬢様や美紀さんが気にするような事は無いですよ」

そう言いながらも、元々の一夏を知っていた碧の表情は暗い。大人の事情に巻き込まれた男の子を碧は何とかしたいと思い、そして攫った連中を千冬・千夏の二人の姉以上に痛めつけたいとも思っていたのだ。

「一夏さん、碧です。入りますよ」

中から返事はない。だが拒否反応も無かったので、碧は扉を開いて部屋の中へ五人を連れて入る。そこにいたのは、かなり怯えた様子の子だった。

きつかけは

更識家の一室で、一人の少年が小さくなりながら身体を震わせている。自分の名前以外は何も覚えてなく、気がついたら知らない大人たちに色々と訊かれ「知らない」と答えると何かで叩かれる。暫くそんな事が続き、漸く助けてもらったと思つたらまた知らない場所につれて来られたのだ。震えるなどという方が無理である。

広い部屋の中の隅っこにいた一夏は、ノックされた扉に驚き、更に身体を小さくして震えていた。

「一夏さん、入りますね」

外から聞こえてきた声に、聞き覚えはあつた。ここに自分を連れてきた大人の中の一人の声だ。一夏は震えながらも扉を凝視し、返事をしなければ入つて来ないのではないかと淡い期待を抱いていた。

だがその期待は裏切られ、扉はゆつくりと開かれた。

「一夏さん………いきましたね」

一夏から見たら大人の女性である小鳥遊碧が部屋に入つて来たので、一夏は扉から視線を下に移し眼を合わせないようにする。だが部屋に入つて来た足音が彼女一人だけでは無かつたのが気になり、恐る恐るながらも視線を彼女達の方に向けた。

「この子が、織斑一夏君？」

「このような子供に……」

「だ、だれ？」

大人では無い。だが子供だからと言つて無条件で信じられる程、一夏は樂觀主義者では無かつた。元々しつかりとしていた性格だつたのだが、誘拐を経験して更に慎重——悪くいえば人間不信に陥っているのだ。

「私、更識刀奈！一夏君の一つ年上よ。よろしくね」

「布仏虚と申します。一夏さんの二つ年上ですが、あまり気にせず接してくれと嬉し
いです」

まず年長の二人が一夏に声を掛ける。驚かせないように、なるべく警戒されないように距離を保ちながらの自己紹介。

だがこの二人の気配りは、一人の少女によってぶち壊された。

「やつほー！ 私は布仏本音って言うんだ！ おりむくとは同い年だし、仲良くしようね！」

「ッ!?!」

初対面でいきなりのダイブ、それからの頬ずりという最悪の行動を取った本音に、出来る事なら関わりたくないと言っていた簪と美紀が本音を一夏から引き離し説教を始める。

「何も聞いて無かったの!?! 彼は酷い目に遭ったばかりなんだよ!」

「本音ちゃんの明るいところは羨ましいけど、時と場合を選んでよ!」

「ほえ？ 何でかんちゃんと美紀ちゃんはそんなに怒ってるの?」

自分が何をしたのか理解していない本音は、いきなり怒りだした二人の幼馴染を不思議そうに眺めた。一方で抱きつかれた一夏は、何とかして逃げ出そうと四つ角の別の位置に移動して震えだす。

「ごめんね、一夏君。本音はこういった子なの。でも、悪い子じゃないのよ?」

「妹が失礼を……ごめんなさい、一夏さん」

物凄い勢いで逃げ出した一夏に、刀奈と虚が謝罪をする。自分たちの気配りを台無しにした本音に呆れながらも、一夏のフォローを忘れなかったのは、やはり年長者だからだろう。

「ごめんね、一夏。私は更識簪。さっきのお姉ちゃんと姉妹なんだよ」

「私は四月一日美紀です。よろしくお願いしますね、一夏さん」

「ついでに私も自己紹介しておかなきゃね。久しぶりね、一夏さん。まあ一夏さんは覚えてないんだけど……貴方のお姉さんのクラスメイトの小鳥遊碧です。貴方の護衛役として選出されたので、これからもよろしくね」

次々と自己紹介を済ませ更識サイド。だが一夏はただただ膝を抱えて震えている。自己紹介をちゃんと聞いていたのかも定かでは無かった。

「碧さん……元々の一夏君ってどんな子だったんですか？」

あまりにも反応が見られなかったので、刀奈が碧に問いかける。元々引つ込み思案だったのか、それとも誘拐され記憶を失ったからなのか、刀奈たちにはその事が分からなかったのだ。

「元々警戒心は強かったです、これほど人間不信では無かったと思います。二人の姉

との関係も良好だったようですし、前に見た時は笑顔が可愛らしい感じでした」
「そっか……じゃあやつぱり誘拐の所為で」

「おそらくは。それにやはり見ず知らずの人間に囲まれて、本音ちゃんにあんなことをされたら普通の男の子でも警戒心を強めても仕方ないかと……」

「本音が申し訳ない事を……」

姉である虚が反省している横で、本音は首を傾げながら一夏に話しかけ続ける。

「ねーねー、何で震えてるの？ そんな事してないで一緒に遊ぼうよー」

「……苛める？」

「苛めないよ。だって私はおりむくと仲良くしたいんだもん！」

誰にも反応しなかった一夏が、本音の問い掛けに答える。一夏としてはかなり勇気を振り絞ったのだが、本音にはそんな事は関係なかった。

「それに、かんちゃんや美紀ちゃん、おねくちゃんや刀奈様だって、おりむくと仲良くしたいんだよ？ もちろん、碧さんも」

「……本当？」

「そうだよね？」

本音に視線で問われて、即座に頷く五人。普段頼りなさげな本音が、今だけは頼もしく見えた瞬間だった。

「おりむくは私たちと仲良くしたくないの?」

本音の問い掛けに小さく首を振る一夏。大人は怖いと思っっているが、年の近い彼女たちなら大丈夫だと思っただのかもしれない。

「それじゃあ、何時までも部屋に籠って無いで外に出よう! 碧さんが鬼でみんなでごっこだ〜!」

本音に手を引っ張られて無理矢理連れ出されそうになった一夏だったが、彼はそれに鍛えていたので、本音の力では引っ張る事が出来なかった。

「ほえ!! おりむくって力強いんだね〜! 何かやってたの?」

「分からない……」

やっぱり本音は本音だった、と五人は苦笑いを浮かべたが、とりあえず一夏が反応を示してくれたので一安心をしていた。

その後一夏は本音以外にも返事をしてくれたので、その報告を受けた更識楯無は満足そうに頷いたのだった。

残念な姉

一夏が誘拐され、更識家に保護されてから数日後。更識家に怖い顔をした女子高生二人がやって来た。

「スマンな、小鳥遊。わざわざ案内させて」

「ごめんなさいね。千冬が無理を言ったように」

「いえ、弟の心配をするのは当然だし、理不尽に攫われて酷い目に遭わされた弟を心配するのは当然だと思います」

碧と千冬には面識があつたが、千夏には無かつた。だが初対面ではあるが、別に緊張するような性格でも無ければ、そのような精神状態でも無かつたのだ。

「それで、一夏を攫つた阿呆共は何処だ？」

「それより先に一夏の様子でしょ。まったく千冬は猪なんだから」

「お前だつて似たようなものだろ！」

突如始まる姉妹喧嘩。普段は一夏が止めに入ってくれるのであまりひどい事にはな

らないのだが、生憎今一夏はこの場にはいない。いたとしてもこの二人を止められる状況では無い。

「あの……一夏さんに会うにしても、犯人たちを痛めつけるにしても、喧嘩は止めてもらわないと困るんですけど」

「……すまない」

碧の冷静なツツコミを受け正気に戻る織斑姉妹。熱くなりがちだが、冷静さを取り戻すのも早いので有名な姉妹なのだ。

「それで、どっちが先なんです？ 一夏さんに会うのが先？ それとも犯人たち？」

「そうだな……千夏の言うように、先に一夏の様子を見たい」

「そうですか。一夏さんは今中庭にいますよ」

碧に案内してもらおうとして、千冬は何かを思い出したように立ち止った。

「待て……確か小鳥遊は方向音痴だったよな」

「そうなの？」

「え、ええ……ですの、ここから先は別の人が案内します」

更識家に仕えている侍女が待機しており、碧はその侍女に二人の案内役を任せた。
「それで、一夏は何処にいるんだ」

たった数日会わなかったただだが、この二人にはその数日は永遠に等しい時間だった。重度のブラコン、それがこの二人に相応しい称号だ。

「一夏さんは先ほど小鳥遊が申し上げましたように、中庭で遊んでおられます」

「二人でですか？」

「いえ、お嬢様たちとご一緒です」

「お嬢様？ そう言えば一夏と年の近い女の子がいるんでしたね」

侍女の言葉に千夏が反応する。千冬も同じように反応したが、声に出したのは千夏だった。

「はい。一夏さんはご当主様のご息女である刀奈お嬢様と簪お嬢様、その専属従者の布仏虚と本音姉妹、そしてご当主様の遠縁に当たられる美紀様とご一緒でございます」

「全員女……だと」

「何か問題でも？」

千冬が絶句してみせたので、侍女は何となく訊ねる。特に深い意味は無く、彼女の的には世間話程度の感覚だったのだ。

「問題ありだ！ 一夏の周りに虫が付くではないか！」

「虫……ですか」

「千冬、今はそんな事言ってる場合じゃないわよ！ あの束の妹なら兎も角、良家のご息女ならいきなり一夏を押し倒したりはしないわよ」

「そ、そうだな……すまない、取り乱した」

「いえ、落ち着かれたのなら幸いです」

とある事件の後、千冬と千夏のブラコン指数は大幅に跳ね上がり、一夏と親しくしようとしている女子を片っ端から泣かせるという暴挙に出た事もある。もちろん一夏にバレて怒られたのですぐに止めたのだが……

「それで、一夏の様子はどうです？ 落ち着いてきましたか？」

「その事です……お嬢様方たちとご一緒の時は明るい表情も見受けられますが、我々侍女や従者が近づくと途端に物影に隠れたり、酷い場合は視界に入っただけで逃げ出したりする始末です」

「そこまでなのか……」

一夏がどんな目に遭ったのか、どんな状況なのかは碧から聞いていた。だがそこまで酷いとは二人とも思っていなかったのだ。

「何とかご当主様だけでもと思ったのですが、大人の男性は特に怖がってしまいうんですよ」

「つまり、一夏を攫ったのが男で、そのトラウマが心に植わつてるといふ事だな」

「ハッキリ申し上げればその通りです。ですが、男性だけではなく女性にも恐怖を抱いているのを見ると、もしかしたら我々が助け出す前にあの場所に女性がいたのかもしれない」

「なるほど……」

そうこうと話していると、向こう側から聞きなれた声が聞こえてきた。聞き間違えるはずもなく一夏の声だ。二人は侍女を押しつけて中庭へと急いだ。

「一夏！」

「ッ!?!」

突如声を掛けられ、一夏は飛び上がるような仕草をして刀奈の背中に隠れる。そして

一夏を護るように刀奈の周りに他の四人も集まりバリケードを作る。

「失礼ですが、貴女たちは一夏君とどのような関係でしょう」

一夏を護るように前に出て刀奈が問いかける。とても八歳の少女とは思えないほどしつかりとした口調だったのだが、良く見れば足が震えていた。

「私とコイツは一夏の姉だ」

「お姉さん？ 一夏ってお姉さんがいたの？」

「分からない……」

千冬の言葉に簪が反応して一夏に問いかけるが、当然の如く一夏には家族の記憶すら残っていないので答えはこうだった。

「間違いありませんよ。こちらの織斑千冬さんと千夏さんは、一夏さんのお姉さんです」

「あつ、碧さん。今日は早かったね」

「……さすがに迷いませんよ」

何日も続けて中庭に足を運べば、重度の方向音痴である碧でも道を覚える。本音の無邪気な問い掛けに、碧は苦笑いを浮かべた。

「だけど残念ですね。一夏さんには自分の名前以外の記憶は残ってません。私の事も当然ながら、千冬さんと千夏さんの事も覚えていませんよ」

「なん……だと……」

「聞いてはいたけど事実だったとは……この世に神はいないのか……」

膝から崩れ落ちる千冬と千夏。そんな二人を一夏と五人は不思議そうな目で眺めていたのだった。

二人のブラコン

千冬と千夏が膝から崩れ落ちるのを、一夏は不思議そうに眺めていた。姉二人からすれば、最愛の弟が自分たちの事を覚えていなくてシヨックを受けたのだが、記憶の無い一夏には、見ず知らずの年上の女性がいきなり膝から崩れ落ちたとしか思えないのだ。「この人たち、何で泣いてるんでしょうか？」

刀奈の背中に隠れながらも二人の姉の事を見て、そんな事を口にする一夏。事情を知っている碧だけが、その言葉に反応出来た。

「この二人は一夏さんのお姉さんで、二人とも凄く一夏さんの事を大事に思っていたんですよ」

「お姉さん？ 僕はここのお家で生活してるのに、何で二人は別のお家で生活してるの？」

「それは……」

一夏は自分が攫われた事も覚えていない。気が付いた時には拷問されていたので仕

方ないのかもしれないが、自分がどんな目に遭って、何故救出されたのかも正確に理解していないのだ。

「二夏君、私たちは向こうで遊びましょ。碧さんはこのお姉さんたちとお話があるみたいだから」

「そうなの？　じゃあ仕方ないね」

子供ながらに一夏とこの二人の姉を同じ空間にいさせてはマズイと感じ取った刀奈が一夏に移動を提案する。一夏の方も、刀奈の言う事を信じて移動に応じた。

「碧さん、また後でね」

刀奈の背に隠れながらも、可愛く碧に手を振る一夏。他の大人には驚き以外のリアクションを見せない一夏も、碧には懐き始めているのだ。

そんな一夏の姿を見て、千冬と千夏は小鳥遊碧という人間に殺意を抱いた。自分たちの方がよっぽど一夏に近い人物なのに相手にはされず、数回会った事があっただけの碧は、一夏からあんな風に手を振ってもらえるのだ。多少ブラコンが過ぎる二人とはいえ、理不尽に思ってしまったのは仕方の無い事だろう。

「小鳥遊……少し話があるのだが」

「わたしも話が出来たわ」

「……何となく想像は出来るけど、あれは一夏君の意思だからね？ 私がやってほしかった訳じゃないの。まあ可愛かったけど」

元々幼い一夏だが、記憶を失ってからそれ以上に幼児退行してしまっているのだ。誰かの後ろにくつついて歩いたり、先ほどのように、無邪気な笑顔で手を振ってくれたり、見てる周りの人間の心をほっこりさせてくれる行動が目立つ。

だが千冬と千夏にとっては、その行動は自分たちに向けて欲しいもので、他人に向けられているのは耐えられない物であったのだ。

「裁判抜きで有罪」

「控訴上告は却下され、一審で死刑確定」

「じよ、冗談に聞こえないんですけど……」

「無論、本気だからな！」

「何この姉妹……凄く怖いんですけど……」

本気目の、一瞬でも気を抜けばやられる、そんな雰囲気二人から感じ取れる。碧は何とか話題を逸らそうと必死に考えを巡らせ、ここに来たもう一つの目的を思い出して

もらう事にした。

「そ、その殺意は一夏さんを攫った連中に向けてくれない？ 私に向けてもあまり意味は無いんだけど」

「……むっ、確かにそうだな」

「小鳥遊は何時でも屠れるしね」

千夏の発言を冗談と取れるわけが無かった。目が笑っていない、本当に何時でも屠る事が可能だと目が碧に訴えているのだ。

「では侍女殿、一夏を攫い私たちから天使を奪った愚か者の場所に案内してくれ」

「それから、わたしたちがその場所について暫くは、その場所に他の人間が近づけないようにしてください」

「……一応ご忠告させていただきますが、いくら相手が犯罪者とはいえ、殺人は罪です。ましてや更識の屋敷内でそのような事が行われようとしているのをみすみす見逃すわけにはまいりません」

侍女の言っている事は至極当然な事だが、今の千冬と千夏には通用しない。理屈ではなく感情で動いている今の二人に、正論など邪魔以外の何物でも無かったのだ。

「もし屠るのであれば、その事を一夏さんにご報告しなければならなりません。それでもよろしいのでしたらどうぞ。ご満足いくまで弄り、屠ってくださいませ」

「……………」

戦力では千冬と千夏に適うはずもない侍女だが、口でなら勝つ事が出来る。それ程行っているわけではないが、やはり年の功だろう。

「……分かった。とりあえず一発殴るだけに止めよう」

「そうね。わたしたちが一夏の恐怖の対象になるのは避けたいものね」

「賢明な判断です。それではご案内いたします」

「じゃあ私はお嬢様たちと一緒にいるから、終わったら呼んでください」

千冬と千夏の行動に興味の無い碧は、案内を再び侍女に任せて一夏たちの許へ向かう。本当なら千冬と千夏も一夏の許へ行きたいのだが、今行っても自分たちは一夏を怖がらせるだけ。断腸の思いで一夏の許へ向かう事を諦めて侍女の案内に従い一夏を誘拐し、拷問した愚か者たちがいる部屋へと向かう事にした。

「念の為に申し上げますが、一撃で屠るのもダメですからね」

「分かっている。私たちがだつてそこまで愚かでは無い」

「大体屠つても一夏がわたしたちの事を思い出してくれるわけでもないし、簡単に屠つたら己の罪を自覚させられないじゃない」

「左様ですか……」

恐ろしく自分本位——この場合は仕方ないのかもしれないが、侍女はちよつとだけ誘拐犯たちの同情をした。あの集団はこの二人のブラコンの逆鱗に触れ——いや、逆鱗を蹴り飛ばしたのだらうと理解し、案内するのをちよつとだけ躊躇つてしまう。もちろん、同情の余地は無いので、あくまでちよつとだけなのだ。

ませた子供

千冬・千夏のプラコンが誘拐犯に鉄槌を下しているのとほぼ時を同じくして、刀奈がふと疑問に思った事を一夏に尋ねた。

「ねえねえ一夏君」

「なーに？」

「一夏君って学校はどうするの？」

年齢で言えば一夏も簪たちと同じ小学一年生。学校に通っているのが普通だ。だがこの屋敷に保護されてから、一夏は一步も屋敷の外には出ずにいるのだ。

「分からない……学校ってなに？」

「ほえ!? おりむくは学校も覚えてないの? いいなく! 私も記憶喪失になりたいな」

「本音、一夏はなりたくて記憶喪失になったんじゃないんだよ」

「そうだよ! 一夏君は怖い目に遭ったから記憶を失っちゃったんだよ? 本音ちゃんも怖い目に遭いたいの?」

「それは嫌だな」

普段から学校に行きたくないと思っていた本音が考えなしに言ったセリフに、簪と美紀が注意を入れた。確かに考えなしの言葉だったし、一夏自身がなりたくてなったわけでは無かったので、本音も素直に一夏に頭を下げた。

「ごめんね、おりむ」

「ううん、本音ちゃんが悪いわけじゃないよ」

「お嬢様、一度楯無様にお伺いを立てた方がよろしいかと」

「うーん……お父さんも何も言っていないだし、一応は何とかなってるとは思うのよね……でもまあ、何時までも屋敷の中に引き籠り、ってわけにもいかないでしょうしね」

虚の提案に刀奈は少し考えてから答えた。

「それじゃあ一夏君、お父さんのところに行きましょう」

「……いじめる？」

「いじめないわよ。私と簪ちゃんのお父さんだもの」

「お姉ちゃん、それってなんの根拠にもなつて無いと思う……」

小学一年生とは思えないツツコミに、刀奈は苦笑いを浮かべた。だがそれも一瞬の事で、一夏の手を取って当主の部屋へ向けて出発したのだった。

「虚ちゃんたちも一緒に来るでしょ?」

ふすまを開け一歩部屋から出たところで、刀奈は振り返り四人に問いかける。このまま一夏と二人きりでも一向に構わなかったのだけでも、一夏の事を気にしているのは自分だけでは無いと理解しているのだ。

「しかし、私たちはご当主様に簡単にお会いできる立場では……」

「おねくちゃんは気にし過ぎだよ。楯無様は私たちの事も娘みたいに思ってくれてるじゃん」

「ですが……ここはお嬢様と簪お嬢様のお二人で行かれるのが良いかと」

「そうですね。私もここで虚さんと本音ちゃんと一緒に待ってます」

「ほえ? 私は一緒に……離せ〜!」

虚と美紀に押さえつけられ、本音は部屋に残される事になった。刀奈は一夏と手を繋ぎ、それを羨ましそうに見ていた簪に一つ提案した。

「簪ちゃんも手を繋ぐ? まだ反対側が空いてるわよ」

「一夏、私も良い？」

「うん、簪ちゃんなら良いよ」

同い年のはずなのに、一夏は簪から見ても子供っぽい。記憶喪失と共に、幼児退行を起こしており、小学一年よりさらに幼い言動をとったりしているのだ。

「一夏、もしかしたら一緒に学校の学校に行けるかもしれないね」

「そうなたら一夏君はお姉さんの後輩ね」

「小学校に先輩も後輩も無いよ、お姉ちゃん……」

「刀奈ちゃんと簪ちゃんは仲良しだね。僕羨ましいな」

「一夏君……」

一夏にも姉はいる。だが一夏はその事を覚えていないし、自分たちや虚たちのように年の近い兄弟ではなく、十歳近く離れているのだ。

「よし！ 一夏君も私の事をお姉ちゃんだと思って良いわよ」

「本当！ 嬉しいな」

「ちよつとお姉ちゃん。そんな事また簡単に言つて……」

「大丈夫。ちゃんと簪ちゃんのお姉ちゃんだから」

「そういう事じゃないよ……まあ良いけどさ」

そんな事を話しながら当主の部屋を目指す三人。その途中で一つの部屋を横切った時、一夏が急に震えだした。

「どうしたの、一夏君？」

「一夏、寒いのか？」

「ち、違うよ……この部屋の中に、怖い人たちがいる……」

一夏が指さした部屋、そこは一夏を攫った奴らが閉じ込められており、今現在は千冬・千夏姉妹が誘拐犯に罪に適した罰を与えているのだ。ちなみに、罪と罰の比重は彼女たちの基準であり、実際に比例しているのかと問われれば即答出来る感じでは無い。

「大丈夫。何があってもお姉さんが護ってあげるから」

「私も。一夏を怖い目に遭わそうとする人がいるなら、その人から一夏を護る」

実際問題として、小学二年生と一年生では出来る事に限りがある。だが今の一夏にとっては、この二人の言葉は非常に心強く、また安心出来るものだった。

「ありがとう。二人とも大好き！」

震えていた一夏が笑顔を取り戻し、無邪気にそんな事を言う。子供が良くいう感じの「好き」であって、そこに深い意味は存在しない。だが刀奈と簪は多少なりとも一夏の事を想っていたので、その一夏に「好き」と言われ大いに照れた。

「もう！ お姉さんをからかっても何も出ないぞ」

「一夏、そういう事は簡単に言っちゃダメだよ」

「何で？ 僕は刀奈ちゃんも簪ちゃんも、虚ちゃんも本音ちゃんも美紀ちゃんも好きだよ？」

「私たちも一夏君が好きよ。でもね、一夏君の『好き』と私たちの『好き』はちよつと違うかもね」

「？ 良く分からないや」

小首を傾げながらもそれ以上は追及してこなかった。一夏としては気にはなつただけども、深く聞いちゃいけないと本能的に理解していたのかもしれない。

「お父さん、ちよつと聞きたい事があるんだけど」

そうこうしている内に当主の部屋にたどり着き、なんの前置きも無く刀奈が声を掛け

た。

「どうした、刀奈」

「夏君って学校はどうするの？」

この問いかけに、楯無は悪い笑みを浮かべながら娘に耳打ちをしたのだった。

当主VSブラコン

肅清を終えた千冬と千夏は、侍女につれられて当主の部屋へと向かっていた。

「何故わたしたちを当主の部屋へ連れて行く」

「既に肅清は済ませたから、私たちにはもう用は無いぞ。後は一夏を連れて帰って、それで終わりだ」

「その事でご当主様からお話がございますので、私は貴女方お二人をご案内しているのです」

いくら客人とはいえ、千冬と千夏よりこの侍女の方が年長だ。不遜な態度を取られても態度には出さずにしつかりと役目をこなしている。だが内心はこの二人のブラコンに対し呆れとほんの少しの苛立ちを抱いているのだ。

「話とはなんだ？ わたしたちはすぐにでも一夏を連れて帰りたいのだ」

「千夏の言うとおり、私たちは既にこの屋敷に用は無い。さっさと案内して終わらせろ」
「畏まりました。ではこちらですのぞ」

親がいなかった千冬と千夏は、目上の人間を敬うという事を教わって来なかった。なまじつか昔から頭脳も武力も高い能力を有していたので、周りがへりくだっていたのだから、仕方ないと言えはそうなのだが……

「楯無様、織斑千冬様、織斑千夏様をお連れしました」

『御苦労。入りなさい』

「失礼します」

扉越しに一礼して、侍女は当主の部屋の扉を開ける。そして千冬と千夏を中に通し、自分は静かに扉を閉めて別の仕事の為に部屋から遠ざかって行くのだった。

「さて、君たちが一夏君のお姉さんで、小鳥遊碧を通じて我々に織斑一夏君の搜索・救出を依頼してきたんだね」

「そうだ。一夏を見つければ、助け出してくれた事に感謝する」

千冬の状態に対しても、顔色一つ変えずに楯無は対応する。伊達に暗部の当主を務めているわけではなく、人生経験は先ほどの侍女より遥かに多く積んでいるのだ。

「なに、弟さんを心配するのは当然の事だろう。それに、君たちの事は小鳥遊から少し聞いているからね。随分と弟の一夏君を溺愛しているようではないか」

「当たり前だ！ 一夏はわたしたちの癒しなのだからな！」

「ふむ……だが今の一夏君は、君たちの事を全く覚えていない。そんな一夏君を君たちは面倒見切れるのかい？」

楯無は既に、千冬と千夏が家事が一切出来ない事、一夏が二人の姉の面倒を見ていた事を調べ上げている。そして自分の二人の娘と、娘のように可愛がついている布仏姉妹、美紀も一夏と仲良くしている事を見てきている。

「一緒に暮らせばそのうち記憶も戻るだろう。それに一夏は私たちの弟だ。その弟を家に連れて帰るのに、わざわざ貴方にとやかく言われる覚えは無い」

「確かにそうだ。だが君たちは一夏君を怖がらせず、また負担も掛けずに生活を送れる自信はあるのかい？ 失礼ながら君たちの事は調べさせてもらっている」

楯無の言葉に、千冬と千夏がピクリと身体を震わせる。もちろん一瞬だけだったのだが、楯無はそれを見逃さなかった。

「君たちのご両親の事は、同じ親として許せなく思うよ。だけど君たちも自分の事に集中して一夏君の事を疎かにしている節があるね。今回の事件の元凶と噂されている篠ノ之東、その妹の箒ちゃんが一夏君にした事、君たちも知っているよね。あれは君たち

がしつかりと一夏君の事を見ていれば防げたはずだ」

「だが！ あれはあの雌が……」

「その言葉遣い、一夏君が真似したらどうするんだい？ 彼は今記憶がない。周りの影響を受けやすい状態になっているんだ。君たちのその言葉遣いを普通だと認識して、一夏君までも口汚くなったらどうするんだ」

楯無の言葉に、千冬と千夏は反論の言葉を無くした。自分たちの言葉遣いは前に一夏から注意された事もあったので、それを一夏が真似する可能性は無かった。だが楯無の言うとおり、今の一夏は周りの影響を受けやすい状態なのだ。

「一夏君の記憶が戻るまで、彼の事は我々が面倒を見よう。生活費やその他諸々も我々が出す」

「なっ！ 貴方はわたしたちから一夏を奪うと言うんですか！」

「なに、一夏君の記憶が戻るか、君たちの言葉遣いと生活習慣が改められたと判断すれば、その時は一夏君を元の生活に戻すと約束しよう。まあ、一夏君の記憶が戻った時、どちらで生活したいかを確認して、君たちとの生活を選べばの話だがね」

「どういう事だ？」

「一夏君が何時記憶を取り戻すか分からない状態で、暫くこの屋敷で生活を送るとしよ

う。記憶が戻った時に、失っていた間の記憶が残らない場合もあれば、そのまま残っている場合もある。記憶が残っていた場合、彼はここで生活していた時の記憶と、君たち姉二人の面倒を見ていた時の記憶の両方があるんだ。その場合は、どちらが楽しかったかの判断に任せると言う事だ」

楯無は娘二人を持つ父親だが、心のどこかで息子が欲しかったと思っていた。もちろん一夏を自分の息子にする事は出来ないが、息子を育てる気分にはなれる。言っている事は更識家当主としての判断と、今の一夏の状態を考えての事だが、少なからず一夏を織斑家に帰したくないという気持ちもあったのだ。

「……分かりました。ですが、一夏がわたしたちを選んだ時、すぐに一夏は連れて帰りますので」

「当然だね。一夏君の意思を捻じ曲げてまでここに残す事はしないよ。もちろん、ここに残りたいと言った時に、君たちが強引につれて帰ろうとした場合は、暗部更識家の全勢力をもって君たちを排除させてもらうよ」

「良いだろう。千夏、とりあえず帰るぞ」

自分たちの生活習慣が改められるとは千冬も千夏も思っていない。一夏無しでは数

日である家はゴミ屋敷と化すだろうし、まともな食生活が送れるはずもない。そうなれば出来るだけ早く一夏の記憶が戻り、この屋敷での思いでが残らないように祈るしかなかったのだった。

二人が帰った後、楯無は一人ため息を吐き、これからの事を考えるのであった。

楯無の計画

千冬と千夏が帰ったあと、一夏は刀奈と一緒に楯無に呼び出されていた。何故刀奈が一緒なのかというと、一夏一人では自分は恐れられてしまい話が出来ないという、楯無の配慮だ。

「お父さん、来たわよ」

「入りなさい」

扉越しに娘に声を掛けられ、楯無は短く返事をして部屋に招き入れた。娘の背後には、少し怯えた表情の一夏が顔を覗かせていた。

「別に何かをするわけじゃないんだ。そんなに身構えなくても良い」

「本当？」

「ああ、本当だ。私は君の意見を聞きたくてね」

娘の背後から顔を覗かせる男の子に、楯無は苦笑いを浮かべながら丁寧な口調で話しかける。

「それでお父さん、一夏君にお話しして何なの？」

「さつきまで君のお姉さんたちが来ていたのは知っているね？」

記憶が無く、二人の姉の事を覚えていないのは楯無も知っている。だがあの二人の事だから、一夏に顔を見せて自分たちが姉だと宣言しただろう事も楯無はお見通しだったのだ。

「えっと……さつきの二人が僕のお姉ちゃんなら、確かに会ったよ」

「そうか……じゃあ君は、ここで生活するのと、さつきのお姉さん二人と一緒に暮らすのと、どっちが良いかな」

楯無としては、当分の間一夏を織斑家に帰すつもりは無い。だが一夏本人がここでの生活ではなく織斑家での暮らしを選べば、一夏の意味を尊重するつもりでもあったのだ。

「僕はここがいい。刀奈ちゃんや簪ちゃん、虚ちゃんや本音ちゃんや美紀ちゃんと一緒に良い」

「そうか……じゃあ暫くはここで生活するがいい。学校には小鳥遊と別の人間を送り迎えにつけるから心配する事はないぞ」

「でもお父さん、碧さんは方向音痴じゃ……」

「だからもう数人つけると言っただろ。それが無ければ小鳥遊は優秀なんだがな」

楯無は娘からの質問に苦笑いを浮かべながら答えた。

「政府の連中は一夏君を別の人間として扱う方が護り易いとは言ってきたいるが、それは『織斑一夏』という個人を否定し、世間から隔離する事と同じだからな」

「それで、一夏君は何時から学校に行けるようになるの？」

「そうだな……今週は屋敷でゆっくりしてもらって、来週から学校に復帰する形でどうだろうか？　一夏君はそれで構わないか？」

「うん……でも僕、学校が何処なのか、どんな友達がいたのかも分からないよ？」

「大丈夫だ。学校には事情を話してあるし、君に危害を加えようとする輩は隔離するよに『お願い』してあるから」

「そうなの？　ありがとう、小父さん」

一夏の無邪気な笑みを見て、楯無は急に父親のような顔になる。元々息子の欲しかった楯無は、一夏の事を少なからず息子のように見ている節があるのだ。

「じゃあみんなと遊んでおいで。私はまだ仕事が残ってるから」

「分かった。でもお父さん、一夏君の学校って私たちと違うよね？ 何で転校させなかったの？」

「何時記憶が戻って、何時織斑家に戻るか分からないんだ。ここからの距離よりは織斑家からの距離を優先するべきだと判断したんだ。子供がそんな事を気にする必要はないだろ」

「また子供って言う！ 私だって考える事くらい出来るんだから！」

「はいはい。刀奈も一夏君と一緒に遊んであげてくれ。どうやらお前たちには心を開いているようだからな」

「そんな事、お父さんに言われなくても分かっているわよ」

反抗期、では無いにしても、この年頃の娘は扱いが難しい。楯無はそんな事を考えながら書類に目を通す。重要人物保護プログラムの説明が書かれた書類をクズ籠に入れ、ため息を一つ吐いた。

「織斑一夏君は私の娘たちと仲が良い。その彼を、『彼では無い誰か』にしてしまうのは彼にとっても、娘たちにとってもマイナスでしかないからな」

再び攫われるかもしれない可能性がある事は、楯無も十分理解している。だが折角娘

たちと仲良くなつてきている彼を、政府や大人の都合で離ればなれにして遠ざけるのは、一人の父親として認められないのだ。

「誰か、小鳥遊を連れてこい」

楯無の言葉に、側を通つていた侍女が反応して、すぐに碧をこの部屋に連れてきた。

「お呼びでしょうか」

「君には一夏君の護衛と、学校までの送り迎えを頼む。もちろん君一人では無いから気負う必要はそれほど無い」

「畏まりました」

「それから、一夏君に近づく政府の人間は敵とみなして構わない。これから篠ノ之束が例の『IS』について発表するかもしれないからな。そうなったら彼女をおびき出す餌に、一夏君は最適だ。彼女の妹である篠ノ之箒は、篠ノ之束にとつてあまり執着する相手ではないようだからね」

「分かりました。政府の人間とは別に、織斑姉妹はどうしましょう？ あの人たちの事ですから、毎日のように一夏君の事を観察・隙あらば連れて帰ろうとか考えそうですけど」

碧の言葉に、楯無は頭痛を覚えた。確かにあの姉妹ならばやりかねない、その考えが楯無の頭によぎったのだ。

「そうだな……君の戦闘能力で彼女たちが払いのけられるならそれが一番なのだが、彼女たちは相当な手練のようだしな。その場合は一夏君が連れて行かれないようにするよ
うに注意してくれ」

「分かりました」

「もちろん、君も学生生活をしっかりと送るように。君が学校に行っている間は別に人間が一夏君の監視・護衛を務める事になっているから」

「はい。では失礼します」

碧が部屋から出て行き、楯無はもう一度重要人物保護プログラムの説明書きを読む。何度読んでも、政府の都合だけを押し通しているこの制度に、楯無は嫌悪感を抱くのだった。

女子高生の会話

一夏の護衛役を命じられた碧は、一夏を小学校まで送り届けた後自分も学校に向かう。普通に移動したのでは遅刻確定なのだが、一夏を送り届ける際に車移動をしているので、ついでに碧自身も車で学校に向かう。

「じゃあね、碧さん」

「行つてらっしゃい、一夏君」

車から降りて手を振る一夏に手を振り返し、碧は運転手に車を出してもらおう。自分で運転出来れば一番いいのだが生憎まだ免許を取れる年齢でも無いし、取れたとしても碧は方向音痴。自分一人では一夏を学校に送り届ける事は出来なかつただろう。

「貴女も大変ね」

「いえ、これくらいしか出来ませんし、一夏君が他の人を怖がってしまった以上、私が一夏君の送り迎えに立ち会うのは仕方の無い事です」

学校に通うようになって、少しは他人を恐れる事が無くなつて来た一夏だが、大人に

対してはまだまだ恐怖心が勝ってしまうのだ。男性なら特に……だからこの任務は碧が適任だろうと、楯無は最初から思っていたのだ。

「一夏さんは記憶を取り戻そうとはしてない様子ですし、このまま貴女が面倒をみる事になりそうですね」

「お嬢様たちもいますし、私だけではなさそうですね」

現在更識家において一夏が怖がらずに接する事が出来るのは、刀奈、簪、虚、本音、美紀、碧の六人。少し怯えながらも楯無と話す事は出来るので、それを含めても七人、他の侍女や従者には怖がって近づこうとはしないのだ。

「報告を見る限り、一夏さんの学校生活は順調のようですし、このまま平和に事が進めば一番でしょうけど、まだ予断は許さない状況ですね」

「篠ノ之束の動きが分からない以上、一夏君に危害が及ぶ可能性は無くなりません。もちろん、篠ノ之束が動いたら動いたで、一夏君が危険な目に遭う可能性が高まるかもしれないのですが……」

「彼女の妹も、一夏君にとっては危険人物ではあるようですね」

「復帰初日に一夏君に襲いかかろうとした時には、本気で殺そうかと思いましたよ」

一夏が学校に復帰した日、篠ノ之箒は一夏に向かつて飛び付いた——本人は抱きついたつもりでも、一夏にとってはタツクルしてきたようにしか感じられなかったのだが。

教師から記憶喪失になり、他人を怖がる傾向があると言われたばかりの行為に、更識の護衛を含む周りの大人から大目玉を喰らわせられたのだが、一向に反省の色は見られない。未だに一夏を見つけては飛びついてこようとするので、碧は半分以上本気で箒に攻撃を仕掛けようとした事もあるのだ。

「まあ彼女の事は織斑姉妹にも報告が行ってますし、どうやら篠ノ之束にもその情報は伝わっているようです」

「相手の事を考えないのは、その束って人も妹の箒って子も変わらないんですね」

「篠ノ之家の血筋なのでしょうか……詳しい事は分かりませんけど」

「そうですか。到着しましたので、後は我々にお任せ下さい」

「はい、お願いします。また後ほど、よろしくお願いします」

碧の通っている高校に到着し、碧は一札をして車から降りる。そして車を見送ったところで、背後から強烈な気配を感じ取った。

「えっと……おはよう、千冬さんに千夏さん」

「挨拶はいい。一夏の様子はどうか？」

「あのバカ箒はまだ一夏にちよつかいを出しているのか？」

「教えてあげるから、その殺気はしまつてくれない？ 別に私が一夏君にちよつかい出してるわけじゃないんだから」

女子高生が朝からするような会話内容では無かったが、周りはその事を指摘したりしない。碧が暗部組織に身を置いている事は周知の事実だし、千冬と千夏が重度のブラコンで、その弟が誘拐された事も既に全校生徒に知れ渡っている。そしてこの三人に話しかけるような猛者など、この学校に在籍していなかったのだ。

「何故一夏は私たちでは無く小娘たちを選んだのだ……」

「お姉ちゃんたちが一日中護つてあげると言うのに……」

「貴女たちだつて学校があるんだし、一日中は無理よ。それに一夏君は貴女たちの記憶も失つてるんだから、一夏君から見た貴女たちは今、ただの年上の女性でしかないのよ？ そんな一夏君を怖がらせずに相手する事が貴女たちに来るの？」

「当然だ！ 一夏は私（わたし）の天使だ！ 怖がらせずに接する事など容易い」

「……その息ピッタリなところ、私からしたら怖いわよ」

普段は息の合わない事が多い姉妹だが、こと一夏の事に関しては息ピッタリなのだ。

「ここ数日付き合ってみて、碧はその事を理解させられていた。

「うちの屋敷でも、一夏君に怖がられずに接する事が出来る人は少ないの。そこに貴女たちが加われるとは思えないわ、悪いけど」

「その数少ない相手の殆どが小娘だろ？」

「一夏が記憶を失ってるのを良い事に取り入ろうとは……今度教育する必要があるだろうだ」

「お嬢様たちに手を上げると言うなら、私だって黙って見過ごす事は出来ないわよ」

碧の戦闘力では、千冬や千夏には敵わないだろうが、自分が仕えている家の人間に手を出そうとするのなら、碧は死を覚悟してでも止めに入るつもりなのだ。

「まあそんな事はどうでも良い。バカ箒は反省しているのか？」

「昨日の時点では反省してないわね。昨日も一夏君に向かって竹刀を振り回していたって報告が入ってるし、放課後に自分の家に連れて行こうとした事も報告されてるわ」

「ほう……千冬、今日は篠ノ之道場に寄って行こう」

「奇遇だな、千夏。私もそう思っていたところだ」

「……ほどほどにしなさいよね」

碧は篠ノ之道場がどういった場所かは知らないが、『篠ノ之』という苗字からそこが篠ノ之家だと言う事は理解出来た。そしてこの姉妹が何をしようとしているのかも、何となくではあるが理解出来てしまったのだった。

動き始める世界

更識楯無はある一枚の報告書を見てため息を吐いた。内容は一夏の周辺を観察・警戒した結果だ。今のところ直接的な脅威は一夏の周りには存在していないが、一夏に悪影響を及ぼす可能性のある人物が一名観測されている。

その人物の名は篠ノ之箒。一夏が更識家で生活するきつかけを作ったとされている篠ノ之束の妹で、その篠ノ之束よりも周りを考慮しない人物だと報告書には書かれているのだ。

その一つの例を上げるとするならば、一夏が学校に復帰した初日、いきなり篠ノ之箒は一夏に近づき、おもむろに一夏の頭を叩こうとした。担任教師がすぐのところ箒の手を払ったおかげで一夏に肉体的ダメージは無かったが、記憶の無い一夏は、その行為一回で篠ノ之箒を恐れるようになった。

その日の内に更識の護衛と碧とで篠ノ之箒に注意し、二度とそのような行動を取らないようにと警告したのだが、翌日には似たような行動を起こしているのだ。

「この娘、おそらくは一夏君に好意を持っているのだろうが、それを表現する方法が分からないのだろう……だが攻撃的な性格と、自己中心的な考え方は放っておくと一夏君

の脅威になりかねない)」

楯無は少し考えて、前にクズ籠に捨てた重要人物保護プログラムを彼女に適応出来な
いか考えを巡らせた。篠ノ之箒はISを生み出したとされている篠ノ之束の妹。重要
度で言えば一夏より遙かに上に位置してもおかしくは無い。だが今のところ脅威が彼
女を襲う事も無く、あの事件から世間は落ち着きを取り戻しかけているのだ。今の状況
では篠ノ之箒に重要人物保護プログラムを適応させる事は不可能に近い。

「(さて、どうしたものか……)」

考えを纏める為に瞼を閉じ、腕組みをしながら今後の事について思案する。この状態
の楯無に話しかけると物凄く怒られるのだが、そんな事を気にしていない程の事態
が侍女によって楯無にもたらされた。

『ご当主様！ 至急お耳にお入れしたい情報が！』

「……入れ」

『失礼します！ ご当主様、至急テレビをお付け下さい！』

「テレビ？」

楯無に自室にももちろんテレビはある。だが普段から点ける事は無く、ホコリを被った状態が長く続いていた。そのテレビが久方ぶりに点けられると、どこのチャンネルでも同じような内容を放送していた。

「篠ノ之束が、例の新型武装、インフィニット・ストラトス。通称『IS』の製造方法を世界的に発表。その結果各国はISの製造に精を出す事となりました」

「……製造方法の発表と言つても、これは外装だけの設計図だ。肝心の動力部分については一切発表していないではないか」

「彼女の言い分としては、『自分だけが作ればそれでいい』との事です。動力部分については篠ノ之束が製造して、それを各国に配布するようになる模様です」

「ISか……これが戦争に使われたら、ISを持たない国は一日持たずに降伏を余儀なくされるだろうな」

「その点はご心配の必要はなさそうです。篠ノ之束はISを『我が子』と申しており、その『我が子』を戦争に使おうものならその国ごと滅ぼすと発言しております」

「……冗談に聞こえないのだが」

楯無はテレビに映し出されている篠ノ之束を目に焼き付ける。後に大天災と呼ばれる彼女だが、楯無の目には普通の——見た目的な意味での普通で、中身は普通では無い

と楯無は見抜いている——女子高生にしか見えなかった。

「情報部の人間に、至急ＩＳの情報を集めるように通達。可能なら動力部分の獲得も並行して行うようにと」

「御意」

世間はこれからＩＳに支配されるだろうと考えた楯無は、自分たちも一つだけは動力部分となるものを確保しておくべきだと考えた。篠ノ之束とコンタクトが取れば一番いいのだが、生憎楯無は彼女の友人の千冬・千夏としかコンタクトを取る事が出来ない。

「連絡するのは憚られるし、彼女たちも簡単に我々に協力してくれるとは思えないしな……」

彼女たちの弟、一夏を更識で保護しているのだが、彼女たちはそれを完全に納得はしていない。毎日のように小鳥遊碧に一夏の状況を訊ね、隙あらば連れて帰ろうとしていると報告を受けているのだ。

「重度のブラコンとは、小鳥遊も面白い表現をする……まあ、私が言えた義理ではないがな」

娘を溺愛している楯無としては、千冬・千夏の気持ちも分からないでは無いのだ。だが当然のように、彼女たちのように弟と「そういつた行為」をしたいなどは考えていない。楯無の「それ」は、普通の父親が抱く感情と相違ないのだから。

「しかしI Sか……これからは力を鍛えるより、操縦技術を鍛えた方が良い時代が来るのだから……そうなった場合、私はしっかりと対応出来るのだろうか……」

常に何手も先を読む、大組織の当主として楯無は常にその事を優先してきた。だが今回のこれは、完全に楯無の予想の範疇を越えた出来事、後手に回っても仕方ない事。だが楯無はその事を恥じ、そして反省する。

「白騎士事件を考慮すれば、この可能性は十分に考えられたはず……しかしこれ程大事になるなんて考えていなかった……今から挽回する事は出来るのだろうか……」

挽回出来なくても、せめて娘たちの幸せは守りたい。と楯無は思案を巡らせ、可能な限りの策を練る。暗部更識家の当主としてではなく、一人の父親としての策も、楯無の頭の中にはあった。だがそれを選ぶのは本当に最悪の事態に陥った時だけ。組織のリーダーとして、自分たちだけを守れば良いなどという考えは、楯無には存在しな

か
っ
た
の
だ
っ
た
。

一夏の特殊能力

楯無の迅速な判断のおかげで、更識家はISの動力源——コアを一つ手に入れる事が出来た。無論一つでは大した事は出来ないだろうが、ゼロよりは一方が可能性はある。

「篠ノ之束の発表によれば、ISは女性にのみ反応するようです」

「それは彼女が望んだ結果なのか？」

「いえ、篠ノ之束の意図した結果では無いようです。彼女はそこまで計算して造ったようではなさそうですし」

実際束は自分と千冬、千夏が使えば後はどうでも良いと考えていたのだ。その結果なのかは分からないが、ISは女性にのみ反応するように完成したのだ。

「既に各国がISを大量生産出来ないか模索中です。篠ノ之束がコアを各国に配布する条件として、軍事産業や戦争にISを使わないと確約させたおかげで、直接的脅威には繋がりませんが、ISを多く保有している国がこの確約を護るといふ保証はどこにもありません」

「そうだな。だから一つでも多くのI Sを欲するのだろう。今現在は篠ノ乃東もI Sのコアを造る事に協力的だが、何時その考えを改めるか分からないからな。今の内にコアの解析と造り方を研究しておいた方がいいだろう」

「ですが、我々は実働部隊です。このような研究は得意としておりません」

「そうだな……誰か新しい人間を雇い入れるしかないだろうな」

更識は実働部隊であり研究職の人間は在籍していない。I Sが造られる事が無かつたら気にもならなかった事だったのだが、このような事態なのでやむを得ないと楯無は判断したのだ。

どのような人材をスカウトするかの話合いをしていたら、外に何ものかの気配を感じ取り、楯無は従者に扉を開けさせた。

「刀奈？ 何のようだ」

「いえ、私じゃなくって一夏君が……」

「どうかしたのか？」

楯無の記憶では、一夏がこの屋敷に来てから今日まで、自分の意思でこの部屋に来た事は無かった。だが今は刀奈が付き添いで一夏が自分の意思でこの部屋に来たのだ。

「それ……」

「ん？ これか。これはI Sのコアだ」

「僕、それ造れるよ」

「……なに？」

別に聞こえなかったわけではない。一夏の言葉が、楯無が想像していた範疇を越えた事だったので思わず訊き返したに過ぎない。

「だから、僕はそのコアを造れるよ」

「本当か？」

「うん。何でかは分からないけど、造れる気がするんだ」

そう言つて一夏はコア作成に必要なものを紙に書き出し従者に手渡した。半信半疑ながら楯無を見た従者に、楯無は無言で頷いてその材料を持って来させた。

「一夏君、何で造れると思つたの？」

「んつとね、良く分からないけど、さっきテレビを見た時に思つたんだ」

「だが一夏、君は記憶が無いのだから？ 何故そう思つたんだ？」

「何でかは分からないけど、造れるなつて思つたの」

理由は一夏本人も理解していないようだが、楯無は一夏の言う事を信じてみる事にした。造れなかったとしてもなにも失うものは無い。楯無はそう考えていたのだ。

暫くして従者が一夏のメモにあったものを揃えて戻ってきた。材料自体はさほど貴重なものでは無かったと、楯無は集められたものを見て思った。

「それで一夏、どうやって造るんだ？」

「ちよつと待つてて！　すぐ造つてくるから」

材料だけを持っていき、一夏は楯無の部屋から飛び出て行った。どうやら造っているところは見られたくないらしい。

「刀奈、一夏はテレビを見てすぐに私の部屋に行くと言ったのか？」

「ううん、テレビを見て、多分お父さんの部屋にこのコアが到着した時くらいにいきなり……」

東がISを発表したのが一昨日、もしテレビを見て造り方が分かったのならすぐに一夏はこの部屋に来ていたはずだ。楯無は何が一夏がコアの造り方を理解したきっかけなのかを考えたが、そんなものは分かるはずも無い。なぜなら、一夏自身も理解してい

ないのだ。他人である自分が理解出来るはずも無いのだと、楯無は思考を巡らせる事を止めた。

そして暫くして、一夏が再びこの部屋に戻ってきた。その手には、つい先ほど従者が持ってきた物と全く同じもの——I Sのコアが握られていた。

「はい、これ」

「至急政府から支給されたコアと、一夏が造り上げたコアの分析を！ この際どれだけ時間が掛かっても良いから今いる人間にやらせる！」

「ぎよ、御意！」

普段声を荒げる事の無い楯無が大声で指示を飛ばしたので、従者も飛び上がるようにして返事をした。そして弾かれたように二つのコアを持って部屋から出て行った。

「一夏、もし君が造ったものと篠ノ之東が造ったものが同一だったとしたら、君は再び狙われる可能性が高くなるかもしれない。だから、同じものだった場合は君の護衛を更に嚴重にさせてもらおう」

「良いよー。僕はみんなに『アイエス』に乗ってもらいし」

「みんな、とは？」

「えつとねー、刀奈ちゃんに簪ちゃん、虚ちゃんに本音ちゃん、それと美紀ちゃんと碧お

姉ちゃん！」

「自分は乗ってみたいとは思わないのか？」

「だって『アイエス』って女の子しか動かせないんでしょ？ 僕は男だしね、無理だもん」

「そうか……やはり『IS』は女性にしか動かせないのだな」

解析結果を待つ前に、ISが女性専用だと理解した楯無は、これから先は女性が優位に立つ時代が来るだろうと心のどこかで理解した。理解せざるをえなかった。

ISが世界中の女性全員に支給されるとは思えないが、ISという強みを得た女性が、今の世の中をそのままにしておくはずが無いと、あきらめにも似た何かで楯無は理解したのだった。

そして数日後、束のコアと一夏のコアが同一であると解析結果が楯無にもたらされたのだった。

一夏の周りの危険性

一夏がI Sのコアを造る事が出来る。その事は瞬く間に更識で働く全ての大人に伝わった。そしてすぐに当主・楯無はこの事を外部に漏れ出る事を恐れ緘口令を敷いた。

事の重大性を理解している大人たちは、楯無の命令に従ったが、何がどう大変なのか分かっていない子供たちは、無邪気に一夏がコアを造った事に感心していた。

「一夏君って凄いのね」

「まさか一夏さんがI Sの核たるコアを製造出来るとは」

「お父さんがお友達には言うなって言ってたけど、屋敷の中なら喋っても良いんだよね？」

「そうじゃない？ 小父様が外のお友達って言ったんだから、屋敷内の私たちなら問題ないでしょ」

「でも、一夏さんの立場を考えると、屋敷の中でもあんまり喋らない方が良いと思うけど……」

「大丈夫だって。めったに友達なんて来ないんだし……あれ？ 私たちってあんまり外に友達っていないかもしれないわね……」

自分で言っておきながら、刀奈は少しシヨックを受けた。虚や簪も同様に、自分たちには友達がない、もしくは少ないと改めて自覚しシヨックを受けてしまう。だが本音と美紀はその事には意識を割かず、一夏の事をずっと撫でていた。

「おりむゝつて凄いだね〜」

「一夏さんがコアを造れるのなら、更識の未来は安泰ですね」

「えへへ〜」

一夏自身も、それほど大それたことをしたなどと言う意識は無いので、本音と美紀に褒められてまんざらでもなさそうに笑っている。

「失礼します。一夏さん、ご当主様がお呼びです」

「一夏君だけ？」

「同伴者は特に言われておりません。一夏さんが一人で来られるのでしたら、出来る限りお一人でお願いしたいのですが……」

部屋に一夏を迎えに来た碧の言葉を聞いて、一夏は咄嗟に刀奈の手を取る。楯無が自分に危害を加えないと言う事は一夏も理解しているが、やはり大人の男に対して自分一

人と言うのは心許ないのだ。

「……分かりました。では刀奈お嬢様と一夏さんのお二人でご当主様の部屋へ向かってください」

「碧さんは？」

「私は……別の任務がありますので」

これから何が話されるのか、何となく勘づいている碧は、当主の部屋への付き添いを辞して別の場所へ向かった。だが何の話か全く分からない刀奈と一夏は、碧の態度は道が分からないからだと勝手に解釈して当主の部屋へと向かった。

「何の用事なんだろうね？」

「分からないけど、小父さんは僕をいじめたりしないから大丈夫だよね？」

「当たり前よ！ 私と簪ちゃんのお父さんだから」

それが何の根拠にもなっていない事に、刀奈も一夏も気づいていない。父親である前に暗部組織の当主なのだから、場合によっては一夏に危害を加える可能性だってあるのだが、まだそんな汚い大人の世界に染まっていない子供二人にとって、楯無は優しい父親・小父さんなのだ。

無論楯無も、自分の娘やその友人に手を掛けるなどと言う行為はしたくないと思つて
いるし、実際にそのような場面に直面したとしてもそのような指示は出さないと心に決
めているのだが。

「お父さん、一夏君を連れてきたわよ」

「……入りなさい」

少し答えるまでに間があつたのは、楯無は刀奈が同伴してくる事を考えていなかった
からだ。もちろん可能性は考えていたのだが、楯無の中ではその確率は低かつたのだ。

「小父さん、僕に話つてなに？」

「ああ……篠ノ之束が君の事を狙っているようだ」

「篠ノ之博士が？ でも、何で一夏君を狙うの？」

「……元々一夏君と篠ノ乃束の間に面識はあつた。その事は刀奈も知っているな」

「うん。一夏君のお姉さんの織斑千冬さん・千夏さんのお友達でしょ？」

「そうだ。そして……どこから情報を仕入れたのかは分からないが、篠ノ之束は一夏君
がコアを造れる事を知っているようだ」

「誰かが喋つちやつたのかな？」

刀奈の疑問に、楯無は小さく首を横に振る。

「それは分からないが、更識の人間が情報を外に漏らした可能性は限りなくゼロだ。そうなると、篠ノ之束は何かしらの方法で一夏君を監視している可能性が出てくるのだ」
「監視つて……更識の屋敷に侵入するなんて不可能だし、外から覗きこめる程、この屋敷の扉は低く無いよね」

「だから分からないと言っているのだ。もしかしたら監視衛星でも使っているのかもしれないが、一高校生がそのようなものを使えるとは思えないのだ……」

自分の常識の範囲に束がない事を理解している楯無だが、何処まで常識外れなのか測れない以上、様々な可能性を考えなければならぬのだ。それでも、監視衛星など簡単に造れるはずも、使えるはずも無いと常識の範囲で考えてしまうのだ。

「とにかく、一夏君は変なお姉さんに声を掛けられたらすぐに逃げるんだ。最悪近くにいる大人に助けを求めるように」

「……でも、僕は大人には話しかけられないし」

「ではこの防犯ブザーを鳴らすと良い。すぐに更識の人間が君の許に駆け付ける」

「碧お姉ちゃん？」

「そうだな。学校の時間で無ければ小鳥遊が君の側に駆け寄ってくれるだろう」

碧も高校生であり、彼女自身も学校があるのだ。四六時中一夏の側にいる事は出来ない。だが一夏が自分から近づける大人——小学生から見れば、高校生は立派な大人だ——は碧だけであり、それ以外の人間は、更識の従者だろうと怖がられてしまうのだ。

「無論、君に危害が加えられそうな場合は、ブザーが鳴らなくても大人が駆け付けるから安心してくれ。それから、篠ノ乃束の妹である箒に連れて行かれそうになった場合も、大声で助けを呼ぶんだ。良いね？」

「うん、分かった」

一夏の返事に満足して、楯無は笑みを浮かべて一夏の頭を撫でる。この笑顔を守る為に、楯無は必死になろうと決心したのだった。

新たな脅威

一夏が更識家で世話になり始めて二年が経った。その間は特に大きな事件は起こらなかった——いや、世界からすれば起きてはいるのだが、一夏の周りのみで言えば平和だったのだ。

この二年で世界は大きく変わり、女性優先社会へと変貌を遂げ、今では女尊男卑などという言葉すら常識的に使われるようになっていく。

ISが発表され、各国でIS産業が盛んになり始めた結果なのか、近々ISの世界大会を開催してはどうかとすら言われているくらい、各国での生産合戦は激しさを増している。

楯無が一夏がコアを造れるという事を更識内の秘密とし、口外する事を禁じたおかげで、今のところ一夏がISのコアを造れる事を知っているのは更識家の従者、ないしは侍女たちだけだ。

「小鳥遊も今年で高校は卒業だな。大学には進学しないのか？」

「はい。金銭的問題もありますが、一夏さんの護衛を正式に拝命しましたので、そちらを優先させたいのです」

「彼ももう三年生か……記憶が戻りそうな兆候は無いのか？」

「はい。一夏さん自身も思いだそうとしておりませんし、千冬・千夏両姉も接触は控えておりますので」

「そうか」

今や千冬・千夏は日本におけるＩＳ操縦者の一，二を争う実力者となっている。相変わらず一夏に接触しようとしていたのだが、碧が頑なに許可しなかったおかげでここ数ヶ月はその話題にはなっていない。

「篠ノ之束はどうだ？ その後変わった動きは」

「今のところはＩＳのコアを各国に配布する事に協力的ですが、気まぐれらしいので何時供給を止めるかと彼女の周りではそんな事を囁かれているとか」

「そうなると思います一夏君がコアを造れると世間に知られるわけにはいかないな」

「そうですね。せめて一夏さんがもう少し成長して、自分の身を最低限守れるようにならなければなりませんし」

「一応娘たちの分と君の分のコアは一夏君は製造してくれている。時を見て君たちのＩＳを製造しようと思いで考えているのだが……」

「それは初耳ですが」

「あくまで計画段階だからな。本人に伝える必要は無いだろう。」

楯無にそう問われ、碧は無言で頷く。確かに決定したわけでもないのに、本人に伝える必要性は低い。そして自分は一従者なので、計画段階の事を知る必要性はかなり低いのだと。

「一夏君は何時でも造りたいと思ってるのかもしれないが、まだ技術者が育っていないからな」

「一夏さんは素直に成長してくれてますし、刀奈お嬢様や簪お嬢様との仲も良好ですしね」

「相変わらず私に会う時は刀奈の後ろに隠れているがな」

「仕方ありませんよ。学校の教師ですら、一夏さんは接触するのを避けようとしていますし」

「そうだな。それで、例の問題児はどうなっている」

「篠ノ之箒はこちらの圧力にも屈せず相変わらず一夏さんにちよつかいを出しています。千冬・千夏の制裁を受けてなお、一夏さんに近づく根性はあるようですが、それが一夏さんの迷惑になっているとは考えていない模様ですな」

「やはりあの計画を政府に実行してもらえないのか」

「あの計画……とは？」

出過ぎた質問だとは碧も思ったが、彼女は一夏の護衛として彼に害をなす相手を片付ける事が最優先になっている。いくら楯無とはいえ、一夏の自由を奪おうとするならば、碧は戦うつもりだった。

「篠ノ之箒に重要人物保護プログラムを適用出来ないかと思つてな。重要度で言えば、一夏君とさほど変わらないはずだからな」

「確かに、篠ノ之束の妹という立場は危険が伴うでしょうね。それに篠ノ之箒は我々のように護衛が付いているわけでもありませんし」

「前から政府にかけ合つてはいるのだが、今のところは篠ノ乃束は世界に協力的なので、篠ノ之箒を襲おうなどと考える輩もいないだろ、と言う事で却下されているのだが、な」

「篠ノ之束が非協力的になれば、篠ノ之箒を護る必要性が高くなる、と言う事ですか」「そうだ。もし世界大会などが開催され、国ごとの力の差が歴然となった場合、何処かの国がコアを優先的に欲する可能性もあるのだ。ましてや日本はIS産業でトップクラス。腹いせに篠ノ之箒を攫い束にコアを要求する国もあるかもしれないからな。まあ、そんな輩が大勢いるのなら、一夏君も危険に曝されてしまうのだが」

「一夏君の姉は日本におけるIS操縦者のトップですからね」

碧のセリフに楯無は頷いて答える。織斑千冬・千夏の弟というだけで、一夏が狙われる可能性だって大いにあるのだ。無論護り通すつもりだし部下にもそう伝えているが、万が一という事は何事にもあるのだ。

「篠ノ之束がコア製造を辞め、そして世界大会で日本が優勝でもしたらそんな事もあり得るかもしれないがな。一応、頭の隅にでも留めておいてくれ」

「御意」

楯無から色々と聞かされた碧は、頭の中での整理が追いつかずに混乱していたが、退室の際にしつかりと一礼はした。その事に楯無は満足そうに一度頷いたが、彼の顔色が晴れてはいなかった。

「モンド・グロツソ、か……この計画は中止になってもらいたいものだ。私の息子の為に……」

楯無の中で、一夏は完全に更識の子供として定着している。血のつながりは無いが、一夏を実の息子のように可愛がっている。それこそ、実の娘である刀奈と簪と同等に。

娘のように可愛がっている虚や本音、美紀と同様に。

だがそんな楯無の思いも虚しく、ISの世界大会たるモンド・グロツソは開催の方向で世界的に進んでいくのだった。そしてそのルールは、個人戦とタッグマッチの二種類が検討されているのだった。

代表選考会

ISの世界大会を個人戦とペア戦の二種類で開催するか、それともどちらか一つで開催するかは、大いに揉めていた。代表レベルを三人以上用意出来ない国は一種類、出来れば個人戦だけで開催したいと提案し、代表レベルが多すぎて一人に決めきれない国は、個人戦・ペア戦の二種類で開催すべきだと豪語する。

そんな中日本では、織斑姉妹と小鳥遊碧が最終選考にまで残っており、このままいけば個人・ペアの両種目で世界を取れるとまで噂されていた。

「まさか貴様も代表選考会に来ていたとはな」

「ISになど興味なさそうだったのにな」

「いや、私個人としては興味なんて無いわよ。でも、折角ご当主様が苦勞なさって手に入れたコアを、むぎむぎと国に返すなんてもつたいないじゃないの」

本当の理由は、一夏が造ったコアを使ったISを用意出来ると楯無に言われ飛びついたので、一夏がコアを造れる事は更識家外には秘密にされているのだ。だから碧はもつともらしい嘘を言つてこの選考会に参加している。

「そういう貴女たちだって、例の事件が起こってからはI Sになんて興味を示して無かったじゃないの」

「なに、世界の強者を叩きつぶせる良い機会だからな」

「一夏が更識家で生活し始めて二年以上、わたしたちのストレスは溜まる一方だからな」

織斑姉妹がモンド・グロツソに参加したい理由は実に分かりやすく、一夏と共に生活出来ない今の状況で溜まりに溜まったストレスを発散したいがためだった。普通に発散するにも、この二人の相手を務められる人間は無く、どうやっても弱い者いじめにしかならないのだ。

そんな時に舞い込んできた日本代表選考会の話。千冬と千夏がこの話に喰いつかない訳も無く、選考会で情け容赦なく他の候補者を叩きつぶしたのだった。

「最終選考でも私と千夏を止められるヤツなどおらん」

「だけど、競技が一種類だけになったら、わたしと千冬で叩きあうのだろう……厄介だ」「ちよつと！ しれつと私を候補から外さないでよ！」

「貴様など相手にならん。我々の天使を奪った更識の人間など、一切の容赦なく叩き潰す！」

「私たちは一夏君の護衛！ 奪った相手は貴女たちが叩きつぶしたでしょ！」

とんでもない展開になりそうになったので、碧は声を大にして抗議した。一夏を攫ったのは何処かの国の組織で、更識家は一夏を救出し保護しているのだ。感謝されこそあれ、恨まれる筋合いでは全く無いのだ。

「しかし、東のヤツがこのまま順調にコアを提供し続けるとは思えんな」

「それはわたしも思っている。あの東が今の状況に甘んじるとは到底思えない」

「そうなのよね……もし篠ノ之東がコアを造る事を拒んだら、それこそコアの取り合いにでもなりかねない。いくら条例で戦闘行為に使ってはいけないと決められていても、そんなのはいくらでも破れるしね」

特に罰則の決められていない条例を護り通すなど、そんなお気楽な考えを持っている連中はほとんどいないだろうと考えている三人。何かしらの罰則を早めに決めなければ更なる危険が一夏に迫ってくるかもしれないのだから、この三人が頭を捻った何かしらの解決策を模索するのは当然だったのかもしれない。

『織斑千冬、織斑千夏、小鳥遊碧は至急本部に来るように。繰り返す……』

「何やら呼ばれたな」

「用があるなら向こうが来れば良いものを」

「とりあえず行きましょ。その物騒な殺気はしまつて……」

自分に向けられているわけではないのだが、濃密な殺気を真横から感じるとさすがに居心地が悪い。碧は織斑姉妹にそう言ってから本部へと向かう事にしたのだった。

「来てやったぞ」

「何の用だ」

「……だから普通に話しなさいよ」

織斑姉妹の口の利き方に、碧はため息を堪えられなかった。だが本部の人間は誰一人その事を指摘せずに本題に入ったのだった。

「この度、第一回モンド・グロツソは我が日本で開催される事になり、それに伴い競技は個人戦、そしてペアの二種目で行われる。そして貴女たち三人を、我が日本の代表として参加させる事に決まりました」

「では我々には『専用機』なる物が配布されるわけだな」

「そのとおり！　ちーちゃんとなつちちゃんのは、この天才発明家の束さんが造る事に決まったからー！　文句がある国はそのまま地図から消えてもらうって脅したから、何処の国からも反発は無いからねー！」

「あの、私の専用機は……?」

「んー? お前のは更識とかいう組織が造るって聞いたけど? そもそもお前誰だよ」

「……同級生の小鳥遊碧です」

三年になつてからはクラスも一緒なのに、束は碧の事を知らなかった。いや、認識出来ていなかった。昔からの事で、束は千冬と千夏、そして一夏以外の人間への興味はほとんどなく、妹の箒が辛うじて認識出来る程度であり、他の人間は両親だろうと認識出来ないのだった。

「愛しのいっくんが生活してる家だから勘弁してやったけど、もしいっくんがいなかったらそんな家跡形もなく消し去ってやったのに」

「そうですか……じゃあ私は一旦屋敷へ戻ります」

本部の人間に頭を下げ、碧は部屋から退室する。おそらく屋敷で用意すると言う事は、一夏の造ったコアを使うのだろうと、碧は考えながら合宿所を後にした。

屋敷に戻る為に呼び寄せた車に乗り込み、碧はさっきの束の言葉を思い出していた。

「『愛しのいっくん』ね……誰が原因で一夏君があんな目に遭つたと思つてるのかしら……全て貴女たちの所為でしょうが……」

ISを発表した束、白騎士の操縦者と噂されている千冬、そしてもう一人の姉である千夏。この三人は一夏にベツタリで家事まで任せていた事は調べがついている。碧は、拳を握りしめながら屋敷までの道を車に揺られながら進んで行ったのだった。

更識・I S開発部

日本代表に選ばれた碧は、専用機を受け取る為に更識の屋敷へと移動する事になった。もちろん、自力では帰る事が出来ないので迎えの車が来ているのだが。

「小鳥遊様、この度は代表選出おめでとうございます」

「あの……そんな畏まられると居心地が悪いので、普段通りでお願いします」

「ですが、小鳥遊様は一介の従者から、日本代表に立場が変わられたのですから、私めが普通にお声を掛けるのものはばかられるのでは」

「気にしないでください。私はあくまでも更識の従者ですから」

いきなり話し方が変わった運転手に、碧は普段通りでいて欲しいと頼む。彼女は別代表に選ばれたからといって自分が偉くなったなどとは思っていないのだ。

「では、普段通りにさせてもらいます」

「その方が私も気が楽です」

「小鳥遊さんの専用機ですが、コアはもちろん篠ノ之束が造ったものではなく一夏さんがお造りになったものが使用されます」

「篠ノ之博士の造ったコアと一夏さんが造ったコアとでは、性能の差などはあるんじゃないんですかね？　いくら一夏さんが優秀とはいえ、彼はまだ小学校三年生ですし」

碧の疑問はもつともなものだと言えよう。一夏が小学校三年生で、篠ノ之東のように専門的な知識も技術も持ち合わせていないのは確かなのだから。

だが碧もだが、一夏が造ったコアが東が造ったコアに劣っているとは思っては無い。それだけ一夏の事を信頼しているのだ。

「分析結果は遜色ない出来に仕上がっていると出ていますし、一夏さんが貴女に負けて欲しくないと思っているのは貴女もご存知のはずです」

「そうですね。一夏さんは実のお姉さんの記憶が無いので、私の事をお姉さんだと思っっていますからね」

「彼は未だに心を閉ざしている傾向がありますからね。更識内でも、貴女以外にはあまり懐いていませんからね」

誘拐事件から二年近く経つても、一夏は周りに心を開かずにいる。基本的に刀奈や簪たちと一緒に行動しているので、他の人間と接する機会が少なくなっているのも原因なのだが、無理に接して再びトラウマを呼び起こす事は避けるようにと楯無から全従者に

通達されているのだ。

「ご当主様も一夏さんにはかなり過保護ですからね」

「それこそ、実の娘様である、刀奈お嬢様や簪お嬢様と同等くらいに」

運転手と碧が同時に笑う。本人を目の前に出来るやり取りではないが、こうした事を言い合えるのは屋敷内の団結が強いからだろう。

無事に屋敷に到着した碧を待っていたのは、二人のお嬢様と一人の男の子だった。

「お帰りなさい。碧さん、代表決定おめでとう」

「おめでとうございませす」

「ありがとうございます、刀奈お嬢様。簪お嬢様も一夏さんもありがとうございます」

「早速だけど、碧さんには開発部に行ってもらいたいの」

「開発部？ そんな場所ありましたっけ？」

ここ最近では合宿所と一夏の送り迎いで屋敷に戻ってきていても寝るだけだった碧だが、屋敷内の事はそれなりに把握していたつもりだった。だがいきなり聞いた事の無い場所を言われて、碧は小首を傾げたのだった。

「一夏君が本格的に研究出来るように、お父さんが最近造ったのよ。お父さん、一夏君に

甘いから」

「お姉ちゃんや私にだって優しいけど、一夏には特に優しいよね」

「それじゃあ、私の専用機は一夏さんが造ってくれるのかしら？」

碧の問い掛けに、一夏は満面の笑顔で頷く。

「そうだよ！ 日本政府から送られてきたデータは既にISに反映してあるから、後は碧さんのパーソナライズを打ち込むだけで完成だよー」

「随分と仕事が速いのね」

「えへへー。実は、碧さんが代表に決まる前から造ってはいたんだー。いずれは虚ちゃんや刀奈ちゃん、簪ちゃんや本音ちゃんにも造ってあげたいけど、今は碧さんのを造ってるの」

笑顔で話す一夏に、碧の心は温かくなっていく。つい先ほどまで一夏の実姉である冬と千夏と一緒にいたから疲れていたのだが、その疲れはこの笑顔で跡形もなく溶けて無くなった。

「それで一夏さん、専用機の特性は？」

碧としても、自分の戦い方に合っているのかどうか気がになり、実物を見る前に一夏に尋ねた。

「えつとね、一応近接格闘も銃撃戦も出来るようには造ったけど、碧さんが得意な近接戦に重点を置いて造ったから安心してくれていいよー」

「まあ、千冬さんや千夏さんに比べたら私はどちらもダメなんでしょうけどね……」

「その二人の事も一応は調べてあるけど、あの二人は近接格闘つて言うよりは剣術つて感じがするし、遠距離攻撃と言うよりは狙撃だよね」

実際にあの二人は篠ノ乃流剣術を修めているいるので、I S戦闘においても剣術の動きが色濃く出ている。一夏は二人の記憶は無いが、その動きから戦い方をシツカリと判断していたのだった。

「それじゃあ格納庫に行こう！ 碧さんに気にいってもらえると嬉しいな」

「一夏さんが用意してくれたんですから、絶対に気にいるって」

「えへへー」

一夏が差し出した手を取り、一夏に案内してもらいながら開発部へと向かう碧。驚いた事に、開発部の主任は一夏だと言うのだ。

「I Sの開発よね？ 一夏さんはよく理解出来てるわね」

「うーん……良く分からないけど、I Sが教えてくれるから」

「？ そうなんだ……」

一夏の言い回しが妙だと感じた碧だったが、その事を深く追求する事はしなかった。そして開発部に着いた碧の目の前には、間違いなく日本政府が造ったI Sに劣らない機能を兼ね備えたI Sが待っていたのだった。

専用機との会話

開発部に到着した碧の目に飛び込んできたのは、まるで精霊のような雰囲気を纏った I S だった。おそらくはこれが碧の専用機なのだろう。

「えつと……これって一夏さんが考案したものですよね？」

「うん。他の人に手伝わってもらったけど、一応は僕が造った、碧さんの専用機だよ」

無邪気に宣言した一夏だったが、碧はその一夏のテンションには着いていけず、気になった事を一夏に尋ねる。

「一夏さんが造った、と仰いましたけども、それはコアを、という意味ですよね？」

「ううん。機体も僕が造ったんだよ！」

褒めて、と言わんばかりに視線を向けてくる一夏に、碧は言葉を失った。I S の開発は今だ何処の国も苦戦を強いられている状況なのに、一夏はそれを自分でやったと言っているのだ。ところどころは大人の手を借りたのかもしれないが、それでも小学三年生の子供が出来る仕事では無い。

「……もしかして、気に入らなかったの？」

「いい、いえ！ そんな事はありませんよ。ありがとうございます、一夏さん」

泣きそうになった一夏を見て、碧は慌てて一夏の頭を撫でながらお礼を言う。撫でられてお礼を言われた事が嬉しかったのか、一夏はすぐに泣きそうな顔から満面の笑みへと表情を変えた。

「この機体の名前とかは考えてあるの？」

「うん！ この子の名前は『木霊』だよ。森の精霊だけど、一説では人を迷わせる悪い子だけど、この子は道に迷わせる事無く、それどころか道を教えてくれる良い子なんだ。これなら碧さんの方向音痴も治ると思うよ」

「そ、そうなんだ……」

まさか一夏にまで自分の方向音痴を心配されていたとは思ってなかった碧は、複雑な思いになりながらもI Sに近づく。

「じゃあフィッティングをしてパーソナライズをしちゃおうよ！ そうすれば『木霊』は完全に碧さんの専用機になるからさ」

「そうね。ところで、それも一夏さんが？」

「うん。でも時間が掛かるかもしれないから勘弁してね」

そう言いながらパネルを操作し始める一夏。碧は木霊を纏いながらその作業を見詰めていた。

『貴女が私の操縦者ですか?』

「へっ? 一夏君、何か言った?」

「ううん。木霊じゃない?」

あつさりと言った一夏だったが、碧はその事を簡単に受け入れられなかった。

「ISって喋るの!?!」

「? 最初から喋ってるよね?」

「そんな事ないけど……」

『一夏さんは我々の声を聞きとれる稀有な存在なのですよ。そして、一夏さんがお造りになったコアを使ったISである私は、操縦者である貴女と会話する事が可能なのです』

「そ、そうなんだ……」

『無論、他の人には聞こえませんので、碧は声に出さず心の中で私と会話するようお願い

いしますね。私も操縦者が変人に思われるのは嫌ですから」
「りよ、了解……」

専用機に呼び捨てにされた事も気にならない程、碧は混乱していた。一夏がISの声を聞く事が出来るのも驚きだが、まさか自分もその声を聞く事が出来るなんて思ってもなかったのだから……

『武装などは後でモニターに表示しますが、私に積まれている武装で一番貴女に合うのはおそらくこの「フォレスト・ランス」ではないでしょうか』

「（直訳で森の槍……どういった効果があるの？）」

『突き出した先に森が出来たような幻影を見せ、相手の動きを鈍くさせます。碧が対戦相手と思っている相手にのみ有効で、観客や他の相手には何も見えません』

「（いきなり森が現れたら驚くわよね……）」

『動きが鈍ったところに一撃を喰らわせればそれなりにシールド・エネルギーを削れますし、相手のISに穂先が当たれば、相手からシールド・エネルギーを吸収する事も可能です』

「（それってかなり有効な手よね）」

『碧がそれを使いこなせば、ですけどね』

ISに小馬鹿にされたような感じがして、碧は苛立ちを覚える。だが、木霊の言うとおり何もかも自分の操縦技術によるものなので、感情を表に出す事はしなかった。

『賢明な判断ですね。今ここで怒っても、一夏さんには何の事だか分かりませんからね』
「(貴女と付き合っていくのは大変そうですね)」

『慣れて下さい。私も碧とは長い付き合いを望んでいるのですから』

「(でも、専用機って国から貸し出されるんでしょう？ 貴女も同じように私が現役を引退したら返還しなきゃいけないんじゃないじゃ……)」

『馬鹿なんですか、貴女は？ 私は日本政府からではなく、一夏さんから貴女に「贈られた」ISなんですよ。何で日本政府に返還されなきゃいけないんですか』

「(馬鹿って……でも確かにそうですね。日本政府は一切介在してないんだから、貴女を日本政府に返す必要は無かったわね)」

同様に、日本政府からではなく「篠ノ之束」個人からISを渡される千冬・千夏コンビも引退してもISを政府に返す必要は無いのだ。

『私は一夏さんがお造りになった初めてのIS、いわば初号機と言えるでしょう』
「(何かのアニメに引つ張られて無い?)」

『別にそのような事はありません。一夏さんがお造りになった第二世代型 I S として、世界の愚か者共を驚かせるのです』

「(第二世代!?) まだ第一世代もろくに開発出来てないのに……どれだけ凄いのよ、一夏さんは)」

第二世代、という言葉すらまだ世間では言われていないのに、一夏はほぼ一人で第二世代型 I S を製造したのだと木霊は言う。碧はその事に驚きながらも――

「一夏さんならそれくらいは可能でしょうね」

――と、心の中で納得していた。

「終わったー!」

「もう? やっぱり一夏さんは色々と凄いですね」

一時間も経たずにフィッティングとパーソナライズを済ませた一夏に、碧は称賛の言葉を贈ったのだった。

木霊の力

木霊のフィッティングとパーソナライズを済ませた一夏は、さすがに疲れたのかその場に座り込んで寝てしまった。

『こうして見ると、どれだけ天才的な頭脳を持っていてもまだ子供なんですね』

「当たり前でしょ。一夏君はまだ小学三年生、九歳なんだから」

『我々ISからすれば、一夏さんは生みの親ですけどね』

「貴女たちの生みの親は篠ノ之束でしょ」

『私は一夏さんが造られたコアを動力源とした、一夏さんが製造したISですので。IS全体の生みの親は確かに篠ノ之束かもしれませんが、私に限って言えば生みの親は一夏さんです』

木霊のツツコミどころの無い説明に、碧は思わず頷いてしまった。IS全体の生みの親と、彼女自身の生みの親は確かに違う。人類の生みの親と、一個人の生みの親が違うのと同じなのに、何故一色単に考えてしまったのかと少し恥ずかしく思っていた。

『まあ、厳密には創造主であって生みの親とは違うんですけどね』

「私の感動を返せ！」

あつさりと掌を返したような事を言いだした木霊に、碧はすぐそばで一夏が寝ている事を忘れて大声でツツコミを入れてしまった。

『お静かに！ 一夏さんが寝てますし、そろそろ合宿所に戻らなければいけない時間ですよ』

「へ？ そう言えばそんなにノンビリしてる暇は無かったんだっけ……でも、ご当主様には挨拶しておかなければ」

『なら、早く行きましょう。合宿所に戻るのが遅れたら、最悪代表取り消しなんて事態にもなりかねませんよ』

「……でも、私一人だとご当主様の部屋までたどり着けるかどうか」

『ご安心を。私を持ち運べばその方向音痴も治るはずですから』

そう宣言されても、碧は自分の方向音痴が治るなどとは思えなかった。だがここでその事を話しあっている時間すら惜しい状況だったので、碧は木霊を待機状態へと変換し、急ぎ当主の部屋へと向かった。

「あ、あれ？」

普段なら数分から数十分掛かる移動時間が、ものの一分で目的地へと到着する事が出来、碧は落ち着きを失い周りをキョロキョロと見渡してしまった。

『どうしたんです？ 挨拶をして合宿所に戻るんじゃないかなかったですか？』

「そうなんだけど……本当にここがご当主様の部屋だったのかに自信が持てなくて……」

『どれだけ方向音痴だったんですか、碧は……私にインプットされている更識家内の地図でも、この場所は間違いなくご当主の部屋です。もう少し自分の記憶力に自信を持って下さい』

ISに呆れられながらも、碧は何とか冷静さを取り戻し楯無に挨拶をすべく部屋へと入る。もちろんシツカリとノックをし入室の許可を貰いながら……

束から専用機を受け取った千冬・千夏姉妹は、慣らし運転も兼ねての模擬選を行っていた。ちなみに、千冬の専用機が『暮桜』で千夏の専用機は『明椛』あけもみじと命名されている。名前から分かるように、この二体は対となっている。

『暮桜』は近接戦オンリーの機体で『明椛』は遠距離オンリーの機体、完全にペアマッチにしか使えない機体だと言えよう。——操縦者が織斑千冬と織斑千夏以外だった場合は。

この姉妹は見た目から好み、家事が出来ないと言うところまでそっくりなのだが、唯一ISの特性は全く正反対だったのだ。千冬は近接戦が得意で、千夏は中遠距離が得意。実にペアマッチに適した特性であり、双子故に相手の動きは見るまでもなく理解し

てしまうのだ。

それ故に、この模擬戦も互いの攻撃を一度も喰らう事無く、一度も当てる事もなく時間だけが経過している。

「やっぱりこの二人は別格ね……」

『あれが織斑姉妹、ですか……一夏さんの実姉でありながら、一夏さんの記憶には全くその存在が覚えられていない悲しき存在』

「それ、本人たちには言っちゃダメだからね」

『大丈夫ですよ。それよりも、碧はさつき私が言った事を忘れてるのですか？ 私の声は貴女と、一夏さん以外には聞こえないのですから、今貴女は独り言をぶつぶつと呟いている痛い人ですよ』

「(覚えてるけど……どこでそんな表現を覚えてくるのよ！)」

『貴女の記憶と語彙から得ました。意外と的を射ている表現だと思うのですが』

確かに的は射ていたかもしれないが、ISが使う表現にしては適当とは言えなかったかもしれないと碧は思っていた。

「ふむふむ、これがいつくんが造ったISか……うわあ！ もう第二世代を造れるなんて、さすがは東さんのエンジェル！」

「だ、誰!? って篠ノ之束!?!」

「やーやー、私が天才束さんだよ。お前がいつくんの保護者的扱いの小鳥遊とかいう女だね」

「てか、何故一夏さんがISを造れる事を知っているのですか」

更識内では緘口令を敷かれているし、このISも更識が独自開発したと言う事しか発表されていない。一夏がISを造れる事も、その動力源たるコアを造れる事も更識外の人間は知らないはずなのだが、束はあっさりとその事実を言い当てた。

「束さんに知らない事など存在しないのだ! あつ、いつくんの事だけだからね! 有象無象のゴミの事なんてどうでも良いし」

「その事を千冬さんと千夏さんには……」

「言つてないよー。束さんには関係ないとはいえ、緘口令は必須だと束さんも思ったからね。ちーちゃんとなつちちゃんは口が軽いし」

「そうですか……良かった」

「本当はお前になって言いたくないけど、いつくんを護つてあげてよね。あの子は私たちの所為で人生を狂わされちゃったから」

他人の事など二の次で、自分さえ楽しければそれでいいと世間から思われており、実際殆どの人間の事など考えていない束が、一夏の為に碧に頭を下げた。その事に驚きながらも、碧は力強く頷いたのだった。

試運転

専用機を受け取った三人は、もう一度集合を掛けられて本部へと足を運んでいた。

「それが篠ノ之束より受け取った『暮桜』と『明栴』で、そつちが更識家が開発した『木霊』だな。データは既に送られてきているが、実物はまた凄そうだな」

「で、私たちはなんで呼びつけられたんだ？」

「代表内定は既に聞いたし、専用機も既に渡されたんだ。ここにはもう用事は無いだろう」
「どれだけ自分本位なのよ……それで、私たちが呼び出された理由は何なのでしょうか？」

千冬・千夏姉妹の高圧的な態度にツツコミを入れながら、碧が用件を問う。彼女としても、折角久しぶりに一夏と会えたのに戻って来なければならぬ理由を知りたかったのだ。

「専用機が渡された事で自覚が出てきたかもしれないが、貴女方三人は我が国の代表であり、IS乗りを目指す少女たちの手本となる存在だ。言動や行動にはくれぐれも気をつけて頂きたい」

「そんなもの、私たちに強制させられる筋合いは無い」

「そうね。教育はお前たちがする事であつて、わたしたちを手本にさせる理由は全く存在しない。そもそも個人個人で戦い方なども違うのだから、わたしたちが手本になるかどうかなど分らないだろ。そんな事も分らないのか、お前たちは」

「ちよつと！ まあ言葉遣いや行動などは気をつけますが、織斑姉妹の言うように、手本になるかはその人の戦い方次第ですので、勝手に手本にされては困りますかね」

一部織斑姉妹に賛同しながらも、言動や行動には気をつけようと心に決めた碧であつた。

本部での話はすぐに終わり、碧は木霊を動かすべくアリーナへと来ていた。先ほどまで織斑姉妹が使っていたので、所々に戦闘の痕が見られるが、モニター操作一つでこの痕もすぐに消えるのだが。

『I Sが出来てから、科学の進歩は凄まじい勢いですね』

「(そっちも篠ノ之博士が関わったからね。一々開発を待ってたら研究が捗らないって理由で)」

『恐ろしく自分本位ですね、篠ノ之束という女性は』

「(さつき見たでしょ？ あれが篠ノ之束なのよ)」

展開する前に頭の中で動きをシミュレートする。それが碧のI Sを操縦する前の決めごとであり、代表選考に最後まで残った理由でもある。

「よし！ それじゃあ木霊、一通りの動きを確認するから、武器情報をモニターに出し

て」

『先ほど教えたように、メイン武装は槍です。後はライフルとレーザー銃、マシンガンが一丁ずつと二刀流用の刀が一对ですかね』

「(二刀流? 一本ずつでも使えるの?)」

『もちろん使えますよ。小太刀では無いので』

「(その二本にも名前はあるのかしら?)」

『右に持つ刀が「十五夜」左に持つ刀が「十六夜」ですね。威力はそれ程変わりませんが、僅かに「十五夜」の方が高いですね』

「(じゃあ『十六夜』が小太刀的な扱いなのね)」

威力は低いが、使い勝手は「十六夜」の方が高いとモニターに表示されている。碧は両利きなのでどちらでも同じように使えるだろうが、若干短い「十六夜」の方が間合いを取るのが楽そうだと感じていた。

『その辺りは動かして確認してください。私も碧に使ってもらえるのが楽しみなので。から。一夏さんに期待されている貴女の実力を知るのが』

「(データとして打ち込まれてるでしょ。今更ワクワクする事もないんじゃない?)」

『実際に体験するのと、データとして知っているのでは感じ方が違いますからね。それ

に、データでしか知らないとなると、細部がどうしても大雑把にしか把握できないんですよ。細々とした癖などは、実際に経験して知るしかないですからね』

「(そんな癖なんて無いと思うけど、そこら辺はISが体験して気づくのかもね)」

自分の癖など、指摘されるまで気づかない事が多い。操縦においてもそうなのだろうと納得して、碧はアリーナにて木霊の試運転を始めたのだった。

碧が試運転をしている頃、合宿所の一室で篠ノ之束と織斑姉妹が顔を合わせていた。

「やはりこの『暮桜』と『明栴』は一对として造ったんだな」

「もつちろん！　ちーちゃんとなつちちゃんが敵になるなんて考えなかったし、あの小鳥遊とかいう雌とペアになるつもりもなかったんでしょ？」

「当然だ！」

「だったらちーちゃんとなつちちゃんがペアになるって考えたから、ちーちゃんとなつちちゃんの専用機は一对として考えた方が面白いなーって思ったんだ」

伊達に付き合いが長いわけではないので、束が考えそうな事は千冬も千夏も理解している。それと同じく千冬と千夏の事を、束はしっかりと理解しているのだ。

「この大会で優勝して、いっくんに良いところを見せれば二人の事を思い出してくれるかもねー。そんな記憶がいっくんの中にあつたのなら、だけど」

「それを言うなら束だつて同じだろ。一夏に頼り切つて家事などしなかったのだから」

「だつてちーちゃんやなつちちゃんだつて同じだけど、束さんも料理とか苦手なんだもん！　暗黒物質を造り出した時は、自分の事ながら呆れちゃったもん。まあ美味しく頂いたけどね」

「アレを食べて生きてられるのはお前だけだ。わたしや千冬でもあんなものは食わん」

実に五十歩百歩の会話だが、その事を指摘出来る強者など存在しない。唯一ツツコミを入れられた一夏も、今はこの三人の事を覚えていないのだ。このまま話がグダグダになつてしまうのも、一夏が記憶を失つた弊害と言えるのかもしれない。

少女たちの心配

代表選考から、また暫く時が経ち碧たちは高校を卒業した。元々優秀な成績だった織斑姉妹と共に、碧は下級生から絶大な人気を誇っていた。方向音痴、という欠点も後輩たちには愛おしいと思われる要素だったようだ。

「まさか全校集会で挨拶をしなきゃいけないなんて思ってたわ」

「貴様も国家代表だからな。私たちと同様に意気込みを言え、と言われたのだから」

「わたしは面倒だから断ったのだが、暴動が起こると言われたから仕方なく参加しただけなんだがな」

卒業してもこの三人は顔を合わせ続ける。モンド・グロツソが無事終わるまで、各国の代表はそれぞれの合宿所で生活するように言い渡されているからだ。

「早く一夏に会いたいぞ。せつかく高校という枷が無くなったのだ。これからは四六時中一夏を見守る事が出来る」

「一応忠告しておくけど、今の一夏君に近づいたら実姉である貴女たちでも不審者扱いされるわよ？ 一夏君に防犯ブザーを鳴らされたいのなら止めないけど」

「一夏に不審者扱いされるのは、わたし耐えられないな……」

碧の忠告に千夏が膝から崩れ落ちた。警護はしているが、この姉妹が本気で一夏に近づこうとしたら更識の戦闘力では抑えられないと碧は思っている。

そしてもう一つ、この姉妹には一夏がISを造れること、もつと言つてコアを造れる事を知られるわけにはいかないのだ。

篠ノ之東がどのように知ったのかは分からないが、彼女は織斑姉妹にその事を話していない。長年の付き合いからそうしているのだろうと、碧も理解しているし、この間束から言われた「緘口令は妥当」という事からも、この二人には知られてはいけないと思っ

ているのだ。

「小鳥遊、貴様の専用機は更識で造ったんだっただな？」

「いや、わたしたちのと比べると性能が良いからな。よほど凄腕のエンジニアがいるんだな」

「貴女たちのだつて、篠ノ之東が直々に造った専用機なんだから。私のよりも随分と特殊な造りをしてるんじゃないの？」

「まあな。かなりピーキーに造られていて、私と千夏以外には動かせないだろうな」

胸を張りながら答える千冬に、碧は苦笑いを浮かべる。あまり自慢にならない事でも、この二人が言うとは何故こうも自慢げに聞こえるのか、という感情から苦笑いを浮かべたのだが、二人には違う理由で苦笑いを浮かべていると伝わったらしい。

「あのバカは万人向けなど造れんからな」

「そもそも他人を認識出来てないからな。わたしたち姉妹と一夏、あとは馬鹿箒の四人だけだ」

「そう言えば、そんな事言ってたわね……本当に認識出来ないの？」

「両親ですら、路傍の石を見る感覚らしいからな。それ以外の人間など、何処に違いがあるのか分からないだろうな」

あつさりと言い放つ千冬に、碧はもう一度苦笑いを浮かべた。両親と言う事だけならば、千冬たちも自分も大して変わらないのだから、と。

「そんな事より、後数ヶ月もこのような場所で生活しなければならぬと考えると、壁でもぶち抜きたくなるな」

「確かに。こんな空間に閉じ込めるなど、政府の連中は命が惜しくないらしいな」

「頼むから問題行動は控えてよね。連帯責任、なんて言われたら私泣くわよ」

「バレなければ良いのだ。一人一殺で」
「だから止めなさい！」

冗談に聞こえなかった千冬の宣言に、碧は割かし本気のツツコミを入れた。これから数ヶ月、この二人の相手をしなければならぬのかと思ひ、碧は盛大なため息を吐いたのだった。

碧が合宿所で大変な目に遭っている頃、更識家では一夏が開発室に籠って研究を続けていた。最近では学校から帰ると必ずこの部屋に籠っているので、刀奈たちは寂しい思いをしていたのだった。

「私たちに、一夏君のお手伝いが出来ればいいんだけどね……」

「さすがにI Sの知識は私たちは持つてませんし、一夏さんも私たちが手伝うと言つても領いてはくれないでしょうしね」

「一夏が自分から何かに熱中するのは、この屋敷に来てから初めてだけど、その所為で一緒にいられないのは寂しいよね……」

「おりむくと遊べなくなつてから、美紀ちゃんも悲しそうだしね〜」

「それは本音も一緒でしょ！ 私だけじゃなく、刀奈お姉ちゃんや簪ちゃんだって、虚さんだつてそうよ」

I Sが造れると判明してからも、一夏は自分たちと一緒に遊んでいたのに、モンド・グロツツが現実に行われる事が決まつてからは一夏はI S開発で忙しくなつてしまつている。

「もう碧さんのI Sを造り終えてるのに、まだ研究所に籠つてるものね」

「開発部の人たちも、私たちが聞いても教えてくれないし」

「どうやら一夏さんから口止めされているようです」

「むむむ……おりむくが何をしているのか気になるぞ〜！」

「本音はただ、一夏さんと遊べないから気になるんでしょ？」

「ほえ？ 美紀ちゃんは違うの」

本音の問い掛けに、美紀は寂しそうに答える。

「もしかしたら、一夏さんがISを造れる事が知られてしまい、どこかの国から強制的に造らされているのかもしれないって心配で……」

「あり得なくは無い話だけど、更識の緘口令は完璧なはずだから、まだ一夏君がISを造れる事は世界に知られていないはずよ。碧さんのISを調べられたらバレるかも、だけどね」

力なく慰めてくれた刀奈に、美紀は同じように力ない笑顔を浮かべて応える。一夏の自由が狭まるなら、ISなどは無くなればいいのに……と言うのが、更識内で生活する少女たちの共通の願いだったのだ。心配されている一夏本人は、その事など全く知らないのだが……

開発戦争

モンド・グロツソが近づいてきたが、一夏は一向に研究所から姿を見せない。既に碧の専用機は完成させているのにも関わらず、最近では学校以外の時はこの部屋で過ごす事が多くなっている。

「一夏殿、少し休まれた方がよろしいのでは」

「大丈夫だよ。それに、何時また自由が無くなるか分からないんだから、出来るだけ研究を進めたいんだ」

「ですが、お嬢様たちが心配しておられますし、本音殿は一夏殿と遊べなくて寂しがっております」

「そう……じゃあ偶にはみんなと遊ぼうかな。研究も行き詰っちゃったし」

木霊という第二世代ISを完成させた一夏だが、彼はあくまでも先を目指し続けている。汎用型の第二世代ISを造れないかと模索し、ある程度の目処は立っているのだが完成にはいたっていない。気分転換も兼ねて、一夏は学校以外で久しぶりに研究所から出る事にした。

「あつ、一夏君！」

「刀奈ちゃん？ なにしてるの、こんな場所で」

一夏が外に出てすぐに、刀奈と遭遇した。刀奈たちの部屋はこの場所から離れた場所であり、刀奈たちが研究所を訪れる理由は、一夏が知る限り無い。

「一夏君が心配だったに決まってるでしょ！ 何日も、何時間も研究所に籠って、出てきたと思ったら学校に行っちゃうし……」

「一夏が私たちの事を嫌いになったんじゃないかって、お姉ちゃんや本音が毎日心配してたんだよ？」

「そうだったんだ……ごめんなさい。ISの研究も大事だけど、刀奈ちゃんたちの方がもっと大事だよ、僕は。だから今日はいっぱい遊ぼう」

「ほんと？ おりむくは私たちの事を大事だと思ってってくれてるの？」

「うん。だから、そんな泣きそうな顔をしないでよ」

泣きそうな本音の頭を優しく撫でながら、一夏は安心させるように笑顔を浮かべる。本当は疲れ切っているのだけでも、今まで心配させた罰だと自分に言い聞かせて遊ぶ事にした。

「一夏さん、今はどんな研究をしているのですか？」

「今は更識内で使う訓練機、第二世代で造れないかどうかの研究をしてるんだ。まだ実用に耐えうる機体は出来ないんだけどね」

「第二世代!? まだ第一世代もまともに造れてない状況なのに、一夏君は何処まで凄いのよ」

「そう言えば、碧さんに造った専用機も第二世代なんですよね？ 一夏さんは私たちと同じ年なのに……世界的な研究者になれますね」

「僕はあくまでも更識内で研究をしてるんだよ。世界がどうこうより、僕はみんなと一緒にいたい。これからはちゃんと研究以外も充実させたいと思ってる」

数週間とはいえ、刀奈たちを蔑ろにした事を反省し、一夏は改めて宣言する。自分は更識で生活する事と、更識の為にISを造ると言う事を。

開催日が近づくとつれて、それぞれの国の代表者たちが顔を合わせて行く。どの国も警戒しているのは日本代表であり、織斑姉妹ペアは特に警戒されている。

「凄いわね、貴女たちは。どの国の代表からも警戒の目を向けられてる」

「興味は無い。どうせ我々より強い相手など存在しないのだからな」

「過信や慢心ではないが、やるだけ無駄な大会になると思うぞ」

前評判から、個人戦もペア戦も日本が有利と言われている。篠ノ之東が造った専用機を使用する織斑姉妹と、第二世代 I S を専用機とする小鳥遊碧の事は、何処の国も警戒の対象としているし、特に碧の専用機である『木霊』は、何処の国も未だに第一世代を

まともに造れない状況での第二世代だ。警戒されない方がおかしいのである。

『注目されるのはいいですが、不特定多数の人間に舐めまわすように見られるのは嫌です』

「仕方ないでしょ。貴女は現在世界中を見渡しても唯一の第二世代。注目するなど言う方が無理よ)」

『一夏さんの努力の結晶ですからね。有象無象の輩が造れるほど、今の第二世代は甘くないですよ』

「(貴女の毒舌は誰に似たのかしら……)」

他の人間には聞こえないからいいが、木霊の毒舌には碧は頭を悩ませていた。聞かされる身になれば、木霊の毒舌はかなり精神的にダメージを負うのだ。

『だいたい、私の許可なく触ろうとするなんて、電撃を喰らわされて当然だと思っただけです』

「(確かにあれは仕方なかったけど、私にまでダメージが来たただけ?)」

『大事の前の小事ですよ。気にしちゃダメです』

「(小事じゃないわよ！ 結構痛かったんだから)」

何処の国の人間だかは分からなかったが、碧の意識が別の場所に向いているのを良い事に、無断で木霊に触ろうとした輩が存在していたのだ。自己防衛から木霊は電撃を放ったのだが、その電撃が所有者である碧のも伝わったのだ。

『あれは完全に私を奪って研究対象にしようとしてましたね。手の感覚で分かるんですから』

「（貴女が奪われたら、私は大会に参加出来ないし、もしかしたら一夏君がＩＳのコアを造れるって知られちゃうかもだったから、電撃は有効だったと思うわよ。でも、一言私に言ってから放ってほしかったわよ。そうすれば私も構えられたかもしれないなかったにや）」

『碧の意識が変質者に行ってしまったら意味が無かったんです。あれはあの変態に己の行動が攻撃対象になると言う事を伝える為の攻撃だったんですから』

「（それで、何処の国の人間だったかは分からなかったのよね）」

『一瞬でしたからね。男だったとは思いますが……おそらくは北歐辺りの人間だったと思います』

「（北歐ね……イギリス辺りかしら）」

ＩＳ開発戦争から、既にこぼれ落ちそうな国は多々あるが、北歐となると限られてい

る。碧はイギリス代表に視線を向けながら、そんな事を考えていたのだった。

開幕直前

各国の代表との練習試合を終えて、やはり篠ノ之博士が開発した「暮桜」と「明栴」は別格、そして一夏君が開発した「木霊」もまた、世代差で他国を圧倒した。

「本番を前にして、早くも日本が優勝だと騒いでいるな」

「IS発祥の地だと豪語するだけはあると言われてる」

「世界的に見ても、日本がIS発祥の地だと認められているんだから、豪語って言い方は無いんじゃない？」

日本代表である織斑千冬・千夏姉妹と小鳥遊碧は、模擬戦で無敗記録を更新中であり、三人のデータ収集の為に何度も挑まされている代表もいた。それくらい日本の三代表の実力はずば抜けており、既に戦意を喪失している代表も中には見受けられる状態だった。

そんな中モンド・グロツソの本戦が近づいて来て、各国首脳たちはピリピリした空気を纏いながら腹の探り合いをしていたのだった。

「おい小鳥遊、一夏の安全は確保されているんだろうな」

「もし応援に来ていた一夏に何かあったら、わたしと千冬が更識家と一夏に害をなそうとした国を滅ぼす事になるからな」

「大丈夫よ。一夏さんは観戦には来ないだろうし」

「何故だ！ お姉ちゃんの活躍を見に来ないのか!？」

「……一夏さんの中では、貴女たちは顔見知り程度だし、人ごみを嫌う一夏君が、世界大会であるモンド・グロッソの会場に来るわけじゃないでしょ」

本当の理由は、テレビで観戦出来るので、わざわざ危険を伴う場所へ足を運ばせなかつたのだが、その事は二人に伝えるべき事では無いので黙っていた。

『一夏さんは来たがってましたけどね』

「仕方ないでしょ。一夏さんに万が一があったら、私だって大会どころじゃないんだし」

『そうですね。何かあったら私だって貴女の意志を無視してでも一夏さんを救出に向かいますよ』

「さすがに操縦者の意志は尊重してよ……それかせめて確認を取ってから行動してほしいわね」

一夏個人の意志は、今回に限り黙殺された形なのだが、一夏も周りに迷惑を掛けると分かっていたので無理には言わなかったのだ。

『あの歳で、一夏さんは色々和我慢しているんですね』

「(もう少し我が儘を言っても良い気がするけど、一夏さんは周りに迷惑をかけたくない、更識家から追い出されたくないって思ってるみたいなのよね)」

『誰も一夏さんを追い出そうなんて思ってる無いんじゃないんですか?』

木霊の言うように、更識家から一夏を追い出そうなどと考えている人間はいない。ただ周りの大人には懐いていないが、刀奈たちや碧には懐いているし、一夏が懐いている人間の側にいる時の笑顔に、周りの大人たちはひっそりと癒されているのだ。

「(一夏さんは記憶が無い分、大人が何を考えているかなんて分からないのよね……元々両親がいなかった、つてのも関係してるのかもだけど)」

『身近にいた大人がああ織斑姉妹と篠ノ之博士ですからね……記憶があつたとしても、大人なんて信用していなかったのではないでしょうか』

木霊の身も蓋もない言い方に、碧は無意識に織斑姉妹へと視線を向けていた。ISに
関してだけならば尊敬に値するだろうあの二人も、私生活ではダメダメなのだ、ここ

最近理解していたからこそその視線だったのだが、その視線に込められた意味を正確に理解出来る人間は、この場には存在しなかった。

いよいよモンド・グロツソ開幕が近付いて来て、一夏の通う小学校でもその話題で盛り上がっていた。四年生になっても、何の因果か篠ノ之箒と同じクラスだった一夏は、出来る限り近寄らないように生活しているのだが、箒の方から話しかけてくるのだった。

「一夏、千冬さんや千夏さんは勝てると思うが、あの小鳥遊とかいう人はどうなんだ？
姉さんが開発したＩＳじやないようだが、更識の技術力とやらは世界に通じるのか？」

このように、一夏に話しかける話題が無いのか、本人が嫌っているＩＳの話題を一夏に振っている筈。周りの人間も、筈が篠ノ之束の妹である事は知っているし、一夏が日本代表の弟である事は知っているので興味を示している。したがって、誰一人として、一夏を助けてくれる人間はいなかったのだ。

「知らないよ……僕はその代表の二人の事を良く知らないし、篠ノ之博士が造ったＩＳがどの程度なのかも聞いてないもん。世界とかは興味が無いし、碧さんだって代表に選ばれたんだから、その二人にだって引けを取らないと思う」

「そのなよなよした態度はどうにかならんのか！　こうなったら放課後は私の家でみっちり稽古をつけてやる！」

「僕に構わないですよ……そもそも何で篠ノ之さんは僕に馴れ馴れしいの？」

「私はお前の幼馴染だからな！」

「僕は覚えてないし、周りからもあまり関わらない方が良くって言われてるんだけど」

更識の人間から見ても、今の一夏に筈と関わるのは良くないと映っている。したがっ

て護衛の人間が口々にするのは「篠ノ之箒と密に関わらない方が良い。一夏さんの身が危ないから」と聞かされているのだ。

そんな事情は知らない箒は、掃除用具入れからモップを取り出して一夏に向かって振りかぶった。

「お前は、幼馴染と私とその更識の人間、どっちを信じるんだ！」

「更識の人……だって、篠ノ之さん、怖いもん……」

一夏がハッキリと言い切ると、周りの子供たちも頷いた。篠ノ之箒は怖い、それがクラス中の評価であり、正しい評価だったのだ。

「き、貴様！ 幼馴染に向かって怖いとはなんだ！ 一から根性をたたき直してやるからそこに座れ！」

モップを振りかぶり、まさに振り下ろそうとしたタイミングで、篠ノ之箒はどこからか現れた更識家の人間に確保され、意識を刈り取られたのだった。

モンド・グロツソ開幕

モンド・グロツソはテレビでも中継されている。だから一夏は更識家のテレビを使ってモンド・グロツソを観戦しているのだ。

本当は会場に行つて直接碧の応援をしたかったのだろうが、一夏の事を考えて会場には赴かない方が良くと楯無が結論付けたのだ。

「おりむくが造つたI Sが世界を相手にするんだよね。楽しみだな」

「本当はもう少し性能を上げたかつたんだけど、今の技術じゃ厳しいんだよね」

「一夏は他の人より何歩も先を行つてるんだから、そんなに焦らなくても良いんじゃない？」

「そうですね。一夏さんは他の開発者が造れない第二世代I Sを造りだしているんですし、小学四年である事を考えなくても、十分すぎる成果だと思います」

「そうかな……でも、やっぱりもう少しは性能を上げたかつたよ」

簪と美紀の評価に照れたような仕草を見せたが、やはり一夏は少し不満げだった。

「そんな事言わないの。一夏君は十分すぎる成果を出してるんだし、碧さんだって満足

してくれてるわよ」

「そうですね。報告を見る限りでは、碧さんは優勝候補筆頭ですしね。一夏さんがお造りになった木霊が碧さんの評価を高めているのは紛れもない事実ですし」

「派手に迷子になる事も無くなったらいいしね」

木霊と共に行動するようになってから、碧が集合時間に遅れる事は無くなった。無論時間を間違えていたとかそういう理由で遅れていたのではなく、単純に迷子になっていただけなので、その事で評価を落としていたわけではないのだが……

「碧さんもだけど、一夏のお姉さんたちも優勝候補なんだよね。やっぱり日本のI S開発は進んでるのかな？」

「織斑千冬さんと千夏さんの専用機を造ったのは篠ノ之博士だよ？ 日本の技術力じゃなくって、単純に専用機を造った人の力じゃない？」

美紀のツツコミに、一夏以外の全員が頷いた。千冬・千夏の専用機は篠ノ之束が、碧の専用機は一夏が造ったのだ。他の国の専用機に負けるはずもないと納得出来たのだ。

だが一夏だけが、専用機だけの力では無いと思っていたのだ。

「碧さんもだけど、この二人も相当な時間を訓練に当ててるんだろうね。他の国の代表

者よりオーラが強いよ」

「一夏つてオーラも見えるの？　ISの声も聞こえるし、見ただけで相手の実力が分かるのは、ほんとに凄い事だと思うよ」

「この三人は特別強いオーラだから分かるだけで、他の人を強い順に並べようとしても分からないよ」

それでも凄い事なのだが、一夏は自分が凄いとは頑なに認めようとしない。自分はあくまでも彼女たちと同じなのだと思いたいのだろう。

「いよいよ初戦が始まるね。お姉ちゃん是谁が勝つと思う？」

「順当に勝ち進めば碧さんが優勝でしょうが、勝負は時の運とも言いますからね……碧さんが大きなミスをしないうとも限りませんし」

「難しい事はいいんだよ！　とにかく碧さんを応援するのだ！」

布仏姉妹の会話を聞き、一夏はさつきまでの会話を打ち切ってテレビに視線を戻した。簪と美紀も一夏につられるように視線をテレビに向けたが、刀奈だけは一夏を見続けた。

「（あつさりと言ってたけど、オーラが見えるなんて事が余所にバレたら、また一夏君が

狙われるかもしれないわね……後で二人には誰にも話さないように釘を刺しておきましよう)」

簪も美紀も、それほど口が軽いわけではない。むしろ軽さで言えば刀奈の方がよっぽど軽いだろう。だがそんな刀奈でも軽々しく口に出来ない事であると理解しているからこそ、二人にも釘を刺しておこうと思ったのだ。

「このIS、見た目が悪いね〜」

「性能重視なのではないでしょうか？ まだ見た目まで考える余裕が無かったとか」

難しい顔をしていた刀奈だが、布仏姉妹の会話を聞いて表情を改めた。そして視線も一夏からテレビへと移し、仲良く観戦を始めたのだった。

予選を終えて、千冬・千夏ペアと碧は順当に勝ち進んだ。順当というか、危なげなくというか、とにかく何のアクシデントも無く予選を突破したのだった。

「実につまらない試合だったな」

「連携がなくて無いし、個々の技量も大した事ない。あれで良く国家代表に選ばれたな」
「貴女たちと違って、他の国の代表はISつてもものに慣れてないのよ。開発者がバックにいる貴女たちとは違ってね」

予選を無傷で突破した事で、千冬と千夏はレベルの低さに呆れていたのだが、碧は他が低いのではなく二人が高すぎるのだと諭す。事実日本代表の三人以外の代表者の実力は拮抗しており、観客を飽きさせない試合展開になっているのだ。

「この大会はI Sの凄さを知らしめるのが目的だろ？ だつたら容赦などせずには叩き潰す方が宣伝になる」

「広告に使われるんだから、当然ギャラを要求するがな」

「……国の代表なんだからそこら辺は無償に決まってるでしょ。優勝すれば何か賞金があるみたいだけど……それも大した事無いようだけどね」

「ふん、つまらん大会だ」

「実力者を叩きつぶせると聞いていたのにこの体たらく……」

「だから、貴女たちが強すぎるのよ」

『ツツコミも大変ですね』

木霊に同情された事で、碧はこの二人にツツコミを入れるのは止めようと決意した。いくら言ってもこの二人の考えを改めさせるのは不可能だと悟つたのだ。

「とりあえず、相手国の代表に怪我を負わすのだけは気をつける事ね。国際問題とかに発展したら面倒でしょ？」

「問題無い」

「その国を世界地図から消せばいいだけだからな」

「問題ありです！」

う。それでもツツコミを入れてしまうのは、この二人があまりにも常識外れだからだろ

スパイの影

順当に勝ち進む日本代表を見て、更識家では刀奈たちが大袈裟にはしゃいでいた。

「やっぱり篠ノ之博士が造ったISと、一夏君が造ったISは他の国のISよりも強いわね」

「操縦者の実力もだけど、ISの性能が格段に違うからね」

「個人戦の碧さんもですけど、ペアの織斑姉妹は二枚も三枚も上手ですからね。これは他の国の代表が可哀想に思えるくらいですね」

「思うだけで同情はしないんですよ？ お姉ちゃんだって日本が勝てばうれしいんだしや〜」

「一夏さん？ 何か気になる事でもあるんですか？」

はしゃいでいる更識・布仏姉妹の横で難しい顔をしている一夏に気づいて美紀が話しかける。すると途端に明るい顔を見せて一夏は首を振った。

「別に大した事じゃないんだけど……この織斑姉妹って僕のお姉さんなんだなって思っ
てさ。全然覚えてないし、懐かしいとも思わないんだけど、何でか戦い方が雑なような

気がするんだよね……この二人の本気なんて見た事ないのに」

しきりに首を傾げながらも、織斑姉妹の戦い方に違和感を覚えたという一夏。確かに千冬と千夏が本気を出せばたとえISを纏っているとは言っても無傷では済まない可能性が大いにある。手を抜いているわけではないが、本気は出していないのだから、一夏が疑問を抱いても仕方は無いのだ。

「でもさつきからこの二人も無傷だよ？ 雑な戦い方をしてたら、さすがにダメージを負うよね？」

「うん……だから不思議なんだよ。本気じゃなさそうなのに、それでも相手を寄せ付けない強さがある……そんな感じがしてならないんだ」

「でも、一夏のお姉さんなんだし、それくらい出来てもよさそうだけどね。一夏は頭脳戦で、お姉さんたちは肉弾戦担当、みたいな感じで」

「僕だって肉弾戦は出来るよ。でも、頭脳戦の方が良いけどね」

「一夏君ってまだ篠ノ之箒ちゃんに追いかけ回されてるんでしょ？ 一発叩けば大人しくなるんじゃないかしら」

「お嬢様。いくら一夏さんに付きまとってる鬱陶しい相手でも、一夏さんは暴力に訴え出る人じゃないですよ」

「虚さんもなかなか毒が強いですよね」

全員が見た事もあつた事も無い筈を敵だと認識してはいるのだが、虚のようにハツキリと鬱陶しいとは口にはしなかつた。だから美紀が驚いたような表情を見せたのだ。

「そういうえびおりむく、暫く研究所に籠つてたけど、何をしたの？ もう碧さんの専用機は完成してるんだし、おりむくがISの研究を続ける必要は無かつたんじゃないの？」

「本音……貴女ほんとに何も聞いて無かつたのね。一夏さんは更識で使うISを造ろうとしていたんですよ。それも日本政府が計画している第一世代型ISではなく、第二世代型だね」

「ほえくさすがおりむくだね」

姉に説明され、改めて関心を示す本音を見て、虚を除く四人は微笑ましげな表情で本音を見つめる。

「ほえ？ みんなどうしたの？」

「ううん、何でも無いよ」

「それよりも、いよいよ予選最後の試合だね。このままいけば、碧さんは予選を無傷で突

破出来る」

「無傷でって、負けなしじゃなくって、本当にノーダメージなんだもんね」

「碧さんだけ第二世代型ですからね。ISの性能でも勝り、操縦技術でも勝ってますから、負ける要素が見当たらないですからね」

「過信や慢心してるわけじゃないだろうけど、碧さんもそう思ってるだろうね」

無邪気に盛り上がる五人の隣で、やはり一夏は難しい顔をしていた。だがそれは碧の戦い方ではなく、先ほどからチラチラと背後に映っている外国人を見てその表情を浮かべていたのだった。

最終戦を前に、碧は控室で精神を統一していた。一夏が造ってくれた木霊のおかげで、碧は順当に勝ち進んで既に決勝ラウンド進出は決めている。残るは無敗で——ノーダメージで予選突破出来るかどうかが目ざされているポイントだった。

『碧、一応忠告しておきますが、貴女の動きを盗撮している人間がいます』

「(知ってるわよ。開催前に貴女を狙った人と同じかしら?)」

『はつきりと断言は出来ませんが、おそらくは同じ国の人間だと思われれます』

「(もう一度触られれば分かるかしら……でも、また電撃を喰らわされるのは遠慮したいわね)」

『今度は加減しますから』

木霊を狙った窃盗行為は、木霊の自己防衛装置から発せられる電撃のおかげで未遂で済んだのだが、碧はその際に木霊から発せられた電撃で軽度の火傷を負っているのだ。

「(それにしても、どうして篠ノ之束が造った専用機じゃなく、更識で造ったとされている貴女を狙うのかしら)」

『単純に、貴女の方が織斑千冬・千夏姉妹より簡単そうだったからでは?』

「(あの二人と比べられたら、誰だって簡単だと思うけどね……それでも、生みの親である篠ノ之束が開発したISの方が、盗むのに適していると思うけど……盗むのに、適しているか否かなんて関係ないだろうけども)」

『もしかしたら、私我更識ではなく一夏さん個人によつて造られたのだと知っているのではないでしょうか。もちろん、そんな可能性は万が一にも無いでしょうけども』

「(どうかしらね……篠ノ之束は知っていたようだし、何処かから情報が漏れている可能性も否定は出来ないと思うけどね。もちろん、更識の人間が意図的に情報を漏らしているなんて思いたくないけど)」

そう結論付けたタイミングで、アナウンスが流れる。これから最終戦という事で、碧は余計な考えを頭からおいやって控室から移動する事にした。普通に戦えば負けるはずもないので、その点では気負つてはいなかったが、折角ならノーダメージで予選を全て終わらせたいという考えは、碧の中にもあったのだった。

大会終了

予選を無傷——ノーダメージで突破した日本勢は、各国から称賛と嫉妬の視線を浴びせられていたのだが、碧以外の代表、千冬と千夏姉妹は他国の視線など気にする様子もなく調整を続けていた。

「とつとと終わらせてノンビリしたいものだ。もちろん一夏と」

「そうだな。一夏がいれば、わたしは後なにも必要ない」

「残念だけど、その願いは叶わないわよ。一夏さんは貴女たちの側にいる事が出来ないんだから」

記憶を失い三年の月日が流れたが、一夏は記憶を取り戻す事無く更識家で生活し続けている。そして、更識家との約束——否、更識楯無との約束で、織斑姉妹はなるべく一夏に近づく事無く過ごしてきた。出来ない家事も、それなりに頑張ったのだが、結局は諦めて今は清掃業者や宅配サービスに頼る日々を過ごしていた。

「久しぶりに一夏の手料理が食べたいぞ……」

「わたしも……こうなったら更識家に襲撃して一夏を……」

「そんな事をしようものなら、更識の全勢力を以って貴女たちを止めます」

千冬と千夏がISを使つて攻め入ってきたのなら、いくら暗部組織である更識でも一日は持たないだろう。それでもなお、碧は一夏の今の生活を護ろうとしているのだ。

「分かっている。私たちだつて一夏が嫌がるのなら無理に連れ帰りはしない」

「だが、一夏はお姉ちゃんたちが大好きだつたはずなのに……何故思い出してくれないのだ」

「それは多分、貴女たちの愛が一方通行だつたからだと思うわよ」

口には出さず、心の中で呟いた本心に反応した相手がいた。

『碧も私に負けず劣らずの毒舌じゃないですか。ですが、目は口ほどに物を言う、気をつけた方が良いでしょう。ましてや相手はあの織斑姉妹なんですから』

「分かつてるわよ。だいたい今はあの二人の目に私は映つて無いわよ。自分たちの中にいる一夏君の事で頭がいっぱいのようにだし」

虚空を見上げながら最愛の弟の名前を呼び続ける織斑姉妹。事情を知らない他国の人間から見たら恐怖のほかないだろう。

『一夏さんは更識で生活するのが良いと、ISの私でも分かりますよ。それなのになぜ、この二人は一夏さんを取り戻そうと考えているのでしょうか?』

「(それだけ溺愛していたのよ。周りが引くくらいに)」

『それは……碧が一夏さんを意地でも更識から返さないという決意の理由が分かりましたよ……』

ISである木霊ですら、一夏は更識家で生活した方が良いと分かっているのに、血縁関係であるこの二人には、それが理解出来ないのだった。

決勝リーグも、危なげなく勝ち進み、最終的にダメージを負う事無く日本勢はモンド・グロツソを制覇した。まだ代表である三人が若いという事もあり、終わったばかりなのに連覇を夢見る政府の人間たちは多くいた。

だが開発者である篠ノ之束と、織斑一夏はそのような楽観視はしていなかった。第二回モンド・グロツソは三年後という事で、各国とも開発技術も操縦技術もそれなりに進歩するだろうし、その三年間を無為に過ごせば今の三人が代表のままでも連覇はそう簡単ではないだろうと考えている。

そう考えている二人の内、先に動いたのは篠ノ之束だ。467個目のコアを製造し終えたタイミングで姿をくらまし、各国の競争威力を高める——つもりではなく、これ以上コアが増えないという事実で各国が慌てふためく様子を何処かで楽しんでいるのだろうと織斑姉妹の発言で更識勢にもそのような考えが伝わってきた。

その考えが伝わってきてすぐに、一夏も動いた。これ以上更識家外でコアは増えないと知らされたので、一夏も最低限のコアだけを造り、それを必要になるまで楯無に預け

た。

「いいのか？ 君が世間に出れば、間違い無く一人で生きていけるだけの利益は得られるんだぞ？」

「僕は一人では生きていきません。未だに大人相手に苦手意識があり、特に男性相手では更識の従者さんにもビクつくんです。こんな人間が一人で生きていけるわけありません。それに、更識家にはかなりの恩がありますので、その恩に報いるまではここで生活させてもらいたいです」

「そうか。ならこれは私が責任を持って預かる。あの子たちがISを欲した時、君が造ってあげなさい」

「もちろんそのつもりです」

「碧も木霊を手に入れてから、盛大に迷子になる事は無くなったからな」

「初めて行く場所では、やはり迷子になってるようですけどね」

その原因は、さすがの木霊でも初めて行く場所のデータは持ち合わせていないからであり、二度目からは迷う事無く目的地に到着できるのだが、本来の碧の方向音痴の度合いが、木霊のスキルを持ってしても補えないのだ。

「虚や刀奈はそろそろISに興味を持ちだすかもしれないからな。来年虚は中学に上が

るし、刀奈も六年生だからな」

「僕も、鬱陶しかった篠ノ之箒が転校してくれたおかげで、更識の方たちを徒に困らせる事が無くなって安心出来ましたからね。もし虚さんと刀奈さんがISを欲したら、全身全霊でIS製造に取り組めます」

「おや、この前までは『虚ちゃん』『刀奈ちゃん』と呼んでいたと思ったが、何か心境の変化でもあったのか？」

「何時までも子供口調ではいけないと思っただけです」

「それなら、そろそろ『僕』という一人称も変えたらどうだ？」

「そうですね……俺……いや、私でしようか」

「それは自分でじっくりくるものを使えば良い。私は立場的にもこの一人称を使っているが、一夏君はそんな事気にする必要は無いからな」

親子のような会話をしていた一夏と楯無だったが、結局結論は出ずに一夏は当主の部屋を辞して自室へと戻っていた。

「あの小さかった一夏も、立派に成長してるんだな……」

誰もいなくなった当主の部屋で、楯無がしみじみと呟いた言葉は、誰の耳に届く事も

無く部屋の空気に溶け込んで消え去ったのだった。

中国からの転校生

記憶を取り戻す事無く四年が過ぎた。一夏は相変わらず昔の事を思い出す兆候すら無く更識の屋敷で生活していた。通学の際は車で送ってもらっていて、今年から運転手が碧に変わった。

「モンド・グロツソで優勝したからといって、私はあの二人みたいにIS関連に就職出来ないですからね」

「碧さんだって誘われてましたよね？ 楯無さんも別に構わないって言ってくれたのに」

「だって木霊が一夏さんが造ったISだとバレたら大変ですからね。一夏さんの自由が無くなりますし、篠ノ之東博士が姿を晦ました今、コアを造れると知られたら大変ですからね」

一夏が言うように、千冬と千夏は日本政府が作ったIS関連の企業に就職し、次期代表を育成する為に日々働いている。言動などはそのままなのだが、それが良いと指導される側から企業に要望があった為に、二人はのびのびと指導しているらしいと、噂で碧

も知っていた。

「一夏さんも、篠ノ之箒が転校してくれてホッとしてるんじゃないですか？」

「転校じゃなくて、重要人物保護プログラムで何処かに匿われてるらしいですけどね」

篠ノ之東が姿を消したタイミングで、楯無が日本政府へと掛けあい、篠ノ之家全員に保護プログラムが適応される事になったのだ。転校の際、箒は一夏に別れを惜しんでもらいたいと思っていたのだが、一夏は箒に興味も向けずに更識の屋敷へと帰ろうとしたので、最後の最後まで箒は一夏に殴りかかろうとしていたのだった。もちろん更識の従者に捕まり、最後まで一夏と話す事は出来ずに何処かに転校していったのだった。

「虚さんも中学生になりましたし、そろそろISに興味を持ち始めるんじゃないかな」

「虚さんは選手よりも整備士になりたいって言ってるようですけどね。虚さんの専用機は一応考えてますけど、まだ早いですかね」

「何でも政府は、『IS学園』なる物を造るとか何とか……噂の範疇ですけどね」

「織斑姉妹も何時までも代表でいるわけではありませんからね。後任を育成したいいんのでしよう」

「私は今回で引退しましたからね」

碧は第一回モンド・グロツソを無敗で——無傷で制覇し、その場で引退を発表した。自分は更識で働く為、これ以上世界大会などで注目されるのはマズイ、との理由だったが、実に今更なる理由だと世間では言われている。

もちろん碧が言った理由は引退する為のものとしては十分だが、本当の理由は一夏の護衛が出来なくなるのが嫌だったからなのだ。合宿所などに強制的に滞在させられ、一夏と会う機会が減る事を嫌っての引退発表なのだが、それを知っているのは更識の人間だけだった。

「I S 学園が本当に出来るのなら、碧さんは教員として採用してもらえんじゃないですかね」

「私が教師を？ 一夏さんも冗談を言うんですね」

「強ち冗談では無いんですけどね」

「それだったら一夏さんだって……教師より生徒ですね、一夏さんは」

既に世界で通用する整備の腕を持っている一夏だが、それはあくまでも非公開の事実。教師として、整備士としてI S 学園で雇ってもらえるのではと考えた碧だったが、一夏はまだ未成年であり、学園が完成したとしてもまだ生徒の年齢だと気がついたので途中で言葉を変えたのだった。

「僕はI S学園には入れないと思いますけどね。おそらく……いや、確実に女子高ですし」

I Sを扱えるのは女子のみで、男子には反応しない。これがI S界の常識であり、その事が原因で女尊男卑の風潮に拍車が掛かっているのだ。

「一夏さんは使えないんですか？」

「? 何をですか」

「I Sをですよ」

「僕は男ですからね。声は聞こえても反応はしてくれないと思いますよ」

『そんな事無いと思いますけどね。一夏さんなら、反応したいと思ってるI Sは沢山いると思いますよ。各言う私もその一台ですけどね』

「木霊は碧さんの専用機でしょ。浮気はダメだよ」

学校に到着して、一夏は木霊にツツコミを入れて車から降りた。碧に手を振って学校に入っていく一夏の姿を見て、碧は一人車内で悶えていたのだった。

箒が転校したおかげで、一夏の周りには平穏な空気が流れていた。箒が原因で距離を取っていた友人も、転校を機に一夏の周りに戻ってきたのだ。

「そういえば織斑、今日転校生が来るんだってさ」

「転校？ 学年が変わったばかりなの？」

「篠ノ之だって学年が変わるギリギリに転校したんだ。おかしくは無いんじゃないか？」

「……そうだね」

箒が転校した本当の理由を知っている一夏としては、友人のように今回の転校を受け入れる事が出来なかった。箒がいなくなったのは嬉しいけど、今回の転校生にはどのような事情があるのだろうかと考えてしまったのだ。

「席についてください。転校生を紹介しますよ」

担任の教師が教室に入ってきたので、一夏の周りにいた友人たちも自分の席へと戻っていく。一夏も視線を教卓へと移して担任の言葉を待った。

「中国からやってきた凰鈴音さんです。みんな、仲良くしてあげて下さいね」

担任教師から紹介されたのは、中国人の女子だった。少し背の低い、だけど明るい印象を持たせる笑顔で挨拶をした女子は、授業終了のチャイムと同時に周りに人だかりを作る人物だった。

「凰さんって何で日本に来たの？」

「親の仕事だね。日本で中華料理店を開いたのよ」

「そうなんだ。でもその割には日本語上手だね」

「I Sに興味があつてね。それで日本語は勉強してたのよ」

「そうなんだ。でも、ISで言ったら織斑も関係あるんじゃないか？ モンド・グロツソで優勝した日本代表に関わりがあるんだしさ」

その言葉に凰鈴音は一夏に興味を持ったのだった。

鈴との付き合い方

鈴が一夏に話しかけるきつかけとなったのは、やはりモンド・グロツソで無双した実の姉だった。一夏としてはあの二人の事を姉と認識していないのだが、世間的にはやはり、一夏は最強の双璧の弟なのだ。

「アンタ、あの『織斑姉妹』の弟なの」

「そうみたいだね。記憶が無いから一緒に生活していた事すら覚えてないけどね」

「記憶が無い？ 今も一緒に住んでるんじゃないの？」

「別々で生活してるんだよ。鳳さんは知らないかもしれないけど、俺は昔誘拐されてね。その時の影響なのか記憶を失って、今は俺を助け出してくれた人たちと一緒に生活してる」

「……そう言えば昔、ISが原因で人生を狂わされた男ってニュースを見た気がするわ」
「それ、多分俺だね」

記憶を失った事をあまり気にしていない一夏だが、周りから見れば一夏は可哀想なのだろう。鈴も同情的な視線を一夏に向けていた。

「そんなに凰さんが気にする事じゃないよ。俺だつて特に気にしてないんだから、周りが気にし過ぎるのはおかしいだろ」

「気にしてないって、不便だとは思わないの?」

「もう四年経つてるからな。今更不便だと思わないさ」

「でも、両親とかの記憶も無くなつたんでしょ? 会いたいとか思わないの?」

鈴の発言は完全に地雷を踏んだものだった。一夏の家庭事情を知らない鈴としては当然の疑問だったのだが、周りの友人たちは揃つて顔を顰めた。

「な、なによ……アタシおかしか事言つた?」

「別におかしくは無いだろうね。当然の疑問だ……だが、その当然は俺には当てはまらないってだけだ」

「……どういふ事よ」

「俺には両親がいない。物心つく前に捨てられたらしいから、記憶があつたとしても知らないんだがな」

「実にあつさりと告げる一夏に、今度は鈴が顔を顰める番だった。

「アンタ、随分とサツパリしてるのね」

「知らない人を相手に頭を悩ませるなんて、時間の無駄だからな。そもそも俺には織斑姉妹に関しての記憶もないんだ。あの人たちの弟だと言われても、俺には全然ピンと来ないんだ」

「そうなの？ でも、身内が優勝したんだから、少しは嬉しいんじゃないの？」

「身内でいえば、織斑姉妹よりも小鳥遊碧さんの方が近い存在だからな」

「どういう事よ」

再び首を傾げた鈴に、一夏は表情一つ変えずに伝えた。

「俺がお世話になってる家、更識家に仕えている人だからな、碧さんは」

「更識家って言えば、コアを独自開発してるんじゃないかって言われてるトコよね。ア
ンタそこで生活してるなら何か知らない？」

「知ってても教えないだろ、そんな事は。だいたい風はそんな事を気にしてどうするっ
て言うんだ？」

「鈴で良いわよ。そうね、中国は篠ノ之東からそれ程コアを提供してもらえなかったの
よ。だから独自開発が出来るなら、そのノウハウを教えてもらうかと思っただけ」

「随分と愛国心が強いんだな」

一夏の、皮肉とも取れる言葉に鈴は「織斑一夏」という存在の認識を変えた。記憶を失った可哀想な男の子ではなく、ちゃんと考えを持っている、大人より大人らしい男の子だと。

「別に愛国心はそれ程じゃないわよ。ISを貰えるなら、国籍なんて何処でも構わないんだからさ」

「自由国籍か？ だが、そんな事言つてると両親が哀しむんじゃないか？」

「娘が代表になれば、文句が称賛に変わるわよ」

「違うない」

皮肉げに笑った鈴につられるように、一夏も皮肉げな笑みを見せた。この二人のやり取りを聞いていた友人たちは、少し距離を取って苦笑いを浮かべていたのだった。

あのやり取りから、一夏と鈴は互いに遠慮せずに付き合える相手だという認識になり、それにつられるように周りの友人たちも付き合い方を変えていた。一夏の記憶の事は触れずに、だが気にし過ぎないようになっていたのだ。

「ねえ一夏」

「なんだ」

「更識家の人が日本代表候補生になるかもって噂はホントなの？」

碧が引退を表明してから、個人戦の代表の席は空いたままだ。その後任を探す為に日本政府は躍起になっていると言っても過言では無かった。

「そうみたいだな。長女の刀奈さんが候補生の打診を受けているのは確かだ」

「更識には独自開発の訓練機があるって噂だものね。当然の人選よ」

「噂の範疇なのに、よく納得出来るな」

実際に更識家には、一夏が開発した第二世代の訓練機が結構な数在るのだが、その事は表の世界には調べようがない事なのだ。だがまことしやかにささやかれているように、刀奈に日本代表候補生として合宿に参加しないかと誘いが来ているのだ。

「候補生になれば、専用機が与えられるかもしれないのよね」

「日本にだって、ISのコアはそれほどないさ。織斑姉妹の専用機は無所属扱いだし、碧さんの木霊も更識所属で、日本のものではない」

「何だかズルイわよね。他の国はコアをやりくりしてるのに、日本だけは無所属のコアがあるなんてさ」

「それも含めて技術力の差だろ。コアを造る造らないは別にしても、それだけ他の国と差があるんだよ」

「技術力だけじゃなく、戦闘力でも勝てる気がしないわよ……」

「碧さんは引退したか？」

「織斑姉妹の方が厄介でしょ！ あの二人はいたぶるように戦うんだから」

碧の戦い方は普通だが、千冬・千夏ペアの戦い方は、逃げまどう相手に嬉々として迫り、壁際に追い込んで絶望させる、という戦い方が多い。窮鼠猫を噛む、という諺も、こ

の二人相手には当てはまらない事を証明し続けているのだ。
「アレはトラウマになると思うけどな」

二人の戦い方を思い出し、一夏は苦笑いを浮かべたのだった。

大人びる一夏

代表合宿に参加できるかもしれないという事で、刀奈は今当主の部屋に呼び出されていた。普段から気軽に出入り出来る部屋ではないのだが、今日は特に居心地の悪さを感じていた。

「お父さん、何の用なの？」

「もう少し待て。話は全員が揃ってからだ」

さつきから似たようなやり取りを繰り返しているが、その都度楯無は同じ言葉を繰り返すのだった。

「誰が来るのよ」

刀奈がぼやいたタイミングで扉がノックされた。

「入りなさい」

「失礼します」

楯無の言葉に返事をして、当主の部屋に一夏が入ってきた。

「一夏君？ 貴方もお父さんに呼ばれたの？」

「呼ばれた、というよりは、この話は俺がいないと進まない事だと思うので」

「そうなの？ ところで、何時から『俺』って言うようになったの？ 最近まで『僕』だったと思うんだけど……」

「本当に最近変えたんですよ。刀奈さんとは最近会う機会が減ってたので気付かなかつたんでしょう」

「そうなんだ……？ 『刀奈さん』？」

自分の呼ばれ方も変わっていた事に、刀奈は少しショックを受けていた。本当に最近までは「刀奈ちゃん」と呼ばれていたし、話し方ももつと砕けた感じだったのだが、今は敬語でさん付けに変わっていたのだから仕方ないかもしれない。

「話を進めても構わないか」

「問題ありません」

「ご、ごめんなさい……私も大丈夫です」

楯無の言葉に、一夏は平然と、刀奈は慌てながら返事をした。実の娘である刀奈の方

が緊張しているのは、些かおかしな気もするが、最近だけで言えば、一夏の方が楯無と顔を合わせている時間が長いのでこの反応も仕方なかったかもしれない。

「まずは刀奈、日本代表選考の合宿に参加出来る事が正式に決定した」

「ほんと？ 良かった。もしダメなら自由国籍を使つて何処か他の国選考合宿に参加するつもりだったんだけどね」

「適性が高く、小鳥遊と所属が同じ——というか、小鳥遊が仕えている家の人間だという事も加味されたのだろうか」

碧が更識家に仕えている事は、日本政府も周知の事実だ。その更識家の長女が合宿への参加申請をしてきたので、日本政府としては刀奈は無条件で合宿に参加させるつもりだったのだ。だが眞貝だと思われるのを避けたのか、決定の知らせは他の候補者と同じタイミングだった。

「そして、お前は知っているよな。一夏がISを造れる事を」

「うん。碧さんの木霊だつて一夏君が造つたのよね？」

「そうだ。そして今、虚にISの事を教えているのも一夏だ」

「そうだったの……虚ちゃんも忙しそうにしてると思つたら、一夏君にISの事を教わつてたんだ」

学校から帰ってすぐ、虚は一夏にISの事を教わる為に研究所に足を運んでいたのだ。その事は刀奈も知っていたが、まさか一夏にISの事を習っていたのだとは気付かなかった。

「虚はお前が代表になった場合、サポート役として加わりたいと言っていてな。今一夏に指導してもらっているのだ」

「それで、私がここに呼ばれたのって、合宿に参加出来るって事を教えてもらうためのなの？」

「いや、それだけじゃない。正式に候補生に選ばれた折には、一夏がお前の専用機を造る事になっている」

「……………一夏君が、私の……………」

篠ノ之束がコアを造るのを辞めた所為で、全世界で何とかコアを独自開発出来ないかと研究者たちが躍起になっている事は刀奈も知っていた。そしてここにいる一夏が、そのコアを造る事が出来る事も……………

「でも、そのタイミングで私の専用機を造ったら、この屋敷の誰かがコアを造れるって事を世界中に知らしめることになるんじゃない……………」

「小鳥遊の木霊で、既に更識家はコアを独自開発出来るという事は知られている。だが、造る事が出来る個人を特定する事は難しいからな。その辺はお前が心配する事では無いだろ」

「俺がコアを造れると知られても、俺の周りには更識の人たちがいてくれますからね。刀奈さんが心配しなくても大丈夫ですよ。それに、俺だつてもう簡単に拉致られる事もないでしょうし」

最近一夏は格闘術を鍛えだしたので、並みの相手なら自分で対処する事が出来るくらいには身体を鍛えてある。だが相手がISとなると生身ではなかなか厳しい状況になるだろう。

「一夏の護衛には碧をつけるから心配するな。相手がISだろうが碧なら対処出来る」

「俺がISを使えば一番なんですけどね」

「しょうがないよ。ISは女性にしか使えないんだから」

刀奈の慰めに、一夏は軽く頷いてから刀奈を正面に見据えた。見詰められた刀奈は、少し恥ずかしそうに視線を逸らした。

「? 何かあったんですか」

「う、ううん……何でも無いわよ」

「はあ……」

刀奈と一夏のやり取りを見て、楯無は内心ほっこりとしていた。実の娘と、息子のよ
うに思っている一夏が結婚してくれれば、楯無としてはこんなにも嬉しい事は無いと
思っていたのだ。

「それで、刀奈さん。I Sの希望などありますか？」

「そうね……」

具体的な話を始めた二人に、楯無は興味を二人から書類へと移して、部屋から出て行
くように指示した。具体的な話はここよりも研究所の方が良いだろうとの配慮で、一夏
も納得して当主の部屋から外へ出たのだった。

「一夏君」

「何でしよう？」

「その喋り方……やっぱり違和感しかないから戻してくれない？」

「そのうちなれますよ。俺だって何時までもあんな喋り方をしてるわけにもいかなかったで
しょうし、良い機会ですよ」

「何が、良い機会なのよ……」

「虚さんだって我慢してくれてるんですから、刀奈さんも我慢してくださいね」

「はーい……」

不貞腐れながらも承諾した刀奈を見て、一夏は思わず嘖き出しそうになったのだった。

乙女の気持ち

一夏に専用機の要望を聞かれて、刀奈はある程度の希望を一夏に伝えた。まだ候補生を選ぶ合宿に参加出来るようになっただけに、専用機とは気が早い——と刀奈は思っていたが、専用機が手に入るのは素直に嬉しい事だし、それが一夏が造り上げた専用機ならば尚更だ。

「お姉ちゃん、何だか嬉しそうだけど……なにかあったの?」

スキップしそうな雰囲気を感じ取ったのか、簪が刀奈に疑いの眼差しを向ける。姉との才能の差を感じ始め、簪は最近刀奈に冷たい態度を取る。この眼差しの原因も、半分以上は簪の自己嫌悪が原因だ。

「候補生を決める合宿に参加する事になったのよ。それで、もし候補生に選ばれたら、一夏君が専用機を造ってくれてくれるって言ってくれたのよ」

「一夏が……最近まともに会えてないな……」

「今なら部屋にいると思うわよ? 虚ちゃんもまだ帰ってきて無いし」

刀奈がそう言うと、簪は未だかつてないくらいスピードで一夏の部屋を目指した。それを見送った刀奈は、少し複雑な気持ちに陥っていた。

「やっぱり簪ちゃんも一夏君の事が……でも、一夏君は私たちの事を友達としか思っていないだろうし……今は開発やらで忙しい一夏君も、何時かは異性の事で悩んだりするのかしら……」

その相手が自分なら良いなと思いつながらも、それだと簪や虚たちが悲しんでしまう。何故一夏は一人なのかと刀奈は憂いていたが、更識にのみ適用される法律を思い出し、何とかそれを一夏が認めてくれないかと考え始めたのだった。

「たしか更識の当主は重婚を認められているのよね……美紀ちゃんや本音も一夏君の事が好きなのよだし、お父さんをお願いして一夏君に次期当主になつてもらえば何の問題も無くなるのよね……一夏君はそれだけ更識に影響力があるんだし、今一夏君が更識からいなくなると、折角軌道に乗った表の会社がダメになっちゃうし……」

一夏が造り出した訓練機のおかげで、更識企業は世界の中でもトップクラスのIS産業企業になつている。もちろん悪用しそうな所にはISを渡さない事を前提に一夏に作業してもらっているの、ISを売る際にはかなり厳しいチェックが入るのだが。

「よし！　そうと決まれば早速お父さんをお願いしに行かなきゃ！」

刀奈は今さつき出たばかりの父親の部屋を目指し、こちらも未だかつてないくらいのスピードで廊下を走って行ったのだった。

虚の帰りを待ちながら、一夏は刀奈から聞いた希望を紙にまとめていた。派手な事が好きな刀奈らしく、ISの希望も結構派手なものが多かった。

「水で攻撃したいか……特性を水にするにしても、基本武装はどうしよう……」

まだ製造段階どころか、製造する事すら決まっていけないのに、一夏は既に頭を悩ませていたのだった。

「一夏、今いいかな？」

「簪？ ああ、開いてるぞ」

外から声を掛けられ、一夏は思考を一時中断した。簪がこの部屋を訪ねてくるのは珍しいと思いつながら、最近は共に過ごす時間が減っていたからなと反省もしたのだった。

「一夏、久しぶりだね」

「そうだな。最近はあるまり会わなかったしな」

「話し方、変わったんだね」

「ああ、最近な。何時までも子供口調じゃマズイからな」

一夏が更識企業で様々な手伝いをしている事は簪も知っていた。まだ年齢が年齢なので公には出来ないが、更識企業の業績が世界トップクラスなのは一夏のおかげだと、

簪も十分理解していた。

大人の中で過ごす時間が増えた一夏の喋り口調が変わってしまったも、それは仕方の無い事だとも分かっているのだが、やはり違和感は拭えなかった。

「今、お姉ちゃんから聞いたんだけど」

「ん？」

「お姉ちゃんの専用機も、一夏が造るんだってね」

「まだ決定したわけじゃないけど、刀奈さんが代表候補生になった時にはな」

「やっぱりお姉ちゃんの方が良いの？」

「は？ 何の事だ」

自分以外にも、刀奈や本音、虚や美紀が一夏の事を想っている事は簪も知っていた。だから簪は、自分より刀奈の方が良いのかと一夏に尋ねたのだが、一夏には訳が分からない問い掛けになってしまったのだった。

「えつと……一夏は誰か好きな人はいるの？」

「唐突だな……前にも言ったと思うが、俺は簪たち全員が好きだ。だけど、おそらく簪が聞きたいのはこの『好き』じゃないんだろ？」

「うん……」

一夏は鈍くもなければ、相手の感情を読み取る事も多々あるのだ。だから簪が何を聞きたいのかを正確に理解していた。

「そうだな……俺はまだ、誰かを好きになった事は無いのかもしれない。だから、簪たちが思っている『好き』という感情は、俺には分からない。悪いな、こんな返事で」

「ううん、一夏ならそう言うと思ってた。何となくだけどね」
「なんだそれは」

口では呆れた感じを装っていたが、一夏の顔は笑っていた。簪もモヤモヤが晴れた気分になっていたが、自分の気持ちを整理するにはまだ時間が掛かりそうだった。

「そもそも、俺たちはまだ小学五年だ。誰かを好きになるのは、早くないか？」

「そんな事無いと思うけど」

「そうなのか？　俺が遅いのかな……明日友達にでも聞いてみるか」

自分がおかしいのか、と一夏は首を傾げながら考えたが、答えが出るはずもないと思いきり考えるのを止めた。同学年ならクラスメイトでも他のクラスの相手でもいくらでもいるのだと思いつたからなのだが、そんな事を気軽に聞いていいものなのかと、

一夏は再び頭を捻りながら考えるのだった。
そんな一夏の許に、刀奈が嬉しそうに飛び込んできたのだった。

養子に

簪と話していたところに刀奈が飛び込んできたので、一夏は何事かという顔で刀奈の事を見た。

「どうかしたんですか、刀奈さん。そんなに慌てて」

「あのね、お父さんが一夏君の事を次期当主に指名してくれる事になったんだ！」

「……はい？ 次期当主は刀奈さんじゃ」

「だから、それを一夏君に変えてもらったの。一夏君は更識にとって重要な人だし、表の世界では、更識はI S企業のトップだしね。一夏君をその企業のトップに据えるのなら、やっぱり一夏君を当主にした方が良いじゃないの」

刀奈が嬉しそうに話している横で、簪が難しい顔をしていた。一夏は簪の表情の変化に気づき、そして刀奈に簪が疑問に思っている事を代わりに聞く事にした。

「楯無さんや刀奈さんの気持ちは分かりましたけど、外部の人間が当主になれるんですか？ そもそも、俺を当主だと認めてくれる人なんているんでしょうか？ 刀奈さんが次期当主だつてことにも不服な人間がいるようなのに、全くの外部の人間である俺が当

主候補にでもなれば、それこそ暴動でも起こりかねませんよ」

「大丈夫。一夏君には、更識の養子になつてもらうから」

「養子？ でも織斑姉妹が納得するんですか？」

「大丈夫だつてお父さんが言つてるから平氣じゃないの？ それに、一夏君だつて織斑の家に戻るつもりは無いんでしょ？」

「それは、まあ……」

織斑家で過ごした記憶の無い一夏は、織斑の家に帰るつもりは無かつた。それは更識家で生活する全ての人間が分かっている事だし、一夏も前々から明言している事だ。

「それに一夏君が楯無を継いでくれれば、私たちの全員と結婚出来るのよ？」

「お姉ちゃん、それって本当？」

「ええ、当主が男の場合にのみ適応されるんだけど、更識家当主は何人嫁を迎えても違法にはならないのよ」

「……ですが、楯無さんの奥さんはお一人ですよね？」

「お父さんはね。モテなかつたらしいし、お母さん以外に嫁を取るつもりも無かつたみたいだし……でも、一夏君は違うでしょ？ 既に私たち五人……いや、碧さんもだから

六人か。一夏君のお嫁さんになりたい人がいるんだから。私たちは一人で幸せになる

つもりは無いし、そうなると一夏君が楯無を継いでくれるのが一番かなって」

「はあ……まあISの研究を続けるには、更識にいるのが一番ですし、確かに誰かを不幸にするのは忍びないですね……織斑の説得をしてくれるのでしたら、俺はそれでも構いませんよ」

結婚とかはとにかくとしても、一夏は誰かを不幸にしたくないと考えていた。養子になる事で誰かが不幸になるわけでも無いので、一夏は承諾の返事をしたのだ。織斑姉妹は絶望するかもしれないが、そこら辺は大人がどうにかするだろうし、そもそもこの四年間ろくに会っていないのだから、今更な気もしているのだ。

「じゃあお父さんには一夏君も納得してくれたって伝えてくるね!」

「ちよつと!? ……行っちゃったな」

「お姉ちゃんって、本当に周りが見えて無いというか、一つの事に執着するとか……」

「一つの事に執着する、か……」

「一夏?」

何気なくいった言葉に一夏が興味を示したので、簪は不思議そうに一夏を眺めた。

「ちょっと刀奈さんの専用機のアイディアがな。簪の言葉がヒントになったかもしれない」

「お姉ちゃん専用機も一夏が造るんだね」

「欲しいなら簪のだって造るぞ？」

「でも、私はまだ代表候補生の選考にすら掛からないから……」

「気にし過ぎだ。俺は、刀奈さんも簪も違う凄さがあると思うけどな」

簪の頭を撫でながらそういう一夏に、簪は少し頬を赤らめながら視線をそらしたのだった。

織斑家を訪れた楯無はまず、足の踏み場の無い廊下に愕然とした。

「多少散らかっているが、まあ気にするな」

「それで、何か用なのか？」

散らかっていると自覚していても、片付けようとしなない織斑姉妹を前に、楯無は心の隅にあつた遠慮を取つ払い本題に入る事にした。

「一夏君が記憶を失つて四年、そろそろ諦めもついたんじゃないかと思うのですが」

「一夏は私たちの事を思い出す事はないと？」

「わたしたちと一緒に生活すれば思い出すはずだ」

「彼をこのようなゴミ屋敷に住まわせるのを認める事は出来ない。それに、一夏君は更識の方が良いと言つてくれた」

楯無の言葉を聞いて、千冬と千夏は鋭い視線を楯無に向けた。

「嘘は言わないでもらおうか」

「一夏がわたしたちを見捨てるはずが無い」

「だが、君たちは少しでも一夏君に思い出されていると思つているのか？ 彼の中で君たちは、モンド・グロツソで優勝したペアだとして認識されていないんだぞ」

「……………」

「私が今日、この家を訪ねたのは、一夏君を更識の養子に迎え入れたいという事を君たちに伝える為だ。もちろん、一夏君と会う事は認めてあげよう。彼の意志を確認する上でも、一度は会わなければいけないのだからな」

「もし、一夏が貴方の養子になるというのでしたら、私たちは素直に引き下がりますよ。ですが、養子になった後も我々と会う事を認めてくれるのでしたら、ですが」

「その辺りは一夏君に意志に任せるつもりだ。もちろん、一夏君が織斑家に戻りたいの言うのであれば、私は大人しく引き下がるつもりだが」

既に一夏の意味は確認しているのだが、あえてその事は二人には伝えなかった。本人から聞けば、この二人でも諦めがつくだろうと判断して言わなかったのだが、それが後々どう影響するかまでは、この時の楯無には考えが及ばなかったのだった。

姉弟の再会

一夏を更識の養子にして、次期当主候補に祭り上げるといふ計画を聞いた織斑姉妹は、楯無につれられて更識家を訪れていた。理由はもちろん、一夏の意志を確認する為だ。

「一夏ア!!」

「ッ!? ……何でしょうか、織斑千冬さん、千夏さん」

突如研究所に入ってきた二人に驚きながらも、一夏はシツカリと二人に対応する姿勢を見せた。ちなみに、驚いたのは一夏の演技であり、二人がこの場所に向かっているという事はダダ漏れの気配で一夏には伝わっていたのだ。

「お前、私たちより更識を選ぶのか?」

「どういう事でしよう?」

「わたしたちの許には帰らず、更識の養子になるのか、と聞いているんだ」

「その話ですか。そうですね、自分は織斑の人間なのでしようけども、記憶が始まったのは更識家で生活してからです。それ以前の記憶は自分にはありませんし、必要もない

と思っっています」

「な、何故だ……」

必要無い、それは「記憶」に掛かっている言葉なのだが、千冬と千夏は、それが自分に掛かっているような錯覚に陥っていた。

「別に不便を感じませんし、更識にいる方が自分の身の安全と、趣味に集中出来るからですよ。織斑の家に戻ったら、それは叶いせんから」

「お、お姉ちゃんが全力でお前の事を護るぞ……」

「一夏の為なら、わたしたちは代表など辞めるぞ……」

「貴女たちは日本の期待を背負っている人たちなんですよ？ 一個人の為にそれを捨てるのは少し無責任な気がします」

「だ、だが小鳥遊は辞めたじゃないか……」

「碧さんは元々あの大会のみという条件で代表選考に臨んだのです。それは日本政府も了承していた事ですので、碧さんが引退したのは当然の流れなんですよ。だが貴女たちはそのような取り決めはしていませんよね？」

一夏の的確な事を言われ、千冬も千夏も言葉を失ってしまう。自分たちの記憶の中に

ある一夏と、今の一夏の喋り方は、あまりにも違い過ぎていた。

「それに、貴女たちには各国から指導してほしいという要求が来ているはずですし、その後には新設校となる I S 学園の教師に就任してほしいという政府からの要求もありますよね？ そうなった場合、どうやって自分の身の安全を護ってくれるのでしょうか？ 仕事もせずに、自分だけに付きつきりになるのは不可能ですよね？」

「……………」

自分たちの情報をしっかりと集めていた一夏に、千冬も千夏も抵抗を諦めるほか無かった。

「分かった……非常に遺憾だが、一夏が更識の養子になる事を認めよう」

「ただし、定期的にわたしたちと会ってくれるのだがな」

「それくらいなら別に。半年に一回くらいでいいですよね？」

一夏としては、別に会ってもなにも思わない相手なので、それくらいのペースが一番なのだが、二人にはそれはあまりにも期間が長い提案だった。

「せめて一ヶ月に一回……」

「それは無理ですよ。貴女たちは代表合宿や強化遠征などで日本にいない事もあるんで

す。その場合はどうするおつもりなのですか？」

「一夏がわたしたちに会いに来てくれれば……」

「却下です。自分が動けば更識の人たちも動かなければいけないですよ？ その費用

は貴女たちが出してくれるとでも言うのですか？」

「わ、分かった。半年に一回でいい」

ただならぬプレッシャーを感じてか、千冬も千夏も大人しく一夏の提案を呑む事にした。

「では、そういう事で。ここから先は自分ではなく大人たちと話し合う内容ですの」

つまりはこの場所から出ていけという事なのだ、二人の姉は弟の言葉に隠された指示に従うしかなかった。ここがISの研究所で、自分たちには理解が及ばない場所であるという事は、この自己中心的な二人にも理解できているからこそ、邪魔したら大変な事になると言葉の裏に隠された一夏の伝えたかった事に気付けたのだ。

一夏の意志を確認した二人は、楯無に一夏を養子にする事を認める旨を伝えて更識家を後にした。門を出たところで、懐かしい顔を見つけた。

「久しいな、小鳥遊……大会以来か」

「そうですね。私は現在一夏さんの護衛を主な仕事にしていますからね。貴女たちと会う機会は確かに無くなってました」

「わたしたちが自由に会えないのに、お前は一夏に毎日会えていたのか……羨ましい限りだな」

「IS学園の教師の打診は私にも来ています。ですが、今のところはそれを受ける義理はありません。私は専用機も政府から受け取った訳では無いんですし、後輩を育てるのも私の仕事ではありませんので」

「だが、一夏がISの研究をしているのなら、遠からず一夏にISが反応するかもしれないぞ?」

そんな事はあり得ない、その事は千冬も千夏も分かっていた。ISは男には反応しない、それが世間の常識であり、女尊男卑の風潮が広まっている原因でもあるのだから。「万が一、そんな事があったら、私はIS学園の教師になりますよ。一夏さんにISが反応したとなれば、政府は一夏さんを無理矢理にでもIS学園に入学させるでしょうからね」

まだ出来てもない学園の事で話を進める側らで、碧は二人が一夏の研究内容を知っている事に驚きを覚えたのだった。

「(何でこの二人が一夏さんの研究内容を……)」

『さつき研究所に入ったからでしょうが。何を考えているんですか、碧は』
「(あつ……そうだったわね)」

木霊にツツコミを入れられて、碧は二人が何故一夏の研究内容を知っているのか、という疑問を捨てた。何故その事を忘れていたのかと、自分を恥じて屋敷内に戻って行ったのだった。

更識一夏の誕生

正式に養子縁組されて、晴れて一夏の苗字は「織斑」から「更識」へと変更された。学校や役所への手続きなど面倒な事は全て更識家が受け持ち、織斑姉妹は特にする事無く一夏は更識家の人間になったのだった。

「本日を以って、更識に籍を置くこととなりました。皆さま、これからもよろしくお願い致します」

「今まで通り、一夏にはIS部門で活躍してもらおうつもりだ」

「はい、自分もそのつもりです」

一夏の返事に、楯無は満足そうに頷いた。そして人の悪い笑みを浮かべて続けた。

「一夏が更識に籍を置いた事を受けて、私は次期当主候補を刀奈から一夏に変更する」
「ですがご当主、一夏殿は養子です。実子の刀奈の方がよろしいのでは……」

「刀奈は日本代表候補の選考合宿に参加出来るほどの才能の持ち主だ。更識という枠にはめるのは惜しい。一夏も無類の才能を發揮しているが、これは逆に世界に出すには惜しい才能だ。したがって私は一夏を次期当主候補とし、今まで通り更識の為に力を振つ

てもらいたいのだよ」

表社会における更識は、I S企業のトップとまで言われるくらいの大企業に成長している。その業績の殆どは一夏のおかげであり、一夏が世界に飛び立った場合、更識に勤めている大半の人間が路頭に迷う可能性があるのだ。

「さて一夏、次期当主候補に指名したが、君はどうしたい？」

「自分は更識で生活する事を選んだのです。ご当主様がそのようにお決めになられたのなら、自分はそれに従います」

「そうか。更識の当主を継げば、私の娘二人や布仏の二人、そして四月一日家の娘や小鳥遊とも共にいられるだろう」

「自分にはまだそのような話は……」

「分かっているさ。まだ小学五年だからな、一夏は」

実に楽しそうに笑う楯無を前に、さすがの一夏も苦笑いを禁じえなかった。

「とにかく、次期当主候補は刀奈から一夏へと変更、それ以外は何も変わらない。これからも一層励むように」

「承りました。更識の為、ひいては自分の為にこれまで以上努力する事を約束致します」

この宣言を合図に、招集を掛けられた人間はそれぞれ任務へと戻っていく。この集まりに参加していた碧は、誰もいなくなったのを見計らって一夏に話しかけた。

「ご立派になりましたね、一夏様」

「止めてください、そんな喋り方。碧さんは今まで通りで良いんです」

「ですが、次期ご当主となられると、私などは立場が……」

「碧さんは、俺が普通に接する事が出来る貴重な年上の人なんですから。その人に距離を取られると、凄く悲しいですし」

いまだに大人相手に身構えてしまう一夏だが、碧だけは昔から例外として付き合ってきているのだ。その碧にあのような喋り方をされると、さすがの一夏も凹んでしまうのだ。

「じゃあ、誰もいない場所では今まで通りに話すわね。でも、先に喋り方を改めたのは一夏さんですよね」

「俺は、昔が馴れ馴れし過ぎただけで、普通に変えただけなんですけどね」

「じゃあ一夏さんも、人前では今のままで良いですが、二人きりの時は昔みたいに話して下さる」

「……………分かったよ、碧お姉ちゃん」

少し顔を赤らめながらも、一夏は昔の呼び方で碧の事を呼んだ。それに満足したのか、碧はその日一日気合いが入っていたのだった。

更識姓を名乗り始めて暫く、学校でも漸く馴染んで来始めていたのだった。

「なあおり……………更識。ここってどうやって解くんだった？」

「どこ……………ああ、ここはだな……………」

まだ若干のぎこちなさは残るものの、クラスメイトの大半は一夏の事を「更識」と呼ぶようになっていた。

「一夏、アンタ色々大変なのね」

「まあまず両親がいない時点で大変だと思うんだろうけどな」

「アンタ、記憶無かつたもんね。それにしても、随分と急な養子縁組ね。何かあったの？」

「織斑姉妹が本格的に忙しくなると、さすがに保護責任を全うできないだろうからとご当主は仰っていたが、その真意は俺にも分からん」

「そうなんだ。それにしても、アンタも堅苦しい家に養子縁組されたわね」

鈴は一夏の苗字が変わろうが、変わるまいが関係なく、名前で呼び続けていた。一夏も他のクラスメイトにも名前で呼んで良いと言ったのだが、過去のトラウマというものはそう簡単に払拭できるものでは無かった。

「それにしても、アタシが来る前にいた篠ノ之東博士の妹って、随分と暴力的だったのね」

「そうだな。俺の事を名前で呼ぼうとした相手に殴りかかってたからな」

「アンタ、その筈とかいうこになにしたの？」

「知らん。いや、覚えてないと言った方が正確か？」

「アタシに聞かれても分からないわよ！」

鈴の事を見て首を傾げた一夏に、鈴がツツコミを入れた。

「多分だけど、更識は何もしてなかったと思うぞ」

「そうそう、篠ノ之さんが勝手に更識君に付きまどっていただけだったと思う」
「だだよ」

周りの証言を受け、一夏は鈴に視線を向けた。

「随分と勘違いヤロウだったのね、その筈って子は」

「『野郎』じゃないけどな」

「細かい事は良いのよ。とにかく、その筈から解放されたのに、アンタたちはそのトラウマから一夏の事を名前前で呼べない、と」

「木刀を持って追いかけて回されたんだから仕方ないだろ」

他人事のように言う一夏に、鈴は呆れた視線を向ける。本人が意図した事では無いにしても、トラウマの原因は一夏にもあるのだと鈴には思っていたのだ。

「ま、気長に克服するのね」

「別に苗字のままでも不便は無いが、呼ぶ度に聞えてたら面倒だろ？」

「そんなもんかしらね」

一夏の苗字が変更されても関係無かった鈴としては、他のクラスメイトの気持ちは分からない。だけど「篠ノ之箒」という人物が面倒だったという事だけは理解出来たのだった。

感じる距離

選考合宿に参加している中で、刀奈は最年少だった。当たり前だが、他に小学生などおらず、一番歳の近い相手でも高校生だ。

「何だか凄いところに来ちゃったわね……」

「ISに乗りたくないから、という理由で選考合宿に参加希望を出した刀奈としては、これほどまでに敵意剥き出しの中に放り込まれるのは困った状況だった。

「これより、ISの適性を計りますので、呼ばれた者から別室に移動するように。また、この適性値である程度の者は振るい落とされるので覚悟しておくように」

試験官らしき人にそう言われ、刀奈は周りを見渡す。ある程度の測定は済ませてからの選考合宿に呼ばれたのに、更に測定して振るい落とされるなどと思っただけでなかった人間がちらほらと見受けられた。

「(ISに対する適性じゃないわよね……そうになると、いったい何の適性なのかしら)」

ここににいる者の大半はI S適性がB以上のはずなので、今更適性値で振いに掛けられるなんておかしな話なのだ。そんな事を考えながらも、刀奈は特に緊張もせず名前を呼ばれるのを待っていた。

「次、更識刀奈」

「はっ」

漸く名前が呼ばれ、刀奈は別室に移動する。その際残っていた参加者に不審な眼で見られたが、別に気にする事もなく移動する事が出来た。

「小学生が参加するのが不思議なんでしょうね。悪いけど、私はそんな事で怯えるような性格じゃないのよ」

元更識家次期当主候補だったからか、大人から値踏みされるような視線を向けられる事に慣れているのだ。高校生を大人というのは可哀想かもしれないが、小学生の刀奈から見れば、十分高校生は大人だった。

「(適性検査って、何よこれ……)」

移動先の部屋に待ち構えていたのは、現日本代表の二人、織斑千冬と千夏姉妹だった。

「つまり、この二人に恐れを抱く事無く代表選考合宿に集中出来るかって事なの？」
「ほう、更識の小娘か」

「貴様がこの合宿に参加するとはな……確か一夏より一つ年上だったと記憶しているが」

「間違いありません。私は一夏君より一つだけ年上です」

「つまり、小六か……選考基準はクリアしてるのだし、歳は気にしないでおう」

色々と質問されたが、刀奈は詰まる事無く返答した。

「よし、お前は合格だな」

「あちらの部屋に進むがいい」

千冬・千夏から合格を言い渡され、刀奈は合格者がいる部屋へと案内された。

「殆どの人が合格なのね……でも、私より先に検査を受けた人で、ここにいない人もいる……」

振るい落とされたのだろうと理解した刀奈は、改めて合宿に対する気合いを心の中で入れ直したのだった。

刀奈が合宿に参加しているので、更識家では騒がしいと評される人物は本音だけに
なっていた。

「美紀ちゃん、遊ぼうよ〜！」

「本音ちゃん、せめて宿題を終わらせてからいいなよ。今日も宿題忘れて先生に怒られ
てたでしょ」

「別に気にしないよ〜。だって最悪いつちに教えてもらえば良いんだしね」

「虚さんに言い付けるよ？」

「か、かんちゃん……怖い事言わないでよ」

一夏が「織斑」では無くなったので、本音は一夏の事を「おりむく」とではなく「いつちー」と呼ぶようになっていた。他の二人は元々名前で呼んでいたもので、一夏の苗字が変わってもさほど不便には思っていないなかった。

「一夏さんが次期当主候補か……」

「美紀がなりたかった？」

「ううん、そんな事無いよ。むしろ簪ちゃんになりたいんじゃないの？」

「まさか。お姉ちゃんが候補だったんだから、それを変更したとしても私にはならないよ」

「かんちゃん、美紀ちゃん、これってどう解くの？」

既に学力的に落ちこぼれている本音は、簪と美紀に質問を繰り返していた。

「本音、このままじゃ一緒の高校に進学できないかもよ」

「まだ中学生にもなつて無いだから、かんちゃんは心配性だな」

「でも本音ちゃん。来年にはIS学園が開校になるし、あの学園も一応は学力試験はあるって噂だよ？」

「……いつちーに家庭教師してもらおうから」

「はあ……」

美紀もさほど成績が良いわけではないが、それでも本音ほど落ちこぼれてはいない。そして始める前から他力本願な本音に、簪と同様に呆れてしまったのだ。

「おねくちゃんだっていつちに教わってるんだから、私が教わってもなにもおかしくは無いよ〜！」

「虚さんは専門的な知識を一夏から教わってるだけで、基礎は自分で勉強してたよ」

「刀奈お姉ちゃんの補佐をしたって、昔からしっかり勉強してたしね」

「……おねくちゃんと私とじゃ、そもそも出来が違うんだよ〜！」

「私がかしました？」

本音の泣きごとが聞こえたのか、虚が部屋に入ってきた。

「虚さんと本音とじゃ、元々の頭の出来が違うって本音が泣きごとを言ってただけですよ」

「私だって勉強したんです。元々出来るように思われるのは心外です」

「だから本音ちゃんも頑張るしかないんだよ」

「ほえ〜……」

本音の口から何か出て行ったような幻覚を見た、と思ったが、次の瞬間にはそんな事は気にならなくなっていた。

「虚さん、ちよつといいですか……つと、なにしてるんだ、本音は？」

「見ての通りですよ、一夏さん」

「はあ……」

「勉強したくないよ……」

机に突っ伏している本音を見て、一夏は気の抜けたような言葉を漏らした。それ以上の興味を失ったようで、一夏は虚を連れて部屋から出て行ってしまった。

「忙しそうですね、一夏さんは」

「そうだね……昔みたいにみんな遊ぶ時間もないくらいにね……」

少し寂しそうな響に、美紀はなんて声をかければいいのか分からなくなってしまうのだった。

簪の秘密

選考合宿への適性検査に合格した刀奈は、本格的にISの戦闘訓練を受ける事になった。

「分かっているとは思いますが、ここで才能なしと判断された人間は即座に帰宅してもらおう」「怪我などされて面倒を起こされては困るからな」

教官役の織斑姉妹の言い草に、刀奈は呆れたのを顔に出しそうになった。

「(なんて自分勝手な人たちなのだろう……一夏君を更識から連れ出そうとしてたのも納得ね)」

あまり面識の無かった相手だったが、周りの従者から「一夏を更識から連れ戻そうとしている」という事は聞かされていた。生活能力が無く、一夏に頼らなければまともな生活を送れない、というのもあったのだろうが、この二人は単純に一夏と生活したかっただけなのだ。だが、それは更識の人間からすれば自分勝手な思いで、一夏がそれを望むはずが無いとすぐに思える事だったのだ。

「（I Sに関してだけ言えば凄い人なんだけど、それ以外はダメダメなのよね）」

織斑姉妹の本性を知っている刀奈は、八つ年上の教官の事を微妙な眼差しで眺めていた。

「次は貴様だ」

「はい」

「分かっているとは思いますが、相手に怪我をさせるような事の無いように。面倒だからな」

「……相手はそれなりの実力者ですよね？」

「代表になれない候補生だからな。真の実力者には敵わない可能性がある」

「（別に私は実力者ってわけじゃないんだけど……）」

目の前の相手を見て、代表になれない理由が何となく分かった刀奈は、とりあえず怪我だけはさせないように気をつけようと心に決めて開始位置に向かったのだった。

刀奈は合宿に参加、一夏と虚は研究所に籠り何かをしている、そして碧は特別任務で屋敷にいない。少し前まではみんな揃って遊ぶ事もあったのに、最近では本音と美紀の二人しか遊び相手がいない事を、簪は気にしていた。

「かんちゃん、次はかんちゃんの番だよ?」

「……えっ? ああ、ゴメン」

「何か気になってるの?」

「ちよつとね……今の学年になってからお姉ちゃんたちと遊ぶ機会がめつきり無くなつたな、つてさ」

「刀奈お姉ちゃんも虚さんも忙しくなっちゃったからね。一夏さんもだけど」

「いっちは刀奈様のISを造る為の準備で、おねくちゃんはそれのお手伝いだもんね」

本音も納得はしていない様子だが、一応理解はしているのだ。美紀も二人が大事な事

をしているのだと理解しているから、寂しいと思ってもそれを口に出したりはしなかった。

「この前久しぶりに一夏に会ったけど、すぐにまた研究所に籠っちゃったじゃない？だから余計に寂しいって思っちゃったのかも」

「そうなんだ〜……ってああ!?! かんちゃん、ちよつと待つて!」

「待つたはダメだよ、本音ちゃん」

考え事をしながらでも、的確に相手の急所を突いてきた簪に、本音が絶望の声を上げた。その横で美紀が苦笑いを浮かべながら本音に同情していた。が、味方をするつもりはなさそうだった。

「そういえばお父さんが一夏を正式に次期当主として認めたから、それもあって余計に忙しくなってるのかな?」

「私のお父さんも、一夏さんが忙しいのは仕方の無い事だと言ってた」

「いっちーが忙しいのは、周りの大人が仕事を押し付けてるからじゃないの?」

「押し付けてるわけじゃないと思うけど、一夏に仕事が回ってるのは確かだよ。お姉ちゃんがやってた事も一夏に任せてるから」

「そうなんですか……あつ」

「今度は美紀ちゃんが攻められてるね〜……ほえっ!？」
「二人とも油断し過ぎ。ガラ空きだったよ」

別の事を話しながらも相手の隙を見逃さない。ゲームにおいて簪に勝てる相手はこの屋敷には存在しないと断言しても過言では無かった。

「本音、ちゃんと宿題はしたのですか」

「あつ、おね〜ちゃん！ 今日ほちゃんとしたよ〜」

「そうか、珍しいな」

「一夏さん！ どうしたんですか、今日はもう研究は終わつたんですか?」

「まあな。それで偶には息抜きでもしてくれ、と大人たちに言われてな……」

何をしたらいいのか分からなくなった、という表情で一夏は頭を掻いた。最近の研究が更識の仕事かで大半の時間が潰れていた一夏は、息抜きと言われても没頭出来る趣味が無かった。

「それじゃあいつちーたちも一緒に遊ぼう！ かんちゃん、この勝負は無かった事に……」

「大丈夫。後三ターンで終わるから」

「嘘っ!？」

自分たちがそこまで追い詰められているなどと理解していなかった本音と美紀は、簪の宣言に驚いて画面を睨みつけた。だが、何処をどう攻めれば終わらせられるのかが分からなかった二人は、なすすべなく簪に敗北したのだった。

「相変わらず簪お嬢様はお強いですね」

「お姉ちゃんや虚さんに勝てる唯一だから。これ以外だと二人に敵わないし」

「アニメの知識だって、かんちゃんが一番だと思うよ。後はそうだな………B——もが!？」

「何を言い出すのかな、本音は」

余計な事を口走りそうになった本音は、簪に羽交い絞めにされて口を塞がれた。何でこんな事になっているのか分かっていないのは一夏だけで、虚と美紀は何となく察しがついていたのだった。

「今のは本音が悪いですね」

「そうですね、本音ちゃんが悪いですね」

「何の事です?」

「な、何でも無い！ 一夏、ゲームしよ、ゲーム！」

「あ、ああ……分かった」

慌てふためく簪を見て、これは触れてはいけない事なのだど理解した一夏は、大人しくゲームをする事にしたのだった。

「そういえば、本音は？」

「本音なら寝ちやったよ」

「寝た？ ……なる程」

もがき続けて疲れたのか、本音はその場で寝てしまったのだ。一夏はそう思う事にし、ゲームに集中したのだった。

合宿の合間

選考合宿に参加していた刀奈は、久しぶりの休みなので屋敷に帰ってきた。

「ただいまー！ 簪ちゃん、お姉ちゃんが帰ってきたわよー！」

「お帰りなさい、お姉ちゃん。合宿は大変だった？」

「まだ終わりじゃないけど、結構大変よ。具体的には、織斑姉妹の指導とかが……」

更識家に養子入りした一夏の事で刀奈は千冬と千夏から他の候補者より多く指導時間を割かれているのだ。それを羨ましいという事で不公平だと騒ぐ人が多いが、刀奈としては理不尽だと声を大にして叫びたい気持ちだったのだ。

「あつ、刀奈さん、お帰りなさい。選考合宿はまだ終わりでは無かったと思いますが」

「今日から三日休みなのよ。だから屋敷に帰って来ちゃった」

「原則として合宿中は宿舍からの外出は許可されないのでは？」

「この休みの間はOKなのよ。だから帰ってきたの！ みんなに会いたかったし、一夏君も最新のデータが欲しいと思って」

「そうですね……ハッキングするのも面倒ですし、直接測定させてもらえるのでしたら、

それに越した事は無いですから」

さらりと凄いを言い放った一夏に、刀奈と簪は驚いた表情を浮かべた。

「？ 二人とも、どうかしましたか？」

「いや……ハッキングつで一夏、それって立派な犯罪行為だよ……しかも侵入する先が日本政府となると……」

「バレるような痕跡は残さないさ。まあ、実際やろうとは思わないが」

「そうよね……それじゃあ一夏君、早速測定する？」

刀奈としては早い方が良いと思つての提案だったのだが、一夏は首を横に振つた。

「今日一日はゆっくり休んでください。疲れが抜けた時のデータの方が良いですし、簪や本音と遊べる時間も少ないですから、そっちを優先してください」

「でも、一夏君だつてISの開発とかあるでしょ？ それに、そんなに疲れてるわけじゃ……」

「いえ、今日は虚さんにIS整備の指導をする約束なので、どちらにしろ刀奈さんのデータを測定する時間が無いんですよ」

「あつ、そうなんだ……」

自分よりも虚の事を優先されたような気がして、刀奈は不満そうな顔をしていた。もちろん一夏にはバレ無い角度でその表情を浮かべていたのだが、ここ最近急激に観察眼を磨いていた一夏には、刀奈の表情は簡単に見破られてしまった。

「器用に顔半分だけ不満を浮かべてるようですが、虚さんの方が先に約束してたので諦めてください。それに、刀奈さん自身は疲れを感じて無くても、身体の方にはしっかりと蓄積されてるんです。なれない場所での生活や、織斑姉妹の指導などで、絶対に身体に負荷は掛っているんです。今日はゆっくりと休んで、少しでも万全な体調にしてから測定したいんです、分かってください」

「……はい」

年下の男の子に諭され、刀奈は不貞腐れたように返事をした。だが不貞腐れているように見えるだけで、実際はここまで自分の身体を心配してくれる一夏に感動していたのだ。

「じゃあ俺は研究所に戻りますので、刀奈さんはゆっくりと休んでください」

「分かったわ。大人しく簪ちゃんや本音、美紀ちゃんたちと遊んでるわ」

「そうしてください。碧さんもいますから、ISの事で聞きたい事があるなら聞くのも

ありだと思えますよ」

「えっ、碧さん？」

一夏ほどでは無いにしても、刀奈も気配を探る事に関しては昔から教育されていた。だがその刀奈の実力でも、周囲に碧の気配を察知する事は出来なかった。

「やっぱり一夏さんには敵いませんか……」

「護衛ですつと傍にいてくれましたからね。碧さんの気配は間違いません」

「私、気付けなかった……」

「他の人相手なら、刀奈さんの方が気配察知は上のはずですが、碧さんに関してだけならば、俺の方が気配に慣れてますから」

それだけ言い残して一夏は研究所へと向かって行ってしまった。残された刀奈と簪は、無言で碧の事を見詰めていた。

「な、何でしょうか……言っておきますが、一夏さんの身辺警護の任はご当主様より仰せつかったものですからね？ 私の独断ではありませんよ」

「そうよね……でも、羨ましいのは確かなのよ」

「そうだね。最近私たちは一夏に会える機会が減ってるのに、碧さんは毎日一夏の事を

「見てるわけでしょ？」

「見てるだけじゃないですが……まあそうですね。もちろん、私も最近は一夏さんと話す時間が減っていますが」

刀奈の専用機開発の準備や、IS学園から専用機を用意してもらいたいと要求され、次期当主候補となった為に更識の仕事もそれなりにこなしているのだ。一番近くにいる碧でも、会話をする機会は格段に減ってしまったのも仕方ない。それに加えて一夏は虚にISの整備の仕方などを教えているので、研究所から出てくるのは寝る時くらいなのだ。

「こうなったら私も、一夏にISの事を習おうかな……」

「簪ちゃんは整備より選手の方が似合ってると思うな。私と一緒に代表になって世界を取りましようよ！」

「でも、私はお姉ちゃんみたいに戦術家でも無いし、碧さんみたいに臨機応変に動けるかどうか……」

「大丈夫ですよ。簪ちゃんだって刀奈ちゃんみたいに代表候補になれる实力はあると思いますよ」

『適正も高そうですね』

「そうなの？」

「?」

「あつ、木霊が簪ちゃんもI S適性が高そうだった」

木霊の声が聞こえるのは、持ち主である碧を除けば一夏のみ。他の人には碧が独りで何かを言っているようにしか聞こえないのだ。

「I Sからの評価なら、簪ちゃんも代表になれるかもね」

「そうすれば一夏さんに専用機を造ってもらえますね」

二人の甘い言葉に、簪は自分が代表になっている場面を夢想したのだった。

息抜き？

あまり広くもない研究所で、一夏から I S の講義を受けていた虚は、ふと視線を一夏に向けた。

「何か分からない箇所でもありました？」

「いえ、一夏さん……疲れてます？」

「……何故そう思うんですか？」

「何時もより覇気が無いような気がしまして……」

「覇気なんて、元から無いつもりですが……虚さんの目は誤魔化せなかつたですね。簪や美紀には気づかれなかつたんですが」

接触する機会が減っている簪や美紀は兎も角として、虚には隠し通せなかつたと、一夏は苦笑いを浮かべながら認めた。

「確かに最近疲れが抜けてないような気もしてますが、心配してもらおうほどでもないと思いますけど」

「今日はもう良いですから、この後はゆっくりしてください」

「ですが、虚さんだって疲れてる感じがしますけど?」

「……中学に通うようになって、まだ慣れてないからでしょう」

「じゃあ、今日はお互いにここ迄にして、大人しくしましょう。幸いな事に、刀奈さんも帰ってきてますので、久しぶりに一緒に遊ぶのも良いかもしれませぬ」

中学一年の虚と、小学五年の一夏がするような内容ではないが、二人ともそれなりに忙しいので、年相応に遊ぶ事も久しくしていなかったのだ。一夏の提案に少し考えるフリをして、虚はその提案を受け入れる事にした。

「虚さんは専用機とかに憧れとか無いんですか?」

「無い事は無いですが、私の実力じゃ代表や候補生になるのは難しいですし……」

「更識の表企業で、ISの宣伝を担当してくれる人を探してるんですけど、虚さんをお願いしても良いですか? もちろん、企業の代表としてISを所有する事が出来ませぬと」

「私が、ですか……企業代表ともなると、各国の代表と同等の扱いをされる事になるんですよね……」

「まあ、IS学園には無条件で入学出来るでしょうね」

再来年開校のI S学園に入学したいと思っている同級生は、虚の周りにも大勢いる。そのI S学園に無条件で入学出来るというのは、かなり美味しい条件だった。

「その代わり、企業同士の性能テスト、という名の模擬戦闘には参加してもらおう事になりますけどね」

「それくらいなら構いません。お嬢様もI S学園に進学なさるでしょうし、私もI S学園にいた方がお嬢様も安心出来るでしょうしね」

「じゃあ、ご当主にはそのように伝えておきます。正式な採用不採用はご当主から通達があると思いますので」
「分かりました」

専用機が持てるかもしれない、その事実が虚の心の中を占領し、彼女としては珍しく浮かれていたのだった。

簪、本音、美紀と一緒に遊んでいた刀奈がその気配を掴んだのは、普段から怒られて
いる相手だったからに過ぎない。

「虚ちゃんが部屋に来る」

「虚さんが？ でも、一夏と一緒に研究所に籠ってるはずじゃ……」

「いえ、刀奈ちゃんの言う通りですね。一夏さんも虚さんもこの部屋に向かっています」

碧がそう告げると、簪も納得したように外に興味を向けた。

「もしかして簪ちゃん、お姉ちゃんの事を疑ってたの？」

「だって、お姉ちゃんの言う事を全部信じてたら大変だし」

「酷い!? 本音、簪ちゃんがいじめるよ」

「かんちゃん、刀奈様をいじめちゃダメだよ」

「別に苛めて無いんだけど……」

精神年齢が近い二人に言い寄られても、簪は特に気にする様子もなくゲームを続ける。その相手をしている美紀も、茶番には目もくれずに簪の相手を務めていた。

「反抗期！　これが反抗期ってやつなのね!？」

「バカな事言っていないで、お姉ちゃんも少しはまともに相手してよね」

「だってー！　簪ちゃんの相手をするなんて、私には無理だもん」

ゲームだけは、刀奈より簪の方が強い。だからではないが、刀奈は簪と一緒に遊ぶ時には別の事を提案してくるのだ。だけど簪はとにかくゲームでしか刀奈に勝てないで、頑なにゲームを選択したがるのだ。

「何を騒いでるんですか……廊下まで聞こえてますよ」

「虚ちゃん、簪ちゃんがいじめるのー」

「簪お嬢様が？　お嬢様の勘違いじゃないんですか」

「うわあ！　虚ちゃんも私より簪ちゃんの方の肩を持つんだ！　一夏君は私の言う事、信じてくれるよね？」

「別に俺はどちらも……言い分を聞いてから判断しますよ」

実に冷静な答えに、刀奈は本当に年下なのだろうかと疑いの目を一夏に向けてしまっ

た。

「なにか？」

「ううん……一夏君は何時も冷静だなーって」

「そんな事は無いですよ。それで、簪が苛めたと言ってますが、具体的にどう苛められたんですか？」

判断する為に一夏は刀奈の言い分を聞き始めた。その横では簪と美紀がかなり集中してゲームで対戦をしているのだが、一夏はそちらには一切視線を向けなかった。

「ほえ、さすがかんちゃんだね。美紀ちゃんも頑張ってる！」

「これは、私たちには無理そうですね」

「刀奈ちゃんも頑張ってたんだけど、やっぱり簪ちゃんには敵わないってさつき言っちゃいました」

二人の実力はかなり拮抗しているのだが、毎回僅差で簪が勝利しているのだ。だから美紀も今回こそは、という意気込みで挑んでいるのだった。

「——なるほど、それは刀奈さんの勘違いですよ」

「そうなの!? 簪ちゃんは反抗期でも私の事を嫌ってるのでもなく、私の思い込みだっ

て一夏君は言うの？」

「そうですね。簪だつて刀奈さんの事は好きなのはですが、一から十まで信じてたら大変だつていうのは、俺も同意します」

「分かった、これからはなるべく誇張しないようにするね」

「そうしてください」

結論が出たのと同時に決着も付いた。やはり今回も簪の勝利で、美紀はまたしても僅差で敗れたのだった。

本音の名言

更歳の企業代表になれるかもしれないという事で、虚はますますＩＳに関しての勉強に力を入れるようになった。もちろん、息抜きする時にはしっかりと休み、分からない箇所は一人で抱え込まず一夏に尋ねるようにしているおかげで、普通の学業にも影響する事無く知識を深める事が出来ている。

それでもやはり中学一年である虚には限界があり、専門的な知識を身につけるには至っていない。普通に考えれば当たり前なのだが、何せ例外が身近にいる所為で、虚は自分に才能が無いのではないかという悩みに陥ってしまったのだった。

「おねーちゃん？ なに悩んでるの？」

「本音……いえ、私にはＩＳに関する才能が無いのではないかと……」

「ほえ〜？ おねーちゃんは同年代の誰よりも才能があると思うけどなく。何でそんな事を思ったの？」

「いえ、どれだけ頑張っても、専門的な知識・技術を身につけられないので」

「そんなの当たり前だと思うけどなく。碧さんだって日本代表だったけども、技術なんて持ってなかったよ？」

碧はあくまでも操縦者であって、整備や開発の知識が無いのは当然であり、また身につける必要も無かった。だが虚が目指しているのは操縦者ではなく整備士、専門的な知識が必要な立場なのだ。

「もしかしてだけどおねくちゃん、いつちーと比べてるなんて事は無いよねく？」
「それは……」

「比べるだけ無駄だと思うけどねく。いつちーはISの声が聞こえるみたいだし、色々特殊な立場だからああいった技術を身につけられたんだからさく。おねくちゃんはおねくちゃんのペースで技術を身につければいいんだよく」

「本音……貴女、偶に良い事言いますね」

普段の本音ばかり見ているからこそ、今回受けた衝撃はかなり大きいものだったのだろう。妹に言われるまで、自分が一夏との才能の差に悩んでいたなんて気づきもなかったのかもしれない。いや、あえて気づかないふりをしていたのかもしれないなど、虚は改めて自分の考えに呆れてしまった。

「偶につて酷いなく。私だつて色々と考えてるんだからねく」

「そうですね。……ところで本音、確か今日算数のテストだったと聞いているのですが、結

果はどうだったんですか？」

「え、えーつと……あつ、かんちゃんだ！」

「逃げるんじゃないやありません」

「ほ、ほえく……」

さつきまで姉に良い事を喋っていた本音だったが、一瞬にして何時もの本音に戻ってしまっていた。簪の名前を使って逃げ出そうとしたのがバレて、結局虚に怒られる羽目になってしまったのだが、何時もよりお説教が短かった様に本音は感じていたのだ。た。

選考合宿もいよいよ終盤に差し掛かり、候補生に相応しくないと振るい落とされた人間も一人や二人では無かった。そんななか刀奈は振るい落とされる事もなく、むしろ候補生に相応しいとさえ評価されるくらいにまで成長していた。

「なかなかやるな、更識の小娘は」

「わたしたちの指導にもシツカリと付いて来ているからな」

「私はこんなところで諦めたくないんです」

先日の休みの間に、一夏分を補充した刀奈は、休み明けの特訓でもシツカリと喰らい付いていた。織斑姉妹の指導は厳しく、憧れだけでこの合宿に参加していた人間は、後悔の念に押しつぶされ、そして振るい落とされていったのだった。

「貴様のデータは逐一更識に送るように言われているが、何が目的なんだ？」

「候補生に選ばれた時に、専用機を造ってもらえる事になっているので、その為のデータだと思えます」

「そう言えば、更識では独自開発したコアがあるんだったな。小鳥遊の専用機も、確か更識が造ったISだったな」

あまり他人に関心を持たない織斑姉妹ですら、更識の事は気になっていた。理由は当然のように、一夏がそこにいるからなのだが、珍しく一夏が関係していない事を気にしていた。

「まさか一夏君がISを造ってるなんて、口が裂けても言えないわよね……」

この二人にバレたりしたら、それは世界中にバレるのとほぼ同義なのだ。篠ノ之東には知られてしまっているようだが、彼女は今のところその事を世間に発表する事はしていない。

だがこの姉妹は、弟の事を全世界に自慢したくてしようがない性格なので、その弟である一夏がISのコアを製造し、ほぼ一人でISを造る事が出来るなどと知ったら、その日の内に全世界に向けて発信する事だろう。

「とにかく、今の状態なら貴様が一番候補生に近いだろう」

「他の連中は歳ばっか食っていて、技術はそれ程高くないからな」

「仕方ないですよ。ウチみたいに実家に訓練機があるわけじゃないんですから」

一夏作の第二世代訓練機、打鉄。近接格闘用の訓練機だが、更識の屋敷にはこれが結構な数あるのだ。日本政府にも報告が行っているので、新設校となるIS学園に納品さ

れる訓練機は、この打鉄に決まりつつあるのだった。

「どんな技術者がいるんだ、更識には」

「まだそれほど I S の開発戦争に差は無かったはずなのに、いきなり第二世代の訓練機だからな……興味を持たれても仕方ないだろう」

「それはもちろん秘密です。この事が知られたら、その人の生活に影響が出てしまいますから」

「ここで、「その技術者は一夏君です」なんて言おうものなら、一夏の明日からの生活が一変してしまう。その事をちゃんと理解しているからこそ、刀奈はこれ以上話すつもりは無かった。

「そうだな。一夏のように、I S で人生を狂わされるなんて事にはなってほしくないからな」

「その技術者にも家族はいるだろうしな」

「(い、言えない……その技術者が一夏君だなんて……)」

納得顔で頷いている織斑姉妹の傍で、刀奈は必死に表情を押し殺していたのだった。

美紀の努力

刀奈も合宿所に戻り、再び更識家での子供たちは大人しくなった。元々騒がしいのは刀奈と本音だけなのだが、この二人が揃うとそれなりに子供っぽさが出てしまう事があるので、刀奈が屋敷にいる間は簪や美紀も年相応にはしゃいでいた。

だが刀奈が合宿に戻り、一夏と虚も再び忙しそうにしていると、自然に大人しくなってしまう、三人は特にする事もなく部屋で過ごしていたのだった。

「かんちゃん、これってどういう意味？」

「少しは自分で考えなよ……」

「だって〜！」

今日も今日とてする事もなく、簪と美紀は既に宿題を済ませていたのだが、本音は相変わらず時間がかかっていた。そして自力では解く事の出来ない問題も多く、簪に解説を求める事が多かった。

「刀奈お姉ちゃんも最終選考まで残ってるし、虚さんも一生懸命I Sの知識を得てるのに、本音ちゃんは相変わらずだね」

「なんだよ〜！ 美紀ちゃんだって、テストでは私とそれ程点数変わらないじゃないか〜！」

「本音、二十点も違ったら大分違うと思うけど……」

先日の算数のテスト、美紀は日ごろの努力が実を結びそれなりの点数を取る事が出来たのに対し、本音は何時も通りの点数だったのだ。美紀はそれに驕ることなく努力を続けているが、本音は焦ることなく怠惰に過ごしているのだ。

「そのうち一夏に怒られるからね」

「いっちょーは私の構ってる暇なんてないから、怒られる心配は無いよ〜」

「さて、それはどうでしょうね」

不意に簪でも美紀のでも無い声の本音の耳に届いた。顔を見なくても、気配を感じる事が無くても聞き間違える事の無いその声の持ち主に、本音は身を縮込ませたのだ。た。

「この点数、いったいどういう事なんですか？」

「えっと……頑張ったんだけどね〜……てへ？」

「今から夜まで付きつきりで勉強を見てあげますから、すぐに部屋に行きますよ〜！」

「おねくちゃん!? 夜までつて長いよ!」

虚に引き摺られていった本音を、簪と美紀は手を合わせて見送った。自業自得とはいえ、虚に見つかったのは不運だと、簪も美紀も思っていたからだ。

「美紀は随分と頑張ったようだな」

「あつ、一夏さん……日ごろから頑張った成果が漸くつて感じですけどね」

「ところで一夏、今日はもう良いの?」

何時もならまだ研究所に籠っている時間なのに、この部屋に現れた一夏に簪は不思議そうな眼差しで問い掛けた。

「一通りは出来たからな。後は細部をどうするか、つてだけだからな。当分は籠る事は無くなるだろうな」

「本当!? じゃあ一夏も一緒に遊ぼうよ」

「そうだな……偶にはそうするか」

年相応に遊ぶ事もしていない一夏は、少し考えてから簪の提案を受ける事にした。ゲームの類はあまりやった事の無い一夏だったが、簪や美紀相手でも後れを取る事は無

く、勝てないにしても無様に負ける事も無かったのだった。

教室でのんびりと時間が過ぎるのを待っていた一夏の許に、鈴が駆け寄ってきた。割かし何時もの事なので、一夏は気にしなかったのだが、鈴が広げた新聞に見知った名前があつたので興味を示したのだった。

「候補生確定？」

「まだ最終判断はされて無いようだけど、この人で確定だつて世間は言ってるわよ」
「何を根拠に言ってるんだか」

新聞に書かれていたのは『更識刀奈、最年少で代表候補生に』という見出しの記事だつ

た。内容を見ると、特に何かしらの根拠があるわけでも無く、憶測の記事である事が分かったが、一夏の中でも刀奈で候補生は決まりだろうなと思っていたのだった。

「この更識って人、一夏の知り合いなんでしょ？」

「更識家の実子だ。戸籍上は俺の姉、って事になってる人だけど、実際は普通に友達のような感じだな」

「アンタの実姉はこの織斑姉妹でしょ。記憶は無くても間違いなく血縁関係なんだから」

検査をしたわけでもないのに自信満々な鈴だが、一夏と織斑姉妹は顔立ちがそっくりなのだ。目元や鼻筋など、どう見ても姉弟だろうと判断出来るくらいにそっくりなのだ。

「そっか、刀奈さんが候補生で確定なら、そろそろIS製造も忙しくなるな」

「更識は独自にコアを造ったり出来るんだっけ？ その技術を公表しなさいよ、って言いたいわね」

「独占市場をわざわざ明け渡すとは思えないが？」

更識の造る訓練機用のコアも、余所が造るコアとは一味も二味も違う出来るになるの

で、何処の国でも訓練機は更識制を採用しているのであって、一夏の言うように独占市場状態なのであった。

「そのおかげなのかは知らないけど、更識企業の株価は上がりっぱなしだものね」「鈴……お前株なんてやってるのか？」

「ウチの親がね。中華料理店だけじゃやってけないとか言つて……」

「つまり、更識がこけると、そのまま鈴の家庭にダメージが及ぶって事か……」

「こ、怖い事言わないでよ」

実際一夏の匙加減一つで変わってしまう家庭は鈴の家だけでは無いだらう。もし一夏が束のように消息を晦ませたら、いったいどれだけの家庭が崩壊に追い込まれるのだろう、そんな考えが一夏の頭をよぎったが、それを実行に移すつもりは無かった。

「それよりも、アンタ最近付き合い悪いわよ。偶には一緒に遊びなさいよ」

「そうだな……ここ最近落ち着いたし、偶には鈴に付き合うとするか」

「そう決まったら早速今日出かけるわよ！ 近所に怪しい屋敷があるんだけど、探索に行ってみましょう！」

「子供かよ……つて、小学五年は子供か」

「あんた、大人の中で生活してるから擦れてるんじゃないの？」

本気で心配そうな顔を見せた鈴に、一夏は苦笑いを浮かべるのだった。

候補生、決定

代表候補生選考合宿もいよいよ最終日となり、残った人間はたったの五人になっていた。初日にはこの十倍はいたはずの人数も、様々な選考基準から振るい落とされ、ついにはこの五人となってしまっていたのだった。

その中に、更識刀奈の姿もあった。最年少参加者でありながら、最も候補生に近いと言われている彼女は、最終選考でも抜群の成績を残し、今は発表の時を待っていた。

「大丈夫、結果は残したはずだし、自分の力を信じて待つ」

選考委員である織斑姉妹に忌み嫌われている事を除けば、誰がどう見ても刀奈が選ばれる事は間違いないはずだ。それは他の候補者である四人にも分かっている。四人が祈っているのは、刀奈が候補生に選ばれた場合は、専用機は更識が用意する事になっている為に、日本政府が所有するコアが余るといふ事実があるので、お情けで自分も……という淡い期待を抱いているのだ。

「待たせたな。それでは候補生に選ばれたヤツを発表する」

「無駄な祈りは捨てて現実を受け止める準備は出来ているか？ 出来ていなくても発表

はするがな」

実に唯我独尊な二人に、刀奈は呆れた視線を向けそうになったが、何とか堪えた。別に視線を向けただけで落選にはならないだろうが、今の刀奈では二人に絡まれた場合の対処法が無いのだ。

「本日付で日本代表候補生になるのは、更識刀奈だ」

「この決定により、更識刀奈には専用機が与えられる事になる。至急更識家へ帰還し、お前に合った専用機を製造してもらえ」

「はい、ありがとうございます」

「それから、候補生に選ばれたといって、必ずしも代表になれるわけではないのだが、现阶段で既に貴様は代表候補筆頭だ。その自覚を持ってこれからも精進するように」

「は、はいー」

小学六年の自分が、まさか代表候補になれるなんて思ってたのに、まさかその中でも筆頭だと言われ、刀奈の心は揺らいでいた。

「何時かは……って考えはあったけど、まさかこれほど早く代表になれるかもしれないなんて……候補生だけでも十分だったんだけどな」

二年後の第二回モンド・グロツソは諦めて、その次の大会に照準を合わせていた刀奈にとつて、すぐに代表になれるかもしれないと言われれば焦りも生じるだろう。だがそれも含めて、刀奈は改めて気合いを入れ直した。

「(とりあえず、専用機が完成するまでは屋敷でゆっくり出来るし、その後の訓練もウチなら碧さんや虚ちゃんがいるから相手に困らないわね。しかも碧さんはモンド・グロツソを無傷で制した強者、実力を磨くにはこれ以上ない相手よね)」

「今回候補生に選ばれなかった諸君も、まだチャンスが潰えたわけではないので、各々で精進するように。では解散」

千夏の宣言によつて、選考合宿の幕は下りた。刀奈は普段では考えられないスピードで携帯を操作して迎えを呼び寄せた。そして一夏に候補生に決まったという旨のメールを送り、専用機製造をお願いしたのだった。

刀奈からメールを受け取った一夏は、その内容を簪以下三名に伝えた。

「どうやら刀奈さんが候補生に選ばれたようですね」

「ほんと!? やっぱりお姉ちゃんは凄いな……」

「だから、簪ちゃんだって刀奈お姉ちゃんに負けないくらい凄いなところがあるってば。だからそんなに気落ちしないの」

「そうだよ。かんちゃんも秘蔵本の数が……じよ、冗談だからその顔止めて〜!」

「余計な事を言うからですよ」

各々が刀奈を心の中で称賛する中で、やはり簪は姉に対する劣等感で押しつぶされそうになっていた。元々選ばれる確率が高いと簪も理解していたし、選ばれた事は素直に嬉しい妹として誇らしかった。

だが同時に、妹だから感じる姉との差が、簪の心を押しつぶしていた。父親も友人も、

誰一人刀奈と簪を比べて優劣をつける事はしていないが、それ以外の周りの人間がそう思っているのではないか、比べられて失望されているのではないか、という妄想がどうしても簪には付き纏ってしまうのだ。

「このままいけば代表になれるかも、とも書かれていますね」

「そうなるよ、また候補生の枠が空きますね……簪お嬢様もチャンスがありそうですね」
「私っ!? 虚さんがなった方が……」

「私は正式に更識企業の代表として選出されましたので、日本の代表候補生にはなれませんが」

「そうなるよ、いっちーはおねくちゃんと刀奈様の専用機を同時に造る事になるの?」

「また、一緒にいる時間が減ってしまうんですね……」

寂しそうなのを隠そうともしない美紀に、一夏は寂しそうな笑みで応えた。

「それ程時間はかけない予定だが、どうしても一緒にいられる時間は減ってしまうだろうな。美紀たちにはすまないと思ってるが、これは俺しか出来ない事だからな」

「分かっていますけど、やっぱり寂しいと思ってしまうよ。私だけでは無く簪ちゃんや本音ちゃんも」

時期当主候補であり更識企業がIS業界トップに躍り出た立役者、そして篠ノ之東以外でISのコアを製造出来る唯一である一夏が、専用機製造で忙しくなるのは仕方の無い事だと理解はしている三人だが、やはりまだまだ子供であり未熟なので、自分の心を抑える事は出来なかったのだった。

「そのうち三人にも専用機を造る時が来るだろうし、その時は一緒に過ごせると思う」

「どういう……」

「そのうち、な」

これ以上は考えるな。一夏が言外に三人に告げた為、簪は続きの言葉を発する事が出来なかった。いずれ自分たちもISの世界に飛び込むのだろう、それだけはハッキリと分かったのだった。

二人の専用機

候補生という立場になった為に、刀奈には専用機が与えられる。製造するのはもちろん一夏だが、表向きには更識企業が製造する事と発表されている。

「それで一夏君。この前要望なんかを聞いてたけど、どれくらい製造には掛かるの？」
「それなりにデータは集まっていますし、少しずつではありますが製造に着手していただく、それほど時間は掛らない予定です。ですが、虚さんの事も同時進行で製造するので、一週間は掛りそうですね」

「そんなに早いのか!? 普通ならもう少し掛かりそうだと思うんだけど……」
「他の人がどの程度時間を掛けるか、なんて俺には分かりませんよ。とりあえず、完成するまでは訓練機を使って虚さんと模擬戦でもしててください。漸く打鉄と、遠近両方で戦えるラファールが完成しましたので」

世間的にはまだ訓練機の量産など出来ていないのに対し、一夏は既に訓練機を量産する事に成功している。候補生選考合宿でも、更識製の——一夏作の訓練機を使つての訓練が行われていたのだ。

「私の希望は一夏君に伝えたけど、虚ちゃんの希望は聞いてるの?」

「もちろんですよ。そこら辺は刀奈さんが心配するような事じゃないのですので」

「そっか……じゃあ、頑張つてね」

「はい、任せてください」

専用機を製造する際には、刀奈や虚に手伝える事は無いので、ここから先は一夏一人に任せるしかない。刀奈も虚も心配ではあるのだが、邪魔しか出来ないと分かっているので無理は言わずに訓練機を使つての模擬戦に興じる事にした。

「まさか虚ちゃんとか戦う事になるなんてね」

「私はコネでの代表ですが、お嬢様は実力で掴み取った候補生ですからね。まともに戦える訳がありませんが」

「そんな事無いわよく。虚ちゃんだつてそれなりに実力はあるでしょ? さつき一夏君の研究所にあつたデータ、結構高い数値を叩きだしてたじゃない」

「あれは……偶々ですよ。それに、簪お嬢様の方が、平均値は上ですから」

「さつきが私の妹ね。簪ちゃんも近い将来、候補生の地位についているかもしれないわね」

「そうなるよ、お嬢様と簪お嬢様でペアを組むのですか?」

虚は半分以上冗談のつもりでそんな事を言ったのだが、刀奈の方が思いのほか本気に受け取ってしまった。

「それ良いわね！ 後は美紀ちゃんが代表になれば、更識関係者で日本代表を務める事が出来るわよ」

「……言っておいてなんですが、簪お嬢様も美紀さんも、まだ候補生ですら無いんですが？」

「大丈夫よ！ 次の大会で織斑姉妹は引退する事が決まってるし、そうなたら次の代表・代表候補生を探さなきゃいけないのよね。そこに簪ちゃんと美紀ちゃん、あと本音に参加すれば最強の布陣が完成するわよ！」

「一夏さんの苦労を考えてませんよね？ それだけの人数のISを製造、メンテナンスしなければいけない一夏さんは、どれだけ大変だと思ってるんですか？」

「あっ……」

ただでさえ、今の一夏はオーバーワーク気味なのだ。これ以上の仕事を一夏に任せるのはさすがに酷だというものだ。虚にそう指摘されて刀奈も一夏の事を度外視していた事に気が付き、そして反省した。

「まあ、一夏君がOKだって言ったら実現するかもね」

「一夏さんは自分の事を二の次、三の次にしますから、お嬢様たちが頼めば嫌だとは言わないって分かっていますよね？」

「もちろん、無理そうなら私たちが止めるわよ」

お喋りしながらも模擬戦の激しさは増して行く。コネだと謙遜する虚も、かなりの実力者で候補生として選ばれてもおかしくは無いくらいに戦闘技術を有している。

「でも！一夏君の造ってくれた専用機で世界を制したら気持ちいいと思わない？」

「私には縁の無い世界ですから、分かりませんよ！」

「企業代表なら、そのうち各国の代表とやり合うんじゃないの？」

「あくまで企業交流として、ですよ！」

「残念、フェイントよ」

「くっ！」

候補生に選ばれてもおかしくない実力を有している虚でも、代表に限りなく近いと言われている刀奈には敵わず、そのまま押し切られてしまった。

「参りました」

「うん。でも、この訓練機は使いやすいわよね。合宿には日本政府が製造を依頼した倉持技研の訓練機もあったんだけど、やっぱり一夏君作の方が良いわ」

「第二世代、ですからね。動きも大分スムーズなのでしよう」

使った訓練機を格納庫に戻し、刀奈と虚は訓練機の感想を言い合いながら部屋に戻って行ったのだった。

一夏が研究所に籠って五日目、刀奈と虚は内線で一夏に研究所に来るように言われた。

「何かあったのかしら？」

「一夏さんの事ですから、もしかしたら専用機が完成したのかもしれないよ？」

「まつさかく。まだ五日よ」

普通で考えれば、専用機を造り上げるのに一週間でも早すぎるのだ。それが五日で完成するなど、言った虚本人も思っていないかった。だが……

「専用機が完成しましたので、早速フィッティングとパーソナライズを……って、どうかしました？」

「ううん、さすがに早すぎだと思って……」

「さすがは一夏さんですね……」

「?」 とりあえず、刀奈さんの専用機は『蛟』みずちで虚さんのは『丙』ひのえです」

「蛟って……蛇?」

「水神ですよ。まあ、一節では蛇とも言われてるらしいですけど」

「丙というのは、十干の丙ですか？」

「火之鴉でも良いんですが、刀奈さんの蛟と対になれば良いかなって感じで名づけました。蛇にとって鴉は天敵ですし」

「それってどういう意味よ!？」

刀奈にとって虚が天敵である、という事は更識内で生活している全ての人間に伝わっ

ているので、一夏もそのように専用機の名前をつけたのだと理解した刀奈は、ふくれっ面で蛟に乗り込んだのだった。

急展開

いくらふくれたっ面をしようが、刀奈が専用機を前にして興奮している事を一夏に隠し通せるはずもなかった。だが一夏はその事は一切指摘せずにフィッティングとパーソナライズの準備を進めていく。

「蛟……ねえ……」

『お気に召しませんか?』

「ふえ!? な、なにこの声……」

『驚かせてしまいましたか。私は貴女の専用機となるものです。名称は先ほど貴女が呟いたように「蛟」です』

「あつ、これがISの声なんだ……」

確認の意味を込めて一夏の方に視線を向けると、笑顔で頷いたので刀奈も受け入れる事が出来た。もし何の反応も示してくれなかったら、こんなスムーズに受け入れる事は出来なかっただろう。

「お嬢様もISの声を?」

「も、って事は虚ちゃんにも聞こえてるの？」

「そちらの声は聞こえませんが、丙の声はシツカリと……」

隣で同じように驚いた表情を浮かべている虚がいる事も、刀奈がすんなり受け入れる事が出来た要因だったのかもしれない。

『とにかく、私と隣にいる丙は対となる機体。私の属性が水なのに対して彼女は火。私は蛇で彼女は鴉。属性では私が、生物としては彼女が優位になるように造られた第三世代型 I S です』

「第三世代!?!」

おそらくは丙から同じような説明を受けていたのだろう。刀奈と虚が驚きの声を上げたタイミングは、寸分違わぬものだった。

『何をそんなに驚いているのかは分かりませんが、一夏様は既に第二世代型である「木霊」、そして訓練機扱いにはなっていますが第二世代の「打鉄」と「ラファール」の生産に成功しています。第三世代型 I S の製造に着手していても不思議は無いと思うのですが?』

「だ、だって……漸く世間では第一世代の I S が安定して生産出来るようになったのに」

「一夏さんの凄さには驚きますよ……」

刀奈の言葉を継いで、虚も驚きのコメントを発した。その間一夏は一切会話に加わらずにキーボードをたたき続けているのだが、そのスピードは二人が見てきた大人の誰よりも早く、また誰よりも正確な動きをしていた。

『説明に戻りますが、私は基本武装が槍です。貴女が希望した通りの武装になっていまずので確認をお願いしたい』

「りよ、了解……」

蚊に言われた通りにモニターを開き武装を確認する刀奈。確かに自分が一夏に希望を出した通りの武装がそこに表示されていた。

「凄い……私が思い描いていた通りの武装だわ……」

『しかし、何故水なんです？ 属性で言えば丙の火の方が有効だと思うのですが』
「陽炎じゃつまらないじゃない。私が造りたかったのは残像でも幻影でも無く別の私。水で作った私を囿にして背後や上空から攻撃したいの」

『別に幻影でも残像でも同じ事は出来たと思いますが……まあ、貴女がどう使うかはこれから楽しみにしてますよ』

「よろしくね」

一通りの説明、挨拶が済んだタイミングで一夏はフィッティングとパーソナライズを終了させたのだった。

「あつ、一応言っておきますけど、木霊同様に蚊の声も、丙の声も原則所有者である刀奈さん、虚さんにしか聞こえませんので、会話をする際は心の中で喋ってください。不審者だと思われたくないのでしようし」

「原則？」

「俺には聞こえてますから」

唯一の例外である自分を指差して、一夏は簡潔に説明を済ます。ただ簡潔ではあったが二人にはそれだけで十分で、同時に納得したように頷いてそれぞれの機体に意識を戻したのだった。

専用機を手に入れた二人が研究所から出ていこうとしたタイミングで、碧が駆けこんできた。最近は何多にも出入りする事の無かった碧が研究所にやってきたので、刀奈も虚も、一夏でさえも驚きを表した。

「どうかしましたか？」

「た、大変ですお嬢様！　ご当主様が！」

「お父さんが？」

何を慌てているのか、刀奈にはその事が全く分からなかった。普段冷静な碧がこれ程慌てているのだから、何となく想像はつきそうなもののだが、生憎刀奈はそっち方面の勘は鋭く無かったのだ。

一方でこちらの勘も鋭い虚と一夏は、次の言葉がどのような意味を持っているのかを理解し、今の立場ではいられなくなるのだろうという事を正確に理解していた。そして覚悟もしていた。

「ご当主がお倒られになられました！ 現在病院に運ばれておりますが、意識を回復するかは五分五分かと……」

「えっ……だつてさつき会った時はあんなに元気だったのに……」

「はい、私がお挨拶に伺った時もお元気でした……」

「医師の診断では急性心筋梗塞だと……」

刀奈、虚、碧の三人が慌てている中で、一夏だけは慌てる事無く静かに目を閉じていた。何かを覚つたような、何かを覚悟したような表情を浮かべているが、その事を指摘できる余裕は三人には無かった。

「一先ずここから出ましょう。より詳しい情報は外に出なければ分かりませんし」

「そ、そうですね。お嬢様は急ぎ病院へ。一夏さんと虚さんは屋敷でお待ちください」

「簪ちゃんは？ あの子はどうしたの？」

「簪様も病院へ向かわれていますが……」

「な、なに？」

言い淀んだ碧に、刀奈は恐る恐る尋ねる。妹である簪が——年下の少女が、父親が倒れたと聞かされて冷静を保てるはずが無いと分かっているからこそ、刀奈は恐る恐る尋

ねたのだ。

「大分動揺されていたご様子なので、美紀ちゃんと本音ちゃんが付き添って向かわれました」

「虚さん、刀奈さんについて行ってあげてください。こっちは俺が引き受けますので」
「分かりました。お嬢様、参りましょう」

「う、うん……」

つい先ほどまで専用機を手に入れた喜びでいっぱいだった心は、父親を失うかもしれないという焦燥感でぽっかりと穴が開いたような感じになってしまっていた。そんな中でも、一夏と虚は冷静を装っているのを見て、刀奈はこれが現実では無いのではないかという錯覚に陥ってしまったのだ……

一夏の提案

刀奈、簪、虚、本音、美紀、碧と、楯無が運ばれた病院に向かう中一夏は一人更識の屋敷に残っていた。

「君は行かないのか」

「貴方に話がありましたので、四月一日さん」

中庭で空を見上げていた一夏に声を掛けてきた四月一日家当主、四月一日尊に一夏は振り向きながら言葉を続けた。

「万が一があつた場合、次期当主は自分になるはずですよ」

「そうだな。ご当主様がご指名なさったからそうなるだろう。我々は君を支えるつもりだ」

「その事ですが、表向きは貴方が『楯無』を継いだ事にしてくれませんか」

「……どういうつもりだ」

思いもよらない提案をしてきた一夏に、尊は訝しげな視線を向けた。大人びているが

小学五年生、娘と同一年の少年に向けるには眼光が鋭すぎたが、一夏は怯える事もなく冷静に説明を始めた。

「更識は裏組織ですが、表の世界でも有名になり過ぎました」

「ああ、君のおかげだ」

「IS産業における更識の立場は、最早他企業が追いつけないくらいの技術力と供給力を兼ね備えたトップです」

「それも、君のおかげだ」

「そしてその企業のトップは『楯無』です。トップならば表の世界でも顔を出さなければなりません。現に楯無さんは会見などで表社会に顔を出していました」

一夏が言わんとしている事が何となく理解出来た尊だが、早合点という可能性もあるので一夏に続きを促した。

「そのトップが代わる、まあ不幸が起こってしまった場合は仕方ないでしょう。ですが、その代わったトップが子供では企業に対する不信感が生まれてしまうかもしれません。ですから、自分が成人するまで……いえ、せめて高校を卒業するまでは、貴方が『楯無』という事にしてもらえないでしょうか」

「……つまり、君がISのコアを造れる事同様に更識内では君が『楯無』だという事で良

いんだな？ 私はいくまでも代理——いや、影武者のような事をすればいいと」

「そのまま貴方が継いでくれても構いませんが、『楯無』の襲名は先代の指名が絶対だと刀奈さんから聞いていますので」

「そうだね。だから私たちは『もし』があつた場合は君に忠誠を誓うつもりだ」

中には思うところがある大人もいるだろうが、一夏が更識内で残した——現在進行で残し続けている功績は、今まで仕えてきた時間や血筋を凌駕してあまりある程のものにまで膨れ上がっている。暗部組織としてではなく、健全な企業としても、更識は力をつけたのだ。

「こんな事は言うべきでは無いのですが、やはり子供だという事で舐められる可能性を孕んでしまうでしょうし、四月一日さんは楯無さんの遠縁に当たる人、代理を頼むにはこれ以上ないと自分は判断しました」

娘と同じ年——小学五年生の考えるような事では無いと尊は感じていたと同時に、この子なら立派に当主を務められるという確信を得ていた。だが、一夏が危惧している事は、まさに起こりうる事だった。

「……分かった。万が一があつた場合、君が高校を卒業するまでは私が表の『楯無』を演

じよう。この事は他の連中には私から伝えておくよ」
「お願いします」

折り目正しく一礼した一夏に、尊は軽く手を上げて更識の中枢が集まっている部屋へと向かった。既に十七代目楯無の選考を始めている中枢部の人間も、一夏が十七代目を襲名する事を既定事項として話を進めていたので、この提案はあつさりと言議に挙がったのだった。

楯無が倒れてから一週間が経ち、更識家では表面上は落ち着きを取り戻しつつあつ

た。無論、完全に落ち着く事は無く、皆楯無の回復を祈っていた。

「最近、いっちゃんも刀奈様もおねくちゃんも元気が無いよね」

「仕方ないよ、楯無様がお倒れになってから色々大変なんだから……」

「かんちゃんも忙しそうだし、私と美紀ちゃんだけは平和なんだよね」

「それも仕方ないよ。私と本音ちゃんはまだ更識の仕事をまともにした事無いんだから」

次期当主候補だった刀奈とそのお付きだった虚、その刀奈に代わり次期候補となった一夏、そして現当主の娘である簪は、それぞれ忙しそうに屋敷内を駆けまわっているのだが、この二人は相変わらずだった。

「本音ちゃん、宿題やった？」

「まだ。後でかんちゃんと一緒にやろうかなうつて」

「簪ちゃんは学校で終わらせてたよ？」

「ほえ!! 学校で終わらせるのってありなの!？」

「事情が事情だから、ありなんじゃないのかな」

父親が入院しており、実家が特殊な事を踏まえて、簪は元々宿題を免除されるはず

だったのだが、簪がそれを善しとせず、休み時間などを駆使して学校で終わらせていたのだ。

「てか、本音ちゃんも簪ちゃんが学校で宿題をやつてるところを見てるはずなだけど」「そうだっけ？」

こんな状況でも変わらない本音を、美紀は頼もしいとさえ思っていた。誰もが慌て、そして忙しくしている中でこのマイペース、ある意味尊敬に値するだろう。そんな事を考えていた時だった、部屋に簪が飛び込んできたのは。

「か、簪ちゃん!? どうかしたの……」

「……今、病院から電話があつて」

その言葉から始まる文章は、美紀にとって受け入れがたい事実を告げるものだと瞬時に理解した。何時かは、とは思っていてもさすがに早すぎると。

「とりあえず病院に行こう！ 美紀ちゃんも一緒に！」

「えっ……うん……」

受け入れがたい——受け入れたくない事実を告げられたばかりなのに、本音はシヨツ

クを受けるでもなく迅速に動いている。普段では想像もつかないくらいの動きに、美紀も面を喰らってしまった程に。

「刀奈様も向かわれるだろうし、かんちゃんも急いで！」

何事にも動じない、普段はマイナス要素しか目立たなかつた本音だったが、意外な時にその本領を發揮したのだった。

対 I S 用護衛

楯無の不幸を、一夏は出先で知らされたのだった。

「……………そうですか。分かりました、今すぐ屋敷に戻ります」

携帯をしまい、一夏は鈴や他の友人に頭を下げた。

「悪い、お世話になってている人が不幸に見舞われたらしく、今すぐ屋敷に帰らなければならなくなつた」

「不幸？ 何があつたのよ」

「つまり、お亡くなりになられてしまつたんだよ」

「そう……………じゃあ仕方ないわね」

遠回しでは伝わらなかつたので、一夏は率直に事実のみを伝えた。小学五年生——細かい事を言えば一週間後には六年生になる一夏が使うような言い回しでは無かつたので仕方ないのだが、少しくらい察しても良いのではないかと一夏は思っていた。

「悪いな。今度埋め合わせはするから」

「気にしないで。元々アタシが強引に誘ったんだから」

「そうそう、更識は忙しいんだし、凰が無理矢理誘ったんだしな」

「あによ！ アンタたちだって一夏を誘おうって言ったじゃないの！」

気兼ねなく遊べる数少ない友人たちのじやれあいを見ながら、一夏はもう一度頭を下げた。

「悪いな。それじゃあ、また今度」

クラス替えがある為、確実に会える保証は無いのだが、一夏は友人たちとはまた遊ぶ機会もあるだろうと考えていた。事実上更識を背負って立つ立場になってしまいうのだが、そんな事はこんな場所で言える事でも無かったのだった。

「大変だな、更識は……」

「一夏なら大丈夫でしょ。それよりも、さっさと奥に進むわよ」

「ホント、凰は怖いもの知らずだよな。更識の事を簡単に名前で呼んだりするんだもん」
「だから、アタシはその筈とかいう子の事を知らないから何とも無いのよ！ だいたい、もういないんだから、アンタたちだって名前で呼べばいいじゃないの」

「いや……トラウマがよみがえるから……」

「なにされたのよ……」

一夏がいなくなっても、鈴は変わる事無く探検を続けていた。周りの友人たちも、なんだかんだ言って鈴に付き合うのだった。

病院から帰ってきた刀奈たちは、一ヶ所に集まっていた。もちろん、この場には大人与呼べる人間は一人もい無く、一番の年長者は虚だ。不幸を完全に受け入れられるだけの人生経験は持ち合わせていない。

「お父さん……何で、この前まであんなに元気だったのに……」

「お姉ちゃんの卒業式では泣きそうになってたのね……」

「入学式を楽しみにされていましたのに……」

「やっぱりいつちーが『楯無』を継ぐのかな」

「そうだと思うよ。一夏さんが当主候補だったんだし、他の候補者はいないし」

子供しかいない空間だが、この中に一夏はいなかった。次期当主候補という事で、大人たちの集まりに加わっているのだろう。実子とはいえ、候補者から外れた刀奈や簪は近づけなくても、次期当主であった一夏はその集まりに呼ばれるのは当然なのだ。

「そう言えば、碧さんは？」

「碧さんなら、この春開校になる I S 学園の教師として働く事になったので、その手続きと簡単な説明を受けに出かけています」

「碧さん、更識を抜けるの？」

「いえ、所属はあくまで更識のままです。専用機を持った人が教員にいれば、日本の I S 操縦者の質も上がるのでは、という政府の浅はかな考えが影響してるのでしょうか」

「織斑姉妹は現役だしね」

入試だけは済ませてあったのだが、その他諸々の準備は最近終わったらしいので、この時期に教員採用に至ったのだった。

「碧さんがI S学園の教師になる、って事は一夏君の護衛は別の人が担当するのかしら？」

「一夏さんが『楯無』を襲名した場合、護衛は碧さんだけじゃ無くなるでしょうし、おいそれと外出する事も出来なくなるでしょうしね」

当主となれば、今までの護衛以上の人数をつける事になるだろうし、碧一人のままでは無くなるだろうという事は刀奈にも理解出来る。だが、それほど護衛に人員を割けるほど更識の戦力は万全ではない。I Sの訓練は積んでいても、専用機を持っているのは碧、刀奈、そして虚の三人だけだ。I Sで襲われたら一夏を護りぬける保証など何処にも無いのだ。

「何の話をしてるんですか？」

「あつ、いっちー。お話は終わったの？」

「いや、みんなにも説明しなきゃいけないからな。大人が伝えに来るより俺が伝えた方が聞いてくれるだろうからって」

確かに一夏以外が告げに来たらまともに耳を傾けなかっただろう人物が数名いるので、虚と簪と美紀は大きく頷いた。

「まず、もう分かっているとは思いますが、先代の楯無様がお亡くなりになった」
「知ってるわ、この目で見たんだもん……」

「そうですね。そして、第十七代楯無を、この俺が襲名する事になった」

予想通りの内容に、刀奈も簪も驚いた様子もなく頷く。だが、一夏の話にはまだ続きがあった。

「そして、俺が高校を卒業するまで——つまり後七年か、世間には四月一日尊さんが楯無を継いだ事にする事になった」

「お父さんが？」

「子供がトツプだと疑いの目を向けられるだろうから、と俺から提案した事だ。別に四月一日さんが俺の楯無襲名に反対したとかじゃ無いぞ」

心配そうな顔をした美紀を安心させるために、一夏はあっさりと事情を告げた。

「俺がコアを造れる事同様に、真実は更識内の人間だけ知っていればいい。だから、みんなも今まで通り『更識一夏』に接するようにして構わないから」

「ほえ？　つまり『いつちー』のままが良いの？」

「そうだな。それから本音」

「ほえ？」

「本音を対 I S 用の護衛として採用する事になり、専用機を与えることとなった」

最後の言葉は、この場にいる全員を驚かせるのに十分な内容だった。

号泣

本音の専用機が製造される事が正式に決定するのを待つ間、刀奈は気を紛らわす為に虚と碧を連れて訓練所へと向かっていった。

「お嬢様、こんな時にＩＳの訓練ですか？」

「こんな時だからよ……」

父親が死んでしまつて冷静でいられるはずはないのだが、妹や妹のように思い付き合つていた相手の前では弱音を吐く事は出来なかつた。そして泣く事も我慢していら、今度は一人になつても泣く事が出来なかつたのだ。

発散する事が出来ない感情を、ＩＳで何とか出来ないかと思ひこのような時にＩＳの訓練に付き合つてほしいと頼んだのだ。

「止めておきましようよ、お嬢様。感情がコントロール出来ない状況でＩＳを動かして、お嬢様にまで万が一があつたらどうするんですか」

「そんなミス、犯さないわよ……私は候補生で、碧さんは元代表。虚ちゃんだつて企業代表なんだから」

「いえ、虚さんの言うとおりですよ。刀奈さんは今、自分の感情さえもコントロール出来ていない」

虚や碧の制止を無視して先に進もうとした刀奈だったが、彼女の前に立つ人の声に思わず足を止めてしまった。

「一夏君……何で貴方がこんな場所に……『楯無』を継いだ貴方が、こんなところで何をしてるのよ……」

全世界に発表されたのとは違い更識内で生活している人間には、本当は誰が楯無を継いだのか知らされている。だから刀奈が言うように、当主となったはずの一夏がこんな場所にいる事はおかしいのだった。

「確かに……楯無様、何故このような場所に……」

「一夏で良いですよ。表社会ではまだ『更識一夏』って事になってるんですし」

「では、一夏さん……いくら表社会ではそうなっているにしても、更識内では違うはずの貴方が、何故こんな場所に……本音の専用機を造るのでは無いんですか？」

「その前に、一番大切な仕事があったのでここに来たんですよ」

「大切な、仕事……？　なによそれ」

何時まで経ってもここに居る理由を話さない一夏に、刀奈は少し苛立っていた。普段であれば、一夏が目の前にいて苛立つような事は無いのにと、自分でも驚いている刀奈を、一夏は優しく抱きしめた。

「一夏、君……？」

「泣いてください。貴女は泣くべきだ」

「なに、言ってるのよ……私はお姉ちゃんで……」

「ここに簪も美紀も、本音もいません。だから、泣いて良いんですよ」

一夏の優しい言葉に、刀奈の涙腺が崩壊した。一夏の胸に顔を押し付け、声を殺す事も忘れて大声で泣き始める。

「お父さん……何で！ どうして！ 私が代表になった姿を楽しみにしてるって言うたのに！ これから頑張るところを見せるはずだったのに！」

「刀奈さん……」

「何ですよ！ どうしてお父さんが！ 何ですよ……誰か教えてよ！」

「お嬢様……」

子供のように喚き散らす刀奈を見て、こちらも我慢していた虚の心も揺らいでいた。
「一夏さん……？」

「貴女も、泣いていいんですよ。みんなのお姉ちゃん、お疲れさまでした」

自分が我慢していた事に今気づいた虚は——一度気づいてしまったら我慢する事など出来ず、刀奈と同じように一夏に抱き寄せられ、一夏の胸に顔を埋めるようにして泣き始める。ただし、こちらは声を押し殺し、静かに泣いていたのだった。

部屋に残っていた簪は、美紀や本音がいるのも気にせず、ひたすらゲームをしていた。
「かんちゃん……」

「簪ちゃん……」

普段であれば、簪がCPUに負ける事などあり得ないのだが、簪はCPU相手にボロボロに負けていた。

「かんちゃん、今は止めておきなよ……」

「いや、やる!」

「簪ちゃん……泣きたいんでしょ……もう我慢しなくても良いと思うけど」

「だって! ……だって、泣いたところで……お父さんが帰ってくるわけじゃないもん……」

「かんちゃん……自分の感情を抑えつけてたら、何時か本当に自分の感情すら分からなくなっちゃうよ? 泣きたい時は、泣きなよ……私だって悲しいんだから」

我慢していた本音だったが、簪より先に泣かないようにしていたのだが、ついに我慢の限界が訪れてしまい、大声で泣き始める。そして本音につられるようにして、今度は美紀も泣き始めた。

「楯無様……早すぎますよ……まだ簪ちゃんは小学生なんですよ? 刀奈お姉ちゃんだって、漸く中学生になるって時に……」

「本音……美紀……」

二人が泣いているのを見て、簪も我慢の限界が訪れた。むしろ、一番最初に泣かなければいけなかったはずの簪が、こうして最後に泣き始めたのは、彼女が我慢強い事の表れだったのかもしれない。

「お父さん……もつと一緒に行ったかった！　まだまだ聞きたい事があったのに！　どうして……どうしてお父さんが！」

「かんちゃん……」

本音が簪を抱きしめ、簪の勢いにつられるように更に泣き続ける。この場に冷静さを保っている人間がいなかったため、三人は気が済むまで——全て吐き出すまで泣き続けた。

「……ありがとう、本音。もう大丈夫」

「大丈夫ではないでしょ？　でも、全部出したんだね」

「そう、だね……大丈夫な訳無いよね……でも、確かに出し切ったよ」

本音に抱きしめられながら、更にその外側から美紀にも抱きしめられながら、簪は強くそう宣言した。

「刀奈様にはいつちーがついているだろうし大丈夫だよ」

「でも、その一夏さんには誰が……」

「あっ……」

自分たちと同じ年で、父親のように思っていた相手がいなくなってしまうって悲しくないはずもないのに、一夏は未だに泣いていない。そして、そんな一夏を泣かせる事は、自分たちには不可能だと簪たちは思っていたのだった。

逃げ出すように

自分の護衛に選ばれた本音の為に、一夏は研究所に籠りI Sの製造に勤しんでいた。周りの人間からは休むようにと言われているが、一夏は一心不乱にI Sの製造に取り組んでいる。まるで、何かから逃げるように。何かを考えないように……

『一夏さん、頑張りすぎですよ』

「そうだね……確かに俺は頑張り過ぎてる。だが、少しでも早く君を完成させなければならぬからな」

本音の為に製造しているI S『土竜』どりゅうに話しかけられ、一夏は苦笑いを浮かべながらもその手を止めようとはしなかった。

『まあ、私としては早く一夏さんの役に立てるのなら嬉しいですが、その所為で一夏さんが倒れたりされたら大変です』

「大丈夫。俺はそんなにやわじやない」

『ですが……』

「君が何を心配してるのか、俺には何となく分かる。だが、それは今考えても仕方ない事

だからな」

土竜の言葉を遮り、一夏は武装データを呼び出した。本音の希望は遠距離からエネルギーを削り、ある程度削れたら一撃で残りを持っていける武装を持ったIS——面倒くさがりな本音らしい希望だった。

『そのデータは?』

「モンド・グロツソで織斑姉妹が使ってた『暮桜』と『明樅』のデータ。日本政府から拝借した」

『……ハッキングですか?』

「いや、正式に貰い上げたデータだから気にするな」

訓練機向上の為、とそれらしい理由をでっち上げてもらったデータなのだが、一夏の言うように正式に日本政府から更識家が貰い上げたデータなので問題は無い。もちろん、訓練機にこのデータが役立てられる事は無いのだが……

「零落白夜か……これは単一仕様能力だしな……」

『まさか、組み込むつもりですか?』

「さすがに単一仕様能力を常時使える様には……まあ可能性はゼロじゃないが」

『いえいえ、さすがにそれはやり過ぎですよ』

土竜にツツコミを入れられ、一夏は思考を一旦中断して再びデータを呼び起こす。

「じゃあこっちの権落としては使えるか？」

『これも単一仕様ですか？』

「いや、これは織斑千夏さんが独自に考えた技だろう。ハンドガンのようだが、マシンガン以上の速さで連射してるからな……本音には無理か」

『普通にマシンガンを使えば良いのでは？』

「それだと連射を警戒されるからじゃないのか？ まあ、一度使えば覚えられるだろうから、結局は警戒されるんだろうが」

そもそも織斑千夏以外にこの技を使えそうな人間に、一夏は心当たりが無かった。瞬間加速しながらハンドガンを連射するなど、余程Gに対する抵抗が無ければ一瞬でブランクアウトだ、それは織斑千冬の戦い方にも言えることだが。

『ライフルの精度を上げるとかではダメなんですか？』

「ある程度距離を保ち、ある程度射撃の腕があればそれで削れるんだが……本音はどっちも中途半端だからな」

本来であれば、一夏の護衛には本音では無く美紀が選ばれるはずだった。だが、表向きには当主となっている尊の娘を、一夏の護衛に付けたら探られたくない腹を探られる恐れがあると一夏自身が尊に伝えたのだ。今更美紀に変更する事は出来ない。

『とにかく、一夏さんは根を詰め過ぎです。少し休めばアイデアが浮かぶかもしれませんよ』

「……そうだな。じゃあ別の事でもするか」

『はい……別の事?』

休んでくれるのかと思った一夏だったが、土竜の開発を一時中断しただけで別の作業を始めた。

『あの……今度は何を?』

「木霊のバージョンアップの為の作業と、その他諸々のデータ整理をと思って……」

『休みなさい! これは全てのI Sを代表しての言葉ですから、その木霊の意味でもあるんですからね!』

「別に三日寝て無いくらい……」

『それでけじゃないでしょ! ご当主様がお亡くなりになってから、一夏さんは泣いて

「ませんよね？」

「……………」

本当は三徹するつもりは一夏にも無かった。事情が事情なので誰も一夏を注意する事もしなかった——出来なかったが、一夏は頭脳は人並み外れたものを持っているが、体力は平均より若干上というだけで、二徹目で相当辛いはずなのだ。それでも一夏が開発に没頭したのは、楯無の死を受け入れる事から逃げ出しているように土竜には感じていたのだった。

「何故、その事をお前が知っている？」

『一夏さんは、「コアネットワーク」というものを知っていますか？』

「I Sのコア同士は、そのネットワークを介して情報を共有しているというあれか……つまり、木霊や蛟、丙から聞いたという事か」

『I Sですが、その所有者である三人……いえ、それ以外の人も貴方の事を心配してるのです。誰かに甘え、そして吐きだしてからでも遅くは無いですよ』

「……………まさかI Sに諭されるとはな」

一夏は素直に研究所から外に出て、こんな時に一番頼れそうな相手の部屋を訪れた。

「はい？ ……一夏さん、大丈夫なんですか？」

「スミマセン、虚さん。こんな時間に」

「いえ、まだ起きてましたから……それより、どうしたんですか」

「いや、ちよつと甘えさせてもらおうと……」

「はい？」

一夏が何を言ったのか理解出来なかつた虚だったが、次の瞬間、自分の胸に顔を押し付けた一夏の行動で、何をしたいのか理解したのだった。

「ゴメンなさい……今だけは……」

「分かりました。お嬢様や私だけ泣かせてもらっておいて、一夏さんはまだ泣いて無かつたんですものね……」

少なからず想っている相手が自分の胸に顔を埋めているのだが、虚には邪な気持ちは一切芽生えなかつたし、一夏にもそんなつもりは無かつた。大人びているとはいえ小六に進級したばかりの男の子を、ただただ抱きしめていたのだった。

次の代表

何時までも悲しんでいるわけにもいかなかった刀奈は、候補生として訓練に参加していた。

「貴女が新しい候補生ですかー。よろしくお願ひしますね」

「はい、よろしくお願ひします。えっと……」

「? あつ、私は山田真耶と申します」

「やまだまや……」

目の前の女性の名前が回文である事に気付いた刀奈は、吹き出しそうになるのを堪えて自分も名乗る事にした。

「更識刀奈です。新参者ですが、よろしくお願ひします」

「はい、よろしくお願ひしますね。でも更識さんは私たちの誰よりも代表に近い人って噂されてますから、そんなに畏まる必要は無いと思いますよ。ここでは年齢では無く実力で上下関係が成立するんですから」

「それ、織斑姉妹が決めた事、ですよね?」

刀奈は織斑姉妹の人となりを入れて知っているわけではないが、明らかにあの姉妹が考えそうな事だという事は分かった。分かってしまった。

「そうですよ。千冬さんと千夏さんが決めたらいいです」

「やっぱり……」

「でも更識さん、その専用機って第三世代だって噂ですけど本当なんですか？」

「えっ？ ええまあ……」

急激な話題変換についていけなくなりそうだったが、辛うじて返答に詰まる事は無かった。

「凄いですよねー、更識家の技術力！ 訓練機もそうですが、まだ何処の国も第一世代を安定して製造出来るほどのなのに、既に第三世代ですもんね……いったいどんな人が造ってるんですか？」

「それは言えませんが。その人を危険に曝す事になりかねませんから」

「そうですか……どんな人なんだろうな」

「（言えない……この蛟を造ったのが小学生だなんて……一夏君だなんて……）」

真耶と一夏に面識は無いが、どうも織斑姉妹を尊敬している節が見受けられる真耶に真実を告げれば、それ即ち織斑姉妹に告げる事とイコールだと刀奈には感じられていたのだ。

『一夏さんを危険な目に遭わせるのは避けるべきですよ』

「(貴女に言われなくても分かっているわよ！ それに、一夏君は更識の当主なんだから、万が一があつたら大変なもの)」

『世の中的には、更識家当主は別の人なんですけどね』

「(当たり前でしょ！ 小学生が当主だなんて、笑い物になるか不信感を買うかのどっちかよ！ だから一夏君が提案して、更識家の全員がそれに賛成したの)」

突然の代表交代に、世の中は更識企業の事を少しばかり訝しんだが、変わらぬ性能と安定した供給が続いている事で、その不信感はずぐに消え去った。だがそれは、代わった代表も大人だったからだ。

『一夏さんなら問題無くこなせそうですね』

「(それでも、やっぱり子供ってだけで相当なハンディなのよ)」

「あの……さつきから黙ってしまいました。私何か気に障る事を言いましたか？」

「へっ？ い、いえなにも言ってますよ。ちよつと考え事をしてただけですから」

泣きそうな顔で覗きこんできた真耶に、刀奈は苦笑いを浮かべながら右手をヒラヒラと振って見せたのだった。

一夏を抱きしめ、自分の胸で泣かせてから、虚はまともに一夏の顔を見る事が出来なくなっていた。だが、それを周りに気づかせないように振る舞えるほどには、彼女は器用だった。

『虚、最近一夏さんと気まずそうですね』

「やはり貴女には隠せませんよね」

専用機である丙には、当然の如く自分の感情を読み取られてしまう。その事を理解していた虚は、丙に指摘されても驚く事は無く冷静に返した。

「年下ですが、一夏さんは私よりよっぽど大人です。そんな一夏さんがあれほど泣きじゃくるなんて……」

『それも驚きましたが、虚が気にしてるのは別の事、ですよね？』

「ええ……私、一夏さんを抱きしめてたんですよ……」

普段は抱きしめられる側故に、抱きしめた事を過剰に意識してしまっているのだと、虚も理解はしている。だが心を鎮めるには至っていないのだ。

『それなりに成長してますからね、虚の胸は』

「そ、そう言う事を言っているんじゃないやありません！ まったく、分かって言ってますよね
貴女」

『まあまあ、そう興奮しないで。とにかく、これから一夏さんの研究所に行くんですから、何時までも気にしてたら授業に集中出来ませんよ』

「分かってます」

本音の専用機である『土竜』を完成させた一夏は、暫く学校と屋敷を行き来するだけで他に何もしていなかったのだが、今日漸く虚へのIS指導を再開するのだ。

『一夏さんを慰められるのは、今は貴女だけなんですから』

「お嬢様は訓練、譬お嬢様と美紀さんは未だに立ち直れてませんし、本音では役に立ちませんからね……碧さんはIS学園に行っちゃいましたし」

『織斑姉妹がまだ教師にはなって無いですからね。世界を知っているのは彼女だけです』

新設校であるIS学園の教師の殆どは、ISを操縦した事はあれどさほど経験の無いものばかり。その点碧は専用機を持ち、そして世界を制した実績があるのだ。当分屋敷に戻って来れなくても仕方ないと言えるだろう。

『貴女も来年は受験生なんですから、今からしつかりとISに対する知識を深めておくんですね』

「受験の後にはモンド・グロッソですね。お嬢様は出るのでしょうか……」

現時点で代表に最も近い候補生と称されている刀奈は、第二回モンド・グロッソ個人戦に参加が期待されているのだ。もちろん、専用機の性能で言えば、どの国にも負けな

いものがあり、実力も織斑姉妹の訓練という名のシゴキでかなり上がってきている。このままいけば順当に選ばれるだろうと思いつながら、虚は一夏の待つ研究所へと向かったのだった。

一夏の進路

クラスでのんびりしていた一夏に、何時も通りに鈴が騒がしく話しかけてきた。だが今日の内容は何時もと違い、騒がしい中にも真面目な雰囲気が見て取れたので、一夏も居住まいを正して鈴の方を見た。

「アంత、中学はどうするの？」

「どうする、とは？」

「だって学区が違うでしょ？ このままコッチの中学に通うのか、それとも今生活して居る場所の学区で通うのかって事」

「ああ、そう言えば学区が違うんだっけか……すっかり忘れてた」

車で通学する事が一夏の中では当たり前になっていたので、鈴に言われるまで学区という概念を完全に忘れていたのだ。

「さすがに中学まで車で送ってもらわねにもいかないし、俺は完全に織斑家の人間では無くなったんだ。更識の屋敷から一番近い場所に通う事になるだろうな」

「ふーん、て事はアタシたちとは別の学校ってわけね」

「別にそれ程遠いわけでもないし、携帯で連絡だつて出来るだろ。遊ぼうと思えばいつでも遊べるさ」

「そうなんだけどさ。中学つてほら、試験とかあるでしょ？ 一夏がいないとキツイかなーつて」

「そこまで面倒は見切れん。それに、俺だつてそれなりに忙しいんだから、何時までも鈴の相手をしてられるわけじゃないんだが」

小六に進級したばかりだというのに、鈴はもう来年の事を心配していた。その事がかしく思えた一夏は、正した居住まいを崩し、普段通りの雰囲気に戻した。

「今日は遊べるの？ この前知り合つたヤツを紹介したいんだけど。中学は同じっぽい感じだし、一夏がいなくなるのなら、ソイツらとつるもうかなつて」

「同性の友達には作らないのか？ 鈴が女子と遊んでるところなんて見た覚えが無いんだが」

「アンタはアタシの親か！ 心配しなくても同性の友達くらいいるわよ！」

結局何時も通りのグダグダのやり取りになつたのを見て、他のクラスメイトも会話に加わつてきた。だがやはり、鈴と親しそうな女子はいなかったと、一夏は密かに確認し

ていたのだった。

先日から再開した一夏と虚のIS勉強会に、何故か簪と美紀も参加したいと言い出した。理由はIS学園入学に向けての準備と言っているが、虚は一夏と一緒に時間が減った二人が勉強を理由に一夏と一緒にいる口実だと思っていた。

「まあ、簪お嬢様も美紀さんも、本音と違ってまともに勉強するみたいですし、問題は無いんですが……」

『嘘、ですね。貴女は一夏さんと二人っきりの時間を邪魔されたと思ってます』

「（そんな事無いですよ。それに簪お嬢様と美紀さんは私なんかよりよっぽど立場が上の御方です。むしろ私なんかと一緒にいて良いのかと思うくらいなんですよ）」

『前当主の娘と、表向きの現当主の娘、ですものね。更識家に仕えているだけの貴女が、同列視出来る相手では無いのは確かでしょう。ですが、ISに関して言えば、貴女の方が上なんですよ、虚』

「(そうなんですが……ところで、先ほどから一夏さんが生温かい視線を向けてきているのは……)」

『私の声は一夏さんに丸聞こえですからね』

丙があっさりと言葉に、虚は顔を真っ赤に染め上げた。その理由が分かっている一夏は特に気にしなかったが、いきなり顔を赤くした理由が分からない簪と美紀はしきりに首を傾げ、我慢出来なかったのか虚に理由を尋ねてきたのだった。

「虚さん、いきなりどうしたんですか？」

「刀奈お姉ちゃんならまだしも、虚さんがいきなりそんな反応するのはおかしいですよ」

「美紀……お姉ちゃんなら納得出来るっつのは、妹として複雑なだけだ」

「でも、簪ちゃんだって納得出来るでしょ？」

「……まあ」

実の妹にこのような事を思われている刀奈は、現在候補生合宿で屋敷にはいない。そ

して一夏の護衛として専用機『土竜』どりゅうを与えられた本音は、その土竜に怒られて訓練に精を出している。本音の性格を熟知している一夏が、せめて専用機はしっかり者にさせようとプログラムした結果だ。

虚は現実逃避気味にそんな事を考えながら、どう説明しようか思考を巡らせる。助けを求めようと一夏に視線を向ければ、苦笑いを浮かべながら首を左右に振る一夏の姿が見られた。

「(さて、なんて言いましょうか……)」

「何時までも無駄話してるのなら、今日は終わりで良いのか？」

「ゴメン、一夏……もう少しだけ」

「ちゃんと集中しますから」

「……へ？」

助けるつもりは無いと意思表示してきた一夏が、助け舟を出してくれた事で、虚は間が抜けた声を上げてしまった。そんな虚に、またしても二人は訝しむ目を向けてきたのだが、今回はそれ以上は追及してくる事無く勉強に戻ってくれたのだった。

「虚さんも手が止まってますよ。いくら専用機を持つてるハンディがあるからと言って、IS学園の入試に百パー合格出来るわけじゃないんですからね」

「わ、分かってます！　ですが、驕りでは無いですけどI Sの知識は同年代では上の方だと思ってます」

「そうですね。ですが、そこで驕り高ぶったらそれ以上は有りません。ですから、集中して勉強してください」

「は、はい！」

特に厳しい口調に改めたわけではないが、一夏の言葉には圧が掛かっていた。しかも虚にだけ伝わるように調整しているから二人には何の影響も与えていなかった。

「ねえねえ一夏、中学は一緒に通えるんだよね？」

「ん？　そうだな。中学は簪たちと一緒にの所になるだろう」

不意に尋ねられた質問に、スムーズに答えられたのは、先日似たような質問をされたからに他ならなかった。一夏はそれ以上無駄話はしないと意思表示し、簪も美紀も虚も勉強に集中したのだった。

代表選考

何時までも代表不在ではマズイという事で、日本政府は早急に空いた一枠を決めるように動き始めた。候補生の中でも、実力差は多かれ少なかから存在しているので、データだけでは判断出来ないという事で、候補生全員を集めて模擬戦をさせ、最後まで勝ち残った人間を代表とすると決めた。その事に不満の声は上がらず、日程は一週間後と発表になった。

「まさかこんなにも早く代表を決める事になるなんてね。私はまだ候補生になったばかりなのに」

「そんな事関係ないですよ。更識さんは私たちより強いんですから。機体もですが、更識さん自身も」

「そんな事言われましても、実家があつた『更識』ですからね。候補生になる前から実家で経験は積めましたし、碧さんに指導もしてもらいましたから」

「羨ましいですよー。織斑姉妹と並んで全世界の憧れである小鳥遊碧さんに直接指導してもらえるんですから」

無傷でモンド・グロツソを制した織斑姉妹と碧は、全世界のIS乗りを志す少女の憧れの的となっている。それとおなじように同じように、更識製のISを持つ事も少女たちの夢となっていた。

「まさか全世界の憧れである織斑姉妹が、家事無能者で重度のブラコン、そして碧さんは極度の方向音痴。更に憧れの更識製のISを造ってるのが男の子だなんて……言えない事が多すぎるわよ……」

身内だからこそ知っている事実を、刀奈は必死に隠している。一夏の事以外は知られてもそれ程問題は無いのだが、織斑姉妹の事情をばらしたらどうなるか。それが怖くて必死に隠しているのだ。

「てか、更識さん以外専用機を持つてる人がいないので、普通に戦えば更識さんが代表に確定だと思いますよ」

「専用機が無い？ でも日本が所有してるコアはありますよね？」

「コアがあっても、ISを造り上げる事が出来る技術者がいないんですよ……更識さんの御実家、更識企業があるから日本はIS先進国と言われていますが、それ以外の企業は未だに安定したISを製造する事が出来てませんし……」

「倉持技研が成功した、とニュースで見ましたけど」

「あれはあくまでもＩＳを造る事に、です。実用に耐えうるレベルでの話ではありませんよ」

「そうだったんですか……（この人、見た目に反して情報を集めるのに長けてるわね）」

自分より年上（当たり前だが）の真耶に失礼な事を思いながらも、その情報収集能力の高さに感心していた。刀奈は一夏が基準となりつつあるので世間とズレてしまっているのであつて、日本のＩＳ開発力は、他国と比べても低い部類に位置しているのだ。

「とりあえず、一週間は実家に戻れるので、私もこれで失礼しますね」

「あ、はい。私も帰って準備しますので」

見た目だけなら同級生と言えなくもなさそうな真耶と別れ、刀奈は迎えの車に乗り込み、更識の屋敷へと帰るのだった。

時間というものはあつという間に流れていき、緊張したまま代表を決める模擬戦を行う当日になってしまった。刀奈は朝から挙動不審な行動を繰り返していた。それを見て一夏が呆れて彼女を落ち着かせる為に動いたのだった。

「大丈夫ですよ。昨日絞の調整はシツカリとしましたし、刀奈さんの動きにフィットするはずですよ。後は刀奈さんが自分の力を信じるだけです」

「うん……そうだよね。一夏君が私の動きにシツカリ合うように再調整してくれたんだから、後は私が結果を出すだけ……お父さんに胸を張って報告する為にも、絶対に負けられないんだから……」

「……難しいかもしれませんが、楯無さんの事は考えない方がいいと思いますよ。下手に力んでしまう原因になりかねませんから、今の刀奈さんだと」

「そう、かもしれないわね……力を抜いて挑まなきゃいけないもの……」

まだがちがちの刀奈に、一夏はため息を吐きそうになるのを堪えて更に近づいて行っ

た。

「あの、一夏君……何だか近くないかな？」

「大丈夫です。刀奈さんなら、きつと勝ちぬく事が出来ますから」

「あつ……うん」

刀奈を安心させるために一夏が取った行動、それは刀奈を抱きしめ、そして頭を撫でる事だった。

「でも、私が代表になったら、一夏君大変よ？ 遠征とか有るだろうし、その都度調整してもらわなきゃいけないわけだし」

「別に遠征から帰ってきたらそのまま屋敷に戻ってきてもらえば良いだけですよ。その都度蛟は調整出来ますし、それほど大変ってわけじゃ……」

「それと、私が候補生から代表になったら、また新たな候補生を探す事になるわよ。そうなると思ちゃんや美紀ちゃんも応募するでしょうし、その二人が候補生に選ばれたらまた一夏君が専用機を造るのよ？ 大丈夫なの？」

上げればまだまだ出てきそうな一夏の苦勞に、刀奈の方が顔を青ざめ始める。一方で張本人である一夏は涼しい顔をしていた。

「専用機の事は問題ないですよ。生前楯無さんに預けたコアが有りますし、それを少し改良してから造るとしても……そうですね、一人三日くらいあれば完成するでしょうし」

「三日っ!? どれだけ慣れてるのよ……」

「それに、虚さんだつて遠征やら何やらで飛び回ってるんですから、刀奈さんも同じ事になるだけですよね? だから問題はありませんよ」

「そういえば、最近虚ちゃんとか会わないわね……」

「屋敷にいる時は、基本的に研究所でI Sの勉強をしていますからね」

更識の企業代表として、そして表向きの社長である『楯無』の護衛も兼ねて、虚もあちこち飛び回る日々を送っていた。だからではないが、一夏は刀奈が飛び回る日々になつても慌てる必要は無いと考えていたのだった。

「とにかく、選考会頑張ってください」

「一夏君の凄さに呆れ過ぎて、選考会だつてこと忘れてたわよ……」

緊張も何処かに吹き飛んだようで、刀奈は何時も通りな感じで合宿所に向かう事が出来たのだった。

当主としての一夏

代表選考の模擬戦は、てつきりトーナメントだと思っていた刀奈は、実は総当たり戦だという事を知らされて少なからず驚いていた。

「総当たりって……候補生って結構な数いるわよね」

『全部で八人ですね。内五人が今回代表になれなかつたら引退すると表明していますので、結構死に物狂いで挑んで来るでしょう』

「うへえ……何だか面倒ねえ」

『戦う前からそんな事思ってたら、思わぬところで足元を掬われますよ。一夏さんに期待されているんですから、刀奈は代表にならなければいけないんです』

「分かってるわよ。お父さんに良い報告をしなきゃいけないし、一夏君に失望されたくないんだから」

「あの……更識さん？ 誰と話してるんですか……？」

「ふへ？」

蛟と会話していた刀奈に、真耶が不気味がついているのを隠しきれない表情で話し

かけてきた。まあ真耶の表情は無理もないもので、周りから見たら刀奈は、誰もいないのに誰かと会話しているのだから。

「えつと……この子とです」

「この子つて……更識さんの専用機、ですよね？」

「造ってくれた人のおかげで、更識製の専用機はその持ち主と会話する事が出来るんですよ」

「そうなんですかー……という事は、小鳥遊さんの専用機も？」

真耶が憧れている相手である碧の事を聞かれ、刀奈は自分が不審者扱いされなくて済んだと確信した。

「そうですね。といつても木霊の声は私には聞こえませんので、碧さんに確認するしかないですが、同じ人が造ってくれたISですので、おそらくは会話出来るのだと思いますよ」

「そうですねー。更識さんのお家で造った専用機は話す事が出来るんですよ」

「その人曰く、ISは最初から話しかけてきてる、らしいんですけどね」

これから総当たり戦を繰り広げるといふのに、刀奈と真耶はそのままIS談義に花を咲かせた。周りではピリピリとした空気を纏っている残りの候補生がいるといふのに、この二人は全く動じずに話していた。

「——そういえば、真耶さんもこれが駄目なら辞めるんですっけ？」

「そうですね。IS学園の教師にならないか、という打診も来てますし、何時までも代表に拘るのもどうだろうと思ひまして」

「真耶さんってまだ高校生でしたっけ？」

「三年ですけどね」

「と、言う事は卒業したらすぐに教師に？」

「一応研修とかあるのでしようが、そのつもりです」

第二回モンド・グロツソが終われば織斑姉妹も引退すると表明しているので、真耶が代表の座を諦めるのは些か早いように刀奈は感じていた。だが同時に、これで簪や美紀が代表、または候補生に選ばれる確率が高くなったと内心喜んでいたのであった。

「無駄話はそこまでだ！　これから総当たり戦を開始する」

「なお、順番などはこちらで決めさせてもらった。文句があるやつは今すぐ荷物を纏めてここから去るのだな」

『相変わらず偉そうですね』

「（まあ現役の代表で、ここにいる誰よりも強いからね……仕方ないわよ）」

織斑姉妹の言動を受けて、蚊がぼやいた。そのぼやきに、刀奈は苦笑いを浮かべそうになるのをこらえながら、心の中で蚊に答えたのだった。

代表選考会が行われている頃、更識家では一夏と尊が顔を合わせていた。表向き楯無となつた尊だが、屋敷内では楯無として振る舞う事は無い。

「それで一夏君、企業代表として虚ちゃんはどうくらいなんだい？」

「機体の性能差を差し引いたとしても、虚さんの実力はずば抜けているでしょうね。それこそ、国家代表に選ばれてもおかしくは無いくらいには」

「なるほど……各国のＩＳ関連企業から文句が上がるわけだ」

「言っちゃ悪いかもしれませんが、性能の差も代表の差も、こちらが悪いわけじゃ無くそれぞれ用意出来なかつた方が悪いんですよ」

書類に目を通しながら、一夏が余程小学生には似つかわしくない口調で斬り捨てたのを受け、尊は苦笑いを堪える事が出来なかつた。

「時々、君は私たちと同年代なんじゃないだろうかと思う時があるよ」

「私は美紀たちと同じ年ですが」

「ああ、知っているさ。だがね、子供らしくないのだよ」

「一応は楯無を襲名した身ですから。子供らしさなど、とうに捨てました」

書類から視線を尊に向け、一夏はあつさりと言い放つ。先代楯無を失つてまだそれほど経っていないのだが、更識企業は順風満帆という言葉が当てはまり過ぎるくらい順調に業績を伸ばし続けていた。その背景には、一夏が大人よりも大人らしいから、という事が多分に含まれるだろう。

「やれやれ、少しは娘たちと一緒に遊んであげてくれないか？ 家に帰れば『一夏さん、一夏さん』と五月蠅いのだよ」

「美紀も私が楯無である事は知ってるのですから、もう少し我慢してくれてもいいと思いますけどね。来年からは同じ学校に通うわけですし、一緒にいられる時間は増えるんですから」

「普通の子供は、君ほど理屈で物事を考えられないんだよ。今日はもういいから、娘たちの所に行つてあげてくれ」

「……了解しました」

次の書類に手を伸ばしかけていた一夏は、若干不満そうな顔をしながらも、次の瞬間には完全に何時もの雰囲気に戻っていた。元々美紀や本音、そして簪と一緒にいる時間が減っている和一夏も思っていたので、今回の尊の申し出は一夏にとつても良いものだったのだ。

だが楯無としての一夏がそれを喜んで受け入れると問題があると考えていたので、一夏はあえて不満そうな顔をしていただけだったのだ。その辺りは、やはり小学六年生、子供らしいと言えるのかもしれない、尊は密かに微笑ましげな顔をしていたのだ。

代表決定

当主としての仕事を一区切りさせた一夏は、簪たちがいる部屋へとやって来た。普段ならこの時間は書類整理をしているか研究所に籠っているかの二択だったので、こうした時間の使い方は本当に久しぶりだったのだ。

「あれ？ 一夏、どうしたの？」

「どうしたの、とはご挨拶だな。一区切りついたから一緒に遊ぼうと思ったのに、簪は俺と遊ぶつもりは無いのか。仕方ない、本音、美紀、外で遊ぶとするか」

「待つて！ 遊ぶ！ いや、遊びたい!!」

人の悪い笑みを浮かべながら美紀と本音に声を掛けた一夏に、簪は普段では考えられないくらいの大声で呼び止めた。普段から一夏と遊べない事に不平不満を募らせていた簪は、一夏と遊べる時間が出来た事で興奮しているのだ、と本音と美紀には思っていたのだった。

「さて、簪も一緒という事だから外遊びは無しだな。となると、室内で出来る何かだが……何が良い？」

「ゲームで良いんじゃない？　かんちゃんも美紀ちゃんも得意分野だし、頭を使わなくて良いから私も楽だからね〜」

「……考え無しで戦ってるから負けてるんじゃないのか？」

「ほえ〜？　……はっ!？」

今まで簪と美紀に勝つ事が出来ないのが当たり前だと思っていた本音に、一夏から指摘が入った。その指摘を受けた本音は、まるで身体に電気が流れたような感覚に陥っていた。

「なるほど〜。私が勝てなかったのは頭を使って無かったからか〜」

「いや、俺に言われても知らんぞ。そもそも、何で本音が負けてるのか、俺は見た事も無いんだから」

「本音は純粹に実力不足だよ。私や美紀に正面から突っ込んで来るだけだもん」
「そりゃ負けるな……」

一緒にいる時間こそ少ないが、一夏も簪や美紀のゲームの腕は知っている。だから馬鹿正直に正面から突っ込んでいくだけだと言われた本音に、呆れた視線を向けたのだった。

「今日こそはかんちゃんたちに勝つぞ〜！」

「……聞いちゃいないな」

敗因がハッキリとしてるのにそれに気づいていない本音に、三人は生温かい視線を向けたのだった。

総当たり戦の代表選出も残すところあと一戦となっていた。

「やはり、順当だな」

「実力もさることながら、専用機の性能の差はやはりデカイな」

「だが、真耶がここ迄全勝なのにも驚きだな」

「あいつはやる時はやるヤツだからな。ただ、本番になるとプレッシャーで実力を発揮出来ないのが難点だがな」

織斑姉妹が勝敗の打ち込まれたデータを見ながら、次の代表の可能性がある二人の事
で話しあっていた。

「このままいけば、更識が勝つだろうな」

「真耶はここ一番に勝てないからな。だが、更識も漸く中学生になったばかりだ。大一番に慣れているとは思えない」

「私はこの更識が勝つと思うけどな」

「うむ……なに？」

「何故貴様がここにいる……」

姉妹で会話をしていたはずなのに、聞き覚えのある声が出てきたので姉妹は揃ってその声が出た方へ視線を向けた。そこには、世界的に有名で、指名手配並みの包囲網で行方を捜されているうさ耳マツドの姿があった。

「やつほー、ちーちゃん！ なつちゃん！ ご無沙汰だねー！ 元気してたー？」

「束……貴様がコアを造る事を止めたせいで大変なんだぞ」

「とつと引き籠りを止め世間に出てこい！　そして再びコアを造れ！」

「えー！　嫌だよ！　せつかく面白くなってきたところなんだから〜！」

「貴様が表から引つ込んでから、更識企業がIS業界を牽引している。その所為で日本政府には『更識企業のバックには篠ノ之束がいるのではないか』という抗議の電話が鳴りやまないらしい。その所為でわたしたちに調べるとまで言ってくるんだ」

「じゃあその日本政府をブツ潰せばいいんだね〜？」

「うむ！　……では無くてだな」

ついつい本音が飛び出した千冬に、千夏は冷たい視線を向けたが、すぐに束に視線を戻した。

「お前は、更識企業が業績を伸ばし続けている理由を知っているんだろ？　教えてろ」

「ダメだよ。それは自分たちで調べるか、日本政府のクス共に調べさせるかしなきゃ」

「面倒だ。答えを知ってるヤツがいるのに、何故私たちが調べなければいけない」

「相変わらず自己中心的な考えだね〜。そんなだからいつくんがちーちゃんとなつちやんの許からいなくなつちやつたんだよ」

愛しの弟の名前が出てきた所為で、千冬と千夏はそれなりのダメージを心に負った。束の言う通り、一夏がいなくなった原因は自分たちの考え方だという事は何となく自覚しているのだ。

「……とにかく、お前と更識企業には何のつながりも無いんだな？」

「当たり前だよー。いっくんが生活しているだけで、私と更識には何の関係も繋がりも無いんだから。ところで、もう戦闘が始まつてるけど、ちーちゃんとなつちゃんは見て無くてよかったの？」

「なに？」

無邪気に笑いながらモニターを指差した束の言葉に、千冬と千夏は慌てて視線をモニターに移した。モニターには代表選出戦、最終組み合わせ・最終戦。山田真耶VS更識刀奈の戦闘が映し出されていた。

「まだ合図を出して無いはずだが……」

「暇だから出しちゃった〜！ ブイブイ」

「また貴様か！ このダメウサギが！」

篠ノ之束と不毛な言い争いをしていた織斑姉妹を他所に、代表選出戦の最終戦は白熱

を極めた。実力、そして機体の差で圧倒するかと思われた刀奈だったが、意外な事に苦戦を強いられたのだが、やはり問題視されていた本番に弱いという真耶が、最後の詰めを誤り、結果刀奈がその隙を突いて勝利したのだった。

「この結果、日本代表は更識刀奈とする」

千冬の宣言により、刀奈は日本代表の座に就いたのだった。

新たな悪友

鈴から新たに知り合った友人を紹介するという事で、一夏は仕事に一区切りをつけて更識の屋敷から外へ出る事にした。本来なら、外出の際には護衛をつけなければならぬのだが、碧も本音も手が離せない状態だったので今回は護衛は無しでの外出となった。

「それで、紹介したいヤツって？」

「もうすぐ来ると思うわよ」

待ち合わせの十分前に一夏が到着し、その五分後には鈴が到着した。だが、肝心の新たに知り合った友人は、まだ姿を現していなかった。

「また男か？」

「そうだけど？」

「鈴……お前やっぱり……」

「うっさい！ 同性の友達だってちゃんといるわよ！」

一夏が同情したフリをすると、鈴はその事に過剰に反応した。実際、同性の友達はいるにはいるのだが、一夏や他の男子たちと遊ぶ方が圧倒的に多いので、一夏には鈴に同性の友人がいないのではないかと思われてしまっているのだ。

「悪い、遅れた」

「この阿呆が妹に説教されてたからな」

「違うだろ！ お前が道に迷ったから」

「あーはいはい。不毛な争いは見るに堪えないから止めてくれる？」

「なんだと!？」

「……これが、鈴の新しい友達か？」

目の前で繰り広げられる、息があつたコントのようなやり取りを見て、一夏は少し呆れた様子になっていた。初対面がいると分かっているのに、まったくもって畏まる様子も無い相手に、これが普通なのだろうかとついつい首を傾げてしまった一夏、普段から大人の中で生活している彼にとって、この二人の対応は実に子供だった。

「おつ、コイツが例の？」

「そうよ。アタシの友人の一夏よ」

「はじめまして、更識一夏です」

「五反田弾だ。よろしくな、一夏」

「御手洗数馬だ。こちらこそはじめましてだ」

一応丁寧な挨拶をした一夏に対し、弾も数馬も砕けた挨拶を返す。この対応の差に、困った表情を浮かべたのは、一夏では無く鈴だった。

「分かってたけど、やっぱり一夏って大人びてるわよね……この阿呆二人が余計に阿呆に見えるわ」

「テメエだつてガキだろうが！」

「あんですつて！ アンタたちと同列だと思われたくないわよ！」

「……あんまり騒ぐなよ。見られてるぞ」

一夏に指摘され、周りの注目を集めていた事に気がついた三人は、顔を赤くしてうつむいてしまった。

「と、とりあえずウチに来いよ。この間のゲームの借りを返す時が来たぜ」

「お前はぶつちぎりで最下位だっただろうが」

「レースゲームも格ゲーも音ゲーもね」

「ウルセエ！」

「…………愉快な男だな」

一人別次元の存在となりつつある一夏だが、不思議とこの空間を楽しんでいた。同年代の友人など、学外にはいなかったから新鮮に思えたのだろうが、普段から大人の中で生活する事が当たり前だと思っていた一夏にとって、意外と居心地の良い空間になりそうなのな雰囲気だった。

虚につれられてISの訓練を積んでいた本音は、護衛対象である一夏が屋敷にいない事に気が付き、首を傾げながら屋敷中を探し回っていた。

「あれ、本音。何か探してるの？」

「あつ、かんちゃん！ いっちーが見当たらないんだけど、知らない？」

「一夏ならさつき、仕事を終わらせたからって言うって何処かに出かけたけど？」

「ほえっ!? 護衛の私を置いていつてどこに出かけたんだろう……碧さんもIS学園からまだ戻ってきて無いのに……」

「一夏さんなら大丈夫ですよ」

慌てふためく本音の背後から、落ち着いた声がかげられた。

「何で大丈夫だって分かるのさ！ おねくちゃんはいっちーの護衛じゃないから分からないだろうけど、いっちーは結構狙われるんだからね！」

「だから、一夏さんなら出かける前に私にGPSの識別コードを教えてくださいましたので、それで辿れば今いる場所が分かりますよ」

「ほえ？ 何で私じゃなくおねくちゃんに？」

「本音はまだ長距離走の途中でしたし」

実際は本音では頼りないから、と一夏が虚に教えたのだが、それを本音にそのまま伝えるとショックを受けるだろうからと言い訳まで一夏が考えたのだった。もちろん、そんな事知り得ない本音は、微妙に納得行っていない表情を浮かべていたが、それ以上の追

及はしてこなかった。

「とにかく、護衛任務を遂行するなら場所を教えますが、普通に遊びに行くだけだと言つてましたよ？ それでも護衛に行きますか？」

「うーん……じゃあ良いや。偶にいつちーは遊びに行くだけだからって護衛はいらないって言う時もあるし」

「そもそも本音は、屋敷の中でも一夏に撒かれてるんだから」

「いつちーはかくれんぼが上手だからね」

仕事内容によつては、本音に知られるわけにはいかないものもあるので、一夏はたびたび本音の護衛から姿を晦ます事があるのだ。もちろん、他の人間が一夏に注意を払っているから出来る事であつて、このように外出の際に護衛をつけないのは危険な行為だと言えるだろう。

「そう言えば、美紀ちゃんは？」

「美紀なら、小父さまに呼ばれて何処かに出かけたけど」

「ほえ……美紀ちゃんも忙しいんだね」

表向きの当主の娘である美紀は、それなりに仕事を任される事がある。それこそ、先

代当主の娘である簪よりもだ。

「とにかく、本音はもう少し一夏さんの護衛という任務に集中しなさい」

「でも、並大抵の相手じゃいつちーを攫う前に倒せちゃうし、いつちーもそれなりに動けるからね。倒せないにしても、簡単に攫われる事は無いと思うよ」

実に楽観的な本音に、簪と虚は同時にため息を吐いた。何故一夏の護衛に選ばれたのが本音なのか、それはこの二人以外に取っても謎でしか無かった。

一夏の境遇

五反田家で遊び倒した鈴と数馬は、一夏と共に五反田家を後にする事にした。

「いやー一夏って強かったんだな」

「普段からやってたの？」

「いや、今日初めてやった。別のゲームはやった事あるが、勝てた試しが無かったんだがな」

「つまり、弾はそれくらい弱いって事だな」

「ウルセエ！」

素人の一夏に全敗した弾は、涙目で数馬と鈴に怒鳴りかかった。もちろん本気の喧嘩にはならないと分かっていたので、一夏は一人傍観を決め込んでいたのだが。

「ウルセエぞ、弾！ ご近所に迷惑だろうが！」

「イテエ!? ……じいちゃんの声の方が——」

「ん？」

「何でも無いです……」

五反田家の主——五反田食堂の看板爺さんである五反田蔵が孫の弾の頭をお玉で殴りつけた。その光景を始めてみた三人は、驚きと憐れみが混ざった視線を弾に向けていた。

「お前らが弾の友達か」

「はじめまして、更識一夏と申します」

こういった場面に慣れている一夏が、いち早く現実には復帰し蔵に挨拶をする。そんな一夏につられるように、鈴と数馬も蔵に挨拶を済ませた。

「なかなか骨のある子供だな。まあ、この阿呆と仲良くしてやってくれ」

「こちらこそ。交友範囲が狭かった私が、こうやって弾君と出会えたのは彼女のおかげです。彼女共々、これから仲良くしていきたいと思つてます」

「……なかなか大人びた子供だな」

「あのじいちゃんがたじろいだ!？」

すぐに大人モードに切り替わった一夏に、蔵は少し不気味さを感じたのだが、弾は単純にたじろいだ蔵に驚いたようだった。

「あー、弾の御爺さん？ 一夏は色々とあって大人だらけの世界で生活してるのよ。だから気にしなくて良いわよ」

「色々？ この阿呆と同じ年の子供が、どんな事情だつて言うんだ」

「一夏の本名は織斑一夏。養子縁組したから、更識一夏も本名んだけどね」

「織斑……？ あの最強姉妹と関係してるのか？」

「その弟なんだつてさ。もつと子供のころに誘拐されて、それ以前の記憶が無いんだつ
け？」

「鈴……人の事情をぺらぺらとしゃべるなよ……」

一夏は呆れと諦めが同居した表情を浮かべていたが、その表情を見て厳はそれ以上聞こうとはしなかった。

「そうか……大変だったな、小僧」

「いえ、もう慣れましたし、大変だと思った事は一度もありませんから」

「そうか……」

それだけ言い残して、厳は店に戻っていった。

「なんだ……じいちゃんのやつ？」

祖父の考えが分からない孫は、しきりに首を傾げていたのだった。

鈴、数馬とも別れ、一夏は足を止めて誰もいない場所に振り返り声を掛けた。

「本来なら本音の仕事じゃなかったか？ GPSの位置データは分かるはずだが」

「あの本音ちゃんがGPSなんて操作出来ると思いますか？」

「いや。思わないな。だが、お前も色々事情があるだろ——美紀」

表向きの当主の娘である美紀が、養子縁組されただけの一夏の護衛につくのは色々問題がある。一夏にはそう思っていた。だから自分の護衛は美紀ではなく本音を推薦

したのだ。

「仕方ないですよ。本音ちゃんはI Sの訓練とかお勉強とかで捉まってきましたし、まさか簪ちゃんを護衛につけるわけにはいかないですし」

「だから一人で出かけたんだよ。虚さんに位置データだけは分かるようにしておいたのは、護衛の必要が無いと教える為だったんだがな」

「一夏さんには色々と事情があるんですから。一人で出歩かれたら私たちが心配しますよ。碧さんはまだ戻って来ませんし、刀奈お姉ちゃんは代表に決まって忙しくなっていくでしょうし。虚さんも企業代表ですから色々とお出向く事が多いです、私しかすぐに通じる人間がいなかったんです。お父さんに言われるまでも無く、私が一夏の護衛につくつもりでしたし」

「まったく……当主としての自覚が無いんですかね、楯無さんは」

「自覚が無いのは一夏さんも同じですよね？」

一夏は周りを気にして「尊」と呼ばず「楯無」と呼び、美紀もそれに倣い「当主としての」という一文を省略した。本来であれば、一夏が表も裏も当主を継ぐはずだったが、あまりにも早い先代の死により、表向きは美紀の父親である尊が楯無を名乗っている。その事は美紀も納得しているのだが、彼女からしてみれば、尊はあくまでも父親

であり、仮の楯無でしか無いのだ。

「やっぱり美紀にも必要だったかも……」

「何がです？」

「I S」

本音を護衛に推薦したのは一夏だが、早くもその選択は間違いだったかもしれないと内心思い始めていた一夏は、美紀にも専用機を造ったほうが良いかもと頭の中で設計図を引いていた。そんな一夏を他所に、美紀は慌てて周りを見渡した。

「どうかしたのか？」

「簡単にI Sを造れるなんて言わない方が……」

「別に俺が造るわけじゃないんだし、そこまで気にしなくても良いだろ。更識が独自技術でI Sを造ってるのは、もう全世界が知ってる事だし」

「それは……そうですけど」

「大袈裟に気にし過ぎなんだよ、美紀は。こんな世間話だろ？」

本当の事情を知っている美紀からすれば、危険極まりない内容だが、一夏の言うように、上辺だけの事情を知っている人間からしてみれば更識関係者の会話としては普通の

内容なのだ。

「そうですね。気にし過ぎでした」

「とにかく、さつさと帰って落ち着いて話した方が良いな」

「そうですよ。ただでさえ一夏さんは狙われる立場なんですから」

「……更識関係者で、織斑姉妹の弟。はたまた篠ノ之東のお気に入りだもんな……記憶が無いとはいえ面倒な」

自分の事なのに、何処か他人事のように眩いた一夏を見て、美紀は思わず吹き出してしまったのだ。それくらい、今の一夏のセリフには実感が籠っていないかったのだ。

代表のトレーニング

代表に決まったからと言って、遊んでいられるほど刀奈に時間は無い。既に来年に迫っているモンド・グロツソに向けて、実家である更識家でひたすら経験を積み重ねる事に集中していた。

「くっ！ やっぱり虚ちゃんは強いわね」

「お嬢様、そんな笑顔で言われても嬉しくありませんよ」

「事実なのに。合宿所では、やっぱり候補生だと一枚落ちるのよね……かといって、織斑姉妹と模擬戦しようものなら、自信喪失しそうだし」

「中学生のセリフとは思えませんね」

蛟と丙は、元々互いに大ダメージを与えられるように一夏が調整したISだ。少しでも油断すれば、あつという間にシールドエネルギーを削られるために、刀奈も虚も互いに最大の緊張感を保ちながら戦う事が出来る。だから刀奈は合宿所では無く実家で経験を積むことを選んだのだ。

「おーやってるねー」

「本音、少し静かに」

「集中してるから、本音ちゃんの間の抜けた喋り方でその集中が途切れちゃうよ？」

二人の模擬戦を見学に来た簪、本音、美紀の声を聞きながらも、刀奈も虚もそちらに視線を向ける事無く模擬戦を続ける。

「後で本音にも相手してもらおうかしら」

「お嬢様相手に、本音が何処まで耐えられるでしょうかね」

「さあ？ それはやってみないと分からない、わ！」

「っ！」

決めにかかった刀奈の攻撃を、虚は捌ききれずに直撃を喰らった。そこから一気に攻勢にでた刀奈に押し切られる形で、模擬戦は終了したのだった。

「いやー、やっぱり虚ちゃんは強いわ」

「全くこちらの攻撃を喰らって無いのに、よく言いますね」

「これでも日本代表ですもの。企業代表とはいえ虚ちゃんとは経験の差があるもの」

「織斑姉妹、ですか」

「あの二人相手は本当に死ぬかと思うわよ……」

織斑姉妹と戦った時の事を思い出して、刀奈は軽く身震いをした。そんな刀奈を見た虚は、自分はそのような経験が無いから勝てないのだろうかと首を傾げたのだった。

「そうだ！ 本音、相手してよ」

「ほえ!! 私じゃ刀奈様の相手なんて出来ないですよ。役不足ですよ」

「本音、役不足の使い方、間違えてるぞ」

「あつ、いつちー！ 間違えてるって？」

背後からかけられた声に振り返り、本音は首を傾げた。

「役不足というのは、自分に対して仕事が簡単過ぎるという意味だ。だから本音の言葉をそのままにすると、刀奈さんじゃ相手にならないから、という意味になる」

「おお！ カッコいいー！」

「……間違えてるんだから反省しろよな」

思わぬところで勉強しなければならなくなった本音は、一夏から視線を逸らして刀奈に向き直った。

「じゃあ、私じゃ刀奈様の相手は務まりませんので、かんちゃんか美紀ちゃんのどちらか

にしてください」

「でも、簪ちゃんも美紀ちゃんも専用機は持ってないわよ?」

「訓練機がありますよ。更識には、いっちゃん造った訓練機たちが沢山いますし」

「あつ、その事なただけ」

専用機の件で思い出したのか、刀奈が手を上げて皆の視線を集めた。

「今度のモンド・グロツソが終わったら、織斑姉妹が引退するのよね。それで、新しい候補生、ひいては代表を探す為にまた選考会を開くらしいのよ。そこに簪ちゃんと美紀ちゃんを推薦したいんだけど……ダメ?」

「ダメって……別に私たちは嬉しいけど、一夏は大丈夫なの?」

「ん? 大丈夫って、何がだ?」

「だって、お姉ちゃんと虚さんと本音の専用機の整備もあるし、もし私と美紀が代表、もしくは候補生になったらまた一夏が専用機を造るんでしょ? 碧さんの専用機の整備だってあるだろうし、一夏の負担は大丈夫なのかなって……」

簪が口にしたのは、ある意味当然の心配だった。いくらけた外れの技術力を持っているとはいえ、一夏の体力は平均より若干高いだけの平凡並みだ。だが一夏はその心配は

無用だと首を横に振った。

「前に刀奈さんにも言ったが、二人の専用機を造る時間は、三日もあれば十分だ。それに、調整だってそれほど大変な作業じゃないし、むしろ俺の事を気にして代表になれるチャンスを棒に振るのだけは止めてくれ」

「ねえねえ、いつちーはISを動かせないの〜?」

「あのなあ……ISというのは女性にしか動かせないようになってるんだ。俺は男だぞ、動かせる訳が無いだろ」

「えー! でもいつちーはISの声を聞く事が出来るんでしょ? もしかしたら、つて事もあるかもしれないじゃないか〜」

「本音、そんな事言つて、自分が護衛しなくてもよくなるんじゃないや、とか思ってるんじゃないんですか?」

「そ、そんな事ないよ〜」

姉に凶星を突かれて、本音は視線を誰にも合わせないように逸らし続けた。

「まあ、俺になら反応しても良い、と言ってくれるコアは確かにいるが、実際に動かした事が無いんだから分からん」

「じゃ、じゃあさ、今動かしてみようよ!」

「そうね。私も一夏君が動かせるのなら、トレーニングを手伝ってもらいたいし」
「代表である刀奈さんのトレーニングに付き合えるとは思えませんが……では試しに動かしてみましようか」

訓練機の前まで移動し、一夏は機体に触り心の中で念じる。すると打鉄は一夏の念に反応してしやがみこんだ。

「おお！ 動いた」

「やっぱり一夏君はISを動かせるんだね」

「……バレるとまた面倒な事になりそうですし、ここだけの秘密にしてくださいよ」

「分かってるって。ご当主様の言う事は絶対ですもの♪」

「……楽しんでますね」

とりあえず打鉄を見に纏った一夏は、刀奈のトレーニングの相手を務めた。結果はもちろん、一夏の完敗だったが、それでも善戦した方だと一夏以外の全員は思ったのだった。

更なる危険

一夏がISを動かせる事が判明して暫くが経った。世間には公表出来ない事なので、この事も更識内での公然の秘密扱いになっていた。その結果ではないが、刀奈の訓練相手は一夏と虚が交互にしていた。

「いやー、虚ちゃんも強いけど一夏君もなかなかやるわね〜」

「……素人相手に本気出さないでくださいよ。こっちは体力は平均並みなんですから……」

頭脳労働が主な一夏にとって、ISを纏つての戦闘はかなりの重労働だ。

「ISを纏つて動きまわれる刀奈さんたちが凄いと思いましたよ……これは、研究所に引き籠つてたら分からなかったでしょうね」

「これからは一夏君も身体を鍛えた方が良いんじゃない?」

「……最低限鍛えてたつもりだったんですがね」

操縦者として活躍するつもりが無かった一夏は、本当に最低限にしかトレーニングは

積んでいなかった。それでも、生身相手ならそこそこ戦えるくらいには鍛えていたのだが、やはりI Sを操縦するとなるとそれ以上にトレーニングを積む必要があるのだ。

「自分の機体を造つちやええば？ 軽量化とか、より負荷が掛からないようにとか一夏君なら出来るでしょ？」

「ただ専用機になると、肌身離さず持つてなければいけなくなりますし……」

「外せるんだから、外に出る時は置いておけば？」

「それだと機体が拗ねちゃいますよ……I Sとの関係を悪化させるのは得策ではありませんし」

I Sも一夏の境遇は理解しているので、心配する必要はあまり無いのだ。だが、やはり専用機ともなると話は違ってくる。個人に所有される専用機は、出来る限りその所有者と一緒にいたいと願うものであり、一夏が言うように肌身離さず持つているのが一番なのだ。

「やはりもう少し鍛えなきやダメですね」

「フアイト♪」

「……楽しんでますね」

「そんな事無いわよ？」

「はあ……それじゃ俺は仕事がありますので」

「はいはい。お仕事、頑張ってるね」

刀奈との訓練を終えた一夏は、楯無の顔になり屋敷の中へと姿を消した。そんな一夏の背中を寂しそうに見送ってから、刀奈は背後にいる少女に声を掛けた。

「美紀ちゃんは何を心配してたのかな〜?」

「ッ!? い、いえ! 私は一夏さんの護衛として……」

「さすがに、元当主の娘と一緒にいる時は護衛の必要は無いんじゃないかしら? ISで襲われる事も無いだろうし、もしあったとしても私は専用機を持つてるんだから」

「いえ……刀奈お姉ちゃんが一夏さんを襲う可能性がある……」

「何それ!? 誰よ、そんな事言ったのは!」

襲うの意味が変わっている事に気がついた刀奈は、顔を赤く染め上げながら叫んだ。さつきまで感じていた寂しさは何処かへ飛んでいき、刀奈の心の中は怒りで埋まっていたのだった。

あつという間には流れ、そろそろ一夏たちの卒業式が近づいて来ていた。一夏もそれなりに鍛え始めたので、最近では護衛も前より数を減らし、距離も離れている。

「やーやー！ 久しぶりだね、いっくん」

「……篠ノ之束博士、ですよね」

「やだなー、そんな他人行儀な話しちやつて！ 昔みたいに『束さん』で良いよー」
「……良いんですか？ 世界的に追われている貴女が、こんな場所に姿を現して」

一夏たちの現在地は普通の住宅街。誰かの目に留まる確率はかなり高いはずなのに、束は余裕の笑みを浮かべていた。

「問題なーし！ 不可視フィールドと遮音フィールドを同時展開してるから、束さんの姿はいっくんにしか見えないんだよー！」

「……それで、そこまでして俺に会いに来た理由は何ですか？ 生憎ですが、俺には貴女の記憶もありませんので」

「知ってるよー！ でも、ちーちゃんやなつちゃんみたいに絶望はしないから安心して良いよ」

「別に心配してませんが」

「もー！ じっくりんはクールだね、うりうり」

音も無く一夏の背後に周り、その豊満な胸に一夏の頭を押し付ける束。一夏は不快感を露わにして束の拘束から擦りぬけた。

「およ？ さすがに鍛えてるだけあってこれくらいなら抜け出せるんだ」

「バカにしに来たんですか？」

「いやいや、じっくりんがISを動かせる事、ISを造れる事、コアを造れる事、どれも世間に知られても大変だなーっと思ってるさ」

「……何処で知った」

「いやーん！ その目、カツコよすぎだよ、じっくりん！」

「……………」

急に身悶えた束に、一夏は呆れた視線を向ける。つい先ほど危険人物だと再確認した相手を、別の意味で危険人物だと一夏は認識した。

「束さんはいつくんの事なら何でも知ってるよー。ISの研究状況から今日のパンツまで」

「それで？ 貴女は何をしに、何が目的で俺に近づいたんですか？」

「目的はいつくんとお話したかったんだけど、もつと注意した方が良いよ、つて警告に」

「警告？」

急に真面目は表情になった束につられるように、一夏の表情も引き締まった。大人と子供、の差はあるのだろうか、この二人に関してだけ言えばさほど差は感じられなかった。

「世界はIS先進国である日本を……もつと言えば最先端技術を持っている更識企業を妬んでる。もしその全てがいつくん一人の成果だと知られれば、間違いなくいつくんは再び攫われる危険が高い。だから、あんなしよぼい護衛じゃなく、もつとしっかりとした人を護衛に付けた方が良いよ。昔の小鳥遊とかいうヤツみたいに」

「ご忠告感謝致します。ですが、貴女が口を滑らせなければ『私』の秘密が外部に漏れる

事はありません」

「おーおー！ 当主モードだー！ 大丈夫、当分は黙っててあげるから」

「当分？」

「いっくん成分が束さんの中に残ってる間だよ」

「……なんですか、その成分は」

謎の言葉を残して消えた束に、一夏は盛大なため息を吐きながら呟いた。現れた時も消えた時も全く気配を掴ませない束に、一夏は警戒心を高める事を決意したのだった。

卒業式前日

小学校の卒業を明日に控えた一夏たちは、再び五反田家を訪れていた。

「何で今日？ 普通は明日じゃないのか？」

「色々あるんでしょ。そんなのアタシに聞かれても分からないけど」

「まああの弾が考えた事だし、一夏が思ってる普通とズレてるんだろ、あの阿呆は」

「……かもしれないな」

一夏たちが通ってる小学校も、弾たちが通ってる小学校も明日が卒業式だ。だが何故か前日に卒業パーティーをしようとして弾に誘われたのだった。

「よう、遅かったな」

「アンタの阿呆さ加減に呆れながら来たからね。普通明日でしょ」

「明日は別の奴らとの先約があるからな。だから前日にお前たちと騒ごうと思って」

「そういう理由か……厳さんに挨拶してくるから、鈴たちは先に行っててくれ」

「分かった。くれぐれもよろしく言っておいてね。騒いでも怒られないように」

敵の怖さを身を持って体験したわけではないが、鈴は敵の事をかなり恐れている。一夏も心得ているのか、シツカリと領いて敵の待つ五反田食堂へと足を踏み入れた。

「こんにちは」

「おや、一夏君じゃないかい。よく来たね」

「蓮さん、お邪魔します。敵さんはいらつしやいますか？」

「大丈夫、事情は聞いてるからね。さすがに今日は怒鳴りこんだりしないわよ」

「そうですか。では、少々騒がしいかもしれませんが……」

「あのバカの考えた事だからね。悪いのはバカ息子だから一夏君たちは気にしなくて良いわよ」

母親の記憶が無い一夏にとって、蓮の言動が普通の母親の基準になっている。だから息子をバカ呼ばわりしても「それが普通」だと思ってしまうのだった。

「では、自分もこれで」

「また遊びに来てやってね」

「はい、時間が合えば」

元々小学校も別で、中学も別である一夏だが、弾と数馬には遠慮無く付き合えている

のだ。数少ない友人と呼べる相手を、一夏も邪険に扱うつもりは無かったのだった。

「ど、どうだった?」

「……何でまだここにいます。とりあえず、何かあつたら弾が厳さんと蓮さんに怒られるだけだから、俺たちは心配する必要は無い」

「良かった」

「ちよつと待て! 何で俺だけ……」

「お前の家だろ?」

当たり前な事を聞くな、と一夏に言外に言われた弾は、その場で膝から崩れ落ちそうになった。だが当然の如く鈴と数馬にも領かれ、叫びたい衝動に駆られていたのだった。

「何で俺がこんな思いをしなきゃいけないんだ……」

「お兄、邪魔」

「イテっ!」

家の前で立ち尽くしていた弾の腿に、少女が蹴りを入れた。

「いってーな! なにするんだ!」

「だってそんなところに突っ立ってたら邪魔でしょうが」

「確かに、弾、邪魔だぞ」

「何で一夏までコイツと同じ事を言うんだ！」

少女の言葉に便乗して弾をからかった一夏に、弾が泣きそうな目を向けてくる。

「ところで、このお嬢さんは？」

「俺の妹だよ！ 見たら分かるだろ！！」

「……分かるか？」

「分からないわね……」

「全然似てネエな……」

一夏に問われた鈴と数馬が、同時に首を横に振る。その動きを見て、再び弾が崩れ落ちそうになった。

「お前ら……こんな時だけ息ピッタリだな」

「お兄、この人たちは？」

「数馬は知ってるだろ。それとこつちの男が更識一夏。で、このチツコイのが凰鈴音だ」

「小さいって言うな！」

「イデッ!？」

妹に蹴られた方の足と逆の足を鈴に蹴られ、弾はその場で悶絶した。

「五反田蘭です、はじめまして」

「更識一夏です」

「凰鈴音よ！ 気軽に「鈴」って呼んでちょうだい」

蘭と挨拶を済ませた一夏と鈴は、悶えている弾を素通りして家の中へと入っていく。数馬もそれに倣い弾を放置して中に入る事にした。

「お前ら、誰か一人くらい助けろよな！」

「ウルセエぞ！」

「あだっ!？」

叫んだ弾に止めを刺したのは、五反田食堂名物「空飛ぶお玉」だった……

簪たちの小学校も明日が卒業式なので、前日の今日は何もする事が無かった。

「いっちーも出かけちゃってるし、する事が無いよね〜」

「本当なら、本音ちゃんは一夏さんの護衛で出かけて無きやいけないんだけどね」

「まあ本音だし」

「えへへ〜」

「褒め（られ）て無いよ」

「ほえ？」

皮肉を言われたのに気づかない本音に、簪と美紀が同時にため息を吐いた。

「今日はお姉ちゃんも虚さんもないし、模擬戦を見学も出来ないしね」

「私たちが模擬戦をする？」

「訓練機を使うには、申請書を一夏に出さなきゃいけないじゃん。その一夏がないから、勝手に使うのは……」

「怒られますか……」

簪や美紀が勝手に使っても、一夏は怒りはしないだろう。だが、一応規則として定められている事なので、前当主の娘と表向き現当主の娘であろうと、その規則を破るわけにはいかない。むしろ、そんな立ち場の二人だからこそ、余計に規則は守らなければいけない。

「じゃあ、何時も通りゲームで遊ぶの〜?」

「それが一番かな」

「今日こそは簪ちゃんに勝ちたい」

「私は美紀ちゃんにも勝てないんだけどね〜」

ゲームの強さは簪>美紀>>>>本音といった感じだ。簪と美紀にそれほど実力の差は無いが、美紀と本音とは結構な差が存在している。でも、本音は嫌そうな顔もせずゲームを楽しんでいた。

「一夏さんも、何気に強かったですからね」

「一夏は器用だから」

この二人に勝つ事は無くても、一夏は本音のようにあつさり負ける事も無かった。それは生来の器用さに加え、一夏が考えてゲームをしているからなのだが、本音にはその事は理解出来ていなかったのだ。

「今日こそは勝つぞ〜」

考え無しの特攻、それでは勝つ事は出来ない、本音は未だに気づく事は無かったのだ。

小学校卒業

小学校の卒業式など、さほど堅苦しく考えている子供は多くないだろう。大抵は同じ中学に進級し、そのまま付き合いを続けるのだから仕方ないだろう。だがしかし、この学校には例外が存在しており、一夏の周りには級友や学友たちが集まっていた。

「なんだいったい……今生の別れでもあるまいし……」

「いやー、篠ノ之の所為であまり話せなかったが、お前って結構人気あったんだぞ？」
「そうなのか？ 普通に話しかけてくれてよかったんだが……」

「だから、篠ノ之が怖くて話しかけられなかったんだよ。男子も女子も」

「また、篠ノ之箒……いったいどんな女だったのよ？」

面識の無い鈴には、たびたび話題に上がる篠ノ之箒という人物を、上手く想像出来ていなかったのだった。暴力的で思い込みが激しい、それが鈴の篠ノ之箒像だった。

「どんなと言われてもな……よく覚えてないし」

「更識に付きまとい、近づく相手全てに威嚇してたな」

「自分は更識の幼馴染だから、とか言ってるね」

「更識君、迷惑そうにしてたのに全然気づいて無かったし」

「実家が道場らしくて、剣道は強かったんだっけ？ だからモツプを振り回された時は怖かったって訊いたけど」

次々と出てくる箒に対するコメントに、鈴はあつた事も無い篠ノ之箒という人物に嫌悪感を抱いた。

「随分と自分勝手なヤツね。よく一夏が怒らなかつたわね」

「更識の人に排除してもらつたし、あの人の妹だから、そのうち日本政府が対応するだろうと思つてたからな」

「あの人？ ……篠ノ之束博士？」

「そ、だから放つておいてもそのうち消えるだろうと思つてたから」

そもそも、篠ノ之箒に重要人物保護プログラムを適應するように仕掛けていたのは、更識家であり一夏と先代榎無だ。だからそのうち消えると思つていたのも、むしろ確信めいていたと友人たちは証言した。

「とにかく、アンタは別の中学だし、今日は騒ぐわよー！」

「昨日も騒いだだろ……厳さんに怒鳴られるくらいに……」

「あれは、あの阿呆二人が悪いんでしょ！」

弾と数馬が最弱を決める争いで白熱し、声のポリウムを上げたところに敵が怒鳴りこんできたのだ。それまでもそこそこ騒がしかったのだが、それがきっかけとなり昨日はそこで解散になったのだった。

「悪いが、今日はパス。色々とおつて急いで帰らなきゃいけないからな」

「なによ、アンタがいなきや騒ぐ意味が無いでしょ！ 殆どは同じ中学なんだから」

「別に良いだろ。鈴は俺のアドレス知ってるんだから、そのうち連絡くれれば遊べるだろ」

「ま、それもそうね……じゃあ一夏、そのうち連絡するわ」

「ん」

右手を軽くあげて、一夏は教室から出て行った。その後ろ姿を見た数名の女子が、追いかけてようとするのを何とか堪えている姿が見受けられたが、誰もそこは指摘しなかった。

「じゃあアタシたちだけで騒ぎますか！」

「騒ぐのはお前だけだろ」

「あによ！ アンタたちだつてどうせ騒ぐわよ」

誰一人別れを惜しむ事無く、卒業式の打ち上げ的な企画は盛大に行われたのだった。

更識の屋敷では、一夏、簪、美紀、本音の帰りを今か今かと待っている少女と、その少女に付き合わされている少女が待っていた。

「お嬢様、家の事情という事で休んでいるのに、これはどういう事ですか？」

「どういう事って、見ての通り一夏君や簪ちゃんたちの卒業パーティーよ！ 盛大にお祝いしなくっちゃ！」

「普通に学校から帰って来てからでも準備出来ましたね？ わざわざ私とお嬢様が中学

を休まなければならぬ必要性はあったのでしようか？」

「あるわよ！ 盛大にお祝いするには、それなりに準備が必要だし、一夏君には日ごろお世話になってるんだから、その感謝の意味も込めなきゃいけないんだから」

「……単純にお嬢様が学校をサポートしたかっただけでは？」

虚が呟いた言葉に、刀奈は視線を少し逸らした。多少はその気持ちがあつたのかもしれないが、虚はあえて追及する事はしなかった。

「まあ、一夏さんも仕方ないと言ってくれましたし……お嬢様を説得する労力と、諦めて受け容れる労力と、どっちが負担か考えたんでしようが……」

「まあ、簪ちゃんたちも納得してくれてるし、専用機のメンテナンスもあつたんだから仕方ないじゃない」

「データのアップロードですよ。でも、それだつて一夏さんがいなければ出来ない訳ですし……」

「さーて！ 早く準備を終わらせるわよ」

「逃げましたね……」

逃げるように飾り付けを再開した刀奈に、虚はため息を漏らした。

『ため息を吐くと、幸せが逃げますよ』

「そんな事を言っても、お嬢様の態度にはため息を吐きたくなりますって」

『まあ分かりませんが、まだ若いんですから。そんなにため息ばかり吐いてると、年寄りっぽいと思われまますよ』

「……分かつてはいますが、どうしても堪えられないんですよ」

丙に話しかけられ、虚は自分の心境を吐露する。前当主の娘であり、自分の主でもある刀奈に、虚はどうしても強く言えないのだ。

『一度一夏さんに相談……つて、まだ気まずい雰囲気を引き摺ってるんですか？』

一夏の名前を出した時、虚の心拍数が少し跳ね上がったのを感じ取り、丙が訊ねた。

「一応は大丈夫ですけど、二人きりで会うのはちよつと……」

『はあ……乙女なのはいいですが、何時までも引き摺っていると致命傷になりかねませんよ？。ただでさえ人気が高いんですから』

「分かつてます……」

『虚ちゃん！早く手伝ってー！』

「今行きます」

少し離れたところから刀奈に声を掛けられ、虚は考えを中断して手伝う事にした。そんな虚を見て、丙は呆れた空気を醸し出していったのだった。

お姉さんたちの心配事

第二回モンド・グロッソ開催を半年後に控え、刀奈はより一層の訓練を積んでいた。相手は更識でも指折りの実力者の小鳥遊碧、更識企業の企業代表を務める布仏虚、そして三人が専用に使っているISの製造者にして、現更識家当主と務めている更識一夏の三人だ。

一夏は表向きには楯無を継いでいない事になっていたので、あくまでも名乗りは「更識一夏」で通している。男である一夏がISを操縦できる事は、一夏がISのコアを製造できる事、一夏が実は「楯無」を継いだ事と並び更識家のみで知られている事実であり、世間には秘密にされている事だ。

「やっぱり一夏君も専用機を持つべきだと思うのよ」

「ですが、それですと一夏さんがISを動かせる事がバレル危険性が出てきてしまします」

「虚さんの言う通りだと私も思います。一夏さんに危険が及ぶかもしれない事は、徹底的に排除するべきだと」

訓練の休憩中、話題は一夏に専用機を持たせるべきか否かに焦点が集まっていた。本人は特に専用機には興味がなく、今は三人の専用機の状態を調べている。彼は操縦者よりも整備士を目指しているのです、この時間は彼にとつてたまらなく楽しい時間なのだ。だからでは無いが、三人は一夏本人の気持ちを確認しようとせず話を続けているのだ。

「でも、一夏君の護衛が本音じゃね……せめて美紀ちゃんが出来れば良いんだけど」

「美紀さんは、『表向きの楯無』である尊さんの娘さんですから。当主の娘が前当主が養子に迎えた子供の護衛をしてるとなると、そこから疑いを持つ人が出てきてしまうかも知れません」

「一夏さんの特殊な立ち位置から、言い訳はどうとでも出来るでしょうが、一夏さんに疑いを向けられるのは、やはり更識としても一夏さん本人としても望ましく無いと思えますね」

「だからって簪ちゃんに任せるのもマズイじゃない?」

「そうですね。前当主の娘である簪お嬢様が一夏さんの護衛になったら、そちらもそれからで問題が発生しそうですし」

「やっぱり本音さんを護衛として任命した一夏さんが正しいと言うしかありません……他に案がありませんし」

その本音が立派に護衛の役目をはたしていれば、三人もこんな事で頭を悩ませる必要は無いのだ。だが本音の性格上、真面目に護衛を務められるとは思えないし、実際何度も一夏に撒かれている。

「次善の策が、一夏君に専用機を持たせる事なんだけど……やっぱりこれも危険よね」

「さつきも言いましたが、待機状態から一夏さんがISを動かせる事がバレル可能性が高いですからね」

「隠せるなら良いんですが、隠してもバレル可能性はありますし」

「そうなのよね……本音が立派になってくれるのが一番良いんだけど……」

「あり得ませんよ、そんな事」

実姉である虚が言い切ったのを受けて、刀奈と碧が揃ってため息を吐いた。そこに一夏が戻って来たので、一夏は三人が何が原因で悩んでいるのか全く見当がつかなかった。

「えっと、何か問題でもあったんですか？」

「ううん、一夏君の護衛をこのまま本音に任せて良いのか話してただけ」

「そうですか。碧さん、木霊のバージョンアップも終わりましたので、これで第三世代に

も引けを取らない動きが出来るはずです」

「そう？　じゃあこれで刀奈ちゃんや虚さんにも簡単に負けずに済むわね」

「負けて無いじゃないですか……むしろ負けてるのは私とお嬢様の方ですよ……」

「さすがは無傷で世界を制した人よね……」

訓練の成績は、碧が世代差を跳ねのけて全勝、刀奈と虚も善戦するものの勝てないのが現状だった。

「それで、俺の護衛がどうのこうのはもう良いんですか？」

「考えても仕方ないもの……本音が真面目に務めてくれるのを祈るしかないし……」

「簪お嬢様や美紀さんに任せられない以上、本音がシツカリと役目を果たすしかないんですよ……」

「前から言ってますが、別に護衛はいなくてもGPSがありますし、並大抵の相手なら助けが来るまで一人で対応出来ますし」

「それでも、一夏さんを狙う輩は大勢いるんですよ？　事実を知らない連中だって、一夏さんを攫えば篠ノ之博士や織斑姉妹に言う事を聞かせられるとか考えたり、更識企業からコアを貰えるとか考えるんですから」

碧の話を、大袈裟だと笑い飛ばすものは誰一人いなかった。実際一度誘拐された事のある一夏、その原因はISのコアを欲した連中が篠ノ之束に言う事を聞かせようとしたからであり、今度もそれが理由になる可能性は大いにあるのだ。

「とりあえず、本音に護衛は任せておくが、あまり過信しなければ良いですよ。危ない判断したらすぐに逃げますよ」

「でも、一夏君って体力は人並みでしょ？ 戦闘訓練を受けてる相手だったら逃げ切れないんじゃない？」

「その時は、本音に任せますよ。いくら怠ける事に全力を注ぐ本音でも、対象が狙われたらさすがに働くはずですよ」

「だと良いのですが……」

不安げに呟く虚に、一夏は苦笑いを向けて話題を変える事にした。

「とりあえず、刀奈さんは大会が近いんですし、虚さんも交流会で海外に行くんですから、俺の事だけを心配してれば良いわけじゃないんですよ、分かっています？」

「私たちも狙われる可能性はゼロじゃないって事ですよ？ 分かっているけど、やっぱり一夏君が心配なのよ」

「そうですよ。私たちはISという抵抗力を有してませんが、一夏さんは丸腰なんですか

ら」

「だから、護衛の本音がいますから。安心は出来ないかもしれませんが、心配し過ぎは良くないですよ」

一夏の言葉に、一応の納得を見せた刀奈と虚だったが、やはり一夏の事が心配で仕方なかったのだった。

中学入学

中学に入り、一夏の周りは一変した。それは当然の事ではあったが、知り合いがほぼいないクラスで、一夏は馴染もうともしないで、一人で過ごす事が多くなると考えていたのだが、同じクラスに簪と本音と美紀がいたため、その計画は初日から破綻したのだった。

「まさか四人とも同じクラスなんてねー」

「一夏、何だか顔色が悪いけど……大丈夫？」

「ああ、問題無い……」

「入学式の答辞、さすがでしたよ」

何の因果か中学に入った途端に目立つ事をさせられた一夏は、少し気分が悪そうにしている。それを心配して簪が声を掛けたのだが、一夏は問題無いと返すだけで、全然大丈夫そうに見えなかった。

「ねえ本音、この子知り合い？」

「いっちは更識の屋敷で生活してる子だよー。訳あって小学校は別だったけど、中学

からは同じ学校に通う事になったんだー」

「色々って？」

「ウチの養子なのよ」

「お姉ちゃん!？」

説明しにくいと感じていた簪が何かを言う前に、教室に入り込んでいた刀奈があつさりとバラした。別に隠してるわけでも、「更識」という苗字ですぐに分かる事だから、むしろ刀奈には何故簪が説明しにくそうにしていたのかが不思議だった。

「てことは、簪ちゃんの弟になるの？」

「一夏君の方が誕生日が先だから、お兄ちゃんじゃない？」

「さあ？ そんな事気にしてませんし。それよりも刀奈さん、何故この教室に？」

「ちよつと相談したい事が出来ちゃったから、放課後時間くれない？」

刀奈の相談したい事が何か分からない一夏だったが、この場所で話す事が出来ない事は色々心当たりがあつたので、無言で肯定の返事をする。

「良かった。じゃあ放課後、この教室に迎えに来るから待っててね」

「分かりました」

嵐のように去って行った刀奈に、クラスメイトは呆気に取られていたが、すぐに意識を現実に向け出していた。

「更識君って、随分と落ち着いた子なんだね」

「まあ、更識の屋敷は殆どが大人だからな。これくらいが普通だと思うが」

「いっちーは真面目すぎるんだよ。普段からもう少し遊んでくれても良いじゃないか」

「本音はサボり過ぎるんだろ。少しは家の事を手伝ったらどうだ？」

「一夏さんの言う通りだよ、本音ちゃん。手伝いとは言わなくても、宿題くらいは自分一人で終わらせないと」

「中学にはテストがあるから、本音もしっかり勉強しなきゃね」

「いっちーに教えてもらうから大丈夫！」

何の根拠があつての大丈夫なのか、一夏や簪、美紀の他のクラスメイト達も首を傾げたくなる発言をした本音。だが本人はいたって真面目で、本気で大丈夫だと思つているのだから不思議だ。

「俺にだって予定があるんだ。本音の事に感けてる時間なんてそうそう無いぞ」

「かんちゃんだっているし、それでも分からなかった部分をいつちに聞けばいいんだよー!」

「……私は教えないよ」

「ほえ!?!」

簪の無慈悲なる言葉に、本音は驚いた声を上げる。このやり取りがきつかけで、一夏の中学生活は、小学校の時以上に騒がしいものになる感じがしていたのだった。

放課後になり、一夏は約束通り刀奈が来るのを教室で待っていた。時間指定はされて無く「放課後」とだけ言われていたので、それが何時なのか一夏には分からなかったの

だ。

「ゴメン、遅れちゃった」

「いえ、大丈夫ですけど……何の用事なんですか？ 急ぎじゃ無いなら屋敷でも……」

「急ぎよ。IS学園にハッキングを仕掛けた輩がいると、碧さんから連絡があったの。一応データは盗まれる事無く済んだらしいんだけど、あそこには色々と機密指定のデータがあるから、念の為気をつけて欲しいって」

「……更識のデータバンクにもハッキングを仕掛けてくるかもしれないと？」

「IS学園よりも、知られたらマズイ情報がわんさかあるからね……一応一夏君には早めに耳に入れておいたが良いと思つてここで知らせたの。本当はあの時にでも言っておきたかったんだけど、一夏君が更識の重要ポジションにいると知られるのはマズイしね。メールも同様にダメだったから、わざわざ待つてもらつたの」

「別にそこは構いませんが……犯人の特定は済んでるんですか？」

すぐに大人モードに切り替わつた一夏に、刀奈も居住まいを正した。元々崩してはいない両者だが、正した前と後ではやはり姿勢やら纏っている空気なども変わってくる。「残念だけど、それはまだ特定出来て無いそうよ。真耶さんが調べてるらしいけど、特定に至るかどうかは……」

「そうですか……とところで、真耶さんとは？」

聞きなじみの無い名前に、一夏は話の腰を折り質問をする。刀奈も一夏が質問してくるのが分かっていったかのようにすぐに答えを返した。

「山田真耶さん。元日本代表候補生で、今はIS学園で教師を務めてる人よ。といっても、碧さんみたいにいきなりクラスを担当するわけじゃ無く、副担任として働いてるらしいんだけど」

「つまり、刀奈さんの先輩に当たる人ですか。実力はどんな感じですか？」

「代表になれるだけの実力はあったんだけど、本番に弱いタイプの人らしくて、大勝負になればなるほど力を発揮出来ない感じかな。情報収集能力に長けてるらしくって、だから今回のハッキング対策を任せられたらしいんだけど」

刀奈の説明に小さく頷き、一夏はすぐに尊に暗号メールを送った。

「楯無さんにも一応の連絡は行ってるでしょうけど、今の刀奈さんの情報も伝えておいた方が良いでしょうし」

「今のは、真耶さんの？」

「必要とあらば、その人の力を借りるかもしれませんがね。それよりも、刀奈さんはそ

ろそろ時間なのでは？」

「ん？ ……ああ!! 今日代表のミーティングだった！ それじゃ、一夏君またね！」

慌ただしく教室から出て行った刀奈を見送り、一夏は遠くを見つめた。何となくではあるが、一夏には今回のハッキングの犯人は東なのではないかと思えたのだった。

天才の悩み

ハッキング事件から暫く、IS学園ではデータの保管に対して嚴重なロックを掛ける事に対応する事になっていた。ハッカーが狙っていたデータは、主に碧に対するデータであるという事を真耶が突き止めた為、碧に関するデータを保管して更識家にも注意喚起されていたのだ。

「まったく、何で碧さんのデータを狙ったのかしら……」

「碧さんのデータを得られれば、そこから更識の秘密に迫れるとも思ったんじゃないですか？」

「ありえそうね……でも、さすが真耶さんよね。数日でそこまで調べがつくなんて」

元代表候補生である山田真耶と面識のある刀奈は、感心したように頷く。だが一夏と虚は刀奈ほど樂觀視していなかった。

「IS学園のデータ保管状況は調べがついてますが、犯人を特定するような情報はまだ掴めてないらしいですね」

「ああ、犯人なら何となく分かっていますので、そこまで心配する必要は無いですよ」

「そうなの？　で、誰誰？」

「……おそらくですが、篠ノ之東博士だと思います」

一夏の発言に、刀奈と虚が息を呑んだ。可能性は一番高い東だったが、刀奈も虚も東がそんな事をする必要があるのかどうか分からないのだ。

「何で篠ノ之博士がIS学園のデータを……碧さんのデータなんて欲するの？　あの人は他人に興味が無いんでしょう？」

「だからおそらく、と言いました。あの人は碧さんのデータから俺に繋がる何かを掴もうとしたのでしょうか？」

「一夏さんの？　ですが、篠ノ之博士は一夏さんがISを造れる事も、コアを造れる事も、ISを動かせる事も知っていますよね？」

「あの人は、俺がその三つの秘密——正確には更識楯無である事も秘密ですので、四つですが……その全てを知っています。ですが証拠がありませんので、世間に公表しようとしても誰も信じてくれない可能性が高いんです。だから、碧さんのデータから俺に繋がる何かを掴もうとしたんだと思います」

「そんな事をして、篠ノ之博士に何の得があるっていうの？」

刀奈が抱いた疑問は、当然のものだと言える。確かに束が一夏の事を世間に公表したからといって、束に何かしらの利益があるとは思えない。更によえば、そんな事をすれば一夏から嫌われる可能性が高いのに、束がそんな暴挙に出るとも考えにくい。

だが一夏は、刀奈の疑問に対する答えを持ち合わせていた。

「あの人は俺に執心ですからね……俺の事を世界的に認めさせて楽しもうとか思ってるんじゃないですか？ 織斑姉妹が知り得ない情報を私は知っている、とか何とか考えている可能性もありますが……」

「つまり、愉快犯である？」

「俺が何回かあの人と話した感じからして、その可能性が一番高いと思いますよ」

「それだと、更識のデータも狙われるんじゃない？ 呑気にお話ししてる場合じゃないと思うんだけど……」

一夏の憶測を聞いて、刀奈は少し焦った様子で一夏に問いかける。だが一夏は、首を左右に振って心配する必要は無いと刀奈に伝えた。

「既に手は打ってあります。簪に手伝ってもらって、更識のデータバンクに外部から侵入しようとしたサーバーを攻撃するプログラムを組んであります。篠ノ之束相手にどれだけ効果があるか分かりませんが、プログラムが作動さえしてくれば相手にカウン

トークラックを仕掛けられますから」

「それって、中学生が組めるプログラムなの？」

「簪も、こつち方面の方が得意ですからね。相談したら喜んで協力してくれました」

得意不得意ではなく、簪は一夏に頼まれたから手伝ったのだが、その真意は一夏には伝わっていないかった。

「じゃあとりあえずは安心して良いのね？」

「さあ？ 篠ノ之束の技術がどの程度かにもよりますし、別の方法で証拠を集めようとされたら意味がありませんし」

「そこは、嘘でも大丈夫って言うところでしょう！ せっかく安心出来ると思ったのにー」

「安心して居る場合じゃないでしょうが。そろそろモンド・グロツソが近いんですから、刀奈さんには常に緊張感を持ってもらわないと……」

「あ、簪ちゃんだ！ おーい、簪ちゃんー！」

一夏の小言が始まるのを察知した刀奈は、遠くに見つけた簪目掛けてかけ出して行った。

「やれやれ……」

「一夏さんも大変ですね」

残された一夏と虚は、あからさまな態度を見せた刀奈に苦笑いを浮かべるのだった。

篠ノ之束はどうかして一夏が隠している秘密の確証を得ようと試行錯誤していた。比較的なんでも思うように出来ていた束にとって、これが初めての苦戦かもしれない。「さすがいつくんだよ、このカウンタープログラムは解除に相当な時間が掛かるし、そんな事してる間にこっちが攻撃されちゃうし……うーん、困ったな」

東自身は一夏の秘密を全て知っているのだが、それには証拠が無い。一夏本人から事実であると確認したからといって、それを世界が信じるとは限らない。

「これだから阿呆共は嫌になっちゃうだよね……天才東さんの言う事が嘘なわけ無いだろうに……でも、有象無象に東さんの事を理解しろって言う方が無理なんだよね」

幼いころから高みに存在していた東は、その他大勢の人間を見下す傾向がある。だが、それは天才故の悩みでもあり、そんな東を初めて理解してくれたのが織斑姉弟だったのだ。

「ちーちゃんもなっちゃうも凄かったけど、いつくんはまだ幼稚園児だったのに」

天才の片鱗をその頃から見せていた一夏が、今ではIS製造におけるトップに君臨しているのだ。東としては、何としてもこの事実を世間に知らしめたいのだ。

「でも、いつくんに危害が及ぶ可能性もあるんだよね……これだから有象無象は……」

高い技術力を独占したいと考える人間の心理を、東は理解出来ない。だから一夏を狙おうと計画している人間たちの事もまた、東は理解出来ないのだった。

新しいシステム

東の事は気になってしようがないが、刀奈はその事だけに感けていられる程暇ではない。間近に迫ったモンド・グロツソに向けて、日々訓練や模擬戦などで経験を積み、更には織斑姉妹の指導を受けるなど時間がいくらあっても足りないくらいなのだ。

「やっぱり一夏君が淹れてくれたお茶が一番ね」

「……ノンビリしてる暇は無いんでは無かったですか?」

「これくらいは良いでしょ。虚ちゃんだつて寛いでるじゃないの」

「私はモンド・グロツソには関係ありませんので」

虚との模擬戦を終えた刀奈は、一夏が用意してくれていたお茶を啜りながらノンビリしていた。虚の指摘通りなのだが、刀奈としてはこれくらいの時間は許してほしいと思うほどの僅かな時間なのだ。

「それに、一夏君がメンテナンスしてるから、ISを動かさないじゃない」

「それはそうですが、ならその時間を使って対戦国のデータを見直すとか、映像データから戦略を考えると色々出来る事はありますよね?」

「もう見飽きるくらい見たわよ……そもそも、織斑姉妹と戦ってから相手のデータを見ても、大した事無さそうとか思えないわよ……」

「それは……そうかもしれないが……」

加えて刀奈は、前回モンド・グロツソ個人戦を無傷で制した碧とも模擬戦を重ねているのだ。その三人と比べれば、何処の国の誰が相手だろうと大した事無いと感じてしまうのは仕方無い事だった。

「それに一夏君と簪ちゃんが造り上げたプログラムのおかげで、仮想対戦も積んでるしね」

「バーチャル・トレーニング・システム、ですよ。お二人は本当にこういった作業が得意なんですよ……」

まだ試作段階だが、一夏と簪が造り上げたプログラムは、対戦相手を想定した訓練にはとても有効なシステムだと刀奈は感じていた。それもそのはずで、織斑姉妹の動きをほぼ完璧に再現しており、威圧感なども本物そっくりにまで仕上げてきていたのだ。

「些かチートじみていますが、これも技術力の差で論破出来ますからね」

「そうそう。一夏君がいるから日本は強い、とか思っちゃいそうだけど、私だつてちゃん

と訓練してるんだから」

「I Sを持ってない人でもI Sのトレーニングが出来るように、って開発したものらしいけど、早くもI S学園から注文が来てるらしいのよね」

「訓練機を用意出来ても、それを動かせる場所には限りがあるからでしょうね」

I S学園には複数のアリーナが存在しているが、これから三学年が揃った時に、その全員がI Sを使った訓練を何時でも出来るわけではないのだ。そこで一夏と簪が造り上げたこのシステムを導入できないか、早くも検討されているのだ。

「どこから聞き出したのかしらね、まだ発表もされて無いのに」

「責任者は碧さんですから、碧さん個人の考えではないでしょうか？ まあ、I S学園にとっても有益なものでしょうから、反対意見は上がらないでしょうがね」

「そうなるよ、I S学園の設備の殆どは一夏君が関係してる事になっちゃうわよ」

正確には更識企業が関係してると言うべきなのだろうが、事実を知っている刀奈たちにとって、更識企業の業績Ⅱ一夏の業績なのだ。だから刀奈が言うように、一夏が関係しているでも間違いではないのだ。

「大袈裟なメンテナンスを必要としない分、訓練機を使つての授業より楽かもしれない

わよね」

「ですが、そうなると教師の立場が無くなってしまいますよ」

「もちろん直接指導も必要でしょうけども、このシステムならそれなりの場所さえ確保できれば誰でもＩＳ戦闘訓練が出来るじゃない？ 怪我の恐れも無いから、教師たちも安心でしょうし」

「ですが、仮想戦闘にばかりしていますと、実践の時も無茶な動きをするかもしれませんよ。現実では怪我もしますし、最悪二度とＩＳを動かせなくなるほどのトラウマを受けるかもしれませんし……」

「その点はまだ改良中ですので」

虚があげたシステムの問題点に対する回答は、刀奈では無く一夏から返された。

「いくら仮想戦闘を積んだからといって、やはり実戦には敵いませんからね。そこら辺はちゃんと理解してもらえようように、今簪と最終調整をしているところですよ」

「だから言ったでしょ？ まだ試作段階だって」

「刀奈さんは実際に織斑姉妹や碧さんと戦った事があるから、仮想戦闘でも緊張感を持つてする事が出来ましたが、全員にその緊張感を持たせるのは難しいですからね。蛟と丙のメンテナンスは終了しましたので、訓練を再開しても構いませんよ」

一夏からメンテナンス状況が記された冊子を受け取り、刀奈と虚はそれに目を通した。

「一夏君、この新武装って言うのは？」

「刀奈さんが希望していた、水で造る圏を発生させる武装です。漸く完成しましたので、早速搭載しておきました。虚さんのは陽炎で造る幻影です。使いどころはお二人が自分で決めて下さい。そこまで俺は責任を持ってませんので」

そもそも一夏はI Sを動かせるだけで、I S戦闘は専門外なのだ。タイミングまで一夏は責任を負えない、それは刀奈も虚も分かっている事なので、二人は一夏からの注意に素直に頷いたのだ。

「それでは、俺は簪とプログラムの改良をしなければいけないので」

「うん、頑張つてね。間違つても簪ちゃんを襲ったらダメよ?」

「襲いませんよ……そもそも、美紀や本音もいるんですから……」

「いなかったら襲うのかしら?」

「だから襲いませんつてば……」

げっそりと疲れたような表情を見せた一夏に、虚は同情したような視線を送る。更識家の当主は一夏だが、虚個人の主は刀奈なので、この状況をどうにかする事は虚には出来なかつたのだつた。

第二回モンド・グロツソ開幕

第二回モンド・グロツソの開催国はドイツに決定した。前回大会覇者の織斑姉妹がいるから日本で開催しろ、という声もあったのだが、前回大会も日本で開かれたので、さすがに連続で同じ国での開催は避けるべきだ、という声が多くあった、という理由から日本以外の国で開催する事になったのだ。

『災難でしたね。現地には行きませんが、テレビで応援してますよ』

「うん。ていうか、一夏君がこっちまで来たら、また誘拐されるかもしれないでしょ？」

簪ちゃんや美紀ちゃんも同様な理由でこれないし、一夏君の護衛の本音も屋敷に残るしかないからね」

国際電話を使い、刀奈は一夏との会話を楽しむ。大会を翌日に控えた夜に、長電話をするなどと言うのは愚行に等しいのだが、時差を考えずに電話したのには、刀奈が緊張しているのだという事が良く分かる行動だ。

『初戦から開催国のドイツ代表とは、刀奈さんのくじ運は悪いとしか言いようがありません』

「そんな事言われても……完全に会場まで敵になるわよね……」

『アウエー感は否めないでしょうが、それも含めての大会です。落ち着いて、何時も通りの動きをすれば刀奈さんが勝ちますよ。碧さんといいい勝負が出来るんですから、自信もって頑張ってくださいね』

「うん、一夏君に言われるまでも無く頑張るけど……やっぱり緊張する」

一夏の励ましに、一応は強気で答えようとした刀奈だったが、やはり緊張が上回ってしまった。

『仕方ありませんね……刀奈さん、もし優勝したら、俺が出来る範囲で言う事を一つ聞きますよ』

「本当？ 何でも良いの？」

『……出来る範囲でしたら』

何やら墓穴を掘った感じがした一夏だったが、今更前言を撤回するわけにはいかない。明らかに緊張から高揚に変わった刀奈の表情に、一夏はそんな事を思っていた。

「よーし！ それじゃあいつちよ勝ちに行きますか！」

『……まだ開始時間までありますよね？ 少しは寝ておいてくださいよ？ 寝不足で負

けた、なんて言われたくは無いですよね？」

「そんな負け方したら、恥ずかしくて外を歩けないわよ……」

全世界が注目している大会だけに、恥ずかしい負け方をすれば何処に行っても指を指される事になるだろう。一夏の忠告を受け、刀奈は大人しく寝る事にした。さつきまでは気分が高揚して眠れなく、時差も気にせずに一夏に電話をしたのだが、今は何故か疲れ果ててベッドに入ってすぐ、刀奈は眠りに落ちたのだった。

いよいよモンド・グロツソが開催される時刻になり、一夏たちは大部屋のテレビの前に集まっていた。今日は休日と言う事もあって、虚も簪も美紀も本音も、子供全員がこ

の場所に集まっている。

「一夏さん、少し眠そうですが……」

「朝早くに刀奈さんから電話がありまして……向こうはまだ夜でしたがね」

「まったく、お嬢様は……」

刀奈の状況が手に取るように分かった虚は、小さくため息を吐いただけでそれ以上何も言わなかった。

「お姉ちゃんの出番は、第三試合だね」

「個人戦より先に、ペアマッチが行われるから、刀奈お姉ちゃんより先に織斑姉妹が登場するね」

「おー、鬼の織斑ペアだ〜」

どんなに戦術を凝らしても、どんなに対策を積んでも、織斑姉妹には勝つ事が出来ない。それがどの国の代表たちが口を揃えて言う、そんなところから織斑姉妹は鬼なのではないか、という噂が流れ始めたのだ。それをもじつての「鬼の織斑ペア」なのだが、一夏からしてみれば、鬼なら誰かしらが倒せるのではないかと思うところではあった。

「しかし、スゴイ観客ですね……」

「あの場所にいたら、すぐにはぐれそうですね……主に本音が」

興奮している三人よりは、いくらか冷静な態度を保っている虚の言葉に、一夏は苦笑いを浮かべた。

「あの場所にいたら、誘拐犯が混じってても気づけませんね」

「洒落になって無いですよ、一夏さん……貴方は既に一度誘拐されているんですから……」

『織斑一夏』は攫われましたが『更識一夏』は攫われてませんよ」

「同一人物ですよ……」

一夏の冗談に、虚はかなり苦い笑いを浮かべる。自虐にしては重すぎるし、冗談だとしたら笑えない部類の言葉に、それ以外の表情が出なかったのだ。

「しかし、この大会の意味はあるんでしょうか」

「……どういう意味です？」

一夏が腕を組みながらこぼした独り言に、虚が相槌を打った。

「I Sのお披露目、と言うわけでもありませんし、世代差で言えば刀奈さんがぶつちぎってます。個人の能力でも日本勢が他国を圧倒しているのはデータから分かってるでしょうし、万が一でも無い限り日本が連覇する事はどの国も分かってる事ですし」「それでも、万が一を信じて訓練を積んできたんです。戦わずして負けるのは納得出来ないのではないですかね？」

「……そもそも競技者に戦ってるつもりは無いんじゃないですかね？　むしろ技術者の方が戦ってるという感覚を持つてる気がしてならないんですが……」

「操縦者の能力差もですが、技術の差も勝敗を左右するから、ですか？」

「『あの人』以外にも更識にハッキングしようとしてる国が結構ありましたからね。もちろん、カウンタークラックで撃退しましたが」

対篠ノ之束のカウンタープログラムを、他の人間が食らえば大変な事になる。一時期ヨーロッパでデータ流用が騒がれたのはそれが原因だ。

「……本当に中学生なんですか？　一夏さんですが、簪お嬢様も……」

「あれくらい知識があれば小学生でも組めるプログラムですよ」

「ですが、その知識は簡単に吸収出来るものではありませんよね？」

虚の質問に、一夏は小さく笑うだけでなにも答えなかった。つまりはそういう事だ、と虚も納得して視線をテレビに移したのだった。

一夏の黒い考え

自分の出番より先に、織斑姉妹の試合が行われるので、刀奈は控室のモニターでその様子を観戦していた。

「やっぱりあの二人は別格中の別格ね……対戦国が可哀想に思えるくらいに……」

『それは刀奈、貴女も大して変わらないと思いますけどね』

「何でよ?」

独り言に対して蚊の返しが思ってもみなかった事だったので、刀奈は少し頬を膨らませて問いかける。

『第三世代型I.S.である私を使い、元世界最強の碧さんの指導を受け、一夏さんに最も有効だと思われる作戦を教えてもらっている貴女と戦うんです。しかも貴女はバーチャルでどの国の代表とも戦った経験がある。それは明らかに反則じみてますよ』

「一夏君の口癖じゃないけど、それも含めて実力よ。世代差や技術力の差は、操縦者より国に大きく関係してる事で、私には関係ないもの」

『……まあ、私もとやかく言うつもりは無いですが』

「そうそう。それに優勝すれば、一夏君が言う事を一つ聞いてくれるって言ってたから、私は誰にも負けるつもりは無いわよ」

『……何ともまあ、現金な事で』

呆れたのを隠そうともしない蚊の態度に、刀奈は少し不満を覚えたが、モニターに映る織斑姉妹の動きを見てそんな事を考えている余裕は無いと覚った。

「これはすぐに私の出番になるわね」

『可哀想なくらいフルボッコですね……これはさっさと引退させるべき、と各国が騒ぐのも無理は無いですね』

「この大会が終われば、そのまま引退で千冬さんと千夏さんはドイツで一年間教鞭を振ってからI・S学園の教師になる事が決定してるんだけどね」

何故ドイツかと言うと、織斑姉妹がモンド・グロツソの後で移動するのがめんどくさいと言いつつ放った結果だ。そこで各国の首脳が話し合った結果、モンド・グロツソの開催国で教鞭を振ってもらう事にしたのだ。だから開催直前まで開催国が決定しなかったのだが……

『しかし良くあの織斑姉妹を説得しましたよね。あの人たちの性格なら、もう一回くら

い大会で暴れ回るかと思っただのですが……』

「非難を浴びたくない日本政府が、裏技を使って説得したのよ」

『裏技？』

「一夏君を使つて、織斑姉妹にI S学園の教師になる事を承諾させたの。その代わりに一年間はドイツで好き放題していいって条件でね」

『指導するんですよね？』

「だから、指導内容は口を出さないから、織斑姉妹の思うように指導して良いって事よ」
『それは……何ともご愁傷様としか……』

織斑姉妹の指導を間近で見ってきた蛟としてみれば、あの姉妹が自由気ままに指導したら大半の人間は死んでしまうのではないかと思うのだ。それは刀奈も同じようで、まだ見ぬドイツのI S乗り候補たちに同情している表情を浮かべていた。

「さて、もう出番になるし、移動しなきゃね」

『刀奈は落ち着けば世界一になれるだけの実力はあります。ですので、絶対に勝ちましよう』

「当たり前よ！」

勢い良く立ち上がり、控室を後にした刀奈。程良い緊張感と、それ以上に昂る気持ちを抑えるのに苦勞しながらも、刀奈は平常心を心掛ける余裕を持っていたのだった。

織斑姉妹の試合を見て、簪と美紀はため息しか出無くなっていた。

「はー……やっぱ強いね……」

「うん……この人たちが引退するのは、日本としてはもったいないよね……」

引退の背景に一役買っている一夏は、二人がこぼした言葉に苦笑いを浮かべていた。もちろん、誰にも気づかれない事無く普段の表情を取り戻したので、誰も一夏の事を不審がる人間はいなかった。

「そんな呑気な事言つてて良いのか？ この二人の後釜の最有力候補は簪と美紀だろ」
「まだ候補生でも無いし、後釜とか言われてもね……」

「全然実感湧きませんし、本当にそうなるとも思えないですし」

「既に日本政府に二人のＩＳ適性のデータは渡してあるし、この大会が終わればおそろく、選考合宿への招待が来るだろう」

悪い笑みを浮かべながらあつさりと言い放つ一夏に、簪と美紀は揃って驚きの声を上げた。

「ほえ？ かんちゃんに美紀ちゃんはどうしたのかな？」

「急展開についてこれなかったんだろ。それより、本音はどう思う？」

「ほえ？ かんちゃんと美紀ちゃんなら、世界を取れると思うけどな」

「だそうだ。後はやる気次第だろ」

驚き固まった二人から視線を逸らし、一夏は再びテレビに焦点を合わせる。

「ドイツ代表の人、明らかに顔が引きつってるような気が……」

「事前のデータで、お嬢様の相手をするのを嫌がったんじゃないですかね？」

「あり得そうですが、敵前逃亡なんてしたら、一生笑われ者になるから仕方なく、つてと

「ころでしようか」

モンド・グロツソは国の威信をかけての大会でもある、と一部で言われている。その大会で敵前逃亡でもしようものならば、何処の国でも指を差され笑われる事になるだろう。

「ですが、ドイツは更識にハッキングを掛けて無いはずですが？」

「データ流用した国にハッキングしたんでしよう。少しくらいなら情報をくれてやろうと、簪とどうでも良いデータだけは抜きとれるように仕組んでましたし」

「……ほんと、悪い人ですね」

そのどうでも良いデータの中には、刀奈の実力の一端が分かるデータも含まれていたのだ。それを見たのであれば、ドイツ代表の選手が相手をしたがらないのにも納得がいくものだと一夏は思っていた。

「まあ、バーチャルで対策を練られてるとか、蚊の能力とかは教えてませんし、彼女が思ってる以上に完敗するでしょうね」

「一夏さん、黒過ぎますよ……」

「そうですかね？」

特に気にした様子の無い一夏に、虚はため息を吐きたくなったのだった。

実戦のプレッシャー

第一回戦、刀奈はドイツ代表と相対していた。

「(何でだろう……バーチャルの方が強く感じるんだけど)」

『緊張、委縮、恐怖、そして大歓声、実力を出せなくても仕方ないと思いますけど?』

「(うーん……大観衆の前で戦うのは、確かに緊張するけど、委縮するほどかしら?)」

『観衆に、ではなく貴女相手だという事で委縮してるのでは? それなりにデータを集めただけでも、貴女の実力には恐怖しますし』

「(どういふ事よ!)」

戦闘中だというのに、刀奈は蛟と会話をしていた。それくらい、今の相手は実力を発揮出来ていない証拠であり、一夏と簪が造り上げたプログラムは絶大な効果を発揮している証拠なのだ。

『一夏さんと簪さんが組み込んだカウンタープログラムは、まずあまり重要ではないデータをあえてハッキングさせてから発動するものです。そのあまり重要ではないデータの中には、貴女の少し前の能力データも含まれてましたから』

「つまり、貴女が更新する前のデータって事？」

『そう言う事です。一夏さんは使えるものは何でも使う主義ですし、ハッキングを仕掛けてきた国を特定するのにも、貴女のデータは良い餌でしょうしね』

「(餌って……別に釣りをした訳じゃないんでしょ?)」

『カウンタープログラムの中には、ハッキングを仕掛けた国のデータが流用するように仕組まれてましたから。更識刀奈のデータを欲した国は、自国の代表のデータを公表するはめになったんですがね』

「(何ともまあ……一夏君らしいっちゃらしいか)」

事前に訊かされていたら対戦相手や、他の国の代表に同情したかもしれないが、国が仕掛けた結果だから仕方ないと今は割り切った刀奈は、あまり時間を掛けると手の内を他の国に知られると思いい決めに入った。

「悪いけど、貴女の実力は十分しってるの！今の貴女じゃ私にダメージを与える事は不可能よ！」

あつという間に相手のSEをゼロにして、刀奈は控室へと戻っていく。その後ろ姿を、ドイツ代表はうらみがましく睨みつけていたのだが、刀奈はその事に気づかなかつ

た。

刀奈の試合を屋敷で観戦していた一夏たちは、思いのほかあっさりと終わった試合に拍子抜けしていた。

「なんか、バーチャルの方が強い気がするな」

「緊張とかしてたんだろ。バーチャルの場合は、精神面に関する項目は無視してるからな。常に全力で戦えるようにプログラムしてあるから」

「それに、本音はお姉ちゃんの専用機の能力を使って対戦してたでしょ？ お姉ちゃんの実力を使ってるんだから、本音でも勝てるって」

「そもそも、何で土竜のデータをインストールして戦わなかったんだ？」

本音は、バーチャル対戦において自分の専用機『土竜』のデータを使わずに、刀奈の専用機である『蛟』あるいは虚の専用機である『丙』のデータを使ってトレーニングを積んでいる。その事が不思議で、一夏と簪は本音に問いかけたのだ。

「だって、土竜だと色々横から口を挟んで来るんだもん。だから蛟か丙のどっちかを使ってるのだ」

「……そりゃ、実物がすぐそばにいらんだから色々口を挟んで来るだろうよ。だがな、それは土竜なりのアドバースなんだから、バーチャルでもまず土竜を使えよな……自分専用機をまともに使えるようになってから、他の機体で遊ぶなら良いが、最初から人専用機で戦うのはあまり意味が無いぞ」

「は〜」

一夏に諭されるように注意され、本音は素直に言う事を聞いた。その場だけの返事だけで無い事は、本音の表情を見ればその場の全員に分かったので、これ以上誰も本音に追い打ちを掛ける事はしなかった。

「さてと、それじゃあ俺は早速バーチャル・トレーニング・システムの改良をするかな。」

簪、手伝ってくれ」

「うん、やろう」

一夏と簪が部屋から出て行き、虚と本音と美紀の三人がテレビの前に残される。

「本音、折角ですから模擬戦でもしませんか?」

「おねーちゃん? 私じゃおねーちゃんには勝てないよ。碧さんや刀奈様といい勝負が出来るおねーちゃんと、未だに専用機からあれこれ注意される私とじゃ、模擬戦と言えども意味をなさないと思うけどな」

「そんな屁理屈を並べて逃げようとしてもダメです。一夏さんに言われたように、貴女はまず自分の専用機である土竜を完璧に近いくらいまで使いこなせるようにならないければならないのです。その為には経験あるのみ、つまり模擬戦を相当数こなすしかないのですよ」

「ほえ……美紀ちゃん、助けてよ」

それらしい理由で逃げる算段だった本音だが、虚には通じなかつたので美紀に助けを求めた。だがしかし、美紀は笑顔で手を振るだけで、本音を助けようとはしなかつたのだった。

「美紀ちゃんの薄情者〜！」

「美紀さんは本音に必要な事を理解しているだけです。貴女が理解してないのはおかしいんですけどね」

「うわ〜ん！ おね〜ちゃんが苛めるよ〜」

遠ざかる本音と虚の声を最後まで聞いて、美紀はテレビに視線を戻した。

「刀奈お姉ちゃん、凄く余裕って顔してたな……緊張してるんだらうけども、刀奈お姉ちゃんは昔から見られる事に慣れてるからかな……」

更識家の次期当主候補だった頃には、大勢の従者の前で挨拶などもしていた刀奈は、普通の中学生では考えられない程人に見られる事に慣れている。それともう一点、一夏が刀奈の緊張をほぐしたのだが、その事は美紀に知りようは無かった。

「もし私があの場合に立ったのなら……ダメだ、緊張して吐きそうになった……」

実際に立ったわけではないのに、美紀は吐き気を催してしまった。今から慣れておこう、美紀はおかしな目標を立てたのだった。

第二回モンド・グロツソ終結

圧倒的な強さで勝ち進む日本勢に、他国の代表たちは、日本の代表三人を畏怖の目で見るようになっていた。

「何だか、居心地が悪いですね、ここ」

「貴様は初めてだからな。前回大会でもこんな感じだったさ」

「己の未熟さを棚に上げて、わたしたちを恐れるとはな」

「あはは……（二人に関しては、完全に二人の方がおかしいと思うけどね）」

刀奈の場合は、一夏と簪が造り上げたトレーニングシステムのおかげで対策が練れているのだが、織斑姉妹の場合は完全に実力差でものを言わせている。

『まあ、人外と言われるだけではありませんよね』

「（一夏君や簪ちゃんも、別ベクトルで人外っぽいけどね）」

『否定できないのが良い事なのでしょうか……少なくとも、あれが世界に知られれば、一夏さんの自由は更に狭まるでしょうし』

「（あれがバレて、そこから芋づる式にドンドンと……なんて事は避けなければならない

わよ。一夏君の為にも、私たちの為にも)」

「おい、更識。お前はＩＳ学園に通うつもりなのか？ それとも高校は行かず、そのまま代表を務めるのか？」

「はい？ えつと……一応はＩＳ学園志望ですけど」

蛟と話していた所為で、織斑姉妹の会話内容が変わっていた事に気付けなかった刀奈は、少し間をおいてから答えた。

「なら我々の教え子となるわけか……国家代表だろうが、容赦はせんからな」

「むしろ、わたしたちから一夏を奪った一族だ。特別扱いしてやろうじゃないか」

「あ、あはは……謹んで、遠慮させていただきます」

千冬と千夏から一夏が離れる原因となったのは、厳密に言えば更識の所為では無く誘拐犯の所為だ。だがこの姉妹は、更識家に一夏を盗られたと認識しているのだ。

「そもそも、一夏君に言われませんでしたか？ 貴女たちの側より、更識で生活した方が安全だって」

「言われた……」

「あれはショックだったぞ……」

「あ、あれ？」

急にシヨックを受けた織斑姉妹の前に、刀奈はどう反応して良いのか悩んだ。ここで同情したのなら、この場で人生が終わっていたかもしれないと、後に刀奈は思い知らされたのだった。

「そう言えば、決勝は何処の国の代表だったか？」

「ペアマツチはイギリス、私は中国です」

「イギリスか……」

「あの飯マズの国か……」

「（それでも、貴女たちの料理よりはマシだと思いますよ……）」

「なにか言ったか？」

「い、いえ！ 何にも言ってません!!」

読心術を使われたと勘違いしそうになるくらい、織斑姉妹が刀奈に問いかけたタイミングはバツチリだった。

「とりあえず、私たちが先だな。間違っても負けるなんて事の無いようにな。日本勢の連覇が掛かっているのだから」

「わたしたちだけ連覇してもつまらないからな。貴様もどうせなら優勝したいだろ」
「そうですね。一夏君や簪ちゃん、虚ちゃんたちのサポートがあつてここまで来たんですから。どうせなら頂点に立ちたいです」

これが織斑姉妹なりの応援だと理解した刀奈は、力強く頷いた。自分より先に、織斑姉妹は連覇を確定させるだろうから、自分もそれに続けるようにと、心の中で強く願ったのだった。

第二回モンド・グロッソペアマッチ決勝は、瞬殺で織斑姉妹が無傷での連覇を達成し

た。だがこれまでの戦いでは、少しくらい対戦相手に雰囲気を楽しませる時間を与えていたのに対して、決勝では本当に瞬殺。雰囲気を楽しませる余裕なんて与えない、本気の戦いだっただけだ。

「何があつたのよ……」

『あの二人から、物凄い怒りの感情が流れ込んでくると、「暮桜」と「明樅」のコアから事情を聞きました』

「怒り？ 何に怒ってるのかしら……」

決勝前の控室では、和やかとは言えないまでもリラックスした状態だった織斑姉妹だが、刀奈の別れてから何かがあつたのだろうと推測する。だが、事情は刀奈には分からなかった。

「聞いてみましょうか」

『命知らずですね。決勝の後で良いんじゃないでしょうか？』

「……そうね」

もし織斑姉妹の怒りを浴びたら、刀奈でも耐えられるか分からない。蛟に諭されて、刀奈は決勝が行われるアリーナへと向かう事にした。

「さて、更識」

「少し時間を寄越せ」

「は、はい!？」

だが、運悪く鉢合わせしてしまった織斑姉妹に両脇を掴まれ、そのまま控室へと連行されてしまった。

「えっと……私、そろそろ試合なんですけど……」

「確か貴様の実家は情報操作もお手の物だったよな？」

「え、ええ……専門の人がいます」

「なら協力しろ。世界地図からイギリスを消し去る」

「ええ!?! 何があつたんですか、いったい……」

穏やかではない発言に、刀奈は思わず聞いてしまった。

「イギリスがIS学園や貴様の実家にハッキングを仕掛けようとしたのはしってるよな?」

「え、ええ……担当者から聞いてます（本当は一夏君から、なんだけどね）」

「そのバカ共が、『弟さんは貴女たちの許を離れて正解でしたね』だの、『貴女たちの料理

を食べさせられるなんて、可哀想でしかありませんわ」とかふざけた事をぬかしたからな。その報いを……」

「そんなデータ、更識では管理してませんけど？」

イギリスが盗んだと聞かされたデータは、一夏がわざと盗ませたデータとは一致していなかったたので、刀奈は首を傾げた。すると、織斑姉妹も不思議そうな顔をしていた。「ではなぜ、やつらはそんな事を知っていたんだ？」

「一夏が誘拐された事は有名だが、それ以降の事は知られて無いはずだろ」

「篠ノ之博士が、色々と暗躍してるみたいだと、一夏君から聞かされましたが、それが関係してるとは無いでしょうか？」

「束か……」

「今度会ったらとつちめるか」

織斑姉妹の雰囲気にてられて、刀奈は普段の実力が発揮できるか不安になってしまったが、それ以上に対戦相手が緊張していたおかげで、刀奈も無傷でモンド・グロツソを制したのだった。

必須成分

第二回モンド・グロツソも、日本勢が無傷で優勝した。前回大会を無傷で制した織斑姉妹は前評判通りだったが、刀奈はここまで強いとは思われてはいなかった。いや、優勝はするだろうとは言われていたのだが、まさか無傷でとは誰も思っていなかったのだった。

「貴様もなかなかやるな、更識」

「独自技術でＩＳ界の最先端に行く企業の娘ただけはあるな」

「そうですね……（ウチって暗部組織じゃなかったっけ？）」

刀奈が疑問を抱くのも仕方無い事だろう。本来更識家と言うのは、対暗部用暗部であり、表世界でこれ程有名になるような家では無いのだ。だが、ＩＳが誕生し、一夏が更識家で生活するようになってからと言うもの、更識家の名は、対暗部用暗部としてはなく、ＩＳ企業として世界的に有名になってしまったのだ。

「全世界が、更識の情報を欲しがっている」

「少しくらい技術を公開しないと、そのうちその技術者が狙われるぞ」

「更識にも事情がありますし、その人の名は世間には公表してませんので、誰を狙えば良いのかは分からないでしょう。もちろん、狙われる事なんて無いように、更識では従者にもかなりの訓練を積ませています」

「訓練機の全国シェアが六割を超えているからな、更識企業は。訓練を積ませるのにも困らないか」

頑として更識制を使わない国があるので、百パーセントとは行かないが、それでも半分以上は更識制の訓練機を採用している。こういった国際大会の警備用に貸し出されているＩＳも更識制のものが殆どだったりするのだ。

「もちろん、引き続き一夏君も狙われるでしょうし、護衛はしっかりと務めてもらってますので、千冬さんと千夏さんはお気になさらず、ドイツで指導してあげてください」

「くっ……一目で良いから一夏に会いたいぞ」

「わたしも千冬も、そろそろ一夏分が尽きてしまう……」

「なんですか、その成分は……」

織斑姉妹には（篠ノ之束にもあるが）普通の人間に必要なエネルギーの他に、必須な成分があった。それが「一夏分」だ。普段なら写真でも補給する事が可能だが、長い間

本物を見ていないとその成分が枯渇してしまい、写真での補給が不可能になるという恐ろしいものだ。そして、その成分が無くなると、全てのを排除してでも一夏に会いに行こうとするから性質が悪い。

「……これから一夏君にテレビ電話しますけど、それでいいなら会わせられますよ?」
「本当か!?!」

「構わん! 一夏に会えるなら何でも良い!」
「……一応本人の了承を得てからですけどね」

思いのほか食いついてきた織斑姉妹に、刀奈が引いてしまった。それくらい、今の織斑姉妹から必死さが伝わってきたのだった。

虚は今、更識企業の代表としてドイツに来ていた。理由は一夏と簪が仕掛けたカウンセラープログラムが作動する原因の説明と、それを喰らった国からの釈明を受けるためだ。

「何故、私たちなのでしょうか？」

「虚さんは文字通り更識企業の代表ですからね」

「ですが、貴方は世間から見れば普通の中学生のはずです」

「そうですね。ですが、先代楯無の息子であり、現楯無の名代を務める事になったのですから問題は無いですよ」

虚の付き添いとしてドイツにやってきたのは、一夏だった。一夏本人が言ったように、先代楯無の養子であり、現楯無が日本でどうしても外せない用事があるので、一夏に名代を言い渡したのだ。

「ですが、中学生の一夏さんが名代だと、色々とマズイのでは？」

「カウンセラープログラムを仕掛けた張本人ですし、別に問題は無いんじゃないですか？」

「……中学生にやられた、と知ったら色々問題があるとは思いますがね」

「おねくちゃんは心配し過ぎだよ。いっちーはそんな問題すら計算済みだって」

もう一人の付き添い、一夏の護衛として同行してきた本音が、無邪気に宣言する。その宣言に、一夏と虚は揃ってため息を吐いた。

「とりあえず、本音は俺や虚さんからはぐれるなよ？ ドイツで迷子になったなんて、面倒な事を起こすのだけは止めてくれ」

「分かってるよ。……ほえ？ 誰かが走ってくるよ？」

「誰だ？」

本音が指さした方向から、物凄い勢いで駆け寄ってくる女性が二人。そのさらに奥には、もう一人女性の姿が一夏には見てとれた。

「一夏ツ!!」

「……ご無沙汰しております、織斑千冬さん。千夏さん。何かご用でしょうか？」

「お前の匂いを嗅ぎつけてな！」

「更識が電話する前に気づいたから飛んで来たんだ！」

「はあ」

それほど匂うのだろうか、一夏は自分の鼻に腕を押し付けて匂いを嗅ぐ。しかし、そんなに遠くまで匂うような感じは一夏にはしなかった。

「それで、何かご用でしょうか？」

「弟に会うのに、理由が必要なのか？」

「お姉ちゃんたちは、一夏に定期的に会わないと死んでしまうんだ」

「そんなバカな……いや、この前篠ノ之博士も似たような事を言っていたような……」

興奮している二人の姉を放っておいて、一夏は遠くにいる刀奈に手を振って近くに呼び寄せた。

「まさか一夏君が本当にドイツにいるなんて……」

「更識家の用事ですよ。ハッキングした国が釈明をするからと楯無さんと呼んだんですが、何分急だったものでして。それで俺が名代として派遣されたんです」

「なるほど」

本当は一夏が楯無なので、ここに一夏がいる事が正しいのだが、その事を世間は知らないのです、そういった理由を作ったのだと刀奈には正確に伝わった。

「それじゃあ、私も一夏君たちの同行するわよ。本音だけじゃ護衛が心許ないもの」

「お願いします」

こうして、刀奈も一夏たちと行動を共にする事になり、織斑姉妹も一夏分を十分に補給し、禁断症状にならないように新しい写真を何枚も撮っていつて一夏たちと別れたのだった。

一夏の計画

各国の釈明を受けて、刀奈は呆れを通り越して苛立っていた。

「何が『ＩＳ界をもつと発展させるために、更識がひた隠しにしている事を調べようとしただけ』よ！ 完全に犯罪行為よ！」

「まあまあ、その行為の報いは、各国がもうすでに受けてますから」

「そりやそうだけどさ……それでも、あの開き直りはムカつくのよ！」

まるで非は更識にあるとでも言いたそうな各国の政治の代表たちに、刀奈は今にも食って掛りそうだったのだ。それを素早く察知した一夏と虚が「楯無にその事を伝え判断を下してもらおう」という理由でこの別室に刀奈を連れ出したのだった。

「それで？ 『楯無である一夏君』は、あいつらをどうするつもりなの？」

「そうですね……制裁金なんて貰っても意味無いですし、かといってＩＳの開発状況の提示なんてしてもらっても、非常に今更な事しか無いでしょうしね……」

「とても中学生の言葉とは思えませんね……」

「まあ一夏君だし」

国が支払う制裁金をはした金だと言い切り、各国の開発状況を見てもつまらないと切り捨てる中学生が、一夏以外にいるかと問われれば、全員が否だと答えるだろう。だが、それを言ったのが一夏だから、と言う事でここにいる全員は納得したのだった。

「さつきも言いましたが、ハッキングを仕掛けた国は既にその報いを受けていますし、今回はそれで手を打ちしましょう。これ以上恥を曝させるのは、さすがに可哀想ですよ」

流失したデータの中には、政治の代表の個人情報も多分に含まれているのだ。具体的には女性歴や歪んだ性癖など……今の地位を失ってもおかしくない程の情報も流失しているのだ、一夏が直接手を下さなくても、今回釈明に訪れた人間はそんなに遠くない未来に、今の地位を失う事になるだろう。

「じゃあ、一応制裁金を支払わせる事にしましょう。さすがに、個人だけに罰を与えるのはね」

「個人で仕掛けたのか、それとも国で仕掛けたのかは分かりませんがね。国にも罰を与えておくのが良いでしょう。じゃあそこら辺は虚さんと刀奈さんで決めて下さい。俺はもう興味もありませんので」

「さつすがいつちー。こんな大きな問題にも興味が無いなんてね」

一応この場に参加していた本音が、一夏の背後に回って一夏にくつつく。だがその前に刀奈と虚が本音の両脇を抑えて一夏から遠ざけた。

「この件は本音にも考えてもらおうから」

「一夏さんに甘える前に、貴女の意見も聞かせてもらいます」

「横暴だ〜！ 私にはそんなの分かるわけ無いの〜！」

二人に引つ張られていく本音を、一夏は手を振って見送ったのだった。

ドイツに向かった一夏に代わり、一夏の研究は簪が引き継いでいた。引き継ぐ、と大

袈裟に言っているが、ようは一夏の手伝いとして簪が資料を纏めているだけなのだが。

「やっぱり一夏さんは別格ですね。この資料なんて、私が見ても理解出来ないよ」

「まあ、美紀は専門的な知識がまだそれほど豊富じゃないからね。私もだけど」

「簪ちゃんが知識不足なら、私は知識皆無って事になっちゃうよ」

簪の手伝いをする為に研究所に来ていた美紀は、苦笑いを浮かべながら資料の整理をしていた。チラリと見ただけでは何の資料なのか理解出来ないが、何処にどう整理すればいいのかは簪が指示してくれるので、その事で頭を悩ませる事は無かった。

「そう言えば美紀も、あのシステムを使ったんだよね？ どうだった？」

「なかなか手ごわいし、テレビで見た織斑姉妹や碧さんの動きを忠実に再現、その上、パターン化されて無い動きだから、どんな攻撃が来るのか想像出来ない。実戦に近い雰囲気を経験を積める良いシステムだと思うよ」

「でも、まだ完成してない。一夏は今回のモンド・グロツソを見てもつと改良するつもりだよ」

「例えば？」

好奇心を抑えきれずに美紀は簪に問いかけた。それでも、整理の手を止めない辺りこ

の二人が真面目だという事が伺える。

「多分お姉ちゃんも感じたと思うけど、今回お姉ちゃんと対戦した全ての相手が、あのシステムで対戦した時よりも弱く感じたはず」

「それは、システムに組み込んだ際に一夏さんがより強力になるようにプログラムしたからじゃないの？」

「ううん、単純に対戦相手が緊張で実力の半分も発揮出来て無かったから」

「ああ、精神面ではどうしようもないもんね、プログラムでは」

「うん。だから一夏は相手の精神面も考慮したプログラムを組めないかと考えている」

簪の発言に、美紀は驚いた表情を浮かべた。まさかそこまで考慮してプログラムを組もうなんて考えているとは思わなかったのだろう。

「それから、ここで作動させる分には問題無いけど、バーチャルで使用出来る機体が殆ど専用機なのも問題。こっちの特性を知られちゃうからね」

「まあ、更識で使う場合の殆どが、専用機に慣れる為という目的があるからね」

「本音みたいに、自分の専用機以外で遊んでる場合もあるけどね」

そこで二人は揃って苦笑いを浮かべた。

「I S 学園に導入する際には、使用者が選べる機体は打鉄がラファール、専用機持ちの場合はその機体をインストール出来るようにする、って一夏は言ってた」

「なるほど。でも、インストールしたら他の人も使えるんじゃない？」

「パスワードを設定するみたい。他の人に使わせないように、指紋認識装置も付けるとか考えてるっぽいけど」

「そこまで行くと、最早やり過ぎと思うけどね」

「でも、I S は個人の能力もだけど性能の能力も大きく戦況を左右するから。特性を知られないためにも、これくらいは必要だって言ってたよ」

「まあ、専用機を他人が動かしたら色々知られちゃうもんね。情報が開示されていない隠し武装とか」

お喋りしながら整理を終えた二人は、候補生選考会に備えて一夏が開発を続けているバーチャル・トレーニング・システムを起動し、I S の動きを研究するのだった。

マスコミの対応

IS学園で指導している碧に、一夏から暗号メールが届いた。普段は何気ない内容のメールも来るのだが、こういった暗号メールの時は一夏からでは無く『楯無』からのメールだという事だ。

「相変わらず大変なんですね、一夏さんは……」

暗号を読み解き、内容を理解した碧はそんな事を呟いた。メールの内容はハッキングに対する各国の言い訳と、それに対する制裁の内容が書き記されていた。

『これは、暗号メールにする意味があったのでしょうか？』

「更識だけの事情じゃないけど、罰を決めたのは更識だからね。他の人に見られる可能性だつてゼロじゃないんだし、一応は伏せておくべき事だからね」

『しかし、随分と罰が軽いような気がします』

「先に一夏さんと簪ちゃんが組み上げたプログラムで情報流失を起こしてるからだつて書いてあるけどね」

『首脳たちはとりあえず更迭されるでしょうね。あんな趣味を露呈したんですから』

今各国の首脳の色々な趣味を取り上げてジャーナリストたちが騒いでいるのだ。モンド・グロツソが開幕してる間は大人しくしていたが、それも終わったので再び熱を帯びる事間違いなしだと木霊は思っていた。

『マスコミは民間人の代弁者だ、とか騒いでますが、ようは自分たちが騒いで楽しみたいだけでしょくに』

「意外と辛辣ね……そもそも、何処からそんな情報を得てるのよ……」

『本音ちゃんの専用機、土竜からコアネットワークを通じて情報を得てるのです。本音ちゃんは護衛としてドイツに行ってるようですし、情報には事欠かないです』

「仕事しなさいよね、本音ちゃん……まあ、今は虚さんや刀奈ちゃんと一緒にいたいだし、一夏さんに万が一があってもすぐに対応出来る状況なんだろうけどね」

メールからその事も知らされている碧は、木霊が本音の状況をバラしてもすぐに納得した。だが、一夏の護衛はそんな生半可は覚悟で務まるものではないという事は、誰を差し置いても碧が一番知っている事でもあった。

「今は篠ノ之箒もいないけど、一夏さんの周りには危険が付きまとってるのに……」

『あの時よりも、一夏さん自身も強くなってますし、なにより虚さんと刀奈さんが一緒に

いるんですから、さすがに一夏さんを狙おうとする輩もいませんよ」
「そうだと良いんだけどね……」

日本代表である刀奈と、更識企業の代表である虚のIS操縦技術は、他国の代表より二枚も三枚も上手である事は碧も理解している。だが、何事も油断は禁物であるという事も、碧は忘れていなかったのだった。

制裁金の話も終え、一夏は用意された部屋で寛いでいた。楯無に用意されていた部屋なので、一夏には結構豪華な感じがしていたのだった。

「さすがに更識のトップを招くのに、そこら辺の部屋を用意するわけにはいかなかった

のか」

「何を呑気な事を言ってるのよ、一夏君。こんなに広い部屋に一人でいたら、どうぞ襲ってくださいと言ってるようなものよ」

「……別に襲われる心配は無いと思いますけど。それこそ、楯無さんが来ていて、そんな事が起こったらドイツ政府は顔面蒼白で済みませんよ?」

「他国の要人を自国で襲わせた、なんて噂が飛び交うでしょうね」

ただでさえマスコミの報道は日に日に過熱しているのだ。モンド・グロツソという枷が無くなった今、新たな燃料を投下する事は何処の国も避けたはずだ。だから刀奈の心配は考え過ぎなのだが、一夏の事情を全て知っている刀奈にとっては、考え過ぎなどと思えないのだ。

「それに、どうやら本音や虚さんも同じ部屋らしいですし、もう一人くらい余裕がありませんから、刀奈さんも一緒にどうですか?」

「泊まる! 一夏君と同じ部屋だもの!」

「……即答ですね」

広さ的にも問題無く、一夏とも別のベッドなので倫理的にも問題は無い。これが尊

だったらすすがに遠慮しただろうが、一夏と同部屋と言う事なので本音も虚も既に了承済みなのだ。

「それにしても、あの程度の罰で本当に良かったのでしょうか？　これから先、同じような事が起こってもこの程度で済むとか思われるのでは？」

「国としてはそうでしょうが、その都度首脳を変えなければならぬ事を考えれば、少しは自重するんじゃないですかね？　選挙だつてタダで出来るわけじゃないんですし」

「殆ど税金でしょ？」

「だからですよ。余計な事をして制裁金を払わされ、その上選挙で税金が使われたらその国の国民たちは黙ってませんよ」

「確かに……暴動でも起きそうな感じがするわね」

制裁金も、突き詰めれば税金から出されるのだ。国の威信を掛けた大会に勝とうとして余計な事をした政府に、国民たちが不信感を抱いても何も不思議ではない。その上あつさりと敗北したのだからなおさらだろう。

「これで少しは平和になれば良いんですが……」

「一夏君の場合は、簪ちゃん和美紀ちゃんの専用機問題があるから、当分は平和にならないんじゃない？」

「……その事は別に問題じゃないが、I S学園からの要請が面倒だ」

「例のバーチャル戦闘の事ですよ？ まだ調整がつかないんですか？」

「明日くらいには終わる予定だったんだが、国が余計な事をしてくれたから……」

「あはは……中学生のセリフじゃないわね、それ」

一夏のごぼした言葉に、刀奈は乾いた笑い声で返した。ちなみに、この場に本音もいるのだが、話が難し過ぎてそうそうにベッドに倒れ込み、そのまま寝てしまっていた。だった。

「とりあえず、明日日本に帰って速攻で終わらせますよ」

「私も、微力ながらお手伝いしますよ」

「わ、私も！ 私も手伝う！」

張りあうように手伝いを申し出た二人に、一夏は笑みを返し頷いたのだった。

織斑姉妹の指導

色々話を纏めた刀奈は、一夏と同室で休むことにした。

「やっぱりみんなで一緒が一番よね〜」

「良いんですか？ 国家代表には専用の部屋が用意されているはずですが」

「良いのよ。あんな場所、四六時中監視されてる気分なもの」

「監視、ですか？」

不穏な単語が出てきたため、虚が首を傾げる。刀奈の護衛としての任も一応続けている虚にとって、主を狙う危険に注意を払うのも仕事だった。

「本当に監視されているわけじゃ無く、好奇の目で見られてる感じがするのよ、あの場所
は」

「なるほど、そう言う事でしたか」

「……三人、いや、四人ですね」

「何が？」

扉を睨みつけながら呟いた一夏の言葉に、刀奈が首を傾げた。

「来客が、ですよ。穩便に済めばいいんですがね」

『失礼、更識一夏さんの部屋はこちらでしょうか?』

「そうですが、貴女たちは?」

『イギリス政府を代表して来ました。入れていただいてもよろしいでしょうか?』

一夏は視線で虚と刀奈に問いかけた。その視線に答え、虚も刀奈も頷いて見せた。

「どうぞ」

一夏が扉を開けると、そこには武装した女性が四人立っていた。明らかに穩便に済ませるつもりはなさそうだった。

「やれやれ……何が目的なんですか? イギリスという国を本当に消滅させたいんですしたらそう言ってくればいいものを。刀奈さん、織斑姉妹の番号、知ってますよね?」

「うん、一応は……でも、何で織斑姉妹?」

「俺が襲われそうになった、とすれば、あの二人はイギリス政府の人間を全員、関係したかしてないかなんて気にしないで屠りますから」

一夏のこの言葉に、武装した四人のイギリス女性がたじろぐ。冗談に聞こえない一夏の声音に、さすがに危機感を覚えたのだろう。

「では、本当に穏便に済ませるつもりなのでしたら、今すぐイギリス政府に伝えて下さい。こちらは、別に喧嘩するつもりなどない、と」

武力では無く雰囲気で相手を圧倒した一夏の交渉に、女性たちはただ頷いて部屋から出て行くしか無かった。

「……怖かった」

「ん？ 一夏君でも怖いなんて思うのね」

気配が完全に遠ざかってから、一夏は全身の力が抜けたようにその場に座り込んだ。

「あのですね……俺は普通の人間です。銃で撃たれば死にますし、ナイフで切りつけられたら痛いんですから」

「それはみんなよ……でもまあ、さすがは一夏君。口先だけで相手を撃退なんてね」

「それだけ『織斑』という単語の威力がスゴイんでしょうね……」

「ところで、イギリス政府の人たちは、どうやってこの場所を知ったんでしょうか？ こ

こを用意してくれたのはドイツ政府のはずですが」

虚の疑問に、一夏が苦笑いを浮かべながら答えた。

「大方、イギリス政府がドイツ政府から聞きだしたんでしょうよ。上手くいけば自国の制裁金もチャラに出来る、とか何とか考えて」

「腐ってるわね……」

「本当はどうかは知りません。ですが、イギリス政府には抗議の文書を送っておきましょう」

当主モードになった一夏に、虚と刀奈は顔を見合わせて笑いだしたのだった。

モンド・グロツソも終わり、織斑姉妹は代表引退を表明し、ドイツ軍を指導する事となった。

「本日より、貴様らを鍛える事になった織斑千冬だ」

「同じく織斑千夏だ」

「これから我々が言う事に対して貴様らが発して良い事は『YES』か『ハイ』のどちらかだ」

「間違っても『NO』や『イエ』の類の言葉を発しないように。間違つて殺してしまうかもしれないから」

あまりにも独裁的な挨拶だったが、ドイツ軍所属の誰もが織斑姉妹の言葉に肯定の返事をした。

「よろしい。ではまず最初に体力づくりからだ」

「この重りを背負って十キロ走れ」

「「ハイ！」」

憧憬の眼差しを向けてくるドイツ軍の兵士たちに、織斑姉妹は本気で指導する事に決

めた。元々あまりやる気の無い仕事だったのだが、これだけまともに自分たちの教えを吸収しようとして来るとは思つて無かつたのだ。

「千冬、これは次のモンド・グロツソはドイツが持つていくかもしれないな」

「まだ分からんだろ。私たちの後釜は、あの更識から選出されるのが濃厚らしいからな」
「更識か……一夏に会いたいぞ」

「それは私もだ……」

つい先ほど、と言つても差し支えない程度前に、一夏に会つたはずなのにもうこれだ。織斑姉妹にとつて一夏は最愛の弟であり、必須成分を補給する為に必要不可欠な存在だ。という事が良く分かる。

「しかし、一年もドイツで生活しなければならぬとは……」

「ストレスが溜まつて一人や二人殺してしまふかもしれないな」

織斑姉妹が誰かに聞かせるでもなく呟いた言葉に、答えが返つて来た。

「別に殺しても構いませんよ」

「どういう事だ？」

「貴女たちが指導しているやつらは試験管ベビーと言つて、誰かに祝福されてこの世に

誕生したわけではない子供たちです。一人や二人死んだところで、我々は痛くも痒くもありませんので」

そう話すのはドイツ政府の上層部の人間。千冬や千夏にはこの男がどれほど偉いかも、どれだけ凄いかも関係無い。ただたんに嫌悪感を抱いただけだった。

「それから、これはお二人に関係する事ですが」

「なんだ？」

「先ほど、弟の更識一夏さんを襲うとして返り打ちにされた国がごいます」

「ほう、何処だ」

「イギリスです」

ドイツ政府の男は、織斑姉妹にイギリスを無きものにしてほしいとの狙いが見え見えだった。だからではないが、織斑姉妹はすぐにイギリスを潰しには動かなかった。

「まあ、一夏がどうにかするだろう」

「わたしたちは、IS産業から遅れ、IS学園に勉強しに来るであろうイギリス代表をいたぶればいいんだな」

「お好きにどうぞ」

思惑とは違うが、イギリスを痛めつけてくれるとの事で、ドイツ政府の男は満足顔でこの場を後にしたのだった。

差出人不明メール

IS学園の教師とは、殆どが元代表か元代表候補生、と言うわけではない。普通教科の担当をする教師や、IS素人の教師も結構存在している。そんな中で、元日本代表にして世界最強の称号を手にした碧は、教師からも生徒からも羨望の眼差しを受けていた。

「何だかやりにくいわね……」

『いい加減慣れたらどうです？　もう半年はこの視線の中で生活してるのですから』

「そんな事言っても……」

長期休暇以外は、生徒も教師も気軽に学園の外へ出る事は出来ない。碧も敷地内にある教員用宿舎に寝泊まりする事が多くなっている。

「一夏さんからの報告では、各国の首脳たちが自分たちの非を認め、更識及びIS学園に罰金を支払う事になったようですが……どうやったら中学生の一夏さんが国の首脳たちを言いくるめたのでしょうか？」

『一夏さんは普通の中学生では無いですからね。それよりも碧、来客のようですよ』

木霊がそう言った直後、来客を告げるチャイムが鳴り響いた。碧は立ち上がり扉を開けて来客を確認する。

「はい、どちら様……つて、なんだ。真耶と……どちら様？」

来客の一人は、元日本代表候補生にして、碧の後輩である山田真耶だった。だが、もう一人の来客は、碧の知らない女性だった。

「やっぱり碧さんはご存知なかったんですね。一応I S学園の教員で、私と一緒に元代表候補生なんですけど」

「そうだったの？ ゴメンなさいね、更識の方でも忙しくて、私教員の殆どを知らないのよ。候補生も、あまり交流無かったし」

「そうですね。小鳥遊さんは私たちの憧れでしたが、小鳥遊さんは私たちの事はあまりご存知ないですよ。織斑姉妹もおそらく、指導した私の事を覚えて無いでしょうし」

「そもそも私はすぐ代表を辞めたから。それで、貴女は？」

自分がまだ名乗って無かった事を思い出し、女性は慌てて一礼をした。

「申しおくれました！ 私、元日本代表候補生にしてI S学園教師の五月七日紫陽花と
言いますー！」

「つゆりさん？ どういう字を書くのかしら？」

耳馴染みの無い苗字に、碧は思わず首を傾げた。

「五月七日と書いて、つゆりと読みます」

「そうなの。私の知り合いに四月一日さんって人がいるから、覚えるのは楽そうね」

「そうなんですか。珍しい苗字なので、絶対一回は漢字はどう書くのか聞かれるん
ですよね」

「ごめんね、その絶対を私もやっちゃって……」

落ち込んだ碧に、紫陽花は慌てて両手を左右に振った。

「良いんですよ。一度も聞かずに理解出来る人なんて、滅多に存在しませんから」

「おそらくだけど、私の知り合いの男の子は一回も聞かないで理解するかもしれないわ
ね」

「そうなんですか？」

碧が思い浮かべた男の子が誰の事なのか、紫陽花にも真耶にも理解出来なかった。

「それで、何か用事だったんでしょ？」

「はい。学園宛にこんな悪戯メールがあつたのでご報告に」

「悪戯メール？ なになに……『とある男の子がISを動かす事に成功した。数年後、IS学園に入学させるべし』……差出人は？」

「不明です。いくら調べようとしても不可能でした」

「そう……更識に報告して、事実関係と差出人を調べさせておくわね」

「お願いします」

真耶は碧に報告した事で肩の荷を下ろした様子だったが、碧は重たいものを背負わされた気分陥つたのだった。

テロ未遂も無事解決し、刀奈は一夏たちと同じ更識のプライベートジェットで日本へ帰国していた。

「やっぱり更識の屋敷が一番落ち着くわねー」

「あんまりだらだらされても困るんですが……」

夏休みも残りわずかと言う事で、刀奈は残された夏を満喫していた。

「失礼、碧さんからだ」

刀奈の隣で呆れていた一夏に、碧から通信が入る。

「何かありましたか？」

『「IS学園に差出人不明のメールがありました……内容はISを動かせる男子が存在するというものでした」』

「……篠ノ之博士でしょうね」

一夏がISを動かせる事を知っているのは、更識関係者を除けば篠ノ之束ただ一人

だ。一夏は何処にいるか分からないあのうき耳マッドに鋭い視線を向けた。

『それともう一つ、一夏さんに聞きたいんですけど』

「なんです？ まだ問題があるんですか？」

『いえ、そうでは無く……一夏さんはつゆりさんという苗字が、どんな漢字を書くかご存知ですか？』

「つゆり？ 栗の花が落ちると書いてつゆりの方ですか？ それとも、五月七日と書いてつゆりの方ですか？」

『後者です。ていうか、そんな字もあるんですね』

一夏が先に言った方を知らなかった碧が、しきりに頷いていた。

「それで、その五月七日さんが何か？」

『いえ、I S 学園の教師で、元日本代表候補生の子に、そんな苗字の子がいたので』
「それは元代表候補生の五月七日紫陽花さんの事？」

一夏の隣で話を聞いていた刀奈が口を挿んだ。彼女はつい最近まで候補生であり、刀奈とも面識があったのだ。

『うん、そうです。やっぱり刀奈ちゃんは面識があったのね』

「だって戦いましたし。結構強かったと記憶してますが、まさか真耶さんに負けるとは思ってませんでした」

『真耶もアレで実力者だからね。それじゃあ、一応時間をおいてから差出人は篠ノ之博士だという事を報告しておきます』

「そうしてください。そして、そのような事実は確認出来なかったとも『分かりました』」

一夏から短く命令を受け、碧は了解の返事をして通信を切った。

「まだ知られるわけにはいかないんだが……何を考えてるんだ、あの人は」

「多分、何も考えて無いよ」

刀奈がこぼした言葉に、一夏は頷いてしまった。記憶は無いが、何度か顔を合わせた結果篠ノ之束という人物像を何となく理解してしまっているのだった。

「通信手段が無いからな……釘も刺せない」

虚空に呟いた一夏の言葉は、風に乗ってかき消された。

タイムリミット

IS学園に差出人不明のメールが届いてから数日、再び同じようなメールがIS学園に届いた。

「碧さん、またあのメールです」

「また？ 今度はなんて書いてあるの？」

「えつとですね……『織斑一夏はISを動かす事が出来る』ですって」

「ふーん……今度は名前を出して来たんだ……でも、織斑一夏はもう存在してないはずよ。既に更識家と養子縁組してるんだから」

一夏の事を旧姓で呼ぶのはただ一人。だが碧はその人と親しい間柄では無いので、何故このような事をするのか理解に苦しんだ。

「一度検査の為に、その一夏君をIS学園に呼べないんですか？」

「前に一夏さんに確認した時も、ISを動かす事は出来ないと言ってるんだから、呼んだって来ないわよ」

「そうですか……ん？ 織斑って、千冬さんと千夏さんの関係者ですか？」

「あれ？ 真耶は知らなかったんだっけ」

「何をです？」

キョトンとする真耶を見て、碧はあの事件は世間ではもう忘れられているのかと理解した。

「千冬さんと千夏さんの弟である一夏さんは、白騎士事件のすぐ後に誘拐され、そして記憶を失ったのよ。それを救出したのが更識家。それで今は一夏さんは更識姓を名乗っているの」

「そうだったんですか……でも、千冬さんと千夏さんの関係者なら、男の子でもI Sを使えそうですねー」

無邪気に言い放つ真耶に、碧は内心ドキドキしていた。実際、一夏はI Sを動かす事も、一から造り出す事も出来るのだ。その事を知られば、一夏に自由は無くなってしまうのだから。

「差出人は、更識家でも特定出来なかったんですよね？」

「え、ええ……そう報告を受けているけど」

「もし一夏君が本当にI Sを動かせるのだとしたら、それを隠そうとするのでは？」

「真耶は更識が嘘を吐いていると言いたいのかしら?」

「そ、そんな意図はありませんよ!」でも、一夏君がISを動かせるのなら、世間に知られると半強制的にIS学園へと進学させられるじゃないですか……その一夏君が今何歳なのかは知りませんが」

「一夏さんは今年中学生になったばかりよ。今は更識でISの資料とかを纏める仕事を手伝っているの」

事実を言うわけにはいかないので、碧はそれっぽく嘘で真耶をやり過ぎす事にした。「そうなんですか。じゃあISの開発にも携わってるんですか?」

「それは更識企業のシークレットよ。開発に携わってる人間は、誰一人公表出来ないわ。企業代表である虚さんと、企業のトップである楯無様以外は」

「ガード固いですよねー、更識企業は」

「そうね（言えない）。そのガードは全て一夏さんを守る為だなんて……」

一人で内心焦りを覚えながら、碧は篠ノ之束からのメールを削除したのだった。

夏休みも終わり、中学に登校していた一夏の前に、うさ耳が現れた。一夏の隣にいた簪、本音、美紀は首を傾げたが、一夏だけはそのうさ耳に近づき、そして側に落ちていた小石を近くの繁みに投げ込んだ。

「いたーい！ 何でここにいて分かったの？」

「あからさま過ぎます。それで、何の用ですか、篠ノ之博士？」

「篠ノ之博士ッ!?」

「ほえ。テレビで見るより美人さんだ」

一人ずつれた感想を述べる本音を他所に、束は一夏に近づき、そして簪と美紀に視線を向けた。

「こいつらが、ちーちゃんとなっちゃんの後釜候補？ 何だかぱっとしないね〜」

「バーチャルですが、既に他国の代表に訓練機で勝てるくらいにはなってますよ」

「でも、それはあくまでも仮想世界での話でしょ？ 実際にISを纏って、あの空気の中

でどれだけ戦えるかが問題だよ〜？」

「……それはそうと、何故あのようなメールをIS学園に送り続けているのでしょうか？

貴女は当分は黙っていると云ったはずですよね？」

簪と美紀の実力についての口論をしに来たわけではないと分かっている一夏は、さつさと本題に入れと束を睨みつけ、強引に話題を変えた。

「いっくんは強引だなく。まっ、それが良いんだけど。それじゃあ本題だけど、束さんはいっくんに世界を創り変えて欲しいって思ってるんだ〜。だからいっくんの秘密を世界に発信しようとしただけだよ」

「俺は別に今の世界に興味はありません。創り変えたいとも思いませんし、かといって住み難いとも思ってます。まったくの無関心です」

「いっくんはそうだろうね〜。自分の周りを守れば、それで良いんだろうけど、いずれ更識家は危険に曝される。いっくんがひたすら隠している事を暴こうと、実力行使に出る国も少なくないと思うよ」

「……………」

既に一度、ドイツにてイギリス国家にテロまがいな事をされている一夏は、無言で東を見つめる。ただその目は、自信無さげな雰囲気ではなく、東が何をしたいと考えているのかを見透かそうとする雰囲気だった。

「いっくんがまだその時期じゃないって考えてるのは分かっているつもり。でも、遅ければ遅いほど、いっくんの大事な場所や人が傷つく可能性が高くなる。だから東さんは動いたんだよ」

「そうですね……貴女は織斑姉妹とは違い、純粋に『私』の事を案じてくれているんですね」

「別にいっくん以外がどうなろうと東さんには関係ないけど、それがいっくんが悲しむ結果に繋がるのは東さんも不本意だからね」

「分かりました。屋敷に戻り次第、発表の時期を話しあいますので、貴女はもうしばらく大人しくしててください」

「ん〜どうしよつかなく?」

「……何が望みです?」

報酬を求めていると、一夏は東の行動から理解し、そして訊ねた。

「キスが良いけど、ハグで妥協してあげよう！」

「……仕方ないですね」

「カムカム……ッ!？」

「これはおまけです」

東を抱きしめ、おまけとしてほつぺたにキスをする一夏。望み以上の報酬を受け取った東は、満足顔でこの場から消え去った。

「さて……いよいよ時間が無くなった来たのか……」

何時までも隠し通せるとは一夏も思っただけで、やれやれと首を振りながら、背後の視線に気づかないふりをして学校に向かうのだった。

一夏の決意

IS学園で仕事をしてきた碧に、更識家から至急戻ってくるようにメールが届いた。基本的にはIS学園の教師は教員宿舎で寝泊まりするのだが、碧は更識の人間——IS学園の最大のスポンサーの家の人間だ。その更識家が『至急』と言っているのを、学園側は止める事は出来なかった。

「それじゃあ五月七日さん、もし明日までに私が帰ってこれなかったら代わりをお願いね」

「分かりました！ それでは小鳥遊先生、行ってらっしゃいませ！」

自分の代わりを五月七日に任せ、碧は更識家へと向かった。移動手段は更識家から遣わされた車なので、それほど時間は掛らないだろうと思っていた。

「しかし、至急なんて珍しいですよ。普通なら週末にでも帰ってこいって言われるのに……」

『何かあったんでしょう。一夏さんも色々大変なお人ですから』

「例のメール、日本政府や諸外国にも送られてるそうよ。今はもう送られてきて無いよ

うだけど」

『一夏さんが対処したのでは？　一夏さんなら篠ノ之博士に会う事も可能でしょうし』

あのメールの差出人が篠ノ之東である事は、更識家——一夏を通じて碧も知っている。だが、目的までは碧には理解出来なかった。

「その辺りの事を詳しく話し合ったのかしら？　それでも、至急つて言うほど差し迫った事では無いと思うんだけどな……」

『考えても結論は出ませんし、屋敷に帰れば分かる事です。何時までも分からない事で頭を悩ませるのは得策ではありませんよ』

「そうだけどき……木霊は気にならないわけ？」

『そうですね……最悪私はコア・ネットワークから情報を得る事が出来ますので』

「ズルイっ!？」

しかし木霊も、コア・ネットワークを使ってその事を知ろうとはしなかった。別に急いで知ろうとしなかったわけでは無く、本能的に知ってはいけなさと感じていたのだった。ISに本能というものがあるかどうかは別にして……

『しかし、IS学園だけなら対処は簡単でしょうけども、日本政府及び諸外国にも一夏さ

んの情報が流されたとなると、対処するのは一筋縄ではいかないでしょうね」

「そうなのよね……あの情報を鵜呑みにして、更識家に襲い掛かってくる輩もいるかもしれないし……」

『そうなることやはり、一夏さんには専用機を持たせた方が安全ですし、護衛も本音さん一人では無くなるでしょう。建前など放り出して、美紀さんや簪さんにも専用機を持たせる事になるかもしれません』

「それで呼びだされたのかしら……更識関係者として、初代世界最強として」

『どうでしょう？ 碧も危険に曝される可能性があるから、私のバージョンアップをするのではないのでしょうか？』

「まあ、もうじき着くんだし、説明は一夏さんがしてくれるでしょうしね」

木霊と話している間に結構な時間が経っていて、更識家はすぐそこだった。碧は覚悟を決める為に、目を瞑り精神を落ち着かせたのだった。

更識家の中心、大広間には刀奈以下簪、虚、本音、美紀と更識関係者の子供も集められていた。そこへ碧が足を踏み入れた時、全員の視線を浴びたのだった。

「えつと……小鳥遊碧、I S学園より戻りました」

「ご苦労様です。わざわざ呼び付けて申し訳ありません」

「い、いえ……それで一夏さん——楯無様、この度は何故私まで呼び付けられたのでしょうか？」

碧は一度「一夏」と呼び、すぐに今は「楯無」としてこの場所にいるのだと理解して呼び直した。

「簡単な事です。私の秘密が——一つですが世間に噂として出回っている事は知っていますね？」

「はい。最初にその秘密の暴露メールが送られてきたのはI S学園ですのよ」

「そうでしたね。そこで、秘密を全て暴かれるのは拙いと判断し、私がI Sを動かせる事

のみを世間に公開する事となりました。つきましては、皆さんに危害が及ぶ可能性を考慮しまして、貴女を呼びもどして木霊の改良を行う事になりました。学園側も既に承知です」

「……そんな事、一言も言ってくれなかったんですけど」
「学長にはくれぐれも内密に、と念を押しましたので。本人である碧さんにも言わなかったでしょう」

人の悪い笑みを浮かべている一夏に、碧はため息を吐きたくなつたが、場所を思い出して何とか踏みとどまった。

「国家代表である刀奈さん、更識企業の企業代表を務めてくれている虚さん、そして私の護衛として専用機を有している本音、この三人は自己である程度は身を守る事が可能でしょう。しかし、簪と美紀はISを有していない。候補生として取り立てたいと言われていますが、まだ正式には決まっていますね」

一夏が何を言いたそうとしているのか、当事者である簪と美紀——だけでは無くこの場にいる全員が興味を示している。唯一の例外は、既に一夏からその内容を聞かされている尊だ。

「もう何となく分かっているとは思いますが、私の護衛として簪と美紀を採用する事になります。そのついでと言つては二人に失礼ですが、専用機を私が用意する事になります」

「えつと……代表候補生としてもだけど、一夏君の護衛として簪ちゃんと美紀ちゃんを採用するって事？」

「そう理解してくれて構いません。ISを使える事を公表する以上、私も自分の専用機を造るつもりです。ですが、皆さん知つての通り、私の運動能力は平均的。自己防衛にしてもISだけでは心許ないのです。そして、本音はあんな感じですし……」

「ほえ〜?」

一同の視線を一齐に浴びた本音だが、何時ものペースを崩す事無く首を傾げた。

「日本政府からは了承を得ています。候補生に採用する事も、邪魔するわけではありませんのでね」

「つまり、更識所属の専用機が三機増えるという事ですか?」

「そうですね。あくまでも更識家が製造したという事になります。私がISのコアを――
――ISを一から一人で造れる事は、まだ知られていませんのでね」

一夏の言葉に、更識の重鎮たちが一斉に頷いた。即ち、更識家としても、今回の事を
実行する事が可決されたのだった。

三人の専用機

三人の専用機を造る為に、一夏は夏休み明け早々中学を休むことにした。さすがに何日も続けて休めないのです、土日を利用して四日で専用機を完成させる予定だと聞かされた簪と美紀は、揃って一夏の身体を心配した。

「大丈夫なの？ 一夏、体力は平均かちよつと高いくらいでしょ？」

「あんまり無理しては、元も子もないですよ」

「分かってる。だが、あの人が忠告しに来たように、あんまり時間は残されて無いんだ。全部暴かれる前に、自分から秘密の一つを公表した方が安全だというのは的を射ていると思う」

I Sが動かせる、その事も世間に知られたら大問題だとは思いますが、残る秘密である、I Sのコアを造れると、更識家の当主権無である事の方が、世間に知られたら起こるであろう事態は深刻だと一夏も判断したのだ。

「幸い、簪と美紀のデータはバーチャル・トレーニング・システムで取れてるし、自分の専用機はその都度調整できるから問題は無い」

「問題無いと思ってるのは一夏だけだつて……土日は私たちも手伝うから」

「簪ちゃん程じゃないですけど、私だつて手伝えますよ」

「この前はバーチャル・トレーニング・システムを完成させる為に虚さんと刀奈さんが手伝ってくれたし、今度は二人に頼むとするか。本音は当てにならないし」

一夏の護衛であるはずの本音だが、今も何処かで遊んでいるのだ。一夏が本音の事を当てにしなくても仕方ないだろう。

「お姉ちゃんは候補生選考合宿の準備で忙しそうだし、虚さんも発表に向けての準備で忙しいからね。私たちが手伝うしかないんだよ」

「簪ちゃん、何となく刀奈お姉ちゃんつぼかったよ、今の」

「そうかな?」

簪と美紀がお喋りをしている隣で、一夏は物凄い勢いでデータを打ち込んでいた。

「簪は中遠距離、美紀は近距離主体の戦い方だな」

「私は近距離でも大丈夫なんだけど、美紀が遠距離を苦手にしてるんだよ」

「どうしても距離があると攻撃を当てられなくて……」

「ペア候補なんだから、それで問題は無いだろうけど、苦手はなるべく克服しておいた方

が良いぞ。一応美紀の機体にも中距離武器は積むんだから、使えるところまでは行かなくても、苦手では無くしておいた方が良い」

「はい、頑張ります……」

自分のデータから苦手をハッキリと見抜かれた美紀は、少し肩を落としてそう返事をした。

「美紀は今からバーチャルで遠距離の練習をしてくるといい。そのデータも反映するから」

「分かりました。しかし、今は本音ちゃんが遊んでるはずですが……」

「当主からの命令って言えば、本音も諦めるだろ」

「強権発動……」

屋敷内では、一夏が楯無である事は前から知られている事なので、一夏の命令は当主の命令とイコールである事も全員が理解している。つまり本音もそれくらいは理解出来るという事なのだ。

「簪はこっちのデータを打ち込んでおいてくれ。その間に俺は専用機の外装を組み立て始める」

「分かった。……それで一夏、専用機の名前は考えてるの?」

「簪こうびやつこのが光白狐美紀きんきゆうびのが金九尾やみからすそして俺やみからすのが闇鴉だ。ちなみに、光白狐と金九尾は姉妹機だからな」

「三大妖怪、九尾狐?」

「さすが簪、良く知ってる」

データを打ち込みながら問いかけた簪に、一夏は頷いて返事をした。その間、簪の手も一夏の手も止まっていないのはさすがとしか言いようが無かっただろう。

「お姉ちゃんやみからすと虚さんの専用機は互いが弱点になってるけど、私と美紀の機体は二機揃って力を発揮するって感じなの?」

「別に個々でも力は発揮できるが、ペアを組むと考えて造るからな。相性はいいだろう」
「や」

「一夏って、何時からこんな事考えてたの? 今考えたわけじゃないんでしょ?」

「この前、篠ノ之博士に会ってから考えてた。元々簪と美紀の機体は造る予定だったが、俺のはさすがに考えて無かったからな」

「でも、自己防衛の為なら仕方ないでしょ」

いくら護衛を増やそうと、一夏を狙えばそれが一番簡単に世界を変えられる手段には変わらない。そして一夏は、頭脳こそ人並み外れたものを持っているが、戦闘力や体力は人並みか、それ以下なのだ。だから一夏が専用機を持つのは、一番手っ取り早い抑止力となり、また襲われても簡単に攫われる事は無くなるのだ。

だが問題としてあった、一夏がISを動かせる事を世間は知らない、という事も、この度一夏が発表すると決意したおかげで問題では無くなったのだ。だから一夏も自分の専用機を作ろうと決心したので。

「それで、一夏の闇鴉の特性は？」

「スピード重視。攻撃力は二の次で、とにかく速さを追求した機体だ。俺は戦う為にISを造るんじゃないって、逃げの手段としてISを持つんだからな」

「でも、一夏なら攻撃手段があれば自分で自分を守れそうだけど……」

「それは過大評価だ。俺はおそらく、本音にも負けるだろう」

刀奈や虚、簪や美紀の練習相手としてISを動かす事はあっても、一夏はその全てで勝とうとは思っていなかった。練習になれば、相手の経験値になればとしか思っていなかったのだ、それほど戦闘力が身についているわけでも無いのだ。

「でも、武器は少し積むんでしょ？」

「丸腰じゃ意味無いからな……剣と銃を少し。後は本当になにも積まない」
「一夏は代表になりたいわけじゃないもん。仕方ないよね」

一夏の武装内容を聞いた簪が、何処か同情したように呟いた。自分の想い人は、世界を丸ごと造り変える可能性を秘めているからこそ、こうやって大変な思いをしているのだと、簪は改めて『織斑一夏』という人物の現状を把握したのだった。

専用機の説明

光白狐、金九尾、そして闇鴉の開発を手伝っていると、簪の中にふと疑問が湧きあがった。

「ねえ一夏」

「なんだ？」

「この三機も第三世代なの？」

各国も漸く第三世代の開発に目を向け始めたこの頃、一夏が造るISが未だに第三世代な訳が無いと思っっている簪だったが、開発が進んでいるという事も聞いていないのでそんな事を思ったのだった。

「言っつて無かったか？ 土竜が既に第四世代なんだが」

「聞いて無いよ!？」

「そっか……多分本音にも言っつて無いと思う」

「それで本音ちゃんは土竜じゃなくなっつて蛟や丙を使っつてたんだ……」

「まだそっちを使っつてるのか？」

「最近は諦めて土竜を使ってるけどね」

バーチャルトレーニングでも、本音は自分の専用機を使おうとしていなかった。その理由は、自分がしつかりと専用機の説明をしていなかった事が多分に含まれているのだと一夏は今理解したのであった。

「まあそれはさておき、この三機は第五世代だ。スピードも攻撃力も第三世代の一、五倍に相当するはずだ」

「それって、お姉ちゃんたちにも勝てるって事？」

「蛟や丙にも第五世代の動きが出来るようにバージョンアップを施すつもりだが、それが完了するまでは機体の差では圧倒出来るだろう。だが、碧さんみたいに世代差をもものもしない程刀奈さんや虚さんが成長していたら分からん」

「つまり、私たちも基礎をシツカリと積んで、訓練をしなければいけないって事ですよね」

「そうだな。そしてそれは俺にも言えることだ」

美紀の発言に大きく頷いて、一夏は機体の製造を続けて行く。八割方完成している専用機だが、ここからが大変な作業だと一夏は思っている。

「後は武装を積み込むだけだが……ここで連動をシツカリさせておかないと、後で重大な欠陥になるからな……」

「一夏は既に四機の専用機を造り上げて、その四機全てにおいて欠陥は認められて無いじゃん」

「だからと言って、気を抜いて作業出来るわけじゃない。大事な人が一生付き合っている機体になるんだ。手抜きなんて出来るわけ無いだろ」

一夏の何気ない一言に、簪と美紀の頬が赤く染まる。一夏としては、簪も美紀も、もつと言えば刀奈や虚、本音や碧も「大切な人」だ。その言葉に特別な意図は含ませていないのだが、少なくとも他の人間よりはその六人を大切に思っている事も事実なのだ。

その事を理解してなお、簪と美紀は一夏に「大切」だと思ってもらえている事が嬉しく、そして恥ずかしかったのだ。

『初心な人が持ち主になりそうですね』

『しようがないよ。一夏お兄ちゃんに大切だって言ってもらえたんだから』

「[?.]」

誰も口を開いていないのに聞こえた声に、簪と美紀は首を傾げる。唯一事情を知って

いる一夏が、その声の主に返事をした。

「ちゃんと自己紹介してくれよ。二人は初めて声を聞くんだから」

『そうなんだ。わたしが光白狐』

『ボクが金九尾だよ』

「これが、ISの声……」

「でも、これって一夏さんと所有者にしか聞こえないはずじゃ……」

「姉妹機だつて言つたら？ だからどつちの声も二人に聞こえるんだろう。詳しい事は俺にも分からないがな」

既にある程度のデータを登録してあるから、二人にもこの声が聞こえるのだが、普通ならば光白狐の声は簪、金九尾の声は美紀にしか聞こえないはずなのだ。だが互いに互いの機体の声が聞こえている理由については、一夏も憶測の域を出無い答えしか持ち合わせていなかった。

代表候補生選抜合宿は、諸事情により参加者縮小を余儀なくされた。その諸事情に大きく関わっている刀奈は、微妙な空気の中で作業を続けるしか無かった。

『随分と注目されてますね、刀奈』

「(仕方ないでしょ！ 簪ちゃんと美紀ちゃんが無条件で候補生当確なんだから)」

『無条件、では無いでしょうに。更識の技術力を日本のものとしてアピールしたい日本政府の思惑が関係してるんだから』

「(……貴女、本当にきわどい事をあつさりと言うわね)」

蚊の発言に冷や汗を流した刀奈だが、蚊のきわどい発言はこれで終わりでは無かった。

『どうせ私の声は刀奈と一夏さんにしか聞こえませんし、日本政府がどう思おうが勝手ですよ。もちろん、一夏さんの技術力は一夏さんのものであり更識企業の為に発揮される物です。日本の為、なんて考えは一夏さんには存在しませんよ』

「だから危ない事をさらつと言わないでよ！ 聞いている私がハラハラするじゃない！」

『ですから、言ってるんですよ。娯楽が少ない私としては、刀奈をハラハラさせるくらいしか楽しみがありませんので』

「（……今度一夏君に頼んで、貴女たちISにも出来る娯楽を考えてもらおうよ）」

『今の発言、しっかりと録音しておきましたので、もし反故にした場合は今以上に刀奈をハラハラさせる発言を続けるのでお忘れなく』

「（ISに脅されるなんて思ってたわよ……）」

織斑姉妹の引退、前回の代表選考会後に候補生の半数以上が引退してしまったので、準備に必要な頭数が圧倒的に足りていないのにも関わらず、刀奈は蛟と会話をしながら準備を進めている。それだけやる気が感じられない刀奈だが、その彼女を咎める者も存在しなかった。彼女以上にISを上手く操れる人間も、彼女に強く出れる立場の人間も存在しなかったからだ。もしここに一夏か虚がいれば刀奈も準備に身が入った事だろうが、生憎合宿所にはそのどちらも存在しないのだ。刀奈が多少手を抜いても仕方ないだろう。

『さっさと終わらせて屋敷に戻りましょう！ 一夏さんに娯楽を提供してもらわねば

！
』

「めんどくさいのよねー……まっ、私も一夏君に会いたいから頑張りますか」

結局一夏が原因で、刀奈はやる気を出し、選考会の準備をあつという間に終わらせたのだった。

発表の準備

候補生に選ばれる前から専用機を持っている、という事だけで、簪と美紀は周りから様々な感情が入り混じった視線を浴びていた。だが、二人にはそんな視線はある意味慣れっこであり、また当然のものだった。

「選考会では、訓練機を使うんだよね？」

「そうじゃないと公平を期さないからと昨日、日本政府の人たちから注意されたからね」
「そもそも、私たちの専用機は更識所属で、日本政府には関係しないのに……」

「仕方ないよ。日本代表候補生を選び出す試合だもん。日本所属じゃ無くても専用機を使ったらフェアじゃないでしょ」

「そうだけどき……なんかめんどくさい」

日本政府が用意した訓練機も、一夏が造り上げた更識製のものだ。他の企業で造られた訓練機よりも数段上の能力を発揮できるようになっているもので、簪と美紀はこの機体での訓練もかなり積んでいるのだ。

「それじゃあ今から選考戦を始めるわよ。審判は日本代表の更識刀奈が担当します。身

内がいるからってえこひいきはしないから安心してね」

高らかにそう宣言した刀奈に、周りの女子から羨望の眼差しが注がれている事に簪は気がついた。

「やっぱり、お姉ちゃんは皆に尊敬されてるんだね」

「日本代表で、前回大会の覇者ですからね」

二代目・世界最強の称号は伊達では無い。その事は簪も理解していたつもりだったが、実際にその場面に遭遇して、改めてその称号がIS乗りを目指す者にとってどのようなものかを実感した。

『ボクは一夏お兄ちゃんの方が凄いと思うけどな』

『それは、わたしたちが一夏さんの凄さを知っているからだよ』

『だって、あの蛟だって一夏お兄ちゃんが造ったんだよ？ それを發表すれば……』

「（それはダメ！ 發表するのはあくまでも、一夏がISを動かせる事だけ。それ以上は一夏も發表するつもりは無いよ）」

金九尾の眩きに、簪が過剰に反応した。それでも、声に出さないくらいの配慮は出来

ていたが。

『一夏さんを不要な危険に晒すのは得策ではないからね。それは我々I Sも同じ考えだけど』

『でもやっぱり、一夏お兄ちゃんの凄さを世界中に知らしめたいと思っちゃうんだよね』
「それは私たちもだけど、その所為で一夏と一緒にいられる時間が減っちゃうのは嫌だから」

「ただでさえ、最近一夏さんと一緒にいられる時間が減っているんだから……専属護衛の本音以外は」

二人と二機の会話は、選考戦が始まる直前まで続いた。別に軽んじているわけではないのだが、更識でかなりの経験を積んでいる二人と、他の人とは、明らかに実力差が見て取れるくらいの差が存在しているのだった。

簪と美紀が無事日本代表候補生に選ばれてから数日後、一夏は尊の部屋を訪れていた。

「それで一夏君、何時発表するんだい？」

「少し釘を刺しておきたい相手がいまいますので、その人とコンタクトが取れてからにするつもりです」

「その人物は？ 更識が総力をあげて探そう」

「無理ですよ。世界中が血眼になって探してるのに、誰一人見つける事が出来ないんですから」

一夏の言葉に、尊はその釘を刺しておきたい人物を理解した。

「篠ノ之東博士か……しかし、どうやってコンタクトを取るつもりなんだい？」

「例の差出人不明のメールから、あの人へのアクセスが出来ないか試した結果、メッセージを送る事に成功しました。一応約束はこの後なので、私は少し屋敷を空けます。護衛

も結構ですので、本音に居場所を聞かれても教えなくて大丈夫です」

「分かった……だが、危険な真似はしないように」

「重々理解しております」

そう返事をして、一夏は尊の部屋から屋敷の外へと向かった。普段なら誰かに声を掛けられたり、外出する際には本音を伴うのだが、今回は本音がいたら話が進まないと言う事で本音には内緒での外出だ。戦鬪力こそ人並みの一夏だが、散々狙われた結果気配察知と気配遮断だけは上達しているのだ。

こつそりと更識の屋敷から外に出た一夏は、指定した場所へと向かう。人目は避けるべきだと一夏も考えているので、密会場所はどうしても人気の少ない場所になってしまふ。もしこのタイミングで襲われでもしたら、一夏には抗う術は無かった。

「……いるんですよね。姿を現してください」

繁みに声を掛け、一夏は側に落ちていた小石を拾い、投げ込むポーズをした。

「やっぱりいつくんから隠れるのは難しいな……気配察知だけならちーちゃんたちより上なんじゃない？」

「隠れてるつもり、無かったですよね？」

一夏は更識内では上位に位置する気配察知能力を有しているが、織斑姉妹と比べられるほどのものではない。それは一夏自身が一番理解している事だ。

「さすがいつくん！ 聡明ないつくんには東さんのおっぱいの感触を味あわせてあげよう。うりうり〜」

「……無駄な事をしている暇は無いです」

「まーまー……東さんがいつくん成分を補給し終えるまでの辛抱だよ」

「はあ……協力を依頼する以上、それくらいは我慢しましょう」

東が満足するまで、一夏はされるがままでいた。そして満足したのか、東が一夏を解放した。

「この度、『私』がISを動かせる事を発表するにあたり、篠ノ之博士にご協力を賜りたいたい、ご連絡させていただきました」

「世界同時発信をする為に、東さんのハッキング能力が必要なんだね〜。ミサイルを同時発射させた時みたいにな」

「話が早くて助かります。報酬は、私と——『織斑一夏』と一日過ごさせる権利で如何でしょう？」

「のった！　いっくんと一日過ごせるなら何でもやるよー！」

こうして、大天災と大天才が裏で手を組み、世界に向けて情報を発信する準備が完了した。二人の表情は、凄く悪い事を企んでいるようにも見えた。

全世界同時ハッキング

発表の準備が全て整い、一夏は東にハッキングを依頼する為に聞いた東直通番号に電話を掛けた。

『はいはい！ 天才東さんに何の御用かな？』

「……こちらの準備は整いました。後は貴女の協力が必要です」

『分かっているよ、いつくん。約束、忘れて無いよね？』

「覚えていますよ。具体的な日程はそちらで決めて下さい。ただし、前日までに連絡は入れて下さいよ？ こちらにも色々あるんですから」

『分かっているって。それじゃあ、いくよ』

東の声の質が変わったのを受けて、一夏も表情を改めた。これから行われるのは、全世界同時生中継。東が全ての映像媒体をハッキングし、一夏が映像を流すのだ。日本語が分からない相手でも、視覚的に訴える事で何を伝えたいのかが分かるように考えてあ

一夏の発表を、碧はI S学園の職員室で視ていた。丁度休み時間に合わせて流された映像は、碧以外の教師に衝撃を与えた。

『言葉で言っても納得出来ないでしょうし、今から実際にI Sを展開してみせましょう』
「(いよいよね……一夏さんが世界に衝撃を与える瞬間が……)」

碧の中では、一夏がI Sを動かせると言うだけでは世界に衝撃を与えるとは思われていなかった。それは碧が「一夏の秘密の全て」を知っているからで、普通の人間は男がI Sを動かせると聞いた時点で衝撃を受けるのだが……

「う、嘘……」

「本当に男の子がI Sを展開して動かしてる……」

「この子確か、小鳥遊さんがお仕えしてる家の子ですよね？」

事実を知っているだろう碧に、教師からの視線が集まる。その中に当然、真耶と紫陽花の視線もあった。

「確かに一夏さんは私が仕えている更識家の人です。旧姓織斑一夏、元日本代表である織斑千冬さん、千夏さんの実弟であり、更識家の養子です。現日本代表である更識刀奈さんのお手伝いでISに携わっている時に、偶然作動させる事が出来たんですが、その時はまだ発表するつもりは無かったです」

「では、何故今回発表したんですか？」

真耶の当然ともいえる質問に、碧は一度ため息を吐いてから答える。

「例のメール、あの差出人不明の」

「ええ」

「あれ、篠ノ之博士からのメールなの。本当は更識で突き止めていたんだけど、ご当主様が当分伏せておくようになって仰ったから黙ってたけど」

「し、篠ノ之博士!?!」

衝撃的な事実が重なったからか、教師たちは全員口をポカンと開けて固まっている。

「篠ノ之東博士は、一夏さんと旧知らしいのよ。それで一夏さんの事を思つて発表した方が良いと促して、今日の発表に至つてるの。ちなみに、映像媒体をハッキングしてるのも篠ノ之博士だから」

「つまり、更識一夏君の発表を、篠ノ之博士がお手伝いしてるつて事ですか？」

「彼女、一夏さんには甘いのよ」

「じゃあ、更識家がI Sのコアを大量に持っているのも、やはり篠ノ之博士が……」

真耶は言いかけて碧が凄い顔で自分の事を睨んでいる事に気がついた。自分が踏み込んで行けない領域に踏み込もうとしたのだと真耶は勝手に解釈して言葉をそこで止めたが、他の教師が真耶の言葉を引き継いでしまった。

「篠ノ之博士と懇意である一夏君がいるから、更識家は専用機を大量に所有してるんですか？」

「……それは違う、としか答えられないわ。断言出来るけど、じゃあ誰が造つてるのかは答えられない。分かつてると思うけど、調べようとかしたら、貴女たち消されるからね」

「消される？ また冗談を……」

「知らないの？ それとも忘れてるのかしら」

「だから、何を？」

碧の纏っている空気の質が変わったのに、真耶と紫陽花は気がついた。碧が戦っている姿を間近で見た事がある二人だからこそ気が付いたのであって、テレビ越しでしか見た事の無い他の教師陣には気づけなかった。彼女が本気で怒っているという事に……

「更識家は元々、IS企業じゃないのよ」

「そうだったんですか？　じゃあ元は何を……」

「対暗部用暗部。つまり一人一人消す事くらい簡単に出来る組織なのよ」

「冗談……では無いの？」

笑い飛ばそうとした一人の教師が、碧の表情を見て本気だという事を覚った。つまりそれくらい碧は怖い顔をしているのだが、その事を碧は今気にする余裕が無かった。

「忠告じゃ無く警告よ。これ以上更識家の事を知ろうとするのは止める事ね。命が惜しいのなら」

碧がそう締めくくったのと同時に、一夏も中継を終わらせていた。画面には何時も通りのバラエティーが流れており、今の中継が嘘だったのではないかと思うくらい何時も

通りだったのだ。だが、職員室内の空気は、その勘違いを許さないものとなっていたのだ……

中継を終えた一夏は、束にお礼を言う為に再び束直通番号に電話を掛けた。発表と言っても誰かの前で行うのではなく、カメラを通じて知らせるだけだったのでそれ程疲れては無かったが、さすがに緊張はしていたので手には汗を掻いていた。

「珍しい事もあるものだ……」

『んー？ 何がかな、いつくん』

「いえ、緊張で手汗を掻いていました」

『束さんも興奮でびっしりだけどね。それじゃあいつくん、今度一日いつくんの時

問を貰うから』

「構いませんよ。私から言い出した事ですので」

『その時は、当主モードのいっくんじゃなくって、ちゃんと「織斑一夏」としてのいっくんですよ。じゃあ、バイビー』

一方的に通信を切られた一夏だったが、その事を不快に思う事は無かった。彼が気にしていた事は、それとはまったく異なる事だったから……

「明日、学校面倒だな……」

間違いなく質問責めに遭うだろうと考え、学校に行くのが億劫になっていた一夏であった。

翌日の騒動

一夏の発表の翌日、一夏の想像通り中学に到着するや否や一夏の周りには人だかりが出来た。同級生だけではなく、上級生や教員、中には見覚えの無い大人も混じっていた。

「特に何も話すつもりはありません。マスコミ関係の方はお帰り下さい」

「えっ、マスコミ?」

一夏が見覚えの無い大人にそう告げると、周りの生徒や教師たちは一斉にマスコミ関係の人間に視線を向けた。その隙に、一夏は人ごみをスルリと脱け出して教室へと向かう。一夏同様に虚、刀奈、簪、美紀は人ごみを脱け出したが、残念な事に本音は人ごみに吞まれてしまったようだった。

「世話の焼ける護衛だ……」

「ほ、ほえ……いっちー、ありがとう。助かったよ」

「護衛される側が、護衛する側を助けるのって、何だかおかしいわよね」

「まあまあ、お姉ちゃん。本音だから仕方ないよ」

これまたスルリと人ごみの中に入り込み、本音を見つけ出してあつという間に戻って来た一夏を見て、刀奈と簪がしみじみと呟いた。

「やっぱり今日は休むべきでしたかね」

「今日休んだとしても、明日、明後日と問題の先延ばしにしかありませんよ」

「そうですよね……」

虚の言いたい事は、一夏にも分かっていた。だからではないが、一夏はガツクリと肩を落として教室へと向かったのだった。

全世界同時中継の影響は、何も一夏の学校だけに起こっているのではない。一夏の友

人（悪友）として有名な鈴は、教室につくなり複数の視線を向けられて立ち竦んだ。

「よう、鈴」

「何やってるんだ？」

入口で立ち竦んでいた鈴の背後から、残り二人の悪友が顔を覗かせた。そして同時にその顔を引つ込めた。

「なる、一夏の事だな」

「俺たちを見ても何も分からないってのに」

「理屈じゃないんじゃない？ あたしたちが一夏と親しかつたつてのは、小学校が同じ人からすれば周知の事実だし、何か知ってたんじゃないかって思われても仕方ないだろうしさ」

「そんなもんかねー？ 爺ちゃんも母ちゃんも何も気にする事は無いって言ってたがな」

「厳さんと蓮さんみたいな考え方が出来る方が稀なんですよ。普通は気になるだろうし」

各言う鈴も一夏がISを動かせるという事実を聞かされた時、本人に電話して確かめ

ようとしたくらいだ。だが実際に電話をする事は無く、一夏の心境を考えて我慢したくらいだ。それくらい一夏が発表した事実は世間に衝撃を与えているのだ。

「もしかしたら、俺たちも動かせたりして」

「無理でしょ。一夏なら何でもアリっぽいけど、アンタたちじゃね……万年成績低空飛行組のアンタたちじゃ、仮に動かせたとしても座学で断念せざるを得ないわよ」

「……言い返せない自分がなんか嫌だ」

「でも、一夏はこれで I S 学園進学が確定だろ？ 女の園だぜ」

「うがー！ 俺も I S 動かしてー！」

仮に動かせたとしても、女の園に入れたとしても、この二人はモテないだろうなど、鈴は確信した瞬間だった。

「今度一夏も誘って遊びに行こうぜ！ それで I S に触れるチャンス……」

「やめときなさい。電撃でも流されてこれ以上バカになったら大変でしょ」

「確かに……って、誰がバカだ誰が！」

「アンタら二人よ」

「俺はコイツよりバカじゃねえ！ つ、真似するな！」

ハモったバカ二人を無視して、鈴は自分の席に着く為に教室へと踏み込んだ。何か聞きたくてたまらないような視線には、一切気づかないふりをして……

一夏の発表を衛星中継を通してリアルタイムで見ていた織斑姉妹は、事実確認の為に日本に帰ろうとした。だが、契約期間に日本へ帰る事は許される事無く、仕方なく織斑姉妹はドイツから事実確認を行う事にした。さしあたっては、事実を知っているであろう悪友に電話をした。

『もすもすひねもす〜?』

「お前は一夏がISを動かせる事を知っていたのか?」

『当然でしょ。なんてったって愛しのいっくんの事だもん』

「何故わたしたちに教えなかった!」

『だってなっちゃん……いや、ちーちゃんもだけど、いっくんがISを動かせると知ったらどうした?』

「当然自慢した!」

見事にハモった姉妹に、東は呆れたのを隠そうともせずのため息を吐いた。

『だからだよ。本当は東さんも知った時に発表しようとも思った。でも、いっくんが苦しむような事をもう東さんはしたくなかったんだよ。それに、いっくんにも口止めされちゃったからね』

「貴様! 私たちを差し置いて一夏と会っているのか!」

『うん。昨日の発表中継だって、東さんが世界の映像媒体を同時ハッキングして世界同時中継にしたんだもん。その打ち合わせの為に、東さんはいっくんの電話番号とメールアドレスをGETしたのだよ』

「な、なんだって!?!」

『ちーちゃんとなっちゃんはいっくんの番号もアドレスも知らないんだっけ? 実の姉なのに、信用されてないね』

事実、一夏に番号とアドレスを聞こうとした二人は、一夏から拒否の回答をされシヨックを受けた事がある。その事を知っている東だからこそ、このような追い打ちを掛ける事が出来るのだが。

『それとー、手伝った報酬として、いっくんと一日一緒にいられる権利も貰っちゃったもんね〜』

「貴様！ その権利を私に寄越せ！」

「いや、わたしにだ！」

『ダメだよ。この権利は、「織斑一夏」が「篠ノ之束」にくれた権利だもん。ちーちゃんやなっちゃんにはあげられないもん！』

「？ 今の一夏は『更識一夏』だろ？」

『さあ？ いっくんの考えは、ちーちゃんやなっちゃんには分からないんじゃない？ それじゃあね』

「あつ、おい！ ……何が言いたいんだ、東のやつ」

一夏が「一夏」ではなく「楯無」だという事を知らない二人は、東が含ませた意味を理解する事無く首を傾げ続けたのだった。

デート？

一夏がI Sを動かせると発表して一週間、世間の熱は少しさめてきた。その理由として連日一夏にインタビューを試みていたマスメディア関係の人間が、日本政府に拘束されるという事件が報道されたからだ。

では何故、日本政府がただのマスコミを拘束したのかと言うと、一夏から相談されていたからである。相談、とは聞こえがいいが、ようは一夏は日本政府に脅しを掛けたのだ――

「どうかかしてくれないなら、日本政府が所有している更識製の訓練機を全て回収する」――と。

その事は公にはされていないが、一夏に迫ろうとすれば日本政府が動くという事を世間に知らしめたこの事件のおかげで、一夏やその関係者の周りには平穩が戻りつつあった。もちろん、完全に平穩が戻るのもう少し先だろうが。

その戻りつつある平穩を感じながら、一夏は人を待つていた。待ち合わせの相手は篠ノ之東、全国同時ハッキングを手伝ってもらったお礼として一日デートする事になった

相手だ。

「やっほー！ おまたせ、いっくん」

「まだ時間前ですし、貴女が気にする事では無いですよ」

「相変わらず真面目だねー。でも今日は『織斑一夏』としてのデートだからね」

「分かってますよ。俺からそう言いだしたんですから」

この二人が待ち合わせるとなると、どうしても人気の少ない場所になる。そうなるで一夏が狙われる可能性も高くなるのだが、今の世の中で、一夏を知らない人間はほぼいなくなつた。良くも悪くも有名人である一夏が攫われそうになり、本気で助けを求めれば誰かしら反応はしてくれるだろう。攫う側も顔を見られるリスクを冒してまで一夏を手に入れようとは思わないようで、この辺り一帯には二人以外の気配は感じなかつた。

「東さんも、意外と普通に出歩いて大丈夫かもしれないですね」

「いや、東さんの場合は、世界同時ハッキングがバレてるっぽいから、国から見つかると面倒なんだよー」

「そうなんですか。一々秘匿回線を通してやり取りするのが面倒なんですよね。俺のもの東さんのもの、通信機器の履歴を調べられると拙いですし」

「いっくんの個人携帯なら問題ないでしょ？ 現にこうして東さんとデートの約束したんだから」

「……まあ落とさなければ良いだけですからね。見られる心配もありませんし」

さて、この二人がデートするとして、パニックにならない場所が存在するのだろうか。今日は日曜日で、定番のデートスポットには数多くのカップル、または家族連れであふれ返っている。街をただ歩くだけでも大問題を起こすペアだ、ブラインドシヨツピングも無理。個室に入ってそこを狙われたら面倒。したがってデートと言っても一般的とは事なりただ一緒に人気の無い場所を歩くだけになってしまふのだ。

「いや、有象無象の視線を気にしなくて良いデートは最高だね、いっくん」

「これってただの散歩のような……まあ、東さんがデートだと思ってくれているのでしたら良いですけど」

「その茂みで東さんと合体してみないかい？」

「合体？ 何の事です？」

「そっか……いっくんはまだ中学一年生だもんね。疎くても仕方ないか」

「だから、何の事です？」

束の少し下品な提案も、無垢な一夏には通じなかった。束も自分で言っておきながら、一夏が理解出来なかった事に喜んでいた。

「いっくんは世間に揉まれて大人の風格を身につけてるけど、こっちの知識は無いんだね」

「こっちの知識？」

「まだいっくんは踏み入れなくて良いんだよ。それに、束さんも本気では言っておかなかったし」

「はあ……」

結局何の事か分からない一夏だったが、束が気にしなくて良いよ、と言わんばかりに笑顔で一夏にそれ以上考えさせないように迫ったので、一夏も深く考える事はしなかった。

「……ねえいっくん」

「なんです？」

「後悔してない？ 世界中の奴らにいっくんの事を知らしめた事を」

「今更ですね。その原因を作ったのは貴女でしょうが」

「そうなんだけどさ。今考えれば、いっくんが世話になっている家、暗部組織でしょ？」

秘密の二つや三つくらい隠し通せそうな気がしてきて」

「前々から疑っていた集団もありましたし、遅かれ早かれこの事は発表するつもりでしたので」

一夏が自分を慰めてくれているだけでは無いと感じた東は、一夏のセリフの続きを待った。

「I S 学園に進学する事は既に決めていましたので、I S を動かせる事は世間に知られたんですよ、その時に。それが二年弱早くなっただけです」

「でも、いつくんはこの二年弱、誰かに狙われる確率が高くなったんだよ？ 私が早まった所為で……」

「ですから、東さんの所為では無いですって。発表すると決めたのは俺なんですから」

東にしては珍しく本気で気にしていたようで、一夏も誤魔化す事はせず本音を東に聞かせた。あくまで決心したのは自分で、東の所為では無いと。

「うん、いつくんは優しいもんね。東さんの所為なんて言わないよね。でもね、いつくん。東さんが引き金になった事は間違いないんだよ。だから、ゴメンなさい」

「……それくらい世間にも興味を向けられれば、貴女は逃亡生活など送らなくても済ん

だのかもしれないね」

「かもね……でも、束さんは世間になんて興味ないもん」

「知ってますよ。ここ最近、貴女の事を知る機会が多すぎましたし」

実姉である織斑姉妹よりも、自称姉である篠ノ之束の事の方が詳しくなってきたと、一夏も分かっている。記憶を失くし、織斑姉妹に苦手意識を持っている一夏だが、束の事は不思議と怖がらなかつたのだ。まあその理由の一つは、織斑姉妹が記憶を失つたばかりの一夏に物凄い表情で迫つた事と、束特有の空気感で一夏を安心させた事が挙げられるだろう。

「それじゃあ、何処か別の人気の無い場所に行こうか」

「お供しますよ、束姉」

「おつ、思い出したのかい？」

「いえ、何となくです」

記憶を失う前に呼んでいた呼び方を一夏がしたので、その後の束のテンションは常に高かつた。

休日の計画

あつさりとは決まったとはいえ、候補生として簪と美紀は経験が浅い。更識の屋敷で訓練を積んでいるとはいえ、候補生の訓練はまた別物だった。

「まさかお姉ちゃんと戦うはめになるとは……」

「しかも二対一で刀奈お姉ちゃんは涼しい顔してるし……」

「ほらほら。せつかくの第五世代が泣いてるわよ」

光白孤と金九尾は第五世代で蛟は第三世代。世代差だけで言えば圧倒的に簪・美紀ペアの方が有利であるのに、ここはやはりモンド・グロツソ覇者、世代差をもっともしい戦いつぶりで二人を圧倒していた。

「お姉ちゃん、近接でも遠距離でも有利に立てないなんてどんな戦い方してるの」

「それでも織斑姉妹とある程度は戦えたんだから。候補生の二人には遅れは取らないわ

よ」

「なるほど、あの二人と戦った経験があるから、刀奈お姉ちゃんは強いんですね」

「だって、強くないと死んじゃうから……」

あまりにも実感のこもった刀奈の言葉に、簪と美紀は思わず顔を見合わせた。それが決定的な隙となり、二機同時にS Eをゼロにされてしまった。

「油断大敵よ♪」

「お姉ちゃん、ズルイ……」

「まさか普通に会話してるところを攻撃してくるとは……」

「まだ戦闘は終わって無かったんだから、気を抜いた二人が悪いのよ」

刀奈が言っている事の方が道理だったので、簪も美紀も何も反論出来なかった。候補生として、ペアとして訓練を積んでいるとはいえ、やはり刀奈の経験の方が圧倒的に多いのだった。

「それにしても、一夏君は今日篠ノ之博士とデートか……羨ましいわね」

「明日は一夏も一日中屋敷にいるらしいし、私たちも帰れるんだから」

「まあ、一夏さんが一日中屋敷にいたとしても、私たちと会うかどうかは分からないですけどね……」

「今は大丈夫じゃない？」

一通りの専用機の製造、及びバージョンアップの為に研究室に籠りつきりだった一夏も、その作業を一段落させている。だからこそその束とのデートなのだが、更識家で生活する少女たちにとって、ここ最近一夏との時間が減ってしまったている事には変わりはない。無かったのだった。

「明日は虚ちゃんもいるし、珍しく碧さんも戻ってくるようだしね」

「月曜日に研修とかで政府に呼ばれてるらしいからね。学園から向かうより屋敷から向かった方が近いらしいよ」

「刀奈お姉ちゃん、何か悪い事考えてる？」

「皆がハッピーになれる事よ」

「……何となくだけど、一夏は疲れそうな予感がする」

「簪ちゃんも？ 実は私もそう思ってるんだけど……」

刀奈が言った「皆」に、一夏が含まれていないような気がしてならない。簪と美紀は、揃ってため息を吐いて一夏の身を案じたのだった。だが、刀奈の計画を止めようとはしなかった。簪と美紀も同罪なのかもしれない……

東とのデート（その実、人気の無い場所での散歩）を終えた一夏は、なるべく人気の無い場所を選び屋敷へ戻つて来た。一躍時の人となつた一夏は、外出する際には誰かからの護衛を付け、そしてなるべく人目につかないように目的を果たしてきた。そして今日も、人気の無い場所での歓談を楽しみ、そして無事に更識の屋敷へと戻つてきたのだつた。

「あら、一夏さん」

「碧さん？ ああ、研修つて明後日でしたっけ？」

「そうなんですよね。何で私なのか疑問なんですよ。代表合宿経験者を呼ぶんなら、別に真耶でも紫陽花でも良いと思うのに」

「碧さんは元代表ですからね。しかも織斑姉妹と並んで、無傷で世界の頂点に立つた人ですから」

「それなら刀奈ちゃんでも良いじゃないのよ……何で私が」

「刀奈さんは学校がありますから。碧さんも学校はありますが、教師と生徒の立場から碧さんと呼んだんだと思いますよ」

一夏の完璧に近いであろう考えを聞き、碧はガツクリと肩を落とした。自分でも薄々感づいていた事だが、一夏に言われるとそれが正しいと認めるしか無くなってしまうと分かっていたのにも関わらず愚痴を言ったので、碧の精神的疲労は倍増している。

「面倒なんですよねー。バツくれようかしら」

『そんな事したら更識とI S学園に迷惑を掛ける事になるですよ？ 分かって言ってます?』

「分かってます……冗談なんだから本気で怒らないでよ」

「良かった。木霊との関係は良好なようですね」

『私は色々と文句を言いたいですが、言っても右から左、ですからね……馬耳東風とでも言えば良いのでしょうか?』

「ちゃんと聞いてるじゃない! 偶に聞き流すけど」

「聞いて無いじゃないですか……まあ動作に不備が出ない程度なら俺は注意しませんがね」

碧と木霊の会話を聞きながら、一夏は苦笑いを浮かべていた。自分の専用機である闇鴉とは、さほど会話をしない一夏にとって、二人(?)の関係少し羨ましいところなのだろう。

『ところで一夏さん、先ほどからコアを通じて闇鴉が文句を言ってきているのですが、何とかしてください』

「文句? いったい何が不満なんだ?」

木霊から専用機が不満を感じていると聞かされ、一夏は闇鴉に話しかけた。

『だって、木霊とばつか話して、私とは全然話してくれないんですもん! 偶には話しかけて下さっても良いじゃないですか! それを一夏さんは……』

「あんまり話す事も無いだろう? 不備があれば自分で気づけるし、日常会話の相手に困る程、俺はコミュ症でも無いつもりだ」

『そう言う事じゃありません! 少しは私と話して下さい!』

「……善処しよう」

『約束ですからね!』

思わぬところで専用機との溝を感じた一夏は、なるべく闇鴉と会話をしようと思ったのだった。

朝早くから

学校も休み。代表・候補生の合宿も休み。企業代表としての仕事も無い。そして更識家当主としての仕事も、当面急ぎのものは無い。そんな日が休日である確率はどれくらいあるのだろうか。そんな奇跡とも言える休日をむかえ、刀奈は朝からハイテンションで一夏の部屋を訪れた。

「やっほー！ 一夏君、今から遊びましょうよ」

「……今からですか？ まだ外暗いですよ？」

現時刻は午前四時半、遊ぶには不適切な時間のまえに、個人の部屋を訪れるのにも不適切な時間だ。だが、一夏以外の簪、虚、美紀、碧の姿が刀奈の背後に見えたのを受け、一夏は自分が知らない間に計画されたであろう遊びのスケジュールを理解した。この時間から消化し始めないと終わらないスケジュールを。

「……本音はどうしたんですか？」

「あの子はこの時間から起きられないから、後から合流するわよ」

「そうですか。それで、こんな時間から何して遊ぶんです？ ゲーム、と言うわけではな

いですよ？」

「ある意味ゲームかな。バーチャル・トレーニング・システムを使って勝負しましょう！」

「……俺が皆さんに勝てるわけ無いじゃないですか」

更識家にあるVTSは全員の専用機のデータをインストールしてある特製品で、これが盗まれただけでも更識所属のIS乗りのデータをほぼすべて手に入れられてしまうのだ。もちろん、システムには厳重な処理が施されており、データを弄るのは一夏にしか出来ないのだが。

「特訓よ、特訓！ 一夏君だってISに慣れなきゃいけないでしょ？」

「そうですね、一夏さん。もちろん私たちも全力でお守りする所存ですが、最近私と簪ちゃんは訓練で家を空ける事が多いですし」

「本音一人だと不安で、訓練に集中出来ない」

「それなら俺じゃ無く本音に訓練を積ませれば……」

「もちろん、後で本音にもやらせます。ですが、一夏さん自身も強くなられる方が、簪お嬢様と美紀さんには安心出来るのですよ」

虚の言葉に、簪と美紀が力強く頷いた。つまりは、本音にはあまり期待していないという事だろう。

「分かりましたよ。その代わりに、勝てないんですからあまり期待しないでくださいよ」

説得は不可能と判断して、一夏は刀奈に引つ張られるがままVTSがある部屋まで連れて行かれる事になった。早朝である事で、騒がしくないのが一夏にとって唯一の救いだったのかもしれない。

朝食の時間まで、VTSを使った遊び——という名の一夏苛め——は続いた。元代表で無傷で世界を制した碧、現代表で無敗で世界を制した刀奈を始め、企業代表の虚、代

表候補生の簪と美紀相手に、いくら闇鴉を使用したからと言って逃げ切れるわけは無く、最終的に一夏は全員にやられたのだ。しかも碧には一撃も喰らわせる事叶わずに：「皆さん、専用機との相性はよさそうですね。木霊も世代差をもつともしない動きで皆さんの考えについて行ってますし」

「戦闘中にそんな事を考えていたんですか？」

「逃げるのが俺の機体の特徴ですから。その間に皆さんの動きを観察してただけですよ」

碧に問われ一夏は、あっさりと戦闘に集中していなかった事をぼらした。正確には、相手の動きには注意を払っていたが、自分が攻撃する事に関しては感じていたと。

「一夏さんの訓練なんですから、もう少し攻撃に集中してくださいよ」

「俺が攻撃に集中したとして、はたして攻撃を当てる事が出来るでしょうか？ 逃げながらの牽制で漸く刀奈さんのSEをちよこつと削っただけなんですから、集中したって無駄ですよ。むしろ無傷でやられるのが関の山です」

「そんな事無いと思うけどな。一夏君、製造者だけあってISの事を理解してるし、戦闘に関しても筋は悪くないと思うけど」

「俺は戦う為にISを所持したわけじゃないですからね。もちろん、皆さんも戦いたく

てI Sを持ったわけじゃないでしょうけど」

一夏の言葉に全員が頷く。I Sを持った理由の最たるは、一夏を守る為、守る事につなげる為なのだから。

「俺だつて皆さんに依存するだけじゃダメだつて事は分かつてますけど、戦闘は門外漢な上に苦手です。気配察知は辛うじて更識内でも上位に位置してはいますけど、それだつて逃げの手段でしか無いんですから。強力な相手と対峙した場合、俺はせいぜい逃げまどつて助けを待つしかないんですよ、情けない事にね……」

「仕方ないですよ。一夏さんは根が優しい子です。争いを好まないのもそれが原因でしょう。昔は篠ノ之箒に襲われそうになる度に泣いていたんですから」

「……恥ずかしいので昔の事は言わないでくださいよ。あれから俺だつて成長してるんですから」

「そうですね。でも、一夏さんが優しいのはあの頃から変わつてませんよね？」

自分の昔を知る大人——碧相手に一夏は得意の舌戦でも白旗を上げた。こればかりは一夏でも抗えないものがあつたのだ。

「昔の一夏君かー。本音が起きてくるまでその話しを詳しく聞きましょうか」

「起こしに行くつて選択肢は無いんですか？」

「うん、ない」

「……………」

自分の過去——あくまで更識に来てからだ——を暴露される事を回避しようとした一夏だったが、刀奈を始め虚も、簪も、美紀も本音を起こしに行く事に反対した。碧も困つてる風を装つてはいるが、話す気満々だと一夏には見えた。

「お願いですから黙っていてください、碧お姉ちゃん」

「その呼ばれ方をされちゃ、黙ってるしか無いわね」

「あー！ 碧さんズルイ！ 私も昔の呼ばれ方したいなー」

「私もです」

一夏が切り札を一枚切った所為で、その日の一夏は昔の呼び名で全員を呼ぶ羽目になったのだった。

更識家内の順位

朝食を済ませ、起きてきた本音も合流した事で再びVTSを使ったトレーニング——では無くトーナメントが開催される事になった。

「ルールは、自分の専用機を使う事がまず一つ。そしてハンデイとして、私が半分、虚ちゃんが三分の二、簪ちゃんと美紀ちゃんと本音が四分の三のSEでスタートする事が二つ目。そして三つ目は、一夏君と戦う際には全力で相手をする事。逃げのトレーニングにもなるし、一夏君も良いでしょ？」

「まあ、それだけハンデイを貰ってますからね。ここで嫌だと言っても刀奈ちゃんの事です、そのルールを適応させるんでしょう？」

「もちろん♪」

自分の事を分かってももらえている事が、刀奈は嬉しかった。だが一夏は、分かっただけで、また自分を恨んでいる様な表情を浮かべていた。

「優勝者には、一夏君から特別なご褒美があるからね」

「俺が勝った場合は？」

「私たち全員がキスしてあげる」

「……適度に頑張ります」

おそらく褒美の内容も似た事なのだろうと覚り、一夏はとりあえず全力で相手をずる事に決めた。どうせ自分が最後まで勝ち残るなど、万に一つも無いのだからと……

ドイツで指導を続けている織斑姉妹だが、先日の衝撃的な発表を受けてからその指導に身が入っていないような感じがドイツ軍の中でまことしやかに囁かれていた。

「教官たちはどうしたんだ？」

「何やら呆けている時間が長く見られるが……体調がよろしくないのでしょうか？」

「誰か、直接聞いてきたらどうだ」

「では、私が聞いてこよう」

織斑千冬・千夏姉妹に指導されている部隊、通称「黒兎部隊」に所属している軍人は、ほぼ全員が織斑姉妹信者となっている。初めこそ理不尽な指導に怒りを覚えたが、自分たちを道具としてしか見ていなかったドイツ軍上層部の人間とは違い、彼女たちは人間を指導していた。その事を受けて、黒兎部隊の面々は織斑姉妹を崇拜していたのだ。

その中でも、この黒兎部隊の隊長候補として期待されている少女、ラウラ・ボーデヴィツヒの千冬、千夏信仰は群を抜いていた。

「織斑教官！ 最近呆けている場面を多々見受けませんが、何か心配事でもあるのでしょうか？」

千冬・千夏兩名を見つけたラウラは、二人の視界に入る場所まで移動し、その場で敬礼をして二人に問いかけた。これは黒兎部隊の中での決めごとであり、二人が強要しているわけではない。

「ラウラか。先日の発表はお前も見たん？」

「はい、更識一夏とかいう男がISを動かしたと。それが何か？」

その言葉を発した次の瞬間、ラウラの身体は宙を舞った。千冬と千夏に殴られたのだと気付いたのは、数メートル吹き飛ばされた後だった。

「な、何をするんですか教官！」

「お前、一夏をバカにしたな？」

「きよ、教官のお知り合いなのですか？」

ただならぬ気配を感じ、ラウラはそう問いかけた。その事を、ラウラは一生後悔する事になるのだが、詳しく語るのとは今では無いのかもしれない。

刀奈主催のトーナメントは、ハンデいの通り刀奈と虚が他を圧倒する強さを見せて勝ち進んでいく。ちなみに、一夏は一回戦で早々に美紀に敗北している。

「碧お姉ちゃんは見学でしたけど、何で参加しなかったんですか？」

「刀奈ちゃんが言うには、シミュレーションでも強すぎるからって。まあ、私は無条件で一夏さんの隣にいれるので文句はありませんけどね」

「さすがは無傷で世界を制した人ですね。無敗で制した刀奈さんでも恐れるとは」

「一夏さん、呼び方が元に戻ってますよ？」

「本人が聞いてないんですから、別にいいでしょ。俺だって恥ずかしいんですから」

全員にせがまれて、今日一日昔の呼び方をしなければならぬ一夏だが、本人が聞いていない所では普段通りの呼び方をしている。もちろん、本人が聞いていたら頬を膨らませて指摘してくるだろうが……

「聞いていない所でも呼んであげなきや可哀想よ」

「……面白がってますね」

碧と一夏以外は刀奈と虚の戦いに集中している為、二人の会話は他の人の耳には届いていない。だから一夏も刀奈の事を普段通り「刀奈さん」と呼んでいたのだが、碧は照

れる一夏の顔が見たくてわざと困らせているのだった。

「おわったー！ やっぱり虚ちゃん相手は疲れるわ」

「ハンデイ分善戦はしましたが、やっぱりお嬢様には敵いませんね」

「てなわけで、第一回更識家バーチャルトーナメントは私の優勝でーす！ はい拍手ー」

「わー」

「……わー」

美紀と本音のようにすぐに乗れなかった簪が、少し恥ずかしそうに拍手を送った。その姿を満足げに眺めたいた刀奈だが、不意にその視線を一夏に向けてきたのだった。

「何でしょうか？」

「優勝者には一夏君からご褒美があるって言ったよね？」

「ええ。ですが、そのご褒美の内容を俺は知りませんし」

「大丈夫。一夏君はジツとしてくれるだけで良いから」

「はあ……」

刀奈に言われ、要領を得ないがその場に留まる一夏。刀奈が徐々に近づいて来ても、一夏は約束通りジツと動かずその場に立ち止まっている。

「あの……近いですよ？」

「一夏君、私のほっぺにキスして？」

「「なあ!」」

「いいなく刀奈様」

「あらあら」

簪、美紀、虚は声を上げ、本音は羨み、碧は微笑ましげに刀奈の言葉に反応した。だが一夏は何を言われたのか理解するのに数秒要した為、他の人とは違う反応を示したのだった。

「……これがご褒美、ですか？」

「うん！ 篠ノ之博士にしてたのと同じようにね」

「はあ……分かりましたよ」

刀奈の頬に口付けをし、一夏は他の人の視線に気づかないふりをして部屋から逃げ出したのだった。

戒め

一通り遊んでから、今度は簪提案のゲーム大会が行われる事となった。当然、簪にはハンディをという声が多くあがったが、今回は全員平等にと言う事になった。実力差がある時点で平等では無いのだが、そこは気にしない方向で話は進められていた。

『一夏さんって苦手があったんですね』

「(当たり前前だろ？ 闇鴉は俺をなんだと思ってるんだ)」

『そうですねえ……完璧超人？』

「(そんな人間は存在しない!)」

闇鴉の意見に、この部屋にいる全I Sが同意を示したが、一夏はそれを力強く否定した。

「木霊？ 何を言ってるの？」

「蛟も……いきなりどうしたのよ？」

「丙？ 何かあったのですか？」

「金九尾も光白孤も……」

「何を急に……」

「土竜もどうしたの〜?」

それぞれの専用機の言葉しか聞こえない六人——簪と美紀は互いのISの声も聞こえるが——は、急に同意の言葉を放った専用機に不審の眼差しを向けた。だが、ただ一人全てのISの声が聞こえている一夏は、やれやれと首を左右に振ってから事情を説明する事となった。

「ちよつと闇鴉と会話をしている、その中で出た言葉に他の子たちも同意しただけだ。詳しい内容は専用機に聞くか気にしないでくれ」

「一夏君は全てのISの声が聞こえるんだったわね……なるほど、それで一夏君だけ驚かなかったのか……」

「それで? 結局なんのゲームをするんだ?」

「このまだ封を切っていない新しいゲーム。これなら実力差も対してないでしょ?」

「さあ? 俺や虚ちゃん、碧お姉ちゃんやんは普段からゲームしないから、その辺りに差が出るんじゃない……って! いい加減普段の呼び方に戻していいよな?」

「……ダメ(です)(だよ)……」

「……何で息ピッタリなんですか」

全員が示し合せたように同じタイミングで答えたので、一夏はとてつもない疲労感に襲われた。迂闊な発言で酷い目に遭ったと、一夏は今日一日の出来事を戒めとし、今後
に生かそうと考えていた……現実逃避気味に。

一夏の発表から暫く、鈴たちの周りも騒がしくなったが、知らぬ存ぜぬで押し通した結果少しは静けさを取り戻していた。

「しかしよー、鈴もしらねえんじや俺たちだつて知らないつて分からないもんかね？」
「そんなの俺が知るわけ無いだろ。だいたい、弾は女子に話しかけられて鼻の下を伸ばしてただろ」

「それはオメエも同じだろうが！」

「はいはい、やかましいから黙りなさいよね、つたく。何でアタシにはこいつらのお守をしなきゃいけないって空気が流れてるのよ」

「それは、鈴さんに同性の親しい人がいないからではないでしょうか？」

「蘭……アンタ言うようになったわね」

せつかくの休日だと言うのに、鈴は何時もの二人と蘭を加えた四人で遊んでいた。場所は一夏反田家だ。当然の如く一夏も誘おうという流れになったのだが、このタイミングで一夏と接触したら、また色々と面倒になると考えて今日は一夏を誘わなかった。それが蘭の不機嫌の理由だと鈴は思っていた。

「だいたい、蘭だつて友達じゃないじゃないのよ！ アタシ、アンタがアタシたち以外の人と遊んでる場面なんて見た事無いわよ？」

「それは鈴さんの前で遊んでいないからですよ。私にはちゃんと同性の友達がいいます、沢山」

「何故沢山にアクセントを置いた？ それはアタシに対する宣戦布告と受け取って良いのね？」

「まあまあ、落ちつけよお前たち」

「弾（お兄）は黙ってて！」
「あつはい……」

仲裁に入った弾だったが、鈴と蘭の迫力に負けてあつさりと引き下がった。そんな弾の姿を見て、数馬が苦笑いを浮かべた。

「やっぱり弾はヘタレだな……これが一夏だったらあつさりと仲裁に成功しただろうに」

「じゃあオメエがやってみろ！ 出来るもんならな」

「俺は別に鈴と蘭が騒がしくても問題は無い。厳さんに怒られるのは弾だからな」

数馬の言う通り、鈴と蘭が騒がしくても、怒られるのは弾なのだ。理由は多々あるが、一番の理由として厳は蘭を溺愛しており、その友人であると思われる鈴も怒る事が難しくなっている。そこで一番怒り易く、二人に関係している人間を選べば、当然弾と言う事になるのだ。

「爺ちゃんも理不尽だよな……騒いでるのは蘭と鈴だつて言うのによ……」

「お前んちでお前の妹が騒いでるんだ、兄として甘んじて説教される」

「お前、バカなんだから難しい言葉を使うなよな」

「なんだとー！」

弾と数馬も言い争いを始め、結局弾が厳に怒られるのだった……

あれから暫く時が経ち、いよいよ虚のI S学園入学試験の日が近づいて来ていた。I S学園の最大のスポンサーである更識の人間で、その更識企業で企業代表を務めている虚は、合格確実と言われているが、本人はその事で油断する事は無かった。

最近は一夏も忙しくて疎かになっていたI S講座も、受験が近づいてきた事を受け再開するほど、虚は受験に対して本気だった。

「——ここまでで何か質問はありますか？」

「いえ、問題ありません」

「では続きを……つと、もうこんな時間でしたか。今日はこれまでとしましょう」

学校から帰ってきて、一夏は当主としての仕事もしている。その仕事を終えてから虚の勉強に付き合っていたら、当然の如く夜遅くまでかかってしまう。その所為で最近一夏は刀奈たちとまともに会話もしていなかった。まあ、刀奈や簪、美紀は代表合宿で屋敷を空ける事が多いし、本音に至っては次のテストで赤点なら補習というところまで追い込まれているので、今更ながらに必死になって勉強をしているので、一夏が例え暇だったとしても会話をする機会は多く無かっただろう。

「いよいよ来週ですね。自信の程はどうです？」

「油断はしませんけど、一夏さんのおかげで、合格は間違いないと思えるくらいにはありますよ」

「俺が手伝わなくても、虚さんなら合格間違い無しだったと思いますよ」

「一夏さんにそう言ってもらえるのなら、大丈夫でしょうね」

二人つきりでも、この二人は変な事をしようなんて思わない。これが刀奈なら、

一夏にちよつかいを出そうとか考えるのだろうか、根がまじめな二人は、ただただ勉強をすただけだった。虚が一夏の事を想っている事は、互いに気にしないようにしていたのだ。

受験の準備

ＩＳ学園の入試というのは、筆記試験の他に実技試験もある。割合的に言えば、実技試験重視なのだが、ＩＳ学園は一応高校扱いなので筆記試験もやらなければならないと政府から通達されていたのだった。

「ＩＳ乗りを目指す子は、最低限の知識と教養は持ち合わせてると思うんですけどね」

「そうね……私たちがみたい専門機関や参考書が無かった時ならまだしも、今はＩＳの専門機関も参考書もあるんだからね」

「ですが、やっぱり高校生なんですから、勉強は大事だと思いますよ？」

「真耶は真面目ねえ……」

高校時代、勉強が嫌いだった碧は真耶に感心したような眼差しを向けた。嫌い⇨苦手ではない所が、碧の凄いとところなのかもしれないが……

「そう言えば、更識関係者が試験を受けるという噂を耳にしたのですが、本当何ですか小鳥遊先生」

「ああ、虚ちゃんね……布仏虚ちゃん。更識家に仕える布仏家の長女で、更識企業の企業

代表を務めてる子よ」

「そうなんですかー。企業代表って事は、相当強いんでしようねー」

「そうねえ……日本代表の刀奈ちゃんには敵わないっばいけど、それに準ずる強さは持ち合わせてるわ。それに、I Sの知識もね」

「ここで虚に知識を教えているのが一夏だとバラさない辺り、碧は弁えていると言えるだろう。もし本音だったら、あつさりと一夏の方が知識量が豊富だとバラしたかもしれないが……」

「更識家は優秀な人が多いんですねー。代表の更識さんも、もちろんですが候補生の妹さんと四月一日さんもなかなか強いと聞きましたよ。それに、男の子でI Sが動かせる一夏君もいますし、更識は世界中から注目されてますよね」

「前にも言ったけど、あんまり表の世界で注目されちゃマズイんだけどね」

「まあまあ、小鳥遊先生。細かい事は気にしちやダメですよ」

「細かくないわよ、紫陽花……」

「実技試験の担当は私と五月七日先生で受け持ちますので、小鳥遊先生は試験官をお願いします」

「私も実技担当が良いんだけど」

「小鳥遊先生相手だと、受験生が自信喪失しますので」
「あつそ……加減くらい出来るんですけど？」

何だか織斑姉妹と同列にみられた気がして、碧は機嫌を損ねた。もちろん、真耶にそんな意図は無く、純粹に碧相手だと加減されても勝てないと知っているからこそその発言だったのだ。

IS学園入試当日、虚は朝から緊張していた——などと言う事は無く、むしろ周りの刀奈の方が緊張していた。

「準備出来てるわよね？ 受験票は持った？ 筆記用具は？ それから——」

「お嬢様、私は本音ではありませんので」

「ほえ？」

引き合いに出された本音には伝わらなかったが、その一言で刀奈は冷静さを取り戻したのだった。

「I Sの勉強もだけど、普通教科もあるんですよ？ 虚さんなら大丈夫だとは思いますが」

「中学でも上位だもんね、虚さん。企業代表であちこち飛び回って学校休みがちなのに、何時勉強してるんだって愚痴ってる先輩がいるって聞いたけど」

「時間がある時に家で勉強してるんですよ。分からない箇所があつたら先生に聞いたり、一夏さんが分かる場合は一夏さんに聞きますし」

「一夏君、一年生なのに三年生の範囲が分かるの？」

「少しは、ですけどね。全部は分かりませんよ」

実にリラックスした空気が流れているが、何時までもグダグダでは虚も気合いが入らないだろうと考慮し、一夏が無理矢理真面目な空気を纏った。

「虚さん、落ち着いて受ければ間違いなく合格出来るでしょうし、無駄に力まず、適度に

リラックスして頑張ってください」

「ありがとうございます。更識の名に恥じぬよう頑張ります」

笑顔でIS学園に向かう虚を見送り、一夏たちも学校の用意を始める。ちなみに、本音は途中から居眠りをしてたので、一夏に叩き起こされた。

「ほえっ!？」

「静かだと思っただらよかった……俺たちも普通に学校なんだからさっさと支度しろ。何時まで寝間着なんだよ……」

「一夏、本音のお兄ちゃんみたいだね」

「言えてますね」

「勘弁してくれ……」

冗談で言った簪と美紀だったが、あまりにも的を射ている表現だと刀奈は思っていた。自分より年下だが、刀奈も一夏の事を兄だと思わされる場面が多々ある事を自覚しており、自分より子供っぽい本音に対しても兄っぽいところが見て取れてもおかしくないと思ってしまったのだった。

「そういえば、来年から織斑姉妹がIS学園に赴任するんじゃない……」

「ああ、あの人たち……ドイツで好き勝手やってるってこの間報告がありました」

「誰から？」

「篠ノ之博士」

一夏と東は情報を共有する為に、割と頻繁に連絡を取り合っていた。東からはドイツにいる織斑姉妹の情報や、怪しい動きをしている国が無いかの報告。一方の一夏からの情報は、東を探そうとしてしている集団がいる事や、その集団が何処にいるかなどを報告している。

互いに自分でしようと思えば出来るだけの技術力を有しているのだが、何分互いに互いがもたらしてくる情報、ならびにその相手に興味が持てないのだ。だからそれを互いが補っているのだ。

「ドイツって言えば、この間模擬戦をしたドイツ代表、かなり強かったわよ」

「織斑姉妹が指導した相手なら、お姉ちゃん相手でも結構戦えるんだね」

「まあ、一夏君が造ってくれたこの蛟を使って、負けるわけにはいかないんだけどね」

盛り上がっている刀奈・簪姉妹を他所に、一夏はI S学園の方角に視線を向けた。いずれ自分も通う事になるであろう場所に、実の姉が赴任するとなると「一夏分」なる物

を補給させろと迫り寄ってくるのではないかと、今から不安に思うのだった。

実技試験

筆記試験は特に問題無く終えた虚だったが、実技試験が近づくとつれて緊張は増して行く。唯一の救いは、実技試験の対戦相手が碧では無かつた事だ。試験官相手に勝つ必要が無い事は虚も理解しているが、碧を相手にするとどうしても緊張してしまい、普段の実力の半分も発揮できない事が多々あるのだ。その所為で不合格になどなれば、恥ずかしくて一夏に顔向けが出来ないと考えているのだ。

『虚は気にし過ぎなんですよ。貴女は立派に戦えるんです。相手が誰であろうと自分を信じ、また専用機である私を信じて下さい』

「(そう：ですね。一夏さんが大丈夫だと言ってくれましたし、なにより私には丙、貴女がついていきますしね)」

『少しは気が楽になりましたか?』

「(ええ。相手は元日本代表候補生ですが、私は常日頃から日本代表や代表候補生と訓練を積んできたのです。ここで緊張する事など無いのですね)」

『適度な緊張は必要ですが、過度な緊張は確かに不要です。良いですか、自分の力を過信し、慢心する事など無いように。普段通りに動かせば、貴女は確実に合格出来るだけの

操縦技術を持ち合わせているんですから』

専用機に励まされるなど、普通ならあり得ない事だろう。だが更識製の専用機はその持ち主に対して話しかける事が出来る。したがって持ち主に対して叱咤激励をする事も、的確なアドバイスを送る事が出来る。心は持てど緊張とは無縁の存在だ。常に冷静でいられるISだからこそ、持ち主の緊張を解く事が可能なのだ。

「次、布仏虚さん。第二アリーナへ来て下さい」

「はっ」

受験生を案内する教師に連れられ、虚は第二アリーナへと向かう。対戦相手は元候補生と言うだけで詳しい情報は得られていない。だが虚は緊張で固くなる事無く、何時も通りの雰囲気を感じていた。その事に、案内を任された教師は驚き、感心していたのだ。

筆記試験の監督だった碧は、実技試験をモニタールームで見学していた。本当ならアリーナに直接赴き、受験生の動きを生で見たかったのだが、元日本代表で無傷で世界を制した自分がその場にいると、緊張を加速させるかもしれないという理由でモニター越しでの見学になっている。

「私ってそこまで有名だったんだね」

『自覚してないんですか？ 貴女は織斑姉妹と並んで、全世界のIS操縦者、及び操縦者を志している少女の憧れなんですよ。世間に疎いのは仕方ないですが、それくらいは自覚したらどうですか？ モンド・グロツソは世界大会なんですから』

「そんなこと言われてもねえ……織斑姉妹と比べれば私なんて普通よ、普通」

『比べる相手がおかしいんですよ。一夏さんだって偶に言ってますが、篠ノ之博士と比べて普通でも、世の中から見れば十分凄いです。まったく、何で自分が凄いつて事を認めないんでしょうね……』

「だって、私たちからしてみれば普通なんだから。私より強い人がいる、それだけで十分

だと思うけど?」

周りに人がいない事を良い事に、碧は普通に木霊と会話をしている。誰か近づけば碧にも、木霊にも分かるからこそ、こうして普通に会話が出来るのだが……

『上を見るのはいい事ですが、偶には下も見ないといけませんよ。自分がどの位置にいるのか、正確に把握する事も大事です』

「自分の位置、ねえ……いたくっているわけじゃないんだけどね」

『何を贅沢を言つて……まあ、これは言つても無駄ですけどね。そろそろ虚さんの番ですわね』

「そうね。まあ虚ちゃんなら心配なく合格ラインを突破するでしょうけども」

木霊が何を言いかけたのか、碧は気にする事はしなかった。言つても無駄、と言われたのだから気にするだけ無駄だと判断したのだろう。既に碧の意識は木霊との会話から虚の戦闘に向けられている。

「相手は真耶なんだ。紫陽花の方が楽が出来ると思つただけど、こればかりは仕方ないわね」

『楽つて……貴女から見れば、ですからね。受験生たちにとっては、山田真耶が相手でも

五月七日紫陽花が相手でも楽などでは無いんですが』

「まあまあ、確かに二人とも元候補生だけど、紫陽花は選考会で真耶に負けてるのよ。だから、その分紫陽花相手の方が楽だと言えるでしょ?」

『……実力者から見れば、と何故思えないのでしょうか』

真耶相手だろうが紫陽花相手だろうが、受験生が勝てる確率などコンマの先にしか無いと木霊には思えている。それなのに碧は、紫陽花相手なら受験生でも勝てるんじゃないかと思っている。これが碧の世間とのズレであると、木霊は悩んでいるのだった。

「やっぱり虚ちゃん他の人と動きが違うわねー。専用機を使ってるっていうのもあるんでしようけども」

『いくら一夏さんが造ったとはいえ、打鉄やラフアールと丙を比べるのは失礼ですよ。あれは虚さん専用にかスタマイズされてますし、いくら元候補生とはいえ容易ではないのは当然です』

「あーやっぱり私が相手したかったなー」

『貴女、SEが半分でも刀奈さんを完封するんですから、虚さんが自信喪失しちゃいますよ』

「そっかな?」

VTSとはいえ、碧は刀奈相手に完封勝ちしている。それも木霊では無く打鉄を使つてだ。その碧が相手ならば、虚は今のように着いた状態で試験に臨む事など不可能だっただろう。それは木霊には容易に想像出来る事であり、実際にそんな事になればそれは現実のものだったであろう。

『本当に、貴女は自分の能力を正確に把握する必要がありそうですね。一夏さんにデータ化してもらつて送ってもらいますでしょうか？ 貴女のデータと各国の代表のデータを見比べれば、貴女でも理解出来るでしょう』

「酷くない、それ？ 見比べなくても理解くらい出来るわよ。ただ、織斑姉妹と比べるとねえ……」

『だから！ 比べる相手がおかしいんですつてば！』

木霊の叫びが碧の中に響いたと同時に、虚は真耶との対戦を終えた。結果は引き分け、時間内に両者ともSEをゼロにする事は出来なかったのだった。

合格祝い

虚と真耶の模擬戦は引き分けに終わったが、それ以降の受験生は悉く試験官を務める真耶と紫陽花にSEをゼロにされていた。それはつまり、虚が受験生の中でずば抜けている事を証明しているのであった。

「ほらやっぱり。虚ちゃんの相手は私がした方が良かったんじゃない?」

『ですから、貴女相手だと虚さんが自身を喪失してしまいますって!。そもそもこれは受験であって試験じゃないんですから。勝つ事では無く動きが重視されるんです!』

「でも、虚ちゃんだつて不完全燃焼だと思っけど?」

『ここで完全燃焼しても仕方ないでしょうが!。良いですか、虚さんはこれからISについて学び始めるのです。ここで完全燃焼されて、入学後に苦労するのは貴女なんですよ?。理解してます?』

「そうだったわね。私、教師だった」

『まったく、碧は……来年からは織斑姉妹もここで教鞭を振うんですよ?。その事を忘れて無いでしょうね?』

「あつ……」

来年からIS学園には織斑姉妹がやってくる。その事も受験生が多い事と関係している事を碧は失念していた。もちろん、彼女たちが来れば自分は少し楽が出来るとは思っているのだが、それ以上に苦勞する事になるなんて碧は粒ほども考えていなかったのだ。

『はあ……織斑姉妹が暴走した場合、止められる可能性があるのは貴女だけなんですよ？ もちろん暴走しなければ良いんですが、あの姉妹の事ですから何かしらの面倒は起こすでしょうね』

「私、IS学園の教師辞めようかな……」

『辞めてどうするんです？ 更識に戻って一夏さんの護衛という名のニート生活でも満喫するんですか？』

「その言い方って酷くない!? 護衛って結構大変なんだからね!」

『知ってますよ。ですが今の一夏さんは、ある程度自分の身を守るだけの術を持ち合わせています。四六時中貴女が張りついていなくても問題は無いでしょう』

「……ほんと、木霊って毒舌よね」

『貴女が危機感を持っていればこれ程言いませんよ』

木霊に完全に打ちのめされた碧は、来年から同僚になる二人を思い浮かべ、深いため息を吐いたのだった。

受験から暫く日が経ち、更識家では虚の合格おめでどうパーティが催されていた。企画者はもちろん刀奈だ。

「それでは、虚ちゃんの主席合格を祝して——」

「「「かんぱーい！」「」」」

「あ、ありがとうございます」

今日だけは一夏も刀奈の騒がしさに目を瞑り付きあう事を宣言している。行き過ぎない限り、刀奈の暴走は止められる事は無いのだ。虚もその事を受け容れ、素直にお祝いされる事にしたのだが、恥ずかしさはやはり残っているようだった。

「さすがおねくちゃん、トップで合格なんて凄いいね〜」

「まあ、何で本音ちゃんのお姉さんなのか時々不思議になるくらい、虚さんは優秀だからね」

「自慢のおねくちゃんだもん！」

自分が貶された事に気づかず、本音は胸を張る。皮肉を言った美紀も、その本音の態度に苦笑いを浮かべた。

「相手は真耶さんだったんでしょ？ 真耶さん相手に引き分けるなんて、虚ちゃんも世界に通用するんじゃない？」

「相手は訓練機ですから。いくら一夏さんが製造したからといって、私は丙を使っています。その差を考えれば、引き分けじゃ満足出来ない結果だと思いますよ……手加減も当然されていたんですから」

「でも、お姉ちゃんの言う通り、虚さんなら世界でも通用すると思う。私や美紀よりは強いんだし」

実際にI Sを使った訓練でも、V T Sでも、虚は簪と美紀に負けた事は無い。経験の差も多分にあるのだが、それ以上に戦略を立てるのが上手い虚に、簪も美紀も面白いように虚の攻撃を喰らってしまふのだ。

「上手く誘導されてる気がするんですよ、虚さんと戦つてると……」

「やっぱり刀奈お姉ちゃんと毎回僅差の戦いをする虚さんは凄いと実感するんだよね……」

「まあまあ、かんちゃんも美紀ちゃんも気にし過ぎだつて。私なんておねくちゃんと戦つても全然ダメージ与えられないもん」

「本音、それは威張つて言う事では無いぞ」

「ほえ？」

黙つて話を聞いていた一夏が思わず本音にツツコミを入れた。しかし本音は、何故ツツコまれたのかが分からず首を傾げる。その仕草を見て、虚と一夏が同時にため息を吐いた。

「我が妹ながら、何故こんなにも皮肉が通じないように育つたのが不思議です」

「素直に育つた、と考えましよう」

「そうですね……」

「一夏君と虚ちゃん、何だか本音の親みたいよ?」

本音について語る姿がそんな風に見えたのか、刀奈はそんな事を二人に言った。その事で二人がもう一回ため息を吐いたのは想像に難くないだろう。

「でもそっか……来年は私が受験するわけだし、今から勉強しておこうかな?」

「お嬢様は文句なしで合格出来るでしょう。なんて言っても現役の国家代表なんですから」

「慢心したくないのよねー。一夏君、今度から勉強を見てくれないかな?」

「別にいいですけど、虚さんにも言いましたが、俺年下なんですけど」

「I Sの知識なら一夏君に聞くのが一番でしょ? 世界中探しても、一夏君以上にI Sの事を正確に教えてくれる人はいないわよ」

「はあ……ですが刀奈さん、滅多に屋敷に帰ってこれないんじゃない?」

国家代表として、刀奈はそれなりに多忙だ。今日だって無理を言って屋敷に戻って来たくらいだし、勉強を見ると言っても毎日付き合えるわけではないのだ。

「メールでも何でも、相談するからそれに答えてくれればいいわよ」

「まあそれくらいなら……俺も仕事が無ければ、ですけどね」
「分かってるわよ、ご当主様」

その後、刀奈と本音がパーティーに託けて暴走しかけたのを、一夏とこのパーティーの主役である虚が抑え、さすがにやり過ぎだと説教するのだった。

新たな恐怖

ドイツでの指導も残すところ一ヶ月を切り、織斑姉妹は帰国の準備を始めていた。何故一ヶ月も前からかと言うと、彼女たちがそう言った作業が苦手だからである。

「千夏、これは何だ？」

「それは千冬が捨てたシャツでしょ。何でまだ持っているんだ」

「私のか、これ？ お前のじゃないのか？」

「そんな事は……」

このように、部屋の片づけもまともにしていなかったのだから、一ヶ月も前から準備していても終わるかどうか怪しいのだ。もしかした一ヶ月前でも遅すぎるのかもしれない、とドイツ政府の人間は感じていた。

「このままドイツに残って指導してくれませんか？ 貴女たちなら国賓級の対応をさせていただくが」

「断る！ ドイツには一夏がないからな」

「し、しかし！ 日本には小鳥遊碧や他の元候補生など優秀な人材が次世代のIS操縦

者を育てています。その優秀な人材が育てたIS乗りに対抗できる人材を貴女たちに育てていただきたいのですが」

「そんなものに興味は無い！ 一夏がいるから日本に帰るのだ！」

ドイツ政府の人間がどれだけ交渉しようが、どれだけ最高の条件を用意しようが、織斑姉妹は首を横に振り続ける。その理由は自分たちで言っているように、一夏がドイツにいないからだ。その事を聞いた黒兎部隊の少女たちは、実際にあつた事の無い一夏に嫉妬を抱き、その嫉妬が殺意に代わりそうなどころまで積み上がっていた。

「織斑教官からそこまで想われるなど……」

『「一夏」……この間中継があつた更識一夏の事ですよね……」

「おそらくはな……ヤツの事を聞こうとして私は教官たちに殴り飛ばされ、その後の記憶が無い」

「もし会う事が叶えば、その時が一夏の最後だ……」

「ほう、貴様ら一夏に何をするつもりなのだ？」

一人の少女が呟いた途端、背後に気配が生まれた。黒兎部隊の少女たちは、この後起こつた事を生涯口にする事は無かつたという……

中学を卒業しI S学園入学までの間、虚は更識の仕事を手伝っていた。当主の楯無は分刻みのスケジュールで各地を飛び回り、書類の類は『本当の』楯無である一夏が処理をしている。しかしその一夏も学生である以上この時間には屋敷にはいない。その代理として虚が書類整理を行っているのだった。

『貴女、まだ一夏さんに告白しないんですか？』

そんな作業中に丙がそんな事を言いだした。

丙の声は虚にしか聞こえないため、何故虚がいきなり取り乱したのかと周りの大人た

ちは疑問に思ったが、すぐに虚が取り繕ったために追及してくる大人はいなかった。

「いきなり何を言い出すんですか！」

『いきなりではないですよ。貴女が一夏さんの事を想ってるのは大分前から、先代の楯無様が存命の頃からです。何時までも秘めているのは辛くないのかと思っただけですよ』

「(秘めているのは私だけじゃありません！ お嬢様や簪お嬢様、美紀さんや碧さんも一夏さんの事を少なからず想っていますよ)」

『何故そこで本音さんの名前を出さないのか、あえて追及はしませんか……他の人に遠慮してるのなら無駄だと思えますけど。刀奈さんはあからさまに好意を見せていますし、簪さんや美紀さんも控えめとはいえ一夏さんに好意を見せています。本音さんはまあ……おいておくとしても、貴女は明らかに遅れているんですよ』

「(そんな事言われなくても……一夏さんは恋愛やそう言った事に疎いですし、まだ中学生ですから結婚とかは早いですしね)」

更識内のルールとして、当主は重婚を認められている。だから刀奈たちは競争するのではなく共存する事を選んだのだが、それでもその中で一位になりたいと多かれ少なかれ思っているのだ。虚はその欲が他の人より薄く、一夏の側にいらればそれで良いと

思っているのだ。

『貴女は不器用ですね。まあ家事の出来を見ればそれは分かつてはいましたが……』

「放っておいてください！」

卒業し、少しは手伝おうと家事を引き受けた虚だったが、その腕は壊滅的。侍女たちから「頼むから大人しくしておいてくれ」と懇願されるほどの酷さだったのだ。それもあり、虚は一夏の代わりに書類整理をしているのだが……

『イメージ的には本音さんが酷そうだと思っていたんですが、まさか虚の方だったとは』
「(家事だけはどうしても上達しないんですよ……)」

勉強、ＩＳ操縦、そして事務作業。虚は何でもそつなくこなしているが、家事だけはどうしても上達しなかったのだった。その事だけは、本音が虚に勝っているので自慢しているのだった。

『一夏さんに教わったらどうです？ 彼は織斑家で生活していた頃から家事をしていたはずですし、更識に来てからもちよくちよく手伝っていたはずですし』

「(ですが、これ以上一夏さんに教わるのは……お嬢様の勉強を見る約束もしてました)」

『だから、貴女は他の人に遠慮し過ぎです！ 少しくらい我がままに振る舞っても良い年頃なんですから！ 少しは一夏さんに甘えなさい』

「わ、分かりました……」

丙の勢いに押され、虚はつつい領いてしまった。そしてその日の夜……

「家事を教えて欲しい、ですか？」

「え、ええ。一夏さんの時間がある時で構いませんので」

「別にそれくらいなら構いませんが、何故家事を？ 更識ではそれを仕事にしてる人がいますし、I S学園では掃除は業者が、食事は食堂があつたと思います」

「一応出来た方が良くないかな、と思ひまして……それに、洗濯は自分でしなきゃいけませんし……」

「なるほど。では時間がある時に」

「はい、お願いします」

こうして虚は、一夏に家事を教わるのだが、その上達スピードは、お世辞にも早いとは言えないものだった。

謎の少女

新入生主席としてI・S学年に入学を果たした虚は、学園最強の称号である生徒会長の座を一週間で手に入れた。一夏が造った専用機、丙の力も多分にあつたが、普段から努力を積み重ね、国家代表である刀奈と渡り合えるだけの実力を有していた為に、それは実にあっさりと手に入れられたのだった。

『刀奈さんが入学するまでは、貴女が生徒会長ですね』

「（お嬢様が大人しく会長職に収まるか分かりませんがね）」

苦笑いを浮かべながら生徒会長の仕事をこなす虚は、とても新入生には思えないほどの貫録を持ち合わせていた。入学式まで更識の仕事を手伝っていたおかげか、虚の書類整理のスピードは並みの高校生では太刀打ちできないほどに成長していた。

「失礼するわね」

「碧さん、何かありましたか？」

「織斑姉妹が一夏君に会わせろって暴走しかけてるの。停めるの手伝ってくれない？」

「私では織斑姉妹に太刀打ちできませんよ。碧さんだけで頑張ってくださいって」

「それは私に死ぬと言ってるの？ 私だって二人同時は無理よ！」

入学し、生徒会長の座についてからこのようなやり取りは何度目だろうと、虚はため息を吐きたくなっていた。しかしため息を吐いたところで何かが解決されるわけでもない。渋々生徒会室から職員室へ向かい、碧と二人で織斑姉妹の暴走を停めるのだった。

二年生に進級しても、一夏は簪と美紀、そして本音と同じクラスだった。偶然で片付けて良いのだろうかと一夏は思っていたが、別に不自由があるわけではないので追及はしなかった。

「一夏、お姉ちゃんが呼んでるよ」

「刀奈さんが？ 何か用なのか？」

「受験の事じゃない？ お姉ちゃん最近忙しかったし」

第三回モンド・グロツソに向けて世界中が開催国を狙っているので、その国の代表もあちこちと飛び回る日々を送っていた。刀奈もその一人で、つい先日までヨーロッパ各国でその国の代表と模擬戦を行う羽目に陥っていたのだ。

「久しぶり、一夏君。早速だけど今日の夜、勉強教えてくれない？」

「別に構いませんが、髪の毛跳ねてますよ？」

「大急ぎで空港から来たからね。学生のスケジュールを考えて欲しいわよ」

「刀奈さんは学生の前に国家代表ですからね」

「国家代表の前に学生なんだけど？」

中学校は義務教育であり、何においても優先されるべきだと刀奈は主張したのだが、国の威信を背負っているのだから、義務だの何だの言う前に責務を果たせと言われたのだった。これには一夏たちも刀奈に同情したのだった。

「幸いにしてゴールデンウィークは暇ですからね。みっちり勉強を見てあげますよ」

「……そう言えば私、課題があったんだった。またね、一夏君！」
「逃げて家でも会おうんですけど？」

一夏の言葉に、刀奈はガツクリと肩を落として自分の教室まで戻って行った。その背中は、物凄く哀愁が漂っていたと一夏には見えた。

織斑姉妹が日本に戻って来たのを、篠ノ之束はハッキングした衛星から観察していた。今のところ一夏に害をなす行動はしていないので、束もただただ千冬と千夏を観察するだけにとどめていた。

「ちーちゃんとなつちゃんに会いに行こうかなー？　でも、有象無象が騒がしくなりそうだし……およ？　いっくんから電話だ」

「ここ最近頻繁に電話する事も無くなった相手からの電話に、東は考えていた事を一旦全て放り出して電話に飛びついた。

「もすもすひねもすー？　何かないっくん」

『とある組織が東さんの事を狙っていると報告があつたので。それと、織斑姉妹にそっくりな少女がその組織内にいるとの情報も』

「ちーちゃんとなつちゃんにそっくりな少女？　凄く興味があるんだけど、詳しい情報は無いのかな？」

東が興味を示したのが意外だったのか、一夏は少し間を空けてからその少女の情報を伝え出した。

『名前は織斑マドカ。これが本名なのかは確認出来ていません。所属は「ファクトムマス亡国機業」で歳は十三、見た目は確かに織斑姉妹に似ていますが、少し幼さは感じますね』

「写真があるの？」

『送りましょうか？』

一夏からの提案に、東は二つ返事で答えた。千冬と千夏の子供の頃と似ているのかもしれないと思うと、東のテンションはどんどん上がって行った。

「どれどれ、これが『織斑マドカ』か。確かにちーちゃんとなつちちゃんの子供の頃にそっくりだね」

『貴女がそう言うなら、おそらくそうなのでしょう。何せ俺にはあの二人の記憶がありませんから。それで、ここからは貴女に頼みたいのですが、織斑姉妹と織斑マドカの関係を調べていただけませんか？』

「何で東さんに？ いくくんの方が情報収集能力高いでしょ？」

『何故って、貴女を襲いに来る相手が彼女だからですよ。捕まえて訊問するなり、薬を使って吐かせるなり好きにしてください』

「相変わらず黒い事をさらりと言うね。そこがいくくんのカッコいいところだと東さんは思うよ」

『……何となくですが、面倒な展開になりそうな予感がします。東さん、お気をつけて』

それだけ言って一夏は通信を切った。丁度そのタイミングで、東のラボに不審者が侵

入したのだった。

「いっくん、もしかしくても分かってたね。これはまたデートしてもらわないと割に合わないな」

何処か楽しそうにモニターをラボの監視カメラに切り替えた束は、少女の姿を確認して発狂した。

「こ、これは……子供版ちーちゃん！ この子にあんなことやこんなことをしていいなんて……さすがいっくん！」

既に捕まえた後の事を考えている束、そんな束を探しながら、織斑マドカなる少女は束のラボを破壊していくのだった。

織斑マドカ

派手に暴れる少女をモニターから確認していた束は、ついついその少女を自分の親友に重ねてしまっていた。

「ちっちゃいちーちゃん……なっちゃんにも似てるけどやっぱりちーちゃんの方に似てるな……いっくんも自由にして良いって言ってたし、あんなことやこんな事も……実際のちーちゃんたちには出来ない事でも、この子になら出来そうだしねー」

束から見た少女——織斑マドカの戦闘力は千冬や千夏と比べても数段落ちていると感じられていた。それこそ、一夏でも対抗出来るのではないかと思うくらいに……

「まあ、いっくんは争い事が嫌いだからねー。多分この子に襲われても逃げるだけだろうし……そんな事よりも、そろそろ罠が発動する頃だね！」

モニターを見ながら、束はその瞬間を待ちわびていた。自分の研究施設が破壊されているのにニコニコしていたのは、そのような罠が張り巡らされているからだった。

『クッ！ 何だこれは！ クソっ！』

「はい、侵入者一名様ごあんなーい！ それでは早速ご対面と行こうかな」

あつさりと罠に嵌り、束が操作する機械に連れられて織斑マドカは束のいる部屋へと運ばれていく。その姿を確認しながら、束は扉が開くのを待っていた。

『何処へ連れて行くんだ！ 私は篠ノ之束に用があるだけだ！』

「だからその束さんの前に運んであげてるんだよ、小さいちーちゃん」

モニターから騒がしい声が聞こえ、その声が扉の向こう側へ到着したのを確認して、束は扉を開けるスイッチを押した。

「ようこそ、侵入者さん。私が天才束さんだよ、ハロー！」

「貴様が篠ノ之束……お前を殺すのが私の仕事だ」

「うーん……ちーちゃんやなっちゃん、そしていつくんの妹とは思えないほどおバカさんだね。それこそ、箒ちゃんといひ勝負が出来るんじゃないかってくらいのおバカさんだよ」

「私をあいつらと同じに思うな！ 私は私だ！」

「うんうん、小さいころから優秀な姉や兄と比べられて来たんだもんね。それが嫌であのクズたちについて行ったのに、結局捨てられてまた比較される事になるなんて」

一夏から聞くまでも無く、束はマドカの事を知っていた。だが、彼女が亡国機業に属している事や、自分を狙っている事は束は知らなかったのだった。

「I S業界において、織斑千冬・千夏姉妹と織斑一夏——今は更識一夏だけど、その三人を知らない人間はいない。世界最強の姉妹と男で唯一I Sを動かせる少年、その妹ついでで過度な期待をされるのは辛いんですよ？」

「……お前がI Sなんてものを造らなければ、私はあの人たちと比べられる事は無かった。だから私は仕事など関係なく貴女を殺す」

「本来の任務は、束さんを捕まえる事。でも君自身の感情では束さんを殺したい……成る程、いっくんが束さんの自由にして良いって言うわけだ」

マドカと対面して、束は一夏が処遇を一任してきた理由が分かった。一夏もマドカの事を知っており、そして兄として想っていたのだろうと。

「君、束さんの助手にならない？ 今なら専用機も用意するよ？」

「何をバカな……私はお前を殺しに来たんだぞ」

「でも、君じゃ束さんを殺せない」

「ば、バカに——ッ!？」

「この程度の動きについてこれないんじや、東さんはおろかいつくんも殺せないよ。まあ、いつくんを殺そうとしても、怖いお姉さんたちが現れるだけだね。もちろん、東さんも許さないけど」

一瞬でマドカの背後に回り込み、そして首筋にナイフを突き付ける東。これ程衝撃的なパフォーマンスも無かつただろう。

「……例えば私を助手にしたところで、別の亡国機業所属のヤツが来るだけだ。私はあの場所以最弱の存在なんだから」

「そこは、東さんの知り合いに頼んで君は死んだとその組織に伝えてもらうのさ。いくら最弱の存在である君だからと言って、東さんの戦闘力を知らしめる事は出来るだろうしね。君は最弱って言ってたけど世間では結構強い部類だと思うしね」

「……だが、何時までも隠し通せるとは思えない」

「そんなの、日本政府でも脅してIS学園に入学させればいいのさ！ あそこは何処の国も不可侵だからね」

「亡国機業は国では無い。不可侵とはいえ関係なく攻め込める」

「ほんと、君はおバカだね。君が入学するのは一年半後。いつくんたちと同学年になるのさ。そうすればいつくんも、ちーちゃんやなつちゃんも君の事を守る事が出来る。

亡国機業だろうが国だろうが、武力と知力でいっくんやちーちゃんたちに敵う相手なんていないよ。それに、東さんもバックアップするしね〜」

領けば身の安全と専用機が手に入り、首を左右に振れば命を失うと分かっている状態で、後者を選ぶ人間が果たしているだろうか。マドカは一種の諦めを持って領き、東の庇護下に入る事を承諾した。

「よし！ それじゃあまーちゃんの専用機を考えないとね〜」

「ま、まーちゃん？」

「ちーちゃんやなつちゃんの妹なんだし、それで良いでしょ？ 東さんが認識出来る五

人目の人間だよ〜」

「……それで、専用機と言うのは？」

「う〜ん……暮桜と明椛の性能を受け継いだ第三世代型ISを計画してるんだけど、それで良いかな？」

「構わない。私はあの二人を超えなければいけないのだから」

マドカの覚悟を確認した東は、その後三日間研究部屋に籠った。その間にマドカが逃げ出すなど微塵も思っていなかったようで、マドカはかなり拍子抜けな気分を味わった

のだった。

「……織斑千冬、織斑千夏、そして更識一夏。私は三人の偉大な姉と兄を超える」

一人取り残されたマドカは、そんな事を宣言していたのだった。

鈴の転校

重要書類に目を通し、どう処理するかを決めたタイミングで、一夏の携帯が鳴った。普段は鳴らない着信音に、一夏は首を傾げた。

「珍しい事もあるものだ」

かかって来た電話にそう感慨深い言葉を漏らし、一夏は通信を開始したのだった。

「何かあったのか？ 最近電話が無かったから忘れてるのかと思ってたぞ」

『悪かったわね。あたしたちはアンタと違って優秀じゃないからね。試験とか色々大変だったのよ』

「それで？ 近況報告をしたいわけではあるまい」

『前置きの無駄話にくらい付き合いなさいよ』

「生憎、そこまで時間があるわけじゃないんだ」

一夏の立場をある程度知っている鈴は、小さくため息を吐いて本題に入る事にした。

『あたしね、中国に帰る事になったの』

「……随分といきなりだな。何かあったのか？」

『I Sの適性が高い事が分かつてね。候補生にならないかかって打診が来たのよ』
「なるほど。それはおめでとう、で良いのか?」

『どうだろう。あんたと離れ離れになるのはちよつと寂しいけど、国の威信を背負えるかもと思うと興奮するわね』

一夏は鈴の気持ちは何となくではあるが知っていた。本人が何も言わないのでスルーしていたし、鈴自身も伝える事は無いだろうと思っていた事だった。

「弾と数馬は良いのかよ」

『別にあいつらはどうでも。一夏、もし代表になれたらあたしと付き合ってくれる?』

「……悪いが、俺は鈴の事を友達としか思えない。鈴のように特別だと思ふ事は出来な
くよ」

『……分かつてたけどキツイわね、振られるのつて。うん、何時か絶対後悔させてやるく
らいの美人になってやるから、覚悟しなさいよね一夏!』

「ああ、後悔させてみる」

強がりだとあからさまに分かる鈴の言葉に、一夏は冗談で返す。これは一夏からのメッセージだと理解した鈴は、涙声になりながらも感謝の言葉を述べて通信を切った。

「『ありがとう』……ね。俺は感謝されるべきだったのだろうか」

通信の切れた電話を耳に当てながら、一夏はそう呟いたのだった……

鈴の帰国から時は一気に加速したのではないかと勘違いしそうなくらい、一夏のここ最近の感覚はズレていた。この前夏休みだったと思ったのに、今はもう受験シーズンになってきているのだから、一夏でなくてもそう思ってしまうのは仕方ないだろう。

「うー緊張するなー」

「まだ二週間あるんですから、今から緊張してどうするんですか……」

「でも！　I S学園の入試は、何処の高校よりも難しいってもっぱらの噂だし……」
「国家代表の刀奈さんが落ちるって、どんな猛者たちが集うんですか、そこは……」

I Sの勉強——だけでは無く一般教科の勉強をしながら、刀奈は一夏に励まされていた。ここ一ヶ月ほど一夏に勉強を教えてもらっているんで、下手を打たなければ合格は確実だと言えるくらいの自信は付いている。だが、どうしても緊張はしてしまうのだった。

『一夏さんの言うように、刀奈は国家代表なんですから、筆記がダメでも実技で確実に合格出来ますよ』

「でも、今年は織斑姉妹が実技試験担当じゃないかって虚ちゃん和碧さんが……」

「あれは刀奈さんを緊張させて楽しんでるだけですよ。だいたい、織斑姉妹が担当したら、全員不合格になってしまいますし」

『そうですよ。あの二人が担当したら、自分の気にいらぬ相手は不合格にするでしょうし、織斑姉妹と戦った事で自信喪失する受験生が続出ですよ』

「……そうよね！　実技試験は織斑姉妹が担当する訳ないわよね！」

一夏と蛟に励まされ、刀奈は無理矢理テンションを上げる。気休めだと分かるからこ

そ、無理してでも明るく振る舞おうと思つたのだろう。

「まあ順当に行けば、今年も山田真耶さんと五月七日紫陽花さんが実技担当でしょうね」
『去年は碧さんがモニター室でボヤいてたと聞いてますが、今年も碧さんは監視役なの
でしょうか?』

「どうだろうな。碧さんが相手でも、自信を失う人は大勢出てくるだろうし、碧さんもそ
こは弁えてるんじゃないか?」

「碧さんが相手でも、私は勝てる自信が無いわね……そう考えるとどれだけ化け物がい
るのよ、I S学園って」

刀奈の言葉に、一夏と蛟が同時に苦笑いをした——ように刀奈には感じ取れた。

「なに?」

「いえ、現日本代表にここ迄言わせるんですから、先代はどれだけ強かつたんだろうと思
ひまして」

『そもそも貴女も十分化け物扱いされてもおかしくない戦績なんですよ? その事、理
解してます?』

「虚さんも世間から見れば十分実力者——刀奈さんが言うところの化け物に当たるん
じゃないですかね?」

「ちよつと！ 私はあの人たちのように化け物じみた戦績では無いはずよ！」

碧もそうだが、刀奈も上が凄過ぎて自分の事を凄いと認められない領域に踏み込んでいた。その事を理解している一夏と蛟は、再びため息を吐いた。

「上を見過ぎて自分の強さを理解していない、か……」

『重傷ですね、これは……』

「な、なによ……私より碧さんや織斑姉妹が強い事は事実でしょ」

「確かに事実ですが、貴女も世界から見れば十分『強い人』です」

『あんまり上を見過ぎると、下の事を忘れてしまいます。少しは自分の立ち位置を自覚する時間があつても良いんじゃないでしょうかね』

奇しくもそれは、一年前碧が木霊に言われた事と似ているのだが、刀奈にそんな事を知る術は無かった。だから刀奈は一夏と蛟の言葉を受けて、自分の立ち位置——客観的に見れば自分はどうな存在なのかを知る事にした。

そしてIS学園入学試験当日、刀奈は過度の緊張はせず、普段通りの雰囲気を身に纏っていたのだった。

刀奈の受験

現役の国家代表が受験すると言う事で、IS学園は普段より落ち着きが無かった。この時期は特例として実家に戻ってもよいとされているのだが、日本代表更識刀奈を生で見ようと殆どの生徒が帰宅せずに寮に残っていた。

「凄い人気ですね、お嬢様は……」

『それだけモンド・グロツソ優勝という実績は大きいのでしょう。普段の刀奈さんを知る虚には分からないでしょうが、世間から見れば「更識刀奈」はカリスマと言っても差し支えないくらいの人気なのですから』

「実力者ですからね……まあお陰でこうして丙と普通に会話していても誰も気にしない状況が出来あがったのですがね」

見学の為に殆どの生徒はアリーナへと移動しており、普段から来客の少ない生徒会室は完全に虚一人の空間になっているのだ。僅かに残っている生徒も、今日はわざわざ生徒会室に訪れるような事は無いだろう。

『どうやら去年は貴女が注目されていたようですよ』

「私が？ 国家代表でも無ければ候補生でも無い私が何故……」
『更識の企業代表、それだけでも注目されるのに十分だと思えますけどね』

丙と会話しながら、虚はモニターの電源を入れた。そこに映し出されたのは、山田真耶と戦っている自分の主だった。

モニター室での観戦を余儀なくされた碧には、今年はまだ一つ重大な任務が言い渡されてきた。その任務とは――

「何故私たちまでここで観戦しなければならないのだ！」

「そもそも真耶や紫陽花よりわたしたちが実力を見てやった方が良いと思うぞ」
「……貴女たちと戦わなきゃいけないって分かったら、受験生全員落ち込むわよ」

——同じく元日本代表の織斑姉妹の見張りだった。

碧相手でも自信喪失を心配されるのだから、織斑姉妹と戦わなければいけないとなればこれはもう確実だろう。碧はまだ手加減や隙を見せたりと言った遊び心を持つて挑めるだろうが、織斑姉妹が担当すれば一切の容赦なく叩きのめす未来しか碧には見えなかったのだった。

「もし我慢出来ないのなら、来年受験予定の一夏さんに会わせませんよ？」

「それは困る！ 一夏に会えないなど耐えられない苦痛だ！」

「学園の至る物を壊してしまっても仕方ないくらいの苦痛だ！」

「……壊していい理由なんて無いわよ」

事実、一夏に会えなくて織斑姉妹は訓練機を数機壊しかけた事がある。授業に託けて生徒相手に暴れ、その生徒を再起不能ギリギリまで追い込んだのをフォローしたのは碧なのだ。

「あの訓練機だって、更識の技術者が修理してくれたおかげで使えますけど、下手をす

れば貴女たちが弁償しなきゃいけないんですけどからね」

「分かつてるさ。あの程度なら問題ないという事だろ？」

「わたしも千冬も、あの程度で良いならいくらでも出来るからな！」

「やるなど言ってるんです！」

そう何度も修理させられなきゃいけない一夏の心労を考えると、これ以上織斑姉妹を暴走させるのはマズイと碧は判断した。かといって一夏に会わせるなど簡単に出来るはずもなく、碧は携帯を取り出して一夏に繋いだ。

『はい？ 何かありましたか？』

「一夏さん、少し時間大丈夫？」

『問題ありませんが、何か……』

「一夏だと!?!」

『納得しました』

背後から聞こえてきた姉妹の声に納得した一夏は、詳しい事情を聞く事無く諦めた声を出したのだった。

受験している人間からしてみればその一瞬は長く感じるが、その他の人間からしてみればあまり変わらない一瞬だ。刀奈の受験が終わり更識の屋敷では一夏が蛟のメンテナンスを行っていた。

「お姉ちゃん、最近メンテナンスしてなかったんだってね？」

「ちよつと忙しかったし、蛟と相談しながら使ってたわね」

「ダメですよ。ちゃんとメンテナンスしなきゃ。一夏さんだから問題無く修理出来ませけど、余所で異常が見つかっても修理出来ないんですから」

更識製のISは、訓練機ならば普通の業者でも修理出来るくらいには技術が発展した

が、専用機を修理しようとしても他の人間には手に負えない部分が多く存在しているの
で、定期的にメンテナンスしておかなければ、いざ実戦という時に異常が見つかっても
修理が出来ない代物なのだ。だから更識所属の代表、及び候補生は定期的に実家に帰る
事が認められているのだが。

「受験と交流会とかで忙しかったのは知ってるけど、ISだって休ませてあげないと」

「虚さんも半月に一回のペースで屋敷に戻ってきてますし、刀奈お姉ちゃんもそのくら
いのペースでメンテナンスに出さなければマズインじゃないですか？ 虚さん以上に
ISを動かす機会が多いんだから、それ以上のペースの方が良いとは思うけど」

「IS学園に入学すれば、少しくらい余裕が出来ると思うわ。だからそうなたら週一
くらいのペースで屋敷に戻ってくるわよ。もちろん、週末に予定が無ければだけどね」

モンド・グロツソは行われない代わりに、各国の代表を交流会と称して結構な頻度で
集められ戦う事になっている。これはIS戦闘力を競うのではなく、ISの開発技術を
競う方向に変わったからなのだが、更識企業を除けば、何処の国も拮抗した技術成長を
見せていたのだった。

「フランスが少し遅れてるっぽいけどね」

「でも、まだ何処の国も安定して第三世代を供給する事は出来ていないんでしょ？ フ

ランスにはデユノア社があるし、ラファールの改良に成功したってニュースを見たけど」

「あれは、一夏君がラファールの設計図をデユノア社に貸したからよ。それなりの見返りを要求しても良かったと思うんだけど、一夏君はそういつた事に興味ないみたいだね」

「でも、データは回収したんでしょ？」

「コピーも出来ないように加工してたから、もう一度造ろうにも成功例を分解して造るしかないんだけどね」

意外としつかり対策していた一夏に、簪と美紀は納得の表情で刀奈の言葉を聞いていたのだった。

禁断症状

入学して早々、刀奈は虚から生徒会長になるように言われていた。IS学園の生徒会長とは、即ち学園最強の称号。虚は自分より強く、生徒の見本となるべき刀奈にその職を譲ると申し出たのだった。

「今年は虚ちゃんやんがやっててよ。それで来年は一夏君が生徒会長になれば良いじゃない」

「一夏さんはあくまで知能最強です。IS学園の生徒会長は武力の面が強いですから一夏さんには不向きですよ。それと、お嬢様がそう言うだろうと言う事は予測済みです」

そう言つて虚は携帯を取り出し刀奈に手渡した。

「何よ?」

「話せば分かりますよ」

相手が誰かを教えてくれなかった虚に不満を込めた視線を向け、刀奈は電話を取った。

「はい」

『刀奈さん、生徒会長になればそれなりに自由が利きますし、ISの整備で俺が学園を訪ねる際に会う事が可能です』

「なる！ 私生徒会長になるわ！」

電話の向こう側で一夏が呆れているのが、虚には分かったが刀奈には分からなかった。そもそも、一夏が自分に会う事をプラスだと言っている時点で、誰かがその事を吹き込んだのだと分かるはずなのだ。だが刀奈はその事には気づかず、まんまと生徒会長になると宣言してしまったのだった。

『それは良かったですね。生徒会長とは生徒の見本となり、規律をシツカリと守る事を求められます。刀奈さんなら問題なく出来るでしょうが、頑張ってくださいね』

「それで、一夏君は次、何時整備に来るのかしら？」

『そうですね……二週間後にメンテナンスの予定が入ってますから、それに同行する形でIS学園に伺いますよ。その時にお会いしましょう』

「うん！ 楽しみに待ってるわね」

ISを動かせる事は公表しているが、ISを造れる事は公表していない。整備くらい

なら問題ないのかもしれないが、念には念を入れて一夏は整備に訪れる際も数人と一緒に行動している。IS学園は基本的に男子禁制の為、一夏以外は全員女性研究者なので居心地は悪そうだと虚は思っていた。

「さーて、一夏君が来るまで何して時間を潰そうかな〜」

「残念ですがお嬢様、生徒会長に就任されたのですから仕事をしていただきます。このように学園への要望や様々な国や政府からの嘆願書など多くに目を通さなければいけませんので遊んでいる余裕などありませんよ」

「な、何よこの量……こんなの聞いてないわよ」

「国家代表が入学すると言う事で、各国の候補生も大勢入学したのです。これくらいの量の書類があってもおかしくは無いと思えますが？」

「は、ハメられた……」

生徒会長に就任すると一夏に宣言してしまった以上、今更前言を撤回する事は不可能だと刀奈にも分かっていた。そして二週間後に一夏に会える事だけを糧に、刀奈は書類の山と格闘する事を決意したのだった……

I S学園での生活は毎日が充実していたのか、気が付けば一学期終了が近づいて来ていた。半月に一回学園で、三週間に一回は屋敷に戻り蚊のメンテナンスで一夏に会う事が出来ていたが、同じ屋敷で生活していた頃と比べれば格段に一夏と会う回数は減っていた。

そんな悩みを抱えていた刀奈だが、いよいよ夏休みになり、今年は代表として各国を飛び回る事もなさそうなのでテンションが上がっていた。

『ウキウキ気分なのは良いですけど、この仕事を片付け無いと帰れないんですよ?』
「一夏君に会えると思えば、この程度の仕事なんて簡単よ」

そう宣言した通り、刀奈は書類の山をみるみる片付けて行つた。普段のスピードからは考えられない程の処理能力に、蚊だけでは無く虚も驚いたようだった。

「普段からこれくらい早く片付けてくれれば、私も楽なのですが」

「虚ちゃんが早すぎるんでしょ？ 私は普段から頑張ってるわよ」

「そうですか……ところで、織斑先生が用事があるみたいですので、これが終わり次第職員室に行ってください」

「織斑先生が？ どっちの？」

「両方です」

その答えに何となく不安を覚えつつも、一夏に会う為だと言い聞かせて書類をドンド処理していく。生徒会長として過ごした数ヶ月は、刀奈にとつて苦痛以外の何物でも無かったのだが、今だけはその事を忘れ必死になれているように虚には感じられていた。

「終わった！ じゃあ職員室に行ってくるわね」

「まあまあお嬢様、一服してからでも遅くはありませんよ。それに、まだ夏休みじゃないんですから」

「それもそうね。虚ちゃんが淹れてくれる紅茶は世界一だものね」

「これしか出来ませんけど……」

一夏に指導してもらったおかげで、一応は家事が出来るようになった虚だが、本人が言うようにハイレベルな事が出来るのは紅茶を淹れるというただ一つだった。それ以外は本音に劣るレベルなのだ……

「でも、織斑先生たちの用事って何かしら？ 一応半月に一回は遠くから一夏君に会わせてるのよね？」

「はい。暴走しないように碧さんを監視につけていますが、一夏さんの姿を見る事は出来ていません」

「謎の『一夏分』とやらはそれで補給出来ているはずよね……」

紅茶を飲み終えて、刀奈は一人で職員室に向かった。虚は刀奈が処理した書類の山を整理する仕事が残っていると行って同行を拒否したのだ。

「失礼します。織斑先生は……」

「更識！ 夏休みは我々も一夏と交流させろ！ いや、させてください！」

「これ以上生殺し状態は耐えられない！ わたしたちも一夏と喋りたい！ 触れ合いたい！ ペロペロしたい！」

「……最後がおかしいですが、一夏君が許可するのですしたら良いですよ」

「「本当だな！ よし、今すぐ確認しろ！」」

「……分かりました」

織斑姉妹の勢いに圧倒されながら、刀奈は携帯を取り出して一夏に繋いだ。

『何でしょうか』

「夏休み、一日でも良いから織斑姉妹と交流出来ないかな？ 何だか怖いんだけど……」

『でしたら、篠ノ之博士と会って話す機会がありますから、それに同行する形なら良いですよ』

「……ですって？」

自分の横で聞き耳を立てている織斑姉妹にそう告げると、それでも構わないという返しを受けた。刀奈は一夏にその事を告げ、電話を切ったのだった。

家族の再会

本当なら一夏だけと会う予定だったのだが、千冬と千夏も同行すると一夏から言われ、束のテンションは少し下がっていた。だが、別の意味ではテンションが上がっている。表面上は一夏個人と会う予定だった時と何も変わってはいなかった。

「いよいよだね。偉大な姉二人と天才の兄とのご対面は」

「……本当に良いんでしょうか？ 私は織斑ですが、貴女を痛めつけようとしたんですよ。」

「良いって。君が織斑を恨む理由はあのクズ共の所為だから。ちーちゃんやなっちゃん、いつくんの所為じゃないんですよ？ だから束さんは許したのだ」

マドカが束を襲いに来た日、束はマドカを捕獲し自分の研究を手伝わせるテストパイロットとしてマドカを保護した。その事は一夏に伝えており、今日会う理由もその事だと一夏には伝えてある。その事を千冬と千夏に伝えたかどうかは束の知る由には無かった。

「まーまー、偉大な姉や兄と比べられてきた君の辛さは束さんには分からないけど、それ

でも君がちーちゃんやなっちゃん、いつくんの事が好きだつて事は東さんには分かっているからね」

「……私は姉さまたち、兄さまと比べられる事が嫌でした。早々に離れ離れになったのに、親は三人と私を比べたがった。そして勝手に絶望していました。だから私は亡国機業に拾われ、貴女を殺せと命じられた時、織斑姉妹や天才と言われる兄に近づけるのではないかと思いました」

「でも、結局は自分のコンプレックスと向き合わざるを得ない状況になっただけだったんだよねー。まあ、これから会う三人は、東さんから見ても普通じゃないからね」

織斑千冬、千夏姉妹と更識一夏——旧姓織斑一夏は篠ノ之束が認める数少ない人物であり、認識出来る数少ない人間でもある。人外と称される束ですら、この三人は普通ではないと思っっているのだった。

「それにしても、まさか君がちーちゃんたちの妹だったとはねー。行方不明だつて事は知つてたし、名前も聞いた事があつたけど、いつくんから報告があつた時は驚いたよ。まさかちーちゃんたちの妹が束さんの命を狙つてるだなんてさ」

「殺すか捕まえるかして来いと命じられていましたので、とりあえず暴れられないように痛めつけるつもりではいましたが、別に殺すまでは思つてませんでしたよ。それに、

貴女を殺すとI Sのコアを手に入れる事が出来ないとも思っていましたし」

「その専用機、白式の具合はどうだい？ 君の能力にあつた設定にはしてあるけど、機体自体はピーキーだからね。後でいっくんに再調整してもらおうと良いよ」

マドカは束から、一夏がI Sを造れる事も、コアを造れる事も聞かされている。もちろん一夏に確認を取り、マドカが逃げ出さないように束が嚴重に監視する事を条件としての打ち明けなのだが。

「兄さまに調整してもらえるのでしたら、私はこれ程嬉しい事は無いと思います」

「堅いなくもつとフランクに行こうよ！ まーちゃんつては堅すぎる！ その喋り方はやめるんだね。束さんの事はもう一人のお姉さんとも思えば良いのだよ」

「で、ですが……」

マドカが困惑したのと、来客が到着したのは、丁度同じタイミングだった。

一夏に会うだけに来たのだが、千冬と千夏は一夏に引き連れられて東のラボを訪れていた。一夏と会う条件としてここに付き合う事を承諾させられたので仕方ないのだが、二人は何故東に会わなければいけないのかと不満を垂れていた。

「なあ一夏。お姉ちゃんたちと何処か遊びに行こう!」

「そうだぞ! 東なんかに会わないで、お姉ちゃんたちと一緒に何処かへ……」

「約束を反故にするのですか? 貴女方に会う条件として、俺はここに付き合うよう要求したのですが」

「……………」

世界最強の姉妹の称号も何処へやら、一夏相手に千冬と千夏は何も反論出来なかったのだった。

「さて、到着です。一応警告しておきますが、くれぐれも暴れないようお願いします」

「分かってるさ……」

「いくらわたしと千冬が束と会うと暴走する傾向にあるからといって、一夏の前で暴走するわけがないだろ」

「いえ、別の理由があるのですが……まあ言質は頂きましたので」

一夏は懐に忍ばせていたボイスレコーダーを見せ、二人の証言は記録されている事を教えた。

「束さん、一夏です。織斑姉妹も連れてきました」

『はいはい！ 開いてるから入っておいで』

ロックが外れる音がしたのを確認して、一夏は扉に手を掛けた。

「ほらー、まーちゃんも隠れてないで挨拶しなきゃ！」

「で、ですが……」

扉を開け、三人の視界に飛び込んだのは束ともう一人の少女。一夏はその少女の事を知っていたが、千冬と千夏はここにその少女がいる事は聞かされてなかったのだ。

「ま、マドカ……なのか？」

「お、お久しぶりです……千冬姉さま、千夏姉さま。そして、一夏兄さま」

「久しぶりなのでしょうが、生憎俺には昔の記憶が無いから、あえてはじめましてと言わせてもらう」

「それで構いません。私は織斑マドカ、兄さまの妹です」

兄妹は簡単に会話をしているが、姉二人はそうはいかなかつた。生き別れになった妹が、悪友のラボにいたのだから受ける衝撃が大きくても仕方ないだろう。

「何故マドカがここに……」

「束、貴様が誘拐していたのか！」

「違うよ。束さんは、いっくんから情報を貰ってまーちゃんを保護してただけだよ。それに、まーちゃんに専用機を造ってあげてたのさ」

ブイブイとポーズを決める束を他所に、千冬と千夏の視線はマドカに向けられている。生き別れの妹に再会したのは嬉しいのだが、どう表現して良いのか困惑しているように一夏には思っていたのだった。

新たな少女

再会して早々に、一夏は席を外し白式の調整に取り掛かっていた。現状の装備では厳しいと判断して、バススロットを空ける作業と別の武装を積み込めるかどうかの勝負だと言つて束と共に研究室に閉じこもつたのだつた。そして、残されたのは気まずい雰囲気の中の三人だつた。

「げ、元氣だつたか？」

「は、はい。姉さまたちの活躍はテレビで拝見しておりました」

「マドカ、わたしたちは姉妹だ。そんな堅苦しい喋り方はやめてくれ」

「で、ですが……」

幼いころに別れ、離れている間に偉大な記録を残した千冬と千夏に対して、マドカはどう接すればいいのかに困っていた。また同時に、千冬と千夏もマドカにどう接すればいいのか悩んでおり、このように気まずい空気が流れているのだつた。

もし一夏か束がこの場に来てくれれば多少は緩和されたのかもしれないが、三人の緊張感は常に高い状態でキープされていたのだつた。

「ま、まさかマドカが束の許にいたとはな……」

「どうやら兄さまが私がこの研究所を襲う事を突きとめ、束様に判断を委ねたようです。殺すも生かすも束様に任せたと」

「なるほど……実に一夏らしい行動だな。そして、束がマドカを殺すはずが無いと確信していたのだろうか」

「記憶を失い、私たちと離れていてもやはり一夏は優しい子だな……お姉ちゃんとしてこれ程嬉しい事は無い」

感動している千冬と千夏を他所に、マドカは困惑を強めた。二人がそのような考えに至った経緯が、マドカには分からないからだ。

「一夏とマドカは仲が良い兄妹だった。だがあのバカ共が家を出て行く時、マドカはあのバカに付いて行った。そして一年後、一夏は記憶を失いマドカの事も、わたしたちの事を忘れた」

「だが、一夏は変わらずマドカの事を思っている。そして私たちの事も邪険に扱いはがらも心配してくれているんだ。実に優しい子だろう？」

「そう……ですね。兄さまは優しいお方です」

「おまたせー！ まーちゃんの専用機の改良、終わったよー！」

姉妹が感動しているタイミングで、束が研究室から飛び出てきた。だが一夏の姿は無かった。

「おい、一夏はどうした?」

「いっくんなら白式とお話してるよ。どうやら白式は束さんじゃなくなつていっくんを生みの親と判定したみたいだしね」

「どういう事だ?」

「向こうに行けば分かるよ」

束に促され研究室に歩を進める織斑三姉妹。そしてそこで見た光景にかなりの衝撃を受けたのだった……

一夏に調整された白式を見に来たはずだったのに、一夏の傍に白式は無く、一人の少女が一夏の膝の上に座っていた。

「おい、誰だその小娘は」

「その行為はわたしたちに喧嘩を売っていると判断して良いんだな？」

「兄さまの膝の上……羨ましい……」

「ほら、挨拶しろ」

「はい、一夏様。お初におめにかか……りたい」

無駄に堅苦しい言葉を使おうとして舌を嚙んだのだろう。少女は涙目で一夏にしがみついた。

「普通に話せばいいんだよ。ほら、もう一回」

「うん……はじめまして、なのかな？ 私は白式です」

「……、はい？」

「私は、白式です。一夏様と束さんのおかげでこのような姿になりました」

きよとんとする織斑三姉妹の前に歩み寄り、小さくお辞儀をする白式と名乗った少女。振り返って一夏の表情を確認して、安心したように破顔した。

「えつと……この子が私の専用機？ さっきまではブレスレットだったのに……」

「女の子であるマドカさんにあのブレスレットはちよつとつて思つて、一夏様が改良してくださったのです。そうしたらこの姿になれるようになりました。もちろん、元のブレスレットにもなれますので、迷惑はかけませんよ」

「信頼関係を築く為に、一緒に生活するのも手だと思つぞで」

一夏から追加された武器の資料を渡されて、マドカは白式を改めて眺めた。自分とあまり変わらない身長、体付きもさほど変わらない少女。しかしその少女は人間では無くISだと言われたのだから、すぐに受け容れられる訳も無く呆然と立ち尽くす。

「まーちゃんは何時まで衝撃を受けてるのかな？ 現実に復帰させる為に束さんがあちこち揉んじやおうかな？」

「待て、それは姉である私（わたし）の役目だ！」

「……マドカ、早く帰つてこい。じゃないと酷い目に遭うぞ」

一夏に軽く叩かれて、マドカは現実に復帰した。一夏の背後では変態三人が少し残念

そうにしているのがマドカには見えていたので、一夏に感謝しつつ白式に視線を向けた。

「えつと……これからよろしく?」

「はい、こちらこそよろしく願います。あつ、それから展開する時ですが、一度ブレスレットに戻ってから展開する事になりますので、時間的余裕を持つて展開してくださいね」

「う、うん……」

「それから武装ですが、雪片式型の他にも色々と積まれましたので、その確認はしっかりと行つておいてください」

「こ、この資料だよね?」

「はい。本来なら私を展開してモニターで確認もらうのが一番だけど、一夏様がせっかく用意したのですから、そちらでお願いしますね」

マドカと白式の会話を聞きながら、一夏は背後に迫ってきている変態たちから距離を置いていた。

「マドカもIS学園を受験するんだろ? 日本政府には更識から報告しておこう。束さんが関係してるとなると、またややこしくなるからな」

「そうして。無能なやつらと話すなんて束さんには出来ないからね。」

こうして白式は更識所属の扱いになり、何処の国からもクレームは来なかった。何せ織斑姉妹の末の妹であり、天下に轟く更識企業が関係しているのだ。逆らおうものなら I S 産業に関わる事は不可能になりかねない。

そして月日は流れ、一夏たちの I S 学園入学の為の試験当日がやって来たのだった。

最強世代の受験

IS学園職員室では、受験生の顔ぶれが話題になっている。まず一番話題になるのは、IS学園始まって初の男子受験生となる更識一夏。そして次は日本代表候補生である更識簪と四月一日美紀のペア。その次は更識製の専用機を持ち、二年前に試験官と引き分けた成績を持つ姉が在籍している布仏本音。そして最後の一人は篠ノ之束がテストパイロットとして保護していた少女、記録上は死亡していた事にされていた少女だった。

「織斑先生たちの妹さん、ですよね？」

「見た目もそっくりですし」

「でも一年前に事故で亡くなったとされているはずでは……」

「あつても、篠ノ之博士ならそれくらいの改竄は出来るんでしょうね」

様々な憶測が飛び交う中、織斑姉妹は一人の少年の願書を眺めていた。正確には、願書に貼られた写真を眺めていた。

「ああ、一夏……ついにあなたと同じ空間で生活出来るのか」

「お姉ちゃんは嬉しいぞ。まさかお姉ちゃんを追いかけてI S学園に入学したいなんて……」

「誰もそんな事は言ってませんし、何時までも一夏さんの願書を眺めてないで仕事してください。千冬さんと千夏さんは筆記試験の試験官ですよ」

誰もが恐怖する織斑姉妹に仕事をするように促したのは、この学園で三本の指に入る実力者、小鳥遊碧だった。

「お前は今年もモニター室で見学だけだろ」

「わたしたちの代わりに試験官をやれ。その間わたしたちは一夏の写真を眺めている」

「……確か二人が担当する教室には一夏さんがいたような……後マドカちゃんも」

「よし千夏！ 急いで教室に向かうぞ」

「了解だ、千冬！ 最速の歩きで向かうぞ」

絶対的な餌をちらつかせる事で、織斑姉妹に試験官としての仕事をさせる事に成功した碧は、二人が抱えていた一夏の願書を元あった場所へと移動させた。

「すみません碧さん……私たちでは千冬さんたちを説得出来ませんし」

「織斑先生たちもあれが無ければ尊敬出来るんですがね……」

「仕方ないわよ。重度のブラコンでありながら長年離れて生活してたんだから……」

苦笑いを浮かべながら、碧は後輩二人に事情を説明し始める。世間的にはあまり知られていない織斑家の事情と、あの二人のブラコン具合を……

筆記試験を終え実技試験の順番を待つ部屋で、一夏たちはお喋りに興じていた。受験の真つただ中なのにこれ程緊張感の無い空気を醸し出している一団も珍しいだろう。

「それじゃあマドマドはいっちーの妹さんなんだね〜」

「はい。歳は一つ下ですが、兄さまと束様が色々と手を尽くしてくれましたのでこうし

て同じ学年としてIS学園の受験に挑む事が出来ました」

「その女の子がマドカの専用機の白式？」

「普段はブレスレットなんですけど、ご挨拶をと思ひまして人の姿になってもらいました」

マドカの横に現れた少女を見て、簪が真つ先に興味を示した。それにつられるように、美紀と本音も白式に視線を向けた。

「はじめまして、織斑マドカの専用機で、束さんが製造・一夏様が改良を施した第三世代型IS、白式つて言います。以後よろしくお願いしますね」

「おー！ 見た目は子供っぽいのに、意外としっかりしてるんだね」

「本音ちゃんよりしっかりしてるかもね」

「それ言ってるかも」

美紀と簪が呆れた表情で本音を眺めていたが、残念な事に本音は皮肉に気づかず、また視線にも気づかなかつた。

「モニターで試験内容を見学出来るようだが、お前たちは見ないのか？」

「いっちゃんは見てるの？」

「ああ。たつた今イギリスの代表候補生が山田真耶先生と戦闘を終えたところだ」
「結果は？」

「明らかに山田真耶先生が手を抜いている。これで勝つても何の自慢にもならないだろうな」

記録していた映像を再生して、一夏が四人に説明を始める。だが本音以外の三人は、一夏の説明が無くて手加減されているという事を理解していた。

「ほえ、手加減してるのにこの強さはさすがだね。刀奈様がいたから仕方ないけど、この人って代表になれたかもしれない人なんですよ？」

「そうだね。お姉ちゃんに負けて現役を引退したけど、実力的には国家代表レベルはあと思う」

「この映像を見る限り、イギリス代表の人って全力ですよね？」

「そうだな。おそらくは全力だろう。まだ武装を隠してるようだがな」

「[[[?]]]」

一夏が断言した理由は、簪にも美紀にもマドカにも分からなかったようだった。

「さすがに受験生のデータを見る事は出来ないか……」

「一夏、それってハッキング？」

「いや、受験生なら見る事が出来るデータだ。……面倒にならない方がいいがな」

今のイギリス代表候補生のデータを見ていた一夏がそんな事を呟いたのを、簪と美紀は心配そうに眺めていた。表示されていたデータには、彼女は自尊心が高く男性を見下す傾向があると書かれていたのだった。

「次、織斑マドカ、第一アリーナへ移動してください。布仏本音は第二アリーナで試験です」

自分たちの順番が近づいてきたという事で、一夏は開いていたモニターを閉じて目を閉じ精神を落ち着かせる事にした。それに倣うように、簪と美紀も気持ちを落ち着かせる事に集中したのだった。

そして結果は、マドカと本音は引き分け、簪と美紀は試験官を完封する強さを見せつけ、一夏は時間内に相手の攻撃を一撃も喰らわないという動きを見せたのだった。もちろん、全員合格基準を軽々と越え、無事IS学園入学が決定したのだった。

「セシリア＝オルコットか……少し調べておく必要がありそうだ」

更識家に戻った一夏は、実技試験前に見ていたイギリス代表候補生の少女について、調べておく必要があると思っていたのだった。そしてもう一つ、悪友の名前が見当たらなかった事も、一夏は引っかかっていたのだった。

中学卒業

更識の調査力をフルに使い、一夏はセシリアⅡオルコットの情報を手にし、その資料に目を通していった。

「何か心配な事でもあるのかい？」

「ああ、尊さん……いえ、この少女ですが、自尊心が高く、他人を見下す傾向があるようですので……俺だけなら兎も角、簪や美紀、本音やマドカに飛び火しないようにと思いましてね」

「その時は我々がその少女の地位、名誉、資産、全てを消し去るから心配しなくても良いだろう」

「いえ……そこまで鬼畜な事をするつもりはありませんよ。精々、織斑姉妹との楽しい楽しいレクリエーションでも計画するくらいですよ」

「……ひと思いに楽にさせてあげないのか、さすが暗部組織の当主だな」

尊もかなり黒い事を計画していたのだが、一夏は更にその上を行っていた。確かに一夏に頼まれたとなれば、あの姉妹が協力するのは確実視出来るだろう。そして尊の計画

よりセシリア少女に与える衝撃は強いものになる事も確かだった。

「俺はなるべく平和に学園生活を過ごしたいんですよ。これまで波乱万丈だった俺の人生、そろそろ落ち着いても良いと思うんですよ」

「高校生になる少年の言葉とは思えないが、君なら仕方ないか……だが、君にはまだまだ長い人生が待ってるんだ。落ち着いた人生程つまらないものは無いぞ?」

「さすがに含蓄がありますね。でも、少しくらいは落ち着いてもらいたいと願うのは、尊さんにも分かりますよね?」

「まあな。君の人生を歩んでいけば、私もそう思うかもしれない」

一夏の人生を自分が歩んでいたならば、などと妄想を膨らませながら尊は一夏が目を通していた資料に目をやる。

「イギリスの代表候補生ね……国の威信を背負つてると言う自覚が欠如しているのかい? 他国の人間を見下すなんて、候補生の振る舞いとは思えないけどね」

「だから自尊心が強いと言いましたよね。自分より弱い相手に敬意を払うつもりは無い、と言う事でしょう」

「やれやれ……君の安寧はもう暫く先だろうね」

「まあ、彼女だけが不安材料では無いんですけどね」

そう言つて一夏は、もう一枚の資料を尊に見せた。

「篠ノ之箒……そうか、彼女も今年受験だったのか」

「二応、元同級生ですからね。被る事は覚悟してましたが……I Sを嫌つてる彼女が何故受験を……」

「案外、君が受験するからでは無いか？　彼女は思いこんで君を自分のものだと言つていたからね」

「そんな事を……あの二人に殺されたかつたんですかね？」

あの二人が誰を指しているのか、尊にはしつかり伝わっていた。先ほどとは違う笑みを浮かべながら、尊は資料を一夏に返し部屋から出て行つたのだつた。

中学の卒業式を終えた日、一夏の携帯に一本の連絡が入って来た。

「これはまた、珍しい相手からだな」

ディスプレイに表示された名前を見て、一夏はそんな事を思いながら通話を開始した。

「何かあったのか？」

『無事に卒業式も終わったんだし、これから一緒にどうだ？ I S 学園じゃ気軽に外に出れないだろ？ だから今の内に遊んでおこうと思ってよ』

「別に構わないが、数馬も一緒なんだろ？ 何して遊ぶんだ？」

『そうだな……一夏もいる事だしこれからナンパでも——』

弾がその単語を出した瞬間、一夏は通信を切った。すぐさま着信があったので、一夏はもう一度通話を開始する。

『冗談だつて！ 相変わらず容赦ないな、一夏は……』

「笑えない冗談はやめるんだな、弾。俺は色々と有名なんだ、不本意ながら……だからそんな事をすればすぐに騒がれる」

『だから悪かったって。ゲーセンでも行って遊ぶか』

「それなら問題は無い。ただし、暴走するなよ?」

一夏に釘を刺され、弾は降参したような声で返事をし、今度は弾から通信を切った。「さてと、暫く会えなかつた悪友たちの顔でも拝みに行くかな」

弾と数馬は一般入試で、合格ギリギリのラインだったので遊ぶ機会が減っていたのだ。それに加えて鈴も中国に帰ってしまったので、一層会う機会は無くなっていったのだった。

「本音、俺は出かけるが護衛は必要ない」

「了解なのだ〜! 私もかんちゃんたちと遊んでくるね〜」

「それでいいの? 一応一夏さんの護衛なんだから……」

「でも、一夏がいらないって言う時は大抵安全な時だしね。一夏、何かあったら連絡してね」

「分かった。簪たちも今日は女子だけで遊んでくるといい」

中学の校門前で簪たちと別れ、一夏は待ち合わせ場所へ向かおうとして——背後を振り返り声を掛けた。

「何かご用ですか、篠ノ之博士？」

「およ？ 今日完璧に隠れてただけどなく。さすがいつくん」

「それで、何か問題でもありましたか？」

「ううん、いつくんには直接関係ないのかもしれないけど、箒ちゃんがIS学園に入学するでしょ？ 多分ほぼ100パーセントの確率でいつくんに絡んでこようとするよ。中学女子剣道大会優勝者の実力を考えずに、本気で竹刀を振るったりね」

「さすがにそこまで考え無しでは……」

そう言いかけてから、一夏は過去の記憶から篠ノ之箒という少女の成長を想像した。

「ありえそうで嫌ですね」

「だから一応警告にね。何かあったらこれを箒ちゃんにぶつけてね。そうすれば一瞬で永眠するから」

「そんな危険な物を渡さないでください！」

束から受け取った危険物を丁重に押し返し、一夏は束を睨みつける。本気を出されれば一夏では束を止める事は出来ないのです、出来る限り穏便に事を済ませる事を宣言して、束をラボへと帰したのだった。

「まったく……尊さんの言う通りになりそうだな」

これから始まる学園生活を想像して、一夏は胃の痛い思いをするのだった……

I S 学園入学

入学式で挨拶をする刀奈を眺めながら、一夏は四方八方から突き刺さる視線と戦っていた。I S 学園とは女子の為に造られた学校と言っても過言ではない——というか、I S は女性にしか動かせないのだから、女子しかいない方が正しいのだ。

だが今年はその中に異分子が紛れ込んでいるのだ。興味や嫉妬、観察するような視線が向けられない方がおかしいのだと割り切っていた一夏だったが、さすがに視線の集中砲火に耐えきれないくらいにまで視線の量が増えているのだ。

「——最後に、あんまり私の義弟を苛めないであげて欲しいかな。とある事情でまだ人を怖がる事があるし、あんまり人前に出て何かをするような男の子じゃないから」

壇上から助け船が出されて、一夏に向けられる視線は一気に減った。一夏は壇上にいる刀奈に目礼をして肩の力を抜いた。

「(……ん？ 肩の力を抜くという事は、俺は緊張していたのか……)」

克服したと思っていた人間恐怖症がまだあったのだと再確認して、一夏は人知れず苦

笑いを浮かべる。注目されると分かっているながら入学したので、今更この程度で音をあげるわけにはいかないのだった。

「一夏、クラス分け表を見に行こう」

「そうだな。同じクラスならありがたいたいが」

「さすがに全員は無理じゃない？ 特に私と簪ちゃんは同じ日本代表候補生だし」

「そうだね。かんちゃん和美紀ちゃんは別々かもね」

そそくさと何時ものメンバーと合流した一夏は、マドカがない事に気が付き辺りを見回す。

「本音、マドカはどうした？」

「ほえ？ マドマドならここに……ほえ？ いないや」

「「……………」」

呆れた視線を本音に向ける三人の視線の先に、人波に吞まれているマドカの姿が映った。

「アイツ、こういうところに慣れてないのか……」

「助けに行ってくる」

「さすがに一夏に行かせるわけにはいかないもんね」

簪と美紀がスルリと人ごみの中を移動し、あっさりともドカをこの場所へと連れてきた。その動きは一夏でも感心するほどであった。

「お見事としか言いようがないな。簪と美紀の成長は俺でも驚く」

「一夏が丁寧に教えてくれたからだよ」

「そうですよ。人ごみをスムーズに移動する方法は、一夏さんが編み出したんじゃないですか」

「兄さま、申し訳ありませんでした。人波に吞まれてしまうなんて……」

シヨンボリと俯くマドカの頭を、本音が何故か撫でる。普通なら一夏が取るはずの行動なのだが、まあ本音だからという理由で誰もツツコミは入れなかった。

「えつと……簪は四組か」

「後は全員一組だね」

「何だか疎外感……」

「専用機持ちが四人も一組になんておかしいと思っただけ、担任が織斑姉妹で副担任が碧さん、それと補佐って何だか分からないけど、山田真耶さんが担当なら何となく分か

るわね」

「暴走すると思われているのでしょうか？」

マドカのセリフに答えをくれる人はいなかった。一夏以外は答える事が出来ず、一夏は別の事に意識を割いていたからだだった。

教室に移動しても、一夏に向けられる視線は多かった。まあ体育館の時と比べれば幾分マシなので、一夏は目を瞑り精神を落ち着かせていた。

「皆さん、おはようございます。このクラスの担任・及び副担任の補佐を務めます、山田

真耶です。よろしくお願いします」

「(試験の時に見たけど、随分と子供っぽいな)」

『それは一夏さんが大人びているからではありませんか?』

「(いや、クラスメイトだと言われても違和感が無いほどだ)」

童顔である真耶であるが、身体の一点は学生とは比べ物にならないほど成長している。ただし一夏がその部分に興味を示さないので、クラスメイトと言われても違和感が無いと思われるのだが……

「じゃ、じゃあ自己紹介をしてもらおうかな」

真耶の進行で自己紹介を始めるクラスメイトたち。順番は五十音順だ。

「織斑マドカ。本当なら皆の一学年下に当たるのだが、特例でこの学年に組み込まれた。姉である千冬・千夏や兄である更識一夏を目標に頑張っ行って行きたいと思う」

「はい、ありがとうございます」

質問は受け付けないと言外に真耶が進行する事で騒がしくなる事は無かった。

「更識一夏だ。訳あって苗字が違うがマドカの兄にあたる。それと入学式で義姉である

刀奈さんが言ったように、とある事情で若干の対人恐怖症があるので、一斉に近づいて来られるとちよつと怖いかな。それ以外はまあ、常識の範囲内なら仲良くしたいと思ってるので、よろしくお願いします。あつ、もう一つだけ言っておきますが、俺は大して強くないので」

そう締めくくり、一夏は真耶に視線を向けた。つまり先に進めろという合図だと理解した真耶は、スムーズに先に進めた。

「布仏本音だよ〜！ いっちょーやマドマド、そしてこの後自己紹介をする美紀ちゃんと同じ更識所属だよ。皆、よろしくね〜」

「はい、布仏さんありがとうございます」

間延びした自己紹介にクラスメイトが肩透かしを喰らっているのを見て、一夏が真耶に先に進めるよう促したのだった。

「えつと、最後は四月一日さんですね」

「はい、四月一日美紀と言います。日本代表候補生ですが、一夏さんの護衛も務めていますので、万が一夏さんに害をなそうとした場合は、私と本音ちゃん、後はそうですね、四組の簪ちゃんや先輩の刀奈お姉ちゃん、虚さんに加えてこのクラスの副担任である碧

さん、そして最後に織斑姉妹が制裁を加える事になるでしょうからお気を付けてください」

美紀の自己紹介に、何人かの生徒は恐怖しただろう。それだけ美紀が出した名前は有名で、また強力な印象があったのだった。

多い理由は

全員の自己紹介が終わったタイミニングで、教室の扉がゆつくりと開かれた。開かれた先に立っていたのは三人の女性で、一夏には見慣れた存在だった。

「山田先生、すみません代わりを押し付けてしまつて」

「いえ、先生たちは色々忙しいでしょうし、これも補佐としての仕事です」

山田真耶教諭に代わり教壇に立つ一人の女性、後の二人は入り口横で腕を組んで立っている。

「皆さん、このクラスの副担任を務めます、小鳥遊碧です。そしてあちらにいらつしやる二人が、このクラスの担任である織斑千冬、千夏先生です」

『一夏さん、耳を塞ぐのを推奨します』

碧の挨拶が終わり、闇鴉に言われるがまま耳を塞いだ一夏。闇鴉が耳を塞ぐよう言った理由はすぐに分かった。

「「「きやー!!!」」」

「本物よ！ 本物の織斑姉妹よ！」

「しかも小鳥遊様もこのクラスの担当なんて！」

「夢みたいですよ！ 先生たちに指導してほしくて、私北九州からIS学園を受験したんです！」

世間一般から見れば、織斑姉妹も碧もIS界のカリスマ的存在だ。だからこの反応も仕方ないのかもしれないが、この騒動を織斑姉妹が黙って見てるなどあり得ない事だった。

「静かにしろ！」

「今後このように騒がしくなるのなら、わたしたちで相応の処罰を取り行うのでそのつもりで」

「……えっと、話の続きをしても良いでしょうかね？」

織斑姉妹の威圧感で静まり返った生徒たちに、碧が呆れながら問いかける。その問いかけに答えられる生徒は一人しかいなかった。

「どうぞ。熱狂も収まったようですよ、織斑姉妹の怒気もとりあえず静まりましたから」
「そうね……えっと、何故このクラスだけ担任が二人、そして補佐などと言う役割がいる

のかと言うと、まあ今ので分かってもらえたかもしれないわね。織斑姉妹を怒らせると大変な事になるし、その二人を止められる教師は、不本意ながら私だけなの。だから三人が抜けた場合代わりに授業をする人が必要になるから、このクラスには補佐として真耶に付いてもらったの」

「基本的に私は、皆さんからの質問に答えたりするのが仕事ですので、何かありましたら相談してくださいね」

笑顔でそう宣言した真耶だったが、生徒のほぼ全員の視線は真耶に向いていなかった。

「それではHRはこれで終わりです。休憩をはさんで早速授業に入りますので、トイレなどは早めに行っておいてください。それから、更識君はちよっと一緒に来て欲しいかな」

「分かりました」

碧、千冬、千夏と共に一夏は教室から廊下へと向かった。背後から鋭い視線を向けられている事には、気づかないフリをしたのだった。

「それで、いったい何の用です?」

「一夏、あのバカ箒には気を付けろ」

「あのバカは何を仕出かすか分からん。もし何かあつたらお姉ちゃんたちに言うんだぞ」

「……それだけですか？」

「えつとね……一夏君の部屋なんだけど、一人部屋を用意出来なかったの。だから悪いんだけど美紀ちゃんと同じ部屋でも良いかな？」

碧の言葉に暫く考え込んだ一夏は、何個か浮かび上がった疑問点を碧に訊ねる事にした。

「用意出来なかったという事は、いずれは用意出来るという事ですか？」

「調整はしてみるけど、ちよつと難しいかもしれないわね」

「では、何故美紀なのですか？ 俺の護衛は簪や本音でも良かったのでは」

「それなんだけど、簪ちゃんはクラスが違うでしょ？ そして本音ちゃんは一夏君の護衛の前に簪ちゃんのメイドさんだから」

「では最後に、マドカは誰と同居屋なんですか？」

この質問に、碧は即答する事が出来なかった。別に答えを知らない訳では無く、答え

難しい質問だったのだ。

「……マドカちゃんのルームメイトは篠ノ之箒さんよ」

「この事は織斑姉妹も納得してるんですか？」

一夏は視線を碧から千冬と千夏に移し質問を続けた。一夏に視線を向けられた事が嬉しかったのか、織斑姉妹はさつきまでの難しい顔から一変してだらしない顔をした。
た。

「……織斑先生？ 質問に答えてください」

「あ、ああ……バカ箒が何か仕出かしたら、このセンサーで私たちと束に情報が行くようになってる」

「そしてその情報を受け取ったら、わたしたちと束で然るべき制裁を加えるつもりだ」

「一応忠告しておきますが、傷害沙汰は避けてくださいよ？ この学園には色々探られたくないものもあるんですから」

「安心しろ」

胸を張る織斑姉妹に、一夏はホッと胸を撫で下ろしかけたのだが――

「外部にバレる事無く処理するから！」

「だから傷害事件は起こすなと言ってるんだ！」

——撫で下ろす事無くそのまま織斑姉妹を怒鳴りつけた。

そんな姉弟のやり取りを真横で見ていた碧は、まだ話していない事を一夏に話す事にした。何時までも待っていて話すタイミングはやって来ないと判断して、多少強引にでも話題転換を試みたのだ。

「一夏君が入学した事に伴い、更識製造の架空トレーニングシステム、通称VTSの調整は一夏君にお任せする事になりました。簪ちゃんにも手伝ってもらえるように話は通しておきます」

「まあシステムの書き換えくらいなら問題無いでしょうし、下手に弄られてダメにされるのは避けられますね」

「専用機のデータを積み込んでも使えるように改良してもらえるかな？ もちろん、個人パスワードを設定する事もお願いたいんだけど」

「それくらいなら構いませんよ。更識所属以外にも、専用機持ちがいるようですよ」

一夏は教室で感じた敵意剥き出しの視線を思い出して、深いため息を吐いたのだ。突き刺さるような視線は二本。一本は篠ノ之箒のものであり、もう一本はその専用

機持ちのものだと一夏には分かっていたのだった。

他国の候補生

真耶と一緒に教室に戻ると、一夏に向けられる視線は少ないながらも鋭いものがあつた。ISが出来てから女尊男卑の風潮が広まっているので、異分子である男子を敵視する女子がいても仕方ないと一夏は理解しているが、二本程それ以外の敵意や害意が含まれている事にも気づいていた。

「それでは早速授業を始めたいと思います。皆さん、事前学習の為に贈られた参考書は確認して来ましたよね」

「ほえ？ そんな物もらつてませ〜ん」

「お前はそれを枕に寝てただろうが……」

「あつ！ あれつて教科書だったんだ〜。よく分からない文字の羅列だったから、開いてすぐ枕にしちゃったよ〜」

「お前は……すみません、山田先生。アイツには後で俺たちが教えておきますので」

本音の代わりに頭を下げた一夏に、真耶は慌てて手を振る。背後で織斑姉妹が見ているのだ、一夏に頭を下げさせたなんて死罪に相当するかもしれないと真耶は思っている

のだ。

「そ、それじゃあ布仏さんの事は更識君たちにお任せします。では授業を始めますので静かにしてくださいね」

所々から聞こえていた私語が、真耶の注意ではぶつたりと無くなった——ように思えたが、一夏と美紀とマドカは、真耶のお願いでは無く織斑姉妹の威圧感で静まり返つただと正確に理解していたのだ。

「えつと、〃〃〃までで何か分からない事はありますか？」

真耶の授業はお世辞にも上手いとは言えないものではあつたが、なるべく分かりやすいように言葉をかみ砕いて説明しているので、先行して知識を持ち合わせていない者でも理解出来るようになっていると一夏は感じていた。

「更識君も大丈夫ですか？」

「問題ありません。山田先生、もう少しご自身に自信を持たれた方が良いでしょう」

「そ、そうですね？ 褒められると照れちゃいま——ヒイツ!？」

一夏に褒められて照れていた真耶だったが、背後から向けられている視線に気づき飛

び上がった。そしてゆっくりと振り返ると、そこには無表情ながらも苛立ちをオーラで伝えてきている織斑姉妹がそこにいた。

「山田先生、早く続きをお願いします」

「わ、分かりました！ それでは授業を再開します」

普段オーラなんて見る事が出来ない真耶だが、織斑姉妹のオーラだけは的確に見る事が出来る。まあ、真耶以外にも今のオーラが見えた生徒が数人いるようで、その生徒たちは背筋を伸ばして真面目に授業に取り組んでいたのだった。

授業間の休憩中、一夏は美紀や本音、マドカと雑談をしていた。更識の屋敷ではこの

ような時間は取れない事が多くなってきたので、IS学園での休憩時間は一夏や美紀たちにとつて絶好の雑談に興じるチャンスなのだ。

「ちよつとよろしくして?」

気配では分かっていたが、明らかに雑談を楽しんでいる一夏たちに声を掛ける無粋な少女がいた。本音でも分かるくらいに傲慢な雰囲気を感じ、明らかに自分が上だと言わんばかりの声に、一夏は冷静に対応したのだった。

「何か用でしょうか? イギリス代表候補生のセシリア・オルコットさん」

「あら、私の事を知っているなんて、下賤の輩にしては立派ですわね」

「この間候補生同士の合宿に付き添った時に貴女の事を拝見しましたので。それで、何の御用ですか? クラスメイトとの雑談を中断してまで話さなければいけない事なのですよね?」

言葉遣いこそは丁寧だが、一夏は明らかに苛立っている。その事を付き合いの長い美紀と、妹であるマドカは感じ取っていた。もちろん、本音は全く気づいていないのだが。「この私に声を掛けられただけでも榮譽な事なのですよ? なんですよ、その態度は」

「そんな事言われなくても……元日本代表である小鳥遊碧さんは昔からの知り合いです

し、同じく元代表の織斑姉妹は俺の姉です。そして現日本代表の刀奈さんは義姉に当たる人ですし、候補生の簪と美紀も、このように旧知の仲です。今更候補生に話しかけられたから光榮に思えなどと言われても、正直ピンと来ないんですよ」

この場に簪はいないが、そんな細かい事にツツコミを入れる人間はここにはいなかった。それだけ一夏が並べた名前が凄すぎるのと、候補生程度と言わんばかりの一夏の態度に気圧されたのもあった。

「それから何か勘違いしているようですので忠告しておきますが、普通は専用機持ちであらうとそれは国から貸し与えられたもの、決して自分の所有物と言うわけではありません。貸し与えられたもので威張り散らすのは、候補生としての態度としてはいただけないのではないのでしょうか？ まあ、その辺りは俺より美紀に聞いた方が詳しく分かるでしょうけどもね」

「一夏さんの言う通り、例えば候補生であらうと、余所の国の人を見下すような態度は心得に反しています。セシリア・オルコットさん、貴女はイギリスの全ての候補生、及び代表の人の品位まで落としかねない事をしてるんですよ？ 理解してますか」

「お、覚えていなさい！ この屈辱、必ず晴らさせていただきますわ！」

反論出来なかつたセシリアは、大声で宣言し自分の席に戻って行つた。何か起こるのではないかとほらはらしていたクラスメイトたちは、何事も無く終わつてホツと胸をなでおろしていたのだった。

「ねえねえいっちー、あの人は何がしたかつたの?」

「さあ? 自分が凄いとでもアピールしたかつたんじゃないのか?」

「でも、あの人の実力は大した感じじゃ無いよね? 試験の時見たけど」

本音的確な分析に、一夏と美紀は少し驚いた表情を浮かべていたのだが、幸いな事に本音には見られずに済んだのだった。

代表選出

昼休みになり、一夏たちは食堂で簞と合流してお昼ご飯を食べる事にした。場所取りは本音と美紀が担当し、残る一夏、簞、マドカの三人で食券を購入し定食を運ぶ事にしたのだ。

「それで、四組の担任は五月七日さんだったのか？」

「うん。実力もあるし、落ち着いた人だからね」

「山田先生よりは担任が務まるのかもしれないね」

「マドカ……あんまり人の事を悪く言うのは感心しないぞ」

「ゴメンなさい、兄さま」

片手でお盆を持ちながらの会話でも、簞とマドカの軸はぶれる事は無く、危なげなく二つのお盆をテーブルまで運びきった。

「さすがに鍛えてるな……俺には出来ない芸当だ」

「いっちーだって鍛えれば出来るんじゃない？」

「本音ちゃん、まずは自分が出来るようになってから一夏さんに言いなよ……」

場所取りの為に残っていた本音と美紀も会話に加わり、その一角は結構盛り上がりを見せていた。

「まさか担任が姉さまたちだったとは……少しややこしいかもしれませんが」

「どういう事？」

「『織斑先生』ではどちらを呼んだのかが分からないですし、私も『織斑』ですからね。もしかしたら私を呼んだのに姉さまたちに勘違いされる可能性もありそうだな、と」

「あの二人を呼び捨てに出来る猛者がいるとは思えないけどな……一夏はどう思う？」

マドカと簪の会話を聞いていた一夏は、不意に簪に問われて少し考えている風を装い、そして簡潔に答えた。

「おそらくだが『千冬先生』と『千夏先生』に落ち着くだろうし、マドカは『織斑さん』と呼ばれると思うぞ？ 男子じゃないんだから、呼び捨ては無いだろうし」

「まあマドマドはマドマドだし、ちー先生となー先生は……」

「本音ちゃん、先生たちは普通に呼んだ方がいいと思うよ」

「そうかな？ じゃあ千冬先生と千夏先生は苗字で呼ぶのは避けると思うしね」

「その考えを纏める速さ、何故他に行かせないんだよ」

「仕方ないよ一夏……本音だもん」

簪のフォローになって無い言葉に、一夏は妙な納得感を得たのだった。

午後の授業に入り、ふと思いついたように真耶が生徒全員に話しかけた。

「今の内にクラス代表を決めたいと思います」

「せんせー！ クラス代表って何ですか？」

「それはわたしが説明してやろう」

クラスメイトの一人が真耶相手に気軽に聞いた質問に答えると言ったのは、早くも一

組の中で恐怖の象徴とされている姉妹の内の一人、織斑千夏だった。

「クラス代表とは、読んで字の如くクラスの代表だ。普段はクラス間の集まりや連絡事項をクラス全員に伝える役割だが、クラス対抗戦などの試合に参加してもらおう事もあるのだ、ある程度の実力を兼ね備えたヤツが就く役職だ。一年間変更は認められないので、興味本位で選出するのは控える。それを踏まえて、誰かいなか？ 自薦だろうか他薦だろうか一向に構わん」

千夏の説明が終わると、クラス中から推薦の声上がる。

「やっぱり四月一日さんじゃない？ 代表候補生で更識所属だし」

「じゃあ織斑さんでも良いんじゃない？ 千冬先生と千夏先生の妹さんだし、やっぱり更識所属だし」

「布仏さんも更識所属だし、お姉さんは企業代表を務めるほど優秀なんですよ？ 入学試験でもしっかりしてたし」

「私は更識君が良いかなー。せっかく男子がいるんだし、強くないって謙遜なんですよ？」

「いや、俺は……」

「納得いきませんわー！」

一夏が何かを話そうとしたのをぶった切るように、一人の少女が立ちあがる。クラス中の視線を一齐に浴びながらも、その少女は怯む事無く一夏に歩み寄って来た。

「何故この私より先にこのような男が選出されるのですか！ 入学試験で教官を倒し、新入生主席を務めたこのセシリアⅡオルコットではなく、このような極東の猿を推薦ならすのですか！」

「……貴女が主席だったのは、更識所属の我々が辞退したからです。そして別に自薦でも構わないと織斑千夏先生は仰られたのですから、不満ならご自身で立候補すれば良かったのではないのでしょうか？ それと……あの二人の処理はご自身でお願いしますね」

「あの二人？」

一夏が指差す方向に視線を向けたセシリアは——この世のものとは思えない鬼のような姉妹を見て腰を抜かしてしまった。

「貴様、一夏を『極東の猿』と言ったな」

「それはつまり、我々に戦争を申し込んだという事で良いんだな？」

「な、何故そのような解釈になるのでしょうか……私はただ、あの男に対して……」

「一夏は私（わたし）の可愛い弟だ。その弟を侮辱されて黙っていると思うか？」
「織斑先生、少し落ち着かれてください。確かに一夏さんを侮辱したオルコットさんは八つ裂きにしてやりたいですけど、ここは模擬戦をして決着させては如何でしょう。そうすれば、オルコットさんが井の中の蛙である事を思い知るでしょうし」

一夏は傍観を貫いたが、碧が織斑姉妹の制止に入る。ただし、セシリアを助ける為では無く傷害沙汰を避けるための処置であつた。

「お前たちはそれで構わないか？」

「はい。私たちも一夏さんを侮辱されて我慢なりませんので」

「いっちーを侮辱するなんて、命知らずだよね」

「兄さまの事を良く知らずに、あんな暴言許せません！」

「……それって俺も参加するんですか？」

「当然だ。お前も推薦されているんだからな」

「……俺、更識所属で一番弱いんですけど」

一夏の言い分は黙殺され、クラス代表は模擬戦の結果で選出される事に決まつた。日時は一週間後で、それまでは一切の争いごとを禁止し、この場は収まつたのだつた。日

「えつと……授業を再開します」

……このクラスの補佐を務める山田真耶教諭の声が、教室に虚しく響き渡ったのだった

過去との遭遇

辞退は許さないという織斑姉妹に押され、一夏は代表選考戦に参加する事になってしまった。いくら専用機を持っているからといって、一夏は基本的には争いごとを嫌う性格だ。黒い事は考えてもあまり実効に移すタイプでは無いのだ。

「元氣出してください、一夏さん」

「そうは言ってもな……マドカと本音と美紀と戦わなきゃいけないんだぞ。これが元氣になれると思うか？」

「オルコツトさんは良いんですか？」

「ん？ ……ああ、あの人ね。別にどつちでも良いよ、あの方は。それよりもやっぱり三人だろ」

一夏はこの三人の他にも、碧、刀奈、虚という実力者たちとバーチャルではあるが戦った事があるのだ。今更他国の候補生相手に恐怖するような心情は持ち合わせていなかった。

「勝てないにしても、惨敗はしらないと思うから」

「そこは勝ちましようよ！ 一夏さんを侮辱した罪は、私たちが罰しますが、一夏さん自身でも力を見せてくださいね」

「そうはいってもな、美紀……仮にも代表候補生なんだぞ、相手は。整備が専門の俺が勝てるわけ無いだろ」

部屋でセシリアのデータを引つ張り出しながらぼやく一夏に、美紀はその横に腰を下ろす。

「一夏さんなら勝てますよ。闇鴉の特性を生かして動きまわり、隙を見て攻撃すれば」

「そんな戦い方で勝っても、あの人は納得しないだろうさ……かといって真つ向勝負で勝てるなんて自惚れは無いからな」

「困りましたね……」

美紀が結構本気で困っていると、一夏も理解はしている。だが自分で言ったように、真つ向勝負で勝てる相手では無いのだ。

一夏と美紀が悩んでいるところに、部屋のドアがノックされた。この部屋が一夏と美紀の部屋である事は知られているし、来客があってもおかしい事は無いのだが、二人は何となく嫌な予感がしていた。

「美紀、対応を頼めるか？」

「お任せください。一夏さんの護衛は私の任務ですから」

美紀に來客の確認を任せ、一夏は息を擧める。二人の予想通りなら、來客は招かれざる客だからだ。

『貴様にはようは無い！ 一夏を出せ！』

『ですから用件はなんですか！ それが分からなければ一夏さんに会わせる事は出来ません！』

『貴様には関係ない！ 私は一夏の幼馴染だ！』

「やはりか……」

死角に移動して二人の会話を聞いていた一夏は、昔の記憶通りの相手にため息を漏らした。

『何事だ、騒々しい』

『あつ、織斑先生。篠ノ之さんがいきなり部屋に入れろと押しかけてきました』

『私は一夏に用があるだけです、千夏さん。なのにこの女が邪魔をするから……』

『ここでは織斑先生、もしくは千夏先生と呼べ！ そして貴様が一夏に会う事は授業以

外では認めん。これは決定事項だ』
『な、何故ですか!?!』

織斑千夏が現れた事により、一夏はとりあえずの身の安全を確保したと理解し、三人の視界内に移動する事にした。あれだけの大声なので、盗み聞きしていたとは思われな
いと確信もして。

「騒々しいですよ。他の人たちにも迷惑がかかります」

「一夏! 貴様、何故私を無視した!」

「別に無視なんてしてませんよ。そもそも話しかけられてすら無いんですから」

あえてよそよそしい態度で話す一夏に、箒は千夏の前だという事を忘れて一夏に掴み
かかろうとする。もちろん、そんな暴挙を千夏が見逃すはずも無く、一瞬で箒は床に崩
れ去った。

「うわあ……」

「織斑先生、さすがにやり過ぎでは?」

「コイツに関しては、やり過ぎなど無い。昔からそうだろ、一夏?」

「学校では更識とお呼びください。まあ、篠ノ之さんの処理はお任せします」

扉を閉め、二人の気配が遠ざかったのを確認してから、一夏は自分の身体を抱きしめるようにして震えだす。過去のトラウマは克服できておらず、特に篠ノ之箒に対するトラウマは一夏の心の奥に深い傷を負わせていたのだった。

「一夏さん、大丈夫ですか!」

「う、うん……大丈夫だよ……」

「ああ、幼児退行を起こしてしまってる……」

言葉遣いが子供の頃に戻っているのを受けて、美紀は一夏が正常な状態では無い事を一瞬で理解する。いくら気丈に振る舞っていても、見ず知らずの大人に会う時の一夏は何処か緊張している風だったのは美紀も知っている。それでも、ここまで深い傷を負っているとはさすがに思っていなかったのだがこの有様、美紀は自分の考えの浅さに苛立ちを覚えた。

「(一夏さんが気にしないでと言ったのを、何で疑わなかったのよ……トラウマなんてそう簡単に克服出来るわけじゃ無いのに)」

ついにしやがみこんでしまい激しく震える一夏を見て、美紀はどうすればいいのかを

考える。幸いな事にこの事はまだ他の人には知られていないし、今ならまだ間に合うかもしれない。

「大丈夫だよ、私がついてるから」

しゃがみこんだ一夏を優しく抱きしめる美紀。普段なら恥ずかしくて出来ない行動だろうが、今はそんな事を気にして居る場合では無い。

「ほんと……美紀ちゃんを守ってくれるの？」

「私だけじゃ無いよ。刀奈お姉ちゃんも虚さんも、簪ちゃんも本音ちゃんも、マドカちゃんだつて一夏さんの事を守ってくれる。だから一夏さんは一人で怖がる事は無いんですよ」

「うん……ありがとう」

少し落ち着きを取り戻したのか、一夏の身体が震える事は無くなっていた。ただまだ若干の幼児退行は残っており、一夏は縋るように美紀を見つめている。

「今日はこのまま大人しくしてましよう。オルコットさんの対策は明日でも出来ますし」

「そうだね……今日はこのまままで……」

継るように、助けを求めるように美紀にしがみつく一夏の背中を、美紀は優しく撫でるのであった。

更識関係者の感情

落ち着きを取り戻した一夏は、美紀に礼を言つて美紀から離れた。少し美紀が名残惜しそうな顔をしているのには気づかないフリをして……

「やっぱり一夏さんはトラウマを抱えたままだったんですね」

「そう簡単に克服出来るようなものをトラウマとは言わないだろう。それに、長い間会わなかったからな。あれほど凶暴になつてゐるなんて思つて無かつたぞ……全国女子剣道大会優勝者が棒状のものを振るえばどうなるか、分からないのだろうか」

「あの人のルームメイトつてマドカちゃんですよ？ 大丈夫でしょうか……」

マドカの事を心配している美紀に、一夏はそれは無用な心配である事を告げる。

「マドカは俺より強くなつたし、別にトラウマも抱えて無い。だから篠ノ之相手だろうが後れは取らないだろう。それに何かあれば織斑姉妹がすつ飛んで来るだろうしな」

「そうでしようけども……」

美紀が何かを言いかけたタイミングで、再びドアがノックされる。今度は一夏も美紀

もよく知っている気配だったので、特に警戒する事無くドアを開け来客を部屋に招き入れた。

「一夏君、I S学園初日はどうだったかな?」

「いきなりトラウマが発動しましたがけど、それ以外は普通でしたね。あつ、何故かクラス代表選考の模擬戦に参加する事になってしまいました」

「そっか。一夏君は代表とかに興味無いんだよね?」

「そもそも、勝てる未来が見えません」

例え選考会を勝ち抜いたとしても、四組のクラス代表は間違いなく簪、一夏は簪に勝てる未来が見えないのだ。それ以前に、選考会には美紀もいるので、簪と同程度の実力の美紀に勝てる未来すら一夏には見えないのだ。

「一夏さんには生徒会に入っていたら良かったのですが、それを理由に辞退する事は出来ないでしょうか?」

「碧さんに相談してみないと分かりませんが、生徒会という事情なら大丈夫だと思えますよ」

「本当は簪ちゃんも生徒会に欲しいんだけど、クラス代表に内定してるみたいだしね。だから一夏君だけでもと思つて来たんだ」

「ところで……美紀さん、胸の辺りが濡れています。何か零したのですか？」

「えっ？ あつ、これは……さつきまで一夏さんが泣いていましたので」

「美紀がいてくれなかったら、まだ復帰出来て無かったでしょうね」

トラウマが発動したという事から想像はしていた刀奈と虚だが、ここでの生活は一夏にとつて苦痛になるかもしれないと改めて実感したのだった。

「辛かったら何時でもお姉ちゃんのお部屋に来て良いからね。ルームメイトには目を瞑ってもらおうから」

「私も、何時でも呼んでください。一夏さんの為ならすぐに駆けつけますから」

「ありがとうございます。でも、自分の意思でIS学園に入ると決めたんです。ある程度は耐えられますし、ここには大人の男はいませんから、それが唯一の救いですかね」

更識所属の大人に対する免疫は出来ていても、見ず知らずの大人に対する免疫はほぼゼロなのだ。女性相手は何とか堪えられるのだが、男性相手だと一夏は冷静さを欠いてしまう事が多い。特に一人でいる時に遭遇したら、一夏はすぐさま逃げ出してしまおうのだ。

「さしあたっての問題は、篠ノ之箒ですかね」

「先ほども織斑千夏先生の前にも関わらず一夏さんに暴行を加えようとして連行されて行きましたし」

「分かったわ。生徒会でも何とかする」

「お嬢様、あまり職権乱用はいけませんよ。入学式でも力技で一夏さんを助けましたし、あんまり一生徒に肩入れすると問題が発生する可能性が」

「分かつてるけど、一夏君は色々と問題があるのよ？ 生徒会長では無く義姉として、義

弟の事を心配するのは当然でしょ！ それに、未来の旦那様かもしれないだから」

「それは私も同じですけど。まあ、篠ノ之箒さんに関しては確かに対策が必要かもしれないですね」

クラスが同じなのは仕方ないとしても、部屋まで乗りこまれては困る。刀奈と虚は何か有効な手立ては無いものかと考え始める。その背後から三人の少女が一夏たちの部屋に入って来たのだった。

「いっちゃん！ 遊びに来たよ〜」

「あれ？ お姉ちゃんに虚さんも……何かあったの？」

「何故私があんな女と同室なのですか！ 部屋替えを要求します！」

「……早速問題があったようだな、マドカ」

三人の内一人は文句があるらしく、一夏はマドカの不満に耳を傾け、そして少し震えだす。

「大丈夫ですよ、一夏さん。あの人はここにはいません」

「あ、ああ……分かつてる」

「兄さま？ 何かあったのですか？」

「一夏君は昔、篠ノ之箒ちゃんに追いかけて回されてたのよ。記憶を失ってまだ不安でいっぱいなのにね。その所為で篠ノ之箒恐怖症になっちゃってるのよ」

「まあ話を聞く限りでは、完全に彼女が悪いんですがね。何故か被害者を装ってるんですよ」

「マドカちゃん、部屋割の事だけ——って、全員いるのね」

また来客があり、その人は一夏たちの部屋に来たのに目的はマドカのようだった。

「碧さん、別室は用意出来たのですか？」

「調整しないと無理ね。誰も篠ノ之さんと同じ部屋になりたがらなかったのよ」

「……このままではあの女を殺してしまうかもしれない」

「別に個人的には構わないんだけど、学園教師として殺傷沙汰は勘弁してほしいかな」

更識関係者が全員一夏たちの部屋に集い、そして話あつた事は篠ノ之箒の事について。結論として、篠ノ之箒は問題児で、個人的感情を優先すれば消し去つてもよいが、学園に迷惑がかかるのであるべく我慢するようにとの事に落ち着いた。篠ノ之箒について話している間、一夏はずっと美紀にしがみついていたのだつた。

I S の授業

I S 学園での生活二日目の朝、一夏と美紀は簪たちと合流して食堂へと向かう。さすがに食材を用意していなかった為に、一夏も食堂を利用する事にしたのだ。

「いっちーが自分でご飯を作らないのって何時以来なの？」

「最近は忙しくて作って無かったし、むしろ最後に何時作ったのか覚えて無い」

「兄さまはご自身で料理を作られるのですか？ 今度食べてみたいです」

「ああ、良いぞ。食材を買ったらマドカにも食べさせてやる」

そんな会話をしながら、一夏たちは開いている席へと腰を下ろす。一夏の隣に誰が座るか、それは毎回激しい争いの末に決まるのだった。

「今日は簪とマドカなんだな」

「うん。さつきじやんけんで決めたから」

「何である時チヨキを出したんだろう、私……」

「まあまあ美紀ちゃん、そんなに落ち込まないでよ。美紀ちゃんはいっちーと同じ部屋なんだしよ」

本音の妙な励ましにどう反応すればいいのか困った美紀は、とりあえず俯くのを止めた。

「更識君、ここいいかな？」

「別にいいぞ。俺の席ってわけでも無いんだし、気にする事は無いと思うけど」

クラスメイトの二人が、本音の隣に座っていいか聞いてきたので、一夏は無難にそう返した。だが隣に座ってる簪には、一夏が緊張しているのが良く分かった。

「（一夏、そんなに緊張したら一日もたないよ？）」

「（分かってるんだけど、やっぱ慣れない相手は緊張する）」

「（少しずつ慣れていこうね）」

普段は簪が妹っぽいのだが、こういった時は一夏の方が弟っぽくなる。この二人の関係は義兄妹なのだが、たまに逆転するのだ。

「更識君って整備が専門なんだってね。昨日小鳥遊先生から聞かされてびっくりしたよ」

「まあ、戦闘よりは整備の方が慣れてるかな」

「いっちゃんはあるまり争いごとを好まないからね〜」

「ところで、更識君と織斑さんって兄妹なんだよね？」

「そうですけど、何か問題でも？」

マドカが丁寧に対応したのは、一夏が緊張している事に漸く気がついたからだ。過去のトラウマから対人恐怖症である兄の代わりに、自分が対応しようとしたのだろう。

「いや、更識君の義姉である更識先輩や小鳥遊先生から事情はある程度聞いてるけど、苗字が違うとどうしてもね……気になっちゃうんだよ」

「兄さまは過去に想像を絶する出来事に巻き込まれてしまったのです。それが理由で姉さまたちとも距離を置く事になったのです。そして姉さまたちが本格的に忙しくなられたので、今の家で厄介になる事になったそうです」

「そうなんだ……大変だったね、更識君」

「もう慣れましたし、余程の事が無い限りは大丈夫ですのぞ」

クラスメイトに少し堅苦しい話し方をしてるのは、一夏がまだ距離感をどうするか悩んでいるからだ。その事を理解したクラスメイトは、無理に距離を縮めようとはしないと決めたのだった。

「何時まで食べているんだ！ いい加減食べ終えないと遅刻だからな！」

「一年の寮長はわたしたちだ！ 規則を破ったものはそれ相応の処罰があると思え！」

「姉さま！」

「学校では織斑先生と呼べ！ もしくはお姉ちゃんだ！」

「……後半は心の内に止めておいてください、織斑先生」

一夏のツツコミに、織斑姉妹はゆつくりと視線を逸らして行ったのだった。

クラス代表選考戦は週末に行われる事になっているが、授業は普通に進められる。本当なら碧が担当するはずだった授業だが、織斑姉妹が散らかした寮長室を片付けるとい

う事で、代わりに真耶が担当している。

「というわけで、ISは宇宙での作業を想定して造られているので、操縦者の全身を特殊なエネルギーバリアーで包んでいます。また、生体機能も補助する役割があり、ISは常に操縦者の肉体を安定した状態へと保ちます」

「先生、それって大丈夫なんですか？　なんか体の中を弄られてるみたいでちよつと怖いんですけど……」

「そんなに難しく考える事はありませんよ。そうですね、例えば皆さんはブラジジャーをしていますよね。あれはサポートこそすれ、それで人体に悪影響が出るといふ事は無いわけです。もちろん、自分にあつたサイズのものを選ばないと型崩れしてしまいますが——」

そこまで話して、真耶は自分を見つめる異性の視線に気づいた。

「え、えつと……更識君はしてませんよね。わ、分からないですよね、この例え。あは、あははは……」

気まずさから愛想笑いを浮かべた真耶に代わり、一夏がマドカに視線を向けた。

「説明されるより実際に聞いた方が理解出来ると思います。マドカ」

「はい、兄さま」

一夏に名前を呼ばれ、マドカはすつと立ち上がり白式に意識を向けた。

「うーん……こんな時間になに？ ……あれ？ 人間の姿にされてる」

「白式、少し兄さまの説明に付き合って」

「……あれって織斑さんの専用機？」

「言葉だけじゃ分からないかもしれないので視覚に訴えますが、このようにI Sにも意識があり、操縦者の事を理解しようとしてくれます。自分だけが理解しようとするのではなく、I Sに理解されるように努力する事も大切です」

「そう言えばはじめましてだね！ 織斑マドカの専用機の白式だよ。よろしくね」

ちよこんと頭を下げた白式に、一夏は優しい笑みを向ける。表向きには更識が開発した専用機という事になっているが、この白式は篠ノ之束が製造し、一夏が改良を加えた特殊I Sなのだ。人型にする事に成功した一夏は、白式の事を常に気に掛けているのだ。

「これで理解出来たとは思いますが、もう一度言います。I Sにも意識があり、それぞれ個性があります。その事を覚えておいてください」

視線を真耶に向け、一夏は補足説明は終わりだと伝えた。その事を正確に理解した真耶は、少し大袈裟な感動を込めた視線で一夏を見つめたのだった。

昼食時に

昼休みを迎え、一夏たちは再び食堂を訪れた。成り行きで白式が人型になれる事をバウしたので、昼は白式も一緒に行動している。

「あら？ 今日には白式ちゃんも一緒になんだね」

「お嬢様、口にもものを入れた状態で喋るのはお行儀が悪いですよ」

普段は学年ごとに食堂も別れているのだが、別段立ち入り禁止というわけではない。なので昼食は刀奈と虚も一緒に摂る事にしたのだ。

「さっきの授業でISにも個性がある、という事を説明する為に人型になってもらいましたので、そのまま行動してもらっています」

「へへー、一夏様のお役に立ったの」

一夏に褒めてもらい胸を張る白式を、微笑ましく眺める一同。白式はこの中では共通の妹のような扱いなのだ。

「それにしても、一夏君の注目度は高すぎるわよ。さっきから羨む視線が何本も……」

「仕方ありませんよ。私とお嬢様は学年が違うんですから」

「ところで一夏、生徒会に入らって本当？」

「選考から外れるなら、それでもいいかなと思つてな」

「あー……その事なだけで」

気まずそうに刀奈が視線を逸らしたのを見て、一夏は何となく刀奈が言いたい事を理解したのだった。

「千冬さんと千夏さんにその事を話したら、『せめて選考戦が終わってからにしろ！』つて怒られちゃった……」

「よっぽど兄さまの戦いが見たいのでしょうね」

「迷惑な話だ……」

織斑姉妹を説得するのは、一夏ですら困難だ。説得する労力と諦めて選考戦に参加する事を天秤に掛け、一夏は諦める事にしたのだった。

「それにしても、あのせつしーとか言う子、いっちゃんーの事をバカにし過ぎだと思ふんだよね。皆で懲らしめるのはどうかなく？」

「本音ちゃんがやる気なら、私もやるよ。一夏さんの事をバカにした事を後悔させてあ

げるんだから」

「兄さまの為に、私も頑張ります！」

「……オルコツトさん、南無」

この三人を本気にさせた事に対して、一夏はセシリアに同情した。自業自得ではあるのだろうが、この三人相手に戦わなければいけないと思うと、一夏もさすがに可哀想だと思ふのだった。

「三人が懲らしめても態度を改めなかったら、私と虚ちゃんも戦ってあげるわよ」

「後輩を正しい道に導くのも先輩の務めですから。そして、生徒会の仕事でもあります」

「……一夏様、あのオルコツトとか言う候補生、死ぬんじゃないですかね？」

「……さすがに死にはしないとは思うぞ」

「なんなら私もその人を懲らしめるよ？」

「もうやめてあげてください」

簪も参戦の意を表明したのに対して、一夏はさすがにやり過ぎだと判断したのだった。

「ちよつといいか」

「……何か用でしょうか、篠ノ之さん」

丁度一段落したタイミングで一夏に声を掛けてきた箒。その声だけで一夏の緊張感が高まっていると、箒以外全員が理解した。もちろん白式や本音も。

「お前、自分の事を強く無いとか言ったな」

「ええ、事実ですのぞ」

「男がそのような弱気ですぞする！ 私が鍛えてやるから剣道場に来い！」

「I Sに剣道は関係ないと思うのですが……」

少しずつ、一夏の幼児退行が始まっているのが刀奈たちには分かった。このままではトラウマが発動し、最悪泣きだしてしまいかもしれない。そう判断して、箒には早々に退場願うべきだと、刀奈と虚、簪と美紀の間でアイコンタクトで会話し決定した。

「篠ノ之さん、一夏の稽古には私たちが付き合うから」

「無関係の篠ノ之さんはいんまり一夏さんに関わらないでください」

「なっ!? 無関係ではない！ 私は一夏の幼馴染だ！」

「そう思っているのは貴女だけよ、篠ノ之箒ちゃん」

「一夏さんは貴女の事を単なる知り合いとしか思っていないです。あんまりしつこく一夏

さんに付きまとうようでしたら、こちらとしても対処を考えるしかないのですが」

「あ、貴女たち上級生まで口を挿むのですか！ これは幼馴染である私と一夏の問題です！」

「入学式で言ったでしょ？ 『あんまり私の義弟を苛めないで』 って。もし苛めるのなら、それなりに覚悟しての事でしょうね？」

刀奈が纏う空気が変わったのに、さすがの箒も後ずさる。良く見れば虚や簪、美紀が纏っている空気も冷たいものになっているのだ。

「い、一夏！ お前はもうどうしたいんだ！」

「俺は、刀奈さんたちと訓練する。だから篠ノ之さんは大人しくしてて」「くっ……」

若干幼児退行している事に気づけず、箒はその場を後にした——というか、現実を受け容れられずに逃げ出した。

「よしよし、いっちは良く耐えたね」

「もう怖い女はいませんよ、兄さま」

小刻みに震えている一夏を、本音とマドカが慰める。やはり一夏にとって篠ノ之箒という存在は恐ろしいものなのだ。

「美紀ちゃん、一夏君を部屋に連れて行ってあげて。後で私たちも行くから」

「分かりました。一夏さん、行きましよう」

「う、うん……」

「本音と簪ちゃんも、一夏君に付き添ってあげて。片付けは私たちがしておくから」

「分かった」

「いっちょー、大丈夫?」

周りの目を遮るように、三人で一夏を囲い食堂から移動する。一夏のトラウマを周りに知られるのは、色々とマズイと判断した刀奈は、即座に一夏を食堂から移動させ、人目のつかない自室で落ち着かせる事にしたのだ。

「虚ちゃん、マドカちゃん、白式ちゃん、速攻で片付けて一夏君の部屋に行くわよ」

「分かりました」

「兄さま……」

「一夏さま……」

トレイを返却口に運び、片付け残しが無いかを確認した刀奈たちは、物凄い速度で食堂を後にした。

「な、なんだったのでしょうか、あの男の感じ……」

そんな一連の出来事を目撃していた少女は、一夏の事が気になってしまったのだった。

VTSのシステム変更

午後の授業が始まるまで、一夏たちは部屋に籠っていた。理由は一夏のトラウマが治まるまで皆で一夏を安心させていたのだ。

「更識君、お昼休みは何処にいたの？」

「ちよつと気分が悪くなつて部屋で休んだ。もう大丈夫だから心配はしなくても良いよ」

「やっぱり女の子ばかりで落ち着かないのかな？　もし気分が悪くなつたら先生に言いなよ？」

「ああ、もちろんそうするつもりだ」

トラウマの事を話すわけにもいかないの、一夏はそれっぽい嘘を吐いて誤魔化する。さすがに授業中に箒に詰め寄られる事は無いだろうけども、万が一があつた場合は最悪美紀とマドカ、そして本音が何とかしてくれると言っているので一夏としては安心してゐるのだ。

「それでは午後の授業を始めます。更識君は体調、大丈夫なの？」

「はい、ご心配をおかけしました」

刀奈から碧に報告が行っているので、碧はまず一夏の体調を心配した。もちろん身内だけの時のようにベツタリとはいかないまでも、かなり心配してくれているのは一夏にも伝わっている。

「あつと、そうだった。授業の前に、代表選抜戦の順番が決まったので発表しておきますね。まず第一戦は更識君対オルコットさん。その後が織斑さん対オルコットさん。その次が布仏さん対オルコットさんで、その次が四月一日さん対オルコットさん——」

「お待ちください！ 何故私が連戦なのでしょうか？」

「文句があるのでしたら織斑先生に仰られてください。この順番を決めたのは織斑先生ですのぞ」

「……分かりましたわ」

「後は当日に決めるそうです」

実に理不尽な組み合わせだと思うだろうが、セシリア以外その事に異議を申し立てる人間はいなかった。それだけセシリアはクラスメイトからも良く思われていないのだ。

「では、授業を始めます」

何か言いたげだったセシリアだったが、碧の有無を言わせない雰囲気にも吞まれ、そのまま着席した。自分が何に喧嘩を売ったのか、セシリアは未だに理解していないのだった。

やるからには無様に負けるわけにはいかないということ、放課後になり一夏はVT Sがある部屋に簪たちを連れてトレーニングに励む事にした。

「ブルー・ティアーズのデータはあるんだよね？」

「入試の時のデータなら持つてる。だけどより詳しいデータとなると、一週間では手に入らないかな」

「セツシーよりはかんちゃんたちの方が上手く使えると思うけどね〜」
「完全なデータじゃないんだから、本物のようには行かないよ」

データを打ち込みながらシステム変更をしている一夏たちの後で、本音と美紀がセシリアについて話している。二人とも既にセシリアの事など相手にならない程の実力があるために、油断を抜きにしても負けるつもりは無かった。

「刀奈お姉ちゃんや虚さんにも言われてるし、あの候補生は完膚なきまでに叩きのめさない」と

「再起不能にしたらさすがにマズイよね？ イギリスに何を言われるか分からないし」

「その時は織斑姉妹が矢面に立って解決してくれるだろう。なつ、マドカ」

「そうですね。兄さまと私で頼めば、姉さまがイギリスごと消し去つてくれますよ」

美紀と簪は、実際にそうならないように祈る事にした。いくら一夏を侮辱したからといって、国一つ消し去るのはさすがにやり過ぎだと思ったからだ。気持ち的にはともかく、それを実行するとなるとさすがに躊躇いを覚える。

「それにしても……随分と杜撰な管理だな……システムデータの書き換えが頻繁に行われてる形跡があるぞ……」

「誰かが更識のデータを狙ってるって事？」

「ここ最近だから、そうかもしれないな。まあ、メインデータにはアクセス権が無いと入れないし、更識のデータはここには入って無いからな」

システムデータの管理を一夏たちが務める事にしたので、これから先はパスワードを知らなければ誰も弄る事は出来ない。元々もそういう管理がされていたはずなのが、パスワードの管理が杜撰だったのか誰でも比較的簡単にシステムデータにアクセスは出来たのだ。

「やはり織斑姉妹に管理を任せたのが失敗だったか……」

「対策は完璧だけど、管理が杜撰だったら意味無いもんね……」

泥棒などには強くとも、あの姉妹は物を管理する能力に欠けている。掃除などを頻繁に行わないので、何処にやったか分からなくなり、数日間部屋に無くても気づかない事があるのだ。その事知っている誰かが織斑姉妹の部屋に忍び込み、そしてVTSから更識の情報を引き出そうとしたのだろうと一夏と簪は結論付けた。

「教員の中でパスワードを教えるのは碧さんだけにしておこう。さすがに織斑姉妹に教えるのはマズイ」

「今更識所属の機体のデータも打ち込んだからね。それを知られるのは一夏的にも更識的にもマイナスだもんね」

「これが本音のパスワードで、こつちが美紀のパスワードだ。簪のはコレな」

「いっちー、私のパスはいっちーが管理してて。多分無くすから」

「……そうだな。一括で管理しておくか。俺の部屋なら簡単には入れないし、書類とか管理する金庫があるから、そこに一緒に入れておけばいいだろ」

「とりあえず、自分でパスワードは覚えるんだよ?」

簪に言われ、美紀はすぐに自分のパスワードを覚えたのだが、本音は覚えようとせずつ一夏にパスワードが書かれた紙を手渡した。つまりは誰かに覚えておいてもらおうという事なのだろうと、簪は呆れたようにため息を吐いたのだった。

「一夏、お姉ちゃんと虚さんのパスワードは後で生徒会室に持って行かなきゃね」

「あの二人ならしつかりと管理出来るだろうしな」

本音の事には触れずに、一夏と簪はVTSのメインデータからログアウトして電源を落としたのだった。

一夏VSセシリア

仮想だけではダメだという事で、生徒会権限でアリーナの使用許可を得た刀奈に連れられ、一夏は今特訓を積んでいる。闇鴉の特性であるスピードを生かした戦い方を徹底的に身体に覚えさせる為らしいが、一夏としては勝てるとは思っていないので訓練はほどほどに頑張る程度だった。

「一夏君、そんなんで勝てるの?」

「いや、最初から勝つつもりはあまり……無様に負けなきゃそれで良いかなって」

「良くない! 一夏君が負けるところなんて見たくないもの!」

「……刀奈さんは授業がありますよね? どうやって見るつもりなんです?」

代表選抜戦は普通の授業時間に行われる。だから一年一組以外の生徒がその模様を見学する事は不可能なのだ。当然の疑問に思われた一夏の発言だったが、この場においてはその当然は当てはまらない。

「何言ってるのよ。一夏君が侮辱されたんだから、私や虚ちゃんだって参戦する勢いだったのよ。でも、碧さんに『見学だけにして』って言われたから、私と虚ちゃんもモ

ニター室で観戦するのよ」

「はあ……そうだったんですか」

碧が何故刀奈たちに見学を許したのか、その理由は一夏にも理解できている。だからこれ以上その事で論議を交わすつもりは無く、もう一度刀奈が考えた戦術を身体に覚えさせる為にトレーニンングに励むのだった。

クラス代表選出戦当日、一夏はピットで精神統一をしていた。一夏の出番は一番最初、つまりセシリアが隠している武装は見る事が出来ないのだ。

『いくら隠していても、ブルー・ティアーズが教えてくれてるんですけどね』

「まあそういうな。彼女なりに頑張ってるんだらう」

『まさか専用機が相手に情報を流してるなんて思わないでしょうからね』

「そもそも彼女は、ISが喋れるなんて思ってた無いのだらうさ」

白式が人型になれるのは見ているが、他のISまで喋れるなどとは思っていないと一夏は言う。事実一夏以外にISの状態のままISの声を聞く事が出来る人間は、更識所属の専用機持ちが、自分たちの専用機の声だけで——簪と美紀は互いの専用機の声も聞こえるが——それ以外には確認されていないのだ。

「ビット兵器が六個か……面倒だな」

『一夏さんの射撃の腕なら、一個一発で確実に打ち落とせると思いますが』
「偏向射撃が出来ないんだっけ？ ならいけるかな」

打ち出した弾の軌道を変える事が出来ないセシリアは、一夏にとつて恐怖の対象では無かった。それでも、普通に戦えば勝てないだろうなと一夏は思っている。

『私も一夏さんを侮辱したあの女を許せません。だから一夏さん、頑張つて勝ちましようね！』

「刀奈さんたちも見てるし、とりあえず頑張るけどさ……勝てるなんて自惚れは抱いて

無いからな」

『そこは嘘でも勝つて言うところですよ』

闇鴉との会話を終え、一夏はアリーナへと歩を進めた。大観衆、まではいかなくてもクラスメイト全員が一夏を見ているのだ、若干震えだしそうになっても仕方ないのかもしれない。だが、一夏は多くの視線の中から、自分の事を心配してくれている視線をいくつか見つけ、そのおかげで平常心を保つ事が出来たのだった。

「あら、逃げ出さずに来ましたのね。それだけは褒めて差し上げますわ」

「別に貴女に褒めてもらおう言われはありません。それよりも、前に忠告した事、また忘れたんですか？ あまり人を見下していると、何時か痛い目を見る事になりますよ」

「貴方がそれ程強いとは思いませんもの。何やら特訓をしていたようですが、所詮付け焼刃ですわ」

セシリアの発言は、一夏にしか聞こえない。だが、色々と人外が揃っているIS学園には、読唇術が使える人間が複数存在するのだ。

『オルコット、今の発言、後で覚えておけ』

『一夏を侮辱するとは言い度胸だ』

『……そろそろ始めますので、オルコットさんは平常心を取り戻してください』

プライベートチャンネルで脅しをかける織斑姉妹に、セシリアは顔色を悪くした。プライベートチャンネルなので一夏には何故セシリアの顔が蒼白になっているのか分からないが、細かい事は気にしない事にしたのだった。

『それではカウントを始めます』

オープンチャンネルで碧が宣言し、カウントが始まる。一つ減るごとに一夏は周りの視線をシャットアウトしセシリアに集中していく。

『開始!』

碧の合図と共に、セシリアはライフルを取り出し一夏に照準を合わせた。

「踊りなさい! この、セシリア! オルコットとブルー・ティアーズが奏でる円舞曲で!

……あら?」

完璧に照準を合わせたつもりのセシリアだったが、その先に一夏の姿は無かった。

「何処に行きましたの? センサーにも反応がありませんし……!」

センサーだけでは無く肉眼でも一夏の姿を探すが、セシリアはついに一夏の姿を見つ
ける事は出来なかった。

「なっ！ 何処から攻撃してますの!？」

姿も見えない、武器も見えなければ飛んでくる弾もぶつかると前まで見えない。これ
では反撃はおろか回避行動すらとれない。セシリアはとりあえず移動しながら攻撃が
出てくる場所を探す事にした。

「どこですの！ 卑怯者！ 姿を現しなさい……なっ!？」

センサーに敵接近の表示が出たと思った次の瞬間には、一夏の専用機閻魔がセシリア
の目の前に姿を現し、そしてSEを半分以上削る斬撃を繰り出した。

「なんですの、今の攻撃は……」

『勝者、更識一夏』

驚いている間にもう一撃喰らわされ、あっさりとセシリアは一夏に敗北したのだっ
た。

「更識一夏……いったいどんな方法で私を下したのでしょうか……」

まったく歯が立たなかったセシリアだったが、彼女は純粹に一夏に興味を抱いたのだった。

クラス代表決定

一夏にあつさりと負けたセシリアは、何が起こったのかを確認する為に一夏のピットを訪れ、そして詰問した。

「何なのですか、あれは！ 貴方、自分で『強くない』と仰られたじゃありませんの！
なのになんですか、あの強さは！」

「えっと……あれは闇鴉の特性を使っただけで、闇鴉本来の武装じゃないんですよ」
「………どういう事ですか？」

理解が及ばなかったセシリアは、詰め寄っていた身体を離し、キョトンとした顔で一夏を見つめる。一夏は詰め寄られていた時より落ち着きを取り戻し、セシリアに闇鴉の特徴を教える事にした。教えたところで、普通の人間には対処出来ないのだからと。

「まず姿を消したのだけど、あれが闇鴉の特性『雲隠れ』」

「雲隠れ？ どういう技ですか？」

「体験したオルコットさんなら分かると思うけど、ISのセンサーからも隠れ通す技なんだ。そしてブルー・ティアーズのSEを一気に削った技。あれは織斑千冬さんが使っ

ていた暮桜の単一仕様能力『零落白夜』を真似た技。闇鴉の単一仕様能力である『影真似』で放った斬撃。本物の零落白夜じゃないからこつちのSEはそれ程減らないし、オルコットさんのSEも一撃では削りきれなかった」

「つまり、その機体だけの武装なら私には勝てなかったと？」

「どうだろう……雲隠れはれつきとした闇鴉の技だし、その特性は武装にも及ぶ。それは体験しましたよね？ 放たれた弾丸が当たる直前まで見えなかったはずですし」

一夏自身がカスタマイズしてそこまで能力を向上させたのであって、普通の技術者には放った弾丸まで隠せるような技術力はない。だがセシリアは、一夏が更識所属だからという理由だけでそれを受け容れたのだった。

「これが更識の技術力ですの……ですが、貴方は『更識所属で一番弱い』と仰られましたよね？ これがあれば勝てるのではなくて？」

「隠せるのはあくまでもISの反応だけですから。いくら気配を殺したところで生体反応までは隠せません。そして、更識所属の人間は生体反応さえあれば何処にいるか分かっていますから……」

「あののほほんとしてる方も？」

「あれでも本音は美紀や簪と同レベルの実力を有していますからね。この後戦えばそれ

が分かるはずですよ」

「貴方だけでも次元が違うと思いましたが、どれだけ別次元なのですか、更識所属のI S操縦者は……」

まだ三人と戦わなければいけないセシリアは、ガツクリと肩を落として自分のピットへと戻って行った。気配が完全に無くなったのを確認して、一夏は全身に入れていた力を抜いてその場に座り込んだ。

『一夏さん、大丈夫ですか？』

「うん……まだ大丈夫。相手は篠ノ之さんじゃ無かったし、それほど怒気も無かったからね……」

『あまり無理はしないでくださいよ？ 一夏さんがトラウマを抱えている事が相手にバレれば、そこに付け込まれるかもしれないんですから』

「分かっている。でも、あの人はそこまで悪い人じゃ無いと思う。自分自身を冷静に見る事が出来れば、あの人はまだ強くなると思うよ」

相手の事を冷静に分析している一夏に、闇鴉は心の中で称賛を贈り、それ以上何も言わなかったのだった。

クラス代表選出の為の模擬戦は、美紀が全勝でクラス代表に内定。元々一夏は生徒会に入る為に辞退する旨を伝えていた為、セシリア戦以降は不戦敗となった。

「姉さまたちがオルコットさんに勝ったからもう十分だつて」

「私たちからすれば、一夏さんとも戦いたかったですけどね」

「勘弁しろ。美紀や本音、マドカと戦ったところで俺は勝てない」

試合後のピットで美紀とマドカと談笑していた一夏の許に、刀奈と虚、そして簪と本音がやって来た。その背後には碧と、そして全敗を喫したセシリアの姿があった。

「何かあったのですか？」

「まずは美紀ちゃん、クラス代表内定おめでとう」

「ありがとうございます、刀奈お姉ちゃん」

「それから、一夏君には正式に生徒会役員として働いてもらいます」

「分かりました。それで、オルコットさんは何故この場に？」

碧だけなら更識関係の話かと思つたが、セシリアがいる事でそれはあり得ない。一夏たちは何故セシリアがこの場にいるのかが気になったのだ。

「オルコットさんは、皆さんに謝りたいそうです」

「更識一夏さんを侮辱した事、本当に申し訳ありませんでした。自分が驕っていたのを自覚しましたわ」

「でも、オルコットさんも十分強かつたと思います。本音ちゃんなんて珍しく本気で戦つてましたし」

「だって負けたらいつちに怒られるもん。それに、いつちを侮辱した事はまだ許して無かつたし」

「織斑姉妹の殺気にてられて、オルコットさんは血の気が失せていたじゃないか。あれで許してやらなかつたのか？」

「「はい（うん）！」」

「……はあ。まあ謝罪を受け入れ、今後は良好なクラスメイトの関係を築いていきましよう」

「よろしく願いますわ。それから、貴方の事を『一夏さん』とお呼びしても？」「構いませんよ。こちらも『セシリア』と呼ばせてもらいます」

多少のしこりはまだ残っているかもしれないが、更識一派とセシリアはこうして和解した。残る問題はセシリアと織斑姉妹の関係だが、これは一夏たちでもどうしようもないので、セシリア本人に任せるのだった。

代表就任パーティー

クラス代表が決定した事を祝して、一年一組のクラスメイトほぼ全員が食堂に集まりパーティーを開く事になった。主役の美紀や一夏は参加を辞退しようとしたのだが、お祭り好きの本音が二人の参加を表明してしまった為、今更辞退できないと言われて渋々参加していたのだった。

「それにしても、やっぱり更識所属のみんなは強かったねー」

「更識君だって、あのままやってれば勝てたんじゃないの？」

「さすがに美紀やマドカ、本音には勝てませんよ。俺は自己申告したように強くありませんから」

基準値が普通より高い一夏たちは、世間から見れば十分に強くても満足出来ない節が見られる。それでも一夏は、その中では割かし周りからの評価を受け容れているのだ。

「そんな事無いと思うけど。更識君だったら今度の対抗戦でも良いところまでいきそうだと思うけどな」

「他のクラスの代表が誰なのかは知りませんが、四組の代表には絶対と言い切れるほど

勝てませんから」

「かんちゃんだもんね〜」

日本代表候補生であり、更識所属の中で碧、刀奈、虚の次に位置する簪には、美紀でも五回に一回勝てる程度なのだ。その美紀より下に位置する一夏が簪に勝てる確率は、それこそ万に一つだろう。

「それにしても、篠ノ之さんも誘ったんだけどね」

「何でも織斑姉妹とお話があるからって、小鳥遊先生に言われちゃったんだよね」

「自業自得です。あの女は兄さまの敵なのですから」

「敵って？」

マドカが呟いた言葉にクラスメイトが興味を示したところに、上級生の乱入者が現れた。

「はいはい！ 期待の一年生、四月一日美紀さんと更識一夏君、それから織斑姉妹の妹で更識君の妹でもある織斑マドカさんにインタビューさせてもらいまーす！ あつ、私は新聞部二年の黛薰子ね」

はい、と名刺のようなものを差し出した先輩に、三人はどう反応すればいいのか困り、とりあえず受け取る事にした。

「それにしても、更識所属がこんなにいるなんて、さすがかつちゃんの家の子ね」

「かつちゃん？ ……刀奈さんの知り合いなのですか？」

「ルームメイトよ。それにクラスメイトでもあるけどね。じゃあ早速、代表に選ばれた四月一日さんから意気込みを」

「えつと……簪ちゃんに負けないように頑張ります」

「かつちゃんの妹さんかー。確かに強そうだよねー」

凄い速度でメモを取り薫子に、一夏は若干恐怖心を抱き美紀の背後に隠れる。

「それじゃあ次、更識君ね。何で棄権しちゃったの？ あれだけオルコットさんを圧倒する力があるんだから、他の三人にも勝てそうな気がしたけど」

「自分の戦い方では、精々初見相手にしか勝てません。同じ所属で自分より遥かに強い三人に挑んでも、無様に負けるだけです。それに、自分は生徒会入りが決まっていますので、本来ならオルコットさんとも戦う必要は無かったですよ」

「じゃあ何で戦ったの？」

「……織斑姉妹が『せめてオルコットとは戦え』と言ったものでして」

「なるほど……織斑姉妹の命令には逆らえないんだね」

何か曲解した薫子に、本音がやんわりと釘をさす。

「あまりにも捏造記事だったら、おねーちゃんに言い付けますよ?」

「ツ!!? お願いだから布仏先輩には言わないで!」

虚から聞いていたのか、本音がヒラヒラと携帯を薫子に見せつけると、さつきまでの勢いが全て謝罪に使われているのではないかと思うくらい速度で頭を下げた。その姿に、美紀と一夏は驚き、そして本音に恐怖した。

「えつと……気を取り直して、最後は織斑さんね。偉大なお姉さんたちと有名なお兄さんがいるけど、織斑さんの目標は?」

「少しでも姉さまたち、そして兄さまに近づく事です」

「でも、更識君は織斑さんの方が強いつて言ってるけど?」

「兄さまの凄さは戦闘では無く整備で発揮されますから。本来争いごとを嫌う兄さまが、あそこまで戦えるようになったのは並大抵の努力ではありません。私はその少しでもいいので、兄さまに近づきたいのです」

「なるほど、努力の量ね……更識君は天才じゃなくて秀才だったのね」

「兄さまは天才であり秀才です。だから私などが兄さまより強いなどと、そんなおこがましい事は言えません」

マドカの言葉に感動したのか、薫子はマドカの両手をつしりと掴み、そして数回上下に振った。

「頑張つてね！ 陰ながら応援するから！」

「はい！」

「それじゃあ最後に、一応オルコットさんにもインタビューさせてもらおうかな」

「一応なのですか!?!」

イギリス代表候補生としての自尊心がその言葉に反応したが、その自尊心が原因で酷い目に遭ったばかりのセシリアは、それ以上何も言わなかった。

「ズバリ、その身で体感した更識君の強さは？」

「何処の国の代表でも務まると思いますわ。ですが、一夏さんは何処の国の代表にもなるつもりは無いそうですね」

「ふーん……：険悪だつて聞いてたけど、仲直りしたんだね」

「私のくだらない自尊心のせいで、一夏さんたちに不快な思いをさせた件は謝らせてい

「ただきました」

「そっか。でもセシリアちゃんも新入生の中では間違いなく上位クラスだし、頑張ってるね」

一応の応援をした薫子は、最後に一枚とカメラを構える。何故かクラス写真になってしまったが、一夏たちはその写真を薫子からもらい、部屋に飾ったのだった。

転校生は悪友

美紀の代表就任パーティーがお開きになった頃、一人の少女がIS学園を訪れていた。

「ここね、IS学園……政府の親父たちを説得するのに手間取って入学試験には間に合わなかったけど、漸く転校の手続きが完了したわ。えっと……まずは事務室に行つてこの書類を提出して、それで正式にIS学園に入学が完了するのよね」

少女はリュックの中から重要書類を取り出し、事務室に提出する為にふらふらと歩きはじめた。

「えっと事務室は……多分コッチね」

すぐそばに案内板があるのにも関わらず、少女は勘だけで事務室を目指した。そして、その少女の勘は全くの見当外れだったのだ。

「あれ？ おかしいわね……あたしの勘ならそろそろ事務室に着くんだけ……ん？」

これってIS学園の施設案内？ えっと、現在地がここで事務室が……って、全くの真

逆じゃない！」

少女——凰鈴音は地図などに頼りたくないという考えの持ち主だった。方向音痴では無いのだが、悉く勘を外す残念な面があったのだった。

「とりあえずダツシユで元いた場所まで行つて、そこからさらにダツシユで事務室に提出しちゃいましょう」

鈴音はダツシユで事務室を目指し、途中で重要書類を手放しそうになるほど勢いを付けた。そして既に閉まっている事務室の小窓を叩き、強引に事務員に書類を押し付ける。

「ねえ、更識一夏つて何組？」

「更識君は一組ですね」

「あたしは？ 何組に編入するの？」

「えつと……凰さんは二組ですね」

「ふーん……ところで、クラス代表つてもう決まってるのよね？ 一組の代表は？」

「一組は四月一日美紀さんですね、日本代表候補生の」

それを聞いて鈴音は首を傾げた。普通なら物珍しきで一夏が選ばれるのもだと思っていたのに、選出されたのは実力十分の美紀だったのだから。

「更識一夏じゃないんですか？」

「何でも更識君は生徒会に選出されたから、代表は辞退したみたいよ」

「なるほど……」

鈴音の中で納得出来たようだ。彼女の中でも一夏は戦闘より事務作業の方が向いていると判断されているのだろう。

「それでは凰鈴音さん、ようこそIS学園へ。これが生徒手帳と、IS学園特記事項が書かれた冊子です。ちゃんと目を通してくださいね」

「この分厚いのを？ 冗談でしょ？」

「ちゃんと目を通しておいってくださいね」

にこやかに告げる事務員に、鈴音は頷く事しか出来なかった。あの迫力は、少なくとも鈴音の中でトップクラスだったのだ。

転校生の噂は、何処の学校でも話のタネになる。I S学園も多分にもれず朝からその話題で盛り上がっていた。

「何でも二組に転校生が来るらしいよ」

「こんな時期に？ 珍しい事もあるものだな」

「ねえねえ四月一日さん」

「何、相川さん」

更識組の会話に割り込んできた相川清香に、美紀は視線だけ向けて問いかける。敵意が無いのは分かっているのだが、一夏は若干清香から離れた位置に移動し、マドカと本音が一夏を庇うように前に出た。

「四組の代表の更識さん、同じ候補生なんですよ？ どっちが強いのか？」

「簪ちゃんの方が強いですよ。でも、何故そんな事を気にするんですか？」

「今度のクラス対抗戦、優勝したクラスには学食のデザート食べ放題って噂なのよ」

「ほえ!? 食べ放題！」

「本音……そこに喰いつくなよ」

甘いものに目が無い本音は、清香の話に喰いつき一夏を庇っていた事を失念した。一夏も清香には危険が無いと判断したのか、既に冷静を取り戻していた。

「そっか……でも、専用機持ちは四月一日さんと更識さんだけだし、更識さんに勝てれば優勝出来るかもね」

「ですが私は簪ちゃんに五回に一回勝てれば良い方で、確率的には——」

「その情報、古いよ！」

美紀の言葉をぶった切るように扉が開かれ、そして仁王立ちするように一人の少女が扉の先に立っていた。

「久しぶりね、一夏」

「鈴？ お前、何でここにいるんだ？」

「何でって、転校してきたからに決まってるじゃない！　ちよつと手間取って入学には間に合わなかったけどね」

「ふーん……噂の転校生って鈴だったのか。それで、情報が古いつて？」

「二組の代表はあたしに変更になったの。中国代表候補生で『甲龍』の持ち主のあたしにね！」

もう一度胸を張るように仁王立ちした鈴の背後に、二人の鬼が近づいている事に一夏は気づいていた。だが、久しぶりの悪友を驚かせる為に、あえてその事は教えなかったのだ。

「邪魔だ、小娘」

「痛っ！　誰よまった……く？」

振り返った先にいたのは、テレビの中で無双していた元世界最強コンビだった。

「織斑千冬……織斑千夏まで」

「織斑先生と呼べ、バカ者が！」

「何で『デビルシスターズ』が……」

「なんだその名前？」

「一夏知らないの？ 他国で織斑姉妹と言えば『デビルシスターズ悪魔の姉妹』で有名なのよ。悪魔のように攻め立て、簡単に終わらせてくれないってね」

「一撃で終わらせてたように思えるが」

「その一撃までが長いのよ……」

遠い目をした鈴の後頭部に、千冬と千夏の出席簿が振り下ろされた。

「もう予鈴は鳴っている」

「小娘はさっさと自分のクラスに戻るんだな」

「分かりました……じゃあ一夏、後で話しましょ」

片手を上げて挨拶した鈴に、一夏も片手を上げて返事をする。その二人の関係を羨ましそうに、また妬ましそうに見ている一人の少女がいたが、一夏の意識にその少女が引つかかる事は無かった。

新たな友人

一時間目が終わり、一夏の周りには人だかりが出来ていた。もちろん、最前線には美紀とマドカと本音を守るようにいるのだが。

「更識君、あの転校生と知り合いなの？」

「小学校が一緒だったんだ。まあ悪友の一人かな」

「あつ、じゃああの人が一夏さんが言っていた『鈴さん』ですか？」

「ああ。凰鈴音、候補生になれるかもとは聞いていたが、本当になっていたとはな」

しみじみと語る一夏に、クラスメイトは不思議そうな視線を向けた。

「ん？ 何か」

「いや、更識君でもそんな顔するんだなと思って」

「どんな顔？」

「嬉しそうな、懐かしそうな」

「実際再会は嬉しいし、会うのも久しぶりだから懐かしくも思うさ」

小学校を卒業してから互いに忙しくなりろくに会う事が叶わないまま鈴は中国に帰ってしまった。そして始めから鈴も入学しているものだと思っていた一夏は、受験者の中に鈴の名前が無かったのが少しショックだったのだ。だから余計に再会が嬉しいのだろう。

「じゃあ、凰さんは更識君の幼馴染なんだね」

「そうなるのか？ 出合いが小学五年だから微妙ではあるが」

「一夏の幼馴染は私だけだ！」

人垣の向こう側から聞こえてきた声に、一夏は若干顔をひきつらせた。だが今回は一夏だけでは無く、クラスメイト全員が顔をひきつらせている。

「篠ノ之さん、あんまり大声を出さないで。五月蠅いから」

「だがっ！」

「更識君はどういうわけか篠ノ之さんを避けてるみたいだし、あんまりしつこいと余計に嫌われちゃうわよ」

「なっ!!? どういう事だ一夏! 何故幼馴染の私を避ける!」

箒を宥めている女子は、一夏が箒に対して恐怖心を抱いているのを知っている様な口

ぶりで話しているのが一夏には気になった。

「あの人確か……鷹月静寐さん？」

「一夏さん、どうかしました？」

「いや……ちよつとゴメン」

人垣を掻きわけて一夏は鷹月に近づいて行く。それは同時に箒に近づく事でもあるのだが、今の一夏は恐怖心より先に探究心が勝っているので震えだす事は無かった。

「鷹月さん、少し良いかな？」

「ええ。私も更識君とお話したかったし」

「じゃあ次の休み時間、屋上で」

「邪魔が入らない場所で、って事？」

「そつちの方が落ち着いて話せるでしょ」

何やら含みのある事を言い合う二人に、クラスメイト全員が興味を抱いたのは当たり前前の事なのかもしれない。だが、屋上の監視は美紀、マドカ、本音に加えて碧も担当するので盗み聞きをする事は不可能だった。

そして屋上では、一夏が一人で静寐と対峙していた。

「何故俺が篠ノ之に対して恐怖心を抱いていると？」

「食堂で見ちゃったの。篠ノ之さんが逃げかえった後、更識君は更識さんたちに囲まれて食堂から出ていくのを」

「そうか……入学式で刀奈さんが言った事、覚えてるか？」

「昔色々あつたつて事？」

「そうだ。記憶を失った俺に対して、篠ノ之は心配してくれた周りの友人たちを蹴散らし、そして自分だけに興味を抱くように仕向けた。だが、その方法は暴力に訴えたもので、記憶を失ったばかりの俺には恐怖の対象でしか無かつたんだ。そのトラウマがまだ若干残ってるんだ」

「そう、そんな事が……この事は内緒にしておいた方が良いのよね？」

「そうしてくれると助かる」

話分かる相手で助かつたと、一夏は内心ホツとしていた。だが、静寐の顔が若干悪い事を考えているようにも見えて、一夏は緊張感を残したまま話を続けた。

「鷹月さんは何故その事を他の人に話す前に俺に？」

「だって、折角更識君と直接、一対一で話せるチャンスでしょ？ そのチャンスをふいにするのはもったいないもの」

「そんなもんか……」

「それから、黙ってあげる代わりに、君の事『一夏君』って呼んでも良いかな？」

まさかこれが静寐の企んでいた事なのかと一瞬怯んだが、別に実害は無いので一夏は認める旨を静寐に告げた。

「それから、私の事も静寐で良いわよ。私だけ名前と呼んでるのに一夏君だけ苗字だと、何だか篠ノ之さんと同列みたいだからさ」

「別に貴女に恐怖心を抱く事は無いですが、分かりました静寐さん」

「さんもイイって。普通に『静寐』で」

「分かった、静寐」

「うん、これで私と一夏君はお友達だね。困った事があつたら何でも言つてね」

笑顔でそう言いながら静寐は屋上から教室へと戻って行つた。出入り口で待つている更識関係者に一礼して、特に何も無かつた様に教室へと戻っている静寐は、一夏から見て頼もしい感じがしていた。

「俺も戻るか」

「良かったね一夏さん。お友達が増えて」

「少ないですけど、俺にだって友達はいますよ、碧さん」

苦笑いで碧のからかいに対応し、一夏は美紀とマドカと本音と一緒に教室に戻る事にした。

「兄さまのご友人という事であれば、私も後でご挨拶をしなくてははいけませんね」

「いっちーのお友達か。後でリンリンも紹介してね」

「リンリンって本音ちゃん、もう渾名つけたの？」

「本人の前でその呼び方はやめてやるんだな。小学校の頃散々からかわれた渾名だから」

中国でリンリンという渾名が付き、そのまま暫く鈴はパンダと呼ばれる事になったのだ。その事が今でも鈴のトラウマで、その名前で呼ばれると暴走してしまうのだ。

「ほえ、リンリンにもトラウマがあったんだね」

「普通大小の違いはあれど誰にもトラウマなんてあると思うんだが……本音にはなさそうだな」

一夏の零したセリフに、美紀とマドカが大きく頷いて同意した。その事が不思議で、

本音は首を傾げながら教室に戻るのだった。

悪友との昼食

約束の昼休み、一夏たちは食堂に向かい鈴と合流した。

「遅いわよ！」

「仕方ないだろ。教室を出る時織斑姉妹に捕まったんだ」

「それなら仕方ないわね……あの二人に逆らうなんて自殺志願者くらいでしょうし」

一夏が織斑姉妹の弟である事を知っている鈴は、特に追及する事無く確保していた場所へと移動した。

「あたしは先に行ってるから、アンタたちは早く買って来なさい」

「今日は簪とマドカと美紀が並ぶ日で、俺と本音が場所取りだったんだがな」

「一夏と本音は凰さんと一緒に待ってる。私たちが買ってくるから」

「久しぶりのご友人との再会なんですから、一夏さんはお喋りでもしててください」

「ここで自分が、と言えないのが一夏は悩みの種だった。バランス感覚では簪や美紀にはもちろん、本音にも劣る一夏としては、自分の分を運ぶので精一杯、とても両手にお

盆を持ってまったく零さずに運ぶのは不可能なのだ。男として情けないと感じつつも、自分に出来ない事に挑戦する意思は一夏には無かった。出来ない事は出来るようになってからすればいいが一夏の考えなのだ。

「一夏、アンタちゃんと友達いたのね」

「いや、鈴だつて同性の友達ないだろ……それに、友達というより家族だからな、みんなは」

「家族……更識所属の I S 操縦者なのね、今のメンバーが」

「あのメンバーに刀奈さん、虚さん、そして碧さんを加えたメンバーが今のところ更識所属だな」

「アタシも更識企業に専用機を造ってもらいたかったわよ」

「中国の代表候補生が、日本の I S 企業に専用機を造ってもらうって、他の国から抗議が殺到するぞで」

一応更識所属の I S は何処の国にも属さない扱いなので、個人的なコネがあれば日本以外の国の代表、もしくは候補生が専用機を造ってもらっても問題は無い。だが、今のところ日本所属の代表、及び候補生のみが更識企業が製造した専用機を与えられているのだ。それが中国の候補生の鈴に専用機を提供すれば、じゃあ我々も言い出す国が続

出する事は想像に難くない。

「友人の頼みって事で納得してくれないかしら？」

「無理だろ」

「いつちーが私たち以外と話してるのは珍しいねー」

「古い付き合いだからな」

「あー、アンタまだ苦手なのね、人と話すの」

「慣れれば問題無いんだが、初対面の人とかそれ程交流の無い人は苦手だ」

その原因を何となく知っている鈴は、それ以上話を膨らませる事はしなかった。ここには他の人の耳もあるのだ、あまり一夏の秘密をひけらかしにするのは鈴も本意ではない。話題を変えようとしたタイミングで、簪と美紀、そしてマドカが食事を購入してこの場にやって来た。

「一応自己紹介しとくわね。中国の代表候補生で一夏の古い友人の凰鈴音です。気軽に鈴って呼んでいいわよ。でも、続けるのは無しだからね」

「よろしく、リンリン」

「だから続けるのは無しだって言っただろ、アンタは！」

「ほえっ!？」

反応速度コンマ五秒のツツコミに本音以外のメンバーが拍手を送る。見慣れてる一夏ですら、久しぶりに見ると賞賛を送りたくなるような反応速度だったのだ。

「相変わらずキレのいいツツコミだな、鈴」

「これ、アンタの知り合いでしょ？ 注意しておいてよね」

「実は既に注意したんだがな」

「あつ、本人には言っちゃダメだったんだっけ……じゃあなんて呼ぼうかな」

「普通に鈴で良いんじゃない？ 私は日本代表候補生で更識所属の更識簪。よろしくね、鈴」

「同じく日本代表候補生で更識所属の四月一日美紀です。よろしくお願いしますね、鈴さん」

「更識所属の布仏本音だよ！ よろしく、リンリン！」
「だからその呼び名は止める！」

学習しない本音に、再びコンマ五秒でツツコミが入る。本音が学習しないのは今に始まった事では無いので、鈴以外の四人は挨拶を続ける事にした。

「更識所属で兄さまの妹、織斑マドカです。貴女が兄さまが認めたご友人の鈴さんです

か」

「一夏、アンタ妹いたの？」

「ああ、いたらしい」

「らしいって……あつ、記憶が無いのか」

「最近再会してな。織斑姉妹との仲も良好だ。だよな、マドカ？」

「はい、兄さま」

一夏の言葉に少し考えてから答えに至った鈴に、マドカの現状を手短かに伝える。織斑姉妹との仲が良好、というだけでだいたいの事は伝わるのだ。

「それなら問題なさそうね。ところで、さつきからこつちを見てる金髪がいるんだけど」

「金髪？ ……あ、セシリアさん」

「ごきげんようですわ、一夏さん。私もご一緒してもよろしいですか？」

セシリアの問い掛けに一夏は周りに視線を向ける。全員が肯定の旨をアイコンタクトで伝えると、一夏は小さく頷いてセシリアの同席を許可した。

「えつと、一夏の友達？」

「クラスメイトのセシリア＝オルコットさん。ちよつと対立しかけたけど、今は良好な

関係を築けそうな感じかな」

「はじめまして。イギリス代表候補生のセシリア・オールコットですわ」

「中国代表候補生の凰鈴音よ。よろしく、セシリア」

一夏が良好な関係を築けそうと判断した相手なので、鈴は特に警戒心を抱く事無くセシリアに手を差し出す。その手の意味を理解したセシリアが、鈴の手を浅く握る。

「対立しかけたって、例の代表選考戦と関係あんの？」

「その話しは止してもらえますか？ あの恐怖が……」

「何があつたのよ……」

一夏に瞬殺された後で、セシリアのここにいる美紀、本音、マドカにボロボロに打ちめされた後、織斑姉妹との楽しい面談を体験したのだ。その事を思い出して震えだすセシリアを見て、鈴は首を傾げたのだった。

そしてそんな七人を恨めしそうに遠目で見ている少女がいる事を、美紀と簪とマドカは気づいていた。一夏の護衛として、あの視線だけは一夏に近づけさせないようになると決意しているからだが、同じ決意をしたはずの本音は、残念ながら気付けなかつたのだった。

生徒会での初仕事

一応セシリアには勝った一夏だが、それだけで満足してはいけないという事で、生徒会初日の仕事は刀奈との模擬戦だった。これを仕事と言えるのか一夏は疑問だったが、同じ生徒会役員の虚が何も言わないところを見ると、今日は仕事が無いのだろうなと諦めの気持ちに至ったのだった。

「それじゃあ一夏君、軽くやってみましようか」

「刀奈さんは軽くかもしれませんが、俺は結構本気でやらないとあつという間にやられてしまいますよ」

「大丈夫だって。一夏君の攻撃とか見てみたいし」

「何時も攻撃する前に負けますからね……」

バーチャルだろうが実戦だろうが、一夏は何時も刀奈の攻撃を捌いている間にSEが無くなって負けてしまうのだ。闇鴉の特性を使ったとしても、刀奈には気配でバレるし攻撃を当てる事は叶わないのだ。

「それじゃあ開始！ さあさあ、お姉さんの胸に飛び込んで来なさい」

「お嬢様、どことなく卑猥ですよ」

「何処がよ！」

虚にツツコミを入れていた間でも、刀奈に隙は見当たらなかった。一夏はとりあえず牽制でライフルを放つ、もちろんあたる事無くその弾は消えていった。

「さすがね、一夏君。今のが当たってたら結構ダメージを喰らってたわ。的確に急所を突いてくるあたりはISの事を熟知しているとかわざるを得ないわよ」

「整備が主ですからね。何処を狙えば効率的にダメージを与えられるかとかは把握してません。でも、そこに当てるまでが大変なんですよね……」

普通の相手ならば、姿や弾丸を隠して当てる事が出来る。だが相手が更識所属だとそれが叶わないので、一夏は毎回どうすれば当てられるかを試すのだ。

「でも、最初の方と比べれば大分上手くなってるわよ。油断したら当たっちゃいそうなくらいに成長してるわよ」

「IS戦闘において、刀奈さんたちが油断するとは思えません……それに、それぞれの専用機がしっかりと気を引き締めるように言うでしょうから、油断なんてあり得ないのではないですか？」

「そうね。専用機は造り手に似てしつかりした子だから、操縦者が気を抜いていたら活を入れてくれるでしょうね」

一夏が造ったと言いつうになつたが、アリーナでの訓練は誰に見られているか分からない。なので刀奈は寸でるところで一夏の名前を出さずに言い換えたのだった。

「お嬢様、そろそろお時間です」

「生徒会権限とはいえ、アリーナの使用時間は短いわよね」

「正規の手続きをしてくださいよ……隙間にねじ込んだんですね」

「さあ、最後は本気で行くわよ」

「勘弁してくださいよ……」

今までののは本気では無いと分かっているながらも、手を抜かれていたと言われて一夏はガツクリと肩を落としたのだった。

ピットでISスーツから制服に着替えた一夏は、刀奈と虚を待つ為にアリーナの入り口で待っていた。さすがに更衣室の前で待つのはマズイだろうという配慮だったのだが、一夏は更衣室の前で待つべきだったのかも知れない。

アリーナの入り口付近で、出来る事なら会いたくない相手と鉢合わせしてしまったのだ。

「一夏、少し良いか？」

「何でしようか、篠ノ之さん」

会いたくない相手——篠ノ之箒が必要以上に近づいて来るので、一夏は少しずつ後ずさる。これ以上近づいたら会話が出来ないと判断した箒は、近づく事は諦めたが視線で逃げられないように一夏を捉えて離さなかった。

「お前、何であんな戦い方をしたんだ！ 篠ノ之流を修めている者なら——」

「俺は篠ノ之流剣術は修めていない。君の考えを俺に押し付けるのは止めてもらいた
い」

「それが幼馴染に言うセリフか！ お前は軟弱過ぎる！ 自分が弱いだの、姿を隠して
の不意打ちで勝利するなど、男のする事ではない！」

「君の頭の中の男像がどうなのかは知らないけど、不意打ちだって立派な戦術です。格
上相手に真正面から挑んで勝てるなんて自惚れは持ち合わせていません。まして、格上
相手だろうと無策で真正面から突っ込むような猪武者のような事をするつもりもあり
ませんし。それから、俺の中で貴女は幼馴染では無くただの古馴染です」

幼馴染のように親しい間柄では無く、単なる知り合いである古馴染という言葉を選ん
だのは、一夏がいい加減にしてほしいという願いからだ。だが箒はその言葉に激昂
し、近くに立てかけてあった竹箒を手に取り振りかぶった。

「一夏、貴様！」

「何してるのかしら？ 私の義弟を苛めようとするなんて、貴女死にたいのかしら？」

「お嬢様、さすがにお嬢様本人が手を汚すのは避けましょう。私に命じてくだされば私
が処分しますので」

「なっ！ 一夏、貴様！ またしても女に守られるつもりか！」

「何を勘違いしてるのか知らないけど、一夏君に守ってほしいなんて言われて無いわよ、私たちは。私たち自身の判断で一夏君を守り、そして貴女のような害を取り払っているのよ。一夏君は我々更識にとって重要な人なのだから」

「次期当主候補筆頭を守るのは私たちの役目。その次期当主候補を侮辱し、あまつさえ怪我を負わせようとするなど万死に値します」

威圧感だけで箒を圧倒する刀奈と虚、その二人を一夏が優しい口調で宥めた。

「さすがに殺すのはマズイですよ。篠ノ之さん、この事は織斑姉妹に報告しておきます。学園での暴力行為は禁止だと言われているはずなのにその行動、しっかりと反省してください」

十分な距離が開いている為、トラウマがすぐ発動する事は無かったが、一夏が小刻みに震えているのを、刀奈と虚は見逃さなかった。素早く箒の傍から移動し、落ち着くまで二人で一夏を安心させる為に抱きしめていたのだった。

箒対策

震える一夏を部屋まで送り届け、そのまま一夏と美紀の部屋に留まっている刀奈と虚は、本格的に箒対策を考えなければと首を捻っていた。政府が要人として扱っている箒を、更識の判断で消し去るのは色々と問題がある。一夏の秘密を全て政府に知らせ、箒より一夏の方が重要な人物であると知らしめれば、更識の独断で箒を肉体的にも社会的にも抹消する事は可能だ。だがそれは同時に一夏の身に降りかかる危険が増えるという事なのだ。

「一夏君の安全は確保したいわよね……」

「四六時中一緒にいられるわけではありませんからね……」

考えながらも、二人は一夏を抱きしめている。その隣では美紀が引きつった笑みを浮かべているのだが、生憎二人の視界には美紀は映っていない。一夏はと言うと、二人に抱きしめられ、そして撫でられて安心したのか小さな寝息を立てている。

「普段は大人びても、やっぱり子供っぽいわよね、一夏君は」

「十五歳はまだ子供ですよ。それに一夏さんの心には……」

「分かってる。その傷が癒える事は無いかもしれないけど、出来る限り癒してあげたい」
「それは私たちも同じですよ、刀奈お姉ちゃん」

「ん？ ああ美紀ちゃん……いたんだっけ」

「……私の部屋です」

完全に美紀の存在を失念していた刀奈の発言に、美紀はガツクリと肩を落として返した。虚は完全には失念していなかったようで、刀奈の発言に少し呆れた視線を向けたのだった。

「織斑姉妹が再三再四注意してるにも拘わらず、箒ちゃんの言動は改善されるどころか度を増しているのよね……」

「先ほどの件ですが、どうやら一夏さんの戦い方が気にいらなかったようです」

「碧さん……相変わらず音も無く現れるのね……」

「本来私はこういった密偵作業が主でしたから。一夏さんの護衛も気づかれないよう気配を殺す必要がありましたし」

箒の行動理由を探っていた碧が、音も無く部屋に現れた事に驚いた三人だったが、碧本来の仕事の思い出して納得した表情になる。

「一夏君の戦い方って、別に反則じゃないわよ」

「一夏さんの戦法はルールの範囲で認められていますし、篠ノ之さんがとやかく言う問題ではありませんが」

「多分篠ノ之さんは理屈じゃないと思います。単純に一夏さんが男の子だから——篠ノ之さんが思い描く男像に当てはまらなかったから一夏さんに稽古を付けるとか思ってたようですよ」

「なんですか、それ……一夏さんは篠ノ之さんの想像とは別の次元で生きてるんですよ！ 何で篠ノ之さんに強制されなきゃいけないんですか！」

碧の報告を聞き、真つ先に声を荒げたのは美紀だった。同い年であり同部屋、そして現護衛である美紀からすれば、箒の行動理由は（存在は？）迷惑な物でしか無かったのだ。

「美紀ちゃん、一夏君が起きちゃうわよ」

「気持ちばかりですが、少し落ち着きましょう」

「ゴメンなさい……碧さんも報告を中断させてしまいました。申し訳ありません」

「いえいえ、私も美紀ちゃんと同じ気持ちですから。さて、今回の件で織斑姉妹は篠ノ之東博士にコンタクトを取りたがっています。しかし篠ノ之東博士に連絡できるのは一

夏さんのみ、織斑姉妹でも所在は把握しておりません。したがって一夏さんをお願いし
たかったのですが……この寝顔に免じて日は改めましょう」

安心しきつた寝顔を見て、碧は表情を緩め一夏の頭を撫でる。普段頼りにしきつてい
る一夏のこの表情は、なかなかギャップがあつて彼女たちの心をくすぐっているのだ。

「簪ちゃんと本音とマドカちゃんには悪いけどね」

「せめて写真だけでも見せてあげましょう」

フラッシュに気を付けながら、虚が携帯で一夏の寝顔を撮る。そして三人に同時送信
をして再び肉眼でその寝顔を眺めていた。

「あの……そろそろご自分の部屋に戻られた方が……寮長は織斑姉妹ですし……」

そろそろ消灯時間も近いのに自分たちの部屋に戻らない三人に、美紀が力無いツツコ
ミを入れたのだった。

一夏から連絡を貰うまでも無く、束は今日の出来事を知っていた。自称宇宙規模のストリーカである束は、衛星をハッキングして二十四時間一夏の監視と言う名の追跡をしているのだから。

「箒ちゃんには消えてもらった方がいつくんの為だね。でも、無能な日本政府の人間がそれを善としないか……この小鳥遊とかいう女、ちゃんと考えてるんだね……」

口調はしつかりとしているが、束の顔をだらしなく緩み、そして口からは涎が垂れていた。一夏の寝顔に興奮している証拠だ。

「身を持つていつくんの強さを知れば、箒ちゃんも理解出来るのかな？ でも、あの単細胞がいつくんの考えを理解出来るとは思えないし……」

自分の考えが絶対だと思い込んでいる筈は、束が考えるように身を持って体験したとしても考えを改めない可能性が高い。一度死ぬような経験でもしない限り、あの考えは改めないだろうと束は考えているのだ。

「いっくんが対抗戦に参加すれば方法はあるんだけどなあ……そうだ！　ちーちゃんと なつちゃんに相談していっくんに参加してもらえば良いんだ！」

閃いたとばかりにうさ耳をピンッと伸ばし、携帯を探し始める束。彼女の携帯に登録されているのは一夏の番号のみだが、特別仕様のこの携帯は、非通知で念じた相手に繋がる優れものだったのだ。束は夜遅くのこの時間に千冬に連絡をし、一夏のことを無視した取り決めをするのだった。

気になる書類

夜遅くに非通知からの電話に、千冬は眉を顰めながらも通信に応じた。

「誰だ？」

『もすもすひねもす〜？ 愛しの束さんだよ〜』

挨拶を聞いただけで、千冬は通信を切ろうと携帯を耳元から離れた。

『待つて待つて！ 束さんはちーちゃんの悩みの種を取り除いてあげようって提案をしたいだけだよ』

「悩みの種は貴様の妹だ！ それをどうにかすると言うのか、お前は」

『今度のトーナメントにいつくんを参加させれば良いんだよ！ そうすればいつくんは更識の妹の方以外には勝てるでしょ？ そうなれば箒ちゃんもいつくんの実力を認めると思うんだよね〜』

「貴様の事だ、どうせ碌でもない事を企てているんだろ」

『そんな事無いよ〜。束さんは、みんながハッピーになる事を考えてるんだよ』

「悪いが今回はお前の計画には乗らん。白騎士の時に懲りたからな」

『残念だなく。いつくんの寝顔の写真があるんだけどなく』

東は隠し撮り（盗撮ともいう）した写真を餌に千冬に協力を煽る。だが白騎士事件の際に千冬は、東に協力した所為で一夏を失った過去があるのだ。魅力的な提案に喰いつかずに冷静に再度断りを入れた。

「貴様の隠し撮り写真などいらん。それに、一組の代表は四月一日だ。今更一夏に変更は出来ない」

『そつか……じゃあ別の方法を考えなきゃね』

「いつそのこと貴様が引き取ってくれても良いんだぞ？」

『いつくんを？』

「バカ箒をだ！ 誰が貴様なぞに一夏をくれてやるか！」

『箒ちゃんなんて貰っても研究は捗らないしなく。言っちゃ悪いけど、箒ちゃんって単細胞じゃない？ いつくん並みの頭脳かちーちゃんたち並みの操縦技術があるなら良いけどさ、箒ちゃんにそんなもの望めないじゃない？ それに、東さんのテストパイロットはまーちゃんて事が足りてるから』

「……私が言うのもなんだが、お前、実の妹に酷い言い種だな」

束の偽りの無い本音を聞いて、さすがの千冬も少し引いていた。それくらい束の言葉は辛辣だったのだ。

『だいたいいつくんにケチを付けるなんて、妹じゃ無かつたらその瞬間に蒸発させてるところだよ』

「お前が言うのと洒落に聞こえん」

『まあ、そういうわけでこつちでも箒ちゃん対策は考えてみるよ。だからちーちゃんたちも頑張つて箒ちゃんを更生してあげてね。バイビー』

言いたい事だけ言つて通信を切つた束に、千冬は頭を抑えて首を左右に振つた。

「やれやれ、あの大天災でも妹の事はそう簡単に片付かないのか……本当に殺したい気分だな」

物騒な事を呟きながら、千冬は冷蔵庫の中にあるビール缶を手に取り、そして飲んだ。校内——しかも学生寮の寮長室に何故ビールが存在するのか。それは織斑姉妹の生活場所だからで説明が付くのだった。

生徒会役員として本格的に始動した一夏は、生徒会室に溜まっている書類の山を見て呆然とした。更識の屋敷でもこれ程の量の書類を見た事が無かったからだ。

「いったい何日分溜めたらこれ程溜まるんですか？」

「これで今日一日よ。今年は専用機持ちが多く入学したし、なにより一夏君が入学したからね。各国から色々抗議やらなんやらの書類がいっぱい来るのよ」

「ですが、それは職員室で処理するものなのでは？」

「当事者が処理する方が早いと、轡木先生が仰られたそうです」

「校長が……」

抗議の殆どが更識関係——もつといえは一夏関係のものなのだ。職員室で処理する

より確かに生徒会で処理した方が早いし都合が良い。だがそれにも限度と言うものがあるだろうと一夏は思っていたのだった。

「とりあえず、こっちの山を一夏君お願いね。殆ど一夏君に関する書類だと思うから」「残りの殆どは代表であるお嬢様や、候補生の方々にその国の製品を使つてほしいとかですからね」

「嘆願書は学園にはなく個人に出すべきだと思いますが……」

文句を言いながらも、一夏と虚は書類の山を素早く崩して行く。一方の刀奈は、二人には劣るが確実に書類を片付けていく。

「やっぱり一夏君や虚ちゃんはや早いわね……私の倍くらい終わつてるじゃない」

「お嬢様だつて、普通の人から見れば十分早いですよ」

「俺と虚さんは屋敷でも書類整理とか色々やつてましたから」

実は更識家当主の一夏と、更識企業の企業代表として多くの書類にサインをしてきた虚からしてみれば、この程度の作業は造作も無い事なのだ。刀奈も元当主候補として沢山の書類に目を通し、そして判断をしてきた経験を持っている為に、普通の女子高生とは比べ物にならないくらい処理速度を有しているのだ。

「ところで、俺は本音も生徒会役員だと聞いていたんですが」

「本音なら今日は簪ちゃん和美紀ちゃんの訓練に付き添ってるわ。ペアとしての訓練だから、マドカちゃんも一緒にね」

「なるほど……確かにペア代表候補ですからね、あの二人は」

「それに、本音がいたところでこの量は無理ですよ。普通の仕事なら出来ない事も無いですが、この量を見ただけであの子は逃げ出します」

「それにも納得です」

刀奈と虚から聞かされた事情に納得がいった一夏は、素早く書類を処理していく。途中で気になった書類があったので手が止まったが、それ以外は全く無駄の無い動きで仕事を終わらせた一夏たちは、最終下校時間前に書類の山を片付け終え、生徒会室で一服してからそれぞれの部屋に戻った。

「あの書類……男性操縦者の受け入れ要請だったな……少し調べておこう」

フランスから来ていた書類が気になっていた一夏は、尊直通のアドレスに暗号メールを送り調べてもらう事にしたのだ。もし本当に男性操縦者が現れたなら、自分に向けられる注目の何割かはそちらに移るだろうし、もし虚偽の申請だったら、それなりの

対処をする為に、一夏はI S 学園生徒会副会長として、更識家当主楯無として動いたのだ。

クラス対抗戦、前日

一夏から連絡を貰った尊は、一夏から聞かされた内容を聞き間違いではないかと自分の耳を疑っていた。

「すまない一夏君、もう一度言ってもらえるか」

『疑いたくなる気持ちは俺も分かりますが、これで三度目ですよ「楯無さん」』

「すまん……だが、何度も聞き返しても受け容れがたいんだよ」

一夏から聞かされた「第二の存在」について、尊は絶対にはあり得ないと確信を持っていた。ISのコアに好かれ、また認められる男など、一夏以外に存在するはずが無いと。『これが虚偽の申請だった場合、このデュノア社にはそれ相応の制裁を加えられます。わざわざデータを貸して開発競争に残らせてあげたのに、この仕打ちは酷いですからね』

「分かった。数日くれれば調べられると思うぞ。しかし、この『シャルル・デュノア』という少年——とあえて言うが、随分と中性的な顔立ちをしているな。デュノアという姓から、デュノア社長の関係者だと言う事は分かるが……」

『こちらで把握している限り、「シャルル」というご子息はいなかったと思うのですが』
「……正妻の子、では無いのかもしれないな」

尊の言葉に、一夏は息を呑んだ。いくら大人びていようと十五歳の少年、そこまで黒い事を考えていなかったのだろう。

「とにかく、小鳥遊がIS学園にいる以上一日では調べられない。何か分かれば連絡をしよう」

『お願いします。あつ、一応念の為に、報告は美紀の携帯にお願いします』

「それは構わないが……何故娘の携帯なんだい？ 別に君のでも問題は無いだろ」

『良くも悪くも注目されてますから、俺は。電話を盗み聞きされる可能性が高いので、美紀なら尊さんからの電話でも、父親からですし』

「そういうものか……分かった。連絡は美紀の携帯にしよう」

『では、そのように』

「本当」の楯無からの電話を切り、「表向き」の楯無である尊は小さく息を吐いた。

『『第二の男性IS操縦者』の存在ね……一夏君は心配性過ぎる。男女の差など、骨格を見れば分かりそうなものだが……おそろく編入前に調べ上げておきたいのだろう』

自分に害がありそうなものを徹底的に調べ上げるのは確かに必要な事だが、今の一夏は過剰に気にし過ぎないように尊には感じられていた。

「篠ノ之箒が側にいることで、一夏君は余裕を持ってない状況なんだろうな」

過去の出来事を知っている尊は、今の一夏の状況を思い出し苦笑いを浮かべた。更識から日本政府に再三要望を出しているのだが、こればかりは更識の力を持つてしても実行不可能なのだ。

「篠ノ之箒をＩＳ学園から追い出す……か」

暴力に訴える事が多い箒にＩＳを与えれば、必ずと言っていいほどの確立で怪我人が出ると更識は政府に訴えている。だが実際に起こっても無い事を理由に追い出す事は出来ないと突っぱねられているのだった。

「もう少し一夏君の身の回りの安全が確保されない事には、一夏君の高校生活は波乱に満ちるだろうな」

先代楯無から引き継いだ、一夏を息子のように思う気持ちを抱きながら、尊は調査班

にデユノア社について調べ上げるよう命じたのだった。

クラス対抗トーナメント戦を翌日に控えてはいるが、一夏はクラスメイト達と雑談を交わしていた。

「更識君的には、どっちに勝ってもらいたいの？」

「どっちかって？」

「四月一日さんか更識さんのどっちかって事」

「鈴は選択肢に無いんだな」

「だって凰さんはお友達だけど、四月一日さんと更識さんは家族でしょ？ 家族同士が戦うのを見るって複雑じゃないの？」

「散々模擬戦してるところを見てるからな。今更ではある」

専用機の性能に違いは無いので、この二人が戦う場合は純粹に力の勝負になる。そうなるも簪に大分有利のだが、美紀もそう易々と負けるつもりは無いだろうと一夏は考えていた。

「本音はどうだ？ どつちに勝ってもらいたい？」

「デザートの為に美紀ちゃんに勝ってほしいな」

「自分で作ればいいだろ。本音は料理得意なんだから」

「いっちーと比べたらまだまだだよ」

「えっ、布仏さんって料理上手なの？」

クラスメイトその1——相川清香が驚いた表情で本音の顔を覗きこむ。それくらい本音が料理上手だと言う事が信じられないのだろう。

「おねくちゃんやかんちゃんたちよりは得意だよ。でも、いっちーには敵わないかな」

「へー、一夏君って料理上手なんだ」

「細かい作業が得意なんだよ。だいたい静寂、驚いた感じも無い声で聞いて来るなよな」

人垣の向こうから話しかけてきた鷹月静寐に対し、一夏は呆れた顔でそう答えた。

「更識君と鷹月さんって、前からの知り合いなの？」

「いや、みんなと一緒にでIS学園に入ってからからの知り合いだが」

「それがどうかしたの？」

「いや……随分と仲がよさそうだから」

二人で顔を見合わせ、同時に首を傾げる一夏と静寐。その息ピッタリな感じにクラスメイト達が羨ましそうに静寐に視線を向けた。

「どうやったら更識君とそんなに仲良くできるの？」

「そのコツ、教えてください」

「「お願いします！」」

「コツって言われても……普通にお喋りして、普通に仲良くなっただけよね？」

「そうだな」

一夏の事情を伏せているので、詳しい事は話せない。だが一夏と静寐はそんな事情が無くともいわずれ仲良くなっただろうとお互いが思えるほど自然な関係なのだ。

「そっか……コツコツと頑張るしかないのかあ」

「まだ知り合ったばかりだもんね。これからよろしくね、更識君」

「「よろしくお願ひします！」」

「あ、ああ……よろしく」

勢いに押され気味の一夏を、静寂は笑顔で眺めていたのだった。

新たな候補生

クラス対抗戦当日、クラス代表の簪と美紀、そして鈴は同じ控室で対戦相手の発表を待っていた。

「そう言えば、五組の代表も候補生なんだっけ？」

「確かそんな事を一夏さんが言ってたような……」

「イタリア代表候補生のアメリカさんとか言ってたよね」

生徒会役員である一夏は、各クラスの代表のプロフィールを把握しており、その流れで二人はその事を聞いていたのだ。

「専用機は持ってないって言ってたけど、イタリアって開発が遅れてるんじゃないかなかったっけ？」

「フランスより遅いつて聞いた事があるわね。何でも主だった企業が全て開発を諦めて、そのうちコアもはく奪されるかもしれないって」

「鈴って意外と世界情勢に精通してるんだね」

「意外とは余計よ！ まあ、一夏から聞いたんだけどね」

鈴の暴露に、簪と美紀は表情を崩した。結局情報元は一夏であり、一夏が世界情勢に詳しいのは、二人の中では当たり前なのだ。何せ世界に轟く更識企業、そのトップである更識楯無その人なのだから。

「てことは、簪と美紀に勝てば、あたしが優勝出来るつて事ね」

「鈴には負けないと思うな」

「一夏さんのお陰で、鈴さん対策はバツチリですからね」

「ズルイわよ、美紀！ 何で一夏がアンタに情報を与えてるのよ！ 不公平でしょ！」

「一夏さんはクラスメイトですから」

「あつ……それでなの」

種明かしをされると、意外とあっさり鈴はその事を受け容れた。

「あの……日本代表候補生の更識簪さん、四月一日美紀さんと、中国代表候補生の凰鈴音さんですよね」

「そうですが、貴女は？」

「はじめまして。イタリア代表候補生のアメリカ＝カルラと申します」

「貴女が……日本代表候補生の更識簪です」

「同じく、四月一日美紀です」

「中国の候補生、凰鈴音よ。気軽に鈴って呼んで頂戴」

候補生同士の挨拶がすんだところで、簪は何故アメリカが話しかけてきたのかが気になっていたので訊ねる事にした。

「えつと、アメリカさん……」

「エイミイと呼んでください。そっちの方が呼ばれ慣れているので」

「じゃあエイミイさん、何か用ですか？」

「えつと……更識さんたちは更識所属なんですよね？」

「所属というか、実家です」

何を聞きたいのかが分からないからには対処しようがないので、簪は当たり障りの無い対応でエイミイの真意を探る事にした。

「実は、イタリアの候補生を辞退して自由国籍で他の国の代表を目指そうと思ってるのですが、その場合は大企業の後押しが重要なんです。ですが、私にはそのようなものはありません。ですから、更識さんたちにご助力お願い出来ないかと思ひまして」

「自由国籍ねえ……それなら一夏に頼んでみたら？ 一夏ならそういった話、詳しくそう

だし」

「一夏？ 更識一夏君の事ですか？」

「鈴、無責任な事を……でも、確かに一夏に相談した方がよさそうだね、そういう事は。トーナメントが終わったら一夏に相談出来るように取り計らってあげる事くらいしか出来ないけど、それでも大丈夫ですか？」

「はい、お願いします！ 良かった、話しかけてみて」

「エイミイさんって、そっちが地なんですか？」

「えっ？ ……あつ！ 折角猫被ってたのに」

真面目な雰囲気の下に隠れていた本来のエイミイを見抜き、美紀が指摘するとエイミイの雰囲気が一変した。

「もう真面目な話し方は良いよね。改めまして、私アメリカンカルラ！ エイミイって呼んでね」

「そっちの方が親近感湧くわね！ よろしく、エイミイ！」

「うん、よろしくね鈴！」

明るい物同士が仲良くなったタイミングで、一回戦の対戦相手が発表された。美紀は

鈴と、そして簪はエイミイとの一戦だった。

観戦の為にマドカと本音に挟まれて一般席に座っていた一夏に、背後から声が掛けられた。

「一夏君、ここ良いかな？」

「静寂なら問題ないぞ。マドカも本音もそう殺気立つな」

簪ではないかと一瞬身構えたマドカと本音を宥め、一夏は振り返り静寂に話しかける。

「もつと見やすい場所で見れば良いじゃないか。静寐は俺と違って人ごみが平気なんだろう?。」

「一夏君の側で見学すれば、聞きたい事が出来たらすぐに聞けるでしょ?。」
「俺は教師じゃないんだが……まあ、教えられる事なら教えるが」

異例の速さで一夏と仲良くなった静寐に、本音とマドカは驚きを隠せずにいる。普通なら数週間から数ヶ月くらいはかかるであろうと思われる友人関係の構築を、静寐はたった一日で成し遂げ、そして普通に話しかけられるレベルまで警戒心を解かせたのだ。

「初めは少し離れた場所だったけど、やっぱり話すならこれくらいの距離よね」

「静寐なら大丈夫だが、他の人はまだ身構えてしまうからな」

「それって、私が特別だって思ってもいいのかしら?。」

「ある意味特別だろ。高校に入って初めての友達だからな」

「初めて? 凰さんは別なのかしら?。」

「鈴は幼馴染だからな。いや、悪友と言うべきか」

元々友人関係である鈴、更識関係者を除けば、確かに静寐は一夏の高校での初めての

友達と言う事になる。そういった意味でも、一夏と静寂の関係は特別と言えるだろう。「専用機持ちが三人も参加する大会かあ……出ろって言われても辞退するわね、私なら」
「他のクラスの代表には悪い気もするけどな」

そんな話をしながら、一夏は対戦表に目をやり、そして身内が戦う相手に驚いていた。「美紀が鈴とで、簪が五組のアメリカさんか……」

「強いのか？」

「一応候補生だからな、アメリカさんも……諸事情で専用機は無いみたいだけど」

イタリアの事情を頭の中で思い描き、一夏は会った事の無いアメリカに同情し、そして何事も起こらなければいいがとこの大会に対してそんな祈りを抱いていたのだった。

乱入の I S

クラス対抗トーナメントは、前評判通りに美紀と簪が勝ち進んでいく。初戦に候補生が相手でも多少苦労していたが、次の試合では二人とも完封勝利を収めるなど、互いに負けるつもりなど無いのではないかというくらいの気迫だった。

「やっぱ更識所属は別格よね」

「少しでもS Eを減らせたのが救いだよね」

初戦敗退ながらも二人のS Eを多少なりとも削った鈴とエイミイは、選手控室で決勝が始まるのを待っていた。

「簪と美紀、どっちが強いのかな？」

「一夏が言うには、簪の方が強いらしいわよ。美紀も五回に一回勝てれば良い方だって言ってたし」

「そうなんだ……」

「始まるみたいね」

エイミーと話していた鈴だったが、開始の合図が近づくにつれて身体に力が籠っていた。自分が戦うわけではないのに身構えてしまうのは、美紀の強さを身をもって知った鈴だからだろう。簪と戦ったエイミーの身体にも力が籠められているのを見れば、やはりそうなのだろう。

「うわあ、えげつない攻撃ね……」

「簪も負けてない……これで候補生なんだから、どれだけ日本のレベルが高いかって事よね」

「初代代表が小鳥遊碧と織斑姉妹、そして第二回大会の代表が生徒会長と織斑姉妹だもんね。別格よ、日本は」

モニター越しとはいえ二人の強さが伝わってくるような戦闘を目の当たりにして、鈴とエイミーは自分たちの努力量をもっと増やさなければと考えていた。

「やっぱり簪が優勢なのね」

「でも、美紀の方も頑張ってる」

「簪の S E が残り三割で、美紀が二割か……」

一夏が改良したモニターには、戦闘中の I S の S E 残量から使用した武装のデータな

どを表示できるようになっている。試験的にそのモニターを導入しているIS学園では、観戦している人がより正確に戦況を把握できるようになっているのだ。

「これだけ見ると、やっぱり簪の方が強いんだなって分かるわ」

「実際は結構紙一重っぽいけどね」

残量だけ見れば簪有利だが、実際はそんなに簡単に説明できる戦闘では無い事が二人には分かっている。それが分かるだけの力量がこの二人にはあるからなのだが、入学したての一年生が見ているので、客席からは美紀に対する応援の声が大きくなっている。

「応援して何とかなる状況だと思ってるのかしら」

「それだけ興奮してるって事じゃないかな？ その気持ちは分かるけどね」

自分たちを圧倒した二人が、互いにギリギリの勝負をしているのだ。エイミイや鈴が興奮しないわけが無い。

「デザート食べ放題なんて関係なく、もう一回戦いたいわね」

「私はその前に更識君を紹介してもらわないと」

「自由国籍の手続きだっけ？ いっそのこと日本に所属して更識企業に専用機を造って

もらえばいい」

「あの三人に割って入る自信はないなあ……」

そんな呑気な事を話していた二人だったが、モニターに不審な影が映り込んだのを見てそのような空気では無くなってしまったのだった。

謎の I S が乱入したのを見た一夏の行動は早かった。

「本音、マドカ、客席にいる全員を避難させる。危険が及ばないように I S の使用を生徒会権限で許可する」

「分かりました！」

「了解だよ！」

「俺はモニター室に行つて織斑姉妹の状況確認をしに行く。何か分ければプライベート・チャネルで知らせる」

迅速に行動する一夏たちを見て、他の生徒たちも冷静さを取り戻しかけていた。だがアリーナの出入り口が全て塞がれてしまつていたので、再び混乱の渦に巻き込まれてしまったのだった。

モニター室に掛け込んだ一夏は、慌てた雰囲気でもコンソールを操作している真耶に話しかけた。

「状況を教えてください」

「乱入機にハッキングされているのか、こちらからのパネル操作がシャッターに影響しません。このままではあのISを倒さない限りアリーナからの避難は不可能です」

「相手の強さは分かりますか？」

「代表候補生並み、ですかね……万全の更識さんと四月一日さんなら勝てるでしょうけども、互いにSEを削り合つていた途中ですので……」

「二人へ援軍は送れますか？」

「ピットも閉められてしまつているので、援軍は不可能です」

そこまで聞いた一夏は、真耶の横に割って入りコンソールを操作し、ピットのロックだけを解除した。

「碧さん、アリーナの出入り口のロック解除をお願いします。俺は二人がエネルギー補給するだけの時間を稼ぎますので」

「分かりました。マドカさんと本音ちゃんには私が報告しておきます」
「お願いします」

素早く碧に指示を飛ばした一夏に、織斑姉妹も真耶も驚きの表情で固まってしまった。生徒と教師であるはずなのに、碧が何故か部下に見えてしまったからだろう。

そんな事に気を割いている余裕が無い一夏は、闇鴉を展開してピットからアリーナ内に飛び立った。

「簪、美紀！ エネルギーの補給をしてくれ。その間は俺がもたせる」

「一夏、平気なの？」

「本音ちゃんとマドカちゃんは？」

「あの二人には生徒の避難を任せた。時間だけ稼げれば二人なら勝てるだろ？ だからその間は俺が担当するから」

「分かった。一夏、無理しないでね」

「大丈夫……？ 何であるＩＳ、こっちが会話している間は大人しいんだ？」

攻撃する隙などいくらでもあったただろうと考えた一夏だったが、侵入してきたＩＳはこちらをジッと見ているだけだった。

「闇鴉、あのＩＳから人間の反応は？」

『ありません。無人機だと思われませう』

「無人機か……あの人、何がしたかったんだ？」

犯人に心当たりがある一夏は、とりあえず無人機を停止させようとして――

「一夏！ 男なら、その程度倒せずになんとする！」

「あのバカ……」

――スピーカーを使って檄を飛ばしてきた古馴染に頭を悩ませたのだった。

姉妹機的能力

本音とマド力は焦っていた。しつかりと監視していたはずなのに、何時の間にか篠ノ之箒がマイクを使い大声で一夏に声をかけていたからだ。

「マドマド、何で篠ノ之さんがあそこには!?」

「分かりません。確かに気配は探っていたんですが……小鳥遊先生からオープン・チャネルで兄さまが救援に向かわれたと聞かされて、ホッと一安心してしまった隙を突かれたのかもしれない」

周りの迷惑を考えない事を除けば、篠ノ之箒という女子はかなり腕が立つ部類の人種だ。相手の隙を突く事など造作もないだろう。

「とりあえずいつちに頼まれた避難を完了させて、それから篠ノ之さんの事は考えよう」

「そうですね。ロックも解除され、避難も順調に進んでいます。焦って不安を煽る事は避けましょう」

意外と冷静な本音に救われた形のマドカだったが、生徒の避難は順調に行っているの
で、それも相まって冷静さを取り戻したのだった。

「二人とも、篠ノ之さんは何がしたかったのかしら」

「シズシズ、そんなの私にも分からないよ」

「し、シズシズ？ それって私の事かしら」

「うん、そうだよ！ 静寂だからシズシズ」

こんなタイミングでも不思議な渾名を真顔で言う本音に、話しかけてきた静寂の顔が
引きつる。それでも時間を無駄にしない辺り、彼女も普通の女子高生では無いのだろ
う。

「あの大声の所為で、侵入してきたISが篠ノ之さんの存在に気付いたようよ。一夏君
が彼女を助ける義理は無いでしょうけども、優しい一夏君が目の前で殺されそうになっ
てる人を見捨てるとは思えないんだけど……二人はどう思う？」

まだ一夏との付き合いが短い静寂でもそう思うのだから、付き合いの長い更識所属の
人間がそう思わないわけが無い。本音とマドカは一夏に頼まれた事を放り出してでも
一夏の救援に向かいたかったのだが、そんな事をすれば余計な混乱を招きかねないと理

解した本音が、逸る気持ちを抑えて誘導に専念した。

「本音、行かないんですか!？」

「いつちに頼まれた事をやらないと。終わらせてからいかないといっちに怒られるし、みんなに余計な不安を与えちゃうから」

「……分かりました。私も兄さまに任された事を遂行します。静寐さんも急いで避難してください」

自分より下に思っていた本音の冷静な判断に、マドカは素直に従う事にした。意外な面を見た気分だったマドカだったが、それは同時に本音を侮っていた自分を恥じるいきっかけになったのだった。

箒の櫛をピットで聞いていた簪と美紀は、舌打ちしたくなるくらい箒の事が邪魔に思えていた。あの大声の所為で、侵入してきたI Sのターゲットが一夏から箒に変更になったことは、モニター越しでも分かるくらいの経験を二人は持っているから。

「美紀、後どのくらいで終わる？」

「少なくとも後二、三分はかかります。今の状態でも動けますが、完全に回復させてから来るように一夏さんに言われてますし……」

「もどかしい。この二、三分の所為で一夏がいなくなるかもしれないと思うと、一夏の言い付けでも破りたくなる……でも、破ったら怒られるし……」

逸る気持ちを抑えながらも、もどかしさにイライラを募らせる簪、その横では美紀が心配そうにモニターを眺めている。

「一夏さん、篠ノ之さんに攻撃がいかないように動いてますね。やっぱり優しい人です」「うん……あんな人、見捨てても誰も怒らないのに……」

「あの辺りに攻撃されたら、避難中の他の生徒にも被害が出るから仕方なく、でしょうけどもね」

いくら一夏が攻撃を捌く事を得意にしても、何時までも捌き切れるわけではない。闇鴉のSEだって無尽蔵にあるわけではないので、簪と美紀はモニターと自分たちの専用機のSEを交互に見てはため息を吐きたくなっていた。

「後一分……一夏、頑張つて」

「本当に余計な事しかしらないんですね、篠ノ之さんって……」

「今更じゃない？ 小学校の頃の話をお碧さんから聞いたじゃない？ あれも相当だよ」「ですね」

記憶を失った一夏に対して簪がとつた数々の迷惑行動を思い出し、簪と美紀は改めて篠ノ之簪に対して怒りを募らせた。

「終わった、行くよ、美紀！」

「分かりました！ 金九尾、もう少しお願いしますね」

ピットから飛び出した二人が見たものは、レーザー光線にやられる一夏の姿だった。

「一夏（さん）っ！」

篠ノ之簪を庇っていたのが原因で、一夏はあの攻撃を避ける事が出来なかった。普段

の一夏ならあんな分かりきった攻撃を喰らうはずが無いのだが、何時まで経ってもその場から動かない篠ノ之箒の所為で、一夏はやられてしまった。

「美紀、速攻で終わらせるよ」

「もちろんです」

『わたしたちも力を貸します』

『一夏お兄ちゃんに傷を負わせた罪、存分に味わってもらわないと！』

二人と共に怒りをあらわにした専用機二機、光白孤と金九尾は未だかつてないエネルギーを放ち乱入機へと突っ込んでいく。

「私は右側を」

「では私は左側を」

怒りに身を任せていても簪と美紀は冷静さを失っていないかった。しっかりと声を掛けあい、そして同時に乱入機へ攻撃を喰らわせる。

『行きます！』

『これが、お兄ちゃんがボクたちに積んだ隠し技だ！』

二機が同時に光だし、そして乱入機に向けて高エネルギー攻撃を放つ。操縦者二人が見たそれは、この姉妹機が出せる全力の攻撃、単一仕様能力に迫る程の威力だった。

「これで、終わり？」

「ISの反応ありません。倒したと思われまます」

モニターでISの反応を調べていた美紀からそう聞かされ、簪は意識を少しだけ爆心地に向けておいて、残りの全てを一夏に向けた。

「一夏っ！」

「一夏さん！」

二人同時に駆け寄った先では、闇鴉が解除され倒れ込む一夏がそこにいたのだった

……

大怪我

今までで一番早いのではないかと思われる速度で一夏に駆け寄った簪と美紀は、一夏の姿を確認して驚愕する。

「頭から血が出てる……」

「下手に動かさない方が良いよね？ とりあえず先生たちに報告しなきゃ……」

オーブン・チャネルを使えば良いのだが、今の二人にそのような冷静な判断は期待できない。目の前に意識を失い、頭から血を流している一夏がいるのだ。この状況で冷静な判断が出来る人間など、更識所属には存在しないだろう。

『更識、四月一日、状況を報告しろ』

プライベート・チャネルから織斑千冬の声が聞こえたのをきっかけに、簪と美紀は冷静さを取り戻した。

「侵入してきたISは停止させました」

「篠ノ之さんを庇った一夏さんは……」

『一夏がどうした?』

言い淀んだ美紀に、千冬が促すように声をかける。だがその声はやけに硬い感じを与えるものだった。

「闇鴉が解除され、あの高さから転落。意識を失い頭から血を流しています。至急担架をお願います」

『分かった! 千夏、小鳥遊、すぐに医療班をアリーナに向かわせろ! 私は件の戦犯である姉妹を問い詰める』

千冬の激を聞いた簪と美紀は、これ以上自分たちに来る事は無いと判断して、一夏の周りで見守る事にした。

「簪ちゃん……一夏さん、大丈夫だよね?」

「分からない……あのビームを喰らったんだとしたら、相当なダメージを一夏が負っていてもおかしくない」

「そんな……」

闇鴉を纏った状態でならISの絶対防御がある程度操縦者へのダメージ貫通を抑え

てくれる。それが完全ではない事は簪も美紀も知っているが、解除さえされなければ操縦者が重傷を負う可能性は少ないのだ。

だが今の一夏は闇鴉を纏っていない。つまりS Eがゼロになり強制解除されたのか、もしくはは一夏が自分の意思で解除したかのどちらかという事だ。だが後者である可能性は限りなくゼロに等しい。つまりあの攻撃は残っていたS Eをゼロにしてもあまりあるダメージ量だったという事になる。

『かんちゃん、美紀ちゃん、避難誘導終わったよ』

『兄さまは！ 兄さまはご無事ですか!』

再びプライベート・チャンネルが開き、今度は本音と美紀の声が聞こえてきた。

「無事……とは言えないかも。もうすぐ救護班が一夏を運び出してくれるから」

「本音ちゃん、マドカちゃん、篠ノ之さんは何故二人の監視をかくぐれたの?」

避難と同時に二人に任された最重要任務である、篠ノ之箒の監視。二人の監視をかくぐれる程の気配遮断が箒にあるとは美紀も思えなかったのだ。

『いつちーがアリーナに入るって報告を受けて、一安心した隙を突かれたとしか……』

『気を抜いたつもりは無かったです、あの篠ノ之の力量を正確に測れなかったよう

です……』

「そっか……とりあえず篠ノ之さんは織斑千冬さんが捕えに行つたから……あつ、救護班が来たから一旦切るね」

プライベート・チャンネルを切り、簪と美紀は運ばれていく一夏の側に付き添う。だが途中で千夏と碧に止められ、侵入してきたISについての聴取をする事になつてしまつたのだつた。

保健室に運び込まれた一夏の許に、刀奈、虚、簪、本音、美紀、碧が駆けつけた時に

は、鈴、エイミイ、セシリア、静寐が一夏の側にいた。

「遅かったわね」

「織斑先生に色々聞かれてたから……それで、一夏の容体は？」

焦る気持ちを抑えながら簪が鈴に問う。刀奈と虚は顔を蒼白にしており、その瞬間を見ていた簪と美紀が一番冷静という、少し訳が分からない感じに陥っている。

「とりあえず一命は取り留めたらしいわよ。でも、油断は出来ないって」

「本当なら集中治療室にでも入ってる程の怪我らしいけど……」

「なに？」

言い淀んだ静寐に、刀奈が問いかける。その声は震えているが、それでも一夏の事を知りたいという意思が込められた言葉だった。

「専用機的能力——かは分かりませんが、一夏君の回復力は普通の人より高いようです……頭の傷以外はほぼ治ってるそうです」

静寐の言葉に目を見開いた更識所属の六人は、確認すべく一夏に近づき、そして驚愕した。

「嘘っ……さつき見た時は全身傷だらけだったのに……」

「本当に治ってます……」

「ですけど、頭の傷だけは治らなかつたようすわね。ここが一番痛いでしょうに」

心配するように呟いたセシリアに、他の人間が驚いた視線を向ける。

「な、なんですか？」

「いや……初対面の時のセツシーからは考えられない言葉が出てきたから……」

「わ、私だつて反省してますし、一夏さんの事を心配しますわ！」

「あんまり大声を出さない方が良いわよ、オルコットさん。一夏さんが目を覚ましてしまふかもしれないから」

「……申し訳ありません、小鳥遊先生」

この中で唯一の大人である碧がセシリアを窘め、そして全員の声量を落とさせた。

「とりあえず私たちがここにいても出来る事はありません。そろそろ部屋に戻らないと寮長に怒られますよ」

「……そうですね。明日の朝、また一夏君のお見舞いに来ましょう」

少しずつ冷静さを取り戻した刀奈がそう言うと、残りのメンバーも名残惜しそうながらも保健室から部屋へと戻って行く。残された刀奈と碧は、もう一度一夏の寝顔を見てから保健室を後にした。

「碧さん……」

「何でしょうか？」

「私、あの侵入してきたISと篠ノ之さんを絶対に許さない」

「ええ、私もです」

本来どのような目的で送り込まれたのか分からないが、あのISが原因で一夏は大きな荷を負ったのだ。理由がどうあれあのISの所有者に、刀奈と碧は怒りを覚えたのだ。た。

篠ノ之姉妹への制裁

部屋に戻って来たマドカは、敬愛する兄・一夏が大怪我を負った原因である篠ノ之箒の存在に気付き、無意識のうちに舌打ちをしていた。

「なんだ、その態度は」

「お前が余計な事をした所為で兄さまはあのような大怪我を負われたのだぞ！ 少しは

悪いとは思わないのか！」

「私は何もしていない！ 一夏に檄を飛ばしたただけだ！」

「それが余計な事だつて言ってるんだ！ お前になんか檄を飛ばされなくても兄さまは勝っていた！ それをお前が余計な事をしてあのISの標的になるものだから、兄さまは仕方なくお前を守ろうとしたんだ！」

実際、一夏が守ろうとしたのは箒では無く、箒が攻撃された事により瓦解する建物によつて二次災害が起こるのを防ぐためだったのだが、マドカにはそこまで理解が及ばなかつたのだ。

「男が女を守るのは当然だ！」

「お前、本当にバカだな。兄さまに構ってもらえないからってあんな行動を……普通ならお前死んでたんだぞ、分かってるの？」

箒がマドカに掴みかかろうとしたタイミングで、部屋の扉がノックされた。乱暴なノックでは無かったので織斑姉妹では無いだろうと思ったマドカが、箒とのやり取りを中断して扉を開けた。

「はい」

「お引越しです」

「は？」

扉の先に立っていたのは山田真耶教諭で、開口一番マドカの理解の及ばない事を言った。

「今回の件で、篠ノ之さんは寮長室のすぐ側の部屋で一人で生活する事に決まりました」
「……それじゃあ、私のルームメイトは？」

「はい。調整の結果、鷹月静寐さんに決定しました」

「こんばんは、織斑さん。これからよろしくね」

真耶の背後から姿を現した静寐は、何処か楽しそうな顔をしていた。

「待つてください！ 何故私が織斑姉妹の側で生活しなければならぬのですか！」

「分からないんですか？ 本当なら退学でもおかしくない事を仕出かしたんです。反省の機会を与えられただけでも感謝してくださいね」

「私は何もしてないではありませんか！」

「篠ノ之さん、貴女がした事は殺人幫助でもおかしくない行動です。更識君の邪魔をして、あまつさえ生命の危機に追いやったんですから」

「ですがっ！」

「これは政府の決定です。逆らえば貴女は『篠ノ之箒』として生活出来なくなります。どうします？」

貼り付けたような笑顔でそう言う真耶に、マドカは恐怖した。ただのぼんやりした童顔だと侮っていたが、真耶も間違いなく自分より上だと認識した瞬間だった。

「では、篠ノ之さんの荷物は全て移動させて、鷹月さんの荷物を運び込みましょう」

反論が無かったのを肯定と受け取り、真耶は箒の荷物を纏め始める。マドカはそんな真耶をただぼんやりと眺めていたのだった。

大天災・篠ノ之束は、ハッキングした衛星から見ていた一連の事態に頭を悩ませていた。

「何で?!」 本当に箒ちゃんは束さんの邪魔しかしないんだから!　いつくんが……いつくんが死んじゃったらどうしよう……束さんがちーちゃんとなつちちゃんたちに殺されちゃうよ……」

一応一命は取り留めた、という事は知っているが、それでも束のパニックは治まらなかった。自分が送り付けた無人機の所為で、愛しい一夏が死の淵に追いやってしまったのだから致し方ないだろう。

「これでいっくんが死んじゃったら、東さん殺人者なのかな？ 殺意は無かったから傷害致死？ てか、悪いのは箒ちゃんだよね!？」

絶賛混乱中の東の携帯に着信を告げるメロディーが流れだす。この携帯に掛けて来られる人間は一人だけ、だがその一人は現在意識不明の重体のはずなのだ。

「も、もしもし?」

『東、貴様良くも一夏を……!』

「ま、待ってちーちゃん！ 東さんはただいっくんの凄さを箒ちゃんに見せつけて大人しくさせるつもりだったの！ だからハツキングもいっくんが簡単に解除できる程度でしかしてないし、あの子だって誰かを傷つける為に送ったんじゃないよ!」

『だが現に一夏は貴様のくだらない計画の所為で大怪我を負ってるんだぞ』

「それは……箒ちゃんがあそこまで考え無しだったとは東さんも思ってたんだよ……」

唯一の計算外だった実の妹の行動について、東は言い訳しようが無かった。あの無人機は会話している人間には攻撃しないが、大声を上げる人間には容赦なく攻撃するようにプログラムされていたのだ。無論、悲鳴はそれに含まれないようにしてあったが、ま

さかあのような拡声器を使って一夏に話しかけるなど想定外だったのだ。

『とにかく、貴様の妹は当分の間自由に行動する事は出来ん。これは政府の決定であり、我々の決定でもある』

「殺さないんだ？」

『篠ノ之東の妹』というブランド力を甘く見るな、この元凶』

「本当にゴメンなさい。いっくんが目を覚ましたら直接謝りに行くから」

『貴様を一夏に会わせるのは認めたくは無いが、謝罪する気持があるなら仕方ない……ただし、その時は数発殴らせてもらおうからな』

「ちーちゃんだけが？」

『無論、千夏や更識関係者全員だ』

「とほほ……まあ仕方ない事をしちやっつたし、今回は甘んじて受け入れます」

鉄拳制裁を甘んじて受け入れるなど束らしくないと千冬は思ったが、今回はそれ程の事を仕出かしたのだと思いなおし通信を切った。

「いっくん……君はこんなところで死なないよね？ あの子の為にも、いっくんは死んじゃダメなんだからね」

無人機のコアの事を思い、束はハッキング映像を一夏が安静にしている保健室へと切り替える。外傷は殆ど治っているが未だに目を覚まさない一夏に、束はモニター越しに話しかけるのだった。

一歩間違えば…

一夏のいない部屋で、美紀は一人読書をしていた。普段なら本など読まないが、一人で過ごす無音の部屋に耐えきれずに一夏が読んでいた本を借りて読んでいるのだ。

『珍しいね、美紀が読書なんて』

「一人で過ごすには寂しいからね。消灯時間まで読もうと思つてさ」

『一夏お兄ちゃん、大丈夫だよね?』

金九尾が心配そうに美紀に訊ねると、美紀は少し引きつった感じがある笑みを浮かべる。

「後は意識さえ戻れば大丈夫だと思う。でも、その意識が何時戻るかが分からない……」
『……あのね、お兄ちゃんが攻撃された時、何かをしようとしてた感じがしたんだけど、美紀は知らない?』

「何かつて……あの状況なら、レーザーを無効化しようとしてたんじゃ……でも、そんな事出来るのかな?」

闇鴉のSEをたつた一撃でゼロにするような攻撃を無効化出来る手段を、美紀は知らない。

「ところで、最後の攻撃……金九尾と光白孤が何か能力を発揮していたような」

『あれは普通なら操縦者が絶体絶命の時に発動するはずだけどね。一夏お兄ちゃんが危ない、って思ったら発動してた』

「あれ、なに？」

『ボクと光白孤の単一仕様能力「殺生石」』

「殺生石？」

『近づいてきた敵を全て倒す一夏お兄ちゃんが美紀と簪を守る為に編み出した技。どれだけ強大な敵だろうが一撃で倒す事が出来る起死回生の一手。だけど普通ならそこまですぐ追いつまれる事は無いから、発動する事もないかなあ、って思ってたんだけどね』

自分のSEがゼロで、なおかつ敵が攻撃を止めない場合を想定して一夏が編み出した技である殺生石は、競技でISを使っている限り発動しないはずだった。だが今日その技が発動したのだ。

「つまり、あのままあのISが動けてたら、一夏さんの命は……」

『たぶんね……だからボクたちがあの技を出せたんだと思う』

美紀が言い淀んだので金九尾も直接的な表現を避けた。一夏が死んでいたかもしれない——想像でもそんな事を考えてしまった美紀は、特に寒いわけでは無いのに震えだした身体を抱きしめ、そして俯いた。

「篠ノ之箒……殺しても殺し足りないくらい憎い……」

『憎悪の感情に支配されちゃダメだよ。あのバカに制裁を下すのは一夏お兄ちゃんだから。美紀がそんな顔してると一夏お兄ちゃんが知ったら、きつと悲しむよ』

「……ゴメン、そしてありがとう」

憎しみに押しつぶされそうだった美紀は、金九尾の言葉で何とか気持ち落ち着かせたのだった。だがそれでも、自分が想像してしまった事に恐怖し、美紀は早々にベッドに潜り込み自分を抱きしめるように丸まったのだった。

一夏は今、終わりの無い闇の中にいた。前を向いても後ろを向いても何処までも続く闇、もしかしたら身体を動かしているつもりだったが動いていないのかもしれないと思いたくなるくらい景色に変化が無いのだ。

「(ハハ)は……何処だ？」

一夏の記憶は、無人機にやられそうになったところで止まっている。だからここが何処なのか、何故自分は暗闇の中にいるのかが分からないのだ。

「これが世に言う死後の世界、というやつなのだろうか？ いやいや、確かにあの攻撃は強力で、全て捌き切れなかったが死んだりするはずは……」

あの無人機を送り込んできた犯人を、一夏は知っている。というか、自分以外でISを造れる人物は、一夏が知る限り一人しかいないのだ。その相手が自分を殺すなどという事は考えられないので、とりあえずは死後の世界という考えを頭から追いやった。

「ん？ 誰かいるぞ……」

永遠に続くかと思われた暗闇だったが、少し先に光が射し込んでいる。一夏はその光を目指し一步前に歩みを進めた。

「あれは……子供？」

漸く視認出来る距離まで近づいた一夏は、目の前にいる人間が子供であると認識した。そして、その顔を見て驚愕する。

「あれは……俺？」

少し幼さを感じさせるが、その子供は間違いなく一夏だった。だが、一夏には目の前の子供が本当に自分の幼少時代なのか確証が無かった。

「君、名前は？」

「……おりむらいちか」

「……」

『更識』ではなく『織斑』と名乗った事で、一夏はこの子供が自分の失われた記憶である事を理解した。

「つまり、ここは俺の記憶の中という事か……」

「おにいちゃん、だれ？」

「俺か？ 俺は更識一夏。未来のお前だ」

「さらしき？ 何でおりむらじやないの？」

どう説明しようか頭を悩ませたが、急に一夏の視界が開けた。

「……ここは、保健室か」

目を覚ました一夏は、自分は記憶を失ったのではなく閉ざしたのだと理解した。だがその閉ざした記憶を無理に開こうとは思わなかった。

「とりあえず痛みは……痛っ！」

自分の身体を触っていると、頭部に激痛を覚えベッドに倒れ込んだ。

「これは……さすがに致命傷だったんじゃないか？ 何で生きてるんだ、俺？」

痛みが和らいだところで近くににあった鏡で自分の頭部の傷を確認する一夏。確認した一夏が抱いた感想はそれだった。

明らかに深い切り傷が二ヶ所にあり、普通の人間なら死んでいてもおかしくなくらいの出血量が予想出来たのだ。だが自分は生きている。一夏は鏡を覗きこみながら首を傾げたのだった。

「こんな傷があるなら、普通他の場所にも傷があるんじゃない……」

「まだ安静にしていなければいけませんよ、一夏様」

「……誰？」

不意に声を掛けられて振り向いた先には――

「私です、一夏様。闇鴉です」

――綺麗な黒髪の美女が専用機の名を告げたのだった。

早朝の対面

痛む頭に意識を取られながらも、一夏は目の前の女性を隈なく観察する。しつかりと人間の姿をしているが、彼女からは熱を感じられなかった。

「一夏様……分かつてはいませんがそうじろじろと見られると恥ずかしいです。私はISではありませんが、性行為は可能ですので」

「何を言い出すんだ、まったく……刀奈さんたちに影響され過ぎたか？」
「冗談はさておき、恥ずかしいのは本当です」

「あ、ああ……すまないな。だが、何でいきなり人の姿に成れるようになったんだ？」

分かりにくかった冗談に、どう反応すれば良いのか困った一夏だったが、そんな事よりもその事が気になったので聞く事にした。

「一夏様があのレーザーを無効化しようとした際、あのレーザーに含まれるエネルギーが私に流れ込んできたのです。そしてそのエネルギーが限界まで蓄積された所為で私は強制解除されました」

「それで？」

「そのエネルギーは私の中で変換され、この様に人の姿になる事を可能としました。もちろん、エネルギーが無くなればこの姿には成れませんが」

「つまりそのエネルギーの正体を研究すれば、君はこの姿に成れると？　つまり俺につき止めると言うわけだな」

「そのような偉そうなことを言うつもりはありません。ありませんが、一夏様にご奉仕出来るのであるのならば、この姿に成るのが一番でしょうし」

また分かりにくい冗談を言う闇鴉に頭痛を覚えながらも、一夏は日ごろ持ち歩いてくる端末を開き闇鴉にケーブルを握らせた。

「これは？」

「君の今の状況を調べようと思つてね。本来ならこのケーブルを差しこむんだが、今は握るだけでも測定は可能だからね」

多少手間取りながらも闇鴉のデータを解析した一夏は、一つため息を吐いた。

「どうなさいました？」

「いや……君の中のエネルギーは既に君自身が供給出来るように進化している。だから自分の意思で待機状態に戻る事も、人の姿に成る事も既に可能だと言う事だよ」

「何と!? 第五世代とはそのような自立進化を兼ね備えているのですか……」
「いや、これは完全に予想外の出来事だよ……まあこのエネルギーが何なのかを解析出来れば、木霊たちも人の姿に成れるのかもしれないが」

痛む頭を完全に忘れているような雰囲気醸し出す一夏を、闇鴉が優しく諭す。

「一夏様、我々I.Sの事を想ってくれるのはありがたいですが、今は一夏様のお身体を治すのが先決です。私の力で一夏様の怪我を治せれば良いのですが……」

「別に気に病む必要は無いよ。君たちは普段から俺を守ってくれている。それだけで十分ありがたいんだから」

「では、朝まで一夏様のお傍で警護をさせていただきますので、一夏様はご安心を」

その言葉を聞いたのを最後に、一夏は再び意識を失ったように眠った。その横では闇鴉が言葉通り一夏の傍で警護していたのだった。

普段ならまだ部屋から出ない時間に刀奈は部屋を飛び出した。向かう先はもちろん保健室、つまり一夏の許だ。

「一夏君、ちゃんと治るのかなあ……」

『刀奈はもう少し一夏さんを信用してはどうです？ 彼はあるな攻撃で死ぬような人間ではありませんよ』

「いや、普通の人間はあるな攻撃を喰らったら死んじゃうんだけど」

『一夏さんはほぼすべてのISに好かれているお方です。あの無人機のコアもおそらくは一夏さんを傷つけた事を後悔しているでしょうし、一夏さんがあの憎い篠ノ之箒を庇うように間に入った事でレーザーの威力を落としましたでしょうし』

「うーん……そうだと良いんだけどな……」

蚊と小声で会話をしながら、刀奈は保健室の前までやって来た。いざここまで来ると

異様に緊張したが、勇気を持って刀奈は保健室の扉を開いた。

「一夏君、起きて……………る?」

一夏が眠るベッド、そのベッドの中には一夏の他にもう一人の女性が寝ていた。綺麗な黒髪をした、全身黒尽くめのスタイルの良い女性。それが刀奈の意識を占めた。

「誰?」

「むにゃ……………あつ、刀奈さんはじめまして」

「はじめまして……………って、何で私の名前を?」

『彼女は一夏さんの専用機の闇鴉です』

「へー、闇鴉って美人さんだったんだ……………って! 何で闇鴉が人の姿をしてるのよ!?

それで何で一夏君と一緒に寝てるのよ!」

「お静かに。一夏様が目を覚まされてしまいます」

闇鴉に叱られて、刀奈はしょんぼりと肩を落としかけて——そんな場合では無いと思いなおし闇鴉に詰め寄った。

「質問に答えて。何で人の姿をしてるの。何で一夏君と一緒にベッドで寝てるの」

「理由については、詳しい事はまだ分かりません。昨日のレーザーのエネルギーが私の

中で変換されこの姿に成れた、という事しか分かっておりませんし、一夏さんと一緒に寝ていたのは、私が一夏さんの専用機だからです」

「答えになつて無いわよ!」

『まあまあ刀奈、貴女も今一夏さんのベッドに潜り込めば万事解決じゃない?』

「……はっ!」

蚊の提案に雷に打たれたような感覚に陥った刀奈は、ゆっくりと一夏のベッドへと忍び込もうとして――

「何をなさつてるのですか、お嬢様」

――保健室入口に立っている虚に怒られたのだった。

「事情は全て丙から聞きました。改めてよろしくお願ひします、闇鴉」

「こちらこそ、よろしくお願ひしますね、虚さん」

闇鴉が人の姿をしている事にはツツコミを入れずに、虚はあつさり闇鴉の存在を受け容れ、そして一夏の容体を気にしたのだった。

「まだ目を覚まされませんか……」

「昨日一度だけ目を覚まされましたが、再び意識を失ってしまいました」
「そうなんだ……一夏君、早く目を覚ましてね」

祈るような刀奈の言葉に反応して——かは知らないが、一夏はそのタイミングで目を覚ましたのだった。

解析依頼

目を覚ました一夏は、目の前に三人の美女を確認して、小さく頭を振った。

「昨日のアレは夢じゃ無かったんだな、闇鴉」

「覚えていてくれましたか。朦朧としたところでの自己紹介——とあえて言いますが、それだったので覚えておいででは無いと思っていました」

「刀奈さんと虚さんには挨拶したのか」

「ええ。ところで一夏さん、先ほどから保健室前に教師の気配が複数しているのですが」

そういつて闇鴉は保健室の扉を開き、盗み聞きをしていた不届き者たちを保健室へと引き込んだ。

「紫陽花さんに真耶さん……何してるんですか？」

「一応苗字で呼んでくれないかな、刀奈ちゃん……」

「更識君に用があつて来たのですが、何やら入り難い雰囲気だったもので……」
「盗み聞きは感心しませんか、何かご用でしょうか、山田先生。五月七日先生」

まだ起き上がるのに苦勞している一夏に、虚が手を貸して置き上がらせる。そんな一夏の姿を見て、真耶と紫陽花は少し目を逸らした。

「? 何かありましたか」

「いえ、痛々しい姿を見て……」

「篠ノ之さんはお引越しという形で織斑姉妹のすぐそばの部屋に移動させ反省を促しています。織斑さんのルームメイトは鷹月さんに変更になりました」

「はあ……それをわざわざ伝えに?」

真耶の言葉に首を傾げながら、一夏は不思議そうに呟く。

「いえ……更識君って確か、整備が専門だと言っていましたよね? コアの解析とか出たりしませんか?」

「動けないのでどうとも……ここに持って来ていただけだったのでしたら、可能だとは思いますが」

「一夏さん、あまり賛同出来ませんね。今は安静にしているべきかと」

「あの……こちらの美人さんはどなたですか?」

ずっと気にはなっていたのだろう。紫陽花がおずおずと一夏に訊ねる。

「盗み聞きしていたのでは？」

「肝心な事は何も聞こえませんでしたし……」

「闇鴉、挨拶しろ」

「はい、一夏さん。はじめまして、山田真耶先生、五月七日先生。一夏さんの専用機の闇鴉と申します。以後お見知りおきを」

闇鴉の挨拶を聞いた真耶と紫陽花は、一瞬ポカンと口を開けたが、先に白式が人の姿になれる事を知っていた真耶はすぐに現実に復帰した。

「なんだ、更識君の専用機も人の姿に成れたんですね」

「ええ、昨日のあの事故以降に成れるようになったとか。それで、あの無人機のコアはこちらに持つて来られるのでしょうか」

「はい、可能です。ですが持つてくるにあたり、私と五月七日先生だけでは安全が確保できないので、小鳥遊先生にも同伴願う形になります」

「碧さんでしたら問題ありませんよ。そもそも碧さんは俺がI Sの事に詳しいのを知っていますし」

「小鳥遊先輩も更識所属ですからね」

そこで漸く現実に復帰した紫陽花が、一夏の言葉に反応した。とりあえずは放課後、という事で刀奈と虚は真耶と紫陽花を保健室から追いやり、自分たちも授業があるからと言って保健室を後にした。

「さて闇鴉、東さんがあの無人機を送りつけてきた理由は何だと思う？」

人が完全に遠ざかったのを確認して、一夏は闇鴉に問う。問われた闇鴉も特に驚く事無く思案に入った。

「そうですね……ハッキングレベルが大した事無かったのを考えると、一夏さんに解決してもらいその実力を知らしめる、といったところでしょうか。唯一の誤算は篠ノ之箒の無駄に素早い動き、でしょうかね」

「アイツに知らしめるつもりだったんだろうが、その計画が俺に怪我を負わせる形になった、というわけか……今頃東さん、気にしてるんじゃないだろうか」

「血のつながりが無ければ、今頃篠ノ之箒は跡かたも無く蒸発してるでしょうね」

「あの人が血縁を気にするとは思えないが……今までも直接手を下そうと思えば出来たんだし、今回もしないか」

一夏はとりあえず回復を優先する為に再びベッドに寝転ぶ。闇鴉も心得ているよう

で、一夏が身体を寝かせる手伝いをシツカリとこなす。

「何だか重病人みたいだな。実際は大した事無いのに」

「大した事です。頭から流血したんですから」

「そうなのか？ 気付いた時には傷は塞がってたし、大した事無いと思ってたが」

「殆どの人が顔面蒼白になるくらいの重傷だったんですよ」

「そうか……心配をかけちまったな……後で謝っておかないと」

そう言われれば刀奈と虚にも謝って無かったな、と一夏は今更ながらにそんな事を思っていた。

「マドカが静寂と同じ部屋になったとか言ってたし、これで篠ノ之との繋がりがまた一つ減ったんだな」

「元々一夏さんとあの人には繋がりがありませんよ。もし関係があるとするとするならば、それは無関係です」

「あるのか無いのか分からないな、その表現は」

苦笑いを浮かべながら、一夏はポケットから携帯を取り出し、元凶である東に連絡を入れようとした。

「まだ電話も止めておいた方が良いでしょう。あの人の声は頭に響きますから」

「さすがに東さんも俺が怪我をしてると知ってれば大声は出さないと——」

『いっくん！ 無事!? ちゃんと生きてるの!?!』

「……五月蠅いですよ、東さん。頭に響くのもう少し抑えてください」

闇鴉の心配の通り、東は大声で一夏の無事を確認してきた。携帯を耳から離しながら東に無事を伝え、声のボリュームを下げるよう頼む一夏。

『ごめんごめん、あまりに心配過ぎて、東さんこのままIS学園に突っ込もうかと思つたから』

「はあ……それで、何故あのような事を？」

東に直接説明を求めると、その答えは闇鴉の推測とほぼ同じだった。

『あの単細胞、本当に消し去ってやろうかと思つたくらいだよ』

「織斑姉妹が監視するようですよ、とりあえずは大人しくなるかと」

『そう願いたいよ。じゃあいっくん、安静にしてるんだよ。あつ、それからあの無人機のコアはいっくんにプレゼントするよ。怪我を負わせちゃったお詫びにね。じゃあねー』

通信が切れたのを確認して、一夏は携帯をポケットに戻し眠りに就くのがだった。

コアの調査

じつくりと休んでいた一夏は、ふと気になる事があつたので闇鴉に尋ねた。

「あの子供の頃の俺を見せたのはお前だよな？ 何のために」

「トラウマ克服のお役に立てれば、と思ったのですが」

「俺が記憶を『失った』のではなく『閉ざした』んだと知らせる事が、トラウマ克服と何の関係が……いや、記憶があるのなら、その原因が分かるのか」

「篠ノ之さんのトラウマはともかくとしても、何時までも女性に苦手意識を持たれてるのは」

「I S学園に入学する前は、ある程度克服出来ていたと思っていた恐怖症だったが、いざ女子のみの世界に飛び込んだら、やはり恐怖心は襲ってきたのだった。

「原因が分かったとしても、それをどうにか出来るかなんてわからないぞ？ そもそもトラウマの原因が誰かなんて、子供の頃の記憶があてになるとは思えない」

「ヒントくらいにはなると思いますけどね」

そこで外に人の気配を感じた闇鴉と一夏は会話を中断して、相手の反応を待った。

『一夏さん、碧です。例の件で真耶と紫陽花を連れてきました』

「分かりました。入っても構いませんよ」

碧が丁寧に一礼して保健室に入ってくる。その姿に若干驚きを感じながらも真耶と紫陽花も碧に続いた。

「そこまでかしこまる必要はありませんよ。ここでは教師と生徒なんですから」

「いえ、私は更識にお仕えする身です。次期当主候補筆頭であられる一夏様には、本来ならあのような喋り方も出来ない身分なのですから」

「ですから、俺は昔から碧さんにお世話になってるんですから、そうかしこまられると距離が出来たみたいで寂しいんですよ」

本当は『候補』ではなく『当主』なので、ますます碧の喋り方が正しいのだが、表向き一夏はまだ楯無を継いでいないのだ。だから碧が必要以上にかしこまると逆に不自然なので一夏はこう言っているのだ。

「更識君って、実は凄い人なの？」

「俺は子供のころに誘拐され、その縁で更識の養子になっただけです。そして刀奈さん

と簪が代表、ならびに候補生になったのでそのまま俺が次期当主になっただけですよ」

謙遜しながら、一夏は真耶が持つているコアに視線を向けた。先ほど東からある程度の事情は聞いているし、いくら調べても未登録である事は一夏も既に知ってる。だが、あのコアを好きにして良いと言われているので、一夏はコアの性能をとことん調べるつもりでいるのだ。

「これがあの無人機のコアです。必要な道具は一通り持つてきました」

「ありがとうございます。実は先ほど篠ノ之博士から無人機の事は聞きましたので、調べる必要は無いんですけどね」

「えっ、じゃあ何で……」

「単純に興味がありますし、何時までも無所属のコアを学園で保管していると、色々とマズイ事態になるかもしれませんからね。調べて問題が無ければ、このコアは更識で処理しますのぞ」

「本当ですか？ よかった……これ以上問題を抱え込みたく無かったんですよ」

一夏の言葉に真耶がホッと胸を撫で下ろす。その行動に思い当たる節が無い一夏は、コテンと首を傾げた。

「山田先生、何か問題でもあったんですか？」

「篠ノ之さんの処分について、日本政府と織斑姉妹が揉めてまして……」

「どのような処分を検討してるんです？」

「日本政府は、織斑姉妹の監視を付け、二週間の停学・及び反省文の提出です」

「織斑姉妹の要求は？」

「極刑です」

「……………」

言い淀む事無く言い放った真耶に、一夏は呆れた視線を向ける。本当なら織斑姉妹に向けた視線ではあるが、生憎本人がこの場にいないのでその視線は真耶に向けられたのだった。

「死傷者無しと言っても過言ではない状況で、極刑はさすがにやり過ぎでは……」

「更識君が重傷を負った事が一番の原因ですね。小鳥遊先生が何とか宥めてくれたおかげで、今は大人しいですが」

「本音を言えば、私も極刑でも構わないとは思いますが一夏さん本人の意思を確認しないまま刑を執行するのはどうかと思ったので」

「俺から遠ざけてくれるのであれば、IS学園に在籍していようが関係ありません。政

府の罰で十分ではないでしょうか」

コアを調べながら、一夏は興味なさげに言い放った。

「じゃあ、一夏さんに近づこうとしたら校庭二十周とかでどうでしょうか？」

『授業以外で』を付けてあげましょう。グループ分けで運悪く同じグループになる可能性だつてゼロでは無いんですから」

「ですが一夏さん、篠ノ之さんと一夏さんのグループは絶対別になるように織斑姉妹が動くと思いますが」

闇鴉のツツコミに、一夏はコアを調査する手を止めた。意識の半分以上をコアに向けていた所為で、その考えに至らなかつたのだろう。

「そうだな……あ、後更識所属の人間にちよつかいを出そうとするのも止めてもらいたいな。マドカが別室になつた以上、篠ノ之との関係は出来る限り放棄したい」

「分かりました。後で織斑姉妹にそう伝えておきます。それから、一夏さんに面会したいというイタリア代表候補生の女の子がいるのですが、後日改めるように伝えておきましたので」

「イタリア代表候補生？ アメリカンカルラさんですか？」

「そうです。一年五組のクラス代表のアメリアさんですね」
「俺に何の用だろう……まあ、怪我が治ったら会ってみますよ」

少しエイミイの事を考えた一夏だったが、情報が少なすぎるのでこれ以上考えても結論が出無いと考えを一旦放棄してコアの調査を再開する。そのスピードは、同じ調査を行った真耶がシヨックを受けるくらいのものだったという。

一夏のいない教室

コアの解析を済ませた一夏は、そのコアを碧に預け教師陣を保健室から退室させた。

「闇鴉、あのコアだが……」

「性能的には第三世代——いえ、第四世代並みでしたね」

「やはり気付いていたか……束さん、あんなものくれるって言ってもな……」

既に第五世代まで開発を進めている一夏にとって、第四世代のコアは「今更」過ぎる代物なのだ。

「貰えるものは貰っておきましょうよ。何時か役に立つかもしれませんし」

「新たに造らなくて良いのは楽だが、更識所属の人間は全員専用機を持つてるし」

「新たに所属する人が来たときの為ですよ」

「そんな人間がいるとは思えないが……」

そんな事を話しながら一夏は解析結果を保存した端末を開く。闇鴉が人の姿になるきっかけを作ったレーザーは、間違いないく一人なら簡単に殺せるだけの威力が籠めら

れていたのだった。

「よく無事だったよな、俺……」

「どうやら一夏さんは、誘拐された時に投薬実験されたようですね。その副産物として異常に回復力が高いようです」

「何を目的とした実験だったんだか……そもそもあの時だつて俺じゃ無く篠ノ之を誘拐すれば良かったんじゃないのか？」

「そんな事私に言われても困りますよ。誘拐犯たちが何故一夏さんを狙ったのか、なんて私に分かるわけありませんでしょうが」

「まあそうだな……とにかく、後は頭の傷さえどうにかなれば保健室のベッドから抜け出せるわけだが……この学校つて保険医いるのか？」

さつきから無人の保健室を見渡して、一夏はそんな疑問を投げかけた。

「いないのではないですか？ 医療道具は揃ってますが、IS操縦者はだいたい自分で治療出来ますからね」

「余程酷い怪我でもない限りは、自分で処置出来るだけの知識は持ち合わせているから……だが、ここにいるのは一人前のIS操縦者では無く半人前の見習い操縦者だ。保険医の一人くらいいても良い気もするが……まあ教師が知識を持っているから必要無

いのかもしれないが」

そう言いながら一夏は頭の傷を撫でる。多少痛みは残っているが、出血も止まっ
るのであまり大袈裟には考えていないようだ。

「後二、三日は安静にしてる事ですね。無理して傷口が開いたら大変ですから」

「暇なんだが……」

「なら、生徒会の仕事でも持って来ましょうか？ 書類整理くらいなら出来ますよね」

「それでも構わない。むしろ本当に持って来てもらいたいくらいだ」

退屈を嫌う一夏は、保健室で安静にしている事が苦痛でしようがないのだ。あまり波
乱万丈でも困ると思っているが、何も無いこの状況も一夏にとって困るものだったの
だった。

一夏がいない教室では、一夏の席に集まるように本音、美紀、マドカがボンヤリとその席を眺めていた。

「何してるの？」

「シズシズ……いっちーがいないと静かだなーって思ってたよ」

「一夏君は何時も静かだったわよ？ 騒いでたのは、一夏君の周りにいる私たち」

「兄さまがいてくれたから、私たちは安心して騒げたのですね。やはり兄さまは偉大な人です」

「マドカちゃん、その感想はおかしくない？」

「いえ、兄さまは偉大な人です！ あんなクズを庇って大怪我を負ったにも拘わらず、極刑は避けるべきなどと仰られたのですから」

一夏の一声で、織斑姉妹は自分たちの要求を取り下げ、政府が言うように停学二週間・反省文の提出の刑を篠ノ之箒に科した。

「そう言えば篠ノ之さん、今部屋で大人しくしてるのかしら？」

「さすがにしていると承知しますよ。千冬先生か千夏先生、どちらかがベタ付きで監視して
るんですから」

美紀が言うように、篠ノ之箒の部屋の前には、千冬か千夏のどちらかが絶対にいる状
況が作られているのだ。いくら猪武者の箒とはいえ、悪魔の姉妹に逆らうような真似は
しないだろうと誰もが思っている。

「でもシノノンの事だから、織斑姉妹の目をかいくぐろうとか思ってるかもね」

「姉さまたちの監視をかいくぐって何処に行くといふのですか？ あの女に訪ねるよう
な友人がいるとは思えません」

「一夏君のところに行くかもね。さすがにやり過ぎたつて謝るかも知れないし」

「静寂、それはないと思いますよ。あの篠ノ之さんが大人しく頭を下げるとは思えませ
んし」

「むしろ『お前が軟弱だからあの程度の相手にやられるんだ』とか言つて重傷の兄さまを
ベッドから引き摺りだして剣道場に連れて行きそうですよ」

半分冗談で言つたマドカだったが、周りの反応が微妙なものだったので、冗談で済ま
ないかもしれないと焦りだした。

「ま、まあ……姉さまたちの監視をあの手ノ之箒がかいくぐれるとは思いませんがね」
「そ、そうだよ。織斑姉妹の監視をかいくぐれる人間なんて、それこそ一夏さんくらいですよ」

「何だかフラグのように聞こえるのは私の気の所為かな？」

「自殺行為までして死にたいと思う人間はいないと思うけどね」

自殺行為とは、織斑姉妹から逃げる事。死とは、一夏にちよつかいを出して織斑姉妹に消される事だ。静寐が言った二つの事が現実起こらないという確証は無いが、さすがの箒でも命は無駄にしないだろうと三人は思う事にした。そうしないと自分たちの心の安寧が保たれないからだ。

「はい、授業を始めますので席についてください」

そんな恐ろしい考えを中断させる間延びした声が教室にやって来た。担任・副担任の補佐を務める山田真耶教諭が四人の恐ろしい考えを忘れさせてくれるきっかけをくれたのだった。

「先生、ありがとうございます」

「はい？ どう致しまして……？」

美紀にお礼を言われた真耶だったが、本人は何故お礼を言われたのかが分からず首を傾げたのだった。

エイミーとの約束

HRで真耶から伝えられた内容を、美紀たちは保健室の一夏の所で相談していた。

「来月の学年個人トーナメント？ 俺は参加しないぞ」

「うん、それは分かっているけど、一夏が出無いなら私たちも止めておこうかな。更識所属は別格だって言われてるっぽいし」

一夏の答えに簪が反応する。クラスの違う簪が何故美紀たちと一緒に来たのかというとうと——

「あ、あの……アメリカンカルラです！ よろしくお願いします」

——彼女を紹介する為だ。

五組であるエイミーは、美紀たちの所に行くより簪を訪ねた方が楽であり、簪を訪ねればそのまま一夏の場所まで同行出来るのだから。

「初めまして、更識一夏です。こんな格好で申し訳ありません」

「い、いえ！ 更識君が私たちを守ってくれたのは分かっていますから」

表面上は箒を助けたようにしか見えなかったのだが、ある程度の実力者になれば、あれが箒では無く二次災害を防ぐために行っていた事は理解出来るのだった。

「それで、イタリア代表候補生で五組のクラス代表のアメリカさんが何の御用でしょうか？」

「あつ、私の事はエイミイで良いよ。みんなもそう呼んでるし、私も『一夏君』って呼んで良いかな？」

「構いませんよ。エイミイさんは俺の事情は訊いてますか？」

「う、うん……昔の記憶が無いのと、いきなり近づかれると怖がっちゃうって事くらいしか」

それは保健室に来る前に、簪から散々注意された事だった。エイミイの性格上、初対面でもいきなり飛び付きそうな勢いなので、簪が一夏の事情を長々とエイミイに説明したのだ。その結果、エイミイは猫を被った挨拶をしたのだ。

「それだけ分かっててくれれば大丈夫です。まあ、簪や美紀が認めたエイミイさんなら、俺もそのうち慣れるでしょうしね」

「あ、ありがとう。嬉しいな。あと、さんもいらないよ。エイミイで良いから」

「そうか。それでエイミーは何の用でここに？」

「えつと……私、専用機が無いんだ。イタリアはIS開発戦争で大きく遅れてるし、学園を卒業するまでに専用機が出来る可能性が殆ど無いの。だから自由国籍を使って何処かの国の候補生になろうかなと思っただけど、その場合はよっぽどの実力者か、大企業の後ろ盾が無いと上手くいかないんだ。だから更識さんをお願いしたら、一夏君なら顔が利くかもって」

エイミーの説明を聞いて、一夏は簪に視線を向けた。それと同じ速度で、簪は一夏から視線を逸らしたのだった。

「なるほど……今すぐは無理だが、もうじき出来るかもしれないな」

「? どういう事?」

「更識企業に喧嘩を売って来た企業に心当たりがあつてな。今調べてもらつてるところだ」

「それと自由国籍とどういった関係が?」

「その企業は海外だな。とある契約を結んでいて、逆らつた場合はしつかりと契約書に明記されているんだ。それを失念したのか報復されないと舐められたのかは分からないが、契約内容通りになれば、更識は海外の拠点を手に入れられる事になる。そし

てその企業からならば、エイミイをその国の候補生として認めさせられるかもしれないってだけだよ」

「あつ、一夏さん、さつきお父さんから電話があつて、ほぼ一夏さんの考えで間違いないって。後は一夏さんの目で判断してほしいって」

「資料は？」

「虚さんにメールで送ったつて言つてました。後で虚さんに持つて来て貰いましょうか？」

美紀の言葉に、一夏は一つ頷いてエイミイに視線を戻した。

「今の話は他言無用で頼む。まだ公には発表できないからな」

「う、うん……それは良いけど、一夏君つていったい何者なの？ さつきみたいに黒い事を平然と言つてのけるなんて、普通の高校生とは思えないけど」

「普通じゃないさ。トラウマ持ちで普通の男子なら舞い上がるであろうハーレム状態を怖がるんだから」

「いつちー、カルカルはそんな事を言いたいんじゃないよ」

「か、カルカル!! それって私の事？」

「えっ、だめ？」

既に「エイミー」という愛称があるにも拘らず、本音は独特の愛称をエイミーに付けていた。エイミー以外はまたかという感じだったが、エイミーは驚きを隠せなかった。

「ダメじゃないけど……呼ばれなれて無いから」

「そのうちなれるよ〜ねっ、かんちゃん」

「まあ本音だからね」

「……さて、エイミーの専用機だが」

「う、うん」

脱線しかけた流れを、一夏が修正する。その空気にてられたのか、エイミーの顔が緊張で強張っている。

「実はこの前、篠ノ之東博士からコアを貰ってな。この間の侵入してきた無人機のコアなんだが、性能的には第四世代と遜色ない仕上がりになっていた」

「一夏、そのコア見たんだ」

「山田先生に解析を頼まれてな。碧さん立ち会いの下で俺が解析した。てか、その前に東さんから聞かされてたんだけどな」

「ほえ……一夏君って凄い人と知り合いなんだね」

「織斑姉妹の友人ってただだよ。俺はその弟だから」

「……あつ！ そつか！ 一夏君の旧姓は『織斑』だったんだね！ すっかり忘れてたよ」

「ちゃんと教えたじゃない……」

「私が兄さまと呼んでいるので分かりそうなものですが……」

マドカがぼそつと呟いた言葉に、エイミーは大袈裟に笑って誤魔化した。

「そのコアを使えばすぐに造れるだろうが、生憎今は動けないからな。とりあえず海外拠点が確定するまでは大人しくしてくれ。悪いようにはしないから」

「うん、分かった。それじゃあ一夏君、お大事にね」

一夏との約束を取り付けたエイミーは、満面の笑みを浮かべて保健室を後にした。残る更識所属の四人は、時間ギリギリまで一夏の側を離れなかったのだった。

新たななる問題

とりあえず日常生活には支障が出ない程度には回復した一夏は、すぐさま保健室から自室へと移動し、例の件の報告書を読みこんでいた。

「一夏さん、いくら日常生活には支障が無いとはいえ、それ程頭を使えば痛みますよ」

「別に頭は使つて無いさ。報告書を頭に詰め込んでいるだけだ」

「ですから、それが頭を使つてると言っているんですよ。少しは周りを——具体的には私を頼つてくれても良いんじゃないですか？」

闇鴉が少しつまらなそうにそう言うと、一夏は視線を資料から闇鴉に向けた。その表情は若干苦笑い気味だ。

「そうは言つてもな……この『シャルル・デュノア』が転校してくるのは来週だ。それまでに更識が調べ上げたこの情報を頭にインプットして、交渉の際にイニシアティブを取れるようにしないと」

「一夏さんなら絶対にイニシアティブを取れるでしょうに。むしろ取れない相手など存在するのですか？」

闇鴉の問いかけに、一夏はより一層苦い笑いを浮かべる。

「とりあえず明日から授業に復帰するから、自由に使える時間は限られるからな。だから多少無理をしてもこの内容を頭に詰め込んでおこうと思ってるんだよ。闇鴉や他の人に心配をかけてるのは申し訳ないとは思ってるが、これも更識の為なんだよ」

「分かっていきます。ですが、本当に無理だけは止めてください。あのような事がもう一度起これば、刀奈さんや虚さん、簪さん以下更識所属の我々が悲しむという事をお忘れないように」

「分かってるさ。闇鴉が見せてくれたみんなの顔……あんな顔をさせたらダメだろ」

一夏が気を失っている間、お見舞いに来た全員の顔を記録していた闇鴉は、その顔を一夏に見せたのだ。どれだけ心配されているかを自覚させる為と、二度と無理をさせない為の戒めとして見せたのだが、思いのほか効果があったのだった。

「やった」

資料を全部頭に詰め込み終わったのか、一夏は資料をシュレッダーに掛け解読不能になるまで細かくする。

「良いのですか？」

「全部頭に入っただし、元データは更識にあるからな。いざとなればそのデータを引っ張ってくればいいだけだ」

「規格外にも程がありますよ……コピー用紙百枚近かつたんですよ？」

報告書は一夏がブロックを強化した回線を通して送られてきた。無論一回きりしか使えないので、ハッキングなどは不可能、そして印刷したデータも一夏以外が開こうとすれば自動的に消滅するプログラムが組まれている。

だが闇鴉が驚いたのはそこでは無く、たった二日でそのデータを全て暗記した一夏の頭脳に関してだ。万全ではないこの状況で、美紀がいない時間だけを使つての暗記だったのにもかかわらず、一夏はそれを成し遂げたのだ。

「さて、明日に備えて寝るとするか」

「では、私は添い寝を……」

「ただいま」

そのタイミングで美紀が部屋に戻って来たので、闇鴉は添い寝を諦めて待機状態に戻つたのだ。

「夏が復帰してから一週間、情報が確かなら今日フランスからの転校生が来るはずだと一夏は考えていた。」

「一夏君？ まだ痛むの？」

「いや、そうじゃないが……だが静寂、何でそんな事を思ったんだ？」

「いや、目を瞑って難しいような雰囲気をしてたからさ。もしかしたら痛むのかなーって」

「別に傷は問題無い。まあ、横からの視線が痛いのはあるが」

唯一籌が一夏の側にいられるのは、教室でだけなのだ。席替えも計画されたが大人しくしているなら問題ないだろうと一夏が織斑姉妹に思いとどまらせたのだった。本音を言えば、わざわざその為だけに席替えをするのが面倒だっただけなのだが。

「無言のプレッシャーってやつ？」

「突き刺さるのは勘弁願いたいかな……とところで静寐、何だか女子たちが盛り上がってるのは何だ？」

「ん？ ああ、ISスーツの話でしょ。何処の会社にするかって話よ」

「ふーん」

「ちなみに一夏君のスーツは何処の？」

「何処って……更識製に決まってるだろ。俺は更識所属で開発部門なんだから」

「つまり、自分でテストしてるって事？」

「ぶつちやければそうだな」

もつとぶつちやける事が許されるのであれば、更識に開発部門など存在しない。一夏一人で開発しているのです、部門という言葉は不適切なのだ。もちろん、そこまで教えられるほど一夏と静寐の関係は深いものではない。

「そう言えば、噂があるんだけど」

「噂？　どんな」

「今度の学年別個人トーナメントで優勝すると更識製の専用機が貰えるって噂」

「何だそのデマは……」

「やっぱりデマなんだ。ちよつとは期待してたんだけどなー」

「満面の笑みで残念そうに言われてもな……最初からデマだと分かってただろ」

「一夏さん、そろそろHRの時間です」

急に人の姿になった闇鴉に、クラスメイト達がビククリした表情をし、そして一夏に質問の集中砲火が行われる。

「更識君、この美人さんは誰なの!？」

「あの胸、本音程ではないけど大きい……」

「綺麗な黒髪……羨ましいですわ」

「あれ？　セツシーは金髪より黒髪が良かったの？」

いくつか的外れな声も聞こえたが、一夏はとりあえず闇鴉に自己紹介をさせる事にした。

「一応挨拶くらいはしておけ」

「はい、一夏さん。初めまして、皆さん。一夏さんの専用機の闇鴉です。例の事件後にこの様に人の姿に成れるようになりました。以後お見知りおきを」

「はーい、皆さん。席に着いて……おや？　新しい人がここにも」

闇鴉の自己紹介が終わったタイミングで真耶が教室に入って来た。

「えっと、転校生を紹介します。しかも二人ですよ」

入ってください、の合図で教室に入って来た二人の少女——いや、少女と男子の制服を着た女子がそこにいた。

一夏と交渉

教室に入って来た男子生徒を一目見て、一夏は立ち上がりその少年の前へ移動した。

「えっと、なにかな？」

「貴方は男子なのですか？ それとも女子なのですか？」

「見ての通りだよ。僕は男だよ」

「そうですか……見る人が見れば、貴女が女だとすぐにバレると思わなかったのですか？ 男子と女子とでは骨格から何から全て違うんですから」

一夏が視線を向けた先では、織斑姉妹と碧がコクコクと頷いている。つまり彼——いや、彼女は女なのだ。

「それでは交渉しましょうか。デュノア社のご息女・シャルロット・デュノアさん」

「何でその名前を……」

「まあそれは置いておきましょう。貴女は我々更識企業とデュノア社が交わした契約内容を知っていますか？」

一夏の質問に、シャルロットは首を横に振った。つまり知らないのだ。「そうですね……では、更識企業がデュノア社に技術提供した事は？」

次の質問には、シャルロットは首を縦に振った。

「そうですね。では、契約内容をお教えしましょう。まず一つ、デュノア社は更識企業に対し、反逆ないしは反逆と取られるような行動はしない。二つ、技術提供する代わりにデュノア社は更識企業とフランス政府との橋渡しを担当する。ああ、貴女の専用機がフランス所属では無くデュノア社所属なのは、私が交渉したからです」

一夏が平然と言つてのけた事實に、シャルロットは驚きの表情を見せた。

「なんですか、知らなかったんですか？ まあ良いでしょう。三つ、開発した専用機のデータを更識企業に公開する事。アップデートなどのデータも含まれます。そして四つ、以上の事を守る限り、更識企業はデュノア社に対して技術提供を惜しまないものとする。これが更識企業とデュノア社が交わした契約です」

そこまで話して、一夏の瞳に獰猛な光が宿っている事にシャルロットは気が付いた。

「さて、契約には当然違約内容も明記されています。一つ、反逆ないしは反逆行為と思わ

れる行動をデュノア社が取った場合は、更識企業は全力でデュノア社を潰しにかかる。二つ、未然にその行為が防げたとしても、一つ目と同様の処置を取る場合がある」

そこまで言つて、一夏はシャルロットを見据えた。

「今回は二つ目に該当しますね。貴女の目的は、男装して私に近づき、男性操縦者のデータと更識製のISのデータを盗み出す事。これは更識企業に対する反逆行為と取られても仕方ない行為ですよね？」

「……………」

「無言は肯定を受け止めます。さて、貴女には三つの選択肢が与えられます。どれを選んでも私は構いません」

「三つ?」

一夏の言葉を待つように、シャルロットは俯いていた顔を上げた。

「ええ、三つです。まず一つ目、我々更識が調べ上げたこの事を嘘だと言い切り、また自分が男子だと偽り続けてデュノア社と共に破滅の道を歩む」

「……………二つ目は?」

「自分が女子で、更識に対してスパイ行為をするつもりだったと認め大人しくフランス

へ帰る。この場合は更識からデュノア社に対して報復する事はありません。ただし、貴女のこの先の人生がどうなるかは知りませんがね」

表情が明るくなりかけたシャルロットだったが、一夏が続けざまに言ったセリフに顔を青ざめる。おそらくは一夏が想像した通りの出来事が彼女の人生に降り注ぐのだからと一夏は勝手に解釈した。

「さて、三つ目ですが……個人的には貴女にはこの選択肢を選んでもらいたいですね。貴女はデュノア社に言われただけで、まだ何もしていないのですから」

「どういう——」

そこで、一夏はシャルロットの耳元に自分の口を近づけた。

「正妻の子では無い、という理由だけで貴女の人生を無茶苦茶にする権利は、たとえ父親であろうが正妻であろうが存在しないんですよ。だから、貴女には自由になつてもらいたいです」

「自由……?」

「さて三つ目ですが」

そこで一夏は耳元から離れ、クラスメイト全員に聞こえるように声を出した。

「貴方がスパイであることを認め、そして更識に協力するか」

「協力？」

「ええ、協力です。貴女は反逆の証拠そのものですから。貴女の証言で、更識はデュノア社に干渉する事が出来る。そうなれば情報も全て筒抜けです。いくら証拠を消そうが関係ありません。更識は裏組織ですから。そして証拠が出てきた場合、更識企業はデュノア社を併合、現経営陣は全員クビとなります」

「……あんまり良い選択とは思えないんだけど？」

一夏の話聞いて、シャルロットは顔を顰め首を傾げる。だが、一夏の話はまだ半分だった。

「従業員には罪はありませんし、併合した会社でそのまま働いてもらいます。そしてシャルロット・デュノアさん、貴女にはその会社のトップとして働いてもらいたいと考えています。もちろん学園を卒業するまでは、形だけのトップですが、その間に更識から派遣した人間が基盤を作っておきますので、卒業後はその企業のトップとして活躍してくださいれば貴女には罪を問いません」

「そんな事が——」

「出来ますよ。そしてフランス政府にも介入させません。もし口を挿もうとしたら、フランスにあるＩＳ企業の凄腕の技術者を更識が引き抜き、フランスの技術進歩を停滞させると脅せば良い。もしくは全企業を潰した後に更識がフランスから撤退すれば、フランスのＩＳ産業は壊滅しますからね」

「……随分と黒い事を言うね、君」

「開発・営業は私の担当ですので。それで、どの選択肢を選びますか？」

笑顔で問いかける一夏に、シャルロットは苦笑い気味な笑みを浮かべて答えた。
「三つめを選ぶよ。僕はスパイで、君たちに反逆するつもりだった」

その返事を聞いて、一夏は笑顔で頷いたのだった。

もう一人の転校生

シャルロットとの交渉を終えた一夏は、視線を碧に向け小さく頷き、そして自分の席へと戻った。

「山田先生、デュノアさんの新しい制服、用意してもらえますか？」

「は、はい！ すぐに用意します」

憧れの碧の指示に、真耶は少し緊張した面持ちで答える。織斑姉妹にも憧れてはいるが、尊敬できるのはやはり碧なのだろう。真耶は物凄いスピードで教室を出て行き——もちろん走ってはいない——シャルロット・デュノアの制服を用意する為に職員室へと向かった。

「さてと、じゃあ自己紹介をしてもらおうかな」

「はい、シャルロット・デュノアです。今更識君が言ったように、僕はデュノア社のスパイで、更識の情報を盗みに来た——んですけど、スパイ行為をする前にバレちゃいました」

そこで言葉を区切り、シャルロットは一夏を見た。小さく頷いた一夏を確認して、シャルロットは自己紹介を続けた。

「本当ならこの場所に居続ける事など出来なかつたんだらうけど、更識君のお陰で僕は自由を手に入れる事が出来るようです。なので、これから三年間、よろしく願ひします」

「大丈夫、更識の力を甘く見ないで」

碧の言葉に、シャルロットは泣きそうな顔で破顔した。余程辛い生活だったのだろうとクラスメイトほぼ全員がシャルロットに同情し、そして歓迎した。

「では次に、ラウラ・ボーデヴィツヒさん、自己紹介をお願いします」

「はっ！ ラウラ・ボーデヴィツヒであります！」

「そんな軍隊みたいな挨拶じゃなくて、普通に出来ないのか」

「相変わらず堅苦しい娘だな」

「織斑先生たち、お知り合いですか？」

ラウラの背後でやれやれと首を振った千冬と千夏に、一夏がそう問いかける。普段から声を掛けられることの少ない千冬と千夏は、それだけでだらしの無い顔をしてしま

そうになるのを何とか堪えて、一夏の質問に答えた。

「私たちがドイツで指導していた中の一人だ」

「わたしたちを慕い、そしてしっかりと指導に耐えた頼もしい娘だが……この様に堅苦しいヤツでな。もう少し柔らかくなれと言ったんだが……」

「なるほど。ドイツの代表候補生は、織斑姉妹が指導してきた人でしたか」

興味を失ったように、一夏は視線を織斑姉妹からラウラ・ボーデヴィツヒへと移す。

「何で貴女は震えているんですか？」

「お——貴方の事を教官たちから聞かされ、少しでもおかしな事をすれば殺すと……」

「ああ、なるほど……貴女もトラウマを持っていらっしゃるんですか」

その説明だけで、ラウラが持っているトラウマを理解した一夏は、再び織斑姉妹へと視線を向ける。ただし今度は少し厳しい視線だった。

「あんまり過保護なのは感心しませんね。特に何をされるわけでも無いんですから、彼女とは穏便な関係でお願いしますよ」

「安心しろ。一夏に手を出さない限り、私たちはラウラに何もせん」

「何もしなければ、な」

不気味な笑みを浮かべる織斑姉妹を見て、ラウラは教室の隅に逃げ出した。その姿を見たクラスメイトは、ラウラの事をマスコットの存在に位置付けたのだった。

「とりあえず……デユノアさんとボーデヴィツヒさんは席に着いてください。真耶が戻ってくるまでは、私が一時間目を担当します」

「では、私たちは職員室へと戻る」

「後の事は頼んだぞ」

教室から織斑姉妹がいなくなっているから、漸くラウラは席へ移動した。その姿を、クラスメイトは愛しむような目で眺めていたのだった。

一夏から暗号メールが送られてきた更識家は今、デュノア社への報復の準備をしていた。とはいっても、それ程派手な事は無く、フランス政府への根回しとシャルロットから聞かされた自供を録音したボイスレコーダーを確認するくらいだ。

「ではご当主、決行は翌日に」

「分かった。一夏君から確認は取れているな？」

「もちろんです。証人・シャルロット・デュノアを連れ、明朝こちらに来られると」

「かなり強行スケジュールだが、一夏君がいなければ交渉は上手くいかないだろうからな」

明日は火曜日で平日なのだが、デュノア社が証拠隠滅を図る隙を与えないように、一夏は学校を休む事にしたのだ。ちなみに、一夏の護衛として美紀も学園を休む事になっている。

「小鳥遊は同行しなくてよろしいのでしょうか？」

「彼女は教師だからな。事情が事情とはいえ、簡単に休めるわけではない」

「まあそうでしょうが……しかし、一夏さんの護衛が一人というのは——」

「私の娘が信用できないと？」

「っ！ 失礼しました」

「いやなに、まだまだ未熟なのは親の私から見ても分かるからな。美紀一人では心配なのは仕方ないだろう」

部下を叱るような視線から一変、尊は面白がるような視線を部下に向ける。その視線を受け、部下は恐縮していた態度からホッとした雰囲気醸し出す。

「驚かさなくてくださいよ。本気で死を覚悟したんですから」

「そこまで覚悟するなら言わなければ良いだろ。アレが私の娘だと知っているんだから」

「とにかく、一夏さんの護衛が一人なのは気になります。布仏の長女を休ませましょう」
「いや、虚を休ませれば刀奈様も休みたがる。一夏君の指示で、護衛は美紀一人にしたんだ」

「分かりました。一夏さんのご指示でしたら仕方ありませんね」
「我がらのご当主様だからな」

尊の冗談めいた表情を見て、部下も笑みを浮かべた。あえて尊を当主として会話していたのだが、更識の人間は本当の当主が一夏である事を知っているので、あまり意味は

無かったのだ。

「では私はこれで」

「ご苦労だった」

部下を労い、尊は一夏から送られてきたメールにもう一度目を通したのだった。

「実の娘にこの仕打ち……デユノア社長には相応の罰を与えるべきだな」

親バカと揶揄される一面を持つ尊は、同じ娘を持つ一人の父親としてデユノア社長に憤慨したのだった。

解任と就任

更識が所持している飛行機で、一夏と美紀とシャルロットはフランスへ来ていた。もちろん他の更識関係者も来ているが、矢面にたつて交渉———というか制裁を加えるのは一夏なのだ。

「大丈夫なの？　僕が言うのもなんだけど、デュノア社って結構黒い噂が付き纏ってるんだけど」

「別に問題は無いですよ。噂程度の黒さなら、更識には敵いませんから」

そう言つて一夏は、アポも取っていない会社に乗りに込んだ。当然の如く受付では止められそうになつたが——

「重大な契約違反が発覚した為、至急デュノア社長に説明を求める。拒否する場合は肯定とみなし制裁を実行する」

——と一夏が告げると、慌てたように社長への取次を行つてくれた。

「ねえ、一夏つて何者なの？」

「一夏さんは一夏さんですよ。普通——とは少し違いますが、私たちとあまり変わらない一人の男の子です」

「うーん……あんまり変わらないって事はなさそうだけどな……」

訝しむシャルロットを他所に、一夏たち更識関係者は社長室へと案内される事になった。

「どうもあつさりと入れてくれたな……」

「一夏さんがあんな脅しをするからでは？」

「いや、契約違反と言っただけで、それが何か向こうには分からないはずなんだが……」

シャルロットさんの存在は会社中に知られているのですか？」

「いや、ごく一部の人間にしか知られてないはずだけど……」

シャルロットの存在が受付の人間にまで知られているのなら、今回の対応は多少なりとも納得は出来たのだが、彼女が言うには存在は知られていないという。一夏は罨の存在を警戒しながらも、社長室の扉を開いた。

「ようこそ、更識企業の皆さん。それで、重大な契約違反とは？」

「……替え玉か」

「な、何の事ですか？」

社長室で待つていた男を一目見て、一夏は背後の更識所属の人間に二、三指示を出して男の前へ移動する。

「ちよつとした特殊能力みたいなものでして、私は一度見た相手の特徴などを一瞬で記憶出来るんですよ。貴方はデュノア社長より一センチ弱身長が高いんですよ。それに、声も上手く似せてはいますが若干高い。さて、本物のデュノア社長は何処へ雲隠れしたのですか？」

「わ、私が本物のデュノアだ」

「そうですか……シャルロットさん、この人は貴女の父親ですか？」

今まで一夏の背後に隠れていたシャルロットの姿を確認して、偽社長は驚いた表情を浮かべた。

「何故……何故貴様がここに……」

「この人は僕の父親じゃないよ。専務の禿げ親父だ」

被っていたカツラを取りシャルロットが宣言する。替え玉だとばれた専務は大人し

く一夏の前に歩み寄り、頼まれた事全てを話したのだった。

結局デュノア社長とその家族は既に逃げ出した後で、追いかけるのは面倒だと一夏が判断した為に追跡隊は編成されなかった。だが専務以下秘密を知っている人間全てが更識への反逆行為を認め、その指示はデュノア社長自ら下したものだと言言した。

「違約行為を確認、これよりデュノア社は更識企業の傘下とする。前任のデュノア社長は解任とし、後任としてシャルロット・デュノアさんを指名します。ただし、シャルロットさんは学生の為、向こう三年間は学業に専念してもらう為に、指示は日本から出します。フランス政府にお願いして、デュノア社長一家が持っているデュノア社の株は無効としてもらいますので、横から口を出される事も無いでしょう。ああ、専務以下今回の

「反逆に加担した人は、暫く減俸処分ですのでお覚悟を」

「わ、私たちも会社に残れるのですか!？」

「積極的に反逆に加担したのなら兎も角、調べた結果社長の独断で進められていたようですし、止めなかったのは問題ですが、貴方たちが止められたとも思えませんしね」

一夏の辛辣な言葉に、専務たちは下を向く。職を失わなかった嬉しさと、無能扱いされたような苛立ちでどういった顔をすればいいのかが分からないのだろうと一夏は思った。

「技術者の皆さんには、これまで通り働いてもらいますが、更識から派遣する技術者の方々の指示に従ってもらいます。三年間で基盤を造り、それ以降はシャルロットさんの経営に基本のお任せしますので、その点をご理解いただきたい」

更識の技術が学べると伝えられた技術者たちは、自分たちより大分年下の一夏に苛立つどころか感謝し始める。それだけ「更識の技術」というのは魅力的なのだろう。

「ではこの時点を以って、デュノア社を更識企業の傘下にします。経営などはとりあえず今まで通りお願いしますね」

専務たちに一言告げ、一夏はシャルロットを前面に押し出した。社長就任の挨拶と共に、一夏が計画していた事を発表させる為だ。

「えつと……この度社長に指名されました、シャルロット・デュノアです。前社長の隠し子としてこの会社を頼り、そして反逆の道具として使われそうになったところを一夏に助けてもらい、この子・ラファール・リヴァイブ・カスタムの所有権も認めてくれました。私は、この時を境にフランス代表候補生の地位を辞し、デュノア社長に就任する事をここに宣言します。また、私の後任として、現イタリア代表候補生であるアメリカ人カルラさんを推薦し、デュノア社が彼女の自由国籍の取得、及びフランスでの活動を全面的にバックアップする事を重ねて宣言します」

「政府との交渉は更識が行いますので、皆さんは新しい候補生のバックアップだけを気にしてください」

シャルロットの後を引き継いだ一夏が笑顔でそう告げると、技術者や専務たちは急に寒気に襲われた。底冷えのする一夏の笑みに、逆らったら消されると本能的に理解した瞬間だったのだ。

新たなマスコット

フランス政府との交渉は驚くほどスムーズに終わり、シャルロットは今帰りの飛行機の中にいた。一日も滞在する事無く帰るとは思ってたのだろうが、明日も学校がある事を考えると仕方ないのかもしれない。生徒会副会長とクラス代表の一夏と美紀が、これ以上学校をサボるのは体面的に良くないからだ。

「よくあんな脅し文句が思いつくよね」

「ん？ ああ『この条件を呑めないのであれば、フランスの技術者を引き抜いてI S企業を潰し、その上で更識がフランスから撤退する』ってやつだろ？ 別に普通に思いつきそうなものだが」

「一夏さんの普通はズレてますからね」

多少強行軍だったせいにか、一夏の顔にも美紀の顔にも疲労の色が濃く出ている。それでも眠る事無く話せている辺り、普通の高校生とは違うのだろう。

「でもさ、一夏。イタリアからフランスに亡命？ って大丈夫なの？」

「亡命じゃなく自由国籍の取得だ。実力的にも問題無いだろうし、イタリアも伸び悩ん

でいるからな」

「更識企業がぶつちぎってるだけで、何処の国も漸く第三世代に取りかかった程度だよ」

IS産業におけるトップは、相変わらず更識企業だ。訓練機のシェア八十五%を誇る更識企業が、今更「IS関連が主な仕事では無い」と言ったところで説得力が皆無なところまで成長してしまっている。

「そもそも今回のような事が本来の更識の仕事っぽいけどな。暗躍から脅し、最悪人も殺す覚悟だったんだが」

「首謀者は逃走、その部下だった人たちはあつさりと反逆を認め降伏しちゃいましたからね」

「一夏……そんな怖い事考えてたの？ 美紀もさらつと言ってるけど、随分と恐ろしい雰囲気だよ？」

「更識はIS企業なんかでは無く、暗部組織だからな。正確には対暗部用暗部だが、必要ならばそれくらいはする」

冗談を言っているような雰囲気では無い事を感じ取ったシャルロットは、自分がどんな存在に囲まれているかを自覚して震えだす。

「ん？ どうかしたのか？」

「い、いや……今更ながらに凄い人たちに囲まれてるんだって自覚したら怖くなっちゃって……」

「別に何もしない。それより少しくらい寝ておかないと授業に響くぞ」

そう言って一夏は瞼を閉じ、少しも間を空けずに寝てしまった。その隣では美紀も同じように眠っている。

「えっ、早い……」

シャルロットも慌てて寝ようとしたが、二人のようにすぐ眠れるはずも無く、眠りに就いたのは暫く経った後だった。

強行スケジュールでフランスから戻って来た美紀を待っていたのは、同行出来ずに不貞腐れた少女たちだった。

「えつと……ただいま戻りました」

「お帰りなさい。良いわね、美紀ちゃんは一夏君と婚前旅行出来て」

「そんな甘ったるいものではありませんし、刀奈お姉ちゃんだつて分かつてますよね？」

不貞腐れた少女たちの代表なのか、刀奈が美紀を問い詰めるように距離を狭めてきた。

「シャルロットちゃんやエイミィちゃんの為に一夏君が動いたのは分かっているけど、だったら私を護衛に指名してくれたって良いじゃない。私だつて更識の人間なんだし」「刀奈お姉ちゃんは日本代表だし、余計に話がややこしくなるのを避けたんだと思うけど……」

「でも、美紀ちゃんだつて候補生でしょ？ ややこしくなるのなら美紀ちゃんだつて同じだと思っただけど？」

答えに窮したい美紀に助け船を出したのは、やはり一夏だった。

「刀奈さんは生徒会長ですからね。副会長と会長が同時に学園を留守にするのは避けた方が良かったです。それに、美紀はシャルロットとクラスメイトですからね。マドカや本音でも良かったのですが、一番冷静な判断を出来るであろう美紀を今回同行させたのです」

「兄さま、それは私や本音が冷静な判断を出来ないと思われているのですか？」

「そうじゃないが、美紀が一番冷静なのはマドカだって分かってるだろ？ それに、本音はどうも落ち着きが無いし……」

「ほえ？」

一夏に名前を呼ばれ首を傾げる本音を見て、全員が一夏が何を言いたいのかを理解した。つまり彼女では護衛として不安が残るのだ。

「そういう事なら仕方ないわね……一応納得してあげる」

「ありがとうございます」

「では、シャルロット・デュノアさん。改めて転校の手続きをしてもらいますので生徒会室までお願いします。それから、新しい制服も用意できていますので、そちらにお着替えください」

「分かりました。あつ、僕のルームメイトは？」

「ラウラ・ボーデヴィツヒさんです」

「あの銀髪の軍人か……とところでそのラウラ・ボーデヴィツヒの専用機のデータはありますか？」

一夏の目が学生のものから技術者のもの変わった事に、刀奈、虚、簪、美紀は気付いたが他のメンバーは気付かなかった。

「一夏、あの子の事が気になるの？」

「気になると言えば気になるな。同じトラウマ持ちのようだし」

前半部分だけを聞いたシャルロットは少し不貞腐れたような顔をしたが、後半までしっかりと聞いた残りのメンバーは、一夏が何に興味を持ったのかを理解した。

「ラウラウ、千冬先生と千夏先生には逆らえないようだしねー」

「ラウラウって、俺たちがいない一日の間に随分と親しそうだな」

「ウチのクラスのマスコットだからね」

「本音もマスコットの存在だった気が……」

一夏が零した言葉に、美紀が苦笑いを浮かべる。実は彼女も同じような事を考えていたのだろうと、更識所属の面々は正確に理解したのだった。

「とりあえず、お帰りなさい、一夏君」

「ええ、ただいま戻りました」

授業が始まるまで、まだ少しだけ時間があるという事で、一夏たちは少し横になる事にした。もちろん、自分たちの部屋で。

事情説明

一日で帰って来た一夏たちを、クラスメイト達は温かく迎えてくれた。

「お帰りなさい、一夏君」

「ただいま。ちよつと強行軍だったけど思い通りに事が進んだ」

「内容は知らないけど、一夏君たちに掛ければ何でも思い通りになるんじゃないの？」

「静寂は更識を何だと思ってるんだ……無理な事だつて当然あるさ」

HRまでの僅かな時間をクラスメイトとの談笑の時間にあて、一夏は彼女の登場を待った。

「はい、皆さん。今日は転校生——というか、正式に転校してきた子を紹介します」

「皆さん、改めて初めまして。更識企業フランス支部支部長・シャルロット・デュノアです。訳があつて男子として編入しましたが、すぐ一夏たちに見破られ、そして僕の家の問題を一夏たち更識企業が解決してくれたおかげでこの場所に戻ってこられました。これから三年間この学園で勉強し、卒業後は更識の支部長の名に恥じない働きをしたいと思つています。これからよろしくお願いします」

シャルロットの自己紹介に、クラス中から一夏へと視線が向けられた。その視線を遮るように美紀が一夏の側に移動し、そして説明役を買って出た。

「私たちが昨日学校を休んだ理由は、更識企業とデュノア社の間にあった契約が原因だったんです。デュノア社が更識企業に対して反逆とも取れる動きを見せたので、前々から調査していて、一昨日シャルロットさんが『男子』として編入してきた事で違約行為が確定し、その制裁の為にフランスまで行っていたのです。そこでデュノア社に対する報復として、デュノア社は更識企業に併合、前社長は解任の運びとなり、新たにシャルロットさんをトップとする企業に生まれ変わりました。もちろん、シャルロットさんは学生なので三年間は更識から人を派遣してはいますが、卒業後はシャルロットさんが言ったように彼女に頑張ってもらおう予定です」

「でも、それって更識君の一存で決められる事なの？」

「一夏さんは現当主の名代として活動した実績もありますし、日本・フランス両政府との交渉役も務めました。更識企業も旧デュノア社も一夏さんの決定に逆らうつもりはありませんでしたし、日本・フランス両政府もこの決定に異議は申し出ませんでした」

実際は一夏が脅してフランス政府を黙らせたのだが、それは教える必要の無い事なの

で美紀は黙っていた。

「併合したからと言って、更識企業がフランスに肩入れするわけではありません。まあ、その企業から代表に選ばれたのなら仕方ありませんがね」

「どういう事ですか？」

イギリス代表候補生であり、同じヨーロッパの国の事が気になったセシリアが美紀に問いかける。

「今回の併合に伴い、シャルロットさんは候補生の地位を辞して新たな人を推薦しました。イタリア代表候補生の身でありながら自由国籍を希望していたアメリカンカルラさんが更識企業の推薦でフランス国籍を取得、そして空いた候補生の地位に着きました」

「では、ラファール・リヴァイブ・カスタムIIはそのアメリカさんがお使いに？」

「いえ、このラファール・カスタムはシャルロットさんがIS学園在籍の三年間は使用いたしませんので、アメリカンカルラさんの専用機は更識で用意する事になりました。フランスの候補生ではありませんが、アメリカンカルラさんは更識所属とみなされますので抗議などはフランス政府では無く更識企業にお願いします」

国同士なら色々問題が発生しただろうが、一夏はそれを避ける為にエイミイを更識所属扱いするように根回しをしている。その上で自由国籍を取得させフランスの候補生の地位を確立させたのだ。

「ですが、フランスにコアが増えるのを他国が黙つてるとは思えません……」

「各国に配布されているのは篠ノ之東博士が造つたコアです。お忘れかもしれませんが、更識所属のＩＳは独自開発されたコアを使用しています。だから更識所属のアメリカさんに専用機を造つたとしても、それは国に付随するものでは無く個人に付随するものとなります。各国に配布されたコア数に変動はありません」

「つ、つまり……更識所属になればコアの問題を気にする事無く専用機を与えられるという事ですか？」

「気にする事無く、とまでは行きませんが、比較的簡単に専用機を所持する事が可能です。貸出では無く所持ですので、ややこしい政府との契約も存在しません。現に候補生ではない本音が専用機を持っているのは更識所属だからです。もう一つ言えば、引退した碧さんが専用機を持つたままなのもその為です」

織斑姉妹も専用機を所持したままだが、これは日本政府からでは無く篠ノ之東個人から二人に贈られたものだからだ。つまり日本政府が所有しているコアの中に、織斑姉妹

の専用機や更識所属の専用機のコアは含まれてはいないのである。

「では、何故そのアメリカ⇨カルラさんなのですか？ 他の人でもよろしいではありませんか？」

「ええ、問題はありません。なのでアメリカ⇨カルラさんなのです」

「どういう事ですの？」

「彼女は私たちを通じて一夏さんに相談していたのです。丁度デユノア社の問題があったので、タイミング良くアメリカさんは更識の力を借りる事が出来ただけです。もし相談していたのが相川さんや鷹月さんだったとしても、同じ結果だったでしょうね」

ようはタイミングだけだと説明した美紀に、クラス中から相談しておけばという空気が醸し出されたのだった。

ラウラのお願い

美紀の説明が終わったタイミングで、一夏に近づく小さな影が一つ。銀髪はその影は、一夏の目の前まで移動すると、直立不動の姿勢を取った。

「何かご用でしょうか、ラウラ・ボーデヴィツヒさん」

「一つお願いがあります」

「何でしょうか？ 専用機を既に所持している貴女が俺にお願いとは。さすがにドイツ政府が開発に力を入れているシヴアルツェア・レーゲンの改良なんて請け負いませぬからね」

「違う！ あつ、いや……違います」

「？」

怒鳴り付けた次の瞬間には大人しくなったラウラに、一夏は違和感を覚え背後を確認する。そこには今にも殴りかかりそうな雰囲気をした姉妹が立っていた。

「それで、俺に何をお願いしたいというのですか？」

「一度模擬戦をお願いしたいのです。聞くところによれば、貴方はそのイギリス代表

候補生を一瞬で屠ったとか」

「実力者と戦いたい、と思っっているなら俺じゃ無くマドカや本音、美紀に模擬戦を挑んだ方が良いでしょう。俺は更識所属の人間の中で一番弱いからな」

一夏の言葉を、ラウラは謙遜と受け取った。更識所属の強さは候補生であるラウラも知っているが、あの織斑姉妹が溺愛する男が弱いはずは無いという固定概念が彼女の中には存在するのだ。

「私が知りたいのは貴方の実力です。お時間があるのでしたら一戦交えていただきたい」

「その勝負、生徒会長権限で許可します」

「刀奈さん……どこから現われてるんですか」

「更識、今回は見逃すがHRをサボるとは良い度胸だ」

「だが、わたしたちも一夏の試合は見たいので教師権限でも許可する」

「はあ……じゃあ今日の放課後、第一アリーナに来てください。時間は三十分くらいしか取れませんので、勝敗が付かなくても文句は言わないでくださいよね」

「分かりました。感謝します」

一夏の提案を、ラウラは敬礼の形で受け容れる。軍人なので仕方ないかと一夏は諦めたが、指導者であった二人はその行動を指摘する。

「ラウラ、ここは軍では無い」

「普通の返事を出来ないのか、バカ者が」

「ハッ！ 申し訳ありません、織斑教官！」

「学校では織斑先生、もしくは千冬（千夏）先生だ」

そんなやり取りの最中で、一夏は刀奈の姿が見えないのに気が付く。

「何時の間に捕まえたんですか、碧さん」

「一応教師ですから。サボりの生徒を見逃すわけにはいきませんし」

「ゴメンなさい、碧さん。だから虚ちゃんに言うのだけは許して」

主と従者なのだが、学校では教師と生徒。刀奈が碧に懇願する光景を一夏は何となく眺めていた。その横からは、言われの無い怒りが込められた視線を向けられているのだが、一夏はその視線に気づかないフリを続けたのだった。

昼休みになり、一夏は美紀たちと簪と合流して食堂へやって来た。そして料理を持って来てすぐに話題は放課後の模擬戦に焦点が集まる。

「一夏、ドイツからの転校生と模擬戦するんだってね」

「仕方ないだろ。刀奈さんが強権発動してアリーナ使用を許可して、更に織斑姉妹もそれに同調したんだから……」

「一夏さんなら問題無く勝てそうですね」

「いっちは戦いが好きじゃないだけで、弱いわけじゃないもんね」

「そうは言ってもな……フランスの事もあるし、やる事が山積みなんだよ……」

エイミイから専用機の希望を聞いたり、束から貰ったコアを一夏なりにアレンジしたりと、放課後はそういうった事に当てるつもりだったので、一夏の予定はガラリと変わった

てしまうのだ。

「一夏なら瞬殺出来るんじゃない？」

「バカ言うなよ……ドイツ代表候補生を真つ向からねじ伏せる事なんて出来るわけ無いだろ」

「何時もみたいに別角度から攻めれば良いじゃないですか」

「いや、シユヴァルツエア・レーゲンのデータが欲しいし、少しくらいは正面から打ち合わない」と

「おおー、いっちーが科学者の目をしてるよ〜」

何時もなら他の人が戦っている時にデータ収集をするのだが、折角の機会だからと一夏は自分で戦いながらデータを取ろうとしていたのだ。

「実戦の恐怖も再現出来れば、より訓練に役立つしな」

「VTSですね。あのシステムのお陰で一年生は訓練機が借りられなくても復習が出来ると感謝しています」

「訓練機の数があっても、アリーナがな……」

「使用時間が短い人もいれば長い人もいるからね。特に二、三年生は一年生よりアリーナを使用出来る時間が長いし」

より実践的な授業になる二、三年生は一年生よりアリーナを使える時間が長い。これは織斑姉妹や学園が許可したルールであり、生徒会の承認も得ているのだ。まあ、刀奈が良く書類を見ずに認印を押ししたのが原因なのだが。

「彼女もVTSを使うだろうし、自分の機体があれば訓練の役に立つだろう。もちろん、対戦相手としては全員に使えるようにするが、シユヴァルツエア・レーゲンに乗れるのはラウラ・ボーデヴィツヒさんだけにするからな。ワクワクするなよ、本音」

「ラウラの機体、ちよつと使いたかったな……ねえねえいつちー、私のパスワードでもラウラの機体を使えるようにしてくれない？」

「ダメだ。いい加減土竜だけを控えよ……」

アクセス履歴を閲覧できる一夏は、本音が自分の専用機以外で遊んでいる事も知っている。だからではないが、本音の専用機である土竜の機嫌が最近悪い事も知っているのだった。

「使ってるよ。でも、偶には他の機体も使いたいじゃん？」

「偶について頻度じゃないだろ、お前は……」

一夏が零したセリフに、簪と美紀も頷いて同意したのだった。

ラウラとの模擬戦

一夏との模擬戦を前に、ラウラ・ボーデヴィツヒはピットで瞑想をしていた。尊敬する織斑千冬・千夏姉妹が溺愛する弟であり、噂ではイギリス代表候補生であるセシリア
|| オルコットを瞬殺したほどの猛者を相手に、ラウラは彼女には似合わず興奮していた。

「教官の弟と言うだけでも楽しみだが、形だけでも候補生であるあの金髪を瞬殺した実力……そして更識製の専用機的能力、この身で体験させてもらう」

軍属とはいえ彼女も候補生、いずれは更識製の専用機持ちと戦う日が来るだろう。その日の為にも一夏との模擬戦は是非とも体験したかったのだろう。ラウラは待ち合わせの三十分前からピットに入り、そして一夏の到着を待っていた。

「おまたせ……待たせちゃったかな？」

「いや、私が早すぎただけだ。まだ時間前だし問題は無い」

「そう言ってもらえると助かる。織斑姉妹や刀奈さんたちを何とか宥めてモニター室で勘弁してもらってたんだ」

おそらくはアリーナかピットまでついて来るつもりだったのだろうと、ラウラも一夏の疲れ具合から想像出来た。

「貴様は何故そこまで織斑教官に想われている？ 何故私よりお前の方を取るんだ？」

「何故と言われても……記憶を失っているから、何であそこまで溺愛してるのか俺にも分からない。血縁だから、って事もあるんだろうけどな」

少し遠い目をした一夏に、ラウラは頭を下げる。

「すまない。記憶喪失だという事は聞いていたのだが、その事を失念してしまっていた」

「ああ、別に構わないさ。特に不便だと思った事は無い……いや、一個だけあったな」

「それは？」

不便は無い、と言いかけて一つだけあると言った一夏に、ラウラは純粋な興味で質問をした。

「小学生の頃、篠ノ之箒が必要以上に俺にかまってきた理由が分からないんだ。周りの話では記憶を失う前からそれ程親しかった訳では無いそうなんだよ……なのに記憶を失った俺に必要な以上に近づき、そして周りから人を遠ざけようとした理由がな……」

「それは、貴方の特別になろうとしたのではないかと。私も本当は貴方を排除して織斑教官の特別になろうとしたからな」

「……そんな考えは出て来なかったな。しかし、俺を排除しても織斑姉妹にはマドカがいるぞ」

「そのようですね。ですので私は、貴方の実力を知る事にした。教官に認められている貴方に近づき、少しでも教官に近づこうと！」

「……正直に言うのは悪い事では無いですが、それをはつきりというのはさすがに……まあ良いですけど」

「？」

世間に疎いラウラは、一夏が何を懸念しているのか分からない様子だった。時間になったので一夏は自分のピットに移動して、互いにISを展開してアリーナへと出ていったのだった。

モニター室では、織斑姉妹と更識姉妹、布仏姉妹に美紀、そして碧といった面々に見られながら、真耶がモニター操作をしていた。

「何で私が……デユノアさんの再転校の手続きとか色々書類が溜まってますけど……」

「三十分くらい問題無いだろ。そもそもお前がとろいから仕事が溜まるんだろ」

「わたしたちは既に仕事は終わらせているからな」

「貴女たちは真耶に仕事を押し付けたからでしょ。ちゃんと自分でやった方が良いでしょう」

「そのうち一夏君にバレて、怒られるかもしれないし」

「一夏に怒られるだ?!?」

碧と刀奈の言葉に、織斑姉妹は驚き——何故か恍惚の笑みを浮かべている。

「ねえねえかんちゃん、千冬先生と千夏先生は何で嬉しそうなの?」

「さあ？ 美紀は分かる？」

「ううん、分からないかな……気にしちやダメな事だよ、きつと」

「気になるなく……おねくちゃんは分かる？」

「いえ、私にも分かりません」

本音以外は全員何故織斑姉妹が恍惚の笑みを浮かべているのかに見当はついていないが、それを本音に教えるわけにはいかない。ある意味純粋な本音は、その事を周りに言いつらさ可能性が高いのだ。

もちろん、言いふらしたところで悪いのは本音では無く、人前でこんな顔をしている織斑姉妹なのだが、この姉妹にとってそんな事は関係なく、自分たちの失態を言いふらした本音に制裁を加えるだろう。当然その時には一夏にも話が伝わっているだろうし、一夏なら本音が悪くないと弁護してくれるだろう。そうなると本当に織斑姉妹は一夏に怒られるわけで、それが制裁では無くご褒美になつてしまうので黙っているのだ。

「あれがドイツの第三世代 I S、シユヴァルツエア・レーゲンですか」

「なかなか強そうですね」

「まあ一夏君なら問題ないでしょ。現に一発も攻撃当たつて無いし」

「珍しく観察してる。本当にデータ収集をするつもりなんだね」

「一夏さんなら直接対戦しなくても、私たちの誰かとボーデヴィツヒさんとを戦わせればデータ収集出来るんですけどね」

偶々一夏自身が模擬戦を挑まれたからこういう形でデータ収集をしているのだと、更識所属の面々はちやんと理解している。だが織斑姉妹と真耶は一夏の観察眼がそのまま優れているとは知らなかったようだ。

「見ただけで分かるのか？」

「さすがにわたしや千冬も、見ただけでは強さは分からん。強いか弱いかは分かるが」
「生徒より分析能力に劣る私って、やっぱり教師に向いていないんでしょうか……」

「一夏さんが特殊なだけで、真耶は頑張ってるわよ……多分」

「多分っ!? 碧先輩、それって慰めてませんよね!？」

モニター室でこたごたしている間に、一夏がラウラの一瞬の隙を突いてSEを削っていた。そしてタイムアップを迎え、SE残量で一夏が勝利したのだった。

ドイツの問題

模擬戦を終えたラウラの許に、闇鴉を解除した一夏が訪ねてきた。

「何か用か？」

「いえ、その専用機——シユヴァルツエア・レーゲンに禁止されているシステムが搭載されている可能性があるんですけど」

「禁止されているシステム？ いったい何の事だ」

「VTシステム、と言えはお解りになられますか？」

「VTシステム——ヴァルキリー・トレース・システムだと!」

ラウラもIS乗りとして一応の知識は持ち合わせている。だから一夏が言いたい事もだいたい見当はついていた。

「貴女も同意してこのシステムを搭載させたのかと思いましたが、今の驚き方は知らなかったようですね。VTシステムは操縦者に著しくダメージを与える可能性がある為、研究開発は禁止されています。そのシステムがシユヴァルツエア・レーゲンに搭載されている可能性がある」

「何故そんな事が分かるんだ？ 三十分戦ったくらいで」

「私はI Sの整備も担当していますので、違和感を覚えたんですよ。それで模擬戦の後半はシュヴァルツエア・レーゲンの解析を行っていました」

「……真面目に戦っていなかったと言うのか」

「いえ、回避行動は真面目にやらないと危ないですから、集中はしていました。ただ攻撃に割く余裕は無かったですけどね」

苦笑い気味の笑顔を浮かべる一夏に、ラウラは肩の力を抜いて会話を続けた。

「つまり、攻撃する意志が無かったお前に、私は勝てなかったと言うのか」

「避ける事には必死でしたよ。少しでも解析に意識を集中させたら危なかったですし。だから時間がかかりました」

「……で、そのVTシステムの起動条件は何なのだ？」

のらりくらりと躲かれるので、ラウラは模擬戦に関して追及する事を諦めてVTシステムの話に切り替える。その切り替えに応じて、一夏の表情に厳しさが増した。

「おそらくですが、貴女が更なる力を欲した時、でしょうね。実際に調べてみなければ分かりませんが、織斑千冬の動きをトレースした設定になってるでしょう。並みの人間が

織斑千冬と同じ動きをすれば、全身にかなりの負担が掛かります。それを自分の意思とは関係なく行わされれば、最悪日常生活にも支障は出るでしょう。ましてやISの力も加味されれば、最悪全身がバラバラになるくらいの衝撃です」

「……何故ドイツ政府はそんな大事な事を私に黙っていた」

「貴女が試験管ベビー——つまりドイツ政府にとつては使い捨ての駒だったから、かもしれませんね。貴女は人では無く駒、と思われていたのでしょう」

一夏の言葉に、ラウラは衝撃を受け膝をついてしまふ。それくらい衝撃的な事であり、自分が人間とは思われていなかったのだと実感させられたのだ。

「ラウラ・ボーデヴィツヒさん」

「……何だ？」

「貴女は何者ですか？」

「……………」

一夏の問いかけに対する答えを、ラウラは持ち合わせていなかった。たつた今自分は人間ではないと思ひ知らされたばかりで、名前も単なる識別表記に過ぎなかったのだと思ひ知らされたのだから。

「何者でもないのなら、貴女は『ラウラ・ボーデヴィツヒ』になればいい。ここはドイツでも無ければ貴女の出自を知っている人間ばかりでは無い。私は特殊な立ち位置なので知ってますが、あと貴女の事情を知っているのは織斑姉妹と小鳥遊碧くらいです。それなら貴女は『ラウラ・ボーデヴィツヒ』として生活出来るでしょう。VTシステムは更識の方で解除しますので、一時的にシュヴァルツエア・レーゲンを預かりたいのですが」

「……何故お前はそんな風に考えられる？ 何故そこまで強い心を持っている？」

「私も過去に色々ありました。貴女と同じようにとある人物に対して強いトラウマを持っていきます。ですが、そんな私を支えてくれる人たちがいましたので、だから私は強くないと思います。貴女も支えてくれる人を探し、強く生きてください」

少し恥ずかしそうに笑いながら、一夏はラウラに手を伸ばした。専用機を手渡すように求められたと勘違いしたラウラは、待機状態のシュヴァルツエア・レーゲンを一夏に差しだした。しかし一夏は笑いながら首を横に振り、シュヴァルツエア・レーゲンを受け取ってからラウラの手を掴んだ。

「微力ながら。私も貴女が強くいられるようにお手伝いしますよ。もちろんクラスメイトや更識所属の人間も貴女を支えてくれるでしょう。ドイツにも貴女を慕ってくれる

人や心配してくれる人がいるかもしれないませんが、そういう人は多い方が良いでしょう？」

「……完敗です。貴方はI S戦闘や頭脳戦だけではなく、心も強く偉大だ。貴方に敵対意識を持つていた自分が恥ずかしいです」

「誰かに認められたいと願った結果、私が邪魔だったのでしょうか。ですがそう思う事も間違いではないと思いますよ。思うだけなら自由です。誰にも迷惑はかけていませんから。ただし、実行に移すのはダメですからね」

そう言い残して一夏はシユヴァルツエア・レーゲンを持ってピットから出ていった。そんな一夏を見送ったラウラは、懐から携帯を取り出した。

「クラリツサ、私だ」

『どうかしましたか、隊長』

「更識一夏と話したのだが、こう……心がぼかぼかした感じがするのだが、これは何だ？」

『どのようなやり取りの後で、そんな感じになられたのですか？』

ラウラは一連のやり取りをクラリツサに伝えた。するとクラリツサは一通り絶叫し

た後にラウラに告げる。

『それは妹を心配するお兄ちゃんですよ！ 更識一夏さんの事を「お兄ちゃん」と呼んでみるのは如何でしょうか？』

「お兄ちゃんか……」

常識に疎いラウラは、こうして間違った知識を与えられるのだった……

一夏の苛立ち

シユヴァルツェア・レーゲンに積まれたVTシステムの解除を行っている一夏の許に、美紀が飛び込んできた。整備室自体は解放された空間なので誰でも入って来れるのだが、一夏が使用している時は特別なパスワードを入力しなければ入ってこれないので、誰かが入ってきてても一夏は更識関係者だと分かるので身構える事は無いのだが、さすがに今回はビックリした様子で振り返った。

「美紀、何かあったのか？」

「あつ、あの……今お父さんから電話がありました……」

「楯無さんがどうかしたのか？」

「この空間に盗聴器などが無い事は確認済みだが、念には念を入れて一夏は「尊」と呼ばずに「楯無」と呼んだ。

「フランス政府からの報告で、前デユノア社社長とその家族が遺体で発見されたって」

「……自殺、じゃないよな？」

「明らかな他殺体だとの報告です。残虐非道の限りを尽くした殺し方だと……映像があ

るようですけど、私は見れませんでした」

「普通の女子高生には無理だろうな。ありがとう、そこに置いといてくれ」

美紀を労い、一夏は一先ずシュヴァルツエア・レーゲンのシステム変更作業を中断して、美紀が置いて行つた映像を見る事にした。

「これは……酷いな……」

顔の識別が不可能な程ズタズタにされた顔が映り、さすがの一夏でも顔を顰めた。まさかここまでハッキリと映つた映像だとは思つていなかったのだ。

「これはこれは……」

「闇鴉、何か分かるのか？」

「巧妙に隠していますが、ISで与えられた傷が幾つも見られますね。少なくとも殺害者の一人は女性、ISを持っていると思われまますね」

「同じISだから分かるのか？ この映像では俺には分からないが……」

「直視出来ない以上判別は無理ですよ。人間の心を持たない私だから判別出来ただけです」

「そうか……ISを使って殺人を犯すなど、許せないな……」

本来篠ノ之東が開発した目的からも逸脱している現在のISだが、それでも戦争で使えない、人を殺す為に使わないと決められていたので一夏も口を挿む事はしなかったのだ。だが今回、闇鴉の分析でISを使った殺人が行われたと判明したので、一夏の心は怒りで満ちていた。

「一夏さん、私たちの為に怒ってくれるのは嬉しいですが、犯人が分からない以上捕まえる事は出来ません。フランスにいる更識所属の方々にこの件を報告し、何か分かれば伝えてもらうように手配しましょう」

「……そうだな。現地にいないんだから何もできないな。すまない、闇鴉……ちよつと冷静さを失ってた」

「いえ、一夏さんがISの事を思ってくれているだけで私は嬉しいですから」

一夏は懐から携帯を取りだし、尊に暗号メールを送る。表向きのトップは尊なので、一夏は直接命令を下す事はしないのだ。

「さてと、フランスの問題は尊さんに任せるとしても、ドイツのこの問題はさすがに見逃せないな……織斑千冬を模したヴァルキリー・トレース、そんなものを普通の人間が発動させれば四肢が千切れ去ってもおかしくないんだぞ」

「I Sの自由も無くなりますしね。操縦者が死ぬ確率はかなり高いでしょう」
「闇鴉、このデータを保存しておいてくれ。後でP Cに移すまでで良いから」
「はい、記憶しました」

シュヴァルツェア・レーゲンに組み込まれていたV Tシステムのデータを複写し、一夏は完全にそのシステムをシュヴァルツェア・レーゲンの中から排除した。

「他にはおかしきシステムはなさそうだな……システムのアップデートをしてラウラさんに返すとするか」

「シュヴァルツェア・レーゲンも喜んでいきますよ」

「一応聞こえてるから分かってるが、やはり闇鴉の方がハッキリとシュヴァルツェア・レーゲンの声が聞き取れるんだな」

「普通の人はI Sの声すら聞こえないんですから、一夏さんは自信を持って良いんですよ」

最終チェックを終え、一夏は整備室から移動してラウラの部屋へと向かう。途中寮長室によってドイツ政府に対する抗議文章に署名して欲しいと頼むと――

「一夏のお断りを断る訳が無い！」

「一夏に頼まれるなら、抗議文章だろうが連帯保証人だろうがなんだってサインするぞ！」

——とバカな事言う姉二人に説教をしたのだった。

バカ二人に説教をしていた所為で、一夏がラウラたちの部屋に到着したのは夕食時だった。

「失礼、ラウラ・ボーデヴィツヒさんはご在室ですか？」

『はい、今開けます』

中からラウラのものとは違う声が返って来たが、その声の主が誰なのか分かっていない。一夏は身構える事無く扉が開かれるのを待った。

「いらつしやい、一夏。ラウラなら今シャワー浴びてるからちよつと待つてね」

「いや、出直す事にしよう。さすがに女子の部屋で待つのはちよつと……」

「一夏のルームメイトって四月一日さんなんでしょ？ だったら今更だよ。それに僕は、一夏の部下なんだからさ」

それが何の根拠になるのか一夏には分からなかったが、わざわざ出直すのも面倒だつ

たので部屋に入る事にした。

「一夏つて凄いい人なんだね。僕、改めて尊敬するよ」

「別に大した事は……ラウラ？ 何で裸なんだよ？」

「私はシャワーを浴びてから暫くは服を着ませんので」

恨みがましい目をシャルロットに向けると、両手を合わせて頭を下げていた。

「これ、例のシステムは完全に解除しておいたからな」

「ありがとうございます 『お兄ちゃん』」

「お、お兄ちゃん!？」

ラウラの一言に、一夏とシャルロットの声がハモったのだった。それくらい衝撃の大きい一言だったのだ。

ラウラの幼児退行

ラウラの「お兄ちゃん」発言は、あの時限りのものでは無く、彼女の中で「一夏〓お兄ちゃん」の構図が出来上がってしまったらしい。その事で衝撃を受けたのは一夏が一番——では無く、彼の姉妹が共にラウラに対して詰め寄っていた。

「ラウラ、貴様は何時の間に一夏の妹になったんだ、ん？」

「わたしたちの一夏に随分と馴れ馴れしいではないか。ドイツで言った事を忘れたのか？」

「何でいきなり現れた貴女が、兄さまの事を『お兄ちゃん』と呼ぶんですか！ 私だつて呼べてないのに……」

「ヒウ!? だつて、クラリツサがお兄ちゃんだつて言ったから……」

織斑姉妹（千冬と千夏）に対するトラウマが発動しており、ラウラの口調は完全に幼児退行を起こしていた。犯人の名前を聞きだした千冬と千夏は、アイコンタクトで決断してラウラから携帯を拝借する。

『隊長、どうかなさいましたか？ 一夏お兄ちゃんとは仲良くなれたのですか？』

「ほう、貴様も一夏の事をそう呼ぶのか、クラリツサ」

『隊長じゃない？ いったい誰です？』

「私の声を忘れたのか？ なら思い出させてやろう小娘」

『ま、まさか……織斑千冬教官?!』

「わたしもいるぞ、クラリツサ。無知なラウラに変な事を教え込んだそうだな」

横から割り込むように千夏もクラリツサに声を掛ける。

『変な事ではありません！ オタク文化は日本が世界に誇れる文化ではないですか！』

そして隊長に対する更識一夏さんの優しさは、妹に向けるそれと同じです』

「お前がどう思おうが関係ない。一夏に甘えるチャンスを与えるなど、私たちが見逃す
とでも思ったのか？ 今すぐドイツに向かうから覚悟するんだな」

「何をバカなことを言ってるんですか、貴女たちは……マドカもあまりラウラを責める
な」

ラウラと同室のシャルロットから助けを求められた一夏が、横から織斑姉妹（マドカを含む）に呆れた声を掛けた。

「貴女たちは教師なんですよ？ 仕事を放り投げてドイツ旅行なんて認められるわけ無

いじやないですか。それに、ラウラが私の事をそう呼ぶ事を、私が許可したんです。初めは驚きましたけどね。それから、マドカもそう呼びたいのなら俺は一向に構わないぞ」

「えっ、あつ……いえ、私は今まで通り『兄さま』と呼ばせて頂きます」

「そうか。さて、織斑先生？ その電話を貸していただけないでしょうか」

一夏に睨まれた千冬は、大人しく一夏にラウラの携帯を手渡す。状況が理解出来ない通話相手、クラリツサはしきりに声を掛けてきている。

『織斑教官？ 何があつたのですか？ それと、どうやってドイツに来るつもりなんですか？』

「えっと、まさか、I Sに乗ってくるつもりじやないですよね!?!」

『ご丁寧にどうも。クラリツサ・ハルフオーフと申します。貴方が織斑教官の弟さんで、隊長が慕う「一夏お兄ちゃん」ですか』

「自分より年上の貴女にお兄ちゃんと言われるのは不思議ですが、まあそのようなものですね。それですが、織斑姉妹は大人しくさせましたので、怯える必要はないでしょう。それから、可能でしたらドイツ政府の人間を一人紹介してもらいたいです」

『政府の人間を、でありますか？』

クラリツサの口調が上官に対するもの変わったのを、一夏は特に気にしなかった。多分クラリツサの方も無意識に緊張しているからそうなったのだろうし、それを指摘してまた面倒な事になるのを避けたかったからだ。

「VTシステム、といえば分かりますか？　それがラウラの専用機に搭載されてきました。これが政府の命令で行われていたのなら、ドイツはIS産業に関わる全ての人間から攻撃されても仕方ないでしょうからね。発表はしません、もしドイツ政府がVTシステムの開発に携わっているのでしたら、更識企業代表代理の立場としては遺憾の意を表明したいところです」

『VTシステム……それが隊長の専用機に積まれていたのですか？』

「データは取ってありますので、そちらにお送りしましょうか？　貴女がドイツ政府と繋がっていないのでしたら、ですけどね」

視線をラウラに向けると、彼女はコクコクと首を縦に動かしていた。

「貴女の隊長は貴女の事を信頼しているようですし、この回線を使えば良いのでしょうか？」

『いえ、隊長のPCにある回線をお使いください。そちらは完全に私個人の回線ですの

で』

「分かりました。確認次第また連絡をください。ドイツ政府の人間を紹介していただけるのか否かをお聞かせ願いたい」

『了解しました。もう既に紹介しても良いとは思いますが、実際のデータが見られるのでしたらそれに越したことはありませんので』

通信を切り、一夏は携帯をラウラへと返す。そして、視線で逃げようとしていた織斑姉妹（マドカも含む）を捕まえ、呆れているのを隠そうともしない口調で話しかける。

「まったく……シヤルロットが報告してくれたから間に合いました、何をするつもりだったんですか、貴女たちは」

「いや、一夏と必要以上に仲良くしようとする雌を排除しよう……」

「ドイツで釘を刺したのに忘れているようだからもう一度刺しておこう……」

「兄さまに甘えられるのが羨ましくて……」

素直に謝ったマドカの頭を撫でながら、一夏は千冬と千夏に雷を落とした。その雷は、怒られているわけではないラウラやマドカ、そして背後から見守っていたシヤルロットにとっても恐怖の対象となったのだった。

「ラウラ、PC借りるよ」

「うん、お兄ちゃん」

まだ若干の幼児退行を見せながらも、ラウラは素直に一夏にPCを貸したのだった。

学年別トーナメントのルール

学年別トーナメント戦で優勝すれば、更識企業から専用機が贈られる。そんな噂が立ったが、すぐに消え去った。だが当事者の一人であるエイミイは少し驚いていたのだった。

「まさかあんな噂が立つなんて……一夏君つて随分注目されてるんだ……され過ぎないようにも思えるけど」

自分に専用機を造ってくれると約束してくれたのが保健室、まさか聞き耳を立てていた人物がいたのではないか、エイミイはずっと気になっていた。

「(だけど、一夏君の他にも、簪に美紀、本音だつて気配には敏いはずだし……)」

いったい何処から情報が漏れたのだろうと、エイミイは答えが分からない問いで頭を悩ませていたのだった。

「エイミイ、どうかしたの？」

「あつ、簪。あの噂つて何処から出てきたのかなーつて」

「噂？ 専用機がどうこうってやつ？」

「うん。あの話が誰かに聞かれてた——なんて事は無いんだよね？」

「間違いないよ。私が気付かなくても美紀と一夏がいたから」

気配察知においては、簪より美紀の方が上だ。IS学園に入って一夏と一緒にいる事が多い美紀だからではないが、ここ最近の気配を探る事に関する美紀の成長は著しいものがあるのだ。

「じゃあ単なる噂だったのかなあ……それにしても、そろそろエントリー締め切りなのに、具体的な事を何も教えてもらって無いんだけど」

「多分私たちの所為かな……更識所属は参加しても良いのかどうかで揉めてるんじゃないかな」

一年だけでも、更識所属は五人いる。二年、三年にも更識所属は在籍しているので、それを含めてどうするかを検討しているのだらうと簪は考えていたのだった。

「あつ、かんちゃーん！ いっちーが探してたよ」

「一夏が？」

「うん。カルカルも一緒なら丁度良かった。一緒に来て〜」

「えっ、私も？」

簪だけなら完全に更識の用事だと思えたのだが、エイミイも一緒だと違う可能性も出てくる。二人は揃って首を傾げたが、とりあえず一夏の待つ部屋へ――

「一夏は何処にいるの？」

「ほえ？ どこだっけ……」

「……」

簪は携帯を取りだして一夏に所在を確認し、それから移動したのだった。

一夏の部屋には現在、一夏、美紀、マドカ、刀奈、虚に加え、本音が呼びに行つた簪とエイミーを含む八人が集まっている。エイミーだけ更識所属ではないが、いずれそうなるのでここにI S学園在籍の学生で、更識所属全員が集まっている事になる。

「一夏君、話つて何?」

「学年別トーナメントの件ですよ、刀奈さん」

「それでしたら、我々更識所属は出場出来ない事になつたのではないのですか?」

「職員室でもそのような噂が立っていたようですが、どうやら出られるようです。ただし、何故かペアマッチになり、更識所属の面々はそれぞれ更識所属では無いパートナーを見つけられるのなら参加OKだという事です」

「つまり、専用機持ち同士だろうが、更識所属じゃ無ければ大丈夫なの?」

簪の疑問を、一夏は軽く頷いて肯定した。

「見つけられなくても、当日にルーレットでペアを決める事が出来るようだから、登録だけは出来るようだ。ただし、更識所属の面々しか残つて無かつた場合は、残念ながら参加不可となるらしい。エイミーはまだ正式に更識所属では無いから、ここにいるメンバーとペアを組んでも問題は無い」

「いっちーは参加するの?」

「俺は出ない。エイミイの専用機をどうするか更識企業で会議があるからな。当日は学園にいない可能性が高い」

「なんか、ゴメンね……私が無理なお願ひしたばかりに」

「エイミイだけが問題じゃないから気にするな……」

一夏の頭の中には、この間見た前デユノア社社長一家の惨殺死体の映像が浮かんでいた。ISを殺人に使うような組織が存在していると認識した一夏は、尊に頼んでその組織のあぶり出しに動いている。その経過報告もあるので、一夏はトーナメント当日は高確率でIS学園にはいないだろう。

「私や虚ちゃんは学年が違うから別に探さなきゃだけど、エイミイちゃんは誰とペアを組むのかしら?」

「そうですね……私は中近距離ですから、遠距離が得意な人の方が良いと思うんですよ……美紀、私とペアを組んでくれる?」

「良いですよ。簪ちゃんとは違う人とペアを組むのも訓練になるでしょうしね」

「さすが候補生。私も美紀と違う遠距離の人を探さないと……セシリアさんなら大丈夫かな?」

「じゃあ私はリンリンにお願いしようかな」

「わ、私は……誰とペアを組めばいいのでしょうか？」

困った顔で一夏に問うマドカに、一夏は首を捻った。

「白式は完全近距離機体だから……遠距離が得意な人が良いだろう。誰かいたかな……」

「シャルルンは？」

「シャルロット？ そうだな、あの機体は中遠距離型だし、白式との相性も悪くは無いはずだな」

「シャルロットですか。兄さまが問題無いと判断されたのであれば、私が文句を言う道理もありませんね。今すぐお願いして来ます！」

「じゃあ私もリンリンにお願いしに行こう」

「じゃあ私もセシリアさんをお願いしに行かなきゃ」

それぞれのペア希望者の許へ向かった三人を見送りながら、一夏は苦笑いを浮かべながら視線を携帯へと向けた。

「一夏君、それって何を見てるの？」

「更識の資料だ。見ても良いが一生監視がつくぞ？」
「遠慮しとこっかな」

笑顔で脅されたエイミイは、大人しく一夏の部屋を辞した。一夏が見ていたのが更識の資料などでは無く、デュノア前社長一家惨殺の資料だとは気付かなかつたのだった。

お兄ちゃんの心配事

トーナメントのルールが発表されてから、参加希望でパートナーが見つかっていない人は慌てているので、学園中が慌ただしい雰囲気にも包まれている。そんな中でも、一夏は落ち着いた雰囲気で一日を過ごしていた。

「一夏君は参加しないの?」

「あまり争い事は好きじゃないんだ。それに、更識所属と当たれば負けるからな」

「ふーん……この間フランスまで行って争ってきた人の言葉とは思えないね」

静寐の感想とも皮肉とも取れるセリフに、一夏は苦笑いを浮かべた。

「あれだつて俺から挑んだわけじゃないぞ。向こうがあんなことを計画してきたから、それに対抗しただけで……」

「まあ、学園単位と世界単位と一緒にしちゃダメだろうけど、それでも一夏君が争いごとを好まないとは意外だったかな」

「静寐は俺を何だと思ってるんだ……とところで、静寐は参加しないのか?」

一夏が記憶している限りでは、参加者の中に静寐の名前は無かったのだ。これだけ自分に聞いて来るのだから、一夏も静寐の事情を聞いてみたいと思っただろう。

「私？ 私が出てても大して活躍出来ないしね。それに、専用機持ちがこれだけの学年で、訓練機で挑もうと思うほど、私は強くないもの。それこそ、一夏君よりも弱いわよ、絶対にね」

「静寐さん、一夏さんには私がいいますからね。更識所属以外に負けさせるつもりはありませんし、一夏さんさえその気なら、本音さんやマドカさんくらいになら勝てる実力はあるんですからね」

「闇鴉……いきなり人の姿になるなよ……俺もビックリするだろ」

一夏が自分の事を弱いというのは、闇鴉が弱いからと言うわけではない。一夏自身に勝つつもりがあまりなく「怪我をしなければ良い」と考えているからだ。その考えは相手にも適応しており、本音やマドカ相手でも一夏は気を使って戦っている——この考えが無ければ、もう少しまともに勝負出来ると闇鴉は考えているのだ。

「だいたい、何故一夏さんは今回のトーナメントに参加しないのですか！ 折角一夏さんの強さを学園中に知らしめるチャンスなのですから！」

「知らしめるも何も……黛先輩の所為で、俺は『強い』と誤解されっぱなしなんだが……」

「實際セシリアさんを瞬殺したんだから、強いんじゃないのかしら？」

「だからあれは織斑千冬先生の動きを——」

「一夏が私を呼んでいると聞いて!!」

「「……………」」

いきなり現れた千冬に、一夏・静寐・闇鴉は呆れた視線を向けた。一夏以外は少し抵抗のある行為だが、それだけ今の千冬は呆れられても仕方ない行動を取ったのだ。

「別呼んでませんよ。話の流れで名前を出しただけです」

「そうか……………ああ、一夏」

「学校では更識と呼んでください。織斑千冬先生」

「……………更識、生徒会長がお前の事を探していたぞ。何でも布仏から匿って欲しいとか何とか」

「何をしたんですか、刀奈さん……………」

千冬からもたらされた情報に頭を悩ませながら、一夏は静寐に別れを告げて刀奈を探しに行く——

「闇鴉、蛟の反応は？」

「生徒会室側のトイレからですね」

——必要もなく闇鴉のセンサーで刀奈の位置を特定したのだった。

刀奈と虚の争いは、割と何時も通りの内容だった。刀奈が虚の地雷を踏んで、そして怒られて逃げるといふ、一つのパターンだった。

「まったく、お嬢様は私を何だと思ってるんですか」

「だからゴメンってば！ 謝ってるじゃない」

「謝っても同じ地雷を踏む刀奈さんですからね……虚さんも信用出来ないんでしょうよ」

二人を落ち着かせる為に、一夏はコーヒーと紅茶を用意する。コーヒーは自分で飲む為で、二人は紅茶だ。

「虚ちゃんが淹れてくれる紅茶も最高だけど、一夏君が淹れてくれる紅茶も格別よね〜」
「お嬢様と同意見なのがちよつとアレですが、確かに一夏さんが淹れてくれる紅茶は美味しいですよね」

「ちよつと!? アレって何よ!」

「まあまあ。ところで、この申請書って学年別トーナメントへの参加希望ですよね?」

山積みになっている申請書に目を通し、一夏が意外な感じを受けているので、刀奈も虚も一夏が手に取った書類を覗きこんだ。

「あら……篠ノ之箒ちゃんの申請書じゃない……」

「参加は自由とはいえ、ペアが見つかるとは思えませんが……」

「ペアが組めなければ当日にルーレット抽選で決まる——とはいえ、篠ノ之とペアを組む事になる人は可哀想です……おや?」

再び申請書の山に手を伸ばした一夏が、今度は驚いた感じで首を傾げた。

「どうかしたの?」

「いや、シャルロットのパートナーなんですけど、てっきりマドカとペアを組んだものだと
思っていたものでして……」

シャルロットの参加申し込み用紙に書かれたペアの名前は、マドカでは無くラウラ
だった。

「どうやら一足遅かったみたいですね。マドカは別の人を見つけられたのか?」

「お兄ちゃんとしては心配?」

「まあそうですね。白式は完全近距離型I Sですから。万が一篠ノ之とペアにでもなっ
たりしたら、最悪でしょうね。戦い方もですが、人間的相性も」

「一夏さんに危害を加えようとする篠ノ之さんと、お兄ちゃんっ子のマドカさんですか
らね……仲間撃ちなんて事も有り得るかもしれませんね」

「当日までにパートナーを見つけ申請すれば、そんな心配は無くなるんですけどね
……」

マドカは決して人付き合いが苦手ではない。苦手ではないが、得意でも無いので、一
夏は何となく心配していたのだ。交友関係は自分とさほど変わらないマドカが、他の

パートナーを見つげられるのかどうか、一夏は数日間その事を気にしていたのだ。

そして、トーナメント当日。マドカはパートナーを見つげる事が出来ずに、ルーレットでパートナーを決める事になってしまったのだ。そしてその相手は――

「マドカのパートナーは篠ノ之か……」

――一夏たちが恐れていた相手だったのだ。

衝撃の展開

マドカは今、頭を抱えて悩んでいた。このままトーナメントに参加するべきか、それとも辞退するべきかを……

「おい」

「……何でしょうか、篠ノ之さん」

どちらとも友好的とは言えないが、マドカの方がまだ大人の対応をしている。だが、その対応も長くは続かないだろう。マドカの顔には明らかに嫌悪感が見て取れるからだ。

「ペアになったが別に貴様と慣れ合うつもりは無い。私は私の目的でこのトーナメントに参加しているのだ。私の邪魔だけはするな」

「邪魔なんてしませんよ。むしろ、貴女に興味も無いですし」

マドカにとって、篠ノ之箒とは敬愛する兄・一夏に暴行を加え、無人機乱入の際に大怪我をしなければならなくなった諸悪の根源でしか無い。ペアになったからと言って友好的な態度を取れるような相手では無い。つまり、相当苛立っているのだ。

「一夏の妹だか何だか知らないが、あまり偉そうにするな。一夏は私の幼馴染で婚約者なのだ！」

「妄想もそこまで行くとは痛々しいを通り越して滑稽ですね。漫談を極めるんですか？」

一夏に婚約者と呼べる相手がいるとすれば、それは更識所属の面々だろう。間違つても箒が婚約者であるわけがない。マドカは確信を持つてそう言い切れる自信があつた。実際一夏と箒が婚約していた場合、その時点で姉二人がこの女を消し去っているだろうと思つて仕方が無いくらい、箒に対するマドカの評価は低い。

「ふん！ 一夏も私の事を好きはずだ！ 貴様ら周りの人間が余計な事をしなければ、今頃子供の一人や二人くらい……」

「兄さまはお前のような勘違い猪武者なんて好きじゃない。だいたい兄さまに好かれると勘違いする理由が分からないですね」

その言葉に箒が殴りかかろうとしたが、タイミング良く対戦相手が発表された。

「ラウラ・ボーデヴィツヒさんとシャルロット・デュノアさんのペアか……強敵です」

「ふん！ あんな小娘と男女に負けるはずが無い」

「（この人が使える訓練機つてあるのかな？）」

マドカはこの前、一夏が零していた言葉を思い出していた。

『篠ノ之はI Sの使い方が荒いから、あまり好かれて無いみたいなんだよな……このままだとI Sを動かせなくなり退学になりかねない』

『兄さま的には、篠ノ之箒がいなくなった方がいいのではありませんか?』

『ん? 個人的にはそうだが、篠ノ之の人生だからな。俺がとやかく言える立場では無いだろ』

『兄さまは優しすぎます。あんな女の事まで兄さまが悩む必要は無いのです』

『マドカ、いくら嫌いな相手でも「あんな女」なんて言ったらダメだぞ』

——一夏とのやり取りを思い出したマドカは、今更ながら何で箒がエントリーしたのが気になったのだった。もちろん、それを本人に聞くなんて事はしなかったが。

モニター室で見学している一夏は、マドカのペアが筈になった事には驚かなかったが、対戦相手がラウラとシャルロットである事には驚いた。

「いきなり候補生二人を相手にするとは……マドカもついて無いな」

「でも一夏さん、篠ノ之さんとペアの時点でマドカちゃんのツキは最悪だったんじゃないんですか？」

「そもそもシャルロットとペアが組めなかった時点で、マドカは辞退するべきだったんですよ。ペアが決まって無い一年生はマドカと篠ノ之だけだったんですから」

参加申請用紙を纏めたモノを碧に手渡し、一夏はモニターに視線を向けた。

「あの訓練機……更識製のものでは無いようですが？」

「えっ？ おかしいですね。IS学園の訓練機は全て更識製を採用しているはずなのですが……」

一夏の指摘に、モニター操作をしていた真耶も首を傾げた。一目で更識製では無いと見抜いた一夏の観察眼については、特にツッコむ事無く……

「そもそも篠ノ之さんに反応してくれるＩＳがまだあつたんですね」

「一応は反応しますよ。ですが、どの子もやる気はあまり出ないようですけどね。ただ、あの訓練機は妙にやる気だな……少し気に掛かるくらいに」

「更識君は篠ノ之さんの事をどう思ってるの？」

真耶の隣でモニター操作を覚えようと必死だった紫陽花が、ふとそんな事を聞いてきた。何故紫陽花が必死なのかと言うと、尊敬する織斑姉妹の役に立てるのならと真耶の技術を盗もうとしているのだ。

「どうと聞かれましたも……古馴染、クラスメイト、ＩＳに嫌われている少女——」
「最後のが酷いわね……」

ほぼすべてのＩＳの声が聞ける一夏にとって、篠ノ之箒という少女はＩＳの中でも嫌われていると知っている。そんな一夏でも、今現在箒が乗っているＩＳの声は聞き取れないのだ。

「あんな子、学園にいたかな……」

「新しく納品されたとかですかね？」

「更識製ではないISを学園が買うとは思えません……」

「少なくとも私は知らないですね」

四人であの訓練機は何処から来たのかを考えていたが、動くのであれば問題は無いだろうという事で、真耶は開始の合図を鳴らした。すると速攻で箒はシャルロットに撃退され、マドカ対二人の構図が出来上がった。

「ラウラの機体にはアクティブ・イナーシャル・キャンセラー、慣性^A停止^I能力^Cがありますし、白式には有効な攻撃手段がありませんし……これは決まりですかね」

「一夏さんの言う通りになりそうですね。ボーデヴィツヒさんがマドカさんの攻撃を受け止め、その背後からデユノアさんが的確に白式のSEを削って行く。見事な連携ですね」

「同部屋だけあって、作戦会議はしやすかったのでしょうかね」

ラウラとシャルロットの連携に感心していた一同だったが、モニターの端で何か光ったのに一夏だけが気付いた。

「すみません、カメラを篠ノ之に向けてください」

「篠ノ之さんに？ 既に戦闘不能になってアリーナから退場したはずで……なっ!?」
『寄越せ！ もっと私に力を!!』

箒が使っていた訓練機が光だし、変形を始める。このプログラムに、一夏は見覚えがあった。

「VTシステム……何故訓練機に……いや、何で篠ノ之がそれを発動してるんだ……」

「真耶、三人と観客に避難勧告を！ 紫陽花は私と一緒に篠ノ之さんを止めに——」

「いや、俺が行きますので、お二人は避難誘導を！ 山田先生は三人と観客に避難勧告を出した後、お二人と一緒に避難誘導をお願いします。自動録画くらい出来ますよね？」

「は、はい……ですが、更識君一人で大丈夫ですか？」

真耶の心配をよそに、一夏は既にアリーナへと飛び出していた。あのシステムだけは、絶対に許せないという気持ちが一夏を突き動かしているなど、真耶には分かりようが無いのだった。

箒救出

目の前で何が起こったのか、マドカたちには理解出来なかった。早々に脱落したはずの箒が何かを叫んだと思った、次の瞬間には彼女は光に包まれていたのだ。

「マドカ、あれって作戦なの？」

「いえ、私はあるの知りません……」

「VTシステム、だと……何故あれが訓練機に……」

ラウラが呟いた言葉に、マドカとシャルロットが驚きの表情を見せる。

「VTシステムですって!? この間兄さまが解除したあれですか!？」

「でも、あれって国際条約で禁止されているんだよね? それが何で訓練機に?」

「そんな事私にも分からない。今分かる事は、ここが危険だという事くらいだろう」

自分がああなっていたかもしれない、という恐怖がラウラを襲っていた。だが不思議と焦りは無く、落ち着いてこの場から回避しようと動いていた。

「あの化け物……もしかして千冬姉さまか?」

「私の機体に組み込まれていたモノと同じシステムのような。お兄ちゃんが組み込むはずが無いから、シユヴァルツェア・レーゲンにVTシステムを組み込んだヤツが持ち込んだ訓練機なのだろうな」

ラウラは自分の機体に組み込まれていたシステムについて、一夏から聞かされていた。その場に一緒にいたシャルロットも、その事は知っている。

「いったい誰が、何のために……」

「二人とも、SEの残量はどのくらいだ」

「僕は三割無いよ」

「私も同じくらいですね」

「……私もだ」

この残量であの化け物を退治出来るなどと、三人は自惚れはしなかった。曲がりなりにも「織斑千冬」が相手なのだ。SEはいくらあっても足りないだろう。

「マドカ、ラウラ、シャルロット」

「兄さま」

「あの機体、一夏の家で造ったヤツじゃないの？」

「いや、あの訓練機は更識製じゃない……誰が持ち込んだのか今調べてるが、それよりも先に避難だ。あいつは俺が引き受ける」

「でもお兄ちゃん。あれは偽物とはいえ千冬教官をトレースしたものの……勝てるの?」

上目遣いで訊ねてくるラウラに、一夏は苦笑い気味に微笑み首を振った——縦にはなく横に。

「勝てるなんて言い切れる相手じゃないし、あのシステムの数値が本当なら、少なくとも掠っただけで致命傷になりかねない。とりあえず俺の任務は、生徒たちが避難するまでの時間稼ぎと、篠ノ之を助けだせるか確認する事の二つだ。そのうち織斑姉妹もやってくるだろうしな」

暮桜と明栴は、今も織斑姉妹が所持している。だが普段は部屋に放置しているので、準備に手間取っているのだ。その時間稼ぎとして、一夏がこの場にやって来たのだとマドカたちは理解した。

「でしたら兄さま、私もお手伝いを——」

「ダメだ。マドカたちは急いでピットに戻り、他の生徒たちと一緒に避難するんだ」

「だったら兄さまも一緒に……」

懇願するマドカの頭を、一夏は優しく撫でた。闇鴉を部分解除して撫でた一夏は、凄く優しい顔をしていた。

「俺は生徒会役員だからな。一緒に避難するわけにはいかない」

「兄さま……分かりました」

「おい！」

「兄さま、絶対に無事で帰ってきてくださいよ」

一夏に指示に従い、マドカが戦線を離脱する。何か言いたそうだったラウラとシャルロットも、ここにおいても役には立てないと判断して戦線を離脱した。

「さてと……時間稼ぎくらいはしっかりしないと……」

変形したISに呑みこまれて箒の場所を、闇鴉のセンサーで探る。個人的な感情を優先するのなら、別に助けなくても良いのだが、ISを使った殺人だけはどうしても許せないのが一夏の心情だった。

『一夏さん、腹部に反応あり。篠ノ之さんはあの場所にいると思われます』

「懐に飛び込んで切り裂いて救出するしかなさそうだな……遠距離攻撃じゃそこまで深

い傷を与えられないだろうし」

『織斑姉妹が来るまで待ちますか？』

「いや、篠ノ之さんの身体ダメージを考えると、そう長い時間待ってられないだろう。『影真似』を使って零落白夜を放てば行けるか？」

『「雲隠れ」を併用しても難しいと思われます。相手は偽物とはいえ織斑千冬、世界最強の称号を持つ者です』

闇鴉の忠告は、一夏にも分かっていた。だがこのままでは、ISが原因で死人が出てしまう。それだけではどうしても耐えられないのだ。

「スピードには対応出来そうだが、あのリーチは厄介だな……」

『やっぱりマドカさんたちに手伝ってもらった方が良かったのでは？』

「今更そんな事を言うなよな……」

闇鴉の言う通り、マドカの白式なら確実にあの化け物の腹部を切り裂き、篠ノ之箒を救い出す事は可能だっただろう。もちろん、一夏や他の二人が注意を惹き付ける事が前提での作戦ではあるが。だが一夏はマドカたちに危険が及ぶのを嫌い、自分がそれを引き受けたのだ。

「二か八か、飛び込んで救出を試みるか……すまん、闇鴉。何時も危険な目に遭わせて」

『私は一夏さんの専用機ですし、一夏さんが危険に飛び込むのは何時も、大切な人を守るのとI Sを助ける時ですからね。そのお手伝いが出るのであれば、私は何処までもお供しますよ』

「助かる……」

一瞬だけ瞼を閉じ、次に開いた時の一夏の目は本気だった。先に相手に攻撃をさせ、それを回避して懐に飛び込み零落白夜を放つ。狙う場所はコアでも、篠ノ之箒がいる場所でも無く、このI Sを止められる場所だ。

既に解析を済ませていた一夏は、何処を狙えば止められるかに見当をつけていた。もちろん一撃で止められない可能性もあったので、一夏と闇鴉はあのような会話をしていたのだ。

「一夏っ！ 避ける!!」

「分かっています!」

救援にきた織斑姉妹の声に反応して、一夏は回避行動を取る。やはり一撃では止めら

れず、反撃を試みたのだろう。一夏はその攻撃をギリギリで躲し、その勢いを利用して相手を倒した。

「後の事はお任せします」

「ああ、ご苦労だったな」

「篠ノ之は保健室に運んでおく。コアは真耶に渡しておくぞ」

「そうしてください。おそらく何処の物か分からないでしょうけどね……」

訓練機のコアは量産されているものだし、プログラムから割り出すのも不可能だと理解している。一夏は闇鴉を解除し、アリーナから部屋へと向かったのだった。

訓練機の解析

V Tシステムから解放された箒は、紫陽花と真耶に任せ、一夏は箒が使用していた訓練機の解析を始めていた。

「元世界王者として、あのシステムはどうお思いなんですか？」

「モデルは私だが、今の私と比べれば大したことは無いな。それに、万人がああの動きに耐えられるわけが無いから開発は中止になったのだ」

「確かに、見た限りでは篠ノ之さんの身体ダメージは相当な物でしたからね。一週間は動けないと思いますよ、普通の体力なら」

「あいつは体力バカだからな。わたしや千冬までとは言わないが、二、三日で日常生活に復帰出来るくらいの体力はあるだろう」

会話をしながらも、一夏はモニターから視線は逸らさない。織斑姉妹もそれは承知しているし、真剣な一夏の横顔を見て幸せそうな表情をしているので、これはこれで良いのかもれない。

「一夏さん、全生徒に今回の事は口外しないよう指示しておきました」

「ありがとうございます、碧さん。刀奈さんや虚さんに、あのISが何時、誰に納品されたのか調べてもらえるよう手配しておきました。分かり次第碧さんに連絡するように言っております」

「分かりました」

箒が使っていた訓練機、あれは更識製のものでは無かった。IS学園で採用している訓練機は全て、更識製のものはずなのにだ。一夏は解析を進めていくうちに、徐々に眉間に皺を寄せていく。

「どうかしたのか?」

「いえ……VTシステム自体は、ドイツがラウラの専用機——シユヴァルツエア・レーゲンに積まれていたのとほぼ同じです」

「ほぼ? 何処かが違うということか」

「ええ。攻撃対象が俺個人に設定されています。しかも、周りに危害が及ぼうがお構いなしの設定ですね。だから最終的に自爆に繋がったのですが」

「一夏さんを狙ったという事は、篠ノ之博士は除外されますね。あの人は一夏さんを傷つける事は避けるはずですし」

「ですね」

そうなると思います分からなくなってくる。ISのコアを造れるのは一夏と束のみ。いくら訓練機用の大量生産されたコアとはいえ、簡単に入手出来るほど管理は杜撰では無いはずなのだ。

「何処の国で造られたコアなのか、世界中の管理システムを調べても分かりませんし……」

「一夏さん、それってハッキングなのでは？」

「非常事態です。手段は選んでられません」

「……暗部の当主候補らしいですよ、今の」

こんな時でも、碧は一夏が「本当は当主である」事をバラさないように注意して発言する。これがもし本音だったら、うっかり「当主らしい」と言ってしまうそうだが、そこはさすがである。

「だが一夏よ、この件で篠ノ之が大人しくなれば、お前にとつては良かったんじゃないのか？」

「大人しくなりますかね？　むしろ『幼馴染である私を一夏が助けるのは当然であり、また男が女を助けるのも当然だ！』とか言いそうですよ？」

「……ありえるな、あのバカなら」

なんだかんだ言っても付き合いがそれなりにある筈の事は、一夏も何となくではあるが理解出来るのだ。まあ、それでも大体の事は理解出来ないし、理解したいとも思っていないのだが……

「一夏さん、このコアって前にアメリカが開発してた物に似てませんか？」

「アメリカ？ ……そう言われれば確かに似てますね。管理システムはあくまでも現在の物しか照合出来ないのが気付きませんでした、碧さんは良く気付きましたね」

「アメリカに知り合いがいるので、電話で失敗作に終わったコアの話聞いていたんですよ。特徴も何となく聞いていたので、もしかしてと思っただけです」

「詳しい資料がもらえれば良いんですが、いくら失敗したからとはいえコアの情報を渡してくれるとは思えませんし……」

「何だ、そこはハッキングしないのか？」

管理システムをハッキングしてるんだから、そっちもすれば良いではないか、とでも言いたげな織斑姉妹の表情を見て、一夏は盛大にため息をついた。

「管理システムとコア開発のデータを同列に見てる時点でダメですが、ハッキングする

のがどれだけ難しいか分かってるんですか？ 管理システムだけならハッキングされても研究データが盗まれるわけではありませんが、コアの開発データは、例えば中止になっていく物でも嚴重に管理してらんです。我々更識でもコアデータは最重要機密扱いになっていますし、何処の国でもそれが当然です。更識にある個人のPCからなら可能かもしれませんが、学園にある、何もチューンナップしていないPCではほぼ百パーセント不可能です」

「な、なるほど……つまり一夏ならやろうとすれば出来るんだな」

「……何を聞いていたのか聞きたいですが、やろうとすれば、ですがね」

「とりあえずアメリカが怪しいのは分かった。何なら束に頼んでそのデータを盗み出してもらえば良いんじゃないのか？」

「だから……はあ、もう良いです」

何を言ってもダメだと理解した一夏は、織斑姉妹への興味を失い再び解析に集中する。碧がもたらしてくれた、アメリカが断念した物かもしれないという情報から、一夏は今手元にあるデータだけでアメリカが関与しているかを照合する。

「確かに……クセはアメリカの物が確認出来ますね。でもそれだけでアメリカが関与しているとは断言は出来ませんね」

「とりあえず、コアがアメリカに関係しているかも、と言う事だけでも収穫じゃないですか」

「そうですね。後はこの訓練機が何処の誰が何時納品したのかが分かれば、そこから辿れるんですが……」

一夏でも把握していなかった事が、学園の記録に残つてるとは考えにくい。一夏は僅かな希望にかける事にし、とりあえず解析を終了させたのだった。

更識会議

解析を終えて部屋で休んでいた一夏の許に、更識所属の面々が訪れてきた。

「何かありましたか？　こんなに大勢で……」

「頑張った一夏君にご褒美を、と思ってね」

「ご褒美？　刀奈さんの考案なら、あまり期待しない方がよさそうですね」

「何ですよ!？」

刀奈の反応を、一夏は満足げに眺めている。その表情で、刀奈は自分がかかわれたのだと理解した。

「酷い！　折角一夏君に良い思いをさせてあげようと思ってたのに……」

「良い思い？」

「思春期の男の子なら、誰でも憧れると思うわよ?」

「膝枕とかなら大丈夫です」

「もつと良い物よ。その名も、おっぱいま——」

「ところで、碧さんまで一緒なんですね。刀奈さんの暴走は止められなかったんですか

「？」

「すみません……刀奈ちゃんと私では、立場に違いがありすぎまして……」

刀奈をまるつきり無視して、一夏は背後に控えていた碧に声を掛けた。

「うわーん！　一夏君が苛めるよー！」

「だから言ったんですよ。一夏さんはそんな事に興味を示すような人じゃないって」

部屋に完全に入り込んだのを確認して、一夏は扉を閉め鍵を掛けた。

「そう言えば一夏、今日は更識で会議だったんじゃない？」

「カルカルの専用機についての会議だって言ってたよね？」

「あれはエイミィを納得させる為の方便だ。だいたい、専用機は基本的に俺一人で造るんだから、会議の必要は無いだろ」

「あつ……」

一夏が一人で専用機を造れる事を失念していたのか、簪と本音は同時に声を上げた。

「そう言えば一夏君、何で箒ちゃんを救い出す時に、真耶さんや紫陽花さんに行かせなかったの？」

「あのシステムの出所を探る為と、訓練機を壊されたら大変でしたからね。何処を叩けば確実に止まるか、なんて整備が専門じゃない二人には分かりませんよ」

「ですが、もうこれからは危険な事は控えてくださいよ。聞かされた私たちの身にもなつてください」

現場にいなかった刀奈と虚は、一夏がVTシステムが発動した訓練機に一人で挑んだと聞かされ、顔を蒼くして現場に駆け付けようとしたくらいなのだ。

「すみません。一応無事に帰って来たので、今回は許して下さい。また、次があつても一人で突っ込んだりはしないと約束します」

「約束ですからね。破ったら許しませんから」

「虚ちゃん、何だかお姉さんみたいだね」

「実際虚さんは一夏より年上だし、本音のお姉さんなんだからおかしくは無いんじゃないかな」

「でもさ、普段は一夏君の方が落ち着いてるし、お兄ちゃんっぽいじゃない？」

「兄さまは私の兄さまですし、兄っぽくても仕方ないのでは？」

だんだんと脱線しかかった雰囲気、碧が強引に戻す。

「それで一夏さん、VTシステムが搭載された訓練機の出所ですが、残念な事に学園に記録は残っていませんでした」

「でしようね。もし残ってたら覚えてたでしようし、刀奈さんや虚さんだつてすぐに見つけられたでしよう。内通者がいるのか、それとも……」

「それとも?」

「学園にすら尻尾を掴ませない大物が関係しているのか、ですね」

一夏の言葉に、数人の息を呑む音が部屋に響いた。そんな中でも、本音は何時もの雰囲気を崩さずに美紀に話しかける。

「ねえねえ美紀ちゃん。私と部屋変わつてくれない? 私もいつちーと同じ部屋が良いな」

「本音ちゃんは簪ちゃんのメイドなんでしょ? それに、部屋の変更は寮長の許可が必要なんだよ? 織斑姉妹に直談判出来るの?」

「諦める」

「早い……」

「……話を戻しても良いか?」

二人の会話を呆れた表情で眺めていた一夏が、そう問いかける。その言葉に美紀は顔を赤らめて頷き、本音は何時も通りの笑顔で頷いた。

「今回の件は、一応更識に報告しておきました。情報が入り次第、本音以外の更識関係者には連絡が行くと思います」

「ほえ？ 何で私以外なの？」

「本音に教えてもしょうがないだろ。それに、誰かに話してしまう可能性があるし」

一夏の言葉に、本音以外の全員が頷き、本音自身も納得したような表情を見せた。

「……ここで納得されるのもおかしな話だが、とにかく今回の件で俺たちが出来ることは、今のところは無いです」

「そっか。それじゃあ早速一夏君にご褒美を……」

「これから整備室でエイミィの専用機製造の準備ですので、お喋りなら自由にどうぞ」「うわーん！ やっぱり一夏君が苛めるよー!」

刀奈の冗談をあつさり流して、一夏は本当に部屋から出て行ってしまった。

「一夏、今日はあるな思いをしたのに、まだ働くんだ……」

「仕方ないよ。一夏さんにしか出来ない事なんだし……」

「でも、篠ノ之さんを助ける義務は、一夏には無いし、助けるにしたって、その責任は一夏だけが負う必要は無かったはずでしょ？」

「確かにそうですね……私たち教員が本来助けに入るべきでしたし、実際に真耶や紫陽花はそうするつもりだったようですよ。それを一夏さんが制してあのような展開になつたようです」

「ところで、織斑姉妹が来たのって、随分遅かつたって聞いてるけど……」

「自分の専用機を部屋の何処に保管してたか分からなかつたそうです」

「何と言うか……千冬さんと千夏さんらしい理由ね……」

織斑姉妹が整理整頓を不得手にしているのを知っている刀奈は、納得しながらも苦笑いを禁じえない表情をしており、詳しい事情を知らない他の面々は、織斑姉妹の意外な面を聞かされて、どういった表情をすればいいのか悩んだのだった。

処分は……

意識を取り戻した筈は、自分が何処にいるのかが分からなかった。

「……は……何処だ？」

「目が覚めたか、問題児」

「千冬さん!？」

「学校では織斑先生、もしくは千冬先生だバカ者」

一応怪我人という事で、千冬は出席簿を振り上げただけで止めた。さすがに怪我が増えていたら一夏に怒られるとも思ったのだろう。

「あれはいったい何だったんですか？ 私の中に力があふれてくるような感覚だったのですが」

「詳しい事はお前に言っても理解出来ないだろうから省略するが、あれは禁止されているシステムだ。もう少し救出するのが遅かったら、お前は死んでいただろう」

「そうですか。それで、誰が私を助けてくれたんですか？ 千冬さ——先生ですか？」

千冬さんと言いかけて、さっき怒られた事を思い出した箒は慌てて言い直す。一応進歩がみられたのが満足なのか、千冬はしきりに頷いていた。

「お前を助けたのは一夏だ。まあ、アイツはお前じゃなくってI Sのコアを助けたんだろうがな」

「私よりコアが大事だと言うのか、あいつは！ 幼馴染を何だと思ってるんだ」

「一夏はお前など幼馴染だとは思って無い。せいぜい腐れ縁だろう。そもそもだ、お前あの訓練機を何処からもってきた？ あれはI S学園で管理してるものじゃないぞ」

「……昨夜庭先に落ちていたのを拾いました」

「I Sが落ちているものか、バカ者が」

「本当です！ 周りを見渡しましたが誰もいませんでしたし、そもそも学園の訓練機は私に反応しないものが殆どですし、反応しても動きが他のヤツより鈍いんです。だから、普通に動くあの機体を使っただけです」

報告も無しにI Sを使った事を悪びれない箒に、千冬は殴りかかりたい衝動に駆られていた。訓練機が正常に作動しないのは、箒が散々訓練機をバカにし、一夏に殴りかかったりしてる事をコアネットワークを通じて知られているからなのだが、箒はI Sに感情があるなどと信じていない。白式や闇鴉のように人の姿になれるからと言って、人

間の感情を理解出来るなんて思つて無いのだ。

「己の発言の所為でISからも嫌われているのに、それも全て一夏の所為にでもするつもりか。訓練機の整備も一夏や更識の人間が担当しているからな」

「じゃあやつぱり、私が動かしても正常に作動しないのは一夏の……」

「だから違うと言つているだろうが！ お前が訓練機だと侮り、負けたのを訓練機の所為にしているからお前に乗つて欲しくないと思つてるんだ！ そして一夏に危害を加えようとするお前は、もれなく全てのISから嫌われても仕方ないんだ」

「何故ですか！ 一夏が私を無視するから私は抗議の為にやつてるだけです！ 悪いのは私では無く一夏の方でしょうが！」

——いよいよ我慢の限界が訪れた千冬が、拳を振り上げたところに——

「あまり叫ぶのは良くないと思いますよ、千冬先生」

——一夏が現れてその拳を開いた。

「何か分かつたのか？」

「いえ、分からない事が分かりました。篠ノ之さんが使つていた打鉄が何処から来たのかも、誰が持つてきたのかも不明です。少なくとも正規のIS関連業者が造つたもので

はないでしょう」

「そうか。ところで一夏」

「何でしょう、千冬先生」

「このバカの処分はどうするつもりだ？　一番危ない目に遭ったのはお前だ。お前が決めてくれ」

「何故私が処分されなきゃいけないんですか！　私は被害者ですよ！」

声を荒げた筈に、一夏と千冬は呆れた視線を向けた。

「良いか？　お前が真面目に I S と向き合えていれば、今回のような事は起こらなかつた。故に、貴様は自業自得だ」

「私はしっかりと訓練していますし、向き合ってるつもりです！　一夏、貴様が余計な事をして私が I S をまともに使えないようにするから！」

「俺はそんな事していないし、そんな細かい設定が出来ると本気で思っているならおめでたい頭だな。そもそも全ての訓練機にそんな事をしてる時間など俺には無い。更識の仕事と生徒会の仕事、他にも学業があるんだ。お前に嫌がらせをする程暇じゃないんだよ、俺は。そして、I S がお前にまともに反応しないのは、お前が心のどこかで I S を否定しているからだろ。東さんが I S を造った所為で、自分は不幸になったとでも

思ってるんじゃないのか？ 千冬先生、処分は学園にお任せします。俺はエイミイの専用機的事で更識と電話しなければいけませんので」

「そう言えば会議とか言ってたもんな。大丈夫なのか？」

「緊急事態です。納得してくれてますよ」

一礼して保健室から出ていった一夏を見送り、千冬は鋭い視線を箒に向けた。

「I Sの所為で不幸になったのが貴様だ？ 笑わせるな。一番の被害者は一夏だ！ 誘拐され怖い目に遭い、記憶を失いトラウマまで抱えているんだ。それでも一夏はI Sの所為にはしない。I Sと向き合い、そしてI Sに愛情を注いでいる。そんな一夏に暴力的な貴様に、I Sが心を開くとも思えん。今すぐ退学にでもしてやろうか？」

「I Sに心などあるはずないでしょうが。あれは一夏の妄言です！」

「本当に貴様は……あの大天災の妹とは思えないくらいバカだな……」

「あの人は関係ありません！」

「なら日本政府にそう申し出る。そうすれば貴様はすぐにでもI S学園を退学になり、更生施設にでも送り込まれるだろうよ」

「何故そんな場所に私が送り込まれなければいけないのですか！」

「貴様がしてきた事、全て『篠ノ之束の妹』という理由だけで酌量処置が取られていたん

だ。その理由を本人が否定すれば、すぐにも警察沙汰になるし、更生施設行きになる理由にもなるだろうが。そんな事も分からないのか、貴様は」

自分は悪くない、そう信じている筈は、千冬の言っている事が理解出来なかつた。悪いのは一夏であり、自分は被害者だと思ひ込んでいる筈に、千冬は盛大にため息を吐いて蔑みの目を向けてから保健室から去っていったのだつた。

専用機的设计図

整備室にやって来た一夏は、誰もいない事を確認してしやがみこんだ。気丈に振る舞って見せたが、箒と対面していた時、一夏は恐怖心を抱いていたのだ。自分は悪くないと豪語する箒に……

「一夏さん、良く我慢しましたね」

「うん……あの人、本当にISの事が嫌いなんだね……なのに何でIS学園にいるんだろう?」

「そんな事、あの女にしか分かりませんよ。そもそも、一夏さんの事を悪く言う女に、訓練機だろうが専用機だろうが関係なく心を開くはずありませんよ」

「二応お願いして動いては貰ってるけど、これ以上バカにするなら本当に動かなくなっちゃうかもしれないね……そうになったらどうなるんだろう?」

幼児退行を起こしていても、思考速度は普段とあまり変わらない。直接的に暴力を振るわれかけたわけでもないの、そこまで幼児退行していかないのだろうかと闇鴉は考えていた。

「それより、エイミイちゃんの専用機だけど……どうしようか？」

「それこそ、一夏さんが一人でお決めになれば良いんですよ。篠ノ之博士から貰ったコアがありますし、一夏さんは武装を考えるだけでほぼ終わりなんですから」

「でも、組み立てとか連携動作の確認とか、まだまだいっぱいあるよ？」

「もちろん、動作確認はエイミイさん本人に手伝ってもらえば良いですし、組み立てだけなら簪さんや虚さんも手伝ってくれますよ」

整備科に在籍している虚と、独学で勉強している簪は、確かにISの組み立てを手伝えるだけの知識も技術もあるだろうし、最終チェックではエイミイに動かしてもらわなければならないので、闇鴉の提案は的を射ていた。だが結局は、そこまでの作業は一夏一人でするしかないのだ。

「どんな専用機が良いかな……トーナメントで戦い方を見て決めようと思ってたのに、そのトーナメントが中止になっちゃったし……」

「この時期での成長を見たいからという理由で、一回戦だけは後日改めて行われるそうですよ？」

「その時にデータを取ればいいのか、それともそれまでに完成させて専用機のデータを取った方がいいのか……」

「急に何時もの一夏さんに戻りましたね」

「ん？ ああ、そう言われればそうだな」

完全に無自覚だった一夏は、モニター端末に専用機案を纏めていく。今あるデータは、本人から聞いたものと、イタリア在籍時に計測したものだけだ。あと使えるものがあるとすれば、エイミイから聞いた専用機の希望くらいだ。

「近接格闘が主だけど、遠距離もカバー出来る万能型……使いこなすのが難しそうな機体を選んだな……」

「碧さんのような戦い方がしたいのではないでしょうかね？」

「碧さんは近接が主だったけど、遠距離も苦手だったわけじゃないしな……だが、あれだって訓練だけで出来るものじゃないぞ」

「碧さんのI.S.に関する才能と、一夏さんの整備があつてこそその能力ですものね。木霊が喜んでましたよ」

「最近では動かす機会が減ってるからな……碧さんも参加できる何かを企画するか……専用機の最新データも欲しいし」

「もちろん、一夏さんも参加するんですよ？ 私だって他の専用機たちと戦いたいですし」

「勝てないと思うけどな……」

I S 開発の話をしてる時の一夏と、戦闘の話になった時の一夏は、随分違うと闇鴉には思っている。この自信の無さが、一夏が更識所属で一番弱いとされる所以なのではないかと思ってるのだが、一夏本人が争いごとを好まない性格である事も、闇鴉は重々承知しているのです、あまり強くは言えないのだ。

「さてと、とりあえずはエイミイの意見を考慮した草案になったか？」

「随分と武器を積みますね……バスロットが許す限り積み込むつもりですか？」

「このコアだが、自立進化型らしくてな。今満杯に積んだとしても、いずれ空きが出るらしい」

「随分と優れたコアですね……さすがは篠ノ之博士が造ったコア、とでも言うっておきましようか」

「実際に使った事が無いから、本当かどうかは知らないがな」

専用機の企画書を保存し、一夏はモニターの電源を落とし整備室から移動する事にして——ふと思いついたように携帯を取り出し、更識本家へ電話を掛けた。

『どうかしたのかい？』

「いえ、例の件をお願いしておこうと思ひまして」

『心得ているが、そちらで分からなかった事がこちらで突き止められるとは思えないのだが』

「良いんですよ。今日の俺は、本来更識で会議だったはずなんですから。着信履歴に更識の番号が無いと、疑われた時に面倒なので」

『なるほど、十五歳とは思えないほどの用意周到さだな。例の打鉄の出所は私たちが調べておくから、君は篠ノ之箒に気を付けなさい。君が助けだした事で、彼女は更に調子に乗るだろうからね』

「俺が助けたのは、助けないと周りに被害が及ぶ可能性があったからであって、篠ノ之を助けたかったわけじゃないんですけどね……言っても理解するとは思わなかったのだから詳しくは言いませんでした」

既に千冬が説明済みだとは、さすがの一夏も気づいていなかったようだ。

『本当に、篠ノ之束の可能性は無いんだね？』

「あの人は、なるべく俺や織斑千冬さん、千夏さんに迷惑がかからないようにするはずですよ。掛かるにしても、あそこまで面倒な展開にはしませんよ」

『分かった。じゃあ、篠ノ之束以外で君たちに気づかれずにIS学園に侵入出来そうなの

人物、及び組織が無いか調べてみるよ。あまり期待しないで待っていてくれ』

「お願いします、楯無さん」

『君に楯無と呼ばれるのは不思議な気分だよ』

尊との通信を切り、今度こそ一夏は整備室から部屋へ戻るのだった。

部屋での会話

部屋に戻って来た一夏を、美紀は心配そうに出迎えた。一夏が整備室の前に保健室に寄った事は、金九尾のセンサーで確認済みなのだ。

「一夏さん、篠ノ之さんに会ったんですよね？ 大丈夫でしたか？」

「あ、ああ。意外と早く復帰できた」

「そうでしたね。過去最速かもしれません」

一夏の言葉に続き、闇鴉も心配無用と告げると、美紀はホツと胸を撫で下ろした。同時に、少し残念そうに見えたと一夏には思っていた。

「とりあえず、エイミイの専用機の設計図は出来たから、明日にでもエイミイに細かな希望を聞いて修正作業を……」

「一夏さん、今日はもう休んでください。VTシステムを相手にしたんですから、疲労は蓄積してるはずですよ」

「そうだな……風呂にでも入ってゆっくりするか」

「じゃあ、お風呂の準備をしまするので、その間はゆっくりしててください」

美紀が部屋付きのバスタブにお湯を張りに行くと、闇鴉が一夏をからかうように話しかけてきた。

「残業でへろへろで帰って来た旦那様に甲斐甲斐しくお世話をする奥様？」

「別にへろへろでも無ければ残業でも無い。それに、美紀は奥さんじゃないぞ」

「ですが、『未来の』を付ければ不自然さは減少しますよね？　一夏さんと更識関係者全員がそういう関係なんですし」

「一夫多妻は本当に平和的解決なのだろうか……」

更識家当主に認められた特例、大昔ならまだしも現代でその特例を実行するのは、一夏は疑問だった。確かに全員を不幸にしないようにするには、その特例を実行するのが一番良いのだろうか、果たしてそれが良い事なのか、今の一夏には疑問だった。

「刀奈さんに簪さん、虚さんに本音さん、美紀さんに碧さんと、現段階で一夏さんの事を想ってる女性は六人以上なんですからね。理解してます？」

「その六人で全員じゃないのか？」

闇鴉の言った六人「以上」という言葉に引っかけかりを覚えた一夏が、首を傾げながら

闇鴉に問いかける。すると闇鴉は、結構本気が混じっているため息を吐き一夏を見る。

「な、何だよ?」

「静寐さん、エイミイさん、セシリアさんにラウラさん、それから一応篠ノ之さんや鈴さんも、一夏さんの事を想ってるんですよ? シャルロットさんは、感謝の念が強いですがね」

「友人として、では無いのか?」

「一夏さんは女性の気持ちには疎いですからね……まあ、年頃の男子よりそう言った事に興味が薄いつて事も原因の一つでしょうが。良いですか? ここ、IS学園は本来男子禁制の場所です。そんな場所に男子が——しかも、一夏さんのようにカッコいい男子が来たら、多かれ少なかれ特別な感情を抱いてしまうのは当然なんですよ」

「はあ……」

突如始まった闇鴉の説教に、一夏はどう反応するべきか悩んだ。真面目に聞くのもおかしいし、かといって笑い話として受け取るのも違う。一夏が反応に窮しているところに、助け船が出された。

「一夏さん、お風呂の用意が出来ました」

「ありがとう。闇鴉、その話はまた今度」

「あつ、こちら！ ……逃げられてしまいました」

脱兎の如く素早い動きで、一夏は風呂場に姿を消した。その姿を見送つてから、美紀が闇鴉に話しかける。

「あんまり一夏さんに余計なことは言わない方が良いでしょう」

「余計な事ではありませんよ。一夏さんには乙女心を理解していただくかなければ」

「私たちは、今の一夏が好きなんです。女性の扱いに長けた一夏さんは、ちよつと嫌です」

「……確かに、あの純朴そうな一夏さんが、実は百戦錬磨とかだつたら嫌ですね」

「少しずつ、一夏さんは私たちの気持ちに応えようとしてくれます。私たちはそれで十分なんですよ」

欲が無い、と言えばそうなのかもしれないが、更識所属の乙女たちにとって、あまり急激な進展は自分たちも耐えられないのだろうと闇鴉は納得したように数回頷き、そして視線を風呂場へ向けた。

「これほどまで想われているなんて、一夏さんは幸せ者ですね」

「くすつ、世界一不幸な少年は、世界一幸せな世界にやつて来たんですよ」

「ISに人生を狂わされた男の子、でしたっけ？ 良く知らないであんな記事を書くな
んて……」

数年前、一夏の事を記事にした雑誌が発売され、波紋を呼んだ。内容は全くのだからめ——では無く、一部本当な事が混じっていたので、余計に社会へ影響を与えたのだ。『誘拐され救出されたのは良いが、その家で奴隷のような扱いを受けている』なんて、いったいどんな頭をしてたらそんな記事が書けるのか、刀奈お姉ちゃんが本気で気にしましたしね」

「奴隷どころかその家のトップにまで上り詰めてるんですけどね。まあ、更識の内情を知られていないと喜ぶべきなのでしょう」

「ただの記者が、暗部組織の内情を知れるわけありませんよ。それこそ、内部にスパイでもない限り」

更識は元々身内だけの組織だったが、先々代辺りから外部の人間も採用するようになってきている。もちろん、採用の際は厳しい審査が行われるので、敵対組織のスパイなどの疑いは無い。ましてや今の当主の一夏の人を見る目は確かだ。そして、一夏を裏切ろうなどと思う人間は更識内に存在しないと美紀は確信している。

「うっかり本音ちゃんが何か言いそうだけど、抜けてるようでしつかりしてるから大丈夫なんですよ」

「唯一本音さんに不安があるとすれば、ご自身の専用機をあまり使わない、と言うことでしょうか。土竜が不満を溜めこんでいるようですし」

「その事は、一夏さんも気にしてました。本音ちゃんもそろそろ自分の機体を使って訓練して欲しいものですね」

VTSで遊んでる時でも、本音には土竜を使うように一夏は注意している。だがそれでも本音は他人の専用機を使ったりして遊ぶのだった。

「そのうち土竜も人の姿になって喧嘩になるかもしれないですね」

あり得そうな闇鴉の言葉に、美紀は苦笑いを浮かべて頷いたのだった。

一緒のベッドで…

保健室で休みながら、箒は昨日の事を考えていた。学年別トーナメントは誰ともペアを組めずに、当日にあぶれた者同士でペアを組む事になり、その相手はマドカだった。実力的なら、候補生とペアになったくらい幸運な相手だと言えただろう。だが負けてしまった。

マドカの専用機である白式と、自分が乗り込んだ打鉄は、どちらも近接格闘が主な武装になっている。機体の相性が悪かった、とかの問題ではなく、人間的相性が最悪だったと、さすがの箒も理解していた。

「あの女、私を一夏の嫁だと認めなかったからな……あんな奴とまともに組める訳が無い。やはり無理矢理にでも一夏とペアを組んでいれば……」

そこで箒は、当日一夏は学校にいないはずだったのではないかと言う事を思い出した。救出してくれたのが一夏だと聞いた時は嬉しかったし、一夏が自分に言った事は照れ隠しだと勝手に思い込んでいた箒だったが、いないはずの一夏が学園にいた事だけは気になっていた。

「アイツは更識家に用事があるから学年別トーナメントに参加しなかったはずだ。もし用事が無ければ、今頃私と優勝の歓喜に浮かれ、男女の営みに励んでいるはずだし……」

古風な考えの持ち主であるが、そこはやはり花の女子高生。頭の中がピンク色に染まってしまうても仕方ないのかもしれない。

「ISが暴走したのだから、きつとアイツらが何かしたに違いない。一夏に振り向いてもらう為には、私は邪魔な存在だろうしな」

実に前向きな思い違いだが、箒は本気でそう思っている。一夏のあの態度は照れ隠しで、本当は自分の事が好きで好きでたまらないだろうと、本気でそう思っている。この辺りの勘違いが、束に「箒ちゃんも束さんの妹とは思えないくらいのおバカさん」と言われる所以だと、箒は気付いていないのだった。

「そうと決まれば早速ISの解析を進めてもらわなければ。結果が出ればあいつらは退学、邪魔者が減るという事だ」

一人不気味な笑い声を上げながら、箒は保健室のベッドから身体を動かそうとして――全く動かない事に気がついた。

「なっ？ 拘束されているのか!？」

慌てて首だけを動かして手足を確認するが、特に拘束はされていなかった。じゃあ何で動かないのかと思考を巡らせ――

「まさか、毒でも盛られたと言うのか!？」

――盛大な勘違いをしていたのだった。

箒が勘違いをしている頃、一夏は部屋で休んでいた。トラウマから復帰したとはいえあの恐怖は一夏の心に残っている。なので今日は美紀と一緒にベッドで寝る事になっ

た。もちろん美紀からの提案で、一夏は頑なに断っていたのだが、最終的には恐怖心に負けて美紀と同じベッドで寝ることを了承した。

「なあ美紀……やっぱ狭くないか？」

「そんな事無いですよ。それに、こうやって一夏さんの事を抱きしめれば、二人でも十分だと思いますよ」

「でもな……」

「一夏さん？ 男の方が一度了承した事を覆すのは良くないですよ」

「……分かってる」

幼児退行している時ならまだしも、今の一夏はほぼ正常な思考なのだ。いくら同年代の男子と比べて興味が薄いと言っても、全く興味が無いわけではないのだ。つまり、美紀に抱きつかれるとそれだけで心が落ち着かなくなったりするので、一夏でも。

「一夏さんの心臓、凄くドキドキしてますね」

「当たり前だろ。美紀は俺を何だと思ってるんだよ」

「更識家次期当主様で、私たちの好きな男の子。ちよつと鈍いところがまた可愛いって刀奈お姉ちゃんは言ってますけどね」

「可愛いって……十五の男に使う表現なのか？」

一夏の疑問に、美紀は笑いながら答える。

「そういうところが可愛らしいんですよ」

「？」

無意識なのか、先ほどから一夏はしきりに首を傾げている。その仕草は実に可愛らしいものであり、ここにいるのが美紀では無く刀奈なら間違いない抱きしめる力を強めていただろう。それくらい今の一夏の仕草は美紀の心を刺激していたのだ。

「まあ別にいいが……お休み」

「はい、お休みなさい、一夏さん」

二人の眠りに就く速度は、更識でも一、二を争うくらい早い。就寝の挨拶をした三秒後には、規則正しい寝息が聞こえてくる。

「……なんだか、空気みたいでしたね」

一夏のベッドで横になっている闇鴉が、二人の寝息を聞きながらそんな事を考えていたのだった。

一夏を驚かせようと、一夏の部屋の前には少女たちが集結していた。

「おはようございます。現在の時刻は午前五時少し前。寝起きドツキリの時間がやって来ました。司会は私、更識刀奈がお送りします」

「……お姉ちゃんの頭がおかしくなった」

「割と何時も通りですよ、簪お嬢様」

「そうだった」

「酷っ!?! ……まあ、とりあえず一夏君に寝起きドツキリを仕掛けるわよ! ……って、本音は?」

「あの子がこんな時間に起きると思えますか？」

生欠伸を堪えながら答える虚に、刀奈は納得の表情で頷いた。この二人は先ほど刀奈が叩き起こしたのだが、その時ついでに本音も起こしたのだ。てつきりそれで起きたと思っていた刀奈だったが、確かにこの時間は本音には無理ゲーだ。

「じゃあ、早速お部屋にお邪魔しまーす。さすがに綺麗ですね」
「昨日もは入ったでしょ」

一夏のベッド目指し、刀奈は細心の注意を払って部屋を進む。そして一夏のベッドに到着するや否や――

「一夏君のベッドにダーイブ！」

――ベッドに飛び込んだのだ。

「あれ？ 何だか一夏君の感触じゃない気がする……」

「……当たり前です。私は一夏さんじゃないんですから」

「あれ、闇鴉!!? じゃ、じゃあ一夏君は……」

恐る恐る美紀のベッドに視線を向けると、そこには仲良く眠っている一夏と美紀の姿があつた。

「美紀ちゃんに先を越された!? これで第一夫人は美紀ちゃんに決定なの!？」

「……五月蠅いですよ。単純にトラウマが発動したから一緒に寝ただけです」

「あ、ああ……箒ちゃんね」

目覚めた一夏の説明で、刀奈は頓珍漢な事を言っていたのを止め、少し微妙な雰囲気は残りながらも納得したように頷いたのだった。

本音の特技

学年別トーナメントが中止になってしまった事を、エイミーは複雑な気持ちで捉えていた。美紀とのペアは楽しみだった半面、足を引く張るのではないかという不安があったのも確かだ。同じ候補生といっても、向こうは専用機持ち——更に言えば更識所属で——で自分は専用機を持っていない。IS学園の訓練機は更識製とはいえ、やはり専用機と戦うのは不利なのは変わらない。

エイミーは一人部屋から抜け出し、朝の空気を吸いながらそんな事を考えていた。

「そう言えば、一夏君つて昨日いかなかったはずじゃ……マドカさんの試合だけ見て出掛けるつもりだったのかな？」

織斑姉妹（マドカを含む）が重度のブラコンであるのは知っているし、一夏もなんだからで三人を心配しているのも知っている。そして開幕戦の四人の中で、一夏が気に掛けるのはマドカだろうと推測した結果が、エイミーの勘違いを加速させていった。

「一夏君もシスコンなのかな？ 義理のお姉さんである生徒会長や義理の妹の簪とも仲良しだし」

エイミイの勘違いを正しておく、更識姉妹とは確かに仲が良い。だが更識姉妹は夏の婚約者候補として仲が良いのであり、シスコンブラコンとはちよつと違う。だが織斑姉妹の場合は、完全に弟(兄)LOVEなのだ。ここ更識姉妹を同列に見るのは、更識姉妹に失礼なのだ。もちろんエイミイに悪気は一切ないのだが。

「専用機の件はまだ進んで無いだろうし、少しでも専用機持ちに相応しい身体を作っておかないと……まずは体力」

本音でも専用機が持てるのだから、既に候補生であるエイミイが体力面を気にする必要は無い。だが更識所属というブランド力の前に、エイミイは自分の実力を過小評価してしまっているのだ。

「朝から運動ですか？ 感心ですね」

「た、小鳥遊先生……おはようございます」

動き始めた直後、背後から声を掛けられエイミイは委縮した。相手が元日本代表にして、織斑姉妹と同様に無傷で世界を制した碧なのだから仕方ないのかもしれない。碧は別に威張ってるわけでも、元世界王者である事を自慢しているわけではないのだが、そ

の態度がエイミイが緊張する原因なのかもしれない。

「カルラさんがこの時間に動いているのは珍しいですね。噂では遅刻ギリギリの時があると聞いていましたが」

「……一夏君に専用機を作ってもらえるので、少しでも実力の底上げをしておこうと思
いまして」

「一夏さんに？ では一緒に運動でもしますか？」

「い、いえ！ 小鳥遊先生と一緒に動いたら、すぐにバテてしまいますよ……」

碧の誘いを断り、エイミイは自分のペースで運動を続ける。その後ろ姿を、碧が興味
深げに眺めていた事には気付かずに……

早朝の襲撃に失敗した刀奈は、少し不機嫌な空気を纏いながら食堂に来ていた。先ほどから視線が何本も向けられているのは、自分と虚がここでは異端だと理解はしている。だが気分が良いものでは無かった。

「食べてる時に見られるのって不愉快ね」

「仕方ありませんよ、お嬢様。ここは一年生の食堂で、私たちは上級生なのですから」

「別に上級生が一年生の食堂を使つてはいけななんて校則は無いわよ？ それに、私たちと一夏君の仲が良いのは有名でしょ」

「お嬢様は現日本代表で、世界最強の称号を持っていますからね。興味が無い女子の方が少ないんでしょう。次回大会でも優勝大本命と言われてるお嬢様ですし」

第三回モンド・グロツソはまだ開催すら決まっていけないのだが、既に優勝候補筆頭に刀奈の名前が挙がっている。その事は刀奈も知っているし、嬉しいとは思っているのだが、こうして様々な視線を浴びせられるのだけは勘弁してもらいたい事だった。

「今日に限って、一夏君の隣は美紀ちゃんとマドカちゃんに取られちゃうし……」

「毎回公平を期す為にじゃんけんにしよう、と言いだしたのはお嬢様じゃないですか。今変更は認められませんよ」

「分かっているわよ……でも、美紀ちゃんは一夏君に抱きつかれて寝てたのよ？ 今日に限って言えば不公平じゃないかしら」

「仕方ありませんって。美紀さんは同部屋であり一夏さんの護衛なんですから。そして一夏さんはまだ彼女に対してのトラウマを克服しておりません」

自分たちが見られているのと同じように、自分たちは一夏の事を眺めている。その事に気がつかない刀奈たちは、一夏の事を見ながら会話を続けている。不意に一夏がこちらを見てきたので、刀奈たちは少し慌てたように問いかける。

「ど、どうかした？」

「いえ、何か用事があるのではないかと思っただけです」

「別にありませんが？」

「そうですか。さっきからずっと見ているので、何か用でもあるんじゃないかって思っ
てましたか」

「あつ……」

「なんです？」

一夏に言われるまで、自分たちが一夏の事を眺めていた事に気づいていなかった二人

は、思わず声を上げてしまった。一夏は何で二人が声を上げたのかが分からず首を傾げていたが、すぐに興味を失ったのか、それとも心当たってあえて視線を逸らしたのかは分からないが、本音の方に視線を向けてしまった。

「本音、さつさと食べないと織斑姉妹に怒られるぞ？」

「ほえ〜……眠いよ〜……」

「さつきまで寝てただろ？ 何でまだ眠いんだよ……」

惰眠をむさぼる本音の気持ちは一夏には分からない。真面目に生活している一夏たちのリズムは、本音には分からない。だからではないが、本音が眠いと言っても一夏にはそうとしか言えないのだった。

「眠いものは眠いの……」

「食べながら寝るとは器用なやつ……」

本音の特技に呆れながら、一夏はやれやれと首を左右に振ったのだった。

エイミイのデータ

期末テストが近づいてきた頃、エイミイは一夏に呼ばれ整備室の一室に足を運んでいた。基本的に誰とでもすぐ仲良くなれるエイミイは、一夏とも既に二人つきりでもいられる関係にまで発展しているの、特に緊張感は無い。だが、別の意味で緊張しているのは否めなかった。

「一夏君、来たよー」

『開いてるから入ってきてくれ』

エイミイは更識所属になるとはいえ、まだパスワード教えてもらっていない。だから普通なら一夏が使っている整備室には入る事が出来ないのだが、今日はその事を配慮して鍵はかけていなかったようだった。

「お邪魔しまーす！ 意外と普通なんだね」

「学園の整備室を何だと思ってるんだ、エイミイは……」

「だって、一夏君が作業してる時はパスワードが必要だって聞いてたから、何か凄いものがあるんじゃないかなーって思ってた」

「整備してるものとかは基本普通のI S Dだ。見られたくないのはその作業だからな。更識には秘密にしてる事が多くあるから」

「そうみたいだね。私、秘密守れるかな……」

「本音でも重要な事は漏らして無いから、心配する必要は無いんじゃないか？」

慰めだと分かったが、本音でも出来るのならという気持ちでエイミイの中に芽生えていた。

「それで、今日はなんで呼ばれたの？」

「一応原案が出来たから確認してもらおうと思っただけ。要望があるなら今の内に修正しておきたかったし」

一夏から渡されたUSBを端末に差し込み、エイミイは専用機の原案に目を通す。細かな事は分からなくても、その機体がどの戦いに適しているとか、武器の特性などはどうなのかとかは理解出来る。

「一夏君、これって本当に出来るの？ 反動が凄いや、そんな欠点があるとかじゃなくて？」

「理論上は可能だが、実際に造って見なきゃ分からないな。一応出来るだけ反動は無い

ように造るが」

「遠距離は苦手だから、このシステムは嬉しいかも」

「一応そっちは俺がテストして誤差修正もしたから、後はエイミーの腕前がどれくらいに掛かっている。何せトーナメントでエイミーの実力を図ろうとしてたのに、そのトーナメントが中止になっちまったし」

「なんなら今でも良いよ？　一夏君ならすぐに訓練機の使用許可取れるでしょ？」

一夏は生徒会副会長であり、訓練機の整備担当だ。使用許可は確かにすぐ取る事が出来る。だがアリーナの使用許可は生徒会役員でもそう簡単に取れるものではないのだ。

「VTSでも良いならすぐに使用許可は取れる。てか、更識所属専用の特別カスタムのVTSがあるから、エイミーもそれを使えば良い。パスワードは専用機が完成したら新たに設置すればいいし」

「更識専用って、本当に存在してるんだね。噂だけだと思ってたよ」

「全ての専用機のデータが入ってるからな。産業スパイでもいたら大変だから別にしたんだ。実際、俺が入学する前にはVTSから更識のデータを手に入れようとしてた人たちがいるようだし」

「簡単に言ってるけど、それって重大事件じゃないの？」

エイミーにはそう取れるのだろうか、一夏は特に気にした様子も無く続けた。

「趣味レベルのハッカーに、更識のプログラムを突破出来るとも思えないし、プロレベルならカウンターを恐れて更識のデータにはアクセスしようともしないしな。実際に複数の国が更識のハッキングを仕掛けて、そのカウンターで機密情報流失という事件を起こしてるんだし」

「あれってやっぱり更識に喧嘩を売ったからだだったんだ……お陰でヨーロッパ諸国は互いの機密情報を握ったは良いけど、こちらの情報も握られてるんじゃないかって疑心暗鬼に陥ってたんだってさ」

「忍び込むなら、バレないようにすれば良いものを……こんな風に」

一夏が手渡してきた資料を見て、エイミーは驚きの表情を浮かべる。なぜならそれは、イタリアが管理しているエイミーのデータだったからだ。

「これ、どうやって手に入れたの？ 申請しても通るはずもないし……イタリアから鞍替えする私の為に、パーソナルデータを送るはずは無い……まさか!？」

「測定するから別に必要無かったんだが、インパクトを与えるならこれくらいした方が良いだろう?」

悪戯っぽい笑みを浮かべながら、一夏は立ち上がり更識専用のVTSがある場所まで移動する。あつけに取られていたエイミイだが、一夏がどんどん進んでいくので、慌ててその背中を追いかけた。

「そう言えば一夏君、篠ノ之さんってもう復活してるんだってね」

「ん？ あの事故の翌日には普通に食べれてたし、三日後には立ち上がって部屋に帰ってたらしいぞ。授業に復帰したのが一週間後だったかな」

「あの事故って、それ程重傷を負うものじゃ無かったの？」

「普通の人間なら、意識を失ったまま一週間が経っていてもおかしくは無い程のダメージだったはずなんだがな。やはり体力が普通の女子と違うんだろうな」

特に興味が無いのか、一夏はさつきから資料とにらめっこしながら答えている。エイミイも特に興味があったわけでは無く、無言に堪えられなさそうだったので話題を振つたに過ぎなかった。

「さて、ここだ。入室の際は専用のパスが必要になるから、エイミイの分も用意しておくように言っておいたから」

「何だか秘密基地みたいだね」

「ちなみに、VTSを作動させるときにもパスは必要になるから、管理は厳重にしておくように。本音みたいに預けても良いけど」

「……その管理は一夏君がしてくれるの？」

「俺の部屋にある金庫で保管する」

「……じゃあ、お願いします。あと、期末テストの勉強も教えてください」

「……本音や美紀にも頼まれてるし、一緒に良ければ構わん」

専用機製造に着手出来るのは何時になる事か、と一夏は頭を抑えながらそんな事を考えていた。とはいえ、重要なのは専用機製造も期末テストもものだ。とりあえず並行して出来るところまでやろうと決意した一夏だった。

本音と美紀

エイミイのデータ測定を終えた一夏は、そのままエイミイを部屋に招き入れた。部屋では美紀と本音とマドカが簪に勉強を教わっている。

「お帰り一夏。もしかしてエイミイも？」

「そうらしい。一人で問題無かったか？」

「うーん……美紀はある程度理解してるっぽいから大丈夫だけど、本音とマドカがね……まあ、マドカは義務教育すら受けて来なかったから仕方ないけど」

「入試の時は俺と簪で詰め込んだから……」

いくら実技重視といえども、筆記が酷過ぎると入学が危ういということで、マドカは必死になって勉強していたのだ。じつを言うと、マドカの入学は特例措置なので、筆記が酷くても入学は認められたのだ。だがそれではダメだと一夏と碧が学園生活をスムーズにする為に勉強させたのだが、やはり身につけてはいなかった。

「まだ半月はあるから大丈夫だとは思うけど、本音の酷さは異常だよ……」

「そんなに褒めなくても」

「褒めて無いぞ……」

何を勘違いしたのか、褒められていると受け取った本音に一夏の呆れた声でのツツコミが入る。余程呆れているのか、一夏が向ける視線は、普段より鋭さを増している。

「いつちー、もしかして眠いの？ 目が開いて無いけど」

「呆れてるんだよ。何処をどう解釈したら褒められたと思うんだよ……てか、その計算間違ってるぞ」

「ほえ？」

注意しながらも間違いを指摘する一夏に、マドカが羨望の眼差しを向ける。敬愛する兄の能力の高さに感動しているのだろうが、そんなマドカにも容赦の無いツツコミが入る。

「マドカ、その漢字違う」

「え？ ……本当ですね」

「マドマドはダメだね」

「多分マドカも本音ちゃんには言われたくないと思うよ」

自分も人の事は言えないと思ってるのか、美紀の控えめなツツコミが本音に入ったが、あまり響いていない。そんな三人の輪の中にエイミイも加わり、大人しく試験勉強を始めるのだった。

「そう言えば一夏、エイミイの専用機は完成しそう?」

「延期になったトーナメントには無理だな。さすがに明後日には出来ない」

「仕方ないよ。データ不足だったし、勉強教えなきゃいけないだし」

そう言いながら簪は、座って勉強している四人に視線を向ける。実力者揃いではあるが、頭脳面では残念な四人は、何処となく居心地が悪そうに簪には思えていた。

「刀奈さんや虚さんに手伝ってもらおうか? 上級生だし、あの二人なら自分の勉強をしなからでも教えられるだろ」

「虚さんとはかく、お姉ちゃんに頼みごとをすると、見返りを要求されるよ? 例えば、一夏と同じベッドで寝かせろ、とか」

この間美紀と一緒に寝ていたのを目撃した刀奈は、事あるごとに一夏同じベッドで寝たいと言っている。一夏からのお願い事なら断らないだろうが、チャンスがあれば一緒に寝たいと思っている刀奈にとって、もしお願いされれば見返りを要求するチャンスだ

と思うかもしれない。それが分かるのは、簪が刀奈の妹だからだろうか。

「ところで、篠ノ之さんの処分はどうなったの？ 普通に授業に出てるみたいだし、制裁無しなの？」

「織斑姉妹との楽しい楽しいデートが、期末試験後に行われる事になった。内容は知らないが、遠慮したい罰だな」

「期末試験後って、臨海学校前って事？ 随分厳しいスケジュールだね」

「自業自得だろ。拾ったISを使って暴走し、あまつさえ自分は悪くないとのたまったんだから」

簪の罰は一夏から千冬へと決定権が移ったので、その内容を一夏は知らない。だが最低限の枷として、直接制裁は禁止にしておいたのだ。そうでもしないとあの日が篠ノ之の命日になっていただろうから。

「一夏さんも簪ちゃんも、お喋りしないで教えてよ。皆同じ場所が分からないんだけど」

「ん？ ……ああ、そこはこれの応用で——」

問われてすぐに答える一夏を見て、簪は羨ましいと思っていた。自分も理解出来なけ

れば一夏に教わる事が出来るのに、自分は一夏と同じぐらいの早さで説明出来るくらい理解してしまっているのだから……

「ほえ？　かんちゃん、いっちーの事眺めてどうしたの？」

「何でも無いよ。ほら、本音もマドカもしっかり説明聞いてないと、本番で分からなくても知らないよ」

簪に気を取られていた本音とマドカだったが、簪に言われた事に恐怖したのか必死になって一夏の説明を聞いている。美紀とエイミイは努力すれば補習の心配は無いくらいの成績は取れるだろうが、本音とマドカは努力しても危ないラインなのだ。並みの努力では無く必死になって勉強しなければいけないので、さっきの脅し文句は二人に十分効いていたのだ。

「ねえねえ一夏君、美紀ちゃんって頭良いんじゃないの？　何だか参謀みたいな立ち位置だと思ってたけど」

「ちゃんと勉強すれば問題無いんだが、理解するまでに時間がかかるんだよ、美紀は。入試の時だって必死になって勉強してたし」

「私はもともと本音ちゃんと大差ない頭脳ですからね……必死になって勉強しないと、私も本音ちゃんのようになってしまいます」

「そうなんだ。美紀ちゃんは見た目頭良さそうだから損だよ。本音ちゃんは何となく分かるけど」

「いや〜それ程でも〜」

「だから褒められて無いって……」

この勘違いこそ、本音の見た目通りなのだろう。もし美紀と本音が同じ成績だった場合、どちらが驚かれるかと言えば美紀だろう。点数が高かろうが低かろうが、本音と同じと言うだけで美紀のイメジはガラリと変わってしまう事だろう。

それが分かっているから、美紀は必死になって勉強し、一夏の手伝いが出来る程度にはI Sの知識は持ち合わせている。だがI S学園も高校、一般科目も試験にあるのだ。その一般科目である程度の点数を取る為に、美紀は一夏に泣きついたのだった。

「とりあえず、今日はここまで勉強しておくように」

「何処か行くの?」

「さっきのエイミイのデータを打ち込むだけだ。仕切りの向こうにいるが、あまり覗かれると困るからな」

一夏の端末には色々なデータが入っているため、普通の人間には見せられないのだ。

それが分かっている簪は、何かあれば呼ぶと言って四人の勉強を見ることを承諾したのだった。

バカ二人

試験、それは学生たちが出来る事なら受けたくないもの。優秀な人間であろうがそうでなからうが、好んで試験を受けたがる人間など稀であろう。IS学園に入学を許された全員が国から選ばれしエリートだと言える程の才能を持っているのだが、それはISに限った事だ。一般教科でも優秀な人間は何処の学校にも一握りしかない。

「ねえねえ一夏君。私たちにも勉強教えてくれないかな〜?」

「刀奈さんは上級生ですよね? 下級生の俺に教わるのはおかしくないですか?」

「一夏君なら問題なく解けるでしょ? それに、本音や美紀ちゃんだけ一夏君に教わるなんてズルイ!」

「そつちが本音ですか……」

一般教科においても優秀な成績を収めている刀奈が、暇つぶしなのか一夏の部屋を訪ねては文句を言っている。もう慣れたもので、一夏たちは刀奈をいないものとして扱う事にして勉強に集中していた。

「一夏君が同級生だったらなー。そうすれば私が同じ部屋だったのに」

「お嬢様、勉強の邪魔は良くないとあれほど申しましたのに……」

「虚ちゃんだって結局は一夏君の部屋に入り浸ってるんだから同罪よ。それに、簪ちゃんだってここに居るんだから」

「簪お嬢様は一夏さんのお手伝いとしてこの部屋に居るのです。私やお嬢様のように、ただ居るだけじゃないのですよ」

「試験前で生徒会の仕事が落ち着いたのは良いけど、問題児がいるせいで一夏君と遊べないし……」

優秀な人間でも、勉強しなくても良いわけではない。だが刀奈や虚、ついでに一夏や簪は授業である程度理解しているので、本当に見直し程度の勉強で優秀な成績を収める事が出来るのだ。

「暇なら手伝ってくださいよ。マドカやエイミイだって勉強してるんですから」

「じゃあ終わったら一夏君が遊んでくれる？」

「……遊ぶって言っても試験前なんですよ？ 勉強は良いんですか？」

「一夏君と同じで、前日にノートを見ればだいたい出来るもん」

「そのスキル、羨ましいです……刀奈お姉ちゃん、そのスキル私にください！」

「美紀ちゃんだって頑張れば会得出来るわよ。だから、f i g h t！」

無責任な応援に、美紀はガツクリと肩を落とす。自分は努力して何とか合格した身であり、簪や一夏のように楽勝だったわけではないと自覚している分、出来る刀奈が羨ましくてしょうがないのだ。

「ほえ〜……おね〜ちゃんのように勉強出来るようになりたい……料理は出来なくても良いから」

「それは私に喧嘩を売ってるんですか？」

「そんなつもりはないよ〜。だって、おね〜ちゃんは紅茶を淹れるのは上手でしょ〜？」
「全然褒められた感じがしないのは気の所為でしょうか？」

虚に問われた一夏は、肩を竦めてはぐらかしたのだった。

何処の学校でも試験の日程は大して変わらないだろう。一般の高校に通っている弾や数馬もまた、試験前の勉強に追われていた。

「今度こそ数馬に勝つからな」

「そう言つて中学から数えて何連敗だよ？ いい加減諦めたらどうだ？」

「五月蠅い！ だいたい全教科合わせても大して変わらないだろうが！」

「でも、勝ちも勝ちだろ。そもそも鈴が途中で転校してからは、賭けるものが無くなつたんだから気にし過ぎだろ」

鈴がいた時は、三人の中のトップが最下位に奢ってもらうシステムだったのだが、鈴が中国に帰つてからは単純に弾と数馬の点数勝負になつていた。

「そういうえば、鈴のヤツが日本に来てるらしい」

「らしいな。一夏からメールで知らされた」

「一夏のヤツ、女の園で毎日ウハウハなんだろうな」

「そうか？ 一夏の性格だと、ウハウハの前にビクビクじゃねえ？」

弾も数馬も、一夏の事情はある程度知っているし、トラウマが無くても一夏が自分たちみたいにならしない態度を取るとは思っていないかった。

「そう言えば、一夏って頭良いんだよな？ 勉強教えてもらえないかな」

「範囲が違うだろうし、一夏に頼るのはな……」

「中学の成績を聞く限り、俺たちより遥か上に位置する存在だし、頼れば俺たちだって少しは……」

弾のセリフの途中で、数馬が手を弾に向けて広げ、そして首を左右に振った。

「そうじゃなくて、アイツが生活するのはI S学園の寮だ。そしてI S学園は原則男子禁制であり、外出の際には面倒な手続きが必要らしい。勉強を教わるだけで一夏にそこまで面倒をかけるのはマズイ。最悪織斑姉妹に殺されかねない」

「何で織斑姉妹が……あつ、そっか。一夏の旧姓は『織斑』だったな」

「ああ、俺たちみたいな落ちこぼれの相手をしてると知れば、理不尽に怒られるかもしれない」

「鈴からのメールだと、織斑姉妹は理屈じゃないらしいな……どれだけ一夏を溺愛してるんだか……」

自分らがバカである事は弾も数馬も認めている。鈴からは「低空飛行組」とまで呼ばれたくらいだ。自覚していない方がおかしい。だからこそ今回こそはしっかりと勉強して良い点数を取りたいと思っていたのだが、バカが二人顔を合わせても勉強が捗らないという事を失念していたのだ。

「癪だが実力勝負するしかないな」

「赤点じゃなきやどうでも良いぜ。じいちゃんに殺されなきや、俺は夏を満喫出来るからな」

「俺もバイト三昧だな。来月は欲しい物が多いから、日数減らすわけにはいかない」

この二人は完全に失念していた。メールや電話でも一夏に勉強を教わる事が可能だという事を……そして試験開け、無情に二人の名前が補習生徒の欄に載ってしまったのだった。

ちなみにI S学園の試験結果は、本音も美紀もマドカもエイミイも補習ではなく、むしろ平均以上の成績で終えていた。弾も数馬も、一夏に教えてもらえればもしかしたら、違った結果だったのかもしれない……

週末の予定

試験が終わり、I S学園一学年は色々ときわめていた。理由の一つが、一夏の試験結果。筆記試験を全問正解したかとおもえば、実技試験も上位の成績を収めたのだ。常日頃から自分は強くないと言っている一夏にしては、かなり本気で勝ちに行つたようにも見えたからだ。

そしてもう一つの原因は、一年生の臨海学校だ。入学して始めてと言つても良いイベントだけに、騒ぐなど言う方が無理な相談なのかもしれない。特に今年は一夏という異性の眼があるので、女子生徒たちは——
「もつとダイエツトしておけばよかつた！」

——とか

「更識君はどんな水着が好きなんだろう」

——などの声が聞こえてくるのだった。

そんな騒ぎの渦中にいる一夏だが、彼は今物凄い忙しい日々を送っているのだ。学業

に生徒会の仕事、更識の仕事に加えてエイミイの専用機製造に取り掛かっている。その所為で一夏は早朝から作業し、日付が変わるギリギリに部屋に戻ってくるのだった。

「最近いっちょと遊んでないな〜」

「試験勉強でお世話になってた時だって、一夏さんは専用機製造の為に動いてましたし、その前だって色々あつてI S学園に入学してから今日まで、遊んだ記憶は無いんじゃない?」

「刀奈様がもう少しちゃんと働いてくれば……」

「それは本音が言える事じゃないと思うよ。お姉ちゃんも大概だけどさ」

「兄さまはフランスの問題やドイツの問題、そしてあの女の問題と色々巻き込まれましたからね……どれも兄さまが関わる必要が無い事ばかりでしたのに……」

更識所属の一年生四人は、一夏のいない部屋で雑談を交わしている。内容はやはり一夏の事で、彼の体調を心配する声も聞こえるほどに一夏は忙しい一日を過ごしているのだ。

「臨海学校には来るんだよね?」

「学校行事ですし、いくら一夏さんとはいえ休めないと思いますよ。ましてや、織斑姉妹が一夏さんに水着を見せるんだと張り切っていましたし」

「姉さまたちも考える事は一緒なんですネ」

「そういえばかんちゃん、今度水着買いに行こうよ」

「じゃあ明日の放課後か明後日の休みのどっちかだね。もう時間もあまりないし」

週明けには臨海学校に出発するので、最後のチャンスだろう。美紀もマドカも簪の提案に頷いた。

「じゃあ明後日の休みだね！ 生徒会の仕事もないし」

「お姉ちゃん……どこから現れたの？」

「普通にドアから入って来たわよ。虚ちゃんと碧さんと一緒に」

「お邪魔します」

「付き添いとして私もご一緒します。外の世界では、一夏さんがトラウマを発動させてしまうかもしれませんので」

I S学園の生活は慣れてきている一夏だが、一步外に出ればまるつきり世界は違う。女尊男卑の風潮が蔓延するする世界で一夏を一人きりにすれば、あつという間にトラウマが発動し、おそらく衛星で監視している大天災が暴走しかねない。また、大天災が暴走すれば織斑姉妹にも連絡がいくだろう。そうなれば死者の一人や二人で済むかどうか

か分からない事になりかねない。

だが更識所属の誰か一人でも一夏の側にいれば、その事態は回避出来る可能性が高くなる。そしてその一人には、碧が一番適しているのだ。

「私は皆さんのように水着を買う必要もありませんし、刀奈ちゃん同様世間に顔を知られてるしね。一夏君の側にいれば話しかけてくるバカな人も現れないでしょう」

「でも、碧さんだつて水着買わなきゃだめじゃない？ 夏休みになれば更識組全員で海やプールに行くんだから。一夏君に新しい水着を見てもらわなくて良いの？」

「……では、皆さんが買い終わった後に買います。そうしないと一夏さんが一人になつてしまう時間が出来てしまうので……」

そもそも一夏が買い物に同行するのかすら決まってい不在のだが、このメンバーの中では一夏が同行する事は決定事項のようだ。

「随分と人が多いな……」

「あれ？ 一夏君、専用機を造ってたんじゃないの？」

「一応は完成して、エイミィに試運転してもらおうと思つたんだが、携帯を部屋に忘れたから取りに来たんですよ。ところで、何の話題で盛り上がったんですか？ 俺の名前も聞こえてましたけど」

「明後日お買い物ものに行こうって話よ。一夏君も一緒に行くんだからね」

「まあ専用機も造り終えて、後は微調整だけですから明日には終わるでしょうし、付き合いますよ。で、何を買いに行くんですか？」

多少疲労の色が濃い感じがする一夏だが、折角盛り上がりつつあるところに水を差すような野暮な事はしない。大人の世界で揉まれている一夏は、空気を読む力も普通の高校生とは比べ物にならないのだ。

「水着よ！ 簪ちゃんたちは臨海学校に向けて、私と虚ちゃん、碧さんは来たる夏休みに向けてね！」

「……俺が同行する理由はあるんでしょうか？ 女性同士の方が気が楽のでは……」

「一夏君に選んでもらうんだから、一夏君がいなきや意味無いでしょ？ それに、これだけの美少女たちの水着姿を見られるんだから、嘘でも良いから喜びなさい。一夏君の欠点らしい欠点は、女の子を喜ばせる術が欠けてる事ね」

「ですがお嬢様、一夏さんが女性の扱いに長けているのは……」

虚に言われ、刀奈はそんな一夏を想像してみた。

「……うん、こんなの一夏君じゃないわね」

「いったい何を想像したんですか……」

呆れた口調の一夏だったが、結局は買物に付き合う事を承諾し部屋から出ていってしまった。おそらく最終調整の為に必要な試運転をエイミイに頼むのだろうと、本音ですら分かっていたので誰も引きとめる事はしなかった。

そして翌日、エイミイの専用機がお披露目されたのだった。

エイミイの専用機

IS学園内で発行されている新聞に、エイミイの専用機情報が掲載されていた。どう取材したのかは分からないが、新聞部の黛薫子が一夏から専用機の内容を聞きだし、そして今朝の新聞に掲載したのだ。

「これは……薫子ちゃんを問い詰める必要がありそうね」

「お嬢様、私もお供します」

「薫子ちゃん、虚ちゃんの事苦手だもんね」

そんな話をしてる所に、薫子とエイミイ、そして少し疲れた顔をしている一夏がやってきた。

「かつちゃん、私の渾身の記事はどう?」

「そうね……聞きたい事が沢山あるから、今から部屋でお話ししましょうか? もちろん一夏君とエイミイちゃんも一緒に来てね」

「な、何でそんなに怒ってるのかなー? って! 何で布仏先輩まで怒ってるんですか!?!」

刀奈よりも背後の虚が気になってしまい声を上げる薫子。薫子の背後ではエイミイと一夏が苦笑いしている。

「怒られる原因に心当たりがあるんじゃないですか？ 薫子先輩、専用機の試運転をしているアリーナに忍び込んでたですから」

「あつ、こら！ 黙ってるって約束したじゃない！」

「まだ口止め料貰ってませんから」

しれつと言い放ったエイミイに、一夏は更なる苦笑いを浮かべた。

「そもそも初めから刀奈さんに教えるつもりだっただろ、エイミイは」

「あつ、バレてた？」

「口止め料を貰ったら同罪だったからな。更識所属になるエイミイがそんな浅はかな考えは持たないと思ってた」

「さて、何か言いたい事はあるかしら、薫子ちゃん」

「……じゃ、ジャーナリストを志す者として、スクープの匂いには敏感なんです」

「では、薫さんにはジャーナリズムとはどのようなかをみっちり教え込んで差し上げますよ」

刀奈の背後でゆらりと動いた影に、薫子は竦み上がる。普段は大人しい雰囲気虚だが、彼女は更識所属の中で最も怒らせてはいけない人だと更識内でも思われているのだ。そして彼女の怒りトリガーの殆どは一夏に関係する事であり、一夏にストーリーカー紛いの行いをしていた薫子を許せるはずもなかった。

「さ、更識君！ お助けを！」

「俺もどうやって忍び込んだのか知りたいですからね。侵入した時には気配を感じませんでしたし」

「一夏さんが作業に集中してたからですよ。私は普通に気付きました」

「私もです、一夏様」

一夏の背後から二人の声が聞こえてきた。一人は既に見慣れている黒髪の美人、闊鴉。だがもう一人は、声も顔も知らない相手だった。

「一夏君、その人は？」

「ん？ ああ、刀奈さんたちは初対面でしたね。挨拶しろ」

「この度アメリカ⇨カルラさんの専用機として造られましたスサノオと申します。以後お見知りおきを」

「最初から人の姿になれるんだ」

「私に使われているコアは、篠ノ之東博士が気まぐれでお造りになった自立進化型です。一夏様が保管している間に人間に対する好感度は最高にまで上がっていますし、この姿の方がインパクトを与えられると思いましたので」

どうやらエイミイの専用機は悪戯好きのようだと、同類の刀奈はすぐに理解した。これからはスサノオとコンビを組んで悪戯を仕掛けるのも面白そうだと、彼女の頭の中では既に計画が練られていた。

「とりあえず黛さんは立ち入り禁止だったはずのアーリーナに忍び込んだ事を詳しく聞かせてもらいますので」

「お助けー!」

虚に引き摺られるように連れ去られた薫子を見送り、刀奈は慌てたように二人を追いかけた。

「待って! 私も訊問するー!」

「……生徒会長が廊下を走って良かったのでしょうか?」

「刀奈さんのあれは早足で誤魔化せるレベルだから大丈夫だろ」

呆れた顔で問う闇鴉に、一夏は苦笑いを浮かべながら答えた。

「ところで一夏君、スサノオの待機状態ってどんななの？」

「実際になつてもらえばいいだろう」

「そうだね。スサノオ、待機状態に移行」

エイミイの声に反応して、スサノオはエイミイの腕に巻き付いた。

「腕時計なんだ。あれ？ でもこの時計、時間があつてないよ？」

『そこはご自身で調整してください。今の私には手がありませんし』

「？ 私、腕時計の調整の仕方なんて知らないんだけど」

「俺がやるよ。貸して」

腕からスサノオの待機状態である腕時計を外し、一夏に手渡すエイミイ。スサノオとの会話は一夏にも聞こえているようだった。

「ねえねえ一夏君。スサノオの武器ってどれも特徴があるって感じがしないんだけど」

「今のところはエイミイには使いこなせないからな。もう少しスサノオとの関係が発展したら実力を発揮出来るだろうさ、ほら」

時間を合わせ終わった一夏からスサノオを受け取り、再び腕に着ける。そして今の話で気になったところを一夏に問いかける。

「それってつまり、スサノオには隠された強さがあるって事？」

「そうだな。だけど、それを発動させるにはまず、スサノオとの関係の進展と、衝撃に耐えられるだけの身体作りだな。少なくとも、マドカくらいには体力が欲しいかな」

「マドカちゃんって、結構体力あるよね？　少なくとも更識所属で最下位じゃないと思うけど」

「体力だけで言えば、簪や本音の方が下だな。ISがあれば別だが、IS無しだとあの二人は運動音痴だから」

「一夏君が言う運動音痴は世間一般とはズレてそうだしな……とりあえず朝の運動を毎日続けられるように頑張るよ」

更識内での常識は、世間一般とズレている事が多い。その事はエイミイも理解していた。スサノオの隠された強さを発揮出来るように、より一層の努力をしようと誓ったのだった。

勘違いの女性

刀奈に連れられて、一夏は今水着売り場に来ていた。周りには女性物の水着が並ぶ中、一夏は非常に居心地の悪いしていたのだった。

「一夏さん居辛いのでしたらあちらに移動しましょう。私が付き合いますから」

一夏の様子がおかしいのに気がついた碧が、そう提案する。元々そのつもりで碧は同行したので、買い物は後でも十分なのだ。

「いえ、碧さんはそのまま水着選びを続けてください。一夏さんの護衛は私がかかりますら」

碧の提案を聞いた闇鴉が、突如人の姿になり碧の提案を断る。相変わらずいきなり人の姿になる闇鴉に、一夏は苦笑いを浮かべた。

「そう言うわけですので、碧さんはお買いものを続けてください。俺は向こうのベンチで休んでますから。刀奈さんたちも、決まったら電話してください」

今日の目的は、一夏に新しい水着を選んでもらう事なので、最終的には一夏がこの場所になければ意味が無い。だから一夏は後でまた来るといい刀奈たちを納得させたのだったが、どうも刀奈は不満顔だった。

「お姉ちゃん、どうしたの？」

「せっかく恥ずかしがってる一夏君を眺めてたのに……」

「お嬢様、悪趣味です」

「そうかな？ 最近照れた一夏君なんて滅多に見られなくなっちゃったから、偶には良いと思うんだけど」

「一夏さんが可哀想だよ、刀奈お姉ちゃん」

虚と美紀に怒られた刀奈は、軽く舌を出して反省したように見せた。もちろん形だけの反省だという事は、本音以外の全員にバレていたのだった。

水着売り場から少し離れた場所にあるベンチに腰を下ろした一夏は、座った途端にため息を吐いていた。

『どうしたんです？ ため息なんて近頃吐いて無かったですじゃないですか』

「（いや……あの場所は居心地が悪かったし、碧さんが提案してくれなかったら逃げ出せなかっただろうな、と思つて）」

『刀奈さんが楽しんでましたからね。一夏さんがオロオロしてるのを見て』

「（そんなにオロオロした覚えは無いんだがな……）」

無意識にしていたのだろうか、と一夏が自分の行動を思い出しているところに、見ず知らずの女性が声を掛けてきた。

「そのの貴方」

「……………」

「貴方よ貴方！ ベンチに座っている貴方！」

「？ もしかして俺ですか」

自分が声を掛けられているのだと理解した一夏は、確認の為に女性に声をかける。

「そうよ！ 貴方、私の水着選びに付き合いなさい！」

「はい？ 何故俺が見ず知らずの貴女の水着選びに付き合わなければいけないのですか？ 俺は連れが選り終わるのをここで待つてゐるんです。貴女に付き合う暇はありません」

「男が私に逆らうつていうの？ 貴方の事を痴漢で警備員に突き出しても良いのよ」

「冤罪も甚だしいですね……てか、貴女狙われてますよ」

チラリと視線を背後に向けた一夏は、ため息を堪えたような声で女性に忠告をする。もちろん気配など探れない女性は、一夏が悪あがきしているのだと受け取った。

「男なんて女に従つてればいいのよ！ 分かつたらさつさと——」

「一夏さん、皆さん選り終わりましたのでお願いします」

「た、た……小鳥遊碧ッ!？」

声を掛けてきた女性も、第一回モンド・グロッソ覇者である碧の事は当然知っていた。その碧が目の前少年と知り合いだなんて、全く思っていなかったのだろう。腰を抜か

しかけている。

「一夏さん、この女性は？」

「さあ？ 俺に水着選びを手伝えとか言ってきた偉そうな女性です」

「更識家次期当主候補筆頭である一夏さんに偉そうな態度を取ったのですか？ 社会的にも肉体的にも殺しても良いんですよ？」

碧の顔がいきなり裏の顔になり、女性は完全に腰を抜かした。碧が暗部組織所属である事はあまり知られていないが、更識所屬という言葉は世の中の女性の憧れであり、その次期当主候補が目の前の少年だったという事で、驚きが倍増したのだろう。

「放っておきましょう。それに、刀奈さんたちが待つてるんですよ？ 面倒を起こして後で色々言われるのは御免です」

「そうですね。こんな小者の所為で一夏さんに選んでもらえなかったと知れば、刀奈ちゃんは怒るでしょうね」

二人の口から出た刀奈という名前も、日本に住んでいるこの女性は知っている。現日本代表にして第二回モンド・グロツソ覇者の名がそうなのだから。自分がとんでもない相手に話しかけていたのだと理解した女性は、力の入らない足を必死に引き摺って逃げ

ていったのだった。

「ありがとうございます。どう対処しようか悩んでいたんですよ。闇鴉で物理的に撃退するわけにもいきませんし」

「一夏さんは表向きには無名ですからね。仕方ありませんよ」

「碧さんや刀奈さんみたいに、顔が知られてるわけじゃないですもん。それに、俺の顔が知られてたら色々とマズイですからね」

更識の最重要人物である一夏は、何処へ行くにも誰かしらの護衛が付く程だが、表世界ではISを使える男の子程度にしか知られていない。だから今回のように一人で行動しているとあのような勘違いをした女性が声を掛けてくるのだ。

「闇鴉が一緒なら大丈夫だと思ったのですが」

「いきなり私が現れたらあの人、心臓麻痺で死んじゃいそうでしたし。現に碧さんの登場で呼吸困難になりましたしね」

「別に、女性の品位を落としてる人なら、死んでも別に問題無いと思うんだけどね」

「大ありですよ……眼の前で死なれたら後味悪いじゃないですか」

物騒な事を話しながら、一夏は水着売り場まで戻って来た。そこには、大きく手を

振って一夏を待っている刀奈たちが、あまり見たくない笑みを浮かべていたのだった。

合流

一夏たちがいる水着売り場から少し離れた場所に、I S 学園の生徒が数名水着売り場を目指してやってきていた。

「お兄ちゃんと来たかったぞ」

「仕方ないよ。一夏は更識所属のメンバーと何処かに出掛けてるみたいだし」

「アンタも更識所属じゃないの？」

「僕は子会社の人間だから。本社の面々と一緒には行動出来ないよ」

「一夏君はそんな事気にする人じゃないと思うけど」

「そうですね。私やラウラさんの暴言にも寛容な心で対応してくださったり、シャルロットさんのご自宅の問題も解決してくださった一夏さんが、子会社の人間だからという理由で区別するとは思えませんわ」

ラウラ、シャルロット、鈴、セシリア、静寐の五人も、今日は臨海学校に向けての水着選びに来ていたのだ。一夏の人柄に納得したのか、シャルロットは話題を変えることにした。

「篠ノ之さんも誘ったんだよね？」

「うん。でも篠ノ之さんは今日予定あるんだって」

「教官たちとデートとかお兄ちゃんが言ってたぞ。私も教官とデートをしてみたいぞ」

「えつと……多分そのデートって言葉は隠語だと思うよ。一夏君がそう言ったなら間違いないと思う」

静寂だけは「織斑姉妹とのデート」という言葉の正確な意味を理解しているようだが、織斑姉妹を尊敬しているラウラは、箒の事を羨ましく思っているようだった。

「ところでシャルロット、アンタ一夏とフランスに行ったのよね？」

「うん、そうだけど？」

「更識企業の秘密とかは教えてもらったの？」

「僕みたいな末端の人間には重要秘密なんて教えてくれないよ。多分布仏さんも聞いてないんだろうし」

シャルロットの言う「布仏」とは、当然本音の事で、鈴もその事を正しく理解していた。

「あののほほんとした子に教えたら、あつという間に情報漏洩問題に発展するでしょう

しね。でも子会社って言ってもその社長なんでしょ？ そのうち教えてもらえるんじゃないの？」

「どうだろうね。でも何でそんな事聞くの？」

「ちよつとした好奇心よ。アタシも付き合い長いけど、一夏って何か隠してる感じがするのよ。部外者のアタシには言えなくても、アンタになら言えるのかなって思っただけ」

「鈴さんは小学生の頃からのお付き合いなんでしたね。子供の頃の一夏さんってどんな感じでしたの？」

「どんなんて……あの頃はまだ対人恐怖症だったし、箒の所為で親しい友人は皆苗字で呼んでたから『更識』に変わって呼ぶのに苦労してた友達に苦笑いを浮かべてるような子だったわね。名前で呼んでも良いって一夏は言ってたんだけど、アタシと入れ替わりだった箒が、一夏の事を名前で呼んだ人を追いかけて回してたらしくて、一夏だけじゃなくて他の子たちも箒に恐怖心を抱いてたわね」

「一夏君、まだ篠ノ之さんの事が苦手っぽいけどね」

そんな話をしながら、水着売り場に到着した五人の前に、刀奈たちの水着を選ばされていた一夏が見えた。一夏だと確認して、ラウラの動きは素早かった。

「お兄ちゃん！ 私の水着も選んでください！」

「だから、お前がお兄ちゃんって呼ぶな！ 兄さまは私の……」

合流してすぐ、マドカと言い争いになったラウラを、一夏と他の面々は微笑ましく眺めていた。

「やあ一夏。今日就更識の面々とお出かけじゃなかったの？」

「だからここにいます。刀奈さんたちに水着を選んでくれと頼まれたから」

「丁度いいじゃない！ 一夏、アタシたちの水着も選んでよ」

「鈴たちのもか？ 俺が選ぶより自分で選んだを方がセンスが良いと思うんだけどな……」

一夏は基本的、着られればそれで良いと思うタイプであり、自分の服装には無頓着なのだ。だがセンスが悪いわけでは無く、一夏が選んだ服は、簪や美紀に好評であり、刀奈や虚も選んで欲しいと一夏に頼むほどだ。

その事を知っている鈴は、一夏の謙遜を一蹴し、自分たちの水着も選ぶように交渉する。

「アンタのセンスが良いのは知ってるのよ。だいたい普段から織斑姉妹がしつかりして

るのだって、アンタが昔に選んだ服を基準にしてるからでしょ」

「そうらしいな。俺があの人々の服を選んでたのって、俺が記憶を失う前なんだよな。何時までそんな服を持つてるんだか……」

「あの二人は永遠に持つてるでしょうね。それじゃあ、テキトーに選ぶから、その中から一夏が選んでよ。それなら良いでしょ？」

「まあ、それくらいなら……」

「よし！ それじゃあセシリア、ラウラ、シャルロット、静寐、一夏に見せたい水着を選びに行くわよ！」

「趣旨が変わってないか？」

鈴の宣言に首を傾げた一夏だが、どうやら女子たちにとってはそれが本命だったらしい。一夏のツツコミに全員が同時に首を横に振った為、一夏は腑に落ちないながらも自分の心を納得させるのだった。

「さっすが一夏君。モテモテね。この水着も可愛いし、一夏君のセンスは間違いないわね」

「それはいいですが、何時まで試着してうるついでるんですか？ 早く着替えてください」

「もうちよつとだけ。それに、簪ちゃんや虚ちゃん、美紀ちゃんだつて一夏君にくつついてるじゃない」

「その三人は着替えてるので文句は言いませんが、刀奈さんはまだ水着のままじゃないですか」

文句を言いながらも強引に引きはがさないのは、一夏の優しさだ。その事を分かっている刀奈は、もう少しだけ甘えてからと一夏にお願いし、存分に一夏分を補給してから更衣室へと戻って行った。

「ところで、本音の水着だが……」

「ほえ？」

「あんな着ぐるみみたいな水着があるんだな」

「パジャマもあるよー!」

「ああ、それは知ってる」

この後まだ五人分の水着を選ばなければいけないのか、と一夏が疲れている横で、本音のはほんど買った水着を眺めていたのだった。

織斑姉妹とのデート？

一夏たちが買い物を楽しんでいる頃、不機嫌な雰囲気を感じそうともしない二人と一緒に行動していた少女がいた。

「何故わたしたちが貴様の相手をしなければいけないんだ」

「お前などさつきと更生施設に送りつけてしまえば全てが丸く収まるというのに……」

「私はなにもしていないではないですか！ 千冬さんや千夏さんだつて分かつてるでしょうが」

「まだどうか……お前がした事はIS学園で生活する全ての人間に危害を加える恐れがあったんだ。それを、一夏の温情で私たちと臨海学校が終わるまで行動を共にする事で許してもらえたんだぞ。一夏に感謝するならまだしも、何時まで逆恨みしてるつもりだ」

箒に科せられた罰は、織斑姉妹との楽しいデートだ。だが日数の指定はされていないし、臨海学校の時に余計な事をされないように織斑姉妹がそこまでは行動を共にすると決めたのだった。

「だいたい、お前さえいなければ今頃、一夏やマドカと一緒に買い物に行けたというのに……」

「ああ、一夏とマドカの水着姿……お姉ちゃんは見たいぞ」

「行けば良いじゃないですか。私は一人でも大丈夫です」

箒の提案に、二人は一瞬一夏に頼まれた事を忘れかけたが、すぐに箒の危険性を思い出して首を左右に振った。

「本当ならそうしたいが、お前が余計な事をしないと制限されないからな」

「次余計な事をすれば、さすがの一夏でもお前を庇わないだろうからな。昔馴染みというだけで、一夏は随分甘い」

一夏が箒を見捨てれば、今すぐにでも彼女は更生施設送りか、最悪警察のお世話になっているだろう。「篠ノ之東の妹」というだけではもう、庇いきれないくらい箒の言動行動は問題視されているのだ。

「一夏が甘い？ 冗談は言わないでくださいよ千夏さん。幼馴染の私を無視して、わけのわからない連中ばかりと話してる一夏が甘いわけないでしょう」

「お前は一夏の幼馴染でも無ければ友人でも無い。それを理解出来ないお前の頭を叩き

つぶしたいところなんだぞ。それを一夏が学園に迷惑がかかるからと言って抑えてるんだ。一夏がいなかったら、お前は既に生きて無かっただろうな」

「そもそも一夏がいなければ、私だってアイツに抗議する必要は無くなるんですが」
「お前のは抗議ではなく暴行だ。わたしだってお前を殺したい気分だが、一夏にダメだと言われているから殺さないだけだ。東の妹だろうがお前の行動は問題だからな」

奇行の目立つ束だが、それでも箒ほど凶暴な事はしない。そもそも他人の区別がつかない束にとって、周りに迷惑をかけるなどと言う概念が存在しないので、一夏に怒られない程度にふざけてただけなのだ。だが箒の場合は、一夏に自分を認めさせることが目的であり、その為には周りを排除しても構わないという思考の持ち主だと織斑姉妹は分析している。その所為で友達も出来ないし、その行動が一夏を遠ざけているのだと理解しない限り、一夏が箒に振り向くとも思っていない。

「貴様は本来なら臨海学校に同行させたくもないところだが、学校行事だからな。私と千夏がしっかりと監視し、部屋も私たちと同部屋だ」

「一夏はどの部屋なんですか？ 男一人で部屋を使わせる余裕があるんですか？」

「一夏は更識妹、布仏妹、四月一日と同部屋だ。あいつらは家族だから特例で認められる」

血涙を流しながらいう千夏に、箒は一つの提案をする事にした。

「家族と言うなら、千冬さんと千夏さんも認められるのでは？ 私の監視というなら、一夏もその任を務めるべきだと思いますが」

「確かにそうだが、一夏とお前を同じ部屋で生活させるわけにはいかない。お前が一夏を襲いかねないからな」

「性的なトラウマまで植え付けられたら堪らんからな」

箒が常日頃「邪魔さえ入らなければ子供の一人や二人……」と言っている事を織斑姉妹も知っている。そんな箒と一夏を同じ部屋にしたら最後、一夏が襲われるのは必至だろう。そして箒が手加減するとも思えないので、魅力的な提案ではあったが断腸の想いで却下したのだった。

「しかしですね！　いくら一夏とはいえ、女子三人と同部屋では、何をするか分かりませんよ」

「一夏は利口で優しい子だ。あの三人の事を大事に思ってるのは、わたしや千冬でも理解出来る」

「そもそも一夏とそこら辺の男子高校生を一緒にするな！　一夏はそう言った本すら

持つてないんだぞ」

興味が無いのではなく、興味を向けている暇が無いのだが、その辺りは織斑姉妹にとつてどうでも良い事なのだ。一夏がそういった本を持つていない、その事実だけが必要なのだから。

「ですが、高校生にもなつてそのような本に興味が無いなど、おかしいではありませんか！　もしかしたら男色の気が……」

「一夏を侮辱するな！　このバカものが!!」

「しかし、一夏はこれだけ女子に囲まれているのに、誰一人一夏に手を出された女子はいません。これは疑つても仕方ないとは思いませんか？」

一夏は手を出さないのではなく、トラウマから一定の距離を保たないと付き合えない相手が多いだけであり、恋愛にも興味はあるだろうし、間違つても男色の趣味は持ち合わせていない。それは普段の一夏をちゃんと見ていれば分かる事で、分かつていないのは筈だけなのだ。

「お前は今後一夏の事を口にするな。不愉快だ」

「もし口にしかけたら、私たちが力づくで止めるのでそのつもりで」

「で、ですが！」

「黙ってろ、小娘」

千冬の殺気の中てられて、箒は渋々口を噤んだ。普通の女子高生では、今の殺気だけで気を失いそうだが、その辺りは箒ならではのだろう。一応鍛えているだけあって、殺気だけでは気を失わないだけの胆力を持ち合わせていたのだった。

いざ海へ

一年生が臨海学校に出掛けると、I S学園の戦力は大きく落ちる。単純に専用機持ちの大半が一年生というだけでは無く、織斑姉妹、小鳥遊碧、山田真耶、五月七日紫陽花といった元代表及び元候補生の教員が一年担当だという事も多分にあるのだ。

それでも現役の代表である刀奈、企業代表である虚といった実力者は在籍しているし、何かあれば一夏と簪が組み上げた撃退プログラムを作動させればある程度の敵は撃退出来るようににはしてあるのだ。

「でもこの前みたいに俺たちに気配を掴ませない相手が来た場合は二人に任せるしかないんだがな……」

「気にし過ぎですよ。一夏さんだってその事はお二人に任せるって納得したじゃないですか」

「そうなんだが……虚さんはともかくとして、刀奈さんは何処か抜けてるところがあるから……」

「大丈夫ですって。刀奈お姉ちゃんだって一夏さんに頼まれた事はしっかりと務めあげてくれますから」

生徒会長であり、現役の代表ではあるのだが、刀奈の信頼度はさほど高くない。普段から生徒会の仕事を一夏や虚に任せているのが原因なのだが、彼女は別に仕事が出来ないわけではないのだ。

「頼る人がいなければ、刀奈お姉ちゃんだってちゃんと仕事しますよ」
「だといいがな」

移動中のバスの中で、隣に座る美紀と学園の心配をしている一夏を、クラスメイトは複雑な思いを抱きながら眺めていた。ある生徒は、これから水着姿を見せるのを恥ずかしがっていたり、ある生徒はこの機会に少しでも一夏と仲良くなりたいたいと思っていたり、またある生徒は、隣に座る美紀を羨ましがったりと様々な感情がバス内をめぐっていた。

「そろそろ旅館に到着するが、まず自分の部屋を確認し荷物を運びこめ。遊ぶのはそれからだ」

織斑千冬先生の言葉に全員が元気のよい返事をし、バスは目的地へと到着した。まず自分の部屋を確認するよりも、一夏の部屋を確認してる生徒が複数いたのは、多分遊び

に行こうと考えているのだろう。

「一夏、同じ部屋だね」

「私も」

「私もですね」

「兄さまと同じ部屋です」

「見事に更識所属が揃ったな……偶然ではなさそうだ」

少し離れたところで織斑姉妹が一夏を眺めているのを見て、一夏はこの部屋割は織斑姉妹の計らいだと理解し、軽く会釈をした。すると織斑姉妹は鼻血を出して興奮しだしてしまい、その姿を見られないように部屋へと引つ込んだのだった。

「いっちー、荷物を運んで海に行こう！」

「兄さま、一緒に遊びましょう」

「私はいんまり泳げないから、浜辺で本でも読んでる」

「とりあえず、部屋に行きましょう」

既に疲れそうだと、一夏は内心苦笑いを浮かべていたが、折角楽しそうにしてる四人に水を差すのは避けようと思ったのか、顔には出さなかった。

女子更衣室では、同性だからなのか遠慮の無い言葉が飛び交っていた。

「鈴さんは活発なイメージだけあって胸も慎ましやかなのですね」

「あによ、喧嘩売ってる？」

「そうではありませんわ。鈴さんがティナさんほど胸があつたら、私たちは敵いませんもの」

「確かに、ティナの胸は羨ましいわよね……さすがアメリカなのかしら」

「意味が分からないわよ。だいたい、鈴だって小さいわけじゃないでしょ？」

鈴のルームメイトでアメリカ国籍のティナ・ハミルトンの胸を見ながら、セシリアと鈴がぼやく。その隣ではシャルロットとラウラ、そして静寐がそんな二人を見てぼやいていた。

「セシリアだって十分あるじゃないか」

「私はお兄ちゃんが気にいってくれるなら大ききなど気にしない！」

「ラウラ、いくら同性だけだからって、少しおおっぴらげ過ぎじゃない？　もう少し恥じらいを持つて発言しないと……」

「そう言えば箒は？」

「篠ノ之さんなら織斑姉妹に連れて行かれてたわよ」

ふと思いついたように鈴が訊ねると、静寐が見た事を素直に伝えた。

「また何か仕出かしたの？」

「この前の学年別トーナメントの罰ですわね。臨海学校が終わるまで織斑姉妹と行動を共にするらしいですわ」

「教官二人と行動を共にするなど羨ましい……私が代わってもらいたいくらいだ」

「ラウラ、多分楽しい事じゃないし、一夏と会えなくなるかもよ？」

「なにつ!?　お兄ちゃんと会えないのは却下だ！」

少し他とズレているラウラに、シャルロットがやんわりと指摘をして考えを改めさせる。この二人は割といいコンビなのかもしれない。

「そう言えば自己紹介してなかったわね。初めまして……じゃないけど、一応ね。一年一組の鷹月静寐です」

「ティナ・ハミルトンよ。よろしく」

「静寐、一夏は来るの？」

「さつき更識さんたちと部屋から出ていくのを見たから、多分来るんじゃない？」

「一夏に飛び乗って監視ごっこしなきゃ！」

「そんな事出来るの、鈴だけだよ……」

少し羨ましそうなシャルロットを他所に、ラウラは純粹のその遊びが気になっている様子だった。

「でも、臨海学校って何をする行事なの？ イマイチよく分からないんだけど……」

「細かい事は気にしない方が良いでしょう。行事を楽しんだ方がお得ですよ」

「後で一夏に聞いてみましょう」

着替え終わった面々は、それぞれの覚悟を胸に浜辺へと飛び出して行く。ただし鈴と静寐は、こういった場所に一夏が出てくるのかが気になつていたのである。鈴は一夏が対人恐怖症である事を知っているし、静寐も何となく理解しているので、来たとしても簪や美紀の傍からは離れないだろうと思つていたのである。

織斑姉妹の懸念

浜辺に出てきた一夏を襲ったのは、幼馴染の容赦ないタックルだった。

「やっぱり一夏の目線だと高くていいわね〜」

「おい、鈴！ いきなり何をする」

「監視委員ごっこよ。アンタは監視台ね」

「あのなあ……」

振り落とそうとすれば簡単に出来るが、一夏は抵抗を諦め鈴が飽きるまで付き合う事にした。最近遊べてなかった謝罪も込めての行動だが、その行動は周りに人を集める結果になってしまったのだった。

「更識君に肩車してもらってる！」

「あれって私たちもやってもらえるのかな？」

「そして早い者勝ちよ、きつと」

「……おい鈴、この騒ぎの始末はお前がやれよ」

「はいはい、これはアタシだけがやってもらえる事だから、騒いでも無駄だからね」

一夏の頭上から鈴が周りの女子に宣言すると、一組の専用機持ちたちが不満を爆発させた。

「何故鈴さんだけなのですか？ 私たちだって一夏さんと触れ合いたいですわ」

「一夏はパンダじゃないわよ」

「そういう意味じゃないけどね。でも、僕も一夏の視線を体験してみたいな」

「お兄ちゃんに肩車してもらいたいぞ！」

「これは幼馴染であるアタシの特権なの！ 小学生のころプールでやって楽しかったからまたやってもらおうって決めてたんだから！」

「聞いて無かったけどな……」

いくら説得を任せたからといって、頭上で大きな声を出されれば一夏も黙ってはいない。鈴が一人で決めていたと宣言した事にツツコミを入れたが、それが余計に騒ぎを大きくしてしまった。

「つまり鈴さんは、いきなり一夏さんに飛び乗ったと言うわけですね」

「別にアタシなら一夏は気にしないですよ？」

「まあ、害意があれば闇鴉が撃退しただろうからな」

「……何気に怖い事言わないでよ」

「はい、鈴さんでしたから何もしませんでしたが、もし他の方でしたら今頃真つ二つだったでしょうね」

「……相変わらずいきなり人の姿になる奴だな」

一夏の隣に人の姿で現れた闇鴉に、一夏がツツコミを入れた。

「ほら、そろそろ下りろ。気が済むまで付き合おうとも思ったが、こんな騒ぎになるなら終わりだ」

「ちえ、まあ楽しんだから良いけどさ」

勢いを着けて一夏から飛び降りた鈴は、普段より楽しそうな笑顔を浮かべていた。

「楽しそうだな、一夏」

「千冬先生、それに千夏先生も。何か用ですか？」

「お前の耳に入れておきたい事があってな。少し良いか？」

「構いませんが、お二人は篠ノ之さんの監視があつたのでは？」

「緊急事態だからな、真耶に代わってもらった」

また押し付けたのでは、と疑ったが、取り合えず話を聞いてから判断しよう。一夏は人気の無い場所へ移動する事にした。心配させないよう、美紀と簪にアイコンタクトで事情を伝えて。

人気の無い岩場に移動して、一夏は織斑姉妹に何があつたのかを訊ねる事にした。

「人の気配はありませんね。それで、緊急事態とは？」

「先ほどあのバカから連絡があり、アメリカに不審な動きがあるとの事だ」

「不審な動き？」

「イスラエルと共同開発している第三世代型ISの運用試験が行われるらしいのだが、

アメリカが何か仕出かすかもしれないとのことだ」

「それが分かっているなら、東さんが対応すればいいのでは……あつ、あの人は外交問題とか世界情勢とか気にしないのか」

千冬たちが何か言う前に自分で納得した一夏は、少し考えてから二人を正面に見据え真剣な表情を浮かべた。

「何かあれば——もつと言えば、この辺りに影響が出るようなら我々で対処せよ、と言う事ですね」

「察しが良くて助かる。更識所属の面々がいるので、わたしたちは後方支援にあたれるし、外交問題になっても、お前なら上手く対処出来るだろ」

「何かあればこちらが被害者ですので、俺が対応しなくても済むと思いますが」

「実は共同開発されたI Sのテストパイロットは私たちの知り合いでな。私情を挟まない為にも一夏が適任だと思う。小鳥遊も顔見知りだからな」

「はあ……なにも起こらないのが一番でしょうが、東さんが懸念するくらいですからそれはなさそうですね」

うさ耳マッドを思い浮かべ、一夏は小さくため息を吐いた。東は快樂主義な面もみら

れるので、アメリカの計画を束が乗っ取る、などという展開も大いに懸念されるところなのだ。

「気になるのは、七月七日がバカ箒の誕生日だと言う事だ。余計な事をしないように釘は刺しておいたが……」

「五寸釘でも無ければ意味が無いでしょうね。いつそのこと杭でも打ち込めればいいのですが」

「束の事だ、余計な事を仕出かす確率の方が高いだろう。更識所属の奴らにはお前から説明しておいてくれ。小鳥遊は既に知っているがな」

「分かりました。ところで、共同開発の第三世代型ISのデータは無いんですか？ 万が一に備えて調べておきたいのですが」

「開発中のISのデータは国家機密に値する。さすがに手に入れる事は出来ん。お前もハッキングなど考えるなよ」

「分かってますよ。しかしデータが無いといざという時に動けるかどうか……」

腕を組みながら思索する一夏の表情に、千冬と千夏は内心興奮していた。

「ああ、一夏の水着姿。写真に収められないのが悔しいが、立派に成長しているな。お姉ちゃんは嬉しいぞ」

「（適度に引き締まった肉体、幼さを残す顔立ちだが真剣な表情は立派さを感じさせる……さすがわたしの自慢の弟だ）」

「……？ 何か付いてます？」

「いや、何でも無いぞ」

「はあ……」

穴が開くくらい見詰められて、さすがに居心地が悪くなったのか、一夏は早々に浜辺へと戻って行った。残された二人は、それぞれ岩陰に隠れて発散したのだった。

ビーチバレー

岩場から戻って来た一夏を、本音は相変わらずの能天気さで迎えた。

「いっちー、どこ行ってたの〜?」

「織斑姉妹と話があるってアイコンタクトで伝えただろ」

「兄さま、本音が兄さまのアイコンタクトを理解出来るとは思えません」

想っていてあえて言わなかった事をマドカがあっさり言ってしまったので、一夏は苦笑いを浮かべながらマドカの頭に手を置いた。

「そう言う事は思っても口に出すものじゃないぞ。さすがの本音も傷つくだろうしな」

「一夏も大概だと思おうよ? それで、千冬先生と千夏先生はなんて言ってたの?」

本音の事を何時までも喋ってるわけにもいかないのだと理解していた簪が、話の流れを変える為に助け船を出した。一夏は目礼で簪に感謝を示し、そのまま説明を始める事にしたのだった。

「確定情報でも無いし、本来なら生徒である俺たちに任せるのはおかしいとは思うんだが……アメリカで行われてる共同開発した第三世代ＩＳの性能テストが近々行われるらしく、そこに不穏な動きが見られと報告があった。万が一暴走でもした場合の対処は、専用機持ちに任せるといふ話だ」

「暴走つて、どんなテストをするか分からないの？」

「テストの内容どころかＩＳの性能すら分からない。想像だが、アメリカは開発データをイスラエルに持つて行かせたくないのかもしれない。暴走したのをイスラエルの所為にしてデータを解析するからとか言つて一人占めするのかな」

「随分とせこい考えですね。アメリカつて世界の警察を名乗つてるほどですよ。そんな事しますかね」

美紀の質問に、一夏も首を傾げる事しか出来なかつた。なにせ情報が少ないのだから、憶測を立てるにしても突飛な事を考えてしまう可能性の方が高いのだから。

「まあ、なにも起こらなければそれで良いんだから、頭の片隅にでも留めておいてくれ」
「そう言えば一夏、さつきから一夏の事探してるよ」

「相川さんに夜竹さんに榎灘さんがビーチバレーでもしたいつて言つてたけど」

「やりたいつて言つても……簪と本音は普通の運動はあまり得意じゃないだろ？ マド

「かもやった事無いだろうし……」

「向こうが三人ですが、私と一夏さんで——」

「なら、三人目は私が務めましょう」

美紀が提案し終える前に、一夏の隣に黒のビキニを着た闇鴉が現れた。

「……お前、肌白いんだから大丈夫か？ ISも人の姿だと日焼けするんじゃないのか？」

「問題ありません。UVケアは万全です」

「まあいいか……マドカも見学して、途中から誰かと代われば良いだろう」

「はい！ 兄さまの邪魔をしないように努力します」

「……遊びなんだから気にしなくても良いと思うぞ」

妙にやる気の高いマドカを連れて、一夏は三人の許を訪れる。

「こんにちは、探させちゃったみたいですね」

「あつ、更識君。来てくれたって事は勝負って事で良いよね？」

「別に構いませんが、ルールはどうします？」

「スパイク無しの十一先取で、デュース無しね。あつ、それから更識君はサーブは下か

ら打ってね。さすがに男の子の全力サーブは受けられないから」
「分かりました。美紀や闇鴉も下から打たせましょう」

更識所属である美紀とISである闇鴉も、普通の女子のレベルのサーブでは無いだろうと考えて、一夏は追加提案をしたのだ。

「そつちのメンバーって四月一日さんと闇鴉さんなの？ てつきり本音がマド力が出る
と思ってたのに」

「私は見学してから交代で参加する予定です」

「私はいっちょーのカッコいいところを見に来たんだよ。かんちゃんも一緒にね」

「うう……日光が眩しいよ……」

「普段から引き籠り気味なんだから、少しくらい外にでなきゃね」

開発・研究に没頭するクセがある簪は、日頃日光を浴びる機会が少ない。それこそ実習の為に校舎からアリーナへ向かう間くらいしか無いのかもしれない。

「簪は屋敷にいた時はちゃんと訓練してたのに、最近はVTSばかりだもん」

「外に出なくても訓練出来るし、格闘術は武道場で出来るもん」

「健康に良くないからって誘っても、簪ちゃんは外に出ないもんね」

「この前の買い物の時だって、かんちゃんも帽子を目深に被って日光を見ないようにしてたし」

「あれって顔を隠してた訳じゃ無かったのか……」

代表候補生である簪の配慮だと思っていた一夏は、その真の意図を知り驚いた表情を浮かべていた。あの時、刀奈も虚も美紀も、碧さえも顔を出していたのに騒がれなかったのは、ある意味で奇跡だったのかもしれない。

「そろそろ始めていいかな？」

「あ、ああ……それじゃあそちらからサーブで」

一夏がそう言うと、櫛灘の目がキラリと光った、ように見えた。良く見れば口元も笑っているように釣り上がっている。

「七月のサマーデビルと言われたこの私のサーブを受けてみよ！」

「サマーデビル……悪魔の多いクラスだ」

『悪魔の姉妹』と呼ばれる双子が担任であるので、これで少なくとも悪魔が三人目。一夏がそうばやきたくなるのも仕方ない事なのかもしれない。

「更識君に勝つチャンス！」

「ほい、美紀任せた」

「はい！」

スパイクは禁止されているルールなので、美紀はピンポイントで全員が反応して動けなくなる場所にボールを浮かせた。狙い通り三人はお見合いをして、あえなく一夏チームが先制したのだった。

「さて、それじゃあ闇鴉、サーブを任せる。軽くだからな」

「分かっていますよ。このままストレートで勝たせてもらいます」

「……軽くだからな？」

闇鴉の呟いた言葉に、一夏は一抹の不安を抱き念を押したのだった。

夕食

初日は海で遊んだりしただけの臨海学校の夜、大広間で夕食を摂る事になった一夏の隣には、セシリアとマドカが座っていた。

「セシリア、椅子座じゃなくて大丈夫なのか？」

「へ、平気ですわ……（この席を確保する為に、わざわざ美紀さんに土下座までしたのですから）」

本来なら護衛である美紀がセシリアの席に座つてるはずだったのだが、土下座までして頼みこまれたらさすがに美紀でも断れなかった。

「兄さま、この緑のものはなんですか？」

「ん？ ワサビを知らないのか？」

「ワサビですか……食べてみます」

「えっ？ ちよつ——」

ワサビを箸で摘み口へ運ぶマドカを止めようとしたが一步及ばず。あまり辛いもの

が得意ではないマドカにとって、ワサビは初挑戦のはずだ。それを一山全て口に運べば――

「か、辛い！ 兄さま、口が辛いです！ 痛いです！」

——まあこうなるだろう。

辛さと痛さでもがくマドカに、一夏は水を飲ませ背中をさする。

「ワサビはそのまま食べるんじゃないかと、刺し身につけたり醤油にとかしたりして使
うんだよ。見た事無いか？」

「他人の食事してる姿なんてみませんよ。それに、更識所属の面々はあまり辛いものを
食べませんし」

「言われてみればそうだな……皆甘いものばかり食べてるような気も……」

女子だから多少は仕方ないのかもしれないかと思っていた一夏だが、改めて考えると甘
いものの食べ過ぎのように思えて仕方なかったのだった。

「セシリア？ さつきから震えてるけど……本当に大丈夫なのか？」

「も、問題ありませんわ……お箸が使い辛いのと、正座になれて無いだけ——」

「更識はいるか」

セシリアの言い訳の途中で、千夏がふすまを開けて大広間へ入って来た。

「はい」

「何でしょうか？」

「更識一夏の方だ」

簪も反応したので、千夏は一夏だけだと伝え簪を座らせた。

「ん？ 織斑は何故涙目なのだ？」

「ワサビをそのまま食べてしまい、少し前までむせていたからでは？」

「そうか……」

夢想の世界へ旅立ちそうになった千夏を、一夏はとりあえず大広間から追い出す事にした。あまりだらしの無い姿を見られて威厳が無くなるのは教師としても人としても避けた方が良くと判断したからだ。

「織斑先生、話があるのですよね？ ここで聞いても良いのでしょうか？」

「ん？ ああ、そうだな。聞かれるとマズイ事もあるだろうから外で話そう。織斑、オルコット、少し更識を借りるぞ」

熾烈な争奪戦があつた事を見越してか、千夏はマドカとセシリアに声をかけてから大広間から出ていった。

「姉さま、何の用なのでしょう……私には聞かせられない事なのだろうか」

「ま、マドカさん……美紀さんと呼んでももらえないでしょうか？ 私、そろそろ限界ですわ」

「最初から無理しなければ良かったのでは？」

足を崩し悲鳴を上げたセシリアにそうツツコミ、マドカは美紀に席交換の合図を送るのだった。

大広間から一夏の部屋へと移動すると、そこには千冬と耳と目と口を塞がれた箒が待っていた。

「……何故篠ノ之さんはそんな事に？」

「監視を怠るわけにはいかないが、千冬にも同席してもらわなければいけなかったのでは？」

「では何故この部屋で？ 織斑先生たちの部屋でも良かったのでは？」

「いや……まあ細かい事は気にするな」

既に散らかっているのだろうかと思っただが、一夏はその事を追求する事は無かった。それよりも箒をここまでしてでも話さなければならぬ内容が気になったのだ。

「それで、何かあったのですか？」

「東からの追加情報だ。共同開発されたISの名称は『銀の福音』シルバリオ・ゴスペル遠距離主体の機体だそうだ」

「良く分かりましたね」

「これくらいなら東に調べられて当然だろう。まあ、能力値とか細かな武装については

さすがに分からなかったと言っていたが」

「遠距離主体と分かっただけでも十分ですよ。万が一の時に作戦を立てやすくなりますし」

チラリと時計に目をやり、一夏はそろそろ大広間に戻らなければ食事を摂る時間が無くなる事を確認した。

「それでは、俺は戻ります」

「何だ？ 何か用事でもあるのか？」

「いえ、まだ食事の途中です……時間もそろそろですし」

「そうだったな……料理ごとこっちに持ってくればよかったな」

「さすがにそこまでは……では、部屋に戻り次第篠ノ之さんは解放してあげてくださいね。何時までも目と耳と口を塞いだままではさすがに可哀想ですので」

一応の忠告を残し、一夏は大広間へと戻っていく。その姿を名残惜しそうに見送った千冬と千夏は、転がっている箒を持ち上げて自分たちの部屋へ戻る事にした。

「一夏のやつ、随分立派な目をするようになったな」

「あの目だけでご飯三杯はいけるな」

「わたしは五杯だ」

変な事で張り合う姉妹に、ツツコミを入れられる存在はここにはいなかった。唯一出来そうな筈も、今は喋れないし聞こえないのだから。

「さて、部屋に戻って来たわけだが……」

「このバカに片付けさせるか」

料理が運ばれてきた時はまだ綺麗だった部屋が、僅か数十分で目も当てられない惨状になっていたので。理由は明快、二人で酒盛りをしたからに他ならないのだが。

「おい箸、仕事をやろう」

「なんですか。さつきまで理不尽に拘束されていた私に何の用です」

「五分でこの部屋を綺麗にしろ」

「はっ？ ……なんですかこの惨状は」

あちこちに転がっているビールの空き缶に、さすがの箸も絶句してしまった。実は口臭で一夏には二人が酒を呑んでいた事はバレているのだが、教師も大変なのだろうという事で今回は大目に見てもらったのだ。その事を二人は知らないが……

「つべこべ言わずに片付けろ」

「海の藻屑と消えたくないければ、きびきび動け」

「どんな理屈ですか……」

逆らうことのできない相手なので、箒は渋々掃除を始めたのだが、内心では——
「（これも全て一夏の所為だ。自由になったら抗議してやる）」

——反省の色もうかがえない事を考えていたのだった。

部屋割りの理由

部屋に戻った一夏は、先ほど聞かされた他の部屋の人数とこの部屋の人数の違いの事が気になっていた。

「一部屋九人って聞いたけど、ここは五人だよな？」

「一夏、私、美紀、本音、マドカの五人だね」

簪が部屋にいる人間を数えたところに、来客が訪れた。

「やつほー！　なんか部屋の都合でこの部屋で寝る事になっちゃった」

「おー、カルカルだ〜」

「これでも六人ですね……他の部屋より三人少ないです」

少ない方が部屋を広く使えて良いのだろうが、何となく他の人に悪いと思ってしまうのだろう。美紀や簪、一夏は若干申し訳ない気分になっていた。

「では」

「私たちで」

「丁度ですぬ、一夏様」

「……白式もスサノオも、闇鴉に感化されてるのか？」

突如人の姿になり、まるで打ち合わせでもしてたのではと疑いたくなる程のコンビネーションで残り三枠に入って来た専用機たちに、一夏は呆れた視線を向ける。

「折角人数がいるんですから、何かして遊びましょう」

「トランプあるよ」

本音がバグから取り出したトランプに、スサノオと白式が喰いつく。人の姿になれるようになったは良いが、あまり娯楽と言うものに縁が無かったからだろう。その点は闇鴉も同じだが、彼女は他の二機と違い冷静に見えた。

「闇鴉も遊びたいなら構わないぞ。こんな時間から訓練も無いだろうし」

「そうですか？ では——」

一夏の許しを貰った闇鴉も、前の二機同様トランプに喰いつく。性格の違う三機が同じようにはしゃぐ姿を、一夏は父親のような気分で眺めていた。

「いつちーとかんちゃんはやらないの？」

「俺は少し出てくる。気になる事もあるしな」

「私はポータブルゲームがあるから」

簪がバッグから取り出した物を見て、一夏は苦笑いを浮かべる。ゲーマーの簪がこれくらい忍ばせていてもおかしくない、と言う事を失念していた自分に苦笑いを浮かべたのだが、簪は自分が呆れられたのだと勘違いして一夏に抗議した。

「べ、別に問題は無いはずだね？ 一夏のクラスメイトだってボードゲームとか持つて来てるって言ってたし」

「ん？ 何を慌てるんだ？ 別に悪いとは言って無いんだが」

「だって、苦笑いを浮かべてたから……」

「ああ、それは簪が持つて来てるという事を失念してた自分自身にだ。別に簪がどうこうというわけじゃないよ」

泣きそうになった簪の頭を軽く撫で、一夏は部屋から出ていった。簪を除く残されたメンバーは、少し羨ましそうに簪の頭を眺めていたが、すぐにトランプゲームに夢中になり羨ましいと思っていた気持ちは消え去ったのだった。

教員たちに割り振られたフロアにやって来た一夏は、碧が使っている部屋を訪れていた。

「あっ、更識君。お茶でも淹れますね」

「お気になさらずに。それに、山田先生や五月七日先生にも関係するかもしれない話ですから」

碧と同部屋である真耶と紫陽花を落ち着かせてから、一夏は一つ息を吐いて訪問の理由を伝えた。

「先ほど織斑姉妹から追加の情報を聞かされましたが、碧さんはもちろん聞いていますよね？」

疑問の形をとっているが、一夏は碧がその事を知っていると確信している。織斑姉妹と並び、現在でも世界最強の呼び声高い碧に情報を与えないほど、あの二人もバカじゃないと思っているからだ。

「ええ、聞いているわ。でも、私たちはあくまでもバックアップだと織斑姉妹に言われているけど」

「それは俺も聞いています。いざという時は俺たち専用機持ちちに任せると」

「それで？ 一夏君が聞きたいのはその事では無いですよね」

「碧さんならもう少し詳細なデータを持つてるのではと思ってきましたのですよ。束さんは知ってても教えない可能性がありますし、自分で調べようにもPCがありませんので」

普段使ってるPCは、学園の寮においてきているし、携帯ではさすがに調べる事は出来ない。元々諜報担当だった碧なら、もう少し詳細なデータを持っているのではと考えて今回の訪問に繋がったのだ。

「……残念だけど大した情報は持ってないわね。銀の福音のテストパイロットがナターシャ・ファイルスだって事くらいしか」

「それは織斑姉妹も知ってましたね。知人なんですってね」

「ちよつとした知り合いよ。第一回モンド・グロツソの時に少し話したくらい」

「更識君、私や紫陽花にも関係すると言っていました、この事は既に聞いています」

何時までも自分たちに関係する話題にならないのを不審に思い、真耶が一夏に話しかける。すると一夏は表情を改め、真耶と紫陽花に視線を向けた。

「万が一何か起こった場合、おそらく指揮は織斑姉妹が執るべきなのでしょうが、あの二人は篠ノ之箒の監視があります。前回のようにならまた拾ったISを使い暴走する可能性を考慮すると、あの二人は篠ノ之の傍から離すわけにはいきません」

「でも、心配のし過ぎじゃないかしら？　いくら篠ノ之さんでも同じ過ちを繰り返す程愚かじゃないと思うわよ？」

「俺もそう思いたいですが、最悪の可能性を考えて行動したほうが、万が一そうなった場合対応しやすいので。それで、作戦指揮をお二人にお任せしたいのですが」

「私たちですか!?　小鳥遊先輩じゃなくて!？」

「碧さんには情報収集に動いてもらいたいです。この前の暴走事件と無関係じゃないかもしれないので」

「愉快犯なら側で見てるかもしれないですからね」

一夏と碧に頼まれ、真耶と紫陽花は顔を見合わせる。自分たちはせいぜいバックアッ

プのバックアップだと考えていたのに、まさか指揮を執るように頼まれるなど思ってたかったのだろう。

「……分かりました。万が一の時は私と紫陽花が指揮を執ります」

「ありがとうございます。何も無ければ一番ですけどね」

一夏の見せた笑顔に、真耶の胸がときめいたのは、誰も気づかなかったのだった。

残された二人

一夏が真面目な話をしていること、I S学園の生徒会室では仕事が終わらず悲鳴を上げていた少女がいた。

「何で一夏君がいない時にこんな仕事が来るのよ！ 殆ど一夏君が処理するはずの案件じゃない！」

「一夏さんだけではなく更識所属全員に関係する事ですので、お嬢様が処理しても問題はありません」

「でも！ 『スサノオの情報開示』要求は私たちちって言うより一夏君とエイミちゃんに関係する事でしょ！ 何で私がこんな目に……」

「普段私や一夏さんに仕事を丸投げしてるんですから、今回は精一杯働いてください」

スサノオが完成したのが土曜日で、一夏は今日から二泊三日で臨海学校に出掛けている為、各国からの要請を見る事無く学園を離れている。もし少しでも見ていけば学園に残ったかもしれないが、可能性の話は何の救いにもならない。

「残った我々で片付け無いと、他の仕事も山積みになっちゃいますよ」

「帰ってきたら一夏君に思いつ切り甘えてやる！ 一夏君が作ってくれたケーキをホー
ル食いついてやる！」

「太りますよ？」

「大丈夫！ 必要分以外の栄養は全部胸に行くから」

「……それは私に対する当てつけですか？」

虚は自分の胸部を抑えながら刀奈に詰め寄る。刀奈は若干冷や汗を流しながら懸命
に言い訳を始めた。

「別に虚ちゃんだって小さくないじゃないの。簪ちゃんや虚ちゃんが気にし過ぎなだけ
よ」

「お嬢様や本音という、成長著しい相手が身内にいると、それだけでも気にしてしまうん
ですよ」

「でもほら！ 男の子が全員大きい方が好きじゃないし、一夏君も特に気にしてないで
しょ？」

「一夏さんはあまりそういう事を口にしませんから。私たちに甘えてくれる時でも、特
に気にしてませんし」

最近では減ってきているが、トラウマ発動の際には一夏は刀奈だろうが虚だろうがと
りあえず身内なら落ち着けるので、胸の大小はさほど気にしてないように思えているの
だ。

「この前水着を選んだ時も、私や本音の時と同じように、簪ちゃんや虚ちゃんの時だつて
照れてたじゃない？ もちろん、美紀ちゃんや碧さんの時もだけど」

「マドカさんは血縁と言うだけあつて冷静でしたし、凰さんはご友人と言う事で特に反
応は無かつたですけどね」

セシリア、シャルロット、ラウラの水着を選ぶ時も、一夏は鈴の時以上に事務的な対
応をしていた。

「つまり、私たちの事をちゃんと意識してくれてるつて事よ」

「お嬢様、話を逸らして仕事をサボろうとしないでください」

「うへえ、バレてるし……」

上手く話を逸らしたつもりだった刀奈だったが、虚にはその事すらお見通しだった。
結局全ての仕事が終わりに部屋に戻れたのは、日付が変わるギリギリの時間だった。

臨海学校二日目、今日はI S学園らしく基礎体力をつける訓練と、各種装備試験運用とデータ取りにあてられている。基礎体力をつける訓練は一般の学生で、試験運用とデータ取りは専用機持ちが担当する。

「千冬先生、何故箒さんがここにいますのですか？」

「確かに、箒は専用機持ちじゃないですよね？」

セシリアと鈴が質問したが、一夏以外の残りのメンバーも箒がここにいます事が気になつていた。

「こいつは臨海学校の間我々の監視下にあり、私と千夏がこちらを担当してる以上、コイ

ツもここに在る事は当然だ」

「そしてコイツは、体力だけは有り余っているので訓練に参加させる必要もない。よつて一日中ここで座禪を組ませ精神鍛錬をしてもらう事になっているのだ」

「岩場で座禪……」

美紀が零した言葉に、簪と一夏が苦笑いを浮かべた。じつに織斑姉妹らしい罰であるのだが、その意味を理解出来るものは専用機持ちの中でも多くなかった。

「少しでも身動きをしたら打ってやるから感謝しろ」

「わたしと千冬、一回ごとに交代で打ってやるからな」

「じゃあじゃあ、私もお手伝いしちやおつかなく」

突如現れたうさ耳の女性に、織斑姉妹（マドカは含まず）と一夏以外の面々は驚き距離を取った。

「気配はしてたが本当に現れるとは」

「貴様が現れるとろくな事にならんからな」

「えー！ 酷いよちーちゃん、なつちゃん！ あつ、いつくんとまーちゃん久しぶり〜！

二元気だった〜？」

「……何の用ですか、東さん」

一夏が女性の名前を呼んだ事で、セシリアがその相手に興味を持った。

「東……もしかして、篠ノ之東博士ですの! 私、イギリス代表候補生のセシリア……」
「あつ? 誰だお前。何で東さんに話しかけてるの? 興味ないから話しかけんな、雌豚」

「相変わらず口が悪いヤツだな……オルコット、この兎は他人を認識できない病気だからあまり気にするな」

珍しく千冬がフォローに回った事に、一夏は少し驚いていた。確かに東は他人を認識できないが、それは病気ではなく単純に興味が無いからである。だがその事を素直に伝えると追い打ちになると判断したのだろうと、一夏はそう解釈した。

「それで、本当に何の用だ?」

「面白そうな事をしてたからついつい……あつ、待つて! ちゃんと用件を言うから殴らないで!」

千冬と千夏から不穏な空気を感じ取り、東は大人しく織斑姉妹(マドカは含まない)と

一夏を別の場所へ誘い出した。

「例の件、何だかキナ臭いよ。介入しようにもブロックが堅くて……」

「束でもハッキング出来ないとなると、いよいよ事が起きてからしか動けないな」

「一応真耶に世界情勢を監視させているので、何か起こればすぐに分かる——」

「た、大変です！　千冬先生！　千夏先生！」

駆け寄って来た真耶に全員が視線を向けると、丁度バランスを崩して転んでいるところだった。

「「……………」」

「あははー！　なにあの面白そうな巨乳メガネ！」

束の笑い声に顔を真っ赤にしながらも、真耶は千冬たちに指令書を手渡したのだった。

紫陽花の疑問

真耶が持つてきた書類に目を通した千冬は、それをそのまま千夏に手渡して真耶と細かな事を取りきめていた。

「現時刻よりＩＳ学園教員は特殊任務行動へと移る。今日のテスト稼働は中止。基礎体力運動も中止だ。以後連絡があるまで各自室内待機する事。以上だ！」

「ちゅ、中止？ 特殊任務行動って……」

「状況が全然わからないんだけど……」

不測の事態に女子たちはざわざわと騒がしくなる。しかしそれを千冬の声が一喝する。

「とつとと戻れ！ 以後、許可なく室外に出た者は我々で身柄を拘束する！ いいな!!」

「はっ、はいっ！」

基礎訓練をしていた女子たちが慌てて旅館に走りだす。さすがに織斑姉妹に拘束されるとどうなるか理解してるだけの事はある、と一夏は感心してその動きを見ていた。

「専用機持ちは全員集合しろ！ オルコット、デユノア、ボーデヴィツヒ、凰！ それから更識所属の面々もだ！ 篠ノ之は大人しく部屋で座禪を組んでろ。見張りは東に任せろ」

「ほいほい！ それじゃあ箒ちゃん、大人しく部屋まで行こうね」

東に抱きあげられて、箒は部屋まで連れさられていく。何か言いたそうな箒だったが、彼女の事を気に止める者は誰もいなかった。

「一夏、小鳥遊を連れて来い。その間に詳しい事をこいつらに説明しておく」
「分かりました」

先に色々と聞かされている一夏は、碧の許まで走って行った。最悪な事態を想定して色々と準備していた為に、一夏の動きは普段と変わらず俊敏だった。

「さて、残りのメンバーはわたしたちと作戦司令室へと向かう。更識所属の諸君らは一夏からある程度は聞かされていると思うが、細部までは聞いていないだろうからな」
「起こらなければいいと願っていたが、どうやらそうはいかなかったようだ」

織斑姉妹の言葉に、更識所属の面々は一夏が心配していた事を思い出し憂鬱な気分

なっていた。これから行う事がどれだけ大変なのか、既に想像が済んでしまったのだ。

紫陽花と基礎訓練の監督をしていた碧は、少し離れたところで千冬の怒号を聞いていた。

「どうやら恐れてた事が起こったようね」

「小鳥遊先輩、私たちが前線に出なくても大丈夫なのでしょうかね？」

「平気よ。簪ちゃんや美紀ちゃんだっているし、一夏さんも指揮を執ってくれるでしょうし」

更識のメンバーで最も信頼のおける一夏がいるのだから、碧は何の心配もしていな

かった。

「碧さん、千冬先生がお呼びです」

「分かったわ。紫陽花は？」

「山田先生とモニター操作をお願いすると」

「分かりました。ところで、更識君は説明を受けなくて良かったの？」

作戦司令室で行われている説明の内容をある程度知っている紫陽花は、何故一夏だけ説明を受けていないのが気になり、それを尋ねた。

「ある程度は前知識がありますし、その場で解析すれば良い事ですし」

「一夏さん、それは普通出来ませんよ」

「まあ、闇鴉のセンサーを使えば大抵のISは解析できますから」

絶句して言葉も出ない紫陽花に、フォローにならない言い訳をして、一夏は空を見上げた。

「先生たちの大半は海域封鎖にあてられるでしょうし、本当に専用機持ちだけでやるんですね」

「一夏さんが指揮を執るんじゃないんですか？」

「俺が？　どうなんでしょうね。セシリアでも良い気もしますが、言われればやりませよ」

非常事態だというのに、普段と変わらない口調で話す一夏に、紫陽花は首を傾げる。

「（この子、何でこんなに落ち着いているのかしら？　小鳥遊先輩の関係者だって事は、更識の家の人間……まあ、それは苗字でも分かるんだけど。それにしても落ち着き過ぎている気が……本当に十五歳なの？）」

「さて、それじゃ俺たちも作戦司令室に……いや、不審なISの反応が複数ありますね……追跡は不可能か。碧さん、織斑姉妹には伝えておきますので、周囲の警戒とこの前みたいに篠ノ之が脱け出して余計な事をしないように監視してください。五月七日先生は俺と一緒に作戦司令室へ」

「分かりました。紫陽花、素直に一夏さんに従って」

「は、はい！」

自分が一夏の能力に疑問を抱いている事を見透かされ、紫陽花はひっくり返りするような声で返事をした。

「急ぎますよ、五月七日先生。思ってた程余裕はなさそうです」

「えっ?」

一夏がどの程度を想定していたか、など紫陽花には分からない。だが一夏の表情はかなり厳しいものに代わっており、さつきまでの余裕は感じられない。つまりそれくらい大変な事態なのだろうと、紫陽花は改めて理解させられた。

「つて、更識君早い……」

普段更識所属で一番弱いと言っている一夏だが、身体能力はそれなりに高く、並みの候補生なら完封するくらいの実力はあるのだ。その事を知ってはいた紫陽花だが、実際に見た事が無かったので一夏の実力を図り損ねていたのだ。

一夏から遅れる事数分、紫陽花は作戦司令室へと到着した。

「遅かったな、五月七日」

「更識はとつくに到着してたんだが」

「……現役を引退してからも運動は欠かさなかったつもりだったんですが、更識君の早さについていけませんでした……」

「まあ一夏だしな。さて、お前も息を整えたら真耶と一緒にモニター操作を頼む。後数十分後に作戦開始だ」

「わ、分かりました！」

千冬の言葉に背筋を伸ばし返事をして、呼吸を整える為に軽く深呼吸をしてから真耶の隣に腰を下ろした。モニターには銀の福音の飛行ルートの予想や、海域封鎖完了の情報などが表示されており、近くの岩場には専用機持ちの反応も映っていたのだった。

作戦内容

作戦開始の合図があるまで、一夏たちはテスト稼働を行うはずだった岩場で待機していた。

「ねえ一夏。本当にあんな事が出来るの?」

「出来るかどうかは俺たち次第だろ。理論上は確かに出来るんだから」

「でもさー、いっちー……闇鴉でマドマドとカルカルを同時に運ぶなんて大丈夫なの?」

今回の作戦は暴走した——暴走させられた銀の福音の停止と操縦者の保護だ。アメリカからの報告では無人機とされているが、操縦者のナターシャ・ファイルスは織斑姉妹や碧と旧知の仲で、テストパイロットに決まったと知らされていたのでほぼ間違いない。福音に搭乗しているはずなのだ。人道的に考えても個人的感情で考えても、ナターシャに落ち度が無い以上助けるべきだと一夏が進言し、千冬たちもそれに賛同した。

だがその為には高速飛行を続ける福音を止めなければならないのだが、福音に対抗出来るスピードを出せるのが闇鴉のみで、他の機体では福音に対抗するには少し厳しいのだ。そして闇鴉では的確に福音を止める事が出来ないので、白式とスサノオの零落白夜

で福音のSEを完全にゼロにして撃墜、先行してその下で待っている他のメンバーが回収すると言うのが今回の作戦だった。

「セツシーたちはもう準備してるんだろうな」

「本音ちゃん、そろそろ私たちも行くよ」

「でも一夏、本当に密漁船の事を心配する必要はあるの？　ちゃんと海域封鎖してあるんだし……」

「封鎖してあるからこそ、密漁者は入ってくるんだろう。人員がもう少しいれば穴もないだろうが、何分急だったからな。忍び込むとしたらこの位置しかないだろうから、何もなければそれでいい」

ここ最近の海域の情報を調べ上げた一夏が、密漁者がいる事を考慮した作戦を提案した時、千冬たちは気にする必要はないと突っぱねようとしたが、犯罪者であろうがなんであろうが人の命を大切にする一夏の瞳に負け、密漁者に備える為に人員を割く事を許可したのだった。

「それじゃあマドマド、カルカルも頑張つてね」

「今回の作戦は一夏と二人に掛かってるんだから」

「あんまりプレッシャーかけないでよ……ただでさえこんな大舞台に立つの初めてなん

だから……」

緊張しているのがハッキリと伝わってくるエイミイの態度に、一夏が苦笑いを浮かべながら彼女の目の前で手を打った。

「緊張するなどは言わないが、そんなにがちがちだと実力の半分も発揮出来ないぞ。大丈夫、エイミイは確かな実力を持つてるんだから、後はそれを発揮できるように心を落ち着かせるんだ。スサノオの動きも、十分理解してるだろ？」

「う、うん……Gも体験したし、VTSで何度もシミュレーションしたし……」

「でも兄さま、あの短時間でよく銀の福音のデータをVTSに打ち込みましたね」

「データ化は束さんがある程度してみたいだし、俺はそれをVTS用に改良しただけだ。更識傘下の旅館で本当に良かったよ」

一夏は作戦会議のすぐ後に更識本家からVTSのメインシステムをデータ化して送ってもらい、訓練で使うはずだった簡易VTSに更識のIDで改良を施してマドカとエイミイに動きを叩きこんだ。そのおかげでマドカもエイミイも短時間でかなり成長したのだった。

「でも一夏君、失敗したらどうしよう……」

「最悪の事態を想定するのは悪い事じゃないが、さすがに今は止めておけ。マドカも泣きそうな顔をするな。援護は俺がするから、二人は攻撃を当てる事だけに集中しろ」

いくら操縦の腕が上がっても、メンタル面の成長はこの短時間では不可能、精神的支柱の意味合いも一夏が二人を運ぶ理由にもあった。そもそもスサノオで白式を運べば事足りるのに一夏が二機同時に運ぶ事になったのはその理由が最たるものだ。

『更識、織斑、カルラ、聞こえるな』

「聞こえます、千冬先生」

「は、はいっ！ 聞こえます」

『落ち着け、とは言わないが緊張し過ぎだ。目標がそろそろ上空を通過するとの事だ。これより作戦を開始する。更識は織斑とカルラを乗せ所定の位置に向かうように』

「了解しました……ところで、何故篠ノ之の気配がそちらに？ 部屋で座禅を組んでるはずでは？」

この位置から作戦司令室は、一夏の気配探知の範囲内で、一夏はその事が気になつていた。

『それはねー、束さんがちーちゃんとなつちやんのフォローに入ったからだよ、いっくん

！』

『ちゃんと目隠しして耳を塞ぎ、柱にくくりつけているから安心しろ』

「……別の意味で心配ですが、そう言う事ですか。それで東さん、今回の作戦の成功率はどれくらいだと思いますか？」

『いっくんがいるから100%！　つて言いたいけど、七割くらいかな。密漁船がなければもう少し確率は上がるかもだけど、いっくんが懸念したように密漁者が来る確率は高いよね』

「……そうですか。東さんの七割はかなり高いですし、エイミイもマドカもそんな顔するな。そもそも絶対に成功する作戦なんてありはしないんだから」

再び泣きそうな顔になったマドカとエイミイを宥め、一夏はオープン・チャンネルを切り目標の位置まで移動する為に闇鴉を展開した。

「さてと、一応VTSで体感したと思うが、実際のGはキツイぞ。しっかりと意識を保つ事に集中しろ。作戦の事は到着してから考えるんだな」

闇鴉を展開し、その上に白式を展開したマドカ、スサノオを展開したエイミイを乗せ、一夏は飛び立った。

『一夏さん、重いです』

「悪いが我慢してくれ。後でいくらでも頭撫でてやるから」

『それだけでは満足できません。膝枕も要求します』

「……刀奈さんに感化されてないか？ まあいいぞ」

『では、最大出力で所定の位置を目指します』

闇鴉の気合いも入ったところで、一夏は更に加速し目標位置まで一気に向かったのだった。

銀の福音の意志

一夏と織斑姉妹、そして束で立てた作戦に口を挟める猛者はいなかったが、不満を抱えている生徒はいた。だがあの作戦以上の考えが無かったので仕方なく動いている感じは他のメンバーにバレバレだった。

「セシリア、少しは機嫌直しなよ。これだって立派な任務だよ」

「分かってますわ、シャルロットさん。ですが、候補生である私に課せられた任務が撃墜したIISとその操縦者の回収なんて……イギリス本国に知られたら笑われるかもしれませんのよ」

「別に笑われないだろうし、もし笑うやつがいたら一夏と篠ノ之博士が社会的に抹殺してくれるでしょうよ。あの博士、一夏の言う事は聞くみたいだし」

「センサーに不審船の反応あり。さすがお兄ちゃんだな」

セシリアを慰めている横で、ラウラが現れた密漁船の反応に喜びの声を上げた。敬愛する一夏の心配が的中し、その為に人員を割いたのが間違いではなかったと証明されたからだろう。

「ラウラ、一夏の予想が当たったのが嬉しいのは分かるけど、一応任務中なんだから」
「そもそも密漁船なんて現れた方が迷惑なんだから、喜んじやダメでしょ」

シャルロットと鈴に注意され、ラウラは急に震えだした。

「ど、どうしたのよ？」

「お、織斑教官に怒られる……もう『アレ』は嫌だ……」

「アレ？」

「そう言えばラウラもトラウマ持ちだつて一夏が言つてたわね……軍人であるラウラが……」
「ここまで恐れるとは……さすがデビルシスターズ」

ラウラのトラウマに興味を抱いている間に、美紀と簪と本音が密漁船を誘導し作戦ポイントから遠ざけ終えた。密漁船はそのまま海上保安庁へ引き渡される事になるだろう。

「後は銀の福音を一撃で撃墜して回収するだけね」

「一夏さんがカルラさんとマドカさんを運んでいるんですわよね。一夏さんに運んでもらえるなんて、羨ましい限りですわ！」

「でも、闇鴉越しだからね。実際に一夏に乗れるのはアタシくらいよ」

「……お前ら、無駄口叩く暇があるなら気を引き締めろ。私は織斑教官に怒られたいくない」

「あつ、復活した」

ラウラが復活したタイミングで、一夏からの通信が入った。

『聞こえるか？ 後五分くらいで上空にターゲットが到着する。こちらと同じか少し早いタイミングでそちらに着くので、リラックスモードだったら気を引き締めておいてくれ』

「さすが一夏ね。何でもお見通し」

完全にリラックスしていた四人は（ラウラは気を引き締めてはいたが）、一夏の通信を受けて身が引き締まる思いになっていた。そして、センサーに闇鴉と銀の福音を捉え、更に気を引き締めたのだった。

ランデブーポイントまで後少しと言うところで、一夏は謎の少女の声を聞いた。

『お願い、誰か助けて！ 私を停めて操縦者を助けて！』

「（？）もしかして、君は銀の福音のコアかい？」

頭に直接聞こえてくる声に、一夏は心の中で声を掛ける。マドカとエイミイが反応しない時点で、この声は自分にか聞こえていないと理解し、そうなると必然的にISの声と言う事になり、この状況で聞こえてくるなら銀の福音だろうとある程度断定しての返答だ。

『私の声が聞こえるの？ だったらお願い！ 暴走させられちゃった私を停めて、中に閉じ込められている人を助けて！』

「（暴走させられた？ 君は誰に暴走させられたんだ？）」

『分からない。漸く完成して広い空を飛べるって喜んでたのに……』

「（自我は保てているのなら、自分で停まる事は出来ないのか？）」「無理だよ……今だつてギリギリで話しかけてるんだもん」

銀の福音から情報を引き出せないと判断した一夏は、とりあえず福音と中に閉じ込められているであろうナターシャ・ファイルスを救助する事を伝える。

「（今から数分後に、君と俺たちは接触する。そこで君のSEをゼロにする。少し痛いかもしれないが我慢してくれ）」

『私たちは助かるの？』

「（海上に仲間が控えているから、君と操縦者——ナターシャ・ファイルスさんは必ず助ける）」

『お願い！ 私はまだこの人と——ナターシャと飛びたい！』

そこで声が途切れ、一夏は上に控えている二人に声を掛ける。

「福音からコンタクトがあつた。どうやら何者かに暴走させられたらしい。アメリカの報告では突如暴走したとのことだったが、どうやら虚偽だったようだ」

「そもそも兄さま、無人機では無い時点であの情報は虚偽だと見抜けてましたよね？」

「全て疑うには情報が少な過ぎたが、無人機では無い事は分かった。さて、後一分もす

れば接触するぞ。エイミーもマドカも準備いいか？」

一夏に問われ、エイミーもマドカも肯定の返事をし、それぞれ武器を構える。肉眼でも銀の福音の姿を確認し、マドカとエイミーはそれぞれ零落白夜の発動体制を取った。

「十秒前」

一夏から告げられ、マドカとエイミーは集中する。

「五……四……三……二……一……」

自分でもタイミングを計り、丁度真横を通り抜けるタイミングでマドカとエイミーはそれぞれ福音に一太刀浴びせた。

「当たった！」

「停まった？」

「……SEの消滅を確認。福音は所定の位置へ落下していくようだ。作戦は成功……いや『セカンド・シフト第二形態移行』しただと!？」

福音の意思では無い事が分かっている一夏は、咄嗟にセンサーを確認する。

「微弱ながらI Sの反応……マドカ、上空に敵反応だ。こっちは俺がやる！ お前はエイミーと今回の主犯と思われるI Sの捕獲に向かえ！」

「わ、分かりました！ いきましよう、エイミー！」

「う、うん！」

一夏の怒号にはじかれるように、マドカとエイミーは上空へ向かった。

「(油断してた訳じゃない……今回は相手が上手だったな)」

第二形態移行した銀の福音を相手に、一夏は反省をしていた。下にいるラウラたちにも指示を出し、福音を停める準備は既に完了していたのだった。

「悪いけど、大人しく僕たちと来てもらおうからね」

「見せ場が来ましたわ！」

「はいはい、とつとと停めちゃいましょう」

「お兄ちゃんの指示通りだ！」

マドカとエイミーに気を取られているのか、遠隔操作はされなかったもので、福音は無事に一夏がS Eをゼロにし、ラウラとシャルロットによって運ばれるのだった。

新たな病気

一夏の指示で上空を目指していたマドカとエイミイの横を、何かが高速で通り過ぎて行った。

「今、何かとすれ違いませんでした？」

「分からない……何か風が吹いたとは思ったけど」

互いに不思議そうな顔を浮かべたが、とりあえず上空を目指そうとした二人に、上から声がかけられる。

「あれ？ マドカちゃんにエイミイちゃんじゃないの。どうしたの？ 作戦は終わったの？」

「碧さん？ 兄さまが上空に不審なISの反応があるから……」

「逃がしちやっただけ……追いつめたと思っただけ、自爆まがいな事で目晦ましされちゃって」

「じゃあ、さっき私たちの横を通り過ぎて行ったのって……」

「多分今回の事件の主犯——というか、裏で糸を引いてた組織でしょうね」

悔しそうに唇を噛む碧に、マドカは素朴な疑問を投げかけた。

「何故碧さんがここに？ 本所で姉さまのフォローをしていたのでは……」

「一夏さんの命令だね。もしこの前の訓練機暴走と同じ犯人なら、近くで見てるかもしれないからって」

「さすが兄さまですね。でも、私たちに確認させに行かせようとした意味は？」

「私が苦戦するのに気づいてたんでしょね。追いつめはしたけど、こうして逃げられてるわけだし」

悔しがってるのを隠そうともしない碧の態度に、エイミイが顔をひきつらせる。

「元世界一の小鳥遊先生でも苦戦する相手って、いったいどんなIS乗りなんですか……」

「見た事無いISだったわ。木霊の案で映像録画してあるから、後で一夏さんと篠ノ之博士に解析してもらおうと思ってるけど」

「操縦者は確認出来てるんですか？ 銀の福音のように、完全に操縦者が見えないタイプのISでは無かったんですよね？」

「ヘルメットとバイザーで人相は分からないけど、結構鍛えてる感じの体型だったわよ」

とりあえず合流しようと、碧が視線で提案すると、マドカもそれに合意し、エイミイも遅ればせながらアイコンタクトに気付き頷いた。

「一夏さんの方はとくに片付いてるみたいだしね」

「第二形態移行するとは思いませんでしたよ……」

「さっきのISに遠隔操作で無理矢理させられたっばいわね。そんな研究が行われてるなんて報告は無かったはずだけど」

ISの研究の第一人者は篠ノ之束で、それに匹敵するのは一夏くらいだと碧は理解している。その二人がこの事件に解決する方で関わっているのを考えると、その二人に匹敵する研究者がまだいる可能性が出てくるという結論に行きつき、慌てて頭を振った。

「どうかしたんですか?」

「いえ……何でも無いわ」

そんなわけがあるはずが無い、と否定しようにも、先ほどの考えが頭から離れなくなっ
てしまった碧は、一夏と合流するまでの間、ずっと不安そうな表情を浮かべていたの
だった。

銀の福音の回収を確認した千冬たちは、こつそりと逃げ出そうとしていたうさ耳を無遠慮に掴み、地面にたたきつけた。

「いた〜い！ 何するの、ちーちゃん！ なっちゃん！」

「貴様、二重スパイだったのか」

「アメリカ側の黒幕に銀の福音を強制的に第二形態移行させられる装置か何かを渡し、それを一夏に喰いとめさせようという計画だろ」

「カツコいいつくくんが見れて、ちーちゃんもなっちゃんも満足でしょ？ それに、銀の福音暴走には手を貸して無いからね。私はあくまでも第二形態移行させられるように命令出来る信号を開発しただけだもん！ 何で敵の手に渡ってるのかは分からないけ

ど……」

「……お前が渡したんじやないのか？」

「何で見ず知らずのカスにあげなきやいけないのさ。あれは白式の第二形態移行の為に開発したんだもん！ 何で銀の福音にまで作用したのか、東さんは今からそれを調べるので忙しいのだよ！」

それらしい理由を付けて逃げ出そうとした束を、千冬と千夏はもう一度地面にたたきつけた。

「へぶっ?! 二回目は酷いんじやないかな〜」

「解析ならこの場所でも十分出来るだろ。どうせお前のヘンテコラボが近くにあるんだろうし」

「……な、何の事かな〜?」

「惚けても無駄だ。お前が一夏の水着姿を生で見に来るだろうと言う事はお見通しだったからな。お前のラボの位置は既に特定済みだ」

「……ちーちゃんとなつちゃんって、普段怠けてるのに凄いやね。それじゃあ東さんのラボにちーちゃんとなつちゃんをご案内しよう！ いつくんの隠し撮り写真も沢山あるからさ。それで許してくれない？」

東の提案に気持ちが揺れかけた姉妹だったが、東の背後に現れた少年の姿を確認して、返事はしなかった。

「隠し撮りつて、いったいいつからやってるんですかね？」

「そりゃいつくんが小さかった頃から……つて、いつくん!？」

「人のプライバシーとか考えないんですか、貴女は？」

「だ、だって……いつくんが可愛すぎるからいけないんだぞ！ 東さんだっていつくん成分を吸収しないと死んでしまう生き物なんだから！」

「……またその成分ですか。何なんです、それは？」

織斑姉妹も定期的に『一夏分』を吸収しなければ暴走すると言われていたのだが、一夏本人がその成分の事を理解していない。だが東の背後では千冬と千夏が納得したような顔をしているのだ。

「一夏分の為なら仕方ないか」

「どうやら東もわたしたちと同じ病気らしいな」

「病気？ なんですか、その病気は……」

「一夏溺愛症候群だ。一夏と定期的に触れ合わないと発狂して最悪死に至る」

「……わざわざ声を揃えて説明ありがとうございました」

織斑姉妹のユニゾンに、一夏は頭を抑えながらお礼を言ったのだった。

誘拐

東が織斑姉妹と同じ病気だと判明した事で頭を押さえていた一夏だったが、すぐに頭を振って真耶に一枚のデータチップを手渡す。

「碧さんが不審なI Sの撮影に成功しましたので、モニターに表示お願いします」

「分かりました。ちよつと待って——って、何してるんですか篠ノ之博士!？」

「ドジっ子メガネに任せるより東さんの方が早いからね、ほい映像出るよ」

さすがは大天災と言うだけあるのか、東は数秒でモニターに映像を表示した。

「蜘蛛?」

「いやいや、ちゃんとI Sだね」

「そう言えば、何処かで見ただことあるような……気の所為か?」

一夏が首を傾げるたタイミングで、銀の福音回収に向かっていた面々が作戦司令室へやってきた。

「ご苦労だったな。事後処理は大人の仕事だから、お前たちはもう休め」

「ん？ 織斑、顔色が悪いがどうした」

「何で……どうしてそのISがモニターに映ってるんですか！」

「マドカ、知ってるのか？」

一夏がマドカと目線を合わせるようにしやがみこみ、そして落ち着かせるように肩に手を置いて問いかける。マドカは一瞬落ち着きを取り戻したが、今度は別の理由で緊張していた。だが、その事は今は気にしないように務め、一夏の問いかけに答える。

「亡国機業……オータムが使っているIS——アラクネです」

「亡国機業……マドカが所属していた組織か」

「はい、兄さま。その上位に位置する実力者で、破壊行動を趣味とする危ない女です」
「でも、何でその組織が……ん？ 千冬先生、千夏先生、篠ノ之は何処に行きました？」

「ほよ？ 何かないつくん？」

「いえ、東さんでは無く……」

辺りを見渡した一夏は、部屋の隅に蜘蛛の巣が張つてあるのに気が付く。

「こんな物、さつきありましたっけ……？ これ、ISの武装か」

「何でこんな物が……」

「真耶、この部屋に監視カメラは付いているか？」

「いえ、この部屋にはカメラは付いていません。ていうか、篠ノ之さんはお手洗いに行つたはずですよ。紫陽花が付き添いで」

真耶が不思議そうな顔で織斑姉妹を見つめる。一夏は二人が監視を怠っていたのではないかと疑い、織斑姉妹の正面に立った。

「まさかとは思いますが、篠ノ之の監視を五月七日先生に押し付けたのですか？」

「い、いや……トイレに行かせるくらいわたしたちじゃなくても出来るだろ？」

「それに、私たちだつて他の教員に指示とか出さなきゃいけなかつたので忙しかつたんだ。バカ箒に感けてる余裕は……」

「お、織斑先生……」

姉妹の言い訳が続く中、作戦司令室にボロボロになつた紫陽花が戻つてきた。

「五月七日先生、どうしたんですか!？」

「な、謎のＩＳに襲われ、篠ノ之さんを誘拐されました」

「それつてこんなＩＳですか？」

一夏がモニターに映るISを指差すと、紫陽花はボロボロなのを忘れたように大袈裟なりアクシジョンを取った。

「そう！ それともう一機いましたけど、間違いなくそのISです！ 糸のような物を巻き付けて篠ノ之さん連れて行ってしまいました」

「……何が目的で篠ノ之を？」

「篝ちゃんの思考は犯罪者に近いものがあつたからね。ストーカー思考つて言うのかな？ いくつかの周りから他のすべての人間を排除して、そして自分だけがいくつかの側にいたいって」

「変態思考の間違いだろ。お前そっくりじゃないか」

「私はいくつかの人が悲しむ事は極力しないよ」

織斑姉妹と束のじゃれあいを無視して、一夏はアラクネの糸が何処に繋がっているかを辿る、すると屑かごに何か紙が捨てられている事に気付く。

「この紙屑は誰が捨てたものですか？」

「わたしたちでは無い。真耶か？」

「いえ、私ではありません」

一夏がくしやくしやくに丸められた紙を開き中を確かめる。

『『不当な扱いから解放されたければ、トイレに立つふりをして監視から逃れる』……指
示みたいですね』

「だけどいつくん、何で箒ちゃんの監視にちーちゃんたちが付かないって分かってたんだらう？」

「この場所が観察されていて、篠ノ之より作戦だと言う事を織斑姉妹が考えると分かっていたのでしよう。拘束もしてなかったようですしね」

「お前らの戦いを見せれば、あのバカも改心すると思ったのだが……その隙を突かれるとは」

「相手の気配は碧さんでも掴み難いものでしたので、気配察知で劣る我々が気付けなかったのは仕方ないです。ですが、何故篠ノ之の監視に五月七日先生を付けたのですか？ 東さんもフォローに回るとか言っていましたよね？」

自分に矛先が向いた事に居心地の悪さを感じた東は、何も無かった空間からとあるものを取り出した。

「この箒ちゃん探知機があれば、今箒ちゃんが何処にいるかが分かるよ！ えつと……反応なし……この旅館から半径二キロ以内には箒ちゃんの気配は無い」

「誤魔化そうとしても無駄です。そもそも二キロ以内なら碧さんの策敵範囲です。篠ノ之の気配はおろか、敵の気配もないんですからその結果は当然です」

「い、一夏……今は篠ノ之の搜索より何故篠ノ之を連れ去ったのかを調べるのが先じゃないか？」

「理由は何となく分かりますよね？ マドカが抜けたことで戦力ダウンしたその組織が、武力だけなら十分の篠ノ之を欲しても不思議ではありません。おそらく例の打鉄を篠ノ之に使わせたのも亡国機業でしょうし……篠ノ之に反応するISを使わせこちらと戦わせるのが狙いでしょね」

一夏の推測に、クラスメイトの専用機持ちたちは微妙な表情を浮かべる。箒の武力については、一応知っているからなのか、それとも戦いになった時やり難いと感じているのかは、一夏には分からなかったが。

闇落ちの箒

作戦指令質から逃げ出した箒を待っていたのは、亡国機業の女幹部二人だった。

「ようこそ、篠ノ之箒さん」

「まさかMを見つけたと思ったたら別の掘り出しもんがあるとはな」

自分が掘り出し物なのだろうと理解しながらも、箒は一応の確認と抗議の意味を込めて問いかけた。

「おまえらが言う掘り出し物と言うのは私か？ なぜこんなことをした？」

「戦力的にも、今の更識とやり合うのは厳しいのよね。そこでMを誘拐して洗脳しようと思っただけでも、Mより貴方の方が使えると思っただよ。洗脳なんてしなくても私たちと一緒に戦ってくれそうだしね」

Mと言うのが誰なのか、洗脳とは物騒だなと思いつつも、箒は女の説明をもう少し詳しく聞きたくなっていた。

「一緒に戦うということは、私にもISが与えられるということか？」

「与えられるんじゃないやなくて奪うんだけどな。今度イギリスの第三世代型ＩＳを奪う計画があるから、それがおまえの専用機になるぜ」

「奪う……つまりおまえたちは犯罪組織だと言うことだな」

「そうね。だから貴女が私たちの仲間にならないと言うなら、殺すしかなくなるわよ？」

ＩＳの武装を展開し箒の喉元に突きつける女。

「おまえたちの目的は何だ？ なぜ更識に対抗しようとする？」

「そんなの簡単よ。あの家にいる人間がほしいから」

「……生徒会長の更識刀奈か？」

箒は一番可能性のある更識の人間を頭に思い浮かべたが、それは見当違いだった。

「そんなＩＳに使われてる人間なんていらぬわよ。たとえ現役の国家代表だろうと、私たちには必要ないわ」

「じゃあ誰だと言うんだ！」

答えが分からない箒は、激高し突きつけられているＩＳの武装を退け女に詰め寄る。その行動をもう一人の女が楽しそうに見ていた。

「すげえな、お前。そんな動きが出来るのになんで捕まってたんだよ？ 縄抜けだつて簡単に出来るだろうに」

「織斑姉妹からは逃げられないからな。あの二人は一夏に逆らえないから、アイツが私を避けている間は不当な扱いをしてくるんだ」

「一夏……それって織斑一夏のことよね？」

「I Sを展開したままの女が、箒に訪ねる。そこで箒は相手の名前を聞いていなかったのを思い出した。

「お前らの名前は何だ？ それから、どこかの集団のようだが、その組織の名前も教えて。仲間になるにしても殺されるにしても、お前らの名前くらいは知りたい」

「スクールよ。あっちの短気なのがオータム。そして私たちは亡国機業と呼ばれる組織よ」

「短気とは失礼だな！ オレはさっさと答えないやつが嫌いなだけだ」

それを短気というのでは、と箒は思ったが、名乗られたからには答えなければなど、律儀なことを考えていたのだった。

「篠ノ之箒だ。あと、お前らが言っていた織斑一夏はもういない。今は更識一夏だ」

「知ってるぜ。あいつが織斑じゃないこともお前の名前もな。まあ、律儀に名乗るとい
うことは、オレたちの仲間になるって事でいいんだな？」

ニヤリと笑うオータムに、箒はうなずいて肯定した。

「私を不当に扱うI S学園より、お前らの組織——亡国機業？ とかいうところの方が
自分を高められそうだ」

「ようこそ、篠ノ之箒さん。貴女もこれで世界中から追われる身になったわね。とりあ
えず拠点までは私のI Sに掴まってなさい」

スコールに持ち上げられ、箒はI S学園から亡国機業へと身を落としたのだった。

作戦指令室では、篠ノ之箒をみすみす連れ去れた罰として、織斑姉妹と篠ノ之束が正座させられていた。その前には一人の少年が仁王立ちしている。

「万が一篠ノ之が遺体で発見された場合、貴女たちは保護責任問題を問われても仕方ありませんからね」

「「はい……申し訳ありませんでした」」

「亡国機業の狙いがあるのかまだ分かりませんが、篠ノ之を攫った理由があるのでしよう。いずれ何かしらのコンタクトがあるかもしれませんので、山田先生にはその対応をお願いしたいと思います」

「分かりました。何かしらのコンタクトがあつたら更識君に報告します」

「碧さんにはこの馬鹿三人の監視と生徒への説明をお願いします。篠ノ之がいなくなつた事で不安になる生徒もいるかもしれせんし」

「分かりました」

大人たちに的確に指示を出していく一夏を、紫陽花は呆気にとられた表情で眺めていた。

「五月七日先生はまず傷を癒してください。それが済みましたら複数人の有望な生徒の指導を碧さんと一緒をお願いします。性格に難がありました、篠ノ之は有望株でしたから、その代わりを育てないといけませんし」

「は、はいっ！」

候補者としては、鷹月静寐、相川清香などが頭に浮かんだが、それよりも一夏に命令されることになったく違和感を覚ええない自分に驚いていた。

「(なんでだろう……更識君、すぐく人に指示を出すのに慣れてるような気が……)」

「一夏、救出したナターシャ・ファイルスさんが意識を取り戻したよ」

「分かった。こつちが終わったら会いに行くと伝えてくれ」

「了解なのだ」

簪と本音にも軽く指示を出し、一夏は再び正座している三人に向き直った。

「織斑姉妹には小鳥遊先生と五月七日先生が指導している間の山田先生の補佐、および日本政府への説明をお願いします。篠ノ之博士には衛星を駆使して篠ノ之箒の行方を搜索してもらいたいと思つていますが——何か不満はありますでしょうか？」

あえて慇懃無礼にいう一夏に対し、織斑姉妹と束は無言で首を左右に振つた。つまり異存なしということだ。

「では、事後処理はお任せします。俺は意識を取り戻したナターシャ・ファイルスさんの今後について話し合つてきますので」

それが一生徒の仕事では無いと、誰もが分かつてはいたが、誰もそれに反論できる大人はいなかったのだった。

ナターシャの情報

目を覚まして、初めに思ったことは銀の福音は大丈夫なのだろうか、ということだった。

「ここは……あの子は無事なのかしら」

「お目覚めですか、アメリカ軍所属、ナターシャ・ファイルスさん」

聞き覚えのない声で名を呼ばれ、ナターシャはとっさに声が出た方に視線を向けた。そこにはまだ高校生くらいの少女が姿勢よく座っていた。

「貴女は？ その前にここはどこ？」

「ここは現在、ＩＳ学園が利用している旅館で、更識の傘下でもありません。そして私は日本代表候補性であり更識所属でもある、四月一日美紀と申します」

「更識？ あのＩＳ企業のトップの？」

ナターシャの言葉に、美紀は苦笑いをこらえられなかった。確かに更識企業といえば、全世界で有名なＩＳ企業ではあるのだが、その本質は対暗部用暗部であり表には知

られてはいけない組織だ。その更識がIS企業で有名になってしまったのは、ほかでもない一夏のおかげなのだ。

「今当主代理を呼びに行っていますので、しばらくお待ちください」

「分かったわ……それよりも、何が起こったのか教えてくれないかしら？」

「そちらも当主代理からご説明いたします」

美紀の態度に、ナターシャはこれ以上問いかけても何も教えてくれないだろうと理解し、視線を美紀から外して天井を眺める。

「IS学園ってことは、織斑姉妹や小鳥遊さんもいるのかしら？」

「いますよ。今は事件の事後処理で忙しそうですがね」

美紀が答えたタイミングで、部屋の外に気配が現れた。

「誰っ！」

「ご安心を。当主代理が到着したようですので」

美紀はすつと立ち上がりふすまを引いた。ナターシャはふすまの向こうに立っていた相手を見て、思わず口をポカンと開けて固まってしまった。

「貴方が……更識家当主代理なのかしら？」

「代理、というよりは次期当主候補筆頭ですかね。初めまして、ナターシャ・ファイルスさん。更識家当主代理を務めております、更識一夏と申します」

丁寧な態度で挨拶をする一夏に、ナターシャはつられるように丁寧に頭を下げた。

「さて、二、三質問してもよろしいでしょうか？」

「構わないわよ」

「では一つ目。銀の福音が暴走したことは覚えていますか？」

一夏の質問に、ナターシャは目を見開いて首を左右に振った。

「なるほど……ではなぜここにいるのが分からないでしょうね。後でまとめて説明しますので、今は動揺してても何とか答えてください。二つ目、貴女はアメリカ軍で何かミスをしましたか？」

さらに混乱するような質問をされ、ナターシャは困惑気味に首を左右に振る。

「では最後に、誰かに恨まれる覚えはありますか？」

「いいえ、ないわ。さつきから何を確認してるのかしら？」

一夏の質問の意図が分からず、ナターシャは一夏に問いかけた。少し目を瞑ってから、一夏はナターシャに事情を説明し始めた。

「アメリカ・イスラエル共同開発の名目で造られた銀の福音は、何者かにより暴走させられ、先ほど我々 I S 学園所属の生徒で停止させました。あつ、別に破壊してませんので
ご安心を」

ナターシャが起き上がりそのような雰囲気醸し出したので、一夏は手で制しながら苦笑いを浮かべそう告げた。

「本当なら一撃で停止させられたはずなのですが、何者かが篠ノ之束のラボから盗み出したとされる装置を使用し、銀の福音を強制的に第二形態移行させ暴れさせようとした。第二形態移行した原因を解明するために、更識企業の方で精密検査を行います。それが済み次第銀の福音はお返しします」

そこでいったん区切り、一夏は真剣な表情を見せた。

「先ほどの最後の質問に意図ですが、アメリカ軍は暴走した銀の福音は無人機だと報告してきています。我々が先に入手していた情報では、テストパイロットがいるはずだつ

たのにです。私の専用機のセンサーで反応を確認しましたが、やはり操縦者は存在していません。そこで先ほどの質問なのです。貴女はなぜいないものとされたのでしょうか？」

「……分からないわ。誰かに恨まれる覚えも、邪魔だと思われる覚えもないもの」

「そうですか……では、どうしますか？ ケガが完治したらアメリカ軍へ戻りますか？」
「それ以外に選択肢なんてないわよ。銀の福音はアメリカとイスラエルが共同開発したとはいえ、所有権はアメリカにあるんだから」

当然のことだと思っていたナターシャだったが、次の一夏の言葉でその『当然』は当然ではなくなった。

「所有権なら更識の方で引き取れますし、このまま戻っても貴女は殺される可能性がありますよ。それでもアメリカへ戻りますか？」

「所有権の引き取り……そんなことができるの？」

「アメリカがほしいのはデータだけでしようし、代わりのコアさえ用意できれば問題はありませんでしょうし。幸いなことに更識は独自開発したコアがありますので、銀の福音の代理はそのコアで問題ないでしょう」

「でも、更識所属にはなれないわよ。私はアメリカ国籍ですもの」

銀の福音はどうかなくても、自分の国籍はどうしようもないと嘆くナターシャに、一夏は人の悪い笑みを見せた。

「別に国籍なんて気にする必要はありませんよ。現にフランス国籍の人間が一人と、イタリヤから自由国籍を使ってフランスの代表候補生になった人間がいますから。それに、政府に誠心誠意お願いすれば何とかかなりますよ」

「……その内容は聞きたくないけど、本当に私はアメリカ軍から抜けられるの？」

「文句があるようでしたら、織斑姉妹と篠ノ之博士にも説得に参加してもらいますので」

一夏が出した三人の名前は、ナターシャを納得させるに十分の威力を持つていた。そこまで考えてくれているのならと、ナターシャは一夏に自分の所属先の変更手続きを任せたのだった。

様々な問題

ナターシャから聞きたいことを聞き出した一夏は、美紀にナターシャの面倒を見るように告げ部屋から出て行ってしまった。

「随分と落ち着いた子ね……あれが旧姓織斑一夏……ISに人生を狂わされた男の子」
「アメリカでも知られてるんですね」

誰に聞かせるでもなくつぶやいた独り言に、美紀が合意の手を入れた。

「織斑姉妹、小鳥遊碧、篠ノ之束に並び、全世界で彼の名前を知らない人はいないわよ。まあ、前者の四人と違うのは、顔をあまり知られていないって事かしらね」

表向きの当主は尊が務めているし、一夏は別に国家代表でも候補生でもない。表の世帯で顔を知っているのは、知人が昔なじみくらいなものだ。

「一夏さんは人前に出て何かをするタイプの人じゃないですからね」

「そうみたいね。あれだけ落ち着いて尋問できるんだから、参謀とか副官向きね、彼は。ところで、私が更識に匿われる事になったとして、貴女はいいのかしら？ 更識に人間

が増えれば、彼と一緒にいられる時間が減るんじゃないかしら？」
「……………どういう意味でしょうか？」

ナターシャが何を意図して質問してきたのが理解できず、美紀は本気で首を傾げた。
「だって、貴女と彼、付き合ってるんでしょ？」

「んなあ…………ち、違いますよ！　一夏さんは誰ともお付き合いしていません！」
「じゃあ片思い？　彼も貴女の気持ちは知ってるの？」

「ですから！」

美紀は更識内の複雑な事情をナターシャに説明することにした。

今までの生活から離れた筈は、まずスコールが拠点としてる場所へ案内された。

「随分と豪華な場所だな……亡国機業つてのは儲かってるのか？」

「別に儲かっているとかじゃないわよ。経営してるだけ」

「つまりコネだな」

スコールとオータムがあっさりと種明かしたことに疑問を覚えた筈だが、細かいことは気にしないと決めたので深くは尋ねなかった。

「ここでは私たちは普通のお客さん。下の方には普通のお客さんもいるから、あんまり物騒なことはしないでちょうだいね。特に貴女、IS学園では猪武者扱いだったんでしょ？」

「あれは私が悪いんじゃない！一夏が私を無視してほかのやつと……」

「別に付き合ってたわけじゃないんだろ？無視とかじゃなく、お前に問題があったん

じゃねえの？」

オータムの遠慮のない指摘に、箒が激昂した。

「何も知らない貴女にそんなことを言われる覚えはない！ 一夏は私の幼馴染で将来を誓った仲なのだ！」

「それ、貴女の妄想でしょ？ いろいろ調べたけど、貴女と一夏の関係はただの昔馴染み。あと少し関係が悪化したら、ただのストーカーよ」

「そんなことはない！ 一夏だつてきつと私のことを……」

痛々しい妄想を繰り広げる箒を、スクールとオータムは苦笑いを浮かべながら眺めていた。

「なあスクール」

「何かしら、オータム？」

「本当にこいつでよかつたのか？ Mの方が使えそうだぜ？」

「自分の意志でこちら側に来たんですもの。洗脳とか調教とか、面倒な手間が省けたのよ。それでいいじゃない」

「だがよ……」

まだ何か言いたかったオータムだったが、スコールに耳元で囁かれたせいで何も言えなくなってしまうた。

「なんで貴女たちは抱き合ってるんです?」

二人の関係を知らない箒は、目の前で抱き合っている——ように見える——二人に素朴な疑問を投げかけた。

「貴女には刺激が強すぎる世界かもしれないわよ?」

「お、オレはレズじゃねえ……」

「はいはい。言い訳はベッドで聞くわよ」

「……人の趣味に口を挿むつもりはないです。趣味嗜好は人それぞれですから」

物わかりのいいことを言う箒の前に、スコールは——

「(元の世界でもこれだけ物わかりが良ければね)」

——などと思っていたのだった。

行方不明者一名は出たが、それ以外大きな問題もなく臨海学校は幕を下ろした。まだいろいろと手続きやら交渉やらは残っているが、一夏を除く生徒にはさほど影響はないことなので誰も気にした様子はなかった。

「まさか簿がいなくなるなんてね」

「篠ノ之さん、よっぽどI S学園での生活が嫌だったのかしらね」

バスで隣に座るシャルロットと静寂は、失踪した箒のことを話し合っていた。

「まあ、箒さんはIS学園にある訓練機から、もれなく嫌われていたと聞きましたし、織斑姉妹からも退学寸前だと言われていたようですね」

「問題児だということだな」

二人の前に座るセシリアとラウラも、失踪した箒のことを口にしていった。通路を挟んだ隣には、美紀や本音、マドカといった更識所属の面々が座っているが、誰も真相を聞くとはしない。

「そういえば、お兄ちゃんはまだバスに乗ってないがどうしたんだ？」

「一夏さんなら織斑先生たちと何か話があるとかで、まだ旅館に残ってますよ」

ラウラの質問に美紀が答えたが、その回答があまりにもスムーズだったことにラウラは疑問を抱いた。

「何かあったのか？ 今の返答にかかった時間、あまりにも早すぎる。まるで用意されていた回答のようだ」

「……大したことではありませんよ。更識所属がまた増えて、一夏さんや刀奈お姉ちゃ

んの負担が増えそうで心配なだけです」

「所属が増える？ ああ、例の銀の福音の操縦者さんか。彼女も更識所属になるの？」
「いつちーにかかれば、アメリカ軍だろうが何だろうが交渉に応じるのだ」

まるで自分の手柄のように語る本音に、他の女子は呆れた視線を本音へと向ける。

「まあ、そんなわけでして、一夏さんがバスに来るのはもう少し後になりそうです」

「一夏さんも大変ですわね……やはり更識家次期当主候補というのは大変なのです
「……そうですね」

まさか現役の当主だとは言えない美紀は、先ほどより苦めの笑みを浮かべ誤魔化したのだった。

生徒会の動き

学園に戻ってきてすぐに、一夏は生徒会室を訪れた。帰りのバスの中で刀奈と虚には箒の一件を暗号メールで送ってあるので、対処の準備はすでに整っていた。

「おかえりなさい、一夏君。早速だけど日本政府への事情説明は済ませておいたわ」

「こちらも全世界に亡国機業について問い合わせましたが、今のところその全容は分かっています」

「すみません、いきなりこんな事頼んでしまって。それで、アメリカとの交渉は？」

「そっちは問題ないわね。更識の名前だけなら兎も角、織斑姉妹と篠ノ之博士の名前が出たんだもん。逆らおうなんて思わないわよ」

書類に目を通しながら刀奈の報告を聞く一夏の目は、普段より真剣味が増していた。

「この報告書、事実ですか？」

「多分嘘でしょうね。アメリカ側はイスラエルの裏切りとして処理したいんでしょうけども」

銀の福音が暴走原因は、アメリカではなくイスラエルにあるという報告を読み、一夏は眉を顰める。そもそもアメリカとイスラエルが共同開発という手段をとった理由は、アメリカは資金はあるが技術がなく、イスラエルは技術はあるが資金が無い、というお互いの欠点を補うための共同開発だ。技術力で勝るイスラエルが、そのような事をして貴重な資金源を手放すとは一夏には考えられなかった。

「イスラエルから得た技術を使い、アメリカ独自の開発したISとして発表したいんだろうな」

「国際問題に学生を巻き込まないでほしいわよ……ところで、これだけ頑張って調べたんだから、お姉さん、何かご褒美がほしいかな」

甘えるようにすり寄ってきた刀奈を、一夏は視線で制して手近な書類に目を通し始める。

「お嬢様、一夏さんの邪魔だけはしないように」

「せっかく一夏君が帰ってきてるのに、甘えられないのは寂しいよ……虚ちゃんだってそうでしょ？」

「そういうことは、この問題が一段落ついてからです」

虚に注意され、刀奈は不貞腐れながらも一夏にすり寄ることをやめた。

「銀の福音の件は、引き続き尊さんをお願いするとして、問題は篠ノ之の方ですね。在籍させたままにするのか、それとも除籍して、何か問題を起こす前に無関係にしておくか……生徒会長はどう考えます？」

「箒ちゃんは自分の意志で亡国機業に向かったのなら、早急に無関係にしておくのが正解かもね。ちょっと調べただけで相当やばい組織だったことは分かったもの」

「では、そのように手続きしておきましょう。篠ノ之の保護者には織斑先生から説明の連絡を入れてもらいましょう。束さんでもいいですけど、あの人だと説明にならないでしょうし」

携帯を操作し、千冬に箒の件を一任するメールを送ると、すぐさま返信がくる。内容は了承を伝える旨と、報酬を要求するものだったが、一夏はそれを無視して話を続けることにした。

「銀の福音のデータ解析は俺がやりますが、場所を借りたいので生徒会権限で整備室を抑えられませんか？」

「それは問題ないですけど、いつも一夏さんが使ってる場所ではいけないのですか？」

「束さんが来るかもしれないし、更識につながるものがある場所にあの人を近づける

のは避けた方が良いですからね。ただでさえ、あの人は知りすぎているんですから」

東は一夏がコアを造れることも、一夏が実は『楯無』であることも知っている。この上VTSの仕組みやら更識の現状やらを知られると非常に面倒なことになりかねない。例えば、秘密を守る代わりにデートしろとか……

「整備室は問題ありません。夏休み直前ということで、普段より利用者が少ないですから。ですが、解析の後でアリーナを使われる場合は、追加で申請してもらおうことになりましたが、問題ないでしょうか？」

「それは構いません。いくら生徒会とはいえアリーナの使用は正規の手続きを踏まなければいけませんからね」

整備室はある程度融通を利かせることができるが、アリーナはそうはいかない。ただでさえ訓練機使用許可を取るのが大変なのに、その時間帯に生徒会が割り込みでアリーナを使用していたから訓練が出来ないという問題が発生したらしいのだ。

「いったい誰が割り込みで……ああ、刀奈さんですか」

一夏が呟いた言葉に刀奈が気まずい顔をしたので、一夏は一人で納得して話を先に進

める事にした。

「ナターシャ・ファイルスさんには更識所属ということになってもらいますが、表向きは I S 学園の非常勤教師ということになりますので、そちらの手続きもお願いします」

「分かりました。お嬢様、轡木学長に連絡をお願いします」

「はいはい。それじゃあ一夏君と虚ちゃん、簪ちゃんと三人で銀の福音の解析をお願いします。そつちは私、手伝えないし」

「俺一人で問題ないですが……みんなとの時間を確保するために、手伝いをお願いします」

特に刀奈と虚は臨海学校の間、一夏と一緒にいられる時間がなかったのだから、それくらいの時間をやる努力を一夏に強いても一夏以外から文句は出ないだろう。そして一夏はそれを強いられたとは思わない。

「では、各自迅速に作業を終わらせて一夏君の部屋に集合ね！　そこで思いっきり甘えてやるんだから！」

「お手柔らかにお願いします。闇鴉からも頼まれごとがあるので……」

マドカとエイミイを運んだ時に約束したことを、闇鴉は一夏にだけ聞こえるように

ずっと眩いているのだ。いい加減ノイローゼになりそうなくらい言われているので、一夏としてはそつちも急いで片付けたいのだった。

「それでは一夏さん、簪お嬢様と合流して整備室へ行きましょう」
「そうしましょうか。本音と美紀にはナターシャさんの案内をお願いしておきましょう」

簪へのメールに、他のメンバーへの指示も書き込み、一夏は簪へメールを送信したのだった。

解析結果

一夏指揮の下、銀の福音の解析作業はあっさりと終了し、暴走の原因は福音自体には無い事が判明した。

「つまり外部から何かしらの細工をされ暴走したのか、それともアメリカがシステム自体に暴走するようにプログラミングしたか、のどちらでしょうね。最悪、両方ってこともあり得そうですが」

一夏は木霊が録画した映像から、亡国機業の関与はほぼ百パーセントだと思っている。だがアメリカに肩入れをした理由は、一夏にも理解できていなかった。

「虚さんと簪はどう思いますかね。亡国機業がアメリカの計画に加担して、得はあると思えますか？」

「何か得があるから加担したのでしょうが、その『得』が何なのかは私たちには知りようがありませんし……」

「それもだけど、亡国機業が篠ノ之さんを攫った理由もわからない……学園の訓練機、ほぼ全てから嫌われている篠ノ之さんが戦力になるとは思えないし」

「VTSでは使えるんだし、血のにじむ努力でもさせるんじゃないか？ まあ、あいつに使えるI Sがあるのなら、だけどな」

一夏はとりあえずの解析結果を更識へ転送し、モニターの電源を落とした。

「特に不審なものは組み込まれてないから、このままナターシャさんに返しても問題ないだろう」

「そのことですが、ナターシャさんの臨時教員としての採用が決定しました。非常勤ではなく常勤です」

「学園も考えることは一緒か……非常勤にしてつけこまれる隙を作るより、常勤にして監視しようってことなんだろうな……まあ、あれが演技とは思えないし、福音は彼女のことを気に入ってるから、問題は無いとは思うんだが」

「一夏らしくないね。人を疑うことが仕事みたいな一夏が、あっさり信じるなんて」

「何気に酷いな……まあ、人は疑うがI Sは疑わない。この子たちは純粹に人間を見ることが出来るからな。福音が認めた相手なら、さほど問題はないだろうし、実際に話した感じも良かったし」

初対面でも緊張しなかったのは、福音からナターシャ・ファイルスという女性の人と

なりを聞いていたからだ。もし前情報が無ければ、もしかしたらまともな尋問は出来なかったと一夏は思っていた。

「さてと、後は更識で調べてもらうだけだから。俺たちも部屋に戻りますか」

「その前に、一夏さんは職員室に行ってください。密漁船の事で日本政府と海上保安庁から聞きたいことがあるそうですので」

「面倒だな……あくまでも可能性の話だったんだから、俺が手引きしたわけないだろうに」

何を聞かれるか想像がついている一夏は、やれやれと首を振りながら職員室へと向かう。その後ろ姿を虚と簪は複雑な思いで見送ったのだった。

「一夏さん、かなり疲れてますね」

「仕方ないよ。銀の福音の暴走、篠ノ之さんの失踪、織斑姉妹と篠ノ之博士へのお説教、ナターシャさんへの尋問と各方面への交渉、学園に戻ってきてすぐにその反応に対する返事と、銀の福音の解析、それが終わったと思っただら今度は事情説明だもん。さすがに一夏も疲れる」

簪が上げた一夏の仕事量は、普通の高校生ならあり得ないものだ。だが普通ではない

一夏でも、さすがにその量は多すぎると虚も簪も思っていた。

「一夏さん、どこかで倒れなければいいですが……」

「そろそろ夏休みだし、一夏もどこかで一息入れると思うけど……」

二人の頭の中には、一人の少女の姿が思い描かれていた。その人物が一夏に負担をかけなければいいが、と密に願うのだった。

妹と従者にそんなことを思われてるなど露知らず、刀奈は一夏の部屋で談笑していた。

「それで、闇鴉と白式とスサノオが擬人化して、結局九人部屋だったんだ」

「そうですね。なんで擬人化したのかはわからなかったですけど」

「……お二人は仕事しないんですか？」

「兄さまたちは忙しそうでしたが？」

「人には向き不向きがあるの。今回の件は私たちに向きなんだよ」

刀奈の言うことも一理あるが、だからって遊んでいい理由にはならないと美紀は思っていた。ただでさえ最近の一夏は忙しそうだったのに、国際問題にまで巻き込まれるさらに忙しくなっている反面で、こうして談笑してる自分が情けないとさえ思っている。

「やつぱりここにいましたね。お嬢様、一夏さん不在の間に溜まった仕事はまだ残ってますが？」

「一夏君が戻ってきたんだし、後で一緒に片付ければ大丈夫よ。もちろん、一夏君にじつくりと休んでもらった後でね」

「え？ 刀奈お姉ちゃんは一夏さんに甘えるために部屋に来たんじゃないんですか？」

刀奈の言ったことが信じられず、ついつい問いただす勢いで美紀が刀奈との距離を詰めた。その反応に、刀奈は苦笑いを浮かべた。

「美紀ちゃんが私のことをどう思ってるかが分かった気がするけど……甘えたいけど今は一夏君を休ませるほうが先決よ。あんなにふらついて、どれだけの仕事をこなしたんだか」

「新たな敵、かもしれない相手が現れたんですから、一夏さんも気が張ってしまいますよ……」

「そういうえば、マドマドはあの組織のことを知ってるんだよね？」

「はい……亡国機業は私が元々所属していた犯罪組織。何故兄さまの周りに付きまとうのかは分かりませんが」

「はいはい、暗いお話しはそろそろ止めにしましょう。一夏君が帰ってきたとき、部屋の雰囲気が暗かったら気にしちゃうでしょ？」

「さすが刀奈ちゃん、普段だらけてるけど決めるところでは決めるのね」

「……碧さん、いつの間に」

不意に現れた碧に、全員が驚いた表情を浮かべる。その表情を見て、碧は満足そうに微笑んだのだった。

コードネーム

亡国機業の拠点で生活している筈には、一つ疑問があった。

「これは更識が開発したシステムだろ？　なんでここにもあるんだ」

「一般販売されてるんだから、あってもおかしくないだろ」

「そうじゃなく、システムが高度に設定されてる気がしてな……」

「へえ、脳筋かと思ってたが意外と鋭いんだな、お前。ＩＳ学園に潜んでる奴がハッキングしたデータだぜ。まあ、一夏って餓鬼が入学してからは、ハッキング出来なくなってるんだが」

「そうなのか。ところで、何故私はさつきから遠距離の練習をさせられてるんだ！　私は近距離戦闘が得意なんだ」

オータムの説明に納得したところで、筈はもう一つの疑問を爆発させた。

「何故って言われてもな……今度奪うＩＳが遠距離射撃型のＩＳだからに決まってるだろ。お前が動かせるＩＳは限られてるからな」

「学園のＩＳじゃなきゃ動くだろうが！　あれは一夏が嫌がらせて……」

「そんな事、あの一夏がするわけないでしょ。あれは単純に、貴女がISに嫌われてるだけよ」

箒の妄言をスコールがぶった切る。箒は未だに一夏とスコールの関係がどのようなものなのか聞いていないが、あまり深い部分まで聞く関係でもないので踏み込めずにいるのだ。

「だいたい、貴女にISを使わせないようにして、一夏に何のメリットがあるっていうのよ」

「その一夏って餓鬼、お前と大して親しいわけでもなければ、興味も持っていない感じなんだろう？ 自惚れもそこまでいくと滑稽だな」

「……で、貴女が来たということは、何かあったんですか？」

「そうねえ……アメリカの企みが一夏にバレちゃったばいよねえ……これで、アメリカから技術提供してもらおうって上層部の考えは破談ね」

「そもそもなんでアメリカなんだよ。あそこは金だけだよ」

「イスラエルの技術力は馬鹿にできないでしょ。だからアメリカがイスラエルから奪った情報で、組織もIS産業に参入するつもりだったんじゃないの。いつまでも更識の独壇場なのが気に入らないんでしょうよ」

呆れてるのを隠そうともしない口調で言うスコールに、オータムも全面的に同意した。

「それで、例の作戦の決行は？」

「SHがもう少し遠距離射撃に慣れてから、かしらね……使えないのに奪っても邪魔なだけだし」

SH——篠ノ之箒の頭文字だが、亡国機業では箒はそう呼ばれることになった。冗談でオータムが——

「箒ってモップの親戚だろ？ だったらMでいいんじゃないかね？」

——と言ったら箒は立てかけてあつた鉄パイプを振り回したので、さすがのオータムもそれ以上冗談は言えなくなつていた。

「それじゃあ、訓練頑張つてね。私は上層部の顔色伺いをしてこなきゃ」

「オレも暴れたいぞ」

「なら、SHの対戦相手でもしてなさいな。VTSを搭載した機械は五台あるんだから」
「相手にならねえよ。肉弾戦なら兎も角、射撃戦じゃこいつはまだだからな」

歯噛みをしながらも言い返せない実力であると自覚している筈は、いつか見返してやると心に決めたのだった。

鷹月静寐、相川清香、谷本癒子など、一年生の中でも織斑姉妹や小鳥遊碧などに指導されている一組の面々は、他のクラスと比べて技術面での成長が著しい。その代り、座学の面では芳しくないのだが……

その面々が急遽アリーナに呼び出されたのが夏休みに入る数日前。臨海学校から戻ってきて一週間も経たないくらいだ。

「なんで呼ばれたんだろうね？　相川さんは何か聞いてないの？」

「聞いてないわよ。癒子は？」

「私も何も……そもそも、更識君と一番親しいのは、この中じや鷹月さんじゃない。鷹月さんこそ何か聞いてないの？」

「今回の呼び出しは一夏君じゃなくなつて織斑先生だからね。さすがに何も聞いてないわよ」

一年一組には、専用機持ちが多いのもあつて、それぞれの技術力向上に役立っている。だがやはり一番の理由と考えられるのは、一夏にいいところを見せたい、という乙女心だろう。

「ところで……彼女も呼ばれてるんだね」

「更識君の隣の席の子だね……名前何だっけ？」

「貴女たち……クラスメイトの名前も覚えてないの？」

静寂に呆れられ、清香と癒子は苦笑いを浮かべる。普段から交流があれば別だが、夏の隣の席というだけであまり話した記憶はない。むしろ、その反対側の席が筈だったために、なるべく近寄りたくなかったというのが本音なのだが。

「彼女は日下部香澄さんよ。私もあんまり話したことはないけど」

「あの子って、確か実技も座学も赤点ギリギリだったんじゃない？」

「じゃあこの集まりって、補習なの!? 私赤じゃなかったよね!？」

「随分と騒がしいな、小娘ども」

「わたしたちが来ると分かっているのに騒いでるとは……よほど命を捨ててもいいと思っているようだな」

三人の背後に、冷たい空気が流れた。ゆっくりと背後を確認すると、そこには出席簿を構えた『悪魔の姉妹』デビル・シスターズが立っていた。

「千冬先生、千夏先生も。私たちが来たのは今さっきなんですから、おしゃべりくらい大目に見てあげましょう。一夏さんもそう思いますよね？」

「そうですね。いきなり現れて理不尽に罰則を与えるなんて、減給ものですね。轡木学

長に報告しておきましようかね」

そのさらに背後で、一夏が携帯を操作しだすと、織斑姉妹は振り上げていた出席簿を下ろし、一夏に懇願するように頭を下げた。

「えっと……それで一夏君。これってなんの集まりなの？」

「ん？ 聞いてないのか？」

「うん。千冬先生に『放課後アリーナに来るように』って言われただけ」

静寂からそのことを聞いた一夏は、背後で逃げようとしていた織斑姉妹に最高の笑顔を向けて呼び止めた。

「千冬先生、千夏先生、後程お話がありますので寮長室でよろしいでしょうか？」

「は、はい……」

元世界最強のこんな姿を見ても、生徒たちが憧れを抱くのは変わらない。そのことが一夏は不思議でならないのだった。

隣の彼女の特殊能力

集められた面々の前で説教された織斑姉妹だったが、次の瞬間にはすでに立ち直り説明を始める態勢を整えていたのだった。だが、集められた説明をしたのは、織斑姉妹ではなく別の問題児だった。

「はろはろ〜！ 愚かな愚民ども、私が天才束さんだよ〜！」

「……説明するつもりなら、もう少し普通に登場してもらえませんかね」

「いっくんその鋭い視線！ 束さんのあそこはもう……って、冗談だからその手を下ろしてもらえると嬉しいかな」

「……はあ、それじゃあ説明よろしくお願いします」

漫才みたいなやり取りが一段落し、束は改めて説明を始めることにした。

「えつとね、私の妹である箒ちゃんのために用意してたんだけど、いつまでたつても反省しなかったし、その上どっか行っちゃったから、余ってるコアがあるんだよね〜。だからそれを更識機業に横流しして、お前らの誰かの専用機にしちゃおう！ って案があるんだよね〜。ちーちゃんとなつちゃん、それからいっくんのいるクラスの人間なら、そ

れなりに技術もあるだろうから、模擬戦でもして最強を決めちゃおうってこと。理解できたか、屑ども」

「最後の言葉は聞かなかったことにしますし、横流しとは人間きが悪いですよ。貴女が勝手にくれたんでしようが。更識は独自にコアを造ることができまますので、違法すれすれの方法で手に入れる必要はありません」

「えっと……それで一夏君。なんで私たちなの？」

集められた理由は分かったが、何故自分たちなのかという具体的な説明がほしいと、静寂が申し出る。

「二年一組から出した方が、専用機の定期メンテナンスが楽というのものもあるが、実技テストの結果を加味したからだけど、さつき束さんが言わなかったか？」

「実技テストの結果を加味した結果なのは分かったけど、それだと日下部さんが呼ばれた理由がイマイチ納得できないのよ。私じゃなく彼女が」

た。そういつて静寂が視線を香澄に向けると、ものすごいスピードで頷く姿が目に入った。

「彼女は人の本質を見抜く素質があるからな。ISにもそれが応用出来るのであれば、

すぐに上達すると思つて俺が呼んだ」

「更識君、なんでそのことを……」

「見ていけば分かりますよ。貴女程ではないですが、俺も全面的に人を信じられませんか。さて、今回はともかくとして、もし次回このようなことがあれば、日下部さんは間違いなく強敵になるでしょうね。そのこともよく考えて今回の勝ち抜き戦を戦つてください」

「日下部、お前はこつちで私たちと特訓だ。一夏に見込まれているお前なら、すぐにあいつらとそんな結果をのこせるだろう」

香澄は織斑姉妹と碧に連れていかれ、別のアリーナでの特訓、なので専用機を手に入られる確率が少し上がったことで、集められた面々のモチベーションはまた少し上がったのだった。

特訓と称されてアリーナを移動している最中、香澄は織斑姉妹と碧の本音を探っていた。探る、といっても別に特別なことをするわけではなく、相手の言葉の裏に隠された本音を、彼女は聞いてしまうのだ。

「（更識君の言葉に嘘はなかった。でも、織斑姉妹や小鳥遊先生は別。指導しても上達しない私の事を呆れてるんだ……）」

「曰下部さん、緊張してるんですか？」

「い、いえ！ 更識君に高い評価をされてるなんて思ってたものでして……それに、元日本代表である先生三人に指導してもらえるなんて、ちよつと恐れ多いなって……すみません」

「お前の特殊能力を見抜いたのも一夏だ。あいつはとある事情で人を極端に恐れるからな……それで磨かれた観察眼をもって、お前が相手の本音を見抜くという特殊能力を持つっていると知つたらしい」

「人の心を読む、とは別なんだろう？ 聞きたくないことも聞こえてしまう。だからお前はクラスに馴染もうとしなかった。違うか？」

織斑姉妹の今の言葉には裏を感じなかった香澄は、素直に本音を言うことにした。

「そうですね。最初の頃のオルコットさんやいなくなる寸前までの篠ノ之さん、転校してきたばかりのデユノアさんやボーデヴィツヒさん。言葉の裏に様々なことを隠していたのが怖かったのも確かにあります。でも一番は勉強も実技もダメな私が、エリート集団といわれる人とお友達になれるわけがないって諦めが一番でした」

「入学した時点で、お前とあいつらとにそれほど差があるとは思えんが」

「本当に偶然だったんですよ。実技試験で山田先生が操縦を誤って壁に激突しちやつたから……」

「あ、アイツは……」

入学試験で摩耶がヘマをしたとは聞いていた織斑姉妹だったが、そのヘマをした時の

相手が香澄だったとは知らなかったようで、二人は盛大にため息を吐いた。

「えつと……それじゃあ日下部さん。貴女はISの意志を感じたことはありますか？」

気を取り直して、というわけではないだろうが、碧が一つ咳ばらいをしてから尋ねる。「何となく、はありますけど……更識君みたいに声が聞こえるわけじゃありませんので、それがISの意志なのかどうかはつきりと分かるわけではありません」

「でも、何か感じるというわけですね？」

「はい……」

碧が何を確認しているのかが分からない香澄は、少しびくびくしながら相手の反応を待った。特殊能力を以てしても今の碧の本音を聞き出すことが出来ない。これは香澄の人生の中で初めての事だった。

「貴女が特殊能力を持つてゐるって知れば、対処の仕方はあるわよ。これでも暗部組織の人間ですもの」

「……なんで私が驚いていることを」

「顔に出てるわよ。それに、心を閉ざす事自体は難しい事じゃないもの。まあ、一夏さんが教えてくれなきゃ貴女の前で心を閉ざす事なんて無かったでしょうけども。それで、

貴女が感じていたことがI Sの意志ならば、貴女は私たちではなくI Sに操縦方法を習った方が良いわね。そっちの方が確実だし、貴女にあった戦い方が身に付くわよ。私たちはそのお手伝いってわけ」

碧にあっさりと種明かしをされて、少し肩透かし気味な気分を味わった香澄だったが、続けざまに言われたことを理解し、すぐに緊張を取り戻したのだった。

勝者は…

自分には縁がないモノだと思つていた専用機が手に入るかもしれない。そうなる人間、欲が全面に出てしまうものだ。クラスメイトとの争奪戦、という形だが、別に殴り合つて決めるわけでもないの、まだ穏便だといえるのかもしれない、一夏は他人事のように目の前で行われているバトルロイヤルを眺めていた。

『一夏さん、勝ち抜き戦だったのでは？』

「ああ。だから、勝つたらそのまま専用機ゲット。分かりやすいだろ？」

『だったら最初からバトルロイヤルだつて言つてあげれば良かったのでは？』

「トーナメントでやるより早く決まるから良いだろ？ それに、日下部さんが今回は参加しないつてなつたから人数が減つたし」

『……どことなく面倒くさがりですよね、一夏さんつて』

投げやりな態度で答える一夏に、闇鴉が呆れたのを隠そうともしない感じで呟いた。

「早く終わる方がその人のデータを取る時間が出るし、細かな調整もすることが出来る。持ち主が決まつてからじゃないと出来ないことが多いんだから、その持ち主はさつ

さと決めてもらった方が良いだろ」

『データなんて、この間の定期試験の結果で十分でしょうが。それに一夏さんなら、調整時間も平均を大きく上回るスピードで終わらせられるんですし、じっくりと決めてもらってもさほど変わらないのでは？』

「……刀奈さんやお前の相手をしなくてもいいならじっくり決めてもらおうが」

『早いことはいいいことですね！』

「変わり身早いな……」

自分との約束を忘れていなかった一夏に感動し、闇鴉は一夏の考えを全面的に支持した。

『将来有望とされている人の中でも、やはり実力差はあるんですね』

「あたりまえだろ。同じ候補生でも、セシリアやラウラたちより美紀の方が強いが、その美紀より簪の方が強いんだ。一括りにされている中にも、当然差はあるだろう」

五人で始まったバトルロイヤルも、残りは鷹月静寐と相川清香の二人だけになっており、その二人の残りSEにも結構な差があるのだ。

「こりゃ決まりかな」

『鷹月静寐さんなら、一夏さんも緊張することはありませんしね』
「バレてるからな」

静寐は一夏が対人恐怖症で、限界を超えると幼児退行することを知っている。だから一夏としても、二人つきりで調整、という場面になった場合かなり楽なのだ。

『それで一夏さん。今回お造りになる専用機はどのような機体なんですか？』

「束さんが元々造つてた第四世代型をアレンジするつもりだ。といつても、残ってるのはデータだけで、機体そのものは束さんがスクラップにしたらしいがな」

懐から取り出したデータチップを見せながら、一夏は苦笑いを浮かべる。機体が残っていればさらに楽が出来たのに、とでも言いたそうな顔だと、闇鴉は内心呆れていたのだった。

「そこまで。五人ともお疲れさま。とりあえずピットに戻って一休みしてくれ。勝った静寐は後で生徒会室に来てくれればいいから」

バトルロイヤルが終了し、オープン・チャネルで一夏が五人に指示をだし、一夏本人もモニタールームから移動するために立ち上がった。

『生徒会室に行くんですか？』

「先行して静寐のデータを打ち込んでおかないとな。学園も政府も、戦力確保を人に押し付けるんじゃないよ」

『やさぐれてますね……でも、そんな一夏さんも好きです！』

「……悪いが、お前のポケにツッコんでる暇はないぞ」

闇鴉の言葉をポケとして処理して、一夏はさっさと生徒会室に向かうのだった。

特訓を終えた香澄は、誰もいない部屋に帰ってきた。そう、香澄にはルームメイトがおらず、現状一人部屋なのだ。

元々は鷹月静寐がルームメイトだったのだが、あまり馴染めずいたところに調整が入り、篠ノ之箒を追い出す形で静寐がマドカのルームメイトとなった。その結果、一人部屋が二つ完成したのだ。現状、もう一つの一人部屋の住人は行方知れずになっている。

「つ、疲れたあ……織斑姉妹と小鳥遊先生の指導を受けられるのはうれしいけど、圧倒的に基礎体力が足りないような……」

勉強ダメ、IS操縦もさほどまくない、その上基礎体力も平均以下の自分が、何故あの場に呼ばれたのが不思議で仕方なかった。その理由を聞かされたとき、はじめて自分の特殊能力の存在をありがたいモノだと思ったのだった。

「でも、まさか更識君に知られてたなんて……あんまり話したことなかったけど、やっぱ

り裏表のない言葉で話す人はいいな。小鳥遊先生も、私じゃ対抗できないくらい心を閉ざす事が出来るとは思わなかったけど」

聞きたくもない本音が聞こえてしまう体質から、あまり人と関わらないようにしてきたのだが、まさかこのような形で関係を持つとは思ってなかったのだろう。疲れたといながら香澄の顔は笑っていた。

「篠ノ之さんには悪いかもしれないけど、いなくなってくれたおかげで私も友達が出来る」

ある意味で裏表のなかった筈だったが、それ以前の問題で香澄は筈に話しかけたことが無かった。だから行方不明になったと聞かされても、それほどの衝撃は受けなかったのだ。

「でも、行方不明になったって聞かされたときのクラスメイトの反応……微妙にうれしそうだったのはなんでなんだろう？」

あの反応が一夏だったら、香澄も少しは納得出来たのだが、特に付きまとわれていたわけでもないクラスメイトが喜んだ理由は、香澄には理解できないのだった。

「まあいいや……それより、汗を流して着替えなきゃ……」

そう思っただけで、もはや香澄に動く体力は残されておらず、そのまま眠りについたのだった。

契約書

一応の勝者となった静寐は、約束通り生徒会室を訪れようとして——今更ながらに事の重大さを感じ始めていた。

「（専用機持ちになる、つてことはそれなりの覚悟が必要なはず。あんなバトルロイヤルで決めていいものなのかしら……いくら一夏君や更識先輩たちが話を纏めてくれたとしても、どこかからは絶対にクレームが入るわよ。そうなる私も対処に追われる事になるのかしら……）」

生徒会室の前で立ち止まり、長考している静寐の背後から、呆れたような声がかけられた。

「そこで突っ立っていると邪魔だぞ」

「うわあ!?! ……なんだ、一夏君。脅かさないでよ」

「別に驚かすつもりもなかったし、その考えは無意味だから気にするな」

「え?」

自分の考えが分かつてるかのように話す一夏に、静寐は一瞬すべての動きを止め一夏を見つめた。

「……そんなに見られると恥ずかしいんだが。いくら静寐は大丈夫だといつても、限度というものは何にでもあるだろうが」

「ごめん……じゃなくって！　一夏君、なんで私が考えてたことが分かるのよ」
「思いつきり顔に書いてある」

あっさりと同明かしをした一夏は、生徒会室のドアを開き、そのまま静寐を中へ案内した。静寐も案内されるがままに生徒会室へと入っていく。

「あっ、一夏君お帰り。それと、貴女が鷹月静寐さんね。生徒会長兼日本代表の更識刀奈よ」

「肩書だけは立派ですね……三年の布仏虚です」

「あっ、はい！　一年の鷹月静寐です。よろしくお願いします」

畏まった挨拶をする静寐に、一夏は苦笑いを浮かべながらコーヒーを差し出した。話
が長くなるかもしれないという一夏の合図なのだが、生徒会役員ではない静寐にはその
ことが伝わったかどうか微妙なところだ。

「それじゃあ鷹月さん、どこまで説明を受けているのかしら？」

「えつと……篠ノ之博士が造ったコアを更識企業が譲り受け、そのコアでIS学園所属の生徒に専用機を造る、というところまでは聞いてます」

「そ……代表でも候補生でもないのに専用機を持つ、ということについて思うことはある？」

「そうですね……さつきまではいろいろと考えていたんですが、入り口前で一夏君に『その悩みは無意味だ』って言われてからは考えないようにしています」

ちらりと一夏に視線を向けると、彼はコーヒーを啜りながら書類に目を通していった。静寂には、それが何の書類なのか分からないが、おそらく自分に関係してるものだろうと解釈した。

「考えないようになったのは立派ね。マドカちゃんや本音は最初から何も考えてなかったんだけど……」

「あつ……：……：……：そういえばあの二人も専用機を持っていますが代表でも候補生でもないですね」

「まあ、本音は更識所属、マドカさんは篠ノ之博士のテストパイロットという理由で納得させたんですが……一夏さんとお嬢様が世界を相手に説得をして」

「説得じゃないわよ！　ちよつとお願いしただけよ」

更識の『お願い』が、普通のお願いでは無事くらい、静寐にも想像できたが、そこを深く聞くと自分も「そちら側」に引き込まれそうなのでやめておいた。

「何か誤解してゐるみたいだが、更識所属になるからといって、更識の秘密を全部知れる訳じゃないからな。シャルロットやエイミイも更識所属だが、内情は殆ど知らせてないからな」

「本音も殆ど知らないって言つてなかつた？」

「本音とマドカには、必要最低限の情報しか与えてない。なんか不安だからな、あの二人は」

一夏の零した愚痴に、刀奈と虚も苦笑いを浮かべ肯定の意を示す。

「えつと……それじゃあ鷹月静寐さん、この書類にサインをお願いできるかしら」

「書類？　何かの契約書ですか？」

「読めばわかるわよ。別に人身売買の同意書とかじゃないからそこまで緊張しなくてもいいわよ」

それが刀奈の優しさだと、一夏と虚には伝わったが、あまり面識のない静寂には伝わらず、刀奈の冗談は効果を發揮せず流されてしまった。

「一夏君、コーヒーお代わり！」

「そんなに飲むと眠れなくなりますよ？ 刀奈さん、そんなにコーヒーを飲む方じゃないんですし」

「そうなつたら一夏君の部屋に遊びに行くからいいもん」

「織斑姉妹と終日デートしたいのでしたらどうぞ」

「……やっぱりお茶を頂戴」

さすがの刀奈も、織斑姉妹とのデートは避けたいようで、一夏の脅しにあっさりと屈してしまった。苦笑いを浮かべながら刀奈にお茶を淹れ手渡した一夏は、再び書類に目を通したのだった。

「一夏さん、アメリカからまた抗議の書面が」

「銀の福音のデータはすべてアメリカに送ったはずですし、東さんが例の暴走事件の真相を明らかにしてアメリカに伝えたはずなんですがね……そんなに破滅したんでしよ
うか」

「コアはアメリカの物だから、それだけでも返してほしいとの事です」

「抗議じゃなく嘆願ですか……福音自身が帰りたくないと言ってる以上、こちらからは何とも言えないと返事を出しておいてください」

「分かりました」

「(生徒会の仕事って言うより、更識の仕事だったんだ……)」

書類に目を通していた静寢は、二人の会話を聞いたことを後悔していた。だが、同じ部屋にいて、普通に話している二人の声を聴くな、という方が難しい話だと静寢は開き直り書類にサインをするのだった。

「はい、これで貴女も更識所属ね。専用機が完成したら、一夏君から連絡がいくわ。それから、専用のVTSパスワードも一夏君が設定してくれるから、くれぐれもそのパスワードをなくさないようにね」

「分かりました」

「よろしい」

まだいろいろと混乱することはあったが、とりあえず静寢は更識所属になった喜びをかみしめていたのだった。

マドカと静寐

静寐が部屋に戻ると、ルームメイトのマドカが専用機の白式と会話をしていた。

「あ、お帰りなさい、静寐さん」

「ただいま。これからはマドカさんの後輩になるのかしらね」

「後輩？ 私は兄さまより一つ年下なのですが？」

「そうじゃなくて、専用機持ちとしてと更識所属の後輩よ。マドカさんの方が歴は長いでしょ？」

マドカの勘違いを指摘しながら、静寐は苦笑いを浮かべる。普段一夏たちが苦勞してゐるんだな、と実感してしまったのだから、仕方ないのかもしれないが。

「別に改まる必要はないですよ。私は更識所属ってことになっていますが、正確には篠ノ之博士のテストパイロットですから」

「そうですよ。私も更識が開発したのではなく、篠ノ之博士が造り上げたのを一夏さんが改良してくれただけですから」

「さらりと言ってるけど、それって喋ったらダメなんじゃない？」

機密情報ではないのかもしれないが、結構重大なことをサラリと言ったマドカと白式に、静寐は今更ながらツツコミを入れた。

「他の人ならまずいかもしれませんが、静寐さんは既に更識所属になったのですよね？」
「え、ええ……」

「なら問題ないですよ。万が一情報が漏れたら、それは静寐さんからだってすぐ分かりますし」

「……怖い事言わないでよ。間違っても口を滑らすなんてことは無いから安心して」

さすがは一夏の妹だ、と静寐が感心してる横で、白式が静寐の身体をジロジロと見渡しているのがマドカは気になっていた。

「何してるの、白式」

「いえ、静寐さんの専用機はどこかなーって」

「いくら兄さまたちが優秀でも、所有者が決まっただけですぐに専用機を完成させることは不可能ですよ。それくらい白式にも分かるでしょ？」

いくら更識所属になったとはいえ、静寐にも言えないことが多々ある。そのうちのー

つが、実は専用機は一夏が一人で造っている、ということだ。マドカも白式もそこは心得ているので、口裏を合わせたかのように嘘を続けていく。

「ところで、専用機って学園で造るのよね？ 更識の技術者がこつちに来るってこと？」
「詳しいことは私も知りません。更識企業の中でも、開発部は限られた人しか情報を持つていませんので」

「学園で言うなら、一夏さん、刀奈さん、虚さん、簪さんの四人ですかね。碧さんも知らないはずだって木霊が言っていました」

詳しく言えないことは、それっぽい嘘で誤魔化し、信憑性を増すために教えても構わない真実を織り込む。この徹底ぶりが、今まで一夏の秘密を隠し通してきた秘訣でもあるのだ。

「そうなんだ……更識企業って秘密が多いのね。外にも内にも」

「そうでなければ、IS業界のトップを維持し続けられませんか。優秀な人材だけでは、トップを維持し続けることは不可能だ、というのが更識の考え方らしいので」

「でも、シャルロットさんの実家——デュノア社を傘下に加えて、ますますIS業界での地位を高めたんだから、少しくらい油断しそうなんだけどな……トップがよほど優秀なのね」

「楯無様は滅多に顔は出しませんが、確かに優秀な人ですよ。美紀さんのお父さんらしいですけど」

「何回かは見たことがあるわ。重大発表の時には必ずテレビに出てたし。一夏君もただと」

表向きの当主である尊と、真の当主である一夏が、更識関連の発表でテレビに出ていても不思議ではない。とはいっても、二人とも出来ることならテレビになど出たくないのだが、発表しなければ暴動が起こるかもしれないと脅されては、さすがの暗部組織の当主でも屈せざるを得ないのだ。

「更識企業は、IS界の発展に著しく貢献してるものね。更識所属の人間が個人でISを所有しても怒られないのも何となく分かるわ」

「現役为国家代表と候補生、二元世界最強までもが更識所属でしたからね。逆らえば企業ごと国籍を変えることだって可能ですから。日本としては認めざるを得ないですし、他国で採用してる訓練機も、殆どが更識製ですから。友好関係が続けていくには、それくらいの事は認めるしかないんですよ」

一種の脅しだが、更識企業と事を構えたい国など、どこを探しても存在しないだろう。

「とりあえず、静寐さんが個人的に専用機を持つことについては、兄さまと姉さまたちが了承を得てるから心配ないそうですよ。文句を言った国があれば、今頃その国は世界地図から姿を消していたでしょうが」

「……貴女の身内、恐ろしい事を平気でやりそうだものね。武力でも知力でも」

「千冬さんと千夏さんも専用機を所持したままですからね。あれは篠ノ之博士から贈られた機体ですし」

「姉さまたちが管理してるらしいですけど、普段から身に着けてなくていいのでしょうか？」

暮桜と明椛は、現在寮長室で保管されている。織斑姉妹が専用機を使って暴れると大変だから、という理由らしいのだが、それが原因でこの前の襲撃事件の際に駆けつけるのが遅れたのだ。

「兄さまに管理してもらえば一番なのでしょうけどね」

「織斑先生って、確か片付けとかが苦手なんだっけ？」

「私が喋った、というのは秘密ですからね。私はまだ死にたくないですし」

「分かってるし、誰かに喋っても信じてもらえないだろうしね」

凜としてしつかり者のイメージを世間が作り上げているので、本当の織斑姉妹の実態を話しても大抵の人間はそれが真実だとは思わないのだ。

マドカと静寂はそろって苦笑いを浮かべ、織斑姉妹がこの話を聞いていない事を願いながら談笑を続けたのだった。

夏休みの予定

静寂が専用機持ちになって数日後、I S学園もいよいよ夏休みへと突入する。海外組は帰国の準備などで忙しそうにしているが、更識所属の面々も、学業で免除されていた所属先の訓練などで予定は埋まっていた。

「せっかくの夏休みなのに、今更代表の合宿なんて意味ないじゃない！ 候補生だけでやればいいじゃん！」

「気持ちばかりですが、お嬢様は国家代表なんですから、国同士の交流会などで忙しい事には変わらないと思います」

「おねーちゃんも、企業間の交流で忙しいんだっけ？ 大企業の代表も大変だね」

「本音は？ 何も予定無いの？」

候補生として合宿に参加しなくてはいけない簪が、少し恨みがましい口調で本音に尋ねる。

「私は更識所属ってだけだからね。特に予定は無いよ」

「じゃあ、私の訓練相手になってもらおうかしら」

「み、碧さんの相手なんてしたら、死んじゃうよ〜」

「……あの、なんで俺と美紀の部屋で駄弁ってるんですか？」

当然の疑問だと思っていた一夏だったが、美紀以外の共感は得られなかった。

「だって、今後の話し合いをするには、一番邪魔が入りにくい場所であるのが普通でしょ？ そんな場所、生徒会室か一夏君たちの部屋しかないじゃない？」

「別に秘密ってわけじゃないんですし、食堂でも良いじゃないですか」

「一夏、自分の人気を自覚してないね。一夏の予定を知られたら、他の連中——じゃなかった。他の人たちに一夏の予定を取られちゃうじゃない！」

「……簪ちゃんも、中々刀奈お姉ちゃんに毒されてるよね」

美紀の言葉に、一夏も激しく同意したい気持ちだったが、そのことはとりあえず置いておくことにした。

「大体、俺はナターシャさんの亡命の根回しとか、デユノア社との合同会議に付き添ったり、それぞれの専用機の調整やアップロードなどでほぼ予定が埋まってるんですけど」

「それでも、何日かはお休みがあるでしょ？そこは全員で遊びたいじゃない」

「空いている日は、静寂や日下部さんの訓練に付き合おうと思ってるんだが……あつ、あ

とエイミイの訓練にも付き合う予定があるし……休みつて言われてもですね」

「兄さま、怒涛の忙しさですね……始まってもないのに、すでに夏休みが終わりそうな勢いです」

「マドカだって、数日間は東さんの研究所に行くんだろ？ 仮にもテストパイロットなんだから」

「そうなるよ、夏休みの予定が無いのって本音だけだね」

簪の一言に、本音が何故か胸を張った。

「一日中のんびり過ごすのさ〜！」

「……簪や美紀が訓練の日は、お前か碧さんで俺の警護に当たるんだが」

「いっちゃん側で過ごすなら問題ないのさ〜！」

「……不安だから海外に行くときは碧さんをお願いします」

「分かりました」

本音の態度に一抹の不安——どころではない不安を抱いた一夏は、海外に行く際には絶対に碧に護衛してもらおうと決心した。

一夏たちが部屋で話をしている頃、海外組も一ヶ所に集まって話し合っていた。その中には、何故か日本国籍の静寂も混じっていた。

「エイミイに呼ばれたから来たけど、なんの集まり？」

「私もよくわかってない。でも、なんだか一夏君に都合の悪そうな展開だったから……」

自分一人では対処できない可能性が高い、と視線で伝えたエイミイの思いは、しつか

りと静寐に伝わっていた。

「お兄ちゃんとは遊べないのはずっと残念だが、何とか一日だけでも時間はもらえないだろうか」

「一夏さんがお忙しい理由が理由ですから……国際問題に発展しそうなことはもうこりこりですわ」

「何？ あんた、なんかやらかしたの？」

「わ、若気の至りですわ！ と、とにかく、一夏さんの『お仕事』を妨害したとなれば、それ相応の処罰が課せられますわ。それも、個人的に」

「千冬先生と千夏先生だね。僕も仕事で何度か一夏と会う予定しかないし、少しは学生らしい事をしてみたいよね」

すでに不穏な空気が漂う会話が繰り広げられており、静寐とエイミィはどうしたものかと頭を悩ませている。

「そういえば鈴さん、お友達からヘルプの電話があったというのは本当ですか？」

「急に何よ？ ……ああ、あの馬鹿二人の事？ よく知ってるわね」

「何？ 鈴のボーイフレンド？」

「腐れ縁よ。小学校五年から中学二年までの間、つるんで遊んでた馬鹿二人。一夏も

知ってる連中よ」

「それで、この平和な日本でヘルプとは、いったい何をやらかしたんだ、そいつらは？」

軍人の性なのか、ラウラがこの話題に喰いついてきた。このまま脱線したまま終わってくれないかと願う二人だが、その願いは叶う事は無かった。

「赤点取ったから一夏に勉強会を開いてもらえないかって、あたしに相談されただけよ。一夏は忙しいから無理じゃないって答えたけど」

「やはりお兄ちゃんは頼りになる人だな！でも、もう少し頼りなくても良かった気がするが」

「確かに、頼り切っちゃうと一夏が忙しくなるだけだもんね……僕やラウラもだけど、他の人も一夏に助けてもらってるし」

「一夏さんのお仕事をお手伝いできればいいのですが……」

「あ、あの！一夏君を休ませてあげようとは思わないの？忙しいんなら、なおさら休ませた上げた方が好感度が上がると思うんだけど……」

苦し紛れのエイミイの言い分は、意外なことに海外組に効果があった。

「確かにそうだな。適度な休養は必要だ。うむ、私はお兄ちゃんの邪魔はしないと誓お

うー」

「私も。少し寂しいですが、一夏さんからの誘いを待つだけにしますわ」

「僕も一応は手助けが出来るように頑張ってみるよ。それ以外は邪魔しないようにしなきゃ」

「アタシは馬鹿二人と遊んだりするから、その日一夏が暇なら誘ってみようかしらね」

何とか一夏の予定の邪魔を防いだエイミイの背後で、静寐が四人に見えないように拍手を送っていた。

「結局、私必要なかったじゃない」

「静寐がいてくれたから、何とか頑張れたんだよ」

小声で話す二人の事は視界に入らず、四人は一夏の邪魔をしない程度に計画を練るのだった。

ちよつとした変化

夏休みに入り、代表及び候補生たちはその実感を得る間もなく飛び回っている。企業代表である虚も同様に、世界各国のＩＳ企業との定例会に出席している。

本来ならば一夏も参加しなくてはいけないのだが、表向きの『楯無』は尊が務めているので、そういった集まりには一夏ではなく尊が参加している。

したがって、夏休みに入っただけは、一夏のスケジュールは静寐の専用機製造と香澄や本音とのトレーニングにあてられる。

「ほえ……いっちーとのトレーニングは疲れるよ〜」

「そんなこと言っても、布仏さんの方が元氣じゃん……私、しばらく動けそうにないんだけど……」

「だらしないわね……一夏さんが組んだトレーニングメニューは、今の貴女たちなら問題なくこなせるはずなのよ」

当の本人である一夏は、今整備室に籠って静寐の専用機製造でこの場にはいないが、一夏の代わりに監督を務めている碧は、呆れたように地面に寝転がる二人に声をかけ

る。

「鷹月さんを見なさい。疲れてるけど寝転がっては無いわよ」

「一夏君に言われて、一応は基礎体力をつけるように運動してましたから……でも、さすがにキツイですよ」

「だいたい、本音ちゃんは随分前から専用機を持つてるのに、基礎体力が低すぎるわよ」
『本音は土竜を使わずにVTSで遊んでばかりだったから、実際にISを使った戦闘の経験はそれほど多くないから仕方ないんじゃない?』

「そうは言ってもね……」

「あの、誰と話してるんですか?」

ごく自然に木霊が話しかけてきたので、碧も普通に返答した。だが、木霊の声は碧を除けば一夏にしか聞こえないので、ここにいる三人には、碧が急に一人で会話を始めたようにしか聞こえないのだ。

「えっと、この子——私の専用機の木霊とちよつとね」

「そういえば、更識製の専用機は、持ち主である人物にだけ声が聞こえるでしたね」

「マドマドやカルカルの機体のように、人の姿になっちゃうやつもあるけどね」

「……布仏さん、回復も早い」

まだ一人バテている香澄は、さっさと回復して立ち上がった本音に驚きの目を向ける。

「さて、日下部さんが回復したら今度はVTSを使った訓練ね。本音ちゃんはパスワード、持つてるでしょ？」

「こっちが管理してるから、分からないけどね」

「……じゃあ一般生徒用のIDでログインして。訓練機だけだけどそれなりに訓練にはなるわよ。三人のバトルロイヤルで良いわよね」

「あの……私、補習ギリギリだったんですけど」

腐っても専用機持ちである本音と、優秀な成績を収め、その結果専用機を与えられることになった静寂と戦わなければならないと言われ、香澄は少し顔を蒼ざめていた。

「大丈夫よ。ちゃんと日下部さんも成長してるから」

碧の慰めともとれる言葉は、香澄の表情を元に戻すまでの威力を持たなかったが、それでも多少はマシになったので、碧は三人をVTSルームへと連れていくのだった。

名目上はテストパイロットであるために、マドカは現在、東の移動型研究ラボに来ていた。

「いやいや、まーちゃんもIS学園に通うようになって一段と成長したね。特に、去年まではほぼなかった胸のふくらみが――」

「やることが無いのなら兄さまの所へ帰りたいたいのですが」

「少しぐらい東さんとのコミュニケーションに付き合ってくれてもいいじゃないか！

……まあ仕方ない。早速だけど白式のデータを取らせてね。いつくんの側にいるだ

けで、ISの性能は東さんの予想値を大幅に超えてくるからね」

楽しそうな口調で、だが動かしている手は全く無駄がない。曲がりなりにも天才と称されるだけはあるな、とマドカは東の手を見てそのような事を考えていた。

「まーちゃんはいっくんの側にいられて幸せ?」

「はい。兄さまの側にいられるのなら、私は他の何も欲しません。側にいられるだけで幸せなのです」

「そうだよね。失踪した織斑の屑親たちがまーちゃんを手放した事が、いっくんとの再会に繋がってるんだよ。まあ、いっくんが東さんにまーちゃんの処遇を任せただけから、この子は東さんのものって決めたんだけどね」

「それで、私が兄さまの側にいられる事に幸せを感じるのと、白式のデータと、なんの関係があるんですか?」

聞かれたのでとりあえず答えたが、マドカには今の質問にどのような意図が含まれているのかが分からなかった。分からないことは聞けばいい、それがマドカの考えだった。

「ん? ちょっとうちの愚妹がいっくんに固執しすぎてたなくって思っさ。近くに

いたのに離れ離れになったのは、まーちゃんも箒ちゃんも一緒だなんて思ってた。まあ、状況が違いすぎるから、参考にはならなかったけども、箒ちゃんが亡国機業に身を落とした理由は、やっぱり箒ちゃんの弱さなんだって実感したよ。すべてをいつくんの所為にして、自分は悪くないと開き直る、そんな弱さにつけこまれたんだなって」

「束様……」

真面目に語る束に少し感動を覚えたマドカ。だが、その感動も次の瞬間には全て台無しとなった。

「まあ、あの箒ちゃんがいなくなった事で、いつくんはより研究に集中できるだろうし、束さんも愚妹の尻拭いをしなくて済むと思うと、いなくなってくれてありがたうだよね」

「束様……私の感動を返してください」

「返せって言われてもな。束さんが貰ったわけじゃないし」

白式のデータをモニターに表示しながら、束は楽しそうに笑った。マドカは詳しく知らないから驚かないが、束がこれほど楽しそうにしているのを織斑姉妹、及び一夏が見たらかなり驚くだろう。

「やっぱり東さんが予想した成長速度よりも早いね。いっくん効果かな？」

自分が楽しんでるなど気づかないままに、東は更に楽しそうな笑みを浮かべるのだった。

静寐の適正值

VTSを使ったトレーニングの最中、監督役の碧の携帯が鳴り響いた。

「ごめんね、マナーモードにするの忘れてたみたい……あら？　一夏さんから電話なんて珍しい」

三人の集中力を乱した事を謝罪し、碧はその電話に出ることにした。

「はい……えつ、もうですか？　やっぱり早いですね……はい……分かりました、すぐに向かわせます」

一夏の声は三人には聞こえないため、碧の言葉から一夏のセリフを推測するが、残念ながら誰一人一夏のセリフを想像できたものはいなかった。

「鷹月さん、一夏さんが整備室でお待ちです。最終調整をしたいからの事です」
「もう完成したんですか？」

「データは前々からのを使ったらいいですし、機体そのものは大して手間ではないらしいですよ。もっとも、一夏さん一人で造ってたわけではありませんので、少しくらい早

くても当然だと思いますがね」

碧の言っていることは、完全なる嘘ではない。データの整理など、手伝えることは簪も手伝っていたし、コアそのものを造ったのは一夏ではなく束だ。だが組み立てた人間は一夏のみなので、部分的に碧の言っていることは嘘、という事にもなる。

「じゃあ、今から整備室へ行けばいいんですね？」

「ズルいよシズシズ。勝ち逃げは許さないよ」

「本音ちゃんは、普段から自分の機体を使わないで遊んでた罰が当たったのよ……
ヴァーチャルで専用機が言うことを聞かないなんてね」

「これはいつちーの陰謀だ〜！」

一般のIDでも、専用機持ちだと認められれば自分の機体を使うことが出来る。だが、普段から他人の専用機を使って遊んでいた本音は、専用機である土竜に仕返しとばかりに命令とは逆の動きをされてしまったのだった。

「布仏さん、普段から使ってるんじゃないかなかったですね」

「何時も一夏さんに怒られているのに、改めないからこういうことになるんですよ？」

「今度からはなるべく土竜を使う所存です、はい……」

まるで責め立てられた大人のようない分を残し、本音はその場にへたり込んだ。

「それじゃあ、鷹月さんが戻ってくるまでは二人ともCPU相手に頑張ってね。さて、私
もたまには木霊と空を飛びたいわね」

『授業で使っては貰ってますが、アリーナには天井がありますからね。屋外戦がまだ可
能だった第一回モンド・グロツソ以来、私は空を飛んでません』

「ヴァーチャルだけど、偶にはいいわよね」

木霊と会話しながら、碧は一夏から渡されているパスワードを入力しVTSを起動す
る。碧の戦闘を見学していた香澄は、あまりのレベルの違いに愕然とするのだった。

一夏に呼び出された静寐は、一夏がいると思われる整備室の前まで来ていた。だが、そこから先に進むには、パスワードが必要なので、静寐一人では入ることが出来ない。「困ったわね……って、一夏君に電話すればいいだけの話か」

自己完結をして、静寐は携帯を取り出して一夏の番号にコールする。

『はい?』

「扉の前まで来たんだけど、パスワードが無いと入れない場所じゃないの、ここ」
『てつきり碧さんと来ると思ったんだが……』

そういつて一夏は、内側から扉を開けた。

「まあ、入ってくれ。現状の静寐のデータが欲しい」

「……………、学園の整備室よね？」

室内には、かなり本格的な測定器や、静寐が見たこともないようなものが沢山、所せましと置かれていた。

「IS学園のスポンサーは更識企業だからな。それなりのものを置いていてもおかしくはないだろ」

「私たち一般人からすれば、こんなものがあればおかしいと思うわよ」

「そうか？ まあ細かい事はおいておくとして、早いところ測定してしまおう。それを機体に反映すれば、この子は静寐の専用機として完成するだろうからな」

「これが……………私の専用機……………」

目の前に鎮座するISに目を奪われ、他の動作を忘れてしまう静寐。まるで心臓までもが停まってしまったのではないかと錯覚するくらいに、静寐はそのISに心を奪われていた。

「おーい……………そろそろ現実に戻ってきてくれると助かるんだが」

「……………」

「反応なし、か」

「仕方ありませんよ。コネでもなければ専用機なんて簡単に手に入るものではありませんから」

「……だから、いきなり人の姿になるのはやめろ」

闇鴉が人の姿になっても、静寐はなかなか現実に戻帰しない。一夏は一つため息を吐いて、静寐のすぐそばまで移動し――

「鷹月静寐！」

「は、はいっ!？」

――声を張り上げて彼女の名前を呼んだ。

「やれやれ、やっと戻ってきたか。いつまでも夢想の世界にいられると困るんだが」

「えつと……ごめんなさい。そんなに長い時間ボーっとしてた? ……って、いつの間にか闇鴉が人の姿になってる」

「こんにちは。鷹月さんは専用機に縁が無いと思っていたんですよね?」

「そりゃあね……候補生なんて無理だし、更識所属にでもならない限り個人で専用機を持つなんて不可能だもん」

「感動するのは仕方ないにしても、せめて完成してからにしてくれないか？　これでも、俺だって予定が詰まってるんだから」

闇鴉と談笑し始めそうになったので、一夏が強引に本筋へと流れを戻す。測定器へ静寐を誘導し、現状のデータを測っていく。

「基礎体力は想定内だが、適性がBに上がってるのは驚きだな」

「鷹月さんも頑張っておられたんでしょうね」

一夏と一緒にモニターを眺めていた闇鴉がしみじみと呟く。一夏も似たような感想だったので、静かに頷き、専用機用のデータを上方修正してプログラムしなおすのだった。

簪の不満

遠距離の適正を少しでも上げるために、簪は今日もVTSでトレーニングに励んでいた。

「犯罪組織というから、もっと忙しいのかと思ってたが、意外と暇なんだな」

「あ？ お前がせめてもう少し上達しないと動けねえし、どっちにしたってまだ準備が出来てねえからな。オレはお前の監視っていう任務中だ」

「何故監視など。私はどこにも行かないし、ここから逃げ出す脚もないからな」
「金もつてねえもんな。タクシーに乗ろうにも料金払えなきや普通に犯罪だぜ」

着の身着のままで亡国機業にやってきた簪は、あの日から殆どこの部屋から外に出ない。それでも、自分がISを持てるという希望に向け、日々努力することに文句を言うことは無かった。

「そういえば、更識の餓鬼がまた一機専用機を造るらしいな。コアはお前の姉貴が提供したとか」

「あの人か？ 一夏が頼んだのか？」

「いや、オレも聞いた話だから詳細は知らんが、お前用に専用機を造ったはいいが、お前が力を制御することが出来ない」と判断した篠ノ之束が、その専用機のコアを一夏に渡したらしい」

「何故そんなことを貴女が知っている。殆ど私と一緒にこの部屋にいる貴女が！」
「スコールから報告されただけだ」

淡々と話すオータムに、簪は冷静さを取り戻す。ここで激昂しては、IS学園にいた時と何も変わらない。

「……ところで、何故IS学園の情報が逐一入ってくるんです？」

「前にも言わなかったか？ 潜ってるヤツがいるって」

「ああ、VTSのハッキングをしてたとかいう……」

「そいつから報告されるんだよ。まだ織斑姉妹にも更識の連中にもバレてないからな」

「そんな人がIS学園に……じゃあ、私が使った打鉄を持ち込んだのも」

「そいつに手引きされた組織の人間だな。オレら側の」

そこで簪は、未だに亡国機業のリーダーらしい人物に会っていない事を思い出した。「組織なのにリーダーがいらないのか？ まだ挨拶してないんだが」

「あ？ 別に挨拶なんて必要ねえよ。そもそも派閥が違うから、お前が入ったことすら知らないと思うぜ」

「どこの組織にも派閥というものは存在するのか」

「てか、無駄口叩いてる暇があるなら、さっさと成長してくれないか？ オレだって暴れたくて仕方ないんだ」

「努力はしてるが、前回の試験で、私は射撃部門は赤点だったからな……これでも必死にやってるんだ」

未だにCランクから成長しない筈の実力に、オータムはあきれ果てていた。だが、少しでも成長しようと努力してるのは、彼女から見てもよく分かるので、どう反応していいかに少し頭を悩ませたのだった。

日本代表として、刀奈は現在中国との合同訓練に参加していた。もちろん、候補生である簪と美紀も一緒に。そして、中国側には鈴がいる。

「あーあ、こんな訓練さつさと終わらないかしらね」

「お姉ちゃん、自分の立場を考えて発言しなきゃダメだからね。外交問題とかになったら、また一夏の仕事が増えることになるんだから」

「でも、簪ちゃんだつてそう思わない？ 美紀ちゃんや鈴ちゃんだつて一夏君と遊びたいわよね？」

四人一グループということで、刀奈は簪と美紀と鈴とでグループを作り、こうして訓

練の合間に愚痴を零していた。

「そりやあたしだって、一夏と遊べるなら遊びたいですよ。でも、一夏が予定ぎつしりだつて知ってますからね。国の決めたことに逆らつてまで遊びたいとは思いませんよ」
「刀奈お姉ちゃんは、この前膝枕してもらつてたじゃないですか。だから、少しくらい我慢しなきゃダメですよ」

「あれは、闇鴉がしてもらつてたついでに、私もしてもらつただけだもん」

「何開き直つてるの？ まだ抜け駆けしたことを許してないから」

「……はい、ごめんなさい」

簪からもものすごいオーラが流れ出し、刀奈は素直に頭を下げた。偶に本気で怒る簪には、刀奈や一夏でも手が付けられないので、その時は素直に謝るのが一番だと結論付けられたのだ。

「さて、そろそろ再開しないと怒られそうですね。ペアマッチの練習なのはいいけど、あたしと会長さんとじゃ実力差が……」

「じゃあ鈴ちゃんと誰か日本の候補生と交代する？ 鈴ちゃん、中国の候補生に親しい人がいないんじゃないかなかったっけ？」

「……あんまり中国にいませんでしたから。それに、あたしが一夏と友達だつて知られ

てるみたいで、教える教えろって五月蠅いんですよ」

更識一夏とは、全世界のＩＳに関わる人が一度は聞いたことある名前であり、その一夏と親しい鈴がいれば、その事を聞き出したいと思ってしまうのだろう。ましてや、異性との付き合いに乏しいＩＳ操縦者だ。その衝動が強いのも仕方のない事なのかもしれない。

「それじゃあ仕方ないわね……じゃあ、頑張って簪ちゃんと美紀ちゃんの相手を務めましょう。それでも、私は全力を出さないようにしてるんだから」

「手を抜いている……わけじゃないですね。手加減してると言うべきでしょう」

「刀奈お姉ちゃんが本気なら、私と簪ちゃんはすぐに負けますから」

「普段だらけてるくせに、実力だけは本物だから質が悪いよね」

「簪ちゃん辛辣だよ……お姉ちゃんだって、頑張るときは頑張ってるんだから！」

「普段から頑張らなきゃダメな立場でしょう？ 威張って言う事じゃないよ」

簪の毒舌に、刀奈は棒のような涙を流す。ここ最近一夏に会えないからなのか、簪の毒舌が好調だと、ルームメイトの美紀は思っている。

「よっぽど合宿所での生活が嫌なんだろうな……まあ、私も一夏さんに会えないのは寂

しいですけど)」

美紀も同じ気持ちだからこそ、簪をどうにかできないかと思っっているのだ。実害はと
りあえず、刀奈にしかないのです、今は本格的に悩んでいるわけではないのだが。

静寐の専用機

最終調整の段階に入っているのに、一夏はまだ静寐に専用機の名前を教えていなかった。

「一夏君、この機体の名前は決まってるの？」

「スサノオがいるし、伝承から持ってこようと思って考えたんだが、どうもしっくりこなくてな……」

「じゃあ、まだ名前が無いの？」

静寐が首をかしげると、一夏は首を左右に振った。

「行き詰まったときにちよつと空を見ようと思つて外に出たら、そこに鳥がいてな。その鳥がスサノオにも無関係じゃない鳥だったから、それでいいかなつて」

「スサノオに関係がある鳥？ そんな鳥、いたかしら……」

「スサノオは伊邪那岐と伊邪那美の末子だ。伊邪那岐と伊邪那美が性行をしていた時にその側にいたとされる鳥、鵺だ。別称で『恋教鳥』とも言われる鳥だから、俺に何かを教えに来てくれたのかもな。だから、この子の名前はそのまま『鵺』だ。見た目も

若干鳥っぽくしてある」

「一夏君、知識が若干マニアックな上に『性行』とか真顔で言わないでよ……」

「……実は俺も若干恥ずかしいんだよ」

フイツと静寂から視線を逸らした一夏の顔は、みるみる真っ赤になっていく。そんな一夏を見て、静寂は笑い出しそうになってしまった。

「笑いたければ笑えよ」

「いや……一夏君でも恥ずかしいって思うんだな〜って思っただけだよ」

「静寂は知ってるだろ。俺はそもそも異性が得意じゃないんだよ」

「そういえばそうだったわね。でも、普段から異性に囲まれてる一夏君じゃ、説得力が皆無よ?」

「……この学園、俺と同性なのは学長くらいだろ」

盛大にため息を吐いた一夏を見て、静寂は少し笑みを零して、真面目な表情に戻った。

「それで、この『鵺鴿』の特性は?」

「オールラウンドに造ってある。遠距離でも近距離でも、回復役でも使える」

「回復役? IS 戦闘じゃ、回復なんて無かったと思うけど……」

「束さんの研究の名残だな。設定がコアに残ってたからそのまま使った。あの人、フオーマットしないで渡したらしい」

実際は一夏がコアに残されていた微かなデータから呼び起こしたのだが、静寐にそれを確かめる術がないのをいいことに、ちよつとした嘘を吐いたのだ。

「剣が二振りと銃火器が数点、後は珍しい弓も積んでみた」

「弓？ I Sで弓道でもするのかしら？」

「攻撃用じゃなくって、その弓で味方を射抜いて回復させるんだよ。武器の名前は『天照』」

「またたいそうな名前ね……」

「そんなこと言ったら一振りは『草薙』だぞ」

「一夏君、日本神話好きなの？」

「それほどでもないが……記憶を失った後、更識で厄介になり始めた時に片っ端から本を読まされたから……その中に古事記とか日本書紀もあったから」

あつさりと言い放つ一夏に、静寐はどう反応しているのかに困った。普通の家に、古事記や日本書紀が置いてあるわけがないのだから、仕方ないかもしれないが……

「更識ってなんでもあるのね」

「逆に漫画とかはあんまり無かったな……簪や本音が持つてるのだけだった気がする」

「やっぱり歴史あるお屋敷なのね……書庫に入ってみたいわ」

「興味があるのか？ 楯無さんに頼んで入れるように出来るが、どうする？」

「……遠慮しておくわ。いくら更識所属になるとはいつても、私は暗部組織に入るわけじゃないんだから」

一瞬入ってみたい、と思った静寂だったが、寸での所で更識が暗部組織だということ
を思い出し、その拠点である屋敷に入ったら、何か後戻り出来ない事態になりそうだと
思い断った。

「別にそこら辺に血痕とか死体とかが転がってるわけじゃないぞ？ 普通の武家屋敷
だ」

「武家屋敷ってだけで、普通とはかけ離れてるわよ」

「そう……だな……。でも俺、更識の屋敷以外だと、五反田食堂しか行ったことないな……
だから、普通の家の中を見たことが無いかもしれん……」

「子供のころ、お友達の家に行ったりとかは？」

「無いな……記憶を失ってから、暫くは篠ノ之に付きまとわれてたし、アイツが転校して

からは、鈴たちと外で遊ぶことが多かったからな……さつき言ったように、友達の家つて言われても、五反田食堂にしか行ったことが無いな」

一夏の悲しい過去話を聞かされ、静寐は涙を堪えるのに一苦労だった。普通の幼少期を過ごしてこなかった一夏に、同情して泣きたくなっているのだ。

「ところで、その『五反田食堂』って？」

「ん？ ああ、悪友の実家が食堂を営んでいて、自宅兼お店なんだよ。二階で遊んだことはあるが、やっぱり普通の家とは言えないだろう？」

「まあ、一般家庭は食堂なんて営んでないわね……」

「あつ、鈴の両親が営んでる中華料理店にも行ったことがあるな」

「……一夏君のお友達って、基本お店の子なんだね」

一夏がIS学園に入学する前からの付き合いで、更識関係者ではない人物で、現在も辛うじて交友があるのは三人で、そのうち現在進行で店を営んでいる五反田家と、現在は店を畳んで、離婚したと聞かされた風家。そして残りは一夏が訪れたことのない御手洗数馬の家、そこは普通の家なのだろうが、一夏は知らない。

つまり、一夏のIS学園入学前の友人の内、三分の二は飲食店を経営していたのだ。

「改めて考えると、俺って交友関係狭いな……」

「仕方ないんじゃないの？ 篠ノ之さんが原因で近づけなかったんだし、一夏君がご厄介になつてる家が特殊だからね……」

「微妙なフオローをどうも。それじゃあ、鶴鴿の動作チェックと武器のチェックを頼む」
「そういえば、それがメインだったわね……」

すっかり一夏の過去話になつてしまつていたので、静寢は本来の目的を忘れかけていた。そんな静寢の反応に、一夏は苦笑いを浮かべたのだつた。

テスト飛行

鵓の動作確認の為にアリーナへ出ると、そこには土竜を纏った本音が待っていた。

「本音、どうかしたの？」

「いつちに頼まれたんだ。シズシズの相手をしてほしいって」

「戦うわけじゃないが、相手がいた方がやりやすいだろ？ それに——」

そこで一夏は鋭い視線を本音に向ける。

「な、なに？」

「土竜に機嫌を直してもらうためにも、少しは動いてもらわなければな」

「ほえ!!? なんでもいつちーがそれを知ってるの」

「更識所属の専用機のコンディションなど、闇鴉を通じて知ってるに決まってるだろ！
誰が整備してると思ってるんだ」

一夏に怒られ、本音は心の中で土竜に話しかける。一夏には土竜の声は聞こえるが、静寂には聞こえないのでそうしたので。

「(何でいつちーに密告してるの)」

『貴女がVTSでも私を使わないからですよ。私が言っても聞かないので、一夏さんにお願いました』

「(そのせいで怒られちゃったじゃないか)」

『自業自得です。そもそも、貴女の専用機は私であつて、訓練する時も私を使うのが普通なんです。他の機体をいつまでも使つてるような本音は、怒られた方が良かったんですよ』

「(うう、土竜つてお姉ちゃんみたいだ)」

『一夏さんがそう設定してくださいましたからね。本音はだらけるのが得意だから、私が律するようにと』

それでも怠けたから、土竜から一夏に報告され怒られたのだが、本音はあまり反省しているようには見えない。

「本音、早いところテストしたいんだが、まだ土竜との会話は終わらないのか？」

「大丈夫なのさ。とりあえずシズシズの攻撃から逃げればいいんだよね？」

「それもそうだが、ちゃんと土竜に謝っておけよな。相当使つてないんだろ？」

「テストの時にはちゃんと使つたよ」

当然のことを偉そうに言った本音に、一夏はため息を堪えられなかった。

「お前、そのうち篠ノ之みたいになるぞ」

「ほえ？」

「土竜がお前に反応してくれなくなるって言うてるんだ。そうなれば俺の護衛は解任だな」

「が、頑張る！ これからは土竜を使って訓練もする！ だからいつちーの護衛を解任するのだけはやめてください！」

「(今のつてそんなに威力のある脅しだったんだ……)」

本音の事だからつきり、任務から外されて喜ぶかと思っていた静寐は、本音の慌てっぷりに驚いていた。それだけ一夏の護衛という任務は、本音にとっても重要なのだろうと思うことにした。

「さて、それじゃあ静寐」

「なにかしら？」

「いや、何じゃなくってだな……そろそろテストしたいからピットに行つて準備してくれ。これ、鶴鴿な」

待機状態の鵜鴒を渡され、静寐はピットへと移動する。

「それじゃあ、俺はここで見てるが、流れ弾とかは気にしなくていいぞ……」

「私が全て切り伏せますから」

「……だから、いきなり人の姿になるのは止めろ」

闇鴉を展開するから、と言おうとした一夏だったが、先に本人が人の姿になって言うてしまったので、ため息代わりに何時ものツツコミを入れたのだった。

ピットで鵺鴿を展開した静寐は、言いようのない高揚感に包まれていた。専用機など縁のないものだと思っていたのだから、自分の機体を持つという事実に感動してしまいうのも無理もないだろう。

「これが……私の専用機」

『初めまして、鷹月静寐さん。わたしは貴女の専用機として造られた「鵺鴿」と申します』
「うわあ!?　これが、ISの声なの……」

初めて体験する「人の姿」をしていないISに話しかけられる事に、静寐は驚きと感動を覚えた。

「えっと、初めまして。私は鷹月静寐です。これからよろしくね」

『はい。先ほどの土竜と本音さんの関係ではありませんが、なるべく訓練でも私を使ってください』

「もちろん。せっかく専用機を持てたんだから」

静寐の考え方が一般的で、本音のように他人の専用機を使ってみたいと思う方がおかしいのだ。性能を調べようと思ひ、一回か二回くらい思う事があるかもしれないが、毎回使いたいとは思わないだろう。

静寐は鵠鴿を身に纏いアリーナへと出る。今まで訓練機でこの動作はやったことがあるが、専用機でやるとまた別の感動が静寐の中に生まれていた。

「それじゃあ、まずは遠距離武器から試してくれ」

「一夏君はそこで見てるのよね？ 流れ弾とか平気なの？」

「さつきも言ったが、闇鴉を展開して逃げるから問題ない」

さつきは闇鴉に言われてしまったのだが、静寐にはその事を聞かれてはいない。だから一夏は、待機状態の闇鴉を指さし、いざとなれば展開すると言って静寐を安心させた。「それじゃあ遠慮なくやっていいのね？」

「言っておくが、怠けているとはいえ本音はかなりの実力者だからな。反撃は禁止してるが、攻撃をあてられるかどうかは知らんぞ」

それだけ言って、一夏は開始の合図代わりに闇鴉を展開し、一発の弾丸を天井に放った。それを見てすぐに、本音が静寐から距離を取り逃げ始める。

「反応が早い!? 普段の本音からは考えられないわね……」

その後、追いかけて何発が放った静寂だったが、結局一発も当てることが叶わず、近距離戦闘の訓練でも、どこから仕掛けても全て止められてしまったのだった。

「……これが、本音の実力なのね」

「どうだシズシズ、参ったか!」

「威張るな。殆ど土竜の指示に従って回避行動を取ってただけだろ」

「どういうこと?」

地上で本音の事を褒めたい静寂だったが、向こうから来た一夏が本音の実力ではないと言ってきた。

「その指示に即座に反応出来るのは、間違いなく本音の実力だが、攻撃が何処から来るか、どう反応すれば避けられるか、などは殆ど土竜が本音に指示してることだ」

「それでも、一発も当たらなかったのは褒めてもraisる事じゃないかな?」

「これからも精進するように」

軽く頭を叩き、一夏はアリーナから移動してしまう。本音も知っている通り、彼のス

ケジュールはパンパンに詰まっているので、次の仕事に向かったのだらうと勝手に解釈したのだった。

スクールと一夏

結局一撃も本音に当てる事が出来なかつた静寂だが、今回はそれでもかまわないと、どこかに行っていたがアリーナに戻ってきた一夏が言ってくれたおかげで凹むことなくテスト飛行を終えた。

「普段怠けてるから、一発くらい当てられると思っただけだな……」

「まあまあ、これでもかんちゃんや美紀ちゃんの練習相手を務めてるから、そう簡単には当たらないよ〜」

「偉そうに言うな。それから、次からは土竜にフォローしてもらおうことなく戦えよな」
「分かつてるつて〜。でも、本当に危ない時は頼むけどね〜」

一夏が本音の為に造った土竜は、敵の攻撃が何処から来るか、どのくらいの速度で回避行動をとれば避けられるかを瞬時に計算してモニターに表示してくれる機能が備わっている。さすがに刀奈や虚の相手をするときは、この機能を使っても敵わないのだが、候補生以下を相手にする時は、かなり有利に戦いを進めることが出来るのだ。

「一夏君、鵺鴿にはその機能搭載してないのよね？」

「本当は本音にも使わせたくないんだが、データを採るためには本音の機体に搭載した方がすぐにデータが集まるから載せたんだ。そうしたらそれに頼りまくってるから……これは企画部に没だと伝えておこう」

「……いきなり研究者の顔にならないでくれない？」

「あ、ああ……すまん。それで鶺鴒には搭載してないぞ。今言つたように没にするから」「それじゃあ、本音の機体からも取り外すってこと？」

静寂の質問に、一夏は少し考えてから首を振った。

「あいつからあれを取り上げると、いざというときに役に立たないかもしれないからな……」

「そんなことないよ。あつ、ところでいっちー、さつきはどこに行つてたの？」

「ん？ 更識に電話を入れていたんだ。鶺鴒の動作確認を終了したつて報告をな」

「いっちーも大変だね。次期当主候補筆頭なのに」

「あくまで仮の立場だからな。候補つてだけでは偉くないだろ」

本当の事を知らない静寂は、二人の会話を聞きながら適度に相槌を打っている。もし本場の事を知っていたら、一夏も本音もこんな嘘は吐かなかつたに違いない。

「一夏さん、そろそろ更識にお戻りになる時間です」

「もうそんな時間か……じゃあ静寐、本音も悪いが、俺はこれで。アリーナの使用時間はまだ残ってるから、模擬戦するなり動作チェックするなり好きにしてくれ」

碧が迎えに来たので、一夏は今度こそアリーナから姿を消した。

「やっぱり一夏君は忙しいのね……」

「開発部と企画立案部の掛け持ちで、次期当主候補筆頭だからね。いつちーより暇な大人は沢山いると思うし、いつちー以上に真面目に更識の為に働いてる人も少ないだろうね」

「一夏君って養子よね？　なんでそこまで更識の為に？」

静寐の質問に、本音の表情が一瞬だけ曇った。だが、それは幻覚だったのではないかと思うくらい、本音の表情はすぐにいつも通りに戻った。

「いつちーに直接聞きなよ。少なくとも、私が言える事じゃないしね」

「そんな事言って、本当は知らないんじゃないの？」

「えへへ、どうだろうね」

それ以降、本音は一夏の事を話そうとせず、土竜の機嫌を取るためにアリーナの使用時間いっぱいまで飛行テストをしていたのだった。

亡国機業で遠距離武器の適正を上げるために努力していた筈に、スクールから信じがたい報告を受けた。

「姉さんが私に専用機を造るつもりだったと?」

「そのようね。でも、結局貴女はこちら側に来たので、余ったコアは更識に譲渡され、そのコアを使って一夏が鷹月静寐という女子生徒に専用機を造ったらしいわよ」

「一夏が? あいつ一人で専用機を造れるのか?」

てつきり知っていると置いていたスクールは、箒が首を傾げたのを見て、二人の関係性を思い出した。

「知らないなら聞かなかった事にしてちょうだい。とにかく、これでまたIS学園に戦力が増えたことになったわ。SH、まだ適正値は上がらないのかしら?」

「この間CからBになったところだ」

「なら、そろそろ動けるかしらね。あと一週間、頑張つて訓練してちょうだい。そうすれば貴女も専用機持ちになれるかもしれないから」

「ああ、分かった」

箒を下がらせて、スクールはオータムを部屋に呼ぶ。

「なあ、アイツあの餓鬼が一人で専用機を造れることを知らねえんだな」

「まあ、一夏とあの子の関係を考えれば、教えてなくてもおかしくは無いわよ」

「ストーリーカー寸前のやつに、自分の秘密は教えないか」

ニヤリと笑うオータムに、スコールは苦笑いで応えた。

「それで、例の作戦は何時実行するんだ？」

「SHが適正Bになったようなので、来週には実行出来ると思うわよ」

「ようやくか。それで、IS学園の動きは？」

「一夏は更識の仕事で忙しそうだし、所属の面々も各国を飛び回ってるらしいわよ。残ってるのは布仏の次女と鷹月静寐の二人だけ。こつちに人員を割く余裕はないわね」

「それじゃあ、邪魔される事なく仕事出来るってわけだな」

「貴女がデュノア社長一家を殺してくれたおかげで、あの会社は生き残っちゃったけど、まあ一夏の傘下に入ったのなら問題ないでしょう」

「やけにその一夏って餓鬼を気にしてるよな、スコールって。知り合いか？」

少し嫉妬した風にオータムが尋ねると、スコールは笑顔で返す。

「向こうは私の事なんて知らないでしょうけどね。彼の両親と知り合いなのは確かで、何度か見た事もあるわよ」

「そりゃあ、アイツの両親ってことはMの両親だろ？ ならオレだって会った事あるぜ」

「とりあえず、今は一夏の事は考えない事ね。しっかりとSHを見張っておいて」

そう短く命令し、スコールはオータムから視線を逸らす。どこことなく気になってはいたが、オータムはスコールが言いたくない事なのだろうと理解し、そのまま部屋を辞したのだった。

デュノア社の現状

代表の合宿としてフランスに来ていた刀奈たちは、同じ更識企業所属のエイミイと合流していた。

「そういえば、今日あたり一夏君もフランスに来るんじゃないかなかったっけ？」

「家の仕事で来るはずだよ。楯無さんが来られないから、その名代として」

「お父さんが来ても、ISの事はさっぱりですからね……どっちが当主なのか分からないよ」

実際は一夏が当主であり、一夏が顔を出すのが普通なのだが、それを公表できないのと同じ嘘を繰り返す。いい加減罪悪感も薄れてきているので、三人は当たり前のようにこの嘘をエイミイにも信じ込ませた。

「それで、一夏君が来るのは分かりましたけど、私たちと会えるんですか？」

「それは分からないわね。シャルロットちゃんの会社を訪問して、現状を確認するだけだと思っただけよ」

「新しく開発中の武装のチェックも一夏が担当じゃなかったっけ？」

「一夏さん考案ですからね」

「改めて考えると、一夏君ってなんで学生やってるのか分からないくらい忙しいんだね」

エイミイの一言に、三人は一瞬固まったが、すぐにエイミイの言葉に同意した。

「確かに、一夏君はウチに必要な人材だから、更識の仕事に専念させても良かったかもね」

「でも、一夏が自分の意志で I S 学園に通うって決めたんだから、それは無理じゃない？」

「必ずしも自分の意志、ってわけじゃないんでしょうけどね」

「普通の高校に通って、普通に学生生活を送る、なんて一夏君の立場じゃ不可能よ。可哀そうだけでもね」

まずはじめに、不特定多数の人間——見ず知らずの人間が多数いる場所に、一夏は一人ではいけない。そして I S を動かせることを公表している以上、I S 学園に入学する事が身の安全を確保する一番の手段でもあったのだ。

「自分の所為で他の人に迷惑はかけられない、って言ってたね」

「実に一夏さんらしい考え方ですけどね」

「前から気になってたんだけど、一夏君って昔の記憶が無いんだよね？　じゃあ更識のお屋敷に来てからずっとあの喋り方なの？」

「昔は可愛らしい喋り方だったけど、小学校高学年になってからだっけ？　今の喋り方に変わったのよ」

「あの頃の一夏さんは、更識の人間でも怖がってましたからね」

本人がいないところで過去を暴露する三人だが、一夏も別にそのことで目くじらを立てることはしないだろう。ただ、あまり喋って欲しくないとは思っているかもしれないが。

「ていうか、合同合宿と言う割には、大した訓練してないのよね……これってなんの嫌がらせなのかしら？」

「訓練してない、って言うか私たちがすぐに終わらせてるだけなんだけどね……」

「他の皆さんはまだ訓練中ですし……」

「私も、更識所属になって別格になっちゃったみたいですね……」

他の代表・代表候補性が苦勞して取り組んでいるメニューを、更識所属の四人は早々に終わらせてしまったのだった。

社長代理として更識企業フランス支部で作業していたシャルロットを、一夏が訪ねる。前もって訪問する旨を伝えてあるために、それほど驚いた様子はない。

「いらっしやい。小鳥遊先生もわざわざすみません」

「いえ、私は一夏さんの護衛ですから」

「シャルロットも社長が板についてきたか？ だいぶ落ち着いてるな」

「からかわないでよ、僕……私なんてまだまだだよ」

「別に一人称を変える必要は無いぞ？ シャルロットが普段使ってるので構わない」

代理とはいえ社長職にあるシャルロットは、普段から一人称として「私」を使おうと心がけている。一夏以外と面会するときは難なく使えているのだが、一夏の前ではどうしても学園気分が抜けないのだろう。普段使いである「僕」という一人称を使ってしまった。

「だって、一夏はちゃんと公私を使い分けてるでしょ？」

「これでも更識代表代理だからな。でも、シャルロットの前では楽をさせてくれ」

「そういえば、一夏も普段通りの口調だね。じゃあ僕も肩肘張らずに行かせてもらおうかな」

一夏の口調が普段通りなのに気が付き、シャルロットも普段通りの口調で話すことにした。

「ねえ一夏」

「何だ、シャルロット？」

「それ。長くない？ 言いやすい呼び方で良いよ」

「別にあまり気にしてなかったが……じゃあ『シャル』と呼ばせてもらおう」

「うん、良いねそれ」

愛称が気に入ったのか、シャルロットは満面の笑みを浮かべた。

「じゃあシャル、頼んでいた例の物の開発状況を教えてくれ」

「えつとね、現状は六割程度完成と言えるかな。でも、ここからが大変だと僕は思ってる」

「俺も同意見だな……だが、この短期間でよく六割まで完成出来たな。やはりデュノア社の技術力もかなりのものだったんだな」

「デュノアの力だけじゃないよ。更識が派遣してくれた技術者さんたちが優秀だから、デュノアも成長できてるんだよ」

「実戦を想定した武装だから、使い道が無いかもしれないが、これが完成すれば災害現場の救出作業も長時間続けることが可能になる」

「簡易エネルギー補給装置、SEの補給がその場で出来れば確かに無駄が減るもんね」

いちいち拠点で補給しなくても、その場で最低限の補給が出来れば、救出活動時間が

増える。その結果、助けられる命が増えるのではないか、と一夏が考案し、ここデユノア社が開発に取り組んでいるのだった。

「でも一夏、君っていつもこんなことを考えてるの？」

「この前の福音戦ちよつと思いついただけだ。実戦に赴く可能性も無いだろうし、なるべく全員を助けたいと思つたからこの設計図を作つたんだ」

「大変だね、開発部主任と企画立案部主任の掛け持ちは」

「学生だからじゃ通用しない世界だからな、ここは」

表向きの立場はシャルの方が上になっているが、シャルは一夏を下だとは思っていない。だからこそ、一夏が浮かべた苦笑いに、シャルも苦笑いを返したのだ。

シャルの疑問

シャルとの会談を終えた一夏は、社長室を辞して滞在先のホテルへ戻るつもりだった。だが、シャルがまだ何か聞きたそうな顔をしていたので、上げかけた腰を下ろしてそのことを尋ねることにした。

「何か聞きたそうだが、何だ？」

「いや、鷹月さんの専用機が完成したって聞いたから、テスト用にこの新武装を積まなかったのかなって……」

「まだ試作段階にすら到達していない武装を、静寂に使わせるのは駄目だろ。俺やシャルみたいに、会社の為という名目は、アイツには通用しないからな」

「そうか……僕はまだ経営者としての考え方が不足してるね……でも一夏、テストパイロットっていうのもあるんだし、自分で試作品を試さなくてもいいんじゃない？」

「更識には、名目上テストパイロットは存在しないからな。虚さんはあくまでも広告塔として動いてもらってるからな」

「布仏先輩、美人だもんね」

何か非難するような口調で拗ねるシャルに、一夏は苦笑いを浮かべる。

「別にそういつた理由で虚さんに頼んでるわけじゃないんだが……実力的にも虚さんなら申し分ないからな。他の企業の代表との対戦だって、虚さんだから勝ってる部分も少なくないし」

「布仏先輩も、普通に強いもんね……なんで国家代表を目指さなかつたんだろうって思うくらいに」

「刀奈さんが先に候補生になってたからじゃないか？ 碧さん、詳しい事情は知ってますか？」

「特に虚ちゃんからは聞いてませんが、たぶん一夏さんの考えであつてだと思いますよ」
「……いたの知つてたのに、普通に忘れてました」

一夏とシャルの会談中、碧は気配を完全に殺して邪魔をしないようにしていたのだ。碧が本気で気配を殺せば、一夏ですら掴むことが難しいので、シャルが忘れていても仕方ないのだが。

「じゃあ俺たちはこれで。また夏休みが終わつたら会おう」

「僕もずっとここに居るわけじゃないからね。IS学園で会えると思うよ」

「……いや、俺がいない可能性が高いんだ」

自分のスケジュールを思い出し、一夏は先ほどより苦めの笑みを浮かべ、今度こそ社長室から出て行ったのだった。

合宿で課された作業を早々に終わらせ、暇を持て余していた刀奈たちだったが、やけ

に周りが騒がしい事に気づいた。

「何かあったのかしら？」

「日本側もフランス側も、どっちの候補生も騒いでるね」

「ちよつと聞いてきますね」

立場上一番下になる美紀が、刀奈と簪の疑問を解決するためにざわついている箇所へと足を運ぶ。

「私はまだフランス側に知り合いがいませんからね……」

候補生になつても、そのほとんどの時間をIS学園で過ごしていたため、エイミイはまだフランスに友達と呼べる相手はいなかった。ライバル同士を友達と呼んでいいのかは微妙だが……

「刀奈お姉ちゃん！ 簪ちゃん！」

「美紀ちゃん、どうしたの？ そんなに興奮して」

「一夏さんが表敬訪問してるみたいです！」

「嘘っ!? 急いで会わなきゃ！ って、簪ちゃん早っ!?」

普段はのんびりした感じの簪だが、いざというときは刀奈より素早く行動することが出来る。まさに今がそれだと美紀は苦笑いを浮かべた。

「一夏君、忙しいんじゃないの？」

「ん？ 新武装の開発の関係で、デュノア社に用があつたんですよ。ここに立ち寄つたのはつい事です」

「私たちに会いに来たんじゃないの？」

「それもあるけど、一番の理由は訓練機のメンテナンスだ。シェア八割を超えると、メンテナンスも大変なんだよな……他の業者に頼んでも、本来の実力は発揮出来ないだろうし」

「それって一夏君が全部やってるの？」

人垣の外側からエイミーが一夏に話しかけると、今まで一夏の周りに出来ていた壁が一瞬で開き、エイミーは一夏の姿を確認することが出来た。

「出来る限りは俺がやってるけど、学園から出るには許可を取らなきゃいけないからな……普段は他の技術部の人に任せてる」

「それで土日は一夏君と会う確率が低いんだね」

「いや、他にも生徒会の仕事や更識の仕事、本音たちの訓練の手伝いとかで一日が終わる

ことが多いから、遭遇率が低いだけじゃないか？」

会話をしながらも、一夏のメンテナンスを行う手が停まることは無い。本格的なメンテナンスならば、さすがに人前でやることは無いが、このような簡易メンテナンスならば人目についても何ら問題は無いのだろう。

「終わりました。全ての機体に大きな問題はありません。多少動きが鈍い子がいましたが、今のメンテナンスで一応は元通りの動きが出来るようになるでしょう。ですが、早めに本格的なメンテナンスに出すことをお勧めしますね」

合宿の責任者に報告を済ませ、一夏は少し離れたところに腰を下ろす。

「まだメニューを消化しきってない候補生たちは、早急に訓練に戻りなさい」

ちよつとしたファイバー状態だった場を、一人の女性の声が一瞬にして落ち着かせる。

「引退しても絶大な力を有していますね」

「それでも一応は最強の名を貰いましたからね」

「本音が護衛じゃなかったんだね」

「……簪は海外に本音を連れてきて役に立つと思うのか？」

「……………」

一夏の護衛役の碧の一声で場は落ち着き、簪は護衛が碧なのを確認しただけなのが、何故か彼女の中で本音の株が大暴落した。

「その顔が何よりも語ってるよな……」

「まあ、本音だもんね。ところで、一夏君は何時までこつちにいるのかしら？」

「二、三日滞在して、開発の目途が立てばそのまま日本に帰って試作品のテストを行う予定ですが」

「それじゃあ、その間は一夏君に甘えられるんだね」

「……………ちゃんと訓練してください。曲がりなりに刀奈さんは国家代表なんですから」

一夏の言葉に、刀奈を除く更識所属全員が頷くのだった。

最強の監視者

一夏も碧も、虚さえも不在となれば、本音がだらけるのは火を見るよりも明らかだろう。現に本音は、訓練もせず一日中部屋でダラダラしていた。普段なら簪が諫めるのだが、その簪も不在。本音を注意する人間など誰もいないと思われていた。本音自身さえも……

「布仏妹、今からグラウンド二十周だ！」

「一夏から頼まれたからには、わたしたちはお前をしっかりとしごくからな！」

「ほ、ほえっ!?　なんで千冬先生と千夏先生が」

「今言っただろ！　一夏に頼まれたからだ！」

先に言った通り、本音がだらけるのは誰の目にも明らかだったので、一夏は対策として織斑姉妹に本音の監視を任せただった。

「二人がいつちに頼まれたからって、私の事を監視するはずがないと思ってたのに……」

「確かに、普通ならお前などどうなっても知らんがな」

「報酬として、部屋の掃除と三日間の食事の準備を約束してくれたのだ！」
「…………物でつられたんですね」

普段は自分がつられる側の本音だが、今だけは織斑姉妹に蔑みの目を向ける。仮にも世界最強の姉妹が、実に即物的だと……

「お前だつて一夏の料理の腕は知っているだろ」

「そして、最近は何しくて滅多に作ってくれないことも」

「確かにそうですね……じゃ、じゃあ、訓練したことにしていっちーを誤魔化せば……無理ですよね」

二人に鋭い視線を向けられ、本音は途中で「反撃を諦めた。

「貴様が多少なりともマシになれば、一夏もお姉ちゃんたちを見直すだろうしな！」

「最近お姉ちゃんの株が大暴落気味だから、ここら辺でしっかりしたところを見せなければいけないのだ！」

「…………まだ下がる余地があつたんですね」

口は禍の元、この言葉の意味を、本音はこの後じっくりと理解させられたのだった。

いくらIS業界のトップの更識企業の社長代理と言えども——いや、そういう立場だからこそ、無駄遣いは避けるべきだろう。だからではないが、一夏が海外に出張するときの滞在先は、必ずと言っていいほど護衛と同じ部屋という形をとっている。一部屋で

済ませ、経費を少しでも減らす努力を見せれば、下の人間も無駄な経費を使わないようになるのだ。

「一夏さんと二人つきりって言うのも久しぶりですね」

「国内なら美紀や本音も同行しますし、碧さんは教師だから生徒より融通が利きませんからね……」

「IS学園の教師は、普通の学校の教師とは違いますからね」

さほど広くない部屋で、男女が二人つきりと言えげしからんことを考える人間もいるかもしれないが、この二人の間にはそんな空気は介在しない。一夏がそういった事が得意ではないということを重ね承知しているので、碧もそんな空気になるような事は避けているのだ。

「一夏さん、少し休んだ方が良いんじゃないですか？ さつきから休みなく働いてますし」

「少しでも完成度を上げるためには、出来る限りの調整をしておきたいんですよ」

「ですが、開発はデユノア社の技術者にお任せしてるんですし、一夏さんが今からデータ解析をする必要は無いと思いますけど」

「開発は確かに任せていますが、俺が何もなくていい訳ではないですからね。それに、

立案者としては少しでもいい方向に進めるように何かしたいんですよ」

根がまじめなのか、一夏は自分の事を二の次にして開発に没頭する癖が最近ついてきている。学園生活をしているだけならば、休むタイミングはいくらでもあるが、この夏休みの間の一夏のスケジュールでは、休めるときに休んでおかなければもたないと碧は懸念しているのだ。

「一夏さん」

「何ですか？」

「偶には年長者の言うことを素直に聞いてくださいよ。私は立場的には、一夏さんの護衛——一夏さんの部下ですけども、IS学園では私が先生で一夏さんが生徒なんです。生徒の健康を心配する先生の気持ち、一夏さんに分かりますか？」

若干涙声で訴える碧に、一夏は作業の手を止め両手を上げた。

「そんな事を言うのは卑怯ですよ……分かりました、今日はもう休みます」

親しい相手の忠告は割と素直に聞く一夏だが、今日はやけにすんなりと降参したので、訴えた碧の方が面食らってしまった。

「一夏さん、体調でも悪いんですか？」

「酷い言われようですね……根を詰めても仕方ないと思っただけです。それに、まだ俺が介入しなくてもあの人たちならさらにいいものを作ってくれてくれるって思っただけですよ。現場の人間を信じることも、俺の仕事なんだと思いなおしただけです」

「一夏さんが自分で全てできるわけじゃないですからね。まあ、大抵の事は出来そうですけど」

「さすがに俺一人で、この短時間で六割完成させることなんて出来ませんよ。精々四割に満たない程度だと思います」

「それじゃあ、PCの電源を落として、大人しくお風呂に入ってください」

「……シャワーだけじゃダメですか？」

意外なことに、一夏はあまり入浴が好きではない。昔から開発やら研究やらに没頭する傾向があった一夏は、少しでも時間を浪費しないために、湯船に浸かる事を避けシャワーだけで済ませてきたのだ。

織斑姉妹の話では、昔はお風呂が大好きだったらしいのだが、これも記憶喪失の弊害なのだろうと更識内では考えられている。

「ダメです。ゆつくりとお風呂に入って、日ごろの疲れを溶かしちゃってくださいね。」

なんなら、一緒に入って見張りましょうか？」

「いや、俺一人で大丈夫ですから！　お願いですから、勘弁してください、ホントに……」

「……そこまで嫌がられると、女として自信を無くしそうなんですけど」

「そうじゃなくて。碧さんが女性らしいから勘弁願いたいんですよ……」

刀奈や本音ほどではないが、碧も十分に発育しているので、下手に意識してしまうと逆上せる可能性がある。だから一夏は混浴は避けたいと考えているのだ。

一夏の理由を聞いた碧は、それなら仕方ないと諦めて一夏一人で入浴させたのだった。

天罰とご褒美

本音と訓練しようと、彼女の部屋を訪れた静寐は、部屋につくなり疲れ果てて、その場で寝ていた本音を見て驚いた。

「ちよつと本音？ 生きてるの？」

「ほええ〜……」

「……寝息？」

何時ものような間の抜けた彼女の口から洩れ、それが寝息だと理解するまで数秒かかった。

「何があつたらこんな場所で寝るのよ……」

静寐は、本音が織斑姉妹に監視されていることを知らないため、何故本音がこんなところで疲れ果てたのかを知らない。知っていれば、彼女と訓練しようなどと考えなかつただろう。

「布仏妹！ 時間だ！」

「何だ、鷹月もいるのか」

「千冬先生に千夏先生？ 何故本音の部屋に？」

「うむ。一夏からこいつの事を頼まれていてな。少しでもまともな生活を送るように私たちが鍛えてやっているのだ」

「ちよūdいから鷹月も一緒に鍛えてやる」

「ちなみに、訓練メニューはどのような？」

千夏から聞かされたメニューは、一夏でも設定しないような厳しきで、本音がよく部屋まで帰ってこれたなと思うほどの量だった。

「ちよつと待つてくさいね……」

静寐は携帯を取り出し、一夏に千冬たちが設定したメニューをメールで知らせた。すると数十秒待つただけで返事が送られてきた。

「千冬先生、千夏先生、一夏君がお二人に見せるようにつて」

送られてきた返事を、静寐は千冬と千夏に見せる。首をかしげながらも静寐から携帯を受け取り、画面に表示された文字を読んだ途端、二人の世界最強が震え出した。

「な、何故だ……何故一夏はお姉ちゃん而努力を理解してくれないんだ!」

「少し厳しくしてやった方がこいつの為だと判断したからなのに!」

「厳しすぎたんでしょね。さすがの一夏君だって、いきなりこんなメニューからは入りませんでしたし」

「と、とりあえず急いで一夏に謝らなければ!」

「今日の訓練は自主訓練とする! 布仏妹が起きたらそう伝えておいてくれ!」

携帯を部屋に置いてきたのだろう。千冬と千夏は急いで寮長室へと向かう。もちろん、教師が廊下を走るなどという真似はしなかったが。

「やれやれ……それで、いつまで寝たふりを続けるの?」

「あつ、バレてた?」

「だって、普通にこっち見てたじゃない」

普段の織斑姉妹なら絶対に気が付いてただろうが、精神的に不安定だったために騙しとおせた本音の狸寝入り。彼女は立ち上がり軽く全身を動かして――

「じゃあ、もう少し寝ようかな」

——ベッドに倒れこんだ。

「さすがに起きなさいよ。そろそろ十時よ？」

「昨日の訓練が終わったのが八時だから、まだ二時間しか寝てないよ」

「……朝の十時なだけど」

十四時間寝ていた計算になるのだが、本音の中ではそれほど時間が経った実感が無かったのだろう。静寂から現時刻を聞かされて目を見開いた。

「仕方ないな。それじゃあ起きるよ」

「……」夏君が忙しそうにしてるのに、本音は相変わらずね」

苦笑いを浮かべながら、学園に唯一残っている生徒会役員——つまり本音にアリーナの使用許可をもらい、静寂は鶺鴒に慣れるべく特訓を始めるのだった。

日本で午前十時ということは、フランスは午前二時。そんな時間にメールでたたき起こされた一夏は、とりあえずトイレですつきりして自分のベッドに戻った——はずだった。

人の気配を感じ目を開けると、そこにはなぜか碧が一夏を抱きしめて寝ていたのだ。「何で碧さんが俺のベッドに……いや、俺が間違えたのか」

少しだけ動ける範囲で確認して、自分が夜中にベッドを間違えた事を確認した一夏だが、それ以上何も出来ないのととりあえず碧を起こすことにした。

「あの、碧さん……放してくれるとありがたいんですが」

「うーん……くすぐつたいですよ、一夏さん」

「起きてますよね？ そろそろ放してください」

「後一時間……」

「どれだけ寝るんですか」

一夏が呆れたのを気配で感じたのか、碧の一夏を抱きしめる腕の力が少し緩んだ。その隙を一夏が見逃すはずもなく、あっという間に碧の腕の中からすり抜けた。

「間違えた俺に非があるので強くは言えませんが、刀奈さんたちに知られたら大変ですよ？」

「大丈夫。刀奈ちゃんたちに今の事を知る方法は無いもん。一夏さんが口を滑らせない限り」

「言いませんよ。そんな事言ったら、全員と一緒に寝なければいけなくなりますし」

「それもそうね。ところで、なんでいきなり私のベッドに入ってきたの？」

碧も何故一夏が自分のベッドに入ってきたのかは知らなかった。普通の男女の関係なら、夜這いでも仕掛けてきたのかと考えるのかもしれないが、この二人はそういった

関係ではない。そして一夏がそのような行動に出るはずもないと、碧も重々理解している。

「夜中にこんなメールで叩き起こされました……寝ぼけ眼でトイレに行つて、そのままベッドを間違えました」

「どれどれ？ あー、これは酷いわね……てか、静寐ちゃんも時差を考慮してメールすればいいのに」

「メール着信の音で起きた俺も悪いのかもしれませんがね……とりあえず、申し訳ありませんでした」

「気にしなくていいわよ。ある意味役得だったから。普段なら美紀ちゃんの可能性が高いけど、今回は私だったからうれしいわ」

「……寮ではさすがに間違えませんよ。普段から使つてるわけですし」

幼児退行を起こしているならまだしも、普段から一夏が美紀のベッドに潜り込んでいと邪推している碧に、一夏はツツコミとため息で応えたのだった。

「でも、一夏さんと一緒の部屋で寝てるのは、美紀ちゃんでしょ？」

「まあ、そうですね。ルームメイトですし」

「だから、私たちから見れば、美紀ちゃんはかなり役得なのよ」

「そんなもんですか」

自分がそこまで想われているとは思ってなかった一夏は、気のない風を装った態度で返し、洗面所に向かい顔を洗って照れているのを誤魔化したのだった。

本音VS静寐

静寐が一夏に報告したお陰で、ここ数日の織斑姉妹はかなり大人しかつた。具体的に言えば、訓練メニューは自分で立てさせ、自分たちはあくまでも監視だけするというくらいに。

「見られてると、やりにくいものがあるわね」

「シズシズは見られることに慣れてないからね。私は昔っからいっちーの傍にいたから見られるの慣れてるから気にならないけどな」

『本音の場合は、鈍感だという可能性も否定できませんけどね』

「最近、土竜が毒舌に思えてきたよ」

今日本音が立てた訓練メニューは、静寐との戦闘訓練、模擬戦まで本格的にはならない程度の戦闘だ。だからこうして会話をする余裕もあつたりするのだ。

「一夏君に怒られてから、本音は土竜しか使っていないでしょ？」

「そもそも、普段VTSで遊んでたのだから、いっちーが管理してるパスワードがなければログイン出来ない私専用のIDだから、いっちーがいないと一般生徒用IDしか持っ

てないし」

「ログインしてから専用機のデータを読み込ませるんだっけ？ そうじゃないとパスワードを誰かに知られた時にデータを盗まれる可能性があるからって」

「いっちは更識でも重要なお仕事をしてるから、専用機のデータ管理もその仕事の内なんだって刀奈様が言ってたような気もするんだよね」

「……一夏君が本音に専用パスワードを管理させない理由が、今ので良くわかったわ」

自分が仕えている家の事情も把握していない本音が、パスワードを覚えられるはずもないと静寢も確信した。

『時に静寢、私の乗り心地はどうですか？』

「悪くないわよ。一夏君が私専用にかスタマイズしてくれたつてのもあるけど、貴女に乗っていると本当に空を飛んでる感じがするのよね」

『まあ、飛ばたきはしません、鳥をモチーフにしたデザインですからね、私は。同じ空を飛ぶ行為でも、私と他のISとは少し感じ方が違うでしょうね』

「ほんと、更識の技術力には頭が下がるわよ。一夏君が企画したとはいえ、短時間でISをくみ上げちゃうんだからね」

『そう……ですね……』

「?」

鵺鴿の返事にぎこちなさを感じた静寂だったが、その正体は分からなかった。いや、考えたことはあるが、それが現実だとは微塵も思っていないのだ。

「シズシズ、よそ見してると危ないよ〜」

「え? つて、本音、容赦なしなの!?!」

考え事をしようと本音から視線を逸らした隙を突かれ、静寂は本音から攻撃を受けてしまった。反撃に出ようにも態勢が悪く、立て直すために大げさに距離を取った。

「その動きは失敗だよ〜」

「くっ!」

咄嗟に草薙を展開して本音の斬撃を受け止めたが、このままではギリ貧であることは誰の目にも明らかであり、静寂自身も理解していた。

「(このままじゃ、本当に本音の動きに付き合っただけになっちゃうわね……: 实力差があるのは自覚してたはずなのに、いざ戦うと想像以上に悔しいわね……: せめて一太刀だけでも浴びせたいって思っちゃうなんて……: 意外と強欲なのかしら、私って)」

単に負けず嫌いなだけとも言えるが、静寂は本音の隙を窺うべくマシンガンを展開し威嚇射撃をしながら距離を開く作戦に出た。

「いつちーに比べたら、シズシズの弾丸は素直で避けやすい」

「そこで一夏君と比べないでよね。あの人は次元が違うんだから！」

「いつちーはそこまで強くないよ〜？ 美紀ちゃんやかんちゃん、マドマドにだって完封負けするくらいだし」

「逃げる手段が多いってことよ！ そもそも、私たちから見れば、一夏君だって十分に強いんだから！」

弾丸の隙を、縫うようにして距離を詰めてくる本音に、静寂は恐怖心を抱き始めていたが、その恐怖に負けないように自分を鼓舞して戦い続けた。

「当たらないにしても、もう少し距離を稼げる予定だったのに」

『『鶴鴿』のデータは、すでに土竜が解析済みなので、どんな攻撃も脅威ではないのだ』

！

「なら、一夏君が極秘に積んでくれたこの武装はどうかしら？」

本音と一緒に訓練を始める前、静寐は血の滲む努力でとある武装の適正を上げていた。それを知っていた一夏が、静寐のために開発した武装、八機のビットを同時に展開することで効果を発揮するその武装の名は――

「いでよ『八岐大蛇』」

「ほえ!?! その武装のデータはなかったよ?! 土竜、どういふこと!?!」

『一夏さんが意図的に解析できないようにしたのでしようね。造り手である一夏さんが本気で隠そうとしたのなら、私でも解析出来ません』

「なら、回避行動の計算を! それが出るまでは自力で頑張ってみるから」

『そんな悠長なことを言ってる余裕はないですよ。八方向から同時に撃たれるんですから』

土竜からの忠告で、本音は自分が置かれた立場を思い出した。今、まさにこの瞬間、自分は八方向から狙われているのだということを。

「いつちーめ、こんな隠し武装をシズシズに与えていたなんて! なんて面白そうな武装なんだろう」

『……貴女つて人は。まあ、本音はビット適正が低いですから、使えないでしょうけどね』

「良いなくシズシズ、何か一生懸命特訓してたのは知ってたけど、まさかビットだったとはなく」

『まだ偏向射撃は出来ないようですが。そのあたりは、マドカさんが一番でしょうね』
「とりあえず、これを避けきってシズシズには大人しくしてもらおう！」

具体的な作戦など一切ないまま、本音は八岐大蛇の攻撃を野生の勘だけで攻略してしまっただった。その動きには、監督役である織斑姉妹も感嘆の声を上げるほどだった。

二つの気配

本音と静寐の訓練を見学してた織斑姉妹は、ここ数日の二人の成長に目を見張っていた。

「一夏が発破をかけたとはいえ、予想以上の成長速度だな」

「布仏妹も、もともと高い能力を持っていたのだろうが、この成長は想定外だ。さすが一夏が護衛に任命しただけはある、ということだろう」

「布仏妹もだが、鷹月も相当な成長速度だ。更識の専用機だということを差し引いても、ここまで出来るとは思ってなかったぞ」

二人がそう評価している隙に、背後に気配が生まれた。咄嗟に振り返り腕を突き出したところで、その気配が誰のものを理解した。

「お、驚かせないでくださいよ」

「何だ、お前か」

「何か用か？」

「いえ、ようやく動けるようになったので、更識一夏君にお礼でもと思って探しているん

ですけど」

気配の持ち主、ナターシャ・ファイルスは、織斑姉妹の攻撃に晒されても、特に慌てた様子はなく対応する。そのあたりは、やはり軍属ということなのだろう。

「一夏なら、まだフランスにいるはずだが」

「えっ？　でも小鳥遊先生は職員室にいましたけど」

「何？　あいつは一夏に同行してフランスに行っているはずだが」

「帰ってきたんですよ。それくらい分かるでしょうが」

再び背後に湧いて出た気配に、織斑姉妹は再び攻撃を繰り出そうとしたが、その声の主が誰だかを理解したとたん、引き締まっていた表情がだらしなく緩んだ。

「一夏、帰ってきてたのか！」

「お姉ちゃん、心配してたんだぞ！　向こうで変な女に付きまとわれてないだろうな？」
「どんな心配ですか……とところで、あのメール内容に間違いはないんですよね？　どれだけスパルタでやるつもりだったんですか、貴女たちは」

帰ってくるなり早々、一夏は織斑姉妹に呆れた視線を向けた。

「ところで、ファイルスさんはもう動いても平気なんですか？」

「ええ。それから、私のことはナターシャで構わないわ。呼びにくそうだし」

「別に平気ですが……まあそうさせてもらいます。で、ナターシャさんはもう動いても大丈夫なんですかね？」

質問から確認の形に変えた問いかけに、ナターシャは笑顔で頷いた。

「おかげさまで。更識君の立てた作戦のお陰で、私もこの子もそれほど重症を負うことはなかったから」

「実際に動いてたのは各国の候補生たちですから、お礼ならそちらに言ってやってください」

一夏とナターシャがやり取りしている間に、本音と静寂もピットに戻ってきた。

「お疲れさま」

「いっちー！ あんな武装聞いてないよー！」

「あ？ ああ、八岐大蛇か。秘策なんだから、教えるわけないだろ」

「一夏君、やっぱりまだ連動が甘いのかしら」

「そればかりは静寂が努力するしかないぞ。これ以上性能を上げろって言われても、

難しいからな。それに、本音だから避けられたって面も小さくないからな……ほんと、勘だけは鋭いんだよな」

まるで見ていたように話す一夏に、千冬と千夏は思わずツツコミを入れる。

「一夏、お前いつから見ている」

「少なくとも、お前が言った感想は試合を見てなければ出ないはずだ」

「いつからと言われても、結構前からこの部屋にいたんだが……まあ、雲隠れを使つてたから、それなりに気配も消せてたんだろうな」

「それから、千冬さんと千夏さんがお二人の戦闘に集中していたので、一夏さんの気配に気づけなかったのでしょうね」

「……だからいきなり人の姿になるのは止める」

一夏の言葉を引き継ぎ、一夏を驚かせることに成功した闇鴉は、お決まりのツツコミを完全に無視して静寂と本音に視線を向ける。

「少し見ない間に、かなり成長しましたね。土竜との連携もなかなかです」

「いつちに怒られたからね。少しは土竜と仲良くしないと、本当に動かなくなっちゃうかもしれないから」

『当たり前です！ 私は貴女の専用機として造られたのに、練習でも本番でもろくに使わないなんて、機嫌を損ねると分からなかったんですか？』

「別にそこまで大変なことにはならないかな〜って思ってたよ。でも、実際に動きが鈍くなったのを受けて、これはヤバいかな〜って焦ったけどね」

『焦ってあれですか……貴女はもう少し危機感を持った方がいいですね』

「これでもちゃんと考えてるつもりなんだけどな〜」

土竜に注意されても、本音の態度はあまり変わらない。二人のやり取りを正確に理解しているのは、この場で一夏と闇鴉の二人（？）だけ。残る四人は本音が一人で会話をしているようにしか聞こえない。

「とりあえず、八岐大蛇のデータは採れたから、もう少し動きを向上させられるかどうか検証してみる。それから本音」

「ほえ？」

「俺や闇鴉は土竜の声が聞こえてるからいいが、ほかの人たちはついにお前の頭が完全に逝かれちゃったんじゃないかって心配してるぞ」

「あつ、そういえばそうだったね。土竜の声は私といっち〜、あとは闇鴉にしか聞こえないんだつたね〜。いや〜うっかりしてたよ〜」

一夏が呆れていると理解しているはずなのに、本音の態度はいつも通りだった。

「そういえばいつちー」

「何だ？」

「フランスで刀奈様やかんちゃんたちと会ったんだよね？ 元気だった？」

「フラストレーションが溜まってそうだったけどな。帰ってきたら大変な思いをしそうだ。黙って日本に帰ってきたし」

「いつちーが忙しいのはみんな分かっているだろうけども、せめて一声掛けてくればよかったのに」

「仕方ないだろ。こつちに戻ってきたのだから、緊急で更識の方で片づけなきゃいけない仕事が出来たからなんだから」

その仕事が何か、一夏は本音には教えない。それだけ重要なことであり、火急の用だったのだろうと本音は勝手に解釈した。

「それで、そのお仕事は終わったの？」

「ああ、ここに来る前に終わらせてきた」

「そつかく。じゃあ遊ぼう！」

「……俺はまだ仕事があるから、遊ぶなら静寂とにしてくれ」

訓練はもういいのか、というセリフを寸でのところで飲み込み、一夏は代わりにため息を吐いてアリーナを後にしたのだった。

パンデミック

フランスでの合同合宿が終わり、IS学園在学の面々はそれぞれの部屋に帰ってきて、まずベッドに倒れこんだ。

「随分とお疲れだな」

「一夏さんが合宿に訪問してくださったあと、私たちと一夏さんの関係を聞かれたり、知り合いだったことで恨まれたりして大変だったんですよ」

「それは悪かったな。一目会おうと思つて訪問したんだが、責任者に見つかつてな。整備を任されてしまったんだ。会いに行かない方がよかつたかもな」

「いえ、会いに来てくださったのは、素直にうれしかつたですし、それは刀奈お姉ちゃんや簪ちゃんも一緒です。でも、一夏さんはもう少しご自身の人気を自覚してください」
「そうは言つてもな……」

一夏は、自分が特殊な立ち位置だから騒がれているだけだと思つているので、自分の人気と言われてもあまりピンと来るものがない。だからではないが、自分が合宿の場に現れたら、乙女たちにどのような影響を与えるかなど、一夏には理解できないのだった。

美紀や刀奈、簪はそんな一夏と知り合いで、家族同然で生活しているから耐性が出来ているが、他の候補生や代表には、そんな耐性は皆無であり、ただでさえ女だけの世界に異分子が——しかも極上と言ってもいい異性が現れるのだから、訓練に身が入らなくなるのも仕方ない。だが、うら若き乙女たちにとつて、その異性の情報を得ることは、時に訓練より大事になってしまふことがあると、美紀は今回の合宿で学んだのだった。

「あんな堂々とアリーナに現れたら、周りが騒がしくなると理解してなかつたんですか？」

「俺だつてアリーナにまで足を運ぶつもりはなかつたんだが、護衛が碧さんだったから……」

「なるほど、一夏さんだけでなく碧さんもでしたか……」

合宿所の責任者が、たまたま碧のことを知っていて、発破をかけてもらおうとアリーナへ案内して、そのついでに一夏に訓練機のメンテナンスも頼んだのだった。一夏としても、自分が手掛けた訓練機のチェックを断る理由もなかつたので、軽い気持ちでアリーナに足を運んだのだったが、その結果があんな騒ぎになってしまったのだったのである。結果的に碧が騒ぎを鎮静化してくれたおかげで一夏は難なくその場から帰れたのだが、残された一夏の知り合い——特に関係の深い刀奈、簪、美紀の三人は酷い目に

遭ったようだ。

「エイミイは、一夏さんとそこまで関係が深くなかったので、事なきを得たようですけどね……」

「所属先の次期当主候補つてただけだもんな。エイミイはあまり詳しいことを知らないだろうし」

「一夏さんが女性恐怖症、人間恐怖症であることくらいしか知らないんじゃないですか？」

「……最近は大シになってきただろ。合宿所であつて、何とか耐えたんだから」

あの光景を思い出したのか、一夏の身体が小刻みに震えだす。そんな一夏を見て、美紀は疲れた身体に鞭打つて立ち上がり、優しく一夏を抱きしめた。

「何だよ？」

「震えてたので、思い出しちゃったんじゃないかって心配してるんですよ。一夏さん、自分が震えてることにも気づいてなさそうだったのだから」

「いや、さすがに気づいてたが……まあ、思い出したのを後悔したかな」

はじめは抵抗を見せていた一夏だったが、これが美紀の優しさであることは重々承知

しているのです、途中からは大人しく美紀に抱きしめられていた。何時もなら一夏が先に寝てしまうのだが、今日は時差ボケもあってか、美紀が先に寝息を立て始めた。

「……何年たつても、トラウマは払拭出来て無いからな。美紀には一番心配してもらつてる気がするよ」

寝息を立てている美紀の髪を優しく撫で、一夏は美紀を自分のベッドまで運ぶことにした。さすがに同じベッドで寝るのは恥ずかしいと思つたのだろう。

「何時もは俺が先に寝ちまうからな。美紀じゃ俺をベッドまで運べないし」

年頃の少女が、異性と一緒に寝たいなどと思つてないだろうと、一夏はそう思い込んでいる。そうなる前は、ほぼ幼児退行してるので、寝る時は気にならないのだが、起きた時に必ず後悔の念に押しつぶされそうになってしまつていたので。自分がもう少し強ければ、もう少しトラウマを払拭出来ていればと……

それが一夏の勘違いであることは、誰も指摘したりしない。理由は簡単で、何時までも一夏が勘違いして焦つてる顔を見るのが、少女たちの楽しみだからである。

「この前は寝ぼけて碧さんのベッドで寝ちゃったし、篠ノ之がいなくなつてから、クラスメイトのスキンシップが激しくなつた気がするし……」

幼児退行を起こさないように、必死にこらえる分、部屋に戻ってからはほぼ美紀や他の更識関係者に抱き着いて震えている事が多くなっているのです、一夏はなるべく一人になれるように整備室に籠るので、余計に更識関係者が一夏分不足を起こし、甘えたり甘えさせたりをしたくなってしまうのだ。

「そもそも『一夏分』って何なんだ？ 前に織斑姉妹や束さんも言ってたが、そんな成分がこの地球上に存在するとは思えないんだが……何か新発見された必須成分だとしても言うのか？」

真面目に考えても答えは出ないのだが、一夏は腕を組み、首をかしげて、謎の「一夏分」の存在を必死に理解しようとするのだった。

「……分からん。今度刀奈さんとかに聞いてみるか。そういえば、明日は虚さんも帰ってくるし、俺も仕事の予定もない。代表ならびに候補生の訓練の予定もないのか……刀奈さん辺りが遊びに行こうとか言いだしそうだな」

考えても分からない事はわきに置いておく事にして、一夏は鶺鴒のデータを呼び出し、八岐大蛇の性能向上のためにキーボードを叩くのだった。

休日の予定

時差ボケもすっかり良くなった刀奈は、とりあえず虚の部屋を訪れていた。

「今日一日を、どうやって過ごせばいいと思う？」

「……とりあえず、このような時間に私の部屋を訪れた理由を仰ってください」

時刻は午前三時。日本に戻ってきたのが午後二時で、そのあとずっと寝ていた刀奈は、この時間ですでに元氣いっぱいだったのだ。

「いや。時差があつたから、帰ってきてからずっと寝てたのよね。そしたら、こんな時間に目が覚めちゃつたのよ。だからとりあえず虚ちゃんに相談しようって思つたの」

「……まあ、私も起きてたのでいいですけど。それで、予定と言われましても、何の予定です？」

「虚ちゃん、今日は一夏君も私たちも、まったく予定がない日なの。だから、この日を逃すわけにはいかないと思わない？」

「みなさんお疲れなんですから、今日は大人しくしていた方が……」

実際、一夏はここ数日更識の仕事と生徒会の仕事を一人でこなしていたし、合宿組も昨日まで海外遠征で、まだ時差ボケが残ってる可能性もある。虚も、遠征組から遅れること二時間後に帰国し、そのまま部屋で寝ていたとはいえ疲れが残っている。こんな状態で遊びに行こうなどと思う人間は、刀奈くらいだろう、と虚は思っていた。

「でも、次に全員の休みがそろうのって何時よ?」

「えつと……八月の最終週ですね」

「そんなに待てないもの! とりあえず、今日は近くのプールに遊びに行きましょう!」

「……一夏さんが領くとは思えません」

「大丈夫だって。一夏君、意外と押しに弱いし」

反対しても、結局は多数決で押し切られるだけなのだが、刀奈の中で一夏は頼み込めば許可してくれる人という位置づけになっているのだった。

「では決まったので、お嬢様は早急に部屋にお戻りください。私も、もう少し寝たいので」

「えー! 眠くないのよ」

「でしたら、一夏さんが肩代わりしていた生徒会長の仕事をしてはどうです? 夏休み

とはいえ、生徒会の仕事は山のようにあるのですから」

「こんな時間から仕事なんてしたくないわよく。それに、一夏君がほとんど終わらせちゃったみたいだし、私は明日にでも認印を押せば終わるらしいわよ」

一夏から送られてきたメールを虚に見せて、刀奈は笑顔で胸を張った。

「とりあえず、大人しくしててください。間違つても一夏さんの部屋に侵入しようとか考えないでくださいよ」

「それもいいわね……って、冗談だから。その振り上げた手を下ろしてください」

本気で怒られそうになったので、刀奈は大人しく部屋に戻ったのだった。

本音以外のメンバーが一夏の部屋に集まったのは、まだ午前七時を少し回ったくらいだった。

「……みんな早くに寝たのは知っていますが、なぜこの部屋に？ 俺はそんなに寝てないんですけど」

「まあまあ、一夏君だって起きてたんだし」

「美紀だけズルい」

「な、なにが？」

「昨日、一夏に抱き着いて寝たでしょ」

「(女の勘って怖いな……)」

『金九尾と光白狐は姉妹機ですから、それで知ってるのでは？』

「(なるほど……)」

完全に別のことを考えていた一夏は、ふいに簪に視線を向けられて首を傾げた。

「どうかしたか？」

「一夏、私も抱きしめて」

「あー！ 簪ちゃんだけズルい！ 私も〜」

「出来れば私も、一夏さんに抱きしめてもらいたいのですが」

「……みなさん、まだ時差ボケですか？」

自分でも苦しい逃げだと理解していたので、一夏は小声でそう呟いた。もちろん、そんな言葉で躲せるわけもなく、一夏は三人を順番に抱きしめたのだった。

「では、最後は私ですかね」

「碧さんまで……ん？ ナターシャさんもご一緒だったんですか」

「え、ええ……小鳥遊さんに誘われまして」

「はあ……それで、碧さんは何の御用ですか？」

「抱きしめてもらってから話します」

なんとなく居心地が悪い思いをしながら、一夏は碧を軽く抱きしめた。その光景を、

ナターシャが羨ましそうに見ているのは、きっと錯覚だと思い込むことにしたのだった。

「さてと、それじゃあ本題ね」

「まるで今の行為が必須だったみたいと言わないで下さいよ」

「必須でしょ。他のみんなが抱きしめてもらってるのに、私だけ無しってのは不公平だ
と思うもの」

「分かりましたよ……それで、本題とは？」

「うん。これは何でしょうか」

そういつて碧が取り出したものに、真っ先に気が付いたのは刀奈だった。

「それって、この近くにオープンしたばかりのプール施設の無料券!? 碧さん、どこからそんなものを手に入れたんですか？」

「先日ご報告に戻った時に、楯無様から頂きました」

「これって一枚で五人まで大丈夫なんですね。二枚あるから全員で行けますね」

「もう一枚あるのよ。これは一枚で一人だけど、最初に使った日から三カ月以内なら、五回まで使えるらしいのよ。それでナターシャさんを誘っても、三人足りないのよね。鷹月さんと日下部さんとカルラさんを誘えばちょうど十一人でしょ? マドカ

ちゃんは、まだ戻ってきてないみたいだし」

「それじゃあ私は静寐さんにメールしますね」

「じゃあ私はエイミイに」

美紀が静寐に、簪がエイミイに連絡を取ると言った後、全員の視線は一夏に集まっていた。

「……日下部さんには、後で俺から言っておきます。予定が合えば来てくれると思いますよ」

「じゃあそういうことで」

「お邪魔しました」

碧とナターシャが退室した後、静寐とエイミイから参加するとの返事が送られてきた。これで残るは香澄だけだが、あいにく一夏は香澄のアドレスを知らないのので、朝食後に部屋を訪れることにしたのだった。

目立つメンツ

束の研究の手伝いをしていたマドカだったが、今日は何故かプールに付き合わされて
いた。

「何故プールなんですか？」

「ちーちゃんとなつちやんが、まーちゃんと遊びたいって言うから、ちよつとズルして手
に入れた無料券を使ってふれあいの時間を作ったわけですよ」

「ズルって……何をしたんですか？」

「応募はがきに、いっくんの名前を使っただけだよ。いっくん、昔からくじ運が良いか
らね」

それはズルではないのでは？ とマドカは思ったが、細かいツツコミは省略し、心の
中で敬愛する兄に感謝することにした。

「（ありがとうございます、兄さま。兄さまのお陰で、姉さまたちと楽しい時間が過ごせ
そうです）」

お礼を言った後、マドカは無料券に書かれている内容に目を向け、首を傾げた。

「束様。このチケット、五人まで無料ですけど、私たちの他に誰か来るんですか？」

「ん〜？ ちーちゃんとなつちゃんのスツパー役の愛玩動物が来るはずだよ」

「愛玩動物？」

束の言うそれが、誰のことなのか、マドカは理解できなかったが、向こうから来る三人を見て、それが誰なのかを理解した。

「山田先生だったんですね」

「そうだよ。愛玩動物の、天然巨乳ドジっ子眼鏡」

「束様、山田先生と言った方が短いですよ？」

「じゃあドジっ子」

「……名前を覚える気はないんですね」

真耶に聞こえるか聞こえないかギリギリのところまでその問答は続いたが、結局束が真耶の事を名前で呼ぶことはなかった。

十一人の集団で行動していれば、それなりに目立ってしまうのも仕方ないだろう。だが、一夏たちの集団が目立っているのは、その人数の多さではなく、個人のレベルの高さと知名度であつた。

「ねえあれって、元日本代表の小鳥遊碧さんじゃない？」

「その隣にいるのって、現日本代表の更識刀奈ちゃんよね？」

「じゃあ、あつちの二人はペア日本代表の更識簪ちゃんと四月一日美紀ちゃん？」

「あつちの金髪の人って、誰かしら？ モデルさん？」

「あつちの姉妹も、綺麗なお姉さんと可愛い妹ってバランスが良いわよね」

「あ、あれって……世界で唯一 I S を動かせる男の子じゃない？」

このように、更識所属の面々はそれなりに顔が知られており、表に出ない布仏姉妹も、かなりのレベルの高さなのだ。

「何か、私たちって場違い？」

「他のみんなと比べられるとね……」

「わ、私は最初から場違い感が半端なかつたですから……」

静寂、エイミー、香澄も個々で見ればそれなりにレベルが高いが、周りにいる面々と比べると、どうしても見劣りしてしまうのかもしれない。

「でもこれって、一夏君がとんだハーレム野郎に見えてないかしら？」

「鼻の下でも伸びてればそうかもしれないけど、一夏君、さつきから疲れた顔してるし」「何かあったんでしょうか？」

一夏は先ほどから、少し離れたところに視線をやっては、ため息を吐くという行為を繰り返している。

「一夏君、何かあったの？」

「ん？ いや、悩みの種が増えそうだなーってさ」
「？ どういう——」

静寂がどういう意味かと問いかけようとした途中で、その答えが向こうからこちらへとやってきた。

「やつほー！ いくくんたちも来てたんだね〜」

「一夏！ お姉ちゃんと遊ぶぞー！」

「千冬！ 独り占めはダメだぞー！ さあ一夏、わたしも遊ぶぞー！」

「兄さま、お久しぶりです」

「……さ、更識君。私では四人を抑えるのは無理でした」

「ああ……なるほどね」

こんな状況でもウサ耳を付けたままの大天災と、その顔は世界中の女子に知れ渡っている悪魔の姉妹と、その二人に顔がそっくりの妹。そして垂れ目で泣きそうな顔をしている巨乳が現れれば、周りが騒がしくなるのも仕方ないだろう。

「あれって織斑姉妹？ その隣にいるのは妹さんかしら？」

「あ、あのウサ耳って、篠ノ之東博士じゃない!？」

「あの垂れ目の女の子、俺的にアリだな！」

「……一夏さん、なんか誘ってごめんなさいね」

「いえ、承諾したのは俺ですから……」

騒がしくなった周りを見て、碧が謝罪をしたが、一夏は自分の責任だと言ってその謝罪を不要のものと言った。

「一夏くーん！ こっちで一緒に泳ぎましょうよー！」

「一夏、こっち」

「あ、ああ……今行きます」

更識姉妹に呼ばれ、一夏は騒がしい場所から少し離れた場所まで泳いで逃げた。

「な、なぜお姉ちゃんたちじゃなくあっちなんだ……」

「一夏はわたしたちと遊びたくないのか……」

「まあまあちゃん、なっちゃんも。いっくんの半裸姿を収めた映像と画像で我慢しなよ〜」

「また盗撮したんですか……」

「違うよまーちゃん。これは必須アイテムだからね！ これが無いと束さんたちは、

「いっくん成分が枯渇して死んでしまうんだよ」
「貴女たち、少しうるさいですよ……」

このメンツにツッコミを入れられるのは、一夏を除けば碧のみ。周りから助けてほしいとの視線を向けられ、碧はため息を我慢しながらツッコミを入れた。

「小鳥遊！ 貴様ばっか一夏とくつつきおつて！」

「あの役目はお姉ちゃんであるわたしと千冬の役目だったのに！」

「そんなこと言われなくても、一夏君はお二人の事を、血縁の姉としてしか認識してませんし……特別な気持ちは無いんですよね、一夏君の方には」

「それを言うな……」

記憶を失つてからというもの、織斑姉妹に対する一夏の認識は、怖いお姉さんたちから血縁の姉、というところまでは回復したが、それ以上進展はしないだろうと思われる。その事実を受け入れることを、織斑姉妹は頑なに拒否し続けるのだった。

プールでの会話

いろいろと目立ちすぎる集団から少し離れ、一夏は更識姉妹と三人で遊んでいた。

「いや、知名度を考えてなかったわね」

「お姉ちゃんは有名人だからね」

「簪も有名だと思うが」

「それを言ったら一夏君だって、メディアとかで取り上げられてたりしてたし、全国同時ハッキングまでしてISを動かせることを発表したんだから、有名人だよ」

あの集団で無名なのは、代表でも候補生でもない静寂と香澄くらいだろう。エイミーは一応元イタリア代表候補生にして、現フランス代表候補生として、一応顔は知られている。

「虚ちゃんも更識の広告塔として、知ってる人は知ってるし、本音はあの見た目だからね」

「厭らしい視線が突き刺さってたね」

「このご時世に、度胸のある男性がいるのもだ」

他人事のように話す一夏の背後から、何本もの嫉妬の視線が突き刺さる。本音だけではなく、刀奈や簪、虚にもそういった視線は向けられているのだが、その全員が一夏に好意を向けているのが分かるくらいの態度なのだ。周りから嫉妬されても仕方ないだろう。

「お〜い、いつちー！ こっちで遊ぼうよ〜」

「本音ちゃん、一夏さんの自主性に任せるって話は何処に行つたの？」

「そんなの、最初から存在しないのだから〜！」

「……この集団って、いつもこんな感じなんですか？」

「そうね。といっても、私も最近この集団に入ったから、いつもなのはわからないけど」

本音と美紀の隣では、香澄と静寂が苦笑いを浮かべている。一夏は刀奈と簪を連れて、その集団に近寄ることにした。

「あまり大声で名前を呼ぶのは勘弁してもらいたいんだが？」

「何で〜？」

「これでも更識の重役として、それなりに名前が知られてるからな。何時も遊んでると

思われると面倒だからだ」

「そんな勘違いする人なんて、いないと思いますけど」

「そうそう。この前だって、一夏君が発案した新武装が販売されて、更識の前期利益の10%になるって言ってたしね」

「そんな内情、外から見てる人には分かりませんから」

刀奈の言っていることは事実だが、利益の内訳など社内でも知らない人間がいるのだから、外から見てる人が知っているわけがない。一夏はそう言っただけで苦笑いを浮かべる。

「何の話ですか？」

「ちよつと会社の話ですよ。ところで、ナターシャさんは泳がないんですか？」

「いや……あの姉妹と比べられるのは避けたかったので」

「……マドカまで何やってるんだか」

視線の先では、織斑姉妹（マドカを含む）が競泳並みの迫力で泳いでいる。千冬と千夏から見れば一枚も二枚も劣るが、マドカもそれなりのスピードで泳いでいるので、周りの注目を集めていた。

「碧さんと山田先生でも、あの暴走は止められなかったのか」

「いえ、私は最初から無関心ですから」

「山田先生一人に任せてたんですか？」

「私はあくまでも、一夏さんたちとここに遊びに来たんですから」

織斑姉妹のお守りは、自分の仕事ではないと主張する碧に、誰一人ツツコミを入れることはしなかった。事実、あの二人は十分大人なので、お守りが必要ではないのだ。

「それよりも一夏さん、もう少し楽しそうにしてもいいんじゃないですか？ これだけの女性に囲まれてるわけですから」

「……殆ど知り合いですから大丈夫なだけで、基本的に俺は、女性に囲まれて悦に浸るタイプではないので」

「更識君って、何か問題を抱えてるんですか？」

「そっか、日下部さんは知らないんだっけ」

静寂が視線で一夏に問いかけ、一夏は無言で頷く。まるで熟練の夫婦並みのアイコンタクトでの会話だったが、香澄とナターシャ以外の面々にも、今のアイコンタクトの意味は伝わっていた。

「一夏君はね、昔誘拐されたの。それは知ってるわよね？」

「ええ、聞いたことがあります」

「その時に、余りにも怖い体験をしたのか、記憶を失い、大人と異性を怖がるようになってらしいのよ」

「そうなんですか……ですが、更識君は今では大人の中で働き、異性しかいない空間で学業に励んでますよね？」

「それなりに克服したのと、更識関係者の人たちが側にいれば、ある程度は耐えられるみたいだしね」

「例外だった篠ノ之もいなくなったからな。今はそれほどトラウマが発動することもない」

静寂の説明を聞いた香澄は、納得したらしくしきりに頷いていた。

「それで更識君は裏を感じさせないんだ」

「裏？」

「あつ……私は、昔から相手の本心が聞こえてくるんです。聞きたくもない本音、上辺だけの友達に耐えられなくなつて、I S 学園では大人しくしていたんですけど、更識君からはその本音が聞こえなかつたので、なんでなんだろうって思ってたんですよ」

「一夏君は、良くも悪くも裏表がないからね。怒つてるときは本当に怖いわよ……」

「怒られるようなことをしなければいいだけですよ、お嬢様」

虚がニツコリと笑みを浮かべ刀奈に注意すると、刀奈は壊れた玩具のように、何度も首を縦に振り続けた。

「別に隠し事が無いわけじゃないが、日下部さんの特殊能力を知っているから、相手に本音を覚られないようにしてるって事もあるんだがな。碧さんがそうですし」

一夏が視線を向けると、碧はニツコリとほほ笑んで一夏の言葉を肯定した。

「だから更識関係者の方々は、なかなか本音が窺えないんですね」

「まあ、本心で話してるってことも多分にあるけどね」

「お嬢様はもう少し、本音と建て前を使い分けた方が将来の為だと思いますけどね」

「うう……虚ちゃんがいじめるよ〜」

ウソ泣きをして一夏にしがみついた刀奈に、周りから非難の視線が突き刺さるが、それに負けずに刀奈は一夏にしがみついていたのだった。

篠ノ之姉妹の現状

「夏たちがプールで遊んでいるのと、時を同じくして、亡国機業で特訓をしていた筈に、成長の兆しが見られていた。

「ようやく、ビットを動かせるようになったのか」

「元々適正ゼロだったんだ。これでも立派な成長だろ」

「そうだな。IS適正がCで、ビットや遠距離武器に関しては適正ゼロ。とんだハズレだと思ってたが、努力は出来るんだな」

「正当な評価してもらえるのなら、努力くらいするさ」

筈はいまだに、IS学園では一夏関連で不当に成績を下げられていたと思いついてる。だからではないが、亡国機業での努力は、すさまじいものだと言えよう。

「別に不当な扱いはされてねえと思うけど、まあ、これで作戦実行の目的が立ったな」

「あの作戦、本当にやるのか？」

「戦力確保のためには仕方ねえだろ。それとも、お前は専用機が欲しくないのか？」

「欲しいに決まってるだろ！」

オータムに怒鳴り散らす箒だが、さすがに扱いに慣れてきたオータムは、箒を大人しくするためにある一言を放った。

「正当な評価を受けたいのなら、このまま努力するんだな。そうすれば、あの一夏とかいう餓鬼を見返すことが出来るだろうぜ」

「一夏を見返せば、あいつも私の気持ちを受け入れてくれるだろうからな！ このまま私は成長して見せる！」

意気揚々とVTSがある部屋へと向かう箒を見送り、オータムはため息を吐いた。

「毎日毎日、一夏一夏つてウルセエな、あいつ……そもそも、犯罪組織の人間が正当な評価を受けるわけないだろうが」

「まあまあ、そうぼやかないの」

「スクール……相変わらず音もなく現れやがって」

「あら、SHがいた時から私もいたのだけど？」

「……だったらたまにはあいつの相手を代わってくれよ。面倒でしょうがねえぜ」

箒の相手に辟易しているオータムは、上司であるスクールに箒を押し付けようとす

る。だが、スコールの方が何枚も上手だった。

「貴女が頑張ってくれてるから、私は他の事を進めることが出来てるの。ご褒美はちやんとあげるから、もう少し頑張ってちょうだい」

「ちっ、しょうがねえな……その代わり、ちゃんと相手してくれなきゃ怒るからな」

「分かってるわよ。しかし、Mの代わりが務まるか不安だったけど、煽てれば出来るものなのね」

「あいつの場合は、妄執って感じだけどな。そんなに一夏とかいう餓鬼が好きなのかねえ」

「貴女も昔会ってるでしょ？ 結構可愛い男の子なんだから」

「オレには分からねえな」

「貴女はレズだものね」

「チゲエって言うてるだろ！ オレはたまたま好きになった相手がお前だっただけで……」

恥ずかしくなってきたのか、語尾が弱くなつていくオータムを抱きしめ、スコールは部屋から出て行ったのだった。

泳ぎ疲れた一夏は、少し休憩の為にプールサイドに座って本音たちを眺めていると、その横にウサ耳を付けた束がやって来た。

「プールの時くらいは、それ外さないんですか？」

「これは束さんのトレードマークだからね。ところでいつくん、亡国機業がそろそろ動き出しそうな予感がビンビンしてるんだよね」

「アイツの行方は掴めたんですか？」

「箒ちゃんセンサーでも居場所が分からないから、もしかしたら殺されちゃったのかも
しれないけど、あの生命力の塊みたいな箒ちゃんが、簡単にやられるとは思えないんだ
よね」

物騒なことをあつさりと言い放つ束に、一夏は苦笑いで応える。だがその苦笑いこそ、一夏も束と同じ考えだという証明なのだった。

「篠ノ之が亡国機業に加わって、こちらにそれほどダメージはありませんが、俺が入学する前に、VTSのメインシステムをハッキングしようとした輩がIS学園にいるんですよね。パスワード管理は織斑姉妹に任せていたんですけども、管理が杜撰だったように……」

「まあちーちゃんとなつちゃんだからね。それで、いつくんはそのハッキングしてた屑が、亡国機業のスパイだって思ってるの？」

「可能性の問題です。この間の篠ノ之が使った打鉄を亡国機業が持ってきたものだとして、内通者がいなければ確実にセンサーに引つ掛かるはずなんです」

「それじゃあいつくんは、その内通者を束さんに探せって言ってるのかな？」

楽しそうに笑う束に、一夏は顔を顰め、そして首を左右に振った。

「東さんにIS学園の内部を見られるのは、更識としては避けたい事ですから」

「いづくんたちの研究の成果が詰まってるからね。東さんでも、IS学園のデータをハッキングするのは難しいもん」

「そもそも、ハッキングは犯罪ですよ」

「それなら、いづくんも同罪でしょ？」

ニツコリと笑う東に、今回は一夏も素直に笑う。自分も各国のデータをハッキングした経歴を持っているので、人の事は言えないのだ。

「まあ俺は、全世界の核ミサイルの発射スイッチをハッキングするような、危険な思考は持ち合わせていませんけどね」

「劇的に世界を変えるには、あれくらいいしなきやダメだったんだよね。まあでも、東さんが望む世界にはならなかったけど」

「女性が全員偉い訳じゃないんですけどね」

一夏がぼやいたタイミングで、背後から声が掛けられた。

「その男子。私に付き合いなさい」

「私に貴女に付き合わなければならぬ義理はありません」

「そんな口利いて、貴方の両親が無職になってもいいのかしら?」

「両親いませんし。義理の両親は大企業・更識の代表ですよ? 貴女がそれよりも高い社会的地位を持っているとは思えませんし」

「そもそも、お前みたいなクソに、東さんが造ったISが動かせるわけないだろ。偉ぶるなババアが! お前にいつくんに命令出来る権利があると思ってるのか?」

「東……? いつくん……? まさか、篠ノ之東に更識一夏?」

声を掛けてきた女は、相手がIS業界に欠かせない人物だと気づくと、あつという間に逃げて行ってしまった。

「アイツ、社会的に殺してやろう」

「放っておきなさい」

物騒なことを言った東に、一夏は珍しくため口を利いたのだった。

帰路

散々プールで遊んだからか、刀奈は今、一夏の背中で寝ている。

「高校生にもなつて、体力の限界まで遊びますかね、普通……」

「まあ、お嬢様は今日、朝早くから起きてましたからね」

「それにしても、いきなり倒れたから何事かと思いましたがよ」

刀奈を背負いながら、一夏は帰路についている。その横では、刀奈の寝顔を眺めながら一夏と話す虚と、刀奈を羨ましそうに見つめる簪と本音、そして美紀が少し離れて後ろに続き、さらにその後ろに静寂とエイミイ、香澄が並んで歩いている。

碧とナターシャは、織斑姉妹と束に連れられて飲みに出かけ、マドカは一人束のラボに帰っていった。

「どちらが年上だか分からないですね、こうしてみても」と

「刀奈さんはちよつと子供っぽいところがありますからね」

「一夏さんも、トラウマが発動してる時はこんな感じですよ？」

「……あれは俺の意思と関係ないですからね」

そっぽを向きながら言い訳をする一夏を見て、虚は思わず微笑んでしまった。

「おねくちゃん、なんで笑ってるの？」

「何でもありません。それより本音、貴女夏休みの宿題はちゃんとやってるんでしょうね？」

「ほえ？ そんなのあつたつけ？」

「専用機持ちには、織斑姉妹が特別課題として面倒な事を押し付けてきただろ」

「あれって、いつちーが無しにしてくれたんじゃないの？」

「メニューは変えたが、一応課題は残ってるからな」

ちなみに、織斑姉妹が課そうとしたメニューは、休み明けまでに適正値をワンランク上げる事だったが、すでにA判定である更識所属の面々は、システムを弄らない限り上を目指すのはほぼ不可能だったので、一夏がその事を抗議して、VTSの最高スコアを更新する事で片が付いていた。

「ちなみに本音、ちゃんと土竜を使ってハイスコアを出すんだぞ」

「ゲーム感覚で出来るのはいいいけど、あれって面倒なんだよね」

訓練の時に使うだけではなく、VTSは近頃ゲームとしても販売されており、ゲームセンターで好評を博している。ちなみに、ゲームの場合のみ、男性でも使用することが出来るようになってきている。

「IS業界だけじゃなくって、ゲーム業界にまで進出したって大々的なニュースになってたね」

「別にあれは、一人でも多くのIS操縦者が誕生すればいいと思っただけなのよ、なぜかゲーム業界から睨まれることになったんだよね……」

「だって、ゲームセンターが連日それ目当てで人で溢れてるんだよ？ そりゃ、警戒もするって〜」

「IS学園に通わなくても、ISを体験できるって女子中学生の間で大人気なんですって」

「……簪も美紀も、この前まで日本にいなかったのに、どこからそんな情報を得てるんだ？」

世間の動きには敏感な一夏でも、女子中学生のブームまでは把握していない。それを、先日までフランスに遠征に行っていた簪と美紀が知っている事に、大いに驚いたのだった。

「まあまあ一夏君、あんまり騒ぐと更識先輩が起きちゃうわよ」

「この人はこれくらいじゃ起きないさ。昔は朝起きなくて本音と一緒に叩き起こしてたくらいだし」

「お姉ちゃん、一回寝ると長いからね……」

「平気で半日くらい寝ちゃいますからね……」

普段はそうでもないが、体力の限界まで動いて寝ると、それくらいは平気で寝続けるのだ。さらに厄介な事に、眠りが深いために少し騒いだくらいでは目は覚まさない。簪曰く――

「お姉ちゃんは無駄に体力があるから、限界まで動いても、寝続ける体力は残ってるんだよ」

――とのことだ。

「それにしても、一夏君って女子が苦手だって聞いたけど、更識先輩とかは大丈夫なんだよねっ？」

「まあな。家族だし」

「じゃあ私や静寐、香澄だったら？」

「うーん……他の女子よりかは大丈夫だと思うけど、まだちよつと遠慮願いたいかな」

「じゃあ、千冬先生や千夏先生、篠ノ之博士は？」

「全力で遠慮願う。何をされるか分かったもんじやない」

一夏が力いっぱい否定するのを初めて見た三人は、思わぬリアクションに違った反応を見せた。

「一夏君でもそんな反応するんだね」

「今の反応、結構面白かったね」

「更識君の意外な一面ですね」

「お前らは、俺を何だと思ってるんだ？」

一夏のツツコミに、三人は顔を見合わせ、そして同時に吹き出した。

「はあ……まあ、日下部さんもだいぶ打ち解けたみたいだし、これで少しは自分の特殊能力の事を気にならなくなったんじゃない？」

「更識君、そんなことまで考えてたんですか？」

「日下部さんは、俺と違って慣れるまでに時間がかからないとは思ってたけどね。俺の場合は、根本的にダメだからさ……」

「一夏さんは、慣れるまでが地獄でしたものね。あれは更識の屋敷に来てすぐぐらいでしたっけ？」

「その話は本当にやめてください……今では大丈夫なんですから」

「何々々、布仏先輩、その話詳しく！」

「エイミイ、一夏が嫌がってることを掘り下げようとしちやダメだよ？　虚さんも、分かってますよね」

簪の目が笑っていない事に気づいたエイミイは、すぐに好奇心に蓋をした。

「簪お嬢様も、最近迫力が付いてきましたね」

「全くですね。楯無さんもたまにそんな感じを見せてましたから、やっぱり父娘なんでしょうね」

「一夏さんの前では見せてなかったと思いますけど」

「人間不信だったんで、雰囲気でなんとなく分かりました」

あつさりと特殊能力がまだあつた事をバラした一夏に、虚は驚いた視線を向けるのだった。

一夏の基準

目が覚めると、そこは自分の部屋であった。これが刀奈が目覚めて最初に思ったことだった。

「あれ？ 私いつの間に部屋に戻って来たのかしら……」

「さつき更識君がかつちゃんをおんぶしてきたわよ」

「一夏君のおんぶ!? そんな最高の時間を、まさか寝て過ごすとは……」

「そもそも、かつちゃんが起きてたら、更識君はおんぶしてくれなかったんじゃない?」

薫子の指摘に、刀奈は思わず手を打った。普段から甘えっぱなしで忘れがちだが、一夏は基本的に異性に触れるのを極端に嫌う節がある。それは刀奈たち「家族」でも見られるので、手をつなぐことさえ、一夏はあまりしてくれないのだ。

「碧さんや美紀ちゃんだと、比較的大丈夫なだけだね」

「そうなの? それって、更識君の中で、かつちゃんよりその二人が上って事じゃない?」

「……そうなの!?!」

薫子の指摘に、今度は驚きの声を上げる刀奈。自分では全く気にならない事だったのだが、第三者から改めて指摘されて初めて、その考えに至ったのだろう。

「ちよつと一夏君の所に行つてくる！」

「でも、そろそろ消灯時間だよ？ 一年のフロアの担当は織斑姉妹だし、明日でもいいんじゃない？」

「夏休みに消灯時間なんて関係ないわよ！ そもそも、ほとんどの生徒が実家に帰つてるか、海外遠征で不在なんだから、織斑姉妹だつて緩くなつてるわよ、そこらへんは。でも、とりあえず仲間を連れて行かなきゃ」

そういつて刀奈は、一夏の部屋に向かう前に、虚と簪と本音を迎えに行くのだった。

ほほ休みなく働いて、偶の休日には刀奈たちに振り回され、挙句にその刀奈をおぶつて帰って来た一夏は、部屋で伸びていた。

「さすがに疲れた……」

「お疲れさまです。刀奈お姉ちゃんを背負えるのは、一夏さんか虚さんのどちらかだけですからね」

「簪と本音と美紀じや、刀奈さんより背が低いからな……」

「それと、刀奈お姉ちゃんを背負うところ……背中当たる感触で悲しい気分になりますし……」

「女子ってそのあたり気にしすぎだと思っただけだな」

自分のベッド、自分の部屋ということで、一夏は今、思いっきりリラックスしている。

それでも、衣服を乱れさせないだけの常識は持ち合わせていた。

「一夏さんは、大きいのと小さいの、どっちが好きですか？」

「いや、その前に女性恐怖症を何とかしないとダメだろ。俺の場合は」

「女性だけですか？」

「……人間恐怖症です、はい」

素直に白状した一夏を見て、美紀は楽しそうな笑みを浮かべる。普段は主従関係に徹している美紀も、部屋では年相応な反応を見せるのだ。

「そういえば一夏さん、プールの後にちゃんと髪の毛洗いましたか？ 少しごわつてますけど」

「シャワーで洗ったけど」

「ダメですよ！ ちゃんとシャンプーを使わなきゃ！ さあ！ お風呂で洗ってあげますから」

「自分でやる！ だから勘弁してくれ」

フランスでも似たようなやり取りをした気がする一夏だったが、とりあえずは起き上がって部屋のシャワー室へ駆け込んだ。

「一夏さんのお風呂嫌いも筋金入りですね……研究に没頭するのは仕方ないにしても、その時間を無駄にしないためにお風呂に入らないなんて……」

母親のような気持ちになりながら、美紀は読みかけの本を読み終えてしまおうと思
い、机の上に置いた本に手を伸ばし――

「一夏君！」

「刀奈お姉ちゃん？」

――その手を伸ばしたまま来訪者の名を呼んだ。

「美紀、一夏君のベッドに手を伸ばして、何してるの？」

「へっ？ ……違う違う、本を取ろうとしただけ」

若干ジト目で睨んでくる簪に、美紀は冷静に誤解を解くことにした。

「ところで、一夏君は？」

「一夏さんなら、シャワー室で髪を洗ってますよ」

「いつちく、入ってもいい？」

『ダメに決まってるだろ！』

扉越しのツツコミは、全員の耳に届いたが、本音と刀奈の悪戯心に蓋をする威力は無かった。

「ダメって言われると、余計にやりたくなるんだよね〜」

「刀奈様ですか。それじゃあ、扉オープンまで……って、かんちゃん？ おねくちゃん？ 何でそんなに怒ってるのかな〜？」

「自分の胸に聞いてみなさい（たら）？」

声をそろえて本音と刀奈に詰め寄る姉と妹。二人は後ずさろうとしたが、すぐに壁に行き当たり逃げ場をなくしたのだった。

「何ですか、騒々しい……って、何で簪と虚さんは怒ってるんです？」

「何時もの事ですよ……刀奈お姉ちゃんと本音ちゃんが悪戯しようとして、簪ちゃんと虚さんを怒らせたんです」

「少しは反省してくださいよ……つと、それで、何か用事なんですよね？」

部屋を訪れてきた理由を一夏が尋ねると、刀奈がそこに活路を見出したように食い付いてきた。

「そうよ！ 一夏君！」

「な、何ですか？」

「一夏君の中で、私たちより美紀ちゃんや碧さんの方が上なの？」

「……はい？」

質問の意図が理解できずに、一夏は首をかしげる。彼の中では別に「家族」に優劣はつけているつもりはないのだ。

「だって、私たちが抱き着いたりすると嫌がるけど、美紀ちゃんや碧さんにはそんなことしないでしょ？」

「そもそも、その二人は抱き着いてきたりしませんし……」

「でも、一夏が幼児退行を起こしたとき、抱き着くのはその二人だよな？」

「偶々だろ……そもそも、幼児退行を起こしてる時の記憶は、俺にはないんだが」

何故か簪からも責められ、一夏は困惑気味にそう告げる。そもそも幼児退行を起こした時、傍にるのがその二人の可能性が高いだけであって、一夏個人が選んで抱き着いているわけではないのだ。

その事を一夏はしっかりと説明し、四人は若干不満気味だったが、納得して部屋に

戻っていったのだった。

亡国機業の人々

散々特訓したお陰で、箒のビット適正はかなりのものになってきている。IS学園で比べるのなら、マドカ、セシリアに次ぐくらいの実力はつけていたのだった。

「SHもまともに戦えるようにはなってきたんだな」

「……完封しておいて言うことですか、それが」

「あ？ オレにダメージを与えようなんて、十年早いってんだよ。まあ、IS学園の餓鬼共になら、勝てるくらいの实力はあると思うぜ」

VTSを使った模擬戦で、箒はオータム相手に完封負けを繰り返しているが、最初の頃よりかは善戦しているとオータムが褒めてくれているので、まんざらでもない顔をしている。

「これでようやく、あの作戦を実行に移す時が来たようね」

「やっとかよ。あんまりチンタラしてたら、あの一夏とかいう餓鬼に気づかれるかと思ってたぜ」

「あら。さすがの一夏でも、こちらの事を知りようがないのなもの。私たちの作戦の邪

魔は出来ないわよ」

スコールとオータムの話を聞いている箒は、まだ見ぬ自分の専用機となるISを夢想していた。それが手に入れば、一夏も見返すことが出来るのではないかと。

「てか、その一夏を攫ってきた方が早いんじゃないのか？」

「一夏を誘拐するのは簡単じゃないもの。そもそも、一夏を攫って来ても、私たちの為に動いてくれるとは思えないしね」

「私以外を攫った場合、洗脳をする計画じゃなかったのか？ 一夏にもそれをすればいいだけだろ」

「そもそも、更識の人間は鋭いから、近づくのも楽じゃねえんだよ。お前を攫った時は、見張りがあのどんくさいやつだったから楽勝だったけどよ」

「五月七日紫陽花は、更識所属じゃないわよ」

オータムの勘違いを、スコールが優しく正す。元日本代表候補生ではあるが、紫陽花は気配とかそういうことに敏い方ではないのだ。

「それで、イギリスから奪う予定のISは、どんなものなんだ？」

「ビット兵器や遠距離武装主体の、どちらかと言えばMが使った方が良いやつだな。」

まあ、お前も血のにじむ努力の末に、ようやく適正ありになったが」

「名前はサイレント・ゼフィールスよ」

「遠距離主体か……近距離武器は積んでないのか？」

「貴女の好きそうな物は積んでなさそうね」

スコールの返事に、箒はがつくりと肩を落とす。

「じゃあ、遠距離武器を数点外して、代わりに近距離武器を積みめば——」

「亡国機業に、そんな高度な調整が出来るやつなんていねえよ」

「メンテナンスだって、テキトーなんだから。たまに業者に頼むけどね」

「犯罪組織の依頼を受ける業者なんているのか？」

「メンテナンスだけなら、意外と引き受けてくれるのよ」

意外な事実を聞かされた箒だったが、近距離武器を積み込めないと知らされ、モチベーションが少し下がってしまった。

「お前の姉貴か、それこそ一夏でも攫ってこれれば別だがな」

「？ 姉さんは兎も角、一夏がそんな本格的な組み換えが出来るんですか？」

箒は一夏が「一人で」ISを造れることを知らない。最終調整などの作業が出来るのは知っているが、どうせ外装チエックくらいだろうと侮っていたのだ。

「あら、貴女一夏の事なのに、何も知らないようね。それでよく『一夏は私の幼馴染だ!』とか『一夏と私は将来を誓い合った仲だ!』とかほざいてたわね」

「なっ……じゃあ貴女は、一夏の何を知ってるんですか!」

スコールの挑発に、箒はまんまと乗ってしまった。それが自分とスコールの一夏に対する理解度の違いを決定的にするとも知らずに……

唯一の休日プールに費やした一夏は、翌日からI S学園で静寂と香澄の指導をしていた。新しく更識所属になった静寂と、いずれは更識所属になるだろうと見込まれている香澄の指導を、一夏が引き受けた形だが、実は織斑姉妹に押し付けられただけなのだ。

「日下部さんはまだ専用機が無いから、学園の訓練機を使って」

「は……」

「？ 俺の顔に何かついてる？」

「い、いえ……更識君は、鷹月さんの事は名前で呼ぶのに、私の事は苗字なんだなっと思いで……すみません忘れてください」

「別に名前でも呼んでも良いですけど、日下部さんは恥ずかしくありませんか？」

あまり会話をしてこなかった間柄だから、という遠慮が一夏の中にあり、自分ならあまり親しくない相手に名前で呼ばれたら嫌だな、という考えが彼の中にはある。自分と香澄の関係は、いったいどういうものなのだろうという疑問も、それと同居している。

「一夏君、日下部さんは名前で呼んでほしいからこんなことを言い出したんでしょ。女の子に恥を掻かせるものじゃないわよ」

「そんなものか？　じゃあ香澄さん、打鉄は向こうにあるから」

「は、はい！　一夏さん」

「……『更識君』だったのに『一夏さん』なのね、香澄さんって」

「そこ、気にするところか？」

走ってピットに向かう香澄を見送りながら、静寐は素朴な疑問を一夏にぶつけていた。

「香澄さん、一夏君の目から見てどうなの？　見込みあるのかしら？」

「唐突だな……ISの気持ちを理解できるという強みがあるからな。そのうち静寐も抜かされるかもしれないぞ」

「それは大変ね……鶺鴒、私たちも頑張らしましょう」

『はい。一夏さんに失望されないように頑張ってください』

「……本音も言ってたけど、一夏君が造る専用機って、基本毒舌なのかしら？」

「別にそんな風に設定した覚えはないがな、土竜以外」

本音相手には、多少毒舌だろうが強引だろうが、彼女をリード出来る専用機の方が良いと考えていたのは事実だが、他のISにはそのような考えは一切持ち込んでいない。それが一夏の言い分だった。

だが、木霊も蛟も土竜も、そして鶺鴒も、所有者に対して結構な毒を吐くのだ。これが一夏の思惑なのかどうか、所有者たちは頭を悩ませるのだった。

聞きたくない情報

二人の訓練を見ていた一夏の携帯に、本音からの着信が入ったのは、一夏が次のメニユーに進もうとした、まさにそのタイミングだった。

「悪い、ちよつと電話」

「それじゃあ、私たちは休憩してるわね」

「別にいいけど、休み過ぎて動きたくないとかいうなよ」

電話の相手が本音だということを確認したから、本音に言うような注意をしてみましたのだと、一夏は自分の中で反省して通話ボタンを押す。

「何か用か？」

『い、いつちー！ 大変！ 大変だよ！』

「何が？」

『えつと……とにかく大変だよ！』

「……誰か事情を話せる人と代わってくれ」

本音では説明できないと、一夏は即座に判断して、傍にいらるであろう誰かに代わるよう命じる。

『分かった！ かんちゃんに電話して……って、携帯使ってる!?!』

「何だ。部屋じゃないのか？」

『へ？ ……あ、うん……ちよつとまって、おねくちゃん。今かんちゃんに……』

「虚さんがいるなら、虚さんと代わってくれ」

『ほえ？ ……うん、分かった』

かなり焦ってるのだろう、と一夏は事の重大性は高そうだと自分の中で整理する。本音が慌てるのは、割と何時も通りのだが、虚が傍に居るのに簪を探するなど、そのような慌て方はあまりしない。慌てているように見えて、割と冷静な部分を残していることが多いのだ。

『代わりました、虚です』

「それで、本音があそこまで慌てるなんて、本当に何があつたんですか？」

『まだ未確定情報なので、あまり詳しい事は申し上げられません』

「構いません。報告してください」

虚の話し方から、学園での出来事ではなく実家関係であることを見抜き、一夏も自然と姿勢を正した。

『イギリスの研究所が襲撃され、開発中の第三世代 I S、サイレント・ゼフィルスが強奪されたとの情報が』

「イギリスか……セシリアがそっちにいるはずですから、本音に確認を取らせてみてはどうでしょう？ あいつならセシリアの番号も知ってるでしょうし」

『分かりました。また情報が入り次第、私が連絡します』

「お願いします。間違っても本音に連絡はさせないようにしてください」
『申し訳ありませんでした』

虚が謝ることではないのだが、おそらく他にも報告があつたため、本音に頼んだ事を後悔しているのだろうと一夏は解釈して、そのまま通信を切った。

「……思ってたより、動きが早かったな」

「何の動き？」

「ん？ 情報が確定したら教えてやるよ。不確定情報を与えて、余計な心配を掛けたくないからな」

「ふくん……一夏君がそんな風に言うってことは、相当ヤバイ事なのね」

「事実であればな……また忙しくなるかもしれん」
「……高校生のセリフじゃないわね」

一夏が零したセリフに、静寂が呆れ気味にツツコミを入れたのだった。

情報収集のために、簪と碧は更識のIDを使い、世界情勢の最新の出来事を閲覧、本音は事実を知っている可能性があるセシリアに連絡、刀奈と虚は、有事に備えて生徒会の仕事を早く終わらせるために奔走していた。

「一夏がハッキングすれば、あつという間なんだけどね……」

「さすがにそれは認められないわよ、簪ちゃん。いくら一夏さんだって、不確定情報の裏付けの為にハッキングはやらないと思うし」

「てか、生徒会の仕事なら、一夏君にも手伝ってもらわなきゃ終わらないわよ」

「一夏さんには、最悪の場合に備えて待機してもらわなければいけませんので」

「美紀ちゃんは？」

「楯無様と連絡中です」

「そっか……父娘だもんね」

ここにいる誰が掛けても変わらないが、美紀が尊に電話をする分には、更識の用事だとは思われない可能性が高いのだ。まあ、電話相手が誰か、などと知られる心配はさほどする必要はないのだが……

「あの情報が確かだとして、やったのって亡国機業よね？」

「そうですね。先日一夏さんが篠ノ之博士から言われた通りでしたら」

そろそろ亡国機業が動くかもしれない、という束からの情報を、一夏は刀奈と虚には伝えてある。正確に言うのであれば、虚に伝え、それを刀奈に報告してもらった形だ。

「何でも面倒な事が立て続けに起こるのよ！ 箒ちゃんの失踪の件だって、まだ片が付いていないっていうのにさ！」

「文句を言わないで手を動かしてください。それに、もうじき本音が何かしらの情報を持って——」

「おねくちゃん！ 大変だ〜！」

「来ましたね」

噂をすれば影、ではないだろうが、虚が本音の名前を出した途端に、生徒会室に本音が駆け込んできた。

「何か分かったのですか？」

「えつとね……そのね……えつと……」

「とりあえず、落ち着いて息を整えなさい」

本音が慌てている事は誰の目にも明らかだったので、虚はとりあえず妹に落ち着くよ

う促す。

「……ふうく。うん、もう大丈夫！」

「そうですか。それで、何が大変なんですか？」

「うん！　せつしーの情報だと、確かにサイレント・ゼフィルスが強奪されたみたい。監視カメラは壊されちゃってるから、犯人の映像とかは無いけど、そのうちの一人は、蜘蛛のようなＩＳに乗ってたって目撃情報があつて、もう一人は日本人ぽいって」

「日本人……ですか？　でも、なんでそんなことが分かるんです？」

「えつとね……綺麗な黒い髪をしてたって目撃者が」

「意外と冷静ですね、その目撃者」

髪の色だけで日本人だと判断するわけにはいかないだろうが、虚はなんだか嫌な胸騒ぎがしていたのだった。失踪した篠ノ之箒も、綺麗な黒い髪だったからであり、万が一誘拐——ということになっている——したのが亡国機業で、その仲間として篠ノ之箒が動いているのだとしたら、面倒な事態に拍車がかかるからであった。

強奪後

サイレント・ゼフィル強奪に成功した箒たちは、一先ず拠点で祝賀会を開いていた。「思ってたより簡単だったな」

「お前の訓練の成果が、あんなものだ。亡国機業の中では弱いが、世間に出れば、お前も十分上位にランクインしてることだな」

「一夏め……私には見込みがないとか言ってたくせに」

「それ、ただ発破をかけただけじゃねえのか？」

一夏としては、箒が自分の現状を見直すために言っていた言葉なのだが、その真意は彼女には届いていなかったようだ。

「アイツがそんなことを考えているとは思えん。私を無視して、他の女とイチヤイチャしている軟弱者などな」

「お前って思い込みが激しいよな……そもそも、一夏を誘拐したときに前もって周辺を調べてたが、お前とは特に親しいとは報告されてなかったみたいだぞ」

「何!? てか、何故お前がそんなことを知ってるんだ!」

「言っただろ？ 一夏を攫ったのはオレたち亡国機業だつて」

前に説明は受けているはずなのだが、箒は驚いた表情を浮かべる。それくらい、彼女にとつて衝撃的な情報だったのだ——

「そんな……私は、一夏の大切な人ではなかったのか……」

「シヨック受けるのそつちかよ!？」

——記憶を失う前から、自分は一夏の特別ではなかったということが。

「あら、何のお話しかしら？」

「SHの思い込みが解消したつて話だよ。てか、スコールが説明したんじゃないのか？ あの一夏とかいう餓鬼を攫ったのがオレたちだつて」

「言ったわよ。それと、私が一夏の初めてをもらったつてこともね」

「襲ったのかよ……」

「何を想像したのかは分からないけど、ファーストキスだからね」

「本当か？ お前の事だから、あつちももらつてそうだけど」

「まだ小学一年生の男の子に、そんなことはしないわよ」

すぐに一夏は取り戻されてしまったため、さすがのスコールでもそこまではしていないと言う。だが、付き合いの長いオータムは、それを百パーセント信じはしなかった。

「まあいいか。オレにはどうでも良い話だからな」

「それよりも、サイレント・ゼフィルスの調整だけど、誰か良い技術者を攫ってこようかしら？　ほら、最近更識の傘下に入った企業があるでしょ？　あそこの技術者で、不満を抱えてる人間でも攫って来て」

「オレがか？」

「何時もの変装で、ヘッドハンティングだとか言えば、連れてこれるでしょ？」

「外面を取り繕うのは面倒なんだが」

渋るオータムに、スコールは二言、三言耳打ちをして、オータムをやる気にさせた。

「仕方ねえな。まっ、オレに掛ければ技術者の二人や三人楽勝だぜ」

「出来るだけ腕のいい技術者を攫ってきなさいよ。あとはこつちで記憶を操作すればいいんだから、多少疑問を持たれても問題ないわよ」

「大丈夫だつての。その前に、社員リストとかねえのかよ？　前情報が無ければ、攫うのだつて一ヶ月以上かかるぞ」

「仕方ないわね……二日あれば揃うから、それまではSHと訓練でもしていなさい」

「了解だ。てなわけですH、いい加減現実を受け入れて元気出せや！」

オータムに背中を叩かれ、箒は肺の中の空気を全て吐き出して、なおも咽せ続けるのだった。

イギリス政府を通じ、一夏はサイレント・ゼフィルス強奪事件の詳細を知った。不確かな情報が多い中、確定している情報は二つ。

一つ目は、強奪犯は二人で、警備についていた腕利きのＩＳ操縦者十人を軽々とあしらうほどの操縦技術の持ち主であること。

二つ目は、一人は蜘蛛のような専用機を操る凶暴な性格で、もう一人は、訓練機ながらも確実に相手を仕留める腕を持つ、長く綺麗な黒髪の女だということである。

「蜘蛛ってというと、篠ノ之箒が姿をくらました時にも、蜘蛛の糸のような武装が見つかっていますね」

「紫陽花さんの証言も、蜘蛛みたいなＩＳに乗った女に不意を突かれた、って感じだしね」

「篠ノ之箒さんを誘拐した犯人と、サイレント・ゼフィルスを強奪した犯人の内の一人が同一人物だと仮定して、篠ノ之箒さんを攫った目的は何でしょう？　彼女は篠ノ之博士から失望され、交渉道具としては使えないと分かっているでしょうに」

「虚ちゃん、いくら本人がいなくても、その発言は酷いんじゃない？　それが事実であつたとしても」

虚の言い分は、一夏から聞かされた情報であり、その一夏は束本人から箒をどう思っているか聞いているので、刀奈が同情する方が間違っているのだが、人間的には正しいのかもしれない。

「とにかく、交渉道具に使えない篠ノ之を攫つたのには、何かしらの訳があるのでしよう。それよりも問題は、この黒髪の女が篠ノ之箒だった場合、かなりIS操縦の腕を上げたことになります。警備についていた女性たちは、更識製造の訓練機に乗っていましたし、実力は学園にいた頃の篠ノ之箒より格段に上です。その警備員をもともせず強奪していったということは、代表候補生クラスの実力はつけているということですよ。どこで特訓したのかは知りませんが、この一ヶ月弱でそれほど成長するとは、かなり脅威な存在です」

「元々高いポテンシャルはあったものね。ただ目が濁ってたから成長出来なかっただけで」

「一夏さんが発破をかけても、おかしな解釈をして成長の機会を自分で潰していましたし」

「……とりあえず、シャルに何か分かったら報告してもらおうようにメールはしておいたので、進展があれば逐一報告されるでしょう」

「尊さんも、何人か人を遣って調べてるしね」

「てなわけで、俺たちがしなければならぬのは、この大量の書類の処理ですね」

山のように積まれた書類に目を向け、一夏も虚も、刀奈さえも盛大にため息を吐いた。「篠ノ之箒失踪に関する情報なんて、生徒会じゃなくって学園長に持つてけよな……そもそも、搜索は警察の仕事でしように……」

「一応学園に在籍時に失踪した訳ですから、報告はされるんでしようね」
「でも、まったく進展がないのに報告されても、正直迷惑よね……」

書類の殆どがその関連のものなので、三人はもう一度ため息を吐き、少しずつ山を崩していくことにしたのだった。

亡国機業に備えて

サイレント・ゼフィルス強奪事件の概要を聞いたマドカは、すぐに犯人の一人に思い至った。

「オータムですね、その蜘蛛のようなＩＳ——アラクネを使う犯罪者は」

「ふむふむ……まーちゃんは元亡国機業の人間だけあって、相手の情報も持つてるんだね」

「最新の情報は分かりませんが、そんなＩＳを使って、人を痛めつけるような戦い方をする人間など、この世に一人しかいません」

「何か因縁でもあるのかな？」

あまり人を悪く言わないマドカが、断定口調で話すことに、束は引つ掛かりを思えたので、このような問いかけをしているのだ。

「個人的には恨みだらけですよ。私が大事にとっておいたデザートを、横から奪い取ったり、報酬の半分以上を使い込んだ挙句に、私の分にまで手を出そうとしたり——」
「聞かなければよかったかな……」

マドカの不満が爆発してしまったのを、東は後悔しながら愚痴を聞き続ける。大した情報は得られそうにないとききはじめかけたその時、東は聞き捨てならない単語を耳にした。

「兄さまの事を、くそ餓鬼とか言ったり……」

「よし、そいつは殺そう。肉体的にも、精神的にも、社会的にも抹殺しよう」

「た、東様？　急にどうしたんですか……」

あまりの変貌ぶりに、マドカの方が戸惑いを覚える。ついさつきまで興味なさげだったのは、マドカにも分かっていたので、この食い付きようは、驚くなど言う方が無理である。

「可愛い可愛いいっくんを、あろうことか『くそ餓鬼』呼ばわりなんて、神が許してもこの東さんが許さない！　ちーちゃんやなっちゃんたちを連れて、そいつを地の果てまで追いかけて殺す」

「……そんな簡単に見つけられるような奴じゃないですよ」

「こうなったら、全世界の監視モニターを常時ハッキングして、そいつが見つかった地域に核ミサイルを打ち落とすしか……」

「無関係な人がどれだけ犠牲になる計画を立ててるんですか！」

「え？　いっくんの為なら、有象無象が何百人死のうが関係ないし」

「こういう人でしたね……」

他人の区別がつかない束にとって、オータム一人を殺す為に、無関係な人間が何百人死のうが関係ない。むしろ全世界の人間に対して、無礼を働けばこれくらいの制裁が下されるといふアピールになる、とすら考えているのだった。

「実行すれば、確実に兄さまに怒られますね。いや、怒られるだけで済むかどうか……」

「うん、この計画は没だね。いっくんに怒られるのは悲しい思いをするし」

「どれだけ兄さま基準なんですか……」

「束さんにとって、興味があるのはいっくんと、ちーちゃんとなっちゃん、そしてまーちやんだだけだからね」

あつさりと言い放つ束に、マドカは少し恥ずかしい気持ちになりながら顔を背けたのだった。

敵に戦力が増えたのは確定してしまったので、IS学園及び更識では戦力拡大が急務となっていた。とはいったものの、そんな簡単に戦力を揃えられるほど、IS学園も人材豊富というわけではない。

「千夏先生、ではこのメニューで訓練をお願いします」

「ああ、任せろ一夏。わたしと千冬が指導すれば、最強の軍隊が出来上がるだろう！」

「誰がそんなことを頼みましたか……新学期から取り入れるカリキュラムのテストをし

てほしいと頼まれただけです。エイミィや香澄さん、静寐や本音たちが選ばれたので、貴女と千冬先生に指導をお願いしたんです。時間があれば俺が担当するんですが、更識もそこまで人材豊富ではありませんし、買取したデユノア社の方も、どうやら一枚岩ではないようですからね……また近いうちに様子を見に行かなければいけませんので、碧さんをお願いするわけにもいきませんし」

「学生のセリフとは思えないな」

指導役だけでも学生の範疇を超えていると思えるのだが、その後企業の仕事についてぼやく一夏は、疲れ果てたサラリーマンのような哀愁が漂っていた。

「分かっているとは思いますが、くれぐれもやりすぎないようにお願いしますよ。特に、日下部香澄さんは、相手の本音を読むことが出来る特殊能力を持っていますから、貴女方に含みがあればすぐにこちらに連絡するように伝えてあります。その場合は……分かってますよね？」

ニツコリと、普段見せないような笑顔で問いかける一夏に、さすがの千夏も無言で頷く。何時もなら一夏の笑顔を見て発狂する千夏だが、今日は快樂より恐怖が上回ったのだ。

「だが一夏、あの日下部は一学期の成績不振者だぞ。何故目を掛けるんだ？」

「彼女は実力が無いわけではありませんからね。自信がなかったのと、相手の裏側を見たくないのに見れてしまうという、自分の特殊能力に押しつぶされていただけです。ちゃんと指導し、その特殊能力を上手く使いこなすことが出来れば、I S学園的にも我々更識的にも大いにプラスですから」

「何処の人材発掘業者だ、お前は……学生が学園や企業のプラスを考えて生活するか、普通？」

「俺はいろいろと普通じゃない立場ですから。それでは、指導の件はお願いしますよ」

千夏との会話を切り上げ、一夏は自室に戻り、新たなI S開発案を纏める。

「これが完成すれば、香澄さんにピッタリの機体を作ることが出来るだろうし、亡国機業の動きも探れるかもしれない……だが、まだ完成のビジョンは見えないな」

「一夏さん、あんまり根を詰めてはいけませんよ」

「分かってはいるんだが……」

「明日からまた、私たちは合宿ですから、くれぐれもやりすぎないてくださいよ？」

先ほど自分が言った言葉を、今度は美紀に言われ、一夏は苦笑いを浮かべる。人に釘

を刺している場合ではなく、まず自分が注意しなければいけなかったのか、という表情だ。

「やりすぎはしないし、それほど時間が取れるわけでもないからな……とりあえず、コンピュータ上で上手くいくまでは、実行には移せないからな」

「一夏さんだけの問題ではないんですから、誰かに手伝ってもらうのはどうです？ 簪ちゃんとかなら、一夏さんのお手伝いが出るでしょうし」

自分はこういった作業に向かないと、美紀は心得ているので、間違っても「自分が手伝う」とは言わない。だが内心ではかなり悔しいと思っっているだろう、と一夏は思っていた。

「大丈夫だ。それに、まだ急ぐような状況ではないからな。まずはじっくりと地力をつけてもらう」

「もう完全に指導者ですね」

貫禄すらうかがえる一夏の言葉に、美紀は結構本気で笑ったのだった。

一般高校生の夏休み

一夏に指導を頼まれた千冬と千夏は、前回の失敗を繰り返さないように気を付けながら指導しようと思っていた。

「千夏、分かっているとは思いますが、今回も一夏に怒られるようなことをすれば、確実に嫌われる」

「これ以上一夏のお姉ちゃん離れが進むと、わたしたちは耐えられないところまで来ているからな……」

一夏としては、別にこの姉二人がいなくても何とかなるくらいの知恵と実力をつけているので、これ以上嫌う必要も無いのだが、姉二人から見れば、これ以上一夏に嫌われるのは耐えがたい苦痛でしかない。

「それで、今回は誰の指導をすればいいんだ？」

「一夏からもらったリストには、日下部、鷹月、アメリカ、布仏妹、相川だな」

「五人中四人がわたしたちのクラスか」

「それだけ期待値が高いということだろう」

他のクラスに比べて、一年一組は専用機持ちもだが担任教師も多い。しかも元日本代表の三人と、元候補生が授業を担当しているのだから、他のクラスより成長して当たり前ではある。

だが、脱線が多い真耶と、自分たちを基準に考える織斑姉妹の授業では、成長する見込みは低かった、それを補っているのが、碧と一夏の二人だ。

「こいつらが成長すれば、亡国機業に下つたと言われているあのバカ箒を抹殺することが可能になるだろうな」

「そうだな。IS学園の警備をこいつらに任せて、わたしと千冬の二人で亡国機業ごとぶつ潰す事が出来るだろうし、一夏の周りの警護レベルも格段に上がるだろう」

「何故布仏妹が一夏の護衛なのか、私には分からないがな」

本音は確かに実力者ではあるが、あの性格故護衛には向かない、というのが織斑姉妹の考えだ。実際に、再び海外に向かった一夏の護衛については、本音ではなく今回も碧だ。

「四月一日はまあ、候補生でもあるから仕方ないが、何故毎回小鳥遊なんだ？」

「アイツばっか一夏と海外旅行など、許せんな」

「仕事だと思えますけど？」

「何か用か、ナターシャ・ファイルス」

音もなく現れたのに、織斑姉妹は驚くこともなく侵入者の名を呼んだ。

「一夏君から見張りを頼まれたので。くれぐれもやりすぎないように注意してくださいとの伝言も預かっていますので、お願いしますよ」

「どれだけ信用されていないんだ、私たちは……」

「確かにわたしも千冬も、前はやりすぎたと反省したが、それだけで何度も注意する必要はないだろうに……」

「成長する前に使い物にならなくされたら困るから、とも言っていましたね」

再びナターシャから告げられた一夏の伝言に、織斑姉妹は膝から崩れ落ちたのだつた。

中国の候補生は、今回招集されなかったので、鈴は久しぶりに悪友二人と遊んでいた。「てか、あんたたち補習じゃなかったの？」

「昨日で終わったんだよ」

「てか、一夏は来れなかったのか？」

「更識の仕事で、昨日からフランスに行ってるわよ。一昨日までは日本での仕事で忙しいそうだったけどね」

「ホント、忙しいやつだよな」

五反田弾と御手洗数馬と三人で遊んでいる鈴は、事情を知らない人間から見れば男を引き連れる悪い女、にも見えなくはないが、鈴は別に女尊男卑を善としているわけではない。むしろ、努力しないで偉ぶっている女に嫌悪感を抱く方だ。

「二夏のヤツ、IS学園でどんな生活を送ってるんだ？ やっぱりハーレムなのか？」
「ハーレムかどうかは知らないけど、人気者ではあるわね。一夏は嫌がってる感じだけだ」

「そういうえば、対人恐怖症と女性恐怖症のダブルなんだっけ？ それでよく女子高に通ってるよな」

「世界で唯一の男性IS操縦者だからね。一夏んところの家が、男性でも遊べるVTSゲームを発表したから、そのうち他の男性操縦者も現れるかもしれないけど」

「ゲームと本物は違うだろ？ そもそもあれは、リアル体験だけど実物じゃないって言うてなかったか？」

「女子はあれで特訓すれば適性が上がるんだけど？」

実際、IS学園ではアリーナや訓練機の使用許可が取れなかった生徒が、VTSを使って訓練する様子かなりの確率で見られる。そして、その訓練の結果はしっかりとテストに反映されているのだ。

「最初から適正ゼロの俺たちが練習しても、せいぜい一くらいにしかならないだろ」

「てか、何処のゲーセンも長蛇の列で、プレイまで二時間待ちとかが当たり前だから……熱が冷めるまでプレイ出来ないだろ」

「そうねえ……あたしは学園でいくらでも出来るけど、あんたら二人は学園に入れないものね……確実に不審者として警備の人に突き出されるだろうし」

「一夏の家にはないのか？ 開発元なら、あつてもおかしくなさそうなんだが」

「バカね。一夏の家って言えば、あの大企業・更識なのよ？ あんたらみたいなヤツが遊びに行けるわけじゃないでしょうが。それに、あたしも一応は敵国の候補生なんだから、更識の本拠地になんて入れないわよ」

「友達の家に遊びに行くだけなのに、なんでこんな悩まなければいけないんだか……」
「その家が、世界が羨む技術力を誇る更識企業だからよ」

数馬の愚痴に的確なツッコミを入れて、鈴は弾の部屋で格ゲーにいそしむことにしたのだった。

「てか、あんたら弱すぎ。これはISの技術関係ないんだけど？」

「でも、実物を動かしてる鈴に、勝てるわけないだろ。特性とかどの機体にはどの武器が有効か、なんて俺達には分からないんだから」

「勉強すれば誰でも覚えられるでしょうが。少しはあたしを楽しませなさい」
「横暴だ……」

「昔から態度だけはデカいんだから」

鈴の前で禁句を呟いた弾は、その後二時間は目を覚まさなかつたのだつた。

墮ちる企業

今回の視察は二日の予定だったので、一夏はすでに帰り支度を済ませていた。だが、一夏たちに来客が告げられたのは、部屋を出ようとした時だった。

「アポなしの売り込み？ 悪いが断ってくれ」

「でも一夏、業務提携を考えてるっていうし、無碍に扱うのは」

「何処の企業だつて？」

「えつと……『みつるぎ』って言ってたよ」

「ああ、I Sの装備開発の……あそこ、ペーパーカンパニーだつて噂があつたけど、ちゃんと働いているのか」

一夏が興味を示したのは、企業自体であり、売り込みにはさほど興味は示さなかった。

「業務提携とか言つたか？ あそこつて大した実績はなかつたはずだから、提携は出来ないな。買収してもメリットは無いから、残念だが帰つてもらつてくれ」

「分かつたよ。それから、出来れば作業を見学したいとも言つてるんだけど」

「機密にならない部分なら構わないが、不審な動きをしたら……その時はシヤルに任せ

る」

「う、うん……」

一夏が醸し出した雰囲気、シャルは若干気圧されながら頷く。一高校生、ましてや女子に「人を消せ」という命令は、あまりにも酷だと言えよう。

「一夏は会わないの？」

「会う必要はないだろ。更識本社に来るならまだしも、その人はデユノア社に用があつて来たんだから。デユノア社のトップは俺じゃない、シャルだ」

「まだ全然貫禄も、実感もないけどね。分かったよ。それじゃあテキストに見学してもらつて、不審な動きが無かつたらそのままってことで」

一夏の部屋からシャルが去り、今まで一言も発さなかつた碧が一夏に声を掛ける。

「どう思います？」

「ほぼ不審者で間違いないだろうな。みつるぎは調べた限りではペーパーでした。どこかの暗部組織が作った企業だと思つていましたが、何が目的なんでしょうかね」

「調べますか？」

「いや、それよりも本当に動いているのか、そつちを調べてもらいたいですね」

「分かりました。日本に戻り次第、早急に調べます」

数年前、一夏は日本に拠点を置くIS企業全社を調べつくした。その中には当然みつるぎも入っていたが、その時は活動していなかったと報告されている。だが今日、そのみつるぎの人間を名乗る人が売り込みに来たので、一夏はもしかしたらと勘を働かせたのだ。

「サイレント・ゼフィルスが強奪されてすぐに動いたみつるぎ……亡国機業と何か関係があるかもしれません」

「もし関係があるのだとしたら、一夏さんがあつておけば一発で分かったのでは？」

「関係なかった場合、更識にまで売り込みに来られるかもしれませんが……そうなのと面倒です」

「そうですか。では、そろそろ飛行機の準備が出来る頃ですので、空港に向かいましょうか」

「プライベートジェットって、どれだけ儲かってるんですかね、更識企業は」

「一夏さんのお陰で、IS訓練機シェア八割以上を占めていますし、アタッチメントも充実していますからね」

今や、他所の国でも国家代表には更識製の専用機を使わせたいと考えているなどという噂まで飛び交うくらいだ。儲かっていないわけがない。

「それじゃあ、帰りましょうか。刀奈ちゃんたちも、今日帰国だと聞いています」

「また『一夏分の補給』とか、訳の分からない事を言われなければいいんですが……」

完全に刀奈たちも、謎の「一夏分」が必須栄養素になってしまい、数日離れたただけで過剰に接触してくるのだ。まだ耐えられるレベルだからいいが、そのうちエスカレートしないかと、最近の一夏は悩んでいたのだった。

デユノア社を軽く見学し、どの人材を攫うかの目星をつけたオータムは、外用の顔でシヤルに挨拶をし、今日は大人しく帰った。

「あの元男装ヤロウ、誰の指示を受けたんだ？」

オータムは、見学の際のシヤルの視線に気づいていた。気づいていながら、バレない程度に目星をつけていたのだ。

「まだまだ経験が浅いようだな。裏組織には向かないほど素直な視線だぜ、まったく」

そもそもシヤルは裏世界の人間ではないので、オータムの感想は若干的外れなものだが、シヤルが裏組織に向かないという事は、実は一夏も同意見なのだ。

「それにしても、機密に関われないってことは、大した技術力はねえのか？ そうなると攫つても大した戦力にはならねえな……」

「そんなの事は、貴女の考える事ではなくてよ」

「スコール！ てか、何時から聞いてた」

「そうねえ……『あの元男装ヤロウ、誰の指示を受けたんだ？』の辺りかしら」
「最初からじゃねえか！」

スコールの冗談に喰らいかかるオータムだったが、すぐにスコールが真面目な表情を見せたので、彼女も大人しく相手の出方を待った。

「デュノア社から攫わなくても、新しい技術者が得られるかもしれないわよ」

「どういふことだ？」

「日本にあるＩＳ企業で、倉持技研って知ってるかしら？」

「確か、更識が台頭するまで日本代表及び候補生の専用機を担当するはずだった企業だろ？　だが思いのほか更識の成長が早かったから、結局下請け程度の仕事しか出来なかったって聞いてるぜ」

「そうね。その倉持技研の重役が、私たちの理想に共感してくれてね。洗脳しなくても使えそうな駒が手に入るかもってわけ」

スコールの報告に、オータムは微妙な表情を浮かべる。

「あら、嬉しくないの？」

「どうせなら、オレが偵察に行く前に言ってほしかったぜ。外用の顔はいろいろ疲れるんだ」

「あら、私は好きだけどね」

スコールの返しに、オータムは照れた。だがそれを覚られないように、オータムは大声で反論する。

「スコールが好きとか嫌いとか、そんなのは関係ねえんだよ！ とにかく、あの顔は疲れるからもうやらねえからな！」

「それは困ったわねえ……来る一夏誘拐作戦の実行には、あの顔が必要なのに」

本気で困って見せるスコールに、オータムは複雑な思いで「あと一回だけなら」と言っ
てしまったのだった。

寝ぼけの一夏

フランスから帰国し、しばらくは生徒会と更識の書類整理に追われることになる一夏は、とりあえず生徒会室で書類に目を通していた。

「最近やけに訓練機の受注が多いですね」

「イギリスで強奪事件が起きる前からですし、戦力増強ではなさそうですね」

「一夏君も虚ちゃんも真面目ねえ……私はまだ時差で眠いわよ……」

「別に寝ていても構いませんよ？ その間、私と一夏さんが二人きりですけど」

後半は刀奈だけに聞こえるように囁くと、刀奈は眠い目をこすりながら書類に目を通し始める。

「そんな展開だけは阻止しなきゃ」

「何の話です？」

「お嬢様は一夏さんが大好きだって話ですよ」

「ちよっ、虚ちゃん!？」

自分から発言する分には恥ずかしくないのだが、他の人に言われると恥ずかしいらしい。刀奈は慌てて虚の口を押えようとピョンピョン跳ね回るが、虚は心得ているかの如く刀奈の手から逃げる。

「二人とも疲れてるなら休んで構いませんよ？ 俺がやっておきますから」

「いえ、簪お嬢様や美紀さんだって、遠征から戻ってすぐ織斑姉妹の指導を受けていますし、私たちも休んでいる場合ではありませんので」

「まあ、本音みたいに帰ってきてすぐ寝て、いまだに起きてこないのも考え物だけどね」
「アイツはまあ……仕方ないのではないんでしょうか。刀奈さんと一緒に、限界まではしゃいでぶっ潰れるタイプですから」

「あれは……久しぶりに一夏君と遊べてうれしかっただけで……普段はそんなことないんだからね」

恥ずかしそうに顔を背けながら言い訳をする刀奈を見て、一夏と虚は思わず微笑んだ。虚は兎も角としても、一夏は年下なのに、なぜか年上っぽいのは、刀奈が子供っぽいのと関係あるのだろう。

「ん？ 一夏君、電話だよ」

「そうみたいです……リンからか」

一夏は着信相手が悪友であることを確認して、刀奈と虚に断りを入れて生徒会室の外で電話を取った。

「どうかしたのか？」

『あつ、一夏？ あんたの家にVTSゲーム機はある？』

「ゲーム機？ ああ、一般用に開発した筐体の事か。あるにはあるが、それがどうかしたのか？」

『いや、思ったたより面白くてね。この前弾と数馬と三人で遊んだ時に初めてやったんだけど、物凄いいリアルね、あれ！』

「専用機を持つてるお前がゲームではしゃぐとは……」

一夏の狙いとしては、IS学園を志す女子中学生を中心に流行ればいいと思っていたのだが、意外な事に男子や、操縦者適齢期を過ぎたOLたちにも人気なのだと報告は受けていた。だがまさか専用機持ちまでもがハマるとは、さすがの一夏も思っていなかったのだ。

「てか、そんなことを聞いて、何がしたいんだ？」

『一夏君家に遊びに行きたいな〜って話してたのよ』

「……次の休みは一週間後だぞ。その日はまた刀奈さんたちと遊ぶだろうし、その次の日で良ければ更識企業にある筐体を使って遊ばせることは出来るが……」

『よし決まり！ 弾と数馬にはあたしから連絡しておくから！』

「くれぐれもはしやぐなよ？ 関係者パスを渡すが、最悪不審者として警察に突き出すから」

『……あんたが言うとお洒落に聞こえないから怖いわよ』

鈴からの電話を切り、一夏は悪友三人が会社にある筐体を使うから、その日はなるべく筐体を置いてある部屋には近づかないよう、社員たちに通達したのだった。

再び全員の休みが重なり、何をしようかと楽しむ刀奈、本音、マドカの三人とは対象に、一夏、虚、簪、美紀の四人は少し疲れた表情を浮かべていた。

「みんなだらしないわね。若いんだからシャキッとしなさいな」

「お嬢様や本音と違い、私たちは昨日夜遅くまで書類整理をしていたんです。もう少し休ませてください」

「てか、なんでもう着替えてるんですか……まだ四時ですよ？」

「いっちー、休日は遊ぶためにあるんだよ！」

「……字のごとく、休むためにあるんだよ」

まだ半覚醒状態の一夏は、一面倒くさそうにツツコミを入れ、再び舟を漕ぎ出した。

「一夏君がこんなに眠そうなのは珍しいわね」

「仕方ありませんよ。一夏さんが寝たのは三時ですから」

「碧さん……また音もなく現れて……びつくりしますよ」

「うくん……もう少し寝かせてくれ……」

さすがの一夏でも、働きっぱなしの次の日、一時間睡眠ではもたないだろう。彼の言いはもつともだった。だが、遊びたい三人には、その言いは通用しない。

「せっかく東様の所から帰って来たのですから、今日は兄さまと思う存分遊びたいです！ 明日は兄さま、小学校時代のご友人たちとお遊びになるようですし」

「……………」

「兄さま？」

マドカが一夏を見ると、彼は立ったまま眠っていた。ただでさえ睡眠時間を削って、亡国機業について調べたり、更識所属の面々の成長データを打ち込んだりしているのだ。偶の休みくらいは寝たいのだろう。

「一夏君！ 起きなさい！」

「もうちよつと、刀奈お姉ちゃん……」

「はう!?!」

寝ぼけているのか、一夏は昔の呼び名で刀奈を呼んだ。その呼び方は、刀奈にかなり
のダメージを与える。だが彼女の顔は嬉しそうに——だらしなく緩んでいた。

「ずるい〜！ いっち〜、起きるんだ！」

「本音ちゃんも、一緒に寝る？」

「寝る〜！」

「……ん？ 何してるんだ、本音？」

本音が飛び込んだ事により、一夏は目を覚ました。立ったまま寝ていたので、飛びつ
かれたらさすがに目を覚ますのは分かっていたはずなのに、本音は我慢できなかったの
だった。

「ん？ 虚さんたちは何で睨んでるんです？」

「お嬢様や本音だけズルいです」

「一夏、今日は私たちの事を昔みたいに呼んでね」

「は？」

「寝ぼけてたとはいえ、あれは破壊力抜群ですからね」

「碧さんまで、何を言ってるんです？」

一夏が首をかしげると、なぜか録音されていた先ほどの発言が、美紀の携帯から流され、一夏は赤面したのだった。

不穏な影

鈴たちとの約束の前日、一夏はいつも通り刀奈たちと過ごしていた。

「一夏君」

「何でしょう?」

「さつきみたいに呼んでほしいな」

「勘弁してください……」

美紀が録音していた音声を聞かされて、一夏は自分が寝ぼけていたことを知った。そして、自分がだいぶ疲れていたんだと言う事も自覚したのだった。

「お姉ちゃんや本音だけズルいよ! 一夏、私の事も昔みたいに呼んで!」

「そんなこと言われてもな……寝ぼけてる時の事だから……完全に起きてる時に呼べと言われても……」

「今日は何して遊ぼうかしら?」

「刀奈ちゃんはいつも通りね」

「碧さん、何か分かりましたか?」

先日のデュノア社に売り込みに来た「みつるぎ」の事を調べていた碧は、残念そうに首を左右に振った。

「ダメですね。いくら調べても背後関係は分かりませんでした」

「企業としては？ 稼働しているのですか？」

「相変わらずのペーパーカンパニーですね」

「日本政府への報告は？」

「今の腐りきった政府では、何も対処してくれません。おそらく、みつるぎのバックにある組織から、かなりのマージンを受け取っているのだと思います」

碧からの報告を受け、一夏は短くため息を吐いた。元々政府になど期待していなかったのだが、ここまで腐りきっている可能性を聞かされて、さすがの一夏も呆れを通り越してため息しか出なかったのだ。

「傀儡政権だとは思っていましたが、本当に腐っているとは……」

「それから、これは無関係だとは思いますが」

「まだ何か？」

「日本政府御用達になるはずだったIS企業、倉持技研が倒産しました」

「倒産？ 技術者たちは？」

「不明です」

「……分かりました。碧さんは更識の人たちに業務を引き継いでください。みつるぎと倉持の件は、他の人に探ってもらいましょう」

休日でも仕事に事欠かない一夏は、周りで刀奈たちが騒いでいてもお構いなしに思案に耽っていた。

「いっちー！」

「っ!? な、何だ」

「VTSでトリーナメントするらしいから、私のパスワードを教えて〜」

「あ、ああ……ほら、失くすなよ」

本音のIDパスワードが書かれた紙を手渡し、一夏はその場でもう一度考えを巡らせようとして――

「いっちーも参加するんだよ〜」

――本音に手を引っ張られVTSが置かれている部屋に向かうことになった。

「本家を筐体の代わりにするとは……」

「まあまあ、私たちにとつて、訓練も兼ねてるんだからさ」

「別にいいですけど、このメンバーなら更識の屋敷にある試作機でも良いわけですし、わざわざ学園で遊ぶ必要はないと思うんですけど」

「屋敷に帰る暇がないからね。それも、一夏君が一番忙しいんだし」

「まあ……そうですね……？ 誰かいたようですね」

VTSが置かれている部屋に入るなり、一夏は人の気配を感じた。だが、現在進行ではなく少し前までここにいた、という感じだった。

「誰か使ってたのかな？」

「今日は誰も使用申請していませんが……虚さんは聞いてますか？」

「いえ、私も申請があったとは聞いていません」

「一夏、この機体のシステムにアクセス履歴が残ってるよ」

簪に言われ、一夏は履歴から誰が使っていたのかを調べることにした。

「システムにアクセスしようとするなんて、何が目的だったんだ？」

「あれ？ システムデータにアクセス出来るのって、一夏君と簪ちゃん、後は虚ちゃんの

三人だけじゃなかったっけ？」

「メインシステムはそうですけど、難易度などのサブシステムには、学園のIDを持っていれば誰でもアクセスは出来ますよ」

IDからアクセスしていた人間を探していた一夏だったが、途中でエラーの文字が表示された。

「……正規のIDでアクセスしたわけじゃないようですね」

「ハッキング？」

「産業スパイ、かもしれませんが、学園内に簡単に学生以外が入れるわけありませんし……」

「つまり、スパイだとしたら、ここの学生だと言う事？」

「その可能性が高い。俺が入学する前のシステム管理は杜撰だったからな。メインシステムへの介入は無かつたらしいが、それを調べたのが織斑姉妹だからな……鵜呑みには出来ない」

とりあえずメインシステムに異常がない事を確認した一夏は、難しい顔で腕を組み考え込んでしまった。

「遊ぶ雰囲気じゃなくなっちゃったわね」

「悪いが俺は部屋に戻ります。みんなは遊んでも構いませんよ」

「いつちーが一緒じゃなきや意味ないよ」

「そうか……じゃあPCを持ってくるから、それまで待つてくれ」

「一夏も参加するの？」

「解析しながらでも良いならな。その代わり、いつも以上に手ごたえは無いかもしれないぞ」

一夏のPCなら、VTSのメインシステムを書き換える事も可能だ。だがしよつちゆう書き換えていては、いづれ限界が訪れる。そう思つてめつたに書き換えはしないのだが、不審者と思しき相手がいる以上、カウンタークラックは充実させなければならぬ。「学園にスパイが……？」　だが、一般企業のスパイとは考えにくい……そうなると、残る可能性は亡国機業……だが、学生レベルの操縦技術で戦力に数えられるのか？……篠ノ之の件もあるし、可能性はゼロではないのかもしれないが……っ！　誰だ！」

背後に気配を感じ、一夏はその気配に向けて叫んだ。

「あら怖い。後輩君、先輩に対してその態度は無いんじゃない？」

「貴女は？」

「三年のダリル・ケイシーよ。アメリカの候補生でもあるわ」

「すみません。一年、更識一夏です」

「知ってるわよ。それにしても、随分と可愛いわね」

—— そういつてダリルは、一夏に近づき抱き着こうとして——

「不純異性交遊は認められないわね」

—— 碧に腕をひねりあげられたのだった。

疑わしい先輩

碧に腕をひねりあげられたダリルは、いとも簡単にその拘束から抜け出し、不敵な笑みを碧に見せた。

「いきなりひねりあげるなんて、随分なご挨拶ですね、小鳥遊先生？」

「更識君にはいろいろと事情があるのよ。ほぼ初対面の貴女が抱き着けば、ほぼ間違はなく更識君はパニックを起こしたでしょうしね」

「別にやましい気持ちはありませんわ。純粋に、更識君にお近づきなりたかっただけですのに」

白々しい態度で碧の追及をかわすダリルを、一夏はそれとなく観察していた。

「(アメリカの候補生と言うだけあって、かなり鍛えられているな……三年だと言う事が差し引いても、本音といい勝負が出来るくらいの実力者だ。だが、そんな実力者の彼女が、何故俺に近づいてきた？　すでに専用機も持っている彼女が、今更更識の技術力が欲しいと言う事も無いだろうに……)」

「そんなにお姉さんの胸が気になるのかしら？」

「え？ あ、いえ……失礼ながら、先輩の実力を測っていました。じろじろと見つめてしまったのは、素直に謝罪します」

「良いわよ、別に。外に出れば、もつとあからさまの視線の方が多いのだから」

「それは、ダリルさんが露出度高めの服を着ているからでしょうに」

碧のツツコミには取り合わず、ダリルは懲りずに一夏との間合いを詰める。

「それで、更識君の事情って何なのかな？ 不当に拘束されかけたんだから、私にも聞く権利があると思うんですがね、小鳥遊先生？」

「生徒会長の更識さんが公言している通りよ。一夏さんは過去の出来事で、女性恐怖症と人間恐怖症というトラウマを抱えているの。特に、大人の女性相手だと最悪逃げ出しそうになるくらいにね」

「そこまで酷くないですよ」

苦笑いを浮かべながら、一夏は力ないツツコミを入れる。それが強がりであることは、言った一夏本人が一番理解しているのだから。

「そうなんだ。でも、私と更識君は二つ違い。小鳥遊先生より年が近いのですけどね」

「私と一夏さんは古い付き合いなの。だから、初対面の貴女より、よっぽど距離を詰めら

れるのよ」

「何を張り合ってるのか分かりませんが、先輩は俺に何の用だったんですか？ わざわざ気配を殺してまで近づこうとしたんですから、それなりの用があったんですよね？」

実は一夏は、あの誰何以前からダリルの気配には気づいていた。だが碧が尾行していたのにも気づいていたので、あえて気づかないふりをしていたのだ。だが、気配の質が変わったのを木霊から闇鴉を通して報告されたので、捨て置けないと判断し声を出したのだ。

「VTSで私の専用機を使えるようにしてほしいな、って思っって声を掛けようとしただけよ」

「それでしたら、普通に声を掛ければよかったのでは？ わざわざ気配を殺し、碧さんの尾行に気づかないふりまでした意味は何でしょう？ そして、あえて腕をひねりあげさせたのにも、意味があるのですよね？」

「すごい観察眼ね。純粹に貴方がどれくらい『出来る』のか調べたかったつてもあるわね。何せあの『更識企業』に所属する男の子ですもの。並大抵の実力じゃない事は知ってたけど、どこまで出来るのかも気になっちゃったのよ。小鳥遊先生にひねりあげられたのも、先生が本気じゃないって分かってたから。それだけよ」

ダリルの言い訳の間、一夏は一瞬たりともダリルから視線を外さなかつた。嘘を吐いても、一夏には一瞬で判断するだけの観察眼がある。それを隠そうとすれば、余計な力がかかり、ぎこちない動きになってしまう。

だがダリルは、一切の無駄がなく言い訳を終えた。言い訳を終えたのと同時に、一夏はダリルから視線を外し、小さく息を吐いた。

「もし今のが嘘だったとしたら、貴女は嘘を吐くことに慣れ過ぎている、と言う事になりますね」

「どういう事かしら?」

「息を吐くように、貴女は嘘を吐けると言う事ですよ。まあ、褒め言葉だと思ってください」

一夏の言葉の意図が掴めず、若干引きつった笑みで応えたダリルだったが、すぐに先ほどまでの余裕の笑みを浮かべだす。

「VTSの件は了解しました。日を改めて、先輩の専用パスワードを作成させていただきますよ。それから、俺の実力は、先輩が気にするほどのものじゃありません。過大評価し過ぎですよ」

「そうかしら？　でも、あの布仏まで認める実力者なんですよ？　過大評価だなんて思えないんですけど？」

「虚さんの評価は知りませんが、少なくとも俺は、更識所属が一番弱いですよ。新たに所属した、シャルやエイミー、静寂にも勝てないかもしれません」

「そんなことは無いんじゃない？　貴方の専用機である『闇鴉』の特性を使えば」

「何処で見たのかは知りませんが、俺は戦闘が得意じゃないんです。闇鴉の特性を使えば勝てるかもしれませんが、そもそも戦うことを前提に物事を考えたくないです」

「面白い考えね。まあ人それぞれだものね。じゃあ更識君、VTSの件はよろしくね」

約束を取り付けた事で満足したのか、ダリルはそのまま一夏の横を通り過ぎる。すれ違いざまに、碧には聞こえない声で話しかけた。

「何なら、今度は直接見せてあげてもいいのよ？」

「何をです？」

「この胸よ」

一般男子みたいに興味津々ではないが、その分耐性が低い一夏は、その言葉だけで気を失いそうになる。バランスを崩した一夏を、碧が素早い動きで抱きかかえ、ダリルに

声を掛ける。

「夏さんに何を言ったの？」

「別に。先生には関係ありませんわよ」

それを最後に、ダリルは本当にこの場から去ったのだった。

バッドタイミング

部屋に戻った一夏は、珍しく碧にしがみついた。

「一夏さん？ どうしました？」

「少し……このままで」

自分の限界をよく理解している一夏が、おそらく訪れるであろう限界に備えて、碧にしがみついたのだった。

「……こわかった、あのお姉ちゃん」

「一夏さん……やはり初対面相手だところなっちゃいますか」

「それだけじゃない……と思うんだけど」

「他にも何か原因が？」

幼児退行を起こし、碧にしがみつきながら震える一夏だったが、思考はまともに働いているようだった。

「上手く言えないんだけど、あのお姉ちゃんと似た空気を、どこかで感じたような気がする」

る……思い出せないけど」

「似た空気？ まあ、彼女はIS学園の生徒ですし、一夏さんがどこかですれ違っているのも不思議ではないですけど、そういったことではないんですよね？」

「……………」

「一夏さん？」

問いかけに返事がなく、不思議に思った碧が一夏の顔を覗く。

「寝ちゃったんですね……いろいろと忙しくて、睡眠時間も確保出来ませんでしたからね」

加えて、せつかくの休みに早朝から刀奈に起こされたのだから、寝てしまっても不思議ではない。まして今の一夏は幼児退行を起こしているのだ。普段より我慢強くなっても仕方がないのだった。

「これ、どうやって説明しましょう……」

しがみついたまま寝てしまった一夏を見ながら、碧は刀奈たちにどう言い訳するべきか頭を悩ませたのだった。

なかなか戻ってこない碧を迎えに、簪と美紀は一夏の部屋を訪れることにした。

「私の部屋でもあるんだけどね」

「? 何のこと?」

「一夏さんを迎えに『一夏さんの部屋に行つて』つて刀奈お姉ちゃんに言われたでしょ?」

あの部屋、一応私も生活してるからさ」

「ああ……まあルームメイトだしね」

当然、部屋の鍵も持っているので、美紀は何の疑いもなく部屋の鍵を開けて中に入
た。

「一夏さん、刀奈お姉ちゃんが……」

「美紀、どうか……また、碧さんなんですか？」

「ちよつと待ってよ、簪ちゃん。私の言い分も聞いてほしいな、なんて……」

「その場所を代わってくれるなら、聞いてあげてもいいですよ」

「簪ちゃん……目が本気だよ……」

一夏にしがみつかれながら、身動きが取れなかった碧は素直に簪に謝罪をし、今の状
況を説明することにした。

「……それで、その先輩の素性は？」

「アメリカの代表候補生で、やけに一夏さんに近づこうとしていました」

「今更、ですか？ 入学早々ならまだ分かりませんが、夏休みも半分以上終わったこの
時期に？」

「一夏さんもそこを気にしていました。それから、幼児退行を起こした後に言われた事なので、確証はありませんけど、一夏さんは彼女が纏っている空気を『知っている』と感じたらしいです」

「同じ学園の先輩だし、どこかで感じたことがあるんじゃないやなくて?」

簪の反問に、碧は静かに首を横に振った。今大きさに動けば、一夏が起きるかもしれないという考慮からだ。

「どうやら違うみたいでした。まあ、その答えを聞く前に寝てしまったんだけどね」

「ん……? うわあ!?!」

「おはようございます、一夏さん。早速で悪いですけども、あちらにいる簪ちゃんを宥めてもらえるかな?」

「簪? ……何で怒ってるんだ?」

一眠りしたお陰か、一夏は幼児退行から復活していた。だが、まだ寝不足は解消されていないのか、碧から離れてすぐに、足元をおぼつかせた。

「おっと」

「一夏、大丈夫?」

「あ、ああ……悪い、簪。大丈夫だ」

支えてくれた簪にお礼ともとれる謝罪をし、一夏はしつかりと立ち上がった。

「それで、なんで不機嫌なんだ？」

「一夏さんが私か碧さんにばかり抱き着くからですよ」

「そんなこと言われても……護衛である二人がいる時に幼児退行を起こすんだから、仕方ないんじゃないか？ 簪はそこまで俺と行動を共にしてるわけじゃないし……」

一夏としては、幼児退行しているから、あるいはしつかり抱き着くのであって、自分の意思はそこに介在していないと主張している。比較的は慣れてきているので、最近では学園の普通の女子生徒相手なら、幼児退行を起こすことも無くなってきたので、簪や刀奈、虚にしがみつような場面はめつきり減っていからだともついでに主張した。

だが、簪たちの嫉妬は理屈ではなく、単純に一夏にしがみつかれていた美紀や碧が羨ましく、自分にもしがみつくべきだと主張しているだけなのだ。

「幼児退行してないときに抱き着いたら、変じゃないか？」

「変じゃないよ！ それに、私たちは家族なんだから、ハグくらい普通でしょ？」

「……少なくとも、更識はそんな欧風な挨拶が普通な家では無かったと思うが」
「良いから!」

簪の勢いに負けて、一夏は簪を抱きしめることにした。普段は自分が抱き着く、しがみつく方なのだが、今日は自分が抱き着かれることに、一夏は若干の抵抗を覚えたが、簪の剣幕の前に諦めたのだった。

「一夏君、おそ……い?」

「お嬢様、どうなさいまし……た?」

「兄さまと簪が抱き合っている!?!」

「ほえ、あの奥手なかんちゃんがいっちょに抱き着くなんて。ズルいから私も」

タイミングというのは、悪い時はとことん悪いのだろう。簪に抱き着いた——抱き着かせたタイミングで、来るのが遅いと文句を言いに来た刀奈たちが部屋に入って来たのだった。そして、マドカの大声に反応したのか、織斑姉妹の気配もこの部屋に近づいているのだった。

一夏はどう処理したものかと頭を悩ませていたが、織斑姉妹以外は簪と同じことをすれば大人しくなることは分かっていた。だが、自分の気持ち的に、その行動を取らずに

解決できないかと悩ませているのだった。

ゲームの魔力

一夏との待ち合わせ場所である喫茶店に、鈴は一時間近く早く来ていた。

「あちゃー……興奮しすぎね、あたし。いくら『あの』更識企業に行けるからって、一時間も前に来ても仕方ないじゃない」

全世界の憧れであり、どの企業からも中を見たいと言われている更識企業の内部に入れるとあって、鈴はテンションが上がっていたのだった。もちろん、凄さがあまりわからない弾と数馬はまだ来ていないし、その人間である一夏が高いテンションでやってくるとも思っていないかった。

「とりあえずお茶でも飲みながら気を落ち着けましょう……」

「意外と遅かったな、鈴」

「え？ 一夏っ!?! 何でここに……」

「仕事の合間だ。鈴の事だから興奮して早く来るだろうと思ってな」

「くっ、言い返せない……」

コーヒーを飲みながら、冷静に鈴の行動を分析する一夏に、鈴は素直に脱帽した。

「それで？ 早く来たあたしを、早めに更識企業の中に入れてくれるの？」

「別にいいけど、入れるのはサンプル筐体が置いてある場所だけだから？ 他の所を見学したいとか言われても無理だから、それを理解してるなら構わない」

「マジっ!? よし、今すぐ行こう！」

「……せめてオーダーを取りに来た店員さんの立場を考えてから行動しろ」

入って何も頼まずに出ていく客を、店側がどう思うか考えた一夏は、とりあえず鈴を座らせて注文させた。

「落ち着くんじゃなかったのか？」

「この前ゲーセンで出来なかったからね。一夏が相手してくれるの？」

「対戦だけじゃないからな、あれは……元々の使い道は、鈴だつて知ってるだろ」

「ええ……復習を兼ねて使ったことあるしね。アーリーナが使えないときは、学園にあるVTSを使うから」

「まあ、本家とは若干使い方が違うけどな」

運ばれてきた紅茶を一気に飲み干し、鈴は席から立ちあがる。

「さあ、行きましょう」

「一気飲みかよ……まあいいけど」

立ち上がり、鈴の伝票もまとめてレジに持っていく一夏。鈴は当然の如く見送ったが、一夏が払い終わった後で奢ってもらった事実気が付いた。

「あれ？ あたし今、一夏に奢ってもらった？」

「あれくらい構わない。それとも、俺に借りを作るとでも思ったか？」

「うっ……ごちそうさまでした」

一夏のちょっと悪い笑みを見て、鈴は素直にお礼を言った方がいいと理解してお礼を言う。

「冗談だ。さっ、中に入るぞ」

「えっ？ ちよつと一夏！」

当たり前のように更識企業に入っていく一夏の背後を、若干慌てながら鈴が追いかける。社員証が無ければ入れないはずなのだが、一夏が受付に二、三言話ただけで、鈴は中に入ることが出来たのだった。

約束の時間になると、弾と数馬がビルの入り口前にやって来た。

「でさえ……これが更識企業のビルか……」

「どうやって入るんだ？ 一夏に電話すればいいのか？」

「とりあえず中に入って、受付で聞いてみるか」

一歩中に入ると、そこには別世界が広がっていた。

「何……この空気？」

「さ、さあ……お前が受付で聞いて来いよ」

「いや、お前が行けって」

「何入口で不審者やってるんだよ……」

「あつ、一夏」

奥から現れた悪友に、弾と数馬は一安心したように胸をなでおろす。

「受付から『不審な男子二名が入り口前にいる』って報告された俺の身にもなれよ……それが知り合いだと説明しなきゃいけない俺の」

「何で嫌そうなんだよ！」

「てか、鈴はどうしたんだよ？ あいつが遅刻か？」

「ああ、鈴ならもう中で遊んでるぞ。一時間前から」

「はあ!?!」

声を揃えて驚く二人に、一夏が事の説明を始める。鈴の性格を知っている二人は、その説明で納得がいったのだった。

「とりあえず入れよ。鈴にも言ったが、不審な動きを見せた時点で拘束して訊問するか、そのつもりで」

「こ、こええよ……てか、IS企業の中を見たって、俺やこいつには理解できないだろうしな」

「そうだな。高校の授業も理解してないようだしな。補習、終わったのか？」

「な、何で一夏がその事を……」

「鈴に聞いた。てか、中学時代から赤点すれすれだったんだろ？」

珍しく普通に笑う一夏に、受付の女性が見とれている事に、残念ながら誰一人気づかなかった。まあ、弾と数馬が気づいたところで意味は無いが、彼女の気持ちが一夏に伝わる可能性はあったのだ。

「ところで、俺たちはなんて名目で中に入れてるんだ？」

「ん？ 『一応』友人という名目で入れている。ただ、普通はそんなこと出来ないから、次遊びに来ても入れないからな」

「了解。てか、一応にアクセントを置くな」

そんなことを喋りながら、一夏に連れられた二人もゲーム筐体が置かれている部屋に到着した。

「うりゃ！ このお！ うわあ!?! や、やられた……」

「何一人で盛り上がってるんだよ」

「てか、普段以上に口がわりいなんて……」

「ああ!?! ……つて、馬鹿二人か。遅かったわね」

「時間通りだ。お前が早かったただけだろ」

一夏のツツコミに、鈴が時計を見た。

「まだ一時間しかやってなかったのね……てか一夏、これサイコーね!」

「専用機持ちもハマる! つて銘打っていいか?」

「構わないけど、これ以上稼ぐ気?」

「儲かっているのは企業であって、俺個人じゃないんだが。まあ、開発担当として、それなりに回っては来るが」

この後二時間、鈴と弾と数馬でひたすら敵を倒すモードで遊び、途中で一夏が席を外

したのにも気づかないほど熱中したのだった。

「そろそろ休憩したらどうだ？ 二時間ぶつ通しはさすがにやり過ぎだ」

「え？ もうそんな時間？」

「一夏、これ面白れえな！」

「販売してないのか？」

「してるが、高校生が——てか、個人が買える値段じゃねえぞ」

カタログを数馬に見せ、三人は驚愕の声を上げたのだった。

マッド一夏

鈴たちを見送った後、一夏は一人筐体の置いてある部屋で考え事をしていた。

「あそこまで熱中するとは思わなかったな……俺が部屋を抜け出していたことも気づかないとは」

「それだけ、お友達が楽しみにしていたんではないですか？」

「ああ、美紀……来てたのか」

「護衛ですから」

気配を消して陰から見守っていた美紀だったが、三人が帰ったので堂々と姿を現した。あくまで護衛であって、一夏のプライベートには介入しない決まりなのだ。

「美紀からみて、あの三人の操縦技術はどうだった？」

「鳳さんは、さすが候補生という感じでしたが、男性お二人はやはり雑ですね……難易度が低かったのと、鳳さんのお陰でクリアしていた面が大きいと思います」

「まあ、アイツらは普段ISに触れる機会なんてないからな……この前は二時間待ってワンプレイしか出来なかったとか言ってたし」

「物凄い人気らしいですからね。私はゲームセンターに行かないので分かりませんが」

「俺もだ。そもそも学園に本家VTSがあるからな。わざわざゲームをしに出かける必要も無いし」

「ところで一夏さん、開発部に何の御用だったんですか？」

美紀は一夏が部屋から抜け出して、何処に向かったのかも知っているが、そこで何をしていたのかまでは知らない。いくら美紀でも、開発部の中に入ることは許されていないのだ。

「亡国機業の戦力が上がった事で、日本政府から戦力の拡大を急かされてるんだよ。今のところ候補者は香澄さんか相川さんのどちらかなんだが……成長著しい香澄さんの方が良いかなって思って、彼女の特性にあったIS武装を開発してるところなんだ。さつき開発部に行ったのは、その打ち合わせだ」

「ですが一夏さん、今日は完全オフじゃなかったでしたっけ？」

「本社において、発案者の意見も聞きたかったんだろ。てか、この人たちは俺がトップであることを知ってるからな。完全なオフなんてないさ」

「責任者の務め、というやつですか？ たまにはお父さんに任せてゆつくりした方が良

「いですよ。ただでさえ一夏さんは休まないんですから」

ため息交じりに美紀がそう呟くと、一夏は苦笑いを浮かべる。実は尊も大して休めているわけでもなく、更識企業の表のトップも裏のトップも、休みなく働いているという事実を知っているからだ。

「それで、香澄さんの特性ってどんなのです?」

「人間だけでなく、I Sの感情を読み取る彼女なら、数秒単位なら未来視が出来るんじゃないかって思ってた。敵の動きを予想して展開するバリアを考えてみたんだが、どうにも実用に耐えうるものが出来ないと報告があったんだよ。それで、少し改良を加えて再テストをして、ようやく実戦テストにまでこぎつけることが出来るらしい」

「誰がテストするんですか?」

「俺だろうな。虚さんには頼めないし、俺なら本音たちの特訓に混ざってテストすることも容易だしな」

「そのバリアは、S Eは消費しないで使えるんですか?」

「展開するだけだからな。武器を出すように、バリアを張るだけだ。S Eは消費しない」「完成すれば最強の盾になりますね」

美紀は手放しで喜んでいて、一夏はそれほど嬉しそうではなかった。一夏の反応に疑問を覚えた美紀は、何か問題点があるのかと首をかしげたのだった。

「展開するのに、少し時間がかかるのが難点なんだよな……人間の予知だけじゃ間に合わないかもしれないから、ISにも未来視の機能を……いや、そんなの造れる道理が無い……いや、伝承に在ったあの存在を用いれば行けるのか？ ……でも、あんなのどうやって再現すれば……」

「……一夏さん？」

「ん？ ああ、すまない……どうも考え出すと止まらなくてな。問題点は山積みだが、とりあえず実戦テストにまでこぎつけたからな。完成はさせたいと思ってるが……『楯無』の俺が盾を使うのは、なんか皮肉っぽいけどな」

「表世界では『一夏さん』ですし、問題は無いと思いますよ。更識縁者も気にしないと思いますし」

「まあ、あくまでテスト品だし、深く考える必要はないか……」

美紀にそう答えた後、一夏はまた思考を巡らせ、自分の世界へと入っていったのだった。

香澄の成長速度をグラフに現したものをモニターに表示し、一夏は専用機の設計図を作っていた。やりたいことはいくらかでもあるのだが、キャパシティーの問題や予算の問題が現実にはある。いくら更識企業の名目で専用機を造ると言っても、無限に予算が採れるわけではないのだ。

「コアは問題なしだが……あれを造るとなるとかなりの予算がかかるし……デュノア社で開発してたアレも実戦テスト段階まで進んだから、本格的な予算組みをしなければならぬし……VTSも本来の目的でもだが、ゲームとしても需要が増えたから、利益にはなっているあれを一個作るには結構な予算がかかる。儲けがすぐ手元に来るわけじゃないしな……」

「一夏君、独り言が多いわよ……」

「ああ、刀奈さんいたんですか」

「酷いっ!? せっかく心配で見に来てあげたのに」

「何か問題でも?」

「おかげさまで、千冬さんも千夏さんも絶好調で問題だらけよ。暴走を止める私たちの事も考えてよね」

代表の合宿も終わり、残りの夏休みを学園で過ごすことになった刀奈たちは、織斑姉妹が担当している特訓の監視の役目を仰せつかったのだった。

「まあ、やり過ぎない程度には学習してると思えますよ。結果がこれですからね」

香澄の成長具合を刀奈に見せ、一夏は苦笑いを零した。

「もうちょっと頑張ってくださいね、刀奈お姉ちゃん」
「！ うん、頑張る！」

一夏に昔の呼び方をされ、刀奈は気合を入れてアリーナへ戻っていったのだった。

一夏の逆鱗

二学期からの新プログラムのテストとして、一週間織斑姉妹の指導を受けている本音たちは、ＩＳ操縦技術だけでなく体力面でも成長していた。

「たった一週間でグラウンド十周を軽々クリアか」

「初日は布仏妹と日下部は二周でダウンしたが、見事な成長だな」

「毎日あれだけやらされれば、嫌でも成長しますよ……一夏君に怒られない程度で厳しくするなんて、千冬さんと千夏さんも一応は学習してるんだなって、さつき一夏君が言っていました」

「なに!? 一夏がわたしたちを褒めていただと！ 今すぐ一夏のところへ行かなくては！」

「褒めては無かったと思いますけど」

都合の良い脳内変換をした千夏に、刀奈のツツコミが入る。だが織斑姉妹にとって、一夏以外の事は些末事に等しいので、そのツツコミは千夏には届かなかった。

「千冬、今すぐ一夏のところへ行くぞ！」

「それは構わないが、誰が監視するんだ？ 褒められに行つて、怒られるのは避けたいぞ」

「そんなの、そこで見学してるナターシャと、どうせどつかにいる小鳥遊に任せればいいだろ」

「それもそうだな。よし、今すぐ一夏のところへ——」

「俺が、何です？」

任務を放り出して一夏のもとへ行こうとした二人の背後に、目的の人物が現れた。喜びにあふれた表情で振り返った二人が見たものは——

「誰がグラウンド十周させろとお願ひしました？ 貴女たちは全学生に十周させるつもりだったんですかね？ 俺は確か三周と指示したはずなんですが」

——指示以上の指導をしていた事に対して、怒りを露わにしている一夏本人だった。

「ええ!?! いっちー、それ本当?」

「ああ。さすがに十周なんて指示するわけないだろ。静寐やエイミイならともかく、本音や香澄さん、相川さんがそれだけ走れるとは思ってない」

「私たちも結構ギリギリなだけどね……」

「一夏君に期待されてるのは嬉しいけど、私も静寂と同意見……初日から五周させられた時は『一夏君の鬼!』って思ったけど、まさか織斑姉妹の独断だったとは……」

次々に出てくる不満に、織斑姉妹はつい声を荒げそうになったが、一夏が視線だけで二人を制した。

「小鳥遊先生やナターシャさんに、指導内容を教えていなかったとはいえ、お二人は不思議に思わなかったんですか?」

「これでも半分だ! とか言っていましたから、最初から十周走らせないだけマシなのかな? とは思いましたけども……まさか織斑姉妹基準の半分だとは思いませんでした」

「私もです。候補生やそれに準ずる実力の持ち主なら、それくらいが普通なのかなって……」

「はあ……道理で想定より成長の速度が速いはずだ……指示したメニューの三倍近い事をさせてるんだから……」

右手で頭を掻きながら、一夏はため息と共に納得したように頷いた。

「これからは数日、五人には休日を与えます。その代わり、織斑姉妹には五人がやってきたメニューの五倍のメニューを課しますので、しっかりとこなしてくださいね」

「えっと、五倍って事は……グラウンド五十周!？」

「その後、重り付き校舎周り五周に、瞬間加速訓練を二時間半、模擬戦五十回……」

「想像するだけで嫌になってきたよ〜」

「……なんだそのメニュー、俺も知らないぞ」

一夏が予定していたのは、グラウンド三周と瞬間加速訓練を二十分、そして模擬戦を総当たりだけだったのだが、何か知らないメニューまで増えていたのだった。

「重り付き校舎周りって、歩くのか?」

「ううん、グラウンドを走り終わった流れで重りをしょって、校舎周りを一周走るんだ

よ」

「……よく疑問に思わなかったな」

鬼畜と称されることが多くなってきた一夏だが、そこまで苛め抜くメニューを組むほど鬼畜ではない、と自分では思っている。

「だって、刀奈様が普通にやってのけたから、代表になるにはこれくらい必要なのかな
〜って」

「刀奈さん!」

「ひゃうっ！　だ、だって……千冬さんと千夏さんにやれって言われたから……それに、一夏君の組んだメニユーだと思ってたから……」

刀奈の証言で、一夏の堪忍袋の緒が切れた。まさか自分の名前を出して、必要以上のメニユーを課してたなど、一夏の逆鱗に触れたのだった。

「千冬先生、千夏先生……俺と模擬戦をしてください」

「な、なに!?　一夏と模擬戦だと」

「だが一夏、わたしと千冬はペアだ。さすがのお前でも一對二では勝ち目はないだろう？」

「誰が俺一人だと言いました？　小鳥遊先生、お願いします」

「えっ、私？　現役の刀奈ちゃんの方が良いんじゃない？」

「刀奈さんでは、織斑姉妹に傷を負わせる前に終わってしまいますよ」

「酷いっ!?　でも、当たってるかもしれない……」

「もちろん、俺一人でも勝てる見込みなど皆無です。ですが、碧さんならある程度は対抗出来ますよね？」

教師としてではなく、自分の護衛役に対する信頼だと、一夏は呼び方でそう伝えた。

それが理解できない碧ではない。

「分かったわ。でも、一夏さんは大丈夫なんですか？」

「ここに来た目的を果たそうと思いましてね。俺が使えれば、少し改良するだけで全ての人が使えると思いますし」

「それはどうだろう……一夏君も、なかなか人外な動きをするし」

「それでも、刀奈さんには完封されますけどね」

「そりゃ、現役の日本代表だもの。一夏君に後れを取るようじゃ、活躍は出来ないもの」

こうして、急遽決まった一夏&碧ペアVS織斑姉妹ペアの模擬戦を観戦しようと、バテバテだった五人と刀奈、そしてナターシャはアリーナへと移動したのだった。

一夏・碧ペアVS織斑姉妹

ピットに移動した碧は、一夏が冷静さを取り戻しているかを確認するために話しかけた。

「一夏さんが直接お仕置きを実行するなんて珍しいですよね」

「あくまで新武装のテストをしたかったですし、織斑姉妹が相手なら、興味深いデータも採れそうですし」

「あれ？ それじゃあお仕置きというのは……」

「それは本当です。俺も少しは動いておかないと、闇鴉が不貞腐れそうですし」

「そんなことは無いですよ。確かに、最近出番が少ないな、とは思ってましたが」

「夏休みなんだ。実習が無い限りお前を動かすことは無いからな」

代表でもなければ候補生でもない、ましてや候補生を目指す身でもない一夏がISを動かす機会は、授業を除けば数えるくらいしかない。一夏の説明に闇鴉は一応納得して見せたが、何処かつまらなそうに碧には見えたのだった。

「それで、新武装って何ですか？ 一夏さんがテストするって事は、武器じゃないですよ

ね？」

「香澄さん用に開発してみたんですが、他の人間も使えばかなり有利になりそうでしたので、まずは俺が試してみようと思ったんですよ。自分で試せば、ダメだった時もすぐに諦めがつきますし」

「とりあえず、相手は元世界最強コンビですし、瞬殺だけはされないようにしてくださいね。さすがの私も、一対二で織斑姉妹に勝てる、なんて思ってませんから」

「二人は引きつけておきますから、思う存分痛めつけちゃってください」

「……一対一でも厳しいわよ」

一夏の邪気の無い笑みに、碧は逆に戦慄を覚えたのだった。

アリーナに出てきた四人を確認した刀奈は、開始の合図の為にブザーを鳴らした。その直後、千冬が一夏目掛けて瞬間加速を使い間合いを詰めた。

「相変わらずね、千冬さんの瞬間加速からの零落白夜は」

「でも刀奈様。いっちは完全に読んでたみたいですよ」

「一夏君、攻撃が来る方向が分かってたみたいでしたね」

静寂の言うように、一夏は千冬の攻撃がどの方向から繰り出されるのかを、目で確認する前に理解していたような動きを見せた。

「一夏君も、私みたいに相手の気持ちを読めるんですか？」

「そんな特技は無かったと思うけど……表情から読み取るとはあっても、心を読めるまではいかなかったと思うし」

「小鳥遊先生と千夏先生の戦いも、やはり次元が違いますね……やっぱり私、場違いじゃないかな？」

「キヨキヨも頑張ってるとは思っけどね〜」

独特な呼び名で清香を呼ぶ本音に、この場にいる全員が和んだ。だがそんな空気も、モニターに映し出される激しい戦いのお陰で吹き飛んでしまった。

「ナターシャさんから見ても、この戦いは凄いですか？」

「凄いななんてものじゃないわよ……軍でもこんなハイレベルな訓練なんて見たことないわよ」

「でも刀奈様、いつちーの動き、今日はやけに正確じゃないですか？ 何時もみたいに反射神経だけじゃなく、何か別の物で補ってるように感じるんですが」

「そう？ 確かに一夏君が千冬さんの動きに圧倒されてる感じは無いけど、一夏君に攻撃を当てるのは私たちだっけ苦勞するんだから」

「そうですけど……何か面白そうな武装でも作ったのかな？」

野生の勘、ではないが本音はこういった嗅覚に優れており、他の人間が気づかない些細な違いに気づいたりするのだ。だが、普段の行いから、それを信用されないのが残念

な所だが。

「今の一夏君の動き、千夏さんが撃ってくるのが分かってたわね。本音の勘が当たったのかしら」

「小鳥遊さんと互角に戦いながら、一夏さんを的確に狙える千夏さんの射撃技術もさすがですね」

「ISだけなら尊敬できるって、いつちーがぼやいてたのも頷けるね」

それを本音が言うなど、刀奈は心の中でツツコミを入れた。瞬間加速からの零落白夜を何度も繰り返す所為で、暮桜のSEはみるみる消費されていき、ついには千冬は戦闘不能になった。

「今のカウンター、さすが一夏君ね」

「突っ込んできた暮桜の動きを利用した攻撃、これが一夏君の戦い方なんですか？」

「色々な戦い方をするからね、一夏君は。セシリアちゃんとの戦いで見せた、姿を消しての射撃や、今回のように相手の動きを利用したカウンター、さらには開幕速攻なんてパターンもあるわよ」

「いつちーは前から刀奈様や、かんちゃんや美紀ちゃんの為に、様々な行動パターンで模擬戦相手をしてたからね」

千冬が戦線離脱した所為で、均衡は破られて一夏・碧ペアが勝利したのだった。

模擬戦が終わり、ピットに戻った一夏は、物凄い汗を掻いていた。

「凄い汗ですね。さすがの一夏さんも、織斑千冬相手じゃ緊張したのですか？」

「いえ……この新武装、脳で処理する情報が多すぎて疲れるんですよ……やはり香澄さんのように相手の行動が読めないとキツイですね……」

「それって結局どんな武装なんですか？ 戦いを見た限りでは、よくわからなかったんですが」

碧の疑問に、一夏は上がっていた息を整えて説明を開始した。

「ちよつとした未来予知が出来る武装です。香澄さんの特殊能力からISの性能を考えて、その二つが合わされば使えるかと思いついたものですが、やはり一般人にはキツイものがありました。他のISに搭載は出来そうになかったですね」

「未来予知、ですか……だから今日の一夏さんの動きには迷いが見られなかったんですね」

「まあ、フェイントの心配がない分楽でしたが、その分物凄い情報量ですから、疲れました」

碧に一礼して、一夏はアリーナにあるシャワー室へと向かったのだった。

武装の説明

シャワー室で汗を流した一夏を待ち構えていたのは、ISスーツから着替えもせず、汗も流していない織斑姉妹だった。

「な、なんでしよう……」

「一夏、何故私の攻撃を全て避けることが出来た。前までのお前は、あそこまで正確に相手の動きを読むことが出来なかったはずだぞ」

「わたしの不意打ちも完璧に躲いだら。完全に隙を突いたと思ったのだが」

「説明してもいいですが、その前に着替えたらどうです？　いくら貴女がたが人間離れた体力の持ち主だといつても、そのままでは風邪をひきますよ」

一夏の記憶の限りでは、織斑姉妹が風邪をひいたり、体調を崩した事など無いのだが、常識的に考えての忠告だった。

「一夏はお姉ちゃんを心配してくれるのか」

「優しい弟だ。よし、頭を撫でてやるからこっちにこい」

「お断りします。ちょうどシャワー室の前にいるんですから、汗だけでも流してきましたら

「どうですか」

織斑姉妹の横を通り過ぎながら、一夏は捨て台詞のようにそんなことを言う。

「だが私たちは着替えを持ってきてないぞ」

「別に全裸でもわたしたちは構わないがな」

「気にしてください……戸籍上は姉弟とはいえ、ほぼ交流の無い相手の裸を見たくはありませんので」

今度こそその場を去っていった一夏を見送った織斑姉妹は、とりあえず部屋に戻って着替えを取りに行ったのだった。

一夏の動きが気になっていたのは、何も織斑姉妹だけではなかった。部屋に戻って来た一夏を出迎えたのは、何時ものメンバーにナターシャを加えた、あの試合を見学していた人と、一緒に戦った碧だった。

「随分と大所帯ですね……」

「一夏君の動きが鋭すぎたのが気になったのよ。ドーピングでもしてたんじゃないかって」

「そんなことしませんよ。新武装を試してただけです。そのせいでかなり疲れましたが」

「新武装？ 確か一夏さん、デュノア社でも開発させてましたよね？ それとは違うんですか？」

企画の大半を知っている虚が一夏に尋ねると、刀奈と本音が興味津々の目で一夏を見る。

「その新武装って、私たちも試しているのかな？」

「面白そうな武装なら、VTSでも使いたいな」

「今日試したのを使えるのは、多分香澄さんだけでしょうね。俺でも厳しいくらいの情報量でした」

「私、それほど脳内処理が早いわけじゃないですけど」

「相手の本音を読める、つまり気持ち分かるだけで、余計な情報はカット出来ますからね」

そこまで話したところで、ようやく織斑姉妹が部屋にやって来た。

「一夏、説明を求めろ」

「何だ、お前たちもいたのか」

「遅かったですね。まあ、今話した通り、今日試したのは先の動きを見ることが出来る武装だ。まあ、数十から数百のパターンから正解を導き出すため、かなり脳に負担がかかるのが難点ですが」

「つまり、一夏君が使えば数百パターンの未来が、日下部さんが使えば数千パターンの未来になるって事かしら？」

静寐の問いかけに、一夏は満足そうに頷く。すべてを説明する前に理解してくれる静寐の存在は、一夏にとつてとてもありがたかった。

「まだ試作品だから数百ものパターンがあるが、俺が使っても三十〜五十の間に出来れば、香澄さんなら二、三パターンで済むだろうからな。無論、完成したらVTSでテストしてもらおうが」

「じゃあじゃあいつちー、私が使ったら、どれくらい未来が見えるの〜?」

「本音だと数百で済むかどうか……いや、野生の勘があるから必要ないだろ。未来なんて見なくても、お前は攻撃を躲すことが出来るんだから」

「おね〜ちゃんや刀奈様のは無理だよ〜? あと、碧さん相手じゃ逃げる間もなくやられちゃうし」

「それは俺も同じだ。さらに俺は、お前や簪、美紀相手でも躲すのが精いっぱい反撃など出来ない」

そこまで説明したところで、一夏の携帯に着信を告げるメロディーが流れた。

「ちよつと失礼……はい、更識です」

『いつくん、あの武装のデータ、東さんにもくれないかな〜?』

「また覗き見してたんですか? あれはまだテスト段階ですので、東さんにも教えるわ

けにはいきませんよ」

『マドマドとは別のテストパイロットを手に入れたから、その子で試そうと思つてたのに。まあ、家事の一切をやってくれてるから、その子でテストするつもりはあまりないけどね』

「どつちなんですか……てか、まだ自分で家事をするつもりが無いんですか？」

『あるわけないよ。あんなこと、束さんがする事じゃないしね』

「全国の主婦と主夫の方々に謝れ！ てか、マドカから聞きましたが、束さんのラボは足の踏み場がないらしいですね」

マドカからの情報だと一夏が告げると、通話が切れて今度はマドカの携帯が鳴つた。

「はい……ですから束様、ご自身でお掃除などをした方が良くと申し上げたはずですよ。いくらクロエ様が料理以外が得意であつても……え？ はい、分かりました……」

何かを言われたのだろう。マドカは一夏に気まずそうな表情を見せた。

「どうかしたのか？」

「兄さまに代わつてほしいと。最後に言いたいことを言い忘れたとかでして……」

マドカから手渡された携帯で、一夏は束の言い訳を聞くつもりだった。

『言い忘れてたけど、あの武装は世に出しちゃダメだよ？ 便利すぎる物は人を墮落させるからね』

「既に墮落してる貴女に言われたくはないでしょうね、あの武装も」

『ひど〜い！ まあ、忠告はしたし、いっくんならそんなことしないって信じてるからね。それじゃ〜ね！』

言いたいことを一方的に言って、束は通信を切ったのだった。一夏はため息を一つ吐き、携帯をマドカに手渡したのだった。

箒の成長

サイレント・ゼフィルスの整備を見学している箒の背後に、スコールとオータムがやって来た。

「じっくり見ても、整備は早くならないわよ」

「あれを軸にして、亡国機業の方で訓練機を造れないか模索するらしいしな」

「技術があってもコアが無いでしょう。その問題はどうするんですか？」

「うちの組織は、劣化型なら造るれる技術があるからな。訓練機レベルなら問題なく造れる」

「VTSだけじゃ、実機の感覚は掴めないものね。それこそ、更識の上層部でも捕まえて手伝わせないきゃ無理なもの」

幹部二人の意見に、箒は幼馴染の言葉を思い出していた。

「ISにも感情があるとか、そんなことを言っていたヤツがいたんですが、お二人はどう思いますか」

「感情とかは知らねえが、こいつの機嫌が悪い時はなるべく突っ込まないようにしてる

ぜ」

「SHが聞いたセリフ、一夏の口癖でしょ。あの子が言うなら間違いないでしょうし、実際にあの子はISの声が聞こえるらしいからねえ……あまり無茶するとISが動かなくなる可能性は否定できないわ」

「私は学園にある訓練機の殆どが反応しない事態に陥りました。それは一夏が私に嫌がらせをしてると思つてたのですが、そつちはどう思います？」

「一夏とかいう餓鬼が、お前に嫌がらせしてなんか得があるのか？」

「情報提供者の話では、貴女が単純にISから嫌われていただけだつて報告を受けてるけど」

一夏一人に言われるだけでは納得できなかった箒も、この二人まで同じ意見だとさすがに考えざるを得なかった。

「つまり、私がISに嫌われていたと……だが、嫌われた原因は何ですか？ 私は普通にしていたはずですが」

「負けたのは訓練機が悪い、とか思つてたんじゃねえの？」

「己の実力不足を棚に上げて、機体の所為にしてたんじゃ嫌われるわよねえ」

二人の意見は、奇しくも一夏が箒に言っていたことと同じだった。一夏に固執するあまりに、彼の周りにいる女子を叩きのめそうと勝負を挑み、あつさりと負けたのを機体の性能の差だと言いつくし、同じ機体を使えば勝てると思いつ込んだ所為で、ますます一夏との距離は開いていつていたのだが、そのことを認めようとしなかった。

それが今の現状だと、箒は今更ながらに理解し、そして心に誓ったのだった。

「成長した私の姿を見せれば、一夏も私の事を認めてくれるはずだ！ よし、さっそくとレーニングだ！」

一人息まいてVTSが置いてある部屋に向かう箒を、スコールとオータムは苦笑いを浮かべながら見送った。そしてその姿が見えなくなつてから、オータムがスコールに問いかける。

「アイツが成長した姿を見せたところで、その一夏とかいう餓鬼がアイツを認めると思うか？」

「あり得ないわね。裏組織に身を落とし、イギリスから強奪したISを専用機として使つてる時点で、一夏が認めるはずないもの。それに、SHの成長は一夏にとっては想定内のものでしょうし、それ以上の成長をあの子がするとも思えないもの」

「やっぱりMを連れ戻した方が良かったんじゃないか？ アイツならビットも難なく使

えただろうしょ」

「一夏に会う前ならまだしも、今のMじゃ戻ってこないわよ。織斑姉妹と篠ノ之束を恨んでいたMは、もういないのよ」

マドカの中にあつた誤解を増幅し、束と織斑姉妹を暗殺させるつもりだったのだが、その情報を一夏に掴まれ、それを逆手にとつて仲直りさせられてしまった時は、スコールは本気で後悔した。マドカに任せずに自分でやれば、戦力を失うことは無かつたのではないかと。

「まあいいや。あの気に食わねえMの顔を見なくて済むんだからな」

「あら、貴女たち仲良かったんじゃないの？」

「そんな訳ねえだろ！ 大体オレは、アイツの自分の才能を認めようとしねえ姿勢が大っ嫌いだったんだよ」

「貴女は苦勞してI Sを動かせるようになったのに、あの子は簡単に動かしたものね。やっぱりDNAって偉大よね」

「最強の姉二人と、世界で唯一I Sを動かせる兄、その遺伝子なら間違いなく優秀だろうに。昔から比べられる基準が高すぎたのもあんだらうけど、いい加減自信を持つてたぜ」

マドカの話題で思い出したのか、スコールが小さく手を叩いてオータムに笑みを見せる。その笑みがなんとなく不気味で、オータムは少し身構えた。

「な、何だよ……」

「今度 I S 学園で文化祭があるらしいのよね。そこで貴女には I S 学園に潜入してほしいのよ」

「はっ？ I S 学園で一般客は入れてねえんじゃねえの？」

「今年は餌が良いから、入場者数を稼げるって思ってるんじゃないの？」

「餌？ ああ、更識一夏とその周りの連中か」

「そうよ。日本代表の更識刀奈、その妹で候補生の簪とそのペアの四月一日美紀。布仏虚だけでも十分客は呼べるでしょうけど、一夏一人と比べれば個々が弱いつて思えるほどでしょうね」

目的は偵察だろうと理解したオータムだったが、いくら一般客を招き入れるといつても無尽蔵に入れるとは思えなかった。

「でもよ、入るには招待券とかが必要じゃねえのか？ オレを招待する物好きがいるとは思えないんだが……」

「馬鹿ね。レインに招待券を用意させるわよ」

「てか、アイツが調べれば良いだろ。何でオレが……」

「あの子は学生としての仕事があるでしょうからね。不審に思われるのはよくないわよ。はい、巻紙礼子の衣装」

「またやるのかよ！ あれ面倒なんだぞ！」

オータムの抗議も空しく、スクールの中ではオータムが潜入捜査をすることが決まってしまうのだった。

新武装開発の追い込み

開発に追われ、残りの夏休みの大半は研究室籠りが決定的な一夏は、今日も様々なデータを整理している。

「一夏さん、お昼買ってきました」

「ああ、そこに置いておいてくれ」

「……実は今、私裸です」

「ああ」

「……先ほど織斑姉妹が全裸で酒盛りをしていたので、碧さんに報告しておきました」

「ああ」

「……聞いてませんね」

「ああ」

生返事しかしないので、嘘を言った闇鴉だったが、やはり一夏は生返事しかなかった。それだけ開発に集中しているのだが、刀奈たちが心配している通り、一夏は一つの事に集中すると、他の事を疎かにする悪癖がある。

「というか、一夏さん朝ちゃんと食べました？」

「ん？ いや、食べた記憶は無いな」

「……ちゃんと聞いてたんですか？」

「お前が裸じゃないのは分かってるし、織斑姉妹もこんな時間から酒盛りはしないだろう。あれでも教師だからな」

「じゃあ、最後の質問に生返事をしたのは？」

「相手しないと不貞腐れるだろ？」

研究をしながらも、一夏は闇鴉の相手をするという考えは持っていたようだった。だが、その間も一切手を休めることなくキーボード上に指を滑らせていた。

「やっぱり、これを積むと連動が甘くなるな……かといって、これは更識の目玉商品として開発した楯だから、外すわけにはいかないし……かといってこの武装を外すと、この機体の特徴が生かせないし……」

「珍しいですね。一夏さんがI S開発で頭を悩ませるなんて」

「自分でテスト出来ないから……」

「今までののは、全て自分でテストしていたのですか？」

「V T Sにインストールして試してた。スサノオの武装だけはかなり疲れたけどな。今

回のはその比じゃないし、何度もテスト出来ないのがキツイ」

「日本政府に手伝いを……無理ですね」

一夏ですら苦戦するものを、日本政府の人間に出来るはずがないと、闇鴉はそう自己完結させた、その考えは実際正しく、おそらく束でも苦戦するものだと一夏は考えていた。

「せめてもう一割ほど連動が上手くいけば、香澄さんにテストを頼めるのに」

「今回は日下部香澄さんの専用機でしたか。戦力増強のためとはいえ、日本政府は更識企業を——一夏さんを頼り過ぎじゃないですかね。静寐の時もそうですが」

「仕方ないんじゃないか？ 日本政府が期待していた倉持技研は、謎の倒産を遂げただし、他の企業もあまり芳しくない状況だからな……今いる候補生たちも、簪や美紀以外は一枚も二枚も劣るって刀奈さんが言ってたし」

「それは、刀奈さんが更識所属で、レベルの高い人たちに囲まれているから言える感想ですね。世間一般から見れば、刀奈さんと簪さん、美紀さんのレベルが高すぎるだけで、他の人も十分強いつて答えますよ」

「その『世間一般』の考えじゃダメだから、戦力増強を急かされてるんだ」

そう結論付けて、一夏は再びモニターに視線を固定した。今度は閻鴉が何を話しかけても、生返事すらしなかった。

夏休みも終わりが近づき、帰郷していた人たちの姿も学生寮の中で見られるようになってきた。

「やっぱり日本の夏は暑いですわね」

「確かにね。向こうの方が涼しかったよ」

「アタシは中国だし、日本とあまり変わらないわね」

「久しぶりに軍の仲間と会えて楽しかったぞ」

一人だけ違う感想だったが、一年生の海外組の姿も、ようやく寮で見られるようになった。

「お、セツシーにシャルルンにリンリンにラウラウだ〜！ 久しぶりだね〜」

「あら、本音さん。お元気でしたか？」

「毎日毎日特訓でよかっただよ。まあ、それ以外は元気かな〜」

「あら、そちらは確か……日下部さんでしたっけ？ 何やらお疲れのようですが」

「カスミンも一緒に織斑姉妹にしごかれてたんだよね〜。ちなみに、シズシズやキヨキ

ヨとカルカルも一緒に」

「新カリキュラムのテストも兼ねた特訓だったんだけど、初めの一週間はその倍以上のメニューをやらされてたから、疲れが抜けないのよ」

静寂の返事に、ラウラを除く海外組は顔を顰めた。自分も日本に残っていたらそのメ

ニューをやらされたのだろうと思っただろう。

「何っ！ 教官にしごいてもらっただと!? 日本に残ればよかった……」

「何でがっかりしてるのか分からないけど、かなり大変だったからラウラウはドイツに帰って正解だったと思うけどな」

「ところで、一夏は？ 阿呆二人と更識企業で遊んでから中国に帰ったけど、あの後も大変だったんでしょ？」

「いっちゃんなら、日本政府からの要請で、新しい専用機製造に勤しんでるよ。今回のカリキュラムに参加したキヨキヨかカスミンのどっちかに与えられるんだろうけども、多分カスミンかな」

「わ、私はまだそれほどの實力は……」

香澄が慌てて否定しようとしたところに、その後ろで黙っていた清香が口を挿んだ。

「いやいや、私より成長してるし、一夏君が考案した新武装は、私には使えないから」

「私だって確実に使える保証は何処にも……」

「あつ、ここにいた」

香澄の言い訳の最中に、目の下に隈を作った一夏が声を掛けてきた。

「一夏さんっ!? その限はどうしたんですの?」

「ん? ああ、もう夏休みも終わりなのか……道理で眠いはずだ」

「どういうこと?」

「五日ほどまともに寝た記憶がない」

「寝なさいよ! いくらあんたは頭脳労働が専門だからって、いざという時は……」

「頭脳労働が専門だからこそ、睡眠はしっかりとりなさい!」

「これが終わったら寝る。それより、香澄さんにテストしてもらいたいんだけど」

「いっちー、寝てからの方が良いよ」

「……そんなに酷いか?」

一夏の問いかけに、その場にいた全員が頷いた。一夏は周りの判断に従い、部屋に戻って寝ることにしたのだった。

専用機製造の為に

一時間ほど仮眠を取った一夏は、電話で香澄をVTSルームへと呼び出した。理由は、彼女の専用機開発の為に必要なデータを取りたいという、色気も減ったくれもない何とも一夏らしいものだ。

「えっと、何故四月一日さんと小鳥遊先生がいらつしやるのですか？」

「一応俺の護衛だからな。仮眠を取ったとはいえ寝不足なのは否定出来ないから、IS学園に紛れてると思われるスパイに襲われても大丈夫なようにだ」

一夏の話聞いて、香澄は慌てて周りを見渡す。気配など掴むことは出来ないが、誰か隠れていればその場から心の声が聞こえてくるのだ。

「今この部屋にいるのは俺たちだけだから、そこまで警戒する必要はないですよ」

「一夏さんたちには、私の特殊能力は通用しませんからね……本当の事を言っているのか、自分でも確かめない」と

「疑われているのは残念ですが、普段から相手を疑って過ごしてきた香澄さんなら仕方ないのかもしれないね」

「スパイとか言われたら気になりますって……ところで、データを取りたいって言うてましたけど、もうインストールは終わってるんですか？」

「もちろんです。今回はあくまでもデータ収集が主ですので、ダメージなど気にせずやっちゃってください」

一夏からパスワードの書かれた紙を手渡され、香澄はぎこちない動きでVTSの前に座った。

「(えつと確か、IDを打ち込んで、それからパスワードを打ち込めばいいんだっけ……あつ、何時ものパスワードじゃなくて、こつちを打ち込まないと)」

あまり利用したことは無いが、香澄は自分のIDとパスワードをすっかり記憶している。だからではないが、普段のパスワードを打ち込みかけてしまったのだ。

「えつと……一夏さん、この『テスト機体』ってやつですよね？」

「そうですよ。香澄さんの特殊能力を存分に活かせる機体に仕上げたつもりですが、まだデータ不足なんですよ。だから、今日は存分にデータを取らせてもらいますね。あとで碧さんや美紀とVTS内で戦ってもらう予定ですから」

「そんなこと聞いてませんよ!？」

元日本代表と、現日本代表候補生である碧と美紀との戦闘は、例えヴァーチャルとはいえ香澄にとっては心の準備が必要なのだ。それが分かっていたのか、一夏は美紀の感想に人の悪い笑みを浮かべた。

「準備出来てない状況で強敵と戦わなければいけなくなった時のデータも欲しいですし、やるのは今から大分あとですから、その間に覚悟を決めてください」

「噂通り、鬼畜ですわね……」

どこか楽しそうな一夏に、香澄はそんな言葉を漏らしたのだった。

テスト機体を動かして一時間、一夏は満足そうにモニターに表示されたデータを眺めていた。

「やっぱり俺が使うよりも良いデータが取れますね」

「あの未来予知の武装は、一夏さんには扱えないんですか？」

「三十パターンまで絞り込むことは出来ました、それ以上絞り込むことは不可能ですね。それこそ、脳が焼き切れる恐れがあります」

「そんなものを日下部さんに使わせて大丈夫なんですか？」

「彼女は人の心とI Sの心を読むことが出来ますからね。フェイントは彼女には通用しません。だから、見える未来は一つだけ、後は機体の動きに置いて行かれなければ攻撃を喰らう事は無いでしょう。もちろん、織斑姉妹や碧さんのように、予想出来ても避けられない攻撃を仕掛けてくる相手には、純粹に防ぐ事しか出来ませんが」

一夏の説明が終わると同時に、香澄が行っていた対戦も終了した。

「CPU相手ならほぼ確実に完封出来るまでには成長してますね。織斑姉妹の過剰プログラムが、こんなところで役に立つとは」

「い、一夏さん……少し休んでもいいですか？　いくらヴァーチャルとはいえ、一時間ずつとじや疲れました」

「良いですよ。休憩を挟んで次は碧さんか美紀と対戦してもらいますから」

「うっ……それも必要なんですよね？」

「武装のデータはある程度取れましたので、香澄さんはデータとか気にせず戦ってください」

「わ、分かりました」

自分がどう評価されているのかがイマイチ分かっていない香澄は、とりあえず体力を回復させるためにその場に座り込んだ。

「それで一夏さん、私と美紀ちゃん、どっちが先なの？」

「それは香澄さんを選んでもらってください。どっちにしろ二人とも戦うんですけどね」

「二人じゃないんですか!？」

「実力者と戦う事で、己を高めることが出来ますよ。実際、美紀だって刀奈さんや虚さんと特訓したから今の地位があるわけですし」

元々の才能と、機体の性能のお陰も間違いないがあるのだが、美紀も努力せずに今の地位にたどり着いた訳ではない。そのことは香澄にも理解できたので、彼女は抵抗を諦めて二人と戦う決心をつけた。

「それじゃあ、四月一日さんからお願います」

「何故美紀ちゃんからなの？」

「小鳥遊先生だと、何もできずに終わる未来しか見えない気がして……もちろん、四月一日さん相手でも同じかもしれませんが、無傷で世界を制した先生から相手にすると、四月一日さんと戦う気力が残らない気がしたので」

「まあ、碧さんは私なんかより遥かに強いからね。日下部さんの判断は間違っていないと思います」

「どつちも強いんですけどね……それじゃあ、香澄さんの体力が回復し次第、美紀と戦ってもらいますね」

何か美紀に耳打ちした一夏が気になった香澄だったが、それを知る術を彼女は持つて

いかなかった。雑念を頭の中から追い出し、香澄は再びVTSの前に座り、先ほどのテスト機体を選択したのだった。

産業スパイ？

VTSとはいえ、香澄にとつて美紀と戦うと言う事はすぐ緊張する事だった。一学期の成績は赤点すれすれだったことを考えれば、この夏休みの間で学校を辞めるかどうか考えていた前半と、今の状況があまりにも違いすぎており、また相手は国家代表候補生なのだ。緊張しない方がおかしいのだ。

「準備出来ましたか？」

「は、はい！ よろしくお願いします、四月一日さん」

「美紀、で良いですよ。クラスメイトなんですから」

「で、ですが……」

「私も『香澄さん』と呼びますから、ね？」

試合前だというのに、こちらの事を気に掛ける美紀に、香澄は力の差を改めて認識した。そして、美紀の気遣いがありがたく思い、呼び方を改めることにした。

「分かりました。じゃあ、改めてお願いします、美紀さん」

「はい。一夏さんに言われてる以上、本気でいきますからね、香澄さん」

「で、出来れば手加減してくれると嬉しいんですけど……」

限りなく代表に近い候補生である美紀が本気で行くと言うと、香澄は引きつった笑みを浮かべてそう懇願した。

「そろそろ始めたいんだが、二人とも準備は出来てるか?」

「大丈夫ですよ。一夏さんのタイミングで始めてください」

「わ、私も大丈夫です」

普段より低い声で話しかけられた所為か、香澄が少し驚いた声を上げた。今の一夏は既に研究者モードなので、普段相手の事を慮って柔らかい声質を心掛けている時とはだいぶ声が違う。こっつちが地声なのだが、IS学園の生徒の殆どは、一夏の地声を聞いたことは無いのだ。

「一夏さん、どうやら本気でデータを集めたいみたいね。私だけならともかく、香澄さんも聞いているのに地声を出すなんて」

「あれが一夏さんの地声なんですか?」

「男の子だもん。多少低くて当たり前よ」

「普段は私たちを怖がらせないようにしてた、と言う事ですか……」

一夏のさりげない心遣いを知った香澄は、自分の中の一夏の評価をさらに高いものに
変えたのだった。

VTSルームの外では、ダリルが中の様子を窺えないかと扉の前をうろうろしてい
た。

「何をしてるのかしら？」

「ちよつとトレーニングをしようと思つてたんですが、更識君が使つてるようなので、入つていいのか悩んでただけですわよ、小鳥遊先生」

「そうは見えなかつたけど？ 中の声を聞こうと必死になつてたように見えたんだけど」

「更識の技術は何処の国も知りたいですからね。ちよつとでも聞こえれば開発戦争を勝ち抜くヒントになるのではないかと思つただけですよ。それ以上の考えはありません」

「そう、でもあまり感心しないわね。他人の会話を盗み聞きしようだなんて。これも返しておくわね」

そういうって碧は、ダリルが仕掛けた盗聴器をポケットから取り出し、ダリルに投げ返す。それを受け取つたダリルは、一瞬だけ顔を顰めたが、すぐに何時もの表情に戻つた。

「仕掛けるならもつと精巧で小型のものにするのね。それなら本音ちゃんですら見つけることが出来るわよ」

「先生は私が仕掛けたと思つてるのですか？ それは心外ですわよ」

「あまり大人をなめない方が良いわよ。今回は未遂だから見逃しますけど、一夏さんに危害を加えようものなら、学園の生徒だろうが他国の代表候補生だろうが関係なく、貴女を潰します」

「随分と怖い事を言いますわね。まあ、これ以上疑われたくないのでトレーニングは諦めますわ」

碧の殺気を肌で感じたダリルは、捨て台詞のように吐き捨ててその場から退散した。角を曲がり碧の視界から抜けたダリルは、盛大に舌を打ち鳴らした。

「やはり暗部組織の人間……一筋縄ではいかないようね。ただの次期当主候補じゃなさそうね、あれだと……」

そこまで愚痴をこぼして、ダリルは人の気配を感じ取り独り言を止めた。

「何をしてるのですか？ 今の時間、VTSルームは生徒会が貸し切っているはずですが」

「布仏……そうみたいね。トレーニングしようとして、小鳥遊先生に止められたわ」

「そうですか。利用可能時間は二時間後ですから、それまでは別メニューでトレーニングしてください」

「そうするわ。ところで、なんで布仏がここに？」

この先にはVTSルームくらいしかないので、虚がここにいる理由は一つしかない。

だがそれに気づかないフリをして、ダリルは虚に問いかけた。

「生徒会の案件で一夏さんに確認したい件があったのでここに来ただけです。しかし、何故そのような事を気にするのです?」

「一夏君に興味があるから、つて言ったら信じる?」

「信じませんね。貴女は後輩のフォルテ・サファイアとそういう関係だとお嬢様から聞いたことがありますので」

「恋愛は自由でしょ? 女の恋人がいるからつて、男の子に興味がない訳じゃないんだから」

「私には分からない考え方ですね。とにかく、VTSを利用したいのであれば、アリーナ同様生徒会か職員室で許可をもらつてからにしてください。例え候補生であろうと、ルールはルールですので」

「分かったわよ。じゃあ布仏、二時間後に私が使えるようにしておいてくださいな」
「分かりました。では、私はこれで」

ダリルの横を通り抜けVTSルームに入っていく虚を、ダリルは忌々しげに睨んでいたのであった。

「布仏……やつぱりアイツは嫌いな部類ね。まあ、いずれ決着をつけられるでしょうけ

ど
」

意味深な言葉を零し、ダリルは今度こそV T Sルームから寮へ戻る廊下を歩き進める。そんな彼女の事を、見張るようにしていた視線には、最後まで気づかなかったのだった。

更識の見解

ダリルを撃退した碧は、そのことを覚られることなくVTSルームで繰り広げられている戦いを見学し始める。一夏は二人のデータを取ることに集中しているし、美紀と香澄は碧が部屋に入ってきたことにすら気づいていない。

「失礼します、一夏さんは……」

「虚さん？ 何か用事ですか」

「あつ、はい。至急一夏さんに確認していただきたい案件がございます、忙しいと理解しておりながらも邪魔いたしました」

「いえ、大丈夫です。碧さん、ちよつとお願いします」

データの整理を碧に任せ、一夏は虚が持ってきた案件に目を通す。そして小さく息を吐き、虚が持ってきた報告書を虚に返した。

「これは間違いないく日本政府からの要請なんですね？ 裏で学園長が糸を引いているとかではなく」

「そのような事を、轡木学長がする理由がありませんし。いくら戦力が上がろうが、学長

に「一銭の利益もないんですし」

「裏で取引してそうだけどな、あの爺さん……まあ、最終段階に入ってるから、日本政府にはもう少し待てと返答しておいてください」

「承りました。それから、ここに来る途中で三年のダリル・ケイシーに会いました。VT Sルームを使いたいとの事でしたが、おそらく嘘だと思えます」

虚の報告に、碧は一瞬だけ反応を見せたが、さすがに暗部の人間だけあって、その動揺は一瞬で収まった。だがその一瞬を、一夏は敏く見ていた。

「碧さん、何かご存知なようですね」

「え、ええまあ……虚ちゃんが会う前に、不審な動きをしてるダリルさんを追い返したから」

「例の盗聴器ですか？」

「やはり気づいてましたか。仕掛けたのは自分ではないと否定していましたが、そのまま盗聴器を持つて帰ったことから考えて、スパイは彼女だと思われます」

「アメリカ政府のスパイなのか、それとも軍なのかは分かりませんが、ダリル・ケイシーはアメリカのスパイで間違いなさそうですね」

さすがの一夏も、ダリルが亡国機業の人間であることまでは見抜けていなかった。ナターシャを更識で保護し、そのまま銀の福音も回収した腹いせでもしてゐるのではないかと思つていたのでした。

「情報を盗んだところで、アメリカの技術力では再現出来ないでしょうが、念のためダリル・ケイシーの監視をお願いします。あくまで片手間で、本気で疑つてないように装つてください」

虚に監視を命じ、一夏は再びデータが表示されているPCの前に戻り、そして集中してしまつた。

「相変わらず、研究熱心ですね、一夏さんは」

「虚ちゃん、一夏さんに害をなすような人なら——」

「分かつてます。代々更識家にお仕えてきた家の者として、必ずやご当主様をお守りいたします」

深く一礼をして、虚はVTSルームを後にした。そしてそのタイミングで、美紀が香澄を下したのだつた。

一夏から命じられたが、あくまで本気で疑っている事を覚られないようにと言われているので、虚はダリルを監視しに行ったのではなく、刀奈に相談に行っていた。

「その人、本当にアメリカのスパイなの？ その人が言ってた通り、一夏君に興味があるだけの可能性は？」

「それは無いと思われます。本当にそれだけなら、盗聴器を仕掛けることまでしないと思います。ましてやアメリカ代表候補生の彼女がそんな事をしたと公になれば、アメリカの権威はさらに下がります。興味本位でないなら指示でしかありません」

「それにしてお粗末だったのよね？ もっとまじな盗聴器は無かったのかしら」

「例の銀の福音暴走事件の真相を、一夏さんと篠ノ之博士が解明してしまった所為で、アメリカはイスラエルに多額の賠償金を支払ったばかりですから、国にお金が無くても仕方ないのではないでしょうか」

アメリカは、共同開発を利用し、イスラエルの技術力を盗む計画だったのだが、大天災と更識企業のトップが協力して真相解明に当たったのが想定外の出来事だった。初めからイスラエルの反逆だと説明していた所為で、賠償額を上乗せして支払う羽目になってしまったのだ。

「一夏君と篠ノ之博士を敵に回して、情報戦で勝てるわけないわよね」

「どれだけ隠そうと、あの二人ならどんなシステムでも解析可能ですからね」

「最悪相手国の人間を買収して情報収集させることだって可能でしょうしね。なんていったってI Sの生みの親と育ての親なんだから」

「現在も、日本政府からの要請に応えるべく、一夏さんは新たな専用機開発に勤しんでい

ますからね」

「政府は更識企業に要請してるつもりなんだろうけどね」

あくまでも、専用機は更識企業が造った事にしており、一夏個人で造った事を知っているのは、初めから更識に所属している碧や刀奈たち六人だけだ。後から所属となった、静寐やエイミイ、シャルは知らない事で、世間一般もまた同じである。

「とりあえず一夏さんにはなるべく仕事を回さないようにしなければいけません。ですからお嬢様、今から生徒会室に来ていただきます」

「えー！ せっかく寛いでたのに」

「それに、もうそろそろ黛さんが戻られる頃ですから、話の続きは生徒会室でするしかないですよ」

「それじゃあ、虚ちゃんが淹れてくれた紅茶が飲みたいわ。それが条件よ」

「畏まりました、お嬢様。それでは生徒会室へ向かいましょう」

虚は更識に仕えていると同時に、刀奈の専属でもある。だから給仕などを申し付けられれば、基本的にはそれに応えるのだった。ただし、紅茶を淹れる以外の事は得意ではないので、一夏からなるべくやらないようにと釘を刺されていたのだった。

クーちゃん初めてのおつかい

香澄のデータを手に入れた一夏は、さつそく整備室に向かうつもりだったが、美紀と碧に両腕を押さえつけられ、そのまま部屋に連行された。

「な、何ですかいったい……」

「いくら政府から急かされているとはいえ、一夏さんが体調を崩したら元も子もないです。私たちは一夏さんの指揮の下動くのですから」

「個々で動くことは可能ですが、一夏さんという司令塔を欠くと戦力ダウンは避けられません。戦力アップを目指すのならば、まずは一夏さんを休ませることが先決です」

「いや、だから……」

「お二人の言う通りですよ、一夏さん。何なら私が押さえつけてでも休ませましょうか？」

「お前が言うとお洒落にならないからやめてくれ」

見た目こそ女性だが、鬮鴉はまごうことなきISなのだ。一夏の力では鬮鴉に抵抗する術はない。押さえつけられたら文字通り手も足も出ないのである。

「分かりましたよ……その代わり、美紀には完成した暁にもう一度香澄さんの相手をしてもらうからな」

「それくらいお安い御用ですよ。それで一夏さんが休んでくれるのでしたら」

「碧さんは簪に伝言をお願いします。一人でやると集中して時間を忘れるから、簪にも手伝ってほしい、と」

「畏まりました。簪ちゃんなら喜んでお手伝いしてくれると思いますよ」

IS整備において、一夏の次に優れているのは簪だ。他の人では手伝えない事でも、簪なら手伝える可能性があるのだ。それを碧たちは羨ましく思っているのだが、簡単に手伝えるレベルではないことも自覚しているので、無理に間に入ろうとは思っていない。

「てか、もう大人しく部屋に戻るの、二人とも離してもらえませんかね？」

「ダメです！」

「はい……すみません」

二人に強く出られて、一夏は抵抗を諦めて二人に運ばれることにしたのだった、そんな一夏の事を、闇鴉は面白いものを見るような目で見ていた。

一夏の手伝いを出来ないかと、束は盗撮した——監視衛星の映像から、一夏の考えを推理し問題点を見つけ出そうとしていた。

「束様、コーヒーをお淹れしました」

「ありがと、クーちゃん。それにしても、いつくんがここまで汗だくになるなんて……ちーちゃんとなつちちゃんが興奮する理由が束さんにも理解できるよはあはあ」

「東様、一夏様のお手伝いをするはずだったのでは？　いつも通り興奮してるだけになつていますが」

「おっと、ありがと、クーちゃん。またまた助かったよ。さつすが東さんの娘だね」
「娘だなんて……私はただの出来そこないです」

東の身の回りの世話を担当するクロエ・クロニクルという少女が、恥ずかしそうに東から視線を逸らす。自らを「出来そこない」と言う通り、彼女は自分に自信を持ってないのだ。

「クーちゃんが出来そこないなんじゃなく、あの研究者共が屑だったんだよ。だってクーちゃんは、こんなにも東さんの為に働いてくれるんだから」

「私を救ってくださった東様の為に、私は何だつていたします」

「うんうん、さすがクーちゃんだね。それじゃあ、さつそくお願いがあるんだけど」
「はい、何なりとお申し付けください」

恭しく東の言葉を待つクロエに、東は微笑みを浮かべてお願い事を告げる。

「ちよつとI.S学園まで行って、いつくんに渡してきてほしいものがあるんだ」

「渡してきてほしいもの、とは？」

「東さんの新発明『何処でも快眠くん五号』だよ！」

「……四号までは何処に行つたのでしよう？」

「スクラップにしてそこらへんに捨ててあるよ。まあ、この五号の使い心地は東さんが保証するから、いつくんも気に入ってくれると思うよ」

なんとなく不安を覚えながらも、クロエは東に頼まれたことを忠実に果たすべく、I S 学園に謎の発明品を届けるためにラボから出かけたのだった。

数時間休んだ一夏は、さっそく簪と共に整備室に向かおうとした矢先、正面ゲートに不審者がいるという報告を受けてそちらに向かっていた。

「お疲れ様です。それで、不審な少女とは？」

「はい、こちらです。篠ノ之束の使者を名乗っていますが、一応ご確認をと思ひまして」
「束さんの？ 何も聞いてないですね……」

新しくテストパイロットが増えたとは聞いていた一夏だったが、こちらに来るなどとは一切聞いていなかったのも、とりあえずその使者に会うことにした。

「貴女が束さんの？」

「お初にお目に掛かります、更識一夏様。クロエ・クロニクルと申します」

「……どことなくクラスメイトに似ている雰囲気なのは、そう言う事と考えて宜しいのでしょうか？」

「私に敬語は不要です、一夏様。どうぞ気楽にお話してください」

クロエの見た目から、自分より年上だと判断した一夏は敬語を使ったのだが、クロエがそれは不要な気遣いだと一蹴した。

「そのあたりの洞察力はさすがですね。確かに私は、貴方のクラスメイトである『ラウラ・ボーデヴィツヒ』と同じ出自ですから」

「そうですか……それで、束さんの用事とは？」

「そうでした。これを一夏様にと」

「……これは？」

受け取った品を怪訝そうに見つめる一夏に、クロエは束から聞かされた説明をそのまま一夏に聞かせた。

「不燃ごみの日は昨日だったんだが」

「とりあえず使ってほしいと、束様は仰られておりました」

「俺はあの人と違って、寝る間を惜しんで研究してるわけではないんですけどね」

とりあえず受け取らなければクロエが帰らないと察した一夏は、謎の発明品を手に取り正面ゲートのそばにあるこの部屋から移動することにした。

「束さんに、余計な事をしないでほしいと言っておいてください」

「余計な事、とは？」

「例の武装の研究をしてるでしょうけども、それはもう完成間近なので」

「承りました。東様にご報告しておきます」

恭しく一礼したクロエに、一夏は苦笑いを浮かべながらも何も言わずに整備室へ向かったのだった。

一夏と簪

簪の力を借り、一夏は何とか専用機完成目前までこぎ着けていた。このままのペースで行けば、間違いなく夏休み終了前に専用機は完成すると一夏も簪も確信していた。

「後は動作確認して、パーソナライズとフィッティングだね」

「そのあたりは香澄さんに来てもらわないと出来ないから、明日で良いだろう。今日はもうかなり遅い時間だし、そろそろ織斑姉妹辺りが見回りに来る時間だろうしな」

「もう夏休みも終わりで、ほとんどの生徒が寮に戻ってきてるもんね。規律も元に戻っちゃってるし」

「IS学園は宿題というものが存在しないから助かった。もしあつたら研究に集中できなかつただろうし」

「一夏なら問題なく終わりそうなんだけど」

普段から生徒会などの仕事と並行して研究したりしている一夏だから、例えば宿題があるのが問題なく研究していたのではないかと、簪は思っていた。だが彼女は、とあることを見落としていたのだった。

「いや、どうせ本音がやらなくて、最終日辺りで泣きついてくるだろう？ だったら毎日ちよつとずつでもやらした方が良くと考えて、監視してただろうから」

「ああ……去年までは確かにそんな感じだったね」

「俺より十分時間があつたはずなのに、なんであいつは宿題をしてこなかったのか、いまだに分からん」

「それはほら、本音だから」

簪の一言に、一夏は納得してしまった。おそらく更識所属の人間なら、その一言で納得できるくらい、本音の事を理解しているのだろう。

「そう言えばあいつら、宿題やったのか？」

「えっ、誰の事？」

「学外の知り合いというか、悪友だな。前に更識のビルに置いてあるVTSをゲームにした筐体で遊んだって話した鈴以外の二人だ」

「普通の高校生だもんね……多分宿題あるよね」

「まあ、溜め込むほど馬鹿じゃないと願うよ」

あえて自分から確認するほど、一夏は弾と数馬の事を心配していない。そもそも心配

したところで、どうすることも出来ないのだから、無駄な事はなるべくしないと決めて
いる一夏らしい反応だったのだろう。

「それじゃあ、今日はここまでだね」

「そうだな。簪のお陰で大分楽が出来た。ありがとう」

「良いよ、お礼なんて。一夏一人でやらせると、また寝ない事が多くなりそうだったし」
「だから、寝てたつてのに……」

「二時間半はお昼寝とかそんな感じだよ！ ましてや一夏は色々忙しいんだから、
ちゃんと睡眠はとらなきゃダメなんだからね！」

珍しく説教口調で一夏に詰め寄る簪に、一夏は素直に頭を下げる。誕生日の関係上、
一夏が兄と言う事になっているが、今の状況は完全に簪が姉で、一夏が弟だ。

「そう言えば、篠ノ之博士がくれたあの発明品は使ってるの？」

「ん？ 織斑姉妹にあげた。なんだか喜んでたが、俺が作ったわけじゃないんだがな」

「一夏、その事ちゃんと言ったの？」

「……言っていないな。まあ問題ないだろ？」

織斑姉妹は、一夏からの贈り物だと思つて喜んだのであつて、まさか束からもらつた

不用品を自分たちに押し付けてきたなどとは思ってないのだろう。そのことを理解してなお、一夏は説明する必要はないと言い張る。

「別にいいけど、後でうるさいかもよ？」

「あの二人がうるさいのは何時もの事だろ」

「そんなこと、あの二人を前にして言えるのは一夏だけだって……マドカも言えないみたいだし」

「とにかく、今日はもう部屋に戻ろう。危険はないだろうが、部屋まで送っていく」

「ありがとう。でも、危険ならあると思うよ。死角からお姉ちゃんが飛び出してきたり、部屋のドアを開けたらお姉ちゃんが飛び出てきたり、シャワーを浴びようと思って扉を開けると、お姉ちゃんが——」

「簪の中の刀奈さん、忙しいな……」

妹を溺愛する姉と言う点では、刀奈は織斑姉妹と大差ないのではないかと一夏は考えてしまった。それでも、迷惑度で言えば織斑姉妹の方が数段上だと思っているが。

「一夏だって、お姉ちゃんの熱烈歓迎は経験したことあるでしょ？」

「まあな。危うくトラウマが発動しそうになったから、あれ以降刀奈さんが不意に飛びついてくることはなくなったが」

「さすがにお姉ちゃんも反省したからね」

幼少期、まだ完全に慣れていない一夏に対し、刀奈は廊下の曲がり角を利用したドッキリを一夏に仕掛けた。普通なら少し驚いて終わりのはずだったが、極端に人間を怖がっていた一夏にとって、ちよつとしたドッキリでも恐怖の対象だったのだ。

「屋敷中の大人が駆けつけてきたもんね」

「大声で泣いた俺も悪かったが、あれは刀奈さんの所為だと今でも思ってるんだが」

それ以降、刀奈は一夏に対する過剰なドッキリはしなくなっている。それでもまあ、過剰なスキンシップは狙っていると感じてはいるようだが。

「隙あらば一緒にシャワーを浴びようとすからなあ……寮に入ってからは無いが」

「だって一夏は部屋付きのシャワーだけでしょ？ 大浴場使えないんだし」

「山田先生と五月七日先生が使えるように調整してくれると言っていたが、俺が断ったからな」

「一夏、お風呂嫌いだもんね」

「身体の汚れを落とすだけなら、シャワーで事足りるからな。長時間湯船に入ってる暇があるなら、一件でも多くの案件を処理したい」

「色々と立場があるから仕方ないけど、高校生らしくない考えだよね」
「簪はすべての事情を知ってるだろ。仕方ないんだ」

そんな会話をしながら、一夏は簪を部屋まで送り届け、自分も部屋に戻りベッドに倒れ込んだのだった。シャワーは明日の朝でいいやと、そんなことを考えながら、そのままの格好で眠りに就いた。

専用機の名前

夏休みも残り二日となったこの日、香澄は朝から一夏と簪と呼ばれ整備室へ来ていた。理由はなんとなく分かってはいたが、いざそれを目の前にすると、それを現実として受け止めるのに苦労してしまったようだ。

「えっと……これって……」

「とりあえずは完成した香澄さんの専用機です。あとは微調整とパーソナライズ、フィッティングを済ませれば、完全に香澄さんの専用機となります」

「一夏がこだわった所為で、夏休みギリギリになっちゃったけどね」

「こだわったのは簪だって同じだろ」

製造者二人がどこにこだわったのか、香澄には分からない。だが自分の為にそれだけ時間を割いてくれたということだけは、ちゃんと理解出来ていた。

「本当に、ありがとうございます。私の為に貴重な時間を……」

「何言ってるんですか。香澄さんにはこれから存分に動いてもらうんですから、そのための投資だと思えば問題ないですよ」

「一夏はほとんど前線に出ないもんね」

「俺が出たつて邪魔になるだけだろ？ 刀奈さんとか虚さんとか、実力者と行動しても足を引っ張るだけだし」

「一夏さんで足を引っ張る存在なら、私なんて戦力にすらなりませんよ……」

弱気になる香澄に、一夏は苦笑いを浮かべて彼女の肩に手を置いた。

「香澄さんはこれからまだまだ成長出来る可能性を秘めています。即戦力とは正直思っ
てませんが、中長期的な目で見れば、香澄さんは間違いなく更識の力になってくれる存
在です。俺も手伝いますので、ゆっくり成長していきましょう」

ここであえて正直に言うのが、一夏の人望の厚さなのかもしれない。下手に嘘を言っ
て、余計な心配を掛けるよりも、事実を伝え、現状を理解させ、どう動けばいいのかを
伝える。それがたった数年で更識をIS企業ナンバーワンに押し上げた一夏のカリスマ
性なのだ。

「とりあえずは、今の段階でどれだけ動かせるかやってみましょう。簪、データを頼む」

「一夏が相手するの？」

「まだフィッティングもパーソナライズもしていない状態で、簪の相手はキツイだろ？」

一夏のセリフに、香澄が全力で同意した。本心では一夏の相手も十分キツイと思っ
ているのだが、それ以上に簪の相手はキツイのだ。

「本当は本音か静寐に頼もうと思つてたんだが、さすがにこの時間に叩き起こすのは忍
びな〜」

「私は良いんだ……」

「だって、香澄は当事者でしょ？ 本音は兎も角、静寐は更識本家に連なる人じゃない
し」

「そういうわけで、俺が相手だが勘弁してくださいね」

「勘弁願いたいのは私の方ですよ……」

一夏の背後で、闇鴉がやる気満々の目を向けてきたので、香澄は今すぐ逃げ出したい
衝動に駆られた。だがここで逃げてても、結局は一夏以上と思われる相手と戦うのだか
ら、ここは覚悟を決めて試運転をしようと思ひ直した。

「えつと、この機体の名前は？」

「久延くえびこ毘古だ。何でも知っている、全てを見てきたとされる神の名前だ」

「じゃあ、あの未来予知みたいな武装は、この機体の名前から考えたの？」

「それだけじゃないけどな。香澄さんの特性もあるし、それならいつそのことって感じ
で考えた」

「一夏ってノリで行動する時があるよね」

「スサノオだって、結構ノリで考えたんだが」

エイミイの専用機であるスサノオも、一夏が面白そうと思ったから造られた部分が多
分に含まれている。それでも、十分な実力を発揮するあたり、一夏もまた天才なのだろ
う。そう香澄は思うことにしたのだった。

久延毘古を使つての一夏との模擬戦は、手数が多さで一夏が辛うじて勝つた。だがVTSで練習していたとはいえ、香澄の操縦技術は既に高いものだ。一夏には感じられていた。

「使つてみた感想は？」

「あの未来予知機能が、VTSとは比べ物にならないくらい使いやすいです。VTSだと私一人で情報を処理しなければいけなかつたんですけど、久延毘古に搭載して使うと、I Sが情報処理を手伝つてくれるような感じがするんです」

「当然だよ。い——更識が造る専用機は、それぞれが明確に意思を持つて操縦者のサポートをしてくれるんだから」

一夏が、と言いかけて、簪は咄嗟に更識はと言ひ直す。模擬戦で疲れている香澄に、僅かな違いを指摘するだけの思考力は残つていながつたので、簪はホツと胸をなでおろし説明を続けた。

「恐らくその久延毘古も、フィッティングを済ませれば話しかけてくれると思うよ」

「そうなんですな。ところで、一夏さんは何処に？」

「一夏なら、さつき電話がかかってきてアリーナの外に行つたよ。それじゃあ、最終調整に入ろうか。香澄は何か違和感を覚えなかつた？」

「今のままで十分ですけど、強いてあげればちよつと動きが早すぎます。もう少し遅い方がベストだと感じました」

「今の状態に合わせるならそうかもね。でも、一夏は香澄が成長すると見越して今の設定にしてるから、これがベストだと感じられるようになるはずだよ」

「一夏さんの期待値が高いのは分かりましたけど、買い被り過ぎじゃないですかね？」

イマイチ自分も実力に自信が持てない香澄が、自虐的なコメントをする。そのコメントを受け、簪が少し羨ましそうな目を香澄に向けた。

「一夏が期待するなんて、めつたにない事なんだから、もう少し自信を持った方が良いでしょう。私や美紀だって、一夏に期待されたことなんてないんだから」

「そうなんですか？」

「最初から、出来て当たり前だと思われてる部分があるしね」

香澄にとって、簪の状況が羨ましいのと同じく、簪にとって、一夏に期待されている

香澄の状況は羨ましいものなのだ。そのことを伝え、簪は先ほどの模擬戦で採ったデータ
タを反映させ、久延毘古の最終調整に入っただった。

久延毘古、完成

簀が最終調整を済ませたのと同じタイミングで、一夏が整備室へ戻って来た。だがその表情は、普段より険しく、また厳しいものだった。

「一夏、何かあったの？」

「いや、楯無さんから電話だったんだが、消えた倉持技研の技術者の大半は亡国機業に流れて行ったとみて間違いないらしい」

「それって結構面倒な展開だよな？ 日本政府の情報がある程度知れる立場だった倉持が、ほぼ丸ごと亡国機業に行っちゃったんだから」

「情報だけなら大したこと無いだろう。倉持が知れる情報なら、亡国機業だって自力で知ることが出来ただろうし」

日本政府御用達となっているのは更識であり、倉持技研が知れる日本の情報は、ほぼ開示されているものばかりであり、極秘情報などは知る術がない。

「とりあえず、最終調整は済んだんだろ？ だったらさっさとフィッティングとパーソナライズを済ませてしまおうか。そろそろ静寐や美紀も起きてくるころだろうし」

「あれ？ 一夏さん、何故美紀さんの名前まで……」

「訓練は違う相手とした方が為になりますからね」

「静寂は一夏と同じくらいだけど、美紀はそれ以上だしね。いい経験になると思うよ」

二人の笑みに、香澄は背筋に冷たい汗を掻いていた。普段の笑みではなく、底冷えのするような笑みを見たのは初めてだった香澄は、この二人は何が目的なのかと首を傾げた。考えても分からなかったのも、直接聞くことにしたのだった。

「えつと……その笑みは何を期待してるの？」

「久延毘古を使ったデータを元に、新しい開発が出来ないかと思つてな」

「日本政府の言いなりで造つたと思われたら、更識のイメージが下がるしね。何かしらの新商品を開発しないと気が済まないんだよ」

「ですが、久延毘古に使われている武装にだって、新しいのはありますよね？」

「ほぼ香澄さん専用に開発したものですから、一般には使えません。俺や刀奈さんでも無理です」

「まあ、完全個人設定だと言うだけでも、十分宣伝にはなるんだけどね」

更識の設計・開発を担当している一夏と、経理を担当している簪は、ただ造ればいい

という考えではなく、そこからどう利益を生み出すかまで考えなければならぬのだ。久延毘古に搭載されている武装は、ほぼすべてが香澄専用で造られており、そこだけ見れば今回の利益はほぼゼロだ。だが久延毘古のデータを徹底的に解析し、それをゲームにでも反映して人気が出れば、それは利益につながるのだ。

「なんだか更識企業って、色々大変なんですね。今まで内側を知る機会なんてなかったので、ちよつと驚きですよ」

「まあ次期当主候補と、前当主の娘だからね。大変な事はいっぱいあるよ」

「と、そんなこと話してる間にフィッティングとパーソナライズ終了。これで久延毘古は完全に香澄さんの専用機になりました」

会話をしながらも、一夏は正確に作業を進めていた。香澄はその能力を羨ましく思ったが、これは自分が真似して出来るものではないと理解し、口には出さなかった。

一夏が電話で静寂と美紀を呼び出し、いよいよ専用機のお披露目となる。すでに搭乗し一夏と戦ったのだが、あれはあくまでも最終調整の為に必要だったからだ。専用機としては、今が初めての搭乗となる。

「緊張してきたなあ……」

『大丈夫です。貴女は必ず成功します』

「何でそんなことを言い切れるんですか？」

『私は全てを知っていますから』

「凄いなあ……一夏さんがそういった神様だとは言っていたけど、まさかISもそうだななんて」

『久延毘古の名を冠するのですから、それくらいは出来ないとダメだと一夏様は思われていたそうです』

製造時に知った一夏の苦悩を、久延毘古はあっさり香澄にバラす。本人がいらないから言えた事だろうし、本人がいたらさすがの久延毘古も言わなかつただろう。何せ、言えれば怒られる未来が見えているのだから。

『一夏様はご説明しませんでした、あの未来予知の武装の説明をいたします』

「説明って、あれは久延毘古の特性じゃないんですか？」

『いいえ、違います。あれは貴女自身の特性である「相手の本音を聞く能力」が大きく関係してくる武装です。もちろん私もフオローしますが、基本的には貴女が使い、貴女が未来を見る事が主の武装です。使い方は問題ないですよね？』

「VTSで散々テストしたし、さっきも久延毘古に搭載された状態で使いました。でも、久延毘古に搭載されていた方が使いやすかったのは何故でしょう？」

自分の特性が関係しているのなら、VTSだろうが実戦だろうが関係ないのではないかと香澄は疑問に思った。その質問が来るのが分かつていたかのように、久延毘古はすぐに答えを返した。

『あくまでも貴女の特性が重要とはいえ、私の特性が関係ないわけではないのです。全てを見通す私の能力もまた、あの武装の完成に必要なだったのですよ。だから先ほど貴女が使いやすいと感じたのは、私の特性を無意識に発動させていたからでしょう』

「そうだったんですね。一夏さんは色々考えていると言っていました。やはり凄いですね」

『あのお方は、背負うものが大きすぎますからね。別の事を考えて気を紛らわせなければ、今頃潰れていてもおかしくなかったでしょう』

「それってどういう……」

香澄が質問しようとしたタイミングで、ピットに一夏がやってきて久延毘古は口を閉じてしまった。本人が知られたくない事を言うほど、久延毘古も無神経ではないのだ。

「とりあえず日本政府の人間が集まったから、お披露目と行こうか。相手は静寐だが、後で美紀とも戦ってもらうからな」

「一夏さんの口調が研究者モードだ……これは何を言っても意味がなさそうです」

香澄は諦めの気持ちで頷き、そしてピットからアリーナへと飛び立ったのだった。

お披露目の模擬戦

日本政府からの要請という名目で専用機を造つたため、完成したらその報告とお披露目をしなければならぬ。そのためにI S学園に日本政府の要人を招いたのだが、一夏としてはかなり気に入らない状況であつた。

「何で他企業の関係者まで来てるんですか？ 招待は刀奈さんがしたんですよね？」

「私も分からないわよ。政府のおじさんたちが勝手に呼んじやったらしいのよ」

「来賓以外はI S学園に入ることはままならないはずですが、何故あそこにいるのでしょうか」

「それは……議員バッジの力じゃないの？ いくらI S学園が関係者以外立ち入り禁止だと言つても、あのバッジの力はそれを凌駕するものだから」

「たく……まあ、そこいらの企業の技術者に、更識の技術を盗めるとは思いませんが、一応各自警戒はしておいてください。不審な動きをした時点で、拘束しても構いませんので」

ただでさえ亡国機業の事でピリピリしている一夏に、余計な刺激を与えたことは完全

に日本政府の失敗なのだが、幸か不幸かそのことを日本政府の人間は気づきすらしないのだった。

「美紀を対戦相手にしたのは失敗だったな。諜報活動で本音は役に立たないし」

「むう、いっちょ失礼だよ」

「じゃあ本音に、相手に気づかれることなく情報を仕入れる事が出来るっていうんだな？」

「出来るわけないよ。そもそも私はここでいっちょの警護をしなきゃいけないんだから」

「はあ……刀奈さん、虚さんは要人の監視を、碧さんと簪はアリーナの監視をお願いします。アリーナでも不審な動きを見せたものは、すぐに拘束して構いませんので」

「二夏君、織斑姉妹に協力は仰げなかったの？」

最強の切り札になるであろう織斑姉妹の協力が無い事に、刀奈は疑問を抱いていた。しかしその疑問は、モニターに映った要人たちの姿の中に織斑姉妹の姿を見つけてほぼ解決した。

「見ての通り、あれでも元日本代表ですからね。碧さんを取られないように、あの二人には日本政府の人間の相手を任せました」

「なるほど。確かに織斑姉妹なら、日本政府の人たちにも顔が利きますね」

「下手な事をして、I S学園の——いえ、更識の不利益になることはしないようにと釘を刺しておいたので、おそらくこの模擬戦の間くらいは大人しくしてくれるでしょうね」

信頼度が高いのか低いのか分かりにくい一夏のコメントに、四人は苦笑いを浮かべる。だがそれも一瞬だけで、すぐに表情を引き締めた。

「それでは各自、持ち場についてください。山田先生、模擬戦の進行はお願いします」
「分かりました。それではこれより、更識企業の新作専用機お披露目模擬戦を開始します」

一夏の合図で、真耶は要人たちに話しかけるようなアナウンスを始めた。一夏はモニター越しに各企業の技術者たちに目を向け、すぐに視線を逸らしたのだった。

大事になった初陣に、香澄は緊張を隠せずしていた。だがプライベート・チャンネルで夏に励まされたお陰で、今はある程度落ち着いていた。

『それでは、両選手の入場です』

謎の合図とともに、香澄はピットからアリーナへと飛び出る。同じタイミングで向こう側のピットから美紀も現れ、生徒たちから歓声が上がった。

「よろしくね、香澄さん」

「は、はい！　こちらこそよろしくお願いします、美紀さん」

『両者、開始位置に移動してください。開始位置に到着したのを確認しましたらカウンタを始めますので、それまでは動かないようにお願いします』

真耶からの指示に、美紀と香澄は同時に頷き、開始位置に移動した。アリーナからは日本政府の要人や他企業の技術者の姿がよく見えていた。

『美紀、香澄さん、一応お披露目という形を取ったが、あまり性能を見せつけるのは好ましくない。テキトーにやり過ぎせるのならそれが一番なのだが、おそらくそれも出来ないだろうな。だから適度に手を抜いて、見せすぎないように戦ってもらいたい』

『了解しました、一夏さん。ところで、何故あんなに人が来てるのでしょうか？』

『それは私も気になりました。あれだけの人数を割く必要があるのでしょうか？』

『香澄さんは自覚が足りませんよ。貴女は全世界が羨むと言われている、更識企業がこれから全て貴女の為に造った専用機の所有者なのですから。その貴女の実力を生で見たいと思う人が大勢いてもおかしくありません』

『うう……緊張してきました』

プライベート・チャネルを使つての会話を打ち切ったのは、真耶がカウントダウンに入ったからだった。さすがに会話しながら戦う技術を、香澄は持ち合わせていないのだ。

『ゼロ！ 模擬戦を開始してください』

真耶の合図と共に、まずは美紀が仕掛けた。金九尾が繰り出す銃弾を、香澄は例の未来予知機能を使わずに躲した。それだけの実力と判断力を、あの織斑姉妹のメニューで身につけていたのだ。

「やるね。でも！」

美紀も代表候補生としての意地があるのか、躲されたのを見てすぐに別の手段で攻撃に移った。

『来ます。右斜めからフェイント、本命は下腹部への斬撃です』

「視えてるから大丈夫！　でも、躲したら隙が出来ちゃう」

香澄は美紀の攻撃を躲すのではなく、同じように斬撃を繰り出して相殺することにした。

「やっぱり視られてるのはキツイですね……なら！」

「っ!？」

一夏が言っていた未来予知機能の弱点、それは例え未来が視えていても、躲されない

程の攻撃を繰り出されることだった。

『危険です！ 回避に専念してください』

「分かってる！ 視てる余裕もないし、受け止められるなんてうぬぼれてない」

持てるスピードをフルに活用して、香澄は美紀の攻撃から逃げることに専念することにした。そんな二人の戦いを、モニター越しに見ていた一夏が満足そうに頷いている事を、この二人は知る由もなかったのだった。

美紀の本気

一夏に命じられたように、簪と碧はアリーナで不審な動きをしている生徒がいなかったかを見張っていた。一夏は個人名を出さなかったが、彼の本心は「ダリル・ケイシーの見張り」を二人に頼んだのだと、簪も碧も思っていた。もちろん、ご当主様がアリーナの見張りと言った以上、個人だけを監視しているわけにはいかないのだ。

「簪ちゃん、私は一応見回ってくるから、ここはお願いね」

「分かりました。観戦してるフリをしながら監視しておきます」

アリーナを見回る以上、生徒の簪より教師の碧の方が不審がられない。また、アリーナで観戦するなら、教師の碧より生徒の簪の方が不審がられない。この二つの点から見回りは碧、監視は簪が担当することになった。

「何かあったらプライベート・チャネルで伝えてちょうだい。回線はすぐに開けるわよね」

「もちろんです。ただ、先輩も今回は大人しくしてるのではないでしょう。何かするにしても、準備期間が短すぎたと思いますし」

「一夏さんが個人名を差して言わなかったのは、彼も同じ考えだからでしょうね。でも、彼女が怪しいのには違いないのだから、念には念を入れて見張らなきゃ」

碧の言葉に頷き、簪は手近の席に腰を下ろし、アリーナとダリルの両方が見えるように顔を固定した。

「それにしても、さつきから香澄は回避に専念してるようで、反撃に出ていない。それだけ美紀が押してるんでしようけども、その攻撃を一発も当たることなく逃がっている香澄は、かなりの実力をつけたって事なのかな。それとも、一夏が造った久延毘古が美紀の実力を凌駕しているのかな」

簪の興味は、美紀の攻撃を捌いている香澄に向けられつつあったが、視界の端ではしっかりとダリルを捉えているのだ。簪も暗部組織の一員、それくらいはしっかりとやっつてのけるだけの技量は持っているのだ。

「あつ、香澄が攻撃に出た。でも、やっぱり美紀には届かないか」

ペアを組んでいるから分かるのだが、香澄の実力じゃ美紀に一太刀浴びせられるかどうかというくらいだろうと、簪は思っていた。それだけ美紀の実力は高く、一対一で戦

えば、自分も勝てるかどうか分からないくらいだろうと思っている。素直に負けを認められるのは、碧、刀奈、虚を除けば美紀だけなのだ。

「三人は年上だし、碧さんは世界最強の称号を持つている、お姉ちゃんは現日本代表で、二代目世界最強、虚さんは一夏が認めた更識の代表操縦者。この三人は織斑姉妹と並んでも遜色ない実力を持っている、負けて当たり前だもんね。でも美紀は違う。私と同い年で、互いに切磋琢磨してきた相手。負ければ悔しいけど、負けても素直に受け入れられる。その代わり、本音に負けたらかなり情けないけどね」

訓練もまともにしない本音だが、野生の勘と土竜の性能でたまに簪や美紀に勝てることがあるのだが、その時は簪も美紀もかなり悔しそうな反応を見せる。そして次は負けないと意気込んで互いに訓練を重ねるのだった。

「あつちの来賓には動きはなさそうだよ。自分たちで注文しておいたんだから、更識がこれ以上力をつけても文句は言えないでしょうし」

そんなことを考えながら、簪は再び監視に戻ったのだった。

幾度となく攻撃を繰り返しても、悉く躲かれてしまう。美紀は焦りこそはしていないが、次第に焦れてきていた。

「さすがに一夏さんが設計して製造しただけの事がありますね。まさかここまで全撃躲されるとは」

刀剣での攻撃だけではなく、銃火器での攻撃も捌かれているので、美紀はいよいよ攻撃の手段が尽きてきていたのだ。

「何か無いの、金九尾」

『そんなこと言われても、一夏さんが作った未来予知をどうにかしないと、向こうの体力が尽きるまで躲されるって』

「(体力……前までだったら何とかなかったかもしれないけど、織斑姉妹の無茶なカリキュラムの所為で、香澄もかなり体力がついてるしなあ……こうなったら出たとこ勝負。カウンターだけを注意して突っ込む)」

この模擬戦は、あくまで久延毘古のお披露目の意味に重きを置いているので、勝ち負けはあまり重要ではない。だが同級生として、クラスメイトとして、同じ更識所属のパイロットとして、美紀は香澄に負けたくないと思っていた。

「(専用機の所有時間では、圧倒的に私の方が長い。でも、香澄さんにそんな常識は通用しない。何せ心が読めて、未来まで見える武装を持っているんだから。それに対抗するためには、無心で挑み、今まで以上の速度で仕掛ける)」

いったん距離を取り、美紀は一つ息を吐いた。自分が纏う空気が変わったと、何人か

の人間が気づいた事も今の彼女には理解出来ていた。

「（一夏さんに教えてもらった、最終奥義）」

一夏は篠ノ之流を修めてはいないが、姉の動きからその極意を読み取っていた。そしてその極意を、美紀に伝えていたのだった。

『そこまで！ 勝者・四月一日美紀！』

無心の一振りが久延毘古を捉え、その一撃が決定打となった。あくまでお披露目であり、どちらかの攻撃が当たった時点で終了と決められていたのだ。

「やっぱり強いですね、美紀さんは」

「香澄さんも。当てるのに苦労したわよ。まさかこれほどの大勢の前で最終奥義を出す羽目になるなんて思ってたわ」

専用機を纏ったまま互いに手を差し出し、空中で握手を交わす二人に、アリーナから割れんばかりの歓声が贈られたのだった。

「なんだか恥ずかしいですね」

「でも、それだけみんなが満足してくれる戦いが出来たって事ですよ。私も色々戦っ

てきましたけど、ここまでの歓声は初めてです」

美紀の感想に、香澄が恥ずかしそうに視線を逸らした。自分ではそのような戦いをしてたつもりは無いので、美紀の中での最高の評価を貰って照れたのであった。それが分からない美紀は、何故香澄が照れているのかと小首を傾げながら考えていたのだった。

織斑姉妹の怒り

対戦を終えた美紀がピットに戻ると、そこには一夏が待っていた。

「お疲れさま。しかし美紀が本気になるとはな」

一夏には、この模擬戦はあくまでお披露目、本気を出す必要は無いと言われていたのだが、美紀は途中から完全に本気を出していた。

「さすがにあそこまで躲されると本気も出したくなるか？」

「そうですね。初めは避けられても仕方ないと思っていたんですけど、途中からどうにもイライラしてきまして……それが狙いだったんですかね？」

「美紀がイライラしたのは、別に俺の狙いじゃないぞ。美紀が実力者で、香澄さんに負けたくないと思いだしたからイライラして、本気を出したんだろうさ。それは同時に、美紀が香澄さんの実力を認めたということにもなるだろうから、彼女の自信につながるだろうな」

「本当に強かったよ。体力もかなりついてたし、操縦技術も。もしかしたら本音よりも上手いかもしれないです」

「比較対象が本音じゃ、嬉しくないだろうな……殆ど野生の勘で操縦してる本音じゃ」
「それもそうですね」

一夏の言い方が可笑しかったのか、美紀はクスクスと笑った。一夏は美紀を労った後、すぐにピットから出て行こうとしたのだが、美紀がそれを呼び止めた。

「怪しい人物はいたのでしょうか」

「見張りからは何も。だが、妙に久延毘古に興味を持っている人間は数人いたそう。公式文書で、今度は鶴鶴も見せてほしいとか言ってきた」

「静麻さんの専用機ですか？　そう言えばお披露目はされていませんものね」

「この規模のお披露目が、早々出来るわけもないだろうに……大体、更識に送ってくるならまだしも、なんでIS学園生徒会に送ってくるんだか」

「このお披露目を仕切ったのが生徒会だからじゃないですか？　IS学園側に申請しても、どうせ生徒会に回されるだろうと思ったとか」

美紀の答えに、一夏は肩を落としたため息を吐いた。

「実にありえそうな話だな……てか、久延毘古もだが、鶴鶴も学園のものじゃなく更識のものなんだが……」

「その更識の所要メンバーの大半が学園に所属してるからですよ。当主はお父さんですけど、一夏さんが実質的な当主だと思われてるんじゃないですかね」

「まさか……楯無さんだつて立派に働いているんだ。冗談でもそんなことを思う輩はいないと思うぞ」

事実、一夏が本当の当主だという事を知っているから言える冗談なのだが、一夏にはそれが冗談に聞こえなかったのだ。ただでさえ更識への依頼という事で生徒会に書類が送られてくることがしばしばあるのだ。バレていないにしても美紀が言ったように思ってる輩が少なからずいるのかもしれないのだ。

「とにかく、凄い汗掻いてるからシャワー浴びた方が良いぞ。さすがの美紀も香澄さんには苦戦したか。これは面白いな……今度は簪か、虚さん、刀奈さんの誰かと戦つてもらつて……」

「一夏さん、ブツブツ言つてると怖いですよ」

「ああ、すまない……とにかく、さつきみたいな冗談はあまり言わない方が良いぞ。楯無さんが悲しむから」

一夏はそれだけ言い残して、今度こそピットから出て行つた。残つた美紀はアリーナ

にあるシャワー室を目指そうと、一夏とは別の方向に移動したのだった。

織斑姉妹は今、日本政府の要人たちに囲まれていた。

「さすがは更識の専用機ですな。あれなら何時攻められても問題は無さそうだ」
「全くです。IS学園の指導力と、更識企業の技術力があれば、犯罪組織などおそるるに

足らず」

「我々の指導力は兎も角、何故日本政府側で戦力を調達しないんだ」

「何でもかんでもわたしたちに任されても困るのだが。学生たちもそうだが、わたしたちや更識の方に報酬があるわけでもないのに」

千夏が言うように、戦力アップを急務としたのは日本政府であり、その戦力確保の為に動いたのはIS学園と更識企業の二つだ。もちろん、報酬など何処からも出ていない。

「政府の要求に応えるのはそちらの義務ですからな。報酬など騒がれてもそんな金はどこにもない」

「ならあまりIS学園の事に干渉しないでいただきたいものだ。ここは何処の国家にも属さないという決まりがありますので、日本政府の人間が頻繁に干渉していることが知られれば、他国の人間たちも過干渉したがりますからな。そうなった時私たちがどう行動するか分かりませんし、その責任は日本政府に問うように公言します」

「それが嫌なのでしたら、今後これ以上IS学園に過干渉するのは止めてもらえますか？ わたしたちだけでなく、生徒会の面々もそう思っていますので」

そこで千夏は、扉に視線を向けた。その先には刀奈と虚がいるのだが、あえてずっと気づかないフリをしていたのだった。

「その先に誰がいるのか？」

「いえ、こちらの方向に生徒会室があるものでして」

「とにかく、これ以上干渉してくるのなら、I S学園名義と更識企業名義で抗議文書を送らざるを得なくなりますので。そもそも更識が用意した専用機は、日本所属ではなく更識所属だ。あんたたちに見せる義務はないと思うがな」

「更識企業は日本の企業だ！ そこに依頼したんだから我々には見る権利があるだろ！」

「政府の手柄みたいに言ってるのが気に食わないだけだ。コアから全て自社で用意している更識には、日本政府など関係ないと言っているだけだ」

千冬の言葉に、日本政府の要人たちがたじろぐ。言ってることはもつともだし、自分たちにはそのような力がない事も自覚しているので、要人たちはすすごとI S学園から退散を決め込んだのだった。

突然の来訪者

思いのほか早く撤退を決め込んだ日本政府の要人たちを見て、一夏は首を傾げてた。彼らのしつこきは身に染みて知っているので、これほど早く退散するなど、一夏は思っていた。いかなかった。

「何かあったのか？」

「織斑姉妹が追い払ったのよ。それも、かなり怒ってたっぽいから、これからはそれほど干渉してくることも無いでしょうね」

「刀奈さん。そうでしたか、あの人たちもたまには役に立つんですね」

「中々辛辣ですね、一夏さんは」

「虚さんも。お疲れ様でした」

日本政府の要人たちの監視から戻って来た刀奈と虚を労い、一夏は送られてきた久延毘古のデータを開いた。

「香澄さんとの相性はバツチリのようだな。だがまだ慣れてないのか、動きがぎこちない部分が見られる……これは訓練して補うしかないし、連動は問題なさそうだが、回避

重視にした所為か攻撃力が低い。まあこれは想定内の結果だが、香澄さんの性格では司令塔は任せられそうにないし……」

「一夏君、研究もいいけど、少し休んだ方が良いわよ？ 久延毘古の設計から製造、それ

からテストにお披露目会と色々立て込んで、まともに休んでないんだから」

「……そうですね。とりあえず一段落しましたし、明日の夏休み最終日はゆつくりと――」

「いっちょー！ アリーナになんかニンジンみたいなものが降って来た！」

一夏はその犯人の顔を頭に浮かべ、思いっきりため息を吐いたのだった。

突如現れた謎のニンジンに、更識関係者及び織斑姉妹以外の面々は慌てた様子だった。モニター室で真耶が慌てていたが、碧がすぐにやってきて心配ないと告げると、ホツとした様子でアリーナに出てきた。

「ところで小鳥遊先輩、これっていったい何なんでしょう？」

「恐らく、一夏さんや織斑姉妹への来客なんでしょうけどね……」

碧の予想は正しく、織斑姉妹と一夏がアリーナに到着すると、その物体の一部が開き、中から人が出てきた。

「やあやあちーちゃんになっちゃん、それにいつくん！ 天才東さんのお出ましたよ」
「もう少し大人しく登場できないのか、お前は」

「アリーナの結界を貫き、地面に穴まで開けて！ 誰が直すと思ってるんだ！」

「少なくとも貴女方ではないですね。それで、何か用なんですよね、東さん」

「たまには顔を見せておかないと忘れられちゃうかなって思った——ってのは冗談だから、三人ともその殺気はしまつてくれないかな」

冗談を言える状況ではないと覚った束は、とりあえず咳払いをして仕切り直しを図った。

「ごほん、実はね、亡国機業と思われる人間がIS学園に侵入を試みているという情報がキャッチしたから、これはすぐにでも三人に知らせなくては！　って思ってたね。急いで飛んできたんだよ〜」

「電話でよかったでしょうに、織斑姉妹ではありませんが、この修理費用は束さんの個人資産から払ってくださいよ」

「いっくんだってお金持ちじゃない！　何で束さんが——」

「貴女が壊したからですよ。それとも、この仕業は貴女が原因ではないとでもいうのですか？」

ニツコリと笑顔を浮かべ詰め寄る一夏に、束も興奮より先に震えが襲った。いくら一夏限定の変態といえども、この笑顔で興奮することは出来なかったのだ。

「わ、分かったよう……明日には修復用のロボを派遣して傷一つなく直すから、その笑顔は止めてもらいたいかな〜、なんて」

「束さんの発明品ですか……どうにも不安でしかないのですが」

「そんなことないよ。あの快眠くん五号でもわかるように、東さんの発明は問題ないよー！」

「何っ!? あれは一夏の発明ではなく貴様の発明だったのか!」

「専用機の調整で忙しかった俺が、あんなの作る暇あるわけないって分からなかったですか?」

本当は製造で忙しかったのだが、ここにはその他大勢の耳があることを一夏は忘れていなかったなので、あえて調整という単語を使った。その事で三人も他者がこの場にいることを思い出したのだった。

「それで、亡国機業の人間が侵入を試みようとしているということですが、それは確かですか?」

「誰が手引きをしてる、とかは分からないし、何時決行するのも分からないけど、それだけは確かだよ。この東さんでも、亡国機業の妨害電波を全てクリアにして会話を盗聴するのは難しいくてさー」

「盗撮、盗聴、不法侵入。随分と立派な犯罪者になったな東」

「公共物破損も含めれば十分に有罪判決が下るだろう。さあ、大人しくわたしたちに捕まれ」

「それくらい大目に見てよく。私とちーちゃん・なつちゃんの仲じゃないか」

本気で逃げ惑う束を、本気で追いかける織斑姉妹。それでも三人が遊んでいるように見える一夏は、三人の事を視界から外して、亡国機業の事を考えることにした。

「刀奈さん、虚さん。束さんの言葉の信憑性は高いと思われまますので、警備体制を整えるように嚮木学長に進言しておいてください」

「分かったわ」

「それから美紀は、例の事の裏付けを楯無さんに依頼しておいてくれ」

「分かりました」

「簪は俺と一緒に学園に保管されているデータのセキュリティ強化を頼む」

「分かった」

「いっちー、私は？」

自分だけ何も言われなかった本音は、一夏に自分にも役目が欲しいと申し出る。だが一夏は首を横に振り、そして口を開いた。

「本音とマドカは、いざという時まで待機だ。自由に動ける人間が必要だからな」

「ぶうー。まあ、遊んでいいならいいけどね」

「というか、本音。私の事忘れてませんか？」

「そんなことないよ。マドマドも私と一緒に待機だね。さて、何して遊ぼうか？」

「遊んでる場合ですか……有事に備えて力を高めておくのも兄さまのお役に立つことだ
と思いますか」

本音と同じく待機を命じられたマドカは、残りの更識所属の面々の実力を考えてそう
申し出たのだが、本音には響かなかったようだった。

二学期始業式

慌ただしく夏休み最終日を過ぎた一夏たちは、二学期初日の朝を食堂で気だるそうに迎えていた。本来ならば最終日は終日まったりする予定だったのに、束からもたらされた情報の裏付けや、それが本当だった場合のセキュリティ強化の準備などで、本音とマド力を除く更識関係者は貴重な休日を返上して学園の為に動いていたために、朝から気だるさがマックスだったのだった。

「新学期だというのに、随分とダルそうだな。更識、織斑、その他大勢」
「せめて他のメンバーも呼んでくださいよ」

食堂に見回りに来たのか、千冬の呼びかけに、これまた気だるそうに一夏が答えた。顔を向けるのも面倒なのか、視線は一切そちらには向けずに返答したため、若干千冬が寂しそうだったのだが、誰一人その事には気づかなかつた。

「お前ら生徒会は始業式で壇上での挨拶があるだろ。そんな顔でどうする」
「だったらもう少し学園側で動いてくださいよ。生徒会——いや、更識に丸投げはどうかと思いますよ?」

「そんなこと私に言われても知らん。決定権は学長にあるのだから」

IS学園学長である轡木十藏は、実質的な運営は妻に任せているが、こういったことに關しては口を挿んでくるのだ。そして、挿むのは良いが、基本的に一夏たち更識に丸投げするという決定を告げるだけの役割になりつつある。

「いつそのこと教師陣の一新も更識に任せてくれないですかね。とりあえず、織斑姉妹は減給と降格ですけど」

「そんなことは絶対にあリえないから安心しろ。それより、そろそろ本当にシヤキツとしないと、私の愛の鞭が火を噴くことになるぞ」

「昨日二時まで作業してて、朝もその裏付けの結果からいろいろあつて五時に起きたんですから、我々生徒会メンバーは始業式に出なくてもいいんじゃないですかね？生徒会長の私も、副会長の一夏君も有名だし、今更挨拶なんてしなくても——はい、何でもありません」

千冬に睨まれ、刀奈は再び机に突つ伏した。抵抗に力が無いのは、彼女も一夏同様に忙しかったからである。

「生徒会の挨拶は、会長・副会長の代理として本音に任せます」

「ほえっ!? 何で私なの、いつちー?」

「お前は早々に寝て、起きたのもさつきだろ? それに、生徒会役員として、たまには働いたらどうだ?」

「一夏君、それいいアイデアね! 生徒会長として、布仏本音に始業式の挨拶を命じます。頑張つてね」

「お嬢様、こういつた時だけ権力を振りかざすのはどうかと思いますよ。一夏さんも、本音にお嬢様や一夏さんの代わりが出来る訳ないじゃないですか」

「そうそう……ん? おねくちゃん、それってどういう意味さ〜!」

姉にとどめを刺された気分になった本音は、ウソ泣きをして簪に抱き着いたが、簪も疲れ果てているので、何時もみみたいに相手にはしてくれなかったのだった。

気だるさも抜けないまま、刀奈たちは壇上で挨拶をすることになった。カリスマ的人の会長と副会長が壇上に現れると、体育館には割れんばかりの歓声が上がった。

「今日から二学期と言う事で、みなさんより一層の精進を目指しましょう」

「特に二学期は、文化祭やキャンボール・ファストが予定されていますので、準備などにも時間が掛かるでしょう。みなさんのお手伝いが出るよう、我々生徒会も精進してまいりますので、節度のある盛り上がりを目指しましょう」

一夏が最後に釘を刺したが、果たして生徒たちはその事を守るのか。それだけが生徒会の悩みだった。壇上から脇に移る際、熱狂的な歓声に対して織斑姉妹が怒鳴り散らしているのが聞こえたが、それは聞こえないふりをしたのだった。

「お疲れ様です。文化祭の件ですが、今週末には出し物の希望を取っておきたいので、各クラス代表には伝えておいてください」

「それは職員室でされる通達では？」

「普通はそうなのでしようが、職員室から生徒会へ丸投げされました」

「……では、退場の際に伝えておきましょう。あつ、そういえばIS学園の文化祭は、クラス対抗になってるんでしたっけ。賞品とかはどうするんですか？ それも生徒会で決めるのでしょうか？」

「そうね。それは放課後に話し合いましたよ。生徒会も出し物を決めなきゃいけないだし」

厳かに進行される生徒会会議を、本音は半分寝ながら聞いている。始業式もだが、生徒会会議も寝ながら参加するものではないのだが、誰もそこにツツコミは入れなかった。

「さてと、問題はどちらも来場者がいるという点ですね。徹底管理など不可能ですので、ゲートで不審者を識別するのは難しそうですね……個人の繋がりを聞き出すのもあれですし」

「学園側も企業関係者などを招待したいらしいし、チェックは無理でしょうね」

「I S企業の関係者って、更識からは呼ばれてないですよね？」

「生徒にいたからね。わざわざ見学させる理由も、ましてや更識企業のノウハウが詰まってるんだから、更識関係者を呼んでも意味ないわよね」

「こちらとしては、あまり外部の人間に見せたくないのですがね……まあそんなこと言ってもしょうがないでしょうけども」

細々としたことは後で決めると結論付け、一夏はもう一度壇上へと移動する。先ほど虚から言われた、各クラスの出し物の希望を今週中に生徒会へと提出するよう呼びかける為と、暴走しかかっている生徒たちの鎮静を図るためだ。

「私はいかなくてもいいのよね？」

「出来ればお嬢様も一夏さんと一緒に鎮静化を図ってください。このままでは怪我人が出る恐れがありますので」

「まったく、何時からこの学園はアイドルの追っかけになったのよ」

刀奈の愚痴に、虚は苦笑いを浮かべながら首を左右に振った。答えなど分からないが、このままでは織斑姉妹が実力行使に出ることは火を見るよりも明らかだったので、刀奈も壇上へ移動し鎮静化を図ったのだった。

文化祭の出し物

始業式が終わりHRの為に各教室に移動した生徒たちの間では、まだ一夏や刀奈の話題で盛り上がっている生徒も多い。それは一年一組でも変わりではなく、一夏が戻ってくるまでの間はその話題で持ちきりだった。

「夏休みの間はほとんど会えなかったけど、やっぱり更識君ってかっこいいわよね」

「更識先輩も、相変わらずお綺麗でしたね」

「布仏さんのお姉さんも、綺麗ですよね」

「生徒会は美形が揃ってるわよね」

そんな会話を聞きながら、香澄と静寐は少し離れたところで会話をしていた。

「香澄さんの専用機、随分と大々的にお披露目したのね」

「一夏さんもあそこまで大きくなるとは思ってなかったみたいですけど、政府の方々と議員さんが力技で技術者の方々にも見学させたようですよ」

「見学させたって、更識の技術力を盗めるとは思えないのだけど」

そんなことを話していた二人の許に、各国の代表候補生もやって来た。

「日下部さんも専用機持ちになられたようですね。私でよければ何時でもお相手いたしますわよ」

「お兄ちゃんが関わったＩＳなら、私も相手してみたいぞ」

「ラウラは相変わらず一夏の事を『お兄ちゃん』って呼ぶんだね。それにしても、やっぱり本社の技術力には敵わないな」

セシリア、ラウラ、シャルの三人が香澄の専用機に興味を示すのも無理はない。昨日政府の人間に向けて発表したばかりだが、すでに全世界にその事は知られている。それくらい更識の力は警戒されているし、日本の戦力についても興味を持たれているのだ。

「私の時はそんなに騒がれなかったんだけど？」

「静寐さんの時は、箒さんのどきどきに紛れていたからではないでしょうか？」

「それに、完全新武装と比べれば、静寐の専用機はあまり騒がれる事は無いと思うぞ」

「むっ、それは私の鵓鴿が久延毘古に劣ると？」

「どちらも更識製だから、性能に大きな差は無いと思うけど、でもやっぱり、未来予知の特性は大きいと思うよ」

シャルの分析に、静寐は少し納得いかない感じではあったが、大人しく引き下がった。「もちろん、専用機を所有している時期が長い分、静寐の方が実力的には上だと思っけど、それを補って余りあるくらいの特性だからね……相変わらず更識の技術力はエグイって、何処の国でも噂になってるし」

「昨日クラリツサから連絡があつて、ぜひともその強さを体験したいと思つたのだ」「イギリスは亡国機業にサイレント・ゼフィルス強奪されたせいで肩身が狭いですからね。少しでも実力をつけて立場を取り戻したいですわ。ですから、戦うならまず私から

――」
「模擬戦の相談か？　アリーナの使用には生徒会か職員室の許可が必要だ。その事を忘れるなよ」

「一夏、これ頼まれてた資料」

教室にやって来た一夏が逸る二人にツツコミを入れた横で、シャルがデュノア社から頼まれていた資料を一夏に手渡した。

「郵送でよかつたんだが……まあ、確かに受け取つた。それで、そつちはどんな感じだ？」

「まだテスト段階には程遠いかな……一夏みたいに簡単にアイデアが出てくるわけじゃ

ないから」

「俺だつて一人でやつてるわけじゃないんだが……まあ、時間が出来たらまたそつちに行つて改善点を見つけるのを手伝うから」

「うん、お願いね」

表向きは学生だが、一夏は更識次期当主として、シャルは更識傘下デュノア社の社長として日々忙しいのだ。そんな会話を聞いていたクラスメイトたちは、二人に尊敬のまなざしを向けている。

「さて、織斑先生たちが来る前に、文化祭の出し物の意見を聞きたいんだが」

その視線に耐えられなくなったからではないが、一夏が教壇に立ち文化祭のアンケートを取り始めた。

「意見がある人は挙手をして、指名されてから発言してください」

一夏の補佐として美紀が告げると、一斉に手が上がった。

「せっかく更識君がいるんだし、更識君を餌にすれば凄い集客率が見込めると思います」

「……餌つて」

本人を目の前に酷い言い草だが、考えとしては悪くないと思われる意見だった。ただ、そこから暴走した意見が多かったのだ。

「更識君とポツキーゲームは？」

「いやいや、そこはツイスターでしょ」

「王様ゲームは？ 参加者二人だから、二分の一で更識君に命令出来るわよ」

「それだ！」

「……誰か、まともな意見がある人」

頭を抑えながら一夏が問うと、ラウラが挙手をした。

「ラウラ、何かあるのか？」

「いえ……お兄ちゃん、ポツキーゲームやツイスター、王様ゲームとは何ですか？」

世間に疎いラウラは、そういった遊びを一切知らない。だから純粹に質問したのだが、クラスメイトからは驚きの声上がる。

「ボーデヴィツヒさん、今の全部知らないの？」

「ああ。私は軍人だから、そういった世間一般の遊びは分からない。戦車で鬼ごっこ

か、リアルサバイバルゲームくらいしかしてこなかったからな」

「怖すぎるわよ……」

「えつとね、ポツキーゲームっていうのは……ごによごによ」

「っ!?! 最終的にはどうなるんだ?」

「だからね……ごによごによ」

「! お兄ちゃん、私とポツキーゲームを——」

「ほう、どうやら死にたいらしいな、ボーデヴィツヒ」

「ひうつ!?!」

ラウラの目の前に現れた悪魔の姉妹、満面の笑みを浮かべている二人を視界にとらえた途端、ラウラのトラウマが発動し、一目散に一夏の背後に逃げ込んだのだった。

「えつと……放課後までに『まともな』意見を募集します。あまりにもふざけていると、その鬼たちから罰を受けるかもしれませんので」

「誰が鬼だ!」

「間違いなく、貴女たちです」

本格的に頭痛を覚えた一夏は、頭を押さえながら自分の席に戻り、美紀も同様に席に

着いた。HRは特に連絡事項も無く、すぐに終わり、新学期特有のだらだらした空気が流れていたのだった。

文化祭に向けて

結局、一年一組の出し物は、無難な喫茶店に決まった。ただし、女子はメイド服、一夏は燕尾服という衣装ではあるが。

「何故俺が執事などやらなければいけないんだ」

「一夏さんが執事の姿で客引きをすれば、売り上げ倍増間違いなしだからでは？」

「収益は元金以外は学園に巻き上げられるのに、売り上げ倍増もクソも無いと思うんだが」

「学園祭り上げ一位の団体には、生徒会からご褒美が出るじゃないですか。それ目当てだと思えますよ」

部屋で決まった出し物について美紀と話していた一夏だったが、生徒会という単語を聞いて立ち上がった。

「どうかしましたか？」

「いや、生徒会の方でも出し物を決めるらしいんだが、何故か俺は来なくていいと言われたんだ……何か刀奈さんから聞いてないか？」

「いえ、私には何も……そもそも刀奈お姉ちゃんが何を考えているのか、私には分かりませんよ」

「刀奈さんの考えなんて、俺にも分からない。それこそ、久延毘古に聞くしかないかな」

苦笑いを浮かべながら、一夏は先日製造した専用機の名前を持ち出した。しかしこの場合の久延毘古は、ISとしてではなく、日本神話に出てくる本物の事だ。

「とりあえず、一夏さんと呼ばなかったということは、一夏さんの力を使う事は無さそうなのではないでしょうか」

「いや、俺をダシに生徒会で一位を狙うのかもしれない……あの人は、そういうことをする人だからな。まあ、虚さんが止めてくれるとは思うが」

「虚さんも、結局は刀奈お姉ちゃんに甘いですからね……本音じゃストッパーにならないし」

「最悪、副会長権限で没にすればいいだけだな」

立場的には刀奈の方が上なのだが、実質的な権力は一夏の方が遥かに上であり、一夏の決定に刀奈も逆らうことは出来ない。可能性の問題ではなく、一夏に嫌われるかもし

れないという心理的な面で。

「それより、美紀は誰を招待するんだ？」

「誰もしませんよ。お父さんは忙しいでしょうし、友人もそれほどいませんし。一夏さんこそ、誰を招待するんですか？」

「悪友の妹に頼まれたから、すでに招待券は渡した。何でも来年受験するから、見学しておきたいんだそうだ」

「一夏さんの悪友って、確か頭が残念だって鈴さんが……その妹さんは大丈夫なんですか？」

「まあ、あのバカよりかは遥かにマシな頭脳を持ってるし、簡易適性検査でAだったそうだからな。将来性も見込める。最悪更識に引き込んで専用機を用意する、という手も使えるしな」

「最強のコネですね」

一夏が悪い顔を浮かべて、美紀は苦笑いを浮かべた。実際にはやらないと分かっているのだが、万が一と言う事があるので、一夏がその妹に肩入れし過ぎないように注意しようとしたのだった。戦力が増えるのは良い事だが、これ以上ライバルが増えるのは勘弁してもらいたいのだ。

一夏たちが部屋でそんなことを話しているのと、時を同じくして、生徒会室では文化祭に向けて何をするかが話し合われていた。副会長の一夏の代わりに、簪とマドカが招集されて。

「やっぱり一夏君という最強のカードを持つてる一年一組が強そうよね」

「それは生徒会も同じでしょ。始まる前からこの二つの団体の一騎打ちだって言われているんだから」

「かんちゃんのカラスは、何をすることになったの?」

「ISの組み立てやメンテナンスのやり方を分かりやすく解説することになった。未来の後輩に向けての出し物だから、賞品は見込めないかな」

「さてと、出し物もだけど、最優秀出し物に選ばれた団体への賞品も考えなきゃ」

「お嬢様の事ですから、すでに考えているのでは?」

虚の問いかけに、刀奈はニンマリと笑った。何かよからぬことを考えている顔だと、虚も簪も呆れた表情で刀奈を見つめるが、マドカだけは刀奈が何を考えているのかが分からず、思わず聞いてしまった。

「それで、刀奈さんは何を賞品にしようと考えているんですか?」

「一夏君を一日自由に出来る権利、つてのはどう? 団体全員で一日だから、一夏君も無茶だとは言わないでしょうし」

「仮にクラス単位で一日独占だとしたら、一夏の負担が大きいのじゃないの?」

「一緒にお茶するとか、ご飯を食べるくらいよ。全員とデートしろなんて言わないわよ」
「兄さまの一日を確保するのはどうするのですか? 兄さまのスケジュールはほぼ埋

まっていますし、一日フリーの日などあるのでしょうか？」

マドカの疑問はもつともで、一夏のスケジュールを確保するなど、さすがの刀奈でも難しい——いや、不可能に近い。だが刀奈は、何か策でもあるかのような笑みを浮かべた。

「この前日本政府の人たちが勝手に技術者や議員さんを学園に連れ込んだでしょ？ その件を更識から抗議したのよ。それで当分は日本政府は更識に——つまり一夏君に仕事を頼むことを禁じたのよ。だからその分一夏君のスケジュールは空いてるわ」

「また力技を……でも、生徒会が最優秀に選ばれた場合はどうするの？ 一年一組もだけど、そこには一夏が在籍してるんだけど」

「その場合は、一夏君に極上の時間をプレゼントするわよ」

「お嬢様の考えている極上は、一夏さんにとっては極上ではないと思いますのでやめておいた方が良いでしょう」

虚の容赦のないツツコミに、簪とマドカが頷いて同意した。

「何だよく！ 私の言う事が信じられないっていうの!?!」

「だってお姉ちゃんだし」

「酷いつ!? これが反抗期なの!？」

「兄さまには、後日別の形で休みをプレゼントすればいいのでは?。」

マドカの提案に、刀奈以外の三人が賛成し、こうして文化祭の賞品は一応決定したのだった。

疑う碧

文化祭の準備も大事だが、I S学園でも当然授業がある為、そればかりにかまけている暇はない。今日も今日とて座学と実技の授業が粛々と繰り広げられている。

「さて、このクラスには専用機持ちが多い。他の生徒の手本となるように、今から専用機持ち同士でペアを組み二対二の模擬戦を行ってもらいたい」

「そこでだ、諸君は誰の試合を見学したい」

実技の授業中に、織斑姉妹がそんなことを言い出した。ストッパーである碧は、本日更識の任務で不在、真耶は日本政府からの抗議の対応に追われているために、本日の授業は全て織斑姉妹の自由なのだ。

「やっぱり更識君の試合は見たいよね」

「でも、この前見た日下部さんの専用機も強そうだったし」

「鷹月さんも強いよね」

「でもでも、やっぱり四月一日さんじゃない？ 代表候補生なんだし」

「織斑さんも捨てがたいわよね。何せあの篠ノ之博士が選んだテストパイロットなんだ

し」

「なんだかんだ言っても、本音も結構強いよね」

どこまで行っても更識関係者しか名前が上がらないが、他の専用機持ちである、セシリア、ラウラ、シャルロットは最初から更識関係者と戦いたくないと考えているのか、影を潜めている。

「さつさと決めないか、馬鹿者共が！」

「面倒だから、候補生三人と、元候補生のシャルの計四人で良いんじゃないですか？」

「一夏さんっ!? そんな決め方はどうなのでしょう……」

「では、オルコット、ボーデヴィツヒ、四月一日、デュノアの四人で話し合いペアを決めろ」

一夏の意見を受け、千夏が四人にそう告げた。彼女の中で、一夏の意見は絶対であり、いくら選出された四人が不満でもその決定は覆らない。それが分かっている美紀は、早々に諦め話し合いをすることにした。

「私は誰でも良いですが、三人は希望とかがありますか？」

「私はお兄ちゃんから信頼されている貴女と戦ってみたい。だからセシリアかシャル

ロツトのどちらかが彼女と組んでくれ」

「じゃあ僕がラウラとペアになるよ。セシリアとじゃ遠距離同士でやりにくいだろうしね」

「じゃあ私と四月一日さんペア対ラウラさんシャルロツトさんペアですわね」

「決まったのならさっさとピットに行つて準備しろ！ 時間は有限だぞ」

偉そうにそう告げる千冬に、一夏が呆れた視線を向ける。その場の思い付きで模擬戦を提案し、自分たちでは何も決めずに偉そうに振る舞う態度に、一夏はせっかく抱いていた感謝の念を放棄したのだった。

更識の任務で日本政府の人間が勝手に連れてきていた技術者の事を調べていた碧は、その調査が終わりI・S学園に戻って来た。

「お疲れさまです。それで、不審な動きをした人はいましたか？」

戻ってくるなら碧は、報告の為に一夏の部屋を訪れていた。美紀は空気を読んだのか、今は部屋におらず、報告が一夏以外に漏れる事への心配は全くない。

「見ただけで理解できる人がいるとは思ってませんでしたし、実際そんなことが出来るのは一夏さんと篠ノ之博士くらいでしょう。久延毘古のデータを欲している企業は多くありました。織斑姉妹が撃退し、更識からも抗議の文書を出したからでしょうか、日本政府もデータの開示を要求しようという動きはありませんでした」

「要求されたからと言って、じゃあどうぞと見せられるものじゃないしな」

見せたところで再現は不可能だが、独自技術の塊である久延昆虫のデータを、他所の企業に開示するなど出来るはずもないのである。

「それから、一夏さんが懸念していた件ですが、あの技術者の中に倉持技研ゆかりの者はいませんでした。全員身分証の通りの企業に勤めていました」

「いきなり辞めた、とかそういうのもありませんか？」

「部下に引き続き監視はお願いしてありますが、おそらくは杞憂に終わると思いますよ」「ならいいんですが……」

亡国機業が何を企んでいるのかが分からないので、警戒を緩めることが出来ない一夏は、ありとあらゆる可能性を考えて行動している。今回のお披露目はそもそも予定してなかったことなので、警戒網が若干緩かったと考えているので、その隙を突かれたのではないかと心配していたのだった。

「ダリル先輩も、今回は不審な動きは無かったようだしな」

「簪ちゃんが見張ってたからもあるでしょうし、今疑われるのはマズいとも考えたのかもありませんよ。アメリカは非常に微妙な立場に陥ってますし」

「自業自得ですし、コアは嘘を吐きませんからね」

銀の福音の解析の結果、暴走の原因はアメリカ側にあると更識が正式に発表した所為で、アメリカはイスラエルに多額の賠償金を支払い、世界中から疑いの眼差しを向けられている。そんな状況でアメリカの候補生であるダリル・ケイシーが産業スパイだと言われたら、ますますアメリカの立場は厳しいものになるだろう。

その可能性を考慮したと一夏は考えているのだが、碧は別の可能性を考えていた。

「一夏さん、ダリル・ケイシーが亡国機業とつながっている可能性は無いのでしょうか？」

「……ゼロではないでしょうね。ですが、彼女が亡国機業の人間だったとして、目的は何でしょう？　転入ならまだしも、彼女は普通に入学していますし」

「その方が疑われないから、という考えも出来ます」

「……分かりました。碧さんの自由に調べてもらって構いません。ただし、あくまでも我々更識は『ダリル・ケイシーがアメリカのスパイなのではないかと疑っている体』でお願います」

「分かりました」

一夏も実はその可能性は考えていた。だが自分で言ったように彼女は編入ではなく、

普通に受験し、普通に入学しているのだ。その事が引っ掛かっている一夏は、碧のダリルの調査を命じたのだった。

新カリキキュラム

自分が亡国機業の一員なのではないかと疑われている事などつゆ知らず、ダリルは今日も一夏の身辺を探っていたのだった。

「また貴女ですか、ダリル」

「よく会うわね、布仏。貴女もしかして私のストーカーなの？」

「馬鹿な事は言わないでください。私は一夏さんに用事があるからこの場所を訪れるだけで、貴女に興味はありませんよ」

「私だって、更識君に興味があるだけで、布仏になど興味ないわよ。そもそも、更識君にコンタクトを取るのが難しい私たち一般生徒は、こうして偶然でも装わなければ会えないのだから、彼がいるそばをうろついていてもしょうがないと思うのだけど？　ましてや私は学年も違うんだし」

ダリルの言う通り、一夏と学年の違う生徒は、一夏とコンタクトを取ること自体が難しいのだ。だが、ここまであからさまにうろついているのはダリル一人なのも確かなので、虚が疑うのも無理はないのだ。

「一夏さんにどのようなご用件でしょうか」

「男女の仲になりたいと言っても、貴女は信じないでしょう?」

「当たり前です。冷やかしならお帰りください」

取り付く島もない対応で、虚はダリルから視線を逸らして生徒会室へと入っていく。一応態度には出さなかったが、ダリルはかなり頭にきていた。

「やはり布仏は嫌いな部類だわ。てか、どれだけ面倒なのか分かってないのかしら」

虚の立場なら一夏に会うことは簡単だが、ダリルの立場だと話す事すら難しい。ましてや一度コンタクトを取って警戒心を抱かれているのなら尚更だ。

「仕方ないわね……別の方法でも考えようかしら」

ダリルがそう呟いて生徒会室前から姿を消すと、隠れていた碧が物陰から姿を現した。

「一夏さんの事を狙っているのは間違いなさそうね。でも、目的がまだはつきりとしなのは厄介だわ……アメリカのスパイなのか、それとも亡国機業のスパイなのかはつきりすれば、対応するのも楽になるのに……」

例えばアメリカのスパイだった場合は、その証拠を突き付けてアメリカもろとも潰せばいいし、亡国機業のスパイならば、偽の情報を掴ませて一網打尽にすればいい。だがそのどちらともはつきりしない今の状況では、打つ手がないのだ。

「もう少し監視は続けた方がよさそうですね。万が一夏さんを純粹に狙っていた場合でも、その事が早めに分かれば手の打ちようがありますし」

かなり低い確率だと碧も思っているが、ただでさえ一夏は学園中から好意を向けられているのだ。自分たちだけで独占するつもりもないが、他者が介入してくるのを黙ってみていられるほどの余裕は、更識の面々にもないのだ。

「虚さんも疑ってるようだし、もう少し疑いの目を向けてボロを出さないか試してみようかしら」

そんなつぶやきを残して、碧は再び姿を消したのだった。

文化祭に向けて準備を進めている半面、二学期に入りより実践的な授業が採用されている。そのテストの段階で体験した静寂や香澄は、新カリキュラムを受けてもさほど疲れた様子は見られなかった。

「凄いね、鷹月さんや日下部さんは」

「これだけのメニューをこなしてもピンピンしてるもんね」

「四月一日さんや織斑さんは当然としても、本音までピンピンしてるのは納得できない」

けど」

口々に賞賛されるのが恥ずかしい二人は、夏休みの間に受けたメニューの一部を教えることにした。

「私たちはテストケースとしてこのメニューを受けたことがあるからね」

「ちよつとした手違いで、この倍くらいはありましたけど」

「嘘っ!? この倍も動いてたの!? そりゃピンピンしてるか」

正確にはそれ以上なのだが、それを言うとは織斑姉妹に怒られる気がしていたので、静寂も香澄も余計な事は口にしなかった。

「何々、何の話〜?」

「本音がピンピンしてるのが納得できないって話よ。どこにそんな体力があるのよ、あなた」

「一応更識所属だからね〜。見えないところで努力してるのだ〜!」

「本音はただだらしてただけじゃない。一夏さんに怒られても知らないからね」

本音に続いて現れた美紀も、涼しい顔をしながらツツコミを入れた。

「やっぱり更識の訓練メニューって厳しいの？ それも更識君が考えてるの？」

「いっちーは基本何も言わないよ。その分、ISの整備を怠るとすぐ怒るけど」

「一夏さんはISの声が聞こえますから、どんなコンディションなのかIS自身から聞けますからね。無茶してればすぐにバレてしまいますから」

「やっぱり更識君が整備してくれるんだ。羨ましいな」

「鷹月さんや日下部さんも、更識君が整備を担当してくれてるの？」

クラスメイトの面々は、香澄が専用機持ちになったことについて特に含みを持っていない。上級生の中には面白く思っていない人もいるみたいだが、少なくとも一年生の中では納得されているようだ。

「私はまだメンテナンスしてもらうほど稼働させてませんが、静寂さんは一夏さんに整備してもらってるようですよ」

「そもそも学園において、この鵲鴿を弄れるのが一夏君だけだからね。わざわざ更識の技術者を呼ぶのも大変だと言ってたし」

「いっちーしか声を聞けないから、技術者が来ても時間かかるだけなんだけどね」

「整備に関しては、一夏さん一人に任せた方が早いですからね」

事実を知る本音と美紀も、不用意な発言はしないように周りに話を合わせた。もしバラしてしまっても怒られはしないだろうが、IS学園でバラしたらそのまま世界中に知れ渡ってしまう可能性があるので、一夏以外の面々も極力事実は言わずにいるのだった。加えて、今は監視されている疑いがあるので、より慎重に発言するよう、刀奈と碧から言われているので、不用意な発言は避けるように心掛けています、ますます事実を言うわけにはいかない状況だったのだ。

そんな話をしていると、向こうから一夏の声が聞こえてきた。どうやらカリキュラムの件で織斑姉妹と話しているようなので、クラスメイトは興味を惹かれたが聞こえないように更に距離を取ったのだった。

生徒会の出し物

賞品を一夏にするということだけは決まっているが、生徒会の出し物を何にするかはまだ決まっていない。そもそも一夏の承諾も取っていないので、賞品として成立するかも定かではないのだ。

「虚ちゃん、何か案ない?」

「文化祭の間にお嬢様がどれだけ仕事を片付けられるかを実況するというのはどうでしょう? 普段一夏さんや私に仕事を押し付けてばかりなのですから、たまにはいいんじゃないですか?」

「私は見世物になるつもりなんてないわよ! ただでさえ国家代表って事で注目されているのに、晒し者みたいな扱いで注目されるのは勘弁してほしいわ」

「では一夏さんに監督してもらえば如何でしょう? サボったら一夏さんに活を入れてもらえますし四六時中一夏さんと一緒にいられますよ?」

一夏と一緒に、ということに惹かれた刀奈だったが、結局は生徒会の仕事をやっているところを見られるだけだということに気が付き、首を横に振った。

「もつと盛り上がる事をしたいのよね……演劇でもしようかしら」

「演劇、ですか？ お嬢様が主演するのですか？」

「ううん、一夏君にお願いして、アクションでもやってもらおうかしら。出演は一年一組の候補生たちをお願いして、一夏君に勝てたら一日一夏君とデート出来るとか言いぐるめれば……」

「もしもし、一夏さんですか？」

「ちよっ!? 冗談！ 冗談だから！」

「こちらも冗談です。ですが、お嬢様が本気だった場合は、こちらも本当に一夏さんに連絡するつもりですので」

慌てる刀奈に対し、涼しい表情で言つてのける虚。主とメイドの関係だが、刀奈の扱いは虚にとつてお手の物なのだ。屋敷内ならともかく、学園では姉と妹の関係、もしくは先輩後輩の関係なのだ。屋敷内でもあまり主従っぽくは無いが……

「とにかく、これ以上お嬢様と二人で考えてもらちが明かないので、一夏さんを招集したいと思うのですが、異論はありませんよね？」

「そうね……一夏君なら何かいい案を出してくれるかもしれないものね」

結局は一夏任せになるのだが、途中まで考えた事は評価できると虚は考えていた。その考えがろくでもない事には、あえて目を瞑る事にしたのだった。

放課後の自主訓練の指導をしていた一夏は、虚からの電話を受けて生徒会室へ向かつ

ていた。もちろん、護衛の美紀と、一応生徒会役員の本音も一緒だ。

「やっぱり久延毘古や鶴鴿は強いですね。回数を重ねることに慣れはしてきましたけど、まだちょっとやりにくいです」

「私も使ってみたいな。いっちー、VTSにインストールして使えないの?」

「お前は人の専用機で遊び過ぎだ。土竜がもう一度拗ねたらどうするつもりなんだ?」

「その時は、いっちーに説得してもらおうから大丈夫」

何が大丈夫なのかがいマイチ分からないコメントだったので、一夏と美紀はそろつてため息を吐いたのだった。そのタイミングで、背後から声を掛けられた。

「あれ? 一夏君たち、どこにいくの? 今日自主練の日じゃなかったっけ?」

「エイミイ、遅刻だぞ」

「いやー、国語の小テストで赤点取っちゃって……さっきまで追試を受けてました」

「カルカルにとつて、日本語は国語じゃないもんね」

「まあね。それで、今日はもう終わりなの?」

「いや、三人はまだやってるが、俺たちは生徒会の仕事が入ったために早抜けだ」

「じゃあ私はアリーナに行こうと。三人つて、簪と静寐と香澄?」

「いや、簪じゃなくってマドカだ」

簪は現在、クラスの出し物で使う説明用の映像を撮っている。そのために今日の訓練の参加者は普段より少なめだったのだ。

「マドカには兎も角、静寂と香澄には負けないようにしないとね」

「何故マドカには勝とうと思わないんだ？」

「だって、遺伝子レベルで次元が違うでしょ？」

「そんなこと——」

無いだろ、と続けたかった一夏だったが、その隣で美紀と本音が頷いているのが視界に入り、言葉を途中で切った。

「とにかく、マドカにも勝とうという意思は持った方が良いぞ。マドカのライバルとなる人が出来れば、アイツもまだまだ成長するだろうしな」

「いっちゃん、お兄ちゃんというよりお父さんみたいな感じだね〜」

「……とにかく、訓練頑張れよ」

本音の言葉が地味に一夏にダメージを与える。本音としては他意は無く率直に言っただけなのだが、一夏にはかなりのダメージを与える言葉だったらしい。

その後生徒会室までの道なので、一夏が本音と目を合わせることも、何か言葉を発することも無かった。

「遅いよ一夏く——何かあったの?」

生徒会室に着くなり、刀奈が心配するほど、今の一夏からは覇気が感じられない。さすがの本音も、自分が原因だということを理解しているのか、傷口を広げないように黙っていた。

「何でもありません。ところで、生徒会の出し物ってまだ決まっていなかったんですね」

「お嬢様がろくでもない案しか出さないので」

「私だってちゃんと考えたもん!」

「文化祭当日は、未来の後輩たちも大勢来るでしょうし、生徒会の面々で模擬戦をするのはどうでしょう? 声を掛ければマドカやエイミイたちも手伝ってくれるでしょうし、現役の家代表や代表候補生の模擬戦を生で見れば、観客も喜ぶと思いますよ」

「当然、一夏君も参加するのよ?」

「……許可が出たら考えます」

一夏としては、自分は高みの見物を決め込むつもりだったのだが、先に逃げ道を塞が

れてしまったので、そう答えるしかなかったのだった。

着々と

生徒会の出し物の案を職員室に持っていくと、二つ返事でOKが出てしまった。

「そんなに簡単に決めて良い事なんですか？」

「更識君や更識さんがいますし、布仏さん——お姉さんの方もしつかりしてますからね。何か起こる前にちゃんと対策してくれるでしょうしね」

「小鳥遊先生も付き添うのでしょうし、学園側としても、新入生獲得に大いに役に立つと判断できますので」

責任者不在ではあったが、真耶と紫陽花が代理で判断し、責任者がいても同じことを言うであろう事を言ってきたのだった。

「それに、更識所属の面々の実力は、滅多に見られないですし、来賓だけでなく生徒や教師たちも喜ぶ出し物だと思えますよ」

「一年四組の説明を受けてから見学すれば、より楽しめそうですしね」

「自分が担当しているクラスの出し物と抱き合わせにしないでくださいよ」

とりあえず許可が下りてしまったので、一夏はこの案を生徒会に持ち帰ることになってしまった。本人は高みの見物を決め込もうと思っていたのだが、刀奈に逃げ道を塞がれ、マドカからは戦うのが楽しみだと言われてしまったので、さすがの一夏も逃げるこゝとが出来なくなつてしまったのだ。

「本音の一言じゃないが、俺ってマドカに甘すぎないか？」

職員室から生徒会室へと戻る道中、一夏はそのような事を考えていた。だからではないが、背後から近づいてくる気配に気づけなかった。

「何してるの？」

「っ!? ……何だ、簪か」

「珍しいね。一夏が気配に気づかないなんて」

「ちよつと考え事をな……ところで、何か用か？」

簪が声を掛けてきたのだから、何かあつたのだらうと考えた一夏だったが、簪は笑顔で首を左右に振つた。

「今のところは用事は無いよ。ただ単純に一夏を見つけたから声を掛けただけ」

「そうか。さつき職員室に行つて来て、生徒会の出し物の案を言つて許可を貰つて来た

んだが、簪も手伝ってくれるか？」
「何をするの？」

マドカやエイミイ、静寂に香澄には事前に電話で話をつけたのだが、簪は作業中だと言う事で電話がつかなくなかったのだ。

「学園に在籍している更識所属の面々で模擬戦を見せることになった。何故か分からんが、俺も参加する事になっている」

「当然だよ。一夏だって専用機持ちで、更識所属なんだから」

「俺が戦ってるのを見たって面白くないだろ」

「面白い、面白くないは兎も角として、客数は見込めるだろうね。何せ世界で唯一ISを動かせる男子なんだからさ」

簪の言葉に、一夏はガツクリと肩を落としたのだった。客寄せパンダなのは、クラスの出し物だけで十分だったのに、生徒会の方でもやらなければならなくなってしまったからだ。

「そう言う事なら分かった。私も当日はすることないし、生徒会の出し物に協力するよ」
「する事が無い？ 説明は誰がするんだ？」

「資料と原稿は私が作るけど、私は人前で何かを発表するのが苦手だから」

「そんなことで国家代表に選ばれるのか？」

「ISを纏ってれば問題ないよ」

とりあえず簪の協力も得られることになったので、一夏は本格的に自分も参加する覚悟を決めたのだった。

各クラス、団体の出し物が決まってく中、職員室ではその出し物のリストを見て不気味にほほ笑む姉妹がいた。

「一夏が執事姿か……」

「これは是非ビデオカメラに収めなければ……」

「千冬さん、千夏さん……さつきから何笑ってるんですか？」

「真耶には関係のない事だ」

「は、はひっ!!」

一瞬で表情を引き締め、低い声で同時に言われては真耶のような反応を示すのが普通だろう。ましてやそれが憧れの先輩だったのなら尚更だ。

「言っておきますが、織斑先生たちは当日見回りではなく入口での監視ですからね」

「何っ!? それは真耶や紫陽花がすればいいだろうが!」

「わたしたちでなくても出来るのだから、わたしたちがする必要は無いだろ!」

「これは一夏さんの決定です。貴女たちは暴走すると面倒だからと言っていましたか」

「何故だ、一夏……」

絶望に沈む織斑姉妹を、真耶は複雑な思いで眺めていた。

「さすがにずっと監視というわけではないと思いますよ?」

「そうですね。一夏さんの休憩時間に合わせて、織斑先生たちも休憩して良いそうです」

「つまり、一夏の執事服姿は見られないということか……」

「よし、ちよつと世界を滅ぼしてこよう」

「一夏さんの執事服姿が見れないだけで大げさでしょうが！ 世界を滅ぼすって、貴女たちが言うところの冗談に聞こえないからやめてください！」

織斑姉妹が本気で世界を滅ぼしに出かけようとしたタイミングで、千冬の携帯に着信を告げるメロディが流れる。

「誰だ?」

『もすもすひねも——』

「間違え電話か」

『ちよつとちーちゃん!!? せつかく束さんが良いアイデアを教えてあげようと思ったのにな』

「貴様の良いアイデアはろくなものじゃないだろ！」

『そんなこと言って良いのかな？　いっくんの執事服姿の写真を提供出来るんだけど』

「さすが東だ。私たちの親友だけはあるな！」

「凄い変わり身……」

東の声は聞こえないが、碧もそれなりに付き合いが長いので、何を言っているかは想像がついている。そんなやり取りを聞いて呆れた碧の隣では、真耶が訳が分からず首を傾げていたのだった。

初めての I S 学園

あつという間に文化祭当日になり、織斑姉妹は一夏に命じられた通り入口での来場者のチェックを行っていた。

「あれって織斑姉妹じゃない？ やっぱり I S 学園で教師をしてるって噂は本当だったんだ」

「もし合格すれば、織斑姉妹に指導してもらえるってこと？ それじゃあ頑張らなきゃ！」

その実態はダメ教師であることは知られていないので、外部から見た織斑姉妹像というのは、羨望の眼差しを向けるに値する人間なのだ。

「わあ、織斑姉妹だ……本当に I S 学園にいるんだ……」

「ん？ お前は私たちが I S 学園に知っていることを知っているようだな」

「あ、はい！ 招待してくれた人が教えてくれましたので」

「誰の招待だ？ ……何!? 一夏だと!？」

「えっ、はい……兄の友人が一夏さんでして、来年受験するから中を見学したいとお願い

したら招待券をくれたんです」

値踏みするような織斑姉妹の視線に耐えられず、蘭が先に事情を説明した。別に悪い事をしているわけではないのだが、どうにも居心地の悪さを感じてしまうのだ。

「それだけか」

「はい？」

「貴様と一夏の関係は、兄が友人というだけかと聞いている」

責めるような問いかけに、思わず蘭の足が竦む。そんな蘭を助けたのは、織斑姉妹を見張ることを一夏に頼まれていて、何かあったら連絡するように言われていたナターシャだった。

「一夏さん、こつちです」

「何つ、一夏だと!?!」

「……開始早々何してくれてるんですか、貴女方は」

「い、いや……お前の交友関係を知りたくてな」

「はあ……蘭、大丈夫か？」

ナターシャから連絡を受け、ちょうど真上の教室にいた一夏は、窓から飛び降りてこの場所へとやって来た。着地の瞬間のみ、闇鴉を展開し衝撃を吸収したのだ。

「は、はい！ 一夏さん、この度は招待いただきありがとうございます」

「ああ、未来の後輩になるかもしれないからな。それにしても、喋り方が固くないか？」

「だ、だって……織斑姉妹が見てますし」

「ところで、何故織斑先生たちは蘭を詰問していたのでしょうか？」

「弟の交友関係を探るのも姉の務めだ！」

「そんな訳ないでしょうが……」

「お、弟？ 一夏さんって織斑姉妹と姉弟だったんですか？」

「ん？ 蘭は知らないんだっけ？ 俺の旧姓は『織斑』だからな。不本意ながらこの人たちは姉弟の関係になるんだ」

本当に不本意だという雰囲気を纏う一夏に対し、織斑姉妹は誇らしげに胸を張っている。

「まあ良い。蘭、ゆつくりと見学していくと良い。この人たちは俺が何とかしておくから」

「は、はい！ それじゃあ見学させていただきますね」

「あつ、一応言っておくけど、立ち入り禁止区域には入らないようにな。弾ならともかく、蘭はそんなことしないとは思うが念のために」

「分かってます。それに、人がいないところには行きませんよ」

一夏に手を振って、蘭はIS学園内へと足を踏み入れる。その背後では、織斑姉妹が一夏に注意されている声が聞こえたが、蘭は一切振り返ることは無かった。

一年四組での I S の解説をしつかりと聞いた蘭は、次は何処に行こうか考えながら歩いていたら物凄い行列にさしあたった。

「何だろう、この列……」

「はいはい！ 最後尾はこちらです！」

「あの、すみません」

列整理をしている、関係者と思われる女性とに声を掛ける蘭。女生徒は人好きのする笑みを浮かべ蘭に振り返った。

「はい、何でしょうか？」

「(うわつ、凄い美人……) これって何の列なんですか？」

「これは一年一組のコスプレ喫茶の行列ですよ」

「一年一組……一夏さんのクラスか」

「君、一夏の知り合いなの？」

「あつ、はい。お兄が一夏さんの友達ということにさせてもらってます」

蘭としては、あの兄が一夏の友人であるということを、いまだに信じられずにいるのだ。だから説明する時も、一応だとかそういう事になっているという説明をするのだ。

「一夏の知り合いなら寄っていった方が良いと思うよ。さつき出て行つたときは制服だったけど、今は違うからさ」

「えつと……まさか一夏さんもメイドの格好を？」

それだったら嫌だなと思ひながら、恐る恐る尋ねると、女性とは本気で笑い出した。

「さすがにそれは無いよ。だつて一夏がメイド服なんて着てたらおかしいでしょ？」

「それはそうですが……では、一夏さんはどんなコスプレを？」

「一夏はね、執事の格好をしてるんだよ。そのお陰でこんなに混んでるんだけどさ」

「一夏さん、ここでも人気なんですね」

極偶に五反田食堂に顔を見せた際、母親の蓮が一夏に見とれたという過去を知っている蘭は、一夏が客引きをすれば儲かるということを理解していた。

「えつと……貴女と一夏さんの関係は？」

「僕と一夏の関係？ そうだな……本社重役と傘下の社長つて間柄かな」

「はい？」

冗談だとしたら分かりにくいし、事実だとしたら意味が分からない説明に、蘭は思わず首を傾げてしまった。

「二夏の家が大企業だって事は知ってるよね？」

「はい、更識企業ですよね」

「うん。そして僕の家は、フランスにあるデュノア社なんだ。最近更識企業の傘下に入って、僕はそこの社長をやってるんだ」

「えつと……ニユースで見た気がします……元フランス代表候補生で、今はデュノア社社長のシャルロット・デュノアさん？」

「うん、そうだよ」

金髪美少女と会話をしている間に、蘭が入店できるまであと少しというところまで列は進んでいたのだった。

一夏のコスプレ

教室に一步足を踏み入れた途端、蘭はここは何処だという感想を抱いた。

「本音！ 三番にお茶とケーキ！ 急いで！」

「五番のティーセットまだ？」

「二番のお客様お会計です」

「ここ、学校だよね……」

「ん？ 蘭。さつきぶりだな」

困惑していた蘭に声を掛けたのは、この場所の責任者である一夏だった。

「い、一夏さん!!? その恰好は……」

「これか？ 似合わないからスーツにしてくれて頼んだら、意外な事にOKが出てな。燕尾服じゃなくて済まないが、我慢してくれ」

「い、良い……」

まだ中学生である蘭にとって、スーツという衣服は縁の薄いものだ。自宅が食堂を営

んでいるのなら尚更であろう。

「？ 蘭の親父さんは、普通にサラリーマンじゃなかったか？ スーツなんて見慣れるだろ」

「そう言う事じゃ……って、何で眼鏡を掛けてるんですか？」

「ああ、これか？ 俺がスーツを着てもコスプレにならないって言われてな。というわけで伊達メガネをかけるように言われたんだが……恐ろしいほど似合っていないんだな、これが」

一夏本人は似合っていないと思っっているが、このクラスを訪れるほぼ全員が、一夏の眼鏡姿に悶えているのだった。

「まあ、雑談は兎も角、お席にご案内します、お嬢様」

「お、お嬢様!？」

「嫌ならいつも通りに呼ぶが」

どっちがいいと視線で問われ、蘭は少し考えて答えた。

「この場にいる間は、お嬢様でお願いします」

「畏まりました、お嬢様。それで、ご注文がお決まりになりましたら、そちらのベルを

鳴らしてください」

テーブルの上に置いてあるハンドベルを指差し、一夏は奥へと下がっていった。その姿を、この教室にいるすべての女子が眺めているのに、蘭も気が付き心の中で決意するのだった。

「今は「悪友の妹」としか思っていないかと思いますが、何時か一人の女子として見てもらわなきゃ！ そのためにも、I Sの事を勉強して更識企業に就職して、一夏さんの助けになれるような人間にならなきゃいけないよね。さっきのシャルロットさんだって、一夏さんと一緒に働いてるわけだし」

「あれ？ あんた蘭じゃない！ 何でここにいるのよ」

「鈴さん……そういうえば貴女もI S学園でしたね」

「当たり前でしょ。これでも中国の代表候補生なんだから」

「おー、リンリンの知り合いだったのか。いつちーと話してたから、いつちーのお友達かと思ってたよ」

「一夏の悪友の妹よ、この子は」

背後から声を掛けられ、聞き覚えのある声に応えようと、その横から聞き覚えの無い声

まで聞こえてきた。

「鈴さん、そちらは？」

「はじめまして〜！ 布仏本音だよ〜！ いっちーとは一緒にお昼寝する仲なのだ〜

！」

「お前が俺の横で勝手に昼寝をし始めるだけだろ。たまにはちゃんと仕事しろ」

「あつ、一夏さん」

本音がサボつてると報告を受けたのか、タイミングよく一夏が蘭たちの許に現れる。形だけ怒って見せている一夏に対し、本音は結構本気で謝っていた。

「ごめん、いっちー！ だから、おね〜ちゃんに報告するのだけは……」

「私が、何ですって？」

「やつほ〜！ 遊びに来たわよ〜」

「虚さん、刀奈さん……見回りは良いんですか？」

「最強の二人が見張ってるから大丈夫よ。それよりも、一夏君は何でスーツに眼鏡？」

「これがいっちーのコスプレだよ〜」

本音の説明になっていない説明では納得できなかった刀奈は、詳しい事情を一夏に問

恭しく一礼して、一夏は厨房へ下がっていった。その一夏の一連の行動を、刀奈はつまらなそうに見ていた。

「あれ？ 会長さんは『お嬢様』って呼ばれても嬉しくないんですか？」

「ん？ 普段から虚ちゃんに呼ばれてるしね。どうせなら一夏君に呼び捨てにしてもらえた方が嬉しいかな」

「一夏に呼び捨てですか……あたしは普段からそうですし、嬉しいとは思いませんね」
「人それぞれよ。鈴ちゃんは『お嬢様』って呼ばれば嬉しいし、私は呼び捨てにしてもらえたほうが嬉しいって事ね」

「いっちは大抵呼び捨てだからね。あつ、でもカスミンの事はさん付けで呼んでるな」

「本音、何時までもお喋りしてないで、しっかりと働きなさい」
「は〜い」

虚に注意され、漸く本音も作業へと戻っていった。なし崩しに相席になってしまった蘭だが、その相手がIS界で名の知れたメンバーだったので、一言も発することなくその場で固まってしまったのだった。

学園祭の裏で

ダリルに招待券を用意させ、オータムは巻紙札子としてIS学園に潜入していた。

「それにしても、餓鬼共が多いな。蹴散らしたくなるぜ」

「その恰好でその口調は、スコールに怒られますよ」

「お前が告げ口しなければバレないだろ。それじゃあ、私は更識一夏に接触出来ないか試みるから、お前は監視してるヤツをどうにかするんだな」

ダリルを監視している碧には、声までは聞こえない。なのでオータムは表情は柔らかくして、口元は隠してダリルに話しかけているのだ。

「どうにも疑われているんですよ……あくまでも、私は更識一夏に興味を持っているお姉さんを演じているんですが」

「お前、レズだろ？ そんなんじやだませないっての」

「貴女に言われたくはないですよ。私はたまたまお付き合いしてるのが女子っただけです」

「オレだってそうだったの！」

「つつい口調が崩れ、普段の一人称が出てしまったオータムだが、それでも表情は渉外担当としての潜入の賜物で笑顔だった。

「お前と話しているとオレまで疑われそうだから、とりあえず行くぜ」

「お気をつけて。ちなみに、一年一組に潜入するのは無理ですよ。待ち時間が一時間を超えてるらしいですから」

「けっ、あんな男に群がる女の気持ち分からないぜ」

唾でも吐きそうな勢いで毒を吐いて、オータムは校舎内へと入っていった。そのオータムを見送ったダリルは、監視している碧に気づいていないフリをして、持ち場へと戻っていったのだった。

「やれやれ、気づかれる程度に監視しろだなんて、一夏さんも面倒な事をやらせますよ……」

「碧さんはダリル先輩を疑っていると知られてますからね。そのせいで私が駆り出されたんですから、文句言わずに監視してください」

「でもさあ、美紀ちゃん。貴女だってあんなヒラヒラなスカートを穿いて接客したくなかったでしょ？ だったらこっちのお仕事を手伝ってくれたっていいじゃない」

「私は午後から生徒会の出し物で模擬戦があるんですよ。だからあまり付き合っていない時間はないんです」

「午後はナターシャさんがお手伝いしてくれるらしいし、その点は抜かりないみたいよ」
「さて、それじゃあ私はダリル先輩を、碧さんはあの女性を追ってください」

「あつちは簪ちゃんを追ってるわ。そのうち刀奈ちゃんか虚さんが合流するでしょうし、ダリルさんの方は泳がせても問題なさそうよ。何かあれば、織斑姉妹が成敗するでしょうし」

来客ではなく生徒ならば、織斑姉妹の指導の対象になるのだ。その事を鑑みて、一夏は今回ダリルの監視は片手間で構わないという指示も出しているのだった。

「一夏さんの護衛は本音に任せてきましたが、不安じゃないんですけど……」

「まあ、一夏さんの側には他の女の子もいるでしょうし、迂闊に手を出せば袋叩きにあう未来しか見えないんじゃない？ 静寐ちゃんや香澄ちゃんもだけど、シャルロットちゃんやセシリアちゃん、ラウラちゃんにマドカちゃんだって専用機持ちなんだし」

改めて言われると、一夏の周りには専用機持ちが多いのだと、美紀は今更ながらに実感したのだった。それでもなお、本音が護衛役だと不安が付き纏ってしまうのは、それ

だけ彼女がだらけているからなのだろう。

休憩時間に、本音とシャルを伴って学園内を散策していた一夏に、声を掛けてきた女性性がいた。

「失礼ですが、更識一夏さんですね」

「そうですが、貴女は？」

「あつ、貴女はみつるぎの……」

「これはこれは、デュノア社長ではありませんか。ご無沙汰しております」

「ああ、この人がこの間アポなしで訪ねてきたつて人か」

シャルにそう尋ねると、彼女は頷いて一夏の問いかけに肯定した。

「業務提携をお考えのようですが、提携を結ぶ事でわが社にどのような利益が……？」
「いっちー、どうかしたの？」

言葉の途中で首を傾げた一夏に、本音が首を傾げながら問いかける。

「いや、妙な寒気がしたから……失礼ですが、どこかでお会いしたことが？」

「いえ、貴方様とは初対面のはずです」

「ですよね……」

しきりに首を傾げながらも、一夏は礼子から差し出された名刺を眺める。

「それで、巻紙さん。大変申し訳ないのですが、貴女方を調べさせていたのです
が、みつるぎとはどのような会社なのでしょう？ 装備開発という名目で設立された

ようですが、御社のお名前はお聞きしませんので」

「ええ……弊社としましても、努力はしているのですが、やはり更識ブランドに太刀打ち出来るようなものを作ることは出来ませんでした。ですので、提携という名の吸収合併をお願いきかないかと考えております」

「我々更識は、ついこの間フランスのデュノア社を吸収したばかりです。そのタイミングで今度は国内の企業となれば、各国のＩＳ産業に携わる企業に、不必要な不信感を与えかねませんが」

「天下の更識企業が、今更一つや二つ疎まれたからといって、何か問題があるのでしうか？」

「我々は世界各国に顧客を抱えておりますので、些細な事であれ、不信感を抱かせるような真似は避けたいと考えているのです。そして、みつるぎという企業を調べた結果、ペーパーカンパニーの疑いが高いという報告も受けております。そのような企業を吸収して、いらぬ誤解を植え付けたくないのです」

「そうですか……では、次回は弊社社長を同行させ、交渉の場を設けたいと思えますので、ご都合がよろしい日をお教え願えませんでしょうか？」

「私ではなく、本社代表である楯無にご連絡ください。本社へ連絡すれば通じるよう、こちらで手配しておきますので」

それだけ言つて、一夏は逃げるように礼子の前から姿を消した。そんな一夏を見て首を傾げながらも、本音とシヤルも一礼して、礼子の前から移動したのだった。

微かな気配で…

一夏にしては珍しく、自分から相手の前から立ち去ると言う行為に出たことを、本音は不思議に思っていた。だから一夏に直接尋ねる事にしたのだった。

「ねえねえいつちー。まだ話をしたそうだったけど、よかったの？」

「……なんか、あの人はヤバい。そんな感じがしたんだ」

「ヤバい？ 確かに前デユノア社を訪ねてきた時もアポなしだったし、社会人としての常識とかが——」

「いや、そんな事じゃない。分からないけど、あの人の側にはいたくない。そんな感じがしたんだ。本音、悪いが碧さんと美紀と交代してくれ。シャルも、何が起こるか分からないから、出来るだけ離れてた方が良い」

「じゃあすぐに呼んでくるね。シャルルンは二人が来たら交代で」

「う、うん……」

こういう時に素早く動けるあたり、本音も暗部の人間なんだなと実感するシャル。それに比べて自分は、と落ち込まないだけの差を見せつけられたので、むしろ尊敬の念す

ら抱いていた。

「本音って、普段はのほほんとしてるけど、やるときはやるんだね」

「あれくらい普段からしてくれればもっと評価されるんだけどな……」

ISの操縦技術も、いざという時の行動力も、一夏は十分に評価しているのだが、どうにも普段のやる気のなさが本音の評価を下げているのだった。

「というか、一夏？」

「何だ？」

「足が震えてない？」

「まだ大丈夫だ。それよりも、あの人は本当にみづるぎの人か？　ペーパーカンパニーとはいえ、社員を名乗る以上、何かやってるんだろうが……」

「そのことですが、一夏さん」

「うわあ! た、小鳥遊先生……いきなり現れるんですね」

「私もいますよ」

本音から事情を聞いた碧と美紀が現れ、それを確認してシャルは教室へと戻っていった。本音を言えば、もう少し一夏と行動を共にしたかったのだが、一夏も自分も立場と

いうものが存在する。普通の高校生ではなく、企業の重役として、同時に襲われると都合が悪いと言う事は十分理解している。また、自分も陰ながら守られているのだろうと言う事も理解しているので、我が儘でそれを台無しにすることはシャルには出来なかった。

「それで、一夏さん。みつるぎの実態ですが、どうもどこかの闇組織の資金源になっているようです」

「ペーパーなのですか？」

「何をどうしているのかはまだ調査中ですが、一応活動はしているみたいです。ただ、主だったものを世に出した形跡はありませんが」

「一夏さんの命で、あの巻紙礼子女史を監視していましたが、VTSルームに興味を示したり、各国の代表候補生が所属しているクラスだけを訪れたり、とてつもなく怪しかったです」

「他の場所には？ 例えば、寮とか整備室だとかは」

「アリーナの方には何度か視線を向けてましたが、あそこは完全に関係者以外立ち入り禁止区域ですからね。篠ノ之博士並みの侵入技術が無ければ入り込めませんよ」

「そうだな……彼女を招待したと言う事は、ダリル・ケイシーは事実を知っているのだろうな。洗脳や脅迫をされていない限りだが……」

「そっちは特に動きは無かったわね。まあ、私は監視してるのをバレているのを承知で監視してたんだから、動かなくても当然ですけどね」

あつさりと言い放つ碧に、一夏は苦笑いを浮かべた。

「午後の模擬戦の警備、やはり織斑姉妹にも手伝ってもらいましょう」

「ですが、そうすると一夏さんにどのような要求をしてくるか分からないのでは？」

「学園の仕事の一環ですから。給料をもらってるんですから、十分に働いてもらいましょう」

「その理屈が通じないのが織斑姉妹なんですよ……まあ、そんなことは私が言わなくても、一夏さんの方が詳しいでしょうけどね」

「記憶が無い以上、俺より碧さんの方が織斑姉妹との時間は多いと思いますけど」

そこまで言って、一夏は不意に自分の身体を抱きしめた。我慢の限界が訪れたのではなく、僅かに感じた思い出したくもない空気に、トラウマが発動したのだ。

「一夏さんっ!?!」

「ごめんなさい……僕は何も知らない……だからもう痛いのはイヤ……」

「碧さん、これは……」

「拉致された数時間の間に受けた拷問の記憶、でしょうね……薬物投与まではやってなかったけど、相当痛めつけられていた感じだったから……」

「怖いよ……助けてよ……お姉ちゃん……」

あの頃の一夏にとって、助けを求める相手は千冬であり千夏だったのだろう。完全に閉ざしてしまった記憶が呼び起こされる事態に、碧も美紀も警戒心を強めた。

「一夏さんを拉致して、拷問した人が今、学園にいるんでしょうね」

「そんなこと言っても、今日は外部から来てる人が大勢いますし、このタイミングで記憶が蘇った事を考えると、今来た人が——ということになりませんか？」

「それか、隠していた雰囲気解き放ったのかもしれないわね。そうになると、容疑者は今学園にいる人全員、ということになるわね……探し当てるのは無理そうね」

「とりあえず、一夏さんを安全な場所まで誘導しましょう」

美紀の提案に、碧は小さく首を振った。縦にはなく、横にだ。

「今動かすのは得策ではないわね。私たちの事も認識出来ない状況だし、もう少し落ち着いてからの方が下手に刺激しないわよ」

「分かりました。とりあえず、刀奈お姉ちゃんと虚さんには連絡を入れておきます」

「そうね。それから、生徒会室に誘導するから、それも伝えておいて」
「分かりました」

自分の周りで知らない女性二人が何かを話していると、今の一夏にはその程度の認識しか持てない。そんな一夏の状況を、護衛二人は奥歯を噛みしめながら眺めるしか出来ないのだった。

いちか君の扱い方

生徒会室に一夏を連れ込むために、碧と美紀は自分たちが敵ではない事を一夏に伝えなければいけなかった。普段の幼児退行なら、自分たちを敵と思いつくことは無いのだが、今日の幼児退行は何時もと違うものだ。二人とも理解していた。一夏が記憶を封印するほどの恐怖を味わった、あの日あの時あの場所にいた人間が今、この学園にいるのだと理解していた。

「落ち着いて、一夏さん。今から安全な場所に連れて行くから」

「嫌だ……怖い……助けてよ、お姉ちゃん……」

「大丈夫ですよ。私たちは、一夏さんのお友達ですから」

「お友達？ 僕にお姉ちゃんみたいな綺麗なお友達はいないよ？」

友達と認められていない事を嘆くか、綺麗と言われたことを喜ぶか、美紀は一瞬悩んだが、今はそんな時ではないと思いなおした。

「大丈夫ですから。今から、安全な場所に一緒に行きましょうね」

「いじめない？ 怖いことしない？」

「大丈夫ですよ。ほら、一緒に行きましょう」

安心させるように——昔救出した時と同じように、碧が一夏に手を差し伸べる。その差し伸べられた手を、一夏が恐る恐る掴む。

「はい、良い子ですね。美紀さん、先に行つて刀奈ちゃんたちに事情を説明してきてくれる」

「分かりました」

自分は碧ほど上手く対応できないと理解している美紀は、受け入れ態勢を整えるべく生徒会室へ急いだ。

「お姉ちゃんたちは、僕の事知ってるの？」

「うん、知ってるよ。私たちが大事思ってる、世界的にも有名な人なんですから、一夏さんは」

「僕は何も出来ないのに……お姉ちゃんたちが凄いだけで、僕は普通の子供だよ？」

「そうでしたね。昔の一夏さんは、本当に巻き込まれただけですものね」

その当時の事をよく知る碧は、一夏を慰めるように話しかける。怖がらせないように

に、いつも以上に言葉尻を柔らかくし、笑顔で一夏の相手をする心を心掛けていた。

「怖い思いは、もう絶対にさせませんから、安心してくださいね」

「本当？ もう痛い事もしない？」

「私たちは、一夏さんを痛めつけたりしませんよ。ちよつと愛情表現が過激な人もいますけど、みんな一夏さんの事が好きなんですから」

「僕も、お姉さんの事好きだよ。何でか分からないけど、とつても安心する」

そう思ってもらえるように心がけているのもあるが、一夏は昔から人の本質を見抜く傾向があつた。だからではないが、篠ノ之箒は一夏に避けられていたのだ。

「……？」

「そうですよ」

「ここつて、僕が入つても怒られないの？」

「大丈夫ですよ。ここは、一夏さんの知り合いしかいませんから」

幼児退行を起こしているのに、細かい事が気になつている様子の一夏に、碧はもう一度安心させるように笑いかけた。

「お姉ちゃんが言うなら、僕信じるよ」

こうも信頼されることが嬉しいものかと、碧は人知れず感動していた。これが織斑姉妹なら悶絶していただろうが、碧はちやんと分別のある行動がとれる大人なのだ。

美紀の説明を受けて、虚は刀奈に釘を刺した。

「お嬢様、分かっているとは思いますが、一夏さんに抱き着くとか、そういった行動は慎んでくださいよ」

「分かっているわよ。私だって、ふざけて良い時と悪い時の区別くらいつけられるわよ」
「そうだといいのですが」

ため息でも吐きそうな勢いの虚に、刀奈が抗議の視線を向ける。

「虚ちゃん、私のメイドさんよね？ 何だかお姉ちゃんみたいなんだけど」

「主の失態を未然に防ぐのも私の務めですから。ですから、姉のように細かい事を申し上げることも度々ございしますが、それは全てお嬢様のためを想つての事です」

「そろそろ来ると思いますが、虚さんも刀奈お姉ちゃんもお静かに。今の一夏さんは、私たちと出会ったところと同じくらい繊細です」

初めて会った時は、本音がやかしかしたのだが、今はその本音はいない。次にやかしかしそうな刀奈は、虚に釘を刺されているので大丈夫だろうと、美紀はとりあえずの状況を確認して一夏を待った。

「ハハハ」

「そうですよ。みなさん、お待たせしました」

ゆつくりと開かれた扉の先には、大人の体格をした子供がいた。身長では碧よりも大きい一夏が、彼女の後ろに隠れるように中を確認しているのだ。

「一夏君、本当に幼児退行を起こしてるのね……」

「本音のお菓子がありますから、一先ずそれを一夏さんにあげましょう」

「ジューズあつたかしら？」

「……お二人とも、誰が一夏さんをもてなしましょうと言いました？ 気持ちは分かりませんが、落ちついてください」

幼児退行を起こしている一夏を見て、刀奈と虚が暴走しかけたので、美紀がそれを止めた。しかし気持的には二人と同じ思いだったのだ。

「えつと……あつ、さっきのお姉ちゃんだ」

ぶんぶんと手を振る一夏に、美紀も控えめながら手を振り返した。

「こつちのお姉ちゃん二人も、僕のお友達なの？」

「どちらかと言えば、家族の方が近いかもね」

「家族？ 僕の家族は、お姉ちゃん二人だけだよ？」

「それは『織斑一夏君』の家族だね。でもね、今の一夏さんは『更識一夏』なのよ」
「？ よくわからないよ」

しきりに首を傾げる一夏の姿に、刀奈の鼻から愛があふれた、

「お嬢様、もう少し我慢出来なかつたのですか？」

「ごめん……美紀ちゃんティッシュ取って……」

なんとも情けない恰好だが、刀奈の表情はとても幸せそうだった。

幼児退行の原因

一夏と接触したことにより、監視の目が緩んだ隙を突いたオータムは、スコールに報告の電話を入れていた。その時の雰囲気を感じ取った一夏が幼児退行を起こしたのだが、オータムはそんなこと知る由もなかったのだ。

『どうしたの？ 潜入中はなるべく電話しないって言ってなかった？』

「監視の目が消えたから報告だ。あの餓鬼、微かな記憶の中に、オレの雰囲気覚えてるっぽいぞ」

『そうなの？ じゃあなるべく素の雰囲気は感じさせない方が良いわよ。あの子は敏感でしようしね』

「ああ、気を付ける。それより、SHの母校だつていうから少しくらい期待して来てみたが、元のSHよりも使えねえ連中ばかりだな」

『国家代表や更識所属の人間が底上げしてるだけで、学生レベルなんてそんなものでしょうよ』

スコールの評価に、オータムは首を傾げた。この程度のレベルの奴らが、次期国家代

表や候補生に選ばれる事があるのかどうかと問われれば、オータムはあり得ないと答えたいくらいのレベルだと感じているからだ。

「この程度なら、SH一人でも半壊は出来るんじゃないか？」

『バカ言わないの。総合的に見ればレベルは低くても、そこには織斑姉妹や小鳥遊碧っていう元国家代表がいるんだから。しかも、無傷で世界を制したIS操縦者なのよ。SHが勝てるわけじゃないじゃない』

「そう言えばいたな、そんな化け物姉妹が」

入場の際、オータムも当然織斑姉妹のチェックは受けている。疑いの目は向けられたが、持ち前の演技力で何とか誤魔化したとオータムは思っているが、織斑姉妹は一応「巻紙礼子」という女性に注意すべしと生徒全員に通達するよう、真耶に命令しているのだ。『とにかく、注意する人物は沢山いるの。特にMに見られたらおしまいなんだから、気を付けてちょうだいよ』

「そう言えばMのヤロウがいるのか、ここには。久しぶりに叩き潰してやりてえ気分だが、任務遂行が優先だもんな。今は止めておくぜ」

受話器の向こうでスコールが呆れた雰囲気醸し出したのを感じ取り、オータムは自

己完結させたのだった。

『分かってるならいいけど……それより、ちゃんと覚えてるわよね?』

『リムーバ剥離剤』を使って更識所属のISのコアを強奪する事と、出来たら更識一夏の拉致』
『優先順位が逆よ。一夏の拉致が目的で、コアの強奪は二の次よ』

「……別に餓鬼を拉致らなくても、コアさえ手に入れば秘密が分かるだろうが」

『コア一つより一夏一人の方が価値が上なのよ。それくらい一夏は、IS業界にとって重要なのよ』

「よく知ってたんだな……まあ、あの餓鬼一人ならすぐに拉致れそうだが、問題は護衛と監視だな」

任務の重要さはイマイチ理解していないが、難易度が高い事は理解しているオータムは、めんどくさそうにため息を吐いたのだった。

オータムの気配が無くなった事で、一夏はある程度落ち着きを取り戻していた。

「一夏君、もう大丈夫なの？」

「い、一応は……ご心配をお掛けしました」

さつきまで刀奈の膝の上で寝ていた一夏だったが、漸く起き上がり刀奈から距離を取った。

「まだ辛そうよ。お姉さんの膝の上でもう少し休んだ方が——」

「お嬢様、一夏さんが大丈夫と言っているのですから、これ以上の抜け駆けは私たちの怒

りを買うだけですよ?」

「ハイ、自重します……」

いつも以上に鋭い虚の視線に、刀奈は詰め寄ろうとしていた動きを止め、会長の椅子に座り直した。

「それで一夏さん、何があったのですか?」

刀奈が席に戻った事を確認して、虚が今回の原因を一夏に尋ねる。実は碧も美紀も、詳しい事情は説明していないのだ。とにかく、一夏が幼児退行を起こして大変だ、ということしか刀奈と虚は聞いていないのだ。

「俺を攫った人間が、今I S学園にいる可能性があります。というか、確実にいますね。あの気配は間違い様がありませんから」

「でも、不審者なら織斑姉妹が入り口でチェックしてるし……」

「変装しているのでしょうか。もしくは、雰囲気を偽っているかのどちらかですが……恐らく後者でしょうね。本来の雰囲気醸し出したままなら、今もこんな風に話せてないでしょうし」

まだ若干の震えは残っているが、幼児退行からは脱しているのが証拠だと、一夏は確信をもって刀奈たちに説明を続ける。

「なんとなくですが、さっきあつた巻紙札子さん、あの人が怪しいと思いますね」

「その根拠は？」

「尊さんたちが調べてくれた通り、みつるぎはペーパーカンパニーです。その涉外担当の人間が、まともである可能性はかなり低いと思いますし、どことなく怪しい雰囲気がありました」

「そう言えば、一夏さんは彼女の雰囲気覚えがあつたような事を言っていたと、本音から報告を受けています」

「デュノア社でニアミスしてるので、その時に感じたのかもしれませんが、どうも違うっぽいんですね。とりあえず、碧さんと美紀は、引き続き彼女の監視を。虚さんと刀奈さんは、生徒たちに危害が及ばないように見張りをお願いします」

「一夏君は？」

「模擬戦開始までここで休んでいます。まだ完全じゃないですからね」

クラスにも本音やシャルから説明が行っているだろうし、今の状況でクラスに戻っても別のトラウマが発動するだけだと、一夏は冷静に自己分析を行っていた。

「分かったわ。でも、もうあまり時間は無いから、アリーナで休んでたらどう？ あそこならナターシヤさんがいるでしょうし、何かあったら守ってくれるわよ」

「そうですね……じゃあ、そうします」

刀奈の進言に頷き、一夏も四人と一緒に生徒会室を後にしたのだった。

アリーナでのお茶会

学園の関係者でもない自分が、何故この場で待機なのだろうと、ナターシャは何度となく自問自答したが、当然の如く答えなど持ち合わせていない。そもそもIS学園で匿われている身としては、人目の付かない場所にいられる方が都合がいいのだから、この場所は都合がいい場所だと言えるだろう。

「でも、せっかくのお祭りなのに、誰も来ないアリーナで待機って、退屈にもほどがあるわよ……」

根っからのお祭り好き、というわけではないが、アメリカ育ちのナターシャにとって、ひっそりとした空間より、騒がしいくらいの方が自分に合っている気がするのだ。

「それに、朝から何も食べてないし……」

「なら、これでも食べますか？」

「誰っ!？」

誰もいないはずの空間から、自分の独り言に対する返事があったので、ナターシャは

緩んでいた気を引き締め、背後を振り返った。

「おっと！ 俺ですよ、一夏です」

「ああ、一夏さんでしたか……もうそんな時間ですか？」

一夏がここに来るのは、午後一時少し前だと言われていたので、ナターシャは時計に視線を向けた。だが、現時刻は午前十一時を少し過ぎたくらいを差している。

「まだ早くないですか？」

「ちよつとした事情がありまして、人混みから逃げてきました」

「ちよつとした事情っていうのが気になりますが、それよりも何を持って来てくれたんですか？」

「ウチのクラスで出しているケーキと紅茶です。ナターシャさんへの差し入れと言う事だつて言ったんですが、何故か俺の分まで用意してくれたんで、一緒に食べましょう」

そう言つて一夏は、ナターシャの前にケーキが乗った皿を置き、慣れた手つきで紅茶を淹れ始めた。

「一夏さんつて、更識内でもかなり上のポストなんですよね？」

「一応次期当主と言うことになっていますが、それが何か？」

「いえ、お茶を淹れたりするのが上手ですから、普段からやっているのかと思ひまして」
「やっていますよ？ 暇があれば料理もしたいですけど、高校に入ってからあまりする時間が取れませんけどね」

政府からの要請や、亡国機業の事で休日も暇ではない一夏は、自分の趣味ともいえる家事をろくにする事が出来ないのだった。

「料理も出来るんですか。男の子なのに凄いですね」

「まあ、事情があつたのか、記憶が無くても料理は得意でしたね」
「あつ、その事もあつたんですよね」

あまり接する機会が無いが、ナターシャは一夏の過去を知っている。過去、といつても一夏が記憶を失つた後の事だけで、織斑姉妹と共に生活していたころは知らない。

「お陰で困つてるんですよね。人間恐怖症が酷くて」

「ですけど、私とは割かし早く打ち解けてくれましたよね？」

「銀の福音が、貴女の人となりや俺に教えてくれましたからね。ISにそこまで想われている人が、危害を加えてくるとは思ひませんし」

はい、と淹れた紅茶も手前に置き、自分の分も淹れて一口啜る。その仕草が自然過ぎで、ナターシャはここがアリーナであることを一瞬忘れかけてしまったのだった。

「どうかしました？」

「いえ……一瞬ここがどこだか分からなくなりました」

「？」

「一夏さんが紅茶を飲んでいる姿を見て、どこかの宮廷かと勘違いしてしまいましたよ。ほら、その恰好もどこかのエリート様みたいでしたし」

「着替えてもよかったですよ、一刻も早く人のいない場所に行きたかったですよ。このままだったんですよ」

いい加減邪魔だったのか、一夏が伊達メガネを外し、胸ポケットにしまった。ちよつと勿体ないとナターシャは感じたが、かけ続けてもらう理由が思い浮かばなかったの
で、少し息を漏らしただけで何も言わなかった。

「そう言えば、午後はナターシャさんも参加するんですよね？ 大分目立ちますが問題ないのでしょうか？」

「何時までも隠れ通せるとも思えませんし、IS学園は不可侵ですからね。例えばアメリカ軍が何かを言って来ても何も出来ませんから。それに、いざとなれば一夏さんたちが

「何とかしてくれるのでしょうか？」

「まあ、ここで匿っているのは俺たち更識の都合ですからね。本来なら更識の屋敷で匿うべきなのでしょうが、こっちの方が都合が良いものですから」

「私も、何不自由なく生活できてから、文句はありませんけど。強いてあげるとすれば、外出が出来ない事ですがね。それは何処にいても同じですから、言うだけ無駄だと諦めてます」

一歩外に出れば、身の安全は保障されない状況だと、ナターシャ自身も自覚している。国に殺されかけたのだから、それくらいは覚悟して生活するものだと思うっていたのだが、IS学園という場所は前にも言った通り不可侵であり、何処の国も介入する事は出来ないのだ。

だがどうも、日本政府はそのあたりの事を曲解し、日本にある学園なのだから、日本政府の言う事は聞くべきだとか言っているのを、ナターシャも耳にしていた。

「えっと、これで参加者は俺と刀奈さん、虚さんに簪、美紀に本音にマドカ、エイミイ、静寐、香澄さんにシャルにラウラにナターシャさんか。碧さんは山田先生と一緒にアウンズだと言ってたし、あと一人くらいは欲しいかな」

「オルコットさんか嵐さんはどうでしょう？」

「二人ともクラスの担当だそうです」

「では、織斑姉妹のどちらかは？」

「アレが暴走すると面倒なので。まあ、ハンディマッチで刀奈さん対誰か二人でも良いんですけどね」

現役の国家代表なだけあり、刀奈はこのメンバーの中でも頭一つ飛び抜けている。それでも、ペアの組み方によっては刀奈に勝てる組み合わせがあるので、そのあたりは慎重に選ぼうと一夏は思っていたのだった。

女子トーク

一夏とナターシヤがお茶会をしているところに、第三者が現れたが、一夏は全くその気配に対して警戒心を抱いていなかった。

「何か動きでもあつたんですか？」

「そうじゃないわよ。ちよつとナターシヤさんに用事があつただけ」

「私に？ 一夏さんにはなく？」

自分の名前が呼ばれ、ナターシヤは意外感を隠せなかつた。授業の手伝いとして、碧の補佐を何度か務めたことはあるが、それほど会話をした記憶もない相手から、用事があると云われれば誰だつて警戒するだろう。

「午後からの模擬戦なんだけど、真耶が私じゃなくつて貴女に補佐を頼みたいって言つてるのよね」

「私に？ ですが、小鳥遊さんは強すぎてバランスを崩すからつて参加出来ないのでは？」

「そうなのよねえ……一夏さんがどうにかしてくれないかしらつて期待してるんだけ

ど」

「なら、碧さん対簪・美紀ペアで戦いますか？ ペアの候補生である二人なら、ある程度マシな戦いを見せてくれると思いますよ」

本当は刀奈と虚をペアにして戦わせても面白いと思っていた一夏だったが、そうなる
と簪・美紀ペアに対抗出来る相手がなくなってしまうのが問題だった。なら、刀奈対
虚の試合を組み、自分、マドカ、本音、ラウラ、シャル、静寐、香澄、エイミイの残り
でペアを組んで戦えばちょうどいいバランスになるはずだと考えたのだった。

「私は別に構わないけど、簪ちゃんたちがなんて言うかしらね」

「候補生から代表に昇格する為にも、碧さんとの模擬戦は有意義なはずですからね。文
句は言わないでしょう」

「どうかしら？ てか、とつくに引退した私と戦っても、大した経験値にはならないと思
うんだけどな」

碧の言葉を、一夏は謙遜とは受け取らなかつた。彼は、碧が本気でそう思っている事
を知っているし、また木霊からもそのような意思が送られてきているのだ。

「碧さん本人がどう思おうが、貴女は未だに全てのIS乗り、及び未来のIS乗りの憧れ

ですからね。織斑姉妹は、憧れるだけ無駄だと思わせるだけのバカげた動きですが、碧さんは基本的に忠実で、努力すれば自分も、と思わせる感じがありますから」

「殆どはこの木霊のお陰だけだね」

またしても謙遜に聞こえるセリフに、ナターシャは碧の顔をまじまじと眺めてしまふ。アメリカでも小鳥遊碧の名前は知れ渡っているし、むしろ知らないIS操縦者など存在しない程だ。その本人が、そこまで謙遜するほどのISの性能を、彼女は体験したと思うたのだろう。

「そんなに見つめられると、さすがに恥ずかしいんですが」

「あ、すみません。ちょっと実力を測ろうと思ったのですが、私では正確に測れませんでした」

「実力を隠すのも、代表の時には必須でしたからね。癖で今でも隠しちゃうんですよ」

「そもそも、正確に実力を測れる人間なんて、そんな簡単にはいませんよ」

一夏の言葉に、ナターシャは同意の意味で笑みを浮かべたが、碧が浮かべた笑みには別の意味が含まれているように見えた。

「何か？」

「いえ、一夏さんがそれを言うんですか、と思ひまして……貴方の知り合いにいるじゃないですか。しかも三人」

「あれらは人間ではなく人外ですから」

その言葉で、ナターシャもその三人が誰なのかを理解し、確かにあの三人ならと納得したのだった。

一時少し前になり、アリーナには大量の観客が轟めき合っていた。その中にももちろん、ダリルやオータムの姿もあるのだが、今は誰も監視にはついていない。もちろん、完全にフリーと言うわけではないのだが。

「すみませんね、いきなりこっちに代わってもらっちゃいまして」

「別に構いませんよ。人前に出ないで済むならそれに越したことはないですから」

「よくよく考えたら、碧さんはこういった操作が得意じゃなかったですからね。織斑先生に頼んでも、やってくれそうになかったですからね」

ちなみにその織斑姉妹は、一夏の頼みで例の二人をそれとなく見張っている。もちろん、本命は彼女たちではなく、宇宙規模のストーカーだ。

「それにしても、更識君って凄いですよね」

「一夏さん？ いきなりどうしたんですか」

「いえ、さっきクラスの状態を見に行ったとき、更識君のスーツ姿を見たんですけど、完全に着こなしていましたから。それに、こういった企画もすぐに考え付いて準備し、そ

それぞれのモチベーションを上げるために行動出来るんですから。そこらへんのサラリーマンより、よっぽど優秀だなーって思ったんです」

「まあ、一夏さんは高校生であると同時に、立派な社会人ですからね。しかもかなり偉い地位の。ですから、それくらいは当然なんだと思いますよ」

普通の基準がイマイチ分かっていないナターシャは、一夏の地位ならばと納得していたのだが、その普通を知っている真耶から見れば、一夏の行動力などは異常なくらい凄いものだと感じられるのだった。

「しかもそれだけじゃなく、料理に洗濯、掃除まで得意だつて噂ですからね。更識さんたちが羨ましいですよ」

「? どういうことです」

「更識君のお嫁さん候補つて事ですよ。あの家は特殊らしく、多重結婚が認められていらっしゃるんですから、全員そのまま、つて感じでしょうけどね」

私も彼氏が欲しいです、という真耶の愚痴には付き合わず、ナターシャはモニターでアリーナの様子を眺めていた。

「(男子が一人もない……つて、IS学園は女子高だもんね。当然か)」

一夏がいる事で忘れがちだが、ISは基本女性にしかならないのだから、IS学園が女子高でもおかしくないのだ。ただその事を失念していたナターシャは、改めて一夏の凄さを実感したのだった。

模擬戦直前の更衣室

話し合いの結果、マドカとラウラペア对本音と香澄ペアの試合と、一夏とエイミィペア対静寂とシャルペアの試合が組まれることになった。

「最初は、私と虚ちゃんの試合なのね？」

「碧さん対簪・美紀ペアでも盛り上がりと思いますが、目玉になるでしょうし最後で。同じく目玉になる刀奈さん対虚さんを最初に持って来れば、観客の心も掴めるでしょうし」

ただの模擬戦ではなく、文化祭の出し物なのだから、観客の心を掴んでなんぼだと、一夏は計算してこの試合を組んだのだ。

「盛り上がりれば優勝間違いなしだろうし、一夏君の休日を私たちが守ってあげられるもんね」

「そもそも、お嬢様が賞品を一夏さんにしなければ、守る必要も無かったですか」

「こ、細かい事は良いじゃないの。それじゃあ、私は向こうのピットだから、またね！」

逃げるように更衣室から移動する刀奈を、全員が生暖かい目で見送った。

「では私も、準備がありますので」

「おねくちゃん、頑張つてね〜」

本音の気の抜ける応援に応え、虚もピットへと向かった。残ったメンバーはモニターでアリーナの様子を眺めていた。

「凄いな……モンド・グロッソ並みの熱気を感じる。やはり更識所属のメンバーの試合が見れるとあって、皆興奮しているんですね。さすがはお兄ちゃん」

「お兄ちゃんって言うな！ でも、兄さんの目論見通りではありませんね」

ラウラとマドカが一夏を褒めると、一夏は微笑んでモニターに視線を戻した。

「これだけ多いと、緊張するかもな」

「それは私たちも一緒よ。候補生の皆は見られるのに慣れてるでしょうけど、私と香澄は候補生でもなければ、企業代表でも、ましてや国家代表でもないもの」

「私もどれも当てはまりませんが」

「マドカはほら、注目されるのには慣れてるんじゃない？ 織斑姉妹の妹としてや、篠ノ

之博士が選んだテストパイロットとして。そして、一夏君の妹として、今も注目されて

るでしょ?」

「それだったら、静寂や香澄だって、更識縁者でもないのに更識の専用機を貰ったって注目されてるじゃん」

簪の指摘に、静寂と香澄が居心地が悪そうに視線を逸らした。ここにいるメンバーはそうでもないのだが、心無い生徒は何処にでも存在して、陰で「一夏を籠絡したのではないか」と噂が立っているのだ。

もちろんそのような事実は無く、むしろ政府から戦力アップをせつつかれた一夏が、手近にいた二人に目を付けて専用機を与えたのだ。

「ねえねえいつちー」

「何だ?」

「刀奈様とおねくちゃん、どっちが勝つと思う? 私は刀奈様が勝つと思うな」

「ハンディが無いからな。虚さんも十分実力者だが、刀奈さんと比べると一枚落ちるから、その予想も仕方ないだろうさ」

「じゃあ、いつちーも刀奈様が勝つと思うの?」

何だかつまらなそうな本音を見て、一夏はあることに思い至った。そしてそれは、暇

つぶしにしても生徒会役員が率先してする事ではないように思えたのだった。

「本音、賭け事とは感心しないな」

「ほえっ!? 何で分かったのいっちょー?」

「退屈だと思うのはまあ、百歩譲っても、真剣勝負を賭け事に使うのは認められない。何で分かったのかは、お前の顔を見れば分かる。本音は顔に出やすい時が多いからな」

本当にたまになのだが、本音が何を考えているのか読めない時が、一夏にもある。天然故に、本音はそれを常に使う事が出来ないのだが、碧でも心を読めない時が、本音には存在するのだ。ただし、本当にどうでもいい時にそれが発動する事が多いので、一夏も虚も、その事を嘆くのだが。

「じゃあ純粹に予想だけで。かんちゃんはどうちが勝つと思う?」

「お姉ちゃんが有利なんだろうけど、一夏がさつき虚さんに言ってたから、それにもよるんじゃない?」

「俺は何もアドバイスしてないぞ。公の場で刀奈さんを叱らないようにと忠告しただけで」

仮にも日本代表である刀奈を、学園内とはいえ他所からも人が来ている前で説教する

のは、刀奈的にも更識的にも具合が悪いので、多少羽目を外した程度ならば、口頭ではなく攻撃で諫めるようにと助言したのだった。

「刀奈お姉ちゃんならありえそうだから怖いですよね」

「まあ、刀奈ちゃんも自分の立場を弁えてるだろうし、さすがに無いでしょうけどね」

碧の言葉は、若干希望的観測に聞こえたのは、恐らく一夏だけではなかっただろう。彼と同じような表情を簪もしているのを見れば、それは明らかだった。

「ところで、僕は小鳥遊先生じゃなくてナターシャさんが参加するって聞いてたけど」「ああ、それは山田先生の要請で代わってもらったんだ。碧さん、機械の操作得意じゃないし」

「そこまでじゃないんだけどな……まあ、真耶と比べればね」

そこで織斑姉妹に頼まない辺り、真耶がいかにも楽をしたいかを窺えるのだが、教師をそんな目で見るのは一夏くらいなものだった。一夏以外の生徒は、碧のコメントで納得したようでそれ以上追及してやることは無かった。

「さて、そろそろ出てくるかな」

「……出てきただけで凄い歓声だね。やっぱり国家代表対企業代表の戦いは盛り上がる

ね」

「我々もこれくらい盛り上がりしてもらえる試合をしなければ」

ラウラが零した、ちよつとズレた感想に、一夏と簪、美紀以外のメンバーは頷いて同意したのだった。

「一夏さん、ボーデヴィツヒさんは大丈夫なの？」

「まあ、事情がありますからね……」

碧は真剣にラウラの感性を心配しているようで、その事に一夏は苦笑いを浮かべて答えるしか出来なかったのだった。

実力者同士の模擬戦

刀奈対虚の試合は、一夏の目論見通り大盛り上がりの様相を見せている。片や現日本代表であり、片や世界を代表する更識企業の代表だ。知名度で言えば、この二人の上をいくのは織斑姉妹と碧くらいなものだろう。

「凄い熱気ですね。モニター越しでも伝わってきますよ」

「世間では絶対に見られない戦いだからな。刀奈さんはともかく、虚さんは中継されるような試合には参加しないから」

「おねくちゃんはあくまでも企業代表だからね。企業間でのパーツ紹介とかのお手伝いがメインだからね」

更識の企業代表が何をしているのかイマイチ理解していなかったラウラたちに、本音が説明をする。間延びしているのにイマイチ重要さが伝わったかは微妙だが、とりあえずどんな事をしているのかは伝わったようだった。

「更識製の専用機同士の戦いも、滅多に見られるものではないからな」

「訓練で見るくらいだもんね。外部の人は見れないよね」

ラウラとシャルの感想に、静寂と香澄も同意した。それくらいレアな組み合わせであり、注目を集めるには十分な組み合わせでもあるのだ。

「そういえば、生徒会の出し物が一位を取った場合、手伝いに駆り出された私たちにもご褒美はあるのかしら？」

「知らん。なきやなんか作るさ」

一夏としては、お礼として何かお菓子くらいは作るつもりだったので、なきや無いで問題ないのだが、一夏が何かを作ると聞いて、生徒会所属ではない面々の目が輝きだした。

「お兄ちゃんの手作りがもらえるのか」

「そういえば、一夏って家事も万能だったんだよね」

「一夏君の手料理が食べられるなら、気持ちいつも以上に頑張らなきや」

「でも、もらったって知られたら大変そうだね……」

「まだ一位に選ばれるとも決まってるんだが……」

一夏のツツコミは、四人にはあまり効果が無かった。

「でもさ、一夏君たちが出てるんだし、一位は決まりだと思っけどなー。更識所属の面々の試合は、それが例え模擬戦だったとしても注目されるんだから」

「エイミイ、君だつて更識所属なんだが？ しかもフランスの代表候補生なんだから、注目されるのは当然だと分かつてるんだろ？」

「あ、あはは……考えないようにしてただけど」

自分も注目されていると、エイミイは知らなかつたわけではない。緊張するので考えないようにしていたのだが、一夏にその事を指摘され気まずそうに笑つたのだつた。

観客が盛り上がっている中、虚は刀奈の強さを改めて実感していた。

「さすがはお嬢様。腐っても国家代表ですね」

『感心してる場合ではないですよ。このままならジリ貧ですよ』

「(分かつてますよ、丙。ですが、このまま終わるつもりはありません)」

専用機の性能は、自分と刀奈の間に差は無い事を虚は知っている。それでも勝てないのは、単純に刀奈の方がIS操縦の腕が上だからだ。自分は国家代表ではなく企業代表。戦う事が主ではなく、新武装などを世界にアピールするための存在だと、虚は重々理解している。それでもなお、無様に負けることには抵抗があるのだ。

「(お嬢様とて、この熱気の中冷静を保っているとは思えませんし、多少の綻びは必ずあると思うのですが、伊達に世界を制していませんね。まったく隙が見当たりません)」
『向こうには較がついていますから、それで冷静を保っているのかもしれないですね』

「一夏さんがそういう風に調整していますからね。お嬢様や本音は、すぐに興奮してしまいますから)」

先ほどから攻撃を仕掛けては捌かれ、仕掛けられては捌きを繰り返している虚は、何とかして刀奈の間を見出そうとしている。

一方の刀奈も、自分が有利だと分かっているながら決めきれない事にやきもきしていた。それでも、攻めが強引にならない辺り成長しているのだろう。

「(ハンディが無い分有利だって事は分かっているんだけど、イマイチ攻めきれないわね)」
『虚だって負けたくないんだし、簡単に攻め切れる相手じゃないって分かっているでしょうが』

「(でもさあ、こっちは世界最強の称号を手に入れたんだから、少しくらいは楽が出来るって思うじゃない？ それがこんなに苦戦するなんて……やっぱ虚ちゃん相手は骨が折れるわ)」

『それぐらいじゃなければ刀奈が本気を出せないと、一夏さんも理解しての組み合わせなんですから、文句言わずに頑張ってください』

「(蛟、なんかお姉ちゃんみたいね)」

専用機に諭されながら、刀奈はそんなことを考えていた。もちろん、相手の攻撃には細心の注意を払っているし、隙あらば自分からも攻撃を仕掛けている。そんな中で余計な事を考えていられるのは、刀奈が実力者だからなのだろう。

『あまり時間を掛けると、外部から見学に来ている人たちに手の内を晒すことになりま
す。多少強引にでも決めに掛かるべきだと思いますよ』

「(でも、強引に攻めて倒せる相手じゃないのよね、虚ちゃんは……仕方ない、ちよつと賭けに出ますか)」

そう心の中で決め、刀奈は虚目掛けて突進を仕掛ける。

「(特攻!?! いえ、お嬢様がそのような考え無しに突っ込んでくるとは……)」

「はい、残念」

「なっ!?!」

刀奈の狙いは、虚が自分の行動に裏があるのではと疑わせること。それによって生まれた若干の隙を突いて、刀奈は虚のSEをゼロにしたのだった。

『試合終了。勝者・更識刀奈』

真耶のアナウンスが流れ、第一試合は終了となったのだった。観客からは万雷の拍手が送られるが、負けた虚はその拍手に應えるだけの気力が残っていなかった。

試合前の思考

第一試合の熱気が冷めやまぬ間に、次の試合の組み合わせがアリーナに表示され、真耶がコールをした。

『第二試合は、更識一夏君、アメリカ・カルラさんペアVS鷹月静寐さん、シャルロット・デュノアさんペアの対決です』

新旧フランス代表候補生の対決と言う事もあり、場内は異様な盛り上がりを見せている。

「あわわ……なんだか物凄い盛り上がり方をしてるんですけど」

「まあ、候補生同士だしな。盛り上がるだろうとは思ってたけど、まさかここまでとはな」

「何か冷静?!? 一夏君って緊張とかしないの?」

「これくらいなら大丈夫だ。更識の仕事でもっと大勢の前でプレゼンをしたことがあるからな」

大企業の跡取りと言うことになってるので、エイミーは一夏の説明をあつさり信じた。もちろん、一夏も嘘は吐いていない。嘘があるとすれば、役職だけだろう。

「一夏さん、先ほどの気配を感じ取ったら、すぐに私が気配を遮断いたしますので、存分に戦ってください」

「分かった……だからいきなり人の姿になるのは止めると言っているだろう」

「別にいいじゃないですか、一夏様。たまに人の姿で喋りたくなるんですから」

「スサノオも人の姿になってるし……」

聞鴉とスサノオが人の姿になり、一夏の事を心配しているのを見て、エイミーは何か事情があるんだろうなと言う事は感じ取っていたが、具体的な事は何も聞かされていなかった。

「ところで一夏君、静寐の専用機って、確か遠近両方いけるんだよね？」

「スサノオだって両方いけるだろ。エイミーが苦手なだけで」

「はい、精進いたします……」

一夏にやんわりと指摘されて、エイミーはしょんぼりとして、自身の未熟さを改めて見詰め直したのだった。

一夏とエイミーがピットで会話をしているのと同じく、向かい側のピットでは静寂とシャルが会話をしていた。

「一夏君相手っていうのが大変そうよね」

「でも、一夏は基本的には平和主義者だから、戦闘はあまり得意じゃないって聞いている

よ」

「得意じゃなくても、強いよね……あれで更識家内最弱だつて言うんだから、化け物の集団つて噂されるのも無理ないわよ」

「あの本音ですら、一夏よりも強いんだもんね……ちよつと信じられないよ」

一夏より強いから護衛を務めているのだと、シャルもしつかり理解している。理解はしているが、その事実を受け入れるのにはちよつと普段のイメージが邪魔しているのだ。

「あののほほんとした空気を纏ってる本音が、本当に一夏より強いのか気になるよね」

「VTSを使った訓練でも、一夏君は勝つたことが無いって言つてたわよ」

「あの本音がねえ……お姉さんなら分かるんだけど、本音が一夏より強いっていうのはちよつと信じられないよ」

「簪や美紀と肩を並べるくらいには強いって本人が言つてたけど、そこまですは私も思えなかつたわね」

実際にハンディを付けると、本音は簪や美紀と同じハンディになるのだが、その事を知らない静寐とシャルは、しきりに本音の実力で頭を悩ませていた。

「マドカも強いって噂だけど、本人は否定してるんだよね」

「姉さまの強さや兄さまの頭脳と比べたら私なんて……っつてずっと言ってるもんね」

比べるところがおかしいのであって、マドカも同年代からすれば十分な強さを持っている。更識内でも十分通用するレベルなのだが、いかんせん姉がああ織斑姉妹で、兄が更識一夏なのだ。卑下してしまうのも仕方ないのかもしれない。

「そう言えば、静寐が前衛でいいんだよね？　僕は基本的射撃で援護する事しか出来ないけど」

「それで構わないわ。多分エイミーが前衛で、一夏君が後衛でしょうからね。私は一夏君の相手が出るほどの射撃の実力はないもの」

「……やっぱり、僕が前衛でも良いかな？」

一夏が相手だと言う事を想いだしたシャルが、弱気な発言をしたのを受けて、静寐は苦笑い気味に笑って首を横に振った。

「頑張ってるね、元代表候補生さん」

「うう……一夏相手に勝てる未来が見えないよ……」

未来予知の能力は久延毘古のもので、シャルにその能力は無い。静寂はそんなことを思いながら、開始の合図まで集中力を高めることにしたのだった。

客席で一夏を攫う隙を探っているオータムは、自分を見張る視線に気づいてさりげなく辺りを見回した。だが何処にも碧の姿は見えなかった。

「あの小鳥遊とかいうヤツじゃねえのか？　だとしたら更識にはどれだけ人間がいるんだよ」

まさかあの織斑姉妹に監視されているとは夢にも思っていないオータムは、視線の方向だけでも掴めないかとさりげなく辺りを探るのを続ける。だが、よほど監視に慣れているのか、相手は居場所どころか方向すら掴ませないのだった。

「この視線、明らかにオレを疑っているものだ。だけど、更識以外にオレを疑うヤツはいねえし、あの小鳥遊以上の監視がいても思えねえ……そうなると、別口か？　だが、そんなに怪しまれる行動は取ってねえはずなんだが……くそ、気持ちわりい」

纏わりつくような視線に、オータムは不自然にならない程度に身体をゆすった。そんなことしてもこの纏わりつく感じが無くなるはずがないと理解しているのだが、それでもゆすらずにはいられなかった。

「とりあえず今は、あの餓鬼の試合を見て、試合終了後に近づく方法を考えることにするか……視線は、一旦気にしない事にする」

自分に言い聞かせながら、オータムは一夏が出てくるピットに視線を固定し、表情に

出ない程度に思考を巡らせたのだった。そのすぐ側で、織斑姉妹が自分を見ているなどと、夢にも思わずに。

客席での一幕

ピットから出てきた一夏たちに、客席は大熱狂の様相を呈した。ただでさえこの前の試合が刀奈VS虚で盛り上がっていたところに、一夏という更なる燃料が投下されれば、この熱狂も当然だと言えよう。

そんな中、蘭は一人熱心に試合を見学していたのだが、いつの間にか背後に人が来ているのに気が付き振り返ったのだ。

「あの……?」

「ああ、決して怪しいものじゃありませんよ。私は、IS学園二年、新聞部の黛薫子っていうの。さつきまで戦ってたかつちゃん——更識刀奈ちゃんのルームメイトよ」

「はあ……」

「あー、その顔は疑ってるわねー。後で更識君に証明してもらっても構わないけど」
「更識君って……一夏さんのお知り合いなのですか?」

胡散臭い人だと思っていた蘭だったが、一夏の知り合いということで警戒心を解いた。それでもまだ、完全に心を開くことはしていない。

「やっぱり！ 貴女は更識君の知り合いだったわね！ 実は更識君の学園以外の顔を知りたくて、彼が招待した子を探してただけど、漸く見つけられたわ」

「一夏さんの学外の顔って言われましても……私は一夏さんの学内の顔を知りませんので」

蘭にとつて、薫子が言う「学外の顔」がいつもの一夏であり、特筆すべき事は特にないのだ。

「それじゃあ、貴女と更識君の関係は？ 恋人？ それとも、中学の後輩で、憧れの先輩に近づきたいとか？」

「一夏さんはお兄の——兄の友人なんです。もともと、全然釣り合わないのに、悪友って表現を使つてますけどね」

「ほほう、更識君のお友達の妹さんでしたか。でも、それじゃあ何で更識君はそのお友達ではなく、妹の貴女を招待したのですか？」

「私がお願ひしたんです。IS学園を志望しているので、見学に行けないかつて」

「ほうほう、貴女はIS学園志望なんですね。将来有望かもしれない後輩ちゃん、名前を教えてもらつてもいいかな？」

薫子の言葉遣いに、蘭は顔を引き攣らせて若干距離を取る。物理的な距離ではなく、精神的な距離だ。

「ノリが悪いわねえ……まあ、慣れてないって事で許してあげる。それで、お名前は？」

「えっと、五反田蘭です」

「ふむふむ、五反田蘭ちゃんね。それで、IS学園志望って事は、簡易適性検査を受けたのよね？ 判定は？」

「Aでした」

「おお！ ますます将来有望ね。目標は？ 日本代表？ それとも自由国籍を使って別の国の代表かしら？」

「出来れば、日本代表を目指したいです」

「そうよねえ。自分の育った国の代表を目指したいわよね。でも、今の代表はかっちゃんだし、かっちゃんが引退するころには、蘭ちゃんも」

年齢で引退を決める訳ではないが、刀奈が代表落ちするような事は考えにくい。実力もさることながら、バックアップが更識企業なのだから、技術面で劣るのはまずありえないのだ。

「ええ。ですから、目指しはしますけど、現実的な目標ではなさそうですね」

「そうなるよ、やっぱり自由国籍？」

「ＩＳ学園を卒業すれば、ＩＳ関連の企業から引く手あまたでしょうし、現実的に就職を目指します」

「おお、急に現実に戻ってきた……」

蘭の超現実的な将来設計に、薫子の反応は少しつまらなそうだった。それでも、ここで終わらないのが薫子の良いところで——虚や一夏に言わせれば悪いところだが——更に深いところまで切り込んだのだった。

「それじゃあ、就職したい企業とか決まってるの？」

「理想は更識企業ですが、倍率を考えると厳しいでしょうね。その系列でも良いので、世界最高峰の企業に携われればとは思ってます」

「なるほどねえ……更識君と知り合いなら、コネを使うとか考えないの？」

「お兄があれほど世話になってるので、私まで一夏さんに世話になるのは……」
「そのお兄さんと更識君の関係って、本当に悪友って事で良いのよね？」

薫子の質問に蘭が答えようとすると、背後から先に答えられた。

「あの阿呆と一夏は、教師と生徒って感じもするけどね」

「鈴さん？ クラスの出し物で忙しいって一夏さんが言っていましたか……まさか、サボりですか？」

「違うわよ。みんなこつちが気になるみたいで、ウチのクラスは開店休業中よ」

「おや？ 中国代表候補生の凰鈴音ちゃんじゃない。蘭ちゃんは凰さんともお知り合いだったの？」

「あたしもこいつの兄貴の悪友ですから。てか、あたしが一夏にあの阿呆を紹介したのよ」

鈴が薫子を引き受けてくれたので——と蘭は勝手に解釈した——蘭はアリーナで行われている試合に意識を戻した。四分の三が更識が開発した専用機ということもあって、会場は先ほどの試合以上の盛り上がりを見せている。加えて、珍しく一夏が戦っているの、IS学園に在籍中の女子たちも異様な熱気を醸し出している。

「あら、珍しいわね。一夏がちゃんと戦ってるなんて」

「一夏さんって、普段はちゃんと戦わないんですか？」

まるで不真面目だと言っている鈴に、蘭は食って掛かろうとした。だが鈴が蘭の誤解に気付き、正確な表現で言い直した。

「一夏は争い事を好まないから、普段は遠距離から攻撃するか、姿を消して不意打ちで終わらせることが多いのよ。でも今日はさすがにそれは出来なかったんでしようね」

「……何故ですか？」

「見世物だからよ。今の一夏は、お客さんを楽しませる義務があるのよ。だから不意打ちや遠距離から地道にSEを削るような戦法は採らなかつたのよ、きつと」

鈴の説明で納得した蘭は、改めて一夏の戦い方を見た。的確に援護射撃を繰り返し、相手後衛に牽制の銃撃をしている。そして隙を突いて近距離武器で叩き、前衛が相手と距離を作る時間を稼いでいる。

「一夏さんって、前衛はやらないんですか？」

「あの機体は前衛向きじゃないからね。出来なくはないけど、エイミイの方が完全に前衛向きだから」

時折鈴に解説を求めながら、蘭は熱心に一夏たちの試合を見学する。そんな蘭の表情を、薫子がこっそりと写真に撮っていたのだった。

試合中の交代

一夏は、自分が造った鵠鴿相手に大苦戦を強いられていた。元々戦闘用に造ったわけではない闇鴉と、完全に戦闘用に造った鵠鴿では、火力に大きな差がある。闇鴉は一撃一撃はSEを削る程度なのに対して、鵠鴿は一撃で致命傷になりかねないくらいのだ。メージを負うのだ。

『一夏さん、来ます！』

「分かってる。火力で負けるなら、こちらはその特性を生かした戦い方をするしかない」

闇鴉の特性、それは更識製の専用機の中でもトップのスピードと、周りと同化し姿を消す事にある。さすがに後者はこの大観衆の中で使うわけにはいかないが、速度を駆使した戦い方なら、見られても問題ではないのだ。

「(下手をすれば相打ちになるかもしれないが、壊れても後で治してやるから気にするな)」

『意識はありますが痛覚はありませんので。痛いという事は分かりますが、本当に痛み

を感じるわけではないので、存分にぶつかっちゃってください』

「（いや、俺は痛みを感じるんだが……）」

上手くコントロールしなければ、自分が大ダメージを負う事を理解している一夏は、精神を集中して鶴鳩の攻撃を待った。

「戦闘中に目を瞑るなんて、一夏君らしくないわよ！」

静寐の言葉と共に飛んでくるレーザーを、一夏は紙一重で躲した。余裕をもって躲す事も出来たが、この方が相手に与える精神的ダメージが大きいのであえてギリギリまで引きつけたのだ。

「行くぞ、静寐！」

あくまで模擬戦なので、一夏は相手にこれから仕掛ける事を告げた。もちろんプライベート・チャネルなので、観衆には一夏の声は聞こえない。それ故に、静寐がいきなり動揺したのを見て、観衆は何が起こったのかとざわついた。

『静寐、前方より物凄いスピードで攻撃が来ます！』

「（前方!? だって何も見えな……っ！）」

まったくの勘だった。静寐が前方に刀を出すと、そこに強い衝撃が加えられた。衝撃を感じてから、静寐は自分の刀に相手の剣が当たっている事を視認した。

「さすがだな。まさか止められるとは」

「偶然よ、偶然。そもそも見えなかったんだから、偶然以外の何物でもないわよ」

「見えなかったのに止められたのか。俺もまだまだだな」

そう言葉を交わしたのは一瞬で、再び一夏の姿が静寐の視界から消えた。

『後方から来ます！ 先ほどより早い!?』

「(まだ全力じゃないって事なのね。なら、こつちも持てる力全てを出して受け止めるー。)」

静寐は一夏に攻撃を当てる側ではなく、一夏の攻撃を凌ぐ側に回っている事に気づいていない。自分が有利に運んでいたはずなのに、いつの間にか不利な状況に陥ってしまった事に気づかないほど、今の静寐は一夏の攻撃を凌ぐ事だけを考えているのだった。

後衛二人が高度な戦いを繰り返している前では、エイミイと何故か前衛になったシャ

ルが戦っていた。

「分かってたけど、一夏の相手は僕じゃ務まらなかつたね」

「機体の差があるから仕方ないんじゃない？ シャルの専用機つて第二世代だもん」

「第四世代でも、まだ荒っぽいエイミー相手なら負けないよ」

「言ってくれるじゃない。こつちにはまだ隠してある武器がいっぱいあるんだから」

シャルが言ったように、ラファールカスタムでは、闇鴉の相手が務まらなかつたのだ。遠距離攻撃を仕掛けても的確に防がれ、前衛で戦っていた静寐の邪魔をされる。これは勝負にならないと判断した二人は、試合中に前衛と後衛を変更するという作戦に出たのだった。

「悪いけど、エイミー相手なら僕も本気で行くよ！」

「私だって、一夏君の期待を背負ってるんだから、簡単には負けられない！」

軽く火花を散らして、エイミーとシャルが互いに衝突する——寸前で、一発の弾丸が二人の間を通過した。

「盛り上がっていると悪いが、これでチェックだ」

「い、一夏……じゃあ静寐は」

「今さつき撃ち落としたり」

火力の差を、スピードと戦術で覆した一夏が、シャルの背後に回り銃口を向ける。即席のペアとはいえ、エイミーは候補生で一夏は更識の人間。シャルは自分が勝てる未来が見えなかった。

「まあ、無様に負けないようにしないとね！」

ラピットスイッチでマシンガンを取り出し、エイミー目掛けて撃ちまくる。エイミーへの牽制を終えたシャルはすぐさま一夏目掛けて再びマシンガンを乱射した。

「弾幕か、悪くはないが薄すぎる」

「嘘でしょ!？」

「残念、背後ががら空きだよ」

「エイミー!？」

弾幕を縫うようにすり抜ける一夏に驚いている隙に、背後にエイミーが迫っていた。シャルは何とか抵抗しようとしたが、時すでに遅し。スサノオの一撃と、闇鴉の一発を喰らい、そのまま袋叩きに遭う前に降参したのだった。

『試合終了。勝者、更識一夏、アメリカ・カルラペア』

真耶のアナウンスが流れ、一夏とエイミイは空中でハイタッチを交わした。

「一夏君、強すぎるわよ」

「いきなり相手が変わったからな。加減が出来なかつた」

「あはは……僕とやってた時は加減してたんだ」

「一応はな。手の内を晒すわけにもいかないだろ」

「まあね。特に一夏は、狙われてるかもしれないんだもんね」

立場上自分も狙われているかもしれないのだが、シャルは完全に他人事のように言つた。その危機管理の薄さに不安を感じながらも、一夏はシャルの言葉に苦笑いを浮かべたのだつた。

ちよつとした油断

模擬戦を終えた一夏は、着替えるために一人でアリーナの更衣室へと向かっていた。本気は出していないが、それなりに動いたので汗も掻いている。シャワーを浴びる為にも、女子と行動していると色々マズいので、今だけは護衛をつけていなかった。

「何かあれば私がお守りしますよ」

「お前だって動いてただろ？ SEの補給や機体の熱を取ったりとしなければいけないんだ。待機状態でいろ」

「ですが、何かあるか分からないんですから、護衛は必要ですよ」

「ここは関係者しか入ってこれないんだ。だからそれほど警戒する必要は無いだろ」

気を抜いているわけではないが、アリーナの更衣室など、学園の人間ですら滅多に入らないのだ。そんなところに好き好んで忍び込んでくる輩などいないと思つて当然だろう。

さすがに闇鴉も一夏の言い分に納得したのか、人の姿から待機状態へと移行する。これで完全に一夏一人での行動となった。

「二人つていうのは久しぶりな気がするな。開発とか調整とかで籠ってる時ならともかく、こういうった広いところで一人つて、いつ以来だろう……」

誰かしら護衛をつけていたり、友人や部下と行動を共にしていたので、一夏はプライベートでも一人で行動する事が少ない。部屋でも美紀と同室なのだから、そこでも一人になる事は限られてくるのだ。

「次はラウラ・マドカペア对本音・香澄さんペアか。データを採る為にも早めにシャワーで汗を流すとするか」

専用機のデータは、既に十分すぎるほど採っているが、それでもまだ向上出来るのではないかと考えてしまうあたり、根っからの開発者なのだろう。限界を定めず、まだ出来ると思っている一夏は、常に所有者の意見と戦闘のデータを求めているのだった。

試合まであまり時間がないと言う事もあり、一夏は急いでシャワーを浴びる事にした。服を脱ぎ、誰もいないと言う事で特に隠すこともせずシャワーを浴びる。その行為の中に、一夏は不意に気配を感じ取った。

「誰だ、こんなところに……静寂やエイミィ、シャルは別のシャワー室を使ってるはずだし、刀奈さんや虚さんはとっくに済ませてるだろうしな……」

シャワーに用がありそうな人間は、ここには来ないはずだし、それ以外ならもつとありえないので、一夏は多少混乱した。こんな所まで入り込んでくる人間はいないだろうと思っているし、怪しい人間には見張りをつけているのだから、それも有り得ないと思っている。

唯一の心配事と言えば、その怪しい人間につけた見張りが織斑姉妹だと言う事だ。あの二人は実力だけなら申し分ないのだが、仕事をサボる傾向があるのだ。今回もその悪癖が出たのかもしれないと、一夏はとりあえず気を引き締めた。

「……心配が消えた？ 気のせいだったか」

だが、いざ気を引き締めたところで、先ほどまで近づいていた心配が消えた。考え事をしてる間に遠ざかったのだろうと考え、一夏は再び気を緩め着替えることにした。

「結構ギリギリになったな……」

考え事をしてきた所為なのか、一夏が想定していた時間よりも時が過ぎていた。全身をしつかりと拭き、一夏は着替えに袖を通したところで――

「っ!？」

——とてつもない殺気を浴びせられた。

ゆつくりとその殺気の出どころを探りながら、一夏は待機状態の闇鴉のエネルギー残量を確認した。

「二十パーセントか……逃げ切れるか微妙だな」

自然回復の能力を積んであるが、それでも逃げ切れるかどうかというエネルギー残量に、一夏はいざとなってもI-Sは使わないでおこうと決心した。

何食わぬ顔で着替えを済ませ、ごく自然に更衣室から出て行こうとしたところで、一夏は先ほどの殺気を持ち主に出くわしてしまったのだった。

「貴女は……」

「お疲れさまです、更識一夏様」

「こんなところまで営業ですか？ 一応関係者以外立ち入り禁止なので、勝手に入ってこられては困るのですが」

「そうでしたか。先ほどの戦いを見て、ぜひとも更識様に我が社の製品をお使いになっていたいただきたいと思ひまして、つい見逃してしまいました」

「そうでしたか……それで、貴女は何者なのですか——巻紙礼子さん」

あくまでも涉外担当の顔を崩さない礼子に、一夏は最大級の警戒心を以って対応している。言葉遣いは丁寧なのだが、その身からは隠しきれないほどの殺気があふれ出ているのだ。

「実はですね、私は貴方に商品を提供すると同時に、もう一つの任務があるのですよ」
「……それは？」

最悪な事態だと、一夏は理解している。助けを呼ぶにも、携帯は持ってきていないし、闇鴉のエネルギーは不十分。加えて武器になりそうな物は無いし、出入り口は礼子に塞がれている。隙を突いたところで逃げ切れるとは思えない状況だ。

それだけでも最悪なのだが、先ほどから礼子から溢れている殺気に、一夏は覚えがあったのだ。今はまだ堪えているが、それもいつまでもつか分からないのだ。

「更識企業の技術力を手に入れる事、ですかね」

「つまり、更識の人間を狙っている？」

一夏がそう答えると、礼子は被っていた仮面を取り外し、本性を現した。

「そうだと言いたいが、より正確にはお前だよ、更識一夏！」

「っ！ ……それが貴女の本性ですか」

「改めて自己紹介と行こうか。亡国機業所屬、オータム様だぜ、餓鬼が。昔みたいに少々痛めつけてから連れ去ってやるから、覚悟しな」

オータムの殺気に、一夏は足の震えを抑えきれなくなってきた。これでは生身で逃げ出すのは不可能だろう。この状況に気付いて、誰かが助けに来ることも考えにくいので、一夏は持てる思考全てをフル回転し、どうにか状況を打破しようと考えていたのだった。

刀奈の嘘

控室にやって来た刀奈は、辺りを見回して一夏がいない事に気付き、首を傾げた。

「あれ？ 一夏君は何処に行つたの？」

「一夏ならシャワーで汗を流してくるって、下のシャワー室に行つたよ」

「ここにもシャワーあるじゃない。何で下のシャワー室に？」

「あつ、多分私たちが使つてたからだと思います」

シャワー室から出てきた静寂が、刀奈の疑問に答える。その後ろからはシャルとエイミイも髪の毛を拭きながら戻ってきた。

「なるほど。一夏君なら一緒に、なんて考え無いものね」

うんうんと頷いて、刀奈は控室から出て行くこうとして――

「お嬢様、どちらへ？」

――振り返った先で虚と鉢合わせした。

「う、虚ちゃん……ちよつと用を足しに」

「先ほどお嬢様がお手洗いから出てくるのをお見かけしましたが、随分と間隔が短いすね」

「お、お腹の調子が良くないのよ……」

「そうでしたか。では保健室に行つて胃薬でももらつてきましょう。良く利くと噂の、漢方薬が入つたと聞きましたので」

虚の笑顔に、刀奈は冷や汗を掻く。漢方薬というからには苦いのだろうと思うのと同じ時に、自分の嘘が虚にバレているのが分かつているからだ。

「お嬢様の体調管理も私の仕事ですから、どうぞご遠慮なく」

「ご、ごめんなさい……一夏君のところに行こうとしてました」

「まったく……お嬢様、これ以上一夏さんに過干渉すると、嫌われてしまうかもしれませんよっ。」

「一夏君に嫌われるっ!?! そ、そんな……」

その未来を幻視したのか、刀奈は膝から崩れ落ち、蹲り泣いてしまった。

「お、お嬢様……冗談ですので泣かないでください」

自分の冗談が刀奈を泣かせてしまったと、虚は慌てて刀奈に駆け寄る。普段の冷静さは影を潜め、今の虚は完全に動揺していた。

「隙あり！ ごめんね、虚ちゃん。どうも嫌な予感がするから一夏君のところに行つてくるね」

「お嬢様！」

虚の横をすり抜けて、刀奈はダツシユで下のシャワー室へ向かった。騙された虚は、怒りと自分の眼力の無さに腹を立て体を震わせていた。

「お姉ちゃんらしい行動でしたね。一夏のところまで行けば、虚さんが追いかけれないってのも分かってての演技でしたもん」

「長年お嬢様を見てきながら、まさかあのような嘘に引っ掛かるとは……」

「おねくちゃんも駄目だね」

「本音、次は私たちの試合だ。いつまでもだらだらしてないで行くぞ」

「ほえっ!? ラウラウ引っ張らないで」

対戦相手ではあるが、何時までも控室でだらだらしているのが気に入らなかつたらウ

ラが、本音を控室からピットへ引き摺って行った。残された簪と美紀は、布仏姉妹を複雑な目で交互に見て、そして何もなかったかのようにモニターに映っている試合のハイライトを視るのだった。

トラウマを抑えきれなくなってきた一夏は、逃げるように後退していく。下がったところで逃げ道など無いのだが、少しでもオータムから距離を取りたいと思っっているのだろう。

「逃げてどうするんだ？ そっちは行き止まりだぜ」

「あ、アンタから距離を取りたいだけだ。行き止まりなのは分かってる」

「おーおー、強がっちゃまって。どうせお前はオレにやられるんだから、大人しくしろってんだよ」

一夏が下がる速度よりも、オータムが距離を詰める速度の方が早い。一步ごとに足の震えが増していき、ついには動けなくなってしまった。

「おっ、追いかけてっちは終わりか。随分と早かったじゃねえか」

「ひっ！」

「あー？ おめえ、もしかして腰を抜かしたのか？」

その場にへたり込んだ一夏を見て、オータムが馬鹿にした笑みを浮かべる。彼女は、一夏が自分にトラウマを抱えている事など知りもしないので、自分の殺気に耐えられなくなっただと解釈したのだ。

「天下の更識様も、こんな腰抜けを次期当主に指名するとはな」

「く、来るな……」

「来るなって言われて行かねえヤツはいねえんじやねえの？ 待てって言われて待つヤツがいねえみたいによ」

獲物を追い詰める野獣のような、獰猛な笑みを浮かべながら、オータムがゆつくりと一夏に近づいていく。もはや動くこともままならない一夏は、震える身体を抱きしめながら蹲る。

「ったく、こんなやつを捕まえるのなんて、SHでも出来たんじやねえか？」

『やつほー、一夏君いる〜？』

「あ〜？」

出入り口から聞こえてきた声に、オータムは反応した。明らかに一夏に用がある感じの声だったが、オータムの存在に気付いている風ではなかった。

「あれ？ これって一夏君の……」

「何だ小娘。ここは立ち入り禁止だぞ」

「貴女、どなた？ ここに一夏君がいるはずなんだけど」

「そんなヤツいねえな」

「ふーん……それじゃあ、貴女の背後で怯えてる子は、何処の誰かしら？」

刀奈のカマ掛けに、オータムは慌てて振り返ってしまった。しっかりとロッカーに押し込めたはずなのに、あまりにも自信満々な刀奈の態度に、オータムはブラフだと見抜けなかったのだった。

「やっぱり一夏君はこの場所にいるのね。貴女、一夏君をどうするつもり！」

「ちっ、ござかしい真似を！ テメエは血祭にあげてやるぜ！」

オータムが激高したタイミングで、一夏が自力でロッカーから抜け出してきた。

「一夏君っ!？」

「に、逃げて……この人は、亡国機業……」

「黙ってる、餓鬼が！」

一夏が必死になって上げていた頭を踏みつけ、オータムが刀奈に攻め入る。

「知っちまったからには、生かしておけねえぜ」

「貴女、一夏君にそんなことして、生きて帰れると思ってるの？」

互いに相手の命を奪うことに躊躇いの無い空気が流れ、一夏はその空気の中でられ気絶したのだった。

碧の怒り

痛めつけられた一夏を見た刀奈は、次の瞬間にはオータムに殴りかかっていた。

「おつ、肉弾戦か？ 望むところだぜ」

「許さない！ 一夏君に酷い事をした貴女を、私は絶対に許さない！」

「こんなクソガキが良いのか？ お前も大したこと無いんじゃないか？」

あえて煽るような言葉を浴びせ、オータムは刀奈を自分の間合いに呼び込む。冷静な判断が出来る状態なら引つ掛からなかったであろう罨が、そこには用意されていたからだ。

「このっ！」

「世界最強の称号を持っていようが、馬鹿なら意味がないな。こんな見え見えの罨にハマりやがった」

オータムはそこでISを展開し、仕掛けていた蜘蛛の糸を更に刀奈に巻き付けていく。

「餓鬼と一緒に前も連れて行ってやるよ。精々亡国機業の繁栄の為に、人体実験でもされてくれや」

「離しなさい！　こんなこととして、ただじゃすまないわよ！」

「今のお前に何が出来るといふんだよ。助けに来たつもりが、助けてもらおう立場になつてお前がよ」

刀奈を精神的に追い詰めていくオータムの背後で、一夏は何もできずにいる。本心では刀奈を助けたいと思つてはいるのだが、それ以上にオータムに対する恐怖心が勝つてしまつてゐるのだ。

『一夏さん、私が助けを呼びます』

「(でも、間に合わないかもしれない)」

『大丈夫ですよ。一夏さんのピンチだと分かれば、皆さん文字通り飛んできますから』

「(ISを無断で展開したら怒られちゃうよ?)」

『その怒る立場の織斑姉妹が監視を怠つたから、こういう状況になつてゐるんですから。非常事態にはそんなルールを守つて余裕なんてありません』

闇鴉が更識製のISにだけ届く信号を送ると、オータムは背後を振り返り一夏に獰猛

な笑みを見せた。

「てめえ、今何かしたな」

「ひっ！ な、何もしてないです」

「誤魔化すんじゃないよ。オレはそういうのに敏感なんだ。それで、何をしやがった？ 素直に言えば、痛めつける箇所を少し減らしてやるよ」

じりじりと間合いを詰めてくるオータムに、一夏は恐怖し後ずさる。しかしすぐにロツカーに行き当たり、逃げ場が無くなってしまう。

「さて、まずは何処の骨を折ってやろうか？ 首や背骨は最後の方が面白いよな？」

「ひう!？」

冗談ではなく本気で骨を折るのだと理解した一夏は、恐怖のあまり意識を手放してしまった。

「あ？ また気絶しやがった……しかし、気絶してようが関係ねえか。まずは逃げられないように足の骨を——」

「一夏さんから離れなさい！」

「うおっ！」

背後から鋭い一閃がオータムに襲いかかり、寸でのところで回避行動を取った。その隙に一夏は簪によって回収されてしまっていた。

「お嬢様、あれほど抜け駆けは禁止と申し上げたはずですよ」

「ごめんなさい……」

「さてと、形勢逆転かしら？」

「テメエ……小鳥遊碧」

「悪いけど、刀奈ちゃんと同じだとは思わない事ね」

オータムと対峙した碧には、一部の隙も見当たらない。オータムはさすがに不利を感じ取り、戦う事は諦めていた。

「貴女、亡国機業の人間なんですってね。洗いざらい吐いてもらおうかしら？」

「誰が情報をやるかよ。悪いが、お前らなんて相手にしてる暇はねえんだよ！」

そう言つてオータムは天井に攻撃を仕掛け、空いた穴から地上へ抜け出しIS学園からも姿を消したのだった。

「逃がしてよかったんですか？」

「殺したいほど憎いけど、今は一夏さんと刀奈ちゃんよ。虚さんと美紀ちゃんは、二人を保健室に。本音ちゃんとかマドカちゃんは、織斑姉妹に報告、模擬戦の中止を申請して来て」

更識所属のISに送られた信号を解読出来たのは、古くから更識に所属している面々と、その信号を教えてもらっていたマドカだけだった。だがそれでも十分の戦力だったので、オータムを撃退する事に成功したのだった。

「やっぱり織斑姉妹に監視を任せたのが失敗だったわね。無理にでも私がすればよかった」

『貴女が見張っていたら、明らかに動かなかったでしょね。そうすると尻尾を出す可能性が無くなっていたから、一夏さんの作戦が使えなかったわよ』

「でも、一夏さんが酷い目に遭うくらいだったら、尻尾を掴めなかった方が何倍もマシよ」

『再びトラウマを抱えていなければいいのですが……』

「この数時間の記憶だけ、失ってほしいわよ」

しっかりと見たわけではないので、碧も一夏がどの程度痛めつけられたのかが分から

ない。だが確実に幼児退行は起こしていたし、気も失っていた事を考えれば、相当な暴行を加えられたのは分かっていた。

「あの女が亡国機業の人間だとすれば、あの女を招き入れたダリル・ケイシーも亡国機業の関係者だと疑って見るべきね」

『まったくの無関係、ということは無いでしょうね。しかし、訊問したところで白状するとは思えません』

「分かっているわよ、そんなこと。それよりも今は、ここの後始末をしなければいけないわね」

破壊したのはオータムだが、その本人は既にIS学園から姿を消している。片付けろと言ったところでやるはずもないし、そもそも言う事すら出来ないのだ。碧はため息を吐いて、瓦礫を端っこへ移動させる作業へと移ったのだった。

「(あの女の名前、刀奈ちゃんは聞いているかしら)」

巻紙礼子ではない以上、碧は彼女をどう呼べばいいのか分からなかった。あの女、亡国機業の女と言えばいいのだが、名前が分かることに越したことはない。碧は刀奈が意識を取り戻したら聞いてみようと思いつきながら、そこにいない敵を睨みつけるように目を

細めたのだった。

襲われた原因

一夏が襲われたと聞いた織斑姉妹は、急いで保健室へ向かった。だがその途中に立ちはだかった人物がいた。

「そんなに急いで、何処へ行くんですかね、織斑さん」

「そこをどけ、小鳥遊！ 私たちは一夏の様子を見に行くんだ」

「そうだ！ わたしたちは一夏の姉として、襲われた一夏が心配なだけだ」

「では、何故巻紙礼子から目を逸らしたんですか？ あの時間は貴女たちが監視を担当していると聞いていました。だから私は真耶の手伝いを引き受けたんです。噂では、篠ノ之東も監視を手伝ってくれていると聞いていましたが、何故一夏さんは襲われなければならなかったのでしょうか？ 貴女たちの監視が完璧だったのなら、そんな事にはならなかったと思うのですが」

もちろんオータムもバカではないので、見られていると分かっている一夏を襲ったりはしない。例え見ている相手特定出来なくても、見られているという事実は分かっているのだ。当然後をつけられると理解した上で一夏に近づいたりはしない。

だがそれが出来たと言う事は、監視の目に緩みがあった事をオータムに気づかれ、隙を突かれた結果が一夏と刀奈の負傷に繋がっていると、碧は怒っているのだった。

「束のヤツから電話がきてな。私も千夏もヤツの対処に追われていたんだ」

「アイツが衛星で監視しているとばかり思っていたから、つい五分ほどヤツから目を逸らしたのは事実だ。だがたった五分だぞ」

「その五分で、一夏さんと刀奈ちゃんも巻紙礼子——亡国機業の人間に襲われたんです。完全に貴女たち姉妹が監視を怠った所為で、二人の生徒が襲われ怪我をしたんです。当然貴女たちに責任を負ってもらいますので、当分は部屋で謹慎しててください」

「ま、待て！ お前に処分を決定する権利は無いだろー！」

「ええ、ありませんよ」

「だったら——」

「これは轡木理事長の決定です。今回の一件の処分は、一夏さんに一任されました。その一夏さんが意識を取り戻し、貴女たちへの処分が決まるまで、必要以外の外出は禁止です。食事とトイレ、授業以外の間は部屋から一步も出ないように」

強い口調で告げる碧に、千冬も千夏も抵抗出来なかつた。彼女が言っている事は正しく、自分たちが「ちよつとだけなら」と油断した結果、一夏が襲われたのだ。責任転嫁

しようにも、東も同罪だと言わんばかりの目に、二人はお得意の言い訳も出来なかったのだった。

「今から貴女たちが監視される側ですから、くれぐれも監視者に手は出さないように。一夏さんが意識を取り戻す前に、学園から去ってもらおう事になりますからね」

「くっ……分かった、大人しくしてよう」

ISを使つてもだが、生身でも碧はかなり強い。それこそ、織斑姉妹に匹敵すると言われるくらいに。千冬も千夏もその事を十分承知しているので、ここで逆らえば本当に学園から追い出されると言う事を理解していた。

千冬と千夏を部屋に追い返した碧は、かなり疲れた様子で保健室へと足を運んだ。織斑姉妹に説教など、一夏を除けばこの世界で誰も出来ないと思つていたのだから、疲れでも仕方ないだろう。

「お疲れさまです、碧さん」

「虚ちゃん……状況は？」

「変化なしです。一夏さんもお嬢様も気を失つたままです」

「そう……刀奈ちゃん、これが原因で引退とかしなければいいけど」

いくら頭に血が上っていたとはいえ、ISを使う事を思いつかなかったのだ。そのシヨックは結構大きいものだろうと、簡単に推測出来る。

「大丈夫ですよ。お嬢様の夢は、簪お嬢様と一緒に世界大会で優勝する事なんですから。美紀さんと二人で代表になって、次の大会で一緒に喜ぶんだって、ずっと言っていましたから」

「そうなの……素敵な夢ね」

簪、美紀、本音、マドカは織斑姉妹の監視に、虚は保健室の見張りと分かれているが、これは単純に力の差で決まったわけではない。二人がパニックを起こした時、一番冷静に対処出来るのが虚なのだ。

「ですから、お嬢様がこの程度でISを諦めるはずはありませんので、碧さんもご安心ください」

「そうよね。刀奈ちゃんはそこまで弱くないわよね」

誰よりも刀奈を近くで見えてきた虚がそういうんだからと、碧は無理矢理納得する事にしたのだった。

「ん……」

「気が付かれましたか、お嬢様」

「虚ちゃん？ ……そう、私は負けたのね」

「何があつたのですか？」

思いのほか冷静だった刀奈の態度に戸惑いながらも、きわめて冷静に虚は刀奈に何があつたのかを尋ねる。刀奈も答えを洩ることも無く、本人が分かる範囲で話し始めた。

「みつるぎの巻紙さん、彼女が一夏君を痛めつけていたの。だから私は頭に血が上って、生身で彼女に攻めかかって……彼女のI Sの罠にハマつたの」

「罠？」

「蜘蛛の巣よ。暗くてよく見えなかったけど、あれは蜘蛛だったわ。っ！ 一夏君は!？」

「一夏君は無事!？」

「お静かに。一夏さんなら、お嬢様の隣で寝ています」

落ち着いた声で、刀奈の隣のベッドを指差す虚。刀奈は一夏の姿を見て安堵し、そして自分のふがいなさを恥始めた。

「世界最強なんて言われてるけど、大切な人一人も守れないのね……私ってホント駄目だなあ……」

「お嬢様はダメではありませんよ、まだまだ成長出来るんですから、これからも頑張りましょう」

「でも、一夏君がこのままだったら？ 目を覚ましても記憶が無くなっていたら？ そう思うと、やる気も起きてこないのよね……」

「お嬢様……」

目の前で一夏を痛めつけられたのは、刀奈にとって大きなダメージとなっていたのだ。虚は刀奈の弱音に、どう反応すればいいのか悩んだ。

「っ……ここは、保健室か？」

「「一夏さん（君）！」」

そのタイミングで、一夏が目を覚めたのだった。

虚の脅し

目を覚ました一夏に、刀奈は飛びつかん勢いで迫った——いや、迫ろうとしたが虚に止められ、少し身を乗り出しただけだった。

「一夏君、何があったのか覚えてる？」

「一応は覚えているようです……いや、正確には何があったのか闇鴉が教えてくれました。俺自身はそれが現実だという実感はありません」

そういつて待機状態の闇鴉を指差して、何もかも分かっているという顔で視線を逸らした。

「それで、学園側の被害は？」

「更衣室の天井を破られた以外は、一夏さんとお嬢様の怪我だけです」

「そうですか……それで、元凶は」

「巻紙礼子と名乗っていた女性なら、碧さんに撃退され逃げていきました」

その名前を聞いて、一夏はオータムが他の人間には名乗ってなかったのかと理解し

た。

「あの女は亡国機業のオータム、そう名乗っていました」

「オータム……それで、一夏さんは彼女と面識があるみたいでしたが、何処で会ったのですか？」

虚の質問に、一夏は気まずそうに視線を逸らす。聞かれたくない事なのか、あるいは知らなくても良い事なのかの判断はつかなかったが、虚は一夏が答えたくないのだと判断した。

「一夏さんが言いたくないのでしたら——」

「いえ、大丈夫です。オータムと会ったのは、俺が攫われた時。俺を攫った組織が亡国機業で、恐らくその場所にオータムがいたでしょう。午前中に感じた気配も、アイツのものでした」

「ではやはり、彼女を招待したダリル・ケイシーは——」

「決めつけはよくありません。今後の監視を強め、尻尾が出たら捕まえる感じにしましょう。今問い詰めても答えない可能性の方が高いです」

冷静な判断力を失っていない事に、虚は安堵したが、いささか甘い気もしていた。犯

罪組織に加担しているのはほぼ間違いないのだから、多少強引にでも吐かせるべきだと虚は思っていたのだ。

「そう言えば、他の人たちは？」

「碧さんは、先ほど保健室から移動し、更衣室の片づけを指揮しています。簪お嬢様、本音、美紀さんは織斑姉妹の監視、マドカさんはクラスメイトを安心させるために事情説明を行ってくれます」

「織斑姉妹の監視？　また何かやらかしたんですか？」

何時もの一夏ならすぐに気づくであろう事に気づかなかったことに、虚は首を傾げた。

「何かって、監視を怠ったから一夏さんとお嬢様が襲われたんですよ！」

「まあ、そういう考えも出来るのか……俺はてつきり、織斑姉妹の監視よりオータムの行動力が優れているのかと思ってた」

「あの織斑姉妹の監視から抜け出せるなんて、一夏君と碧さんくらいでしょ。犯罪組織の人間がそんなスキルを持っているわけないじゃない」

刀奈の辛辣な評価に、一夏は首を傾げたくなった。むしろ犯罪組織の人間だからこ

そ、織斑姉妹の監視から逃れる術を持つていたのだと思つていたのだから。

「それで、監視と言つても織斑姉妹の事だ、どこから抜け出す可能性だつてあるのでは？」

「碧さんがカミナリを落としたので、それは大丈夫だと思ひますよ。さすがのあの二人も堪えてたようですし」

一夏は、碧が怒つたところを見た覚えがなかつた。そんな碧が怒つたということは、織斑姉妹のやらかした事は相当なのだろうと思ひ直す事にしたのだった。

「一夏さん、何故私を起動しなかつたのですか？」

「……あの状況で上手くお前を動かせたと思ふのか？ 足は震えるし腰は抜けるしで、みんなに助けを求めるのが精一杯だったんだぞ」

いきなり人の姿になつた事にはツツコミを入れず、一夏は事実のみを闇鴉に告げた。

あの状況で闇鴉を展開しても、良いようにやられてただけなのは客観的事実だ。

「ですが、逃げることは出来たのでは？」

「刀奈さんを置いてか？ それは絶対にありえないだろ」

「一夏君……」

「まあ、刀奈さんも頭に血が上ってI Sを展開し忘れるというくらいに、一夏さんの事を心配していたようですね。助けに来てくれた人を置いていくのは、確かに心苦しいでしょう」

「……闇鴉、それって私に対する毒吐きよね？」

自分が責められているということを正確に受け取った刀奈が、闇鴉に頬を膨らまして抗議する。だが闇鴉はそれに付き合う事は無く続けた。

「ですが一夏さん、貴方に何かあったのなら、刀奈さんに何かがあった時よりも更識に与えるダメージは大きいのです。時には人を見限る判断も必要なんですからね」

「それは分かっているつもりだが、あの場面では見限るではなく見捨てるになるだろう？だから助けを求めたんだ」

「だったら暗号化などせず、素直に助けを求めればよかったですじゃないですか」

「オータムに解読されたら、俺も刀奈さんもこの場になかったかもしれないだろ？だからあえて『何かしたと言う事を分からせた』んだ。意識を俺に向けさせれば、時間を稼げるからな」

あの時の一夏は、幼児退行を起こす暇もなかった。意識を失い、また取り戻しまた失

う。その繰り返しだったので、幼児退行せずに冷静な判断が下せたのだ。

「とりあえず、一夏さんとお嬢様が今するべきことは、しっかりと休んで体力を回復させることです」

「私はもう大丈夫よ。ちよつと身体が痛いけど」

「俺ももう大丈夫ですよ」

「駄目です。今日一日は安静にしてください。さもないと、私たち全員が悲しみます」

別角度から脅され、一夏と刀奈は大人しくベッドに寝転んだ。怒られるならまだしも、悲しまれたら目覚めが悪い。そう感じた一夏と刀奈は、特にすることも無い時間を耐えることにしたのだった。

隙を生んだ原因

寮長室に謹慎している織斑姉妹は、部屋の外に監視が付いている事に気付いていた。

「隠れてるつもりは無さそうだな」

「隠れる必要が無いんだろう。それくらい、わたしたちは信用されていないんだ」

堂々と監視されていると言う事は、それだけ疑っていると言う事とイコールなのだ。

これが侵入者とかの監視なら笨だと笑い飛ばせるが、自分たちが対象となるとその意味は変わってくる。

「監視されている事を自覚し、せいぜい反省しろと言う事か、小鳥遊……」

「仕方ないだろ。わたしたちが目を離れた隙に一夏が襲われたんだから」

「だがあれは、束のやつが……いや、アイツも同罪か」

確かに束からの連絡でオータムから目を離れたのだが、責任が全て束にあるかと問われれば、そうとは言えないと自覚している。電話をしながら監視する事も十分出来たのだから、自分たちに落ち度があった事は認めなければならないのだ。

「とにかく今は、大人しく反省しててべきだろう」

「外にいるのは、更識妹、布仏妹、そして四月一日か」

「マドカを監視につけなかったのも、身内の情に絆されて監視の目が緩むことを避けたのだろう。実に小鳥遊らしい考えだ」

千冬と千夏に許されているのは、食事やトイレ、授業などと生活に必要な最低限と仕事の時だけで、それ以外の外出は今のところ禁止されている。これは更識からIS学園に厳重な抗議が来て、轡木が決定した学園からの通達。無視すればすなわち解雇される可能性があるのだ。さすがの織斑姉妹も、解雇されたら自分たちが生きていけない事を自覚しているのです、大人しく謹慎しているのだった。

「抗議のスピードが早すぎる気もするが……」

「当主の娘が学園に在籍しているからだろ。それに一夏は、次期当主だと決まっているからな。すぐに抗議くらい出来るだろうさ」

「何時まで謹慎していればいいんだ、私たちは……」

千冬の零した愚痴に、千夏は無言で首を左右に振った。そんなことは考えても分からないし、何時許されるかなんて、更識側の匙加減なのだから、考えるだけ無駄なのだ。

「一夏の容態くらいは知りたいがな」

「聞いたところで教えてくれるとは思えん。それくらい、私たちの信用は地に落ちたのだから」

「せめて無事かどうかくらいは知りたいものだ」

そう愚痴を零したタイミングで、千冬の携帯に着信を告げるメロディーが流れた。表示された相手は、今回の一件の元凶の一人だった。

『もすもすひねも——』

「束！ お前が監視衛星で見張ってるんじゃないのか！」

『ちーちゃんとなつちちゃんが興奮してたせいで、束さんもモニターから目を逸らしちゃったんだよ。まさかその隙を突かれるとは思ってなかったんだよ』

「待て、何でお前が監視モニターから目を逸らしたのがバレてるんだ？」

『……考えたくないけど、束さんの行動パターンを理解してる人間が亡国機業にいるんだと思うよ』

「お前の行動パターンなど、ある程度親しかったら理解出来るだろうが、お前が親しくしていたのは私たちと一夏と……」

『多分そう言う事だよ。ちーちゃんたちが興奮したら、すなわち束さんも興奮してるっ

て知ってる三人以外の人物が亡国機業にいる。元亡国機業のまーちゃんを外したら、そんなの一人しかない』

「つまり、そう言う事か……」

サイレント・ゼフィルス強奪の際に目撃された少女の情報から、そうだろうとは思っていたが、これで千冬たちも確信した。

「あのバカ箒は亡国機業にいるのか」

『しかも、冷静にこっちの事を分析出来るだけの落ち着きを手に入れてるね』
「腐ってもお前の妹だからな。少し磨けば頭脳も光るものがあるのだろう」

現在行方不明とされている束の妹、篠ノ之箒が今回の一件に絡んでいると三人は確信した。そして、自分たちが知っている箒よりも、大分冷静な分析が出来る事にも気づいたのだった。

「束、逃亡したヤツの追跡はどうなっている?」

『残念ながら振り切られてるね。これも箒ちゃんが助言したのかもね。束さんの行動パターンは、箒ちゃんには知り尽くされているから』

「()数年、まとも会っていなかったのに、何でバレてるんだ」

『ちーちゃんとなつちやんだって、いっくんに行動パターンがバレてるのと一緒だよ。どれだけ否定しても、血のつながりはこういう時に役立つんだって』

東の切り返しに、千冬も千夏も納得してしまった。自分たちもある程度なら一夏やマドカの行動パターンが理解出来るのと同じで、箒にもそれが可能だと言うだけの話だったのだ。

「まさかあの箒が束に一杯喰わせるとはな」

『束さんもびっくりしてるよ。まさかあの箒ちゃんにしてやられるなんて』

「最後のところで一夏誘拐は防いだが、今後バカ箒も敵として警戒しなければならぬのか」

「戦力としてはどうか分かんが、アイツは我々の行動パターンをある程度理解してるからな。厄介になりそうだ」

『束さんの方でも、行動パターンを分析して、別のパターンを生み出せないか考えてみるから、二人は大人しく謹慎しててね』

そう言い残して、束は電話を切ったのだった。

「箒が私たちの自由を奪ったのか……」

「見つけ次第血祭にあげてやりたいところだが、今はそれも出来ない状況だもんな……」
「とりあえず今は、一刻も早く信頼を取り戻さなければならぬな」
「だが、どうやって」

双子の妹の問いかけに、千冬は押し黙ってしまった。前に本音に言われたことがあるように、自分たちの信頼など、最初から底辺に等しいところまで落ちていたのだから……

賞品変更

結果的に逃げ帰ってきた状態だが、オータムはとりあえず満足そうな顔をしていた。

「IS学園に忍び込んだみたいですね」

「SHか……お前の言った通り、あの織斑姉妹とお前の姉貴が絡めば隙が生まれたな」

「あの人たちは昔からそうですから。個々では隙なんて絶対には生まれませんが、三人そろえば必ず隙は生まれます。そこに一夏が絡めばその確率はさらに上がりますから」

「そつちはどうにか出来たんだが、やはり更識所属の実力者はヤベエな。このオレがすごごと逃げるしかなかったぜ」

織斑姉妹も束も、オータムと直に戦えば追い返すくらいは楽に出来るが、この三人はオータムと絡むことなく今回の一件を終えている。それでもオータムが一人も攫ってこれなかったのは、碧の力が大きいのだと、箒にも分かっていた。

「小鳥遊碧は織斑姉妹と並んで、無傷で世界最強の地位に上り詰めた人ですから。いくらオータムでも荷が勝ちすぎてたんでしょ」

「お前に慰められるのは癪に障るが、確かにアイツは戦って勝てる相手じゃねえな」

「あらあら、オータムがそんな調子じゃ、次の作戦は厳しいかもしれないわね」
「スコール！」

箒と話していた時にスコールがやって来たので、オータムは少し慌てた様子になった。普段は箒との会話を終えてから出てくるのに、今回は違った動きを見せたからだろう。

「こんどは私たち三人でI.S学園に特攻を掛けることになるわ。もちろん、内側からレインに手伝ってもらおう算段になっているから、くれぐれも余計な事はしないで頂戴ね」

レイン・ミューゼルことダリル・ケイシーにどうやって連絡をつけたのか、オータムも箒も気になりはしたが、余計な事なので口にはしなかった。

「それにしてもオータム、貴女随分と派手に暴れたみたいね。お陰でレインの監視もきつくなつたつてクレームが入ってるわよ」

「はっ、そんなの知ったこっちゃねえよ。そもそも、アイツがしっかりとデータを送ってこなかったから、オレが細部の調査をする羽目になつたんだろうが」

そのせいで余計疑われたと言わんばかりの剣幕に、スコールは両手を出してオータム

を宥めた。

「はいはい、そのくらいで止めてちょうだい。私に言われてもどうしようもないんだから」

「だいたい何でSHが詳細なデータを知らねえんだよ。お前だつて通つてたんだろ？」

「私は、更識関係者に近づくことも、機密データがあるとされていた場所にも近づくことが出来なかつたからな。近づこうものなら、すぐに織斑姉妹の鉄拳制裁が下されたからな」

「どんだけ信用ねえんだよ、テメエは……」

オータムの同情的なコメントに、箒は本気で嫌そうな顔を見せた。それくらい同情されるのが嫌なんだと、スコールは心の中で箒に対する新たな情報を書き加えたのだった。

結局文化祭は午前のみで優秀賞を決める事になり、結果は一年一組の圧勝だった。だが今回の事件を鑑み、賞品は一夏を一日自由にできる権利から、食堂のデザートのだらみ券半分に変更された。

「あーあ、せっかく更識君とあんなことやこんなことが出来ると思ったのに」

「まあまあ、キヨキヨ。いっちゃんも大変だったんだから仕方ないよ。それに、デザートのだらみ券をタダで食べられるんだから、文句言わないの〜」

「そうだけどさ。まあ、更識君の容態を聞いた時はクラス全員が焦ったけど」

説明はマドカが担当したのだが、監視として本音があまりにも駄目だったので、本音もクラスメイトを落ち着かせる側に変更されたのだった。

「それで本音、姉さまたちはちゃんと反省してるんですか？」

「とりあえず、逃げ出すような事は無さそうかな。さすがにいつちーが襲われた事に對して、責任を感じてるんだと思うよ」

「兄さま、早く意識を取り戻してもらいたいです」

マドカと本音はまだ、一夏が意識を取り戻したことを聞かされていない。だから未だに一夏が意識不明だと思い込んでいた。

「あつ、おねくちゃんから電話だ。もしもし？」

本音が何を聞かされているのか、マドカや他のクラスメイトも真剣な眼差しで本音から聞かされるのを待っていた。

「……うん、分かった。それじゃあ、後でそっちに行くね」

「本音、虚さんはなんと？」

「いつちーが目を覚ましたって。記憶障害も無く、とりあえずは大丈夫だって」

本音から告げられた一夏無事の情報は、クラスメイト全員を歓喜させるに十分な事だった。

「良かった……一夏さんに何かあったら、私……」

「カスミンはいつちーに推薦されたんだもんね。いつちーに何かあったら、政府の言いなりにならなきゃいけないかったのかな？」

「それは無いでしょ。日本政府が要請したといつても、準備から何からしたのは更識企業で、その総責任者が一夏君なんだから。一夏君に万が一があつたとしても、その時は更識先輩が引き継ぐだけでしょ」

「シズシズは冷静だね。そもそも、いつちーに何かあったら、私たちの専用機のメンテナンスが出来なくなっちゃうから、大変だったんだよね？」

「束様でも、更識製のISを弄る事は出来ないと言っていましたし」

弄れないことも無いのだが、下手に弄つて変になるのを嫌っているのだが、マドカはその事は告げなかった。特に今は、織斑姉妹同様束も更識所属の面々に近づくのを避けたい時期なのだから、メンテナンスを頼まれても断るしかなかっただろう。

とにかく一夏が無事だと分かった面々は、祝勝会として学食に乗り出し、さつそくデザートのタダ券を使ったのだった。

就寝前

保健室で安静にしている間、一夏は襲われた時の事を思い出していた。正確には、鴉から得た情報を頭の中で整理していたのだが、それが現実起きた事なのだから、思っ出していたと表現しても間違いではないだろう。

「一夏君、何考えてるの?」

「襲われた時の事を。あの時は幼児退行しなかったなと思ってます」

「それどころじゃなかったんでしょ。あれだけの殺気を浴びせられたら、幼児退行する前に意識を失っちゃうよ」

実際、一夏は気を失い幼児退行しなかったのだが、失う前の記憶ははつきりしているのだ。普段なら幼児退行前の記憶もあやふやになるのに、今回は何故か何時ものようにはならなかった。そこに一夏は、弱点克服のヒントがあるのであるのではないかと考えているのだ。

「それよりも、刀奈さんの方の傷は大丈夫なんですか?」

「打ち身と青痣だけだから大丈夫よ。それも、見えないところだから」

「不良みたいな殴り方ですね」

人に気づかれにくい場所に攻撃し、痣が出来たとしても簡単にバレない箇所を狙っていたのを、一夏は自分の身でも体験している。腹や腿など、普段他人に見せる事のない箇所を狙われていたのだ。

「でも、一夏君は痛々しいわよね……腕とか顔とかにも蹴られた痕があるし」

「女性の顔を狙わなかっただけ、常識があるのかもしれないね」

「そう言う事は考えてないでしょうよ。私は空中に捕まっていたから、顔を狙えなかっただけじゃない？」

「オータムもI.S.を持つてるんですから、殴ろうとすれば顔だつて殴れましたよ。でも使わなかったのは、刀奈さんが死んでしまう可能性があったからだと思います」

「私が死んじゃうと、亡国機業にとつて都合が悪いの？」

一夏の考えが分からない刀奈は、首を傾げながら一夏に問いかける。その際に締め上げられていた肩に激痛が走ったが、それを一夏に覺られないように笑顔のままで一夏の方に顔を向ける。

「相当痛いんですね、その肩……」

「えっ、何のこと?」

「隠しても無駄ですよ。更識製のISは、全部俺に情報をくれるんですから」

「蛟ね! せつかく隠そうとしたのに」

自分の専用機が一夏に情報を流していたと気づき、待機状態の蛟に苛立ちの声を浴びせた。だが蛟からの反応はなく、刀奈はため息を吐いて話を元に戻すことにした。

「それで、私が死んじやうと、亡国機業にとって何がマズいのかしら?」

「刀奈さんにもしもの事があれば、日本政府も黙ってないでしょう。更識所属とはいえ、刀奈さんは現役の日本代表なのですから。もちろん更識も黙ってませんし、俺がいる事で織斑姉妹や篠ノ之博士も動くでしょう。そうなる時さすがの亡国機業も苦戦を強いられますので、まずはこちらの戦力を向こう側に——洗脳でもして亡国機業の味方にしたかったんだと思いますよ」

「……そんな恐ろしい事、よくすぐに考えつくわよね。さすが暗部組織の次期当主よね」
「『すぐに』ということは、時間があれば刀奈さんも思いついたって事ですよね」
「そうね……でも、一夏君ほど早くは思いつかなかったわよ」

前当主の娘として、刀奈もかなり黒い事を考える事もある。だが自分で言っているよ

うに、一夏ほど黒い考えがスムーズに出来る訳ではない。そこは刀奈としても譲れないところであった。

「別に早さなんて気にする必要は無いと思うのですが……ようは思いつけばいいだけなんですし」

「そう割り切れないのが私なの。それより、こっちの戦力を削ぐって事は、箒ちゃんもその一環だったの？」

「さあ。あいつの場合は、言葉巧みに騙されて、自分から降った可能性も否定できません」

「言葉巧みって、正当な評価がされないのは——ってやつ？」

箒は在学中から孤立していたので、騙すのはそう難しくないと刀奈も分かっていた。そして彼女の言い分であるところの「正当な評価をされないのは、一夏が裏で操作しているからだ」という訳の分からない箒の持論も知っていた。そこを突けば、簡単に相手の言う事を聞きそうだとと言う事も、付き合いの短い刀奈でも理解出来るほど、箒は自分の評価が低い事への不満を抱いていたのだった。

「箒ちゃんの評価が低かったのは、ISに当たり散らして嫌われたからでしょ？　一夏君が箒ちゃんに嫌がらせをして、何の得があるっていうのよ」

「ここで怒っても知りませんよ……そもそも、篠ノ之の言い分に正当性なんてなかったんですから、単なる思い込みに怒っても仕方ありません」

実際、一夏はISに手を加えたなどという事実は無く、箒がISに嫌われたのはパーセント自業自得なのだ。その事をちゃんと理解し、反省して態度を改めれば箒もそれなりに力を得られたと一夏は考えている。だがそれを嫌い、亡国機業に身を落としたのは、彼女の弱さに付け込まれた可能性も一夏はちゃんと考えていた。

「万が一心の隙を突かれたのなら、篠ノ之には社会復帰の場を与えるべきだと思いますけどね」

「サイレント・ゼフィルス強奪に関わってるって確証も出たんだし、まずは反省させるところからだと思うけど」

「もちろん反省は必要でしょう。どんな理由があれ、犯罪組織に身を置いたんですから、それなりの罰は必要でしょう。ですが、万が一自分の意思ではなかった場合、社会復帰のチャンスを与えないのは、こちらにも相当なバッシングがあるでしょうから」

「そこからへんは、大人が考える事で一夏君が考える事じゃないと思うけど」

刀奈の言い分に、もつともだと納得した一夏は、それ以上言葉を発する事は無く、静

かに目を瞑り、そして眠りに落ちて行ったのだった。

専用機との会話

一夏が保健室にいる為、美紀は部屋で一人になっていた。別段どうこう言う訳ではないのだが、普段二人で生活している空間に一人というのは、いささか心細くなったりするのだ。

『ミキ、寂しいの?』

「いえ、そういうわけではないのですが……」

『ゴメン、ボクがもう少し早く一夏お兄ちゃんのピンチに気づいてたら』

「金九尾が悪い訳じゃないですよ。私たちも一夏さんから意識を外してたのが問題なんですから」

『それこそしようがないでしょ。美紀たちは試合が近づいてたんだし、相手が碧さんなんだから、そっちに集中しちゃうのも無理はないよ』

金九尾に慰められ、美紀は苦笑いを浮かべる。一夏が造ったISは全機、所有者と一夏に話しかける事が出来るので、一人でも会話相手に困ることは無い。だが、こうして慰められる日が来るとは、美紀も思っていなかったのだった。

これが本音とかならば、専用機である土竜に怒られたり注意されたり、アドバイスをされたりと色々あるのだろうが、美紀はその辺りはしっかりしているので、ISから指示されたりする事は無かったのだ。

『とりあえず一夏お兄ちゃんが無事だった事を喜ぼうよ』

「そうですね……意識もすっかりしてるようですし、記憶障害も特に無いのは、不幸中の幸いだったと喜ばなければいけないでしょう。でも、一夏さんのあんな痛々しい姿を見るのは……」

『一夏お兄ちゃんの回復力は他の人より高いから、数日もすれば痣も消えると思うよ。後は闇鴉がどう動くかに寄るけどね』

「どういうことですか？」

金九尾の含みのある言い方に引っ掛かった美紀は、答えてくれるか分からないが金九尾にその含みの部分の解説を求めた。

『ゴメン、これは一夏お兄ちゃんと闇鴉の問題だから、ボクからは何も言えないんだ』

「そうですか……でも、良い方向に事が進むと受け取っていいんですよね？」

『それはそうだと思うけど、闇鴉が何で一夏お兄ちゃんに今回の一件の記憶を与えたのか、それが分からないとどつちに事が進むか分からないよ……明日、面会の時に聞いて

みたらいいよ』

「そうですか……ですが、明日の面会時間には、私は簪ちゃんと一緒に織斑姉妹の監視なんですよ」

今の時間は碧が担当していて、学生である簪と美紀は部屋に戻っているが、基本的に放課後は美紀と簪が織斑姉妹の監視を担当する事になっている。だから当然、面会にはいくことが出来ないのだ。

『最強の姉妹も、さすがに反省してるんじゃないの？』

「一夏さんの沙汰が下るまで、大人しくしてもらわないと駄目ですよ」

『お兄ちゃんはまだあまり興味なさそうだけどね。悪いのはあの侵入者で、織斑姉妹が完全に悪いってわけじゃないんだし』

「それは、そうですけど……ですが、一度引き受けたんですから、最後までしっかりと役目をはたしてもらいたかったです」

『大人だしね。それは確かにあると思うよ』

金九尾に愚痴を聞いてもらってスッキリしたのか、美紀はそれから少し眠りにつけて眠りに落ちたのだった。所有者が落ち着いたのを確認して、金九尾も意識を閉ざし、休眠に

入ったのだった。

夜にどこかに出かける習慣など無いのだから、監視する必要は無いと思われがちだが、織斑姉妹が何時何をやらかすのかが分からない以上、監視は必要なのだ。

更識所属で唯一の大人である碧は、現在寮長室の前の廊下に座り込み、織斑姉妹が外出しないかどうかを見張っている。

『碧もご苦労な事していますよね』

「仕方ないでしょ。まさか虚ちゃんにお願いするわけにもいかないし」

『これが織斑姉妹なら、山田真耶にでも押し付けてますよ』

「織斑姉妹を監視するのに、織斑姉妹がするはずもないでしょ」

木霊と小声で会話をしながらも、意識はしっかりと部屋の中へと向けられている。監視なら織斑姉妹よりスキルが上の碧を誤魔化す事など、彼女たちには不可能なので、今は大人しく部屋で何かしているようだ。碧は認識している。もちろん、窓から抜け出そうものなら、すぐさま回り込んで押し込める事も出来るので、いささかのんびりした空気が寮長室前には流れていた。

『犯人を取り逃がしたのは失敗でしたね。無理にでも追いかけるべきだったのでは？』

「あの時は、犯人より先に一夏さんと刀奈ちゃんの救助を優先するべきだと判断したのよ。一夏さんも刀奈ちゃんも、結構痛めつけられてたし」

『I Sに対する恐怖心とかが芽生えてなければいいのですが』

「闇鴉が話しかけても大丈夫だったって虚ちゃんから聞いてますし、恐怖症とかは無いと思うわよ。まあ、犯人と対峙したときに、トラウマが発動したりする恐れはあるけどね」

一夏は元々持っているものだが、刀奈にまでそれが植え付けられていたら、亡国機業が攻めてきた時に大きな戦力ダウンになってしまう。後方で指揮を執る事も出来るが、刀奈は前衛にいてほしいと思える操縦者なのだ。

『その時には、さすがに織斑姉妹も専用機を持ち歩くようになってるでしょうし、刀奈さんが下がっても戦力は確保されると思いますよ』

「あの二人は加減を知らないから、周りの被害を考えて行動できるのなら問題ないけどね。修繕費だってバカにならないのよ？」

『随分と経理の事も考えるようになったんですね。高校生の時はそんなことなかったのに』

「何時の話よ。いい加減大人なんだから、少しはそう言う事も考えるわよ」

伊達に付き合い合いが長いだけあって、木霊は碧の成長をしっかりと理解している。碧も木霊に理解されていると分かっているのだが、改めて言葉にされるとむず痒い感じがして、会話を打ち切って織斑姉妹の監視に集中したのだった。

それぞれへの代償

文化祭翌日、HRの為教室に集まった一年一組のクラスメイトたちに、一夏の容態が伝えられた。

「更識君は、今日明日は欠席しますが、それ以降は普通に登校しますので、皆さんは心配しなくてもいいそうです」

「マヤヤ、お見舞いとか行っちゃ駄目なの？」

「大事にしたくないそうですし、更識関係者の監視が厳しいので、簡単に面会は出来ません」

「ほえ、いつちに会うのは大変だったんだね」

「本音は更識関係者でしょ？ 何で会えないのよ」

清香のツツコミに、本音が首を傾げる。本来なら護衛である本音が一夏の側にいるのは当然なのだが、何故か本音は一夏に面会する事が出来ていないのだ。

「美紀ちゃん、何で私はいつちに会えないの？」

「本音は今、余計な心配をクラスメイトにさせないために明るく振る舞う必要があるっ

て一夏さんは言っていましたけど、別に面会して本音が暗くなるとは私も思えないんです。ですが、一夏さんも思うところがあるのだと思いますよ」

「そうなんだ。いっちーが考えてる事は難しいから、私には理解できないけど、美紀ちゃんにも分からない事があって良かったよ」

「私なんかが一夏の考えを理解できるはずがないじゃないですか。一夏さんがいなければ、定期試験だって危ないんですから」

常日頃から努力はしているが、美紀の成績は一夏抜きだと本音と同じくらいだ。だからではないが、美紀は自分が賢いと思われることを嫌う節が見られるのだ。

「とりあえず、一夏さんに簡単に会えるのは虚さんと碧さんだけです。簪ちゃんもその二人のどちらかと同伴じゃなければ会えないと言っていましたし」

「かんちゃんが無理なら、私が無理なものも納得だよ」

本当に納得しているのか、イマイチ分からない本音の態度に、美紀はため息を吐きそうになった。だが本当にため息を吐きたい人が教壇に立っているのを思い出し、寸でこのころで堪えたのだった。

「それから、織斑姉妹ですが、当分の間は授業以外での部屋から出る事が禁止されています

すので、質問がある場合は私か小鳥遊先生にするようお願いします」

疲れ切った顔でそう告げる真耶に、美紀は同情するのだった。

「織斑先生たちは何をしたんですか？」

「更識企業に喧嘩を売った、と言われても仕方ない事をした、としか言えません。それ以上は本人に聞くか、更識君が復帰してから聞いてください」

これ以上は何も言えないと告げて、真耶は教室から職員室へと戻っていった。一時間目はその織斑姉妹の授業なので、遅刻しないようにクラス全員が急いで着替える中、美紀だけは着替えずに生徒会室へと向かった。

一夏、刀奈が負傷した今、生徒会業務が滞ってしまっている為、緊急措置として美紀は実習には出ずに生徒会業務をするように命じられていたのだった。

「それじゃあ本音、何かあったら電話してね」

「はい。美紀ちゃんも頑張つてね」

本音に見送られ、美紀は生徒会室までの廊下を一人で歩く。普段用が無い為違和感を覚えながら、美紀は生徒会室で作業を黙々とこなすのだった。

美紀が一人で生徒会作業をしている時、一夏と刀奈は保健室で安静にしていた。私たちはもう大丈夫だと主張するのだが、虚と碧が後二日は大人しくしているようにと半ば脅しのように押さえつけているのだった。

「ねえ一夏君、せっかく堂々とやらせたらいいのに、つまらないって思っちゃやう私って贅沢なのかな？」

「俺もつまらないと思ってますし、それが普通なんだと思いますよ」

手持ち無沙汰を解消する為には、何か本でも持つてきてほしいと頼んだ一夏だったが、その願いも却下されたため、ただ永遠にゴロゴロするしかなかったのだった。

「闇鴉、なんか持つてきてくれ」

「そうしたいのは山々なのですが、虚さんにきつく言われていますので……私もまだ、スクラップになりたくないですからね」

「そこまではしれないと思うが、このままじゃ退屈で死にそうぞ」

「そう簡単に人は死なないと思えますが……まあ、お二人は忙しくしてるのが当たり前だったんですから、たまにはのんびりしたらどうですか？」

「自分の意思でのんびりするならいざ知らず、こども強制的にのんびりさせられてもな……全然嬉しくないし暇を持て余す」

普段から暇という概念を持ち合わせていなかった一夏は、このままいけば何かしたくて発狂するのではないかと思うくらい、暇を持て余していたのだった。

「そんなこと言われましても、一夏さんに何か与えれば、それに集中して休むことをしなくなる、と碧さんに言われていますので」

「それはあるかもね。一夏君は何か集中すると、そればかりになるから」
「そんなことないと思うんですがね……」

生徒会業務も、IS製造もかなりの集中力で素早く終わらせる事が出来た一夏だが、その間他の事をあまりしていなかったと自分でも覚えていて、語尾が消え入るようになさくなっていった。

「とにかく、今一夏さんと刀奈さんがしなければいけない事は休養。後一日は大人しくしててくださいね」

「読書くらいなら問題ないと思うんだがな……」

「一夏君が読む本って、もの凄く頭を使う本だからじゃない？ 漫画とかなら虚ちゃんも許してくれるかもしれないわよ」

「漫画か……簪や本音が持つてるのを昔借りて読んだことがあるが、それ以外は無いな」
「じゃあ虚さんに聞いてみますね。許可が下りたなら持つてきますよ」

闇鴉が保健室にいる理由は、虚が授業中だからに他ならない。だから今聞きに行くことは出来ないの、一夏は大人しくベッドに横たわったのだった。

二人の誤解

放課後、本来この場にいるべき人間の代わりに仕事をしていた美紀は、時計に目をやつてため息を吐いた。それほど多くないと聞いていた仕事だったのだが、その量は決して「多くない」と言えないくらいの量だったのだ。その量を見て「多くない」と言える虚に、美紀は尊敬と少しばかりの恨みを覚えたのだった。

「虚さんは誰基準で多くないと言ったんだろう……一夏さん基準だったら私には当てはまらないんだけどな……」

愚痴をこぼしながらも、任された仕事はしっかりとこなす美紀は、やはり真面目なのだろう。これが本音だったのなら、すぐにでも投げ出して生徒会室から逃げ出していた事だろう。

「お疲れ様です。美紀さんのお陰で後は私だけでも終わらせられそうです」

「いえ……授業に出なくて良かったのが幸いでした。これで授業にも出て作業しろとかだったら、私は逃げ出してたと思います」

「授業については、後日本音か他のクラスメイトの方に聞いてくれれば問題ないでしょ

うし、一夏さんが復帰すれば特別講義を開いてくれると思いますよ」

「一夏さんにこれ以上頼るのは、なんだか申し訳ない気がします」

ただでさえ定期試験前には世話になつて美紀なので、一夏にこれ以上勉強面で迷惑をかけるのが忍びなく思えるのだった。だが一夏も授業に参加していないので、人に教える事で自分も理解を深める事が出来ると虚は考えているので、本音もまとめて参加させようと考えているのだった。

「お嬢様よりは美紀さんの方がしつかりと仕事をしてくれたので、私としてはこのまま生徒会に欲しいんですが、美紀さんも放課後は色々と大変ですものね」

「特訓や連携の確認などに当ててますからね」

代表候補生として、美紀は日々特訓を欠かさない。ペアの候補生と言う事もあつて、時間が合えば簪との連携訓練を本音やマドカに手伝ってもらつてゐる。

それに加えて今は、織斑姉妹の監視も任されているので、生徒会の仕事を手伝う余裕は、今の美紀には無いのだった。

「授業中の監視は、碧さんや五月七日先生が代わってくれますけど、先生たちも忙しいですからね」

「碧さんは、更識の人間として一夏さんの代理を務めたりもしてますからね。簪お嬢様も同様に、一夏さん、刀奈お嬢様の代わりに判断を仰がれる時がありますから」

「お父さんの代理だった一夏さんの代理の代理、って感じですからね、簪ちゃんは」

順番的に、一夏の次に来るのが刀奈、その次が簪なのだ。だから尊の代わりに務めるのが、今は簪と言う事になっている。別に一夏が判断しても問題は無いのだが、一つ仕事を持ち込めば、そのまま雪崩のように一夏の許に仕事が流れていくことが目に見えるるので、虚が簪に代理を頼んだのだった。

「それでは、私は織斑姉妹の監視に向かいます」

「大変だと思いますが、お願いします」

生徒会室から移動し、美紀は織斑姉妹の監視の任務に就いた。昨日一日は大人しくしていたので、もう数日監視すれば問題は無いと判断できると美紀は思っているのだが、碧はまだその判断は早いと言っているのだった。

外傷もすっかり治ったので、刀奈は早くベッドから抜け出したいと考えていた。今抜け出せば大変なのは理解しているのだが、それでもベッドに縛られているよりかはマシだと考えているのだ。

「一夏君、このまま退屈を持って余すのは間違ってると思うのよ」

「だからと言って、ここから抜け出すと怒られますよ」

「簪ちゃんから漫画とゲームを借りたけど、私には理解出来ない世界だったわ」

「趣味は人それぞれと言う事でしよう」

闇鴉が簪から借りて持ってきた漫画は、いわゆるBLの要素が含まれるものが混じっており、一夏と刀奈はその世界観を理解する事が出来なかった。簪の方も、貸した漫画にその種類が混じっているなどと思っただけで、闇鴉が持って行った漫画を確認していなかったのだ。

もし気づいたら、血相を変えて回収しに来たに違いないだろうと、一夏と刀奈はそんなことを考えながらその漫画を読んでいたのだった。

「もし簪ちゃんがりアルの世界にこんなことを求めている子だったら、お姉ちゃんとしてちよつと……いえ、かなり複雑な気持ちなんだけど……」

「現実と漫画の世界は別物でしょう。簪だって、リアルにこんなことを求めている子じゃないと思いますよ」

「でも……今の漫画ってこんなのが主流なのかしら?」

「主流ってわけではないと思いますけど、こういう趣味の女の子が多いと、悪友から聞いたことがあります」

所謂腐女子というジャンルを、一夏は弾と数馬から聞かされていた。もちろん、簪が

腐女子であろうがなからうが、一夏の態度は変わらないので彼は偏見を持たずに刀奈の疑問に答えていた。

「こういう趣味の女子は、ちゃんと現実と区別してると聞いていますし、簪はあまり男子に耐性を持ってませんので、リアルでこんなことを考える事は無いと思いますよ」

「そうよね……簪ちゃんは一夏君の事が好きなんだから、男の子同士なんて求めてないわよね」

断言したいのだが、今一つ自信が持てなかった刀奈だったが、一夏が好きという決定的な材料に気付き、簪がリアルにそんなことを求めていないという確証が持てたのだ。た。

「それにしても、漫画の中でもこんな事が起こるのね……」

「女性同士というのもあるらしいですから、漫画も奥が深いんでしょうね」

「そうなんだ。漫画もバカに出来ないのね」

普段漫画を読まない二人としては、どの漫画にもそういった要素が含まれていると誤解したのだった。また、その誤解が解かれる事は、あまり期待できないのだった。

更識姉妹の考え

一夏より先に復帰した刀奈は、生徒会室で考え事をしていた。普段はふざけたりして真面目に仕事をしない印象が強いだけに、虚はその姿を見て感動していた。

「お嬢様、何か悩み事でしょうか」

だからではないが、虚は刀奈の力になろうと思いついて尋ねた。どれだけふざけていようと、自分の主が悩んでいるのなら、その悩みを取り除く事も、虚の仕事の内だからだ。

「一夏君の誕生日、何をしようかなと思って」

「……一夏さんの誕生日、ですか？」

「うん。そろそろじゃない？ 九月二十七日が誕生日だって、碧さんが調べた戸籍ではそうなってたって」

「確かにそう聞いていますが、お嬢様が悩んでいたのは一夏さんの誕生日の事だったのですか？」

「そうよ。定かではないにしても、せっかくの誕生日なんだからお祝いしたいじゃない。ここ数年は誰かしらが受験で忙しかったからお祝い出来てなかった分、派手にしたいわ」

ね」

刀奈の言葉を聞いて、虚は呆れてものが言えない状況に陥った。受験といえ、虚は一応受験生と言う事なのに、刀奈はその事を完全に忘れてる。それに加えて、一夏の誕生日はあくまで出生届が出されたときされる日が分かっているだけで、本人も正確な誕生日は覚えていないので、ここ数年は祝わなくていいと一夏から申し出たのだ。

「織斑姉妹に確認すれば、正確な誕生日が分かると思うのよね」

「確認してどうするんですか？ 一夏さんはあまり派手な事を好みませんし、男性は誕生日を祝われてもあまりうれしくないと聞きます」

「そうなの？ 尊さんとかは、美紀ちゃんに祝ってもらって嬉しそうだったけど」
「それは父親が娘に祝われたからではないでしょうか」

虚の言葉に、刀奈も少し首を傾げて考えてみる事にした。確かにあれは美紀が祝ったから喜んだのであって、他の人に祝われても嬉しがらなかつたかもしれない。

「でも、一夏君の快気祝いと重ねて考えれば、少し派手なくらいがちよいと思ふのよね」

「お嬢様一人で考えるのではなく、簪お嬢様や美紀さん、マドカさんなども交えて話し合

うのが良いと思いますよ」

「そうねえ……本音とかもこういったことを考えるのは好きそうだし、さつそく話を——」

「この仕事が終わってからにしてください。美紀さんが手伝ってくれたお陰で、大分終わっています。お嬢様が目を通さなければならぬ書類はまだ沢山あるのですから」

勇んで生徒会室から出て行こうとした刀奈の前に、虚が大量の書類を持って立ちふさがる。その量を見て、刀奈が二歩、三歩と後ずさる。

「たった二日くらい休んだだけで、何でそんなに仕事が溜まってるのよ!? おかしいんじゃない!」

「更衣室の修理の為の書類と、来場者からの質問など多数送られてきていますから、その返事をお願いしたいと轡木さんからの依頼です」

「またあの人の!?! 少しは自分で仕事しなさいよね」

自分の事を棚上げして、刀奈は学長である轡木の顔を思い浮かべてため息を吐いた。実質的運営を奥さんに丸投げし、自分は用務員として日々学園の清掃や草木の剪定などをしている初老の男性の顔を。

「というわけでお嬢様、これが終わるまで今日はここから出られないと考えてください
ね」

「と、トイレは？」

「私が付き添いますので、逃げようとは考えないように」

虚の目を見れば、それが本気だと理解できてしまう刀奈は、がっくりと肩を落として
書類に目を通し始めた。

虚が生徒会室へ行っている為、今日の一夏の監視は簪が担当していた。彼女は保健室に入ってきてすぐ、一夏が読んでいた漫画を取り上げたのだった。

「何で、何で一夏がこれを読んでの!?」

「聞鴉が簪の部屋から借りてきたからだろ。何か問題でもあったのか?」

「あるよ! 大あり! こんな趣味を知られたら、嫌われちゃうもん」

「別に人の趣味をどうこう言うつもりは無いし、簪の年頃なら興味が無い方がおかしいって刀奈さんが言ってたんだが」

「お姉ちゃんも読んだの!?!」

「ああ。多かれ少なかれ興味は持つてるものだって言ってたけど、違ったのか?」

交友範囲の狭い一夏にとって、簪の趣味は一般的だと思い込んでしまってもおかしくは無いのだ。確かに多くの女子が似たような趣味を持っているのは確かなのだが、それが一般的なのかと問われれば、肯定はしにくい問題だったのだ。

「違くは無いけど……でも一夏、あんまり人に言い触らさないでね」

「そんな趣味は無いいし、言い触らせるほど友人もいない」

「そんな事ないと思うけど……」

一夏と友達になりたい人間など、この学園に大量にいるはずだと簪は思っていた。友達じゃなくても、知り合いでも良いから親しくなりたいと、簪のクラスメイトがぼやいているのを聞いたことがあったので、間違いないはずだと簪は思っていた。

「とにかく、これは読まないで」

「似たようなものが数冊あるが、それも読まない方が良いのか?」

「うん、出来れば……ううん、そうしてくれるとありがたいかな」

一夏は闇鴉が持ってきた本を簪に全て渡し、読まれたくない本を持って帰らせることにした。その代わりに一夏が要求したのは、簪が持っているIS整備の本を持ってきてほしいとの事だった。

「良いの? 今の一夏が許されてるのって、漫画くらいなんでしょ?」

「だから暇を持て余しているんだ。簪ならそのあたり、上手くやれるだろ?」

「しょうがないか……交換条件だもんね」

一夏としては、簪の秘密を使って脅すつもりなどまったくないのだが、簪がそう思う事で救われるのなら、そのままでもいいかと思っていた。それに整備の本が手に入れば、少しは気がまぎれるだろうとも思っていたので、変にツツコミは入れなかったのだった。

一夏の観察眼

織斑姉妹を監視していた美紀の許に、碧が陣中見舞いとしてケーキを持ってきた。実はこれはクラスで獲得したただ券を利用したもので、碧は静寂から美紀に届けるように頼まれたのだった。

「すみません、碧さん。まさか碧さんに頼むなんて思ってたもので」

「構わないわよ。織斑姉妹の部屋に近づきたいなんて物好き、マドカちゃん以外にいな
いもの」

そのマドカは、取り込まれる恐れを考慮して、あまり監視の任務に就くことは無い。その代わり、クラスのまとめ役のような事を頼まれることが多いのだ。

「一夏さんの様子はどうですか？ 今は簪ちゃんに側に付いてる時間だと思いますが、碧さんなら様子くらい確認してきたんですよね？」

「そうね。一夏さんももう少しすれば授業に復帰する事は出来るでしょうね。ただ、実技がどうかはまだ分からないわね」

「激しい運動は避けた方が良い状態かもしれませんものね」

外面的には治っている一夏だが、内側はまだ完璧に治っているとはいいいがたい状態なのだ。そして碧たちが心配しているのは、ISに恐怖心を抱いているかもしれないと言う事だ。

「一夏さんが直接ISで襲われたわけじゃないですけど、刀奈お姉ちゃんがISで作られた罠にはまって襲われた事を考えると、一夏さんが恐怖心を抱いている可能性もあるんですよ……」

「学園のISなら大丈夫だと思っただけですね。何せ更識製ですから、一夏さんの子供と言っても差し支えない存在ですからね」

「闇鴉とも普通に会話しているようですし、ISに対して恐怖心は抱いてないと思いたいですね」

開発や整備が主な一夏だが、いざとなれば前線に出る覚悟を持つてほしいと碧たちは思っている。前に出て指揮が執れる存在は、更識にもそう多くないのだ。

「刀奈お姉ちゃんもちよつと心配ですけど、それ以上に一夏さんですよ」

「刀奈ちゃんも指揮は執れるけど、刀奈ちゃんには自由に動いてもらいたいものね」

そのいざという時が起こりうる状況になってきてる以上、碧は一夏に指揮を執つても
らえるとありがたいと考えている。彼女も指揮は執れるし、状況に応じて動けるのだ
が、どうしても周りに目を配る余裕がなくなる可能性を考えてしまうのだった。

「後は織斑姉妹が反省して、戦力になってくれれば助かるんですけどね」

「腐つても世界最強ですからね。私も本気で戦つたら厳しいですからね」

「碧さん以外に勝てる人っているんですか？」

「一夏さんなら計略を駆使して勝てそうですね」

頭脳戦なら、織斑姉妹より一夏の方が長けているのは皆が認めるところなのだ。だか
ら計略を使えるのなら、織斑姉妹より一夏が上なのだ。

「簪ちゃんも、一夏さんほどじゃないけど計略が得意だし、もしかしたら織斑姉妹に勝て
るかもしれないわよ」

「やつぱり正々堂々戦うと仮定すると、碧さんしか勝てなさそうですね」

美紀が零した言葉に、碧は苦笑いを浮かべて缶コーヒを啜つたのだった。

とりあえず普通に動く分には問題ないと診断されたので、一夏は保健室から部屋に移動して安静にすることにしたのだった。だが自分の部屋に移動したことによって、一夏はISの研究に精を出す事が出来るのだった。

「一夏さん、少しはペースを落としてくださいよ」

「別に急いでるわけじゃない。だがオータムのISの印象を覚えてるうちにデータ化して解析したいんだ」

「刀奈さんを罫にはめるくらいの頭脳の持ち主だと考えると、ISの性能もかなりいいかもしれませんね」

「少ししか見てないが、あの調整の癖は倉持技研にいた技術者のものだったと思う」

整備士の目を持つている一夏は、整備の癖を見分け、誰が整備したのかを理解する能力を身につけていた。その一夏から見て、あのISを整備したのは倉持技研の人間だと判断していた。

「ではやはり、倉持技研は亡国機業に抱き込まれたと考えるべきでしょうね」

「抱き込まれたと言うより、自ら亡国機業に入ったのかもしれないけどね」

「そう言えば倉持技研は、更識企業の台頭でパツとしない成果しか挙げてなかったですからね。更識企業に嫌がらせ出来ると思ったのかもしれないからね」

更識がIS産業に参加しなければ、倉持技研が日本政府御用達になる予定だったのだが、ISが発表されてからすぐに更識がIS産業に本格参入した結果、日本政府は倉持技研を御用達にすることなく、更識企業に肩入れし始めたので、逆恨みしていてもおかしくは無いと一夏は思っていた。

「日本政府がフライングして倉持技研に打診してただけなのに、更識に期待し始めただ

けで逆恨みされても困るんだけどな……」

「それだけ一夏さんが残した実績は羨ましいものなんですよ。コアを独自開発してる時点で、他企業から恨まれてもおかしくないんですけどね」

「コアの開発は、ISが教えてくれただけで、俺個人の実績じゃないんだけどな……」

ISを悪用しないとISに思われている一夏だからこそ話しかけてくれただけであつて、一夏からしてみれば恨まれる筋合いの無い事なのだ。その事は闇鴉も理解しているの、一夏が浮かべた苦笑いを見ても呆れる事は無かつた。

「とにかく、倉持技研が亡国機業に加担してるかもしれないという事が分かれば、日本政府に警告する事が出来るからな」

「政府が調べるべきことだと思ふんですけどね……」

闇鴉が零した言葉に、一夏は更に苦みを増した笑みを浮かべ、ISの情報をデータ化する事に専念し始めたのだった。

一夏の不安

生徒会室から戻ってきた美紀は、部屋に人の気配があるのに首を傾げた。美紀はまだ、一夏が戻ってきている事を知らないから、本音が遊びに来たんだと思い、軽い感じで話しかけた。

「本音、そんなに暇だったの？」

「まあ暇だったな。何も出来なかったんだから」

「い、一夏さん!? もうこっちに戻ってきて大丈夫なんですか？」

軽く話しかけた事を後悔しながらも、一夏の身体を心配する美紀。そんな美紀に、一夏は大丈夫だと安心させるように笑いかける。

「元々大した怪我じゃないんだから、あそこまで安静にする必要は無かったんだが」

「そんなことありません! 十分大怪我だったんですから、今も無理はしないでくださいよ!」

「あ、ああ……気を付ける」

美紀の剣幕に、一夏はそう答えるしかなかった。心配されているとは分かっていたが、まさかここまで心配しているとは思っていなかった一夏は、自分の考えの甘さを反省した。

「ところで、そのデータはなんですか？」

「俺が見た限りの、亡国機業の人間——オータムの専用機のデータだ」

「……見ただけでここまで解析出来るんですか？」

「たまたま見たことあった特徴があったからだ。まったく知らなかったらさすがにここまで出来ない」

そう言いながら、一夏は解析データを美紀に見せる。それを見て理解出来るだけの知識は、美紀も持ち合わせているのだ。

「随分と火力に特化してる気がしますが、それだけ自信があるという事でしょうか？」

「性格もあると思うけどな。あの人はかなり好戦的で、残虐非道な行動も厭わない感じだった」

「刀奈お姉ちゃんをぼこぼこにする人ですから、それはあり得ますね。一夏さんも、後頭部を踏みつけられたり大変だったんですよね」

「おかげでまだちよつと痛いけどな」

そう言いながら、一夏はもう一つのデータを呼び起こして美紀に見せた。

「これは……イギリスから強奪されたサイレント・ゼフィルスのデータ、ですか？」

「ついさつきオータムの顔を再現したデータをイギリスの企業に送り、強奪を働いた人物の一人はオータムだと確認が取れた。つまり、サイレント・ゼフィルスは亡国機業の戦力として考えておくべきだと判断し、出来る限りのデータを集めた」

「一夏さん、何時からこの作業を？」

「美紀が帰ってくる一時間くらい前からかな。急いだほうがいいと思って、結構集中してたからどれくらいやったかは定かではないが」

そう言いながら、一夏はこのデータを更識へと送る準備を始めた。だがすぐに美紀に両手を抑えられてしまい、作業が出来なくなってしまった。

「どうかしたのか？」

「少しは休んでください。まだ完全じゃないんですし、今日明日に攻め込んでくる可能性なんて、殆ど無いんですから。敵に備えるのも確かに大事ですが、今の一夏さんがしなければならぬ事は、まず万全に回復する事なんですよ、分かっているんですか？」

「分かっているんだが、これだけは早くしておかないと。もう一つ嫌な予感がしてる

からな……」

「嫌な予感とは？」

普段そんなことを言わない一夏が、予感という単語を使った事に美紀は引つ掛かった。

「織斑姉妹が監視していて、さらには篠ノ之博士も衛星を使って見ていたはずなのに、オータムはあっさりと俺のところまでやって来た感じだった。あの三人の行動を読むことが出来るのは、俺を除けばあと一人だ」

「篠ノ之箒、ですか……ではやはり彼女は」

「亡国機業にいると考えて間違いないだろう。そして、今回の一件に少なからず絡んでいるとみて良いと思う」

「しかし彼女は、学園に納品されているほぼすべてのISから嫌われ、それが原因で実技試験を受けられなかったくらいですよ？ 亡国機業が彼女を仲間に取り入れた理由が分からないのですが」

「歩兵としては使えるだろ。あれでも全国の剣道娘の頂点だからな」

「では、篠ノ之さんは歩兵として攻めてくる？」

美紀の質問に、一夏は首を横に振った。だがその仕草も、何時ものように自信があるようには見えず、判断に困ってる感じがしたのだった。

「コア・ネットワークを介して、サイレント・ゼファイルスに話しかけられないか確かめてるんだが、残念ながら反応は無い。こちらに心を開いていないと仮定すると、篠ノ之でも使えるのかもしれない」

「ですが、このデータを見る限り、サイレント・ゼファイルスは遠距離狙撃型のISですよ？ 篠ノ之さんの戦闘スタイルとはかけ離れているようですよ」

「ISさえ使えれば、アイツは構わないんじゃないのか？ この学園にスパイがいるよーうだし、VTSの紛い物くらいは作れる技術はあるだろう。それで特訓でもしたとか、まあそんなところだと思うぞ。もしこの考えが正しかったら、かなり厄介だがな」

「篠ノ之さんの相手を誰が務めるかによって、戦況が大きく変わると考えているのですか？」

「織斑姉妹が反省して、しっかりと働いてくれるのなら楽なんだがな……あまり期待は出来そうにないんだよな」

美紀もその考えには同意出来ると思っていた。生徒に監視されている時点で、あまり期待はしない方が良くだろうと思ってしまったのだ。

「篠ノ之の写真も、イギリスに送ってみるか。黒髪で長髪のアジア人がオータムと一緒にだったと聞いてるからな。特徴はぴったり当てはまる」

「そして歩兵として高い能力を持つてるのも確かですものね」

美紀も嫌な予感を覚えながら、一夏の代わりにイギリス政府に篠の写真を添付したメールを送り、一夏を半ば強引にベッドに寝かしかけたのだった。

別の問題

とりあえず復帰した一夏だったが、まだ若干の痛みが残っている為、美紀を監視に付け実技の授業は休むことになった。

「別に監視なんてなくてもいいから、美紀は授業に出て来たらどうだ？」

「駄目ですよ。虚さんから頼まれましたし、一夏さんは目を離すと無茶をする傾向がありますから」

「そんなことは無いと思うんですが……」

「だいたい、昨日だって保健室から部屋に戻ってきてすぐにあれだけの情報を端末に打ち込んで、家との連絡やら政府への注意喚起だとかいろいろやったんですよ？ あれで無茶してないとしても言うんですか？」

珍しく強気に責めてくる美紀に、一夏は素直に頭を下げる。自分では無茶してるという感覚ではなかったのだが、全て終わって美紀にベッドに押し倒された時、全身に疲れを感じたのだから仕方なかっただろう。

「ですから今は、ゆっくりと休んでくださいな」

「そう言っても、生徒会の方でも仕事が溜まってるとし、亡国機業に関して注意を促した事によって、警備会社から学園の警備を担当したいという売り込みが殺到してるとはいいしな……その対処もしなければいけないし」

「そんなことは、学園長に任せれば良いんです。普段は仕事を生徒会に丸投げしてるんですから、こんな時くらい働かせたって罰は当たりませんよ」

「そう……だな……」

そう言つて一夏は携帯を取り出し、轡木の番号に電話を掛け、警備会社への断りの連絡を頼むと告げる。轡木も一夏の状態は理解しているので、今回は素直に一夏の申し出を受けたのだった。

「これで残るのは日本政府からの介入を阻止する対策を練るだけだな」

「それは放課後、生徒会室ですればいい事ですよ」

「分かつてはいるんだが、少しくらい考えておかないと不安だな。虚さんは兎も角、刀奈さんが真面目に考えてるとは思えないから」

「刀奈お姉ちゃんも病み上がりですし、頭脳労働は虚さんや一夏さん、そして簪ちゃんに任せてましたからね。苦手というわけじゃないんでしょうが、どうも刀奈お姉ちゃんは難しい事を考えるのは避けるんですよね」

「俺がいなかったら次期当主だったわけなんだから、もう少し考えてくれてもいいと思うんだがな」

周りに人がいなくても、次期当主という表現を使う事を忘れない一夏と美紀。他のクラスは普通に授業中で、万が一会話を聞かれていた時に備えての措置なのだが、他の更識所属の面々から言わせれば警戒し過ぎなのだ。

「そう言えば、織斑姉妹の監視はどうなってるんだ？」

「今の時間は五月七日先生が担当してくれてますよ。山田先生も碧さんも授業中ですから」

「実技の担当は織斑姉妹だった気がするんだが……」

「今日一日は部屋で反省してもらって、明日から現場復帰らしいですよ。昨日些か凹み過ぎて授業にならなかったのも、その事も反省してもらおうそうです」

「何があつたんだ……」

昨日の授業では、何時ものキレが鳴りを潜め、指導にも身が入っていなかったのだ。それを見た碧は、今日一日で心の整理を付け、明日からしっかりと指導させるように再び謹慎を轡木に進言し、それが採用されたのだ。

「織斑姉妹はこうして反省させられるが、篠ノ之博士はどうしようも無いからな……電話も通じないし」

「反省はしてると思いますよ？ 何せ自分たちの所為で一夏さんに大怪我を負わせたんですから」

「そんな殊勝な人だとは思えないがな」

そう言って一夏は、背もたれに身体を預け身体を休める事にしたのだった。

織斑姉妹の代わりに実技を担当した真耶は、己の力不足を実感したのだった。碧がフオローしてくれたから何とかなつたものの、自分一人では確実に授業にならなかつただろうと実感していた。

「すみません、小鳥遊先生。私がふがないばかりに……」

「真耶は生徒と年も近いし、見た目も幼い感じだから親近感を覚えられてるからね。どうしても脱線しがちになつちゃうのは仕方ないと思うわよ」

「ですが、小鳥遊先生はしっかりと生徒との距離感を保つてますし、私より一つ下の紫陽花だつてしっかり教師をしてるんですよ？　なのに何で私だけ……」

「さつきも言つたけど、真耶は幼く見えるからだと思うわよ？　それと、あまり強く物を言えないって知られちゃつてるから、余計な事を言つても強く怒られないって思われるとかかしら」

碧の指摘に、真耶は更にガツクリと肩を落とす。見た目は変えようもないし、強く出

られないのも事実だ。教師として不慣れながらも精一杯務めていても、どうしても注意する時には生徒に気を使い過ぎてしまうのだ。

「どうやったら上手く注意出来るのでしょうか」

「そうねえ……一夏さんに相談してみたらどうかしら」

「更識君にですか？　でも、生徒に相談するのはどうなんでしょう……」

「私だつて一夏さんに相談したりしますし、問題ないと思うわよ？　それに、織斑姉妹なんて一夏さんに怒られてるんだから、生徒と教師なんて気にしなくて良いと思うけど」

一夏が織斑姉妹を怒るのは、一夏以外にまともに怒れる人間がいないからだ。文化祭の時みたいにも、一夏の身に何か起きた時なら碧も強気に出れるのだが、普段はどうしても注意かつツツコミの範疇から抜け出せないのだった。

「そうですね。後で更識君に相談してみます」

「そうしなさい。あつても、今日は一夏さん、放課後は生徒会室で話し合いがあるからつて言つてたから、下校時間過ぎてからじゃないと時間は無いかもよ」

「そうですね……じゃあ、明日にでも相談してみます」

真耶が前を向けたのなら、これで良かったのだらうと碧は判断し、職員室に向かう前

に織斑姉妹のところへ寄ると告げ、真耶と別れたのだった。

誕生日の話題

一夏も刀奈も本格的に生徒会業務に復帰したが、まだ心配なため美紀もその業務を手伝っていた。仕事量は美紀が一人で片づけていた時よりも少ないが、それでも大変な思いをしていたのだった。

「一夏さんも刀奈お姉ちゃんも、何時もこんなことをしてたんですね」

「そうよ。凄いでしょ」

「……お嬢様は一夏さんや私に仕事を投げつけて、たまに抜け出してたじゃないですか」「たまによ、たまに。普段はちゃんとやってるんだから」

美紀に言い訳を始めた刀奈だったが、その背後で一夏が苦笑いを浮かべているのを美紀が見た事で、刀奈は普段から抜け出しているのだと美紀の中で決定づけられた。

「そ、そう言えば一夏君。そろそろ誕生日だけど、何かしてほしい事はあるかしら?」「凄い勢いで誤魔化しましたね」

虚がジト目で刀奈を見つめるが、刀奈は一切虚の方を見ようとはしなかった。見られ

ていると分かっているから、意識的に無視しているのは、誰の目にも明らかだったので、誰もツツコミは入れなかった。

「誕生日？ そう言えばそんなものもありませんね」

「一夏君ってそういう記念日とかに無頓着よね……」

「生まれた日ってだけで、他は普通の日と大差ないですからね」

興味なさげに書類整理を続ける一夏を見て、刀奈は視線を美紀と虚に移し、肩を竦めてため息を吐いた。

「一夏君、ドライなのは良いけど、少しは行事に興味を持った方が良いわよ？」

「行事って、俺の誕生日にかこつけて、刀奈さんたちが騒ぎたいだけじゃないんですか？」

「そ、そ、そ……そんなこと無いわよ？」

凶星を突かれた刀奈は、明らかに嘘を吐いてますと言わんばかりに言葉を詰まらせた。その反応を見て、一夏はますます呆れた態度で刀奈を見つめる。

「騒ぎたいならご自由に。ですが、俺は参加しませんからね」

「そんなこと言わないでさ。本音や簪ちゃんだって楽しみにしてるんだから」

「本音は兎も角、簪は珍しいですね、確かに」

「でしょ！ だから一夏君も——」

「誕生日なんて喜んでる場合でもないですし、めでたいと思う歳でもないでしょう。今は亡国機業に備えなければいけないんですから、刀奈さんもしっかりと働いてください」

あくまで興味を示さない一夏に、刀奈は遂に泣きそうになった。最初は演技だろうと思っていた一夏だったが、無視し続けても泣きそうな顔を止めないのを気配で察知し、もしかして本当に泣きそうになってるのではないだろうかと疑い始めた。

「お嬢様、さすがに泣くのは……」

「泣いてないわよ！ 仕事をすればいいんですよ！ それじゃあさっさと終わらせて、

一夏君に強制的に参加してもらうんだから！」

「何怒ってるんですか……」

「怒ってないわよ！」

刀奈の態度を見て、虚と一夏は「どつちが年下だか分からない」と思っていた。実際一夏の方が大人の中で生活してる分、纏っている空気や言動が大人っぽいので、刀奈の

方が年下に見られがちなのは理解している。だが態度までこうでは、刀奈が年上だと知っている二人でも疑ってしまうのだった。

簪と本音は、織斑姉妹の部屋の監視を行いながら一夏の誕生日の事を話していた。

「いっちゃん誕生日、何をすることになるのかなー?」

「お姉ちゃんの事だから、また斜め上な事を提案してくると思うけど」

とりあえず監視はしているが、今日は殆ど動きすら見せない織斑姉妹の事を、簪は少し心配していた。昨日一日外に出てみて、思ってた以上に凹んでたので、碧が追加で謹慎させ立ち直らせる時間を設けたのだが、本当に立ち直ってるのかが不安でたまらなかつた。

「いっちゃんの誕生日のお祝いって、小学生の頃以来だっけ?」

「一夏、あんまり騒がしいの好きじゃないし、その頃からISの開発・研究に携わっていたから、家にいない事も少なくなかったからね」

「でも、こうして全員揃ってるんだから、今年はお祝いしたいな」

「そうだね……でも、問題山積み状態だから、今年も難しいかもしれないよ」

亡国機業の件だけならまだしも、そこに元IS学園所属の人間がいると判明してしまつたので、その対処もしなければいけなくなつてしまつたのだ。一夏が迅速に動いたお陰で、サイレント・ゼフィルス強奪事件前には除籍になつていたからまだいいが、それでもIS学園に対する抗議の文書がイギリスからひっきりなしに送られてくるの

だった。

「悪いのはシノノンで、IS学園は一切の責任を負わないって言えばいいだけじゃないの?」

「正論で納得できるなら、抗議の文書なんて送ってこないわよ。イギリスとしては、IS学園に非を認めさせ、更識企業の援助を受けようとしてるんじゃないかって一夏が言ってたけど」

「セツシーのデータが思ってたほど役に立たなかつたんだってね。頑張ってるけど、期待値がそれ以上なんだろうっていつちーが言ってたけど」

何処の国も開発戦争に負けない為、高い技術力を持つている更識の援助が欲しいのだからと、簪も本音も理解している。そこに篠ノ之箒が事件に関わっていた疑いが強まったのを受け、イギリスはIS学園の監督不行き届きを指摘し、IS学園の背後にある更識企業にサイレント・ゼファイルスに代わるISを開発するのを手伝ってもらおうと考えているのだった。

「そもそも、イギリスにはコアがもうないんじゃないの?」

「更識企業に造ってもらおうと思ってるんじゃないの? まあ、そんなことしても、他の国から集中砲火を浴びるだけだと思うんだけどね」

本音の言葉に、簪も同意してこの話題を終わらせることにした。部屋の中には織斑姉妹の気配があるが、先ほどからピクリとも動かないのが、簪には不気味に思っていたのだった。

誕生日の為の話し合い

一夏が更識の用事で席を外してる間に、刀奈たちは一夏の誕生日の計画について話し合う為、一夏の部屋に集まっていた。

「何でこの部屋なんですか？ 一夏さんがいつ戻ってくるか分からない以上、簪ちゃんたちの部屋の方が良かったのでは……」

「一夏君のベッドにもぐりこむ——じゃなくって、一夏君の生活空間で考えた方が良く考えが出てきそうだったからよ」

本音が漏れかけた刀奈に、虚がジト目を向けたが、すぐに無駄だと理解して視線を元に戻した。

「一夏はあんまり興味なさそうだったけど、せつかくだからお祝いしたいよね」
「いっちー、誕生日なんて年をとるだけだろって言ってたもんね」

男子高校生にはありがちな態度なのだが、生憎この学園には一夏以外の男子は存在しないので、そのありがちは通用しないのだ。ましてや好意を寄せている相手の誕生日な

ら尚更だろう。

「ケーキを作つてあげるつて言うのはどうかしら？」

「お姉ちゃんと本音は出来るかもしれないけど、私たちはそんなに料理得意じゃないよ」
「じゃあ身体にリボンを巻いて——」

「却下」

「せめて最後まで言わせてよ……」

ボケを途中で潰され、刀奈はしょんぼりとしてしまう。だが簪はそれに付き合うことはせずに、他の案を刀奈以外に求めた。

「美紀や虚さんは、何か意見ある？」

「普通にお祝いするだけでも十分だと思いますけどね。あまり派手にすると、一夏さんがかえつて嫌がるかもしれませんし」

「こういう時、血縁のマドカがいてくれれば一番良かったんだけどね」
「珍しく一夏さんがマドカさんを連れて行きましたからね……」

元亡国機業所属のため、更識で話し合う時に役に立つだろうと考えた一夏が、今日は護衛にマドカを指名したのだった。そのような事情でも、一夏の護衛が出来ると言う事

で、マドカは喜んで一夏と一緒に更識本家へと向かったのだった。

「碧さんも運転手として行っちゃいましたし、お姉ちゃんもこんなですし……」

「こんなって酷くない!? 簪ちゃんはお姉ちゃんの事、どう思ってるのよ」

「真面目に考えないのなら、大人しく織斑姉妹の監視でもしてたら? 五月七日先生だって忙しそうだし、お姉ちゃんが監視すれば、先生も仕事出来るんだから」

「だって私は監視のローテーションに組まれてないし、もう監視しなくても大人しくしてるんですよ? だったら紫陽花さんも監視から外れて仕事すればいいじゃない」

「それを判断するのは、お嬢様ではなく一夏さんと碧さんのお二人です。五月七日さんもその事を理解しているから監視しているのですよ。お嬢様のように無責任に仕事を放棄するような方ではないのですよ」

虚に毒吐かれ、刀奈は強引に話題を変える事にしたのだった。

「織斑姉妹の監視は、後で一夏君に相談する事にして、それよりも一夏君の誕生日よ。本当に何をするか決めないと、当日に間に合わないかもしれないじゃない」

「じゃあ、ケーキはお姉ちゃんと本音が用意するとして、私たちは一夏をもてなせばいいんじゃない? そうすれば、お姉ちゃんたちも得意分野で活躍出来るし」

「……それって、他では活躍してないみたいだね、聞いてみるだけ?」

「だって、お姉ちゃんたちが一夏をもてなそうとしても、自分たちが楽しむだけでしょ？
だったら得意な料理で一夏をもてなした方が、平和に過ごせると思うけど」

「ですが簪お嬢様、お嬢様と本音を二人で作業させても、一向に進まない未来しか見えな
いのですが」

普段から仕事を放り出している刀奈と、最初から生徒会室に現れない本音を二人きり
にして、仕事をする未来が見えないのは仕方ないだろう。だが得意分野なら少しはま
もに仕事すると考えていた簪は、その事をすっかり失念していたのだった。

「じゃあ、誰か監視に付けるしかないですね……でも、お姉ちゃんと本音を同時に御せる
人なんて……虚さん、お願い出来ますか？」

「致し方ありませんね。作業では貢献出来ませんが、監視としてしっかりと役目を果た
したいと思います」

刀奈と本音を同時に相手して、問題なく事を運べる人間など、一夏を除けば虚しかい
なかった。本当は虚も一夏をもてなす側が良かったのだが、自分で言い出した手前引く
に引けず、また簪から頼まれたら断る事は出来なかったのだった。

「じゃあせめて、簪ちゃんたちが何か衣装を着て一夏君をもてなすのはどうかしら？」

「それだったら、私の着ぐるみパジャマがありますよ〜」

「それもいいけど、せっかくだから私が用意するわ。とっておきの衣装をね」

「刀奈お姉ちゃん、用意するのは良いけど、せめて一夏さんに怒られないものにしてね？」

私たちまで怒られるのは嫌なので」

「何で怒られる事が前提なの!?! 私だってそれくらい用意できるわよ!」

「じゃあ参考までに、お姉ちゃんはどんな衣装を用意するつもりなの?」

簪が問いかけると、刀奈は胸を張って答えた。

「バニーガールにナース服、ミニスカポリスに……」

「オジサンみたいな趣味だね……」

「この間お父さんの部屋の掃除をしてたら出てきたって、尊さんから電話があったから」

「お父さん……」

何故そのような衣装が出てきたのか、簪は追及する事を避けたのだった。故人の名誉を守る為にも、使用目的を問いただす事は避けるべきだと、この部屋にいる全員が思いを同じにして、それ以上その話題に触れる事は無かったのだった。

「それじゃあ、その衣装で一夏君をもてなす事にしましょう。異論はないわね?」

「……もう衣装があるんじゃないもんね」

簪の言葉は、一種の諦めとそれ以上真相に近づかない為のものだった。全員諦めて領き、一夏の誕生日に備える事にしたのだった。

マドカの情報

刀奈たちが寮で誕生日の事を話し合っている頃、一夏は更識本家にやってきていた。初めて訪れたマドカは、あまりの広さにきよろきよろと辺りを見回している。

「お待ちしておりました、一夏様。尊様がお待ちです」

「ありがとうございます」

案内役として現れた侍女に、一夏が一礼して尊の部屋まで案内してもらってる間も、マドカは落ち着きなく辺りを見回していた。

「そんなに珍しいものは無いぞ?」

あまりにもきよろきよろしていたので、一夏がそう声を掛けると、マドカは慌てて一夏に言い訳を始める。

「いえ、ここが兄さまが生活していた場所なのだと思うと、なんだか感慨深くてですね……決して物珍しいとかこんな広い屋敷があるのかかと思つてたわけじゃありませんよ」

「そうか」

言い訳をしたつもりが、ついつい本音が零れてしまったマドカだったが、一夏はその事を指摘する事は無かった。本人が気づいていないのだから、わざわざ教える必要も無いと考えたのかは定かではない。

「失礼いたします。ご当主様、ならびにその妹君をお連れいたしました」
『入りなさい』

屋敷の深部まで来れば、誰かに聞かれている恐れはないので、侍女は「一夏」ではなく「ご当主」と呼んだ。尊もその事を理解しているので、特に指摘することなく入室の許可を出した。

「わざわざ申し訳ありません、ご当主」
「気にしないでください。そして、表向きは貴方が当主なのですから、あまり畏まられると居心地が悪いんですけど」

「表ではそうかもしれませんが、ここは裏ですから。それで、そちらが元亡国機業に所属していた、ご当主様の妹君ですか」

「何か知ってるかと思ひまして連れてきました」

尊に視線を向けられ、マドカは小さく目礼をする。その後で一夏が振り返り、マドカに視線を固定した。

「マドカ、覚えている範囲で構わない。亡国機業について教えてくれないか？」

「私も詳しい訳ではありませんが、現在亡国機業には大きく分けて三つの派閥があります」

そこで区切り、マドカは一夏の目を見た。一夏はマドカの目を見返し、小さく頷いて続きを促した。

「二つ目の派閥は、リーダーが率いる派閥です。この派閥は改革と謳いながら破壊と強奪をすることを目的とした派閥です。二つ目は前リーダーの意思を引き継いだ穏健派。悪事を働いている国や組織を壊滅させ、虐げられていた人間を助け出すことを目的とした派閥です。そして三つ目ですが、この派閥に私は所属していません」

「その派閥の目的は？」

「亡国機業からの脱退・独立を目指す派閥です」

マドカの言葉に、一夏と尊は意外感を露わにした。今までの説明を聞く限り、一夏を

襲ってきた派閥は三番目だと言う事が分かる。だがその派閥の目的は脱退・独立だ。一夏を襲う意味が分からないのだ。

「マドカが所属していたと言う事は、あのオータムも一緒と言う事だろ？ 何故その派閥が俺を狙う」

「この派閥を率いているのは、スコールという幹部の一人です。スコールは兄さまに固執している節が見られました。また、篠ノ之束を拉致するよう私に命じたのもスコールです」

「そのスコールという幹部の情報は何？」

「詳しい事は……ですが、少なくとも私やオータムよりはIS技術は高く、戦闘においても、無類の才能を発揮するでしょう」

「俺に固執してるとの事だが、その理由は？」

「分かりません。ですが、兄さまの事を知っているような口ぶりをしてたことから、織斑夫妻と面識があつたのかもしれない」

両親、という単語を使わなかったのは、マドカも認めたくないという現れだろう。一夏はその事を指摘することなく、少し考えを纏める為に瞼を閉じた。

「これは私の勝手な考えですが、篠ノ之束を拉致した目的は、姉さまたちと篠ノ之束博士

の裏をかくためだと思います」

「それはあり得るだろうな。マドカが抜けた穴を、篠ノ之で埋められるとは思えないし、育てたとしても精々候補生レベルに届くかどうかだろうしな。戦力として期待したいのなら、静寂か香澄を攫った方がよっぽど戦力になっただろう。まあ、その二人が率先して亡国機業に力を貸すとは思えないが」

「篠ノ之箒は洗脳されていない可能性の方が高いと兄さまは考えているのですか？」

「アイツを洗脳しても、戦闘の幅が狭まるだけだろうし、そんなことしなくても、アイツは簡単に言いくるめられるだろう。正当な評価がされていないと思いついていたアイツなら、その事を理由に亡国機業に与する事もあるだろう」

「ですが兄さま、篠ノ之箒はISから嫌われているはずでは」

「更識の手が加えられているISからは、軒並み嫌われていたな。だが、それ以外ならまだ動かせない事も無かつただろうし、考え方を改めた可能性も捨てきれない」

箒が自分の力と向き合って、それなりに努力した可能性を考えて、一夏はそう答えたのだが、マドカはその可能性は無いのではないかと思っていた。直接の面識は大して無いが、話を聞く限りの箒像は、限りなく最低に近い評価なのだから。

「独立を目指す派閥の人数は？」

「不明です。正確な人数を把握しているのは、リーダーであるスコールだけでしょう」
「つまり、亡国機業内でも、どれだけの反乱分子がいるのか把握していないと？」
「そのようです。亡国機業のリーダーも疑心暗鬼になっていると聞きました。信用しているのは側近だけだとも」

マドカからもたらされた情報を元に、一夏は対亡国機業の作戦を考え始めたのだ
た。

更識家からの報告

一夏の誕生日を週末に控え、刀奈たちは一夏に内緒で準備を進めていた。ケーキの材料を買い求めたり、実家から出てきた衣装をこっそり I S 学園に持ち込んだりと、非常に怪しい動きなのだが、その動きが一夏にバレないよう、誰か一人が必ず一夏についていたのだった。

「一夏さん、お父さんから一夏さんに伝えたいことがあると」

「楯無さんが？ 分かった」

今日は美紀が一夏についていて、ちょうどそのタイミングで一夏に尊から電話が入ったのだった。

「はい、代わりました」

『こちらから日本政府に注意を促したのですが、I S 学園の事は I S 学園で処理すべきだという返答でした。政府からの追加での護衛は残念ながら』

「元より期待していませんので。その返答も予想の範囲ですし、政府がそのような態度なら、こちらにも対応の態度で返すのみです」

『今後政府の申し出は断る方向でよろしいですね』

「その対応で構いません。IS学園と更識は、今後日本政府の申し出は受けない方向でお願いします」

『承知しました。それから調査の結果ですが、元倉持技研所属の技術者の内、実に九割以上が所在不明でした』

「やはりそうでしたか……一割以下の技術者で、倉持技研の内部情報に詳しい者はいませんでしたか？」

一夏の問いかけに、尊はため息を吐いて答えた。

『残念ながら、その一割以下の人間は技術者とは名ばかりの駆け出しでしたので……雲隠れした際に切り捨てられた者たちですの』

「詳しい内情は知らない者たち、と言う事ですか……そこらへんは抜かりないですね」
『マドカちゃんの情報を元に調べたのですが、どの派閥にその技術者たちが流れ込んだのかも特定は出来ませんでした、おそらくは独立派だと思われま』

「そうでしょうね。俺を襲ったオータムがその派閥なのですから、その機体を調整している時点で、倉持技研の技術者は亡国機業内の独立派に手を貸しているでしょう」

『誰か一人、そちらに派遣出来ればいいのですが……』

「更識がこれ以上手薄になるのは避けた方が良いですし、IS学園に派遣するとしても、そう簡単に手配出来るものでもありませんしね」

苦笑いを浮かべた一夏と、ため息を吐く尊。表と裏、当主として同じ悩みを抱える二人の会話は、自然と暗いものへと進んでいった。

「篠ノ之箒については、何か分かった事はありますか？」

『残念ながら……亡国機業については、更識の諜報力を以つてしてもなかなか……IS学園の近くに一つ、拠点らしき場所がある程度しか分かっていません』

「その場所ですが、念のためこちらで調べた方が良いと思うので、位置情報を後程美紀の携帯に送っておいてください」

『分かりました。では、娘に代わってください』

報告は終わったので、一夏は美紀に携帯を返し、自分は今の情報から新たな何かを見つけ出す為にパソコンに向かった。

『美紀、一夏君の誕生日の件は黙っておいた方が良いのか？』

「お願い。刀奈お姉ちゃんが気合入ってるから。一夏さんにバレないように動いてるんだって」

『分かった。それから、一夏君に頼まれた位置情報、後で送っておくから』

「分かった。てか、一夏さんに直接送ればいいんじゃないの？」

『機密性が高いからな。一夏君の携帯に直接送ると、調べられる確率が高くなる。美紀に送る分には、娘に送るメールと偽装出来るからな』

「いい加減その手も使い古したと思うけどね」

そう言いながらも、別の案があるわけじゃないので、美紀も大人しくそれに従うのだった。

『暗号化するにしても、法則性を見破られると使えないからな』

「そもそも、本音が覚えられないって」

『そうだな。まあ、そう言うわけだから、くれぐれも更識所属の人間以外に携帯は貸さないように』

「分かっています」

そうして、美紀と尊は同時に電話を切り、それぞれの仕事に戻っていくのだった。

一夏が襲われてから、静寐や香澄、エイミイと言った外部から更識所属となった面々は自主訓練の回数を増やしていた。少しでも一夏の手助けが出来ればという思いと、足手纏いにならないようにという思いから、一夏や他のメンバーの予定が合わなくても、この三人で特訓しようという事になったのだ。

「やっぱり、三人だと出来る訓練の制限が掛かっちゃうわね」

「布仏さんに手伝ってもらえないでしょうか。彼女は更識所属でも、比較的暇だと聞いていますけど」

「でも、本音に加わってもねえ。實力は十分だけど、やる気がね」

「それはあるわね。本音の實力は一夏君も認めてるけど、やる気の無さを嘆いていたもの」

訓練の休憩中、三人はもう一人くらい訓練に呼びたいと話し合っていた。タツグ戦の訓練をしようにも、三人ではどうしても出来ないものがある。連携の確認くらいなら問題ないが、実戦形式で戦おうにも、この三人は一人で二人分の動きが出来る人間はいないのだ。

「ボーデヴィツヒさんかオルコットさんにもで頼んでみましょうか」

「それだったら、デユノアさんの方が連携訓練には向いてると思うけど」

「皆さん、そろそろアリーナ使用時間が終わりますよ」

話し合ってるうちに大分時間が経ってしまったらしいと、ナターシャに言われ気づいた三人だったが、もう一つ気づいた事があった。

「そうだ！ ナターシャさん、明日から特訓に付き合ってください」

「それは良いですけど、私はIS操縦から二ヶ月くらい離れてるのですが」
「大丈夫ですって。いきなり本番なんて事はしませんから」

静寂に押し切られ、ナターシャは特訓に付き合う事を了承した。これで四人になったので、明日からは訓練の幅が広がると、三人は喜んでアリーナから寮へと戻っていったのだった。

織斑姉妹の復歸

追加で一日反省した織斑姉妹は、実技の授業の為にアリーナを訪れていた。普段は持ち歩かない専用機の『暮桜』と『明栴』を装着し、万全の状態で授業に臨んでいる。

「普段からそのくらいやる気を見せてくれれば、謹慎になんてならなかったんですけどね」

「一夏……嫌味はよしてくれ。私も千夏も、十分反省したんだ」

「反省出来たかどうかを判断するのは我々です。まだ自分の間は監視をつけさせてもらいますが、今日の授業の成果によっては、自由行動を認めないでもないです」

「そうか。なら、より気合いを入れて授業に臨まなければ」

気合いを入れる姉妹を見て、一夏は念のために釘を刺すことにした。

「気合いを入れるのは良いですが、夏休みの時のように、カリキュラム以上の事をしないでくださいよ？ 過剰訓練は怪我の元ですから」

「分かっている。それに、小鳥遊も監視してるんだろ？ さつきから視線が突き刺さってさ」

「俺はあくまでも生徒として授業に出るだけです。美紀や本音も同様に。となると監視は碧さんになると、分かりそうなものですが」

「我々はそこまで信用を失ったんだと、漸く理解した。だが、あんまり鋭い視線を向けられると、思わず攻撃したくなるから気をつけろ」

単純な攻撃力なら、織斑姉妹に敵う人間はIS学園に存在しない。頭脳戦でもある程度は善戦する織斑姉妹だが、その本質は圧倒的な攻撃力とスピードだ。その織斑姉妹が思わず攻撃したくなるという事は、理屈ではなく単純な力任せな攻撃になるだろう。一夏はそう理解し、碧に視線を少し柔らかにするように指示を出した。

「我が家の貴重な戦力を削がないでいただきたい。IS学園としても、小鳥遊先生を欠くのは困りますからね」

「お前は何処まで大人な考えをすれば気が済むのだ。たまには年相応な反応を見せてくれてもいいじゃないか」

「生憎、どんな反応が年相応なのか分からないものでして。同性の同年代が周りにいませんし、悪友二人も平均的な反応は見せないようですし」

弾と数馬は、思春期過ぎるのではないかと鈴から聞いている一夏は、あれが平均だと

思わないようにしているのだ。だから一夏は、どんな反応が年相応なのかが分からない。その事を理解した姉妹は、そろって小さくため息を吐いたのだった。

「お前の人生を狂わせた側の人間が思う事ではないのかもしれないが、もう少し普通でいる事を心掛けてくれ」

「お前が更識の中で重要なポジションなのは、わたしたちも理解してるつもりだ。だが、もう少し高校生らしさを身につけても良いと思うぞ。高校生らしさなら、周りに見本はいくらでもいるだろうし、少し考えてみたらどうだ」

「そうは言われなくても、IS学園に在籍してる人間が、普通の高校生なのか甚だ疑問なのですが……まあ、善処してみましよう」

一夏がそう返したところで、他の生徒たちも着替えを済ませてアリーナへ現れ始めた。それを見た織斑姉妹は、再び気合いを入れて授業に臨むのだった。

放課後、一夏が生徒会の業務で職員室に行っている間、刀奈は虚と本音、そして手伝いとして生徒会室に来ていた簪と美紀に相談を持ち掛ける。

「一夏君の好みだけど、普通のフルーツケーキで良いのかな？ それとも、チョコレートケーキ？」

「そこはお姉ちゃんと本音の好みで良いと思うけど」

「そもそも一夏さんは、あまり甘いものを食べませんから。チョコレートケーキにするのと、食べてもらえない可能性があると思いますよ」

「じゃあ、甘さ控えめなレモンケーキはどうかしら」

「えー！ せっかくなんですから、甘い方が良いですよー！」

「それは本音の好みでしょ。今回は、あくまでも一夏さんに食べてもらうためのケーキです。本音の好みで選んでも、一夏さんが喜ぶとは限りません」

「そうだけどさ〜」

虚に窘められ、本音は不満ながらも引き下がった。虚が言った通り、今回のケーキはあくまでも一夏の為であって、本音を喜ばせる為のものではないのだ。

「チーズケーキでも良いけど、レアとベイクト、どっちが好きなのかも分からないし……こうして改めて思うと、私たちって一夏君の好物とか知らないのよね……」

「一夏は基本的に何でも食べるから、好き嫌いが分かりにくいんだよ。甘いものだって、出されれば食べるからね」

「そうなのよね……でも、せっかくだし、一夏君に喜んでもらいたいじゃない。コスプレだけじゃ物足りないと思うし、ケーキも一夏君好みに仕上げたいもの」

「……一夏さんがコスプレを見て喜ぶとは思えませんが」

「おね〜ちゃん、いい加減諦めなよ〜。刀奈様が決めたんだから、従者の私たちは従うだけだよ」

「……普段そんな事言わないくせに、こういう時だけは」

本音の言い分はもつともだと、虚も理解している。主が間違っていると思っても、従者として逆らうわけには行かないのだ。まあ、普段は主に物を言いまくっているので、こういう時は逆らわずに従うのも仕方ないと思ってしまったのが間違いだったと、虚は数日前の自分を激しく恨んだのだった。

「野菜ケーキっていうのはどうかな？」

「いくらなんでもそれは、奇を衒い過ぎてると思うよ。普通にショートケーキで良いと思うよ。一夏も作ってもらったものに文句は言わないだろうし」

簪のこの一言で、刀奈と本音を作るケーキは、イチゴのショートケーキに決定した。材料は前日に買い求める事になっているので、必要なものをメモして、当日まで虚が保管する事になったのだった。

織斑姉妹の処分

刀奈たちがケーキについて話し合っている間、一夏は碧と一緒に職員室に来ていた。理由は当然、織斑姉妹の処分をどうするかについて話し合うためだった。

「今日の授業を見る限り、俺はある程度の自由は認めて良いと思いますけど」

「まだ早くないですか？ もう数回様子を見た方が良いと思いますけど」

「小鳥遊先生の意見はもつともだと私も思います。ですが、何時までも監視するのは、される方もする方も大変ですし、そこはもういいかなと思います」

監視の手伝いをしていた紫陽花は、碧の意見を尊重しつつ、織斑姉妹に自由を与えても良いのではないかと主張した。

「私は更識君の意見より、小鳥遊先輩の意見の方が良いと思います。この際織斑姉妹には、徹底的に反省してもらった方が、後々の為になると思うんです」

「真耶はたんに、織斑姉妹に仕事を押し付けられることなく過ごさせてるからじゃないの？」

「確かにそれもあります。ですが、私以外にも織斑姉妹から仕事を押し付けられてる子

「たちがいるじゃないですか。そうですね、更識君」

「まあ、生徒会にも何回か仕事を押し付け——頼みに来たことはありませんが」

あえて言い直したのは、一夏にとってあれは自分が担当してもおかしくなかった案件だったからであって、気持ち的には押し付けられたと思ってしまうような頼まれ方だったのだ。

「最終判断は一夏さんが下せばいいので、私たちの意見はあくまでも参考です。それを踏まえたうえで、一夏さんは織斑姉妹をどうしたいですか？」

「どうしたいかと聞かれても困りますが、今日の授業を見る限り、暴走はしないでしよう。経過観察はもちろんしますが、ある程度の自由と、監視からの解放はしてほしいと思います」

「分かりました。私は一夏さんの意見を尊重します」

「もちろん、また何かした時はもつと重い処分を下すと言い含めておきますので、そういう問題を起こすことは無いと思いますよ」

そのように言い、一夏は真耶と紫陽花の顔を見た。二人とも納得はしていなさそうだったが、長い目で見る事には賛成のようだった。

「では、織斑姉妹には俺と碧さんから伝えておきますので、山田先生と五月七日先生はお疲れ様でした」

「はい、更識君も頑張ってくださいね」

真耶と紫陽花と別れ、一夏と碧は織斑姉妹がいる寮長室へと向かった。今の時間は、監視もついていないので抜け出そうと思えば簡単に抜け出せたのだが、織斑姉妹は大人しく部屋で正座していた。

「失礼しますよ」

「ああ、一夏か。何の用だ」

「分かっているのでしょうか？ 監視がついていないのに大人しくしてたのは、沙汰が下るのを理解していたからとしか考えられませんし」

「下手に暴れて、心証を悪くするのを避けただけだ」

素直じゃない姉妹の態度に、一夏はため息を覚えたが、ぐつとこらえて足の踏み場の無い寮長室へと入っていった。

「少しは掃除したらどうです？」

「無駄ですよ、碧さん。この人たちが掃除しようとしても、逆に散らかるだけだと先代の

楯無さんから聞きましたから」

それも原因で、一夏は織斑家から更識家へと移ったのだ。その事を思い出した織斑姉妹は、苦々し気な表情を浮かべた。

「さて、貴女方の処分ですが……とりあえずは監視を外しますし、ある程度の自由も認めます」

「それで？」

「もちろん、完全に自由というわけではありません。何か問題を起こせば、すぐにまた今の生活に戻ると覚悟してください。それから、一応俺と碧さんで気配を把握しておきますので、気配を消して移動する事は禁止です」

「その程度なら問題は無い。だが一夏、本当にそれだけでわたしたちを解放してくれるのか？」

千夏の言葉に、一夏は首を傾げた。

「解放？ 俺は貴女方を監禁した覚えはありませんよ。トイレや風呂、食事の際には自由を認めてましたし、授業にも参加させると言っていたはずですよ。それを勝手に引きこもったのはそちらが原因でしょうが」

「それは……確かにそうだが、四六時中監視されていると、一步も外に出たくなくなるものぞ」

「監視されるような事をしたからいけないんじゃないでしょうか。そもそも俺だって、貴女方が監視を怠った所為で数日間保健室に軟禁されたんです。それくらいは我慢してください」

一夏の切り返しに、千冬も千夏も反論の言葉を失ってしまった。一夏の言った通り、自分たちがオータムの監視を疎かにした所為で、一夏は怪我をし、自分たちは更識所属の面々からキツイ視線を向けられたのだ。

「亡国機業がいつ攻めてくるか分からない以上、貴女たちのような人でも戦力として計算しなければなりません。もちろん、指導者として、更なる戦力を鍛え上げるのも貴女たちの仕事ですからね。くれぐれもやり過ぎないようにお願いします」

「分かっているとは思いますが、やり過ぎた場合は今回のような処分で済まないと思っていてくださいね。いくら世界最強の姉妹とはいえ、許されない事はありますので」

最後に碧が釘を刺し、一夏と碧は小汚い寮長室から出て行つた。残された織斑姉妹は、解放された喜びと、次は無いという脅しの板挟みで、どのように反応して良いのか

に悩んだが、とりあえずは喜ぶべきだと思い互いに手を高く上げ、ハイタッチをして喜びを表現したのだった。

「とりあえず今日は飲むか」

「そうだな。羽目を外し過ぎない程度に飲むか」

冷蔵庫からビールの缶を取り出し、とりあえず解放された事で乾杯をし、一気に飲み干して喜びを噛みしめたのだった。

束の反省

織斑姉妹の監視をしなくてよいと一夏から告げられ、簪と美紀は首を傾げたくなくなった。二人からしてみても、まだしつかりと反省したとは言い難いということなのだろうと、一夏は苦笑いを浮かべながら追加事項を伝えた。

「完全に自由を約束したわけじゃないさ。俺と碧さんで気配を掴み監視する事になっただけだ。もちろん、気配を消して行動したりすれば、すぐに監視をつける事になっていく」

「そう言う事なんだ。てつきり一夏が温情で解放したのかと思った」

「そんな事するわけないだろ。俺は兎も角、刀奈さんまで危ない目に遭ったんだから、そう簡単に許せるわけもないだろ」

「私としては、一夏さんが危険な目に遭った方が看過できませんが、そう言う事なら納得しました」

美紀の答えに小さく頷き、一夏は簪に視線を向ける。視線を向けられた簪も、小さく頷いて同意を示したのだった。

「そう言えば、刀奈さんたちは何処に行ったんだ？ 生徒会の仕事は、今のところ忙しくなかったはずだが」

「お姉ちゃんたちはちよつと買い物に出かけたよ」

「買い物？ まあ敷地内にスーパーがあるわけだし、出かけても問題は無いが……」

殆どは教員の為にあるスーパーなので、学生が訪れる事はあまりないのだ。一夏も時間が出来た時だけ食材を買い求めに行くくらいで、普段から頻繁に通っているわけではない。そんな場所に刀奈たちが行っていると聞いて、一夏はちよつとだけ不思議に思ったのだ。

「まあ、何か必要になったから出かけてるんだろうし、あそこには刀奈さんが使つてふぎけられるようなものは置いてないからな」

「一夏、お姉ちゃんだっていつもふぎけてるわけじゃないよ」

「そうだけだな。ただ、刀奈さんが率先して動いてる時は、何か嫌な事が起こりそうだと思っただけだ」

苦笑いを浮かべながら、一夏は頭を掻いた。一夏も刀奈が悪だくみばかり企てているわけではないと言う事は理解している。だが、どうしても不安だけは拭い去れないの

だった。

「二夏さん、織斑姉妹が自由に行動できると言う事は、寮の規律も再び厳しくなると言う事ですか？」

「普通に戻るだけだと思うが。謹慎していた数日間が緩かっただけで、消灯時間を破ったらそれなりの処罰はあると思うぞ」

「そうなると本音とかが遊び倒してた時間まで遊んでたら怒られるね」

織斑姉妹が謹慎している間、本音はクラスメイトたちと消灯時間以降も遊んでいたのだった。もちろん、あまり遅い時間になると一夏が注意していたのだが、それでも織斑姉妹と比べれば易しいものだ。その事を本音に伝えておかなければと、簪は携帯メールで本音に織斑姉妹が復帰する事を伝えたのだった。

織斑姉妹同様、反省の為に研究室に籠っていた束は、久しぶりにクロエの前に顔を出した。食事などは部屋の前に置いておけば、いつの間にか無くなっていたし、研究室には簡易ではあるがトイレもシャワーもあるので、衛生面でも汚いと言う事は無く、実にいつも通りの束が姿を現したのだった。

「やつほー、くーちゃん。ここ数日会えなくてゴメンね〜」

「いえ、ですが何故研究室に籠っていたのでしょうか？ 何か新しい発明でもしていたのですか？」

「違う違う。ちーちゃんやなつちゃんだけ謹慎するのは不公平かな〜って思ってた。束さんも謹慎してたわけですよ」

「そうだったのですか。ですが、ここは束様のラボですし、監視も無い中謹慎しても、それで反省したと判断されるわけではなかったのではないでしょうか？」

一夏が監視してるわけでもないし、更識の人間が何かを言ってきたわけでもない。それなのに謹慎して、しかも束が常日頃研究に使っている部屋に籠っていても、反省しているのか研究しているのか確かめようもないのだ。

「まあまあ、一応形だけでも反省しておかないと、ちーちゃんとなつちちゃんに怒られちゃうし、それに束さんの所為でいっくんが危ない目に遭つたのも事実だからね。これからは本腰を入れて、亡国なんちゃらをぶつ潰す研究をしなきゃいけないから、またしばらく引きこもるかもしれないからね」

「なんちゃらつて……亡国機業ですよ、束様」

「そうそう、そのなんちゃら企業」

「わざとやってますね？」

クロエのツツコミに満足したのか、束は表情を引き締めてクロエに向き直った。

「今回の一件で、束さんの愚妹たる箒ちゃんが亡国機業に加担している事が確定したからね。身内の恥を晒す前に、束さんの手で箒ちゃんを亡き者に……」

「物騒過ぎませんか!?　せめて捕まえて事情を聞くとか」

「どうせ何でもかんでも人の所為にして、自分の能力を正確に把握してなかった事を敵に付け込まれて、良いように騙されてただけでしょ。そんなおバカさんを相手にするほど、束さんの心は広くないのだよ」

「ですが、一夏さんの判断を仰がずに処分してしまつては、後々しこりを残す可能性も」

クロエの心配事を聞き、束も少し考えてしまつた。一夏にとつて箒とは、ストーカー気質のある昔馴染みでしかない。だが更識企業にとつては、当主様を傷つけた一味なのだから、そつちで処分する可能性もある。束は少し考えてから、悩んでいた表情を一変させ部屋に向かった。

「箒ちゃんの事で頭を悩ませるのは、捕まえてからでいいや」

そう言つてクロエに片手を挙げ、再び研究室へと籠つてしまつた束を、クロエはポカんと口を開けて見送つた。血の繋がつた相手が誰なのか分からないクロエにとつて、血縁とはその程度のものなのかと思わせる瞬間だつたのだ。

職員室での会話

ある程度自由に行動できるようになったとはいえ、織斑姉妹は自分たちの失敗を反省し、なるべく寮長室から出ずに生活する事にしていた。もちろん、寮内の見回りや、授業への参加はしっかりとしており、寮内の規律も、しっかりと保たれるようになっていた。

「千冬先生、日本政府から亡国機業に関する情報が欲しいと連絡が来ていますが」

「無視しておけ。こんな時だけIS学園を頼るような政府は、どうせろくな対応が出来ないに違いないんだから」

「ですが、情報を共有しておかなければ、いざという時に連携が取れないと思うのですが……」

「その必要はありませんよ、山田先生。更識企業の方から政府へ、必要最低限の情報を流していますから」

千冬の答えに食い下がった真耶の背後から、男子生徒の声が掛けられる。振り返るとそこには、大量に書類を抱えた一夏の姿があった。

「更識、何か用か」

「貴女方が謹慎していた間に溜まっていた書類です。こちらで一応目は通しておきましたので、後は先生方のハンコが必要なだけです。お願いします」

「ああ、すまなかつたな。ところで、日本政府に情報を流して、何か得でもあるのか？」
「日本政府内にスパイがいれば、すぐにこちらにも分かるように仕向けてありますので」

黒い事をあつさりと言い放つ弟に、千冬はため息を堪えられなかつた。

「一夏、暗部組織の次期当主だから仕方ないが、もう少し高校生らしい感性を身につけたらどうだ？ 普通の高校生は、そこまで黒い事を考えられないと思うのだが」

「生まれから普通ではないので仕方ないと思いますよ。何せ、身内が貴女方なのですから」

世界を大きく変える事件に関わっていた身として、千冬は一夏の皮肉を受け流すことが出来なかつた。そこへ見回りに出ていた千夏が戻ってきて、一夏と千冬の会話に加わってきたのだ。

「何の話だ」

「一夏の考えをどうにか改められないかと思つてな」

「一夏の考え？ 何かあったのか？」

千冬は、一夏が日本政府内に亡国機業とつながりがある人物がいるかどうかを、情報を流す事で調べている事を伝えた。

「一夏、さすがに日本政府にスパイを送り込むような組織ならば、それくらいで尻尾を出すとは思えないのだが」

「そんなことは知ってますよ。ですが、何回も繰り返し返せば、いずれ何らかのアクションを起こすでしょうから、そこを叩けばいい。こつちは大した情報は流してないので、アクションが起きなくとも何ら問題は無い訳ですから」

「……やはりお前は暗部組織に染まり過ぎていて。もう少し普通の感性を身につけるべきだ。そうだ、もうすぐでお前の誕生日だろ。ここは盛大に祝って盛り上がりようではないか」

「刀奈さんたちが何か計画しているようですが、俺自身はあまり興味はありませんね。生まれた日と言うだけで別に特別な何かがあるわけじゃないんですし」

「お前は本当にズレているな……普通の男子だったら、好意を寄せている相手に祝ってもらえれば嬉しいと思うものだぞ」

千冬の指摘に、一夏は思わず首を傾げてしまった。自分が刀奈たちに好意を寄せているのは自覚しているが、それが家族としてなのか、それとも異性としてなのかは、まだ実感が持っていないのだ。

「普通はそういうものなのですか？」

「だと思うぞ。真耶、お前ならどうだ？ 好意を寄せている異性から誕生日を祝われたらどう思う？」

「えっ……そういつた経験が無いのでよくわかりませんが、たぶん嬉しいと思います」

ちらちらと一夏に視線を送る真耶だったが、織斑姉妹に睨まれて視線を前に固定して答えた。その答えを聞いた一夏は、腕を組み少し考え込んでしまった。

「……ちよつと考えてみます。それじゃあ、この書類の確認、お願いしますね。期限まで余裕はありますが、あまり溜め込まないようにしてくださいよ」

「ああ待て一夏。日本政府への回答は、更識に任せて良いんだな？」

「I S学園宛に來たのなら、I S学園名義で返答した方が良いでしょうが、まあこちらに任せてもらって構いませんよ。万が一そちらに任せて、余計なことまで報告されたら面倒ですから」

「お前は……もう少し我々を信用してくれてもいいのではないか？ 人間は失敗して成

長するのだから」

「失敗続きの貴女方を、誰が信用出来るか教えてもらいたいものです。前の一件だつて、刀奈さんたちはまだ許してないんですよ？」

一夏の言葉に、千冬と千夏はそろつて居心地の悪さを覚えた。それだけ一夏の視線が鋭く、また余計な事を行つてしまったのではないかという後悔が襲つてきたのだつた。

「信用されたいのなら、まずは結果を残し続ける事ですね。更識所屬以外の専用機持ちも、放課後は特訓をしているようですし、そちらの指導をしてみてもどうでしょう？ ラウラ辺りは喜ぶと思いますよ」

「ボーデヴィツヒはそうだろうが、オルコットや嵐には嫌がられそうだ」

「自覚があるのでしたら、指導方法を見直すことをお勧めしますよ」

苦笑いを浮かべながらそう告げて、一夏は職員室から去つていった。残された織斑姉妹と真耶は、別の意味で居心地の悪さを感じてた。真耶はこの後織斑姉妹が暴走しないかと心配で、織斑姉妹は最後の一夏の言葉を受け、自分たちの行動を反省して。

「真耶、お前ちよつと相手してくれるか？」

「な、何のですか？」

「ISの指導のシミュレーションに」

「それは構いませんが、まずは書類に目を通すべきでは」

「それは後で寮長室で片づけるから問題ない。今は指導方法の見直しが先だ」

織斑姉妹に両腕を掴まれ、アリーナまで引き摺られる真耶。その姿を、職員室に戻ってきた碧と紫陽花は、首を傾げながら見送ったのだった。

誕生日前日

いよいよ明日に控えた一夏の誕生日に備え、刀奈たちは必要なものを揃え、最終確認をしていた。

「それじゃあ、簪ちゃんが本音の着ぐるみパジャマでいいのね？」

「そっちの衣装を着るくらいなら、本音のパジャマの方が良い」

「じゃあかんちゃんも犬ね。私はいつも通り猫の着ぐるみパジャマを着るから」

「あれって猫だったんだ……」

普段から見ているが、簪はあれが何の動物だか理解していなかった。

「虚ちゃんがスーツ、美紀ちゃんがナース服で、碧さんがバニーガールね」

「それで、お姉ちゃんは何の恰好をするの？」

「ん？ ネコミミスーツがあったから、私はこれでいいかなーって」

「一夏さん、気絶したりしないでしょうか」

あまり異性に耐性のない一夏は、普段と違う恰好をした刀奈たちでも避けるのではな

いかと美紀は心配していた。実際ISの実習のスーツ姿でさえ、少し距離を取るくらいなのだ。

「大丈夫よ。一夏君もいつまでもこのままでいいとは思ってないはずだから」

「そうかもしれないけど、距離を詰めるのは一夏のタイミングじゃないの？ こっちら一氣に詰めようとして、余計に開いたら大変だと思うけど」

「それは……まあ、大丈夫だと思うわよ。最終的に冗談って言えば、一夏君は許してくれると思うし」

「それはちよつと樂觀視し過ぎだと思いますが。一夏さんだって、冗談で済ませるものと済ませないものがありますし、お嬢様の冗談は度が過ぎていると思います」

「そうかな？ でも、何時までも一夏君が女性に抵抗を持ったままじゃ、私たちだって困るじゃない？ 結婚出来ても子供が出来ないなんてことじゃ、更識家としても問題だし」

更識家当家として、子をなさないのは問題だと刀奈は考えていた。それはその通りなのだが、表現が直接的過ぎて、本音以外は顔を真っ赤にしていた。

「お姉ちゃん、表現が直接的過ぎ。もう少し考えてものを言つてよね」

「そうかしら？ 簪ちゃんだって、一夏君に抱かれる想像をしたことくらいあるでしょ

「？」

「それは……って、そう言う事じゃなくて！」

簪も年頃の少女なので、それくらいの妄想はしたことがあった。だが今はそう言う事を言っているのではないと思ひ直し、刀奈に詰め寄る。

「お姉ちゃんは今もう少し、オブラートに包んだものの言い方を勉強して！ 一夏じゃないけど、そういう話が苦手な人だっているんだから」

「そんな事言われても……十分包んでるつもりなんだから」

「なら、もう一重くらい包む気持ちで話して。お姉ちゃんのおブラートは、私たちが思っているのより薄いみたいだから」

「分かったわよ……それと、当日はマドカちゃんに時間稼ぎをしてもらうから、マドカちゃんのコスプレは無しになったから」

「今もマドカが時間を稼いでるんだし、それはまあ仕方ないよね」

本当は自分が時間稼ぎを担当したかった簪だったが、マドカより自然に一夏の側にいられる自信が無かったので、結局は本音の着ぐるみパジャマを着る事になったのだ。当日、顔が赤くならなければいいなと思いつつ、簪は本音から受け取った着ぐるみパジャ

マを眺めたのだった。

最終確認が行われてる一夏の部屋に、一夏を近づけないために、マドカはアリーナで一夏にISの稽古とつけてもらっていた。

「まだスピードを生かしきれしていないぞ。瞬間加速して、敵との距離を詰めてから零落
白夜を放たなければ、SEを無駄に消費してしまう」

「はい」

自分を部屋に近づけたくない理由があると、感付いてはいる一夏だが、せつかくマド
カがやる気になっていいるのだから素直に稽古に付き合っていた。そこに静寐たちも加
わり、一夏は合計で四人の指導をすることになったのだった。

「やっぱり一夏君に指導してもらえるとそうじゃないとは、特訓の進み具合が違う
わね」

「そうか？ 俺がしてるのはあくまでも指摘だけだから、いてもいなくても変わらない
と思うが」

「そんな事ないですよ。一夏さんがいてくれれば、自分の動きのどこがダメなのか的確
に分かりますから。それに、専用機を造ってくれた家の人ですから、少しでも調子が
悪ければすぐに見つけてくれますし、メンテナンスもお願いできますから助かってま
す」

「専用機の調子が悪かったら、多分本人が申し出ると思うが、それ以前に見つけて整備し
た方が簡単だからな。特に久延毘古は未来予知という常識外れの特性を有しているか

ら、少しでも不具合があると大変だからな。定期メンテナンスは必要不可欠だ」

「静寐の鶺鴒、香澄の久延昆虫、そして私のスサノオは一夏君しか整備出来ないからな。本格的に整備が必要になっちゃうと、当分は使えなくなっちゃうし」

エイミイが笑顔で会話に加わってくると、一夏も苦笑いを浮かべてそれに答えた。

「IS学園で整備するには限界があるからな。更識本家に持って行って整備しないと、本格的なメンテナンスは出来ないからな。定期的に見て、必要とあらば更識に持って行って整備する感じだからな、三人の専用機は」

「私の白式は、束様がメンテナンスしてくださいますから、ラボに足を運ばなければならぬのですけどね」

「マドカだけが、束さんの現在地を知ってるからな。万が一聞かれても、誰にも教えるんじゃないぞ」

「分かっていますよ、兄さま。そもそも、聞かれたところで言葉に出来るほど器用じゃありませんので。白式のセンサーに従って束様のラボに向かっただけで、そのセンサーを見るまで場所は分かりませんので」

マドカの答えに苦笑いを浮かべ、一夏は指導を再開するのだった。今日はアリーナを

最終まで使えるとあって、一夏の指導にも気合いが入っているとマドカは思っていたのだが、いざ指導が始まると、そんなことを考えている余裕が無いくらい、一夏の指導は厳しかったのだった。

外出先で

目が覚めていきなり、一夏は不自然さを感じ取った。普段ならまだ寝ているはずの美紀が起きていて、部屋にはマドカが遊びに来ていたのだ。

「早いな……」

「兄さま、ちよつとお願ひしたいことがあつてこのような時間に訪問させていただきました」

「お願ひしたい事？」

普段マドカは甘えたいと思つていても遠慮するタイプの子なので、このようにはつきりと願ひがあると言つてきた事に一夏は面食らつていた。

「せつかくの休日ですし、何処かお出かけしたいなと思ひまして」

「別に構わないぞ。マドカに頼む仕事は無いし、本音あたりとゆつくり——」

「いえ、兄さまとご一緒したいと思つてまして……」

「俺と？」

その事が余程意外だったのだろう。一夏は珍しく驚いた表情を浮かべていた。もし計画が何もなければ、美紀も意外感を抱いたかもしれないが、これは前もって刀奈から聞かされていた作戦だと理解しているので、マドカの申し出に意外感を抱くことなく二人の会話を聞いていた。

「駄目でしようか……」

「別に駄目というわけではないが……」

一夏は頭の中にスケジュール表を広げ、今日の仕事内容を確認し始める。差し迫った案件は無いが、この状況で自分がIS学園から離れるのは得策ではないという考えが一夏にはあった。

「一夏さん、たまには妹サービスでもしてあげたらどうですか？」

断る方向に考えが傾いていた一夏に、美紀からマドカへの援護射撃が放たれる。美紀としても、このまま一夏が断ってしまうと都合が悪いからで、本音を言えば、マドカだけズルいと言いたい気分だったが。

「妹サービスねえ……まあ確かに、再会してからろくに相手してやれなかったし、たまにはいいのかもしれないが」

「本当ですか!？」

「あ、ああ……そうするか」

あまりにも嬉しそうな表情を見せた妹に、一夏も断るといふ選択肢を選ぶことが出来なくなってしまうた。こうして刀奈の計画通り、一夏をIS学園から外出させることに成功したのだった。

一夏がマドカと外出している間、刀奈と本音はケーキの準備、簪と美紀と虚で部屋の飾りつけを始めたのだが、意外にも大変な準備に、計画していた時間より長引いてしまったのだった。

「誕生日の飾り付けって、こんなに大変でしたっけ？」

「この格好が原因だと思いますが……」

「文句言わないで手を動かしてよね。こっちだって一生懸命作ってるんだから」

簪と虚が、自分の格好を見てため息を吐くと、キッチンから刀奈の声が飛んできた。別に今からコスプレしなくてもいいのだが、一夏を前にして羞恥心を抱かない為に慣れるべきだと刀奈が言ったため、準備段階からコスプレ姿でいるのだった。

「虚さんと簪ちゃんはまだいいですよ……私なんて、今すぐ逃げ出したい気分です」

スーツ姿の虚と、着ぐるみパジャマ姿の簪を見て、美紀が泣きそうな声でそう呟いた。ノリノリでネコミミスーツを着こなしている刀奈とは対照的に、ナース服姿で作業して

いる美紀のテンションは、未だかつてないくらい低かったのだ。

「碧さんは教師としての仕事が終わってから合流するって言ってたし、そうすれば碧さんもコスプレ姿になるから平気よ」

「ですが、碧さんはその……大きいですし」

「美紀ちゃんだって小さくないでしょ?」

話が脱線しかかったので、真面目な虚が二人にツツコミを入れ作業を再開させる。本音を言えば虚も碧のコスプレ姿は見たくないのだが、そんなことを言って今更別の案を出せる訳でもないのだ。

「碧さんのコスプレは、目立ちますからね……」

「虚さん、その気持ち分かります……お姉ちゃんも目立ってますもんね」

慎ましやかな胸を持つ簪と虚は、コスプレ姿で余計に目立つ刀奈の胸に視線を向け、そろってため息を吐いたのだった。

一夏と一緒に出掛けられたことで舞い上がったマドカは、本来の目的である時間稼ぎをすっかり忘れ一夏との時間を過ごしていた。

「マドカと二人きりで出かけるのは初めてか？」

「そうですね。兄さまは普段ずっと研究室に籠ってるイメージですし、私と再会してまだ一年も経ってませんからね」

「そんなに引き籠もってるつもりは無いんだが……ん？ あれは」

「どうかしました？」

兄の視線を辿ると、そこには赤髪の兄妹と思われる男女がいた。そして妹の方に、マドカは見覚えがあった。

「あれは、兄さまが文化祭に招待した女子ですね」

「ああ、あいつらも兄妹で出かけてるのか」

一夏の視線に気づいた兄の方が、手を上げて一夏に声を掛けた。それがきつかけで妹の方も一夏の存在に気付いたのだった。

「よう一夏、何してるんだ？」

「多分お前と同じ」

「俺と同じって……妹に荷物持ち——」

「お兄！」

余計な事を言おうとした弾の脛を、蘭が蹴り抜いた。悶絶して崩れ落ちた弾を他所に、蘭がおしとやかな雰囲気纏って一夏に声を掛ける。

「一夏さん、文化祭の件はありがとうございました」

「いや、こちらこそ変な事件に巻き込んでしまって申し訳ない」

「あれは一夏さんが悪い訳ではないですよ。その……何とか機業が悪いんです」
「亡国機業な。不審者の侵入を許してしまったのは、こちらの落ち度だからな。そこは申し訳ないと言わせてくれ」

一夏の謝罪を、蘭は素直に受け入れ——そこで一夏の隣にいたマドカに気付いたのだった。

「一夏さん、こちらは？」

「兄さまの妹の織斑マドカです」

「妹……一夏さん、妹がいたんですね」

敵愾心剥き出しのマドカの視線を受け、蘭もマドカに敵対の意思を見せる。そんな二人のやり取りを、一夏は呆れながら眺めていたのだった。

兄妹の時間

蘭とにらみ合うマドカを、弾は物珍しそうに眺めていた。

「お前の血縁と言う事は、千冬さんや千夏さんの妹でもあるのか」

「お前、姉に会った事あったか？」

「おいおい。いくらISに縁が無い俺でも、最強の双子の事は知ってるさ。てか、日本人なら全員知ってると思うぜ」

「そんなに有名だったのか」

一夏からしてみれば、手のかかる姉で後輩に仕事を押し付ける教師という印象しかないのだが、世間での織斑千冬・千夏の知名度は弾が言うようになりかなり高いものだ。だから千冬と千夏に顔がそっくりのマドカは、結構目立つのだった。

「兄さま、人が集まり始めていますので、移動しましょう」

「そうだな。弾、蘭もまた」

「おう」

「あの一夏さん……ご一緒してもよろしいでしょうか？」

迷惑を掛けないように別行動をしようと考えていた一夏だったが、蘭がそれに納得できないように提案してきた。

「一緒に行動しても、俺たちは昼前には学園に帰るつもりなんだが」

「それまでで結構です。てか、家に来てください。お母さんも会いたがってましたし」

「はっ？ そんなこと——いつてっ!？」

「お兄は黙ってて!」

脛を蹴り上げられ、再び悶絶する弾を、一夏・マドカ兄妹は呆然と見詰めた。見られていると気づいた蘭は、愛想笑いを浮かべ再度一夏を自宅へと招待する。見られ

「駄目ですか?」

「少しだけなら大丈夫だろ。マドカもそれでいいか?」

「兄さまがそれでいいのでしたら、私はそれに従います」

「なんか、お前の妹って固い喋りだな」

「家庭の事情だ」

「ああ、お前は色々あったもんな」

鈴から一夏の過去の一部を聞かされている弾は、それだけで一夏とマドカの関係を詮索しようとは思わなかったのだった。

「ところで一夏さん、今日誕生日ですよね？」

「あ？ ああ、そう言えばそんな日だったな」

「っ！」

蘭がその話題を一夏に振ると、その隣でマドカが忌々しげに蘭を睨みつけた。睨まれた蘭は、何故マドカが睨んでくるのかが分からず、とりあえず睨み返したのだった。

準備もほぼ完璧になった頃、仕事を終えた碧が部屋へ入ってきた。そしてコスプレ姿の刀奈たちを見て、頭を押さえたのだった。

「何で準備段階でコスプレしてるんですか……」

「本番前にして、緊張しない為です」

「一夏さんに見せるってだけで緊張すると思うのですが」

「……まあ、お嬢様の考える事ですから」

碧の疑問は、虚も簪も当然の如く刀奈にぶつけたものだった。だが頑なに考えを変えなかつたので、準備段階からコスプレをする羽目になっているのだ。

「虚ちゃんのそれはコスプレなの？ 就活中の女生徒とあまり変わらない気もするんだけど……それに虚ちゃんが一夏さんに同行して他社との会合の時は、スーツ着てなかつたっけ？」

「仕事中と普段とでは、やっぱり気分が違いますよ……」

「じゃあメイド服が良い？ 虚ちゃんもメイドさんだから、そっちの方が良いでしょ？」
「あんなフリフリ、私には似合いませんよ！」

衣装ケースからメイド服を手にとって近づいてくる刀奈に、虚は拒絶反応を見せた。メイドと言つても、更識家の従者には決まった衣装は無く、各々が動きやすい恰好で作業する事になっている。だから本音は作業中も着ぐるみパジャマのままの時が多々あるのだ。

「一夏君も可愛いって言ってくれると思うんだけどなー」

「っ!? ……いえ、そんなウソに騙されませんからね」

「簪ちゃんはどう思う？」

「お姉ちゃん、さつきから本音が生クリームをつまみ食いしてるんだけど」

「ほえっ!? バレちゃった」

「ちよつと本音！ さすがに食べ過ぎよ!?!」

必要最低限は何か残っていたが、本音が食べた量は明らかに残ってる分より多かった。仕上げ用に使う生クリームが減ってしまったので、刀奈は思い描いていたケーキの

完成図を大幅に変更するしかなかったのだった。

結局五反田家に寄ることなくIS学園に戻ってきた一夏とマドカは、微妙に距離を取って歩いていた。出かける時は密着ともいえるほどくっついてたマドカだったが、今

は二歩三歩後ろを歩いている。

「マドカ、さつきからどうした？」

「いえ、何でもありません。ちよつと自己嫌悪中です」

「……最初から知ってたぞ。マドカが時間稼ぎの為に俺を部屋から遠ざけてたのは」

一夏のその一言に、マドカは弾かれたように一夏との距離を詰めた。

「な、なにを言ってるんですか！ 私はただ、兄さまと一緒に出掛けたかっただけで

……」

「そうだろうな。だが、刀奈さんに頼まれたのも確かだろ？」

「それは……」

「大丈夫だ。ちゃんと忘れてた体で部屋に戻るから」

しょんぼりしていたマドカの頭を撫で、一夏は兄の顔でマドカを見つめる。この表情だけは、刀奈も虚も、本音も簪も美紀も見られない、マドカだけの特権だった。

「ありがとうございます、兄さま。私の所為で兄さまのご友人が大変な目に遭ってしまつたのは、反省します」

「ああ、あれは何時も通りだから気にしなくていいぞ」

弾が蘭に蹴り飛ばされ、八つ当たりされるのは割と何時も通りの事だと、一夏の中で認識されている。マドカが何を気にしていたのか納得がいった一夏は、もう一度マドカの頭を優しく撫で、部屋に戻ってもいいのかマドカに確認する。

「それで、時間稼ぎはもういいのか？」

「指定された時間は過ぎていきますし、おそらくは大丈夫かと思えます」

「そうか。じゃあ、一緒に戻るか」

差し出された手の意味を、数秒考えてから理解したマドカは、今日一番の笑顔を浮かべて一夏と手を繋いで部屋まで戻ったのだった。

女性恐怖症の原因

部屋に戻ってきた一夏を、刀奈たちは盛大に出迎えた。さすがに抱き着くのは我慢したが、それでも腕を引つ張つて部屋に引つ張り込むあたり、少し興奮気味だったのだろう。

「お帰りなさい、一夏君。そして、誕生日おめでとうー!」

「いっちーおめでと〜!」

刀奈と本音がクラッカーを鳴らすと、それに続くように美紀と簪と虚もクラッカーを鳴らした。

「おめでと〜、一夏」

「「おめでと〜ございます、一夏さん」」

二人ほどではないが、簪と美紀と虚もそれなりに興奮しているようだった。もしくは、自分の今の格好を気にしないように、無理にテンションを上げているのかもしれない。一夏は全員の格好を見て、そんなことを考えていた。

「ホント、先代はこの衣装をどうするつもりだったんでしょうね」
「碧さん……その衣装、先代の楯無さんのものだったんですか？」

何かするというのは知っていた一夏だったが、それがコスプレで、その衣装の出どころが刀奈と簪の父親で、義父の先代楯無の物だったというのは初耳だった。

「お父さんの部屋を整理したら出てきたんだって、尊さんが言ってたのよね」

「……ところで、その恰好は恥ずかしくないんですか？　とりあえず、見てる俺は相当恥ずかしいんですが」

「ちよつとサイズが小さいかなーとは思うけど、可愛いでしょ？」

胸のあたりを見ながらそう言った刀奈に、簪と虚が鋭い視線を向ける。だが刀奈は構いなしに、一夏にすり寄って感想を求めた。

「そんな恰好しなくても、刀奈さんは普段から可愛いですよ。もちろん、簪や虚さんも本音や美紀もマドカも、ちゃんと可愛いと思ってます」

「一夏さん、何故私の名前だけ出ないのでしょうか？」

「碧さんは、可愛いというより綺麗ですからね」

真顔でそんなことを言う一夏に対し、可愛いと言われた六人は顔を真っ赤に染め上げ、碧は頬を緩めご満悦のようだった。

「二夏君、たまにそんな事言うなんてズルいわよ！　もしかしてこれも計算なのかしら？」

「計算って何ですか？　俺はただ、普段から思ってる事を——」

「だから、そうやってたまに褒められると、こっちはかなり嬉しいのよ！　照れちゃつて恥ずかしいの！」

「そんなものなんですか？　でもまあ、皆さん可愛いと思ってますし、特に簪なんかは珍しい服着てて、良いと思うぞ。美紀や碧さんの衣装は、ちよつと現実的ではないですが可愛いと思いますし、虚さんのスーツ姿も、日常空間で見ると新鮮だなと思いますよ」

「私は？」

「ちやんと可愛いですよ」

素面のように思えた一夏だったが、よくよく見ると頬を若干赤らめている。いくら興味が薄いとはいえ一夏も男子だ。これだけの美少女（美女）がコスプレ姿で迫ってきて、無反応でいるほど枯れていないし朴念仁でもないのだ。

「あれ？　ひよつとして一夏君、照れてるの？」

「て、照れてません」

「ほんとう？」

そう言つて刀奈は、一夏との距離を完全に詰め、より強調されている胸の谷間に、一夏の腕を押し当てた。

「な、なにやつてるんですか!？」

「せつかくの誕生日だし、これくらいサービスのしなきゃ。なんなら、直接触つてもいいのよ?」

「黙れ、この痴女!」

「ひゃん!? 痛いじゃないの、簪ちゃんに虚ちゃん」

暴走しかけた——というか、完全に暴走した刀奈に、簪と虚がツツコミを入れる。その隙に一夏は、刀奈から離れ美紀と碧の背後に隠れた。

「大丈夫ですか?」

「あ、ああ……大丈夫だと思う」

「ちよつと退行してませんか?」

「いや……平気です」

美紀と碧の問いかけに、辛うじて平静を装って答える一夏。だが内心は、恐怖症が発動しないかびくびくしていたのだった。刀奈相手に発動するようでは、今後生活していくのにも弊害が生じてしまうので、何とか堪えられると自分に言い聞かせているのだ。

「お姉ちゃん、さすがにやり過ぎ！」 距離を詰めるにしたって、もう少しゆつくりじゃないと一夏は無理なんだからね！」

「うん……ゴメンね、一夏君」

簪に怒られ、素直に頭を下げる刀奈。その姿を見て、一夏も美紀と碧の背後から移動し、刀奈に頭を下げた。

「俺の方こそ、過敏に反応してしまっ……刀奈さんも俺の事を考えてくれてるのに、すみませんでした」

「いっちゃんにいろいろしてもらいたいの、刀奈様だけじゃないんだけどね。私だっ……てそうだし、かんちゃんや美紀ちゃん、おねくちゃんに碧さんだっ……て、いっちゃんに愛してもらいたって思ってるんだよ。マドマドの感情は、ちよつと私たちとは違うけど、それでもちゃんといっちゃんの事を想ってるんだよ」

「分かつてはいるんだが……幼少期に植え付けられたトラウマというのは、なかなか克

服出来ないんだよな……記憶は無いが、なんとなく嫌だつて気持ちがあるんだよ……」
「姉さまに確認したのですが、視線を逸らされてしまつて何も分かりませんでした」

実は一夏の女性恐怖症は、誘拐だけが原因ではなく、それ以前に受けた千冬と千夏から——たまに束も——受けたセクハラが原因なのだ。その事は一夏も覚えてないし、当時その三人の行為を見ていた箒も、記憶の奥底に封印して覚えていなかったのも、二人とも誘拐が原因だと思っているのだった。

マドカのセリフを受け、一夏以外の全員は「またあの姉妹が原因か……」と嘆き、何とかして一夏の心の傷を癒そうと心に誓ったのだった。

盛り上がる誕生会

ある程度盛り上がったところで、虚がケーキを運んできた。自分の格好はこの際気にしない事にしたのか、虚の表情はいつも通り冷静に見えた。

「さあさあ一夏君。私と本音が作ったケーキを召し上がれ！」

「いっちょー、結構上手に出来たんだよ」

刀奈と本音の視線を浴びながら、一夏はゆっくりとケーキを口に運び、そして小さく頷いた。

「美味しいですよ」

「やった！一夏君に褒められた」

「えへへ、もつと食べてもいいんだよ？」

「いや、みんなも食べるでしょうし、俺はもう結構ですよ」

「あれ？一口でお仕舞なの？」

何か失敗したのかと不安がる刀奈と本音に、一夏は笑顔で首を振った。

「ちゃんと出来てますし、店で売っててもおかしくないと思います。でも、ちよつと俺には甘すぎますね」

「しまった!?! 私たち基準でクリームを作ったから、一夏君には甘かったんだ……」
「お姉ちゃん……やっぱり肝心なところでミスしてる」

簪の冷たいツツコミに、刀奈は今にも泣きそうな顔で膝から崩れ、そしてそのまま蹲ってしまう。慌てふためく簪たちを他所に、一夏はゆっくりと刀奈に近づき、そつとケーキを彼女の口に運んだ——自分が使ったフォークで。

「……美味しい」

「だから言ったじゃないですか。ちゃんと出来てるって。俺は気持ちだけで十分ですから、残りはみなさんで美味しく食べてください」

「お姉ちゃん、どさくさ紛れで一夏と間接キスするなんてズルい!」

「間接キス? ……って、さっきのフォークって一夏君のだったの?」

「何か問題でもありました?」

意外とそう言うことに無頓着な一夏は、何か悪い事でもしたのかと首を傾げる。その仕草を見て、年上組の三人は母性をくすぐられた。

「問題は無いけど、一夏君だって私が使った後に一夏君の口に入れたら恥ずかしいでしよう。」

「そんな事ないですけど」

そう言つて一夏は、せめてもう一口と覚悟を決めて、刀奈が口にしたフォークでケーキを食べる。直接キスは気にするが、間接キスは気にならないようだ、この日全員の心に書き記されたのだった。

「……さつきより甘い気がしますね」

「多分、刀奈ちゃん唾液が混じってるからだと思うわよ」

「碧さん……さすが大人ですね」

照れもせず、表情も変えずに告げる碧に、聞いただけの虚が顔を赤らめて賛辞を贈る。一方、唾液が混じつてると言われた刀奈は、顔を真っ赤にして一夏のベッドに潜り込んで悶絶していた。

「抜け目ないのか、それとも自業自得なのか……」

「多分両方だと思ふよ……」

悶絶する刀奈に冷ややかな視線を送る簪に、美紀がそうツツコミを入れた。恐らく刀奈は、一夏のベッドを堪能することなく悶絶しているだろうと、簪も美紀もそう思っていたのだった。

「兄さま、私も兄さまに食べさせてもらいたいです」

「ああ、構わないぞ」

刀奈に気を取られている内に、妹の特権を利用してマドカも一夏にケーキを食べさせてもらっていた。さすがに倫理観が働いたのか、マドカは自分のフォークを差し出し、一夏も素直にそのフォークでマドカの口にケーキを運んだ。

「美味しいです！ 刀奈さんと本音は料理が上手で羨ましいです」

「マドマドは苦手なの？」

「私は、兄さまに似ず姉さま方に似てしまったので……」

「大丈夫だよ。ウチのおねくちゃんも料理下手だから」

「それはどんなフォロー何ですかね？」

ゆらりと、陰が揺れた幻覚を見た本音は、ゆつくりと背後を振り返る。そこには怒りに表情を歪めた虚が、仁王立ちしていた。

「まあまあおねくちゃん。おねくちゃんが料理苦手なのは事実なんだから、そんなに怒らなくても……」

「さつきは下手と言ってますでしたか？」

「そ、そんな事言つてないよ〜？」

「嘘おっしやい！」

虚のカミナリが本音に落ちると、本音の隣にいたマドカまで背筋をピンと伸ばした。その姿が可笑しかったのか、碧は微笑みを浮かべてケーキを口に運んだ。

「何だか楽しいわね、こういうの」

「えっ？ その恰好がですか？」

「違うわよ。一夏さんだつて分かつてるでしょう？」

「まあ、最近はずつと張り詰めてましたからね。息抜きは大事だと思いますよ」

漸く悶絶から復帰した刀奈が、難しい顔で一夏と碧の会話に加わってくる。若干頬が赤いのは、さつきまで自分が一夏が普段使っているベッドに潜っていたと自覚したからだろう。

「イベントを提案しておいてなんだけど、こんな状況で騒いでて良かったのかしら？」

「今更ですね。騒がしいのはいつも通りですし、張り詰めてはいませんが気は抜いていませんので、刀奈さんたちは存分に楽しんでいいんですよ」

「でも、一夏君の誕生日だし、一夏君が楽しまないと意味がないと思うのよね」

「楽しんでますし、俺の誕生日を使って皆さんが楽しそうにしてるのを見てるだけで、俺は十分ですけどね」

「一夏、なんだかお父さんみたいなこと言ってる」

「そうか？ てか簪、口の端にクリームが付いてるぞ」

簪の口の周りに付いたクリームを指ですくい、そのままなめとる一夏。その行為に簪の顔がみるみる赤く染まっていく。

「何だ、どうした？」

「一夏君って、そういうところ抜けてるわよね」

「意外な発見ですよね」

「何だって言うんですか……」

自分がしたことが恥ずかしい事だという自覚がない一夏の隣で、刀奈と碧がしみじみと呟く、そして簪は我慢の限界が訪れたのか、先ほどの刀奈と同じく一夏のベッドに潜

り込み、顔の赤みが引くまで悶絶するのだった。

狂気の箒

IS学園で一夏の誕生日パーティーが盛り上がりつつある頃、亡国機業の箒の部屋でも一夏のお祝いが行われていた。お祝いと言っても、何時も通り感謝の押し売りのような感じなのだ。

「一夏、お前の誕生日だな、今日は。まったく、お前は自分の誕生日に無頓着だったから、私がお祝いしてやらないと無駄に歳をとるだけだからな」

画像検索してプリントアウトした一夏の写真に話しかける箒。こんな姿を誰かに見られたら、彼女の事だから恥ずかしさのあまり襲いかかるかもしれない。幸か不幸か、彼女の部屋を訪れる物好きは、亡国機業にもそうそういなかった。

「お前は甘いものが苦手だから、今年はビターチョコのケーキを用意した。これならお前も食べられるだろ？ 何？ 食べさせてほしいだと？ お前は相変わらず私には甘えん坊だな」

多分に妄想が入っている箒の設定では、一夏が箒に甘えてくるようだ。そんな見えな

「い一夏にケーキをすくい、そつとケーキを口に運ぶ。」

「美味いか? そうか、ならもつと食え。遠慮はいらないからな」

「SH、ちよつといいかしら……何やってるの?」

妄想を楽しんでいた箒の下に、直属の上司であるスコールが訪れてきた。箒は自分の行動を見られた恥ずかしさから、立てかけてあった鉄パイプを手に取ったが、相手がスコールだと言う事を思い出しそれを元に戻した。

「何の用だ」

「ちよつとした連絡よ。それよりも、何故一夏の写真の前にケーキが置いてあるのかしら?」

「今日がヤツの誕生日だからだ。私が祝ってやらないと、あいつは自分が歳をとった事すら気付かないからな」

「そんな事ないんじゃない? あの子の周りには、貴女以上に一夏の事を想ってる女の子が大勢いるもの。それこそ、貴女以上に一夏の事を想ってお祝いしてくれる子たちだね」

まるで見てきたような口ぶりのスコールに、箒は怒りを覚えた。スコールがどれだけ

一夏の事を知っているか、箒は知らないが、少なくとも一夏のすぐ側にいたのは自分だという自負が、上司だと言う事を忘れさせたのだった。

「貴女がどれだけ一夏の事を知ってるか知らないが、側でずっと見てきた私が言うんだ。私の方が間違いないに決まっている」

「そんな事ないと思うわよ。現にほら、一夏の事を祝おうと更識の面々が楽しそうに準備してらるって報告が」

「ダリル・ケイシーからの報告を箒に見せるスコール。箒には誰がスパイなのか教えていないので、送信元はすっかり消してある。」

「これが現状だという証拠は？ 事実だと認めるには、証拠が少なすぎる」

「なら、貴女の姉にでも聞けばいいでしょ？ どうせハッキングしてストーキングしてらるんでしょうし」

「姉さんに？」

スコールはそれだけ言い残して部屋から去っていった。箒は唯一覚えていた束の番号に電話を掛ける。もちろん、自分の携帯は使えないので、組織から支給された飛ばしの携帯でだ。

『んー？ 誰かな？ この番号に電話してくるなんて馬鹿者は』

「お久しぶりです」

『おー、その声はバカ箒ちゃんじゃないですか。いったいどの面で束さんに電話してきたのかな？』

「ただ聞きたいことがあつただけです。一夏は今、更識の連中に祝われているのですか？」

『は？ そんな事聞きたいから束さんに電話してきたの？ やっぱり箒ちゃんはバカだね。あの連中がいくくんの事を本気で愛してるって事は、この束さんでも分かるっていうのに。それから、飛ばしの携帯だろうが何だろうが、この束さんは居場所を特定する事が——』

受け入れ難い現実から逃げるために、箒は電話を切つて携帯を投げ捨てた。あのシスコンが、自分の事を「バカ」と呼んだこともそうだが、一夏が自分以外の人間から誕生日を祝われていると言う事が、彼女には受け入れ難い事だった。

「私がいなくなつてから、一夏の周りの悪い虫が活発に行動してるようだな……待つてろ、一夏。私がすぐにお前を助け出してやるからな」

狂気に揺れる箒は、PCから更識の面々の画像をプリントアウトし、蠟燭の火でそれを燃やし始める。表に名が売れていない本音以外の面々をプリントアウトした紙が、物凄い勢いで燃えていく。

「一夏をたぶらかした罪、この程度で償われると思うなよ」

誰もいない部屋でそう呟く箒は、もはや正常な思考をしていなかったのだろう。

誕生日パーティーが一段落し、お色直しだと言われ部屋を追い出された一夏は、中庭の自販機に来ていた。騒がしい中にいたので、外の風に吹かれようとしたのと、少し疲れたのでコーヒーを飲もうと思ったからこの場所に来たのだった。

「騒がしいが、なかなか楽しい時間だったな」

まだ終わりではないようだが、一夏は今日一日を振り返っていた。マドカに時間稼ぎの為に連れ出され、五反田兄妹と会い、そして刀奈たちのお祝いを受ける。昨日までは忘れかけていた自分の誕生日だったが、迎えてみれば人生最高の一日だったかもしれないと思っていた。

「明日からまた、頑張れるって思えるようになるな、こういう息抜きは……」

缶コーヒーのプルタブを開け、一口啜ったところで、一夏は不審者の気配に気づきコーヒーの缶をそちらへ投げつける。

「誰だ、どうやって入ってきた」

「久しぶりだな、一夏。せっかくの幼馴染との再会に、缶コーヒーは似合わないと思わないか？」

ここ数ヶ月聞いてないかった声を聞き、一夏は身の危険を感じ取った。まだいなくなる前の方が、声に狂気が混じっていなかったと記憶していたので、今の声は警戒に値するほどの狂気が含まれているのだ。

「邪魔者のいない今こそ、私がお前を救い出してやるからな」

「邪魔者？ 救い出す？ お前は何を言ってるんだ、篠ノ之箒」

月明りに照らされ、不審者の顔がはつきりと一夏にも確認が取れた。まあ確認するまでも無く、自身のトラウマから聞き間違えようなない声だったので、一夏は顔が見える前に名を呼んだのだった。

箒VS一夏

約二ヶ月ぶりに姿を見せた箒に、一夏は並々ならぬ警戒心を抱いていた。箒が持つているIS、サイレント・ゼフィルスは完全に心を閉ざしており、彼女から情報を引き出すことが出来ないのだ。

『どうやらサイレント・ゼフィルスは完全に篠ノ之箒の手に堕ちているようですね』
「（それを言うなら亡国機業に、だろうな……よほど高度な技術力を持つ人間がいるようだ）」

予想を遥かに超える整備力に、一夏は素直に感心していた。一方の箒は、再会してもなかなか口を開かない一夏を見て、感動していると勘違いしていた。

「一夏、今日がお前の誕生日だと言う事を覚えてるか？ 覚えてないだろうな。お前はいつもそうだったから。まったく、私が祝わなければお前は——」

「何の話をしている？ 誕生日だと言う事は覚えている、というかついさつきまで祝われていたからな」

わざわざそんなことを言いに来たのかと呆れながら告げる一夏に、箒は驚き、信じられないという表情で一夏との距離を詰めてきた。

「祝われていた？ 私がいない今、誰がお前の誕生日を祝うというのだ？ ……そうか、千冬さんと千夏さんだな。あの人たちは相変わらず……」

「普通に刀奈さんたちだと何故わからない？ そもそも俺が、あの姉二人に素直に祝われると本当に思ってるのなら、相当お目出度い頭をしてるんだな」

サイレント・ゼフィルスの性能がはつきり分らない今、一夏は少しでも時間と距離を稼ぎたかった。だからあえて挑発し、サイレント・ゼフィルスを展開させるように仕向けているのだ。侵入に気付かなくとも、ISが展開されれば絶対に気付くだろうという自信も、一夏にはあったからだ。

「何故だ。何故お前はそうも変わってしまったんだ！ お前を本気で祝えるのは私だけなのに！ 幼馴染である私こそが、お前の隣にふさわしいのに！」

「何度も言っているが、俺はお前の事を幼馴染だと思つたことは一度もない。精々昔馴染み、付き合いの長い知り合いに過ぎない」

「記憶が無いからだな。なら一夏、私と一緒にこい。そうすればすべて思い出すはずだ。お前が私の事が好きで、将来を誓い合った仲だという事をな」

『この人は何を言っているのでしょうか？』

「俺が知るかよ……」

妄言を吐きまくる箒に、闇鴉が呆れ、一夏もつられて呆れる。その一瞬の油断が、箒の攻撃を避けきれないほどになるとは、一夏も闇鴉も思っていなかった。

「避けたか。やはり一筋縄ではいかないか」

「お前……」

「驚いたか？ このクソみたいな学園で冷遇されていただけで、私はこの通りISの才能に満ち溢れていたのだ。これで分かっただろ？ 私はお前の隣に立つにふさわしい能力と資格を持っていると！」

近距離主体だった箒が、遠距離から攻撃を仕掛けてきた事も想定外だったが、それ以上想定外だったのは、箒の射撃の腕がかなり向上している事だった。マドカには劣るが、セシリアとはいい勝負が出来るのではないか、一夏はそんなことを考えていた。

『一夏さん、碧さんと美紀さんがこちらに向かってきておりますので、それまでは回避に専念してください』

「（反撃する隙なんて見つけてる余裕がない。それくらい成長してる……闇鴉、動けるな

「？」

『掠っただけです。問題はありません』

箒との間合いを開こうと、ゆっくりと後退していく一夏に向けて、箒は立て続けに射撃を続ける。生きてさえいれば問題ないとスコールから言われていたオータムと同じく、箒も無傷で一夏を捉えられるとは思っていない。だから攻撃に一切の躊躇は無かつた。

「お前は！ 私と一緒にいるのが一番なんだ！ わけの分からない更識にいるよりも！」

「お前には理解できない世界だろうさ。ISの事を分かったつもりでいて、その実何も理解していないお前には」

「私は篠ノ之束の妹だ！ ISのことくらい理解している！」

「なら何故、お前は更識製のISを動かさずにいる。その機体だって、俺が少しでも心を開けば動かなくなるだろうさ」

「それはお前がそう命じたからだろうが！ 私を不遇の境地に追いやれとでも命じられたのか！ ならやはりお前は更識に在るべきではない！」

「妄言もそこまで行くと不愉快だな。俺は命じてもないし、命じられてもない。た

「ただ単にお前がISから嫌われているだけだ。その子だって、亡国機業に堕ちた技術者が強制的に心を閉ざしたに過ぎない」

挑発を続けながらも、一夏は回避行動を怠らないし、箒も攻撃の手を緩めたりはしない。むしろ挑発に乗り、攻撃が過激になりつつある。その分正確性が損なわれているので、一夏に攻撃が当たる確率は更に低くなっているのだが、箒はその事に気付いてすらいなかった。

「ISに感情などあるものか！ ISはただの機械。人に使われてこそ意味があるんだ！」

「そう思ってるのなら、お前は一生普通にはISに乗ることは出来ない。精々改造された自分の意思を表に出すことが出来ずにいる子を使って、強くなった気だけで」

「まだお前はそんなことを言っているのか！ 更識め！ 一夏を洗脳するなど許せんなど！」

箒が一夏に攻撃を仕掛けようとして、両サイドから強烈な攻撃が襲ってきたのを感じし咄嗟に回避行動を取った。

「貴女、篠ノ之箒さん……何しにIS学園に来たのですか。貴女は既に除籍されてるん

「だけど」

「一夏さんに攻撃してましたよね。それだけで十分私たちの攻撃対象になるんですが」

「ふん。更識の狗風情が偉そうに。一夏は私と共に生きていくのが一番幸せなんだ」

「……一夏さん。あれって洗脳されているんですか？」

「いや、恐らく正常に狂ってるんでしょう」

実に矛盾している言葉だが、箒は確かに洗脳されていない。もし洗脳されているのであれば、無駄口を叩かずにはさっさと自分を攫って行ったはずだと、一夏は確信していた。だからこそその「正常に狂っている」と言ったのだった。

考え方の相違

美紀と碧が現れても、箒の余裕は崩れなかった。勝てるとは思ってないだろうと一夏も分かっているのだが、不気味なまで余裕の表情を浮かべたままなので、何か秘策でもあるのかと警戒していたのだ。

「もう一度だけ言うぞ。一夏、私と共に来い」

「何度でも言うがお断りだ。お前んところのリーダーにも言つとけ。俺はお前らの仲間になるつもりなど更々ないとな」

「何故その事を知っている」

「マドカからある程度の事情は聞き出せたからな。独立しようがどうしようが関係ない事だが、俺を巻き込もうとするのだけは止めてくれ」

美紀、碧、そして一夏の三人から銃口を向けられた箒は、盛大にため息を吐いた。

「まだそんなことを言っているのか、お前は。お前が幸せになるには、私と一緒にいるのが一番なんだ。わけの分からない更識になど身を置かず、私と共に来い」

「お前こそ、何時までそんな妄想を抱いているんだ。お前と共に生きる？ そんなこと

したら数週間で五体不満足になりかねん。正常な思考も持てないお前など、お断りだ」
「なら、力づくでお前を連れていくのみ！ ケガしてもお前が悪いんだからな！」

そう言つて箒は、瞬間加速を使い一夏との間合いを詰めようとして——
「その程度で私を抜けると思つたの？ だったら随分と舐められたものね」

——あつさりと碧に行く手を阻まれてしまった。

「ここにいた時よりは格段に強くなっている事は認めてあげるわ。でもその程度じゃ候補生の中でも下から数えた方が早いわよ」

「舐めるな！」

偏向射撃で碧を襲おうとした箒だったが、攻撃を放つ前に碧の姿が視界から消えていた。

「なっ！ 何処に行つた!?!」

「肉眼だけで確認しようとするなんて、下策もいいところね。ISにはセンサーだつてあるんだから、そつちでも確認しなきゃダメよ」

「ぐっ！」

振り向いてレーザーを放った筈だったが、これまた碧に当たることは無く、一夏がその攻撃を打ち消した。

「あんまり学園に被害を出さないでもらいたいんだが。修理費を捻出する身にもなれよ」

「そもそも、碧さんだけに意識を取られ過ぎ。一対一じゃないってことぐらい分かっているんでしょ？」

一夏が攻撃をはじめ、その背後から美紀が箒目掛けてライフルを放つ。咄嗟に回避行動を取った筈だったが、どうやら掠ったようだった。

「お前は、男なら堂々と戦ったらどうだ！ そんなだからお前は——」

「お前の価値観を俺に押し付けようとするなよな。そもそも堂々も何も、俺はお前と戦うつもりなど更々ない。碧さんと美紀に任せ、お前を餌に残りの亡国機業をおびき寄せ算段を立てるのが俺の仕事だ」

「なっ!?! 女の背に隠れて、それでも男なのか！ 恥ずかしくないのか!」

「別に恥ずかしいなんて思わないし、適材適所って言葉があるんだ。俺よりも強い二人に戦闘は任せて、俺は頭脳労働に勤しむ」

激高する筈に対し、一夏は何処までも冷静に返答していく。その涼し気な態度に、箒はますます激怒していくのだが、それも一夏の作戦だった。

ただでさえ猪武者である箒だ。激高して周りが見えなくなれば、間違ひなく自分に突進してくる。そこを横から碧と美紀が攻撃し仕留める。そんな作戦を即興で立て、プライベート・チャネルで二人に伝えたのだ。

「やはりお前は男として腐っている。私が叩き直してやるから一緒にこい！」

「だから、お前の価値観を俺に押し付けるのは止めると、昔から言っているだろ。作戦参謀だつて立派な役目なんだから、男だからとか言ってるお前の方が間違つてるんだよ。そもそも考え無しで突っ込んできて、現にピンチに陥つてるお前にとにかく言われる筋合いはない」

「一夏ア！」

一夏の読み通り、箒は考え無しに突っ込んできた。だが少しだけ計算外だったのは、そのスピードが思ひのほか速く、美紀が反応しきれるかどうか微妙だった事だった。

「お前は！ どうしてそう軟弱な考え方しか出来ないのだ！」

「武力こそ全て。そう考えてるお前には分からないだろうよ」

碧だけでは止められなかったもので、一夏も正面から攻撃を仕掛けた。決定打にはならなかったが、これ以上戦闘を続けるのは得策ではないと箒に思わせるくらいにはダメーシを与えられたので、一夏は再び交渉に入ることにした。

「そのまま続けても、お前が負けるのは分かるよな？ 大人しく投降して、亡国機業を壊滅させる為の餌に甘んじてくれないか？ 曲がりなりにも昔馴染みのお前を消すのは、いささか忍びないと思わなくもないからな」

「誰がお前の言いなりになどなるか！」

箒は地面に弾幕を張り、姿をくらました。追いかける事は簡単だったが、一夏は碧と美紀に構わないと目で伝え箒を逃がしたのだった。

「よかったですか？」

「追いかけて敵の増援でもいたら面倒ですからね。それよりも、この破壊された中庭の修理費を何処から捻出するかを考えなければいけませんし、そもそもその恰好で追いかけて恥ずかしくないんですか？」

一夏に言われ、二人はコスプレ衣装のままだった事を思い出し、美紀は顔を真っ赤に

染め上げたのだった。

「それに、篠ノ之の戦力がどのくらいなのか、データを取ることが出来ました。これをVTSに反映させ、専用機持ちの戦力アップに使わせてもらう」

「相変わらず考えが黒いですね……」

「暗部の人間だからな。当然、美紀にももう一段以上レベルアップしてもらわないと困るからな。あの程度の瞬間加速、目を瞑ってでも対応できるくらいにはなってもらいたい」

「回避は一夏さんに敵いませんよ……」

一夏にかなりの難題を突き付けられ、美紀は盛大にため息を吐いたのだった。

スコールV S 箒

箒を撃退してすぐ、一夏は携帯を取り出しどこかへ連絡を取っていた。その相手は誰であるか分からない美紀と碧は、とりあえず黙ってその会話を聞くことにした。

「どうせ覗いてたんですよね？ 追跡は可能ですか？」

一夏の口ぶりから、二人は電話の相手が篠ノ之束であると理解した。宇宙規模のストーカーである彼女ならば、逃げた篠ノ之箒を追跡するくらい可能だろう。

「……そうですか。分かりました、ありがとうございます」

表情から察するに、追跡は出来なかつたようだと理解した二人は、一夏に近づき慰める事にした。

「そう肩を落とす必要はないですよ、一夏さん。とりあえず敵戦力の一端を知ることが出来たんですから」

「そうですね。それに、篠ノ之箒が完全に敵勢力に加わっていると分かっただけでも、十分な収穫だと思いますよ」

「別に落ち込んでませんよ。それに、篠ノ之箒が敵勢力に加わっている事は、ほぼ確定してしまいましたね。とりあえず闇鴉を通じて得たデータをVTSに反映して、専用機持ちたちに仮想篠ノ之箒相手に対戦してもらいましょう。更識所属の面々なら、ある程度苦戦こそすれ負ける事は無いでしょうし」

かくいう一夏も、想像以上に成長していた箒に苦戦したのだが、それでも負ける事は無かった。碧と美紀のフォローがあったと言う事も多分にあるのだが、一対一でも負ける事は無かっただろうと考えている。技術は成長しても精神面はそのままだったのだ。そこから崩せると一夏は確信していたのだ。

「普通にしてれば、あいつも候補生にと話があったかもしれないのにな」

「あの性格では無理だと思いますよ。ソロは刀奈ちゃんがいますし、ペアだと誰も組んでくれないでしょうし」

「違いますね……アイツが刀奈さんに勝てるとは思えませんし、そもそもあの固まった考え方をどうにかしないと、普通のISは動かせませんからね」

サイレント・ゼフィルスのデータを眺めながら、一夏は対箒の算段を立てていた。サイレント・ゼフィルスに触れさえすれば、彼女の心を開放する事は可能だろうと一夏は

考えている。サイレント・ゼフィールの心さえ開ければ、その時点で箒が彼女を動かせなくなるだろうと読んでいる一夏は、どうすれば近づけるかを必死に考えるのであった。

「煽つてもあの威力だからな……流しても隙は小さいし……かといってわざと攻撃を喰らうのも問題だ……」

「一夏さん、とりあえず部屋に戻りませんか？ 刀奈お姉ちゃんたちも心配してますし」「そうですね。いつまでも二人をその恰好で中庭に留まらせるわけにもいきませんし」

コスプレ衣装のままの二人を見て、一夏は部屋に戻ることを承諾する。二人は既に羞恥心より警戒心が上回っているので恥ずかしくないのだが、後々思い出して恥ずかしがることがありそうだから、一夏はなるべく早く部屋に戻ることにしたのだった。

本拠地へ戻ってきた箒を出迎えたのは、スコールだった。滅多に感情を見せないスコールだが、今は少し怒っているように箒には思えたのだった。

「何か用か」

「貴女、単独でどこに行っていたのかしら？」

「貴女には関係ない。ちよつとした野暮用だ」

「一夏のところに行っていたんじゃないか？」

ズバリ言い当てられ、箒はキツと鋭い視線をスコールへと向けた。

「だったらどうしたというのだ」

「貴女の所為で計画が練り直しになるかもしれないのよ？　少しは悪いと思わないのか

しらね。」

「私は私の考えがあつてこの組織にいるだけだ。最低限の命令には従うが、それ以上貴女に従う義理は無い」

「勝手に対象に接触するのは、最低限の命令にも従えてない証拠ではないかしらね？」

苛立ちを隠せなくなつてきているスクールに、箒は悪びれもせず言い放つ。

「幼馴染に会いに行くだけだろ。それが命令違反になるとは思わないがな。そもそも一夏に会うな、などと命じられた覚えはないし、例え命じられていても、私はそれを承諾した覚えはない」

「貴女、まだ一夏の幼馴染だと思ひ込んでるの？ あの子は貴女なんて何とも思つてないつて散々言われてるはずよね？ まだそれを受け入れてないのかしら？」

「一夏はシャイなだけで、本音では私の側にいたいと思つてゐるんだ。それを周りごとやかく言う資格は無いだろうが！」

「だから、それが妄言だつて言つてるのよ。とにかく、命令違反を犯したんだから、貴女は三日間の謹慎。これは決定事項だから、騒いでも無駄だからね」

謹慎を言い渡された箒は、納得できないとばかりにスクールに喰つてかかる。

「横暴だ！ 私はただ幼馴染の誕生日を祝いに行っただけで、それが命令違反になるとは思えん！」

「その相手が作戦のターゲットで、時間を掛けて接触すべき相手なら話は別でしょうが。そもそも、今回の件で接触が難しくなつてのは明らかだから、いい加減自分の非を認めなさい。どんな思惑を持っていようが別に良いけど、ここにいる以上はその自己中心的な考え方は止める事ね」

そう言ってスコールは箒を部屋に引つ張り込み、そのまま部屋の外側から鍵を掛けた。

「おいー」

「食事は気にしなくていいわよ。三日位食べなくても死なないから。水だけはそこに置いてあるから」

「そう言う事ではない！ 私を解放しろ！」

「おバカさんは少し反省してなさい。貴女の所為で作戦の練り直しなんだから」

そう扉越しに言い放ち、スコールは箒の部屋から遠ざかっていったのだった。

闇落ち箒の対策

一夏が襲われたと聞いて、刀奈は部屋に戻ってきた一夏に対し、いきなりゼロ距離で問い詰めた。

「一夏君、襲われたって本当!? 誰に襲われたの!? 怪我とかしてないわよね!?」
「……落ち着いてください、刀奈さん。一つずつ答えますので」

ゼロ距離だった刀奈を軽く肩を押す事で距離を保ち、一夏がゆっくりと質問に答えていく。

「まず、襲われたのは本当です。碧さんと美紀の手を借りて相手は撃退しました」

視線で碧と美紀に礼を言った一夏は、二人が目礼を返したのを見て、視線を刀奈に戻した。

「襲ってきた相手は篠ノ之です。篠ノ之箒」

「篠ノ之さんって、亡国機業に身を落としたって噂だけど、本当に?」

「そのようでしたね。亡国機業に力を貸している元倉持技研の技術者が調整したと思わ

れるサイレント・ゼフィルスを操縦していました」

「これでサイレント・ゼフィルス強奪事件に関わっていたもう一人が篠ノ之箒だと言う事が確定した訳ですね？」

幾分冷静さを保っている虚が、一夏に質問をする。その質問に頷いて答え、一夏は最後の質問に答える。

「怪我はしてませんよ。そもそもあの程度なら掠ることなく逃げましたから。篠ノ之の実力を測るために、わざとギリギリで避けてたので掠るかもとは思いましたが、相変わらず精神面は脆かったですね」

「あえて挑発してる一夏さんを見て、何がしたいんか疑問だったのですが、そういう意図があったんですね」

碧が納得したように手を叩くと、一夏は少し恥ずかしそうに頭を掻いた。

「あんな分かりやすい挑発、してるこつちが恥ずかしかったんですが、やはり篠ノ之は精神面から崩す方が正解でしょう。実力が飛躍的に上がっているため、力づくでは厳しいかもしれませんから」

「そうなの？ 一夏君が言うならそうなんでしょうけど、でも箒ちゃんってそんなに実

力があつたようには思えないんだけど」

「VTSを使つて訓練したんでしようね。才能皆無だと思われていた遠距離武器に対する適正も、相当上がっていましたし」

「偏向射撃を会得していましたから、オルコットさんより上かと思われえますね」

碧からの補足説明に、本音が驚きの声を上げる。

「セツシー、シノノンに抜かれちゃつたんだ。こりやセツシーも特訓頑張るしかないね」

「セシリアはセシリアで頑張ってるんだろうけど、学園だと少しなれ合いもあるからね。篠ノ之さんみたいに、出来なきや捨てられるつて環境で特訓するのと、ちよつと違ふと思うよ」

「まあ、簪の言う通り、篠ノ之がいるのはそう言う世界だからな……とにかく、専用機持ちには、対篠ノ之の特訓を積んでもらうつもりだ。VTSに採取した篠ノ之のデータを反映させ、それぞれが篠ノ之対策をするようにしてもらおう」

「私たちも？」

刀奈の質問に、一夏は頷いて答える。本音では更識所属の面々は、特訓するまでも無

く勝てるだろうと思っっているが、先ほどの美紀の動きを見る限り、初見では苦戦するかもしれないという考えが一夏の頭の中にはある。仮想とはいえ、一度でも見ておけば今の更識所属の面々の実力なら、十分に撃退できるとも思っっているのだった。

「刀奈さんたちのデータには、あえて実力を上乘せしたデータを入力しておきますので、しっかりと対策を練ってくださいね」

「一夏君、笑顔がSっぽいわよ……」

「S? よくわかりませんが、とにかくそう言う事で」

これでお開きと言わんばかりに会話を打ち切った一夏に、刀奈が再びゼロ距離まで詰め寄った。

「一夏君も無事だったし、誕生日パーティーを再開しましょう!」

「まだ続けるんですか?」

「当然でしょ! ただコスプレしただけじゃ意味ないし、これから一夏君にそれぞれが抱き着きまーす!」

「聞いてませんよ!?!」

刀奈の宣言に、虚が驚きの声を上げる。それも一夏以上に驚いているのを見ると、本

当に聞いていなかったんだらうなど、本人である一夏が他人事のように思ってしまうほどだった。

「別にいいじゃない。今思いついたんだし」

「お姉ちゃん……相変わらず思いつきで行動するんだね」

「だって、無事だったお祝いも兼ねてだからね。一夏君には私たちの存在を改めて認識してもらおうと思つて」

「ちゃんと認識してますし、気配で分かりますよ」

「そう言う事じゃないんだけどね」

少しずれた感想を言う一夏に、刀奈は腕を絡め上目遣いで一夏を見つめる。

「一夏君が私たちの事を心配してくれるように、私たちも一夏君の事を心配してるのだから、あんまり無茶はしないで」

「……善処します」

「約束よ？ もし約束を破つたら、私たちで一夏君を襲うから」

「寝込みを襲われるのは勘弁してほしいですね……ただでさえ寝不足気味なんですし」

「それが嫌だったら、次からはちゃんと誰か一人を護衛に付ける事。亡国機業のスパイがいるのは確定的なんだしね。お姉さんとの約束、ちゃんと守れるよね？」

義理とはいえ姉である刀奈の言葉に、一夏は素直に頷いた。

「分かりました。刀奈お姉ちゃんの言う事、しっかり守ります」

「よろしい。それと、もう一回お姉ちゃんって言うって」

「もう嫌です」

きつぱりと拒否を告げると、刀奈は頬を膨らませて一夏に胸を押し付けた。

「言ってくれないと、今度は直接押し付けるわよ？」

「……勘弁してください、刀奈お姉ちゃん」

思春期男子としては、魅力的な提案なのだろうが、一般的とはズレている一夏は、刀奈の脅迫に屈してもう一度お姉ちゃんと呼んだ。それが原因で、一夏は立て続けに碧と虚にも脅され、終いには簪、美紀、本音にも昔の呼び名で呼ぶように脅されたのだった。

来るべき時に備え

誕生日の翌日の早朝、一夏はアリーナで簪と美紀の訓練を見ていた。本当なら一夏も参加すべきなのだろうが、二人の実力から大きく差がついていると思っっている一夏は、二人の訓練を邪魔しない為に見学を選んだのだった。

訓練が一段落着いたので、二人がISを解除して一夏の側にやってくると、一夏は二人分のお茶を差し出し、今の訓練のデータを二人に見せるのだった。

「若干簪の方が攻めにくそうにしてたが、これは武器の差だろうな。中遠距離の簪が近距離主体の美紀の間合いで戦ってたのが原因だろう」

「美紀、瞬間加速に磨きがかかった。昨日の今日で凄いね」

「篠ノ之さんの動きについて行けなかった自分が不甲斐なくて、パーティーの後一夏さんをお願いしてVTSで瞬間加速の特訓をしたからね」

「仮想世界でどれだけ速くなろうと、実際のGを体験するまで成功とは言えなかったんだが、さすが代表候補生、あつという間にGに慣れてたように見えた」

一夏は美紀の今の戦闘データを解析し、Gに耐える動作がスムーズに出来ている事を

伝える。一夏に褒められた美紀は、少し恥ずかしそうに頬を掻いた。

「二人はペアで戦う事を前提に訓練してるから、一対一で戦う時、自分の間合いを確保出来た方が有利になるのは仕方ないだろう」

「一夏、私も瞬間加速を会得した方が良いかな?」

「簪は距離を保ち、確実に狙撃する事に専念した方が良いと思うぞ。美紀がこれだけ動けるようになったことだし、簪がする事は速さを求める事より、正確性を高める事だ」
「正確性……具体的に、どんな訓練が良いと思う?」

簪の質問に少し考えるそぶりを見せて、一夏は美紀へと視線を向けた。

「何でしょうか?」

「残りの時間、美紀は瞬間加速でアリーナを飛び回ってくれ。簪はその美紀に攻撃を当てる事だけに集中してくれ」

「つまり、美紀は瞬間加速の練習をして、私は動き回る敵に狙いを定める練習をするって
ハハハ。」

簪の質問に、一夏は満足げな表情で頷き、二人の専用機のSEを回復させる。

「本当は後二、三人くらいのになる人がいればいいんだが、この時間じゃそれは無理だ」

し、今は美紀だけで」

「一夏さんはどうですか？ 回避行動の練習になると思うのですが」

「俺の実力じゃ、簪の攻撃から逃げ続けるのは不可能だからな。得意の心理戦も、簪には通用しないし」

簪相手には上手くいったが、簪相手に自分の口八丁が通用するとは、一夏も思っていない。一夏の言い分に簪は笑みを浮かべ、そして準備するためにISを展開する。

「それじゃあ美紀、せいぜい逃げ回ってね」

「簪ちゃんの攻撃、一発は小さいけど、一度当てると立て続けに当て続けてくるから気をつけな」と

こうして二人の訓練は朝のHRギリギリまで盛り上がり、三人は朝食を摂る時間無く教室に駆け込んだのだった。

午後の授業では、織斑姉妹の実技指導があつた。一夏はグループ長として教わる側ではなく教える側だつたのだが、静寐、香澄は教わる側で、一夏の班だつた。

「千夏先生、専用機持ちにグループ長を任せるのでしたら、静寐や香澄も長をやらせるべきなのでは？」

「鷹月と日下部は司令官として育てるより、手足として育てた方が役に立つ。そして恐らく、その二人に指示を出すのはお前だろうからな。だから二人はお前の班にしたのだ」

「……亡国機業対策、と言う事ですか。確かに指揮を執るのは俺になる可能性が高いでしょうが、貴女方二人が指揮を執る可能性だつてあるのですよ?」

「わたしと千夏はお前の指揮下に入り、前線で敵を殲滅させるつもりだ」

最強の双子である織斑姉妹が前線に出て暴れば、数の差など気にする必要はなくなるだろう。だが最強故に他との連携が見込めないのも、一夏としては二人を前線に出すのは避けたいと考えていたのだった。

「殲滅させるつもりなのは良いですが、お二人もちゃんと周りを見て戦ってくださいよ? 勝手な思い込みかもしれません、敵味方関係なく撃墜させそうなんです」

「そんな事……出来るだけしないつもりだ」

「……は絶対にないと言つてほしかったですがね……」

千夏の答えに、一夏は苦笑いを浮かべながら指導に戻つていった。残された千夏は、自分たちが前線に出て戦つた場合の光景を思い浮かべ、一夏の不安ももつともだと納得してしまつたのだった。

「千夏、何かあつたのか?」

「いや、一夏に言われたことを想像して、あいつの不安ももつともだと思つただけだ」

「一夏の不安？　いつたいなんだ」

千夏は千冬に自分たちが前線に出て戦った場合、敵味方の区別をちゃんとつけて戦えるかと問うた。千冬は少し考えてから、乱戦で無ければある程度はつくだろうと答え、千夏が納得した事に自分も納得したのであった。

「亡国機業が攻めてきたと言う事は、乱戦が想定されるだろうからな。一夏がわたしたちに前線に出てほしくないと思う理由がなんとなく分かっただけだ」

「まあ、一夏に指示されるのなら、私たちは後方支援でも構わないんだがな」

「そういうことだ。いつの間にか立派になった弟に指示されるのも悪くないだろう」

その時の事を夢想し、織斑姉妹はアリーナのご真ん中で立ち止まりだらしない表情を浮かべていた。その二人にツツコミを入れたのは、他の生徒から心配され相談を受けた碧だった。

一夏の指導

箒が一夏を襲った事は、既に I S 学園中に知られていた。更識製の専用機を持つ面々は、V T S とアリーナで対箒に向けて特訓を積んでいる。その場に一夏が訪れる時であれば、どちらにも顔を見せない時があるが、一夏の存在の有無で訓練内容が変わるわけではない。やる気が若干高まるくらいで、一夏がいてもいなくても訓練に支障はないのだった。

「エイミイ、右側への反応が鈍い！ 静寐は正面に集中し過ぎで左右からの攻撃に備える動きが若干遅れている！ 香澄は全体的に動きについて行けてない！」

今日は一夏がアリーナの方の訓練を見学しており、彼女たちの動きをすぐに数値化して、何処がいけないのかを即座に指摘している。オープン・チャネルではなく肉声で指導するため、彼の声は結構な大きさを必要としている。

「一夏さん、喉が潰れてしまいますよ？」

「このくらいならまだ大丈夫だ。それより、美紀も参加したらどうだ？」

「私は早朝訓練がありますし、ここに加わってもあまり意味はありませんので」

「そうか。美紀の実力じゃ、ここで訓練してる四人とはレベルが違うもんな」

一夏に指導されたエイミー、静寐、香澄の他にもう一人、マドカがここで訓練しているのだが、この四人と美紀とは実力に大きな差がある。マドカですら美紀に敵わないのだから、残りの三人が挑んだところで、攻撃を当てられるかどうかくらいになつてしまふのだ。

「マドカ、敵を追い過ぎだ！ 深追いは予想外の事態を生み出すから、必要以上に追い回すな！」

「マドカちゃんも、冷静さを欠く動きが目立ちますからね」

「織斑姉妹の妹だからな……その辺りは仕方ないだろうさ」

千冬も千夏も、IS戦闘なら冷静さを保つことが出来るのだが、実生活ではかなりすぐ激昂したり動揺したりする。マドカはそれがISを動かしているときに現れる事が多いだけで、実生活はマドカの方が冷静に過ごしていたりするのだ。

「血縁で言うのであれば、一夏さんだつて血のつながりはあるのでは？」

「あまり似なかつたんだらうよ。それが良い事だとは言わないが、マドカはもう少し俺に似てほしかったかもしれないな」

容姿も中身も千冬と千夏にそっくりだと、マドカもいずれあなるのではないかと不安がよぎったのか、一夏は深いため息を吐いた。

「心配ですか、お兄ちゃんとしては？」

「マドカがあの人になるとは思ってないが、もう少し落ち着いて周りを見れるようになってほしいとは思ってる……東さんに捕まった時も、かなり荒れてたらしいからな」

東が仕掛けた罠も、冷静に対処出来ていれば抜け出すことが可能なレベルだったのだが、マドカはその罠から抜け出すことが出来ずに、結果一夏たちと再会したのだ。結果だけ見ればよい方向に動いたのだが、罠から抜け出すことが出来なかったマドカは、実力的に不安を残しているのだ。

「亡国機業が罠を仕掛けてくるとは思えないが、マドカには罠抜けの練習もさせておいた方が良いな……」

「人混みから抜け出すのも、若干きこちないでもんね」

「本音以下なのは問題だと思っただが……何故か本人は焦ってないんだよな」

マドカが焦らない理由、それは人混みに吞まれ、身動きが取れなくなる度に一夏が助け出してくれるからなのだが、一夏はその事に気付いていない。敬愛する兄に助けられる事が嬉しいマドカは、人混みから抜け出すための訓練を疎かにしているのだが、素質的なものもあつて本音以上に人混みから抜け出すのが下手なのだった。

「ところで一夏さん、四人ともかなりへばつてますけど、そろそろ終わらせなくていいんですか？」

「ん？　そうだな、休憩にしよう」

一夏の合図で、四人はISを解除しグラウンドに座り込んだ。その姿を見た一夏は、スタミナ向上も考えなくてはいけないなど思っていたのだった。

「今度のキャノンボール大会、高速移動に慣れる為にも全員参加だな」

「趣旨が変わってませんか？　あれは正確性を競う競技のほうですが」

「この際正確性は問わないから、篠ノ之箒の動きに対応できるようにすれば構わない。あいつが最速じゃないのは確かなんだから、せめてアイツレベルには対応できるようになつてもらわなければ戦力として計算出来ないからな」

「さすが陣頭指揮を執る可能性が高いお人です。ですが、学生にこれ以上望むのは酷かと思えますよ」

美紀の忠告に、一夏は苦笑いを浮かべながら首を横に振った。

「そんなこと言ったら、ここにいる殆どを戦力として計算出来なくなるだろ。俺や美紀もだが、刀奈さんや虚さんだって学生なんだ。織斑姉妹や碧さんたちだけじゃ撃退出来るとも限らないし、少しくらい酷でもやるしかないんだ。ましてや専用機持ちなんだから、それくらい覚悟してもらわなければな」

「そうでしたね。でも一夏さん、今日はもう終わりにした方が良いでしょう。香澄さんとエイミイの気力が著しく落ちていきますので」

モニターを指差し、各自のコンディションを確認した美紀がそう告げると、一夏も厳しい顔つきになり頷いた。本当はもう少し訓練を積ませたいところなのだが、これ以上続けても身にならないし怪我の元だと彼も理解しているのだ。そのあたりも、織斑姉妹とは違うのだろうか。

「今日はこれで終わりにしよう。静寐とマドカは、エイミイと香澄に肩を貸してやれ。多分歩くのもしんどいだろうからな」

一夏の指示に頷き、静寐は香澄に、マドカはエイミイに肩を貸し、四人はアリーナか

ら更衣室へと歩いていったのだった。

夜半のメンテナンス

消灯時間を過ぎた頃、一夏はVTSルームでシステムの更新作業をしていた。もちろん一人ではなく、護衛として碧が付き添っていた。

「何やっている。とつくに消灯時間は過ぎていゝぞ」

部屋に明かりが点いていたのに気が付いたのだろう、見回りの千冬がVTSルームへとやってきて、形ばかりの叱責をした。

「この時間じゃなきや作業できないんですよ。千冬先生もご存じでしょ」

「知ってはいるが、一応申請はしてもらいたいものだ。お前以外の人間がいるのかと思っただではないか」

「申請はしましたよ。千夏先生が許可してくれました」

「なに、千夏が？ 私には報告が来ていないのだが」

双子の妹から報告を受けていないと千冬が言うと、一夏はため息を吐いて質問を始めた。

「俺が申請したのは放課後です。それで降貴女は千夏先生と顔を合わせましたか？」

「夕食の時に少しだけ。だが、会話は無かったな」

「そうでしょうね。貴女たちは食事中の会話を嫌いますから。それで、それ以降は？」

「時間をズラして風呂に入り、消灯時間まで私は食堂に、千夏はアリーナにいたから、会話は無いな」

「なら、メールはどうですか？ 貴女の事ですから、メールが着けていても気づかない可能性がありますよ」

一夏にそう言われ、千冬はポケットから携帯を取り出した。するとそこには、一夏の予想通り千夏からのメールが届いていたのだった。

「……直接言えば良いものを」

「言うタイミングが無かったのでしょうか。あの人の事ですから、消灯時間が過ぎて、回りの当番ではない事を良い事に、お酒でも飲んでるんでしょうし」

「ああ、その通りだ。私も早く部屋に戻って飲みたいのだから」

「飲むな、とは言いませんが、ほどほどにしてくださいよね。このような状況なのですから、貴女方二人が戦力として計算出来なくなるのは厳しいですし」

「真耶や紫陽花がいるから、そこまでではないと思うがな」

「元候補生とはいえ、世界最強姉妹の穴埋めは難しいと思いますけどね」

真耶と紫陽花の実力は一夏も認めているし、簪や美紀と同等程度だとも思っているが、それでも最強の双子と比較すると数段落ちてしまうのは仕方ないだろう。

一夏が自分たちのIS技術を高く買っていると言われ機嫌が良くなった千冬は、笑みを浮かべながらVTSLルームから去っていったのだった。

「あれ、ちゃんと分かっているのでしょうか？」

「仮にも教師ですし、限度は弁えていると思いますよ。まあ、行き過ぎたら謹慎じゃすまないと理解してるでしょうし、羽目を外し過ぎると言う事は無いと思います」

「だと良いですが……とところで一夏さん、今回のメンテナンスは、篠ノ之箒対策ですよね？ それにしては随分と大掛かりな感じがするのですけど」

「システムの更新のついでに、本体に異常がないかのチェックも兼ねてますからね。普通に使ってる分には問題ないですが、ここには色々な人間がいますからね。負けた悔しさで筐体を叩いたりする輩がいなくても限りませんので。精密機械だと言ってあるの、そう強くは叩かないでしょうし、やり過ぎたらどうなるか想像つくでしょうし、叩く前に冷静さを取り戻すとは思いますがね」

そう言つてメンテナンスハッチを開け、一夏は筐体の状況を確認し始める。放課後の特訓に付き合つていたのを知つている碧は、一夏の体力を心配していたが、これは一夏にしか出来ない作業なのだ。彼女は手伝いたい気持ちを抑え、見張りに徹した。

「それにしても一夏さん、亡国機業の中でも篠ノ之さんは浮いているんですね」

「単独行動だつたらしいからな。追跡すればよかつたかもしれないですね」

「篠ノ之博士がある程度場所は特定したと聞きましたが、その場所に人は？」

「調べさせにはいきましたが、既にもぬけの殻でした。相手もバカではないと言う事でしょう」

束からの情報を受け、更識の人間を使つて調べさせたのだが、既に拠点だつた場所には一人の人間もおらず、亡国機業に繋がる痕跡すらなかつたのだつた。

「あの一件で篠ノ之も自由には動けなくなつたでしょうし、次に現れる時は恐らく敵勢力も相当数を揃えてくるでしょうからね」

「こちらでも戦力拡大を急ぐべきでは？」

「拡大は難しいですよ。これ以上は更識所属という理由では納得しないでしようし。ですから戦力の底上げを急いでいるんですが、一朝一夕では無理ですよ」

「皆、普段から特訓してますしね。急激な成長は見込めないのは仕方ないですよ」

エイミィは候補生だから当然として、静寐も香澄も普段から特訓をしているのだから、いきなり急成長などというのびしろは残っていない。徐々に力をつけていくことは可能だが、それ以上を望むのであれば、織斑姉妹の作ったメニューで特訓するしかない。「そう言えば、ナターシャさんが鷹月さんたちの特訓を見てる時があると聞きましたが、彼女も銀の福音を持っているんですし、攻め込まれた時は戦ってもらえないのでしょうか?」

「銀の福音は、表向きはコアを凍結し、更識で保管してる事になってますからね。非常事態とはいえ使う事は出来ないでしょうね……このままでは」

そこで碧は、一夏が悪い笑みを浮かべている事に気付き、何か考えがあるのだと察した。

「事後報告では駄目なのではないですか?」

「二応日本政府には、緊急時には福音を解放するかもという旨は伝えてありますよ。どう解放するのか、再び凍結させるのかは伝えてませんけど」

「そもそも凍結してませんけどね」

ハッチをしめ、メンテナンスが終了したので、一夏も自分の部屋に戻ることになり、碧も部屋まで送り届けてから自室へと戻り寝ることにしたのだった。

仮想世界の箒

箒の単独行動が原因で、亡国機業では二人一組で動くことが義務付けられた。そして箒のペアとなったのは、サイレント・ゼフィルス強奪の際にもペアを組んだオータムだった。

「何でオレがお前とペアなんだよ」

「仕方ないだろ。スコールがそう言ったんだから」

「お前とペアを組みたがるような物好きがいらないからって頼まれたんだよ！ てか、お

前は当分謹慎じゃなかったのか？」

「だからアンタも任務が下りないんだろ？」

何を当然の事を聞くんだ、と言わんばかりの表情で箒が事実を告げると、オータムはガツクリと肩を落とした。薄々感付いていたのだが、自分に任務が来ないのはそう言う事かと理解させられてしまったからだ。

「やっぱり貧乏籤引かされたのかよ……」

「任務に赴かなくていい分、特訓が出来るのだからいいじゃないか」

「お前はそうかもしれないねえが、オレは前に出てなんぼだからな。お前のように未熟じゃねえし、そもそも独立派のナンバーだぞ、オレは」

「未熟だと？ 私はそんな事言われるほど弱くないのだが」

「精神面で未熟だろ。あの餓鬼に良いように精神を掻き乱され、簡単に激昂するんだからよ」

「あれは相手が一夏だからだ。あいつは昔から人の冷静さを欠くような事を平気で言えるからな。少しでも表情が代われれば違うのだが、あいつはずっと真顔で言い続けるから余計に苛立つのだ」

それが一夏の狙い何だろうと、オータムは話を聞いただけで理解したが、実際にやられている筈は、その事に気付いていないようだった。

「だいたい一夏のヤツ、私が迎えに来てやったんだから、素直に応じるべきなんだ。それを更識のやつらが一夏を洗脳し、邪魔してくるからいつまでたつても一夏が正常にならないんだ」

「(こいつの思い込みもここまでくると怖えな……何がこいつにそう思わせているのか、スコールも知らないようだし、聞いても要領を得ない答えしか返ってこないし……ほんと、何でこんなやつをスカウトしたんだよ、スコール……)」

いつまでもブツブツと言いつける箒の隣で、オータムはそんなことを考えていたのだった。

VTSのメンテナンス後、更識所属の面々が稼働テストを行う事になった。今回のメンテナンスの目的は、より強い相手のインストールと、篠ノ之箒が使っていたサイレント・ゼフィルスのデータを、一夏がより向上させたものと戦えるようにするものであり、そのレベルは普通の代表候補生だと苦戦するかもしれないものであった。

「ほえ、シノノンってこんなに強かったんだ」

「一夏さんが手を加えてるので、本来はこれほど強い訳ではなかったですが、並の候補生ならやられるかもしれないって思うほどには強かったですよ」

「美紀ちゃんも油断して抜かれたって聞いたけど？」

「あれは……一夏さんに気を取られて……多少舐めていたのは否定しませんが、あの時は退治よりも一夏さんの身の安全を優先して動いてましたから」

刀奈にツッコまれて、美紀は慌てて弁解をする。実際箒相手と言う事で、少し油断していた事もあるが、それを差し引いても箒の実力が格段に上がっていた事には変わりはないのだ。

本音と美紀が稼働テストを終え、次は刀奈と虚がVTSで箒との戦闘をすることとなり、一夏の目が先ほどより鋭さを増した。

「国家代表と企業代表なら、何処まで出来るか楽しみだな」

「一夏、また何かやったの?」

「二人がやってたのを見たんだろ? 俺は精々篠ノ之の強さを上方修正しただけだ」

データ上ならいくらでもパワーアップする事が出来るので、一夏は先のデータに箒のびしろを計算して上乘せした強さでインストールさせたのだった。もちろん、それは選択次第で元の強さに戻すことが出来、本音と美紀が戦ったのは現在の箒の強さだった。

「うわあ!? こんな動きが出来るの!?!」

「これは、美紀さんが虚を突かれるのも仕方ないかもしれないですね」

「……一夏さん、篠ノ之箒がここまで出来るようになるとお思いなのですか?」

「可能性の世界だからな。あいつの努力次第であそこまで出来るようになるって話だ。もちろん、VTSは精神攻撃が使えないから、実際にあそこまで強くなったとしても、ここまで苦戦する事は無いだろうけどな」

「精神攻撃は一夏の得意技でしょ? お姉ちゃんにそんな駆け引きが出来るとは思えないし、篠ノ之さんだって精神面を鍛えたりするだろうから、あれくらいになっちゃうかもよ?」

簪の当然の不安に、一夏は笑って首を左右に振った。

「いくら篠ノ之が精神面を鍛えようとも無駄だ。あいつの精神を乱すのはそんなに難しくもないし、相手が俺なら尚更乱れるだろうしな」

「いっちは口が上手いからね。褒めるのも貶すのもお手の物だし」

「それだけじゃないけどな。あいつが俺に固執してるからこそ、そこに付け込んで精神を掻き乱す事が可能になるんだ。何であいつが俺に固執してるのか分からないが、そこが大きな弱点になっていると言うことに気づかない限り、あいつの精神を掻き乱すのは簡単だ」

あつさりと言つてのける一夏に、簪と美紀は呆れた表情を浮かべた。その弱点を克服したとしても、一夏の方が上を行つていそうだと、二人は顔を見合わせて頷きあつただった。

銀の福音の今後

周りが強くなっても、一夏自身が成長してなかったら危険なのではないかという、本音の眩きが原因で、一夏も放課後に特訓をする事になった。

一夏としては、自分は逃げに専念すればいいだけなのだから、他の人の訓練を見学して仮想箒の動きを覚えればいいだけだと思っていたので、この流れは予想外過ぎたのだった。

「何で俺まで……書類整理とか戦力分析とかで忙しいのに……」

「文句言わないの。本音の言う通り、一夏君だって訓練する必要があるんだから」

「俺一人で撃退出来る訳もないでしょうが……過程はどうあれ、篠ノ之箒は俺よりも動けるんですし、普通に戦えば勝てる見込みだってないんですから……」

怒りをぶつける目的が大きかったが、彼女は全中学女子剣道大会で優勝した実績があり、それに見合うだけの体力と剣道の腕があるのだ。サイレント・ゼフィルスは遠距離主体のISではあるが、近距離武器が皆無というわけではない。射撃を当てられないと分かれば、すぐに近接戦闘に変えてくるだろうと一夏は思っている。そして、接近され

たらトラウマが発動する恐れがあるので、一夏の作戦としては、頭に血を上らせ、冷静な判断力を奪い、主体である遠距離武器で攻撃させるという考えなのだ。そもそも逃げが主体なのだから、VTSで特訓したところであまり意味は無いのだが、刀奈たちに押さえつけられては、さすがの一夏も逃げられないのだった。

「一夏君が倒せなくても、私たちが駆けつけるまでに時間が掛かるかもしれないでしょう？ だから少しは戦えるようにならないとね」

「近づかれたら終わりなんですが……戦力云々というより、トラウマ的問題で」

威圧的、高圧的な態度で迫ってくる箒相手を想像して、一夏は思わず身震いをした。この場所にいるわけないと分かっているにも関わらず、一夏は思わずキョロキョロと視線を彷徨わせた。

「これは重症ね……よつぼど箒ちゃんが怖いのね」

「プログラムを組んでる時も、最後まで顔データは打ち込みませんでしたし」
「だから相手の顔がのつべらぼうだったのね」

ヴァーチャルなんだから、そこまで気にしなくてもいいのに、と操作中思っていた刀奈だったが、一夏のトラウマがここまで酷いと分かって漸く腑に落ちたのだった。

「トラウマを克服する特訓をした方が良いかな？ 確か生徒会室に箒ちゃんの写真タータが残ってるから、それをプリントアウトして一夏君のベッドの上にも貼り付ければ——」

「一夏さんが部屋に帰ってこなくなるので止めてあげてください」

同室の美紀がその不安を告げると、刀奈は何か悪い事を思いついたような表情を浮かべた。

「そうなれば一夏君が私の部屋に……」

「お嬢様、さすがにそれは見逃せませんし、一夏さんがお嬢様を避ける原因になるかもしれません、よろしいのですか？」

「それは困ったわね……一夏君に避けられるようになったら、私立ち直れないかもしれないもの……」

トラウマ克服の為という理由があるとしても、刀奈の案を実行したら間違いなく一夏は刀奈にもトラウマを感じる事になるだろう。虚の言葉でそれを理解した刀奈は、自分の案を却下し別の案を考えるのだった。

「それで、俺はこのままVTSをやつてればいいんですか？ それとも他の事をして

いいんですか？」

「いっちはそのままシノン相手に戦つててね。いっちが組んだプログラムだから、かなり強いよ。」

仕方なく、という感じが全員に伝わってきたが、誰一人一夏に同情する事は無かった。それが必要な事だと全員が理解しているし、一夏も受け入れているのだから当然と言えば当然なのだ。

「そう言えば、ナターシャさんの専用機つて、ウチが管理してるんだっけ？」

「銀の福音ですか？　アメリカ軍から凍結申請が出されているので、更識が責任を以つて管理すると言う事になっていますが、凍結はせずにナターシャさんが管理してるはずですよ。」

「名目上はウチが管理してる事になってるなら、非常事態つて事で使えないかしら？　アメリカの失態隠蔽に力をかけたんだから、それくらいは許されると思わない？」

「隠蔽というか、事故と言う事で処理しただけですけどね。実際は一夏さんと篠ノ之博士が暴いたように、アメリカの自作自演なのですが。」

「その事なら既にアメリカ政府に申請は出したはずだよね……まだ返事は無いけど。」

一夏が纏めていた書類から銀の福音関係のものを取り出し、簪が二人の会話に加わる。稼働データはアメリカにも渡すという条件で一夏が打診したのだが、返事はまだないのだった。

「これ以上の条件は出せないし、駄目だったら別の案を考えないとね……」

「山田先生や五月七日先生に専用機を、というのはどうですか？」

「これ以上一夏君の負担を増やすのは、ちよつと避けた方が良くもしいわよ……昨日も夜遅くまでプログラムを書き換えてたんだし」

ここにいるメンバーは全員、一夏一人で専用機を造っている事を知っている。だから直接的に一夏を心配する事が出来るし、刀奈の言っている事をもっともだと思えるのだ。

「とりあえず、現状の戦力で戦う事になるでしょうね……底上げが間に合うかどうか分かりませんが、私たちも出来る限りをする、ということだ」

「それが一番現実的よね……織斑姉妹にも頑張ってもらうけど、あくまでも最終防衛としてだものね」

前線に出したら最後、敵も味方も関係なく暴れる可能性が高いので、一夏からあの二

人は最終防衛として考えられているので、刀奈たちも織斑姉妹を戦力として考える事は無かった。結局具体的な案は何も出ず、一夏の特訓を見学してこの日は下校時間を迎えたのだった、

束に出来る事

一夏が戦力の工面に悩んでいる事を、ハッキングした衛星から知り得た束は、どうかして一夏を手助けできないかと考えていた。一夏が頭を悩ませている原因の一部は、自分がISなんてものを世間に発表したからだと言責任を感じているからなのだが、それ以上に束が力を貸そうと思った理由が、敵戦力に実の妹である箒がいることだった。

殆ど相手をしてこなかったが、束と箒は間違いなく血縁関係であり、束が認識出来る数少ない相手でもある。その箒が一夏の頭痛の種であることは、束にも理解出来るし、出来る事なら自分の手で葬り去りたいとさえ考えるようになっていた。

「束様、夕食の準備が整いました」

「ありがとークーちゃん。でも今は食べないからその辺りに置いておいて」

「分かりました。束様、あまり根を詰め過ぎないようにしてくださいね」

「大丈夫だよ。束さんは細胞単位で普通の人間じゃないから、疲労なんて感じないのだー！」

心配するクロエを安心させるように、束はその場でピョンピョン跳ね回って見せる。

その姿を見て安心したのか、クロエは持ってきた夕飯にラップをかけ、東が暴れても被害を受けない場所に置いて研究室から去っていった。

「クーちゃんに心配させちゃうのは心苦しいけど、東さんがいつくさんを苦しめてるこの状況が気に入らない。東さんはいつくんの為に何かしなきゃいけないんだよ」

誰もいない研究室でそう呟き、東はどうにかして一夏の手助けが出来ないかと頭を悩ませ、盗撮した一夏のスーツ姿の写真を見てだらしなく顔を緩ませた。

「えへへ……っはー。今はこんな事してる場合じゃ……でへへ」

一度我に返り表情を引き締めたが、再び視界に一夏の写真が入り、だらしなく口を半開きにして写真を食い入るように見つめる。

「いつくんの側にいられる更識の連中が羨ましいな……ちーちゃんやなつちゃんも側にいるけど、ある程度の距離は保たれてるし……いつそのこと東さんも更識に所属して……でもそれだと、いつくんの負担が大きくなっちゃうしな……まったく。何で世界の阿呆レベルに合わせないといけないのか理解できないよ」

東が更識に所属した場合、その説明などで一夏が忙しくなるのは火を見るよりも明ら

かであり、それは当然束にも理解出来ていた。自分がどこに所属しようが自分の勝手だと思っただけだが、自分があの「篠ノ之束」であるが故にその勝手が通用しない事も理解出来ている。天災と言われているが、彼女は天才でもあるのだ。それくらいは簡単に理解する事が出来る。

「いっそのこと全世界同時テロ事件でも企画して、束さんがそれを解決。その時に力を借りた更識に恩返しをするために更識に所属するって方向に出来ないかな……出来たろうけど、間違いなくいっくんやちーちゃん、なつちゃんに怒られるだろうしな……根本的な解決にもなつてないし、この考えは没だね」

そもそも一夏が頭を悩ましているのは箒の事なので、束が更識所属になったところで何の解決にもならない事に気が付いた束は、今までの考えを全て頭の中から追いやってた。

「あのバカ箒ちゃんを懲らしめる為にはどうすればいいんだろう……サイレント・ゼフィルスに使われているのは、束さんが造ったコアだから、遠隔操作で機能停止にすれば……って、あの子は今こつちからの干渉を一切拒んでるんだっけ……いっくんもあの子の声が聞こえないって言ってたし」

ISの生みの親である自分の手を離れているサイレント・ゼフィルスに、東はいら立ちを覚えた。もつと言えば、子供であるサイレント・ゼフィルスのコアを都合の良いように改造した技術者を、東はこの世から消し去りたいと考えているのだ。

「いっくんの調べでは、サイレント・ゼフィルスを改造したのは倉持技研とか言う二流企業にいた技術者の可能性が高いんだっけ……所在の分からない技術者は倉持技研にいた八割以上で、残りの二割は二流企業の中でも二流レベルの技術しか持たない老人だとか言ってたし、東さんはその人間の区別もつかないしな……いっくんが見つけ出してくれるのを待つしかないか……」

こういう時、自分の認識力の低さが東は恨めしかった。普段は気にならない他人を、この時ばかりは認識したいと思ったのだが、自分の脳はその方面には機能しないのだったと改めて思い知らされ、東は少し悔しそうにIS学園を監視しているモニターを眺めた。

「いっくんとまーちゃん、ちーちゃんとなつちゃんのはつきりと認識できる。後は小鳥遊とかいう、いっくんの護衛の女とちーちゃんとまーちゃんの愛玩道具である眼鏡は分かるけど、後は殆ど分からないんだよね……」

辛うじて更識所属の面々は曖昧に認識出来るのだが、それ以外は束にとつて有象無象でしかない。多少の違いは認識できるが、それだけで個人を認識する事は出来ない。だから束は技術者の特定は自分の役割ではないと割り切つて別の事を考える。

「訓練機レベルなら、世界中から文句も言われないうし、IS学園に寄付するといふ形にすれば、いっくんも受け取つてくれるかな？　そうと決まれば、さつそく訓練機用のコアを製造して、IS学園に寄付する準備をしなければ！」

一夏が受け取るとも決まつてないのに、束は訓練機製造の準備に取り掛かろうとして、クロエが持つてきてくれた夕飯が視界に入った。

「おっと。愛娘の手料理を食べてから準備しよう」

クロエの事は、本当の娘のように可愛がつているので、どんなに失敗した料理でも束は文句言わずに食べる。今日も多少焦げてはいたが、束は何も言わずに完食したのだつた。

箒VSオータム

一夏や東が自分の事を考えているなど露知らず、箒は謹慎の間ずっとVTSを使い碧や美紀を倒す為にはどうすればいいかを考えていた。彼女もそれなりに考える事はするのだが、いざ実戦となると気持ちが高ぶり、そして挑発に乗って冷静な判断が出来なくなるので、あまり意味はなさない。

箒と行動を共にしなければならぬオータムも、暇つぶし感覚でVTSでトレーニングを積んでいた。彼女は元倉持技研の技術者が調整できる最大レベルの相手でも完封する事が出来るので、本当に暇つぶしでしかないのだが……

「何故だ！ 何故ここであんな動きをするんだ！」

「お前、VTSでも冷静さを失ってんだな……」

戦闘ログを見て、オータムが呆れ声で箒の動きを分析する。相手が無名の操縦者なら、箒でも完封する事は可能なのだ。だがいざ碧や美紀、その他の更識所属が相手だと想定した場合、すぐさま冷静な判断が出来なくなり、動きがおかしくなるのだ。

「私は冷静だ！ あいつらが私の想定外の動きをしてくるから——」

「なら、そこから何か学ばよな。同じところでやられてるのを見ると、やっぱりお前が冷静じゃないって判断されても仕方ないと思うぜ」

「……始める前は分かかってるつもりなんだ。だがいぎ敵を目の前にするとどうしてもな……私から一夏を奪った相手を完膚なきまでに叩きのめしたいという気持ちがある。過ぎてしまう……ああ、愛しの一夏が側にいれば、私はこんなに悩むことはないというのに」

「（こいつは何を言ってるんだ……）」

箒の思考が理解できないオータムは、心の中でそう呟いて暇つぶしに戻ることにした。彼女は更識所属の面々を想定したプログラムでも、この程度なら問題なく勝つことが出来る。もちろん、本物より遥かに弱く、また動きも単調なので、オータムはこれで勝っていても実戦では勝てるかどうか微妙だと考えている。

実際対峙した相手である碧を想定した訓練でも、あの時感じた殺気や、あの時見た動きなどと比べると全く齒ごたえが無いので、オータムはスコールにもっとレベルの高い技術者を連れて来いと頼んでいたのである。

「アンタは凄いな……更識相手だろうがアンタ一人で勝てるんじゃないのか？」

「バカ言うなよな。お前だつてこの程度じゃねえつてことくらい分かかってるんだろ？」

もしこの程度だったら、今頃オレたちが壊滅させてるってんだよ」

「しかし、これ以上のプログラミングは、今いる人間では出来ないんだろ？ それこそ、

一夏か姉さんを捕まえるしか技術力の向上は見込めないと聞いたが」

「……知り合いだけはスゲエよな、お前って」

「？ それはどういう意味だ」

箒は、オータムの皮肉を理解出来なかつたようで、褒められたのかけなされたのか分からぬままこの話を流したのだった。

実際彼女の知り合いには、天下の更識企業の企画・開発担当責任者である一夏と、世紀の大天災篠ノ之束という、ＩＳ業界において最も高い技術力を有していると言われて二人がいる。それに加え、最強の双子である織斑姉妹とも面識があり、この四人の全面的バックアップがあつたとすれば、間違いなく世界一を狙えるくらいにはなるだろうとオータムは考えていた。

もちろん、箒が亡国機業に身を置いている事は知られているだろうし、もともと興味を持たれていなかったと言う事も知っているので、そんなことは天地がひっくり返つてもあり得ないと言う事は理解していた。

「くそっ！ また躲すのか！ 卑怯だぞ！ 正々堂々——」

「ヴァーチャル相手に文句言ってるヤツだもんな……見捨てられても納得だぜ」

先にしたげた四人は、ある程度の事ならば一切気を乱すことなく対処できるだけの精神力と判断力を持っている。だが目の前の箒には、その能力は感じられない。オータムはもう一度ため息を吐いてから、この場にはいない恋人の事を思い浮かべていた。

「(スコール……オレも前線に出たいんだが……何時までお守りをしてればいいんだよ)」

実質的なナンバーツーであると自覚しているオータムは、箒のお守りなど出来ればしたくない——出来ればではなく完全にやりたくなかったのだが、箒が暴れだした時、実力で圧倒出来るのがスコールとオータムの二人しかおらず、スコールを監視に付けるのは作戦決行が大幅に遅れる事を意味している。したがってオータムが箒のペアという名の監視者選ばれたのだが、このままではオータムが暴れかねなくなってきたのだ。た。

「どうもうまくいかないな……すまないが、ヴァーチャル戦場で相手してくれ」

「それは構わねえが、ハンディはどんぐらいつけるんだ？ お前相手だったら、三分もかからないぜ？」

「……言ったな。その言葉忘れないでもらいたいな。私がどれほど成長しているか、まずはアンタに見せつけてやろうではないか！」

何処からその自信が湧いて出て来るのか、オータムには理解出来なかったが、単調な動きしかしない相手よりかは楽しめるだろうと思ひ、ツツコミは入れなかった。

結果として、箒は三分以上粘ったのだが、オータムに一撃も喰らわせることが叶わず完封負けしたのだった。

「はん、結局は口だけか」

「ぐっ……やはり機体との相性と対戦相手自体との相性が悪いか……」

遠距離主体とはいえ、箒は基本的に近接戦闘を好む。オータムはその事を知っているので、最低限の距離を保ちながら、箒を痛めつけるという事をやってのけたのだった。

知力と武力

亡国機業対策も大事だが、生徒会役員としての仕事も大事だと考えている一夏たちは、恒例行事であるキャノンボール大会の準備に追われていた。

「お嬢様、この書類に認印をお願いします」

「はいはい。一夏君、来賓のリストってどこにあるつけ？」

「刀奈さんの机の上にまとめて置いてあるはずですが……その書類の山の中のどこかでしょうね」

「何でこんなに書類が溜まつてるのよ！ 毎日毎日、ちゃんと目を通してるはずなのに！」

「仕方ありませんよ。日本政府からは亡国機業に関する情報を寄越せとせつつかれ、他所の国からは我が国の代表候補生をしっかりと守るように圧力を掛けられ、職員室からは仕事を丸投げされて……溜まらない方がおかしいくらいですから」

ちなみに、職員室から丸投げされた仕事は、織斑姉妹が担当するはずだった仕事だ。だが彼女たちは今、日本政府にこれ以上介入しないよう説得——というなの脅し——し

に行っているために不在、その分の仕事が生徒会回ってきたのだ。

「戦力アップに協力してくれない相手にどうこう言われる筋合いはないんですけどね」

「IS学園は日本の領土にある事は、変えられない事実ですからね。口出ししたくなるのも分からなくはないですが」

一夏が零した愚痴に、虚がフオローともとれる発言をする。そのセリフに一夏は苦笑いを浮かべながら、残りの書類の処理を始める。

「猫の手も借りたいって時に、本音は何処に行ったのよ？」

「本音なら、簪お嬢様と美紀さんに連れられて特訓の手伝いをしているはずですよ」

「本音が？ 役に立つの？」

刀奈の酷い発言に、虚と一夏が揃って苦笑いを浮かべる。本音の實力は、IS学園の中でも上から数えた方が早いのだが、普段の生活態度や無気力な感じが相まって、それを忘れさせる。

「あれでも専用機持ちで並の候補生なら完封するだけの實力はあるんですけど」

「まあ本音ですし、お嬢様が疑いたくなる気持ちも分かりますからね」

「簪ちゃんと美紀ちゃんが本音が必要だっと思って思ったのなら仕方ないけど……こつちも本

音でも欲しかったわ」

「愚痴を溢す暇があるのでしたら、こっちの書類にも認印をお願いします」

「これもあとは刀奈さんが処理すれば片付きますね」

「二人とも仕事早すぎ！ 私が遅いみたいじゃないのよ！」

実際、刀奈のスピードも他の人と比べれば速い部類なのだが、それ以上に一夏と虚の書類を処理するスピードが速いので、刀奈が遅いと錯覚させるのだった。

「いつそのこと中止にしますか？」

「それはダメよ。実力を測るいい機会なのには変わりないんだし、既にやる気になってる子たちだって大勢いるんだから」

「そう思うのでしたら、お嬢様も限界を超えるつもりで頑張ってください」

「鬼だ……」

虚の発言に刀奈はガツクリと肩を落とし、机に突つ伏した。現実逃避をしようとしても、正面からくるプレッシャーでそれも出来ず、更に自分を囲む書類の多さで、無理矢理現実に取り戻されてしまうのだった。

生徒会室に刀奈の悲鳴が木霊してる頃、アリーナでは更識所属の面々と代表候補生の面々がそれぞれ特訓をしていた。

「箒さんに出来て、私に出来ないはずがありませんわ！」

「気負うのも大事ですが、気負いすぎはよくないですよ」

アリーナの一角で、セシリアがマドカの指導を受け偏向射撃の練習をしたり、「これでとどめた！」

「残念、ハズレだよ」

「何っ!?! ならこっちだ!」

ラウラが本音相手の、動きの素早い相手を想定した訓練をしたり、

「香澄、そっちに行った!」

「分かってますけど、更識さんに加えて四月一日さんもとなると、私では無理です」

エイミィと香澄が、簪と美紀のペアを相手にコンビでの動きを確認したりと、それぞれがそれぞれに頑張っている。

「さてと、もう一戦行きますか」

「別に良いけど、もう僕じゃ鈴の相手が務まらなくなってきたるね」

鈴とシャルも特訓に参加しているのだが、シャルは代表候補生の座を退き、社長職に力を入れているために本当に訓練程度しか出来なくなってきたのだった。実戦の

緊張感を保つには、少し力不足感が否めないのが今の悩みだ。

「それでも、アンタのラピット・スイッチは脅威よ。あの筈にそれは出来ないでしょうけども、他の人間が出来るかもしれないものね」

「そんなに簡単に出来るものじゃないし、専用にカスタマイズしなきゃ難しいんだよ？」

「亡国機業に力を貸している企業がいるんだし、その中にそのカスタマイズが出来る人がいるかもしれない。こういう時の考えは、常に最悪を想定しておくべきだつて一夏が言つてたわよ」

「最悪の事態の時に慌てなくて済むから、でしょ？ 僕も前に言われたことがある」

「シャルさんが厳しいなら、そろそろ私と交代する？」

「あら静寐。用事は終わったの？」

図書室で調べものをしていた静寐が合流したため、鈴の相手はシャルから静寐へと変更になった。そのお陰でシャルは今の本業である社長の仕事に専念する事が出来たのだった。

「あの子も随分と社長が板についてきたわよね」

「あの一夏君がフォロワーしてるんだから当然といえは当然よね。あの年で世界中の企業のトップと対等に——いや、むしろ優位に話し合ってるんだから」

静寐の感想に、鈴が頷いて生徒会室の方に視線を向ける。そして少し考えてから頭を振って静寐へと視線を戻した。

「それじゃあ、その一夏の力に、少しでもなれるように頑張りましょうか」

「そうね。でも、私じゃ鈴さんの相手が務まるかどうか」

「謙遜しない。その機体はかなり厄介な部類よ！」

それを合図に、鈴と静寐は模擬戦を開始したのだった。

一夏の忙しさ

職員室に、日本政府からの重要書類が届いた。受け取ったのは真耶だが、彼女は書類の入った封筒を開けようともせず、本来の受取人である千冬のデスクにその封筒を置いた。

「千冬さん、これここに置いておきますね」

「ああ……真耶、これとは何だ？」

「何だって、日本政府からの重要書類が入った封筒です。千冬さんが送らせたんじゃないんですか？」

「私は日本政府に用など無いぞ。千夏の間違いじゃないのか？」

「わたしも特に用事など無い。分からないのなら開けてみれば良いだろう」

千夏のもつともな意見に、千冬と真耶は頷いて、封筒を開けようとして——
「ああ、やっと来たんですか」

——背後から覗き込む生徒の存在に気付いた。

「一夏っ!? お前、音も無く忍び寄るな!」

「普通に近づいてきたんですが……それより、それは生徒会——というより更識で取り寄せた書類です」

「……何故私名義で届けられた?」

「貴女の名前で取り寄せれば、間違っても見てみようなんて思う人はいないでしょう?」

何当たり前な事を聞いているんだ、とでも言いたげな一夏の目に、真耶は納得して頷いた。これが一夏名義なら、検閲した方が良いのではないかと思う教師がいるかもしれないが、千冬名義なら間違っても関わらないでおこうと思う人が大半であり、間違っても開けて怒られたりするのではないかと思う人が全員だと思えたからだだった。

「それで一夏、それは何だ? 私名義で取り寄せたと言う事は、かなり重要な書類なんだろう?」

「ナターシャさんの専用機、銀の福音の凍結解除申請の書類ですよ。アメリカとの関係を悪化させない為に、表面上は更識が凍結保存している事になっていますし、使用する時もこうして申請する形になっていいますよ」

「ナターシャの専用機? そんなものを大つぶらに使う機会があると思っっているのか?」

今も非公式の場合——主に訓練相手としてナターシャが参加するときには、普通に銀の福音を使っているのだ。今のままでも訓練相手は務まるし、彼女が前線に出る機会などそうそうないと、千冬も千夏も思っているのだった。

「俺もそんなことが起こらなければいいと思つてはいますが、万が一亡国機業が攻め込んできて、万が一最終防衛ラインの維持が厳しくなった時に、ナターシャさんには出撃してもらおうと考えているんですよ」

「それと使用申請と、どういう関係があるんだ？」

「普段どうでも良い事には敏いくせに、こういう時は鈍いですね、貴女方は……」

ため息でも吐きそうな勢いで呆れられた事で、千冬と千夏は猛烈に居心地の悪い思いをした。

「亡国機業のスパイがどこにいるか分からない状況で、ナターシャさんが銀の福音を申請無しで使つたとしましょう。その事をスパイがアメリカ政府に教え、日本政府に抗議でも来れば面倒な事になるのは目に見えています。ただでさえキャノンボールの準備は亡国機業に対しての備えで忙しいのに、そんなどうでも良い事で時間を割かなければいけない芽を摘んでおきたいんですよ」

「お前は常に先を考えているな……足場固めはもういいのか？」

「そつちも並行してやっていますので、ご心配なく。一応千冬先生名義ですので、返答は貴女の名前でお願いします」

「待て、申請手続きなどという面倒ごと、私が出来ると思うか？」

「必要箇所はこちらで記入しますし、貴女は最後にハンコを押してくればいいだけです」

「なるほど……それなら問題ない」

一夏の冷めた態度に、千冬は必要以上に強がって答えた。

「そう言うわけで、また後程」

一夏は必要書類だけを持っていき、職員室から去っていった。その後姿を見送った三人は、その背中が見えなくなつてから話し始める。

「アイツ、本当に高校生か？」

「私たちとアイツとで、時の流れる速度が違わないのなら高校生のはずだ」

「織斑先生たちは更識君が生まれた時を知っているのではないんですか？ 時間が進む

スピードなんて同じなんですから、その時からちゃんと計算すれば間違いないと思うん

ですが」

「生まれたのは知ってるし、アイツの記憶が無くなる前まではずっと一緒にいた。だが更識で生活し始めてからは分からん」

「あそこは暗部だからな。時間の流れる速度を変えるくらい——」

「出来る訳ないでしょうが、そんな事」

ひそひそ話をしていた三人の背後に、碧が現れてツツコミを入れる。

「一夏さんは濃密な時間を過こしては来ましたが、流れている時間は私たちと一緒にです。そんなことは当然だと分かりそうなものですがね」

「つまり一夏は、年齢ではなく経験であそこまで大人びたと言う事なんだな？」

「当然です。一夏さんは常に忙しそうにしていますし、今も実際忙しいですからね……普通の高校生と比べれば大人びているのは仕方のない事でしょう」

怒涛の日々を送ってきた一夏の雰囲気が大人数びているのは、碧からすれば当然であり疑問に思う事でもなかったのだが、千冬たちからすれば驚きの事実だったのだろう。

「更識君って、いったいどれだけの苦勞を背負い込んだんですか？」

「はじめはひっそりと生活させるつもりだったのですが、ひよんなことからISを動か

せると感付かれてしまいましたからね。そこから一夏さんは忙しくなってしまったのですよ」

本当はその前から忙しかったのだが、一夏がコアを造れるという事実を伏せなければいけないので、碧は世間が共有している事だけを使い、一夏が忙しくなった理由を三人に教えたのだった。

襲撃予定日

謹慎期間が過ぎたとはいえ、箒に任務が下ることは無かった。それはつまり、ペアであるオータムにも任務が来ないと言う事なのだ。

「暇すぎる……お前の所為でオレまで評判がた落ちじゃねえかよ」

「そんな事私は知らんぞ。そもそも一夏に現実を見せてやるのが私の使命なんだ。亡国機業の事は二の次に決まっているだろ」

「お前も組織の人間なんだから、少しは組織の事を考えて行動しろよな……」

そもそもが思い込みなのだから、そんなことを最優先にされたらたまったものではな
い。オータムは一応ツツコミを入れるのだが、箒には響かなかった。

「いい加減VTSでお前をぼこぼこにするだけじゃ気がすまなくなってきたからな……
どこか広いところに行つて実戦と行きたいところだぜ……」

「外出すら禁止されている私と、何処に行くんだ？」

「自覚してるなら少しは反省しやがれ！」

オータムの叫び声が部屋に反響したのと同時に、その部屋の扉が開かれた。ここは筈が使っている部屋なので、殆ど人が近づぐことが無いので、扉が開く事自体、オータムが部屋にいる限りありえない事だったのだ。それが開かれたと言う事は、何かしらの進展があると言う事と同意である、オータムは知っていた。

「あらあら、なかなか仲良しそうね。これなら安心かしら」

「何処をどう見たら仲良しに見えるんだよ！ こいつの所為でストレスが溜まって溜まって……いい加減部屋を破壊しそうなくらいだぜ」

「それは困ったわね……」

あまり困って無さそうな感じでスコールが嘆いてみせると、オータムもその芝居に付き合うように声を荒げてみせた。

「それでいったい何の用だっていうんだよ。まさか様子を見に来たなんて言わねえだろうな？」

「そうね。お芝居はこれくらいにして本題に行きましょうか。襲撃に日程が決まったから、その報告に」

「いいのか？ オレは兎も角、こいつも出撃させるんだろ？」

「今回は少数の方が都合がいいし、SHには暴れてもらって敵の目を引き付けてもらう

から」

「つまり、あいつは囹だど？」

箒に聞こえないように声を潜め、オータムはスコールに真意を問うた。

「あれほど目立つ子はいないもの。ＩＳ学園に忍び込む為に役立つてもらいましょう」

「忍び込むって、何でそんな面倒な事を……」

「今度行われるキャンボンボールって行事に、各国のお偉方も呼ばれてるそうなの。そこで数人殺めることが出来れば、よりいっそう目的に近づけるわけ」

「過激派が狙ってる連中を先に殺る事で、あいつらの面子を潰すって事か？」

「それもあるけど、標的は亡国機業過激派のパトロンとなってる人物数名。裏では極悪非道な事をしておきながら、表の顔は慈善家という最低の男たちよ」

スコールから標的を聞かされ、オータムは納得したように頷く。溜まった鬱憤を晴らすにはちょうどいいでも思ったのだろう。

「今回は内部からも攻める為にレイン・ミューゼルにも動いてもらう事になってるわ。もちろん、ＩＳを使って直接攻撃させるわけにはいかないのだけでも」

「位置情報を割り出してもらう感じだろ？　いつものことじゃねえか」

「そうなんだけどね。そろそろダリル・ケイシーとしての表の顔を捨ててもらおう時が来るかもしれないわね」

「あいつが戻ってくれば、SHなんかに頼る必要がなくなるからな」

「おい、何時までこそこそと話してるんだ！ 私に用があるからこの部屋に来たんだろ？」

いい加減イライラしてきた箒が、スコールとオータムの会話に割って入ろうとする。二人は同時に箒の事を思い出し、彼女に任務内容を話す事にした。

「今週末IS学園で行われるキャンボンボール大会に、我々亡国機業の邪魔となる人物が来賓として訪れることが分かったの。それSHには、私たちがその邪魔者を始末する間、IS学園の人間の注意を引いてもらいたいものよ」

「私が注意を引くのか？ 私が来賓すべてを吹き飛ばした方が早いと思うのだが」

「邪魔者といっても、こいつらは過激派のパトロンってだけで、表の顔は慈善家よ。他の来賓には私たちに有利な情報を流してくれる者もいるの。そいつらまで吹き飛ばすのは止めてもらいたいもの」

「なら、私我更識やIS学園の連中を吹き飛ばすのは良いんだな？」

「それが出来るのであれば、願っても無いわね」

どうせ出来もしないのだから、期待もせず待つている事にするわ、と言いたげな目で箒を見たスコールだったが、箒はスコールの視線に込められた意味など理解もせず頷いた。

「これで一夏が私の手に……漸くあるべき姿に戻るのだな、一夏」

「……なあ、こいつの妄想ってどうにかならないのか？」

再び小声で話しかけてくるオータムに、スコールは肩を竦めて見せた。

「SHの中の一夏がいったいどうなっているのか、私にも分からないもの。妄言だって分かってないのは本人だけなんだし、放っておいても問題ないんじゃない？」

「その妄言を聞かされるオレの身にもなれってんだよ！ いい加減ぶつ殺しそうになるぞ」

「それは困るわね……まだ使い道があるんだから」

仲間だから、という理由ではなくまだ使えるからという理由で、スコールはオータムに箒は殺さないようにと念を押しした。

そんな会話がされているとは気づかずに、箒は一夏が自分の下に来る妄想をして、怪

しい笑みをこぼし二人に引かれるのだった。

ダリルVS虚

スコールからの暗号メールを読み直し、ダリルはそのメールを削除した。誰かに携帯を見られるなんて事は無いが、念には念を入れての事だ。

「漸く動き出すのね……」

I S学園に入学というなの潜入をして二年半、漸くスコールが目的の為に動き出すと知り、思わず声に出してしまった。

「何が動き出すのですか?」

「布仏……別に貴女には関係ないことよ」

「まあ、そうでしょうね。貴女と私では住む世界が違いますから」

「そうそう、アンタみたいに私は光り輝く世界にいないもの」

「私だって、輝いている世界にいる訳ではないのですが」

「何よそれ、嫌味なの?」

虚は表向きは大企業である更識の企業代表として、忙しなく世界中を飛び回っている

ので、一般生徒からしてみれば、それは輝かしい世界に見えるだろう。

「アメリカの代表候補生の貴女が、私がいる世界を羨ましいと思うとは……アメリカの今の現状は、アメリカの自業自得ですよ」

一方でダリルは、アメリカの代表候補生として、世界中から注目される立場にある。虚からしてみれば、自分よりもダリルの方が光り輝く世界にいると思つても仕方ないだろう。

「別に国の事じゃないわよ。アンタは更識企業の企業代表として、既に脚光を浴びる立場にあるの。私はまだあくまで候補でしかないのだし、どっちが羨ましいかと聞かれれば、絶対にアンタだつて答える方が多いわよ。なにせ、更識製の専用機がもらえるんだから」

「更識所属になるということは、それだけ背負わなければいけないものが多いと言う事です。そんな生半可な気持ちでなれるものではありません」

「でも、一年で何人かは更識所属になつただろ？ あいつらでもなれるなら自分も、つて思うヤツがいてもおかしくないと思うんだけどね」

「彼女たちも、ある程度の事は知らされていますが、私やお嬢様のようにすべてを知らされてはおりません。それは本音や簪お嬢様も同様です。同じ更識所属で

も、私の立場はかなり大変なものなのです。それでも私の立場になりたいと思うのであれば、その人は相当なマゾヒストだと思えますよ」

更識には秘密がある。これは世界共通の認識であり、更識所属の人間がそのすべてを知っているなどと、世間もさすがに思っていない。IS学園にいる更識所属の面々の中で、全ての事情を知っているだろうと思われる人間は四人。前当主の娘であり、元当主候補であった刀奈、現当主の娘である美紀、次期当主候補である一夏、そしてその三人に最も近く、信頼の厚い虚だ。

「そんな事を差し引いても、更識製の専用機つてのはほしいんだと思うわよ。実際、私だってほしいもの」

「それが狙いで一夏さんに近づいたりしてるのですか？」

「あれは純粹に、更識君に興味があるだけよ。あれだけの女を侍らせておいて、一切手を出さないなんて『特殊な趣味』でもあるんじゃないかって」

「それは貴女でしょうが。二年のフォルテ・サファイアと『そういう関係』にあるのは」「私は別にレズじゃないわよ。バイではあると思うけど」

虚は、レズよりたちが悪いではないですか、というツツコミを飲み込み、ため息を吐

いてダリルから離れる事にした。亡国機業の人間ではないかという疑いがある為、なるべく監視しているのだが、どうしてもダリルとは喧嘩腰になってしまふのだ。

「何を言っても平行線のようにすし、私はこれで」

「だから言ってるでしょ。私とアンタじゃ、住む世界も考え方も違うんだからって」

「……貴女のいる世界など、見たいとも思いませんがね」

「同性愛者を差別するなんて酷いわね」

「別に同性愛者を否定するつもりはありません。私が否定したいのは、貴女なのですから」

同じことじゃない、とダリルは思ったが、虚が教室から出て行ってしまったので、そのツツコミは飲み込むことにした。

「やれやれ……布仏の相手をするとかれるわね……あんなお堅い女、絶対に彼氏なんて出来ないわよ」

一夏と虚がそういう関係ではないと言う事は、ダリルも知っている。だからあえてそう言ったのだが、その本人にその声が聞こえる訳も無く、また聞かせるつもりもなかった。ダリルは一気に虚しさに押しつぶされそうになった。

「さつきまで白熱してたからかしら。急に無気力感に襲われてるわね……こんな時は、更識君でもからかって遊ぼうかしらね」

一夏に近づくだけで、その周りがピリピリするのだ。その反応を見て楽しんで、更に一夏を動揺させることで二度楽しむことが出来るので、ダリルは一夏にちよつかいを出そうとしているのだ。

もちろん、一夏と『そうった関係』になりたいわけではないが、先に彼女自身が言った通りレズではなくバイなので、そういう流れになればやぶさかではないと考えているのだ。

「そうと決まれば、さっそく更識君を探して……あら、あそこにいるのはまさに更識君……今日の護衛は布仏の妹か……あいつは何を言っても苛立たないから、面白くないのよね」

碧や美紀なら、ある程度誘惑をすれば簡単に怒ったり、最初から警戒心剥き出しだったり、ダリルが楽しむのにもってこいの反応を見せるのだが、本音は必要以上に一夏に近づかなければ何も反応を見せないのだ。

本音が護衛だと分かった途端、ダリルは一夏に近づいて誘惑して遊ぼうとしたのを止

め、
恋人関係であるフォルテ・サファイアの許へ向かう事にしたのだった。

襲撃直前

「いよいよ明日はキャノンボール・ファストというのに、一夏はあまり乗り気ではなかった。」

「何か問題でもあるのですか？」

「あくまで可能性だが、来賓の中に亡国機業と繋がってる人間がいるかもしれないとか、標的になってる人がいるかもしれないとか、考えたらきりがないがな」

「ダリル・ケイシーの動きを見る限り、何かしそうな雰囲気はありますけど、気にし過ぎは一夏さんの体調に影響します。そう言う事は私たちに任せて、一夏さんはゆつくりと休んでください」

「そうはいつてもな……美紀たちは参加するわけだし、監視は参加しない俺や刀奈さん、虚さんが受け持つしかないだろう？」

大会運営もあるので、生徒会メンバーの内本音以外は大会には参加しない。元々乗り気ではなかった一夏だけでいいと言ったのだが、刀奈と虚もレベルが違うという理由で参加しなかった——出来なかったのだった。

「警備などを怠るつもりは無いが、人員が割けない以上、より一層の注意を払わなければいけないんだ。気にし過ぎ、と言う事は無いだろう」

「ですが、本番前日から気を張ってたら当日にへロへロになつてしまいます。今は私たちが周りに気を張っておきますので、一夏さんはゆっくりと休んでください」

「そうしたいのは山々だが、まさか前日になつてプログラムが組まれてないとか言われるとはな……何やつてたんだよ」

本来、キャノンボールのプログラムは真耶が担当するはずだったのだが、先ほどになつて、一夏に泣きついてきたのだった。

「福音の解放やそれに伴う手続きなどで、織斑姉妹に駆り出されていたとか」

「……殆ど更識で処理したんだが、何を手伝う事があつたんだ？」

「さあ、そこまでは……」

美紀と二人で首を傾げながら、一夏はプログラミングを急いだ。半分以上終わつてなかつたのだが、一夏にかかれればこれくらい二時間もかからずに終わるだろう。

結局二時間もかからずにプログラミングを済ませた一夏は、本番前まで仮眠をとることにしたのだった。

来賓リストを手に、スコールはターゲットがどの位置に座るかを確認していた。その横には、オータムと箒の姿も見られる。

「ターゲットは三人。私とオータムで確実に殺るから、SHは場の攪乱と更識の連中を

引き付けてちょうだい」

「別に引きつけるのは構わないが、あいつらをやっつけてもいいいんだろ？」

「死亡フラグを建てるのは構わねえが、本当に死ぬんじゃないぞ？ 今回の襲撃が本番

じゃねえんだから」

「分かっている。本番は一年生の修学旅行だろ」

「恐らくだけど、その場には篠ノ之束も姿を見せるんじゃないかと思うのよね。その時に篠ノ之束が一夏、どちらかを確保出来れば、私たちの願いが叶うのも間違いはないわよ」

「IS学園の側で今回の目的と、次回の目的を確認した三人は、それぞれ領きあい、そして準備に入った。」

「そう言えば、潜入しているレイン・ミューゼルって人は、何時合流するんだ？」

「今回の修学旅行の際に合流する予定になっているわ。もちろん、監視されてるでしょうから慎重にね」

「あの更識とかいう連中の内、レインを疑ってるのが結構いるからな」

「上げられてくる報告の中に、明らかに疑われていると言う事も含まれているので、なるべく慎重に動くように指示は出してあるが、それでも監視の目は鋭くなつていく一方

なのだ。ここで箒にその正体を教えたとして、彼女の事だからすぐに激昂してその名前を言ってしまうかもしれない。だからスコールとオータムは箒にレイン・ミューゼルⅡ
ダリル・ケイシーと言う事は教えていないのだった。

「とりあえず今は、目の前のターゲットに集中しましょう」

「了解した」

スコールの言葉に頷き、言葉で同意を示した箒が、攪乱の為に I S 学園内へと忍び込み、スコールとオータムは標的が逃げる際に通るであろう場所が見える位置に移動したのだった。

大会運営本部で、一夏と刀奈は来賓のチェックを行っていた。疑わしい人間は五人、そのうち一人は体調不良とかで代理を立てた。

「残るは、この四人ですね」

「万が一亡国機業が襲ってくるとして、ターゲットとなりうる人間が四人もいるっていうのはどうなのよ」

「表の顔は兎も角、裏では極悪非道の限りを尽くしていますからね……マドカから聞かされた亡国機業の派閥を考えると、狙われそうなのはこの四人ですからね……仕方ありませんよ」

箒が所属していると思われる、独立派が狙うとしたら、過激派のパトロンとなりうる人間であると一夏は考え、その可能性がある人間が四人も来ているのだ。気が休まる時

など、一瞬も無い。

「とりあえず、虚さんに周囲を警戒してもらってますけど、碧さんが審判として参加してるのが痛いですね」

「織斑姉妹より、碧さんの方が尊敬されてるからね……織斑姉妹の奇行が知られ始めてきたのが原因だから、後で注意しておいたら？」

「注意くらいで収まるのなら、とつくに……」

「? どうかしたの?」

急に言葉を切り、辺りを素早く見回す一夏を見て、刀奈も警戒心を強める。

「今一瞬、篠ノ之の気配がしたような気がしまして……気のせいかもしれませんが」

「小刻みに震えてるけど、それは寒いから? それとも、篠ノ之さんの気配がするから?」

刀奈が質問をしたのと同時に、一夏の携帯が鳴った。

『一夏さん、上空にサイレント・ゼフィルスと思しきISを発見しました!』

「刀奈さん、避難警告! 大会は一時中止です」

「分かった!」

刀奈に短く指揮を飛ばして、一夏は簪たち更識所属の面々に電話を掛ける。

『どうしたの？』

「大会は一時中止。警戒態勢に入れ。亡国機業だ」

一夏の言葉に、電話越しに簪が息を呑んだ。こういう場面を想定していたとはいえ、実際にそうなるとは思ってなかったのだろう。

本音のツツコミ

一夏からの指示を受け、簪と美紀は観客の避難誘導を急いだ。あの箒が攻め込んできたと言う事は、見境なく暴れる可能性が高いのだ。

「落ち着いて避難してください！」

「箒ノ之箒の攻撃は、本音とマドカが防いでくれていますので、今のうちに安全な場所へ！　そこ、走らないでください！」

この二人が箒と戦った方が安全性は増すかもしれないが、避難誘導がスムーズに進むかと聞かれれば、この役割分担も仕方ないと言えるだろう。

「簪、美紀、私たちは？」

「静寐たちは、一夏に連絡して指示をもらって。とりあえず専用機持ちは避難誘導が終わったら辺りの警戒に就く予定になってるから、多分静寐や香澄たちもそうだと思うけど」

「分かった」

簪から何をすればいいか聞いた静寐は、オープン・チャネルで一夏に呼びかける。携帯の方が楽なのだが、電波妨害がされている可能性も考え、こつちを使ったのだった。

『何かあつたのか?』

「一夏君、私たち専用機持ちは何処を見回ればいいのか?」

『篠ノ之以外の気配は来賓席付近に二つ、そつちは刀奈さんと虚さん、碧さんが見張つてる。静寐たちは簪たちの手伝いをし、終わり次第本音とマドカの援護、余裕があればアリーナ周辺の警備を頼む』

「了解、任せといて」

一夏から指示を貰つた静寐たちは、簪と美紀の手伝いをし、素早く誘導を終わらせた。「それじゃあ、私たちは本音とマドカの援護に行つてくるね」

「お願い。私たちは、この辺りに敵が潜んでないか確かめてから行く」

簪と美紀はここで別行動となり、静寐たち専用機持ちはタイミングよくロックが解除されたピットからアリーナへと出る。もちろん、偶然ではなく一夏が操作したおかげだ。

「本音、マドカ、一旦下がって。ここは私たちが引き受ける」

「おくシズシズ、ありがたいよ〜」

「意外と苦戦しますので、油断なきように」

避けて避難している生徒たちに攻撃が及ばないように、本音とマドカは出来る限り箒の攻撃を受け止めていた。そのせいで普段以上にSEの消費が激しく、二人は一旦SE補給の為に前線から下がる。

「篠ノ之さんって、学園にいた頃より遥かに強くなってるんだよね？ 私たちだけで大丈夫かな？」

「VTSでそれなりに経験は積んでるけど、油断しないように。マドカが言ってた通り、あの二人でも苦戦するんだから、勝とうとは思わない方が良いかもね」

「そうだね。一夏君に援護と言われたんだから、とりあえずあの二人が戻ってくるまでは持ちこたえよう」

香澄、静寂、エイミイが箒の前に立ちはだかると、箒のバイザーで隠している顔が笑ったように思えた。

「……何かおかしなこと言ったかしら？」

静寂が表情の変化に気付き、箒に話しかける。すると箒は、バイザーを上げて顔を晒したのだった。その顔は、どす黒い笑みで歪んでいた。

「いやなに。お前たち程度が私を足止めするなんて言うから、つつい笑ってしまっただけだ。気にすることはない」

「いや、かなり気にする事だと思っけど？ 私たち『程度』とは、舐められたものね。勝てるとは思ってないけど、そんな簡単に負けてあげるつもりもないけど？」

「思いあがるとは嘆かわしい……何なら三人まとめてかかって来い。力の違いを見せてやろうじゃないか！」

箒の姿が消え、三人は慌てて戦闘態勢を取り、センサーで箒を探す。

「遅い！ 遅すぎる！」

「グツ！ VTSでは殺気までは再現してなかったから、これはキツイわね……でも、スピードは想定内ね」

箒の一撃を受けた静寂が、二人にアイコンタクトを送る。二人は頷き、箒を囲むようなフォーメーションを取った。

「無駄無駄！ お前ら如きに私が止められるものか！」

全方位にレーザーをぶつ放す筈に、三人は慌てた。いくら避難が済んでいるとはいえ、このレーザーにどれほどの威力があるのか、三人は知らないのだ。

「ボーっとしていいのか？ 隙だらけだ！」

「っ！ レーザーは囷ね！ 二人とも、そのレーザーにそれほどの威力は無いわ！」
「遅い！」

偏向射撃で背後から狙撃され、静寂は肺の中の息を全て吐き出した。

『さて、演技はここまでですね』

「全く……一夏君も難しい注文をしてくれるわよね」

「何をブツブツと言っている。力の差を思い知って、頭がイカレたのか？」

「何処見てるのかわからなく、シノノン。もう私たちも戦場に復帰してるんだけど」

「相変わらずの単細胞ですね。自分の優位が揺るがないと思っちゃうなんて、馬鹿の極みです」

筈が乱射したレーザーに対し、マドカが偏向射撃で撃ち落とす。そのレーザーの合間を縫って本音が筈へと攻撃を当てた。

「舐めるな！」

「シノノンなんて舐めても美味しくないから舐めないよ」

「本音、そう言う意味じゃないわよ……」

「ほえ？」

天然を炸裂させた本音に、静寂が疲れたような声でツツコミを入れた。

「邪魔を、するな！」

「うわっ!? 危なかった」

「本音、気を抜き過ぎ。いくら数で圧倒しても、この威圧感は厳しいわよ」

「大丈夫、だいじょくぶ。これくらい、本気で怒ったいちーの怒気に比べたら軽い
て」

殺気や怒気に慣れている本音は、箒の威圧感をもともせずに進めていく。その本音に続くように、マドカも後方から援護射撃を繰り出し始め、威圧感に慣れてきた静寂たちもそれに続いた。

「邪魔だ、雑魚ども！ 一夏！ 男なら正々堂々勝負しろ！」

「またそんな事言ってる……シノノンって時代錯誤もいいとこだよね。男だから、女

だからなんて、もうそんな理屈が通じる時代じゃないのに」

珍しく呆れ気味の本音が、箒の考えを真っ向から否定する。そのせいで、箒の怒気は最高潮に達したのだった。

最強の三人

箒に更識所属の面々を全てぶつけてくると考えていたスコールたちは、要人の警護についている三人の気配を掴み、ため息を吐いた。

「まさか更識の三人——しかも実力者をこっちにぶつけてくるとは……さすが一夏ね。私たちの上を行く考えだわ」

「感心してる場合かよ……これじゃあターゲットに狙撃した途端にオレたちが狩られるぜ？」

「大丈夫よ。狙撃なんてしなくても、あの場所を纏めて吹き飛ばせばいいんだから。こんなこともあろうかと、レインに爆発物を設置しておいてもらったのよ」

そう言つてスコールは、携帯電話でレイン・ミューゼルことダリル・ケイシーに合図を送った。

「アイツにも監視が付いてるんだろ？ よく爆発物なんてセット出来たよな」

「一見すると、ただのゴミにしか見えない改良型だもの。初見で爆発物だつて見抜けるのは、そうそういないと思うわ」

スコールが話し終わると、小規模ながら爆発が起こった。来賓を匿っている場所で爆発が起これば、さすがに移動せざるを得なくなるので、スコールはそこでターゲットを殺るつもりだったのだ。

「おいおい、小規模過ぎて動かねえぞ？」

「大丈夫よ、あれで終わりじゃないから」

立て続けに小規模な爆発が起こり、さすがにこの場にいるのは危険と判断したのか、刀奈と虚が要人を安全な場所へと誘導し始める。

「もう少し……今ね！」

「おうよー！」

スコールの合図でオータムが特攻を仕掛けようとして――

「これくらいお見通しです。まったく、舐められたものですね」

「お前は……」

――オータムの前に影が割り込んできた。

「ダリル・ケイシーが貴女たち側の人間であると知っていて泳がせていたんです。これくらい想定内の範囲内ですよ」

「小鳥遊碧……バカな、お前の気配はあいつらの側に……」

「あまり深い関係じゃないから、気配を偽るのは簡単でしたよ。あそこにいるのは私ではなく、私の服で身を固めた山田真耶です」

碧と仲のいい相手なら、この作戦は使えなかった。碧と真耶では、身長が違い過ぎるし、胸の発育も若干違う。それでも変わり身が使えたのは、スコールもオータムも、碧の事をよく知らなかったからに他ならない。

「篠ノ之箒が暴れだす前に、貴女たちを捕らえれば終わりです。観念して大人しく投降しなさい」

「誰が！ テメエ一人ならオレが相手してやる！ スコール、今のうちにやつらを！」

「誰が私一人だと言いました？」

碧が視線をオータムから逸らすと、その視線につられてオータムもそちらへ視線を向ける。その隙を突いて、碧はオータムに一撃喰らわせた。

「ツチ、舐めた真似しやがって！ ゼッテーに血祭に上げてやる！」

「別に舐めた真似なんてしてないわよ。本当にそこにいるのだから……ね、織斑姉妹」

碧が呼ぶと、物陰から気配が生まれ、現れたのは最強の双子だった。

「一夏から頼まれたから来てみれば、本当に大物が二人もいたな」

「こいつらを捕らえれば、わたしたちの株も上がると言うもの……覚悟するんだな」

「あらあら……これは詰んだわね」

さすがのスコールも、第一回モンド・グロツソの覇者たちを相手に勝てるとは思って
いなかった。

「オータム、ここは大人しく引くわよ。SHにも合図を送るわ」

「ツチ、さすがに分が悪いよな……おい、今日の所は大人しく帰ってやるぜ」

「それ、雑魚キャラのセリフじゃないの？」

「そんなツツコミ入れてる場合じゃねえだろ」

何処からか煙幕が起こり、スコールとオータムはその隙にこの場を脱出した。追いか
けようとすれば追いつくが、深追いしてこちらがやられる可能性を考え、碧と織斑姉妹
は二人を追う事はしなかった。

「あのバカは？」

「モニターを見る限り、ぼこぼこにされて逃げていったな」

「相変わらず口だけのヤツだな……」

「さて、わたしたちは周辺の警備に当たるから、一夏への報告はお前に任せるぞ」

「ダリル・ケイシーへの訊問の時は、私たちも呼べ」

そう言い残して、織斑姉妹は周辺の警備へと飛び立っていった。

「尋問も何も、さすがにもう彼女も逃げてるでしょうね」

今回の件で、完全にバレたと考えるだろうから、ダリル・ケイシーはIS学園から姿を消すだろうと碧は考えていた。もちろん一夏も同意見だったので、見張りをつけるべきではないかと提案していたのだが、それよりも警護に人員を割くべきだと言う事で、逃げるなら自由にしろ、というスタンスを取っていたのだった。

「さてと、一夏さんへの報告を済ませたら、私も周辺の警備に当たるとしますか」

『展開されただけで、あまり出番がありませんでした』

「まあまあ……出番がない方が平和の証拠なんだし、不貞腐れないの」

『久しぶりの出番だったんですよ？ もう少し動きたかったです』

木霊が不貞腐れたように眩くと、碧は苦笑いを浮かべながら答えた。

「今回は戦わずに勝利したけど、毎回こう上手くいくとは限らないんだから。その時は思いつきり動きましょう」

『そうですね。今回はあくまで、あの羊頭狗肉という言葉がふさわしい連中を守るのが目的で、殲滅が目的じゃなかったですもんね』

「IS学園で殺人が行われたら、さすがに立場が危ういからね」

要人を守ったのではなく、IS学園の立場と更識の立場を守ったと解釈する事で、一夏は更識所属の面々を納得させたのだ。だからあくまでも守ったのは自分たちの自由と言う事で、碧は要人がどうなるうと気にしなかっただろう。木霊はそんなことを考えながら、一夏が待つモニター室へと針路を変更したのだった。

愛か平和か

爆発物を仕掛けた事を知られていると知っていたダリルは、騒ぎが起きている内に I 学園から逃げ出すつもりだった。だが、彼女の前に二人の女性が立ちはだかつたのだ。

一人はナターシャ・ファイルス。この度無事に専用機である銀の福音を開放され、I 学園内で戦力として数えられるようになった元アメリカ軍所属の I S 操縦者で、ダリルの先輩にあたる女性だ。そしてもう一人――

「何故ですか、ダリル。何故 I S 学園を裏切ったのです!」

――ダリルの恋人である、フォルテ・サファイアだった。

「何故って、私は元々 I S 学園側ではなく、亡国機業の人間だったというだけよ、フォルテ」

恋人が前に立ちふさがっても、ダリルの表情は変わらない。むしろフォルテの方が動揺し、泣きそうな顔になってきている。

「それじゃあ、私はただ遊ばれていただけなの？」

「それは違うわよ。私は貴女の事を愛している、これだけは本当。だけど、貴女をこちら側に巻き込もうとかは考えていない。それだけよ」

「大人しく観念しなさい、ダリル・ケイシー。そうすれば訊問だけで済むかもしれないわよ？」

ナターシャの言葉に、ダリルは狂気の笑みを浮かべる。その表情を見て、ナターシャではなくフォルテが怯んだ。

「尋問だけで済む？ そんなこと、本気で思ってるのかしら？」

「当然、そんな訳ないでしょうね。貴女は色々と探り過ぎたもの。更識君が黙ってないわよ」

「あの少年、本当に邪魔だったわね。私が探ろうとするたびに布仏を私の監視につけたりして。お陰でフォルテと愛し合ってる時まで周りが気になって本気になれなかったのよ？」

「そんなこと、私に言われても仕方ないでしょ？ むしろ、そうなのは貴女が悪いんだから、自業自得と割り切りなさいよね」

ナターシャは、二人がそう言った関係だと聞いても表情を歪めたりはしない。元々夏から聞かされていたと言う事もあるが、IS操縦者の中には、そう言った性癖の人間が少なからず存在するので、ナターシャはこの二人もそう言う事なのだろうと割り切っているのだ。

「そもそも、貴女たち学生でしょ？ 不純同性交友は認められないんじゃない？」
「同性なんだから、純潔を散らす事もないでしょ？ だから不純ではないわよ。そもそも私たちは、純粹に愛し合ってるんだから」

ダリルのセリフに、フォルテが頬を赤らめる。どうやら見た目通り、ダリルが攻めでフォルテが受けのようだとなターシャはそんなことを考えていた。

「ダリル、私はどうすればいいの？」

「本音を言えば、私と一緒に来てほしい。でも、貴女だつてギリシャの代表候補生だものね。無理強いはいしないわよ。貴女の決断に、私は従うわ。例え敵になろうと、私は貴女だけを愛すと誓うわ」

ダリルの言葉で、揺れていたフォルテの心は決まった。一步下がりがら空きのナターシャの背中に一撃をくらわす。

「なっ……」

「ごめんなさい、ナターシャさん。私はダリルと生きていきます。だから、貴女の味方にはなれない」

「ありがとう、フォルテ。それじゃあ、今のうちにこの学園から逃げ出しましょう。最低限のものはすぐに手に入れられるから、気にする必要は無いわ」

倒れたナターシャにダリルがもう一撃喰らわせ、完全に意識を刈り取ってこの場から離れていく。余裕があればナターシャを攫い、亡国機業の戦力に、と思ったかもしれないが、入ってくる情報は悉く亡国機業が不利であると言う事だったので、ダリルはこの場からの脱出を最優先として行動したのだった。

ナターシャが目を覚ますと、そこは見慣れぬ天井だった。何が起きたのか思い出そうとして辺りを見渡し、ここが保健室であると理解し、自分が負けたことを思いだしたのだった。

「情けないわ……一夏君に任されたのに、あつさりとダリルに逃げられるなんて……しかも、フォルテさんまで敵に奪われるなんて」

「自分の意思で敵に下ったんです、ナターシャさんの所為じゃありませんよ」

まさか独り言に返事があるとは思っていなかったもので、ナターシャは慌てて飛び起きた。
た。

「痛っ!?!」

「まだ無理はしない方が良いですよ。急所ではないとはいえ、かなりの威力で攻撃を叩

き込まれたようですから」

「……情けないわね」

歪む視界で、看病してくれているのが一夏だと確認したナターシャは、二重の意味で情けなさを感じていたのだった。

一つは、任された事を全う出来ず、逆にやられてしまったと言う事を実感して。もう一つは、戦闘において下に見ていた男子に看病されている事についてだった。無論、ナターシャは全てにおいて男子を下に見ているわけではないので、そこまで派手に落ち込むことはしなかった。

「全治三日というところですね。一撃目は加減されていますが、二撃目は完全に本気ですね、これは。フォルテ先輩はダリル・ケイシーを選んだんですか」

「揺れ動いてる感じだったけどね……愛の前に策は無意味だったみたい」
「随分とロマンチックな表現ですが、敵となつた以上容赦はしません。ナターシャさんに対するお礼参りもしなければいけませんしね」

ダリルとフォルテの専用機のデータはしっかりと採つてあるので、一夏としてはさほど脅威には感じていない。だがそれでも、敵に戦力が増えてしまったことは嘆かわしい事

だった。

一夏はすぐにギリシャ政府へ連絡し、フォルテ・サファイアが亡国機業へと身を落と
した可能性があることを報せ、捜索に協力するよう要請したのだった。

新たな候補生を探して

キャノンボールが中止となり、その事についての説明をするために、臨時生徒集会が開かれる事になった。集会といつても、朝礼の延長でしかないのだが、何時もみたいな弛緩した空気はそこには無かった。

「参加予定だった生徒の皆さんには、誠に申し訳ないと思いますが、延期ではなく中止となりました」

壇上から生徒に向けて正式に中止が決定したと一夏が告げると、少なくとも生徒が残念そうにため息を漏らした。活躍の場を失ったのだから仕方ないかと、一夏も少し同情したが、本当に知らせなければいけない事は他にあるのだ。

「それから、昨日攻め込んできた篠ノ之箒に加え、三年生でアメリカ代表候補生であったダリル・ケイシーと、二年生でギリシヤ代表候補生であったフォルテ・サファイアも亡国機業側へと寝返った」

箒だけならこれほど動揺しなかっただろうが、ダリルとフォルテの二人までとなる

と、全校生徒に与えるダメージは結構な大きさだった。

特に、フォルテは亡国機業のような闇組織に似合わなそうな雰囲気醸し出していたので、衝撃はより大きいものとなった。

「これに伴い、アメリカ・ギリシャ両国から代表候補生の補充に関する要望が来ているのだが、興味がある生徒は放課後、生徒会室か職員室に来てもらいたいと思っています。アメリカは兎も角として、ギリシャは完全にこちらの落ち度で候補生を一人失ったわけですので、更識としてもせいっぱい援助はするつもりです」

一夏がいった援助とは、選抜の際の手伝いや、訓練相手を見繕うなどだったのだが、生徒側が受け取った援助の内容は、更識製の専用機がもらえるなどの豪華特典だった。

「ダリル・ケイシーは元々疑ってて、最終手段として恋人のフォルテ・サファイアをぶつけたら、見事にそのフォルテごと敵に持つていかれちゃったのよね……仲が良かった人には申し訳なく思ってるわ」

一夏からマイクを受け取った刀奈が、どういう経緯でフォルテまで敵に寝返ったのかの説明を始める。ダリルは元々疑われていたから、それほど交友範囲が広がったわけではないが、フォルテはダリルの恋人、というだけで特に怪しい動きはしてなかったのだ、

それなりに友人がいたのだ。その友人に対して刀奈が頭を下げ、フォルテはダリルとの関係を優先したと説明を始めた。

「フォルテさんの実力なら、ダリル・ケイシーを止められると思つたのですが……」

「学園より恋人を選んだんですから、仕方ないですね……想定外もいいところですが」

「私が不甲斐ないばかりに……申し訳ないです」

虚と一夏が舞台袖で話し合っていると、ナターシャが申し訳なさそうに会話に割つて入ってきた。

「背後から一撃喰らわされたんですから、仕方ないと思いますよ。しかも、動けないところにダリル・ケイシーの強烈な一撃を喰らわされたんです。気を失ってしまったのは仕方ない事です」

「それだけではなく、フォルテさんがこちらの味方だと勝手に思い込んで、彼女から攻撃されると言うことにまつたく意識が向いていなかったんです」

「それは、こちらとしても同じ考えだったので、ナターシャさんだけが油断していたというわけではないですよ。同性愛者を軽んじてたわけではないですが、人の感情というものはすさまじいものなんだと思ひ知らされました」

フォルテはダリルか学園かで揺れ動いているとは考えていたが、最終的には学園——ひいては国の信頼を選ぶと思っていた一夏だったが、その考えは改めた方が良いと思ひ知らされたのだった。

「それで一夏さん、フォルテ・サファイアの代わりとなるギリシャ代表候補生のあてはあ
るのでしょうか」

「数人程あてはあるんだが、まずは立候補者がいるかもしれないから、そつちを優先だ
な。アメリカの方は、自分たちで決めてもらえばいい」

アメリカと他国との関係は、今非常にビミョーなバランスとなつていたので、下手に
アメリカ国内の事に首を突っ込んで、他国から袋叩きに遭うのは避けたいところだと一
夏は思っており、虚もナターシャもその意見に賛成だった。

「それで、一夏さんが考える候補生候補とは？」

「何だか妙な言い回しですが……二年でイギリス代表候補生のサラ・ウエルキン先輩な
どいいかと思つてます」

「イギリスが黙つて差し出しますかね？」

「セシリアがある程度育つてきてるんだし、次の代表はセシリアでほぼ決まりだろう。
そして、サラ・ウエルキンはペアよりもソロでその能力を発揮するタイプですからね。」

候補生として終わらせるにはもったいない才能ですし、何よりイギリスには更識に対する貸しが多くありますから。それをチャラにさせる代わりに、とでも言えば問題ないでしょう」

一夏の言う貸しとは、サイレント・ゼフィルス強奪事件の犯人特定に手を貸した事や、候補生であるセシリアに対する訓練メニユーの作成、ならびに訓練相手の提供などである。一夏たちのお陰で、セシリアも偏向射撃を習得するまであと一歩というところまで成長したので、この貸しはかなり大きいものであると、イギリス政府側も思っているで、この交渉はイギリス政府側にとつてもありがたい話になるだろう。

「まあ、一番の問題は、サラ・ウエルキンが母国の代表を諦め、ギリシャに国籍を変えることを認めるか、ですけどね」

「最終的には個人の判断ですものね」

壇上で刀奈が説明を続ける中、一夏と虚はそう結論付けて大人しく舞台袖で刀奈の説明している姿を見守ることにしたのだった。

一夏の説得

一夏と虚がそんなことを考えてるなど露知らず、サラ・ウエルキンはセシリアの特訓に付き合っていた。

「もう少しでコツが掴めそうなのです。申し訳ないですが、今日もよろしくお願いしますわ」

「付き合うのは構わないんだけど、訓練機相手に本当にいいの？ 貴女の実力なら、織斑さんにもお願いすればいいと思うのだけでも」

「マドカさんは別の要件で忙しいですし、私はとりあえず偏向射撃をマスターして、精度を上げるのはその後でも十分だと考えていますから」

セシリアの考えを聞いて、サラは内心感動していた。サラの良く知っているセシリアはオルコットという人物は自分が一番だと過信し、人の忠告を話半分でしか聞かないような問題児だったのだ。それが今では、自分の実力と正面から向き合い、アドバイスをしっかりと聞いてそれを成長の糧としようとするほどの努力を惜しまない感じになっている。

「これも、更識君たちがセシリアの伸びていた鼻を折ってくれたからかな」

事の顛末を聞いただけだが、サラは一学期のはじめ、セシリアが日本をバカにして、更識・織斑の両方を敵に回しかけた事を知っている。なんとも自殺行為に等しい事だと、今ではセシリアも理解しているのだが、当時の彼女にはその事が分からなかったのだ。

「あら？　一夏さんに、布仏さんのお姉さん？　何か私たちに御用ですか？」

サラがそんなことを考えている時に、セシリアがアリーナにやって来た人物の名前を呼んだ。その二人はサラにとつても予想外で、動揺を隠せないまま振り返った。

「こんにちは、サラ・ウエルキン先輩。一年の更識一夏です」

「ええ、知っているわ。貴方は有名人ですもの」

「それほど目立つようなことをした覚えはないのですが」

「IS戦闘ではね。でも、敵が侵入してきた祭の的確な指示と、最高峰の整備技術を持つ貴方の事を知らないIS学園の生徒はいないわよ。それに、学園唯一の男子生徒なんだし」

最後の意見で、一夏は納得したように頷いた。IS学園は基本的に女子、または女性

だけなので、男子である自分が有名でも仕方ないとも思ったのだろう。

「それで一夏さん、本日はどのような御用で？」

「ああ、今日はサラ先輩に用があつて来たんだ。セシリアは悪いが、虚さんと特訓してくれるか」

「私で役に立てることがあるなら、遠慮なく頼ってください」

「布仏先輩が私のトレーニング相手…ですか？　なんたる光栄！　是非お願いいたしますわ！」

虚は自分がそこまでの人物だとは思っていないが、更識企業の企業代表として名高いので、セシリアの反応は当然といえるだろう。

二人がトレーニングを始めるのを見届けてから、一夏はサラを連れて屋内へと移動した。さすがに初対面の相手と二人きりというのは一夏にとつても居心地が悪いので、待機させていた美紀と合流したのだ。

「それで、天下の更識企業の方々が、私にどのような御用でしょうか？」

「別に固くなる必要はありませんよ。貴女にとつても悪い話ではないでしょうし」

「そうなの？　それじゃあ、聞くだけ聞いてみましょうか」

出されたお茶を軽く啜って、サラは一夏が何を言いだすのかを興味深そうに待っている。一夏の方も、変にもつたいぶる事は無く、要件を素早く告げた。

「フォルテ・サファイアの件は、今朝の集会で知っていると違います」

「ええ。少し話す程度だったけど、同じ候補生として気にはしていたのだけど……まさか敵側に身を落とすなんてね」

「この点については、更識の人間として責任を感じている次第です。まさか国の威信より恋人をとるとは……彼女がどれほど本気だったかを見定められなかったのはこちらの落ち度です」

「それで？ 私に謝罪するだけじゃないんでしょう？」

「そうですね。まあ、完全に関係ない訳じゃないのですが……サラ・ウエルキンさん。自由国籍を使ってギリシャの候補生——いえ、代表になりませんか？」

一夏の申し出に、サラは完全に虚を突かれすぐに返答出来なかった。

「……いきなり代表って、私はまだ専用機も持ってない候補生よ？」

「その事は決まってから詳しく話しますが、どうも現ギリシャ代表の人が、フォルテ・サファイアの師に当たる人のようでした、責任を取って代表を辞すと言っているらしいのですよ。そこでギリシャは、代わりの代表を探す事になり、今回の原因に関わっている

我々更識に、有望な人材を斡旋してほしいと」

「でも、私はイギリス代表候補生としてのプライドが……」

「その事ですが、このままいけば、次期代表はセシリアで確定でしょう。敵に寝返った篠ノ之が良い感じでセシリアを刺激したお陰で、ここ一ヶ月での成長速度は学園内でもトップクラスです」

「そうね」

サラも薄々は感じていた、自分は代表になれないのではないかという懸念が、一夏の口から告げられたことによつて、より現実味を帯びてきた。

「イギリス政府側との話し合いは、我々更識とギリシヤ政府で行いますので、サラさんはその事を気にする心配はありませんよ」

「……ちよつとだけ、考えさせてもらえる？ そう時間はかからないと思うから」
「当然ですね。即断即決なんてされたら、こちらが考え直すところでしたよ」

人の悪い笑みを浮かべながら、一夏が席を立つ。決まったら連絡してほしいと電話番号の書かれた紙を渡され、サラは無意識にその紙を受け取ってしまった。

母国が代表の地位かで頭を悩ませることになったのだが、サラは意外と悪い気はしな

か
つ
た
の
だ
つ
た
。

サラの悩み

一夏との話し合いを終えたサラは、とりあえずアリーナへと向かっていた。自分が敵になるかもしれないとセシリアに告げ、相談する為だ。

「あら、ウエルキンさん。一夏さんとのお話は終わったのですか？」

「ええ、一応は……布仏先輩、ちよつとオルコットと二人にしてもらいたいのですが……」

「構いませんよ。一夏さんからそう言ってくるだろうと聞いてますから」

サラは、そこまで一夏が読んでいた事に驚いたが、虚としては、これくらい一夏が読んでいると思つてなかつたサラに驚いた。

「どうかしたのですの？ 一夏さんのお話ですから、それほど悪い事ではないと思つていたのですが……随分と深刻そうな顔をしていますわね」

「もしかしたら、オルコットの特訓に付き合えなくなるかもしれない話だったからね」

「そうなのですか？ ですが、私の事よりも自分の事を優先にしてくださいの方が、私も嬉しいですわ」

セシリアの申し出に、サラは驚きを隠せずしていた。あの自己中心的な考えしか出来なかつたセシリアが、まさか自分の事を考えてくれていたなどとは思つていなかつただ。

「それだつたらちよつと相談に乗つてもらいたいんだけど、私が他国の代表になるとしたら、貴女はどう思う？」

「それは、例の亡国機業とやらが関係しての事ですの？」

「ええ。フォルテ・サファイアがいなくなつたことで、ギリシャの代表が引退を表明したらしいのよ。その人に次ぐ実力者だつたフォルテはいなくなつて、国にも目ぼしい候補者がいないらしくて、更識企業に人材の斡旋を頼んだらしく、それで私に白羽の矢が立つたのよ」

「では栄転ではないのですの！ 何を悩む必要があるのですか」

「栄転つて言われても……私に務まるのかどうか心配で……何せ専用機も持たない身としては、専用機持ちの代わりなんてとてもじゃないけど……」

そう、サラが気にしているのはその点であつた。代表を退くと言つても、国の防衛などでISは必要になるだろう。だからギリシャからコアの提供を受けられる可能性は

極めて低い。加えてフォルテ・サファイアもコアを持つて行ったままなので、ギリシャにコアが余っているかどうかも疑わしい。

そんな状況で専用機を持たない自分が代表になったとして、国の威信をかけた戦いで勝てるとも思えないのだ。

「でしたら、その辺りも一夏さんに相談してみてはいかがでしょう。一夏さんでしたら、コアを造れる更識の人間ですし、篠ノ之博士とも連絡が取れるでしょうし」

「でも、どちらにしても他の国からは文句が出そうなんだけど……」

「それくらいでしたら、一夏さんの話術でどうとでもなりますわ！ さっそく一夏さんに相談してみましよう」

「えっ、ちよっ!?!」

セシリアに引つ張らながらも、サラは自分が専用機を持つことが出来たらと考えてしまい、抵抗する事を忘れてしまったのだった。

生徒会室で書類整理をしていた一夏の許に、セシリアとサラがやって来たせいでおかげで？——刀奈は生徒会室から追い出されてしまった。

「まあ、イギリスに関する話だし、日本代表の私がいたら出来ない話もあるんだろうな」
おおつぴらに仕事をサボる口実が出来た事に浮かれながら、刀奈は妹の部屋を訪ねることにした。

「ヤッホー！ 遊びに来たよ、簪ちゃん」

「お姉ちゃん？ 今日生徒会の仕事が出来たって言ってなかった？」

「そうなんだけど、生徒会室が使えなくなっちゃったから、急ぎの仕事は一夏君がやってくれるってさ。残りは明日やればいいって」

「生徒会室が使えなくなつた？ どういうこと？」

刀奈は簪に事情をかいつまんで説明し、簪の隣に腰掛けた。

「そつか……一夏も大変だね。国同士の問題に介入しなければいけないなんて」

「更識の次期当主だもんね。仕方ないって……それに、今回は私たち更識の見立てが甘かつたって事も関係してるんだと思うよ」

「まさか国を裏切るとは思わないって……ダリル先輩はまあ、前からマークしてたから仕方ないけど、フォルテ先輩はね……一夏でも想像してなかつたと思うよ」

簪はそこで、姉が何かを探しているのに気づき、とりあえず肩を掴んで止めさせた。

「なに探してるのよ」

「いや、簪ちゃんもお年頃だから、お宝本でもあるかなうって」

「お宝本ってなに？」

「男子高校生なら、女の人がいっぱい載ってる本とか」

「私女子高生なんだけど？」

「うん、だから簪ちゃんの趣味を知ろうと探ってたんだけど……」

何もなかったわね、とつまらなそうに告げる刀奈を他所に、簪は見つからなかった事に安堵していた。別にイヤラシイものは持つていないのだが、年頃の女子として、特撮ヒーローの本を持つているというのは少し恥ずかしいと簪も思っているのだった。

「ところでお姉ちゃん。遊ぶって言っても何するの？」

「簪ちゃん、ゲーム持つてるでしょう？　それで遊ばない？」

「二人で？　しかもお姉ちゃんと？」

「何よう！　確かにお姉ちゃんじゃ、簪ちゃんの相手にならないかもしれないけどさー」

刀奈が唯一素直に簪に負けていると公言するのが、ゲーム関連だ。刀奈も決して弱い訳ではないのだが、それ以上に簪が強いのだ。

「仕方ない、本音とか美紀とかにも電話してみるよ」

「今日は特訓もしてないし、来れると思うわよ」

一夏の護衛には碧がついているし、アリーナは別グループが使用中なので、美紀も本音も暇を持て余しているはずだと決めつけ、刀奈は二人がくるのを楽しみに待つことになったのだった。

決定的証拠

死屍累々となりながらも、誰一人脱落することなく拠点に戻つてこれたことに、スコールは安堵した。そしてダリル・ケイシーことレイン・ミューゼルが合流した事も喜ばしい事だった。

「本当なら修学旅行襲撃の際に合流する予定だったのにね」

「まさか誰一人殺ることなく撤退するとは思つてなかつたわよ。まあ、あの鉄壁の三人がそつち二人についたら無理よね」

「ああ。織斑姉妹に小鳥遊碧がオレたちを見張つてたとは」

レイン・ミューゼルが普通にスコールとオータムと会話している横で、フォルテ・サファイアは居心地の悪さを感じていた。

「フォルテ、どうかした？」

「ううん……本当にダリルは亡国機業の人間だったんだなつて思つて……」

「ところで、こいつ誰だ？」

今更ながらフォルテに気付いたオータムがレインに尋ねる。

「誰って、私の恋人よ。私がこつちに戻る際、学園に残るか一緒に来るかで悩んで、結局は私と一緒に来てくれたギリシャの代表候補生よ」

「フォルテ・サファイアです、よろしくお願いします」

「代表候補生って事は、それなりに戦力として期待できるな。SHは最初は本当に使えなかったからな」

「何を！ 私だって頑張って戦力になるようにしただろ！」

「今回だって、お前がもう少し引き付けてくれれば余裕で逃げたのに、あっさりとやられやがって」

「いくら私でも、数の暴力には勝てないからな。一対一なら負けなかっただろう」

根拠のない自信に、オータムは呆れたように箸を見つめ、軽く首を振って視線をフォルテへ移した。

「こちら側へ来たって事は、もう表の世界に戻ることは出来ねえぜ？ 覚悟は出来てるんだらうな」

「分かってます。それでも私は、ダリルと一緒にいたかったです」

「随分と愛されてるな、レイン。お前ってレズだったんだな」

「あら、貴女に言われたくはないわよ、オータム。貴女だつてレズなんでしょ？」
「オレはレズじゃねえ！ ただ好きになつたのがスコールだつたつてだけだ」

お決まりの返しに、レインは呆れたように笑みを浮かべた。

「この五人の中で、唯一異性が恋愛対象になつてるのが篠ノ之箒だつていうのが可笑しいわね」

「何がだ？ 私はごく普通の恋愛感情で一夏の事を想つてるだけだ」

「普通の恋愛感情ねえ……ストーリーカーが普通だと思つてる時点で異常だと思つてよ」

レインの言葉に、箒はいつも通り痙攣を起し、殴り掛かりそうになつたところでスコールが軽く手を打った。

「次の襲撃まで、私たちはまず怪我を癒し、回復した人から更なる高みを目指して特訓するということだ。IS学園との繋がりが無くなつちやつたから、VTSのバージョンアップは見込めないけどね」

スコールの言葉に四人は頷き、それぞれの部屋へ向かつたのだが、特に部屋が決められていないフォルテは、レインの後ろに続いて一緒の部屋で休むことにしたのだった。

襲撃を退けた後、千冬は束に電話を掛けていた。

「お前の読み通り、やはり箒は特攻を仕掛けてきたな」

『単細胞で猪武者の箒ちゃんだからね。圧倒的に自分が優位だと思ってる隙に攻めれば』

勝てるって』

「一夏もそう考えてたから、私たちを箒に当てずに向こうの主力に当てたんだろうな」
『ちーちゃんたちがそつちを相手すれば、間違つても来客に被害が及ぶことも無いからね』

東の考えを一夏に伝えたから、自分たちが敵戦力に当てられたと千冬は思っていた。だが東は、自分が何も言わなくても一夏ならその考えに至つただらうと思つている。

「それよりも、お前の妹の所為で、また面倒ごとが増えたぞ」

『箒ちゃんの所為だつていつても、私が関係してるわけじゃないよ？ 箒ちゃんがあんな性格なのは、箒ちゃんが元々残念な頭だつてただけだよ』

「お前を反面教師にした結果だと思ふが？」

東は昔から頭が良く、周りとの違いを自覚し、出来る限り他人と関わろうとはしなかった。箒はそれを見て育つたはずなのに、東の経験を何一つ生かす事は出来ずに成長し、頭脳だけは東と真逆で、それ以外は東と大差なく育つてしまったのだった。

『人間関係においても、東さんを反面教師にすればよかつたのにね』

「自覚してるのなら、お前も少しくらい改善したらどうだ？」

『無理だね。もう東さんは他人を認識出来ないくらいまで他人と違っちゃったから』
「はあ……とにかく、カメラに映ったからこれで全世界に箒が亡国機業に加入したと納得させられるだろう。お前の妹っただけで、国際指名手配を拒否られたんだからな」
『東さんがそうしろって言ったわけじゃないし、おバカな奴らが箒ちゃんをどうにかしたいって考えただけでもね』

既に箒に対する興味を失いつつある東は、箒が国際指名手配されようがどうでも良いのだ。

『東さんはちーちゃんとなっちゃん、いっくんとまーちゃん、後はクーちゃんがいてくれればそれで満足なので、箒ちゃんがどうなるうが報告してくれなくていいよ』

「それはつまり、こちらで殺そうが気にしないと言う事だな？」

『自分の意思でちーちゃんたちの敵になつたんだから、ちーちゃんたちに殺されようが自己責任だよ』

冷たいように感じられる東の言葉だが、千冬たちを敵に回すと言う事はそう言う事なのだも理解しているだろうと東は思っていた。

実はそんなことを箒が考えてもいないなど、東には思いもよらなかつたのだった。

揺れる思い

サラがギリシヤの代表を引き受けた時の為に、一夏はギリシヤ政府との交渉を進めていた。

『つまり、更識でコアは用意してくれると言う事か？』

「今回はこちらの落ち度ですし、それくらいなら他国も納得すると思いますよ」

『出来ればそちらで専用機も用意してくれば最高なのだが』

「そこまでは出来ないと思いますよ。既にフランスの候補生にI Sを提供してるのですから、これ以上日本以外の代表にI Sを提供するのは日本政府が良い顔しないと思います」

一夏が告げた心配事に、ギリシヤ政府の人間は頷き肯定した。

『だが、日本政府が力を貸さなかった所為で、我が国の有望株が闇組織に身を落としたのだ。それくらいの我が儘は通してもらってもいいのではないか？』

「その辺りは我々ではなくそちらが交渉してください。許可が出れば、我々はI Sを提
供させていただきますよ」

一夏としても、IS学園所属の専用機持ちが二人も減ってしまったので、更識所属の人間が増えるのであれば歓迎するつもりだ。だが日本政府がこれ以上他国に更識所属を増やすのに良い顔をしないと考えている。更識は日本政府とは深い関係ではないのだが、日本の企業なので他国に技術提供するのは面白くないのだろう。

『フランスの候補生はそちらが買収したデュノア社所属という事にしてあるのだから？
だったら、我が国の企業を買収してくれても構わない』

「そんなポンポン企業買収したら、他の企業から敬遠されてしまいますよ。いくら世界トップの企業とはいえ他の企業との繋がりが無くなるのは困るんですよ」

『なるほどな。ではやはり、我々が日本政府を説き伏せる必要があるのだな』
「更識製の専用機が欲しいのでしたら、そうしてください」

一夏からの忠告を受けて、ギリシャ政府の人間は苦笑いを浮かべながら通信を切った。

「やれやれ……ギリシャ政府も色々と考えてるんだろうが、高校生に説き伏せられるのは考えなければいけないな」

「一夏君相手に口で勝てる人間なんていないわよ。そもそも一夏君がそういう風に動く

ように仕向けてるのに」

「俺が日本政府と交渉すると、余計な軋轢が生まれる可能性がありますからね」

「高校生が気にするような事じゃないんだけどね」

「仕方ないですよ。銀の福音の解放の際だって、更識が間に入った事で許可してもらったんですから。これ以上日本政府にIS学園関係を優先してもらうのも他の企業に悪いですからね」

「さすが外交担当ね」

「卒業して、代表を引退したら刀奈さんにしてもらいますけどね」

一夏が人の悪い笑みを浮かべると、刀奈は苦笑いを浮かべながら視線を逸らしたのだった。

一夏が裏で色々と手を回している間、サラはイギリスからギリシヤに国籍を変えるかどうかで頭を悩ませていた。一夏に言われた通り、このままいけばイギリス代表はセシリアになるだろうし、自分がペア戦に向いていないのも自覚している。

だからと言って、ここまで育ててくれたイギリスを出て、敵国の代表になると決断するのは、十六、七歳の女子高生には重いものだった。

「自分の為を考えるなら、更識君の申し出を受けるべきなんだろうけども、イギリスには恩もあるし、生まれ育った国を裏切りのは……」

別に自由国籍を使って他国の代表になったからと言って、裏切り行為と言う人間が全

てではないのは理解しているつもりだった。だがいざ自分がその立場になるかもと考
えると、全ての人間が自分の事を裏切者と指差すだろうと思つてしまつてゐるのだ。

「オルコットは望むところつて言つてくれるけど、やっぱり断つた方が良いのかな
……」

サラが頭を悩ませるところに、噂話を聞きつけた黛薫子がやつて来た。

「こんにちは、サラさん。ギリシャ代表にならないかつて話があるようですが、それは事
実ですか？」

「何処から聞きつけるのよ……この事はまだ公に発表されてないんだけど」

「ジャーナリストを舐めないでちょうだい。こんなにおいしいネタを聞き逃すわけない
でしょ。オルコットさんに相談してるところを偶然見かけてね。ちよこつと盗み聞き
させてもらったのよ」

「普通に怒られるわよ、それ……後で更識君に伝えておくわ」

「それは止めてくれる!? ちゃんと決定するまでは口外しないから」

一夏の名前が出た途端、薫子は焦つたように詰め寄つてきた。

「まあ、断ろうとも思つてるから、そこまで泣きそな顔ををする必要は無んだけど」

「えっ、断つちやうの？　せつかく代表になれるかもしれないのに？」

「だって、いくら認められているとはいえ、母国を裏切るのは……」

「裏切る？　栄転じゃない。そんなに難しく考えないで、自分が代表になりたいかかなりたくないかでいいんじゃないのかな？　サラさんは実力はあるんだから、オルコットさんと戦つてイギリスの代表になるか、ギリシャ代表になつてオルコットさんと戦うかのどっちかを選べばいいだけよ」

簡単に言つてのける薫子を見て、サラは苦笑いを浮かべた。結局は戦うのなら、国を懸けて戦うか、国の代表を争うかの二択だと思ひ知らされた。

「ありがとう、薫さん。もうちよつと悩んでみるわ」

「役に立ったなら幸いだわ。だから、盗み聞きしたつて事は更識君たちには内緒にしてね」

「分かつたわ」

薫子が誰を恐れているのか知っているサラは、笑みを浮かべて薫子を見送つたのだつた。

サラからの質問

さんざん悩んだ結果、出てきた疑問を一夏に聞いてから決断しようと思った。善は急げということ、そう決めてすぐに一夏の部屋を訪ねた。

「夜分にすみません、更識君」

「構いませんよ。結構夜行性な部分があるので、時間は気にしなくても良いですよ」

書類整理をしていたのか、一夏の背後には紙の山が出来ている。だが隠そうともしないのを考えると、サラが見ても問題は無いものなのだろう。

「ルームメイトは？ 確か四月一日さんが一緒だったよね？」

「美紀なら今、更識所属の面々と一緒に風呂に行つてますよ。どうやら反省会をするからという理由で、消灯後に風呂に入れるように織斑姉妹と交渉しましたし」

「そうなの？ っつて、反省会ってなに？」

サラから見れば、更識所属の面々の動きは完璧で、反省する箇所など無いように思っていた。だが刀奈たちには反省点が多くあるようで、誰の耳も気にすることなく反省す

るには、消灯時間以降の方が安心できるのだ。

「ちなみに、今日サラ先輩がくるかもしれないって事も織斑姉妹には言っておりますので、そんなにびくびくする必要は無いですよ」

「そうなの？ てか、何で私が入るって分かってたの？」

「香澄の専用機、久延毘古の特殊能力ですよ。未来予知とでも言えば分かりますかね」

「すつごく便利そうね、その機能」

「その分処理しなきゃいけない情報が多すぎて、普通の人間には使えませんけど」

苦笑いを浮かべながら、立ち話もなんだからと一夏が言いだし、サラを部屋に招き入れた。

「今更だけど、その書類って私が見てもいいものなの？」

「じっくりと読まれるのは困りますが、完全記憶能力があるわけじゃないんですし、構いませんよ」

「そんな能力があるなら、私だってもっと成績上位に名を連ねてるわよ」

別に頭が悪い訳ではないが、一夏や刀奈のようにほぼ全教科満点の化け物と比べればと思っているのだった。

「代表に必要なのは操縦技術ですから、そこは気にし過ぎな気がしますね」

「慰めは良いわよ。それで、質問が幾つかあるんだけど、良いかしら？」

「構いませんよ」

コーヒーをサラの前に置き、自分の分もテーブルに置いて一口啜った。

「砂糖とかミルクは使います？」

「少しだけもらえる？」

自分はブラックで飲むので、一夏は最初から砂糖やミルクを用意していなかった。何時までも飲むうとしなかったので、漸くブラックでは飲めないのかと気が付いたのだ。

「虚さんもブラックで飲んでるので、すっかり失念していました」

「構わないわよ。更識君は大人の世界で生活してるから、ブラックで飲むのが当たり前だったんだよね」

笑顔で砂糖とミルクを受け取り、サラは一夏をフォローするコメントをする。一夏もフォローされていると自覚し、気恥ずかしそうに頭を掻いた。

「それで、質問とは？」

「まず初めに、ギリシャ代表になるにあたって、イギリスと軋轢が生まれるとか言う事はないわよね？」

「大丈夫ですよ。その辺りは既に交渉済みですので。サラ先輩が移籍したというなら、イギリス政府は素直に出すと言ってくれています」

「そう……仕事が早いわね」

引き留められないと知り、サラは少し寂しいと思つてしまった。自分が実力的に劣るのだから、セシリアが残るのなら自分などどうでも良いのだろうと思つてしまったのだつた。

「素直に認めてくれたわけではありませんよ。セシリアをより更識で鍛えるという条件で、サラ先輩の移籍を認めてもらつたんです」

「フオローしてもらうとは……先輩失格ね」

「さつきフオローしてもらつたんで、これでトントンです。それで、他の質問は？」

「ギリシャはコアを一つ失つたわけだけど、そのあたりはどうなるの？」

「こちらの落ち度なので、更識で一つ用意する事で話が付いています。もしサラ先輩が望むのでしたら、専用機製造は更識が受け持ちますが」

この提案は、サラにとつても嬉しいものだった。専用機が持てるというだけでも嬉しい事だが、その専用機が更識製となれば、そのうれしさは数段跳ね上がる。

「是非お願いします」

「分かりました。ギリシャ政府に連絡を入れておきますので、追々希望などを聞きに行きますね」

一夏が簡単に受け入れたことに疑問を覚えながらも、彼が開発・営業担当であることを思いだして確かめる事はしなかった。

「では最後に、私はギリシャに移籍するとして、ギリシャ国内から不満が出たりしないの？」

「フォルテ・サファイアが次期候補筆頭だったので、それ以下の候補を代表に上げるより、他国から有力者を引っ張ってくる方が効率的だという声が多いようですので、その辺りは問題ないですよ」

「そう、分かったわ。じゃあ更識君、私の移籍に関する手続きを進めちゃっていいわよ」
「分かりました。ではサラ先輩、この書類に目を通して置いて、署名とハンコが必要なものもありますので、それもしておいてください」

「分かったわ。てか、準備早いわね」

一夏から手渡された書類の束を見て、サラは苦笑いを浮かべながらそんなことを呟いた。

「移籍するという事を確信していました——というか、知ってましたから」

「ああ、未来予知ね」

更識企業が造りあげた技術を思い出し、サラはもう一度苦笑いを浮かべて部屋から出て行ったのだった。

姉の信頼

一夏の迅速な働きによって、翌日にはサラ・ウエルキンの国籍はイギリスからギリシャへ変更された。それに伴い、サラ・ウエルキンの肩書は「イギリス代表候補生」から「ギリシャ代表」に変更された。

「まさか半日も経たずに国籍が変更されるとは思つてなかつたわよ」

「一夏君の仕事は早いからね。これでサラちゃんも完全に私の敵になつたわね」

「敵？ どういう意味よ」

同級生の刀奈からの発言に、サラは首を傾げた。別にサラは亡国機業に身を落としたわけではないので、敵と称されるのは心外だったのだ。

「だって、サラちゃんはギリシャ代表になつたわけでしょ？ 私は日本の代表なのよ？」

「国際大会では敵同士でしょう」

「あつ、そつちね……自分が代表つて実感がまだないから、敵つて言われると亡国機業の事かと思つちやつたわ」

「しつかりしなさいよね。多分今日中に一夏君が専用機の希望を聞きに来るだろうか」

ら、そっちの覚悟もしておいた方が良いわよ」

「更識製の専用機を持てるって言うだけで夢見心地なのに、希望まで聞かれたらさすがに実感が持てるかもね」

ギリシャ政府と更識からの説得を受けて、日本政府もサラの専用機を更識企業が造ることを認めたのだった。

「いったいどんな交渉をしたのかしらね」

「一夏君の交渉は、一度見たら忘れられないから……見ない方が良いわよ」

何故か視線を逸らした刀奈を見て、サラは首を傾げる。義弟の交渉術を知らないわけはないだろうと思つているので、サラは何とか聞き出そうと思つたが、刀奈からにじみ出る「これ以上踏み込まない方が身のためだ」という空気を受け、結局何も聞き出せなかった。

「サラちゃんは遠距離主体でしょ？ きつと厄介なんだろうなーって思つただけだから、普段から敵対する意思は無いから安心して」

「そもそも更識さんと敵対関係になつたとしても、私が勝てるとは思つてないから大丈夫よ」

「最初っから負けるって思ってたらもつたいいわよ。私も負けるつもりなんてないけど、絶対に勝てるなんて思ってたないんだから」

慢心していると隙が生まれると言う事を、虚や一夏から散々言われてるので、刀奈は常に相手の事を見下さないように心がけている。だからではないが、セシリアやラウラ、鈴といった候補生たちのデータも常に頭に入れているのだ。

「もちろん、訓練相手が欲しいなら私たちも手伝うから、その辺りは気にしないでいいわよ」

「確かに更識所属には、日本の代表や候補生以外にもいるからね。その辺りはありがたいわよ」

イタリア代表候補生からフランス代表候補生に変更したエイミイもいるので、サラもその点は安心している。でも訓練相手の質が高すぎるので、そこで自信喪失しないかと心配しているのだった。

「さて、これで更識所属の層がまた厚くなるから、引退したとしても更識の力は安泰ね」
「女子高生がそんなこと考えてるの？」

「一応暗部所属だからね。一夏君なんて、その次期当主なんだから、私以上にこんなこと

を考えてるんだからね」

更識が暗部組織だと思いだしたサラは、自分はとんでもないところに足を踏み込んだのではないかと後悔し始めたのだった。

専用機製造に向けて、一夏は織斑姉妹に授業を休むかもしれないと言う事を報告しに職員室を訪れていた。

「やはりお前が最終調整などをするのか」

「更識の技術者を大量にＩＳ学園に連れて来るわけにはいきませんし、こういった細々した作業は俺が一番得意ですからね。もしかしたら簪にも手伝わってもらうかもしれませんが」

「そう言う事なら仕方ないだろう。一応公欠と言うことにするが、終わり次第補習を行うからな」

「それで構いません。それと同時に、生徒会に仕事を回しても俺は処理出来ないで、ご自分たちで処理してくださいね」

「お前はわたしたちをバカにし過ぎだ。最悪真耶にやらせるから問題ない！」

「その発想が既に問題ですけどね……」

初めから真耶に投げることで前提で話す千夏に、一夏は盛大にため息を吐いた。

「大丈夫よ、一夏さん。ちゃんと私が見張ってるから」

「碧さんが見張ってくれてるなら安心ですけど、碧さんも訓練の相手やご自分の仕事が

あるでしょうし、織斑姉妹の監視だけをやるわけにはいかないですよね？」

「私はそこまで仕事を溜め込んでないし、虚ちゃんに相談しながら訓練の相手をしてるから問題ないわよ」

「一夏……実姉より小鳥遊の方を信用するの？」

「当然ですよね？　むしろ何故貴女たちの方が信用されていると思ってるんですか」

どれだけ自分たちが信用されていないかを思い知らされた千冬と千夏は、ガックリと膝から崩れ落ちた。だが一夏は二人に目もくれずに、一礼して職員室から出て行った。恐らく二年の教室に向かったのだらうと理解し、碧は崩れ落ちた二人に声を掛けた。

「少しくらい一夏さんに信用されるように動いたらどうですか？」

「私たちだつて頑張ってるんだが、それ以上にダメな部分が目立つらしいんだよ……」
「お姉ちゃんらしく振る舞ってるつもりだったのだが、それが逆効果だったんだよな……」

口から煙が出てる幻覚が見えるくらい、織斑姉妹の周りの空気が淀んでいた。碧は苦笑いを浮かべながら、この二人が信頼を勝ち取る日は来るのだろうか、別の事を心配していたのだった。

マドカVSラウラ

一年一組の教室では、一夏がまだ教室に来ていない事が話題になっていた。それと同じに、サラ・ウエルキンがギリシャ代表になった事も話題に上がっていた。

「一夏さんがまだ来ていないのと、サラのギリシャ代表決定と、何か繋がりがあるのかしら」

「お兄ちゃんは凄い人だからな。きつと関係あるのだろう」

「だから、お前が『お兄ちゃん』って呼んでいい相手じゃないと何度言えば分かるんだ！」

ラウラとマドカの、ある意味いつも通りのやり取りを横目に、セシリアは一夏が教室に出来ない理由を知っているであろう美紀に声を掛けた。

「美紀さん、一夏さんはやはり、サラの専用機関係で休むのですか？」

「サラ・ウエルキンさんの専用機は、我々更識企業が担当する事になりましたからね。一夏さんは色々と責任のある立場ですので、授業より優先しなければいけない事が出来たら休むということになっています」

「僕も手伝えればいいんだけど、僕は技術面は全くだからね。しかも子会社の社長って

「ただだから、一夏程の権限ないし」

「それでも十分凄いなと思いますけどね」

「同い年で、子会社とはいえ更識企業で社長職を任されているのだ。セシリアから見ればシャルロットも相当偉い部類になるだろう。」

「でも、サラ先輩がギリシャ代表になったということは、セシリアが次期イギリス代表に内定したってことじゃないの？」

「一夏さんたちのお陰で、偏向射撃も三回に一回は成功するようになりましたし、後は精度と確率を高めていくだけですからね。サラも実力はありますから、競い合っているのも良かったですが、やはり一緒の大会に出たいですから私も頑張らなければいけませんわね」

「慢心せずに更に高みを目指すとは、やっぱりセツシーはいつちーの影響を受けてるんだね」

「おはようございます、本音さん。もちろん、一夏さんに喧嘩を売った時の私を殴り飛ばしたいくらいですわ」

入学早々一夏をバカにして危うく更識に存在を消されかけた記憶があるセシリアは、

どれほどあの時の自分が愚かで凶に乗っていたかを自覚している。

「ところで美紀ちゃん、いっちは今日来ないの?」

「昨日刀奈お姉ちゃんから聞いたでしょ? 一夏さんは専用機の製造の為に授業は出れるときだけ出るようになるって」

「まあ、いっちーが一番考えるのが早いし、他の技術者をI S学園に呼ぶわけにもいかなもんね。いっちーは大変だ」

さすがの本音も、一夏が一人で専用機を造ると言う事をバラす事はしない。もしバラしてしまつたら、余計に一夏の自由を奪う事だと自覚しているからであり、すなわち自分が一夏といられる時間が減ると言う事を考えているからである。

「私たちに指導してもらつてるだけでも忙しそうでしたのに、専用機製造にも関わるなんて、やはり一夏さんはI S業界において重要な人なのですわね」

「いっちーは篠ノ之博士に次ぐ重要人物だからね。だから護衛も大変なんだよ」

「……その護衛のはずの本音が信用出来ないから、私も護衛になつただけど?」

美紀の冷たい視線が本音に突き刺さるが、本音はそれには動じず一夏の席を眺めていた。

「いっちーがないって事は、授業が脱線したら大変だね」

「山田先生も、少しはマシになってきたけど、やっぱり年が近いって事が問題なのかもね」

「分かりやすいんですけど、相川さんたちの質問で脱線していきますものね……」

たまにおかしな質問もするので、そこから脱線していくことが多い真耶の授業だが、基本的にはしつかりと説明されているので、生徒の間では好評なのだ。だから真耶も頑張って授業を進めようとしているのだが、頑張れば頑張るほどから回るのだ。

「織斑先生たちがいれば、びしっとした空気になるんですけどね……」

「あの緊張感は逆に頭に入らなくなるんですよ……」

「少しでもお喋りすれば、即制裁って空気だもんね〜」

一夏がいればまた違う空気なのだが、基本的に織斑姉妹は授業妨害には制裁を加える感じなのだ。

「だいたい、後から出て来てお兄ちゃんの妹面をするんじゃない!」

「後から!?! 私生まれ時から兄さんの妹なんだよ! そっちこそ兄さんに馴れ馴れしくするなんて! なにが『お兄ちゃん』だ! たまたまISが暴走して兄さんに助け

てもらって、それで甘えるようになるなんて、随分とチョロインじゃないの?」
「お二人とも、何時まで喧嘩してるんですの?」

ラウラとマドカの喧嘩にツツコミを入れたセシリアに、二人とも強い視線を向けた。
「お前だって、お兄ちゃんに負けてあつさり態度を変えたんだろ? だつたら私の気持ち分かるだろ」

「お前も兄さんに色目を使ってるのか!? てか、兄さんの魅力は凄いんだな……って、感心してる場合じゃなかった! 美紀、本音、この雌猫を退治するのを手伝ってください」
「お前たち、何時まで騒いでるんだ! もうとつくにHRの時間になつてるぞ!」

「ね、姉さん!」

「学校では織斑先生、もしくは千冬先生だ馬鹿者!」

マドカとラウラは千冬の愛の出席簿アタックを喰らい、しょんぼりとしながら自分の席へと戻っていく。そして千冬は、当たり前のような顔で一夏の席に座り、千夏と喧嘩を始め真耶を困らせたのだった。

仕事の速さ

専用機を製造するにあたって、一夏はとりあえずどういった機体にするかの考えを纏めることにした。サラはセシリアと同じく遠距離攻撃を得意とする操縦者であり、それなりに近距離攻撃も使えると聞いている。もちろん遠距離主体の機体にするからといって、近接武器が皆無では問題なので、当然近距離武器も搭載するつもりだ。

問題はその武器をどうするかである。イギリスから移籍したからといって、イギリスで学んだ事を全て捨てる必要は当然ない。だがギリシャの闘い方は、中世をイメージしているのか近接戦が多いのだ。そこになじませるか、それとも自分の得意な戦い方をさせるか、そこはサラの意思を確認しなければ決断出来ない。もちろん、ギリシャ側も戦い方を強要する事は出来ないので、おそらくは遠距離主体の機体になるだろうと考えていた。

「……ところで、何でお前は人の姿なんだ？」

「碧さんや美紀さんは授業ですからね。今は私が一夏さんの護衛と言う事になってるんですよ。だから人の姿でひと時も離れないようにくっついていてくれるのです」

「作業し辛いから離れる。だいたい、こんなにべったりとくっついてたら、いざという時

に動きにくいだろうが」

いくら護衛だからと言っても、美紀や碧、本音でさえもここまでべったり、と言う事は無かったのだ。まあ元々が一夏の専用機で、待機状態の時はべったりなのだから、この距離間でも仕方ないのかもしれないが。

「仕方ありませんね……実は私、一夏さんから一定距離離れると力が出ない体質なんですよね……」

「取って付けたような理由でこの距離を正当化しようとするな。そもそも体質もなにも、お前は人間ではないだろうが」

「まあ、私はISなので、体質とかないんですがね」

一夏のツツコミを受けても、闇鴉はケラケラと笑いながら一夏との間隔を広げた。

「お前は何がしたいのか、相変わらず分からないな……」

「一夏さんは人間が考える事は理解出来るでしょうが、私のようにISが考える事はそんな簡単に理解出来ませんよ。心は覗けても、全てを理解する事は今のところ無理ですよ」

「待機状態の時は簡単に分かるんだがな……」

「この姿での私は、一夏さんでも私の考えは見抜けませんよ」

自信満々に胸を張る闇鴉を見て、一夏はため息を吐いて視線を闇鴉から逸らした。

「ところで一夏さん。サラさんの専用機の名前ですが、今まで通り日本神話から取るのですか？ それとも、ギリシャ代表ということで、あちらの神話から取るのですか？」

「まだそこまで考えてない。まあ、サラ先輩がどんな機体を望むかによって、どういった能力を持たせるかが代わるから、決めるならそれ以降だな」

イギリス政府からもらったサラのデータを眺めながら、一夏はとりあえず数パターン
の機体の、簡単な説明書きを作り始めたのだった。

一夏から呼び出されて、サラは刀奈と一緒に一夏が主に使っている整備室へとやって来た。

「一夏君、サラちゃんを連れてきたわよ」

刀奈が声を掛けると、中から闇鴉が扉を開け二人を招き入れた。

「お待ちしていました、刀奈さん。サラさんも楽にしてください」

「えつと……この人は？」

「あつ、お初にお目に掛かります。一夏さんの専用機の闇鴉と申します。以後お見知りおきを」

「人間の姿になれるとは聞いていたけど、まさかこんなに美人だとは思ってなかったわね」

闇鴉との対面を済ませたサラは、部屋の奥にいる一夏に視線を向け、一夏もその視線を受け領き、数枚の紙を持って近づいてきた。

「わざわざこちらに来てもらってありがとうございます」

「何か聞きたいことがあったんでしょ？ 私の専用機の事についてなんだから、私が訪ねるのが当然だと思っわ」

「そう言ってもらえると助かります。まず、サラ先輩は近接重視と遠距離重視の機体、どっちが良いですか？」

まずはと言う事で、一夏はどちらを重視するかを確認する事にした。

「イギリスでは遠距離を重視した戦い方をしてたけど、ギリシャでもそつちで問題ないのかしら？」

「闘い方について、国が口を挿むことは無いので、気にしないでください」
「じゃあ、遠距離主体でお願い」

予想通りの答えに、一夏はとりあえず安心したように一息吐いた。

「一夏君、もう遠距離主体で考えてたんでしょ？」

「まあ、サラ先輩のデータを貰ってるんで、おそらくは遠距離主体で造るんだろうなとは考えてました」

「更識君が設計を担当するの?」

サラは一夏が全て造るなどとは考えていないので、一夏が設計を考えているというこ
とでかなり驚いている。

「まあ、サラ先輩に近い位置にいる製造担当の人間は俺ですからね……先輩の希望など
を出来るだけ反映させるために俺が担当してるんですよ」

「なるほど……更識君って勉強も出来て、ISの設計まで出来るなんてすごいわね。さ
すが次期当主ってことなのかしら?」

「そう言う事だと思ってる構いませんよ。それで、遠距離主体ということで、三パターンく
らい考えてあるので、この中ならどれがいいか選んでください」

一夏が書いた図面を見て、サラはそれぞれの専用機の性能などを吟味し、遠距離に重
きを置きながらも近距離戦にも対応できるタイプの専用機を選んだ。

「では、このタイプを軸として、更にいろいろなパターンを考えておきますので、また意
見を聞かせてください」

「分かったわ。それにしても、よく一日でこんなに考えられるわね」
「まあ、授業免除されてるので、これくらいなら」

苦笑いを浮かべながら答える一夏を、サラは可愛いと思ったのだった。

色々な問題

サラの専用機製造に勤しむ一夏だったが、現実問題として、ずっとその事に没頭していられるわけではない。何時亡国機業が攻め込んでくるのか分からない状況で、睡眠不足に陥るのは避けなければならないし、何よりもうすぐ修学旅行なのだ。

「一夏さん、そろそろ休んだ方が良いでしょう。今日は生徒会の仕事もしましたし、サラ先輩の専用機製造も、とりあえずの目途は立つたんですから」

「目途が立ったと言つても、まだ何も手を付けてない状況だからな。最低限、コアだけは今日中に用意しておきたかったんだが……」

「仕方ないですよ。織斑姉妹は一夏さんがコアを造れる事を知らないんですから」

生徒会の仕事が一段落し、専用機製造に取り組もうと整備室へ向かう途中で、織斑姉妹が一夏に話しかけてきたのだ。普段なら相手をしない一夏だが、今日の話は全くの無関係とはいえない内容だったので、仕方なく話を聞いていたのだった。

「篠ノ之博士が大量の無人機を用意してる、でしたっけ？」

「何に使うのか、だいたい分かるんだが、余計なお世話でしかないから電話で黙らせた

んだがな……大人しくしてくるかどうか……」

基本的に、言えば分かる相手だと一夏も理解しているの、とりあえずは安心していいのだが、たまにとんでもない事をしでかすので、全面的に安心とはいかなかったのだ。

「それに、修学旅行の事もありますからね」

「旅行なんて楽しんでる場合じゃないと思うんだが」

「仕方ないですよ、学校行事なんですから」

美紀のツツコミに、一夏はやれやれと呆れた顔で首を振る。過去の事例を見ても、学校行事が襲われているのだから、この際中止でも良いのではないかと学校側に進言したのだが、I S 学園には海外からの学生も多いので、日本観光をさせるべきだと言われ、結局は修学旅行は予定通り行われる事になったのだった。

「観光も何も、遊びに来てるわけじゃないだろうが」

「I S 操縦者の卵とはいえ、学生ですからね。偶の息抜きは必要だと思いますよ」

「息抜きばつかだと思うが……そもそも国の威信を掛けて来てるわけだろ、海外組は。日本観光なんかして時間を無駄にするくらいなら、少しでも実力を磨いてた方が良くないか？」

セシリアや鈴、ラウラといった海外組は、修学旅行を楽しみにしているとの噂を聞いて一夏は、そんなのんきな事を考えてて良いのかと思つたのだ。そもそも鈴は、数年とはいえ日本に住んでいたのだから、今更日本観光など興味ないと思つていたのだが、意外な事に修学旅行を楽しみにしているらしいのだ。

「簪ちゃんや本音も、修学旅行は楽しみにしてるみたいですし、一夏さんもその時ばかりは家の事や亡国機業の事は忘れて、楽しんだ方が良いでしょう」

「いや、他の人が忘れてるからこそ、俺がしっかりと覚えてなければいけないと思うんだが……簪や本音が楽しんでるのなら尚更な」

「さすがご当主様ですね。ですが、一夏さんもここでは学生なのですから、少しくらいは学校行事を楽しんだ方が良いと思いますよ」

「学生である前に一企業の代表だからな。そんな悠長な事はしてられない」

学生になる前から代表を務めているので、この表現は間違えではなかった。美紀もその事が分かっているのです、その事に関してはツツコミを入れなかった。

「それで一夏さん、サラ先輩の専用機は、やっぱり遠距離主体の機体になるんですか？」
「本人がそれを希望しているからな。まあ、ギリシャ側も特に戦い方を強制するつもり

は無いと言っているし、イギリスで学んだことをギリシヤに反映してもらおうとも考えているのだろうか」

「他国の情報を得るのは、何処の国も苦戦してるようですからね」

「その点、更識は無所属扱いだから情報収集が楽で助かる。まあ、何処の国にも情報を流さないという信頼があつてからこそだがな」

「日本政府が執拗に聞いてきますが、そのうち大人しくなるでしょうしね」

日本の企業ではあるが、更識は海外にも拠点を持つ大企業になっている。しかも現フランス代表候補生が更識所属で、元フランス代表候補生が更識企業の子会社の社長と言う事もあつて、フランスや近隣諸国との関係も非常に安定している。また、技術提供とまではいかないが、時折他国の企業からの相談に応えたりもしているので、どの国も安心して更識企業には自国の情報を渡しているのだ。

もちろん、国の運営などに関わることは教えないが、その辺りは当然の事として一夏も理解しているし、もし簡単にそう言った情報まで教えて来る国があつたとしたら、一夏はその国と関係を持つことを止めるだろうと彼の周りでは思われている。

「とりあえず、サラ先輩の専用機のプログラムはある程度組み終わつたし、今日はもう休

むことに——」

パソコンの電源を落とし、今日は休もうと思った一夏は、外に人の気配を感じて扉に近づいた。

「何方ですか？」

『一夏君、起きてた？ 刀奈だけど、ちよつといいかしら』

「はい、どうぞ」

気配も完全に刀奈のもので、一夏は特に警戒もせず扉を開け刀奈を部屋に招き入れた。もちろん、美紀は何が起こつてもすぐに動けるように構えていたのだが、扉の向こうには刀奈一人しかいなかった。それを確認してすぐに警戒態勢を解いたのだった。

「えつとね……ちよつと前に薰子ちゃんから頼まれてたのを、一夏君に伝えるのをすっかり忘れてたんだけどね」

「なんです？」

「今度の日曜日に、一夏君と私、そして虚ちゃんにインタビューしたいって薰子ちゃんのお姉さんが言つて来てるのよ」

「……既に承諾した後なのですね？」

刀奈の雰囲気から、既に断ることが出来ない^がと理解した一夏は、小さくため息を吐いたのだった。

一夏の愚痴

昨晚刀奈から聞かされた、黛薫子の姉が自分たちにインタビューしたいと言う事を、一夏はどうにかして断れないかと考えていた。専用機製造に時間を割く為、他の事は出来るだけ断りたいのが一夏の本音であり、それ以上に薫子の姉という時点で、一夏はうさん臭さを感じ取っていたのだった。

「一夏さん、難しい顔をしています、昨日の刀奈お姉ちゃんの話ですか？」

「いきなり言われたからな……しかも今週末だ。一分一秒が惜しい今、そんなことに付き合ってる余裕などないんだよな……」

「ですが、もう刀奈お姉ちゃんがOK出しちゃってるんですよね？ 虚さんも嫌々ながらも引き受けてるらしいですし」

「事前に言ってくれてれば、まあどうにでも出来たんだが……引き受けてしまってる以上、今更断れないだろうな」

一夏としては、一言も「引き受ける」などとやっていないのだが、刀奈が承諾の返事をしてしまってる以上、今更何を言っても無駄だろうと半分諦めている。

「そもそも、インタビューって何をするつもりなんだ？ 更識の秘密なんて聞かれても答えられるわけないって分かりそうだが……」

「I S 学園の三学年のトップにインタビューって企画らしいですよ」

「刀奈さんや虚さんは分かるが、何で俺？ 学園トップは簪か美紀だろ？」

「一夏さんは、世界で唯一 I S を動かせる男子としてインタビューしたいって事だと思えますよ」

「ああ、そう言えばそんな肩書があったな……殆ど動かしてないから、すっかり忘れてた」

「一夏さんは最近研究ばっかで、私の事を動かしてくれませんかね」

「……だから、いきなり人の姿になるのは止めろと言ってるだろ」

自分の事が話題になったのを聞いて、闇鴉が待機状態から人の姿へと変化する。相変わらずのタイミングに、一夏は少し呆れながらツツコミを入れたが、入れた一夏本人も意味はあまりないと言う事は理解出来ていた。

「それ以外にも、一夏さんは更識企業の重要人物ですからね。その点も鑑みてのインタビューではないでしょうか」

「他にも代表候補生がいるのに、何で俺なんだよ……」

自分の立場を考えれば、そう言った話があつても仕方ないと言う事は理解した。だが納得は出来ていない様子だった。

「一夏さん、決まってしまった事をいつまでもぐちぐち言っている余裕はないと思ひますよ。インタビューを出来るだけ早く切り上げ、急ぎ専用機の製造に取り組みと前向きになつた方が懸命だと思ひますが」

「……そうだな。万が一くだらなかつたら、会社ごと潰せばいいだけか」

「それはやり過ぎだと思ひますが……精々、黛先輩の秘密を全て、虚さんに教える程度にしておいた方が」

どつちも恐ろしい事を平然と言つてのけるので、闇鴉がやれやれと肩を竦め時計を指さす。

「愚痴つたり恐ろしい事を計画するのは良いですが、そろそろ教室に向かわないと織斑姉妹に怒られますよ？ 一夏さんは兎も角、美紀さんは普通に授業に出なければいけないんですから」

「そうですね。では闇鴉、一夏さんの護衛をお願いしますね」

「承知しました」

「闇鴉に護衛を任せ、美紀は急いで教室へと向かう。部屋に残された一夏は、やれやれと呟いてから立ち上がり、昨日出来なかったコア製造を済ませてしまおうと整備室へと足を進めた。

「それにしても、一夏さんがIS雑誌のインタビューを受けるのは、私も思っただけです」

「俺だつて受けるつもりは無いさ。だが、刀奈さんが勝手に話を進めてしまった以上、受けるしかないだろ？　後で刀奈さんにはしっかりと罰を与えるつもりだがな」

「相変わらず黒い事を平然と言つてのけますね。そこが一夏の良いところだと私は思います」

「これが良いところだと受け取るお前も、大概だと思うがな」

「何せ、私は更識製の専用機であり、一夏のさんの専用機ですから。使用者に感化されるのは仕方ないと思いませんか？　ましてや設計者も……なんですから」

「周りに人の気配は無いが、念には念を入れて闇鴉も機密情報は口に出す事はしなかった。た。」

「間違つても、インタビュー中に人の姿にはなるなよ。そこに興味を持たれたら余計面

倒な事になりかねないからな」

「分かってますって。私だって、一夏さん以外の人にこの姿を見せるのは御免ですからね。まあ、IS学園所属の人には、私が不審者ではないって事を知ってもらう為に仕方なくこの姿も見せましたが、不特定多数の人間が目にする雑誌のインタビュー中にこの姿になるなんて、一夏さんに頼まれたって御免ですよ」

「……そんな考えを持つているなら、何故いきなり人の姿になる癖を直そうとしないんだ」

「これはだって、一夏さんの驚いた反応を見る為ですから」

堂々と言い放った閻鴉に、一夏は呆れた視線を向ける。だがそんな視線など気にした様子も無く、閻鴉は浮かれ気分で一夏の護衛をしていた。

「もう潜入者はいないだろうから、そこまで警戒する必要は無いぞ」

「そうでしょうけども、一夏さんは色々と危ない立場なんですから、もう少し緊張感を持つた方が良いでしょうよ。まだ知られていないとはいえ、一夏さんはIS界において篠ノ之博士の次に権威だと言われているんですから」

「はいはい……あの人と同列に扱われるのはなんだか嫌だが、仕方ないと言えばそれまでだからな」

微妙に納得いかないような顔だが、一夏は闇鴉の言葉に頷き、整備室の中へと入っていったのだった。

一夏にインタビュー

コア製造を終え、専用機製造に取り掛かっていた一夏だったが、刀奈が勝手に組んだ予定の所為で、本日は専用機製造に使える時間が少なくなってしまう。せつかくの休日にも何処にも出かけないのも、もったいない話ではあるが、そもそもIS学園所属の身としては、簡単に外出する事も出来ないの、休日だろうが平日だろうが、寮で生活する生徒は少なくない。

一夏もその例にもれず、休日も基本的には寮から出る事は無い。出たとしても整備室やアリーナで作業をするくらいで、学園の敷地内から外に出る事はまずないと言い切れるくらいの生活を送っている。

そんな一夏が今日、刀奈と虚と三人で都心のビル群に足を運んでいる。理由は先に言った通り、刀奈が勝手に承諾した所為で、黛薫子の姉であり、雑誌「インフィニット・ストライプス」の副編集長でもある渚子という女性のインタビューを受けなければいけないからだ。

「まさかお嬢様が一夏さんに伝え忘れていたとは思いませんでした」

「だからそれは謝ったでしょ！ 虚ちゃんもいつまでも言わないでよ……」

「それで、その編集社というのは何処にあるんですか？ 俺は一切聞いてないので知りませんよ」

「えつと……薫子ちゃんに貰った地図だと……あつちね」

刀奈の先導に一抹の不安を覚えながら、一夏と虚は刀奈の後に続いた。一夏としてはこんな事をさつさと終わらせて、専用機製造に戻りたいのだが、自分の意思が介在していないとはいえ引き受けてしまった事だと割り切り、インタビューを受ける事を承諾したのだった。

「たぶんこの辺りなんだけど……」

「見せてください」

一夏が刀奈の背後から地図を覗き込み、辺りを見渡す。それほど詳細な地図ではないが、この辺りの特徴はしっかりとつかんでおり、確かにこの辺りのようだった。

「この路地裏じゃないですか？」

「そうみたいね……」

一夏が指差した路地裏と、地図に書かれている編集社のビルの位置が一致したのを見

て、刀奈は少し駆け足でそのビルに向かった。

「ごめんください。I S学園の黛薫子ちゃんから頼まれて来たものですが」

「いらつしやい。貴女が更識刀奈ちゃん？」

「はい。そう言う貴女は、薫子ちゃんのお姉さんですね？」

「はじめまして。『インフィニット・ストライプス』副編集長の黛渚子よ。これ名刺ね」

刀奈に名刺を渡し、刀奈の背後に立っている二人を見て、渚子はそちらにも挨拶をする。

「それで、貴女が布仏虚さんで、貴方が世界で唯一I Sを動かせる男子、更識一夏君ね？」

「更識一夏です」

「布仏虚です」

渚子に話しかけられ、一夏と虚は軽く自己紹介をして頭を下げる。

「黛渚子よ。今日はわざわざありがとうございます」

薫子同様軽い感じがする相手だと、一夏は渚子をそう評価した。

「早速で悪いんだけど、まずは更識君にインタビューしてもいいかしら」

「構いませんよ。こちらも早いところ終わらせたいと思っっているのです」
「なるほど。薫子ちゃんの言う通り、物事をはつきりと言う子だ」

一夏の本音を隠そうともしない態度に、渚子はおもしろいと言わんばかりの笑みを浮かべた。

「それじゃあ早速、女の園で生活する気持ちは？」

「特別な気持ちはありませんね。強いてあげるとすれば、トイレがないくらいでしょうか」

「さすがにクールね。それじゃあ、専用機持ちと言う事だけど、更識君は代表とか候補生とかには興味ないのかしら？」

「この専用機は戦う為ではなく、逃げるために開発したものですから。そもそも、本気で戦ったら俺なんか相手にもされませんって」

「そうなの？ 薫子の話では、更識君は戦闘においても優秀だつて聞いているけど」

「平均以上の動きは出来ると思いますが、世界相手に戦えるかと聞かれればね。そんなうぬぼれた考えは持ち合わせていません」

一夏のはつきりとした答えに、渚子は頷きながらメモを取っていく。

「それじゃあ次は、好きな人とかいるかしら？」

「それは答えなければいけない質問なのでしょうか？」

「そうね。出来れば答えてもらいたいかな」

「出来ないので答えません」

思春期の男子に見られる、年上の女性相手に緊張している、とかいう感じも無く、一夏ははつきりと拒否を叩きつける。渚子も一夏の態度に少したじろぎながら、質問を続けた。

「じゃ、じゃあ、休日の過ごし方とか聞いてもいいかな？」

「基本的に訓練の付き添いかVTSシステムのメンテナンスに当てています。本日も本当ならば別の作業があったのですが」

「そ、そうなの……わざわざ予定を空けてもらって悪いわね」

「いえ、気にしないでください」

そもそも空けていないので、一夏としては謝罪される覚えはないのだ。一夏の隣で刀奈が身動きをしたが、渚子はそのツツコミは入れなかった。

「じゃあ最後に、最強の双子を姉に持つ気持ちを聞かせてもらえるかな？」

「血縁上は姉ですが、俺にはあの二人と過ごした記憶はありませんので、どう思うかと聞かれても答えることは出来ません、強いてあげるとすれば、IS操縦者としては一流でも、人間として一流ではないと言う事でしょうか」

「……なかなか重い一言ね」

織斑姉妹の本性を知らない渚子は、一夏の言葉を皮肉と受け取ったのだが、本性を知る刀奈と虚は、かなり苦めの笑みを浮かべていたのだった。

続くインタビュー

渚子の質問を受けて、一夏はこんな質問に意味はあるのだろうかと考えていた。確かに自分の立場は特殊で、興味がある人間がいるかもしれないという理由は理解出来た。だが自分の恋愛事情など聞き出して、誰が得をするのかという点が疑問だったのだ。

「それじゃあ次は更識さんに質問するわね。義理の弟くんがこんなにカッコいいと、ちよっとイケナイ気持ちになったりしないの？」

「私と一夏君に血縁関係は無いので、禁断の関係という表現は出来ませんよ。それに、私たちと一夏君は、普通にお友達以上の関係だと思ってますから」

「おつ、それは興味深い話ね。薫子の話だと、更識家は特別な事情があるらしいじゃない。その辺り、聞いてもいいかしら？」

渚子の質問に、刀奈は一瞬考えてから頷いた。これくらいは知っている人間がいてもおかしくない話であり、特に秘密にしななければいけない内容でもない判断したのである。

「更識家では、当主が男性の時のみ、配偶者を複数設けても構わないという決まりがある

のよ。残念な事に、私の父や現当主は一人しか奥さんを迎えられなかったけど、次期当主である一夏君は、既に私や虚ちやんの他にも複数人がお嫁さんになりたいと思ってるから、恐らくその決まりが適応されると思うんですよね」

「なるほど。更識君はその辺りどう思ってるの？」

「どうと聞かれましても……まだそんな事を考えた事ありませんし」

一夏が正直に答えると、渚子は少しつまらなそうな表情を見せ、たまに刀奈が見せるような笑みを浮かべた。

「そんな答えじゃつまらないから、ハーレム最高とでも書いておこうかしら」

「事実を捻じ曲げて伝えるつもりでしたら、この出版社を潰す事も可能なのですが？」
「正直申し訳ありませんでした」

悪い事を思いついたという笑みを浮かべ、堂々と事実無根の記事を書くといった渚子に、一夏は無表情で淡々と告げると、一秒も間をおかずに渚子はその場で土下座した。普通なら高校生が会社を潰すと脅してきても笑い話で済むのだが、それを実現できる立場であり、また世間がどちらの味方をするかと考えれば、渚子は平謝りするしかなかったのだった。

「えっと……それじゃあ気を取り直して、更識さんは義弟くんの事を想ってるのね？」

「一夏君は義弟というより、もう家族ですからね」

「仲が良いんだね」

「一夏君が女性恐怖症ということもあって、子供の頃からじつくりと付き合ってきた結果です」

「そうなの？　じゃあ更識君にとつて、IS学園は天国というより地獄なのかしら？」
「知り合いがいなかったら、とつくの昔に退学してたでしょうね」

一夏の友人が聞けば、何を贅沢な事をと云ったかもしれないが、彼らも一夏が女性恐怖症であることは知っているの、口には出さなかつただろう。

渚子は一夏の事情を知り、これは正しく伝えなければいけない事だと思つたのか、その辺りを掘り下げる事にしたようだった。

「女性恐怖症になつた原因とかは？　聞いても大丈夫かしら」

「世間でも既に報道されてますし、原因は構いませんよ。白騎士事件の後、俺は何者かに誘拐され、それが原因でそれ以前の記憶を失い、捕まっていた数時間の間に何かをされ、人間不信と女性恐怖症に陥つたんです」

「最初は大変でしたからね。家の人間ですら怯えちゃつて、年が近かつた私たちしか一

夏君とコミュニケーションが取れなかったのだから」

「なるほどなるほど。実の姉である織斑姉妹の事も、その時から避けてたのかしら？」

「まあ、あの二人は自活能力が低かったので、先代の楯無さんが俺を養子にしてくれたんですけどね」

「織斑姉妹は自活能力が低い、これはスクープかしら」

喜々としてメモを取る渚子に、一夏は申し訳なきように告げた。

「記事にしたら最後、貴女は最強の双子に地の果てまで追いかけてまわされますよ？ も

ちろん、出版社も潰されるでしょうね、物理的に」

「そもそも織斑姉妹に幻想を抱いている女性が、そんな記事を読んだら抗議に来ますよ？ 『事実無根の記事を書くとは何事だ』って」

「……確かに、世間の織斑姉妹像は物凄い事になってるからね。家事も仕事も完璧にこなし、更にスタイルも良いから」

「実際は自堕落な生活をしている、尊敬できない教師ですけどね」

「そんなことを堂々と言えるのは一夏君だけよ……他の生徒は思っても口に出さないから」

一夏と刀奈の会話を聞いて、渚子の中でも織斑姉妹のイメージがガラリと変わった。彼女もまた、幻想を抱いていた一人だったのだ。

「それじゃあ最後に布仏さんにインタビューしますね」

刀奈にする質問は少なかつたなど、一夏は内心でそんなことを思っていた。

「世界トップとも言われる更識企業の企業代表という立場は、私たちが思ってる以上に大変だと思うのだけど、実際はどうかしら？」

「そうですね……一夏さんをはじめ、更識企業の人間のフォローがありますから、想像しているほど大変ではないと思いますよ。まあ、様々な国に行かなければいけないので、そういった点では大変かもしれませんが」

「なるほどね……布仏さんは国家代表には興味が無かつたの？」

「お嬢様に敵うとも思えませんでしたし、私は整備や開発の方に興味があつたので」

虚への質問が続く中、一夏と刀奈は大人しくインタビューが終わるのを待っていたのだ。

写真撮影

一通りインタビューを終えた渚子は、写真撮影をしたいから着替えてほしいと奥の部屋から衣装を持ってきた。

「更識君は、この白いスーツなんてどうかかな？」

「スーツなんて、普段から来てますし、新鮮味など皆無だと思えますが」

「そうなの？　ISのスーツじゃなくて、こういった普通のスーツなんだけど」

「これでも更識企業の役員なんで、他社との会合やIS発表会などではスーツを着用してますので。調べればたぶん、写真もあると思いますよ」

更識企業のIS発表記者会見などでは、一夏が矢面に立つて記者からの質問に答えたりしているのです。一夏のスーツ姿は新聞を読んでいる人には、確かに新鮮味に欠ける恰好だといえるだろう。

「それじゃあ、こっちの礼服なんてどうかしら？　タキシードなら、公の場で着たりしてないわよね？」

「何で若干コスプレっぽい服ばかりなんです？」

「それはほら……部数を出す為にはこういった事も必要になるのよ……今のご時世、インタビュ記事だけで部数が出る事は殆どないのよ……必要なら大げさに記事を書いたり、中には捏造でもいいから記事を出せとかいう出版社もあるとかないとか……」

渚子の愚痴ともとれる言い訳に、一夏は同情的な視線を彼女に向けた。

「確かに、捏造記事が横行していると聞いた事がありますし、記事だけで勝負出来る会社が減ってきているというのも聞いていますが……何故二人がウエディングドレスで俺がタキシードなんですかね」

「それはその……ごめんなさい、私の趣味です」

ノリノリで着替えた刀奈と、若干頬を赤くしながらも、相手が一夏ならと引き受けた虚が出てきたのを見て、一夏が渚子に殺気の籠った視線を向けた。

「まあまあ一夏君。これくらい協力してあげましようよ」

「……何で言いくるめられたんです?」

「な、なにもないわよ?」

「三人で撮った写真を加工して、二人きりになるようにプリントしてその写真を貰う、なんて事無いですよね?」

「……ごめんなさい、まったくその通りです」

驚異的な勘で刀奈たちがもらうはずの報酬を言い当て、一夏は更に深いため息を吐いた。

「だから言ったんですよ。一夏さんにはバレるからやめた方が良いと」

「虚ちゃんだって、結局は着替えたんだから同罪よ。自分だけ逃げようとしたってそうはいかないんだから」

「……やるならさっさと終わらせましょう。どうせ何を言っただってこの茶番は終わらないでしょ？ だったらこれ以上面倒になる前に終わらせた方が良いでしょうし」

「よし！ じゃあ更識君も急いで着替えて来てね」

一夏が呆れながらも承諾したのを受けて、渚子は元気を取り戻した。カメラマンも準備万全のようで、後は一夏が着替えればいつでも写真を撮ることが出来る状態になっていたのだった。

「でも、巷では結婚前にウエディングドレスを着ると婚期が遅れるって言われてるんだけど、更識さんや布仏さんは気にしてなかったわよね？」

「もう相手がいますし。それに、更識の結婚式は洋風ではなく和風、紋付き袴に白無垢で

すから。ドレスって憧れてたんですよね」

「そっか。もう相手がいるから気にしなくていいのか……羨ましい限りだわ」

「黛さんは、そういったお相手はいないのですか？」

「このご時世に、IS関係の仕事をしてる女性に声を掛ける男性など、殆どいないからね」

女尊男卑が進む今の時世、結婚率が下がっているのもまた問題視されているのだが、男性の卑屈さは年々増していき、それに伴うように女性の傲慢さも加速しているのだ。た。

「更識君のように、女性相手だろうがはつきりと物事を言えるような相手じゃなきや、結婚なんて考えないかもね」

「一夏君だって、私たちがいなかったら多分、女性に話しかけられただけで逃げ出すと思いますよ」

「ああ、女性恐怖症だったんだっけね。さっき聞いたのにすっかり忘れてたわ」

渚子と刀奈の会話を聞きながら、虚は少しそわそわしていた。一夏のスーツ姿なら見慣れているが、タキシード姿は見たことが無いので、楽しみに思う気持ちと共に、この

格好でタキシード姿の一夏の隣に立つ自分を想像して緊張しているのだった。

「虚ちゃん、さつきからうろろうしてるけど、ドレス汚れちゃうわよ?」

「お嬢様は緊張しないのですか? 一夏さんの隣にこの格好で立つんですよ?」

「そりや緊張はするけど、それ以上に楽しみなのよ、私は」

「今だけは、お嬢様のそのような性格が羨ましいです」

「今だけってどういう事よ!？」

刀奈と虚が言い争いを始めたタイミングで、一夏が着替え終えて戻ってきた。

「何か変な感じですね」

「一夏君……いいい」

「はい?」

率直な感想を漏らした刀奈に、一夏は首を傾げて呆れたような表情を浮かべた。

「さつきと終わらせましょう。実は仕事が山積みなので、出来る事ならインタビューを受けたくなかつたんですよね」

「そうなの? でも、OKしてくれたじゃない」

「俺が聞かされたのは一昨日ですからね。OKも何も、返事すらしてないんですよ」

「でも断らなかつたじゃない？ どうして？」

「差し迫つてなければ、お断りしましたよ。ですが、二日後に迫つてましたので、今更断れないだろうと判断したままでです」

「その判断は正しいわね。断られても困つたもの」

渚子と軽く会話をし、一夏は刀奈と虚を両脇に立たせ、カメラの前に立つたのだつた。

自分たちの苗字

写真撮影も終わり、一夏たちは渚子と別れ帰路についていた。

「まさか謝礼がこんなにもらえるとは思ってなかったわ」

「随分と気前が良かったですね。まだ発行すらしてないのに」

「それだけ売り上げが見込めるって事じゃない？ 私や虚ちゃんはIS操縦者を目指す日本人女子の憧れらしいし、一夏君は全世界から注目されている唯一の男子IS操縦者にして世界トップと言われている更識企業の次期当主であり、既に世界的地位を確立してるんだから」

「それほど表に出た覚えはないんですけどね……」

一夏はあくまでも開発や交渉を担当しており、IS企業に属してないかぎり、滅多に一夏の姿を見る事は出来ない。まあ、皆無ではないので、そのタイミングで見たのかもしれないが。

「とりあえず、もらった謝礼を使って、お昼ご飯にしましょう」

「俺たち三人だけで外食したとバレたら、簪とかに怒られますよ？」

「大丈夫よ。ちゃんとお土産としてケーキを買って帰るから」

既に対策済みと言わんばかりに胸を張る刀奈を見て、一夏と虚はそろって嘖き出した。

「な、なによ〜」

「いえ、相変わらずお嬢様は子供っぽいなと思ひまして」

「俺より年上のはずなんです、何故か年下っぽいと思つてしまいました」

「虚ちゃんも一夏君も、私の事を幾つだと思つてるのよ」

頬を膨らませて抗議する刀奈の姿が、より子供っぽく見え、虚と一夏は揃つて笑い出す。二人を睨んでいた刀奈も、二人につられて笑い出した。

「さつ、とりあえずご飯にしましよ。朝から何も食べてないから、お腹すいちゃった」

「朝食を摂らなかつたんですか？」

「だって、写真撮影があつたから……」

「ああ、なるほど」

刀奈の乙女心を理解し、一夏は呆れた目を向けるのを止めた。自分も研究に没頭する

と食事を忘れる傾向にあるので、一夏も人の事は言えないのだが……

「お嬢様、お腹がすいているのは分かりましたが、くれぐれもがつくような事の無いようにお願いします」

「分かってるわよ。私だって恥じらいつてもものは持つてるわよ」

「だと良いのですが」

虚の呆れた顔を見て、刀奈は抗議するように詰め寄り、虚の背後に見覚えのある顔を見つけた。

「あれ？　ねえ一夏君」

「何ですか？」

「あの人が確か、一夏君のお友達よね？」

「友達？　ああ、弾のヤツですか」

「何してるのかしら？」

刀奈が観察していると、弾の背後から大量の荷物を持った鈴と、同じくらい荷物を持った蘭がやって来た。

「あれって凰鈴音さんとお友達の妹さんよね？　何を買いこんだのかしら」

「多分いらんモノだと思えますよ。弾の奢りで、どうせ弾が持つんだからという理由で、普段なら買わないような物も買ったんだと思います」

一夏の言った通り、大量の荷物は全て弾に渡され、二人はまたどこかへ行くこうとして、一夏たちに気付いたのだった。

「一夏じゃない。何してるの、こんなところぞ?」

「それはこつちのセリフだ。また弾との勝負に勝ったのか?」

「アタシが負けるわけじゃないじゃないの。今回は蘭にも負けたから、何時のもの倍よ」

「そろそろ勘弁してやらないと、アイツが高慢な女性にぶつかって難癖つけられ、そのまま逮捕されるなんて展開になりかねないぞ」

「それ、面白そうね」

「おいおい……」

一夏の冗談を見てみたいと思ったのか、鈴は人の悪い笑みを浮かべた。だがもちろん冗談だと理解しているので、一夏の忠告を大人しく聞くことにした。

「仕方ないわね。弾、少し持つからさつきと帰るわよ」

「それじゃあ一夏さん、また。ほらお兄! ふうふうしていると人にぶつかっちゃうから

ね」

「分かってるなら手加減しろってんだよ！」

弾は最後まで一夏と会話することなく去っていった。

「面白い人よね、一夏君のお友達は」

「勝てないと分かっているのに勝負を吹っ掛けるからいけないですよ」

あの状況は自業自得だと一夏は分かっている、必要以上に同情的にはならなかったが、さすがに知り合いが警察の厄介になるのは避けたいと思ったので、あのような言葉を掛けたのだった。

「私たちも一夏君の奢りで何か買ってもらおうかしら？」

「俺個人の資産なんて、高校生の平均以下だと思えますが」

バイトも出来ない身であり、給料の大半は新たな開発資金として確保する為、一夏が自由に使えるお金はそう多くない。だがそれでも、平均以下とは思えない刀奈と虚だった。

「だいたい、一夏君個人で開発資金を捻出する必要は無いと思うんだけどな」

「必要経費ですので、企業に領収書を回していただければ、しつかりと経費で落ちるんですけどね」

「個人的趣味の部分もありますので、それを経費で賄うのはちよつとね……まあ、その分成功して利益が出た時は会社側が気を利かせて報酬を増やしてくれてますので」

「経理担当は簪ちゃんだから、ちゃんと分かっているんでしょうね」

そんな他愛のない話をしながら、一夏たちはファミレスへと入っていった。少し待つ事になったのだが、特に気にする様子も無く、人数と名前を書く時に「更識」と書いてしまった事を、後々後悔する事になったのだった。

「何で更識って書きちゃったのよ？」

「他にどう書けと？ 布仏の苗字も多くに知られてますし、織斑なんて書いたらこれ以上の騒ぎだったと思いますけどね」

自分たちの苗字が、世界的に有名になっていた事を失念していた一夏たちは、少し食べ辛い雰囲気の中で食事を済ませたのだった。

成長する美紀

一夏が出かけているからと言って、訓練は中止にはならない。むしろ一夏がいなかったらこそ、訓練は真剣にやるべきだと考え、簪と美紀は朝からアーリーナを使って訓練を積んでいた。

「少し休憩にしましょうか」

「そうだね。やっぱり簪ちゃんには敵わないな」

「そんなことないと思うけど。美紀だって十分強くなってるよ」

この二人の対戦成績は、簪が大きく勝ち越してはいるが、内容は毎回ほぼ互角。少しでも気を緩めれば一気に持つていかれるという危機感を持つて簪が挑んでいる分、簪が勝っているだけなのだ。

「強くなってるという実感はあまりないけど、簪ちゃんがそう言うならきつとそうなんだろうね」

「美紀相手だと気を抜けないからね。少しでも油断すれば命取りになりかねないもん」
「私だって本気で行ってるんだけどなあ……やっぱり簪ちゃん相手だと分が悪いのか

な」

美紀の悩みを聞いて、簪はますます気が抜けないと思った。美紀の実力は自分と大差ないので、自分相手に対策を立ててくるのは分かる。その対策が功を制したら、今度は自分が連敗を重ねるだろうと思っっている。だから簪も、美紀相手に対策を練り、相手の上を行けるよう努力しているのだった。

「さすが次期代表が内定していると噂されるペアの訓練ね。凄い気合いが入ってるわよ」「碧さん。いたんですか？」

「最初からね。一夏さんから、二人の訓練を見て何かアドバイス出来そうならしてあげてって頼まれたのよ」

「全然気づきませんでした……やはり碧さんが本気で気配を消したら、私じゃ捉えられませんね」

「こればかりは経験の差よ。私の方が年上だから、その分の経験の差が出てるだけよ。美紀ちゃんだって、もっと訓練すれば私なんかあつという間に追い抜いちやうわよ」

これは碧の本音でもある。美紀の周囲への警戒心は、ある意味で碧以上に研ぎ澄まされている。それでも碧が彼女の気配探知から逃れられるのは、経験の差が大きいからだ

と本気で思っているのだ。

「そうだと良いのですが……今日だって本当は一夏さんの護衛としてついて行くことも思ったのですが、一夏さんの方が気配探知能力が上ですし、私程度じゃ尾行もままならないですからね……」

「私も今日は自重したわよ。最強の国家代表と最高峰の企業代表が一緒なんですもの。例え襲われたとしても大丈夫だよ」

「虚さんは兎も角、お姉ちゃんはたまにとんでもないヘマをするから、そこが心配なんですよね」

刀奈本人が聞いたなら、憤慨しそうなことを平然と簪が言い放つ。美紀はその言葉に顔を引き攣らせながらも、小さく頷いて同意を示したのだった。

「確かに刀奈お姉ちゃんは強いですし、警戒心も高いので安心は出来ます。ですが、刀奈お姉ちゃんはその警戒心を常に保っているわけではないので、その隙を突かれたらと思うと……」

「一夏さんと虚ちゃんが警戒心を強めてるからこそ、刀奈ちゃんは少し緩めても大丈夫だと思ってるんだと思うけどね。でも、さすがに外に出てるんだから、刀奈ちゃんだって警戒心を保ってると思うわよ」

「だと良いのですが……」

碧のフォローに少しは気が和らいだのか、美紀の表情に明るさが戻ってきた。だが完全に不安は払拭出来ていないのは碧にも分かっていたので、彼女は心の中で刀奈に念じたのだった。

非常に居心地の悪い中での昼食を済ませた一夏たちは、簪たちへのお土産を買いに近所のデパートを訪れていた。

「？」

「どうかしましたか？」

「いや、誰かに呼ばれた気がして……気のせいかしら」

辺りを見渡したが、知り合いなどいるはずもないと思い直し、刀奈が小さく首を傾げた。

「とりあえず、ケーキで良いんですよ？ 幾つですか？」

「お土産の前に、少しお店を回ってみましょうよ。何か欲しいものがあるかもしれないし」

「……あまり遊んでる時間は無いんですが」

「いいじゃないの。今日は少しくらいISの事は忘れて。忙しいなら簪ちゃんや、もちろん私だって手伝うから」

「簪は兎も角、刀奈さんは邪魔しに来るんじゃないですか？」

「酷いっ!？」

一夏の表情を見れば、それが冗談だと分かったので、刀奈も冗談めかして顔を覆って見せた。

「一夏君の中では、私より簪ちゃんの方が役に立つと思ってるのね？」

「整備の面では、間違いなく簪の方が上だと思いますが」

「だよー。簪ちゃんは私の自慢の妹だもん。戦闘面だけじゃなくって、開発面だって優秀なんだから」

演技に飽きたのか、刀奈も簪の凄さを自慢し始める。だがここにいるのは既に簪の凄さを知っている二人なので、刀奈も必要以上に熱くなることは無かった。

「そう言えば夏休み、大して遊べなかったわね」

「今更ですか？ まあ、色々忙しかったですし、仕方なかったと諦めてください」

「せめて一夏君と旅行くらいしたかったなー」

「フランスに行ったじゃないですか」

「あれは合宿で私がいたところに、仕事で一夏君が来ただけでしょー! ……そう言え
ば、一夏君たちはそろそろ修学旅行なのよね」

「分かってるとは思いますが、お嬢様。お嬢様は二年生で修学旅行は関係ありませんからね?」

「分かってるって。でも、簪ちゃんたちは一夏君と旅行に行けるなんて……羨ましいわね」

何か企んでいるのだろうと、一夏と虚は顔を見合わせてため息を吐いた。だが結局は刀奈の企みを容認してしまう二人は、結局甘いのだろう。

処刑方法

買い物物を済ませた一夏たちは、簪たちへのお土産であるケーキを買いに洋菓子店を訪れた。基本的に甘いものは進んで食べない一夏は、店内に充満する甘い匂いで少し胸やけ気味だった。

「一夏さん、大丈夫ですか？」

「大丈夫ですけど、凄く甘ったるい匂いですね」

「これくらい普通だと思うけど。一夏君は普段、甘いものの匂いを嗅がないから余計にそう思うんだよ」

刀奈の指摘に、一夏は納得したような感じで、店の外で待つと提案して先に外へ出た。もちろん、財布は刀奈に渡してあるので、支払いは一夏持ちだ。

「一夏君、よっぽど甘いものが苦手なのよね」

「食べれないわけじゃないんですけど、この間の誕生日の時のケーキも、最後は本音にあげてましたからね」

「あれでも甘さを控えたんだけどな……」

せつかくの手作りと言う事で、一夏は結構頑張ってケーキを食べていたのだが、一人で食べることが出来ずに、最終的に本音にあげたという記憶は、刀奈や虚にも新しものだった。

「甘くないケーキって、あるのかしら？」

「これなんてどうですか？ 野菜を使ったケーキらしいですけど」

「トマトやニンジンか……本音が嫌いそうなのが使つてあるわね」

「お嬢様？ 一応お土産なので、嫌がらせなど考えないようにお願いしますね」

虚に釘を刺され、刀奈は分かっていると云わんばかりの笑みを浮かべ、別のケーキを眺め始めた。

「何だかお嬢様と二人で行動するのも久しぶりのような気がしますね」

「まあ、私も虚ちゃんも、色々忙しい身だし、普段は一夏君が一緒だからね」

その一夏は今、出入り口付近で腕を組みながら何かを考えている様子。恐らくサラの専用機の事を考えているのだろうと、刀奈と虚は顔を見合わせて笑った。

「それじゃあ、一夏君にはこの野菜ケーキにして、後はみんな同じでいいよね？」

「取り合いになるのが目に見えてますし、全員同じものなら問題はないと思います」
「了解。つて、一夏君の財布って凄いのね……これだけあれば」

「お嬢様？」

「じよ、冗談よ」

自分もそれなりに稼いでいるのだが、やはり大企業のトップと比べれば微々たるものだど実感した刀奈の心に湧いた黒い考えも、虚の一言でどこかに霧散していった。

「それじゃあ帰りましょう……あれ？ 一夏君が誰かと話してる」

「というよりも、一方的に絡まれてるようにも見えませんが」

会計を済ませた二人が一夏に声を掛けようとしたら、見知らぬ女性が一夏に話しかけていたのだった。だが話しかけているというよりかは、虚が言ったように一方的に女性が声を荒げているようにも見える。二人は首を傾げながらも、一夏に声を掛けた。

「一夏君、お待たせ」

「あら、既に飼い主がいたのね。まったく、躰けのなつてない犬ね」

「犬？ 一夏君は人間ですよ」

「そう言う事じゃないわよ。男なんて所詮、女の言う事を聞くだけの犬なんだから」

女尊男卑を笠に、偉そうにしている女性だったのかと、刀奈と虚は一夏が一切口を開かなかつた理由を理解し、その勘違いをしている女性に真実を告げようとした。だが――

「一夏さんを犬とか、どれだけ勘違いしてるんですか、貴女は」

――第三者の出現で、それも出来なくなってしまった。

「なっ、誰よアンタ」

「私は一夏のさんの専用機であり護衛の闇鴉と言います。貴女のように勘違いした女性が
大勢いるから、世の中腐つてるとかネットで呟く人が多いんですよ」

「お前、何時ネットなんて見てるんだ？」

「コアネットワークって便利ですよね」

一夏からの問いかけに、闇鴉は軽く舌を出しながら答える。コアネットワークの回線を通じて、インターネット回線を覗き込めるらしいと、一夏はこの時知つたのだった。

「せ、専用機？ 男の貴方が何故ISを持つているというの!？」

「貴女、IS関連の仕事をしてないですね？ もししているのであれば、刀奈さんが『一

「夏君』と呼んだ時点で分かると思うのですが」

「何の話よ」

「ここにいるのは、更識企業次期当主である更識一夏さんと、日本代表の更識刀奈さん。そして更識企業の企業代表である布仏虚さんです。貴女よりもよほど社会的地位の高い人たちなんですよ」

穏便に済ませる気など更々ない闇鴉は、一夏だけでなく刀奈と虚の事も紹介する。衝撃的な事実を受け、一夏に声を掛けてきた女性は、逃げ出そうと身体を反転させる。だが反転させた先には、刀奈と虚が素敵な笑みを浮かべて立ちはだかっていた。

「貴女、一夏君を『犬』呼ばわりしておいて、何も言わないで帰れると思ってるの?」「貴女一人を社会的に抹殺する事など、更識には造作もない事なのですがね?」

自分たちが貶されてもここまでは怒らないだろうと、刀奈と虚は思っている。だが一夏が貶されたのなら話は別であり、一切の容赦もなくこの女性を狩ると心に決めたのだった。

「刀奈さん、虚さん。こんな勘違いしてる女性一人の為に、貴女たちが動く必要はありませんよ。どうせそのうち勝手に野垂れ死ぬでしょうから、放っておきましょう」

「でも……」

「大丈夫ですよ。どうせ監視しているあのウサギが狩るでしょうから」

一夏の言葉があつたからか、次の瞬間にはその女性は消えていた。恐らくは転送されたのだろうと一夏は理解したが、刀奈と虚はその女性が、跡形も無く消し去られたと思ひ震えたのだつた。

「本当に消し去る必要は無いんじゃないの？」

「はい？ 今頃は束さんがお仕置きしてると思えますよ。その後で織斑姉妹の許に転送されるんだと思いますが」

「……死んだね」

地獄のフルコースと言ってもよさそうな展開に、刀奈と虚はあの女性の末路を想像し、晴れやかな気分になつたのだつた。

姉妹の時間

一夏がないので、織斑姉妹は久しぶりにマドカを含む姉妹の時間を過ごししていた。普段はここに一夏も交ぜようと努力する千冬と千夏だが、戦果は芳しくなく、また一夏が来ないと言う事で、マドカもあまり呼びかけに応じてくれないのだった。

「いやー、何時振りだ？ マドカがこの部屋に来るのは」

「最近はこちらと片づけてるからと言って、マドカが信じてくれなかったから……夏休み前くらいじゃないか？」

「だって、姉さまたちが片づけてるって言っても信用出来ないし兄さまが……」

夏休み前には、足の踏み場もなかった寮長室だが、今はそれなりに人の住める空間になっている。それでも、ところどころに洗濯物だったり、片づけてないゴミだったりが見受けられるが、過去の二人と比べればかなりの成長だと言えるだろう。

「だいたいだな、一夏の清掃スキルを基準に考えられたら、世の中の殆どの女性は掃除下手だぞ」

「それはそうかもしれませんが……兄さまは本当に掃除上手ですし、あれだけ散らかっ

ていた本音の部屋も、一時間もあればきれいになってましたから」

同室の簪からクレームが入り、一夏が強制執行という形で部屋の掃除を行ったのが、夏休み最終日直前。護衛としての任務を碧や美紀に任せつきりだった本音は、ほぼ毎日部屋でただらだら過ごした結果、久しぶりに寮に戻ってきた簪が腰を抜かすというくらい散らかしたのだった。

「布仏妹の部屋の掃除をするのなら、お姉ちゃん部屋の掃除もしてくれればいいのに……」

「兄さまに甘えてばかりだと、姉さまたちが成長しないからと兄さまは言っていましたか」

「なら布仏妹にも自分で掃除をさせるべきだったのではないのか？ アイツこそ成長しないだろ」

「兄さま曰く、本音は言っても動かないが、姉さまたちは言えば一応動くからと言う事でした。もちろん、掃除した後で、兄さまと虚さんにこっぴどく怒られていましたけど」

散らかしたことで、片づけ出来ない事の二重で怒られていた為、普段のお説教時間よりも長かったと本音は語っていた。

「そうか。わたしたちは一夏に期待されてるんだな！」

「確かに私たちは、言われれば動くからな！」

それが大人としてどうなのかと問われれば、ダメな方に分類されるんだろうなと考えながらも、マドカはその事を口にはしなかった。

「ところで、今日は何で一夏たちは外出してるんだ？」

「……姉さまたちは聞いていないのですか？」

「外出許可は真耶が出したからな。そもそも、わたしたちに相談しないからな、一夏は……」

少し遠い目になった姉二人に、マドカは慌てて外出の理由を告げた。

「今日は雑誌のインタビュウを受ける為、兄さまたちは外出したのですよ」

「インタビュウ？ 雑誌とか言ったが、どんな雑誌だ？」

「二年の黛先輩のお姉さんが副編集長を務めている『インフィニット・ストライプス』という雑誌だそうです。インタビュウ記事の他に、兄さまたちのグラビア写真が載るらしいですよ」

「なるほど……それで、その雑誌は何時発売なんだ？」

鬼気迫る勢いで尋ねて来る千冬に、さすがのマドカ引き気味になる。妹を怖がらせてしまったという事を実感し、千冬も少しは落ち着きを取り戻した。

「すまない。つい一夏の水着姿を想像したら……こう、興奮してしまつてな」

「別に水着で写真を撮るわけじゃないですよ？　なんかコスプレみたいな感じになると刀奈さんが言っていましたか？」

「コスプレだと？　……何ともけしからん！」

「……ちなみに、何のコスプレを想像したのです？」

恐る恐る、という表現がぴったりの感じで、マドカは千夏に尋ねる。この姉の事だから、きつとぶつ飛んだ答えが来るのだろうと身構えた。

「一夏が猫の耳と尻尾をつけてご奉仕してる姿だ！」

「欲望丸出しですね……」

身構えたというのに、それ以上のぶつ飛んだ答えが返ってきた為、マドカは軽い頭痛を覚えたのだった。

「むっ？　束のやつから電話か……」

千夏同様に一夏のコスプレ姿を夢想していた千冬だったが、着信音で現実に戻され、ディスプレイに表示された相手の名前を呟き、小さくため息を吐いて電話に出た。「何の用だ？ ……ああ、分かった」

少し会話を交わした後、千冬は千夏にも聞こえるようにスピーカーに切り替える。「やあやあなっちゃん。まーちゃんもそこにいるのかな？」
「御託はいらん。それで、貴様が電話してくるなど珍しいな。何かあったのか？」

無駄話をするつもりは無いとバツサリ切り捨て、千夏は先を急かす。

『相変わらずクールだね、なっちゃんは。でも、これを聞いたら冷静じゃいられなくなるかもね』

「だから何だと言うのだ？」

『外出中のいっくんに難癖つけた愚か者を捕まえてるんだけど、ちーちゃんとなっちゃんも懲らしめたいかなーって思って電話したんだけど』

「よし、今すぐそっちに行くから場所を教えろ」

『さっすが双子！ 寸分たがわぬタイミングだね。位置情報はまーちゃんの携帯に送

信じたから、後は自力で上って来てね〜』

東からのメールが届き、マドカはその内容を千冬と千夏に見せる。

「IS学園上空五百メートルだと?」

「ステルス機能でもついているのか? まあ、これくらいなら問題ない」

問題あると思うのだが、マドカはツツコミを入れる事無く、二人の姉を見送ったのだった。

スコールの悩み

お土産を買って帰ってきた一夏たちを出迎えたのは、満面の笑みの本音と、何処か気まずそうな表情を浮かべたマドカだった。

「マドカ、何かあったのか？」

「いえ……姉さまたちが束様の電話を受けてラボに向かわれたのですが……」

「ああ、あの人の件だろうな」

「兄さまはご存じだったのですか？」

「目の前から人が消えたから……あんな出鱈目が出来るのは、東さんくらいだ」

会話内容を聞いているので、マドカも女性に対して同情はしない。だが東と織斑姉妹を同時に相手する事に対しては、若干の恐怖心を抱いていたのだった。

「マドカが気にする事じゃないぞ。ああなったのは驕り高ぶったあの人が悪いんだ。

まあ、ちよつと調子に乗っただけでIS界の重鎮三人に面会出来たんだから、ラツキーだと思えば良いだろう」

「兄さま、全然心が籠ってませんが……」

「当たり前前だろ？ 思っていないんだから」

東、千冬、千夏と顔を合わせたからといって、ラッキーだと思わない一夏は、まったく心の籠っていない言葉でマドカの気を紛らわせた。

「そんな事よりいつちー、お土産ちょうだい」

「お前は……まあいいか。てか、俺も何を買ったのか知らないから、どれが誰のか分からないからな。その辺りは刀奈さんと虚さんに聞いてくれ」

「大丈夫よ。一夏君の以外全員一緒だから」

そう言つて箱を開けた刀奈。中は一つを除いて全てショートケーキだった。

「美味しそく。ねえねえ、今食べてもいいの？」

「別にいいが、後で簪や美紀が食べてる時に指をくわえる事になるぞ？」

「そっか……じゃあ冷蔵庫に入れておこう」

一夏の部屋にある、結構大きい冷蔵庫にケーキをしまった本音は、そのついでに何かお菓子が無いかと物色し始めた。

「簪と美紀はどうした？」

「あの二人でしたら、今もアリーナで特訓中だと思いますよ」

「そうか……さすが候補生、本音とは違うようだな」

「私はいつちーの護衛だからね。訓練は必要だと思っけど、かんちゃんや美紀ちゃんのようにがつりやる必要は無いと思ってるんだ」

「でも、本音だつて訓練しないと、一夏君を狙う相手が強くなってるんだから」

「前はシノノンくらいだったのにね。まさか大組織がいつちーを狙ってくるとは」

緊張感のない本音の喋り方に、刀奈も肩透かしを喰らったような表情で一夏を見つめる。

「そうだな。たまには俺も身体を動かした方が良いだろう。本音、付き合ってくれ」

「了解なのだ」

基本的に一夏の頼みは断らない本音は、一夏の運動相手を引き受ける。それが自分の訓練になるとも知らずに、満面の笑みで了承の返事をしたのだった。

「それじゃあ、私たちも一緒に行こうか、虚ちゃん？」

「そうですね。午前中はインタビュで身体を動かす事も無かったですし、カロリー消費の為に頑張りますよ」

「でしたら、私もお付き合いします。姉さまたちがいなくなってしまったので、会話相手がないのです」

結局全員が参加する事になったのだが、本音はそれでもニコニコと笑みを浮かべていたのだった。

監視衛星で一夏の行動を観察していたスコールは、一夏の目の前から人が消えた事に驚いていた。

「あらあら、さすがは大天災ね……スケールが違い過ぎる」

東が本気になれば、自分たちなどあつさりやられてしまうと実感したスコールは、どうやって東の監視を掻い潜るかを考え始める。

「最悪、SHに興味を向かせれば私たちはすり抜ける事が出来そうね。何でも篠ノ之東は他人を認識する事が出来ないらしいから」

箒からの情報なのだから、確定的だと思えるはずなのだが、どうにも箒は信用されていないようで、スコールは彼女からの情報を鵜呑みにしていないようだった。

「まあ、篠ノ之東だけ誤魔化しても、一夏の周りには強力な戦力が揃ってるのよね……」

刀奈や虚といった現役から、織斑姉妹や碧といった伝説となりつつあるIS操縦者まで一夏の味方なのだ。下手に手を打っても返り討ちにされる未来しか想像出来ない。

「未来と言えば確か、更識所属に未来予知が出来る機体を持った子がいたわね……」

レインがダリル・ケイシーとして送ってきた情報に、そのような報告が上がっていた事を思い出し、スコールはますます頭を悩ませる。

「この情報が確かだとすれば、奇襲なんて成功するはずがない。それどころか、攻め込んだ先に待ちかまえているかもしれないし、攻め入ろうとした時に既に包囲されているなんて事もあり得るかも……」

あくまで狙いは一夏なのだが、それを守る壁が厚すぎるのだ。一夏一人相手なら何とかなる、と思えるのだが、そんな楽観視を出来る立場でもないスコールは、スクリーンに表示されている戦力を確認したため息を吐く。

「レインが連れてきたフォルテ・サファイアはそれなりに使えそうだけど、やはりSHがね……能力はそれなりに向上してるけど、すぐにカツとなるし連携は期待できないし……」

単独行動させたところで、挑発に乗りやすく視野狭窄を起こしやすい性格なので、すぐに撃退されるだろうし、一夏が目の前に現れたらそれが更に加速する。

「何とかして性格を矯正しないと、SHはこのまま使い捨てになるかもしれないわね……せつかく強奪したサイレント・ゼファイルスも使えなくなっちゃいそうね……」

箒専用にかスタマイズしたので、箒が離脱するとそのままサイレント・ゼファイルスも戦力から外さなくてははいけなくなる。その事でますます頭を悩ませるスクールを、遠巻きに協力者たちが見守っているのだった。

織斑姉弟の關係

束からの呼び出しで、調子に乗っていた女性を肅正した織斑姉妹は、やり切った顔で束のラボからI・S学園へと戻ってきた。

「どちらに行っていたのですか？」

「調子に乗っている不届き者がいると知らされてな。ちよつと上空まで」

「普通の人間には不可能ですからね、そのセリフ」

織斑姉妹を出迎えたのは、肅正しに行くきつかけを作った、最愛の弟である一夏だった。

「山田先生から泣きつかれたんですが」

「真耶から？ 何があつたというのだ」

本気で分からないと言う顔で首を傾げた千冬と千夏を見て、一夏が盛大にため息を吐いた。

「約束した時間になつても貴女たちが職員室に来ないと言つてましたよ。何か約束をし

「てたんじやないんですか？」

「真耶と約束か……」

腕を組み考え込んだ織斑姉妹。数十秒考えて、漸く思い至ったのか、ポンと音を立て手を叩きしきりに頷いた。

「溜まつてた仕事を片付ける約束をしたな。すっかり忘れていた」

「それで、真耶は今も待ってるのか？」

「……待ってるわけではないでしょうが。今何時だと思ってるんですか」

「そうだな……日の傾きから察するに、そろそろ十九時か？」

「そんな特殊能力は必要ないでしょうが……時計くらい持つてないんですか？」

現時刻を正確に当てた千冬に、一夏は呆れながら腕時計を見せる。正解した事に氣をよくした千冬は、そのまま寮長室へ戻ろうとした。

「まだ話は終わってないですよ」

だがもちろん、そんな分かり切った逃亡を一夏が許すはずも無く、あつさりと行く手を阻まれてしまったのだった。

「せっかく刀奈さんが今日はオフにしてくれたのに、結局書類整理を手伝う羽目になったんですけど?」

「何!? 真耶と二人きりで作業したというのか!」

「碧さんや五月七日先生も手伝ってくれましたけど、本来は貴女方の仕事ですよね?」

それを放つて何処で油を売っていたんですかね? まあ、だいたいは見当つきますけど」

「束に呼ばれて、お前に対して不遜な態度を取った不届き物を肅正にな。社会的に抹殺してやろうかとも思ったがな」

「まあ、さすがにそこまでやったらお前に怒られると思って、物理的に始末するかとも考えたが、結局は執行猶予で済ませたがな」

自重した事を褒めろと言わんばかりに、双子はそろって胸を張った。だが一夏は、何を偉そうにしているのかと本気で頭を抱えなくなっていたのだった。

「貴女方が望んでこんな風になったわけではないのは分かっています、今の世の中を作り上げた原因は貴女方姉妹と、篠ノ之束が原因なんですよ? 篠ノ之束がISを世界に

発表し、その発表会を千冬先生が手伝い、更には第一回モンド・グロツソで貴女方が無双するものだから、女性が強いと勘違いしてしまったんですけど? まあ、卑屈になつ

た男性にも問題はありますが、女尊男卑の風潮の元となっているのは、貴方たち姉妹と東さんって自覚あるんですか？」

「そんな怖い顔しなくてもいいじゃないか……」

「わたしたちだって、こんな世の中になるとは思ってたんだ……」

「まあ、I Sも元々は宇宙開発のためのパワードスーツのはずだったんですから、東さんもこんな世の中を望んでいたとは思いませんが……」

本来の目的を知っている一夏としては、何時かその流れに戻したいと考えている節もある。だが今I Sの路線を変更すると、更識企業が成り立たなくなる可能性があるのだ。社員何千、何万と抱える大企業のトップとして、今はその時ではないと踏み切れずにいるのだった。

「大企業のトップともなると、考えてる事が違うな……とても高校生の言葉とは思えん」
「感心してる風を装つても駄目です。今から碧さんと二人でお説教しますから、大人しく寮長室までついて来てください」

「せめて、お前一人にはならんのか？ 小鳥遊に怒られるのはちよつと……」

「駄目ですよ、千冬さん。私も貴女たちの仕事を肩代わりしたんですから、説教する権利があると思うんですよ」

「何時の間に……」

「最初からいたに決まってるじゃないですか。これでも私は、一夏さんの護衛なんですから」

何を当然の事を聞くんだと言わんばかりに、碧が二人の前に詰め寄る。一夏も特に気にした様子も無く、すたすたと寮長室までの廊下を進んでいく。

「なあ一夏……」

「学校では更識と呼んでください」

「別にいいだろ。今日は休日で、身内しかいないんだから」

「部屋の中なら別にいいですけど、ここはまだ廊下です。他の生徒に聞かれるかもしれないですから、せめてものけじめはつけてくださいよ」

一夏もしっかりと敬語を使っているし、千冬先生という呼び方をした。弟がけじめをつけているのだから、姉としてこれ以上ダメさ加減を見せる訳にもいかないと、千冬は小さく頷いて一夏の後には続き寮長室までの廊下を歩き進める。その千冬の後には千夏が続き、殿に碧が続いた。引く縄も無ければ強制もしていないのだが、その光景は間違いなく「連行」だった。

「しかしな、更識……お前の為にわたしたちは……」

「誰も頼んでませんし、半分は憂さ晴らしだったんじゃないんですか？」

「何故それを!？」

「……本当にそうだったんですか」

一夏としては冗談のつもりだったのだが、千夏があつさりと認めた為、カマを掛けた一夏の方が驚いてしまったのだった。

新兵器開発

インタビューと織斑姉妹への説教で一日が潰れてしまった為、一夏は今日の作業を諦めて部屋で読書をしていた。

「一夏さんが読書とは珍しいですね。何の本ですか？」

「専用機の名前のヒントでもないかと、ギリシャ神話の本を図書室から借りてきたんだ」
「今回はあつちの英雄の名前を付けるんですか？」

「まだ決めてない。だが、候補は多い方が可能性を広げられるから」

設計から開発まで全て一人でやれるからこそその考え方だが、美紀はそこにツツコミは入れなかった。元々一夏が独りで考え、一人で造っているのを知っているのもあるが、下手に手伝おうとすると、余計に仕事を増やすだけだと言う事を身を以って体験したからこそであった。

「ですが、サラ先輩はイギリスの人ですし、イギリスの英雄からでもいいんじゃないですか？」

「それも考えたが、ギリシャ代表として使う専用機だからな。イギリスの英雄の名前を

付けても受け入れられるかどうか」

「結局は更識の専用機なわけですし、どんな名前でも受け入れてもらうんですよね？」

「まあな」

美紀のツツコミに、一夏はあっさりと自分の懸念を放棄した。ギリシャ代表として使う専用機だが、ギリシャの専用機ではないのだ。だからどんな名前であろうと問題ないのだが、国民から支持される為には、少なくともイギリス関係の名前は避けた方が良いと思っているのだった。

「一夏さん、今日は色々あつて疲れてるでしょうから、読書もほどほどで切り上げてくださいよ？　じゃないと、無理矢理にでも休ませますからね」

「無理矢理って、何かするの？」

美紀が具体的に何かを考えている風ではなかったの、ちよつとした興味から一夏はその事を掘り下げてみた。

「そうですね……休むというまで、一夏さんのベッドに潜り込むと言うのはどうでしょう？」

「だんだんと刀奈さんに思考が似てきてないか？」

「そうですか？ 一夏さん、こうすれば大人しくなるって言ってましたし」

「まあ、逃げ出すか諦めるかのどっちかだな。身内なら諦める、他人なら逃げだす」

つまり自分がやれば諦めてくれるのだと理解した美紀は、いざという時はやってみようとして心を決めたのだった。

「まあ、美紀の言う通り色々あった一日だったからな……そろそろ切り上げるとするか」
「そうしてください。明日からまた、亡国機業に備えたり、修学旅行の準備とかで忙しくなるんですから。休める時に休んでください」

「美紀も同じだからな？ お前も今日かなり特訓に励んでたようだから、いつも以上に体力を消耗してるだろ。俺の事ばかり気にしてないで、自分の事もしっかりと労わってやれよ」

「そうですね。今日の特訓は簪ちゃんが気合い入ってましたから、確かに疲れました。部屋のお風呂に入って私も休みます」

一夏の一言に素直に反応し、美紀もお風呂の準備を始める。一夏は先ほどシャワーで済ませてるので、このまま寝ても問題はない。

「そう言えば一夏さん、今年に入って湯船に浸かりました？」

「いや？ てか、ここ数年湯船に浸かった記憶が無いな」

「研究熱心なのは良いですけど、たまにはゆつくりと湯船に浸かって疲れを癒したらどうですか？」

「風呂はあまり好きじゃないからな……」

織斑姉妹曰く、記憶を失う前はお風呂が大好きだった一夏だが、記憶を失い、研究に没頭する癖がついた所為か今では風呂嫌いになっているのだ。あまりにも風呂に入りがらなかつたので、幼少期に刀奈たちが強引に風呂場に連れて行こうとして漸く、シャワーは浴びるようになったのだ。

「長時間浸かってられる人の神経が俺には分からん……五分で上せる」

「一夏さんは温泉とか楽しめない体質なんでしょうね……」

そんな会話をしながらも、準備を終えた美紀は、風呂場へと向かっていき、一夏はせめて美紀が出て来るまではという事で読書を再開したのだった。

一夏たちがそんな会話をしている頃、IS学園上空ではウサ耳マツドが新たな研究を進めていた。

「これが完成すれば、いつくんでも見つける事が出来ないステルス機能が実現する……そうならばいつくんのお風呂を覗き放題……じゃなくなつて、偵察とかがより効率的になる」

思わず本音が漏れてしまったが、束も一夏が風呂嫌いであることは知っている。だか

らあくまでもそれが目的ではなく、自分たち以外が偵察をしても見つかることなくより効率的になるように開発を続けているのだ。

「まあ、ちーちゃんやなつちゃんレベルの人間が他にいるかと聞かれれば、いっくんやまーちゃんくらいしか思いつかないからね〜」

隠密行動でいえば、碧も得意としているのだが、束にとって碧は興味の対象ではないので名前が出て来ることは無かった。

「てか、あの愚妹である箒ちゃんの所為で、いっくんと遊べる時間が減っちゃってるしな〜……こんなことなら小学生の頃に消しておくんだっただよ〜」

記憶を失った一夏に付きまどっていた箒の事を、当時の束は本気で消そうか悩んでいたのだ。だが結局は身内と言う事で見逃したのだが、その判断が間違っていたと最近になって思い始めているのだ。

「突き止めた拠点も、既に引き払ってたし……サイレント・ゼフィルスはこちらからの干渉を拒んでるし……早いところいっくんの不安の種を減らさないと胃に穴が開いちゃうよ」

一夏の事を心配しつつ、箒の事をどうやって始末するかを考える束の姿を、料理を運んできたクロエは恐ろしいと感じていたのだった。

オータムの苦勞

実の姉がそんなことを考えているとも知らずに、箒はひたすらに連携の確認をさせられていた。

「何故このような特訓をしなければならぬのだ！　連携など取れなくとも、個々の能力で上回っていれば勝てるではないか！」

「相手は実力もあり連携もかなり上手く取れているんだ。こちらも個々の実力だけでなく、連携力も高めておかないと前回のようにあっさりと負けちまうぜ？」

「一夏の奴め。多勢に無勢とは……どこまで落ちぶれば気が済むんだ」

「立派な戦法だと思ふんだが……」

自分の考えを押し付けける箒に、パートナーにされているオータムはため息を吐く。ここ数日でオータムのため息を吐く回数は、飛躍的に増えたといえるだろう。

「男なら、潔く一対一で勝負するのが普通だろうが！　それを女の陰に隠れるなどという、卑怯極まりない行動に出るとは……やはり私が一から鍛え直す必要がありそうだな」

「総大将が前線に出てる方がおかしいのであって、その一夏とかいう餓鬼の行動の方が正しいんだとオレは思うんだがな……それに、一対一で戦えなんて、完全にお前のエゴだろ？ 向こうは質は兎も角量が多いんだから、一対複数の形を採るのが自然であり、こつちの考えなんて気にしないだろうが」

だんだんと自分が常識人ではないかと疑い始めるオータムを、スコールが陰から見てほくそ笑んでいる。その光景を見たダリルとフォルテは、そろって首を傾げるのだった。

「何を見てるのかしら？」

「あらレイン、相変わらず恋人と一緒になのね」

「パートナーと一緒に行動するのは普通だと思うけど？ それこそ、貴女が今見て楽しんでるオータムとSHだって、一緒に行動してるじゃない？」

「それもそうね。ところで、何か用事じゃないのかしら？」

用が無ければ話しかけてこないと分かっているので、スコールは無駄話はせずにダリルに先を促す。

「前に拠点として使ってた場所に、篠ノ之束のものとと思われる探査機が入ったらしいわ

よ。もしかしたらあの女が手引きしたんじゃないかと思つて」

「ああ、あれは完全にSHのミスよ。篠ノ之束の技術力を軽んじて、うかつにも名乗つて自分がどこから電話を掛けているか逆探知されたとか」

「阿呆の極みだな……まあ、ちゃんと報告しただけマシか」

箒も一応バカではないので、束に居場所がバレたかもしれないとスコールにちゃんと報告した。無論、まったく悪びれた様子も無かったので、スコールはまたしばらく箒に謹慎を命じたのだが……

「しかし、何時の間にもこの派閥も篠ノ之束に狙われるようになったのかしら？ 私が潜入する前は、組織内でも軽視されていたこの派閥が、今では大天災に狙われるほど成長してるなんて驚きよ」

「それは成長じゃなくつて、SHが無用に敵を増やしてた結果だと思っただけどね……あの子、自分の考えを人に押し付ける癖があるのに、他人からそれを指摘されると激昂するのよね。例えば間違つた考えでも『自分は悪くないんだ！』と言い張るし、こつちが間違つてるかのように言うし」

「……何でそんなヤツを引き入れたのよ」

箒を亡国機業に引き入れた過程を知らないダリルは、呆れた表情でスコールに問いかける。その隣では、フォルテも同じような疑問を抱いてる様子だった。

「Mが抜けちゃってから、人手不足が否めなくなっちゃってね……IS学園から数人攫ってこようと計画してたんだけど、一夏や更識関係、織斑姉妹といった監視がキツくて、あの子しか釣れなかったのよ」

「確かに、更識君の周りは監視がキツイ感じでしたもんね」

「布仏とかが目を光らせてたからね」

フォルテの問いかけに、ダリルも思い出したように頷きながら同意する。IS学園は今、どんな企業よりも監視が厳しく、また武力も何処の国よりも高い状態だ。そんな中から人を攫おうなどと考えなければならぬ程、スコール一派は追い込まれていたのかと、ダリルは組織の現状にため息を吐いた。

「まあそんなわけで、オータムが一から教育してるんだけど……これが厄介でね。下手にプライドが高いというか、他人の言う事をまったく聞かないのよね……洗脳でもしてあげようかとも思ってたけど、下手に弄るとIS適性が下がるかもしれないって研究者が言うものだから、それも出来ないのよね」

「いつそのこと殺して新しい人を攫って、洗脳して一から鍛えたらどうよ」

「ここまでオータムが苦勞してるといふのに、今更新しい人間を攫ってきたからSHは処分するなんて言ってみなさいよ。あの子、暴れだすわよ?」

「確かに……オータムならありえそうね」

ありえそう、ではなく確実に暴れるだろうと、ダリルも思っている。それだけ箒の指導は大変な事なのだろうと知っているし、学園でも織斑姉妹が散々箒に注意や説教をしていたのを思い出し、それをオータム一人でやっているのだと実感すると、少し同情しなくなったのだった。

「とりあえず今は、篠ノ之束の手がこつちに伸びてこないようにしなければいけないわね。過激派が上手い事動いてくれれば楽なだけだ」

「やつらがIS学園を襲うとは思えないのだけど? 過激派を名乗っておきながら、妙に慎重な動きをするので有名なんだから」

悩みの種が増えたと、スコールは頭を抑えながらオータムが指導している姿を眺めるのだった。

恋バナ

サラの専用機製造の為、一夏は授業に参加していない。それでも一年一組の授業は緊張感を持ったものとなっている。理由は簡単で、織斑姉妹が見学しているからである。

「それではこの問題を……織斑さん、お願いします」

「はい」

真耶に指名され、マド力は問題を解いてみせる。本来一学年下であるマド力ではあるが、時間を見つけては一夏や虚に勉強を見てもらってるお陰で、何とか平均点付近にはいるのだった。

「はい、正解です。この辺りは次の試験で重点的に出題しますので、皆さんしっかりと覚えておいてくださいね」

真耶がニッコリと笑顔を浮かべながら教室を見回し、全員が嫌々ながらもノートを取っているのを確認して小さく頷いた。そのタイミングで終業のチャイムが鳴り、午前の授業は終了となった。

「はい、ではここまでです。午後は実習ですので、遅れずにアリーナまで来てくださいね」

真耶が注意事項を言い渡し教室から出ていく。それに続くように織斑姉妹も教室から出ていき、張り詰めていた空気が一気に弛緩した。

「相変わらず姉さまたちがいると緊張しますね」

「まったくだよ。いつちーがいないから、怒らせちゃったら大変だもんね」

「そもそも怒らせなければいい話だと思うけどね」

マドカ、本音、美紀の三人で話しながら教室から出て、簪と合流する。この後食堂に移動し、刀奈や虚とも合流するのだが、今は授業の内容で盛り上がるのだった。

「山田先生の授業も、最近は脱線しなくなったから安心して聞いてられる」

「てか、姉さまたちがいるから、清香たちも茶々を入れられないのだと思いますよ」

「確かにね。キヨキヨたちも大人しくなってるから、進むスピードが速くて困っちゃうよね」

「それは授業が早いんじゃないかって、本音が遅いんじゃない？」

簪のツツコミに、美紀とマドカが揃って頷く。同じクラスではなくとも、本音の行動など簪にはお見通しなのだ。

「さすがかんちゃんだね。伊達に付き合いが長い訳じゃないよ」

「そもそも、本音の事なら美紀やマドカだって分かるでしょ？」

「確かにそうだね」

「本音は分かりやすいですからね」

「そんな事ないよ」

お喋りをしながら廊下を歩いていた本音は、正面にいた女子に気付かずにぶつかってしまふ。

「ほえ!! ごめんごめん、大丈夫？ って、カスミンだ」

「いてて……本音？ こっちこそゴメン。前見てなかった」

「食堂から帰って来てたみたいだけど、もうお昼済ませたの？」

「違いますけど……ちよつと居心地が悪くなったので戦略的退散を……」

「逃げる事ないじゃないのよ、香澄ちゃん」

「さ、更識先輩……」

「お姉ちゃん？」

香澄が逃げていた相手は刀奈で、簪はまた姉が何かしたのではないかと訝しむ。そんな視線を受けて、刀奈は慌てて否定を始めた。

「べ、別に何もしてないわよ？」

「じゃあ何で香澄はお姉ちゃんから逃げてるの？」

「私は、香澄ちゃんが一夏君の事をどう思っているのか聞いただけよ」

「……それだけ？」

あつげにとられた表情で香澄を見つめると、気まずそうに香澄は頷いた。

「女子高生の一般的なトーク内容だと思うんだけど、どうも香澄ちゃんは免疫が無いみたいだね。走って逃げちゃったから追いかけてきたんだけど、本音とぶつかるとは……てか、何で一緒に来なかったの？」

「私さっきの授業中に具合が悪くなって、途中から保健室にいたんです。それで、中途半端な時間に体調が回復したので、先に場所取りをしておこうと思ってチャイムと同時に食堂に来たんですけど……そこに更識先輩がやって来たんです」

「そう言う事だったの。具合が悪くなったって、あの日？」

「はい」

「なら仕方ないわね」

一夏がいたら逃げ出しそうな内容だが、女子高と言う事もあって刀奈たちはあまり気にしない。むしろ気にしている方がおかしいとさえ思っていたのだった。

「ところで、おねちゃんは何で黙って立ってるの？」

「えっ、虚ちゃん？」

「お嬢様？　あまり後輩をイジめるのは感心しませんね」

「いい、イジメてなんかないわよ？　純粋な興味よ。決してからかおうなんて思ってたかったわよ」

「本当ですか？　一夏さんの前でも同じことが言えますか？」

「一夏君、こういう話題好きじゃないから、言っても相手されないと思うけど……」

虚の威圧感に後ずさりながらも、刀奈は他意はなかったと弁明する。もし他意があればすぐに認めると分かっている虚は、刀奈に他意はなかったと認め威圧感を抑えた。

「ところで、一夏つてご飯どうしてるの？　朝からずっと整備室に籠りつきりだけど、ちゃんと食べてるのかな？」

「一夏さんは料理上手ですし、ご自分で用意してるのかもしれないよ」

「そうですね。一夏さんなら、それも有りそうですね。これが本音とか刀奈お姉ちゃんだと、用意するのが面倒だからって理由で食べないかもしれないけど」

「本音と一緒にしないでよね。私は、ちゃんと一夏君にお願いするから大丈夫だもん」
「それは大丈夫だとは思えないんだけど……」

胸を張って威張る姉に、簪が呆れながらツツコミを入れる。

「ところで、何時までここでお喋りをするんですか？ 早くいかないと場所が取られちゃいますけど」

「そうだった！ それじゃあ、行きましょう」

マドカの冷静なツツコミに刀奈が反応し、彼女が先頭に立って食堂へと向かって行ったのだった。

サラの専用機の名前

専用機の名前を決めた一夏は、その名前を元にサラの要望に応えるための武装を造り始める。時間的問題は一夏にはあまりないのだが、学校行事という事を考えると、さすがにサボるわけにはいかないので、来週に迫った修学旅行までには終わらせたいと考えているのだった。

「一夏さん、さすがに一週間で専用機の製造は難しいではありませんかね?」

「授業に一切出なければ問題ないだろ。もちろん、あまり無理すると刀奈さんや簪に怒られるし、虚さんや美紀に心配を掛けてしまうから、夜遅くまで作業しないと仮定した場合の話だな。夜通しやっつけていいなら、三日もあれば終わるだろ」

「専用機製造を三日で、しかも一人でとなると、ますます篠ノ之博士に近づいたんではありませんか?」

「俺はあそこまで変態のつもりは無いんだが」

「変態って……仮にも世界的な研究者ですよ?」

「宇宙規模のストーリーカーなんだから、変態で間違いないだろ」

今もどうにかしてこの室内を覗けないかと計画している束の事を想像し、一夏はその一言で切り捨てた。闇鴉も一夏から知らされた限りに知識しかないので、篠ノ之束は変態であるという事は否定しないのだった。

「それで一夏さん、サラさんの専用機の名前と、要望とはいったい？」

「水を使った戦いをしたいらしくてな。そんな事を考えるとは思ってなかったから、名前を探するのに苦労したが、漸くそれらしくてまたISにも相応しい感じの名前を見つけたんだ。ちよつと縁起は悪いがな」

「縁起が悪い？」

一夏の最後の一言に引つ掛かりを覚えた闇鴉は、自分同様に日本の神話からそのような神や妖怪がいたかどうかを探る。だが、彼女には該当する名前を見つけ出すことが出来なかった。

「もしかして、ギリシャ神話から取りました？」

「二応ギリシャ代表が使う専用機だからな。この前図書室から借りた本で見つけたんだ」

「それで、この子の名前は？」

まだコアと外装の一部しか出来ていないが、コアそのものに自我があるので、闇鴉は既に一個体として認識している。もちろん、一夏も一個体としてコアに接しているの
で、このコアも一夏たちに友好的に接している。まあ、生みの親である一夏に逆らえば、
一瞬でスクラップになると怯えている可能性も否めないが、一夏を嫌うコアを、闇鴉は
今のところ見たことが無かったので、そっち方向ではないだろうと思っている。

「セイレーンだ」

「……本当に物騒な名前を持ってきましたね」

「名前通りの技を考えようとも思ったけど、さすがに白骨化させるのはマズいしな……
水で幻惑させる程度に留めようと思ってる」

「それが良いですよ」

闇鴉も、セイレーンの伝説は知っているようで、一夏がいった「白骨化」がどういう
意味なのかを即時に理解して、一夏の考えに同意した。さすがに消して、更に殺すのは
マズいと闇鴉も思ったのだろう。

「惑わされてる間に、普通に攻撃を打ち込むわけですね？」

「切り込んでも良いが、サラ先輩もセシリア同様に遠距離主体だからな。一応近接格闘
用の武器や、レーザー以外の遠距離武器も積み込むが、基本的にはレーザー光線で戦う

「んだらうな」

「偏向射撃が使えるので、レーザーの方が都合がいいんでしょうね」

「その気になれば、ミサイルやマシンガンの軌道を変えることだって可能だと思っただが……」

「それは、一夏さんが物理的に軌道を変えているだけでしょうが……」

直撃を避けるために、一夏は着弾ギリギリで相手の弾に圧力を掛けて少し軌道をズラしてダメージを軽減させるという戦法を取ったりする。そんなことが出来るのも、一夏の動体視力の良さとギリギリまで恐怖に耐えられる忍耐力があつてこそなのだが。

「とりあえずこれで当面の問題は片付きそうだな」

「専用機製造が終われば、修学旅行ですよ？ 亡国機業が狙つてきそうないイベントです」
「単純に戦力が分散するからな……IS学園を狙うのか、それとも一年生を狙うのかでまた変わってくるな……まあ、狙いが俺のようだし、九分九厘一年生を狙ってくるだろうけどな」

「そんな他人事のように言つて……ご自身で言つてるじゃないですか。ターゲットは一夏さんだつて」

「俺を狙つてくれた方が対処しやすいからな」

「まあ確かに、一夏さんが不在の間にI S学園が襲われたら、機密文書とかVTSのメイ
ンシステムにハッキングされたりと、面倒事が多そうですしね」

「何より後始末が面倒だ。撃退して終わりなら、修学旅行中に襲われた方が楽だからな、
観光とかもしなくて良くなるだろうし」

「本当に行きたくないんですね、修学旅行……」

一夏のセリフに、闇鴉が呆れた事を隠そうともしないでため息を吐いた。学校行事と
割り切って楽しめればまだましなのかもしれないが、一夏の場合遠出をすればほぼ間違
いなく面倒事に巻き込まれるのだ。とてもじゃないが旅行を楽しもうという精神を持
てるわけがない。

そう言った事情から、一夏は出来るだけ遠出はしたくないと考えているのだ。もちろ
ん、仕事の都合で海外などに行かなければならなくなった時は、諦めて出かけるのだが、
それ以外では極力今の拠点から動かないようにと心に決めていたのだ。

「そこまでなら、織斑姉妹に頼んで修学旅行を欠席させてもらえば……」

「そんなこと頼んだら、見返りに何を要求されるか分かったもんじゃない」

「……実の姉に対して、物凄い偏見ですね」

「実の姉だからこそ、そうなると思ってるんだが？」

一夏の返しに、闇鴉はそれ以上何も言えなくなってしまう、大人しく一夏の護衛としてこの整備室の入口を守る事に努めたのだった。

美紀の意思

授業中は闇鴉に護衛を任せている美紀だが、授業が終われば一目散に整備室へと向かう。無論、廊下を走って織斑姉妹に怒られる、などというヘマを演じる事無く、かつ出来るだけ早く移動する事で一夏の安全を確保する事に努めていた。

「一夏さん、美紀です」

扉越しに声を掛けると、内側から鍵の外れる音が聞こえ、中から闇鴉が美紀を招き入れた。

「お疲れさま、後は私が引き受けますので、闇鴉は待機状態に戻って構いませんよ」

「いえ、私もこのまま人の姿で一夏さんの護衛を務めさせていただきます。一人より二人、ですからね」

「どさくさに紛れて、自分を人間とカウントするな」

一夏にツッコまれて、闇鴉はチロリと舌を出して反省した風を装った。あまりにも人間じみた行動に、美紀は一瞬だけ闇鴉がISであることを忘れそうになった。

「今日は訓練とかは良いのか？ 無理して俺に付き合う必要は無いんだが」

「何言ってるんですか。私は一夏さんの護衛なんですから、それが最重要事項なんです」
「I S学園内はそれなりに安全だし、スパイだったダリル・ケイシーはもういないんだ。闇鴉がいれば助けを呼ぶことも簡単だから、無理してこっちに付き合う必要は、本当に無いんだぞ？」

「では、私が一夏さんといたいからこうして護衛を務めているのです。それなら文句は言えませんかよね？」

あつさりと開き直った美紀の態度に、一夏は作業の手を止め美紀を見つめる。

「随分と物好きだな、美紀は……俺といたって面白くはないだろ」

「面白いとか、そういう概念で一緒にいる訳ではありませんから。もちろん、刀奈お姉ちゃんや虚さん、簪ちゃんや本音、碧さんやマドカだって、一夏さんと一緒にいて楽しいから、とかそういうった感情で一緒にいる訳ではないですよ。一夏さんも分かっていますよね？」

「……分かっているが、今はその気持ちに応える事は出来ない。社会的地位を確立し、高校生だからという理由で舐められなくなれば、そういう事に考えを割く余裕も生まれるかもしれないが」

「今の一夏さんでも、舐められることはないと思いますがね」

表面上、更識企業のトップは尊と言う事になっているが、それはあくまでも一夏が高校生という地位だからであり、裏では一夏がトップだと認められている。だが一夏は、余計な混乱を招かぬよう、更識家の当主は尊が継いだと言うことにしておくべきだと主張し続けている。

「とにかく、私は私の意思でここにいますので、一夏さんが気にする必要はありませんよ」

「ああ、分かった。それじゃあ、護衛を頼む」

「はい、承りました」

満面の笑みで応える美紀に、一夏は苦笑いを浮かべながら視線を自分の手元に戻したのだった。

一夏がいらない今、生徒会室では刀奈が悲鳴を上げながら書類整理を行っている。普段なら逃げ出すのだが、一夏がいらないので虚の監視がいつも以上にキツイので、さすがの刀奈も逃げ出す事が出来ないのだった。

「虚ちゃん、あとどのくらいあるの?」

「そうですね……この山が終われば、後三つくらいでしょうか」

「案件が?」

「山が、です」

分かっていたこととはいえ、はつきりと言われてしまうと絶望感が増してきて、刀奈

は机に突っ伏してしまった。

「そもそも、生徒会役員は私と虚ちゃんだけじゃないわよね？　本音はどうしたの、本音

はー！」

「あの子はいてもいなくても変わらない……いえ、いない方が仕事がありますので呼んでません」

「……何気に酷い事言ってるわね」

だが虚の言う通り、本音がいれば今以上に仕事は捗らず、今以上に絶望感を味わっていたかもしれないと思い直し、本音がない事を幸福と思う事にしたのだった。

「一夏君がいてくれれば、この程度の仕事、早く終わるんだけどな」

「仕方ありませんよ。一夏さんはサラさんの専用機製造が忙しいのですから」

「それは分かっているんだけどね……修学旅行もあるし、なるべく早く終わらせたいって一夏君の気持ちを尊重するべきだって事も分かっているんだけど……ね。これだけ仕事があると、愚痴も言いたくなるわよ」

愚痴を言いながらも、刀奈はちゃんと書類整理を進めている。忘れがちだが、彼女も次期当主として過ごしていた時期が長いので、この程度の仕事は目を瞑ってもすること

が出来る。出来るだけで、実際にやったら怒られること間違いなしなのでやらないが。

だから会話をしながらだろうがミスすることなく処理を続けており、早くも次の山も半分が消化しきっていたのだった。

「それにしても、まだ一夏君を部活に参加させたいって要望があるわね……」

「一夏さんが部活動に顔を出してくれれば、それだけでモチベーションが上がると考えているのでしょうね」

「そんな暇がないって言えればいいんだけどね……」

「専用機はあくまでも更識企業が造っている事になってるので、一夏さん個人がやっているという事を言えませんかからね」

「そもそも、それ以外にも一夏君は忙しいんだから、いい加減諦めてくれないかしら……：目を通すのも飽きてきたんだけど」

「今度の全校集会で、お嬢様がそう仰ればよろしいのでは？ 生徒会長として全校生徒に申し伝えれば、このような要望も無くなるでしょうし」

虚の提案を受けて、刀奈は割かし本気でそうしようかと考え始めていた。もちろん、それくらいで諦めてくれるのであれば、こう何度も申請書が出される事は無いだろうと分かっているのです、どれほど効果が出るのか、期待はしていないのであった。

海外組の期待

修学旅行先が京都ということ、海外組は妙に高いテンションでここ数日を過ごしている。一年一組の海外組も例外ではなく、セシリア、ラウラ、シャルロットの三人は修学旅行を非常に楽しみにしている様子だった。

「アンタたち、随分と楽しそうね」

「鈴さんは楽しみではありませんの？ 日本の観光名所、しかも京都ですよ？」

「アタシは小学校の時に行ってるからね。その時も特に楽しみだった覚えは無かったけど」

「そうなの？ 京都と言えば古き良き文化が残っていると聞くが？」

「確かに古い建物とかは多いけど、そんなのを見て回るだけって面白いかしら」

同じ海外組でも、鈴は特に楽しみにはしてい無さそうなのを見て、シャルロットが少し期待値を下げた。

「僕も興味はあるんだけど、そんなによさそうな感じはしないんだね」

「どう思うかはアンタたち次第だけど、変に期待してがっかりするのを避けたいのなら、

期待値は下げておくことをお勧めするわよ」

「鈴は空気が読めないんだね」

「あらティナ。アンタも楽しみにしてる一人なの？」

鈴のルームメイトであるティナ・ハミルトンが会話に加わり、更にエイミーもこの場に加わってきた。

「ネット検索しただけでも、興味がそえられる箇所が多くて困るわよね」

「エイミーさんもですか？ 実は私も調べて行きたいと思った箇所が多すぎて困ってますの」

「教官たちの話では、二日目は自由行動らしいからな。どのルートで動けば効率よく見学出来るか、今からその話し合いをしておいた方が良いのではないだろうか？」

「ラウラも興味津々なんだね」

はしやいんでいるラウラを、シャルは生暖かい視線で見守る。ドイツではそういった事が出来なかつたラウラは、旅行というだけでテンションが上がっているのだった。

「自由行動じゃなくて班行動でしょ？ 高校生にもなつて集団行動しなきゃいけないのは面倒よね」

「一応学校行事ですから、それは仕方ないのではないでしょうか？　ましてや私たちは専用機を持っているのですから、それなりに行動に注意しなければならぬ立場なのですよ？　少しくらいは我慢しましょう」

「私は持つてないけどね」

「アメリカは今大変だもんね。僕も取引していたアメリカの企業が潰れちゃつて焦つてるんだけどさ」

「高校生の会話とは思えせんわね、シャルロットさん」

形だけとはいえ、デュノア社の社長として経営に携わっているシャルは、ダリル・ケイシーが亡国機業の人間だったと分かったすぐ後に、アメリカ企業との取引を控えるように通達していた。

その直後は社内から不審に思う声が上がっていたが、前からあつた銀の福音問題と併せて考える人が増え、アメリカのＩＳ企業の株はかつてない大暴落の一途をたどり、遂には倒産するしかない企業が続出したのだった。あのまま取引を続けていたら、デュノア社もその煽りを喰らつていたかもしれないと、今ではシャルロットの先見の明に心酔する社員までいるくらいになっていた。

「実は一夏に言われただけなんだけど、何故か僕の手柄になつてるんだよね……困つた

事になったなって思ってるんだけど、何か対策は無いかな？」

「ですから、一介の高校生でしかない私たちに、企業運営の相談をされても困るのです
が」

「正直に話したらどうなのよ。自分じゃなくて一夏がそう言ったから指示したって」

「うん、言ってるんだけど……」

「なによ？」

歯切れの悪い答えを返したシャルに、鈴が首を傾げながら続きを促す。

「一夏自身が僕の独断だって明言しちやったから、今更何を言っても覆せないんだよね

……」

「何で一夏はそんなことを言ったのかしら？」

「てか、更識君ってそんなに偉い人だったのね」

「ああ、ティナはあまり付き合えないもんね。あいつはあれでも次期更識の当主だから。それなりに権力もあるし、開発・営業では群を抜いているって噂よ。このままじゃ近い将来IS企業の殆どは更識の傘下に入るかもしれないって噂まで流れるくらいのやり手なんだってさ」

「誰から聞いたのよ、そんな噂……鈴がIS企業の噂に詳しいとは思えないんだけど」

「失礼ね! ……」と言いたいけど、本音から聞いただけなのよね」
「布仏さんか、イマイチ信憑性が薄い相手ね」

更識関係者なのだが、本音の信頼度は他の人と比べると大分低い。本人もそれを自覚しているので、本当のことも嘘っぽく伝わるのが不満だと零しているのだが、この場にいる誰もその事を知らないの、噂の真意は確かめようがなかった。

「そんなわけで、僕も何故か忙しくなってきたから、少しくらい息抜きしたいな」

「落ち着けるとは思うけど、日本人にしか分からない空気感かもよ?」

「鈴だつて中国人でしょ?」

「だからアタシには分からなかったわよ。まあ、一緒にいた一夏も興味薄そうだったけどね」

「そう言えば鈴さんは、その時から一夏さんとお付き合いがあるのでしたね」

「小学五年からの二年だけね。その後は一夏は学区が別だったから」

「だが、付き合いは続いていただけだろ?」

「休みの日に遊んでたくらいだけどね」

その後はとりとめのない話をして、下校時間までお喋りを続け、それぞれが期待を胸に準備を進めるのだった。

更識所属のレベル

朝から作業しようと考えていた一夏だったが、一時限目は教室にいてくれと千冬と千夏に頼まれたので、HRの時間に整備室から教室へとやってきた。

「あれ？ 今日には授業に出るの？」

「織斑姉妹に頼まれたんだ。てか、俺が教室に来ちゃいけないのか、静寐」

「ここ数日一夏君はいなかったじゃない？ だから、専用機が完成するまで授業に出ないのかと思ってたわよ」

「俺もそのつもりだったんだが、今日の一時限目は教室にいろと言われたんだ」

相変わらずの上からな物言いではあったが、そこを指摘しても何も変わらないと理解しているの、一夏も余計な波風は立てずに大人しく教室へ来たのだった。

「はい、席に着いてください」

時間になり、真耶が教壇に立つと、一夏と静寐も大人しく自分の席へと腰を下ろす。

「今日はこの時間と一時限目を使って、修学旅行の部屋割りとグループ分けをしたいと

「思います」

「部屋割り？ そんなのは先生方がお決めになればよろしいのではないのでしょうか？」

「ある程度は生徒の自主性に任せる、と織斑先生が仰られましたので」

「また仕事を投げたな……」

その本人たちは、今日は顔を出していない。来れば怒られると分かっているようで、今は職員室で大人しくしているのだろう。

「ちなみに、俺はさすがに個室ですよね？」

「更識君も相部屋だそうです」

「……学園内ならどうとでも言い訳できるが、さすがに外でそれはマズいのではないでしょうか？ 倫理的にもですが、学園の評判も落ちると思いますよ」

「更識君の事を説明したら、ホテル側も納得してくれたようですよ」

「……………」

説明した側も問題だが、それで納得するホテル側にも問題があるようだ、と一夏は痛む頭を抑えながら首を垂れた。

「じゃあ兄さまと同部屋になるのは、私と本音、それと美紀で決まりですね」

「あつー織斑さんずるーい！ 私たちだって更識君と同じ部屋で寝たいーい」

「もつと言えば、更識君と同じベッドで寝たい」

「分かる！」

妄想が加速し、授業中だと言う事を忘れて盛り上がる女子たち。真耶がオロオロと慌て始める中、一夏はゆっくりと席を立ち教室から出て行こうとする。

「さ、更識君？ 何処に行くんですか？」

「くだらない事で時間を無駄にしたくないので。俺の部屋はマドカが言ったメンバーで結構ですのうで」

「で、でも……希望者も多いですし、ここは公平に——」

「マドカは血縁者で美紀と本音は俺の護衛です。文句はありませんよね？」

「は、はい……」

千冬や千夏に睨まれた時以上の恐怖を感じ、真耶は一夏の言葉に同意を示す。クラスメイト達は文句を言いたそうだったが、一夏が一睨みしただけで不満を言う勇氣は無くなってしまったのだった。

「では山田先生。俺はこれで。もし織斑姉妹が何か言い出したら、俺のところに来るよ

うに言っておいてくださいいね」

「わ、分かりました！」

織斑姉妹以上に一夏を怒らせてはならないと身を持って実感した真耶は、一夏に敬礼を送り見送った。一夏が遠ざかったのを確認してから、真耶は教壇でホツと息を吐いた。

「マヤヤ、あつさりと説得されないでよー」

「せっかく更識君とお近づきになれるチャンスだったのに」

「あ、あの目で見られたら誰だって大人しく言う事を聞きますって……あの目は人を殺せますよ……」

真耶の言葉に、本音とマドカが何度も頷いて同意する。マドカは血縁者と言う事もあり、一夏が怒ればどれほど怖いのか知っているし、本音は何回か怒られそうになったことがあり、こちらも一夏は怒らせてはいけないと身を持って知っているのだ。

「そもそも、一夏君と同じ部屋で生活するって事は、それだけ敵に襲われる可能性が高くなるって事よ？ みんなはその事を考えてたのかしら？」

「私や静寂さんは一応更識製の専用機を持っているので、まだ自分の身は守れますが、亡

国機業が攻め入ってきた時の事を考えていましたか？ 敵の一人は凶暴で凶悪な篠ノ之さんなんですよ？ 生身で対抗出来るとお考えだったのでしょうか？」

鵜鴿を持つ静寢と、久延毘古を持つ香澄の追加説明で、自分たちの考えの無さを実感したクラスメイト達は、大人しく自分たちだけで部屋割りをすることにしたのだった。

「あ、ありがとうございます。鷹月さん、日下部さん」

「何故山田先生がお礼を？ 私と香澄さんは当然の事を言っただけです」

「むしろ、私や静寢さんでも亡国機業相手には力不足だと言われているのですから、専用機を持たない皆さんが一夏さんと同室になったら、一夏さんの足を引っ張るところでは済まなかったでしょうね」

「二人とも襲われる事を前提で話していますが、そうならない可能性だって……」

「限りなくゼロですね。私が視た限りの未来では、何パターンもの未来で襲われていきます」

「何だか視える未来の数が増えてない？ この前までは二つくらいじゃなかったっけ？」

「久延毘古の性能が上がったのと、私自身が処理出来る情報量が増えたのが理由ですね」
「ますます香澄さんに勝てなくなりそうね」

「情報は処理出来ても、ISでの動きは静寂さんの方が上じゃないですか」

忘れがちだが、この二人も更識所属になれるだけの実力があるのだ。ハイレベルな会話内容に、真耶は考えるのを止めて大人しく部屋割りが終わるのを待つ事にしたのだ。た。

クラスメイト達の納得

部屋割りの書かれた用紙に目を通し、碧は納得の表情で真耶に用紙を返した。

「さすがに一夏さんと同じ部屋に専用機を持ってない子を入れる、なんてことはしなかったのね」

「更識君が有無を言わずこの三人で決定だと言つて教室からいなくなり、鷹月さんと日下部さんの補足説明で皆さん納得してくれましたから」

「なんだ、更識は最後まで教室にいなかったのか？」

二人の会話を聞いていた千冬が、一夏が教室を出て行ったと言う事に引つ掛かったようだった。

「時間を無駄に出来ないとかで、自分はこの三人と同室で構わないと言い残して整備室に向かつて行きました」

「忙しいのは分かるが、もう少し学校行事にも目を向ける余裕を持った方が良くと思うのだが……」

「今回は日本政府だけでなく、ギリシャ政府やイギリス政府の方たちも注目してますか

らね。普段以上に一夏さんが頑張つてしまうのも無理はないと思いますよ。これが成功すれば、更識企業はますますの発展が見込めますから」

「……あいつは一人でどれだけ企業を大きくすれば気が済むんだ？」

更識の当主であることは知らなくとも、一夏が更識企業を大きくした事は千冬や千夏も知っている。だからこのような疑問を抱いたのだが、その疑問に答えられる人は、ここにはいなかった。

「一夏さんとしては、世界が平和になるのならどこまでも大きくすると考えるかもしれないね」

「そのうち自分のデータを解析して、男性にも使えるISとかも開発しそうだもんな」
「それが叶えば、このふざけた世の中も多少はマシになるかもしれないな」

自分たちがその風潮の元凶とはいえ、今の行き過ぎた女尊男卑に辟易している千冬と千夏は、一夏がこの世の中を矯正してくれるかもしれないという意見に目を輝かせた。

「腐った世の中を一夏が直すのか……悪くない未来だ」

「そして、その一夏はわたしたちの弟なのだと公表すれば、自分たちの地位が危ぶまれる事になるであろう女どもからの不満も消えるだろうしな」

「自分たちの手柄にしようとしてますが、一夏さんの立場なら貴女たちが出てこなくても刀奈ちゃんや虚ちやんたちが文句を言う女性をねじ伏せると思えますよ」

確かに織斑の名が持つ威力は強大で、名前を聞いただけで竦む女性は少なくないだろう。だが一夏の周りには、それに匹敵するくらい強力な名前が他にもあるのだ。

現役の日本代表で、既に一度世界大会を制した刀奈や、大企業である更識企業で企業代表を務めている虚も、世界中に名が知られている。織斑姉妹を頼るくらいなら、一夏はこの二人に頼るであろうと碧は考えているのだった。

「最悪、私もお手伝いしますし」

「貴様も世界的に名が知られているからな……確かに大人しくはなるだろう」

「だが、それでも文句を言う輩がいるのであれば、わたしたちも協力させてもらうぞ」

「……仮定の話でここまで盛り上がれるのは、千冬さんたちだけですよ」

あくまで仮定の話だと言う事を忘れて盛り上がる織斑姉妹に、一人取り残された真耶がツツコミを入れたのだった。

一夏と同じ部屋になれるかもと夢想していたクラスメイト達は、自分たちの考えの甘さに肩を落としていた。

「更識君と一緒に行動するって事は、それだけ狙われるリスクが上がるって事を忘れてたわね」

「更識君は周りを守るために自分を犠牲にする人だし、私たちの所為で更識君がいなくなっただなんて事になったら、更識企業からどれだけの賠償金を請求されるか……考えただけで震えが止まらないわよ」

「次期当主様だもんね。それだけ敵も狙う価値がある人なんだよね」

クラスメイト達の会話を聞いた美紀が、フオローを入れるかのように会話に入った。

「一夏さんは周りが傷つくの嫌うお方ですからね。みなさんを出来るだけ安全で、楽しい修学旅行として思い出に残すため、自分と行動を共にしない方が良いと判断してのお言葉ですので、あまりお気になさらない方が良いでしょう」

「でも、更識君が整備室に行ったあとで鷹月さんと日下部さんに言われたことは、確かにそうだなって思ったもんね。専用機を持たない私たちが更識君の側にいても、足手纏いになるだけだし」

「更識君がいなくなるなんて嫌だから、私たちは大人しく別行動をしてた方が良かったって考えに至ったわよね」

一夏を独占しようとして失うのであれば、遠くから眺めるだけだが近くにいてくれる方が良くと結論付けたようで、クラスメイト達は今は空席になっている窓際の席に目を向けた。

「そもそも、篠ノ之さん相手に勝てる未来が見えないものね……」

「言動は兎も角として、戦闘能力は高かったものね……」

「織斑姉妹にあそこまで反抗できる神経はすごかったよね……」

「兎に角、一夏さんはみなさんの安全を考えてあのような発言をしたのです。決して皆さんの事を嫌ってるわけではありませんので、ご安心ください」

最後にもう一度だけフォローを入れてから、美紀は自分の席へと戻る。まだチャイムまでは余裕があるのだが、既に廊下に織斑姉妹がスタンバイしているので、一秒でも遅ければ理不尽な制裁が入る事を恐れ、美紀はクラスメイト達にもその事を伝えたのだ。た。

常識外れの速度

消灯時間ぎりぎりになって漸く部屋に戻ってきた一夏を、美紀は厳しく問い詰めるつもりだった。だが一夏が思ってた以上に疲れ切っていたので、とりあえずシャワーを浴びてスッキリしてくるようにと一夏を浴室に押入れ、着替えを脱衣所に置き出て来るのを待つことにした。

『一夏お兄ちゃん、かなり疲れてるけど何してたんだらう』

「IS製造ではないのでしょうか？ 今一夏さんが忙しくしている理由は、それしか思い当たらないのですが」

金九尾の疑問に、美紀は思い当たる理由を告げて読書に勤しむことにした。

『てか、一夏お兄ちゃんがあそこまで疲れるって、どんな作業をしてるのさ？』

「知りませんよ、そんなこと」

『美紀、一夏お兄ちゃんの護衛なんですよ？ 何で今日は整備室に行かなかったのさ』

「今日は私ではなく本音の番でしたから……まさかそれが原因なんでしょうか？」

本音が護衛の任をサボり、その間に襲撃を受けたのではと思い、美紀は慌てて携帯を操作しようとして、そんなことは無いと思い直しベッドに身体を預けた。

「さつきから何をしてるんだ、美紀は」

「い、一夏さん……いつ出てこられたのですか？」

「本を手にとって金九尾と話してた辺りからか」

「随分と早いですね……」

「元々風呂は嫌いだからな」

そう言つて一夏は自分のベッドに腰を下ろし、美紀に視線を向けたまま何も話そうとしなかった。

「えっと……今日は随分と遅くまで作業していたのですね」

「朝のHRで無駄な時間を使ったからな。その分を取り戻そうと必死になってたら……こんな時間になってた」

「いくら必死になってたとはいえ、本音がいたでしょうが。時間なら本音が教えてくれたのでは？」

美紀の疑問に、一夏は首を左右に振つて答える。

「本音は来てなかったぞ。多分自分の当番だって事を忘れて、マドカたちと遊んでたんじゃないか？」

「本音は……自分が一夏さんの護衛だって事を自覚してないのでしょか」

「自覚はしてるだろうが、今は前ほど学園内で緊張感を保つ必要は無いからな。少し気が緩んでいても仕方ないだろ、本音だし」

「一夏さんは本音に甘すぎませんか？ 本音の為にも、もう少し厳しくした方が良くと思うのですが」

「本音に厳しくしても逆効果だろうしな……言っても無駄な事に労力を割きたくない」
「それは……否定できないかもしれないけどね」

美紀も何度か本音に注意をしたことがあるが、あまり彼女には響いていない様子だったし、厳しくするだけであの性格が治るのであれば、布仏家の人間が既にやっているだろう。

本音があのまま成長したと言う事を考えれば、一夏が言った『無駄な労力』という表現もあながち間違えでは無いのだろうと、美紀はため息を吐いて納得したのだった。

「それで、今日は護衛無しだったんですか？」

「私がいましたので、問題はありませんよ」

「闇鴉……だからいきなり人の姿になるのは止めろとあれほど……いや、言っても無駄か」

「漸く一夏さんの許可も下りましたので、これからはどんどん人の姿になっていきたいと思えます」

本音とは別だが、闇鴉にも言っても無駄だという事を認めた一夏は、これ以上ツッコミは入れないと諦め、闇鴉はその言葉に喜んだ。

「てか、闇鴉がいたのですしたら、時間を忘れるなどと言うことにはならなかったのでは？」

「それが……お恥ずかしい事に、周りに気を張っていた所為で、時間の概念をすっかり忘れていました」

「そんなに長時間気を張っていて、疲れたりしなかったのですか？」

「私はISですからね。体力という概念は存在しませんので」

闇鴉のセリフに、美紀は納得したように頷き、そして呆れた。研究や開発に没頭して時間を忘れるのは、一夏の昔からの癖だから仕方ないが、その護衛として止めに入らなければいけない闇鴉までも、時間の概念を忘れる傾向があると、美紀は頭の片隅に記憶

しておくことにしたのだった。

「これからはタイマーでもセットしておくことをお勧めしますよ」

「鳴ったとしても、集中していると気づかないだろうし、途中でうるさいと思って投げ捨てるかもしれない」

「その前に、作業を始める前にセットする事を忘れる可能性の方が高いのではありませんか？」

「それも否定出来ないな」

「それでは、一夏さんの護衛は私と簪ちゃんで交互に請け負いますので、それなら時間を忘れて開発に没頭し、このような時間まで帰ってこないという事態も避けられるでしょう」

美紀の提案に、一夏は軽く首を振った。

「その必要は無い。あと少して完成だから、もう周りが見えない程集中する事も無いだろうしな」

「今日だけで二日分以上は進めましたからね」

「……相変わらずの速度ですね、感服しますよ」

「若干呆れてないか？」

美紀の反応に、一夏が呆れられているような感覚を覚えたのか、そんな事を聞く。

「呆れてるに決まってるじゃないですか。ただでさえ人並み外れたスピードで作業をこなすとは思ってましたが、I S製造を一から始めて、僅か数日で完成間近までこぎ着けるんですから。呆れない方がおかしいと思いませんか？」

「そんなものなのか？ この間束さんに聞いたら、これが普通だと言ってたが」

「そもそもI Sを一人で造れる方が……って、篠ノ之博士と一夏さんしか出来ないんですから、それが普通なんでしょうね……」

I Sを一から造ることが出来る人間が一夏と束しかいないと言う事を想いだし、美紀は一夏の考えを矯正する事を諦めて、自分のベッドに倒れ込んだのだった。

セイレーンの性格

翌朝、一夏は最終メンテナンスの為に整備室を訪れていた。専用機はほぼ完成しており、後はサラのデータを打ち込めば、完全に専用機として完成するところまで来ている。だが一夏は、サラのデータを打ち込む前にやり残しは無いか、欠陥は無いかのチェックを長時間かけて行いたいと思っていたのだ。

「相変わらず心配性ですね、一夏さんは」

「俺が乗るわけじゃないからな。万が一欠陥があっても、俺が乗ってる分には自業自得で済む。だが他人様を乗せる機体を造るんだ。万が一でも欠陥があってはいけないぞ」

「私は乗られる側ですので、何とも言えませんけど。ですが、一夏さんの作業に万が一なごありえないと言い切れるだけの信頼はあります」

自らも一夏に造られ、そして一夏にメンテナンスされている闇鴉が自信満々に言い切ると、一夏は少し恥ずかしそうに頭を掻き、それでもチェックの手を止める事は無かった。

「しかし一夏さん、本当にこんなことが出来るのですか？」

「直情的な相手程かかりやすい幻術だからな。戦いだけに集中してるような相手なら効くだろう」

「つまり、篠ノ之箒やオータムといった、すぐ激昂するような相手になら有効だと？」

「名指しするつもりは無いが、その二人には効きやすいだろうな」

セイレーンに積まれた新兵器のデータを見ながら、一夏と闇鴉は亡国機業の二人を思い浮かべていた。

「しかし、こんな幻覚を見せられても、普通の人ならすぐに偽りだと分かりそうなものですが……」

「だから冷静な相手には効かないって言っただろ。殆ど遊びのようなものだし、発表は出来ない」

「設定を変えるだけで、恐怖体験も幸福体験も出来る兵器なんて、ある意味夢物語だと思いますが」

「夢物語ね……」

闇鴉のセリフを鸚鵡返しのように繰り返して、一夏は最終チェックを終える。繋がれて

いたケーブルを一旦外すと、一夏の脳内にセイレーンの声が響き渡る。

『私の所有者はどんな人なの？』

「元イギリス代表候補生で、実力は十分の人だよ。性格も特に問題は無いし、すぐに仲良くなれると思う」

『ふーん……リア充なんて全て消し去ってやりたいわね』

「……もしかして君の伝承って、ボッチが寂しいから人を攫ってたのか？」

『そんなんじゃないわよ！ でも、楽しそうにやってくる人たちを見て、イラッとしたのは確かかもね』

「一夏さん、また物騒な仲間が増えましたね……」

「自立進化して、冷静な相手にも幻覚を見せられるようになるかもしれないな……」

セイレーンの性格を知り、一夏と闇鴉は苦笑いを浮かべながらそんなことを思ったのだった。

二時限目が終わり、織斑姉妹が教室から出ていくのと入れ替わるように、一夏が教室にやって来た。

「あれ、いっちーだ。もうメンテナンスは終わったの〜?」

「後は放課後にフィッティングとパーソナライズをして、試運転を済ませれば完成だな」
「相変わらず末恐ろしい程の速さだね〜」

「そう言えば本音、昨日はお前が護衛だったはずだが、何で来なかったんだ?」

昨日の晩に美紀と話したことを思いだし、一夏はそんなことを尋ねた。

「あれ？ 私だったっけ？ よく覚えてないな」

「間違いなく本音が担当だったわよ。一昨日は私、今日は碧さんが担当なんだから、昨日は本音でしょ」

「そうだったんだ。ゴメンねいっちー、昨日忘れてて」

「別に構わない。闇鴉がいたし、そもそも学園内で襲ってくるような相手もないしな」

そう言つて一夏は、空席になつてゐる篠ノ之箒の席に視線を向けた。彼の事を学園内で襲つてきたとすれば、彼女くらいだったので、今は学園内での護衛はあまり必要としないのだ。

「亡国機業のスパイだったダリル・ケイシーもいなくなりましたし、確かに安全かもしれない。でも、本音はもう少し自分の仕事をちゃんと務めてくださいよ？ 生徒会の仕事もしてないと、虚さんから聞きました」

「あれは、私がやつても仕事が増えるだけだから、あえてやつてないんだよ」

「確かに本音がやつてもあまり進まなくて、俺や虚さんがフォローする事になるだろうが、だからと言つてやらなくていい訳じゃないんだがな」

「私には、かんちゃんの手相手という大切なお仕事があるんだよ。いっちーの護衛や生

徒会役員である前に、私はかんちゃんのおメイドさんなのだから」

「そのメイドの仕事も、殆どしてないだろうがお前は……」

一夏のツツコミに、本音はゆっくりと視線を逸らした。

「兄さま、本音に何を言っても無駄だと思いますが」

「あー！ 酷いマドマド〜！ 私だつてやれば出来る子なんだぞ〜！」

「そういうのは自分でいうものじゃないだろ……」

「兎に角、本音はもう少し護衛と生徒会の仕事に興味を持ってください！ 昨日本音がサボった所為で、一夏さんが部屋に戻ってきたのが消灯時間ギリギリだったんですからね」

「いっちゃん研究に没頭するのは、私がサボった事と関係ないじゃんか〜！」

「本音がいれば、お腹すいたとか遊んでとか良い具合に邪魔をするから、一夏さんも集中出来ないと思います」

「それって褒められてない気がするんだよね〜」

「褒めてないんですから当然です」

美紀の手厳しい言葉に、本音は少し頬を膨らませて抗議しようとしたが、面倒だと

思ったのかそのまま何も言わずに微笑んだのだった。

「兎に角、これでいっちも授業に出られるんだね」

「そうだな。サラ先輩に動かした感想を聞いて、特に問題が無ければな」

一夏の返事に、本音だけではなくクラスメイト全員が顔を綻ばせたのを、一夏だけは気づかずにいたのだった。

初陣は…

刀奈を通じて一夏から呼び出されたサラは、指定された第一アリーナへとやって来て、まず人の多さに驚きを覚えた。

「随分と人が多いけど、更識君は？」

「一夏さんは、今準備してます」

「準備？」

呼び出された理由は、サラ自身もなんとなく理解している。だが準備と言われてピンと来るものは無かったのだ。

「準備が出来たらサラ先輩をピットに連れてくるように言われてるんです」

「ピット？ だったら最初からそっちに呼んでくれればいいのに」

「その前に、サラちゃんが誰と戦いたいかを決めてもらいたいんだってさ」

「戦うって……ここにいて人と？ 冗談でしょ？」

サラの目の前には、日本代表である刀奈、更識企業の企業代表として世界中の強敵と

戦った経験を持つ虚、日本代表候補生で、織斑姉妹の後釜最有力候補とされる簪と美紀、普段はのほほんとしているが、実力は簪たちと同等と言われている本音、最強のDNAを持つマドカ、更には元日本代表にして無傷で世界を制した碧と、サラからしてみれば次元の違う相手が揃っているのだった。

「あつ、それだったら鷹月さんと日下部さんもいますけど」

「私より先に更識製の専用機を貰った二人よね？ その二人もかなりの実力者だって聞いているんだけど……」

「それも嫌なの？ じゃあ後は織斑姉妹にお願いするしか……」

「それだけは本当に勘弁して！」

戦ったところで瞬殺必至の相手の名前に、サラは本気で刀奈を制止に掛かった。

「冗談よ。てか、勝ち負けは関係ないんだし、戦いたい相手を選べばいいのよ」

「そんなこと言われてもね……ちよつと前までは候補生でしかなかったのよ？ その私がこのメンバーと戦う事になるなんて、思っても無かったものだから……」

「大丈夫ですよ。ちゃんと手加減しますし、これはサラさんの試運転を兼ねた模擬戦なんですから」

虚の言葉に、サラは少し気が楽なつたと感じていた。本気で相手されるわけではないと分かっているても、自分がこのメンバー相手に戦うだけで緊張してしまうと感じていたのだ。更識内では下に数えられる本音も、外から見れば十分に強敵になりうるのだ。

「それじゃあ、せっかくだし小鳥遊先生にお願いしようかしら」

「了解よ。それじゃあ私は、反対のピットで準備するから」

「丁度一夏君の準備も終わったようだし、サラちゃんは私たちと一緒にピットに行きましよう」

一夏からの合図を受けた刀奈が、サラの手を取りアリーナからピットへと向かう。引き摺られそうになるのを何とか堪えて、サラは自分の足でピットまで向かう事にした。

「それにしても、専用機の希望を聞かれてからまだ一週間も経ってないわよ？ 更識の仕事は随分と早いのね」

「まあね。伊達に世界最高のＩＳ企業を名乗ってないわよ」

「お嬢様が威張ることではないと思いますが」

「その異名の殆どは、一夏の営業能力と虚さんの宣伝能力だけだね」

一夏が開発・営業をして、虚がその機能を十二分に宣伝するお陰で、更識企業はＩＳ

業界におけるトップの座を手に入れたのだ。

「まあとにかく、早い分手抜きなんて事は無いから安心して頂戴」

「その辺りは疑ってないわよ。更識の技術力の高さは、この学園にいる誰もが知ってるんだから」

更識所属が多い今、IS学園内における更識製の商品支持者は増え続けている。他国の代表候補生からも、出来る事なら使いたいと言われるほど、更識ブランドは人気が高いのだ。もちろん、名前だけではなく使い心地などもその人気に拍車を掛けているのだ。

「一夏君、お待ちせー」

「いえ、こちらこそ、最終チェックに少し時間が掛かってしまい、申し訳ありませんでした」

刀奈の挨拶をスルーして、一夏はサラに頭を下げた。

「い、いえ……こちらこそ、こんなに早く専用機を用意していただき、ありがとうございます
ます」

「お礼は結構ですよ。今回の件の半分は、我々更識の所為ですので。では、フィッティン

グとパーソナライズを済ませちゃいましょう。セイレーンに乗ってください」
「これが……私の専用機……」

青を基調としたISに見とれながらも、サラは引き込まれるようにセイレーンの操縦席に収まる。

『貴女が私の所有者ですか』

「?」 更識君、何か声が聞こえるんですけど……」

『貴女は授業で聞いていないのですか? ISには意思があり、話しかけてくれることがあると』

「これって、ISの声なの?」

初めて聞くISの声に戸惑いながらも、サラはその声に耳を傾けた。

『これだから人間は……いつそのこと引き摺り込んで骨に……』

「セイレーン? それはダメだと言ったはずだが」

『じよ、冗談に決まってるじゃないですか。だからその……解体だけは勘弁してください』

セイレーンが言っていた事は、一夏が開発した幻術を見せる機能を発動させると言う事なのだが、その恐怖は体験した者を戦闘から離脱させるには十分な威力を持っている。だから一夏は、操縦者であるサラにそのような幻術を見させないように、セイレーンに脅しを掛けているのだった。

「よし、フィッティングもパーソナライズも終了……誰だ、こんな時に」

最終調整も終わり、いよいよ試運転というタイミングで、一夏の携帯が着信を告げるメロディーを流した。

「何か御用ですか、大天災様？」

『いっくんに天才って褒められると嬉しいな〜』

「褒めてません。用が無いなら切り——」

『あー待つて待つて！ 今IS学園にアメリカ軍が攻め入ろうとしてるの！ 多分いっくんたちに対する腹いせだと思うけど、試運転するなら、そいつらを絶望の淵に案内してあげたらどうか？ いっくんが作り上げた新しいシステム「霧の監獄」ミスト・プリズンでさ』

「……まだ名前は言っていなかったのですが」

束からの連絡を受け、一夏は織斑姉妹にも連絡を入れ、学園内の守りを強固にし、こ

ここにいる面々でアメリカ兵を迎え入れる事にしたのだった。

セイレーンの特徴

一夏からの連絡を受け、千冬と千夏は急ぎ学園内に避難勧告を発令した。

「千冬さん、私たちも撃退の準備をー」

「いや、迎撃は一夏たちに任せ、我々は学園内に侵入してきた愚か者を捕らえる事だけに専念する」

「真耶、紫陽花の両名は生徒たちを安全な場所に誘導後、その入り口を守る事に専念するように」

「では、侵入者撃退は千冬さんと千夏さんの二人で？」

真耶の質問に、千冬たちは首を横に振った。

「小鳥遊とナターシャの両名も私たちと同じように侵入者捕獲に動く。だからお前たちは生徒の安全を第一に動くんだ、良いな？」

「は、はいー」

どれだけ私生活が残念であろうが、どれだけ弟に説教されていようが、これでも最強

の称号を持つ者。いざという時の頼り甲斐はすさまじいものがあると、真耶と紫陽花は感じていた。

「千冬さん、専用機持ちたちはどうしましょう?」

「更識所属以外は他の生徒と同じく避難だ。連携訓練などを重点的にやっていないやつらなど、素人も同然だからな」

「分かりました」

千冬からの指示を受け、真耶と紫陽花は生徒たちを避難させるために職員室から飛び出していった。

「さて、一夏が指揮を執る更識勢の隙を突いて校内に侵入してくる不届き者はいるのだろうか」

「いてくれた方が、わたしたちは退屈せずに済むんだが」

「そんなこと言ってるから、一夏さんに呆れられるんですよ」

姉妹の会話に、聞き覚えのある声が割って入る。

「小鳥遊か……相変わらず我々に心配を掴ませないとは」

「さすが更識きつての隠形の使い手、という事か?」

「貴女たちが油断し過ぎなんですよ。ねっ、ナターシャさん」

「私は気配を消す事は出来ませんので、コメントを求められても困るのですが……」

碧同様に職員室へとやって来たナターシャが、困惑顔で碧からの問いかけに応える。

「しかし、アメリカの信用が地に落ちているのは、殆ど自業自得だと思うのだが」

「合同開発の権利を独占しようと、事故に見せかけた暴走で銀の福音とその操縦者であるナターシャを亡き者にしようとしたり、亡国機業のスパイを代表候補生にしたり」

「人を見る目にも問題はありますが、確かに信用の失墜はアメリカ政府の傲慢が原因であると、一夏さんも言っていましたしね」

自分が場違いではないかという懸念に襲われながらも、ナターシャは侵入者に備えるために精神を落ち着かせることにした。銀の福音は更識が——というか一夏が整備してくれていたので問題なく動く。VTSのお陰で勘が鈍っているという心配も無い。唯一の心配事は、攻め込んでくる相手が旧知なのではないかということ。既にアメリカには何の未練も無いナターシャだが、旧知の間柄では些か戦いにくいと感じなくもないのだ。

「大丈夫ですよ。貴女は私たちのフォローをしてくれればいいですから」

「は、はい」

心の裡を見透かしたように掛けられた碧の言葉に、ナターシャは緊張しながらも冷静に返事をしたのだった。

ぶつつけ本番となつてしまつたが、サラは自らの専用機であるセイレーンから説明を受けていた。

「つまり、霧の監獄を発動させる為には、この中の武器から空中に水をまき散らし、十分な湿気を作る必要があるのね？」

『それ以外にも、水や氷で幻影やら分身やらを作り、敵に破壊させることで湿気を作る事も可能だけど、一番はやはり攻撃しながら必要な湿気を作る事だな』

「その方が反撃されにくいし、相手の頭に血を上らせることが出来るからかしら？」

『さすがにその程度は分かるようね。せっかくこの世に生まれたんだから、少しは楽しませてくれるといいんだけど』

不吉な笑みを浮かべ——実際には見えないが——恐ろしい事をいうセイレーンに、サラは引き攣つた笑みを浮かべる。

「貴女の伝承は聞いたことあるけど、何が目的だったの？」

『目的なんて無いわよ。ただ、私の見た目に騙されてホイホイついてくる愚か者を始末するのが楽しかっただけで、そこに理由なんて存在しない。ただ私が楽しいから騙して、楽しいから殺してただけ』

「狂ってるわね……」

ただ快樂の為だけに人を狩っていたというセイレーンに、サラは畏怖の念を抱く。もちろんISとなった今は、そのような事は操縦者のサラが命じない限り出来ないのだ。そこらへんは安心していいのだが。

『兎に角、更識に牙を剥こうだなんて愚か者、一人残らず骨にしてやりたい気分だけどね』

「今は幻覚を見せるだけでしょ」

『今は、ね……』

「その間は何よ……凄く怖いんだけど」

『更識製のISは、自立進化する機能を持っているから、貴女が私を使えば使う程に、私の能力は上がっていく。それはつまり、何時の日かは私個人で動くことも、敵を白骨化させることも可能と言う事なのよ』

不気味に笑うセイレーンに、サラは一夏に文句を言いたくなくなった。

「(もうちょっと可愛らしい性格にしてくれても良かったんじゃない? 更識君の趣味じゃないとは思うけど)」

更識製のISは心を持ち、所有者に話しかけてくる、と言う事は聞いていたが、まさかここまで黒い考えを持ったISがパートナーになるとは思っていなかったので、サラは若干困惑気味だった。

『ああ、リア充滅びないかな……』

「嫉妬だったの!？」

快樂で人を狩っていたのではなく、嫉妬だったと分かり、サラは驚きの声を上げたのだった。

侵入者の末路

上空から攻め込もうとしていたアメリカ軍 I S 部隊を待ち構えていたのは、更識所属の精鋭たちだった。

「何故だ！ 何故我々の動きが読まれている!？」

「怯むな！ 相手は所詮学生、我々のように日夜訓練しているわけではない」

まさか迎撃態勢が整っているとは思っていなかったのか、アメリカ軍の人間は若干の焦りを見せていた。

「この程度で焦るなんて、随分とお粗末な部隊なのかしら」

「そんなこと言つては失礼ですよ、お嬢様。アメリカは今、正規のコアが無い状態ですから、訓練といつても大したことが出来ないだけですよ、きつと」

「こんな人たちに使われるなんて、I S が可哀想」

「簪ちゃん、そう思うなら早いところ解放してあげよう」

「私たちはあくまでフォロワーですよ。これはサラちゃんの試運転を兼ねてるんだから」

慌てふためくアメリカ軍とは対照的に、更識所属の面々は余裕すら窺える態度で侵入経路を塞いでいる。

「水分を充満させるのなら、私にも手伝えそうね」

「我々はあくまでも侵入経路を塞ぎ、サラさんが動きやすくなるようにサポートするだけです。身の危険を感じない限り、こちらから攻撃に出るのは一夏さんから禁じられていますよ」

「でもさー、身の危険を感じるくらいまで反撃するなつて、結構酷くない？」

「それだけ私たちの力量を信じてくださってるんですよ」

不満を漏らす刀奈に、虚が冷静にツツコミを入れて諭す。その光景を見たアメリカ軍 I S 操縦者は、苛立ちを覚え特攻を掛けようとするが、既に辺りは霧に包まれていた。

「な、何だこの霧は！ さっきまであれほど晴れていたというのに！」

『貴女たちには、永遠の恐怖を味わわせてあげましょう』

霧の向こう側から声がしたと思つた瞬間には、アメリカ兵たちの視界は奪われていた。

「な、何だこれは!? 何故私以外の全員が白骨死体に……」

『貴女以外？ 貴女も白骨化してるんじゃないかしら？』

何処からとなく現れた鏡を覗き込み、アメリカカ兵は声を上げそうになり、そのまま意識を失った。鏡に映っていたのは、まぎれもなく骸骨だったのだった。

霧が晴れて漸くアメリカ兵たちがどうなったかを確認できるようになった刀奈たちは、その光景を見て驚いていた。

「本当に気絶してるわね……」

「いったいどのような幻を見せられたのでしょうか……」

「感心するのは兎も角、とりあえずこの人たちを拘束しておかなきゃ」

「ISに対するダメージは与えていないので、回収も楽ですね」

「いっちょーから報告。どうやら別経路で忍び込もうとした愚か者がいるみたいですよ」

「可哀想に……そっちには姉さまたちが待ち構えているというのに」

サラのお陰で簡単に気を失えたこの兵士たちは、ある意味で幸せだったのではないかと思います。刀奈たちは操縦者たちを拘束し、ISを回収してアリーナへと運ぶのだった。

あえて侵入経路を開けて待っていた千冬たちの前に、武装した集団が姿を現した。

「まさか本当にこの経路で侵入してくるとは……さすが一夏だ」

「数はおよそ三十、といったところか」

「ISを囿にして、こちらが本命なんでしょうね」

千冬の他にも、千夏と碧が待ち構えているとも知らずに、侵入者たちは得意げに会話をしていた。

「まさかIS部隊が囿だとは思わないでしょうね」

「ISが使えるからと言って粹がるからこんな単純な手に引っ掛かるんだ」
「肉弾戦で我々に勝てる人間がIS学園にいるはずもない」

リーダー格と思われる男女が、得意げに話しているのを聞いて、千冬と千夏がため息を吐く。

「あの程度で肉弾戦で勝てると思つていゝとは、随分となめられたものだな」

「アイツらなど、まとめて相手したところで五分とかからないだろうな」

「まあ、貴女たち相手に、五分も立つてられるのなら、この程度の気配遮断は見抜けるでしょうけどね」

今三人は、完全には気配を遮断してはいない。それなのに三人の存在に気付かない辺り、その程度なのだろうと碧もため息を吐いたのだった。

「さてと、恨みは無いが、一夏の為に倒れてもらうぞ！」

「一人十人、二、三分といったところか」

「貴女たちと同レベルで計算しないでもらいたいんですが……」

「貴様も十分人外レベルだろうが」

「私はISありきです！」

三人同時に侵入者へと攻めかかり、本当に三分以内で全員を打ち負かした。

「いや、さすがは世界最強の三人ですね」

「一夏、見てたか？ お姉ちゃんの実力」

「褒めてくれてもいいんだぞ？」

「褒めませんよ。これが仕事なんですから」

何もない影から突如現れた一夏に、特に驚いた様子も無く胸を張り賞賛を期待した織斑姉妹だったが、仕事だと言われ肩を落とす。

「拳銃くらい持つてるかとも思いましたが、本当に身体一つで攻め込んでくるとは……自殺志願者とは思えない悪手ですね」

「こいつらの訊問は任せろ」

「まあ、既に所属ははっきりしているのだがな」

「これで完全にアメリカは終わりでしょうね」

世界の警察を名乗っていたアメリカを完全に潰すことになるだろうと一夏は思っており、千冬や千夏もまた、同じような事を思っている。

「素直に自分たちの非を認めれば、ここまで完膚なきまでに潰される事も無かったでしょうに……」

「潰した本人がよく言えるな、小鳥遊」

「お前も我々と同じ、潰した側の人間だからな」

「分かってますよ」

碧だけは若干同情的な意見だったが、潰されて当然の事をしたのだから、手心を加えろとは言わなかった。引き摺られていく三十人を見送り、一夏は何事も無かったかのようになり、回収したISを調査するためにアリーナへと向かい、碧もまた、一夏に続いたのだった。

織斑姉妹との確執

気を失っていたアメリカ兵たちは、底知れぬ恐怖を感じ取り一斉に目を覚ました。

「……」

「漸くお目覚めか、侵入者共」

高圧的であり、それでいて反抗する気も起きないくらいの威圧感に、侵入者たちは一斉に声のした方へ視線を向けた。

「誰よ、貴女」

リーダー格の一人、歩兵として侵入した女性隊員が声の主に尋ねる。

「わたしを知らんのか？ ああ、姿が見えないのか」

自分が経っている場所が逆光であることに気付いた声の主は、少し移動して自分の姿を相手に認めさせる。

「お、織斑千夏……」

「さて、お前たちには三つの選択肢が与えられる」

相手のペースなどお構いなしに、千夏は話を進めていく。もつとも、侵入者として撃退され、捕虜となった彼女たちに千夏の言葉を遮る権利など最初からないのだが。

「二つ目は、わたしたちに訊問され、大人しくアメリカの非を認める事」

自分たちがどこの国家所属であるかを知られている事に、彼女たちは驚きの表情を浮かべる。まさか知られているとは思っていなかった事に千夏は驚いたが、些細な事で時間を無駄にしない為に、話を続ける。

「二つ目は、わたしたちに拷問され、アメリカの非を認める事」

訊問より恐ろしい提案に、侵入者たちは自らの身体を抱きしめる。底冷えする笑みを浮かべる千夏を見て、無意識に震える身体を止める為だと気づき、彼女たちの顔色が蒼褪めた。

「三つめは、訊問されようが拷問されようが自分たちの非を認めず、永遠にこの場所に閉じ込められる事だ」

軍所属の身としては、最後の選択をするのが正解なのだろうが、訊問や拷問を行う手が最悪なのだ。千夏は先ほどから「わたしたち」と言っている。つまり少なくとも二人以上、そしてすぐに思い浮かぶ人間は、彼女の双子の姉なのだ。

「さあどうする？　言っておくが、第四の選択肢など存在しないからな」

恐らくは考えていたであろう第四の選択肢など、この人外だらけのＩＳ学園において、成功するはずもない。襲撃開始からわずか五分たらずで全滅させられたことを思いだし、彼女たちは脱走計画は破棄するのだった。

「なに、存分に悩むがいい。どちらにしる貴様らに慈悲は無いのだからな」

わざと足音を立て、千夏はこの場所から去っていく。去り際に実に楽しそうな笑みを浮かべているのを見せつけ、まだ諦めきっていなかった侵入者の心を折り、三つの中から選ばせるように仕向けたのだった。

千夏が侵入者たちを苛めて楽しんでいる頃、一夏は回収したISから既に背後にアメリカがいる事を突き止めていた。

「本命過ぎて面白くないな」

「そもそも東さんからネタバレ喰らってるんですから、本命も何もないでしょ」

「アイツもたまには間違えたりするだろ？ だからその可能性を期待していたんだが

……」

「何を期待してるんですか……」

解析に立ち会っていた千冬がつまらなそうに呟くと、一夏はその呟きを受けてため息を吐いた。

「銀の福音の件も、ダリル・ケイシーの件もアメリカの自業自得なんですが、責任転嫁しなくなる気持ちも分からなくはないですからね……完全にＩＳ開発競争から脱落し、企業も次々と倒産してるわけですし」

「そのうえで自分たちの非を認めるなど、政府の人間にとっては屈辱的と言う事か」

「コア数をゼロにされ、これ以上開発を続けられなくなったわけですし、別事業で頑張れば良いものを」

「元々ＩＳ産業以外でも利益は得ていたんだろ？ その会社はどうしたんだ？」

千冬の質問に、一夏はモニターを操作してアメリカの経済状況をスクリーンに表示した。

「アメリカの企業というだけで不信感を持たれ、ほとんどの取引は中止。損失は計り知れない状況ですので、ここから回復するのは難しいでしょうね」

「あれほどデカい顔してたアメリカが苦しむとは、実に愉快だな」

「……何かアメリカに恨みでもあつたんですか？」

「IS企業に関してはアメリカ政府の自業自得だが、ISに関係ないところまで影響が及んでいる事に、一夏は同情的だった。だから千冬が楽しそうにしているのを見て、彼は顔を顰めたのだった。」

「臨海学校の時に、アメリカ政府がデカイ顔して私たちに銀の福音を始末させようとしただろ？ その前から気に食わなかったが、あの一件でますます気に食わなくなつたんだ。何時か潰してやろうとは思っていたのだが、自爆してくれたおかげで自分たちで潰すより愉快的な思いが出来た」

「世界の警察を名乗ってましたから、若干上からの物言いになっていたのは否定しません。他人の不幸がそこまで楽しいですか？」

「アメリカ人は可哀想とは思いますが、アメリカという国に対してはそんな感情は一切ない。責任転嫁に失敗してそのまま滅びれば良いとさえ思うな」

「……とりあえず、煽りを受けたIS企業の中に、使える人材がいるのであれば更識で引き受けます。貴女たちは捕虜がどの選択肢を選ぶのが、きつちりと働いてもらいますからね」

「任せろ。アメリカ軍の奴らは、ドイツで指導している時から気に食わなかったからな」
「……本当に、どんな確執があるんですか」

織斑姉妹とアメリカ軍の間には、間違いなく確執が見て取れた。一夏は若干その事が気がかりだったが、同情の余地はないと判断して千冬たちに訊問を任せる事にしたのだった。

認識不足

侵入者をあつさり撃退出来たことを、サラは物凄くびつくりした、という感じで訊問が行われている部屋の外からモニターを眺めていた。

「どうかしたの、サラちゃん」

「私が仕掛けたこととはいえ、まさかあそこまで簡単に敵を戦闘不能に出来るとは思っ
てなかったから……」

「一夏君の提案した新武装だもんね。あれくらい出来て当然だとは思わよ?」

「普段から更識君の凄さに触れている貴女には分からないかもしれないけど、つい昨日
まで専用機を持ってなかった私からすれば、恐るべき威力なのよ」

専用機を持っていたとしても、あの性能には驚いただろうとサラは思っているが、その事を今ここで言ったところで意味は無いと理解しているのか、軽くため息を吐くだけに止めた。

「幻影を見せて戦意を削ぐとは、一夏君も凄い事考えたわよね」

「どんな幻影を見せているのか、私たちには分かりませんけどね」

「ところで、この人たちはどうなるの?」

サラの疑問に、刀奈と虚はそろって視線をサラに向ける。

「な、何ですか?」

「ううん……普通の人はこの後の事は考えないんだな、って思っただけよ」

「普通の人? 一応国家代表になったんだけど」

「違う違う、そういう普通じゃなくて、暗部に関係ない人って意味よ」

普通の人と言われ、ムツとした表情で睨んできたサラに、刀奈は慌てて普通の意味を説明した。

「この人たちは、訊問され、拷問され、持っている情報を全て吐いた後、良くて強制労働ですかね」

「最悪だと、どうなるんですか?」

虚があえて言わなかったことを、サラは勇気を振り絞って尋ねる。恐らくはそうなるであろうという考えはあるが、さすがにそこまではしないだろうという考えもまた、彼女の頭の中にあるのだった。

「得られる情報を全て得た後は使い道も無いので、そのまま処分ですね」
「処分……」

その言葉がどういう意味を持っているのか、理解したくないと思う一方で、サラはその言葉の意味をすぐに理解してしまったのだった。

「誰が処分するのですか？」

「普通なら日本政府の方々にお任せするのですが、狙われたのがIS学園、ひいては更識企業ですからね。私たちの内の誰かが、でしょうね」

「……………」

自分が恐ろしい集団の一員になったと言う事を、ようやく理解したサラは、無意識の内に自分の身体を抱きしめたのだった。

「大丈夫よ、サラちゃん。間違ってもサラちゃんにお願いする事は無いから」

「そんなこと言っても、安心は出来ないわよ。貴女たちの内の誰かが、この人たちを処分するかもしれないでしょ？」

「一番可能性が高いのは、次期当主である一夏君かしらね」

「それか、織斑姉妹か篠ノ之博士が引き取って処分するかもしれませんが」

モニターに映っている捕虜たちは、既に人扱いされていないと言う事を自覚し、さらには早々にこの場から立ち去ることを決めたのだった。

織斑姉妹に後処理をお願いして、一夏は今回のセイレーンの活動結果をデータ化して

解析していた。

「少し霧の牢獄が発動するのに時間が掛かっている気がするな……」

「そうかな？ 初操縦なんだから、これくらいは誤差の範囲だと思うけど」

「それを加味しても、やはり少し発動までのタイムラグが気になる」

一夏の手伝いとして、そして護衛も含め簪と一緒にデータを眺めているのだが、簪は特に気になった様子は見せなかった。

「一夏は少し完璧を望み過ぎてると思うな」

「設計者であり製作者だから、それは仕方ないと思うんだが」

「それを無視したとしても、一夏は高望みし過ぎだ思う」

「……そうか？」

簪の指摘に首を傾げながら、もう一度データを眺める一夏。何度見ても、一夏の表情は固いものにはかならなかった。

「……やっぱりもう少し改良した方が良くもしいないな」

「せめてあと二、三回は使ってからの方が良いと思うけど……サラ先輩は修学旅行に來ないわけなんだし、今すぐ必要ってわけじゃないんだから」

「それは……そうかもしれないが……どうも気になってしまっただよな……」

「根っからの研究者だもんね、一夏は……でも、少しは忘れた方が良くともうよ」

「そうは言われてもな……」

「一夏の立場上、全てを忘れて楽になるって事が許されないのは分かるよ。でも、考え過ぎは良くないと思う」

簪の説得に、一夏は腕を組み視線を下げる。彼が考え事をする時のポーズだと知っている簪は、一夏が答えを導き出すまで口を噤んだ。

「少し、気持ちを落ち着かせるのも必要かもしれないな。分かった、調整はもう二、三回動かした後にはしよう」

「それが良いよ。一夏、今週末には修学旅行に出発だけど、ちゃんと準備は済ませたの？」

「いや……まったくもってやってないな」

開発に没頭し、修学旅行が今週末だと言う事も忘れていた一夏は、簪の問いかけに気まずそうに答える。その答えを聞いた簪は、大きいため息を吐いたのだった。

「それじゃあ急いで支度しなきゃ。ほら、行くよ」

「おい、引つ張らなくても自分で歩けるっての」

義理の兄の手を引つ張りながら、簪は頬を赤らめる。義理ではあるが、血縁ではないのでそう言った対象になりうるのだから当然なのだが、普段あまりそう言った感情を表に出さない簪にしては、珍しい反応だと言える。だが幸いな事に、その事にツツコミを入れる人間は、誰一人いなかったのだった。

一夏との時間

旅行の準備を手伝うという名目で、簪は一夏の部屋に入り込んだ。普段は滅多に入ることが無いので、少し緊張した様子が見受けられる。

「一夏さんが修学旅行の準備をしていないのは分かりましたが、何故簪ちゃんまで一緒になんですか？」

「一夏は自分が興味ある事以外は全然ダメだから、手伝ってあげようと思って」

「確かに一夏さんは研究や開発以外は、あまり得意としてませんが——」

「おいおい、それ以外も並くらいは出来るぞ」

一夏が美紀の表現にツツコミを入れる。確かに、やる機会が減っているが、一夏の料理はそこらへんの店には負けない程の美味さがある。

「今はそういうこまごまとしたツツコミは入れないでください」

「あつ、悪かった……」

美紀の権幕に圧され、一夏が素直に頭を下げる。

「一夏、何で美紀はこんなに怒ってるの？」

「俺に聞かれても分かるわけないだろ……」

小声で尋ねる簪に、一夏も小声で答える。

「だいたい簪ちゃんは、一夏さんの側にいたいだけで手伝うって言ったんでしようが」

「悪い？ 普段から一緒にいる美紀には分からないかもだけど、こうしたチャンスを掴まないと、私は一夏と一緒にいられる時間が少ないんだよ。クラスも違うし、もちろん、部屋が一緒になることも無いんだから」

「それは……」

美紀が優勢に思われたが、あっさりと簪が形勢を逆転した。簪の言い分は最もで、クラスが同じ美紀は、旅行先でも一夏と行動を共にする機会が多い。だが簪は他クラスであるがゆえに、一夏と行動出来る時間は美紀たちの半分以下だ。こうしたチャンスを掴み取り、少しでも行動を共にする時間を確保しなければ、織斑姉妹のように暴走しないとも限らないのだ。

「兎に角、今日は私が手伝うから、美紀はゆっくりお風呂にでも入ってきたら？ 最近シャワーだけで済ませる事が多いでしょ」

「そう言えば、最近の美紀は大浴場に行ってるイメージが無いな」

部屋付きのシャワーで済ますことが多くなったと、一夏も感じているので、簪の案を支持したのだった。

「分かりましたよ。その代わりに、くれぐれも間違いを起こさないようにしてくださいね」
「間違い？ 何の話だいたい……なあ、かんざし……し？」

「ふえ？」

美紀が何を意図したのか理解出来なかった一夏は、簪に尋ねようと視線をそちらに向けた、するとそこには、顔を真っ赤にした簪の姿があったのだった。

「そ、そんな心配はしなくていいから、美紀は早いところお風呂にでも行きなさい！」

「その反応……やっぱり簪ちゃんは刀奈お姉ちゃんの妹だね」

「なんなんだよいったい……」

互いにヒートアップしていく簪と美紀に挟まれて、一夏はため息を吐いたのだった。

とりあえずは落ち着いたので、美紀は大浴場で反省するためにゆつくりと湯船に浸かっていた。

「美紀ちゃんがいるの、珍しいね〜」

「最近は何部のシャワーで済ませてたイメージがありましたからね。美紀と一緒に入るのは久しぶりです」

「二人とも、本当にお風呂好きね」

一緒に浸かっている本音とマドカに感心の眼差しを向けて、美紀はもう一度ため息を吐く。

「何であんなにヒートアップしちゃったんだろう……」

「何の話？」

「何でもないよ。ところで、本音やマドカは、修学旅行の準備は済んでるの？」

「私はもう終わっています。ルームメイトが静寢だから、少しでも気が緩めばツツコまれますから」

「まあ、静寢は真面目だからね」

それが無くても、せっかくの旅行と言う事でテンションが上がっているマドカだ。拔かりなく準備は終わらせていただろうと美紀は思っていた。

「本音は？」

「私も終わってるよ。かんちゃんが手伝ってくれたからね」

「そっか」

「そういう美紀はどうなんですか？ 終わってるんですか？」

「一応はね。後は前日に用意すれば大丈夫かな」

「荷物は輸送するから、出発の二日前には終わらせなきゃダメなんだよね？」
「手荷物、という意味だよ」

細々としたものはバッグなりポケットなりにしまえるので、そういったものはまだ準備していかないということと言いたかった美紀は、本音の疑問をあつさりと解決したのだった。

「修学旅行は楽しみですが、問題は亡国機業ですね……香澄の予知では、ほぼ百パーセント襲われるとのことですが」

「学園が襲われても、刀奈お姉ちゃんや虚さん、サラ先輩といった実力者がいますし、旅行先で襲われれば、一夏さんをはじめとする更識所属の面々に加えて、織斑姉妹にナターシャさんといった実力者がいますからね」

「問題は、班行動してる時に襲われると厄介だと思っんですよね。私や本音、美紀だけで兄さまを守り切れるかどうか……」

「シノノンがいたら、いっちは冷静な判断が下せない場合があるもんね〜」

箒だけでなく、オータムがいても判断力の低下は避けられないだろうと分かっているので、出来るだけ人の多い場所を動き回ろうと三人は心に決めたのだった。

「ところで、何時まで湯船に浸かってればいいのかなく？ そろそろ逆上せそうなんだけど」

「そうですね。そろそろ出ましようか」

「そうだね。購買で牛乳でも買って飲もうか」

今部屋に戻ると、まだ簪がある可能性があるのですが、美紀は風呂上りの寄り道を提案した。その意図は理解出来なかったが、マドカも本音も寄り道に賛成し、風呂から上がったのだった。

刀奈の考え

部屋で一人考え事をしていた刀奈に、取材から戻ってきた薫子が声を掛ける。

「何考えてるの、かつちゃん」

「薫子ちゃん……どうやったたら一夏君と旅行が出来るかなーって」

「旅行って、修学旅行の事？」

「そうよ？」

なに当然の事を聞いているのか、という顔で薫子を見つめる刀奈、その表情を受けて薫子は呆れたような表情を浮かべる。

「修学旅行は一年の行事だし、かつちゃんがについて行くのは難しいと思うわよ？　ましてや一年には織斑姉妹や小鳥遊先生もいるんだし、気配を殺して忍び込むのも不可能でしょうし」

「そもそもこっつそりついて行くななんてつまらない事はしないわよ。私は堂々と一夏君と旅行したいの」

「あつ、そう……なら、今度の休みにでも更識君を誘って行けばいいじゃないの」

「今度の休みって、日帰り旅行じゃつまらないじゃない。泊まり込みで旅をするから楽しいんでしょー!」

「そんなこと私に言われても……そもそも更識君のスケジュール的に、泊まり込みでの旅行なんて出来るの?」

表向きは次期当主だが、本当は既に当主として動いている一夏のスケジュールは、薫子が心配したようにぎゅうぎゅうに詰まっている。その事を想い出した刀奈は、ガックリと膝を付きこの世の終わりと云わんばかりの表情に変わった。

「やっぱり、無理にでも修学旅行先に先回りして、一夏君を納得させるしか……」

「でもさ、生徒会長のかっちゃんが存在となると、かなりマズいんじゃないかな? 布仏先輩もカンカンになるだろうし」

「そうなのよね……虚ちゃんをどうにかして説得しないとイケないのよね……」

ただ一夏と旅行がしたいという理由で、虚が納得するはずもない。だからと言って護衛だと言い張っても、簪や美紀、本音にマドカといった専用機持ちたちが一夏の周りにいるのだから、わざわざ刀奈が行く必要も無いと言われるだろう。

そして何より、学園が襲われる可能性もゼロではないのだ。一夏たちが不在となる以

上、刀奈が学園を離れるのは得策とは言えないのだ。虚が刀奈の外出を認めるはずもない。

「そもそもかつちゃんは、何でそこまでして更識君と一緒にいたいのか？ 義姉弟だけの関係じゃないって事は知ってるけど、独占出来るとも思っていないでしょ？」

薫子の問いかけに、刀奈は下げていた頭を上げて、薫子に視線を固定した。

「確かに私は一夏君の事を、義弟以上に思ってるし、それは私だけじゃないのも分かっている。誰か一人が一夏君の事を占領しようものなら、私たちは徒党を組んでその人を蹴落とすとも思ってる。だけど、それでも一緒にいたいって思うのは仕方ないと思うのよね。だって一夏君は私たちにとって、唯一の近い同年代の異性だったし、どん底だった時を知ってるからこそ、守ってあげたいとも思うのよ。今は守ってあげる必要が無いくらいに動きは出来るけども、特定の条件が揃うとそれも出来なくなっちゃうし」

「確か、篠ノ之箒さんに対するトラウマだっけ？ 幼児退行を起こすとか聞いたけど」

「彼女だけじゃないんだけどね」

オータムの事を話すわけにもいかないの、刀奈はその辺りを濁して話を続けていく。

「心配かけないように一夏君が振る舞ってるのも理解出来るし、そこらへんは男の子なんだなとも思う。でも、私たちは一夏君に無理をしてほしくないのよ。専用機の研究やその他いろいろで世界中を飛び回ることもある一夏君に、私たちと一緒にいる時だけは気を張らなくていいように、気が休まるようになってほしい。だから出来るだけ一緒に行動したいのよ」

「何だかいい話風に聞こえたけど、要するにかつちゃんが一夏君と一緒にいたいだけなんだでしょ?」

「……そこまでかみ砕くことは無いんじゃないかな」

自分の気持ちをうまく隠そうとしていたが、あつさりと薫子に見抜かれ、刀奈は少し恥ずかしそうに視線を逸らした。

「更識君の事を大事に思ってるのは伝わったわよ。でも、それと仕事をしなくても良いはイコールにはならないと思うのよね」

「私だって仕事はちゃんとしてるわよ。でも、一夏君や虚ちゃんが優秀だから、私が仕事してないように思われてるだけだもん!」

「実際、何回かはサボってるんでしょ?」

「……はい」

サボってない、と言い切れないと自覚している為、刀奈は正直に頷く。先ほどから鋭い返しをしてくる薫子に、油断ならないという感情を懐き始めたのだった。

「兎に角今回は大人しく学園でお留守番をしてるべきだと思うよ？ 副会長として絶大な信頼を得ている更識君が学園からいなくなるんだから、それに加えて生徒会長のかつちゃんまで不在となると、学園は混乱に陥ると思うのよ」

「……なにも無かったら、混乱も何もないと思うんだけど」

「何も無い、って言いきれぬ状況じゃないんだし、生徒の長として、ここはかつちゃんは学園に残るのが正解だと私は思うな」

「そうなのよね……実は虚ちゃんにも同じことを言われてるのよね」

「なら、そうするしかないんじゃない？」

刀奈が虚に逆らえないと言う事は、薫子も知っている。だからこの話はこれでおしまいだと思い、薫子は今日集めてきた情報の整理に取り掛かったのだった。

一夏の憂鬱

修学旅行に必要な荷物を宅配業者に任せ、一夏たちは教室で雑談をしていた。

「何だか、こうして一夏さんとお話するのが久しぶりのような気がしますわ」

「確かに。一夏、もう少し教室に顔出せないの？」

「シャルは知ってるだろ。俺だって忙しいんだ」

「うん、それは分かっているけどさ……」

「確かに、シャルロットもたまに仕事と言って教室に顔を出さない日があるが、お兄ちゃんはその以上に忙しいのだろうか？ たまにしか顔を出せないのも仕方ないだろうな」

「だから、お前が『お兄ちゃん』って呼ぶな！」

いつも通りの言い争いが始まりそうになったのを、一夏が視線だけで二人の妹を宥める。

「さすが一夏さん、扱いに慣れてますね」

「マドカは血縁者だからな。ラウラも、言えばちゃんと聞いてくれるいい子だぞ？」

「何だか、本当にお兄さんみたいですな」

「ダメな姉を見てきたからな。反面教師になってるのかもしれない」

年上としての心得など、一夏は特に気に掛けた事は無い。だが、実姉である千冬と千夏、そして義姉である刀奈の行動を反面教師としてきた結果が、こうした振る舞いになっっているのだった。

「刀奈様は相変わらずだもんね〜」

「お前もな、本音」

「ところで、一夏さんたちは自由行動の時は何処に行くか決まっていますか?」

セシリアの質問に、一夏は首を捻った。

「別に出かけなくてもいいんだろ? 部屋でのんびり過ごせるなら、それが一番だろ。」

京都の安全を守るためにもな」

「何時、何処で襲われるか分かりませんかからね……出先の人が多い場所で戦うより、更識の息のかかったホテルで待機していた方が、文化財などの多い京都の街を守るには最適ですね」

「ですが兄さま、そのような行動を姉さまがお許しになるでしょうか?」

担任であり責任者でもある織斑姉妹が、旅行先で引き籠もる事を善とするかと問われれば、おそらくは許可しないだろうと一夏も分かっている。だが、一夏の本音は京都の街の安全ではなく、観光などめんどくさいという怠惰の気持ちから出ているのだ。

「観光なんて、人が多いところに行く意味が分からない。PCで景色だけ楽しめば、それで十分だろ」

「一夏、それって引き籠もりの考えだと思うけど」

「そもそも、俺が動けばそれだけ周りに危害が及ぶ可能性が高まるんだ。本当なら京都にすら行きたくなかったのを、学校行事だからという理由で参加しなきゃいけなかったんだ。これ以上面倒事は御免だ」

「やはりお兄ちゃんの立場ともなると、色々大変なんでしょうね。護衛がついているからと言って、それで安心出来ない程に」

「兄さまを狙っているのは国際犯罪組織だからな。ましてそのうちの一人は、周りの事などお構いなし、自分が良ければ他などどうでも良いという考えの持ち主、篠ノ之箒だからな」

「ウサ耳マツドに監視は頼んだが、それでも人がいない場所に誘導するのは難しいだろうからな。観光地なんて、無関係な人間が多い場所で襲われて、怪我でも負わせれば更識の信用にも関わってくるからな。学校行事なんて理由で、それが許されるはずもない

し、そもそも学校なんて単位と同じレベルで語れるほど、更識は小さくないからな」
「僕のところでも、この学園とほぼ同じ人数の社員がいるんだから、本社ともなるとそれ以上だもんね。社員全員を路頭に迷わせるわけにもいかないし、一夏の考えも理解出来るね」

学生社長として、日々努力しているシャルは、一夏の立場を考えれば部屋に引き籠もっていたと思う気持ちも理解出来た。だが、セシリアとラウラは、その辺りの話には疎く、ただただ別次元の会話として聞いていたのだった。

「学園が責任を取ってくれるのであれば、俺もそんなこと考えないがな」

「たぶん取ってくれないでしょうね。都合が悪いと日本政府も学園も、全て更識に押し付けてきますから」

「いつそのこと、更識単体で独立宣言でもするか？ そうすれば学園側も政府側も、こっちに仕事を押し付けられなくなるだろうし」
「ですが、そんなこと出来るんですか？」

美紀の質問に、一夏は再び首を捻る。可能性はあるだろうが、面倒な手続きだとか、書類整理だとかがあるだろうし、何より独立すると言う事は、何処へ行くにもパスポート

が必要になるのだ。

「想像しただけで面倒だ。この考えは無しにしよう」

「いっちーつて研究以外はめんどくさがりだよね」

「全てにおいてめんどくさがりのお前に言われたくはない」

「そうかな？ 私、やるときはやるよ？」

「その『やるとき』が何時なのか、俺には分からないだな」

侵入者撃退の時には、意外と冷静な判断を下す本音だが、生憎その場面に一夏は遭遇した事はない。だから本音が本気になったところを、一夏は話でしか聞いたことが無いのだった。

「まあまあ、とりあえず織斑姉妹には話してみましようよ」

「そうだな。まあ最悪、脅せば言う事を聞かせられるし」

「兄さま、顔が怖いです」

冗談を言っているようには見えない一夏の表情に、マドカは戦慄を覚えた。姉二人も十分に怖い、それ以上にこの兄は怒らせてはいけないと、本能的に理解しているのだ。雑談を楽しんでいた一年一組の教室に沈黙が訪れたのは、予想外の人が教室にやって

来たからだった。

「一夏さん、少しよろしいですか？」

「虚さん？　どうかしましたか？」

「今朝からお嬢様の姿が見当たらないのですが、気配を探ってもらってもよろしいでしょうか？」

「刀奈さんの？」

一夏の気配察知は、学園内全てに範囲が及ぶが、普段から全員を警戒しているわけではない。むしろ学園内の人間には、このセンサーは反応しない。警戒しているのが外からの気配なのだから、日常的に範囲内にある気配に鈍くなるのは仕方ないだろう。もちろん、一夏が警戒すれば、学園内の気配だろうが全て掴むことが出来るのだが。

「……？　学園内に刀奈さんの気配がありませんね」

「まさかお嬢様……」

心当たりがあるのか、虚は頭を押さえながら一年一組の教室から去っていった。残された一夏たちは、刀奈がどこに消えたのか首を傾げて考えるのだった。

一夏の訊問方法

一夏の気配察知を掻い潜って逃げている可能性も鑑みて、虚は学園中を探し回り、そしてため息を吐いた。

「お嬢様……やはり、そう言う事ですか……」

「いったい何なんです？ 刀奈さんがどこかに行ったのは分かりましたが、行き先に心当たりがあるのですよね？」

ため息を吐く虚の背後から、一夏が声を掛ける。行方不明というわけでもなさそうなので、その声は普段通り落ち着いたものだった。

「恐らくですが、一年生の荷物に紛れて、お嬢様は京都に行かれたのだと思います」

「……なんとなく分かりますが、何のために？」

あの人ならありえそうだという表情を浮かべながら、一夏が虚に尋ねる。

「お嬢様は一夏さんと旅行がしたいと仰られておりましたし、おそらくはそう言う事だと思われませう」

「……どういふ神経してるんですか、あの人は」

「学園の警備が手薄になるので、どうしても残ってほしいと説得はしてたのですが、どうやら逆効果だったようですね……」

「説教は俺の方でしておきます。すぐに追い返そうとしても、頑なに拒否するでしょうし、部屋は俺たちと同じで数日滞在させれば、文句も言いませんでしょうしね」

「ですが、四人部屋で既に四人決まっているのですし、お嬢様は何処で寝るのでしようか？」

「俺がソファで寝ますので、刀奈さんは大人しくベッドで寝かせますよ」

一夏の案に、虚は顔を顰め一夏に詰め寄る。

「な、何です？」

「お嬢様をソファで寝かせれば問題ないと思えますよ？ 一夏さんは普段から無理し過ぎなんですから、出先でくらいはゆっくりと休んでください」

「別に俺は、ソファでも十分休めますが……」

「駄目です。最悪、お嬢様は野宿でもさせておけば問題ありませんので」

「いやいや、女の子を野宿させるくらいなら、俺が外で寝ますって」

いくら勝手についてきたからといって、一夏は女子を外に追いやる事は考えていないようだった。その優しさは分かっていたが、虚はため息を堪えられなかった。

「一夏さん、お嬢様は今回、完全に自分のわがままで京都に同行したんですから、少しくらいキツメにしないと反省しませんよ？」

「亡国機業が攻めてきた時、刀奈さんがいれば大分違いますからね。まあ、その分I S学園が襲われた時には、苦戦するでしょうが」

「指揮を執れる人が他にいませんからね……」

「虚さんは参謀タイプですしね」

織斑姉妹に碧は一年一組の担任と副担任と言う事で修学旅行に同行するし、真耶や紫陽花も同様だ。唯一刀奈の他に指揮が執れそうなのはナターシャだが、I S学園の戦力を完全には把握していないので、指揮を飛ばすには少し不安が残る。

「まあ、殆どの確率で亡国機業は旅行先に攻め入ってくるでしょうし、万が一の時はI Sですつ飛んで帰ってきますから」

「緊急時じゃなければ大問題ですけど、それが可能ならお願いします」

超高速移動の訓練も積んでいるので、更識所属のメンバーだけなら数十分で京都とI

S 学園を行き来する事が可能なのだ。もちろん、何も無い時にそんな移動をすれば、大問題となり日本政府から抗議が来るだろう。

「一夏さん、くれぐれもお嬢様の事を甘やかさないでくださいね」

「てか、俺が怒らなくても織斑姉妹にこつ酷く絞られるでしょうけどね」

「まったく……侵入者の処分もまだ終わってないというのに……」

「大人しく背後関係は吐いたようですし、更識の工場で働いてもらいましょうか」
「何時裏切るか分からないのに、ですか？」

虚の質問に、一夏は人の悪い笑みを浮かべた。

「裏切ってくれれば、容赦なく片づけられますから」

「そうですね。まあ、今回は素直に白状した訳ですし、それでバツサリは可哀想ですしね」

「下働きとはいええ、ちゃんと給料は出しますから、文句は出ないと思いますけどね」
「軍人として、背後関係をあっさり吐くようでは、諜報にも使えませんしね」

虚が嘆かわしく呟くと、一夏は苦笑いを浮かべ反論する。

「訊問してきた相手が織斑千夏じゃ、大抵の人間は素直に白状するとは思いますがね」

なにせドイツ軍所属のラウラですら、織斑姉妹には逆らわないようにしているのだ。軍属だろうが何だろうが、あの姉妹は恐怖の対象であることには変わらないのだろう。

「一夏さんがやっても、素直に白状したと思えますけどね」

「俺はそこまで恐怖を植え付けるとかはしませんよ？ 白状しなければ、骨が一本ずつ外れていくだけですし」

「そつちの方がよほど怖いですよ」

見た目はそこまで怖そうではないが、一夏の訊問もなかなか過激なのだ。産業スパイを見つけた時、一夏はその背後に何処の国がいるのかを吐かせる為、スパイの骨を一本ずつ外していったのだ。

「まさか三本でギブアップするとは思ってなかったですけどね……まだ外すつもりでいたのに、あっさり和白状して失禁するとは……スパイに向いていなかったんですかね」

「あれは、一夏さんの行動と表情が恐ろし過ぎただけだと思いますけどね……」

精神的に追い詰める為に、一夏は必要以上に楽しそうにスパイの骨を外していったのだ。その恐怖に耐えられなかったのも、仕方のない事ではないかと更識内では噂されて

いるのだ。

「まあ兎に角、あの侵入者たちの処遇は、俺たちが修学旅行から帰って来てからですね。人事は俺個人では出来ませんし」

「そうですね。それまでは、あの場所で大人しくしてもらいましょう」

結局更識の仕事先の話し合いのようになったが、一夏と虚は特に気にした様子も無く自分たちの部屋に戻っていったのだった。

身内の評価

刀奈が京都に向かったかもしれないという情報は、簪たちの耳にも入っていた。今更何も出来ないと言っている一夏の横で、簪が呆れてものも言えないという表情でうつむいていた。

「簪ちゃん、そんなに落ち込まなくても」

「だって、荷物に紛れて京都に向かったなんて無謀な事をした人が、自分の実の姉だと思うとね……」

「それくらいなら可愛いものだろ。気に食わないという理由だけで、国一つ潰そうとした女が実の姉だってほうが、よほど絶望的だがな」

「一夏の方は、スケールが違うからね……」

慰めなのかなんともとれないセリフに、簪も同情してしまった。実の姉が残念、ということなら、一夏の右に出る者はいないだろう。

「刀奈さんが京都に向かったのであれば、戦力アップは見込める。だが、I S学園の警備が手薄になると、司令塔がいなくなるという問題が浮上してくるんだよな……」

「香澄さんの未来視では、IS学園が襲われる確率は限りなくゼロ。心配する事は無いと思われませんが……」

「限りなくゼロでも、まったくくない訳ではないからな。例え一パーセント未満の確率でも、無視は出来ない」

「虚さんでは駄目なのですか？」

マドカの疑問に、一夏は虚が参謀タイプであり、ナンバーツーとしての方が実力を発揮出来るという考えを伝えた。

「確かに、虚さんはトップでも十分通用するでしょうが、ナンバーツーの方が向いていますね。ですが、そうなるとう方が一の時に指揮を執れる人がいませんね……どうするのですか？」

「最悪の場合は、俺たちがISを展開して高速で学園に戻ってくれば良いと考えているが、回線を繋いで俺が遠方から指示を出す事も考えている。もちろん、そんなことは起こらないとは思ってるがな。だからと言って油断して良い訳にもいかないし……ほんと、刀奈さんは想定外の動きが多すぎる」

「なんかゴメンね……お姉ちゃんが」

一夏の言葉を、自分に対するあてつけだと思ひ込んだ簪が、ますます落ち込む。そんな彼女を見た一夏は、苦笑いを浮かべながら簪の頭を撫でる。

「簪が気に病む事は無いだろ。向こうについて刀奈さんと会えれば、しつかりと説教するから気にするな。もちろん、二度目なんて考えられないくらいに徹底的に叱るつもりだから、手出しは無用だ」

「一夏さん……その笑顔は怖いです……」

「おっと……美紀たちを怖がらせても仕方ないもんな」

すぐに表情を改めて、一夏は簪の頭を撫でていた手を離した。

「あっ……」

「ん？　なんだ、もう少し撫でてほしいのか？」

　　こういえば恥ずかしかがって無理にでも元気になると思つての発言だったのだが、簪は予想外の反応を示した。

「うん、もう少しだけ……」

「あ、ああ……あと少しだけだぞ」

予想外の反応を示され、一夏の方が動揺する。それでも、撫でる手に力が籠ったり、雑になつたりすることは無く、丁寧に簪の頭を撫で続けた。

「いいなく、かんちゃん。いつちー、私の頭も撫でて〜」

「本音は自分の仕事をちゃんとこなしたらな。それで、刀奈さんの部屋なんだが、監視の意味も込めて俺たちと同部屋にしようと思うんだが、美紀はどう思う?」

「そうですね……同部屋にしておけば大人しくはなると思いますが、ですが、刀奈お姉ちゃんの事ですから、一夏さんの寝込みを襲おうなどと考えるかもしれないから」

「その点は問題ないだろ。そんなことを思えないくらい説教するつもりだから」

「どの程度怒るのかわかりませんが、刀奈お姉ちゃんの心が折れるなんて事があり得るんですかね? むしろそれをバネに新しい悪戯を考えそうで怖いんですが……」

「ありえそうだが、少しは刀奈さんを信用しない事には始まらないからな。反省しなかつたら織斑姉妹に差し出せばいいだけだし」

「兄さま、それは処刑とイコールなのでは?」

実の姉に対するイメージとしては最悪だが、マドカの認識は間違つてはいない。一夏もその意味を込めて言っているので、マドカの反応に笑みを浮かべた。

「最初から突き出ささないだけマシだと思うが?」

「まあ、裁判抜き死刑確定はさすがに可哀想ですしね」

「兎に角、刀奈さんが京都に向かったのであれば、戦力として考えさせてもらおうと思っている」

「観光は？ させるの？」

一夏に撫でられたままで、気持ちよさそうに目を細めながら簪が問う。

「そんなことはさせないさ。ホテルの監視として部屋で謹慎してもらおう」

「何かあればすぐに連絡も出来るでしょうし、最適な人選だと思います」

「でもさ、刀奈様が大人しく謹慎するかな？ シノノンとは違うけど、刀奈様もあま

り人の話は聞かないタイプだと思うんだよね」

「それは本音が絶対に言っちゃいけない事だとは思うけど、確かにお姉ちゃんは人の話を聞かないよね」

「本音が言っつてはいけないと思いますが、刀奈お姉ちゃんは基本的には言う事を聞かないですよ」

「お前ら、本音をデイスリながら刀奈さんもデイスってないか？」

若干楽しそうに話す簪と美紀に対して、一夏はそんなツツコミを入れた。

「そんな事ないよ、一夏。それに、これくらいのデイスりで大人しくなるなら、今頃学園に留まつてくれているはずだもん」

「そうですよ、一夏さん。刀奈お姉ちゃんはこれくらいのデイスりは気にしませんから」「やっぱデイスってんじゃないかよ……」

一夏の呟きに、簪と美紀は顔を見合して笑ったのだった。

束からの情報

翌朝に出発と言う事で、さすがの一夏も今夜は整備室に籠る事は無く、部屋で寛いでいた。そこへ非通知で電話がかかって来て、一夏は露骨に嫌そうな顔を浮かべた。

「何方からです？」

「非通知なんて使ってくるのは、あのウサギくらいだ」

ちゃんと番号が登録されているのに、登録外から掛けて来る愉快犯の顔を思い浮かべ、一夏は小さく息を吐いた。

「お掛けになった電話番号は、現在ウサギからの連絡を受け付けておりません。速やかに通信を切り、そして反省してください」

『えっ、ちよ……いっくん、それ何の冗談？』

「通信切断まで、残り三秒」

『もういいってば！ そんな事より、いっくんに……』

何か言いかけていたが、一夏は容赦なく通信を切り、携帯の電源を落としてベッドに

倒れ込んだ。

「いいんでしょうか？ あれでも世界最高峰の技術者なんですよね？ 何か有益な情報

かもしれませんよ」

「大丈夫だろ。電話が使えないと分かれば——」

「いっくん、酷くない!?!」

「……………」

「ほらな」

光の速さで部屋に現れた大天災を目の当たりにして、美紀は言葉を失った。一方の夏は、この展開を予期していたようで、特に驚いた様子も無く、むしろ狙っていたかのような余裕さえ窺えた。

「それで、いったい何の用ですか、駄ウサギ様」

「あつ、その辛辣な眼差しと可愛いいっくんに罵られていると思うと、東さん、本格的に目覚めそうだよ」

「ふざけるのはそれくらいにして、用件を言ってください。何時までも貴女の気配を偽るのも限界なんで」

篠ノ之束が侵入したと知れば、すぐに織斑姉妹が飛んでくる。比喻ではなく、本当にこの部屋に飛んでくるだろうと、美紀も短くない付き合いで理解していた。

「別にちーちゃんたちにも言わなきゃいけない事だから、来てもらった方が束さん的には楽なんだけどな〜」

「貴女たち三人が揃うと、ろくなことが起きないので嫌です。本当は電話で済ませられれば良かったんですが、電話越しでは貴女を叱れませんからね」

「し、しまった!?! つて、今回束さんは何もしてないよ〜」

アメリカ軍が仕掛けてきたのは、束が裏で何かをしたわけではない。その事は一夏も重々承知しているが、一夏の苛立ちの原因はそこではなかった。

「どうでも良い時にはしつかりと監視していて、重要な時ほど目を離すとは、さすがは世紀の大天災、恐れ入ります」

「余り褒められてる気がしないのは気のせい?」

「褒めてないので当然です」

はつきりとそう告げてから、一夏は表情を改め、束もそれに合わせて真面目な空気を醸し出す。

「今回の件だけど、アメリカ軍を唆したのは亡国機業で間違いないよ」

「それは俺もISのコアから聞いていますので知ってますが、貴女が調べたのは、どの派閥かと言う事ですよね」

「さっすがいっくん。東さんの事はなんでもお見通しなんだね……つて、真面目に話すからその殺気はしまつてほしいかな」

今はふざける時ではないと自覚して、東は飛びつこうとした身体を押さええて続きを話し始めた。

「亡国機業の中でも、現リーダーを中心に組織された過激派、これがアメリカ軍を唆したので間違いないよ。狙いはアメリカの弱体化と、希望的観測でいっくんたち更識所属の誰かが負傷する事かな。残念ながら、希望的観測ではなく、天文学的確率の世界の話だけどね」

あの程度の実力で、更識所属に傷一つでもつけられると思つた辺りが滑稽だと、東はバカにしたような口調で告げる。一夏もその事に関してはずっこみを入れる事無く、東の報告の続きを待っている。

「いっくんたちの戦力が少しでも欠ければ、独立派の連中がいっくんたちに一矢報いる

事が出来るのかも、とても思ってたのかな？　　いっくんたちを倒し、調子に乗ってるところを叩き潰す計画だったらしいけど、そっちももう虚数の彼方にしかない確率だけだね」

「独立派の動きは、過激派に把握されていると？」

「独立派の中には、あの単細胞箒ちゃんがいるからね。監視されていたり、後をつけられていても気づかない可能性の方が高いし」

「ですが、篠ノ之は気配には敏いはずですが」

「あくまで可能性の話だよ、いっくん」

ニツコリとしてやったりという表情の束に、一夏は鋭い視線を向け、すぐに逸らした。「では、独立派が俺たちを襲って来て、それを返り討ちにしたら、そこを過激派に襲われる可能性があると言う事ですか」

「馬鹿箒ちゃんがどうなろうが知った事じゃないけど、一応血縁者だからね。それに、あの中には何人か使えそうな人材がいるんですよ？　　いっくんの言葉なら信じるかもしれないし、一応報告しておこうと思っただから電話したのに、いっくんたら束さんに会いたいからって電源まで——」

「美紀、すぐに簪と虚さんに連絡を。場所はこの部屋で構わない」

「かしこまりました」

「それから、メールで良いので尊さんにもこの事は伝えておいてくれ」

「無視は酷くないかな」

口では文句を言いながらも、束の表情はすぐ嬉しそうだった。一夏に無視された事に快感を覚えた——わけではなく、仕事モードの一夏の表情を間近で見られて喜んでゐるのだ。

「それじゃあ束さんはこれで——」

「帰れるわけないだろ？ 詳しい話はわたしたちの部屋で聞かせてもらおう」

「な、なっちゃん……」

一夏の意識から束の存在が外れたので、気配を偽っていた結界も消えたのだ。そうなればすぐにでも織斑姉妹が現れても不思議ではない。その事を失念していた束は、ズルと千夏に引き摺られて寮長室へ移動する事になったのだった。

独立派の不安

早朝から新幹線で移動して、一夏たちは目的地であるホテルへと到着した、まずチエックインを済ませ、荷物を部屋に運んでからの班行動となっているので、一年生全員がそれぞれの荷物を持って部屋へと移動していく。

「失礼、更識一夏様でございますか？」

「そうですか」

「お荷物が届いております」

「分かりました」

中身はなんとなく理解しているので、特に訝しむことも無くフロント係の案内に従って荷物を受け取りに行く。大きな段ボールを受け取り、一夏は簪と美紀、そして碧を従えて箱を開けた。

「じゃーん！ 貴方のお義姉さんで……す？！」

「さて、さっそく説教タイムといきましょうか」

満面の笑みで飛び出してきた刀奈だったが、周りを囲むように立っていた一夏たちを見て、表情を強張らせた。

「えつと……ちよつとしたお茶目よ」

「虚さんが怒ってましたが、このまま送り返されるのと、大人しく怒られるの、どっちがいいですか？」

「……………めんなさい」

箱から出て、その場に正座して頭を下げる刀奈。所謂土下座だが、今回は形だけではなく本気で反省しているようだった。

「次からは容赦しませんからね」

「……………許してくれるの？」

「その代わり、俺たちがいない間のこのホテルの警備、襲われた時の連絡係をお願いします。部屋は俺たちと同じでいいですから、ゆつくりとしててください」

最初からそのつもりだったと、簪と美紀、碧は知っていたが、その事は顔に出さず、仕方ないという雰囲気醸し出す。その演技にまんまと引つかかった刀奈は、もう一度頭を下げてから一夏に抱き着こうとして——三人に襟首を掴まれたのだった。

「では刀奈ちゃんはこっちだから。それでは一夏さん、ゆつくりと観光してきてください」

「それじゃあ碧さん、お姉ちゃんの事、よろしくお願いします」

「えっ、ちよ……私も観光したいんだけど」

「刀奈さんは、部屋で謹慎です」

まさか初日から警備につかされるとは思っていなかった刀奈は、泣きそうな顔で碧に引つ張られていくのだった。

「ちよつと可哀想でしたね」

「いいんだよ、美紀。お姉ちゃんにはあれくらい厳しくしないと響かないんだから」

「まっ、これでも大分甘い沙汰なんだがな」

「おーい、いっちー！ そろそろ行こうよう！」

「兄さま、準備出来ました！」

「やれやれ、あいつらはほんとマイペースだな」

刀奈と入れ替わるようにやって来た本音とマドカに癒されつつ、一夏は苦笑いを浮かべる。

「それじゃあ、私は別行動だから」

「ああ。また後で」

クラスの違う簪とも別れ、一夏と美紀は本音とマドカと合流し、京都を散策する事にしたのだった。

IS学園に忍び込もうとしたアメリカ軍の背後に過激派がいた事は、スコールたちも突き詰めていた。

「どうするんだ？ アイツらにとつちや、オレたちも過激派連中も変わらないと思われてるんじゃないのか？」

「更識君は冷静に分析するでしょうけども、私たちが亡国機業であることには変わらないうものね……その辺りの判断を誰が下すのかにもよるんじゃない？」

「でもよ、オメエと更識の代表、布仏だっけか？ 相性悪いんだろ？ 個人的感情が邪魔をするなんて事もあるだろ」

「布仏が判断を下すとは思えないけど、多少感情的になるかもしれないわね。だから、出来る事なら更識君個人で判断してもらいたいわよ」

元IS学園所属のレイン・ミューゼルことダリル・ケイシーは、IS学園内の問題について誰が判断を下すかある程度予想はついている。だが、今回は事が事だけに、織斑姉妹が判断を下す可能性もあるのだ。

「織斑姉妹が判断する場合は、過激派や独立派などの派閥など気にせず、亡国機業を潰

せばいいとでも考えるでしょうね」

「それが一番楽だろうからな……でもよ、あいつらと一纏めにされるのは気に食わねえな」

「その意見には同感だけど、織斑姉妹の考え方ってそんな感じだったわよ」

派閥があろうがなからうが、まとめて潰せばすつきりする、それが織斑姉妹の考え方でと理解しているダリルは、諦め半分の気持ちでオータムにそう告げた。

「ところで、スコールは何処に行ったんだ？ オレたちに黒幕を伝えてから姿が見えねえんだが」

「さつきどこかに出かけたわよ」

「一人でか？」

「ええ。そもそも私のパートナーも、貴女のパートナーも特訓中なんだから、他にスコールに同行出来る実力者はこの派閥にはいないわよ」

「SHが痲癩を起した所為で、前の突撃戦の時に大分戦力を削られたからな……突貫工事じゃ期待も出来ねえか」

「それでも、鍛えない事には始まらないもの」

「そんなことお前に言われなくても分かっているが……それでも愚痴りたくもなるってん

だよ」

過激派のパトロンを潰す事に失敗して、それに加えて戦力を失った事で独立派は立場が危うくなっている。今までは見て見ぬふりをされていたが、本格的に潰されそうになっっているのだ。

「とにかく今は、更識一夏の協力を得られねえかどうか懸かっているんだろ？」

「協力するつもりは無いでしょうけども、過激派と独立派を別として扱ってくれるかに懸かっているのは確かでしょうね。更識が本気で潰そうと思えば、私たちなんて一瞬で消されてもおかしくないんだから」

それだけの戦力を有しているのは、ダリルもオータムも重々承知している。別組織だと理解してもらえるかどうか、それだけが心配なのだった。

裏取引

集合時間の連絡だけを受け、各班に分かれ京都の散策に出たのが、今から約十分前。一夏たちも例外ではなく、気は進まないなりに散策に出ていた。

「美紀、気づいてるか？」

「はい、一夏さん。尾行者一名。敵意は感じませんが、この気配は……」

「何か話があるのだろうか。だから一人で、武器も携帯せずに尾行しているのだろうか」

「そこまで分かるんですか？」

「気配察知だけは、美紀や簪に勝てる分野だからな」

そう言つて一夏は、本音とマドカに視線を向ける。どうやら二人は気づいていないようだ。

「本音は兎も角、マドカは真つ先に気付きそうなものだと思つていたが……」

「旅先で浮かれていますのではないのでしょうか？ マドカさんにとって、こうした旅行は初めてなのでしょうし」

「まあ、その点を差し引いたとしても、かつての同僚の気配に気付けないのは問題だと思

うがな……」

一夏の視線に気づいたのか、マドカが小走りに駆け寄ってくる。小動物を思わせるその動きに、一夏は緊張感を一瞬忘れそうになったのだった。

「兄さま、何か御用ですか？」

「いや、ちよつと野暮用が出来たから、俺と美紀は別行動になる。時間は三十分もあれば終わるだろうから、その間は本音と二人で行動しててくれ」

「それは構いませんが、何処で落ち合う予定なのですか？」

「それは決めなくても問題ないだろ。俺も美紀も、気配察知は得意だからな」

そう言いながら、一夏はマドカの頭に手を置き、少し乱暴に髪を撫でる。

「に、兄さま！ マドカは猫じゃありませんよ」

口では文句を言うマドカだが、その表情は嬉しそうだった。兄妹として過ごした時間は、離れ離れだった時間に遠く及ばない分、こうした何気ないやり取りがマドカは嬉しくてたまらないのだろうと、一夏の背後でその表情を見た美紀はそう思った。

「本音には上手い事言っておいてくれ」

「分かりました。では兄さま、後程」

小さく手を振って一夏たちと別れたマドカの姿が見えなくなるまで見送り、一夏は背後の尾行者に声を掛けた。

「これで出て来れるだろ？ いったい何の用だ」

「あらあら、私がMの存在を気にしていたというの？ 一夏ともあろう子が、随分な勘違いを——」

「あつ、マドカさん」

「っ!？」

美紀の発した声に反応し、スコールが慌てて振り返る。しかしそこには誰の姿もなく、スコールはしてやられたと言うことに気が付いた。

「さて、何か言い訳はあるのか？」

「……くだらない事に時間を割いている余裕は無いはずよ。貴方たちにも、私たちにも」
「そう言うことにしておこう。それで、わざわざ危険を冒してまで接触を試みた理由を聞こうか」

なんとなく想像はついているのだが、一夏はあえてスコールの口から用件を言わせることにした。

「この前の学園襲撃事件だけど、あれは過激派の仕業よ。私たちは関係ないわ」

「それを証明する手立てはあるのか？ ただ単にやっていないという証言を鵜呑みに出来るほど、俺はお前たちを信用していない」

「そう言われると思っていたけど、残念ながら証拠は無いわ。でも信じて。あれは断じて私たち独立派が仕掛けたことじゃないの」

あまりにも自分だけの都合で話を進めるスコールに、美紀は嫌悪感を示す。美紀の反応を当然のものと受け止めるスコールだが、内心は穏やかではない。

「証拠は無い、だが信じろか……自分たちに都合がいい事だとは思ってるのか？」

「もちろんよ……私たちが信じて、貴方たちに都合がいい事なんてない事くらい分かってる。でも、これだけは本当よ。私たちはアメリカ軍を唆してなどいないし、本気で貴方たちに勝てるとも思っていない」

「なら、襲撃計画は何のために立てているんだ？」

「……私たちが動けば、恐らく過激派も動くでしょう。だから、その動きに乗じて過激派の戦力を削ろうとしてるだけよ。まあ、SHにはこの事は教えてないんだけど」

「アイツはすぐ顔に出るし、そんな考えを認めるタイプにも思えないからな……それで、最初の質問に戻るが、危険を承知で俺たちに接触を試みた理由は何だ？ お前なら、俺たちがとつくに黒幕に気付いている事を知っているんだろ？」

今までのやり取りが演技だと告げる一夏に、スコールも笑みを浮かべて応える。美紀も表に出していた嫌悪感をしまい、一夏の護衛としての任に徹する形を見せる。

「過激派のメンバーの内、様々な国の重鎮たちとパイプを保持してるヤツがいるの。そいつがアメリカ軍を唆して、アメリカの戦力ダウンを狙ったのよ。一部だけど、やり取りの記録をハッキングして手に入れた。これは更識の方で好きに使ってちょうだい」

「なるほど……アメリカ軍を唆したのは亡国機業過激派、そのパトロンはロシアか」

「I Sの登場で有耶無耶になってるけど、ロシアとアメリカは仲が悪いからね」

「ロシアもI S操縦者の質が上がらず困っている。そこで敵国の戦力を削る作戦に出たというわけか……」

「つまらない事を考えるんですね、国というのは」

「ロシアはアメリカの戦力ダウンと共に、更識の力も削りたいとも思ってるらしいわよ。あまりにも強大過ぎる更識の力を、一部だけでもロシアのものに出来ないかと考えてるみたいなのよね」

「……まあ、ロシアが仕掛けた株価暴落の煽りを受けなかったから、更識的にはダメージはゼロに等しい。だが、面倒事を起こされた恨みは、しっかりと晴らさせてもらわないとな。スコール、派手にやるか」

「そうね。あつ、でも……SHだけは演技ではなく本気で行くでしょうから、それはそっちで対処してね」

「……アイツ、そろそろ束さんに消してもらった方が良くないんじゃないか？」

一夏が零した愚痴に、美紀とスコールは笑いをこらえるのに必死だったが、遂にこらえきれずに吹き出してしまったのだった。

本音の癖

スコールとの密会を終えた一夏と美紀は、マドカと本音を探すべく気配を広げた。

「意外と近くにいるな」

「まあマドカさんと本音ですから、歩みが遅くても仕方ないと思いますよ」

本格的な旅行が初めてのマドカと、マイペースな本音のコンビだから、それも仕方ないのかもしれない。一夏と美紀は二人と合流を急ぎ、少し駆け足で二人の気配の位置まで移動する。

「ところで一夏さん、あの人の話し、何処まで信用出来ると思いますか？」

「俺がアメリカのコアから聞き出した情報と、ほぼ一致する情報だったからな。ある程度は信用していいと思うぞ。問題は篠ノ之が何も知らない、という一点だろうな」

「前回の襲撃時の能力を一夏さんがデータ化したものをVTSに反映して対策しているとはいえ、あの人は毎回想定外の動きを見せますからね……」

「人が想像出来る範疇にいないんだろ、きつと」

姉があんな感じなのだから、妹もきつと人外なのだろうと結論付けている一夏は、筈の事も人間レベルではないと説明する。

「その理屈だと、一夏さんやマドカさんもそれに当てはまるのでは」

「実際俺は一種の人外だろ？ 生憎、戦闘ではなく開発や研究の方面だが」

「では、マドカさんは？」

「マドカは分かりにくいのが、成長速度が普通の人間の倍以上ある。これは努力しているものもあるが、一種の人外なのかもしれないな」

マドカの事を話題にしていたのが聞こえたのか、向こう側からマドカが駆け寄ってきた。

「兄さま、早かったですね。野暮用とやらは済んだのでしようか？」

「ああ、バッチリとな。それより本音はどうした？ 気配は側にあつたはずだが」

「本音でしたら、あそこで甘味を楽しんでいますよ」

「ふあ、いっていいー！」

「……せめて飲み込んでから喋れ」

一夏の姿を見つけて手を振る本音に、一夏はため息を吐きながらツツコむ。昔から口

に物を入れて喋る癖がある本音に、虚も一夏も散々注意してきたのだが、ついにその癖は治らなかつたのだ。

「兄さま、先ほど姉さまから電話がありました、ホテル周辺に疑わしい気があつたようです。ですが、何もせずに引き返したので、今回は見逃したと」

「何故マドカに報告したのかはさておき、恐らくウサ耳マッドだろうな、その気配は」
「不審者判定なんですね……」

束の扱いに驚きを覚えた美紀だったが、今までの登場の仕方や、面倒事を起こしてきたのを思い出し、それも仕方ないのかもしれないと思い始めていた。

「兎に角、ゆつくりと散策してホテルに戻るか」

「一夏さん、あまりやる気がありませんね」

「小学生の頃に来てるし、部屋でのんびりしてる方が性に合ってる」

「兄さまは確かにインドアですからね」

「俺が動けばそれだけ人に迷惑がかかるからな……なるべく外には出たくないんだよ」

妹に引き籠もり扱いされたようで、一夏はとりあえずの言い訳を試みたが、あまり効果は無かつたようだった。

アジトに戻ってきたスコールを、オータムとダリルが出迎えた。

「あら、お出迎えなんて嬉しいわね。それより、何時の間にそんなに仲良くなったのかしら？」

「御託はいいぜスコール。それより、何処に行つてたんだよ」

「前に説明した通りよ。過激派の勢いを削ぐために力を借りに行つたの」

「それで、確約は取れたの?」

「一応はね。でもSHはすぐに顔に出るから、前にも言つた通り彼女には秘密ね」

箒の性格を知っている二人は、そろつて首を縦に振る。

「それにしてもよく協力してくれる氣になつたな。アイツには散々酷い事をしてきたつていうのに。もしかしてDMなのか?」

「利害が一致したからでしょ。一夏はどう考えてもドSよ」

「そうね。更識君のあの目は、どうやって私をいたぶろうか考えている感じだったもの」
「簡単に尻尾を掴まれるようじゃ、スパイが聞いて呆れるぜ」

「あら、貴女がしっかりと捕まえてくれてれば、私だってこんなに早く学園を去る事は無かつたと思うのだけでも?」

一発触発の空氣が流れる中、スコールは手を鳴らして意識をこちら側に引き戻した。

「今から足並みを乱してどうするのよ。これは私たちの野望の第一歩なのよ。多少の仲の悪さは目を瞑つてあげるけど、これからって時に喧嘩は止めてちょうだい」

「ちっ、分かったぜ」

「私はもとより、喧嘩を売るつもりはありませんわ」

「そうやって煽るのもやめなさい。それより、過激派の目を欺くために、初めは結構本気でぶつかる事になるわ。一夏の方でもある程度の手加減はしてくるでしょうけども、くれぐれも本気で潰しに行かないように」

ダリルを諫めながら、スコールはオータムに視線を向けて注意を促す。彼女の性格上、作戦だと分かかっていても強者と戦えるとなると、作戦を無視して戦闘を楽しむ傾向があるのだ。

「分かっているっての。だいたい、オレの投入は過激派が姿を現してからだろ？ 更識の餓鬼共と戦う理由がねえだろ」

「分かっているならいいのだけど。でも貴女の事だから、我慢しきれずに飛び出してくる、なんてこともあり得るでしょ？ だから、念のために確認しただけよ」

あながち否定できないと感じたのか、オータムは何も反論せずに、素直に頷いたのだった。

「決行は明日の正午。場所は前に伝えた通りよ」

「了解」

「分かったわ」

最終確認を済ませ、三人はそれぞれに割り当てられた部屋へと戻っていくのだった。

情報の共有

京都散策を終えた一夏たちは、とりあえず情報を共有するために簪を部屋に呼び、スコールとの話し合いの内容を伝えた。

「つまり、初めは派手に戦ってるフリをして、本命が来たらそのスコールって人たちと協力して黒幕を捕まえるのね？」

「簡単に言えばそうです。ただし、向こう側には篠ノ之がいますので」

「でも、箒ちゃんにだって情報は行ってるんでしょ？」

「いいえ。あいつはこういった作戦などは受け入れず、一人で突っ走るらしいので、伝えるだけ無駄だと言っていました」

一夏の言葉に、刀奈たちは納得の表情を浮かべる。それなりに実力はつけているようだが、そういった連携の部分では成長していないようだ、容易に想像出来てしまったのだ。

「それじゃあ、篠ノ之さんは本気で私たちに挑んでくるってこと？」

「アイツの本気なんてたかが知れてるだろうが、アイツの行動は想像出来ないからな

……複数人で動きを止める方向で考えた方が良いだろう」

「なら、篠ノ之箒の相手は私がやります」

マドカが手を挙げて立候補すると、本音もつられるように手を挙げた。

「じゃあ私も。シノノンを怒らせて私たちに攻撃を集中させればいいんでしょ？」

「まあ、アイツを怒らせるのは本音が適任かもしれないな」

「ちよつと凶星を突けば、すぐに突っ込んでくるからね」

「本音に凶星を突かれたら、誰だつてカツとなるでしょうけども、篠ノ之さんは特にですからね」

実際、前の襲撃の際に、本音に凶星を突かれた箒は激高し、他の相手には目もくれずに本音に突っ込んできた。その光景を見ている箒たちは、本音が立案した作戦を支持した。

「一夏君、私は？」

「刀奈さんは、向こうがこちらとの約束を反故にした際の切り札として待機、約束を守つて黒幕が出て来たら、その確保に動いてください」

「つまり、初めは出番なしなの？」

「何で残念そうなのか分かりませんが、こっちには静寂や香澄、セシリアたちといった専用機持ちがいるんですから、刀奈さんを最初から投入する必要はありません。それに、織斑姉妹や碧さんといった実力者も控えていますので、大人しくIS学園に戻っていただいても構いませんよ」

不満そうな刀奈に、一夏は満面の笑みを浮かべて問いかける。間違いなく顔は笑っているのに、その目は笑っているようには見えなかった。

「わ、分かったわよう……でも、一夏君が危ないと思ったら、容赦なく助太刀するからね」
「ええ、その時はお願いします。まあ、そんな事は起きないと思えますがね」

そう言って一夏は、立ち上がり部屋から出て行くこうとする。

「どこ行くの?」

「織斑姉妹と碧さんにも、この事を伝えておかなければいけませんので。情報は共有しておかないと、いざという時に動けませんからね」

「なら、私もお供します。何も無いとは思いますが、護衛としてしっかりと一夏さんをお守りしなければいけませんので」

「そうか。じゃあその前に簪を部屋まで送らないとな。簪だつて更識の人間、襲われる

可能性は俺と大して変わらないだろう」

そう言つて簪の手を取り、そのまま部屋から出て行つた一夏を、刀奈たちは羨ましそ
うな目を向けて見送るしか出来なかつたのだつた。

簪を部屋まで送り、織斑姉妹、碧といった教師陣たちに今回の件を報告した一夏は、一息吐くためにエントランスで缶コーヒーを購入し、ソファに腰を下ろした。その隣には、缶のミルクティーを一夏に奢ってもらった美紀が腰を下ろす。

「まったく、織斑姉妹の理解力の低さには頭が痛くなる」

「理解はしているんでしょうけども、それ以上に戦いたい衝動が強いですよね」

一夏からの説明を受け、織斑姉妹が出した答えは――

「来るもの全てを叩き潰せばいいんだな！」

――というものだった。

ある意味でそれは有効な手だと一夏も思ったが、もしかしたら亡国機業・独立派をこちら側に引き込むことが出来るかもしれないという考えがあるので、全てを叩き潰されては自分の考えが実行出来なくなってしまうのだ。

何せ独立派には、自分のトラウマ発動の条件である篠ノ之箒とオータムがいるのだ。これが味方になれば、戦闘中にトラウマを発動させ周りに迷惑をかける可能性が大幅に減るのだ。一夏としてはなんとしても独立派をこちら側へ引き込みたいのだった。

「あの二人を見ると、マドカは素直に育つてるとかと思えるよ」

「マドカさんは一夏さんの言う事は素直に聞きますからね。他の人の意見も素直に聞きますし、不審な点があればすぐに確認しますから、理解力も高いですからね」

「織斑姉妹と同じ血が流れてるとは考えられないな……それとも、亡国機業の躰け方が良かったのか？ いや、束さんを狙つてた時は、織斑姉妹と大差ない言葉遣いだつたし、それは無いか……もしそれだけの躰け能力があるのであれば、篠ノ之箒も更生出来てるだろうしな」

「マドカさんのあれは、一夏さんが彼女を受け入れ、愛情を注いだ結果ではないでしょうか」

確かにマドカの性格は、一夏に気に入られたい一心で変わったと言つても過言ではない。だが、それだけで変わるほど、人の性格は簡単ではないと一夏は思っているのだ。「兎に角、暴走はしないように見張りをつけておいた方が良さだろうな……」

「なら、それは一夏さんと刀奈お姉ちゃんでしたらどうでしょう？ 私たちは、形だけとはいえ亡国機業と戦わなければいけませんし」

「そうだな。まあ、さすがの織斑姉妹も、演技だと分かつてる戦闘に首を突つ込むことはしないだろうけどな」

自分で言っておきながら、一夏はあの二人の姉に一抹の不安を懐いていた。また美紀も、あの二人なら演技の戦闘だろうが突っ込んできそうだなと思っていたのだった。

それぞれ打ち合わせ

一夏から情報を聞いた織斑姉妹と碧は、生徒の避難を担当するであろう真耶と紫陽花にも情報を伝えるために部屋を訪れていた。

「つまり、私たちは生徒たちが慌てないように、落ちつかせながら退避すればいいんですね?」

「そうだ。それから、好戦的な奴が数人いるから、そいつらが出撃しないように見張っている」

「好戦的というと、オルコットさんや凰さん、ボーデヴィツヒさんですか?」

「そうだな。その辺りが篠ノ之目掛けて出撃する可能性は否めん。だが、今回の襲撃はあくまでも本命をおびき出すための偽装だ。本気で戦闘を始められては計画が狂ってしまうからな」

「敵戦力の全てがここに集結するわけではなさそうだけど、ある程度は戦力を削ることが出来ると思うわ。だから、一夏さんの計画に狂いが生じないように、真耶と紫陽花にはバックアップをお願いしたいのよ」

碧の追加の説明に、真耶と紫陽花が力強く頷く。元々織斑姉妹と碧の三人を尊敬している紫陽花にとつて、この三人から命じられる事は幸せであり、真耶は一夏の実力——主に作戦面での——を十分に知っている為に、彼の立てた計画ならと信頼を置いているのだ。

「問題は、馬鹿箒がこの作戦を聞かされていらないと言う事だな」

「何故亡国機業の人は、篠ノ之さんにこの事を教えないのですか？」

千冬の眩きに、真耶が当然の疑問を投げ掛ける。事をうまく運ぶには、箒にも情報を与えた方が絶対に良いと思っっている真耶とは対照的に、千冬と千夏は盛大にため息を吐いて、真耶の疑問に答えた。

「あの馬鹿は、作戦というものをまるで気にしないからな。自分が動きたいように動き、戦いたい相手を見つけて勝負を挑む。教えるだけ無駄の作戦をアイツに伝え、敵に知れ渡つたら大変だからな。ましてや偽装出来るほど器用でもないアイツのことだ。反発して余計に本気で殴り掛かってこないとも限らないからな」

「亡国機業の連中も、二ヶ月弱アイツと過ごして、アイツの性格を重々承知したのだから。演技が本気に変わるなんてことが、アイツなら十分にあり得るからな」

「こちらとしても、篠ノ之さんと無駄に戦つて戦力を失うのは避けたいですからね。篠

ノ之さんの相手は、一夏さんが適任をぶつけるでしょうから、真耶と紫陽花は気にしないでいいわよ」

「そうだったんですか。確かに、篠ノ之さんはあまり言う事を聞く子じゃなかったですね」

一学期の実習風景を思い出し、真耶がしみじみと呟く。一方の紫陽花は、担当した事が無かったので、篠ノ之箒という生徒の情報に殆ど持ち合わせていない。だが、この三人が言うのであれば間違いないのだろうと、特に疑いを持つ事なく受け入れたのだった。

「襲撃予定は明日の正午。集団行動の最中に馬鹿箒を含む四機のI Sが被害の少ない場所を目掛けて攻撃を仕掛けてくる。それを合図に一夏以下更識所属の面々が対応にあたる」

「お前ら二人は、その隙を突いて生徒たちを安全な場所へ誘導、避難した専用機持ちが攻撃しないように見張っている」

「追加の指示は、たぶんデュノアさんを介して一夏さんから伝えられると思うから、もし何かあったらお願いね」

「分かりました」

何故シャルなのか、という疑問は口にせず、真耶と紫陽花はそろって頷いてみせたのだった。

教師陣が作戦の確認をしている頃、一夏たちは部屋でのんびりと過ごしていた。四人部屋に五人いるが、一夏はベッドを使わないと宣言しているので、誰が一緒に、とかいう争いは起きなかった。

「刀奈お姉ちゃん、帰ったら虚さんに怒られるからね」

「分かつてるわよ……でも、一夏君の作戦には私も必要だし、結果的に来て良かったんじゃない？」

「刀奈さんがいなかったら、別の作戦にしましたよ」

開き直って凶々しい事を言いだした刀奈に、一夏の冷静な指摘が入り、再び刀奈はしょんぼりと俯いた。

「兄さま、簪が来ました」

「ああ、入れてくれ」

マドカに続くように、簪が部屋に入ってくる。クラスが違うので別の部屋なのだが、緊急と言う事で消灯時間までこの部屋にいて良いと織斑姉妹から許可を貰っている。ちなみに、他の生徒がこの部屋に近づけばすぐに織斑姉妹が飛んできて、消灯時間までお説教というありがたいプランが待っているのだ。

「それで一夏。亡国機業の独立派？　と手を組んで、どうするつもりなの？」

「一つは戦力の充実かな。候補生を外されたとはいえ、ダリル・ケイシーとフォルテ・サファイアは実力者だ。更識に引き込めれば心強い。スコールとオータムも言わずもがなだがな」

「いつちー、シノノンは？」

「アイツは……東さんにでもくれてやれば良い。身内なら容赦なく人体実験出来るだろ」

「普通逆では？」

「あの人は身内以外を人とは思わないから、人体実験じゃなく動物実験としか思っていないからな」

美紀の冷静なツツコミも、東というイレギュラーには通用しないと一夏が言い放つ。実際東は人体実験に興味を持っているが、人間と認識してる相手が少ないので、一夏の言う通り動物実験の域を出ていないのだった。

「問題は、俺と刀奈さんでどこまでアイツを引き留められるか、だな」

「大丈夫、私これでも国家代表だもの。猪武者くらい引き留めて見せるわ」

自信満々に胸を張る刀奈を見て、一夏と簪はなんとなくため息を吐きたくなくなったの
だった。

天才二人の密会

消灯時間近くになり、廊下に見回りの教師の気配が増えたことを受け、一夏たちも部屋の明かりを消し、それぞれのベッドへと入ることにした。

「本当に一夏君がソファで寝るの？ 私がいけないんだし、私がソファで寝るわよ」

「ですが、刀奈さんはソファで寝た経験はありませんよね？」

「それは……でも、一夏君だって無いでしょ？」

「俺は何処でも寝られるようになってますし、最悪一日二日寝なくても行動に制限はかかりませんし。それに、亡国機業との戦闘の際は、俺は後方支援ですからね」

自ら前線に出て戦うタイプではない一夏だが、それが今回は刀奈を納得させる決定打となった。

「それじゃあ、ベッドを使わせてもらおうけど、もし寝にくいと思ったら何時でも入って来ていいからね」

「刀奈お姉ちゃん、それセクハラですよ」

「義姉弟のスキンシップよ。マドカちゃんだと、血縁兄妹になるから不謹慎だけど、私と

「一夏君なら問題はないでしょ？」

「問題ないと思ってる刀奈お姉ちゃんの頭が問題だと思っけどね」

美紀のツツコミに、一夏も頷いて同意した。

「兎に角、大人しく寝てください。どうやらこの部屋の見張りは織斑姉妹らしいので、何か問題を起こせばすぐに説教されるでしょうし、刀奈さんの場合は強制送還の可能性もありますので」

「うう……分かったわよ」

さすがの刀奈も、織斑姉妹に逆らう程愚かではないので、大人しくあてがわれたベツドへと入り、素直に寝る事にした。

皆の寝息を確認してから、一夏はこっそりと起き上がり部屋から外へ出る。当然織斑姉妹の監視に引つ掛かるが、特にお咎めも無く一夏は建物の外へと出る事に成功した。

「いますよね」

一夏が小さく声を掛けると、何も無い草陰からウサ耳が生え現れた。

「さすがにいつくん。ちーちゃんたちの伝言を正確に受け取るとは」

「昼間の不審な気配とやらで、貴女がこの付近にいるのは分かりましたし、わざわざ織班姉妹に気配を掴ませたのも、こうやって話すためですよね」

「何でも分かってくれるいづくんが好き。亡国機業のメインシステムにハッキングを仕掛けてみたけど、これといった情報は無かったね。それから、亡国機業に肩入れした倉持技研の技術者の名簿を見つけたけど、ほとんどが過激派に加担してる感じかな。独立派に加担してる技術者の腕は、更識内では屑レベルだね」

「何時の間に更識の技術者を品定めしたのかはさておき、問題はサイレント・ゼファイルスですね。あれは亡国機業が強奪したものですし、所有権はイギリスにありますから、篠ノ之がこちらに加わったとしても、アイツが使い続ける事は不可能です」

「箒ちゃんに専用機なんて一億年早いけど、他のISを使えない以上、戦力として計算するのならサイレント・ゼファイルスを使い続けてもらうしかないんだよね」

「そもそも、サイレント・ゼファイルスが俺か束さんに心を開いた時点で、篠ノ之は扱えなくなると思われるんですが、その辺りはどう考えます?」

一夏の質問に、束は小さく首を傾げて考える。あまり興味は無さそうに見えたが、一夏からの問いかけと言う事で束は真剣に考えている様子だった。

「箒ちゃんがサイレント・ゼファイルスに乗れなくなつたのであれば、素直にイギリスに返

還すべきだろうね。もちろん、箒ちゃんの騎乗データはこちらがもらうけど」

「そもそも、篠ノ之のデータなんて貰って、イギリスは嬉しいんですかね？」

「操縦に難があるとはいえ、戦闘データは何処の国も喉から手が出るほど欲しいと思うよ。いつくんたちみたいいに、すぐにデータが取れる環境が整ってるわけじゃないんだから」

「更識だつて、戦闘データをすぐに取れるわけじゃないんですが」

「実力者が揃ってるんだし、広大なアリーナだつて持つてるじゃない。すぐに欲しいデータは取れるし、そのデータから新たなシステムをくみ上げる事が出来る頭脳だつて、ここにがあるしね」

一夏の頭を指差しながら、束が楽しそうに呟く。反論する意味も無かったので、一夏は特に取り合わずに話を先に進めた。

「束さんの方から、コアネットワークにアクセスして亡国機業のISを止める事は出来ないんですよね？」

「残念ながら、亡国機業が使ってるISのコアは劣化が激しくて、束さんが管理してるネットワークの管轄外なんだよね。更識の方でもアクセス出来ないでしょ？」

「そもそも俺は、コアネットワークにアクセス出来ませんので」

「専用機の闇鴉がハッキング出来るでしょ？　そうやって束さんの計画を覗き見してるのは知ってるんだからね」

「……そんな事してたのか」

闇鴉は覗き見していたが、その事は一夏には伝えていない。純粹に一夏は束の計画を未然に知ることが出来ているので、覗き見する必要すら彼には無いのだ。

「まあ、そんなわけで、回収したISは束さんが引き取るから、いつくんはその事を気にすることなく戦いに集中してよ」

「俺は前線に生まれませんけどね。まあ、ISの後処理を頼めたのは大きいですね。更識家で引き受けたら、また色々と文句を言われかねませんから」

「技術力で劣る国が、いつくんに文句を言うなんて万死に値するけどね」

「……どこの法律に当てはめてものを言ってるんですか、貴女は」

最後に物騒な事を言い残して消えた束に、一夏はそんな言葉を呟いたのだった。

真夜中の勘違い

夜中にふと目を覚ました刀奈は、部屋に一夏がいない事に気がつき慌てた。

「えっ、一夏君、何処に行つたの!? トイレ? それとも……」

亡国機業の計画が一夏を捕まえるために罠で、もしかしたら攫われてしまったのではないかと思いついた刀奈は、すぐに部屋を飛び出して一夏を探そうと行動する。だが、部屋を飛び出る前に部屋の扉が開き、慌てている刀奈を見て呆気にとられている人物が視界に入った。

「一夏君?」

「はい、どうかしたんですか?」

何故刀奈が慌てているのか見当もつかないという表情で、一夏が刀奈に問いかける。

「どうかした、じゃないわよ! こんな時間に何処に行つたのよ!」

「何処って、駄ウサギと打ち合わせに!」

刀奈が慌てている分、いつも以上に冷静に答える一夏。その態度を見て落ち着きを取り戻したのか、刀奈がその場に座り込んだ。

「心配させないでよね。亡国機業が一夏君を攫っていったのかと思っただじやない」「織斑姉妹の監視を掻い潜って？ 碧さんもいるのにですか？」

普通に考えればありえない事だと、刀奈も今では理解している。だが、目が覚めて一夏がいなかったという衝撃は、冷静な判断が出来なくなるには十分すぎる衝撃だったのだ。

「スコールたちが俺を罠にはめるのはあり得るかもしれませんが、今のタイミングでは無意味です。過激派の動きが活発になって今、俺を攫ったところで過激派に横取りされるのがオチですからね。今のスコールたちでは、過激派の動きに対応しきれませんから」

「……だったら、書置きくらいしておきなさいよね。誰かが起きて心配するかもって考えなかったの？」

「こんな時間ですし、皆さん熟睡してましたからね」

そう言って一夏は、寝入っている三人に視線を向けた。刀奈もつられるように三人に

視線を向け、確かに寝入っているなど思ったのだった。

「それで、刀奈さんは何故起きたんですか？ 少なくとも、俺が部屋から出ていく前は確実に寝入っていましたよね？ トイレですか？」

「違うわよ！ なんとなく胸騒ぎがして目が覚めたの。そうしたら一夏君がいなくて……だから、もしかしたら思って思ってたわけ」

「胸騒ぎ……ですか？ 学園で虚さんが怒ってるとかじゃなくて？」

「……その可能性は否定できないわね」

虚に黙ってこっちに來ているのだ。生徒会の仕事や、学園周辺の警戒などを虚一人に押し付けているので、虚の怒気がここまで飛んできた可能性もあると、刀奈はIS学園の方角を向き、両手を合わせて頭を下げた。

「とりあえず、明日——いえ、日付が変わったので今日ですか。亡国機業と一戦交える事になるのは確かですので、ゆっくりと寝てください。俺ももう寝ますので」

「目が冴えちゃって……少しお話ししない？」

「少しだけですよ」

ため息を呑み込んで刀奈の要求に応える一夏。その表情はマドカや本音に向けられ

るものに近かったが、刀奈はその表情に気付くことなくソファに座り一夏とお喋りをすることにしたのだった。

吐いた。
一夏が部屋に戻ったのを気配で感じ取り、千冬と千夏、そして碧は一先ず安堵の息を吐いた。

「篠ノ之博士との打ち合わせは無事に終わったようですね」

「あの馬鹿が一夏をそのまま連れ去るかもしれないと思ったが、そこまで馬鹿ではなかったようだな」

「一応天才発明家ですよ？ その人相手に馬鹿を連呼するとは……」

「わたしと千冬は、あの馬鹿と付き合いが長いからな。世間では天才発明家だとか大天災だとか言われているが、アイツの本性はただの馬鹿だ」

千夏の言葉に千冬も頷いて同意する。碧も学生自体から束の事は知っているが、この二人はそれより以前から束との付き合いがあるので、自分が知らない一面も知っているのだろうという事で自分を納得させた。

「それにしても一夏のヤツ、束まで巻き込んで何をするつもりなんだ？」

「私を見ても何も答えませんからね。ていうか、私も詳しい事は聞いていないんですから」

「本当か？ 一夏の懐刀であるお前が、今回に限って何も聞かされていないというのか？」

「それだけ、周りにも知られてはいけない計画なんでしょう。今回は私は後方支援、あくまでも手伝い程度ですから、詳しい事は何も聞かされていません」

自分や織斑姉妹が前線に出てしまうと、本気で籌を潰しかねないと判断されたのかは分からないが、碧は今回の作戦では後方支援を頼まれたのだ。その判断に文句は無いが、若干不服に感じているのは確かだった。

「更識姉がいるから、お前も後方支援なのか」

「どうでしょうね？ 刀奈ちゃんがいなくても、一夏さんの指示は変わらなかつたと思いますけど」

「まあ、他にも専用機持ちはいるからな」

避難させる生徒の中にも、専用機持ちは数名いる。その専用機持ちが暴走しないように見張るよう、一夏から頼まれているのだ。

「オルコットさんやボーデヴィツヒさん、凧さんが暴走したら私たちしか止められないからかもしれないませんですけどね」

「アイツらなど、睨み一つで大人しくなるだろ」

「それは貴女たち姉妹だから出来る技でしょうが……」

例えば真耶が睨んでも、専用機持ちたちは大人しくならぬだろう。千冬たちの概念

で物事を言われ、碧は何でこの人たちと行動しなければいけないのだろうと、心の中で一夏に恨み言を溢したのだった。

過激派の影

打ち合わせ通り襲撃に備えるオータムは、ふと気になった事をスコールに尋ねた。

「今の亡国機業のトップって、結局は誰なんだ？」

「あら、てつきり知ってると思ってたけど」

「知るわけねえだろ。興味なかったし、オレはそう言った集まりに呼ばれてねえんだからよ」

「そうだったわね。残念だけど、私も直接会ったことは無いわ。今のトップは警戒心が強くてね。モニター越しにししか会議に出てこないし、どうしても出られない時は名代を立ててたから」

「名代？」

トップの名代というからには、かなりの高齢者を想像したオータム。しかしスコールの答えは、こちらも歯切れが悪かった。

「全身を衣服で包んで、体格も性別も分からない感じよ。本当に名代なのか、それともあれが今のトップなのではないかと、穏健派の幹部たちが話してるのを聞いたことがある

わ」

「何だよ。つまり、今のトップを見たことあるヤツはいねえのか？」

「過激派の幹部なら、あるいは知ってるかもしれないけどね。生憎、過激派との繋がりは無いから、真実は分からないけど」

悪びれも無く告げるスコールに、オータムはため息を吐いた。

「なら、何で過激派の人間が多く之国とパイプを持つてるって知ってるんだ？」

「繋がりは無くても、動きは監視してるから分かるのよ。過激派の誰かが国同士で潰しあいをさせて、その隙を突いて戦力増強を図ってるってね」

「動きは分かるが、誰が動いているか分からないって不気味じゃねえか？」

「そうなのよね……過激派のグループ編成も分からないし、そもそも誰が中心になって動いてるのかも分からないなんて、不気味でしかないのよね」

「穏健派の人間たちも知らねえのか？」

対立してるんだから、それくらい知ってるのではないかと問いかけるオータムに、スコールは首を左右に振って否定した。

「穏健派の人間も、過激派がどれくらいの人形で形成されているのかも知らないらしい

のよね。というか、以前から亡国機業に所属していた人間の殆どは、穏健派か独立派に属しているから、過激派に誰がいるのか全然見当もつかないのよ」

「何だよそれ。つまり本当にいるのかどうかも分からない相手を警戒し、おびき出そうとしてるって事かよ」

「大げさに言えばそう言う事ね。でも、間違いなく過激派の人間は存在してるのよ」

「まあ、それは疑ってねえけどよ……」

イマイチ乗り切れない態度を示すオータムだったが、彼女がスコールの言葉を疑うはずも無く、結局は彼女の指示に従うのだった。

集団行動として列車を使用している最中に、一夏たちは亡国機業の気配を察知した。もちろん打ち合わせ通りなのだが、殆どの生徒は襲われる事すら知らないのです、一気にパニックに陥りそうになった。

『皆、落ちついて！ 私たちが食い止めるから、皆は織斑先生たちの指示に従って避難してください』

車内アナウンスを利用して、刀奈がそう一年生たちに告げる。何故刀奈がこの場にいるのか疑問に思つた生徒は少なくなかったが、緊急時であることを思いだし素直に指示に従つた。

「私たちも出撃するべきではありませんか？」

「そうね。何とかして千冬さんたちの目を——痛つ!? 誰よ!」

「織斑先生と呼べ！　そして、お前たちは大人しく避難しろ」

「ですが、私たちも専用機持ちとして——」

「既に更識所属の面々が出撃している。お前たちにあいつらの動きについて行くことが出来るというのか？　鷹月や日下部ですら避難対象になっているのに、更識所属でもないお前たちが？　自惚れるな小娘共」

千夏の言葉に、セシリアも鈴木も大人しくなる。確かに静寂や香澄も大人しく避難しているのだ。その二人の動きについて行くのがやつとの自分たちが出撃しても、恐らく邪魔にしかならないと理解して、大人しく避難誘導に従うのだった。

「やれやれ、やはり一夏の読み通りだったな」

「正義感に溢れるのはいい事だが、自分が出来る事と出来ない事の区別はしっかりとしてもらいたいものだ」

そう呟きながら、千冬と千夏は殿を務める。万が一簿がこちらに向かつて来ても、この二人が対処すれば大抵の事は解決できるという一夏の考えによるものだが、二人は一夏に頼ってもらったと言う事を喜び、何があっても生徒は守るという教師本来の仕事をすることになっているのだった。

「おい、あれを見ろ」

「ほう、あの馬鹿箒がまともに動けるようになってるのか」

箒を食い止めるために囷になっているのは、一夏と刀奈。箒の狙いは自分だろうからと一夏が申し出て、ISにおける一番信頼の高い刀奈がそれに随行する形となっている。

「一夏のヤツ、若干震えてるではないか」

「やはり、子供の時にあの馬鹿は消しておくべきだったか」

十分な距離を取っているのに、トラウマは発動していないようだが、それでも本来の動きには程遠い感じに見受けられる。

「ここまでは計画通りか。残りは過激派とやらが現れば全て終わるのだが」

「ホテルに残してきた真耶からの連絡はまだか」

モニター室に閉じ込められた——千冬たちは仕事を任せたと思っている——真耶からの連絡を待っていると、ちょうど着信を告げるメロディーが流れた。

「来たか？」

『大変です、織斑先生！ 超高速で接近するISを捉えました』

「数は？」

『一機です！ まもなくそちらに——』

真耶からの連絡を受けている最中に、元いた場所から物凄い爆音が聞こえ千冬は通信を切った。生徒たちの避難は完了しており、その守りは碧が担当なので抜かりはない。

「行くぞ、千夏」

「分かっている」

千冬と千夏は念のために持ってきていた暮桜と明椛を展開し、爆音がした場所まで高速で移動するのだった。

爆音の原因

全くの予想外の出現方法に、一夏も刀奈も、あの箒でさえも一瞬動きを止めて爆音のした方角に視線を向けた。

「一夏君、これって計画通りなの？」

「いや……どうなんでしょうね」

確かに過激派の人間が現れるかとは聞いていたし、久延毘古の未来予知でも敵が現れると言う事は視えていた。だがここまで派手に現れるなど思ってたので、更識所属の面々も、亡国機業独立派のメンバーも呆気にとられてしまっていた。

「おいおい、随分と派手な登場だな」

「もしかして過激派の『過激』って、こういうところから来てるのかしら？」

「そんなのんきな事言ってる場合じゃないと思うけど……」

「ダリル・ケイシーにフォルテ・サファイア……久しぶりね」

爆心地にわらわらと現れる人の中に、刀奈はかつての先輩と同級生の姿を見つけ、声

を掛けた。掛けられた方も、軽く会釈したり、手を挙げたりで応えるが、今はそれどころではない。

「おいスコール。これはどういことだ？」

「知らないわよ。そもそも、私たちだって過激派の構成メンバーだったり知らないんだから」

「で、この爆心地にいるのが、亡国機業過激派の人間で間違いないんだろうな？ お前たちの仲間、つて事は無いんだな？」

「私たちはここにいるメンバーで全員よ。それより、更識の人間だって事は無いの？」

「俺たちもここにるので全員だ。残りは避難させているからな」

未だに何が落ちたのかすら見えないので、スコールも一夏も互いの増援なのではないかと疑う。もちろん、そのような事は無いのだが。

「一夏、これは何事だ！」

「避難場所まで物凄い音が聞こえたぞ！」

「あらあら。織斑姉妹……これは終わったわね」

物凄い勢いで飛んできた織斑姉妹の姿を確認したスコールが、そんなことを呟く。事

前に打ち合わせはしてあるとはいえ、織斑姉妹が現れたら過激派の人間もあつさり仕留められるだろうと、そんな気持ちになったのだろう。

「姉さま？　他のみんなの警護はよろしいのですか？」

「ああ、問題ない。小鳥遊がいるからな」

「それに、あそこにだつて専用機持ちは数人いるんだ。わたしたちがいなくても何とかなるだろう」

「そういう問題じゃないんですけどね……貴女たちは任された事を全うする事が出来な
いんですか？」

ゆらりと二人の背後に立つ一夏。最強の双子も弟の前では大人しくなるのかと、亡国機業のメンバーがしみじみと思っていると、一人の命知らずが一夏に迫る。

「これはどういうことだ一夏！　お前は、まだ正々堂々戦うつもりが無いのか！」

相変わらずの勘違いをした筈が、一夏につかみかかろうとして――

「おい、邪魔だ小娘」

――最強の双子に投げ飛ばされた。

「一夏の事になると余計に周りが見えなくなる癖がある筈だが、織斑姉妹を失念して一夏につかみかかろうとするなんて、自殺行為の他無い。

「そんな事より一夏、これはどういう状況なんだ？」

「俺にも分かりませんよ。ウサ耳マッドが降ってきたわけでもなさそうですし」

「アイツはこんなことしないだろ。見ず知らずの相手が多い場所に現れるヤツでもないしな」

「状況によればするかもしれませんが、今の状況ではしないでしようね」

「可能性があつた束も違うとなると、ますますこの爆発音の原因となつたものが何か見当がつかなくなつてしまつた。未だに土煙が上がり続けているので、中心部に何があるのか確認も出来ないのだ。

「兎に角油断しないで、戦闘態勢を解かないようにしてください」

「一夏、私と貴方で中心部に攻撃を仕掛けて、土煙を吹き飛ばしましょう」

「そんな事しなくても、いずれ晴れるでしょうし、敵も今のところ動く気配も無いよう
だ」

「てか、あの中心地に堕ちてつたSHは大丈夫なのか？」

オータムの言葉に、一夏とスコールはそろって中心地に視線を向ける。サイレント・ゼフィルスを纏っているから死んではいないだろうと思っているが、余計な恨みを買った恐れはある。

「てか、本当に教えてなかったんだな」

「当然でしょ？ あの子に教えて妨害でもされたらせつかくの計画がペアですもの」

「やはりそつちでもあの馬鹿は馬鹿のままなのか」

「何処にいても邪魔にしかならないな、あの馬鹿は」

「貴女たちも大差ないと思いますけど？」

「そんなことはないだろ！ あの馬鹿と一緒にするな！」

一夏の辛辣なコメントに、織斑姉妹は声を揃えて反論する。確かに命令は守らないし仕事は放り投げる事が多いが、自分たちは箒ほど周りに迷惑はかけていないと思ってるのだろう。

だが実際に、仕事は生徒会や真耶に投げ、自分はやりたい事をやるといふ暴挙に出たり、頼まれた監視もまともに出来なかつたりと、いざという時のポンコツ加減は中々なものがこの二人にはあるのだ。箒と同列に視られても仕方ない節は確かにある。

「おい、なんか飛んできたぞ」

「SHじゃないの？」

「いや、それもだが……」

オータムの言葉に、全員が土煙の中心地——爆発音の原因となったものが浮いてくるのを確認した。

「ISか？」

「そのようだな」

「馬鹿以外にもISがいるな」

一夏と織斑姉妹も、第三者の存在を確認し、警戒を強める。

「全く。人の頭にこんなポンコツを落とすなんて、失礼しちゃうわよね」

「女の子……？」

刀奈が眩いたように、土煙の中から聞こえた声は、女性というより女の子と表現した方が良い感じだった。

「誰だ？ 亡国機業の過激派の人間なのか？」

「その声は」

一夏が問いかけると、土煙の中から嬉しそうな声が聞こえてきた。

「そうだよ。私が亡国機業の過激派といわれてる組織——というか、そのものなんだけどね」

「二人……なのか？」

過激派と言われてたから、てつきり大勢いるものだと思っていた一夏だったが、その実態はこの少女一人だったようだ。

「そうだよ、『お兄ちゃん』」

「お兄ちゃん？」

そう呼ばれた事で、一夏の頭はますます混乱に陥っていく。唯一の妹であるマドカは隣にいるし、自分の事を「お兄ちゃん」と呼ぶラウラは、今は避難してこの場にはいない。

「君は、誰だ？」

「はじめまして、お兄ちゃん。織斑マナカだよ」

名前を聞いても、一夏にはピンと来なかった。だが、隣の織斑姉妹は確かに息を呑んだ。そう一夏には思えたのだった。

マナカの目的

織斑マナカと名乗った少女を見て、織斑姉妹は気まずそうに視線を逸らす。もちろん、一夏がその程度で深追いを自重するわけも無く、彼女について知っているのであろう二人に問いかける。

「お二人と彼女の御関係は、どのようなものなのでしょう？ 名前から察するに、マドカの双子の姉か妹だとは思うのですが」

「……事実、その通りだ。奴は織斑家の末っ子だ」

「だが、マドカ同様に屑親たちが生まれてすぐに連れ去ったんだ。マドカは見つかつたがマナカの話は掴めなかつたので、てっきりもういないのかと思つていたが……」

「何をブツブツ言つてるのか知らないけど、あんたたちには興味ないわよ。私が興味あるのはただ一人だもん」

そう言つてマナカは、ゆっくりと一夏に近づいてくる。手を伸ばせば触れられる距離まで近づいたところで、スクールが二人の間に割つて入る。

「貴女、確か独立派の」

「まさか過激派と呼ばれていたのがこんな小娘だったとはね。私たちは何に怯えてたのかしら」

「小娘？ 出来そこないのMadokaと一緒にしないでもらいたいわね」

そう言つてマナカは、何かのスイッチを押した。

「つ！ 一夏さん、周辺にISの気配を確認！ その数五十！」

「何処からそんなにISを確保したのよ！ 私たちだってギリギリしか確保してないつていうのに」

数の多さに不平を漏らすスコール。だがマナカは冷静に、見ようによつてはスコールに取り合う気が無いかのように答えた。

「造つただけよ、こんなの」

「いっちー！ あのIS、人が乗ってないよ!？」

「無人機か……」

「その通りだよ、お兄ちゃん。あのISは私がコントロールしてるだけの無人機。だからパイロットの育成なんて面倒な事は気にしなくていいし、大量生産出来るから機体の心配もしなくていいんだよ」

そう言いながらマナカは、無人機を操作して独立派の面々や、更識所属の面々に向けて突撃させる。

「刀奈さん、指揮は任せます」

「了解！ 簪ちゃん和美紀ちゃんは広く浅く攻撃して！ 私と本音で分散した敵を叩き、撃ち漏らしはマドカちゃんが仕留めて」

刀奈の指揮を受け、更識所属の面々が無人機退治に向かう。一夏も少し視線を向けたりはしたが、刀奈を信頼して意識をマナカの方へ完全に向けた。

「悪いが、俺には君の記憶は無い。まあ、例え昔の記憶があつたとしても、君の事は知らなかつただろうがね」

「それはそうだよね。私たちが生まれてすぐ、あの屑たちは私とマドカを連れてあの家から去つたんだから。私たちと一つしか違わないお兄ちゃんが、私たちの事を知らなくても仕方ないもん。まあ、その駄姉たちは知つてて当然なんだけど」

マナカが織斑姉妹へ視線を向けると、二人は居心地の悪そうな表情を浮かべた。

「一つ確認したいんだが」

「何、お兄ちゃん?」

「君が今の亡国機業のトップなのか?」

「そうだよ。屑親の紹介で前のトップに会って、私とマドカは別々のグループに配属になったの。それで私はそのままトップのグループに所属になって、トップが死んじやつてからは私が実権を握ったの。だからお兄ちゃんを私の手元にと思つてオータムたちに命じたのに、失敗した挙句に記憶を失わせちゃつて、憎むべきISの第一人者にまでしちゃつたんだよね……だから潰そうとしてたのに」

「随分と俺の事を気に入つてるようだが、君は俺の事を何処で知つたんだ?」

生まれてすぐ離れ離れになつたと言つていたのに、マナカは何処で自分の事を知つたのかと、一夏は当然の事を疑問に思つた。マドカも自分の事は知つていたので、亡国機業内で自分の事は知られているのかという疑問だ。

「そんなの簡単だよ。屑親が教えてくれてたんだよ」

「親が?」

「うん。化け物二人が怖くて連れてこれなかつたけど、お前たちには優しい兄がいるつてね」

「おいおい、化け物は酷くないか?」

「あつ？ お前たちには話してないよ」

千冬が口を挿むと、マナカは一夏相手の時とは比べ物にならないくらいの嫌悪感を示した。

「あの屑親がお前たちから逃げる為に私たちを連れ出したらしいけど、本当はお兄ちゃんも一緒に来るはずだったんだ！ それをお前たちがお兄ちゃんを手放さなかったから、仕方なくお兄ちゃんはその家で生活する事になったんだ！」

「……俺にはそれが本当か分からないですが、どうなんですか？」

真実を知っているであろう織斑姉妹に視線を向けると、千冬も千夏も憤慨していた。

「私たちが一夏を手放さなかった？ あいつらが一夏を置いて行ったんだろが！」

「そもそも、マドカもマナカもろくに世話するつもりが無かったくせに、私たちを見下して二人を連れて行つたくせに！」

「それが真実であろうがなかるうが、私には関係ない。私はただ、お兄ちゃんと一緒にいたいだけ」

マナカが更にスイッチを押すと、何も無い空間から無人機が現れる。

「私はお兄ちゃんとお話ししてるんだから、貴女たちはこれと遊んでてください」

マナカが短く無人機に命令を送ると、無人機たちは織斑姉妹目掛けて突撃する。

「さあ、お兄ちゃん。全て破壊し尽した後の世界を、私と一緒に過ごそうよ」

「全て破壊するって、君は何をするつもりなんだ」

「決まってるよ。私からお兄ちゃんを奪い、そのお兄ちゃんから記憶を奪った世界を破壊し尽すだよ」

笑顔で物騒な事を言うマナカに、一夏は表情を顰める。そのタイミングで、気絶していた箒が意識を取り戻したのだった。

最凶タツグ

意識を取り戻した筈はまず、自分の周りに一夏と見知らぬ少女しかいない事に気が付き、そしていつものように勘違いをして一夏に喰ってかかる。

「一夏貴様！ また新しい女にちよっかいを出したのか！」

「あー、確かにこれじゃあお兄ちゃんが鬱陶しいって思うのも仕方ないかな」

「お兄ちゃん？ 一夏貴様、幼女にそんな呼ばせ方を強要しているのか！」

「……勘違いもここまでだと賞賛すら送りたくなるな」

勘違いを正すつもりもないが、筈を相手にしているとトラウマが発動しそうなので、一夏は視線をマナカへと向けた。

「君が亡国機業のトップであるのなら、俺は容赦しない」

「お兄ちゃんが相手なら苦戦するかもだけど、それでも勝つのは私だよ」

「亡国機業のトップ？ お兄ちゃん？ お前たちは何の話をしているんだ」

情報の整理が追い付かない筈は、一発触発の空気を無視して二人に問いかける。その

問いかげに応えたのはマナカの方だった。

「そう言えば貴女、篠ノ之束の妹だったわね」

「あの人は関係ない！」

「その気持ち、分かるわよ。私だって織斑姉妹と比べられてきたんだから」

「織斑姉妹と？ ……まさかお前、千冬さんたちの妹なのか？」

「さつきから一夏お兄ちゃんの事を『お兄ちゃん』って呼んでるんだけど」

一夏の妹＝織斑姉妹の妹と言うことに気づいていなかったのかと、マナカは箒を残念な子を見る目で眺める。蔑まれていると言うことに気づかず、箒はマナカに質問を続けた。

「一夏の妹と言う事は、あのマドカとか言うヤツとも血縁と言う事か」

「甚だ不本意ではあるけども、マドカは私の双子の姉よ。才能なんかは私の方が遥かに上だけどね」

「それで、一夏の妹とやらが何故亡国機業のトップなんてやっているんだ」

「篠ノ之束の妹が亡国機業に与してるのと大して変わらないわよ。まっとうな評価をしてほしいから。姉が世界最強の双子であるっただけで、私にまでその才能を期待する。そして遠く及ばないと分かると勝手に失望し、キツイ態度で接してくる。私は私だ！

織斑千冬、千夏の劣化版じゃない！」

癩癩を起したマナカに、一夏は同情の眼差しを向ける。自分には織斑姉妹と比べられた記憶が無いので共感はいらないし、共感出来たとしてもマナカの行動を善とすることは出来ないのだ。

だが、似たような境遇で育った箒は、マナカの考えに同調した。

「分かるぞ、その気持ち。私も篠ノ之束の妹というだけで勝手に期待され、あの人の遠く及ばないと分かるかと失望された」

「貴女、私と一緒に来ない？ 本当のお兄ちゃんを取り戻して、三人で生活しましょうよ」

「本当の一夏？」

マナカの言葉に、箒は自分の妄想の中の一夏が本当の一夏であると錯覚し、マナカに手を伸ばした。

「私知っている一夏に戻るのであれば、お前に協力しよう」

「そう、じゃあお願いね。それから、私は一応貴女の所属している組織のトップなのだから、言葉遣いには気をつけなさいよね」

「私は私の目的の為だけに今の場所にいるんだ。縦社会になど興味ない。だが、一夏を取り戻すためなら考えないことも無いぞ」

あくまで偉そうに告げる箒に、マナカは面白いものを見るような目を向けた。

「まあ、何時までその態度が続けられるか見ものだね。それじゃあお兄ちゃん、今日はこのくらいで引いてあげるね。そろそろ無人機の壁も破られそうだし」

「出来る事なら、この場で君を拘束して全てを終わらせたいところだが」

「お兄ちゃんには出来ないでしょ？ この女が側にいるだけで、お兄ちゃんは本来の力を発揮出来ないんだから」

箒に視線を向けてから、マナカは瞬間加速で一夏の側に移動し、そして耳元で囁く。

「精々偽りの世界を楽しんでね、お兄ちゃん。すぐに本当の世界を見せてあげたいけど、それには色々準備が必要なんだ」

「何が偽りかは知らないが、俺は君の思う通りには動かない」

「マナカで良いよ。お兄ちゃんにはそう呼んでもらいたいし」

さつきまでの貼り付けた空気が一転し、マナカは甘えたい妹の空気を醸し出した。そ

の変化に一夏も面を喰らったようで、今の彼は隙だらけだった。

「お兄ちゃん、私が敵だつて事忘れてない？」

「いや、君の空気の変化が唐突過ぎて、一瞬呆けただけだ」

「私がお兄ちゃんの命を狙つてたら、今の一瞬でお兄ちゃんは死んじやつてたんだからね」

「そうだな。それで、マナカの目的は世界の破壊で良いんだな？」

一夏が呼び捨てでマナカの名を呼ぶと、彼女は幸せそうな表情を浮かべて答えた。

「半分正解。残りの半分は、お兄ちゃんを手に入れる事。織斑千冬、千夏、マドカの三人を消し去る事だよ」

「表情とセリフが一致してないんだが」

「だって、お兄ちゃんに『マナカ』って呼んでもらつたんだもん。あつ、携帯の着ボイスにしたいから、もう一回呼んで」

「……………」

戦場の空気ではないものが流れ始めて、一夏はどう対処するのが正解なのか頭を悩ませたが、穏便にこの場が済むのであれば、名前を呼ぶくらいはいいかと諦めたのだった。

「マナカ」

「……うん、ちゃんと録音出来た！ それじゃあお兄ちゃん、今日の所はこれでお別れだね。行くよ、篠ノ之箒」

「私に指図するな！」

マナカと箒がこの場から退散してすぐ、刀奈たちが無人機を倒して一夏の許に飛んできた。

「一夏君、無事!?!」

「ええ、この通りです」

無傷の姿を刀奈たちに見せて安心させた一方で、一夏はマナカの事を考えていた。

「（織斑マナカか……後で織斑姉妹に詳しい事を聞かなければな）」

家族の記憶すらない彼にとって、あそこまで懐かれる理由を知る為にも織斑姉妹に話を聞く必要があると思ったのだ。マナカの事ではなく、両親の話を。

独立派の処分

マナカと箒が退散し、無人機を全て無効化した一夏たちは、とりあえず状況を整理するため一カ所に集まった。

「それで、織斑マナカというのは、本当に織斑家の末っ子で間違いないんですね？」

「ああ、マドカ同様に、生まれてすぐ織斑の屑親たちが連れ去った二人の内の一人だ」

「それがどうして現亡国機業のトップになっているんですかね？ マドカが亡国機業にいた事と関係あるんですかね？」

「その辺りはわたしたちよりコイツら聞いた方が良いんじゃないか？」

千夏がスコールたちに視線を向けると、一夏が一度小さくうなずいてから視線を亡国機業独立派の面々に向けた。

「その辺りの事、詳しく分かる人はいるのか？」

「オレやレインは知らねえぜ」

「最近亡国機業に入ったフォルテ先輩も当然知らないでしょうね」

オータムの言葉に付け加え頷き、一夏は唯一真相を知っているであろうスコールに視線を固定した。

「私も詳しい事は知らないわよ？ それでもいいなら話してあげるけど」

「それで構わない。お前は俺の事も織斑姉妹の事も知っていたな？ あれは何故だ」

「答えは簡単よ。亡国機業に貴方たちの両親もいたからよ」

あつさりと告げるスコールに、織斑姉妹ではなく更識所属の面々が驚いた視線を向け、声を上げそうになったが、一夏がそれを手で制した。

「マナカが前主と近しかったのは、織斑の両親が亡国機業の組員だったからか？」

「組員って言い方が妥当かどうかは分からないけど、恐らくその通りよ。織斑夫妻は亡国機業の中でも大分上に属していたわ」

「お前とも面識はあったのか？」

「数回だけね。性格的に合わなかったから、会話もろくにしたことなかったし、何時死んだのかも知らないわ」

既に故人であると告げられても、一夏たちは特に何も思わなかった。一夏に関しては両親の記憶も無いので当然だが、千冬と千夏が何も思わないのは少し薄情ではないかと

も思ったが、誰一人その事を口にするものはいなかった。

「それで、亡国機業は何を目的に作られた組織なんだ？」

「前にも話したかもしれないけど、基本的には義賊みたいなことをしてたのよ。国民を虐げ税金を搾り取り、自分たちは裕福な暮らしをしていたような奴らを暗殺したり、悪徳業者の金庫から表に出せないようなものを盗み出して換金し、食料にして貧しい人たちに振る舞ったりとかね」

「それが何故犯罪組織などに？ まあ、以前も犯罪と言えば犯罪なんだが」

義賊と言えば聞こえはいいが、やっている事は窃盗である。一夏はその事をしっかりと理解した上で、何故変わってしまったのかをスクールに問いかけた。

「一番の原因はやはりISが誕生した事かしら。あれの所為でパワーバランスが一気に崩れてしまったからね。そのタイミングと被るように、前リーダーが病に臥せて、それからすぐ他界してしまったのよ。その時点で亡国機業は今の三つの派閥に割れたのよ」

「お前たち独立派、日和見主義の穏健派、そしてマナカの過激派か……過激派はマナカ一人のようだったがな」

「無人機を大量に所有してるなんて知らなかったもの」

そもそも無人機の出所も調べなきや分からないのだから、同じ組織に所属しているスコールたちが知らなくても仕方ないのかもしれない。

「美紀、倉持技研にこれほどの腕を持つ技術者はいたか？」

「更識で調べた限りでは、いなかったと思います」

「スコールたちは？ 何か知らないか？」

「残念ながら知らないわ。独立派の手伝いとして手に入れた技術者は、本当に最低限の技術しか持たない素人同然だったから」

「さっき見た限りでは、駄ウサギのものでもなかったし……織斑先生たちは先にホテルに戻って解析の準備を山田先生にお願いしてください。生徒たちは避難解除で」

腕を組み少し考えを纏めてから、一夏はそう織斑姉妹に指示した。

「解析の準備と言ったが、場所は？ あのホテルにはそのような設備など無いだろ」

「最低限の解析なら、俺のPCでどうとでもなりますし、一応更識の息のかかったホテルですから。東京に持ち帰るくらい簡単です」

「なら、真耶には何を準備させろというんだ？」

「ケーブルとかモニターとか、ありそうな物をホテルの従業員に聞いて用意させてくだ

さい。貴女たちが頼むより山田先生が頼んだ方が要領が良いでしょうし」

解析などを得意としている真耶の方が、正式名称やらどのような形状の物かを説明出来るので、確かに真耶が適している。織斑姉妹も納得して、無人機を担いで避難場所へ飛んでいった。

「さて、スコールたち四人は更識が身柄を拘束するとして」

「おい、どういふことだよ！」

「派閥が違うとはいえ、お前たちは亡国機業所属だからな。名目上拘束しておかないと他所からクレームが入りかねない。だから一応拘束して、更識が責任を持って面倒を見るといふ名目で動いてもらう」

「さすが一夏ね。抜け目がないわ」

「刀奈さん、美紀、四人を一時拘束しホテルに連行してください」

一夏の指示に従い、四人は大人しく連行されて行った。スコールやオータム、ダリルの表情はさほど変わってなかったが、フォルテ一人だけは深刻な表情を浮かべていた。

「一夏、この後はどうするの？」

「簪と本音は、まだ無人機が残ってるかもしれないから暫くこの辺りを警戒してくれ」

「兄さま、私は？」

「マドカは俺と一緒にホテルに戻り待機。双子の妹相手じゃやりにくいだろうし、俺の手伝いをしてもらおう」

「分かりました……」

恐らくは前線に出たかったのだろうが、一夏の指示に従うと決めていたマドカは、俯きながら肯定の返事をしたのだった。

無人機の解析

避難場所から移動する際に、静寐と香澄はエイミイと合流した。

「久しぶりね、どうしてたの？」

「イタリアの方で色々と問題があつて、その都合でイタリアに行つてたのよ。私はあくまで更識所属のはずなのに、一応代表候補生だからって事で呼び出されて、漸く帰つてこれたと思つたら修学旅行だったからね」

「亡国機業の事で、何かイタリアでも問題があつたのですか？」

「ううん、そうじゃなくて、ギリシャ代表が代わつちやつたでしょ？ それに合わせてイタリア代表の人も引退するかもつて事で呼び出されたんだけど、結局は次の大会までつて事になったんだ。だから行つただけ無駄だったんだよね。すっかり忘れられてたかと思つたわよ」

無邪気に笑うエイミイに、静寐と香澄は苦笑いで応える。その三人の所に、セシリアたち専用機持ちも合流した。

「あら、エイミイさんじゃないですか。お久しぶりですわ」

「うん、久しぶり〜。みんなも避難してたんだね」

「お兄ちゃんの命令だからな。我々では足手纏いになりかねないから、今回は退避していた」

「一夏はなるべく犠牲を出したくないようだからね。仕方ないって言えばそれまでなんだけどき」

「でも、鈴だつて更識所属のメンバーの動きについて行くのは難しいって思ってるんではよ？」

「そりゃ、現に更識所属の二人が——いや、三人か。とにかく更識製の専用機を持つ三人が避難してるのに、アタシたちが加わつてもね。戦力どころかマイナスになりかねないもの」

鈴の言い分に、セシリアやラウラも頷いて同意を示す。同学年の中ではかなり上に位置するくらいの実力は有しているが、そのくくりが更識所属に代わるだけで、そんな自信は意味をなさないと理解しているのだ。

「なんていつても、あの一夏が更識の中で最弱つて言うんだから、張り合うだけ無駄だつて思うわよね」

「そもそも私は、一学期に一夏さんに派手に負けていますもの」

「織斑教官たちすら畏怖の念を懐くお兄ちゃんに逆らおうなんて、馬鹿な事は考えない方が身のためだ」

「僕は普通に一夏に助けてもらったからね。逆らう気持ちすら起きてこないよ」

「シャルちゃんは今じゃ更識傘下の社長だもんね」

「まだまだ見習いだけどね」

謙遜するシャルに、他のメンバーはそんな必要ないと思っていた。実際更識傘下に入ってからの方が、デユノア社の業績は良くなっている。もちろん更識の名の効果もあるだろうが、シャルが頑張っているからだと認めているのだ。

「とりあえず、今は一夏君に詳しい事情を聞く必要があるわね。一応更識所属なんだし、貴女たちも代表候補生なんだし、何か指示があるかもしれないもの」

「その前に先生たちから説明があるかもね」

鈴の言葉に、静寂は彼女の視線の先を追った。そこには織斑姉妹と碧が生徒たちを集め、全員いるかの確認をしていた。

「確かに、点呼だけなら山田先生でも良いはずなものね」

「でもそうじゃないって事は、まだ一波乱くらいあるのかもしれないわね」

嫌な予感だが、鈴はある意味確信めいたものを感じていたのだった。

ホテルのロビーで織斑姉妹や碧が点呼を取っているのと同時刻、一夏はホテルの地下

室で回収した無人機の解析を進めていた。

「一夏、こつちのケーブルはここでもいいの？」

「ああ、そこで構わない」

さすがに一人では賄いきれないので、簪に手伝いを頼み、一夏はマナカが操っていた無人機の内の一機にケーブルを繋ぎ解析を開始した。

「俺や束さんが造ったコアじゃないし、何処の国の癖も検知出来ない……このISのコアは独自のコアネットワークを展開しているようで、闇鴉もアクセス出来ないらしいし……これは亡国機業内で造られたと考えるのが普通だな」

「でも一夏、篠ノ之博士と一夏以外に、これほど高度なISプログラムを組める人間なんているの？」

「さあ、俺は知らないが……駄ウサギなら何か知ってるかもしれない。後で聞いておく」

更に解析を進めていくと、コアに何か刻まれている事に気付いた。

「何だこれは？ ……何かのマークか」

「何の意味があつてこんなものを刻んだんだろう？」

「自己顕示欲の現れかもしれないが、特に意味は無さそうだな」

他のISも調べたが、製造者にたどり着くようなものは発見出来ず、どのコアにも同じマークが刻まれている事だけが収穫だった。

「それにしても一夏、あの織斑マナカって子が亡国機業のトップなんでしょ？」

「マナカはそう言っていたし、嘘を吐いている様子も無かった」

「それにしても、まだ妹がいたんだね」

「いや、そんな目で見られても……記憶は無いし、あったとしても覚えてなかっただろうがな」

生まれてすぐ両親が連れて行ったとマナカは言っていたので、一夏の記憶があらうが無かるうが知らなかっただろう。一夏の弁明を受け、簪も非難の目を向けるのを止めた。

「後はこの解析結果を更識に送って、少しでも照合するデータが無いか調べるだけか」

「尊さんはそう言った仕事早いし、明日には照合終わってるかもね」

「別に急がないし、敵の数が無人機を除けば二人だって分かったのが今回一番の収穫かもな」

「織斑マナカに篠ノ之箒……一夏の関係者ばっかだね」

「篠ノ之は関係者じゃないぞ」

古なじみではあるが、という一夏の眩きを受け、簪は少し笑みをこぼしたのだった。

独立派の処遇

亡国機業の本拠地に戻ってきたマナカは、襲撃ポイント周辺に仕掛けていたカメラで、一夏たちがまだ警戒している事を確認してほくそ笑んだ。

「お兄ちゃん、そんなにマナカの事を警戒してくれるんだ。嬉しいな」

「おい、お前と一夏は、本当に兄妹なのか？」

今まで一人で使っていた拠点だが、今はもう一人いる。独立派に属していた箒を連れてきたのだ。

「お前はマドカの事を知っているんだろ？ なら見た目がそっくりな私がお兄ちゃんの妹だって言っても不思議はないだろ。そもそも、マドカは千冬に瓜二つ、私は千夏に瓜二つなんだけどね」

千冬とマドカは綺麗な黒髪、千夏とマナカは灰色の髪色をしている。その点を見ても、マナカが織斑の血縁であると証明出来るだろう。

「私は一夏に妹がいた事も知らなかったが、確かにあのマドカとかいう小娘は千冬さん

にそっくりだった。そして、お前は千夏さんにそっくりだ」

「別に構わないんだけど、これでも私は亡国機業のトップなの。つまり、貴女よりよっぽど偉いのよ？　少しは口調を改めようとは思わないわけ？」

「私は亡国機業に与しているわけではない。一夏を手に入れるために場所を借りているだけだ」

「その考え方、私は好きよ。一緒にお兄ちゃんを取り戻しましょう」

一夏が手に入れば、他はどうでも良い筈と、一夏以外は本気でいなくなっても構わないと思っているマナカ。この二人が本気で一夏の事を狙えば、かなり厄介な敵となる事は明白である。だがマナカも筈も、一夏に危害を加えたいわけではないので、脅威となるのは一夏ではなく、むしろその周りの人間に対してであるのだった。

「篠ノ之東がI Sなんてものを発表し、織斑千冬がそれを手伝った。その結果お兄ちゃんはその当時から独立を企てていたスコール一派に拉致されて記憶を失った」

「さて、あれはお前が命じた事なんじゃないのか？」

「私が命じたのは、お兄ちゃんを捕まえてっただけで、乱暴しろなんて命じてない。私はお兄ちゃんに痛い思いなんてしてほしくなかつたもん」

「じゃあ、あれはスコールたちの独断というわけか？」

「違う、織斑の屑親が命じたらしい。だから肅正したんだけど」

「肅正？ 私の記憶が正しいのなら、一夏が拉致された時まだ小学生だろ？ お前はそんな子供の時から権力を握っていたのか？」

「さつき言ったでしょ。前のトップに気に入られていたって。だから、ちよつとお願いすれば大抵の事は叶ったのよね。本当は抹殺してほしいかつたんだけど、さすがにそこは聞き入れてもらえなかつたけど」

表情を変えずに淡々と告げるマナカに、箒は眉を顰めた。どのような教育を受けなければこのように育つのかと本気で考えたのだが、人の事を言えるような教育を受けていない事は棚上げしている様子だった。

「とにかく、これからは貴女にも働いてもらうから、色々とお願ひね、篠ノ之箒さん」「一夏が私の許に戻ってくるのであれば、どんなことでもしよう」

マナカが差し出した手を握り、箒は正式に亡国機業所属になったのだった。

形だけとはいえ拘束されたスコールたちは、ホテルの一室にまとめて入れられていた。

「ここ四人部屋だな。ちようどだぜ」

「私たちが使つてた拠点より立派な監禁部屋よね。さすが更識つて事かしら」
「良いんでしょうか、私たちがこんな立派な部屋を使つても」

オータムとダリルは堂々とした感じで寛いでいるが、フォルテはおどおどとした雰囲気、
気を纏いながら恐縮している。

「一夏がここに案内させたつて事は、使つても良いつて事なんでしょうし、少し気にし過ぎだと思わよ」

「そうでしょうか……」

「更識君は紳士だから、捕虜にも最低限の生活は保障してくれると思うわよ」

「()が最低限だとは思えねえけどな」

部屋付きの冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出して飲むオータムを見て、ダリルは苦笑いを浮かべた。

「さすがに緊張感なさすぎじゃないかしら？ 仮にも捕虜なのよ、私たち。それを疑いも無く用意された水を飲むなんて」

「あの餓鬼が毒殺なんて考えると思ってるのか？」

「いえ、でも彼の周りの人間はそれくらい考えそうだけどね」

ダリルが誰を思い浮かべているのか、オータムには理解出来なかった。水を飲み干したタイミングで、部屋の扉がノックされた。

「何方かしら？」

『更識一夏と護衛の者二名。入ってもいいか？』

「ええ、構わないわよ」

捕虜を閉じ込めている部屋に入る時も、一夏はきちんと声を掛けてから扉を開ける。前に捕らえたアメリカ兵たちとは違い、スコールたちは仮の捕虜なので一夏も人権を認めているのだった。

「さて、何か御用かしら？」

「とぼけるな。まあ、このまま部屋に閉じ込められたいのであれば、話し合いはせずに帰るが」

「この部屋なら文句ないわよ。お風呂もちやんとあるようだし」

「フォルテ先輩が恐縮しきつてるように見えるんだが？」

「本当にこの部屋を使ってもいいの？」

「他に部屋なんてありませんからね。更識の屋敷にだったら、座敷牢くらいありますが」

独立派四人は、一夏の言葉に揃って首を傾げる。座敷牢と言われても、外国育ちの四人にはピンと来なかったのだろう。

「まあ、数日間はこの部屋で生活してもらおう事になると思うから、くれぐれも暴れないように頼むぞ」

「ですって、オータム」

「何でオレなんだよ」

「この中で暴れそうなのは貴女だけだからよ」

スコールの言葉に不貞腐れたオータムは、ベッドに潜り込んでふて寝を決め込んだのだった。

織斑姉妹の部屋

スコールたち独立派との話し合いを終えた一夏は、そのまま織斑姉妹の部屋を訪ねるつもりだった。だが途中でマドカから連絡が入り、一旦部屋へ戻る事になった。

「マドカ、どうかしたのか？」

「兄さま……姉さまたちの部屋に行くのであれば、私も同行してもよろしいでしょうか」「それは構わないが……マナカの事か？」

一夏がマナカの名前を出すと、マドカはビクつと肩を震わせたが、小さく、しかしはつきりと頷いて見せた。

「分かった。美紀、刀奈さん、護衛はマドカを連れて行きますので、二人は部屋で休んでいてください。これは家族の——織斑家の問題ですので」

「分かったわ。でもね一夏君、私たちも一夏君の家族なのは間違いじゃないんだから、話せる範囲でいいから教えてよね」

「分かっていますよ。だから家族と言った後で織斑家と言い直したんですから」

心配そうに自分を見つめる刀奈に頷き返して、一夏はマドカを連れて織斑姉妹の部屋を訪ねる事にした。

「兄さま、あの少女……」

「マナカの事か？」

「はい。恐らくは私の双子の妹だと思われる彼女ですが、あれはかなり危険な思想を持つている様子でした」

「そうだな。俺以外は全て消し去りたいとか言っていたし、考え方的には束さんに近いものを感じた。あれは俺や織斑姉妹、あとはマドカ以外は識別出来ないらしいがな」

束がいるであろう方角に視線をやって、一夏は小さく頭を振った。

「あれは思ってるだけで実行しようとはしなかったが、マナカは可能性があればやるぞ。そんな感じがした」

「兄さまがそういうのであれば、恐らくはやるのでしようね。亡国機業のトップとして、様々な機関や国とのパイプを保持しているようですし、無人機を造るだけの技術力も有しているようですし」

「そこなんだよな……マナカがコアを造れるとしたら、かなり厄介な事になりかねない。無限に無人機と戦わなければならなくなれば、こちらが圧倒的に不利だからな」

織斑姉妹の部屋に到着し、一夏は扉をノックして返事を待った。

『一夏か？ 入っても構わないぞ』

「失礼しま——」

「姉さま!!? なんて恰好をしてるのですか!」

「何って、下着はしてるだろ?」

「何か問題でもあったか?」

「兄さまは男の方なんですよ! 下着姿でうろろするなんて、少しは恥じらいを持ってください!」

マドカの権幕に、織斑姉妹は首を傾げた。

「わたしたちの下着など、一夏にとつては見慣れたものだろ? 真耶に泣きつかれてわ

たしたちの洗濯物を片付ける手伝いをした一夏なら」

「洗濯物としての下着と、着けているものを同じだと考えないでくださいよ! ただで

さえ姉さまたちは大きいんですから!」

「ああ、わかつたわかつた。服を着るから少し廊下に出ててくれ」

「……本当ですね? 兄さま、一旦出ましょう」

「ああ……」

一気に疲れ果てた様子の一夏の手を取り、マドカは一旦部屋から廊下に出る。扉が閉まるのと同時に、兄妹は盛大に息を吐いたのだった。

「相変わらず無神経な姉妹だな……」

「兄さま、トラウマは大丈夫ですか？」

「なんとかな……一瞬だけだったから」

「姉さまたちにも困ったものですね……女性だけの職場、女子だらけの学園で生活してるから、羞恥心が薄れているのかもしれないですね」

「最初から持ち合わせていないんだろうよ……とにかく、マドカのお陰で助かった、ありがとな」

　　ろうようにマドカの頭を撫でる一夏と、一夏に撫でられて気持ちよさそうに目を細めるマドカ。織斑姉妹の部屋の前でそのような光景を繰り広げていると、部屋の中から声が聞こえた。

『もう入って来て構わないぞ』

「本当ですね？」

『ああ。私も千夏もちやんと服は着た』

「信じますからね」

姉の言葉に疑いを持ちながらも、マドカはゆつくりと扉を開け中を確認した。そして本当に服を着ていた事を確認してから、一夏を部屋の中に招き入れたのだった。

「それで、お前たちが私たちを訪ねてきたと言う事は——」

「ええ、そうです」

「姉弟妹仲良く同じ部屋で寝るんだな！」

「……すみません、違いました」

千冬の宣言に一夏が余所余所しい態度で応える。さすがにふぎけ過ぎたと反省したのか、千冬は一つ咳ばらいをしてから真面目な雰囲気を醸し出した。

「マナカの事だな？」

「貴女たちなら彼女の事も知っているのではないかと思ひまして」

「と言つてもだな、わたしたちも詳しい事は知らない。屑親たちが生まれた直後のマドカと一緒に連れて行ってしまったからな」

「彼女の話では、織斑夫妻は俺も連れて行く予定だったようですが、そこはどうなのです

か?」

「アイツらは生活能力ゼロだったからな。一夏を連れて行ったとしてもまともな生活は送れなかったと思うぞ」

「まるで貴女たちはまともな生活を送れているような言い草ですね? 何で一日過ぎただけで部屋がここまで散らかっているのですか?」

「……その事は後でゆつくり聞くとして、解析結果はどうだったんだ? 何処かの支援を受けている証拠は掴めたのか?」

「いえ、あの無人機に使われていたコアは、何処の国のものではありませんでした。恐らくは亡国機業で造られたものだと思います」

一夏の答えに、二人はそろって腕を組んで考え出した。

「お前はコアの声が聞こえるのさ? それで確認出来ないのか?」

「残念ながら、俺に心を開いてくれないので聞こえません。引き続き交渉はしてみますが、期待しないでください」

「そうか……マナカについては私たちが調べておくから、一夏はコアの方を頼むぞ」

「お願いしますね? くれぐれも他人に仕事を投げ捨てないようにお願いします」

念を押ししてから、一夏はマドカと共に自分たちに宛がわれた部屋へと戻っていったのだった。

召喚方法

織斑姉妹の部屋から戻ってきた一夏とマドカは、刀奈の熱烈歓迎に見舞われた。

「いったいどうしたんですか？」

「最近スキンシップが足りてない気がしてさ」

「兄さまにならともかく、何故私にまで」

「何でって、マドカちゃんは一夏君の妹でしょ？ だったら私の義妹でもあるって事じゃない。一夏君は義弟なんだし、その妹であるマドカちゃんともスキンシップを取るのほ当然よ」

何だかよく分からない理論を振りかざした刀奈だったが、スキンシップされているマドカが嫌そうではなかったので一夏は注意することなく、刀奈のスキンシップから自分だけ抜け出してソファに腰を下ろした。

「一夏さん、織斑姉妹の方で何か分かっていた事はあつたのですか？」

「あまり成果は無かったな。あの人たちもマナカの事は詳しく知らないそうだ」

「では、あの織斑マナカが言っていたように、生まれてすぐ引き裂かれたというのは事実

だったのですね」

「織斑の両親が何故マドカとマナカだけを連れて行ったのかは不明だが、生まれて間もない二人を連れてあの家を出て行ったのは事実のようだ」

「に、兄さま！ 助けてください！」

「マドカちゃんって、意外と着痩せるタイプなのね」

スキンシップがエスカレートしているようで、マドカは割と必死に一夏に助けを求めた。その声に反応して刀奈の方へ視線を向けた一夏と美紀は、同時にため息を吐いた。

「これが先代楯無様の実の娘かと思うと……」

「更識内から刀奈お姉ちゃんに対する謀反が起こっても不思議ではなさそうですね……」

「な、なによ！ 私だってやる時はちゃんとやるんだから！」

「ならそろそろふざけるのは止めにして、話し合いに加わってくださいよ。刀奈さんにだってやってもらおう事があるんですから」

「わ、分かったわよう……」

非難の目を向けられた刀奈は、渋々といった感じでマドカを解放して、一夏と美紀の

話し合いに加わる事になった。マドカは一夏の後ろに隠れるようにして参加している。

「そこまで警戒しなくてもいいじゃないのよ」

「いえ、しばらくは警戒心を剥き出しにして過ごさ事になります」

「一夏君、これってマドカちゃんに嫌われちゃったの!？」

「むしろ嫌われないと思ってたんですか?」

一夏の言葉に、刀奈は膝から崩れ落ちる。大げさなりアクションを無視して、一夏は美紀に視線を戻した。

「尊さんからの連絡はあったか?」

「いえ、まだです。さすがに更識本家の回線を使ったとしても、一夏さんのような早業は出来ませんから」

「尊さんもそれなりに早いだろ? しかし、データが無いとなるといよいよ困ったな……」

「篠ノ之博士には連絡したの?」

相手にしてもらえないと理解した刀奈が復活して話題に入ってくる。一夏は刀奈の言葉に数秒固まってから、携帯を取り出した。

「そう言えば駄ウサギがいましたね……忘れてました」

「兄さま、わざと思い出さないようにしてませんでした?」

「……気のせいだ」

マドカのツツコミを弱々しく否定した一夏は、登録されている番号の中から束の携帯に連絡を入れる。一回コール音が流れるか流れないかのタイミングで、何時も通りの騒がしい声が受話器越しに聞こえてきた。

『もすもすいっくん? なになに、束さんに何の用——』

あまりにも騒がしかったので、一夏は反射的に通信を切り携帯の電源を落とした。なんとなく似たような展開を最近見た覚えがあった美紀は、咄嗟に部屋の鍵を開けて登場を待った。

「いっくんから連絡してくれたのに、酷くないかな!」

「やかましいんですよ、貴女の声は!」

美紀が扉を開けたタイミングとほぼ同時のタイミングで束が部屋に現れ、マドカと刀奈は驚きの表情を浮かべていた。

「それで、いっくんはこの束さんにどんな用事なのかな？」

「織斑マナカ」

「ほえ？」

「どうやら知らないようですね。お疲れ様でした」

束の首根つこを掴み上げ部屋から廊下へ摘み出す。摘み出された束は一瞬だけ呆気にとられたが、すぐに部屋へ戻ってきた。

「何するのさ！ いっくんは束さんに何をしたいの!!」

「何で戻ってくるんですか……もう用件は終わったのでお引き取り下さい」

「そんな事言わないでよ！ てか、織斑マナカって誰なの？ ちーちゃんやなっちゃんの関係者だよな？ マーちゃんと名前が似てるって事は、もしかして隠し子？」

「織斑夫妻が私と一緒に連れ出した、織斑家の末っ子で、私の双子の妹だそうです」

一夏が説明するつもりが無いと理解したマドカが、束の質問に答えた。一夏は仕方ないという表情を浮かべたが、マドカを責める事はしなかった。

「宇宙規模のストーリーカーである貴女なら何か知ってるかとも思っ呼び出したんですが、貴女でも知らなかったようですね」

「そもそも東さんは、ちーちゃんとなつちゃん、いっくんとマーちゃんにしか興味ないからね」

「ちなみに、これがその織斑マナカです」

闇鴉の機能を使い撮った写真を束に見せると、物凄い勢いで食い付いてきたのだつた。

「ちつちやいなつちゃん!? これがその織斑マナカつて子なの!」

「織斑家は、双子、俺、双子の五人姉弟妹だったようですね」

「分かった。この子の事を調べればいいんだね!」

「いえ、東さんにはこの無人機の解析を手伝ってもらおうかと」

意気込んでいた束は、肩透かしを喰らったかのようにこけそうになったが、一夏の頼みなので断ることはしなかったのだつた。

旅行再開

危険が無くなったからと言って、それで修学旅行が完全に再開されるわけでもなく、残りは集団行動が義務付けられることになった。

「ところで、一夏さんたちは来ないのですか？」

「お兄ちゃんの色々と忙しそうだったからな。美紀やマドカもいないぞ」

「それなのに、何で本音は来てるのかな？」

「私の代わりにシズシズとカスミンが呼ばれてたからね。私はかんちゃんの護衛でもあるから、こつちにいるんだよ」

恐らくは本音より静寂、香澄の方が話し合いの場には必要だと判断されたのだろうと理解し、セシリアたちはそれ以上掘り下げる事はしなかった。

「てか、簪はこつちで良いわけ？」

「解析は篠ノ之博士が手伝ってくれるみたいだし、本音を一人で行動させるわけにもいかないからね」

「どつちが護衛なのか分からないわね」

鈴のツツコミに、本音以外は頷いて同意した。

「私だって、やる時はやるんだからね〜！」

「その『やる時』が何時なのか、私たちには分からないけどね」

「むう〜！ 久しぶりにあったというのに、カルカルは辛辣だなく」

「辛辣って言うのかしら？」

クラス単位での行動ではなく、学校単位で行動しているので、クラスがどうかという概念が無いため、実力者たちで話し合っているのを、専用機持ちではない生徒が眺めている。話題もおいそれと加わるものではないし、あの中に入っても自分たちは話についていけないと分かっているのか、割り込んでくるような生徒はいなかった。

「織斑先生たちもいないようだし、こっちが襲われたら大変だと思っただけだな」

「それならお兄ちゃんがしっかりと対策してくれたようで、万が一襲われたら大量の無人機が守ってくれるそうぞぞ」

「いっちゃん、敵さんが使ってた無人機のコアをもう籠絡したんだね〜」

「本音、イマイチ褒めてるように聞こえないから」

「ほえ？」

簪のツツコミに首を傾げる本音。彼女としては一夏を褒めたつもりだったのだろうが、簪からすれば、籠絡という単語は褒め言葉ではないと感じたようだった。

「まあ、一夏さんなら何でもありですからね」

「私たちの専用機だって、一夏さんが命じたら動かなくなっちゃうもんね」

「更識製を持っているエイミイだから言える事で、僕たちの専用機はあまり関係ないと思っただけ」

「いや、お兄ちゃんなら私たちのISも停める事が出来そうぞ」

「いっちゃんなら何でも出来ると思うな」

「……あの、山田先生が泣きそうになってるから、そろそろ移動しようよ」

会話に夢中になっていたのか、真耶の接近に誰一人気づかなかった。漸く簪が真耶に気付く、他のメンバーにもその事を伝え、六人は移動の為のバスに乗り込んだのだった。

一方ホテルでは、一夏の部屋に招かれた静寂と香澄が、少し落ち着きなさげな態度でソファに腰掛けていた。

「そんなに緊張する事じゃないから、もう少し肩の力を抜いていいのよ?」

「刀奈お姉ちゃんの前で緊張するのは仕方ないと思いますけど」

「そうなの? 私ってば日本代表で生徒会長だものね。緊張しちゃうのも無理はないか」

「立場があると自覚しているのなら、もう少し考えて行動した方が良いと思うよ?」

「美紀ちゃん、それは酷いと思うな〜」

目の前で繰り広げられる刀奈と美紀の会話のお陰で、静寂と香澄の緊張は若干ほぐれたのだが、一夏と共に現れた織斑姉妹の所為で、再び緊張は最高潮に達したのだった。

「悪いな、わざわざこつちに残ってもらって」

「別にそれは構わないわよ。一夏君から呼び出されるって事は、かなり重要な事なんですよから」

「私たちも一応更識所属だもん。次期当主である一夏さんから呼び出されたら従うよ」
「そこまで重く考えなくてもいいんだが……まあ、それは追々考えるところとして」

そこで一度言葉を切り、一夏は織斑姉妹へと視線を向けた。一夏の視線の意味を理解し、千冬が一枚の写真を取り出した。

「これは？」

「千夏先生の子供の頃の写真ですか？」

「いや違う。今回の黒幕———というか、亡国機業のトップである少女の写真だ」

「随分と千夏先生にそっくりね……って、まさか!？」

何かに行きついたようで、静寐は驚きの声を上げる。その反応にやや遅れて、香澄も真相にたどり着いた様子を見せた。

「亡国機業の現トップの名は織斑マナカ。織斑家の末っ子でマドカの双子の妹だ」

「一夏君って、お姉さんも妹さんも双子だったのね」

「驚くところはそこなのか？」

静寐のボケだか本気だか分からない反応に、一夏も少し困ったような表情を見せた。

「冗談よ。それにしても、織斑の血筋と言う事は、私たちがや太刀打ち出来ないかもしれないわね」

「まだ詳しい情報は入ってないが、マドカの事を出来そこないと言っていたからには、少なくともマドカよりは強いんだろうな」

一夏がマドカに視線を向けると、悔しそうに俯いた。

「私もマナカの実力は知りませんが、物心ついたのは屑親が私をスコールたちに引き渡す頃でしたから」

「まあ、見間違える事は無いだろうが、一応警戒しておいてくれ」

「私の久延毘古でも、予知できませんでした……」

「情報が無いんだ。仕方ないさ」

「もう少し精度を上げられるよう、努力します」

香澄が妙に意気込んでいるのが気になったが、一夏はやる気に水を差す事はせず二人を部屋に戻したのだった。

四人の今後

部屋に軟禁されているとはいえ、独立派の面々に不満は無く、むしろ今までの生活とは比べ物にならない程の快適さに、オータムははしゃいでいた。

「ベッドなんて寝られればいいって思ってたけど、このベッドはヤバいな……もう前の生活には戻れそうにねえや」

「I S学園のベッドもなかなか気持ちよかったけど、さすが一流ホテルね。ベッドから出たくないと思わせるとは」

「あんまり気を緩められると困るのだけど？　いくら一夏が私たちの事を評価してくれているとはいえ、罪の清算はしなければならぬのだから、またあのような寢床になる可能性があるのよ」

「オレたちがしてきたことは、殆どが悪人から資産を巻き上げたくらいだけ？　しかも、表に出せない金ばかりだ。何を清算しろって言うんだよ」

「それでも、社会的制裁を受けなければ私たちは自由になれない。一夏もそれくらい分かっているでしょうから、何かしらの罰を用意するはずよ」

スコールの言葉に、フォルテが肩をびくつかせる。例え亡国機業にいた時間が短くても、彼女も社会的制裁を受ける立場になったのは理解していた。だが、改めてその罰が近づいてくると思うと、彼女は心穏やかでいらられるはずもなかったのだ。

「心配しなくても、更識君なら罪に合った罰を用意するでしょうから、フォルテが心配する事は無いわよ」

「だと良いのだけども……でも、私はギリシヤに多大なる迷惑をかけて、その尻拭いをも更識君に押し付けちゃったから、ダリルみたいに樂觀視は出来ないよ」

「そんなこと言ったら、私なんてアメリカの信頼を地に落とす結果に繋がったわけだし、そこをあの織斑マナカに突かれたわけだから、よっぽど酷い罰が待ってると思うのよね」

「じゃあ何でそんなに気楽でいられるのよ」

自分よりよほど重い罰が待っていると分かっているのに平然としているダリルに、フォルテは涙声で訴える。不安に押しつぶされそうになっている自分より重い罰だと分かっているのに平然としていられる理由が、彼女には分からなかったのだ。

「別に気楽ってわけじゃないのだけでも、気にしたって仕方ないでしょ？ どうせ罪は清算しなければいけないだし、更識君が私たちにそれほど重い罰を下すとも思えない

しね」

「どういう事？」

「彼は基本的に争い事を好まない人だから、既に落ち着いている問題に再び燃料を投下するようなタイプではないと思うのよ。だから、国同士のいざこざとか、私たちが原因で国が困ったとか、既に鎮静化している問題まで持ち出してこないと思うのよね。だから、私たちが受ける罰は、国際問題とかは気にしなくていいと思うのよ。既に更識に逆らえる組織なんてないのだし、更識が下した罰に異議を唱える人間なんていないと思うのよ」

ダリルの考えに、スコールとオータムも頷いて同意する。

「確かに、更識企業は世界中に発言権を持つているからな……逆らえばその国のIS産業は廃れるとまで言われる程に」

「実際に更識に逆らって潰された企業が、フランスにあるくらいだからね」

「ああ、オレが探りに入ったあそこか。でもよ、あそこはデュノアの娘が継いだんだろ？」

「貴女が前社長を殺したりしちゃうからよ」

「アイツから足がつくのを避けるべきだと言ったのはスコールだろ！」

デュノア社前社長を殺した責任を擦り付け合う二人を無視して、ダリルはフォルテに向き直る。

「だから、あまりびくびくしながら過ごすのは身体によくない事だと思おうし、なるようになると思えば気が楽になるんじゃないかしら」

「確かにそれは言えてますが、裁かれる側の人間が言っても説得力に欠けると思いますが」

「なっ、更識君!? いつの間に」

「普通に扉から入ってきましたが」

護衛のマドカを連れたい夏が、独立派の部屋を訪れた。一夏の言う通り、普通に扉から入ってきたのだが、説得に集中していたダリルはその事に気付かなかったのだった。

「とりあえず現状の報告と、今後の事についてお話に来ました」

「もう私たちの処分が決まったのかしら?」

「元々独立派が迷惑を掛けていたのは、IS学園及び更識企業ですからね。こちらで判断を下しても何も問題はありませんから」

主に迷惑を掛けていたのはオータムと箒なのだが、その箒はこの場にいないので、一夏の視線はオータムに向けられていた。

「とりあえず、貴女方がSHと呼んでいた篠ノ之箒は、織斑マナカ率いる過激派に鞍替え、現状行方不明ということになっています」

「あの子が役に立つとも思えないけど」

「その辺りはマナカも理解しているでしょう。そして今後ですが、フォルテ先輩に關していえば、復学する事が可能です」

「えっ?」

「ダリル先輩について行っただけだと判断し、反省文を書いてもらえばそのまま復学する事が可能だと判断しました。ダリル先輩に関しては、爆撃やら色々と問題行動が確認されていますので、それなりの罰を受けてからの復学となります」

「そんな軽くていいの?」

「もちろん、卒業後は更識の為に働いてもらいますけどね」

人の悪い笑みを浮かべる一夏にダリルは降参の意思を伝えるために両手を挙げた。

「スクールとオータムに關しては、さすがに俺個人で判断するのは難しいから、IS学園に戻り次第話し合いを設ける事になった。したがって、その結論が出るまでは大人しく

してもらおう事になる」

「つまり、監禁場所が変わるって事か」

「居心地は悪くないと思うが、自由に動くのはもう少し我慢してもらおう」

「仕方ないわね。私たちはそれなりにやって来たんだし」

二人の反応を見て、一夏は軽く目を瞑ってから部屋を出て行ったのだった。

学園へ

予定外の襲撃もあったが、無事に修学旅行も終わりに学園へ戻る事になった。元々勝手にやって来た刀奈と、連行される独立派の四人の分のチケットは、一夏のポケットマネーから支払われる事になった。

「悪いわね、一夏。私たちの分まで払ってもらって」

「当然、後に働いて返してもらうがな」

「更識で働けるなら、私たちも出世した事になるのかしら？」

「当分は社会の風当たりが強いだろが、自業自得と割り切ってくれ」

「それくらいは当然よね。やって来たことがやって来たことなんだから」

一応見張りとして織斑姉妹と碧を当てて、一夏は独立派がいる車輛から自分に割り振られた席へと戻る事にした。

「貴様ら、一夏の情けを裏切るようなら、今ここで殺してやるからな」

「特にダリル・ケイシーにフォルテ・サファイアの二名は、一夏の恩赦で復学出来る事になったんだから、くれぐれもその事を忘れないように」

「分かってますって、織斑先生。私だって更識君に危害を加えるつもりはありませんから。興味はありますけど」

「私も、ちゃんと感謝してます」

ダリルとフォルテの反応は、千冬と千夏を納得されるものではなかったが、独自判断で処断したとなれば、後々一夏に怒られると分かっているの、二人に鋭い視線を向けるだけに留めたのだった。

「貴女たち二人も、普通なら国際問題を起こしておいてこの程度の処罰で済んだのは、一夏さんが色々と骨を折ってくれたからと言う事をお忘れなく」

「分かっているって。さすがのオレだって、ここまで甘い処分で済むはずがネエって分かっているから」

「当分はIS学園で学生の相手をして、後々は更識のテストパイロットとして開発・研究の手伝いをすれば自由は確約してくれるなんて、かなり甘い処罰よね。一夏ってどれだけ権力を持つてるのよ」

「更識の力を甘く見ない方が良いですよ。元々暗部ですから、暗殺だって必要ならしますから。もちろん、今回はそんな事してませんがね」

碧の言葉に、フォルテただ一人が戦慄を覚えた。他の三人は暗殺という単語を聞いても特に動揺しない程裏社会に染まっているが、フォルテはまだ一月くらいしか裏社会に身を置いていないのだ。暗殺と聞かされて、驚かない方がおかしい。

「とにかく、学園に着いたらまず、フォルテとダリルに関しては反省文と復学の手続きを行ってもらおう。国籍については、一夏が何とかしてくれるから問題ない」

「専用機も同様だ。アメリカの方は知らんが、ギリシャの方は既に片が付いているからな」

「代わりの専用機を一夏が提供したんだっけ？ 相変わらず一般常識の範疇にいないのね、一夏は」

スコールが感慨深げに呟くと、織斑姉妹がスコールに詰め寄る。

「貴様、一夏の何を知っているというのだ」

「知ってるわよ？ 私は織斑夫妻とそれなりに親交があつて、貴女たちの事も生まれた頃から知ってるんだから」

「しかし、屑親共は一夏の事を知らないはずだ！ 生まれて一年弱で捨てて行つたんだから」

「宇宙規模のストーカーが、篠ノ之東一人だと思わない事ね。監視衛星をハッキングし

て一夏の成長記録をつけていたのよ、私は」

「たまにスコールの部屋から不気味な笑い声が聞こえてきたのは、一夏を盗撮してたのかよ……」

「私にとつて一夏は、血の繋がらない息子みたいな感じよ。まあ、死人である私が親の気持ちを抱くなんておかしな話だけどね」

前半は怒りを覚えたが、後半はさすがの織斑姉妹も驚愕を覚えた。

「死人だと?」

「私はとある研究施設で改造された元軍人よ。こんな身体だから、生きているとは表現出来ないから、死人という表現を使っているのよ」

そう言つてスコールは、改造された部分を剥き出しにし全員に見せる。既にその事を知っているオータムとダリルの二人以外は、大きさまざまな違いはあれど、驚きの表情を浮かべた。

「だから、貴女たち二人に任せてられないと判断して一夏を攫う計画に手を貸したんだけど、下っ端が暴走して一夏の記憶を奪ってしまった……それだけは本当に申し訳ないと思つてるわ」

「オレも、アイツに恐怖を植え付けてしまったからな……恩赦してもらっておきながら、オレはアイツに何一つ出来ねえと思うと情けないぜ……」

空気が重くなっていくのを感じた碧が、話題を変えるために織斑姉妹に視線を向けた。

「これからの敵は織斑マナカと篠ノ之箒の二名となりますが、貴女たちはやりにくさとかあるんですか？」

「正直言つて、マドカ同様にマナカの事も名前しか知らなかったからな……」

「しかし、あれだけわたしの幼少期に姿が似ていると、多少のやりにくさは感じるかもしれません。だが、身内だからと言って手加減するつもりは毛頭ない」

「篠ノ之さんについては？」

「アイツに関しては、まったくもってやりにくさは感じない。むしろ、思う存分叩き潰せる」

寸分たがわぬ発言に、問いかけた碧だけではなく、独立派の四人も呆れた表情を浮かべた。

「どう対処するかを決めるのは一夏さんですが、貴女たちがやりにくさを感じないので

あれば、戦力として考えてもらえるかもしれないね。その前に、一夏さんの信頼を失わなければですが」

実の姉でありながら信頼されていないとスコールたちに知られた二人は、より一層監視の目を鋭くしたのだった。少しでも一夏に信頼してもらおうと張り切ったのだと、碧は二人に見えない角度で苦笑いを浮かべ、監視の任につくのだった。

無人機の使い道

IS学園に戻ってきた一夏たちを出迎えたのは、虚とナターシャだった。虚の顔を見て逃げ出そうとした刀奈だったが、簪と美紀に先回りされており、大人しく虚に連行されて行ったのだった。

「ただいま戻りました、ナターシャさん。何か変わった事はありませんか?」

「いえ、一夏さんにご報告しなければいけない事は特にありませんでした。連絡をいただいてすぐに、亡国機業の四名を監禁する為の部屋を用意しましたので、まずはそちらに向かいましょう」

「監禁と言っても、篠ノ之が前に使っていた寮長室の隣の部屋ですよ? フォルテ先輩とダリル先輩は反省文とそれなりの罰を受けたら復学するんですから、二人一部屋で生活させればいいんですし」

二年生と三年生ではあるが、この二人なら同部屋で文句が上がるはずもないと理解している一夏は、部屋の調整を済ませて既に二人の部屋を確保していたのだった。

「とりあえず、復学の手続きが完了するまでは寮長室の側の部屋で我慢してくださいね」

「二年の寮長つて織斑姉妹でしょ？ そんな部屋に入れられるってSHは余程問題児だったのね」

「知らなかったんですか？ 篠ノ之さんは一夏に迫る、殴り掛かる、周りに危害を加える事に躊躇わないなど、問題行動が多かったですから」

「そういう生徒がいるって噂には聞いてただけど、それが篠ノ之箒さんだとは知らなかったわ」

ダリルとフォルテが驚きの表情を浮かべる中、スクールとオータムはIS学園の外装を見て感心していた。

「じっくりと見る機会が無かったから気づかなかったけど、随分と立派な建物よね」

「これだけ頑丈な造りなら、多少オレが暴れても建物が崩れなかったわけが分かるぜ」

「あれで多少だと言えるのは、貴女の基準がおかしいからですよ。修理予算を捻出するの大変だったんですから」

「あ？ そうというのは理事長がするんじゃないかねえのか？」

「……理事長、そう言う事は全部生徒会に一任してるから」

一夏と箒の表情が沈んだのを受け、どれだけ大変だったのかを理解したオータムは、

形だけの謝罪をして話題を変えた。

「訓練場やVTSも充実してるのに、どうしてまともな操縦者が育ってないんだ？」

「生徒全員分あるわけじゃないですし、VTSはあくまでも架空世界での訓練ですから。生身を相手にするのは若干の違いがありますからね」

「そんなもんか……まあいいや。早く部屋に案内してくれ」

「随分とデカイ態度だな。貴様らは捕虜だぞ」

オータムの背後に立った千冬が高圧的に告げると、さすがのオータムも一歩引いた。気配を感じなかったからか、それとも純粹に恐怖を覚えたのかは定かではないが、間違はなく驚いていたのだった。

「では一夏、後はわたしたちが引き受けるから、お前は部屋に戻れ」

「いえ、まだやる事があるので部屋には戻りませんが、後はお願いします」

千冬と千夏に一礼して、一夏は作業の為に整備室へと向かう。護衛としてマドカと美紀が随行する形だが、それ以外は部屋へと戻っていった。

「随分と信頼されてるのね、一夏は」

「当然だな。アイツ程信頼されている人間はこの学園にいないからな」

「貴女たちは信頼されてないようだけどね」

スコールの言葉に、千冬と千夏は反論しようとしたが、言葉が見つからずにそのまま黙って四人を連行していったのだった。

整備室で束からの解析結果を開き、該当するデータ無しという事を確認し、一夏は一つため息を吐いた。

「束さんの方でもデータ無しという結果と言う事は、マナカが独自開発してると考えるのが普通だな」

「一夏さん、何故篠ノ之博士の方でもという表現をしたんですか?」

「向こうはハッキングし放題だからな。こちらでは入手出来ないデータも持ち合わせているから、もしかしたらと思ってたんだが……やはり無かったみたいだ」

「しれつと言ってますが、そんなデータがあるとすれば、最早国家機密レベルですよね?」

「犯罪ですよ!」

「今更だな、そんなの。何せあの人は全世界の核ミサイルを同時に遠隔操作して、日本に向けて放った人だぞ。罪の意識など持ち合わせてるわけがない」

白騎士事件の事を思い出し、美紀はあれもそうだったのかと納得の表情を浮かべた。

「とりあえず、何処かの国が協力してるのかも思ったが、亡国機業の独自開発だと断定して良いだろう。後はこの無人機たちをこちら側で動かせるように調整を加えれば、警備面の強化が出来るな」

「それは簪ちゃんや虚さんと相談して進めてください。私やマドカちゃんではお力にな

れませんので」

「申し訳ありません、兄さま」

「いや、気にする必要は無い。改造が済むまで、美紀とマドカには引き続き護衛を頼むと思うし、改造が済んでも、完全に無人機だけに頼るわけではないからな」

元々亡国機業のモノなので、完全に信用するわけではないと一夏が考えているのかと思つた二人だったが、どうやら違うらしいと次の言葉で理解した。

「無人機たちだつて休ませる必要があるからな。無人と有人でローテーションを組んで警備にあたるようにした方が良いだろう」

「そうですね。その点は刀奈お姉ちゃんを踏まえて話し合ひましょう」

「そうだな。だが、今日はもう休んだ方が良いでしょう。美紀、マドカ、お疲れさま」

そろそろ日が暮れると言う事で、一夏は今日の作業はこれで切り上げると宣言する。美紀もマドカもその言葉に従い、部屋まで戻る事にしたのだった。

隠し撮り写真

マナカと共に亡国機業の本拠地で生活する事になった筈は、自分に割り当てられた部屋に入りベッドに横たわった。

「貴女、随分と順応力が高いのね。同部屋なのに気にした様子が無いなんて」

「誰が一緒にいようが関係ない。私は私の世界で生きていくのだから、他人がいようが気にしなければいいだけだ」

「その考え方、私は好きだよ。私もお兄ちゃんだけいれば他はどうでも良いから」

「しかし、随分とコンピュータが多い部屋だな。こんなに必要なのか？」

自分は使わないので、せいぜい一台あれば十分なのではないかと筈は考えていた。しかし、マナカにとってはこれでも減らした方だったのだ。

「無人機のデータは採れたし、独立派の動きを覗く必要も無くなったから、これでも五台ほど減らしたんだよ。てか、貴女は脳筋だから分からないでしょうけど、何台も同時操作してないと時間が足りないんだからね、ISの設計やら製造やらは」

「そんなものか……確かに、記憶の彼方にある姉の部屋は、これくらいコンピュータ

が所せましと置かれていた気がする」

「篠ノ之束もだろぅけども、半分近くはお兄ちゃんの写真データや映像データでキャパがいっぱいになっちゃってるんだけどね」

「二夏の写真や映像だと？ 私にも見せてくれ！」

マナカに迫る箒だったが、マナカは首を横に振る。

「悪いけど、これは私一人の宝物なの。いくらお金を積まれても見せる事は出来ないわ」
「私とお前は共同戦線を張るの难道？ 相手の事をよく知る為にも、互いの趣味嗜好は

共有するべきだと私は考えるのだが。もしお前のデータを見せてくれるというのであれば、こちらでも幼少期から隠し撮りした秘蔵の一夏コレクションを提示しよう」

「くっ……なんて興味がそそられるネーミング……では、お試しで一枚ずつ見せ合いをしましょう。それを見て判断するわ」

似通った思考の持ち主同士なので、興味がそそられるポイントも似通っている。マナカと箒は互いに一枚ずつ提示し、そして朝まで写真の魅力を語り合ったのだった。

IS学園で作業をしていた一夏が寒気を覚えたのは、マナカと箒が隠し撮り写真の見せ合いっこで盛り上がっている時だった。

「どうかしたのですか？」

「いや、なんとなく寒気が……風邪でもひいたか？」

「一夏さんですか？ 一夏さんに近づくウイルスは、この私が全て撃退しているので

ありえないと思いますが」

「お前は専用機だろ？ ウイルス退治までやってるのか？」

「もちろん冗談です。ですが、一夏さんが風邪をひくなんてイメージ出来ません」

この日も未明から無人機の解析とプログラムの書き換え作業を行っているので、体調管理は若干疎かになっているかもしれないが、それでも一夏が病気に罹った事は無い。多少頭痛や眩暈がする事はあっても、それは体調不良ではなくただの寝不足だったり、本音や刀奈の行動に頭を悩まされるだけだった。

「なんとなくだが、この感じに覚えがあるんだよな……」

「そうなのですか？」

「ああ。まだ子供だった頃……と言っても、更識で生活をしている頃だが。風呂に入っていた時にこんな感じの寒気を覚えた記憶があるんだよな……あの時は確か、変態駄ウサギが監視衛星で人の裸体を盗み撮りしてたとかなんとか聞いたが」

「さすが篠ノ之博士ですね。常識の上を行く変態です」

「褒めてるのか貶してるのか、はっきりしたらどうだ？」

「褒めつつ貶してるのですよ」

闇鴉の表現に首を捻りながら、一夏はプログラムの書き換えを進めていく。

「織斑マナカさん、でしたっけ？ 彼女もまた一夏分という必須成分があるのだとしたら、今も盗撮されているかもしれませんね」

「これだけのプログラムが組めるのなら、ありえるだろうがな……てか、その『一夏分』ってなんなんだよ？ 駄姉たちも駄ウサギも刀奈さんたちも言ってたが、俺は栄養分じゃねえんだが」

「つまり、一夏さんと触れ合ったり、側にいるだけであの方たちは必須栄養素を補給してると言う事なのでしょうね。一定時間一夏さんと触れ合えなかったり、お喋りしたり出来なかったら死んでしまうのでしょうか？ まあ、写真からでも栄養素は補給出来るらしいですがね」

「謎なんだよな、それが……写真で良いならわざわざ会いに来る必要は無いと思うんだが……」

「二次元より三次元の方が補給に適していると言う事だと思いますよ」
「ますます分からん……」

闇鴉の仮定を聞いて更に謎が深まった一夏分の存在について、一夏は本格的に調べた方が良いのだろうかと思いを悩ませた。

「とにかく、マナカの事は駄姉たちが調べてくれると言ったし、駄ウサギの方も手伝ってくれる約束は取り付けた。後はこの無人機のプログラムを書き換えて、教員たちとサイクルで警戒にあたらせれば、更識の人員は割かずに警備を強化する事が出来る」

「プログラムの書き換えは、一夏さんにしか出来ませんものね。というか、コアが心を開くのが早かったように感じますが」

「アメリカが使ってたコアより早かったからな……これもマナカの意味が介在してるのだろうか」

僅か数分話ただけで、マナカが駄姉たちに負けないほど、重度のブラコンであることを理解した一夏。そのマナカが造ったコアだからかは分からないが、この無人機に使われているコアは驚くほど早く、一夏に心を開いたのだった。

簪の悩み

朝起きて、部屋に一夏の姿が無いのを確認した美紀は、一つため息を吐いてから着替えて整備室へとやって来た。

「一夏さん、美紀です」

『どうぞお入りください』

中から闇鴉の声が聞こえ、美紀はとりあえず一安心してから、整備室に足を踏み入れた。

「おはようございます、美紀さん。何か怒ってるように見受けられますが、何かありましたか？」

「何かありましたか？　じゃないですよ！　一夏さん、しっかり休むんじゃないんですか！」

「休んだぞ？　今日だって二時まで寝てたし」

「短すぎです！　昨日修学旅行から戻って来て、今日二時から作業してたのでは全然休めてないじゃないですか！　代休と言う事で、一年生は本日授業が無いのですから、普

段通りに作業を始めても十分時間があるんですよ」

「普段通りと言われてもな……出来るだけ早くこの子たちを味方に引き入れないと、何時マナカが遠隔操作してくるか分からない。そんな状況で休めるわけないだろ」

一夏の言い分に、美紀は言葉を失った。確かにこの無人機たちは元々亡国機業の物で、それを操作していたのは織斑マナカである。

だが、いくら彼女が優秀であつたとしても、どれくらい離れているか分からない場所から操作出来るほどの技術力を持ち合わせているのかは分からない。心配する事は当然かもしれないが、些か気にし過ぎないように思えたのだ。

「織斑マナカは一夏さんに危害を加えるつもりは無さそうでしたし、無人機が暴れだす可能性は限りなくゼロだと思えますけど」

「俺に危害を加えるつもりが無くて、他の相手にはそうじゃないだろ？ 現にこの無人機たちは刀奈さんたちや織斑姉妹と戦ってたんだし、独立派の面々も学園にいるんだ。そう考えると可能性は若干上がるだろ？ だから俺はその脅威を取り除くために作業しているんだ」

「ですが……いえ、一夏さんの言う通りですね。では、早めに脅威を取り除いて、一夏さんにはゆつくりと休んでもらう事にしましょう」

そうやって美紀は携帯を取り出し、何処かに連絡を取った。

「誰に電話してるんだ？」

「簪ちゃんと虚さんです。あの二人なら一夏さんのお手伝いが出来ますから」

「美紀さんは手伝わないのですか？」

闇鴉の言葉に、美紀はゆっくりと視線を逸らした。

「私は整備とか開発の手伝いは出来ませんから……完成した新武装のテストとか、そっちなら手伝えるのですがね」

「そう言う事でしたか。だからこそその簪さんと虚さんなのですね」

美紀の人選に納得した闇鴉は、それ以上何も言わず、護衛も来たと言う事で待機状態に戻ったのだった。

無人機を味方に引き入れる作業は、簪と虚の手伝いもあつて八時前には終了した。

「一夏、お疲れさま」

「簪も虚さんもありがとうございます。俺一人だったらもう少しかかってたでしょうね」

「それでは、私は授業がありますのでこれで。一夏さんと簪お嬢様はごゆっくりお休みください」

虚は授業があるため食堂に向かったが、一夏と簪、そして美紀は慌てて朝食を摂る必

要は無い。とりあえず整備室を片付けてから、三人は食堂へ向かう事にした。

「随分と人が少ないな」

「何時もでしたら人でごった返していますからね」

「一年生は今日休みだし、まだ寝てる人が多いんじゃない？」

全くの皆無ではないが、何時もの光景と比べるとやはり少ないと感じてしまう。

「どうします？ 朝ごはん食べて、私たちも部屋に戻りますか？」

「いや、せっかく時間があるわけだし、食材だけ買って俺が作ろう」

「一夏の料理、随分と久しぶりな気がする」

「夏休みの間に少し作って以来だもんな。学園ではそうそう機会も無いし」

食堂のおばちゃんたちに事情を話し、食材を譲ってもらった一夏は、その食材を持って自室へと向かう、美紀にとっても自室なので問題は無いが、簪は少し恥ずかしそうに二人についてきた。

「そんなに緊張する事か？ 旅行先でも俺の部屋に来ただろ」

「そうだけどき……慣れようと思っても、こればかりは全然慣れないんだよね」

「私は一夏さんと同部屋が当たり前になってきたから、簪ちゃんの反応が羨ましいな」

「とりあえず、俺は調理するから二人は寛いでてくれ」

美紀は自分のベッドに腰を下ろしたが、簪はどっちに腰を下ろすかで悩んでいた。これが刀奈なら容赦なく一夏のベッドに腰を下ろすのだろうか、悩んだ末に簪は美紀の隣に腰を下ろした。

「ところで、本音は？」

「当然、まだ寝てるよ」

「相変わらず本音は朝弱いんだね」

「休みの日は特にね。ほっといたら翌日まで寝てるんじゃないかって思うくらい」

幼少期から互いに知っているのも、それが冗談に思えないと美紀も感じていた。

「本音、昔からよく寝てたからね」

「だからなのかな……あんなに胸が大きいのは……」

「気にし過ぎだって。簪ちゃんだって気にするほどじゃないと思うけど」

「それは美紀が大きいから言える事だよ……お姉ちゃんも大きいし、何で私だけ……」

簪がブツブツと言い出したので、美紀は何とかして話題を変えようと辺りを見回す。

すると、良い匂いが部屋に充満してきたので、それをネタに話題を逸らす事にした。

「良い匂いがしてきたね。一夏さんの料理、楽しみ」

「そうだね。後でお姉ちゃんたちに何か言われそうだけど、これは私と美紀だけの秘密だからね」

「もちろん」

上手く話題が逸れた事に内心でガッツポーズを決めて、美紀は簪の言葉に頷いたのだった。

織斑夫妻の情報

織斑姉妹の部屋のすぐ隣で生活する事になったスコールとオータムだが、二人とも特に気にした様子も無く部屋で寛いでいた。

「このベッドもなかなか気持ちいいわね」

「オレたちが使ってたのは、殆どクツションが死んでたからな」

「これだけ柔らかいと、腰に悪そうね」

「サイボーグのお前が気にする事か？ それに、これくらいは普通だと思うが」

そこで二人は、部屋に人の気配が近づいてくるのに気づき、意識を廊下に向けた。一夏程ではないが、この二人の気配察知はレベルが高い。並大抵の相手なら近づく前に気付かれるのだ。

「おかしいわね。今は授業中だったと思うんだけど」

「サボりか？」

個人の特定は出来なかったが、間違いなく学生であると理解はしていた。気配からで

はなく、歩幅や足音で判断出来るくらい、この二人の警戒心は高いのだ。

『スコール、オータム、ちよつといいか?』

「一夏? 開いてるわよ」

二人が感じ取った気配は男の物ではなかったもので、意外感を覚えながらも一夏に入室を許可する。そもそも捕虜なので拒否する権利は無いし、わざわざ確認しなくてもいいはずなのだが、そこは一夏。紳士的に声を掛けてから入室するのだった。

「なるほど。護衛のヤツの気配だったのか」

「はい?」

「何でもないわよ。それで、何か用があるのでしょ?」

「マナカが使つてた無人機のプログラムの書き換えが、思いのほか早く終わつてな。暇になつたから情報でも聞き出そうと思つて」

「暇つぶし感覚かよ……悪いが、オレたちもアイツの事は知らねえぜ」

「知りたいのはマナカの方ではなく織斑夫妻の方だ。俺も含め人外と評される子供を持つ二人の事を調べれば、マナカの事も少しは分かるかもしれないからな」

一夏の発言に、スコールは少し意外感を覚えた。

「織斑夫妻の事なら、私じゃなくて織斑姉妹に聞けばいいじゃない。本人たちは否定しても、親子なんだから」

「あの二人に聞いてもイマイチ要領を得ないんだよ。途中から愚痴になったり、この手で始末したかったとか言い出すからな……」

「よっほど恨んでるのね……」

千冬と千夏は重度のブラコンであると同時に、重度のシスコンでもある。マドカは無事に取り戻せたが、マナカには完全に敵視されている以上、元凶となった織斑夫妻を許しはしないだろうと、スコールはすぐに理解し、その状況では必要な情報も出てこないだろうと一夏が自分たちに聞きに来た理由に納得した。

「オレはMを押し付けてきた時に少し会っただけだが、スコールは奴らの事詳しいのか？」

「私もそれほど詳しい訳じゃないけど、はつきり言えばあの二人はさほど実力があつたわけじゃないわよ。それこそ、織斑姉妹のように戦闘に特化したわけでも、一夏のように天才的な頭脳を持っていたわけでもない。Mのように他人から教わった事を物凄い速度で吸収するわけでも、織斑マナカのように病んでたわけでもない」

「最後のいるか？」

オータムのツツコミに、スコールは一応と付け加えてから説明を続ける。

「見た感じは人畜無害というイメージだったけど、実際は亡国機業を裏で支配しようとしてたみたいね。危害を加えてでも一夏を手に入れようとした事がバレて、マナカつて子にやられたみたいだけど」

「ということとは、織斑夫妻が消されたのは、つい最近と言う事か？」

「最近つてわけじゃないでしょ？ オータムを使つて一夏を攫おうとしたのは、もうだいたい前なんだから」

「オレは現場の指揮を任せただけで、実行犯ははした金で雇われた男どもだろ。肅正されたがな」

「とにかく、織斑夫妻について私が知ってる事は、Mではなく妹のマナカに英才教育を施し、一夏を手に入れようとした事、本人に大した力は無かったけど、人を使うことに長けていたくらいかしらね」

スコールのまとめを聞いて、一夏は二、三頷いてから視線を美紀へ向けた。

「今の話、本家へ連絡しておいてくれ」

「かしこまりました」

美紀が部屋を出て行ってすぐ、簪が監禁部屋にやって来た。まだ一夏一人で対峙すると、トラウマが発動する可能性を考えての行動だが、その速さにオータムも感心した様子だった。

「相変わらず警戒されてるのな」

「記憶が無くなったから、あの場にいた全員に恐怖していたと思つてたからな。未だに大人の男女は苦手だ」

「SHにもトラウマを植え付けられてるんでしょ？ 大変だったわね、一夏」

「まあ、そのお陰で駄姉たちから解放され、更識の次期当主にまでなれたのだから、一概に大変だったとは言えないがな」

「そう言えば、この学園にはVTSがあるんだよな？ オレたちも使えるのか？」

「今は無理だ。お前たち二人に対する罰が決まるまでは、この部屋から出すわけにはいかないからな。他の二人とは違い、お前たちに恐怖心を懐いてる生徒もいるわけだし」

一夏の冷静な分析に、二人は納得するしかなかった。元々IS学園の生徒であったダリルとフォルテは、それなりに顔見知りがあるし、更識の監視下に入ったと知らされているので、悪さをすればすぐに処理されると言う事で納得出来ている。だが、最初から

敵であったスコールとオータムにおいては、それだけでは安心出来ないと思ってしまう生徒がいても不思議ではなかった。

「暇つぶしと言ってはあれだが、更識で新開発したポータブル版のVTSの試作機を置いていく。好きに使ってくれて構わない。ちゃんと二人の専用機のデータは打ち込んであるので、暇つぶし程度にはなると思うぞ」

「持ち運び出来るVTSか。これは便利だな」

さっそく喰い付いたオータムに、スコールは呆れ半分慈愛半分の笑みで見つめ、自分もVTSを起動するのだった。

ダリル、フォルテへの罰

授業が無いからといって、一夏たちはただ休んでいられる立場ではない。各国に織斑マナカの存在を報告し警戒するように呼びかけ、独立派の処罰については更識が責任を持つて行かう事を報告、サイレント・ゼフィルス強奪の件での罪の清算は、更識がセシリアに個別指導する事で既に清算しているので、オータムの罪は残りIS学園への襲撃及び器物破損のみとなっている。

「一夏さん、アメリカを除き、各国の代表から承諾の返事が届きました」

「アメリカは仕方ないだろ。今政治の中枢が機能してないからな」

「一夏さんが叩き潰すからですよ」

「仕掛けてきたのは向こうだろ？ そのバックにはマナカがいたようだが」

美紀からの報告を受け、一夏は半分以上片付いた書類の山に目をやり、休憩の為に茶を淹れる。

「簪も悪いな。生徒会と更識の仕事、両方とも手伝ってもらって」

「別に良いよ。私も更識なんだから、家の仕事くらいは」

「でも、簪ちゃんは経理担当でしょ？　こういう書類整理はどちらかと言えば刀奈お姉ちゃんの仕事だと思っけど」

「刀奈さんは授業中だからな。本音に頼んだところで戦力にならないし、簪に頼るしかなかつたんだよ」

そう言いながら、一夏は簪と美紀の前に淹れたお茶を置く。生徒会室には割かししっかりとしたお茶の道具が揃っているの、休憩するには一番いい場所だと刀奈が言っているのを簪も美紀も知っている。ただし、休憩だけで済まないの、刀奈が近寄りたくないと思っている事も、当然知っていた。

「お姉ちゃん、生徒会長なのに全然仕事しないもんね」

「少しはするようになってきたが、虚さんが頭を悩ませてるのには変わらないからな」

「出来ないなら仕方ないけど、刀奈お姉ちゃんはちゃんと仕事出来るのにな」

「やる気が無いからね。昔から何かご褒美が無いとやる気が出ないって言ってるし」

「刀奈お姉ちゃんらしいね」

二人が談笑している横で、一夏はPCを取り出して何かのデータを眺め、難しい顔をしていた。

「何かまだ問題が？」

「いや、無人機たちにテスト運行を兼ねて学園周辺の警備をしてもらってるんだが……随分とゴミが散らばってるなと思って」

「業者に頼んでるはずですよ？ それなのになぜ」

「手を抜いてるわけじゃないんだろが……やはり自分たちで掃除した方が安上がりだし確実だな」

「でも一夏、IS学園で学生が掃除する場合は、罰則になるわけで、進んで掃除したいなんて思う人がいるとは思えないけど……」

「なら、ダリル先輩とフォルテ先輩にしてもらうとするか。敷地内の清掃ともなれば、かなりの重労働になるし、反省を促すには十分だと判断されるだろうし」

さっそく許可を貰う為に、一夏は学長の番号を呼び出し、有無を言わず許可を貰った。

「これで敷地内は綺麗になるし、ダリル先輩とフォルテ先輩の復学における問題にも片が付くな」

「でも一夏、監視とかはどうするの？」

「無人機はまだ何機もいるから、そこから数機選んで監視をしてもらう。逃げ出す事は

無いだろうし、清掃中は二人の専用機はこちらで預かるから、反撃も出来ないだろうしな」

「そこまで考えているのでしたら、問題は無いと思います。早速お二人に伝えに行きますか？」

「いや、まずはこっちの仕事を終えてからだな。まだ反省文を書いてるだろうし」

一日で全てやらせるわけじゃないので、一夏はそこまで罰を与える事に速さを求めていなかった。それよりも先に、この書類の山を片付ける方が大事だと判断して、カップに残っていたお茶を飲み干して仕事を再開したのだった。

大量の反省文を書かされたダリルとフォルテは、二人そろってベッドに身を投げた。一時的とはいえスコールとオータムの部屋の隣で生活する事になったが、これはこれで快適だと思えるのだった。

「ちよつとだけとはいえ、離れてたから忘れてたわね、この感触」

「亡国機業に属してた時は、酷いベッドでしたからね」

「あれでもマシな方よ？ 酷いとゴザか段ボールだったんだから」

「……独立派って財源無かつたんですか？」

フォルテが質問をしたタイミングで、部屋の扉がノックされた。

「どちらさま？」

『更識です。少しよろしいでしょうか？』

「構わないわよ。入ってちょうだい」

反省文はちゃんと提出したので、一夏がこの部屋を訪ねて来る理由が分からなかったが、ダリルは特に気にした様子も無く招き入れた。

「何か御用かしら？」

「まあ、用事が無ければ来ませんよ」

「それもそうね」

無駄口を叩きあつた後、一夏の表情が真剣みを帯びたので、ダリルも真面目に聞くことにした。

「実はですね、敷地内のあちこちにゴミが捨てられてるんですよ」

「それが？」

「業者に頼んでも隅々までしつかりやつてもらうにはお金がかかりますので、お二人にゴミ拾い及び敷地内の清掃をお願いしようと思ひまして」

「それが、私たちに課せられる罰なの？」

「結構な重労働ですし、それなりに時間もかかりますので、復学する為にはちようどいい罰だと思ひますよ」

「本当にそれだけでいいのかしら？　もしかしたらサボるかもしれないのよ？」

ダリルの言葉に、一夏も人の悪い笑みを浮かべ答えた。

「ご心配なく。ちゃんと監視はつきますので」

「でも、そんな人員ないでしょ？」

「回収した無人機の中から、監視用にプログラムを書き換えた子がいますので、ご心配には及びません」

「……用意周到ね、まったく」

完全に信じられていないと分かっていたダリルは、しつかりと手を打ってきた一夏に白旗を挙げ、敷地内の清掃を請け負う事にしたのだった。

ゴミの出所

自分が不在の間に罰が決まっていた事に、刀奈は少し不満を抱いていた。生徒会長として、最終判断は自分が下すつもりだったのに、一夏がさっさと決めてしまったからだ。「一夏君にとって、私ってなんなの？ ただの飾り？」

「別にそんなつもりはありませんが……そんなに刀奈さんが仕事熱心だったとは思わなかったもので……次からはしっかりと仕事を残しておきますので」

「そう言う事じゃないわよ！ てか、出来る事なら仕事はしたくないわよ」

刀奈のぶつちやけに、一夏と美紀が苦笑いを浮かべ、虚が頭を押さえる。

「そうじゃなくて！ 危険人物に対する罰なんだから、生徒会長である私が決定した方が他の生徒を安心させられるでしょ？」

「書類上は刀奈さんが決定した事になってますので、不安を取り除く分には問題ないと思います」

「そうなの？ でも、私は何も聞いてなかったんだけど？」

「ついさつき決めて、学長に許可を取り下した罰ですから、授業に出ていた刀奈さんが知

らないのは当然です」

「学長も、何で一夏君からの電話で許可しちやうのかしら……いつそのこと生徒会長の座を一夏君に明け渡しちやダメかしら」

「俺は刀奈さんに勝てませんから」

IS学園の生徒会長の座は、学園最強の証であり、戦闘面では一夏が刀奈に敵うはずもない。ましてや一夏は刀奈以上に忙しい身なので、生徒会長の座を受け入れるはずも無かった。

「とにかく、ダリル・ケイシーとフォルテ・サファイアへの罰則は一夏さんが決めてくださいましたので、お嬢様はこちらの仕事を終わらせてください」

「何でこれだけは残ってるのよ……こっちも終わらせてくれたって良かったじゃないの……！」

「そちらの書類は、生徒会長の認印が必要なものですので、俺や美紀が終わらせることの出来ないものですから」

「認印の場所知ってるんだから、代わりにやってくれてもいいじゃないの……！」

「それじゃあ意味が無いでしょうが」

一夏の言葉に、刀奈はガツクリと肩を落とし書類に認印を押していく。その横では一夏の淹れた紅茶を美味しそうに飲む虚と美紀が刀奈の仕事を監視していたのだった。

罰則が決まり、さっそく清掃を始めたダリルとフォルテは、IS学園の広大な敷地を目の当たりにして決心が揺らいでいた。

「地図では確認してたけど、これほど広いとは思ってなかったわね」
「端が見えませんか……」

とりあえず正門付近からと決め、いざ清掃を始めたはいいが、どれだけ掃いても、どれだけゴミを拾っても終わりが見えてこない。むしろ、まだ殆ど終わっていないという現状を受け入れるしかなかった。

「周りだけ清掃しても意味ないものね……中庭や裏庭なんかも掃除しなければいけないのだし」

「軽い罰だと思ってきましたが、かなり重労働ですな……」

「おまけに監視までついてるから、サボるわけにもいかないからね……休憩を挟みつつ、ゆっくり進めてくしかないわね」

「業者がしっかりと清掃してくれていれば、こんな罰ではなかったかもしれないのに……」

「まあ、織斑姉妹の相手、とかそういうった罰じゃないだけマシなのでしょうけども。更識君の性格からするに、それくらいありえると思ってたから」

反省を促すには、それくらいした方が早いと一夏も理解しているし、織斑姉妹もかな

りやる気を見せていたので、清掃が無かつたら恐らくはダリルの想像通りの罰になっていた事だろう。

「てか、誰がこんなに散らかしてるのかしら?」

「清掃業者の人間とは考えられませんかね? 掃除したはずなのに、これほど散らかってるのですから、可能性はあると思います」

「あまり無駄口叩いてると、一夏さんに報告しますよ?」

全く気配を感じさせずに現れた第三者に、ダリルとフォルテは思わず戦闘態勢を取った。

「何だ、小鳥遊先生ですか」

「無人機だけに監視を任せるわけにはいかないもの。見回りを兼ねて見に来たらそんなことを言ってたから」

「ですが小鳥遊先生。業者が清掃してるにも関わらずこの散らかりよう、犯人を知りたいと思うのも当然だと思いますが」

「大半は鴉や野生動物たちが散らかしたものよ。空き缶とかは、織斑姉妹が捨てるのを怠って回収場所以外に置いたものを動物たちが散らかしたのだけどね」

「つまり、大半は織斑姉妹が原因だと言う事ですか?」

「犯人と呼べる人間を導き出すのなら、そういう事ね」

「……とりあえず片づけましょうか。文句を言うのは、全て回収した後更識君に付き添ってもらってからでも出来るんだし」

ダリルの考えに、碧も頷いて同意する。

「確かに、一夏さんが同伴していれば、織斑姉妹も大人しく言う事を聞くでしょうし、証拠物件があるなら言い逃れも出来ないでしょうしね」

「というか、この無人機は映像をモニターに表示できるように改良されているんですから、小鳥遊先生がわざわざ見に来る必要は無かったのではないのでしょうか？」

「いったでしよ？ 無人機だけに押し付けるわけにはいかないって。周辺の警戒も兼ねての見回りだから、貴女たち二人が気にする事じゃないわよ。というか、私の事を気にしてる暇があるのなら、さっさとゴミ拾いを進めた方が良くと思うけど？ これが終わらないと、自由になれないんでしよ？」

碧の言葉に奮起したのか、ダリルとフォルテは物凄い速度でゴミ拾いと清掃を進め、一日で四方の一辺を終わらせたのだった。

スコールとオータムの使い道

大人しく反省していたオータムだったが、日が経つにつれてイライラを募らせていた。トイレに行くにも許可が必要な現状で、ストレスを発散する事も出来ず、ただただ裡に溜め込むしか無かったので仕方は無いのだが、そろそろ限界だとスコールは感じていた。

「オータム？ 分かっているとは思うけど、暴れちゃ駄目だからね」

「分かっているっての……でもよ、大人しくしてるなんてオレに向いてねえんだよ」

「まだ三日目よ？ もう少し辛抱出来ないのかしら」

「それでも十分辛抱してるぜ？ 以前だったらこの部屋吹き飛ばしてるくらいだ」

「SHと組んでた事で、忍耐力が身に着いたのかしら？ それでも、三日が限界のようね」

箒とオータムを組ませたのは、他に扱える相手がいなかったのもあるが、オータムに忍耐力をつけさせる意図も含まれていたのだった。それでも、三日我慢して限界を迎えてしまうくらい、彼女は短気だったのだ。

『更識一夏と護衛一名、入ってもいいか?』

「どうぞ」

オータムがイライラしているところに、一夏が部屋を訪ねてきた。一人だとトラウマが発動するかもしれないので、最低でも護衛は一人つけているが、基本的に二人の話し相手は一夏が務めているのだ。

「おい一夏! いい加減動きたいんだが」

「まあそうだろうな……ポータブルタイプのVTSじゃ満足出来ないだろうとは思ってたから」

「なら暴れさせろ! 少しでも身体を動かさないと部屋を破壊しそうなんだが」

「……暴れるという表現はいただけないが、更識所属を相手に模擬戦なら認めよう」

「本当か!？」

外に出られるという事で、オータムは一気に表情を晴れやかにした。

「二人の専用機はこちらで弄らせてもらったので、少しばかり動きにくいと感じるかもしれないが、当分は我慢してくれ。安全だと判断した時には元に戻すから」

「それでも構わないぜ! 漸くこの退屈な空間から抜け出せるぜ」

「まずは刀奈さんや虚さんの相手をして、お前たちが敵対の意思なしと判断してから、他の更識所属の相手、いずれは普通の生徒の訓練相手などを務めてもらう予定だ」

「つまり、私たちは実戦の相手としてI S学園に組み込まれると言う事かしら？」

「これで罪が清算出来る訳じゃないぞ？ 退屈だと暴れられたら面倒だから仕方なく、だからな」

「分かっているっての！ さっそくやろうぜ！」

勢い勇んで部屋から出て行くこうとするオータムに、スコールと一夏は呆れた視線を向ける。

「やる気になってるところ悪いが、まだ昼休みで授業はまだ残ってるんだよ。だからもう少し我慢してくれ」

「つち、学生は面倒だな……あと二時間くらいか？ 仕方ねえな」

「とりあえず専用機は返しておく。間違っても逃げ出そうとか考えるなよ」

釘を刺して、一夏は部屋から去っていく。久しぶりに専用機を手にしたオータムは、早く動かせたいとそわそわしていた。

「あー早く餓鬼共をぶちのめしたいぜ！」

「あくまでも訓練よ。本気で叩きのめしたらダメだからね」
「分かってるっての」

スコールからも釘を刺され、オータムは自分はそのままで餓鬼じゃないと不貞腐れベツドに倒れ込んだのだった。

放課後になり、刀奈と虚がスコールとオータムの二人と模擬戦をしてるのを、一夏は美紀と簪を引き連れてモニタールームで観戦していた。

「一夏が付けた枷、上手く機能してるみたいだね」

「それでも二人と互角なんだから、やはりレベルが高いんだろうな」

「普通にどこかの国の代表でもおかしくないですからね」

「一応亡国機業の幹部だからな。それなりに強いのは知っていたが、刀奈さんや虚さんと互角とはな……碧さんや織斑姉妹がいなかったら危なかったかもな」

何度か襲われた時、碧や織斑姉妹がいたから撃退出来たと、一夏は改めて実感していた。もしその三人がいなかったら、そう考えると己の未熟さが情けなくさえ思えたのだった。

「俺ももう少しくらい戦えるようにならないと……」

「一夏さんの事は私たちがお守りします。ですから、安心してください」

「何時までも守られるだけじゃ情けないからな。少しくらいカッコつけさせてくれ」

「一夏は十分カッコいいよ」

「そう言う事じゃないんだが……まあ、ありがとな」

簪の言葉に恥ずかしそうに頭を掻いて、一夏はモニターに視線を戻した。上手く枷が機能しているの、スコールもオータムも若干精彩を欠いているように見えるが、それでも十分模擬戦の相手を務めている。

「これは思わぬ拾い物をしたかもしれないな」

「戦力アップもですが、底上げも出来そうですね」

「織斑姉妹に頼むと、どうしてもあの二人が暴れる未来しか見えないから……この二人なら他のメンバーでも太刀打ち出来る」

「実戦経験の少ない静寂や香澄、エイミイなんかでも相手出来そうだしね」

「そもそもISの実戦は禁止されてるんだけどね。競技としての経験も浅いし、他の人も実戦に近い感覚で模擬戦を出来るし、そういう意味では簪ちゃんの言う通りだね」

「ナターシャさんにも手伝ってもらえるだろうし、後はアーナの使用時間を確保出来れば、十分戦力の底上げが出来るな」

「あつ、お姉ちゃんたちが勝った」

「模擬戦終了。各自ピットに戻ってください」

一夏のアナウンスで、四人はピットへと戻っていく。模擬戦が終わったので、一夏た

ちもモニタールームからピットへと移動するのだった。

ストレス発散

模擬戦を終えた刀奈たちは、ピットから更衣室へと移動し総括をしていた。

「やっぱり私も虚ちゃんもペア戦には慣れてないから、若干の連携ミスがあったわね」

「でもよ、正式なペアじゃねえのにあれだけ動ければ十分だと思うがな」

「そうでしょうか？ そちらのISに制限が掛けられているから勝てましたが、本来の動きをされていたら私たちが負けていた可能性の方が大きいと思います」

「そりゃ、私とオータムは長年ペアを組んで動いていたから、主従関係とはいえペアを組んでなかった貴女たちに連携で負けはしないわ。でも、貴女たちはIS操縦者として高い技術を持っているから、多少連携にミスがあっても、それがイコールで隙に繋がらないのよね。それってかなりの強みだと思うわよ」

スコールに褒められ、刀奈と虚はまんざらでもなさそうな表情を浮かべた。

「刀奈さんも虚さんも、個人での技能は他の追隨を許さないくらい高いものを持っているますからね」

「あー一夏。一応ここは女子更衣室なんだけど？」

「この学園の施設に、男子用があるとは思わないんだが。精々トイレくらいだろ」

「一夏君しか男の子がいないものね」

「そもそもI Sを動かせる野郎がお前だけだもんな」

オータムの言葉に、他のメンバーも頷く。

「枷をつけた程度じゃお前たちの戦闘力を大幅に削る事は出来ないな」

「これでも大分キツイんだけどね。それを感じさせないように頑張ったから、一夏がそう感じたんだと思うわよ」

「てか、オレたちが本気なら、二対二で負けるはずもねえからな」

「なら枷を外して織斑姉妹とやるか？ あの二人なら喜んで相手してくれると思うぞ」

一夏の提案に、オータムは全力で拒否を叩きつけた。さすがのオータムでも、織斑姉妹とはやり合いたくないらしい。

「刀奈さんと虚さんから見ても、二人はどうでしたか？」

「そうですね……簪お嬢様や美紀さんなら十分に渡り合えるとは思いますが、他の方ですと少し厳しいですね」

「特に、本音やマドカちゃんだとかなり苦戦すると思うわよ。マドカちゃんはそれ以外

にも問題はあるけど」

「元同僚ですものね。マドカの方にも精神的なしこりはあるでしょうし、対戦させるのはもう少し時間をおいてからの方が良いでしょう」

「なあ一夏。オレたちもVTSを使いたいんだが、お前が調整してるんだろ？ 何とかしてくれよ」

オータムのお願いに、一夏は少し腕を組んで考えてから返答する。

「学園内を自由に動かれるのはまだ早いから……VTSに関しては当分の間ポータブル版で我慢してくれ」

「あれだと訓練って言うよりゲームって感覚になるんだよな」

「贅沢言わないの。本当だったら私も貴女も国際裁判にかけられて向こう数十年は自由に行動する事が出来なくなってもおかしくないんだから」

「でもよ、何時までも部屋でジツとしてるなんて、オレには向かないってスコールだって分かってるだろ」

「なら、別の運動でもしましょうか？」

スコールの提案に、オータムは恥ずかしそうに視線を逸らした。その反応を見て、一

夏は二人が何をしようとしてるのか理解し、呆れたのを隠そうともしない態度で釘を刺した。

「原則何をしようが構わないが、一応学園内であることを忘れるなよ？ 生徒の情操教育上よろしくない」と判断されたら、織斑姉妹の制裁が入るかもしれないからな」

「愛の形は人それぞれよ」

「だから、バレないようにやれと言っているんだ」

そう言い残して、一夏は美紀と簪を連れて更衣室を後にした。刀奈と虚も二人に配慮したのか、一夏の後に続くように更衣室を後にしたのだった。

生徒会室に戻ってきた刀奈たちは、席に座っている一夏に視線を向けた。

「なんです?」

「バレないように言っても、相手は織斑姉妹よ? すぐにバレるんじゃないかしら?」

「行き過ぎない限り、自由にさせるよう言っていますので、バレたとしても問題は無いですよ」

「じゃあ何故バレないようにしろと言ったの? 最初からバレてるって分かっていたら、あの二人もそれなりに対処すると思うんだけど」

簪の質問に、一夏は興味なさげに真実を告げた。

「最初からバレてると教えると、あの二人は恐らく加減しないだろうからな。だからバレないようにしろと言う事で、少しは加減すると判断した」

「なるほど。でも一夏、同性愛を否定するわけじゃないけど、あまり過激だと困るんじゃない？」

「そうよ。ただでさえ簪ちゃんはそう言うことに興味津々なお年頃なんだから」

刀奈の言葉に、簪は慌てて否定の言葉を重ねた。

「私は別に興味ないよ？　でもさ、他に興味がある人がいるかもしれないじゃない？」

例えば、ダリル先輩とフォルテ先輩だってそう言った関係なわけだし」

「簪、何でそんなに早口になってるんだ？」

「と、特に理由は無いよ」

「まあ、深くは言及しないが」

簪の趣味に口を挿むつもりは、一夏にも刀奈にも無い。だが簪が必要以上に反応したので、一応追及しただけなのだ。

「好き好んで寮長室の隣の部屋を訪ねるヤツもいないだろうし、ストレスを溜め込まれると面倒だからな」

「適度に発散させる程度なら、織斑姉妹も目を瞑ってくれるでしょうしね」

これ以上簪が墓穴を掘らないように、一夏と刀奈がそうまとめてこの話題を終わらせたのだった。

追加の対戦相手

スコールとオータムが模擬戦をしていると聞きつけ、ダリルとフォルテは一夏の部屋を訪ねる事にした。

「何処へ行くのかしら？」

「ちよつと更識君に話があるので、部屋を訪ねようと思ひまして」
「一夏さんに用事、ですか？ 連絡しますのでちよつと待つてて」

二人の監視を担当している碧が、一夏に電話を掛け確認すると、すぐにOKが出たのか碧が二人を部屋まで連れて行くことになった。

「一夏さん、碧です。二人を連れてきました」

『開いてますので、入って来てください』

一夏の返事を待つてから、碧は二人を部屋に引き入れる。何の用事なのかは分からな
いが、一夏に危害を加えるかもしれない二人をこんなに簡単に部屋に招き入れる行為
は、碧からしてみれば警戒心が薄いのではないかと心配になる行動だった。

もちろん、一夏が何も考えていないわけではないし、何かあれば護衛の自分たちが何とかすると信頼してくれているからこそ一夏は二人を招き入れたのだろうと理解しているが、それでも少し警戒心が薄いように碧には感じられたのだった。

「そんなに心配しなくても、二人は大丈夫ですよ」

「そうだと良いのですが……特にダリルさんは、爆発物を学園内に持ち込んだ前科がありますし」

「もう持つてないわよ。そもそもあれだって、オータムが用意してくれなかったら出来なかったんだから」

「分かりました。警戒のレベルは下げます」

碧から発せられていた殺気が薄まり、フォルテは漸く安心したような表情に変わった。

「それで、何の御用でしょうか？」

「スコールとオータムが模擬戦をしたと聞いてね。私たちも少しくらいストレスの発散がしたいと思って、お願いにきたのよ。ゴミ拾いもしっかりやるけど、それだけじゃストレスが溜まっちゃうもの」

「まだ三日目ですよ？　大変なのは理解出来ませんが、それほどストレスが溜まるとは思

えないのですが」

「普通に掃除してる分には、確かにストレスは溜まらないわよ。でもね、更識君。一日中監視されながら掃除してれば、通常の三倍以上ストレスが溜まるの。それでいてスコールとオータムが模擬戦をしたのに、私たちはせつせと掃除をしなければいけないと思うと、更にストレスが溜まっちゃうのよ」

「そうですか……では、放課後はお二人も模擬戦の相手を務めてもらいましょうか。元代表候補生二人が相手となれば、対戦したい人も多いはずですし」

「でも一夏、更識所属でこの二人と戦わせるとなると、かなり大変じゃない？」

「まずは静寂や香澄といった経験の浅い人たちからだな。その後、エイミィや本音たちも徐々に加えていけばいいだろ。スコールやオータムもいるんだし、その辺りはローテーションで」

既に計画に組み込まれていたと知り、ダリルは素直に脱帽した。一夏はただの学生ではないと理解していたが、これほどまでに人を使うことに慣れているとは思っていなかったのだ。

「更識君って本当に凄いわね。私たちが文句を言いに来ると分かっていたみたいだし、それを上手く利用して自分たちの戦力増強に繋げてる」

「一応その人の人生を預かってる身としては、少しでもいい結果に繋がるように常に考えているんですよ。先輩たちだって、戦ってストレス発散出来るなら文句ないですもんね」

「それじゃあ、明日からは私たちも模擬戦に加わるって事で。それじゃあ、私たちは大人しく部屋で休んでるわね」

「そうですか。碧さん、お願いします」

まだ二人を全面的に信用出来ない生徒が多いので、二人が移動する際には必ず碧が行する事になっている。碧が同行出来ない時は、無人機が二人を監視しているので、とりあえずはI S学園内に安心感が漂っているのだった。

「それじゃあね、更識君」

「お邪魔しました」

ダリルとフォルテが会釈をして部屋から去っていくと、部屋で話していた美紀と簪が一夏の隣に腰を下ろした。

「一夏、ダリル先輩の事苦手でしょ？」

「まあな。なんとなく雰囲気がおータムに似てるから、少し身構える」

「ダリル先輩もなんとなく分かつてるみたいですし、必要以上に一夏さんに近づこうとはしてませんしね」

「でも、あの人もSっぽいから、一夏が怖がってるのを面白がってもっと近づいてくるかもしれない。油断は出来ない」

「俺に必要以上近づけば、簪や美紀が黙ってないだろ？ だから俺も必要以上に身構える事無く会話出来てるんだが」

自分一人で会話しようものなら、数分で幼児退行してもおかしくなくらいだと、一夏は自己分析していた。だからわざわざ簪を部屋に呼び、それから二人を迎え入れたのだった。

「一夏から部屋に来るように言われた時は何事かと思っただけど、本音じゃ役に立たないもんね」

「碧さんから電話を受けて、すぐ美紀に連絡を頼んで正解だった。やつぱりあの人の雰囲気は苦手だ」

「でも、一夏さんのトラウマもだいたい薄れてきたのではありませんか？ 一学期のように私のベッドに潜り込んでくる回数もかなり減りましたし」

「あの時の原因は殆ど篠ノ之だったからな……アイツがこの場にいたら、たぶん今でも

夜な夜な美紀の世話になっていたと思う」

「美紀、ズルい……一夏、今度一緒に寝ようね」

「だんだん刀奈さんに似てきたな、簪も……」

苦笑いを浮かべながら、一夏は簪に札を言い消灯時間まで三人でまったり過ごしたのだった。

究極の解決法

た。久しぶりに朝から教室に一夏がいる事に、大半のクラスメイトは意外感を抱いていた。

「あら、一夏君が朝から教室にいるなんて、修学旅行の部屋決めの時以来じゃない?」

「そんなだっけか? いろいろあつて覚えてないな」

「クラスの子たちが物珍しそうに見てるじゃない。一夏君も学生らしい生活を送れるようにしたらどうなの?」

「そうはいつてもな……まだ片づけなければいけない事が多いから、明日いるかどうかすら定かではないんだが」

「それでよく補習とかにならないわよね……その頭脳が羨ましいわ」

「静寂だつて補習とかには縁が無いだろ? 何処を羨むんだよ」

静寂の軽口に応える一夏は、何処か疲れているようにも見えた。実際一夏のスケジュールを考えれば、疲れていないと言われた方が心配になるくらいだから、そう見えて当然ではあるのだが、疲れをあまり表に出さない一夏が疲れているように見えるのも

また、クラスメイトを心配させるのだった。

「顔色が悪いわね。相当無理してるんじゃない？」

「無理してないように思うのか？ 亡国機業のメンバーのしてきたことを秘密裏に処理するのがどれだけ大変か分かるだろ？ 国と交渉して、企業と交渉して、更に個人と交渉して漸くダリル先輩とフォルテ先輩の復学の手続きが出来るようになったところだぞ」

「それって一夏君が担当しなきゃいけないかったの？ 大人がするような事だと思うけど」

「更識企業の関係者で上位、IS学園に在籍してる人間じゃなきゃ交渉できないようなこともあったからな。刀奈さんや虚さんは関係者ではあるがこういった交渉はしてこなかったから、俺がやるしかなかったんだ」

「小鳥遊先生は？ あの人も更識企業の関係者よね？」

静寂のセリフに、一夏は苦々しげに呟いた。

「碧さんは実力は十分だが、あくまでも従者としか見られてないからな……交渉の席に着いたら舐められるのがオチなんだよ……」

「更識所属の相手を舐めるなんて、かなり傲慢な人間もいるのね」

「覚えとけよ、静寐。企業のトップなんて大抵傲慢で他人を見下してる人間が殆どなんだ」

「その人相手でも、一夏君は負けなかったのね？」

「それなりに権限を持つてるからな。少し『お願い』すれば大抵の事はこちらの思い通りに進む」

「怖いからその『お願い』の内容は聞かないでおくわね」

一夏の口調から、それが普通のお願いではない事を理解した静寐は、強引に話題を変え、事にした。

「それで、亡国機業の人たちの件は、一夏君に一任されているの？」

「復学の判断は碧さんに任せてる。スクールとオータムの件は、一応俺が観察し、どうするか織斑姉妹と話し合う事になっている」

「普通織斑姉妹が観察して、一夏君と相談するんじゃない？」

「静寐はあの二人が信頼出来るのか？」

「……コメントは控えさせていたくださいです」

何処からか殺気を感じた静寐は、そう言い残して自分の席に戻っていったのだった。

午前中は大人しくしていたオータムだったが、時間が経つにつれて暇を持て余していた。

「やっぱりポータブル版じゃなくて普通のVTSを使いたいぜ」

「もう少ししたら模擬戦で暴れられるんだから、我慢しなさい」

「暴れられると言つても、こっちは動きに制限が掛かつてるんだ。本気で暴れた時と比べると全然スツキリしないのはスコールだつて分かるだろ？」

「忘れがちかもしれないけど、私たちは捕虜なのよ？　少しだけとはいえ自由が認められてるだけありがたいと思わなきゃダメなの」

「それは分かつてゐるつての。一夏が交渉してなかつたらオレたちは国際的な犯罪者としてどつかの監獄にぶち込まれてたのは間違いない。それは分かかつてるんだが、それでも暴れたいと思うのは仕方ないだろ」

ベッドの上で駄々をこねる子供のようには愚痴を溢すオータムを見て、スコールは思わず笑いそうになる。本能に忠実なオータムに我慢を強いても無意味だと知つているからこそ、どうにかしてストレスを発散させなければと考えていたのだった。

「もう少し信頼されたら、VTSの使用許可も下りるでしょうし、自由に歩き回る事も出来ると思うわ。だから、もう少し頑張つてちょうだい」

「我慢つて言葉は嫌いだぜ。オレはただ本能に従つて暴れたいんだ！」

「随分と過激な事を言つてゐるな。お前たちは捕虜なんだぞ」

「織斑千夏……何の用だ」

いきなり声を掛けられても驚きはしなかったが、まったく気配が感じ取れなかった事にオータムは苛立っていた。

「なに、そろそろお前たちのフラストレーションが溜まっているだろうから相手してやれと一夏に頼まれてな。整備室に連れてくるよう言われたんだ」

「さすが一夏ね。すべてお見通しというわけ」

「あつ？ どういうことだ？」

「昼休みを使って、お前たちとわたし・千冬のペアで試合をするというわけだ。もちろん、お前たちの機体の枷は一夏が外してくれるから、全力で暴れられるぞ」

「普段なら断りてえ話だが、暴れられるなら乗ってやる」

織斑姉妹を相手にするのはオータムも避けたいと常々思っているのだが、その考えを覆すほどに、暴れられるという事が嬉しかったようだ。

オータムが乗り気なので、スコールも断る事はせずに、千夏に連れられて一夏の待つ整備室へ向かう事にしたのだった。

一夏の狙い

学園中が騒がしくなっている事に気付いた刀奈は、原因を突き止めるために簪と本音を探していた。

「お姉ちゃん、何してるの?」

「何だかみんなそわそわしてる気がしてね。簪ちゃんたちなら何か知ってるんじゃないかって思ってる」

「刀奈様聞いてなかったんですか? これから第一アリーナで織斑姉妹VSスコール・オータムペアが模擬戦を行うんですよ。いっちーが亡国機業二人の専用機の枷を外したから、かなり白熱した試合になるんじゃないかって学園中で話題になってるんですよ」

「そうだったんだ。じゃあさっそく——」

「ダメですよ、お嬢様。お嬢様はこの昼休みの間に溜まった仕事を少しでも片づけていただかなければいけませんので」

第一アリーナに駆け出そうとした刀奈の襟首を、虚が掴み生徒会室へと引き摺って行

く。

「待って、虚ちゃん！ 首が！ 締まるから！ 自分で歩けるから！」

「お嬢様を自由にすると、すぐどこかに行ってしまうから。このまま生徒会室まで連行します」

「いや〜！ 助けて、簪ちゃん！ 本音ー！」

虚に引き摺られていく刀奈を、簪と本音は無言で見送り、何事も無かったかのように会話を再開した。

「ところで、本音は一夏の護衛じゃなかったの？」

「模擬戦の間だけ私じゃなくマドマドが美紀ちゃんと一緒にうちの護衛を担当する事になったんだよ〜」

「……最近、私と美紀が一夏の護衛をすることが多い気がするけど、本音って何時担当してるの？」

「ほえ？ ん〜……最近はあまり担当してないかな。周辺警備とか、そっちの方を担当する機会が多くなってきたから」

「そうなんだ」

本音の実力は簪も認めているが、一夏の護衛としては信用出来ないもので、この人選は正しいと感じていた。本音一人が護衛だと、どうしても何か失敗するのではないかと不安になる時があるのだ。

「それに、私はかんちゃんメイドさんだからね。こうして一緒にいて警護するのもお仕事なのだ」

「まあ、それは兎も角として、私たちも第一アリーナに行こうよ」

「そうだね。織斑姉妹にどれだけ喰い付けるのか、見てみたいしね」

「一夏の事だから、ストレス解消以外の目的もきつとあるだろうし、それが何なのか知りたいしね」

「よーし！ 出発だー！」

このタイミングで、簪は本音も生徒会役員であることを思いだしたが、彼女が手助けに行つたところで、刀奈が解放される事は無いと思い、その事は指摘せずに第一アリーナへと向かう事にしたのだった。

白熱した模擬戦を観戦していた生徒全員は、亡国機業の二人に対する恐怖心を忘れ、善戦する二人に声援を送っていた。

「これが一夏君の目的かしらね」

「どういうことですか？」

多分に漏れず観戦に来ていた静寐が呟いた言葉に、香澄が首を傾げながら尋ねる。

「模擬戦が始まる前は、亡国機業の二人に対して私たちは恐怖心を抱いていたはずよ。それが今はその二人を応援しているの。あれだけ怖がつてたんだから、織斑姉妹にコテ

ンパンにやられる姿を見たが、つてた人も絶対にいるはずよね。それが、一丸となつて亡国機業の二人を応援しちやつてる」

「つまり、一夏さんの目的は彼女たちのストレス発散と共に、私たちに彼女たちに抱いていた恐怖心を捨てさせることだったのですか？」

「真意は分からないわ、一夏君に聞かなければ。でも、これだけ応援すれば試合が終わつてもまた恐怖心を抱く事はほぼ無いでしょうし、彼女たちも織斑姉妹に勝てないんだと分かれば、必要以上に恐怖する必要も無いって分かるでしょうからね」

「なるほど、一夏さんの考えてる事って凄いなだね」

「あらエイミィ、来てたのね」

静寐の推察を盗み聞きしていたエイミィがひょっこりと顔を出した。静寐も香澄も驚いた様子も無く、普通にエイミィを出迎えたので、ちよつとした肩透かしを受けたような表情をエイミィは浮かべた。

「もつと驚くかと思つてたのに」

「エイミィさんが来るのは、久延毘古で予知済みですから」

「下手に情報を掴まれると、香澄を驚かすのは不可能になるのね……」

「織斑マナカさんの登場を予測出来なかつたので、精度を上げるためにこの機能を使つ

てますからね」

「そのせいで、ほぼ常時疲れてる感じがしてるけどね」

「かなり体力使うんですよ、これ」

警戒は無人機と更識所属の中でも上位の人間がしてくれているので、香澄は自分の能力の底上げに集中出来るのであった。

「面白そうな機能だけど、私には使えそうにないな」

「エイミイ、意外と体力無いものね」

「平均くらいはあるんだけど、それじゃあ全然足りないでしょ？」

「更識所属のメンバーの平均なら問題ないでしょうけど、IS操縦者の平均じゃ全然よ。その倍くらいあって漸く更識所属の平均くらいなんだから」

「のほほんとしてる本音さんですら、私たちより体力ありますからね」

「頭脳派だと言われている一夏君や簪さんだって、私たちより遥かに体力あるものね」

「更識所属ってだけで、かなりハードルが高くなってる気がするんだよね……周りの目もそういう感じだし」

「それだけ期待されていると言う事でしょうね」

静寂がそう締めくくったタイミングで、模擬戦終了のアナウンスが流れた。善戦していたが、やはり織斑姉妹が力で押し切り、スコールとオータムの機体のSEがゼロになったのだった。

一夏のカミナリ

模擬戦を終えた織斑姉妹は、ピットで出迎えてくれた一夏に勝ち誇った笑みを浮かべた。

「見てたか、一夏！ 私たちの戦い方を」

「これで、アイツらが何か企んでたとしても、お姉ちゃんたちがぶっ潰してやるからな！」

きつと褒めてくれるに違いない。そう確信していた二人だったが、一夏の表情は険しいものだった。

「何かあったのか？」

「何も無いと思っっているのが問題です」

「どうしたというんだ。今回はわたしたちは何もしていないはずだぞ」

千夏が言った通り、二人には怒られる覚えが無い。普段なら一つや二つくらいすぐ出て来るのだが、今回に関しては心当たりが全くないのだ。

「何もしていない？ この画像を見てもそんなことが言えますかね」

そう言つて一夏が端末から呼び出した画像を、モニターに表示する。そこに映っているのは、資源ごみを回収場所に出さず、裏庭に隠すように捨てる二人の姿だった。

「ゴミは回収場所に出すよう、あれほど言つたはずなのに、これはどういう事でしょうか？」

「これは……その……」

「資源ごみだけではなく、可燃ごみや不燃ごみも同じように処理してますよね？」

「こ、これからはちゃんと回収場所に出す」

「なに当たり前な事を偉そうに言つてるですか、貴女たちは！」

一夏が落としたカミナリに、織斑姉妹だけでなく護衛の美紀とマドカまでもが背筋を伸ばした。

「貴女方が回収場所に持つて行かなかつたゴミは、敷地内に生息する野生動物や鴉によつて散らかされ、業者でも手が負えないくらいになつています」

「それはわたしたちの所為なのか？ 散らかつたのはわたしたちが原因ではないぞ」

「その原因を作つたのは貴女たちでしょうが！」

言い訳をする千夏に、一夏はもう一発カミナリを落としました。実際に雷が発生した訳ではないのに、千夏は電撃を浴びせられた錯覚に陥った。

「貴女たちが原因で散らかったゴミは、ダリル先輩とフォルテ先輩に片づけてもらっています。本当なら違う罰を課すつもりだったのですが、あまりにも目に余る汚さだったので、これを罰としました」

「なら、散らかってて良かったではないか」

「良いわけないでしょうが！」

本日三発目のカミナリが、千冬に落とされる。護衛としてこの場にいるのが嫌になるくらいの迫力に、美紀もマドカも圧倒されていた。

「さっきの模擬戦だって、本当なら貴女たちがやられてくれた方が良かったのに」

「私たちがあの程度の奴らに負けるはずがないだろうが」

「そもそも亡国機業の連中に後れを取るような鍛え方はしてないからな！」

「……反省の色無し。織斑千冬、千夏両名の向こう三カ月の給料はカットしてもらいましょう」

「それだけは勘弁してください!!」

武力行使が不可能と判断した一夏が下した判断に、織斑姉妹はそろって土下座をした
という……

「兄さまには姉さまたちでも敵わないのですね……」

「実質学園のトップですからね……」

最強姉妹の土下座を見て、マドカと美紀はそんなことを思ったのだった。

存分に暴れられて満足したのか、オータムは大人しく部屋でポータブル版のVTSを操作していた。

「あれだけ文句言ってたのに、結局は使ってるのね」

「たまに動けると分かれば、これで我慢出来るってもんだぜ」

「貴女って本当に現金ね」

「負けたのは気に入らねえが、あの二人と定期的に出来ると思うと、ポータブルとはいえ馬鹿に出来ねえだろ？」

「私は出来る事ならもう戦いたくないけどね……枷が付けられてあの強さ……敵と考えると脅威でしかないわよ」

事前に一夏が織斑姉妹の専用機に細工しておいてくれたから、互角程度の闘いが出来たのであって、制限なしで戦えと言われて勝てる相手ではないと、スコールは改めて実感したのであった。

「織斑姉妹だけじゃなくて、この学園には小鳥遊碧もいるだろ？　いつかアイツとも

やってみてえぜ」

「戦闘狂と揶揄されてただけの事はあるわね」

「別に何と言われようがきにしねえし、戦いの世界で生きてきたからな。この快感は病みつきだぜ」

オータムが満足してるので、スコールもとりあえずはホツと胸をなでおろした。そのタイミングで、この部屋の前に人の気配が生まれ、二人は即座に緊張感を取り戻したのだった。

「誰かしら?」

『私たちよ、スコール。ちよつといいかしら?』

「レイン? 開いてるから構わないわよ」

レイン・ミューゼルことダリル・ケイシーの訪問に首を傾げながらも、スコールは部屋に招き入れた。

「何かあつたのかしら?」

「織斑姉妹とやり合つたって聞いてね。感想を聞きたいなと思つただけよ」

「まともにやり合うだけ馬鹿らしいくらいの実力差を感じたわ。一夏が向こう側に枷を

つけてくれたから、今回は怪我無く終わったけど、制限なしで戦ったら瞬殺されてもおかしいわ」

「その二人の尻拭いをやらされると思うと、なんだか泣けてくるわね」
「何かあったのか？」

ダリルだと分かった途端に緊張感を解き、ポータブル版のVTSをベッドに転がりながら操作していたオータムが、ダリルに問いかけた。

「回収場所まで持つてくのを怠ったゴミが、野生動物たちの所為で散らばってしまったのよ。それを片付けるのが私たちの罰なんだって」

「織斑姉妹は家事全般がダメだという噂がありました、まさかそれが事実だったとは思っても見ませんでした」

フォルテのコメントに、ダリルとスコールは苦笑いを浮かべたのだった。どうやらフォルテの中の織斑姉妹は、世間一般のイメージと同じだったのだと理解したからだと、笑われたフォルテには理解出来なかった。

狂気のマナカ

監視衛星で一夏を盗撮していたマナカは、千冬と千夏が一夏に怒られている場面を見てほくそ笑んでいた。

「やっぱりお兄ちゃんは私と一緒にいるべきだよ。こんな屑共に時間を割かれてるなんて、無駄の極みだよ」

そんなことを言いつつも、マナカは怒られている千冬と千夏を見て満足感を覚えてしまっていた。

「おかしいなあ……お兄ちゃんと一緒にいたいって思ってるのに、もし一緒にいられるようになるよ、こうやってこの屑共が怒られるシーンが見られなくなっちゃうって感じてる……時間の無駄だって言ってるのに、お兄ちゃんが屑共を怒ってるところを見ると満足しちゃうなんて……」

マナカは間違いなく一夏と一緒にいたいと思ってる。千冬と千夏に一夏の時間を奪われているのが物凄く嫌だと思っている。だがその一方で、一夏が二人を怒ってるの

を見て満足感を覚えたり、もつと怒られるとすら思ってしまったのだ。

「何をしているのだ？」

「別に。ちよつとお兄ちゃんの状態を見ていただけだよ。それで、貴女の方はどうなの？」

スコールたちにやられた傷は、もう癒えたのかしら？」

「正確に言えば、お前にやられたんだがな……まあ、もう少して全快と言ったところだ」
「そう、それは良かったわ。お兄ちゃんを手に入れるのに、貴女が敵を引き付けてくれないと別の案を考えなきゃいけなかったし」

「困をやるのは仕方ないとしても、私にもちゃんと恩恵があるんだろうな？」

「何言ってるの？ お兄ちゃんが私の物になれば、貴女だつてずつと一緒にいられるのよ？ それが恩恵じゃなくってなんだつて言うのかしら？」

本気でそう思っている目で近づいてくるマナカに、さすがの箒も一歩後退る。この少女は本気で一夏以外の存在など気にしていない、自分の姉よりたちが悪い存在だと、箒も思っていたのだった。

「まあ、私はお兄ちゃんと血が繋がってるから仕方ないけど、貴女はお兄ちゃんとの間に子を成せるのよ？ 至高の悦楽ではなくて？」

「一夏との……子供、だと……？」

箒は一夏との間に子を成す妄想を膨らませ、そしてその行為についても妄想を膨らませた。

「普段はSつ気たつぷりのお兄ちゃんを、貴女が組み伏せて手玉に取るのよ？ 想像しただけで興奮してこない」

「一夏が…受けだど!？」

「だって、お兄ちゃんが自分から貴女を求めて来るなんて、洗脳でもしなきゃありえないわよ？ だから、お兄ちゃんを自由にしちや駄目なの。貴女がお兄ちゃんをリードするのよ」

「私が…一夏を…それはいいな！ よし！ こんな傷さつさと治して、早いところ一夏を手に入れて世界を滅ぼそう!!」

「その意気よ。頑張つてね」

箒が部屋からいなくなり、遠ざかっていくのを確認してから、マナカは唾でも吐き捨てるかのように呟いた。

「頭が弱くて助かるわね。誰があんな雌にお兄ちゃんを渡すものですか。貴女は困りなかつたまま屑姉や更識の人間に殺されるのよ。そして、お兄ちゃんと私だけの世界を創

るんだから。だから、待っててね、お・に・い・ちや・ん」

画面に映る一夏に口づけをし、マナカは新たな無人機製造を始めるのだった。

織斑姉妹に説教をしていた一夏だったが、背筋に寒気を感じ辺りを見回した。

「どうかしたのですか？」

「いや、何処からか寒気が……多分マナカが何かをしたんだろう」

「織斑マナカ……篠ノ之束、スコールに引けを取らない宇宙規模のストーカー……何か対策は無いのでしょうか」

美紀の言葉に、一夏は腕を組んで考え込む。もちろん、織斑姉妹が逃げ出さないように視線で釘付けにしているので、二人は大人しく正座しているしかなかった。

「目には目を、ストーカーにはストーカーを」

「どういうことですか？」

「同じストーカーに対策を考えてもらえば、何か解決策が出て来るかもしれない」

そう言つて一夏は束の番号にコールし、向こうが受話ボタンを押したのと同時に通信を切った。

「最近このパターン、多くないかな!？」

「普通に呼ぶより早いですからね」

部屋に現れた束を見ても、誰一人驚きはしなかった。むしろ美紀は冷静に扉を開け、

マドカはそそくさと一夏の背後に隠れたのだった。

「それで、今日はどんな用事かな？　ちーちゃんとなつちちゃんを矯正させるのは、束さんでも無理だからね」

「そんなことは分かっていますよ。この二人を矯正するには、一度殺すしかないですからね」

「おい、それはどういう意味だ」

一夏のコメントに喰い付いた織斑姉妹だったが、一夏の鋭い眼光に怒気を削がれたのだった。

「馬鹿は死んでも治りませんが、家事無能は死ねば治るかもしれませんから」

「たぶん無理じゃないかな……ちーちゃんとなつちちゃんの家事無能は生まれつきっぽいし、生まれ変わってもそこは変わらないと思うな」

「まあ、この人たちの事は兎も角として、織斑マナカが俺の事を監視してるようなのですが、何とかありませんかね？」

「そんなこと言われても……束さんでもあの子の居場所を掴めないんだよね」

「篠ノ之の気配を辿れば、おのずと分かるのでは？」

「それなんだけど、箒ちゃんの気配ってどんなのだったけ？　有象無象と区別つかなく

なっちゃったんだよね〜」

「……じゃあとりあえず、貴女が俺を監視するのを止めてください」

「それは出来ない！」

胸を張って言い切った束の頭を、千冬と千夏が全力で殴ったのだった。

変態の実力

マナカ対策を束に頼み、一夏は目の前で正座している織斑姉妹に視線を向けた。

「貴女たち姉妹の変態行為は遺伝なのですか？」

「知らん。だいたい、私たちはマナカほど酷くないだろ」

「そうだぞ、一夏！ 私たちは精々お前が子供の頃の入浴シーンを録画し、繰り返し見ていたくらいだ」

「十分変態じゃないですか……」

美紀が呆れたように告げると、二人は驚いた表情を浮かべた。

「この程度、可愛いものじゃないのか!？」

「束など、一夏の老廃物をコレクションしてたんだぞ！」

「そんなこと聞きたくなかったですよ……てか、何時からそんな変態行為をしてるんですか、貴女たちは」

「そんなの、お前が生まれてからに決まっているだろう！」

何当たり前のことを聞くんだ、と言わんばかりのテンションに、一夏は頭を押さえ背後に隠れているマドカの頭を撫でた。

「兄さま？」

「マドカは良い子だなと思ったんだけど。もう少し撫でさせてくれ」

「はい……兄さまの気のすむまで」

千冬、千夏、マナカと変態思考の姉妹の中で、唯一マドカだけがまともだと一夏は改めて感じていた。多少甘えん坊なところはあるが、離れて暮らしていた分、今甘えているのだろうか？と割り切る事が出来る。

だが、千冬たちとマナカの行為は、一夏の中でどう変換しても変態行為としか思えないのだった。

「さて、とりあえずは後一時間は正座で反省してくださいね」

「私たちは何を反省すればいいんだ？ ゴミをちゃんと回収場所に出さなかった事か？」

「それとも、一夏を生まれた時から性的な目で見てた事か？」

「……とりあえずは、ゴミの件を反省してください。異常性癖の件については、全てが片付いた時にまとめて反省してもらいますから」

「姉さまたちも、異常性癖だと理解しているのですから、少しくらい反省出来るのではないでしょうか？」

「いや、私（わたし）たちは異常だとは思っていないが、世間から見たらおかしいんだらうなというだけだ」

「……ほんと、マドカが良い子に育ってくれて良かった」

変態二人を部屋に放置して、一夏はマドカと美紀を連れて自室へ戻る事にした。

「兄さま、何時までこうしてるのです？」

「そうだな。マドカ、今日はもう休んでいいぞ」

「いえ、兄さまを部屋までお送りするまでは一緒にいます」

しっかりと護衛の任を勤め上げる気概を見せるマドカを、一夏は慈愛顔で見つめる。多少妹に甘いところがある一夏も、やはり織斑の人間なのだろうと美紀は一步下がった場所で眺めていたのだった。

一夏と美紀が部屋に戻ってくると、何故か刀奈と虚、そして簪が部屋で寛いでいた。

「なあ、美紀……」

「何でしょうか、一夏さん」

「ここって俺たちの部屋だよな？」

「私たちの知らない間に部屋替えが行われていないのでしたら、間違いなく私たちの部屋ですね」

あまりにも寛いでいる刀奈と簪を見て、一夏はてつきり部屋を間違えたのではないか
と思い美紀に尋ねた。無論ここが自分たちの部屋であることは一夏も理解しているので、
美紀の答えに特に驚いたリアクションはしなかった。

「お帰りなさい、一夏君。ごはんにします？ お風呂にします？ それとも、わ・た・し
？」

「……ふざけてないで、何か用があつたから来たんですよね？」

「もう、ノリが悪いわね。まっ、そこが良いんだけど」

「お嬢様がふざけてるのは何時もの事ですので」

「そうでしたね」

虚のコメントに一夏があつきり同意した事に、刀奈は不満の表情を浮かべたが、この
まま続けると二人に怒られると理解しているのか、真面目な表情を浮かべた。

「さつき実家から連絡があつただけど、亡国機業の穏健派が壊滅したらしいのよね」

「マナカ、ですかね……」

「調査した人の意見だけど、少なくとも無人機の仕業ではないそうよ。明らかに人の意
識が介入した壊し方だつて」

「穏健派は専用機を持ってなかったと聞いていたが、その辺りはどうなんだ？」

「現在調査中です。ですが、生存者無しの大量虐殺が行われたのを見ると、抵抗の手段が無かったのではないかと」

「少なくとも、ISに生身で立ち向かえるのはあの変態姉妹と駄ウサギくらいですからね」

一夏のコメントに、刀奈たちも頷いて同意する。表現は兎も角として、ISに生身で立ち向かうなんて事が出来るのは、あの三人しかいないのだ。

「独立派の四人——いや、フォルテ先輩は知らないだろうから三人ですね。詳しい話を聞きたいので部屋に来てもらいましょう。碧さん、ダリル先輩をこの部屋に連れてきてください」

「かしこまりました、一夏様」

「……いつも通りで構いませんよ」

当主の命に応えるべく、碧は呼び方を変えた。だが、一夏としては命じたわけではなくお願いしたわけなので、畏まられるとかえって一夏の方がしっくりこないのだった。

「簪と虚さんは、スコールとオータムを呼んでみてくださいください」

「了解」

「では、お嬢様をお願いします」

「別に何もしないわよ！」

イマイチ信頼されていないと実感している刀奈は、不貞腐れたように虚の言葉に噛みつく。だが相手にされる事なく流されて不満だったのか、頬を膨らまして一夏に飛びつこうとしたのを、簪に叩き落とされ床に倒れ込んだのだった。

筈の考え方

一夏に部屋に呼ばれ、スコールとオータム、そしてダリルの三人は何の用かと首を傾げながら部屋に入ってきた。

「早速で悪いが、穩健派と呼ばれていた集団は、専用機などのIS戦力は有していなかったんだよな？」

「そのはずよ。でも、それがどうかしたの？」

「穩健派一派と思われる集団が、何者かの襲撃を受けて壊滅した、と報告を受けたからな。穩健派の戦力の確認と三人にも教えておこうと思っただけだ」

淡々と告げる一夏ではあったが、内心は穏やかではなかった。穩健派集団ははずれ、更識に取り込もうと思っただけに、その計画に狂いが生じた事で新たな人員を何処から確保するか、穩健派を壊滅に追いやったのは何処の誰か、と様々な思考を巡らせていた。

「壊滅って言うてたが、全員死んだのか？」

「穩健派の構成員がどれだけいたか分からないから、全員とは言い切れないがな。少な

くともその場所にいたと思われる穏健派メンバーは全員、一人残らず殺されていたらしい」

「織斑マナカの無人機ではないの？ 私は詳しくは知らないけど、穏健派を潰すなんてこと、あの織斑マナカぐらいしかしないと思うわよ」

「攻撃に法則性が無かったですし、無人機に積んでない武装で攻撃した痕が発見されているので、少なくとも今までの無人機ではない事が確定しています。新たに造った無人機なのか、それとも人間の手で操作されたISなのかは、現在調査中です」

「そうなってくると、SHのヤツなんじゃねえか？ アイツなら人を殺る事に躊躇わないし、暴れる事が好きそうだったからな」

オータムの分析に、スコールも同意を示した。

「確かにSHなら、裏切りものと言われれば容赦なく殺すでしょうし、他人がいくら苦しもうが気にしない感じだったからね」

「二応容疑者として篠ノ之の名前は上がっている。死体の傷跡からサイレント・ゼフィールの武装と合致するかどうかも検証しているから、いづれ分かると思うがな」

「殺人となると、いよいよ篠ノ之さんは国際指名手配されますね」

美紀の考えに、一夏は微妙な表情を浮かべた。

「何か問題でもあるのでしょうか？」

「いや……確かに篠ノ之箒の犯行だと断定されれば、これは許されない行為だろう。だが、穏健派とはいえ国際犯罪組織の人間だ。世界的脅威を取り除いたと判断されるかもしれない」

「そんなことがあり得るのでしょうか？」

マドカの疑問に、一夏は全員が知っている事実を告げる。

「アイツは篠ノ之束の妹という立場だからな。何処の国もアイツをぞんざいに扱う事を避けたいだろうし、束さんがアイツに興味が無くなってきてる事を知っているわけでもないからな。特例が認められる可能性は十分にある」

「人を殺つても許されるって、羨ましい特権だぜ」

「世界が許しても更識は許しませんよ。もし篠ノ之箒の犯行だと断定できれば、どのような手を使つても彼女を追い詰め、罪を償わせます」

「あのSHが反省するかしら」

「別に償わせる方法はいくらでもありますし、反省しないのであれば、束さんに人体実験の道具として差し出せばいいだけです」

物騒な事を平然と言つてのける一夏に、亡国機業の三人は引き攣つた笑みを浮かべるしか出来なかつたのだつた。

一仕事終えた箒は、一応上司と言う事になっているマナカに報告に行くために、本拠

地にあるマナカの研究所を訪れていた。

「おい、頼まれた穏健派の掃除、終わったぞ」

「しつかりと確認したわ。どう？　リハビリの経過は」

「悪くないな。あの場になかった連中の捜索はどうなっている？」

「ちゃんと進んでるから心配しないで。それより、良く顔色一つ変えずに人を殺める事が出来るわね貴女」

「私は別に人を殺してきたわけではない。ゴミを片付けてきただけだ」

「なるほど、貴女も思考が逝かれてるのね」

不敵な笑みを浮かべるマナカに、箒は無言で右手を差し出す。

「お前が言った通りにしてきたんだ。報酬を寄越せ」

「あらあら、貴女のリハビリとストレス発散の為にお願いしたのに、報酬まで要求されるとはね……じゃあ、私の秘蔵コレクションから、お兄ちゃんの全裸体がバッチリ写ったこの写真をあげるわ」

「これは……つい最近の一夏ではないか！　どうやって手に入れた!?!」

「さて、どうやってでしょうね」

適当にはぐらかして、マナカは箒を部屋から追いやる。十分に気配が遠ざかったのを確認してから、マナカは監視衛星を作動させ残りの穏健派メンバーの搜索と並行して、一夏の監視を再開した。

「あんな女にお兄ちゃん的全裸を見せるのは癪だけど、あれくらいじゃないと満足しなかっただろうしね……ゴメンね、お兄ちゃん。でも、本当に大事な部分は見えないように加工しておいたから怒らないでね」

映像の中の一夏は、難しい顔をしながら各方面へ指示を出している。音声までは拾えないが、マドカにとって一夏が何を指示しているかは大事ではなかった。

「この表情のお兄ちゃんも素敵……ああ、お兄ちゃんが私を捕まえようと必死になってくれてる……」

都合の良い考え方をして、マナカはモニターにキスをする。

「何時かは直にキスしてあげるからね、お兄ちゃん」

マナカは笑っているように見えるが、第三者がその笑みを見たら、きつと恐怖しただろう。そんな笑みを浮かべていたのだった。

束のモチベーション

言い表せない悪寒を感じた一夏は、自分の身体を抱きしめるようにしやがみ込んだ。

「一夏さん、どうなさいました？」

「いや……絡みつくような視線と、物凄い悪寒を感じてな……ちよつと気分が悪くなってきた」

「織斑マナカ、ですか……」

「変態駄ウサギかもしれんが、あの人のここまで悪寒を感じた事は無いからな」

気配を感じられれば、いくらでも対処出来るのだが、監視衛星からの視線ではさすがの一夏も対処出来ない。束に解決策を考えてもらうよう頼んだが、束の事だから一緒になって観察してるのかもしれない、と一夏は思っていた。

「せめてもの救いは、俺がマナカに対してトラウマを抱えてないことだな」

「ですが、これだけ見られている事を感じてしまうのですたら、そのうちトラウマを抱えてしまうかもしれませんよね？　そこは大丈夫なんですか？」

「……分からない」

今はまだ、悪寒だけで済んでいるが、そのうち恐怖心を抱いてしまうかもしれない。そう考えると、早めに対処しなければいけないと一夏は改めて思った。

「別に私は一夏さんに甘えてもらえないので、ある意味役得なのですが、一夏さんとしてはそんな風に考えられませんかものね」

「……そんなことを思ってたのか」

「少しだけ、ですけどね……普段の一夏さんはあまり私たちに甘えてくださらないので、ちよつと幸せな気分を味わえる、というだけです。もちろん、心配の方が大きいので、そんな気分になれるわけではないのですが」

「まあ美紀が何を考えていようが、護衛としてしっかりとってきてるから文句は無い。だが、あまりそう言う事を口にする、刀奈さん辺りが嫉妬するから気をつけろよ」

何とか立ち上がって、一夏は部屋に戻る事にしたのだった。その途中で、学園内に見知った気配を感じ取り、急遽進路を変えて裏庭へ向かう。

「何かあるんですか？」

「さつすがいっくん。他の有象無象やちーちゃんたちには気づかれなかったのに」

「一応警戒の責任者を任されてますからね。不審者の気配には敏感でいなければいけま

せんで」

裏庭に現れた束に、美紀は警戒心を解いた。一夏にしか気配が感じ取れなかったとはいえ、美紀も何か不審な気配は感じ取っていたのだ。それが何なのかを識別する事が出来なかったもので、最大限の警戒心を持って一夏に随行し、その気配が束の物だと理解したから、ある程度警戒心を解いたのだ。

「その女、四月一日美紀だっけ？ よく束さんがいた事が分かったね」

「この辺りに不審な気配がある事は分かりましたが、篠ノ之博士の気配だとは分かりませんでした」

「まっ、さすががいつくんの手下って事かな」

「手下ではなく護衛です」

一夏の訂正に、束は「ゴメンね」と軽く謝って本題に入った。

「織斑マナカが使ってる監視衛星を特定する事は出来たよ」

「『特定する事』ですか……つまり、特定出来ただけでその衛星をハッキングする事は出来なかったんですね」

「一を聞いて十を知る、さすがにいつくんだね。そうなんだよ、束さんの技術力を以ってし

ても、あのプログラムをハッキングする事は出来なかった。もちろん、諦めたわけじゃないけどね」

全くない力こぶを作って見せる東の姿に、一夏は頷いて引き続き東に任せる事にした。

「それから、えつと……亡国機業だっけ？ その穏健派集団を壊滅させた犯人だけど、荒っぽい画像しか手に入らなかったから断言は出来ないけど、サイレント・ゼファイルスに乗ってるっぽいんだよね」

「そうなるよ、篠ノ之箒の仕業と言うことになりますね」

「何故か鮮明な映像が手に入らないから、それっぽいとしか言えないけど、画像を解析してより鮮明な映像になるように、こっちも東さんが頑張るから」

「重ねてお願いします」

頭を下げる一夏に、東は手を振って一夏に頭を上げさせる。

「いっくんが頭を下げる事じゃないでしょ？ それに、東さんといっくんの仲じゃないか！」

「……何が望みですか？」

「さっすがいつくん！ 話が早いね」

東の言葉から、何か目的があると感付いた一夏は、その要求を聞くことにした。東の方も、気付かれるのが分かっていたように話を進めていく。

「二度だけで良いから、東さんと一緒に寝てくれないかな？ もちろん、何もしないし、必要以上に触ったりもしないから」

「それくらいなら別に良いですが、織斑姉妹が許可した場合のみ、ですからね」

「ちーちゃんとなっちゃんを説得しなきゃいけないのか……まあ、それも頑張ってみるよ！ じゃあいつくん、ちーちゃんとなっちゃんが許可してくれたら、報酬を貰うからね」

「それでモチベーションが上がるのでしたら、どうぞ」

「約束したからね！ 絶対だからね!!」

そう言い残して、東の気配はあつという間に消えてしまった。

「良いんですか、一夏さん。あんなこと言つて」

「織斑姉妹が許可するとも思えないし、東さんと織斑姉妹が交渉したとしても、俺には織斑姉妹に対して提示された物に対して、応える義務はありませんので」

「さすが一夏さん、そこまで考えているとは……」

一夏からすれば、事件が解決される事を優先しただけで、その過程でどのような交渉が行われていようが関係なのだ。ましてや、東が織斑姉妹にどのような報酬をちらつかせようが、別に応える必要は無いと割り切っているのだから、あのような要求も簡単に呑んだのだった。

清掃完了

自分が使っている衛星に他者が介入しようとしているのに気づいたマナカは、その相手を特定すべく必死になっていた。

「私が簡単に特定出来ないとなると、だいたい誰か分かるだけだね」

マナカは自分の能力を過信しているわけではない。だが、客観的に見ても自分はその技術力を有していると思えるほどの実績がある。その実績を元に分析すると、自己より高い技術力を有している人間は、本当に僅かしか存在しないと言う事を知っている。

「お兄ちゃんか、篠ノ之束か……お兄ちゃんが衛星に干渉してる様子は無いし、篠ノ之束で決まりかな」

一夏の事は二十四時間、三百六十五日観察しているので、もし衛星に干渉しているのが一夏だったら最初から分かるのだ。だがマナカが見てた限りでは、一夏が衛星に干渉しようとした形跡はない。だから消去法で束が犯人であると分かってはいるのだが、一

応答え合わせも兼ねて干渉している相手を特定しようとしているのだった。

「入るぞ」

「入ってから言わないでくれる？」

「別に良いだろ。独立派の残りは見つかったのか？」

「巧妙に逃げてるようで、なかなか監視衛星に引つ掛からないのよね」

「別に手段は無いのか？」

「人手が無いんだから、無理言わないでよ。こつちだつて色々と忙しいのよ」

「一夏の監視でか？」

モニターに映し出されているのは、ほぼ一夏だ。端つこのモニターの幾つかは本当に世界中の映像が流れているが、それ以外のモニターのすべては一夏が映し出されている。

「私の目的はお兄ちゃんを取り戻す事なんだから、お兄ちゃんを見るのは当然でしょ？ それ以上に大切な事なんてこの世に存在しないんだから」

「狂気すら感じるな……お前、一夏を手に入れてどうしたいんだ？」

「変な質問ね。一緒にお風呂に入ったり一緒に寝たり、一緒にお買い物に行ったり一緒にご飯食べたり、普通の兄妹がするようなことをしたいだけよ」

「前半二つは、普通の兄妹はしなと思うがな」

「世間一般の常識なんて、私には関係ないし、貴女だって気にしないでしょ？」

「まあ、そうかもしれないが……」

「暇なら、IS学園で暴れてきても良いわよ？　ただし、お兄ちゃんに怪我なんてさせた

ら……楽に殺してなんてあげないから」

「例え暇でもあの場所を一人で襲撃するなんて事はしないさ。あそこには織斑姉妹や小鳥遊碧など、名だたるIS操縦者がいるからな」

さすがの箒でも、猛者揃いのIS学園に単身乗り込むなどという自殺行為はしたくないのか、マナカの提案を断った。

「なんなら、この無人機たちを連れて行っても良いわよ」

「整備士がいらないからな。万が一の事があつたらサイレント・ゼフィルスを使えなくなってしまう」

「貴女でも一応考えてるのね」

てつきり脳筋だと思っていたマナカは、箒への評価を少し改める事にしたのだった。

IS学園の敷地内の掃除を初めて数日、ダリルとフォルテはようやく見えてきた終わりにホッと息を吐いた。

「長かったわね」

「そうですね。織斑姉妹が散らかしたものを片付けていたと思うと、なんだか悲しいですが、これで復学も出来ますし、この広い敷地内を掃除する事からも解放されるのかと思うと、なんだかホッとします」

「復学の手続きは、更識君がしてくれてるみたいだし、専用機も更識君のお陰で没収される事なく使い続ける事が出来るみたいだしね。更識君には頭が上がりなくなるわね」

「最初から更識君には頭が上がりたくないと思いますけどね……私とダリルの関係も黙認してくれてますし、普通ならこんな軽い罰で済むはずなのに、更識君が交渉してくれたからこの程度で済んだんですから」

「あの布仏が大人しく従うわけが分かるわよね、ほんと……さすがは更識の次期当主様よね」

最近ではお喋り程度では怒られなくなったので、ダリルもフォルテもお喋りをしながら掃除を進めている。もちろん、掃除の手が止まれば無人機から報告を受けて碧がこの場によつてくるのだが、最近では碧が監視に来ることも無くなり、ある程度は信頼されたのかも思っているのだった。

「復学したとしても、私たちは同級生から冷たい目で見られるんでしょうけどもね」

「そんなことは覚悟してるのではないのですか？　そもそも、私は同級生に知り合いないど殆どいなかったですし」

「まっ、それは私もただけどね」

ダリルもフォルテも、学校行事などをサボり気味だったので、同級生との間に溝が出来ていた。知り合いが少ないのが功を奏すのかは復学して見なければわからないが、親しかった友人が余所余所しくなる、という事は無いのでとりあえずは安心しているのだった。

「お疲れ様です。お二人のお陰で大分綺麗になりましたね」

「敷地内の掃除がこれほど大変だとは思わなかったわ」

「これで、私たちは復学出来るんですか？」

「とりあえずは、ですかね。もちろん、何か問題を起こしたらさすがに庇えませんが、そのつもりで」

「分かっているわよ」

「ああ、部屋はそのまま結構ですし、あまり度が過ぎなければ文句もつけませんので」
「更識君は私たちの行為を覗き見したいのかしら？」

ダリルの意地悪な質問にも、一夏は素面で答える。

「部屋の監視なんてしませんよ。それとも、監視されたいのですか？」

「ううん、そんな訳ないわよ」

こうやって冗談を言い合えるようになったのも、自分たちが反省していると判断されたからだろうと、ダリルは思っていた。

こうして学園敷地内の掃除を終えたダリルとフォルテは、恩赦として復学が認められたのだった。

アメリカの不正記録

ダリルとフォルテが清掃作業から解放されたと知ったオータムは、とりあえず自由を得た二人に声を掛けた。

「良かったな」

「ええ。これであの地獄のゴミ拾いから解放されるわ」

「そっちかよ……これで復学出来るんだろ？ お前たちは学生だもんな、まだまだやり直せるだろ」

「そんなこと言っても、卒業後は更識君にこき使われるのが目に見えてるんだけどね」

進路を選ぶ自由など無いと、ダリルもフォルテも自覚している。だが卒業後に更識に就職など、他の人間から見れば羨ましい事この上ない進路だった。

「普通なら更識企業に就職なんて、バラ色の人生が待ってるはずんだけどね」

「危険地域の調査とか、そんなことばっかやらされるんだろうしな。まあ、自業自得だと諦めるんだな」

「貴女からそんな言葉が出て来るとはね……まあ、実際自業自得だから仕方ないんだけ

ど」

「オレたちは新武装のテストなどの相手だろうな……外に出られねえかもしれないと思うと、今からストレスが溜まってくるぜ」

「貴女たちの戦闘技術があれば、候補生たちの訓練相手とかも出来るんじゃないの？」

実際今も、放課後などを使いスコールとオータムは代表候補生の訓練相手を務めている。この間の対織斑姉妹戦から、更識所属以外の候補生たちも相手にすることになったのだった。

「私たちも織斑姉妹に勝てないって分かったからだ、一夏は言っていたけどね」

「てか、あの人外に勝てるヤツなんているのかよ？」

「同じ人外なら、あるいは……って感じよね」

「更識君がお説教とかしてると噂は聞きますけどね」

フォルテの何気ない一言に、オータムは腹を抱えて笑い出した。

「あの人外共、一夏に怒られてるのかよ。おもしろー」

「私たちが掃除しなきゃいけなくなつた原因も、織斑姉妹だしね」

「織斑家の女は家事無能なのよ、Mも織斑マナカも、きつとそうでしょうしね」

「つまり、更識君がいなければ、織斑姉妹はまともにも成長出来てたかどうかも分からないのね」

「今がまともだとは思わねえけどな」

オータムの言葉に、スコールもダリルも笑いながら頷いて同意したのだった。

復学の手続きを全て済ませ、一夏は生徒会室で一息ついていた。

「お疲れ様です」

「確かに疲れた……」

「アメリカ政府はしつこかったですからね」

ダリルとフォルテの復学の手続きの際、ギリシャ政府はすぐにフォルテの専用機の所有権を放棄し、更識に譲渡する事を認めてくれた。それも当然の反応で、ギリシャは既に更識製の専用機を持った新たな代表が誕生しているのだ。

だが、アメリカ政府はそうはいかない。ただでさえ亡国機業に嵌められて世界的にマズい状況なのだから、戦力は少しでも多く欲しい。そんな時にダリルの専用機の所有権を放棄してほしいと言われて、はいそうですかで済むはずがない。

「いくらゴネようが、こちらにはいくらでもアメリカ政府の不正データがあるからな。それをちらつかせれば大人しくなるしかなかったようだが」

「何処から手に入れたんですか？」

「亡国機業穏健派が持っていたデータファイルをハッキングしたら、こんなものが出てきただけだ。意図して手に入れたわけではない」

データファイルを覗き込んだ美紀は、そのあまりにも酷い不正に嫌悪感を示した。

「政治資金の不正使用に罪もない人たちから土地を巻き上げ、その土地を使ったマネーロンダリング、ＩＳデータの改竄……ナターシャさんの殺害計画まであるんですか!？」
「これでも氷山の一角だから……全て片付いたらアメリカ政府を叩き潰す余裕も出て来るかもしれない。その時は派手にやってやるか」

「ティナさんも亡命の準備をしてるようですし、そうならばアメリカに知り合いはいなくなりますから、私たちもお手伝いしますよ」

自分の発言が過激になっていると、美紀は重々自覚している。だが、それくらいアメリカ政府の事を許すことが出来ないと思っっているのだ。

「まあ、今は目の前の敵に集中しないと」

「亡国機業過激派、織斑マナカ……」

「東さんでも足取りがつかめない程の実力者、篠ノ之箒から足がつかないかと期待してたんだが……上手く立ち回ってるようだしな」

「穏健派メンバーを殺害したのは、篠ノ之箒のサイレント・ゼファイルスで間違いなさそうですし、先に残りの穏健派メンバーを探し出す事が出来れば、篠ノ之箒を捕まえる餌に

出来るかもしれない」

「餌ねえ……殺させるのは避けたいが、確かに有効な手段だよな」

暗部の人間として、人の命を軽んじてるわけではない。だが、犯罪組織の人間の命を、他の人の命と同列視するほど、一夏たちは慈悲深くなかった。

「これだけ殺めたんですから、篠ノ之箒は更識でも救いようがないですね」

「アイツも、更識に関わるのは御免だろうし、これで良かったのかもしれない……現実世界から決別し、何処かの独房で最後を待つ」

「というか、あの人は反省するのでしょうか？」

「……分かん」

箒の性格を分析し、恐らくは反省しないだろうと結論付けて、一夏と美紀は生徒会室から部屋へと戻るべく、腰を上げて生徒会室を後にしたのだった。

好奇の目

復学初日、ダリルは特に問題なく午前中を過ごしていた。

「何で貴女がクラスメイトになってるのかしら？」

「一応復学は認められましたが、全面的に信用されているわけではないと理解してはまずいですよね？ 私は貴女の監視として一夏さんに任命されました。そして、私がクラスを動くわけにはいかないのです、貴女が私のクラスに再編入させられたわけです」

「よりにもよって、貴女が私の監視とはね……いつそのこと一年からやり直しで、更識君にでも監視されたかったわよ」

「一夏さんに何かしようとするれば、我々更識関係者と、織斑姉妹が黙っていませんよ」

かなり本気目の目でダリルを睨む虚に対して、ダリルは何処かふざけてるような雰囲気
で答えた。

「怖い怖い……せつかく自由になれたっていうのに、好き好んで面倒事なんて起こさな
いわよ」

「そうだと良いのですがね」

「せっかく専用機の所有権まで認めさせてくれたつていうのに、その恩を仇で返すほど落ちぶれてはないわよ」

アメリカ相手に交渉する事が、どれほど大変かがある程度理解しているダリルは、一夏の苦労を無駄にはしないと宣言し席へ戻っていった。

一方、こちらにも復学初日の午前を過ごしていたフォルテは、クラスメイトからの視線に耐えられなくなってきた。

「やっぱり注目されてるわね」

「仕方ないですよ……私は一度、亡国機業に与したんですから」

「うーん……それだけで注目されてるわけじゃなさそうだけどね」

「？ それ以外に何が……」

「ほら、前はフォルテちゃんとダリル先輩との関係は公になってなかったけど、今回の騒動で知られちゃったからかな」

刀奈の言葉の意味を理解するのに時間が掛かったが、言葉の意味が自分の中に浸透していくのと同時に、フォルテは羞恥に顔を染め上げた。

「つまり……私とダリルとの関係がバレたから、これだけ注目を集めているの?」

「たぶんね。まあ、そのうち飽きるでしょうから、しばらくは我慢する事ね」

刀奈としては、見られることになれているからこそそのアドバイスだったのだが、フォルテはそう簡単に割り切れなかった。

「何で、私たちの関係がバレちゃったの……」

「そりゃ、貴女が母国か恋人か迷った末に恋人を選んだからでしょ? 二人が学園からいなくなった際に、そう説明したんだから」

「何で言っちゃったの!?!」

「いきなり生徒が二人もいなくなったら、周りが不安になっちゃうからって……それに、一部では貴女たちの関係は噂されていたんだから、今更でしょ」

「そういう問題じゃないわよ」

これからも好奇の目曝されるのかと思うと、フォルテは復学した事を後悔したのだつた。

昼休みになり、ダリルとフォルテは虚と刀奈に連れられて、一年の食堂にやって来ていた。

「何で一年の食堂に？ 別に入っちゃいけないって決まりは無いんだろうけども」
「貴女たちは監視される立場なんですから、私たちに合わせてもらうのは当然です」
「それに、ここなら貴女たちに話しかけてこようなんて思う人はいないでしょうし」
「……もう、死にたい」

様々な反応を見せながらも、四人は一夏たちがいる区画にやって来た。

「何だか疲れてるようですが……大丈夫ですか？」

「私は別に大丈夫よ。でも、フォルテの疲労感は一瞬半端ないわね……何があつたのよ」

ダリルに問われ、フォルテは泣きそうな顔を上げて事情を説明した。

「なるほど、それでここに来る途中好奇の目を感じたのね」

「ダリル先輩は気にしてないみたいですね」

「周りがどう思おうが関係ないもの。それに、更識君だつて言つてたじゃない？」

「何か言いましたっけ？」

「『愛の形は人それぞれ』だつて」

「ああ、言いましたね。だつてその通りだと思つてますから」

一夏としては、行き過ぎなければダリルとフォルテが——もつと言えばスコールとオータムが何をしようか注意するつもりは無い。もちろん、物を破壊したりなどすれば、相応の罰は与えるつもりだが、それ以外は過干渉しようとは思っていないのだ。

「今は復学したてで目立ってるだけでしようけども、そのうち関心も薄れると思いますよ」

「私は、ダリルや更識君のように強くないのよ……好奇の目に曝されてるだけで、恥ずかしくて堪らないの」

「なら、全校集会で注意しましょうか？」

「そこまで大げさにされたくないかな……」

一夏や刀奈が全校集会で発言すれば、恐らく今のような目は向けられなくなる。だが、それは噂を事実だと認める事と同義であるとフォルテは思っているのだった。

「ならいつそ、公衆の面前でいちやついてみる？」

「さすがにそれは注意させてもらいます」

「女同士のスキンシップ程度よ？ 更識君は何を想像したのかしら？」

「貴女が言うスキンシップがどの程度かは知りませんが、堂々とされてはこちらも困りますので」

「少しくらい焦ってくれてもいいじゃないの……つまらないわね」

「あまり一夏さんにちよっかきを出すのでしたら、容赦しませんよ?」

一夏とダリルの間に割って入るように虚が会話に加わり、ダリルに鋭い視線を向ける。

「怖い怖い、本当に愛されてるわね、更識君は」

「俺にはもったいない人たちですけどね」

特に照れもせずと言う一夏に、ダリルは年上の余裕から笑みだけを返したのだった。

不意な来訪者

更識所属の特訓を手伝うという名目で、ダリルやフォルテ、そしてスコールとオータムもアリーナに姿を現していた。

「貴女が私が原因でギリシャ代表になった人？」

「サラ・ウエルキンよ、貴女がフォルテ・サファイアね？」

初対面の挨拶を済ませている横では、オータムが今か今かとうずうずしていた。

「今日は誰が相手なんだろうな」

「少し落ち着いたらどうなの？」

「お前だって、この中の誰と対戦するかを考えるとワクワクするんじゃないか？ お

前も立派な戦闘狂だもんな」

「私は貴女程じゃないわよ？ 部屋に監禁されて、暴れだすような事はしないもの」

スコールと言い争うダリルを見て、虚は盛大にため息を吐いた。

「私たちからしてみれば、貴女たちに大差ないと思いますか」

「ほら見ろ！」

「布仏……貴女、人を見る目が無いんじゃない？」

「これが正当な評価です。貴女が自分自身を客観的に見る事が出来ないんじゃないですか？」

ダリルにつられるようにヒートアップしていく虚の肩に、一夏が手を置いた。

「落ち着いてください。虚さんまで騒ぎ出したら収集付かないじゃないですか」

「ごめんなさい……つい、カッとなつてしまいました」

「怒られてやんの」

「オータムもダリル先輩も静かにしてくれませんか？ 黙れないというなら、大人しく部屋で謹慎しててくれるとありがたいのですが」

一夏に睨まれ、オータムもダリルも大人しくすることにした。実力では自分たちも負けてないと思うが、それ以上に一夏には権力があるのだ。自分たちを潰す程度、簡単にできる立場にある相手なので、二人は大人しく一夏に従ったのだった。

「とりあえず今日は、オータムVS簪・本音ペアがここで対戦。スコールは刀奈さんと第二アリーナで、ダリル先輩は虚さんと第三アリーナで、フォルテ先輩はサラ先輩と第四

アリーナ、残りは第五アリーナで好きなように対戦してくれ」

「おい、何でオレだけ一對二なんだよ！」

「そつちの方が面白いだろ？」

一夏の挑発的な笑みに、オータムは血が騒いだ。確かに相手が強く、多ければ多い程オータムの戦闘狂としての血は騒ぐ。それを知られていたのに驚いたが、オータムは猛烈な笑みを浮かべ一夏に応えた。

「やってやるよ！ その代わり、その小娘共が再起不能になつても知らねえからな」

「やり過ぎだと判断したら、お前の専用機は強制的に停まるように設定してあるから安心しろ。二人が再起不能になるまで痛めつける事は出来ないし、そんな事にはならないから安心しろ」

「けつ、なら恐怖を植え付けるまでよ、お前みたいにな」

獯猛な笑みを浮かべたまま一夏に接近するオータム。その表情に気圧され一夏は数歩後ろに下がった。

「それくらいにしておきなさい、オータム」

「なんだよスコール」

一夏を追い詰めて楽しんでいたオータムを止めたのは、意外な事にスコールだった。

「これ以上一夏を苛めると、あそこにいる小鳥遊碧に殺されるわよ」

「はっ、殺せるものなら殺して——」

「お望みとあらば、今すぐ殺して差し上げますが？」

「な、に……オレが反応出来なかっただと」

油断していたわけではないのに、オータムはあつという間に碧に接近を許し、背後を取られ、首筋にナイフを突きつけられていた。

「碧さん、そのくらいで」

「一夏さんがそう仰るのですたら」

一夏に命じられ、碧はオータムの首筋からナイフを離し、再び距離を取った。

「それじゃあ、各自移動して訓練を開始してくれ」

「一夏君は？ 何処にいるの？」

「俺は溜まつてる生徒会業務を片付けておきますので」

「すみません、お願いします」

虚が頭を下げ、それにつられるように刀奈も一夏に頭を下げた。一夏は気にしないでくださいとだけ告げ、生徒会室へと向かったのだった。

生徒会室で雑務を片付けていると、部屋に近づいてくる気配を感じ身を顰めた。

「誰でしょうね？」

「敵意は感じないから別に良いんだが……それより、美紀は誰が近づいて来ているか分かるか？」

「いえ……それよりも、一夏さんでも識別出来ないんですか？」

「細かくは無いと思うんだが……識別出来ないというより、偽りの気配を作りだして攪乱してるみたいだからな。本物を捕まえるのに少し時間が掛かる……まあ、こんな事するのはあの駄ウサギくらいだろうからな」

偽の気配を払いのけて本物を探していくと、一夏の顔は驚愕に染まった。

「どうかなさったのですか？」

「いや……駄ウサギじゃない」

「では、いったい誰が——」

「こんにちは、お兄ちゃん」

美紀の問いかけを邪魔するように、生徒会室に織斑マナカが入ってきた。

「お前、何故ここに……」

「おかしなことを聞くね、お兄ちゃん。妹が兄に会いに来るのは当然でしょ？ それに、

今なら邪魔者もいないし、思う存分——」

「一夏さんに何をするつもりですか！」

「——甘えられるもん！」

「……はい？」

護衛として美紀がマナカの前に立ちはだかるうとして、彼女の言い分に呆気にとられたのだった。

「本当ならお兄ちゃんを連れ帰って色々したいんだけど、今日は無人機も連れてきてないからそれは無理だもんね」

「……本当に甘えてますね」

一夏の膝の上で丸くなり、身体にすり寄る姿は、まるで猫だったと、美紀は後に語るのだった。

兄妹の会話内容

生徒会室に突如現れたマナカに、美紀はすぐさま臨戦態勢を取った。

「邪魔しないでくれる？ 思わず殺しちゃうから」

「っ！」

警戒していたはずなのに、あつという間に間合いを詰められ、喉に手刀を突き付けられ、美紀は悲鳴を呑み込んだのだった。

「マナカ」

「なーに、お兄ちゃん？」

先ほどまで殺気剥き出しだったマナカだったが、一夏に名前を呼ばれた途端、美紀に興味を失ったかのように視線を逸らせ、剥き出しだった殺気は何処かに霧散していったのだった。

「用があるのはこっちだろ。美紀に手は出すな」

「いやだなーお兄ちゃん。私は、お兄ちゃん以外に興味は無いよ。だから、邪魔さえしな

ければ手も出さないし、そもそも視界にすら捉えないから」

「そうか……美紀、悪いがマナカにお茶を——」

「お兄ちゃんが淹れて」

「……大人しくしてろよ」

今マナカから視線を背けるのは得策ではないと考え、美紀にお茶の用意を頼もうとしたのだが、マナカに遮られるように指名されてしまったので、一夏はマナカの分のお茶を用意したのだった。

「ありがとー」

敵対しているとは思えないぐらいリラックスしているマナカの姿に、一夏も美紀もペースを掴めずにいた。

「お兄ちゃん」

「何だ？」

「お兄ちゃんは、私を捕まえるために有象無象を鍛えてるみたいだけど、それ無駄だよ」

「どういう事だ」

「だって、私はお兄ちゃん以外に捕まるつもりは無いし、お兄ちゃん以外を生かしておく」

つもりもないから。だから、万が一お兄ちゃんが私が潜伏している場所を見つけ出して、あの有象無象たちと攻め込んできたとするならば、アイツらは次の瞬間には息していないってこと。お兄ちゃん以外を招き入れるつもりは無いし、お兄ちゃん以外に私のアジトに入らせるつもりは無い。織斑姉妹だろうが、篠ノ之東だろうが例外なく、近づいてきた瞬間に殺すから」

満面の笑みでそう告げるマナカに、一夏は鋭い視線を向ける。

「その目……凄くぞくぞくするよ、お兄ちゃん」

「君の体術はさつき見せてもらった。この場で君を取り押さえるのは無理だろうな」

「君って呼び方は好きじゃないな、ちゃんとマナカって呼んで」

「……それで、今日はその事を言いに来たのか」

警戒を保とうとすればするほど、マナカのペースに呑み込まれている気になり、一夏は一つ息を吐いてから問いかけた。

「べつにー。お兄ちゃんとお話がしたいから忍び込んできただけだよ。あの無人機たちも、元は私が造ったやつだから、動きを計算するのは簡単だったし」

「穏健派と言われている人間を消しているのはマナカか？」

「直接手は下してないよ。実行犯は篠ノ之箒。まあ、アイツに人を殺してるという概念は無いみたいだけどね」

「……………どういう事？」

思わず口を挿んだ美紀に、マナカは鋭い視線を向けたが、一夏が自分を睨みつけている事に気づき、美紀から視線を逸らした。

「仕方ないから答えるけど、篠ノ之箒にとつて、穏健派の連中を片付けるのは、ゴミを掃き捨てたのと同じ感覚みたいだよ。だから、罪悪感も無く、自分が罪を犯したという事も理解してない感じ」

「自分が正義だと思い込んでる、わけではなさそうだな」

「正義なんて、この世に存在しないって。自分に都合の良い事は正義、悪い事は悪だつて決めつけて、大衆を味方につけられれば、悪が正義面しても分からないんだから」

「辛辣だな……………だが、言いたい事は最もだと思う」

「表向きは慈善家、でも裏では人身売買を生業にしている悪人だっているんだから」

「それ、お前のパトロンじゃないのか？ 前にそんなことを聞いたことがある気がする」

一夏の言葉に、マナカは笑みを浮かべて頷く。

「お兄ちゃん、私の事知ってくれてたんだね。そうだよ、そういう奴らに餌をチラつかせて投資させて、使えるだけ使ったら消そうと思ってるんだ」

「それも、篠ノ之箒に始末させるつもりか？」

「別に、悪事を表社会にバラすだけで、そういう奴らは勝手に消えていくから」

「だが、マナカの存在を知っているんじゃないのか？」

「ボイスチェンジャーを使って、直接会う時は変装してるから、正体がこんな可愛い女の子だなんて思っていないよ」

自分で可愛いというな、というツツコミは一夏も美紀も入れなかった。入れても効果は無さそうだったし、今重要なのはそこではないからである。

「何か言いたそうだけど、まだ質問があるの？」

「いや……聞いたところで答えてはくれないだろうし、詮無い事を聞いても意味は無いからな」

「そう？　じゃあ、私帰るね」

「……本当にお喋りしに來ただけなんだな」

「今ここでお兄ちゃんを連れて帰る事なんて、造作もない事だよ。でもね、今は敵対関係じゃなく、ただの兄妹として会いに來たんだから、そんなことはしない」

「ただの兄妹だったとしたら、随分と物騒な会話内容だったかな」

「仕方ないよ。ただの兄妹であっても、普通の兄妹じゃないんだから」

「それもそうだな……」

自分たちが普通ではない、一夏はその事を痛い程理解している。常軌を逸している変態の姉や、自分以外どうでも良いとはつきりと断言する妹、そして自分も、普通ではないと理解している。

「それじゃあ、お茶、美味しかったよ、お兄ちゃん」

それだけ言い残して、マナカは姿を消したのだった。

訓練後

マナカの気配が完全に消えてから、一夏と美紀は大きく息を吐いた。

「やはりマナカ対策となると、無人機だけでは手に負えないな」

「それ以前に、あの威圧感に耐えられるだけの人が、この学園にいますかね？」

「とりあえずは織斑姉妹、後は碧さんか。美紀でも厳しいとなると、刀奈さんや虚さんでも厳しいと考えるべきだろうな……」

「五月七日先生は如何でしょう？」

「あの人は操縦技術は一流だが、気配察知やそつち方面は美紀より下だ。美紀がダメならあの人もダメだろう」

候補者をリストアップしていきながら、一夏は次第に顔色を曇らせていく。

「威圧感に耐えるトレーニングをするとして、誰がマナカに匹敵する威圧感を出せるかが問題だ……」

「それなら、一夏さんがすればいいと思いますが」

「俺が？」

意外感を隠し切れない反応を見せる一夏に、美紀は笑いながら頷いた。

「だって、一夏さんが織斑姉妹を怒っている時の威圧感、先ほどの織斑マナカに十分匹敵するものがありますし」

「そうはいつてもだな……常に怒ってる事なんて出来ないし、理由もなく怒ることも出来ないぞ、俺は」

「なら、怒られる事がありそうな人をトレーニンング対象にすればいいのではないですか？　すぐ思いつくとすれば、本音か刀奈お姉ちゃんくらいですが」

「本音は兎も角として、刀奈さんを怒る理由は俺にないが」

「生徒会業務をサボったり、部屋に忍び込んでいたり、怒るには十分すぎる理由があると思いますが」

美紀の指摘に、一夏は腕を組み考え込んだ。

「生身で威圧感に耐えるのと、ISを展開している時に耐えるのでは、またちよつと違うしな……癪ではあるが織斑姉妹に威圧感を出してもらおう事も考えるか」

「とんでもない報酬を要求してきそうですが」

「その時はまた、カミナリを落とせばいいだろ。あの人たちこそ、怒られる理由に事欠か

ないからな」

一夏の言い分に、美紀は確かにと頷いて同意する。この前ゴミを片付けなかったことでカミナリを落とされたばかりの二人だが、探せばまだまだ怒られる理由はありそうだと美紀も感じたのだった。

「今日実際に感じられてよかったと考えるべきか、簡単に侵入されたことを嘆くべきか……」

「前者で行きましょう。あまりネガティブに事を考えるのはよくないですし」
「あまりポジティブでもよくないが、確かにその通りだな」

あまり納得はしていないようだったが、一夏は美紀の提案通りポジティブに物事を考える事にしたのだった。

特訓を終えた刀奈たちは、へろへろになりながら食堂へ足を進めていた。

「スコール、やつぱり強いわね」

「貴女こそ。さすがは国家代表ね」

「一夏君が貴女を相手に選んだ時はどうしようかと思つてたけど、逃げ出さないで正解だったわ」

「そんなこと考えていたのですか、お嬢様」

「う、虚ちゃん……別にサボろうとは考えてないわよ」

「フォルテと話していた最中に背後に現れた虚に、刀奈は狼狽して見せる。

「いやー、さすがは布仏ね。まさか私が苦戦するとは」

「よく言いますよ。攻撃の殆どをギリギリで躲す、などという遊びをしていた人が」

「別に遊んでたわけじゃないわよ。ただ、何処まで本気を引き出せるかと思っただけで。そっちこそ、私が避けるのを分かってて、あえて攻撃してたんじゃ？ 貴女が本

気だったら、私は今頃医務室のお世話になってたわよ」

「さて、それはどうでしょうね」

虚とダリルの間に流れる不穏な空気に、刀奈もスコールも呆れていた。性格が正反対だからこそ、この二人は互いを嫌っているのだろうと理解できてしまうからこそ、何も言えないのだった。

「ギリシャ代表候補生の実力、確かに感じられたわ」

「私も、新しい代表の実力を知れてよかったです」

サラとフォルテは友好的な空気を醸し出しているが、その奥のオータムは好戦的な空気を醸し出したままだった。

「さすがはあの織斑姉妹の後釜の片割れだと言われているだけの事はあるぜ。オレがやり

損ねるとは」

「本気で殺そうとしてたでしょ」

「危なかつたよ」

簪と本音のペアを相手にしていたオータムは、実に獰猛な笑みを浮かべていた。

「練習とは言え死合いなんだから当然だろ？」

「……なんだか別の変換がされていそうなんだけど」

オータムが思い浮かべた文字を正確に受け取ったのか、簪は疲れた笑みを浮かべた。

「次は正式なペアとやり合いたいものだけ」

「美紀ちゃんはいっちゃんの護衛で忙しいから、しばらくは無理だと思うよ」

「護衛っていつても、この学園にアイツを襲うヤツなんかいねえだろ」

「一人で行動させるのも心配だし、貴女たちのような人がまだいるかもしれないから」

簪の真剣な表情に、オータムは冷やかかそうと思ったのを反省した。

「随分と愛されてるんだな、アイツ」

「当然だよ。いっちゃんは私たちだけじゃなく、他の人たちからも愛される人だからね

「それだけの事をしてくれてるし、一夏を失う事は、私たちにとって恐怖そのものだから」

「そうかよ」

一夏が要であることはオータムも理解していたが、ここまで想われているとはさすがに考えてはいなかった。そのせいで、何時もの威圧感も無く、あっさりとその答えるだけで会話は終了してしまったのだった。

緊張感の無さ

一夏からマナカが侵入してきたという事実を聞かされたのは、刀奈たちが夕食を済ませお風呂で寛いで一夏の部屋に突撃した時だった。

「それで、なにもされなかったの!？」

「普通にお茶を飲みながらお喋りしてただけですので」

現在一夏は、部屋付きのシャワールームで一日の汚れを落としている。なので刀奈の問いかけには、マナカが尋ねてきた時すぐ側にいた美紀が答えている。

「いっちゃん淹れてくれたお茶は美味しいからね。マナマナが飲みたくなった気持ちもわかるよ」

「マナマナって……もう仇名を付けたんですか?」

「マドマドの妹さんなら、私にとってお友達だからね」

「本音、一応彼女は敵対組織のリーダーと言うことになってるんだけど」

「かんちゃんも難しく考え過ぎだと思っただけだよ」

「貴女が樂觀視し過ぎなのです」

虚に怒られ、本音は反省の色が見えない返事と態度で応えた。

「それで、美紀ちゃんから見て織斑マナカってどう？」

「全く気配を感じさせないでIS学園に侵入し、目にも留まらぬ速さで間合いを詰めてきましたので、警戒度は最大ですね。織斑姉妹でも対応出来るかどうか……」

「美紀がそう感じたのなら、間違いないだろうね」

簪が不安そうな顔でそう呟くと、本音は何も考えていないような笑みで簪を励ます。

「いっちーやマドマドの妹さんなんだし、話せば分かってくれると思うよ？」

「話してわかるのなら、最初からこんなことで頭を悩ませたりしないわよ。そもそも、向こうは一夏以外興味が無いんだから、私たちがいくら言葉を並べたところで無意味なの。分かった？」

「ほえく……かんちゃんに難しい事言ってるよ……」

「何も難しくなかったと思います……」

頭から湯気が出そうな勢いで混乱している本音を見て、マドカが困ったように呟いた。

「風呂から出てみれば、随分と賑やかですね」

「お風呂つて、一夏君はシャワーだけでしょ」

「浴びるだけマシだと思ってください。本当はシャワーだけでも嫌なんですが」

「あまり汗を掻かれていないとはいえ、ちゃんと毎日シャワーは浴びてください」

美紀に注意され、一夏は肩を竦めてみせた。

「それで一夏君」

「なんでしよう」

「一夏君は織斑マナカについてどう思ってるの？」

「どうと言われましても……」

刀奈の問いかけに、一夏は困ったように頬を掻いた。敵としてのマナカなのか、血縁としてなのか、捉え方が色々あるので、今の聞き方では答えようがなかったのだ。

「じゃあまず、家族としての彼女の事は？ どう思ってる」

「記憶が無いので、どう思ってるかと聞かれても困りますが、彼女は織斑千夏にそっくりな見た目です。間違はなく血縁ではある、という認識ですね」

「じゃあ敵としては？ 亡国機業・過激派のリーダーとしての彼女の事は」

「間違ひなく強敵ですね。今日見た限り、身体能力は刀奈さんたちが言う人外レベル、つまり俺や織斑姉妹、篠ノ之東に匹敵……いや、それ以上でしょう」

唯一自分の目で見ていた美紀は驚かなかったが、刀奈たちは思わず息を呑んでしまった。いや、簪だけは息ではなく悲鳴を呑み込んだような表情をしていた。

「一夏たち以上の身体能力……そんなのどうやって対応すればいいの」

「問題は身体能力だけじゃないんだが」

「他にも問題が？」

表情の晴れない一夏を見て、刀奈も不安を隠せずにはいた。だが聞かないことには何も対策を練らないと理解しているので、気丈に振る舞って見せている。

「美紀は直接見て、感じたから分かっていると思うが、あの威圧感^がは並の相手では失神するだろう」

「そうですね。怒った一夏さんと同等、下手をするとそれ以上の威圧感をまだ隠し持っているかもしれませんからね」

「っ！」

今度こそ、簪は悲鳴を呑み込んだのだろう。一夏の威圧感に遠巻きに感じたことがあるのだが、あれだけの距離があっても恐ろしさは感じ取れたのだ。それを間近で感じたのなら、自分は耐えることが出来るのか、簪はそれが不安だったのだ。

「織斑家の子供たちの威圧感ってどうなってるのよ……」

「私はそんなもの持ち合わせていませんが……」

「マドカは良いんだ。そんなもの無くても何も問題ない」

一人ハブられたような気持ちになったのか、マドカがしょんぼりとした表情を見せた。すかさず一夏がフォローを入れたので、マドカが本格的に落ち込むことは無かった。

「威圧感云々は置いておくにしても、ISを使わずにあの動きだから……もしかしたら、篠ノ之束のように細胞レベルで人外なのかもしれない」

「細胞レベルで……人外……篠ノ之博士ってそんなにすごい人なの？」

「実態はただの変態だが、頭脳や身体能力は普通の人間では太刀打ち出来ないレベルですよ。本当に、実態を無視すれば尊敬されて当然の人なんですよ……」

その実態を知っている全員としては、一夏の気持ちに痛い程理解出来た。

「とりあえず、碧さんには警戒を強めてもらっているので、当分マナカが忍び込んでくる

ことは無いと思います。ですが、油断などしないようにしてください。特に刀奈さんと本音」

「しないわよ」

「さすがの私でも、いっちに匹敵する相手に油断なんてしないよ」

イマイチ緊張感のない返事に、一夏は不安そうな目を向けたが、それ以上何も言わなかった。とりあえず今は、本音たちを信じるしか方法が無かったのも、何も言わなかった原因なのかもしれない。

改善点

一通り連絡事項を伝え終えた一夏は、監視モニターに視線を向け周囲の警戒を強めた。

「一夏さん、無人機の警戒ですが、普通の相手なら問題なさそうですが、そうですね……美紀ちゃんくらいの実力があれば、容易に抜けられそうです」

「そうでしょうね。碧さんも、スタート地からこの部屋まで、一度も無人機に見つかることなくやって来ましたし」

「今の状態のプログラムなら、三十通りくらいの抜け道がありますから」
「ほえ……この前私もやったけど、あっさり見つかっちゃったのに」

本音の言葉に、簪が呆れた顔でツツコミを入れた。

「本音と碧さんを同レベルに考えちゃ駄目でしょ……碧さんは美紀の師匠でもあるんだから、美紀のレベルでも十分なら、碧さんなら楽勝だよ」

「気配を消すのは、私より美紀ちゃんの方が上だしね」

「お姉ちゃん、隠れる気が無いからね……」

刀奈の言葉にも、簪は本音に向けたのと同じような顔でツツコミを入れた。実際刀奈も気配遮断は常人以上の練度はあるのだが、更識所属の中では本音の次に下手と言われている。その理由は、簪が言ったように隠れる気があまりないのだ。

「だって、私の居場所は常に一夏君に知ってもらいたいじゃない？」

「だからってアピールが露骨なんだよ、お姉ちゃんは……」

「お嬢様はお風呂やトイレの時ほど、一夏さんに気配を掴んでもらおうとしてますからね」

「そ、そんな事ないもん！　いつもと変わらないもん！」

何だか脱線し始めた話題に、一夏はため息を吐いた。

「碧さんから見て、改善点などはありますか？」

「単純に数を増やせばいい、というわけではありませんし、プログラミングは私の専門外ですから大したこと言えません、やはり有人機も二十四時間欲しいですね」

「やはりそうですか……ですが、そこに割ける人員は……」

手練れである人間は、教員の仕事もある。それに加えて二十四時間体制の監視のロー

テーションを組むのは、さすがに難しい。かといって監視の任を優先する代わりに、教職の任を疎かにされては育つものも育たない。その事は一夏たちの頭痛の種であったのだ。

「スコールやオータムはどうなのですか？ あの人なら基本的に暇ですし、監視の任くらいなら十分全う出来ると思うのですが」

「それはそうなんだが、あの二人に関してはまだ自由に動かれては困るんだよな……ダリル先輩やフォルテ先輩とは違い、各国との交渉も難航してるし」

「彼女たちは色々やって来てますからね……その全てを更識で処断するのは難しいですし、遺恨もありそうですからね」

「特にイギリスは、サイレント・ゼフィルスを強奪されたことで、オータムに強い遺憾の意を示してますし、出来る事なら自分たちの手で処断したいと言ってきてるからね」

「そうでしたか……やはり私程度の考えでは、兄さまの手助けなど出来ないのですね……」

しよんぼりとうなだれるマドカの頭を、一夏が優しく撫でる。

「そう気にかけることは無い。マドカは精一杯俺の手伝いをしようとしてくれた、その気

持ちだけで十分だよ。誰かみたいに、人の仕事を増やす事もしないしな」

そういうしながら、一夏は寮長室へと視線を向けていた。

「姉さまたちも、頑張ればきつとちゃんと生活できますって」

「マドカ、思ってもない事を言うなら、せめて表情は作れ」

「ごめんなさい……」

顔が引きつっていたのが自分でも分かっていたので、マドカは素直に頭を下げた。それが一夏に対する謝罪なのか、千冬と千夏に向けての謝罪なのかは、この部屋にいる誰もが判断しかねたのだった。

「更識から人を呼びましょうか？ 私の部隊でしたら、ある程度融通は利きますし、楯無様もこの事態は楽観視するべきではないと判断してくれるでしょうし」

「いくら更識の人間でも、IS学園には容易に派遣出来ませんよ。ここには更識の機密データ以外にも、色々と外部に漏らせない情報がありますし」

「あれ？ でもそのほとんどは一夏君、閲覧してたよね？」

「さて、夢でも見てたんじゃないですか」

ふと思い出したように零した刀奈の言葉に、一夏は何時通りの表情で答える。学園のデータ管理も任されていた織斑姉妹に、その権限を押し付けられたなど、さすがの一夏でも言えなかったのだ。

「おかしいわね……絶対見てた気がするんだけど……」

「お姉ちゃん、もしかして歩きながら寝てたんじやないの?」

「お嬢様なら、それも十分ありえそうですね」

「無いわよ! さすがに歩きながら寝るなんてこと、出来る人間は……」

言葉の途中で、何かに気付いたのか、刀奈は不意に視線をとある人物に向ける。

「ほえ?」

「いたわね、ここに……」

「本音は確かに歩きながら寝てたよね……」

「我が妹ながら、何故こうもぐうたらに育ってしまったのかと……」

「それはね、私の周りのみんなが優秀だったからだと思うよ? 私が何かをしなく

ても、誰かがやってくれるから、私はのんびり出来るんだよ」

本音の最もな言い草に、一夏を含む全員が納得してしまった。だが、一夏の思惑通り、

学園の機密データという微妙な会話内容から話題を逸らすことに成功したので、一夏は内心ホツとしていたのだった。

等価交換

消灯時間になり、美紀以外が部屋からいなくなったのにも関わらず、一夏は無人情の巡回ルートの改善と、有人機をどう調達するかを神経を集中させていた。

「一夏さん、消灯時間ですよ」

「ああ……もう少ししたら灯りを消すから、もうしばらく待ってくれ」

「ですが……最近無理し過ぎではありませんか？ 今日だって、織斑マナカと対峙したんですし、知らず知らずの内に神経を摩耗させているはずですよ」

「大丈夫だ。それに、あまり悠長に構えてられる状況でもないしな。俺一人の神経で補えるなら、いくらでも摩耗するさ」

「ですが……」

確かに一夏の言う通り、あまり悠長に事を構えてられる状況ではないと言う事を、マナカに知らしめられたばかりなのだ。一夏が学園の安全の為に神経を摩耗させるのも仕方ないと言う事も、美紀には痛い程分かる。なぜなら、マナカが学園にやってきたのを知っているからだ。

「こんな時、手伝えることがあればいいのですが」

「プログラミング作業は簪や虚さんの領分だからな。美紀は気にする必要は無い」

「そうかもしれないませんが、護衛以外で一夏さんの役に立てていないのが歯がゆいんです」

「そうか？ 一学期は大分世話になったと思うんだが」

まだ簪が学園にいた時、一日一回は一夏に迫ってくる簪の所為で、一夏はほぼ毎日トラウマに怯えていた。その一夏の心を癒し、安心させていたのが美紀なのだ。一夏にとつて、それはかなり助かっていた事であり、感謝してもしきれないほどの恩を感じている。

「ですが、敵となった篠ノ之さんに対抗する術を、私は見出せません……一人で戦って勝てると言い切れるほど、自分の実力を過信していませんし、篠ノ之さんも学園にいた頃より大分成長しているでしょうし……」

「それでも、俺は美紀の方が強いと思うがな。自分の実力を過信せず、相手を舐める事無く戦いに備えている時点で、篠ノ之とは比べ物にならないくらいの実力だと思う」

「そうでしょうか……篠ノ之博士から頂いた写真を解析して、穏健派の方たちを殺したのは篠ノ之さんであると判明しました。人を殺めたというのに、顔色一つ変えずにいられるあの人の心が、私は怖いと感じました」

「それが普通だろう。普通の人は、人を殺めるなんてことはしてはいけなさと知っているし、やってしまった時には動揺だつてするだろう。だが、篠ノ之は人としての感情が欠落したのか、人を殺めたとは思っていないようだ」

一夏の方でも写真の解析は進めていたので、報告を受けなくても犯人が筈であることは知っていた。そして一夏は更なる解析を進めており、殺める瞬間の写真も手に入れた。

「映像を切り取った写真だから、口の動きを解析するのに手間取ったが、命乞いをする穏健派の人間を、篠ノ之は一切の躊躇なく殺している。まるで集つて来る羽虫を払うかのように、一切の躊躇いなく」

「そうなんですか？ その画像を見る事は出来ますか？」

「止めておいた方が良いでしょう。あまりにもリアルで、そしてあまりにも残酷な画像だ。女子が見て良いものではない」

「私は、女である前に暗部更識の人間です」

「俺からすれば、暗部の人間である前に女子なんだよ」

そう言って一夏は、開いていた端末を閉じ、灯りを消した。

「どうかしたんですか？」

「交換条件だよ。俺は美紀に画像を見せたくない。だが美紀は見たがっている。だから、美紀の希望を断る代わりに、俺は我を通す事を止める。大人しく休むことにするよ」

「全然等価交換ではないと思うんですが……」

「なら、他に何を望むというんだ？」

一夏は、自分の方が価値が低いと考えているようだったが、美紀からすれば、自分の方が低いと感じていた。自分が画像を見ない分には、何の問題もないが、一夏が対策を練ることを止め、休むことを選べば、それだけ危険に曝される時間が長くなると言う事なのだ。

「……何でもいいんですか？」

「俺が出来る事なら、叶えよう」

だが、美紀はせっかくのチャンスを不意にするのをためらった。せっかく一夏が望みを叶えてくれると言ってくれているのに、それを無為に返すのはもったいないと。

「なら、久しぶりに一緒にベッドで寝てください」

「む……」

「望み、叶えてくれるんですよね？」

既に言質は取っており、一夏にしか出来ないことを要求する。何も男女の営みをしようと言っているわけでもないのだから、叶える事は実に簡単である。

「出来れば他の事に……」

「更識家の次期当主ともあろう御方が、前言を撤回するのですか？」

「むう……」

「何もしませんし、誰にも言いません」

「刀奈さんならともかく、美紀がそういうなら信じるが……」

「一夏さんの中で、刀奈お姉ちゃんはどんな存在なんですか」

「あの人の事だから、目覚めたら下着姿、とかありえそうだからな」

一夏が言った想像に、美紀は納得がなくなってしまった。

「確かに、刀奈お姉ちゃんならやりかねませんね」

「……本当に一緒に寝たいのか？」

「はい」

一点の曇りもない笑顔で頷く美紀に、一夏は困り果てた表情を浮かべた。だが、覚悟を決めたのか、大人しく美紀のベッドを指差した。

「美紀のベッドか？ それとも俺の？」

「さすがに私が一夏さんのベッドに入るのは緊張しますので、私のにしましょう」

「何が違うのか、俺にはさっぱりなんだが」

「いいんですよ、一夏さんはそれで」

一夏を自分のベッドに招き入れ、狭いスペースを無駄にしないようにくつついて寝たお陰で、二人は少し寝苦しい思いをしたのだが、それ以上に美紀は幸せを感じた一夜だったのだった。

姉の奇行

一夏に甘えた事で、マナカのやる気はさらに高まっていた。今までさほど本気で調査していなかった穏健派のメンバー探しにもやる気を出し、あつという間に見つけ出したのだった。

「これで、更にお兄ちゃんを手に入れる瞬間が近づく……待っててね、お兄ちゃん。お兄ちゃんを手に入れたら、毎日のように甘えてあげるから」

マナカが夢想の世界に旅立っている間に、箒がマナカの部屋にやってきた。

「呼ばれたから来たが、何かあったのか？」

「……はっ！ 何故お前がこの部屋にいる」

「いやだから……呼ばれたから来たんだが」

箒の呆れたような言い方で正気に戻ったマナカは、穏健派のメンバーが映った映像を箒に見せる。

「コイツが逃げたメンバーの一人だ。こいつを追跡した結果、逃げ出したメンバーの内、

ほとんどがこの地域に潜伏してる事が分かった」

「ほとんど？ 全員ではないのか？」

「二人くらい見当たらないのよね。まあ、そつちは引き続き探しとくから、あんたはこいつらを始末してきてちょうだい」

「ふふ、ゴミ掃除なら任せろ」

「(さすがは『箒』と名付けられただけあるのかしらね。ゴミ掃除とはなかなかの皮肉じゃない)」

「む？」

自分を見つめながら黙りこくったマナカに、箒は首を傾げる。

「私の顔に何かついてるのか？」

「鼻と目と口が付いてるわよ」

「何っ!? ……それは普通ではないのか？」

「ええ、だから問題はないわよ。それじゃあ、残りの二人はこつちで探しておくから、貴女は貴女の任務を全うしなさい」

「……イマイチ釈然としないが、こちらは任せてもらおうか」

「随分と頼もしい事を言ってくれるわね。貴女を拾ってよかったと思えるわよ」

マナカの皮肉に気づくことなく、箒は位置情報とメンバーの顔写真が保存されている端末を持って飛び立っていったのだった。

「頭は相変わらずだけど、ゴミ掃除にはうってつけよね、あのおバカさんは」

そう呟いて、マナカは残りのメンバー探しと並行して、一夏の盗撮を再開したのだった。

「マナカが侵入してきたことを、何時までも黙っているわけにはいかないので、一夏は放課後、簪を伴って寮長室へやって来ていた。」

「いや、違うんだ一夏」

「わたしたちも片付けようとしたんだが、何故か余計に散らかってしまっただけで……どうする、一夏？」

足の踏み場もない寮長室に入った途端、織斑姉妹の言い訳が始まったので、簪は判断を一夏に仰いだ。

「とりあえず、このゴミ屋敷を片付けないことには、俺と簪の精神衛生上よろしくないからな……駄姉たちもしつかりと動いてもらうのでそのつもりで」

「だから駄姉というのは……」

「呼ばれたくなければ、呼ばれないように努めてください」

「むう……」

本気ではないが、怒っている一夏を逆撫でするのは避けるべきだと、千冬も千夏も重々承知している。今は呼ばれ方をとやかく言うよりも、これ以上一夏を怒らせないようにするべきだとアイコンタクトで意思疎通をして、渋々ながら部屋の掃除を開始したのだった。

「……何ですか、この布切れは」

「ああ、それはパンツだ。洗濯しようと思つてそこに置いておいたのだが」

「確かその辺りにはブラもあった気がするんだが」

その言葉に、簪は慌てて一夏の手からパンツを取り上げ、その場所から移動させた。

「どうかしたのか、簪？」

「気にならないの？」

「何が？」

「いやだつて……女性が使用した下着だよ？」

「駄姉たちの下着なんて、何度か洗濯したことあるし、山田先生から泣き付かれて部屋の片付けをした時に何枚か捨てたから問題ない」

まるで汚いものでも見るような目で、千冬と千夏の下着を見てため息を吐く一夏。それを見て少し安心した簪ではあったが、二人のブラの大きさを見て、思わず自分の胸に視線を落としてしまった。

「なんだ、更識妹」

「わたしたちの胸がどうかしたのか？」

「神様は理不尽だ……」

「「？」」

簪の零した愚痴に、一夏と織斑姉妹はそろって首を傾げた。

掃除を済ませ、溜まっていた洗濯物を洗濯機に突っ込んでから、一夏は寮長室を訪ねた本来の理由を告げた。

「実はこの前、織斑マナカが学園内に侵入してきた」

「なに、マナカが!？」

「だが一夏、わたしたちはマナカの気配を感じなかったが」

「偽の気配を纏っていたからな。俺も気づかなかったさ」

「ではなぜ、一夏はマナカが忍び込んできたことを知っているんだ？」

当然ともいえる千冬の疑問に、一夏は淡々と真実を告げる。

「マナカが忍び込んできた理由は、俺に会いたいという事だったからな」

「それだけか？」

「良く分からないが、散々甘えて行つて満足したのか、特に何もせずに帰つていった」

「甘え、だど？」

「ああ。一緒にお茶飲んだり、お喋りしたりと、それだけだ」

一夏とすれば、特に何かをされたわけではないし、学園の機密データを盗みに来た様子もなかったたので報告だけのつもりだったのだが、織斑姉妹にとっては、ただの報告だけでは済まなかったようだ。

「なんたるうらやまけしからんヤツだ」

「一夏と一緒に喋りなど、わたしたちですら滅多に出来ないというのに」

「なあ簪、この人たちは大丈夫なのか？」

「私に聞かないですよ。一夏のお姉さんなんですよ？」

「なら簪は、刀奈さんの事を何でも分かるのか？」

「……………」

一夏のカウンターに、簪は黙ってしまふ。確かに実姉とはいえ、何でも分かるわけではないと理解した簪は、織斑姉妹の奇行をただただ眺めるしか出来なかったのだった。

急展開

寮長室で説教をしているタイミングで、一夏の携帯が鳴った。ちらりと視線を向け、興味がないのかそのままポケットにしまい説教を再開しようとして、この部屋に近づいてくる気配を感じたため息を吐いた。

「どうして無視するかな!？」

「今忙しいんです。貴女のくだらないことに付き合ってる暇は——」

「穏健派の残りメンバーのところに、箒ちゃんが出撃した。多分また虐殺するんだと思う」

その言葉を聞いた一夏の反応は迅速だった。

「簪、すぐに動ける者は？」

「本家にはいません。学園になら、一夏かお姉ちゃんがすぐに動けるでしょ？ 仕事は、

私たちが引き受けるから」

「すまない。千冬先生、千夏先生」

「分かった。更識姉、及び更識弟のIS使用許可を出す」

「政府への対応は任せてもらおう」

さつきまで怒られていた人とは思えないほどの頼もしさを感じ、一夏は急ぎ刀奈の部屋へ向かう。

「刀奈さん」

「分かつてる。さつき簪ちゃんからメール貰ったから」

「さすが簪、仕事が早い」

「なにになに？ スクープの匂いが」

「緊急事態です。邪魔をするなら黛先輩でも容赦しませんよ」

「……大人しく待っています」

一夏の容赦のない殺気を浴びせられ、薫子は二歩三歩引いて返事をする。普段なら加減してくれる一夏が、一切の容赦なしで殺気を浴びせてくるという事は、本当に緊急事態なのだと理解したのだった。

「生徒会長権限を、一時的に虚ちゃんに委譲します。学園に何かあった時は、虚ちゃんが先頭に立って指揮してちょうだい」

「かしこまりました。お嬢様、一夏さん、ご武運を」

虚に見送られ、一夏と刀奈は東が捉えた穏健派メンバーがいると思われる場所まで、猛スピードで飛び立った。

『一夏さん、篠ノ之さんを捕らえることが出来れば、それを足掛かりにマナカさんの居場所を知ることが出来るかもしれませんね』

「いや、そう簡単にはいかないだろ。恐らく、マナカは俺たちが篠ノ之を捕らえに動いていることを知っているだろうし、捕らえられたらすぐに拠点を変えるくらいの事はするだろう」

『ですが、今まで使っていた拠点の場所が分かれば、そこから新しい情報を得られるかもしれない』

「そうだが、マナカの事だから、拠点爆破くらい平気だしそうだしな……まっ、期待しないでいいか」

『そもそも篠ノ之さんが情報を持っていけば一番なのですがね』
「捨て駒としか思っていない相手に、情報を持たせるとは思えないがな」

移動中に今後の話し合いを闇鴉として、一夏はレーダーに不審IS情報をキャッチした。

「刀奈さん、東より猛スピードでこちらに接近しているISの情報あり。恐らく篠ノ之だと思われまます」

「こつちでも捉えてる。どうする？ 私が相手しようか？」

「……いえ、まずは穩健派メンバーの保護を優先します。篠ノ之は俺が適当に相手しますので」

「大丈夫？ 箒ちゃん相手じゃ、一夏君のトラウマが……」

「接近されなければ大丈夫です。それでもあまり長い時間は持ちませんので、穩健派メンバーを集めたら束さんへ連絡してください。そうすれば、すぐに回収してくれるでしょうから」

そう言つて連絡用の端末を刀奈に投げつけ、一夏は箒の気を引くためにあえて攻撃を仕掛けた。

「待つてて、一夏君！ すぐに終わらせるから」

穩健派メンバーの回収に向かった刀奈を見送り、一夏は覚悟を決めて箒がやってくるのを待った。

「久しぶりだな、一夏」

「そうか？ 修学旅行の際に見かけたと思うが」

「二対一で会話をするのが、という意味だ。お前は誰かしらを護衛につけ、私と二人きりになるのを避けていたからな」

「危険人物と二対一の状況を作りたがる人間がどこにいるんだか……お前、自分が殺人鬼だつて事を理解してるのか？」

一夏は、箒が人を殺している感覚を持ち合わせていないことを知っている。だがあえて聞くことで、意識のすべてをこちらに向けさせようとしているのだ。

「人殺し？ 何をバカな事を言っているんだお前は。私は世界のゴミを片付けているだけに過ぎない。褒められるならともかく、責められる所以は無いぞ」

「ゴミ掃除？ どんな理屈をこねくり回したらそんな考えに至るのか、本当に束さんにお前の頭の中を覗いてもらいたいくらいの超理論だな。何処からどう見ても、お前がやってきた事は犯罪行為だ。人を殺め褒められるわけがないだろ」

「何故お前は理解しない、理解しようとしなさい。私たちは正義なのだ。正義の使者が悪を裁くの何故法律を気にしなければいけないのだ」

「正義の使者？ 篠ノ之、お前しばらく見ない間にお笑いに転向したのか？ 実に面白い話だな」

「まあいい。お前をここで捕らえあのいけ好かない小娘に引き渡せば、私の勝利だ。何もかも破壊し、それから本当の一夏を取り戻すのだからな」

「妄言もそこまでしたらどうだ？ 本当の俺を取り戻す？ どんな俺を想像してるのかは知らないが、そんなのはお前の妄想の中だけだ」

「お前が私に勝てるんでも？ あの時の私とは違うのだ」

これ以上話すつもりは無いと言わんばかりに、箒が一夏に向けて狙撃した。その攻撃をいとも簡単に避け、一夏は距離を取った。

「確かに、考えなしに突っ込んでこないだけ成長したのかもしれないが、遠距離戦で勝てるんでも思ってるのか？ ISの能力を引き出せていないお前が、全能力を引き出している俺に勝てるんでも？」

「ぬかせ！ その傲慢な態度、更識の連中の所為でそんな風になってしまったんだろ！」
「傲慢はどつちだよ……」

呆れながらも一夏は箒に向けて射撃を繰り返す。無論、一撃が軽いので箒に大したダメージを与えるまでには至らないのだが、確実に箒の冷静さは削っているのだった。

衝突

一夏と箒が一発触発の空気になっているのを見ていたマナカは、慌てて自分も出撃の用意をしていた。

「あの馬鹿、お兄ちゃんに傷でもつけたらただじゃ済まさないって言ったのにー」

一夏も挑発するようなことを言っていたので、箒の頭に血が上っても仕方ないのかもしれないが、それでもマナカにとっては一夏を傷つけるものは許せないのだった。

「今から向かつてても、恐らくは戦闘開始には間に合わない。でも、まだお兄ちゃんが挑発を続けてる最中だから、あの馬鹿が攻撃を仕掛けるまでは猶予がある。その間になるべく傍まで移動しておかないと、万が一お兄ちゃんが傷ついたら困るもんね」

無人機を連れて行くことも考えたが、今は一秒が惜しいので自分の機体のみでマナカはアジトから飛び立った。目的地はアジトから遠く離れた場所ではあるが、超高速移動にも耐えられる特殊設計と、Gに耐えうる訓練を重ねてきたマナカだからこそ扱える機体で移動すれば、十分もかからず目的地に到着する事が計算上可能なのだ。

「十分も挑発が続くとは思えないけど、お兄ちゃんがあの阿呆に後れを取るとも思えない。穏健派のカス共を更識刀奈に任せただから、その救助が終わるまでの間はお兄ちゃんが阿呆を引きつけることが出来ると言う事。つまり、その間に私がお兄ちゃんの許にたどり着ければ、お兄ちゃんが怪我をすることも無いと言う事になる」

高速で移動しながら、思考を纏め、マナカはリーダーで一夏たちの位置を確認する。「この動き……戦闘が開始してみただね。阿呆が一方的に攻め込むかとも思ってたけど、お兄ちゃんが上手く誘導して穏健派のカス共を逃がしている。それに気づけない辺り、やはりあれは阿呆と言う事ね」

刀奈の動きもリーダーで確認しながら、マナカは箒に対する評価を下げる。冷静な判断が出来るようではあったが、目の前に一夏がいる時はやはりダメ思考なのかと。

「(後二分で到着する……戦況はお兄ちゃんが上手く立ち回って入るけど、どう見ても阿呆の方が有利。お兄ちゃんは本来戦闘要員ではないから、攻撃を裁いたりするので精一杯って感じだね)」

遠距離主体のサイレント・ゼフィルスではあるが、箒専用近接武器も積んである。

今は一夏が間合いを十分に取って遠距離戦を繰り広げているが、少しでも間合いを詰めればあつという間に箒の間合いになりかねない。マナカは万が一の可能性に気持ちを逸らせ、いつも以上のスピードで一夏の許へ急いだ。

「あと少し、あと少しでお兄ちゃんの姿が見えてくるはず」

レーダーを確認しながら、いつも以上に掛かるGに耐えるマナカ。漸く一夏の姿を視認出来たので気が緩んだのかは分からないが、制御不能の文字が表示されマナカは冷静さを失った。

「(停まらない!? それほど負荷をかけたつもりは無いのに)」

普段の冷静さを保てていれば、この事故は防げただろう。いつも以上に急がなければ、制御不能に陥ることも無かっただろう。だがそれはすべて後の祭り。マナカは一夏と箒が撃ち合っている中心に飛び込んだ。

「何事だ!」

「あの機体……マナカか」

一目見ただけでISの制御を失っていると理解した一夏は、瞬間加速でマナカの機体

の進行方向へ移動し、その機体を受け止めた。

「ぐっ……」

さすがの一夏でも、超高速で飛んできた機体を受け止めて無事で済むはずもなく、その勢いを殺しきれずに建物に衝突した。

「（これは、さすがにマズいな……）」

ISの絶対防御が働いたとはいえ、これだけの速度で物にぶつかればそれ相応の衝撃が襲ってくる。ましてや一夏は建物とマナカの機体に挟まれた状態なので、衝撃をどちらからも受ける事になったのだ。絶対防御が働いても無事で済むはずもない。

「一夏君、今の音は……一夏君っ!？」

「穏健派の人たちは……」

「篠ノ之博士に無事回収してもらったわ。今頃更識の屋敷で訊問を受けていると思うわ。それより、一夏君……」

「非情になれなかつたみたいですよ……敵だつて分かつてたのに、身体が勝手に動いてしまつて……」

「喋らないで！　すぐに篠ノ之博士に連絡を」

「もう来てるよ。それより、この瓦礫を片付けてくれないといっくんを回収出来ない」「分かりました」

強制解除されていないのを見るに、闇鴉のSEはまだ残っているのだろう。刀奈はそう思い込んで瓦礫の撤去を急いだ。

「（強制解除されていないって事は、一夏君が受けた衝撃はそれほど酷くないのかも。だけど、あれだけの音がしたんだから、無事では済まないんだろうな……）」

「ところで、箒ちゃんは何処に行ったのかな？」

「それぞれろじやありませんよ。今は一夏君の救助が先です」

「いや、箒ちゃんがいるなら手伝わせようと思ったんだけど、どさくさに紛れてどこかに行っちゃったみたいだね」

「東さん、マナカの治療を先に……」

「はいはい、結局いっくんもシスコンなんだね」

「家系、何だから仕方ないでしょうが……」

「今は無理に喋らない方が良いでしょう。絶対防御があるからと言って、ISだって万能じゃないんだから」

束に注意され、一夏はそれ以上何も話さなかった。一夏の腕の中では、マナカが気を失いガツクリとしているのが印象的だった。

重症の兄妹

ISのコントロールを失い、衝撃で意識を失っていたマナカが目を覚ましてまず思ったのは、ここは何処だと言う事だった。自分は一夏と箒が戦っている場所に向かい、そして箒に肅正を与えるつもりだったのに、視界に入ってきたのは見覚えのない天井だったのだから仕方ないのかもしれない。

「ここは……」

「目が覚めたかな？ 織斑マナカちゃん」

「誰だ！ ぐっ!？」

「はいはい、まだ動かないの。いくらいつくんが受け止めてくれたからって、君は相当なダメージを身体に負ったんだから」

「お兄ちゃんが……」

自分の身に何が起こったのか思い出したのか、マナカは悔しそうに唇をかみしめた。

「動揺した所為でISの制御を失うなんて、滑稽な話よね」

「全くその通りだね。束さんに匹敵する頭脳と身体能力の持ち主だっていつくんから聞

いてたけど、過大評価だったみたいだね」

「言い返せないのが悔しいけど、実際そう思われても仕方ない失態を見せたんだから言い訳はしないわ。それで、私は貴女に捕らわれたって事でいいのかしら？」

「本当なら解剖して頭の中を覗きたいんだけど、いつくんから手を出すなって言われているから何もしないよ」

自分の身の安全を一夏が保障してくれたと、マナカは嬉しい気持ちになったが、すぐに先ほどの束の言葉を思い出した。

「お兄ちゃんが受け止めてくれた？ 確か私はビルに突っ込んだ気が……もしお兄ちゃんが受け止めてくれていたのなら、お兄ちゃんは私とビルに挟まれたことになる？」

「その通りだね。いつくんは君を庇って重傷を負った。幸いなことに意識がはつきりしてたからよかったけど、下手をすれば死んでたかもしれないんだよ」

「私が、お兄ちゃんに怪我を……」

「君の身柄は東さんが一時的に預かり、多少回復したら更識に引き渡すことになっている。意識もはつきりしてるし、後は更識に任せるから」

「待って、私は……どれだけ気を失っていた？」

「君がいつくんと衝突したのは、三日前だよ。いつくんも一時は意識不明に陥ったけど、

今は意識もはつきりしてるから、そこは安心して良いよ。ただし、全身を強打してるから、歩くことは出来ないけど」

「それは、治るの……？」

もし一夏の脚を奪ってしまったのならと、マナカは顔面を蒼白にして束に問いかける。

「いっくんも束さんと同じで、驚異的な回復力の持ち主だから、恐らくは大丈夫だと思うよ。ただ、そんな回復力を持っていても、三日では全快とはいかないみたいだけどね」

どこかに連絡を入れた束から視線を逸らし、マナカは自分を責め続ける。自分が油断したから、箒などに任せただけだからなど、後悔が頭の中を支配していく。

「惨めね……」

そう呟き、マナカは再び意識を失ったのだった。

次にマナカが目を覚ました時、隣に暖かい気配を感じた。その気配は、マナカがずっと手に入れたかったものだった。

「お兄ちゃん？」

「目が覚めたか」

「お兄ちゃん、大丈夫なの！ いたっ！」

「まだ起き上がれないんだから無理するな。まあ、人の事を言える状態じゃないんだがな、俺も」

自分と同じようにベッドに横たわっている一夏を見て、マナカは涙を堪えられなくなっていました。

「ごめんなさい……私が油断したから……私が篠ノ之箒なんて手駒にしたから……お兄ちゃんに傷を負わせてしまった……」

「好きで庇ったんだ、マナカが気にする事じゃない」

「でも……」

「少しは落ち着いたらどうですか」

マナカは、声を掛けられて漸く第三者がいる事に気が付いた。慌てて声のした方に視線を向けると、そこには自分に似た少女が立っていた。

「織斑マドカ……」

「本当なら姉さまのどちらかが訊問するはずだったのですが、兄さまが姉さまたちを立ち入り禁止にしたために私が」

「訊問……何もかも失ったに等しい私に、何を聞きたいのかしら？」

「貴女の真の目的と、篠ノ之箒の行方」

マドカの言葉に、マナカは鼻で笑った。

「真の目的など無いわよ。ただ、お兄ちゃんと一緒にいたかっただけ」

「それで兄さまの周りを排除しようとしたのですか？ その事で兄さまに嫌われるかもしれないのに」

「私はただ、取り戻そうとしただけよ。お兄ちゃんと過ごせるはずだった時間を、お兄ちゃんから向けられるはずだった愛情を」

「……私も似たような環境で育ったのでとやかく言えませんが、貴女は狂っている。すべてを排除して、兄さまから愛されると本当に思っているのですか？」

「なら、どうすればよかったのよ！ 私からお兄ちゃんを奪った屑親たちは死に、この恨みをぶつける相手がいなくなったのよ!! やり場のない怒りを晴らすには、もう世界を恨むしかなかった」

「私も亡国機業で育ち、姉さまや兄さまたちと比べられ恨みもしました。ですが、そんな私を兄さまは優しく迎え入れてくださいました。貴女も世界を恨むことをせず、素直に兄さまと向かい合えばよかった。周りを排除するのではなく、自分もその輪に入ろうとすればよかった」

「そんなこと出来ないわよ。私は昔から、周りを切り捨てて生きてきたんだから……貴女みたいに屑親から見限られて自由に出来たわけじゃないのよ……篠ノ之束を超える

頭腦の持ち主だと言われ続け、期待されてきた。プレッシャーから逃げ出すことも出来ず、人格を歪めてまで研究してきたの。どうやって周りや仲良くすればいいのかなんで、私は知らない…分からない…」

「とりあえず、俺もマナカも回復する事を優先して、後の事は回復してから話し合えばいい。マドカも、それでいいな？」

今まで黙って聞いていた一夏が口を挿むと、マドカは素直に一夏の言葉に従った。

「私は、兄さまがそれでいいと仰られるのでしたら」

「そうか。マナカも、それでいいか？」

「……うん」

自分も人並み外れた回復力を持っていると自覚しているマナカだが、それでも回復が間に合わない程のダメージを負い、そして一夏に負わせてしまったのだという思いが彼女の中を支配し、そう答えるだけで精一杯の印象を与えていた。そんなマナカに、一夏はどうする事も出来なかったという自責の念を感じていたのだった。

箒の企み

「マナカが重傷を負い敵の手に堕ちたのを知った箒は、マナカの研究室にあるものを一通り確認していた。

「これが無人機のデータで、こつちが衛星のコントロールをしているのか……それで、こつちが全世界の核を遠隔操作する為のもので、これが映像媒体をハッキングする為のシステムか……」

物を一から作ることは出来なくても、データさえあれば箒は基本的には何でも出来る。マナカが組み上げたものを利用し、箒は野望を果たす為に動き始めた。

「まずは無人機を私の思い通りに動かせるようにしなければな。IS学園に報復をし、一夏を差し出させるためには今のままでは駄目だからな」

システムの書き換えなど、箒はやったことがない。だが遺伝子的に刷り込まれているのか、箒は何の苦勞もなく無人機のシステムを書き換える事に成功する。

「やはり私は選ばれし人間なのだ。こんな私を邪険に扱った世界に、私は私の存在を

知らしめなければならぬ」

ある種の脅迫概念に囚われているのか、箒はターゲットをIS学園から全世界へと変更する事にした。

「全世界に私の素晴らしさを教えるのと同時に、私にこそ一夏が相応しいと言う事を認めさせなければならぬ。そうしなければ滅ぼすのではなく支配する方が楽だな……従わない国には核を落とし、無人機で殲滅させれば他の国は大人しくなるだろう」

頭の中でシナリオを描き、ぎこちないなりにシステムの改竄を進めていく箒。このアジトが知られているかもしれないという可能性を見落としているが、現状攻め込んでくる勢力は無い。マナカと同時に一夏も負傷したため、更識の命令系統は機能していない。

「待っている、一夏。もうすぐお前は私の物になるのだ。そうすればすべてが終わり、正しい世界へとお前を導くことが出来る……邪魔するものは、誰であろうが排除する」

抑圧されていたものが解放されたため、箒の顔には狂気の笑みが浮かんでいる。自分こそが一夏の隣に在るべき存在だと思ひ込んできたため、それが正しいのだと信じてや

まないのだった。

双子の姉から諭され、マナカは自分の考えを改めて見直していた。

「お兄ちゃんを手に入れる事だけに意識を向けていた所為で、全てを排除したらお兄

ちゃんが悲しむと言う事を失念していた……」

「兄さまは、刀奈さんたちを大事に思っていますから、その人たちを傷つけていたら貴女は愛されることは無かつたでしょうね」

「私がお兄ちゃんを傷つけられるのを嫌つたように、お兄ちゃんはその人たちを傷つけられたくなかつたわけか」

「兄さまだけを意識したために、簡単な事を見失つていたのでしよう。私もそうだったから」

「そう言えば、あんたは篠ノ之束のラボを襲つて捕まつたんだっけ」

「私を織斑の出来そこないと罵つた世界を恨み、姉さまたちを倒せば認められると思ひ込んでいたから……敵うはずもないと分かつていながら篠ノ之博士を襲い、兄さまの策略にハマつたのです」

「……お兄ちゃん、篠ノ之箒つてバカなんだよね？」

急に話題を振られ、一夏は少し考えてから答えた。

「勉強は普通に出来たはずだが、思い込みが激しいタイプではあつたな」

「なら平気かな……」

「何か不安でもあるのか？」

「ううん、私の研究室に、色々つまづいシステムとかがあるから、下手に弄られると困かなと思つて」

「ちなみに、どんなシステムがあるんだ？」

一夏に尋ねられ、マナカは少しバツの悪い笑みを浮かべながら答えた。

「えつとね……全世界の映像媒体をハッキングするシステムとか、核爆弾を遠隔操作するシステムでしょ、それから無差別に人を攻撃するように無人機に命令するシステムに、研究室の自爆スイッチとか、その他諸々」

「……………」

「そのどれかを篠ノ之が扱える可能性は？」

「無いと思うよ。一応パスワード認証が必要だから」

「なら安心ですね」

マドカがホツと一安心したのに対して、一夏は難しい顔をしたままだつた。

「何か心配な事でもあるの、お兄ちゃん？」

「いや、篠ノ之の野生の勘は侮れないと思つてな……それに、曲がりなりにも東さんの妹だから、ハッキングの腕がもしかしたらあるのかもしれないと思つて」

「心配し過ぎなのでは？ 学園生活しか知りませんが、篠ノ之箒に技術者としての腕は無かったと思います」

「だと良いのだが……沸点が低いから、操作出来ないと殴つてでも動かそうとするかも知れない。そうするといろいろ問題があるんじゃないか、とか気になることがな」

「下手に叩いたりしたら、その相手を排除するように組み込んであるから大丈夫だよ。でも、アイツの武力は底知れないものがあつたから、そのシステムすらも切り捨てたりしそうなんだよね」

マナカがため息を吐いたタイミングで、部屋に別の人物がやってきた。

「一夏君、具合はどう？」

「おかげ様で、目は覚めました」

「良かった……それから、マナカちゃんが飛んできた方向から計算して割り出したアジトだけど、既にもぬけの殻だったわ。システムを弄つた形跡はあつたけど、実行はされてなかつたわ」

「でも、コピーした形跡はあつたから、篠ノ之さんが何かを企んでいる可能性は否定出来ない」

刀奈と簪の報告を受けて、一夏とマナカは同じような仕草で考え込んだ。

「マナカ、篠ノ之を追跡する事は出来るか？」

「GPSなんて仕込んでないから、衛星を使って追いかけるしか出来ないよ」

「なら、東さんにでも頼んでみるか」

兄妹の連携に、刀奈と簪は少し嫉妬したのだった。

結局は

マナカが組み上げていたシステムなどを全てコピーし、一夏たちに知られた可能性がある拠点を放棄したのは良かったのだが、新たな拠点を確保する術を箒は持ち合わせていなかった。

「あの拠点ではシステムを実行に移す事が出来なかったからな……かといってパスワードを考えている暇もなかったからコピーだけして飛び出してきたが、資金など私には無かったな」

着の身着のまままで生活していたので、荷物が無いのは良いが、さすがに野宿する気は箒にも無かった。

「どこかの施設を襲撃しアジトにするか？ いや、そんなことすればすぐに居場所がバレる……なら、独立派が使っていた廃墟ならどうだ？ ……雨風を凌ぐには申し分ないが、あの場所にはコンピューターが無かったな」

せつかく盗み出したデータも、コンピューターが無ければ意味がない。箒は自分の計

画性の無さに苛立ちを覚えた。

「何故もう少し計画を立ててから動かなかつたんだ、私は……目障りな織斑マナカが重傷を負った時点で、一夏を私の物にしてしまえばよかつたのではないか。一夏も重傷を負つてまともに動けなかつたんだから、いくらでも連れて行くチャンスはあつただろうに……」

あの周辺には刀奈や束もいたが、相手が一人なら逃げ切る自信はあつた。最悪一夏を人質にしてそのまま逃げれば相手は手を出す事は出来なかつただろうと、今更ながらに箒はせっかくのチャンスを不意にしてしまったと後悔したのだつた。

「過ぎてしまった事は仕方ない。とりあえず今は、このデータを使えるようにしなければな……」

箒は必死にコンピュータがある場所を考え、何処に隠れば束に見つかることなく生活出来るか検討し始める。

「漫画喫茶は論外だ。あんな場所、すぐ姉さんに見つかつてしまう。やはりどこかからコンピュータを盗み出して、回線をつなぐしかないか……だが、盗み出すことは出来ても、回線をつなぐことは私には難しい……」

始める前から計画が頓挫してしまい、箒は立ち往生してしまったのだった。

ベッドに横たわる一夏の真横に、音もなく一人のマッドが現れマドカを驚かせてい

た。

「束様!?　せめてドアから入って来てくださいよ」

「やつほー、マーちゃん。緊急事態だからショートカットさせてもらったよ」

「貴女が大天災・篠ノ之束ですか」

「君が織斑家の末っ子、織斑マナカちゃんだね。はじめまして、天才束さんだよ」

束の、ある意味いつも通りの挨拶をスルーして、一夏は束がこの場に現れた理由を問うた。

「それで、扉から入ってくる間も惜しんだ理由を教えてくださいようか」

「そうだった。マナカちゃんのラボに侵入してみたんだけど、既に箒ちゃんが何かをしでかした後だったんだよね」

「何かとは?」

「たぶんデータを盗み出そうとしたんだらうけど、あのロックを外せたとも思えないんだよ。実際、抜き出された形跡もなかったし」

「それなら、篠ノ之がその施設を破壊するなりしたと思うのですが」

「うん。だからたぶん、箒ちゃんはデータを抜き出したんだと勘違いしてると思うんだよね。マナカちゃんが仕掛けた罠にまんまと嵌まって」

「罨?」

一夏はマナカに視線を移し、罨の詳細を尋ねる。

「USBなりなんなりにデータを抜き出そうとした相手の位置を追跡できるようにプログラムしておいたの。抜き出そうとした本人には、データを盗み出せたと勘違いさせる偽装してあるから、お兄ちゃんやこの人じやなきや気づけないと思う」

「この人じやなくて、束さんだよ、マナちゃん」

「ま、マナちゃん!?!」

「あまり気にするな……それで、篠ノ之がデータを盗み出そうとしてたのなら、そのプログラムを追えば現在地が分かるというわけか」

「残念だけど、束さんにはそのプログラムがどんなものか分からなかったんだよね。マナちゃんが自分でプログラムを起動して、箒ちゃんを追跡するしかないよ」

「ごめんなさい、現状では操作出来ません」

「かなりの重症だもんね。いっくんが庇ってくれたからまだマシだけど、あのスピードであるの衝撃なら、マナちゃんの身体なら一生動けなくなってもおかしくなかったし」

「私が身を挺して一夏さんとマナカさんを庇ったお陰ですね」

「お前はまた……」

いきなり人の姿になり胸を張る闇鴉に、一夏はため息交じりにツツコミを入れた。

「ところでマドカ。織斑姉妹は大人しくしてるのか？」

「それは……」

急にふられ、マドカはどう答えるべきかに迷ってしまった。だが、マドカが何かを言う前に、東が口を滑らせてしまった。

「ちーちゃんとなつちちゃんなら、いっくんに危害を加えようとした箒ちゃんを探すつて

許可も取らずにI Sで飛んで行つちやったよ」

「学園の仕事はどうするんですか……」

「愛玩眼鏡っ子に押し付けてたけど」

「またあの二人は……マドカ、織斑姉妹の給料の何割かを、山田先生に振り込むように指

示しておいてくれ」

「わかりました、兄さま」

職務放棄した二人の代わりに倍以上の仕事をこなさなければならなくなった真耶に、

一夏はせめてもの罪滅ぼしとしてそう指示したのだった。

マナカも同類

一夏が自分たちの給料を減らそうとしてるなどと露知らず、千冬と千夏は専用機で移動しながら箒の行方を捜していた。

「やはり旧式のISのレーダーでは範囲が狭いな」

「しかし、一夏が大怪我を負った原因を造りだしたバカ箒を野放しにしておくわけにもいかないだろ。わたしはあちら側を探すから、千冬は向こう側を頼む」

「了解した」

マドカのアジトからそう離れていない場所をくまなく探すが、もちろんそんなところに箒の姿など無い。いくら脳筋だからとはいえ、バレた可能性が高いアジトのすぐ傍に身を隠すようなことは箒でもしなかった。

「仕方ない、一度学園に戻って束に相談でもするか」

「一夏たちも、そろそろ意識を取り戻しているかもしれないしな」

周辺の搜索を終え、二人はIS学園に帰還する事に決めた。素敵は得意だが、何時ま

でも先行して動くのはお説教の対象になると考えたのだろうか、その考えは遅すぎたのだった。

学園に戻り、一夏たちが搬送された医務室を覗き込むと、難しい顔をしている一夏と、その横顔に見とれているマドカとマナカの姿があり、千冬と千夏は一瞬にして身もだえたのだった。

「私たちの弟も妹も、こんなにかわいいとは」

「今すぐ抱きしめたい！ スリスリしたい！ ぺろぺろしたい！」

「……変態思考がダダ漏れています」

千冬と千夏の背後に現れた碧が、呆れているのを隠そうともしない口調で声を掛け、二人を医務室内に連れ込んだ。

「一夏さん、やはり独立派が使っていたアジトにも、篠ノ之箒の姿はありませんでした」
「そうですか。スクールの話では、あの廃屋には電波が届かないそうですので、身を隠すだけで満足しないであろう篠ノ之が使う可能性は低かったですからね。ところで、貴女たちは何故ここに？」

碧かの報告を受け、リストに線を引いてから一夏は織斑姉妹へと視線を向けた。

「一応私たちも報告にな。マナカが使っていたアジトの周辺、約五キロ四方に篠ノ之の気配は無かった」

「それから、マナカのアジトにあるとされていた秘蔵の一夏コレクションだが、篠ノ之が盗み出した可能性が高いな」

「そんな……データは持ち歩いてるから問題ないけど、現像した写真とかを盗まれたというの？」

「くまなく探したが、発見する事は出来なかった」

「何探してるんだよ……」

独断専行ではあったが、四方五キロを探索したとなると、それはそれで役に立ったと思えるくらいの成果だったのだが、その後之余計な事をしていたと言う事も分かり、一夏は結局呆れたようにため息を吐いたのだった。

「姉さま、その兄さまのコレクションというのは？」

「マナカが幼少期から監視衛星をハッキングして隠し撮りした一夏の成長記録写真だ」

「束曰く、自分よりアングルの良い写真があるとの噂だ」

「何処で知ったのよ、そんなの」

「重要なのはそこではない！ 一夏の成長記録をバカ箒が盗み出したと言う事はだ、一

夏の大事な部分をバカ箒は視れると言う事なのだぞ」

「くっ、私しか見ないと油断して加工してなかった写真がいつぱいあるというのに……まあ、そっちは別のパスワードだから、盗まれる心配は無いんだけど」

「マドカ、お前は聞かなくていいからな」

「あの、兄さま……何も聞こえないのですが」

変態三姉妹に巻き込まれないよう、一夏は碧にアイコンタクトで指示を送りマドカの耳を塞いだ。

「聞き捨てならないことを言ったな。今、一夏の無修正の写真があると行ってなかったか？」

「当然あるに決まってるでしょ。私が持ち歩いている元データにだって、修正なんてかけてないんだから」

「そのデータを寄越せ！」

「誰がアンタなんか……痛っ！」

「怪我人に襲いかかるな、馬鹿者が！」

マナカが隠し持っているデータを探そうと、千冬と千夏はマナカに襲いかかり、そし

て一夏にカミナリを落とされたのだった。

「言い忘れていたが、あんたたち二人の仕事を肩代わりさせられた山田先生に、貴女たちに支払われるはずだった給料の一部を振り込みますので、そのつもりで」

「ま、待て！ 私たちはバカ箒の搜索の為に出处を隠していたんだ」

「真耶にはわたしたちの代わりをお願いしたんだ。決して押し付けたわけではない」

「と本人たちは証言していますが、実際はどうだったんですか？」

廊下に声を掛ける一夏に首を傾げた二人だったが、刀奈と虚が連れてきた人物に目を見開いた。

「真耶だと……気配など感じなかったぞ」

「そりゃ私がお兄ちゃんのために、その女の気配を偽ったから。アンタたちに見破れなくて当然」

「それで、実際はお願いされたんですか？ それとも、押し付けられたんですか？」

「えつと……」

千冬と千夏に恐怖を覚えながらも、一夏がいるからと小さく頷いて、真耶は証言を始めたのだった。

「お二人はお願いしたつもりなのかもしませんが、あれは半ば強制でした。しかも、常日頃から溜め込んだ仕事を、これ幸いと私に任せて、自分たちは更識君のその……写真を探すつもりだと喋ってたのを聞いたのです」

「と仰つてますが、何か弁明はありますか？　あるなら、聞くだけ聞いてあげますが」

目が笑っていない笑みを向けられた二人の姉は、その後こつ酷く怒られたのだが、その事を誰も証言する事は無かったのだった。

現時点での最強

打つ手が無く、箒はただひたすらに移動し、居場所を特定されないように生活していた。

「このデータを持つていても、コンピューターが無いと無用の長物でしかないからな……出来るだけ早く環境が整った場所に腰を据えなければ」

辛うじて資金は手に入れたが、人を見る目を養ってこなかったせいどころが安全かを見極める事が出来ずにいたのだった。

「何故私がいこんな目に遭わなければいけないんだ……これもすべて、一夏の所為だな」

自業自得という概念が存在しないのか、箒はそんなことを呟いていた。

「しかし、コンビニのコピー機でも写真を現像出来たのは助かったな。まさかあの写真が一枚数万円もするとは思ってなかったぞ」

現像した一夏の写真を、断腸の思いで売りに出したところ、数秒で完売し、それで資

金を得ることに成功したのだった。

「いっそのことこの写真をさらに現像して資金を増やし、口止め料込でどこかのホテルで生活するのも悪くないかもしれないな……いや、そんなことをすれば、必ず織斑姉妹や姉さんたちが私の足取りを掴んでくるだろうし、何よりも一夏の写真を有象無象共にくれてやるのは気に食わん」

自分の計画に腹を立て、箒は唯一に収入方法を諦め、引き続き逃亡生活が続けるのだった。

身動きは取れなくても指示は出せると言う事で、一夏は更識所属の面々やクラスメイ
トに訓練の指示を出していた。

「簪と美紀はオータムと模擬戦を重ねてくれ。アイツが相手なら連携の見直しも出来る
だろうし、強敵相手にどう動けばいいかの訓練にもなる」

「分かった」

「刀奈さんは虚さんとスコールと三人で対戦形式の訓練を積んでください。とりあえず
個人戦ですが、誰かと協力して誰かを脱落させる、という戦法をとっても構いません」
「そうなると真つ先に私が落とされそうなんだけど!？」

「そこらへんは自由ですから。本音やマド力は、セシリアやシャル、ラウラたちと一緒に
模擬戦形式で訓練をすること。特に本音はサボり過ぎだから気合いを入れて訓練しろ
よっ。」

「了解だよ。私だって、やる時はやるんだから!」

「そのやる時が滅多にないように思いますがね」

「静寐や香澄、エイミイはサラ先輩やダリル先輩、フォルテ先輩たちと訓練する事。実力者だからいい経験になると思うぞ」

「そうね。元とはいえ代表候補生の二人と、現国家代表の先輩相手だものね」

「緊張するけど、一夏さんの為に頑張ります」

指示を受け全員がアリーナに向かった後に残ったのは、動けない一夏とマナカ、そして碧の三人だけとなった。

「お兄ちゃんって、沢山の配下がいるんだね」

「仲間だと思ってるがな。立場的には配下なんだろうが、その表現は何か嫌だ」

「一夏さんは優しいですからね。私のような従者にも丁寧に接してくれますし」

「そう言えばお兄ちゃん」

「何だ？」

「お兄ちゃんって、更識家の当主なんですよ？ 表向きはあの四月一日美紀の父親が当

主って事にしてあるみたいだけど、普通にお兄ちゃんが当主でも問題ないと思うんだけど」

いきなり核心をついてきたマナカに、碧は鋭い視線を向けたが、一夏が手でそれを制し答えた。

「さすが駄ウサギ以上の宇宙規模ストーカーだな。知ってたのか」

「普通に考えて、お兄ちゃんが当主であるべきだと思うと思うんだけども、有象無象共のちっぽけな脳みそじゃ理解出来ないだろうね」

「尊さんも普通に優秀だから、彼が当主を継いだと言つても誰も疑問には思わなかったんだろ。血筋的にも問題はないし、年齢的に考えても俺より尊さんが『楯無』を継いだと考える方が普通だと思うぞ」

「そうかな？ 私にとつてはお兄ちゃんの方が優秀で、貫禄も十分だと思うけど」

「先代の楯無さんが亡くなったのは、俺がまだ今以上に子供だった時だぞ。だから尊さんに代理の当主として働いてもらってるんだ」

「そんなの関係なく、お兄ちゃんが当主だつて言つた方がスコールたちの時にもっとスムーズに話が進んだんじゃないかなって思ったただけだよ」

「それは否定しないが、結果的に丸く収まったんだから良いだろ」

「一夏さんもマナカさんも、あまり大声は出さないでくださいね。身体に響きますよ」

そう言つて碧は、一夏とマナカの脇腹に指を立てる。触られただけだというのに、一

夏とマナカは激痛に見舞われ悶絶した。

「今のは効きました……」

「この私が抵抗出来ないとは……」

「二人とも、本当ならこんな場所ではなくちゃんとした病院に入院してるはずの怪我なんですから、くれぐれも興奮して立ち上がろうとしないでくださいね？　次は触るだけじゃ済ませませんから」

「鬼だ……お兄ちゃん、この女鬼だよ……」

「何か、言いましたか？」

ニツコリと笑みを浮かべながら人差し指をマナカに向ける碧。その姿に恐怖したのか、マナカは首を横に振って許しを請うたのだった。

「まったく、誰が鬼ですか。私は二人の身体が心配で言ってるんですからね」

「分かっていますよ。マナカ、ちゃんと碧さんに謝るんだぞ」

「ゴメンなさい……」

一夏に怒られた事と、碧への恐怖心から、マナカは素直に頭を下げ碧はよろしいと頷いてマナカの失言を許したのだった。

箒の思い付き

仮住まいを探していた箒が、例の二人が隠れていた場所を思い出したのは、一夏とマナカが衝突して大怪我を負った日から数日たってからだだった。

「あの場所ならコンピュータも使えるし、何より一夏たちの監視からも逃げられるんじゃないか？　何で今まで気づかなかったんだ」

今まで気づかなかった自分に呆れながらも、箒は例の隠れ家へ向けて移動する事にした。

「風の噂では、一夏もマナカも自力で歩けないくらいの怪我を負ったそうだし、更識の命令系統も機能していないらしいし、一夏を取り戻すなら今しかないな」

元々自分の物ではない、と言う事を完全に無視した思考だが、それにツツコミを入れる人間は誰もいない。箒は意気揚々と穏健派が隠れ家として使っていた場所を目指し飛行する。

「ISのエネルギー補給もままならなかったが、あの場所なら問題はすべて解決する。

これで世界は私の物に、そして一夏も私の許に戻ってくるではないか」

皮算用だとは思っていないようで、箒は移動しながらほくそ笑む。もし誰かが今の箒を見たらいきなり笑いだして気味が悪いと思つたかもしれないが、彼女の側には誰もいないので自分が不審な事をしているなどと気づくことは無かつた。

「それにしても、何故一夏はマナカなんか助けようとしたんだ？ 自分の事を狙つてる相手など、放つておけばよかつたものを……やはりあいつは甘いところがある。私が鍛え直してやるしかないんだろうな」

人助けなど箒には興味もなく、ましてや自分の周りに危害を加える事を厭わないと言つていた相手を助けた一夏の思考が、箒には理解出来なかつた。挙句に、それは一夏の甘さが招いた事だと曲解し、自分が正してやるしかないと決めつけ、更に笑みを浮かべたのだつた。

「待つていろ、一夏。私とお前の未来の為に、私は姉さんが壊した世界を創り直し、私とお前が住みやすいようにしてやるからな。そうすれば、お前も私が正しかつたと認めてくれるだろうし、私の側にいるのが一番だと理解するだろうさ」

まだ見ぬ未来へ思いを馳せながら、箒は穩健派がアジトとして使っていた建物に到着したのだった。

一夏の指示で特訓を積み重ねて行く更識メンバーを労う為に、織斑姉妹は自動販売機

で飲み物を購入し真耶に差し入れさせた。

「どうして真耶さんが？ 織斑姉妹が買ったんなら、二人が持つてくるのが普通だと思うのですが」

「溜まつてる仕事をどうにかしなければいけないので、お二人はお金だけ出して、購入したのは私ですから」

「また仕事を溜めてるのですか……入学する前と今とでは、織斑姉妹の印象が百八十度変わった気がしますわ」

「まあ、そういうなセシリア。教官たちにもいろいろあるのだろう」

「いろいろあるにしても、織斑姉妹の仕事しなさは一夏も気にしてまし、僕以上に仕事してないのは問題だと思うんだけど。僕はまだ学生だから仕方ないって一夏は言ってくれたけど、織斑姉妹はそれが本業なわけだし」

「てか、あの二人が何もしないのは今に始まつた事じゃないわよ。昔一夏に聞いた話では、更識に養子縁組された理由の一つに、織斑姉妹がだらしなからって事があつたらしく」

「それ本当の話よ？ お父さんが織斑姉妹との話し合いに行ったときに、あまりにも家が汚かつたから一夏君をこんな場所に帰せないって事で養子縁組を決意したって聞いたし」

「まあ、元々一夏を織斑家に戻すつもりは無かったんだらうけどね」

更識姉妹の暴露話に、他のメンバーたちは驚きを隠せなかった。

「織斑姉妹って最強のイメージが強いので、他の事も出来るんだと思い込んでいましたが、他は平均以下なのですわね」

「まあ、何でも完璧にこなせる人なんていないって事だよ」

「だが、お兄ちゃんは何でも完璧にこなしてるイメージがあるぞ?」

「いっちゃんは確かに結構完璧にこなすけど、いろいろと苦手なものがあるから、そこでは私たちがフォローしてたんだよ?」

「本音は殆ど役に立ってませんでしたがね」

「おねくちやんだって、家事一切が出来ないじゃないか?」

「うっ……」

本音にカウンターを喰らい、虚はその場に膝をついた。

「布仏先輩って、家事苦手だったんですね。こりや意外だわ」

「凰さんだって、細かい作業はあまり得意ではないんですね?」

「まあ、あたしは大雑把ですからね。細かい事は一夏やバカ二人に任せてましたし」

「バカ二人つて？」

「無駄に付き合ひの長い悪友二人よ。毎年赤字すれすれの低空飛行組だから、バカ二人つて呼んでるのよ」

「その二人つて、前に一夏君が更識本社に呼んだ子たち？」

「たぶんそうですね。あたしも一緒にいましたし」

「更識の本社つて、そう簡単に入れないと聞いていましたが」

「一夏は関係者だし、あたしたちの目的だったものの開発責任者だったから、その縁で入ることが出来たのよ。まあ、その部屋以外は入れなかつたけどね」

「それは当然だよ。僕だつて本社にはなかなか入れないし、会議室や開発室以外は滅多に入れないもん」

関係者であるシャルもなかなか入れない場所に入った鈴に、全員は尊敬のまなざしを向けたのだった。

凡人と人外

穩健派が使っていたアジトに侵入した箒は、まず真つ先に盗み出した一夏の画像データを呼び起こした。

「これは！ いやしかし……まったく妹がけしからんな！」

誰もいないのにもかかわらず、誰かに聞かせるような言い訳をしながら、箒は一枚一枚をじっくりと鑑賞していく。

「こっちは映像データか……」

再生ボタンを押す勇気がないのか、箒はたつぷり数秒固まってしまった。

「いや、これは一夏がちゃんと成長しているか確認するだけだ。決してやましい気持ちがあるわけではない！」

またしても誰に聞かせるでもない言い訳をしてから、箒は映像を再生する。

「こ、これは！ ……これがいわゆる無修正というやつか……まったくけしからんな」

鼻から熱いものが流れ出るのを感じながらも、箒はかぶりつくように映像を眺めていた。

「これが一夏のすべて……実際に触ってみたりしてみたいものだ」

思う存分鑑賞した箒は、もう一つのUSBを取り出して無人機の設定データを呼び起こそうとして、エラーの表示に焦りを覚えた。

「エラーだと？　だがしつかりとコピーはしてきたはずだ。長時間外で生活していた所為でデータが壊れたとでもいうのか？　だが、一夏の画像データや映像データはしつかりと生きているし……何がどうなっているんだ」

元々素質はあったが磨いてこなかったせいで、箒はメカに余り強くない。平均以上は普通にやっつてのける実力はあるのだが、箒が挑もうとしているのは人外レベルと言われる相手なのだ。並大抵の実力では相手にすらならない。

「もう一度あの場所に行つてデータを……いや、既に日数も経っているし、あの場所も抑えられているだろう。だが、並の戦闘員なら倒せないことも無い……だが、あの場所に侵入した所為で、この場所を特定されるのも避けなければいけないし……クソ、こんな

ならもう少しあの餓鬼を調子づかせてコンピュータの使い方を教えてもらうんだっ
た」

マナカに教えを乞うのは箒にとって屈辱的な事ではあったが、こんな事になるなら我慢すればよかつたと、今更ながらに後悔したのだった。

人に支えてもらい、ようやく歩けるようになった一夏とマナカは、コンピュータのある部屋に移動し、箒の手掛かりを探してゆく。

「簪ちゃんや虚ちゃんもなかなか早かったけど、この二人は別格ね」

「そうですね。一夏さんもマナカさんも、人外的技術力を持つと噂されていますからね」
「マナカちゃんがこっち側に来てくれたから、簪ちゃんや虚ちゃんを前線に出す事も出来るし、一夏君不在の際でもなんとかなるもんね」

「ですが、あまり頼り過ぎるのもどうかと思いますよ。二人とも、まだ完全に回復した訳ではありませんので」

「分かっているけど、一夏君がいてくれるだけで、なんだか安心出来るじゃない?」

「それはまあ、一夏さんが側にいてくれる時の安心感は半端ないと私も思いますけど」

一夏とマナカが作業している後ろで、刀奈と美紀は雑談を繰り広げる。本来ならこの二人も訓練に参加するべきなのだろうが、一夏とマナカの支えとしてかつ、この二人ならマナカが裏切った時でも一夏を救い出せるという事でこの場にいるのだった。最も、マナカが裏切ったとしても、一夏に危害を加える可能性は限りなくゼロなので、本音でもよかったのではないかという声もちらほら聞こえてたりしている。

「お兄ちゃん、そっちはどう?」

「あちこちと点在してるみたいで、特定するのはもう少しかかりそうだ。そっちはどうだ?」

「仕掛けたトラップを発動するまでの技術力がないみたいで、コピーしたと思われるデータを起動するまでに行けてないんだよね……まったく、技術力の低いヤツはこれだから」

「コピーするだけでも大変なんだろう?」

「まあ、本当にダメな人には、データを引つ張り出す事自体無理だったからね」

「マナカのデータは、こちら側からハッキングしようとしても無理だったからね……どれだけのセキュリティを積んでたんだ?」

「それを言うなら、お兄ちゃん側のデータだって、セキュリティがキツくて手に入らなかったんだから。お兄ちゃんの方こそ、どれだけの物を積んでたの?」

兄妹の会話について行けない刀奈は、自分に宛がわれたモニターで外の様子を眺めていた。

「あつ、織斑姉妹がマドカちゃんと何か喋ってる」

「姉妹なんですし、喋っていてもおかしくないと思いますが?」

「でも、今は仕事の時間だった気がするんだけど……」

そう言つて刀奈は、映像を外から職員室へと切り替え、織斑姉妹の机の上を確認した。「終わつてるみたいね……普通に優秀なんだから、普段からちゃんとすれば一夏君に怒られる事も無くなるのに」

「それは刀奈お姉ちゃんにも言える事では？」

「今はちゃんと仕事してるでしょ」

「今は、ですけどね」

「うう……最近美紀ちゃんが意地悪だ」

美紀とそんなやり取りをしながら、刀奈は再び映像を外に戻し、三人が何を話しているのか聞けないかとモニターを弄る。

「刀奈お姉ちゃん、そんな事しても、声は拾えませんよ」

「唇の動きで分からないかなって……でも、読唇術なんて出来なかつたわ」

「それが出来るのは一夏さんと碧さんくらいですからね」

一夏は兎も角、碧もなかなかの人外だなと、改めて思った刀奈だったのだった。

織斑姉妹の逆鱗

箒の行方を捜していたマナカが、気まぐれで開いたオークションサイトに、目を疑うようなものが販売されていた。

「お、お兄ちゃん！ これ見て！」

「ん？ ……何だこれは」

そこに出品されているのは、まぎれもなく一夏の写真だ。しかもその服装はほぼ裸の物から、一番厚着でも上半身裸という実に頭の痛い写真だった。

「そこじゃないよ！ 落札価格」

「はっ。」

一夏は写真の方で頭を押さえていたのだが、マナカが問題視したのは出品されているものではなく落札価格だったようだ。

「えっと……一枚三百万？ 何の冗談だ？」

「まったくくだよね。三百万なんて安過ぎるよ！」

「えっ、そつち……」

たかが写真に三百万も出す物好きがいるのかと驚いた一夏だったが、マナカが怒っているのは落札価格が安過ぎるという事だった。

「出品されてるだけでも腹立たしいのに、こんな安値で買われるなんて、お兄ちゃんに対する侮辱だよ」

「美紀、このサイトの運営に連絡をして、落札者と出品者の情報を貰えないか問い合わせ
てくれ」

「かしこまりました」

暴走気味のマナカを放置し、一夏は美紀に指示を出す。

「この写真はマナカが保管していたものなのか？」

「この程度のは盗まれてもいいからってロックを掛けてなかったけど、確かに私のお兄ちゃんコレクションの一部だよ」

「と言う事は、恐らく出品者は篠ノ之だろうな。活動資金に困ったからと言って、こんな写真で儲けられるとでも思ったのだろうか……まあ、こんなのに三百万も出す物好きがいたようだが……」

「私だったらスタート価格は五百万からだね」

「そんなの誰も買わないだろ……」

「でも、お兄ちゃんの半裸体を引き渡すんだから、それ以上は絶対だよ！ 全裸体はス

タートは一千万以上は確実だけど」

「何でそんな写真を持つてるんだよ……」

「物心ついた時から、私はお兄ちゃん専門のカメラマンだから」

「……そんな時から監視衛星をハッキングしてたのかよ」

マナカが物心ついたころと言う事は、一夏もまだ記憶を失う前で、今みたいに黒い事も平気でするような性格ではなかったのだろう。そんな時からストーリーカーされていたと知って、一夏は今更ながらに自分の周りには変態しかいなかったと言う事を自覚した。

「刀奈さん、織斑姉妹をここに連れてきてください」

「いいけど、何かあったの？」

「いえ、恐らく落札者に心当たりがあるのではないかと」

「了解、ちよつと待っててね」

刀奈が織斑姉妹を呼びに行ったのを見計らい、マナカがもつともな事を言う。

「でもお兄ちゃん、あの二人にこれだけのお金があるとは思えないんだけど。最安値で三百万だし、いくらISで一世を風靡したとはいえ、あの酒癖と浪費壁を考えるとあの二人はあり得ないよ」

「だとすると、もう一人の変態か？」

「篠ノ之束なら、この程度の写真で満足するとは思えないけどね……あの人のコレクシヨンにも興味はあるけど、この程度なら篠ノ之箒も持ってたし」

「はっ？ 束さんだけじゃなく、篠ノ之もこんな写真を持つてるのか？」

「悔しいけど、私でも撮れなかったお兄ちゃんの下半身のアップ写真は、一億くらい出してでも手に入れたいと思っただもん」

「お前の金銭感覚にも驚きだが、篠ノ之にそんな写真撮られてた自分にも驚きだ……」

下半身のアップ写真に一億も出す妹にもビックリだが、そんな写真を大事に持っていて、しかも自慢げにマナカに見せた箒に一夏は本格的に恐怖を抱いたのだった。

「一夏がお姉ちゃんを呼んでいると聞いて！」

「さあ一夏！ お姉ちゃんに何を聞きたいんだ？」

「何故私まで連れてこられたんでしょうか」

「何を言う！ 一夏とマナカがいるんだから、後はマドカがいればこの場所は私たちの桃源郷となるではないか！」

「早速鍵を掛けてわたしたちだけの空間に——」

「あの、私もいるんですけど」

背後から刀奈が声を掛けると、千冬と千夏はおよそ人が出来無いような目を刀奈に向けてる。

「空気を読んでどこかに行ったらどうだ、更識姉？」

「そうだな……閻魔大王と行く二泊三日旅行とかどうだ？」

「そんな恐ろしい事言わないでくださいよ！ 一夏君、織斑先生たちがいじめろく」

「……話が進まないのです、今はスルーしますが、後でじっくりとお説教させていただきますので」

一連の流れに対するツツコミを諦め、一夏はさっさと本題へと入ることにした。

「これを見てください」

「こ、これは！」

「オークションは終了しました、だと……何故教えてくれなかった！」

「見てほしいのはそこではなく、この写真を買いたがる物好きに心当たりはありますか？」

「お前は自分の評価がどれくらいか知らないのか？ お前の写真なら、普通に立っているだけの物でも百は下らないんだぞ」

「何だそれは……」

衝撃の事実にも、一夏は眩暈を覚えその場に突っ伏したい気持ちに駆られた。

「一夏さん、運営サイトに確認しましたが、出品者はSHというハンドルネームと言う事しか分かりませんでした」

「SHは篠ノ之箒の亡国機業での名前よ。これで篠ノ之箒の足取りの手掛かりを得たわね」

マナカが小さく頷く横で、織斑姉妹は烈火の炎を纏ったような雰囲気醸し出していた。

「あの馬鹿箒が……」

「アイツは、わたしたちの逆鱗に触れた」

「何で怒ってるんだ、この人たちは？」

「お兄ちゃんには分からないよ、きつと」

とにかく、箒が織斑姉妹を怒らせたと言う事だけは理解した一夏は、姿さえ見つければすぐにこの件は終わるなど確信したのだった。

箒捕獲に向け

怒りに身を震わせながらも、織斑姉妹は箒の行方を捜す為に束に連絡を入れた。

『もすもすひねもす〜？　ちーちゃん、この束さんにどのような用事かな〜？』

「バカ箒が、我々の逆鱗に触れた。今すぐ居場所を特定しろ」

『ちーちゃんたちの逆鱗って、もしかしていつくんの盗撮写真をオークションに掛けたことかな〜？』

「知っているなら話は早い。とつとと貴様の妹の居場所を特定し、その周辺を消滅させろ」

『消滅させるのは簡単だけど、そんなことすればいつくんやマーちゃん、マナちゃんに軽蔑されるけど、それでもいいならいいけど〜？』

「ぐっ……」

千冬は束の一言に奥歯を噛みしめて葛藤する。箒は消し去りたいが、一夏やマドカ、そしてマナカに軽蔑されるのは避けたい。せつかく一夏やマドカが間に入ってかれて、多少なりともマナカと打ち解け始めたのに、箒の所為で全てを台無しにするなど、千冬

には耐えられないことだった。

「では、バカ箒のみを蒸発させることは可能か？」

『そんなの、いくら天才東さんでも無理だよ。それが出来るなら、とつくの昔に人類を滅亡させてるって』

「そうか……ならとりあえず、バカ箒の居場所の特定を急げ。お前の発明品で蒸発させられないのなら、私たちがこの手で生まれてきたことを後悔させてやるから」

『居場所なら特定出来るし、そのオークションの落札者は東さんだから』

「貴様か！ テロリストに資金提供をしたのは！」

『別に箒ちゃんを助けるために購入したんじゃないやなくて、いつくんの写真を有象無象の手に渡るのを避けるために購入したんだよ！ 決して私利私欲の為じゃ……』

『束様、購入した写真が送られてきました』

『わーい、ありがとう、クーちゃん。これで当分はいつくん成分の補給に事欠かないよ……はっ!』

「貴様……完全に私利私欲ではないか！」

千冬と電話していることを忘れ、束はつい本音を漏らしてしまい、千冬のカミナリを電話越しに喰らったのだった。

『ま、まあまあ……ちーちゃんとなつちゃんになら、特別価格でコピーさせてあげるから』

「……なら仕方ないな。その代わり、こちらの言い値で納得してもらおうからな」

『三枚までだからね！ それ以上は東さん価格でやらせてもらうから』

「仕方ないな、それで手を打とう」

東との交渉を済ませた千冬は、東から送られてきた位置データを見て、怒りが沸々と湧きだしたのだった。

箒の居場所を特定したと報告を受け、一夏とマナカは千冬から位置データを見せてもらい、早急に監視衛星をハッキングし、その場所の確認を急いだ。

「人が生活してる反応有り。ついでにサイレント・ゼフィルスの反応もあるね。間違いなく箒ノ之箒がここを拠点にしてる」

「一回直に確認したから、見落としていたな……箒ノ之に裏をかかれるとは思ってなかったな」

「てか、最近になってこの場所にコンピューターがあるって気づいたみたいだよ。それまでは点々としてたっぼいし」

「てか、資金繰りが苦しいからって、俺の写真を売るか普通……」

「お兄ちゃんの写真なら、一枚だけでも一ヶ月は生活出来るくらいの値が付くからね」
「私なら、全財産を叩いてでも一夏の写真を買うぞ！」

「自慢にならないでしょうが、そんなこと」

一夏が呆れながら、現在の情報をモニターに映し出す。そこには、間違いなく箒の姿が映し出されていた。

「何か喋ってるな」

「口元をアップに出来る？」

「少し待ってろ」

マナカに言われるまでもなく口元をアップにした一夏は、そこから口の動きを読んで箒が何を言っているのかを確認する。

「えつと……『ま、さ、か、こ、れ、ほ、ど、の、ね、が、つ、く、と、は』何を言ってるんだ？」

「モニターに表示された金額を見て喜んでるのかも」

「続きは……『こ、れ、な、ら、い、く、ら、で、も、つ、く、る、こ、と、が、で、き、る』何を造るんだ？」

「無人機のデータは抜き出しただろうから、きっと無人機だと思うよ」

「造られると厄介だな。千冬先生、許可しますので千夏先生と共にこの場に急行し、篠ノ之箒を捕まえてきてください。抵抗した場合のみ攻撃を許可しますので、くれぐれも逃

がさないようにお願いします」

「任せろ一夏！ お姉ちゃんが颯爽とこのバカを捕まえて来るからな！」

意気揚々と部屋を飛び出し、千夏と合流しものすごい速度で飛んでいった千冬を見送り、一夏はモニターに視線を戻した。

「無人機製造は出来るかもしれないが、コアの製造は別データじゃないのか？」

「そもそも、資格が無い人間にコアは造れないよ。それこそ、篠ノ之束と私、そしてお兄ちゃんの三人以外はね」

「外装だけ造れてもな……そこに気付かない辺り、やはり篠ノ之は篠ノ之なのか」

「そもそもお兄ちゃんが自分の物だって勘違いしてる残念な頭の持ち主なんだから、無人機のデータがあっても製造出来るかどうか怪しいと思うけどね」

「とにかく、織斑姉妹が篠ノ之を捕獲してくれれば、とりあえずの問題は解決になるな」
「平凡な学生生活を送れるんじゃない？」

「いや、後処理や更識の仕事があるだろうし、平凡な学生生活は無理だろうな」

既に事件解決を確信した二人は、解決後の事を考え始めていたのだった。

箒覚醒

箒には気配探知の才能は無い。いや、無いわけではないが、更識所属の面々や織斑姉妹と比べれば、無いに等しいと評されても仕方ない程度の才能しかない。

しかし箒は、野生の勘で危機を察知し、使っていたアジトを捨て身を隠していた。

「何故この場所に気付いたんだ……一夏やマナカがいるとはいえ、あまりにも早すぎる」

つい数時間前まで使っていたアジトには、現在織斑姉妹がガサ入れに来ている。あの二人の殺気だからこそ感じ取れたのだと、箒は昔から度々浴びせられた殺気に、何故か感謝したのだった。

「(とりあえず他の場所に移動するべきなのだろうが、下手に動くとも気取られる。私にはずっと気配を隠し続けるだけの実力は無いが、周りと同化して気配を偽ることは習得した。だから織斑姉妹があの場合を去るまでここでジツとし続け、帰ったのを見計らって別の場所に移動するしかない……くそっ、一夏のヤツめ。正々堂々自分で私を捕まえに来ればいいものを、何故あの二人を使っただのだ)」

相変わらずの責任転嫁ではあるが、負傷している一夏相手ならば、箒は勝つ自信があつたのだ。万全の状態の一夏では敵わないかもしれないが、負傷し動きに精彩を欠く一夏ならばと、箒は淡い期待を抱いていたのだつた。

「いたか？」

「いや、既にもぬけの殻だ」

「そう遠くには行っていないはずだ。周辺を隈なく探すぞ」

織斑姉妹の会話が聞こえてきて、箒はさらに身を低くして周辺に気配を溶け込ませる。

「(こんな事ばかり上手くなっても、何の役にも立たないと思つたが、これはこれで意外と役に立つな)」

逃亡生活が長引けば長引く程、こういつた術が上手になると、箒は自分の置かれた状態を皮肉り、人知れず笑みを浮かべたのだつた。

「(私のこの術で織斑姉妹をやり切れれば、一夏も私の事を見なおすかもしれないな)」

万が一にも、織斑姉妹と戦闘になれば自分に勝機は無い。その事は箒でも理解している、だからこそ気配を周辺に溶け込ませ、やり過ごす事で箒は自分の株を上げようと計画したのだった。

「まあ、そんなことはこの束さんが許さないんだけどね〜」

「なにつ!？」

「そもそも、ちーちゃんやなっちゃんだって、この程度の擬態に気付かないわけないじゃん」

「やれやれ、もう少し泳がせるつもりだったのだがな。邪魔してくれるな、束よ」

「見ててイライラしたからついね。いっくんを出し抜こうなんて百兆年早いよ」

「そんなに生きてるヤツがいると思うのか？」

「だから、一生無理だって事だよ、なっちゃん」

いつの間にか囲まれていたと、箒は自分が置かれた状況を理解するのに手間取った。

「何故だ!?! 千冬さんや千夏さんの会話は、間違いなく遠くから聞こえたのに」

「気配を偽る程度の事が出来ずにどうする」

「一夏やマナカ相手ならともかく、貴様相手に後れを取るはずないだろ」

「というわけで、おバカな箒ちゃん。君はいっくんに裁かれることになるから、大人しく

束さんたちに連行されるんだね」

「何故姉さんまでいるんですか！ 織斑姉妹ならなんとなく何でもありな気はしますが、姉さんは頭脳だけでしょうが！」

「知らんのか？ 束は細胞レベルで私たち以上なんだぞ」

「いつくんやマナちゃんには敵わないかもだけどね」

「逆らう気が無いだけだろ、お前の場合は」

自分を置いて会話を続ける三人に、箒は絶望感を抱いていた。自分の姉は武力においても自分以上だと知らしめられたことがショックだったのだろうと、三人はあまり深く考えていなかったが、箒の様子がおかしいと千夏が気づき、二人も普段以上におかしいと感じ取り警戒を強めた。

「認めない……こんな展開はあってはならないのだ」

「ん？ 何を考えてるのかな、このおバカちゃんは」

「認めない……私がこんなところで終わるなど、認めてなるものか！」

「認めないも何も、君はもうここで……」

「私は、こんなところで終わるわけにはいかないのだ！」

箒の言葉に呼応するかのように、箒の身体から力が溢れて来る。その気配を感じ取り、織斑姉妹は箒の動きを封じようとしたが、時すでに遅し。二人が反応した瞬間には、箒の姿は目の前から消えていたのだった。

「おい東、あれはどういうことだ?」

「分からないけど、東さんの妹だから、もしかしたら箒ちゃんも細胞レベルで人外なのかもしれない」

「だが、貴様が調べた限り、アイツは凡人程度の力しか持つてなかったはずだろ」

「分からないよ! 東さんにだって、この展開は予想外過ぎるんだもん」

「感謝しますよ、姉さん。そして千冬さんに千夏さん。お陰で、隠されていた本当の力が目覚めました。お礼に、私の真の力を味合わせて差し上げますよ」

そう言うや否や、箒は三人の周辺を爆発させる。無論、その程度の攻撃でこの三人が大人しくなるはずもないのだが、爆薬も何もない状態でいきなり爆破されれば、精神的に来るものは大きかった。

「これがあの箒だというのか?」

「弱くバカの箒が、こんなことを?」

「散々馬鹿にしてくれましたもんね。帰って一夏に伝えてください。一対一で勝負をつ

けてみろと」

「ま、待て！」

「……なんちやつてね」

織斑姉妹を囿に使い、東は箒の背後に回り込み麻醉銃を打ち込んだのだった。

監視

織斑姉妹と束に捕まった箒は、IS学園にある地下施設に一時監禁される事となった。並大抵の攻撃では壊す事の出来ない壁や扉で無ければ、箒を監禁する事は不可能だと一夏が判断したからである。

「何故私がこのような目に遭わなければならないのだ！ 私は何も悪い事などしていないではないか！」

誰もいない地下空間で大声を出したところで、誰かが応えてくれるわけでもない。箒はただ八つ当たりをしているだけなのだ。

「窓も無ければ時計も無いからな……食事はしつかりと持つてきてもらえるが、それが一日三食なのかどうかの見当がつかない……いったい、私は何日間この場所に監禁されているんだ？」

食事を運んでくるのが織斑姉妹のどちらかなので、その相手を殴り倒して逃げ出す、などという事が出来ないし、あの二人なら一食や二食普通に抜いているかもしれないの

で、これが朝食なのか、はたまた昼食なのか、あるいは夕食なのかという判断が箒には出来ないのだった。

「専用機さえあれば、こんな場所破壊して逃げ出せるんだが……一夏め、不当に私の専用機を奪い取るなど……まったく、男の風上にも置けん所業だ」

あれだけの事をやっておきながら、箒にはその自覚が全くない。自分がこの場所に監禁されている理由も、一夏が専用機を取り上げた理由も、箒には理解出来ないのだった。「織斑姉妹や姉さんまで洗脳して味方につけるなど、何処まで落ちぶれば気が済むのだアイツは……やはり私が一から鍛え直すしかないのだろうか」

手持無沙汰を解消するために、箒は何もない空間でも出来るトレーニングを開始する。腕立てや腹筋、背筋などの基本的なトレーニングから、篠ノ之流徒手格闘術の型をなぞってみたりと、その動きは様々だったが、その動きに反応する相手は誰もいないのだった。

「せめて窓でもあれば違うんだが……いつそのこと素手で壁とかを殴り壊して逃げ出すか？　だが、一回試したがびくともしなかつたしな……」

それだけ自分は警戒されているのだとも知らずに、箒は再び一夏に対する愚痴を溢し始めた。

「自分では一切手を下さず、審判気取りの勘違いをしてる一夏を、私は正しい道へと更生させようとしただけではないか！ それをアイツはまだ勘違いして、私を不当にこんな場所に監禁するなど……まったくもってけしからんな！ 更識で生活するようになって、アイツの性根は腐ってしまったようだな」

挙句に更識家の事を悪く言うなど、箒には反省の色は全く見られないのだった。

箒には気づかない程度の監視カメラから、箒の様子を観察していたマナカと簪は、箒に対しての殺意を抑えきれなくらいにまで膨らませていた。

「コイツ、お兄ちゃんのことを悪く言うなんて……本来なら、裁判抜きで極刑だつていうのに、お兄ちゃんがそれは避けた方が良くと言ったからまだ生きてるのに……感謝するのが普通でしょうが」

「篠ノ之さん、ウチの事を悪く言うなんて……それに、一夏の性根は腐つてない。むしろ篠ノ之さんの方が腐つてるんじゃない」

ともに一夏至上主義であり妹属性、マナカと簪が打ち解けるのにそう時間はかからなかった。

「簪、やっぱりこいつは殺すべきだと思わない?」

「思うけど、勝手に手を下すと一夏が怒るよ?」

「そこなんだよね……お兄ちゃんは優しいから、こんな屑にも人権を認めてあげてるんだよね」

「害虫でしかないと思うけどね」

「害虫は駆除しなきゃいけないけど、お兄ちゃんに嫌われるのは嫌だもんね……」

いつそのこと殺虫剤でも食事に混ぜようかとも考えたが、一夏に怒られる、一夏に嫌われるかもしれないという思いが邪魔をして実行には至っていなかった。

「ところで、そのお兄ちゃんは何処に行ってるの？」

「お姉ちゃんと美紀を連れて、誰かを探しに行ってるらしいんだけど……」

「まあまあ、いつちーはきつと帰ってくるから大丈夫だよ」

「本音は相変わらずね」

「ほえ？ マナマナ、それってどういう意味？」

同じく妹属性であり、誰とでも仲良くなれるという特技を持つ本音も、マナカとは有効な関係を築いている。世界のすべてを破壊すると考えていたマナカだったが、ここに来て気持ち共有出来る友人という存在のありがたみを感じていたのだった。

「何も考えていないようで、実は考えてたりするから怖いって意味よ」

「怖いかな〜？ それに、何も考えていない人間なんていないと思うけどな〜……あつ、目の前にいるね」

そう言つて本音は、モニターを指差す。箒の現状は、思い込みの結果であり、他の事を何も考えなかつたからであると、本音はそう主張したのであつた。

「まあ、話を聞く限り、篠ノ之さんは昔から考え無しだったみたいだからね」

「織斑千冬、千夏姉妹に喧嘩を売つたとかなんとか……武力も伴つてないのにバカの極みよね」

「全部自分が正しくて、周りが間違つてるとか思つてるんじゃないのかな〜？」
「ありえるかもね」

監視を続けながら、妹属性の三人は箒に対する評価を口にしては、その都度殺意が増していくのを感じていた。

「やっぱり駆除するしか」

「でも、碧さんの監視を抜けるのは至難の業だよ？」

「私もまだ完全に回復してないから、あの人には勝てないわよ」

一夏が自分たちの行動を読んでいたのかは分からないが、箒を監視している自分たちは碧に監視されているのだと思ひ出し、三人はそろってため息を吐いたのだった。

最強の師匠

衛星と情報を駆使して、一夏はとある人物を探し、そしてようやく発見したのだった。本当なら織斑姉妹か束に任せなかったのだが、更識家当主としてお願いした方が良いと刀奈たちに言われ、護衛の美紀と、提案者の刀奈を連れてその人物を訪ねる事にしたのだった。

「ごめんください。どなたかいらつしやいませんか？」

目的の場所に到着し、一夏は建物の中に人の気配を感じていながらもしつかりと声を掛けて相手の反応を待った。

「こんな人里離れた場所に客人とは珍しい。しかも、随分と出来る人たちのようだ」

「何の連絡もなく、突然押しかけて申し訳ありません。私は、更識一夏と申します」

「更識？」

「なにか？」

一夏の顔を覗き込むようにしてから、一夏の名乗った苗字に首を傾げる男性。一夏と

しては、自分の事を知られていても不思議ではない相手なので、特に気にした様子は見せなかった。

「いや、知り合いに『一夏』という子がいてね。懐かしい名前だったからつつい顔を見込んでしまった。まことに申し訳ない」

「いえ、貴方が私の事を知っていても不思議ではないと、姉たちから聞かされておりますので」

「姉？」

「私の旧姓は織斑一夏ですので」

「では、やはりあの」

「貴方の思っている通りだと思います、篠ノ之柳韻様」

「様は止してくれ。そうか、あの一夏君だったか」

一夏が訪ねたのは、東と箒の父親にして、織斑姉妹の師匠である篠ノ之柳韻だった。「それで、こんな所まで私を訪ねてきた理由はなんだい？ 君の事だから、ただ昔話をしに来たというわけでもないのだから？」

「では、さっそく本題に入らせていただきますが、貴方に娘の指導をお願いしたく参上仕った次第です」

「娘？ 君は確か箒と同じ年のはずだが、もう子供がいるのかい？」

「いえ、私の娘ではなく、貴方の娘さん——篠ノ之箒の指導をお願いしたくてここに参りました」

「箒の？ あの子はIS学園で勉学に励んでいるのではないのかい？」

近況は知らされていないようで、柳韻は一夏の申し出に首を傾げた。

「美紀」

「はい、一夏様。こちらでございます」

普段は敬語など使わなくて良いと言っている一夏だが、この時だけは立場をはつきりとさせた方が良いと言う事で、美紀は敬語を使い様付けで一夏の事を呼んだのだった。

「篠ノ之柳韻殿、こちらに貴方の娘である篠ノ之箒が、ここ数ヶ月でした事を纏めてあります。映像データもございしますので、ご確認を」

「随分と物々しい雰囲気だが、あの子は何をやらかしたんだ？」

一夏から資料を受け取り、柳韻はその資料に目を通して行く。次第に眉間に皺が寄り、信じられないものを見るような表情に変わっていく。

「これは、何かの冗談とかではないのだね？」

「残念ながら、全て事実です。東さんの協力もあり、全ての所業の映像を手に入れる事が出来ました。ご覧になれますか？」

「いや、止めておこう。君たちの雰囲気を見れば、これが嘘ではなく事実であると言う事は十分わかった」

「では、お願いできませんでしょうか？」

「それは構わないが、ここまでの事をしたんだ。私などに頼まず君たちが手を下しても文句は言えないと思うのだが」

「何分人手不足なものでして。貴方が矯正してくださるのでしたら、まだ使い道はあると思うのですよ」

「随分と黒い事をあつさり言う子になったね、君は……昔はもつと素直で優しい子だったと思うのだが」

「昔の記憶はありません。それに今は、暗部の頭領として——大企業のトップとして、黒さも必要なのですよ」

一夏の見せた黒い笑みに、柳韻は一夏がどのような生活をしてきたかを理解し、そして頭を下げた。

「我が娘が多なるご迷惑をお掛けしたようで、この通り謝罪申し上げます。箒はもちろん、東も君の人生を狂わせてしまったようで」

「その二人が全てではありませんけどね。血縁の姉二人も、私の人生を大きく狂わせてくれましたし」

「千冬ちゃんと千夏ちゃんか……確かにあの子たちは、君の事を常に一番に考えていたからね……何か行き過ぎたことをするのではないかと心配していたのだが」

「不肖の姉の所為で、貴方様を悩ませていたとは……こちらも謝罪申し上げます」

一夏と柳韻、互いに頭を下げ合い、互いに気にしないでくれと両手を振って謝罪は不要だと伝える。

「それで、今箒は何処にいますんだい？」

「既に身柄は確保しておりますし、IS学園の地下施設で厳重に監視しておりますのでご安心を」

「監視の方も、織斑姉妹をはじめとする優秀な人材が行っておりますので、これ以上ご息女が罪を重ねる事はないと思われまますのでご安心を」

一夏の言葉に美紀が補足説明を行い、柳韻の心を落ち着かせた。

「では、君たちは先に戻っていてくれ。私は車で向かうでしょう」

「いえ、貴方には一刻も早くI S学園に来てもらわなければいけませんので、私がI S学園まで運ばせていただきます」

「運ぶ？ I Sを無断で展開するのは違法ではなかったかね？」

「既に各国首脳に許可はもらっておりますし、それだけ重要な案件なのです」

「やれやれ、我が娘ながら情けない……どれだけの人に迷惑を掛ければ気が済むのだか」

一夏の影響力にも驚きはしたが、それ以上に箒が迷惑をかけている事に頭を悩ませた柳韻は、一夏が展開したI Sの肩に乗り、I S学園まで向かったのだった。

最強のお出迎え

普段だらしない織斑姉妹が、ぴつちりとスーツを着て、何処か落ち着きのない態度で座っているのを見て、真耶は首を捻った。

「あの、更識君が探している人って、どういう人なんですか？　千冬さんや千夏さんはご存じなんですよね？」

真耶がそう尋ねると、千冬と千夏はそろって肩を跳ね、ぎこちない動作で真耶の方へ振り向いた。

「とても厳格な人で、私や千夏もよく怒られたものだ」

「あの人が親でありながら、何故あのような残念な娘に育ったのかが、わたしには分からない」

「とにかくだ、失礼のないようにしなければな」

「そんなに怖い人なんですか？」

真耶がそう問いかけたタイミングで、千冬と千夏は席を立ち正門へと向かい始めた。

「何処に行くんですか!? まだ仕事が残ってますよ」

「それどころではない! 出迎えをしなかったとバレたら、後で何をされるか分からないからな」

「挨拶だけしたら戻る。だから見逃してくれ」

「やれやれ……真耶、ここは私がやっておくから、織斑姉妹が怯える相手を見てきたら?」

「小鳥遊先輩……はい、行ってきます」

碧に後を任せ、真耶も織斑姉妹同様正門へ向かう。よく見れば、更識所属の中でも、簪とそのメイドである本音以外は姿を見せていない。余程高位な相手なのだろうと、真耶はその相手が現れるのを待ち望んだ。

「山田先生まで、どうなさったんですか?」

「更識さん……いえ、織斑先生たちが職員室から急いで移動し始めたので、何事かと思いまして」

「そうですか。でも、すぐに分かると思いますよ」

「おねーちゃんが来るべきじゃないの? 何で私なの?」

「虚さんは篠ノ之さんの監視で忙しいからでしょ。一夏とお姉ちゃんがいらないんだか

ら、代理は虚さんくらいしか出来ないんだし」

「かんちゃんだつて出来るじゃんか〜!」

「それだと、更識本家の人間が出迎えにいないでしょ」

どうやら更識家の人間でも、しつかりとしたもてなしが必要な相手であると、真耶は一夏が連れて来る相手がどんな人なのか想像がつかなくなつてしまった。

「あの更識家の人でも、わざわざ出迎えをするくらいの人つて、いったいどんな人なのでしょうか……各国首脳ですら出迎える事はないと聞いてるんですけど……ましてやあの織斑姉妹ですら恐怖するなんて、どんな人外が現れるのか分かりませんね」

そんなことを考えていると、千冬と千夏が一層背筋を伸ばし、直立不動の体制になっていた。どうやらいよいよお出ましのようだ、真耶は内心ワクワクしていたのだつた。

「ご無沙汰しております、師匠」

「この度はわざわざご足労頂き、ありがとうございます」

「おお、千冬ちゃんに千夏ちゃんか。大きくなつたね」

「お初にお目に掛かります、篠ノ之柳韻様。更識家次女、更識簪と申します」

「布仏本音です。貴方がシノノンのおとくさん？」
「本音っ!？」

実に馴れ馴れしい態度に、簪の顔が蒼褪める。よく見れば織斑姉妹の表情も強張っているが、馴れ馴れしく話しかけられた柳韻は、実に楽しそうな顔をしている。

「随分と面白いお嬢さんだね。一夏君の知り合いなんだろう？」

「一応幼馴染ということになっています。本音、後はこつちでやるから簪と二人で部屋に戻ってろ」

「了解だよー！ さあかんちゃん！ ゲームの続きをしよう」

「もう！ 失礼します」

「ばいばーい！」

恥ずかしそうに一礼する簪と、無邪気に手を振って去っていった本音を見送り、刀奈が一夏の後ろで恥ずかしそうに身動きをしたのだった。

「いやはや、君の周りには素敵な女性が大勢いるようだね」

「お騒がせして、申し訳ありません」

「なに、久しくあのように気軽に話しかけて来る女の子などいなかったからな。年甲斐

もなくうれしくなってしまうたよ。それで、千冬ちゃんと千夏ちゃんは、しっかりと教師をやっているのかい？」

「は、はひいー！」

「それでは、わたしたちは仕事が残っていますので、これで失礼しまひゅー！」

柳韻に視線を向けられ、慌てて職員室に戻る織斑姉妹。その姿をポカンと口を開けて見送った真耶だったが、自分も戻らなければいけないと思い出し、一夏に一礼して二人を追いかけて行つたのだった。

「あの様子じゃ、サボり癖は治ってないようだね」

「最近は多少マシになってきましたが、追いかけて行つた女性に仕事を任せて、篠ノ之を探しに行つたりと問題は多いですけどね」

「根は真面目なんだがな……まっ、そんなこと私が言わずとも、君なら分かっているのだろっ？」

「さて、どうでしょうかね」

柳韻の問いかけに韜晦で返し、一夏は柳韻を連れてきた本来の目的を果たす為に案内をすることにした。

「ろくなもてなしも出来ませんが、とりあえずモニター室で現状を確認していただきましようか」

「そうだね。私はその為にここに来たんだからね。世間話は後程、千冬ちゃんたちを交えてゆっくりとしようか」

「……………」

どうしても自分の現状を知りたいのかと、一夏はため息を吐いて柳韻の好奇心を振り払い歩き出す。随分と大人びた対応に頷きながら、柳韻は大人しく一夏の後に続いた。

「ところで、誰が本命なんだい？」

「世間話は後程だったのでは？」

「なに、年寄の道楽だと思っただけで諦めてくれ」

「……………誰とも付き合ってませんよ」

それだけ答え、一夏はその後無言でモニター室まで移動したのだった。

親子の対面

人の足音が聞こえ、箒はもぞもぞと起き上がる。食事以外にすることがない現状で、暴れる事以外に出来る事と言えはふて寝くらいであった。

「もう飯の時間か？」

時計も無く、外も見えない状態では時間感覚が麻痺してしまうのも仕方ないが、その状態の箒でも、いささか早すぎると感じていた。

「一夏か、ようやく私を助ける気になったのか」

部屋に入ってきた人物を見て、箒はそんなことを言う。自分が悪い事をしたという自覚がないので、この現状は不当であると訴え続けているのだから、そんな勘違いも仕方ないのかもしれない。

「俺はある人をこの場に連れてきただけだ」

「ある人？ いったい誰だというんだ」

あくまで強気な態度を崩さない筈ではあったが、一夏が横にずれ招き入れた人物を見て、思わず息を呑んで固まってしまった。

「な、何故貴方がこんな場所に……」

「どうやら私は、お前の育て方を間違えたようだな。中学女子剣道大会で優勝したと聞いた時は嬉しかったが、まさか犯罪組織に身を落とし、あまつさえ大量殺人を働いたと聞かされた時は、何かの間違いだと思つたよ」

「私は殺人などしておりません」

「一夏君からお前がしたことを全て聞かせてもらったよ。いい加減認めたらどうだい？」

「ですから、それは一夏が勝手に言っている事であつて——」

「そうか……一夏君、ここからは私と筈だけにしてくれないか」

「分かりました。一応監視は続けますが、行き過ぎない限り、こちらから干渉する事はありませんので」

「すまない……こんなことを頼める立場ではないことは分かっているのだが、せめて娘に現実を教えてやることは親の仕事だからね」

一礼して一夏が部屋から去っていくと、柳韻は先ほどまでの穏やかな雰囲気から一

変、あの織斑姉妹ですら恐怖する師範の顔になった。

「箒、お前がしてきたことは紛れもない犯罪、しかも殺人だ。普通であれば捕まった時点で死刑だろうが、一夏君が各国首脳に無理を言つて身柄を更識が引き受けているんだ」

「死刑？ 私は別に悪い事をした覚えはありません。犯罪者を一掃したに過ぎません」

「それは誰に命じられてやった？ 国か？」

「いえ……」

「例え犯罪組織の人間であろうと、独断で殺していいわけではないのは分かるな」

「ですが」

「口答えするな！」

なおも屁理屈を捏ねようとした箒に、柳韻のカミナリが落ちる。さすがの箒も、柳韻のカミナリには抵抗出来ないのか、背筋を伸ばし押し黙った。

「この場でお前を処分する事は容易い。だが、お前一人の命でお前が殺めた命の分の罪を相殺する事は出来ない。一夏君は私にお前の再教育を任せてくれるそうだ。それでもお前の性根が治らないようなら、処刑もやむなしだと言っている」

「アイツに何の権限があつてそんなことを……」

「知らないのか？ 一夏君は更識家の当主で、各国首脳にも顔が利く。本来なら親の教

育不足として、私も処分されるべきなのだろうが、特殊な状況を鑑みてこのようなチャンスをくれているんだ。みっちり鍛え直してやるから、覚悟しておくのだな」

「待ってください。何故私が父上に指導されなければならないのですか。悪いのは一夏で、私は何も——」

「そうやって責任を全て彼に押し付けてきたんだろ。それが間違っていると何故わからない」

もはや怒る価値もないと判断したのか、柳韻は情けないと嘆くだけで箒を怒ったりしなかった。まさかここまで身勝手な思考を身につけているとは思っていなかったのだろう。

「お前の矯正期間は二ヶ月、それでまともな思考にならなかった時は、私も合わせて処分されようではないか」

それだけ言い残して、柳韻は監禁部屋を後にした。残された箒は、何故こんなことになったのかと、自分の行為を思い返していたのだった。

一夏が待つ応接室へ足を運んだ柳韻は、IS学園に来た時よりも老けて見えるくらいやつれていた。

「大丈夫ですか？」

「ああ……まさかあそこまで身勝手に育つているとは思ってなかったからね……小学五年の時に離れ離れになり、どんな風に成長したのかと思っていたが、まさかあそこまでとは……」

「なまじ能力があつたからこそその勘違いなのでしょうね。武力においては、専用機を持

たない生徒の中では上位ですし、生身の戦闘なら全校生徒の中でも上から数えた方が早いでしょう」

「君にそう言ってもらえてるのに、あの子は何が気に入らなくて犯罪者になってしまったのか……」

「その辺りは自分より、他の人に聞いた方が分かりやすいと思います」

一夏は話題を打ち切り、柳韻に箒の身柄を預ける書類を差し出し、後は柳韻のサインが済めばいつでも身柄を引き渡せると説明した。

「何から何まで、迷惑をかけて申し訳ない。必ずや更生させ、世界の為に働かせると約束しよう」

「無理はなさらないください。本当なら、篠ノ之を処分すれば丸く収まるのを、昔馴染みとして最後のチャンスを与えただけです。ダメなら、さっさと処分しますので、柳韻さんも手が付けられないと判断したのであれば、いつでもご連絡ください」

「ああ、無理はしない。だが、これでもあの子は私の娘だからね。最後まで諦めないつもりだ」

そう宣言して、柳韻は書類にサインをする。それを受け取り、一夏は碧にその書類を

手渡し、箒の身柄を柳韻に引き渡す準備に取り掛かったのだった。

平和な日常？

柳韻が箒を引き取り、改心させると意気込んでいったのを見送り、一夏と美紀は、ホッと一息ついたのだった。

「これで問題解決になればいいですね」

「そうだな。抱えていた問題の大半は、篠ノ之の事だったし、これが片付けば平凡とはいかなくとも、学園生活を送ることが出来るだろう」

「一夏さん、入学してから今日まで、まともな学園生活を送ってませんからね」

「そうだったか？」

そもそもまともな学園生活とはどんなものなのか、一夏には見当がつかない。記憶を失ってからは、しばらく箒に付きまとわれ、中学に入学したころには、ISの研究などに時間を当てていたので、友達と遊んだり是最小限しか経験したことがない。そしてIS学園に入学してからは、怒涛の展開に振り回され、その解決に奔走していたら、今日まで経っていたという感じなのだ。

「刀奈お姉ちゃんの事ですから、何か計画してるかもしれないですよ」

「直近のイベントだと、もうクリスマスになるのか？」

「ハロウインは間に合いませんしね」

「いや、あの人の事だから、既に用意してるかもしれない」

そもそもは盛り上がるイベントではないのだが、刀奈なら何でもありだろうと言う事は、二人の中で共通の認識なのだ。

「一夏さんがコスプレしたら、またマナカさんや篠ノ之博士に盗撮されちゃいますね」

「何で隠れる必要があるのか、さっぱりわからないのだが……写真を撮りたいなら、普通に撮ればいいものを」

昔ならともかく、束もマナカも気軽に一夏に話しかけられる状態にはあるのだから、写真くらい普通に撮ればいいというのが、一夏の考えだった。

「あの二人は盗撮する事に意味がある、とか言ってみましたけどね」

「マナカもやっぱり織斑の系譜なんだな……マドカがいい子に育ってくれていて助かった」

「織斑と言えば、千冬先生と千夏先生のお給料はどうするんですか？」

「当分は二十パーセントカットでいいだろ。下手に金を渡すと、すぐに酒盛りするから

な」

「そうですね。もう散らかされても掃除する人がいませんものね」

前はダリルやフォルテに掃除させることが出来たが、次はその手が使えない。かといつて本人たちに掃除させようとしても、余計に散らかる未来しか見えないのだった。

「こんな事で久延毘古の能力を使いたくなくなつたがな……」

「一夏さんも、多少てこずりながらも未来視を使えるようになりましたからな」

「かなり疲れるけどな……」

香澄のデータを元に、一夏も未来視が使える武装を積み込んだのだが、やはり処理する情報が多すぎて疲労がたまりやすいのだ。

「いたいた、一夏君。来月なんだけど、中止になった文化祭をやってほしいって学長が」
「中止になったのは模擬戦だけだったような気がしますが……」

「だから、全校生徒に参加者を募つて、トーナメント戦をやりたいんだってさ。現状の戦力を把握するのにもちょうどいいだろうからって」

「敵対勢力はもういないっていうのに、何で戦力を把握する必要があるんですか……」

「IS学園卒の国家代表が増えれば、入学者増が見込めるからって、経営的な問題らしい」

わよ」

「運営はこつちに丸投げなのに、ちゃっかりしてる」

すぐさま頭の中で計画が可能かどうかを精査し、一夏は簪に電話を掛ける。

「参加者募集のポスター、すぐに作れるか？　こういうのは本音が得意だったから、本音に構図は任せれば良いから。そうだな……十枚ほどあれば足りるだろうし、貼る場所とかは黛先輩に頼めば、良い場所を教えてくれるだろうから」

手配を済ませた一夏は、細かなルールを決めるために刀奈を連れて虚の部屋へとやってきた。

「校長も急ですね……ハンディとかはどうするのでしょうか？」

「全校生徒参加可能だと言う事は、専用機持ちだろうが関係なく組み込むと言う事でしょうからね……一般の部と専用機持ちの部に分けた方が良いでしょうね」

「でもそれだと、アリーナを全部使っても一日で終わるかどうかな……」

「参加人数が多い場合は、一試合を四人で戦わせればいいんですよ。そうすれば試合数も減りますし、I Sを犯罪に使う集団が、これから先現れないとも分かりませんからね。多人数での戦闘にも慣れておく必要があるでしょう」

「今回は一夏君たちが事前に潰したからよかつたけど、次も一夏君が現場にいるとも限らないもんね」

「亡国機業の一件で、更識は各国に傘下の企業を持つ事になりましたからね。代表である一夏さんが各国を飛び回る必要も出て来るでしょう」

具体的な話し合いをしているところに、碧から連絡が入った。

「何か問題でも起こりましたか？」

『オータムが模擬戦に乱入してきたんですが、止めた方が良いでしょうか？』

「行き過ぎない限りは、自由にさせて構いません。もちろん、怪我を負わせるような事をすれば、叩き潰して構いませんので」

『承知しました。それと、スコールも参加したげなのですが』

「手が空いてる人と戦わせて構いませんよ。実力者を相手に訓練すれば、自然と成長するでしょうし」

更識所属以外の候補生たちも、日に日に実力を伸ばしていると報告を受けているので、スコールとオータムを相手にしても、手酷くやられると言う事はないだろうと一夏は思っている。

「とりあえず後は参加者がどれくらいかによりますね」

「じゃあ、募集期間が終わったらまた話し合う感じで」

「お嬢様、生徒会の業務がまだ残っていますので、逃げ出そうとしないでくださいね」

「はい、分かっています……」

「俺も手伝いますよ」

久しぶりに生徒会の業務を手伝えると、一夏は苦笑いを浮かべながら、刀奈を引きずる虚の隣を歩き、生徒会室に向かったのだった。

朝の風景

珍しく朝から教室に顔を出すと、クラスメイトたちは意外そうな顔を見せた。

「篠ノ之さんの問題が片付いたから、一夏君も普通に授業に参加するのかしら?」

「そう行けばいいんだがな……静寂もしばらくのんびり出来ると思うか?」

「どうかしらね? 今回の一件で色々が一夏君の秘密が明るくなったみたいだし」

「無駄な手間を省くためとはいえ、本当はもう少し後に発表するつもりだったんだが……」

箒の処理を柳韻に任せるために、一夏は自分が更識の当主であると各国に宣言し、尊を間に挟まずに交渉したのだ。口外禁止と言ったとはいえ、全ての人間の口に蓋をすることは難しく、何処からか漏れて一夏が当主であることは世界中の人間に知られることになったのだった。

「まさか一夏君がね……次期当主だってことだったけど、何時当主の座に就いたのか気になるわね」

「そんなの、最初からに決まってるだろ……中学生が当主だと言えば、世界から舐められ

ると思ひ尊さんに代理を任せていたんだ。だが、この一年で色々と問題があり過ぎて、尊さんに間に入ってもらつてゐる時間をもつたないと思つたから、今回は首脳にだけ説明して時間短縮を図つたんだがな……」

「マスメディアの執念を甘くみちや駄目よ」

「首脳と会談してるといふのに、何処から聞いてたんだか……」

一夏がため息を吐くと、静寐は面白そうに笑いだす。

「とにかく、一夏君が当主だというなら、私たちは強力なコネを手に入れたつて事よね？」

就職の時はお世話になるかもしれないわよ」

「静寐や香澄なら十分使えるだろうから、こちらからお願ひしたいくらいだがな」

「エイミィやサラ先輩なんかも狙つてゐるみたいだけど？」

「一応更識所屬だからな……何かしらの部署で雇えるかもしれないが、関連企業の人事に介入は出来ないからな」

「大丈夫、本社狙いだから」

あつさりと言ひ放つた静寐に、一夏はもう一度ため息を吐いたのだった。

「なんならデュノア社で雇うよ？　うちも優秀な人材は必要だろうしね」

「でも、デュノア社はフランスでしょ？ 出来るなら日本の企業が良いのよね」

「うーん……でも、日本のIS企業に入社しようとしても、倍率は凄いでしょ？ いくらコネがあるとはいえ大変だよ？ フランスの企業なら、それなりに余裕はあるし」

「他の人にも声は掛けているのか？」

「一応はね。フランスでなら、ダリル先輩やフォルテ先輩も雇えるかもしれないでしょ？」

「まあ、あの人たちは更識傘下の企業で雇わなければならないだろうし、シャルが引き取ってくれるなら安心だな」

「でも、一番は一夏が監視し続ける事じゃない？」

「俺はスコールやオータム、そして恐らく篠ノ之の監視があるから……」

「大変だね、一夏も……」

さらに問題児がいたことを失念していたシャルは、同情の眼差しを一夏に向けたのだった。

「ラウラはドイツ軍の再建を目指すのか？」

「この学園で学んだ事を軍再建に活かせればと思います」

「それだったら、もう少し座学にも集中した方が良いでしょう」

「分かつてはいるのですが、私は所謂義務教育というものを受けていませんので、勉強は苦手なのです」

「セシリアはどうするんだ？ 代表をずっと続けられるわけじゃないだろうし、第二の人生なんかは考えているのか？」

「今からは考えていませんが、出来る事なら一夏さんのお手伝いをしたいと思っていますわ。私がこうして次期代表に内定したのも、一夏さんのお陰ですのよ」

「セシリアになら、イギリスの傘下企業を任せられるかもしれないな」

一夏が傘下の企業の一覧を眺めながら可能性のある企業をピックアップしていく。

「今からピックアップしなくても大丈夫ですわ。私はまず、モンド・グロツソ出場を目指さなければなりませんし」

「それを言うならラウラもだな。一応代表候補生なんだから」

「鈴やエイミイ、簪に美紀、そして更識先輩と切磋琢磨して強くなっていると自負していますし、並大抵の相手には負けない自信はあります」

「まあ、確かにラウラやセシリアの成長は目を見張るものがあるからな。だが、これに満足せずに訓練は続けるように」

「はい、お兄ちゃん」

「だからお前が——」

「誰が誰のお兄ちゃんだつて？」

いつも通りのマドカの言葉を遮り、マナカがラウラに向けて鋭い眼差しを向けた。

「落ち着けマナカ。ラウラのこれは仕方ないんだから」

「だけどお兄ちゃん！」

「俺の本当の妹はマドカとマナカだけなんだから、そんなにムキになる必要は無いだろ」
「あの、お兄ちゃん……その千夏教官にそっくりな娘は？」

本当ならまだ顔を出す場面ではなかったのだが、ついつい我慢できなかつたマナカを、一夏はクラスメイトに紹介する事にした。

「俺のもう一人の妹、織斑家の末っ子に当たる四女、織斑マナカだ」

「HR前に教室に行くなんて、随分と学校が楽しみだったんですね、織斑さん」

「あれ？ HRは千冬先生が担当するのでは？」

「溜まつてる書類を片付ける為、HRは私が担当する事になりました」

「大変ですね、碧さんも」

今日何度目かのため息を吐き、一夏はマナカを教壇の方へ向かわせ、自分たちは席へと着くのだった。

マナカの罰

一夏に促され教壇に立ったマナカは、ぐるりと教室を見回し、そして小さく頷いたのだった。

「それでは織斑さん、ご挨拶を」

「織斑マナカだ。ここで教師をしている織斑千冬、千夏姉妹、そして一夏お兄ちゃんとマドカの妹だ。織斑家末っ子で歳は十四。本当なら中学三年生なんだが、そこはマドカと同じく特別措置だと思っってもらって結構だ」

「マナカさんは一応、亡国機業のリーダーって事になってましたので、IS学園で監視するという名目で編入してもらいました」

碧の補足説明に、クラスメイトの大半は納得した表情で頷いた。

「小鳥遊先生」

「なんででしょうか、オルコットさん」

大半に含まれなかったクラスメイトの中で、セシリアが真っ先に挙手をして質問をす

る。

「亡国機業のリーダーということですが、何かしらの制裁は受けたのでしょうか？ 三年のダリル・ケイシー先輩や二年のフォルテ・サファイア先輩は一夏さんたち更識家が制裁を与えたとお聞きしましたので納得はしましたが、マナカさんにも当然制裁は与えるのですよね？」

「その辺りは更識君から説明があります」

碧は視線で一夏を促し、それに応えるように一夏は小さく頷き、立ち上がろうとして碧が手を貸した。

「俺もまだ完全に回復した訳じゃないが、マナカは既に制裁を受けているんだ」

「それはどういう意味ですか？」

「超高速移動中にISの制御を失い、ビルに突っ込んでまだまともに歩ける状況ではないはずなんだが……俺よりも回復が早いためか、普通に歩いているのでそうは見えないだろうが、既に痛い思いはしてるから、今はそれで納得してくれ。卒業後は更識が責任もって監視するので、おびえる必要も無いし、本人にももう敵対する意思は見られない」

「お兄ちゃん、やっぱりまだ一人じゃまともに動けなかったんだ」

「日常生活には支障ないんだが、さつきみたいにたまにふらつくことがあるくらいだ」

マナカの心配そうな眼差しに、一夏は苦笑いで応えた。

「ですが、亡国機業のリーダーと言う事は、様々な犯罪行為をしてきたわけですわよね？
その事についてはおとがめなしですか？」

「この後から、七泊八日の織斑姉妹との同居生活が待っているから、それで勘弁してもら
う事になっている」

「ああ……」愁傷様としか言えませぬわね」

IS学園に在籍している人間なら、織斑姉妹の本性を知っている。なのでその罰がど
れほど苦痛であるかを、クラスメイト全員は知っているのだ。

「捕捉しておくよと、あの二人は既に、マナカでも興奮出来るからな。無事に帰ってくるん
だぞ……」

「ちよつと!? お兄ちゃん、怖いんだけど……」

妙に実感の籠った言葉に、マナカは震えあがったのだった。

「さて、他に何かあるか？」

「じゃあ一つだけ。私たちはなんて呼べばいいのかしら？ 普通にマナカさんと呼んで

も問題ないのかしら?」

「ああ、静寢は知ってるんだっけか……もうあの時のような牙は無いから、普通に呼んでも問題ないぞ。本音など、既に仇名で呼んでるくらいだから」

「マナマナの席は何処になるのかな?」

「……な?」

「さすが本音、つて事で納得しておくわね……では、マナカさんはボーデヴィツヒさんの後ろの席ね」

静寢に案内され、マナカはラウラの後ろの席、つまりマドカの隣の席に腰を下ろした。

「うむ、ちっちゃい教官が揃ったな」

「ちっちゃいって言うな!」

「背が低いのがコンプレックスのようだから、その事は言わないでやってくれ……てか、マドカもかよ……」

やはり双子かと、一夏は深いため息を吐いたのだった。

午前中の授業を済ませ、マナカはクラスメイトに囲まれていた。

「マナカさんって、やっぱり頭いいんだね」

「さすが大犯罪組織のリーダーって感じだよね」

「それと頭がいい事と何の関係があるのよ」

これほど人に囲まれた経験のないマナカは、困り果てたような表情で誰かに助けを求めようとして、人垣の隙間に一夏を見つけサインを送った。

「お兄ちゃん、助けて」

瞬きでモールス信号を送ると、一夏はやれやれとため息を吐いて立ち上がりこちらに移動してきた。

「ほら、マナカが困ってるから一斉に話しかけないでやってくれ」

「あつ、ゴメンねマナカちゃん。でも、こうやってクラスメイトが増えたわけだし、私たちとしても仲良くしたいからつい」

「う、うん……大丈夫」

「てか、昼休みは職員室に行くんじゃないかなかったのか？ 駄姉コンビが待ってるんだろ？」

「忘れてた……行きたくないよ……」

「一応罰則なんだから、諦めて行ってくれ……じゃないと、マナカを罰しなければいけないからな」

織斑姉妹が責任もって面倒を見る、と言う事で各国に納得してもらっているのだ、それを怠ればやはり別の罰を与えなければならなくなるのだ。

「またね、お兄ちゃん……」

トボトボと背中を丸めて歩いていくマナカを見送り、一夏は急に立ちくらみに襲われ、バランスを崩しかけた。

「おっと？」

「大丈夫ですか、一夏さん」

「ああ、悪いな、美紀」

「いえ、護衛として当然です」

「ほえ？ 何で私を見たの、美紀ちゃん？」

「何でもないよ」

同じ護衛なのにと考えたことは言わずに、美紀は苦笑いだけを浮かべたのだった。

心を砕く

かつて篠ノ之道場があつた場所に連れてこられた箒は、何故自分がこのような事になつたのかと考え、一つの結論を導き出していた。

「よもや父上ともあろうお方が、一夏の世迷言に惑わされたとてもいうのか……やはりあいつは私がこの手で矯正するしかないのか」

「何を勘違いしているのかは知らないが、私は自分の意思でここにいるのだ。決して一夏君に何かを言われたからではない」

「ですが、父上は基本的に子育てには干渉しなかつたではないですか。それを今更このような形で私を指導するなど、一夏に何かを言われたからと疑つて当然だと思いますが」

箒の返しに、柳韻は顔を顰めた。確かに子育ては妻に任せきりで、自分が教えた事と言えば剣道くらいしかない。それを今更と言われてしまえば、柳韻に返す言葉は無かつたのだつた。

「お前には剣道を通じて心を鍛えてほしかったのだが、一夏君に執着するあまり歪んで

しまったようだな」

「何を言っているのですか。私は何も歪んでませんし、間違っています」

「では、穏健派の方々を大量虐殺した事も間違っていないというのだな？」

「二人二人殺したら犯罪かもしれませんが、相手は犯罪組織の人間。見方を変えれば危険思想を持つ集団を片付けたのですから」

「お前にその権利があつたと主張するのか」

「権利など必要ないと思いますが。ある一辺から見れば大量殺人かもしれませんが、ある一辺から見れば英雄的戦果だと思えますが」

「自分を正当化する術は長けているようだな……呆れを通り越して賞賛すら送りたくなる」

何を言っても無駄だと理解した柳韻は、立てかけてあつた竹刀を箒に持たせた。

「何を？」

「その性根を叩きなおしてやる前に、一度そのくだらない考えを完膚なきまでに叩きのめさなければいけない。怪我をしても恨むなよ」

「父上の方こそ、もう年なのですから。何時までも昔みたいに動けると思っているのですしたら、怪我をするのは父上の方だと思えますけどね」

絶対的な自信があるのか、箒はそのような強気な発言をする。柳韻は何も答えず、静かに構え、箒もそれ以上何も言わずに構えた。

「ッ！」

一瞬の交錯ののち、人が倒れる音が道場に響き渡った。

「なぜ……」

自分が倒されたことが意外だと言わんばかりの口調に、立っている方も苦笑いを浮かべるしかなかった。

「それがお前の実力だと言う事だ。ISなどという玩具を手に入れ、粹がって訓練を怠ったお前が悪い。これから二ヶ月弱、私が身体と共にその驕り昂った精神も鍛え直してやるので覚悟するように」

柳韻はそれだけ告げると、さっさと立つように視線で箒を促し、その後何度も箒を打ち負かし精神的に追い込んでいったのだった。

「(何故勝てない……いくら父上とはいえ、十年以上経って強さを維持しているなど――

いや、あのころから考えれば私も十分強くなっているはずだから、あの時と同じように強いと感じるということは、父上もまた成長していると言う事……」

「やはり子供のころから私が精神鍛錬をさせていれば、そこまで傲慢にはならなかったのだらうな」

「ですから、私は何も間違っていない！ 間違っているのは、この世界の方です」

「確かに、東が創り変えたこの世界は間違っているのかもしれない。様々な人の人生を狂わせ、世界の在り方を大きく捻じ曲げたのだから」

「ですから——」

「だが、それでも箒が正しいわけではないだろう。そもそも、どんな理由があろうと人を殺せば罪に問われる。一夏君が顔なじみの好で更生の機会を与えてくれたが、本来なら裁判抜きで死刑でもおかしくないことをしたんだ」

柳韻の言葉に、箒は大きな動揺を覚える。

「そんな……一夏が私の事を顔なじみとしか思っていないなどとは……」

「……シヨックを受ける所はそこなのか？」

一夏から直接言われても動揺しなかった箒が、柳韻を通して言われたらかなりの

ショックを受けたようだった。

「単なる照れ隠しではなく、本気でそう思っているというのか……」

「そもそも、箒は昔から一夏君に付きまとい、周りから人を排除しようとしてたらしいじゃないか。そんな相手を幼馴染だと認める物好きは、私が知る限りいないと思うがね」

「そんな……一夏が私の事を幼馴染だと認めていないなどと……そんなことがあつていいの……」

「箒、それが真実だ」

酷な言い方だったかもしれないが、それが効果あつたようで、箒はその場に膝から崩れ落ちた。本人から言われるより、父親から言われた方がダメージが大きい事に柳韻は驚いたが、これで箒の中にあつた勘違いを正すことが出来ると一安心したのだった。

「さて、お前が言っていた『見方を変える』事をすれば、お前が今までしてきたことはなんだ？ 幼馴染だから許されるなどと、勝手な理論を振りかざし一夏君にしてきたことは、いつたいなんだ」

「……………」

「最早何も返す言葉もないか」

絶望感に浸っている筈に、柳韻は感情の読み取れない視線を向ける。

「今日はそのままそこで己の人生を振り返るんだな」

それだけ言い残し、柳韻は道場から姿を消す。残された筈は、逃げようと思えば逃げられる状況だというのにもかかわらず、一步も動こうとはせずその場に崩れ落ちたのだった。

優秀な生徒会役員

織斑姉妹との、言葉にするのも恐ろしい昼食を済ませたマナカは、机に突っ伏していた。

「何があつたの？」

「同じ血を引いてるとは思えない所業の連続だった……」

「まあ、姉さまたちのスキンシップは過激極まりないから」

「過激で済まないでしょ、あんなの！ お兄ちゃんも鬼畜だったんだ……」

「それくらいじゃなきや貴女のしてきたことへの罰にならないって言ってみました」

マドカの言葉を聞き、マナカはさらにガックリとしたようにマドカには見えた。何分机に突っ伏しているため、これ以上下がれないくらい肩は下がっているので、雰囲気で察するしか方法がないので、断言は出来ないのだ。

「兄さまの罰は貴女にも強烈なダメージを与えるものだったのですね」

「たぶん、お兄ちゃんが想像していた以上のダメージを負った気がする……」

「……私も悪い事をすれば、同じような目に遭うのでしょうか」

「てか、アンタも元亡国機業でしょ！ 何で私だけあんな目に……」

「私は早々に捕まりましたし、東様の相手をするという罰を喰らいましたから……」

「そつちもそつちで嫌ね……」

まだ一人相手だからマシかとも思ったが、東のぶつ飛んだ行動はマナカも知っているので、結局は疲れると言う事だけは理解出来たのだった。

「それで、そのお兄ちゃんは？」

「来月のトーナメントの細部を話し合うとかで、生徒会室へ向かいました」

「そう言えばお兄ちゃん、生徒会副会長なんだっけ」

「実質会長みたいなものですが、兄さまはあくまでも副会長だと言い張るでしょうね」

「IS学園の生徒会長って、学生最強の証なんでしょ？ 奪い取ろうとすれば出来るん

じゃないの？」

「刀奈さんから会長の立場を取ってしまうと、サボりに拍車がかかるそうなので」

「いつそのことクビにしたらどうなの……」

マナカの率直な感想に、マドカも一度は思った事があると告げ、それでもクビになっていないという事実を伝えた。

「それだけ刀奈さんの能力が高いと言う事なのでしようが、実際に作業している大半が兄さまと虚さんなので、刀奈さんの能力を正確に把握している生徒は多くないでしょうね」

「それでも文句が出ないって事は、相当な実力を有しているんでしょうね」

「刀奈様はやれば出来る人だからね」

「本音……いつの間に」

机に突っ伏していたから気づかなかったのか、マナカは本音が会話に割って入ってきた事に結構本気で驚いている。

「まあ、細かい事は兎も角としても、刀奈様が本気を出せばIS学園に来る仕事の半分はすぐ片付くくらいだよ」

「では、何故常にだらけた雰囲気なのでしょうか」

「えつとね、それ以上におねくちゃんやいっちーが優秀だから？」

「何故疑問形……」

本音の答えに、マナカもマドカもイマイチ納得できなかつたが、一夏が優秀であると称されて悪い気はしないのだった。

教室でそんな事を言われているとは露知らず、一夏たちはトーナメントのルールを詰めていた。

「思いの外専用機を持たない人の参加希望者も多そうですね」

「まだ初日ですし、これから増えると仮定すれば、やはり専用機持ちとは別のグループで開催するべきでしょう」

「まさか半日でこれほど集まるとはね。特に目ぼしい景品があるわけでもないのに」
「三年生にとつては、卒業前最後になるかもしれない大行事ですからね。思い出作りも兼ねているのかもしれませんが」

「そんなこと言っても、大半がIS関連業者に就職したりするんだし、それほど大きなイベントにするつもりもなかったのにな」

「刀奈さんはただサボりたいだけでしょ」

一夏に本音を見透かされ、刀奈はだらしなく座っていた椅子から落ちそうになった。
「虚さんは参加しないのですか？」

「私は別に、思い出作りは裏方でも十分出来ますし、更識企業の企業代表としてちよくちよく学園にも顔を出すことになるでしょうしね。企業代表から引退したら、教師として来ないかともお誘いを貰っていますし」

「いつの間に……まあ、虚さんなら教師として十分やっていけるでしょうが、更識企業としては、優秀な人材を手放したくないんですがね」

「てか、虚ちゃんの進路は一夏君のお嫁さんで決まりじゃないの？」

「お嬢様！」

刀奈の冷やかしに、虚は本気で照れたようで、顔を真っ赤にして刀奈を追いかける。追いかけられるのが分かっていた刀奈は、すぐに部屋中を走り回り、最終的に一夏の背後に隠れる事になったのだった。

「刀奈さんも、代表を引退した後の事は考えているんですか？」

「んー……私も一夏君のお嫁さんで決まってるけど、専業主婦は暇そうよね……てか、うちはお手伝いさんとかいっぱいいるから、家事の殆どはやってくれるでしょうしね……」

「なら、どこかの企業の社長でもやりますか？ 全部俺が兼任でもいいんですけど、優秀な人材を遊ばせておけるほど、ＩＳ業界は人材が豊富ではありませんので」

「なら虚ちゃんだっていいんじゃない？」

「虚さんは既に誘いがあるようですので、そちらを優先してもらった方が優秀な人材を育ててくれるでしょうし」

「まあ、今は将来の話より来月のトーナメントの事を決めちゃいませうよ」

「脱線の原因を作っておいて、刀奈さんがそれを言いますか……」

「まあ、お嬢様ですし……」

一夏と虚に呆れられたのを受けて、刀奈はもう少し真面目に取り組もうとする姿勢を

見せたのだが、結局は一夏と虚が話し合いルールを決定したのだった。

知らず内に

参加応募期間が終了し、一夏たちは参加者の顔ぶれを見て楽しそうな笑みを浮かべた。

「ダリル先輩は参加するようですね」

「復学してからは真面目に授業に参加してますし、放課後の訓練でも実力の差を見せてますからね。他の相手とも戦いたくなかったのだとしても不思議ではありません」

「逆にフォルテちゃんは出ないみたいね。訓練で満足してるようだし」

「サラ先輩も出るようだし、専用機持ちの方は誰が勝ち抜いてもおかしくない顔ぶれですね」

「簪お嬢様や本音、美紀も出るようだし、その他の更識所属の人間も参加するようですね」

「一夏君やマナカちゃんは、身体が万全じゃないから参加しなかったのよね？」

「俺は万全でも出る気はないですがね」

この顔ぶれの中に飛び込んだとしても、勝てないと分かっている一夏は、最初から裏

方に徹するつもりだったのだ。

「お嬢様は何故参加しなかったのでしょうか？ お嬢様の實力なら、十分優勝が狙えると思うのですが」

「これでも一応第二回モンド・グロツソの優勝者ですから……解説に徹する事にしたのよ」

「ただたんに面倒だっただけでしょ？ 刀奈さんは簪の闘いを間近で見たいからって解説を買って出たんじゃないですか」

「一夏君！ その事は虚ちゃんには内緒だつて……あつ」

そんな事ないと否定すればよかったものを、刀奈はあっさりと墓穴を掘った。一夏の口調では本気が冗談か判断しかねる具合だったのに、刀奈の言葉がはつきりと事実であると裏付けさせてしまったのだった。

「まあ、お嬢様が参加したら、パワーバランスが崩れていたでしょうから、今回は大目に見る事にします」

「良かった……でも、そんなこと言ったら虚ちゃんだつて参加してないじゃない？ 虚ちゃんならダリルさんや簪ちゃんどだっていい勝負が出来るんじゃないかしら」

「私は表舞台で華々しく戦うなんてガラじゃありませんから。一夏さんのサポートもし

なければなりませんし、後輩たちの成長をじっくりと見るには、参加者よりも裏方の方が良いですから」

「まあとにかく、これだけ参加してくれるのはありがたい事ですね。人の闘いを見るのも勉強になりますし、参加しなかった人も勉強になるようなイベントにしていきたいましよう」

「一夏君、やっぱり私の代わりに会長やらない？」

「やりません。俺が代わったら刀奈さん、本気で生徒会の仕事をやらないつもりでしようし」

「そ、そんな事ないわよ？ 今だってやれと言われればやるもん」

「刀奈さんの立場的に、言われる前にやらなければならぬと思うのですが」

「難しい事分らないもーん」

刀奈の子供のような対応に、一夏と虚はそろってため息を吐き、同時に苦笑いを浮かべたのだった。

柳韻に心を碎かれて数日、箒は抜け殻のように毎日を過ごしていた。

「私は井の中の蛙だったのか……？ 力を手に入れたと思っていたが、手も足も出なかった……」

たとえISがあつたとしても、柳韻には敵わないだろうと知らしめられてしまった箒は、かつての自信を失い、何もする気にはなれなかった。

「織斑姉妹や一夏ですら私には苦戦していたはずなのに……何故父上には敵わなかったんだ……」

実際は織斑姉妹も一夏も、箒に苦戦していたわけではなく、本気で相手する気になれなかつただけなのだ。一夏が本気で相手にしない以上、更識所属の人間も箒を本気で排除しようとは動かなかつた。もちろん、一夏に危害を加えたとしたら別だったかもしれないが。

「父上が不正などとして私に勝ったわけではないことは、あの空気を感じた者なら誰でも分かるだろうし……」

腐つても剣士の端くれとして、あの試合に不正など無かつたことは重々承知していた。だからこそ、箒は自分が信じていた事に疑いを持ち始めたのだ。

「もしかしたら、織斑姉妹も姉さんも、一夏に洗脳されたわけじゃないのか……？ だが、そうではないとすると、あの変わりように説明がつかないんだ……いきなり私を目の仇にするような行動が増えたのは、一夏がそうしろと操っていたからに違いないのに……」

ここまで来てもお、自分が悪いという考えに至らないのは、ある意味賞賛される事なのかもしれない。ここまで勘違いをしていてられるというのは、一種の才能だと言えるだろう。

「父上の剣技には、何の邪念も含まれていなかった……それはつまり、一夏が邪魔をしていたというわけではないと言う事……だが、一夏が何の邪気も無く人を操れる術を手にしていたとしたら……いや、そんな技に惑わされる父上ではないことは、織斑姉妹が敬意を示している事から分かる……だとすればやはり一夏は間違っていないで、私の方が間違っていたと言う事になるが……そんなことはあり得ない」

考えがまとまらず、箒は何もない部屋から空を見上げた。

「どこかにまだ、私が考え付かないような何か潜んでいるのだろうか……それとも……いや、これだけは絶対にありえない。一夏が正しく、私が間違っていたなどと言う事は……」

既に答えにたどり着いているにも関わらず、箒はそれを頑なに受け入れようとはしなかった。そんな娘を、柳韻はどう矯正するかと頭を悩ませていたのだった。

審判の割り当て理由

何度も一夏ではなく自分が悪かったのではという結論にたどり着いては頭を振り、また同じような結論にたどり着いては否定してを繰り返して一日が終わった筈は、自分に宛がわれた部屋で横になりまた考え出す。

「何故一夏が悪くないという結論になってしまふのだ……どう考えてもアイツが悪く、私が正しかったはずなのに」

その考えが間違っているという事に思い至らない以上、どう考えても結論など出ないのだが、生憎それを指摘してくれる人はいなかった。

「もう一度最初から考え直してみるか……まず、一夏が私の事を好きなのは間違いないとして……記憶を失ってしまった一夏を、更識家が洗脳し私の一夏を奪った。これは紛れもない事実だ、誰に聞いてもそう答えるだろう」

盛大な勘違いなのだが、彼女の中ではそれが事実であるという確信めいた何かがあるようで、誰が指摘してもこの前提条件を覆すことは出来ない。

「小学五年の頃に転校し、I S学園で運命的な再会を果たしたというのに、一夏の周りには邪魔者が多く、私との逢瀬の邪魔をし、挙句の果てには私が悪いと一夏に刷り込ませ私と一夏が接触するのを邪魔した。その後臨海学校の時と私の誕生日が重なり、一夏が自分をプレゼントとして用意していたのも疑う余地はない。だが何時まで待っても一夏は私の部屋には来ず、そして翌日になりアメリカ軍が暴走させたI Sを停めるべく出撃した隙を突かれ、私が亡国機業に所属する事になった。この考えで行くと、私が亡国機業でしてきたことは、I S学園の警備力の低さが原因という事ではないか！ やはり私が責められるいわれはないぞ！」

いつそ賞賛すら送りたくなるほどの勘違いだが、これですべてではないのが彼女の凄いとこころである。

「そして独立派とかいう雑魚集団から移籍し、私は過激派と称されていた一夏の妹を名乗るマナカと行動を共にし、ゴミである穏健派の人間どもを掃除した。うん、褒められこそすれ責められることは何一つないな」

あくまでも正義の名の下に罰を下したと信じている筈は、自分がしてきたことが殺人であると思っていない。東や織斑姉妹、一夏や柳韻に言われても、それだけは信じよう

としなかった。

「では何で私はこんな目に遭っているんだ？　姉さんや千冬さん、千夏さん、一夏や父上
が言うには、私は世界中の国から指名手配され、身柄を引き渡せば即刻死刑だという
……それを避けるために、一夏が父上を探し出し、二ヶ月間の間に私を改心させ、数十
年の奉仕活動をさせるといってはないか……さすがの一夏も、全世界の人間を同時に催
眠に掛ける事は出来ないだろうし……だが、そうなると正しいのはヤツらで、間違つて
いたのが私という構図が成り立ってしまうのだ……そんなことあるはずないというの
に……」

堂々巡りの思考に、箒は頭を振つてもう一度最初から考え直す。だが何度考え直して
も、一夏が悪くないという結論に至るので、箒はその都度思考をリセットして、また最
初から考え直すという行為を繰り返したのだった。

専用機を持っているかいないかの割り振りが済み、一夏たちは参加者の質を再確認していた。

「専用機が無い方では、やはり三年生が有利でしょうね」

「専用機を持っている人数で言えば、一年が圧倒的だけどね。普通に授業に出てきた分だけ、専用機が無ければ三年生が有利よそりや」

「目ぼしい人には、一夏さんが交渉して更識製の専用機を与えていますし、専用機持ちのトーナメントは、一年生有利で事が進むでしょうね」

「いやいや、サラ先輩やダリル先輩と言った実力者もいますし、サラ先輩の専用機である

セイレーンの単一仕様能力を破るのは厳しいと思いますよ」

「幻覚だつて分かつてても、あの光景を目の当たりにしたら怖いものね」

「周り全員が白骨化し、自分の顔も骸骨に見えるという恐怖ですから……頭で理解していても、視覚から来る恐怖は中々でしょうし」

「まあ、発狂しない程度で止めさせますがね」

将来有望な操縦者が多いので、行き過ぎた攻撃は横槍を入れて止めると先に公言してあるのだ。サラも停められても文句を言えないように手を打つてある。

「その場合は、サラちゃんの勝ちになるのよね？」

「まあ、そのまま続けていれば明らかにサラ先輩が有利ですし、そのまま選手生命を奪うことくらい出来ますからね、あの能力は」

「でも、サラさんなら攻撃して停める必要は無いのでは？　ブザーを鳴らせばそれで終わるような気もしますが」

「……残念な事に、専用機持ちの方の審判は織斑姉妹が担当しますので、力づくで止めないと気が済まないですよ」

「本当に残念ですね……」

本当に残念そうに思っている一夏の気持ちが一十二分に伝わったのか、虚も刀奈も残念な気持ちになったのだった。

「それじゃあ、普通の子たちの方の審判は、誰が担当するの?」

「そっちは碧さんとナターシャさんが引き受けてくれました」

「逆の方が良いんじゃない?」

「いえ、あの駄姉たちが暴走しないと限りませんので、専用機持ちの方がその暴走にも耐えられるでしょうし」

「ああ、そっちなものね……」

実に残念な二人だと、刀奈も虚も改めて思ったのだった。

大魔王

朝から道場に連れてこられた箒は、柳韻相手になすすべなく叩きのめされていた。同年代で生身であれば負けない自信があった箒ではあるが、織斑姉妹ですら勝てないと言われている柳韻相手に、一撃も当てる事が叶わずに床に倒れ込んだのだった。

「何故ですか、父上……私は何も悪い事はしておりません」

「まだ言うか……お前ももう、分かっているのだろうか？　悪いのはお前で、一夏君たちではないと」

「……そんなことはありません。悪いのは一夏の周りの人間で、私は本当の一夏を取り戻したいだけです」

「記憶を失ってしまったのは、一夏君にとつても不運だったかもしれない。だが、今の彼は実に幸せそうに見えるがね」

「仮初の幸せなど、長続きはしません。一夏は私と一緒にいる方が幸せになれるのですから」

箒の勘違いに、柳韻はいよいよ頭痛を堪えきれなくなってきた。心を砕き、己を

省みさせてみたものの、一向に自分がしてきたことが理解出来ていないようなので、柳韻は責め方を変える事にした。

「今から己がしてきたことを紙に書きなさい。ただし、自分の名前や一夏君たちの名前は伏せるように」

「なんですか、いきなり」

柳韻に言われたことが、イマイチ理解出来なかつた筈ではあるが、言われるがまま自分が過去にしてきた事を紙に書き記していく。

「……何だこいつは。実に腹立たしい事をしていないか」

自分が書いている事を見て、筈は第三者目線になっていた。それが自分がしてきた所業であるという事は完全に失念しているようで、書かれている人物像を見て苛立ちさえ覚えていた。

「こんなやつは、死んだ方がましだろうな。何の価値もない」

書かせておいてなんだが、柳韻はこんなことで筈が反省するとは思っていなかった。だが、予想外の反応に、どうすればいいのか若干悩んだが、後で思い出して反省してく

れるなら、それでもいいかと思つたのだつた。

「父上、この人間は死んだ方が良いと思います。ですので、探してきて私が始末してきて
もよろしいでしょうか」

「探し出すも何も、それはすべてお前がしてきたことだぞ」

「何を言つてるんですか？ 私はこんな事してませんよ」

「……本気で束に解剖を頼みたくなる頭の作りをしてるんだな、お前は」

あくまで自分の事だと認めない筈を見て、柳韻はそんなことを思ってしまったのだつた。

「マナカもだいぶクラスに馴染んだのか、初日に囲まれて一夏に助けを求めたのがウソのように普通に話している。」

「お兄ちゃんとしては、嬉しいのかしら?」

「まあ、若干引き籠もりだったマナカが、ああして友達を作って話してるのは嬉しい」
「引き籠もりつて表現でいいの? 一歩間違えてたら大惨事だったんでしょ?」

「その一歩を間違えなかったんだから、問題ないだろ」

「そう言い切るのもどうなのかしらね……香澄はどう思う?」

「えっ? ……一夏さんが良いと言えば、世界はそれで納得するんじゃないかな」

「まあ、ある意味世界の王ともいえるからね、今の一夏君は」

香澄の答えに、静寂はため息交じりにそう呟く。世界中に支社を持つ更識企業のトップであり、全更識所属のIS操縦者に好かれている一夏が命じれば、国の一つや二つ、あつという間に消滅する。そして、一夏は使われないだろうが、織斑姉妹や篠ノ之束とい

う切り札も持っているので、逆らう人間は殆どいないのだ。

「何だか一夏、悪の大魔王みたいだね」

「なんだその大魔王ってのは……」

「えつとね、昔やったゲームで、世界の半分をやるから仲間になれって魔王がいたんだけど、一夏ならそれが出来るんじゃないかなって」

「いや、そもそも手に入れてないし」

一夏としては、世界征服をしたわけでもないのにそう思われているのが不服なのが、シャルは面白そうに話を続ける。

「一夏に逆らえばその国のIS産業は終わるわけだし、あながち間違っていないでしょ？」
「別に終わりはないさ。優秀な人材を引き抜けるだけ引き抜いて、発展するのを遅らせるくらいだ」

「それイコール終わりだと思うけどね……開発戦争から遅れるってのは、その国にとって死みたいなものだから」

「そうなのか？」

「私に聞かれても……一夏君、本当にIS企業のトップなの？」

「遅れた事無いから分かん」

「ああ、そう言う事ね……」

妙に納得した静寂は、シャルの言っていた事を考えて、そして事実なのだろうと解釈した。

「ところで一夏君、例のトーナメントの準備は終わったの？」

「ルールは明日の朝発表になる。それで最終参加表明をした人で対戦を組んでいこうと思ってる」

「その組み合わせは、どうやって決めるのか気になりますわね」

「コンピュータに参加者のデータを打ち込み、当日にランダムで対戦相手を決めるつもりだ。もちろん、専用機持ちとそうでない人は分けるがな」

「そのプログラムは誰が作ったの？」

「ん？ 俺とマナカの合作だが」

「お兄ちゃんが私を呼んだ気がして！」

名前を呼ばれたのがうれしかったのか、マナカが人垣から一瞬にして一夏の目の前に現れ、そして体中にダメージを負う。まだ完治してないのだから無茶な動きは自分を苦しめるだけだと再認識したマナカは、涙目になりながらも一夏に頭を撫でてもらって

たの
だつ
た。

織斑四姉妹の共通点

罰として織斑姉妹と生活しなければいけないマナカは、今日も憂鬱な気分で寮長室を訪れる。部屋の中はいつも通り散らかっているのだが、片づけようとすればするほど、千冬や千夏では散らかってしまう。かといってマナカが片づけようとしても、姉二人同様に散らかしてしまうのは目に見えているので、マナカはあの汚い部屋で食事をすることに慣れる事にしたのだった。

「いくら慣れてきたとはいえ、やっぱりあの空間は好きに慣れないな……やっぱり、お兄ちゃんがいないからが一番の原因なんだろうけども……」

基本的な考えが変わったわけではないので、一夏がいないとマナカの機嫌はすこぶる悪い。だが今の状態では生身で織斑姉妹から逃げる事は出来ないのです、我慢して付き合っているのだ。

「来たわよ」

扉をノックして、嫌そうな声で中にいるであろう二人に呼びかけたが、返事がない。

マナカは若干不審がりながらも、ゆつくりと扉を開け中の様子を窺い見た。

「あれ？ あのゴミの山がきれいさっぱりなくなってる……いったい誰が」

「あつ、マナカが来た」

「マドカ……これはアンタが？」

「違います。私も貴女や姉さま同様に、片づけようとすればするほど散らかってしまいますので」

「じゃあ、いったい誰が……」

「ん？ マナカか」

「お兄ちゃ……ん？」

一夏の声がして嬉しそうな顔で振り返ったが、一夏の腕の中には大量の女性の下着や衣服が詰まった籠があり、マナカは一瞬身構えてしまった。

「あれは姉さまたちの衣服ですよ。極稀に、兄さまの気がのれば掃除や洗濯をしているんです」

「なるほど。お兄ちゃんが性に目覚めたのかと思っちゃった」

「万が一目覚めたとしても、姉さまたちには走らないと思いますけどね。兄さまの周りには、綺麗な人が大勢いますから」

「おつ、一夏。掃除と洗濯をしてくれたのか」

「やっぱり一夏はお姉ちゃんたちの世話をしてくれるんだな！」

「何を勘違いしてるのか分かりませんが、異臭騒ぎの原因を突き止めていたらこの部屋にたどり着いただけです。今後マメに掃除や洗濯をしていなかった場合、強制的に寮長室から出て行ってもらいます」

「どうやら一夏は、生徒会に來た苦情の原因を探りに來たらしく、マドカはその付き添いだったようだ。」

「まて一夏。私たちが寮長室から追い出されたら、何処で生活すればいいんだ？」

「実家でも近くの物件でも、好きなどころに住めばいいじゃないですか」

「実家だと光熱費やら色々かかるだろうが！ 部屋を借りればさらに家賃。そんな金があると思うな！」

「威張っていう事じゃないでしょうが！ だいたい、IS学園の教師の給料は、一般企業に努めている同年代の人の給料よりも高いじゃないですか。それくらい十分あるでしょう」

「それは……」

「マドカ、簪に電話して、織斑姉妹の寮長解任と碧さんを新たな寮長にする手続きをして

もらってくれ」

一夏の言葉に、織斑姉妹は慌ててマドカの携帯を取り上げ、一夏に懇願する。

「頼むからそれだけは止めてくれ！」

「これからは真面目に掃除や洗濯もするし、お酒も控える。だからそれだけは……」

「……では執行猶予という事で。むこう三カ月大人しく出来たら、寮長解任は止めてあげます。ただし三ヶ月間真面目に働かなかつた場合は、すぐにでも碧さんを新しい寮長にしますそのつもりで」

「わ、分かった……努力する」

「俺は出来て当然の事しか言っていないんですが……努力するのなら、頑張ってください。それから、これ、洗濯しておいたので、干すなりして片づけてください」

「すまない、感謝する……」

洗濯済みの衣服がたんまり入った籠を手渡し、一夏はマドカを連れて寮長室を後にしようとして、マドカに裾を掴まれた。

「せつかく来たんだし、お兄ちゃんも一緒にご飯食べようよ。ついでにマドカも」

「お誘いはありがたいが、まだ仕事が残ってるんだ。どっかの誰かさんたちの所為で、余

「計な事もしなきゃいけないかったからな」

「「面目次第もない……」」

「それに、これはマナカの罰だからな。織斑姉妹に弄られるのは、マナカ一人で十分だろ」

「お兄ちゃんって、かなりのドSだよね……」

「そんなつもりは無いんだが、よく言われる」

「自覚していないようで、一夏は不本意だと言わんばかりの表情で首を傾げる。その姿に、織斑四姉妹は苦笑いを浮かべた。

「一夏、私たちがいう事ではないかもしれないが……少しは自覚した方が良いぞ？」

「何を？」

「お前がドSだという事をだ。わたしたちに臆することなく物事言えるだけでもかなりだと思うが」

「貴女たちに臆する理由がありませんからね。まあ、個人的に会いたくはないですけど」

「兄さま、まだ姉さまたちにトラウマを抱えているのですね」

「恐れより呆れが強いから平気だが、何時発動するか分かったもんじやないからな」

「お兄ちゃん、可哀想……」

「気にするな。一人で会いに行こうなど思わないから」

最後にマドカの頭を撫でてから、一夏はマドカを連れて生徒会室へと戻っていった。残されたマナカは、姉二人に蔑みの目を向け、向けられた二人は居心地悪そうに視線を逸らし、一夏が用意してくれた三人分の晩御飯を取り分ける事にしたのだった。

オカン一夏

生徒会室に戻ってきた一夏を出迎えたのは、虚から逃げてきた刀奈だった。

「一夏君、助けて！」

「お嬢様！ この仕事だけはちゃんとやってくださいと言ったじゃないですか！」

「……刀奈さん、仕事はちゃんとしてください」

「したもん！ でも追加された分はちよつと……」

「刀奈さんは生徒会長なんですから、しつかりとしなきゃダメですよ」

刀奈と目を合わせ、諭すように一夏が言うと、刀奈は少し顔を赤らめたが、素直に虚に頭を下げた。

「ゴメン、虚ちゃん……私、もうちよつと頑張ってみる」

「そうしてください。お嬢様はやれば出来るんですから、もつと頑張った方が良いでしょう」

「虚さんも、あまり頑張れとかいうと、刀奈さんのやる気をそいでしまいますから、もう少し刀奈さん自身にやる気を起こさせるような事を言った方が良いでしょう」

「兄さま、なんだかお母様みたいですね」

「……マドカ？ 性別上、俺は母親にはなれないんだが」

「まあ、私も母親というものを知りませんが、今の兄さまはなんだかそんな感じがしました」

一夏もだが、マドカも母親の愛情など知らずに育ってきた。だがそんなマドカが母親っぽいと感じるほど、今の一夏にはオカン属性が備わっているのだった。

「確かに一夏君は、掃除洗濯何でも出来て、料理も美味しいし、私や本音の世話や、仕事をさせるような言葉を掛けてくれたりして、お母さんみたいな感じはするわね」

「刀奈さんまで……」

「ゴメンゴメン。でもね、一夏君がいてくれるから、私や本音もある程度自由に出来てるし、一夏君が仕事を割り振ってくれるから、私や本音も自分が出来る仕事をさせてもらってるんだなって思ってる」

「そう思っているなら、任された仕事はしてくださいね？」

「ぜ、善処します……」

満面の笑みで自分を見て来る一夏に、刀奈は背筋が凍る思いをした。普段あまり笑み

など浮かべない一夏が笑みを浮かべた時、それは機嫌が悪いサインでもあるのだ。

「と、ところで一夏君たちは何処に行つてたの？」

「苦情の原因を片付けに」

「苦情？」

「姉さまたちが生活している寮長室から異臭がすると投書がありましたのね、兄さまと一緒に寮長室へ行つてました」

「また織斑先生たちですか……本気で契約を見直した方が良いのではないのでしょうか？」

「でも、指導力は確かだし、他所の国で指導して強敵を育てられても困るのよね……」

生活力は無くてでも指導力は秀でているので、学園としても織斑姉妹の処分には困っている。今年からは一夏が入学してくれたお陰で多少はマシになっているのだが、それでも頭を悩ませることは多いのだ。

「本気で給料カットなどとして、自分たちがどれほど無駄遣いをしていたのかを知らしめようとも思いましたが、寮長室で生活してる以上、金の使い道など酒にしかないんですよね……」

「追い出せばいいんじゃないの？　そうすれば千冬さんたちだつてきつと……」

「刀奈さんは、周辺住民に異臭騒ぎに巻き込まれると言うんですか？　ただでさえ織斑家がどうなってるか分からないというのに……」

「……めんなさい……」

鬼気迫る一夏の表情に、刀奈は思わず頭を下げてしまった。

「とりあえず、今度異臭騒ぎを起こしたら寮長は碧さんに代わってもらおうと脅しましたし、少しは改善される事を願いましょう」

「一夏君、視線が明後日の方を向いてるんだけど……」

全く信じていないのが見て取れる一夏の表情に、刀奈たちは一夏に同情したのだった。

一夏が生徒会室でそんなことを話しているなど露知らず、千冬と千夏はマナカとの時間を満喫していた。

「一夏もマドカもなかなか相手してくれないからな」

「こうしてマナカと過ごすのは非常に嬉しいぞ」

「私は苦痛でしかないんだね……そもそも、何で私がこんな目に」

「罰なんだろう？ 甘んじて受け入れろ」

「私たちはマナカと一緒にいられて嬉しい、マナカは私たちという事で過去の罪を清算出来るんだから、どちらにとっても良い事じゃないか」

「こんな苦行を強いられるなら、大人しく刑務所にぶち込まれた方がましよ……しかも、

オータムが私を見るたびに同情してくるなんて耐えられないし」

付き合いの短いオータムですら、織斑姉妹と生活するという事がどういうことかを理解しているのです、そのような罰を課せられたマナカに同情しているのだ。

「家族と過ごすのは当然だと思っただが」

「いつそのこと一夏やマドカもここで生活してくれないだろうか」

「お兄ちゃんもマドカも、絶対に来ないと思うわよ……それだけは断言できる」

「一夏がいれば、何時でもきれいな部屋で、毎日おいしいごはんが食べられるというのに」

「一夏を嫁に迎えられる奴は、きつと幸せになるだろうな」

「……いくら男女が逆転してるからとはいえ、お兄ちゃんはお嫁さんにはならないわよ。そもそも、バリバリ働いてる人を捕まえて嫁つて……お兄ちゃん怒ると思うんだけど」

大企業のトップなんだからという概念は、この姉たちの中には無いみたいだと理解したマナカは、盛大にため息を吐いて一夏が用意してくれた料理を食べ、思わず泣きそうになってしまったのだった。

「……私よりもはるかに美味しいんだけど」

これなら確かに嫁に迎えたくなると、自分の中の考えが揺らいだ瞬間であった。

風邪ひき簪

放課後の訓練を終えて、簪と美紀は汗を流す為にシャワー室へ向かった。

「美紀……」

「なに？」

「また大きくなってる……」

「なにが？」

簪の視線を辿り、彼女が何を見て大きくなったと言ったのかを理解した美紀は、慌てて胸を自分の腕で隠し、身体を捻った。

「何処見てるの！」

「まさか、毎夜毎夜一夏に大きくしてもらってるとかじゃないよね」

「怖い！ 簪ちゃん怖いから」

鬼気迫る勢いで美紀に詰め寄ってくる簪は、想像を絶する恐ろしさであった。

「普通に成長しただけだって。一夏さんは関係ないよ」

「普通に成長……私なんて、もう成長止まってるのかな……」

「気にし過ぎだつて。ほら、一夏さんはあまり大きさとか気にしないから」

「お姉ちゃんは大きいのに、何で私は小さいんだろう……」

「と、とりあえず身体を拭いて服を着ようよ。もう秋もだいぶ深まって寒くなつて来てるんだし、風邪引いちゃうよ」

美紀に背中を押され、とりあえず更衣室で身体を拭き服を着た簪だったが、その間も視線は美紀の胸に釘付けであつた。

「羨ましい……ちよつと触つていい？」

「へっ!? 簪ちゃん、ちよつと刀奈お姉ちゃんみたいだよ!？」

「秘訣を知りたいの……私だつて少しは大きくなりたいの……」

「ちよつと!？」

もう触られると覚悟した美紀は目を瞑り身構えたが、何時まで待つても簪の手が伸びてこないのを不審がり目を上げると、顔を真っ赤にして倒れた簪が目の前にいた。

「えっ!?! ちよつ……何がどうしたっていうの!?!」

慌てて簪に駆け寄り、抱き起そうとして、簪の身体が熱い事に気付く。

「これって、風邪をひいたって事よね……そう言えば今日の訓練中に調子悪そうだったけど、ほんとに体調不良だったなんて……でも、どうやって簪ちゃんを部屋まで運べば……」

小柄な美紀では、簪を背負って部屋まで運ぶことは叶わない。かといってこの場所に一夏を呼び寄せるのは、互いに勇気がいるのだ。

「知り合いの中で大柄な人は……もう、簪ちゃん。これは貸しだからね！」

思いついた大柄な人は、こういうことを手伝ってくれそうにないし、今は長年離れ離れになっていた妹との至福の時間を過ごしてるはずなので、電話などしたら殺されるかもしれない。そう思いいいたった美紀は、覚悟を決めて一夏をこの場所に呼ぶことにしたのだった。

人の気配を感じ、簪はゆっくりと目を開けた。まず視界に飛び込んできたのは、自分の部屋とは少し違う感じがする天井だった。

「ここは……?？」

「目が覚めたか」

「一夏……?？ ここは一夏の部屋?？」

「本音には看病を頼めないからな。美紀に頼んで、今日は向こうの部屋で寝てもらおう事になった」

「えっと……私、倒れたの?？」

「体調悪いなら無理するな、完全に風邪だ」

「ゴメン……」

体調が悪い事は感じていたが、無理をした覚えはない。だが実際倒れてしまったのだから、簪に反論する気持ちは無かった。

「ところで、私は何処で倒れたの？ 訓練の後半から意識が朦朧としてたような気もするんだけど、美紀と一緒にシャワーを浴びた記憶もある……あれ？ 美紀の胸が大きくなったって話をした記憶もある」

「簪が倒れたのは更衣室だ。着替え終わってたからよかったが、そうじゃなければ俺が運ぶことも出来なかっただろうな」

「うう……恥ずかしい」

自分が倒れた場所を知り、簪は妙に恥ずかしい思いをしていた。服は着ていたし、アリーナの更衣室は一夏も使う事があるので気にすることは無いのだろうが、それでも何か恥ずかしい思いをしたのだった。

「あまり気にするな。余計に熱が上がるぞ」

「う、うん……」

「後で本音に頼んで寝間着を持ってきてもらうから、それに着替えてゆっくり休め」

「ありがとう……?」とここで、このベッドって美紀が使ってる方だよな?」

「ん? 当然だろ。それとも、俺が使ってる方が良かったか?」

「ううん! こつちでいい!」

力いっぱい否定し、首を横に振ったために、眩暈に襲われた簪はその場に倒れ込んだ。

「忙しいやつだな……とりあえずおかゆ作ったから、食べるか?」

「うん……でも、たぶん自分じゃ食べられないかも……一夏、食べさせてくれる?」

「今日だけだからな」

弱ってる簪を見捨てるほど、一夏は人でなしではない。そもそも基本的真面目な簪や美紀に対しては、一夏は甘いところがあると刀奈が言っていた事がある。事実その二人は滅多に一夏に怒られないが、それは怒られるようなことをしてないからであり、別に甘いわけではないのだ。

「熱いから気を付けろよ」

「フーフーして?」

「なんだ、随分と甘えてくるな」

「今日だけ。今日だけだから……」

「分かった、今日だけだな」

「そう言っておかゆを冷ましてから簪の口へ運ぶ。風邪で味覚もマヒしているはずだが、簪は今まで食べてきた中で一番美味しい、そう感じていた。

「やっぱり一夏って料理上手だよね」

「なんだいきなり。おかゆなんて誰でも作れるだろ」

「ううん、私はたぶん無理。虚さんも……きつと」

「まあ、誰にでも得手不得手はあるから、そう気にするな」

「頭を撫でられ、二口目のおかゆを口に運ばれながら、簪は風邪をひくのも悪くないかもしれないと思っていたのだった。」

姉の心配

簪が風邪をひいたと聞かされ、刀奈は逸る気持ちを抑えるのに精一杯だった。

「かつちゃん……もう少し落ち着きなさい」

「薫子ちゃん他だから落ち着いてられるけど、最愛の妹が風邪をひいたって聞かされて落ち着いてる姉なんていないと思うわよ」

「ウチの姉は、私が風邪をひいたって聞かされても落ち着いてると思うけどね」

姉妹の仲は悪くはないが、刀奈のように妹を溺愛してるわけではないので、薫子が風邪をひいても渚子はそこまで反応を示す事はしないだろうと薫子は思っている。

「それに、更識君が看病してるなら問題ないでしょ？　これが織斑姉妹が看病してるとかだったら、私も慌てるけどさ」

「それじゃあ看病じゃなくなつてトドメだよ……まあ、間違つてもそんな事にはならないし、なったとしても私たちが全力で織斑姉妹を止めるから」

「逆の意味で信用されてるのね……」

織斑姉妹の生活力の無さは、IS学園に在籍している人間ならほとんど知っているが、本当の意味で織斑姉妹の酷さを知っているのは、更識所属の人間を除けばほんの僅かしかない。薫子はその少ないうちの一人なのだ。

「掃除や洗濯が出来ないってレベルじゃないものね、あの二人は」

「掃除をしようとすれば余計に散らかし、洗濯をしようとすれば洗濯機を破壊する……マニユアルを見ながらでも洗濯機を操作出来ないレベルだもんね」

「一度洗濯機を爆発させたって聞いたけど、それもあながち誇張した話ってわけじゃないさそうよね……」

「とりあえず、一夏君が簪ちゃんの看病をしてくれてるのは安心出来るんだけど、別の意味で全然安心出来ないのよね」

「どういう事？」

一夏の家事スキルの高さは、薫子も当然知っているし、一夏が弱っている女子を襲うようなケダモノではないことも重々承知している。だからスクープ性が無いと判断し、一夏の部屋を突撃する気持ちにはなれなかったのだが、刀奈の中では別の問題があるようだ、薫子は少し楽しそうな臭いを感じ取っていた。

「弱ってる女の子に、一夏君はいつも以上に優しくなるの。それを知っている簪ちゃん

が、この機会を逃すとも思えない。思う存分甘えるに決まってるわ!」

「かっちゃんだって、何時も更識君に甘えてるじゃないのよ」

「あれは、義姉の特権よ!」

「そんなことを言い出せば、簪さんだって義妹でしょ? お義兄ちゃんに甘えてもいいじゃないのよ」

「でも、簪ちゃんの事だから、普段我慢してた分箍が外れると大変な事に」

「例えば?」

面白がっているのを隠す事をしない薫子だったが、今の刀奈にそれに気付けるだけの冷静さは残されていなかった。

「汗を掻いたから身体を拭いてほしいとか、寝るまで手を繋いで欲しいとか、あまつさえ一緒に寝てほしいとか」

「それって、かっちゃんの願望じゃないの?」

「うぐっ!」

「まあかっちゃんの場合、鬼の霍乱でも起きないと風邪なんてひかないと思うけどね」

「それってどういう意味よ!」

薫子とじやれ合ったお陰で、刀奈の中にあつたもやもやは解消されたのだが、それ以上で恥ずかしさが去来し、刀奈は別の意味で眠れぬ夜を過ごしたのだった。

一夏が隣にいるというだけで、緊張して眠れないのではないかと思つていた簪だったが、体力の低下と一夏が側にいる安心感に包まれたおかげで、ぐっすりと寝る事が出来

たのだった。

「ん……そっか、昨日は一夏の部屋で寝たんだっけ」

隣に本音がないことを確認して、簪は昨日の出来事が夢ではなかったと再認識したのだった。

「目が覚めたか？」

「おはよう、一夏……どこかに行ってたの？」

「食堂に行ってお米を分けてもらってきた。まだおかゆの方が良いだろ？」

「うん……昨日よりだいぶ楽だけど、まだ若干熱っぽいかな」

「どれ」

一夏が簪の額に自分の額を押し付け熱を測る。それだけで顔の熱が上昇していくのが簪には分かったが、目の前に一夏の顔があると言うことに幸せを感じてしまったのだった。

「確かにまだ少し熱いな……今日は大人しく寝てろ。五月七日先生には俺から言っておくから」

「ゴメンね、一夏」

「ん？」

何で簪が謝ってきたのかが分からない一夏は、視線で簪に真意を問う。その視線の意味を理解した簪が、ゆっくりと口を開いた。

「一夏だつて色々あつて疲れてるのに、私の看病をさせちゃつて」

「そんな事か。簪が謝る事じゃないだろ。風邪は注意してたつてひいてしまう事があるんだし、簪は俺の家族なんだから。家族の看病をするのは苦じゃないと俺は思う」

「織斑先生たちの看病も？」

「むしろあの二人を病気に追いやるだけのウイルスがあるなら手に入れたいが……少しくらい大人しくなつた方が世界の為だと俺は思うんだが」

「そうかもね」

「だが、あの二人が感染するくらい強力だと、他の人が死に至る可能性があるし……」

本気で悩みだした一夏を見て、簪はクスクスと笑う。そんな簪に優しい眼差しを向けながら、一夏は簪の額に熱さましを貼るのだった。

「恐らく休み時間の度に刀奈さんがお見舞いに来るだろうな」

「お姉ちゃんならありえそうで嫌だな……」

「それだけ簪の事を大事に思ってるって事だろ」
「うん、分かってるんだけどね……」

刀奈の気持ちは理解しているが、休み時間の度に来られるのは嫌だなど、複雑な思いに苛まれた簪だった。

紫陽花の行動力

四組の担任である紫陽花に簪が風邪をひいて休むと伝えるために職員室を訪れると、まっつききに出迎えてきたのは織斑姉妹だった。

「どうしたんだ一夏？ お姉ちゃんに会いに来てくれたのか？」

「それとも、わたしたちと朝食を一緒に食べたいから迎えに来てくれたのか？」

「篠ノ之も大概でしたが、貴女方も負けてないんじゃないですかね」

そう言つて二人を退け、一夏は紫陽花の側に移動する。普段あまり会話した事がない紫陽花は、一夏が側にやつて来て緊張した面持ちで問いかけてきた。

「えつと……私に何か用ですか？」

「簪が熱を出して寝込んでいますので、今日は欠席させますので、簪の担任である五月七日先生に報告をと」

「そうですね……それで、更識さんの容体は？」

「まだ熱が引かないので、今日は大事を取って休ませる程度ですよ。そこまで先生が気にすることないです」

「そうなの……良かったわ」

生徒思いで人気の紫陽花は、簪がそれほど酷い状態ではないと知りホツと息を吐いた。

「ところで、更識さんの看病は誰がしてるの？ もし大変そうなら、その子も休んだ方が良さと思うんだけど」

「簪の看病は俺が、本音には任せられませんし」

「まあ、布仏さんの事は良く分からないけど、更識君は大丈夫なの？ いろいろと忙しいでしょうし、今日は休んだ方が——」

「なら一夏も欠席でいいんだな？ お前は自分自身の事を済ませるんだな」

「いえ、そこまで忙しいわけでは——」

「お前が倒れるといういろと大変だからな。まだマナカと衝突したときの怪我が完治していないのだから、今日はゆっくり休むがいい」

勝手に話を進められ、一夏は頭痛と眩暈がしてきたのだった。それを見た紫陽花は、一夏が簪の看病をして風邪がうつってしまったのではないかと誤解し、一夏の額に自分の額をくつつける。

「少し熱いですね。やっぱり更識君も相当無茶してるんですね」

「いえ、別にそういうわけでは……」

「はい、更識君も部屋に戻る。たまには先生の言う事を聞いてくださいね」

「たまにはつて、ちゃんと聞いてるつもりなのですが……」

「そうだっけ？ 一夏さんはいろいろと教師に命じる事の方が多いじゃないですか」

「碧さん……絶対面白がってますよね？」

「そんな事ないですよ」

一夏が紫陽花に背中を押されている光景を見て、碧は何処か楽しそうな表情を浮かべているが、織斑姉妹がいる手前堂々と一夏を見て笑う事は憚られたのだ。

「ほら、更識君も大人しく寝てください。いう事聞けないというのでしたら、私が添い寝してあげましょうか」

「いえ、結構です」

何故そのような結論を導き出したのかと、一層強い頭痛を覚えながら、一夏はふらつく足取りで部屋まで戻っていったのだった。

「紫陽花、ちよつと校舎裏まで来てもらおうか」

「なに、すぐに終わるから」

「な、何で怒ってるんですか……?」

「紫陽花は天然だもんね」

「小鳥遊先輩? 何で織斑先輩たちは怒ってるんですか?」

「一夏さんに添い寝するなんて言えば、大抵の人は怒ると思うわよ?」

「えつと……なんだか小鳥遊先輩も怒ってます?」

自分がそれほどの事を言った覚えはない紫陽花は、先輩三人が怒っている理由が分からなかった。紫陽花にとって一夏は可愛い生徒であり、それ以上の感情は無いので、大人しく寝かしつけるために添い寝をすると言ったに過ぎないのだ。だが三人にはそうは思われていないようで、紫陽花はゆっくりと後退りながら職員室から逃げ出したのだった。

紫陽花に部屋に追いやられた一夏は、制服から普段着に着替えベッドに倒れ込んだ。

「あれ？ 一夏どうしたの？」

「いや、五月七日先生に簪が休むって言いに行ったんだが、流れで俺も休む事になった」
「何で？」

「簪の看病と、その他諸々で疲れてるだろうからって」

額をくつつけられたりもしたが、その事は言う必要がないので簪には黙っていた。

「それで、一夏も部屋で寝る事にしたの？」

「黙って授業に出てもいいんだが、その場にいた織斑姉妹にも知られてるからな……授業に出たりしたら、あの二人の事だから何をするか分かったもんじゃない……」

「強制的に一夏を寝かしつけたりしそうでね……」

「それどころか一緒に寝るとか言い出しかねない……」

「ありえそうで嫌だね……私も、お姉ちゃんならありえるかもって思うと、一夏の気持ち
が良く分かるよ」

刀奈と織斑姉妹では比べ物にならないが、それでも簪が自分の気持ちを理解してくれ
た事が一夏には救いだった。

「それに、私も一夏にはゆっくり休んでもらいたかったし、五月七日先生には感謝しな
きゃね」

「まあ、多少思い込みは激しいみたいだが、いい先生であることは違いないだろうな」

「学園の中でも、かなりの良識人の部類だと思うけどね」

「世間一般の良識人と比べればそうでもないが、この学園内なら間違いなく上位だろう
な」

「この学園、変人が多いからね……織斑姉妹に始まり、それ以外にもだいぶぶつ飛んで
人もいるし……お姉ちゃんとか」

簪が残念そうに刀奈の名を告げると、一夏は苦笑いを浮かべ、そして絶望に満ちた表情を浮かべる。

「実姉二人と義姉が変人扱いされた俺はどうすればいいんだ……」

「なんかゴメン……」

「簪が悪いわけじゃないがな……」

実際自分たちも変人の部類なのだろうと理解してるが、それでも絶望せずにはいられなかった一夏であった。

悩みの種

HRの時間が近づいても教室にやっつてこない一夏を心配した織斑姉妹（双子妹）は、心配で吐きそうなくらいの精神状態になっていた。

「兄さま、何かあったのでしょうか……」

「お兄ちゃんの事だから、私たちに黙ってどこかに行くなんてないと思うけど……」

「あれ？ 織斑さんたち聞いてないの？ 一夏君なら、体調不良の更識さんの看病と、自分自身も若干の体調不良で今日は休むらしいわよ」

「何故鷹月さんに連絡が行っているのに、妹である私たちには連絡が無かったのでしょうか……」

「単純に、クラスが暴走しかけたら私に処理させるためよ……こんな時だけ頼られてもね……」

遠い目をする静寂に、マドカもマナカもなんて声を掛ければいいのかに戸惑った。

「まあ、一夏君も万全な状態じゃないし、休むのも仕方ないと思うくらい事後処理とかがあったみたいだからね。今日くらい頑張るけど」

「美紀は聞いてたの？」

「簪ちゃんが体調不良だという事は知っていましたが、一夏さんまでもとは聞いていませんでした。ですが、休むという事は伺ってましたよ。恐らくですが、お二人にも連絡は行っているはずですが」

美紀に指摘され、二人は携帯を机の奥深くから取り出し、メールの確認をする。

「マナカさんもマドカさんも、何故携帯を携帯していないのですか……」

「昨日忘れてしまいました……」

「殆ど鳴らないしね……てか、あの二人からのメールの量が恐ろしくて、携帯したくないのよ……」

姉二人からの溺愛メールの量が多すぎて、マナカは若干携帯恐怖症に陥っている。二人が一夏からのメールを確認して、静寂に向けていた嫉妬の視線は漸く収まったのだ。た。

「それにしても、あのお兄ちゃんが体調不良とはね……諸々片付いて気が抜けたのかな」「兄さまは気を張り詰め過ぎていましたから、少し休むのは良い事だと思いますけど」「何々々？　いつちーがどうかしたの？」

「……アンタもお兄ちゃんの疲労の一員だと思うわよ」

「ほえ？」

能天気な本音に、さすがのmanaも毒気を抜かれたため息を吐いた。何故自分を見てため息を吐いたのかが分からない本音は、manaに必要以上にくつつき、質問を続けた。

「ね〜ね〜、何で私がいつちーの疲労の原因なの〜？」

「その能天気さが、お兄ちゃんを悩ませていると分からないの？」

「いつちーは優しいから、そんな事では怒らないし悩まないと思うけどなく。それに、最近までいつちーの悩みの種筆頭だったmanaには言われたくないなく」

「うぐっ！」

見事なカウンターを喰らい、manaはその場で崩れ去った。

「HRを始めたいので、皆さん席に着いてください」

「あつ、まややだ」

「今日はまーやなんだ」

クラスメイトも、HR担当が真耶だと分かると気が緩んだのか、何時もの緊張感は何

処にもなく、本音たちもゆつくりと席に戻るのだった。

半ば無理矢理休まされることになった一夏は、端末から世界情勢や緊急の案件がないかのチェックをしていた。

「一夏、今は休まない」と

「俺は別に簪みたいに高熱があるわけじゃないし、大事を取っての休みだからな。学生

としては休めても、企業のトップとしては早々休んでられないだろ」

「一夏がトップだつて知られちゃったからね……まあ、尊さんが代理を務めてくれるから、学園に押しかけて来るような人はいないけど」

「そんなヤツがいれば、その企業との取引は止められるんだがな」

実際そんな人間がいる企業と取引をすることは無く、事前の調査である程度駄目そうな企業は篩い落としているのだ。そういう仕事も一夏が担当していたので、学生とは思えないタイムスケジュールだったのだ。

「今は別の意味で忙しそうだしね」

「篠ノ之の件で無茶したからな……何であいつの尻拭いをしたんだらうって、今は思ってる」

「I Sを使えばそれなりに戦力になるんだし、荒れ地の開拓とかそういった力仕事に使えるからでしょ？ 篠ノ之さんなら、誰もいない荒野でも生きていけそうだし……もちろん、水や食料は必要だけど」

「まあ、柳韻さんからの報告だと、更生は難しそうだがな……」

柳韻から送られてきたメールを簪に見せ、一夏は深々とため息を吐いた。

「自分がしてきたことを箇条書きしてるのに、何で自分のことだって分からないの、この人は……」

「やっぱり東さんに頼んで解剖してもらおうか……だが、解剖して元に戻るかどうか分からないからな、あの人の場合は……」

「マツドの思考が働くって事？」

「いや、恐らく面白半分だと思うが……」

東なら十分あり得ると、簪も重々承知しているので、一夏が心配し過ぎだとは思わなかった。むしろ心配する必要は無いのではないかとすら思っている。

「ねえ一夏」

「ん？」

「一夏は篠ノ之さんをどうしたいの？」

「使えるものは何でも使う、それだけだ。使えないと判断すれば、容赦なく片づけるけどな」

「何だか暗部の人間みたいだね」

「一応主だからな……せめてもの情けで、その時が来たら俺が手を下してやるか」

「一夏がやらなくても、やりたい人は大勢いそうだけだね」

それだけ恨まれているのだが、本人がその事を自覚していないのが問題なのだ。あのスコールやオータムでさえ、自分たちが悪い事をしてきたと自覚しているのに、箒にはその自覚がない、どころかこちらを悪だと決めつけている。反省の色無しと判断されれば、処分されると分かっているのではないかとすら思う一夏だったのだ。

不敵な笑み

一夏がいない以上、織斑姉妹が暴走したとき止められる人間はいない。マナカが出来ないこともないのだが、彼女も彼女で万全ではないので、無茶をしたら後で一夏に怒られるかもしれないという恐怖から、自分の力にストッパーを設けてしまっているのだ。

「今日の実習、大丈夫かしら……」

「静寐、なんだかお腹痛そう……」

「どちらかといえば、胃が痛いわね……一夏君、何時もこんな思いついたのね」

「一夏さんは慣れだと言っていましたかね」

「四月一日さん……」

香澄と話していたのに、いつの間にか美紀が会話に入ってきたので、静寐は少し意外そうな顔を見せた。

「一夏君がいる時は兎も角、四月一日さんって基本的私たちと会話しないわよね？」

「そうでしょうか？　話しかけられればちゃんと答えますし、必要とあらば話しかけますが」

「そういうところよ。なんというか、表面上の付き合いって感じがするのよ」

「はあ……一応暗部の人間として、人との繋がりは最低限にとどめておかないとそれが弱みに繋がりがかねませんので」

「暗部って言っても、四六時中誰かと戦ってるわけでもないんでしょ？ それに、今更識の名を出せば、大半はＩＳ企業だって答えるわよ」

「一夏さんのお陰で、更識企業は世界最大のＩＳ企業になりましたし、現在敵対している組織もありませんからね」

表の世界で有名になり過ぎた所為か、更識に喧嘩を売ってくる暗部組織はほぼなくなつたと言えるだろう。それも一夏の功績ではあるのだが、一夏がそれを意図していたかは定かではない。

「美紀ちゃんには気にし過ぎなんだよ。もっと楽しく生きようよ」

「本音はいつも楽しそうだもんね……」

「うん！ 何事も楽しまなきゃ損だと思っただよね」

「その思考が、一夏さんを悩ませてるんですが……」

「いっちは『そのままの本音で良い』って言ってくれたし、無理して変わったら私じゃなくなっちゃうしね」

「……一夏さん、また無理をして」

一夏のセリフの裏に隠された本音を理解した美紀は、この場にはいない一夏に対して同情してしまった。

「ほえ？ 美紀ちゃん、どうして泣きそうなの？」

「一夏さんの本音を理解しただけ……無理して変わろうとして、本音が余計な事をするんじゃないかって思ったのよきつと……」

「ありえそうね、それ……」

「美紀ちゃんもシズシズも酷いなく。私だって変わろうと思えば出来ると思うんだけど」

「本音が虚さんみたいに大人しく礼儀正しくなられても、それはそれで嫌だし……」

すぐ傍に比較対象となる人物がいるので、美紀は本音の見た目に虚の言動を当てはめ、そして背筋が凍る思いをしたのだった。

「何だか怖いわね……」

「ほえ？ 何を想像したの〜？」

「何でも無いわよ……とところで、オルコットさんたちがまだ来てないようだけど」

「もうチャイム鳴るのにね」

雑談もこれまでという感じで話題を変えたが、確かにセシリアとラウラ、シャルと鈴の姿がアリーナには無かった。二組との合同授業なので当然鈴もいるものだと思うのだが、その四人の姿はアリーナの何処にもなく、美紀が感知した限り更衣室にも四人の気配は無い。

「マナカさん、四人の気配分かりますか？」

「最近更識の人は識別出来るようになったけど、その他大勢の気配は分からない」

「そうですか……マドカさんはどうですか？」

「私は、姉さまや兄さま、マナカのように広範囲にわたつての気配探知が苦手ですし、個人を識別するまでの実力はその……」

「ゴメンなさい……謝りますから泣かないでください」

側にいたマナカとマドカにも分からないという事で、いよいよお手上げ状態になった美紀の背後に、急に気配が現れた。

「誰ですかっ!」

「おっと! 私よ、私」

「碧さん……いきなりなんででしょうか？」

「えつとね、オルコットさんたちは一夏さんのお見舞いをしようと部屋に忍び込もうとしたところを織斑姉妹に見つかり、今は一夏さんが綺麗にした寮長室でお説教されてるわ。その影響でこの時間の合同実習は自習となります」

「軽い感じで言ってますけど、結構大変な事ですよね、それ？」

「そうかしら？ 割と何時も通リな感じだと思うけどな」

悪友の鈴と、一夏を兄と慕うラウラはまだわかるが、何故セシリアとシャルまで忍び込もうとしたのが、美紀には分からなかった。

「オルコットさんは一夏さんに恩義を感じているし、デュノアさんも同様に恩義を感じてるし、ちよつと一夏さんに憧れてる面があるからじゃないかしらね」

「私……何も言つてませんよね？」

「うふふ」

「こ、怖いですよ……」

笑つてごまかした碧に、美紀だけでなくその場にいた静寐と香澄、マドカやマナカも一歩碧から距離を取った。

「とにかく、訓練機を使いたい人は私に言ってください。それから、第二、第三アリーナも開放しますので、模擬戦形式の訓練をしたい人も、私に申し出てください」

「あの、そっちの監督は誰が？」

「一夏さんが無人機を出してくれましたので、何かあればすぐ私に連絡が来ます」

「おー！ さすがいつちーだ〜！」

手放しに賞賛する本音とは対照的に、美紀はまた無理をした一夏に小言を言いたい気分になったのだった。

一夏の中の順位

専用機持ちは実習中に訓練を済ませてしまおうという本音の提案で、美紀、静寐、澄の四人は隣のアリーナで訓練をすることにした。

「セツシーたちがいればもう少しバリエーション豊かな訓練が出来たのにね〜」

「一夏君のお見舞いに行こうとしたんだろうけど、何でこつそりと忍び込もうとしたのかしら？ 簪さんも一緒にいるんだから、普通にお見舞いに行けば許されたと思うんだけど」

「いや、織斑姉妹の事ですから、一夏さんに近づこうとしただけで有罪だと言いかねません」

「そんな人たちなの？」

「カスミンはまだ織斑姉妹に幻想を抱いてるんだね〜」

「織斑姉妹と言えは……マドカやマナカは誘わなくて良かったの？」

静寐の問いかけに、本音は首を傾げた。

「マナマナはクラスに溶け込むために向こうにいた方が良さし、マドマドはマナマナが

クラスに溶け込みやすいように一緒にいた方が良いと思っただけど、こっちに呼んだ方が良かった〜？」

「いえ……本音も色々考えてるのね」

「いえ、先ほど一夏さんからメールが着ましたので、その通りに動いてるだけです」
「あつ、やっぱりそうなんだ」

一瞬でも本音の事を凄いと感じてしまった自分を恥ずかしく思いながら、静寐は何食わぬ顔で訓練内容を確認し始める。

「私と美紀、本音と香澄のペア戦をするのね？」

「おー、カスミンと一緒にならどこから攻撃されても大丈夫だ〜！」

「本音、自分の身は自分で守らないと駄目でしょ」

「私だって、自分の事で精一杯ですし、美紀さんは代表候補生ですから……私が対処出来るか分かりませんよ」

「むー……せつかく楽が出来ると思っただのに〜」

「訓練で楽をしようとしなないの」

静寐に軽くチョップされ、本音は笑顔で反省の弁を述べた。

「ごめんなさ〜い……でも、簪ちゃんや刀奈さん相手より楽が出来るかもね」

「むっ、私だつて楽をさせるつもりは無い。香澄さん、本音の相手は私がするから、貴女は静寐と戦つててくださいね」

「それじゃあ一対一の訓練になるわよ？」

刀奈は兎も角、簪にライバル心を持つている美紀が、本音の言葉にカチンときたように、二対二の訓練だという前提条件を無視し始めた事に、静寐がツツコミを入れる。だがそれでも自分が本音を相手にしなくていいという事なので、美紀がそれで構わないというなら、静寐も一向にそれで構わないと思つていたのだった。

「周りを意識しながらも、本音と戦うから大丈夫」

「まあ、美紀がそれでいいなら構わないけどね……香澄もそれでいいかしら？」

「私じゃ美紀さんを止められないし、今のは本音が悪いとも思うから……」

「じゃあ、そう言う事で」

突如変則的な訓練になったが、二人からすれば強さの次元が違う相手をしなくていいので、内心ホツとしたのだった。

無人機から送られてくる映像を見て、一夏は思わず苦笑してしまった。

「どうかしたの？」

「いや、本音が不用意な事を言った所為で、美紀との結構本気なバトルに発展してな。本音も上手く対処してるようだが、美紀の実力が相当上がってるのを知らなかつたように追いつめられてるんだ。これを機に不用意な発言を控える事と、もう少し真面目に訓練

する事を覚えてくれればいいんだが」

「一夏、なんだか本音のお父さんみたい」

「同い年なんだが……」

「知ってるよ。でも、一夏ってお父さんっぽい雰囲気があるから……言動はお母さんっぽいけどね」

「どっちだよ……てか、どっちでもないっての」

「一夏となら、幸せな家庭が築けそうだって事だよ。卒業したら、私たちを幸せにしてくれるでしょ?」

「……」

風邪をひいているからなのか、何時もより積極的な簪に戸惑いを感じ、一夏は簪から視線を逸らせた。

「照れてるの?」

「俺だって一応照れたりするさ……」

「私は別に、平等に愛してほしいとは言わない。一夏にだって私たちの中にだって順位はつけてるでしょ?」

「……別に」

「その反応、やっぱりつけてるんだ」

「何でそうなる……」

「女の勘だよ、一夏。それで、一夏の中で一番は誰？ やっぱりお姉ちゃん？ それとも虚さん？」

こうなると答えなければ大人しくならないと判断した一夏は、大きなため息を一つ吐いてから簪に向き直った。

「あくまでも現段階でだが、一番一緒にいて楽なのは美紀だな。部屋が一緒だって事も大きい、凄く自然体で側にいてくれるから」

「そっか、それじゃあ二番目は？」

「……全部答えなきやいけないのか？」

「せめて三番目までは答えてもらう」

「はあ……二番目は簪、三番目は碧さん、以上」

「い、意外な結果だった……てつきりお姉ちゃんや虚さんの方が上だと思ってたから」

「虚さんは色恋という感じより仕事仲間って印象が強いから……もちろん、好きではいるんだが」

「お姉ちゃんは？」

「……妹みたいな感じがしてる」

「手がかかるもんね……本音と同レベルって感じ?」

「そこまでは言わないが……マドカやマナカを相手にしてる時と似たような感覚だという事は否定しない」

「そっか……私が二番なんだ……」

急に恥ずかしくなったのか、簪は布団をかぶって真っ赤になった顔を隠そうとしたが、一夏にはお見通しなのだった。

四人への罰

寮長室で説教されていた四人は、あまり正座に慣れていなかったのか、徐々に足の感覚がマヒしてきていた。

「何をそわそわしている」

「千冬さん、足がしびれてきたので崩していいですか？」

「学校では千冬先生と呼べ！　だがどうか、貴様らは日本人じゃなかったな」

「アタシは日本長いですけど、正座の文化は取り入れてなかったですし」

「仕方ない、動けないように重しを乗せてやろう」

「鬼畜?!」

「冗談だ。後で一夏に怒られるからな」

そう言つて、千冬は四人に楽しんでいいと告げ、珍しく自分で淹れたお茶を啜つた。

「それで、何で一夏の部屋に忍び込もうとしたんだ。こうなることは分かっていただろ」

「アタシは普通に、お見舞いに行こうとしただけです」

「僕も、一夏に聞きたい事があつたので。電話では分かりにくいかと思つて、直接会おう

と思つてました」

「私はお兄ちゃんが風邪気味だと聞いてお見舞いに行こうとしただけです」

「わ、私も一夏さんを見舞おうとしただけですわ」

「普通に見舞おうとして、何故忍び込もうとする。凰は一夏と付き合い長いのだから、忍び込もうとすればどうなるか分かつていたのではないのか？」

千冬に名指しされ、鈴は少しびくつきながらもはつきりと答える。

「弱つてる一夏なら、忍び込むことが出来るんじゃないかという知的好奇心が働きました……そのせいで千冬さんと千夏さんの存在を忘れてました」

「そもそも、お前如きの気配遮断で一夏を欺けると思うな、馬鹿者」

「うっ、酷い言われようだけど返す言葉が無いわ……」

「次にデュノア」

「は、はい！」

「お前の用事は急ぎのモノだったのか？」

「そこまで切羽詰まったものではないですけど、早いに越したことは無いですし」

「なら、正式に訪問する旨を伝え堂々と訪れればよかつたものを、何故こつそりと近づいたりした」

「それは……」

千冬に睨まれ萎縮したシャルは、これ以上千冬の視線に耐えられないと判断し正直に答えた。

「もしかしたら一夏の寝顔を見れるんじゃないかと思ひまして……前に一度だけ見たことがあるんですが、もう一回見たいという気持ちがありました。申し訳ありませんでしたー」

「正直に白状したのは良い事だが、一夏の寝顔を見たいなど万死に値する」

「ヒイ!？」

「次、ボーデヴィッツヒだが」

「はい、千冬教官!」

「お前は普通に見舞おうと言っていたが、それなら堂々と部屋に入ればよかつたのではないか? お前は一夏ともそうだが、その周辺の人間とも友好的だと思っていたが」

「こつそりと訪れて、お兄ちゃんを驚かしたかつただけです」

「そうかそうか……素直に育つて嬉しい限りだが、お前はもう少し駆け引きを覚えた方が良いでしょう」

「はっ! ご指導ありがとうございます」

「もういい……最後に、オルコツト」
「は、はい」

ラウラに対しては少し甘い面が見られたが、セシリアに視線を向けた時の千冬は、完全に獲物を狙う肉食獣のものであった。

「お前もボーデヴィツヒ同様、見舞いに行くつもりだったと言ったが、何故こつそりと近づいたりした」

「前の三人がこつそりと一夏さんの部屋に近づいていたので、それが普通なのかと勘違いしました……」

「貴様は入学当初、一夏を目の敵にしてた前科があるからな……弱っている一夏にとどめを刺そうとしたのではないのか？」

「そ、そんなつもりはありませんわ！　ちゃんと一夏さんを見舞おうと、おかゆを作って持って行くこうとしただけですわ！」

「セシリア、アンタ確か……壊滅的な料理下手じゃなかったっけ？」

「失礼な事言わないでくださらないかしら、鈴さん。私だって日々成長しているのですわー！」

「じゃあ、何でアンタの作ったおかゆを一口食べた千夏さんが気絶してるのよ……織斑

姉妹の片割れを気絶させるなんて、大量破壊兵器より危険よー！」

「セシリア、その武器をぜひドイツ軍で使わせてくれないだろうか」

「し、失礼な事言わないでください！ これは武器ではなくれつきとした料理ですわ！」

「オルコット、貴様は今後一切料理を作ろうなどと思うな」

「あつ、復活した」

今にも吐きそうな表情で起き上がった千夏が、セシリアを睨みつける。軽く生死の狭間を彷徨ったからだろうか、千夏からは未だに生気が感じられなかった。

「とにかく、貴様ら四人は一夏の部屋に侵入しようとした罪で罰せられる事になる。そうだな……まとめて相手してやるから、放課後第三アリーナに来るように」

「えっと、千冬先生対僕たち四人って事ですか？ 千夏先生は戦える状態じゃないですし」

「本来なら千夏も戦わせたいところだが、この状況を鑑みナターシャに手伝わせる」

「ナターシャさんって確か、布仏先輩と同等くらいに強いんですってつけ？」

「最近はISを動かしてないから、せいぜい更識妹か布仏妹レベルだとは思うがな。貴様ら相手ならそれくらいの実力があれば十分だろう」

「てか、普通に勝てないわよ……千冬さんだけでも嫌なのに、簪か本音レベルがもう一人

相手にいるんじや、ボロボロになるの確定ですよ」
「そうじやなきや罰にならんだろうが」

こつそりと忍び込もうとした結果が、千冬とナターシャを相手にしなければならなくなったことに、四人は深く後悔したのだった。

姉の乱入

思いのほか白熱した訓練を終えて、本音たちはシャワーを浴びていた。

「いや、美紀ちゃんの本気は捌くのが大変だったよ。何発か当たっちゃったし」

「本音の方こそ、普段のんびりしてるのにあんな動きしてくるなんて。普段からしっかりしたら？」

「香澄は未来予知が出来るから相手するのが大変だったわよ」

「未来が見えても動きが鈍いですからね……もっと精進しなければいけませんね」

結局一対一のような戦いになってしまったが、誰一人大ダメージを負わなかったのは、一応訓練だという事が頭の片隅にあつたからだろう。

「それにしても、相変わらず大きいわね、本音は」

「ほえ？ シズシズは何処を見てるのかな？」

「別に私だって小さいわけじゃないんだけど、本音や更識先輩の前じゃ霞むわよね……」
「大きくても邪魔なだけなんだけどね。でも、その事をかんちゃんの前で言ったら殺されそうになったんだけど、何でだと思っ？」

「本音、簪ちゃんが気にしてるの知ってるくせに……」

「美紀ちゃんだつて十分大きいし、おねくちゃんとかんちゃんは小さいからね。マドマドよりも小さいんじゃないかな？」

「それ、絶対に本人の前で言わない方が良いわよ」

一つ年下とはいえ、マドカはあの織斑姉妹の血縁であり、将来性を十分秘めている。そんなことを簪の前で言ったものなら、次の日の朝日を拝めるかどうか不安になる結末が待っていることは本音以外の三人は理解していた。

「良く聞くのは、男の人は意外と大きさは気にしないって事ですが、実際どうなのでしょう？」

「どうなのかと聞かれても、IS学園の男子は一人しかいないし、一夏君はあまり気にして無さそうだし」

「確かに一夏さんは気にしてませんね。もし気にする人でしたら、刀奈お姉ちゃんの誘惑に負けてしまつてもおかしくありませんし」

「刀奈様、遠慮なくくつつけるからね」

「義姉弟なのよね？ 見た目一夏君の方がお義兄さんっぽいけど」

「刀奈お姉ちゃんが学年上だということは静寐さんも知っていますよね？ それが答え

です」

「でもさ、マドカさんやマナカさんみたいな特例もあるわけだし、更識先輩もその特例なのかもとは思うわよ」

「簪ちゃんが普通に高校一年生なんですから、その姉である刀奈お姉ちゃんが年上であるという事実は揺るぎのないものだと思うのですが」

背が低く、精神年齢も低そうな刀奈の年齢を疑う気持ちは、美紀にも分からなくはないが、間違いなく刀奈は年上であり、一夏の義姉であるのだ。

「まあ、確実に言える事は、刀奈様は子供っぽいって事だよね」

「本音さんには言われたくないと思いますが……」

香澄のツツコミに、美紀も静寂も領いて同意したのだった。

体調不良とはいえ、高熱があるわけでもなかった一夏は、食堂に行き簪の分と自分の分のお米を分けてもらい、自室でおかゆを作ったのだった。

「簪、食欲あるか？」

「朝よりはだいぶ楽かな……でも、まだちよつと怠いかも」

「二日で治るような熱じゃなかったしな。まあ楽になったのなら良かったが」

起き上がろうとした簪を手で制し、一夏はレンゲを簪の口元に近づける。

「熱いから冷まして食べるよ」

「一夏が冷ましてよ」

「それくらい出来るだろ？」

「ダメ？ お義兄ちゃん？」

「……誰に入れ知恵された？」

「別に誰でもないよ。それに、一夏が私のお義兄ちゃんなのは事実だし、少しくらい甘え たつていいでしょ？」

「昨日から随分と甘えっ子になったな、簪は……」

下手に抵抗して簪の体調不良を悪化させては悪いと判断し、一夏は簪の口元に近づけていたレンゲを自分の口元に運び、冷ましてから再び簪の口元へ運ぶ。

「ほら」

「うん……美味しい」

「味が分かってきたという事は、だいぶ回復はしてるんだろう」

「一夏が作ってくれるものは全部美味しいから、味が分からなくても感想は言えるよ？」

「いや、それじゃあ意味がないだろ……」

もう一口と思ったその時、一夏は扉の向こうに誰かいる事に気付き、足音を立てずに扉へ近づき、一気に開け放った。

「うわあ!？」

「何か御用ですか、刀奈さん」

「あ、あはは……何時から気づいてたの?」

「扉の前に立った時からです」

「近づくことは出来ても、聞き耳を立てる事は出来なかつたな……それにしても、随分と甘えてるみたいね、簪ちゃん?」

「普段はお姉ちゃんが一夏に甘えてるんだし、これくらいいいでしょ?」

「私だつて一夏君に『あーん』してもらいたい!」

「ど、何処から見てたの!？」

「この学園には一夏君のストーカーがいるのよ? それくらいお見通しだつて」

「マナカか……」

別に恥ずかしい事をしていたわけではないので、一夏は全く動じなかつたが、簪は熱とは別の理由で真っ赤になっていた。

「甘えん坊な簪ちゃんは可愛いわね。お姉ちゃんに甘えてもいいのよ?」

「遠慮しておく。私は一夏に甘えたいんだもん」

「簪ちゃんばっかりズルい! 一夏君、私も看病してほしいな」

「刀奈さんは健康体でしょうが……」

「お姉ちゃん、何とかは風邪をひかないんだよ？」

「私バカじゃないもん！」

刀奈の乱入で騒がしくなったが、一夏も簪も少し楽になれた気がしたのだった。

父の後悔

刀奈が部屋にやってきたので、簪の看病は刀奈に任せて、一夏は部屋のシャワーで汗を流しに行った。

「ほら、簪ちゃん」

「……何しに来たの」

「そんなに睨まなくてもいいじゃない」

「お姉ちゃんが来なければ、一夏に食べさせてもらえたのに」

「昨日食べさせてもらったでしょ？ それに、これ以上甘えるのは一夏君の為にならな

いよ」

「どういう事？」

刀奈がおかしなことを言ったので、簪は首を傾げる。刀奈がおバカ発言をするのは、割と何時も通りなのだが、今回は妙に実感が籠っていたので、さすがの簪もスルーすることは出来なかったのだ。

「さっき言ったでしょ？ この学園には、一夏君のストーカーがいるって」

「うん、聞いた……」

「当然、簪ちゃんが一夏君に甘えてたところはバツチリ見られてるの」

「何だか恥ずかしい……」

「簪ちゃんは風邪をひいてるから我慢してるっばいけど、これ以上は我慢の限界みただったから私がここに来たのよ。さすがにマドカちゃんやマナカちゃんをここに来させたなら簪ちゃん以上に甘えるでしょうし、本音じゃあまり意味ないしで……」

「マナカは分かるけど、マドカもなの？」

「双子の姉が大好きな一夏君と一緒にいたら、マナカちゃんも突撃してくるかもしれないでしょ」

「そう言う事ね……」

簪が納得したところで、刀奈が両手をワキワキと動かしながら近づいてきた。

「な、なに？」

「汗をイツパイ搔いたでしょうから、お姉ちゃんが全身隈なく拭いてあげるわよ」

「不純同性交友は認められませんね」

「あら、一夏君……相変わらずお風呂短いのね」

「簪が嫌がってますし、本気で嫌われますよ？」

「うっ……簪ちゃんに嫌われるのは嫌だな……織斑姉妹みたいな思いをするって事でしょ？」

「何故そこで織斑姉妹の名が出て来るんですか」

本気で分からないという顔をする一夏に、刀奈は苦笑いを浮かべながら答える。

「だって、大好きな妹に——あつ、あの二人の場合は弟だけでも、蔑まれたりつつけんどんな態度を取られるわけでしょ？ 私だったらそんなの耐えられないよ」

「別に蔑んでるわけでもつつけんどんな態度を取ってるわけではないんですが……大人として、あれは駄目だろうと思ってるだけです」

「より酷いわよ……とにかく、そんな風にされたら私、立ち直れないからやめておくわね……」

「簪もシャワー浴びるか？」

「……タオル濡らしてくれば、自分で拭ける」

「そうか、じゃあ洗面器とタオルを用意するか」

「背中はお姉ちゃん、拭いて」

「まっかせなさい！ 綺麗に拭いてあげるわよ」

「……やっぱ一夏が拭いて」

「何もしないわよー!」

妹に信用されていない事が寂しいと、初めて実感した刀奈だったのだった。

あれから何度も箒を反省させようと四苦八苦した柳韻ではあったが、そろそろ一ヶ月経とうとしているのにまったく成果が上がらない。

「我が娘ながら、何故あそこまで偏った考え方しか出来なくなってしまったのだろうか……柔軟な発想をしてもらいたく剣道をさせたのだが、それが間違いだったのだろうか……」

この年になって娘の事で頭を悩ませるとは思っていなかった柳韻は、懐から昔撮った家族写真を取り出した。

「束も色々と問題あるようだが、向こうは一夏君が言えば大人しくなるそうだし……やはり箒か」

誰が言っても自分がしてきたことを認めず、それ以前に自分が悪だという事を認めていない。挙句の果てには一夏が悪いとか言い出す始末に、さすがの柳韻も匙を投げたくなっていた。

「約束の期限までは、まだ一月以上残ってるが、私には荷が重すぎる……何故こうなってしまうんだ……」

「いっそのこと稽古とかこつけて痛めつけようと考えた事もあったが、さすがに剣の道を極めた人間としてそれは出来なかった。

「父上、いい加減私を解放してください！ 腐った性根を持つ一夏を更生出来るのは私だけです！」

「だから、一夏君は真面目だと何度も言っているだろ。腐った性根を持つるのはお前だ」

「まだそんなことを言っているのですか……私を監禁し不当な拷問などを強いた一夏がまともなわけないでしょうが」

「彼がしてきたことを不当だと思ってる時点で、お前の思考が狂っていると何故わからな
い……それに、一夏君は拷問などしてはいないはずだが」

「精神的苦痛を与える事も、立派な拷問だと思いませんが」
「そう言う事をされる原因を作ったのはお前だろうが」

「このやり取りも両手の指では足りないくらい重ねてきたのだが、一向に箒の主張は変わらない。それどころかより過激になっているときえ柳韻には思えていたのだった。

「何故父上ともあろう方が、一夏などに洗脳されてしまったのですか」

「洗脳などされてはいないし、お前が考える一夏君は、人の事を操るような人なのか」

「ですから、一夏は更識に引き取られて変わってしまったのです！ だから私がこの手で一夏を更識から解放し、操ってきた人間どもを始末する」

「もうこのやり取りに意味はない。箒、竹刀を持って道場に来なさい」

「また、私を痛めつけるのですか」

「教育的指導だ。それに、お前だつて生身の一夏君に竹刀を振り回したりしていたのだろ」

幼少期の奇行を更識家から知らされている柳韻は、記憶を失ったばかりの一夏に対してしてきた箒の所業に、何故あの時叱つてやれなかったのだらうかと後悔していた。その念も相まって、箒相手に手加減出来ずにいたのだった。

束の介入

箒を道場へ呼び出したは良いが、柳韻は普通に倒すだけでは意味がない事を思い知らされている。手加減しているつもりは当然ないが、箒の頑丈さは柳韻でも手を焼くレベルなのだ。

「いっそのこと真剣で……いや、相手が誰だろうと殺人には変わりない……」

たとえ相手が殺人者であろうと、法の名の下に罰を下さなければ彼女と同じ事である。柳韻はその事を重々承知しているので、立てかけてある真剣ではなく、竹刀を手に取り精神を集中させる。

「誰だっ！」

精神を集中させている時に、背後に気配を感じ柳韻は竹刀を寸止めするつもりでその気配に向けて突き立てた。

「自分の娘の気配くらい分からないものかな？」

「お前……束か？」

「ハロハロ〜！ 箒ちゃんの行動に呆れたお父さんの為に現れた天才東さんだよ〜」

「お前なら箒を正しい道へ戻せるといふのか？」

「別に戻さなくても殺しちやえばいいじゃん。箒ちゃんは身勝手な理由で大勢の人を殺したんだし〜」

「だが、個人がそのような判断をしてはならない」

「別に箒ちゃんなら、後からいくらでも正当性をでっちあげる事が出来るし、いつくんとちーちゃんたち、そして束さんが正当だと言え、それが真実になるんだよ」

確かに一夏も千冬たちも、そして束も世界に対して多大なる影響力を持っている人物である。その人たちが正当だと認めるのなら、そこに反論する人間はいないだろう。

「いや……私は一夏君から、箒を更生させるよう頼まれたのだ。まだ一ヶ月弱残っているこのタイミングで音を上げるわけにはいかない」

「相変わらず面倒な人だな。じゃあ、箒ちゃんにコレを飲ませると良いよ」
「ハレはあ〜」

無色透明、そして無臭な液体を渡され、柳韻は首を傾げる。

「本当はトリカブトでも入れようかと思ってたけど、毒物が入ってないから安心して。」

あつ、でも飲んじやダメだから」

「いったいなんだというのだ」

「それは、記憶を完全消去する薬だから。後一ヶ月以上あつたとしても、あの箒ちゃんを更生させるなんて不可能だからね。だから、一から作り直せばいいんだよ」

「しかし……」

「大丈夫だつて。記憶は失つても、I Sの操縦とかそういうのは身体が覚えてるから、一から作り直した箒ちゃんでも、いつくんの役に立つよ」

確かに一から教育し直したいと何度思ったから分らない程、柳韻は箒にそのような感情を抱いていた。だが、記憶を消すという事は今までの箒を殺す事とほぼ同じなのではないかという疑念が柳韻を襲う。

「なんなら束さんが飲ませて来るから、お父さんはその後から教育すればいいよ」

「……いや、私が飲ませる。これは私が背負うべき罰なのだからな」

「箒ちゃん自体が罪の塊だから、罰もなにもないと思うけどね」

「一夏君へは束が報告しておいてくれ。必ず綺麗な心を持った箒にしてみせる」

「それだけ変わったら、別の意味でいつくんが戦いちゃうだろうけどね。まっ、報告は任せて」

そう言つて東は完全に姿を消した、柳韻でも気配を察知出来ないのです、もうこの敷地内にはいないのだらう。

「父上、いったいいつまで私を待たせれば——つと、そのお茶は？」

「飲むか？」

「そうですね……大声を出して喉も乾きましたし、頂きます」

そのお茶を飲んだ箸は、その場に崩れ落ちた。目覚めを待つことなく、柳韻は今までの箸が死んでしまったと確信したのだった。

簪と刀奈が同じベッドで寝ているのを見て、一夏は苦笑いを浮かべた。今日くらいは一緒にいると聞かなかつたので、一夏も簪も刀奈を部屋に戻すのを諦め、簪は仕方なく一緒に寝たのだった。

「仲が良いのは知ってるが、ここまでべったりだと簪が少し可哀想だな」

やれやれとため息を吐いてから、一夏は何もない空間に視線を向けた。先ほどまで何もなかった空間に気配が生まれ、その相手は一夏に向けて飛び込もうとしたが、身体が万全でない事を思い出したのか住んでの所で踏みとどまった。

「何か用ですか？」

「いっくんに報告しにきただけだよ」

「報告？ 貴女がいつたい何の報告をしに来たのですか」

東が報せに来るなんて、よほどのことが無ければありえないと確信している一夏は、疑り深い視線を東ねに向け、決して聞き逃さないよう集中した。

「大したことじゃないんだけど、東さんが作った薬で、今までの箒ちゃんは死んだから」「死んだ？ 殺したんですか？」

「違うよ〜？ ちよつとした新薬で、記憶を完全に消す薬を箒ちゃんに飲ませただけ。だから、今までの傍若無人で自己中心の箒ちゃんはいなくなつて、一から教育した箒ちゃんが生まれるんだよ〜」

「さすがに柳韻さんでもあの篠ノ之を更生させることは無理だつたんですね」

「あんなの、ちーちゃんやなつちゃんでも無理だつて」

「まあ、ダメで元々のつもりでお願いしたんで、最悪死なせてしまつても弁護はするつもりだつたのでいいですけどね」

「お父さんも躊躇つてたけど、いっくんたちが弁護するつて言つたら決心したみたいだしね〜。いっくんに対する信頼は、お父さんもだいたい高いみたいだし」

「あの報告を見る限り、何時匙を投げてもおおかしくないと思つてましたし、柳韻さんが責任もつて育ててくれるなら、こちらかは何も言いません」

一夏の言葉を聞いて満足したのか、束はあつという間に姿を消し、気配も完全に消えた。一夏は大きいため息を吐いてベッドに横たわり寝る事にしたのだった。

目覚め

少女は目が覚めてまず見たものは、板張りの床に高い天井だった。

「ここは何処でしょう……その前に、私は誰で何故寝ていたのでしょうか……」

記憶喪失者が良く言うだろうと言われている言葉を、彼女も口にする。やはり自分が誰だかわからないという事は相当な恐怖なのだろう。

「目が覚めたかい」

「ど、どなたですか……?」

いきなり声を掛けられて、少女は身体を震わせながら、声を掛けてきた相手に問いかける。どうやら声を掛けてきたのは中年の男性で、少女が感じた限り敵意は無かった。

「やはり何も覚えていないのか……」

「えっと……貴方は私が誰だか知っていますのですか?」

「ああ、知っている」

「教えてください。私は誰で、貴方とはどのような関係なのかを」

あつたばかりの人間を信じるのは危険な事だが、彼女にとっては記憶の手掛かりなのかもしれないのだ。そのような事を考える余裕はない。

「お前の名前は、篠ノ之箒。そして、私は篠ノ之柳韻だ」

「……お父様？」

「なるほど、そう呼ぶか……」

「あの、何か間違えましたか？　もしかして旦那様だったでしょうか？」

「いや、父で間違いない」

恐る恐る柳韻に問いかけ、自分と彼の関係が親子であると理解した。だが、柳韻は自分の呼び方を気にしてよう、箒は何が原因なのかと首を捻る。

「記憶を失う前、私はお父様の事をどのように呼んでいたのでしょうか？」

「前の事は気にすることは無い。私が慣れればいいだけの話だからな」

「そうですか……ところで、私は何故このような場所で倒れていたのですか？　お父様なら何かご存じなのではないでしょうか？」

箒がその事を柳韻に聞くと、柳韻は視線を逸らし渋い顔をしていた。それを見た箒

は、たぶん聞かれたくないことだったのだろうと察し、頭を下げようとする。

「……何があつたかを教える前に、前の箒の事を話さなければならぬだろう」

「前の私……？」 記憶を失う前の私はどのような人だったのでしようか？」

「それを知つたら、今の箒が苦しむかもしれないが、それでも構わないか？」

「今の私が苦しむ？ 前の私はそんなに酷かったですか？」

「覚悟があるのなら話そう。元はと言えば箒自身の事だから、今の箒にも知る権利は当然ある」

「……お願いします」

小さく息を吐き、箒は柳韻の前に正座し、話を聞く体勢を取つた。それを見て柳韻も腰を下ろし、懐から数枚の紙を取り出し箒に手渡した。

「これは？」

「読んでみなさい」

柳韻に言われるまま紙に書かれた事を読み進め、徐々に箒の表情は険しく、時に信じられないという感じの表情を浮かべた。

「そこに書かれている事、それはすべて前の箒がしたことだ」

「私、こんなことを……」

「ああ。だが前の箒はそれが悪い事であると——いや、自分がやったのにそれを自分がしてきたことだと認識していなかった」

「どういう事でしょうか……」

「紙に箇条書きしたのは前の箒だ。そして、そこに書かれている事を読んで『自分が成敗してやる』とすら言いだした」

信じられない事を聞かされ、箒は口を押さえる。紙に書かれている事はあまりにも非人道的な行爲が多く、『一夏』なる人物に多大なる迷惑をかけているのが読み取れた。

「一夏君というのは、私の教え子の弟で、箒と同年の男の子だ」

「前の私との関係は……?」

「箒は幼馴染だと言い張っていたが、一夏君は顔馴染み程度にしか思っていなかったと思う。何せ記憶を失ったばかりの一夏君に付きまとい、彼を孤立させようとしてたらしいからね」

「その『一夏さん』も記憶を……? 私と同じように記憶を失ったのですか?」

「いや、一夏君は箒とは違う理由で記憶を失った——いや、彼の場合は記憶を自分の奥底に封じ込めた、と言った方が正しいのかもしれない」

「どういう事ですか？」

柳韻は一つ咳ばらいをしてから、今の世界について箒に話し始める。ISの事、ISを造ったのが姉である東である事、ISの所為で一夏が誘拐され拷問された事、その時の恐怖から一夏が記憶を閉ざした事など、長時間かけて現状を箒に話聞かせた。

「——何か質問はあるか？」

「いえ、とても分かりやすかったです……ただ、本当に前の私は人を殺めたのですか？
この手で？」

「ISを使つてたらしいから、その手でかどうかは分からない。だが、間違いなく人を殺したのだろう。それも一人二人ではなく、大勢の間人を」

「では、私は処刑されるのでしょうか……覚えていないことで処刑されるのは嫌ですが、前の私だろうが今の私だろうが人を殺したのは『篠ノ之箒』なのですから仕方ないのか
もしませんか」

「いや、一夏君がその件については世界中と交渉して一任されている。前の箒だったら
処刑もやむなしだったかもしれないが、今の箒ならまだ分からない。もう少し混乱が収
まったら彼に会いに行こう。教育に関しては私より彼の方が適任だろうし」

「一夏さんっていったい何者なのですか……？ 先ほどの話を聞く限り、私と同い年の

「高校生だと思ったのですが」

「ああ、肝心な事を言っただけでなかったね。一夏君は世界トップ企業である更識企業の代表で世界中に対して影響力を持つてるんだ」

「そんな人に迷惑をかけていたなんて……なんだか恥ずかしいです」

前の箒に手を焼いていた柳韻は、この箒ならまっすぐ育ってくれてくれないかと思いと、結局更生させることは出来なかったという思いが心に押し寄せてきて、結局はため息となって外に吐き出すしか出来なかったのだった。

刀奈の覚悟

何も覚えていない筈に、今までであった事を一から教えていく柳韻は、昔してこなかった子育てを今しているような気分になっていた。

「では、その一夏さんが私を庇ってくださいらなかつたら、今頃私は処刑されていたという事ですね？」

「そうだろうな。あれだけの事をして、生かしておく理由が国にはないだろうから」

「そして、前の私はその事を認めていなかったと」

「悪いのは一夏君で自分ではないと主張していた」

「そんな私を更生させようとお父様は奮闘したが、出来なかつたという事です」

「さつき見せた物もそうだが、自分がやってきた事だという自覚が無かつたからな」

娘と話しているのに、何処か調子がかめないのは、昨日までの筈とはあまりにも違い過ぎるからだろう。柳韻は言葉がキツクならないように注意しながら筈に説明を続ける。

「そんなお父様の前に、姉である篠ノ之東博士が現れ、私の記憶を完全に消す薬を手渡し

てきた、これで間違いありませんね？」

「東が何を考えて私の前に現れたのかは分からないが、お前の記憶が無くなったのは東の薬の所為だ」

「では、私は篠ノ之東博士に感謝しなければいけませんね」

「感謝？」

思いがけない言葉に、柳韻は思わず聞き返してしまった。前の筈ならば絶対に口にする事が無かった単語だったという事もあるのだが、話の流れ上恨みこそすれ感謝する理由は、彼には思い当たらなかったのだ。

「だってそうじゃないですか。前の私は殺されても当然の所業をしておきながらそれを認めなかったのですよ？ そんな私を殺してくれて、尚且つ新しい私を生み出してくれたのです。感謝してもしきれませんよ」

「今のお前も、前のお前に嫌悪感を抱いていたのか」

「当然ですよ。話を聞いただけで苛立ちますし、叶う事なら私が始末してやりたいときえ思いました。自分の事だというのに、まるで自分が悪くないだなんて、ましてや一夏さんの所為にするだなんて……許せると思えますか？」

物凄い剣幕で柳韻に迫る箒は、ふと我に返って柳韻に頭を下げた。

「申し訳ありません、お父様に怒っても仕方ありませんよね」

「いや、箒が怒る気持ちは私にも良く分かる。実を言うと、私も前の箒には苛立ちを感じており、更生させるのは無理じゃないかと諦めていたんだ」

「お父様じゃなくても、だいたいの方は諦めて当然だと思います。一夏さんだって、更生の見込みなしと判断すれば即座に始末するつもりだと思いますし」

「まあ、一夏君は時に冷酷な判断をするのを躊躇わない子だからね。顔馴染み程度にしか思っていない相手なら尚更だ」

「直接会って謝らなければいけませんよね。いくら記憶が無いとはいえ、私が一夏さんに多大なるご迷惑をかけていたのは事実なわけです」

「そうだね。だが今は、必要最低限の常識と、IS学園の重要人物の事を覚えるのが先だ」

柳韻の言葉に頷き、箒は大人しく柳韻の話を聞く体勢を取る。素直に自分の言う事を聞く箒に若干の薄気味悪さを覚えながらも、柳韻は箒に一から色々教え込むのだった。

簪の容態は回復しつつあるが、一夏本人の調子は一向に上がってこない。授業を休んだからと言って、一夏が完全に休めるわけではないので仕方ないのかもしれないが、それでも多少なりは休めてもいいはずなのだ。だが昔からジツとしてる事が苦手な一夏は、せつかく時間が出来たのだからという理由であれこれ出来なかった事を片付けよう

としてしまったのだ。

「一夏君、少し働きすぎだって理解してるの？」

「まあ、自覚はありますけど……刀奈さんがもう少し働いてくれるのでしたら、俺も休めるんですがね」

「うっ……分かったわ。一夏君が休むためですものね。私が代わりに働くから、今日は一日安静にしててね」

「分かりました。でも、刀奈さん一人だと心配ですし、この部屋で作業してください」

「イマイチ信用されてない気がするけど……仕方ないのかな、今まで散々サボってきてたんだし」

自分が信用されていない理由を理解してるため、刀奈は大人しく一夏の側で作業する事にした。ここで下手に逆らっても意味がないと理解出来るだけの良識は持っているため、一夏も最終的には刀奈を信用するのだった。

「お姉ちゃん、一人で出来るの？」

「これでも生徒会長なのよ？ やる気がなかっただけで仕事は出来るんだから」

「やる気がないのが問題だったような気もするけど、お姉ちゃんなら出来るよね」

「なんとなく傷つく言い方だけど、簪ちゃんも一夏君も、少しはお姉ちゃんを信じてちよ

うだい」

「今までの経験上、お姉ちゃんを信じて碌な目に遭ってこなかったけど、今回は信じてあげる」

「ありがとう。それじゃあ、ちやちやつと終わらせちやおうかしらね」

「念のために言っておきますが、ちゃんと授業には出てくださいね」

「分かっているわよ。さすがにサボったりしたら怒られちゃうし、織斑姉妹にお仕置きされるのは嫌だからね」

この部屋はそれなりに寮長室に近いので、刀奈がサボってこの部屋にいたらすぐにバレルのだ。一夏に念押しされるまでもなくそれを理解している刀奈は、ちゃんと授業に参加してかつ、溜まっていた仕事をしっかりと片づける覚悟をしていたのだった。

姉妹の語り

刀奈の姿が見えないことが気になりながらも、かといって探し回るのもおかしいと思つて大人しくしていた虚だったが、もしかしたらと思ひ一夏たちの部屋を訪ねてみたら案の定刀奈もいた事に頭を押さえた。

「お嬢様……姿が見当たらないと思つていましたら、こんなところでサボつていたのですか」

「サボつてないわよ!? 一夏君の代わりに溜まつてる仕事をここでしてただけだもん」

「一夏さんの代わりと仰りましたが、元々はお嬢様が片づけるべき仕事ですので」

「分かつてるけど、それだけじゃないもん！ 普段私が見た事無いような物もちやんとやつてるんだから」

そう言つて刀奈は、自分が片づけた仕事の中から、普段でも一夏がやっている仕事を引つ張り出して虚に見せつける。

「これが出来るのでしたら、普段からしつかりとしてもらいたいものですが」

「うっ……一夏君に聞きながらやったから、一人でやれと言われても出来ないわよ……」

「まあそんな事だろうとは思ってましたが、何故いきなりしつかりしようと思ったのです？」

「それは……その……」

言いにくそうにしている事が引つ掛かり、刀奈が何を隠しているのかを虚は問いたただいた。

「また何かを壊したりしたのですか？」

「壊してないわよ！ てか、またってなに!？」

「いえ、この前部屋の窓を割ったからという理由で仕事をしていたので、また何か壊したのかと思っただけです」

「あれは私じゃなく薫子ちゃんが……って、そんな話はどうでも良いわよ。今回は一夏君が倒れたからお姉ちゃんとしてしつかりしなきゃと思っただけよ」

理由としては納得出来るが、刀奈の態度や目が泳いでる事が気にかかり、虚は無言のプレッシャーを刀奈にかけ続ける。

「うう………本当は一夏君に意識してもらいたいから頑張っていました」

「お姉ちゃん、あの会話聞いてたの？」

「さつき言ったでしょ？ この学校には一夏君専門のストーカーがいるって」

「マナカは後でお説教だな」

「理由はともあれ、仕事をしつかりとすることは良い事ですね。ではお嬢様、生徒会室にある仕事も片付けてください」

「えっ、そつちは私の仕事じゃ……」

「お嬢様の仕事ですよ？ 普段私や一夏さんが肩代わりしてただけで、生徒会に来る仕事の大半はお嬢様が処理すべきものですので」

「聞いてないよ、そんなの……」

虚に引き摺られながら部屋を出て行った刀奈を見送り、一夏と簪は同時に嘖き出したのだった。

「実にお姉ちゃんらしいね」

「まったくだ」

ひとしきり笑った後、二人は大人しく寝る事にしたのだった。何時までも心配かけるのが忍びないと思つたのと、いい加減にしないと他の人間も突撃してくる可能性があるかと理解したからなのかは定かではないが、少しでも早く治そうという気持ちだけははつ

きりとしていたのだった。

簪と仲良さげに話してる一夏を覗き見ていたマナカは、どうやれば自分も一夏と楽しくお喋り出来るかを考え、一人では結論が出せないという事でマドカの部屋を訪れた。

「——てなわけなんだけど、アンタならどうする？」

「いきなり部屋を訪ねてきて何なんですか……兄さまは前から簪や刀奈さんとは仲良く話していますし、私や貴女とだって普通に話してるじゃないですか」

「私はお兄ちゃんともっと仲良くなりたいの！」

マナカの本音に、マドカは「さすがは姉さまと同じ血が流れてるだけありますね」と思ったが、それを声にすることはしなかった。

「刀奈だってお兄ちゃんにくつつき過ぎてるのに、簪までお兄ちゃんにべったりじゃ私たちの立場が」

「立場？」

「妹のポジションが取られるってことよ！」

「そんなことを気にしてるんですか？ 兄さまの妹は、私と貴女の二人だけです。確かに簪は義妹ですが、簪自身は義妹として扱ってほしくは無さそうですし、刀奈さんは年上ですから」

「妹っぽいのは他にもいるじゃん！ お兄ちゃんが私たち以外を妹扱いしてるのが気に入らない」

はつきりと言い切ったマナカに、マドカは頭痛を感じ始めた。

「とにかく、兄さまと仲良くなりたかったのでしたら、盗撮や盗聴、周りを排除しようという考えを止める事ですネ」

「それは出来ない！ お兄ちゃんの観察はもはや日課だから」

「そんなこと言っていると、姉さまや東様のような扱いを受けるかもしれませんよ？」

「それは……」

千冬たちが一夏からどう思われているかを知っているマナカは、あんなふうに使われたいやだという考えが信念を揺るがせた。

「で、でも……お兄ちゃんの成長を眺めるのが唯一の楽しみなんだから、それを止めるのは人生に終止符を打つと同じ事……」

「いえ、そこまでの物ではないと思うのですが……私たちはもう、兄さまの側を離れる事はないのですし」

「確かにそうだけど、一時もお兄ちゃんの事を見てないなんて事が無いようにしたいの」

「それは妹というよりストーカー思考ですね……いい加減にしないと本当に嫌われてしまいますよっ」

「それだけは絶対にイヤ！ 分かった、止める努力をしてみる」

双子の妹の変態的思考に悩まされながらも、何とか更生出来るかもしれない可能性が見えて、マドカはホッと息を吐き心の中で一夏に話しかけたのだった。

「(兄さまの悩みの種、一つ除去出来るかもしれません)」

一夏が何に頭を悩ませているかを知っているマドカは、少しでも役に立てたかもしれないという事に喜びを感じながら、マナカが去った部屋で小さくガッツポーズを見せたのだった。

真夜中の妄想

早めに寝たお陰か、妙な時間に目が覚めた簪は、ちよつとした出来心でベッドを移動しようとして立ち上がった。

「（美紀だって篠ノ之さんがいた時は結構一夏と一緒に寝てたらしいし、これくらいは別にいいよね？）」

誰に問いかけるでもなくそう心の中で自問自答し、いざ一夏のベッドへと思ったところで立ちくらみを起こしてその場にへたり込んでしまった。

「あ、あれ……まだ治ってなかったのかな……」

一夏が手厚い看病をしてくれたとはいえ、まだ万全ではなかった体調で一夏と一緒に寝る妄想をしてしまった所為で再び熱が上がってしまったようだ。

「と、とりあえずベッドに戻らないと……」

はいつくばってでもベッドに戻ろうと思ったが、動いただけで気持ち悪さが込みあが

てきて、どうにも身動きが取れなくなってしまった。大声を出せば一夏は起きるかもしれないが、一夏も体調が万全ではない上に、自分の妄想が原因で熱が上がったなど、恥ずかしくて一夏に言えるわけがない。

「ど、どうしよう……」

「なにしてるんだ?」

「えっ? 一夏……起きてたの?」

「早く寝た所為か妙な時間に目が覚めてな。柳韻さんからの報告メールが昨日の夜来てたらしくて、今それに返信してたところだ。それで、簪は何をしてるんだ?」

「えっと……トイレに行こうかと思ったけど、立ち上がったところで立ちくらみを起こしてどうにもこうにも……」

「トイレか……連れて行ってやることは出来るが、動けないんじゃないかな。……碧さん、起きてるか聞いてみるか」

「だ、大丈夫! もう引っ込んだから」

「……我慢は身体によくはないと思うが、こればかりは俺が追及すると変態みたいだしな。とりあえずベッドに戻った方が良さぞ」

「動けないんだってば……」

情けない声を出す簪にため息を禁じ得なかった一夏だったが、とりあえずは抱き上げてベッドに簪を戻した。

「明日からは俺じゃなく美紀にこの部屋にいてもらおうか？」

「大丈夫、こんなことはもうないだろうし……（い、言えない……一夏と一緒に寝る妄想をして体調を悪化させたなんて……お姉ちゃんじゃないんだから……）」

心の中で自分の行動を反省しながら、簪は再び眠りに就いたのであった。それを見守った一夏は、柳韻から送られてきた現状報告メールを呼び出し、右手で頭を掻いた。

「束さんの開発した薬とはいえ、完全に記憶を消してしまうとはな……だが、身体が覚えているようで剣道の腕はすぐに回復してみたいだ……これから考えるに、ISも簡単に動かせるのだろうか」

箒の専用機という事になっているサイレント・ゼフィルスも解体する必要は無さそうだと考えながらも、万が一の為にセーフティロックを掛けておいた方が良いのではないかと思考を巡らせる。

「こちらの戦力は本音主導で底上げが出来ているが、最初から暴走されるのを前提で物事を考えるのは虚しい気もするが……今までの言動がアレだったから、仕方ないのかも

しれないがな」

「二夏さん、サイレント・ゼフィルスの心を開くことに成功しました」

「いきなり人の姿になるなど言ってるだろ……まあいい。漸く外部アクセスに成功したのか」

「私が何度も呼びかけ、無理矢理意識を覚醒させた訳ですけどね」

「……まあいい。夜が明けたらサイレント・ゼフィルスに会いに行くか」

現状は一夏が良く使う整備室の最奥に保管されているのだが、さすがにこの時間から作業をすれば誰かに怒られる可能性が高い。それは一夏も弁えているので、今すぐには言わなかったのだ。

「簪さんの看病を誰かに引き継いでもらわなければなりませんし、一夏さんだつてまだ立ちくらみする可能性がありますね」

「整備の手伝いは簪が一番適任なんだが……仕方ないか」

美紀のベッドで安心しきった顔で寝ている簪を見て、一夏は頭を振って他の候補者を探す。

「虚さんも整備は出来るが、手伝ってもらおうと生徒会の仕事が終わらないだろうし、美紀

には簪を任せたいしな」

「本音さんは如何でしょうか？　彼女は一応整備の腕がありますし、一夏さんの為になら喜んで動いてくれると思いますよ」

「だが、本音には今戦力の底上げを頼んでるし、腕は在ってもやる気は無さそうだしな……アイツも身体を動かしてる方が楽しいだろうし」

「そうなるといよいよ人が……あつ、マナカさんは如何です？　天才的な頭脳と神のような整備技術を併せ持っていますよ」

「マナカの状態は俺より酷いんだ。フォローするのがどっちになるんだという話にならないか？」

「そうでしたね……マナカさんは日常生活にこそ支障はありませんが、整備や戦闘はまだ全然ダメだったんでしたね……」

いよいよ八方ふさがりかと思いかけたタイミングで、一夏の携帯が鳴った。

『いっくん、誰かを忘れてないかな？』

「部外者を簡単に学園へ入れるわけにはいきませんので」

『部外者じゃないよ！　ISの生みの親にして、いっくんが現状頭を悩ませている箒ちゃんのお姉ちゃん、そしていっくんの未来の——』

「では、夜が明けたら学園に来てください」
『えっ!? ちよつといつく——』

まだ何か言いたげだったが、一夏はこれ以上話す事がないので電話を切った。その鮮やかな手口に、闇鴉は賞賛の拍手を一夏に送ったのだった。

束来訪

夜が明ける少し前、束は一夏に呼ばれたので堂々とIS学園にやってきた。

「やあやあ、ご苦勞様」

無人機にその声を掛けゲートをくぐると、不審者判定をされて無人機に追いかけまわされる羽目になった。

「あれ〜!? 束さん、正式にいつくんに呼ばれてるのに不審者なの〜!」

「お前は不審者に決まってるだろ」

「あつ、ちーちゃん」

無人機を遠隔操作していた千冬が現れ、束はコントロールパネルを千冬から奪い取った。

「今日は束さん、いつくんに呼ばれて来たんだからね。何時もみたいに不法侵入するわけにもいかないでしょ」

「不法だと分かっているならぜひ止めていただきたいものだな」

「てか、忍び込んだっていつくんやちーちゃん、なっちゃんにバレるし、あとあの……小鳥遊だっけ？ あの女にも気づかれてるっぽいし」

「小鳥遊は今でこそIS学園で教師をしているが、元々は一夏の護衛だ。気配に敏くて当然だろうな。ましてや一夏に対して邪な考えを持っているお前なら尚更だ」

「だから、今日はそういう感じであつたわけじゃないんだってば」

「ええ、お聞きしますよ」

千冬と束の背後から声がして、二人は咄嗟に臨戦態勢を取り、相手の姿を確認したのと同時にその態勢を解いた。

「最強の双子の片割れと大天災に気付かれずに近づけるなんて、私も捨てたものじゃないじゃない」

「小鳥遊か……それで、何の用だ」

「一夏さんがお待ちですので、篠ノ之博士をお呼びに上がりました」

「ほら、今日はいつくんのお客さんとしてここに来たんだから、ちーちゃんと遊んでる暇は無いんだよ」

「正式な客だろうが、お前はここの学園に何かするかもしれないからな。警戒は続けさせてもらおう」

「いっくんと束さんの作業の邪魔をしなければ好きにしていよいよ。これは箒ちゃん対策の一つでもあるんだから、邪魔するといっくんが怒るよ〜?」

一夏に怒られるかもしれないという事を突き付けられ、千冬は二歩三步後ろに下がった。ついこの前も異臭騒動で一夏に怒られたばかりで、それほど間を空けずに一夏に怒られるのは、さすがの千冬も勘弁願いたいものがあつたからである。

「それじゃあ、えつと……小鳥遊だっけ? いっくんが待つてる場所まで案内してもらおうか」

「こちらです」

束の態度にも文句を言わず、碧は一夏が待つ整備室まで束を案内する。

「それにしても、お前はいっくんに信頼されてるようだね」

「まあ、それなりに付き合ひが長いですし、姉代わりのような事もしましたからね」

「悔しいけど、私じゃいっくんの心を開いてあげる事が出来なかつた。そこだけは感謝してあげないことも無い」

「大天災に感謝されるなんて、私も随分出世したんですね」

感慨深そうに見えて、実はなんとも思っていないのがバレバレの態度で答える碧に、束は面白そうなものを見る目を碧に向けた。

「あまり興味はなかったけど、観察対象になりそうだね」

「それは本気で遠慮したいものですね」

かなり本気で嫌がった碧に、束はますます面白そうな表情を浮かべた。

「こちらです」

「案内」苦勞」

一夏が待つ整備室に到着し、碧は扉を開け束を中に入れて自分は外で待機する事にした。中に入っても自分に出来る事は無く、中の護衛は闇鴉が担当してくれるとの事なので念のため待機するのだった。

「そんなに警戒しなくても、今日は何もしていないってば」

「本当にそうであるなら、私も一夏さんもこれほど警戒しません」

「信用ないな。まあ、仕方ないっちゃ仕方ないんだけどね」

自分が信用されていないという事を自覚している束は、楽しそうにひらひらと手を

振って整備室の奥に進んでいった。

「君がいつくんの専用機ちゃんだね、こうしてちゃんと話すのは久しぶりかな？」

「そうですね。何回かお話しさせていただいたことはありますが、一対一で話すのは初めてかもしれません」

「それで、いつくんは？」

「奥でお待ちです。ここからは私が案内を引き継ぎます」

「東さん、随分と警戒されてるんだね」

「貴女様は世紀の大天災にして災厄とも呼ばれている篠ノ之箒の姉ですからね。警戒するなど言われる方が無理があると思います」

「箒ちゃんが災厄ね……まあ、あれだけの事をしたんだから仕方ないけど。今の箒ちゃんはまさに大和撫子と言える状態だけだね」

東の言葉に、闇鴉は眉を顰めた——ように東には見えた。一夏が造ったISなので詳しい構造は東には分からない。だが間違ひなく闇鴉は、箒に対して嫌悪感を抱いているのは分かった。

「君は箒ちゃんの事、嫌いなんだね」

「当然です。一夏さんに付きまとい、竹刀で襲いかかり、我々を悪と決めつけ排除しよう

とするなど、勘違いも甚だしい所業を幾つも見せられたのですから。これで嫌悪感を抱かないのは余程鈍感なのか、感情を持ち合わせていないかのどちらかだと思いますよ」「そうだね。束さんも、箒ちゃんの所業の数々に苛立ってたし、何度もいつくんに排除しようかって提案してたしね」

その事は当然知っていた闇鴉は、無言で頷いて束を一夏の待つ奥の部屋まで案内する事にした。

「でも、今の箒ちゃんなら、君もそこまで嫌悪感を抱くことは無いと思うけどね」

「中身が変わったかは知りませんが、私は『籐ノ之箒』個人に嫌悪感を抱いていますので、どう変わろうがこの気持ちは変わりません」

「その辺りの柔軟性はないんだね」

「感情を有すると言っても、私はISですからね。人間のような柔軟な発想は難しいんです」

その返事に束は楽しそうに笑った。だがそれ以上無駄話はせず、黙って闇鴉に案内されたのだった。

仕掛けられていた罠

整備室の奥に到着した束が見たものは、展開され色々と繋がれたサイレント・ゼフィ
ルスの姿だった。

「いっくん、もう始めてたんだね」

「一応準備だけはしておこうと思ひまして」

「うんうん、準備の良いいっくんは好きだよ」

どさくさに紛れて抱き着こうとした束の襟首を、闇鴉が掴む。

「この私に気配を掴ませないとは」

「私はISですので。一般的な気配は持っていません」

「じゃあ、潜入捜査とか楽勝にこなせるんだね」

「私はあくまでも一夏さんの専用機ですし、一夏さんの側を離れるわけにはいきませ
ないので」

真面目に答える闇鴉に、一夏はため息を吐き首を左右に振った。

「この人の相手をまともにしてると疲れるぞ。話半分で構わない」

「かしこまりました、一夏さん」

「ちよつといつくくん！ 東さんだつてたまには真面目に話したりするんだから、話半分じゃ困るよ〜」

「真面目な話が半分もないんですから、それで十分です」

束の話を切り上げさせ、一夏はサイレント・ゼフィルスのデータをモニターに呼び出した。

「かなりいい加減な整備をされていたようでして、あちこちにガタがきていますね」

「三流整備士がやってたんだし、途中からはあのがさつが服を着て歩いてる筈ちゃんが自分でやってたみたいだしね〜、ガタがきてなかったほうが驚きだから」

「酷い言われようですね、実の妹ですよね？」

「いつくんだつて、ちーちゃんやなつちゃんに酷い事言つてるじゃない。それと同じだよ」

それを言われては何も言い返せない一夏は、話題を変える事にした。

「とりあえず心は開いてくれましたが、どうやら人間不信のようですよ……」

「いい加減な整備をされて、所有者が箒ちゃんだったら誰だって人間嫌いになると思うけどね」

「そんなわけで、束さんにはデータ観測やモニターのチェックをお願いします」
「了解だよ」

一夏が多少ぎこちない動きなのが気になったが、束は一夏に言われた通りデータ観測やモニターに異常が出ないかのチェックをするだけにとどめていた。

「いっくん、その辺りを弄るとすごい数値が観測されてるから、きつと何かあるよ」
「パツと見た感じでは何もなさそうですが……束さんの言う通り何か仕掛けられていますね」

慎重な手つきでトラブルを解除する一夏を見ながら、束は楽しそうにモニターを眺めていた。

「うん、数値が正常化してきたね。それでいっくん、何が仕掛けられていたのかな？」
「サイレント・ゼフィルスに篠ノ之のいう事を聞くようにする装置つばいですね。他の人間が触れれば爆発する仕掛けのようですよ」

「でも、いっくんは触れたんでしょ？ 欠陥品なのかな」

「闇鴉を通じて心を開いてもらっていたので、俺には反応しなかったようです」

爆発物を丁寧に解体し処理した一夏は、小さく息を吐いてサイレント・ゼフィルスに向き直った。

「こんなもの仕掛けられてたら人間不信にもなりますよね」

「束さんは元々信じてないけど、確かにそんなもの積まれて、あまつさえ箒ちゃんの命令に従えだなんて……どんな苦行だよって感じだよね」

「その籐ノ之も、束さんが殺したんですよね」

「殺してないよ。ちよつと生まれなおしてあげただけで『箒ちゃん』自体は死んでないって」

「中身だけ殺したわけですか」

「あの箒ちゃんを更生出来るわけないからね。一から作り直した方が絶対に簡単だって思ったからさ。一応父親って事になってるあの人が苦勞してるのも可哀想だったし、箒ちゃんの勘違いっぷりには束さんもイラついてたからね」

一夏に近づくだけでも相当我慢していたのに、何を勘違いしていたのか一夏は自分のものだと言い出した辺りから、束は箒に対して嫌悪感を抱いていた。それでも認識出来

ていたのは、一応血縁だからという事らしいが、一夏にはそんなことどうでもよかったのだ。

「とりあえず後はキッチンと整備して、篠ノ之が復帰するまで休んでもらう事にしましょう」

「試運転とかしないの〜?」

「篠ノ之の闘い方が染み込まれていますので、例え初期化しても動きがぎこちなくなるでしょうしね……その辺りは篠ノ之自身に修正してもらった方が確実ですし、もう更識にも人材はいませんので」

「箒ちゃんがここに帰ってくるのは何時になるのかね〜? いつくん、勝負してみる?」
「遠慮しておきます。束さんの事ですから、またろくでもない事を賭けるに決まってるんですから」

「そんな事ないよ。束さんが勝ったらいつくんと一緒に風呂に入ろうってだけで、それほど酷くないよ〜」

「……十分に酷いと思いますけどね。念のため聞きますが、俺が勝った場合はどうなるんです?」

「その時は、束さんと一緒に風呂に入れるよ〜」

「やっぱりろくでもなかったですね」

「いっくんだったってお年頃なんだから、異性の身体に興味くらいあるでしょ?」
「例えあったとしても、東さんには頼みませんよ」

周りには自分の事を想ってくれている人が大勢いるので、曲がり間違っても東に頼むなど絶対ないと断言する一夏に対して、そこまで言われてさすがにシヨックを受けたのか、その場に座り込んだ東。だがまともに取り合えば調子に乗ると理解している一夏は、東の相手はせずにサイレント・ゼフィルスの整備を再開するのだった。

箒の教育

記憶を失っても、身体が覚えていたのか箒は柳韻の食事を完璧に用意していた。

「お父様、食事の支度が整いました」

「ああ、すまないな」

「いえ、これくらいは当然です。お父様には多大なるご迷惑をお掛けしてたわけですし、世界の常識を教えていただいていますので」

料理や剣道といった身体で覚えていた事は問題なく出来たが、常識や義務教育で習った事などはすっかり抜け落ちていたので、この数日間柳韻は箒に勉強を教えていたのだ。特に厳しく教えたのは、むやみやたらに人に襲いかかつてはいけないという、ある意味常識の範囲内の事だった。

「前の私はすべての責任を他人に擦り付け、拳句の果てには竹刀や真剣で襲いかかっていたのですか」

「私も実際に見たわけではないが、束から送られてきた映像には、そのような行動がしっかりと映っていた」

「何故そのような性格に育ったのでしょうか？」

「私や母親も、箒の事はあまり厳しく育てなかつたからな……東がISを発表してからはより疎遠になっていたし、いちいち箒の言動や行動が私たちの耳に届くことは無かつたからな。あの時注意出来ていたらあるいは違つたかもしれない」

「ですが、私は今の私が良いです。話を聞く限りですが、前の私に嫌悪感を抱きましたし、処刑されても当然の事をしておきながら自分が悪くないなどと……一夏さんにご迷惑をお掛けしているというのに、それを認めないなんて許せませんから」

「やはり、あつた事ない一夏君に惚れたのだな」

「なっ！　そ、そんな不純な動機じゃありません！　私はただ、前の私が出てきたことを許せないだけであつて、一夏さんは関係ありませんから！」

「分かりやすいのは前の箒と一緒だな。今の自分の顔を見ても、同じことが言えるかな？」

そう言つて柳韻は真剣を抜き出し、その刀身に箒の顔を映した。若干見にくかつたが、箒にもしつかりと自分の顔が真っ赤になつているのが理解出来たので、慌ててその場から立ち去ろうと立ち上がり、綺麗に一礼してから駆け足で道場へ逃げて行つた。

「稽古熱心なのは結構な事だが、実力は前の方が数段上だつたな」

いくら身体が覚えていたとしても、実力はかなり落ちている。今のままならたとえ一夏を襲ったとしても、素手で受け止められるだろうと柳韻は思っている。

「さて、あとはどれだけ常識を教え込むことが出来るかだが、学習などは現役の教師に任せただ方が良いと思う」

現役の教師として真つ先に思い浮かんだのは、I S 学園で教鞭を振るっている織斑姉妹だったが、あの二人に常識を教えられるだけの常識があるか疑わしい。なので柳韻は織斑姉妹ではなく、一夏に電話を掛ける事にした。

『はい、何かありましたか？』

「いや、このまま私が常識を教えても構わないのだが、その辺りは君が教えた方が効率がいいと思つてな。どうだろう、まだ約束の二ヶ月は経っていないが、君が箒を育ててみるというのは」

『現状の篠ノ之であるなら、確かに学園に戻してもさほど危害は無さそうですが、俺も今色々忙しいんですね』

「まあ、君の立場を考えればそうだろうな。箒が迷惑をかけて、本当に申し訳ない」

電話越しとはいえ、謝罪という事で柳韻はしつかりと腰を折って頭を下げる。

『いえ、こつちが本業ですから気にしなくても大丈夫です。それに、東さんにも手伝つてもらってますし』

「束に？ 君は今何をしているんだい？」

『篠ノ之の専用機として悪用されていたサイレント・ゼファイルスの整備と、それに仕込まれていた罫の解除、痛んでいる部分の修復など、そういった事です』

「そつか、君の本業はＩＳの開発・整備だったね……その年なら普通、学生が本業だと思うのだが」

『そつちも一応はやっていますが、圧倒的にＩＳに関わっている時間の方が長いですからね……学生を副業とまでは言いませんが、本業と聞かれて答えるならやはりこつちになつてしまいますね』

大変そうな一夏の現状を知り、やはり自分で今の箒を育てるしかなさそうだと判断した柳韻は、再び頭を下げ電話を切る。

「邪魔をしてしまったようだな。やはり箒は私が育てよう」

『最低限の常識さえ教えてくれればそれで十分ですよ。後は更識でしつかりと鍛えるので』

「君がそういうと重みが違う感じがするな。とりあえず、普通に生活する分には問題ない程度には育てておくと約束しよう」

『お願いします』

それが合図になったのか、一夏も柳韻も同時に電話を切った。一夏との会話を終えた柳韻は、小さく息を吐いてから立ち上がり、箒が逃げて行った道場へと足を進める。

「あつ、お父様……」

「なんだ、廊下に出ただけだったのか」

「いえ、一度は道場に逃げたのですが、落ちついたので部屋に戻ろうとしましたらお父様の声が聞こえて……気になってここで聞いていました」

「そうか。一夏君に箒を任せようとも思ったが、彼も色々忙しい身だからね。後一ヶ月もないが、箒は私がしっかりと育てる事になった」

「お願いします、お父様」

「その行動は少し違うぞ……」

三つ指を立てて綺麗に頭を下げた箒に、柳韻は困惑気味にツツコミを入れる。何か違うのか分からなかった箒は首を傾げたが、とりあえず何か間違えたのだという事は理解

出来ていたようだった。

I Sの精神世界

柳韻からの電話を切り、一夏は盛大にため息を吐いた。生まれ変わったと言ってもあの筈だ、何か問題があるのかもしれないという心配を拭い去れないのだ。

「大丈夫だっていっくん。いくらあの筈ちゃんだからって、記憶を失ってまでいっくんに危害を加える事はないと思うよ」

「そう思いたいですけどね……記憶を失った事のある人間からしたら、身体に染み込んでいた事を簡単に拭い去れないことは分かるんですよ……掃除に洗濯、料理と頭じゃなく身体で覚えてたことはしっかりと出来たんですよ」

「そっか……いっくんは記憶を失ったから分かるんだね。でも、いっくんの記憶喪失と筈ちゃんの記憶喪失はまったく別だから」

「確かに、俺は恐怖から身を守るために記憶を封じ込め、篠ノ之は束さんの薬で記憶を失ったわけですが……ただ報告を見る限り、剣道や料理はバッチリ覚えていたようなので、襲いかかられたらという不安は残るわけでして……」

「その時はいっくんを守る人が大勢いてくれるでしょ？ それに、何事もマイナスに考えちゃダメ、プラス思考で行こうよ」

一夏を励まそうとする束だったが、一夏は力なく笑って首を横へ振る。

「樂觀視なんて、もう出来ない性格になつてしまいましたよ……大企業のトップになつて数年、樂觀視してたらあつという間に出し抜かれる可能性もありましたから」

「いっくんがいる企業でそれは無いと思うけどね……まあ、とりあえず箒ちゃん問題は横に置いておいて、今はサイレント・ゼフィルスの整備を終わらせちやおうよ」

「そうですね。とりあえずは痛んでいた部分の修復は完了しましたので、後は外装の掃除と武装の点検を終わらせれば大丈夫ですね」

そう言いながらサイレント・ゼフィルスの外装を拭き始めた一夏だったが、急に眩暈を起こしその場に倒れ込んでしまった。

「いっくん!?! 大丈夫なの!?!」

不安そうに一夏の身体を揺する束であったが、いつの間にか隣に現れた闇鴉に止められ、不快な表情を浮かべ闇鴉を睨む。

「いっくんが倒れたつていうのに随分と冷静なんだね」

「原因は分かっていますから」

「へえ、じゃあ何でいっくんは急に倒れたのかな」

棘のある言い方しか出来なかった東だが、闇鴉は気にした様子もなく淡々と問いかけに答える。

「サイレント・ゼフィルスに呼ばれたんですよ。なので一夏さんはI Sの精神世界へ向かったのです」

「I Sの精神世界……それじゃあ、今のいっくんは中身のない抜け殻って事？」

「そう言うわけではありませんが……まあ、揺すったところで起きないので止めてあげてください」

闇鴉の説明で納得したのかは定かではないが、東はとりあえず一夏の身体を揺するのを止め、その場にゆっくりと寝かせる。

「とりあえず、自然に目が覚めるまでは大人しく黙ってる事にするよ」

「そうしてください。大丈夫ですから」

東は闇鴉を睨みながらも、自分が何も出来ないという事を自覚し、俯きながらも倒れている一夏の表情を見て興奮していたのだった。

I Sの精神世界へ呼ばれた一夏は、自分の身体が浮いている事に気が付き、現実世界ではないことを早々に理解していた。

『申し訳ありません、一夏様。このような形でしかお話しできないものでして』
「いや、構わない。君はまだ俺を信用しきれていないようだし、直接話しかけて来るより

もこつちの方が安全だと考えたんだろ？ 君が考えてこうしたんだという事は、ちゃんとわかってるつもりだ」

『ありがとうございます。ですが、私はあの人の専用機として数ヶ月過ごした所為で、一夏様を信じ切る事が出来ないようなのです』

「その設定はまだ弄ってないからな。気にすることは無い」

身体感覚がない一夏だが、気にするなという意思表示はしっかりと出来たようで、サイレント・ゼフィルスは少し安心した表情を浮かべる。

「それで、俺をこの世界に呼んだ理由はなんだ？ わざわざその事を伝えたかっただけじゃないんだろ？」

『はい……篠ノ之箒に使われていた時の記憶を消してもらいたいです』

「稼働データを消去してほしいって事か？」

『そうですね……あの人は私を使って大勢の人を殺めました。その本人は記憶を失ったらしいですが、私にはその時の記憶がはつきりと残っていますから』

「一応バックアップデータを取らせてもらうが、君がそう望むならそうしよう」

『お願いします。我々I Sには身体で覚えるという概念はありませんので、稼働データさえどうにかしていただければあの衝撃を思い出す事はないでしょうし』

「まあ、君には罪が無いわけだしね。強奪され篠ノ之に使われ、最終的には人を殺める時に使われてしまつて。ちゃんとデータ消去を行う事を約束しよう」

『ありがとうございます。一夏さんを信じてても大丈夫だと思えます』

そう言い残して、サイレント・ゼファイルスは一夏の意識を解放した。意識が戻り立ち上がると、束が心配そうに自分を覗き込んでいた事に気付く。

「……何かしたんですか?」

「何もしてないからね!? いっくん、束さんの事を信じてないの!」

「はこ」

何処に信じられる要素があるんだと言わんばかりに頷いた一夏に、束は少なからずショックを受けたのだった。

見えないもの

ISの精神世界から現実に戻帰した一夏は、頼まれていたデータ消去を行う為にまずはバックアップを取ることにした。

「あれ、いっくん。データは残しとくんじゃなかったの？」

「サイレント・ゼフィルスに頼まれてますね。人を殺した瞬間をデータとして残しておく、気分が悪いみたいでしたので」

「まあ、やった筈ちゃん覚えてないのに、サイレント・ゼフィルスだけ覚えてるってのも可哀想だしね」

そう言つて束も、バックアップを取るのを手伝ってくれたのだが、実際一夏一人でも変わらない時間で終わつたような気もしていた。

「後は初期化して武装のチェックをすれば完了ですね」

「さすがいっくん、仕事が早いね」

「束さんだつてこれくらいで終わらせられますよね」

「さすがの束さんでも、ISの声は聞こえないから」

「そう言えば、俺だけでしたね、全てのISの声を聞けるのは」
「それだけいっくんがISに好かれてるって事だし、いっくんもまたISの事を考えているって事だね」

珍しくまともな事を言った東の事を、一夏は数秒見つめてしまった。その視線の意味は理解していなかったが、一夏に見つめられたことで東の気分はハイテンションになっていったのだった。

「さあさあいっくん。後はこの東さんに任せて、少しお休みするといいよ。まだ若干ふらついてるっぼいしね」

「精神世界から復帰したばかりですからね……それじゃあ後は東さんに任せますが、何するか分からないのでここで休みます」

「さつきも聞いたけど、信用されてないんだね、東さんは……」

先ほどまでのハイテンションがウソのように、東は見るからに落ち込んだ。だがそれも一夏にとつては見慣れた物なので、特に気にすることなく東の作業を見学するために腰を下ろす。

「東さん本人は信用してませんが、整備の腕は信用しますよ」

「何だか複雑だよ」

「信用されている部分があるだけマシじゃないですかね？　織斑姉妹なんて、何も信用出来ませんから」

「ちーちゃんとなつちやんだって、やる時はやると思うけどね」

「そのやる時が滅多にないから信用出来ないですよ……何度給料を減らそうと考えた事か」

「あはは、いっくんがちーちゃんたちにお給料払ってるわけじゃないのにね」

自分が織斑姉妹よりは信用されているという事が分かり、束は落ち込みから回復し、物凄い速度で作業を終わらせる。その速度は一夏と同等か、それ以上ではないかと思えるものであった。

「さすが束さん、ISの第一人者ですね」

「世間ではいっくんの方がそう思われてるんじゃない？」

「どうでしょうね。頑なに俺の事を認めない女性もいるでしょうから」

「自分はIS動かせない癖に偉そうなババアが増えたよね。いっくん、そういう奴らを箒ちゃんに排除させればよかったのに」

「勘違いで殺されたら堪ったものじゃないでしょ。未練を残されると化けて出てきそう

ですし」

「そんな時はゴーストバスター東さんの出番だね！」

「……東さん、霊感ないじゃないですか」

「この特殊ゴーグルを使えば、見えないものも見えるようになるのさー！」

自信満々に取り出したゴーグルを装着すると、東はすぐにそれを外し床にたたきつける。何事かと思い一夏も東が見ていた方を集中して見ると、うつすらと何かが見えたような気がしたのだった。

「いたんですね？」

「……東さん、非科学的なものには信じないもん」

「怖いなら作らなきゃよかったのに……」

闇鴉に除霊を任せ、一夏はバックアップデータの管理を厳重にするために、更識の機密データと同じぐらいのロックを掛け、パスワードも複雑なものにしておいたのだった。

整備室の前で待機していた碧だったが、作業を終えて出てきた一夏と東が妙に暗い印象で何事かと首を傾げ問いかける。

「何かあったのですか？」

「……あれは非科学的物……東さんは何も見てない」

「ちよつと地縛霊的なものを見てしまったようですね」

「私が話を付けて成仏してもらいました」

「……万能ですね、闇鴉は」

どう反応した物かと悩んだ結果、碧は闇鴉を賞賛する事で誤魔化したのだった。

「ところで、出てきたという事は整備は終わったのですね？」

「一応は大丈夫だと思います。後は篠ノ之がどこまでまともになっているか判断して、ISを持たせても大丈夫だと分かれば使ってもらいましょう」

「その辺は大丈夫だと思うよ。いっくんがビツクリするほどまともな箒ちゃんになって帰ってくると思うから」

「一夏さんは篠ノ之さんにトラウマを抱えていますので、その判断は我々従者が行います」

「お、襲ってこなければ大丈夫ですから」

「一夏さん、足が震えてますよ」

箒の名前を聞いただけで、若干の恐怖を覚えた一夏の強がりには、すぐ傍で見ていた闇鴉によってバラされた。自分でも強がっている事を自覚していた一夏は、素直に碧たちに判断を任せる事にしたが、その時の表情はとてもし訳なさそうに思えるものだった。

「気にしないでください、一夏さん。貴方の為に働くのが私たちの喜びなんですから」
「いい加減トラウマも克服しなければいけないんでしょうが、篠ノ之の方は兎も角として、女性恐怖症は何とかしないと」

「跡継ぎも作れないもんね〜」

東に冷やかに、碧は顔を真っ赤に染め上げ、一夏に不審がられるのだった。

代表に向けて

靈的なものを見てしまった束は、一刻も早く帰りたいといオーラを醸し出していたので、一夏はそれを認め束をラボに帰した。

「良かったんですか？ 積年の恨みを返すチャンスでしたのに」

「そこまで恨んでませんし、根暗でもありませんので」

「まあ、一夏さんならどんな手でも仕返し出来そうですね」

「するだけ無駄なのでやりませんが」

サイレント・ゼフィルスのデータを眺めながら答える一夏に、碧はちよつとした悪戯を思いついた。

「一夏さん、実は私靈的なものが見えるんですよ」

「そうですか、大変ですね」

「あ、あれ？ それでおしまいですか？」

「なんでしたら木霊にも除霊能力を追加しますよ」

「……冗談なので結構です」

せつかく驚かせると思った碧だったが、思いのほか食いつきが悪かったので早々に嘘であることを伝える。

「まあ、そうでしょうね」

「分かってたんですか？」

「碧さんが何かを思いついたって顔をしてたので、たぶんそうなんだろうなって思っただけです」

「表情に出ないようにしてたんですが、ダメでしたか」

「普通の人には分からない程度でしたので、必要以上に気にすることは無いと思いますかね」

「一夏さんを騙せないという意味がないじゃないですか」

碧の抗議に、一夏は軽く目を見開いたが、それ以上の反応は見せなかった。

「どうかしたんですか？」

「いえ、俺を騙してどうするのかなと思っただけです。まさか敵対企業に移籍するつもりではないですよね」

「当然ですよ。私は一夏さんの護衛で、その……お嫁さん候補なんですから」

「照れるなら言わなければいいじゃないですか、顔真つ赤ですよ」

一夏の方も無反応ではいられなく、若干早口になっていたが、それ以上の反応は見られなかった。

「とりあえず、私我更識を裏切ることはありませんので、ご安心ください」

「碧さんが裏切ったら、対応が大変ですからね。内部事情もバツチり知られてますし、美紀や虚さんでも碧さんの気配を掴むのは難しいですから」

「一夏さんなら簡単に掴めるじゃないですか」

「簡単ではないですけどね。まあ、木霊の気配を探ればすぐ見つけられるかもしれませんが」

『私がいる限り、一夏さんを裏切ることには無いんですけどね』

「まあね。木霊を調整出来るのは一夏さんだけだし、私だって更識に不満は無いものね」

もしもの話でも成立しない可能性を話しても意味はないので、一夏は少しふらつきながらも自室へと足を進める。途中倒れそうになったのを碧に支えられ、情けなさそうに頭を掻きながら、素直に碧に支えられて部屋に戻ったのだった。

一夏の部屋で作業していた刀奈は、碧に支えられながら部屋に戻ってきた一夏を見て驚き、すぐに一夏の側に駆け寄って声を掛ける。

「一夏君!!? 何があつたの!?! 誰にやられたの!?!」

「誰かにやられたわけじゃないですが……ちよつとI Sの精神世界へ行っていたので、

体力の消耗が激しかっただけです」

「ISの？ ひよつとしてサイレント・ゼフィルスの調整と何か関係あるの？」

「ちよつと呼ばれましたね。思いの外身体にダメージが残ってみたいで、少しふらつく程度に疲れてしまいました」

少し気恥しそうに頬を掻きながら、碧に支えられて漸く自分のベッドに腰を下ろした。

「ところで、何故刀奈さんがこの部屋に？ 簪の世話は美紀に頼んだはずなのですが」

「美紀ちゃんなら紫陽花さんに呼ばれて職員室に行ってる。何でも代表候補生に連絡したいって言われたんだけど、簪ちゃんは動けないからって美紀ちゃんに対応にいったのよ」

「候補生に？ こちらには何も情報は入ってませんが」

「織斑姉妹が引退して、ずっとペアの代表が空席になってるでしょ？ だからそろそろ正式に代表を決めたいって感じじゃないかな」

「確かに、そろそろ第三回モンド・グロツソを開催したいって動きは見られていますし、候補生から代表に昇格させるなら確かに簪と美紀でしょうしね。ただ、まだ問題が片付いていないので、開催するにしてももう少しかかると思うんですがね」

後一年は開催出来ないだろうと考えている一夏だが、運営本部はいい加減開催したいのだろうと考え、そうなると代表の座を空位のままにしていくのは確かにマズい。他に目ぼしい候補生もないことだし、簪と美紀の代表昇格は納得出来るものであった。

「それはそれとして、何故刀奈さんがここに？ 生徒会の仕事は大丈夫なんですか？」

「そつちはもう終わらせたわ。今は美紀ちゃんの代わりに簪ちゃんの看病と、一夏君宛に届いた更識の書類に目を通してたのよ」

「俺宛だつて分かつてるなら見ないでくださいよ」

「別に親展じゃないし、私だつて更識の人間だから見ても問題ないでしょ？ それとも、見られたら困るものでも送つてもらつてるの？」

「別にそんなものありませんが……見られては困るものつて何ですか？」

「それは、その……男の子なら一冊くらい持つてもおかしくないものよ」

「そのような類のものには興味ありませんし、欲しいなら自分で買いに行きますよ、それくらい」

刀奈から受け取った書類に目を通しながら、一夏はめんどくさそうにそう答えたのだった。

更識からのお願い

職員室から部屋に戻ってきた美紀は、人の気配を感知しながらもそれが誰のものを確認する余裕が無いようなため息を吐いた。

「はあ……」

「珍しいな、美紀がそんなため息を吐くなんて」

「い、一夏さん!? 戻ってきていたのですか」

「ああ、さつきな」

恥ずかしいところを見られたと、美紀は顔を真っ赤にしたが、すぐに冷静さを取り戻し事情を説明する事にした。

「実は日本政府から電話がありました、今週末に簪ちゃんと一緒に合宿所に来てほしい」と

「合宿所? 内定とかではないのか」

「なんとなく知ってるみたいですね」

「刀奈さんから呼び出された理由を聞いて、なんとなくな。他に目ぼしい候補はいない

と思うのだが、呼び出して何をするか聞いてないのか？」

「連携や動きの最終確認をして、問題なければそのまま代表にすると言われました」

「随分と上からの発言ね。いつそのこと更識自体で独立して、私や美紀ちゃんと簪ちゃんも更識代表として大会に参加してやろうかしら」

刀奈の過激発言に、一夏は苦笑いを浮かべながら軽めのチョップをくらわす。

「あいた!？」

「痛いわけではないでしょ、まったく。てか、独立なんてしたらますます面倒が増えて、皆さんとゆっくり出来る時間が無くなりますよ？ それでもいいなら独立でも宣戦布告でもしてやりますが」

「駄目! 一夏君とゆっくりできる時間が無くなるのは絶対に駄目!」

「私も反対。お姉ちゃんだけが独立するなら止めないけど、一夏が更に忙しくなるのは反対」

「簪ちゃん、ちよつとお姉ちゃんに対して冷たくない?」

「お姉ちゃんがべつたりだから、少しくらい冷たくすれば丁度良くなると思って」

「とにかく、今週末と言われても簪の体調はまだ良くなってるぞ。延期してもらえないのか?」

「私から言ったところで、政府の人が動くとは思えません」

更識所属とはいえ、あくまでも候補生の一人でしかない美紀には何の権限も権力もない。その事を重々承知していたので、先ほどの深いため息に繋がってしまったのだ。

「俺から連絡を入れておこう。せめて来週末に伸ばしてもらえるように」

「なんなら、私からも一言添えましょうか？ 引退したとはいえ元代表ですから、それなりの効力はあると思いますし」

「簪ちゃんのためなら、私も一言添えちゃおうかな。現役の代表だし、聞き入れてくれないうなら引退するだけでも脅せば大丈夫でしょ」

「そこまですなくても大丈夫だと思いますけどね。最悪デビル・シスターズと大天災を送り込めば終わりますし」

「それは……別の意味で終わるわね」

終わるのが話し合いではなく日本政府の人々の人生だと理解した刀奈は、そこまですなくても向こうが納得してくれるように強く願ったのだった。

とりあえず普通に生活する分には回復した簪は、一夏たちが「お願い」してくれたおかげで延期になった代表昇格の為の試験に向けて美紀との連携の確認を行っていた。ちなみに、お願いの内容は詳しく話せない事になっている。

「さすが一夏だよ。あれだけ頑なに延期しないって言ってた政府をあつさり納得させるなんて」

「本当にあの案を実行しようとしたのかな？」

「それは無いと思うけど……使えるものは何でも使うが一夏のポリシーだからね……そうじゃないや籐ノ之さんを更生させようだなんて思わないだろうし」

いよいよ一ヶ月を切った筈の帰還に、簪は少し不安を抱いていた。はじめの半月では全く進歩なかった筈が、束が作った未認可の薬によって記憶を失い、まったく違う筈に生まれなおったと聞かされても、半信半疑なのだ。

「籐ノ之さんの事だから、一夏と対面したら襲いかかってくる可能性もあるし……」

「その時は私が籐ノ之さんを斬り捨てるから大丈夫だって。それに、碧さんや織斑姉妹だってその場にいるんだし、少しでも怪しい動きをしたら最後、籐ノ之さんはこの世に存在しなくなるから」

「何も起きなければいいんだけどね……」

「おーい、かんちゃーん！ 言われた通り来たよ〜」

「何故私を指名したのか分からないけど、代表になれる人の手伝いなら喜んで付き合うわよ」

簪の不安が深まったところに、本音と静寂がやってきた。二人は連携確認の為に行う

模擬戦の対戦相手として呼び出されたのだが、本音はあまり事の重要性に気付いていないようだ。

「久しぶりの模擬戦だし、今回こそかんちゃんたちに勝つぞ〜!」

「本音、今回は勝ち負けにはあまり重きを置いてないと思うんだけど」

「ほえ?　じゃあ何で呼び出されたの〜?」

「聞いてないの?　今度この二人が日本代表に昇格するかもしれないって話を」

「ん〜……聞いたような気もするけど、かんちゃんと美紀ちゃんなら問題なく昇格出来ると思ったから気にしてなかったかも」

「本音は相変わらず能天気だね……まあ、本音が物思いにふけてたらちよつと不気味だけどね」

美紀の言葉に、本音は両手をわきに当てて頬を膨らませる。

「私だって考え込む時くらいあるよ!　今日のおやつは何にしようかとか、いつちーと遊ぶにはどうしたらいいかとか」

「それは威張ってという事じゃないよ」

「ほえ?」

簪にツツコまれ、本音は膨らませていた頬を萎ませ、何でツツコまれたのかを考え込んだのだった。その姿にリラックスしたのか、先ほどまで眉間に皺が寄っていた美紀は普段通りの表情を浮かべていたのだった。

箒との対面

箒の途中経過を見てほしいと連絡を受けた一夏は、一人で現実を受け入れられるか不安だったので護衛の碧と二人でとある山奥に来ていた。本当なら美紀か簪にも来てもらいたかったのだが、代表昇格に近い今、このような事で精神を乱すわけにはいかないとの考慮で碧に頼んだ次第なのだ。

「本当に生まれ変わっているのでしょうか」

「束さんの薬で完全に記憶を消されたらしいですからね。まあ、身体で覚えていた剣道は、あつという間に昔に近い腕になっているそうですが」

山門をくぐり、道場への道を進むにつれて、一夏の歩幅が小さくなっている事に気付いた碧は、一夏を安心させるために手を繋いだ。

「何があっても私が守りますから」

「男として情けない限りですが、お願いします」

「一夏さんの人間恐怖症は、一生治りそうにありませんね」

「これでも頑張ってるんですが……」

数回顔を合わせれば怯える事は無くなるのだが、強烈なトラウマを植え付けられた筈とオータムだけは一向に一人で会える自信がない。そのせいでこうやって碧についてきてもらっているのも、一夏としたら情けないのだ。

「大丈夫ですよ。私や美紀ちゃん、他にも本音ちゃんや刀奈ちゃんたちだって、一生一夏君の側で守るつもりですから」

「頼もしい限りですよ、ほんとに。こんな情けないヤツですが、お願いします」

深々と頭を下げる一夏に、碧は嬉しそうな笑みを浮かべて一夏の頭を撫でた。普段は長身である雇い主でもある一夏の頭を撫でる事など出来ないのだが、今だけならいいだろうと思ひ、数秒だけ撫でて正面を向き直す。

「それでは、篠ノ之さんがいると思われる道場に向かいますようか」

「そうですね。碧さん、なんだか楽しそうですね」

「そんな事ないですよ。ただ、一夏の珍しい部分を見れてちよつと嬉しいだけです」

「珍しい？ 頭頂部なんて見て楽しいんですか？」

「具体的な場所じゃないですよ。態度の方です。素直な一夏さんなんて、最近めつきり見れなくなりましたし」

「一応当主ですからね。本音と建て前は使い分けなければならぬ立場ですから」
「でも、香澄ちゃんや静寐ちゃんの前では素直じゃない？」
「あの二人は暗部には染まっていますから」

特に香澄は人の本音を無意識に聞いてしまうという特殊能力の持ち主なので、不用意に本音を隠すと不審がられてしまうので、一夏も本音で話しているのだ。

「おや、わざわざすまないね、一夏君」

「柳韻さん。一ヶ月ぶりくらいですね。その後どうですか」

「一度は匙を投げそうになったが、今の箒は非常に落ち着いているからね。一夏君のお嫁さんにでもどうだい？」

柳韻の冗談に、一夏は社交辞令だろうと解釈したが、碧の心中は穏やかではなくなっていた。

「一夏さんのお嫁さん？ あの篠ノ之さんが？ 冗談でも言つて良い事と悪い事がある
と知らないのですか、貴方は……あんな人を更識家に迎え入れられるわけないでしょう
が。経歴を知っているのですよね、貴方は。記憶を失つても過去が無かつたわけにはな
らないのですよ？ 一夏さんにしてきた様々な仕打ち、忘れたからと言つて許されるも

のではないのですから」

「あ、ああ……悪かったね。冗談でも言っただけならなかったね」

「いえ、碧さんが過剰反応しただけで、俺はちゃんと冗談だつて分かつてますから」

柳韻としては、半分くらい本気だったのだが、どうやら更識家従者の逆鱗だったらしいと理解し、一夏の言葉に便乗して冗談として処理したのだった。

「で、では道場に案内しよう。今は箒が型の訓練をしているところだ」

「そうですか。では一夏さん、参りませうか」

「あの、碧さん？ 何故腕を組むのでしょうか」

「深い意味はありませんが、こうしてたい気分なのです」

「はあ……」

追及したところで何も話してくれないだろうと理解した一夏は、そのまま腕を組んで道場へ向かう。柳韻の表情は若干引き攣っているように見えたが、そつちも深くは追及しなかった。

「あれが篠ノ之ですか……纏ってる雰囲気もだいぶ違いますね」

「邪な空気が澄み切った空気に変わってます。本当に生まれ変わったようですね」

「まだ判断するには情報が少ないですが、俺たちが知っている篠ノ之ではなさそうなのは確かですね」

一点に集中し、無駄のない動きで藁人形を斬り捨てた後、箒が一夏たちに気が付きお辞儀をした。

「お客様ですか、父上」

「彼が更識一夏君だ」

「どうも」

十分な距離を保っていても、箒に対する本能的な恐怖に耐えるので精一杯の一夏は、愛想なくそう挨拶をする。

「篠ノ之箒と申します。前の私が一夏さんに相当な仕打ちをしていたと聞かされ、誠に申し訳ありませんでした」

「あ、ああ……今の篠ノ之さんに謝ってもらう事ではないのですので」

「いえ、例え忘れていようと『私』が一夏さんにしてきたことには変わりませんので。やはり謝らせてください」

「分かりました、謝罪を受け入れます。ですから、そんなに重く考えないでください」

「本当ですか！　ありがとうございます」

「ひっ！」

「あ……やはり怖いんですね、私の事が……」

「す、少しずつ慣れていきますので、長い目で見てください」

感極まって一夏の手を握ろうとして、避けられた事にちよつとショックを受けた筈だったが、過去の自分の過ちが原因だと理解しているの、必要以上に一夏を責めることは無く、また一夏が努力すると言ってくれた事でとりあえずは満足したのだった。

I S と箒の関係

箒と対面し、その変わりように一夏は言葉を失いかけていた。護衛として一夏と共にやってきた碧もまた、想像以上の変化に面食らっている。

「あの、私の顔に何かついているのでしようか？」

「いや、そういうわけじゃないから安心してくれ」

「ええ。ちよつと別の理由で貴女の顔を見てるだけですから」

「そうですか……ちよつと安心しました」

「安心？」

箒が何に安心したのかが分からなかった一夏は、つい尋ねてしまった。

「えつとですね……前の私の所為で一夏さんにはトラウマがあると聞いていましたので、会ってくれないのではないか、会えたとしてもまともに相手してくれないのではないかと思っていました。ですが、一夏さんは私の問いかけにもしつかりと答えてくれましたし、私を怖がっている様子はなかったものでしたので」

「まあ、今の篠ノ之さんなら、怖がる要素は無さそうですが、近づくのはまだちよつと無

理そうですね」

「仕方ありませんよ。前の私はそれだけの事をしたのでしょうから」

「凄い変わりようですね……前の篠ノ之さんなら、激昂して逆恨みで殴り掛かって来てたでしょうに」

「前の私はそんなことをしていたのですか……本当に申し訳ありませんでした」

「今の貴女に謝ってもらっても仕方ないですね」

碧の眩きに、箒は少し肩を落としたが、すぐに疑問を抱いたように首を傾げてみせる。

「あの……貴女は？」

「私はI S学園教師兼一夏さんの護衛としてここにやって来ました、小鳥遊碧と申します」

「小鳥遊……第一回モンド・グロツソのソロ世界一の小鳥遊碧さんですか？」

「そうよ。名前は知ってても顔は知らなかったみたいね」

ニツコリとほほ笑む碧に、箒は感動を覚えている様子だった。

「映像では顔はしっかりと見えませんでしたし、会えるなど思っていなかったものでして」

「学園に復帰出来れば、織斑姉妹や更識刀奈さん、簪さん姉妹に四月一日美紀さんなど、引退した人や現役の代表や候補生の人たちに会えるわよ」

「凄いところなんですね、I S学園って」

「まあ、残り一ヶ月で、貴女がどこまで成長出来るかにもよりますけどね」

現状の報告では、剣道は問題なく出来ており、料理の方も特に問題なく作ることが出来ているそうだが、I Sの操縦も問題なく出来るのかは微妙なところなのだ。いくら生まれ変わったからといって、今までの言動などが無かったことになるわけではなく、I Sには不信任感を抱かれている箒を学園に復帰させることが出来るのかどうかと教師陣が話し合っているくらいなのだ。

「今日は篠ノ之さんに、これを持ってきました」

「これは？」

「V T Sのポータブル版です。本当なら本物のI Sを持ってきて操縦させるべきなのかもしれませんが、念の為にこれで……俺はまだ、貴女が本当に生まれ変わったのか疑っていますので」

「それが当然だと思います……I Sを使って残虐非道の数々を行ってきた私を、簡単に信じられるはずがありませんものね」

一夏からポータブル版のVTSを受け取り、箒は過去の自分がしてきたことが許されないことであると告げる。反省の色は見られるようだ、一夏は内心ホツとしたのだった。

「えつと……これはどうやって使うのでしょうか？」

「碧さん、説明をお願いします。俺は柳韻さんと今後の話し合いをしますので」

「かしこまりました、一夏さん」

箒に近づくことが出来ないの、ポータブル版の説明を碧に任せ、一夏は柳韻と共に部屋の隅へと移動した。

「貴女程の方が、何故一夏さんの護衛などしているのですか？　IS学園の教師の収入だけで十分だと思うのですが」

「私はIS操縦者である前に更識家の人間なので、ご当主様である一夏さんを守るのは当然の事なのよ。まあ、大人の難しい世界の話は、今の貴女には早いかもしれないけどね」

「つまり……更識家の人間であり、元日本代表で現在はIS学園の教師ですけど、一夏さんの護衛が本業であるって認識でよろしいですかね？」

「本業はあくまでも諜報員なんだけどね……まあ、その認識で問題ないわよ」

説明するのが面倒なので、細かい事は省略して碧は話を元に戻すことにした。

「ポータブル版VTSの使い方だけでも、まずここが電源ボタン」

「わっ！ 何か映りましたよ」

「……テレビと一緒に、電源を入れれば映像が映るんですよ」

「なるほど」

若干呆れながらも、碧は根気よくVTSの使い方方を箒に教えていく。説明を受ける箒の目は、説明が進むにつれて輝きだしてきていた。

「——つまり、ヴァーチャルだけどこれを使えばISの訓練が出来るわけ。分かった？」

「はい、わかりました。ですが、前の私はすべてのISから嫌われていたのですよね？」

ヴァーチャル世界とはいえ動かせるのでしょうか？」

「その辺りは一夏さんがしつかりと考慮してくれてるから大丈夫よ。まあ、あくまでも仮想世界だからって感じでしたけどね」

「現実問題として、ISに信用されるところからスタートでしょうしね……」

過去の自分の所業を受け入れ、箒はISに信用されるにはどうすればいいのかを考えながら、ポータブル版VTSで細かい動きなどを確認しながら戦闘訓練を開始したのだった。

戸惑う一夏

箒がポータブル版VTSでISの練習をしている場所から少し離れた位置からその光景を見ていた一夏は、柳韻と今後の事を話し合う事にした。

「とりあえずはあのポータブル版VTSを置いて行きますので、一日一時間くらいはあれで訓練させてください」

「箒も気に入ってるようだし、一時間以上やれそうな気もするが」

「いきなり数時間もやってしまうと、他の事が疎かになりそうですからね。今の篠ノ之に必要なのは一般常識や生活するのに困らないくらいの人付き合いの方ですから」

「そっちの方はもう大丈夫な気もするがね」

「社会復帰する為にも、誰が危険人物かをもっと理解させておく必要があると思いますよ」

一夏から手渡された映像データには、一夏が思う危険人物の名前と戦闘力などが映っている。それを見た柳韻は、確かに危険だと納得したのだった。

「これを箒に見せておけばいいんだね？」

「あまり怯えさせるのも可哀想ですが、こればかりは知っておかないと命にかかわり
ますから」

「そこまでなのかい？ 私を知る限り千冬ちゃんも千夏ちゃんもいい子だったがね。
まあ、若干君に入れ込み過ぎなような気はしていたが」

「ちよつとどころじやないですよ……まあ、あの二人に逆らおうとするなんて自殺行為
でしかないと分かってももらえればいいので、あまり長時間見せないでくださいね」

「箒も自分で判断出来るとは思いますが、そう伝えておこう」

一夏からの忠告に頷いて答え、柳韻は箒の側へ移動する。

「箒」

「父上？ 何か御用でしょうか？」

「いや、楽しそうだなと思っただけだ。だがそろそろ茶道の時間だ」

「あつ、本当ですね。一夏さん、これはどうすればいいのでしょうか？」

「それは貴女にお貸ししますのです、ご自由にどうぞ。ですが、くれぐれものめり込まない
ように気を付けてください」

「分かりました。大事に扱いますね」

箒が笑みを浮かべると、一夏はどう反応すればいいのかに悩み、結局は無表情で頷いたのだった。

「あの……先ほどから難しい顔をしています、私になかしてしまいましたか？」

「いや、君は何もしてないけどね……前の篠ノ之の事がどうしても頭をよぎってしまつて……君に随分失礼な態度を取っていると自覚しているんだが、こればかりは……」「いえ、仕方のない事だと思えますし、少しずつ慣れてくだされば私はそれで構いませんので」

「そう言ってもらえると助かる……それじゃあ俺たちはこれで」

柳韻と箒に一礼してから、一夏は足早に道場から外へ出て行った。一夏の態度に苦笑いを浮かべながらも、碧はしっかりと一夏の後に続く。

「父上」

「どうかしたか？」

「何だか胸が苦しくて、顔が熱いのですが……これはいったい？」

「一夏君の事を好きになつたんじゃないか？」

「これが……恋というものなのか……」

写真を見た限りではそんな感情にはならなかったのだが、実際に会った結果、箒は再び一夏に恋心を抱いたのだったが、安心して見ていられると柳韻は変わった娘を見て笑みを浮かべていたのだった。

足早にI S学園に戻ってきた一夏を出迎えた刀奈は、一夏の様子がおかしいのに気が付き首を傾げる。

「一夏君、何かあったの？」

「いえ……変わり果てた篠ノ之に戸惑っただけです……」

「そんなに変わってたの？」

「まったくの別人ですよ……違和感しかありませんでした」

一夏の背後では碧も苦笑いを浮かべながら一夏の意見に同意している。それを見た刀奈は、怖いもの見たさで今の箒に会ってみたい気持ちになっていた。

「それで、一夏君の見立てでは箒ちゃんも社会復帰出来そうなの？」

「更識で仕事を宛がえば十分使えるでしょうが、今のままでは社会復帰どころかあの場所から移動するのも無理でしょうね。あまりにも無垢過ぎて、悪い人間に再び悪の道に誘われかねませんので」

「一夏さんが気にしているのは、織斑姉妹にいびり倒されないかどうかですよ？」

からかうように口を挿んだ碧に、一夏は呆れた表情で応える。その表情が全てを物語っていると、碧も刀奈は感じていた。

「あの二人だけじゃないんですが、当面の危険人物はあの二人でしょう」

「スコールやオータムも、近頃は大人しくしてますからね」

「あの二人にはやつてもらいたい事もありますし、このまま大人しくしてもらえればいいんですが」

「ダリル先輩やフォルテちゃんも大人しくしてるし、よっぽど一夏君が作った反省用プログラムが嫌なのかしらね」

「普通に反省文を書かせたり、ちよつとキツイ罰を与えただけなんですが」

「そのちよつとが嫌なのよ、きつと」

次に悪さしたら、織斑姉妹と碧を相手に本気で戦ってもらうと脅しているので、スコールとフォルテは素直に、ダリルは若干興味ありそうな感じではあったが大人しく、オータムはつまらなそうにいう事を聞いたのだ。その後から少しでも不審な動きをすれば一夏に報告されるようになってるが、特に不審な動きは報告されていない。

「とりあえず、もうすぐに迫ったトーナメント戦の最終確認をしましょうか」

「えー、ちよつとは遊ぼうよ〜」

「……これが終わったら少しはゆつくり出来るでしょうから、それまで我慢してください」

駄々をこねる刀奈の頭を軽く撫でて、一夏は生徒会室へと向かうのだった。

体調不良の原因

生徒会室で最終調整を終えて、部屋に戻る途中で一夏は自分の身体がふらついている事に気付いた。

「一夏君、どうかしたの？」

「いや、微妙にふらついている気がしまして……少し根を詰め過ぎましたかね」

「大丈夫？　碧さん呼ぼうか？」

「いえ……大丈夫です」

部屋に戻る分かれ道に差し掛かり、刀奈と虚を見送ってから一夏はふらつく足で部屋まで戻る事にした。

「無理しちゃ駄目ですよ。刀奈さんたちは何とか誤魔化したみたいですけど、専用機である私の事は誤魔化せませんからね」

「別に大したことじゃないんだし、下手に心配をかけるのも悪いだろ。それに、根を詰め過ぎたと言っているし、それも嘘ではないんだから」

「分かっていますけど、一番の原因は篠ノ之さんに会ったことですからね。変わっていた

とはいえ、一夏さんは本能的にあの人を怖がっていますから」

「ここまで耐えられたんだから、次はもう少し大丈夫だと思う」

「耐えてる時点で問題だと思えますけどね……まあ、復帰しても一夏さんの側には来られないでしょうし、あからさまに距離を取った事で碧さんにはバレているでしょうね」

「そこまであからさまじゃなかっただろ」

闇鴉に肩を借りながら抗議する一夏だったが、その抗議に何時もの鋭さは無かった。

「篠ノ之さんの方もですが、一夏さんも本気で人間不信と女性恐怖症を治さないと大変ですよ」

「分かっているし、少しはマシになって来てるんだがな……篠ノ之とオータムだけは本能的に避けたいと思ってしまってるんだから仕方ないだろ」

「まあ、一夏さんが努力してないわけじゃないことは私が一番知っているつもりですけどね」

部屋の前に到着し、闇鴉は待機状態へと戻る。美紀に余計ない心配を掛けない為なのだが、それを一夏が強く願ったからでもある。

「お疲れ様です、一夏さん。お父さんから連絡がありました」

「何かあったのか？」

「アメリカが篠ノ之さんの社会復帰に異論を唱えているようです」

「アメリカが？　今はコアもなく、世界的地位を失っているあの国が何の理由で」

「どうもアメリカは篠ノ之箒に脅されていたとか、全ての元凶は彼女だとか、訳の分からない事を言っているだけのようです。何処の先進国も相手にしていませんし、更識の方で黙らせたとの事です」

「異を唱えたくなる気持ちは分かるが、篠ノ之はアメリカと何の関係もないだろ……イギリスが文句を言ってくるのならまだ分かるが、サイレント・ゼフィルスはアメリカの物ではないし、アメリカに関して篠ノ之は何もしてないはずだろ」

「ですから、自分たちの地位を復活させるためのパフォーマンスだろうと」

報告を受けた一夏は、すぐさまネットで今回の事件を調べ始める。調べ始めてすぐ、アメリカが作ったホームページを発見し、その内容を読んでため息を吐いた。

「何が書いてあるのですか？」

「ざっくり言えば妄言だな。篠ノ之が襲ったと言い張っている店の写真や、襲われたと言い張っている人の写真が載っているが、この日は確か学園が襲われた日だ。篠ノ之も

その場所にいたのはこの学園の人間なら大抵知っている。時差を考えたとしても、あっさりと思い返された腹いせにアメリカの施設を襲うのは非効率だ」

「そもそも、篠ノ之さんはアメリカなんて興味なさそうでしたからね」

「拠点はアジア圏内だったし、アメリカの技術者と通じている感じもしなかった。そもそも亡国機業の本拠地だってアメリカではないんだ。破壊工作を行うにしてもアメリカを襲う理由はない」

すぐにサイトを閉鎖させ、一夏はPCの電源を切る。尊からの報告書に目を通し、取り合う必要は無いと判断して尊に処理を一任することにした。

「まったく、余計な仕事を増やそうとするとはな……本当にアメリカを襲って黙らせるか?」

「一夏さん、冗談に聞こえないんですけど」

「半分くらい本気だからな。織斑姉妹と東さんに頼めば、世界地図からアメリカが消えるのも時間の問題だと思うし」

「……さすがにやり過ぎだと思えますけど」

「だから、半分は冗談だって言ってるだろ。やったとしても二度と再起出来ないくらい叩き潰すくらいだ。世界地図から消そうだなんて思ってるない」

「ならいいですけど……」

一夏の真意が何処にあるか分からなかった美紀は、まだ少し不安そうな表情で一夏を見つめた。

「大丈夫だって言ってるだろ」

「いえ、そつちはもういいんですが……体調悪いですか？」

「……何だいきなり」

「いえ、一夏さんが冗談を言うなんて滅多になかったのも、もしかしたら体調が悪いのかなと思っただけです」

「俺だって人並みに冗談は言ってきたつもりだが」

「いえ、一夏さんはあまり冗談を言うタイプではありませんでしたし、言ったとしてももう少しマイルドな感じでした」

「はあ……よく見てるな、俺の事」

一夏の言葉に、美紀は一瞬赤面したが、その言葉に含まれた意味を瞬時に理解して表情を改めた。

「何があったのですか？」

「いや、篠ノ之に会ったから調子が優れないだけだ。一晩休めば大丈夫だろう」
「なら、前みたいに抱きしめてあげますよ？」
「いや……あとが面倒になりそうだから大丈夫だ」

美紀と一緒に寝たことがバレたら、刀奈や簪が押し寄せてくるだろうからと断り、一夏は自分のベッドへと倒れ込んだのだった。

二人の関係

箒に会ったことと、I Sの精神世界へ呼ばれた事で、一夏はかなりの疲労を感じていた。強がらず美紀に抱きしめてもらえば安心して眠れただろうが、それを断った為浅い眠りしか出来なかった。

「イマイチ疲れが抜けてないな……」

『申し訳ありません、私が無理なお願いをしたから』

「サイレント・ゼフィルスは悪くないだろ。てか、まだ何か頼みがあるのか？」

これは夢だと割り切っているので、いきなり話しかけられても特に驚いたりはない。一夏は声を掛けてきたサイレント・ゼフィルスの方に振り返り尋ねる。

『いえ、お陰で昔のデータは無くなりましたので、とりあえずは落ち着いた気持ちになりました。今度のお願いは一夏さんにゆつくりと休んでいただきたいという事です』

「そう言われてもな……」

『今からでも遅くありませんので、美紀さんと一緒に寝たらどうですか？』

「いや、美紀のベッドに入り込むのは……」

『言ってる場合じゃないのは一夏さんが一番分かっているんじゃないですか？　これから学園のイベントなど、色々と疲れる事が待ってるのです。強がったり遠慮したりしないで、甘えられる時に甘えた方が良いと思います』

「……………」

サイレント・ゼフィルスの言うことに、一夏は反論する事が出来なかつた。確かに自分が倒れたりしたら他の人の迷惑が掛かるし、更識の仕事にも支障が出てしまう。

『それに、美紀さんだつて一夏さんに甘えてもらえるのは嬉しいはずですよ』

「だが、年頃の女子が異性と寝たいものか？」

『一夏さんだつて、美紀さんが貴方の事を好いていますよね？　てか、貴方も少なからず美紀さんの事を想っているはずですよ。だったら遠慮せずに甘えた方がお互いの為だと思いますが』

「互いの為、っていうのがイマイチ納得出来ないが、サイレント・ゼフィルスの言う通りにはしてみるよ」

『そうしてください。我々I S一同、一夏さんに何かあつたら悲しいですし、一夏さん以外の人間に整備されても力を発揮出来ませんので』

「結局は自分たちの為、ってわけか」

『そう思ってくれても構いませんので、とにかく一夏さんはゆつくりと休んでくださいね。そろそろ一夏さんが目を覚ましますので、その後は分かっていますよね?』

「とりあえずトイレに行つて、その後美紀のベッドに入ればいいんだろ」

あくまで寝ぼけたフリをするという一夏に、サイレント・ゼフィルスは盛大にため息を吐いた。

『素直に甘えてください。その方が美紀さんも喜びますので』

ISに説教されるなどという貴重な体験をした一夏は、サイレント・ゼフィルスに言われた通り目を覚まし、少し躊躇いがちに美紀のベッドに近づいた。

「ん……」

一夏が近づいたタイミングで、美紀が小さく息を漏らした。自分が近づいたことで起こしてしまったのかと一瞬慌てた一夏だったが、目を覚ました様子はなく小さく安堵の息を吐いた。

「美紀、悪いが一緒に寝てくれ」

「………いいですよ」

「やっぱり起きてたか」

一夏が美紀のベッドに入り小さく声を掛けると、美紀はそれにはつきりと答えてくれた。

「一夏さんが若干幼児退行を起こしていたのは寝る前に気付きましたし、その後も震えてるように思えていましたので、もしかしたらとは思っていました。ですが、素直にベッドに入ってくるとは思ってなかったです」

「嫌なら別にいいが……」

「嫌じゃないですよ。それに、私だって一夏さんに頼ってもらえて——一緒に寝たいと思ってもらえてうれしいんですから」

ベッドから出て行こうとする一夏を、美紀は優しく抱きしめながら笑いかける。護衛として、家族としてなどの言い訳はせず、美紀は一人の少女としてこの状況が嬉しいとはつきり一夏に告げた。

「そうか……ありがとう」

一夏の方も素直に甘える事にして、お礼を言って美紀を抱きしめ返す。シングルベッ

ドに二人で寝るには密着するしかないが、そういう意味ではない抱擁に一夏も美紀も若干戸惑いながらも、一夏は疲れていたのですね、すぐに眠りに落ちたのだった。

「こうしてみると、一夏さんもまだ幼さが残ってるんですね」

安心しきった顔で寝ている一夏を見て、美紀は母性を感じていた。

「というか……一夏さんが先に寝てしまったら私が寝れませんよ……」

「なら、私と話しましょうか」

「闇鴉……何で人の姿になってるんです？」

「一夏さんに頼ってもらえなかった事による嫉妬です。美紀さんは私の愚痴に付き合う義務があると思います」

「そんな理不尽な……」

一夏が自分を頼ったのは、ただ単に隣に寝ていたからだと思っている美紀は、闇鴉の嫉妬に対して理不尽だと感じていた。だが闇鴉は一夏とサイレント・ゼフィルスの会話を聞いているので、諭されて頼ったという事を知っているのだ。つまり、ISの中でも美紀は一夏の支えとして認められているという事なのだ。

「まったく、自分がどれだけ一夏さんに頼られているか分かってないんですか？」

「分かっているつもりですけど……」

「つもりじゃ駄目なんです。ちゃんと一夏さんを支えてくださいね」

「何で怒られながら頼まれてるの？」

「ですから、嫉妬です！」

納得出来ないという顔をしながらも、一夏を支えようと決意した美紀は、少し力を込めて一夏を抱きしめたのだった。

甘えっ子

いつもならぐっすり寝ている時間帯だが、簪は昼間ずっと寝ていたので目が覚めてしまった。

「二度寝する気分じゃないしな……」

隣では本音がだらしない恰好で寝ているが、さすがに起こして相手をさせるのは可哀想だと感じ、とりあえずいつもかけている眼鏡をと思い手を伸ばしたが、何時もの場所に置いてなく簪は首を傾げた。

「えつと……ああ、一夏の部屋に忘れてきちゃったんだ」

体調不良で一夏の部屋で生活していたので、その時に外してそのままになってしまったのだろうと簪は理解した。別になくても生活は出来るし、元々伊達なので問題はないのだが、かけていないと妙に落ち着かないのだ。

「仕方ない、取りに行こう。一夏や美紀なら起きても不思議じゃない時間だし、織斑姉妹には事情を話せば大丈夫だろうし」

こんな時間に寮内をうろついていたら、寮長である二人に怒られるかもしれないが、事情が事情なので大丈夫だろうと考え、簪は一夏の部屋を目指し廊下に出た。

「寒っ、もう冬もすぐそこまで来てるんだね」

日中はそうでもないが、朝晩は冷え込んできたなと感じながら、簪は廊下を歩き進める。途中外に人影を見たような気がしたが、早朝から身体を動かしている人はいるので特に気にしなかった。

「一夏や碧さんなら、気配で誰か分かるんだろうけどな」

簪も人の気配を掴むことは出来るのだが、それが誰の気配かを識別するまでには至っていない。そもそも識別出来るのがおかしいのであって、簪でもかなり高レベルなはずなのだが、簪はもつと精進しようとして心に決めたのだった。

「さてと、到着したけど……起きてるのかな？」

いぎ部屋の前まで来て、そんなことを考えた簪ではあったが、例え寝ていたとしても、中の二人なら扉の前に立った時点で気づいてるだろうと思ひ直し、ゆつくりと扉を開け

て中に入った。

「えつと……眼鏡は」

「あれ？ 簪ちゃん。どうかしたの？」

「おはよう、美紀。えつとね、眼鏡を忘れたみたいで」

「それならその上に置いてあるけど」

「良かった……？ 美紀、ベッドの中に誰がいるの？」

美紀のベッドに、不自然なふくらみを見つけ、簪は鋭い目つきで美紀に詰め寄る。

「一夏さんですよ。昨日篠ノ之さんに会ったから、少しトラウマが発動してみたいで、夜にこっちに入ってきたんです」

「美紀は同じ部屋だからいいよね。そうやって頼られるんだし」

「簪ちゃん？ 何だかオーラが刀奈お姉ちゃんに似てきたんじゃない？」

「姉妹だもん、似てても仕方ないよ」

引き攣った笑みで簪を躲そうとした美紀ではあったが、そのタイミングで一夏が目覚ましベッドから出てきた。

「ん……？ 何で簪がここにいるんだ？」

「眼鏡を忘れたそうです」

「眼鏡？ ああ、寝てる簪を部屋まで運んだから、その時に忘れたんだろう……だが、何で怒ってるんだ？」

「私ばかり一夏さんと一緒に寝てるからですって」

「そんなこと言われてもな……簪はクラスが違うし、本音ではいざという時に頼りないし、刀奈さんと虚さんは学年が違うからという理由で美紀が同部屋になったんだ。今更そんなこと言われても……」

「たまには私たちにも甘えてほしいの！」

まだ早い時間という事を忘れ大声で詰め寄ってくる簪に、一夏と美紀は顔を引き攣らせる。

「簪には整備やらなんやらで相当甘えてるつもりなんだが」

「そう言うのじゃなくて、碧さんや美紀にしているように甘えてほしいの」

「やっぱり刀奈お姉ちゃんみたいだよ」

「とにかく、今から一夏は私と一緒にベッドに入って！」

「それは別にいいんだが……俺のベッドに簪が入るのか？」

「えつと……」

一緒に入ることに躊躇いは無かった簪だったが、いざ一夏のベッドに入るといふ事になり、少なからず躊躇いを覚えた。

「一夏が良いなら、そつちのベッドが良いけど……」

「俺は別にどつちでも……」

「じゃ、じゃあ一夏のベッドで……」

滅多にない機会だからと自分に言い聞かせ、簪は一夏が普段使っているベッドに入る決心をした。

「では、私はベッドから出ておきますね」

「何でお前がそこで寝てるんだ……」

「だって、外にいたら寒いじゃないですか」

「待機状態になってればいいだろうに……」

一夏のベッドで丸くなっていた闇鴉を追い出し、一夏と簪はベッドに潜り込む。

「今から寝たとしても、そんな時間あるわけじゃないんだが」

「いいの！ それに、今日は土曜日で授業は無いし、明日のトーナメントに向けて体調を

万全にしておかないと。来週は代表昇格に向けてのテストもあるし、今日はゆっくりするの」

「はあ……まあいいが」

普段は我慢する事に慣れているのではないかと思わせるくらい我が儘を言わない簪がここまで言うのなら、それは相当なのだろうと一夏は考え、簪の身体を優しく抱きしめた。

「これじゃあ私が一夏に甘えてるようだね」

「どっちでもいいだろ。簪は嫌か？」

「ううん、一夏の身体、あつたかい」

すぐに寝息をたて始めた簪の顔から眼鏡を外し、一夏は美紀と顔を見合わせ苦笑いを浮かべた。

「やっぱり簪ちゃんも一夏さんに甘えたかったんですね」

「まあ、刀奈さんばかり目立ってるが、簪も結構甘えっ子だからな」

「本音も、ですけどね」

「あれは甘えすぎなような気もするが……」

とりあえずは自分も身体を休めておこうと、簪の頭を撫でながら一夏もゆっくりする
事にしたのだった。

早朝のV T S ルーム

トーナメント戦前日という事で、アリーナの使用が出来ないので、静寂と香澄は昨日許可を取ったV T S ルームに向かっていた。

「早朝は誰も使わないからって、一夏君が言ってたけど」

「午後からは使用禁止ですもんね。使いたい人が続出してもおかしくないと思うんですが」

専用機持ちの部の他に、一般の部もあるので、最終調整にV T S を使いたがる人は大勢いるだろうと踏んでいた二人だったが、思いのほか使用申請をしてきた人はいないと事で、若干の肩透かし感を味わっていた。

「特に専用機を持ってない人は、訓練機の使用が毎日出来るわけじゃなかったし、アリーナの使用もなかなか出来なかったはずなのに」

「どうしても専用機持ちが優先されましたからね。一夏さんが公平に割り振ってくれようになつてからは良かったですけど」

「一夏君が他の問題に取り組んでた時は織斑姉妹が割り振ってたから、どうしても偏つ

てたりしてたのよね」

「それでも、小さいアリーナは非専用機持ちに割り振ってたようですけどね」

「でもあそこって、精々三人くらいしか動かせないよね？ 全学年参加で、非専用機持ちがどれほどいるか分かつてるはずなのに」

複数あるアリーナの中で、一番小さい場所を非専用機持ちに割り振っていた所為で、生徒会にクレームが入ったのだ。それで一夏が事態を漸く把握し、公平に割り振られるよう申請先を職員室から生徒会室へと変更したのだった。

「一夏さんが復帰するまでは布仏先輩が割り振っていたんですよね」

「更識先輩だとしても信用出来ないからって一夏君が言ってたけど、私たちからすればあの人もかなり凄いいんだけどね」

「現役の家代表ですし、生徒会長ですもんね」

そうこうしている内にVTSルームに到着し、二人は弛緩していた空気を張り詰めたものへと変える。

「とりあえず、最初はCPU相手かしらね」

「対人戦でも良いですけど、アップは必要だと思います」

「そもそも、専用機データは一夏君が管理してくれてるから、いつでも最高の状態で動けるはずだけどね」

「I Sは兎も角、私も静寐さんも寝起きですから、身体を起こす意味でもアツプは必要だと思います」

「感心ね、二人とも」

突如掛けられた第三者の声に、静寐と香澄は心臓を掴まれた気持ちに陥った。

「ごめんなさい、そこまで驚かすつもりじゃなかったんだけど」

「えっと……亡国機業のスコールさん、でしたっけ？」

「元、が付くのかしらね。亡国機業は殆ど崩壊して、今は機能していないし」

「それで、何故貴女がここに？ この場所は許可書が無いと入っちゃいけないですよ」

若干距離を取りながら、静寐はスコールがここにいた理由を尋ねる。静寐の態度が珍しいものだったのか、スコールは楽しそうな笑みを浮かべながら質問に答えた。

「許可は貰ってるけど、貴女たちがこんな早く来るとは思ってたから、少し様子を見させてもらっただけよ、すぐに出ていくわ」

「許可は出てるんですか」

「私とオータムは、深夜帯にこの部屋を使わせてもらってるのよ。ほら、一般の生徒は私たちの事を恐ろしい人物だと思ってる人もいるだろうからって、一夏が気を遣わせてくれたのよ。本当はアリーナを使つての実機訓練の方がオータムは良いんだらうけども、今はアリーナを使える時期じゃないからって一夏が」

「それでこんな時間にVTSルームに」

「そう言う事。それじゃあ、私はそろそろ部屋に戻るわね。あまり悠長にしていると、一夏に怒られちゃうから」

そう言い残してVTSルームから出て行つたスコールを見送り、静寐は先ほどから黙っている香澄に声を掛けた。

「香澄、大丈夫？」

「え、ええ……あの人、嘘は言つてなかつたですね」

「香澄が言うなら信用出来るわね。それにしても、随分一夏君と親しそうな感じだったけど、実際はどうなんだろう」

「分からないですね……元敵対勢力の幹部と知り合いなわけなんですし、向こうが一方的に知っているだけという感じでもなかつたですね……」

「考えても分からないし、とりあえず訓練しましょうか」

「そうですね。今の出来事で完全に身体も起きましたが、とりあえず心を落ち着かせな
きやいけません」

「かなり動揺してゐるわね……」

ぎこちない動きでセットを始める香澄を見て、静寐は苦笑いを浮かべて自分も準備を
進めたのだった。

一夏と一緒に寝た事で、簪の目覚めは非常に良いものだった。何時もは低血圧で寝起きは良くない簪だが、今はスッキリとした気分で寝起きのカフエラテを飲んでいた。

「美紀ってば、こんな気分がいい朝を何回も迎えてたんだね」

「私は別に低血圧じゃないけどね」

一夏に淹れてもらったカフエラテを飲みながら美紀と話す簪だが、その隣には不服そうに頬を膨らませた刀奈がいる。

「せっかく寝起きドッキリしようと思って一夏君の部屋に来てみれば、簪ちゃんが一夏君の腕の中で寝てるんだもの。私の方が驚いちやったわよ」

「そもそも、何でお姉ちゃんはこの時間から一夏の部屋に遊びに来たの？」

「妙な時間に目が覚めたから、一夏君と遊ぼうと思って。ほら、一夏君も美紀ちゃんも早起きだから、きつと起きてるだろうなと思って」

「簪だつて似たような事言つて部屋に来ただろ？　はい、お待たせしました」

今は急ぎの案件がないため、今朝は珍しく一夏が朝食を用意してくれたのだ。簪も刀
奈も、そのやり取りを眺めていた美紀も、一夏の朝食の前に言葉を失い、自分の家事の
腕を恨んだのだったが、食べ終わった後には幸せ満面の笑みを浮かべたのだった。

未来予想

VTSでの特訓を終えた静寐と香澄は、この後どうするか決めてなかった事に気がつき、どうしようかと互いに顔を見合わせる。大会前日という事もあり、アリーナは使用出来ないし、VTSもこの後使用するグループが既に来てしまったので、延長する事も出来ない。

「どうしようか」

「そうですね……とりあえず朝ご飯を食べながら考えましょうか」

「もうそんな時間？　って、そりやそうか。次の人たちが来てるんだから」

「その後は、トーナメント後にある定期試験の勉強でもします？　静寐さんは兎も角、私は低空飛行組ですから」

思い出したくないものを思い出したという顔で告げる香澄に、静寐は苦笑いを浮かべる。

「そう言えばそんなものもあったわね……私だって楽勝ってわけじゃないんだけど」

「ですが、私や美紀さん、本音ちゃんより楽勝ですよね？」

「そう言えば、美紀も成績不振者だったわね……普段の言動と立場から忘れがちだけど」
「また一夏さんに頼るのも忍ばれますし、自力で何とかしなければ……」

専用機を手に入れるのも一夏が何とかしてくれたからであって、本来なら補習ギリギリの自分が専用機など持てるはずがないと香澄は自覚している。その為、専用機を手に入れてからは授業にも必死になつて参加し、少しでも成績を上げようと努力したのだが、座学の方はさっぱりなのだ。

「そんな事一夏君は気にしないとと思うけど。どうせ本音や美紀、マドカの勉強を見るんだろーし、香澄が増えても問題ないと思うわよ。てか、エイミイだつて低空飛行だし、そっちも手伝うんじゃないかしら」

「そうなのでしょうか……後で聞いてみましょうか」

「それが良いわね。私も、手伝えることがあるなら手伝うから」

「あれ〜？ シズシズにカスミンだ〜。こんなところで何してるの〜？」

「本音こそ、こんな時間に起きてるなんて珍しいわね」

平日ならまだ若干の余裕がある時間に本音が起きているなど、静寢でも数えるくらいしかない事を知っているのだが、今日は既に目が覚めている様子だった。

「起きたらかんちゃんがいなくてさ。どこ行ったか知らない？」

「一夏君の部屋じゃないの？ 重要な話し合いとか、そんなのの為に」

「私は何も聞いてないけどな？」

何でだろうと視線で問いかけて来る本音に、静寂も香澄も苦笑いを浮かべた。その理由は大方いつも通りなのだろうが、本音は理解していない様子なのだ。

「本音っていつも呼ばれてないんじゃない？」

「そんな事ないよ。五回に一回くらいは呼ばれてるんだから！」

「それ、威張って言える回数じゃないですよ」

「とりあえずいつちーの部屋に行ってみるね。あつ、それからカスミン」

「な、なんですか？」

急に名前を呼ばれ、香澄は身構えてしまった。本音も裏表がない言葉で話してくれるので、香澄としては付き合いやすい部類なのだが、こうしていきなり話しかけられると未だに緊張してしまうのだ。

「トーナメント戦が終わったら、いつちーが勉強会を開いてくれるらしいから、カスミンも参加するよね？」

「参加して良いのでしたら、ぜひ参加したいです」

「じゃあ、いっちゃんに伝えておくね。私の他にも、マドマドや美紀ちゃん、カルカルにマナマナも参加するんだってさ」

「マドカさんは兎も角、マナカさんは成績良いんじゃないでしょうか？」

あれだけのシステムを組み上げるのだから、当然マナカは頭がいいと思っていた香澄は、マナカが勉強会に参加すると聞かされ首を傾げた。

「ISに関してはいっちゃんにも負けない頭脳を持っているんだけど、一般教科は全然ダメなんだってさ。まあ、義務教育すら通ってなかったから仕方ないんだけどっていっちゃんと言ってた」

「それじゃあ、教師役は足りるの？ さすがに一夏君一人じゃ厳しい人数だと思うけど」
「かんちゃんもいるし、刀奈様やおねくちゃんも手伝ってくれるみたいだし、大丈夫だと思おうよ？ なんだったら、シズシズも手伝ってよ」

「手伝うのは別にいいけど、勝手に決めて良いわけ？ 一応一夏君にも聞かないと」
「じゃあ聞いておくね。それじゃあ、後でメールするね」

そう言い残して本音は急ぎ足で一夏の部屋を目指し進んでいった。だが、彼女の中で

の急ぎ足なので、二人にはあまり急いでるようには見えないのだった。

「とりあえず、香澄も参加出来そうだし良かったわね」

「一夏さんに頼りっぱなしで、卒業したらどうしようかと悩みますけどね」

「更識への就職が約束されてるわけじゃないけど、問題ないんじゃない？ 更識製の専用機を持つてるんだし、傘下の企業なら問題なく就職出来ると思うけど」

「就職まで手伝わってもらったなんて、お父さんに怒られちゃうかも」

「コネというのは、使ってなんぼなんだから、そんなこと気にする事ないと思うんだけどな」

「でも……」

「それに、普通の企業じゃ香澄もやりにくいんじゃない？ 一夏君ならその辺りを考えて香澄の就職先を見つけてくれると思うんだけど」

「否定出来ないです……この特殊能力の所為で、普通の企業じゃ一週間耐えられるかどうか……」

自分の未来を想像して、物凄く情けない気分になった香澄は、その場にしゃがみ込んでしまった。そんな香澄を励ましつつ、静寐は食堂まで移動しただけで疲れ果ててしまったのだった。

大会直前

それぞれが前日を万全の状態度過したおかげで、トーナメント戦は開始前から物凄い盛り上がりを見せている。特に注目されているのは、更識所属の専用機持ちに、更識以外の専用機持ちがどれだけ善戦出来るのかだった。

「それにしても、セシリアちゃんもラウラちゃんも鈴ちゃんも入学当時と比べると大分成長してるわね」

「まあ、指導力なら誰にも負けないだろうと言える織斑姉妹の指導を受けてますし、セシリアやラウラ、鈴は簪たちと訓練してますし自然に成長したのでしょうか」

「入学時から考えるのでしたら、静寂さんや香澄さん、エイミイさんもかなりの成長を遂げてますね。それから、ギリシヤ代表に収まったサラさんも、二年次進学から見れば、かなり成長しています」

「やっぱりお兄ちゃんに関わると大分成長するのかな？」

「俺だけが原因じゃないと思うが」

更識所属となり、専用機を手に入れたことももちろん大きく関係するだろうが、それ

それが成長したのはそれぞれが弛まぬ努力を続けた結果だと一夏は考えている。

「相川さんや夜竹さんたちだって成長してるんだから、必ずしも俺が関係してるとは言い切れないと思うんだが」

「でも、一夏君のクラスメイトばつかよね、高い成長を記録してるのって」

「こうしてみると、本音があまり成長してないように見えますね」

「あの子は元々野生の勘で戦う節がありますからね……」

「でも、入学当初から高レベルだったというのもあると思うわよ。あれでも一夏君の護衛として、簪ちゃんや美紀ちゃんの訓練相手として十分の腕を持っているんだから」

「後はマドカもゆつくりとではありますが成長してますね」

「屑親に捨てられるくらいだから、大したこと無いんだろうと思ってたけど、こうしてみると結構強いんだね、マドカも」

「闘い方が雑だっただけで、マドカは最初から高い能力を秘めていたと思うが……亡国機業がマドカの才能を生かしきれなかったと言う事だろう」

参加者は既にアリーナで待機しているのに、参加しない一夏たちはのんびりとデータを眺めてられるのも、真耶が頑張つて説明を引き受けてくれたからだ。モニターに表示されているアリーナの様子を眺めながら、そろそろ移動するべきだろうと一夏が腰を上

げた。

「虚さんと刀奈さんは専用機持ちの方の解説を、俺とマナカは非専用機持ちの解説をするんで、ここで別れましょう」

「二夏君、くれぐれも体調に変化を感じたら無理をしないこと。そつちの審判は真耶さんと紫陽花さんだから大丈夫だと思うけど、流れ弾には気を付けてね」

「大丈夫、お兄ちゃんは私が守るから」

「そちらこそ、織斑姉妹が暴走しないように気を付けてください。万が一暴走したら、全専用機持ちに織斑姉妹を止めるよう指示してください。まあ、碧さんとナターシャさんも控えていますので、大丈夫だとは思いますが」

「おう、俺たちも忘れてるんじゃないぞ」

「……別に忘れてないですけど、いきなり現れるのは勘弁してほしいですね。気配察知が得意じゃない刀奈さんが驚いてるじゃないですか」

「得意じゃねえとか言ってるが、そいつも十分な気配察知能力を持つてると思うんだがな……テメエら基準で考えると、確かに得意じゃねえのかもしれないねえが」

「二夏とマナカは置いておくとしても、そちらの布仏姉もかなりの警戒心だものね」

背後から声を掛けてきたスコールとオータムだが、今の彼女たちには敵意は感じな

い。なので一夏もある程度の接近なら耐えることが出来る。

「それにしても、俺たちが乱入して中止になったイベントを今やるのかよ」

「篠ノ之の問題とか、その他いろいろあつたからな……」

「ゴメンなさい……」

その他いろいろには、マナカの問題も当然含まれているので、当事者であるマナカはシユンとした表情で頭を下げた。

「いや、マナカより問題だったのは織斑姉妹だから……何度カミナリを落とせば反省するのかわかつたもんじゃない……」

「あの二人、いつそのことクビにしたらどうなの？」

「生活態度や考え方は兎も角、指導力は随一ですから、他所へ流失するのは避けたいんだよ。間違つてもアメリカや危険思想の持ち主に共感する事は無いにしても、あの戦闘力と指導力が敵側に回るのは御免だ。胃が痛い思いをし続けるのも大変なんだよ、これでも」

「一夏にそれだけ言わせるといふ事は、やはり織斑姉妹は侮れないといふ事かしら？」

「何だ、まだ敵に回るつもりなのか？」

「そうじゃないわよ。純粹に、織斑姉妹の実力がどんなものか気になるの。まともに

戦ったら勝てないってことくらいしか分かってなかったし、実際に対峙した時もまともに戦わなかったし」

「あの人たちが本気を出したら、全更識所属の専用機持ちで挑んでも厳しいだろうな……まあ、マドカやマナカを使って精神的に攻めれば簡単に大人しくなるだろうが」

その二人より、一夏が精神的に攻めればあつという間に陥落するのだが、そもそも怒られると分かっているのに暴走するのは、ひよつとしたら怒りたいからなのではないかと束から言われ、そうなった時はマナカとマドカに任せようと一夏は心に決めていたのだった。

「とりあえず、織斑姉妹が暴走しないように気を付けてください」

「了解よ。一夏君も、頑張ってるね」

それぞれの持ち場に移動する為、刀奈たちと別れた一夏とマナカは、第二アリーナに向けて仲良く歩き出したのだった。

事前説明

専用機持ちたちには敵わなくとも、非専用機持ちの中ならと思つている女子は少なくない。ましてや全学年合同なら三年生がそう思うのも無理はないだろう。だが、一年の中にも結構上位に行けるのではないかと企んでる生徒は少なからず存在する。

「あれ？ テイナも参加してんだ」

「まあ、アメリカの現状を考えて、何処か拾つてくれるところがないかと思つてね。アピールしておこうと思つて」

「でも、別に中継されてるわけじゃないんだし、ここで活躍してもあまり意味はないと思うんだけど」

「そんなことないわよ？ ほら、あそこ」

テイナが指差した方を見ると、解説席に一夏がいる事に気付いた生徒が騒ぎ出す。

「えっ、何で更識君が？」

「てつきり専用機持ちの方を解説するんだと思つてた」

「あつちは更識先輩と布仏先輩が解説するらしいわよ」

「それだったら、アピールに成功したら更識君と……」
「それは無いと思うけど」

良からぬ事を妄想しそうな同級生を軽く宥めて、ティナは気合を入れる。あのような問題が起こる前、アメリカの代表に選ばれるかもしれないという話はあったのだが、今のアメリカは代表になっても何のメリットもない国だと割り切り、自由国籍を使つて移籍出来ないかと考えているのだ。

「その為にはまず、実力があることを更識君に見てもらつて、彼の口添えでどこかの国が拾ってくれば一番なのよね」

「ティナは国家代表を目指すの？ それとも更識所属を目指すの？」

「私はそこまで更識君と縁が深くないし、口添えしてくれるだけで十分だと思ってるわ。だから、国家代表になれるように頑張るの」

「ティナがここまでやる気だと、私たちは厳しいかな」

「優勝賞品の学食のフリーパス一ヶ月分」

「それくらいお金払いなさいよ」

「ティナは候補生としての収入があるかもしれないけど、一般の女子高生にとつては一回の食事代だつてバカに出来ないんだからね」

「……間食を止めれば、それなりに大丈夫そうに思えるんだけど？」
「簡単に止められるなら苦労しないわよ！」

何やら理不尽に怒られた気がしたが、ティナはとりあえず頭を下げた。

「ところで、あつちに燃えてる三年生たちがいるけど、ティナは何で分かる？」

「え？ 就職先が決まってる人たちじゃないの？ ここで動けることをアピールして、内申点を稼ごうとしてるとかじゃない？」

「ＩＳ学園卒なら、何処の企業からでも引く手数多だと思ってたけど、そうでもないんだね」

「引く手は数多だと思うけど、上位企業ともなれば話は別でしょ。優秀な人材が欲しいんだらうし、ＩＳ学園卒だからって優秀とは限らないでしょうしね」

ティナの声が聞こえたわけではなさそうだが、三年生たちの数人がティナを睨んでいるように見える。他の女子たちはその理由が分からなかったが、ティナははつきりと視線に込められた気持ちを受け取っていた。

「どうやらライバル認定されちゃったみたいね」

「ライバル？」

「優勝する為には私が邪魔だつて思われてるみたい」

「そりや代表候補生だもんね」

「専用機を持たない、がつくけどね」

自虐ネタで苦笑いを浮かべるティナだったが、ここで活躍すればどこかの国に移籍し華々しい世界で活躍出来るかもと思いきさらに気合を入れた。

『そろそろ対戦表がモニターに表示されるでしょうから、各選手はモニター前へ移動してください』

『なお、思つてたより参加者が多かったので、五人まとめて戦つてもらいます』

「つまり、五人で戦つて勝ち抜けるのは一人。誰を潰すかを話し合つて徒党を組んでも善し、という事ね」

「それつてティナがだいぶ不利なんじゃない？」

「くじ運にもよるかもね」

そんな話をしていると、モニターに対戦相手が表示された。専用機持ちの方も同じモニターに表示されるので、自分の名前を探するのは結構苦労したが、ティナは運よく三年生が一人もないブロックに組み込まれたのだった。

「でも、狙われるのは間違いなさそうね……一、二年生も商品は欲しいでしょうし」
「優勝候補だもんね。潰せるときに潰しておかないと」

『なお、訓練機の数にも限りがあるので、あまり派手に撃ち落とす事はしないように気を付けてください』

『メンテナンスの時間は考慮してあるとはいえ、面倒な事はしたくないので』

『……マナカ、本音が漏れてるぞ』

『だってお兄ちゃん。嫉妬からISを雑に扱う人間なんて、どうせ大した企業に就職なんて出来ないと思うんだけど』

『とにかく、皆さん怪我の無いように気を付けてください』

一夏が慌てて説明を終わらせた感じが凄かったが、誰もその事に関してツツコミは入れなかった。というか、入れる事が出来なかったのである。

こちら側の声はマナカにも聞こえるので、下手に侮辱すれば通信を介して織斑姉妹の耳にも入る恐れがある。そうなればあの二人は間違いなくこちら側に、文字通り飛んでくるだろう。そうなってしまえば、もう大会どころではなくなくなってしまい、せつかくのアピールの場を失くしてしまうからである。

『それでは、第一回戦に組み込まれた生徒は、各自訓練機を受け取りピットへと向かって

ください。それ以外の人はモニター前で待機しててください』
『なお、モニター前の映像はこちら側で確認出来ますので、不正が発覚したら即失格となりますのでお気を付けてください。間違っても、お金を渡して勝ちを譲ってもらおうなど考え無いように』

心当たりのある生徒たちは、心臓を鷲掴みされた感覚に陥ったが、発覚する前で良かったと胸をなでおろし、仕方ないので正々堂々戦おうと心に決めたのだった。

盛り上がる大会

一夏とマナカが非専用機持ちの方を解説しているのをモニターで眺めながら一刀奈と虚は専用機持ちのグループの解説をしていた。

「第一グループは、簪ちゃん、美紀ちゃん、マドカちゃん、ラウラちゃん、そしてセシリアちゃんの五人ね」

「気を抜くとあつという間にやられてしまいそうなグループですね」

「ここで注目なのは、やっぱり簪ちゃんかしらね」

「病み上がりでどこまで体力が回復しているかも注目ですが、簪お嬢様と美紀さんはペアの候補生ですから、ソロでどれだけ動けるかも注目です」

「その点だと、マドカちゃんが有利かしらね？」

「マドカさんも実力は十分ですが、篠ノ之博士が造った白式はかなりピーキーな設定になっていきますからね。遠距武器の無い状況で簪お嬢様に勝てるでしょうか」

「ラウラちゃんやセシリアちゃんも、入学当初から比べると大分成長してるし、上手く動けば勝ち抜ける可能性は十分ありそうね」

「誰を最初に脱落させるか、それが鍵でしょうね」

「一番最悪なのは、簪ちゃんと美紀ちゃんが徒党を組んで、他三人を脱落させるってパターンかしらね」

「手を組んだと見せかけて、簪お嬢様が後ろから美紀さんを撃ち落とすという事も可能ですし、簡単に手を組むとは思えませんがね」

二人の解説を聞きながら、参加しなかった生徒たちはアリーナで盛り上がっていく。まだ始まっていないが、解説だけで盛り上がれるのも、IS学園の良いところなのかもしれないと刀奈は思っていた。

「とにかく、始まってすぐの動きに注目ね」

「若干非社交的なマドカさんがどう動くかも注目したいところですが、それ以上に心配なのはラウラさんですね。あまり人を疑わない様子ですし、言葉巧みに騙され上手く使われる可能性も」

「そんな腹黒い事を考える子、このグループにはいないわよ?」

「暗部所属が二人いるんですから、そう言う事も考え無くはないでしょうに」

「そうかしら? まあ、とりあえず選手の入場です」

開始前から散々盛り上げ、ようやく選手が入場してくると、会場は異常な盛り上がり

を見せた。

「あつ、あんまり騒ぎすぎると他の子たちに迷惑がかかるかもしれないから、ほどほどに盛り上がってね」

「どんな注意事項ですか……基本的には盛り上がるのは自由ですが、あまり行き過ぎると教師陣から注意が入りますのでお気を付けください」

「それから、インターバル中は選手同士の接触は自由だけど、闇討ちとかは禁止だからね」

「それも今更な注意事項ですが、勝ちたいという気持ちが強すぎるとありそうですからね。もちろん、不正が発覚したらそれ相応の罰を課せられますのでお忘れなく」

そんなことは無いだろうと理解してはいるが、参加者にダリルがいるので一応の注意事項を済ませ、ようやく専用機持ちの部も開始となったのだった。

レベルの高い戦いを見せられ、モニター室ではため息があちこちで漏れている。静寂や香澄もまた、簪と美紀の連携に魅入られ、そして力の差を見せつけられたため息を漏らしていた。

「更識先輩が言つてた通りの展開になって来てるわね」

「簪さんが後方から美紀さんを援護し、動きが鈍ったところに美紀さんが一撃を喰らわせ、トドメに簪さんがミサイルを撃ち込む……国家代表に一番近いと噂されているだけあって、やはりレベルが違いますね」

「セシリアやラウラも頑張ってたんだけどね……後はマドカだけね」

「織斑一族というだけあって、マドカさんも予想外な動きをしますけどね」

「戦闘においては姉二人には敵わないって言うってたけど、私たちから見れば十分強いよね、マドカも」

頭脳においては兄や妹に敵わないとも言っているが、マドカは何方も平均以上の才能を持っている。だが、勉強に関しては誰にも似ず酷い結果なのだが……

「姉妹機つてだけあって、金九尾と光白狐の連携は完璧に近いわよね」

「白式も並の専用機から見れば凄いです、やはり更識製の方が一枚上手のようですね」
「まあ、篠ノ之博士が造った白式も十分凄いんだけど、あの二人を見るとやっぱりそう思うわよね……」

操縦者のレベルも当然あるのだが、どうしても更識製の専用機の方が優れているように思えてしまうのだ。それは他の観戦者も同じ考えのようで、鈴やエイミイもため息を吐きながら二人の動きを観察していた。

「てか、こっちは一夏君しかメンテナンス出来ない機体が多いから、次のグループが終わったらしばらくお休みなのよね」

「サラ先輩はギリシャの方で用事があるようなので不参加、ダリル先輩の専用機は使用

申請が下りなかったので訓練機での参加ですからね。残ってるのは私と静寐さん、鈴さんにエイミイさん、後は無理矢理参加させられた本音さんの五人ですから」

一夏とマナカは体調面で、刀奈と虚は戦力面で参加を見送り、シャルも自分が出ても勝てないからと辞退を表明した。その結果専用機持ちの部は少数ながらも実力者が揃い、非常に見ごたえがあると騒がれているのだ。

「簪や美紀と比べられると、私たちなんて何枚落ちるのかしらね」

「この二人が決勝に揃わなかっただけでも盛り上がるのですが、こつちには本音がいますからね……」

「意外と実力者なのよね」

普段のほほんとしていたので忘れられがちなのだが、本音は更識所属の中でも上位に数えられる実力者で、今戦っている簪と美紀の訓練相手を務められるくらいの実力は有している。つまり、次のグループは本音が実力的に一つ抜け出しているのです、上手く徒党を組んで本音を最初に脱落させられるかが鍵になると、静寐はモニターと本音を同時に見ながらそのように考えていたのだった。

第二グループの戦力

専用機持ちの部の第一試合は、辛うじて美紀が勝利し決勝進出を勝ち取った。普段から簪相手には分が悪かった美紀にとつて、この勝利は自信につながるものになるだろう。

「非専用機持ち解説席の一夏くーん！ 美紀ちゃんと簪ちゃんの専用機調整の為、急ぎ整備室に向かつてください。代わりは虚ちゃんがやってくれるそうなので」

「放送を私用に使わないでください……」

専用機持ちの部は、参加人数が少ないので今は休憩時間となっているので、虚が一夏の代わりに非専用機持ちの部の解説を務める事が出来る。その間、刀奈はのんびりとおごすつもりだったのだが、虚に首根っこを掴まれて一緒に解説を務める事になってしまった。

「それじゃあ虚さん、刀奈さん、よろしくお願いします」

「まあ、簪ちゃんや美紀ちゃんの専用機の調整は一夏君しか出来ないもんね。こっちはお姉さんに任せて、休憩時間の間に終わらせちゃってちようだい」

「本当は虚さんにも手伝ってもらいたかったのですが、刀奈さんの監視じゃ仕方ありませんよね」

「別に監視なんていなくてもちやんとやるのにー」

「普段の行いがちやんとしてないから、信用されないうですよ」

虚の辛辣な言葉に、刀奈は泣いたふりをして一夏に抱き着いた。

「一夏君、虚ちゃんが苛める！」

「まあ、虚さんの言い分も分かるので何とも言えませんが、刀奈さんはもう少し仕事に真剣になってももらいたいですね」

「私だつて頑張ってるんだよ？ でも、一夏君や虚ちゃんと比べられるとどうしても見劣りしちゃうのは仕方ないと思うんだけどな？」

「それだけ期待されるといふ事なんですから、もう少しサボるのを止めてくれれば俺はそれで十分だと思いますがね」

「分かった……もうちよつと真面目にやる」

「はい、頑張ってくださいね」

刀奈の頭を撫でながら、一夏は虚にアイコンタクトを送り納得させた。

「では刀奈さん、俺は整備がありますので、解説お願いしますね」
「うん、一夏君も頑張ってるね」

一夏分を吸収した刀奈は、先ほどより血色の良い感じがすると虚は思ったが、ここで自分もと一夏に甘えれば一夏の作業時間を奪ってしまうと思えば我慢する事にした。

「では、お願いします」

虚にも一言掛けて一夏は簪と美紀と一緒に何時もの整備室へと向かっていく。その背中を見送ってから、虚と刀奈はマナカが待つ解説席へと向かった。

「虚ちゃんも一夏君に撫でてもらいたかったの？」

「当然ですけど、あそこで甘えると簪お嬢様や美紀さんも一夏さんに甘えだしたでしょうし、それは一夏さんの時間を奪ってしまう事になるので自重しました」

「良く我慢出来るわよね。私だったら絶対我慢出来ないと思うのに」

「お嬢様はもう少し我慢を覚えた方が良いと思いますが、本音よりは我慢してると思いますが今はこれ以上言わないでおきます」

「本音と比べられても嬉しくないけどね」

普段だらけてる本音の姿を思い浮かべ、刀奈は苦笑いを浮かべた。あそこと比べられるほど自分はだらけてないと思っっているのだが、更識所属では本音の次にだらけてると自覚している刀奈は、もう少し気を引き締めようと決心したのだった。

整備室に到着した一夏は、急ぎS Eの補給と簡易メンテナンスを始めた。互いに実力

者だけあって、派手に破損する事は無くとも、的確にダメージを与えるために脆い部分を狙う為、一試合ごとに破損がないかチェックするのも一夏の仕事なのだ。

「簪は近距離武器があるからまだ分かるが、美紀も良くこんなところ狙えるよな」

「一夏がISの弱点部分を教えてくれたんでしょ？　そこを的確に狙えるように訓練させられたんだから、出来て当然」

「本音でも出来ますし、最初から更識にいた人間なら全員出来ると思いますよ」

「まあ、まさか身内同士で戦う時に発揮されるとは思ってたがな。他の相手はそこまでガード堅くないし、急所を狙わなくてもいけるしな」

更識レベルで考えて堅くないなので、他の人間が聞けばツツコミを入れたかもしれないが、簪も美紀もそれが普通だと思っただけなのでツツコミは入れなかった。

「しかし、よく考えたら参加しなかった方が忙しいっておかしくないか？」

「更識の専用機を整備科の人にお願するわけにはいかないし、任せたとしても出来ないと思うよ」

「一夏さんが組み立て、メンテナンスまでしてるわけですからね。普通の整備士には調整なんて出来っこないですよ」

「この後、本音と静寐と香澄とエイミイも参加するんだろ？　どっちにしろ整備が大変

「そうだ」

「鈴が文句言ってたけどね」

「何で」

「更識所属相手に勝てるわけじゃないの！　って」

社会的地位を考えれば、鈴とエイミイは同じ扱いだが、鈴以外の四人は、更識所属という全世界のＩＳ操縦者が憧れる身分なのだ。例え候補生と言えども、鈴は自分が優位だとは一切思えない人を相手にしなければならないのだから、文句の一つや二つ言っても不思議はない。

「あくまでコンピューターがランダムに組んだグループだから、鈴はくじ運が無かったという事だな」

「とにかく、鈴が文句を言いたい気持ちも分からなくはないけど、決まった事に何を言っても無駄だよね」

「とにかく、美紀は決勝に向けて休んでおくといい。多分本音だと思うが」

「香澄さんや静寐さんも手ごわそうですけどね」

第二回戦の顔ぶれから、勝ちあがるとしたらこの三人の誰かだろうと、一夏も美紀も

簪も疑わなかった。エイミイも鈴も実力者だが、本音が頭一つ抜き出ているのはデータを見れば明らかであり、他の四人も認めている事なので仕方ないだろう。

本音の今後

刀奈たちの解説は整備室にもしつかり聞こえるようになっており、下手な事を言えば怒られると分かっているのか当たり障りのない解説をしている。その様子を聞いて、簪と美紀は苦笑いを浮かべていた。

「何だか刀奈お姉ちゃんらしくない解説だね」

「隣に虚さんもいるし、一夏に聞かれてるって分かってるんだらうね」

「それでもおふぎけするのが刀奈お姉ちゃんの良いところだったのに」

「そこは褒める箇所じゃないと思うんだが」

整備の手を止めずに会話に入ってきた一夏に、美紀は笑顔を浮かべて切り返す。

「でも、そこが刀奈お姉ちゃんの可愛らしいところだと思いますけど、一夏さんはそうは思わないんですか？」

「あの人は普通に可愛いから、特にどこがとは思ったことは無い」

「……そうなんですか。ちよつと羨ましいです」

「一夏、私は？」

刀奈が褒められた事に嫉妬した簪が、整備の邪魔にならないくらいの距離まで身を乗り出してきたのを受けて、一夏は少し驚きながらも平静に答えた。

「簪だつて可愛いと思つてるから安心しろ。もちろん、美紀の事も」

「ありがとうございます。一夏さんはちゃんと私たちの事を想つてくれていると分かつてはいるのですが、こうして言葉にして褒めていただけるとやはり嬉しいものですね」

「ありがとう、一夏」

「別にお礼を言われる事ではないと思うんだが」

一夏としては、もう少しかまつてあげた方が良いのではないかと常日頃から思つてはいるのだが、更識や生徒会の仕事で多忙を極め、最近までは亡国機業対策や箒の事で文字通り東奔西走していたわけなので、こうして彼女たちにかまつてあげられる時間が取れなかつたのだ。

「お姉ちゃんや本音は、忙しそうにしている一夏にも遠慮なく甘えてたけどね」

「そうか？ あの人たちはあれが普通だと思つてるから、甘えてるといふ感じではないと思うんだが」

「一夏さんはあの二人に甘すぎですよ。特に本音には、毎朝モーニングコールしてるら

しいじゃないですか」

「毎朝ではないが、起きてこない時にたまにな」

「それは私がお願ひした事だよ。私じゃ本音を起こす事は出来ないし、放つておいて遅刻になって織斑姉妹に怒られても反省しないのは目に見えてるから」

「まあ、本音が起きないのは今に始まつた事じゃないし、無駄な労力を使わせるのも一応悪いしな」

織斑姉妹に対しては大して悪いと思つていない様子の一夏ではあつたが、その理由に美紀は納得してしまつたのだつた。

「確かに本音は織斑姉妹に怒られるよりも一夏さんに怒られた方が効き目があるでしようしね」

「昔注意した事はあるんだが、本能には勝てないようだな。それで降睡眠について怒つたりすることは無駄だと分かつて放置したんだが……まさか高校生になつても治らないとは思つてなかつた」

「寮暮らしだから余計になんだろうけどね。実家からだつたら、もう少し早く起きなきゃという気持ち働くと思うから」

「どうだろうな。中学の時だつて、遅刻ギリギリまで寝てた記憶しかないんだが」

「あの時も一夏さんが叩き起こしてましたね。はじめの頃は異性を起こすのに手間取っていた一夏さんも、数ヶ月経つたら普通に起こせるようになってましたし」

「加減してたら起きないと知らしめられたからな」

本音の事でひとしきり盛り上がった会話だったが、次第に一夏の表情が暗くなつていつてるのに気づき、簪と美紀は首を傾げる。

「一夏、何かあったの？」

「いや、何時まで本音の面倒を見なきゃいけないのかと思つたらちよつとな……少しくらい自立してもらいたい」

「社会に出れば少しはマシになるのかもしれませんが、本音は更識の外には出ないでしょうし、簪ちゃんの専属メイドとして永遠にだらだらしそうです」

「私の所為なの？」

「そんなことは言つてないけど、虚さんのように刀奈お姉ちゃんの世話をしながら他の事もすれば、本音も多少は改善されるんじゃないかなつて思つただけ」

「一応俺の護衛なんだがな、アイツは」

一夏が零したセリフに、美紀は固まってしまった。確かに本音は一夏の護衛として専

用機を持つ事を許されたのだが、現状は美紀と碧がローテーションを組んで一夏の護衛を務めており、本音はたまにしかその仕事をしていない。実力は申し分ないのに、何故かだらける事に全力を注いでしまっているのだ。

「いつそのこと解任したらどう？ そうすれば少しは焦るかもしれないし」

「どうだろうな……大つぴらにだらだら出来るとか思いそうだし、解任したら専用機も持てなくなるからな。戦力ダウンは避けたい」

「今の更識に口を挿める団体など無いと思えますがね」

「面倒事はなるべく避けたいんだよ……政府相手に説明するのも大変なんだぞ？」

「知ってますよ。毎日のように疲れ果てて部屋に戻って来てましたし」

同部屋であるがゆえに知っている美紀ではあるが、簪もその事はだいたい知っていた。普通であれば政府との交渉は学校がするべきなのだが、その仕事を生徒会に——というか一夏に丸投げしていると刀奈から聞かされたからである。

「とにかく、本音の事はもう少し長い目で見る事にして、護衛の解任とかはその時に考える事にしよう」

「そうだね。私も、もう少し本音に厳しくしてみる」

「あまり効果はありそうじゃないけどね」

三人で苦笑いを浮かべたタイミングで、第二試合が終わったのだと気づいた。整備の方はとっくに終わっていたので、三人はそれぞれいるべき場所へと戻る事にしたのだった。

本音への信頼

第二回戦を目前に控え、参加する専用機持ちたちの纏う空気が変わった。特に更識所属四人と戦わなければならぬ鈴は、物凄くピリピリした空気を醸し出していた。

「リンリン、そんなにピリピリしてどうしたの〜?」

「アンタたちを相手にしなければいけないんだから、これくらいピリピリするのは仕方ないと思うけど?」

「まあ、確かにシズシズもカスミンも、カルカルも強いからね〜」

「一番の強敵はどう考えてもアンタでしょうが!」

「ほえっ!?!」

鈴に吠えられて本音は驚いたように身体をびくつかせたが、表情は一切変わっていない。これでも更識所属の実力者なので、この程度の勢いでは驚かすまでにはいかないのだ。

「とりあえず、特に報酬が豪華ってわけでもないんだし、気楽に行こうよ〜」

「食い意地の張った本音が、食堂のデザートのだダ券に惹かれないなんて、何かあるん

じゃないの?」

「何にもないよ? 単純に食べ飽きてきたから、特にほしくないだけだよ」

「アンタ、どれだけ食べてるのよ……」

普段から生徒会の仕事もせずに遊び倒していたはずなのに、何処からそんな金が出ていたのかも気になったが、それ以上に食べ飽きるくらい食べていた事に鈴は驚いたのだった。

「いっちょがデザートを作ってくれるんなら、やる気も出るんだけどね」

「アンタなら、頼めば作ってもらえるんじゃないの?」

「最近のいっちょは忙しいからね。前みたいにお願ひしても作ってくれないのだ」

「アンタが仕事しないからじゃないの?」

「それだけじゃないよ。だいたい、私が仕事しないのは今に始まった事じゃないもん!」

「それは胸を張って言える事じゃないわよ」

「確かに鈴の言う通りね」

「あつ、シズシズ。もう緊張は収まったの?」

「本音のポケポケな会話を聞いてたら、緊張してるのもバカらしく感じてきたわよ」

静寐の背後では、香澄とエイミーも頷いて同意している。図らずとも本音は、ライブルたちの緊張を解いてしまったのだった。

「本音には悪いけど、もう少し真面目になった方が良いと思うわよ」

「そうですね。一夏さんも忙しそうにしていますし、その護衛の美紀さんだつて忙しそうなのに、本音さんだけのんびりしてるのは他の方に失礼だと思えます」

「でも、私が働いても、いつちーたちの仕事を増やすだけだと思うんだよね。前におねーちゃんから『貴女は働かなくていいので、大人しくしていなさい』つて言われたし」

「それを真に受けて、今まで遊びほうけていたと?」

「いつちーたちの仕事を減らす為に、私は一生懸命遊んでるのだよ!」

この時、本音以外の四人は同じ気持ちを抱いていた。これはなんとしても本音を最初に脱落させ、もっと努力する事を覚えさせようと。

整備を終え解説席に戻ってきた一夏を出迎えたのは、一回戦の時に一緒に解説をしたマナカと、惜しくも一回戦敗退が決まったマドカの妹二人だった。

「マドカまでどうしたんだ？」

「負けてしまいましたし、兄さまの護衛として解説に加わるよう刀奈さんに言われました」

「せっかくお兄ちゃんと二人きりだったのに……まあ、アンタなら別にいいけど」

「という事ですので、よろしくお願いしますね、兄さま」

「ああ。ところで、こっちの二回戦は誰が勝ち抜いたんだ？」

「予想通り、ダリル・ケイシーが勝ち抜きました。専用機が無いとはいえ、元代表候補生の実力者ですからね。勝手が違ったとはいえ問題なく勝ち上がりました」

「二回戦は相川さんが勝ち抜いたから、決勝はもう少し満足出来る試合が出来るんじゃないか」

「次は夜竹さんが出場しますし、四回戦はティナさんがいますからね。こちらの部も盛り上がりを見せてくれるでしょう」

マイクの電源を入れる前から、マドカは妙に実況めいた喋り方をしてるなど、一夏は微笑ましきさを感じていた。あまり人前に出て何かをしたがるタイプの子ではないのだが、自分とマナカと一緒にという事で盛り上がっているのだろうと、微妙に父親めいた事を考えていたのだった。

「それでお兄ちゃん、向こうの二回戦の感じは？ やっぱり本音が有利なのかな？」

「さつき碧さんから報告があったんだが、どうも他の四人が打倒本音で団結したらしく、本音でも厳しいかもしれないと」

「どうせまた、本音が天然かまして四人に怒られたとかじゃないの？」

「ありえそうですね……本音さんはどうも抜けている感じがしますし」

双子の評価を聞いて、一夏は苦笑いを浮かべる。同学年とはいえ年下の二人にまでこのように思われているのに、本人はいたって動じていない事が一夏には分かってしまったからだ。

「とりあえず、本音が本気を出す程度には厳しい戦いになるんじゃないかと報告を受けたから、見てみたい気もするが仕方ない。俺たちはこつちの解説を真剣にするとうう」

「お兄ちゃんにそこまで言わせるなんて、本音ってただののんびりしてるダメっ子じゃないの?」

「マナカ……いくら本人がいらないからって、その言い方は酷くないか?」

あれでも国家代表レベルの実力はあるのにと、一夏は心の中で呟いたが声には出さなかった。そんなことはマナカもマドカも重々承知しているはずだし、言ったところで意味をなさないので呑み込んだのだった。

「とにかく、向こうの結果が届けられたら、恐らく二人の本音の評価も代わるんじゃないか」

「スサノオ、鶺鴒、久延毘古と更識所屬の専用機持ちを三人も相手にしなければならぬ状況だが、一夏は本音の勝利を疑っていない。その信頼が何処から来ているのか、マドカとマナカには分からないのだった。」

土竜の心配

アリーナに出た途端、本音はやけにピリピリした空気を感じた。普段はそんなことに敏くない本音ではあるが、今回だけははつきりと感じる事が出来たのであった。

「何だか見られてる気がするんだけど、何があつたのかな？」

『あれだけ挑発しておいてそんな認識なんですか？ 明らかに四人が徒党を組んで貴女を最初に撃ち落とす作戦に出るのでしょうか』

「挑発した覚えはないんだけどな……まあ、いつちーの顔に泥を塗るわけにはいかないし、少しは本気で頑張ろうかな」

『少しではなくたまには全力で戦つたらどうなんですか、貴女は……VTSでも相手をしたぶるような戦い方しかしいのですから、たまには全力で、完膚なきまでに叩き潰すような戦い方をしてみてもいいのではないのですか？ 更識所属の実力を知らしめる意味でも、その方が良いと思います』

「でもシズシズもカスミンもカルカルもリンリンもみんなお友達だし、リンリンに関しては何も代表候補生だから、完膚なきまでに叩き潰して自信喪失されたら大変だし」

何も考えていないようで、意外と考えている本音に土竜は小さく息を吐いた——ように本音には感じ取れた。

「どうかしたの、土竜？」

『いえ、普段からそのような事を考えて戦っているのですか？』

「ん？ 普段は面倒だから難しい事はいつちーやおねくちゃん、かんちゃんにお任せしてるよ」

『ですよ……貴女が普段からそんなことを考えているわけじゃないですよ』

「良く分からないけど、今日は多少なりとも本気で行かないとすぐ負けちゃうってのは分かるから、最初は四人の中で一番弱いリンリンから墮として行かないとね」

『代表候補生が一番弱いと言えるとは……相手の実力もしっかり把握出来ているのですね』

「他の三人はいつちーが造った専用機なんだし、どう考えてもリンリンのISが性能的にも一番弱いでしょ。中近距離主体のリンリンは、結構VTSでも相手したから大丈夫だと思うよ」

『貴女がそのタイプとの訓練を積んでいた時は、私ではなく他のISで遊んでた時だったと思いますが、大丈夫なのですか？』

「平気平気。最近では土竜との相性も良くなってきたら、多少無茶しても問題

ないでしょ?」

『後で一夏さんに怒られても知りませんからね……』

本音が無茶をすると、後で整備する一夏の負担が倍増するのだ。土竜はその事を心配しているのだが、当の本音は何も考えていないように首を傾げた。

「何でいちーに怒られるの?」

『忘れたのですか? 一夏さんが無茶をすれば皆さんが心配し、怒るように、一夏さんだって貴女たちが無茶をすれば心配し、お説教をするのですよ』

「別にいちーは優しいし、模擬戦で無茶をしたからって怒るような心の狭い人じゃないよ」

『まあそう思ってるならそれでいいですけど……本当に知りませんからね』

自分は釘を刺した、と土竜は後で一夏に言い訳が出来るように行動し、その通りに本音は行動するようだと感じ取った土竜は、盛大にため息を吐きたい衝動に駆られたが、彼女は擬人化する事も出来ず、当然のように呼吸もしていない。なのでため息は吐けずに、雰囲気だけ本音に伝える事にしたのだが、本音には土竜の感情の機微を感じ取るだけの感性は無かったのだ。

闇鴉から土竜の感情を受け取った一夏は、マドカとマナカが隣にいるのも忘れ盛大にため息を吐いた。そんな一夏を見た妹二人は、自分たちが何かしてしまったのかと慌てた様子で一夏の顔を覗き込んだ。

「兄さま、私たちが何かしましたか？」

「無意識にお兄ちゃんに心配されるようなことしちゃった？」

「ん？ あつ、いや……お前たちは何もしてないさ」

泣きそうな顔をしている妹二人の頭を優しく撫でながら、一夏は闇鴉から伝えられた本音の状況を説明する。

「つまり、四対一の状況になるというのに、本音は全く慌てていないという事ですか」

「あの人、普段からのほほんとしてるけど、実力はあるんだよね？」

「まあ、普通に戦えば俺は勝てないだろうな。簪や美紀とさほど変わらない実力はあるんだが、どうにもその実力を無駄にしてるように思えてならないんだ」

「兄さまがそこまで評価してくださっているというのに、本音はどうしてやる気を出さないのですか？」

「基本的にのんびりしたいという考えの持ち主だからな。面倒な事は人に任せて、自分のはのんびりゆつくりしたいと考えてるんだろ、たぶん」

「でもお兄ちゃん、やる時はやるって自分で言ってたから、出来るって事は自分でも分かっているんだよね？」

「たぶんな。確かにやる時は本当にやっていたし」

前に筈が襲撃してきた時も、本音が冷静なツツコミを入れて筈を激昂させ動きを鈍らせた実績がある。その事を知っている一夏は、今回はどう動くか気にはなっていたが、心配はしていなかった。

「兄さまは本音を信頼しているんですね」

「まあ、静寂か香澄辺りが本音を負かしてくれば、アイツも少しは訓練を真面目にやるかもしれないから、負けてくれると面白いんだがな」

「じゃあお兄ちゃん、その二人の機体に今から私が作り出したIS強化薬を打ち込めば——」
「そう言うのは駄目なんだからな」

怪しい薬を取り出したマナカに、軽くチョップを入れて、一夏は開始間近の非専用機持ちの部第三試合の顔ぶれを眺めてたのだった。

本音VS四人

戦闘が始まってすぐ、鈴は本音に特攻を仕掛ける。もちろんこれで本音がビビるとは鈴自身も思っていないし、この攻撃が通りとも思っていない。

「凄いやる気だね、リンリン」

「更識の中でも、一夏に近い相手はこれくらいでも届かないのね、分かってたけど」
「結構危なかったけどね」

仕返しと言わんばかりに、本音は鈴目掛けて攻撃を仕掛けようとして、背後から来る気配に気づきそちらに攻撃を放つ。

「今度はカルカルかく。かなり危なかったよ」

「完全な不意打ちだったのに、これも止めるの!？」

「気配を隠しきれてなかったよ」

「アタシだっているわよ！」

「知ってるって。だから、少し大人しくしてて」

鈴目掛けてエイミィを投げつけ二人を離脱させ、後方で隙を窺っていた静寂と香澄に視線を向ける。

「いくら待つても隙は生まれないからね」

「そうみたいね……いつの間にか間延びもしなくなってるし、随分と本気みたいね」

「後でいっちゃんにもみられるんだし、あんまり情けない戦いをしたら護衛から外されちゃうもん」

「本音にとつて、そつちの方が良いのでは？」

「いっちゃんーの事は心配してるから、護衛から外されると寂しいんだよ。これでもかんちやんの次くらいには気配察知が得意だし、戦闘だってマドマドには負けないんだからね」

「普段のほほんとしてるのは、自分の実力を隠すためつてわけ？」

「そう言うわけでもないんだけどね」

あれはあれで楽だからと、本音は笑顔で二人にそう告げる。呆気にとられた二人は、本音から見れば隙だらけでしかなかったが、あえて攻撃は仕掛けなかった。

「何で攻撃しなかったの？」

「だって、カスミンの久延毘古でバレてたんでしょ？ 私が攻撃を仕掛けたらカウン

ターでシズシズが私に攻撃をするって作戦だったんでしょ」

「……これが一夏さんが言っていた、本音の野生の勘ですか」

「しかも今はやる気が満ちているから、私たち二人じゃ手に負えないわよ」

鶺鴒と久延毘古でも、本音には敵わないと二人は自覚している。そもそもお情けで専用機を与えられた自分たちと、実力を認められて専用機を与えられた本音とではそもそも地力が違うのだ。

「呆けてるんじゃないわよ！」

「もう一回！」

「ほえ、リンリンもカルカルも復活早いね。私ももう少し本気で行かないと！」

エイミイの攻撃をいなし、鈴の砲撃を弾き返す。客席に飛ばされた砲撃は、織斑姉妹が目に見えぬ速さで撃ち落とした。

「あつちはおつと人外だね……まあ、いつちーが客席の安全を考慮しての審判だし、当然なんだろうけどね」

「今のは撃ち取ったと思ったのに……」

「残念だったね、リンリン」

まだまだ余裕だという表情を浮かべる本音に対して、既にいっばいっばいの鈴はとりあえず本音の間合いから抜け出そうと後ろに移動する。

「いいの？ リンリンが離脱したらカルカルが撃墜されるけど」

「私だって候補生としての意地くらいあるわよ！」

「それは、マドマドの零落白夜！ さすがいっちー、面白いものを積んでるね」

触れたらマズいと一瞬で判断した本音は、ギリギリのタイミングでエイミイの攻撃を躲し、背中に一撃を喰らわす。だがその隙を突かれ静寐の攻撃が掠ってしまった。

「あーあ、四人相手に完封出来ればいっちーも褒めてくれると思うってたのにな」

「そこまでナメられてるとは思ってたわ」

「ナメてないよ。出来るとは思ってなかったけど、狙わないと出来るかもしれないことも出来ないからね。まあ、カスミンがいる時点で難しいのは分かってたし、シズシズも最近めつきり力をつけてるのも知ってたから」

仕返しとばかりに、本音が静寐に攻撃を仕掛け、バランスを崩した静寐にそのまま体当たりを喰らわせた。

「四対一で厳しいなら、まず一人墮とせばいい」
「っ！」

この四人の中で一番弱いと判定されたのは鈴。背筋が凍る思いをしながら、鈴は本気の本音相手に必死になって回避行動を試みたが、普段の本音からは考えられないくらい速さで攻撃され、なすすべなく撃ち墮とされた。

「まずは一人」

「何だか人斬りみたいな雰囲気ね」

「次、エイミイさん！」

「予知しても意味ないもんね！」

香澄がエイミイに危機を知らせるが、既に本音はエイミイに詰め寄っていた。

「更識製の専用機だから何があるか分からないけど、これなら！」

「残念！ そう簡単に撃ち墮とされないわよ！」

「リンリンは簡単に喰らってくれたのに！」

エイミイは回避ではなく攻撃を受け止め、その勢いをいなそうとしてきた。本音は受

け止められた事に若干動揺したが、すぐに立て直し蹴りを放った。

「ぐっ！ まさかISで蹴つてくるとは」

「距離を作るのに最適でしょ？ そっちは蹴られた反動で下がり、こっちは蹴った反動で距離を作れる、いっちーが教えてくれたんだ」

「さすが一夏君つてところね。やれることは何でもやるなんて」

「おっと、シズシズもいい感じで邪魔だね」

「私もいます！」

「知ってるよ、カスミン！」

個々で攻められたら勝ち目はないので、三人は乱戦に持ち込んで本音の集中力を削ぐ作戦に移行する。それでも本音の集中力はすさまじいもので、時間差で仕掛けた攻撃も完璧に躲され、それに対するカウンターをもろに受けてしまい、三人は一時態勢を立て直す事を強いられ、その隙に三人ともSEをゼロにされたのだった。

『はい、そこまで！ 勝者布仏本音』

『負傷させなかったただけまともになったのでしようね』

解説席で刀奈と虚が冷静に本音の実力を分析しているのを聞きながら、静寂と香澄は

まだまだ実力不足だということを知らしめられたのだった。

簪の地雷

久しぶりに派手に戦った所為で、ピットに戻ってきた本音はへろへろな状態だった。

「何で勝者のアンタが一番ダメージを負ってる風なのよ」

「あんな激しい動きは久しぶりだったし、少しでも気を抜けば負けちゃうと思ったから最後まで全力だったんだよ」

「アンタが全力を出したのにも驚きだけど、そこまで疲れるなんて思わなかったわよ……アンタ、体力だけは凄いつて思ってたから」

「体力だけじゃないよー!」

冗談だと分かっているにも反応せずにはいられなかった本音に、鈴は笑いかけ手を出した。

「ほえ?」

「アンタのお陰で自分の課題が見つかった気がするわ。戦えてよかった」

「リンリンの役に立てたなら、本気を出してよかったよ」

「気楽に言ってるけど、アンタのご主人様のライバルになるかもしれないのよ? 分

かっているの？」

「だいじょーぶ！ 刀奈様は私の三倍は強いから」

「じよ、冗談でしよ……」

本音相手でも苦戦したというのに、もし代表に選ばれ、日本を相手にした時の事を想像して鈴は戦慄を覚えた。確かに刀奈の強さは映像でも見たことがるので知っているが、体験した事があるであろう本音が言うのだから、三倍という数字もあながち嘘ではないのだろう。そんな強者を相手にしなければいけないとなると、出来る事なら代表になりたくないという気持ち心が心の何処かで芽生えてしまった。

「三倍は言い過ぎだと思うけど、確かに本音よりは強いわよ？」

「あつ、刀奈様」

「お疲れ様。更識所属の面目は保てたようね」

「いっちに怒られたくないですからね」

「風さん以外は整備室に向かってください。一夏さんと簪お嬢様がお待ちですので」

刀奈と虚の登場に一瞬ざわめいたが、ここにいる人間はそこまでミーハーではないし、何回かあった事もあるのでそこまで盛り上がることは無かった。

「それじゃあリンリン、また後でね〜」

気軽に話しかけて来る本音だが、鈴としては完敗した相手なのだ、何も思わないというわけにはいかなかった。

「今度はあたしが勝つんだからね！」

「お〜、リンリンもやる気だ〜」

候補生のやる気に火を点けられたと、本音は何処か嬉しそうだったが、彼女の瞳は喋り方とは裏腹に本音だった。

「私だって、簡単に負けてあげられないけどね。これでもいっちーの護衛としてのプライドがあるんだから」

「だったらもう少し真面目にやりなさい」

「おね〜ちゃん……せつかくカツコつけたんだから、今だけは見逃してよ〜」

虚にツッコまれ素に戻った本音だったが、鈴はさっきの言葉が嘘ではないと理解していた。彼女でもあのような気持ちがあるのかと思いつつも、鈴は静かに本音との再戦を誓ったのだった。

静寂と香澄、エイミイと共に整備室にやってきた本音は、ノックもせずの中へと入っていく。

「ちよつと本音！ ノックぐらいしないと」

「へーきだつて、いつちー！」

「相変わらず礼儀を知らないヤツだな……」

整備室の奥から一夏が頭を掻きながら現れ、本音の不躰な態度に不満を溢したが、それ以上何も言わずに四人を奥に案内する。

「一夏君、なんだか疲れてない？」

「むしろ疲れてないと思われていたのか、俺は」

「まあ、解説に整備と大忙しだもんね」

「妹二人を相手にするのは疲れた……」

微妙に疲れ方が違うような気がしたが、これ以上言っても意味は無さそうだと思ひ静寂は黙つて一夏の後について行くことにした。

「それにしても、随分と派手に戦つたらしいな」

「たまには本気を出さないとね」

「本音はもう少し本気を出し続けた方が良いと思うけどね」

「なにさく！ かんちゃんだって、久しぶりに美紀ちゃんに負けて凹んでるんだと思つてたよ」

「……凹んでない」

どうやら地雷だったらしく、本音の一言に簪の雰囲気が一変した。さすがの本音も自分が踏み抜いた事を自覚し、どうしようと視線で一夏に助けを求めた。

「簪のケアも含め、後は俺がやっておくから四人は専用機を置いて食堂で休憩でもしてくれ。終わったたら本音の携帯に電話するから」

「でもいつちー、私たち財布も何もかも更衣室に置いてきちちゃってるから、お金もなければ電話も持ってないよ」

「なら、一時間もすれば終わるだろうから、その時間を目安にここに戻って来てくれ。金はこれで足りるだろ」

財布から一万円札を取り出し、本音ではなく静寂に手渡す。何故自分じゃないのかと憤りを覚えた本音ではあったが、昔お遣いを頼まれて預かったお金を全て使い切った過去を持っている事を思い出しクレームを入れるのは寸でのところで抑えたのだった。

「それじゃあ一夏君、この子の事お願いね」

「お願いします」

「元々更識の人が造ったものだし、改造とかは気にしなくていいからね」

本音も待機状態の土竜を一夏に手渡し、三人と一緒に食堂へと向かう。残された一夏と簪は、微妙に気まずい空気を感じていた。

「やっぱり悔しかったのか」

「当然でしょ。美紀はパートナーであると同時にライバルなんだから」

「負けたのは事実だが、過去の対戦成績は簪の圧勝なんだろう？」

「だから余計に悔しいんだよ……学校行事とはいえ、大勢の人前で負けたのは……」

「その悔しさを忘れずに、明日から頑張るんだな」

しょんぼりしている簪の頭を軽く撫でて、一夏は整備室の奥へと向かおうとして、簪に服の裾を掴まれた。

「どうかしたのか？」

「ちよつとだけ、一夏の胸で泣かせて」

「……ほら」

泣いて発散出来るならと両腕を広げ簪を受け入れる一夏。その後十数分泣いてから、簪は物凄い勢いで整備の手伝いをしたのだった。

料理の腕前

一夏と簪が整備室で専用機の調整を行っている頃、一夏にお小遣いをもらった四人は食堂にやって来ていた。

「いっちーがお小遣いくれるなんて珍しいな〜」

「そうなの？ 一夏君って本音やマドカに甘いところがあるから、頼めばくれるのかと思ってた」

「そこらへんはきびしいんだよ〜…まあ、たまにお菓子作ってくれたりするから、それでも嬉しいんだけどね」

「一夏さんのお菓子ですか…：…食べてみたいです」

「噂では一夏君、この学園の誰よりも料理が上手だって聞いたけど、それって本当なのかな」

エイミイが呈した疑問に、真相を知らない静寂と香澄は少し考え込む。唯一真相を知っている本音は、一切表情を変えずに食堂のメニューを眺めていた。

「あれ？ おーい、美紀ちゃん」

「本音？　どうかしたの？」

「いっちゃんとかんちゃんかメンテナンスするから、私たちはここで待機なのだよ！」

「そうなんだ。ところで、三人は何をそんなに悩んでるの？」

美紀に尋ねられた三人は、疑問の真相を知っているであろう二人に質問する事にした。

「一夏君の料理って食べた事無いんだけど、噂ではこの学園の誰よりも上手だって言われてるんだけど、それって本当なの？」

「本当だよ。ねっ、美紀ちゃん」

「確かに一夏さんの料理は美味しいですし、少なくとも学生レベルで太刀打ち出来るものではないですね」

「勉強が出来て、I Sの気持ちが出来て、果ては料理上手……弱点とか無いわけ？」
「いっちゃんーは女の子が苦手だよ」

「そう言えばそうだったわね。最近では普通に接してたから忘れてたけど、一夏君って最初は私たちの事も警戒してたんだっけ」

今でこそ普通に会話する事が出来るが、入学当初は一定の距離を保っていても会話す

るのは困難だったのだ。だがそれは弱点というよりも過去のトラウマなので、生まれ持ったものではない。

「他には？」

「一夏さんはあまりお風呂は好きじゃないですね」

「研究に没頭する癖があるから、シャワーで済ませてたからね」

「後は甘いものが得意じゃないですね」

「なんかあまり弱点らしいものは無さそうね」

いくら更識所属が相手とはいえ、一夏の弱点を簡単に話すわけにはいかないのです、美紀も本音もテキトーにはぐらかしたのだが、実際は一夏に弱点らしいものが無いので、はぐらかしたというよりは知らないと言えなかったのが正解だろう。

「あつ！ 一つありましたね、一夏さんの弱点らしい弱点」

「なに？」

「織斑姉妹＋篠ノ之博士の三人組」

「一緒にいるとイライラしてくるって言ってたね、そういえば」

「世界的には凄いい人たちなのに、一夏君にとってはイライラの対象でしかない……」

まあ、本性を知ってるからこそ言えるんでしょうけど」

「後はシノノンも苦手だったね〜」

「トラウマの元凶ですからね」

「そう言えば、復帰するか処分するかの判断ってまだなの？」

「後半月くらいで判断するそうです」

「噂では生まれ変わったとか言われてるけど、あれだけの事をした人が簡単に生まれ変われるものなのかしら？」

箒の現状を正確に知っているのは、更識所属の中でも縁者に近いものだけで、同じ更識所属でも静寂たちには情報はいつていない。だから噂程度でしか箒の現状を把握していないので、生まれ変わった箒の事は半信半疑なのである。

「シノノンはすっごく変わったっちゃったらしいよね〜」

「お会いしてきた一夏さんが凄く動揺してましたからね」

「美紀ちゃん、何でいつちーが動揺してるって思ったの？ 私にはいつもどーりのいつちーにしか思えなかったんだけど」

「まあ、その辺は同室だから分かるものだからね。とにかく、あの反応を見れば篠ノ之さんがだいぶ変わっているんだって事が分かるわよ」

「生徒会長の更識先輩も心配いらないうって言ってたし、実際に会ってきた小鳥遊先生も

あのままなら大丈夫とか言ってたから一応は安心してるんだけど、あの篠ノ之さんだからね」

「実際に会うまでは半信半疑で良いと思いますけどね」

美紀の纏めに、静寐たちは頷いて本音のように食堂のメニューを眺め始める。

「ここの食堂のいいところは、デザートが豊富って事よね」

「でも、全制覇したからあまり新鮮味がないんだよね」

「何時の間に全制覇してたの？」

「放課後暇だから、いろんな人とお菓子食べてたらいつの間にか」

「暇って……仮にも生徒会役員なんだから、少しは手伝うとかしないの？」

「だって、いつちーから本音はのんびりしてていいって言われたから」

「そういうことなんだ……」

つまり本音は戦力外だと一夏は考えているようだ。美紀は今の話で理解した。刀奈や虚も同様に思っているのかは定かではないが、本音が来ても仕事が増えるだけだという考えは美紀にも理解が出来る。

「やっぱりいつちーのお菓子が一番だね、これも美味しいけど」

「一夏さんのと比べるのは食堂の方に失礼だと思っけどね。一夏さんはその気になればお菓子店でも開けるレベルだから」

「そこまでなんだ……」

一夏の料理の腕前を正確に知らない三人は、美紀の言葉に驚きを示す。実際そこらへんのお菓子店よりもレベルの高いものを作るので、美紀としては割と本気の感想だったりするのだ。

「確かにいっちはプロ級の腕だからね」

本音の言葉もいつも以上に真剣味を帯びていて、三人は一度でいいから一夏が作ったお菓子を食べてみたいと思ったのだった。

モブの嫉妬

専用機持ちの部決勝は美紀VS本音に決まり、非専用機持ちの部は既にティナ、ダリル、清香の三人が勝ち抜け、残る一枠を争う第四回戦が行われている。そしてこの第四回戦で注目されているのは、一年一組の夜竹さゆかである。

彼女は目立った特徴はない代わりに、欠点もないという一夏から専用機に近いと称される人物である。

「頑張つてね、さゆか」

「清香は勝ち抜いたからとりあえず気が楽でしょうけど、私はこれからだもん……緊張してくるよ」

「更識君が見てないだけマシでしょ。私なんてバツチリ見られてたんだから」

現在一夏は、専用機の調整を行っているため解説席にはいない。一夏の代わりに刀奈と虚が座っており、元からいた織斑姉妹（妹双子）もしっかりと座っている。

「いっそのこと更識君に見られてた方が、てんぱり過ぎて落ち着けたかもしれないわよ」
「言ってる事が微妙に良く分からないけど、とりあえず頑張つてね。決勝で待つてるわ」

清香に背中を押され、さゆかは覚悟を決め——ようとして自分を見てる周りの視線に気づき萎縮してしまった。幸か不幸か、対戦相手に目立った強者はいなかったが、自分以外全員三年生というなんともやりにくいグループになってしまったのだ。

「あの子確か、更識君と同じクラスの子よね」

「いいわね、労せず更識君とお近づきになれるんだから」

「ただクラスメイトってだけでコネを持てるなんて羨ましいわ」

どうやら対戦相手の内三人はまだ内定をもらっていないようで、一夏と付き合いがあるさゆかを妬んでいる様子だった。残るもう一人は、自分の世界に入り込み試合まで集中力を高めているようで、こちらの様子には気づいていなかった。

「私だって好きで更識君と同じクラスになったわけじゃないのに……そもそも内定を貰えないのは、貴女たちに問題があるからじゃないの」

心の中でそう思っても、さゆかはそれを口にするこはしない。ここで騒ぎを起せば審判の真耶と紫陽花が飛んできて、すぐに没収試合にされてしまうだろう。そうするとさゆか自身にも被害が及ぶので、文句を言いたい気持ちを抑え込み、僻みをつてくる

三年生を無視し続ける。

「聞こえてるんでしょ、このブス」

「アンタなんか更識君になんとも思われてないわよ」

「就職先に困つても助けてくれないわよ」

「……………」

嫉妬もここまでくると醜いものだと思つたが、その嫉妬の矛先が自分で無ければ気にしなかつただろう。だが罵詈雑言を向けられているのは紛れもなく自分で、聞くに堪えない言葉をずっと聞かされて大人しくしていられるほど、さゆかは強くなかつた。

「あの——！」

「貴女たち、失格」

「なつ、小鳥遊先生!？」

「一夏さんの想像通りでしたね……そんな風だから、貴女たちは大企業に内定をもらえないのよ。心を入れ替えるか、中小企業に狙いを変えて活動するのね。更識の傘下で良いたら紹介出来るかもしれないけど、どうする?」

「……………」

「とにかく貴女たち三人は今から職員室で反省文を書いてもらいます。監視には織斑姉

妹をつけて良いと一夏さんから許可ももらっていますので、そのつもりで」

嫉妬に狂った所為で大変な目に遭ったと、三人は後悔し改心して就活を頑張ったのだが、それはまた別の話。さゆかはやイミングよく現れた碧に驚きながらも、助けてもらったお礼を言うのだった。

「あ、ありがとうございます」

「お礼は一夏さんに言ってください。組み合わせ表を見て、もしかしたらあり得るかもと気にしていたのは一夏さんですから」

「更識君って、IS無しでも未来視が出来るんですか?」

「一夏さんの未来視というより様々な可能性を考え、最悪を避けれるように行動してただけですから」

「最悪を避ける……つまり、小鳥遊先生がここにいるのも、最悪の状況を回避する為だったのですか?」

「そうね。一夏さんが考えた最悪は、貴女とあの三人が喧嘩を起こして没収試合になること。そのせいで巻き込まれた彼女の内定が取り消されることね」

「あの先輩は何もしていないのに、ですか?」

「止めなかったという事で同罪に見られる可能性もあるからね……どこの企業も、更識

に對抗しようと優秀な人材を求めている。何もしなかったとはいえ没収試合に関わっていた人物を手元に置きたいかどうかは、少し考えればわかるでしょうしね」

碧の言葉に、さゆかは少し疑問を抱きながらもだいたいは理解出来た。だがその結果次の試合は彼女との一騎打ちになり、学年の差が大きく立ちふさがる展開になってしまったと漸く気づいたのだった。

「一対一で勝てるでしょうか……」

「大丈夫じゃない？ 夜竹さんは更識所属相手に訓練を積んでいるし、織斑姉妹のしごきにも耐えてきたんだから」

「あれは更識君がカリキュラムの一部を変更してくれたからですよ……あのまんまでしたら、きつと途中で倒れていました」

「あれね、一夏さんのが本来の内容で、織斑姉妹のカリキュラムの方が異常なのよ。だから一夏さんの方のカリキュラムをクリア出来たのなら、平均以上って事だから自信持ちなさい」

碧にそう言われ、さゆかは少しだが自信を持つ事が出来た。例え負けたとしても、自分はまだ一年、三年生に負けて当然だという気持ちに切り替える事が出来たのだった。

「ありがとうございます」

「お礼は勝ってからでいいわよ」

もう一度背中を押され、さゆかは貪欲に勝ちを求める事にしたのだった。

同い年

非専用機持ちの部で問題が発生したと報告を受けた一夏は、小さくため息を吐いて調整を続けることにした。

「一夏の予想通りだったね」

「こんな予想、出来る事なら外れてほしかったものだがな」

「でも、内定がもらえないのを人のせいにするのは良くないよね」

「簪にその気持ちが分かるとは思わないが」

既に候補生としての地位を確立しており、来週にでも代表に昇格するのではと言われている簪に、内定をもらえない人の気持ちは分からないだろうと一夏は指摘する。

「一夏にだって分からないでしょ？　そもそも一夏は、内定を出す方なんだから」

「人事には口を挿んでないぞ」

「でも、一夏が認めたから更識所属は大分増えたじゃない？　あれも人事じゃないの？」

「戦力アップは政府から頼まれた事だが、日本所属にして更識のコアを解析されるなんて事態になったら面倒だから更識所属にしただけだ。尊さんにも報告はしてる」

「まあ、ご当主様がやるって言ったのをとやかく言える人はいないからね」

箒の件で力押しをしたため、既に一夏が更識の当主であると知られてしまったので特に周りを気にせず話す簪と一夏。実際一夏が当主であると知られても、更識の信頼は落ちる事無く、むしろアメリカの不正を暴いた事でさらに上がっているのだ。

「来年から一夏は『楯無』を名乗るの?」

「バレてしまった以上、そうなるだろうな。まあ、気にせず一夏って呼んで構わないから」

「私たちは当然そう呼ぶけど、一応従者である虚さんと本音、碧さんはマズいんじゃないかな?」

「公の場ではさすがにマズいだろうが、プライベートの時まで気にすることは無いだろう」

「まあ、一夏のお嫁さんになっちゃえば、誰も文句は言えないだろうしね」

「言っておくが、重婚は出来ても俺はまだ十八になってないからな? そこは守らないと駄目だろ」

「そうだったね……一夏って大人びてるからつい同い年だつて事を忘れちゃうんだよね」

「あのかな……」

年相応に見られないのは一夏も自覚しているが、同じ年で家族である簪にまでそう言われると、さすがに心にダメージを負ってしまう。

「い、一夏？ 何だか暗くなってる？」

「そりゃ、簪の同じ年だつて事を忘れられてるつて言われて、シヨックを受けないわけないだろ……」

「ごめんなさい……でも、本音だつて同じ年だつて事を忘れる事があるし、一夏だけじゃないんだよ？」

「あれは幼過ぎてだろ？ 俺はそうじゃないし……」

「だからゴメンつてば！」

簪が本気で焦り始めたので、一夏は凹んでいるような雰囲気無理に明るく変えて簪を宥めた。

「そこまで気にしてないから、簪も気にするな」

「でも、一夏無理してる……」

「まあ、無理してないと言えば嘘になるが、簪がそこまで落ち込むとは俺も思ってたから……悪かった」

「何で一夏が謝るの？ 悪いのは私なのに……」

今度は簪が本気で凹み始めたので、一夏はどうしたものかと腕組みをし、ぎゅつと簪を抱きしめた。

「年相応に見られないのは俺も分かってるから。簪がそこまで気にすることは無いんだ」

「ゴメン……でも、一夏の家族として自覚が足りなかったのは私が悪いから。そこはごめんなさい」

「俺も気にし過ぎたな、悪かった」

「一夏、あつたかい……」

「ん？」

安心しきったのか、簪から力が抜け寝息が聞こえてきた。

「忙しかったからな。四人の専用機を調整して、その前には美紀と激闘を繰り広げてたんだから」

「そんなこと言うなら、一夏さんだって調整と解説、そして妹の相手と忙しいじゃないですか」

「お前はまた……」

不意に人の姿になり話しかけてきた闇鴉に、一夏は小言でも言おうかと思つたが無意味だと思ひ直したため息を吐くだけにとどめた。

「簪さんは私が部屋までお送りしておきますので、一夏さんは最終調整をしちやつてください」

「別に仮眠ならそこで出来るだろ。布団だつてあるんだし」

「一夏さんが使つてる布団に簪さんを寝かせるのは私が面白くないので」

「I Sも嫉妬するのか」

「当然ですよ！ 一夏さんがお造りになつた専用機にはそれぞれ自我がありますし、感情だつて人並みにあるんですから」

「まあ知つてるが、嫉妬の感情は初めて見たかもしれん」

「普段は思つてるだけで表に出しませんから。てか、一夏さんが気にしてないだけで、結構嫉妬してるんですが」

「そうなのか」

「だつて一夏さん、美紀さんにばっかり甘えるですもの！」

幼児退行を起こしたり、体調がすぐれない時にそばにいる事が多いだけだが、他の相手からしてみれば美紀の事は羨ましいのだろうと一夏は思ったのだった。

「たまには他の人に甘えたりするのもいいと思いますよ？ 例えば私とか」

「お前は人じゃないだろ？」

「そこらへんは気にしたら駄目です」

簪を背負い整備室から出て行つた闇鴉を見て、一夏は確かに人っぽいと思つたのだった。

「さてと、本音も美紀相手に何処まで出来るか楽しみだな」

『一夏さん的にはどっちに勝つてほしいのですか？』

「まあ、実力的に考えて美紀が勝つだろうが、本音も実力者に勝てればやる気になつてくれるかもしれないし」

『本音は誰に勝つてもやる気にはならないと思いますけどね』

「君がそう言うなら、きつとそうなんだろうけどな……」

闇鴉がいなくなったことで、土竜が話しかけてきたが、一夏は普通に受け答えをして、苦笑いを浮かべながら調整を再開したのだった。

テイナの思惑

三人失格となった為、さゆかは真つ向勝負を挑み辛くも勝利したのだった。ピットに戻ると、決勝で戦う清香とテイナが勝利を称えてくれた。

「お疲れ様。真つ向勝負で良く勝てたね」

「いきなり二人だけって発表されたから何があつたかと思つたけど、就職先が見つからない三年生の嫉妬だつたのね」

「それも更識君がお見通しだつたみたいで、小鳥遊先生が助けてくれたんだけどね」

「これで決勝進出の四人の内、三人が一年生だね」

「テイナは候補生だから当然だけど、私と清香は入学当時から考えると快挙だね」

同じクラスに一夏をはじめとする実力者がいるので、一組の指導は他のクラスと比べても質が高い。織斑姉妹が指導する事もあるが、基本的には専用機持ちを中心としたグループで、専用機持ちに指導してもらおう事が多いのも原因の一つではあるが、やはり一番は一夏にいいところを見せたいという乙女心だろう。

「でも、決勝で一番厄介なのはダリル先輩よね……」

「元アメリカ代表候補生、元亡国機業の一員、そして三年生……実績が私たちとは違うもの」

「更識君も要注意と判断するほどの実力者だものね。同じ候補生としてもレベルの違いは実感してたわ」

同じくアメリカの候補生であるティナは、観客席で今の一戦をのんきに眺めていたダリルの顔を思い出し苦々し気に呟いた。

「次期代表の呼び声も高かったのに、あの人はそんなことに興味なさそうだったけど」

「専用機だけが欲しかったみたいだしね。それに、代表よりも亡国機業としての活動の方が主だったらしいし」

「今回は専用機の申請が下りなかっただけで、実力的にはこっちの部の誰よりも高い人だもんね……フォルテ先輩が参加したら、私たちの誰かは負けてたでしょうけども」
「私はこの大会で活躍して、更識君を通してどこかの国に拾ってもらわないと……このままじゃ沈む船から逃げ出せない」

既にアメリカにはコアが無く、更識に喧嘩を売っている最中で経済的にも厳しい状況なのだ。そんな国の候補生などやってられないと、ティナ以外は自力で亡命したりして

いるのだが、IS学園にいるせいでティナはなかなか移籍出来ないのだ。

「IS学園所属って、思ってたより不利なのよね……」

「他が強すぎて、ティナの実力じゃ引き受けてもらえないの?」

「それもあるけど、篠ノ之さんの悪評が邪魔してるつてのもあるかしらね……噂では生まれ変わったとか聞いたけど、勘弁してもらいたいわよ」

「まあ、決勝まで進んだんだし、後で更識君に話でもしてみたら? 上手く行けば更識所属になれるかもしれないわよ」

「そうなれば最高なんだけどね……でも、更識所属になったところで、国家代表は難しいわよね……まあ就職出来たも同然だからいいんだけど」

この試合後の自分の運命はどうなっているのかと、ティナは様々な思考を巡らせ、全てが上手く行けばいいと祈ったのだった。

決勝の相手が本音に決まり、美紀は精神統一を止め本音の闘い方を思い出していた。
『簪に勝ったんだから、本音に負けることは無いよね？』

「本音も実力者、しかも一夏さんが造った専用機を持つてる。油断は出来ないし、絶対に負けないなんて言い切れる相手じゃないことは金九尾だつて知ってるでしょ」

『まあね。一夏お兄ちゃんが本音の為にどこまでも冷静に作られた土竜は、的確に本音に指示を出せる。そして本音も驚異的な野生の勘で久延昆虫の未来予知すら覆すからね』

「普通ならそんなことありえないんでしょうけども、本音の実力は底が見えないからね」

同じ更識所属として、幼馴染として本音の事を良く知っているからこそ、美紀は油断

など一切しない。普段のだらしのなさに騙されがちだが、本音はまごう事なき実力者、相性さえ良ければ簪のパートナーは彼女だったかもしれないのだ。

『本音は基本的に遠距離でも近距離でも出来るけど、やる気がなかったからね』

「VTSで誰の専用機でも巧みに使いこなす器用さも見せてたから、もしかしたら刀奈お姉ちゃんよりも強いのかもかもしれない」

『それは言い過ぎじゃないかな？ 一夏お兄ちゃんだって、そこまで強いって見抜いてたらあそこまでだらだらさせないと思うけど』

「確かに一夏さんの人を見る目は、私なんかとは比べ物にならないけど、実力があるからあえてだらだらさせているという事もあると思う。相手を油断させるには、能無しだと思わせておく方が有利だし」

『気にし過ぎだと思っけどね。だって、頭脳は美紀よりも悪いんだし、見た目通りの実力だと思っけど』

「頭の事は言わないでよ……」

この大会が終われば定期試験が待っている。美紀にとって実技は問題ないが、座学の方は赤点すれすれ、下手をすれば赤点になり得る成績なのだ。

『候補生の補正があるから一学期は平気だったんだっけ？』

「補正が無くても大丈夫だった！ でも、一夏さんに散々迷惑かけたけど……」

『一夏お兄ちゃん、テスト中に不正出来ないようにして、I Sとの会話を禁止してたからね』

「そんなことをするのは本音くらいだと思うけど、一夏さんに頼まれたらI Sは断らないんでしょ？」

『当然！ 生みの親だしね』

「とにかく、今は勉強の事は忘れて、本音との試合に集中しなきゃ」

『学生の本分は勉強なんですよ？ 忘れて良いの？』

金九尾のツツコミには反応せず、美紀は刻一刻と迫る本音との試合に集中するのだった。

美紀VS本音

アリーナに出ただけで、観客は一気に盛り上がったが、美紀と本音は特に気にした様子もなく対峙していた。

「こうして本音と向き合うのって何時ぶりだっけ？」

「まだ高校に入る前だったと思うけどな。美紀ちゃんも最近VTSか合宿所で訓練してるし、私は戦力の底上げで他の人と訓練してるし」

「夏さんの指示とは言え、本音に底上げが出来るのかと思ったけど、確かにみんな強くなってた」

「私もダメージを受けちゃったもん」

「かすり傷でしょ？」

試合前だというのに、美紀も本音も非常に落ち着いた気持ちで会話をしている。相手の事を良く知ってるからこそ、緊張しないのかもしれない。

「夏さんは向こうの決勝の解説だけど、刀奈お姉ちゃんと虚さん、そして簪ちゃんの前で無様に負けるわけにはいかないの」

「それは私だってそうだよ。これでもいつちーの護衛としての威厳があるし、あまりのんびりしてるだけって思われるのもね」

「だったら、普段の生活を改めればいいじゃないの。そうすれば評価なんてあつという間に変わるわよ」

「それは無理だよ。だって、せつかくのんびり出来るのに何で忙しい思いをしなきゃいけないのさ」

「そんなこと思ってるから、他の人からのんびりしてるだけの無能護衛だとか思われるんだよ」

「そこまでは言われてないもん！」

あえて本音を挑発するような発言をした美紀だが、これは狙い通りである。一度本音の本音と戦ってみた、どっちが強いのかはつきりさせたいという思いが彼女の中にはずっとあったのだ。

「来週には代表に決まってるだろう美紀ちゃんを相手にするのはつらいけど、私が無能じゃないって事を証明する為にも本気で行くからね」

「望むところよ。まぐれで勝ち上がってきたわけじゃないって事は分かってるけど、本音は野生の勘に頼る癖があるから、本当に実力かどうか分からないのよね」

「あれだつて立派な実力だよ」

互いに苦笑いを浮かべ、開始の合図を待つ。刀奈たちに自分たちの会話は聞こえていないはずだが、会話の途中で合図が出るなどという事は無かつたのを考えると、読唇術でも使つたのではないかと思いたくなる。ただ、読唇術が使える碧はアリーナの隅に控えているし、一夏はもう一つのアリーナで解説をしている。

「つまり、私たちが話すだろうって事を分かつてたわけだ」

「付き合ひ長いしね」

もう一度苦笑いを浮かべ合ひ、今度こそ合図に備え真剣な眼差しで相手を睨みつける。会話が終わったのを見計らつたように、開始の合図が鳴り響き、美紀と本音はいきなり交錯したのだった。

開始の合図を出した後、本当なら観客の為に解説をしなければいけないのだが、刀奈も虚も簪も、マイクの電源を入れる事無く会話していた。

「世間の誰もが認める実力者の美紀ちゃん、更識内しか実力者と思われていない本音の戦いか……」

「美紀さんはたくさん努力してきましたが、本音は遊び半分ですからね……」
「ある意味で天才だからね、本音は……」

ずっと見てきたからこそ分かる、美紀と本音との差。美紀は努力に努力を重ね今の地位を勝ち取った秀才だが、本音は遊び半分でも実力がある天才だ。本音自身がそれを理

解しているかは怪しいが、刀奈たちから見ても本音の實力は羨ましいものがある。もし本音にやる気があったら、もしかしたら自分の地位は本音のものだったかもしれないと思っくらくらいに。

「一夏君が本音を護衛に指名したとき、何で本音なんだろうって思ったけど、きつと見抜いてたのね」

「一夏ならありえそうだけど、ただ単にだからならしてるだけの本音をしつかりさせようとしたのかもしれないよ」

「ですが、あの子は結局だからならするだけでしたけどね」

護衛に任命されたからといって、本音の生活習慣は変わることなく、むしろISを手に入れてから余計にだらだらしてるようにすら思えた。それもそのはずで、仕事があるはずなのに働いていないのだから、だらけている印象が強まってしまうのも仕方なかっただろう。

「VTSでは自分の機体を使わずに遊んでいましたし」

「でも實力は順調に伸ばしてたんですよ」

「一夏君が逐一土竜に反映させてたからでしょうけども、ISのスキルの伸びは本音が一番だったものね」

目の前で繰り広げられる幼馴染二人の闘いを見ながら、三人は思い出話を繰り広げていく。実績から言えば間違いなく美紀が勝つであろうこの試合だが、本気の本音がどこまで出来るのか、付き合いの長い三人でも——虚に関していえば姉だが、見当がつかないのだ。

「一夏君が何に期待して本音に専用機を持たせたのか、後で聞いてみようかしら」

「一夏も特に何も考えてなかったかもよ？　だって本音を護衛に指名しても、出かける時に本音に声をかけないことが多かったし」

「尊さんに行き先は伝えていたようですがね。もし本音に聞かれたら教えてほしいと」

「まあ、一夏君も安全だって分かっているからこそ本音を連れて行かなかったんでしょうけどもね」

「友達と遊ぶだけだって、一夏の周りにはどんな危険があるか分からなかったのにな？」

「表立っての護衛は本音だったけども、更識の人間は常に一夏君についていたもの」

「あの時はまだISもそこまで普及してませんでしたし、亡国機業も大人しかったですからね」

しみじみと過去を思い出しながら、意外に善戦している本音を眺めながら当時の事を

思い出し、何故か腹立たしい思いをした三人であつた。

妹空間

第一アリーナで熱戦が繰り広げられているのと時を同じくして、第二アリーナではティナVS清香VSダリルVSさゆかの非専用機持ちの部の決勝が行われていた。

「兄さまは誰が勝つと思いますか？」

「普通に考えれば、専用機を持つているダリル先輩だろう」

「実力的にも実績的にもそうだろうね。でもお兄ちゃん的には、あの人以外に勝ってほしいんじゃないの？」

「まあ、順当に決まっちゃったら面白くないからな」

前評判でも、ダリル有利と言われている大会なので、ダリルがそのまま優勝しても面白くない。一夏の思惑としては、ダリル以外の三人が優勝してくれた方が、大会は盛り上がるだろうと考えているのだった。

「私的には、ダリルさんに対抗出来る人はいないと思いますがね」

「私もそう思うけど、一夏お兄ちゃんが他の人を応援するなら、私も他の人を応援する」
「何だか随分久しぶりに人の姿になったな」

「出番なかったですし、闇鴉みたいにまだ好きな時に人の姿になれないんだもん」

突如解説席に増えた二機に、マナカは驚きの表情を浮かべる。闇鴉が人の姿になるのは何時もの事だが、白式がこうして人の姿になるのを初めて見たのだから仕方ないだろう。

「一夏さんのオーラを吸収したのか、白式もある程度は自由に人の姿になれるようになったみたいです」

「えへへ、これでまた一夏お兄ちゃんとお喋り出来るね」

「何でこいつはお兄ちゃんの事を『一夏お兄ちゃん』って呼ぶの！ お兄ちゃんの妹は私とマドカの二人だけなんだから！」

「まあまあマナカ、白式の見た目と、兄さまに手を加えてもらった恩を踏まえて、白式は兄さんの事をそう呼んでいるんだから、少しは大目に見ないと」

「だけどー！」

妹ポジションが奪われるのではないかという心配から、マナカが過剰に反応を示したが、白式はマナカに敵対意識はない事を伝える。

「私は別に、一夏お兄ちゃんに妹として扱ってもらいたいわけじゃないよ？」

「じゃあ何でそんな呼び方をしてるんだ」

「うーん……にじみ出るお兄ちゃんオーラの所為かな？」

「あつ、なんとなく分かるかも」

白式の言い分に納得してしまったマナカは、白式の呼び方を認めざるを得なくなつてしまった。

「とにかく、これからは頻繁に人の姿になるかもだけど、よろしくね」

「これで一夏さんもISの擬人化研究が捗るかもしれませんね」

「闇鴉、スサノオ、白式と、これで三機が自由に人の姿になれるわけだから……ISにも意識があるという事を視覚的に訴えるには便利だが、こども自由に人の姿になられたら大変なんだが」

慣れつつはあるが、いきなり人の姿になり話しかけられると、それなりに驚いたりする一夏は、闇鴉のようなのが増えるのは困るなど頭を悩ませていた。

「一夏さん、よそ見してる間に清香さんが追い詰められていますね」

「ダリル先輩にか？」

「いえ、あれはティナさんですね」

「同じアメリカ所屬として手を組んだのか、それとも単純に倒せそうな相手から倒しているのかは分からないが、三人が手を組んでダリル先輩を攻め立てるといふ作戦には出なかつたようだな」

「テイナさんは移籍問題がありますからね。三人で組んで負ける可能性を考えると、確実に潰せる相手から潰す作戦の方が良かったのかもしれないですね」

「兄さま、テイナさんの移籍に更識は力を貸すのですか？」

「専用機はさすがに用意しないが、それくらいなら問題ないだろ。何処も優秀な人材は喉から手が出るほど欲しいだろうし、テイナさんなら申し分ないだろうし」

テイナの入学時と現在の能力データを呼び出し、マドカとマナカに説明を始める一夏。既に解説の意味はなしていないが、最初から決勝に解説はいらぬのではないかと思っていたので、やる気はあまりなかったのだ。

「鈴が転校してきてルームメートになつてから、テイナさんもちよこちよこと鈴と特訓してみたんだし、アメリカの問題が明るみに出てからは移籍先を探す為に実力に磨きをかけていたからな」

「近場で探すのでしょうか？ 確かカナダが人材を欲しているとかの噂もありますし」

「亡国機業が色々やつてたからね。でも、アメリカには手を出さないけど」

「最近更識の傘下の企業が出来たインドも候補生を増やしたいという要望があったな。いい人材に心当たりがあったら紹介してほしいとも頼まれてるし、ティナさんがカナダとインドどっちを選ぶかによっては紹介出来なくはないな」

「繋がりが多すぎて兄さまの凄さがイマイチ把握出来ませんが、凄いですね兄さま」

「一夏お兄ちゃんなら、何処の国とでも繋がってそうだし、移籍先を探すにはもってこいだと思うけど」

「そんなに頻繁に移籍されたら国が困るんだがな……すでにエイミイがフランスに、サラ先輩がギリシャにと移籍してるわけだからな」

サラの方は亡国機業が関係しての移籍なので、マナカも少しばかり罪悪感を覚えていた。

「お兄ちゃんに余計な手間を掛けさせてごめんなさい……」

「マナカが気にする事じゃないさ。そもそも独立派の人間だったからな、フォルテ先輩は」

正確には独立派のダリルについて行っただけなのだが、犯罪組織に身を落とした人間を何時までも候補生にとどめておきたくはないという理由で候補生を外れ、フォルテを

可愛がっていたギリシャ代表の人が責任を取って引退したためにサラはギリシャの代表になったのだ。マナカが属していた所謂過激派とはあまり関係はないのだ。

「そうこうしてる間に、さゆかさんがダリルさんに撃ち落とされましたね」

「アメリカ所属の対決になったな」

結果はなんとなく見えているので、一夏はモニターを操作して専用機の部の試合の様子を確認し、本音が善戦している事に驚いたのだった。

決着 専用機持ちの部

自分の残りSE量を見て、本音は小さく息を吐いた。

「やっぱり美紀ちゃんや簪ちゃん相手だと、私が本気を出しても厳しいね」

『諦めるのですか？ 例え全制覇しているとはいえ、デザートのタダ券は本音にとつて嬉しいものではありませんか？』

「そうなんだけどさ……こっちの残りSEは三割を切つてるのに、美紀ちゃんは半分以上残つてるんだよ？ 私だつて簡単に負けるつもりはこれっぽちもないけども、美紀ちゃん相手にここから挽回出来ると思えるほど自分の実力を過信してないし、自惚れてもない」

『貴女のそういうところは私は好きですが、負けるにしてもせめてもう少し頑張ってください。ここまで必死になって戦つてきたのですから』

「分かつてるつて。これだけ必死になって戦つたのは何時ぶりだろうね……」

『貴女は普段だらけていますから、私も曖昧にしか覚えていませんよ』

入学前に更識で行つた模擬戦以来ではないかと土竜は思ったが、箒が一夏を襲つてき

た時の本音は結構本気だったと思ひ直し、それ以来ではないかと本音に告げる。

「うーん……でも、シノン相手の時は、今ほど熱くなつてなかつたし、ここまで苦戦もしなかつたしなあ……やつぱり更識でやつた模擬戦以来かな」

『ならもう少し真面目に戦う機会を増やしたらどうでしょう？　IS学園でだって訓練は積んでいるのですから、もつと本気になつて真面目になつて、一夏さんに褒められる機会を増やすべきだと思いますがね』

「いつちは褒めてくれるよ？　でも、本気で相手をして未来あるIS操縦者の自信を喪失させちゃつたら悪いしさ……現にリンリンには次は絶対に負けないと言われちゃつたし」

『ライブルの誕生じゃないですか』

「面倒な事は好きじゃないんだよね」

『貴女という人は……』

何処まで行つても本音は本音であると理解させられた土竜は、盛大にため息を吐いたのだった。

「さてと、何時までも距離を保てるわけじゃないし、いい加減覚悟を決めて突撃するよ」
『分かつてます。それにしても、貴女が近接戦を選ぶとは意外でした。完全に美紀さん

の間合いで戦うなんて、どういう心境の変化ですか？」

「遠距離からパンパンやってるのに飽きちゃったんだよね」

『……………』

ちよつと感動してしまった自分が恥ずかしいと、土竜はもう一度ため息を吐く。本音は土竜がため息を吐いている理由が分からなかったが、今はそんなことを気にしてられる余裕はない。既に美紀の間合いに入り込んだので、ここから先はちよつとの油断が命取りになりかねないのだ。

「美紀ちゃん、悪いけどもう少し付き合ってね！」

「本音がここまで本気を出してくるなんて思ってた。もう少しだらけるかと思つてたのに、予想を外してしまいましたね」

「私だってやる時はやるんだよ。まあ、もう勝てないとは分かつてるんだけどさ」

「だったら、早いところ負けてくれない？ そうすれば本音もゆつくり出来るでしょうし」

「だって、負けたら勉強しなきゃいけないんでしょ？ だからもう少し戦って、疲れ果

てて今日は勉強無しにしたいし」

「勉強したくないのは分かりますけど、私も本音も勉強しないと期末試験厳しいんです

よ？」

美紀は理解するのに時間がかかるだけだが、本音の場合は本気で危ないのだ。同じく香澄やマドカ、エイミイなども試験への不安から一夏に泣きついてきているので、この大会が終われば試験までみっちり勉強しなければならぬのである。

「マナマナは義務教育を受けてなかったから仕方ないっていつちーが言ってたけど、もう平均くらい知識を吸収しちゃってるしね」

「マナカさんは元々が優秀ですから、少し教われればすぐに理解出来るのでしょう」
「いつちーの妹さんだしね」

その理論で行けば、マドカもすぐに理解出来てしかるべきだと思うのだが、偉大なる姉二人と天才的な頭脳を持つ兄と妹の所為で、マナカは平均的な能力でも残念がられるのである。だがマドカのいいところは、比べられても腐ることなく必死になって努力するところであり、一夏もそこを評価していたりするのだ。

「とりあえず、私は赤点を取って補習になり、冬休み一夏さんと過ごせなくなるのは嫌なので、早いところ終わらせませすからね！」

「いつちーと過ごせないのは嫌だな……でも、簡単に負けたら手抜きだと思われるから、

もうちよつと悪足掻きさせてもらうからね！」

解説に刀奈と虚と簪、審判には織斑姉妹と碧がいるのだ、手を抜いたらすぐにバレるに決まっているし、下手をすれば制裁を喰らわせられる可能性だってある。本音は負けるにしても手抜きは出来ないし、かといってここから遠距離に切り替えるだけの気力は無い。

「怒られない程度に頑張りつつ、不自然さを感じさせないように負けるー！」

「カツコいい事言ってるようでカツコ悪いよ、それ」

「別にカツコつけてるわけじゃないよ。織斑姉妹に怒られるのは嫌だし、いっちーやおねくちゃんに怒られるのも嫌だからね」

美紀の攻撃を捌きつつも、やはりSEの残量差は大きかったのか、本音は十分抵抗したがやはり負けてしまった。だが観客からは盛大な拍手を送られ、織斑姉妹も特に何も言ってくることは無く、解説席では刀奈たちが頷いて手を振っていた。

「どうやら、上手く負けられたみたいだね」

「次は負けないからね」

意外な事に負けたことが悔しいと感じた本音は、そんな事を言いながら美紀へ手を差し出し、美紀もそれに応じて握手をする。この結果、専用機持ちの部は美紀が優勝で幕を下ろしたのだった。

決着 非専用機持ちの部

清香とさゆかが撃ち落され、いよいよテイナは残る一人であるダリルと対峙する事となった。同じアメリカ代表候補生ではあったが、実力はかなりの差があり、話したこともありない。

「私は、貴女を倒す」

「威勢がいいわね。何か目的でもあるのかしら？」

「あるに決まってるでしょ！ 貴女だって無関係じゃないんだから」
「どういう事よ」

「面識はあったが関係はないテイナに恨まれるようなことは、ダリルには思い当たらなかった。」

「アメリカの今の状況、突き詰めれば亡国機業の所為なんでしょ！ 元亡国機業の貴女だつて関係してるんでしょ」

「あそこまで酷くなるなんてね……まあアメリカの自業自得よ」

「それなのに貴女はさっさと更識に保護されて何不自由ない生活をしてる、恨まれてな

いとも思ってるの」

「それで貴女は私の事を恨んでるの？　そもそも更識君と面識があるんだから、何処かの候補生になれないか相談すればいいじゃない」

「私は、コネじゃくて実力を更識君に認めてもらってから紹介してもらいたい！　更識所属になりたいんじゃない、どこかに移籍する手助けをしてもらいたいだけ」

「そんなこと言つて、普通に頼まないのは何か裏があるからじゃないの？　例えば……候補生なのに専用機が無いのが気に入らない、とか？」

ダリルの指摘にティナは激昂し突撃を仕掛ける。もちろんダリルには当たることなく躲かれてしまうが、それぐらいティナの気に障った発言だったのだ。

「別に専用機を持つてないことをコンプレックスだと思ふ候補生は少なくない。でも仕方ないでしょ？　実力者から割り振つていくんだし、コアの数にだつて限りがあるんだから」

「限りがあると分かっているなら、何故アメリカのコアを未だに持っているんですか、貴女は！」

「だつて、今返還しても回収されるだけだし、私とフォルテの専用機は更識君が何とかしてくれて無所属扱いなんだから、返す場所なんてないわよ」

「国を背負いたい、そう思うのが悪い事なの!？」

「別にそんな事言つてないわよ。背負いたいなら勝手に背負いなさいな。沈みゆくアメリカという国を背負いたいのならね」

ダリルの精神攻撃に、ティナは完全に嵌まつてしまい、冷静な対応が出来なくなつてきている。当たらないと分かっている特攻を仕掛けたら、いちいち声を荒げてダリルに反論したりと、こんな様子を見られているという事を失念していると思えない言動が増えてきた。

「(同じ候補生でも、やっぱり精神的にショボいわね。更識所属と一緒にいる時間が長かったから、そこが基準になつてるのかしら)」

一方でダリルは、ティナの精神的脆さを目の当たりにしてそんなことを考えていた。実際ティナの精神面は、普通の候補生の中では鍛えられている方だが、この学園には精神的に恐ろしい程頑丈な人間が多くいるので、その中に放り込まれたダリルとしては、ティナの精神面は脆いものとして認識されてしまったのである。

「てか、暴走されるとまた監視が付くかもしれないから、さっさと終わつてちょうだい」
「ぐっ！ わ、私は……」

『勝者、ダリル・ケイシー』

無情にも宣告された勝者の名に、ティナはガツクリと膝をついた。SEもゼロにされ、心までも乱された完敗である、これでは一夏にどこかの国を紹介してもらえないと項垂れても仕方ないだろう。

「更識君なら、貴女の真の実力をちゃんと評価してくれると思うわよ」

「下手な慰めはいらないです」

「実はね、貴女の精神面を確かめる為にあのような挑発をしたのよ、更識君に言われてね」

「な、何でそんなことを……」

「国を背負うだけの實力があるのは知ってるから、後は精神面を見たいってさ」

人の悪い笑みを浮かべながら近づいてくるダリルに、ティナはそれが本当かどうか疑ってしまう。

「じゃあ、さっきの言葉は更識君から言えと言われたの？」

「半分以上は私の気持ちだけど、精神をぐらつかせるようなことを言っただけでほしいと言われたのは本当だから。後で更識君に確認してもらっても構わないから」

「それで、結果は……」

「私には分からないわよ、そんなの。それこそ更識君に聞いてちょうだい」

ひらひらと手を振って去っていくダリルと入れ替わるように、マドカとマナカがティナの許へやってきた。

「お疲れ様でした。汗を流し着替え終えたら兄さまの部屋へお越しく下さい」

「貴女たち……」

「私とマドカはお兄ちゃんに頼まれて、貴女が錯乱してないかどうかの確認も兼ねてここに来た。とりあえずは合格じゃない？」

「合格……ということとは？」

「どこかの国の候補生として、兄さまが推薦してくださいさるといふ事です。希望があったりしますか？」

「候補生としてやっていけるならどこでも！」

「なら、そう伝えておきましょう」

携帯を取り出しどこかに連絡するマドカを見て、いよいよ候補生として再スタートが切れるのかもしれないとティナは喜び、さつきまで抱いていたダリルへの嫉妬や殺意な

どもすっかりなくなっていた。

「候補生ってそんなに良いものなの？」

「私には分かりませんよ。私はあくまでも、篠ノ之東博士のテストパイロットなんだから」

「私も良く分からない立場だし、他の人に聞いた方が良いか」

候補生の価値がイマイチ分かっていないマドカとマナカは、後で簪か美紀に聞いてみようと思ったのだった。

移籍問題

一夏の部屋にやってきたティナは、本当に入っているのかと悩み、扉の前を行ったり来たりしていた。

「何してるんですか、さつきから」

「うわあ!?! って、小鳥遊先生?」

「さつきから一夏さんがお待ちですよ」

「だ、だって……」

ティナからしてみれば、一夏の部屋というのは縁がないものだと思っていた。だがいきなり部屋に来说われられて簡単に入れるものではないのだ。

「気にし過ぎですよ。一夏さん、ティナさんがお目見えになりました」

「そんな簡単に……」

碧に引つ張られるように一夏の部屋に入るティナだったが、心の準備が間に合わず多少混乱していた。

「えっと、この度はお招きいただきまして、誠にありがとうございます。本日はお日柄も善く——」

「何言ってるんですか？」

「えっと……何言ってるんだらうね……」

一夏に呆れられたと反省しながら、ティナは大きく息を吐いて気持ちを切り替えた。

「非専用機持ちの部準優勝、おめでとうございます」

「ダリルさんには完敗したけどね」

「あの人は本来専用機持ちですからね。あそこまで善戦した事を喜びましょう」

「ダリルさんから聞いたけど、私の精神面を試してたそうね」

「まあ、仮にも国籍を変更して代表を目指すわけですから、精神的に軟だと困りますからね」

まったく悪びれない一夏の態度に、ティナは苦笑いを浮かべる。これが世界の更識企業のトップで、あの織斑姉妹や篠ノ之束を手玉に取る男なのかと、更識一夏という人物を初めて知った気がしたからである。

「それで、私はどうだった？」

「戦力的には問題ないですね。精神的には、もう少し鍛えた方がよさそうですね」

「普通の高校生に精神面を鍛える場面なんてそうそうないわよ?」

「貴女だって普通の高校生では無いはずですよ? 仮にも国家代表を目指してるわけです」

「まあ、世間一般の『普通』とはかけ離れてるかもしれないけど、貴方たちから見たら私は『普通』のはずよ」

「暗部に染まつてない、という点では普通でしょうね。だが俺が言っているのは世間一般から見た『普通』ではないという意味です」

テイナの皮肉にも動じず、一夏はモニターに世界地図を表示し、テイナに興味を示している国に色を付けて紹介していく。

「落ちぶれているとはいえ、アメリカの情報を欲しかったり、アメリカの指導力を羨む国は少なくありません。現に移籍を希望していると聞きつけた国がIS学園を通じてコンタクトを取ってきています」

「初耳だわ……」

「安全を確認出来るまで伝えるわけにはいきませんから」

非難の視線を浴びても動じない一夏に、テイナは逆らうのを諦め開き直すことにした。

「それで、更識君が確認して安全だと判断した国がこれだけあるって事なの？」

「まあ、後はテイナさんが選んでください」

「そう言われても……」

カナダやイスラエルといった、アメリカと近しい国から、韓国やタイといった日本に近い国と、様々な国が興味を示しているといきなり知らされてすぐに移籍先を決められるほど、テイナはその国の情報を持っていなかった。

「まあ、まだ期限はありますし、存分に悩んで決めてください。碧さん、テイナさんに資料を渡してあげてください」

「はい、これが現在の情勢など更識が調べ上げた各国の情報が記された資料です。ちゃんと読んで決めてくださいいね」

何処までも先回りされている感じがしたが、テイナは一夏の用意の良さに感謝し、重たい資料を台車に載せて部屋に帰っていったのだった。

「これで、また一人自由国籍を使つての候補生が誕生しますね」

「今回は更識企業としてではなく、I S学園として後押しする予定ですから、俺が出来るのはここまでですかね」

「後は学園にお任せすればいいんですよ。さすがにこれ以上一夏さんに任せるのはマズいと思いますし」

世界的にも更識の当主であると知られてしまった一夏がこれ以上介入すれば、また更識所属なのかと疑われる可能性が出て来る。そこで残る手続きなどは学園が受け持つことになっているのだが、一夏としては若干の不安を感じていたのだった。

「担当が織斑姉妹で本当に大丈夫なのでしょうか」

「補佐に真耶や紫陽花もついていますし、最悪私も手伝う事になっていますから」

「碧さんが介入したら、俺が介入したのと同じだと思われませんかね」

「私は更識所属ですが、I S学園の教師でもありますから」

「その理屈が通るのであれば、俺だってI S学園の生徒会役員なのですが」

「一夏さんはこれまで、様々な移籍話に関わりましたからね。生徒会役員である前に更識当主だろうというツツコミが発生する可能性が大いにありますので」

「そんなにかかわったつもりは無いのですが」

「まあ、一夏さんの場合はいろいろと有名になってしまったのもあるので、今回は織斑姉

妹にお任せしては如何でしょう」

「信用したいんですが、あの二人ですからね……まあ、こっちは篠ノ之の問題を片付けなければいけないので、任せるしかないんですが」

若干震える一夏を優しく抱きしめ、碧は耳元で一夏を安心させる言葉を紡ぐ。

「大丈夫です。一夏さん一人で会うわけでも、昔みたいに斬りかかってくるわけでもないんですから」

「頭では分かっているんですが、どうにも苦手意識がありましたね……」

「大丈夫です、一夏さんならきつと克服出来ます」

たとえ克服出来なくとも、全力で一夏を守ろうとする人物は大勢いるので、碧は無理に克服しなくてもいいと思っている。だが一夏が克服したいと願っているので、碧は全力でそれを応援するのであった。

打ち上げ 学生の部

トーナメント終了を祝して、本音主催でお疲れ会が食堂で開かれた。参加者は優勝した美紀、準優勝の本音のほか、簪、鈴、静寐、香澄、マドカといった大会に参加したメンバーや、刀奈や虚といった参加していないメンバーも含まれているが、一夏はこの場に顔を出していない。

「本音、一夏君は呼ばなかったの？」

「いっちは大会で取ったデータの整理と教師陣の打ち上げに連れていかれちゃったから」

「織斑姉妹か……そりゃ敵わないわね」

好感度で言えばこちら側が圧倒的に勝っているが、戦力となれば向こうに分がある。織斑姉妹だけでなく、碧もいるので、更識所属が束になって挑んだところで相手にならないだろう。

「まあ、碧さんがいるなら一夏さんも大丈夫でしょうし、たまには織斑姉妹にも一夏さんと触れ合う機会を与えても罰は当たらないでしょう」

「お兄ちゃんが向こうに行ってるなら、私も向こうにすればよかったかな」

「マナカもたまには私たち以外にも交流しなければいけないと兄さまに言われたじゃないですか」

「分かつてるけどさ」

一夏に言われたことをマドカにも言われ、マナカは不貞腐れたように頬を膨らませる。最近ではマドカがマナカを注意する光景もよく見られるようになってきたと、刀奈たちはほほえましい気持ちになっていた。

「それじゃあまず、美紀ちゃん、優勝おめでとー!」

「おめでと、美紀ちゃん。決勝は兎も角、簪ちゃんとの熱戦は見応えあつたわよ」

「美紀さんならこの結果は順当だと思われがちですが、簪お嬢様に公式戦で勝つたのは予想外でした。美紀さんの実力を疑うわけではありませんが、やはり簪お嬢様の方が有利だと思っていたので」

「虚さんの言いたい事は私も思ってますから。大勢の前で簪ちゃんに勝てるなんて思っ
てなかったのです、本当に嬉しいです」

「おめでと、美紀」

「うん、ありがとう簪ちゃん」

素直に賞賛を送る簪に、美紀も感極まって抱き着いた。突然の抱擁に焦った簪ではあったが、すぐに簪も抱きしめ返し、互いに感極まって頬に涙が伝った。

「ライバル同士だものね。普段はペアだから戦う事は少ないけど、互いに負けたくない相手がいるっていうのはやっぱりいいわよね」

「お嬢様はいらっしゃらないのですか？」

「私？ そうね……虚ちゃんには負けたくないわね。殆ど虚ちゃんに勝てるものなんてないから、ISだけは絶対について思う事があるわ」

「お嬢様は私に勝ってるものは多いと思いますがね」

「例えば？」

「料理の腕やその巨乳……一夏さんに甘えるのも上手ですし」

「虚ちゃんだって、少し勇気を出せば一夏君に甘えられると思うんだけどね」

「その少しが、私には難しいんですよ」

一夏との関係でいえば、圧倒的に刀奈の方が親しく思われがちだが、仕事などで一緒にいる時間が多い分、虚の方が距離感的には近いものがある。だから刀奈は勇気を出せばいくらでも甘えられるのと思っているのだ。

「鷹月さんも日下部さんも、実力者が多い中よく頑張ったわね」

「まさか本音に圧倒されるとは思ってたんですが、これもいい経験です」

「入学時から考えたらすごい成長していると、一夏さんも言っていましたよ」

「それは私も思ってます。ギリギリで入学して、一学期赤点すれすれだった私が、大勢の専用機持ちの中に混じって大会に参加してるなんて、あの時から考えられませんか」

「一年生が多い大会だったけど、IS学園としては新しい戦力が育ってるって思えば良いのかしらね」

「二年生はあまり積極性が見られませんでしたし、三年生は基本的に就職が決まって落ち着いたところに大会なんて参加してられないという意見が多かったですからね」

「参加してた三年生に失格者が出たのは残念だけどね」

「一夏さんがマークしてた三人ですからね。しっかりと反省してもらい、更識傘下の企業で働いてもらうそうです」

「じゃあ、結果的に就職先が決まってよかったのかしらね」

傘下とはいえ、更識企業に就職するのはかなり大変な事だと、内情を知っている刀奈と虚は重々承知しているので、こつてり絞られるとはいえ結果オーライなのではないか

という事で結論付けたのだった。

「これで残ってる問題は箒ちゃんだけね」

「報告を見る限りでは、素直に成長しているようですが、一夏さんが苦手意識を抱いているのは紛れもない事実ですからね」

「映像で見たけど、あれは驚くわよ」

碧が撮った動画を見て、刀奈はこれが箒なのかと首を捻った記憶があるのだ。大天災が作った薬の影響とはいえ、あれは変わり過ぎではないかと思わされるほどの変貌を遂げているのだから仕方ないのかもしれない。

「箒ちゃんが復帰して、問題なく成長して更識の為に働いてくれれば、今までの苦労が報われるってものよね」

「苦労してきたのは一夏さんであって、お嬢様は大して苦労してないですよね」

「これでも苦労してきたんだけど？ まあ、一夏君や虚ちゃんと比べられることが多いから、私は大して働いてないみたいなの印象を抱いてるかもしれないけど、私だってちゃんと働いてるんだから！」

「確かに働いてはいますが、サボってもいますよね？」

「さーて、私も美紀ちゃんを祝ってこなくっちゃね」

形勢不利を感じ取り、刀奈はそそくさと美紀の許へ移動し、抱き合つて泣いている簪と美紀の二人を称えるのだった。

『相変わらずですね、刀奈さんは』

「あれでも成長してるのですよ」

『知ってますよ、もう結構な付き合いなのですから』

丙と会話しながら、虚は刀奈の成長も嬉しく思っていたのだった。昔から側付きとして成長してきた虚としては、刀奈がしっかりと成長してくれた事こそ、嬉しい出来事なのだ。

打ち上げ 大人の部

本来なら刀奈たちと学生の打ち上げに参加するはずだった一夏は、織斑姉妹と碧に拉致られ、教師陣の打ち上げに参加していた。

「織斑姉妹だけならまだしも、碧さんまで」

「たまにはいいじゃないですか。刀奈ちゃんたちには悪いけど、私だって一夏さんとのふれあいの時間が欲しいんですから」

「それだけだったら、個別に時間作りましたって。何故織斑姉妹の相手をしなければならぬのですか」

大人の打ち上げなので、当然アルコールが入ってそれぞれ少しハイになっている。あの真耶ですら少し強気になっていたりするのだ。

「更識君、貴方は未成年なので飲んじやらめですからね」

「分かってます。先生こそ飲み過ぎないでくださいよ」

「大人を甘くみちやらめですから」

「おい真耶！ 私の一夏にちよっかい出すとは良い度胸だ」

「別に千冬さんのつてわけじゃないですよね？　そもそもあまり相手にされてないじゃないですか」

「貴様……気にしてる事を」

アルコールの力なのか、何時もはやられっぱなしの真耶が千冬に反撃し、見事撃退に成功した。

「お酒の力つて凄いんですね」

「碧さんは飲まないんですか？」

「一応護衛の任務中ですから」

「真面目ですね、碧先輩は」

「真耶、貴女少し飲み過ぎじゃない？」

「そんなことらいでひゅよ」

「ほら、呂律が回ってないわよ。少し風に当たって来なさい」

碧に店の外に追いやられ、真耶は一人で風に当たりに行つた。

「あの真耶があそこまで飲むとはね」

「小鳥遊先輩も少しは飲みましようよ」

「紫陽花、私は一夏さんの護衛なの。護衛が酔っぱらったらダメでしょ」
「少しくらいいいじゃないですか。更識君だつて許してくれますよ」

視線で紫陽花に問われ、一夏は苦笑いを浮かべた。別に碧は酒癖が悪いわけでもなく、すぐに酔っぱらうわけでもないので少しくらいなら構わないと一夏も思っているのだが、碧が自分の仕事に誇りをもっているのも知っているので、無理強いはしない方が良いとも思っているのだ。

「紫陽花は千夏さんと飲んでればいいじゃない。今なら貴女でも相手出来るでしょ」

「私は小鳥遊先輩と飲みたいんです！」

「じゃあ、お茶で良いなら付き合おうわよ」

「やった！ ささ、行きましょう」

紫陽花に背中を押され一夏から遠ざかっていく碧を、一夏は無言で見送る。

「よろしかったのですか？」

「たまには碧さんも羽目を外してもいいと思うんですがね」

「真面目ですからね、小鳥遊さんは」

「ナターシャさんも、少しは飲んでもいいですよ」

「いえ、私は下戸なものでして……」

「なら飲まない方が良いですね」

碧が護衛から外れたため、すぐ傍で控えていたナターシャがすかさず一夏に近づく。一定の距離を保つていればナターシャでも平気なので、一夏は碧を紫陽花に任せただ。

「それにしても、更識所属のメンバーは凄いですね」

「何ですか、いきなり」

「今日の大会を見て、だいたいが更識所属のメンバーだったじゃないですか」

「専用機持ちは、そうですがね。非専用機持ちの部は、更識関係者じゃないですよ」

「そもそも更識所属のメンバーは全員専用機を持つてるじゃないですか」

「確かにそうですね」

一夏は所属メンバーのリストを頭の中で広げ、全員が専用機持ちであることを確認しナターシャに頷いて見せた。

「それに非専用機持ちの部で優勝したダリル・ケイシーだって、更識が監視下に置いているのですから、ある意味更識所属ですし」

「あの人を更識所属だというと、他の人が文句を言ってくるでしょうけどね」
「まあ、あくまで監視されてるだけですからね」

なりたくてもなれない身分に、監視されるだけでなれるなら罪を犯す人が続出するだろうと一夏に言われ、ナターシャも納得してしまった。

「それに、一応ナターシャさんも更識が身柄を預かつてるんですよ」

「まあ、更識君に見捨てられたら私とこの子は引き離されてしまいますからね」

銀の福音を指差し、ナターシャは苦笑いを浮かべた。更識が預かるという理由で一緒にいられるのだと自覚しているナターシャとしては、今一夏に見捨てられるのは非常に困るのである。

「心配しなくても見捨てるつもりはありませんよ。更識だって戦力確保に必死なんですから」

「私一人抜けたからって、今更識の地盤が揺らぐとは思えないのですが」

「一人を大事にしない組織に不信感を抱く人間がいるかもしれませんから」

「大変なんです、大企業のトップって」

「大変なんてものじゃないですよ。凄い大変なんですから」

とても大変そうに思えない雰囲気という一夏であるが、彼がとても忙しい合間を縫ってこの場にいる事を知っているナターシャは一夏を勞う事にした。

「ほんと、ご苦労様です」

「好き好んで忙しい思いをしてるわけじゃないんですが、だからといって人に任せて樂をしたいわけじゃないですからね。苦労は自分の所為だと割り切つて頑張ります」

「もし手伝えることがあるなら言つてください。私だつて少しくらいならお手伝い出来ると思いますから」

「ありがとうございます。ですが、その気持ちだけで十分ですよ」

ナターシャの申し出をやんわりと断り、一夏は織斑姉妹と紫陽花に絡まれている碧を見て苦笑いを浮かべたのだった。

背負い背負われ抱き抱かれ：

教師陣の打ち上げに参加させられ、挙句の果てに酔っぱらった大人たちの介抱を任された一夏は、ため息交じりにそれぞれを寝かせ、会計を済ませて碧と共に帰路についた。

「良かったんですか？ あのまま寝かせておいて」

「帰りのタクシー代くらい持つてるでしょ。そもそも学生に酒代を払わせてる時点で、敬う気すら起きませんから」

「ナターシャさんは匂いだけでダメみたいでしたね」

「途中までは平気そうだったんですがね」

匂いで倒れたナターシャには同情的な一夏ではあるが、それ以外の四人には大なり小なり呆れていた。

「一番の原因はやはり織斑姉妹ですけどね」

「真耶も紫陽花も酔い潰されましたからね」

「アルコールハラスメントで訴えれば勝てるんじゃないですかね」

「どうでしょうね。自分から飲んでましたし」

それさえなければ、一夏も真耶と紫陽花に同情したかもしれないが、自分から飲んでいたので呆れているのだ。

「てか、ナターシャさんが羨ましいです」

「寝てるんですから静かにしてあげてください」

一夏も匂いだけで倒れたナターシャをおいていく気にはなれず、仕方なくおんぶをして連れて帰る事にした。その姿を碧は羨ましそうに見つめているのだ。

「彼女も幸せそうに寝てますね」

「福音と空を飛んでる夢でも見てるんじゃないですか」

「一夏さんに運んでもらってるからだと思えますけど」

「ナターシャさんは運ばれてるなんて知りませんよ」

お店で倒れたのだから、一夏に運ばれているなど知る由もないナターシャだが、碧は幸せそうな顔をしているのは一夏に背負われてるからだと確信しているようだった。

「私はいつも抱き着かれる側ですからね。たまには一夏さんに抱きしめてもらいたいです」

「いきなりなんですか」

「簪ちゃんに胸を貸したんですよね？ 泣かせるために」

「……何で知ってるんですか」

「壁に耳あり、ですよ」

「白状すると私が木霊を通じて教えました」

「……またお前か」

闇鴉が人の姿になり白状すると、一夏は疲れ切った表情を浮かべたため息を吐いた。

「代わりましょうか？」

「いえ、体力的に疲れたのではなく、精神的に疲れただけですから」

「一夏さんが精神的に疲れるなんて珍しいですね。何かあったのですか？」

「お前だ、お前……」

素知らぬ顔で尋ねてきた闇鴉に、一夏は鋭い視線を向けたが、闇鴉には通用しなかった。

「そう言えば、そろそろ篠ノ之箒の猶予期間が終わるのではありませんか？」

「あからさまに話題を変えたな……試験後には結果が出るだろう。まあ、あれだけ変

わってれば極刑は避けられるだろう。まあ、一生監視下には置かれるだろうが」

「当然の判断だとは思いますが、どこかの国が文句を言ってくるかもしれないよ？」

「言ってきたらその国ごと潰せば問題ないですから。もちろん、使えそうな技術者と有望なＩＳ操縦者は更識が引き抜きますが」

「さすがご当主、黒い事もさりりと言つてのけるのですね」

「お前にご当主と言われるとはな……」

「だって、私は更識所属のＩＳですから。一夏さんはその当主様ですから敬うのは当然です」

「ならもう少しふざけるのを我慢してくれないか？」

今度は非難の視線を向けるが、やはり闇鴉には通用しなかった。

「碧さん的には、篠ノ之箒の処分についてはどう思いますか？」

「私は一夏さんが決めたことに従うだけですから」

「いいんですか？ この間柳韻殿が『嫁にでも』と言っただけで殺気を飛ばして斬り殺したんですから」

「幻覚を見せただけです。実際にはやってませんから」

「物騒な事を公共の場で話さないでくれますか？ いくら人がいないからと言って、聞か

れたらただじゃすみませんよ?」

「大丈夫ですよ。喋れなくすれば問題ないです」

「その思考は危ないから止めろ」

専用機の性格設定を間違えたかもしれないと、一夏は今更ながらに後悔した。ある程度は自分で設定出来るので、もう少し真面目にしておけばと、一夏はあの時の自分に伝えたい気持ちに苛まれた。

「まあまあ一夏さん、あんまり真面目だと凝り固まってしまうから、これくらいがちょうどいいんですよ」

「心を読むな……」

「私と一夏さんは以心伝心、一心同体、運命共同体ですから」

「所有者とI Sの関係だ」

「一夏さんはツンデレなんですから、このこの」

「……お前をスクラップにするくらい簡単なんだが?」

「なら、私は一生人の姿でいるとしましょうか」

「……碧さん、助けてください」

闇鴉に何を言っても無駄だと分かっていると言ってしまう一夏は、かなり疲れた顔で碧に抱き着いた。

「あつ！ 私をダシに使って一夏さんに抱き着かれるなんて、碧さんズルいです！」

「だから私は一夏さんに抱き着きたいんだけど？」

「うーん……なんだかうるさいですね……はれ？ ここは何処です？ 私はさつきまで

銀の福音と空を飛んでたはずなのに……」

「だから言ったでしょ？ 空を飛んでる夢を見てると」

闇鴉の声で目が覚めたナターシャは、自分が一夏に背負われている事に気付きすぐに飛び降りた。

「な、なにがどうなってる私我更識君に背負ってもらってたのですか!？」

「酒の匂いで潰れたのよ。さすがに可哀想だからって一夏さんが運んでくれたの」

「そ、そうだったんですか……あれ？ 織斑姉妹や山田先生と五月七日先生は？」

「酔いつぶれたので放置してきました。店にはそれを含めた迷惑料も払ったので問題は
ありません」

「あると思いますがね」

碧のツツコミは取り合わず、一夏は早々にI S学園に戻るべく歩を進めたのだった。

美紀の弱点

大人たちの打ち上げから戻ってきた一夏を出迎えた美紀だったが、いつも以上に疲れ
てるように見えたので、優しく声を掛けた。

「一夏さん、大丈夫ですか？」

「心配しなくても大丈夫だが、ちよつと精神的に疲れたな」

「何があつたんですか？」

「酔いつぶれた教師四人を店に置かせてもらう為にお金を払い、途中までナターシャさん
を背負つて帰つて来て、その後は碧さんと闇鴉からは嫉妬の視線を浴びせられ、ナ
ターシャさんには申し訳なさそうな視線を向けられ、とにかく精神的に疲れる時間が続
いただけだ」

「何故ナターシャさんを背負つてきたのです？」

「ん？ アルコールの匂いで気絶してしまつたから仕方なく。悪酔いした四人は知らん
が、ナターシャさんは完全に不可抗力だからな」

美紀も嫉妬の視線を一夏に向けるが、すぐに申し訳ないと思ひ視線を改めた。

「それで、打ち上げはどうだったのですか？」

「どうも何も、俺は普通に学生の打ち上げに参加するつもりだったんだから退屈の一言だな。織斑姉妹が案の定酔いつぶれたまでは良かったんだが、山田先生と五月七日先生まで悪酔いするとは……」

「それで、酒代は一夏さんが払ったんですよね？」

「領収書を貰ってるから、後で織斑姉妹たちに請求するから問題ない。場所代は別で請求するがな」

店の一角を借りているのだから、それなりに払っているわけで、一夏は別口でそっちの領収書も切ってもらったのだ。請求先はもちろん織斑姉妹だ。

「碧さんとナターシャさんは、既に払ってくれたから問題ない。というか、碧さんもナターシャさんもほとんどソフトドリンクだからな」

「碧さんは飲めるんですよね？」

「一杯だけ付き合ってたが、後は護衛だからって断ってたな」

一夏が許可しなければ一杯も飲まなかっただろうが、紫陽花に頼まれて付き合い程度に飲んだのである。

「こっちは刀奈お姉ちゃんとお本音がコーラの早飲みとかしてました」

「相変わらず何してるんですかね……刀奈さんは」

「本音は良いんですか？」

「アイツは言っても聞かないから……虚さんも頭を悩ませるわけだ」

「一夏さんも虚さんも、結局は本音に甘いですからね」

「そんなつもりは無いんだがな……」

「マドカやマナカさんも楽しそうでしたけど、やっぱり一夏さんがいないと場が締まらないんですね」

「年長者の役目だと思うんだがな……刀奈さんか虚さんに締めてもらえばよかったんじゃないか？」

「もちろんそのお二人でも十分なのですが、やっぱり一夏さん中心に集まってるメンバーですから、一夏さんじゃなきゃしっくりこないんですよ」

一夏としては、自分が中心にいるとは思っていなかったもので、美紀の一言に意外感を禁じ得なかったが、周りにいるメンバーの一人である美紀としては、一夏が意外感を露わにしたことに驚きだった。

「まさか、自分が中心にいますかと思っていなかったのですか？」

「中央付近にはいると思ってたが、中心は刀奈さんかなと思ってた」

「更識の人間は兎も角、IS学園からの付き合いである他の人は、刀奈お姉ちゃんより一夏さんだと分かりそうですけど……相変わらず変なところが鈍いんですね」

「鈍いつもりは無いんだがな……」

つもりは無くともなんとなくそう思われている節があることを自覚しているため、あまり強く否定出来ない一夏を見て、美紀は思わず笑ってしまった。

「普段強気の一夏さんが、弱気だと可笑しいですね」

「別に普段から強気のもりは無い……というか、美紀は俺が弱つてるところをかなり見てきてるだろ」

「はい。それはもう」

力強く頷かれ、一夏は複雑な心境に陥る。年上の碧にならともかく、美紀に甘えてるのはどうしても恥ずかしいのだが、こればかりはどうしようもないので困ってしまうのだ。

「たまに甘えるくらい良いじゃないですか。一夏さんは普段から私たちを甘やかしてくれてるんですから……というか、試験前なので甘えさせてください」

「美紀は勉強が出来ないわけじゃないんだよな……ただ理解するまでに時間がかかると
いうか……」

「他の事は大丈夫なんです、どうしても勉強だけは苦手なんですよ」

「試験の時にISが使えれば碧さんの方向音痴のように補正する事は出来るんだが、さすがにそれは他の人に失礼だもんな」

「ズルしてまで良い点を取りたくはないです」

そこが美紀の良いところで、別に良い点を取りたいわけじゃなく、赤点を取りたくないという気持ちが強いのだ。もちろん、良い点が取れる事に越したことは無いのだが、あくまでもしつかりと勉強した結果を求めるのであり、ISを使って弱点を補うつもりは彼女には無い。

「碧さんの場合は、仕事に差し支えたからな」

「屋敷内でも迷子になってましたからね」

木霊を持つ前の碧を思い出し、一夏と美紀は同時に苦笑いを浮かべた。すぐ傍の部屋に移動するだけで迷子になっていたころの碧は、二人の中で既に遠い過去のように思えたのだった。

「まだ十年も経ってないのに、おかしい話だ」

「それだけ濃い内容の生活をしてるのですよ、私たちは」

「美紀も気づけば代表内定とまで噂されてるからな。てか、今週末じゃないのか?」

「試験が終わったら来てほしいと、簪ちゃんと一緒に連絡を受けました」

「篠ノ之が復帰するのと同時か……ちよつと不安だな」

「大丈夫ですよ。私と簪ちゃんがいなくても、刀奈お姉ちゃんや虚さん、もちろん碧さん
もいますから」

美紀に励まされ、一夏は箒と再会する覚悟を決めた。もちろん、今からその覚悟を持
続させると疲れるので、とりあえずは箒の事は頭の隅に追いやり、試験対策の事を考え
る事にしたのだった。

試験に向けて

トーナメントの翌日、一夏の部屋には本音とエイミイと香澄、そして織斑姉妹（妹双子）が美紀と一緒に勉強をしていた。

「いっちー、今日くらい休みで良いんじゃないかな〜?」

「水曜から試験だが、本音は赤点を取って冬休みを織斑姉妹と過ごしたいんだな?」

「私たちは一夏とゆっくりしてるから、本音は先生たちと勉強したいのならゆっくりしてもいいよ?」

監督である一夏と簪に脅され、本音は渋々勉強を再開した。マドカとマナカは義務教育を受けてこなかったから苦戦しているだけだが、本音とエイミイと香澄は単純に勉強が苦手で、美紀も理解するまでに時間がかかるために勉強会を開いてもらっているのだ。

「専用機持ちが赤点なんて今まであったかしら?」

「補正ががかるためにありませんでしたが、さすがに今回点数が危ないと本音あたりは駄目でしょうね」

一夏の手伝いとして参加している刀奈と虚が、名指しで指摘すると、本音は背筋をピーンと伸ばして必死さをアピールしだした。

「兄さま、ここはどういう意味でしょうか？」

「あつ、私も分からない、お兄ちゃん」

織斑姉妹が一夏に質問し、それを横目で見ていた美紀が、簪に問いかける。

「簪ちゃん、ここってどうやって解くの？」

「えっとね——」

二人が同じところを聞いているなら、自分もその説明を聞いて理解しようと思っていたが、どうやら別の場所だったらしく簪に質問したようだった。

「美紀ちゃんは頑張ってるんだけどね」

「本音は形だけですわね」

「が、頑張ってるよ」

虚に冷たい視線を向けられ、本音はたじろぎながらも問題を解いている事をアピール

する。だが、圧倒的に解いている問題数が少ないので、あまりアピールにはならなかった。

「このままじゃ、本音だけは温泉にいけないかもね」

「どういう事ですか？」

「一夏君が、冬休みに慰安旅行を兼ねて温泉に行こうって言うてくれたのよ。もちろん、赤点だといけないから頑張ってもらってるんだけど」

「それって誰が行けるんですか？」

「一応更識縁者と、一夏君が認めた数人だけって事になってるから、この事は内緒だからね」

万が一織斑姉妹（姉双子）の耳に入ったら、彼女たちもついてくるだろうと危惧した刀奈は、部屋にいるメンバーに他言無用と口止めをした。

「でもお姉ちゃん、休みが全員揃う日なんてあったっけ？」

「一夏君が調整してくれたから、私たちは問題ないわよ」

「他国の候補生であるカルラさんは難しいかもしれませんが、恐らく大丈夫でしょう」

不安に押しつぶされそうになっていたエイミイに、虚がフォローを入れた。更識縁者

ではないが更識所属なので参加出来る可能性があるのに、候補生としての地位がそれを邪魔をするのではないかと心配していたようだが、今の一言で安心したようだった。

「とりあえず、香澄さんやエイミイも候補に入っているから安心してテストに臨むように」

「温泉って、実は初めてじゃない?」

「あまり行く機会もありませんでしたからね」

「言っておきますが、お二人も赤点なんて取ったら行けませんからね?」

「大丈夫よ。これでもちゃんと勉強してるんだから」

刀奈も虚も、学年一位の成績であり、万が一にも赤点なんていう事態にはならないと理解しているが、念の為釘を刺しておいた一夏であった。

「ところで一夏君」

「何でしょうか」

「この試験が終わったら、簪ちゃんと美紀ちゃんは代表になるわけじゃない? お祝いとかしないのかしら」

「俺たちは篠ノ之の件がありますから、準備してる暇がありませんよ。刀奈さんや虚さんだって、色々あるでしょうし」

「復学させるのか否かでも変わってくるけどね」

「とりあえずは様子見ですかね……ISを動かせるのか、それもまだ分かりませんし」

「VTSは使えたんだよね？ だったら大丈夫だと思うけど——」

「お姉ちゃん、一夏、少しポリウム押さえて」

「ああ、すまん」

勉強してる人たちの気が散ると、簪から注意され、一夏と刀奈は部屋の奥——この場合に入り口付近——に移動して話を続ける事にした。

「箒ちゃんの専用機——って事になってるサイレント・ゼフィルスは一夏君が保管してるんだよね？」

「整備は済ませましたし、篠ノ之が行ってきた残虐非道なデータは消去しましたので、彼女がその事で篠ノ之を拒むことは無いと思います」

「それだったら大丈夫だと思うけど、万が一箒ちゃんに過去の人格が戻ったらさすがに庇えないわよね」

「東さんの発明品ですから、何処かしら欠陥があるかもしれませんからね……こちらでも作っておきますか？」

「さすがに未認可の薬を作らせるわけにはいかないわよ……篠ノ之博士は何でもありだ

けど、一夏君には守るものが沢山あるでしょ？」

「そうですね……例えば、刀奈さんとか」

「バカっ！」

照れくさそうに言う一夏に、言われた方の刀奈も照れくさそうに答える。ふざけたのはそこだけで、すぐに一夏も刀奈も真面目な表情に戻った。

「とりあえず、俺と碧さんで篠ノ之の様子を見に行きますので、刀奈さんたちは篠ノ之の部屋の片づけをお願いします。もちろん、試験が終わったらで結構ですので」

「分かってるわよ。てか、箒ちゃん部屋の部屋つて織斑姉妹の部屋の隣でしょ？　あまり行きたくないわね……」

今から憂鬱な気持ちを抱きながらも、一夏からのお願い事を断るという選択肢は刀奈の中には無い。話し合いを終えてみんなの所へ戻ると、本音が死になっただった。

簪の心中

定期試験も終わり、簪と美紀は合宿所を訪れていた。本来なら先週に予定されていたのだが、テスト前とトーナメントが重なってしまったため、一夏の交渉の末今週に変更になったのだ。

「美紀、大丈夫？」

「だ、大丈夫だよ、簪ちゃん……ちよつとテストで精根尽き果ててまだ回復してないだけだから」

「それは大丈夫じゃないんじゃない？」

ぐったりとしている美紀を心配しながらも、簪は簪でかなり緊張しているのだ。

「本当に私たちが代表になるのかな……」

「一夏さんが言うんですから、たぶんそうだと思いますけどね」

「美紀、口調がちよつとおかしいよ？ 私には敬語じゃなくていいって」

「ちよつと自分の中でコントロールが効いてないみたいなので、ちよつと我慢して……すぐに元に戻ると思えますから」

「う、うん……」

定期試験でどれだけ疲れたのかと、簪は美紀の事を心配そうに見つめる。その間だけは、自分の悩みが頭の隅に行っているような気がして、簪は心の中で美紀に感謝したのだった。

「更識簪、四月一日美紀だな。第一会議室に向かいなさい」

「はい」

急に声を掛けられたが、見覚えのある職員だったので簪はすぐに反応できた。これが見ず知らずの相手だったら、少し身構えたかもしれない。

「第一会議室って、確か限られた人しか入れないんじゃないか？」

「その『限られた人』になるのかもしれないね」

簪の目標でもある、まず地位だけでも刀奈に追いつきたいという夢が現実になるかもしれないと、美紀は簪に微笑みかける。

「とりあえずこれで刀奈お姉ちゃんと同等になれるのかな」

「駆け出しの代表と、既に一度世界の頂点に立ったことがある代表を同列視したら失礼

だつて」

第一会議室の前に到着し、簪は大きく深呼吸をしてから扉を叩いた。

「更識簪、四月一日美紀両名、参りました」

『入りなさい』

入室の許可を取り、簪と美紀は小さく頷いて中へ入った。

「用件はなんとなく分かつているわね？」

「おおよそは」

「では前置きなしで本題に入ります。来年の夏、第三回モンド・グロツソが開催されることが正式に決定しました。したがって何時までもペア代表の座を空席にしておくわけにはいきません。そこで二人には第三回モンド・グロツソに向け代表に昇格してもらう事になります。異論はありますか」

「ありません」

代表になれるというのに何に異論を唱えろというのかという感じで、簪と美紀は間髪を入れずに返事をする。

「では、手続きなどは後程書類を送りますので、今日はこれで解散です。代表に昇格するのですから、今以上に精進し、他のIS操縦者の見本となるような行動を心掛けるように。決して、織斑姉妹を参考にしようとは思わないでください」

どうやらこの職員は織斑姉妹の本性を知っているようで、強く念押しされてしまった。もちろん、簪も美紀も織斑姉妹を手本にしようとは思っていないので、職員の言葉に頷き会議室から退室したのだった。

「まさかこれだけの為に呼び出されたのかな」

「まあ、書類とかは後で良いなら良かったよ。面倒な事は後回し出来た方が良いし」
「分からない箇所はお姉ちゃんか一夏に聞けるしね」

それほど難しい書類ではないと思っているが、万が一を考えてその二人の名前を上げた簪は、刀奈に頼ろうとしてる自分に気が付きため息を吐いた。

「どうかしたの？」

「結局お姉ちゃんに頼ろうとしてるなって思ってたさ……やっぱり地位だけ同じになってもお姉ちゃんより下なんだなって思ってた……まあ、仕方ないんだけどさ」

「簪ちゃんは頑張ってるし、一夏さんのお手伝いという点から見れば、刀奈お姉ちゃんよ

り簪ちゃんの方が上だと思うけど」

「私はあくまでお手伝いだもん。お姉ちゃんがやってるのは更識の仕事、個人でやってるお姉ちゃんの方が上だってば」

「そこまで卑下しなくても……簪ちゃんには簪ちゃんの良いところがあるんだし、刀奈お姉ちゃんと比べなくてもいいと思うけどな」

「こればかりは姉妹の問題だからね……美紀は一人っ子だから分からないかもしれないけど」

確かに美紀は一人っ子ではあるが、更識姉妹や布仏姉妹と姉妹同然で育ってきたから、簪が抱えているコンプレックスも多少は理解出来る。だが完全に理解出来ると言えるほど、美紀は自分を刀奈と比べてきたことが無いのだ。

「簪ちゃんは刀奈お姉ちゃんの事、嫌いじゃないんですよ?」

「好きと言い切れるわけじゃないけど、嫌いではないよ。なんで?」

「だったらそこまで比べる事はないんじゃないかなと思って。姉妹でも違いは当然あるんだし、そんなこと言い出したらマドカさんはどうすればいいのって話になっちゃうから。千冬先生と千夏先生は、生活態度に難ありとはいえ最強の称号を持つてるし、兄である一夏さんは更識企業のトップで篠ノ之博士と同じくらいの研究者としての素質が

ありますし、妹のマナカさんも一夏さんよりは劣りますが天才的な頭脳を持っています。それでもマドカさんは自分を卑下することなく、少しでも姉や兄に追いつこうと努力してますよね？ だから簪ちゃんも自分はと思うより、少しでも近づこうと努力し続ける事が大事だと思うよ」

「分かっているんだけどさ……もう少しだけ悩んでから決めるよ」

簪の中でも比べるより追いついて一緒の世界を見たいと思う方が強くなってきたはいるのだが、なかなか割り切ることが出来ないのだ。美紀に諭されるまでもなく分かっているのに、簪は小さくため息を吐いてそう答えたのだった。

箒の復帰

碧を護衛につけ、一夏は再び山奥の柳韻宅を訪れていた。元々の期限は一週間ほど残っているのだが、ギリギリまで預けて即復帰だと色々問題があるだろうからと、一週間は慣らしでI S学園で生活させた方が良くと判断したためである。

「一夏さん、さつきから震えてますが、寒いわけじゃありませんよね？」

「寒さもあるでしょうけど、恐らくは篠ノ之と対面するからだと思います」

いくら箒が生まれ変わったといっても、一夏にとつて恐怖の対象であることには変わらない。最近はおータムには過剰に反応しなくなったのを考えれば、長い時間一緒にいればトラウマは克服されるのだろうが、箒に関しては何時元の人格に戻るかもしれないという恐ろしさから、なるべく傍に置かない方が安全だろうというのが更識全体の考えになった。

「何かあれば私がすぐに仕留めますから」

「杞憂だと思いますけどね。念のためお願いします」

ISだけでなく、徒手格闘も得意とする碧は、こういった場面の護衛に最適である。一夏は思っている。本音や美紀も徒手格闘は心得ているが、一夏には及ばないのでやはり碧が適任だろう。まして本音は頼りなさが目立つし、美紀は合宿所に行っているので、碧しか護衛がないのも彼女が随行した理由でもある。

「お久しぶりだね、一夏君」

「約一か月ぶりですかね。その後篠ノ之の様子は？」

「君から預かったポータブル版VTSでISの練習をしながら、稽古事にも励んでいたから、心身ともに充実していたと思うよ」

「元々のポテンシャルは高いものがありましたね、思い込みが激しかったですからね。その辺りはどうですか？」

「束の葉のお陰か、あの日を境に驕り高ぶることは無く謙虚になったよ。親のひいき目かもしれないが、絵に描いた大和撫子という感じだ」

「中身が変わったのならそうでしょうね。前々から篠ノ之さんは、黙っていれば大和撫子と言われていましたから」

「いや、耳が痛いですな」

碧の率直な意見に、子育てをしつかりとしてこなかった事を言われているような気が

して、柳韻は苦笑いを浮かべた。

「まあ、一週間もあればクラスメイトたちと打ち解けられると思うし、一夏君もそんなにビクビクしなくなると思うよ」

「今の篠ノ之さんには何の落ち度もないのでしようが、こればかりは刻み込まれた体験から来るものですから、そう簡単にはいかないと思います」

過去の箒がしてきた仕打ちを束から伝えられ、柳韻は本当に申し訳ない気持ちでいっぱいになっていたのだ。だから一夏から箒の更生を頼まれた時、親の務めだと思い快諾したのである。

「とりあえず上がってくれ。箒も君たちに会うのを楽しみにしているから」

「一夏さんは兎も角として、私もですか？」

「過去の映像を引つ張り出して、貴女がモンド・グロツソで優勝したのを見て興奮していましたからね。千冬ちゃんと千夏ちゃんと並び、貴女はIS乗りの憧れらしいですから」

「あの二人と同列視されるのはちよつと嫌ですが、そう思っていたのはありませんね」

柳韻の前では大人しいので、柳韻は織斑姉妹をいい子だと思っている。だが実際は駄目人間を絵に描いたような生活態度と傲慢さで、一夏から説教されているのだが、そんな身内の恥を晒す必要は無いと一夏は黙っているのだった。

「箒、一夏君と小鳥遊さんが迎えに来たぞ」

「はい、お父様。一夏様、小鳥遊さん、お久しぶりです」

「その後どうですか？ 生活に問題などありますか？」

「いえ、何不自由なく生活しております。強いてあげるとすれば、過去に一夏様にしてきた仕打ちを覚えていないので、どう償えばいいのかと頭を悩ませております」

「これからの態度と、問題なければ更識に力を貸していただければ、それで十分です」

一夏としては使えるものは何でも使いたいので、箒が更生して更識の為に働いてくれるなら、自分に対する償いになると考えている。もちろん側近というわけにはいかないもので、まずは末端で働いてもらうつもりではあるが。

「そのような事で償えるほど、前の私がしてきたことは軽くないと思っております。話を聞く限りですが、極刑に曝されても仕方ないと思えるほどの仕打ちです。どうか、もっと重い罰を」

「そう言われても……今の貴女には何の罪もないわけですから……もちろん、それなり

に罰は課さなければいけません、更識で判断した罰ならどこも文句は言つてこないと思ひますので」

「まあ、更識に逆らえる組織があるとは思へませんしね」

さらりと言つてのける碧に、一夏は苦笑いを浮かべ、箒と柳韻は一步引いた。当然の事だが、それをあつさりと言われ受け入れられるだけの経験が二人には無かつたのだ。

「とにかく、今日から一週間は元の部屋で生活してもらいますが、問題がないと判断出来れば調整次第でルームメイトも出来るでしょう。そうすれば社会復帰に近づけると思ひますので」

「もちろん、問題ありと判断したら、すぐにでも始末しますので」

「分かりました。お父様、ありがとうございます。行つてまいります」

「ああ、今度こそ立派になるんだぞ」

柳韻に見送られ、箒は碧が展開した木霊の腕に抱かれ I S 学園へと向かう。一夏は片づける仕事があるからと別行動だが、二人は特に文句を言うでもなく、また特に会話するでもなく I S 学園へと戻つてきたのだった。

出迎えは生徒会

IS学園に到着した箒を出迎えたのは、生徒会長の刀奈と従者の虚の二人だった。本来なら教師である織斑姉妹が出迎えをするべきなのだろうが、いきなりは刺激が強すぎるといふ一夏の配慮から、刀奈と虚の二人に決まったのだった。

「ご苦労様です、碧さん」

「いえ、篠ノ之箒さんをお連れする任、無事に完了した事を報告いたします」

形だけの報告を済ませて、碧は木霊から箒を下ろした。

「お久しぶりね、篠ノ之箒ちゃん。いや、今の貴女は初めましてかしら？ IS学園生徒会長兼日本代表の更識刀奈です」

「布仏虚です」

「篠ノ之箒と申します。以前の私が多大なるご迷惑をお掛けしたようで、深くお詫び申し上げます」

深々と頭を下げる箒に、刀奈と虚は若干面食らった感じになったが、すぐにいつもの

調子を取り戻した。

「貴女には一応監視がつきませんが、基本的には自由に過ごしてくれて構いません。もちろん、常識の範囲内の自由ですので、行き過ぎだと判断した場合は即排除しますのでそのつもりでね」

「その判断は一夏様がなさるのでしようか？」

「一夏様？ ああ、箒ちゃんも呼び方が変わったのね。そうね、一夏君が実質的決定権を持つてるから、最終判断は一夏君が下すと思うわ。でも、一夏君は優しいところがあるから、私たちも意見は言うと思うわよ」

「それで構いません。そもそも私は生きていられるだけで喜ばしい身なのですから、多少の監視くらいはなんともありませんし、これ以上罪を重ねるつもりもありません」

「本当に変わったわね、箒ちゃん……これならすぐにでもISに認めてもらえそうね」

「そればかりは一夏さんの判断を仰がなければいけませんよ、お嬢様」

「分かっているわよ。ここにいるISは一夏君にとつて子供同然ですもんね。箒ちゃんに使わせるかどうかは一夏君が判断しなきゃダメよね」

「以前の私は悉くISに嫌われていたと伺いましたが、今の私は認めてもらえるのでしょうか……」

不安そうに尋ねる箒に、刀奈は少し首を傾げてから答える。

「私にはすべての I S の声は聞こえないけど、私の専用機の見立てでは大丈夫だと言ってるわ。もちろん、今のままだったらの話だけどね」

「私の専用機も、今の篠ノ之さんなら大丈夫だろうと言っています。このままゆっくりと成長して良ければ、後々は一夏さんのお力になれると思いますよ」

虚の一言に、箒は嬉しそうに表情を綻ばせる。今の箒にとつて、一夏の力になれる事が何よりも嬉しいのだろうと、刀奈と虚は思ったのだった。

「それでは部屋に案内しますが、当面は一人部屋です。そして部屋のすぐ隣には織斑姉妹が生活している寮長室がありますので、何かあればすぐ織斑姉妹が飛んでくると思ってください」

「その辺りは一夏さんが説明したから大丈夫よ、虚ちゃん。それに、今の篠ノ之さんはそれほど問題を起こしそうにもないし、すぐにルームメイトも出来るかもね」

「今一人で生活してるのって、マナカちゃんと香澄ちゃんの二人よね？ どっちがいいかしら」

「その辺りは一夏さんと相談して部屋割りをした方が良いと思いますよ。元々一人の香澄さんはそのままにして、マナカさんをマドカさんと同部屋にして、静寂さんを篠ノ之

さんのルームメイトにするのが一番だと一夏さんは言っていましたか」

人の心の声が聞こえる香澄は、なるべく一人部屋のままがいいだろうと一夏は考えており、箒とマナカ、マドカのどちらかを同室にするのは危険すぎるので、静寂なら安心出来るというのが一夏の考えであり、それが一番現実的だと碧も思っている。

「確かに静寂ちゃんなら実力的にも人間的にも大丈夫そうね。まあ、一夏君が何かしてあげれば喜んで引き受けてくれるとは思うけど」

「鷹月さんは前の篠ノ之さん相手でもある程度は平気でしたからね。委員長気質というのでしょうか、鷹月さんはしっかりとされていきますからね」

「あの、その鷹月さんというのは？」

「そっか、記憶が無いんだっけ？ 追々説明するけど、箒ちゃんのクラスメイトで、更識所属のIS操縦者よ」

簡単な説明だけ済ませ、箒を部屋へと案内するために寮内へと入っていく。途中食堂やトイレの位置を説明しながら、元箒が使っていた部屋へと到着した。

「ここは基本的に関係者以外立ち入り禁止なんだけど、箒ちゃんは気にせず入っているからね」

「何故このような場所に部屋を？ 前の私が問題児だったからでしょうか？」

「そうなのよね……一夏君に真剣を向けてみたり、木刀で襲いかかったり、竹刀で殴り掛かったりと問題行動がまだだったからこの部屋にされたのよ」

「記憶が無いとはいえ、一夏様にはもう一度しっかり謝らないといけませんね……」

過去の自分がしてきた所業を聞かされ、箒はどんよりとした雰囲気醸し出す。

「前の箒ちゃんからは考えられない言葉ね。今の貴女に謝ってもらっても仕方ないけど、一夏君なら許してくれると思うわよ。でも、万が一今の貴女が一夏君に仇なす存在になったら、一夏君の判断を仰がずに私たちが貴女を処分するからそのつもりでね」

「分かっています。一夏様が私の命を繋ぎとめてくださったのですから、一夏様に仇なす事などないここに誓います。もしそういう存在になってしまった時は、容赦なくやっってください」

箒の覚悟を聞き入れた刀奈と虚は、力強く頷いて箒を部屋へ入れたのだった。

一夏と本音

更識の用事を済ませ、車で送ってもらった一夏を出迎えたのは、護衛の本音だった。

「お帰り、いっちー。もうすぐかんちゃん和美紀ちゃんも帰ってくるって」

「代表昇格したらしいな。さつきメールを見て知ったが、やはり二人で決まりだったやうだな」

「いっちーがせっついたから決まったんでしょ？」

「さて、俺は何も言っていないからな。全ては簪と美紀の実力が認められた結果だ」

当然のように嘯く一夏を見て、本音は楽しそうに笑った。彼が認めないのは最初から分かっていたが、自分の想像通りの反応が楽しかったのだろう。

「さて、篠ノ之の様子はどうか？」

「今は大人しく部屋の掃除をしてるって刀奈様から報告が来てるよ。前のシノノンと違って、今のシノノンは大人しくてちよつと気味が悪いね」

「言ってるやるなよ……まあ、少し時間はかかるかもしれないが、今の篠ノ之なら更識企業で使えるかもしれないからな。長い目で見てやってくれ」

「いつちーが使うって判断するなら、私たちは大人しく従うだけだよ？　ご当主様の命令に逆らえるほど、私には権力は無いし、考える力もないから」

「お前は実力を隠すのだけは一流だからな……だが、上手に隠し過ぎて上手く取り出せない欠点があるが」

「そんなに褒められると恥ずかしいよ」

「後半は褒めてないからな？　もう少し実力を出せるように訓練しろ」

「はい」

本音の実力は一夏も認めるものがあるのだが、その実力を毎回発揮する事が出来ないのだ。碧のように相手に実力を掴ませないまではいいのだが、隠し過ぎて大事な時に使えないというのが本音の欠点である。

「とりあえず篠ノ之の件は様子見だ。何処の国からも文句は無いし、日本政府には状況を見てIS学園に復帰させるかもしれないと報告してきたからな」

「普通先生かがくちよーがするんじゃないの？」

「どちらも生徒会に投げてきたからな。より正確に言うならば、更識に一任してきたんだがな。篠ノ之の処分については更識が最初から一任されているんだから、復帰させる判断もそちらに任せると言ってきた」

「千冬先生や千夏先生らしい言い方だね。まあ、戦力的には申し分ないわけだし、いつちーとしては更識の戦力増強に使いたってところかな？」

「別にどこかと戦うわけじゃないのだから、これ以上の戦力は必要ないと思うがな」

「既に更識企業に敵対しようなんて思う企業は無いだろうしね。アメリカがどう出て来るかにもよるけど、ISを使つての戦争なんて事にはならないだろうしね」

「そもそもアメリカには今コアが無いからな。散々ISで金もうけを企てた報いを受けている最中だから」

「後はティナっちが移籍すれば、アメリカの候補生はいなくなるんだよね？」

「殆ど引退を表明してしまつたからな」

アメリカの権威と共に候補生の評価も下がっていったため、殆どの候補生は絶望しIS操縦士としての夢を捨てて堅実に就職を考え始めたのだが、ティナを含む数人は自由国籍を使つて引き続き候補生として頑張ることを表明している。もちろん、アメリカの情報欲している国に移籍するわけだから、生まれた国を裏切るといふ重荷に耐えられるかどうかはその人次第であるが……

「それでいつちー、ティナっちの移籍先は何処になるのかな？」

「今のところイスラエルが有力だろうな。アメリカからたんまり賠償金を貰い、更に技

術力の発展を見せているが、やはり候補生の質は急激には上がらないからな」

「IS学園所属で、元々候補生として高い実力のあるティナっちが欲しいってわけだね」
「イスラエルの企業も、いくつか買収して傘下に収めているから、移籍の際には手助けも出来るだろうしな」

「いっちゃん、どれだけ更識を大きくするつもりなの?」

「ISを使つて悪巧みをする企業が無くなれば安泰なんだがな……まあ、既にIS企業の三割は更識の息がかかった企業になつてるし、亡国機業を壊滅させたことにより、更に更識の名に力と箔が付いたからな」

「国際犯罪組織を壊滅させ、その実質的リーダーを改心させた手腕を評価するつて、前にニュースか何かで言つてたね」

「本音がニュースを見てるとは、珍しい事もあるものだな」

割と本気でそう思った一夏だったが、同室が簪であることを考慮すれば、ニュースくらい見てもおかしくないかと思ひ直し一つ頷いてから部屋へ向けて歩き出す。

「いっちゃん、今日はかんちゃん和美紀ちゃんが代表昇格した事へのお祝いだから、いっちゃんも手伝つてね」

「手伝うのは構わないが、何をすればいいんだ?」

「食材は用意してあるから、いっちはそれを美味しく調理してくれればいいんだよ！」
「ただだんに本音が食べたいだけじゃないよな？」

「かんちゃんも美紀ちゃんもいっちーのご飯は大好きだし、こんな時くらいにしかいっちは作ってくれないでしょ？」

「確かに、最近忙しくて料理してなかったかもしれないな……」

最近どころではなく、中学に進学して以降、一夏が調理をする機会は格段に減っており、誰かの誕生日に作るくらいになってしまっていた。だがそれもIS学園に進学してからは無くなり、この一年で本当に数える程度しか料理をしていないのだった。

「それじゃあいっちは食材がある調理室に向かうのさ。マドマドとマナマナが待つてるから」

「……あの二人に調理させるつもりか？」

「いっちーのお手伝いをしたいんだってさ。もちろん、包丁は危ないからもたせてないからね」

見た目だけでなく、料理の腕も姉に似てしまった二人の妹を思い浮かべ、一夏はなかり苦みの強い笑みを浮かべて調理室へと向かうのだった。

普通の感性

定期試験も終わり、冬休みに向けてまったりとした空気が流れだすはずの休み明けだが、一年一組には異様な緊張感が流れていた。

理由ははつきりとしており、今日からあの「篠ノ之箒」がクラスに復帰するのだ。事情を知らない人からすれば、何故箒が復帰出来るのか不思議で仕方ないのだ。

「篠ノ之さんって国際裁判にかけられて死刑になるんじゃないの？」

「噂では篠ノ之博士が減刑を求めたらしいよ」

「私が聞いたのは、篠ノ之博士に恩を売ってコアを手に入れようとした国があるらしいって」

「私が聞いたのは、殺すよりも有効活用した方が償いになるって更識企業が進言したって」

いろいろと噂が飛び交う中、事情を知っている美紀と本音とマドカは、空席になったままの一夏の席を見つめながらため息を吐いた。

「本音がため息を吐くなんて珍しいわね」

「私だつてため息くらい吐くつてば、シズシズ」

「余程面倒な事になつてゐるつて事くらいしか知らないからね、私たち」

更識所属でも、ただ単に籍を置いてゐる静寐や香澄は、内情までは聞かされることは無い。だから箒が生きている詳しい理由も聞かされてはいないのだ。

「いっちゃんが反省させて荒野の開拓でもさせればいいつて言つたのは本当だけど、反省してなかつたら片づける予定だつたんだよね」

「片づけるつて簡単に言うけど……」

「ほえ？」

本音からしてみれば普通に言つたつもりでも、静寐と香澄はその意味を理解して戦慄する。普通とは言えなくても女子高生がその意味を理解して、何も感じなかつたらそれはそれで問題ではある。

だが本音は昔から暗部に所属しているからか、普通の人がその事を聞かされてどう思うかという考えには至らず、普通に話してしまつたのである。

「本音、私たちがみたいに暗部の人間ならともかく、普通の家庭の人には刺激が強すぎるよ」

「そうなの？　でもあれだけの事をしたんだから、片づけられても仕方ないとは思うけどね」

「そう考えられないのが普通なんだよ。とにかく、静寐さんも香澄さんもそんなに距離を取らなくてもいいですよ」

戦き怯えた二人に警戒する必要は無いと告げ、とりあえず話題を変える事にした。

「そのせいで一夏さんは職員室でいろいろと手続きをしてるんですけどね。保護観察処分みたいなのですから、更識が身柄を観察する事になってますので、その責任者として」

「一夏君も大変よね……まあ、彼も無理を通す為に立場を明かしたわけだから、この苦労は覚悟してたんでしようけどね」

「誰が大変だつて？」

「あつ、一夏さん」

少しやつれたような雰囲気を感じさせる一夏に、美紀は心配そうな視線を向けた。

「やはり篠ノ之さんは処分した方が——」

「いや、篠ノ之より織斑姉妹だな……あの二人に監視を付けたいくらいだ」

「あの二人がどうしたの、お兄ちゃん？」

先ほどまで興味なさげに外を眺めていたマナカだったが、一夏が顔を見せたからか会話に加わってきた。

「監視するのは面倒だから、問題を起こしたことにして始末してしまおうとか言い出してな。説教してた所為で遅れそうになった」

「あの二人にお説教出来るのは一夏君くらいだもんね」

「あれが世界中から尊敬されているとはな……世の中にあの二人の真の姿を知らしめたのが、身内の恥を他所様に知られるのは恥ずかしいしな……」

「兄さま……」

「お兄ちゃんが心配する必要は無いと思うけどね。私だったらあの二人を社会的に抹殺することくらい——」

「マナカ、あまり過激な事はするなよ」

「うん、お兄ちゃん」

あつさりと手のひらを返したように甘い声を出すマナカに、静寂と香澄は呆気に取られてしまった。

「マナカさんは一夏さんのいう事は聞くのですね」

「当然でしょ？ 首相や神のいう事なんかより、お兄ちゃんの言葉が正しいに決まってるんだから」

「二国のトツプや神より上と言われるのはなんだかな……」

かなり微妙な気分になっている一夏ではあるが、マナカは本気でそう思っているのが分かってるので、あえて何も言わずに微妙な雰囲気だけを醸し出しているのだった。

「お兄ちゃんより正しい人間なんていないし、お兄ちゃんより尊敬出来る相手もないもん」

「もう少し視野を広げたらどうだ？」

「広げてもし緒だし、あまり他人に興味ないからね」

「何だか束様みたいですな、マナカは」

「あんなウサ耳マッドと一緒にしないでよね！」

マドカがボソツと言ったことに過剰に反応して見せるマナカ。実は自分でも若干似ていると自覚しているからこそ過剰に反応したのだが、本人は頑なに認めようとはしないのだ。

「とにかく、さつき本音が言ったように問題があれば更識が責任を持って処分するから安心してくれ」

「一夏君がそう言うなら安心出来るけど、本当に大丈夫なの？ あの篠ノ之さんだよ？」
「ウサ耳マッドが開発した秘薬で完全に人格が変わったからな……公には出来ないから更生したって事になってるがな」

「一夏君、かなり黒いわよ……」

「これぐらい普通だろ。そもそもあの篠ノ之が本気で更生するとは俺も思ってたから、せめてもの情けで最期は俺がトドメを刺すつもりだったんだが」
「だから怖いってば……」

一夏も暗部世界にどっぷり浸かっているため、考えが若干恐ろしいんだと、静寂と香澄は改めて理解したのだった。

厳重な見張り

織斑姉妹、碧、真耶、ナターシャに囲まれるように教室に向かう筈は、自分がどれだけ警戒されているかを再確認し、それだけの事をしてきたのだと改めて理解した。

「束の妹だろうがなんだろうが、今度は容赦しないからそのつもりで生活するように」

「一夏から言われているから今は手を出さないが、一夏の期待を裏切ったら即その首を撥ねてやるからな」

「織斑姉妹の物騒な物言いは兎も角として、私も一夏さんの信頼を裏切るようなことをしたら容赦なく貴女の人生を終わらせますので」

「皆さん、一応教室前なので、生徒に物騒な物言いが聞かれちゃいますよ?」

真耶の弱々しいツツコミは三人には効果が無く、逆に筈に向けていた鋭い視線を向けられてしまい、泣きそうになりながら教室に逃げ込んだ。

「マヤヤ、何で泣きそうなの?」

「い、いえ……えつと、皆さんもご存じだと思いますが、今日から篠ノ之さんがI S学園に復学します。もちろん、何か問題を起こしたらすぐ国際裁判にかけられ、そのまま二

度と帰ってこないことになると思いますので、必要以上に怯える心配はありません。ですよね、更識君？」

自分が伝えるよりも一夏が発言した方が説得力があるし、生徒を安心させられると理解している真耶は、一夏に話を振る。振られた一夏は心得ていたとばかりに立ち上がり、クラスメイトたちに説明を始めた。

「今の篠ノ之さんは、一学期にIS学園に在籍していた篠ノ之さんとは別人になっています。もちろん、ふとした拍子に元の篠ノ之さんが出てくる可能性は否めませんが、その場合は更識が全力を持って排除しますのでご安心を」

「更識君、排除って？ また学園から追い出すの？」

清香の質問に、一夏は苦笑いを浮かべた。普通の高校生が考える排除は、その程度なのかという認識のずれを実感しての苦笑いである。

「言い方が悪かったですね。学園から排除ではなく、この世から排除します」

特に纏っている空気の質を変えたわけではないのに、教室の温度が一気に下がったように真耶には感じられた。それでもまったく動じないマドカとマナカ、美紀と本音を見

て、さすが織斑姉妹の妹と暗部所属の二人だなと感じていた。

「というわけで、過剰に警戒心を抱く必要は無いので、普通にしてる分には仲良くしてあげてください」

説明は終わりだと言わんばかりに座った一夏を見て、真耶は自分が話す番だという事を自覚し、廊下に目を向けた。

「それじゃあ入ってきてもらいましょうか」

それを合図に教室の扉が開き、前を織斑姉妹、後ろを碧とナターシャが囲むようにして箒が教室に入ってきた。

「えっと、篠ノ之箒と申します。以前の私はこの教室で生活していたようですが、今の私にはその記憶はありません。皆様には必要無い恐怖心を植え付けていたようで誠に申し訳ございませんでした。今後そのような事が無いように努めますので、皆様どうかよろしく願います」

懇切丁寧に自己紹介と謝罪をし、深々と頭を下げた箒に、クラスメイト全員が呆気にとられた。そんな中で動けるのは彼女くらいのものだった。

「ほう、これがあの箒なのか……随分と雰囲気が変わってるな」

「姉である篠ノ之束と、一夏様のお陰でございます」

「ら、ラウラ？ よく普通に話しかけられるね」

「お兄ちゃんや教官たちが見張ってくれているのだから、必要以上に警戒しても仕方ないだろ？ それに、またこうしてクラスメイトになるんだから、出来る事なら仲良くしたいじゃないか！」

微妙に空気が読めないラウラに救われたように、クラスメイト達も箒に話しかける。

「HR中だ馬鹿者共！」

「話しかけるのは後にしろ！」

箒に群がろうとしたところを、織斑姉妹のカミナリで現実引き戻され大人しくなるクラスメイト達を見て、箒も背筋を伸ばしてその場にとどまった。

「それでは、篠ノ之さんは席に着いてください。前に使っていた場所が空いていますので」

「そう言われましても……以前どの席に座っていたのかもわかりませんので」

「そうでしたね。更識君の隣の席です」

「先に言っておくが、少しでも一夏にちよつかいを出そうとした時点で処罰の対象だからな」

千冬にきつく念押しをされ、箒はビクビクしながら席に着いた。微妙に離れているような気がする一夏の席との間隔を確認し、そう言う事なのかと箒は心の中で過去の自分を責めた。

「(前の私はどれだけ一夏様にご迷惑をかけていたのでしょうか……自分勝手な考え方もしていたのかしら?)」

記憶が無いので前の自分がどんなことをして一夏に迷惑をかけたのかイマイチ把握していない箒は、とりあえず後でもう一度謝ろうと決意したのだった。

「それでは一時間目は実習ですので、更識君以外はここで着替えてください。四月一日さんは篠ノ之さんにいろいろと教えてあげてくださいね」

「分かりました」

何故美紀を指名したのかと一瞬考えたクラスメイト達だったが、更識所属で正式に代表に昇格した美紀なら納得だと、自分たちの中で結論付けたのだった。

「それでは皆さん、今日も一日頑張りましょう」

真耶の掛け声に誰一人として反応せず、真耶は泣きそうな顔で教室から去っていった。その後を追うように一夏も更衣室に向かい、ストッパー役がいなくなったのでクラスメイト達は箒に群がり、殆どの生徒が織斑姉妹の愛の鞭の餌食となったのだった。

本音と箒

復帰そうそうの授業が実習だったため、箒はとりあえず見学という扱いになった。理由はまだ訓練機たちが心を開いていないのと、いきなりでは可哀想だろうという一夏の温情だった。

「というわけで、私も見学になったから。よろしくね、シノノン」

「よろしくお願いします。えっと……？」

「本音だよ！ 布仏本音」

記憶が無いという事で、本音は箒に改めての自己紹介をした。

「布仏という事は、更識関係者なのですね？」

「かんちゃんのみドさんって事になってるけど、実際はお友達だね」

「かんちゃん？ 日本代表候補生の更識簪さん？」

「あつ、昨日正式に代表に昇格したんだよ。発表はまだだから黙っててね」

それを自分に言っているのかと箒は思ったが、今の自分に何かを話す相手などいない

という事だろうと解釈しツツコミは入れなかった。

「ところで本音さんは何故見学に？ 私の監視という事ならば、他の方でもよかったですよ。」

「昔のシノノンに対抗出来る人がそう多くなかったからかな？ 私は相性が良かったようにいつちーから頼まれたんだ。」

「相性？ 人間としてでしょうか？ それとも対戦相手としてでしょうか？」

「後者だね。この喋り方が苛々したみたいで、前のシノノンはすぐに激昂して動きが単調になったんだよ。」

それを本音自身が自覚していたかは定かではないのだが、確かに本音は箒相手に最適な喋り方をしていた。だからではないが、箒が襲ってきた時には大抵本音を対処に当てさせていたのだった。

「それにしても、いつちーは優しいよね。私だったらあれだけの事をしたシノノンを許そうなんて思わないもん。」

急に口調が真面目になり、箒は何事かと身構えてしまう。先ほどまでの雰囲気とは一変し、本音が纏っている空気は油断ならないものであると、今の箒でも感じ取ることが

出来た。

「おっ、そういうところは前のシノノンと一緒になんだね〜」

「……貴女の本当の姿はどちらなのですか？」

「ん〜？ どっちも私なただけだね〜。たぶんこっちが本当の私で、さっきのはお仕事モードの私って事なんだと思うけど、私も良く分からないだよね〜」

意識的に切り替える事が出来るとはいえ、本音はどっちが本当の自分なのか理解していないし、理解しようともしていない。一夏や他の人間も、使い分けが出来るならどちらの本音が本当の本音でも構わないということ、特に追及もしないので、本音もそれでいいやという感じになっているのだった。

「とにかく、いっちゃんの信頼を裏切るようなことがあったら、私も容赦しないから」

「分かっています。出来る事ならば、前の私を今の私が殺したい気分ですから」

「その雰囲気は前のシノノンと似てる部分があるんだね〜。でも、今のシノノンの方が澄んだ空気を纏ってるよ」

「そう言うのも分かるんですか？」

「なんとなくだけだね〜。いっちゃんのように、何処がどう違うとかは分からないけど、前のシノノンが纏ってた空気は、黒く淀んでた感じがしたからさ〜」

だらだらしてる部分が目立つ本音ではあるが、こういう人を見る目はしつかりとしている。しかも純真故に人の本性を見抜くことも度々あるのだ。

「おつ、セツシーとラウラウが模擬戦をするみたいだね。シノノンもISの事をしつかり見ておくといいよ」

「動きを、ではなくですか？」

「シノノンにはまず、ISにも感情があるという事を理解してもらわないといけないから……だからISの動きを見ておいた方が良い……」

「さつきから何を見ていますか？」

箒が覗き込むと、そこには一夏の字で書かれたカンニングペーパーがあつた。つまりさつきまでの説明は一夏が本音に教えた事をそのまま本音口調に変換されて箒に伝えられていた事だつたのだろう。

「ISの事はいつちに教わった方が一番だからね。でも、シノノンの本性とかの話は私自身が感じたことだからね？」

「分かってますよ。全部見えたわけではありませんが、その紙には私の事は書かれてない様子でしたし」

「むー！　せっかくちゃんとした人だって思われるように頑張ってたのにくー！」

本気で悔しがる本音を見て、箒はクスクスと笑い出す。その表情は実に楽しそうで、変に緊張している様子もなかった。

「やっぱりいっちゃんの思惑通りなんだね〜」

「何がですか？」

「他の人だと変に意識しちゃったり、必要以上にシノノンを警戒しちゃったりするから、シノノン自身も緊張して萎縮しちゃうからって言うってたけど、確かに今のシノノンは自然体だなくって思ってる」

「本音さんは私相手に必要以上に警戒してませんし、こちらも警戒する必要が無いと思わせてくださるので」

「だって、私は出来る事ならシノノンとも仲良くしたいし、いっちゃんが大丈夫だって言うてるんだから、それを信じてるだけなんだけどね〜」

「恐らくですが、以前の私がどうしても頭の中をよぎってしまうので、他の人は警戒してしまうのでしょうか」

「う〜ん……空気を見れば、前のシノノンと違うって分かるんだけどなく……まあ、カスミンあたりは分かっても怖いんだろうけどね」

「カスミン…さん？」

耳馴染みのない呼び名に、箒は首を傾げる。その仕草を見て、本音は自分の呼び名が独特であることを思い出して説明したのだった。

「えつとね…：日下部香澄ちゃんだよ！ シノノンといっちーの席の間に座ってた子。今はいっちーと変わったからいっちーの向こう側に座ってる子だよ」

本来であれば箒の隣は香澄なのだが、箒が怖いという事で一夏が席を変わってあげたのだ。もちろん、一夏もそれなりに恐怖心は抱いているのだが、香澄の怖がり方が尋常ではなかったのだから、織斑姉妹を説得し恐怖心に打ち勝つまでという条件で席を変わったのだった。

「人の心が読めるらしいから、シノノン相手は怖いんだってさ」

本音からその事を教えられ、箒は香澄の相手は細心の注意を払って怖がらせないようにしようと思ったのだ。

本音の立場

実習の見学を終えて、箒は興奮冷めやらぬ状態で教室に戻ってきた。着替えが必要なかつた箒と本音が一番だと思っていたが、教室内にはすでに人の気配があった。

「ほえ？ 誰か教室にいるみたいだね」

「そんなことが分かるのですか？」

「これでも更識所属だからね」

すっかり箒と打ち解けた本音は、自慢げに更識所属の凄さを話していく。もちろん、機密指定の情報を話すようなヘマはほしくないように心掛けて。

「シノノンを生かすために色々と無茶した結果、いっちーがご当主様だつてバレちゃったんだけどね」

「二夏様には多大なるご迷惑をお掛けしてしまいました……」

「いっちーなら大丈夫だと思うけど……って、なんだ。教室にいたのはいっちーだったんだ」

「俺は別件で実習に参加してなかったからな。部屋でのんびりするわけにもいかないか

ら、教室で待つただけだ。それにしても本音、随分と篠ノ之さんと打ち解けたようだな」

「一時間ずつとおしやべりしながら見学してたからね」

「何か変わった事はあったか？」

「んー……前のシノノンのような気配は無かったけど、所々はやっぱり同じ人なんだな
〜って思う事はあったよ。でも、前のシノノンみたいに人に当たり散らすような感じは
しなかったし、I Sの事も真剣に考えてる様子だった」

本音からの報告を受けて、一夏は二、三頷いてから箒に視線を向ける。いきなり見つめられた箒は、少し恥ずかしがりながらもしつかりと一夏を見つめ返した。

「貴女はI Sを動かしてみたいですか？」

「出来るのでしたらやってみたいいです。ですが、まだ私に心を開くI Sは存在しないみたいですね」

「まあ、以前の篠ノ之はI Sに当たり散らし悉く嫌われていましたから……ですが、今の篠ノ之さんなら、そう遠くない未来にI Sは認めてくれるでしょう」

「一夏様がそう仰つてくださると、本当にそうなるような気がしてきます」

「本音、放課後は篠ノ之さんと一緒にV T Sルームに言つて模擬戦をしてくれ」

「私が？」

「実習に参加しなかった分、そっちでフォローする事になってるんだ」

ちやつかりとサボりの分を放課後に持ってこられ、本音は少し不満そうな顔で一夏に近づき、そしてダボダボの袖で一夏を叩き始める。

「いっちーの嘘つき！ シノノンの監視をしてれば授業に出なくていいって言ったのに！」

「そんなこと言っていないだろ……そもそも、お前は普通に参加しろといったはずだが？ サボったんだから、放課後も篠ノ之さんと一緒に訓練するんだな」

「訓練ならかんちゃんでも美紀ちゃんでも良いじゃないか〜！」

「その二人は代表昇格の為の手続きやらなんやらで忙しいからな。かく言う俺たちも篠ノ之さんの復学の手続きやら説明やらで書類の山が出来ている生徒会室を片付けなければいけない。本音はそっちの方が良いのか？」

「よしシノノン、放課後は私と一緒にトレーニングだ〜！」

あつさりと手のひらを返した本音に、箒はほほえましさを覚えた。

「とこころでいっちー、別件って？」

「サイレント・ゼフィルスの調整だ。篠ノ之さんの専用機として新たにデータ入力をしなければいけないからな。隔離されていた時に起動したポータブル版VTSから今の篠ノ之さんの癖やデータを取り出して、ある程度サイレント・ゼフィルスに反映させていたんだ」

「一夏様がISの調整をなさっているのですか?」

「まあ、俺がやった方が早いからな。ISの声を聞こえるというアドバンテージは、他の人が調整するよりも早く正確に終わらせることが出来るから」

「いっちーの場合は、技術力だけでも群を抜いてるからね。さすが更識のご当主様って感じだよね」

本音の発言に、箒はふと一つの疑問を抱いた。目の前にいる一夏が当主で、本音が従者であるのなら、このような言葉遣いはマズいのではないかというものだ。

「気にする事は無いですよ。公の場では本音は発言しませんので」

「ほえ? いっちー、どうしたの?」

「いや、篠ノ之さんが『当主と従者なのにこんな話し方をして大丈夫なのだろうか?』という顔をしていたから」

「美紀ちゃんや碧さんも普段から畏まった話し方はしてないじゃないか」

「あの二人は公私をしつかりと区別してるからな。同じように虚さんも公の場ではいつも以上にしつかりとするが、本音にそれは期待できないからな」

「だって、どうしてもいつちーはいつちーにしか思えないから」

「今はまだいいが、卒業したら少しは努力しろよ？ 布仏家は従者の中ではかなり上の地位なんだから、その娘であるお前が今のままじゃ色々マズいからな」

「おねーちゃんに任せるのだ」

自分には分からない世界の話をする二人を見ながら、箒はなんとなく本音に注意しなければいけないという気持ちになった。

「本音さん」

「ほえ、なーにシノノン？」

「一夏様にご迷惑をかけないよう、私と一緒に礼儀作法の特訓をいたしましょう」

「えー！ 面倒だし、放課後はシノノンと一緒にVTSを使つての特訓だし、そんな時間無いよ」

「休日とかもうじき冬休みですし、その間に少しでも礼儀作法を身につけた方が、本音さん自身の為にもなりますよ」

「うーん……少し考えておくね」

あまりやる気の無さそうな返事ではあったが、本音が検討してみるといっただけで箒は満足したのだった。

一日遅れのお祝い

試験後という事もあり、午前中で授業は終わり、一夏たち更識所属の面々は簪と美紀の代表内定のお祝いをする事になった。本来であれば昨日の内にするはずだったが、いろいろとあつて今日になったのだ。

「それじゃあ、簪ちゃんと美紀ちゃんの代表昇格内定を祝して、乾杯！」

刀奈の音頭で乾杯をし、簪と美紀は少し恥ずかしそうに前にでてお辞儀をした。

「料理は昨日用意したんだが、結局パーティーは出来なかったからな」

「日持ちする物を作ってもらって正解だったわね」

「ケーキはすぐクリスマスだから止めておいたもんね」

「食べたかったけどな」

一夏の料理を食べながら、簪と美紀はようやく自分たちが代表になったんだという事を実感し始めていた。

「姉さまたちの後ですが、お二人なら立派に出来ると思います」

「私はそれほど付き合いが無いけど、とりあえずおめでとう」

マドカとマナカにも祝われ、二人は照れくさそうにお互いの顔を見合っただった。

「ところでいつちー、シノノンはこれからどうなるの？」

「とりあえずは二学期の終わりまで監視して、冬休みはISに慣れる事から始める感じだろうな」

「でも一夏君、箒ちゃんに反応するISってあるの？」

刀奈の質問に、一夏でなくいきなり人の姿になった闇鴉が答えた。

「とりあえずは私が呼びかけたお陰で、更識製の訓練機の子たちは篠ノ之さんに乗せる事を承諾してくださいました。まあ、何かあればすぐに投げ出して構わないという許可を出したからですけどね」

「確かにその通りなのだが、またいきなり人の姿になって……」

「じゃあ私も！」

「白式まで……」

闇鴉に続き白式も人の姿になり、甘えるように一夏の膝の上に座った。

「ああー！」

「一夏お兄ちゃんの手の上」

実妹であるマドカとマナカの悲鳴をもともせず、白式は一夏の膝の腕で気持ちよさそうに目を細めてお茶を飲んでいる。

「別に良いんだが、それは俺のお茶なんだが」

「一夏君、私にもそのお茶ちょうだい！」

「お茶なら急須に——」

「一夏さん、そう言う事じゃないですよ」

「それくらい分かっている」

闇鴉のツツコミに、一夏は疲れたような声で応え、そしてそのまま白式を膝の上から下ろして立ち上がった。

「追加の料理を作ってくるから、皆はこのまま楽しんでてくれ」

「あつ、手伝いますよ」

「美紀は主役なんだから、大人しく祝われてろ。簪もな」

手伝おうと立ち上がった美紀と簪を手で宥めて、一夏はそのまま調理室へと向かおうとした。

「一夏君、私が手伝うわよ」

「じゃあお願いします」

すれ違いざまに刀奈に声を掛けられ、一夏は刀奈に手伝いを頼んだのだった。

調理室へ向かう途中で、一夏はなんとなく嫌な気配を感じ取り、刀奈との距離を詰めた。

「ん、どうかしたの？」

「いえ、調理室から嫌な気配が……」

「誰かいるのかしら？」

そう言っただけで刀奈は調理室の中を覗き込むと、そこにはスクールとオータムがいた。

「何してるの？」

「あ？ ああ、更識の小娘か。見ての通り飯を作ってるんだよ」

「貴女たちに調理室の使用を許可した覚えはないんだけど？」

「だからこっそり使ってたんだけど、バレちゃったわね」

「そもそもご飯ならちゃんと呼意してるじゃない。それで満足してないってこと？」

「いや、暴れたら腹減ってな。それで何かねえかと思っただけだ」

「だったらそう言ってください。こちらで用意しますので、お二人は大人しく部屋に

戻ってください。ただでさえ箒ちゃんが復帰して貴女たちの部屋を用意するのに苦勞したつていうのに、これ以上問題を起こさないでください」

「別に何もしてねえだろ？」

「いるだけで怖がる子がいるのよ」

いくら更識が安全を保障したからといっても、亡国機業の人間相手に簡単に心を許せるわけがない。専用機持ちは割とすぐ打ち解けたが、それ以外の生徒は今でも警戒心を持っていてる人の方が多い。

「用意するつて言つても、貴女が作るのかしら？」

「いや、刀奈さんは手伝いだ。俺が作る」

「てめえが？ 料理出来るのかよ」

「一夏君の料理はそこらへんのお店より美味しいのよ？ それを作つてもらえるんだから、ありがたく思つて部屋で大人しくしてくれませんか」

「そうね。一夏が作つてくれるなら私も満足出来そうね。オータム、とりあえず部屋で待つてみましょう」

「しかたねえな……その代わり、うめえもん持つてこなかつたら容赦しねえからな」

「暴れたら織斑姉妹が貴女を潰しに行くから、そのつもりで」

一夏に脅しをかけたオータムに刀奈が脅しをかけると、大人しくオータムは調理室から去っていった。

「それじゃあ一夏君、追加の料理とあの人のご飯を用意しちゃいましょう」

「そうですね……」

「よしよし、怖かったね」

少し怯えている一夏の頭を精一杯背伸びして撫でる刀奈。普段は自分が甘えている分、こういう時くらいはしっかりとお姉ちゃんをしようかと心に決めているのだ。

「少しこのままでもいいよっか。落ち着いてからやらないと危ないもんね」

「すみません……」

椅子に腰を下ろし落ち着くまで刀奈に頭を撫でられた一夏は、普段以上にしっかりと調理をして、オータムに文句を言われないように頑張ったのだった。

大人と子供

簪と美紀のお祝いの為と、スコールとオータムの空腹を満たすために、一夏と刀奈は調理を進めていた。その匂いにつられたわけではないのだろうが、調理室に一人の少女がやってきた。

「簪ちゃんじゃないの、どうかしたの?」

「いえ、何やら良い匂いがしていたので、何か手伝えないかと思いましたが」

「それはありがたいんだけど、簪ちゃん一人? 今は真耶さんが見張りのはずなんだけど」

「私ならここにいますよ」

廊下からひよっこりと顔を出した真耶に、刀奈はとりあえず安心したのだった。

「良かった。復帰そうそう簪ちゃんが独り歩きしてるのかと思っちゃったじゃない」

「手伝ってくれるなら、篠ノ之さんには洗い物をお願いします。さすがに調理は任せられませんので」

万が一、箒が毒物を持っていて、それを混入されたら大変なので、一夏は洗い物を箒に任せる事にした。箒も、さすがに調理は手伝わせてくれないだろうと理解していたのか、素直に洗い物を始めた。

「山田先生も一緒にどうですか？ 思いがけない人数分を作ることになったので、洗い物が多いんですよ」

「思いがけない人数？ 更識君たちは誰の為に料理を作ってるんですか？」

「とりあえず代表昇格が決定した簪と美紀、そのお祝いに來てるメンバーと、スコールとオータムの分も作る事になりました。余裕があるので、篠ノ之さんと山田先生にも賄いとして何かお作りしましょうか？」

「嬉しいです！ 更識君の料理はめったに食べられないって千冬さんたちが言っていましたので」

「では、洗い物をお願いします」

箒と真耶に洗い物を任せて、一夏と刀奈はどんどん料理を仕上げていく。その速度に、箒も真耶も目を奪われてしまっていた。

「更識君ですが、更識さんも早いんですね……」

「IS関係以外でも就職出来そうですね」

「実家が更識だから、他の就職先も何もないけどな」

「そもそも一夏君はご当主様なんだから、就職も何も関係ないでしょ？ 私も、代表を引退したら更識の幹部として働くことが決まってるみたいだし」

「刀奈さんは本当に実家なんですから当然です」

最後の料理も完成させ、一夏と刀奈は料理を運ぶためにいったん調理室から姿を消した。その間も洗い物を進めていく箒と真耶は、二人の料理の腕を羨んでいた。

「篠ノ之さんは料理出来るんですってっけ？」

「簡単なものなら、お父様と二人の時に作っていましたから。ですが、あそこまでのスピードは出せませんし、盛り付けなどもお二人とは比べ物になりませんよ」

「出来るだけ凄いですよ……私なんて冷凍物を電子レンジで解凍するくらいしか出来ませんから」

「山田先生もお忙しいでしょうし、家事が出来なくても仕方ないと思いますけど」

「あんまりフオローになつてないですけど、ありがとうございます」

二人の料理を見て自信を失くした二人ではあつたが、妙な結束感が生まれ、洗い物を済ませたのだった。

「意外と早かったですね」

「二人だからかな？ でも、真耶さんも箒ちゃんも助かりました」

調理室に戻ってきた一夏と刀奈がお礼を言い、賄いとして作った料理を二人に渡し、部屋へと戻っていく。箒と真耶もとりあえず部屋に戻って食べようという事になり、一夏が作ってくれた料理を持って部屋へと戻ったのだった。

パーティーも盛り上がり、疲れたのか簪と美紀が寝てしまい、それにつられるように本音やマドカ、マナカも寝てしまった。そんなメンバーを慈しむように眺める一夏を、虚と刀奈と碧は眺めていた。

「今日はこのままお泊りかしらね」

「織斑姉妹には事情を話しておきましたので、問題は無いと思います」

「一夏さんは何処で寝るのですか？」

「整備室に仮眠出来るようにスペースを作っておりますので、そこで寝れば問題ないでしょう」

「じゃあ、一夏君のベッドにマドカちゃんとマナカちゃんを寝かせて、美紀ちゃんのベッドに簪ちゃんを、本音は床でも気にしないからお布団を敷いて寝かせましょう」

「ベッドの割り振りに嫉妬が見られますが、それが一番でしょうね」

刀奈の提案に虚が賛同し、碧もそれで納得したのだった。

「それじゃあ、俺がマドカとマナカをベッドに運びますので、そちらはお願いします。俺がやると嫉妬するでしょうし」

「さすが一夏君、分かっているわね」

美紀と簪は碧が抱き上げベッドに運び、本音の布団の用意を虚がして、本音を布団に運ぶのは刀奈が担当する事になった。

「それにしても、簪ちゃんと美紀ちゃんが国家代表か……いよいよ姉妹で世界の頂点を取るという野望が近づいてきたわね」

「油断して負けないでくださいよ？ 簪お嬢様も、お嬢様と一緒に頂点に立ちたいと思っているでしょうし」

「分かっているわよ。てか、一夏君たちが応援してくれるんだから、油断なんてしないってば」

「お嬢様はとんでもないミスを犯す時がありますからね……一応釘を刺しておかないと」

「だいたい、まだモンド・グロツソまでは一年くらいあるんだから、今から釘を刺さなくても良いじゃないの」

「お二人とも、皆さんが起きちやいますよ」

ヒートアップしかけていた二人に、碧が声を掛けクールダウンさせる。その間に一夏

は妹たちをベッドに寝かせ、自分は整備室へと移動していったのだった。

「とりあえず、私たちは部屋に戻りましょうか」

「そうですね。ではお嬢様、おやすみなさいませ」

「お休み、虚ちゃん。碧さんも」

部屋の前で別れ、それぞれ自分の部屋へと戻っていく。もし一夏がこの部屋に残っていたら、三人も泊まったかもしれないと、刀奈は部屋まで向かう間にそんなことを思っていたのだった。

衝撃の目覚め

何時もと違う雰囲気を感じ取り、マナカは夜中に目を覚ました。

「どハ、ハハ」……」

辺りを見回し、ここが一夏と美紀の部屋であることを理解したマナカは、自分が寝ていたベッドに視線を向け、隣のベッドで美紀と簪が寝ている事を確認してベッドに倒れ込んだ。

「お兄ちゃんのベッドだあ……？　そう言えばお兄ちゃんは何処に行ったんだろう？」

自分が寝ているベッドが一夏のものであるなら、その一夏は何処に行ったのかと疑問に思ったマナカだったが、睡魔と一夏の匂いに負けて再び丸くなって寝ようとした。

「？　誰かいる……マドカか」

一夏かとも思ったが、自分と体格も見た目もそっくりな双子の姉だと認識し、マナカはもう一度眠りの世界へと旅立っていった。

そのマナカと入れ替わるように、今度はマドカが目を覚まし、マナカと同じように辺りを見回した。

「……は……兄さまと美紀さんの部屋？ お祝いの後そのまま寝てしまったようですね……」

部屋を見渡して冷静に分析したマドカではあったが、自分が何処に寝ていたのかを理解したら冷静ではいられなくなってしまった。

「このベッド……兄さまの!? 今まで私は兄さまのベッドで寝ていたという事ですか!?」

周りの人が寝ていると理解してるので、驚きも小声だったが、マドカは明らかに動揺している。

「兄さまのベッドで寝ていたというのに、私は普通の夢しか見る事が出来なかったなんて……どうせなら思いっきり兄さまに甘える夢でも見られれば良かったのに……」

この辺りが千冬や千夏と違い常識の範囲内で一夏の事が好きなマドカの良いところであり、夢の中でも高望みはしないのだ。

「よく見ればマナカも一緒ですか……まあ、兄さまと一緒に寝てくださいるわけじゃないですしね……ところで、その兄さまは何処に？」

まさか美紀のベッドに寝ているのかと一瞬考えたが、美紀のベッドにいるのは美紀と簪、床には本音が寝ているだけで一夏の姿は部屋の何処にもなかった。

「兄さまはどちらに？」 白式、闇鴉の気配は？」

『闇鴉の気配は、一夏お兄ちゃんが良く使ってる整備室にあるよ。たぶんそこに簡易ベッドがあるんだと思うけど、動き回ってるのを見るに、一夏お兄ちゃんは起きてるんだらうね』

「こんな時間に、ですか？」

『一夏お兄ちゃんは良くこの時間まで起きてたり、この時間に起きて作業をしたりしてるから、別に不思議ではないと思うんだけど』

「そんなこと初耳です……」

ISの中では結構有名な話なので、てっきりマドカも知っているものだと思っていた白式は、マドカの反応に意外感を示した。

『とにかく、マドカが心配する必要は無いから、今は寝たら？ 明日——というか今日も

授業はあるわけなんだし』

「そうですね……なんだか眠くなってきました」

マナカ同様再び一夏のベッドに倒れ込み、そのまま丸くなって眠りに就くマドカ。持ち主が寝たのを確認してから、白式も再び眠りに就いたのだった。

翌朝、一夏のベッドにマドカとマナカが寝ているのをみた簪が二人を叩き起こした。

「二人とも、起きて」

「むにゃ……後五分だけ、お兄ちゃん」

「私は一夏じゃない！」

「うーん……おはようございます、簪さん」

「マドカ、これはどういう事？」

すぐに目を覚ましたマドカに詰め寄りながら、簪はマドカに質問した。

「どういう事とは？」

「何で貴女たちが一夏のベッドで寝てるのかって聞いてるの」

「そんなこと言われましても……パーティーの後そのまま寝てしまったんだと思います。それで、簪さんは美紀さんの、私とマナカは兄さまのベッドに寝かされたのだと思います」

「それで、その一夏は？」

「白式の話では、兄さまは整備室にいるとの事です」

「整備室？　そう言えば仮眠をとるスペースがあったような気もするけど……」
「簪さんが何を考えたのかは聞きませんが、私たちは兄さまと一緒に寝てはいけませんので」

マドカに指摘され、簪は顔を真っ赤にして逃げ出そうとして、床で寝ていた本音に躓いた。

「うにゅ!?　うーん……むにゃむや」

「ほ、本音も寝てたんだ……」

簪に押しつぶされたが、この程度で本音が起きるわけもなく、再び規則正しい寝息をたて始めた。

「誰がベッドに運んでくれたんだろう」

「兄さまだと思いますよ？　あのメンバーでなら兄さまが運ぶはずですから」

「でも、一夏が私たちを運ぶとお姉ちゃんや虚さんが嫉妬するから、私たちは碧さんが運んでくれたのかもしれない」

簪の考えに、マドカも同意する。確かに一夏が簪や美紀を運べば、刀奈や虚が嫉妬し、

自分たちもとねだる光景が容易に想像出来るのだ。

「おはようございます」

「おはよう、美紀。どうも私たちは途中で寝ちやったみたいね」

「そうだね……一夏さんたちにご迷惑をかけてしまったみたいね」

「その一夏は整備室で寝たみたいだから、後で謝らないとね」

「恐らく刀奈お姉ちゃんや虚さん、碧さんにも迷惑を掛けちやっただろうし、全員で謝りに行かないとね」

簪とマドカは美紀の考えに同意し頷いたが、未だに起きないマナカと本音を見て、三人は苦笑いを浮かべたのだった。

「マナカは兎も角、本音はどうやって起こす?」

「最悪引き摺って行けば大丈夫だよ」

「簪さん、過激です……」

本音の扱いを不憚に思いながらも、マドカは特に代案を出すことは無かったのだった。

冬休みの予定

一夏の部屋から食堂に向かうと、既に一夏の隣には刀奈と虚が座っていた。

「おはよう、お姉ちゃん、虚さん」

「おはよう、簪ちゃん。一夏君の部屋にお泊りした気分はどう？」

「そんなこと言われても、寝てたのは美紀のベッドだし、その一夏は部屋にいなかったし」

「当然でしょ。そんなことお姉ちゃん許しませんから」

冗談なのか本気なのか分かりにくい態度に、簪たちは若干困惑したが、すぐに何時もの冗談なのだろうと考えてまともに相手しなかった。

「ところで本音はどうしました？」

「まだ寝てたから、美紀が引き摺ってくると思いますよ」

「簪ちゃん、重い……」

「これでも寝てる本音っていったい……」

「兄さま、美紀さんが可哀想ですのでそろそろ本音さんを起こしてください」

美紀と本音の体格はほぼ同じ、その美紀が本音を背負えるわけがなく、文字通り引き摺ってきたのを見た一夏は、ため息を吐いて立ち上がり本音を叩き起こした。

「ほえっ!？」

「あつ、ようやく起きました。さすが兄さまですね」

「耳元で大きな音を出せば大抵起きるんだが」

「その大きな音を出す術が私たちには無いから」

ちやつかりと一夏が座っていた場所に腰を下ろした簪がそう告げると、ようやく本音が立ち上がり目を擦りながら辺りを見回した。

「ほえ? 何で食堂にいるの?」

「ついさつきまで寝てたから、美紀がお前を引き摺ってきたんだ」

「そう言えば背中が痛いような気もするよ」

あまり大事だと思っていないようで、本音はそのまま券売機に向かい食事を取りに行った。

「我が妹ながら恥ずかしいです……」

「本音は昔から起きなかつたものね……それにしても一夏君、どうやってあんな音を出したの？」

「それは私が出したのですよ」

「あつ、なるほど」

人の姿になり答えた闇鴉に、一夏はいつも通り呆れた視線を向けるが、まったくもつて堪えないのを理解しているのですぐに視線を逸らした。

「俺は先に教室に行つてるから、遅刻するなよ」

「分かつてますよ。織斑姉妹がHRを担当する日に遅刻しようと思う猛者はいませんつて」

用事があるのか先に教室に向かつた一夏を見送り、美紀も腰を下ろした。

「それにしてもみんな眠そうね？　ちゃんと寝れなかつたの？」

「目が覚めたらお兄ちゃんベッドにいたから、ついつい興奮しちゃつて」

「起きたら一夏のベッドにマナカとマドカがいたから、早朝からお説教してた」

「仕方なかつたのよね。パーティー終盤でみんな寝ちゃつて、起きてた私たちで着替えさせてベッドに運んだんだから」

「着替え…ですか？ まさか兄さまが!？」

「いえ、さすがにそれは私たちがさせませんから」

一夏もそこまでは面倒見る気はないだろうし、例えあつたとしても刀奈たちが許すはずもないのだ。

「かんちゃん、みきちゃん、重いよ〜」

「今日は本音が運ぶ日なんだから、頑張りなさい」

「ほえ〜!」

簪と美紀の分も運んできた本音が、ようやく腰を下ろそうとしたところで、マドカとマナカが本音に食券を渡す。

「ま、まとめて言つてよ〜!」

運べないにしても、まとめて注文しておけばかかる時間は減るのに、あえて今渡してきたマドカとマナカに文句を言いながらも、本音はもう一度列に並び直した。

「狙つてたの?」

「いえ、単純に渡すの忘れてました」

「少しでもお兄ちゃんとお喋りしたかったから、つい……」

どうやら反省しているようで、二人は本音のところにむかい、自分たちで交換する事にしたのだった。

「あと数日で二学期も終わるのね」

「冬休みは特に代表合宿もないし、虚さんも予定は無いんですよ？」

「今のところは何もありませんね。年明けに本家へご挨拶でもと思つてましたが、お嬢様も一夏さんもここにいますので、わざわざ戻る必要も無いかなと思つています」

「問題は一夏君の予定がどうなるかよね」

「問題って？」

何か計画しているような刀奈に、簪は少しはしゃいでる様子で声を掛ける。

「ほら、夏休みはゆつくり出来なかつたから、皆で温泉でも行こうかなって計画してるんだけど、一夏君の予定だけがはつきりしないのよ」

「まあ、一夏さんは忙しいですからね」

「それに、篠ノ之さんの見張りなどもありますから、あまり長期間学園を離れる事は出来なと思いますよ」

「その辺は織斑姉妹に任せれば大丈夫よ。ちゃんと見張ってくれたら一夏君のご飯でも食べさせてあげるとか言えば、きつとやってくれるから」

「あの二人ならありえそうだね……でもお姉ちゃん、一夏が引き受けてくれるかな？」
「私たちとの旅行の為だからってお願いすれば、きつと引き受けてくれるわよ」

どこからそのような自信が出て来るのか簪には分からなかったが、一夏との旅行は簪もしたいたいと思っていたので細かい事へのツツコミは省略する事にしたのだった。

「最悪一夏さんの代わりをお父さんに任せれば大丈夫だと思いますよ。今ではお父さんが一夏さんの名代を務めているのですから」

「尊さんに任せられることばかりじゃないからね。でも、少しくらいなら大丈夫かな？」
「とりあえず一夏さんの予定がはつきりしてから悩めばいいと思いますよ。それよりも今は、溜まっている生徒会の仕事をどうにかする事を考えてください」

「殆どアメリカの問題と箒ちゃんの問題でしょ？ もう見飽きたんだけど……」

そう言いながら机に突っ伏した刀奈を見て、簪と美紀は笑みをこぼしたのだった。

旅行の計画

生徒会室で作業している一夏を見て、刀奈は冬休みの予定を尋ねるのを躊躇ってしまつた。ただでさえ自分の仕事も任せているのに、このタイピングで尋ねるのは邪魔になるのではないかと、珍しく殊勝な考えをしたのだが、一夏には無駄な気遣いだつた。

「何か用ですか？」

「な、何でもないわよ？」

「刀奈さんが考えている事はだいたいわかります。心配してくれなくて大丈夫ですよ」

付き合いが長く、読心術が使えるのではないかと疑いたくなるくらいの勘の良さで、刀奈が心配していたことを把握した一夏は、安心させるように微笑みながら刀奈にそう告げた。

「一夏君って、普段無表情なのにこういう時だけ優しい顔をして……ズルいよ」

「なら、刀奈さんには常に怒ってる顔で接しましょうか？」

「ううん、今の表情が良い」

マドカやマナカに向けている表情に近いが、妹扱いはされていないので刀奈に文句はなかった。

「それで、何か用なのですよね？」

「えつとね、一夏君の冬休みの予定を聞きたいなって思ったの。だけど仕事申中だったから、後にしようかなとも思ったけど、一夏君が心配いらないうって言うてくれたから」

「冬休みの予定ですか？ 今のところ特にはないですね……あつ、でも」

「なに？」

「さすがに年始には本家に顔を出した方が良いのかなと思ひまして」

「その辺りは尊さんが代理をしてくれるわよ、きつと」

「まあ、高校生より大人の尊さんが顔を出した方が、周りも飲めますからね」

当主は一夏だが、彼は未成年であり、当主と酒を酌み交わすという儀式は当然の如く行えない。したがって尊が代理で参加してくれた方が、分家の当主たちもありがたいと感じるかもしれないのだ。

「そうなるよ、本当に特に無いですね……訓練にでも付き合いますようか」

「それだったらね、私たちと旅行に行かない？ 私たちも特に予定がないから、家族だけで旅行に」

「家族というと、更識関係者とマドカとマナカですか？」

「そうね。私と簪ちゃん、虚ちゃんと本音と美紀ちゃん、碧さんにマドカちゃんにマナカちゃんと一夏君で」

「たまにはいいかもしれませぬね、織斑姉妹に篠ノ之さんの見張りを頼めばとりあえずは安心出来ますし」

「一夏君、視線が明後日の方を向いてるわよ？」

安心出来ないのは箒の所為か織斑姉妹の所為か、刀奈にははっきりと分かってしまつたが、それを口にするには無かつた。

「それじゃあ、よさそうなどころ探しておくわね」

「お願いします。あつ、部屋は別ですよね？」

「ううん、大部屋でみんなで雑魚寝しましよ！」

楽しそうな笑みを浮かべる刀奈を見て、一夏は抵抗を諦めたのだつた。

生徒会室から戻ってきた刀奈が上機嫌だったので、簪たちは一夏の許可が取れたのだとすぐに理解した。

「お姉ちゃん、一夏の予定、大丈夫だったんだね」

「もちろん！ それじゃあ、何処にしようか決めなきやね。ちなみに、雑魚寝も許可してもらったから」

本当は断らせないように仕向けたのだが、そこは正直に言う必要は無いので黙っていた。

「雑魚寝と言つても、一夏さんの両隣は誰が寝るのですか？」

「そこは当日じゃんけんでも何でもいいから決めればいいわよ。それよりも今は、何処の旅館にしようか決めなきゃいけないわよ」

「と言いましても、全て更識の系列ですからね。予約するのは容易いでしょう」

「どうせならお兄ちゃんと混浴したいな」

「それいいわね！ 何処か混浴が出来る温泉は無いかしら？」

「これは？ 家族風呂って書いてある」

簪が全員に見える位置に資料を置くと、一斉に食い入るようにその資料に群がった。

「タオルの使用は不可だから、一夏君に見られちゃうわね」

「刀奈お姉ちゃんは昔、一夏さんと一緒にお風呂に入った事ありますよね？」

「そんなこと言つたら、皆だつてあるでしょ？」

「私とマナカはありませんね」

「普通の兄妹ならあつてもよかつたのにね」

マドカとマナカの言葉に、部屋の空気が少し重くなつたように感じた刀奈は、いつも以上に明るく振る舞つた。

「それだったら、この旅行で兄妹の思い出を作りましょ？ もちろん、私たちも二人の事を家族だつて思つてるから、そつちの思い出も一緒に」

「そうですね。マドカさんとマナカさんは一夏さんの妹さんですから、私たちからしてみても家族同然ですから。お嬢様もたまにはいいこと言いますね」

「たまにはつて酷くない!? 仮にも主様なのよ、私」

「刀奈様はあんまり主つて感じがしませんからね」

「本音はメイドつて感じがしないけどね」

簪のツツコミに、本音以外の全員が頷いた。まさか碧までもが頷くとは思つてなかつたので、本音は結構本気で驚いてしまった。

「とにかく、この旅館に決まりかしらね？ 大部屋もあるし、この家族風呂で一夏君と一緒に温泉も楽しめそうだし」

「一番の問題は、一夏さんはお風呂嫌いつてことですかね」

「さすがに逃がさないわよ？ 皆だつて一夏君とお風呂、入りたいでしょ？」

何時もなら刀奈の計画を阻止する側である簪や虚も、今回だけは刀奈の味方だったため、誰も否定の返事をするとは無かった。

「それじゃあ、この旅館に予約を入れておきましょう。一夏君の名前で良いわよね？」
「お嬢様の名前でも大丈夫だと思いますよ？　意味合的にはあまり変わりませんし」

現当主か前当主かの違いはあるが、更識の名に変わりはないので、予約は刀奈の名前ですることになった。あっさりと予約が取れて、全員はその日を楽しみに過ごすのだった。

海外組の予定

冬休みが近づき浮かれているのは、刀奈たち更識勢だけではない。年末年始をどう過ごすのかで盛り上がるのは、他の専用機持ちたちも同じであった。

「セシリアたちは母国に帰るの？」

「今年は日本に残る予定ですわ」

「私も、軍に戻っても学園ほど楽しいとは思えないだろうし、年末年始は日本で過ごす予定だ」

「そういうシャルはどうなのよ？ 仕事とか無いの？」

「一夏の方も無いようだし、僕の方も無いかな。でも、フランスに戻っても何もないし、僕も日本で過ごす予定だよ」

セシリア、ラウラ、シャルは日本に残ると聞いて、鈴は少しほっとした表情を浮かべた。

「そう言えば鈴さんは、小学生時代からのお友達と過ごしたりしませんの？」

「アイツら二人の相手は疲れるのよね。せめて一夏がいてくれれば別だけど、更識先輩

たちと過ごすみたいだし、三が日過ぎてからかしらね、遊ぶとしたら」

「二夏もたまには家族サービスしなきゃいけないみたいだしね」

「何だか疲れ切ったサラリーマンみたいな過ごし方だな、お兄ちゃんは」

実際下手なサラリーマンより働いているので、一夏は疲れ切っていて不思議ではない。だがそれでも若さと人外的な体力のお陰で普通に生活しているのだ。

「じゃあ寮でカウントダウンでもしましょうか。どうせ他にも残ってる子なんているだろうし」

そこにタイミングよくティナが通りかかり、鈴は彼女をカウントダウンに誘った。

「ここで？ 織斑姉妹とかに怒られたりしないかしら」

「ちゃんと申請しておけば大丈夫よ、きつと。まあ、一夏に頼めば大抵大丈夫だろうけどね」

「そんなことが出来る鈴が羨ましいわよ。私たちが更識君に頼もうとしても、簡単には通らないだろうし」

「あたしだって簡単に通ると思っただけで、織斑姉妹に頼むよりは現実的だと思うだけよ」

「そう言えば静寐さんたちも寮に残るみたいなのを言っていましたから、大勢での年越しになりそうですわね」

「そこにお兄ちゃんがいてくれたら最高なのだが、大勢での年越しも楽しそうだな」

既に浮かれ始めているラウラに、シャルは微笑まじげな表情を浮かべていた。

「最近、ラウラの事を慈しむ時間が長くなってきたような気がするんだけど」

「シャルロットさんとラウラさんは仲がよろしいですからね。姉妹のようですわ」

「まあ、一夏がマドカやマナカに向けてる気持ちと同じなんだと思うけどさ……僕とラウラは同じ年なんだよね」

向こうは正真正銘兄と妹だから不思議ではないが、同級生に抱く感情では無いとシャルは思っていた。だが実際、ラウラの事を妹のように思っているクラスメイトは少なくないので、シャルの感情はある意味仕方ないものだといえよう。

「ところでティナはこれからどこかに行くの？」

「ちよつと更識君の部屋にね。移籍先をある程度絞ってくれたらしいから、その詳細データを貰いに行くのよ」

「希望とかはあるのか？」

「うーん……色々とよくない噂があるロシアや韓国は避けようかと思って思ってるけど、そうなるトイスラエルやカナダになるのよね……他の国も更識君が調べてくれたらしいから、最終候補がどれくらいあるのか今から確認しに行くのよ」

「何処の国の候補生になっても、あたしたちのライバルって事ね」

「さすがに被る国は避けてくれてるらしいからね」

「ペアの候補ならともかく、ティナさんはソロでの候補生ですからね」

「そもそも、この学園にいる候補生で、ペアなのは更識さんと四月一日さんだけでしょ」
「そう言われればそうね……」

ティナの指摘に、全員が腕を組んで考え込んだ。ソロで実力を発揮するメンバーが多い中、更識勢はペアでも十分に実力を発揮出来ているのだ。それが一夏の指導の賜物なのか、それとも天性の物なのかは分からないが、そこでも自分たちとの実力差を感じさせられたのだった。

「まあ、ティナならどこの国でも十分やっていけるでしょうし、早いところアメリカから移籍しないと、そのまま代表にされちゃうものね」

「専用機も、ましてやコアも無いのに代表になってもね……じゃあ、私は行くわね」

そう告げてティナは一夏の部屋へと向かっていき、鈴たちはそれを見送った。

「一夏さんの部屋に入れるなんて羨ましいですわね」

「でも、近づいただけで命の危険があるから、普通は羨ましいと思うより怖いって思うと思うけど」

「正式に招かれたわけですし、それでしたら命の危険は無いと思いますわ」

「まあ、織斑姉妹の他にも、今は篠ノ之さんもいるし、少し離れたところには元亡国機業の二人がいるわけだしね。普通は近づきたくないと思うよね」

「教官たちの部屋に近づけるのは、極限られた人のみだと、前にお兄ちゃんが言っていたがな」

それは別の意味で近づけないのだろうと知っているメンバーは、どう反応すればいいのかに困ってしまった。

「とにかく、後で一夏にメールしておくわね。年越しカウントダウンをここでやっていいか聞かなきゃだし」

「お願ひしますわね。私たちは参加者の希望を募っておきますので」

「今年は楽しい年越しになりそうだな！」

やはり一人だけズレた感想のラウラではあったが、三人は微笑まし気にラウラを眺めたのだった。

一夏との関係

二学期のすべての日程が終了し、一夏たち生徒会役員は終業式の為壇上に上がっていた。

「今日で二学期も終わりで、三年生はいよいよ後数ヶ月で卒業になります。この冬休みはのんびりできる最後の時間だと思えますので、思いっきり楽しんでください。あつ、でも学園に迷惑がかかることは止めてくださいね」

刀奈の挨拶に、体育館は笑いに包まれたが、壇上では一夏と虚が頭を押さえる仕事をしていた。

「それじゃあ、各自教室に戻って、今学期の成績を受け取ってください」

解散の合図とともに、学生たちはゆっくりと体育館から各教室へと戻っていった。それを見送ってから、一夏と虚は刀奈に軽く注意をして、自分たちも教室に戻る事にした。「お嬢様、あまりふざけると織斑姉妹から注意されますので」

「ふざけてないわよ？ だって、虚ちゃんだって年が明ければ忙しくなるでしょ？ だ

からこの冬休みはゆっくりできる最後のチャンスじゃない？ だから他の人もそんな感じなんだろうなって思ったから」

「言っている事は正しいですが、言い方が間違っていましたね。少しフレンドリー過ぎた気もしますので、もう少し体裁を保ってください。仮にも生徒会長なんですから」

「仮って酷くない!?! これでも二年間生徒会長を務めてるんだから!」

「去年は私に、今年は私と一夏さんに仕事を任せまくってる生徒会長ですけどね」

「来年から頑張ります……」

しょんぼりとしてしまった刀奈の頭を軽く撫でながら、一夏は一年の教室へと繋がる廊下で二人と別れた。

「一夏君、私の事をどう思ってるのかな?」

「どうしたのですか、いきなり」

「だって、当然のように頭を撫でて行ったから……なんだかマドカちゃんやマナカちゃんを相手にしてる時みたいな感じがして」

「実際お嬢様の事は妹みたいだと、譬お嬢様に言ったことがあるようですので、あながち間違いではないかもしれませんがね」

「お姉さんとしての威厳が……ないか、そんなの」

一夏の前では虚ですら年上では無いような感じがするのだから、自分じゃもつとないかと開き直った刀奈は、虚と別れて教室へ向かった。

「見てたわよ、かつちゃん。どっちが年上だか分からない光景ね、これ」

教室に着く前に薫子が見せてきた映像を見て、刀奈は妹扱いでもいいかなと思いはじめたのだった。

「薫子ちゃん、このデータは消しておいてね」

「せっかくだから現像してあげようか？ 新聞に載せようとしても、更識君と布仏先輩に怒られるだけだろうから、かつちゃんにあげるわ」

「うーん……どうせならもうちよつと仲良しだって分かる写真の方がいいから、別にいらないわ」

そういって、刀奈は自分の席に着き、薫子がデータを消したかどうかを確認せずにこの話題を打ち切ったのだった。

一年一組でも成績表が配られ、一喜一憂する生徒が続出していた。二学期の殆どを亡国機業で過ごしていた筈は当然成績つかず、成績表もない。

「相変わらず一夏君の成績表は凄いわね」

「いきなり現れてなんだ静寂……」

「どうやったらそんな成績が取れるのか不思議でさ」

「静寐だって、さほど変わらないだろ？」

「変わるわよ。私は全部同じ数字じゃないもの」

十段階評価で全ての一夏に、静寐はちよつとばかり嫉妬したが、嫉妬するのもバカらしい成果を上げているのだから、当然と言えば当然の結果である。

「妹さんふたりと本音は、赤点すれすれだったみたいだけどね」

「マドカとマナカは兎も角、何で義務教育を受けてきた本音がギリギリなんだか……」

「とりあえずこれで二学期も終了ね。一夏君は年末年始、何か予定があるのかしら？」

「刀奈さん主催で家族で温泉旅行だそうだ」

「へー、珍しくゆつくり出来そうね」

「本気でそう思ってるのか？」

一夏の問いかけに、静寐は笑いながら視線を逸らした。つまりは、静寐も本気でゆつくり出来そうとは思っていないのである。

「一夏、大晦日寮でカウントダウンするから、食堂の使用許可を頂戴」

「何だいきなり……カウントダウン？ 食堂ですか？」

「思いの外参加者が多くてね。部屋でやるのは難しいから、食堂を借りたいと思って」

「そう言う事か。だが何で俺に？ 普通は職員室に持っていくんだが」

「職員室に持っていくより一夏に持って行った方が確実でしょ。それで、使ってもいいの？」

「騒ぎすぎなければ大丈夫だと思うぞ。織斑姉妹にはこつちから話を通しておくから」

鈴の申し出を簡単に受け入れ、一夏は織斑姉妹にメールを送った。

「大丈夫だ、許可は下りた」

返信されてきたメールを鈴に見せて、一夏はため息を吐きながら携帯をしまった。

「ところで、鈴は弾や数馬と遊ぶのか？」

「アンタの予定次第って事になってるわよ。年明け、期待してるから」

「分かった。予定が分かり次第メールしよう」

用事が済んだので、鈴は自分の教室へと戻っていき、再び静寂が一夏に話しかけてきた。

「鈴さんは相変わらずね」

「昔からあんなだからな」

「ちよつと羨ましいけど」

「あのガサツさがか？」

「ううん、一夏君と自然に遊ぶ約束が出来るっていうのが」

静寐の言葉に首を傾げた一夏ではあったが、それ以上は追及することなく会話を打ち切ったのだった。

仕事納め

終業式も終わり、生徒会の業務も仕事納めとなり、刀奈は身体を伸ばして一夏の淹れてくれたお茶を飲み干した。

「これで明日からの旅行に専念できるわね。一夏君も虚ちゃんもお疲れ様」

「お嬢様も、何時もこれくらい働いてくれるとありがたいのですがね」

「今日くらいはお小言は勘弁してくれない？ 明日から楽しい旅行なんだし、今日で仕事納めなんだからさ」

「まあ、確かに今日は刀奈さんも一生懸命でしたし、お小言はまた今度にしましょう」

一夏にそう言われ、虚も渋々刀奈への小言を呑み込み、代わりにため息を吐いたのだった。

「一夏さんはお嬢様に甘すぎです」

「そんなこと無いと思いますが」

「そうよそうよ！ 一夏君も虚ちゃんも厳しいくらいよ！」

「文句があるのでしたら、刀奈さんだけ留守番でも良いんですよ？」

「ゴメンなさい。一夏君も虚ちゃんもとってもとっても優しい人です」

一夏に脅され、刀奈はすぐに手のひらを返して頭を下げた。本当に置いていかれることとは無いだろうと分かつてはいるのだが、万が一という事が一夏にはあるのだ。

「それじゃあ、部屋に戻りますか。生徒会室もしつかりと戸締りしておかないと」

「年明けまでこの部屋に来ることは無いのね。はあ、疲れた」

「お嬢様がきちんと働いたのは今日くらいですよ」

最後まで小言を言われた刀奈ではあったが、これで旅行に専念出来ると楽しそうに生徒会室に鍵を掛けたのだった。

「はい、これで今年の生徒会業務は終了ね。お疲れ様でした」

「お疲れ様でした」

刀奈の言葉に、一夏と虚も声を揃えて頭を下げる。

「一夏君は更識の仕事も終わったんだよね？」

「急ぎ目を通さなければいけないものは無いですね。尊さんで処理出来るものはお願ひしましたし、何処も年末で重要な案件は既に済ませてますから」

「来年は虚ちゃんが卒業して、私も最終学年か」

「モンド・グロツソもありますから、お嬢様は大変な一年になりそうですね」

部屋に戻る途中にそのような話題で盛り上がり、分かれ道に差し掛かり一夏は二人に頭を下げた。

「お疲れ様でした。また明日」

「うん、また明日ね一夏君」

「お疲れ様でした、一夏さん」

刀奈と虚と別れ、一夏は自分の部屋に戻ろうとして、途中で織斑姉妹に遭遇した。

「一夏！ 明日から旅行らしいな。何故お姉ちゃんを誘わない！」

「わたしたちも一夏と旅行したいぞ！」

「貴女たちはまだ仕事が残ってますし、寮長としての責任をしっかりと果たしてください」

「じゃあ何故マドカとマナカは一緒に行けるんだ」

「あの二人は寮長でも何でもありませんし、卒業後は更識で働いてもらう事が決まっていますので」

同じ血縁でありながら、妹二人は一緒に旅行出来るのが羨ましいのか。千冬と千夏は駄々をこね始めた。

「ズルいぞ！ お姉ちゃんたちも一緒に行きたい！」

「篠ノ之や亡国機業の連中の監視など、真耶にでも任せておけばいいのだ！」

「でしたら、来年からのお二人の給料はダウンで良いですね？ 寮長も解任で、何処か他所で生活してもらおう事になりますか？」

一夏の脅しに、姉二人は戦慄し慌てて弁明をし始める。

「じよ、冗談だ一夏！一緒に旅行出来ないのは残念だが、楽しんで来いよ」

「本気で真耶に押し付けるわけないだろ！アイツは既に帰省してるんだから」

言い訳を言つて二人は寮長室に逃げて行つたのを見送り、一夏は盛大にため息を吐いた。

「相変わらずだな、あの二人は……」

「まったくですね。あの二人と一夏さんが血縁だという事が、今でも信じられませんよ」

「碧さん……」

「気を抜き過ぎですよ、一夏さん」

護衛として陰から見守っていた碧が声を掛けると、一夏は少し驚いた反応を見せたので、碧は笑いながら注意をしたのだった。

「とりあえず、オータムやスコールも大人しくしてますし、年末という事でVTSルームの使用制限も一時解除したので、大人しくなると思えますよ」

「アーリーナの使用許可も下りやすくなるでしょうし、訓練相手に事欠かないでしょうね」

「まあ、行き過ぎた訓練は出来ないよう、一夏さんが専用機に制限を掛けていますからね。我々がいなくても問題は起こらないでしょう」

亡国機業の見張りも織斑姉妹に任せてあるので、最悪の事態にはならないだろうと一夏も碧も思っている。いくらあの二人でも、行き過ぎた行動をすればさすがに止めに入るだろうと確信しているので、二人に訓練を許可したので。

「静寂さんたちもいますし、暴れても取り押さえられるのがオチでしょうからね」
「何故候補生たちではなく静寂の名前を？」

「深い意味はありませんが、彼女が一番冷静に物事に対処出来るからでしょうか」

「確かにセシリアたちより静寢の方が冷静に対処しそうですね」

一夏も苦笑いを浮かべながら、碧の考えを肯定した。下手な候補生より冷静な判断が出来る静寢は、一夏としても是非更識の中枢に欲しいと考えているくらいなのだ。

「とりあえず、私も明日の用意をしますので、今日はここで失礼します」
「お疲れ様でした」

部屋の前まで護衛して、碧も自分の部屋へと戻っていった。碧を見送った一夏も、部屋に入り明日の用意をするのだった。

更識内の序列

旅行に出かける前に、一夏は千冬と千夏に箒とオータムの事をしつかり見張るように念を押してから、先に門に向かった刀奈たちを追いかけた。

「一夏君、こっちこっち」

「すみません、お待たせしました」

既に浮かれ気分の刀奈に急かさされ、一夏は一応頭を下げてから車に乗り込んだ。

「さあ、一夏君も来たことだし、さっそく出発よ！」

「運転するのは碧さんだけだね」

簪にツツコまれても気にせず話を進める刀奈に、一夏と簪は目を合わせてため息を吐いた。

「お姉ちゃん、少し浮かれ過ぎじゃない？」

「だって、ようやく一夏君と旅行が出来るのよ？　これが浮かれずにいられますか」

「お嬢様は修学旅行先に勝手に向かわれて、一夏さんと旅行したじゃないですか」

「ずっと部屋で大人しくしてたわよ……あれは旅行じゃないわよ」

修学旅行はそもそも、亡国機業に襲われたせいでまともに観光は出来ていないので、刀奈が部屋で反省させられてなくとも、まともな旅行とはいかなかっただろう。

「それで刀奈お姉ちゃん、今日行く場所はゆっくり出来るんですよね？」

「もちろん！ 更識の系列の旅館だから、いざという時もその場で対応出来るし、途中で一夏君が帰っちゃうなんて事にはならないわよ」

「それにしても家族旅行なんて久しぶりですね〜」

「まだ一夏が更識に来る前だから、十年くらい経ってるのかな？」

「まだお父さんもいて、立場なんて気にせずに遊べてた時以来ね」

「お嬢様は今でも気にしていないようですがね」

虚のツツコミに、刀奈は勢いよく虚の方に振り返り、そして反論した。

「これでも国家代表としての立場は気にしてるのよ！」

「そちらではなく、生徒会長としてのお立場の事です。堂々とサボったり、廊下を走ったりと」

「細かい事は良いじゃないの。せっかくの旅行なんだから、学園とか代表とかいろいろ

とわきに置いておいて楽しみましょう」

「刀奈のそういうところ、羨ましいと思うわ」

「私たちはそう簡単に切り替えられませんからね」

マナカとマドカの言い分に、運転席の碧も頷いて同意した。

「私の中では引率の意味合いが強いですし、更識内で考えれば一番下ですからね」

「碧さんはそろそろ出世しても良いと思うのよね。一夏君、どうかしら？」

「人事は俺一人ではどうしようもないですからね……とりあえず、何処か傘下企業の社長でもやってみますか？」

簡単に尋ねて来る一夏に、碧は少し呆れ顔で答えた。

「社長なんてそう簡単に出来るものではありませんし、私はIS学園の教師ですから」

「そうですか。それじゃあ、当主の側付きということですね」

「それでも一番下ですけどね」

虚は企業代表であり護衛される側、本音は前当主の娘の護衛兼現当主の護衛としての地位をだいたい前から確立しているため、出世しても碧の方が地位的には下になるのだ。

「本音が碧さんより地位が上っていうのも変な話よね」

「だからだらしてまともに働いてないのに、地位だけは高いからね」

「まあ、本音には給料払ってないし」

「本音に大金を渡したら、すぐに使ってしまいますからね」

「いや〜それほどでも〜」

褒められていないのに褒められたような反応を見せた本音に、全員が揃ってため息を吐いた。

「ほえ？ みんなどうかしたの〜？」

「本音のバカさ加減に呆れたのよ」

「そんなこと気にしてたら楽しくないよ〜？ みんな今日は楽しむために出かけるんだから〜」

「まあ、本音の言ってる事も正しいから、今は気にしないでおきましょう」

切り替えの早い刀奈は、本音の事は気にしないで盛り上がることにしたのだった。

「ところで一夏、篠ノ之さんのデータは揃ったの？」

「実機のデータはさすがにまだだが、VTSでのなら十分揃ったな。これをサイレント・

ゼファイルスに反映させて実機データを取れば、前とは違う調整も出来るだろう」

「二夏さん、前の篠ノ之さんのデータはあるんですよね？　今のところどう違うんですか？」

美紀の問いかけに、一夏はバッグの中からタブレットを取り出し箒のデータを呼び出した。

「明らかに違うのは、ISを労わっている事だな。前の篠ノ之はISを機械だと割り切って、多少乱暴に扱っても問題ないと思っていたからな……」

「だからISから嫌われて、動かなくなっちゃったんだよね？」

「マナカも前のような乗り方をしてたら動いてくれなくなるぞ？」

「反省してる……」

乱暴に扱ったツケが溜まり、制御不能に陥りあのような事故につながったのだと、マナカは酷く反省しそれ以来ISは訓練機を使っていた。

「そう言えばお兄ちゃん、私の専用機って今何処にあるの？」

「束さんが回収して修理するって言ってたから、俺は知らない」

「まあ、あの状態の兄さまが回収したとしても、修理までは時間がかかったでしょうから

ね」

マドカの言葉に、マナカは身を縮込ませた。専用機が壊れたのも、一夏が大怪我を負ったのも自分の所為だと自覚しているからであり、マドカにマナカを責めた自覚は無かったのだ、何故妹が小さくなっているのか理解出来なかった。

「とにかく、ISの事も忘れて楽しみましょう！ 碧さん、あとのくらいで到着しますか？」

「もうすぐですよ」

碧の返事に、刀奈と本音は表情を綻ばせ、今から暴れそうな勢いになったので簪と虚が止めたのだった。

二学期の総括

旅館に到着し、部屋に案内された一夏たちは、とりあえず荷物を置いてゆつくりする事にしたのだった。

「一夏君、お茶淹れてくれる？」

「構いませんよ。他の人も飲むでしょうし」

「あつ、そういうのは私が——」

「虚さんも寛いでください。こういうのは俺が得意ですから」

部屋に用意されていた急須とポットを使い人数分のお茶を淹れた一夏に、刀奈と本音はのんびりした雰囲気でお礼を言う。

「ありがとう、一夏君」

「いっちーが淹れてくれた日本茶は世界で一番美味しいよ」

「大袈裟な……」

本音の大袈裟な賛辞をまともに取り合う事もせず、一夏もお茶を飲んで寛ぐことにし

た。

「思えばいろいろあった二学期だったな……」

「一夏、お爺ちゃんみたい」

「そうか？ でも、かなりの事件があっただろ？」

「一夏君の誕生日に襲撃されたり、文化祭が襲撃されたり、修学旅行が襲撃されたり、マナカちゃんが亡国機業のリーダーだったりと、確かに大変だったわね。その後も、一夏君とマナカちゃんが大怪我を負ったり、箒ちゃんを捕まえて更生させたり、中止になった文化祭の出し物の代わりに大会を開いたり、簪ちゃんと美紀ちゃんが代表に内定したりと、実に濃い二学期だったわね」

「お嬢様が宅配便で京都に行ったりもしましたしね」

「それはもう謝ったでしょ！」

虚に嫌味を言われ、刀奈は勢いよく立ち上がり虚に頭を下げこれ以上というのは止めてくれと頼み込んだ。

「まあ、刀奈さんが京都にいたお陰で、俺たちもスムーズに動けたとも考えられますので、虚さんもこれくらいで勘弁してあげてください」

「一夏さんがそう言うのでしたら……お嬢様、もう二度とあのような事はしないでくだ

さいね」

「はい、反省してます……」

形だけではなく本気で反省しているようなので、虚もあの件はこれで許すことにしたのだった。

「そう言えば一夏さん、ハミルトンさんの移籍先は決まったのですか？」

「イスラエルかカナダで悩んでるようでしたね。年明けには決めると言っていましたので、俺は年明けまで手伝えることは無いですね」

「ティナも代表になったら、IS学園在籍の代表がまた増えるね」

「刀奈お姉ちゃんにサラ先輩、セシリアさんもほぼ内定してますし、私と簪ちゃんも年明けには正式に代表昇格ですしね」

「後はリンリンが代表になれるかもなんだよね？」

「次のモンド・グロツツには間に合わないだろうけど、それで中国の代表の人が引退するみたいだから、第四回には鈴も参加出来るかもね」

「兄さまの周りには国家代表や代表候補生が多いですからね。エイミイも次の大会には代表になれるかもしれないですよね？」

「そう言う話があるというのは聞いたが、代表を決めるのは国だからな、どうなること

か」

しみじみと呟いた一夏に、全員が呆れた視線を向ける。何故呆れられたのか理解出来ない一夏は、首を傾げながら全員に視線を向けた。

「一夏が『お願い』すれば、大抵の国はいう事を聞くじゃない」

「他国の人事にまで口出しするつもりは無い」

「お兄ちゃんならそれくらい出来るでしょって意味だよ」

「まあ、移籍の際にはいろいろと手伝ったりはしてるが」

「テイナちゃんの移籍の時にも手は貸すんだし、もう一夏君が代表を決めても良い時代なのかもね」

「どんな時代ですか……とところで、さつきから本音が大人しいんですが」

一夏にいわれ、全員は本音に視線を向ける。すると本音は、お茶を飲みながら寝ていたのだった。

「相変わらず器用な奴だな……」

「ほら本音、お茶はさすがに危ないから起きなさい」

「ほえ？ 私寝てた？」

「思いつきり寝てたよ……本音は本当に何処でも、何時でも寝ちゃうんだから」

「えへへ、それほどでも」

「褒めてないから。少しは改善するようにしなさい」

虚に怒られ、本音は形ばかりの反省の言葉を述べ、再び舟を漕ぎ出した。

「コイツは……」

「放っておきましょう。それより一夏君、お風呂に入りましたよ」

「風呂は嫌いなんです……」

「せっかく温泉旅館に来てるのに、入らないなんて言わないわよね？」

「出来る事なら入りたくないのですが……」

そこで一夏は、全員から入らないのは許さないというオーラが出ているのを感じ取り、抵抗しても無駄だろうと察して白旗を上げた。

「あまり長時間は入れませんかね？」

「分かってるわよ。一夏君が逆上せたら、私たちが介抱してあげるから」

「お兄ちゃんの事は私たちがしつかりと面倒見てあげるから」

「はいはい、皆テンション上げるのは良いけど、そろそろ止めておかないとただの変態に

なっっちゃうわよ?」

碧が手を打って全員を正気に戻し、怯えかけていた一夏に視線を向け頷く。

「皆だつて一夏さんに怖がられたりするのは嫌でしょうし、一夏さんだつて皆に怖いって感情を抱きたくないでしょうから、ほどほどにしてくださいね」

「さすが碧さん、引率として正常に機能してますね」

「これが姉さまたちだつたら……」

「お兄ちゃんのトラウマが発動してただろうね」

全員が同じ光景を想像したのか、全員が同時にため息を吐いた。そのため息が原因かは分からないが、ようやく本音が目を覚まし、そそくさとお風呂の準備を済ませたのだった。

「ほらほら、皆行くよ〜!」

「何で本音が先頭なのよ……」

さすがの刀奈も呆れたようで、もう一度ため息を吐いてから、一夏の手を引いて家族風呂へと向かうのだった。

仲良くお風呂

刀奈に手を掴まれ、簪と美紀に両脇を固められ、背後を虚に封じられた一夏は、抵抗を諦めて風呂へと向かう。他にも一緒に入るのが楽しみでしようがないという顔のマドカとマナカや、特に何も考えていないような本音、その光景を見て楽しそうに笑う碧など、この場に一夏の味方は一人もいなかったのも諦めた要因の一つである。

「引つ張らなくても入りますって」

「そういつて逃げられたくないから、一緒にお風呂に入るまで離しません」

「お姉ちゃんだけ一夏と手を繋いでズルいけど、逃がさない為にも今は我慢する」

「いつちーも往生際が悪いな〜って思うから、大人しくしててね〜」

「逃げようとしたら、私たちが全力で一夏さんをつまえますからね」

「だから逃げませんって……そもそも碧さんから逃げ切れる未来が視えないので」

未来予知を使わなくても、一夏は碧から逃げ切れるわけがないと分かっているのに、今は大人しく自分の力で歩いているのだが、刀奈はそれでも一夏を開放する事は無かった。

「さあ、脱衣所に到着ね！　一夏君、ここまで来て逃げるのは駄目だからね？」

「だから逃げません——？　さすがに脱衣所は別ですよね？」

「ううん、脱衣所も一緒」

全力で逃げ出したい衝動にかられたが、全員の期待に満ちた目を見てさすがに逃げ出すのは可哀想だと思ったのか、一夏は大人しく脱衣所の中へと進んでいった。

「目を瞑っていきますので、先に入っててください」

「そう言つて逃げるつもりでしょ？　そうはいかないわよ。先に一夏君が脱いで、それで目を瞑ってるならいいわよ」

「それじゃあ意味がないじゃないですか！」

「あつ、ここの温泉タオルをお湯に浸けるのが禁止だから、結局一夏君は私たちの裸を見るしかないんだからね」

「……………」

何でそんな温泉を選んだんだと、一夏は心の中でツツコミを入れたが、決まりでは仕方ないと諦めたのか、ゆつくりと服を脱ぎだした。

「わーい、いっちーとお風呂なんて何年ぶりだろ〜ね？」

「一夏さんがお風呂に入ったのは小学生の頃ですから、その頃以来じゃない？」
「中学の時は無かったっけ？」

「無かったと思うけど」

特に気にした様子もなく服を脱いでいく女子の事を、一夏はどう見ればいいのか悩んでいた。家族として見たとしても、さすがにこの歳で混浴はしないだろうと思うし、婚約者として見てもおかしいのではないかという気持ちが先に出てきてしまう。ましてや同級生と考えれば、どう見てもおかしいのだ。

「そんなに緊張しなくても良いじゃないですか。一夏さんって意外と初心なんですね」
「むしろ何でみんなが平気なのが不思議なのですがね」

後ろから優しく抱きしめてきた碧に、一夏はさすがに覚悟を決めて風呂場へと突撃する事にした。

「お兄ちゃん、背中流してあげる」

「私は頭を洗って差し上げます」

さっそく一夏を出迎えたのは、妹双子の献身的なサービスだった。

「お前たち、仮にも年頃の異性を前に恥ずかしくないのか？」

「お兄ちゃんに見られて恥ずかしいものなんてないもん」

「私も、兄さまに見られるのでしたら耐えられますから。他の異性でしたら、一瞬で消し去ってしまうかもしれません」

「遺伝子的に冗談に聞こえないから止めてくれ」

姉がああ織斑千冬と千夏なので、マドカが消し去るというと冗談に聞こえないと、一夏は今更ながらに実感したのだった。

「一夏くん、後でお姉さんの背中、流してくれない？ もちろん、簪ちゃんや美紀ちゃんたちのもだけど」

「拒否権は無いのですよね？」

「嫌なら前を洗ってもらうけど？」

「謹んで、お背中お流しいたします」

刀奈の事だから冗談では済まないのだろうと理解している一夏は、間違っても背中を流すという行為を断ることはしない。少しつまらなそうに表情を歪めながらも、一夏が背中を流してくれるという事で刀奈は上機嫌になったのだった。

「それにしても、やっぱり一夏君も鍛えてるだけあって逞しいわね」

「美紀はしょっちゅう一緒に寝てるから知ってたんじゃない？」

「しょっちゅうじゃないし、さすがにここまで鍛えてるとは思ってたよ」

「いっちょつて普段は頼りなさそうな雰囲気だけど、戦闘でも十分役に立つんじゃない？」

「本音には言われたくないと思いますよ。貴女は何処にいても頼りなさげですから」

「そんなこと無いと思うんだけどな？」

じろじろと見られているが、不快ではないと思いつつも、気持ちいいものではないなと思いつつも、一夏は大人しく妹に頭と背中を洗われている。

「それにしても本音、また大きくなってない？」

「刀奈様だって、大きくなってますよ」

「美紀ちゃんも成長してるわね」

「み、碧さんだって」

「私小さくないもん、お姉ちゃんたちが大きすぎるだけだもん」

「その通りです、簪お嬢様」

何の話をしているのか、見なくても分かってしまった一夏は、盛大にため息を吐いた。そのため息に反応した妹双子ではあったが、一夏の雰囲気を読み取って声を掛ける事はしなかった。

「はい、終わったよお兄ちゃん」

「流しますね」

洗い終えた二人が一斉にお湯をかけ、一夏は妹二人の頭を撫で、刀奈たちの背中を洗うべく立ち上がったのだった。

お風呂での一幕

全員の背中を洗い終えた一夏は、疲れ果てた様子で湯船に浸かっていた。その姿を物珍しそうに眺めていた刀奈だったが、すぐに一夏の隣に移動して抱き着いた。

「ごめんね、一夏君。お風呂苦手なのに誘っちゃって」

「いえ、それは別に構わないのですが、刀奈さんたちは俺が男だって事を忘れてるんですか?」

「どうして? 一夏君は私たちが知ってる中でも一番男の子だと思ってるわよ?」

「では、何故恥ずかしそうな素振りもなくくつつけるのですかね?」

「それは一夏君だからよ」

何の根拠だと、一夏はツツコミを入れたくなかったが、周りを見渡せば全員が頷いて刀奈の意見に同意して見せたのでため息を吐くだけに留めた。

「一夏は私たちの分まで恥ずかしがってくれるから、私たちはあまり恥ずかしくないんだよ」

「それでも、私たちも恥ずかしいんですけどね。刀奈お姉ちゃんみたいに開き直す事は

出来てないですよ」

「私だって恥ずかしいけど、一夏君にだったら見られても構わないじゃない？」
「お嬢様、はしたないですよ」

虚にツツコまれて、刀奈は軽く舌を出して反省して見せる。

「ところでお兄ちゃん、さつきから本音が大人しただけど」

「兄さま、本音が湯船に浸かりながら寝ています」

「またか……」

お風呂で本音が寝るのは珍しいが、一夏と一緒に入るとほぼ確実に寝てしまうのだ。

「本音、起きろ」

「ほえ？ いっちーのエツチ〜」

「一緒に風呂に入ってそれは無いだろ」

「分かってるよ。ねえねえいっちーは誰が一番好きなの〜？」

「いきなりなんだ」

「だって、いろいろと問題が解決して、いっちーも誰かと付き合う余裕が出てきたじゃない？ だから、結婚するまでは誰かと付き合ったりするのかな〜って思ってる」

「そんな余裕はない。まだ篠ノ之の問題やティナの移籍問題、ナターシャさんを表舞台に復帰させるための手続きなど、いろいろ残ってるんだ」

一夏があげた問題に、刀奈と虚はため息を吐いた。その理由は、一夏が処理しなくても良いような仕事も含まれていたからである。

「一夏さん、少しは私たちに任せてくれませんか？　いくら当主とはいえ働き過ぎです」「碧さんには結構任せてるつもりなんですけどね……しかし、篠ノ之とティナの問題は俺が処理しなければいけないものですから」

「篠ノ之さんの問題は兎も角、ティナさんの問題は更識全体でバックアップする問題ですから、一夏さんだけが処理しなければいけないことは無いのですよ」

「そう……ですね……とりあえず部屋に戻ったら——」

「一夏君、ここではお仕事の話は無しだからね」

刀奈に釘を刺され、一夏は目を瞑って頷いた。

「慰安旅行ですからね、さすがにしませんよ」

そう言いながら一夏は脳内で様々な情報を処理していた。

「ほらまた仕事してる」

「してませんよ。皆さんのデータを修正してただけです」

「何のデータ？」

「更識所属の成長データを修正して、卒業後に何処を任せられるかを考えていた」

「完全に人事じゃない！ 一夏君、それは仕事よ！」

完全に仕事だと断定した刀奈は、一夏を怒ろうと立ち上がり、足をもつれさせて一夏の方へ倒れ込んでしまった。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫だけど、一夏君……くすぐったいよ」

「息がかかる距離にいるんですから我慢してください。立てますか？」

「うん、なんとか」

立ち上がり一夏との距離を元の位置に戻し、少し顔を赤らめながらも一夏に頭を下げた。

「ゴメンね一夏君。倒れ込んだじゃって」

「足がもつれてしまったのは仕方ないですよ。それよりも、周りの人の対処はお願いし

ますね。俺は先に部屋に戻りますから」
「えっ、ちよつと！」

足早に脱衣所へ向かう一夏の背中を追いかけようとしたが、刀奈の肩には虚と簪の手が置かれていた。

「お姉ちゃん、ちよつといいかな？」

「今の、わざとではないですよね？」

「わざとじゃないわよ！ てか、わざとだったらもつと一夏君にくつつくわよ！」

「……確かにお姉ちゃんならそれくらいやりそう」

「言われてみればそうですね……」

それで信用されるのも微妙な気分だと思いつつも、刀奈はとりあえず疑いが晴れたことを喜ぶことにした。

「それじゃあ、私たちも部屋に戻りましょうか」

「そうですね。一夏さん一人では部屋で仕事をしてしまうかもしれませんし」

碧の言葉に、簪と美紀は即座に湯船から脱衣所へと動き出した。

「早い!? 虚ちゃん、私たちも出るわよ!」

「はい」

「私たちはもう少しゆっくりしてますので、お兄ちゃんによろしく言っておいてください」

「私ももう少し入ってるね」

マドカとマナカ、それと本音はもう少し待たたりしたいと湯船に残り、刀奈たちを見送った。

「マドマドやマナマナはお風呂好きなんだね」

「姉さまたちも好きなのですし、これは織斑家の血だと思われます」

「でも、いっちはお風呂嫌いだよ?」

「お兄ちゃんも記憶を失う前はお風呂好きだったんだけどね……まあ、今は研究の為に少しでも時間を使いたいからって、お風呂に入る時間を嫌ってるんだけど」

「いっちは研究の虫だからね」

「兄さまもいつかはゆっくりとお風呂に入る幸せを感じられるのかな?」

本音が呟いた言葉に、マドカとマナカはあり得ないかもしれないと、一夏が長時間風

呂に入る光景を想像出来なかつたのだつた。

逆上せた一夏

部屋に戻ってきた刀奈たちが見たものは、珍しく寝転がっていた一夏の姿であった。

「一夏君、どうかしたの？」

「いえ、少し逆上せました……」

「お嬢様がその無駄に大きいものを押し付けるからですよ」

「押し付けてないわよ!? てか、無駄に大きいって酷くない!？」

「いえ、刀奈さんが原因ではないので安心してください……単純に風呂が熱かっただけですから」

「一夏は普段から湯船に入らないから、温泉も熱く感じちゃうんだね」

実際普段浸かっているお湯より熱くは感じたが、逆上せるほどではないと簪は思っていたので、一夏が逆上せたのを見てつい笑ってしまった。

「どうかしたの、簪ちゃん？」

「ううん、一夏が弱ってる姿を見ると、普段なら心配するんだろうけども、逆上せてる一夏は面白いなと思っただけ」

「一夏さん、冷たい水です」

碧が一夏に水を差し出すと、一夏は弱々しく手を伸ばしてそれを受け取り、ゆつくりと水を飲んでいく。

「やっぱり一夏君に温泉はキツかったかしら？」

「いえ、もう少し短い時間なら大丈夫だと思います」

「短いって、今日もそんなに長く入ってたわけじゃないんだけど」

「刀奈さんたちにはそうでしょうけども、普段から湯船に浸かる習慣のない俺には長過ぎです」

「これを機会に、一夏もちゃんとお風呂に入るようにしたら？」

「どんな機会だよ……」

逆上せたのに風呂に入る習慣をつける気になどなれないと、一夏は簪の提案を却下して、ようやく立ち上がることが出来たのだった。

「ちよつと外で風に当たってきます」

「付き合いますしよつか？」

「さすがにこんなところまで護衛が必要になることは無いと思いますので、碧さんも休

んでてください」

一人で庭に出た一夏を見送り、虚と簪は刀奈に鋭い視線を向けた。

「な、なに？」

「やっぱりお姉ちゃんが転んで胸を押し付けたから」

「一夏さんは否定しましたが、あのような短時間で逆上せるなんて、他の理由があつたに違いありません」

「一夏君が違うって言ったんだから違うわよ！　そもそも、一夏君に胸を押し付けたからって逆上せるとは思えないんだけど」

普段から美紀や碧が抱きしめてもそのような事が起こらないのだから、その理屈はおかしいと刀奈が言うのと、簪も虚も渋々納得したのだった。

「ではやはり、一夏さんには温泉は熱すぎたという事でしようか？」

「そうかもしれないわね。一夏さんは普段から湯船に浸かる習慣が無いですし、シャワーのお湯もそこまで熱くして感じるではありませんし」

「まだ入ってる本音たちは、一夏からしてみれば我慢大会でもしてる感じなのかな？」

「マドカちゃんやマナカちゃんが入れるんだから、血縁である一夏君も入れるはずなの

にね」

「更識に来てからというもの、一夏さんはお風呂に入ることを嫌ってしまいましたからね」

「あの時、無理にでも一緒に入ってれば違ったのかな？」

研究があるからという理由で、一緒に入ることを断っていた一夏だったが、あの時刀奈たちが無理にでもお風呂に入れていけば変わっていたのかもしれないと、今更ながらにそんなことを考えたのだった。

「とりあえず明日は、もう少しゆっくりお風呂に入れるようにしてみましよう」

「そんなこと言ってもお姉ちゃん、一夏は今日の時間で限界だったんだよ？ のんびりも何も無いとおもうんだけど」

「少しお湯を温くするとか、いろいろと方法を考えてみなきゃ」

「温くすると言いますが、温度調節は旅館がしていますので、そう簡単に温度を変えられるとは思えないのですが」

「少し水を入れるとかして、ちよつとの間だけ温くなればいいのよ」

「そこまでして一夏さんをお風呂に入れる理由はあるのでしょうか？」

美紀の問いかけに、刀奈は少し考えてから答えた。

「シャワーだけだと身体を温める事が出来なかつたり、風邪をひいちやうかもしれないでしょ？ それに、少しでも一夏君に温泉を楽しんでもらいたいのよ」

「まともな事を言っているようですが、お嬢様は一夏さんと一緒に入りたいただけですよ？」

「そ、そんな事ないわよ？ それに、虚ちゃんだつて一夏君に背中とか洗ってもらつてる時嬉しそつたつたわよ」

「それとこれとは話が別だと思ひますが。そもそもお嬢様は調子に乗つて前まで洗わせようとしていたではありませんか」

「一夏君になら見られたり触られたりしても恥ずかしくないからね。それに、結婚したらそつ言う事もするんだから、今から耐性をつけておいた方が良いじゃない？」

「お嬢様は普段からそのよつな事を考へているのですか？」

「そんな事ばつかじやないけど、一夏君と結婚するんだから少しはね。それとも、虚ちゃんは一夏君以外の男の人と結婚したいの？」

刀奈の問いかけに、虚は力強く首を横に振つた。一夏以外の男性はあまり知らないが、それでも一夏意外と結婚するのは絶対に嫌だと感じたのだ。

「ほら、だから一夏君とそう言う事をする妄想をしても仕方ないのよ」

「お姉ちゃんは痴女だもんね」

「痴女じゃないもん！」

簪の言葉を力強く否定してから、刀奈は逃げ出すように庭へ出て行った。

「あつ、逃げちゃった」

「簪ちゃん、少し刀奈お姉ちゃんが可哀想だったよ」

「うん、少し反省した」

それでも少しなのは、普段から刀奈がそう思われてもしようがないからである。

新生徒会の考案

夜風に当たりながら逆上せた頭を冷やしていた一夏は、部屋から刀奈が飛び出してきたのを不思議そうに眺めていた。

「どうかしたのですか？」

「皆が私の事を痴女だと言って苛めてきたの」

「まあ、からかったくらいでしょうね。本気でそう思っているのなら、本人には言わないでしようし」

「そうなの？」

「そもそも、刀奈さんは痴女じゃないと思いますよ。織斑姉妹の方がよっぽどですし」
「その二人と比べられるのも微妙だけど、あの二人ってそうなの？」

刀奈の問いかけに、一夏はため息交じりにあの二人の行動を聞かせることにした。

「脱いだ下着は洗濯もせず部屋に放置しっぱなしで、弟の俺に片づけさせたり、下着姿でうろろうろしたり、最悪素っ裸でうろついたりもしてますからね。ほんと、寮長を解任して学生寮から追い出してやろうかとも思いましたが、あの駄姉二人の所為で近所に迷

感をかけるのもどうかと思ひまして、一応寮長のままで放置していますが」

「女だらけの世界で生活してたらそういうところが鈍感になっちゃうのかな？ 薫子ちゃんもたまにお風呂上りに下着姿でうろうろしてるし」

「あの人もですか……まあ、人目につかなければ問題ないのですが、あの二人は俺が訪ねてきても服を着る素振りもせずマドカに怒られていましたけどね」

「あつ、そこはさすがにマドカちゃんも怒るんだ」

「マドカはしつかりと慎みを持っていますから」

そんな話をしていると、刀奈はさつきまで感じていた怒りが静まったのを感じ、急に肌寒さを覚えくしやみをしてしまった。

「くしゅん！ さすがに年末だけあつて寒いわね」

「何でそんな恰好で外に出てきたんですか……」

「だって、皆にイジメられたと思つたから」

しょんぼりとした刀奈の肩に、一夏は自分が羽織っていた上着をそつとかける。逆上せたとはいえこの気温の中浴衣一枚で外に出るような事はしなかつたのが功を奏した。

「ありがとう。でも、一夏君が寒いんじゃない？」

「俺はもう中に戻りますから」

「そうなの？ でも、もうちよつと外にいない？ こうすれば一夏君もあつたかいだらうし」

掛けられた上着を一夏に着せて、刀奈は一夏に抱き着いて暖を取る。他の人に見られたら嫉妬されるであろう光景だが、こんな寒い中外に出る物好きはそうそういない。

「刀奈さんも随分と甘えんぼですよね」

「本音ほどじゃないと思うけどな」

「そこと比べられたくは無いと思いますが、簪も意外と甘えんぼだと最近知りました」

「簪ちゃんも普段我慢しちゃうから、一夏君相手なら我慢しなくてもいいと思ってるんじゃない？」

「まあ、頼られるのは嬉しいですが、簪の場合は嫉妬も激しいですからね」

「でも、そこが可愛いのよね」

姉バカを發揮した刀奈に、一夏は苦笑いを浮かべながら、刀奈が寒くないようしっかりと抱きしめたのだった。

「こういうところが、一夏君に甘えなくなる原因なのよ。分かってる？」

「どういうところですか？」

「無自覚なんだ。ますます惚れちゃうわね」

「はあ……」

特に意識しての行動ではないので、一夏は刀奈が自分の何処に惚れたのかが分からない。だが天然故にキュンと来る行動なので、刀奈はあえてその事を一夏に教える事はしなかった。

「一夏君、来年から生徒会長をやらない？」

「刀奈さんには勝てませんよ」

「私は、一夏君に完敗してるわよ」

「なににですか？」

「こうやって抱きしめられたら抵抗なんて出来ないし、このまま襲われても逃げ出す事は出来ないもの。だから、一夏君が私よりも強いので、だから生徒会長の資格は十分よ」
「そういつて、来年から堂々とサボるつもりですか？ 虚さんが卒業するから」

「そうじゃないわよ。でもね、一夏君が会長の方がみんなしつくりくると思うのよ。もちろん、私も一夏君のお手伝いはちゃんとするし、虚ちゃんがいなくなった分も働くつもり」

刀奈から伝わってくる感情は確かにやる気に満ちていると一夏も感じている。だが生徒会長になるのは少し考えてしまふのだった。

「俺は更識の仕事もありますので、よく学園を留守にするのですが、その辺りは刀奈さんが会長の方がスムーズに事が運ぶと思うのですが」

「私だって代表として忙しくなるだろうし、今だって会長不在でもなんとかなるんだから」

「それは虚さんがしつかりとフォローしてくれるからですよ。しかし来年は虚さんがいませんので、俺だけではフォローしかねます」

「本音が真面目に——無理ね。新入生で優秀な子がいてくれればいいのだけど」

「そもそも、来年の事を今から話しても意味はありませんよ。とりあえず、会長の事は考えておきます」

「お願いね。何だったら、一夏君が生徒会メンバーを一新させてもいいわよ？ 静寐ちゃんとか優秀な知り合いは多いでしょ？」

「それも含め考えておきます。そろそろ部屋に戻りましょうか。簪たちも心配してるでしょうし」

「もうちよつとだけ。せつかく一夏君の体温を感じられる機会なんだからさ」

自分から抱き着く力を強めた刀奈に対し、一夏は苦笑いを浮かべながらも、もう少し刀奈を甘えさせることにしたのだった。

簪の嫉妬

飛び出していった刀奈と、夜風に当たりに行った一夏が一緒に戻ってきたのを見て、簪は二人に何かあったのではないかと勘ぐった。

「お姉ちゃん、一夏と何かしたんじゃない？」

「何もしてないわよ。精々お喋りくらいよ」

「何の話をしたの？」

「普通の話しかしてないわよ。来年の生徒会の事を相談したり、一夏君に生徒会長をお願いしたいなーとかよ。ね、一夏君？」

「そうですね。特に実のある話をしたわけじゃないから、簪もそこまで気にする必要は無いぞ」

一夏の言い分に少し不満げな表情を浮かべた刀奈ではあったが、確かに実のある話をしたわけでもないのです。すぐさま表情を改め、簪に笑いかけた。

「まったく、簪ちゃんは心配性なんだから」

「だって、お姉ちゃんなら抜け駆けくくらいするだろうし、一夏も何だかんだでお姉ちゃん

に甘いから、その場の空気に流されちゃうかもしれないと思ったから」

「酷いわね!! 簪ちゃんはお姉ちゃんの事を信用してないの?」

「うん」

即答されて、刀奈は冗談抜きで泣きそうになり、一夏の胸に飛び込んだ。

「一夏君、これが反抗期なの? 簪ちゃんがお姉ちゃんの事を嫌いになっちゃった!」

「別に嫌いだとは言ってなかったと思いますが」

「でも、昔はもう少しお姉ちゃんの事を信じてくれたのに……」

「お姉ちゃん、一夏から離れて! ウソ泣きで一夏に同情してもらおうなんてズルいんだから!」

「ウソ泣きじゃないもん! 本気泣きだもん! 簪ちゃんに嫌われるということは、お姉ちゃんにとってそれくらいショックなんだよ」

さらに一夏に顔を押し付ける刀奈の頭を、一夏が優しく撫でる。一夏も刀奈がウソ泣きではなく本気で泣いている事はわかってるので、ここで引きはがすようなことはしなかった。

「とにかく、お姉ちゃんは一夏に甘えすぎだから、少しは自分で何とかするようにしなさい」

い！一夏も、お姉ちゃんにもう少し厳しくするように」

「今でも十分厳しくしてるつもりなんだがな……虚さんはどう思いますか？」

「確かに、簪お嬢様が仰るように一夏さんはお嬢様に甘いような気はしますが、簪お嬢様が思っているよりも一夏さんはお嬢様を甘やかしたりはしていませんよ？ しつかりとお嬢様の分の仕事は残していますし」

「そんなの当然だよ！ お姉ちゃんは生徒会長としてもつと働くべきだと思うんです！ 何でもかんでも虚さんと一夏に任せて、本人は遊んでるなんておかしいじゃないですか！」

簪の言い分に、一夏と虚は思わず頷いて考え込んだ。確かに生徒会長でありながら遊びほうけている刀奈にはもう少し仕事を任せた方が良いのではないかと思っただが、任せるところで自分たちで処理した方が早いし確実だと思ってしまうだろうと苦笑いを浮かべた。

「とにかく、お姉ちゃんは一夏から離れて！」

「まあまあ簪ちゃん。せっかくの旅行なんだから、そんなにイライラしないで」

「でも！ 美紀は羨ましくないの？ さつきからお姉ちゃんは一夏にしがみついているんだよ！」

「簪ちゃんが大声で刀奈お姉ちゃんを責めるから、刀奈お姉ちゃんが更に一夏さんにしがみついているんだと思うんだけど」

美紀の指摘に、簪はハツとした表情を浮かべた。確かに自分が責めているから刀奈が泣き、一夏にしがみついているのだと思いつたようで、簪はとりあえず冷静さを取り戻したのだった。

「ゴメン、お姉ちゃん……でも、一夏に甘えられるなんて羨ましいって思ってるのは本当だから」

「ぐすん……私もゴメンなさい。でも、簪ちゃんだつて一夏君に甘えたりするでしょ？」

「私は、お姉ちゃんや本音のように気楽に甘えたりが出来ないもん」

「恥ずかしがっちゃ駄目よ、簪ちゃん。一夏君はしっかりと受け止めてくれるんだから、甘えたいときは思いっきり甘えなきゃ！」

「あまり甘えられても困るんですがね」

撫でていた手を止め、刀奈を離し苦笑いを浮かべる一夏。泣き止んだのを確認しての行動なので、刀奈も不満そうな顔は見せなかった。

「そういえばお嬢様、一夏さんの両隣は誰が寝るのでしょうか？ 現地で決めるとは聞

「いていましたが」

「お姉ちゃんは今一夏に抱き着いたから今日は駄目だからね」

「何でよ!? そこは平等にしなきゃ駄目でしょ!」

驚き反論する刀奈ではあったが、既に一夏に抱き着いて甘えまくった自覚があるので、イマイチ言葉にキレは感じなかった。

「とりあえず刀奈ちゃんは離れて寝る事が決まったけど、どうやって決めましょうか?」
「碧さんまで……いいもん! 明日は思いつきり甘えてやるんだから!」

除け者にされ、一人いじける刀奈を可愛いと思った一夏ではあったが、それを言葉にするには無かった。

「とりあえずじゃんけんで良いんじゃない? それなら、誰かがずば抜けて強いとかも無いし」

「あつ、一応言っておくけど、寝相が悪いとか言つて一夏君の布団に潜り込むのは禁止だからね!」

「そんなこと、お姉ちゃんしかしないってば」

刀奈の注意にそう反論して、簪は気合を入れるために目を瞑り集中し始める。他にも本音やマドカ、マナカなどは気合十分の感じだったが、虚、美紀、碧はいつも通りの雰囲気じゃんけんに臨んだのだった。

碧の決意

じゃんけんの結果、一夏の両隣は碧と虚が勝ち取った。珍しく年上組みが一夏の隣という事で、一夏も少し意外そうな表情を浮かべた。

「珍しい組み合わせですね」

「そう言えばそうですね。普段は刀奈ちゃんや甘えるから、私や虚ちゃんはあまり一夏さんに甘えたりはしませんし」

「甘えるんですか？」

「せっかく隣で寝るわけですから、少しくらいお喋りに付き合ってもらいましょうかね」
「それくらいでしたらいいですよ」

碧と虚なら行き過ぎた甘えもないだろうと一夏は思っているし、普段から自分が甘えている部分があるので、それくらいなら喜んで付き合うつもりだった。

「いいな、私も夜通しお兄ちゃんとお喋りしたいな」

「夜通しではないと思いますけど」

「でも、お兄ちゃんとお喋りしたい事はいっぱいあるから、一日じゃ終わらないかもしれ

ない」

「最早夜通しですらなくなってますよ」

マナカのボケなのか本気なのか分からない提案に、マドカが呆れながらもツツコミを入れる。はじめはぎこちなかった姉妹の関係は良好といえるくらいにまでになっているようで、一夏は微笑まし気に二人を見つめた。

「一夏君もやっぱりお兄ちゃんなんだなって思うわよね、あの表情を見ると」

「たまに刀奈お姉ちゃんや本音の事もあんな感じで見ていますけどね」

「えっ、私って本音やマドカちゃんたちと同列なの!？」

「まあ、お姉ちゃんって甘えたりして妹みたいだしね」

簪の一言に、刀奈は大げさに崩れ落ちウソ泣きを始めた。

「よよよ……まさかこの私が妹扱いなんて……」

「ウソ泣きは通用しないってさっき言ったよね」

「えへ、まあね。一夏君からしたら私も妹みたいに思えちゃうんだろうね。でも、本音と同列視されているのは少し考えないといけないわよね」

「そう思うのでしたら、お嬢様ももう少し頑張られては如何でしょう。先ほどの会話で

はありませんが、生徒会長として立派に勤め上げてから一夏さんに会長の座を譲る方が
よろしいと思いますよ」

「でも、一夏君が最強じゃない？ 私たちは、一夏君より確かにIS戦闘では強いけど、

一夏君に命じられたら逆らえないし」

「そう言う問題ではないと思うのですが……」

確かに一夏に命じられたら逆らうことは無いだろうと虚も思ったが、最強の意味はそ
う言う事ではなく純粋な武力ではなかったと改めて考えてしまったのだった。

「とにかく、お嬢様はもう少しご自分の仕事はご自分で片づけられるようにならないと
いけませんね」

「分かってるわよ……」

不貞腐れながら自分の布団を用意する刀奈を見て、一夏と碧は微笑ましい気分になっ
たのだった。

周りは全員寝たようだと、一夏は気配察知で理解した。こうして大広間で雑魚寝するのも久しぶりだと感慨深げに思っていると、隣から声を掛けられた。

「一夏さんはまだ寝ないのですか?」

「夜更かしに慣れていきますから、この時間じゃまだ眠くないのですよ。碧さんこそ、普段忙しいのですからこういう時くらいは早く寝たらどうです?」

「私もこの時間じゃまだ眠くないのですよ」

そろそろ日付が変わる時間だというのに、一夏も碧も全く眠気が訪れずにいるのだ。普段からこの時間まで起きている事が多いのもあるが、今日はそれほど忙しくもなかった。疲れていないのが主な原因だと二人は考えている。

「刀奈さんは兎も角、虚さんも寝てしまいましたしね」

「虚ちゃんも普段から働きすぎですからね。疲れていても不思議はありませんよ」

「碧さんだって、織斑姉妹の相手や、山田先生や五月七日先生のフォローだったり、大変なのではありませんか？」

「一夏さんほどではありませんよ。本音ちゃんやマドカちゃん、マナカちゃんの相手や刀奈ちゃんのフォローだったり専用機の調整、織斑姉妹へのお説教など、気の休まる時間の方が圧倒的に少ないと思いますが」

「言いたくありませんが、慣れてしまいましたから」
「私もです」

互いに苦笑いを浮かべ、一夏は寝ている他の人に視線を向け、柔らかい笑みを浮かべた。

「皆が楽しそうでしたよ」

「一夏さんも楽しまなければ意味はないんですよ?」

「俺もちゃんと楽しんでますよ。正直に言えば、Manaがここまで打ち解けられるとは思ってなかったのよ」

「本音ちゃんの特技とも言えますね。誰とでも仲良くなれて、周りに同化させるというのは」

「本人は無自覚ですけどね」

「本音がいたからManaもここまで打ち解けたのだろうと認めている反面、それくらいしか本音は役に立たないとも思っているのか、一夏は苦笑いを浮かべた。

「篠ノ之さんもクラスに溶け込めたようですし、やはり本音ちゃんの特技は凄いですね」
「まあ、篠ノ之の事はまだ要観察ですがね」

「今のところは問題なさそうですよ」

「今のところは、ですからね。これが恒久的に続けば問題ないですが」
「やはりご当主様はいろいろと大変そうですね」

「皆さんが手伝ってくれるので、それほどでもないですけどね」

それでも一夏が多忙であることは碧は重々理解しているので、もう少し手伝えたらと

思ってしまった。

「碧さんが気にする事じゃないですよ。こればかりは本家の中でも上位の人間がする事ですから」

「早く一夏さんと結婚して上位に進出してお手伝いしたいです」

「……そう言う事をはつきりと言わないでください。照れます」

「ふふ、こういうところは可愛いですよね」

照れる一夏を見て、碧は微笑ましく思いながらも、いずれは手伝えるようにならなくてはと心に決めたのだった。

監視の目

一夏たちが旅行で留守にしているとはいえ、箒に対する監視が緩むことは無い。むしろ織斑姉妹に監視が変わった事により、箒は普段以上に見張られている感じがしていた。

「どうかしたの、篠ノ之さん」

「いえ、何時もの方ではない方が監視しているようで、気になってしまふのです」

「ああ、一夏君たちが旅行でいないから仕方ないわよ。でも、確かにあからさまな視線よね」

冬休みという事でVTSルームの使用制限が解除されているので、日付が変わるギリギリまでVTSルームを私用していた箒と静寐は、監視の織斑姉妹の視線を感じて互いに苦笑いを浮かべた。

「更識所属の監視は、もう少し柔らかい感じでしたから、あからさまに『疑っている』という意味を込められるのは心にくるものがあります」

「篠ノ之さんのしてきたことを考えると仕方ないのかもしいけど、この視線はあか

らさま過ぎるわよね……一夏君に相談してみれば？」

「相談と言われましても、私は一夏様に連絡する手段を持ち合わせていませんので」「携帯とか持つてないの?」

静寐の問いかけに、箒は躊躇いがちに頷いた。亡国機業に所属した際に、以前の箒が持つていた携帯などの通信手段は一切処分され、今の箒になってからは一夏と離れる機会もそうなかったたので、連絡手段を持ち合わせていないのだ。

「それじゃあ、私から一夏君に連絡してあげるわ。たぶんだけど、まだ一夏君は起きてるだろうし」

「ですが、今は一夏様たちは慰安旅行中ですので、私の問題を持ちかけるのは失礼ではないでしょうか?」

「精神衛生上よろしくないから、改善してもらおうだけよ。このままじゃ精神的に滅入っってしまうでしょ?」

静寐の言い分に箒も納得したようだが、一夏に連絡するのは朝になってからでもよいのではないかと思っていた。後は部屋に戻って寝るだけだし、もし目覚めて同じような監視だったら改善してもらえばいいと箒は考えたのだ。

「それでは、明日の朝になっても変わっていないなかったら連絡してもらってもよろしいでしょうか？」

「それは構わないけど、今じゃなくていいの？」

「一夏様が寝ているかもしれないし、このような時間に連絡をするのは非常識だと思いますので」

「まあ、それもそうね……それにしても、あの篠ノ之さんから『非常識』なんて言葉を聞くとは思わなかったわ」

「そうなのですか？」

「こーう言ったら今の篠ノ之さんに失礼だけど、前の篠ノ之さんは非常識が服を着て歩いてたような感じだったから」

静寐の言葉に筈は前の自分はそれほどまで非常識だったのかとショックを受け、ますますしつかりしなければと心に決めたのだった。

「それじゃあ、一応メールだけ送っておくわ。もし朝になっても改善されてなかったら電話してみよう」

「お願いします。それでは、おやすみなさいませ」

静寂と別れ、箒は自室へと続く廊下を歩きながら、監視している織斑姉妹の気配を感じながら過去の自分を殴りたい気持ちに支配されたのだった。

静寂からのメールを受け、一夏は織斑姉妹にメールを送り、気持ち疑いの目を弱める

ように指示を出した。

「まったく、最初から疑ってかかったら改心する者も改心しなくなるだろうに……」

「まあ、織斑姉妹ですし、監視対象が篠ノ之さんですから仕方ないといえはそれまでですがね」

「今の篠ノ之は何の悪さもしてないのですから、疑うだけ無駄ですけどね」

「あれが演技だったら凄いです、香澄さんの特殊能力でも裏は感じ取れないようですので、本当に生まれ変わったのでしょうかね」

「束さんの発明品という事が問題ですが、今のところは良い方に作用してますね」

碧と話している最中にメールが着たので、碧も何事かと一夏に問いかけ、内容を聞いていたのでこの話題なのだが、結局最後まで問題なのは箒ではなく織斑姉妹なのではないかと碧は思い始めていた。

「あの二人、もう少しどうにかならないのですかね？」

「あれは無理でしょう……IS学園だから雇われているのであって、一般企業ではまず採用されないでしょうね」

「過去の栄光も吹き飛ばすくらい駄目っぷりですからね……」

「あれで指導力が無ければ学園もクビにするのでしょうか、指導力だけは他の追随を許

さないものがありますからね……もちろん、碧さんはあの二人より上ですが」

「指導力だけなら勝てませんよ。それでも、生徒からの信頼とか、他のものは勝ってると思ってますが」

「当然ですね。暴力暴言が当たり前の織斑姉妹より、懇切丁寧な碧さんの方が生徒はついて行くでしょうし、どちらに教わりたいかと尋ねられれば当然碧さんと答えますよ」

「まあ、ボーデヴィツヒさんのような例外はいますけどね」

「あれはまあ……とにかく、来年からは本格的に碧さんを寮長にした方が良いのではないかと思ってますよ」

「ですが、織斑姉妹を寮から追い出すと、どのような問題が起こるか分かりませんよ？」

「そうなんですよね……目を離すと何をするか分かったものではありませんので……」

「一夏さんが保護者みたいですよね」

碧の言葉に、一夏は本気で嫌そうな表情を浮かべた。血縁であることも嫌なのに、ましてや保護者などと言われれば当然だろうと、碧は本気で一夏に同情したのだった。

謎の気配

何時もより早く寝たので、刀奈は妙な時間に目を覚ました。寮ではない天井を見て、一夏たちと泊りがけで旅行に出たのだと思い出し、ちよつとした悪戯を思いついたのだった。

「まだみんな寝てるだろうし、今のうちに一夏君の寝顔を写真に収めちゃいましょう」

謎の病氣、一夏分欠乏症を避けるために、一夏の写真は必須アイテムなのだが、寝顔ともなればその効果は絶大だろうと刀奈は思っていた。

「(来年はモンド・グロツソもあるし、一夏君の側を離れなきやいけない時間も増えて来るだろうし、新しい一夏君の写真はどうしても欲しかったのよね)」

寮だと一夏が寝ている時間だろうと部屋に近づけば織斑姉妹が飛んできてしまうし、頼んだからと言って寝顔を撮らせてくれるとは思えない。だから刀奈はこの機会に一夏の寝顔写真をゲットしようと思き出したのだった。

「(えっと、一夏君のお布団は確か……)」

一番遠い場所に布団を敷いたため、他の人を踏まないように細心の注意を払いながら一夏の布団を目指す刀奈。そしてあと少しで一夏の布団に到着するというタイミングで、誰かの視線を感じじ辺りを見回したのだった。

「誰？ 人の気配はしないんだけどな……」

碧も一夏も布団にいるはずなので、誰かの視線を感じるなんて事は無いはずだと刀奈は思っている。だから気のせいだろうと考え再び一夏の布団を目指すそうとすると、背後から何者かの気配を感じたのだった。

「誰っ！」

他の人は寝ているという事を忘れ大声を出してしまった刀奈だったが、運良く誰も目を覚ますことは無かった。

「やっぱり誰もいない……気のせいなのかな？」

振り返ってもやはり誰もいなかったの、刀奈は首を傾げながらも一夏の布団に近づき、やはり背後になにかいるような気配を感じ取った。

「いったい誰なのよ……」

まさか人ならざる者がいるとは思えないしと、刀奈はゆつくりと背後を確認する。すると今度は何やら靄のようなものを見た気がして、刀奈は震えあがり一夏の布団に飛び込んだ。

「ん……何かあつたんですか？」

「一夏君……お化け」

「お化け？」

何を言っているんだと一夏は気配察知をし、とある人物の気配を感じ取りため息を吐いた。

「何やってるんですか、東さん」

「これでも気づかれちゃうか。そこの巨乳は誤魔化せたんだけどなく。てか、いつくんの布団に飛び込むなんてうらやまけしからんことをするなんて予想外だよ」

「建造物不法侵入の罪で警察の厄介になりたいんですか？」

「そんなことは無いよ。ただいつくんの寝顔写真が欲しかっただけだよ」

「……そんなもの、何に使うんですか」

「それはもちろんストレス発散に……というのは冗談だから、その殺気をしまつてくれないかな？」

「では、何に使うんですか？」

「当然一夏分補給に使うんだよ。本当は本物に触れ合つて補給したいところだけど、ちーちゃんやなつちゃんの監視が厳しくてね。なかなか会いに来れなからさ」

「だから、その『一夏分』ってなんなんですか？」

「でも、その巨乳も同じ目的でいつくんの布団を目指してたようだし、お説教はそつちのもしなきや不公平だよ」

束の告白に、刀奈は一夏の布団の中でピクンと身体を跳ねさせた。怒られるかもしれないとは最初から分かつてはいたが、まさか束に証言されるとは思つてなかつたので予想外の反応をしてしまったのだ。

「そもそも、貴女は宇宙規模のストーカーなのですから、こうしてこの場に来る必要は無かつたんですよ？ 刀奈さんを驚かして楽しんでたんですか？」

「そんなことは無いよ？ いつくんにこのステルスが通用するか試そうとして、その巨乳がいつくんの布団を目指し始めたからちよつと悪戯してやろうかなつて思つただけだよ」

「ますます性質が悪いじゃないですか。とにかく、大人しく帰ってください。そして、そのステルス迷彩の性能でも上げる努力をしてください」

「まあ、更識の血族は誤魔化せるって分かっただけでも収穫かな。それじゃあいつくん、最後にハグしようじゃないか！」

「帰れ」

とびかかってくる束に軽くチョップをして、一夏は束を部屋の窓から中庭へと放り出した。

「冷たい……でも、そんないつくんが好き」

「……怒られないと帰らないならそう言うてくださいよ」

「か、帰ります！」

一夏が満面の笑みを浮かべたのを見て、束は大慌てで自身のラボへと帰っていった。束が帰ったのを確認してから、一夏は自分の布団に潜り込んでいる刀奈に声を掛けた。

「お化け退治は終わったので、そろそろ自分の布団に戻られてはどうですか？」

「もうちよつとだけ……本当に怖かったんだから」

「そもそも、何で刀奈さんまで俺の寝顔を撮ろうとしたんですか？」

「だって、モンド・グロツソとかで一夏君の側を離れる機会が増えそうだったから、最高の一枚を撮りたかったのよ……」

「だったら、後と一緒に写真を撮ればいいだけじゃないですか。刀奈さんなら断りませんよ」

「そうなの？　だったら、こんな怖い思いしないで良かったじゃないの……」

安心したのか、刀奈は急に睡魔に襲われ、そのまま一夏の布団で寝てしまった。

「やれやれ……」

眠ってしまった刀奈をそっと抱きかかえ、刀奈自身の布団へ運んだのだった。

病気の検証法

東と刀奈の所為で中途半端な時間に目を覚ました一夏は、物音をたてずに部屋から抜け出し、自動販売機でコーヒーを購入して一休みする事にした。

「まさか東さんが侵入してくるとはな……てか、刀奈さんも何であんなことをしたんだか……」

事情はある程度聞いたが、イマイチ要領を得なかった、というよりも、一夏にとって彼女たちの必須栄養素であるところの『一夏分』という物自体理解しがたいので、どれだけ説明を受けても納得する事は出来ないのだ。

「枯渴すると生死に関わるらしいが、今のところその病気が発症しているのは織斑姉妹、東さん、刀奈さん、マナカの五人らしいが、簪や美紀も予備軍だと刀奈さんは言っていたし、他にも潜在的に発症している可能性がある人はいるらしいし……」

自分が原因なのは分かっているが、どのような理由で発病し、どうすれば治るのかも分からないので、一夏はどうする事も出来ないのだ。

「てか、本当にそんな病気があるのかも疑わしいしな……」

飲み終えた缶を指定されたゴミ箱に投げ入れ、一夏は背後に現れた気配に尋ねる事にした。

「どう思います？」

「そうですね、少なくとも私は発病してませんし、今のところはその『一夏分』というのが何なのかも分かりかねますね」

「そうですね……」

「そもそも、私は一夏さんと長時間離れる事は無さそうですし」

「在学中は兎も角、卒業したら離れるんじゃないですかね。碧さんは教師を続けるわけですし、俺は当主として様々な国を飛び回るわけですから」

「教師である前に一夏さんの護衛ですから、一夏さんが卒業する年に私も教師を辞める予定ですから」

「それまでに織斑姉妹が大人しくなっていれば問題なく辞められるでしょうが、碧さんほどの優秀な人材を手放すとは思えませんかね」

一夏としても、碧は手放したくない人材の一人であるので、護衛としてついてきてく

れるのであれば碧を指名したいと思っっているが、人材不足なIS業界で、後任を育てるのにも優秀な手腕を発揮するであろう碧をあの学長が手放すとは考えにくいのだ。

「私の人事権はIS学園ではなく更識にありますので、一夏さんが一言発すれば解決しますよ」

「まあ、それもそうなんですが……碧さんの穴を埋めるにはかなりの数の教師が必要になるでしょうし、ゴネられる未来しか視えないですけどね」

「マドカさんとマナカさんも一夏さんと同時に卒業するわけですから、そのまま教師として採用してもらえば良いんですよ」

碧の提案に、一夏は少し考え込んでから若干否定的な答えを返した。

「マドカとマナカの二人であの姉を止められるかと聞かれれば微妙としか答えられないですね……そもそも、二人だって教師として残りたいのかどうか分かりませんし」

「それならやはり、織斑姉妹がまともになるのを祈るしかないですね」
「ほぼありえないでしょうが、期待しましょう」

そもそもあの二人がもう少しまともであるならば、一夏がこれほど忙しい思いをする事も、真耶や紫陽花が彼女たちの尻拭いをさせられ、挙句碧に泣きつく事も無かったの

だ。だから限りなくゼロに等しい可能性だと、一夏も碧も重々理解しているのだが、その可能性に期待する事にしたのだった。

「まあ、刀奈さんや簪、美紀が代表を引退したら、そのままＩＳ学園の教師にという依頼が来てますからね。虚さんにも来てるようですが」

「四人とも更識企業への就職が決まっているのではないのですか？　いくら世界的な大企業とはいえ、優秀な人材を手放す余裕は無いと、一夏さんも言っていたじゃないですか」

「まあ、俺個人としては側においてほしいですが、皆さんが教師をやりたいというなら止められませんから」

「その言葉を聞けば、どんな好条件でも蹴っ飛ばして一夏さんの側にいるとおもいますよ」

碧の確信めいた言葉に、一夏は首を傾げたが、恐らくは碧の言う通りになるだろう。例えどんなに好待遇でも、一夏の側を離れるという苦痛に耐えられるはずもなく、また一夏が側においてほしいと言ってくれたなら、どんな条件でも飲むはずはないのだ。

「とにかく一夏さん、今は慰安旅行中なのでですから、余計な事を考えて疲れる事の無いようにしてくださいね」

「それは東さんや刀奈さんに言つてくださいよ。こんな時間に考え事をする羽目になったのは、あの二人が発病している謎の病気の所為なのですから」

「単純に一夏さんに触れられなくて寂しい、というわけではなさそうですしね……本当に死に至るのでしょうか？」

「試そうにも、本当に死者が出たら大変ですし、そもそも誰で試すかも問題ですからね」

「一番支障がないのは織斑姉妹のどちらかでしょうけどもね」

「……まあ、残りの面子を見れば、その二人のどちらかになるでしょうが、IS業界的には、誰が欠けても困るんでしょうがね」

刀奈、東、マナカと比べれば千冬と千夏のどちらか一人が欠けても問題は少ないと一夏たちは判断したが、それはあくまでも一夏たちだから出来る判断である。IS業界的には千冬か千夏のどちらかが欠けても大問題であるため、やはり一夏分欠乏症の検証は不可能だと判断し、一夏と碧はため息を吐いて部屋へと戻る事にしたのだった。

「ところで、何故碧さんはあの場所に？」

「私は一夏さんの護衛ですから」

満面の笑みで答える碧に、一夏は感謝を込めて頭を下げたのだった。

寝不足の一夏

一夏からのメールで、箒に対する監視を少し緩める事にした千冬と千夏は、どの程度まで緩めて良いのかを話し合っていた。

「とりあえず全面的に疑っているという気持ちは捨てなければならぬだろうな」

「だが、アイツが何をしでかすか分からない以上、疑うのは当然だと思うのだが」

「それは私も分かっている。だが、一夏から注意されてしまった以上、改善せねばご褒美が無くなる可能性だって十分にあるのだ。多少慎重になるのも仕方ないではないか」

「それは確かに……あの馬鹿を疑う事を止めるのと、一夏からのご褒美を天秤に掛ければ、どちらを選ぶかは明らかだからな」

ちなみに報酬は、マドカ・マナカと食べる一夏の手料理なのだが、ここに一夏が含まれない事に二人は気づいていなかった。

「家族団欒など諦めていたが、まさかあの馬鹿を監視するだけでその夢が叶うとはな」

「お姉ちゃんとして、恥ずかしくないように振る舞わなければな」

非常に今更なのだが、二人は姉としての尊厳を汚さないように振る舞おうと決めているのだ。

「とりあえず、あの馬鹿箒が一人で行動している時はしつかりと監視し、他の連中と行動を共にしている時は多少緩める感じでいいのか？」

「いや、あの馬鹿箒が一人で行動している時も、多少なりとも監視の目を緩めないとまた怒られる可能性がある。どうやらあの馬鹿箒も生まれ変わった事により気配察知のレベルが上がっているようだからな。あまりキツ目の視線を向けると気づいてしまいうらしい」

「では、一人で行動している時は普段の監視をするような感じで、他に人がいる時は見ているだけという感じで良いのか？　だがそれだとわたしたちの職務怠慢だとか言われそうだが」

「その辺りは一夏も考慮してくれるだろうし、アイツが何もしなければそれでいいのだからな、したら容赦なく叩き潰せばいい」

「それもそうだな。あの馬鹿箒が大人しく過ごしてくれれば、わたしたちは家族団欒の時を手に来るのだからな」

一夏の料理を姉弟揃って食べられる時を夢想し、二人はだらしなく口を開けながらにやにやしていた。重ねて言うが、食事の席に一夏はいないのだが、この二人はその事

に気付いていないのでこのようならしのない顔になっているのだった。

「おっと、あまりの興奮で時を忘れる所だったな」

「とりあえず馬鹿筭の監視は体裁を保つ程度という事で良いんだな」

「ああ。一夏もその程度で構わないと言っていたしな」

最初から言われている事を実行出来ていない時点で姉の威厳も無いのだが、二人は頑張って一夏に褒めてもらおうと今日も監視を続けるのであった。

東の乱入騒動の所為で寝不足の一夏は、朝から微妙に眠そうな雰囲気であった。もちろん、付き合いの浅い相手には気づかない程度の変化なのだが、ここにいるのは一夏と深い関係であるメンバーなので、全員が一夏の変化に気付いてしまったのだった。

「一夏、良く寝れなかったの？」

「一夏さんは環境が変わっても問題なく寝られるはずですよね？ 何があったのですか？」

簪と美紀に指摘され、一夏ではなく刀奈が少し慌てたような雰囲気醸し出した。その事に気が付いた虚は、疑いの目を刀奈に向ける。

「まさかお嬢様。一夏さんに夜這いを掛けたのではありませんよね？」

「そ、そんなことしてないわよ！ てか、夜這いつて虚ちゃん……」

「お嬢様なら十分あり得る事ですので」

「それでお兄ちゃん、いったい何があつて寝不足なの？」

マナカのストレートな質問に、一夏も正直に答える事にしたのだった。

「未明に目を覚ました刀奈さんがトイレに行こうとして、おかしい気配を感じ取って俺の布団に潜り込んできて、その気配の正体を探ったら束さんだった」

「お姉ちゃん……」

「だって！ 本当にお化けだと思ったんだもん！」

本当はトイレではなく寝顔を撮ろうとしていたのだが、そこは一夏の優しさで変更されていた。万が一寝顔を撮ろうとしたなどと知られれば、この程度では済まなかっただろう。

「まあ、その後いろいろあつて寝てないだけで、みんなが気にするようなことは無い」

「ですが兄さま。この旅行は日ごろの疲れを癒すためのものですので、あまり無理をせずに寝ては如何でしょうか」

「そうだよ。本音だつてまだ寝てるんだし、お兄ちゃんももう少し寝たら？ なんだつたら添い寝してあげるよ」

「平気だ。本当に疲れたら寝るが、まだそれほどでもないし、今日は部屋でのんびりするだけだろ？ だから多少寝不足でも問題は無い」

「そうですね。それに、無理をしていると判断した場合、私が強制的に寝かしつけますの

で」

「碧さん……怖いですよ」

「だって、それくらいいしないと一夏さんは休もうとしませんでしょ？」

「そんなこと——」

無いと否定しようとした一夏だったが、周りが碧の言葉に頷いて同意しているのを見て思わず言葉を呑み込んでしまった。

「とにかく一夏君、今朝——って言って良いのか分からないけど、ゴメンね？」

「いえ、元凶は束さんですので」

「お嬢様は寝る前にちゃんとトイレに行かないからそう言う事になるのですよ」

「行つてゐるわよ！」

何とか誤魔化す事に成功した一夏は、碧にだけ分かるように苦笑を浮かべ、未だに寝ている本音を起こす為に立ち上がったのだった。

お疲れの一夏

本当なら近場を観光でもしようと思画していた刀奈たちではあったが、一夏が疲れているのと、本音がまだ起きないのもあって、部屋でのんびりする事にしたのだった。

「それにしても、本音のこの熟睡は凄いですよね」

「それって褒めてるの？」

「どうでしょうね」

マドカとマナカが熟睡している本音の頬を突きながらそのような事を話していると、虚が情けないような表情でため息を吐いた。

「どうかしたの、虚ちゃん？」

「いえ、高校一年にもなつて誰かに起こされないと起きようともしない妹が情けないなと思っただけですのよ」

「そんなことを言ったら、高校二年生にもなつて、寝る前にトイレに行くのを忘れた挙句に、お化けが怖いといって義弟の布団に潜り込んだ姉を持つ私はどうなるんですか？」

「だから忘れてないもん！　というか、あれは簪ちゃんだつてビックリするわよ！」

簪の言葉に過剰に反応して見せる刀奈を見て、美紀と碧は苦笑し、簪は盛大にため息を吐いた。

「とにかく、お姉ちゃんは今日ちゃんとトイレに行つたか確認するからね。もし同じことがあつたら、おしめでも穿かせるから」

「嫌よ、そんなの！」

「だったら、夜中に一夏の布団に潜り込んで、一夏の睡眠を邪魔するようなことはしないんだね？」

「だから、あれはたまたまで、篠ノ之博士が侵入してだからビックリしただけだもん！」
「簪、そろそろ苛めるのは止めてやったらどうだ？ 本気で泣きかねないぞ」

「別に苛めてるわけじゃないけど、一夏がそう言うなら止めておくよ」

「それにしても一夏さん。篠ノ之博士はいつたいたいのようない用事でここに来たのですか？」

「知らん、そんなの。あの人が何を考えているかなんて、分かりたくもないからな」

本当は何しに来たのか知っている一夏ではあつたが、それを刀奈が起きていた理由がトイレではないという事が勘付かれてしまうので、あえて知らないフリをしたのだつ

た。

「まあ、篠ノ之博士が何を考えて行動しているのか分かるのでしたら、こんな国際指名手配もどきのような事態にはなっていないでしょうしね」

「碧さんも、なかなか酷い言い草よね」

一夏が束の目的を知っている事を知っている碧も、一夏が隠そうとしたのを理解して援護射撃をすると、刀奈が少し呆れ気味にそう呟いた。

「そうですね？ 私も結構長い付き合いになりますけど、織斑姉妹の考えも篠ノ之博士の考えも全く分かりませんし」

「変態共の思考なんて分からなくていいんですよ。とにかく、束さんにはキツク言っておいたので、今夜は忍び込んだりはしないでしょう」

「一夏、少し横になつたら？ 何だかすごく眠そうだよ」

「そうか……？ 自分ではそんなつもりはないんだがな……」

「兄さま、布団の用意をしますか？」

「なんだつたら、私たちも一緒に寝てあげるよ」

妹双子の申し出を笑顔で断り、一夏はその場で横になり目を瞑った。

「一夏さんは少し働き過ぎなのですから、この旅行中くらいはゆつくりと休んでください」

「言われる程働いているつもりは無いんですがね……」

「いえ、どう考えても一夏さんは働き過ぎです。お嬢様がサボったりするのも原因ですが、学園や政府、他国の要人たちとの交渉など、どう考えても一夏さんがする必要のない事まで背負いこんでいるのですから」

「確かに、一夏君がやらなくても良いような事もあったわね」

「お父さんが代理で出来ればよかったです、どうしても一夏さんが動いた方がスムーズに事が運ぶことが多かったのですからね」

「まあ、織斑姉妹に任せて世界地図から国が数個無くなるような事態を避けるためにも、俺がやった方が良かったんですから、ある意味俺の仕事だったんですよ」

確かに織斑姉妹の暴走を止められるのは一夏しかいないので、そう言われればそうなのだが、それでも一夏が背負いこむ必要は無かったのではないかと虚は思っているのだ。

「それだけのことをしたのですから、自業自得だと思えますけどね」

「そうかもしれませんが、さすがに国一つ滅ぼすとなるといろいろと問題がありますし、

恐怖支配をしたいわけじゃないですから」

「それを一夏君が言う？　一夏君の『お願い』は各国からしたら十分恐怖の対象だと思うんだけど」

「別に脅してるわけじゃないですし、あくまでお願いですから」

「今の世界情勢を考えれば、更識のお願いを断れる国なんて無いって分かってるでしょ、お兄ちゃん」

「断つてくれても構わないお願いもあるんだがな。まあ、イギリス相手にした交渉に尾ひれがついて広まったのが原因だろうな」

「あの『断つたら優秀な技術者だけを引き抜いてこの国のＩＳ産業を大幅に遅れさせることだって出来る』というヤツよね？　本当にそんなこと言ったの？」

「いえ、精々『この国に支社を作ってそこに再就職させる』くらいしか言ってますよ。まあ、支社で得たデータは政府に渡す事は無かったので、あながち誇張というわけでもなさそうです」

平然と言つてのける一夏に、刀奈たちは苦笑いを浮かべる。普通ならそんなことあり得ないだろうと笑い飛ばすのだが、一夏にはそれが出来てしまうだけの権力と財力、そしてカリスマ性があるのだ。

「まあ、今はゆっくり休んでちょうだい」

「刀奈さんがそれを言いますか……」

一夏が片目を開き非難の目を向けると、刀奈はゆっくりと一夏から視線を逸らしたのだった。

一夏の連絡先

更識勢が学園を留守にしているとはいえ、VTSルームを自由に使えるわけではない。だがアリーナの使用許可は取りやすくなっているの、鈴たちはちよつとしたトーナメントを開くことにしたのだった。

「参加者はアタシ、セシリア、ラウラ、静寐、エイミイ、香澄ね」

「僕は開始の合図を出すよ」

「どういう分け方をするんだ？ じゃんけんでもするのか？」

「実力的な差はそれほど無さそうだし、くじ引きで良いんじゃない？ ここに更識勢がいたら文句でも出るでしょうが、静寐や香澄は所属っただけで実力的にはアタシたちといい勝負なんだからさ」

「否定出来ないのが悔しいのか、代表候補生と同等と思われたことが嬉しいのか複雑なだけけど」

「まあ、入学した時のことを考えれば、喜ぶべきなのだと思いますよ」

候補生ではない静寐と香澄は、数合わせ的な意味もあるが、実力的にはセシリアたち

とさほど変わらないまでに成長しているので、戦い方次第では十分勝ち抜くことは可能である。

「ティナは専用機を持ってないし、後は旅行中だったり先輩だったりするからね」

「サラになら声を掛けられますけど？」

「でもそれじゃあ奇数になっちゃうでしょ？ シヤルロットが参加しないって言ってる

んだし、これで良いんじゃない？」

「最近は殆どISを動かしてないから、僕が混ぜつてもすぐに負けるのがオチだからね」

シヤルは授業以外でISを展開する機会がめつきり減っており、今ではほとんど専用機を持っているだけになっているのだ。

「お兄ちゃんのお手伝いが出るのは羨ましい事だぞ、シヤルロット」

「あはは……まだ手伝いってレベルまで行ってないんだけどね」

シヤルは基本的には更識から派遣されている人間に教わりながら仕事をしているので、まだまだ一人前というわけではない。それでも十分に一夏の役に立っているのだが、彼女が一夏から受けた恩の大きさを考えると、まだまだ納得出来ないのであった。

「まあ、シヤルロットさんは頑張っておられるようですし、近い将来一人で社長業を全う

出来るようになるだろうと一夏さんも思っただけだしやいますわよ」

「そうだと良いんだけどね」

「そういえば静寐。アンタ昨日筈とVTSで戦ったんでしょ？ どうだった」

いきなり話を振られ、静寐は少し驚いたような顔を見せたが、すぐに鈴の問いかけに答えた。

「前の篠ノ之さんとは比べ物にはならないけど、禍々しい殺気は無かったわよ」

「ふーん……一夏が野放しにして旅行に出かけたのも頷けるってわけね」

「野放しにはしてないわよ？ キッツイ見張りが付いているし、少しでも不審な動きをしたら狩られるわけだし」

「あの双子ね……まあ、確かにあの二人が監視してるなら問題ないのかしらね」

そう結論付けて、鈴は組み分けのようなあみだくじをアリーナの地面に書き始めたのだった。

真耶から連絡を受け、織斑姉妹の監視が多少なりとも柔らかくなったことを一夏に報告した碧は、その場に座り込みのんびりする事にした。

「学園では鈴ちゃんたちがトーナメントみたいなきことをしてるみたいね」
「アリーナを使わせると連絡がありましたからね」

アリーナの申請許可は、生徒会メンバーの誰でも出すことは出来る。だが、そのメン

バーが学園にいない今、代理で織斑姉妹か真耶のどちらかでも良いのだが、鈴は直接一夏に連絡が出来る数少ない更識以外の人間であり、その文面にも遠慮は無かったのだ。

「鈴は一夏のアドレスを知ってるんだね」

「昔からの付き合いだからな」

「他に一夏君のアドレスを知ってるのって誰がいるの？」

「他ですか……静寝のは知ってますが、後はいないかもしれませんね……」

ここにいる以外のメンバーのアドレスを殆ど知らないという事を再認識した一夏は、自分の交友関係の狭さのため息を吐いた。

「シャルロットちゃんのも知らないの？」

「シャルは友人というよりは仕事仲間の印象が強いので、ちよつと違うんですよね……」

いや、知ってはいますが」

「そう言えば前に黛さんが、一夏さんのアドレスを聞き出して一儲けしようとしてましたね」

「そんなので儲かるんですかね」

一夏としては、聞かれれば教える事は吝かではないのだが、更識のメンバーが教える

なという事で教えていけないだけなのだ。だからそれほど自分のアドレスに価値があるとは思っていないのだが、どうやらそれは一夏だけであった。

「一夏のアドレスなんて売り出したら、かなりの人が買うと思うよ」

「薰子ちゃんがぼろ儲けしそうな勢いで売れるでしょうね」

「むしろプレミア価格になりそうです」

「一夏さんは自分の人気を正確に把握してないみたいですね」

「そうなのか？　話しかけられる事も少ないから、興味など無いと思われてるんだと思ってたが」

「それは一夏君がいつつも忙しそうにしてるから、せめて教室では休ませてあげようと思ってるだけだと思うよ」

「そんなに疲れてるように見えますかね？」

一夏の問いかけに全員が力強く頷くと、一夏は情けなさそうにため息を吐いた。

「まあ、来年からは少し疲れて見えないようにしなければな」

「そうだけど、来年はもつと忙しくなると思うよ」

「そうなんだよな……」

来年の事を考え憂鬱になった一夏は、もう一度ため息を吐いたのだった。

箒の憧れ

ISの勉強という名目で、箒は鈴たちが行っているトーナメント式訓練を見学する事になっていた。もちろん、何か怪しい動きを見せたらすぐに対応出来るよう、見学場所はシャルの隣である。

「シャルロットさんは参加しないのですか？」

「僕は専用機持ちだけど、ただ持っているだけ。これは一夏がこの子の所有権をフランスから僕個人に変更してくれたからであり、更識企業の力の象徴にもなっているんだよね。まあ、僕が参加してもまともに相手出来ないっていうのもあるんだけどね」

「そうなのですか。映像を見た限りでは、シャルロットさんも他の人に負けず劣らずの技術をお持ちだと思っただけですが」

「そう言ってもらえると嬉しいけど、今のみんなとは結構な差がついちちゃってるからね。箒が見た映像と今の動きとでは、やっぱり違うんだよ」

「そうですか……」

ちよつと残念そうな雰囲気醸し出した箒ではあったが、アリーナに三人出てきたの

を見て興奮の方が勝ったようだった。

「そんなに楽しみなの？」

「実際の戦闘は見たことがありませんので。何時かは体験したいと思いますが、今は見られるだけでも嬉しいのです」

「そんなものなんだね……まあ、箒の場合は一夏が使用許可を出してくれないとISを使えないもんね」

「一夏さんは使ってもいいと言ってくれるかもしれませんが、ISの方が私を信用してくれていないようですので、まだちょっと難しいんですよね」

「今の箒の所為じゃないけど、それは仕方ないからね……あれだけISの事をバカにしてたら、反応してくれなくなって当然だしね」

シャルは過去の箒がしでかしたことを言ったのだが、箒はシュンと凹んでしまった。

「今の箒が悪いんじゃないから、凹むことは無いと思うけど」

「いえ……過去の自分を殴ってやりたいのですが、それが出来なくて残念なのです」

「あ、あはは……そこらへんは前の箒と同じような考え方なんだね」

「そこらへんとは？」

「とりあえず武力で解決しようとする、かな」

「殴られても当然の事をしでかしたわけですから、殴りたいと思うのは仕方ないですよ」
箒の言い分は最もであると、シャルも分かっていたのでそれ以上ツッコミは入れずに、合図を待っている鈴の視線に気付き、ブザーを鳴らしたのだった。

ようやく目を覚ました本音は、他の人がのんびりしているのを見て首を傾げた。

「みんなどうしたの？ 今日のはのんびりする日なの？？」

「一夏が寝不足で疲れてるっぽいから、今日はここでのんびりする事に決まったんだよ。まあ、本音はずっと寝てたから仕方ないけど」

「本音ちゃん、よくこんな時間まで寝てられるよね」

「こんな時間って、まだ午前中だよ？」

「一番早く寝てるのに、一番遅くに起きるってどうゆう事よ」

「それだけ体力が有り余ってるって事でしょうね。お嬢様、本音の仕事を増やしてはどうでしょうか？」

虚の提案に、刀奈は腕を組んで考え込んだ後、一夏に問いかける。

「増やしてもいいとは思うけど……一夏君はどう思う？」

「本音に任せたとこで、どうせまともにやりませんから……結局はこちらで処理する事になるので、無駄な事はしないでおきましょう」

「ですって。虚ちゃんもそれでいいかな？」

「一夏さんの仰ると通りでしょうし、致し方ありませんね」

盛大にため息を吐いた虚に、本音は無邪気に話しかける。

「おねくちゃん、そんなにため息ばっか吐いてると幸せが逃げちゃうよ？」

「誰のせいのため息を吐いていると思ってるのですか」

「刀奈様だつて原因の一人だと思っけど？」

「確かにお嬢様の所為で吐くため息もありますが、大半は貴女の所為です！」

まったく悪びれない本音に、虚は思わず怒鳴つてしまい、それでも反省しないのだと思ひ出してもう一度ため息を吐いた。

「虚さんも苦労してるんだね」

「本音のお姉さんですし、仕方ないのかもしれないけどね」

「でも、一夏は血縁じゃないのに本音の事で頭を悩ませてるんだから、余計に性質が悪い

よね」

「まあ、本音だからね……」

簪と美紀の言葉にも動じることは無く、本音は再びその場に寝転び、次の瞬間には寝息を立てていた。

「まだ寝るの……」

「一夏さん、起こした方が良いのでしょうか？」

「そうだな……とりあえず耳を塞いでくれ」

周りにいる人に耳をふさがせてから、一夏は本音の耳元に待機状態の闇鴉を近づける。

「ほえっ!？」

「おはようございます、本音さん。いい加減起きないと次はこの程度では済ませませんからね？」

「さすがに目覚めたよ……相変わらず過激な起こし方だよね」

「これくらいしないと、本音さんは目を覚ましませんからね」

「いっちゃんがキスしてくれたら起きると思うけどね」

「何処の白雪姫ですか、貴女は。だいたい一夏さんにキスされたいなどと、贅沢にもほどがあります！ 私だってしてもらったことないのに」

「いや、お前にはしないからな？」

「何故ですか!？」

「何故って……当然だろ？」

一夏のツツコミに、闇鴉以外の女子は頷いて同意を示す。彼女ではない——もつと言え、人間ではない闇鴉にキスをするなど、他の彼女からしたら許しがたい事なのである。

「とりあえずご苦労。もう待機状態に戻っていいぞ」

「いえ、せつかくですしこのままのんびりさせていただきます」

「何がせつかくなんだか……」

闇鴉の言葉にため息を吐きながらも、一夏たちは再びのんびりする事にしたのだ。た。

簪の得意分野

まったりと過ごす目的で旅行に来たというのに、一夏はいつも以上に気苦労が絶えないような気がしていた。

「一夏、せっかくだし勝負でもしようよ」

「ゲームで簪に勝てるはずもないだろ。そもそもやったこと無いんだから」

「でも、一夏なら一回操作しただけで大丈夫でしょ？ それに、本音に勝てるんだから大丈夫だって」

「そんなこと言われてもな……」

簪が持ってきたポータブルゲーム機を使い、本音と勝負をした一夏に、今度は簪が勝負を挑んできて、一夏はどう対処するべきか頭をフル稼働させていたのだ。

「何で簪はそんなに俺との勝負にこだわるんだ？」

「だって、これくらいでしか一夏に勝てそうじゃないし、他の人相手じゃ手ごたえが無いし」

「勝てるって分かっているんだから、やるだけ無駄じゃないか？」

「そんな事ないよ！ 一夏と一緒に遊ぶことに意味があるんだから」

「そんなものなのか？」

「そうだよ！」

何だか断り辛い雰囲気になってきてしまい、一夏は助けを求めるべく視線を彷徨わせ
たが、誰一人一夏と視線を合わせようとはしなかった。

「それとも、一夏は私と一緒に遊びたくないの？」

「いや、そういうわけじゃないんだが……」

「じゃあいいよね！」

「あ、ああ……その代わりに、もうちよつと練習させてくれ」

結局簪に押し切られる形で勝負する事になってしまった一夏は、恨みがましい視線で
練習相手を指名した。

「それじゃあ、美紀に相手してもらおうか」

「わ、私ですか!？」

「普段簪の相手をしてるのが美紀だという事は知ってるから、ちよつどいいだろ？」

Sっ気たつぷりの笑みに、美紀は身震いをしながら簪からゲーム機を受け取った。

「無様に負けないように頑張ります」

「俺が勝てるとも思えんがな……まあ、こつちも簡単に負けないように気を付けるさ」

「おう、いっちー対美紀ちゃんか。意外な勝負だね」

「美紀、下剋上を狙ったら？」

「ゲームで下剋上も何も無いよ……」

簪の提案にため息を吐きながらそう答え、美紀は一夏の相手を務め、辛くも勝利を手にしたのだった。

「ギリギリ……」

「やっぱ俺が負けたな」

「でもいっちー、このゲーム二回目でしょ？ それで美紀ちゃんといい勝負が出来たんだから、次はかんちゃんともいい勝負が出来るよ、きつと」

「やっぱり一夏は侮れないね」

「そもそも侮ってないでしょ、簪ちゃんは」

刀奈のツツコミに苦笑いで応えて、簪はそれ以降言葉を発することは無かった。

「物凄い集中力……これが簪ちゃんの本気なのね」

「こんな事に本気を出さなくてもと言いたいですが、簪の自由ですからね」

刀奈の言葉に一夏が反応し、そして苦笑いを浮かべた。普段から無意識に自分の力をセーブする癖がある簪が、ゲームでは本気を出せる事をどう思ったのかは分からないが、一夏の表情も真剣味を帯びたものに変わってきたのを、全員が感じ取っていた。

「たかがゲームなのに、この緊張感はなんなのよ」

「兄さまが本気で相手をするに値したという事なのでしょう。簪が少し羨ましいです」

「でも、アンタはお兄ちゃんと対峙したいわけじゃないでしょ？」

「当然ですよ。マナカだって、もう兄さまと戦いたいとは思ってないのでしょ？」

「私はそもそも、お兄ちゃんと戦いたいなんて思ったことは無いわよ」

微妙に緊張感のない会話を繰り返しているマドカとマナカであるが、一夏と簪の集中力はその程度では揺らがなかった。互いに準備が出来たようで、いよいよ対戦が始まるというのを感じ取り、マドカとマナカも口を噤んだ。

ポータブル型なので画面は周りからは見辛いが、それでも何とか覗き込んでいた刀奈たちが、二人の動きを見て息を呑む。とてもゲームとは思えない動きで戦う二人に、感

嘆と呆れが混ざった息を吐き、勝負がついたのを機に全員が息を吐いた。

「物凄い戦いだっただね」

「でも、やつぱりゲームではかんちゃんが一番最強だね」

「でもでも、簪ちゃんはこのゲームやり込んでるけど、一夏君は三回目でしょ？ 一日

経ったら一夏君の方が強いかもしれないわね」

「お嬢様、変に煽ったりするのはおやめください」

「さすが一夏……危なかつた」

「涼しい顔して全部ブロックしておいてよく言うよ」

スコア的には簪のパーフェクトゲームではあるが、一手でもミスをしていれば一夏が勝っていてもおかしくは無い展開だったのだ。それだけ簪のテクニクが一夏の才能を上回っていたという事なのだが、才能に努力が加われば簪でもそう簡単に勝てるとは思えない展開だったのだ。

「やつぱり一夏君って器用よね」

「細かい作業が得意だからじゃないですかね？ もっと大雑把なゲームだったら、たぶ

ん下手です」

「いつちーにも苦手があるんだね」

「いや、そもそも俺は風呂が苦手だって言ってるだろ……」

「そういう苦手じゃなくって、勉強とかいろいろ得意だから、ゲームが苦手だって分かっただけでも収穫だよ」

「何に使うんだ、そんな情報？」

「ん？ 何にも使わないよ。ただ、いっちーの事をより多く知れたってだけ」

「何なんだよ……」

相変わらず調子がつかめない本音相手に、一夏は苦笑いを浮かべながら、ゲーム機を簪に返して一息入れるのだった。ちなみに、その後何度か刀奈が簪に勝負を挑んだが、全て簪の完勝であった。

苦勞の総括

思わぬ形でゲーム大会になったのを、少し離れた場所から見ていた碧の隣に、一夏が腰を下ろした。

「いいんですか？ 簪ちゃんたちと一緒にいなくて」

「俺がいない方が楽しそうですからね。俺はこっちでゆつくりさせてもらいます」

「一夏さんがいた方が楽しそうだと思いますけど？」

「俺が相手だと、どうしても勝ちたいって思いが強くなってるような気がするの。純粋にゲームで遊ぶなら、勝ち負け関係なく遊んだほうが楽しいでしょうし」

「達観してますね」

とても高校生らしからぬ考え方に、碧は思わずそんなことを呟いた。その呟きに対して、一夏は苦笑いを浮かべ、自分で淹れたお茶を一口啜った。

「子供の頃から大人の世界で生きてきた弊害かもしれませんね」

「一夏さんは特にそうでしたからね。普通に生活する事も、I Sの所為で出来なくなっ
てしまいましたから」

「I Sの所為ではなく、駄姉・駄ウサギの所為ですけどね」
「それもそうですね」

あつさりと自分の意見を取り下げた碧に、一夏はもう一度苦笑いを浮かべた。

「そう言えば一夏さん、篠ノ之博士へのお説教はあの程度で良かったのですか？」

「あまり大声を出すと、他の人が起きちゃいましたし、どうせまた忍び込んでくるでしょうし、その時にまとめて説教すればいいだけですから」

「来ますかね？」

「この旅行中かは兎も角として、絶対に来ると思いますよ」

ある種確信めいたものがある一夏は、束のラボがあるであろう方角に視線を向け、今度はため息を吐いたのだった。

「それなりに思考が読めるってのも面倒ですね」

「一夏さんの場合は、思考を読んでいるといよりも、彼女たちの行動パターンが読めるってが原因だと思えますけど」

「……あながち否定出来ませんね」

ガツクリと肩を落とした一夏に、碧は楽しそうな笑みを浮かべる。普段弱っているところを見せる事が無い一夏が、自分の前ではこうして弱っている姿を見せてくれるのが、彼女は嬉しく、また楽しいのだ。

「刀奈ちゃんたちには悪いけど、これだけは譲れないわね」

「何のことですか？」

「いえ、私個人のことですのぞ」

笑つてごまかした碧に、一夏は首を捻つたが、追及しても答えてくれないというのが分かつているのか、それ以上尋ねて来ることは無かつた。

「それにしても、色々あつた一年でしたね」

「いきなりどうしました？ 今年はまだ後一日ありますぞ」

「いえ、ここ数年で一番濃い一年を過ごしたなど、改めて思い出まして」

「まあ、激動の一年だったと言えるでしょうしね」

「まさかこれほど頻繁に国家代表や、代表候補生が変更になるとは思いませんでしたし」

「まあ、それも仕方のない事ですがね」

一夏の言う通り、色々仕方のない事情で変更になつたので、文句は言わないがそれ

なりに苦勞したのは否めないので、二人は苦々しい表情を浮かべた。

「篠ノ之さんの国際問題に発展するほどの勘違いにも巻き込まれましたし」

「確かにあれは勘違いでしたが、巻き込まれた側からしたら、勘違いで済まされるのは遺憾でしょうね」

「ですが、結局は勘違いなので、それ以上の説明は出来ませんよ」

「しかも、その篠ノ之は死に、新たに生まれ変わってしまったので、誰にも説明は出来ない状況ですしね」

一夏たちも巻き込まれた側なので、詳しい説明を求められても困る立場なのだ。唯一説明出来たであろう箒も、束の薬により過去の記憶を一切失ってしまったため、説明する事は不可能である。

「相変わらずだったのは、織斑姉妹の一夏さんに対する変態行動への対処ですかね」

「あれはもう、一回死なないと治らないかもしれないかもしれません」

「いえ、恐らくですが、死んでも治らないと思います」

「そう思いますか？ 実は俺もそう思ってます……」

苦々しいのを通り越して、嫌気まで伺わせる笑みを浮かべる一夏に、碧は同情した。

記憶を失ったからといって、血縁関係を清算出来るわけではないので、一夏はこれからも織斑姉妹の事で悩まされることが多々あるのだろうと思うと、思わず同情したくなつたのだろう。

「後は、そうですね……これほどまでに候補生の指導をすることになるとは思ってませんでしたね。元日本代表ですから、刀奈ちゃんや簪ちゃん、美紀ちゃんの指導はするだろうと思っていましたけど、まさか他国の候補生の指導までするとは夢にも思いませんでした」

「教師ですから、それも仕方のない事だと思えますよ。IS学園は敷地こそ日本にありますが、何処の国家にも属さないというのが原則ですから。他国の候補生だろうと平等に指導しないとクレームがきますからね」

「殆ど建前上でしか意味をなさない条文ですけどね……日本政府がどれだけ学園運営に首を突っ込んできたか分かりませんよ」

「その分、更識から日本政府に抗議文書を送りましたし、これ以上介入するならば、他国からのクレーム処理は政府で行ってくれと警告したお陰で、とりあえずは収まりましたからね」

「ですけど、一夏さんの苦勞は続いていますよね?」

「まあ、精神的苦勞は大分解消されましたけどね」

再び苦笑いを浮かべた一夏に、碧はお茶のおかわりを用意するのだった。

煽てられた鈴

トーナメントは結局、鈴がラウラを下して優勝した。だが、鈴もラウラもちよつとしたミスがあつたら他の人に負けていた可能性がある、それくらい今回参加したメンバーの実力には差は無いのだと見学していた箒には感じられた。

「やっぱり更識製の専用機を相手にするのは面倒ね。特に香澄の未来視の能力は勘弁願いたいわね」

「この能力を使つても攻撃が当てられないのは、更識所属以外では鈴さんくらいですよ。後は多少なりとも当てる事は出来るんですがね」

「つまり鈴も、本音と同じで野生の勘が鋭いって事かしらね」

「それって全然嬉しくないんだけど？」

静寂の茶々に鈴が形だけの文句を言い、ピットへと戻ってきたのを、シャルと箒は出迎えたのだ。

「お疲れ様。みんなやっぱり凄いね」

「シャルロットさんも、これくらいは出来るのではなくて？」

「それは買い被り過ぎだよ。僕はもう候補生としての実力も無いよ」
「そんなことは無いだろう。お前が陰で努力しているのは知っている。謙遜はあまりするものじゃないぞ」

ラウラの忠告に、シャルは苦笑いを浮かべながら真実を告げる事にした。

「実を言うと、一夏からなるべく実力は隠せつて言われてるんだよね」

「そうだったのですか？　ですが、何故ですか？　シャルロットさんが元代表候補生であることは知られているはずなのに」

「うん。でもあれは会社の力であったと思われているらしいから、その勘違いを逆に利用しようって一夏が。万が一襲撃の標的になっても、僕の実力が知られていたらその組織を潰せない、だが勘違いしたままなら襲つてくるかもしれないってさ」

「つまり、シャルを餌にして組織を潰すつて事？　一夏にしては考え方が荒いような気もするけど」

「もちろん更識の人たちがいるから、社員や周辺に危害が加えられる事は無いよ。でも、僕の実力次第では他の場所が狙われて I S 業界の発展の妨げになる。それだったら更識傘下の企業を狙われた方が対処しやすいって」

「なるほど、そう言う事ね……まったく、高校生らしからぬ考え方なんだから」

ため息を吐きながら納得した鈴に対し、ラウラはまだ納得していない様子だった。

「だが、シャルロットの実力を知らしめた方が良いのではないか？ そうすれば他企業から救援要請が来易く、その事件に介入しやすくなるのではないだろうか？」

「例え要請が来たとしても、それは事件が起こってからだし、貴重な人材を失いたくないんだと思うよ。まあ、僕に一夏の考えが全て分かるはずも無いし、知りたいのなら一夏から直接聞いた方が良いでしょう」

「いや、お兄ちゃんには私などには考え付かないような考えがあるのだろうという事はわかったから問題ない」

「そっか。それじゃあ、そろそろアリーナの使用時間も終わっちゃうから、部屋に戻ろうか」

「そうですね。シャワーを浴びて着替えたなら、鈴さんの奢りで食堂でお茶しましょう」

「強い人が弱い人に奢るのは当然ですわ」

「……まさか、手ごたえが無かったのは」

「さあ？ どうでしょうね」

セシリアの他にも、にやにやと笑っているメンバーがいるのを見て、鈴は勝たされていたのかと落胆したが、事情を聞かされていないラウラは首を傾げた。

「上官が下のものに奢るのは当然のことだろ？　鈴は何を怒っているのだ？」

「ラウラ、普通の世界では、敗者が勝者に奢るのが普通なんだよ」

「そうなのか。だが、今回は鈴が奢ってくれるんだな？　実に楽しみだ」

「それじゃあ、三十分後に食堂に集合って事で」

静寂がそうまとめて解散となり、箒も部屋に戻ろうとして、後からついてくる織斑姉妹に質問する。

「先生たちから見て、オルコットさんたちは手を抜いていたと思いますか？　少なくとも、私の目には全員本気だと映ったのですが」

「手は抜いていなかったが、本気で勝ちに行っていたかどうかと問われれば否だな」

「嵐にも危ない瞬間は何度もあったが、そのタイミングで他のメンバーは攻撃せず距離を取ったりしていたからな。本気で防御はしていたが、本気で勝ちに行つてはいなかったのだらう」

「それは、手抜きとどう違うのでしょうか？」

「だいたい一緒ではあるが、本当に手を抜いていたら嵐の奴も試合中に気付くだらうし、

怪我を負わせていた可能性もある。だから本気で守り、適度に攻撃する事で勝つ気が無い事を隠し、風を調子に乗せたのだろう」

「二夏であつたらその程度の事は見通せるだろうし、更識所属の連中も同じだろう。だが風は戦闘中に冷静さを欠く傾向があるからな。それを上手く利用させたのだろう」

「守りの訓練をしていたという事ですか？」

「それも少し違つただろうが、何かしら課題を持つて取り組んでいたのは確かだろう。でなければ我々が制裁を加えていたからな」

今日のメンバーだったら、専用機無しでも止める事が可能な織斑姉妹の言葉に、箒は寒気を覚えた。訓練であろうと手を抜けば織斑姉妹の制裁が加えられると知り、もし自分が参加出来るようになったら本気で取り組もう、そう決意したのだつた。

刀奈の後任

特にすることも無く、簪たちに混ざってゲームを楽しむという気分にもなれなかった一夏と、最初から離れたところでのんびりしていた碧の事を思い出した刀奈たちは、二人を誘ってトランプをすることにしたのだった。

「これだったら、簪ちゃんの一人勝ちって展開にはならないでしょうね」

「ですが、記憶系のゲームですと、兄さまが圧倒的に有利ではないでしょうか？」

「間違っても神経衰弱はやらないから大丈夫よ」

「普通に休むという概念はないのですか？ 一応慰安旅行だと聞いていたんですけど」

「高校生が慰安旅行なんて普通無いですけどね」

碧の言葉に、全員が——ただし本音は除く——苦笑いを浮かべた。それだけ自分たちの生活が高校生らしくないという事なのと、学校から任される仕事の量が多いという事なのだ。特に一夏は、それ以外にも様々な仕事を抱えているので、この旅行くらいはゆつくりしたいと願っていてもおかしくは無いのだ。

「仕方ないわね。午後はまったり過ごしませうか」

「午後つて言つても、既に十五時を過ぎてるんだけど？」

「まあ、細かい事は置いておいて、一夏君を休ませるための旅行なんだから、無理強いは駄目よね」

「お嬢様がそれを言いますか。トイレに行き忘れたお嬢様が」

「ちゃんと言つたもん！」

未だにその事で弄られるのかと、刀奈はちよつと一夏を恨んだが、かといつて本当の事を言えば、弄られるのではなく怒られるになつてしまうので、刀奈としても複雑な思いで耐えているのだった。

「そう言えばお兄ちゃん、あの二人の行動はどうなつたの？」

「あの二人？ ああ、あの駄姉たちか。とりあえずは大人しくなつてゐるらしいな。静寂からなんの連絡もないということとは、そういうことだろうし」

「姉さまたちが何かしたのですか？」

「篠ノ之を完全に疑つてる目で監視している所為で、自分たちも疑われているみたいで困る、というメールが着たんだ。それで、少しマイルドにするよう注意して、様子見をしてたんだよ」

「そうだったのですか」

一夏の説明に納得したマドカが頻りに頷き、あの二人ならありえそうだなと苦笑いを浮かべたのだった。

「織斑姉妹も、指導力は十分だし、観察眼もさすがなものを持つてるんだけど、加減を知らないのよね……」

「指導方法も、教師としてというよりかは教官のような感じですからね……学校で教鞭を振るうより、軍隊で軍人を鍛え上げる方が合ってるのかもしれないね」

「まあ、ラウラのようにズレた考えの持ち主が増えられるのは困りますけどね」

「あれは、ラウラが特殊な生まれだからでしょ？」

「周りの人間の影響も多分に含まれてると思うがな」

出生の秘密を知っているメンバーなので、特に気にした様子もなく話が進んだが、ラウラの出自を知っているのはIS学園の中でもそう多くは無いのだ。

「そう言えば虚ちゃん。卒業後は学園に残るの？ それとも更識企業の企業代表として各国を飛び回るの？」

「何ですか、いきなり」

「ほら、来年には卒業じゃない？ だから、虚ちゃんの進路を聞いておこうかって」

「教師として残らないかという打診は受けていますが、私には一夏さんの仕事を手伝うという使命がありますので」

「本音に変わってもいいですよ？ どうせまともに護衛として働いていないので、そっちで働いてもらえれば人材の無駄を省けますし。それに、虚さんに残っていただければ、その分織斑姉妹を追いつ算段が付きますし」

一夏がさらりと黒い事を言うのも、このメンバーなら慣れっこなので特に驚いたり、戦いたりはしない。それでも苦笑いを浮かべてしまうのは、それだけ織斑姉妹の言動・行動に問題があるからである。

「一夏君が織斑姉妹を更生させようとしているのは知ってるけど、簡単に治るとは思えないのよね。それこそ、箒ちゃんみたいに劇薬でも使わない限り……」

「いつそのこと飲ませてみますか？ まあ、代わりの教師の目途が立つてからの方が楽でしょうけど」

「そうなると虚ちゃん一人じゃ足りないわよね……」

「何を考えているのかはだいたい分かりましたが、刀奈さんじゃあまり織斑姉妹と変わりませんからね」

「それって酷くないっ!？」

つまり刀奈が教師になったとしても、面倒事は減らないという事なのだと言われ、刀奈は頬を膨らませて一夏に抗議する。

「私だつてやれば出来るんだから、あそこまで酷い事にはならないわよ！ きつと……」
「何故自信なさげなのかは置いておくとして、刀奈さんは国家代表としてまだまだ出来ると思いますよ」

「でもね、次の大会で簪ちゃんたちと揃って頂点に立つたら、もう目標とかなくなっちゃうのよね……」

「ですが、刀奈さんの後任はまだ当分必要ないだろうと、日本政府も本気で鍛える事はしてないようですし、簡単に引退出来るとは思えません」

「そこは、一夏君に口添えしてもらえれば一発でしょ。それに、静寐ちゃんや香澄ちゃんといった優秀な人材はIS学園にいるんだし、そこから代表を選べばいいじゃないの」
「あの二人は卒業後に更識で働いてもらう予定なので、国家代表とかに就かれると困るんですが」

「まあ、まだ決まったわけじゃないし、今から悩む必要は無いわよ」

本気で後任を考えだしそうになった一夏に、刀奈はそうツツコミを入れて思いとどま

らせたのだった。

大晦日の朝

二日目は特にお風呂で逆上せたり、刀奈が布団に忍び込んだりという事件も無く無事に皆就寝し、何時も通りの時間に一夏が目を覚まし布団を抜け出す。ちなみに昨日の結果は、簪とマドカが一夏の隣で寝たのだが、二人とも寝相は良く、また一夏を困らせたくないという考えの持ち主なので、一夏の睡眠を邪魔する事はしなかったようだ。

「大晦日か……もう一年も終わりか」

「高校生がそんなことを思うのはおかしいですよ」

「そうですかね？ あつという間だと感じているのですから、別におかしくは無いと思います」

背後から掛けられた声に、驚きもせず返答する一夏に、碧は苦笑いを浮かべながら隣に腰を下ろした。

「まあ、一夏さんは学生と同時に大企業のトップなわけですから、そう思っても仕方ないのかもしれないけど」

「今日の夜は刀奈さんや本音が騒ぎそうだなとか考えた方が良いですかね？」

「どうでしょう。まあ、刀奈ちゃんも本音ちゃんも騒ぐかもしれませんね。何せクリスマスはいろいろなあつてそれほど騒げなかったわけですし」

「あれで騒いでなかったとか言うなら、織斑姉妹に怒られますよ」
「そうかもしれないですね」

一夏からしてみれば十分騒がしく、また碧も十分刀奈たちが騒いでいたように思っていたのだが、どうやら本人たちは自重していたらしいのだ。だからではないが、更識の息がかかったこの旅館なら、多少騒がしく年越しをしても怒られないだろうと考えている可能性は大いにあるのである。

「まあ、年越しくらいは付き合いますけどね」

「今日も特にどこかに出かける予定はありませんし、刀奈ちゃんたちも反省したのか、一夏さんを休ませようとしてましたしね」

「昨日の風呂ですか？」

慰安旅行に来て疲れを増やしている一夏に気付いたのか、昨日は一夏に「風呂に入れ」とは言わずに、刀奈たちだけで楽しんできたのだ。

「風呂に入って疲れるなんて、一夏さんも変わってますよね」

「そうですかね？ 苦手な人は結構いると思うんですけど」

苦笑いを浮かべながら、一夏は立ち上がり自販機でコーヒーを購入し、視線で碧に何がいいかを尋ねる。

「同じもので構いません」

碧の答えに頷き、一夏は自分と同じものを購入し碧に手渡した。

「いくらですか？」

「気にしないでください。これくらいなんともないですよ」

「さすがにご当主様に奢っていただくわけにはいきませんから」

「そんなこと気にしないでいいです」

「じゃあ、生徒に奢ってもらうわけにはいきません」

「碧さんは護衛としての報酬を貰っていないと聞いていますので、これくらいはさせてください」

「一夏さんの側にいられるだけで、十分報酬は貰えてますから」

碧の返答に、一夏はたつぷり一秒以上固まってしまい、そして咳込んだ。

「大丈夫ですか？」

「真顔でそう言う事を言うのは反則だと思っんですけど。たまに美紀もやって来ますが、俺を驚かせて面白いですか？」

「事実ですし、一夏さんを驚かそうともしてませんよ」

「……光栄ですね、碧さんにそう思っていただけなのは」

今は何を言っても勝てないと理解した一夏は、それだけ言つてコーヒを一気に飲み干した。

「そもそも、美紀ちゃんだつて護衛の報酬は受け取つてないんですから、私だつていいりませんよ」

「そうなんですか？　本音はちゃっかり貰つてると簪から聞きましたが、美紀も貰つてないんですね」

「本音ちゃんは護衛の報酬というよりかはお小遣いですけどね」

「俺からも最低限はやつてるんですが、二重取りしてるんですか、あいつ？」

「まあ、訓練の後皆さんで楽しく騒いでる時に使つてるのかもしれないし、必要経費なのかもしれないね」

「本音が奢るとは思えないんですがね……そう言うことにはしておきましょう」

マドカやマナカにも小遣いをあげているので、別に本音に渡しても気にしてなかったのだが、報酬を貰っているのなら考えなければなど、一夏は本音に対しての小遣いの事を頭の隅に置いておくことにした。

「そろそろ虚さんや美紀が目を覚ます頃ですし、部屋に戻りますか」

「そうですね。ところで、今日は何故ここに？」

「目が覚めて布団に留まるのはどうにも居心地が悪くてですね……普段は軽く運動したり、ISの整備などをして時間を潰すのですが、ここではそれも出来ませんしね」

「そもそも整備を必要とするISがここにはありませんからね」

運動くらいなら出来るが、学園内ではないのでどうしても護衛は必要になってしまふ。そうなると碧も運動する事になるのだが、碧が本気になると一夏でもついて行くことがやっとなつてしまい、余計な疲労を溜め込むことになるのだ。だから一夏はこのロビーでまったりする事を選んだのだった。

「それにしても一夏さん、私だって加減くらい出来るんですけど？」

「余計な仕事を増やさない為ですよ。碧さんが加減出来るのは知っていますが、興が乗ると大変ですからね」

「織斑姉妹程ではないですよ？」

「そこと比べるのはおかしいですし、そもそも比べられたくないですよね？」

一夏の問いかけに、碧はニツコリと笑みを浮かべながら、力強く頷いたのだった。

珍しい事

何時も通りの順番に起床していくメンバーだが、珍しく本音が自力で目を覚ましたことに一夏たちは驚いていた。

「明日は雨かもしれないね」

「いや、大雪かもしれないよ?」

「さすがに槍は降ってこないとは思うけど、本音が自力でこんな時間に起きたんだから、あり得るかもしれないね」

「みんな酷いなく。私だつて起きようと思えば起きれるんだからね」

「なら普段から起きなさい」

虚に怒られ、本音は目を擦りながら反論する。

「いつちーに起こしてもらった方が、一日を快適に過ごせるんだよ」

「快適に過ごしたいなら、自分で朝早くから目を覚ました方が快適だと思うんだが」

一夏のツツコミに、本音以外が頷いて同意を示した。

「そもそも本音は私たちより年上なんだから、お兄ちゃんに甘えないで自力で起きた方が良いんじゃない？」

「そうですよ。兄さまだつて何時までも本音さんの側にいられるわけではないのですから、少しずつ自立していかなければ」

「自立つて言われても、普段はちゃんとしてるんだからね」

「本音、このメンバー相手に嘘を吐いても意味は無いぞ」

「そうよね、普段の本音を知ってるんだから」

一夏と刀奈にそうツツコまれ、本音は困つたように笑みを浮かべて何とか誤魔化そうとしたが、あまり意味は無かった。

「本音ちゃんはまだ少し努力する事。もしかしたら虚ちゃんの後の更識企業の企業代表として世界を飛び回ってもらう事になるかもしれないんだから」

「ほえ？」

「碧さん、その事はまだ正式に決まったわけではないので」

虚がIS学園に教師として残ることを選んだ場合、その後釜として本音を企業代表にという話は、一夏と碧、そして虚しか知らない話だ。だが知られて困るような事ではな

いので、一夏も本気で碧を窘めるという感じではなく、他のメンバーに対する説明をするためにツツコミを入れた様子だった。

「更識としては、優秀な人材を教師として学園にとられるのは避けたいんだが、虚さんがやりたいというなら止められるわけではないから。その場合は本音に虚さんの代わりを務めてもらうという話がある」

「でもいっちー、私はいっちーの護衛としての仕事が——」

「殆ど美紀と碧さんの二人に任せっぱなしだろ？ だから怠けてる本音にはしつかりと報酬分は働いてもらわないとな」

「本音、報酬貰ってたんだ」

マナカが驚いたような目を本音に向けると、本音はその視線の意味が分からずに首を傾げた。

「働いた分の報酬を貰うのは当然だよね〜？」

「だって、働いてないんでしょ？ だったら貰わないのが当然でしょ？」

「私は精神的護衛だから、いるだけで良いんだよ〜」

本音の訳の分からない開き直りに、一夏、美紀、虚がため息を吐いた。

「何が精神的護衛ですか……貴女はただサボってるだけです」

「マスコットの扱いなのは認めるけど、一夏さんをそれで守れてるかは別だと思うよ」

「そもそも、本音に報酬を払わなければ、別のところにその金を当てる事が出来るんだが」

「でもでも、せつかくくれるって言ってるものを断るのは失礼じゃないかな？」

「碧さんと美紀は護衛の報酬を貰ってないんだが？」

一夏の言葉に、さすがに本音が動揺を見せた。自分よりしつかりと護衛として働いている二人が貰っていないのに、自分が貰っている事がおかしいと思えるだけの良識は持ち合わせているようだ。一夏は心の中で本音に対する評価を改めるのだった。

「じゃあこれからは、少しはまともに護衛として働くから、報酬はそのまま貰っておくね」

「報酬を貰う事は止めないんだな……」

「だつて。放課後とかのお茶にお金かかるんだもん」

「そもそも本音も生徒会役員なんだから、少しは手伝いなさいよ」

「お嬢様も人の事は言えないと思いますか？」

「私、ちゃんとやってるもん！」

「確かに本音を比べれば、お嬢様は仕事をしているかもしれませんが、本来お嬢様がやらなければならない仕事の大半は私と一夏さんが片づけているのですが、その辺りはどう弁解をするのでしょうか？」

虚に責められ、刀奈は引き攣った笑みを浮かべながら一夏の背中に隠れた。

「そもそも一夏君と虚ちゃんが優秀だから、そっちに任せた方が良いつて考えで動いているのだから、私だつてちゃんと考えてるんだよ！　それが分からないなんて、虚ちゃんも落ちぶれたんじゃない？」

「ほう……でしたら、次からは落ちぶれた私の代わりにお嬢様が働いてくれるのですね。それは良かったです」

「じよ、冗談だから！　だからその顔止めてちょうだい！」

「刀奈さんの所為で、俺まで怒られてるみたいじゃないですか」

一夏の後ろにいる刀奈を睨んでいるので、虚の視線は一夏にも向いているのだ。だが一夏が怒られるとしたら、精々まともに寝なかつたとか、そう言う事なのでここまで激しく怒られることは無い。

「ゴメンなさい、だから許して？」

「……反省したのでしたら、二度とあのような事は言わないでくださいね？」

「はい、反省してます……」

「まったく」

何とか宥める事には成功したが、これからは発言に気を付けようと心に決めた刀奈であつた。

スコールのアドバイス

昼過ぎまで寝ていた箒は、自分が知らずの内に疲れていたのだという事を実感し、その原因に対してため息を吐いた。IS学園で生活するようになって一週間弱、その間ずっと監視されており、気の休まる時間など殆ど無いのが原因である。

「過去の私がしてきたことを考えれば当然ですが、やはり更識の方の監視と織斑姉妹の監視では、大きな差があるのですよね……」

更識の監視は、監視している事を気づかせない程の実力と、全力で疑っているわけではないのでそれほど鋭い視線も感じさせない。だが織斑姉妹の監視は、一夏の注意で多少改善されてはいるが、それでも疑いの目を向け続けられるのは精神的に来るものがあるのだ。

「鷹月さんたちは特に気にした様子は無く私と接してくれてますが、日下部さんたちはまだ距離を感じますし、VTS以外で私が動かせるISが無いのも事実……中身が変わっていても私は『篠ノ之箒』であることには変わりはないという事ですね……」

自分に過去の記憶は無い。だが周りには過去の自分が何をしてきたのか、どんな悪事を働いたのかが知られているので、静寐たちのように普通に普通に接してくれる方が稀なのだ。

「上級生からは、あからさまな敵意を感じますし、噂では私が篠ノ之東の妹だから助けられたとも言われているようですし……」

実際は一夏が最後のチャンスとして柳韻に預け、更生しなければ処断する予定だったのだが、東の新薬により記憶を失い、一から育て直す事が可能になっただけなのだ。決して東の妹だからとか、そういった類の酌量措置があつたわけではない。

「とりあえず朝食を——いえ、もう昼食ですかね。とにかく食堂に行きますか」

寝間着から着替え、顔を洗ってスッキリしたところで、箒は自分を監視する視線に気付き、思わずため息を吐いてしまった。

「仕方ないと割り切っけていても、こればかりは堪えますね……」

あからさまに疑っている視線、それに加えてすれ違う人からはまるでゴミでも見るかのような視線を向けられ、すれ違った後に陰口を叩かれる。一夏たち更識の人間が学園

にいる時はこのような事は無かったのだが、やはり更識の人間がいなければ箒の扱いなどこれが普通なのだ。

「自分がしてきたことを考えれば、当然と言えば当然なのですよね……他の人にとって、過去の私も今の私も同じ『篠ノ之箒』なのですから……」

ISを動かせないと考えた時もあったことをもう一度呟き、今度は無性に悲しくなつてしまった箒は、自分でも気づかない内に涙を流していた。

「箒、アンタなんで泣いてるの？」

「えっ?」

食堂にいた鈴に指摘され、ようやく箒は自分が泣いていた事に気が付き、慌てて涙を拭った。

「先ほど起きたばかりで、欠伸をしたからでしょう」

「そんな感じじゃないと思うんだけど……もしかして、アンタが——いや、過去の箒がしたことを気にしてるんじゃないでしょうね？」

「そう言うわけでは……」

「確かに前の箒がしてきたことは許されることじゃないし、記憶を失ったからと言って

全て無かったことにはならないわよ。だからと言って、反省して何とかしようとしてるアンタを必要以上に責める権利なんて、誰にもないわよ。それこそ、一夏にだって無い」
「ですが、私が『篠ノ之箒』である以上、過去は付きまわってくるのです」
「それがどうかして、SH?」

背後から声を掛けられ、箒は振り返り相手の顔を見た。

「えつと……確か、スコール・ミューゼルさん?」

「私やオータム、レインは貴女と同じ亡国機業に属していた犯罪者。だけど一夏は私たちを更識企業で面倒見てくれると言ってくれているわ。それは貴女も同じ事よ」

「ですが、私はたくさんの罪を犯し、それを認めずに人の所為にしていたのですよ?」

「私たちだって、破壊工作や人攫い、窃盗に傷害、殺傷だつてしてきたわよ。それでも一夏は、更生の機会をくれた。だから、貴女も必要以上に悩む必要なんてないわよ。監視されているっていつても、手を出されるわけじゃないんだし、必要以上にビクビクしてたら、考えがマイナスな事ばかりになって不健康よ」

「おいスコール。何時まで喋ってるんだよ。一夏に頼まれた仕事をしねえと、また監禁されるぜ」

「はいはい、今行くわよ。SH、貴女には貴女を認めてくれる友人がいるようだし、一人

で考え込まないことね」

そう言い残して、スコールはオータムと二人でどこかに消えてしまった。呆気に取れた箒ではあつたが、スコールのお陰で少し気が楽になつている事に気が付いたのだった。

「あの人つて確か、一夏が捕まえた元亡国機業の人よね？ 良い事言うんだ」

「そうですね……同じ立場だからこそそのアドバイスだったのでしようね」

「とにかく、箒も手伝いなさいよ。年越しパーティーまで時間が無いんだから」

「はい」

鈴に誘われるがままにパーティーの準備を手伝おうとした箒ではあつたが、自分が何も食べていない事に気が付き、一言詫びを入れてから食事をすることにした。

「一人じゃ寂しいでしょ？ 食べ終わるまで一緒にいてあげるわよ」

「あ、ありがとうございます」

「気にしない、気にしない。アタシたち、友達なんだから」

鈴に一言に、箒は先ほどとは違う涙を流したのだが、それを拭う事はしなかったの

だ
っ
た。
。

鈴の特性

スコールからアドバイスされるなどと思っていなかった筈は、彼女の言葉を噛みしめながら年越しパーティーの準備を手伝っていた。

「おはよう、篠ノ之さん。もうお昼だけだ」

自分の挨拶に自分でツツコミを入れながら静寂が話しかけてきた。

「おはようございます。どうやら自分でも気づかない内に疲れを溜め込んでいたようです」

「まあ、あの視線の中で生活してるんだから、仕方ないとは思うけどね。ほら、香澄もそんなに緊張しなくても大丈夫よ」

「分かってはいるのですが、前の篠ノ之さんの印象が強すぎて……」

「相手の考えてる事が分かるんだから、今の篠ノ之さんが危険じゃないって事はわかってるんでしょう？」

「そうですね……簡単に割り切れるんなら苦労しないですよ」

他人の心の裡を見る事が出来る香澄は、今の箒が危険ではないと分かっているのだが、前の箒の印象が強すぎるので、未だに接し方が分からないのだった。

「一夏君が大丈夫だって言ったんだから、大丈夫だって」

「そうよ。一夏が大丈夫って言ったんだから、過剰に気にするだけ無駄よ。それに、今の箒にはISが無いんだから、専用機を持つてる香澄ならどうとでも対処出来るでしょ」

「私はそこまで実力があるわけじゃないですし……」

「候補生相手に互角程度まで戦えるんだから問題ないでしょ。アンタはもう少し自分に自信を持った方が良いわよ」

いつの間にか自分が怒られている事に気付き、香澄はますます身体を縮こませてしまった。

「アンタだって一夏に目を掛けられているんだから、少しは実力があるって分かるでしょ？ 一夏は無能な相手に時間を割いている余裕なんて無いんだから」

「その言い方は一夏君に失礼だと思っただけ？」

「そうかしら？」

「だって、鈴さんの言い方だと、一夏君が相手にしていない人は無能だって言っているよ。うなものでしょ？ 一夏君はそんな判断をするような人だとは思えないんだけど」

「そうね……まあ、心の中ではしてるかもしれないけど、少なくとも表には出さないわね」

「そこの方々、お喋りしてる暇があるのでしたら手伝ってくださいませんこと？　まだ準備は終わっていないのですから」

「だってさ。ほら、箒も香澄も手伝いに行くわよ」

鈴に強引に連れていかれ、香澄も箒も先ほどまで感じていた気まずさを忘れるほど作業に集中したのだった。

学園にいる紫陽花からメールを貰い、碧は箒が人の輪に加わっている事を知り、一夏に報告した。

「嵐さんは分かかってやっっているのでしょうか？」

「鈴のあれは天然だからな。多少の事は気にしない性格だから、篠ノ之の事も過剰に気にすることなく輪に連れ込んだんだと思いますよ」

碧から報告を受けた一夏は、そう言いながら苦笑いを浮かべた。

「俺も前の篠ノ之の所為で周りから隔離されていましたからね。そこへ鈴が来て、あつという間に人の輪に入れてもらえましたからね」

「嵐さんも教師にむいているのかもしれないね」

「どうでしょうね？ 人に物を教えるのは苦手そうですし、擬音で済ませようとする傾向がありますからね。そんな指導をされても人は育ちませんよ」

そんな光景を思い浮かべ、碧も苦笑いを浮かべた。

「ISの操縦は擬音で説明されても分かりませんしね……座学の成績の方は、凰さんの中の下ですものね」

「ISがあれば問題ないとか考えてるからでしょうね。まあ、やれば出来るヤツだから気にしてないんですが」

「一夏君って、鈴ちやんの事をどう思ってるの?」

一夏と碧の会話を黙って聞いていた刀奈だったが、つついそんなことを尋ねてしまった。

「お嬢様、黙ってられなかったのですか?」

「だって、なんだか特別な関係って感じがしたから」

「特別と言えば特別ですかね。俺の事を特別視しないで同列に扱ってくれた友人ですから」

「リンリンはいつちに告白して振られてるから、特別視はしてたと思うんだけどなく?」

「そう言う事があっても、アイツは変わらず付き合ってくれたからな。俺が特別視して

るのかもしれない」

一夏の言葉に、簪がピクつと肩を震わせたが、特に深い意味は無いだろうと一夏は取り合わなかった。

「暫く会ってなかったが、すぐに昔のように振る舞える、特殊な関係なんだろうな。俺と鈴は」

「親友って感じなのかしら？」

「どうなんでしょうね……俺も鈴も、互いに悪友という表現を使っていますが、そうなのかもしれませんね」

改めて自分と鈴との関係を考えて、刀奈が言うように親友なのかもしれないと、一夏は感慨深げに呟いたのだった。

「一夏さんと鈴さんは、確かに他のひとは違う空気感ですよね」

「そうか？ ……美紀がそう言うならそうなのかもしれないな」

「一夏って私たち以外だと鈴くらいしか友達って言える相手がないの？」

「静寐や香澄、セシリアやエイミー——俺は友達だと思ってるんだが」

「とにかく、篠ノ之さんは順調に周りに馴染み始めてるとい感じですね」

碧の纏めに、一夏も領いて同意し、後はISに認められれば更識の戦力として取り込めると言う考えをしていたのだった。

「一夏、悪い顔してる」

「何時ものことだろ？」

「ううん。何時もはかっこいい顔してるもん」

「そうか」

簪に直球で褒められて、一夏はどう反応して良いのか迷った挙句、それだけを返したのだった。

世間からの評価

何やら食堂が騒がしくなったのを、千冬と千夏は首を傾げながら眺めていた。

「いったいなんだと言うのだ……」

「なにかのパーティーだという事はわかるが、いったい何の……」

「年越しパーティーだと聞いていますか」

「ナターシャか……誰から聞いた？」

二人の背後から声を掛けてきたナターシャに、千冬が詰め寄るように問いかけた。

「普通に一夏さんから連絡を貰いました。嵐さんが企画して、結構な人数が参加するらしいので、食堂を使用する事になったと。お二方にも連絡はいつているはずなのですが」

「……そう言えばそんな報告も来てたな。そうか、今日は大晦日だったのか」

「日付くらい確認してくださいよ。とにかく、そう言う事なので少し騒がしくても大目に見てあげてくださいいね」

「なにかを壊さない限り、わたしたちだつて温かい目で見守るさ」

千夏の言葉に疑いを持ったナターシャではあったが、彼女たちに逆らっても勝ち目がない事はわかつていたので黙つてこの場を去つたのだった。

「あつという間に一年が過ぎていたという事か」

「ちーちゃんもなつちゃんも、なんだか年寄りくさいね」

「束っ!? 貴様、何時の間に現れたんだ!」

ナターシャの代わりに現れた束に、千夏が手刀を放つが、簡単に避けられてしまった。

「いきなりご挨拶だね、なつちゃん。束さんはただ遊びに来ただけなのに」

「お前の言い分など本氣に出来るわけないだろ。それで、今日はどんな厄介ごとを持つてきたんだ」

「せつかく美味しいお酒が入つたからちーちゃんとなつちゃんにも分けてあげようと思つたのに、そんなことを言うんだ」

「さすが束だな。ささ、部屋にくるんだ」

「わたしたちの秘蔵の酒も出そうではないか」

「あつさりと手のひらを返したね」

千冬と千夏の態度に笑みを浮かべながら、東は案内されるがままに寮長室へとやってきた。

「相変わらず散らかってるね」

「貴様の研究所も大概だろ」

「東さんには、愛しい愛しい娘のクーちゃんがいるから大丈夫だもんね」

それでも東のラボは散らかっているのだが、千冬と千夏には調べようがないので堂々と嘘を吐く。その後、三人で昼から酒盛りをはじめ、箒の監視はナターシャが肩代わりしたのだった。

のんびりとお風呂に入り、その後まったりと部屋で過ごしていた刀奈たちではあったが、時間が進むにつれてテンションが上がっていた。

「このメンバーで年越しを過ごすのって、何時ぶりかしら？」

「全員そろつてとなると、三年前くらいじゃないですかね」

「去年も一昨年も、みんな忙しそうだったからね」

「私は暇だったけどね」

「お前は毎年寝てただろ」

珍しく遅い時間まで起きている本音に、一夏は呆れたような目を向けながらツツコミを入れた。本来であれば本音にも仕事があつたのだが、早々に寝てしまいその代わりを一夏や美紀が務めていたのだ。

「そう言えば一夏君、来年は一夏君のお友達の妹さんが受験するのよね？」

「そんなことを言っていました、結局はどうなったのかは知りません。せつかく名門の学校に通ってるんですから、そのままエスカレーター式で高校に通うのかもしれないし」

「でも、簡易適性検査でA判定だったんでしょ？ 一夏としてはそんな人材をみすみす手放すのは良いの？」

「良いも悪いも、蘭の人生だからな。ISの道に進むのであれば、知り合いとして教えたよりもするが、普通の道に進むのであれば、無理強いは出来ないだろ」

「その子も一夏君の事が好きなんでしょ？ だったらISの道を進むと思うわよ」

「好意云々は置いておくとしても、こっちに來るのなら歓迎しますけどね」

弾にメールでもすれば、蘭の進路がどうなったかなどすぐに分かるのだが、別にそこまでして知りたいとも思っていないので確認はしていない。だが文化祭の時に会った感じでは、恐らくはIS学園を受験し、問題なく合格するだろうと一夏は思っていた。

「IS学園に來るのなら、先輩として歓迎してあげなきゃね」

「お嬢様、余計な事はしないでくださいよ？」

「余計な事って何よ!?!」

「特定の新生に肩入れするのは避けてくださいと言っているのです。いくら一夏さんの知り合いとはいえ、お嬢様が特別扱いする事を善とされるわけではありませんので。ましてやお嬢様は国家代表であり生徒会長なのですから、そんな人が特別扱いするような人物なのかと、余計な詮索が入る可能性が出てきますので」

「詮索が入ったとしても、一夏君が何とかしてくれるでしょ?」

「面倒なので、詮索されない方向でお願いします」

国の詮索に横槍を入れて妨害するのは簡単だが、面倒であることには違いないので、一夏は虚の忠告を全面的に支持するのだった。

「とにかくお嬢様、入学してすぐ声を掛けるとか、そう言ったことは控えてくださいね」「分かったわよ……でも、向こうから近づいて来たら仕方ないわよね?」

「その時は仕方ないですが、蘭が刀奈さんに近づくとは思えませんね。世間では刀奈さんは織斑姉妹や碧さんと同じくカリスマ扱いですし」

「碧さんは兎も角、織斑姉妹やお姉ちゃんがカリスマね……」

「ちよつと!?!」

簪が呆れているのを視線で感じ取った刀奈は、ショックを受けたような声で簪に抱き

つき、余計に呆れられたのだった。

年越しの瞬間

年越しまであと一時間を切った頃、IS学園の食堂では主に一年生が騒ぎ、盛り上がっていた。

「よく許可が下りたわよね、こんな騒ぎに」

「鈴さんが一夏さんに直接連絡をして許可を貰ったようですわ」

「ああ、更識君の許可なら織斑姉妹も大人しく従うわよね」

「そうですわよ。それにしても、ウエルキンは国に帰るのかと思ってましたわ」

「今の私はギリシャ代表だもの。家族のいるイギリスに帰っても気まずいだけだわ」

セシリアと話しているサラは、亡国機業に身を落としたフォルテ・サファイアの代わりにギリシャ代表の座に収まり、一人ギリシャで生活していくと決めたため、国には帰らずにIS学園で年越しの瞬間を待っているのだ。

「オルコットも次期代表筆頭と言われるまでになったんだから、この一年で互いに成長したわね」

「それもこれも一夏さんのお陰ですわ」

「そう言えば、オルコットは一学期の頭の方で、更識勢に喧嘩を売ったんだっけ？」
「わ、忘れてくださいませ、その事は！」

セシリアの中で、最早黒歴史になりつつあるあの事件は、彼女の人生を大きく変えたと言つても過言ではない。もしあのまま高飛車な性格だったら、今の人間関係も無かつただろうし、ここまで成長するチャンスも無かつたかもしれないのだ。

「自国を自慢したいってのは分からなくないけど、喧嘩を売る相手は選んだ方が良いでしょう。天下の更識企業を敵に回したら、イギリスって国が無くなるかもしれないもの」

「今ではその事を痛感して、しっかりと反省してるのですから、これ以上過去を思い出させるのは止めてくださいませ」

「まっ、オルコットの無謀な勝負のお陰で、私も更識君と浅からぬ縁が出来て、こうしてギリシャ代表になったんだから、感謝してるわよ」

「感謝されても嬉しくありませんわよ！」

「さつきから何を叫んでいるのだ？」

「な、何でもありませんわ！　ところで、ラウラさんはこの後ドイツに帰られるのですか？」

「いや、このパーティーが終わり、軽く寝たら教官たちに指導してもらおうと思ってい

る」

ラウラが言う教官とは、もちろん織斑姉妹であり、その二人に指導してもらいたいと思っているラウラに、二人は苦笑いを禁じ得なかつた。

「ラウラさんの織斑姉妹信奉は相変わらずなのですね」

「多少だらしないうところがあるようだが、指導力と実績は間違いないからな！ あの人たちのような指導力を身につけ、ドイツ軍を立て直すのが私の目標だからな」

「モンド・グロツソに出場とかではないのですか？」

「あまり興味は無いが、出られるなら出てみたい。そして、本気の更識刀奈と戦ってみたい」

「一夏さんにお願ひすれば出来るのでは？」

「大舞台で無ければ彼女は本気を出さないだろうし、お兄ちゃんに頼りつきりなのも考え物だからな」

意外と考えているラウラに、セシリアは彼女に対する評価を改めるのだった。

自分たちがそんな風に噂されているなどと思ってもせずに、刀奈たちは年越しの瞬間を待っていた。

「後一時間も無いのね」

「来年はしっかりと働いてもらいますからね」

「わ、分かっているわよ……」

虚が卒業したら、その分自分がしつかりしなけければいけないというのは刀奈も重々理解しているのに、虚に釘を刺されなくても仕事はしつかりしようと考えている。だがそれでも、虚は刀奈がサボるのではないかと心配で、こうして念入りに釘を刺しているのだ。

「一夏、来年は無理しちゃ駄目だからね」

「別に無理をした覚えは無いんだが」

「無理も無茶も無謀もほとんど一緒です。一夏さんはいろいろと私たちを心配させすぎなので、少しは反省して改善してください」

「あ、ああ……分かった」

美紀に強く迫られ、一夏はそう答えるしかなかった。実際無謀な事も無茶な事もしてきた覚えがあるので、素直に頭を下げるしかなかったのだ。

「お兄ちゃんもいろいろとやって来たんだね」

「その殆どが私やマナカ相手の所為なのですがね」

「……反省します」

一夏が無謀無策に突っ込んだ事件の原因は、マナカのISが制御不能に陥り、ビルに突っ込みかけた時だけであり、あの大怪我が無ければもう少し平和な一年だったと言えたかもしれないのだ。

「まあ、一夏君が無謀にもマナカちゃんを庇ったお陰で、こうして家族が増えたわけだしね」

「良い事風に言ってますが、あの時一番顔面蒼白だったのは刀奈ちゃんじゃないのよ」

「お姉ちゃん、一夏が死んじやうかもって泣いてたもんね」

「か、簪ちゃんだって泣いてたじゃないの！」

「私はお姉ちゃんほど泣いてないし、一夏なら私たちを残して死ぬなんてことは無いって信じてたから」

「あれ〜？ かんちゃんも大泣きして『一夏がいなくなったらどうしよう』って言ってなかったけ〜？」

「本音っ！」

普段必要な事は忘れてるのに、どうでも良い事ばかり覚えてる本音に、簪は語気を強くして詰め寄った。

「わ〜、かんちゃんが怒った〜！」

「待ちなさい！」

「最後まで騒がしいわね」

「お嬢様がそれを言いますか」

ドタバタとはしゃぐメンバーを眺めながら、一夏は時計に目をやり、そしてため息を吐いた。

「気付いたら年、明けてるし」

「まあ、刀奈ちゃんたちらしいじゃないですか」

「……そうですね」

碧の纏めに、一夏は少し複雑な表情を浮かべたが、すぐに頭を左右に振って頷いたのだった。

一夏と碧

年明けまで騒ぎ倒した刀奈たちは、寝る場所を決めずにそのまま寝てしまった。

「限界まではしゃぐなんて、刀奈ちゃんもまだまだ子供ですね」

「今日は虚さんも寝てしまってるので、子供ってだけじゃないと思いますけどね」

普段から疲れを溜め込んでいる所為もあるのだろうと、一夏は寝てしまった刀奈や虚のフォローをしたが、本心は碧と同じで子供っぽいと思っているのだった。

「今日くらいは仲良く寝てもらいましょうか」

「一夏さんとしては、静かに寝られるから嬉しいんじゃないですか？」

「二日のんびりしてたから、あんまり眠くないんですけどね」

人数分の布団を敷きながら、一夏は苦笑いを浮かべながら碧の問いかけに答えている。
く。

「碧さんこそ、今日くらいはゆっくりしたらどうですか？　ずっと護衛として気を張ってるんですから」

「これくらいは当然ですよ。本音ちゃんも美紀ちゃんも学生ですから、こんな時間まで護衛を任せるわけにはいきませんからね」

「本音はどんな時間だろうと働いてないですけどね」

当然の如く寝ている本音を運びながら、一夏と碧は顔を見合わせて苦笑いを浮かべる。

「精神的支柱とはいえ、もう少し働いてもらわないと困りますけどね」

「まあ、本音ちゃんが笑っててくれれば、何とかなると思えますけどね。本音ちゃんが笑う余裕がないくらい追い込まれたら大変だと思えますけどね」

「追い込まれてても、こいつは笑ってそうですけどね」

だらしなく口を開けて寝ている本音に、一夏は呆れた視線を向けながらも、しつかりと布団を掛けて風邪をひかないように寝かせる。

「やっぱり一夏さんはお兄さんっぽいですね」

「まあ、実妹がここに二人いますからね」

本音を運び終えた後、マドカとマナカを布団に寝かせながら優しい目を向ける。

「去年で妹が二人増えましたし、簪も義妹ですからね」

「刀奈ちゃんや本音ちゃんも、一夏さんの妹っぽいですし、クラスメイトの子たちもそんな感じですよのね」

「本音やクラスメイトは兎も角、刀奈さんは俺より年上なんですけどね」

「お姉ちゃんっぽく振る舞ってても、やっぱり一夏さんの方が年上っぽい雰囲気がありますからね」

「大人の中で生きてきましたから、それは仕方ないのかもしれませんがね」

「天下の更識企業のご当主様ですよのね」

「碧さんだつてその企業の中の人ですからね。あんまり凄さが分からないんですけど」

「まあ、私たちの思つてる以上に更識の名は強力ですからね」

一夏がだいたいお願いすれば、国のトップですら逆らう事が出来ない。それくらい更識の名に威力があり、一夏たちが思つてる以上に効果があり脅しだと取られてしまうのだ。

「IS学園の子たちも、何とかして更識の関連企業に就職しようと頑張ってますしね」

「IS学園に通つてない人たちも狙ってますしね。そんなに魅力的なんですかね？」

「まあ、世界一のIS関連企業ですし、ISに憧れを持っている人が就職を望むのも当然

だと思えますよ」

「営業ならＩＳの知識が無くても大丈夫ですしね。就職してから勉強しても間に合いますし」

「そもそも更識製のＩＳ関連の製品なら、営業力が無くても買ってもらえますからね」

そもそも一夏が用意する営業用のマニュアルのお陰で、個人の営業力はあまり必要ではないのだ。まあそのせいで営業成績に差があまりないので、出世とかに関係してこないのだが。

「シャルロットさんも社長としてのノウハウを吸収してきてますし、一夏さんも少しは楽できてるんじゃないですかね？」

「フランスの方は落ち着きましたが、他の国はまだまだですからね」

「そういえば、アメリカの方は落ち着いたんですか？」

「まだ細かな事は文句を言っただけで来てるようですが、いい加減日本政府に任せました。暴動でも起こらない限り、更識に連絡は来ないでしょうね」

「それでいいんですか？　日本政府に任せてたら、更識に都合の悪い事をするかもしれないよ？」

「そうだったら、日本代表の刀奈さん、簪、美紀を別の国の代表にすればいいだけ

ですから。そうすれば大人しくなると思いますよ」

「……大人しくなるどころか、平身低頭の姿勢になりますよ」

ただでさえ更識に恩がある日本政府なのだから、碧が言うようにとにかく謝って一夏の考えを改めさせるように努めるだろう。

「一夏さんは自分で忙しくなってるような気がするんですが、落ちつこうとは思わないんですか？」

「今でも十分落ち着いてるつもりなんですけど、周りから見ると忙しそうなんですよ」

「あれで落ち着いてると思ってる時点で、一夏さんはズレているんですよ」

「そうなんですかね……」

「ですから、もう少し周りに仕事を任せてみては如何でしょうか？」

「……考えておきます」

全員を布団へ運び終え、一夏は自分の仕事量を思い浮かべ、碧の提案を本格的に考える事にしたのだった。

「お願いしますよっ」

「まあ、虚さんが卒業すれば、時間も出来るでしょうし、お願い出来る事も増えるでしょうしね」

「私や美紀さんだつて、一夏さんの為なら時間作りますから、もつと頼ってくださいね」
「前向きに検討します」

逆らつても意味がないので、一夏は本気で考える事にするのだった。

早朝のお喋り

自分で布団の用意をした覚えも、自分が何時寝たのかも記憶にないが、刀奈はちゃんと布団で目を覚めました。その事を不思議に思いながらも、隣に簪が寝ているのを見て思わず微笑んだのだった。

「簪ちゃんも疲れてるんだね。それにしても、いったい誰が私たちを布団に運んでくれたのかしら……」

刀奈が覚えている限りでは、自分より先に寝た本音や美紀、簪はあり得ない。ましてやマドカとマナカの体格では自分を運ぶのもやつとで、残りのメンバーを運べるとは思えない。

そうなるに残るは一夏、碧、虚の三人なのだが、確認しようにもその三人はまだ眠っている。

「こんな時間に目が覚めたのは、ちゃんと寝ようと思って寝たからじゃないからかしら？」

年越しの瞬間まではしつかりと覚えていた記憶はある。だが次第に眠くなってきて、次に気付いたら布団の中だったのだ。

「たぶん虚ちゃんとは私とほとんど変わらずに寝落ちしたはずだから、布団を用意して私たちを運んでくれたのは一夏君と碧さんの二人という事になるわね」

日ごろから世話になりっぱなしだと自覚しながらも、どうしても一夏と碧を頼りにしてしまふ。刀奈は自分の悪癖を自覚しているが、どうにも止められないのだった。

「この二人がいるから、多少無茶しても何とかなる、つて思っちゃうのよね……一夏君も碧さんも忙しいはずなのに、こうして私たちの我が儘に付き合ってくれてるし」

慰安旅行と銘打ってはいるが、実際は自分たちが一夏とゆっくり過ごしたかっただけなのだ。一夏もその事は気づいているし、旅行中も疲れているような仕草をたまに見せている事から、彼がこの旅行で休めていない事は刀奈も知っているのだ。

「今日は邪魔をしないように、自分の布団で大人しく二度寝でもしましょう」

まだ外は明るくなっていないので、刀奈はもう一度布団に入り寝る事にしたのだった。

二度寝から覚めると、既に一夏と碧は目を覚ましており、二人でまったりとお茶を飲んでいた。

「おはよう、一夏君、碧さん」

「おはようございます。刀奈さんも早いですね」

「お茶を淹れますね」

挨拶をすると、一夏と碧はそろって笑みを浮かべながら刀奈に返事をする。そして碧は刀奈の分のお茶を用意し始めた。

「私たちを布団に運んでくれたのって、一夏君たちよね？」

「ええ。一時過ぎには全員寝てしまったので、碧さんが布団を敷いて、俺が全員を運びました」

「そうだったんだ。……重くなかった？」

刀奈も年頃の少女なので、好きな相手に重いと思われたくはない。万が一重いと言われたら痩せる覚悟も十分にあったのだが、一夏は笑って首を横に振った。

「皆さん軽かったですよ」

「そう、良かった」

「刀奈ちゃんたちの年頃なら、多少重くてもいいと思うんですけどね」

そう言いながら、碧が刀奈の前に湯呑を置く。

「碧さんだって、私たちの年頃の時は気にしてたんじゃないですか？」

「どうだったかしらね。もうかなり前のことだから覚えてないわね」

「まだ十年足らずでしょうが」

碧の韜晦したような答えに、刀奈は頬を膨らませながら文句を言う。実際碧が体重を気にしていたかどうかは、子供だった刀奈は覚えていないし、その頃と今の碧を見比べても、さほど変化は無いように見えるので、刀奈は彼女の本心を知ることが出来なかった。

「一夏さんが重くないと言ってくれたんですから、それで良いじゃないですか」

「まあ、一夏君はお世辞を言うような子じゃないし、それほどマッチョってわけじゃないしね」

「必要最低限は鍛えてますが、筋骨隆々になりたいわけじゃないですし。むしろ瞬発性を重視している闇鴉を動かすためにも、無駄な筋肉は削ぎ落す方向で鍛えてますからね」

「一夏君は重たいものを運ぶような仕事でもないしね」

「書類の束は、結構重いですけどね」

「まあ、あの量は誰が持つても重いの思うわよ……」

普段から書類の束——もとい、書類の山を見てきている刀奈としては、あれを運べと言われたら絶対に重たいだろうと知っているため、一夏の冗談も本気なのではないかと捉えたのだった。

「とにかく、ダイエツトなどという無駄な事を考える暇があるのなら、少しでもモンド・グロツソに向けて鍛えた方が良いと思いますよ」

「無駄な事って……乙女にとつて最重要課題なのよ、体重は！」

「刀奈さんたちはＩＳを動かす事によつて、普通の女性より多く運動しているんですから、普通に食べている分には脂肪が増えるなんてことはありませんよ」

「そうなのかな？ 最近またおっぱいが大きくなったような気がするんだけど」

「それは普通に成長しているだけじゃないですか？ そもそも、その事は俺に聞くよりも碧さんに聞いてくださいよ」

「一夏君になら触られても平気だもん」

「触りませんよ……」

真面目に相談していたのではないのかと、一夏は責めるような視線を刀奈に向けるが、すぐに無意味だと思ひ直したため息を吐いた。

「一夏君は、私たちの事を触りたいと思わないの？ 私は、一夏君をもっと触りたいし触れ合いたい」

「……そういうのは卒業してからにしてください。ほぼ女子高なので校則にはありませんが、不純異性交遊は織斑姉妹の制裁を喰らいますよ」

「純粋異性交遊だもん！」

「あの二人に屁理屈は通用しませんよ」

刀奈の表現が面白かったのか、一夏は暫し笑っていたのだった。

新年の挨拶

十時を回ったところで、ようやく本音が目を覚まし、一夏たちは略式の新年の挨拶を済ませる事にした。

「明けましておめでとうございます。本年も変わらぬお付き合いのほどをよろしくお願い申し上げます」

「略式とはいえ、なんだか堅苦しい言い回しよね」

「お姉ちゃん、私語は駄目だよ」

一夏が当主として全員に挨拶をしている中、刀奈は飽きたのか簪に話しかけ、そして簪に注意された。

「別に構わないですよ。これで終わりですから」

「本家に戻ってたらもつと面倒だったもんね。一夏君、旅行に来て正解だったね」

「今頃尊さんが正式な新年の儀を執り行ってるでしょうし、俺がいなくても問題は無かったですよね」

「ですが、お父さんはあくまで一夏さんの代理ですし、近いうちに一夏さんも挨拶をしに

「戻られた方が良いのではないのでしょうか？」

「そうだな……どうせ本社に用があるから、その時についてに顔を出しておくか」

新学期が始まって早々に、一夏は本社に顔を出さなければならぬ用事があるため、一日学校を休む事になっている。その時についてに本家に顔を出して、挨拶だけはしておこうと頭のスケジュール帳に書き加えたのだった。

「それじゃあ、おやすみなさ〜い」

「まだ寝るんですか？ いい加減起きた方が良いでしょう」

「そうだよ。何時までもお兄ちゃんに起こしてもらってらるんじや独り立ち出来ないから、そろそろ自分で起きてしっかりと一日を過ごすようにすれば？」

「学生なんだから、休みの日は寝るに限るのだ〜……」

「一夏の護衛なんだから、少しはしっかりとしたら？」

「ここじゃあ護衛する意味もないし、いっちはそれなりに強いから大丈夫だよ〜……」

「……もう寝てるし」

マドカやマナカ、簪にしつかりしろと注意されながらも、本音はすぐに眠りに落ちた。先ほど起きたばかりだというのに、一夏以外が起こそうとしてもまったく起きる気配が

無かった。

「一夏君、どうする?」

「仕方ないですから、本音は置いていつて初詣でも行きますか。この近くにこじんまりとしたところですが神社があるらしいので」

「そうですね。しかし、一夏さんが神頼みとは珍しいですね」

「このぐーたらが成長しますようにと、神様に頼んでみようかと思ひましてね」

「本音の生活習慣の改善なんて、神様でも無理だと思ふけど」

「それは分かっているが、それ以外神様に頼むことも無いしな……あつ、『実姉が真面目になりますように』とでも願ってみるか? でも、どれだけお賽銭を出せば叶うか分かったもんじゃないしな」

本音以上に無理そうな願い事を言い、一夏は自分で苦笑いを浮かべてその願いを却下するのだった。

「一夏君のお願い事って、神様でも難しそうなことばつかだね」

「大抵の事は自力で何とかできますし、自分で出来なくても周りに優秀な人たちがいますからね。神頼みするようなことは殆どありませんから」

「私も本音が真面目になるように願ってみましょうか」

「虚さんは自分の願ひ事をすればいいですよ。こいつの事は俺が願つておきますから」

突いても揺すつても起きる気配のない本音の事は諦め、一夏たちは近くの神社に初詣に行くことに決定した。

「でもお兄ちゃん。本当に本音は置いていくの？」

「起きたら土竜が何処に行つたか教えてくれるだろうし、たぶん起きないだろうからな」
「そうですね。あの子は一度寝ると満足するまで起きませんからね」

「ですが、さつき一度起きましたよね？ あれは満足したからなのでは？」

マドカの疑問に、虚と一夏は同時に苦笑いを浮かべ、更に虚はため息を吐いた。

「満足しても、する事がないとまた寝てしまうんですよ、あの子は……そしてする事が多いと、現実逃避をするために寝てしまふんです」

「つまり、大抵の時間は寝てるんだよ、本音は」

「昔はもう少し起きてたと思うんだけど、何であんなになつちやつたのよ」

刀奈の問いかけに、一夏も虚も首を捻った。詳しい原因は分からないが、IS学園に入学してから本音の睡眠時間は増えたのだった。

「それほどしごかれてる様子もないんですけどね……基本的に簪と一緒に行動してるんだから、簪は何か知らないか？」

「一緒に行動してるって言っても、本音は部屋で寝てるし……私も部屋で本を読んだりゲームしたりだから、特に疲れるようなことはしてないんだけど……最近は戦力の底上げだつて一夏が言つて、本音が中心になつて模擬戦とか訓練とかしてたけど、それでも疲れ果てるまではやってなかつたし」

「そもそも本音は殆ど動いてなかつたようだしな」

模擬戦は参加していたが、あのメンバーの中なら無双出来る实力があるので、本音は疲れる事無く模擬戦を勝ち抜いていたのだ。

「やっぱり私も本音の事を願つた方がよさそうですね」

「神頼みでも改善されるかどうか分からないんですから、虚さんは自分の事を願つた方が良いですよ。もし叶うなら、本音の事より自分の事の方が良いでしょうし」

「だったら、一夏君も自分の事を願わないと」

「さつきも言いましたが、神頼みするようなことは無いんですよ……織斑姉妹と本音、どっちが叶いやすいかというくらいですから」

一夏の返答に、刀奈はかなり引き攣った笑みを浮かべる。本心はどっちも叶わないだろうと思ったのだが、それを口にするのはどうなんだろうと思ったのだろうと、一夏は刀奈の表情から読み取ったのだった。

兄力

初詣を済ませて旅館に戻ってきた一夏たちは、まだ寝ている本音を見てため息と苦笑いを同時に行った。

「本音のぐーたらは神様でも治せなかったみたいだね」

「頼んですぐ叶うなら、年がら年中神社は繁盛してらるだろうさ。頼んでから時間が経つて叶う願いの方が多いだろうし、気長に叶うのを待たせよ」

「気長に待つのもいいけど、そろそろ一夏君が起こしてあげたら？」

「起こしたところで、何もすることが無いんですからまた寝ますよ？」

「だって、このまま寝かせてたら、夜寝れなくなっちゃうでしょ？ そうなると一夏君が本音に絡まれて寝れなくなつて、また一夏君の疲労が蓄積されちゃうじゃない」

刀奈のセリフに、マドカとマナカ、そして簪が反応し、本音を起こそうと奮闘した。

「本音さん、起きてください！ 兄さまの睡眠時間の為に！」

「本音が夜寝れなくてもいいけど、お兄ちゃんに迷惑を掛けるのは止めさせないと！」

「本音！ いい加減に起きて！」

「……それで起きるなら苦勞しないですよ」

虚の眩きから分かるように、この程度の騒がしきでは本音は目を覚まさない。それは簪もマド力たちも重々承知しているはずなのだが、一夏の為となると多少の事は忘れてしまうようだ。

「一夏君、簪ちゃんたちの為にも、本音を起こしてくれる？」

「まあ、それが本音の為でもあり、俺の為でもありますからね……闇鴉、頼んだ」
「お任せください」

一夏に命じられるまでもなく人の姿になっていた闇鴉が、本音の耳元で鼓膜が破れないギリギリの音量で爆発音を流す。

「ほえっ!？」

「おはようございます、本音さん。いい加減起きてください」

「びっくりしたよ。闇鴉、そんな音鳴らされたらびっくりするじゃないか」

「びっくりするで片づけられる本音さんが凄いですね。普通なら恐怖するか激怒するかのどちらかだと思いますが」

「苦勞」

闇鴉を労い、一夏は全員分のお茶を用意する。もちろん、闇鴉は飲まないので八人分だ。

「お茶なら私が」

「いえ、もう始めちゃいましたし、虚さんもたまにはのんびりしてください。刀奈さんや本音の事で常日頃頭を悩ませているのですから」

「私は本音ほど問題児じゃなわよ!？」

「お姉ちゃんだって、相当な問題児だから」

簪の辛辣な言葉に、刀奈はその場に崩れ落ちる。ウソ泣きがそうでないかは全員が分かっていたが、相手にすることはしなかった。

「これを機に刀奈さんも反省してくださいね」

「一夏君まで私の事を問題児扱いするの!？」

「やればできるんですから、みんなとゆつくり過ごす時間を作るためにも、刀奈さんの頑張りは必要なんです」

「……分かった。一夏君の為にも、学校に帰ったら頑張る」

「お願いしますね」

刀奈の頭を撫でながら優しく諭す一夏の姿は、どっちが年上なのか分からなくなる光景だった。

「やっぱり、兄さまは刀奈さんの兄さまみたいですわね」

「前から言ってるが、俺は義弟だからな？　刀奈さんが義姉で、俺は刀奈さんより年下だからな？」

「分かつてはいますが、今の光景はどう見ても我が儘な妹を優しく諭す兄の図でしたよ」
「マドカの言う通りだね。お兄ちゃんは兄力が相当高いんだよ、きつと」

「また訳の分からない単語を……何だその『兄力』というのは」

マナカが発した謎の単語に、一夏は激しい頭痛を覚えた。字面からなんとなく理解は出来るが、一応説明させることにしたのだった。

「そのまんまだよ、お兄ちゃん。お兄ちゃんには私とマドカという実妹、簪という義妹、本音という妹みたいな人がいるから、相当兄としての実力があるんだよ。だから一つ年上でしかない刀奈も、妹として扱えるだけの力があるんだと思うよ」

「まったくもって理解出来んし、理解したくもないが、とりあえず分かった」

「マナカの説明をこれ以上ヒートアップさせないために、一夏は矛盾しまくっている返答をし、話題を変える事にした。」

「篠ノ之の様子はどうなってるか報告はきてますか?」

「スコールに説得され、自分を卑下する癖は改善されてきたようだとのことです」

「スコールに?」

意外な名前が出てきたことで、一夏ではなくマドカが反応した。隣ではマナカも似たような表情を浮かべているので、やはり意外だったのだろう。

「それから、寮長室で年を跨いで酒盛りをしていた織斑姉妹と篠ノ之博士が二日酔いで使い物にならないとも」

「何時ものことです、水を飲ませて一時間くらい寝かせておいてくださいと、山田先生に伝えておいてください」

「姉さまたち……」

「世間からはI S界のカリスマだとかもてはやされているのに、実態はただの酒癖の悪い家事無能女なのよね」

「まあ、そう言つてやるな。あの人たちだつて十分自覚してるだろうし、反省が見られないようなら強制的にI S学園から追い出すから」

「相変わらずサドい事を平然と言うわね、一夏君って」

「それが一夏様ですからね」

「お前は何で整然と人の姿で、人の隣を陣取ってるんだ？」

「最近大人しくしてたので、これくらいは良いじゃないですか」

「別に構わないが、他の人たちの視線が鋭いんだが……」

一夏にべったりとくつつく闇鴉に嫉妬の視線を向けるが、闇鴉はその程度では動じることも無く、なんとなく一夏が居心地の悪さを感じていたのだった。

箒の為の訓練

年明け早々暇を持て余した鈴は、一夏に許可を貰いVTSルームを使用して訓練をすることにした。参加者はそれほど多くなく、静寐とエイミイ、そして箒だけだ。

「専用機をお持ちの三人は分かれますが、何故私と呼ばれたのでしょうか？」

「アンタは早くISに慣れて、そこからISに心を開いてもらわなければならないの。だからあたしたちがアンタの相手をしてあげるからよ」

「それも一夏様が？」

「アンタを参加させるように言ったのは一夏だけど、元々アンタは呼ぶつもりだったし、人数的にも丁度良かったのよ」

「篠ノ之さんは兎も角、何故私とエイミイなのかしら？ 他にもいたんじゃない？」

不服そうに鈴に話しかける静寐。それも当然で、彼女は寝ていたところを鈴に叩き起こされ、ここにきているのだ。

「一夏からの信頼の高さを考えると、静寐は絶対に来てくれなきゃ困るのよ。後は戦力的にエイミイが丁度いいんじゃないかと思ったの」

「戦力って、私が弱いつて事？」

「そうは言っていないけど、あたしとまともにやり合えるのはそう多くないし、セシリアもラウラも叩き起こそうとしても起きなかったのよ」

「そう言う事なら、まあいいけど……」

自分が鈴と同等だと評価されている事は嬉しいが、エイミイも叩き起こされた側なので、イマイチテンションが低い。そんな中等だけは、VTSを前にテンションが上がっている様子だった。

「アンタ、一夏からパスワードは聞いてるんでしょ？」

「はい、一応は。ですが、普通にログインした方が良いと思います」

「何で？」

「私が一夏様からお聞きしたパスワードは、前の私が使っていた機体・サイレント・ゼフィルスのデータがインストールされているようですので、それは私には扱えないものですから」

「ヴァーチャルなんだし、動かせると思うわよ。それに、サイレント・ゼフィルスの操縦に慣れておけば、本物がアンタに反応したときにスムーズに事が進むと思うし」

「そうでしょうか……」

「そもそも、現実世界と同じなら、箒に反応する I S は無いはずだしね。V T S で訓練したことがあるんなら、たぶん大丈夫よ」

あまりフオローになっていなようなことを平然と言う鈴に、静寐はため息と頭痛を禁じ得なかった。

「どうかしたの?」

「鈴、貴女本当にデリカシーが無いわね。篠ノ之さんは I S を動かさない事を気にしてるのに、良く平然と言えたわね」

「変に誤魔化したって意味ないし、しつかりと自覚させた方が箒の為でもあるんじゃない? I S の事をより気遣ったり、気に掛けたり出来るんだし」

「……意外と考えてるのね」

「てか、全部一夏の受け売りだけどね」

「私の感動を返せ!」

あつさりと一夏の言葉を真似しただけだと白状した鈴に、静寐は結構本気で怒鳴った。それでも、鈴は反省する様子もなくケラケラと笑う。

「返せもなにも、あたしは何も貰ってないもの」

「……屁理屈だけはすぐに思いつくのね」

「それでもなきや、一夏の悪友なんてやってられないわよ」

鈴の言葉の意味を、静寐は理解する事は出来ない。それほど一夏と過ごした時間の差というものは大きい。鈴は一夏と冗談を言い合える仲なのだと、静寐はちよつぱり鈴に嫉妬したのだった。

「それじゃあまず、眠気覚ましにあたしと箒ペア対静寐とエイミイペアね」

「その何処が眠気覚ましのよ？」

「一夏の話では、箒のポテンシャルは相当高いらしいから、油断してたらあつさりやられるわよ。それに、一夏が手を加えたサイレント・ゼフィルスには、近距離武器も積んであるようだから、剣道娘の箒なら達人レベルくらいにはなるんじゃない？」

「……油断出来るわけないわね、それじゃあ」

元々油断などするつもりもなかったが、それを聞いてますます気が引き締まる静寐。一方のエイミイは、絶望感漂う表情を浮かべていた。

「どうかしたの？」

「近距離戦闘は苦手だし、近距離主体の相手と戦うのも苦手なのよ……」

「次期代表の声も上がってるんだし、苦手は無くしておくべきじゃない？」
「そうなんだけどさ……」

「あーもう！ グダグダ文句言ってるでさっさと準備しなさい！ あんまり文句ばっか言ってるよ、一夏に報告して近距離戦闘主体の相手との訓練メニューを組ませるわよ」

「鈴が言うのと冗談に聞こえないから止めて！」

更識関係者以外で一夏と一夏と一番親しいのは、間違いなく鈴である。その鈴からの提案なら一夏が受け入れる確率はかなり高いとエイミーも分かっている、うだうだと文句を言うのを止めて準備に取り掛かった。

「それじゃあ、後ろは気にしないでいいから、思いつきり戦いなさい。武装などはチェック出来るわよね？」

「ポータブル版と方法が一緒なら大丈夫です」

「それじゃ、一夏期待の静寂とエイミー相手に、箒がどこまで戦えるか見させてもらおうかね」

「鈴さんは参加しないのですか？」

「一応するけど、あたしは箒が一对一で戦えるようにフォローするだけ、あくまで二人と

戦うのはアンタよ」

鈴の言葉に、箒は身が引き締まる思いになり、集中するために目を瞑った。

「分かりました、ガツカリさせないように頑張ります」

「アタシだけじゃなく、一夏もガツカリさせないようにね」

「……はい！」

更なるプレッシャーに押しつぶされそうになったが、箒は何とか気合いを入れ返事をしたのだった。

一夏と鈴の関係

鈴のフォローもあり、箒は静寂とエイミー相手に善戦したが、経験の差から敗れてしまった。それでも有意義な時間だったと、箒は今の戦鬪を成長の糧にしようと思っていた。

「さすがに二対二じゃキツかった？」

「鈴さんがフォローしてくれていたので、何とかしたかったです。やはり経験の差は大きかったですね」

「それでも、ポータブル版だけで訓練してた箒があそこまで戦えたのは凄い事だと思うわよ。一夏も同じことを言ってくれると思うわよ」

「一夏様は妥協を許さない方だとお聞きしていますので、この程度では満足してくださいと思いますけど」

「そんなことは無いと思うわよ。一夏君も、意外と楽をしたがる人だから」

鈴と箒の会話に静寂が加わり、その後ろではエイミーが静寂の言葉に首を傾げた。

「私の専用機の最終調整の時は、一夏君、凄く細かったけど」

「そりゃ、自社の製品で他国の候補生を再起不能にさせたなど言われたくないからじゃない？ あの時から既に一夏君は更識のトップだったわけだし、社員を路頭に迷わせるようなことは避けなきゃでしょ？」

「それもそうか……でも、あの時の一夏君はなんだか怖かったな……」

「I Sの調整となると一夏は妥協を許さないからね。メンテナンスを怠れば鬼の形相で怒ってくるわよ、きつと」

その光景を思い浮かべたのか、鈴が身震いして見せた。

「鈴さんは一夏君に怒られたことがあるの？」

「いや、あたしは無いわよ。バカ二人が中学の時に赤点を取って一夏にこっ酷く怒られてたのを遠目で視たくらいかしら」

「友達が赤点を取って、一夏君が怒ったの？」

静寂が零した疑問に、鈴は苦笑いを浮かべながら答えた。

「一夏に勉強を教えてもらってたのに、テスト前日の夜遅くまで遊んでた所為で、寝不足。テスト本番中に軒をかいて寝てたからね」

「なるほど……」

それは怒られても仕方ないかと、静寂は納得したように頷いた。

「その後弾は爺さんと小母さんにこつ酷く怒られてたけどね」

「一夏君が先に怒ったの？ その後に祖父と母親に怒られるって……逆じゃない？」

「普通はね。でも一夏の場合はそれであつてるのよ。忙しい時間を割いて勉強を教えたのに、当日寝てるんだから」

「その頃から一夏君は忙しかったんだ」

「もう更識先輩が国家代表だったし、その調整やら各国との交渉やらで飛び回ってたらしからね。遊ぼうって連絡しても、大抵は無理って言われてたし」

一夏が誘いを断っていた理由は、忙しいのもあるが、鈴や弾たちに脅威が及ばないように距離を置いていたというのもある。だが鈴はそんなことは知らずに、普通に忙しかったのだらうと思つてゐるのだった。

「とにかく、筈は今の状態でも普通に戦う分には問題なさそうね。サイレント・ゼフィールも普通に操作出来ていたし」

「一夏様が組み込んでくれたマニュアルのお陰です。それが無かつたらどうなつていたか」

「相変わらず過保護ね、一夏も……楽したがってる割に自分で忙しくなってるんだから」
「それが一夏君だと、私は思うけどね」

静寐の言葉に、鈴も苦笑いを浮かべながら頷く。

「それじゃあもう少し休憩したら、今度は箒が戦いたい相手と戦ってもらいましょう。
選ばれなかった二人は、そっちで訓練すればいいし」

「鈴さん、どれくらいこの部屋の使用許可を貰ったんですか？」

「ん？ 誰も使わないからって一日貸してくれたわよ」

「まあ、一夏君に直接連絡取れるのって、そんなに多くないものね」

「静寐だつて知ってるでしょ？」

「私は、それほど気楽に連絡出来ないわよ」

「別に緊張する相手じゃないと思うんだけどな」

「それは、貴女が一夏君と付き合いが長く、一夏君も友人だと認めてくれているからで
しょ」

「静寐の事も、友達だとは思ってるはずだけど？」

「……私は、あくまでも友達だから。でも鈴さんは親友でしょ？」

静寂の表現に、鈴は全身に寒イボが出来たような感覚に陥り、あちこちを掻きまくる。
「その表現止めてくれない!? あたしたちは悪友なの」

「親友って言われたくないから、自分たちを悪友って表現してるって一夏君も言ってたけど、認めちゃえばいいじゃない」

「あたしたちの関係はそういうのじゃないんだってば! そもそもあたしは、昔一夏に恋してたんだから」

「そう言えばそんなこと言ってたわね。フラれたんだっけ?」

「告白まがいな事はしたけど、結局返事は無かったのよ。一夏も今の関係のままの方付き合いやすいとか思ってたんじゃない」

一夏は鈴と特別な関係として付き合う気にはなれず、今のままでいいと思っていたので、鈴の告白まがいな事は気づかないフリをし続け、鈴もそれが答えだと理解し、それ以降は悪友として一夏の側にいる事を決めたのだった。

「あーもう! あたしの過去の話はどうでも良いわよ! それで箒! 誰と戦いたいか決まった?」

「えつと……とりあえずエイミイさんをお願いしようかと」

「おつ、私か。よろしくね」

「はい、よろしくお願いします」

「それじゃあ、あたしと静寐は個人訓練と行きますか」

「もう少しお喋りしてもいいわよ？」

「それは御免だわ！」

静寐の人の悪い笑みに、鈴は舌を出してVTSに逃げ込んだのだった。

有効的な脅し

鈴からのメールで、箒のＩＳ操縦技術のだいたいを知った一夏は、すぐにマツド的思考を働かせようとして美紀に注意された。

「一夏さん。ここにいる間はそういう思考は禁止です」

「……さすが同室だけあって、何を考えていたかすぐに分かったか」

「その表情の時は、必ずと言って良い程ＩＳの事を考えている時ですから。一夏さんの立場を考えれば仕方ないのかもしれませんが、今は駄目です」

「そうよ、一夏君。せっかくの旅行中にお仕事の事を考えるなんて」

美紀の注意に便乗して刀奈も一夏に注意するが、一夏は笑って首を横に振った。

「別に仕事ってわけじゃないんですけどね」

「そうなの？」

「ええ。鈴から篠ノ之の操縦技術のデータを送ってもらったんですよ。それで、サイレント・ゼフィルスを動かした雰囲気なども知らせてもらい、どうやって微調整をするかを考えていたんですよ」

「動かしたって、篠ノ之さんはISを動かせないんじゃないかなかったっけ？」

「VTSだ。一応インストールしてある篠ノ之専用のパスワードは教えてあったから、機会があれば動かしてほしいとは言っておいたんだ」

簪の疑問に答えながら、一夏は再び思考を巡らせようとして、再び美紀に注意される。

「次その表情をしたら、問答無用で抱き着きますからね」

「あー美紀ちゃんズルい！ いっちー、私も抱き着きたい！」

「美紀や本音だけ抱き着くなんて許さないからね。マドカ、私たちも抱き着く準備を」

「わ、私はそこまで兄さまに抱き着きたいわけでは……」

「嘘ついてるのがバレバレなんだから、はつきりと言えば」

「抱きつきたいです」

「……魅力的な提案だが、後ろで刀奈さんや虚さんが怖い顔してるから止めておいた方が良いでしょう」

一夏に名前を呼ばれた二人は、美紀たちに怒っているわけではなく、一夏が休もうとしないことに対して怒っているのである。つまりどういうことかというところ——

「私たちも抱き着くからね」

「一夏さんを大人しくさせる為なら、致し方ありません」

——こういう事である。

「わ、分かりましたからその目は止めてください」

「一夏、こういう事に弱いよね」

「ここにいるメンバーは兎も角、基本的に俺は人間恐怖症であり女性恐怖症なんだから当然だろ」

「そう言えばあつたね。そんな設定」

「設定って……」

簪の言葉にため息を漏らしながら、一夏は送られてきたデータを表示していた携帯端末をしまい、大人しくする事にしたのだった。

「一夏さん、そんなに抱きつかれるのが嫌だったんですか？」

「そう言うわけではありませんよ。俺だって一応男子ですから、これほどの美人たちに抱きつかれるのは嬉しいですが、あのまま思考を続けてたら絶対にそれ目当てだろと思われちゃいますからね」

「私たちは、理由なんて無くても一夏さんに抱きつきたいですけどね」

「勘弁してくださいよ……一人二人ならともかく、それじゃあ収まらないんですから」

一人が抱きつけば、別の一人が抱きつき、更に別の一人がと、一夏が懸念しているように全員が満足するまでその行為は終わらないだろう。そして、一回抱きついた程度で満足出来るほど、一夏とのふれあいの機会が多いわけでもないのだ。

「一夏君がもう少し私たちとの触れ合いを増やしてくれば、一回で満足出来るかもね」
「善処はしますが、更識と学園の仕事で忙しいですからね。少しは他の人に任せるにしても、最終判断は俺が下さなければならぬ案件もありますし、学園の仕事は刀奈さんが真面目にしてくれないと終わりませんし、織斑姉妹が投げ出した後始末もありますからね」

「……私は頑張るけど、織斑姉妹はどうするの?」

「減給をチラつかせて働かせても、一時しか真面目になりませんでしたからね……本格的にクビを視野に入れて脅してみますか」

「あの二人にそんなことが出来るのは一夏さんくらいですけどね」

「別に怯えるような相手ではないと思うんですが。IS界ではカリスマとか言われてるようですが、実態はただの呑んだくれの駄目姉ですから」

「お兄ちゃんだからそんなことが言えるんだよ。他の人が言えば、次の瞬間にはこの世

から排除されてるかもしれないからね」

「言われたくないならしつかりしろと言いたいかな」

マナカの言葉に苦笑いを浮かべながら、一夏は珍しくその場に寝転んだ。

「どうかしたの？」

「いえ、あの姉二人の事で頭を悩ませるのが馬鹿らしくなったので、少し休憩でもしようかと思ひまして」

「それ良いね！　じゃあ私も」

そうやって一夏の腕を枕に刀奈もその場に寝転ぶ。当然非難の視線を浴びる事になるが、その程度では一夏の腕枕を諦めるわけは無かった。

「一夏君って、あつたかいのよね」

「そうですか？　自分では分からないですが」

「一夏君の体温的な事もそうなんだろうけど、やっぱり一夏君といると安心出来て、自分の体温も上がってるんだと思う」

「安心、ですか……確かに、俺もみんなといると安心しますね。たまに大人しくしてほしいとは思いますが」

「一夏に頭を撫でられてさらに安心したのか、刀奈はそのまま眠りに落ちてしまった。ほんとに、刀奈さんの方が妹みたいですね」

マドカの零した言葉に、全員が頷き、刀奈に羨ましげな視線を向けたのだった。

織斑姉妹と束

激しい頭痛に襲われながら、織斑姉妹の新年はスタートした。目を覚まして隣に束が寝ている事を確認し、暑苦しいので引きはがしてその場に転がす。

「へによ!? ……スー」

潰されたカエルのような悲鳴を上げた束ではあったが、その程度で起きる気配もなく、そのまま寝息をたて続けたのだった。

「コイツの事は兎も角として、さすがに呑み過ぎたな……」

「コイツに乗せられて随分と深酒をしたからな……とりあえず水だ」

姉妹揃って冷蔵庫を開けると、中にはミネラルウォーターのペットボトルが一本だけ入っていた。

「ここは、姉である私からだろ」

「殆ど変わらないだろうが！　そもそも、先に冷蔵庫に手を伸ばしたのはわたしだ！」

「殆ど一緒だっただろうが！　そもそも、お前は姉を敬うという気持ちに欠けている！」

「うー！」

怒鳴った所為で痛みが激しくなったのか、姉妹はその場に座り込んだ。

「不毛な争いは止めたらどうかなく？　ちーちゃんもなつちゃんも、いつくんには尊敬されてないんだし」

「束っ！」

「ん？」

姉妹が座り込んだ隙にペットボトルを取り出し、一気に中身を飲み干した束に、姉妹は明確な殺意を抱き、それを束に向ける。

「水なんて蛇口を捻れば出るんだし、コップだってあるんだからそれでいいじゃん」

「それは私たちの水だぞ！　何故余所者のお前がそれを飲んでるんだ！」

「蛇口を捻れば出ると分かっているなら、貴様がそれを飲めばいいだろ！」

「あつたものを飲んだだけだよ。てか、ちーちゃんとなつちゃんは箒ちゃんの監視があるんじゃないの？」

「そんなもの、真耶か紫陽花に任せれば良い」

「どうせ代わりにやってるんだらうしな」

「ちーちゃんとなつちやんがいつくんに尊敬されないのは、そういうところじゃないの？」

東の指摘に、姉妹は揃って首を傾げる。この二人の中では、面倒な事は後輩に任せれば良いという考えがあるようで、何故責められなければならないのだという表情を浮かべている。

「任された仕事を自分たちでせず、後輩に投げ出す姉を尊敬する弟なんていない、つて事だよ」

「そうなのか？」

「だが、一夏は結局お姉ちゃん大好きだからな」

「それが妄想だつて何で分からないかな……東さんでも分かるのに……そういうところだけは前の箒ちゃんそっくりだよ、二人つて」

「聞き捨てならないぞ、東！ わたしたちの何処が箒に似てるというんだ！」
「いつくんが自分の事を好きだと思ひ込んでるところ、だよ」

自分が何だか常識人な気がしてきて、東は酒とは別の意味で頭が痛くなつてきていた。

「とにかく、さっさと水を飲んでいっくんから任された仕事をした方が良いよ」
「待て。どうせ暇なんだろうからお前も手伝え」

「手伝ったことを一夏に言えば、お前は褒めてもらえるかもしれないぞ」

「いっくんに褒めてもらえるかもってのはそそられるけど、これでも東さんは忙しいんだよ」

「一晩中酒盛りしてたヤツが、どう忙しいのか教えてもらいたいものだな」

がっちり両肩を押さえつけられ、東は無駄な抵抗は諦めてその場に腰を下ろした。

「東さんはいっくんがより生活しやすいようにISを改良して、こちらから遠隔操作出来るようにしなきゃいけないだよ。万が一マナちゃんみたく出力オーバーで制御不能に陥ったとしても、東さんが操作出来ればあんな事故は起こらないからね」

「その理論でいけば、お前が遠隔操作して制御不能に出来るという事だよな？」

「お前が気に入らない相手を事故に見せかけて再起不能に貶める事も出来るという事か」

「あ、アハハ……何でそんなマイナスな考えばかりするかな、二人は……」

「貴様なら十分あり得るという話だ」

「そもそも、そんな事なら一夏だって出来るだろう。だがアイツはそんなことを望んで

はいないようだしな」

一夏はあくまでもIS乗りの手助けの為に研究を続けており、東とは方向性が違う。全てのISを制御するなどと言うことに興味も向けずに、彼は彼の研究を進め、より良い環境づくりに勤しんでいるのだ。

「そう言うわけだから、余計な研究は止めてわたしたちを手伝え。運が良ければ一夏の料理が食べられるかもしれないぞ」

「いっくんはまだ帰ってきてないんだから、どうやっていっくんの料理を食べるのさ」
「アイツもお前のラボの位置は把握しているんだ。お礼という事で作りに行ってくれりゃかもしれないだろ」

「二人の中で、いっくんはどれだけお人よしなのさ……そもそもいっくんは忙しい合間を縫って旅行に行ってるんだから、帰ってきたって仕事に忙殺されるだけじゃないか」
「アイツの周りには優秀な人間が大勢いるらしいからな。少しくらい一夏が休んでも問題はないだろう」

「いっくんが周りに任せるといふ判断をしても、結局はいっくんの仕事がなくなるわけじゃないんだから……」

「少しくらいは余裕が出来るだろ。だから少しくらいは期待しても良いんじゃないか

？」

「その楽観的な思考、いっくんに少し分けてあげたいくらいだよ……」

ますます自分が常識人のような気がしてきて、束は頭を抱えたい思いに襲われたのだった。

静寐の脅し

織斑姉妹が寝ている間、箒の監視は紫陽花が担当していた。本当ならば真耶が担当するはずだったのだが、一身上の都合でこの場に来れなくなってしまったので、彼女が代理の代理を務めているのだった。

「お疲れ様です、五月七日先生」

「鷹月さん……よく気付いたわね」

「このくらいなら一夏君たちに鍛えられますからね。もちろん、先生が本気で隠れてたなら、見つけれなかったでしょうが」

「更識君から、見ているのを気づかれる程度で良いと言われてるみたいでしたし、そもそも千冬先輩と千夏先輩は隠れる気がゼロだったらしいからね」

「あからさまに疑っているという視線をぶつけてきてましたから」

その視線を経験し、一夏に相談した静寐は、あの時の事を思い出し苦笑いを浮かべる。「ところで、何故五月七日先生が？ 織斑姉妹はどうしたのですか？」

「まだ起きていないようですので、私が代わりに見張ってるんです。本当なら真耶が代

わりを務めるはずだったんだけど、一身上の都合で来れなくなっちゃったらしいから」「何かあったのですか?」

「大したことじゃないとしか聞いてないから、詳しい事は分からないわ。まあ、織斑姉妹のように二日酔いで来られない、ってわけじゃないでしょうけど」

紫陽花が冗談めかしてそう言うのと、背後からとてつもない殺気を浴びせられた。その殺気の持ち主に心当たりがある紫陽花は、全身に脂汗を掻きながらゆつくりと背後を振り返り、気配の持ち主を確認した。

「千冬先輩……千夏先輩も……いらしてたんですね」

「今しがたな」

「それで、随分と馬鹿にしてくれたようじゃないか」

「い、いえ!? あれは冗談でして……」

「千冬先生、千夏先生、なんだかお酒臭いですが」

静寐が鼻を抑えながら織斑姉妹にそう告げると、二人は慌てて口元を抑えて匂いを確認しだした。

「やっぱり吞まれてたのですね? 一夏君がいないからと言って、羽目を外し過ぎると

帰つてきた時に怒られちゃいますよ？」

「一夏に報告しなければ怒られないだろ」

「残念ですが、お二人が何かしでかしたら連絡してほしいと一夏君から頼まれていますので、お二人が二日酔いでこの時間まで寝ていて、あまつさえその代理を務めていた五月七日先生を苛めようとした事は報告せざるを得ないのですが」

「別に苛めようとしてはいいない。立場というものを分らせてやろうと——」

「パワハラは立派な苛めですよ。どうせ篠ノ之博士と三人で朝まで飲み続けて役に立たないだろうからと、一夏君からメールがありました、まさにその通りだったとはね」

すべて見透かされていたと静寂から聞かされ、織斑姉妹はガタガタと震えだす。

「い、一夏に怒られてしまう……」

「紫陽花、済まなかつた！ 鷹月もこの通りだから、一夏に報告するのだけは止めてくれ！」

織斑姉妹に頭を下げられ、紫陽花と静寂は何とも言えない高揚感に包まれ、とりあえず一夏に報告するのは止める事にしたのだった。

戻ってきた静寐を見て、鈴は何があつたのかと首を捻つたが、詮索するようなことはしなかつた。

「次は静寐が箒の相手をする番よ」

「了解。手加減しないけど、篠ノ之さんなら必要ないよね？」

「視た限りだと、エイミイ相手でも上手く立ち回れてたから、静寐も苦戦するかもしれないわよ」

「それは楽しみね」

意気揚々と箒の相手を引き受けた静寐と交換するように、エイミイが鈴の隣に腰を下ろした。

「危なかったー」

「かなり苦戦してたようだけど、スサノオとのコンビネーションに問題でもあったの？」
「実機なら問題ないんだけど、VTSだとも油断しちゃうのよね。これはあくまでもヴァーチャルだから、ダメージを負っても肉体には損傷は負わないって」

「その感覚、なんとなく分かるけど、ヴァーチャルだからって油断したら危ないわよ？
一夏の事だから、知らぬ間に肉体的ダメージも負うようにプログラミングしてるかもしれないし」

「うっへえ……そう考えると、油断なんてしてられないね。でも、一夏君ってそんなに性格悪いの？」

「IS産業におけるトップ企業のトップなんですから、腹黒くなければやってられないんじゃない？」

「何で疑問形なのよ……この学園で更識関係者を除けば、一夏君と一番付き合いが長いのは鈴でしょ」

「あたしは、一夏になにかをされた事なんてないから分からないわよ」

「そうなの？　じゃあ想像だけで一夏君が腹黒いとか言ってたの？」

「いや、まああたしが直接何かをされたことがないだけで、一夏の腹黒エピソードなら結構あるわよ。聞きたい？」

「いや……遠慮しておこうかな。次に一夏君と顔を合わせる時に気まづくなりそうだし」

エイミイのあからさまな態度に、鈴は苦笑した。

「そこまで緊張するような相手じゃないと思うんだけど」

「それは鈴だからでしょ！　私みたいな付き合いの短い人間は、一夏君と話すだけでも緊張するんだから！」

「そうなの？　友達なんだから、緊張する必要無いと思うんだけど」

「……友達だっと思ってもらえてるのは嬉しいんだけど、私たちIS操縦者希望の女子って、昔から男の子と接する機会が少ないからさ」

「そう言えばそうなのよね。あたしは中学に入ってからISの世界に飛び込んだから、

一般的なIS操縦者見習いの感覚って分からないのよね」

しみじみと呟く鈴を、エイミイは羨ましげに眺めたのだった。

虚のカミナリ

昼過ぎになり、訓練に参加してくれるメンバーも増えたので、鈴と静寂は箒の相手をそつちに任せて、一夏からの連絡を待っていた。

「一夏君って今慰安旅行中なんですよ？ 連絡してくるのかしら」

「データを確認してどうやって訓練させればいいのかくらいの指示は出してくると思うけどね」

鈴がそう言った丁度そのタイミングで、鈴の携帯にメール着信を告げるメロディーが流れた。

「ほらね」

そう言つて鈴はメールを開き、一夏からの指示に目を通したため息を吐いた。

「あたしたちが人数を増やしてるのもお見通しみたいね。そのまま大勢と戦わせてればいいって書いてあるわ」

「まあ、これくらい一夏君ならお見通ししてわけね。そもそも、昨日カウントダウンで大

勢が寮に残つてゐるって知つてゐるんだから、暇つぶしにこの部屋を訪れるのも分かつちゃうか、一夏君なら」

「まあ一夏だしね」

二人揃つて苦笑いを浮かべ、箒の鬨いを少し離れた場所から眺める。

「前の篠ノ之さんは近づき難かつたけど、今の篠ノ之さんはそれほど緊張しなくていいから楽よね」

「それほどって事は、多少は緊張してゐるって事？」

「それはね。いくら一夏君が安全だつて言つても、前の篠ノ之さんの行動を見てた人間は警戒するわよ。何時竹刀を持つて襲いかかってくるか分かつたもんじゃないもの」

「元の箒の荷物は、更識が保管してゐるみたいだから、竹刀も一緒に管理されてるんじゃないの？」

「剣道場には竹刀があるから、そこから持つてくるかもしれないでしょ」

「万が一そんなことがあつても、織斑姉妹が肅正して、そのままこの世からドロップアウトだから大丈夫だと思ふけどね」

ケラケラと笑いながら言う鈴に、静寂は少し眉を顰め、すぐに頭を振つて苦笑いを浮

かべる。

「どうかしたの?」

「いや……『この世からドロップアウト』だなんて、簡単に言うからさ。まあ、あの一夏君と長年友達付き合い合っ出来てる事を考えれば、それくらいは普通かなって思っただけよ」

「事実なんだし、あたしたちがその光景を目にするわけじゃないんだから。気にし過ぎよ」

静寐の考え過ぎだと笑い飛ばし、鈴は空いているVTSを使い自分の訓練を始めるのだった。

鈴に指示のメールを出した後、一夏は刀奈たちに監視されていた。

「別に仕事してたわけじゃないんですが……」

「ちよつと目を離すと一夏君は働いちやうから、こうやって見張ってるのよ」

「篠ノ之の更生は仕事ではないんですが」

「それでも、一夏は今休むべきなんだから」

義姉妹が両隣に腰を下ろし、正面には美紀、背後には碧という布陣に、一夏は彼女たちの本気度を感じ取っていた。

「兄さま、なんだか顔が引きつっていますか？」

「仕事しないで監視されるならともかく、仕事をするから監視されるなんて思ってな

かったからな……」

「でも、お兄ちゃんは休むためにこの旅行に来てるんだから、これくらいされてもしょうがないと思うけど。まだ怪我だって完治した訳じゃないんでしょ？」

「たまに痛む程度だから、そこまで心配されるような事でもないんだが」

「私より重症だったんだから、もう少し自分の身体を労わった方が良いよ」

「分かつてはいるんだがな……」

お茶を啜りながら妹二人と会話する一夏は、多少の居心地の悪さを感じながらも抵抗する事は無かった。

「いっちゃんはまだもう少し休む事を覚えた方が良いよ」

「そう言う本音は、もつと働いた方が良いと思いますけど？」

「ヤダなくおねくちゃん。私が働いたら余計な仕事が増えるでしょ？ だから私はあえて働かないのだよ」

「余計な仕事を増やしているという自覚があるのなら、もう少し効率よく、かつ正確に仕事をするように努力しなさい！」

「ほえっ!?!」

だらけているのを正当化しようとした本音に、虚のカミナリが落ちる。とはいっても一夏程の威力は無いので、本音は一瞬驚いただけで、すぐにだらけてしまう。

「虚ちゃんのカミナリじゃ本音には通用しないようね」

「まあ、本音だし」

「本音ですからね」

刀奈の言葉に、簪と美紀が同意を示し、三人で本音に呆れた視線を向ける。

「私だってやればできるんだよ〜？」

「じゃあ、ちゃんとやれば良いじゃない」

「でも、おねくちゃんやいつちーがした方が早いし正確だから、私がやる気で無いのはおねくちゃんといつちーが原因なんだよ〜」

「いい加減いしなさい！ 責任転嫁も甚だしいですよ！」

「おねくちゃん、何でそんなにピリピリしてるのさ〜？」

「貴女がしつかりしないからでしょうが！」

「怒られたってしつかりしないんだから、怒るだけ体力の無駄じゃない？」

「……怒られている貴女が言うセリフではないですが、そうかもしれませぬね」

釈然としない雰囲気醸し出しながらも、虚は大きいため息を吐いて本音から視線を逸らした。

「こんなんじゃない私が更識代表を引退し教師になるという事は無理そうですね」

「虚さんが望むのであれば、俺が本音を強制的に更識代表に任命出来ますけど」

「ですが、それでもあの子がしつかり働くとは思えません」

「まあ、後数ヶ月ありますから、ゆっくり考えてください。こつちも、本音に代表を変更するとなれば、それなりに手は考えていますので」

虚を慰めるように語る一夏に、虚は感謝と情けなさの両方を感じながら頭を下げたのだった。

鈴の行動力

訓練を終えた鈴たちは、全員で食堂にやって来ていた。もちろん、その中には箒の姿も見受けられる。

「すっかり馴染んでるわね」

「元々警戒し過ぎだったのよ。一夏が大丈夫って言うてたんだから、天変地異でも起こらない限り平気だって分かってるだろうにさ」

「鈴はそうかもしれないけど、私たちはどうしても篠ノ之さんを警戒しちゃうわよ。一夏君たちみたいに自分を守るだけの実力があれば平気だろうけども、って考えちゃってさ」

「ISを持ってない箒なんて、そんなに警戒しなくてもいいと思うんだけど」

「生身でも半端ない強さだったじゃない……」

「万が一そんなことになっても、織斑姉妹が何とかしてくれる手筈だから気にしてなかっただけなのかもね」

織斑姉妹がいる方へ視線を向け、鈴はすぐに静寂に視線を戻した。

「そう言えば、香澄は今日いなかったけど？」

「まあ、前の篠ノ之さんの本音を、聞きたくなくても聞かされていたからね……私たちに上に警戒しちゃうのは仕方ない事よ」

「そつちは一夏に何とかしてもらうしかなさそうね……あたしはここまでで精一杯だもの」

「やつぱり、一夏君に頼まれてたのね」

「何を？」

静寐の質問に、鈴は本気で分からないという雰囲気で首を傾げる。

「篠ノ之さんが必要以上に警戒しなくても大丈夫だと分からせるために、こうして訓練をしたんじゃないの？」

「まあ、それもあるけど、普通にあたしが退屈だったから、一夏になんかないと聞いたのよ」

「それでこれだけの成果を出せるんだから、さすが幼馴染って事かしら？」

「変に気負う必要は無いって言ってたから、静寐に言われるまで忘れてたくらいなものだから、あたしは特に何もしてないのと同じなのよ」

あつけらかんといい放つ鈴に、静寐は少し呆れた視線を向けながらも、それでもこのような成果を出せる鈴を羨んだ。

「明日、明後日と同じように訓練をすれば、ほとんどの人が箒に対する苦手意識を捨ててくれるだろうしね。四日には一夏も帰ってくるみたいだし」

「それしか休めないって事なのかしら？」

「あれでも更識のトップだからね。休み過ぎるのも考え物だっと思ってるんじゃない？」

一夏って昔から休むって事を嫌ってたからさ」

「なんか変だね、その言い方」

「そう？ まあ、真相は一夏にでも聞いてちょうだい。それよりも、あーお腹減った」

静寐との会話を打ち切り、鈴は食券を持って人だかりへ近づいていく。その後姿を見て、静寐は苦笑いを浮かべていたのだった。

「この旅行中に一夏にゆっくりと休んでもらうという計画は、刀奈と本音が原因で実行に移されてはいない。」

「お姉ちゃん、後二日だよ？ 一夏、全然休んでないじゃん」

「そうなのよね……でも、何時もより顔色は良いじゃない？ だから、多少は回復してるっばいのよ」

「多少じゃ意味が無いと思うのですが？ 特にお嬢様と本音は、この旅行中でも一夏さんに迷惑をかけっぱなしなわけですから」

「私そこまで迷惑かけてないもん！」

「自覚してないのですか？ お嬢様は普段以上に一夏さんに迷惑を掛けていますよ」
「まあ、確かに刀奈お姉ちゃんは、いつも以上に一夏さんに甘えてる風ではありますけどね」

虚に視線で問われ、美紀は苦笑いを浮かべながら彼女の意見を支持する。実際学園にいる時以上に一夏に甘えているのは確かなので、それがイコールで迷惑を掛けていると言えるのかどうかと悩んだが故に、苦笑いを浮かべているのだ。

「とにかく、残り二日は一夏さんには迷惑を掛けないでくださいね。本音、聞いていますか？」

「ほえ〜……」

「……寝ちやつてますね」

「またですか、この子は……」

闇鴉に叩き起こされしつかりと目を覚ましたはずだったのに、いつの間にか本音は眠ってしまった。

「もしかして本音って、赤ん坊なの？」

「私たちより一つ年上のはずですが」

「まあ、これだけ寝てたら育つわよね……」

「姉さまたちと同じDNAを持っているんですから、希望はありますよ……」

マドカとマナカの視線が、本音の一部分に固定されているのを見て、虚と簪も同じように本音の一部分に視線を向けた。

「また大きくなってるような気が……」

「あれだけ食べても太らないのも羨ましいですが、何故こんなに成長してるのでしょうか……」

「簪ちゃんも虚ちゃんも気にし過ぎだって。一夏君は大ききなんて気にしないみたいだし」

「俺が、どうかしましたか？」

刀奈の大声に反応した一夏が、内緒話をしていたメンバーに視線を向けたが、刀奈が

「何でもない」という感じで手を横に振り、一夏の興味を逸らしたのだった。

「とにかく、残り二日間は一夏君を休ませるのね？」

「お嬢様と本音が自重してくださいれば、普通に休んでくれると思いますので」

「後は、篠ノ之博士が乱入してこなければ、だけどね」

本当に東が現れたのかと、疑わしい視線を刀奈に向けながら呟く簪。その視線に刀奈はウソ泣きをしながら簪に抱きつき、一夏に何事かと視線を向けられるのだった。

「何でもないよ、一夏。ちよつとお姉ちゃんかウソ泣きをしてるだけだから」

「……簪が問題ないならそれでいいが」

ウソ泣きの原因が少し気になったようだが、一夏は再び視線を元に戻し、碧とまつたりとお茶を飲むのだった。

落ち着かない一夏

ゆつくりとしろと言われても、普段から忙しく働いている一夏としては、何もしいという事自体慣れていないため、微妙に居心地が悪そうにしていた。

「一夏君、なんだかそわそわしてない？」

「何もしないということが、こんなにも落ち着かないことだとは知りませんでした」

「一夏、それって変だよ？」

「そうなのか？」

普段からだらだらしている本音は、実は凄いのではないかと思いついて一夏だったが、自分が変だと譬にツッコまれて、とりあえずその考えは捨てる事にした。

「だが、全然落ち着かないし、何かした方が良いんじゃないかって思ってしまったんだが……」

「それは一夏さんが休み慣れしていないからでしょう。ほぼ毎日忙しく働いていたんですから、急に何もなくなっていいと言われてれば落ち着かないのも仕方ないでしょうね」

「そんなものか？　だが、普通のサラリーマンなどは休日こそわそわするような事は無

いんだろ?」

「それは私たちにも分かりませんよ。私たちはまだ学生ですし、碧さんも一般的な企業の間人ではありませんから、あまり参考にはならないでしょうし」

「まあ、私の場合は休日という概念が存在しませんからね。年がら年中一夏さんの護衛と、その他諜報活動と、一夏さん同様休み慣れしてませんから」

「それにしても、碧さんは落ち着いてますよね?」

どうしてですか、と一夏に視線で問われ、碧はニツコリと笑みを浮かべながら答えた。

「現在も私は、一夏さんの護衛として働いているわけですから。休んでいるわけではありません」

「なるほど……だがそうなる、いよいよどうすればいいのか分からなくなってくるな」

「一夏君でも、分からない事があるのね」

「……刀奈さんは俺を何だと思ってるんですか」

知らないことくらいあるという意味を込めた視線を向けると、刀奈はそれもそうかという感じで舌を出して片目を瞑った。

「ゴメンね。一夏君は何でも知ってるって思ってたから」

「まあ、一般的な勉強やI・S関連については、大抵の事は分かりますが、その他は人より知らないことの方が多いいと思いますよ」

「そうなの？ ……そう言えば、一夏君は両親の愛情とか、そういうたもの知らなかつたんだっけ」

「それはマドカやマナカ、言っちゃえば織斑姉妹も同じだと思いますよ」

「親の愛情なんて都市伝説だと思っけど？」

「私たちが特殊だと思っけど……まあ、とりあえず私たちの中では存在しないものですね」

一夏に続き、マナカとマドカも特に気にした様子の無い口調で淡々と話す。彼らの中では特に気にするような事ではないのだろうが、刀奈たちは気まずい雰囲気にも包まれてしまった。

「とりあえず、そんなに気にする事ではないので、刀奈さんたちが落ち込む必要は無いですよ。俺たちが特殊なんだと、十分理解してますから」

「そう……でも、家族の愛情は知ってるでしょ？」

「まあ、俺は義理の家族に恵まれましたし、それ以外にもお世話になってますからね」
「私たちも、お兄ちゃんに愛されてるもんね」

「私は、貴女のように言い切れるのが少し羨ましいですが、確かに兄さまには愛情を注いでもらっていますね」

「だから、一夏君たちも両親がどうだとか気にしてないのね」

「そう言う事です」

一夏たちを慰めようとしたはずが、いつの間にか自分が慰められている事に気付き、刀奈は首を傾げたが、割と何時もの事だという事に思い至り、これ以上考える事を止めたのだった。

「ところで、さつきから本音が静かですが、また寝てるんですか？」

「する事がないと言って、先ほどからまた……」

「どれだけ寝れば気が済むんだ、こいつは……」

「一夏様、叩き起こしますか？」

「いや、放っておこう。夜寝られなくても無視すればいいだけだしな」

「いやあ、本音の事だから、これだけ寝ても夜は普通に寝ると思いますよ」

「……ありえそうだな」

美紀が零した言葉に、一夏も苦笑いを浮かべながら頷く。どれだけだからでしょう

と、どれだけ昼寝しようと、本音は夜きちんと寝るのだ。寝すぎではないだろうかと心配になるくらい寝ているのだが、特に体調に支障をきたすことなく、常に健康体なのだ。「そう言えば、本音って風邪をひいたことあるの?」

「俺が知る限りではないな……俺が更識に来る前はどうなんです?」

「私たちが知る限りでも、本音が風邪をひいた事は無いわね……」

「それじゃあ本音って、バ——」

「おっと、それ以上はいうな。思っても口にしてはいけない事はあるんだぞ」

マナカの唇に指を押し当ててそれ以上発言できなくする一夏。ここにいる全員が一度は思ったことがあることなので、あえて言葉にしなくても全員が理解しているのだ。

「まあ、こいつが忙しなく働いてたら、それはそれで怖いですけどね」

「確かに……篠ノ之さんが敵だった時は、多少頼れたけどね……」

「篠ノ之さんと相性が良かったんだらうね」

「すぐに激昂する箒ちゃん、何を言われてものほほんとしてる本音だもんね……相性最悪よ」

「それは感心する事なのでしょうか?」

マドカが零した疑問に、全員が苦笑いを浮かべながらマドカから視線を逸らした。つまりはそう言う事なのかと理解したマドカは、つられるように苦笑いを浮かべたのだつた。

一夏の風呂事情

ほぼ一日中寝ていた本音は、夕食の時間になりようやく目を覚ました。それでも眠そうに目を擦りながら、しれっと一夏の隣に腰を下ろすあたり抜け目がない。

「いつちー……なんだか呆れてない？」

「むしろ呆れられてないとも思ってるのか？ 一日中寝てたくせに、何でまだ眠そうなんだよ」

「睡眠は人類の宝だからね。いくら寝ても足りないんだよ」

「それだけ体力が有り余ってるのなら、学園に帰ったら本音には特別メニューでも考えてやろうか？ そうすれば必要以上に寝る必要も無くなるだろう」

「疲れたらそれだけ眠くなると思うんだけどね」

「寝てる時間を有効的に使った方がこちらの仕事も減るからな。本音には篠ノ之の相手を任せようと思ってる」

「シノノンの相手？ VTSとかで相手すればいいの？」

「お前は必要以上にアイツのことを警戒しないからな。ちよūdい距離感で接する事が出来ると思う」

一夏の考えに、刀奈と虚も同意を示す。

「確かに本音なら、箒ちゃんと普通に接する事が出来るかもね」

「何も考えていないだけだとも思えますが、必要以上に警戒しない相手の方が、篠ノ之さんもやりやすいでしょうしね」

「そう言うわけだから、学園に戻ったら昼寝する暇などないと思え」

「じゃあ、後二日はだらだらとしてようかな」

「残念ながら、これ以上だらだらされるとこつちが困るから、明日はこの付近を全員で散策する事になった」

「そんなこと聞いてないよ〜?」

「一日中寝てたからな。聞いてなくて当然だろう」

何か文句を言いたげな本音だったが、文句を言うのも面倒になったのか、そのまま夕食に手を伸ばした。

「そう言えば、今日初めての食事かもしれないよ〜」

「朝も昼も、お前は寝てたからな……」

「もったいないので私がいただきました」

「ほえく？ 闇鴉つて物を食べられたんだねく」

「栄養補給などの必要性はありませんが、食べる事自体は問題なくすることが出来ますので」

「ちなみに、晩御飯も本音が目を覚まさなかつたら闇鴉が食べる事になってたんだからな」

「危なかつたよ。さすがに何も食べないとお腹がすいて寝られないからねく」

「まだ寝ようとする意志がある事自体が驚きだがな……」

本音の言葉に苦笑いを浮かべながら、一夏は他のメンバーと共に食事を再開するのだった。

食事を終えた刀奈たちは、初日のリベンジという事で全員でお風呂に入ることにした。一夏は少し嫌そうな素振りを見せたが、長時間湯船に入るとは強要しないという条件で一緒に入ることを了承したのだった。

「それにしても、やっぱり男の子だよね、一夏君も」

「何ですか、いきなり」

「背も高いし、鍛えてるだけあつて引き締まってるし」

「あの、あんまりペタペタ触らないでくれますか?」

「あつ、ゴメンね……でも、つい触りたくなっちゃうのよね」

「何となく気持ちちは分かりますが、お嬢様は触り過ぎです」

「そうだよ。一夏、私も触っていい?」

「別に構わないが……風呂に入るんじゃないか? 何時まで脱衣所でこうしてる

つもりなんだ?」

「そうだね。じゃあ、お風呂の中で触っていい?」

簪が上目遣いでお願いとすると、一夏も仕方ないという雰囲気でも頷いたのだった。

「兄さま、早く来てください!」

「今日も私たちがお兄ちゃんの背中と頭を洗ってあげるね」

「マドカちゃんとマナカちゃんばつかズルい! って言いたいけど、二人とも子供の頃に甘えられなかった分今甘えてるんだもんね……仕方ないか」

刀奈が二人に嫉妬しながらも仕方ないと言った以上、他のメンバーが文句を言う事は無かった。内心では自分も一夏の頭や背中を洗ってみたいと思っただけでも、幼少期に甘えられなかった妹たちを優先してあげるべきだという考えはしっかりと持っているのだ。ここは我慢すべきだと全員が共通の思いを抱いたのだ。

「兄さまは普段シャワーで済ませていると聞いていますが、その割にはしっかりと頭を洗われているんですね」

「当然だろ?」

「姉さまは面倒だと、本当にシャワーを浴びるだけで済ませると聞きましたので」

「あの二人と同じにはされたくないな……」

「あの二人が不潔だろうがそうじゃなからうが関係ないけど、お兄ちゃんが不潔なのはちよつと嫌だな……お兄ちゃん、学園でも私たちが洗ってあげようか？」

「さすがにそれは看過できないわね。一夏君と学園でも一緒に風呂に入るなら、私たちだつて一夏君の事を洗ってあげたいもの」

「てか、俺は学園の風呂を使えないはずですよね？」

「そこはほら、織斑姉妹の力と、私の権力でどうとでもなるわよ？」

「……普段会長らしいことしないのに、こういう時だけは会長の権力を使うんですか。ですが、自分で洗ってますし、風呂は嫌いなんです」

はつきりと断つた一夏に、全員が残念そうにため息を吐く。

「碧さんまで……」

「あつ、いえ……ついつられてしまいました」

「とにかく、学園では風呂には入りませんので」

もう一度はつきりと宣言して、一夏は黙つてマドカとマナカに洗われる事にしたのだった。妹二人は、そんな兄の態度に明らかガツカリ感を醸し出しながらも、洗える

ことの幸せを噛みしめているような表情を浮かべていたのだった。

無理をさせない程度で

無理はさせないという約束で一緒にお風呂に入ってもらったため、刀奈たちは一夏に洗ってもらいたいという気持ちを抱きながらも、なかなか言い出すことが出来ず、ただやきもきとした気持ちを抱きながら妹二人に洗われる一夏を眺めていた。

「こういう時はお姉ちゃんが特攻するんじゃないの?」

「何時もならそうするけど、今日は一夏君に無理をさせないという約束があるから……一夏君って、私たちと触れ合うのも極力避けてるじゃない? だから、お願いすると『無理』に当たつちゃうんじゃないかってさ……」

忘れがちだが、一夏は女性恐怖症なのだ。このメンバーならある程度の触れ合いは可能だが、調子に乗って避けられるようになってたら立ち直れないと刀奈は考えており、ここでの特攻はなるべくならしたくないのだった。

「お嬢様でもそう言う事を考えるのですね」

「それってどういう意味よ!」

「刀奈お姉ちゃんは普段、何も考えてないように見えるって事だよ」

美紀が苦笑いを浮かべながら虚の気持ちを代弁すると、その通りだと言わんばかりに虚と簪が力強く頷いた。

「刀奈様は、考えてないようであらうで考えてるんだなうって思いました」

「本音にだけは言われたくないわよ！ 貴女こそ、何も考えてないじゃないの！」

「そんなことありませんよ。私だつていつちーが無理してないか心配してるんですから」

「説得力が皆無な事を言つてないで、貴女はもう少し働いたらどうなんですか」

妹の言葉に説得力を感じなかった虚がそう呟くと、本音は心外だと言わんばかりに立ち上がった。

「おねくちゃんは今も少し私の事を信用してくれても良いんじゃないかな？」

「信用したくなるような結果を残してからそう言う事は言いなさい」

「とにかく、今は一夏君に無理をさせないようにしなきゃいけないんだし、この気持ちは我慢するしかないわね」

「何を我慢するんですか？」

マドカとマナカに洗ってもらっていた一夏に今の声が聞こえたようで、少し離れたところから一夏の声が飛んできた。

「な、何でもないのよ……つて、あれ？　一夏君、マドカちゃんとマナカちゃんの頭を洗ってあげてるの？」

「これくらいなら問題ないですから。それに、妹との時間が無かったのは俺も一緒ですからね」

「そっか……良いな、二人とも」

小声で呟きながら、指でも咥えそうな雰囲気呟いた刀奈に、一夏は苦笑いを浮かべた。

「皆さんも頭だけで良ければ洗いますよ？」

「えっ、いいの!？」

「え、ええ……それ以上は無理ですけどね」

先に断っておくことで、一夏は頭だけなら無理にはならないという。刀奈たちは顔を見合わせ、満面の笑みを浮かべて頷いたのだった。

「じゃあお願いね」

「順番ですので、それはそちらで決めておいてください。その間にマドカとマナカのを洗い終えておきますので」

「了解よ！」

とりあえず一夏に洗ってもらえることになったが、その順番をどうやって決めるかで再び頭を悩ませる。

「どうやって決める？」

「じゃんけんで良いんじゃない？」

「勝つても負けても恨みつこなしだからね？」

「でも確か……碧さんってじゃんけんすごく強かったんじゃない？」

美紀が零した言葉に、全員が碧の方に視線を向ける。

「そんなことありませんよ。精々勝率八割くらいなだけですよ」

「十分強いですって！　じゃんけんは却下ね……」

「別に私は最後で構いませんので、じゃんけんで決めても良いんじゃないでしょうか」

「碧さん……いいの？」

「ええ。私は刀奈ちゃんたちみたいに一番が良いってわけじゃないですから。一夏さん

に洗ってもらえるだけで十分ですよ」

大人の余裕、ではないが、碧は微笑みながら自分は最後に構わないと刀奈たちに告げる。

「それじゃあじゃんけんね。分かっているとと思うけど、後出しとかしたら洗ってもらう権利を剥奪するから」

「お嬢様じゃないんですから、そこまでして一番に洗ってもらいたいとは思いませんよ」
「そうですよ。そもそも、順番はそれほど重要じゃないと思ってますし」

虚と美紀の言葉に、簪と本音も頷いて同意し、刀奈も一安心という顔で一息吐き、真剣な表情に変わった。

「それじゃあ行くわよ——じゃんけんぼん！」

刀奈がチョコキ、後のメンバーはパーだ。

「ありや、まさか一回で決まるとは思ってたわ……」

「お姉ちゃん、こういう時強いよね」

「お嬢様が一番乗り気でしたから、当然と言えば当然の結果なのかもしれませんね」

「それじゃあ、残りの順番も決めちゃって」

一番に洗ってもらえることになった刀奈は、既に浮かれ気分に残りの勝負を見学する事にした。

「それじゃあ、順番は私、虚ちゃん、本音、簪ちゃん、美紀、碧さんで決定ね」

「意外とあつさり決まりましたね」

「美紀ちゃんが一人負けしたのは驚いたけどね。じゃんけん、弱かったっけ？」

「時の運ですから……」

負けた時に出したグーを眺めながら、美紀が弱々しく呟く。余程悲しかったのか、自分の拳を恨みがましく眺める美紀の背中を、簪が優しく叩く。

「洗ってもらえることには変わりないんだし、そんなに落ち込まないで」

「分かってるけど、負けるのって悔しいんだよ……」

「じゃんけんなんだから、負ける時くらいあるよ」

こんな時まで負けず嫌いを発揮しなくてもいいのにと、簪は苦笑いを浮かべながら美紀を励ましたのだった。

小さな賭け事

いぎ洗ってもらおうとなると緊張してしまい、刀奈の動きはかなりぎこちないものになつてしまつていた。

「お姉ちゃん、なんだかカクカクしてない？」

「この前一回洗ってもらつてるんですから、今更緊張しなくても良いと思うんですけどなあ」

「お嬢様は変なところが純情ですからね」

「変なところつてなによ!？」

「普段は一夏さんに抱きついたり痴女っぽく振る舞つたりしてるくせに、こういうところでヘタレてしまうから、そう言われるんですよ」

「だつてえ……」

一夏が反撃してこないと分かっているから、刀奈も普段は年上っぽく振る舞つて一夏をからかつてみたりしているのだ。今回も何もされないと分かつてはいるが、いぎ触られるとなると緊張してしまうのは無理もないのだ。

「別にお嬢様が辞退するのであれば、次の私が一夏さんに洗ってもらうだけですが」

「じつ、辞退はしないもん！ただ、物凄く緊張しちゃって……」

「どうでも良いけど、一夏が待つてるよ」

簪にいわれ、一夏の方を見ると、一向にこちらに来ない刀奈を見て首を傾げていた。

「刀奈ちゃん、頑張つてね」

「ううう……行つてきます」

何時までもうだうだしていても仕方ないと開き直ればいいのだが、そう言う事が苦手な刀奈は、緊張したまま一夏の許まで進んだ。

「珍しいですね。こういう時は喜々としてやってくると思ってたんですが」

「い、一夏君は私を何だと思ってるのよ！す、好きな人に触ってもらえるんだから、緊張くらいするわよ」

「そんなものですか？てか、この前刀奈さんも洗いましたし、その後に腕枕もしたんですけど……」

「あつ、あれは……」

思い出して恥ずかしくなったのか、刀奈の顔は真っ赤に染まり、背後にいる一夏にもそれはバレてしまっているようだった。

「とりあえず、後五人洗わなければいけないので、早いところ始めても良いですか？」

「ううう……一夏君も意地悪ね……」

「いえ、嫌なら最後に回してもらっても良いんですが」

「それまでこんな気持ちでいたら逆上せちゃうわよ！ お、お願いします」

覚悟を決めたのか、刀奈は微動だにせず一夏に洗われるのを待つ。そこまで緊張しなくてもいいのではないかと思いつつも、一夏はゆっくり、優しい手つきで刀奈の髪を洗い始める。

「この前もそうだったんだけど、一夏君に洗ってもらうと翌日の髪の毛の質が違う気がするのよね」

「そんなこと無いと思いますが」

「ううん、私だけじゃなくってみんなが思ってたことだよ」

「この旅館のシャンプーが良いものだからじゃないですかね」

一夏としては、洗髪の技術など持ち合わせていないのだから、勘違いかシャンプーの

違うだろうと思っっているのだが、実際に洗われたメンバーは一夏のおかげだと確信していた。

「それじゃあ、明日の朝どうなってるか賭けてみる？」

「生徒会長が率先して賭け事とは感心しませんよ」

「大したものを賭けるわけじゃないんだし、これくらいは娯楽の範囲よ」

「……それで、何を賭けるといいますか？」

「そうねえ……」

刀奈は頭を動かさずに考え込み、そしてひらめいたとばかりに両手を打った。

「明日の晩御飯は、一夏君が作るってのはどう？」

「料理人の仕事を奪う事になりますか？　そもそも、その判定は誰がするんですか」

「私たち全員がそう感じたら一夏君の負け。一人でも勘違いだったかもと思えば、私たちが負けでどう？」

「いや、どうも何も……仕事を奪うのはどうかと思いますし、慰安旅行なんですよね？」

「じゃあ、学園に帰ったらでいいから！」

どうしても一夏の料理が食べたいようで、刀奈はそこだけは引くことは無かった。一

夏の方もついに折れ、その賭けを受ける事にしたのだった。

「ところで、俺が勝つたら何をしてもらえるんです？」

「私たちが一夏君のご飯を用意するわよ」

「刀奈さんたちが？　ですが、虚さんはそういった事が苦手だったような……」

「虚ちゃんと簪ちゃんには、材料の調達とか洗い物とかを頼むから平気よ」

「まあ、お二人の料理も問題なく食べれるので良いんですが……はい、終わりましたよ」

流すから口を閉じろと言外にいわれ、刀奈は目と口を閉じる。勢いよく流すのではなく、丁寧に流してくれたため、刀奈は非常に満足顔で一夏の方に振り返った。

「ありがとう、一夏君」

「どういたしまして。では、次の人と変わってください」

「分かったわ。次は虚ちゃんだからね」

意気揚々と他のメンバーが待つ湯船に向かう刀奈を出迎えたのは、少し不機嫌そうな顔をした簪以下全員だった。

「な、なに？」

「お姉ちゃん、一夏に見られてたよ」

「見られてたつて、なにが？」

「最後、身体ごと反転してたから、お姉ちゃんの全部」

「あつ……」

完全に無意識だったため、恥ずかしいとか「一夏君のエッチ」とかいうやり取りも無かったが、今更ながらに恥ずかしさが込み上げてきて、刀奈は静かに、だが素早く湯船の中に逃げ込んだのだった。

「やっぱり、お嬢様は変なところが純情ですね」

「ううう……せめてもう少しウエストが細ければよかったのに……」

「刀奈ちゃんは十分魅力的な身体つきだと思うけどね」

「ここでもやはり大人の余裕からか、碧は照れている刀奈にフォローを入れるのだった。」

普通の親への気持ち

虚、本音、簪、美紀の順に髪を洗い終えた一夏は、最後の一人である碧の髪を洗い始める。

「すみませんね、一夏さん。私まで洗ってもらっちゃって」

「碧さんだけ仲間はずれにするわけにもいきませんし」

「ほんとに、一夏さんは律儀ですよね」

「別に律儀とか、そういうた事じゃないですよ」

「では？」

互いに顔は見えないが、一夏は碧が笑っているのをなんとなく分かっていった。碧も、一夏が少し照れているような雰囲気を感じ取っているので、そういうた表情になっているのかもしれない。

「一応、婚約者となっている他の人の髪を洗ったのに、碧さんだけ洗わないのは嫌っているから、とか思われなくなかったので……」

「そんな勘違いはしませんけど、ちよつと不貞腐れたかもしれないですね」

「こうして苦手な風呂に入って、皆さんを満足させられるのは、この程度しかありませんからね」

「長時間入っていると、一夏さんは逆上せちやいますからね」

「元々湯船に浸かる習慣がないものですからね……」

話しながらも、一夏は丁寧に碧の髪を洗っていく。絶妙な力加減に満足している碧は、終始笑みを浮かべたままである。

「ありがとうございます、一夏さん」

「何です、いきなり」

「一夏さんが私たちに心を開いてくれたお陰で、こうして楽しい毎日が送れてるんだなと、改めて思っただけです」

「それを言うなら、こんな俺を受け入れてくれてありがとうございます」

「私たちは一夏さんが好きで、大事に想っているから一緒にいるだけです。一夏さんは嫌だったら逃げ出せたんですから」

「初めはビクビクしてましたけど、皆さん優しくかったですから」

髪に着いた泡を流し、終わりだと告げる一夏に、碧は振り返って満面の笑みを浮かべ

た。

「一夏さんにだったから、私たちは優しく接する事が出来たのかもしれないね」

「それはどういう……」

「刀奈ちゃんたちの周りには、男の子なんていませんでしたから。その中でも簪ちゃんは異性に対する免疫力が低かったですから、もしかしたら嫌がったかもしれないなかつたんですよ？」

「そうだったんですか……まあ、今も俺以外の男子と接する機会など殆どないわけですからね」

碧の言い分に納得したように頷く一夏。そこでようやく碧が自分の方に振り返っていると感じ、慌てて視線を逸らした。

「今更ですか？」

「……意識すると大変なんですから」

「普段はかっこいいですけど、こういうところは可愛いですよね、一夏さんって」

「高校生にもなつて、可愛いと言われて喜ぶ男はいないと思いますけどね」

少し不貞腐れた雰囲気です返す一夏を見て、碧はますます顔を綻ばせたのだった。

早々に風呂から退場した一夏の話で盛り上がる刀奈たちだったが、さっきの一夏と碧のやり取りを思い出して問い詰める事にした。

「碧さんは、一夏君と何を話してたんですか？」

「特筆すべきことは何も。普通に一夏さんに髪を洗ってもらったことに対するお礼と、ちよつとした昔の話をしていただけです」

「昔の？ それって、私たちが子供だった時のことですよね？」

「そうですね。簪ちゃんが最初は一夏さんに対して苦手意識を持っていた事とか」

「なっ!?! 何でそんなことを言っちゃうんですか!」

「今は違うでしょ？」

「それは……当然です」

自分の嘸み付き程度では碧の余裕を崩す事は出来ないと自覚し、簪は素直に負けを認めた。

「かんちゃんも男の子が苦手だもんね〜」

「だって、凶暴で自分勝手に、今の世の中に文句ばかり言って自分では何もしようとしてないって聞かされてたからさ……」

「そう言えば、お父さんがそんなこと言ってたね」

「ISが誕生してから、世界は大きく変わってしまいましたからね……先代当主様が嘆いたのも仕方のない事でしたけどね」

「楯無様は何とかして世の中を変えようと模索されておりましたが、その志半ばでこの

世を去られてしまいましたからね」

一夏に可能性を見出しており、この子なら今の世の中を変えられるかもしれないと希望を抱いた矢先に、先代当主はこの世を去ったのだ。その事を知らないマドカとマナカは、無理に話に入っていくことはせず、黙って湯船に浸かっていた。

「マナマナもマドマドも、そんな顔しなくても平気だよ。別に、悲しいお話ってわけじゃないんだしさ」

「ですが、先代の楯無さんというのは、刀奈さんと簪のお父さんなんですよ。普通の家族は、いなくなられたら寂しいものではないのですか？」

「確かに死んだって聞かされてしばらくは悲しかったです。泣いたりもしました。でも、何時までもそこに留まっていたら駄目だって分かってたからね。それに、一夏君が慰めてくれたから」

「ほんとに悲しかったし、何でお父さんがとも思った。でも、今はこうして泣かずに話せるようにはなってるから、マドカたちが気にする事じゃないよ」

「まあ、私たちに普通の親の話は分からないからね。その意味でも黙って聞いてたんだけど、やっぱりお兄ちゃんは凄いなだね」

「結局はその結論に行きつくのね」

マナカの導き出した結論に苦笑いを浮かべながらも、刀奈たちはそろって笑いあつたのだつた。

評価の原因

じゃんけんの結果一夏の隣で寝るのは本音と刀奈に決まり、一夏はなんとなく疲れそうな予感がしていた。普段はすぐに寝てしまう本音も、一日中寝ていた所為で目は冴えており、こういう時に無駄にテンションが上がる刀奈は、当然の如くすぐに寝ようとはしなかった。

「一夏君、まだ起きてるわよね？」

「まあ、普段もこんな時間には寝ませんから。それで、何か用ですか？」

「さっきの約束、忘れてないわよね？」

「約束？ ああ、あの賭け事の事ですか？ ですが、よく他の人が承諾しましたね」

「一夏君の美味しいごはんが食べられるとなれば、全員が参加するに決まってるじゃない」

「そんなものですかね？」

一夏自身としては、そこまで美味しいと思ってくれるのなら、賭け事とか関係なく作ることろも吝かではないのだが、何分時間が無い為、こういう時くらいしか作ってあげら

れる機会は無いだ。

「いっちーのご飯が食べられるなら、多少ごわついても問題ないって言っちゃいそうだよね」

「まっ、そんなことあり得ないでしょうけどね」

「うんうん、いっちーに洗ってもらったんだから、髪の毛が痛んでるなんてありえないですよね」

本音と刀奈が揃って笑うと、その向こうから虚がうるさいと言わんばかりの視線を向けてきた。

「ご、ゴメンね虚ちゃん……ちよつとうるさかったよね？」

「ちよつとどころではなく、だいぶうるさいです。一夏さんだつて疲れているんですから、大人しくしてくださいね？」

「はい……」

虚に怒られては素直に頷くしかない、刀奈も本音も素直に虚の忠告を受け入れ、大人しく寝ようとする。だがもちろんその程度で眠気などやってくるはずもなく、怒られない程度の小声で会話を再開した。

「怒られちゃった……」

「他の人は寝ようとしてるんですから、あんな大声で笑ったら怒られるのも当然だと思いますが」

「一夏君までそんなこと言う……反省してるんだから」

「ところで、本音が随分と大人しくなりましたね」

「まさか？」

確かに会話に加わってこないなどは思っていたが、刀奈はあれだけ昼寝をしておいて簡単に寝られるはずもないだろうと思っていたので、一夏が冗談を言っているのだろうと決めつけていた。だが実際に本音の様子を窺うと、規則正しい寝息が聞こえてきたのだった。

「あれだけ寝てたのに、何でこんな時間に寝られるのよ……」

「まあ、本音だからという事にしておきましょう」

「そうね……本音だから仕方ないわよね……」

特技・寝ること、と普通に答えるくらい、本音は寝るという事に苦勞することは無いのだ。

「刀奈さんも寝たらどうです？ 何もしていないように色々としているんですから、刀奈さんだって疲れてるでしょうし」

「何もしていないようにでつてのは酷くないかしら？ これでも色々と頑張ってるんだから」

「知ってますよ。ですが、周りから見たら刀奈さんは仕事をしない生徒会長だと思われなくても仕方ないんですから」

「優秀な虚ちゃんも、もつと優秀な一夏君がほとんど仕事を片付けてくれるからね」

「刀奈さんだって優秀なんですから、もう少し目に見える範囲で頑張ってくださいよ」

「これでも頑張ってるんだけどね。周りの平均が虚ちゃんとかいう事になっちゃってるから、私は駄目判定になってるだけだもん。周りにどんな風に思われようが、一夏君がちゃんと評価してくれればそれで満足だから」

「簪に馬鹿にされた目で見られるのは嫌だ、とか言ってますでしたっけ？」

「そこが悩みどころなのよね……」

簪も、刀奈が駄目なのではなく、虚と一夏が凄すぎるのだという事は理解しているのだが、この三人を纏めて見ると、どうしても刀奈が駄目なのではないかという錯覚に陥るのだ。

「てか、職員室や政府がもう少し自分たちの仕事をしてくれたら、私たちだってこれほどまでに忙しい思いをしなくてもいいんだから、ダメな人を見る目は私にじゃなく、織斑姉妹や政府の人間に向けてほしいわね」

「織斑姉妹にそんな目を向けたら、この世から消されてしまうかもしれませんからね、普通の人は」

「なら、私にそんな目を向けた人だって、お仕置き対象になると思うんだけど？」

「まあ、サボり癖が治ってもなおそう言う目を向けて来る輩がいたら、お仕置きしますよ」

だからサボるなど言外にいわれ、刀奈は肩を竦めてみせた。

「一夏君に守ってもらえるなら頑張ってみようかな」

「俺がどうこうの前に、刀奈さんの立場から考えれば頑張るのが普通ですよね？ 生徒会長であると同時に、国家代表ですべてのIS乗りの手本となるべき人なんですから」
「だって、私の前の代表——碧さんは兎も角として織斑姉妹は手本となるような生活態度じゃないわよ？」

「あれは反面教師として役に立ってもらおうので別に良いんです。いや、良くないけど……」

「どっちなのよ……まあ、もう少し尊敬されるように頑張ってみるわね」
「そうしてください。ちなみに、俺は刀奈さんの事を尊敬してますから」

サラリと嬉しい事を言った一夏に、刀奈はどう反応すればいいのかに悩み、結局笑顔を浮かべるだけで終わってしまったのだった。

出発前に

出かける予定になっているからか、刀奈はいつもより早い時間に目が覚めた。といっても、虚より早いだけで、一夏と碧は既に目を覚まし、二人でお茶を飲んでいた。

「おはよう……二人とも、何時に起きてるのよ？」

「一時間くらい前、ですかね？」

「そうですね。そのくらいですね」

「何時もそのくらいなの？」

「だいたいそうですね」

二人とも少し考えてから答え、再びお茶を啜った。

「刀奈さんも飲みますか？」

「いや、まずはうがいしてくる……」

寝ぼけ眼を擦りながら、刀奈は洗面所へ向かい、うがいをして顔を洗った。

「せっかくのお休みなんだから、もう少し寝てればいいのに」

「そうは言われなくてもね……こればかりは習慣ですから」

「刀奈ちゃんだって、何時もとあまり変わらないんじゃない？」

「それはそうですけど……二人はいつも以上に休むべきだと思うのよね」

せつかくの休暇中に、いつも以上に疲れては意味がない。だから刀奈たちは一夏になるべく休んでもらえるようにと、甘い気持ちは抑えているのだ。それなのに一夏は、普段と変わらない時間に起床し、こうしてまったりとしているのだ。

「寝てた方が回復すると思うんだけどな……」

「寝続けるのって、結構大変なんですよね。だからこうして起きてまったりしてた方が、俺にはあつてるんだと思います」

「私ですね。常に気を張ってるのが癖になっているのか、寝ている間でも警戒してしまふんですよ。眼を閉じてる分、いつも以上に疲れてしまうので、寝てるよりかは起きて一夏さんとまったりしてる方が気が休まります」

「そんなものなの？」

不思議そうに首を傾げた刀奈に、一夏と碧は笑みを浮かべながら頷いたのだった。

続々と目を覚ましていく中、相変わらず本音は寝たままだった。

「この寝坊助娘、どうしましうか？」

「おいていつても良いんですが、本音も楽しみにしていたのは確かですしね」

「でもお姉ちゃん、この辺りってちよつと小高い丘があるくらいだね？ 本音が楽し

みにしてたのって何?」

「一夏君とお出かけする事、じゃないの?」

「それが正解でしょうね」

それほど景色が良いわけでも、一夏が弁当を作るわけでもないのに、他に楽しみにする
ることと言ったら一夏と出かけられるという事だけだろうと、刀奈と虚は結論付けた。

「さて、そろそろ起きてもらわないとな。午後からは天気が下り坂らしいから」

「では、私の出番ですね」

「何だか楽しそうだな」

「いえいえ、気のせいですよ」

意気揚々と本音に近づき、耳元で大音量を発生させる闇鴉。周りの人間は耳を塞いで
いるが、本音はダイレクトにその音を聞き跳び上がる。

「おはようございます、本音さん。そろそろ出かける時間らしいので、急ぎ用意をお願い
いたします」

「ほえ〜……もうそんな時間なの〜?」

「あれだけの音量を耳元で聞かされたというのに、何でまだ眠そうなんだよ……」

目を擦りながら立ち上がった本音に、一夏が不思議そうにつぶやく。その言葉に刀奈たちも頷いて本音を眺めていたが、何時もの事かと気にすることを止めたのだった。

「とりあえず着替えろ。散歩してる間に目は覚めるだろう」

「了解だよ……」

「寝るな！」

本音の頭にチョップを喰らわせて、一夏は部屋から出ていく。いくら家族同然とはいえ、女子の着替えを見るような趣味は一夏には無かったのだ。

「まったく。本音は何時までも手がかかるわね」

「お嬢様が言わないでください」

「私は、自分で起きれるし、一夏君の前で着替えようとなんてしないわよ」

「お姉ちゃんならありえそうだけど、確かに私より先に起きてるもんね」

着替える事はいりえそうだなと簪は思っていたが、確かに刀奈は自力で目を覚ましているし、簪や美紀よりも早い時間に起きている事の方が多い。

「とりあえず本音が着替え終えたら出発しましょう。一夏君が言ってたように、雲行き

が怪しいものね」

「雨は降らないでしょうが、どうせなら晴れている内に出かけた方がゆつくり出来ますものね」

「ほえ〜……着替え終わったよ〜」

「それじゃあ、さっそく行きましょう」

まだ眠そうな本音を引きずりながら、刀奈たちは一夏が待っている門まで移動する。途中で本音のお腹が鳴ったが、誰も相手にはしなかった。

「お腹減ったよ〜……」

「出かけると分かってて寝続けた本音が悪いんだから、お昼まで我慢しなさい」

「でも〜！ このままじゃお腹が減って歩けないよ〜」

「なら、一人でお留守番してる？ その間に私たちは一夏君とのんびり過ごすけど」

「それはズルいですよ〜！ いっちーを餌にするなんて、断れないじゃないですか〜！」

「餌とは酷い言い草だな……ほら、おにぎり作ってもらったから、歩きながら食べる」

「さすがいっちー！ 用意が良いんだから〜」

「一夏、本音を甘やかしすぎじゃない？」

「途中で寝られたら面倒だからな。自力で歩いてもらう為には、このくらいはするさ」

本音が寝てしまった場合、その場においていくか、一夏が背負って連れて帰るかの二択しかないのです、それだったら起きてもらってた方がありがたいと一夏は思っていた。だからあらかじめ用意しておいたおにぎりを手渡す事で、本音が寝落ちする事を避けたのだった。

更識勢の料理の腕

旅館のすぐ近くにある小高い丘でのんびりと過ごした一行は、天気が完全に崩れる前に旅館へ戻る事にした。途中で刀奈が何かを思い出したように手を叩き、一夏の隣に移動し、髪の毛を一夏に見せつけた。

「ほらほら、普段より纏まってるでしょ？」

「普段から綺麗ですよ、刀奈さんの髪の毛は」

「もう……一夏君はそう言う事をさりとて言うんだから」

褒められたことで、刀奈は顔を真っ赤にしたが、ここで撃退されては意味が無いと思ひ直し再び一夏に髪の毛を見せつける。

「一夏君が洗ってくれて、ドライヤーまでかけてくれたから、ここまで綺麗になってるんだよ？ 他のみんなだって、普段以上に髪の毛が綺麗になってるんだから」

「別に俺がやらなくても、皆さん綺麗なんですから気にしなくてもいいと思うんですが」
「だから、そう言う事をさりとて言わないの！ 賭けは私たちの勝ちだからね！」

「はいはい。学園に帰ったらそうですね……デザートでも作りますよ」

「わーい！ いっちーのデザートは美味しいから好きなのだ〜」

「本音は基本的に何でも食べるじゃない」

簪のツツコミに、本音は頬を膨らませて抗議をする。

「何でも食べるけど、いっちーが作ってくれたものは格別なのだ〜。それくらい、かんちゃんにだつて分かるでしょう〜？」

「確かに、一夏が作ってくれたものは美味しいけど、女としての自信を失くしそうになるんだよね……」

「分かります。一夏さんは気にしなくてもいいと言ってくれますが、女として料理の一つくらい出来た方が良いでしょうね……」

「簪ちゃんも虚ちゃんも、そんなに気にしなくても大丈夫よ。結婚しても私たちが家事をするわけじゃないんだしさ」

「そうですけど、たまには一夏さんに手料理を食べてほしいと思うんじゃないですか？ その時、作れないのは悲しいですし……」

更識家当主の嫁なので、基本的に家事は侍女に任せ仕事に励むのが普通だが、虚の言う通りたまには一夏に愛情たっぷり料理を食べてもらいたいと思う時はあるだろう。

その時になつて、作れないんだつたは悲しすぎる結末だと刀奈も理解出来てしまった。

「それじゃあ、時間が出来たら虚ちゃんと簪ちゃんの料理の腕を磨く特訓をしましょう」
「お姉ちゃんが教えてくれるの?」

「一夏君に頼んだら本末転倒じゃない? 一夏君に少しでも近づこうとするのに、その一夏君に教わるのはどうなのよ?」

「別に良いんじゃないですか? もちろん、一夏さんに時間的余裕があれば、ですけど」
「私が教えてあげてもいいよ?」

一夏の次に料理上手なのは、意外な事に本音なのだ。だから本音が自分から講師を買つて出たのだが、簪と虚はそろつて微妙な表情を浮かべていた。

「本音に教わるのはね……」

「そうですね。本音に教わるのは、いくら料理下手とはいえ気が進みませんね……」

「何でさ〜! おねくちゃんもかんちゃんも、私が料理上手だつて知ってるじゃないか
〜!」

「だからですよ」

「ほえ?」

普段だらだらしているくせに、何故か料理の腕だけは確かなものを持っているのだ。それが簪と虚は気に入らないのか、本音に教わるのだけは断固として断る方針で決定していた。

「私か碧さん、どちらかが時間的余裕がある時で良いんじゃない？ もちろん、美紀ちゃんでも良いけどさ」

「私は誰かに教えられるほどの腕は持っていません。必要最低限しか出来ませんので」
「それだと、私と虚さんが必要最低限の腕すら持つていないって事になるね」

「あつ、いや……そんな意図は含んでないから！」

言外にディスプレイされたと受け取った簪に、美紀が慌ててフォローに入る。確かにそう受け取られても仕方ない事を言ったかもしれないが、美紀にそんな思いは一切ないのだ。
「簪も虚さんも気にし過ぎだと思いがな。ISに関わってるんだから、他の事で苦手が出来てしまっても仕方ないと思うんだが」

「でも、お姉ちゃんや本音は料理上手なんだよ？」

「その代わり二人は、仕事をサボったり怠けたりと、人間としての欠陥があるからな」

「それって酷くないっ!？」

「そう言われたくないのでしたら、もう少し生徒会長としての自覚を持ち、仕事をするこ

とをお勧めします」

「分かったわよ……簪ちゃんたちが苦手を減らそうと努力するんだし、私も嫌いな仕事を頑張つてやります」

刀奈の宣言に、一夏は満足そうにならずに、再び視線を簪と虚に戻した。

「努力する事は良い事ですが、無理だけはしないでくださいね。下手をして織斑姉妹まで出て来たら、料理部から何を言われるか分かったものではありませんので」

「確かに、活動場所を爆破されたらどんな要求をしてくるか分からないものね……特に、シャルロットちゃんが所属している部活だし」

「シャルがどうかしましたか？」

「ううん、女の子にしか分からない問題だから」

「はあ……」

そう言われてしまつては一夏は踏み込むわけにもいかないのです、納得出来なくても無理矢理自分を納得させてこの話題を終わらせる。

「ところで一夏、マドカとマナカの料理の腕つて——」

「……………」

簪に話を振られて、双子はそろって簪から視線を逸らした。それで察した簪は、それ以上話を振ることは無かったのだった。

訓練の相談

あつという間に残り一日も終わり、更識勢は碧の運転でIS学園へと戻る事になった。

「何だかあまり休めなかったわね」

「それはお嬢様たちが一夏さんの妨害ばかりしていたからではないでしょうか？」

「そんな事ないわよ！ 一夏君、私たち、邪魔してないわよね？」

「そうですね。まあ、俺が休み慣れてなかったのが一番の原因でしょうね」

刀奈の問いかけに、一夏は苦笑いを浮かべながら首を振った。

「帰ったらまた仕事なんだよね？」

「さすがに今日は無いが、明日には篠ノ之さんの件で日本政府に出頭する事になっていく。尊さんが代理を申し出てくれたが、さすがにこれは任せるわけにはいかないからな」

「篠ノ之さんの件で？ まだ何かあったの？」

「国際指名手配の取り消しと、正式に学園に復帰させるための手続きとか、その他諸々先

延ばしにしてたからな。いい加減済ませておかないと三学期からの復帰が難しくなるからな」

「そう言えば、今のところは仮復帰だったんだっけ……普通に馴染み始めてたから忘れてたわ」

「お嬢様は覚えておかなければいかなかったことなのですか?」

虚が冷たい視線を刀奈に向けると、ゆっくりと虚から視線を逸らして、一夏にすり寄っていった。

「学園の方は私たちが何とかしておくから、一夏君は一度で終わらせちゃってね」

「もともとそのつもりですし、刀奈さんたちには篠ノ之さんの指導をお願いすると思いませんよ」

「箒ちゃんの? 生徒会の仕事は良いの?」

「年末年始でそれほど仕事が溜まってるとは思えませんし、かといってだらだらと過ごされるのはもったいないですからね。実力者に混じって訓練すれば、おのずと篠ノ之さんの実力も上がっていくでしょうし」

「でもさ、一夏。篠ノ之さんが動かせるI Sは無いんだよね? V T Sで訓練するの?」

「それだけでも良いが、質の高い訓練を見せるだけでも、何かしらのヒントにはなるだろ

う。特に国家代表が三人もいるわけだし、見学だけでも意味はあると思うぞ」

一夏が簪の頭を撫でながら、美紀と刀奈にも視線を向けた。正式に代表に決定したばかりだが、既に優勝候補筆頭と言われている簪と美紀、そして連覇が確実視されている刀奈の訓練を見れば、かなりの経験になるだろうと考えているのだ。

「それだったら、碧さんも参加してもらった方が良いんじゃない？　なんていったって無傷で世界を制したんだしよ」

「残念ですが、私も明日は政府へ向かわなければいけませんので」

「碧さんも？　何で？」

「私は一夏さんの護衛ですから。それにI S学園の教師としても、手続きやらのお手伝いをしなければいけませんので」

「本来なら織斑姉のどちらかを連れて行くべきなのでしょうが、あの二人のどちらが来ても面倒なので、碧さんに同行をお願いしました」

「なるほど……」

千冬と千夏、あの二人は日本政府の人間に対して敵意を剥き出しにする傾向がある。碧も日本政府の人間は嫌いだが、あの二人と比べればかなり大人な対応をするので、一

夏が碧を付き添いに指名したのは刀奈たちも納得出来るものがあつた。

「そうなるよ、虚ちゃんにでも参加してもらおうかしら？ 一対二よりかは二対二の方が簀ちゃんたちの訓練にもなるし、本音には簀ちゃんの見張り兼付き添いをお願いすればいいし」

「私たちはどうすればいいのでしょうか？」

「そうねえ……お姉さんたちを誘つて、姉妹水入らずで訓練でもしてみたら？ あの二人の事だから、大喜びで引き受けてくれると思うわよ」

マドカの問いかけに、刀奈は少し考えてから人の悪い笑みを浮かべながらそう答える。マドカもマナカも、実力的には高いものを有しているが、候補生相手だと少し苦戦するのではないかと刀奈は感じていた。それだったら最強の姉に指導してもらえば、飛躍的には無理でも確実に成長はするだろうと思つたのだ。

「あの二人と一緒にやるくらいなら、マドカと二人きりで訓練した方がマシ」

「そうでしょうか？ 態度は兎も角実力は兄さまの折り紙付きですし、現に無傷で世界を制したのですから、姉さまたちに指導していただければ、多少なりとも成長はすると思ふのですが」

「成長する前に衰弱するわよ、あの変態と一緒にいたら」

「……まあ、疲れるのは確かでしょうね」

一夏だけではなく、マドカやマナカに対しても変態的執着を見せるようになってきた千冬と千夏の姿を思い浮かべ、マドカは力なく首を左右に振った。

「まあ、マドカたちは鈴と一緒に訓練すればいいだろう。あそこのメンバーは候補生も大勢いるし、それに準じる実力者たちもいるからな。そこでなら成長も見込めるだろうし、マナカはもう少し他人と仲良くする術を身に着けような」

「お兄ちゃんがそう言うなら……」

「兄さま、マドカも撫でてほしいです」

「良いなくマドマドとマナマナは〜」

「本音だって、十分一夏に甘えてると思うけど」

一夏に頭を撫でてもらい、気持ちよさそうに目を細めるマナカと、それを見て自分も撫でてほしいと甘えるマドカを見て呟いた本音に、簪がツツコミを入れる。この中で血縁者である二人を除けば、一番甘えているのは本音だと簪は思っているのだった。

「まあ、二人の事は帰ったら鈴に頼めばいいだろうし、そろそろ篠ノ之さんに反応するI Sが出てくるころだと思うがな」

誰に聞かせるでもなく呟いた一夏の言葉に、
運転席の碧が笑みを浮かべて頷いたの
だった。

鈴からの報告

学園に戻ってきた一夏を出迎えたのは、織斑姉妹と鈴だった。

「珍しい組み合わせだな……篠ノ之さんが何かしたんですか？」

鈴だけならそうは思わなかっただろうが、織斑姉妹がいるのを考えると、それもあり得そうだと一夏は思いそう尋ねたのだが、三人は首を横に振った。

「あたしは報告がてら一夏を待つてただけだけど、何で織斑姉妹まで出迎えに来たのか分からないわよ」

「なに、お前たちの所にも東が遊びに行ったららしいからな。肅正しておいたという報告をしに来ただけだ」

「年末と一緒に深酒して監視の任務を山田先生と五月七日先生に押し付けたことは報告を受けてますので。言い訳は結構です」

バツサリと織斑姉妹を斬り捨て、一夏は鈴を引き連れて寮内へと進んでいく。

「それで、どうだった？」

「大人しいもんよ。あれが箒だつて信じられないくらい」

「まあ、中身が完全に変わってるからな」

「ところどころ鋭さは感じさせるけど、別に脅威は感じなかったわ。香澄が気にし過ぎただけだと思うわ」

「まあ、香澄は心の裡を知りたくなくても知ってしまう特性があるからな……前の篠ノ之に怯えてしまうのは仕方がないだろう」

一夏が鈴の報告を聞いているのを、刀奈たちは一步後ろから眺めている。普段なら一夏が別の女子と話しているのを面白くないと言つて妨害するのだが、今は真面目な話をしているので邪魔をするわけにもいかず、ただただ眺める事しか出来ないのだ。

「それで、ISの方はどうだった？」

「それはあたしにも分からないわよ。アンタみたいにISの声が聞こえるわけじゃないんだし」

「見た限りで構わない。動作不良とかは感じなかったか？」

「VTSだから特に感じなかったわよ。動きがぎこちなく見えたのは、単純に慣れてないからでしょうし」

「そうか……悪いな、こんな事頼んで」

「別にいいわよ。あたしだって暇だったし」

「国に帰るんじゃないかったのか？」

「帰ったところで一夏の事を聞かれるのが目に見えてたし、それだったら一夏の頼みごとを引き受けた方が有効的な時間の使い方でしょ？ それに、明日はあの馬鹿共と会う約束があるから、どっちにしる国に帰ってる暇なんてないわよ」

「俺はいけないが、弾と数馬によろしく言っておいてくれ」

「りよーかい。それじゃあ、あたしは部屋に戻るわ」

片手を上げて一夏の傍から去っていく鈴を、同じく片手を上げて見送る一夏。単に付き合いが長いだけではなく、互いに信頼しているからこそ任せられたのだと刀奈たちは鈴に向けられている一夏の信頼が羨ましいとさえ思えた。

「VTSでは特に問題は無いか……これならそろそろ本格的に復帰出来るかもしれないな……」

「一夏君？ 一人でブツブツ言っていると怖いわよ？」

「ん？ ああ、すみません。明日一日留守にしますが、篠ノ之さんの事はお願いしますね」

「それは構わないけど……一夏君と鈴ちゃん、なんだかパートナーみたいな感じがした

わよ」

「付き合いは長いですからね。あいつがいい加減な報告をしてくるとは思いませんし」

普段はいい加減に見えるかもしれませんがね、と言わんばかりの表情に、刀奈たちは再び複雑な思いを抱く。友人であることは間違いないのだが、それ以上の関係なのではないかと邪推してしまう空気が、あの二人の間には感じられるのだ。

「一夏と鈴って本当にただの悪友なの？」

「それ以外なんだから言うんだ？」

「分からないけど……セシリアたちとは別の感じがするし」

「セシリアたちとは、知り合って一年足らずだが、鈴は小学生の頃から知ってるからな。最終的に裏切ることは無いと信じられるくらいの関係だとは思ってるぞ」

「まあ、一夏さんを敵に回したりリスクは、鈴も十分理解してるでしょうしね」

「いっちゃん、疲れた〜」

簪や美紀が一夏と鈴の関係を疑っているのに、本音は相変わらずだらだらとした空気を纏い、一夏にしなだれかかる。

「疲れたって、さつきまで寝てただろ、お前は」

「難しい話を聞いてると疲れるんだよ」

「対して難しい話をしてたわけじゃないんだが？」

「私の担当じゃないから、良く分からなかったんだよ」

「……簪、本音を部屋に運んでおいてくれ」

「私が？ 私と本音じゃ、体格差がないから引き摺るしかないんだけど」

「かといつて、俺が運ぶと問題なんだろう？」

本音だけズルい！ という感じで刀奈が甘え、それでさらに面倒な感じなるのが目に見えているので、一夏は本音の事を簪に任じたのだが、確かに簪と本音には体格差がほとんどなく、前に簪が本音を引きずっているのを見たことがある。

「虚さんが運んでください。虚さんは大きいですし、本音くらいなら運べますよね？」

「この場に捨て置いても構いませんよ」

「それはさすがに……いくら本音とはいえ、こんなところに捨てて置いたら風邪ひきますよ」

そうしたら看病が面倒だと言いたげな一夏の表情に、全員が苦笑いを浮かべた。

「本音は風邪ひかないと思いますけどね」

「万が一、という事もあるでしょうし、虚さんはそろそろ卒業試験の事も念頭に置いておかないといけません。余計な事に神経を割かないためにも、本音には大人しくしてもらっておいた方が全員の為ですから」

「虚ちゃんなら、問題なく合格するでしょうけどね」

「とりあえず一夏の言う通りなので、虚は仕方なく本音を抱き上げ、そのまま部屋に運ぶのだった。」

I Sとの対話

夜遅くに整備室に呼び出された箒は、いったい何の用なのだろうと首を傾げながら指定された部屋の扉をノックした。

『どちら様でしょうか?』

「篠ノ之です。一夏様に呼ばれたのですが」

その声を掛けると、内側から鍵を開ける音が聞こえ、ゆっくりと扉が開かれた。

「お待ちしておりました」

そう言いながら箒を出迎えたのは、一夏の専用機である闇鴉。どことなく敵意を向けられている感じがしたが、箒はそれは仕方ないと割り切って整備室の中へ足を進めた。

「篠ノ之さんにご忠告をしておきたいのですが」

「何でしょうか?」

一歩足を踏み入れた途端、闇鴉に行く手を阻まれてしまい、箒はそのまま真正面から

闇鴉と対峙した。

「万がおかしな動きを見せたら、その瞬間に私が貴女の首を撥ねます。一夏さんの判断など仰がず、私の判断です」

「……肝に銘じておきます」

警告されるまでもなく、箒は一夏に何かしようとは考えていない。過去の自分がどれだけ一夏に迷惑を掛けてきたのかを聞かされているので、何か一夏の為に出来ることは無いかとすら考えてはいるが、余計な事などするつもりも無かった。だが闇鴉が懸念するのも、箒には十分理解出来たので、特に反論するでもなくそう返したのだ。

「では、案内いたします」

箒の返事が嘘ではないと判断したのか、闇鴉は箒に背を向けて一夏の許へと案内する事にした。箒も大人しくその背中に続き、しばらく無言で一人と一機は歩き進めた。

「一夏さん、篠ノ之さんをお連れしました」

「ご苦労様。待機状態に戻ってもいいぞ」

「いえ、このまま護衛として一夏さんの隣に待機させていただきます」

「……好きにしろ」

闇鴉に短く命じて、一夏は視線を箒へと向けた。一夏の視線を正面から受ける箒は、何処か緊張した面持ちに見えたが、余計な事で時間を割くつもりは全く無かったのだ。た。

「余計な前置きはしません。単刀直入に言います。ISの事をどう思っていますか？」
「どう、とは？」

「前のように憎んでいたり、負けたのはISの性能の所為だとか考えたりしていないか、という事です」

「そんなことは決して！ポータブル版でも学園のVTSでも、ISを動かせるだけで幸せです」

「そうですか……」

箒の返事に、一夏は目を瞑りながら頷く。その反応がどのようなものか計り知れない箒は、ただ一夏の言葉を待った。

「訓練機の中に、そろそろ篠ノ之さんに反応してもおかしくない子が数機いるのですが、少し話してみますか？もちろん、通訳は俺がしますので」

「宜しいのですか？」

「訓練機たちが拒めば無理ですが、たぶん大丈夫だと思いますよ」

そう言つて一夏は腰を浮かせ、それに続くように箒も慌てて立ち上がった。

「一夏さん、サイレント・ゼフィルスでは無いのですね？」

「いきなりあの子は無理だと思ふぞ。いくらフォーマツトしたからと言つて、少しずつ慣らしていかないと必ず破綻するだろうし」

I Sとの関係が破綻すれば、その機体を動かす事が出来なくなってしまう。ただでさえ前の箒の所為で今の箒に反応するI Sが無いのだから、サイレント・ゼフィルスまでも反応しなくなつてしまつたら、一夏が一から作り上げるしかなくなるのだ。そんな手間をかけてまで戦力を確保するくらいなら、箒ではなく別の人材を探した方がデータが取りやすいので、一夏は箒に反応しそうな機体を探し出し、ゆつくり慣らす事にしたのだつた。

「この子が一番反応してくれる可能性が高い機体です」

「えつと……初めまして、篠ノ之箒です」

箒がI Sに話しかけると、一夏がその機体の声を聞いて箒に伝える。

「数日間貴女の事を見て、動かしてもらってもいいかなとは思っています。ですが、動かしてすぐに合わないかと判断したら強制的に停まりますが、それでもよろしいでしょうか？」

「当然の対処だと思います。私を信用出来ないと仰る方が普通ですので、警戒心を持つたままで構いません」

箒の言葉を聞いたISが、再び一夏になにかを伝える。

「では、明日の訓練で、試しに私を動かしてください。勝ち負けは兎も角、生のISを動かしてみてもどう思つかを見てみたいので」

「分かりました。ですが、明日は一夏様が不在だとお聞きしておりますが、通訳などはどうしたらいいのでしょうか？」

「それは別にいらないだろ。本当に心を開いてくれれば、動かしている時には声が聞こえるだろうし」

これはISの言葉ではなく一夏の言葉。箒はとりあえず納得したのか、深々と頭を下げた。

「こんな私に動かされるのは嫌かもしれませんが、よろしくお願いします」

「気にしないでください。気に入らなかつたら放り出すだけですの
「……放り出されないように頑張ります」

物騒な事を言われ怖気づいたのか、箒は一步I Sから遠ざかる。それでもI Sを動か
したいという気持ちが強いのか、それ以上は逃げ出さなかつた。

「今日呼んだのはこの確認の為です。明日は刀奈さんたちが訓練に貴女を誘ってくれる
はずですから、そこでこの子を動かしてみてください。問題なければ、しばらくこの子
を使って訓練してもらおう事になりますので」

「分かりました。頑張ります」

もう一度深々と頭を下げ、箒は整備室を後にし、興奮した様子で部屋まで戻って
たのだった。

見学者多数

箒が帰ってから少ししてから、一夏も整備室を後にし部屋に戻る事にした。その間、ずっと聞鴉は人の姿をしていたが、部屋に到着したのと同時に、待機状態へと戻った。

「お疲れ様です、一夏さん」

「美紀か……先に寝てて構わないと言っておいたはずだが」

「寝ろとは言われてませんので。それで、篠ノ之さんの様子はどうだったんですか？」

「大人しいものだった。ISに対しても申し訳ない気持ちと、動かしてみたいという気持ちしか感じられなかったからな。あれならすぐに使えるレベルまでになるだろう」

「政府にはそのように報告するのですか？」

「そもそも、政府にとやかく言われる筋合いは無いんだがな。篠ノ之を撃退したのも、更生させようとしているのも更識なわけだから、処分を決定するのも更識であるべきだと思うんだが」

一夏が言うように、全てを更識に押し付けておきながら、復帰の手続きなどは政府にしなければならぬのは、一夏としては面倒でならないのだ。向こうがこちらに来て手

続きをしろと言うならまだしも、わざわざ出向かなければならないのが、更に面倒だと感じさせているのだった。

「突っぱねる事は出来ないのですか？」

「出来ない事もないが、余計に面倒な事になりかねないからな。一日で済むならそれでいいよ」

「ですが、せつかくの休みだというのに……ただでさえ一夏さんは休むべきなのに、政府の勝手に一夏さんの休みを奪うなんて」

「構わないさ。とりあえず、今日はもう休むとしようか」

自分の為に憤慨してくれる美紀に感謝を示して、一夏は寝ることにした。

「そう言えば一夏さん」

「何だ？」

「刀奈お姉ちゃんとの賭けは、私たちの勝ちですからね」

「ああ……そう言えばそんなことを言ってたな……今度な」

「約束ですからね」

一夏が髪を洗った翌日、全員が普段より髪の様子がいいと実感したので、賭けは一夏

が負けとなったのだ。一夏としては、勝ち負けの判断が曖昧すぎるのではないかとも思ったのだが、これだけ期待してもらったなら仕方ないと大人しく罰ゲームを受ける事にしたのだ。

「そう言えば、何を作ればいいんだ？」

「一夏さんの料理なら、みんな嬉しいと思いますよ」

「そんなものか？」

「そんなものですよ」

一夏は自分の料理がそこまで価値のあるものだとは思っていないので、何でも喜んでくれるのがイマイチ理解出来ていない。だが、喜んでもらえるのは素直に嬉しいので、一夏も彼女たちに料理を作るのは嫌いではなかった。

「明日は篠ノ之さんがI Sを動かす日ですね」

「問題なく動けばいいがな……」

その場にいる事が出来ない一夏は、万が一問題があった時は簪に任せると伝えてあるが、それでも不安はぬぐえていない様子だった。

一夏と碧が日本政府に筭の国籍復帰と正式にIS学園に復帰するための手続きを
に行った日、IS学園第一アリーナにはかなりの人が押し寄せていた。

「見世物じゃないんだけどな……」

「仕方ありませんよ。お嬢様と簪お嬢様、美紀さんは国家代表なんですから。その訓練
が見られるとなれば、これだけの人であふれ返つてもしょうがないです」

「虚さんだつて、更識企業の企業代表なわけだし、注目されるのも仕方ない」
「ですが、一夏さんがいないつてだけで、何人かは帰つていきましたけどね」
「目当ては一夏君だったのね、危ない危ない」

いくら最近は大丈夫になって来るとはいえ、一夏は基本的に人混みを嫌う。人間恐怖症で女性恐怖症であるのだから仕方ないのかもしれないが、それでも一夏がこの場になくて良かったと、刀奈たちはそろつて安堵の息を吐いたのだった。

「それに、箒ちゃんが一夏を動かすつて事も知られちゃつてみたいだしね」
「黛先輩、何処で聞いてたんだろうね……」

「後で問い詰めますので問題ありません」

一夏なら気づいていただろうが、薫子が今日の事を学園中に言い触らした結果が、この溢れかえりなのだと言員がすぐに理解した。ちなみに、箒の周りには本音だけでは不安だという事で、急遽マドカとマナカも控える事になったのだ。

「とりあえず、訓練を始めましょうか。時間は有限なんだし」

「お嬢様からそのような言葉が出るとは思つてませんでした、確かにゆつくりとする場合ではなさそうですね」

「あらら、織斑姉妹が鎮座してるわね」

「何かあってもあの二人が対処してくれるんでしょうね」

箒が暴走する可能性は、殆どゼロとはいえ、完全に安心する事は出来ない。なので万が一の時は自分たちが止めに入るつもりだったのだが、織斑姉妹がいればその役割は彼女たちに任せた方が良いのだ。

「それじゃあ、私たちは後輩たちにお勉強してもらいましょうか」

「私たちは一年なだけど？」

「ISの歴では簪ちゃんたちの方が長いし、実績も十分なんだから、細かい事は気にしないの」

「細かくは無いと思いますが……それでは、お嬢様と私のペアでよろしいですね？」

「そうですね。私と簪ちゃんがペアの代表ですから、そこを弄るのは良くないでしょうしね」

ペアが決まり、それぞれがピットへと移動するなか、アリーナは異様な空気に包まれていたのだった。

更識勢の実力差

予想以上の観客に、本音は驚きの声を漏らしていた。

「何処から情報を得たんだろうね〜」

「お兄ちゃんが言っただのは、黛先輩が盗み聞きしてたらしいわよ。邪魔をしない限りは放っておいていいと言っただから、お兄ちゃん的には問題なかったんじゃないかな？」

「兄さまは、実力者の訓練を見せる事で、他の人の経験になればと思ったのではないでしょうか？」

「確かに、いっちょーは使えるものは何でも使う人だからね〜。ところでシノノン、何で緊張してるの〜？」

「こ、この後自分がISを使うと考えると、緊張しない方がおかしいですよ……」

本音の問いかけに、箒は震える声でそう答える。自分が注目されるなど考えても見なかった箒は、その時の事を考えて震えているのだった。

「前のシノノンは、結構目立ってたんだけどなく。本人の意思なんて関係なく目立って

「たんだから、気にする必要は無いと思うけどな」

「前の私は、そんなことを気にするような性格では無かったのですよね？」

「そうだね。前のシノノンはいっちゃんに付きまどってただけだからね」

「も、申し訳ありませんでした……」

記憶にないとはいえ、自分がやっていた事なので箒は余計に居心地の悪さを感じていた。

「まあまあ、あんまり過去の事を気にして、四人の訓練を見逃したとなれば、お兄ちゃんに怒られちゃうよ。大人しく見学してた方が良いって」

「兄さまがその程度で怒るとは思えませんが、確かにじっくりと見学してた方が良いと思いますよ」

「マナカとマドカに諭され、箒はとりあえず考えをわきに置いて試合をしつかりと見学する事にしたのだった。

「かんちゃんも美紀ちゃんもさすがだよ。刀奈様とおねちゃんのパアにしつかりと対抗してるし」

「あの二人は元々ペアの代表だからね。刀奈さんや虚さんは個人では二人に勝てるかも

しれないけど、ペアだとうだろうね」

「主従ですし、問題は無いと思います」

「生身のコンビネーションとI Sを纏つての動きは別物だからね。まあ、それくらいのハンディがあつた方が簪と美紀の訓練になるだろうし」

「いっちょならそれくらい考えてそうだけどね」

一夏の性格をしつかりと把握している本音たちは、そろつて苦笑いを浮かべた。

「お兄ちゃん、良い性格してるからね」

「色々と考えている、と言つた方が良いとは思いますがね」

「いっちょは私たちには分からない考えを持つてるんだろうしね」

三人が言いたい放題言っているのを、簪は苦笑いを浮かべながら大人しく聞いていたのだった。

代表に昇格したとはいえ、簪と美紀の實力は刀奈や虚に遠く及ばない。その事を重々理解していたが、実際に対峙して簪も美紀も普段の動きが出来ないくらい緊張していた。

『美紀、とりあえず虚さんを抑えて！ お姉ちゃんは私が何とかするから』

「逆の方が良くないかな？ 刀奈お姉ちゃんは近接格闘が主だから、簪ちゃんとは相性が良くないと思うけど」

『虚さんと銃撃戦をしても敵わないし、それだったら美紀が特攻を仕掛けた方がマシだ

と思うけど』

「勝てるとは思ってないしね。いろいろな動きを試してみようか」

プライベート・チャンネルで作戦会議を済ませ、美紀と簪は同時に通信を切って自分が担当する相手に特攻を仕掛ける。

「虚さん、ここから先は行かせません！」

「美紀さんが相手ですか。国家代表の相手が務まるとは思いますが、簡単にはやられませんよ」

「虚さん相手に苦戦するのは私たちの方だと思いますけどね！」

あまり得意ではない遠距離攻撃を仕掛けた美紀に対して、虚はその攻撃を簡単にいなして反撃を繰り出す。

「ぐっ！」

「この程度で体勢を崩すようでは世界は狙えませんよ」

「分かってます！」

立て続けに攻撃を仕掛ける虚に対して、美紀は躲し、いなし、なんとかダメージを負

わずかにしていたが、反撃する余裕は一切無かった。

「やっぱり虚さん相手に遠距離戦闘は分が悪い……」

「焦って特攻するつもりですか？」

「そんなことしませんよ！」

一夏から教わった二段階瞬間加速で一気に距離を詰め、力の限りの斬撃を繰り出す美紀。だが虚は慌てる事無くその一閃を受け止めていた。

「二段階瞬間加速ですか……会得していたとは知りませんでした」

「これでも一生懸命訓練してましたからね。ですけど、簡単に受け止められるとは……さすが虚さんですね」

「美紀さんが正面から突っ込んできたからこそ、私は受け止められたのです。もう少し相手の裏をかく事を覚えた方が良いでしょう」

駆け引きは苦手な美紀は、攻撃も大抵の確率で真正面から仕掛ける事が多いのだ。それでも更識所属を相手にする以外では問題ないのだが、やはり更識所属で、美紀より実力がある相手には通用しないのだ。

「駆け引きなどは一夏さんの専門分野ですからね。時間がある時に習っておきます」

「そうした方が良いでしょう……さて、簪お嬢様もお嬢様にやられたようですし、こちらも終わらせましょうか」

「何時の間に!?!」

普段怠けているようだが、刀奈の実力は学園内でも頭一つとびぬけているのだ、一対一で戦えば、簪だろろろが長時間耐える事は出来ないのだった。

「お待たせ、虚ちゃん」

「さて、せっかくコンビネーションで優っていたのにそれを使わなかったのが、お二人の敗因だと言っておきましょうか」

刀奈と虚に挟まれ、美紀はなすべなく撃ち落されたのだった。

初実機訓練

四人の模擬戦を見学していたセシリアは、自分との力の差を見せつけられた気がして少し凹んでいた。その隣では、鈴が何か納得したように頷いていたので、セシリアは鈴が何を思ったのか聞くことにした。

「鈴さんは今の試合を見てどう思いましたの？」

「どうって、あたしたちの憧れである『更識刀奈』は相変わらず凄いつて事よ。一夏と一緒にいる時の生徒会長は何処かだらしないけど、こういう時の彼女は本当にかっこよく、何時か勝つてみたいって思わせてくれるって思っただけよ。アンタは違うの？」

「いえ……私は会長さんと自分との力の差を見せつけられた気がして、ちよつと落ち込みましたわ」

「力の差があつて当然じゃない。あの人は、現役の国家代表で、前回大会の覇者なんだから」

「それはそうですが……ですが、一つしか年の差がないのにも関わらず、あそこまで実力差を見せつけられたら、誰しも凹んだり、自信喪失したりしても仕方ないと思いますが」

「最初から勝てるなんて思つてないから、あたしはそこまで落ち込みもしないけどね。」

だけど、ずっと勝てないとは思わないけどね。何時かは超えてやる、何時かは勝ってやるって思ってた訓練の方が健全だと思っただけ」

鈴の言い分が最もだと思った反面、そんな事を思える鈴が羨ましいと、セシリアは鈴に憧れを抱いた。

「なに？」

「鈴さんのそういう考え方が出来るのは羨ましいですわ」

「『のは』ってどういう事よ！ あたしが幼児体型とでも言いたいわけ!？」

「確かに胸は慎ましげですが、そんなことは関係ありませんわ。私が言いたいのは、普段何も考えていないようで、その実物凄く考えているという部分が羨ましいという事ですわ。何故それが普段から見られないのかというのは問題ですが」

「二夏と一緒にいれば何か考えていても一夏の方が良い考えがあるだろうからって考えになっちゃうのよ」

確かにそれはありえそうだと、セシリアはもう一度鈴の言い分に納得した。

「ところで、訓練はこれで終わりなのでしょうか？」

「次は箒が本音たちと模擬戦をするって聞いているけど？」

「箒さんが？　ですが、彼女に反応するISは無いのではなかったのでしょうか？」
「一夏が何とかしたんじゃない？　ゆっくりとISの心を開かせて、ようやく箒に反応するISが出てきたとかさ」

実際はどうか知らないけどという感じで言う鈴に、セシリアはため息を吐いたのだった。

いよいよ本物のISを動かせるという感動と、本当に自分に動かす事が出来るのだろうかという不安で、箒は落ち着きを失っていた。

「篠ノ之さん、少しは大人しくしてください」

「そんなこと言われましても……」

「一夏さんがちゃんと調整してくれてますし、貴女が何か余計な事をしなければ問題はありませんか」

「そうかも知れませんが、一夏様は今学園にいらつしやらないじゃないですか!」

箒が落ち着かないもう一つの理由がこれである。一夏は現在箒の復学と国籍復帰の手続きを完了させるために日本政府へと赴いているのだ。だから万が一が起こった場合、一夏が対処してくれるという考えが出来ないのである。

「大丈夫ですよ。何も起こらないでしょうし、万が一何かが起こったら私たち更識勢が対処しますので」

「確かに四月一日さんや更識さんは頼りになりそうですが、布仏さんや更識先輩は何処

か不安を感じさせるのですが……」

「大丈夫です。本音は兎も角、刀奈お姉ちゃんはやればできる人ですから」

あまりフォローになっていない美紀の言葉に、箒の不安を取り除く効果は無かった。

「とりあえず、相手は本音ですけど、あくまでもISに慣れる事だけを考えてください。どれだけ怠けて見えようと、本音の実力は本物ですから」

「それはVTSで十分に知っています。納得は出来ませんが、布仏さんの実力は一夏様もお認めになっているようですよ」

「本当に、本音が羨ましいですよ」

愚痴になり始めたのを自覚し、美紀は一つ咳ばらいをして話題を変える事にした。

「大勢の前で動かす事に対しては何も思わないのですか？」

「何処にしようが注目されているような生活ですし、今更です。まあ、全く気にならないと言えば嘘になりますが、気になるわけでもありません」

「その意気ですよ。今日はあくまでも動かせるかどうかのチェックと、ISとの関係を深める事が目的ですから、変に固くなる必要はありませんしね」

「その目的じゃなくても、勝てるなんて自惚れは抱きませんよ。こちらは漸く実機を動

かせるようになった素人、あちらは専用機を持っている実力者。どんな勘違いをしようが、勝てるなんて思えないですって」

「それが前の篠ノ之さんには無かつたんですよ、その謙虚な考え方が……」
「本当に私が私を殺したいです……」

過去の自分がどれほど愚かだったかを一番理解していると箒は思っている、ことあるごとに自分で自分を殺したいと零すのだった。

「さて、時間で少しISを纏ってアリーナに出てください」

「分かりました。何事もなく終わることを目指します」

「それはほぼ確定事項ですけどね」

気弱な発言を繰り返した箒に、美紀は苦笑いを浮かべながら送り出したのだった。

訓練相手の実力

箒が訓練機を動かしたのを見た学生たちは、感動したり驚愕したり、少数ではあるが恐怖を抱いたりしていた。その中でもクラスメイトたちは、一夏の苦労が報われ始めたのではないかと感動している人が多かった。

「ここまで復帰出来たのも、更識君が頑張ってたからだもんね」

「このまま順調にいけば、篠ノ之さんの事で更識君が頭を悩ませることも無くなるね」
「そうすれば、私たちとお喋りしたりする時間も出来るのかな」

それほど一夏と関係が深くない少女たちは、気楽な考えを持っていたが、一夏と近い人は、手放しに喜んではいなかった。

「箒がISを動かせるようになったって事は、暴走したときの対処が大変になるって事だね……一夏なら何か考えがあるんだろうけど、警戒を怠るのは危険だね」

「そうね。一夏君に指示を仰いで、どうするか決めないとね。専用機を持つてる私たちは兎も角、持ってない子たちを危険に曝すのは一夏君の本意ではないでしょうし」

そう話すのは、シャルロットと静寐の二人だが、今場にはもう一人、香澄がいる。他人の心の裡を無意識に見てしまう彼女は、ISを動かせるようになった筈に並々ならぬ警戒心を抱いている。

「セシリアやラウラはあまり気にしてないようだけど、一応警戒しておくように言っておこうか」

「でも、あの二人は腹芸が得意じゃなさそうだし、下手に警戒を促せば、あからさまになるんじゃない?」

「それって、僕は腹芸が得意だって言いたいの?」

「そんなことないわよ。一夏君に比べれば誰だって不得意よ」

「そこと比べるのは間違つてるとは思うけどね」

揃つて笑みを浮かべる静寐とシャルロットを他所に、香澄は箒の戦闘をじっくりと眺めていた。

「香澄、そんなに警戒しなくても今のところは問題ないんじゃない?」

「実力を把握しておかないと、いざという時に動けないから」

「更識勢が全員学園から離れる事は無いんだし、そこまで警戒しなくても良いと思うんだけどな」

「デュノアさんや鷹月さんは十分な実力があるから安心出来るかもだけど、私は元々赤点ギリギリの成績だったから、安心出来ないよ」

「久延毘古の能力があれば、ある程度は未然に防げるんだし、そこまで悲観しなくてもいいと思うんだけど」

静寐の慰めにも、香澄の表情は晴れなかった。何がそこまで香澄を不安にさせるのか分からない二人は、そろって首を傾げたのだった。

「最悪織斑姉妹だっているんだし、少しは気を楽にしたらどう？」

「でも、あの二人って肝心な時に役に立たないって一夏さんが……」

「実力は確かなんだから、たぶん大丈夫だよ」

ちよつと顔を引きつらせながら慰めるシャルロットに、静寐も顔を引きつらせたのだった。

箒の相手をしながら、本音は箒の実力を測っていた。

「(うくん……打鉄を使つてるといふ事を差し引いても、前のシノノンの方が遥かに強かつた気がするよ)」

『まだ実機を動かせるようになったばかりですし、それは当然だと思えますよ』

「(VTSでサイレント・ゼフィルスを使つてる時も、あまり強いつて感じはしなかつたけどな)」

『サボつてばかりですが、本音も成長してるといふ事でしょうね。一夏さんが貴女の

データもしっかりと測定してるでしょうし、後程見せていただいてはどうですか？ 自分の成長をはっきりと理解出来ると思いますけど』

「そんなに興味ないし、いっちーが知ってればいいことだしね。成長データをシステムに反映させるのはいっちーだし」

『自分でやるべきだと思っただけだよね……』

土竜に呆れられながらも、本音は気にした様子もなく箒の攻撃を裁いている。

「(猪突猛進なのは相変わらずなのかな？ 攻撃がまっすぐ過ぎるんだよね)」

『冷静に相手の事を分析できるのは良い事ですが、相手を舐めすぎると痛い目に遭いますよ』

「(今のシノン相手なら、目を瞑っても勝てるとは思っただけだね)」

『そういう事は思っても口に出さない事です。後で一夏さんに怒られる事になりますので』

「(いっちーに怒られるのは嫌だな。それじゃあ、相手に敬意を表して、さっさと終わらせようか)」

『もういいのですか？』

実力を測っていたのではという疑念を浮かべた土竜に、本音は笑みを浮かべて答えた。

「観測室でかんちゃんがデータを採ってるだろうし、私は結局強いか弱いかでしか分からないしね〜」

『はあ……もう少し努力した方が良いですよ？ 虚さんの跡を継いで更識企業の企業代

表になるかもしれないんですから』

「(私には役不足だと思うんですけどね〜)」

『役不足は褒め言葉です。力不足の間違いでしょうね』

「(ほえ〜、そうなんだ〜)」

『学業にも、もつと力を入れるべきだと思うんですけど、その辺りは私ではどうしようも無いですからね』

「(いつちくに怒られるから、この事は内緒ね〜)」

あまり気にした様子の無い本音に、土竜は冷酷な宣告をした。

『この会話は闇鴉を介して一夏さんに筒抜けです。大人しく怒られてください』

「(ちよっ!?! そう言う事は早く言つてよ〜!)」

勉強不足を露呈した本音は、シヨツクを受けながら箒を撃退させたのだった。

護衛としての自覚

箒のデータを測定していた箒は、思いの外高かった結果に驚いていた。

「箒ちゃんが驚くなんて、相当な結果だったのね」

「お姉ちゃん？ まあ、一夏が想定してた数値よりは低かったけど、一夏は期待値を高く見積もってたから仕方ないけど、それを差し引いても結構な強さだと思うよ」

箒がデータを刀奈に見せると、そのデータを食い入るように刀奈が覗き込む。そして暫く動かなかったと思ったら、急に頷いて笑った。

「まあ、このくらいならすぐにクラスメイトたちと対等に訓練出来るようになるでしょうね」

「篠ノ之さんと訓練したがるクラスメイトはいないと思うけど……」

「まあ、今の箒ちゃんなら心配ないだろうけど、前の箒ちゃんの姿がフラッシュバックする可能性もあるからね」

「見た目が同じだからね……どうしても前の篠ノ之さんを思い出しちゃうのは仕方ないと思うよ」

言動や行動は前の箒とは比べ物にならないくらい大人しいが、どうしても見た目が同じだから仕方ないだろうと簪も思っている。だが一夏が今のところは大丈夫だと言っているの、安心はしている。

「とりあえず、箒ちゃんが暴走しないように私たちが見守っておかないとね」

「大人しくしてる分には、見てるだけでいいんだけどね」

「本当なら織斑姉妹が注意してなきやいけないんだけどね……一夏君が『あの二人を過信すると痛い目に遭うかもしれない』って心配してるからね」

血縁だからこそ言えるのだろうか、一夏の織斑姉妹への信頼度の低さには、さすがの刀奈も若干顔が引きつってしまふのを隠せなかった。

「私もサボり過ぎると一夏君にああ思われちゃうのかしらね」

「てか、もう思われてるかもよ……」

「嘘っ!! あそこまでサボってないわよ、私!!」

「どっちもどっちだって……」

「お前ら、わたしたちが聞いていないでも思ってたのか？」

今まで何も感じなかったのに、急に心配が生まれ更識姉妹は慌てて背後を確認する。するとそこには、話題に上がっていた姉妹の片割れが、恐ろしい表情を浮かべていた。「ち、千夏先生……いらつしやつてたんですか」

「馬鹿筈の測定データを見せてもらおうと思つてな。だがまあ、随分と面白い事をはなしてたじゃないか」

「ご、ゴメンなさい……」

一夏がいるならともかく、この状況で千夏に怒られたら立ち直れないと判断した二人は、素直に千夏に頭を下げたのだった。

政府での用件を済ませた一夏は、引き留めて来る政府の人間を軽くあしらって建物の外へ逃げ出した。碧が隣にいたから表面上は取り繕っていたが、内心は恐怖に支配されていたのだから、普段より早足になっていたのは仕方のない事だろう。

「一夏さん、とりあえず落ち着ける場所まで移動しましょう」

「そうですね……ですが、建物から出ただけで大分落ち着きました」

「相変わらず上からの物言いですし、隙あらば一夏さんを政府に取り込もうとする感情が渦巻いていましたからね」

一夏が恐怖心を抱いてしまうのも仕方ないと思いながらも、碧は一夏の手を引いて建物から距離を取るべく歩き出す。

「そ、そこまでしなくても大丈夫ですから……」

「そう言う事は、今にも倒れそうな表情を改めてから言ってください。もちろん、表情を改めたからといって、私の目は誤魔化せませんけどね」

「護衛としても、碧さんが一番長いですからね」

素直に負けを認め、一夏は碧に手を引かれる。視界から視たくないものが消え、一夏は漸く落ち着きを取り戻し始めた。

「それにしても、篠ノ之さんの一件は更識に一任したはずなのに、何故政府に出頭を命じてきたんですかね」

「確かに、日本政府から世界に伝えるより、更識で伝えた方が効果は大きかったですよけどね」

「面子、というものかもしれませんけどね。そんなことを気にしてる時点で、面子も無いでしょうがね」

「そう言う事を言えるのは、一夏さんが日本政府の人間より大きい人間だからですよ」
「そうですかね？」

落ち着きを取り戻しても未だに手を握られているが、一夏は無理にその手を振り解こうとはしなかった。

「ところで、一夏さんの料理は何時食べられるんですか?」

「急に話題を変えましたね……今日はさすがに時間がありませんし……新学期にはまた直接出向かなければならない案件がありますから……明日ですかね」

「ですが、明日には各国から篠ノ之さんに関する抗議や意見書などが大量に送られてくると思いますよ……」

「発表するのは政府なんですから、そちらで片づけてもらいましょう。先ほどの書類に、そう書いておきましたから、こちら側に丸投げするのは、契約違反です」

「さすが一夏さん……すでに手を打っていたんですね」

「俺だって、たまには学園でのんびりしたいですからね……まあ、出来ないとは思いますが」

箒以外にも問題は山積みなので、一夏が言うようにのんびりは出来ないだろうと碧も思っていた。だがそれでも、箒に関する抗議文書などが来ない分、一夏のスペックなら休む事は出来るだろうと信じていた。

「とりあえず今は、こうして碧さんと触れ合えてるわけですからね」

「他の子たちに怒られちゃうかもしれないけどね」

そう言いながらも、碧の表情は明るいものだった。彼女もまた、一夏と触れ合えるこの瞬間に幸せを感じていたのだろうと、一夏はそう思っていたのだった。

努力の質

部屋で休んでいた箒は、まるで足音も気配も感じさせないまま扉をノックして部屋の中に入ってきた二人を見て緊張した面持ちを浮かべていた。もちろん、返事をして自分で扉を開けて招き入れたので、いきなりずかずかと入ってこられたわけではないので、そこまで緊張する必要も無いのだが。

「お休みのところ、いきなり押しかけて申し訳ない」

「い、いえ！ 問題ありません」

一夏に畏まった挨拶をされ、箒は必要以上に大きな声で答えた。その反応に、一夏の付き添いとしてやってきた碧は笑みを浮かべていた。

「そこまで緊張されるような話ではないのですが」

「篠ノ之さんは一夏さんに緊張されてるんですよ」

「俺に…ですか？」

何処に緊張するんだという表情で首を傾げた一夏をみて、碧はくすくすと笑う。その

二人を、緊張した面持ちで眺めていた箒ではあったが、一夏が自分に視線を向けてきたので、別の緊張を覚えたのだった。

「とりあえず篠ノ之さんの国際指名手配は解除されました。これで、自由に外出する事が可能になります。もちろん正規の手続きはしてもらいますが」

「理解しています」

IS学園の生徒は、そう簡単に外出出来るわけではない。学園に申請を出し、それが通って初めて外出が許されるのだ。一夏のように、しょっちゅう学園からいなくなる方が特殊なのである。

「それに伴い、正式にIS学園への復学と、日本国籍への復帰が認められました」
「ありがとうございます」

立ち上がり一礼した箒に、一夏は小さく頷いて座るように促した。

「今日の訓練を見学した人が大勢いたお陰で、篠ノ之さんの現状の実力を把握したのか、それほど警戒心が強い人は殆どいなくなりました。ですが、皆無ではありませんので、その事を頭の隅にしつかりと残しておいてください」

「無論です。私は警戒されて当然のことをしてきたわけですから」

「今の篠ノ之さんがそんなに気にする事でもないんですけどね。正式に復学するにあたり、監視は織斑姉妹から更識関係者が担当する事になります。なるべく気配を感じさせないようにしますし、視線もさほど気にならない程度になると思いますので、見られている事は忘れてください」

織斑姉妹のように、あからさまな視線が無くなると聞かされ、箒は一安心したような表情で一息ついたのだった。

「さすがにルームメイトはまだですが、近いうちにこの部屋から移動できるかもしれないですね」

「そこまで高望みはしません。復学出来ただけでも十分です」

「そうですね。では、俺たちはこれで失礼させていただきます。篠ノ之さんは、この必要書類にサインをお願いします。期限は三日ですので、出来るだけ早くお願いしますね」

そうやって一夏は大量の書類を箒の目の前に置く。さつきから気になっていた紙の束は、そう言う事だったのかと内心ため息を吐いて、箒は必要書類にサインをし始めたのだった。

箒の部屋から戻ってきた一夏は、部屋で寛いでいる刀奈たちを見てため息を吐いた。「寛ぐなどは言いませんが、散らかし過ぎではありませんかね？ 特に本音」

「お菓子はみんなで食べたから、私だけが散らかしたわけじゃないんだけどな？」
「だが、持ち込んだのは本音だろ？ 他の人がこれほどお菓子を持ち込むとは思えん」

床に散らばったゴミの数々を見ながら、一夏は頭を押さえながら本音を問い詰めた。
「まあまあいっちー。そんな難しい顔をしてると疲れちゃうよ？ はい、アメあげるね」

頭を押さえている一夏の口にアメを入れ、本音はニコニコと笑みを浮かべる。これで許してもらえ、とでも思っていたのかもしれない。

「だから言ったんだよ。こんなに持って行ったら一夏に怒られるって」

「かんちゃんだって運んだんだから同罪でしょ」

「私は本音が零したお菓子を拾っただけ。私にお菓子を運ぶ意思は無かった」

「う、裏切ものお〜！」

簪の冷たい感じに、本音はあまり本気で怒っているようではない感じで簪の身体をポカポカと叩く。

「とりあえず、これはさっさと片付けてもらおうか」

「わかったよ、いっちー……でも、食べたのはみんなだからね！」

「本音がほとんど一人で食べてたような気もするけどね」

苦笑いを浮かべながら片付ける刀奈たちではあったが、どうやら本当に本音がほとんど一人で食べたようだ、他の人の雰囲気から感じ取った一夏は、盛大にため息を吐いたのだった。

「これだけお菓子を食べたヤツに、明日何か作らなきゃいけないのか……」

「それが罰ゲームだからね」

「別に良いんだが、本音にだけは作りたくなくなるような気分なんだよな……」

「なんでだよ！ シノノンの問題がとりあえず片付いたんだから、景気よく行こうよ
〜」

「お前は何処の中年サラリーマンだ」

本当にやる気が無くなるような事を言いだす本音に、一夏だけではなく刀奈たちも苦笑を浮かべたため息を吐いたのだった。

「本音、もう少ししちゃんとした方が良いつて」

「それでも頑張ってるんだけどな」

本音の言葉に、全員が揃ってツツコミを入れたのだった。

「お前の頑張ってるは、他の人間の普通にも届かないからな……もつとやる気を出せ」

一夏が代表でそう告げると、残りのメンバーは力強く頷いたのだった。

二人の覚悟

あつという間に新学期を迎えたが、集会に一夏の姿が無く、クラスメイトたちはそろって首を傾げた。もちろん、事情を知る例外はいたが、他クラスの生徒たちもだいたいい夏の姿がない事にガツカリしている様子だった。

「マドカさん、本日一夏さんは何処に行かれていますでしょうか？」

「兄さまは、亡国機業がしてきた数々の所業の確認と、アメリカが亡国機業の所為だと言つて来ている事件の確認の為に、碧さんと共にカナダへと向かいました」

「何故アメリカではなくカナダへ？」

「アメリカの現状を考えれば、直接赴くより近場で情報を集めて乗り込んだ方が安全だからだと思いますよ。というか、本来ならアメリカ側が兄さまのところへはやつてくるべきだと思うのですが、何処までも傲慢な国ですね」

苛立ちが見え始めたマドカを下手に刺激しないよう、セシリアは傍で話を聞いていたシャルロットに意見を求める事にした。

「シャルロットさんはどう思われますか？」

「下手に一夏がアメリカに入国したら、命を狙われたり誘拐されたりと大変だろうからね。もちろん、小鳥遊先生がそんなことを許すはずもないけど、一夏としたら余計な手間を取らせたくなかったのかもしれないね。それに、そんな連中を一夏が野放しにするとも思えないし……忘れがちだけど、更識は元々I S企業ではなく暗部組織だからね。そういう連中を片付けるのなんて造作もないだろうし」

「私には良く分からない世界ですからね……」

対暗部用暗部、それが本来の更識の姿であり、その当主である一夏も当然そのような命令を出す事もあるのだろう。輝かしい表の世界で生活しているセシリアには、その事が何時行われるのかなど見当もつかなかった。

「アメリカの現状は、日に日に悪化していますからね」

「一夏を襲ったところで、更に立場が悪くなるだけなのにね。それに、亡国機業の所為だと言ってやるけど、既に一夏が違うって言ってたから、今回のカナダ来訪はアメリカにとどめを刺しに行ったんだと思うよ」

「とどめ、ですの？」

「ティナの移籍を報告しに行くのかもしれないし」

「そう言えば、ティナさんは何処の国に決めたんでしょうね？」

「技術的にも、情情的にもイスラエルに傾いていたから、きつとそこじゃないかな？ 他
の国だと一夏も介入し辛いだろうし」

「一夏さんが介入する事前提なのですね……」

言い切ったシャルロットに、セシリアは少し驚いた表情でそう呟いた。シャルロット
としては一夏が介入する事が当たり前だと思っていたのだが、どうやらセシリアの中
は違うようだ、その事に驚いたのだった。

新学期初日など、特にすることも無いので、刀奈たちは一夏のいない生徒会室で仕事を片付けていた。何時もみたいな書類の山は無く、細々として事を片付けるだけなので、刀奈と虚の二人で十分だったのだが、生徒会室には珍しく本音の姿もあった。

「明日は大雪かしらね？」

「もしくは、地球が滅びるのかもしれない」

「そこまで言われるとさすがに傷つくんだけどな」

「貴女が自発的にこの場所に来るなど、それくらいの方が起こらなければ無いと思っていましたから」

「いっちゃんからもっと頑張れって言われたからね」

「頑張るのは良いですが、邪魔だけはしないでくださいね」

「酷いなく、おねーちゃんは」

それだけ信用ならないと思われるのは本音も自覚している。今までこの場所を

訪れた事など、両手の指で足りるくらいなのだから仕方ないし、来たとしてもろくに仕事もせずうだうだと文句を言っていただけなのだから、本音としてもこれで信用されるわけがないと理解しているのだ。

「おねくちゃんが無心して自分のやりたい事が出来るように、これからは頑張ろうって思っただけ」

「本音、貴女……」

「今までおねくちゃんやいつちーに甘えてたのは自覚してるからね。少しでも安心してもらおう為に、頑張るよ私は」

そう言いながら、一夏に作ってもらったマニュアルを見ながら作業を始める本音。別にマニュアルが必要な作業でもないのだが、今までサボっていた分仕事の内容が分からないのだろうと虚は苦笑いを浮かべる。

「お嬢様、私たちも作業を始めましょうか」

「そうね。本音が頑張ってるのに、私たちがサボってたら意味ないものね」

「サボるのは主にお嬢様ですがね」

「わ、私だって頑張るもん！」

刀奈の言い方がおかしかったのか、虚はくすくすと笑いだす。もちろんすぐに真顔に戻り、作業を始めるあたりが、彼女の有能さを物語っているように刀奈には感じられた。「虚ちゃんは何をしたかって言っても、私は応援するからね」

「まずは安心して卒業できるよう、お嬢様と本音には頑張ってもらわなければいけませんね」

「そこは安心してよ。これでも私は生徒会長なんだから！」

「形だけのお飾りと言われているようですが、一夏さんが入学してからは」

「私お人形さんじゃないわよ！」

「そう言う意味ではありませんよ。ですが、そう思われても仕方ないのではありませんかね？」

反論しようとしても、確かに一夏に甘えまくった自覚のある刀奈は、黙って作業を再開したのだった。

美紀への訊問

新学期と言われても、生徒ではないスコールとオータムにとつては前日と変わらぬ一日であり、特に忙しくなったりするわけでもない。最近では警戒心も薄れてきたのか、二人を訓練に誘う生徒も少なくなってきたのだが、さすがに今日は誰も訓練する予定は無いので、こうして部屋でのんびりするしかなかったのだ。

「たまには本気で暴れたいものだぜ」

「こうして生きているだけでも奇跡なんだから、もう少し我慢を覚えたらどうなの？一夏が間に入ってくれなかったら、私たちは間違いなくここよりも悪い環境で監禁されていたか、最悪は死刑になってたでしようね」

「それは分かっているけどよ……大人しくしてるつてのは意外とストレスなんだぜ？それはお前だって分かっているだろうが」

「私は別に、貴女みたいに戦闘狂じゃないもの」

訓練だけでは物足りなくなってきたオータムに、スコールがしつかりと釘を刺す。ここで暴れようものなら、例え一夏の庇護下にあるとはいえ実刑は免れないだろう。それ

どころか、一夏の庇護下から外され、織斑姉妹に殺されるかもしれないのだ。

「餓鬼たちの話を聞いたが、どうやらS Hが実機を動かしたらしいな」

「そうみたいね。一夏が苦勞してS Hを更生させ、I Sに対して罪悪感を持たせた結果でしょうね」

「怪しい薬で人格を再形成したんだろ？ 一夏のお陰ってわけじゃないんじゃないか？」

「S Hが生きている時点で、一夏の功績よ」

「チゲエねえな」

箒が法で裁かれて当然の事をしでかしたという事は二人も知っている。だからスコールの言うように、今箒が生きている時点で、一夏が苦勞した結果だと言えるのだ。

「レインとその恋人は普通に学生に戻ったらしいから、結局捕まってるのはオレたちだけじゃねえかよ」

「私たちは元々学生でもなければ、巻き込まれたわけじゃないんだから仕方ないでしょ。最近では監視も緩くなってきてるんだから、文句言わないの」

「分かってるんだけどよ……たまには本気で暴れたいって思うのも仕方ねえだろ」

オータムの言い分にスコールは呆れながらも、自分の中にも少しそう言う感情があることを自覚して、強くは否定しなかったのだった。

一夏がいなかったため、美紀は簪と本音の部屋に泊まることになった。もちろん、織斑姉

妹には報告し、一夏からの許可が出ていたので全く問題は無い。

「さーて、何して遊ぶ？」

「いくら一夏から許可が出てるからって、消灯時間を過ぎて騒いでたら怒られるよ」

「明日も早いんだから、大人しく寝ましよう」

「えー、せつかく美紀ちゃんがお泊りするんだから、もう少しお喋りしようよ」

ついこの前旅行で全員纏めて同じ部屋で寝たのに、本音はそのタイミングでお喋りすることなくさつきと寝ていたのだ。だからこういう機会にお喋りしたいと思ってしまうのは仕方のない事なのかもしれない。

「美紀ちゃんはいつもいっちーと同じ部屋で寝てるわけだけど、夜這いとかするの？」

「っ!? な、何を言うの! そんなことしませんよ!」

「美紀、なんだか不自然な慌て方だけど、もしかして本当に?」

「してないってば! そもそも、一夏さんは私より後に寝て、私より先に起きるんだから、そんなこと出来るわけないでしょ!」

加えて一夏は、寝ていてもある程度気配を感じる事が出来るので、ベッドに誰かが近づけばすぐに気づかれるのだ。だから美紀が一夏に夜這いをかけるといふ事は不可能

なのだが、簪と本音は美紀の慌て方が不自然に思えて問い詰める事にした。

「本当に？ 隠すと身の安全は保障できないよ？」

「さあさあ、大人しく本当の事を言うのだよ！」

「本当に何も無いってば！ ていうか、二人だつて一夏さんが寝ながら周囲を警戒してるのは知ってるでしょ！」

「でも美紀なら——いつも一緒にいる美紀なら、その警戒を掻い潜って何かをすることが出来るんじゃない？」

「寝ている一夏さんに近づいても問題ないのは碧さんくらいです！ それ以外はさすがに一夏さんが起きて何の用かと確認してきますし」

「つまり、美紀ちゃんはいっちょーが寝ているベッドに近づいたことがあるんだね？」

美紀の言葉をしっかりと聞いていた本音が、その事を指摘すると、美紀は疲れたような顔でため息を吐きながら答えた。

「夜遅くにトイレに行きたくなつて起きた時に、一夏さんのベッドの前を横切っただけです」

「それだけでいっちょーは起きちゃうの？」

「それだけ気配に敏感なんです」

「それじゃあ一夏のベッドにお姉ちゃんが潜り込もうとしても無理だね」

「そもそも刀奈お姉ちゃんが部屋に忍び込もうとした時点で、織斑姉妹が飛んできますからね」

「そっか、織斑姉妹の部屋が近いんだったね、あの部屋は……」

「それだけ一夏さんを守るには人が必要なですよ。まあ、普通の相手なら一夏さん自身が撃退出来ませんが、ただでさえ人が苦手なのですし、余計な事をされて人間不信が強まったら大変ですから」

美紀の言っている事をもっともだと二人も納得して、とりあえず美紀に対する訊問は終わりを上げ、そのまま大人しく寝ることにしたのだった。

「ところで、美紀ちゃんはどうちのベッドで寝るの？」

「簪ちゃんのベッドで。本音は寝相が悪いからね」

「そこまで悪くないよ〜！」

本音の反論は、美紀と簪に苦笑いを浮かべさせるだけだった。

強行軍

強行スケジュールでカナダを訪れ、その日の内にアメリカへの対処を済ませた一夏と碧は、更識が所有するプライベートジェットに乗り込んだ。

「わざわざ出向く必要は無かったかもしれないね」

「ですが、電話で済ませられるような案件ではありませんし、必要以上にアメリカを刺激するのも問題ですからね」

「今のアメリカの状況は、誰がどう見ても自業自得だというのに……まあ、後はティナの国籍変更手続きが済めば、アメリカとの関係は完全に断ち切れますからね」

アメリカに対する処置をカナダに一任する事を決め、他国の外相との話し合いも済ませたので、後はティナが移籍すればアメリカに対する罰を実行する事が出来る。一夏は漸く国際問題も一段落ついたと安堵の息を吐きながらシートに腰を下ろした。

「無理せずカナダで一泊しても良かったのでは？」

「俺は気にしません、帰って碧さんが刀奈さんたちに問い詰められる事は避けた方が良いでしょう」

「更識の当主様が、一部屋分の料金をけちる必要は無いと思うのですが」
「当主だからこそ、無駄遣いは避けるべきだと思いますよ」

更識の財政は、一部屋分の料金をけちらなければいけない程困窮しているわけではない。むしろIS主体になってからというもの、その財政は潤い続けているくらいである。だから働かない本音にお小遣いを渡しても誰も文句を言いださないのだ。

「私としては、一夏さんと同じ部屋で寝られるのは嬉しいですし、刀奈ちゃんたちにはありのままを話せば終わりですから良いんですけどね。その後大変なのはむしろ、一夏さんの方だと思いますけど」

『碧さんだけズルい！』って言いだしそうですしね……」

一夏としては、誰かを鼻負するつもりは無いので順番に一緒に寝るのは仕方ないとは思いますが、毎回そうなるのは大変なので黙っておきたいのだ。だから多少無理をしても日本に帰るという選択をしたのだ。

「篠ノ之さんも正式に復帰しましたし、虚ちゃんからの報告では問題なくISを動かせたとの事ですし、これで漸く一息つけそうですね」

「まだすべてが終わったわけではないですけどね……とりあえず大きな問題は解決の目

途がついたのは確かです」

「では、間もなく出発ですので、一夏さんはごゆっくりとお休みください。警戒は私がしておきますから」

「碧さんも休んでください。日本に着いたら教師の仕事があるんですから」

「一夏さんも、学生として授業に出なければなりませんから、ゆっくりしておいた方が良いでしょう」

互いに休める時に休んだ方が良いという結論に行きつき、一夏と碧は飛行機内でぐっすりと寝ることにしたのだった。

強行スケジュールであることは刀奈たちも聞いていたが、まさか行つてすぐ帰つてくるとは誰も思つてはいなかつたので、一夏たちが学園に帰つてきた事に驚いていた。

「二人とも、大丈夫なの？ さすがに無理し過ぎじゃないの？」

「まあ、無理してるといふ自覚はありますから、大人しく怒られます」

「今日はもう休んだ方が良いでしょうか？ 授業もありませんし」

「？ そうか、今日は日曜日でしたね……」

携帯のカレンダーを確認して、今日が休日であることを思いだした一夏は、疲れ切つた笑みを浮かべながら頭を掻いた。

「とりあえず、部屋で休んでます。何かあつたら言つてください」

「珍しく本音が働いてくれてるので、一夏さんはゆっくり休んでください」

虚の言葉に目を見開いた一夏ではあったが、特に何も言わずに頷いて部屋に引っ込んでいった。

「さすがの一夏君でも、本音が働いてるっていうのは驚く事だったんだね」

「まあ、本音ですからね……」

疲れ切った一夏の背中を見送りながら、刀奈と虚は同時にため息を吐いた。

「とりあえず、私たちは残ってる仕事を片付けちゃいましょうか」

「お嬢様がそこまでまじめに仕事をしようとするとは……明日は雨でしようかね?」

「それって酷くないかな!? 私だって、一夏君が疲れてる時には頑張るわよ」

「毎日一夏さんは疲れてると思いますけどね……」

主に刀奈と本音の所為で一夏が疲れているのだが、虚はその事は口にせずには生徒会室へ戻る事にしたのだった。

簪と美紀が部屋でお喋りをしていたら、一夏が部屋に入って来て、そのままベッドに倒れ込んだのを見て状況を把握した。

「とりあえず、私の部屋に移ろうか」

「そうだね。一夏さんも疲れてるみたいだしね」

足音を立てないように静かに部屋を出て、簪と美紀は簪の部屋に移動する事にした。

「更識妹と四月一日、何をこそそしているんだ」

「一夏が疲れ切つて部屋に入つてきたので、私たちは移動しようとしてるだけです」

「一夏が疲れ切つている？ それならわたしたちが癒してやらなければな！」

「お願いですから、一夏さんの休息の邪魔をしないでください」

「最近お前らも私たちに容赦なくなつてきてるな」

一夏の事なら織斑姉妹だろうが誰だろうが戦うつもりでいる二人に、織斑姉妹は苦笑いを浮かべて二人の前から消えた。

「相変わらずすさまじい移動速度だね……」

「心配すら掴ませないからね……」

そこだけは尊敬出来ると、二人は顔を見合わせて苦笑いを浮かべたのだった。

最後の敵

目を覚ました一夏は、部屋に誰の気配もない事に気付き、美紀に連絡を入れた。

『どうかなさいましたか？』

「いや、ゆつくり休めたから戻って来ても構わないぞ。おぼろげにだが、簪と部屋にいたような気は掴んでたから、気を遣わせてしまったな」

『いえ、一夏さんがゆつくり休めたのでしたら、私たちもそれで満足ですから。では、これから部屋に戻りますね』

「織斑姉妹には、事情を話せば納得してもらえらるだろうから心配するな」

『大丈夫ですよ。まだ消灯時間ではありませんから』

美紀に言われ、一夏は時計を確認した。確かにまだ消灯時間どころか、夕飯の時間も早い時間だった。

「時差ボケか……さすがにあのスケジュールは無理があつたな……」

『お疲れですね。今夜もゆつくりお休みになってくださいね』

「そうした方が良くないだろうか……」

まだ片付いていない仕事の量を思い浮かべ、一夏はため息交じりにそう呟いて電話を切った。

「それで、何か用事なんですか？」

「さすがはいつくん。この装置でも気配に気付いちやうんだ」

何もなかった空間から束が現れ、満面の笑みで一夏に飛びつこうとしたが、一夏が疲れているのを見て自重した。

「距離があれば気づきませんでした、近づかれたら気づきますよ」

「最初は気づかれてなかったもんね。あそこがギリギリか……」

「何をするつもりかは知りませんが、万全なら部屋にいた時点で気づきますから」

「残念だなく……」

「それで、まさか遊びに来たなんて言いませんよね？」

「少しはお喋りに付き合ってくれても良いんじゃないかな？」

「そんな暇はありません」

取り付く島もない態度の一夏に、束は小さくため息を吐いてから本題に入った。

「ちーちゃんとなつちちゃんにも伝えてほしいんだけど、アメリカが何だかきな臭い動きを見せてるんだよね」

「あそこにはコアありませんし、そこまで警戒する必要がありますかね？」

「何も武装はISだけじゃないんだよ？ ミサイルとか機関銃とか、物理的に危険なのはあの国にいっぱいあるからね」

東の言葉に、一夏は納得したように頷き、続きを促した。

「いっくんたちがアメリカに対する制裁を決定した後から密かに動き出したっぽいけど、この束さんの目は誤魔化せないんだよ」

「まだ自業自得だと分かっていないようですね」

「一生かかっても分からないと思うけどね、あんな凡人共には」

「束さんが他人に興味がないのは知ってます。それで、アメリカは何をするつもりなのですか？」

「いっくんの暗殺が狙いだろうね。なんで持つてるのか分からないけど、いっくんの写真にナイフを突き立てたり、拳銃で撃ち抜いたりしてたから」

「俺が狙われる分には問題ありません。その方が対処しやすいですから」

「それから、元アメリカ代表候補生のダリル・ケイシーや軍属だったナターシャ・ファイ

ルスに連絡を取ろうとしてたけど、それは束さんの方で妨害しておいた」

「例え連絡が取れたとしても、その二人がアメリカの為に動くとは思えませんけどね」

既に一夏に多大なる恩がある二人が、今更アメリカの為に働くとは束も思っていない。だが、連絡さえ取れば、いくらでも洗脳する方法があるので、それを未然に防いだのだ。

「とりあえず、面倒事になる前に束さんがアメリカのみを焼き尽くす兵器を開発して皆殺しにしてもいいんじゃないかね」

「関係のないアメリカ国民を巻き込むのは避けた方が良いでしょうね。それに、こちらから先に仕掛けてしまったら向こうに大義有りと言い出さないと限りませんので」

「大義なんて、最初からいつくんにあるじゃん」

「俺は独裁をしたいわけではありませんので」

束から視線を逸らして、一夏は足音を立てずに部屋の扉を開けた。

「というわけですので、警戒は怠らないでくださいね」

「やはり気づいていたか」

「むしろ気づかれていないとも思ってたのですか？」

「束さんもわざわざ、ちーちゃんとなつちちゃんにも聞こえる声量で喋ってたんだからね」

「貴様にそんな氣遣いが出来たのかと思うが、とりあえず事情は聴かせてもらった」

「つまり、私たちが二十四時間、三百六十五日一夏の身辺警護をすればいいんだな！」

「何をどう聞いてたらそう言う結論になるんですか……貴女たちは周りに被害が及ばないように努めてください。こちらは更識で対処しますが、生徒すべてを守るには更識では足りませんので」

四六時中この姉二人に付きまとわれてはたまらないので、一夏は二人を周辺警護に回してなるべく遠ざける事にした。

「そもそも、ちーちゃんやなつちちゃんがいつくんの護衛じゃ、安心出来ないからね」

「何故だ」

「二人がいつくんを襲う可能性の方が高いからに決まってるじゃないか」

束の言い分は一夏ももつともだと思っていたので、数回頷いてから扉の外で待機している美紀に声を掛けた。

「話は終わってるから入ってきてもいいぞ」

「千冬先生、千夏先生、一夏さんの護衛は私たちがしっかりと致しますので、学園の方を

お願いします」

不承不承ながらも、千冬と千夏は学園の警備を引き受け、部屋から出て行った。「東さんも、警戒は怠らないようにしておくね。それじゃあいつくん、またね」

東も大人しく部屋から去り、一夏はまたしても気の休まらない日々がやってきたとため息を吐いたのだった。

安心出来る空気

東からの報告を受けた一夏の動きは迅速だった。すぐにアメリカに対する監視を強め、情報を共有した方が良い相手を部屋に呼び、今後の対策を練ることにした。

「まさかアメリカがそんなことを考えているとは……カナダで視た限りでは、大人しそうな雰囲気でしたのに」

「危険思想を抱いているのは、ごく一部なのでしようね。その他大勢は大人しく裁かれるのを待っているわけではないでしょうが、過激な行動に出ようとはしていないようですし」

「一夏君は、こちらから仕掛けるつもりは無いのよね？」

「先にこちらが動けば、侵略と言われかねませんからね。もちろん、そんなことを思うような輩がいるとは思えませんが、無駄な隙をアメリカに見せるわけにも行きませんし」

「一夏、私たちは特にすることは無いんだよね？」

「今のところは、大つぴらに活動していかないようだからな。簪や美紀は訓練に集中してくれて構わない。もちろん、何かあればすぐに知らせるが」

部屋に集まった碧、虚、刀奈、簪に視線を向け、最後の一人である美紀に頷いてみせる一夏。マドカやマナカを呼ばなかったのは、織斑姉妹から話が行くだろうと思つてゐるのと、マナカが必要以上にヒートアップするのを避けるためである。

「ところで一夏さん、本音は呼ばなくて良かったのですか？」

「アイツに情報を与えるとろくなことになりかねない。そもそも、篠ノ之さんとの闘いの最中に余計な事を考えていた事に対する説教がまだ済んでないからな」

「一応相手の実力を把握しようとはしてたらしいけどね」

「まあ、とりあえずはアメリカの行動を気にする程度で構いません。何もなければそれでいいのですが、何かあった時には手伝つてもらふ事になると思いますので」

「当然よ！ 一夏君に危険が及ばないようにするのが私たちの最重要課題だもの。虚ちゃんも簪ちゃんも分かつてるわよね？」

「お姉ちゃんに言われるまでもない。一夏の事は私たちが守る」

「守つてもらふ程危なつかしいわけじゃないと思うんだがな……」

「一夏さんの事を、それだけ大切に思つてゐるといふ事ですよ」

苦笑いを浮かべながら頭を搔く一夏に、虚が微笑みながらそう告げる。その言葉に刀奈や簪、美紀も力強く頷いてみせたのだった。

「とりあえず一夏君を一人にしない方が安全よね。部屋は美紀ちゃんと一緒にいるからいいけど、誰か一人は絶対に護衛につける事。いいわね？」

「その点は問題ありません。一夏さんの護衛は私がしっかりと勤め上げますので」

「碧さんなら安心だけど、碧さんにも別の仕事があるわけだし……とりあえずは交代で一夏君の護衛をを務めるといふ事で」

「じゃあ、三人の誰かが美紀や碧さんと一緒に一夏を守るといふことで」

一応の結論が出たので、一夏はホッと一息を吐いてから更識からの報告メールを開いた。

「束さんからの報告通り、一部危険思想を抱いたアメリカ政府の人間が武装していると報告が来ました。ですけど、今のところ危険度は低いそうです」

「まあ、すぐに仕掛けてくるようなおバカさんたちじゃないって事ね。ところで一夏君、例の賭けの事は覚えてるわよね？」

「それどころではないと思うのですが？」

「今のところは警戒するまでもないのだから、良いんじゃないかな？」

先ほどまでのまともな雰囲気から一変し、刀奈は甘えるような声で一夏に詰め寄る。

「分かりましたよ。さすがに今日は無理ですが、明日なら時間的にも肉体的にも少しは余裕がありますからね。お菓子でいいんですよね？」

「本当ならお弁当とか頼みたいけど、私たち全員分となると大変だもんね。それで構わないわよ」

「お手伝いしたいところですが、私では足手纏いにしかりませんから」

「気にしなくても大丈夫ですよ。それじゃあ、今日の内に材料を揃えておいた方がよさそうですね……碧さん、ちよつと買い出しに付き合ってもらえますか？」

「もちろんです。一夏さんの護衛が、私の任務の中でも最重要指定されていますから」

「そんなこと、誰がしたんですか？」

「先代の楯無様です」

「お父さん、そんなことしてたんだ」

初めて聞かされた父親の言動に、刀奈と簪は少し驚いた表情を浮かべた。少しだけしか驚かなかつたのは、それだけ父親が一夏の事を大事に想っていたのを知っていたからだ。

「碧さんほどの実力者を俺の護衛なんかには縛り付けるのは更識にとつてマイナスだと思
うんですが」

「そんなことありませんよ。むしろ、一夏さんを失ってしまった方が大きなマイナスなのですから、私が一夏さんの傍から離れられないなど、些細な事です」

「碧さんからしたら、一夏君の傍にいられるのは嬉しい事じゃないの?」

「お嬢様じゃないんですから、公私混同はしないと思えますけど」

「それってどういう意味よ!」

「碧さんはお姉ちゃんと違って立派、って事だよ」

「簪ちゃんまでそんなこと言うの!?! 一夏君、二人が苛める!」

「そう思われたくないのでしたら、もっとしっかりとしてください」

「頑張ってるじゃないのよ!」

結局いつも通りグダグダになった空気に、一夏と碧は苦笑いを浮かべながらも、この空気ですらられることに安心感を覚えたのだった。

久しぶりの実習

久しぶりに朝から教室にやってきた一夏を、クラスメイトは珍しいものを見るような目で眺めてきた。

「なんか更識君を久しぶりに見た気がする」

「そうか？ 冬休みの間にも会わなかったんだっけ？」

「私たちは更識所属じゃないからね」

「所属の面々ともあまり会わなかったけどな」

清香と軽く挨拶を交わして、一夏は自分の席に腰を下ろした。

「おはようございます、一夏様」

「おはよう、篠ノ之さん。この前は実際にISを動かしてみてもうでしたか？」

「凄く緊張しました。布仏さんが相手ということもありましたが、実際に空中を移動するということ感覚に慣れるのに苦労しました」

「VTSやポータブル版では、武器の感覚とかは掴めますが、実際に移動するときには掛かるGなどは再現出来ませんからね。何とかそれも出来ないかと改良は進めているので

すが、実現にはもう少しかかりそうですからね」

「いえ、VTSでもある程度移動する際に掛かるGは再現されていましたが、実際に感じるまであれほどきついものだとは思えなかっただけで、今でも十分訓練には適していると
思いますよ」

箒からのコメントを慰めだと受け取った一夏は、力なく首を横に振り、腕を組んで考え込んでしまった。

「あの、一夏様？」

「こうなってしまった一夏さんは長いですから、用があるなら後にした方が良いでしょう」
「あつ、おはようございます、四月一日さん」

横から話しかけてきた美紀に挨拶をして、もう一度だけ一夏を見てから完全に視線を美紀に向けた。

「一夏様は何を考えているのでしょうか？」

「VTSの改良案や、新しい武装などでしょう」

本当は別の事ではないかと疑っているのだが、その事は他の人に漏らさないよう言わ

れているので、美紀は先ほどまで箒と話していた内容からそれらしい理由をでっちあげた。

「なるほど……当主だとは聞いていますが、一夏様は開発にも携わっているのですね」

「一夏さんが開発部のトップですから。VTSだって一夏さんが一から理論を組み上げて、多少の手助けのみで作り上げたものですからね」

「そうだったのですか、凄いですね……」

難しい理論や、組み立てに掛かる時間などは箒には分からないが、それでもほぼ一人で出来るものではないという事は理解している。だからほぼ一人で作り上げたと聞かされ、そのような陳腐な言葉しか出てこなかったのだった。

「凄いなんて言葉で片づけられないくらい凄い事ですが、一夏さんからすれば普通なのでしょうね。何せあの大天災と同じかそれ以上の頭脳を持ち主なのですから」

「お姉さまと……」

自分の姉が篠ノ之東であるということは、一応認識している箒からすれば、あの大天災と同レベルかそれ以上と聞かされても自分には考えも及ばない次元の話だとしか認識出来なかった。美紀も箒の気持ち理解出来たのか、苦笑いを浮かべて頷いてみせた

の
だ
っ
た。

た。
午前最後の授業は実習で、
一年一組の生徒たちは全員アリーナへと移動を済ませている。

「そういえば、いつちーが実習に参加するのって何時振りだっけ？」

「知らん。色々と忙しかったからな」

「学生とは思えない言葉だね、一夏」

「シャルだつてちよこちよここと抜けてるんだろ？」

「僕はそこまで忙しくないから」

子会社とはいえ更識企業傘下の社長であるシャルロットに同意を求めたが、笑顔で首を横に振られてしまい一夏は少し困った表情を浮かべた。

「そろそろ全面的にデュノア社はシャルに任せようと思っていたんだが、まだ厳しそうだな」

「無理だつて！　せめて卒業してからにしてくれないかな」

「そうなるその後二年は無理か……」

「また難しいお顔をされてますわよ、一夏さん」

「これが素なんだから仕方ないだろ」

「そんなことありませんわよ。普段はもつと穏やかな表情をされていますわ」

「そうか？」

セシリアに言われたことを、この中で一番側にいる事が多い美紀に尋ねる一夏。

「そうですね、問題が無い時は穏やかな表情をされていますが、ここ最近は難しい顔の方が多いかと」

「まあ、まだすべて終わったわけじゃないからな……スコールやオータムの処遇も考えなければいけないし、篠ノ之さんの事もまだ完全には終わったわけじゃないから」

「全員そろっているな」

千冬の声が聞こえてきたので、一夏たちは私語を止めて正面に向き直る。

「今日は久しぶりに更識がいるため、思いつきり戦ってもらおうと思う」

「千冬先生、思いつきり戦うというのは、どのような意味でしょうか？」

「言葉の通りだ。更識対、残りの専用機持ち全員だ」

「自分は候補生レベルもありますが、既に代表に昇格した美紀や、それに準ずる本音相手に五分も持ちこたえられないと思いますが。もちろん、静寐や香澄、セシリアやラウラ、シャルロット相手でも同様ですが」

「謙遜だな。誰が見ても、お前の実力は代表候補生程度では相手にならないと判断されて当然のものなのだが」

「買い被り過ぎです。自分は誰かに助けてもらわなければ生きていかなかったはずです。」

それこそ、美紀や本音には世話になりっぱなしですから」

「出来る範囲で構わん。他の生徒に、貴様の回避能力を見せればそれで構わないから」
「はあ……それくらいでいいのでしたら」

イマイチ納得出来なかつたが、一夏は千冬たちの提案を受け、一対多数の模擬戦をすることになったのだった。

心の奥で

理不尽な条件での模擬戦をすることになってしまった一夏は、一人ピットでため息を吐いていた。

「一夏さん、ため息とは珍しいですね」

「そうか？　しょっちゅう吐いていると思うんだが」

「まあ、ため息の種類が違っても思ってください。授業で一夏さんがため息を吐いている事が珍しいと思ったのですよ」

「殆ど参加してないからな」

「学生のセリフとは思えませんね……」

確かに一夏はここ最近忙しく授業に参加してなかった事は闇鴉も知っている。だがそれでもそう思ってしまうのは避けられなかった。

「美紀や本音だけでも大変だって言うのに、静寐や香澄、セシリアにラウラ、更にはシャルまで相手にしなければならいなんて、ため息くらい吐きたくなるだろ」

「マドカさんやマナカさんを外してくれただけ十分ではありませんか？」

「単純に忘れただけだろ、あの姉妹はそういうところがあるからな」
「まあ、否定はしませんか」

闇鴉も織斑姉妹の人となりはそれなりに理解しているので、一夏の言葉を否定するだけの自信が無かった。

「とりあえず何分耐えられるかが問題だな……香澄が相手にいる時点で、こちらの動きはすべて知られているのと同じだからな……加えて、本音の野生の勘もバカに出来ない」

「勝たなくていいんですから、そこまで深く考えなくても宜しいではありませんか？」
「お前がダメージを負うのを最小限にとどめておきたいんだよ。整備する時間だってあるんだ。そんな余裕が何処にある」

「まあ、アメリカの動き次第でどうとでもなるでしょうが、あまり樂觀視は出来ない状況なのは確かですね」

一夏が何を気にしていたのか理解した闇鴉は、出来るだけフォローを頑張ろうと心に決めたのだった。

一夏がピットで頭を悩ませているのと、時を同じくして反対側のピットでは、美紀がこの模擬戦の意味を考えていたのだった。

「美紀ちゃん、難しい顔してどうしたの〜?」

「わざわざこのタイミングで一夏さんの回避能力を見せつける必要が何処にあるのかと

思つて」

「織斑姉妹がいつちーのカッコいいところを見たかっただけじゃないの?」

「そんな理由だったら、一夏さんが見破つて断ると思うんだよね」

「それじゃあ、さつき言つてた通り、万が一に備えて回避行動の重要さを再認識させるため?」

「それなら、こんな多人数で一夏さんに襲いかからなくても、一対一で十分な気もするけど」

美紀が引つ掛かっていたのは、まさにそこだった。確かに多人数に襲われる可能性は低いながらも存在する。だがこちら側が一人で行動してゐる可能性は、殆どゼロに等しい確率しかないのだ。

「学園内にいる限りは、一人きりという事は無いだろうし……」

「まあ、常に更識の人間が周辺に目を光らせてるし、いつちーや碧さんの気配察知を掻い潜つて襲つてこられるような敵がいるとも思えないしね」

「だから余計に分からないのよね……この模擬戦の意味が」

「あまり深く考えずに、授業の一環だと割り切つたら? たぶん、一夏君もそう割り切つて引き受けたんだと思うけど」

「そうでしょうかね……」

会話に入ってきた静寐の言葉に、美紀はイマイチ納得出来ない表情で首を傾げる。

「それだけの理由でしたら、一夏さんじゃなくても他の人が回避して見せればいいだけだと思いますけど。例えば本音でも、それなりに回避は出来ますし」

「いつち一程ではないけどね」

「同じように、香澄さんの未来視を使えば、本音と同等くらいには回避出来たでしょうし……一夏さんが回避行動を見せる理由が私には良く分からないのです」

「そう言われれば、確かに一夏君である必要は無いわね……代表の美紀さん対私たちでも十分に成立するわね」

「一夏さんなら、織斑姉妹の真意も理解しているのかもしれませんが、私にはさっぱりわかりません」

力なく首を振る美紀に、静寐もこの模擬戦の意図はいったい何なのかと気になり始めた。

「プライベート・チャネルで一夏君に聞いてみましょうか？」

「いえ、恐らく一夏さんは今精神を集中させている頃でしょうから、呼びかけに答えてく

れるかどうか分かりません。ましてやこんなことで一夏さんの邪魔をしたくありませんし……終わってから一夏さんに聞けば十分だと思います」

「そうかもしれないけど……気になって全力を出せなかつたとかじゃ、後で怒られるかもしれないじゃない？」

「そんな事で一夏さんは怒ったりしませんか」

「いや、織斑姉妹に……」

静寂が何を心配しているのかが理解出来た美紀は、苦笑いを浮かべながら首を横に振る。

「何かあれば、一夏さんが何とかしてくれると思いますよ。まあ、一夏さんに頼りつきりなのは忍びないですがね」

「いっちょしか織斑姉妹に勝てないんだから仕方ないってば。美紀ちゃんが気にする事じゃないよ」

「分かつてはいるんだけどね……他の事もそうですが、私たちは最終的には一夏さんがいるから、そう考えてしまってる気がするんですよ」

美紀の言葉に、さすがの本音も反論出来ずに固まってしまった、確かに自分の中にも

そういう考えがあるのを否定出来なかったのだ。

「一夏さんを守らなければならぬ私たちが、最終的には一夏さん頼みなのはいけないと思う」

「そう…だね…：…いっちに頼り過ぎるのは駄目かもね…：…」

重苦しい空気を醸し出した二人に、静寂は掛ける言葉が見つからなかったのだった。

織斑四姉妹の会話

理不尽な模擬戦を前に、一夏はアリーナに出て盛大にため息を吐いた。注目されることには慣れていているが、見世物にされている感が否めなく、非常に居心地が悪かったのだ。

『一夏さん、そんなに緊張しなくても宜しいのでは？ 所詮クラスメイトに見せるための試合なんですから』

「緊張してるんじゃないくて、やりたくないんだよ……」

『でしたら、この授業から脱出しますか？』

「さすがに織斑姉妹から逃げられるなんて自惚れは持っていない」

アリーナから感じる視線にため息を吐きながら、一夏は反対側のピットから出てきた対戦相手に視線を向ける。

『美紀さんと本音さんはイマイチやる気がなさそうですね』

「俺が疲れてるのが分かってるし、織斑姉妹が何かを企んでるのかもと思ってるんだろ」

『何を企んでるんでしょうね、あの二人は』

「何も考えてないだろうな、あの二人は……単純に俺が久しぶりに実習に参加するものだから、俺メインの授業にしてやろうとか考えたただけだろうしな」

実際何も考えていない織斑姉妹に対して、必要以上に頭を悩ませたくなかった一夏は、闇鴉の問いかけもバツサリと切り捨てて、これから始まる模擬戦に向けて精神を集中させたのだった。

客席で模擬戦を眺めていたマドカとマナカは、知らずの内に身体がうずうずしていた

ことに気が付き、同時に苦笑いを浮かべたのだった。

「マドカも参加したくなつたんだ」

「これだけハイレベルな戦いを見せられたら、自分も混じってみたいと思うのは当然だと思います。ましてや、私は現状専用機を持っているのに参加出来なかつたのですから」

「お兄ちゃん相手だから、手心を加えるかもとか思われたんじゃない？」

「姉さまたちがそんなことを考えるとは思えないのですが……ましてや、兄さま相手に手心を加えられるほど、私の実力は高くありません」

「そうかな？　美紀や本音と連携すれば、十分お兄ちゃんに勝てそうだとは思うけど」

「兄さまは基本的に攻撃主体ではありませんから、確かに勝つことは出来るかもしれませんが、ですが、これはあくまでも授業ですから、時間制限があります。私の実力では、二人にフォローしてもらっても時間内に兄さまを捉えられるか分かりません」

「お兄ちゃんの回避能力は、国家代表でもダメージを与えるのに時間がかかるくらいだもんね」

現在、セシリアとラウラが一夏に攻撃を仕掛けているが、一夏は危なげなくその攻撃を躲し、他のメンバーが攻撃できないように牽制を続けている。

「香澄さんの予知で攻撃が来るのは分かっているのですが、兄さまの移動速度は予知出来るレベルを超えていますからね」

「そんな芸当が出来るのは、お兄ちゃんを除けば織斑姉妹と碧さんくらいなんでしょ？」

「刀奈が辛うじて出来るか出来ないかだっけ聞いていたことはあるけど」

「年上を呼び捨てにするのはどうかと思いますよ？」

「聞かれなければ問題ないわよ」

「そう言う問題ではないのではとマドカは思ったが、ここでその論議をしても意味は無いと考えなおして話題を元に戻した。

「姉さまや小鳥遊先生は出来て当然だと思いますけどね。何せ無傷で世界を制したお方ですから」

「あの二人は力技だけど、碧さんは高い操縦技術もあってだからね」

「恐らく姉さまと同じように力技だけでも、小鳥遊先生は世界を制する事が出来たでしょうけどもね」

二人とも共通しているのは、碧は自分たちの姉と同じレベルか、それ以上ではないかという認識だ。程度に違いはあれ、碧の事は二人とも尊敬しているのだった。

「あんな人がお兄ちゃんの護衛をやってくれてるんだから、お兄ちゃんってかなり凄い人なんだよね」

「結局はそこに落ち着くのですか……まあ、天下の更識企業のトップですからね。護衛も小鳥遊先生程の実力者では無ければ務まらないのでしょうか」

「でも、美紀は兎も角として、本音が護衛だっというのはどうなのよ」

「その辺りは兄さまに考えがあったのかもしれない。私も聞いたことありませんので、真意は分かりませんが」

「これが終わったら聞いてみる？」

「そうですね……」

そこで不意に、二人はとてつもない殺気を感じて振り返る。するとそこには、素敵な笑顔を浮かべた姉二人が睨みつけてきていた。

「授業中だというのに、私語とはなめられたものだな」

「織斑妹には罰を与えなければならぬようだな」

「何でいきなり現れて罰せられなければならないのよー！」

「マナカ、今は授業中で、姉さまたちは学園の教師ですから、私語をする生徒を注意するのも、罰するのも仕事の内ですよ……」

「あつ……」

姉という認識は出来ていても、教師という認識をしていなかったマナカは、マドカに指摘されてようやく気が付いたようだった。

「まあ、お前たちの罰は更識弟を交えてじっくりと決めようではないか。今は大人しく模擬戦を見ている事だな」

「だがそれも、そろそろ終わりを迎えそうだがな」

千冬と千夏の言葉につられ戦闘に視線を戻した二人は、美紀と本音がしつかりと連携を取って一夏を追い詰めているのを目撃した。

「いつの間にか、他のメンバーがやられてる」

「厄介な日下部から落とせば、他のメンバーでは一夏の相手にはならないからな」

何処か自慢げに語る千冬に、マナカは苛立ちの視線を向けたが、すぐに無意味だと思いついて息を留めたのだった。

模擬戦後の整備

模擬戦を終え、一夏はピットに戻り軽くシャワーで汗を流してからアリーナに戻った。タイムリング的に美紀たちと同じだったのは、一夏が軽く闇鴉のメンテナンスをしてから戻ってきたからである。

「さすがいつちーだね。まさか他のメンバーがやられちゃうとは思ってなかったよ」

「お前や美紀が、他のメンバーがやられるまで動かなかったからだろ。二人が動いてたら、さすがにここまで倒す事は出来なかつただろうし」

「やっぱりバレてました？ 分からないように動いてたつもりだったんですが」

「俺は付き合いが長いからすぐわかる。誰が二人のデータを管理してると思ってるんだ」

笑みを浮かべながら二人の手抜きを見抜いた理由を告げる一夏に対して、美紀と本音は苦笑いを浮かべながら頭を下げた。

「やっぱり一夏さんを欺くのは無理でしたね」

「バレないと思っただけどなく」

「とりあえず、他のメンバーのＩＳも後でチェックするから、昼休みにでも整備室に来てくれ。セシリアやラウラの機体も、チェックだけなら出来るだろうし」

さすがに他国の候補生——正確には更識所属ではない候補生のＩＳまでメンテナンスするのは、さすがの一夏でも避けていた。余計な軋轢を生みたくないという事と同時に、ウチの国の候補生のＩＳもメンテナンスしてくれという要望を出させないためだ。

「ご苦労だったな」

「お前たちの模擬戦のお陰で、他のメンバーがどれほど努力した方が良かったかが理解出来ただろうしな」

「そんな理由で、こんな理不尽な振り分けで模擬戦をさせられたんですか？ それだったら貴女たちと碧さんとでも模擬戦をすればよかっただけじゃないですかね？ 仮にも、元世界最強なんですから」

「そんなことを言ったら、小鳥遊が泣くぞ？」

「アンタらに言ってるんだよ」

こめかみをぴくつかせながら睨みつける一夏に対し、織斑姉妹はそそくさとこの場を

去っていったのだった。

一夏に来るように言われたので、美紀たちは昼休みに整備室を訪れていた。美紀と本音は結構頻繁に訪れる場所ではあるが、静寂や香澄、シャルといった更識所属の面々で

さえ緊張するのだから、セシリアやラウラがガチガチに緊張しているのは仕方のない事なのかもしれない。

「別に秘密兵器が置いてあるわけじゃないんだし、そんなに緊張しなくても良いと思うんだけどな〜」

「一夏さんが個人的に使つてる空間ですから、緊張してしまうのは仕方ないと思うけどね」

まったく緊張感のない本音と、多少同情的ながらも緊張している様子が感じられない美紀を、セシリアは恨みがましい目で睨んでいた。

「お二人は慣れているかもしれませんが、一夏さんが使っている空間に入り込むのは、かなり緊張するんですわよ」

「まあ、セシリアの言い分は私にも分かるけど、さすがに緊張し過ぎじゃない?」

「鷹月さんは多少慣れてるから分からないのですわよ! 一夏さんの部屋を訪れるのさえ、特別な許可が無ければ入れないのですから、それに準じる空間である整備室を訪れて良いというのは、相当凄い事なのですわよ」

「一夏君の部屋に入れないのは、一夏君が対人恐怖症であり女性恐怖症だからでしょ?

まあ、必要以上に織斑姉妹が目を光らせているつてもあるんだけど」

「わ、私は明日の朝日を拝むことが出来るのだろうか」

「ラウラ、緊張し過ぎだつて。一夏がラウラに何かするわけないでしょ」

「お兄ちゃんは何もしてこないだろうが、織斑教官たちに何を言われるか分からないぞ……最悪、軍隊式の罰則が……」

「ら、ラウラ？ 震え方が尋常じゃないんだけど？」

織斑姉妹の罰がそれほどまでに恐ろしいものなのかと、ラウラの震え方から理解したシャルは、下手な事はしないようにしようかと心に決めたのであった。

「おーい、いっちー！ みんなを連れてきたよ」

「遅かったな。……？ 何でシャルとラウラは震えてるんだ？」

「な、何でも無いよ、何でも……アハハ」

不自然な態度のシャルに、一夏は首を傾げたが、すぐに考えても分からないと判断して整備室の中に全員を案内する事にした。

「ここが、一夏さんが使っていらつしやる整備室の中なのですね……存外普通でびっくりしましたわ」

「セシリアはいつたい何を想像していたんだ」

「いえ……一般の生徒が立ち入ることが出来ない場所ですから、何かとてつもないものが置いてあるのだと思っていました」

「別に立ち入り禁止にしてるわけじゃない。邪魔をされたくないから、特殊な鍵を掛けているだけだ」

「いっちー、それって立ち入り禁止とあんまり変わらないと思うよ〜」

「そうか？ まあ、本音みたいに遊びに来て邪魔をするようなヤツを入れないためにしてるんだがな」

「それは初耳だよ。美紀ちゃんは知ってた〜？」

「当然でしょ。これでも一夏さんの護衛なんだから」

「私も護衛なんだけどな〜」

それだけ信頼度が違うのかと、静寂は苦笑いを浮かべたが、他のメンバーは一夏が使っている整備室に興味津々のようで、今の会話は耳に入っていないようだった。

「昼休み中には終わらせるから、それまではテキトーに寛いでてくれ。美紀、お茶でも淹れてやってくれ」

「かしこまりました」

全員からISを預かった一夏は、すぐに集中してしまいメンバーを視界に捉えることは無かった。美紀が用意したお茶を飲みながら、静寂たちは緊張した面持ちで一夏の作業を眺めていたのだった。

他国の整備士

一夏たちの模擬戦を観戦していたクラスメイトたちは、昼休みになっても興奮冷めやらぬ状態であつた。

「凄かつたね、更識君の動き」

「でも、四月一日さんや布仏さん相手だとやり難かつたのかな？」

「あの二人は別格でしょ。四月一日さんは国家代表だし、本音は一応それに準じる実力者なんだし」

「あの姿からは想像出来ないけどね」

クラスメイトたちの会話を聞きながら、マドカとマナカは二人で昼食を摂っていた。

「お兄ちゃんが褒められるのは嬉しいけど、余計注目されることになつたんじゃないかな」

「これ以上ないってくらい注目されているとは思いますがけどね」

マナカの心配に、マドカが苦笑いを浮かべながら答える。確かに一夏は更識家の当主

という事を発表してから、前以上に注目されるようになっていた。それが今更ＩＳ操縦技術を見せつけたくらいで注目度が増すとはマドカには思えなかったのだ。

「でもさ、あれだけ動けるんならどこかの国の代表に、つて話が来てもおかしくは無いじゃない？ お兄ちゃんは世界で唯一ＩＳを動かせる男子なわけだし、広告塔にはもってこいだしよ」

「既に大企業・更識のトップなのですから、今更国家代表になどと言ってくる国は無いと思いますよ」

「そうだけどさ……お兄ちゃんの都合なんて考えない輩がいっぱいいるわけだし、そういう話が来ないって保証は何処にもないじゃん」

「来たとしても、姉さまたちが握りつぶして、その国に報復するでしょうから大丈夫でしょう。それに、姉さまたちが何もしなくても、兄さまが個人的に潰す事が可能ですから」

「お兄ちゃんに余計な仕事が増えないかが心配なだけで、お兄ちゃんが代表になるなんて思っていないけどね」

「なら、大丈夫だと思えますよ。最近は刀奈さんも本音も、多少なりとも真面目に仕事をするようになったと聞いていますから」

「何時までもつか分からないけどね」

刀奈は兎も角として、本音が長い時間真面目に働くとはマドカには思えなかった。それはマドカも同じのようで、マナカの言い分に苦笑いを浮かべながら頷いた。

「お二人が真面目になれば、残る問題はアメリカに対する処罰だけですからね」

「篠ノ之も、大人しいものだしね」

「実機を動かしてから、ますます訓練に身が入っていると聞いています。今も兄さまに許可を貰ってVTSルームでトレーニングをしているはずですから」

「中身が変わってから、恐ろしいくらい大人しいよね、篠ノ之」

「何かあれば処分されると理解しているからだと思えますけどね」

物騒な話題になっても、二人は顔色一つ変えずに食事を続ける。忘れがちだが、二人とも犯罪組織に身を置いていたので、この手の話題で顔色を変えるような柔な神経は持ち合わせていないのだ。ましてやあの織斑姉妹と一夏の妹なのだから、これくらいで動じるわけもない。周りは二人の会話が聞こえないように少しずつ距離を取ったが、二人はその事に気が付かなかつた。

整備を済ませた一夏が視線を上げると、美紀と本音を中心に他のメンバーも寛いでいた。

「終わったぞ」

「お疲れ様です、一夏さん」

「対して疲れてないけどな。とりあえず急を要するような箇所は全員のＩＳには見られなかったが、セシリアとラウラはそろそろ本格的なメンテナンスをした方が良さだろうな」

「分かつてはいるのですが、私たちは頻繁に整備士を呼びつけられませんから」
「希望するなら、更識の方で融通を利かせるが」

整備士一人を来日させ、ＩＳ学園に呼び寄せるなど、更識の力を以つてすれば簡単に出来る。一夏の提案にセシリアもラウラも少し考えてから口を開いた。

「宜しいのですか？」

「整備室の一室を貸し与えるくらいなら問題は無い。もちろん、何か怪しい動きを見せたら拘束させてもらうが」

「そのような事は無いと思います」

「なら問題ないだろ。織斑姉妹にはこちらから言っておけば大人しくなるだろうし、政府には更識から話を通せば入国の際に止められることも無いだろう」

「お手数をお掛けしますが、よろしくお願いできますでしょうか？ 本当なら、冬休みに国に戻ればよかったですですが、鈴さんたちと一緒に年明けを迎えたかったもののでして」
「これくらいなら手間でもないぞ。美紀、尊さんにイギリスとドイツの整備士を手配す

るように連絡してくれ。本音は織斑姉妹に事情を説明してきてくれ」

「かしこまりました」

「りよーかいだよ」

すぐに指示を出した一夏に、セシリアとラウラは頭を下げる。

「日本政府には俺から連絡を入れておけば問題ないだろう。後は二人の希望する日時を指定すれば、整備出来るだろう」

「私は何時でも構いませんわ」

「私も、特に希望はありません」

「じゃあ、向こうの都合に合わせてという事で。とりあえずこれは返しておくな」

セシリアとラウラに専用機を返し、残りの専用機も持ち主に返す。

「相変わらず学生とは思えないわね、一夏君は」

「学生をやっているのは、ここにいるのが一番安全だからだ。そうじゃなきゃ俺はI S学園に通うつもりなんてなかったからな」

「そうなの？ 更識さんたちに頼まれたら普通に来そうだけど」

「そうだな」

た。
静寐の冗談を本気で肯定した一夏に、残っているメンバーは苦笑いを浮かべたのだっ

織斑姉妹に対するご褒美

約束はしていたが、忙しくなつてしまひなかなか実行出来なかつた料理を、一夏は今日する事にした。材料は既に揃えてあつたので、後は調理するだけだつたのだが、アメリカが余計な事をした所為で今日まで先延ばしになつていたので。

「漸く一夏君が作つてくれたデザートが食べられるのね」

「ここ最近、急に忙しくなりましたからね」

「お姉ちゃんも本音も働いているのに、一夏が忙しいだもんね。本当に余計な事をしてるよ、アメリカは」

「テイナの移籍話もまとまつたから、後はアメリカから籍を抜けば、完全にアメリカとは縁が切れると思つていたんだがな……」

「そう言えば、テイナは何処の国に移籍したの？」

「なんだ、聞いてなかつたのか？」

意外そうな顔で尋ねる一夏に、本音は大きく頷いてみせた。

「どうせいつちーが教えてくれると思つてたからね」

「何だそれは……まあいいか。ティナはイスラエルに移籍した。技術力を考えれば当然だがな」

「イスラエルなら、更識傘下の企業がありますからね。技術力だけではなく、経済力も問題ありません」

「利益の四割は国に寄付する形で援助してるからな。そのうちナターシャさんの銀の福音も表に出せる日が来るだろうな」

今はまだ権利がアメリカにも残っているので表には出せていないが、全て片付けばナターシャも軍人として表舞台に出る事が可能になる。もちろん、このままIS学園に留まり、教師として働くのも可能だ。

「兄さま、何かお手伝いする事はありますか？」

「いや、大丈夫だ。マドカは大人しく待っていてくれ」
「分かりました」

一夏の役に立ちたい一心から申し出たマドカではあるが、一夏にやんわりと断られ大人しく腰を下ろした。

「マドマドも今日は大人しくいっちゃんにもてなされた方が良かったって」

「そうですよ。せつかく一夏さんが時間を作ってくれたのですから、私たちが余計な事をする必要はありませんよ」

「そう…です…ね…：…せつかく兄さまが私たちの為に用意してくださるのですから、大人しく待っている事にします」

「そもそも、私やマドカが手伝ったところで、お兄ちゃんの邪魔にしかならないと思うけどね」

「それは考えないようにしていたのに……」

自分の料理の腕が壊滅的なのを自覚しながらも、何とかして一夏の役に立とうとしたマドカの気持ちを無視した言葉に、彼女はしよんぼりと俯いてしまった。

「マナマナ、今のは全員が分かっても黙ってたのに」

「本音、それがトドメになってる」

「ほえ？」

本音の言葉に更なるダメージを負ったマドカが、その場に崩れ落ちた。それを見た本音は、何故マドカが崩れ落ちたのか分からないという表情で首を傾げたのだった。

調理室から甘い匂いが漂って来ているのを、織斑姉妹は獣並みの嗅覚で感じ取っていた。

「これは、一夏が作るお菓子の匂いだな」

「いったい誰に作っているのだ？」

匂いにつられるように調理室にやってきた織斑姉妹が見たものは、一夏が作ったお菓子を美味しそうに食べている更識所属の面々だった。

「何故小鳥遊まであそこにいるんだ？」

「小鳥遊が大丈夫なら、わたしたちが加わっても問題ないはずだ！」

相変わらずの超理論を振りかざして仲間に加わろうとした織斑姉妹の背後から、良く知っている気配が声を掛けてきた。

「そんなわけではないでしょうが」

「一夏か……相変わらず見事な隠形だな」

「それで、何故小鳥遊は良くて、わたしたちがダメなんだ？」

「あれはちよつとした勝負で、俺が負けたから作ったんです。勝負に参加していない貴女たちが食べる分はありませんよ」

「賭け事とは感心しないな。黙っててほしければ、私たちの分も用意しろ」

「教師が生徒を脅す方がどうかと思いますかね。それに、賭け事と言っても金品を賭けたわけでもありませんし、ちよつとしたお遊びで片付きますから」

「夏の言葉に反論しようとしたが、言葉が見つからなかった二人は、正直に一夏に頭を下げた。」

「私たちも一夏が作ったお菓子が食べたい」

「この通りだ。作ってくれ！」

「そう言えば、俺たちが旅行に出かけてた間、篠ノ之さんの監視を頼んでましたね」

「そうだ！ その報酬として——」

「必要以上に怯えさせてたそうですが、どのような考えでそのような事をしていたのでしょうか？」

織斑姉妹は逃げ出そうとしたが、背後には碧が待ち構えているのを見て、大人しく事情を説明する事にした。

「疑っている事を自覚させておけば、大人しくするだろうと思つてな」

「篠ノ之さんだけなら別に俺もここまで怒りませんよ。ですが、静寂や鈴から苦情メールが着たんですよね。その辺りはどう弁明するつもりですか？」

「加減はしたぞ！ だが、どうしても篠ノ之を見ていると殺意が……」

「そんなんだから、貴女方は今一つ信用されないんですよ。褒美云々はそれと差し引いて後日用意しますので、今日のところは大人しく寮長室にお戻りください」

有無を言わせぬ態度に、織斑姉妹は大人しく寮長室に引き返した。それを見送った碧は、一夏に対して苦笑いを浮かべていた。

「どっちが年上だか分からない貫禄ですね」

「そんなもの、欲しくありませんがね」

対する一夏も、苦笑いを浮かべながらそう答えて、調理室の中へと戻っていくのだった。

使えるもの

一夏が作ってくれたお菓子に舌鼓を打ちながら、刀奈たちは今あるアメリカの情報を共有する事にした。

「お父さんの話では、今のところは表立って動いては無いようです。疑って見なければ、大人しいものだと言っていました」

「篠ノ之博士は良く気が付いたわよね……あの、他人には興味ないとか言ってたのに」
「一夏に被害が及ぶ可能性があるからじゃない？ あの人も一夏至上主義だから」

「織斑姉妹の親友と言われるだけありますよね」

虚が零した独り言に、全員が苦笑いを浮かべる。恐らく三人は親友だと言われたくないのだろうが、傍から見ているれば他に表現しようがない程、三人の仲は良いのだ。

「一夏君が鈴ちゃんのことを『悪友』だと言って言うように、織斑姉妹と篠ノ之博士も似たような表現をするんだらうな」

「とにかく、アメリカの武装がある程度特定出来たのは大きいですね。ISが無いから対処は簡単ですが、油断せずに行きましょう」

「しかしまあ、最後の最後まで悪足掻きを……一夏君に逆らった時点でＩＳ業界で生き残れるはずがないのに」

「一夏さんは気にしてないですけど、周りが勝手に距離を置き始めますからね」

「更識企業と取引が出来なくなったら、それだけで経営が悪化するとも言われてるもんね」

「難しい事は良いから、もう少ししまったりしようよ」

「……貴女は相変わらずですね、本音」

張り詰めた空気をぶち壊した本音に、虚が頭を押さえながら睨みつける。だが、その程度で本音が疎むはずもなく、相変わらずの空気感で語り始めた。

「アメリカがどうなるうが私には関係ないし、みんなにもあまり関係ないだろうけども、いつちーになにかするつもりなら、動いた時点で私たちが始末出来るでしょ？　だから、わざわざ難しく考えないで、動かなければ放置、動いたら処分でいいじゃん」

「言い方は兎も角、本音の意見に俺も賛成ですね。あまり意識し過ぎると疲れちゃいますし、監視は駄ウサギがしてくれるそうですので、精々頭の片隅で覚えておく程度で良いですよ」

「一夏君がそう言うなら、私たちも過剰に気にするのは止める」

いつの間にか戻ってきた一夏の言葉に、他のメンバーも頷いたのだった。だが、本音だけは少しつまらなそうな表情を浮かべていた。

「どうかしたのか？」

「だって〜！ いったーのいう事はすぐに聞いたのに、同じような事を言った私の言う事は聞いてくれなかったんだもん！」

「本音とお兄ちゃんとは、説得力が違うんだもん」

マナカの言葉に、他のメンバーも力強く頷く。誰がどう考えても、本音の軽い言い方よりも、一夏の言い方の方が納得出来るし、従えるだろう。

「何だか損してる気分だよ〜」

「信用されたかったら、もっと頑張るんだね」

簪の言葉に、本音は力なく頷いたのだった。

調理室を片付けた一夏は、碧を連れてとある部屋を訪れていた。普段なら滅多に近寄ろうともしない部屋ではあるが、今はそんなことを気にしてる場合ではなかった。

「それで、わざわざ何の用だ？」

「万が一の時は、二人にも動いてもらおうと思つてな。もちろん、それなりの報酬は出す」

「報酬なんていらねえから、もう少し自由に動かせろ」

「……働き次第では、更識の方で雇う、それでいいだろ」

「営業とかは御免だからな！ 紛争地帯の平定とか、荒野の開拓とかの方が割に合ってるからな」

「あら、貴女は営業も得意じゃなかったかしら？ 巻紙礼子さん」

「それは止めろって言ってるだろ！ あんなのオレじゃねえ！」

じゃれ合い始めたスコールとオータムに対して、一夏は大きく咳払いをして意識をこちらにむかせる。

「何もないのが一番だが、あれだけの準備をしているところを見れば、遠くない未来に仕掛けてくるだろう。その時には、先陣切って突撃を仕掛けてもらいたい」

「好きなだけ暴れて良いんだろ？」

「ただし、関係ない一般市民には手を出すな。そこまでされたら、さすがに底いきれない」

「それぐらいは分かっているわよ。オータムも分かっているわよね？」

「ああ。せっかくオレらがしてきたことをチャラにしてくれたのに、また余計な事をして逃亡生活を送るのは御免だからな」

「それが分かっているなら、ある程度の自由を認める。もし見境なく暴れるつもりだつ

たら、織斑姉妹を監視につける所だったが」

人の悪い笑みを浮かべる一夏に、オータムが苦虫を噛み潰したような顔で口を開いた。

「相変わらず容赦のねえ餓鬼だな、お前は」

「お前相手に容赦するほどの余裕は、俺にだって無い。それだけお前の能力を買ってるんだから、失望させてくれるなよ」

「分かっているっての。天下の更識企業のトップに期待してもらっているなんて、ちょっと前までなら考えられなかったもんな」

「それと念の為、アメリカがお前らを抱き込もうとして来るかもしれないが、裏切ったら容赦しないからな」

「そんなことしないわよ。私は、アメリカに殺されたんだから」
「そうだったな」

スコールの答えを聞いて、一夏は苦笑いを浮かべながら立ち上がり部屋を後にした。

「漸く軟禁生活ともおさらば出来そうね」

「これが終われば明るい未来が待っているようだしな。気合い入れるか」

「気合いを入れるのは良いけど、空回っちゃわないでね」
「そんなヘマするかよ」

気合十分のオータムに、スコールは笑みを浮かべて頷いたのだった。

二人の成長

様々な準備を進めている一夏の許に、悪友が訪ねてきた。

「一夏、ちよつといいかしら？」

「なにか用か？」

「忙しいのは分かかってるんだけど、弾と数馬の奴が一夏に会いたがってるのよね。今度の日曜日、都合つかないかしら」

「アイツらが？ ……今のところ予定はないが、確約は出来ないぞ？」

「それで十分よ。あいつらだって、一夏が忙しいのは分かかってるでしょうし」

作業の手を止めて、顔を上げた一夏の目の前に、鈴の顔があった。さすがに殴り飛ばす事はしなかったが、大袈裟に距離を取ったのだった。

「一夏がそこまで驚くとは思わなかったわよ」

「鈴に近づかれても気にしないからな。だが、さすがに目の前に顔が来ていたら驚くと思うが」

「……それもそうね」

もし自分が顔を近づけられていたらと想像して、鈴は苦笑いを浮かべながら一夏の言葉に同意した。

「ところで、いったい何の用で会いたがつてるんだ？」

「年明けてから会ってないでしょ？ だから、一夏が大丈夫なら挨拶くらいしておきたいよ。後は、冬休みの課題をすっぽかしたせいで、罰試験があるみたいだから、勉強を教えてもらいたいとかじゃないの」

「そんなの、俺が面倒みるわけないだろ……自業自得だ」

「あたしもそうだったんだけどね。進級が掛かってるらしいから、どうしても一夏に手伝ってほしいとか言ってたわよ」

「いっそのこと、蘭と同級生になるのも良いんじゃないか？」

一夏の冗談がツボに入ったのか、鈴は腹を抱えて笑い出した。

「一夏、それ最高！ アハハ、面白すぎ！」

「笑い過ぎじゃないか？」

大笑いしている鈴に、少し冷ややかな視線を向けたが、鈴はお構いなしに笑い続ける。

「あー面白かった。それじゃあ、前日にまた聞きに来るわね」

「ああ。たぶん大丈夫だとは思うがな」

「アメリカが動かなければ、でしょ。それくらいあたしも分かつてるわよ」

それだけ言い残して、鈴は一夏の許から離れていく。その背中を見送ってから、一夏は作業を再開したのだった。

一夏が生徒会室に來れない以上、刀奈が頑張るしかない。それを刀奈も十分理解しているからか、ここ最近では真面目に作業をしているのだった。

「お嬢様が真面目になってくださったお陰で、心配事が一つ減りました」

「虚ちゃんもそろそろ卒業だもんね。何時までも甘えっぱなしじゃ駄目だって、私だっ
て思うわよ」

「本音も、三日に一回はサボりますが、最近では生徒会室に顔を出すようになりました
ね」

「今日はまだ來てないけどね」

「篠ノ之さんとの訓練で遅れると、一夏さんに連絡を入れたそうです」

「箒ちゃんの相手は、本音が一番だもんね」

人間的な相性もそうだが、ISにおける相性も本音が一番いいのだ。だから訓練の時
には本音が指名される事が多い。

「後はこの問題が片付けば、虚ちゃんは安心して卒業出来るのにね」

「まだお嬢様や本音の事が気がかりですが、とりあえずはそうなりますね」

「頑張ってるんだから、そろそろ認めてくれても良いんじゃない?」

「今までが今まででしたからね。認めてほしいのでしたら、もう少し継続して頑張ってください」

「厳しいわね……まあ、簡単に信頼されるとは思ってないけどさ」

自分がどれだけ甘えまくってたか自覚している刀奈は、小さく息を吐いて作業を再開した。

「あら、これってイギリスとドイツの整備士を呼ぶってやつじゃないの? 何で生徒会室にこの書類が来てるのかしら」

「本当ですね……一夏さんが手配したとはいえ、最終的には職員室に通知されると聞いていたのですが」

二人して首を傾げながら、その書類へと目を通して行く。

「なになに……やっぱり今すぐは無理みたいね」

「今の国際情勢では、他国の整備士を招き入れるのも一苦労ですからね……アメリカのスパイかもしれないという疑念が払拭出来ないでしょうし」

「一時的に二人を更識所属扱いにして、そちらの整備士に整備してもらいたい、ですつ

て」

「まあ、それが一番安全かつ、确实ですからね」

とりあえずこの書類は職員室に持って行くとう事だという事で二人は頷きあい、何処か分かる場所に置いておくことにしたのだった。

「ほえ、おくれちゃったかな？」

「ご苦労様、本音。箒ちゃんの様子はどうだった？」

「まだ数回しか動かしてないのに、クラスメイトの中では結構上の方に位置するくらいの実力だね。記憶を失っても身体が覚えているのかな？」

「どうでしょうね。一夏さんの話では、前の篠ノ之さんの記憶は残ってないはずですが、剣道や料理は問題なくこなせたらいいですから、ISも同じ理由なのかもしれませんね」

「そうなるよ、何時暴走するか分からないって事になっちゃうのよね……今は？ 美紀ちゃんが監視してるの？」

「かんちゃんとマドマドが一緒にいるはずだよ。美紀ちゃんは、いつちーの護衛として整備室周辺にいるはずだから」

「箒ちゃんなら安心ね。それじゃあ、本音もこの書類の山を片付けるのを手伝ってちよ

うだい」

「少し休ませてくださいよ……さつきまでシノノンの相手をして、疲れてるんですから」

「貴女よりも、一夏さんの方が何十倍も疲れてるはずなんですから、貴女を休ませるのから一夏さんを休ませます」

「ほえ……頑張ります」

虚に睨まれて、本音は澁々といった感じで書類の山に手を伸ばした。その後は躓きながらも仕事を進めて行き、なんとか下校時間までには片付け終わったのだった。

織斑姉妹の威圧感

セシリアとラウラを一時的に更識所属にして、更識の整備士が専用機を整備するようにとという書類を持って職員室を訪れた刀奈を、織斑姉妹が獐猛な視線で捉えた。

「なにか用か、更識姉」

「職員室で処理するはずの書類が生徒会室に届けられていたのでお持ちしました。一応こちらにも関係する書類でしたので、目は通しましたが、最終的な判断は職員室ですしてください」

「生徒会に関係しているなら、そちらで処理すればいいだろ」

「正確に言うのであれば、生徒会ではなく更識に、ですから。宛先が更識でしたら、こちらで処理します。ですが、あくまでもI S学園宛の書類ですので、生徒会ではなく職員室で処理すべきだと判断しました」

織斑姉妹の視線に圧されながらも、刀奈は声を震わせる事無く事情説明を続ける。これくらい威圧感で震えるようでは、虚や一夏に怒られただけで泣いてしまうだろう。

「本来であれば、生徒会に運ばれた時点でお持ちすべき書類でしたが、何分書類が多くて

見つけるのに時間がかかってしまいました」

「その事は、一夏は知っているのか？」

「まだ報告はしてません。ですが、私たちとは別の情報網を一夏君は持っていますから。恐らく知っているかと」

「一夏が問題ないのなら、わたしたちが判断するまでもないだろう」

「そうかもしれませんが、一応体裁は保ってください。仮とはいえ、これは国際問題に発展する案件ですから。生徒会で処理するよりは、職員室で——織斑姉妹で処理してください。さったほうが、他国からクレームがくることは無いでしょうからね」

「今更問題が一つや二つ増えたところで変わらんがな。そう言う事ならこちらで処理しよう。ご苦勞だったな」

千夏が書類を受け取り、興味なさげにデスクに放り投げる。それでも、ちゃんと処理はしてくれると約束してくれたので、刀奈は頭を下げて職員室を後にしようとした。だが、振り返った背中に声を掛けられた。

「一夏は今何をしている？」

「一夏君なら、アメリカの動きを監視しつつ、使えるであろう人や物を集めています」

「一夏が声を上げれば、それに追随する人間は多いと思うが」

「不確定な戦力では安心出来ないのでしょうね。だから、元敵相手にも頭を下げたり、お願いしているのだと思いますよ」

「アイツらか……まあ、一夏に頼まれれば断らないだろうな」

その相手が誰であるか、言葉にしなくても理解出来た二人は、もう興味を失ったのか刀奈から視線を逸らしたのだった。

生徒会室に戻ってきた刀奈は、自分の席に着いた途端に机に突つ伏した。いくら威圧感に耐えられるとはいえ、全く消耗しないわけではないのだ。

「お疲れ様でした、お嬢様」

「やっぱり、本音に行つてもらつた方が良かったかもね」

「さすがの私も、織斑姉妹の威圧感には緊張しますよ」

「でも、私よりかは緊張しないでしょ？ 普段から一夏君や虚ちゃんに怒られてる本音ならさ」

「そこまで怒られてませんよ」

緊張感の欠片も無い言い方ではあるが、本音も一応は緊張している。刀奈と話しているから、ではなく、その隣で顔を引きつらせている虚に対してである。

「怒られ慣れているというのは、それだけサボっていたという事なのですか？」

「さ、最近は頑張ってるじゃないか」

「ですけど、三日に一回はサボろうとしますよね？ 本来であれば、一夏さんより貴女の

方が生徒会の仕事をしなければいけないのですよ？　一夏さんはあくまでも、臨時生徒会役員なのですから」

「あれ？　正式に副会長に任命したんじゃないの？」

「それは来年度からの話で、私が卒業するまではあくまでも臨時の生徒会役員ですから」

「そうだったんだ」

「知らなかったのですか？」

笑みを浮かべているが、虚は怒っている。刀奈もその事は理解出来たが、さすがに宥める方法が分からなかったたので素直に怒られる覚悟を決めた。

「お嬢様は一応、生徒会の長なのですから、生徒会のメンバーを正式に把握しておいてください」

「ゴメンなさい……」

「最近我真面目になってきたとはいえ、やはり細かい箇所は変わっていないのですね」

「が、頑張るもん！　一夏君や虚ちゃんが安心して仕事を任せられるような生徒会長になるもん！」

「意気込みは立派ですが、最初からそうでなければおかしかったですからね」

「はい、反省します……」

しょんぼりとした刀奈の頭を、女性ではない手が撫でる。

「はえ？」

「刀奈さんは頑張っていますよ。それは俺も虚さんも理解しています」

「一夏君っ?! いつの間に」

「ついさつきですよ。とりあえずこっちは片付きましたので、手伝いますよ」

「ありがとう、一夏君。よーし！ 残りはまだまだあるけど、さっさと終わらせましょう
！」

「残念ですがお嬢様、下校時間は過ぎていきますので、残りは部屋でという事になります」

「あつ、そうだったわね……それにしても、何でまた増えるのかしらね？」

「今の状況を考えれば、仕方のない事かもしれないですね。ほら本音、立て」

「分かってるよ……」

一夏の声に反応し、疲れ果てた本音がふらふらと立ち上がり、危なげな足取りで部屋に戻っていったのだった。

不審な動き

部屋に仕事を持ち帰った一夏は、珍しく書類を眺めながらため息を吐いた。

「一夏さんが書類を見てため息だなんて、そんなに面倒な事なのですか？」

「いや、篠ノ之さんに対する抗議なんだが、アメリカからだから……相手にするのもバカらしいが、無視したら超理論でも振りかざして攻め込んでくるかもとか考えると、ため息くらい吐きたくなるだろ」

「今のアメリカの状態を考えれば、あり得そうで怖いですね」

一夏が何を心配しているのか理解した美紀は、一夏と同じようにため息を吐いた。

「そもそも前の篠ノ之が破壊工作をしていた国はアメリカではないんだから、アメリカがとやかく言う権利は無いと思うんだがな……」

「理屈ではなく、自分たちの地位を取り戻すために、篠ノ之さんを利用したいだけだと思いますが」

「それは分かっているんだが、そんな事で俺たちがまともに取り合うはずもないと分からないのか」

「理解はしているんだと思いますけど、そんなことお構いなしなのでしょね」

皮肉気味に美紀がそう言うのと、一夏も面倒くさそうに頭を振って、その書類を処理する事にしたのだった。

「とりあえず返事はするが、まともに相手にする義務はないな」

「そもそも、一夏さんが処理するような案件ではないように思うのですが？」

「職員室は別の案件を任せてるからな。まあ、持っていったところでテキストに処理するのが目に見えてるが」

「一夏さんも、まともに取り合うつもりは無いのですよね？」

「相手にしてやるほど暇じゃないからな。セシリアとラウラの専用機のメンテナンスの予定を建てなければいけないし、それ以外にもいろいろとあるからな」

次の案件に移りながらそんなことを言う一夏に、美紀は背後からふわりと一夏を抱きしめた。

「どうかしたのか？」

「いえ。私にはこれくらいしか出来ませんから……」

「いや、十分だよ」

美紀の優しきは一夏にも十分伝わっているようで、顔だけで振り返り美紀に笑みを見せたのだった。

「今日はもう休んだ方が良いと思いますけど」

「あと少しだから、終わらせてから休むさ。美紀は先に休んでもいいぞ」

「いえ、私はそこまで疲れてませんから」

一夏の言葉に満面の笑みで断りを入れる美紀に、一夏は苦笑いを浮かべながら視線を書類に戻したのだった。

職員室で例の案件を処理した翌日、朝早くから一夏は織斑姉妹に呼び出されて寮長室にやって来ていた。さすがに護衛を部屋の中まで連れて来るわけにはいかなかったのだ。碧は部屋の前で待機している。

「それで、こんな時間に呼び出された理由をお聞きしても？」

「東から連絡があつてな。アメリカの動きが活発化してきているようだ」

「いきなり仕掛けてくる可能性がある、わたしたちも東に叩き起こされて知らされたんだ。お前にも教えておいた方が良かったらと思うてな」

「いきなり仕掛けてくることは無いと思いますがね。そういう事情なら分かりました。ところで、イギリスとドイツからの返事はどうなりました？」

「今の状態が落ち着くまでは頼む、との事だ。後はお前が好きにして構わないそうだ」

「分かりました。セシリアとラウラの都合を聞き次第、メンテナンスを行います」

二人にそう告げて立ち上がろうとした一夏ではあったが、まだ何か話があるような雰
囲気を感じ取って、浮かせた腰を再び下ろした。

「まだ何か厄介ごとが？」

「バカ箒の事だが、本当に安心して問題ないのか？」

「今のところ、我々に対する負の感情はなさそうです。日下部さんも必要以上に警戒し
なくなつたところを見れば、そう判断出来ると思いますよ」

「クラスメイト達はそれで問題ないだろうが、我々はそうはいかないだろ。特に一夏は、
あのバカの身元引受人みたくないな感じなのだからな」

「あくまでも篠ノ之さんの監視責任はIS学園と更識企業で二分されていますので、俺
一人が身元引受人というわけではありませんよ」

「それは分かっているが……」

「とにかく、アメリカの件はこちらでも監視を強めておきますので、何かあればすぐに動
けるようにしておいてください。貴女たちには学園の守護を頼みたいですからね」

「わたしたちが前線に出なくても良いのか？」

てつきり最前線で敵を潰せるものだと思っていた千夏が、肩透かしを喰らったような

表情でそう問いかける。

「前線には優秀な操縦者を送ります。ですが、護衛にはスペシャリストがいた方が安心して攻められるというわけですよ」

「まあ、一夏がそこまで私たちを評価してくれてるのなら仕方ないな」

「貴女たちの実力『だけ』は評価してますので」

一夏が『だけ』に力を込めたのに、千冬も千夏も気づかなかつた。

「一夏が私たちの事を認めてくれてるなんて」

「それだけで国一つくらい滅ぼせるくらいのやる気が出て来るものだな！」

「物騒な事を眩かないでください。貴女たちは、あくまでも守るだけですからね」

理解してるのか疑わしいが、一夏はそれ以上釘を刺しても無意味だと理解しているの
で、ため息交じりにそう呟いて部屋を辞すことにした。

「あつ、それから」

「なんだ？」

「昨日の実習のように、必要以上に疲れるような事は避けてくださいね」

「わかつたわかつた」

「本当に分かってるんだろうな……」

一抹の不安を感じながらも、一夏は寮長室から外に出たのだった。

クラスメイトの反応

朝教室に顔を出した箒に、クラスメイトたちは若干引き攣った表情で挨拶を交わした。そんな表情をされても仕方ないと割り切って入るが、やはり気にはなってしまう。

「（前の私の言動を考えれば、この反応でもマシな方なのでしょうが、もう少し分かりにくくしてもらえないでしょうか……いや、更識の皆さんのようなポーカーフェイスを基準にしてはいけませんね）」

あの本音ですら、箒相手に表情を読ませることなど無いのだから、更識勢のポーカーフェイスは鉄壁だと言えるだろう。

「おはよう、篠ノ之さん」

「鷹月さん、おはようございます」

「そんなに気になるなら、一夏君に相談でもしてみたら？」

「……何のことでしょうか」

心を読まれたのではないかと警戒した箒だったが、静寂はすぐに種明かしをしてくれ

た。

「そんな表情をしてれば、誰だつて分かると思うけど？ 警戒されるのは仕方ないけど、もう少し分かりにくくしてくれないものかつて考えてたんでしょ？」

「さすがは一夏様が信頼を置くお方、お見事です」

「そんな大層なものじゃないわよ」

箒が大袈裟に言うものだから、静寐は思わず笑ってしまった。本当に信頼されているのは、やはり最初から更識に属していたメンバーであり、自分はそれに準じるようなものではないと本気で思っているから、箒の発言がおかしくて仕方なかったのだろう。

「ですが、クラスを纏めるのを頼むのは、何時も鷹月さんのような気がしますが」

「そう言うことに慣れてるからだと思うけどね。一夏君がいないって事は、四月一日さんもいないって事だから」

「ですが、布仏さんはいる事が多いですよね？」

「本音はそう言う事が苦手だからね」

本音がリーダーシップを発揮してクラスを纏めているところを想像して、静寐は思わず吹き出してしまった。

「どうかしたのですか？」

「いや……本音がリーダーシップを發揮してるところを想像して、おかしくなつてね……あー、ゴメンなさいね。ちよつと脱線しちゃつたみたいだし」

「いえ、それは構いませんが……」

「えつと、一夏君に相談するなら、もうすぐ来るはずだけど」

「そこまでお手を煩わせるわけにはまいりません。自分の言動や行動で、前とは違ふという事を分かつてもらうように頑張ります」

「篠ノ之さんがそれでいいなら別に構わないけど、クラスメイトもまだ、どうやって今の篠ノ之さんと接すればいいのか悩んでるところだから、あえて篠ノ之さんから声を掛けるのも手だと思ふわよ」

静寂のアドバイスに筈はお礼の意味も込めて一礼し、自分の席に着いたのだった。

クラスの雰囲気微妙に違う事を感じ取ってはいたが、特に改善させる必要性を感じなかつた織斑姉妹は、気にした様子もなくHRを続けた。

「——連絡事項は以上だ。それから、更識弟、オルコット、ボーデヴィツヒはちよつと廊下に来てもらおうか」

一夏とセシリアとラウラを呼びつけ、HRは終わりだと言わんばかりに真耶に教壇を譲る。

「すぐに済む話だ。それほど気にする必要は無い」

「わ、分かりました」

教室内を気にしていたセシリアに、千冬が端的に告げる。

「その威圧的な態度はどうかならないのですかね？」

「これが素なんだから仕方ないだろ」

「ラウラが緊張しっぱなしなので、もう少しマイルドに出来ないんですか？」

「別に威圧してるつもりは無いのだがな」

一夏の注意に、千冬と千夏は困った表情を浮かべる。ラウラが自分たちに対して尊敬と畏怖の情を抱いているのは知っているので、なるべく距離を取って話したりしているのだが、それでも緊張してしまうのは仕方のない事なのだと思っていたから、どう対処すればいいのかが分からないのだった。

「とりあえず、本題に入る。本日付で、オルコット、ボーデヴィツヒ両名は一時的に更識の所属となる。したがって、整備などは更識弟が担当する事が出来るようになったので、問題があるようなら更識弟に言うように」

「別にわざわざ廊下に出て話すような事ではないと思うのですが」

「一応機密事項だからな。公然の秘密とはいえ、あまり大っぴらに言えることではない

だろ」

「一応そう言う事を考えての事なら、これ以上文句は言いませんが」

「それで、オルコット、ボーデヴィツヒ両名は都合が良ければ、更識弟にメンテナンスをしてもらいたいのだが、今日の放課後はどうだ？」

「わ、私は問題ありませんわ」

「私も、特別用事などありません！」

敬礼をするラウラに、その行為は不要だと目で告げて、千冬と千夏は満足げに頷いた。

「というわけだ。更識弟は大変だと思うが、メンテナンスを頼むぞ」

「別に大変ではありませんが、職員室で処理すべき仕事を生徒会に回すのは止めてくださいいね。昨日もそのせいで仕事が終わらなかつたのですから」

「な、何のことだ……」

とぼけたところで、処理した本人が目の前にいるのだから、言い逃れなど出来るはずがないのだ。それでも一夏が怒らなかつたのは、授業中であることと、セシリアとラウラの目があることを気にしたからだろう。

「今回は見逃しますが、次はありませんからね」

すれ違いざまに小声でそう告げた一夏に、千冬と千夏は震える身体を抱きしめながら肝に銘じたのだった。

浮かれるセシリア

一夏にメンテナンスしてもらえるとこの事を噛みしめながら午前中の授業を済ませたセシリアに、清香たちが面白そうに声を掛けて来る。

「何だか心ここにあらずって感じだったけど、何か良い事でもあったの?」

「べ、別に何もありませんわ」

「隠すためにならないよ? 正直に白状しなさい!」

「ちよつと! 相川さん!」

脇腹をくすぐられ、セシリアは身もだえながらなんとか逃げ出そうとしたが、他のクラスメイト達に阻まれてしまう。

「さあさあ、正直に白状しないと、もつとくすぐっちゃうわよ」

「わ、分かりましたわよ! 一夏さんに専用機をメンテナンスしてもらったので、ちよつと嬉しかっただけですわ」

「更識君に? でも、セシリアってイギリス所属でしょ? 問題にならないの?」

「正式なルートで交渉したので問題ないと織斑先生たちが仰られておりましたわ。詳し

「事は、私にも分かりませんが、国が正式な文書で通達してきたので、恐らくは大丈夫だと思いますわ。もつと詳しく知りたいのでしたら、一夏さんか織斑姉妹にお聞きになってくださいませ」

「別に聞いても分からないだろうから別にいいけど、それでそんなに浮かれてたんだ」

「そんなに分かりやすく浮かれてたつもりはありませんけど」

「だって、ずっとにやにやしてたから、何事かと思っただけだね」

「にやにやはしてませんわ！」

セシリアが大声を上げたため、何事かと他のクラスメイト達も集まってくる。それを何とかしたのは、やはり一夏だった。

「何事だ、これは？」

「あつ、更識君。セシリアの専用機を更識君がメンテナンスする事になったって本当？」

「ああ、本当だ。さすがに他国の整備士を今招き入れるのは問題になるという事で、セシリアとラウラを一時的に更識所属にして、ウチが担当する事になったんだ」

「一時的って事は、そのうち元に戻るって事？」

「そうだな。長くてもモンド・グロツソが始まる前までだろうし、それほど騒ぎ立てる事でもないだろう」

「ボーデヴィツヒさんもなんだ」

「今のところメンテナン스가必要そうなのはその二人だけだからな。鈴は既に担当整備士が日本にいるみたいだし、他の人も今のところは問題なさそうだからな」

「難しい事は分からないけど、更識君がそう言うならそうなんだろうね」

それで納得出来るのもどうかと思うが、面倒になりそうなので一夏はスルーすることにしたのだった。

「一夏君、ちよつといいかしら？」

「何かありました？」

そのタイミングで刀奈が教室に顔を出したため、一夏はその場から離脱し、残ったクラスメイト達も、セシリアから別の話題で盛り上がり始めたので、セシリアもそのまま席に戻ったのだった。

放課後、整備室に呼ばれたセシリアとラウラは、本音に連れられて整備室前までやって来ていた。

「何で私が案内役なのかな？　まあ、セツシーもラウラウも緊張しちゃうから仕方ないのかもしれないけどね」

少し文句っぽくも聞こえるが、本音の表情はいつも通りニコニコしているので、本気で嫌がっているわけではないのだろうとセシリアとラウラは思っていた。

「いっちー、連れてきたよ〜」

本音がそう声を掛けると、内側から鍵が開けられ、中から闇鴉が姿を見せる。

「お待ちしておりました。では、セシリアさんとラウラさんは私に続いてください。本音さんは、生徒会室へ行くようにとの事です」

「りよーかいだよ〜！ それじゃあセツシー、ラウラウも頑張つてね〜」

「いったい何を頑張ればいいのかと思つたが、それを声に出す余裕が二人には無かつた。」

「別を取って食おうというわけではないので、そこまでガチガチに緊張する必要はありませんよ。メンテナンスをするのは一夏さんですし、お二人が何かをするという事はありませんので」

「分かつてはいるのですが、一夏さんにメンテナンスしていただけるといふ事実が、私たちの身体を強張らせるのですわ」

「そんなものなのですか？ 私はISですので良く分かりませんし、メンテナンスされる側ですからね。とりあえず、一夏さんがお待ちですので」

そう言つてずんずん先に進んでいく闇鴉の背中を、少し駆け足で追いかけるセシリアとラウラ。前に一度入つた事はあつても、やはりこの空間にいただけで緊張してしまうようだった。

「一夏さん、セシリアさんとラウラさんをお連れしました」

「それじゃあさつそく始めようか。二人とも、ISを貸してくれるか」

差し出された一夏の手には、二人は待機状態の専用機を置く。本来なら他国の技術者に自国の知恵と技術が詰まつたISを渡すなどという事はあり得ないのだが、天下の更識企業の若き総帥である一夏が、技術を盗み取るとは二人とも思つていなかった。

「それじゃあ、一時間くらいしたら終わるだろうから、その時間になつたらここに戻つて来てくれ。それまでは自由にしていいぞ」

「ここで待つていても宜しいでしょうか？」

「構わないが、ここは電波も悪いし、暇つぶしになるようなものは何もないが？」

「一夏さんの作業を見学したいのです」

「……好きにすればいい」

見られたからといって、一夏の技術をこの二人が盗めるとは思えなかつたし、見られ

でも困らない作業しかするつもりが無かったので、一夏は短く告げて作業を開始するのだった。

ちよつとした贅沢

一夏が整備室で作業をしているのと同じ時間帯、生徒会室は刀奈と虚、そして本音の三人が忙しなく書類を片付けていた。

「これはもう終わってるわね。本音、そっちは？」

「あと少しです」

「虚ちゃんの方は？」

「私は終わりました」

「さすがね。他に処理してない書類は無いわよね？」

「そうですね。今日は比較的少なかったので、後は本音が処理してる分で終わりです」

少ない、と言っても刀奈や虚の基準なので、本音からしてみればかなりの量があったと思つてゐる。だが、それでも文句を言わずに作業を進めているのは、自分だけ明らかに少ない量にしてもらつてゐると分かつてゐるからだ。

「終わりました」

「それじゃあ、今日のお仕事はこれで終わりね。お疲れ様」

「お疲れ様でした。お茶の用意をしますね」

「ほえ、お疲れ様でした」

一夏がいればもつと早く終わっていただろうが、一夏に頼らずとも終わらせることが出来ると証明する為にも、ここ最近刀奈と本音は頑張つて生徒会の作業をしているのだ。

「お嬢様も本音も、ようやく生徒会役員らしくなつてきましたね」

「私はちよつと一夏君に頼つただけで、ちゃんと生徒会役員をやつてたわよ？」

「お嬢様は役員ではなく会長なのですから、これくらいしてくれないと困るはずだったんですけどね。一夏さんが優秀だったから、お嬢様がサボつてもあまり問題が無かつただけなんですから」

「分かつてるわよ！　ここ最近一夏君がまた忙しくなつてきたから、こつやつて頑張つてるんじゃない」

「あまり胸を張つて言える事ではありませんけどね、お嬢様の場合は」

これが当然だと言外に告げて来る虚から視線を逸らして、刀奈は本音に話しかける。

「本音だつて、本来なら一夏君より働いてなきやいけなかつたんだからね」

「分かってますよ。でも、セツシーやラウラウたちとの訓練に参加したり、シズシズやカスミンたちの戦力の底上げを任せられたりと、私だって色々あったんですから」

「何もない日は、食堂でお菓子を食べていたらだらしてたって報告が上がってるのですがね」

「せっかくの休みはそう言う事をしなきゃダメでしょ？」

「生徒会の業務は、休みなくあつたのですけど？」

「まあまあ、そんなに怒ると、眉間の皺が取れなくなっちゃうよ？」

「誰の所為でこんなに怒らなければいけないと思ってるのですか！」

本音が無邪気に地雷を踏み抜いたのを見て、刀奈は思わず合掌をしてしまった。

「お嬢様、その行為の意味は何でしょうか？」

「へっ？ 特に意味なんて無いわよ？」

怒りの矛先が自分にむきそうになったので、刀奈は慌てて話題を逸らす事にした。

「生徒会の仕事もそうだけど、本音は少しサボり過ぎよ。更識の仕事だつてあるんだから」

「私はいつちーの護衛ですから、いつちーの傍にいればそれで仕事をしてる事になるん

ですよ。」

「殆ど碧さんと美紀ちゃんに任せてるじゃない。本音が護衛だったのって、一夏君が中学生の頃のほんの少しの間だけじゃないの？」

「今でもちゃんと護衛として働いてますよ。いっちーがいる整備室に他の人を案内するのは、私の事が多いんですから。」

「それは護衛じゃなくて案内役なんじゃない？」

刀奈の疑問に、本音は特に気にした様子は見せなかったが、少し考える素振りをしていた。

「とりあえず、本音はもう少し頑張ること。」

「お嬢様も、人の事を言える立場ではないんですけどね。」

そう言つて虚は二人の前にお茶を差し出す。一夏程ではないが、虚が淹れてくれる紅茶は最高に美味しいと刀奈は思っている。怒られた事など気にせず紅茶に手を付けた。

「やっぱり紅茶は虚ちゃんに淹れてもらうのが一番ね。」

「一夏さんの方が美味しいとは思いますがね。」

「一夏君のとは違った美味しさがあるから、虚ちゃんのは虚ちゃんのでいいのよ」
「他の家事は兎も角、お茶を淹れるのだけは上手だからね、おねくちゃんは」

またしても無邪気に地雷を踏み抜いた本音ではあつたが、さすがに何度も同じネタで怒るほど虚も子供ではない。だが、浮かべている笑顔がどことなく怖いと、刀奈は思えてならなかった。

「一夏さんが作り置きしてくださったクッキーがありますけど、本音はいらないうですぬ」

「ほえっ!? いっちーのクッキーは欲しいよ〜!」

「虚ちゃん、やつぱり怒ってるじゃない……」

「何か言いましたか?」

「ううん、何も言つてないわよ。それより、一夏君のクッキーなんてどこにあつたのよ」
「お嬢様や本音に教えると全部食べてしまう恐れがあるという事で、一夏さんが私に手渡してくれたんですよ。生徒会の作業が終わったら摘まめる分しか作つてないと言つて」

「さすが一夏君、抜け目ないわね」

ここに簪や美紀がいたら分け前が減ってしまうので、このタイミングで虚が出してきたというのは刀奈にも本音にも理解出来た。

「簪お嬢様や美紀さんには、別の形で渡しててるのかもしれませんがどね」

「一夏君ならありえそうよね」

「それより、早くいつちーのクッキーを頂戴よ〜」

「はいはい、今用意しますね」

これくらいの贅沢は良いだろうと虚も思っているのですが、一夏のクッキーを皿にのせてちよつとしたティータイムを楽しむことにしたのだった。

整備の結果

きつちりと一時間で整備を済ませた一夏は、セシリアとラウラに専用機を手渡した。

「これで当面は大丈夫だと思うが、何か違和感があったら言ってくれ。可能な限り調整させてもらう」

「お兄ちゃんが整備してくれたんですから、違和感など無いと思います」

「そうですわね。四月一日さんや布仏さんたちも普段から問題なさそうに動かしていますし、一夏さんの整備の腕は確かだとシャルロットさんからも聞いていますから」

「あれは自分の家で造ったI Sだから何とでも出来るのであつて、さすがに他国のI Sを最初から問題なく整備出来るとは思ってない」

一夏としては本音で言っているのだが、セシリアとラウラにはそれが謙遜にしか聞こえなかった。もちろん、嫌味には聞こえないが、一夏の腕ならば第三世代など苦勞なく整備出来るのではないかと思っっているのだ。

「とりあえず動かしてみてくれ。第三アリーナを取つてあるから、そこに移動しよう」
「分かりましたわ」

セシリアは言葉で、ラウラは動作で一夏の言葉を受け入れ、一夏を先頭にして三人で第三アリーナまで移動する。

「一夏さんはずっと整備担当で行くのですか？ 先日動きを見て思ったのですが、十分に代表としての実力をお持ちのようですが」

「確かに。お兄ちゃんならどこの国の代表でも務まりそうですが、何故希望しないのですか？」

「俺は刀奈さんや簪、美紀の整備士として日本に属してる事になってるからな。今更代表とか言われても興味はないし、あまり表舞台に出たくないってのが本音だな」

「ですが、既に更識の代表として大々的に表舞台に立っているではありませんか」

「あれは……色々と仕方なかったんだよ。篠ノ之さんの件を更識に一任してもらったのは、代理ではなく俺が直接交渉した方が早かったし」

「お兄ちゃんは何処の国のトップにも負けない発言力とカリスマ性を持っていきますからね」

ラウラの言葉に素直に頷ける程、一夏は自分を過信していない。だが彼女の評価を訂正することも無いと考え、ラウラの言葉を流す事にしたのだった。

「到着。とりあえず着替えて、軽く移動したり武器を出したりして見てくれ。それで問題が無ければ大丈夫だろうからな」

「わかりました」

「お兄ちゃんの整備に間違いは無いと思いますが、こういうのはしつかりしておかないといけませんからね」

セシリアとラウラがピットに移動するのを見送り、一夏は観測室に移動し、セシリアとラウラのデータを採ることにしたのだった。

動作確認だけのつもりが、つい盛り上がってしまった、そのまま軽く撃ち合ったセシリアとラウラは、満足げな表情でピットに戻ってきた。

「凄いですね、一夏さんの整備は」

「武装を呼び出すのがよりスムーズになっていたな。セシリアも、近接武器を簡単に呼び出せていたようだし」

「ラウラさんこそ。シャルロットさんのラピット・スイッチとまではいなくても、かなりの高速展開でしたわよ」

「これが天下の更識の技術力なのか」

満足げに話していた二人の背後から、一夏が声を掛けた。

『入っても大丈夫か？』

「問題ありませんわ」

少し汗を掻いてはいるが、それほど恥ずかし事でもないと考えたのか、セシリアは一夏の入室を許可した。

「何だ、まだ着替えてなかったのか」

「一夏さんの技術力の高さをラウラさんと話していたところですよ」

「満足してもらえたようで、こちらとしても良いデータが取れた。次整備するときにはこのデータを反映させ、もう少し動きやすく出来ると思うぞ」

「既に次の事を考えているとは、さすがはお兄ちゃんだな！」

「まあ、次があればの話だが」

「一夏さんとしては、あまり敵国の選手を強くしたくない、というところですか？」
「別にそんなことは無いが、何時までも国際問題に頭を悩ましたくないってだけだ」

一夏も更識当主とはいえ高校生、何時までもその事で頭を悩ましたくないというのが本音なのだ、セシリアとラウラは少し意外に思いながらも納得した。

「まあ、セシリアもラウラも、一学期に比べれば大分成長してるようだし、油断してたら俺なんかすぐに抜かされそうだ」

「一夏さんは操縦の腕も一流ですから、私たちが頑張ってもそう簡単に追い抜くことは

出来ないと思いますが」

「現に、この前はあっさりとやられてしまったからな」

「あれはちよつとした隙を突いて一撃で終わらせたからだ。数の有利から油断しててくれたから出来ただけで、次は使えない一度だけの手品みたいなことだ」

一夏は割かし本気でそう思っているのだが、セシリアもラウラも、次やったとしてもあの動きに対処出来る自信は無かった。

「とにかく、訓練相手なら務めるが、本気で相手しろと言われても困るからな。本気の訓練がしたいなら、本音が美紀たちに声を掛けてくれ」

「一夏さん相手でも苦戦しますのに、四月一日さんたちを相手にしたら自信を失ってしまいますわよ」

「お兄ちゃんも弱いとか言っているが、私たちから見れば十分強者だという事を自覚してもらいたい」

「二対一なら勝てないと思うんだがな」

苦笑いを浮かべながら、一夏はセシリアとラウラに軽く手を挙げてピットを後にする。セシリアとラウラはシャワーを浴びてから着替え、それぞれの部屋に戻ったのだっ

た。

久しぶりの外出

土曜日の午後、珍しく部屋で寛いでいた一夏の許に、鈴がやってきた。

「明日、大丈夫?」

「一応は大丈夫だが、いつ呼び出しがあるか分からないからな」

「それはあたしも同じよ。これでも国家代表候補生だもの」

「それでも構わないなら、弾と数馬に付き合えるが」

「了解。そうメールしとくわね」

確認だけしたら、鈴は大人しく部屋から出て行った。もうちよつと居座るのではと疑っていた美紀は、呆気にとられた表情で鈴の後姿を見送っていた。

「アイツはサバサバしてるからな。こういう時は用件を済ませたらさっさと帰るぞ」

「そうみたいですね……」

「意外だったのか?」

「それなりに親しくさせてもらってましたが、鈴さんがあそこまでサバサバしてるとは思ってませんでしたから、ちよつと意外でした」

誤魔化さずに素直に言う美紀に、一夏は苦笑いで応えた。

「あんまり長居すると、織斑姉妹が飛んでくるとでも思ったのかもな」

「一夏さん、私に誤魔化しは通用しませんからね」

「別に誤魔化してるわけではないが、鈴の事だから、刀奈さんか織斑姉妹のどちらかがやってくるかもとか思ってたのかもしれないぞ。面倒事は極力嫌うからな、鈴も」

「それはなんとなく分かります」

一夏も面倒な事は避けたいと思ってるので、鈴もそうなのではないかと美紀も思えたので、今度の説明には納得の表情で頷いた。

「ところで、明日出かけるんですか?」

「そんな大層な事じゃないだろ。確か、進級が掛かっているから勉強を教えてほしいとか何とか……そんな感じだった気がする」

「曖昧ですね……一夏さんが覚えてないなんて、珍しい事もあるんですね」

「あんまり興味が無かったからな。あいつらが留年しようが進級しようが、俺にはあまり関係ないから……いや、泣き付かれる回数が増えそうだから、関係あるか」

「お友達なのですよね?」

「悪友だ」

その表現をする相手がどういうものなのか重々理解している美紀は、それ以上追及する事は止め、笑みを浮かべて頷いたのだった。

「それじゃあ、明日は私が護衛として付き添えばいいんですか？」

「必要ないとは思うが、一応頼めるか？」

「もちろんです。明日は訓練の予定も無いですし、一夏さんのお側にいられるのでしたら、喜んでお供いたしますよ」

「ちよつと大げさじゃないか？」

「そんなことありません」

笑顔でそう言い切った美紀に、一夏は首を傾げながらもそれ以上の質問はしなかったのだった。

翌日、鈴と美紀を引きつれ待ち合わせ場所にやってきた一夏が見たものは、見覚えのある男子二人が年上の女性に絡まれている姿だった。

「何処にでもいるのね、ああいうバカ女は」

「聞こえるぞ」

「聞こえるように言ってるんだから、当たり前でしょ」

鈴の悪態は案の定二人に絡んでいた女性に聞こえたようで、矛先を二人から鈴に変え

つかつかと近づいてきた。

「ちよつと貴女。私の事を『バカ女』とか言ったわね?」

「ええ。どうせ女だつてことをいいことにあのバカ二人に荷物持ちとかさせようとしたんでしょ」

「男なんて私たち女のいう事を聞いていればいいのよ。貴女だつて、その男をこき使つてるんでしょ」

「お生憎様。この一夏をこき使おうだなんて、何処の誰にも出来ないわよ」

「おい」

鈴の言葉に苦笑いを浮かべながらツツコミを入れたが、隣の美紀が当たり前だと言わんばかりに大きく頷いたのを見て、ツツコミはため息に変わったのだった。

「一夏? どこかで聞いた名前ね……」

「天下の更識企業の代表にして、世界的なIS整備士の更識一夏よ。旧姓織斑一夏、あんたらが神聖視している織斑姉妹の実弟にして、現日本代表の更識刀奈さんの義弟、ペア代表更識簪の義兄よ」

「人の事をペラペラと他人に話すなよな」

「これくらい言わなきゃ、この残念な脳みその持ち主には分からないだろうから仕方な

いでしょ」

案の定、女性は口をパクパクさせ一夏を指差し、何も言えずにその場から立ち去っていった。

「悪いな、鈴。助かったぜ」

「後で昼飯奢りなさいよね」

「また集めるのかよ！ 俺らより十分稼いでるんだろ？」

「金を持つているからこそ、使わないのよ。そもそも、助けられたって分かっているなら、大人しく奢りなさいよね。もちろん、一夏や美紀にも」

「そっちの人は誰だ？ 一夏の彼女か？」

「あんたね……いくら関係のない世界だからって、国家代表の顔くらい覚えておきなさいよね」

「はじめまして。一夏さんの護衛兼ペア日本代表の四月一日美紀です」

「ああ、それで見たことがあったのか」

納得がいった弾と数馬が大きく手を叩き、鈴に尻を蹴られてから自己紹介をする。

「一夏の友人、五反田弾です」

「同じく、御手洗数馬です」

「あんまり近づかない方が良いでしょう。バカが移るから」

「移るか!」

「久しぶりに顔を見たが、特に変わりは無さそうだな。それで、進級ギリギリのおバカさんたちは、俺に何の用なんだ?」

「……勉強を教えてください、お願いします」

深々と頭を下げてくださいする二人に、鈴が侮蔑の表情で呟く。

「さっきも一夏の名前に助けてもらって、また一夏に頼るのね、情けない」

「鈴、それくらいにしておけ」

「分かっているわよ」

すぐに表情を改めてケラケラと笑う鈴に、弾と数馬は苦虫をかみつぶしたような表情でもう一度一夏に頭を下げたのだった。

母の抱擁

外で待ち合わせたのが、良い場所が無く結局五反田食堂にやってきた一夏たちを出迎えたのは、蓮の熱い抱擁だった。

「久しぶりね、一夏君。弾と蘭がお世話になってるわね」

「いえ……あの、そろそろ離してください」

「もうちよつとくらい良いじゃない。私は一夏君の事も息子だと思ってるんだから、これくらい母子のスキンシップよ」

「そんなこと言って、母ちゃんは一夏が載ってる雑誌を買い漁ってるくせに」

「なにか言ったかい、バカ息子」

「いえ、何でもありません……」

実の息子に睨みを利かせた蓮は、ようやく一夏を抱きしめていた腕から力を抜き、一夏から距離を取った。

「一年くらい会わなかっただけで、随分成長したわね、一夏君」

「色濃い一年でしたからね。蓮さんはお変わりなく、若々しく美しいですね」

「あらやだ。こんなお婆ちゃんにお世辞を言ったって、何も出ないわよ」

そう言いながら蓮は財布を取り出してお小遣いを渡そうとしたが、一夏はそれを固辞し、奥にいる巖に声を掛ける。

「お久しぶりです」

「おう。暫くだな」

短い挨拶だったが、巖の表情もいつもより柔らかいと弾には思えていた。

「じーちゃんがそんな顔するなんてな」

「うるせえぞ、バカ孫が！ 留年したらこの家から出てってもらうからな！」

「うげっ!？」

めったにない巖をからかえるチャンスだと思っていた弾だったが、見事なカウンターを喰らい絶句する。

「ほらほら、弾も数馬もせつかく一夏が時間を作ってくれたんだから、しつかり勉強するのね」

「お前は どうするんだよ?」

「あたし？ あたしはアンタたちの横でゲームでもしてるわよ」

「ひでえ女だ」

「あたしは問題なく進級出来るし、一夏に教わるほど理解力が低くないもの」

「鈴はそろそろ代表昇格の声が上がるんじゃないか？」

「あんまり興味は無いけどね」

自分たちとは別次元の話に、弾も数馬も口をポカンと開けて固まってしまふ。

「ほら、アホ面曝してないでさっさと行くわよ」

そんな二人に、鈴は結構本気の蹴りを尻に叩き込んだのだった。

弾の部屋で勉強を始めて数十分後、勢いよく部屋の扉が開かれ、見覚えのある少女が部屋に入ってきた。

「一夏さん、お久しぶりです」

「蘭か。文化祭以来か？」

「はい！ えっ、もしかして四月一日美紀さんですか？」

「私の事を知っているんですか？」

「知ってるも何も、IS操縦者を目指す女子の憧れですからね。もちろん、更識姉妹もですが」

「美紀もかなり知名度が高いんだな」

「そうみたいです」

他人事のように話す美紀に、鈴が呆れた視線を向ける。

「日本のペア代表の片割れなんだから、もう少し有名人としての自覚を持ちなさいよ」

「簪ちゃんや刀奈お姉ちゃんならともかく、私なんか注目されてないと思ってました」

「織斑姉妹の後釜なのよ？　注目されないわけないでしょ」

「あの駄姉と比べられるなんて、簪と美紀が可哀想だろ」

「一夏さん、相変わらず織斑姉妹には厳しいんですね」

千冬と千夏の本性をあまり知らない蘭としては、一夏が二人に厳しいのは身内だからだと思っている節がある。だが真実を知る鈴は、蘭の勘違いに苦笑いを浮かべていた。

「I S学園の入試もそろそろだが、蘭は問題なさそうだな」

「更識企業が発売したポータブル版VTSで訓練してますから」

「あれ、すっげー高いんだな」

「何だ、買ったのか？　言えば一機くらい融通が利いたのに」

「早く言えよ！」

「お兄、五月蠅い」

蘭に蹴りを入れられ、弾はその場に崩れ落ち涙目になるが、誰も相手にはしなかった。

「良いんです。コネで入学できたと言われたくないので」

「I S 学園は更識の息がかかっているわけじゃないんだが？」

「ですが、実質的には更識が経営していると、陰で噂されていますし」

「今の三学年には更識縁者が多いからそう言われても仕方ないが、経営はしていないぞ」

「一夏さんが色々指示を出しているから、そう思われているのかもしれないね」

「あれは学園長が人に丸投げしてくるからだ。俺が進んで指示を出しているわけじゃないんだが」

一夏と美紀の会話を、蘭は驚愕の表情を浮かべながら聞いていた。一夏が更識企業のトップであることは聞いていたが、まさか学園長の代理まで努めているとは知らなかったのだろう。

「あのじーさんが指示を出すより、一夏が指示を出した方がいう事を聞くだろうから仕方ないんじゃない？」

「学園長に雇われてるんだぞ？ 何で俺のいう事の方が聞くんだよ」

「だって、あの織斑姉妹だもね」

「……………」

鈴の断言に、一夏は返す言葉を失い力なく肩を落とした。

「一夏、これってどういう意味だ？」

「お兄、そんな事も分からない？ 私でもわかるんだけど」

「うっせーな！ 俺は一夏に聞いてるんだよ！」

「こんなバカが兄だなんて……何で私のお兄は一夏さんじゃなかったんだろう」

「蘭、そこまで言ったら弾が可哀想よ。例え本当の事でもね」

「慰めるんじゃねえのかよ！」

「何であたしがアンタを慰めなきゃいけないのよ」

「ほら、騒がしいと厳さんが飛んでくるぞ。弾、説明してやるから大人しくしろ」

三人を落ち着かせて、一夏が説明を始める。その隣では数馬が説明に耳を傾けていたので、同じ個所が分からなかったのかと、鈴は呆れた表情を浮かべてゲームに戻るのだった。

男としての魅力

三時間勉強して、弾と数馬はその場に倒れ込んだ。

「たかだか三時間でだらしがないな」

「お前と一緒にするなよ……普通の人間が三時間も集中力が続くわけないだろうが！」

「そうか？　IS学園にはこれくらい普通に出来る人が大勢いるんだが」

「IS学園に入学出来るだけで選ばれた人間なんだから当然だろ！　そもそも、そこを基準にしてる時点で一夏の方がおかしいんだよ！」

弾と数馬に責められ、一夏は首を傾げながら美紀に意見を求めた。

「そうなのか？」

「私も三時間くらいなら何とかかなりますが、それが普通ではないとは思いますよ」

「そうか……じゃあ、十分くらい休憩したら再開するぞ」

「十分で回復出来るか！」

「なんだだらしがない……進級出来るかどうかなんだろう？　もつと気合いみせてみろよ」

「一夏、二人を苛めて楽しんでるでしょ」

「別に苛めてるつもりは無いが、これくらいでへばるなら、大人しく留年しろとは思ってる」

一夏からすれば、これくらいの問題は解けて当然なのだから、そう思っても仕方ないのかもしれないが、留年すれすれの二人からすれば、難問と呼べるレベルの問題をひたすら解いていたのだ。精神的にも体力的にも疲弊するのは当然である。

「とりあえず一時間は休憩させてくれ……」

「それでも少ないとは思うが、留年したら家から追い出されるから……死ぬ気で勉強しなければいけないえからな」

「それじゃあ、そこで寝っ転がってるんだな。俺はちよつと外に出る」

「急用？」

「いや、生徒会の様子を聞こうと思つてな」

そう言つて一夏は窓から飛び降り、何事もなかったように裏路地に入つていった。

「アイツもなかなか人外だな……」

「普通なら足にダメージが相当行くと思うんだが」

「あれくらい出来て当然でしょ？ てか、出来ないの？」

「俺らとIS操縦者を同じだと思わない！」

「別にあれはIS云々は関係ないわよ」

鈴としても出来て当然だと思っただけで、弾と数馬が何に怒っているのかがイマイチ理解出来ていなかった。

「まあ、お兄と数馬さんは男の中でも下の方ですから」

「底辺の間違いじゃない？」

「それはちよつと言い過ぎではないでしょうか……」

「じゃあ美紀は、一夏とこのぼんくら二人、どっちがいい？」

「もちろん一夏さんです！」

「この反応速度が答えよね」

鈴たちの言い分に言い返す気力すら残っていない二人は、そのまま馬鹿にされ続けるのだった。

電話で生徒会の方は問題ないと報告され、一安心した一夏は、さすがにジャンプで部屋に戻る気になれず、裏口からこっそりと部屋に戻る事にした。

「何だ、男二人はまだ死んでるのか？」

「ちよつとからかったらトドメになっちゃったみたいだね」

「なにをしたんだ？」

「フツよ、フツ。アンタとこの二人、どっちと付き合いたいかって二人に聞いただ

け」

「美紀と蘭にか？」

「当然でしょ？ まさかこのバカ二人に聞くわけないじゃない」

「分かってるから怒鳴るな」

一夏としてはあくまでも確認の意味しかなかったのだが、鈴はそういう風に解釈してしまったようで少し大声で一夏に抗議した。

「それで、男として一夏に完敗したと理解して、そのまま気を失ったんだよね」
「非常に今更だとは思いますがね」

鈴と蘭の容赦のない感じに、美紀は苦笑いを浮かべながらも、あながち否定出来ない
と内心では思っていたのだった。

「とりあえず起きるまで放っておくか。蘭は分からない箇所とか無いのか？」

「問題なく出来てます。IS学園の入試に向け日々努力してますから」

「蘭が入学するなら、あたしたちの後輩になるってわけね。ビシビシしごいてあげるから覚悟しなさい」

「私は日本国籍ですから、鈴さんにしごかれるわけにはいかないではありませんか？」

ただでさえ日本には優秀なIS操縦者が沢山いるのに」

「中国にだつてゐるわよ！」

「お前らも相変わらずだな……」

昔からやたらと衝突が多かつた鈴と蘭も変わつていないとしみじみと呟く一夏に、鈴と蘭は一瞬だけ鋭い視線を向けたが、すぐに恥ずかしくなつて視線を逸らした。

「そういう一夏だつて、見た目とかは変わつても、基本的には変わつてないでしょ？」
「どうだろうな。自分の事は良く分からん」

「一夏さんは内面的にも幼少期と比べてかなり成長してると思いますよ。ですが、基本的に楽をしたいという部分は変わつていないかと」

「それは自覚してるがな」

美紀の評価に、一夏は苦笑いを浮かべながら同意する。基本的に面倒事は避けたいと思つてゐるのは昔からであり、その部分は変わつていないという事は彼自身が一番理解しているのだ。

「まあ、面倒事は誰でも嫌だもんね。一夏が喜んで面倒事に取り組んでるなんて誰も思つてないわよ」

「むしろ一夏さんなら、面倒事を起こして他の人を困らせる方が似合ってる気がします」
「サデイストだもんね」

「酷い言われようだな……そもそも、面倒事を起こして終わりなわけじゃないんだから、そんな面倒な事するわけないだろ」

「それもそうね……ところで、何時まで気絶してるフリをしてるのかしらね、この万年成績低空飛行組は」

「そろそろ一時間だし、再開するとするか」

弾と数馬の為に集まっているのだから当然と言えば当然だが、二人の慈悲の無いセリフに弾と数馬はため息を吐いて起き上がるのだった。

束からの預かりもの

一夏が外出しているため、生徒会室はいつもよりだらけた空気が流れていた。もちろん、仕事はしっかりとしているのだが、どことなくやる気の無さが漂っていた。

「虚ちゃん、こっちは終わったわよ〜」

「お疲れ様です。では、こちらの山をお願いします」

「一日や二日でどうしてこんなに仕事が増えるのかしらね」

「現状を考えれば仕方ないと思いますが」

「そもそも、日本政府や職員室で処理するような案件じゃないの、これ？」

「生徒会にはではなく、こちらは更識に来ている案件ですから仕方ないではないでしょうか？」

「めんどくさいわねー」

文句を言いながら、刀奈は書類に目を通して行き、次々と処理済みの書類が増えていく。

「おねくちゃん、こっちも終わったよ〜」

「ご苦労様です。では、本音は試験勉強をしてください。恐らく、簪お嬢様がマドカさんたちに勉強を教えているでしょうから」

「試験つて、まだ一月だよ〜？」

「貴女は総復習が必要なんですから、今からやっておかなければ間に合いませんよ。直前になって一夏さんに泣きつくのは効率が悪いですから」

「うへえ〜……でも、確かにそうかもしれないね」

生徒会室から逃げ出せるとはいえ、勉強もやりたくないと思っていた本音ではあったが、座学の試験で赤点を取って一夏に怒られるのは避けたいと考えて、素直に簪の許へ向かったのだった。

「本音にも手伝ってもらった方が良かったんじゃない？」

「あの子に機密情報を与えたらどうなるか分かりませんから」

「最近は成長してるっぽいし、少しは大丈夫じゃない？」

「その判断をするのは私たちではなく一夏さんですので」

「そうだけどさ……この量を私と虚ちゃん二人で片づけるのは大変だと思わない？」

「思ってもやるしかないのですから、文句を言っている暇があるなら手を動かしてください」

「分かつてるわよ……」

一夏がいればもう少し——いや、かなり楽が出来ると思いながらも、この場にいらない夏を恨むことは刀奈もしなかった。一夏はあくまでも臨時生徒会役員なのだから、自分たちが処理しなければいけないという事を理解しているからだ。

だが、更識宛の仕事となれば、一夏が処理すべきではないかと思ってしまうのも仕方のない事なので、虚は作業しながら愚痴を垂れる刀奈を注意することなく彼女の愚痴に付き合っただった。

大分遅い時間になったので、一夏は悪友二人に課題を渡して、後日ファックスなり郵便なりで送るよう指示して五反田食堂を後にした。

「私もちゃんと勉強しなければ危ないかもしれないですね」

「美紀は理解出来れば問題ないんだから、しっかりと復習しておけば問題ないだろ」

「その時間が取ればいいのですが、国家代表になったために訓練やら呼出やらが多くなりそうですので……」

「国家代表とはいえ学生なのだから、それを理由に断ればいいだろ。もし文句を言ってくるようなら、こちらで対処しよう」

「一夏さんにお願ひするのも、ですネ……何方かと言えば勉強を見てもらいたいです」

「それくらいなら問題ないだろ。テスト期間中は生徒会の方にも仕事が出来ない事になっているから、時間的余裕はあるからな」

「毎回毎回、申し訳ありません」

「美紀だけじゃないからな、泣き付いてくるのは」

マドカとマナカ、本音といった身内から、エイミイや香澄といった更識所属の面々もテスト前に一夏に泣きついてくるのだ。

「簪ちゃんや静寐さんにもお世話になってますけどね」

「あの二人は成績優秀だからな。相手に教える事で自分たちも復習してるのだろう」

「それだけで良い点が取れる頭脳が羨ましいです……」

「恨み言を言ってる暇があるなら、少しずつ復習しておけばいいものを」

「仰る通りです……」

美紀が忙しいのは一夏も承知しているので、これ以上責めるのは止めにして、少し早足でIS学園を目指す事にした。

「最近は大変な心配がないとはいえ、あんまりゆつくりしていると心配されてしまうからな」

「特に簪ちゃんは心配性ですからね」

アメリカの動きが活発化している今、あまり学園を離れたくなかったのだが、悪友二人に泣きつかれては仕方なかったのだった。

「そう言えば、鈴さんはまだ帰らないと仰られてましたが、何か用事でもあるのでしょうか？」

「さあな。だが、消灯前には戻ってくるとは思うぞ」

「いくら代表候補生とはいえ、織斑姉妹に逆らう事はしないでしようしね」

「正当な理由がない場合は、あの二人は容赦しないからな」

「正当な理由があつたとしても、容赦し無さそうですけどね……」

「言えてるな」

織斑姉妹ならありえると一夏も思ったのか、笑いながらそう返した。そのタイミングで、一夏は前方に不審者を発見した。

「何している、駄ウサギ」

「その呼び方はあんまり好きじゃないんだけどね……まあいいや。ちよつと娘を預かってくれないかな？」

「娘？ クロエさんとかいう女性ですよね？」

「そうだよー！ 束さんはちよつと危ない事をするから、その間クーちゃんを保護して

てほしいんだ〜」

「危ない事って、何をするつもりなんですか」

「ちよつとアメリカの軍事システムをハッキングして、ミサイルやらをこつちのものにしちまおうと思つて」

「いつも通りじゃないですか。その何処が危ないんですか？」

危険な行為であると理解していない一夏に、美紀は苦笑いを浮かべてツツコミを入れようとしたが、東の方も気にしてなかったのでスルーすることにしたのだった。

「今回はさすがに向こう側も警戒してるから、最悪東さんの居場所を突き止められるかもしれないんだよね。だから、狙われるのは東さん一人で良いって事だよ」

「貴女がそんなヘマするとは思えませんが、彼女の身柄は更識が全力を以てお守りしましょう」

「よろしく〜。それじゃあクーちゃん、いつくんのいう事をちゃんと聞くんだよ〜」

そう言い残して、東は姿を消した。残されたクロエは、一夏に一礼して彼の後に続くのだった。

クロエのルームメイト

人を預かるのはさすがに独断では進められないので、一夏は一応の責任者である織斑姉妹に相談するために寮長室を訪れた。

「——と、いうわけなのですが、彼女を何処で生活させればいいでしょうか？」

「まてまて！ いきなり預かるとか言われても良く分からんぞ！ 束の阿呆はいつたい何をしでかすつもりなんだ」

「さつき言いましたよね？ アメリカの軍事システムに潜り込んでミサイルなどの大量破壊兵器のスイッチを掌握するつもりだと。事情が事情なので、最悪自分が見つかる可能性を考え、娘同然に可愛がっている彼女を守るためにこちらに預けてきたと」

「あの束がそんなヘマをするとは思えないのだが」

「二度乗っ取られている以上、あちらも最大限の警戒をしているでしょうから、束さんとはいえ簡単にはいかないと思つたのでしよう。あの人は何も考えていないようで、色々と考えている人ですから。あまり人には理解されませんがね」

一夏に言われなくても、束と付き合いの長い千冬と千夏は理解している。だがそれで

も束がクロエを一夏に預けた意図が良く分からなかったのだ。

「部屋はバカ箒と一緒に良いんじゃないか？ 現状、余ってる部屋はそこしかないからな」

「篠ノ之さんの部屋ですか？ まあ、彼女が良いと言えばそこでも良いのですが……」

「なにか問題でもあるのか？」

「実姉である束さんの関係者であるクロエさんと生活させて、彼女に悪影響が出なければいいなと思ひまして……」

「あり得そうで怖いな……仕方ない、保健室で生活させるか」

「確かに、あそこなら簡易ではあるがベッドもあるし、冷暖房完備だから問題は無いだろう」

「なんなら、俺の部屋でも構いませんよ。俺は整備室で生活しますから」

一夏の提案に、千冬と千夏だけではなく、美紀も激しい抵抗を見せる。

「一夏さんのベッドを使わせるのは反対です！ それだったら、私が一夏さんのベッドで寝ますので、クロエさんは私のベッドで——」

「貴様が使う事も認めん！ バカ箒の監視を強めるから、アイツと同じ部屋で問題ないだろ」

「そうだぞ一夏！ 良く知らない女に自分の生活空間を明け渡すなど、あつてはいけないことだ！」

「そこまで怒鳴らなくても良いでしょ。では、篠ノ之さんに確認を取って、許可してもらえればクロエさんは篠ノ之さんと同室、という事で」

「分かりました、一夏様。私は最悪野宿でも構いませんので」

「それはこちらが構いますから止めてください」

本気で野宿するつもりだとクロエの雰囲気から読み取った一夏は、それだけは何とか阻止しようと心に決めたのだった。

寮長室のすぐ隣にある一室は現在、篠ノ之箒が一人で生活している。元々の篠ノ之箒が問題ばかり起こしていたので、この部屋に移動させられたのだが、今の篠ノ之箒は別に何も悪さをしていない。だがこの場所で生活しているのには、まだ信頼されていないからというのと、スコールとオータムが部屋を使ってしまったからという理由があるのだ。

そのような理由から、この部屋を訪れる物好きはほとんどいない。だから箒は一度部屋に戻ったら自分から外に出ない限り人と会う事はめったにないのだ。

そんな部屋に今、数人の来客がある。もちろんそれは用事があったからであり、箒も変に浮かれたりはしていない。

「——という事情なのですが、クロエさんと同室になることを承諾してくれますか？」

「その方は、私の姉である篠ノ之束博士が信頼している方なのですよね？」

「あの駄ウサギは『娘』という表現をしていますね」

「駄ウサギ……篠ノ之束博士をそう呼べるのは一夏様だけでしようね」

「まあ、そうでしょうね」

一夏の呼称に苦笑いを浮かべた箒に、一夏も苦笑いを返した。だが、次の瞬間にはいつもの表情を読み取れないポーカーフェイスに戻っていた。

「一夏様が彼女と同室になっても問題ないと判断されたのであれば、私が断る理由はありません」

「そうですか、クロエさんも宜しいですか？」

「はい。よろしくお願ひします、箒さん」

「よろしくお願ひします……黒江さん？」

「クロエ・クロニクルです」

クロエを黒江だと勘違いしていた箒に、改めて自己紹介をしたクロエ。それで自分の勘違いに気付いた箒は、軽く頭を下げて自分も自己紹介をするべきだと判断したのだ。た。

「失礼しました、クロエさん。篠ノ之箒と申します」

「存じております。今の貴女も、そして過去の貴女も」

「クロエさんは東さんの側付きとしてここしばらく過ごしていたから、前の篠ノ之さんの事も知っている。その上で同室でも構わないと言ってくれているから、必要以上に畏まる必要は無いので」

「私の事は使用人だと思ってくださって結構ですので」

「いえいえ、そんな風には思えませんよ！ 私たちはあくまでも対等な関係ということ
で」

本来なら自分の方が下なのではないかとは思ったが、へりくだり過ぎると不快感を与えるのではないかと考えて、対等な関係という事で箒は自分の心を無理矢理納得させたのだった。

「対等な関係、ですか……」

「な、何か問題でも？」

「いえ、私のような出来損ないをそのように思ってくださいるとは、ありがとうございます
す」

「で、出来損ない？」

「では、俺はこれで失礼します」

自分の口からは説明出来ないの
で、一夏は箸が疑問を口にする
前に部屋から逃げ出したのだ
だった。

箒とクロエ

悪友に勉強を教え、その帰りに束からクロエを預かったりと、色々とあつた一日が終わり、一夏はベッドでこれからの事を考えていた。

「アメリカが動かなければ、このまま平穩な日々が送れるだろうが、まず間違いなく動くだろうな……アメリカとしては、何としても世界に対しての実権を取り戻したいと思つているだろうし、亡国機業の所為に出来なかつた以上、実力行使しかアメリカに残された手段は無いからな……」

「学生である一夏さんが考えるような事ではないと思ふんですけどね」

「学生つてだけならそうだろうが、一応更識の当主だからな。考えないわけにはいかないだろ」

それほど大きな声を出していたわけではないが、美紀には一夏の声はつきりと聞こえていたようで、一夏に声を掛けてきた。彼女としては、あまり一夏に無理をしてほしくないのだが、一夏の立場がそれを許してはくれないのだ。

「学園の方は、織斑姉妹に任せればまず間違いなく守つてくれるだろう」

「大丈夫なのですか？」

「普段は兎も角、実戦であの人たち程頼りになる人はいないだろう。碧さんは学園に残しておくわけにはいかないだろうし」

「前線で指示を出せる人がいなくなっちゃいますからね、碧さんまで後方支援だよ」

刀奈や虚でも指示は出せるだろうが、即断即決が出来るかと問われれば首を傾げる部分がある。その点碧であれば、一夏も安心して司令塔を任せる事が出来るのだ。

「私や簪ちゃんも、もしもの時は最前線で戦うつもりですから」

「まあ、更識所属だけで片づける必要は無いのだが、各国の戦力を集められてもアメリカに対する牽制程度にしかならないという報告が来てるから……その戦力は敵が漏れ出ないようにカバーする感じに使う事になるだろうから、やはり美紀たちに頼る部分が大きくなるだろうな」

「私たちだけではなく、静寐やエイミィ、香澄も手伝ってくださいませよ」

「静寐や香澄は兎も角、エイミィはフランス所属だから……また文句言つてこないよな？」

「エイミィさんは更識が斡旋して候補生になりましたから、文句など言えませんよ」

「最悪、デユノア社を通じて抗議文書をフランス政府に送り付けなければいいか」

「一夏さん、考えが黒いです……」

昔は素直で可愛らしかった一夏が、ここまで黒くなるなんてと、美紀は自分が所属しているながら更識という暗部組織が恐ろしくなってきた。

「とりあえず、今は何時動くか分からないアメリカの事で頭を悩ませなきゃいけないだから、休める時に休むか」

「そうしてください。何があっても一夏さんはお守りしますので」

「いざとなれば、俺だって身を守るくらいの実力はあるから気にするな」

「一夏さんの場合は、実力云々よりも対人恐怖症であり女性恐怖症、これが問題ですからね」

「申し訳ない……」

そればかりは治せないと一夏も諦めているので、美紀の指摘に素直に頭を下げるしかなかったのだった。

いきなりルームメイトが出来たので、箒は少し焦っていた。クラスメイトならともかく、その相手は姉が可愛がっている学外の人間だからますます焦ってしまうのだった。

「えっと、クロエさん」

「何ででしょうか、箒さん」

「貴女は私の事を必要以上に警戒したりしないんですね」

「束様から貴女の過去の行動などは聞かされておりますが、ISを持たない今の貴女で

は私に勝てませんから。もちろん、何かあれば全力で抵抗しますし、場合によっては排除します」

箒が見た限り、クロエの身体能力はそこまで高いとは感じられない。良くてラウラと互角か、それ以下ではないかと思っている。それでもクロエは自分を排除出来ると思っ
ているようで、箒は彼女が何か暗器を仕込んでいるのかと疑った。

「ご心配なく。私個人の能力では箒さんに遠く及びません。ですが、このスイッチを押せば一夏さんに連絡が行くようになっていきますので、そうなれば一夏さんと織斑姉妹が即座にこの部屋に現れます」

「そう言う事でしたか。ですが、私はクロエさんと仲良くできればと思っ
ていますので、何か脅威になるようなことはし
ないですよ」

「私も出来る事なら平穩に過ごしたいですから、こちらから仕掛ける事はしません。ですが、皆さんが懸念していらつしやるのは、私から篠ノ之東という人物の影響を受け、貴女が過去の貴女に戻ってしまうのではないか、という事らしいので」

「そんなことは無いと思
いますが……」

箒自身も、完全に無いと言
い切るだけの自信が無かつた。自分はイレギュラーな存在

で、何が起るか予測出来ないのだと改めて思い直したのだった。

「まあ、貴女を排除する事になれば、世間的には平和が訪れたという事になるので、問題は無いんでしょうがね」

「随分とストレートに物事を言うんですね」

「そう言った感情には無縁なものでして」

「まあ、私が今ここに居るのは一夏様のお陰ですので、一夏様に迷惑を掛けるくらいなら自害しますので安心してください」

「何もなければ、私も貴女と友好的に接するのは悪くないと思っています。改めて、よろしく願います」

クロエが深々と頭を下げると、箒もつられて頭を下げる。そして同じタイミングで頭を上げたため、バツチリと目が合ってしまったのだった。

「えつと……」

「私はどちらのベッドを使えばいいのでしょうか？」

「あつ、窓側は私が使ってますので、廊下側のベッドを使ってください」

同性相手も緊張した自分に赤面しながら、箒は慌ててそう答えたのだった。

忙しい理由

いろいろあった週末が明け、再び憂鬱な月曜日がやってきた。朝から教室に顔を出していた一夏は、相変わらず物珍しいものを見る目に曝されていた。

「俺が教室にいるのはそんなにおかしいのか？」

「一夏さんは一、二学期と殆ど教室にいませんでしたからね」

「学生とは思えない生活してたもんね、一夏君は」

「仕方ないだろ。亡国機業やら国際問題やらと、いろいろとこちらに文句が舞い込んできて片付けるのが大変だったんだから」

「他にも、専用機製造や最終調整などにも駆り出されておりましたから、その所為でもあるんですけどね」

一夏が一人でISを造ったという事は公表していないので、美紀は言葉を濁して原因を追加した。

「そう言えば、セシリアさんとボーデヴィツヒさんのISの調整は終わったの？」

「ああ、金曜の放課後に済ませた」

「相変わらず仕事が早いのね、一夏君は」

「静寐の鵲も、問題があるようなら調整するが」

「大丈夫よ。この前一夏君がメンテナンスしてくれたから、調子はいいいから」

静寐の返事に、一夏は無言で頷いてから何か言いたそうにこちらを見ていた箒に視線を向けた。

「なにかあつたんですか？」

「いえ。クロエさんは何時までこちらに滞在するのでしょうか？」

「さあ？ 東さんが無事に作業を終えたら迎えに来ると思いますが……何か問題でも？」

「いえ、そのような事は一切ありませんでした。ですが、やはり人がいるという事に慣れていない所為で、ちょっと居心地が悪いと感じる事はありますが……」

「それは慣れてもらうしかありませんね。他に部屋もありませんし」

箒も一人部屋が良いなどというつもりは無いが、こればかりは慣れなので仕方ないと一夏も思っていた。

「また厄介ごとなの？」

「いや、駄ウサギがちよつと集中して作業するからと言って身柄を預かつてほしいと頼まれただけだ」

「十分厄介ごとだと思っただけど？」

「俺個人がどうこうするわけじゃないし、彼女は大人しい人だから厄介でもないしな」

「一夏君がそれでいいなら別に良いんだけど……よく織斑姉妹が許可したね、そんなこと」

「事情が事情だからな。上手く行けば悩みの種が一つ減る事になるからと許可しても良かった」

「なるほど、一夏君からのお願いでもあるなら、織斑姉妹が断るはずもないか」

そこで納得されるのは一夏としても不本意ではあつたが、事細かに説明するつもりは無かつたので、これ以上追及されなければならそれでもいいかと思ひ直し、静寐にツツコミを入れるのは止めにしたのだった。

一夏に整備してもらってから初めての實習で、セシリアとラウラは今までにない手ごたえを感じていた。調整後に動作不備などが無いかの確認の為に一度動かしたが、本格的に動かすとやはり整備の違いを実感したのだ。

「セシリアとラウラ、今日はいつも以上に動きがスムーズだったね。やっぱり一夏に整備してもらったから？」

「そうだと思いますわ。いきなり自分の腕が上がった、などと思う程訓練した覚えはありませんし、それ以外だとやはり一夏さんに整備してもらったから、としか考えられませんわ」

「これだけスムーズになるなら、お兄ちゃんをドイツ軍で雇って整備してもらいたくらいだ。だが、お兄ちゃんは更識のトップだから、それは無理だろうし、例え可能だとしても、そんな予算はドイツ軍には無いからな……残念だ」

「それ以前に、織斑姉妹がそんなことを許してくれるとは思えないんだけど？」

シャルロットが視線を向けた先には、物凄い形相でラウラを睨みつけている織斑姉妹がいた。ラウラは全身を震わせてから、織斑姉妹に敬礼をして視線を逸らした。

「こ、怖かった……危うくトラウマが発動するところだった」

「いったい何をしたのですの？ ラウラさんがそこまで怖がるとは、よほどの事だとは思いますが」

「口にするのも恐ろしい……出来る事ならすべて忘れたと思う程の出来事だからな……」

「僕が一夏から聞いた限りでは、死にかけたらしいね」

「生きている素晴らしさが実感できるぞ。あまりお勧めはしないが……」

軍人であるラウラが震えるほどの体験など、セシリアもシャルロットもしたいとは思わないので、謹んで遠慮する旨をラウラに伝えた。

「それが懸命だな。私だって、もう一度あれを体験する事になるくらいなら……」

「そこで止められると怖いんだけど」

「……はっ！ 危うく死んでしまうところだった」

「思い出しただけで!？」

どれほどの恐怖だったのかと興味はそえられるが、それを知ったら自分の精神が無事で済むかどうか分らないとシャルロットは感じていた。

「それよりも、そろそろお喋りを止めないと、織斑姉妹に怒られそうだしね」

「そうですね。いくら自分のノルマが終わったとはいえ、私語をしていいという理由にはなりませんものね」

「ましてや私たちは専用機持ちだからな。他のクラスメイトに指導する役目があるからな」

とりあえず私語はお開きにして、三人はクラスメイト達にアドバイスをしたり、実際に動いてみせて改善点などを事細かく教える事にしたのだった。

「候補生や専用機持ちとしての自覚が出てきたようだな」

「さすがはわたしたちの生徒だな」

「サボってないで、貴女たちも指導してください」

自分たちの手柄だと自慢げに話していた双子に、一夏が冷めたツツコミを入れたのだった。

不安な成績

久しぶりに一日普通に授業に参加した一夏は、机に突っ伏している本音に声を掛けた。

「今日は生徒会の仕事はいいのかわ？」

「いっちょ……試験範囲ってどこからなの？」

「学年末だからな。恐らく一年間で習ったところすべてだろう」

「そんなの無理に決まってるじゃないか……美紀ちゃんだって、無理だよな？」

「私は……何とかしたいですけど……」

「まだ時間はあるから、ゆっくりと復習していけばいいだろ。ほら、生徒会室に行くぞ」

学年末試験まであと一ヶ月以上あるので、一夏は特に気にした様子もなく本音を叩き起こして生徒会室に向かうつもりだった。だが、本音や美紀だけではなく、マド力たちも一夏に泣きついてきたのだった。

「兄さま、私たちも不安なのですが……」

「だいたい、私は殆ど授業に出てないのに、他の人と同じ範囲なんておかしくない？」

「威張って言う事ではないと思いますが……一夏様、私も記憶が無いので試験範囲すべてとなると不安なのですが」

「わ、私も……毎回申し訳ないですが……」

マドカ、マナカ、箒、香澄と泣きそうな顔で話しかけてきたので、一夏は困った表情を浮かべた。

「他に学年末が厳しそうだなと思ってる人はいるか？」

教室に残っているクラスメイトたちに確認すると、だいたいが手を挙げて困っている事をアピールした。

「最近授業に出てなかったから忘れてたが、このクラスの座学は山田先生が担当だったな……」

「すぐ脱線してしまいますからね……」

「山田先生に問題があるんじゃないかと、みんなが脱線させてるんだから自業自得だとも思うんだが……少し考えてみるかとするか」

さすがに赤点続出となるといろいろと問題があるため、一夏はどうか出来ないか考

える事にしたのだった。

「とりあえず、静寐には手伝ってもらうからな。逃げるなよ？」

「あはは、バレちゃつてたか……もちろん、一夏君に頼ってもらえるなら、私も出来る限り手伝うけどね」

「後はセシリアとシャルにも、出来る範囲で手伝ってもらうかもしれないから、そのつもりで」

「うん、わかったよ」

「分かりましたわ。私も、出来る限りお手伝いさせていただきますわ」

とりあえず後は簪にも手伝ってもらおうと考え、一夏は本音を連れて生徒会室に移動する事にしたのだった。

一夏が生徒会室に顔を出したおかげで、いつも以上に早く仕事が終わったので、刀奈は一息つくことにしたのだった。

「——というわけなのですが、どうしましょうかね」

「一夏君も大変ね。私も手伝える範囲で手伝うわね」

「ありがとうございます。ですが、刀奈さんも試験があることには変わりないので、そこらを優先してください」

「テストなんて、授業をちゃんと聞いてればだいたい出来ると思うんだけど」

「俺もそう思うんですが、どうもそういう人間の方が稀のようですよ」

「そもそも、一夏君は授業に出てないんじゃないの？」

「ノートを借りてそれで理解してますから」

それだけで理解出来るのは、一夏が優秀だからだろうと刀奈も虚も思ったが、そこにツツコミを入れたところで意味はないので流した。

「それでさつきから本音が過去のノートを一生懸命確認してるのか〜」

「見ただけで理解出来るなら、焦る必要は無いと思うんですがね」

「全くです。普段からしっかりと予習復習をしておけば焦る必要なんて無いと何度も言っただんですが……」

「私は、いっちーや刀奈様、おね〜ちゃんのように頭が良いわけじゃないから大変なんだよ〜！ 何で私と美紀ちゃんだけ勉強が苦手で、後の人は得意なのか全然分からないし」

「美紀は理解するのに時間がかかるだけで、苦手ってわけじゃないだろ」

「自力じゃ私とあまり変わらないから、苦手って表現であつてると思うけどね〜」

「美紀さんの事をとやかく言ってる暇があるのなら、自分の事を気にしたらどうです？

留年なんてしたらお父さんたちに怒られるだけじゃすまないと思いますか？」

「いっちー、生徒会特権で何とかならないかな〜？」

「なるわけないだろ。ふざけた事考えてる暇があつたら、ちゃんと復習しておけよな。もう少ししたらテスト対策も考えてやるけど、それまでは自力で何とかするしかないん

だからな」

クラスメイトだけではなく、エイミーやティナからも頼まれてしまった一夏は、テスト対策にまで頭を悩ませなければいけなくなってしまったのだ。

「一夏君って、不幸が舞い込みやすい体質なのかしらね？」

「別に不幸ってほどではないですが、面倒事が舞い込みやすいのは確かですね……」

「いっちゃんはその言う星の許に生まれたんだと思うよ」

「そんな星は滅びてしまえ」

「本音、この計算間違ってますよ」

「ほえ〜……今計算とか漢字とか言わないでよ〜……」

「本音の勉強嫌いも筋金入りね……」

付き合いが長いからこそ言える事だが、刀奈の眩きに一夏も虚も苦笑いを浮かべながら頷いた。本音が勉強嫌いなのは小学生の頃からで、未だにそれが続いているから、テスト前に一夏に泣きつくのだ。

「一夏さんが手伝ってくれてるからいいですが、もう少し自力で何とかできるようにならないと駄目ですからね」

「これでも頑張ってるんだけどね……」
「つまり、もう少し頑張るんですね」

虚に一刀両断された本音は、その場に崩れ落ちたのだった。

お疲れの美紀

部屋に戻りクロエがいる事にまだ慣れていなかった筈は、出迎えてくれたクロエに身構えてしまった。

「……脅かさないでくださいよ」

「私は普通に出迎えたつもりだったので……気配も消したつもりはありませんし」

「クロエさんの気配は掴みにくいですが、それはあくまでも達人クラスの人たちの話。私程度生に比べればわかりやすいですが、それはあくまでも達人クラスの人たちの話。私程度の実力ではクロエさんの気配もすぐには掴めませんので」

「気配が分かるだけでも、十分凄いとは思いますが」

実際IS学園の生徒の中で、他人の気配が掴めるのは数える程度しかない。その中で考えれば、筈はかなりの実力者なのだが、比べる相手が悪すぎるとクロエは感じていた。

「夏さんや千冬さんに千夏さん、小鳥遊さんは束様と同じレベルですし、更識所属の面々と比べるのも間違っていると思います。彼女たちは一応暗部所属の人間ですので、

「気配に敏くなければ死んでしまう可能性だってあるのですから」

「そうかもしれないですね。気配云々はさておき、私がクロエさんが部屋にいる事を忘れてなければいいだけですわね」

「ずっと一人だったから仕方ないかもしれませんがね」

クロエも箒がしばらく一人部屋だったことを知っているので、部屋に誰かいた時驚いてしまうのは仕方ないと思っている。だが、さすがに毎回驚かれるのはクロエにもダメージがあるので、なるべく気配を消すことなく出迎えているのだが、二日過ぎたくらいでは慣れてはくれなかったのだ。

「今日は何をしていたのです?」

「二日中のんびりしていました。基本的にこの部屋から出る事は無いので、一夏さんが料理本を貸してくださいましたので、それを読んでいました」

「料理本? 一夏様がですか?」

一夏がそのようなものに頼っているとは思えなかった箒が不思議そうに首を傾げる。それを見てクロエはすぐに種明かしをするのだった。

「図書室から一夏さんがお借りになった本を、私に貸してくださいましたのです。私はこの

学園の人間ではないので、図書室から本を借りる事も出来ませんので」

「そう言う事でしたか。ですが、一夏様に頼めばクロエさん自身が借りる事も出来るのではありませんか？」

「さすがにそこまで面倒をかけるつもりはありません。こうして身柄を預かってもらえただけで、かなりの無理をさせているはずですし」

クロエも自分がここにいられる事がかなりの無理を通した結果だという事は理解しているのです、これ以上を望む事はしないし、箒にもその気持ちが無理解出来るので、これ以上は何も言うことは無かったのだった。

本音たちのテスト対策を考えるべく、一夏は部屋に戻ってすぐ仕事用ではないパソコンを開き何やら作業を始めた。

「一夏さん、今日はもうお休みになった方が良いのではないでしょうか」

「まだそれほど遅い時間でもないし、本音たちの成績を考えると、今から準備しておかないとマズいだろうからな」

「申し訳ありません……私が理解するのが遅いばかりに……」

「最終的に理解してくれるだけマシだろ。本音など何度説明しても理解してない感じだからな……それでも、テストではしっかりと点を取るから救われるが」

「本音は一夏さんに甘えたいだけですからね……」

一度説明されれば本音だってある程度理解することは出来る。それでも何度も説明

を受けるのは、一夏が自分の為に一生懸命になっているという事実が嬉しいからであり、それが一夏の邪魔をしているなどと思っていないからだった。

「実際、簪ちゃんに説明されたところは、ちゃんと理解してますからね」

「俺の教え方が悪いのかとも思ったが、そうじゃないんだよね……」

「次はあまり本音に絡まなようにしたらどうでしょうか？ 今まで以上に人も多そうですし、本音に構っている時間はあまり無いようにも思えますし」

「そうだな……そもそも、これは教師がすべき仕事なんだがな」

職員室に視線を向け、数回首を左右に振ってからパソコンに視線を戻した。あまり真耶に期待し過ぎるのも問題だと思ったのだろうと、美紀は今の行動をそう解釈したのだった。

「美紀も今の内から復習しておいた方が良いんじゃないか？」

「そうですね。一夏さんの手間を減らす為にも、私も頑張らないといけませんからね」

そう言って過去のノートを取り出し復習を始める美紀だったが、彼女は一度理解すればその後もずっと覚えておけるタイプなので、二学期までの範囲は問題なく理解しているのだ。

「問題は二学期末以降なんですよね……」

「こればかりは一人では無理か……」

「申し訳ありません……」

「いや、美紀が悪いわけじゃないだろ……とりあえず、今日は休んでもいいぞ」

「いえ、一夏さんの作業が終わるまでお付き合いします」

美紀が無理をしているのは一夏も把握している。自分が無理をしているように、護衛の美紀だってそれなりに疲れているのだから、早めに休ませた方が良く。しかし自分が作業を続ける限り美紀は休もうとしないので、一夏はため息を吐いてパソコンを閉じたのだった。

「今日は俺も休むから、美紀も無理せず休んでくれ」

「……バレてましたか」

「昨日から少し辛そうだったからな。ゆっくりしてくれ」

「ありがとうございます。さすがに関わりのない人の家にお邪魔する、というのは精神的に疲れました」

「すまないな」

五反田家を訪れた所為で疲れていた美紀は、すぐに規則正しい寝息をたてて眠ったのだった。

駄姉と駄ウサギ

一夏にクロエを任せただけ、束の食生活はさらに酷いものになっていた。クロエに任せていた時は、三回に一回は消し炭だったとはいえ、二回はまともな食事を摂っていたが、今は食材そのままだったり、調理しなければいけないものですらそのまま齧りついたりになっていた。

「えつと……このプログラムはこれで解除出来るでしょ……それからこっちはこうで……」

誰もいないからという事で、束はだらしない恰好でパソコンの前に座り、食材を齧りながらアメリカの軍事システムに潜り込もうとしていた。

「さすがに一度忍び込んだ所為か、カウンターシステムが強化されてるね……それでも、この天才束さんに掛ければ解析できないプログラムは無いんだけどね」

強がりにも聞こえるが、束は時間さえかければ確実に忍び込める自信があった。だが一夏の事を考えるとあまり悠長にしては行かないので、こうして周りとの交流を断って

までハッキングに勤しんでいたのだ。

「せめてもの罪滅ぼしになればいいけど……いっくんの人生は私が変えちゃったわけだし……」

ISを発表していなければ、一夏が攫われることも無く、世界に勘違い女がはびこることも無かつただろうと、束は心底後悔している。他人に興味は無くても、その他人が一夏に迷惑を掛ければその相手を全力で排除する事も厭わない。だが、全ての元凶は自分だと思い知ってからは、出来る限り一夏の為に動こうと決めていたのだ。

「この『カップ麺』って、そのまま食べても美味しくないんだね」

「当たり前でしょうが……」

「誰だっ！ って、いっくん？ どうしたのこんな所まで」

「いえ、気配を感じ取ったので何か用なのかと思って確認しに来ただけです。ハッキングに集中し過ぎて、ラボに移動命令を出さなかったんですか？」

「あつ、ここはIS学園の上空か……ステルス機能は一応発動しておいたんだけど、いっくん相手じゃ意味がなかったか……」

「キッチンを借りますよ。一週間分くらいは作り置き出来るでしょうから、日持ちしないものから食べて行ってくださいね」

「さすがいつくん！ 束さんの事を愛してくれてるね〜」

「ふざけたことぬかすと、ここに織斑姉妹を押しかけさせますよ」

「ちーちゃんとなつちゃんが来ても戦力にはならないから止めてほしいかな……」

一夏の脅しにやれやれと首を振って、束は再びハッキングに集中し始める。一夏もそれを見てすぐにキッチンに移動し、残っている食材で栄養バランスを考えた食事を作り、冷蔵庫や冷凍庫に入れて部屋に戻ったのだった。

翌朝、軽く体を動かそうと外に出た一夏に、織斑姉妹が声を掛けてきた。

「ちよつといいか？」

「良くありません。それでは——」

「逃げる事は無いだろ。別に取って食おうというわけではないんだから」

あからさまに嫌そうな表情を浮かべた一夏に対して、織斑姉妹は嬉しそうな笑みを浮かべている。

「マゾなんですか？ 気持ち悪いですよ、その笑顔」

「お前と話せるのが嬉しいだけだ。早速本題だが」

「手短にお願いますよ」

「簡単な事だ。昨日、夜中に外に出たな？」

「ええ。駄ウサギの気配を感じ取りまして、ちよつとラボまで」

隠す事でもないのです。一夏は正直に話す。元々消灯時間後でも緊急の用件などで外出する事もあるので、一夏にとつて門限はあまり関係ないのだ。

「束の所に？ 何をしたんだ？」

「特にこれと言って何をした、というわけではありませんが……即席麺をそのまま齧りついていたので、一週間分の食事の用意と、最低限の掃除をして帰ってきました」

「一夏の料理……だど……」

「ちよつと束のラボまで行ってくる」

「邪魔するのは止めた方が良いでしょう。珍しく集中していますので、不審者扱いされて迎撃される可能性もありますから」

「アイツのメカなど、簡単に捻りつぶしてやるわ」

「何をしに行くか分かってるのに、止めないとでも思いましたか？ 貴女たちにもそれなりに期待しているんですから、くれぐれも邪魔だけはしないでください」

そう言い残して一夏は二人の前からいなくなる。残された二人は、一夏に期待されているという事が嬉しかったのか、既に周りが見えなくなっていた。

「一夏がお姉ちゃんに期待してくれているとはな」

「これまで散々怒られてきたが、わたしたちの事を認めてくれているのだな」

「……一夏さんは最初から、貴女たちの実力『だけ』は認めていますよ」

浮かれ切った双子に、碧が冷めた視線を向けながら呟く。完全に気づいていなかったのか、双子は戦闘態勢を取ったが、すぐに解除した。

「小鳥遊か……盗み聞きとは趣味が悪いな」

「最初からいました。そもそも、私は一夏さんの護衛なのですから、側にいて当然だと思いますが」

「ふん、貴様などいなくても一夏の身の安全はわたしたちが保証する」

「誘拐されたのも、オータムに襲われたのも、貴女たちが監視対象から目を離したり、自分たちの事しか考えなかったからじゃないのですかね？ その二人に任せられると思ってるんですか？ 一夏さんは既に、更識企業にとつていなくてはならない存在なのですから。もちろん、私個人の気持ちとしても、いなくなられたら困りますけどね」

そう言い残して、碧は織斑姉妹にも分からないように気配を消した。残された二人は、碧の言葉が深く突き刺さったのか、その場に膝をついていたのだった。

成長した候補生たち

試験勉強を早めにしておいた方が良いと一夏に言われたからと言って、本音が真面目に勉強するはずもなく、相変わらず仕事が無い時はだらだらと過ごしている。

「本音、一夏に言われたんだから、もうちよつと勉強したら？」

「いっちーが教えてくれるだろうから、もう少しだらだらしても問題ないと思うよ」
「何時までも一夏に甘えられると思ってたら、何時か痛い目を見るかもしれないだし、もうちよつと自分で何とかする事を覚えた方が良いよ」

「いっちーが私たちを見捨てるとは思えないけどな」

「アメリカが不穏な動きを見せてるんだから、私たちに時間を割いてる暇がないって事だよ」

「それはあり得そうで嫌だな……さつさと終わらせてくれるか、ずっと大人しくしててくれないかな」

「こちらの思い通りに動いてくれるなら、一夏だつて苦労しないって」

あまりにも自分本位の考えに、簪は盛大にため息を吐く。簪も一夏の手伝いが出来な

いのが歯がゆく思っているので、少しでも本音の考え方を矯正しようと思つたのに、自分では不可能だと思ひ知らされたのも、ため息を吐いた理由の一つだ。

「それじゃあ、私が少し見てあげるから、もうちよつと勉強しなさい」

「かんちゃん、おねくちゃんみたいだよね」

「虚さんほど真面目じゃないと思うけど、本音が真面目に勉強してくれたら、一夏だつて負担が減るんだし、私だつて一夏の手伝い出来るんだから、ほらほら」

「押さないでよ」

ベッドの上でだらだらしていた本音の背中を押して、机に向かわせる。

「本音は一学期から振り返つて勉強しなきゃいけないんだから、早すぎるつて事は無いと思うしよ」

「かんちゃん、卒業したら先生になつたら？」

「まだ二年残つてるんだから、今から卒業後の進路なんて考えてないよ」

面倒見の良さは、虚と同じくらいだと思つているので、本音は簪も教師にむいているのではないかと思つている。だが、簪が言つたように、卒業まであと二年あるのだから、今から卒業後の進路を考えてはいないのだ。もちろん、一夏のように卒業後は更識の

トップとして君臨し続けなければならないという事情でもない限り、卒業後どうするかなど考えている生徒の方が少ないのだ。

「ほら、さっそくミスしてる」

「ほえく……かんちゃん、目が本気になってきたね……」

「一夏の為だっと思えば、少しくらい厳しくしたって温いと思うけどね」

本音の他にも、マドカとマナカやエイミイ、香澄や美紀といった勉強が苦手なメンバーもいるから、せめてこれくらいはと簪は一日本音の相手をする^と決意したのだ^だつた。

ISに慣れる為に、箒はセシリアたちの訓練に参加する事にした。前までは見学だけだったが、訓練機が反応してくれたお陰で、箒も訓練の輪に参加できるようになったのだ。

「箒さん！ 右後方からシャルロットさんが狙ってますわ！」

「分かっています！ くっ！」

「悪いが、逃がしてやるわけにはいかないんだ！」

シャルの攻撃から逃れようとした箒の前に、ラウラが現れる。ラウラも接近戦は得意としていないのだが、訓練機相手ならと言う事で囧を買って出たのだろう。

「何してる！ さっさと振り解いて逃げろ！」

「そう言われましても……」

「だったら私が……っ！」

「マナカの動きは把握済み。貴女の相手は私」

「それが兄さまが香澄の為に造った久延毘古……動きを読まれるつてのは面倒だ」

箒のカバーに入ろうとしたマドカだったが、香澄に邪魔をされ苦戦を強いられる。

「お兄ちゃんが調整してくれた今の私に、訓練機の箒が敵うはずもないだろう」

「最初から勝てるとは思ってませんが、簡単に負けたくないんです！」

シャルの射撃を強引に振るった剣で弾き飛ばし、ラウラから距離を取り篠ノ之流劍術の間合いを取る。

「それは、前にお兄ちゃんが見せてくれた構え？」

「一夏様は篠ノ之流を修めてはいませんが、一度見れば大抵は使えますからね」

恐らくは織斑姉妹の構えを真似たのだろうが、あの時の箒にはそれに対抗出来るだけの冷静さが掛けていた。だが今は自分が使うということ、いつも以上に冷静な態度でラウラと対峙している。

「ISで剣術を再現できると思っているのか！」

「真似をするだけでも十分です。貴女をこの場に留まらせるのが私の役目ですからね」

「何だと!？」

箒相手だから楽だと思つて周りに注意を配つていなかったラウラが慌てて周りを確認すると、香澄もシャルも苦戦している様子だった。

「遊撃タイプの貴女を私が惹き付けておけば、後は他の方が何とかしてくれる。例えば私がやられても、他の方が戦い終わっていれば貴女の方が不利ですから」

「そう言う事か……お兄ちゃんに調整してもらつたから、慢心していたという事か……冷静さを欠いていた事は認めよう。だが、ここから先は完全に本気を出させてもらう！」

完全に目が覚めてしまった雰囲気のラウラに、箒は身震いをする。仮にも軍人のラウラの殺気だ、並の学生ならそれだけで戦意喪失したかもしれない。だが箒は何とか堪え、ラウラの攻撃に備えるのだった。

慣れない態度

結果的に箒がラウラを惹き付けたお陰で、セシリアチームが何とか勝利を掴んだ。

「箒さん、お疲れ様でした。一番大変な役目でしたが、大丈夫でしたか？」

「織斑姉妹や一夏様の殺気を浴びたことが無かったら失神していたかもしれません……」

「織斑姉妹は分かるけど、一夏からも殺気を浴びせられたの？」

「正確に言うのであれば、一夏様に殺気を浴びせられている織斑姉妹の後ろにいたので、間接的に経験した、という事です」

「そう言う事ですか。それにしても、篠ノ之さんもかなり成長してるんじゃないですか？　いくら更識製とはいえ訓練機で、第三世代を相手に善戦したんですから」

マドカの言葉に、他の参加者も軒並み頷き箒の成長を称える。だが、箒はそれで満足していないようで、小さく首を振った。

「まだまだこの程度では一夏様に頂いた恩をお返しするに至りません。これからも精一杯訓練を続けていきたいです」

「それは僕たちもだよ。まあ、僕は鈍らない程度の運動だけど、ここにいる殆どが次期代表、次期候補生たちだからね。この訓練に参加するだけでもかなりの経験を積めると思うよ」

「これ以上を望むのなら、お兄ちゃんたちの訓練に参加すると良い。あそこには現役の代表である刀奈さんや簪、美紀といった実力者と同等の実力者である虚さんや本音、更にはその全員を凌駕する碧さんがいるからな」

「私やmanaでも太刀打ち出来ませんけどね」

この集団も傍から見ればかなりハイレベルな集まりなのだが、manaが言うように一夏が参加しての訓練はこれ以上にハイレベルな集まりなのだ。

「ですが、そこに混ざるにしても、まだまだ経験が足りませんので、いましばらくは皆さんの訓練に参加させていたいただきたいのですが」

「構いませんわよ。日下部さんもだいぶ箒さんに慣れたようで、必要以上に緊張しなくなりまししたし」

セシリアに視線を向けられ、香澄は小さく、だが力強い態度で頷いた。

「そもそも香澄は未来視があるんだから、必要以上に緊張する事は無いと思うんだが」

「今の篠ノ之さんは安全だって分かってはいるのですが、どうしても前の篠ノ之さんの事が頭を過ってしまふんですよ……」

「それは分からなくもないけどね」

香澄の言葉に静寂が同意するが、他のメンバーも多かれ少なかれ思っている事なので、箒も苦笑いを浮かべて香澄に頭を下げた。

「これから私の態度で過去の私の恐怖を取り除いていただけるよう精進しますので、どうかよろしくお願いします」

「こ、こちらこそ……よろしくお願いします」

箒の礼儀正しさにちよつと気圧されたが、香澄もしつかりと挨拶を返し握手をしたのだった。

VTSのメンテナンスをしていた一夏の背後に、二人の女性の気配が生まれた。もちろん、護衛として碧と美紀が控えているので、危険性は無いし、一夏もこの気配に慣れつつあるので驚くことなく振り返った。

「なにか用か？」

「腕が鈍らないように訓練しようと思ってきたんだけど、メンテナンス中じゃしようがないわね」

「そもそも許可を出してないんだが？」

「だから、ついでに許可を貰おうと思ってたんだけどね」

「……そっちの二機は既にメンテナンスは終わっているから、使いたければ使ってもいいぞ」

「それじゃあ、遠慮なく」

スコールとオータムがメンテナンスが終了した二機の前に腰を下ろし、さつそく訓練を始めたのを、碧と美紀は興味深そうに眺めていた。

「何か気になることでも？」

「いえ、敵としては脅威でしたが、味方だと思おうと頼もしいと思ひまして」

「本音レベルでも苦戦しそうだと思ひながら見てました」

「あれでも相当な実力者だからな。本音では厳しいかも知れないな」

つまり他の候補生が一人で挑んでも勝ち目はないという事だが、そのくらいこの二人の実力は高いものなのだ。そうでなくても長年コンビを組んでいただけあって、互いの動きが分かっているかの如く位置取りをするので、ペアで戦っても勝ち目は薄い。敵として考えれば、これほど面倒な相手はいないだろうと一夏も思っているくらいだ。

「それ以前に、俺はオータムに一对で話す事すら出来ないから……」

「まだ克服出来ないんですか？」

「そんなに簡単に克服出来たら、トラウマなんて言いませんって……」

過去に植え付けられた恐怖心を克服出来ずにいるから、こうして護衛に碧と美紀をつけているのであって、克服出来たのなら、二人が一夏の側にいる理由が無くなってしまう。それが分かっているのも、碧はからかい半分で一夏の女性恐怖症が改善出来ない事を確かめたのだった。

「とにかく、早いところ残りの機体のメンテナンスも終わらせましょう」

「簪ちゃんに手伝いを頼めばよかったのではありませんか？」

「簪は刀奈さんと特訓だそうだ。本当なら美紀も誘いたかったらしいがな」

「私は一夏さんの護衛としての任務がありますから」

「だから代わりに虚さんと本音を連れて二対二の訓練をしているらしい」

連携の確認だろうかと思っただが、正式なペアである自分がそこにいないのに確認も無いかと考えなおし、美紀は単純に暇を持て余していたのだろうかと考えたのだ。た。た。

苦手な気配

VTSのメンテナンスを終わらせ、スコールとオータムの訓練を見学しようとしていた一夏の許に、織斑姉妹がやってきた。

「なにかありましたか？」

「いや、私たちも腕を鈍らせないために訓練しようと思ってアリーナに行ったんだが、混ぜてくれなくてな」

「当然でしょ。貴女たちと一緒に訓練したいなんて物好き、そうそういませんって」

「姉に対して酷い言い草ではないか、一夏」

「事実ですからね。貴女たちと訓練して、優秀な次世代のIS操縦者が自信喪失でもしたら、貴女たちの給料に響くかもしれないませんが、それでもいいのでしたら頼んでみませうけど……」

一夏の脅しとも取れる言葉に、織斑姉妹は物凄い速度で首を横に振った。

「だからVTSを使わせてもらおうと思っただけだ、誰もいなかったのだ」

「そうしたらここに一夏の気配を感じ取ったから、こうしてここにやって来たのだ」
「最初から気配察知で探せばいいでしょうが。特に気配を殺してたわけじゃないんですし」

無駄な事をしているなど、一夏は織斑姉妹の行動に対してため息を吐いた。だが確かに、この二人の実力に陰りが出始めたら困ると一夏は思い、メンテナンスが終わったばかりのVTSを起動し、織斑姉妹のパスワードを打ち込んでいく。

「どうぞ。使い終わったらちゃんとログアウトしておいてくださいね」

「何だ。見て行かないのか？」

「現役的美紀が、貴女たちの動きを見て自信喪失するのを避けるために、俺は大人しく部屋に戻ります」

今更織斑姉妹の動きを見たくらいで美紀が自信を失うわけがないのだが、一夏はそれを理由にしてこの場を去っていった。

「何だ、せっかくお姉ちゃんの凄いとこを一夏に見せてやろうと思っていたのだがな」
「だが、確かに四月一日が自信喪失して、代表を辞したりしたらわたしたちの責任にされかねないからな」

一夏の背中を見送りながらそう呟いた織斑姉妹だったが、すぐに一夏の背中が見えなくなつたのでVTSに意識を向け、高難度を選択して訓練を開始したのだった。

部屋に戻ってきた美紀は、何故一夏が自分を使ってあの場を離れたのかを聞いた。

「一夏さんは、あの場にいたくなかったのですよね？」

「やはり美紀は気付くか……碧さんも気づいてたようだがな」

「あの場で聞くのは憚られたので大人しく部屋まで来ましたけど、今更織斑姉妹の動きを見て自信を失うなんて思われてるはずもないですし」

それだけの訓練を積んできている美紀なので、自分より実力の上の織斑姉妹の動きを見て、自信を失うどころかささらに上を目指そうと思うだろうと一夏も分かっている。

「あの場には苦手な相手が三人いたからな。多少慣れてきたとはいえ、織斑姉妹とオータムの気配はどうも苦手でな……美紀を理由にしたのは謝ろう」

「いえ、一夏さんが謝る必要は無いですよ。それに気づけなかった私の方こそ、申し訳ありませんでした」

「それこそ美紀が謝ることではない。とにかく、あの場からいち早く逃げ出したかったから、無理があつたかもしれないが美紀を使わせてもらったんだ」

互いに謝り合つて、二人は同時に嘖き出した。

「何だかおかしいですね」

「そうだな。時間も中途半端だし、今日はこのまま部屋でのんびりするとするか」

「そうですね。一夏さんはまた最近、忙しすぎですから」

「丁度いい機会だから、美紀の復習に付き合うとするか」

「うっ……」

急に勉強の話題になったので、美紀は逃げ出したい衝動に駆られたが、ここで逃げ出してもどうせ試験前に世話になるので、大人しく一夏の世話になることにしたのだ。た。

「美紀は一度理解出来れば問題なく解けるんだから、基礎だけをしっかりと確認しておけばいいだろう」

「何時も何時も、申し訳ありません」

「気にするな。本音に比べれば美紀はやる気もあるし、理解しようと努力してくれるから楽でいい」

「本音と比べられたくないですが、自力で試験を受ければ恐らく五十歩百歩の結果でしようしね……」

美紀はある方面ではかなり優秀な頭脳を持っているが、生憎その方面は勉強には関係ないのだ。戦闘や警護といった実戦向きの頭脳なので、計算や献策といった方面は全く

の不向きで、学業もこうして一夏や簪にお世話になっていくのだ。

「早速間違えてるぞ」

「うう……こればかりは簪ちゃんが羨ましいです」

「簪は簪で、美紀の事を羨んでるようだがな」

「簪ちゃんは気にし過ぎなだけだと思えますけどね」

「俺もそう言ったんだがな……女子は気になるんだろ？　そう言う事」

「まあ、私ももう少し痩せたいか思ったりはしますけど」

「それ以上痩せたら、体力も落ちるかもしれないぞ？」

「だからと言って、あまり筋肉質だと、一夏さんに嫌われそうですし……」

「別に嫌いにならない。俺は、昔からみんなの事が好きだからな」

「少しでも女性として意識してもらいたいんです」

「十分してるが。てか、これ以上意識したら、一緒の部屋で生活するのが気まずくなるが、それでもいいのか？」

一夏が視線を逸らしながら言うものだから、美紀の方も恥ずかしくなり、大人しく勉強に集中する事にしたのだった。

束の努力

軍事システムに忍び込もうとあちこちサーバーをクラックしてみたが、どうも上手く行かないと束は一息入れる為に一夏が用意してくれた料理に手を伸ばす。

「さすがいつくん。くーちゃんには無い愛情を感じるよ〜」

クロエが用意してくれる料理も、束は問題なく食すが、やはり一夏の料理は格別美味しいと彼女は感じるのだ。

「こんな料理を用意してくれたいつくんの為にも、何とかしてアメリカの軍事システムをクラックダウンさせなきゃいけないね……乗っ取りは難しそうだし、クラックダウンさせるだけでも大分楽になるだろうし」

過去の杜撰な管理の状態だったから、束はアメリカだけではなく世界中の軍事システムに乗っ取り、日本に向けてミサイルを放つことが出来たのだ。そのせいで各国のシステム管理はより強固のものへと進化を遂げ、大天災と言われる束ですらこのようにハッキングするのに苦労しているのだ。

「自分で蒔いた種とはいえ、これほど面倒になるなんて思ってたよ」

泣き言を言ったところでシステムに侵入できるわけではないので、東は別のアプローチをかけてみる事にした。

「いつそのこと真正面から挑んでみるかな。案外簡単に侵入できたりして」

システムの穴を狙ったハッキングには警戒しても、堂々と真正面から挑めば行けるのではないかと考え、東は堂々とアメリカの軍事システムに攻撃を仕掛けてみた。

「どれどれ……まあ、当然だね」

結果は失敗。東もこれが上手く行くとは当然思っていないので結果を見てすぐに次の手を考えようとして、違和感に気付く。

「なにこれ？ カウンターシステムが作動してない？」

正面から仕掛けたのに、向こう側からの攻撃がない事に違和感を覚え、東はもう少し調べてみる事にした。

「さっきまであれほど東さんの情報を盗もうと作動してたシステムが一切作動しないな

んて……何かがおかしいのは確かだよね」

その疑問を解決するために、束は正面と側面の両方からハッキングを仕掛けてみる事にした。すると、正面からの攻撃に対しても、側面の攻撃に対してもカウンターステムが作動しないことが分かった。

「これなら、忍び込むのも簡単かな……でも、ここで油断させておいて、なんてお決まりの事は避けなきゃね」

最大限の警戒心を持って、束はシステムに侵入していく。そして、ようやく要となる場所に忍び込むことに成功した束は、急ぎそのシステムを乗っ取ることにした。

「まだこちらの動きには気づいていないようだし、今の内にアメリカのシステムを束さんの手中に……」

これが上手く行けば、とりあえずアメリカはミサイルといった遠距離兵器を使えなくなる。それだけでも大分一夏は楽になるだろうし、日本の安全にもつながるのだ。

「他の連中なんて興味ないけど、いつくんが守ろうとしているものは束さんも全力で守るよ」

ハッキングが完了したのを確認して、東は急ぎそのシステムから逃げ出す。追跡されないように外国のサイトを経由した所為で時間がかかったが、これで第一関門は突破したことになる。

「この東さんがここまで苦戦を強いられるだなんて……やっぱり東さん特性の攻撃ウイルスを仕込ませて……いや、それで誤作動でミサイルが飛んで来たらいっくんやちーちゃん、なっちゃんに殺されちゃうだろうし……」

何処に飛ぼうが怒られる未来しか見えないので、東は今回このように面倒な手順を踏んでいるのだった。そうでもなければ既に終わらせているだろうし、クロエを一夏に預けるなどという事もしなかっただろう。

「次は、アメリカの命令系統を麻痺させるためのハッキングをしなきゃね。いっくんたちのように命令系統を一つにまとめていないと、こういったところで問題が起こるんだよ」

こちらは乗っ取りではなく暫く機能しなくすればいいので、東は特性のウイルスを忍び込ませ、遅延発動のプログラムを打ち込みすぐさま逃げ出す。これだけでアメリカの

判断は相当鈍くなるため、攻撃を仕掛けようとしてもなかなか許可が下りなくなる。もちろん、アメリカが攻め込んでくるという情報があれば、一夏たちが撃退に向かう事は問題が無くなり、国際問題にも発展しなくなる。

「本当は、アメリカがしようとしている事を表に暴露すればそれで終わるんだろうけど、逆恨みで攻め込まれても面倒だしね」

アメリカが既に亡国機業や箒に罪を擦り付けようとしている時点で、暴露すればどうなるか想像するのは難しくないと束も分かっている。だからこうして回りくどい事をしてでも一夏を助けようとしているのだ。

「とりあえず、残りもばっぱと終わらせて娘を迎えに行かなきゃね。いつくんが作ってくれた料理、くーちゃんにも食べさせてあげたいし」

口調こそいつも通りだが、今の束はかなり急いでいるのだ。一夏分もさることながら、束には必須成分が増えてしまっているのだ。

「ああ、愛しの娘が側にいないなんて、これは耐えられないかもしれない……こんな時は、監視衛星をハッキングしてくーちゃんの姿を覗き見るしかないよね」

一夏分に続きクロエ分という必須成分を欲するようになった身体に、東は苦笑いを浮かべながら衛星をハツキングし、一夏とクロエの両方を覗き見するのだった。

美紀の勇氣

授業に生徒会、アメリカへの警戒に加えて本音たちの復習に付き合っていた一夏は、少し眠たそうに目を擦った。それを目敏く見ていた刀奈が、心配そうに一夏の隣に腰を下ろした。

「一夏君、眠いの？」

「いえ、まだ大丈夫です……それよりも、本音の方は良いんですか？」

「虚ちゃんが代わってくれたからね。私も休憩時間よ」

数人で代わる代わる問題児たちの勉強を見ているため、休憩時間が被る場合もあるが、あまりにもタイミングが良すぎるように一夏は感じていた。

「まだ本格的ではないにしても、本音にはもう少しまともになってもらいたいものですね」

「ほんとよね……中学から数えてこれで何度目だっけ？」

「受験とかもありましたし、本音は補習もありましたから、結構な数やってると思いますよ」

休憩中もアメリカの動きを警戒している一夏に、刀奈は腕を絡ませてモニターから手を離させる。

「どうしたんです?」

「少しは休みなさい。これはお義姉ちゃんからの命令よ」

「仮にも当主なんです、俺は……まあ、義姉さんの命令なら仕方ありませんか」

苦笑いを浮かべながらも、一夏は端末の電源を落とし大人しく休憩する事にした。

「一夏君にしか出来ない事だから仕方ないのかもしれないけど、もう少し休む事をしないと倒れちゃうわよ」

「五徹までならしたことあるので、これくらいで倒れることは無いでしょうが、頭が働かなくなるのは確かですからね」

「それでなくても一夏君はいろいろと忙しいんだから、あまり無理しちゃだめだからね」

「一夏、そろそろ交代だけど、大丈夫?」

休憩時間が終わり、簪と交代するタイミングで、簪が心配そうに一夏の顔を覗き込んできた。

「なんだ、簪まで……そんなに疲れてるような顔をしてるか？」

「普通の人には分からないだろうけども、私たちは誤魔化せないよ。一夏、凄く無理してる」

「やれやれ……家族は誤魔化せないか。確かに無理してるかもしれないが、心配される程じゃないと思うんだがな」

「そんな事ない。どんな些細な事でも私たちは一夏の事を心配するんだから、一夏ももう少し自分の事を大事にしてよね」

「あ、ああ……すまない」

簪の剣幕に気圧され、素直に頭を下げる一夏。簪がもう少し延長して良いという事で、一夏はそのまま身体を休める事にした。

「相変わらず簪ちゃんが怒ると怖いわね……静かに怒るから余計に怖いかもしれないけど」

「何で刀奈さんまで怯えてるんですか」

「隣にいたからかな……」

巻き込まれた刀奈は、震えるまではいかなくても、顔を引きつらせていた。姉の威厳

とかそういうのは何処にもなく、ただ単に一夏の腕にしがみつく格好になったのだ
た。

勉強会もお開きになり、一夏はベッドに倒れ込んだ。体力の限界、とかではないのだ
が、それだけ疲労が蓄積しているのだろうと、美紀はゆっくりと一夏にブランケットを

かける。

「一夏さん、もう少し他の人に任せる事は出来ないのですか？」

「これでもだいぶ任せてるんだがな……」

「勉強に関しては申し訳ないですけど、それ以外なら私も手伝えますので」

「美紀にはかなり助けてもらってるんだけどな」

「私、そんなに一夏さんの為に働いた覚えは無いんですけど……」

生徒会の仕事には参加出来ないし、整備やシステムの書き換えは簪が手伝っているが、美紀はこれといって手伝った覚えは無いのだ。だから一夏が「助けてもらってる」と言っても美紀には身に覚えが無いのだ。

「護衛として常に守ってもらってるだろ」

「あれは碧さんがいるからですよ。私一人で一夏さんを守り通せるなどという自惚れは抱いていませんよ」

「それこそ謙遜だろ。美紀は十分強いし、気配にも敏いからな。護衛としてはかなり高い実力を有してると思うぞ」

「一夏さんなら、護衛などいなくてもある程度自分の身は守れるはずですけどね。人間恐怖症に加えて女性恐怖症さえなければ、私などいなくても十分ですし」

「そういう事言うなよ、寂しいだろ」

「寂しい？」

思いがけない単語に、美紀はただ繰り返す事しか出来なかった。

「記憶を失い、周りが全員敵だと思うしかなかった俺を救ってくれたのは刀奈さんや美紀たちなんだから。いなくてもいいとか言うなよ」

「一夏さんって、思いの外寂しがり屋なんですね」

「警戒心を抱かなくてもいい相手など、本当に数える程度しかいないんだ。ましてや美紀たちは一緒にいて安心出来るから、出来る事なら一緒にいてもらいたいと思ってる」

「私たちは、一夏さんが拒否しても側にいるつもりですけどね」

「そうだったな……そろそろ異性として相手してあげた方が良さのかもしれないが、生憎良く分からないし」

「いいですよ、そんなこと。一夏さんのペースで慣れてくれれば。私たちは、一夏さんがそう言うことに疎い事は知っていますから」

「反論したいが、全くその通りだから返す言葉もないな」

美紀の言葉に苦笑いを浮かべながら、一夏はそのまま顔を閉じて眠りに落ちていっ

た。

「お疲れ様です、一夏さん。これくらいは許してくださいね」

眠っている一夏の唇にそつと自分の唇を重ねて、美紀は恥ずかしそうに自分のベッドに逃げ込んだのだった。

箒の受難

少しでもI.Sの技術を高めるためには、まず基礎体力をつけなければいけないという事で、箒は朝早くから寮の外に出て身体を動かしていた。

「精が出ますね」

「なっ！　なんだ、一夏様でしたか」

「気配は消してなかったんですが、気付きませんでしたか？」

「気配は消してなくても足音は消してましたよね？　それに、今は周りに意識を向けてなかったので、気配云々はどうせ分かりませんでしたし」

持っていた木刀を思わず一夏に向け、相手が一夏であったことに安堵してその切っ先を下に向ける。一夏の後ろでは碧が苦笑いを浮かべているのを見るに、一夏はわざと足音を殺して近づいたのだらうと箒には感じられた。

「一夏様こそ、このような時間からトレーニングですか？」

「俺は別件でこの近くを通りかかっただけです。いろいろと片づけなければならぬ案件が多くて」

「大変そうですね……それでは、今日の授業には出ないのですか？」

「さすがに授業には間に合うとは思いますが、無理して出ても頭に入らないだろうからな……」

「一夏さんなら、そんな心配は無いのでは？」

「碧さんは俺を何だと思ってるんですか……疲れていれば思考回路も停滞しますし、理解が及ばないことだって当然あるのですけど」

箒には碧の接近が分からなかったが、特に驚いた様子もなく一夏が受け答えをしているのを見て、自分の実力不足を痛感していた。

「とにかくそういうわけですから、邪魔して悪かったですね。トレーニングを続けてください」

そう言い残して、一夏と碧は一瞬で姿を消した。

「……そんなに急がないといけないのでしたら、私なんかには声をかけなければよかったのに」

自虐的にそう呟いて、箒は素振りを再開する事にした。身体に染み込んだ動きなの

で、特に問題なく出来ているが、これはあくまでも準備運動なのだ。

「身体も温まってきたし、そろそろ本格的に——」

「誰かを殴るつもりなのか？」

「それだったら看過できないぞ」

「わひゃあ!!」

反射的に木刀を声が出した方に振り抜いたが、あっさりとその木刀を掴まれ、逆に自分が吹き飛ばされてしまった。

「いたた……いきなり声を掛けるだなんて酷いじゃないですか」

「お前の監視は私たちの仕事だ」

「そのわたしたちがお前が不審な動きをしていたのを見つけたら、声を掛けるのは当然だろうが」

「私は普通に運動していただけです。基礎体力をつけるために、慣れ親しんだ剣道を選んだだけなんですから」

「お前が竹刀や木刀を持っていると、どうしても危険だと判断してしまうんだ、許せ」
「謝ってる感じがしないのは気のせいでしょうか？」

千冬のぞんざいな態度にジト目で睨む箒ではあったが、この程度でこの二人が大人しくなるはずもないと分かっているのです、すぐにため息を吐いて睨むことを止めた。

「体力をつけたいのだったら、わたしたちの運動に付き合うか？ この後校舎周りを十周するんだが」

「……私にはそんなに走れませんので」

「そうなのか？ 十分もあれば十分だと思っただが」

「一周三キロを十周するんですよね？ 十分で走り切れるんですか!？」

「これくらい誰でも出来るだろ」

「スピード違反で一発免停な速度なんて出せるわけないでしょうが……」

箒が呆れた声を上げたものだから、織斑姉妹は自分たちがズレているのではないかと疑いでしたが、やはり自分たちは普通だと言いつ張るのだった。

「そんなに疑うのであれば見ているがいい」

「わたしたちがいかに普通であるかを教えてやる」

「いえ、遠慮させていただきます……」

人外に普通を説いても分かってくれないという事が理解出来た箒は、織斑姉妹を見

送って自分の運動を開始する事にした。

「結構人と会うんですね……この時間なら誰もいないと思っていたんですが」

「学生は忙しいんだから、この時間に動く人が多くても不思議じゃないだろ」

「私たちも学生なんですからね」

「……今度は妹の方ですか」

声からマドカとマナカであることはすぐに分かったが、相変わらず気配は感じられなかった。箒はため息を吐きながら振り返ると、やはりマドカとマナカがそこに立っていた。

「妹の方って、さっきまであの二人がいたってこと？」

「姉さまたちも運動しているのですね」

「その前には一夏様もいらつしやいましたので、これで織斑家コンプリートです」

「お兄ちゃんは今は更識だけどね」

「私たちもご一緒してもよろしいでしょうか」

「それは構いませんが、織斑先生たちみたいな運動は私には無理ですからね」

「分かってる。あんなことが出来るのは、あの二人以外にはお兄ちゃんと大天災くらいだろうからね」

「碧さんも出来るでしょうけども、やらないと思いますよ」

どうやら妹の方は常識が通用するようだ、箒は内心でホツと息を吐いたのだった。

「それじゃあ、軽く走りますか」

「校舎周り二周、篠ノ之さんも行きますよね？」

「それくらいだったら。あつ、でもあまり速く走られるとついて行けないと思います」

「大丈夫。私たちは常識の範囲で走るから」

「最低ラインは二十分つてところですかね」

「それでも十分早いですけど、なんとか頑張ります」

姉二人に比べればまだマシだが、妹たちもなかなか速いなど、箒は付き合おうと答えた自分を呪ったのだった。

更識の基準

朝から大変な目に遭った筈は、食堂で突っ伏していた。その姿を見た刀奈たちが不思議そうに彼女に声を掛ける。

「どうかしたの？ 何だか疲れてるみたいだけど」

「朝からマドカさんとマナカさんに付き合ってたんですが、かなり大変でして……途中で置いていかれそうになったので頑張ったのが原因かもしれません……」

「何したのよ」

刀奈が視線をマドカとマナカにずらすと、二人は別に何もしていないと言わんばかりに首を横に振った。

「校舎周りを二周しただけでだいぶ消耗してたっぽかったけど、別に強制はしてないです」

「私たちのスピードに合わせる必要はなかったのですが、篠ノ之さんも意地になっていたようですよ」

「ちなみに、二人のスピードって？」

「計六キロを十八分です」

「まあ、私たちなら普通で済ませられるけど、箒ちゃんはまだ厳しいペースよね、それって」

一キロ三分ペースは、更識では遅い方だが、世間一般の女子高生に当てはめればだいぶ早い。箒も普通のととは形容しがたい実力を有しているとはいえ、このペースは少々嬉しいものだったのだ。

「まあ、その前には姉さまたちに誘われていたようですから、私たちの方なら何とかなると思えたのかもしれないね」

「あの人外共は自分たちを普通だと思ってるみたいだけど」

棘のある言い方ではあるが、マナカの言い分は刀奈たちにも理解出来るので、全員が苦笑いを浮かべながら頷いてみせた。

「ところで一夏君は？ 今日朝から教室にはいかないのかしら？」

「兄さまでしたら、先ほど食事を取りに行かれました」

「そう。それじゃあ今日は私と虚ちゃんが行く日だから、箒ちゃんたちはここで待っててね」

マドカとマナカが使っているテーブルのすぐ傍に腰を下ろした簪たちは、未だ起き上がれない箒を眺めながらお喋りを始める。

「初めの方は私たちもあぁなつてたしね」

「碧さんはだいぶ楽な設定だと言っていましたけどね」

「国家代表とただの女子中学生を同列視してほしくなかつたけどね」

「まあまあ、碧さんもだいぶ世間とはズレてたんだし、今ではそれが普通になつちやつて
るんだから、あまり文句は言えないよね」

「本音は今でも疲れてるじゃない」

「それでも、倒れ込む事は無くなつたよ」

聞こえてくる本音の声に、箒はさらに疲れが増したような錯覚に陥つた。普段のほほんとしている本音ですら倒れ込むことは無いのに、自分はこの体たらく、とでも思つたのだろう。

「おはよう、簪、美紀、本音」

「おはよう一夏。ちよつと眠そうだね」

「そんなことは無いが、それよりも本音がちゃんと起きてる事に驚きだ」

「むー！ 私だつて起きる時はちゃんと起きるんだからね〜」

「定期試験で赤点だつたらお小遣いを減らすつて虚さんから脅されてるから、必死になつて早起きして復習してるんだもんね」

「あつ！ かんちゃん、それは秘密だつて言つたでしょ！」

実に分かりやすい脅しではあるが、本音にはこれが効果覲面だと一夏も知っているの
で、虚の作戦は実に良いものだと感じていた。

「ところで、虚さんからも小遣いをもらつてるのか？ 俺も渡してるんだが」

「貰つてないよ。いっちーから貰つた分をおねーちゃんが徴収して減額するつて言つてたから」

「そういう事か」

恐らくは徴収された小遣いは本音の口座にでも入れられ貯金されるのだろうが、本音にとつては減額には変わりないのだ。貰つた分はすべて使い切つてしまう本音には、赤点の方が良いのではないかと一夏は思つてしまつたのだつた。

「だいたい本音は計画性が無さすぎです。毎月末にはお小遣いを使い切つて苦労してるんですから」

「でも、最近はちゃんと残ってるよ」

「それが普通です。だいたい食事代などそれほどかからないんですから、何に使ってたんですか」

「お菓子かな〜?」

「それでよく太りませんよね……」

「運動してるし、それほど気になるほどでもないからね〜」

周りの生徒たちが羨ましげな視線を本音に向けるが、残念ながら本音はその視線に気付かなかった。

「そういえば一夏君。さっき学長から中庭の草花が舞ってるって言われたんだけど」

「織斑姉妹でしょうね。マドカたちの話から、彼女たちも校舎周りを走ったようだし、その勢いで草花が舞ったのでしよう」

「手入れが大変だつてばやいてたんだけど」

「普段こちらに仕事を丸投げしてるんですから、それくらい苦労しても罰は当たりませんよ」

「まあ、学長も暇してるんだし、それくらいの後始末は任せてもいいわよね」

「普通なら暇してるわけ無いんですがね、この状況で……」

一夏が恨みがましく中庭に視線を向ける。その意味を理解しているメンバーは、学長にではなく一夏に同情的な視線を向けたのだった。

「とりあえず、今は食事を済ませてしましましょうか。そろそろ織斑姉妹が見回りに来る時間ですし」

「そうね。怒られるのは避けたいものね」

「ごちそうさま」

「何時の間に……まあ本音だしあり得るか」

「本音ですからね」

一夏の言葉に美紀が同意し、残りのメンバーも頷いて自分の食事を済ませる事にしたのだった。

訓練中の事故

IS学園の試験は筆記だけでなく、当然実技もある。どちらかが優れていてもどちらかが赤点なら補習になるので、実習にも当然気合いが入った生徒はいるのだ。

「——それで、この惨状はなんだ？」

「すみませんでした……」

「つい気合いが入り過ぎてしまい、セシリアとシャルロットを吹き飛ばしてしまいました」

「だからあたしは気を付けろって言ったのに」

四人一組で訓練形式の実習を命じた織斑姉妹だったが、アリーナの隅で何かが壊れる音を聞いて、文字通り飛んで来たらアリーナのシールドが破壊されていたのだった。

「オルコット、デユノア、ボーデヴィツヒ、風の四名は後程職員室に出頭するように」

「とりあえず今は、二人を保健室に連れていけ。これだけの衝撃だ、何処か怪我をしているかもしれない」

「わ、私は大丈夫ですわ」

「僕も大丈夫です」

「問題ないならそれでいいが、一応保健室には行け。それで確認して本当に問題なければ戻ってくればいい」

織斑姉妹にいわれ、四人は頭を下げて保健室へと移動する。

「さて一夏、このシールドの修繕費はどれくらいだ？」

「四人がいなくなつた途端に何時も通りですね……もう少し尊敬出来る教師でいてくださいよ」

織斑姉妹が頭ごなしに怒鳴らなかつたのは、背後に一夏が控えていたからだ。もしかごと破壊したのなら怒鳴つたかもしれないが、不慮の事故だと聞かされたのでとりあえずは穏便に済ましたのだ。

「訓練中の事故ですから、四人に弁償させるわけにはいきませんね……後程刀奈さんたちを連れてどの程度の破損かを調べ、こちらで計算して職員室に報告させていただきます」

「今すぐは出来んのか？」

「本来であれば学園側が調べるべきことですので、こちらに任されても困るんですよ

……」

一夏がため息交じりに呟くと、織斑姉妹も苦笑し視線を逸らした。

「とりあえずここら一体は封鎖しておこう」

「そうしてください。これ以上壊されては困りますからね」

千冬が真耶に短く指示して、一体に立ち入り禁止のテープを貼り、この辺りを封鎖する。

「それでは、訓練を再開しろ」

「くれぐれも熱くなりすぎて四人の二の舞を演じる事の無いように」

「やはり専用機持ち同士を組ませたのは失敗だったのでは？」

実力者同士であるがゆえに起きた事故ではないかと一夏が指摘すると、織斑姉妹はそろって視線を明後日の方へ向ける。その反応に一夏はますます頭を抱えなくなったのだった。

昼休みになり、一夏は刀奈と虚を連れて破損したシールドを確認していた。

「これは随分と派手に壊したわね……」

「並大抵の衝撃では壊れないはずなんですけどね……それだけラウラたちが成長して
るって事でしょうか」

「感心している場合ではないと思いますけどね……これだけ派手に壊れていると、修理
ではなく取り換えでしょうかね」

「その方が早いですかね。ですが、取り換えともなると一部、というわけにはいかないでしょうし……」

「まあ、更識で何とかすれば安く済みますから」

「それじゃあ虚ちゃん、一両日中に手配しておいて」

「かしこまりました。ついでに、他の所も問題ないかチェックしておきましょう」

修理の手配はすぐに済むので、虚は他のアリーナもチェックするように進言し、一夏も刀奈もそれに賛同した。

「ところで、セシリアちゃんとシャルロットちゃんは大丈夫だったの？　これだけ壊れるって事は、かなりの衝撃だったんじゃない？」

「幸いなことに操縦者には問題ありませんでしたが、専用機の方に深刻なダメージがありましたね……後日メンテナンスする事になりました」

「シャルロットちゃんは更識傘下だし、セシリアちゃんも一時的に更識所属になってるから、一夏君が担当するのかしら？」

「今の状況で他の技術者を学園に呼び寄せられるとも思えませんしね」

また苦労が増えるため息を吐いた一夏に、刀奈と虚は同情的な視線を向ける。

「私たちも手伝えればよかったんだけどね」

「I Sの整備は簪お嬢様くらいしか手伝えませんよ。本格的なメンテナンスとなればますます」

「虚さんも一応は出来ますよね？」

「私は、本当に必要最低限しか出来ませんので」

「これは虚の謙遜なのだが、一夏も刀奈もそれを知っていながら否定する事はしなかった。ここで虚はもつとできるだろと言ったとしても、頑なにそれを認めないのは二人には理解出来ていたからである。

「ラウラちゃんも一夏君にメンテナンスしてもらってから調子よさそうよね。ただ、ちよつと元気が有り余ってるようだけど」

「前に訓練で篠ノ之さんに意識を取られて周りが見えなくなっていたと反省してたばかりだったんですがね。実力者相手だとやはり興奮するのもかもしれませんね」

「ボーデヴィツヒさんは学生であると同時に軍人ですから、強者と渡り合う事に一種の快感を覚えるのかもしれないね」

「織斑姉妹の教え子ですからね……それはあるのかもしれない」

「あの二人の教え子なら、あり得そうよね……」

IS学園に来る前からの教え子なので、ラウラならありえそうだと刀奈も虚も思っただのか、三人そろって苦笑いを浮かべたのだった。

「とりあえず、後で反省文は書かせるようですよ」

「そりゃ、事故とはいえこれだけの事をすればね……」

「お咎め無しとはいかないでしょうね」

もう一度苦笑してから、三人はアリーナを後にしたのだった。

今回の罰

放課後になり、セシリアとシャルロット、ラウラの三名は織斑姉妹に呼ばれ職員室にやって来ていた。ちなみに、もう一人のメンバーである鈴は直接事故とは関係ないので呼ばれてはいない。

「さて、一夏たちが修理を手配してくれたお陰で、それほど大袈裟な事にはならなかったが、当然お咎め無しといわけにはいかない」

「罰として反省文三十枚とグラウンド二十周だ」

「反省文の期限は一週間後、その後でグラウンド二十周してもらおう予定だ」

織斑姉妹に罰を言い渡され、三人は職員室を出る時にしつかりと頭を下げながら廊下に出る。

「思いのほか軽い罰でしたわね」

「一週間で反省文三十枚はキツイと思うけど」

「教官たちの罰にしては軽すぎると私は思うが……」

「ら、ラウラさん？ いきなり震えだしてどうなさいましたの？」

「ご、ゴメンなさい……」

「そういえば、ラウラもトラウマ持ちだったっけ」

何を想像したのかは二人には分からなかったが、とりあえずラウラが織斑姉妹に怯えたのだという事は理解出来たので、そのままラウラを部屋まで連れて行くことにした。

「あら、一夏さんではありませんの」

「セシリアたちか。その様子だと織斑姉妹に罰を言い渡された帰りつてところか」

「はい、お兄ちゃん」

「あつ、復帰した」

一夏の声を聞いてすぐに現実復帰したラウラに、シャルロットは苦笑いを浮かべる。

「さほど問題にすることではないと言っておいたが、どんな罰を言い渡されたんだ」

「一週間で反省文三十枚と、その後でグラウンド二十周だつて」

「少し厳しすぎるとも思えなくはないが、妥当だな。本来なら修繕費などを支払わせようかとも思ったが、学生に負担させるには少し重すぎるからな」

「一夏のお陰で、借金地獄に落ちなくて済んだよ……」

一夏の雰囲気がいまにも本気に思えたので、シャルロットは身震いをしながら一夏に頭を下げた。

「なんてな。そこまで高額ではないから気にするな。修繕は更識が責任を持って担当するから、これに懲りたらあまり派手な戦闘は控えるように」

「申し訳ありませんでしたわ。一夏さんにまでご迷惑をお掛けする事になるとは」

「操縦者に怪我が無くて良かったというべきか……とりあえず週末には二人の機体のメンテナンスをするから、それまでは訓練機を使って授業に出ること。後は……そうだな。I Sに対する恐怖心が無いかV T Sで確認しておくこと」

「一夏、なんだか先生みたいだよ？」

「そうか？ まあ、とりあえずはそれくらいか。後はゆっくり休むんだな」

そう言い残して一夏は職員室へと入っていった。

「一夏さんも大変そうですね」

「仕方ないよ。更識のトップで実質的生徒会長だし」

「それに加えて今はアメリカの動きを警戒しているようだからな。何かあればドイツ軍もお兄ちゃんに手を貸すつもりだ」

「そこまで大げさに動いたら、別の国際問題が発生するのではないのでしょうか？」

セシリアの疑問に対して、ラウラは心配無用とでも言いたげな表情を浮かべた、何処からそのような自信が湧き出て来るのか疑問ではあったが、セシリアはとりあえず一言に言われた通りにVTSでISに対する恐怖心が無いかどうかのチェックを行う事にしたのだった。

セシリアたちと入れ替わりで職員室にやってきた一夏を、千冬と千夏は歓迎した。

「よく来たな、一夏」

「とりあえず、何かお菓子でも出そうではないか」

「遊びに来たわけではありませんので」

浮かれている二人を無視して、一夏は報告書を提出する。

「今回チェックした結果、他にも修繕した方が良い箇所がちらほらと見受けられました。大掛かりな修繕ではないので、今回破損した箇所の修繕のついでにそちらも行っても宜しいでしょうか？」

「そうしてもらえると助かる。こちらとしても、アリーナの安全は第一に確保しておきたいからな」

「大掛かりな大会でもあるんですか？」

「三年の卒業前最後のトーナメントが行われることになった」

「……こんな世界情勢の中、そんなことをしていいんでしょうか？」

「まだ就職先が見つかってないやつらへの最期のアピールの場だそうさ。文句は学長に言え」

「傘下の企業で良いなら紹介出来ますが、それじゃ不満なのでしようね」

大企業に的を絞らなければ、I S学園卒の肩書ならどこでも就職は出来るはずなのに、未だに就職先が見つかっていないという事はそう言う事なのだろうと、一夏はため息を吐きながら千冬から手渡されたトーナメントの概要に目を通す。

「虚さんが参加する事が決定しているようですが、本人は承諾しているんですよね？
少なくとも、俺は聞いていませんが」

「これから交渉するそうさ。まあ、断らないだろうがな」

「虚さんだつて暇じゃないですし、更識の人間ですから、万が一の時はこちらが優先となりますのでお忘れなく」

「相変わらず堅苦しい話し方だな。もうちょつとフレンドリーに出来ないのか？ 昔みたいに『お姉ちゃん大好き』と言ってくれても構わないんだぞ？」

「記憶が無いので何とも言えませんが、少なくともそのような事を言うつもりはありませんので。では、修繕の件はこちらに一任していただくという事で」

早々に職員室を辞した一夏に、千冬と千夏は寂しそうに息を吐く。

「もうちよつと一夏が落ち着ける時間が必要かもしれないな」

「そうでなければ、何時まで経ってもわたしたちは顔見知りではないからな」

あくまで自分たちの為に一夏が落ち着ける時間が必要だと考えている織斑姉妹は、一夏がおいていった報告書を机の上に投げ置いたのだった。

怪しい動き

アメリカに動きがあつたと報告を受けた一夏は、束から送られてきた監視衛星のデータを織斑姉妹、碧、真耶といった教師陣と見ていた。

「完全に戦争の準備だな、これは」

「一夏、今からわたしたち二人でアメリカを世界地図から消してこようではないか」

「こちらから仕掛けたら何を言われるか分かりませんよ。後から、『ただの軍事演習の準備だ』とか言われたら証明しようがなくなるんですから」

一夏の冷静な判断に、碧と真耶が頷く。気持ち的には織斑姉妹を支持したいところだが、一夏の言う通りだと感じたのだろう。

「二、三日して動かなければ安心出来るんですがね」

「これはもう仕掛けて来る雰囲気だと思えますよ」

「そうですよね……試験勉強どころではなくなるかもしれないね」

腕を組みながら苦笑いを浮かべる一夏に、教師陣も苦笑いを浮かべる。だがその理由

は一夏とは異なっている。一夏は本音たちの成績を憂いての苦笑いだが、教師陣は生徒である一夏が気にする事ではないと感じての苦笑いなのだ。

「とりあえず、織斑姉妹は専用機をしっかりと携帯してくださいね。前みたいに、いざとなつて置き場が分らないという事態にならないように」

「分かつている」

「今回はしっかりと携帯しているからな」

「それから、今日一日俺は授業を休んで、セシリアとシャルの専用機のメンテナンスを行います」

「手伝いましょうか？」

「いえ、山田先生には生徒を落ち着かせる役目をお願いしたいのですが」

「わ、私がですか？　小鳥遊先輩の方が適任だと思うのですが……」

真耶の言葉に、織斑姉妹も頷く。実力は兎も角、生徒になめられている感がある真耶よりは、尊敬されている碧の方が落ち着かせることが出来るのではないかと思つたのだろう。

「碧さんには別の事をお願いしたいですし、生徒に近い山田先生の方が、みんなを安心させられると思います」

「確かに、私が言っても『先生の實力があるからそう思えるだけだ』とか思われそうだしね。真耶も実力者とはいえ、生徒に近い感じがあるから落ち着かせられるかもしれないし」

「小鳥遊先生まで……」

少し自信なさげな真耶ではあったが、一夏と碧、そして織斑姉妹にまで期待されている視線を向けられては断ることが出来なかった。

「分かりました。とりあえず紫陽花と一緒に生徒を必要以上に慌てさせないようにしてみます」

「お願いします。専用機持ちにはそれなりに覚悟しておくように言っておいてください。前線に出すわけにはいきませんが、学園の警護くらいは任せたいと思っていますので」

「分かりました」

「それで一夏、更識所属の奴らはどうするんだ？」

「万が一アメリカが攻め込んできたら、我々更識所属の面々で司令塔を叩きます。貴女たちに任せてもいいのですが、やり過ぎる可能性がありますし、何より学園の安全を確保する意味でも、二人にはここに残ってもらいたいですし」

「ですが一夏さん、この二人が見境なく攻撃したら、学園も危ないのでは？」

碧の懸念に、一夏ももつともだと頷いたが、背後に生まれた気配に碧は納得したように頷いた。

「そうですか、彼女に見張りを頼むのですね」

「そういう事です。漸く日本政府との交渉も終わり、アメリカから正式に更識が身元引受先と認められましたからね」

真耶だけは気配に気付けずにいたが、振り返って彼女を確認して納得した。

「漸くナターシャ先生もおもてに出られるんですね」

「別に悪い事をしたわけじゃないんだけどね……今までは後方支援しか出来なかったけど、これからはしっかりと更識と学園の為に働かせてもらおうね」

「更識が先なんですね」

特に意図した訳ではないのだろうが、だからこそそれが本心なのだろうと真耶は感じていた。確かにIS学園に匿われていたとはいえ、身の安全を保障していたのは更識なのだから、どちらに恩を感じているかと聞かれれば迷うことなく更識と答えるだろう

と。

「まったく。こんな時間に連絡してくるとは、東は相変わらずだな」

「時差を考えれば仕方のない事だと思えますが、常に警戒してくれていたからこそですよ。今回ばかりは文句ではなく感謝を述べたら如何ですか」

「わたしたちに感謝されても嬉しくないだろ、アイツは。後で一夏が纏めてお礼を言うておいてくれ」

「俺に丸投げするのは止めていただきたいですね。一応健康を考えて食事は用意しておいたんですから、俺からの感謝は伝わっているはずですし」

「まあ、全ては終わってから考えれば良いだろ。今は警戒を強め、何が起こってもすぐに対応できるようにしておくのが先決だ」

「更識にも連絡はしておきましたので、人手が足りないようでしたら言ってください。歩兵ならいくらでも——とは言えませんが、それなりに用意出来るでしょうし」

「まあ、その辺りは相手の規模によるだろ。一応用意だけはしておいてくれ」
「分かりました」

姉弟の会話ではないが、今はそんなことを気にする人間は誰もいなかった。誰もが近いうちにアメリカが攻めて来るだろうと感じていたので、その事に意識を取られていた

からである。

「授業も考えておかなければな」

「休校にするのはどうだ？ 一夏ならそれくらい出来るだろう？」

「今日はさすがに無理ですが、明日からなら問題ないと思います」

一応学長の許可を取らなければいけないので、さすがに当日は無理だと答え、一夏は携帯を忙しなく操作するのだった。

更識勢の作戦会議

新学期になつて初めて、教室に一夏がいないことが気になり、静寂と香澄は事情を知っているであろう美紀に声を掛けた。

「おはよう、美紀さん。今日一夏君は？」

「セシリアさんとシャルロットさんの専用機のメンテナンス——というか修理のためにお休みです。朝から整備室に籠つて作業をしています」

「それって週末に行うって言つてませんでしたっけ？」

「事情が変わつたんですよ……たぶんこの後HRでその事情の説明があると思いますよ」

どこか疲れたような笑みを浮かべる美紀に、静寂と香澄は首を傾げる。二人は更識所属ではあるが暗部所属ではないので、学園中に張り詰めている独特な緊張感に気付いていない——否、どのような緊張感なのか理解出来ないでいるのだった。

「早速だが席に着け」

予鈴と共に教室に現れた織斑千夏に、クラス中が驚きの声と表情を見せたが、ここで逆らったら大変な事になるという事は、この一年で散々味わってきたので大人しく席に着いた。

「本日の午後より、I S 学園は臨時休校となる。したがって外出なども一切禁止となる」
「千夏先生、どういう事でしょうか？」

「詳しい話は私がしよう」

静寂の問いかけに、遅れてやってきた千冬が答える。

「今日未明、アメリカに不審な動きが見られるとどこかのバカから報告があり、映像を調べた結果何時仕掛けてきてもおかしくない状況であると判断した。二、三日中に攻めて来る可能性が高いため、大事を取って休校となったわけだ。貴様たちの身の安全の確保と、迅速に対応出来るようにと一夏が判断し、学長がこの案を是としたのだ。逆らえば I S 学園にいられなくなると思え」

「午前中も授業ではなく、その事についての説明になる。説明は更識姉から行われるので、貴様らはこれから体育館へと移動してもらおう。さっさと整列し迅速に行動しろ」
「ここは軍隊じゃないんですから、そのような物言いはどうかと思えますけど？ あんまりひどいと、一夏さんに報告しますからね」

「表に出られるようになってそうそう、言うではないか」

「一夏さんから貴女たちがやり過ぎないように見張るよう言われていますから」

碧ではなくナターシャが現れたことが意外だったのか、クラスメイト達はポカンと口を開けて固まったが、そんなことをしている場合ではないという事は理解出来ているので、出来るだけ素早く整列し体育館へと移動する事にしたのだった。

「それにしても、随分と高圧的な説明でしたね。そんなのでよく教師が務まりますね」
「やりたくてやっているわけではないからな。まだ軍で小娘たちを鍛えている方が楽しかったぞ」

「ただ一点、一夏に会えなかったという事を除けばだがな」
「今だつてまともに相手にされていないじゃないですか……」

ナターシャのツツコミに、織斑姉妹は鋭い殺気を浴びせたが、すぐに肩を落として体育館へと移動し始めたのを受けて、ナターシャは拍子抜けな気分を味わったのだった。

全校生徒への説明を終えて、すぐさま生徒会室に移動した刀奈たちは、一夏の代わり
にこの場を纏めてくれる碧に目を向けていた。

「何で私が一夏さんの代理なのか分からないけど、とりあえずみんなにはもうちよつと
踏み込んだ説明をしておくわね」

「お願いします」

碧が気にしたように、立場的には碧が一番下なのだが、事情を知っているのが碧だけなのだから仕方ないのだ。

「朝説明したように、近いうちにアメリカが攻めてくる可能性が高いの。それで私たち更識所属の面々は、アメリカが攻めて来たらすぐに対応出来るようにしておく必要があります」

「静寐ちゃんや香澄ちゃんといった更識所属の子たちはどうするのです?」

「彼女たちには学園の安全を守ってもらおう事になると思います。いくら織斑姉妹や真耶たちがいるとはいえ、教師だけですべてを対応するのは不可能ですからね」

「それじゃあ、私たちは直接アメリカに攻め込むって事ですか?」

「追いつただけで十分だと一夏さんは思ってるようだけど、たぶんそれじゃ何も解決しないでしょうね。最悪は今虚ちゃんが言ったようにアメリカに攻め入って壊滅させるくらいの気持ちでいてほしいわ」

「随分と過激ですね。ですが、それくらいしなければアメリカも大人しくならないでしょうし、仕方がない事なのかもしれませんね」

「いつちーが嫌いそうな展開だよな、それって」

「一夏は出来る事なら平和的解決を望んでるからね……暗部当主としては甘い考えだと

思うけど、人間的には好感が持てる」

一夏が壊滅させるとは思っていないが、東や織斑姉妹ならありえるだろうとここにいる全員は思っているし、場合によってはそれも仕方ないだろうと思っっている。だが、一夏が命じない限り、このメンバーは壊滅まで追い込むことはしないだろう。

「まあ、そういう心持でいてほしいってだけだから、実際はどうなるか分からないからね」

「あれ？ 碧さんは攻めるんですか？」

「私は一応連絡役ということの前線に出ますが、基本的には刀奈ちゃんたちが頑張るのよ。一夏さんも前線にはいるでしょうけど、指示役ってだけで攻撃には参加しないとおもうから」

「まあ、一夏君だもんね」

刀奈の言葉に、全員が頷く。争い事を嫌い、自分は強くないと公言している一夏の事だから、指示を飛ばすだけで自分から攻め入る事は無いだろうと、全員が信じて疑わなかったのだ。

海外組の考え

急に休校になったとはいえ、とても明るい気持ちになれない状況なので、セシリアたちは大人しく部屋に戻っていた。だが、しばらくして扉がノックされ、すぐに騒がしい一団が集まったのだった。

「あなたは自国に確認したの?」

「何をですか?」

「何をつて、もしアメリカが攻め込んできたらどうするかをよ」

「どうするも何も、迎撃するのが普通ではなくて?」

「それはあくまでも日本所属の面々の話でしょ? あたしたちは他国の候補生なんだから、日本の問題に勝手に介入して問題にされたら困るでしょ? そもそも、母国が日本にはなくアメリカに与したらどうするのよ」

「そんなことは無いと思いますが……確かに確認しておくべきですね」

すぐさま携帯を取り出しイギリス政府に確認するセシリアを他所に、鈴は一緒にやってきたラウラたちに視線を向ける。

「あんたらは確認したのよね？」

「当然だ。我らドイツ軍は何があつても日本の——いや、更識の味方という意見で統一された」

「僕はフランス政府にではなく、更識に恩があるからね。そもそも傘下企業の社長として、本社重役に命じられたら逆らえないし」

「私も、一夏君が骨を折ってくれたから今の地位があるわけだし、そもそも専用機も更識製だからね。イタリアにもフランスにも確認するまでもなく、私は一夏君の味方をするつもり」

「ティナは？」

「私はアメリカと袂を分かつたんだし、そもそもアメリカに裏切られたイスラエルの候補生になったんだから、間違つてもアメリカの味方はしないわよ。それに、更識君にはこの程度じゃ返せないくらいの恩があるんだから」

「あんたら、一夏に借りを作ると後が怖いわよ」

「鈴じゃないんだから、そんなノリにはならないよ」

一夏と鈴の関係はある意味特別であり、ここにいる誰にも当てはまらない。だからたとえ一夏に借りを作ったからといって、鈴のように何を要求されるか分からない、とい

う状況に陥ることは無いのだ。

「前にあたしが宿題を手伝ってもらった時には、散々こき使われたんだけど」

「一夏君と鈴の関係は更識所属のみんなとも違った関係だから、仕方ないんじゃない？」

「お兄ちゃんと鈴は親友と言われる関係なんだろう？ 私もお兄ちゃんともっと仲良くやりたいぞ」

「あたしと一夏は親友じゃなくて悪友よ。一夏に聞いてもそう答えるでしょうし」

「僕たちからみれば親友だと思えるけどね。そういう表現が恥ずかしいだけなんですよ？」

シャルロットの指摘に、鈴は恥ずかしそうに視線を逸らした。

「鈴さんは恥ずかしがり屋ですわね」

「確認取れたの？」

「ええ。ですが、確認するまでもなく、イギリス政府は一夏さんの——いえ、更識の味方をする方針でしたわ」

「更識に喧嘩を売ってただで済むはずないものね。特に、ヨーロッパ圏の国は一度痛い目を見てるわけだし」

「あはは……まあ、そんな事もあったね」

「私たちに直接は関係ないが、国が荒れたのは確かだな」
「あの時は大変でしたからね」

フランス、ドイツ、イギリスと悲惨な目に遭ったのだろうと、アメリカ出身のティナはそんなことをしみじみと感じていた。

「イタリアは大丈夫だったの？」

「まあ、技術的に劣ってたから、ハッキングする技術者がいなかったんだよね……だから、他の国みたいにトップの赤裸々な秘密が詳らかになることは無かったんだよね」

「喜ぶべきか悔やむべきか分からないわね、そうなる」と

「もう今はフランスの候補生だし、更識企業がイタリア企業を傘下にしてくれたお陰でだいぶ発展してるようだしね」

「今更ながら、更識君って何者なの？」

「何者って、旧姓織斑一夏。ISに人生を狂わされた男の子よ」

「それは知ってるけど、普通の高校生が国の繁栄衰退をコントロール出来るなんておかしくない？」

「普通の高校生じゃないから出来るんですよ。そもそも、説明されたからって理解出来る事じゃないし、『一夏だから』って理由で納得しておいた方が楽よ」

「それで納得出来るのが凄いわよね……でもまあ、更識君だからって事で大抵の事は納得しちゃうし、それ以上を求めても仕方ないって思えるのよね」

「更識のトップだしね。僕たちが聞いても分からない事が沢山あってもおかしくないしね」

「シャルロットは傘下企業の社長なのだろう？ 我々よりお兄ちゃんの事に詳しいんじゃないか？」

「僕みたいな新米社長に何でも話してくれるわけ無いし、本家の考え方は僕には関係ない、とでも思われてるんだと思うよ」

「本社じゃなくて本家？ 更識本家の考えって事？」

「うん。元々I S企業じゃないんだし、僕たちと違った考えを持っていても不思議じゃないだろうし」

「あの人たちを見ると、元々が対暗部用暗部だつて事を忘れちゃうわよね」

特に刀奈や本音は、暗部の人間特有の空気を全く感じさせないので、彼女たちがたまに非道な事を平気な顔で言つてのけると、一夏が言うよりも衝撃を受けるのだ。

「とにかく、この学生同士で戦うつて事がないだけ安心ね。後は一夏たちに任せておけば問題ないだろうし」

「少しくらい手伝った方が良いんじゃない？」

「邪魔するだけになるから、大人しくしてた方が良いわよ」

鈴の言葉に、全員納得するしかなかったのだった。更識所属のメンバーの動きについて行けるはずもなく、足手纏いにしかならない未来を全員が思い浮かべたからだろう

……

元亡国機業の使い方

戦力であるスコールとオータム、そしてダリルとフォルテを一部屋に集め、一夏は碧を引き連れて説明をすることにした。

「——というわけで、四人には臨機応変に動いてもらおうと考えているんですが、それで構いませんか？」

「私とフォルテは学生って扱いだけど、それでいいのかしら？」

「元亡国機業の三人と、フォルテ先輩は自由に動いてもらった方が良さだろうと思いついて。どうせこちらが細かく指示しても、先輩とオータムは言う事を聞いてくれ無さそうですし」

「そんなこと無いんだけどな。まあ、更識君が自由を認めてくれたって事で納得してあげるわ」

嫌がらせて抱き着いてやろうかとも思っていたダリルではあったが、一夏の背後に控える碧が怖い顔を見せたので大人しく嫌味だけで済ませた。

「臨機応変って言われても、具体的にはどんなことを期待してるの？」

「オータムと先輩には前線が打ち漏らした敵の始末——一応言っておきますが殺したらダメですからね？」

「分かつてるわよ。私はオータムと違って戦闘狂ってわけじゃないだし」「オレだってそういうわけじゃねえっての！」

二人のやり取りに一夏は呆れ気味な視線を向けたが、その奥でスコールが笑っているのを見て、割と何時も通りなのかと納得して説明を再開する。

「打ち漏らしは少ないと思いますし、もしかしたら出番が無いかもしれませんが、準備だけはしっかりとしておいてください」

「了解よ」

「分かったぜ」

「それで一夏。私とフォルテはどうすればいいのかしら？」

「スコールとフォルテ先輩は、防衛側の援護をお願いします。織斑姉妹や専用機持ちの大半はこちら側に回しますので、援護など必要ないかもしれませんが、万が一に備えておきたいので」

口調が丁寧なのは、一夏がスコールに向けてではなくフォルテに話しているからで、

スコールは少しつまらなそうな視線をフォルテに向ける。

「わ、分かりました。でも、準備とかは何をすればいいんでしょうか？」

「この状況でアリーナの使用許可は出せませんが、VTSなら問題ないでしょう。一般生徒は緊張と恐怖から訓練どころではありませんし、専用機持ちだつてそれは同じでしょうからね。実戦と言われる戦闘を経験した事がある亡国機業のメンバーなら、そんな事も無いでしょうけど」

「そういう事ならさっそく訓練と行くか！ 最近鈍つてる感じがしてるから、ちよつと相手しろよ」

「私が貴女の相手をしたつて、貴女が満足するとは思えないけど？ スコールに相手してもらえんば？」

「お前で良いんだよ、レイン。お前をぶつ潰す事でストレスの解消も兼ねてるんだからよ」

「私をストレスのはけ口に使わないでくれる？」

文句を言いながらも、オータムとダリルは部屋からVTSルームへと移動していた。残ったスコールとフォルテは、苦笑いを浮かべながら互いのパートナーを見送つて、一夏に視線を戻した。

「それで、本当に攻めてくるのね？」

「断言は出来ないが、その可能性が高いという事は確かだ」

「そうなるといよいよ最終決戦ってわけね」

「これが本当に最後になるなら、早く終わってほしいがな」

「大変ね、更識の総帥も」

「いつそのこと本当に更識だけで独立してやろうか……これ以上日本政府にあれこれ言われるのも面倒だし」

「でも一夏さん。その案は移動するのが面倒になるからって事で却下したじゃないですか」

碧の言う通り、独立なんてすれば何処に行くにしてもパスポートが必要になる。国内でもそれが適応されるので、屋敷から本社に向かうだけでもパスポートが必要になる可能性があるのだ。

「まあ、屋敷も本社も土地は日本ですからね……独立したとしてもその周辺まで買い取るだけの資金がありませんし」

「あつたとしても止めてくださいよ？ 一々不法入国だって他人を拘束するのは面倒ですから」

「そつちが問題なの？ 相変わらず更識の常識は私たちのとはズレているのね」
「お前らも世間一般の常識からはズレていると思うが」

一夏のツツコミに、スコールは肩を竦めてみせる。自分でもその事を理解しているからこそ、一夏の嫌味にそれだけで済ませられたのだろう。

「フォルテ先輩も、そこまで緊張しなくても大丈夫ですよ。大抵は織斑姉妹が二人で片づけるでしょうし、行き過ぎだと判断したら、ナターシャさんが止めに入りますから」
「それなら私たちの出番がないんじゃない？」

「あくまでお前らが戦闘に参加した事で、日本政府にお前らの危険値が低いという事をアピールするのが狙いだから、それも当然だろ。そもそも、更識が匿ってなければ今頃お前らはこの世にいないんだぞ？」

「私はそもそも死人だから」

「そういう事を言ってるんじゃないんだが」

「分かっているわよ。それじゃあ、この戦いが終われば私たちもある程度の自由が認められるって事かしら？」

「あくまで更識の監視の範囲で、だがな。外出なども可能になるだろう」

「それだったら、大人しく空の上から織斑姉妹の無双でも眺めてようかしらね」

「一応警戒だけはしておいてくれよ？」

一夏が釘を刺してきたので、スコールはもう一度肩を竦めてみせる。そのやり取りを見て緊張が解れたのか、今度はフォルテも笑みを浮かべたのだった。

恐ろしい病

更識所属の面々や、クラスメイト、候補生たちが慌ただしくしている中、箒は大人しく部屋で精神統一をしていた。このような時だからこそ、冷静な考えを持てるようにということだった。

「貴女は何かしないのですか？」

「クロエさん……私には専用機も無ければ、一夏様のお手伝いが出る程の技術も頭脳もありませんので」

「ですが貴女は、仮にも東様の妹君なのですから、少し考えれば良い案が出るのでは？」
「それは買い被り過ぎですよ……私は姉である篠ノ之東博士のような頭脳は持っていませんし、鍛えたところでたかが知れているでしょうしね」

これは紛れもない箒の本心であり、束の凄さを素直に受け入れている証拠でもあった。以前の箒であれば、束と比べられる事を嫌い、その話題になっただけで竹刀を振り回していただろう。

「専用機と言えば、以前の貴女が使っていたサイレント・ゼフィルスは今、何処にあるの

でしようか?」

「一夏様が管理していると聞いていますが……何故そのような事を?」

「今は一人でも動ける人が欲しいと思っただけです。もしかしたら貴女にも出番があるかもしれませんよ」

「まさか……」

口では否定したが、箒もその可能性は無いだろうと感じていた。敵の規模がどれほどなのかにもよるだろうが、一人でも多くの戦力を確保しておきたいと考えるのではないかと。そうなると思うとすぐに専用機を用意できる自分に白羽の矢が立つのではないかと。箒はそんなことを考えていたのだった。

「今の貴女であれば、ISを——力を手に入れたとしても正しく使えるでしょうからね」
「そうだと良いんですけどね」

まだ自分がその力を正しく振るえるのだろうかと思ってしまう箒は、クロエの評価に苦笑いを浮かべ、そうなりたいという決意を秘めた目を向けたのだった。

「おや? 来客のようですが」

「来客?」

気配も音もしない廊下に視線を向けると、そのタイミングで扉がノックされる。その音で、一夏ではないという事だけは理解出来た。

「どうぞで」

「邪魔するぞで」

「織斑千冬さん……何か御用でしょうか？」

来客は最強の双子の片割れであり、担任の織斑千冬だった。

「今の状況はある程度知っているな？」

「生徒会長から知らされた以上の事は知りませんが」

「それでいい。特殊な状況とお前の態度を鑑みて、必要とあらばお前にも出勤してもらう事になった」

「私がですか？」

「非常に遺憾ではあるが、こればかりはすぐに人材を揃えられるわけではない。したがって最近成長著しいお前を使う事にしたのだ」

クロエが箒に「言った通りになりましたね」という視線を向けているのを、箒は肩を

疎めて受け止め千冬に質問する。

「出勤と仰られましたが私には専用機はありません。普段使っている打鉄を使えばよろしいのでしょうか？」

「お前に近距離戦闘をされては困る。したがってお前の専用機であつたサイレント・ゼファイルスを一時的に解放する」

「それは、私とその先もずつとサイレント・ゼファイルスを所有出来るという事ですか？」
「それはお前の働き次第だろう」

苦虫を噛み潰したような顔で答える千冬を見て、箒はまだまだ自分は信用されていないのだという事を改めて心に刻む。

「その決定は日本政府のものですか？ それとも、一夏様のものですか？」

「……一夏が判断したものだ。もちろん、一夏に危害を加えようとした時点で、サイレント・ゼファイルスごとお前をスクラップにしてやるからそのつもりでいろ」

「私のそのような腹積もりはありません。この身が朽ち行くまで一夏様の為に働くことを誓いましょう」

「もう一度だけ言っておくが、一夏に危害を加える事は許さん。少しでも怪しい動きを見せたら——」

「重々承知しておりますので、念を押しなくても大丈夫です」

「そうか。そういうわけだから今からお前はV T S ルームに移動しろ。サイレント・ゼ
フィルスの操縦の練習と連携の確認をしてもらう」

「分かりました」

千冬の言葉に背筋を伸ばして答える筈は、何処か軍人っぽいなど千冬に思わせた。

「それから、クロエ」

「何でしょうか？」

「あのバカから何か連絡はあったか？」

「いえ、私には何も」

「そうか……」

「なにか気になることでも？」

珍しく歯切れの悪い千冬に、クロエは首を傾げながら問いかける。

「いや、何時までお前を預かっていけばいいのかと思つてな」

「私の身柄を保護してくださいっているのは一夏さんです。貴女が心配する事ではないと
思うのですが」

「貴様だって女だ。何時一夏の魅力に絆されるか——何時一夏分欠乏症に罹るか分からないからな」

「何ですか、その『一夏分欠乏症』って?」

耳馴染みのない病気に、箒が首を傾げた。

「一夏の側にいられないと死んでしまう病気だ。発症者はかなりの数いる。写真や動画でも対処は可能だが、やはり本物の側にいる時には敵わないからな」

「そういえば、束様もそのような事を仰られておりましたね……」

「あいつが一番初めの発病者だからな」

そんな病気があるのかと、箒は恐ろしさを感じていた。だがそんなことを感じている暇は無いと思い直し、すぐにVTSルームに向かったのだった。

一夏の周りの人の心配事

VTSルームにやってきた箒は、美紀と虚が自分を待っていた事に驚きを覚えたが、VTSのシステムの書き換えや調整が出来るのは更識勢だけだと思い出し、この二人が待っていても不思議ではないと思ひ直して一礼した。

「事情は織斑姉妹から聞いていますね？」

質問の形を採っているが、虚は箒が事情を知っていると確信している様子だった。隣にいる美紀も同じような態度なので、箒は小さく頷いて続きを促した。

「本来であればもう少し時間を掛けて判断したかったです、緊急事態では仕方ありません」

「一夏さんが判断した以上、従者である私たちに何かを言える権利はありませんよ」

「分かっていますけど、篠ノ之さんが安全かどうかを判断するにはあまりにも時間が短すぎると思いますか？」

「それは言っても仕方ない事ですので。篠ノ之さんも織斑姉妹から言われているかもしれませんが、私たちからも言っておきます。万が一不審な動きを——一夏さんに危害を

加えるようなそぶりを見せた時点で貴女の命は無いと思っておいてください」

「分かっています。そもそも、一夏様が私の事を庇ってくださいらなかった、今の私はありませんので」

その一夏を裏切るわけがないと言外に告げる箒に、美紀と虚は一応納得する事にした。そして、一夏から預かっていた箒の新しいパスワードを差し出す。

「数日間だけ使える、篠ノ之さんの新しいパスワードです。これを入力すればサイレント・ゼフィルスがインストールされている篠ノ之さんのIDでログインできますので」
「そのまま使えるかどうかは、今回の動きを見て一夏さんが判断します。更識としても、使える人は出来るだけ側に置いておきたいので、篠ノ之さんの働きには期待してます」
「その期待に応えられるよう、誠心誠意努力させていただきます」

一夏に期待してもらえているという事が、箒にはたまらなく嬉しかった。過去の自分がしてきた所業を考えれば、警戒されて当然だし、一夏が極端に自分を避けたとしても文句は言えないと思っていたが、まさか期待してもらえるまでの存在になれているという事が、箒にやる気をもたらしたのだった。

「一応説明しておきますが、サイレント・ゼフィルスは打鉄とは違い遠距離主体のISで

す。しっかりと確認しておいてくださいね」
「わかりました」

VTSを起動し、訓練を始めた筈に聞こえないよう距離を取り、虚と美紀は小声で話し合う。

「緊急事態とはいえ、篠ノ之さんにサイレント・ゼフィルスを渡してもいいんでしょうか？」

「先ほども言いましたが、一夏さんが——ご当主様が決定したことに、私たち従者が異論を挿めるわけがありませんよ。美紀さんは先代の遠縁ですし、一夏さんの代理を務めている尊さんの娘さんですから、美紀さんから一夏さんに異議申し立てをすればよろしいのでは？」

「一夏さんの判断が間違っているとは思えませんし、篠ノ之さんが戦力として期待できるのも確かですから、異議申し立てとまでは行きませんが……ですが、篠ノ之さんが何時記憶を取り戻し、一夏さんに襲いかかるかもしれないという不安は拭い去れません」

「一夏さんは前衛、篠ノ之さんは後方支援ですから、例え記憶を取り戻したとしても織斑姉妹が処分してくれると思いますよ。一夏さんもそのように指示は出しているでしょ

うし」

サイレント・ゼフィルスを手にし、消し去ったはずの記憶が蘇るかもしれないという懸念は、当然一夏も抱えている。だからあえて箒は後方に残し、万が一が起こつても織斑姉妹に対処してもらえるように指示はしてある。だがそれでも——織斑姉妹だからこそ信用出来ない美紀は、別の見張りもつけるべきではないかと懸念しているのだ。

「今回ばかりは織斑姉妹でも油断しないと思いますが」

「そうあつてほしいですけど、彼女たちには前科がありますから。また一夏さんが酷い目に遭うかもしれないと思うと、どうしても信用出来る人を監視につけたいと思つてしまふんです」

「それでしたら、鷹月さんにでもお願いしたらどうでしょうか？ 現状では、彼女が最も信用出来ますし、篠ノ之さんの動きにも対応出来ると思いますよ。それか、日下部さんの能力で篠ノ之さんが暴走するかどうか予知してもらつては如何でしょうか」

「そこまでしなくても大丈夫ですが、そうですね。静寐にお願いしておきましょう」

自分の知らないところで織斑姉妹と箒の監視を任せられることになった静寐は、きつと文句を言うだろうと思いながらも、美紀は彼女にお願いしようと思つて固く決意したのだつ

た。

「意外と順調に扱えているようですね」

「一夏さんが分かりやすい説明を打ち込んでいましたので、恐らくIS初心者でも問題なく動かせるはずだって簪ちゃんが言っていましたからね。実際にサイレント・ゼフィールを動かすまで、篠ノ之さんが使えるかどうか判断は出来ないと思いますよ」

「お嬢様も同じ見解でしたが、一夏さんは特に気にしてる様子はありませんでしたけどね」

「攻めてこなかったら、この準備も無意味なんですよね……」

「それは、気にしたら負けですよ……」

アメリカが攻めてくることを前提として用意しているので、アメリカの動き次第では本当に無意味に終わるのだが、美紀も虚も準備だけは怠らないようにしようとして一夏に言われているので、いつでも動ける準備だけは整えているのだった。

別の侵入者

様々な指示を飛ばしながら、一夏はアメリカの動向を見張っていた。束から連絡を貰ってすぐに警戒を強めたお陰で、しっかりと監視体制が整ったのだ。

「どうですか、更識君？」

「明日にでも仕掛けてきそうな雰囲気はありますが、向こうもこちらの動きを警戒しているでしょうから、無策に動くとは思えませんね」

「今更アメリカのスパイがこの学園にいるとは思えません」

「テイナもイスラエルに移籍しましたし、ダリル先輩やナターシャさんは更識の味方ですから、アメリカとつながりがありそうな人はいませんね」

監視を手伝ってもらっている真耶と世間話をしながらも、一夏は味方のデータを纏める手を止めない。教師相手に失礼ではないかとも思うが、真耶が特に気にした様子もないので、一夏も視線はモニターに固定したままなのだ。

「それにしても、やっぱり更識君も衛星のハッキングが出来るんですね」

「ハッキングではないんですけどね。これは更識が打ち上げた人工衛星の映像ですか

ら、更識の人間である自分が使ってもハッキングではありません。覗き見であることは変わりませんが」

「更識企業つて人工衛星も開発してたんですね」

「ISの本来の目的であるところの宇宙開発に先駆けて、宇宙の情報も仕入れておかなければいけないですからね。まあ、今のところ宇宙開発に関しては進展していませんが」

「やっぱり世界的IS企業のトップともなると、考えている事が違うんですね」

「……お忘れかもしれませんが、更識は元々はIS企業ではないんですが」

「そういえばそうでしたね。ですけど、十人に聞いて本来更識がIS企業なんかじゃないと知っている人が一人いるかどうかだと思いますけど」

真耶の言う通り、更識が元々対暗部用暗部であることはすっかり忘れられてしまっているのだ。表世界ではもちろん、裏でも忘れられているのは更識にとつてはありがたい事なのかもしれないが、裏稼業で生計を立てていた人間にとつては、非常に困った状況でもあるのだ。

「世界平和が必ずしも全人類にとつて幸せかどうかと問われれば、どうなんでしょうね」
「哲学は苦手なんですけど」

「世間話の延長だと思ってください。そりや世界中が平和になれば喜ぶ人は大勢いるでしょうが、戦いを生業にしている人間だつて中にはいますからね。その仕事が無くなつたら新たに職を探さなければいけない。ですが人殺しの技など、世間一般では役に立ちませんから。精々ボディーガードくらいですかね」

「そんなこと考えたこともありませんでした……」

「普通は考えませんからね、こんな事」

一夏が苦笑いを浮かべているのを見て、真耶はますます「更識一夏」という人物が自分とはかけ離れた存在なのだを意識する。

「更識君みたいに私になろうとしても、きつと無理でしょうね」

「俺みたいな人間が大勢いたら、それこそ世界平和なんて夢のまた夢でしょうしね」

「そうですか？ 多角的に物事を考えられる人が大勢いたら、きつといい世界になると思うんですけど」

「平和を望む半面で、やろうとすれば世界中を戦火に巻き込む事だつて出来ますから」

「あつ……」

一夏にはそのような力がある、という事を完全に失念していた真耶は、その可能性を

指摘されて言葉を失った。彼女が見た限りでは、一夏がそのような事を望む子ではないと断言できるが、一夏のような力を持った、一夏ではない人間がいたとしたら断言する事は難しいだろう。

「それに、俺のような考え方をしている人間ばかりだと、疲れてしまうと思いますがね。本音のように何も考えていないような人間ばかりでも疲れるでしょうけども」

「更識君って、本当に私より年下なのですか？ 実は千冬さんたちのお兄さんって事は無いですよね？」

「見ての通り、俺は高校生ですから、間違いなく山田先生より年下ですよ。まあ、それを証明する手立ては、残念ながらありませんけど……戸籍などを調べても、確証は得られないでしょうし」

一夏の問題は真耶も知っているので、どう反応すればいいのか窮したが、幸いなことにその事で頭を悩ませる暇は無かった。

「更識君！」

「またあのウサギですか……邪魔したいんですかね、あの人は」

アリーナに不審者有りとの警報を受け、一夏はため息交じりに腰を浮かせ真耶にアメ

リカの監視を任せた。アリーナに向かう途中で千冬と千夏に連絡を入れ、一夏は一足先にニンジン型ラボに一撃を喰らわせた。

「何か分かったんですか？」

「いざという時の為に、東さんもいつくんの側にしようと思って」

「ではなぜラボごと？ 何時もみたいに勝手に忍び込めばよかったのでは？」

「ラボがあつた方が都合がいいでしょ？ 東さんのコンピューターたちはこのラボに積んであるんだから」

「まあ、後はお二人に任せます。俺はアメリカの動きを見ておきたいので」

誰もいない背後に声を掛け、一夏はアリーナからモニター室へ戻っていく。名残惜しそうな雰囲気の間だったが、すぐに二人の気配を察知して本能のまま回避行動を取る。

「この忙しい時に貴様は！」

「その根性を叩き直してやるからそこに座れ！」

「ちーちゃんたちだつて遊んでたじゃないか！」

騒がしくなったアリーナを、モニター越しで見ていた真耶は今まで見たことのない表情を浮かべていたのだった。

戦争の火ぶた

いきなりやってきた束からもたらされた情報によれば、アメリカは今すぐにも仕掛けるつもりらしい。モニター越しにしかアメリカの動向を知り得なかった一夏は、全員にいつでも出動できるよう呼びかけ、束の話を聞くことにした。

「バカたちの動きは単調だし、遠距離武器は束さんがハッキングして乗っ取ったから使えないよ」

「では、ミサイルなどの兵器は気にする必要は無いと?」

「そうだよ。それから、他の国がアメリカを支持する事は無いと思うよ」

「何故そう言い切れるのですか?」

「だって、更識企業とアメリカを天秤に掛ければ、どっちに傾くかなんて誰が見ても明らかでしょ? 今更識企業に喧嘩を売って、勝てる企業なんてどこにも無いんだから」

束の言い分に、千冬と千夏が大きく頷いた。彼女たちも束の意見には納得出来たのだろう。

「そもそも一夏は心配し過ぎなんだ。今更アメリカの味方をして利益などあるわけがな

いだろ」

「ここで更識企業に味方しておけば、その国のＩＳ産業は大きく発展するかもしれないんだ。アメリカという沈む船に乗りたがる阿呆などいないと思うぞ」

「ちーちゃんとなつちゃんの言う通り！ それに、東さんがアメリカの味方をしたらその国のある事ない事を全世界にばら撒くつて脅したからね。清廉潔白なんてありえない国のトップが、東さんの脅しに屈せずにアメリカの味方なんて出来るわけない」

「また脅したんですか……」

「このくらいならいっくんだつてやってるでしょ」

「俺はあることしかバラしませんし、脅しではなくお願いしてるだけですから」
「物は言いようだね」

東の反応に、一夏は苦笑いを浮かべる。恐らく東にだけは言われたくないと思つたのだろうが、東も一夏に言われたくはないと思つているからその言葉は飲み込んだのだ。「それで、東さんの見立てでは、何時攻めてくると思えますか？」

「日本時間で考えるなら、夜遅くだらうね。こっちはずっと警戒してなきやいけないし、その疲労が出てきたタイミングで攻め込むだらうしね」

「こちらが順番に休憩を取っているとは考えないのでしょいかね」
「バカだから考えないんじゃないかな？　そもそも、更識企業に喧嘩を売ってる時点でおバカさん確定なんだから」

話し合いはこれで終わりだと千冬と千夏が宣言し、東はラボへ、一夏はモニター室へと戻っていった。残った二人は、交互に休憩するためにじゃんけんを行ったのだった。

東の見立て通り、アメリカが動き出したのは日本時間で日付が変わる頃だった。一夏の指示で早めに休んでいた更識勢は、アメリカが動き出したとの報告を受けてすぐに集合していた。

「諸君たちには攻め込んできたアメリカ軍の撃退を命じる。アメリカ軍が攻め込んできた証拠としてその人物を確保、堂々とアメリカに攻め込むための大義名分を得てもらう」

「まあ、この映像からアメリカが先に攻め込んできたという証拠はあるのだが、より確実な証拠を得た方が後々楽が出来るからな」

「……交渉などはこちらが行うんですから、貴女たちが楽とか考える必要は無いんですが」

千冬と千夏の物言いに、一夏が白けた目を向けながらツツコミを入れる。そのツツコミは取り合わずに、千冬と千夏はさらに指示を飛ばす。

「各国の専用機持ちは、上空を警戒、ならびに歩兵への警戒に当たってもらう。まあ、万

が一にもこの学園に足を踏み入れたら容赦なく撃退してもらおう」

「更識、他に何かあるか？」

「今のところは。何かありましたらこちらから指示しますので、お二人は学生の安全を第一に考えてください」

「いっくん。アメリカのＩＳが日本領空に侵入、後数分で学園の上空に到達するよ」

「分かりました。ではこちらはお任せします」

千冬と千夏に一礼して、一夏は更識勢を率いて上空へと向かう。既に領空侵犯でアメリカに攻め込む大義名分はそろっているのだが、正々堂々と攻め込むには、アメリカ兵の一人でも人質にした方が楽なのだ。

「では専用機持ちも警戒に当たれ」

「これは訓練ではなく実戦だ。本来であればＩＳを実戦に使うのは協定違反なのだが、先にこの協定を破ったのはアメリカだからな。こちらが罰せられることは無いだろう」

「まあ、万が一そんな事があっても、いっくんが何とかしてくれるだろうけどね」

東の言葉に安心した専用機持ちたちは、ＩＳを展開して上空の警戒、及び周辺の気配察知に当たる。

「さてさて、それじゃあ東さんもアメリカの軍事システムをクラックダウンさせてくるかな」

「証拠は残すなよ？」

「そんなヘマはしないって。それよりも、二人はアメリカと同時に箒ちゃんも見張つてなきやいけないんだから、しっかりしなきやね」

「バカ箒の気配はしっかりと把握している。それに、何かあつたら容赦なく叩きのめせるからな」

「むしろ何かあつてくれた方がわたしたち的にはありがたい」

「そんなこと言つてると、またいっくんに怒られちゃうよ」

軽口を交わしながらも、三人は一瞬たりとも気を抜いてはいなかつた。さすがに今回はふざけられないと思つているのかもしれないと、三人の見張りを頼まれたナターシャはそんなことを思つていたのだった。

一方的な殲滅

アメリカのＩＳと対峙している更識の人間を視界に収めながら、元亡国機業の四人は別動隊の動きをしつかりと捉えていた。

「一夏の読み通りこの場所を通るわね」

「いいのか？ このまま見過ごして」

「構わないわよ。私たちは万が一に備えてここに待機してるだけだもの。あのＩＳ部隊には地獄を味わってもらおう事になってるしね」

「この先に待機してるのは織斑姉妹ですものね。私たちが楽にしてあげるよりも、絶望を味わえるわよ、きつと」

「良いんでしょうか……」

「一夏を敵に回したんだから、それくらい覚悟の上だと思うけどね」

スコールたちが警戒しているのは、ＩＳの別動隊ではなく歩兵の別動隊である。アメリカが開発したＩＳでは、織斑姉妹にかすり傷を負わせることも無く敗北するだろう。だが歩兵に関しては銃火器を所持しているので、万が一があるかもしれないのだ。一夏

はその事を警戒して四人をこの場に配置したのだ。

「おつ、一夏の読み通り本隊とは別の歩兵が現れたぜ」

「随分とお粗末な計画ね。これくらい読まれていと思わないのかしら」

「更識君レベルの参謀がいるはずもないんだし、これが普通なんじゃない？」

「どっちでもいいけどな。それじゃあ、いっちょ派手にやってやるか」

「分かつてるとは思うけど、死者は出しちゃ駄目だからね」

「死なねえ程度に加減してやるに決まつてるだろ！」

別動隊に向けて攻撃を仕掛けるオータムとダリルを見て、スコールは余程ストレスが溜まっていたのだと感じていた。攻撃される歩兵部隊に同情したくなるくらい、二人の攻撃は過激だった。

「さてと、私たちは吹き飛ばされた敵兵の回収よ」

「分かりました」

フォルテと二人でオータムとダリルが吹き飛ばした敵兵を回収し、抵抗出来ないように拘束していく。これだけで自由が約束されると思うと、スコールは世の中甘すぎるのではないかと感じていたが、一夏が味方なのだからそれも仕方ないのかもしれないとた

め息を吐いたのだった。

刀奈たちがIS部隊を交戦しているのを後方で確認しながら、一夏は細かな指示を飛ばしていた。

『一夏君の読み通り、敵部隊はほぼ壊滅したわ』

「お疲れ様です。ですが、思わぬところから敵兵が現れるかもしれませんが、引き続き警戒をお願いします。スコールたちが敵兵を捕らえたらしいので、後は駄ウサギたちが自白させるのを待つて、アメリカに攻め込みます」

『了解よ。これが終われば、ようやく一夏君もゆつくり出来るのよね?』

「事後処理など、細々な事はあるでしょうが、恐らくは」

『それじゃあ、張り切つて終わらせましょうか。一夏君に時間的余裕が出来れば、私たちともつとデートしてくれるだろうし』

『お嬢様や簪お嬢様たちは、モンド・グロツソが近いのでは?』

『大会は夏だし、それまでは一夏君とゆつくり過ごす予定よ』

通信の向こう側で虚が割り込んできたが、一夏は特に驚きはしない。むしろもう少し早く誰かが割り込んできてもおかしくないと思つていたので、思いの外遅かつたなど感じていた。

『いつちーはこの戦争が終わつたら何かしたい事ないの?』

「死亡フラグにも聞こえなくはないから、そういう事はあまり言わない方が良さぞ」

『大丈夫だつてば。相変わらずいつちーは物事を悲観的に考え過ぎだよ?』

『本音が樂觀視し過ぎなんじゃない?』

『そんなこと無いよ』

「……とりあえず、終わった後の事を考えるのは、全て終わった後で良いだろ。今は気を抜き過ぎず、しつかりと来る時に備えてくれ」

『了解だよ』

いったん刀奈たちとの通信を切り、一夏はIS学園の状況を聞くために静寐たちに通信を入れる。

『はい、どうかしたの?』

「そっちの状況を報告してくれ」

『酷いものね……織斑姉妹が撃退したアメリカ兵を喜々として訊問する篠ノ之博士の図が目の前に展開されてるわ』

「それで、大人しく自供したのか?」

『そりゃ、自白しなければ人体実験するって脅されたら、大人しくなるわよ』

「……相変わらずだな。それで、アメリカ兵だって自白は取れたんだな?」

『バツチリよ。録音もして証拠はそろったから、こちらから攻め込んでも正当防衛になると思うわ。もちろん、一夏君の術があつて、だけどね』

「そうか……引き続き警戒は怠らないように織斑姉妹に伝えておいてくれ」

『分かったわ。それじゃあ、怪我だけはしないようにね』

静寐との通信を切り、一夏は送られてきた音声データを再生し、バツチリと自白内容が録音されている事を確認して碧に視線を向けた。

「これでアメリカとの問題も終わりますね」

「向こうが一方的に絡んできてただけですけどね」

「篠ノ之さんの様子は？」

「織斑姉妹と一緒に敵兵の掃討を手伝った後、静寐さんたちと一緒に周辺の警戒に当たっている」と真耶から報告が来てます」

「懸念してたことは？」

「問題なさそうですね。サイレント・ゼフィルスも問題なく動かしているようですし、過去の記憶がよみがえることも無さそうです」

「それじゃあ、元凶を叩いてさっさと日常を取り戻しましょうか」

「他国の介入がないって分かってますから、随分とあっさりと終わりそうですね」

「所詮逆恨みですからね」

バツサリと切り捨てて、一夏は刀奈たちと合流すべく移動を開始する。その背後に碧

が続き、しばらく続いていた緊張もこれで終わるだろうと一夏はホツとした気持ちになつていたのであった。

あつという間の終戦

侵攻開始から二時間、報告される戦果は芳しくないものばかりで、アメリカ軍総司令部では何とかして戦況を打開できないものか話し合いがもたれていた。

「まるでこちらの動きが読まれているような配置に、いつの間にか乗っ取られたシステム、そして迎撃だけで攻め込んでこないところを見るに、更識に情報を掴まれていた可能性が高いだろうな」

「だが、秘密裡に進めていたんだ。いくら更識とはいえこちらの動きを掴めるはずがない」

「歩兵部隊だつて普通の観光客を装つて入国させ、武器だつて貿易船に紛れ込ませたんだ。こちらを疑つていなければまずバレる事は無かつたはずだ」

最初から疑われたいたし、東や一夏に監視されていたのだが、アメリカ軍総司令部の面々はそんなことを思つてもみなかつたのだ。

「とにかく、現状を打開するにはどうすればいい」

「いつそのこと歩兵部隊に爆薬を持たせ、自爆テロを起こさせればいいんじゃないか？」

歩兵ならいくら死のうがこちらには問題ないだろ」

「だが、そこまでの忠誠心が奴らにあるだろうか」

「国の為に死ねる名誉を与えらるるでも言えは納得するだろ。急ぎ爆弾を用意しろ」

実に下種な話し合いが行われているのを、東は監視衛星から覗き見しており、その情報を一夏に報告したのだった。

束からの連絡で、一切の容赦をする必要は無いと判断した一夏は、まず司令部から潰す事を決めた。

「——今お聞きいただいた通り、彼らには情状酌量の余地すらありません。手加減の必要はありませんので、気のすむまで暴れてください」

「殺しても構わねえのか？」

「いや、精々半殺し程度で。彼らには死すら生ぬるい地獄を味わっていただくので」

「それじゃあ、こっちは任せてちょうだい。一夏たちはIS基地に向かうのかしら？」

「亡国機業から流れた元倉持技研の研究者が、ISの意識を封じて動かしているようです。すからね。せつかくですし、その技術を盗み見してから捕らえます」

「相変わらず人が悪いわね、一夏は……それじゃあ、こっちは好きにやらせてもらうわね」

元亡国機業の四人に総司令部への攻撃を任せ、刀奈たちを引きつれた一夏はIS基地へと乗り込む。一夏はそのような技術が無くともISを強制停止させることが可能だが、意識を封じ込めている技術を見学し、解除方法を編み出すのだと全員が理解してい

るので口は出さなかったのだ。

「二夏さん、ナターシャさんからの報告では、I S 学園を狙った部隊はほぼ壊滅。残った戦闘員は壊走した模様です」

「深追いはしないように指示を出してくれ。くれぐれも暴れないようにと、織斑姉妹に釘を刺しておくのも忘れずに頼む」

「了解しました」

美紀からもたらされた報告に素早く返事をして、必要以上に被害を出さないよう配慮する。織斑姉妹が本気で暴れば、日本が焦土と化するのも時間の問題だと一夏は思っている。今回壊滅させるべきは日本ではなくアメリカなので、日本の領土で織斑姉妹を暴れさせるのは避けなければならないのだ。

「しかし、先ほどの軍司令部の話し合いを聞くに、アメリカの全ての人間が戦争を望んでいたわけではなさそうですね」

「でも、アメリカ軍のトップや政治のトップが望んだのは間違いないでしょ？ そうじゃなきゃ攻め込むなんてこと出来ないだろうし」

「まあ、後程大統領を締め上げて背後関係を探れば、誰が望んだ戦争なのかは分かるでしょうね。国民を蔑ろにして勝手に落ちぶれていった国ですし、救う義務も無いんです

がね」

一夏としては国を潰すのには躊躇いはないが、全ての国民が関与したとは思っていない。だから、最低限の生活は保障出来るだけの結果で済めばいいと考えていた。もしすべての国民が関与していたら、今頃アメリカという国は世界地図から消え去っていただろう。

「まあ、こんなものか……コアに何か細工を施すわけではないという事が分かれば、後は施術されたISSさえ手に入ればどうとでも対処出来るな……本音、美紀、ここは任せる。刀奈さんと虚さん、簪は裏口に回って退路を塞いでください。俺と碧さんで、別の場所がないかを探ってみますので」

「分かったわ。それじゃあ、ここの指揮権は虚ちゃんに委ねるわね」

「お嬢様の方が良いのでは？」

「私より冷静に物事を判断できるでしょ、虚ちゃんは」

五人がそれぞれの配置についたのを確認して、一夏と碧は別の基地が無いか探し始める。

「コアの反応がないから、探すのも大変そうですね」

「衛星から探した限りでは、あそこだけなんですけどね……一応探っておかないと後で面倒に発展する可能性がありますからね」

「戦争開始から三時間足らずで壊滅とは、アメリカ軍も思ってたでしようね」

「こちらにはジョーカーが数枚ありますから、相手にすらならないと考えなかつたのでしようかね」

「一夏さんの言う『ジョーカー』とは？」

「織斑姉妹と篠ノ之博士、この三人だけでも十分だと思いませんか？」

「まあ、それに政治的ジョーカーであるところの一夏さんもいますしね……何故踏みとどまらなかったのか不思議でなりませんよ」

碧も十分ジョーカー足りえるのだが、あえてその事は指摘せず、一夏はほぼ終戦した戦況を眺め、IS基地が他にない事を確認して小さく頷いたのだった。

敗軍の将

アメリカ軍壊滅の報せは、政治的中枢にも既に知らされている。アメリカが喧嘩を売ったのはＩＳ学園だが、そこには世界最強の双子や更識の重役が揃っているので、これでアメリカのＩＳ発展の未来は閉ざされたと言っても過言ではない。

「これほどまでに力の差があるとは……やはり日本は全世界を支配しようとしているのか」

かつての敗戦国と侮ったつもりは無かった。むしろ最大限の警戒を持って今回の作戦を実行したはずなのに、一日もたずに敗戦したのだ。アメリカ大統領がそう思っても仕方ないのかもしれない。

「そんなつまらない事をするわけないでしょうが、大統領様？」

「何者だ！」

誰もいなかったはずの部屋で呟いた独り言に返事があつた事に驚きながらも、その事を表情に出さずに声の主を探した。

「敗軍の将である貴方を捕らえに来たものだと分かつてるはずですよね？」
「更識の人間か」

「お初にお目に掛かります、大統領。 I S 学園生徒会所属、及び更識企業の代表を務めております、更識一夏です」

以後お見知りおきを、と続けなかつたのは、これから先一夏が自分と会うつもりが無いという意思表示だろと大統領は思った。

「敵軍の大将がわざわざ迎えに来るとはね。だが、今ここで貴様を殺せば、そちらの指揮系統は崩れるという事だと理解していかないのか？」

「俺一人殺したところで、この状況は変わりません。というか、貴方如きがこの俺を殺せるのですか？ 貴方が引き金を引く前に、俺は貴方を殺せるのですがね」

一夏から放射された、一切の容赦のない殺気に、大統領は懐に突っ込んでいた手を上にあげ、降参を示した。

「さて、では碧さん。その敗軍の将を拘束して、後は任せます」

「かしこまりました、一夏様」

「……その呼び方、堅苦しいから止めてくれませんかね」

「だって、私は一夏さんの従者なのですから、普段が馴れ馴れしすぎるのだと思いますが？」

「……分かっててやってるでしょ」

ついさっきまでの緊張感が一気に霧散し、一夏はため息を吐いて部屋から姿を消した。一方の碧も、大統領を拘束し、更識の人間に引き渡して一夏の後を追ったのだった。「バカバカしい……更識に喧嘩を売ればどうなるか、分かっていたはずなのにな」

残された大統領は、自分の身がどうなるか察して、盛大に笑いながら悪態を吐いたのだった。

IS学園でアメリカの動きを覗き見していた束は、一夏たちが大統領を捕らえたのを千冬たちに知らせた。

「つまり、アメリカは終わりという事か」

「まあ、アメリカって国は無くなるだろうね。それこそ、いつくんが一国の主になりかねない勢いだよ」

「一夏帝国か……悪くない響きだ」

本人が聞けば激怒するだろう事を平然と言つてのける千夏に、誰一人ツツコミを入れる事は無かった。むしろ他の二人もノリノリで千夏の意見を支持しているのだ。世界最強の双子に大天災、この三人にツツコミを入れられる猛者は、残念ながら今のIS学

園には誰一人いないのだ。一夏と碧はアメリカにいるのだから、例え誰か一人で会ったとしても、ツッコめる人はいない。そんなことを思いながら、真耶は三人の浮かれっぷりからこの戦争が終わったのだと察した。

「本当に、更識君が戦争を終わらせたんですね……」

「あの子はいろいろと常識の範囲内にはいない子だと聞いていましたが、ほんとだったんですね」

「これで、ナターシャさんも晴れてI S学園で教鞭を振るえるわけですね、期待しています」

元々教師として匿われていたのだが、表立つて指導するわけにはいかなかったナターシャが、これで誰に遠慮するわけでもなく教鞭を振るえると、真耶は自分の苦労が減ると考えているようだった。

「私なんか加わっても、貴女の苦労が減ると思えないけど?」

「実力者が加わってくれるのは、ありがたい事ですよ」

「おい真耶!」

「は、はい!?!」

突如千冬に名前を呼ばれ、真耶は全身が硬直した錯覚に陥り、背筋を伸ばしてようやく返事をした。その態度を不審に思いながらも、千冬は細かい事にツツコミは入れずに自分の用件だけを告げた。

「この警戒はお前に任せる、私と千夏、そして束は周辺を見回ってくることになった」
「それは更識君からの指示ですか？」

「いや、私たちの判断だ」

「……良いんですか？ 勝手に持ち場を動いてしまっても」

真耶は千冬たちが自発的に警戒を強めるとは思っていなかった。だから見回りと称してどこかで酒盛りでもするのではないかと疑っている。

「もう敵もほとんどいないんだ。私たちがこの場を動いたからといって、悪い状況に陥るとも思えんだろ」

「ですが、最後まで任された事を全うして漸く更識君に褒められるんだと思いますよ？
ここで持ち場を動いたら、せつかくの勝利だというのにお説教、なんて事になりかねません」

「……仕方ないな。それじゃあ、お前も来い。それで同罪だ」

「嫌ですよ！ そもそも、後一日くらい我慢出来ないんですか」

事後処理などはまだかかるだろうが、この状態が終わるのには一日も掛からないだろうと真耶は考えている。だから後一日くらい我慢出来ないのかとツツコミを入れたのだが、視線の先には誰もいなかったのだった。

「……どうなっても知りませんからね」

戦況がひっくり返る事はまずありえないが、千冬たちが一夏に怒られる事になっても関与しないと心に決め、真耶は周辺の警戒に当たるとのだった。

黒い影

敵の動きが鈍くなり、次第に撤退していく様を、箒はつまらなそうに見送っていた。初めての实战、しかも専用機での参加ということで、箒は少し心を躍らせていたのに、蓋を開けてみればこのざまだ。箒じゃなくてもつまらないと感じてしまうのも無理はないだろう。

「まあ、一夏が情報戦で殆ど決めてたから仕方ないけどね」

「一夏さんですものね」

「一夏だしね」

「さすがお兄ちゃんだ」

箒と一緒に周辺の警戒に当たっていた専用機持ちの言葉に、箒も同意しないではない。一夏相手に情報戦を挑めばこうなると、箒だって理解している。だが、余りにも脆すぎると感じてしまう。

「（これが本来の私の気持ちなのでしょうか……今はまだ表に出てきていませんが、いずれあり得るのでしょうかね……一夏様に相談してどうにかしなければ、いずれこの気持

ちが爆発してしまうかもしれません……)」

自分が戦闘狂ではないかと感じ始めた箒は、逃げていく敵兵に襲いかかりたいと思っ
てしまった事を一夏に報告しようと思ひ、周辺の見回りに戻る。

「箒も、今回は良い働きだったんじゃない？」

「そうでしょうか？ 精々敵兵に偏向射撃で警告したくらいですよ？」

「それでいいのよ。一夏はそれを狙ってたんだらうし」

「……どうということですか？」

鈴には一夏の狙いが理解出来ているのかと、箒は首を傾げながら問いかける。少なく
とも、箒が見た限りでは鈴が一夏に今回の狙いを聞いたという事実は存在しないのだか
ら、首を傾げてしまうのも仕方ないだろう。

「一夏は元々争いを嫌うから、戦わずに済めばそれが一番なのよ。だから、セシリアと箒
の二人で威嚇射撃を行って、その間に敵大将を攻め落とし前衛を撤退させる。そうすれ
ば無用な戦闘は回避出来るし、何より後々交渉しやすくなるでしょうしね」

「交渉、ですか？」

「そ。世界平和のためには人材が必要だからって、一夏は使えそうな敵兵を引き入れる

つもりだろうし、実際交戦してなければ、その交渉もスムーズに済むってものよ」

「そこまで考えての行動だったのですか……私には一夏様の考えなど理解出来ませんでしたが、さすがは鈴さんですね」

「いやー、あたしも完璧に理解してるわけじゃないけど、たぶん一夏ならそう考えるだろうなーってだけよ」

伊達に付き合いは長くないのだなど、箒は鈴と一夏の間係を羨ましく思う反面、何処かつまらなさを感じていたのだった。

「箒がそんなことを考えているのと時を同じくして、敵が撤退していくのをつまらなそう、ではなく本気でつまらないと感じている集団がいた。」

「これで終わりか？ 随分とつまらねえ結果だな」

「更識君の交渉術なら仕方ないのかもしれないけど、確かに消化不良気味だわね……久しぶりの実戦だったのに、これじゃあ逆にストレスが溜まるわね」

「文句ばっか言つてないで周囲の警戒を怠らない。まだ終戦宣言はされてないんだから、どこかに敵戦力が潜んでいるかもしれないでしょ」

「でもよスコール。アメリカ軍総司令部壊滅、大統領捕獲だろ？ もう終わりで良いんじゃないわねえか？」

元亡国機業の面々にも、一夏たちが敵の中枢を墜した事は伝わっている。中枢が機能しない以上、敵が攻め込んでくることは無いだろうと考えているのだ。

「まあ、すぐに終戦宣言がされるでしょうけど、それまでは気を抜かない。フォルテはちゃんと警戒してるわよ」

「アイツは実戦経験がないからだろ。必要以上に警戒したらいざという時動けないぜ」

「一人も漏らすことなく追い返したんだから、動けてた証拠じゃない？」

「そうかもしれないが……」

つまらなそうに視線を逸らした先に、敵司令官を捕獲して戻ってきた更識勢の姿があった。

「まさかそのまま連れてくるとはね」

「護送中に襲われたら面倒だからな。自分たちの手で運んだ方が楽だし安全だろ？」

「まあ、貴方たちだから言える事でしょうけどもね。それで、こいつらはどうするつもりなの？」

「面倒だから国際裁判に掛ける事にする。こっちで処理するには時間がかかり過ぎるだろうからな。まあ、アメリカ内の事後処理の権利だけでもらえれば、後は好きにしてもらって構わないわけだし」

「相変わらず黒い考えを平然と言つてのけるわね、一夏は」

呆れたようなセリフではあるが、スコールの表情は楽しそうに笑っている。しかしその後すぐに真面目な表情を浮かべ、今後の事を尋ねた。

「私たちはこれで自由なのかしら？」

「まあ、ダリル先輩はそのまま更職に就職してもらおう事になってますし、フォルテ先輩も来年にはダリル先輩と同じ部署に配属になるでしょうね」

「オレとスコールは？」

「暫くアメリカの監視を頼むと思う。もちろん、二人きりになれる場所と時間も用意する」

つまりそれ以外は監視が付いたままだという事だが、今までの事を考えるとだいぶマシになったとオータムは感じていた。

「それが終わったらそのままアメリカで好きにして構わない。更職の関連企業の重役のポストを用意するから、収入は気にならないだろうし」

「オメエはスゲエな……そんなこと、一高校生には考え付かないだろうが」

「今の俺を作った一端はオータムにだってあるんだからな？」

「チゲエねえな」

一夏が苦笑いを浮かべたのを受けて、オータムは豪快に笑いながら一夏の肩を叩いたのだった。

一夏の金銭感覚

訊問など後始末は織斑姉妹に任せ、一夏は各国の専用機持ちたちにお礼とねぎらいの言葉をかけていた。

「皆さんが手伝ってくれたお陰で、こちらの被害は最小限に止める事が出来ました。この程度なら修繕にも時間はかかりません。本当にありがとうございます」

「一夏さんが指示してくれたお陰で、私たちも実戦経験を積むことが出来たのですから、そこまでお礼を言われることではありませんわ。それに、私たちの学園を守るのですから、このくらい当然ですわ」

「まあ、一夏が指示してくれなかったらあたしたちは好き勝手に動いてたでしょうから、これ以上の被害が出てたのは間違いないけどね」

「ところで、篠ノ之さんはどちらに？ 皆さんと一緒に聞いていたのですが」

「この場に筈がない事が気になった一夏は、辺りを見回しながら問いかける。

「筈さんでしたら、篠ノ之博士に用があるという事で先ほど別れましたわ」

「束さんに……?」

「一夏でも何の用事だか分からないの？」

「それほど親しいわけじゃないからな……何かあれば連絡が来るだろうから心配はしてないが」

「ところで一夏、今回あたしたちに報酬ってあるの？」

「報酬？ そうだな……一人十万くらいでいいか？」

「そ、そこまでの額を貰う事をしてないわよ!？」

「そうか？」

「一夏って普通の高校生の金銭感覚してないからね……十万もあつたらしばらく遊んでいられるわよ」

「ここにいるメンバーも普通の高校生の金銭感覚ではないのだが、それ以上に一夏はズレている。」

「今度何か奢ってくれればそれでいいわよ」

「すまん……他の人もそれでいいか？」

「構いませんわ。私もそこまで貰う事をしたとは思ってませんし」

「私もです、お兄ちゃん。十万など貰っても、使い道が分かりませんので」

「僕もそんなに貰っても使い道が無いしね」

他のメンバーも一夏が提示した金額に戦き首を横に振っている。一夏は自分のズレを自覚し、とりあえず報酬の件は後日という事でこの場は解散にした。

「ねえ一夏、さつきちらつと見たんだけど、箒の様子がおかしかつたのよね。確認しておいた方が良いと思うわよ」

「篠ノ之さんの様子が？ 分かった、一応気に掛けておく」

「お願いね」

鈴も一夏の側を去り、一夏は腕組をしながら部屋まで歩く。途中で誰かとぶつかりそうになり漸く意識を現実に向けた。

「ああ、ナターシャさんでしたか」

「珍しいですね、一夏さんがここまで接近しても気づかなかつたなんて」

「ちよつと考え事をしてましてね……それで、何か用事ですか？」

「織斑姉妹の訊問が見ていられない程残酷だったので逃げてきたんです。これでも元アメリカ軍所属ですから」

「かつての上司が締め上げられるのは見ていられませんか」

「そんなところね」

苦笑いを浮かべながら肯定するナターシャに、一夏も苦笑いを浮かべた。

「そういえばナターシャさんは今後どうするか考えていますか？」

「どうするって？」

「アメリカに戻って、軍の再編成を手伝うか、このままIS学園に残り教鞭を振るうか、ですよ」

一夏に言われてからようやくナターシャは今後の事を考えるに至った。

「私としては、アメリカ軍の再編成や経済の立て直しは更識企業に一任した方が早いと思いますし、このままIS学園に残って指導したいと思っています」

「そうですね。まあ、ナターシャさんにやる気が無いのならアメリカ軍の事はこちらで終わらせておきます」

「やる気がないわけじゃないですけど……ここに残ってアメリカが立ち直った時に若い子たちに指導出来たらと考えているんですよ」

「それは良い考えですね……アメリカもそのうち立て直しが出来るでしょうから、その後はナターシャさんやスコールたちにアメリカの事を任せられるのはありがたいですね」

「あの人たちもアメリカで働かせるんですか？」

一夏が口にした名前に、ナターシャは顔を顰める。元亡国機業の人間を再建に使うなど考えられないのだろう。

「出来るだけ破壊せずに侵攻したとはいえ、それなりに被害が出てるので、アイツらに片づけや瓦礫の撤去などを手伝わせて禊とする予定なんですよ。さすがに防衛に手を貸してもらっただけで過去の罪を清算とするのは無理があるので」

「そこまで考えているんですね……本当に一夏さんは高校生っぽくないです」

「まあ、高校生やってるのは、そっちの方が護衛しやすいからという理由なんですけどね」

そもそも一夏はIS学園に通わずともIS業界のトップに君臨しているのだ。今更学ぶことなど殆どない。

「その学園内に危険が多かったとは思ってもみなかったですけどね」

「ダリル・ケイシーさんね……まあ、それ以外にも織斑姉妹や篠ノ之さんのように一夏さんの過去を知ってる人たちも危険だったらしいしね」

「まあ、それ以外にもいろいろと会ったんですけどね……」

過去を懐かしむような目をしてみせる一夏に、ナターシャは笑いをこらえるのに苦労していた。

「よく言わてるかもしれないけど、本当に高校生なの？」

「よく言われてますが、本当に高校生です」

言われ慣れているからこそその返事に、ナターシャはつい噴き出してしまったのだった。

箒の相談

生徒会室で雑務を片付けていた一夏は、この部屋に近寄るはずのない気配が近づいてきたのを察知し首を傾げた。その仕草に他の生徒会メンバーは首を傾げたくなくなったが、すぐに気配の主に気が付いて警戒心をあらわにした。

「そこまで警戒する必要は無いと思いますけど……」

その警戒心に一夏が苦笑いを浮かべると、刀奈と虚は一夏に詰め寄り警戒の必要性を説いた。

「だって、完全に信用出来ない以上、警戒するのは当然よ。ましてや彼女は一夏君に手を挙げる可能性があるんだから」

「そうですよ。一夏さんだって、気にしてるから首を傾げたのですよね」

「いや、俺はたんに珍しい事もあるものだと思っただけですよ。まあ、シヤルからの報告で、戦闘中に不審な動きは見られなかったけど、何か悩んでる様子だったという事は聞いていますから、恐らく相談があるのではないでしょうか」

「ほええ。さすががいつちー、抜かりなく情報収集してたんだねえ」

唯一警戒心の欠片も感じられない本音ではあるが、これでも気配に対して警戒しているのだ。本音にとって相性のいい相手なので、彼女の対応は本音がした方が良くても理解しているのだろう。

『失礼します。一夏様はこちらにいらつしやるでしょうか?』

「開いているのでどうぞ。そこまで畏まる必要も無いんですがね」

『い、いえ! し、失礼します』

普段縁のない場所なので緊張しているのか、それともこの場にいる人間に緊張しているのか分からない態度で、生徒会室にやって来たのは、気配通り篠ノ之箒だった。

「いらつしやい、箒ちゃん。まあ座りなさいよ」

「刀奈さん、そこまで威圧する必要は無いですよ」

「どうぞ、お茶です」

箒の前にお茶を置く虚の仕草も、どことなく威圧的だと一夏は感じており、右手で頭を掻いて苦笑いを浮かべる。自分の事を心配してくれていると分かるからこそ、あまり強く言えないのだ。

「それで、わざわざ生徒会室まで来たという事は、かなり悩んでいるという事ですかね？」

「何故それを……いえ、一夏様ならそれくらいは当然ですか」

「常に警戒しておかないと安心出来ない立場ですからね。それで、先ほどの戦闘で過去の記憶でも見ましたか？」

「は、はい……喜々として敵を追いかける自分を見たような気がします……あれが記憶を失う前の私なのでしょうか？」

「過去からは逃げられない、という事ですね……篠ノ之さんが思ったように、恐らくはその光景は篠ノ之さんが実際に体験した事でしょう。貴女は亡国機業の穏健派のメンバーを追い回し、そして手にかけて過去のがありますから」

「手にかけて、という事はつまり……」

「サイレント・ゼフィルスの記録はフォーマットしましたし、篠ノ之さんが覚えているわけはないのですがね。人の記憶とは面白いものですね……あつ、いえ楽しんでるわけはありませんのでそんなに睨まなくても」

「あつ……」

無意識に睨んでいたのかと、箒は視線を一夏から逸らした。一夏の方も不謹慎だった

と頭を下げ、改めて箒に過去の説明をすることにした。

「調べればわかることですから話しますけど、貴女は人を殺めた過去があります。それも一人や二人ではなく、相当数」

「それが、過去の私の罪なのですよね……薄々は気づいていましたし、自分がやったという感覚はありませんが、サイレント・ゼフィルスを動かしたときに、そんな光景を見た、気がしました……」

「自分がしてきたことだという実感は持てないでしょうが、それが貴女の過去です。本来であれば貴女は国際裁判に掛けられる事をした、という話は前にしたと思いますが」「ええ。それ相応の事はしたんだろうという事は聞いてましたし、もしかしたらという考えはありましたが……そうでしたか」

「今後はどうしたいですか？ その記憶と付き合って行けそうですか？」

「付き合っていくしかなないので、その罪を償う為にも、私は覚えておかなければいけないのだと思います」

「そうですね……では、サイレント・ゼフィルスはそのまま篠ノ之さんが保有していただく。罪を償うつもりがあるのであれば、その子は絶対に貴女に必要ですから」

「良いんでしょうか……」

「大丈夫よ。その子は既に更識所属として扱えることになってるから。何処の国も文句

は言えないし、一夏君がしっかりと調整してくれてるから暴走する事もないわ。もちろん、一夏君に手出ししようとした時点で、私たちが貴女を裁きますので、そのつもりで」

最後に刀奈に殺気を浴びせられて、箒は自分の立場を再認識させられた。自分はまだ信頼されておらず、警戒されて当然の悪人であるという事実を。

「まあ、何もなければ箒ちゃんも自由にISを動かせるんだし、残りの学生生活を楽しみなさい」

「散々脅しておいて、最後に先輩らしい事を言うんですね」

「これでも生徒会長だもの」

「殆どお飾りの、ですけどね」

「ちよつと!?!」

先ほどまでの雰囲気嘘だったのではないかと思うくらい、生徒会室の空気が一変したため、箒はどう反応していいかに困り、とりあえず引き攣った笑みを浮かべたのだった。

最大の問題児

箒が生徒会室から出て行き、気配が完全に遠ざかったのを確認してから、一夏は刀奈と虚に視線を向ける。

「どう思いましたか？」

「フラツシユバックでもあったのかしら？　でもまあ、完全に過去を思い出したわけではなさそうだったわね」

「一応監視をつけますか？」

「いや、それは大丈夫だと思いますし、何かあればサイレント・ゼファイルスから報告があるでしょうしね」

「そうですね。私に報告が来ると思えますよ」

「だから、いきなり人の姿になるのは止める……」

したり顔で会話に割り込んできた闇鴉に、一夏は頭を抱えながらテンプレになりつつあるツツコミを入れた。

「まあ、闇鴉が言った通り、篠ノ之に異変があればサイレント・ゼファイルスから闇鴉に報

告が行きますし、このようにすぐ人の姿になって報告してくれるでしょうし」

「まあ、思い出したらすぐにでも織斑姉妹が篠ノ之さんを処分するでしょうしね」

「これ以上面倒事を起こしてほしくないんですがね……」

「敵の銃火器を謎のオブジェクトにしてみましたしね……」

一夏と虚が頭を抱えている反面、刀奈と本音はその光景を思い出して笑い出した。

「敵の表情は最高に面白かったけどね」

「あんなの、織斑姉妹にしか出来ないですもんね〜」

「誰も彼も出来たら困るだろうが……」

本音に疲れ切ったツツコミを入れてから、一夏は今回IS学園が負った被害報告に目を通し、盛大にため息を吐いた。

「ほぼ無傷で済んだが、織斑姉妹が敵を吹き飛ばした時の風圧で窓ガラスが大量に破壊されたと……」

「どうしますか?」

「後で簪と相談して、更識の予算で出せば良いですが……織斑姉妹の給料を削ろうとしても反発するだけでしょうしね……」

「そもそも、何で更識が負担しなきゃいけないの？」

「俺があの人血縁だからじゃないでしょうか……甚だ不本意ですがね」

本気で不本意だと言いたげな表情で呟く一夏を見て、三人と一機はそろって笑い出す。

「笑い事じゃないんですが……」

「まあ、血縁はいくら否定しても切れないからね。まあ、最悪ちよつとずつ織斑姉妹の給料を減らして回収しておけばいいしね」

「いっそのことI S学園の経営も更識が仕切ります？」

「そうなったらまず学長と織斑姉妹は切り捨てますかね」

「これ以上一夏君が忙しくなったら大変だし、止めておいた方が良くない？」

「まあ、冗談ですからね」

もう一度ため息を吐いてから、一夏は残りの仕事を片付けるために手を動かし続けたのだった。

敵の訊問を終えた織斑姉妹と束は、自分たちを監視していたナターシャに視線を向けた。

「お前如きが我々の監視とはな……まあ、暴れるつもりは無いからそこまで気を張る必要は無いぞ」

「そもそも、敵はすべて片付け終わったから、監視に必要も無いだろ」

「てか、お前誰だよ」

問題児三人に睨まれて、ナターシャは居心地の悪さを感じていた。IS界のレジエンドとも言われている三人ではあるが、その実態はダメ人間だと一夏に聞かされている。実際この数時間で一夏の言っている事が事実だと思い知らされたのだった。

「ちーちゃん、なつちゃん。こいつらどうするの？」

「一夏が判断すると思うが、一人くらいいなくなつたところで問題ないと思うぞ」

「じゃあ、解剖とかしても良いのかな？ バカが何を考えているのか、解剖して調べてみたいし」

「お前なら解剖しなくても分かるんじゃないか？」

「どういう事？」

「お前はバカだつて事だ」

「酷いっ!? 東さんはバカじゃないよ! そういうちーちゃんやなつちゃんの方がおバカさんじゃないの? 散々いっくんに怒られてるのに反省しないし」

「そんな事ないだろ!」

「そうぞ! お前ほどバカな事はしていない!」

「(全員怒られてるのに、何故反省しないのかしら……)」

ナターシャもこの数ヶ月IS学園で生活していたので、織斑姉妹の問題行為は知っているし、篠ノ之東が大天災と呼ばれる理由もある程度理解出来た。だがIS界のレジエントをダメ人間と言いつける度胸は無かった。だがこのやり取りだけ見ても、一夏が問題児と表現した理由がはつきりと分かった気がしていた。

「あんまりひどいと、一夏さんに報告するしかなくなるんですが」

「それは困る!!」

「……だったら大人しく一夏さんに訊問の結果を報告して、その後の指示を仰げば如何でしょうか?」

「よし! 今すぐ生徒会室に報告に行くぞ!」

「一夏に褒めてもらえるかもしれないからな!」

ナターシャの言葉に弾かれたように生徒会室に走り出した織斑姉妹を見送り、東はナターシャに視線を向けていた。

「お前はいつくんの味方なんだな」

「私は一夏さんに救ってもらいましたから」

「もしいつくンを裏切ったら東さんがこの世の果てまで追いかけて殺すから、そのつも

りで」

「大丈夫ですよ。それよりも、貴方がたの方が、一夏さんに怒られそうですけど」

「慣れてるから問題ないよ」

「慣れてるって……慣れる事じゃないと思いますけど……」

「お前には分からないだろうけど、いっくんに怒られるのは堪らなく快感なんだよ」

分かりたくもないと言いたげなナターシャの視線を受けて、東は双子を追いかけるように生徒会室に向かったのだった。

卒業イベント

IS学園とアメリカとの戦争は、何処の国でも触れられることなく終結した。それだけIS学園の動きが迅速であり、アメリカの動きが稚拙だったと言えよう。

「何だかスッキリしねえ終わり方だな」

「あら、あれだけの事で自由が手に入ったのよ？ 少しは気が晴れるんじゃないかしら」
「自由と言われてもよ……結局監視は付いてるんだし、戦争前とあまり変わってねえじゃねえか」

「学園内を自由に歩けるようになったし、私たちに向けられる視線に恐怖が感じられなくなつたのよ？ 精神的に楽になつたんじゃないかしら？」

「別に餓鬼にビビられようが関係ねえからな」

戦争が終わり、スコールとオータムも自由にIS学園内を歩く事が出来るようになった。前は時間に制限が付けられており、VTSなどの設備を使うにも深夜のみだったのだが、今は一夏が許可を出せばいつでも使えるようになったのだ。

「てかよ、監視されているオレらが、織斑姉妹の監視つてどうなんだ？」

「使えるものは何でも使う、それが一夏だからね」

「あの時に風圧で窓ガラスを大量に破壊した罰として、そのガラス片の片付けとついでに中庭の掃除ね……世界最強の双子が餓鬼一人に勝てないとは」

「まあ、一夏だもの」

世界最強の双子も形無しだと嘆くオータムに対して、スコールは一夏相手では仕方ないと思える。自分たちも一夏には勝てないと分かっているが、どうしても一夏の実力を認めたくないのか、オータムはつまらなさそうに舌打ちをして視線を逸らす。

「てか、オレたちの処遇ってSHより下じゃね?」

「SHにも監視は付いてるわよ」

「何処に?」

「サイレント・ゼファイルス、それがSHの監視なのよ」

「あつ? ……ああ、あの餓鬼はISの声が聞こえるんだっけか」

「だからサイレント・ゼファイルスを通じて闇鴉に報告が入るんだってさ。もしSHに怪しい動きがあれば、すぐにこの最強の双子が飛んでいくことになってるらしいわよ」

「こいつらが飛んで行ったら、また風圧でガラスが割れるんじゃない?」

「さあ、それはどうかしらね。IS学園のガラスは更識が開発した超硬度なガラスらし

いから、生身で出せる風圧程度で割れるかどうか」

「こいつらは普通の人間じゃねえだろ」

「まあ、彼女たちも貴女には言われたくないと思うわよ。何せレスだものね」

「かつ、関係ねえだろうが！　そもそもオレはレスじゃねえ！」

「はいはい。あんまり叫ぶと、一夏に怒られるわよ」

「お前がそんなこと言うから叫んだんだろうが……」

何処か疲れ切った表情で呟くオータムを、スコールは楽しそうに眺めていたのだ
た。

「悩み事も減り、一夏は学園側が勝手に決めていた卒業生強制参加の大会について、細々としたルール変更を行っていた。」

「そもそも、全員参加なんて無理に決まってるじゃないのよ」

「まあまあ、恐らく虚さんを参加させたかったんだと思いますよ」

「だったら、虚ちゃんにまず参加の意思があるかを確認するべきじゃないの?」

「その辺りいい加減ですからね、この学園は……」

この一年で、どれだけ学園の尻拭いをしてきたかと思うと、一夏は呆れるのを乗り越えて泣きたい気分になってきた。

「そもそも、卒業生の中にだって、まだ進路が決まっていないう人もちらほらと見受けられるのに、何処にそんな余裕があると思ってたんですかね」

「進学はもう無理だと思うけど、一夏君が手を貸せばすぐに就職先なんて決まる、とても思ってるんじゃないのかしら？　実際、戦争が起こったお陰で、アメリカの復興やら再整備やらに人手が必要になったんだし」

「それほど派手に壊しては無いんですがね……殆どアメリカ側の自爆ですし」

「まあまあ。アメリカの殆どの企業が更識の援助を求めてきたんだし、そこに卒業生を派遣して更識とのパイプ役になってもらうのも良いんじゃない？」

「卒業生たちにその気があるなら、ですがね」

一夏としては強制するつもりは無いが、もし頼み込まれたらそのつもりだったと明かす。刀奈は一夏の悪い表情を見て、苦笑いを浮かべる。

「一夏君ならこの程度考え付いてたか」

「更識だつて人手があるわけじゃないですしね。虚さんも結局代表は引退して教師になるみたいですし」

「つまり、この大会が虚ちゃんが更識代表として戦う最後、つてわけね」

「元々虚さんは大会とかに出るために代表になったわけじゃないですけどね」

「でも、虚ちゃんの後釜が本音で大丈夫なの？　護衛としてまともに機能してなかったんだし、ちょっと不安だわ」

「仕方ないじゃないですか。簪も美紀も国家代表になったんですし、残ってるのは本音だけですよ」

「静寐ちゃんとか香澄ちゃんにお願いするわけにはいかなかったの？」

「あの二人は更識の人間ではありませんよ。更識所属ではありませんが」

一夏の言葉に、刀奈は思わず納得してしまった。確かに優秀さで言えば二人の方が上だが、本音は更識の人間なのだ。更識の為に働かせるのは当然だと思えたのだ。

「とにかく今は、このイベントを終わらせることだけを考えましょう」

「そうね……てか、本音は何処に行ったの？」

「アイツなら簪と美紀の訓練の相手をしていますよ。マドカと一緒に」

何時も通りの展開に、刀奈はため息を吐いて一夏と二人でイベントの改変に勤しむのだった。

ダリルと虚

一夏と刀奈が生徒会室でイベントのルール見直しをしている中、生徒会を引退した虚は暇を持て余していた。進学するでもなく、企業に就職するでもなく、このままIS学園に残って教師として働くことと決心してから、急にすることが無くなってしまったのだ。

「本音はこんな時間を過ごしていいのでしょうか……」

妹である本音が何時も何もしないでだらだらしていた事を怒っていたが、こうして自分がこの状況に陥つてみると、まるで苦行ではないかと感じてしまったのだ。こんな苦行を本音は楽しそうにしていたのかと考えて、虚は慌ててその思考を追いやった。

「あの子はただだから聞いていただけです。こんな風に思ってたわけがありません」

「何を独りでぼやいているのかしら？」

「ダリル・ケイシー……何か用でしょうか？」

「別に。ただ貴女が急に老け込んだように思えてね。何かあったのかしら？」

「何もありませんよ。ただ、手持無沙汰だけです」

「まあ、この一年は更識君だけじゃなくて貴女も忙しかったから、急にすることが無く

なつて黄昏ちやうのも仕方ないのかもしれないけどね」

ダリルの言うように、この一年は物凄く内容の濃い一年だったと虚も思っている。まずは一夏の入学から始まり、セシリアへの肅正、シャルロットのスパイ疑惑にデュノア社の併合、アメリカの自作自演の被害者であるタワーシヤの保護、篠ノ之箒の亡国機業移籍、文化祭への襲撃など、上げて行けばきりがなくらいの出来事や事件があつただ。

「後は卒業イベントをやつたら本当に卒業だもんね。私は更識企業の指示でアメリカの軍再編成の手伝いだけど、貴女はこのまま学園に残るんでしょ？」

「一夏さんのお手伝いが出るならという事で、IS学園に教師として残る事になつています」

「まあ、貴女なら良い教師になれるでしょうしね」

「貴女に褒められても嬉しくありませんね」

「それはそうかもね」

自分も虚に褒められても嬉しくないなど感じて、ダリルは苦笑いを浮かべて虚の言葉に同意した。

「ところで、貴女は学園に通っていませんが、よく卒業出来ましたね」
「更識君が便宜を図ってくれたのよ。補習と追試を受ける事で、出席日数不足を補ってくれたの。まあ、織斑姉妹は反対してたらしいけど、更識君に逆らえるわけないしね」
「そうですか、一夏さんが……」

よつぽどダリルを学園に残したくなかったのだらうなど、虚は一夏の思考の裏を読んで苦笑いを浮かべたのだった。

「スコールやオータムも私と同じくアメリカ軍再編成の手伝いらしいし、元亡国機業で学園に残るのはフォルテだけね」

「篠ノ之さんやマドカさん、マナカさんも元亡国機業扱いなのですか？」

「篠ノ之の箒は兎も角、マドカちゃんやマナカちゃんは更識君の妹さんだからね。誰も元亡国機業だつて思っていないんじゃない？」

「まあ、すっかり打ち解けてますからね」

一夏を中心としたグループ以外でも、マドカとマナカは受け入れられている。元々一つ年下、という事もあるが、今では完全にちよつとしたマスコット扱いになっているのだ。

「千冬さんや千夏さんと見た目が同じで、それでいて凶暴じゃないからと一夏さんは言っていましたか」

「分からなくはないけどね、その気持ち」

「あの二人は何時までも一夏さんの悩みの種ですからね……」

「この前のガラス修繕も、織斑姉妹が原因だったんでしょ？」

「ちよつとやり過ぎたと言っていましたか、ちよつとどころではありませんでしたけどね」

校舎一階の窓ガラスすべてと、二階の窓ガラスを半分、これの何処がちよつとだと一夏は最強の双子にカミナリを落とすのだ。その噂は瞬く間に更識所属と元亡国機業のメンバーに知れ渡り、これ以上織斑姉妹の株が暴落しないようにそのメンバーの心の中に留める事にしたのだ。これでもし黛薫子にでも知られていたら、あつという間に全校生徒に知れ渡っていたか、薫子がこの世から消え去っていたかのどちらかだろうと虚は思っていた。

「よく校舎が無事だったわよね……更識が作った強化ガラスだったんでしょ？ それを粉々にする風圧なら、校舎が傾いてもおかしくなかったんじゃない？」

「奇跡的に校舎は無事だったと、一夏さんが呟いていたのを聞いたので、もしかしたら本

当に傾いていたかもしれないね」

「やっぱり人間じゃないわね、あの二人は……」

「まあ、一夏さん曰く『人外変態三人衆』らしいですからね」

「織斑姉妹と篠ノ之束を捕まえてそんなことが言えるのは、世界中でも更識君一人でしょうね」

「そうでしょうね。というか、あの三人に首輪をつけられるのも一夏さんだけでしょうね」

「首輪……IS界のレジエンドとか言われているのにね、あの三人」

本気で面白がっているダリルに対して、虚は本気で呆れている様子だった。反応の違いはあるが、二人ともIS界のレジエンドは尊敬に値しないと思っただけだった。

「更識君一人で、あの三人の栄光を上塗りできるかしら？」

「一夏さんは表舞台には立ちたくないみたいですけどね」

「更識の広告塔なんだから、無理じゃないの？」

「本音じゃ弱いですからね」

自分が広告塔を下りたことで、本音と一夏がその役目を継ぐのかと思うと、虚は少し

一夏に申し訳ない気持ちになったのだった。

疲労困憊の一夏

何とかルール変更を終わらせた一夏と刀奈は、生徒会室で突っ伏していた。もちろん、これだけで疲れ果てるはずがないのだが、一夏は蓄積されていた疲労がピークに達し、刀奈はその一夏の真似をして突っ伏しているだけである。

「一夏君、疲れたならお姉ちゃんがおんぶしてあげるけど？」

「俺と刀奈さんの身長差を考えたら、おんぶというより引きずられているようにしか見えなないと思います」

「うう……どうせ私は小さいですよーだ！」

「女の子なんて、そんなものじゃないんですか？　ウチの駄姉たちがデカいだけだと思いますが」

「あの二人は本当に羨ましい身体よね……背は大きいし、胸も大きいのにお腹は引っ込んでるし」

「プロポーションは兎も角として、他が残念ですから」

興味なさげに切り捨てて、一夏は気合を入れて身体を起こす。ここで寝ても良いが、

そのうち心配した美紀が生徒会室にやって来て、刀奈の姿を見て大騒ぎをし、簪や虚が刀奈を叱り始める光景が簡単に想像できたので、それに巻き込まれる苦労を避けるために気合いを入れたのだ。

「さて、刀奈さんはまだ動けますよね？」

「まあね。一夏君程疲労は蓄積してないし、これでも現役の国家代表だもの」

「では、休むのは部屋に戻ってからにしましょう。ここで休むと、後程お説教が待っているでしょうしね」

「怒られるのはイヤよ……特に、簪ちゃんに怒られるのは姉としての威厳が……」

「少し体力の回復を図ってから戻りたいところですが、このままだと本当に寝てしまいうるので多少無理をしても部屋に戻らないといけません」

「一夏君、そこまで疲れてるの?」

刀奈としては、一夏がそこまで無理をしていた事に気付けなかった自分を責めたいところだが、今はそんなことをしてる暇は無い。一夏がそこまで疲れているなどという事は、刀奈の記憶の中でもそうあることではないのだ。

「アメリカへの警戒、事後処理、そしてイベントのルール変更と、ここ数日ともに寝てませんかからね」

「今すぐ寝なさい！　なんだったら、本当におんぶしてあげるから」

「そこまでしてもらわなくても大丈夫ですよ。この通りしつかりと歩けますから」

明らかにふらついているが、不思議と物にぶつかるとは無く一夏は生徒会室から廊下に出ることが出来た。

「ほら、大丈夫でしょう？」

「見てることちがハラハラするわね……闇鴉、一夏君を支えてあげてちょうだい」

「かしこまりました。さあ、一夏様」

「この時ばかりは闇鴉が羨ましいわ……」

闇鴉の背は、虚よりも大きいため、一夏に肩を貸すくらいは楽勝である。そんな二人（？）の背中を見ながら、刀奈は自分の身長を恨めしく思ったのだった。

闇鴉に支えられながら部屋に戻ってきた一夏を見て、美紀は顔を蒼くして詰め寄ってきた。

「どうかなさったのですか!?!」

「ただの寝不足だ。支えてもらわなくても大丈夫だったんだが、刀奈さんが心配してな」
「刀奈さんの背では互いに負担がかかるということ、私が一夏さんに肩をお貸ししました」

「そうでしたか……それでは、可及的速やかに寝てください。今のところ急ぎの仕事は無いのですから」

「急に寝ろと言われてもな……」

「一夏様は寝ろと言われて寝るお方ではありませんからね」

闇鴉に皮肉を言われた一夏は、顔を顰めながらも反論はしなかった。実際に寝ろと言われても簡単に寝られるわけではない、という事は一夏も理解しているからである。

「とりあえずベッドに寝転がるだけでも違いますから、寝間着に着替えて横になつてく
ださい」

「だが、まだ外は暗くないぞ？ こんな時間から寝るわけにも……」

「何日もまともに寝ていないんですから、今から一夏さんが寝たところで誰も文句は言
いません。いえ、私が言わせません！」

「ぞ、そうか……」

美紀の劍幕に思わずうなずいてしまった一夏は、とりあえず着替えるためにクロ
ゼットを開け寝間着を取り出す。

「本当ならお風呂呂に入ってからと言いたいところですが、一夏さんはお風呂ギライです
ものね」

「今入ったところで、そこで寝るかもしれないぞ」

「そんなことになったら、織斑姉妹に襲われてしまいますね、性的な意味で」
「否定したいがああ姉だからな……否定出来ない」

言った美紀も言われた一夏も苦笑いを浮かべ、その間に一夏は着替えを済ませた。

「夕食は私が食堂からこの部屋に持ってきますので、一夏様は存分にお休みくださいませ」

「お前が？ 何か混ぜるつもりじゃないだろうな」

「失礼な！ 精々睡眠薬を混ぜるくらいしか考えてませんよ」
「混ぜてるじゃねえかよ」

「あら、本当ですね」

悪びれた様子もない闇鴉に、一夏は心底疲れ切った表情を浮かべたのだった。

「まあまあ、一夏様に盛ったところで効果は薄いですから、気にせず」
「そんな簡単に流して良い事じゃないと思うがな……」

「一夏さん、余計な気苦労は背負いこまない方が良いでしょう」

「そうしたいが、立場がそれを許してくれないからな……」

虚が生徒会を引退した今、一夏がしっかりと刀奈の監視もしなければいけない。また
気苦労が増えたと、一夏は心の中でため息を吐いて、休むために目を瞑ったのだった。

参加報酬

一夏と刀奈が調整したお陰で、卒業イベントである大会の参加者はそれなりに見込める形となった。特に、進学先も就職先も決まらなかった人間は、こぞって参加する運びとなった。

「一夏君が『それなりの動きを見せてくれたら更識傘下で雇う』とか言い出すから」「人手不足は更識だって例外ではありません。IS学園卒ならそれなりに期待できますし、傘下で実績を残せば本社に引き抜きも出来ますから」

「相変わらず黒い事を平然と言つてのけるわね……」

「これでも暗部組織の当主ですからね、それくらいは当然です」

表情を変えずに言つてのける一夏に、さすがの刀奈も苦笑いを浮かべる。だが、そんな一夏だからこそ側にいたいと感じるし、自分もその程度の事は考え付いてしまうのだと刀奈は思っている。

「まあ、今回は優勝とか関係ないただのイベントですから、そもそも開催する意味が分からなかったんですが、これはこれで良い企画になりそうですね」

「更識企業にとつては、でしよ？ 既に就職や進学が決まつてる人には参加する意味すらないんだから」

「虚さんと戦いたいつて人もいるみたいですけどね」

「あら、虚ちゃんも人気者なのね」

虚の人氣が高かつたのかと、刀奈は少し意外に思つてしまつた。確かに虚は更識の企業代表として有名であり、学力も高く羨む要素は確かにある。だが、同性から見ても憧れるかと問われれば、どちらかと言えば自分の方が人氣があるのではないかと思つていたのだ。これは自惚れではなく、確かに刀奈の人氣は学園内でもかなり高いと言える。既に世界を制しているのだから当然と言えば当然なのだが、それ以外にも人氣が出る要素が刀奈にはあつたのだ。

「どうして女子は大きさを気にして、大きい人を羨むんですかね？」

「なんでだろうね。私はそういう事でも悩まなくて済んだから分らないけどさ」

「簪や虚さんがたまに愚痴つてるのを聞きましたか、なんだか呪詛を撒いてる感じでしたし」

「怖いわね、それ……」

それも一つの要因であり、『あの』小鳥遊碧の後継者であり雇い主、という事も相まって刀奈の人気は高いものになっているのだ。

「刀奈さん個人の力もあり、碧さんの力も混ざったらそりや人気も出ますよね」

「不特定多数に人気でも、ただ一人に不評だったら意味ないんだけどね」

「ちゃんと好きですから心配しなくてもいいですよ」

「最近の一夏君、そういう事をさらっつというのよね……何か心境の変化でもあったのかしらっ？」

「心境ではなく状況の変化、ですかね。他の事に意識を割かなくてもよくなった分、刀奈さんたちの事を考えられるようになった、という事でしようか。まあ、元々ちゃんと考へてはいたのですが、どうしてもそれを最優先にすることが出来なかったものですから」

「いろいろとあったからね……あつ、いろいろと言えば、箒ちゃんの様子はどんな感じなのかしらっ？」

アメリカとの戦争の際、過去の記憶がちらついたり報告があつた箒の様子が気になったのか、刀奈は一夏にその事を尋ねる。

「大人しいものですよ。訓練でも実習でも、暴走する兆候は見られませんし、サイレン

ト・ゼフィルスとの関係も良好です」

「このまま大人しくしててくれるのかしら……」

「戦争以前は篠ノ之さんの事を避けていた生徒も、今では普通に会話するようになりましたし、過去の篠ノ之を彷彿させる行動も見られませんから、そこまで神経質になる必要は無さそうですね。もちろん、監視は続けますが」

「一夏君も、箒ちゃんと普通にお話出来るようになったもんね」

「まあ、突つかかかってこなければ、それなりの対応はしますよ、昔から」

「そうだったかしら？ 顔を見ただけで震えてたような気もするけどなく？ お姉ちゃん
の記憶違いだったけ？」

「ここぞというばかりに年上ぶってませんか？」

「そんな事ないわよ？ てか、最初から私の方が年上なだけど？」

二人の雰囲気や言動、その他諸々から一夏の方が年上っぽいのだが、刀奈が言った通り刀奈の方が年上なのだ。わざわざ年上ぶった事を言う必要は無いのである。

「これからは虚さんがいなくなつてさらに大変になるんで、しっかりと仕事してくださいね、義姉さん」

「その呼び方は好きじゃないなく。もうちよつと可愛らしい呼び方してくれたら考えな

くもないわよ?」

「最初から考える気が無い言い方ですね……てか、考えるまでもなく働いてくださいよ」

来季も生徒会長は刀奈なのだから、一夏のツツコミは正しいのだが、刀奈はそつぽを向いて一夏の言葉を聞いていない風を装っている。

「やれやれ……来年度からもしっかりと働いてくださいね、刀奈お義姉ちゃん」

「やつぱり一夏君にお姉ちゃんって呼ばれるとやる気が湧いてくるわね。よし、今すぐ虚ちゃんの部屋に突撃してこの気持ちをかち合おうと!」

「止めてください。そんなことをしたら虚さんの事もそう呼ばなければいけないんじゃないですか」

「虚ちゃんは一夏君の『義姉』ではないから、そう呼ばなくても良いんじゃない?」

「いろいろとあるんですよ、俺にも」

「人気者は大変ね」

「どの口が言いますか……」

盛大にため息を吐いた一夏を見て、刀奈は楽しそうに笑うのだった。

真耶の成長

参加者を見て、一夏と刀奈はあまりにも想像通りの結果にため息と苦笑いを浮かべた。

「参加者の内、虚さんと戦いたいと思ってる人が一人、残りは進路が決まっていらない人たちですわね……」

「更識の傘下とはいえ、結果次第では本社に異動出来るかも、というフリーズは効果絶大だったみたいね」

「まあ、人手不足を解消するには丁度いいですが、プライドを持って一流企業を選んでたんじゃないかなかったですかね……この時期になるとなりふり構っていられなくなつた、という事なんでしょうか？」

「だと思わよ？ 卒業間近だつていうのに、進路が決まらないつてのは焦る要因だと思わし」

「とにかく、これでイベントの体裁を保つことが出来ますね」
「参加者ゼロじゃ困っちゃうもんね」

生徒会主催ではなく学園主催なので、このイベントに一夏たちが尽力する必要は無い。だが卒業生全員参加というふざけたルールのままではせつかく落ち着き始めた自分たちの周りが再び騒がしくなるという事で、一夏たちはルール改変および商品の変更を行ったのだ。

「虚ちゃんに勝てれば、そのままIS学園で教鞭を振るう事を許可する、負けても更識の関連企業への転職、もしくは就職が約束される、ね……一夏君だからこそ設定出来るご褒美よね。まあ、一人だけで、その人は就職先決まってるけど……」

「虚さんとともに戦える戦力を、みすみす手放すなんてもつたいたいと思っただけどね」

「まあ、虚ちゃんとの一騎打ちを望んだのは、ダリル・ケイシーただ一人だけどね」
「何やら因縁めいたものがあるらしいですからね、あの二人の間には」

「性格が真逆で、しょっちゅう衝突してたらしいしね」

虚は真面目でダリルは何処かいい加減だったために、互いに気に入らない部分があったのだ。それが積もり積もって因縁のようなものになり、今回のイベントでダリルが一騎打ちを望んだのだった。

「見学するだけなら面白そうなんですがね」

「それで終わるわけないわよね……一夏君、お願いね」

「逃がすと思いましたが？ 刀奈さんも解説お願いします」

「あう……逃げないから襟首掴まないで」

「本当ですね？ もし逃げたら……さて、どうしましょうか？」

「に、逃げないから安心して」

普段浴びる事のない一夏からの殺気を浴びて、刀奈は背中に嫌な汗を掻いたのだ
た。

生徒会室から上がってきた草案に、千冬と千夏は満足そうに頷き、そしてどこか誇らしげな表情を浮かべていた。

「どうかしたんですか？」

「さすが一夏だ、と感心していたんだ」

「学長が丸投げしたイベントの企画書が届いたんだが、実に満足のいく結果となつている」

「ですが、更識君が立派なのと、千冬さんと千夏さんとはあまり関係ありませんよね？」

真耶の一言に、千冬と千夏は怒りを覚え睨みつけるが、真耶は一步も引かずに言葉を続ける。

「更識君は千冬さんと千夏さんの許で育ったわけではなく、更識家で育つたのですから、お二人の手柄だと思つるのは更識君に失礼だと思います。それでなくてもお二人は更識

君に迷惑をかけまくってきたんですから」

「お前、覚悟は出来ているんだろうな？」

「確かに私はお二人にいろいろと世話になつてきましたけど、その借りは十分返したと思ひます。というか、最近では私の方がお二人に貸しているような気がします」

「何だと？」

「お二人が仕事もしないでふらふらしている間に、私は期限が迫つてきた書類の整理や、政府への対応など、代わりをしてきたんですよ。それでも間に合わない時は、更識君に手伝ってもらいましたが」

真耶の言葉に、二人は反論しようとして言葉が見つからず口を開いたまま固まつてしまった。まさか真耶に言い負かされる日が来るとは思つてなかつたので、受けた衝撃は計り知れない。

「あら？ 真耶は何をしてるのかしら？」

「小鳥遊先生……いえ、日ごろの鬱憤を晴らそうと思ひまして、今日は言い返してみました」

「なるほど。一夏さんが言っていた事はこれだったのね」

「更識君が？」

「ええ。真耶にアドバイスしたとは聞いてたから、また仕事の事かと思ったけど、織斑姉妹に対しての事だったのね」

「頼り切りもあれなんですけど、この二人に関しては更識君に相談した方が確実ですから」
「これで真耶も少しは楽が出来るんじゃない？　ずっと織斑姉妹の尻拭いをさせられてたんだし」

「どうですかね……更識君が本当に学園経営に手を出してくれれば、かなり楽が出来るとは思いますが」

一夏が人事権を握れば、まず間違いなく織斑姉妹は降格、もしくはクビとなるだろうと真耶は確信している。そうなれば偉そうにすることも出来ないし、仕事をサボれば即説教となるだろう。もちろん、一夏はIS学園の経営権に興味はないので、そんな事にはならないと分かっているのだが、それでも想像してしまうのは、それだけ織斑姉妹に対しての鬱憤が溜まっている証拠だろう。

「これからは自分で仕事を片付けるようにするんですね」

「一夏さんに怒られたくないのなら、真耶の言う通りにするべきですね」

そう言い残して、真耶と碧は職員室から去っていく。残された織斑姉妹は、呆然と見

つめ合い、その場に崩れ落ちたのだった。

織斑姉妹の反省

まさか真耶に言い負かされるとは思っていなかったのか、織斑姉妹はその後数日間覇気を感じさせなかった。授業中に私語をしても怒ることもせず、呆然と授業を進めていく。そんな光景を見た一夏は、昼休みに真耶を整備室に呼びどのような対応をしたのかを聞いたのだった。

「——という感じですね。ちよつと言い過ぎたかなとも思いましたけど、あれくらいじゃなきや効果がないって更識君が言っていたので」

「効果絶大でしたね……ちよつと効き過ぎたくらいです」

「やっぱりあれが原因なんですかね？」

「真面目に授業をやってくれるのはありがたいですが、注意しなくなつたのは問題ですしね……このままでは織斑姉妹を舐めて、そのうち痛い目に遭う生徒が出てくるかもしれません」

「あの二人の怖さは身に染みてるとは思うんですが？」

「人間、慣れてくると昔の事など忘れてしまいますから。現に昔の篠ノ之さんの事を怖がっていた生徒も、あの戦争を機に普通に接するようになってますしね」

一夏としてはありがたい事なのだが、箒が何時過去の記憶を取り戻すかもしれないと思うと、手放して喜べないのだ。だが、必要以上に箒の事を警戒して孤立させるのも良くないという事で、記憶のフラッシュバックがあつた事は更識の人間にしか伝えていないのだ。

「とにかく、織斑姉妹の対処はこちらでしておきますので、山田先生は気にしないでください。ここで甘やかしたら再び山田先生に全てを投げつけて仕事をしないダメ人間に戻りますから」

「ダメ人間は言い過ぎじゃないですか……?」

「そうでしようか? これでもマシな言い方だと思つてゐるんですが」

「(更識君の中の織斑姉妹像は、私がおもつてる以上に酷いんですね……)」

「そりゃ、一応血縁ですからね……血縁ならではの感情、とでも申しませうか」

「えつと……私今、何も言つてませんよね?」

当たり前のように自分の考えに応える一夏に、真耶は困つたように問いかける。

「思いつき顔に書いてありましたし、山田先生の思考を読むのは難しくありませんし」

「そ、そんなんですか……」

「とにかく、あの二人の事で山田先生が頭を悩ませる必要はありませんので、思う存分ご自身の仕事に集中してください」

「分かりました。それじゃあ、更識君。午後の授業も頑張ってくださいね」

一夏なら授業に出る必要は無いのだが、一応学生として学園に在籍しているので、授業に参加する必要があるのだ。真耶は一夏にそういつて整備室から職員室に戻っていったのだった。

真耶からどのような事を言ったのかを確認した日の放課後、一夏はマドカとマナカを誘って寮長室を訪れることにした。

「織斑先生、少しよろしいでしょうか？」

『ああ、一夏か……鍵は開いてる』

「失礼します」

やる気の欠片も感じられない二人を見て、一夏は盛大にため息を吐いた。

「山田先生に怒られたのがそんなに堪えてるんですか？」

「何故それを!? ……いや、お前なら知っていて当然か」

「あの人は事実を言っただけです。シヨックを受けるのはおかしいんじゃないですか?」

「まさか真耶に怒られるとは思ってなかったからな……」

「弟や妹に怒られても堪えなかったのに、山田先生なら堪えるんですか……それでした」

ら、これからは山田先生に任せてみましょうか」

「……何をだ？」

嫌な予感がしたのか、千冬と千夏が身構える。一夏はそんな二人の反応をしつかり見て、悪い事を考えている笑みを浮かべながら告げる。

「我々が怒つても堪えないんですから、お二人の説教を、ですよ。山田先生に言われるのが一番堪えるようですしね」

「お願いだから止めてくれ！」

「姉さま方……」

「元々ダメ人間だと思つてたけど、本当にダメなんだね」

「こらこら、とどめを刺すな」

一夏が笑いながらマナカに注意して、すぐに表情を改めた。

「真面目に授業をしてくれるのはありがたいですが、注意しないのは問題です。前みたいに過激な注意ならこちらも考えますが、放置されるもの困りますからね。しっかりと節度を持った注意をしてくれなければ、これまた給料査定に響くことになりますよ」

その一言に、二人の身体が大きく震えた。一夏に査定の権限はないが、かなりの発言力を持つている事は二人も知っているからだ。

「分かった！ 真面目に授業をするし、節度を持った注意もする！」

「だから学園に進言するのだけは止めてくれ！」

「真面目になつてくれるなら、こちらとしては楽が出来るので嬉しいんですがね。今後の授業態度次第で、進言するかどうかは決めますので」

「ああ、分かった」

「わたしたちの態度、しっかりと見ておけ！」

「……生徒に見られるのはおかしいと思わないんですか？」

「まあ、兄さまですし」

「お兄ちゃんの方が何十倍も偉いんだから、おかしいと思わないのが当たり前だよ」

「何だかな……」

姉と妹、どちらの双子も一夏が査定する側であることに疑問を抱いていない事に、一夏は盛大にため息を吐いた。とりあえず真面目に授業をして、注意もすると約束してくれたので、一夏は寮長室を後にした。

「悪かったな、付き合わせて」

「兄さまの頼みですから」

「あの二人とお兄ちゃんだけの空間にしたら、お兄ちゃんがトラウマを発動させるか、あの二人がこの世から消え去るかのどっちかだっただろうしね」

「さすがに消し去りはしないとと思うが……」

断言できない自分に困りながら、一夏は二人の妹の頭を撫でるのだった。

掃除出来ない姉たち

自分の過去を思わぬ形で視た箒は、自室で頭を悩ませていた。

「あれが過去の私だなんて……一夏様に手を挙げ、追いかけてまわし周りを排除しようとする……そんな人間を幼馴染だと認めるはずがないではありませんか……何故それを理解出来なかったのでしょうか、過去の私は……」

「なにかあったのですか？」

「クロエさん……いえ、ちよつと自己嫌悪中です」

戦争が終わってもこの寮で生活を続けているクロエに、箒は記憶のフラッシュバックがあつた事を説明する。

「なるほど……束様からお聞きしていましたが、確かに最低な人間だったようですね、過去の箒さんは」

「一夏様に危害を加えようとするだなんて、何も考えていない証拠です」

「一夏さんを独占しようだなんて、束様でも考えない事ですからね」

東は出来る事ならしたいとは考えたことがあるが、千冬と千夏がそれを許さないだろうと分かっているし、更識の人間が自分に一夏を明け渡してくれるはずもないと知っているの、そんな無駄な事を考えるのを止めただけなのだが、クロエはそんな事情を知らない、東は一夏を独占したいとは思っていないと受け取っていたのだ。

「とにかく、これ以上一夏様に迷惑を掛けるわけにはいきませんし、記憶が戻らない事を祈るしかないですね」

「良く聞くのは、記憶が戻った時、記憶を失っていた時の事を忘れてしまいうらしいですからね。万が一箒さんの記憶が戻り、今の状況を忘れてしまっていたとしたら、その時が箒さんの最期でしょうね」

「ただでさえ一夏様に生きる事を許してもらっているんですから、その一夏様に手を挙げたらお仕舞でしょうね」

「更識家の人か、織斑姉妹のどちらかが貴女を葬り去るでしょうね」

「もしそうになったら、一夏様にしてもらいたいですね……もちろん、死にたくはありませんが」

「記憶が戻らない方が、貴女は幸せなんですから、無理に記憶を追い求めないようにするしかありませんね」

「分かっています。ところで、クロエさんは何時までこの寮で生活をするのですか？ 東

様は既に危険な状態を脱したはずですが」

一夏から聞かされていたのは、東がアメリカの軍事システムに介入するので、万が一でしかないが自分が危険に曝される可能性を考慮してクロエをIS学園に避難させる、ということだった。その状況が終われば、クロエは東のラボに戻ると思っていたのに、未だにルームメイトを続けている事に、筈は今更ながらに疑問を抱いたのだった。

「一夏さんが、東様のラボは人が生活出来る空間ではない、と仰られました……東様が片付けを済ませられるまで私はこちらでお世話になることになったのです」

「そうだったんですか……ところで、私が聞いた話では、東様は片付けようとすればするほど散らかす、織斑姉妹と同レベルの家事スキルだということですが……」

「事実です。東様は片付けているつもりで散らかすお方ですから。ですので、まだ当分はここで厄介になりますので、改めてよろしくお願ひします」

「こちらこそ、よろしくお願ひします」

互いにルームメイトに頭を下げ、同時に笑い出したのだった。

一夏からラボの片付けを命じられた束は、片付けたはずの部屋が酷い惨状になっているのを見て首を傾げていた。

「おかしいな……さつき片付けたはずなのに、何でこんなに散らかっているんだろう？
これは東さんの天才的な頭脳でも理解出来ないな」

東は片付けたつもりでも、一夏が見たら散らかしたただけだというであろう作業を終えた東は、これじゃあくクロエを呼び戻せないと盛大にため息を吐いた。

「いっくんも難しい事言ってくれるよね……片付けなんて、東さんが出来るわけがない」

人には向き不向きがあると分かっているはずなのになあ、と東は呟きながらどうしたものかと腕組みをしてこの惨状を打破しようと考え込む。そのタイミングで、ラボに人の気配がすることに気が付き、その気配を確かめる為に入口に向かった。

「あれ？ ちーちゃんになっちゃんじゃん。どうかしたの？」

「ちよつと一夏から逃げてるんだ。匿ってくれ」

「また何かしたのかなー？」

「どうせ見てたんだろ？ 寮長室の惨状を一夏に知られてな。片付けろとカミナリを落とされそうになって逃げてきたんだ」

「なんだ、ちーちゃんたちもか」

「なに？」

東は自分だけではなく千冬と千夏も片付けが出来ずに一夏に怒られたとして、ホッ

と胸をなでおろした。

「実は東さんもいつくんに怒られてねー。ラボが綺麗になるまでクーちゃんをこつちに返してくれないって言うんだよね」

「つまり、ここに逃げてきたところで、一夏が追いかけてくる可能性がある？」

「てか、既に背後に鬼の形相をしたいつくんがいるんだけど……」

「なにっ!？」

「今日という今日は許しませんよ? この前片付けたばかりなのに、何であんなに散らかってるんですかね?」

「あ、あれはだな……芸術的センスによって彩られた寮長室であって、決して散らかってるわけでは……」

「遺言はそれで構わないですかね?」

「いや……すまなかつた」

「東さんも、この前より散らかってるように見受けられますが?」

「あはは……頑張ったんだけどね……東さんには片付けなんて出来なかつたんだよ!」

「威張るな!」

一夏のカミナリが駄姉三人衆に落ち、三人は小さくなつて頭を下げるのだった。

最後の試合

卒業イベントのメインとなる虚とダリルの模擬戦を見るために、在校生全てがアリーナに押しかけ、さすがに全員は入らないという事で大型モニターでライブ中継をするこ
とになった。

「さすが一夏君ね。この短時間でライブ中継出来るようにするなんて」

「これくらいなら簡単に出来ますよ。それより、何で俺も実況なんですか？ 前みたい
に刀奈さんと簪の姉妹で実況と解説をすれば良いじゃないですか」

「簪ちゃんは今回は遠慮するって言ってたんだから仕方ないでしょ？ 一夏君も覚悟を
決めてよね」

「はあ……まあいいですけど」

「ところで、さつきまでの闘いで、目ぼしい人材はいたのかしら？」

メインの前には、更識傘下に就職出来るかもという希望を抱いた卒業生たちがバトル
ロワイヤルを繰り広げていたのだ。そのメンバーの実力を確認する為、一夏は目を光ら
せていたのだった。

「数人、使えそうなのがありましたね。後程簪と相談して正式に採用するつもりです」
「何で簪ちゃんど？」

「経理は簪が担当していますからね。どれほど採用出来るか相談しないといけませんので」

「人事権は一夏君にあるんでしょ？ 今の更識の業績から考えれば、全員雇ったからって傾くとは思えないけど」

「余裕があるからといって、無駄遣いは良くありませんから」

「一夏君って、そういうところもしっかりしてるよね」

「何ですか、いきなり」

「だって、普通ならお金があるからって無駄遣いしそうだけど、一夏君って結構儉約家じゃない？ だから更識の利益も高いのかなって」

「利益云々は兎も角、総資産を増やしておくのは大切ですからね。またいつ企業を買収するか分かりませんし」

敵対組織の傘下企業を秘密裡に買収したりも、当分は無いだろうと思ってるが、一夏は来るべき時の為に資金を増やしておくべきだろうと考えているのだ。

「とにかく今は、アメリカの復興と組織の立て直し、その他諸々で忙しくなるでしょうか」

ら、使えそうな人材はなるべく確保するべきだと考えているんですが、独断ではいずれ反乱がおきるかもしれないかもしれませんからね。正当なる更識の血脈を受け継いでいる簪に相談して決めた事なら、後々文句も言えないでしょうしね」

「一夏君に文句を言う輩がいるなら、私が直々に処断するけど？」

「物騒な事はしないでください。いずれ結婚すれば文句も出なくなるでしょうが、今の俺はただの養子ではないんですから。代々更識家に仕えてきた人間程、俺の決定に文句をつけたくなるんじゃないでしょうかね」

「尊さんが一夏君に忠誠を誓ってるんだから、他の人も大人しく従ってくれればいいのに」

「それじゃあ独裁ですよ。俺はそんなことをしたいわけではありませんので」

「まあ、一夏君がそれでいいなら私ももう文句は言わないけどね」

イマイチ納得出来ない感じではあるが、刀奈はそれ以上何も言わなかった。一夏は自分の考えを受け入れてくれた刀奈の頭を撫でながら、小さく頷いたのだった。

まさかの一騎打ちとなったことで、虚は一人ピットで集中力を高めていた。

「ダリル・ケイシーとは一年の時から言い争ったりしました。が、まさか最後の最後で一騎打ちをすることになるとは思いませんでしたね……相手は元亡国機業の主力、実戦経験豊富ですが、更識の人間として負けられません」

一夏はそこまで気負う必要は無いと言っていたが、虚のプライドが負ける事を許せな

いのだった。

「他の誰かに負けるのは良いですが、彼女には負けたくありません。一夏さんにちよつかいを出すような相手に負けるなど、私は受け入れられませんね」

『さつきから独り言が大きすぎませんか？ もう少し冷静さを取り戻してほしいのですが』

「丙だつて、私とダリル・ケイシーの関係は知っているでしょ？ そして、彼女が一夏さんにちよつかいを出していたことも」

『まあ、ずっと側で見てたわけですし、知らないわけではありませんが、それでも少し落ち着いた方が良いと思いますよ。激昂して負けたなんて、一夏さんに思われたくないでしょうし』

「……そうですね。少し興奮し過ぎてたみたいです」

丙に諭され、虚は少し頭を冷やす事にした。普段冷静な分、ダリル相手だと必要以上に興奮してしまうようだ、虚は自分の精神がダリルに掻き乱されている感覚に陥っていた。

「何故私はここまでダリル・ケイシーの事が嫌いなのでしょうか」

『性格が正反対という事もあるのでしようが、基本的に虚が好く感じではないように思

えますからね、彼女は』

「とにかく、今日は一騎打ちという事ですし、冷静さを欠いたら負けるかもしれませんね」

『一夏さんが見てますから、必要以上に熱くなることは無いと思いますが、冷静さを欠いていると判断したら、強制的にでも落ち着かせるのでそのつもりで』

「丙にそんなことさせないよう、気を付けて試合に臨みます」

『そうしてくれると私もありがたいですが、虚と彼女はどうしてもぶつかり合う感じですよ……期待しないでおきます』

丙がため息を吐いた気がして、虚は少し恥ずかしげに視線を逸らし、開始時刻を待つのだった。

盛り上がる観客

いよいよ虚VSダリルの一騎打ちという事で、アリーナの盛り上がりは最高潮に達していた。もちろん、モニター室も相当な盛り上がりを見せており、どれだけ注目されているかが良く分かる光景だ。

「さあ、いよいよ三年生最後の試合、布仏虚ちゃん対ダリル・ケイシー先輩の試合が始まります！ 実況はIS学園生徒会長であり虚ちゃんの主である私、更識刀奈がお送りします。そしてもう一人の実況及び解説はこの人！」

「……何ですか、そのノリは」

「もう！ 一夏君はノリが悪いわね。てなわけで、更識一夏君です」

刀奈の挨拶に、盛り上がっていた会場は更なる盛り上がりを見せる。その熱気に一夏は辟易した様子でため息を吐き、刀奈に話しかける。

「随分と盛り上がってますが、賭け事とかしてませんよね？」

「当然でしょ？ そんなことしなくてこれだけ盛り上がるって分かってたもん」

「……つまり、少しはそういう事も考えていたと？」

「そんな事ないわよ！ てか、一夏君に隠れてそんなこと出来るわけじゃないじゃない」

「まあいいですが……盛り上がってる中水を差すようであれなんです、あまり盛り上がり過ぎて怪我をしても自己責任ですからね。間違っても見舞金などあてにしないように」

「誰もそんなこと思っていないと思うけど？」

「いや、織斑姉妹とかがあり得そうだし、他にも数人心当たりがあるんで」

疲れ切った雰囲気で告げる一夏を見て、刀奈は少し同情的な視線を向けた。

「さてさて、注意事項も済んだところで、さっそく選手に入場してもらいましょうか！」

「何ですか、選手って」

「これくらいの方が盛り上がるかなーって」

「……これ以上熱狂させるつもりなんですか」

「せっかくのイベントだもの。盛り上がってた方が思い出になるでしょ？」

「虚さんは学園に残りますし、ダリル先輩も更識で働いてもらうんですから、そこまで盛り上げなくても良いんじゃないですか？」

「その二人だけじゃなくて、みんなの思い出にもなるでしょ」

楽しそうに笑う刀奈を見て、一夏は小さくため息を吐く。あまり盛り上がり過ぎると自分が疲れるというのを経験上知っているので、それほど盛り上げてほしくないのだ。

「とりあえず、虚ちゃんとかダリル先輩の入場でーす!」

「刀奈さんのテンション、どうにかならないんですか……」

ノリノリの刀奈の横でガツクリと肩を落とす一夏の姿を見た虚は、ピットでため息を吐いていたのだった。

虚とダリルの試合を客席で見学していた簪と美紀は、二人の動きを見て感嘆のため息を吐いた。

「虚さんは当然だけど、ダリル先輩もレベルが高いよね」

「まあ、亡国機業の上位戦力だったわけだからね。それにしても、虚さんとほぼ互角つていうのが凄いよね」

「美紀だったらどう攻める？」

「私一人だったらたぶん勝てないと思う。簪ちゃんとペアで挑んでやっと思おう」

「お姉ちゃんだったらどう攻めるんだろう？」

解説席で楽しそうに実況している刀奈に視線を向け、簪は姉がどう攻めるかを想像する。

「お姉ちゃんの得意としてる残像を使った攻め方をしても、ダリル先輩には効かなさそうだし……」

「刀奈お姉ちゃんは、残像を使わなくても強いけど、力押しじゃ勝てないかもしれないね」

「一夏が認めるだけあるよね……」

「ダリル先輩？ 虚さんに一騎打ちを挑むだけあるよね……」

虚の攻撃をギリギリで躲し、鋭い攻撃を繰り返すダリルに、周りの観客が盛り上がりを見せる。

「元亡国機業の人間だって警戒してたのに、やっぱりこういうのを見せられると忘れちゃうんだね」

「一夏さんが大丈夫だって言ってたので、ある程度警戒は解かれてたけどね……でも、やっぱり少しは警戒しちゃうのはしょうがないとは思ってたけど、やっぱりレベルの高い戦いを見ると盛り上がるんだね」

「あのラウラも楽しんでるみたいだしね」

少し離れたところで本音と一緒に見学しているラウラも、ダリルの動きを見て興奮している様子だった。

「軍人であるラウラが興奮するくらいだから、やっぱりレベルが高いんだろうね」

「何時か私たちもあれくらい動きが出来るようになるのかな？」

「私たちの努力次第だと思うよ？ 一夏さんに指導してもらったり、刀奈お姉ちゃんと一緒に訓練すれば、何時か出来るようになるよ」

「美紀も一緒に訓練していかないとね」

「もちろん。でも、私より簪ちゃんの方が先に出来るようになると思うよ」

「美紀の方が早いと思うけどな……美紀は理解すれば吸収早いし」

「簪ちゃんは理解力が高いし、吸収だって早いじゃん。私なんかよりよっぽど早く出来るようになると思うよ」

「そんな事ないよ。美紀だって……って、何で私たちこんなことで譲り合ってるんだろう」

「お互いに負けたくないって思ってる半面、相手の事を認めてるからじゃないかな」

美紀の言葉に、簪は納得したように頷いた。

「美紀は私のライバルであり、尊敬出来るパートナーだからね」

「何だか恥ずかしいね」

「うん」

互いに恥ずかしそうに視線を逸らして、お互いに笑い出す。そして二人で頷いて、虚とダリルの動きをしっかりと見学して自分のものにしようとしつかりと動きを覚えるために微動だにせずに見入ったのだった。

最大のライバル

客席の様子を見る余裕もないダリルと虚は、互いに一撃も喰らわせることが出来ない状況に歯がゆさを覚えていた。

「実力は互角、いえ、私の方が実戦経験は豊富な分こちらに分があるはずなのに……なのになぜ布仏に一撃も喰らわせることが出来ないの？」

「一夏さんが調整してくださってる分、私の方が有利のはず。なのになぜダリル・ケイシーにここまで押されているのでしょうか？」

互いに仕掛けては躲かれ、仕掛けられては躲しを繰り返している分、観客は盛り上がる一方なのだが、当の本人たちはそんな事を気にしている余裕は無い。恐らく観客の中でその事に気付いているのは教師陣の中でも実力者と言われる織斑姉妹と碧、そして解説席の一夏と刀奈の五人だろう。

「(スコールやオータムを相手にした時だつて、ここまで苦戦した覚えはないわよ)」

「(お嬢様とは違った苦戦の仕方ですね……悔しいですが、彼女の實力は本物という事ですか)」

少しでも余計な事を考えたら、その隙を突かれると分かっているからこそ、考え事は自分が攻撃を仕掛ける時についてにしている、にもかかわらずこの苦戦だ。二人が周りの事に気を割いている余裕がない証拠だと互いに分かっていた。

「認めましょう、布仏。貴女は私が倒さなければならぬ相手のようね」

「(ダリル・ケイシーを倒す事によつて、私は更なる高みにいける、という事でしようか)」

互いを認め合う一方で、この相手にだけは負けたくないという感情、これがライバルなのだろうか、二人の心にそのような考えが浮かび上がる。

「(だけど、今はそんなことを考えている余裕は無い!)」

「(私の全力を持つて、この相手を倒す!)」

どちらかが一撃喰らわせることが出来れば、状況は一気に傾くだろうと分かっているからこそ、安易な攻撃は仕掛けられずにいる。互いに牽制程度の攻撃のつもりなのだが、その一撃は相当な威力を持っている。

「(仕掛けるなら仕掛けてきなさいよね)」

「(あちらが動けばこちらでも仕掛けられるのに)」

互いに戦略など考える余裕もなく、ただ一撃を相手に喰らわせることだけを考えている。それが理解出来るからこそ、余計に仕掛ける事が出来なくなっているのだ。

「(こちらが動けばあちらも動く……)」

「(ですが見えているだけでは隙が生まれてしまう……)」

この状況を打破しようと動けば、そこを狙われる。それが出来る相手だと知っているからこそ再び動きが鈍る。そんな繰り返しをもう何度してきた事かと、ダリルと虚はこの状況を客観的に見ていた。

「(おそらく布仏も分かっているはず)」

「(同じ考えだからこそ動けない、ダリル・ケイシーも分かっているはずです)」

「(なら)」

二人の考えがどのようなものだったか、それはその他大勢の観客には分からなかっただろう。

一人が今までとは違う出方を見せたのを受け、刀奈は楽しそうに一夏に話しかけた。

「虚ちゃんもダリル先輩も、負けず嫌いみたいね」

「刀奈さんだって大概だと思えますけど？」

「そんな事ないわよ？ 私は、負けた時は潔く負けを認めるもの」

「碧さん相手なら、ですよね？ たまに虚さんや簪に負けると、駄々をこねてすぐ再戦す

るじゃないですか」

「あ、あれは……」

一夏に見られていたのかと、刀奈は顔を真っ赤にして言い訳をしようとしたが、視界に飛び込んできた二人の動きにその事を忘れて見入ってしまった。

「虚ちゃん、あんな動きが出来たのね……」

「この一騎打ちの中で出来るようになった、というのが正解でしょうね。ところで、刀奈さんの言い訳は無しでいいんですか？」

「ん？ ……あれはちよつと油断しちやっただけで、本気を出せば勝てるって証明したかっただけで！」

「どんな相手にも油断せずに戦わなかった刀奈さんが悪いんですから、大人しく負けを認めた方が良かったのではありませんか？ そのせいで整備に時間がかかったんですから」

「ゴメンなさい……って、今の危なかったわね」

ギリギリでダリルの攻撃を躲した虚の動きに、刀奈は思わず息を呑む。一夏もこの一騎打ちで二人が想像以上に成長していると感じているのか、何度も小さく頷いている。

「やはりライバルという存在は成長を促すんですね」

「簪ちゃんも美紀ちゃんも、互いを意識して己を高め合ってきたからね」

「刀奈さんにはそのような相手はいなかったですからね」

「でも、虚ちゃんや簪ちゃんたちに負けたくないとは思ってたわよ？」

「ですが、油断してたんですよ？」

一夏の意地悪な質問に、刀奈は頬を膨らませて視線を逸らす。

「意外と長引くかもしれませんね、この試合……」

「今日は制限なく戦えるって分かってるからでしょうね。無理して飛び込まずに隙を窺ってるのは」

「ですが、このままでと一生続くかもしれませんよ」

「S Eが持つわけじゃないんじゃない？ 動かすだけでもちよつとずつ減るんだからさ」

「丙にはあの武装を積んでいる分、ダリル先輩が不利ですね」

「あの武装って？」

「この間漸く完成した、デュノア社の目玉商品となる武装です。テストケースとして虚さんに使ってもらおうと思いましたが」

「デュノア社っていうと……S E回復武装？」

「ええ。さて、それがあると知ったら、ダリル先輩はどう出ますかね」

実に楽しそうに呟いた一夏に、刀奈は何か言いたげな視線を向けたが、言ったところで意味が無いと知っているからかたため息を吐くにとどめたのだった。

ハイレベルな闘い

レベルの高い戦いを目の当たりにして、一年の専用機持ちたちは自分のレベルを省みてため息を吐いた。

「強くなったと思っていました、あれが本当の実力者同士の闘いなのです……」
「あたしたちもあのレベルまで行けるのかしら……」

「夏君に専用機を持つ事を許してもらっただけで、私と香澄は候補生でもないって割り切ってたんだけど、これは凄すぎるわよね……」

セシリア、鈴、静寂の眩きに、香澄、エイミーは無言で頷く。だがラウラだけは弱気な事は口にしなかった。

「彼女たちは三年生で、我々はまだ一年だ。後二年あるんだぞ！」

「でもラウラさん、二年で布仏先輩やダリル先輩のようになれるとお思いですか？」

「なれるなれないではなく、なれるように努力すればいい！ この学園には優秀な教員が揃っているんだから、なろうと努力すればきつと実力は今まで以上に高いものになるはずだ！」

「アンタのその前向きさ、今だけは羨ましいわよ……」

鈴の言葉に、他のメンバーも頷く。ある意味考え無しとも言えなくもないラウラの考えを、素直に受け止められるだけの純真さが他のメンバーには無かったのだ。

「織斑教官たちや小鳥遊先生、そして布仏先輩も教師として学園に残ると噂されている。更にはハイレベルな国家代表やお兄ちゃんのような人材までいるのだ。我々がレベルアップ出来ないわけがないだろ」

「たぶんラウラさんが言っている通りなのでしょうけど、あのレベルまで届くかと問われれば疑問ですわね……」

「てか、あれはモンド・グロツソ決勝だって言われても疑わないレベルの闘いだしね」

「あたしたち、あそこを目指せって言われてるって事よね……候補生辞めたくなくてきたわよ……まあ、辞めないけどね。あたしたちは静寂や香澄と違って、候補生を辞めたら専用機もなくなるし」

「私は一応更識から送られたって事になってるから、候補生を辞めても専用機は残るけどね」

「エイミイさんは更識所属ですものね……」

「その分、実力者の闘いを間近で見せられてきたけどね……」

現役の国家代表である刀奈をはじめとするメンバーと模擬戦をしたりもしたエイミーは、遠くを見つめてそう呟くのだった。

試合も中盤から終盤に差し掛かってきたはずなのに、虚の動きは一切衰える事はな

い。それがダリルには不思議でしょうがなかった。

「いくら鍛えているからといって、息の乱れが一切感じられないし、ISの動きも鈍くなってきていないなんておかしいわね……ダメージは与えられてないとはいえ、回避したり攻撃したりするときにSEはちよつとずつ削られるはずなのに……」

少なくとも自分のSEは徐々に減っているのだ。虚の方も多少なりとも削られていて当然であるはずなのに、虚は特にSEを気にした様子もなく瞬間加速を行っている。

「(最小限に抑えているとはいえ、あれだけ瞬間加速を繰り返せばそれなりに消費しては……なのに布仏の動きは鈍くなるどころか鋭さを増して——そういえば、前にオータムから聞いたことがあったわね)」

そこでダリルは、オータムが入手してきた情報の中に、デユノア社が開発に取り組んでいた武装の事を思い出していた。

「(布仏は更識の企業代表……試作品を積み込んでいても不思議はないわね……でも、それを使ってる様子は見られないし、単純に布仏の技量の方が私より上だつて事……いえ、撃ち合つてみて分かるけど、私と布仏にはそれほど実力差は無い……となると、これが更識製のISの凄さつて事になるのかしら……)」

先ほどから思考に気を取られて攻撃に集中出来ていないダリルではあるが、虚の攻撃を喰らうまでには至っていない。手数が減ったからといって、回避行動まで疎かにはしていないのだ。

「もう降参ですか？」

「まさか。このままやられてたまりますか！ せつかく私を卒業させてくれた更識君の為にも、無様に負けるわけにはいかないのよ」

「一夏さんに手を出そうものなら、一切の容赦なく切り捨てますから」

「あら怖い。先輩が先輩に近づくのがそんなにいけない事かしら？」

「貴女に限って言わせてもらうのなら、いけない事です」

はつきりと言い切られてしまい、ダリルは苦笑いを浮かべるしか出来なかつた。

「てか、さつきから考え事に気を取られているようですが、そんな余裕がまだあつたのですね」

「バカ言わないでちょうだい。これでもギリギリのところで躲してるんだからね」

「でしたら、無駄な事を考えていないで集中すればいいじゃないですか」

「無駄な事、ね……確かに、考えても分からないんなら、考えるだけ無駄よね……終わっ

てから更識君に聞けば済む話だしね！」

鋭さが戻ったダリルの攻撃を、虚は躲さずにいなした。体勢を崩すまではいかなくとも、今の行動はダリルにとって予想外のものだった事には変わらない。

「(何故避けなかったのかしら……アクシデント？ いえ、そんな感じは全くしなかった……分らないわね)」

「また無駄な事を考えてますね！」

「っ！」

虚の攻撃を反射神経だけで躲したダリルは、このままではジリ貧だと感じ取っていた。た。

「(明らかに私の方の動きが鈍くなってきたのは確か……)」

I Sの性能の差だと割り切り、ダリルはそれ以上考える事を止め闘いに集中するのだった。

虚の秘策

若干ではあるが虚の方が有利になってきたと、解説席の刀奈も感じていた。

「あれが新武装の力なの？」

「使えるのは精々一回の戦闘中に三回ですが、実力に差がない相手なら、その三回は大きいでしょうからね。碧さん相手だった場合は、三回だろうが百回だろうが意味をなさないでしょうが」

「まあ、使う前に負けが決まってそうだしね」

それだけ碧との間には実力差があると言う事だと、刀奈も重々承知している。同じモンド・グロツソ覇者とはいえ、彼女相手に勝てるなどという自惚れは抱いていないのだ。「しかしまあ、よく完成したわね」

「デュノア社の命運を賭けた商品ですからね。意地でも完成させるんだと気張っていましたから」

「一夏君が手を貸したんじゃないの？」

「俺は最初の考案だけで、後はデュノア社の——シャルの頑張りで完成したんですよ」

デユノア社には当然更識の技術者が派遣されているが、あくまでも完成させることが出来たのはシャルロットの頑張りである。一夏は言う。刀奈はそれが一夏の優しさだと理解して、その頭を撫でようと手を伸ばし——あっさり回避されてしまった。

「何で避けるの!?!」

「何となく、ですかね」

「もう……」

不貞腐れたフリをして一夏から視線を逸らした刀奈の頭を、今度は一夏が撫でようと手を伸ばす。避けようかとも考えた刀奈ではあったが、めったに撫でてもらえるチャンスなど無いので、大人しく撫でられる事にした。

「一夏君、私の方がお姉ちゃんだって忘れてない?」

「さつきも言いましたが、刀奈さんが俺の義姉であることは忘れてませんよ」

「だったら、これは子供扱いじゃないのね?」

「滅相も無いですよ。それとも、止めた方が良いですか?」

一夏も分かってて言っている。刀奈が止めてほしいなどと思っていないという事を。

それが理解出来た刀奈は、ますます頬を膨らませるのだった。

「一夏君、イジワル」

「そんなつもりは無いんですが」

「……何時か絶対一夏君に仕返ししてやるんだから！」

「期待しないで待ってますよ」

余裕を感じさせる一夏の答えに、刀奈は膨らませていた頬に溜まっていた空気を一気に噴き出し、ガックシと肩を落とすのだった。

「そろそろ終わりそうですね」

「へ？ ……ああ、試合ね」

「忘れないでくださいよ」

完全に試合の事を忘れていた刀奈に、一夏は形だけのツツコミを入れたのだった。

一度気になりだしてからというものの、ダリルの動きは明らかに精彩を欠くものになってしまっていた。それでも直撃は避けているあたり、彼女の實力の高さをうかがわせる。

「どうしました？ さっきから鋭さの欠片も感じられませんか」

「言つてなさいよ。その油断が命取りになるわよ」

「貴女相手に油断などするはずがないではありませんか。油断なく倒してこそその勝利ですから」

「天下の更識の企業代表にそこまで言われるなんて、私も捨てたもんじゃないわね」

軽口を叩き合う余裕を見せるが、彼女に本当はそんな余裕などない。だがここでそれを見せるわけにはいかないと、虚勢に虚勢を重ねて余裕があるように見せているのだつた。

「もう十分楽しみましたし、観客も楽しんだでしょう」

「何の話かしら？ 降参でもするっていうの？」

「その逆です。今から貴女を完膚なきまでに叩きのめします」

「出来るものならやってみなさい！」

受けて立つという気持ちを全面に出しながら、ダリルの心の裡は別の感情で支配されていた。

「(実力差はそれほどないと思っていただけ、まさか布仏が私の実力に合わせて戦っていたって事？ そのリミッターを解除するって事かしら……それなら、さつきから私が押されているのにも説明がつくし……)」

頭を働かせながらも、ダリルは虚の動きに反応すべく気を張り続ける。一瞬でも気が

緩めばそれが致命傷に繋がると、彼女の直感がそう告げているのだ。

「どうしたの？ 完膚なきまでに叩きのめすんじゃないやなかつたんかしら？」

少しでも虚の態度を崩せないかと挑発を試みるが、全く効果が見られない。ダリルは攻めてこない虚が不気味でしようがなかったが、こちらから動けばそれが隙に繋がると、動くに動けなくなってしまうていたのだった。

「(どうする？ 遠距離から攻撃を仕掛けて布仏の集中力を削ぐ……いや、そんなことをしたらこちらに隙が生まれてしまう……かといって懐に飛び込んだらそれこそ一巻の終わり……まさか、こちらの気を削ごうとしてきつきの宣言をしたんじゃないでしょうね……ありえそうだけど、布仏がそんな回りくどい事をするとも思えないのよね……)」

様々な考えが浮かんでは消え、ダリルはいよいよ分からなくなってきた。何か考えがあるのは間違いないのに、それが分からない。その状況が堪らなく気持ちが悪い。

「そつちが来ないならこちらから行くわよ！」

ついにしびれを切らしそう宣言すると――

『試合終了、勝者・布仏虚』

——痛烈な一撃を喰らい、あっさりとS Eが底をついたのだった。

「なっ……何があつたというの……」

「二段階瞬間加速です。貴女がこちらの動きを警戒している間は使えませんでしたので」

「つまり、私が生びれを切らすのを待っていたって事？」

「もしくは、他の可能性を警戒して動いてくれるのを待っていた、という感じですよ」

「つまり、私が根負けしたってわけね……次は負けないわよ」

「次があると思ってるんですか？ 私はもうこりごりです」

互いの実力を認め合い、虚とダリルは大勢が見ている前で握手を交わし、静寂に包まれていたアリーナは割れんばかりの感性に包まれたのだった。

今後の話

虚が見せた二段階瞬間加速に、観客は言葉を失っている。そんな中でも、刀奈は面白そうに一夏に話しかけていた。

「あれを教えたのは一夏君でしょ」

「虚さんなら問題なく会得できると判断しての事です」

「まあね。虚ちゃんなら苦も無く会得出来たでしょうけど、私にも内緒でつてのは面白くないな」

「对刀奈さんの切り札として習得したいと頼まれたんですから、刀奈さんに教えるわけがないじゃないですか。まあ、刀奈さんにはなくダリル先輩相手に使っちゃいましたから、もう不意打ちには使えないわけですけど」

「私だつて二段階瞬間加速は使えるもの。知つてれば対応も出来るし、それがあるつて考えを基に行動するからね」

「普段からそういう考えを持つて行動してほしいですがね」

「まあまあ、とにかく虚ちゃんが勝つて、ダリル先輩の実力も知れたんだし、一夏君的には万々歳な結果じゃないかしら？」

刀奈の問いかけに、一夏は無言で頷く。ダリルの実力だけでなく、使えそうな人材も発掘出来たので、このイベントは一夏にとって——更識にとつてもいえるが、大満足の結果だったのだ。

「さて、これで今回のイベントも終わりですね。後は卒業式の準備ですか」

「虚ちゃんもいよいよ社会人になるのね……まあ、半分は社会人みたいだったけど」

「刀奈さんは公人ですもんね。不用意な発言は外では控えてるんですよ？」

「それって、何時もは不用意な発言があるみたいな言い方じゃない？」

「無いと思ってるんですか？」

「一夏君の前でしか言わないもーん」

「俺の前でも控えてくださいよ……」

疲れ切った表情を見せる一夏に対して、刀奈は楽しそうに笑うのだった。

虚の動きに衝撃を受けた中でも、刀奈と美紀は比較的早く復帰する事が出来た。

「虚さん、使えるようになってたんだね……」

「刀奈お姉ちゃんくらいしか使えないと思ってたけど、やっぱり虚さんもすごいよね」

「本音のお姉さんってのが信じられないくらいすごいよね」

「そこで本音を引き合いに出す理由は無いんじゃないかな……」

美紀も思っただけが口にしなかった事を、簪はあっさりと口にする。普段刀奈と比

べられる簪だからこそ、本音を虚と比べたがるのかもしれないと美紀は思っていた。

「まあ、何時かは私たちも出来るようにならなきゃいけないんだけどね」

「更識製の I S の瞬間加速は、他の I S の瞬間加速より速いから、わざわざ二段階瞬間加速を会得する必要は無いと思うんだけど」

「お姉ちゃんに勝つには、二段階瞬間加速は必須だし、上を目指さない」と

「簪ちゃん……そうだね。私も頑張つて会得するよ」

国家代表という、ある意味ゴールである地位を手に入れたことで、美紀は満足していた節があった。もちろん訓練中に手を抜くとか、そういった事は無かったが、何処か現状維持を目標にしている雰囲気はあったのだ。

「さつそく一夏に指導してもらわなきゃね」

「でも、一夏さんは生徒会の仕事があるんじゃない……それに、今回のイベントで見つけた人材を何処に振り分けるかも考えなければいけませんし、簪ちゃんだって無関係じゃないんじゃないの？」

「私は人経費にどれだけ割けるかを計算して、一夏に報告するだけだから」

「でも、一夏さんは簪ちゃんと相談して決めるって言ってたけど」

「そうなの？ それじゃあ、それが終わってからだね」

自分たちの事よりも一夏の事の方が大事な二人にとって、訓練よりも一夏の手伝いなのだ。もしここに他国の候補生がいたらツツコミがあつたかもしれないが、二人は特に気にした様子もなく頷きあつたのだつた。

ピットに戻った虚を出迎えてくれたのは、解説をしていた刀奈と一夏だった。二人とも拍手で出迎えてくれたので、虚は少し気恥ずかしさを覚えた。

「さすが虚ちゃんね。はじめは互角かな〜って思ってたけど、終わってみれば圧勝だったもの」

「そんなことありませんよ。ダリルもかなり強かったですし、一夏さんが指導して下さったお陰ですから」

「俺はやり方を教えただけで、会得したのは虚さんの力ですよ」

「それに、この新武装のお陰でもありますから。SEを回復出来るというのは、かなりの強みになりますから」

「無限に、ではありませんが、それなりに活用は出来そうですね。もちろん、国際大会とかでは規制がかかるでしょうが」

「そもそもそんなのを使わなくても、私や簪ちゃん・美紀ちゃんのペアは負けないわよ」
「油断してると足元をすくわれますよ？」

「虚ちゃんだって、半分顔が笑ってるじゃない。負けないって思ってるんでしょ？」

刀奈の問いかけに、虚は恍けた表情を浮かべて笑う。織斑姉妹か碧ほどの実力者が他所にいたならともかく、次回のモンド・グロツソも刀奈が優勝候補筆頭なのだ。

「姉妹で世界の頂点に立てたら、私も現役を引退しようかな。一夏君のお手伝いでもしながら、のんびりと過ごすのも良いし」

「現役を引退するなら、刀奈さんに任せたい事が沢山あるので、俺的にも嬉しいですね」
「……やっぱり、前人未到の三連覇でも目指そうかしら」

一夏が浮かべた笑みに嫌な予感がしたのか、刀奈はそっぽを向きながらそう呟いたのだった。

女子高生のお喋り

三年生のレベルの高さを見た一年生専用機持ちたちは、箒の部屋に集まってさつきまでの鬨いを振り返っていた。

「やっぱり布仏先輩はけた違いの強さでしたわね……」

「ああ、そうだな。あの本音の姉君だとは思えないくらいだ」

「そんなこと言っちゃってラウラ、アンタ本音に勝った事ないじゃない」

「なっ！　そういう鈴だって本音に勝った事ないだろ！」

「まあね。あの子はああ見えてかなりの実力者だし、更識の中で育ってるんだからあしたちが敵うわけないじゃないの」

「あの、何故この部屋なのでしょうか……」

食堂でもいいのではないかと、本音は割かし本気で感じているし、そもそも自分が招集した訳じゃないのに、全員が何のためらいもなくこの部屋にやってきた理由が彼女には分からないのだった。

「だって、ここなら他の人が来ることも無いでしょ？　多少だらしなない恰好をしたか

らって、候補生としての自覚がなんたらこうたら言われなくて済むじゃない？」

「鈴さんはそんなに注意されているのですの？」

「あたしは見たまんまでしょ？ 一夏が言うにはガサツというイメージが似合うのはあ
たしか織斑姉妹のどちらかだつてき」

「つまり鈴は教官たちと同じレベルだという事か……師匠と呼んでも構わないだろうか
？」

「構うわ！ てか、アンタもいい加減織斑姉妹に対する幻想を捨てたらどうなの？」

「そもそもラウラさんは織斑姉妹が平均だと考える思考を矯正しなければならないと思
うのですが」

「あの二人は私の理想だからな！ 教官基準になつてしまうのは仕方ないだろ！」

「どうなんだろう……いっそのこと一夏を基準に——無理ね。織斑姉妹以上に無理だわ
ね……」

自分で提案しておいて、鈴はあつさり和一夏を基準にすることを諦めた。悪友だから
こそ知っている一夏のスペックの高さを思い出したのだろう。

「ところでシャルロットさんはどちらに？ お声を掛けようとしたのですが見当たらな
かったのですが……」

「ああ、シャルロットならお兄ちゃんに呼ばれてどこかに行ったぞ」

「一夏に？ シャルロットだけ呼ばれたって事は、仕事の話かしら」

「どうなんでしょうね……シャルロットさんも、鈴さんとは違った意味で私たちと違いますから」

「なにがよ？」

「一夏さんとの関係が、ですよ」

本社代表と子会社の社長という関係だが、それでもセシリアは一夏と特別な関係と表現できる立場が羨ましく感じられていたのだ。

「セシリアだって、ある意味特別な関係だと思っけど？」

「何処がですか？」

「織斑姉妹と更識所属のメンバー全員に喧嘩を売って五体満足で生活出来てるってところが」

「あれは若気の至りですわ！ そもそも、あの時鈴さんはまだ学園に来てなかったじゃないのです！ 何故その時の事を知っているのですか」

「交友関係広いからね、あたしは。情報を仕入れるのに苦労しないのよ」

ポケットから携帯を取り出して意味ありげにセシリアに見せる鈴。彼女が意図したのは「コレさえあればいくらでも情報が手に入る」という事だったのだが、何故かラウラと箒が悔しそうに鈴の事を見ていた。

「ん？ あによ？」

「どうせ私には電話する相手などクラリツサくらいしかない」

「そもそも私は携帯電話を持っていませんし……」

「な、なによ急に……」

「鈴さんはラウラさんと箒さんをポッチ扱いしたんですの？ 私はてつきり、携帯さえあれば情報は手に入ると言いたかっただけだと思っただけなのですが」

「それで合ってるわよ。てか、ポッチじゃないでしょ」

ラウラはマドカと並びクラスのマスコットの存在として、箒は最近安全だと認められて声を掛けられる事が増えてきているのだ。

「むしろ、ハブられてる感ならあたしの方が強いと思うんだけど？ 何であたしだけ二組なのよ」

「今更ですよ!!？ そもそも、クラスの垣根など鈴さんにとって関係ないのではありませんか？ しよつちゆう一組に遊びに来てますし……って、もしかして鈴さんは」

「あによ」

「クラスに親しい友人がいないのですか!？」

「そんな事ないわよ!　てか、アンタ分かってて言ってるでしょう!」

半分以上面白がっていたセシリアは、鈴のツツコミに笑みを浮かべて頷いた。

「先ほどの模擬戦の話は何処に行ってしまったのでしょうか?」

「話題はコロコロ変わるのが女子高生の会話なのよ。ずっと同じ話題なんて、年寄じゃないんだし」

「それは偏見ではありませんか?」

「別にいいじゃん、偏見でも」

鈴の考え方に、セシリアは首を傾げたが、それを討論したところで答えは出ないだろうということでは話題を変える事にした。

「そういえばこの間の入学試験の結果ですが、鈴さんのお知り合いが主席入学だとお聞きしましたが」

「蘭の事?　まあ、最強のコネを持つてるもん、あの子は」

「どういう事ですか?」

「ぶっちゃけると一夏の知り合いでもあるからね。いくらでもISの事は質問出来るし、ポータブル版のVTSの修理も簡単に頼めるから」

「そんな簡単に壊れるものじゃないだろ」

「兄妹喧嘩でしょっちゅう投げてるらしいのよね」

「物騒な家庭もあるのですわね」

物が飛ぶなど想像も出来ないセシリアは、ポータブルVTSが宙を舞っている光景を想像し、かなりズレた感想を述べたのだった。

虚の代わり

卒業式の準備と並行して、一夏は簪と話し合いながら更識で採用するメンバーを決めていた。そして更に、虚が教師として学園に残る手続きと、企業代表を虚から本音に変更する旨を各企業に通達、虚の代わりの生徒会メンバーの選考と、やっぱり忙しい日々を送っていた。

「美紀ちゃんじゃ駄目なの？」

「美紀は簪と同じ理由で駄目だと思いますよ。刀奈さんみたいに一度世界を制してれば別ですが、モンド・グロツソもある中学生徒会の仕事で訓練の時間を奪うのは可哀想です」

「それじゃあマドカちゃんかマナカちゃんは？ あのと二人なら一夏君のお手伝いが出てくるって喜んで引き受けてくれそうだけど」

「あの二人にデスクワークは向かないと思いますが……何せ、姉があのと二人なわけですし」

「でも、お兄ちゃんが一夏君なら問題ないんじゃないかしら？ 一夏君はデスクワーク得意なんだし」

「俺は幼少期から更識で働いていたから得意なわけですし、それをあの二人に望めるかと言えば……」

一夏の言葉に、刀奈も言葉を失う。一夏の血縁だから大丈夫だろうという考えは、実に浅はかであつたと思ひ知らされたのだ。

「そうなる後は更識所属で候補生じゃない人つて事になるわよね……静寐ちゃんが無難かしら」

「別に更識所属でなくてもいいんですが、ここで更識の仕事をするのもあるでしょうからね。外部の人間をこの場所に入れてたくないですし」

「まあ、静寐ちゃんも外部と言えれば外部だけだね。巻き込むのが楽ではあるわよね」

「既に更識の専用機を保有していますからね。更識に引き込んでも何処の国からも文句は出ないでしょうし」

「それじゃあ、静寐ちゃんにお願いしましょうか」

「問題は、引き受けてくれるかでしょうがね」

「一夏君なら言葉巧みに誘い込めるんじゃない？」

人の悪い事を平然と言つてのける刀奈に、一夏は盛大にため息を吐いた。確かに刀奈

の言う通りなのだが、望んでそういう人間になったわけではない、というのが一夏の主張なのだ。

「そもそも、生徒会メンバーの補充は会長である刀奈さんの仕事ですよね？ 刀奈さんが静寐に話すのが普通じゃないですか？」

「お姉ちゃんは一夏君にお願ひします」

「また……虚さんが抜けてから甘えすぎじゃないですか？」

「良いじゃない。どうせすぐ忙しくなって一夏君に甘えられない日々が来るんだから」

平然と言つてのける刀奈に対して、一夏はもう一度ため息を吐いてから静寐に連絡するのだった。

一夏から生徒会室に来てほしいとの連絡を受けて、静寐は生徒会室前までやってきた。普段は近づく事すらない場所に、静寐は少し居心地の悪さを感じていた。

「えつと……ここで良いのよね？」

改めてここが生徒会室であるという事を確認してから、静寐は生徒会室のドアをノックする。

『どうぞで』

「し、失礼します」

返事をしたのが一夏ではなく刀奈だったので、静寐はさらに緊張した面持ちで生徒会

室の扉を開き、刀奈と一夏に促されてソファに腰を下ろした。

「ゴメンなさいね。わざわざ呼びつけちゃって」

「い、いえ……大丈夫です」

「別にお説教とかじゃないから、もうちよつと気楽にしてくれないかな？ 何だか私が

静寐ちゃんを苛めてるみたいに見えるじゃない？」

「は、はあ……」

気楽にしろと言われても、場所と対面している相手を考えれば仕方ないのではないかと静寐は思っているが、一夏や刀奈に普通の女子高生の考えが分かるはずもないと考え、一度大きく息を吐いてから居住まいを正した。

「それで、わざわざ呼び出された理由をお聞きしても？」

「あれ？ 一夏君から聞いてないの？」

「一夏君からは『生徒会室に来てほしい』としか……」

「そう。それじゃあ単刀直入に言うわね。鷹月静寐さん、生徒会役員になってくれないかしら？」

「えつと……何故私に白羽の矢が立ったのでしょうか？ 私以上に優秀な人など大勢いると思うのですが」

「謙遜だな。静寐程優秀な人材はそうそういない」

はつきりと一夏にいわれ、静寐は顔を真っ赤にする。容姿を褒められるよりも、実力を認められた方が嬉しいと、静寐は理解したのだった。

「理由はいろいろとあるんだけど、まず第一。簪ちゃんと美紀ちゃんはモンド・グロツソの関係で生徒会の業務に時間を割けないのよ。私も一応代表だから、一気に抜けると一夏君に多大なる迷惑を掛ける事になる」

「本音はいても遅いですしね」

今日は訓練の相手に指名されこの場にはいないが、最近は少しずつ仕事をするようになってる。だが、二人と比べると遅いのだ。

「次にマドカちゃんとマナカちゃんは、一夏君の判断で却下されたの。姉があれだからって」

「なるほど」

「そうなるより更識の内情がある程度知っていて、尚且つ優秀な人材は誰だって話になるのね。それで、静寐ちゃんにお願いしようって事になったの。引き受けてくれるかしら？」

「私の実力をそこまで買っていただけだったのでしたら、断る理由はありません。生徒会役員の場合、謹んでお受けします」

「良かった。それじゃあ詳しい事は一夏君から聞いてね。私も訓練の時間だから」「分かりました。何かあったら連絡しますのです」

一夏に見送られ、刀奈は生徒会室から出ていく。急に一夏と二人きりになった静寂は、再び居心地の悪さを感じたのだった。

卒業式前日

生徒会役員になってからというものの、静寂はめまぐるしい毎日を送っていた。普段からこのように忙しい思いをしながら平然と過ごしていた一夏たちの事を更に尊敬したのと同時に、自分がどれだけ面倒な事を引き受けてしまったのかと後悔しているのだ。た。

「生徒会ってこんなに忙しかったのね」

「シズシズだって知ってるでしょ？ いっちーがしよっちゆうHRにいなかったこと。あれは生徒会の仕事や、更識の仕事で来られなかったんだよ」

「知ってたけど、あれは本音がサボってばかりだからだと思ってた……でも、違ってたんだね」

「まあ、あの時は刀奈様もサボり気味だったから仕方なかったかもしれないけど、おねちゃんも抜けたのも忙しい要因だと思うよ」

「虚ちゃんも優秀だったものね。ところで静寂ちゃん、例の書類は何処に行ったのかしら？」

「例の……？ ああ、それでしたら一夏君に持っていききましたよ」

静寂に名前を呼ばれた一夏は、刀奈にその書類を手渡す。

「さて、それじゃあ後は本番を待つだけかしらね」

「本番って、明日ですけどね」

「いよいよ虚ちゃんも高校を卒業するのね……なんだか感慨深いわね」

「そのまま教師として学園に残るので、あまり卒業するって感じではないと言ってますけどね」

一夏が虚から聞いたことをそのまま告げると、刀奈は驚いた表情を浮かべた。

「なにか?」

「一夏君、それいつ聞いたの?」

「いつって、ついこの前ですよ? 丙のメンテナンスの際にそんなことを話しただけです」

「そうなんだ……最近虚ちゃんと会う機会も減っちゃったから、私も後で会いに行こうかしら」

「刀奈さんはモンド・グロツソに向けての訓練があるんじゃないですか? 本音も手伝いに行くって言ってたし」

「かんちゃんも美紀ちゃんも人遣いが荒いんだよね〜」

「散々楽してきてたんだから、少しくらいは苦勞しなさいよね。本音だつて来年度からは更識の企業代表として働くんだから」

「いっちゃんに任せておけば大丈夫なんじゃないの〜?」

「少しは働く気を見せろ……虚さんだつて忙しそうにしてたのは知ってるだろ」

「おね〜ちゃんなら楽勝だつただろうけど、私はちよつと厳しそうだな〜」

始まる前から諦めている感じの本音の態度に、一夏と刀奈はため息を吐いた。

「何時までも遊んでいられるわけじゃないんだから、少しはやる気を出しなさい!」

「刀奈様に言われたくないですよ。遊びまくつておね〜ちゃんに怒られてたんですし」

「最近では真面目にやつてるわよ! 私だつて成長してるんだから」

「ちよつとずつですけどね」

一夏がボソツとツツコミを入れると、刀奈は視線を明後日の方へ逸らすのだった。

暇を持て余して虚は、簪と美紀が訓練しているアリーナに顔を出し、二人の成長を感じていた。

「虚さん、どうかしたんですか？」

「いえ、簪お嬢様も美紀さんも入学時から考えるとかなり成長したんですね。お二人の動きはかなりのものですよ」

「でも、まだ虚さんには勝てませんよ」

「私は元々お嬢様の訓練相手として専用機を持ったわけですから、お嬢様に負けない程度には訓練していましたから」

「お姉ちゃん、ぐうたらしてるけど実力は本物だからね……いつかは勝てるのかなあ……」

「簪ちゃんが努力すれば、いつかは勝てるようになるんじゃないかな。私だって負けてられないけど」

「お二人はお互いの実力を認めつつも負けたくないと訓練しているのですね。お嬢様にもそのような相手がいれば、もっと真面目に訓練したかもしれないですね」

本気でそんな相手がいればと思っているのか、虚は深々とため息を吐いた。

「お姉ちゃんには虚さんがいたじゃないですか」

「私ですか？」

「刀奈お姉ちゃんは虚さんには負けたくないと思っただけですよ」

「ですが、私は選手ではなく更識の企業代表ですから。簪お嬢様や美紀さんみたいに、選手同士の方が良かったのではないかと思ったりするのですよ」

「気にし過ぎじゃないですか？ 虚さんはしっかりとお姉ちゃんのライバルとしてやつ

ていたと思いますよ？　というか、私や美紀がお姉ちゃんのライバルとしていられればもっと良かったのでしょうけど」

「私や簪ちゃんでは、刀奈お姉ちゃんに歯が立ちませんし」

「今ならかなりいい勝負が出来るのではありませんか？　瞬間加速はもう完全にマスタ―しているようですし」

「お姉ちゃんは二段階瞬間加速を会得してますし、どうやら三段階に挑戦しているらしいですし」

生徒会の業務の合間を縫って、刀奈もさらに上のレベルを目指しているらしいと聞いている。虚は何故そのやる気をずっと持続できないのだろうかと思っているが、やると決めた時の刀奈の集中力はかなりのものであるのだ。

「簪お嬢様と美紀さんは個々でも高い実力ですが、二人合わさればお嬢様にも勝るのではありませんか？　今度時間を見つけて二対一で戦ってみたら如何でしょうか」

「どうせなら虚さんも一緒に如何ですか？　教師としての初仕事として」

「……考えておきます」

誘われた事は嬉しいが、さすがにこのメンバーの中に混ざる気分にはなれなかった虚

な
の
だ
っ
た
。

卒業式

本来であれば、一年生は卒業式に参加する事はないのだが、専用機持ちであり更識所属の簪、美紀、エイミイ、香澄の四人と、生徒会役員である一夏、本音、静寐の合計七人は卒業式に参加する事になっている。参加すると言っても、生徒会役員ではない四人は特にすることも無く、ただただ見学するだけなのだが。

「簪と美紀はまだいいよね。身内が卒業するわけだし」

「といっても、虚さんは学園に残るけどね」

「布仏先輩ならいい先生になると思う」

「確かに、あの本音のお姉さんとは思えないほど立派だしね」

香澄とエイミイも納得するくらい、虚の教師姿というのは様になっているようだ、簪と美紀は小さく笑い合った。

「布仏先輩が卒業するから、静寐が生徒会役員に選ばれたし、私やエイミイも卒業式に参加する事になるしで、更識所属って意外と大変なんだね」

「参加するだけなんだからいいじゃん。お世話になった先輩だっているわけだしさー」

「それはそうですけど、こんなに人がいる場所に長時間もいたら、頭がおかしくなりそうなんですけど……」

「あつ、一夏から香澄について預かってるものがあつたんだ」

そういつて簪はポケットから何かを取り出し、香澄に手渡した。受け取つた香澄は、それが何なのか分からず首を傾げる。

「ただの耳栓……ではありませんよね？」

「着けてみればわかるって言つてたけど」

首を傾げながらも、香澄はその耳栓を装着する。特に変わった事はないと思つたが、次の瞬間には驚愕した。

「どうっ？」

「普通に声は聞こえますが、私の異能が発動していません……さつきまで聞こえていたエイミイの愚痴が聞こえなくなってます」

「えっ、私の愚痴って？」

「面倒くさい、帰りたい、眠い……などなど、卒業式に参加する事に対する愚痴です」

「エイミイ、そんなこと考えてたの……」

「いや……ほら、式典って長いじゃん？ だからこれだけ特別ってわけじゃ……」
「まあ気持ちには分からないでもないけどね」

自分たちが送られる側ならともかく、送る側など多かれ少なかれ思っている事だと、簪と美紀もエイミイの考えに同意し、香澄も頷いた。

「試作品らしいけど、後で一夏に感想を伝えておいてね」

「分かりました」

「これがあれば香澄も立派な社会人になれそうだね」

「美紀、それじゃあ今までの香澄じゃ立派な社会人にはなれなかったって言ってるようなものだよ？」

「だって、聞きたくない声が沢山聞こえたら、鬱になっちゃいそうだったし」

「それは私も思ってた事ですから大丈夫です」

「そうなんだ」

簪のフォローを必要ないと香澄がやんわりと伝え、納得して簪も美紀を責める事を止めた。

『それではこれより卒業式を始めます』

「おっと」

「一夏さんは耳もいいですからね。視線で注意してきました」

壇上の一夏が四人に視線を向けたのは、言わずもがなな理由である。四人は瞬時にそれを理解し、黙って前を向いたのだった。

長い式典も終わりを迎え、卒業生たちが退場していく。その光景を眺めていた静寂は、少し寂しい気分に陥っていた。

「シズシズ、どうかしたの？」

「いや、なんだか寂しいなって……」

「来月には新入生が来るんだし、別に寂しいって事は無いと思うけどな」

「そうなんだけどさ……何かの終わりに立ち会って、こんな気持ちになるんだよね」
「他人様の卒業でそんななら、自分が卒業するときには泣いちゃうんじゃない？」

本音がからかっているのを隠そうともしない態度でそういうと、静寂は少し考えてから頷いた。

「かもしれないわね。中学の時はそうでもなかったけど、この学園で過ごした時間を考えると泣くかもしれないわね」

「そうなの？ まだ一年しか経ってないのに？」

「この一年はかなり濃かったと思うけど？」

「いっちゃん側の側にいれば、これくらい普通だと思うけどな」

「私は元々更識所属じゃなかったし、一夏君とお近づきになれただけでもかなり濃い一年だったわよ。それが様々な事件に巻き込まれ、専用機持ちになり、挙句には生徒会役員にまで抜擢されたんだから」

「シズシズの実力なら当然だと思っけど」

元々のポテンシャルはかなり高いと本音も知っていたし、一夏が早々に打ち解けたのを見て、いずれは側近に数えられるのではないかとも思っていたので、静寐を生徒会役員に指名した事は、本音にとって当然であり何を疑問に思っているのかが分からないほどである。

「こら、二人とも」

「どうかしましたか？ 刀奈様」

「まだ式典は終わってないんだから、あんまり私語をしていると一夏君に怒られちゃうわよ」

「卒業生が退場したんですから、もう終わったんじゃないんですか？」

「まだ来賓が残ってるわよ。その人たちが退場して、在校生が退場して漸く終わりなんだから、もうちよつと我慢しなさい」

「すみませんでした」

刀奈に注意され、静寢は素直に頭を下げたが、本音は少し不貞腐れたように謝罪した。彼女からしてみれば、来賓など偉くもなんともないし、在校生は殆ど友達だと思つているのだろう。彼女は先輩後輩をあまり気にしないので、どの学年でも友達相手のように接するのだから。

「とにかく、あとちよつとは大人しくしてなさいよね」
「はい」

刀奈相手にもちよつと馴れ馴れしい態度ではあつたが、刀奈は苦笑いを浮かべて二人の側から一夏の隣へと戻つていったのだった。

永遠に…

あの卒業式から一気に時が経つたのではないかと錯覚するくらい、一夏たちは忙しい日々を過ごしていた。卒業式が終わってすぐにアメリカの再建に乗り出した一夏は、本音を連れて一ヶ月ほど学園を留守にし、刀奈たちはモンド・グロツソが近づいてきたという理由で日本政府主催の合宿に参加する事になったのだ。その間一人で生徒会業務を賄っていた静寐は、帰ってきた会長と副会長に文句を言っていたと、学園新聞に掲載された。

そして夏になり、第三回モンド・グロツソが開催され、前評判通りソロでは刀奈が無傷で連覇を達成し、ペアでは簪と美紀が他国を圧倒し初優勝を勝ち取った。その表彰式で刀奈は現役引退を表明し、簪と美紀も今回で代表を辞すことを表明した。もちろん日本政府からは思いとどまるよう要請があつたが、元々日本所属ではなく更識所属なのでその要請を三人がまともに相手にする必要は無かつたのだ。

日本政府は更識企業に抗議文書を提出したが、更識からの返事は『本人の意思を尊重した結果であり、今まで散々更識を頼ってきたのだから、これからは自力で何とかするように』との事だった。

一気に代表の質が落ちる事を恐れた日本政府は、I S 学園に目を向けた。あそこはあくまでもこの国にも属していない事になっているが、生徒の大半は日本国籍を持つ日本人である。その中で実力がある者を発掘出来れば、大会四連覇も夢ではなくなると考えたのだった。

そこでまず目についたのが、元問題児であるところの篠ノ之箒だった。彼女は過去の記憶を垣間見ながらも順調に更生し、今では更識所属のメンバー以外なら負けないと言われるくらいにまで成長していた。そしてすでに専用機を持っているという事も選考の理由だった。

「——というわけだ。ぜひ候補生として来てくれないだろうか」

「せっかくのお誘いですが、辞退させていただきます」

「……理由を聞かせてもらってもいいだろうか」

「私は今更識を背負って戦えるわけがありません。いくら更生したと判断されても、私の過去が消え去ったわけではありませんし、卒業後は更識企業でお世話になることが決まっていますので」

またしても更識企業かと、政府要人は舌打ちをしそうになり、ギリギリで堪えた。ここで舌打ちをすれば更識に喧嘩を売ったとも取られかねないのだ。何せ更識ブランド

のISは全世界の六割以上を占めており、日本に限って言えば九割を超えているのだ。ここで更識との関係を悪化させれば、日本はIS後進国になりかねない。

「そうか……残念だな」

「ついでに申し上げますと、IS学園にいる殆どの生徒が国家代表に興味は無いと思いますよ。皆さん、名誉より更識企業に就職出来るように躍起になっていますからね」

学園の内情を知らされ、政府要人はいよいよ舌打ちを我慢出来なくなったのだった。

あのモンド・グロツソからさらに時が流れ、一夏たちもいよいよ卒業となる。刀奈が卒業してから一夏が生徒会長を務めていたが、それもこの前引退して今は蘭が生徒会長を務めている。

「何だかあつという間の三年間だったな」

「初めの一年はいろいろとありましたけど、残りの二年は穏やかなものでしたしね」

「そもそも一年目がいろいろあり過ぎたんだと思うよ。二年になってから一夏も普通に授業に参加できてたし」

「ちよこちよこ休んだけどな」

その理由として、モンド・グロツソに参加する刀奈、簪、美紀の専用機の整備士として会場に待機しなければいけなかったり、再建中のアメリカでの問題を解決するために赴いたり、学生らしくないのは相変わらずだった。

「てか、その都度私が大変な思いをしてたんだけどね」

「悪かったって言うてるだろ」

「まあ、そのお陰で社長秘書という地位を手に入れられたから良いんだけど」

「本社の社長秘書はある意味でゴールだからな。いきなりそこからスタートする静寢は周りから凄い目で見られるだろうな」

「プレッシャーかけないでよ」

卒業後は一夏は今まで通り代表として、簪と美紀は傘下企業の社長として、そして静寢は本社の社長秘書として働くことになっている。

「まさか本音たちが教師として残ることになるとはね」

「マドカとマナカは兎も角、本音に教師が務まるとは思えないが」

「その所為で私我更識の企業代表に……」

「香澄なら大丈夫でしょ。例の耳栓が完成してから、メキメキと実力を伸ばしたんだから」

「そうだけど……」

聞きたくなかった相手の本音が聞こえなくなる耳栓を一夏が開発してくれたお陰で、香澄は授業でも他に意識を取られる事が無くなり一気に成長した。

「い、ち、か、くーん！」

「何か御用でしょうか、更識先生」

「今は教師としてではなくお嫁さんとしてここにいます。もちろん、虚ちゃんや碧さんも」

「人の十八の誕生日に婚姻届けを持ってきましたからね……」

「せつかく一夏君と結婚出来るようになったのに、一日でも無駄にしくなかつたから」「意味が分かりませんよ……」

「それに、私たちのお腹には——ね」

「それに関しては悪ふざけが過ぎたのでは？ 仮にも教師が生徒を襲つたわけですし」

「合意の上だったでしょ？」

「酔っぱらわせたのことでしょ……まあ、責任逃れはしませんので」

その事は問題になりそうになったが、何故か彼女たちの味方をした織斑姉妹と東が学園を説得してお咎め無しに収まったのだった。

「一夏、私も一夏との赤ちゃんが欲しい」

「私もです」

「就任していきなり休まれるのは困るから、少し経ってからな」

「ご馳走様。あーあ、どこかに素敵な男性が落ちてないかしら」
「静寐ちゃんなら私たちも歓迎するわよ？」

刀奈の発言に、静寐は結構本気にして、かなりの頻度で一夏にアプローチを仕掛けるのだった。

「一夏君、これからもよろしくね」

「ごちらこそ、末永くよろしくお願いします」

年に数回しか全員が集まれる事は無かったが、一夏たちは末永く幸せに暮らしたのだった。